Messenger

kagonosuke

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｍｅｓｓｅｎｇｅｒ

【Ｎコード】
Ｎ９１９９Ｎ

【作者名】
ｋａｇｏｎｏｓｕｋｅ

【あらすじ】
その手に託されたのは一通の封書。見知らぬ場所に辿り着いてから季節が一つ廻ろうとしていた。お世話になった人の最後の頼みを果たすべく宛名に記された人物を訪ねて、ようやく得たはずの穏やかな日常から一歩、外の世界へ踏み出す。そこに待っていたのは、予想だにしなかった新しい出会いだった。
己の常識が通用しない世界、いささか年を取った主人公（女）による地道な日常の試行錯誤の奮闘記。個性豊かな兵士たちや獣たちに囲まれて、ひっそりと育まれてゆく恋模様と複雑に絡み合う人々の

想い。形にならない【人の想い】を繋ぎながら、【Ｍｅｓｓｅｎｇｅｒ】が皆さまを束の間の旅にご招待致します！

★２０１１／１１／６　本編【完結】致しました。沢山のご声援ありがとうございました。今後暫くは番外編を投入予定です。

改訂作業（誤字・脱字等修正）を続けています。途中、ご不便な点が多々あるやもしれませんが、ご了承ください。

「ムーンライトノベルズ」の方に本編にリンクさせたＭｅｓｓｅｎｇｅｒ　の短編集があります。タイトルは”Ｉｎｓｏｍｎｉａ”（ｈｔｔｐ：／／ｎｏｖｅｌ１８．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ３３４３ｒ／）よろしければそちらもどうぞ。

登場人物紹介（前書き）

簡単に主な登場人物・舞台の一覧を作成しました。本編をお読みになる上で混乱した時にご利用ください。進み具合に連動して随時、書き足して行く予定です。内容にはあまり触れないようにしていますが、ネタばれ等が心配な方はお止めになった方がいいかもしれません。もちろん、こちらを飛ばしても何ら問題はありません。むしろその方がよいかと。

登場人物紹介

－　Ｐｒｏｔａｇｏｎｉｓｔｓ　－

１）全編を通じて出てくる主要人物

リョウ・サクマ　：　主人公　性別　女性　年齢は敢えて明らかにはしません

本編をお読みの上でご想像ください

ガルーシャ・マライ　：　リョウがお世話になった【術師】　性別　男性

リョウに手紙を託した人物

セレブロ　：　白銀の王、ヴォルグの長、人とは異なる悠久の時を刻む存在

白く輝く毛並みを持つ四足の獣　狼に似た姿

２）北の砦の兵士たち　－スタルゴラド第七師団に所属

砦：　北の辺境　リョウが暮らす森からは東南の方角へ軍馬で一日半の距離に位置する

兵士たちは王都から派遣

騎士団：　１５歳から入団可能　２年間は見習い扱い　以後各地方へ派遣される

団長　：　ユルスナール・ハイデ・ドゥ・アマン・シビリークス　通称ルスラン

銀色の髪　瑠璃色の瞳

副団長：　シーリス・レステナント　菫色の瞳　毒舌・腹黒　神官の家系

補佐官：　ヨルグ・ペテルハウゼン　ヘーゼル色の瞳　鉄仮面・真面目

ブコバル・ザパドニーク：　ユルスナールの乳兄弟　青灰色の瞳
女好き
　　山賊の親玉のような風貌
アッカ：　リョウが森のはずれでけがをしているところを見つけた人物
　　砦に来るきっかけを作る　　赤い髪に蒼色の瞳　職務に忠実　真面目
サラトフ：　アッカの直属の上官　豪快磊落
ヒルデ：　兵士たちの胃袋と健康を担う料理長　強面の髭面
オレグ：　砦で最年少（17歳）　リョウに対して弟分のように世話を焼く
　　頬にそばかす
ロッソ：　比較的真面目で常識的　青灰色の瞳　柔らかな茶色の髪
セルゲイ：　お調子者
エドガー：　古参の厩舎番
アスレイ：　スート（馬）の主　優しい面立ちをした兵士
キリル：　新しく配属された鷹匠　癖のない明るい茶色の髪に黄緑色の瞳
ルーク：　キリルの父親らしい　軍部でも影の諜報部（チョールナヤ・テェーニィ）に属する本名は知れず
ヘクター：　鷹匠　キリルの先輩　吃音の癖がある
ヤルタ：　大きな体に小動物的な動き　愛嬌のある兵士（シーリス談）
アナトーリィ：　中堅どころの兵士　頼れる兄貴　洗濯と裁縫が得意だとか
グント：　洗い場でオレグをじゃれあった兵士　短い茶色の髪

【軍部（北の砦）の馬たち】
ナハト：　栗毛　額に白い菱　兄貴肌

スート：　栗毛　気位が高い　キッシャーの信奉者　主はアスレイ
ユベル：　アッカの馬
キッシャー：　別名【黒き雷】　黒毛・黒目の逞しい軍馬　主はユ
ルスナール
ケッペル：　お調子者で砕けた口調　第二章で再登場
ロイド、リグス：　リョウが世話を焼いていた馬たち

【伝令の鷹】
イサーク：　軍部に所属
イーサン：　リョウが森で使いを頼んだ相手

３）暦の話

１か月は約４０日
１か月には【第１】から【第４】までの４つの【デェシャータク】
がある
デェシャータク：１０日毎のまとまり
（１～１０、１１～２０、２１～
３０、３１～４０）
１年は１０か月：　【青】【赤】【黄】【白】【黒】５つの色の名
がつく
それぞれの色の月には　【第１】の月　【第２】の月がある　２Ｘ
５色＝１０

４）スフミ村の人たち：　第二章の舞台

リューバ：　村の【術師】　女性　緑色の瞳　肝っ玉母さん的頼れ
る存在
　二人の息子がいる　正式名称はリュドミ
ラ・リュベーズヌィ

ナソリ　：　リューバの飼い犬　村の番犬的存在　茶色　毛足が長い
アクサーナ：　村一番の器量よし　金色の髪　橙色の瞳　明るい性格
デニス　：　無口　朴訥とした青年　短く刈りあげた柔らかそう
な髪を持つ
オリガ　：　デニスの母　愛称はオーリャ
ヴァジム：　デニスの父
ナジェージュダ：　アクサーナの母親　お菓子・パン作りが趣味
ナージャは愛称
クルスク　：　アクサーナの父親　人のよいおじさん
エレーナ　：　アクサーナの姉　明るい金色の髪に　赤茶色の瞳
ミーシャとカーチャ：エレーナの双子の子供たち　正式な名前はミ
ハイルとカテリーナ

緑色の瞳

キーン　：　エレーナの旦那さん　街の仕立てや　やや都会風な感じ
ゲンナージィ　：　キーンの父親
ピァーチ：　リューバが使った伝令の鳩（ゴールビ）
ムサカ爺：　アクサーナの家の向かいに住む老人
ダルジ　：　スフミ村の村長
ジューコフ：　ダルジの息子　未来の村長　村の自警団を取りまと
める
ナターリア：　キリルの母親　未婚の母　愛称はナターシャ
スチョールキン：　ナターリアの父

【その他のお祭りで騒いでいた男たち】
イオーシフ：クルスクの仲間
フセボラド：村一番の酒飲み爺さん
ダフネ　：　歌がうまいおじさん　見事な喉を披露する
セミョーン：　ジューコフとともにいた若者
フョードル：　アクサーナに恋やぶれ　リョウに絡んだ若者
アリョーシュ：　キーンが一緒に飲んでいた村の若者　正式にはア

レクセイ
インナ‥　男たちのテーブルに熱々のパイを運んだ村の女性

スカモーロフ‥　祭りなどには欠かせない道化師の総称　各地を転々と渡り歩く

5）国の名前、街の名前

スタルゴラド‥　この物語の舞台となる国　長い歴史を持つ
スタリーツァ‥　スタルゴラドの王都
ノヴグラード‥　その昔スタルゴラドより袂を分かった王族が建国した隣国
シーニェイェ・マルタ‥　アクサーナの義兄キーン家族が住む街
　スタルゴラド北部を代表する商業拠点
藍色の染料を使った織物が特産品
プラミィーシュレ‥　下記参照
セルツェーリ‥　スタルゴラドの北東にある隣国
キルメク‥　スタルゴラドの南西にある隣国

6）第三章に出てくる人たち・舞台

プラミィーシュレ‥
スフミから街道沿いに南下すること約五日（旅慣れた男の足で）の所にある
武具や武器を扱う店が多く建ち並ぶ軍人御用達、軍需産業的な意味合いの強い特殊な街でもある
金属鉱石の類が集まる一大商業地点でもあり、鍛冶職人が多く集まる街でもある

ツェントル‥　街の治安を守るスタルゴラド第五師団の兵士達が居

る詰所の通称

カマール：街の鍛冶屋、リューバの二番目の息子、リョウが厄介になる

レント　：名うての鍛冶屋、カマールの師匠　ガルーシャの知り合いでもあった

ソーニャ：カマールの工房がある通りに住む金物屋の主の娘　街の食堂の看板娘

　　カマールに仄かな恋心を抱いている

ドーリン・ナユーグ：スタルゴラド第五師団の団長　ユルスナールとブコバルの知り合い

　　几帳面で神経質　濃いめの茶色の髪を後ろに撫でつけている

イリヤ・ベールキン：ツェントルの兵士　プラミィーシュレの門番の時にリョウに声をかける

　　短く刈りあげた金色の髪に浅黒い肌、浅黄色の瞳

　　左頬には斜めに走る刀傷らしきもの

ウテナ・ザポロージェ：ツェントルの兵士　リョウの尋問を行う

　　少年趣味のきらいがある　柔らかな物腰

癖のある性格

　　武官というよりも文官ぽい

ステパン：ツェントルの医務室にいる軍医　右足を引きずる

コースチャ、ラリーサ：　往来の揉め事でリョウがかばった子供たち　弟と姉

タマーラ：コースチャとラリーサの母親

イリーナ：　色街の高級娼館【ファナーリ（灯火）】亭の女主

　　ブコバルとユルスナールが世話になったらしい

クセーニア：　仕立て屋の主の奥さん　妊婦

レオニード・ボストークニ：　王都の名門貴族の二男　ユルスナー

ルをライバル視
カマールに剣制作を依頼するが断られ、リョウをカマールの弟子であると勘違いして口利きを頼もうと強硬手段に出る
レオンチューク：　レオニードの従者、往来でリョウを連れ去った男
パーヴェル：　レオニードの従者
エリセーエフスカヤ：　ブコバルが夕食を奢ることになる高級サロン（レストラン）の名前
ヴィー：　ルークが扱う伝令の大鷲・アリョール
グスタフ：　ヴィーに協力した街の鴉・ヴァローナ
アシュケナージ：　プラミィーシュレの有力者

7）第四章に出てくる人たち、舞台

【術師養成所の生徒たち】
ヤステル：　比較的大柄で兄貴肌
リヒター：　のんびりマイペース　穏やかな気性　大きな薬種問屋の息子
バリース：　おしゃべりでにぎやかな性質　ムードメーカー
アルセーニィー：　背が高くひょろりとした印象　学者肌の勉強家
ニキータ：　寡黙、だが口を開けば意外に毒舌　無駄が嫌いでやや潔癖な所がある

【講師陣】
イオータ：　地質学者　名物講師　【鉱石処理】の分野を担当
　その研究室は【巣窟】と呼ばれる
レヌート・ザガーシュビリ：　シーリスの義兄　専門は【祈祷治癒】神官

【その他】
ハノー：　学生寮の管理人

【軍部関係者】

アルセナール：　スタリーツァにある軍部の詰所　【武器庫】という意味

マクシーム・フラムツォフ：　第一師団・団長

スヴェトラーナ・クロポトキンスカヤ：　第二師団・団長　女性

ゲオルグ・インノケンティ：第三師団・団長　ゲーラは愛称

ヒューイ・サフォーノフ：　第三師団副団長

グリゴーリィ：　第七師団所属　王都での業務処理を担うまとめ役

　愛称はグリーシャ

オリベルト・ナユーグ：　南の将軍　ドーリンの叔父

ザイーク：　第四師団の兵士　リョウにちょっかいをかける

セイラム：　第四の兵士　団体戦に出場

ヴラジーミル・ボグダーノフ：　第二所属　暗殺された侍女イーラの婚約者

アカーキィー：　第二所属　ボグダーノフの同僚

カレーニン、ファイナ：　第二所属　スヴェトラーナの腹心の部下

【ユルスナールの実家（シビリークス家）関係】

ファーガス：　シビリークス家　家長　ユルスナールの父

アレクサーンドラ：　ファーガスの妻　ユルスナールの母　愛称サーシャ

ロシニョール：　長兄　北の将軍

ジィナイーダ：　長兄の嫁　ズィンメル家より腰入れ　愛称　ジーナ

スタニスラフ：　長兄の長男　愛称スラーヴァ　１２歳

ユーリィー　：　長兄の二男　愛称ユーラ　１０歳

ケリーガル　：　次兄　財務官

ダーリィヤ　：　次兄の嫁　愛称　ダーシャ

イオーシフ　：　次兄の長男　愛称オーシャ　５歳

カッパ、ラムダ：シビリークス家番犬

フリッツ・リピンスキー：執事

ラードゥガ：　ファーガス弟　先の戦争で戦死　西の砦を守る　オリベルトの親友

【ズィンメル家（ユルスナールの許嫁）関係】

ラマン　：　当主

アントーニナ：　妻

アリアルダ　：　ジィナイーダの妹　ユルスナールの許嫁　愛称アーダ

【神殿関係者】

東の翁：　先読みを得意とする異能の持ち主　魂が輪廻する　セレブロに近い存在

クルパーチン：　儀式推進派　生臭神官　ぎょろりとした魚のような目　痩身

イシュタール：　神官長

スタース　：　新米神官　レヌートの弟子　街中の治療院に詰める

【宮殿関係・貴族】

エルメリア：　ブコバルの幼馴染　若くして自らの命を絶った

エクラータ：　リョウが迷子になっている途中出会った少女　第二皇子の息女

ティティー：　本名はティーダ　灰色の豹に似た小型の獣

アクショーノフ：　野心家とされている貴族

タラカーノフ：　同上

イジューモフ：　同上

アファナーシエフ：　同上

ソルジェ：　アファナーシエフの懐刀

リガルスキー夫人：　社交界の重鎮　ユルスナールをお茶会に誘うも玉砕中

パーシヴァル夫妻：　有名貴族

クラーヴィア・レステナント：　シーリスの姉　レヌートの妻
イーラ：　後宮の侍女　暗殺される

【その他】
イースクラ：　灰色の髪の男

８）この国の貨幣について

ゾーラタ：金貨
セレブロー：銀貨
メェーディ：銅貨
メェーラチ：銅貨の下、小銭類　普段はもっぱらこの小銭を利用
金貨１枚＝銀貨３０枚、銀貨一枚＝銅貨５０枚、銀貨一枚あれば家族が一月は優に暮らして行ける

９）スタルゴラド騎士団編成

第一師団：　近衛　表の部隊　精鋭のエリート　宮殿の警護
第二師団：　近衛　裏の部隊　奥向き　女性兵士が多い
第三師団：　薬草の研究などを手掛ける術師が多い　特殊な部隊
第四師団：　スタリーツァ（王都）の街中の治安維持を担当
第五師団；　【プラミィーシュレ】の治安維持担当
第六師団：　東にある貿易港のある街【ホールムスク】の治安維持
第七師団；　北の砦駐屯　（ノヴグラードとの国境）
第八師団：　東の砦駐屯（セルツェーリとの国境）
第九師団：　西の砦駐屯（キルメクとの国境）
第十師団：　その他国内街道沿いの街々の治安維持
【チョールナヤ・テェニ】：影の諜報部隊　トップは【アタマン】と呼ばれる

【上記の部隊色】　腕章や襟の徽章の色

第一：水色
第二：紫色
第三：赤色
第四：黄色
第五：緑色
第六：黄緑色
第七：青色
第八：橙色
第九：薄紅色
第十：白色

１０）神話の中の神々

夜の精：　風の王の娘
ズヴァローグ：　竈と炎を司る神
ストリヴォーグ：　風の神
ダジヴォーグ：　太陽（ソンツェ）の神
モーコシ：　大地の神
ヴァダールグ：　水の神
ペールン：　雷の神
セマルグル：闘いの神
リュークス：　豊穣を司る女神　未来予知も得意とする
エルドーシス：　失われた男神

登場人物紹介（後書き）

２０１１／１０／１４　追記

新しい厩舎番（前書き）

異世界トリップものを下地にしています。

２０１１／６／２５　改訂

新しい厩舎番

――――【フェルメ　パラ　ス　リュークス（リュークスの加護がありますように）】

この国の人々は皆、事あることにそう口にする。
挨拶代わりに。
道端ですれ違う顔馴染みに。
遠くへ旅立つ友に。
それは、幾つもの人の交わりが生じる所には必ず付いて回る一言。
そして、その言葉は、ここに来て、最初に覚えたフレーズでもあった。

＊　＊　＊　＊　＊

厩舎傍の木陰では、軽やかな笑い声が馬の嘶きに混じって聞こえてきていた。
男にしては若干高く、だが、女にしてはやや低いと思われるような音域だ。
長く、それこそ馬の尻尾のように伸びた髪を無造作に脇に流すようにして束ね、小ざっぱりとした洗いざらしの質素な風合いの衣服に身を包んだ人物が、傍らに佇む馬にブラッシングを施していた。
背を向けている為、その表情は分からない。だが、淀みのない手つきと時折聞こえてくる上がり調子の声に、その人物が進んで馬の

世話を焼いているのだと言うことが知れる。
それを裏付けるように、その者の傍には、順番待ちの馬が数頭大人しく待っていた。

慣れた手付きで馬の毛繕いをしながらも、リョウは滲みそうになる生理的な涙をそのままに、笑いの余韻と戦っていた。
その様子に己が身体を預けていた栗毛馬のスートは、不満げに鼻をぶるりと鳴らした。
『何が可笑しい』
どこか高圧的な物言いも、その立派な逞しい体つきと相まってか、この馬の気性を良く表しているようで実に似つかわしかった。
「いや、だってさ……どれだけ、気障な奴かと思って……アハハハ」
手を休めないまま、捩れそうになる腹筋を堪えるようにリョウは小さく息を吐き出した。
『気障とはなんだ。気障とは。ここまで聞いておいてどうしてそうなる。何とも潔かろうに』
笑う要素などどこにあったのだとばかりにスートはいきり立った。

そんなことを言われても、リョウはどうしようもなかった。
相手は【馬】で、自分は一応こちらでも【人】という部類に括られるもので、人種が違えば物事の捉え方も変わってくると言うのは、常識として、いや、これまでの体験からも簡単に分かる話だが、その延長線上に自分とこの馬の感覚の違いというものもあるのだろうことは容易に理解できる。
ただ、その違いというものは、まだまだ自分には未知の領域であって、そればかりは、行き当たりばったりと言うか、ぶっつけ本番で、実際にそういう事態になってみないと分からないのだ。
毎日が試行錯誤の連日という訳だ。

今回もどうやらその相違があったらしい。
このスートは、良くも悪くも歯に衣着せぬ物言いをする。言葉使いは辛辣だが、そこに悪意はない。それが分かれば、真っ直ぐな指摘は、却って知識を吸収する段階にある自分には有り難かった。
さて、一体、どうしてこんな話になったのやら。
途端に機嫌を急降下させたスートに、果たして地雷原はどこにあったのだろうかと話の巻き戻しを脳内で始めようとした矢先に、渋みのある声がリョウを擁護するようにして間に入ってきた。

『……じゃが、そういう捉え方もあろうて』
スートはちらりと横目で介入をしてきた馬の額にある白い菱形の文様を見てとると、面白くないとばかりに首を揺らした。
すぐ傍にはスートに負けず劣らず勇ましい体躯を誇る栗毛が寄って来ていた。
そこはかとなく漂う気品と知性あふれる眼差しを持つこの馬はナハトと言い、この厩舎の中では一番の古株で、皆のご意見番のような馬だった。
要するにリョウにとっては頼れる兄貴だ。
リョウは感謝の気持ちを込めて、ナハトの鼻面を宥めるように一撫でした。
「ごめん、スート。気を悪くしたなら謝る。別に他意はない。ただ、スートがその馬のことを敬愛しているっていうのは良く分かったから。立派な奴なんだな」

そうだ。リョウは事の発端を思い出していた。
鷹のイサークが先触れとして飛んだという話になって。
イサークがこの砦に立派な馬を走らせた一行がやってくると連絡を寄こしたことから、そんな話になったのだ。
それから、いつもの皮肉屋は何処に廃業したのか、スートが珍し

くこれからやってくるだろう馬のことをあれこれ称え始めたものだから、正直驚いて、そしてなんだか滑稽に思えてしまったのだ。
勿論、いつになく熱く語るスートに対して、だ。
可笑しかったのはスートの変わりようで、スートが慕う馬のことではない。
『フン。ならば良い』
『やれやれ』
自分の非を認めたリョウにスートは諾と首を振った。
その態度は何処までもスートらしく横柄には違いなかったが、下降した機嫌が直ったのが伝わって一安心、リョウはナハトに苦笑して見せた。
そうしていると、
『おーい、リョウ、まだかぁ？』
『そうそう、待ちくたびれたぞ』
『スートばっかりずりぃ』
周囲で順番を待っている馬達から催促の声が掛かり始めた。
思ったよりも笑いに時間を取られてしまったらしい。
「ああ、わかった。直ぐにこっちは終わるから。もう少し待っていてくれ」
手を動かすスピードは止めずに、首だけ後ろを振り向いて、リョウは催促を寄こした馬達へにこやかに返す。
その傍らでは、
『せっかちな者どもだ』
『なに、あ奴らもリョウに構って欲しくて仕方がないのだろうて』
ぼそりと小さく漏らしたスートにナハトが可笑しそうに言う。
最後の仕上げとばかりに念入りにブラッシングを終えると、リョウは腰に手を当てながら、満足そうにスートを仰ぎ見た。
「さて、終わったぞ。どうだ？」
『ああ。中々よい。男前になったであろう？』

人であるならばニヒルに口角を上げたような台詞に、内心噴き出しながらも、相手の満足の度合いが知れて、リョウも目を細めた。
「ああ、ばっちりだ」

そうして機嫌良く厩舎の方へ踵を返したスートを見送ってから、リョウは後方に居並ぶ馬達を振り仰いだ。
「よーし、お待たせ。順番は決まってるか？」
『おうよ。俺からだ』
待ってましたとばかりにこげ茶色に黒い模様の入った馬が、身を乗り出して来た。

ここの馬達は実によく喋るが、無駄な争いはしない。それは馬達の間でそれなりの序列が出来上がっているからなのかもしれないが、リョウとしては実に助かっていた。
「それじゃぁ、始めようか。リグス」
颯爽と蹄を鳴らし寄って来たリグスを促してから、リョウは一旦、後ろを振り返る。
愛情は平等に注ぐべし。それが、ここの手伝いを任されるようになってから肝に銘じていることだ。
「ケッペル、ロイドはもう少し待っててくれよ」
『承知』
『あいよ』
呼びかけられた二頭は、その声に大人しく尻尾を揺らした。

アッカ

馬達のブラッシングを終えた後、二三の仕事を片付けてから天を仰ぎ見ると日が中天より大分傾いた辺りにあった。

そう言えばと自分の腹に手を当てて、微かな空腹を訴えるように小さく腹の虫が鳴る。

そんな自分に苦笑いをして、リョウは兵士たちの集う食堂へ向かうことにした。

リョウが現在、世話になっているこの場所は国境の辺境にある砦だった。

周囲を囲むのは自然の要害。明確なラインは分からないが、ここは国の最北端にある軍事的拠点ということだった。

この砦から更に北西の方角、早馬で大体一日半走らせるとぶつかる距離にある広大な森の端っこでリョウは暮らしていた。

期間にして一年ほどだ。

【ここ】での記憶は、【そこ】から始まっている。

「おーい、リョウ。こっちだ」

広い食堂と言っても軍事拠点であるから実用性を重視した作りになっていて、簡素な木のテーブルと椅子が雑然と並ぶこの一角は、剥き出しの岩を切り出して作られた無機質な砦の中でも、実に生活感と人間味のある空間だった。

兵士は皆、よく訓練された屈強な若い男達だった。

自分より確実に一回り、二周り以上は大きい。

中に入ったリョウの姿を認めた一人が、大きな声を上げて手を振っている。

それに頷き一つで答えて、リョウは厨房のカウンターへと首を伸ばした。

「こんにちは。ヒルデさん」

「お、坊主、今日は遅かったじゃねぇか」

声を掛けると髭面の男がトレイを手に相好を崩した。ここを取り仕切る料理長のヒルデだ。

差しだされたトレイを受け取ると、野菜と肉がたっぷりと入った温かいスープの美味しそうな匂いが鼻孔を擽り、空いた腹を刺激した。自然と口元が緩む。

「足りなくなったら、いつでも言えよ」

「ありがとうございます」

リョウはここに来た当初、差しだされた一人前だという食事の量の多さに目を瞠った。

ここに集まるのは鍛えられた若い兵士達の集まりで、当たり前と言ってしまえばそうなのだが、元々、食の細かった自分とは身体の作りが全く違うらしく、皆よく食べ、そして、よく飲んだ。

それを毎日至極当然のように見ている料理長からすれば、リョウの食べる量はまさに正反対の意味で相手を驚かせてしまったのだ。

ここの兵士達の間に立てば、リョウの身体など直ぐに埋もれてしまう。

それは、人種的な問題というか性別の違いであったりするのだが、そのことを大っぴらに口にするのは躊躇われた。

自分の胃袋の許容量と平均的な食事量を相手に納得させるのにどれだけ骨を折ったことやら。

兵士達の栄養管理を預かるヒルデとしては、これから成長期を迎

えるであろう少年に見えるリョウに必要な栄養を与えてあげたいと言うのが本音なのだろうが、そもそも根本からして違うのだ。
成長期などとうに過ぎた、十分に“とうの立った女”であると胸を張ればどんなにか良いか。
だが、その本質は、ここで生きてゆく上ではマイナスにしかならないだろう。
幸か不幸か、初対面で自分の本来の姿を言い当てた【人】はいない。
それを分かった上で利用している。その自覚はあった。

ヒルデは渋々、一旦は、納得したものの、時折、こうして心配をしてくれる。
普段、鬼のようだと揶揄されている料理長もリョウに対しては甘かった。
自分を見て、この砦とはやや離れた街に暮らす息子のことを思い出すのかも知れない。
「ほれ、これはオマケだ。たんと御食べ」
「はい」
日持ちするようにと固く焼かれたパンの塊の傍に小さくカットされた果物が入った小皿を乗せられて、リョウは素直に笑みを浮かべた。

声を掛けた一団にリョウが近づくと、相手は空いていた席を勧めた。
「アッカ、もう足の具合はいいのか？」
「ああ、すっかり。ほら、この通り」
「そうか。それは良かった」
顔を上げた赤毛の青年は、身体をやや斜めにずらすと左側の膝を叩いて見せた。
青年の左足は兵士達が着る柿渋色を思わせるくすんだベージュ色

のズボンと黒い革の長靴で覆われているが、その下には包帯で隠された傷跡がある筈だった。
今日から少しずつだが訓練に合流すると嬉しそうに語るアッカに、リョウは安堵して小さく微笑んだ。

怪我を負ったアッカとの出会いは、リョウがこの砦で世話になる間接的な切掛けになっていた。
任務の途中、仲間と逸れ、負傷して北の森に迷い込んでいたアッカを見つけて手当てをしたのが、そもそもの始まりだった。

あの日、森の動物達が騒いでいて、リョウが駆け付けた時には、偵察部隊である狼の一団が遠巻きに囲む中に、倒れているその特徴的な赤い頭髪が見え隠れしていた。
左足からは多量の出血があり、意識は辛うじてあった。
時折、唸り声を上げながらじりじりと迫りくる灰色の動く円陣に、唯ではやられまいと思ったのか、その手には残った唯一の武器であるナイフを固く握り締めていた。
緊迫した空気だった。
そして、それを男が乗っていたであろう馬が、逃げることなく心配そうに、少し離れた所から主の様子を窺っていた。
あれは、そう、ユベル。勇敢で優しい主思いのいい馬だ。
そんな張りつめた空気の中にリョウは入って行った。
お節介は承知の上だが、自分の仲間達でもある誇り高い狼の一族が傷つけられることが耐えられなかったという利己的な理由からでもある。

声を掛けてきた人間に安心したのか、男は意識を失った。
それから、その男を自分の暮らしていた小屋に連れて帰り、傷がある程度癒えるまで世話をしたのだ。

アッカの任務は重要なものであったらしく、意識が戻るとしきりに帰還を急いだ。
それを無理はするなと宥めすかし、偶々通り掛かった鷹のイーサンに伝書鳩宜しく使いを頼んで、まだ半病人のアッカを連れて砦までやってきたのがちょうど5日前のことだった。
リョウ自身にもとある目的があり、暫し、住み慣れた小屋を後にするべく準備をしていた所であったので、ちょうど良い機会とも言えた。
それで、今度は自らの目的を果たすべく、暫し、この砦に居候をさせてもらっていた。
勿論、ただでは申し訳がないので、自ら馬達の世話を買って出たと言う訳だ。

これまで馬に乗ったことも馬の世話もしたことがなったが、運が良いことにここでは馬達を始めとした動物達とはどういう訳か意思の疎通が出来たので、厩舎番の古参の兵士や彼らに色々と教わりながら世話をした。
馬達も話が出来る人間がいると言うことで遠慮なく口を利いた。
そう言う訳で、今のところ恙無く過ごせている。

「頂きます」
小さく手を合わせてから、リョウは食事を始めた。
始めはその所作を奇異と好奇の眼差しを持って見られたものだが、自分の故郷での習慣だと説明をすれば、難なく受け入れてもらえた。
まぁ、言い換えれば、ここに集う男達は、余りそういった瑣末なことに拘りがないということだろう。
男達の話に耳を傾けながら、食事を進める。
「隊長が戻ってくるってさ」
アッカの隣に座るロッソがスープに浸した固いパンを口に頬張りながら、切り出すと周囲が湧いた。

「漸くだな」
「今回は長引いたよな」
「本当か」
「ああ、さっき、伝令の鷹が飛んで来たって話だ」
伝令の鷹。それはスートの言っていたイサークのことだろうか。
そんなことを頭の片隅に思いながら熱いスープを啜る。
肉から出た出汁の旨味と野菜の甘みが口の中に広がった。

基本、リョウは寡黙な性質だった。必要以外は余り口を開かない。
まぁ、新参者であり、ここでは異質分子である自分が入れるような話題の余地はないと言うのが本当の所だろうが。
「つーと、また、あの地獄の訓練が待ってんのか」
「うへぇ」
「容赦ねぇからな」
「ハハ、何、言ってんだ。楽しみにしてるくせに」

黙々と咀嚼を繰り返すリョウの傍で、粗方食べ終えた兵士達は、その隊長の武勇伝という名の噂話で盛り上がっていた。
それにしても、皆、かなり興奮している。白熱した話の内容は、冷静な第三者的視点から聞いているリョウには、思わず首を傾げてしまうようなものもあった。
些か誇張されているような男達の熱い語り口は、朝のスートを思い出させるようでなんだか可笑しい。
リョウは、噂話の類は余り信じていなかった。
実際にこの目で見てみないことには、何の結論も出せない。
ただ、これまでの話を鑑みて、これから砦にやって来るであろう一団の中に、人馬ともに熱烈な支持を受ける者がいるということを心得て置こうと思った。

砦の兵士たち

リョウがこの砦に辿りついた時、初めに会ったのは、門の警備兵に救護班と思しき軍医、そしてアッカの上官に当たると言う兵士だった。

それから軽い尋問を受けた。

幾ら、怪我をしたアッカを連れてきたとは言え、命がけで任務に当たる砦の兵士達にとって自分が不審人物であることには違いなかった。斥候のように思われても仕方がない。

そういう類の嫌疑から逃れる為、リョウは、アッカを引き渡したら直ぐにでも出立しようと考えていた。

だが、それを引き留めたのは、アッカだった。これから人を探して旅に出る。そう伝えていたことを律儀にも覚えていたらしい。

探している人物を知っている奴がいるかもしれないから兵士達に尋ねてみた方がいいと助言をしてきた。

ここに集まる兵士達は、出身は様々だが、国の中央、つまり王都から派遣されてきている。それなりの情報網を持つのだ。

軍籍に身を置くものであるならば、その行方が知れるかもしれない。

手元にある情報は、故人が親しくしていたと語った間接的な記憶と当時の職業、そして名前のみ。

砂の中から小さな金の粒を探し当てる位の途方の無さだと覚悟はしていたリョウにとってその申し出は非常に魅力的だった。

だが、同時に、人の良いアッカに要らぬ迷惑を掛けることになる。

そのような逡巡を見てとったアッカの上官は、怪我人を搬送させた後、リョウを一人、別室に案内した。

そこで軽い事情聴取という名の尋問を受けたのだ。

立ち合ったのは、アッカの直属の上官であるサラトフと名乗る人物とその上の人間だった。
今となってはその時の二人が、温和な副団長シーリスとその冷徹な補佐官ヨルグだったと分かるが、当時は、長身で屈強な如何にも軍人であるという男達三人に囲まれて、疾しいことは何もなかったが、流石に肝を冷やしたのは記憶に新しい。

元々狭い部屋は、三人の軍人とリョウがいることで妙な圧迫感をもたらしていた。
張りつめた、腹を探り合うような空気に息苦しさを感じ始めたのは直ぐだった。
しかし、小さな部屋を包む硬質な空気を打ち破ったのは、これまでの経緯を簡単に説明し、自分が手にしている手紙の差出人の名を口にした時だった。
「ガルーシャ・マライ殿に縁がある者ですか」
もう数え切れない程、あの人には世話になった。
自分がこの場所で、こうして無事に生きていられるのも全てあの人のお陰だ。
感謝を幾らしても足りないだろう。
そして、ここでもまた、自分は、あの人に救われたらしい。
リョウは服の中に忍ばせた革紐の付いた小さな袋へそっと指を伸ばした。

どこか懐かしさを滲ませたようなその静かな問いかけに、リョウはゆっくりと首を縦に振ると、上着の内に作った隠しポケットに入れていた手紙を取り出し、それを一番立場が上だと当たりを付けた人物に差し出して見せた。
まだ、あの人が生きていた時に、しっかりと蜜蝋で封をし、受取人以外には開封が出来ないように小さな、それでも知るものが見れ

ば分かる緻密で強固な呪いを掛けたものだ。
それは、同時に差出人の署名のような文様で、施術者一人一人に固有の唯一のものなのだと言っていた。
「確かに、これはガルーシャ・マライ殿の印封です」
受け取った男は、封印の部分を検分すると静かに言葉を重ねた。
「宛名を見ても？」
「どうぞ」
ゆっくりと裏を返した先には、流れるような特殊な飾り文字で、相手の名前が綴られていた。

会話と基本的な読み書きには不自由をしない位には、ここでの言語を習得したリョウだったが、その呪いのような飾り文字は、どうしても解読が出来なかった。
不思議そうにそれらの象形文字に似た形を眺める自分に、これは普通に暮らしてゆく分には必要のないものだとガルーシャは笑ったものだった。

副団長のシーリスは、その一見、冷酷そうに見える目を細めると柔らかく微笑んだ。
それだけで、この目の前の人物が纏う空気は一変した。
「アッカが大変世話になったようですね。こちらでも消息不明になってから、万が一の可能性は考えていました。上官として感謝します」
そう言ってシーリスは頭を垂れた。

嫌疑はいつの間にか晴れていたようだ。
シーリスに倣うように、傍に居た二人も同じ所作を取った。
ゆっくりとそれでも兵士達の礼を持って慇懃に下げられた三つの頭に、リョウは慌てた。
「そんな。大したことはしていません。どうか、顔を上げて下さい」

動揺を見せたリョウの姿に男達は顔を見交わせると小さく笑みを零した。
空気が一段と和んだ気がした。

「――それにしても、坊主、運がいいな」
アッカの上官であるサラトフの意味深な笑いに、リョウはハッとして顔を上げた。
目が合うとサラトフは片目を瞑って見せた。
「その宛名の御仁を御存じなのですか？」
思わず畳みかけるように口にすれば、
「まぁ、慌てるな」
大きな骨ばった手が宥めるようにゆっくりとリョウの頭を撫で、髪の感触を楽しんだ後、離れていった。
「こっちにも事情ってもんがあってな。今、この場では、口にすることは出来ん……ってことでいいんだよな」
そう言って上官であるシーリスを見たサラトフに、話を向けられた当人は、頷き返した。

「滞在を許可する。小さいが余っている部屋がある。そこを使うといい」
副団長の隣に控えていた人物が、簡潔、且つ事務的に用件を告げる。
そして、用事は終わったとばかりに、そのまま、その場を去ろうと踵を返すのを見て、リョウは咄嗟に声を掛けた。
「感謝痛み入ります。オレは、リョウ・サクマです。あの、御名前を御伺いしてもよろしいでしょうか？」
「ヨルグ・ペテルハウゼンだ」
「ありがとうございます。ペテルハウゼン殿」
「ヨルグでいい」
一つ頷いて見せると、口元に微かな微笑みらしきものを浮かべて、

補佐官ヨルグは去って行った。

そんな遣り取りを上官であるシーリスは興味深そうに眺めていた。

そして、顔を上げたリョウに向かいに立つ二人が改めて向き直った。

「先を越されてしまいましたね。私は、シーリス・レステナント、ここでは副団長の肩書です。尋ね人の消息は近々判明するでしょう。それまでは自由にしていて構いません」

「俺はサラトフ。アッカは直属の部下だ。アイツが無事帰って来てくれてよかった。感謝するぜ、坊主」

「リョウ・サクマです。こちらこそお世話になります」

再び、きっちりと頭を下げる。どうやら、ここに居れば、尋ね人の消息が掴めるようだ。願っても見なかった幸運にリョウは感謝した。

「よし、リョウ。付いて来い」

こうしてサラトフに案内されて、ここでの居候生活が始まったのだ。

「ごちそうさまでした」

リョウが食事を終えるとお喋りに興じていた一団も一頻り気が済んだらしかった。

彼らと共にトレイを戻して、厨房のヒルデ達に感謝の言葉を掛ける。

そのまま鍛錬場へ向かうアッカ達に付いて行く。

序でに厩舎の様子を見てから、自分も腹ごなしに端の方で訓練に参加しようとリョウはこれからの予定を簡単に頭の中で組み立てた1。

「なぁ、リョウ」

前を歩いていたアッカ達の中から、まだ年若いオレグが振り返ると不意に問いを発した。
「前から思ってたんだけどさ。なんで左側だけなんだ?」
そう言って、リョウの肩と腕の部分を示すように自分の肩を軽く叩いて見せた。
「ああ、これか」
リョウの左肩には、シャツと上着の上になめした革で出来た厚みのある肩当てが付いていた。そして、
左腕の前部分にも同じような無骨な籠手当てが付いていた。
よく見ると、その表面には細かい、抉れたような傷跡が沢山付いている。
通常の防護を目的とした具足とは異なる風体のそれらをオレグは疑問に思っていたらしかった。
確かに見てくれは良くない。

前を歩いていた連中が、皆、リョウの方を興味津々に見ていた。
その本来の使用目的を知るアッカだけは、平然としている。
これは、必要に迫られて、急ごしらえで作ったもので、余り誉められたものではないのだ。何せ普段ここの兵士達が身に付けているような、敵の刃から身を守るような立派なものとは程遠い。唯、それらを装着しないとかなり痛い目を見ることは経験済みである。なんとかしたいという試行錯誤の上に編み出されたものだった。
その時のことを思い出して、リョウは苦笑いを浮かべた。

「まぁ、すぐに分かるさ」
解答を言葉にしようと口を開きかけた所をアッカが訳知り顔で遮った。
その視線の先は、一瞬、空を辿り、リョウに戻る。
それだけで、リョウはアッカの言わんとすることを理解した。
いや、そうでなくとも、先程から己の存在意義を知らしめるよう

に視界の隅にチラチラと映り込む小さな影に、自分も同じような言葉を口にしていたに違いなかった。
事情がまだ飲みこめていないオレグやロッソ達は、訝しげな顔をしている。

そんな最中、鍛錬場へ向かう剥き出しの地面に影が落ちた。
黒い影は高速で大きな楕円を描き、急降下で降りてきた。
「あっ」
兵士達の一人が思わず声を上げる。
キーンという甲高い一声の後、バサリと風を切る羽の音がして、幾ばくかの衝撃の後、左肩に馴染みのあるどっしりとした重みが乗った。
この感覚にももう慣れた。
「おかえり、イサーク」
『ただいま、戻ったぞ。達者にしておったか、リョウよ』
「ああ。任務お疲れ様、報告は済んだのか？」
『無論。抜かりはない』
「そうか」
歩き出したリョウの肩に揺られるようにして一羽の鷹が止まっている。
伝令の役目を終え帰還を果たしたイサークだ。
その獲物を捕らえて離さない頑丈で鋭い爪は、リョウの肩先にある厚い皮に食い込んでいた。
振り返ってみれば、オレグが目を見開いていて、ロッソは成程と感心した風に頷いていた。
こちらを見ているアッカ達に軽く手を振って、リョウは鍛錬場へ続く道を厩舎がある方向へ逸れた。

隊長の帰還　1）

ふと、門の辺りが賑やかになっていることに気がついた。
何やら兵士達が集まって来ている。
目を凝らせば、馬に乗った一団が到着したようだった。
『おお、来おったか』
歩みを止めたリョウにイサークが言った。
あの中にスートが敬愛して止まない【黒き雷】殿とやらがいるのだろうか。
じっと観察していると、人垣の中に逞しい大きな黒毛の馬が一頭見えた。遠目にもその黒光りする立派な体格が見て取れる。

【ここ】は、人も動物も己が記憶の中にある形態に比べると格段に大きなものが多いというのが、リョウの個人的な感想だった。スートやナハトも立派な馬だが、その黒毛には何と言うか王者のような威厳と風格があった。
そして、その黒毛の馬の脇には、同じような漆黒色の外套に身を包んだ長身の男が立っていた。
緩く括られた銀色の髪が日の光を浴び、風に揺れてはきめ細かい光を反射する。
こちらには背を向けている為、その顔を拝む事は敵わないが、威風堂々たる黒毛馬の主らしく、隣に並んでも引けを取らない程には、いい体格をしていることが知れる。
あれが、食堂で兵士達の噂に上っていた【隊長】殿であろうか。

集まった兵士達の中に副団長のシーリスと補佐官ヨルグの姿もあった。
黒いマントの男に騎士としての敬礼を取っている。

御出迎えという構図だ。
その脇には、アッカの上官であるサラトフが控え、その他の顔見知りの兵士達もいる。
彼らは、黒毛馬に乗った上級兵士に付き従い一緒にやって来た他の兵士達と軽い抱擁や握手をし合い、長旅の労を労っていた。

その顔ぶれの中にスートの主であるアスレイの姿を見つけた。
アスレイも朋輩との再会を喜んでいるようだ。
意外なことにあの恐ろしく気位の高い馬の主は、柔和な面差しをした優しい青年だった。
まるで正反対の気性だ。
面白い組み合わせもあったもので、一体、どんな顔をしてスートが主に仕えているのかと想像すると若干可笑しみを禁じえない。
そんなことをスートに言ったら、絶対に機嫌を損ねそうだが。

そんな他愛もないことを考えていれば、こちらに身体を向けているシーリスと目が合った。
その口元が薄らと弧を描く。
隣に控えている職務に忠実な補佐官ヨルグは、いつも通りの鉄仮面的無表情だが、やはりこちらへと一瞥をくれた。
すると直ぐ傍にいたサラトフも軽く手を上げる。
こうも気が付かれていては、挨拶を返さない訳にはいかない。
左肩にイサークを乗せたまま、リョウは小さく会釈をしてからその場をやり過ごそうとした。
が、それは叶わなかった。
「リョウ、こちらへ」
良く通るシーリスの声が聞こえてきて、ささやかな逃走願望は一瞬にして消え去った。
あの集団の中に行かなければならないのかと思うと若干、顔の筋肉が引き攣りそうになる。

注目を浴びるのは苦手なのだ。
だが、しがない居候の身、この砦のナンバー2直々の命令を聞かない訳にはいかない。
『呼んでおるようじゃの』
「分かってる」
追い打ちを掛けるが如く、まるで他人事のようにイサークがのんびりと口にした。
恨めしそうに見上げるリョウの視線にイサークは愉快気に笑って見せた。

イサークを肩に乗せたまま、リョウはシーリスの元へ赴いた。
呼びとめた理由を問うべく副団長を見上げると、シーリスは目元を和らげながらも意外なことを口にした。
「リョウ、着いた馬の世話を頼みます」
簡潔な一言。
それに何故か周囲がざわついた。
「よろしいのですか？」
「大丈夫か？」
「おい、エドガーはどうした？」
シーリスが自分を呼び止めたのは、今到着したばかりの一団の馬の世話をするようにと依頼する為だった。
それならば話は早い。
ここでの自分の仕事は、厩舎での馬達の世話であるし、今日に至るまでそれなりの仕事はしてきた積りだ。古参の兵士達に比べれば、まだまだ半人前には違いがないが、誠心誠意を持って馬達には接してきた。
「承知いたしました」
【諾】と頷いて、リョウは振り返ると、兵士達が乗って来た馬達

がいる方へ足を進めた。
「おい」
「心配ありませんよ」
銀色の髪の男が何やら言いたげに口を開いたが、シーリスは笑ってそれを制した。
歩き出すと何やら外野の音が姦しい気がしたが、与えられた任務を全うするべく、リョウは外部からの騒音を意識的に遮断した。

少し離れた木の下に馬は全部で五頭いた。
赤みの掛かった茶色が二頭に濃い栗毛が二頭、そして、あの立派な黒毛だ。
皆、相当の距離を駆けてきたのか、全身から汗を噴出させている。

リョウの足は、自然と黒毛の一頭の前で止まった。
徐に右手の握り拳を左の心臓の前に構えて右足を半歩後方に引き、上半身ごと頭を軽く下げる。
ここの兵士達が取る一般的な騎士の敬礼を取ることで相手に敬意を表した。
「お初にお目にかかります。我が名はリョウ・サクマ。貴公は誉れ高き【黒き雷】殿と御見受けいたしますが」
『如何にも』
静かな問いかけに黒毛は一歩蹄を寄せると、ぶるりと鼻を鳴らした。
『ほう、毛色の変わったのが入ったな。新入りか？』
「いえ。さる個人的な事情により、少し前よりここで世話になっています。兵士ではありません」
顔を上げて、その澄んだ黒曜石のような瞳を見つめる。
『それは見れば分かる。ここは女子のいる場ではないからな』
からかう様なその口調に、リョウは軽く目を瞠ると、苦笑にも似たような小さな笑いを零した。

「やはり、あなた方には分かるのですね」
それは確認の言葉だった。
これまで、ここで出会った人間は、皆、自分を男だとみなしていた。
ここでは、どうやら年端の行かぬ少年に見えるらしい。
防犯上の理由からその相手の勘違いに乗って、自分でもそれらしく見えるように振る舞ってはいるが、それは飽くまでも擬態で、本来の自分の姿ではない。
今はそれなりに楽しんで男らしい口調も板には付いているが、何かの拍子にうっかり素が出まいかと頭のどこかで心配をしているのも確かだった。
そんな中、ここの動物達は違った。森に居る獣達も、砦に居る馬達も、リョウの性別を間違えたことは無かった。それこそ動物的直感という奴なのだろう。
『何を戯けたことを。我らはその者の核を見る。いかにそなたが男と同じ格好をしていようともそなた自身は変わらぬ』
それは森に住まう白銀の王セレブロにも言われたこと。
異質な自分を認めてくれる嬉しい一言だった。
「ありがとう、黒き雷殿」
リョウは目を細めて目の前の鼻面をそっと撫でた。
『その呼び名は止めよ。尻尾が痒くなる』
苦々しい声音にその困惑を感じ取って、リョウは小さく噴出した。
『我が名はキッシャー』
「では、キッシャー。あなた方の世話を一任されました。こちらへどうぞ」
『ああ、リョウと言ったな、宜しく頼む』
「はい。こちらこそ」

こうして、リョウはキッシャーを連れて厩舎への道を歩いていった。その後ろには、四頭の馬達が大人しく付いて行った。

隊長の帰還（2）

ユルスナール・ハイデ・ドゥ・アマン・シビリークスは、額に落ちかかる白銀の髪をそのままに、自分達が乗って来た馬が繋がれている傍へ歩いて行く年若い、まだ少年のような男の姿を目で追っていた。

少年の肩には、伝令で使ったと思われる鷹が乗っていた。

獰猛な猛禽類である鷹のような獣は基本、警戒心が強い。そこを専門の訓練士が時間を掛けて、伝令に仕立て上げるのだが、あのように懐く様も珍しかった。

新しく入った鷹匠の見習いか。

自分の馬、黒毛のキッシャーは、その気性の荒いことで有名だった。

唯一主と認めた自分以外にはそう簡単に懐いたりなどしない、中々に厩舎番の兵士達泣かせの馬でもあった。

「エドガーはどうした？」

この砦に戻って来るのは、先の【黒の第一の月】以来、約三カ月ぶりだが、ここでの馬の世話は古参の兵士、エドガーに任せてあった筈だ。エドガーでさえ中々に苦労をする馬を、あの少年がどうこうできると思えなかった。接し方を間違えれば、蹴られて重傷を負うだろう。下手をしたら死にかねない。

帰還早々そんな事態になるのは、この砦を預かる実質的な責任者としてはどうにも縁起が悪い。

そう思って尋ねてみれば、

「いますよ。配置換えもしていません」

シーリスがその口元に微笑すら浮かべて当然のように言い放つ。

その明るい菫色の瞳の奥には、どこか楽しそうな色が見え隠れしていた。

何かを企んでいる。
付き合いの長い相手のそんな表情をユルスナールは苦々しく思いながら、ならば何故と眉根を寄せた。
「見ていれば分かりますよ」
しかし、返って来る言葉は唯その一言のみ。
はっきりとしない言葉遊びは、自分の好みではない。そんなものは、王都に巣くう狐狸の類を相手にすれば良いのだ。
一層、眉間に皺が寄りそうになる。

「ご心配には及びません」
そこに滅多に口出しをしない補佐官のヨルグまでもが割って入った。
二対一。明らかに分が悪い。
ユルスナールは、この場でそれ以上の詮索は止めにした。

「へぇ、面白ぇじゃねぇか。あの坊主の御手並み拝見と行こうぜ。なぁ、ルスラン」
今回の帰還で王都から一緒に付き従ってきたブコバルが、愉快そうに目配せをしてユルスナールの肩を叩いた。
ブコバルは、ユルスナールにとって乳兄弟のような間柄で、幼き頃からの腐れ縁だ。互いに良いところも悪いところも知り尽くした仲だ。その所為か、言動には遠慮などある訳が無かった。
ユルスナールと並んでも決して引けを取らない、いや、それ以上に頑丈そうな体躯を濃紺の外套の下から露わにして、ブコバルが漆黒の外套の隣に並ぶ。
そして、馬の前に歩み出た少年の後姿を、好奇に満ちた青灰色の瞳で眺めた。
ユルスナールは何も言わずに、肩に置かれた暑苦しい手を軽く振り落とすと、同じように皆の視線の先を追った。

キッシャーの前で、その少年は、恭しく騎士としての礼を取った。
そのことにまず、驚きを隠せなかった。
何がしかの遣り取りの後、大人しく、いや、遠目からでも仲睦まじい様子で歩き出した己が黒毛とその少年にユルスナールは内心、信じられない思いだった。
あんなに、いとも簡単にキッシャーが自分以外の言うことを聞くことなど、これまでにあっただろうか。
「……こいつは驚いた」
常日頃から共に行動し、そのキッシャーの気性の荒さを嫌と言うほどに知っているブコバルもそう感じたのか、冷やかすような調子だが、感嘆した様子で口笛を吹いた。
「だから言ったでしょう」
厩舎へ引率されてゆく馬達の後姿をもう一度見てから、シーリスは当然とばかりに言い放つ。
その訳知り顔が、何故かユルスナールには面白くなかった。
「あれは、新しい厩舎番の兵士か？」
兵の管理を取り仕切るヨルグに問う。
「いいえ。その件も含め、後程報告いたします」
が、場所が場所だけにか、言及されたのはそこまでだった。

そんな中、シーリスが注意を引き戻すように軽く両手を叩いた。
「さぁ、いつまでもこのような場所に居ては邪魔です。中へどうぞ」
柔和な面立ちを引き立てる微笑みを浮かべながらも、毒のある言葉を次々と発する。
毒舌で腹黒い性格は、早々変わるものではない。
久々に耳にした仲間の辛辣な言葉を恐々と懐かしく思いながらも、帰還した兵士達は促されるままに、彼らの後に続いて行った。

帰って来たのだ。自分が本来居るべき場所に。

兵舎に入る間際、ユルスナールはもう一度、後方を振り返った。
この国の軍馬の中でも群を抜いて逞しい体躯を誇るキッシャーに寄り添うようにして、似たような黒い頭髪が揺れる。
長く横に垂らした髪が、それこそ馬の尻尾のように風に揺らいだ。
ユルスナールの口元が微かに緩む。
それに気がついた者は、幸いにして誰もいなかった。

隊長の帰還　2）（後書き）

【ルスラン】は【ユルスナール】の愛称ということで。同一人物です。

世界の理

この世界には、【魔法】というものが存在する。
それが、リョウが生まれ育った世界との決定的な相違点だった。
向こうで言うならば、ファンタジー、お伽噺の中の世界のような事象が、ここには当たり前のように存在した。いや、存在しているように見えた。
向こうの世界でも科学では解き明かすことの出来ない人智の及ばない不可思議な出来事は多々あった。
超能力であるとか、幽霊であるとか。例をあげればきりがない。
だが、ここでの魔法というものは、自然の力を借り、己の中にある潜在能力を引き出して使うものであるという。
人は、皆、多かれ少なかれ、その潜在能力を持つが、その力は通常、意識の奥深くに眠ったままで、それを引き出せるか、引き出せないかが鍵を握るらしい。
そうするとそれを【魔法】と形容するのは、少し語弊があるかもしれない。
ここでは【術師】、【施術者】などと呼ばれるのが一般的らしい。
場合によっては妖術、魔術とされ、忌み嫌われる類もあるという。
能力を引き出す使い手によって、それは毒にも薬にもなる。諸刃の剣というところだろう。
リョウが、森に住まう獣達と意思の疎通が出来るのも、その潜在能力に寄るものらしかった。
本来、人には様々な能力があったが、原始の森を離れ、街を作り、強固な石壁を築いて人のみの暮らしをするようになって、そういった能力は【不要のもの】とみなされて、次第に忘れ去られて来たのだとガルーシャは語った。

リョウは浴室に入ると、壁に埋め込まれた四角い形状の鉱石に触れた。

そうすると室内が明るくなる。

この世界に電気はないが、それに代わるようなものは意外に沢山あった。

それもこの一つだ。それは光の粒子を内部に閉じ込めたような発光石で、人が触れると発光する仕組みになっているらしい。石の加工は専門の術者が行い、術が使えない一般の人々もその恩恵に預かれる形になっているのだ。

壁に沿うように小振りの浴槽が備え付けられている。その注ぎ口にある青い石に触れると水が注がれる。水がある程度まで溜まった時点で、その隣にある赤い色の石に触れると浴槽の中の水が温まった。

細かい温度調節は、水の中に手を入れて行う。片方の手で赤い石に触れたまま、以前、ガルーシャから教わったように、意識を集中させる。自分好みの適温を肌で感じ、思い描きながら。そうするとごく短時間で、自分好みの少し熱めの風呂が沸いた。

この世界でも水は場所によってはかなり貴重な資源になり、おいそれと使うことは出来ないらしいが、この地域は割と豊富に存在した。そのお陰で、余り一般的に広く普及している訳ではないものの、入浴の習慣もあった。これは非常に有り難いことだった。

兵舎の中には別途、大きな、大人数で入れる洗い場のある浴場が備えられているらしいが、無論、リョウはそのような所に入って行ける訳でもなく、部屋に備え付けられている小振りの浴槽で十分だった。

ここの屈強な体格を誇る兵士達には狭くとも、自分にはちょうど良い。

こういう時は、身体が小さくてよかったと思う。

湯船に浸かると、御約束のように長い息が漏れた。

一日の労働で強張った筋肉をゆっくりと解してゆく。

肩に手を掛けて、不意に心臓の上にある銀色と蒼色が混じったような文様に目が行った。

ちょうど鎖骨からあばらを一本ほど下りた所、胸の膨らみが始まる辺りには、飾り文字のような装飾模様が、銀色とも蒼色とも付かないような不思議な色合いで入っていた。

それをそっと撫でてみる。なんと書いてあるのかは、リョウには分からなかったが、それはガルーシャが使った印封のように、この術を施した者の名前が入っていると教えられた。

白銀の王、誇り高きヴォルグの長であるセレブロが、自分の為に入れてくれたものだ。

ガルーシャ亡き後、最後の依頼を果たすべく、暫く森を離れると伝えた際に、セレブロは自分の加護をくれた。

呪いのようなものだと密やかに笑って。

人や単なる獣よりも、精霊や神に近い存在であるヴォルグ。

その中でも長い年月を生きてきたセレブロ。

その印があることで、セレブロはリョウの現在地が把握出来るし、もしもの場合、例えば、命の危機に晒された場合などは、直ぐに分かるのだという。

そして、その有効期間は、リョウの人としての命が尽きるまで。

悠久に近い生を生きるセレブロにとっては、ささやかな時間だ。

どんな気まぐれであったのかは知らないが、そういう風に自分のことを気にかけてくれる存在があるというのは、ガルーシャを失った今、特に心強かった。

この印を貰った時のことは、今でもはっきりと覚えている。
セレブロの精を自分の体内に受け入れ、同調させる。
それは、まるで神聖な儀式のようだった。

白銀の王

身体を洗い、髪を洗って。ホカホカと湯気を立たせながら、いい気分で風呂から上がると、然程広くはない部屋の中央、ベッド前の床板に、大きな白い獣がひっそりと蹲っていた。

「……セレブロ」

リョウはその場で目を大きく見開いて、驚きの余りか、気の抜けたような声を出していた。

『暫くぶりだな、リョウ。達者にしておったか』

白い毛並みがうねるように光り輝いて、顔を上げたセレブロが、静かで低い、それでいて良く通る声を出した。

ささやかな企みの成功を喜ぶかのように長い尻尾がひらりと揺れた。

「どうやってここまで……」

そう言い掛けて、リョウは、目の前にある窓が小さく開いていることに気がついた。

いや、まさか。

セレブロは、小さな馬ほどの大きさが合った。

アッカが自分の馬、ユベルに跨る傍ら、リョウはセレブロの背に乗って、ここまでの道を疾走してきたのだ。それも記憶に新しい。

幾ら、狼や豹のようなしなやかで敏捷な肉体を持つとは言え、この巨体があの小さな窓を潜り抜けたのだろうか。

『造作もない』

そんなリョウの疑問を、セレブロは、あっさりと鼻息一つで肯定して見せた。

「それにしても、どうして……」

『そなたに逢いに来るのに理由がいるか？』

たった今、セレブロのことを思い出していたばかりだ。
懐かしい、そんな気分だった。
左胸の印が、その気分に同調したように薄らと熱を帯びた。

『そろそろ独り寝が寂しかろうと思うてな』
からかうように飄々と口にされて、リョウはその白い逞しい首筋に腕を回すとそっと顔を埋めた。

この場所から、どれだけ自分の感情が、この白き気高きヴォルグに流れ込んでいるのだろう。
それらは、必ずしも心地よいものばかりではない筈だ。
だが、セレブロはそのようなことをおくびにも出さない。
セレブロの毛の表面は、少しひんやりとしていて、だが、その中は温かかった。

顔を己が毛皮に埋めたままのリョウに、セレブロが小さく息を吐く。
『リョウ、髪を乾かせ。濡れたままでは風邪を引く』
それに驚く程、過保護だ。
セレブロがリョウの湿った髪に鼻を当て、小さく息を吹きかけると、不思議なことに髪を濡らしていた筈の水分が一瞬にして飛び散った。
大気と水の精霊達との戯れのようなものだとセレブロは言うが、何度見ても不思議なものは不思議だった。
「ありがと」
指で簡単に櫛けずれば、さらさらとした黒髪が指の隙間を通り、一時の戯れの名残のようにそよぐ風に流れていった。

「それにしても、よく見つからなかったね」
寛いでいる所為か、自然と素の口調が出た。

宵の入りとはいえ、この砦は昼夜問わず歩哨が見回りを行い、兵士達の目があるのだ。

唯でさえ、見つけてくれと言わんばかりに白く光り輝く毛並みを持っている。こんな大きな獣が、人間の居住区内を歩いていたら、それこそ大騒ぎになるだろう。

だが、耳を澄ませてみても、闖入者に騒いだ様子はない。

『さようなヘマなどするものか』

呆れたように鼻先を向けられて、それもそうかと、リョウは忍び笑いを噛みしめた。

そして、暫くは、この肌触りのよい毛皮と温もりを堪能するように、セレブロの身体に自分のそれを預けた。

招かれざる珍客

人の感覚で言う所の【久し振り】の温もりに浸ったまま、うつらうつらとしていると、部屋のドアを小さくノックする音が聞こえた。
「は…い？」
半分眠りかけたようなぼんやりとした思考のまま声を掛けると、無駄のない動きでぱっとドアが開く。
そこに身体半分を覗かせた補佐官のヨルグの顔が見えた。
「リョウ、済まないが、この…あ……」
深い、艶やかな低音で淀みなく告げられる筈の言葉は、リョウの身体をすっぽりと包むようにして寝台に寝そべる白い毛皮を前に、不自然に止まる。
そして、数秒の沈黙が下りた。

まどろみの中にいたリョウはともかく、しっかりと覚醒していたセレブロは、ちらりとドアの前に立つ男へ一瞥をくれた。
ヨルグは一瞬、硬直したように身体の動きを止めた。
が、ここは常日頃から、冷静沈着、不動の鉄仮面を地で行く性格がモノを言うのか、二三度瞬きをした後、驚く程速く己が職務を思い出したようで、体勢を整えると、いつものように簡潔に用件を告げ始めた。
いや、この場合、リョウ以外の存在を敢えて見なかったことにしたとも言う。
「この間の例のモノを持って、団長室まで来てくれ」
その言葉にリョウはハッと顔を上げた。
「今からですか？」
「ああ」
バネのように身体を起こしたリョウの艶やかな長い黒髪が、さら

りと背中に広がった。
いつもは無造作に束ねられているだけのそれが、存在を主張するかの如く発光石の光を内包する。
鈍く光を湛えたその【ノーチ】を紡いだ糸のような美しさにヨルグは思わず見とれる。
風呂にでも入ったのか、ふわりと石鹸の柔らかい香りが鼻孔を擽った。

『我も行こう』
不意に耳に入った低い囁きのような音に、ヨルグはその発生源を確かめるように室内を見回すと、その白い大きな狼のような獣と目が合った気がした。
この部屋には自分以外、リョウとその獣しかいない。消去法からいっても、先の言葉は、この獣が発したことになる。
そんなことがあるだろうか。
だが、それを裏付けるように、
「セレブロ？」
リョウはその白い獣の方を見ていた。
「あの、このセレブロも付いてくると言っているのですが、一緒でも構いませんか？」
リョウ自身もその申し出に困惑をしているのか、躊躇いがちに尋ねる。
「……構わないだろう」
珍しく少し逡巡した後に、ヨルグは許可を下した。
「では、今すぐ準備をいたしますので」
良く見るとリョウは寝間着のままだった。
それに小さく了承の頷きを返して、ヨルグは来た時と同じように、無駄のない動きでドアを閉めた。

勝手知ったる砦内を団長室へ向かいながら、ヨルグは、恐ろしく無表情のまま歩いていた。

だが、その頭の中は、今、情報が高速回転をしている。

今しがた、リョウの室内で目にしてしまったもの。それの処理に対してだ。

白く光り輝く見事な毛並みを持つ大きな獣。単なる獣という括りに分類するには、どこか神聖で冒し難く、威厳に満ち溢れていた。

狼に似たそれは、一体、なんであったのか。

あのような獣は、これまでに見たことがなかった。

しかも自分には、あの獣が人と同じ言葉を発したように思えた。

何かが引っかかる。

果たして、それは何であったか。何処かの本で読んだのか、何かの報告にあったのか。

持てる知識を総動員して、膨大な記憶の引き出しを漁っていた。

あの獣がどうやって侵入したのかも砦の管理を預かる責任者としてはかなり気になるところではあるが、動物に好かれるリョウを毎日のように見ているので、その点は、余り疑問に思っていなかった。

恐らく、アレも伝令の鷹と同じく、リョウの知り合いなのだろう。気持ち良さそうに仲睦まじく寝台に横になっていられる程には、気心が知れているらしい。

そういうフィルターを掛けてみれば、あの獣を団長室に呼んだとて、まぁ、唯でさえ手狭な部屋が狭くは感じられるかもしれないが、別段、問題が発生することではないだろうと踏んだのだが……。

果たしてそれで良かったのだろうか。

考えても埒が明かない。許可を下したのは、自分なのだから。

ヨルグは、頭を振って要らない思考の波を脇へ追いやると、長い歩幅をそのままに足早に廊下を歩いて行った。

程なくして、団長室に現れたヨルグの顔に浮かぶ微妙な表情に、すでに中で待機していた面々は眉を潜めた。
「なにか問題でもありましたか？」
上官のシーリスがいち早く、部下の【らしからぬ態度】を問いただせば、
「いえ、……何と言いますか」
いつもの無表情をほんの少し、苦々しものに切り替えて、ヨルグが歯切れ悪く答える。
それを端から見ていたブコバルが笑って口を挿んだ。
「おいおい、ヨルグ、珍しいこともあるじゃねぇか。何だ、はっきりしろよ」
勿体ぶるなとからかうように促せば、そんな部下達の遣り取りを団長室の椅子に座り、机の上に書面を広げながら聞いていたユルスナールは、静かに面を上げると鋭く切り込んだ。
「何があった？」
真剣な顔つきをした団長に、ヨルグは慌てて表情を改めると、小さく敬礼を取った。
「失礼いたしました」
そして、今度は淀みなく、先程の経緯を軽く報告し始めた。

「先程、リョウの部屋に赴き、ここに必要なものを持ってくるようにと伝えたのですが」
「今は、間が悪いと？」
シーリスが先回りをするように問えば、ヨルグは軽く首を横に振った。
「いいえ。その件に関しては問題ありません。ちょうど風呂から上がったばかりのようで、支度が整い次第こちらに向かうとのことです」

簡潔に告げられた言葉に、ブコバルが片方の眉を器用に跳ね上げた。
「なら、問題なんかねぇだろ」
「いえ、そうではなく。リョウ自体は問題ないのですが、その、部屋に…もう一人（？）【客人らしきもの】がいまして、それがリョウに付いてくるらしいのです」

そう。あの時、あの獣は、はっきりと己が意思を主張するように口にしたのだ。
あの獣を何と形容しようかと思い悩んで、咄嗟に人と同じ扱いをしたのだが、その違和感は相手にも伝わったらしい。
「客人？」
この砦の全ての人の出入りを把握している筈のシーリスは、同じ情報を共有している筈の自分の有能な補佐官へ、訳が分からないというような視線を投げた。
「敢えて形容するならば、恐らく。これまで、ここでは見たことがありませんでしたので」
「誰だ。……いや、そんな言い方をするってぇことは……そいつは、人…じゃぁねぇのか？」
独特だが、鋭い嗅覚を持つブコバルが、ヨルグの躊躇いの背景をものの見事に言い当てた。
「ええ。まぁ、口で言うよりも実際に見た方が早いとは思いますが……。一応、許可は出しておきましたので」

まぁ、あの様子であれば、こちらの許可など関係無しにやって来そうではあったが。
とにかく大きさが規格外なので、少々部屋が手狭になるかもしれない。そう、言外に匂わせることも忘れてはならない。
そして、最後に真顔でこう言い放った。
「白い毛並みの大きな狼のような獣です。大きさは、そう……小振

りの牝馬ほどはありましょうか」
他に表現の仕様がなかったからなのか、そう、告げ足したのだった。

ヨルグの言葉に、シーリスとブコバルは一瞬、固まり、互いに顔を見合わせた。
ヨルグがこのような時に冗談を言っているとは思えない。第一、長い付き合いからそれなりに自分の部下の性格を知るシーリスとしては、ヨルグがこのような場面でそういった冗談の類を口にするとは思えなかった。
それなのに。
部下からの報告は、シーリスの予想を遥か斜め上を行くものだった。
ブコバルもそう感じたのか、微妙な表情を浮かべていた。

ユルスナールは、じっとその話に耳を傾けた後、机の上で両肘を立て、合わさった手の間に顎を乗せながら、何かを思い出すようにすっと目を細めた。
白い大きな狼のような獣。
それを聞いて思い出すのは、この国の御伽話の中によく描かれている存在だ。
人とは異なる時を刻む一族。ヴォルグ。
人が一生の間に、それに遭遇する確率は驚くほど低い。
だが、自分に心当たりは、無くも無かった。
「まぁ、来てみれば、分かるだろう」
そう、独り呟いて結論付けると、途中になっていた書類に手を掛けた。

招かれざる珍客（後書き）

【ノーチ】――はこちら側でいうところのシルクに似た繊維という設定です。

縁は奇なもの

寝間着からいつもの服に着替えたリョウは、上着のポケットに入っている封書を、その感触を確かめるように服の上から撫でた。

ヨルグが言った【例のもの】とはこの手紙のことだ。

そして、この呼び出しは、この宛名に繋がる人物の情報が得られると言うことを意味しているのだろう。

五日前、ここに来た当初、まだ時期ではないといったサラトフの言葉が思い出された。

リョウの脇には、ぴったりとセレブロが控えていた。堂々と廊下を歩く姿に苦笑が漏れる。

食堂が一番の賑わいを見せる時間帯なのか、幸いにして道中、他の兵士達とは全く顔を合せなかった。そのことに安堵の息を漏らす。

見つかったら絶対に大騒ぎになる。

今まで長い間、滅多に人に交わらず、深い森の片隅で暮らしていたリョウであったが、このセレブロが、色々と規格外な存在であるということには、森に居た他の動物達の反応から気が付いていた。

ましてや人の目には滅多に触れることのない幻のような存在なのだと。

そんなセレブロが敢えて、付いてくると言うのであれば、それは何がしかの意味のあることなのだろう。

人知の及ばぬ領域で何かが働いている。

今日、この時間に、このタイミングでこの白き森の王が訪れてきたことには、やはり、何か目的があるのだ。リョウには、そう思えて仕方がなかった。

必然の中の偶然。偶然の中の必然。そう言うことだ。

目的のドアの前でノックをする。
「入れ」
直ぐにくぐもった了承の返事が聞こえてきた。
「失礼します」
頭を下げて中に入ると、そこには四人の男達がいた。
「休んでいたところを済まなかったね」
相手を気遣う言葉を真っ先に掛けてきたのは、副団長のシーリスだ。
その隣には、先程、伝令を伝えに来た右腕補佐官ヨルグが立っていた。
「いいえ。こちらこそ、お待たせして申し訳ありません」
ヨルグに軽く目礼をしてから、リョウはシーリスに向き直った。
この砦の中枢を預かる彼らは普段から忙しい人達なのだ。
そんな人達が、態々、自分の為に時間を取ってくれている。それを感謝こそすれ、迷惑に思うなどあるはずがなかった。

リョウは視界の隅で、部屋の中に居るもう二人の存在を認めた。
それに目敏く気がついたのか、
「まだきちんとした挨拶をしていませんでしたね」
先程は、色々と忙しなかったですから。
そう言ってシーリスがおっとりと微笑んだ。

シーリスが促した先には、先程、厩舎へ向かう途中で見かけた顔があった。
漆黒の外套に身を包んでいた銀色の髪をした男。黒毛馬キッシャーの主だ。
後ろ姿だけであったその男の顔が明らかになる。

男は、大きな執務机に座り、手にしていた書類の束へペンを走らせていた。
無造作に撫でつけられた銀色の髪。かつてならば、二次元の世界でしか御目にかかれないような色合いであったろう。
切れ長の目に薄い唇。瞳の色は、青みの強い瑠璃とも濃紺とも取れる色。
全体的に酷薄そうな造形だ。

「こちらは団長のルスラン。まぁ、謂わば、私の上司ですね」
「リョウです。初めてお目にかかります。この度は無事の御帰還、おめでとうございます」
何やら含みのありそうなシーリスの紹介だが、そこには敢えて触れないで、リョウは簡単に名乗るとその頭を軽く下げた。
「この砦を預かるルスランだ。キッシャーが世話になったな」
書類から顔を上げたユルスナールは、口の端を微かに吊り上げた。
それは、きっと微笑みのようなものであったのだろう。
鉄仮面と揶揄されることの多いヨルグの無表情にも慣れた頃合いだったが、ひょっとしたら、この人物も同じぐらい、いや、それ以上に余り感情が顔に出ない性質なのかもしれないとリョウは密かに思った。
だが、別段、悪い印象を受けた訳ではない。
思い出すのは、つい数刻前の厩舎での出来事だ。
キッシャーは、自分の主のことを誇りに思っていた。互いを信頼し合い、良好な関係を築いているとその世話をしながら感じた。
動物達には嘘や誤魔化しがない。その所為か、リョウはキッシャーの主を評価していた。
目の前の人物からキッシャーと同じような匂いを感じ取り、リョウは内心微笑んだ。
「ああ、それから。アッカの件も礼を言う」
「いいえ。こちらこそ、滞在許可を下さりありがとうございます」

団長の節度を弁えた態度にリョウも姿勢を正した。

そして、その執務机の端に寄りかかるようにして、もう一人の男が立っている。

この部屋に入った時から、その観察するような視線を感じていた。

先刻、漆黒の外套の隣に立っていた濃紺の外套を纏っていた男だ。

荒削りの武人然りとした雰囲気の大柄な男。袖を捲りあげたシャツからは、筋肉質な日に焼けた浅黒い肌が覗いていた。

兵士というよりも山賊の親玉みたいな印象を受ける。

「ブコバルだ」

目が合うと、男は少し独特とも言える癖のありそうな笑みを浮かべつつ、手を差し出してきた。

差しだされたのは右手。ふと視界を掠めた先、男の腰には右側に長剣をぶら下げる為のベルトが付いたままだった。

男は、左利きのようだ。利き手とは逆の手を差しだされたことの意味が頭を過る。

警戒されている。それは深読みが過ぎるだろうか。

だが、男が根っからの武人であることは軽く想像出来た。

「ヨロシクな。坊主」

唯でさえ怪力に見えるその逞しい手を取ることをリョウは、ほんの少し躊躇った。

その戸惑いを見越したのか、向こうが先に俊敏な動きでリョウの手を握り込んだ。

思った以上に強い握力の衝撃に引き攣りそうな顔を何とか笑みらしい形に持って行って、

「こちらこそ」

漸くそれだけを口にした。

それにしても、手が痛い。

鍛えられた武人の握力は一般人とは違うのだ。向こうはこちらを

少年だと思ってからかっている積りなのだろうが、これはきつい。
正直、早く、開放して欲しかった。
「にしても、細っせぇ腕だな。鍛え方が足りんぞ」
遠目で見たときも細い体つきだとは思ったが。
そんなことを言いながら、握られたままの右手から反対の手で手首を辿られて、どうしたものかと途方に暮れる。
これは試されているのだろうか。本当に害があるかないかを確かめる為に。
それとも新人兵士への洗礼のようなものなのか。
逞しい体つきの兵士達に囲まれる生活にも慣れては来たが、初対面の相手から受ける過剰とも思われる接触には、身体が緊張した。

がっちりと掴まれたままの腕は、容易に抜けそうにはなかった。
ここで無理に振り払うことも物理的には不可能だし、第一、相手に不信感を植え付けてしまうだろう。
さて、どうしたものか。
顔には出さないように心の中で焦っていると、意外な所から助け舟がやって来た。

『おい、いい加減、その手を離さんか。小童め。リョウが痛がっておるだろう』
音もなく開いたドアの隙間から、立派な純白の毛並みを光らせながら、セレブロがその巨体を滑り込ませてきた。
びりりとした緊張が室内に流れ込んできた。
その瞬間、意識の空白が出来る。
突然のことに力が緩んだ隙に、なるべくさり気なさを装って、リョウは捕らわれていた右手を抜いた。　手首にはうっすらと大きな手の跡が付いている。
恐ろしい握力だ。
そんなことを思いながら、安全のため無意識に、一歩、身体を後

ろへ引いた隙に、セレブロがリョウを庇うようにその身を前に乗り出した。
大きな巨体からは考えられないような軽く、音のない身のこなしだ。まるで、そこだけ重力が削られてしまったような。

「なんだ、手前ぇ」
突然の闖入者故か、それとも静かに醸し出される敵意に似た負の威圧感を感じ取ったのか、瞬時に反応を返したブコバルが威嚇する。
ブコバルの身に纏う空気が一瞬にして変わった。
だが、対するセレブロは、そんな殺気など歯牙にも掛けないように鼻で嗤った。
『ふん、寄るな、ザパドニークの小倅め。リョウが穢れる』
「なんだと」
『無類の誑しが何を言う。この色好みめが』

セレブロがそう言った瞬間、室内に微妙な空気が流れた。
図星を指されたのか、ブコバルが一瞬、喉を詰まらせる。
それは、その発言内容の信憑性を裏付けるようなものだった。

視界の隅でシーリスが笑いを堪えているのが見えた。
その隣ではヨルグが小さく溜息を吐く。
そして、ユルスナールが心底呆れたというようにブコバルへ冷やかな視線を投げていた。
どうやら、セレブロはこの男を知っているらしい。しかも、この男の下半身事情を。
一体、どこからそんな情報を得たのか。意外にセレブロはこの辺りの事情に詳しいのだろうか。
突っ込み所は沢山だ。

だが、いきなり始まった、妙に人間臭い低次元の応酬に噴き出し

そうになりながらも、何故か険悪になる空気を、取り敢えず、どうにかしなくてはとリョウは顔を引き締めると慌てて間に入った。
「ごめん、セレブロ、呼ぶのが遅くて痺れを切らしたんだな。オレは大丈夫だから。落ち着いてくれ」
リョウの言葉にセレブロがゆっくりと首をもたげた。
『無体なことはされておらぬか、リョウ。おお、可哀想に、赤くなっておるではないか』
目の前にあったリョウの手首に目敏く気が付いて、セレブロがその痕をそっと舐めた。
なんだか【初孫とそれを溺愛する祖父】のような遣り取りにリョウは、脱力するような気分を味わった。

「……それが、ヨルグの言う客人か」
そんな中、場の空気を引き締めるような冷静な声が室内に響いた。
ユルスナールは、椅子から立ちあがると長靴を響かせ、ブコバルの隣に並んだ。
そして、リョウの前まで来ると、そっとその手を取り、まだ赤みの残る手首へ優しく指を滑らせた。
「済まなかったな。こいつは昔から莫迦力で加減を知らん」
「あ？」
貶されたことを不満に思ったのか、脇から抗議の声が上がるが、ユルスナールは綺麗にそれを無視した。
「いえ、この位、大事ありません」
リョウはユルスナールの意外な行動に面食らった。
労わるように静かに言葉を紡がれて、急に変化を見せた空気に妙な気恥ずかしさというか居たたまれなさを感じた。
この空気をどうにかして欲しい。
助けを求めるように視線を彷徨わせた先にシーリスが居た。
リョウの信号を確かに感知したシーリスは、苦笑をして見せながらも、的確な対処をしてくれた。

「リョウ、その方を紹介しては下さいませんか？」
『ほう、おぬしは、レステナントか。ならば、尋ねるまでもなかろう』
だが、リョウが口を開くより早く、セレブロ自身が反応を返していた。
「我らレステナントは古より東の神殿を預かる一族に名を連ねてはおりますが、この時代、知識の継承は驚く程に頼りないものとなっています」
誠にお恥ずかしい話ですが――――そう切り出すとシーリスは僅かに目を伏せた。

「不躾を承知でお尋ねいたしますが、貴方は、ヴォルグの一族ですか？」
その問いかけにヨルグとブコバルが息を飲んだ。
『如何にも』
重々しく頷いたセレブロに、
「ヴォルグの長、セレブロ殿だ」
確固たる答えを導く様にユルスナールが言った。

紹介をされて、セレブロの目がユルスナールを捕らえると、その目が懐かしそうに細められた。
『シビリークスの小倅か。見てくれは随分と成長したようだが、その愛想の無さは相変わらずだのう』
「大変、ご無沙汰いたしております」
セレブロ流の皮肉を無表情で受け流すと、ユルスナールは徐に騎士の敬礼を取った。

「それでは、本題に入ることにしましょうか」
場が収まりを見せたことで、シーリスが話の流れを元の位置に戻すように提案した。

確認するように向けられた視線にリョウは表情を改めると、静かに頷いて見せた。

縁は奇なもの（後書き）

ここまで拙い作品を読んで下さってありがとうございます。
感の鋭い方は、作者が付けている固有名詞から、その参考にしている言語学的系統に心当たりがあるかもしれません。個人的な趣味全開です。
まだまだ続く予定ですので、お付き合いください。

託された想い

「ユルスナール・ハイデ・ドゥ・アマン・シビリークス殿、ガルーシャ・マライよりこちらを預かっております。御改め下さい」

リョウは、懐から一通の封書を取りだすと、宛名が見えるようにルスランと呼ばれている団長に差し出した。

セレブロが口にしたシビリークスという家名。

かつてガルーシャが語った男との思い出話。

そこから、この目の前の男が自分の尋ね人であることを導いた。

ルスランというのは、便宜上の通り名、もしくは愛称のようなものかもしれない。本名をみだらには口にしないこの場所では、それは当然のことと類推出来た。

ユルスナールは、無言のまま、差し出された封書を手に取った。

表書き、裏書きを確かる。

「確かに。ガルーシャ殿からの封書、このユルスナールが受け取った」

切れ長の目をどこか懐かしそうに細めた後、しっかりとした口調で事実を肯定した。

取り敢えず、依頼が果たされたことにリョウは安堵の息を漏らした。

これで第一段階は終了だ。

難航するかに思われた人探しが、思い他、上手くいったことにほっとした。

だが、そんな安心感も束の間、

「ガルーシャ殿はお変わりないか？」

何気なく発せられであろう一言に、リョウは静かに目を伏せた。

「……ガルーシャは、旅に出ました。とても長い旅路に」
窓の外に一度視線を流してから、リョウは微かな哀しみを滲ませながら微笑んだ。
その言葉に、息を飲むような音が聞こえた。
暫し、空白の間が下りた。

永遠の別れ、人がその命尽きる時、この国の言葉では、それを【旅立つ】と言い表した。
その本当の意味に気が付いたのは、あの花が咲き乱れる美しい野原で、飛び交う数多もの花吹雪の中、眠るようにガルーシャが横たわった時だった。

一陣の強い風が吹いて、無数の花弁を舞い上がらせた。
静かに目を閉じたガルーシャの身体が花に埋もれ、瞬く間にその全身が見えなくなったかと思うと、立ち上る風に花柱となって空に消えていった。
その時の情景は、今でも目裏にしっかりと焼き付いている。決して忘れることなど出来はしない。
まるで夢を見ているようだった。厳かで幻想的な夢を。
風が止むと、そこには元と同じ、草花に満ちた野原が広がっていた。
ただ、そこにまどろむようにして横たわっていた筈のガルーシャの姿は、跡形もなく消え去っていた。
蒼穹は天高く澄み、白い雲を従えて、その中をのんびりと鳥達が鳴いている。
長閑な見慣れた景色。
その中に、ガルーシャだけが足りなかった。ぽっかりと空いた虚ろな空間。

――――――ああ、ガルーシャは旅立ったのだ。永遠の旅路に。
もう、二度と会うことはあたわない。

そこで、唐突に理解をしたのだ。【旅立つ】という言葉に隠された真の意味合いを。
と同時に思い出した。
何故、ガルーシャがその旅に自分を連れては行けないのだと哀しそうに言ったのかを。
時間が足りないのだと言葉の端々に仄めかすようになったのかを。
そして、寝る間を惜しむように、この世界の理を自分に語り聞かせたのかを。
残された時間は、本当に僅かで。それすらも静かに、進んでいったのだ。

ユルスナールは、その一言で、全てを理解したようだった。
暫し、目を閉じてから、手にした封書の裏面を慈しむようにそっと指で撫でた。
そこにはガルーシャの署名、印封が描かれていた。
そして、表面も同じように辿る。

その瞬間、微かな光が封筒から発せられた。
飾り文字が浮き上がり、踊るようにその場で揺れた。
空気が振動する。何かの波長に同調するように。リョウはそう感じた。

小さな光は、やがて青白く膨らみ、封書の上に陽炎のような半透明の映像を浮かび上がらせた。

揺らぐ光は、古い映写機からスクリーンに映し出される映像のようだった。

浮かび上がったのは、椅子に腰かけ、ゆったりと寛いだ表情を浮かべるガルーシャの映像だった。

傍にはリョウがテーブルに着き、歌を口ずさんでいた。

足下にはセレブロが目を閉じて寝そべっている。

いつかの昼下がりの情景だ。

次に場面は滲むように変わって、あの最後の野原になった。

静かに横たわるガルーシャの隣には、リョウが腰を下ろしていた。

この時もリョウはガルーシャに請われるままに、歌を口ずさんでいた。

吹きすさぶ花弁の嵐。そして、その中に溶け込むようにして消えて行くガルーシャ。

あの時を再現するかのように、室内に空気の渦が巻き上がり、霧散した光の粒子と共に、やがて映像はひっそりと終わりを告げた。

誰も、声を発するものは居なかった。息をすることすら忘れてしまったかのように、沈黙がこの場を支配した。

リョウは、ただただ、その映像が浮き上がった空間を見つめていた。

ガルーシャが【術師】であることは知っていたが、それが、このように人の記憶に作用するものだとは思わなかった。

自分にとっては、不可思議な現象も、目の前で展開された事実には変わりがない。

封じ込めた筈の思いが溢れるようにして、身体から湧き出て来る。

心がどうしようもなく震えた。

漸く自分の思い違いに気が付いた時には、もう全てが終わった後で。

何もかもが手遅れだった。
ガルーシャにきちんとした御別れが出来なかった。
あれ程までに世話になったと言うのに。それが唯一の心残りだ。

「これは……」
発せられた小さな呟きは、果たして誰のものであったのか。
通常、印封の施された封書の解除は、宛名の人物が開封の意図を持って触れるだけで簡単に済む。その場合、印封の部分が音もなく消滅するだけで、今のような映像が現れることなど無かった。
ただ、ガルーシャは術師の中でも特別な存在で。これは生前、最後にしたためられた遺書のような意味合いを持つものだ。
ならば、これは特別な手紙で。そういうおまけが付いていてもおかしくは無いのかもしれない。
そう、リョウは思ったのだが。
「恐らく、リョウの残像思念だろう」
思いもよらない言葉に顔を上げるとユルスナールが、こちらを見ていた。
自分の残像思念。言われた言葉を理解するのに時間が掛かった。
つまり、それは自分の意識の中にある情景だったのだと。
ガルーシャと過ごした時間の記憶の断片。
「この手紙を包むようにして残されているのは、ガルーシャ殿の気ではないからな」
「オレは、別に、……そんなことは出来ない」
ただ、愛する故人の残した最後の品を大事にポケットに入れていただけだ。
「術師ではないし……」
「だが、これは紛れもない純粋な想いだ」

発光石による通常の明るさを取り戻した室内。深い紺とも碧とも違う瞳が、何かを映して揺らぐ。

その手には、読み終えたのか、開かれた手紙があった。
「リョウ」
『りょう』
低く紡がれた言葉は、いつのものだったのか。誰のものだったのか。
「そんな顔をしている位なら我慢などするな。泣きたいのなら泣けばいい」
『そんな顔をする位なら涙を流しなさい。我慢をしたら、その歪みは心に生じる。この腕は、頼りなく見えるかもしれないが、お前を抱き締める位は出来るのだよ』
そう、おどけたように笑う懐かしい声が、頭の奥に響いてきた。
過去の記憶が、現在に介入し、混ざり合う。
ズレて重なった時間軸に、リョウは自分が何処に立っているのか、分からなくなってきた。
頬に触れる指先は、とても優しくて温かかった。
そうやって、もう何度慰められただろうか。
左の頬をそっと包み込む大きなかさついた掌。骨ばった指の感触。
そこから注がれる慈愛に満ちた温かさ。
内側から湧きあがって来る何かを堪えようと静かに目を閉じる。
そして、吸い寄せられるように、リョウは差し出された腕に身体を預けた。

哀しみを堪えるように揺らいだ黒い瞳。
そこに映し出されているのは、ここにはいない存在だった。
悲痛に歪む眼差しに潜むのは、果てしない虚無で、泪の跡すら見当たらない。
この子は、どれだけの哀しみをその身に宿しているのだろう。
悲しいのならば、泣けばいい。心に正直であれ。
かつて師であったガルーシャが語った教えは今でも身に染みついている。
気が付けば、ユルスナールはリョウに手を差し伸べていた。もうこれ以上、哀しみを堪える顔を見てはいられないというように、その頬に指を伸ばす。

思いの外、柔らかな感触が、自分のかさついた無骨な掌に伝わった。
「独りで抱え込むな」
『りょう。お前は独りじゃない。私達は家族だろう?』

一筋の涙が、ゆっくりと柔らかな頬を伝った。
それが合図だったのか、一度、流れ始めた涙は、次々に溢れだし、顎を伝って床に落ちて行く。
「あ、れ?」
意識とは違う所で流れ続ける涙に、リョウ自身が驚いて、そして戸惑いを隠せなかったようだ。
咄嗟に俯いて、溢れだす透明な雫をその手で拭い始めた。
「それでいい」

『そう、それでいい』
囁いて、傍にある身体をユルスナールは片腕でそっと抱き締めた。
背中に回されたユルスナールの腕が、一瞬、戸惑うように動きを止めた。
洗いざらしのシャツ越しに触れた線の細さにユルスナールの指が躊躇いを見せる。
成長途中の少年にしては華奢で小柄な方だとは思ってはいたが、実際に触れてみたリョウの身体は、見た目よりもずっと細かった。ともすれば力の加減具合で、折れてしまうのではと思う程に。
宥めるように撫でた背中は、恐ろしく薄い。小さく震える肩を隙間なく肌を寄せるように抱き込むと、風呂上がりだと言っていた石鹸の柔らかな匂いが鼻孔を擽った。
無意識に空いたもう片方の手でその髪に触れた。
自分の馬と同じような色合いの黒髪は、驚く程に滑らかでさらさらと指通りが良かった。その繊細な軽さを堪能するように優しく幾度も手を滑らせた。
そして、衣越しに触れてみて初めて生じる何がしかの違和感。それは男では有り得ない感触だった。
――――まさか。
ふと浮かんだ疑問。
壊れ物を扱うようにそっと背中を摩る大きな掌が、何かを確かめるようにその輪郭を暴き出す。
上手く服で誤魔化してはあるが、ユルスナールの手が辿る背は、腰にかけて滑らかにくびれていた。
そして、その下には、やはり男とは全く違う弾力のある肌が存在した。

幼子のように自分の胸に縋り、声を殺して涙を流している姿は、少年のそれに近い。

だが、この部屋に来て、ここに集う男達に対峙して見せた穏やかな眼差しは、とても落ち着いていて、見た目から受ける印象の割には酷く老成している感があった。

一見、１５、６の少年に見えるが、実際の年齢はもっと上なのかもしれない。

この黒い髪の色もそうだが、リョウの顔立ちは、この国の人間とは明らかに違っていた。

遥か西の方に暮らす民の中に、黒髪を持つ一族はいた。

だが、彼らの肌は一概に日に焼けて飴色をしており、その髪もうねりのある縮れ毛が多いと聞く。

リョウのように日に焼けていない肌の色と真っ直ぐな髪を持つものは、自分が知る限り、様々な人種が入り混じるバザールでも見かけたことが無い。

もし、リョウが仮に成人した女性であるならば、この国の女達と比べても、随分と華奢な部類になるだろう。それこそ未発達の子供のように見えるかもしれない。

それは人種の違いなのか、個体差なのか、その辺りはよく分からなかった。

そんな考えが頭を過ったことにユルスナールは愕然とした。

もし、本当に女だとして。

どんな理由から男の格好をしているのかは知れないが、それはこのようなむさ苦しい男所帯では賢明な判断だとユルスナールは思った。

驚くべきことだが、これまでの様子を見る限り、サラトフもシーリスもヨルグも、そして女には手が早いことで悪名高いブコバルで

さえ、そのことには気が付いていないようだった。
俄かには信じがたいことだが。
だが、自分もただ言葉を交わしただけでは疑問には思わなかっただろうことは否めない。
しかし、それで、ふと先程の唐突とも思われたセレブロの介入に合点がいった。
人には相容れぬ気高き孤高の存在が、いつになく気にかけていた。
リョウが女であるならば、ブコバルに対するあの反応も納得がいくのだ。
大事な娘を節操なしの毒牙には掛けたくないという父親のような行動。

リョウの顔立ちは、この国では珍しい、言うなれば異国風だが、客観的に見てもかなり整っている部類に入るとユルスナールは感じた。
少年であるならば、それこそ将来を楽しみにされるという具合に。
真っ直ぐな黒い眉、深い色合いの黒い瞳はキッシャーと同じように澄んだ光を宿し、左の目元には、近づいてみて初めて認識できる程の小さな黒子があった。
そして、薄く引かれた唇。
この国の女達の、どちらかといえば、ぽってりとした唇と肉感のあるふくよかな肢体を見慣れている男達にとっては、この国の基準から見て、女とも男ともつかぬ曖昧さを備えたリョウは、ある意味とても珍しく映るだろう。
潔い程の凛とした佇まいは、女達の視線をも集めるだろう。特殊な嗜好の持ち主には、その希少性もあいまってか、垂涎ものとして映るに違いない。
ここでは上手く隠れているようだが、一度、その内包する美しさに気が付き、そこに潜む何がしかの艶らしき色合いを見つけてしまうと途端に目が離せなくなる。そういう類の静謐で独特な空気をそ

の身に纏っていた。

小さな秘密（後書き）

人の好みは十人十色。
同じようなものの中に、一つだけ違うものが入ると、それが目立ち、何故か気になる。それは人にでも言えることで。そういうものを”示差性”と呼ぶそうです。ユスルナールにもきっとそんなフィルターが掛かっているのでしょう。

ささやかな決意

暫くして、落ち着きを取り戻したのか、リョウがそっと顔を上げた。
「すみません。ご迷惑をお掛けして」
照れ臭さ混じりの、ばつの悪そうな顔をして眉尻を下げた。
「気にするな。こんな胸でよければ、幾らでも貸す」
自分の上着を涙で濡らしてしまったことを申し訳なく思ったらしいリョウに、ユルスナールは小さく微笑んで見せた。
心配はいらないと優しくその背中を叩く。
リョウは、人前で泣き顔を曝すことになって、顔から火が出る思いだった。
穴があったら入りたい。そんな居たたまれなさだ。
こんな筈ではなかったのだ。
哀しみはとうに乗り越えたと思っていた。
ガルーシャが旅立った時も涙が出ることは無かったのだから。
それなのに。
それは、ガルーシャが亡くなってから二カ月、この世界で初めて流した涙だった。
ユルスナールの姿が、何故かガルーシャのそれと重なった。
二人は全く違う姿形をしているし、声だって違う。
それなのに。
ユルスナールの口から出た言葉は、ガルーシャを想起させるには十分だった。
その瞳の奥には、似たような優しさが滲んでいたから。
醸し出す空気の類似に、これまで燻っていたものが引きずられたのかもしれない。そう思った。

少し、すっきりとした気分で身体を離すとセレブロが案じるように寄り添ってきた。
その逞しい首に手を回して、小さく感謝の言葉を口にする。
「ありがと、もう大丈夫だ」
セレブロは、こうなることを予想していたのかも知れない。
「なんだか、みっともない所を見せました。すみません」
笑って誤魔化すように顔を上げる。
涙の痕が若干残るものの、その表情は一転、穏やかなものだった。

そうして息をゆっくり吐いて呼吸を整えると、姿勢を正し、徐に頭を下げた。
「これで一つ、オレのお遣いは終わりました。そして、もう一つ」
そう言うと、リョウは腰に差してあった短剣を手に取った。
そして、迷いのない所作で左に束ねていた髪を手にすると根元の部分に刃を当て、一息に引いた。
「リョウ！！」
「あ、おい」
サクリ。
そんな軽い摩擦音が静まり返った室内に響いた。
止める間も、口を挿む間も無かった。
余りに予想外の出来事に、皆、その場に硬直した。
だが、当の本人は至って冷静で、その口元には微笑みすら浮かべていた。
「愛する人に先立たれた時、この国では髪を一房、共に埋葬する慣習があると聞いています」
そう、静かに切り出した。
「オレの祖国では、遠い昔、まだ戦があった頃のことですが、討ち死にした兵の髪をその証として弔いの為に持ち帰るという習わしがありました。そして残された武人の妻は、夫が死ぬとその髪を切り、俗世を離れました。こちらで言うと神殿に仕えるような感じですね」

初めてそのことを耳にした時、思い浮かべたのはそんな昔の光景だった。

そして、リョウは胸元のボタンを一つ開け、首に垂らした革製の紐に付いた小さな袋を引っ張り出すと、中から豆粒程の丸みを帯びた黒い塊を摘み出した。

「これはガルーシャが旅立った日、その花畑で見つけたものです」

ガルーシャが消えた跡地には、小さな空間が開いていて、そこにこの種らしき塊が落ちていたのだ。

まるでガルーシャがこの種に変わってしまったのではと思えるようなタイミングだった。

いくらなんでもそれを信じる積もりはなかったが、旅立ちと共に生まれたと思われる命の源に、リョウは何か不思議な縁を感じた。

「この種を埋めようと思っています。この髪と一緒に」

リョウは団長であるユルスナールへ向き直った。

「もしよろしければ、この砦の敷地内に植えたいと思うのですが、許可を頂けますか？」

この砦は小高い山の斜面にあり、その頂上まで行けば、遥か遠く、街道に沿って点在する村々に始まり、大小様々な街が薄らとだが見渡せた。あの街道を真っ直ぐ行けば、その昔、ガルーシャが暮らしていたというこの国の中心、王都に辿りつくのだろう。

そして視線を反対方向に転じれば、リョウがガルーシャと暮らしていた森の裾野が広がっている。

この国を一望出来る場所。

それは、ガルーシャの立ち位置とよく似ている気がした。

ここからこの世界の行く末を見守って欲しい。そんな想いがあった。

リョウの申し出にユルスナールは口元を緩めた。

「土地は幾らでもある。好きなところに植えればいい」

「ありがとうございます」

手にした種を握りしめるとリョウは丁寧に頭を下げた。

ささやかな決意（後書き）

髪を切って心機一転。

予想外のおまけ

「で、坊主、これからどうすんだ？」

雰囲気が和やかに落ち着いたところで、それまで黙って成り行きを見守っていたブコバルが不意に口を開いた。

手紙を渡したことで、リョウの用事の九割方は済んだ。後は種を植えれば全ては終わる。そうすれば、この砦にいる理由も無くなる。自分は兵士ではないのだから。

自分には再びあの森の家での日常が待っている。そろそろ裏の畑の状態が気になる頃あいだ。

「もう少し馬の世話をして、これを埋めたら、一度、森の家に帰ろうと思います」

元々、その積もりだった。

リョウの返答にブコバルが意味深にニヤリと笑う。

真正面からそれを見たリョウは、何故か嫌な予感がした。

「そうか。じゃあ、それまで俺が稽古を付けてやるよ」

「稽古……ですか」

思いもよらない提案にリョウの顔が強ばった。

兵士になった積りはないのだが、誤解されているのだろうか。シーリスとヨルグは自分のことを正確に伝えていないのだろうか。

「あの、オレ、剣を持ったことはないんですけど……」

冗談だろうか。

稽古ということは、鍛練場で兵士達がやっているあれを差すのだろう。あの中に混じれというのか。

だが、仰ぎ見たブコバルの目は、愉快そうではあるが、からかうものではなかった。

一時に比べてこの国も治安は良くなったとガルーシャから聞いてはいたが、これから長い先、この世界に一人で生きてゆく中で、万が一という場合は往々にしてあるだろう。幾ら北の森が人の近寄らない辺境とは言え、世の中何が起こるかは分からないのだ。森の中でアッカのような兵士を見つけた場合もそうだった。

ここで通用するような護身術程度は身に付けたいとは常々思っていたので、ブコバルの申し出自体はありがたいのだが、その相手が問題だった。リョウとしては、後でアッカやロッソ辺りにこっそり頼もうかと思っていたのだが。

どう答えたものかと顔を引きつらせていると、

「ブコバル」

嗜めるようにユルスナールが間に入った。

それにホッとするのも束の間、

「お前、リョウを殺す気か」

尋常ではない単語が入っていたことに鼓動が跳ねる。

やはり、ブコバルを相手に稽古をするのは自殺行為ということなのか。

そう、理解した途端、背中を冷たいものが伝った。

「粗雑で反則技の多いブコバルに講師役が勤まるとはとても思えませんが、一番、実戦向きであることは間違いないですね。見てくれもそこらの山賊と変わりませんし」

少し首を傾げながらも、誉めているんだか、貶しているんだか、実にいい笑顔でシーリスが尤もらしく恐ろしいことを言った。

詰まり、それはシーリスとしては、賛成なのか、反対なのか。

ハイリスクだが、ハイリターン。兵士たるものその危険を冒さずしてどうする。

そんなフレーズが頭の片隅に浮かぶ。

いや、それを自分に当てはめてもらっても困るのだが。

「経験がないのなら、まずは基本が大事だと思うが」

至極、冷静に助け船を出してくれたヨルグが、救いの神のように

見えた。
そこで、ふと思い付く。
ヨルグに見てもらうという手もあるではないか。
ブコバルの手前、断りを入れるにもそれ相応の理由が必要だろうが、ヨルグなら納得してくれるのではとの密かな期待があった。
真面目な顔をして『忙しい』と断られそうではあるが。

大昔に齧った剣道と小太刀なら取り敢えずの経験はあるのだが、あれらは決まりごとの中での制限された勝負だ。生きるか死ぬかの命のやり取りをする瀬戸際などない。
要するに根本から違うのだ。
ここの兵士達が持つのは、実戦を念頭に置いた諸刃の剣だ。敵であれば、躊躇い無く人を切れる。そういう心構えを持ち、その理念の上で鍛錬を行っている。
自分には到底、無理だろう。真剣など手にしたことがないのだ。剣一本を取ってみても、まともに持てないに違いない。
だらだらと内心冷や汗をかきながら様子を伺う。
何を酔狂なことをと誰かが一笑に付してくれれば良いのだが。
だが、リョウの生い立ちなど想像も付かないだろうこの男たちに、そんなことを望めそうにもなかった。
「ブコバル。お前は他の奴らをしごいとけ。リョウは俺が見る」
そして、聞こえてきた言葉にリョウは吃驚して、発言者であるユルスナールを見上げた。
本気なのだろうか。団長自らが面倒を見てくれるというのか。
そんな時、不意に今日の昼、食堂で耳にした兵士達の会話が頭を過った。
【容赦ない地獄の訓練】、鬼のようだと揶揄されていなかったか。
目が合うとユルスナールはひょいと片方の眉を上げた。
「なんだ、俺では不満か？」
妙にやる気満々な感じで、何故か凄まれた。

ちらりとヨルグに視線を流すと肩をすくめられてしまった。
その隣にいるシーリスは、苦笑しつつも、その目は諦めろと言っていた。
――そうですか。
「……いえ」
リョウは、その首を縦に振らざるを得なかった。
少なくとも、ブコバルよりは格段にましだろうか。これまでの対応から、基本、紳士的であると思えるし。そう期待することにした。
「ご迷惑をお掛けすると思いますが、お手柔らかにお願いします」
それは、究極の二択だ。
「ルスラン、ずりぃぞ」
「まず俺が見る。それで問題がなければお前にも付き合ってもらう」
副音声として、『そんな事態にはならないだろうが』――そう聞こえた気がした。

「セレブロ……」
――どうしよう。
縋るように白い毛皮に埋もれた灰色の瞳を見れば、虹色の光彩を煌めかせて、白銀の王は小さく笑った。
『よい機会だ。みっちりしごいてもらえばよい。万が一の場合は、しっかりと報復してやる』
そういう問題ではないだろうに。
頼もしい発言も、やや論点がズレている気がしてならない。
『リョウとて中々やると思うが。我の加護もある』
身体を鍛える為に太極拳や中国拳法、空手を自己流にアレンジしたものを行ってはいたから、それを目にしているセレブロは、この世界には無い物珍しさもあってそんなことを言うのかもしれない。
だが、所詮、見よう見真似で素人が齧ったもの、玄人の技に敵うとは到底、思えない。
「では、明日からだな」

決まりとばかりに告げられ、諾と頷く他は無かった。
「はい。よろしくお願いします」
おやすみなさいと挨拶をして、心なしか疲れたような顔をしたリョウは、セレブロと団長室を後にしたのだった。

予想外のおまけ（後書き）

【少年】の通過儀礼というところでしょうか。

一日の終わり

部屋に戻ってから、寝巻に着替えて。
リョウはふと窓に映った自分の姿に苦笑を漏らした。
肩上で不揃いになった髪。
あの時は衝動的にあの場で髪を切ってしまったが、冷静になってみると何もあそこでやらなくても良かっただろうと思わなくもない。
だが、髪を切ったことで、ガルーシャとの思い出に別れを告げて、一歩踏み出せたのは事実だ。
気持ちの区切りが付いた。
「ハサミ……あるっけ？」
流石にこのままでは上手くないから、長さだけでも揃えたい。
ふと漏れた呟きにセレブロが顔を上げた。
『ハサミ……とはなんだ？』
セレブロにとっては耳慣れない言葉であったのだろう。
ガルーシャの家には無かったし、モノを切断するのは専らナイフだった。

【こちら】と【あちら】の違い。日常生活品から一般論に至るまで、知らないことは沢山ある。
そして、ガルーシャと二人きりの狭い世界の中で暮らして来たリョウには、まだまだ学ぶべきことが多かった。
リョウは、簡単に形状と使用目的を説明する。
『ああ。人がシフルの毛を刈る奴か』
セレブロには思い当たるものがあったようだ。
「シフル？」
耳慣れない固有名詞に、今度はリョウの方が首を傾げた。
『家畜だ。刈った毛を紡いで糸にする。そうして作った織物は暖か

く保温性に優れていると聞く』
つまり、羊毛みたいなものか。リャマとか。兎とか。アルパカとか。
こういう時、セレブロが人の事情にも詳しくて助かった。
それでは、この砦にもあるかもしれない。ここの兵士達も伸びてきた髪は切るであろうし。明日にでもヨルグ辺りに聞いて借りよう。

そんな算段を心の中で付けていると、
『リョウ、来い』
いつのまにか、セレブロは人型になっていて、寝台に腰掛けていた。
白い光輝く毛皮は、そのまま髪の色に反映されている。
その目は同じ灰色だったが、時折、光の加減で虹色が入る。何度見ても不思議な光彩だ。
この姿を目にするのは二回目だった。
一度目は、セレブロの加護を貰った時。とても原始的、且つ根源的な手法を取ったからだ。
先程は、いつもの獣の姿のままで寝台に横たわっていたのだが、流石に狭かったのだろう。
促されるままに布団の中に入る。
セレブロは、すっかり短くなったリョウの髪へ手を伸ばすと指で梳き始めた。
『短くなったな。明日にでも揃えてやろう』
「セレブロが？」
意外な申し出に、まじまじと上にある顔を仰ぎ見る。
『なんだ。我では不満か？』
「いや、出来るのかと思って。純粋な疑問として」
『それ位、造作もない』
拗ねたような言い方にリョウは小さく喉の奥を鳴らした。
普段は獣の姿で、人型になったセレブロに接する機会は殆ど無か

ったので、その手が、幾ら同じ形状と機能を持っていたとしても、器用に鋏を使うところを想像できなかったのだ。

だが、不意にリョウの脳裏に加護を受けた時のことが過った。

あの時、セレブロの手は、その大きさに比べてとても優しく、力加減も繊細であった。

ならば、心配など要らないだろう。

「それじゃぁ、宜しく頼みます」

こうして長かった一日が、穏やかに幕を閉じていった。

一日の終わり（後書き）

ここまでお付き合い下さり、ありがとうございます。
漸く長い一日が幕を閉じました。第一章からここまで、時間軸的には【同じ一日】の出来事です。

朝靄の中で　1）

翌朝、厩舎の仕事を終えたリョウは、馬場の柵に寄りかかり、中で疾駆する砦の馬達の群れを眺めていた。

「すっかり短くなったな」

掛けられた声に振り向けば、団長のユルスナールが立っていた。

昨日の帰還の時の服装とは違い、砦の兵士達が着用しているような簡素な上着とズボン、それにシャツを身に着けていた。格好だけを見るならば、朝、食堂を賑わせていた年若い兵士達と何ら変わりはなかった。

「おはようございます」

馬場の柵に凭れていた身体を起こして、リョウは挨拶を返した。

つと前方より伸びてきた手が、感触を確かめるように髪に触れ、離れていった。

昨日とは違い、耳の下、襟足ギリギリのところで切り揃えられた髪は、直ぐに指を離れて行く。

ここまで髪を短くしたのは久し振りのことだったが、別に気に病んではいなかった。

これまでは毎日が必死であったから、正直、髪のことまで気に掛ける余裕がなかったのだ。気が付けば、伸びていたという感じで、今は、背中にある重さが無くなって、実に爽快な気分でもある。放って置けば、また伸びるのだから、この軽さを暫し楽しみたいという感じだ。

「器用なものだ」

その言葉にリョウは小さく笑った。

「セレブロが揃えてくれたんです」

ざんばらであった、まちまちの長さがそれなりに揃っているのは、

セレブロのお陰だ。人の姿を取ったセレブロは、意外な程に長い指を器用に動かして、何処から借りてきたのか、この世界での鋏なるものを操った。その形は昔の糸切り鋏に似ていた。
思いも寄らないことだったのか、ユルスナールの眉がほんの少し上がった。
「セレブロ殿は？」
「一旦、森へ帰りました」
このままこの砦に居るには、他の兵士達の手前、具合が良くないだろし、そもそもセレブロは自由気ままな立場だ。ふらりと現れては、また消えて行く。今では帰る時には、ちゃんと自分に一言残してから行くが、基本、何物にも縛られない存在だ。
だが、自分にはセレブロの加護がある。胸の上にある印は、あの白銀の王と確実に繋がっているのだ。森の小屋に帰る頃に呼べば、また颯爽と現れるだろう。
それこそ一陣の風のように。

「そうか」
小さく頷いてから、ユルスナールは柵の中を見ると口笛を吹いた。
甲高い音が響く。
と、それに応えるようにして、馬場を駆けていた馬の中から一頭が、小さく嘶いた。
立派な体躯を誇る黒毛がこちらに向かって駆けて来る。
あれは見紛う筈がない。キッシャーだ。
朝日を浴びて、その体は艶やかに黒光りしていた。

キッシャーは、柵の傍で止まると己が主に向けて、鼻面を突き出した。
対するユルスナールは、穏やかな眼差しで手を差し伸べ、一撫でする。
端から見れば、実に絵になるような主従だ。

「おはよう、キッシャー」
『リョウ、そなた、髪はどうした?』
主から、つと視線を流して、横に居たリョウにキッシャーは怪訝な声音で問うた。
この馬も中々に目敏い。
「ああ、切ったんだ。昨日。流石に重たくなったからな。さっぱりしただろ?」
今朝から、もう幾度も繰り返された台詞を口にする。あれだけ長かった所為かは分からないが、皆から一様に驚かれたのがリョウには意外であった。

ここの兵士達の髪の長さは実に様々だ。男だから短く、というような固定観念は無いらしく、長い髪を後ろで軽く束ねたり、肩ぐらいの長さを無造作にそのままにしていたりが多い。
現に自分の目の前に居るユルスナールもそんな感じだ。
短く刈っている者もいるが、余り多くは見かけなかった。恐らく、散髪の習慣とそれに用いる器具の違いの差なのだろう。理髪店というものがあるのかどうかさえ疑わしかった。
また、以前、ガルーシャに付き添って訪れた町や村の女達は、皆、一様に長い髪をしていた。
仕事をする女達は一つに束ねたり、編んだり、スカーフを巻いて邪魔にならないようにしていたが、決して短くはしていなかった。そういう習慣なのかも知れない。
髪の長さが女性性の象徴であったりするということは想像に難くない。
そうすると益々髪を切った自分は少年にしか見えなくなるのだろう。そう思うと少し可笑しかった。
『そうか。中々に似あっておる』
「ありがと」
兵士達にも馬達にも、一先ず好意的に受け入れられたようで、リ

ョウは内心ほっとした。

厩舎番のエドガーが持ってきた鞍を受け取るとユルスナールは、それをキッシャーに宛がった。

「リョウ、付き合え」

そう言って、颯爽と己が黒毛に跨った。

これから馬場で馬を走らせると言うことなのだろう。若しくは早駆けか。

「……あの、オレ、馬に乗ったことが無いので」

多分、無理だ。

そう思って困惑気味にユルスナールを見上げれば、

「なに？」

『なんと！』

ユルスナールとキッシャーが同じタイミングで、同じような表情をしてリョウを見下ろした。

主従相似る。そんな言葉が思い浮かんだ。

「ここまではどうやって来た？」

「セレブロの背に乗って」

『ヴォルグの長か。成程、そなたの身には、長の気が残っておる』

動物の世界でも白銀の王の名は轟いているらしい。

「ならば問題あるまい」

ユルスナールはそう言うと実に器用にリョウの身体をひょいと持ち上げて、自分の鞍を跨がせるように前に据えた。

突然、上昇した視界に声を上げる間も無かった。

「あの背に乗ってここまで辿りつけるのであれば、これしきの揺れなど造作あるまい」

言うが早いが、鐙を蹴って、駆け出した。

「うわ」

主の合図に、キッシャーが自慢の脚を持って疾駆する。
爽やかな朝の空気が、頬を刺すようにぶつかってくる。上下する規則的な揺れにリョウは驚く間もなく、その鬣を掴んだ。
「これに掴まれ」
差しだされた手綱に慌てて手を添えた。

どうにかして体勢を整えた頃、気が付いてみれば、ユルスナールの膝の間に抱えられる様にしてその鞍の前に収まっていた。
逞しい左腕が、支える為にか腹部に回される。その右手は、手綱を器用に操っていた。
「キッシャー、早い」
思わず上ずりそうになる声を上げれば、
『気持ちがよかろう』
上機嫌に黒毛が嘶いた。
速度を緩める積りは微塵もなさそうだ。
揺れる視界の中、リョウが必死に身体のバランスを整えようとしていると、
「体の力を抜け」
低い囁きが耳を擽った。
腰に回された手に力が入る。後ろに押しつけるような力が掛かり、リョウは言われるままに体の力を抜いた。
そして、馬の疾走する揺れに身体を任せた。
「それでいい」
ユルスナールが小さく笑ったのが、震えた空気から感じ取れた。

セレブロに跨ってアッカと共に砦に来た時は、落ちないようにしがみつくのに必死で、周囲を見渡す余裕など無かったが、今は、後ろに大きな壁があり、そこからくる安心感からか、景色の移り変わりが目に入って来た。
ユルスナールは馬場を軽く一周した後、キッシャーの鼻先を丘陵

の方へ向けた。

朝靄の中で　2）

暫くして木立の中を抜けると突然、視界が開けた。
そこには鬱蒼とした木々に囲まれるようにして泉が広がっていた。
穏やかな水面は、吹き抜ける風に揺れ、空を鏡のように映し出す。
揺れる白い雲の合間から、日の光が反射してきらきらと輝いていた。

泉の近くまで来るとユルスナールはキッシャーの歩みを止めた。
眩いまでの美しい景色に、リョウは馬上で息をするのも忘れたように目の前を見つめた。
ユルスナールが先にキッシャーから降りる。
そして、行きと同じように徐にリョウの腰を掴むとその逞しい腕に抱えて下ろした。

何かの花の香りだろうか。風に乗って微かに甘さと清涼感の混じる匂いが届いた。
凪いだ水面には、森の木立が映り、揺らいだ蒼い空の中を水鳥が飛んでゆく。
とても静かだった。
木々のざわめきと風の音。そして、泉のせせらぎの音。

こういう自然の景色は、【向こう】も【こちら】もそんなに変わらない。
そうしていると未だに自分が何処に居るのかが分からなくなる時があった。ひょっとして【ここ】にいるのは長い夢の途中で、瞬きをすれば、また耳に馴染んだ機械音・エンジン音が聞こえてくるのではないかなんて。

身じろぎしないリョウの傍ら、柔らかい土を踏みしめて、ユルスナールが隣に立った。そして、同じように、空に合わせて姿を変えて行く揺れる水面の景色へと視線を向けた。
「ガルーシャのこと、感謝する」
低く静かに紡がれた一言に、リョウは我に返ると軽く頭を振った。
「いいえ。感謝するのは、オレの方です。今、オレがここにあるのは、全てガルーシャのお陰。ガルーシャがいなければ、オレはこうして生きては居なかった。本当に世話になりっぱなしで、幾ら感謝をしてもし足りないくらい」
「最後の家族だ……と、そう書いてあった」
それは、きっとあの託された封書の手紙のことだろう。勿体ない言葉だ。

リョウは、あの穏やかな日々を懐かしむように微笑んでいた。
決して色褪せることのない大切な記憶。想い出などにはなりはしない。

「俺にとってもガルーシャは、父であり、母であり、そして、師でもあった」
訥々と故人との過去がつまびらかにされてゆく。
そっと見上げたユルスナールの横顔は、冷たい陶器のようだった。だが、その瑠璃とも形容できる瞳には、愛する者を失った哀しみの色が滲んでいるように思えた。
「だが、人としての定めには逆らえん」
それは当然の理だ。命あるもの、いつかはその終焉を迎える。たとえ、特殊な力を持っていようとも。死は万人に平等だ。残された者は、いつだってその悲しみを抱え、乗り越えて行く。
流れゆく時と共に。やがて訪れる己が最後と共に。
「お前が傍に居てくれてよかった」
そう言って、ユルスナールは振り向いた。口元に微笑みの切れ端

のようなものを浮かべながら。
見下ろした瑠璃色と目が合う。
リョウは、それに応えるように小さく微笑みを返した。

ユルスナールにとってもガルーシャは特別な存在だったのだ。ここに自分を連れてきたのは、整理した気持ちを吐き出す為であったのかもしれない。
ガルーシャという糸で繋がる適度な距離感を持った他者に。
哀惜の共有者として。
素を曝すには、砦の兵士達では具合が悪かったのだろう。

ついと伸びてきたユルスナールの手が、リョウの髪を梳いた。
何度も手触りを楽しむように。ごつごつとした骨ばった感触が頬に伝わる。剣を扱うことで出来たのだろうタコのような固さが所々にあった。
「勿体ない事をした」
それは、短くなってしまった髪のことを言っているのだろうか。
「放って置けばすぐに伸びます」
砦の兵士達の大げさとも思える反応を思い出して、小さく笑う。
それほどまでに長く伸ばした髪を切るということはここの男達にとっては衝撃だったようだ。
ユルスナールも何がしかの罪悪感のようなものを感じてしまっているのだろうか。気まずい思いなどする必要はないのに。
「キッシャーは誉めてくれましたよ」
からかうような声音で態とおどけて見せれば、
『世辞など言わん』
「ほら」
少し離れた所で、ゆったりと草を食んでいたキッシャーが本当のことだとばかりに合いの手を入れる。　動物達は聴覚が発達しているので、囁き程度の音でもこの距離であれば十分聞きとることが出

来るのだ。
　それを後方に仰ぎ見たリョウに、ユルスナールは、やや不満そうな顔をした。
「リョウはアレの言うことが分かるのか」
　今更のことだが、面と向かって尋ねられたのは、それが初めてだった。
「はい。昨日、皆さんがセレブロと話をしたように。オレには同じように聞こえます」
「ガルーシャもそうだった」
「獣たちは元々、我々の言葉を理解しています。人に飼われている動物なら尚更。獣たちが話す声を聞き取ることが出来なくなってしまったのは、人の方だと。ガルーシャは、そう教えてくれました。恐らく、かつての人の祖先は、その能力を【要らないもの】として認識してしまったのでしょう。都合の悪いことには耳を塞ぐ。そうしたい気持ちも分からなくはありませんから」

　だが、失ってみて初めて、その本当の大切さに気が付く。その事実を重大だと認識した時点では、もう大概、手遅れになっているものだ。
　それでも、その事実に向かいあって、どうにかしようという気持ちを持ち続けることは尊いものだ。
　そうやって人は過ちを繰り返しながら生きて行く。

「その能力はガルーシャが引き出したのか」
　術師であったガルーシャには、その人が持つ潜在能力を見極めることが出来たようだ。そして、それを引き出す素養を教えることが可能だった。
　かつてはもっと人の大勢いる賑やかな街に居たことがあると語っていたガルーシャも、そういった仕事を引き受けたりしたのだろう。
「いいえ。オレの場合、気が付いた時にはそうなっていました。ど

うやら無意識のようです」
その言葉に、ユルスナールは意外そうな顔をした。どうやら驚いたようだ。
通常、術師は自分の能力を意識して制御（コントロール）することで、その力を発揮させる。獣達との会話もそういった統制（コントロール）の上で行われるものらしい。情報の取捨選択といったところだろう。
だが、リョウの場合は違った。
この世界に紛れ込んで、初めて言葉を交わしたのは森に住まう狼達だったのだから。
その時は、動物達と意思の疎通が図れたことに感謝をし、そのことをしきりに感心をしていたのだ。そうでなければ、とっくに森で飢え死にか、他の獣の餌食になっていただろう。
それから、森の片隅で暮らしていたガルーシャに拾われた。その時になって初めて、その違いを教えられたのだ。
運が良かった。今にしてはそう思う。

「砦の馬達は実に個性的で面白い。皆、結構なお喋りですよ」
喉の奥を小さく鳴らすとリョウは隣の人馬主従を見比べた。
「キッシャーは、貴方に似ている。熱狂的な信奉者がいるところとか」
リョウの脳裏には鼻息荒く【黒き雷】、キッシャーの武勇伝を熱く語るスート（アスレイの馬）の姿と砦の兵士達の己が隊長を噂する情景が重なるようにして過っていた。
その言葉にユルスナールは、微妙な顔をしてみせた。

「リョウ、年は幾つだ？」
それは、些か唐突ともいえるような問いだった。

二人は湧き水で喉を潤すと泉が一望できる草場に腰を下ろしていた。
「……幾つぐらいに見えますか？」
混ぜ返すように口にされて、ユルスナールはじっと観察をするように目を細めた。
何故、そんなことを聞くのだろうか。
「そうだな。この国を基準に考えるなら……十五、六……辺りか」
そう言って言葉を濁したユルスナールに、リョウは話の方向を変えた。
「兵士たちの中で、一番年若い者は、十七、八ですか」
確か、シーリスがそんなことを言っていた。
頬にそばかすの残るオレグの顔が浮かぶ。

王都で騎士団に入隊出来るのは十五からだが、その内二年間は見習い扱いで、ここの砦のように外に派遣されるのは正式に団員として認められてからだと聞いた。
「ああ、その位だろう」
「サラトフもブコバルもオレを【坊主】って呼んでいますよ？」
自分が、かなり幼く見られているという自覚はあった。
兵士たちの中では、自分は年端の行かぬ少年で、誰もそれを疑問に思う様な事は無かった。だから、そういった質問が改めてされるとは少し意外だ。

自分自身、そういう対応に慣れた所為もあるが、気にも留めていない。

それなのに。

この団長であるユルスナールは、他の砦の兵士達とは少し違っていて、なんだか調子が狂う。

「お前はソレでいいのか」

「構いません、別に」

それは、自分が見かけよりもずっと年を取っていることを確信しているような口ぶりだった。

恐らく、ユルスナールの中では何らかの齟齬が生じているのだろう。外見から受ける印象と実際に言葉を交わすことで生じる誤差みたいなものが。

それとも、あの手紙の中にそのことに関する申し送りのようなものがあったのかもしれない。

「ガルーシャは何と？」

「いや、詳しいことは何も」

手紙にはその辺のことが色々と記されていたのだろうかと思ったのだが、そうではなかったらしい。

まぁ、ガルーシャはそう言った瑣末なことは気にしない性質だったから、【らしい】といえば【らしい】対応だ。

だとすれば、帰還早々一日で、何がしかの違和感に気が付いたと言う訳になる。森の獣達並みに野生の勘が働いたのだろうか。流石、隊を取り仕切る団長であるだけはある。

その観察眼には目を瞠るものがあるが、この時点では、リョウ自身、まだ正直に告げるのは躊躇われたので矛先を変えることにした。

「ちなみに団長は……」

「ルスランでいい」

「では遠慮なく。ルスランは、お幾つですか？」

「幾つに見える？」

そうして問いは、再び振り出しに戻った。
互いに本当のことを告げる気が無いことが知れたのか、ユルスナールは喉の奥を鳴らした。
それに釣られるようにしてリョウも込上げて来る可笑しさをそのままに笑った。

一頻り笑いあった後、リョウは不意に真面目な顔つきをして見せた。
「他に聞きたいことがあるのではないですか」
リョウはゆっくり振り返るとユルスナールを見上げた。
その瞳には、真剣さと穏やかさの中にもどこか相手を試すような茶目っ気の色が躍っていた。
対するユルスナールは、リョウを一瞥すると再び視線を前に戻した。
何も言わないまま、キッシャーが草を踏みしめる音だけが辺りに響いた。

やがて、リョウの足下に影が掛かった。
それは蝕のようにリョウの体を覆い尽くした。
流れるような所作で長い指に顎を掬われたかと思うと酷薄そうな男の面が近づいてきた。
息が掛かる程の近さで瑠璃色の瞳が密やかに細められる。何かを見定めようとしている鋭利な刃物の切先のようだ。
「避けないのか？」
「……避けた方がいいですか？」
至近距離での問いかけにリョウは淡々と言葉を返した。
顔を赤らめることも動揺を見せることもない。至って冷静な反応だ。
それを挑発と受け取ったのか、ユルスナールの口角がくいと上がったのが分かった。

手袋を取った剥き出しの手が、頬の輪郭をなぞって行く。
親指が、この国の女にはない薄い唇を一頻り撫でる。その感触は、薄くとも柔らかいことに変わりは無かった。
そして、ゆっくりと辛うじて残っていた筈の距離がゼロになった。柔らかな、それでいて少し冷たさのある感触が口の端を掠めた。
心中は疑問符が沢山立ちこめては居たが、リョウがたじろがないのには訳があった。
第一にユルスナールは本気ではない。
行為そのものは、相手の出方を探るようなものだった。狼達が鼻を押し当てて、匂いを嗅ぐようなものに似ている。ここで下手に騒げば、喉笛を噛み切られるだろう。
砦の兵士たちに混じってみて分かった事だが、ここの人たちは、身体的接触の距離が近かった。他人を己が領域（テリトリー）に受け入れる許容範囲が割と広いのだ。
それに、今更、触れる程度の口付けだけで騒ぎ立てる程、初心でも無かった。

なんの反応も返さないリョウに、ユルスナールはどこか面白くなさそうな顔をした。
「なにか分かりましたか？」
唇だけなら、男も女も大した違いは無いだろう。
そんな相手の心中が察せられたのか、ユルスナールは小さく笑っただけだった。

想像と真相の乖離率（前書き）

真実というものは、得てして、他人が思うよりも単純であったりするものです。想像と現実の落差は、視点が変われば滑稽にも哀しくも映るでしょう。

想像と真相の乖離率

「聞いてもいいのか？」
暫し、沈黙が落ちた後、ユルスナールの低い声が耳朶に届いた。

何処までも思慮深い男だとリョウは思った。
強面の顔には似合わず、繊細で心の機微に敏感だ。
「聞くだけなら。幾らでも。答えられないことには答えませんから」
この男の四角四面張った律儀さをヨルグみたいだと少し可笑しく思いながらも、リョウは穏やかに言葉を継いだ。
「ですが、ルスラン。貴方はガルーシャに縁のある人。それだけでオレには十分な理由たり得ます」
そう言ってリョウは眩しいまでに鮮やかな笑みを浮かべた。

ガルーシャが信を置いた人物。
第一段階の警戒を取り去るには、それだけで十分だった。
その言葉に後押しされるようにして、やや躊躇いがちにだが、核心をつくような問いがなされた。
「何故、そんな格好をしている？」
それは自分が女であるという前提に基づいて発せられた問いだった。
リョウは、苦笑し、何と答えたものかと考えを巡らせた。
そして出た結論は、
「この方が楽だからです」
自ら進んで男装をしていた訳ではない。別に男に成りたい訳でもない。
どう説明すれば、相手に納得してもらえるだろうか。知識の前提条件が全く異なる相手との会話は中々に神経を使う。

まず自分が立っている土台の説明が必要だろう。
「ワタシの故郷では、服装にそれほどはっきりとした性差や厳格な決まりがあった訳ではないのです。スカートを履くのは往々にして女性でしたが、男性が履いてはいけないという決まりもなく、それと同じようにズボンも男性同様、女性が普通に身につけるものでもありました。勿論、場所や行事、職業などによってしかるべき服装の基準と言うものはありますが、普段は機能性が重視されていました。あとは個人的な好みですね。元々、シャツやズボン、スカートといったものが、外から入って来た異国の文化であったということもありますが」
やはり、その言葉にユルスナールは不思議そうな顔をした。
「その前は何を着ていたのだ？」
「【キモノ】と呼ばれるもので、男女ともに同じ形をしています」
リョウは傍に転がっていた棒切れを拾い上げると、乾いた地面に簡単な絵を描いて見せた。
「こんな感じです」
此方側にも似たような衣装があるだろうか。
「仕立てる生地の素材や色で男物や女物の区別を付けました」
「随分、変わった形をしている」
「まぁ、ワタシがいた頃では、普段着としては廃れてしまっていて、伝統的な衣装として特別な機会に着るという程度でしたが」
個人的には結構気に入っていたのだ。冬場は温かく、腰帯び一つで締め付けを調整できるので楽でもある。
こちら側でも長い衣を太い腰紐一つで留める文化があってもおかしくはない。
「この辺りでは見かけませんか？」
「ああ。大陸の遥か西の方はわからんが、俺が知る限りは、見たことが無いな……といっても、俺は服飾のことは詳しくはないが」
そう言って、肩を竦めて見せたユルスナールをリョウは笑った。

確かに。無骨な兵士というイメージが先行するユルスナールが着道楽で、王都に居るという貴族たちのように無駄に衣装に凝っていたりしたら、それはそれでぞっとしないでもない。華やかさには一見縁がないようにも思えるが、この砦の団長を任される位なのだから、それなりの出自ではあるのだろうが、どうにも想像が付かなかった。

「まぁ、それは置いておいて。早い話が、ワタシは女の身でもズボンを履くことに違和感を覚えない場所で育ったと言うことです」

脱線した話をここで元の位置に戻す。

そして、そっと溜息を吐くと自嘲気味に付け足した。

「ただ、ここでこの格好をしていると、どうしても年端の行かぬ少年にしか見えないようです」

その方が、都合が良かったということもあるが、一々訂正をするのも面倒なのでこのままにしている。　そんな惰性の上に成り立ったものでもあった。

「誰も不思議に思わないのですから、いっそ清々しい程ですよ」

そう言って、小さく肩をすくめて見せた。

それは裏を返せば、自分に女を感じさせる部分、即ち、女性的な魅力が無いということなのだろう。

この国の女達は大抵、肉感的で豊満だ。身体の作りも自分よりは確実に一回りは大きそうだった。そういった女たちを見慣れている男たちにとって、リョウの姿・形は女性としての認識を通り過ぎてしまうのだろう。

思うことは色々あるが、これ以上、考えても気が滅入るばかりだ。なけなしの自尊心も流石に無傷では済まない。ここでは敢えて、そのことには触れないことにした。

「……そうか」

微妙に空いた間は、団長なりの気遣いの表れなのかもしれない。

「だが、その方が賢明でもある」

「まぁ、そうでしょうね」
現状の認識としてはそうだ。仮にも男所帯の兵士達の中に居るのだから。
無駄な混乱は、兵士たちの統率を乱し、要らぬ危機を招きかねない。それは上に立つ者としては絶対に避けなければならないことだ。

そして、
「生まれはどこだ?」
ついに来てしまった質問に、リョウは曖昧な微笑みを浮かべただけだった。
一陣の風が頬を撫でて行く。
水面に出来た漣に、映り込んでいた自分の影がぐにゃりと揺らいだ。
ここでの自分の存在は、あの影のようだとリョウは思った。
「……【Ｎｏｗｈｅｒｅ（ノーウェア）】……」
沈黙の中で、小さな呟きが漏れた。
ユルスナールには、耳慣れない音の羅列に聞こえた。意味を成さない音。
「ノーゥ…エ?」
それを確かめるように独りごちる。
だが、それを発した筈の当人は、ほんの少しだけ困った顔をすると、何でもないと言う風に頭を振ってから、空を見上げた。
「そろそろ時間のようですよ」
透かし見上げた先には、一羽の鷹が悠々とその大きな羽をはばたたかせて、こちらに向かってくるのが見えた。

想像と真相の乖離率（後書き）

ここのところ感傷的な話が続きましたが、次回は少しコメディータッチにお届けする予定です。

【少年】の通過儀礼　1）

行きと同じようにキッシャーの背に揺られて馬場に戻ると、人の悪そうな笑みを浮かべたブコバルが、剣を片手に待ち構えていた。
「お早いお戻りで」
鍛錬場のブコバルの周囲には点々と、息も絶え絶えな兵士たちが座り込んでいた。
どうやら鬼のような地獄の訓練が一段落したところらしい。疲労困憊、ぼろぼろの兵士たちとは対照的に、ブコバルは意気揚々としている。まだまだ動き足りなさそうな感じだ。
事の次第を素早く理解したリョウは、噂に違わぬ稽古の厳しさと法外な持久力を誇る相手に顔が引き攣りそうになるのをどうにかして堪えた。
「坊主、お前もどうだ？」
不意に昨日のシーリスの言葉が頭を過った。
【……粗雑で反則技の多いブコバルに講師役が勤まるとはとても思えませんが、一番、実戦向きであることには、違いはないでしょうねぇ……】

「あぁ……オレはまたの機会に」
誤魔化すように笑みを浮かべてみるが、上手く出来ただろうか。
「リョウ、お前はこっちだ」
ブコバルの誘いをあっさりと無視して、ユルスナールがリョウを促した。
それを見ていた兵士達は御愁傷様というような憐みの視線を投げ掛けて来る。
「リョウ、頑張れ」
「死ぬなよ」

「骨は拾ってやる」
その不穏な台詞にぎょっとして後方を振り返った。
一体、どんな死地へ赴く戦士だ。
生温い声援が、へばった兵士達の間から送られて、内心、嫌な予感がした。
その真意を図るべく、団長を見上げれば、からかいを含んだ冷徹そうな眼差しと目が合った。
ニヤリとこちらも極悪人も真っ青な笑みを向けられて、リョウはごくりと唾を飲み込んだ。

「剣を持ったことは？」
「【コダチ】なら」
「コダチ？」
「片刃の、この位の長さの剣です」
その形状を、手振り身振りを交えて簡単に説明すると、ユルスナールは暫し、考えるような素振りを見せてから、訓練用の中から一本の比較的短い剣を選び出した。
「持ってみろ」
手渡されて握ってみる。
刃は訓練用に潰されてあった。
鍔が競り出ている両刃の所為か、やはり勝手が違う。重さはその昔稽古で使っていた小太刀よりも若干勝っているように思えた。長さは大分あるが、仕方がないだろう。
取り敢えず感触を確かめる為に構えてみた。小太刀のように左手に持ち、刃先を下にして腕を前方に掲げる。そして軽く腰を落とした。身体は意外と昔の経験を覚えていたようだ。
すると、ユルスナールが長剣を手に前に立った。同じように潰してある刃が鈍い光を湛える。
「では、小手調べと行くか」
いつでもいいと掛かった声。

……とても通用するとは思えないのだが。
相手のペースでいつの間にか整ってしまった場に、リョウは腹を括った。
ええい、ままよ。
こんなことになるなら、昔、もう少し稽古に身を入れておけば良かった。などと独りごちそうになるが、今更、嘆いたとて詮方ないことだ。

深く息を吸い込み呼吸を整えると静かに目を閉じた。
集中。
空気が張り詰めるのが感じ取れた。

正面から向かって行っても無駄だ。
長さのある剣とこの短い剣、それに相手と自分の腕の長さがある。明らかにこちらが不利だ。
それに、元々、相手の命を奪う覚悟、人を自らの手で傷つける覚悟なんてなかった。
逃げる隙を見つける為。相手の不意を付く為。精々其処までだろう。

対峙するユルスナールには隙が無かった。
剣先が誘うように小さく動く。
力では到底適わない。それも分かり切ったこと。
活かすなら素早さと身体の小ささだ。思い付くのは、相手の懐に飛び込む捨て身の戦法だ。実戦ならば、かなりの賭けだろう。少なくとも無傷ではいられない。下手をしたら致命傷、いや、命が無くなる。
だが、これはあくまでも訓練の一環で。ここで躊躇いを見せても仕方がない。
リョウは、小さく息を吸い込むと剣を握る手に力を込めた。

土を蹴って。勢いを付けて、踏み込んだ。
当然のことに斬り込んだ一太刀は軽く受け止められる。そのまま、力任せに押される前に、さっと脇へ遠退いた。
そして直ぐ様、間を置かずにもう一太刀。
金属がぶつかる鈍い音が鳴る。
刃から伝わる重みが柄に響いて、握った手に痺れが走った。
歯を噛みしめてその痛みをやり過ごす。ここで柄を放す訳にはいかなかった。
そんなやり取りを何度か繰り返す。
ユルスナールは受けるだけで、暫くは能動的な動きを見せなかったが、ここにきて試すように反撃を始めた。
ただでさえ重みのある剣が何倍もの威力を伴って打ち付けられた。柄を握り込む腕にかなりの負荷を与え始めた。
咄嗟に受けた一撃は、膝を突きそうになるが、体勢を崩しながらも何とか踏みとどまった。
「流せ」
ユルスナールが変わらぬ無表情の下、小さく言い放つ。
――――それが簡単に出来れば苦労しない。
リョウは、段々と息が上がってきた。
元々の体力、持久力の無さはいかんともし難い。
打って変わって、ユルスナールは平然としていた。額に汗すら見えない。
相手の涼しい顔つきに、明らかな力量の差が分かっていても悔しさが込み上げた。妙なところで負けず嫌いの性格が顔を覗かせる。
隙が無いのなら、作るしかない。かなり無謀であることには違いなかったが、自分の持久力の限界も近かった。踏み出すなら、今しかなかった。
すかさず入ってきた一撃を受けるかに見せて、剣を横に滑らせ、

身体を捻ることで、かわす。そのまま、反動を利用して背後に回り、刀の柄を相手の脇へ思い切り突き入れた。
入った……と思った……のだ……が。
――――パシン！！！
鈍い破裂音とともに、突き入れた筈の柄は、大きな手のひらに受け止められていた。
革の手袋が柄を握り込む。

それを瞬時に見て取って。リョウはぱっと左手を放す。
反射的に片手を着いて身体を沈み込ませると、足払いを掛けるように右脚が出ていた。
革と革のぶつかる鈍い音。長靴が擦れる音がする。
だが、渾身の力を込めて打ちつけた筈の脚は、びくともしなかった。

丸腰のまま、崩れた態勢から身体が大きく開く。
その瞬間を逃さないかのように影が差した。
あっと思った時には、喉元で長剣の切っ先が光っていた。
「……参りました」
あっけなくも勝敗は着いた。
ゆっくりと息を吐いた瞬間、ドクドクと耳の奥を奔流のように血液が流れる音がする。吹き出す汗が、首筋を伝った。

【少年】の通過儀礼　1）（後書き）

立ち会いの描写は難しいですね。昔から個人的に時代劇や時代小説が好きで、【小太刀】はそこから想像をしたものです。素人判断なので、現実的には色々と可笑しい点が多々あると思いますが、どうか、ご容赦を。

【少年】の通過儀礼　2）

荒くなった呼吸を整えて。
張り詰めていた緊張の糸が切れると、途端に周りの景色に音が濁流のように流れ込んできた。
リョウがふと周囲を見渡すと、二人を囲むように訓練を中断した兵士達が集まっていた。
「坊主、大丈夫かぁ？」
「おうおう、へばってんなぁ」
「しっかりしろ」
「リョウ、体力ねぇぞ！」
「でも、頑張ったんじゃねぇ？」
「あぁ、あの隊長相手だ」
「お疲れ」
方々から声が掛かる。
何故か沸き立っている外野に、リョウは微妙な表情を作った。
不様なところを晒しただけのような気がするのだが。

困惑気味に思っていると、目の前にすっと茶色いものが差し伸べられた。
見上げれば、ユルスナールが手袋を付けたまま、その大きな手を差し伸べていた。
それを取れば、ぐいと勢い良く引っ張り上げられた。
「思ったより筋はいい。鍛え方次第でもう少しまともに使えるようになるだろう」
立ち会い前と変わらない涼しい顔をしたまま、ユルスナールの口元が僅かに緩んだ。
「ありがとうございました」

寛大な評価を意外に思いながらも、リョウはふらつく足を叱咤し、姿勢を正すと頭を下げた。

「坊主、中々やるじやねぇか」

野太い声と共に勢い良く背中を叩かれる。

バシンといい音がして、リョウは突然のことにたたらを踏んだ。

痛みに顔を顰めたその顔を見て、

「……ブコバル」

嗜めるようにユルスナールが、背後から現れた闖入者に冷ややかな視線を投げた。

しかし、当の本人は気にも留めず、それを豪快に笑って誤魔化す。

「ハハハ、それより坊主、さっきのはなんだ？　えらく珍しい太刀筋だな。あんな構え方、初めて見たぞ」

どうやら先程の立ち会いで使った構え方が気になるらしく、興味津々に尋ねられて、リョウは返答に困った。

根っからの武人としての血が騒いだようだ。

「ああ、その……昔、……故郷で習ったものです」

ここの兵士たちは親切だ。だが、全てを正直に告げられるほど、心を許せた訳ではなかった。

嘘をつくのは苦手だ。だから、時々、どう答えていいか分からなくなることがあった。

「……へぇ？」

歯切れ悪く答えれば、それ以上は訊ねてくれるなと言う空気を感じとったのか、ブコバルは髪をがしがしと掻き乱した。

粗野な印象が勝るブコバルだったが、他人の感情の機微に敏感に反応し、さらりと流してくれるところはとてもありがたかった。

それ以上の質問を流したブコバルは、その代り、大きな剣を肩に担いだまま、意味ありげに目配せをして見せた。

「リョウ、俺の相手もしろ」

挑発的に口元が弧を描く。

――――冗談じゃない。

さっきの今で立ち会いを申し込まれて、リョウは思い切り顔を引きつらせた。表情を取り繕う余裕さえ失していた。

「ほら、休憩は終わりだ。お前達は訓練に戻れ。足りないようなら後でみっちり扱いてやるから、期待して待って置け」

ユルスナールが周囲を囲んでいた兵士たちへ声を掛ける。

すると、冷やかしの様子見をしていた兵士たちは、隊長の号令にすぐさま顔を引き締め、方々へ散らばって行った。

そして、

「ブコバル、お前もだ」

血の気の多い朋輩に釘を刺すことも忘れない。

「リョウはこっちに来い」

再び促されて。

ブコバルの相手をしなくて済んだことに安堵したのも束の間、リョウには新たに厳しい特訓が待っていた。

それから、剣の重みに慣れる為、初歩となる型の稽古をみっちり行う羽目になった。少しでも気を抜こうものなら、激しい檄が飛ぶ。上官としてのユルスナールは厳しく、初心者だからと言って、手加減など無かった。

訓練が終わる頃には、もうヘトヘトだった。

ここにきてから一番身体を動かした気がする。慣れない筋肉を酷使したせいか、身体の節々がギシギシと音を立てた。

「もっと体力をつけろ」

へばった己が醜態を見たユルスナールに半ば呆れたように告げられて、リョウは苦笑いして見せるしかなかった。

第一、比較対象が間違っている。自分は、周囲で剣の稽古をしている筋肉質な若い男達とは違うのだ。　今朝の泉のほとりでの会話

から、ユルスナールはそのことに十分気が付いていると思ったのだが……。情状酌量の余地も無かった。

それでも、指摘は尤なことだと自分自身が一番、分かっている。

そう思えば、表立って反論をする気力も残ってはいなかった。

その日、リョウは、食堂で顔を合わせた兵士達に、一様に同情をされ、からかわれた。

娯楽の少ない場所柄、噂話の類は一気に広がる。団長に付きっきりで扱かれたこともそうだが、自分の素人振りが余程、目に付いたのだろう。

厨房の料理長ヒルデも話しを聞きつけたらしく、カウンターで顔を見せれば、『もっと体力つける為に沢山食べろ。体の基本は食事からだ』といつもの持論を繰り返した。それを黙って聞き流す。

受け取ったトレイには、いつもよりおかずが一品、多く乗っていた。

なんだかなぁと思いながらも、普段以上に沢山身体を動かしたせいか、出された食事を完食することが出来た。

空になって返ってきたトレイを見て、ヒルデが満足そうに笑みを浮かべながら、内心、小さく拳を握り締めていたのは、また別の話だ。

【少年】の通過儀礼　2）（後書き）

ツワモノどもがユメのあと　1）（前書き）

今回は、料理長ヒルデ視点で。ちょっとした宴の様子を挟みます。
楽しんでいただければ幸いです。

ツワモノどもがユメのあと　1）

「よし、これで最後だ」
料理長ヒルデが、その太い腕に大きな平皿を抱えて、厨房のカウンターから顔を覗かせた。
「落とすなよ」
「【ダ・カニェーシュナ（イエッサー）】！」
掛け声だけは宜しく、威勢のいい返事が返って来る。
皿を受け取った、まだ顔にそばかすの残る若い兵士は、自分に任された重大任務を、やや覚束ない手付きと足付きで全うしようとしていた。
そのへっぴり腰には目を瞑るとして。
「へィ、お待ちぃ」
景気のいい声が響けば、テーブルを囲んでいた男たちがやんややんやと囃し立てながら、道を開ける。
そうして、熱々の湯気を立てている大皿の料理は、恭しくもその真中に鎮座したのであった。

それなりに広さのある食堂。
そこにある実用性重視の簡素なテーブルには、今や、様々な料理が実に美味しそうな匂いを立てて、所狭しと並んでいた。それを囲むように、ここの砦の兵士たちが点々としている。
食べに走る者。飲みに走る者。話に興じる者。実に様々だ。
室内は、いつになく賑やかだった。
あちこちで笑い声が波のうねりのように寄せては引いて行く。
今夜の食事は大皿・大鍋で出され、各自が食べたいものを自分の取り皿に取り分ける方式だった。
この地方の特産でもあるスグリの実を発酵させた酒、【ズグリー

シュカ】も特別に振る舞われ、滅多に味わうことの出来ない貴重な酒にちょっとしたお祭り騒ぎだ。
酒の入った連中は、高揚した気分をそのままに大きな笑い声を上げ、出された料理へ手を伸ばす。それを窘めるような野暮な者もこの場には居なかった。
室内は、最早、無礼講の様相を呈し始めていた。

「おぅ、おぅ、派手にやってるなぁ、こりゃぁ」
次々に減っていく皿の中身を遠目に見ながら、砦の厨房、もとい兵士たちの胃袋を預かる料理長ヒルデは呟いた。
美味しそうに自分達が作ったものをそれこそ豪快に食べる様は、見ていて気持ちのいいものだ。
料理人冥利に尽きる。その一言だ。
その所為か、ヒルデは滲みでる嬉しさを隠そうともせず、強面と評判の髭面に満面の笑みを浮かべていた。

このちょっとした宴会は、元々、一人の少年と暫しの別れを惜しむという【送別会】の名目の下、開かれたものだった。
――というのは、まぁ口実で、本音半分ぐらいは、それにかこつけて、ただ酒を飲んで騒ぎたいということなのだろうが。
何かにつけて大騒ぎをするのが好きな連中だ。
この砦は、王都から遠く離れた北方にある、所謂、僻地で、厳しい訓練と命懸けの任務以外には、大した娯楽のない辺鄙な場所だ。
血の気の多い、それこそ血気盛んな若者たちには、偶の息抜きが必要だった。
そう言う訳で、こういった宴会は、水面下で静かに溜まる鬱憤を発散させるにはもってこいの契機になるのだった。

ヒルデは騒いでいる若い連中に混じって、つまみを食べている小さな体とその黒い頭部を探し当てた。

今回の主役だ。
大勢の中にいても、少年の姿は直ぐに見つかる。
兵士たちの明るい髪色の中で、その少年の黒い頭髪は目に付いた。
その癖のない真っ直ぐな漆黒の髪は、室内を照らす発光石の穏やかな光を浴びて艶やかに輝いていた。

その少年がこの砦に現われたのは、十日程前の事だった。
リョウと名乗ったその少年は、一言で言えば、不思議な子供だった。
まだ成長途中と思われる身体は、華奢で線が細い。声は、男にしてはやや高い方だが、声変わりをするかしないかの頃合いなら、そんなものだろう。
ならば、そこらにいる子供とそう変わりはない、と思うかもしれない。
だが、何というか、リョウは普通の少年とは少し違う不思議な空気をその身に纏っていた。
すっと伸びた背筋にひっそりとした佇まい。見た目だけなら十四、五ぐらいだろう。
だが、言葉を交わせば、その印象は随分と変わる。
一言で言えば、リョウは酷く大人びていた。
お喋りと言うよりは寡黙な性質で、かといって、愛想のない無口でもなく、口を開けばにこやかな笑みを浮かべ、ころころと表情を変えるのだ。まだ幼さの切れ端をその瞳に残して、愛くるしい小さな笑みを浮かべる。それを見ていると何故か心が和んだ。
この辺りでは珍しい黒い瞳は、真っ直ぐに相手を見据える。
そして、そのややもすれば堅苦しい口調には少し訛りがあるが、慣れてしまえば、そんなことは気にならない程度だ。物腰も柔らかく、落ち着きがあった。
このぐらいの年頃の少年は、往々にして生意気な所がある。怖い

ものなどないというような自信に満ち溢れているものだ。無茶なことだって平気でする。普通ならば、もっと擦れたところがあっても不思議ではないだろう。

だが、この少年にはそんな所は見受けられなかった。

物理的にも精神的にも敵いっこない強面揃いの男たちに囲まれて、普段の威勢の良さがなりを潜めているという訳でもなさそうだ。体の大きな兵士たちの中に居ても委縮することもない。

ひょっとすると、この坊主は、それなりに【いいところの出】なのかもしれないとヒルデは最初、思った。ちゃんとした教育を受け、裕福な家庭に育つ、といった。

しかし、その割には、言動、仕草、どちらを取っても鼻についた所は無く、こんなむさ苦しくて騒がしい所に居ても平然としている。

考えれば考える程、ヒルデには不思議で堪らなかった。

リョウは、砦の兵士たちの中にもするりと溶け込んでいた。

閉じられた空間のせいか、仲間意識が強い兵士たちの中には反発もあるだろうと自分なりに心配もしたのだが、リョウは分を弁え、上手く彼らとの距離感を保っていた。

リョウがいる場所は、そこだけ空気が違う。

あくまでも個人的で感覚的なモノだが、ヒルデはそう感じていた。

一介の兵士として、そして料理人として、長年様々な人間を見てきたことで培ってきた自分の勘は、強ち間違っているとは思えない。

また、リョウの邪気のない微笑みは、離れた街に暮らす自分の家族を思い起こさせた。

二人の息子はとうの昔に成人して、それぞれ家庭を持っている。

息子達は、この国の男らしく、姿形も今では自分のようにいかついが、幼い頃はそうでもなかった。子供特有の細さは、誰にでも共通だろう。リョウの姿は、時として、そんな幼い息子達との遠い記憶に重なるのだ。

成長期とはいえ、リョウの線の細さは、料理人としては気になるところだった。よくよく見ていれば、食も驚く程細い。

同じ男として、リョウにも自分の息子たちのように強く、逞しくなって欲しかった。

おせっかいと言ってしまえば身も蓋もないが、もうじき孫が出来るという男の楽しみなど、精々、そんなところだろう。

ツワモノどもがユメのあと　2）（前書き）

ヒルデのやや暴走気味な感違いはまだまだ続きます。

「おら、坊主、ちゃんと食ってるか？」
自分よりも一回り、いや、二回り以上は確実に大きい、若い男たちの中に埋もれるようにしてテーブルに着いている小さな背中にヒルデは声を掛けた。
「ヒルデさん」
頭の上に包丁ダコのできた大きな手を乗せれば、くすぐったそうに黒い瞳が自分の太い指の間から覗いた。
上気した頬は血色もいい。そのことにまず安堵の息を漏らした。
「凄く美味しいです」
「そうか」
料理人にとって最高の褒め言葉に、ヒルデが柄にもなく相好を崩した。
「後でコツ、教えて下さい。これって、【バラーニ】の肉ですよね。あの臭みをどうやって消してるんですか？」

【バラーニ】は少し癖のある肉だった。良質な脂肪分が多く栄養価は高いのだが、肉自体に独特の匂いがある。元々、南方からもたらされた家畜で、慣れてしまえれば気にならないのだが、人によっては好き嫌いが分かれる食材だった。
ここでは食べ易くなるように数種類の香草類を一緒に煮込んでいた。その配合は料理人の腕の見せ所だ。肉自体には旨味がある為、味付けは【ソーリ（塩）】のみ。一般的な根菜類と煮込めば、いい味が浸み込む。
思いがけない質問をされて、ヒルデは興味深そうに片方の眉を吊り上げた。
「なんだ、お前、料理をするのか？」

「ええ」
「そうかそうか。その年で包丁が握れるってのは大したもんだ」
「そんな、大したものは出来ませんけど」
嬉しそうに目を細めたヒルデに、リョウは面映ゆそうに目を伏せた。
「俺の息子たちなんざぁ、坊主ぐらいの年ごろには何にも出来なかったぞ」
偉い偉いと褒めそやされて、リョウが苦笑を洩らす。

すると、
「俺だって出来るぞ！」
張り合うように隣に居たオレグが声を張り上げた。
図体ばかりは大きいが、まだまだ頬にそばかすの残るこの砦で最年少の十七歳は、突然現れた初めての【弟分】に何かと兄貴風を吹かせたがった。
挙手付きで発言をしたオレグに周りを囲む仲間の兵士たちがどっと沸いた。
「お前なぁ」
「何言ってやがる」
「お前のは大雑把過ぎるんだよ、あんなのは料理の内に入らねぇ。第一、食えたもんじゃなかっただろ」
動かぬ証拠としての実例があったのか、仲間内から一斉に非難を浴びた。
「あれが男の野戦料理だ」
「お前が威張ってどうする」
「アタ！」
パシリと頭部を叩く小気味よい音がして、オレグが恨めしそうに自分を叩いたセルゲイを見た。
それに周りが笑う。
リョウも釣られるようにして忍び笑いを漏らしていた。

そんな中、
「上手かったぞ」
テーブルを囲んでいた兵士の一人であるアッカが、ぼそりと呟いた。
どこか懐かしそうな表情を浮かべている。
「あ？」
「リョウの作った食事だ」
「ああ、そうか、お前はリョウんとこに世話になってたんだった」
ロッソの落ち着きのある声に、ヒルデも食堂で耳にした兵士たちの噂話を思い出していた。

アッカがその任務途中で行方知れずになったという知らせは、当時、砦の兵士たちに少なからず衝撃をもたらした。アッカの職務に忠実で真面目な仕事ぶりは仲間内でも定評があり、困難に直面しても冷静沈着で的確な判断を下せるということで、今回の特殊任務への抜擢となったのだ。
そんな優秀な仲間の失踪事件は、食堂を訪れる若者たちの間に影を落としていた。
任務の特殊性からその詳細は公にされず、緘口令が敷かれていた。皆、職業柄、表面上は何ともないという表情を取り繕っては居たが、人が集まり、一日の中でも気が抜ける場所である食堂では、収まり切らない心の内がどうしても漏れてしまう。要するに噂話の発生源でもあった。

アッカが砦に帰還した時は、そういった微妙な緊張感の中にあったのだ。
アッカが生きている。
先触れとして伝令に仕立て上げられた鷹が飛来した時は、それこそ大騒ぎになった。皆、本人の無事をその目で確認するまでは半信

半疑だったが、祈るような気持ちであったに違いない。
そして、負傷したアッカが砦の通用門に馬で乗りつけた時、その傍らには一人の少年がいたと言う。
大きな白い獣の背に跨り、アッカとその馬ユベルに寄り添うようにして、人馬主従を見守っていたという。
その少年が、リョウだった。
アッカは、足に大きな怪我を負っていたが、その後の経過も良く、今では他の兵士たちに混じり、通常訓練に参加している。
ヒルデにとって、ここの兵士達は自分の息子たち同然だった。その時のことを思い出すと今でも胸の奥が熱くなる。

妙な感慨に浸りながら、ふと見下ろしたリョウの手元には【ズグリーシュカ】のグラスが置いてあった。
【ズグリーシュカ】は甘みのある、まろやかな口当たりの酒だったが、アルコール度数の強いシロモノだった。摂取量が少ない分には問題ないが、その飲みやすさからついついグラスを重ねてしまうと、後で酷いことになる。翌日は確実に二日酔いコースだ。
ヒルデは吃驚して、リョウを見下ろした。
「おい、坊主、お前、酒を飲んでんのか。誰だ。リョウに【ズグリーシュカ】をやったのは！」
怖い顔をして声を荒げたヒルデに、
「おやっさん、固いこと言うなって」
お調子者のセルゲイが、すかさず宥めるように口を挿んだ。
「莫迦言え、お前、こいつは子供が飲むには強すぎるだろうが」
「まだ一杯目だろ。なら大丈夫だ」
冷静なロッソの声に続き、
「そうそう、俺だってこの位の時には、もう飲んでたぜ」
「俺も俺も」
「馬鹿、お前は底なしだろ。比べる内に入らん」
「大丈夫だって、ちゃんと見てればいいんだろ」

オレグが兄貴分らしく、そう言えば、皆が口々に囃したてる。
酒が回り始めたのか、滑りの良くなった若い男達の口説にヒルデは苦い顔をした。

それまで、黙って皆の遣り取りを聞いていたリョウであったが、そんな心配そうなヒルデを見上げて微笑んだ。
「大丈夫ですよ。ヒルデさん。飲み過ぎないように気を付けますから。これでも自分の加減位は分かっています」
「お前、酒は大丈夫なのか？」
「ええ、それなりに飲みつけてはいます。これは少しきついですけど」
そう言って美味そうに【ズグリーシュカ】の入ったグラスへ口を付けたリョウに、ヒルデは仰け反りそうになった。
――――――何と言うことだ。
ヒルデは額を片手で覆いたくなった。
こんな子供の口から『酒を飲みつけている』なんて言葉を聞くことになるとは。これは忌々しき事態ではないのか。
言いたいことは沢山ある。だが、この場の雰囲気に水を差すようなことは、流石にしたくなかった。
仮にも主役はこの少年なのだ。この場所での最後となる晩餐ぐらい楽しい思い出として記憶に残して欲しかった。
「……そうか」
ヒルデは、若干引き攣りそうになる口元を堪えながらも、漸く、その一言だけを吐き出したのだった。
「まぁ、程々にな」
そう言って、周りにいたしっかり者のアッカやロッソに『あまり飲ませるな』と釘をさして、テーブルに背を向けた。厨房ではまだ片付けが残っている。
「ヒルデさん」
その哀愁が漂ってきそうな大きな背中に声が掛かる。

「ん？」
のっそりと振り向けば、リョウが椅子から立ち上がって、【ズグリーシュカ】の入ったグラスを小さく横に振っていた。
「ヒルデさんもご一緒しませんか？」
にこやかに誘われて悪い気はしなかった。
まぁ、今日ぐらいは目を瞑るか。自分が目を光らせて置けば良いのだから。
ヒルデは気持ちも新たに髭を蓄えた口元を上げると、ニヤリと人の悪い笑みを浮かべた。
「ああ。お前ら、潰れんなよ」
そう言うとひらりと片手を振って、厨房へと戻って行った。
宴はまだ、始まったばかりだった。

ツワモノどもがユメのあと　2）（後書き）

真実との落差、微妙なズレが笑いになれば（笑）。

キミのヒトミにカンパイ　1）（前書き）

前回に引き続き宴会のお話です。元々、小話にしようかと思っていたのですが、思いの外、長くなってしまったので、そのまま本編にしました。

少々、下世話な話題が入ります。ご注意ください。

キミのヒトミにカンパイ　1）

どんちゃん騒ぎもたけなわとなり、辺りには気だるい空気が漂い始めていた。

若い男たちが酒を片手に集えば、自ずと出て来る話題は一つだろう。

――――酒と煙草と女。

この世界にも煙草に似た薬草はあったが、若い兵士たちには余り縁の無いものだった。こちらでも吸い過ぎると毒になるのは同じようで、軍部の定める規律では手を出してはいけないことになっているからだ。

となれば、当然、出て来るのは、そう【女】の話だ。

「あ～、街が恋しい」

誰からともなくそんな呟きが漏れれば、

「【スタローヴァヤ（街の食堂）】のハンナ、元気にやってんかなぁ」

オレグがテーブルの上に頬杖を突きながら、どこか遠い目をした。

思い出しているのは、地元に残して来た恋人のことだろうか。

それが皮切りだったのか。

どこそこの店には大層な美人がいるとか、やれ、どこそこには可愛い子がいるとか、果ては誰それの娘は父親とは違って器量よしだとか。

それこそ枚挙に暇なく。脳内の妄想も、酒の力を借りてか、欲望のままに駄々漏れ状態だった。

リョウは半ば、呆れた顔をして男たちの話を聞いていた。いや、強制的に聞かされていたとも言う。

酔っ払いというものは、国が違っても、それこそ世界が違っても、

そこにあるのが【人】である限り、性質が悪いことには違いなかった。うっかり余計な口を差し挿もうものなら、絶対にあらぬ方向へ飛び火する。妙な絡まれ方をしない為に、時折、合槌を打って見せながらも、大人しく【ズグリーシュカ】のグラスを啜っていた。

さっきまで隣で飲んでいた筈のこの砦の【良心】とも言うべき髭面強面親爺のヒルデは、向こうの男たちに呼ばれて、席を離れてしまった。

御目付役が居なくなった途端にこれだ。

「だあぁぁぁ、あの柔らかさが堪んねぇんだよなぁ」

この国の女達の豊満な曲線を思い出したのだろうか。一人がグラスの酒を呷るようにして飲み干した。

そして、こちら側では、拳を固く握りしめて、妙に熱い舌戦の攻防が繰り返されていた。

「バッカ、お前、やっぱり、女は胸だろ、胸！」

一人がそう言えば、

「いや、俺は断然、尻だな。あのほっそい腰がこう括れる線（ライン）が堪らんだろうが。こうさ」

もう一人は、手付き身ぶりで己が理想とする姿を描き出す。

「それを言うなら脚だろ、脚。長いスカートから伸びるすらりとした脚。そしてキュッと引き締まった足首。スカートの裾が翻る度に、時折、覗くあの白さ。あの見えるか見えないかの所がいいんだろ。まさに究極のチラリズム。そこに口付けるのは男の夢だろうが！」

そして、もう一人が息捲いた。

皆、其々に至高の好みはあるようで、互いの主張は譲らない。

いやいやいやいや。

――――なんだろう。この亜空間。誰か、こいつ等の口を封じてくれ。

リョウは、まだ、そこまで酔っ払っている訳では無かった。酩酊

状態とは程遠い。どちらかと言えば、素面だ。
元々、酒は割合いける口だった。遺伝的にも顔が赤くなることはない。その所為で苦労することもあったが、それはまぁ、ここでは触れることはしなくとも良いだろう。
そんな状態で、延々と繰り返される酒の上の繰り事に、些か、耳を塞ぎたい気分だった。

だが、その願いも虚しく。新たな餌食を求めて、火の粉がとうとう飛来した。
「リョウ、お前はどうだ？」
「へ？」
突然、話しかけられて呆けた声が出ていた。
「だから、好みの話だよ」
「女と言えば、胸だろ？」
「いや尻だ」
「いや脚だ」
「足首に一票！」
「俺は、太ももだな」
「え～、そこは項のラインだろ」
「……」
畳みかけられるように迫られて、マニアックなまでに展開された持論に、リョウは若干、引いた。
彼らと同じぐらいに酔っ払っていれば、それなりのことを返すことも出来るだろうが。いかんせん。こちらは素面なのだ。すんなりとその輪の中に入って行ける程、人生経験を積んだ訳でも無かった。
突然、注目を浴びる形になって、動揺に肩が小さく震えた。
目の前には幾対もの目。賛同者を引き入れようと獲物を狙う獰猛な獣の如く、ギラついている。
これでたじろがない方が、きっとどうかしている。
どう答えたものかと内心、戸惑っていると、

「尻に一票」
不意に差した影に、顔を上げれば、酒瓶を片手に持ったブコバルが立っていた。もう片方の手には、琥珀色の液体が入ったグラスが揺れている。
「お前ら、まだまだ青いな。女といえば、尻が一番だろ」
その筋では有名らしい【猛者】の言葉に、若い男たちは一斉に感嘆の唸り声を上げた。
一方で、納得のいかない者は、再び己が持論の素晴らしさを説き始める。

話題が自分から逸れてほっとしたのも束の間、こちらを見下ろす青灰色の瞳と目が合った。
非常に嫌な予感がした。
短い邂逅の間でも、ブコバルには妙な苦手意識が芽生えていた。何故だろう。本能の奥底から、危険信号が発せられるような、そんな感じに心の底がざわつくのだ。
野生の獣のような独特の鋭い嗅覚を持つ男。いや、野生の獣の方が、まだましだ。彼らはずっと真っ直ぐだから。駆け引きなど必要としない。
だが、この男は違う。問い掛けでも提案でも、斜め上から来る切り込みは、はっきり言って心臓に悪い。
身体が、無意識に身構えていた。来るべき戦闘態勢に備えて。
ブコバルは、ニヤリと笑うと空いている椅子にドカリと腰を下ろした。
「おう、坊主、やってるか？」
荒くれ者の親玉のようなその言葉にリョウは曖昧な笑みを浮かべる。
「お前にゃぁ、ちっと早い話題か、え？」
隣で盛り上がっている男達を一瞥して、ブコバルはからかう様な笑みを浮かべた。

「どうせまだ【初陣】は済ませてねぇんだろ？」
そう言って、意味深な目配せをして見せる。

【初陣】とは何だろうか。
初めて耳にする表現に、リョウの思考が止まった。
文字通りの意味ならば、初めて戦闘行為に参加するということだ。
この国の兵士たちとは違い、戦争や戦いといった血生臭いことには無関係な所で生活を送っていた自分にはとても遠い話だ。
だが、何故、ここで戦いの話になるのだろう。
言葉の意味に気を取られている間に、ブコバルはリョウの沈黙を自分のいいように解釈したらしかった。
「あ？　お前、好きな女とは手も繋げないタイプか？　そんな純情な奴には見えねぇが。まぁ、いいか。男は口説いて何ぼだ。よし、リョウ、この俺が直々に心得を伝授してやろう。任せとけ」
周りにはブコバルの大声を聞きつけた兵士たちが、興味深そうに集まって来ていた。
「なんだ？　リョウ、【初陣】まだなのか？」
「おーい、ブコバルが武勇伝を語るってよ」
「ほほぅ？」
「じゃぁ、ついでに、このオレグ兄さんが教えてやろうじゃないか！」
急に嬉々として隣に腰を下ろしたオレグに、リョウは不可解な視線を投げた。

ぐるりと周りを見渡す。皆、何故か、とても楽しそうだ。
ここの男たちは頑丈で身体が大きい所為もあるだろうが、酒を飲みつけているのか、へべれけに酔いつぶれている者は皆無だった。
テーブルに無造作に置かれてある空になった酒瓶を見る限りは、一人一人がかなりの量を飲んでいると思われるのに、だ。
だが、まぁ、酩酊状態は人それぞれで。普段は寡黙な性質の男た

ちも、陽気でどこか浮ついた空気をその身に漂わせていた。
話声と共に吐き出される息にも酒の匂いが混ざり始めている。
話の流れから、何が言いたいのかは想像が付かなくはないのだが、その意味するところに確証は無かった。訳が分からない内に話が進んでしまうのは、どうにも癪だ。それが自分のことなら尚更だ。

ふと視線を流した先に、何食わぬ顔で優雅に琥珀色の液体が入ったグラスを啜っているヨルグの姿が目に入った。
よし。聞くなら、ヨルグにだろう。彼なら真面目にきちんとした答えをくれそうだ。
リョウは狙いを定めた。
「ヨルグ」
声を掛ければ、いつもの鉄仮面が、滑るような動きでこちらを向いた。その動きは、さながら良く出来たカラクリ人形のようだった。
ヨルグは、視線だけで『何だ？』と問うた。
リョウは、ちらりと横目でブコバルとオレグを一瞥した後、意を決して口を開いた。
「あの、【初陣】とはなんですか？」
その瞬間、まるで時が止まったように、皆が動きを止めた。
それまで騒いでいたのが嘘のように辺りが静まり返る。
――妙な沈黙が下りた。
あれ。不味い質問だったのだろうか。
ヨルグは、目が合ったまま、固まっている。
居たたまれない空気に、リョウが内心焦っていると、
「ヒュウ～」
「おいおい、リョウ、お前、一体、どんな育ち方してんだ？」
「マジか！」
「男なら通る道だぞ！」
「どんだけ箱入りだ」
どっと堰を切ったように男たちが湧き立った。
――そんなことを言われても。知らないものは仕方がない。
だが、それは、ここの男たちにとっては、どうやら常識であった

ようだ。
信じられない者をみるような目で見られて、リョウの気分はささくれ立った。

この一年、それこそ、死に物狂いで読み書きを覚えた。ガルーシャの教えが良かったということもあるが、自分でもかなり頑張ったと思っている。言葉を覚えることは、ここで生きてゆく上での死活問題だったからだ。とっくの昔に頭打ちとなった脳細胞を叱咤して、漸くここまで来られたのだ。それがまだまだ幼子のようなものだとしても。

言葉は生きているものであるし、生活に結びついたものだ。だから、自分の今の知識など、本当に取るに足らないものだとは分かっている。きっとこれからも、新しい表現に直面する度に同じようなことを繰り返すのだろう。そんな自分の努力など、この国の言葉が母国語である彼らには分からないに違いない。それは十分に頭では理解しているのだ。

それでも、こうあからさまに違いを見せつけられると、なんだか、それまでの自分の努力を否定されたようで悲しかった。

リョウは、沸き上がるもどかしさを誤魔化すように、テーブルの上にあったグラスを掴むと中にたっぷりと入っている琥珀色の液体を勢いのままに飲み干した。
「リョウ、待て」
「あ、おい！」
直ぐ傍でロッソとアッカがどこか焦った声を出したが、手は止まらなかった。
喉を通る液体は、それこそ火傷しそうな位熱かった。
それは、ちびちびと舐めていた【ズグリーシュカ】などとは比べ物にならない位、強い酒だった。
そう、昔、飲んだストレートのウォッカに似ている。

食道から胃に直接、焼けるような流れが伝ってゆくのが分かった。胃がちりちりと焼けるようだ。

案の定、咳き込めば、

「無理をするな」

脇からすぐさま水の入ったコップを差し出されて、それで喉を潤す。

「ありがとう」

甲斐甲斐しく世話を焼いてくれたアッカにリョウは礼を口にした。

リョウは、パンと軽く手を打ち鳴らすとにっこりと笑みを浮かべた。

「外野は少し黙っていてください。オレは、ヨルグに質問をしているんです」

普段の大人しさからは想像が付かない、やけに迫力のある言葉に、それまで騒いでいた連中が一斉に口を噤む。

静かになったのを見て取って、再び、リョウはヨルグに向き直った。

「ヨルグ。先程の答えを教えては頂けませんか？」

テーブルに肘を着いて、小さく首を傾げれば、それに合わせてリョウの黒髪がさらりと揺れた。

どこか鬼気迫るリョウの態度に観念したのか、ヨルグは、一度目を伏せた後、居心地が悪そうな顔をして周囲を見渡してから、ゆっくりと口を開いた。

「【初陣】と言うのは、……平たく言えば、……【初めて女を抱く】ということだ」

静まり返った室内に、ヨルグの低い美声が響いた。

やはり、そういうことだったか。詰まり、経験があるか無いか。童貞か否かという問いだった訳だ。猥談の切掛けとしては妥当な始まり方だ。それで、漸く周囲の反応に納得が行った。

「……そういうことですか」

御教示ありがとうございますと丁寧に礼を述べれば、
「ああ」
ヨルグはぎこちなく頷いて見せた。

謎が解けた所で、リョウは、ブコバルに向き直った。
「そういうことでしたら、オレには不要です」
同じような微笑みを浮かべたまま、きっぱりとそう口にする。
「あ？」
「ブコバルの経験談を参考にしなくてもいいです。それからオレグも」
「へ？」
案の定、まだイマイチ話が飲みこめていない状態の二人に、リョウは事も無げに赤裸々な事実を言い放った。
「こう見えても、それなりに経験はありますから」
女としてならば――という注釈が付くが。
経験という括りから見れば、似たようなものだろう。伊達に年齢は重ねていないのだ。
「「はぁ？！」」
余裕綽々で告げられた言葉は、兵士たちには予想外だったのか、室内を揺るがすようなどよめきがそこかしこで上がった。
「嘘だぁ」
「絶対、リョウはまだだと思ったのに」
「見かけによらねぇってことか？」
「ヒュウ～」
そんな周りの過剰なまでの反応と驚きに見開いた表情を見て、リョウは少しだけ溜飲が下がった気がしたのだった。

「何をそんなに騒いでいるんです？」
沸き上がるどよめきの余波が続く中、良く通る声が響いたかと思

うと、この砦のツートップであるシーリスとユルスナールが、盃を手に立っていた。
リョウは現れた二人に満面の笑みを浮かべて振り返った。酷く上機嫌である。
打って変わって、その脇には、項垂れるようにしてテーブルに噛り付いているオレグと微妙な顔をしたブコバルが座っていた。
その様子にシーリスとユルスナールは顔を見合わせると、軽く肩を竦めた。

轟くような騒がしさに気になって覗いてみれば、その中心にはリョウがいた。
よくよく見てみれば、兵士達に混じって、【ズブロフカ】の入ったグラスを傾けている。

【ズブロフカ】は、この国の男たちが好んで口にする一般的な酒の一種で、【ロージィ】という穀物を蒸留して作られていた。特徴的でもあるその琥珀色の液体には、独特の苦みがあり、酒の中でもかなり強い部類だった。慣れない他国の男たちは、直ぐに目を回すシロモノだ。
そんなものを飲んでいるとは。
「リョウ、その位にしておけ」
手にしていた酒の入ったグラスをユルスナールに取り上げられた。不満そうに見上げれば、別の所に置いてあった水差しから、グラスに水を注がれて手渡される。
「慣れない者には後できつくなる。後悔しても知らんぞ」
折角の忠告にも、リョウの眉がしんなりと寄った。

顔色は全く変わっていないが、初めて目にするその子供染みた態度にユルスナールは、リョウが酔っ払っていることを確信した。
目を光らせていた筈のヒルデは、別の場所で他の奴らと飲んでい

た。
どうやら大分酒を過ごしたようだ。元々、華奢で小さい体だ。その格好（なり）で周りの男たちと同じように飲むこと自体が間違っているのだ。
「そんな顔をしても無駄だ」
尖った口元をぐいと指で抓む。すかさず上がりそうな抗議の声をそうやって封じ込めた。
そして、徐に体を傾けると、リョウの耳元で小さく囁いた。
「飲み過ぎだ、リョウ。ボロが出るぞ」
その言葉にリョウは目を瞬かせた。
至近距離でユルスナールの酷薄そうな薄い唇が弧を描いた。
「お前の経験とやらは、後でたっぷりと聞かせてもらうことにしよう」
そう続けて吹き込むと、そのままリョウの体を持ち上げて、あろうことか自分の腕に担ぎあげた。
酒の所為か、いつもより思考の鈍くなったリョウが、今しがた囁かれた意味深な台詞の裏へと考えを巡らせている間に、ユルスナールは体勢を整えた。
「子供はもう寝る時間だ」
そして、そう簡単に言い放つと、リョウを担いだまま、兵士達に背を向けた。
「へ？」
隣でその様子を間近に見ていたシーリスは苦笑い。ヨルグはあからさまにほっとしたような顔をしていた。
そして、残された兵士達が唐突過ぎる隊長の行動に目を白黒させている間に、ユルスナールは何食わぬ顔で食堂を後にしたのだった。
男たちの夜はこれからだ。

キミのヒトミにカンパイ　2）（後書き）

その昔、ロシア人の同僚とウォッカを飲んで、目を回したことがあります。もちろん、ストレートで。冷凍庫に入れて凍らせて、とろとろになったものは飲み口が柔らかくて、結構進んでしまうんです。お好きな方は一度お試しあれ。彼らはストレートでぐいぐいいきますが、傍らに水の入ったコップを置いて、合間にそれを飲んで調整するんです。悪酔いをしたのは後にも先にもその一度だけ、今となってはほろ苦い思い出です（笑）。

Ｋａｌｅｉｄｏｓｃｏｐｅ　１）（前書き）

この続きは執筆予定にはなかったのですが、書き始めたら止まらなくなりました。タイトルは『万華鏡』。くるくると回す度に永遠に違った模様を映し出す不思議な玩具。

Kaleidoscope 1)

「あの、……ルスラン？」

食堂から漏れて来る男たちの喧騒を背に、ユルスナールは、無言のまま、勝手知ったる砦内の廊下を歩いていた。

男の長い脚から繰り出される歩調に合わせて体が上下に揺れる。同じように規則的に上下する視界に、リョウは戸惑いの声を上げていた。

「重いでしょう？　下ろしてください。自分で歩けますから」

酒を飲んでいたのは事実だったが、リョウとしてはそこまで酔っ払っているという意識が無かった。まだ、平衡感覚もはっきりしている。食堂から普段、自分が使わせてもらっている部屋までは直ぐだ。歩いて行く分には、なんの問題もなかった。

だが、リョウの戸惑いを余所に、ユルスナールは自分を抱いた腕を緩めることなく歩き続けている。

重さなど微塵も感じさせないようなしっかりとした足取りで。幼子のようにそのがっしりとした腕に抱えられている。

こんな年にもなって、このような運ばれ方をするとは思っても見なかったことだった。

ユルスナールは無言のまま、廊下を突き進んだ。

所々に設けられた発光石が、夜用に仄かな青白い光を放っている。その前を通り過ぎる度に、壁に少し歪な形をした二人分の影が躍った。

廊下を突き当りまで来るとユルスナールはそこを右に折れた。

「……ルスラン？」

方角が違う。鈍くなった思考でもそれははっきりと分かった。リ

ョウの部屋は、突き当りを左に曲がったどん詰まりに位置していたからだ。

――何処へ行くのだろう。

問い掛けても物言わぬ運び手に不思議に思っていれば、ユルスナールは、とある扉の前で立ち止まった。そのまま扉に手を掛けて中に入る。

そこは、自分の記憶が正しければ、いつぞやの団長室と思しき部屋だった。

大きく切りとられた窓の前には、簡素な広い執務机と大きな椅子があった。

月明かりが室内に長い影を作る。濃紺の濃淡だけで縁どられた室内は、ひっそりと静寂に包まれていた。

ユルスナールはそのまま室内を横切ると、隣へと通じる扉を開けた。

人の手にある温度に反応を示した発光石が、ゆっくりと室内を柔らかな淡い光で照らしてゆく。

淡い明るさを取り戻した室内、そこには大きな寝台がぽつんと置かれていた。

ユルスナールは無言のまま寝台の傍まで歩み寄ると、そこにリョウを下ろした。

「座っていろ」

そう簡単に一言だけ残し、部屋にあるもう一つの扉の向こうへ消えた。

何やら、カタカタという扉を開けるような音がする。それは静まり返った室内では、唯一の音のように耳に響いた。

再び、戻って来たユルスナールの手には、水差しとコップが握られていた。

食堂の時と同じように、水の入ったコップを手渡される。

飲むように促されて、リョウは大人しく口を付けた。
その水は、仄かに薬草の香りがした。清涼感のあるハーブに近いものだ。喉をすり抜けるすっきりとした心地のよい冷たさに、自ずと息が漏れていた。
「美味しい」
「……そうか」
小さく呟けば、微かに微笑んだのが、振動する空気から伝わって来た。

ユルスナールは、水差しを小さなサイドテーブルの上に置くと、自分はそこにあるゆったりとした一人用の椅子に腰掛けた。
その手には、琥珀色の液体が揺らめくグラスが握られていた。

ユルスナールは、何故、自分をここに連れて来たのだろう。
その意図を探るように、リョウは目の前で寛いだ表情を浮かべる男を盗み見た。

兵士達が身につけているのと同じ白いシャツの胸元は、いつもよりボタンが一つ多く開いていた。
そこから覗くのは、逞しい肉体の切れ端。それに海老茶色のズボンを履いただけの簡素な服装だ。
組まれた長い脚は膝から下、黒い長靴で覆われていた。
「気分はどうだ？」
「別に、酔っ払ってはいませんよ？」
先程までの高揚した気分を引きずりながら、小さく喉の奥を鳴らせば、
「酔っ払っている奴程、そう言うものだ」
冷静な口調が一般論を告げる。
「フフフ……確かに、そうかもしれませんね」
それが滑稽に響く位には、酒の影響が残っている。そのことを認

めない訳にはいかなかった。

リョウは履いていた長靴を脱ぐと、そのまま寝台に横になった。

何故、この部屋の主が自分をその領域（テリトリー）に連れてきたのかは分からなかったが、緩んだ思考では、それも、どうでも良くなってきていた。

アルコールを摂取した時特有の気だるさが、身体を支配してゆく。

時間が経つにつれて、それは少しずつ、自分の思考を蝕んで行くのが分かった。

リョウは着こんでいた上着を脱いだ。そして、首元の上まで留めていたシャツのボタンもいくつか寛げた。

頬に触れるシーツは、ひんやりとしていて火照った体に心地よかった。

思わず溜息が洩れた。

ユルスナールは、そんなこちらの様子をじっと眺めながら、琥珀色の液体、【ズブロフカ】の入ったグラスを傾けていた。

「そうしていると、まるで【コーシュカ】のようだな」

ユルスナールが、そう言って喉の奥を震わせた。声音には、からかうような色が滲んでいる。

「【コーシュカ】？」

初めて耳にする言葉に、リョウは首を傾げた。

「ああ。知らないか？」

その問いに静かに頷けば、

「人が飼う動物だ。まぁ、場所によっては野良もいるが。自由気ままな性質で、そうだな、大きさはこの位か？」

そう言って、大きさを示すように両手を前に掲げる。

それだけでは、リョウにはどんな生き物なのか全く想像が付かなかったが、気に留めないことにした。　今度、機会があれば、目に出来るだろう。その位の気持ちだった。

リョウはゆっくりと目を閉じた。
「眠いのか？」
ユルスナールは、ひょっとしたら自分と話をする積りなのかもしれなかった。
だが、頭が働かない。落ちかかる瞼に、このままでは本当に眠ってしまいそうだ。
でも、相手の手前、それを正直に認めるのは気が咎めた。
「……ほんの……少…し」
小さく囁いて。
それから、ものの数分も立たない内に、リョウは静かな寝息を立てていた。

そのまま、規則正しい寝息を立て始めたリョウに、ユルスナールは自嘲とも苦笑とも取れる小さな笑みを浮かべた。
リョウには、警戒の欠片も見当たらない。それがいいのか、悪いのか。気を許していると思えばいいのか。それとも、自分を男として見ていないのか。その辺りは良く分からなかった。
その心中は些か複雑だ。

無造作に脱ぎ捨てられた上着を手にとって、近くの椅子の上に掛ける。
寝台の端っこで縮こまる華奢な体をそれらしい位置にずらして、下に落ちている頭を枕の上に乗せてやれば、寝心地のよい場所を探して、リョウが身じろいだ。
その上に布団を掛けてやる。
そうして、収まった細い体を見下ろす。
自分が普段使用している寝台が、とても広く見えた。

半ば衝動的に、リョウを自分の部屋に連れて来てしまったが、ユルスナール自身、そんな行動に出た自分に戸惑いを感じていたのも確かだった。
自分の中に渦巻いているこの感情は何なのか。

寝台に横たわるリョウの寛がれた胸元からは、日に焼けていない白い肌が覗いていた。
この国の女たちと比べても遜色のない白さ、いや、その肌理の細かさから言えば、それは寧ろ、滑らかで透き通るような質感を持っていた。

あの洗いざらしのシャツの下には、男には無い、柔らかな肢体が隠されている。これまで幾度か、実際に衣越しに触れて知るその感触を思い出すと自然と心の奥がざわついた。

緩やかな輪郭を描くその曲線へユルスナールは手を伸ばしていた。滑る掌の下には、柔らかな体温が息づいている。

規則正しく、ある一定の法則性に則り、微かに上下する華奢な背中。

リョウの体からは、【ズグリーシュカ】の名残だろうか。甘い香りがした。

露わになった細い首筋。短く切り揃えられた黒髪が頬に落ちかかる。それをそっと指で掻き上げて。

不意に、その細い首筋に顔を埋めて口付けたい。そんな衝動がユルスナールの中に湧きあがった。

――――どうかしている。

これも酒の所為だろうか。

だが、それはただの言い訳に過ぎなかった。

自分にとって、リョウは始めから不思議な存在だった。

ガルーシャがその手紙に託した人物。遺書とも言える、その最後の手紙には、少し右上がり気味の癖のある筆跡で、ただ、この封書を届けた人物のことを宜しく頼むとだけ書いてあった。

困ったことが起きたら力を貸してやって欲しいと。本来なら、それは自分の役目であり、責任であったのだろうが、それを果たせない運命の巡り合わせが、ただただ唯一の心残りだと、そう切々と綴られていたのだ。

あの偏屈で、人間嫌いのガルーシャが、大切に思った人物。

守りたいと思った人物。

最後の家族だとまで言わしめた人物。

不肖な弟子としては、その意思を尊重したい、そう思った。

だが、リョウに対する気持ちは、それだけに止まらなかった。

実際に言葉を交わし、その人となりに接してみて、ユルスナール自身、リョウに対しては単なる師匠の依頼だからという理由だけには収まり切らない、何か特別な感情が芽生え始めているのを感じていた。

と同時に、そんな自分に戸惑いを感じているのも確かだった。

リョウの存在は、自分にとって、単なる【庇護対象】とするには些か異質だった。

リョウには、【何か】があった。それは長年に渡り軍籍に身を置く自分の勘のようなものだった。

リョウは、ユルスナールの目から見ても、なんというか、ちぐはぐ（アンバランス）な存在に思えた。

それは、この国では珍しい顔立ち、髪の色、目の色であり、見かけよりも随分と落ち着いていることであり、聡明で学はありそうなのに、この国の、それこそ子供でも知っているような世間的常識に疎いことであった。

何も知らない幼子がそのまま大きくなったような。いや、違う。全く、この国とは異なる習慣の下で暮らしていたというような感じだ。

驚くほど流暢にこの国の言葉を話す為、普通に会話をする分には気が付かれ難いのかもしれないが、偶に混じる言葉使いには、はっきりとした訛りがあった。

――リョウはどこからやって来たのだ？　ガルーシャと知り合った経緯は？

そんな根源的な問いが頭に浮かぶ。

――そう言えば。

この間、それとなく生まれを聞いた時には、旨い具合にはぐらか

されてしまったことを思い出した。
あの時、リョウは、ほんの少しだけ、困ったような、まるで迷子の子供がするような途方に暮れた表情をしていた。
言いたくないことを無理に聞き出そうとは思わない。
リョウには哀しい顔は似合わない。
だが、出来ることなら、その口から自分に打ち明けてほしい。
そんな相反する矛盾した気持ちがユルスナールの中にはあった。

また、リョウは、人の世界の理から逸脱した孤高の存在であるヴォルグの長、セレブロがいつになく気に掛けていた存在でもあった。
それを目の当たりにして、不意に湧きあがって来たこの不可解な感情は……何だろうか。

その答えを出すには、きっと、まだ早い。
ユルスナールは、手にしたグラスに残る【ズブロフカ】を飲み干すと、そのままゆっくりと瞼を閉じた。
――今は、これでいい。
ひっそりと静まり返る室内、自分とは違う、もう一人の小さな息遣いを耳に感じながら、そっと小さく息を吐き出した。

始まりのサヨウナラ　1）

その日、砦の通用門には、朝早くから多くの兵士たちが集まって来ていた。

その中心には、屈強な逞しい体つきの男たちに囲まれるようにして、ほっそりとした体格の人物が見え隠れしている。

襟足で揃えられた真っ直ぐな黒髪が、朝日を浴びて深い光を湛えていた。それは、兵士達の明るい髪色の頭部の中では、より目を引いた。

集まった若者たちの顔は一様に穏やかだった。中には、昨晩の酒盛りの余韻を引きずっているのか、二日酔いに冴えない顔色をした者や眠たげに目を瞬かせている者もちらほらと見受けられたが、それも御愛嬌と言うところだろう。

「リョウ、何かあったら、いつでも来い。今度は俺の番だ」

ここに来る切掛けを作ったアッカが、その特徴的な赤い癖毛を風に靡かせながら微笑んだ。

未だに怪我の介抱を【借り】のように思っているのだろう。律儀な性格は相変わらずだ。そのようなことなど気にすることは無いのに。困った時はお互いさまなのだから。

だが、それをこの場で口にする積りは無かった。

「ああ」

差し出された手にほんの少し、力を込めて握り返した。

「【パラ　フェルメ　ス　リュークス（リュークスの加護がありますように）】」

何度も口にして、漸く馴染んだ台詞。

差し出された腕を掻い潜って、軽い抱擁を交わす。
「お世話になりました」
「また、いつでも遊びにいらっしゃい」
耳元で囁かれた柔らかなシーリスの言葉に、
「はい」
リョウは素直に返していた。
そして、両の頬に軽くキスを贈る。
それが、この国での正式、且つ一般的な挨拶の仕方だった。
そして、リョウは、上官（シーリス）の脇に立つヨルグとも同じように挨拶を交わした。

ゆっくりと振り返った先には、無骨な砦の石壁が広がっていた。
十日程という短い間だったが、ここでは色々なことがあった。森での生活とは比べ物にならない程の、ある意味、密度の濃い時間に、長い期間をこの場所で過ごしたような、そんな懐かしさを伴う錯覚を起こさせていた。
あの小高い丘の向こうには、ガルーシャの種と自らの髪を共に埋めた場所がある。
穏やかな泉の傍。柔らかな土は種が根付くにはちょうど良いし、水の心配もいらないだろう。
そして、その場所にはセレブロに手伝ってもらい、小さな目印を付けておいた。どんな花と実を付けるかは先のお楽しみになるだろう。
振り仰いだリョウの胸元には、種を入れていた簡素な革紐の代わりに、細い細工物の鎖が垂れ下がっていた。その先には、強い青みを帯びた石が付いている。
それは、過日、ユルスナールから渡されたものだった。

「困ったことがあれば、いつでも頼れ。ガルーシャの縁なら、俺に

とっても、リョウ、お前は家族同然だ」
それは思いも寄らない温かい一言だった。
ガルーシャは、今でもちゃんとこの場所に、そこかしこに息づいている。そして、自分を支えていてくれている。
そんな嬉しい言葉と共にユルスナールの逞しい首から引き抜かれたのは、濃紺の青い石が煌めくペンダントだった。
「お守り位にはなるだろう。取って置け」
持ち主の瞳と同じような色合いの瑠璃色の石が、リョウの鼻先で揺らめいた。
剥き出しの水晶のようにカットされた部分に黒い瞳が反射する。
それは見間違いで無ければ、純度の高い【キコウ石】を内部に封じ込め、研磨したものだった。
キコウ石。その中でも純度の高さによって【カローリ(王)】、【カラレーヴァ(女王)】と呼び名が変わる。色の濃さとその発色の鮮やかさから見て、それは【カローリ(王)】だと思われた。希少価値の高いものだった。
「こんな高価なもの……」
【キコウ石】は、金属鉱石【スターリ】から剣などの金属を鍛える時に必要不可欠な鉱物だった。より強固なものを生み出すために、生成の時に【キコウ石】を使うのだ。そうやって鍛えられた刃類は刃零れしにくく、その切れ味も格段に違うらしい。剣を扱うものにとっては【キコウ石】を入れて鍛えられた武器は、それこそ喉から手が出るほどに欲しい代物(アイテム)だった。
そんな武人の間では崇められている【キコウ石】だが、難点もあった。
【キコウ石】の加工を行うのは、専門の術師だが、彼らは一概にして短命の者が多かった。
【キコウ石】が、その生成途中、人にとっては有害な毒となる物

質を発生させる為だ。刀鍛冶である術師は、その身に毒を浴びながら作業を行う。文字通り、術師の命を削って作られる代物なのだ。

世界的に見て、術師の数は減少傾向にあるとその昔、ガルーシャは語っていた。国は、有能な人材を求めて囲い込みを始めている。ガルーシャはそんな流れの中、己が力を権力に利用されることを拒んで、僻地へ逃れ、隠遁生活を営んでいたのだった。

「それは、昔、ガルーシャが作ったものだ」

――――だから、取って置け。

その青く煌めく石は、その昔、まだ幼いユルスナールがガルーシャに師事していた頃、授業の一環として術師の技を教授した折り、見本として作成し、ユルスナールにあげたものだと言う。

それを聞いて、リョウは余計に躊躇いを見せた。

「そんな大事なものを……尚更、頂く訳にはいきません」

きっと、ユルスナールにとっては大切な思い出の詰まった形見となるだろう。

「いや、これは、お前が持つべきものだ。お前にこそ、相応しい」

――――どうして？

喉まで出かかった声は、しかし、言葉にはならなかった。

ユルスナールの長い骨張った指が小さな留め金を器用に外すと、銀色の繊細な鎖をリョウの細い首に回した。指先が擽るように剥き出しの首筋を撫でて行った。

リョウは、そっと自分の胸元を見下ろした。

何度も洗濯を繰り返して白さのくすんだ洗いざらしのシャツに、瑠璃色の綺麗な石は、とても眩しく輝いて映った。

「よく似合っている」

見上げた先には、ユルスナールの満足そうな微笑みとかち合う。

そんな顔を見てしまえば、【否や】などと言える訳が無かった。

「ありがとうございます。大事にします」
リョウは、囁くように呟くと、青い深い光りを放つその小さな石をそっと己が手に握りしめたのだった。

始まりのサヨウナラ　2）

賑やかなざわめきに振り返れば、見知った顔ぶれが集まっていた。
シーリス、ヨルグ、サラトフ、アッカ、ヒルデ、エドガー、オレグ、ロッソ、セルゲイ、ブコバル、アスレイ。その他にも言葉を交わした大勢の兵士たち。
リョウは見送りに集まってくれた兵士一人一人と挨拶を交わした。
「坊主、またな」
「仕官するならこい」
「あぁ、待ってるぞ」
「専任の鷹匠か？」
「いや、どうせなら厩舎番だろう。籍も空きがある」
「だとしてもまだ先の話だろう」
気の早い話に、皆がどっと笑う。
「困ったことがあれば、いつでも頼れ」
親指を上に、ニカッと白い歯を見せて。
兄貴分としていいところを見せようと思ったのか、場を引き締めるようにオレグがいっぱしの口を利けば、
「お前に言われてもなぁ」
「おぅおぅ、カッコつけやがって」
「百年早ぇぞ」
すかさず周りから突っ込みが入った。
再び笑い声が上がる。
すっかり自分にも馴染んでしまった変わらない日常の空気を名残り惜しむように、リョウはその光景に目を細めた。
リョウはゆっくりと周囲を見回した。足りない何かを埋めるように。

それは、日の光りに反射して煌めく白銀の色。深い海の底のような穏やかで静謐な瑠璃の色。この砦の責任者――ユルスナールだ。
ガルーシャを通して始まった、ガルーシャが残してくれた新たな絆（つながり）。

集まった兵士達の後方、兵舎の入り口付近に、目に馴染んだ長身が寄り掛かっていた。
すっと、まるでそこに見えない磁力があるかのように、視線が吸い寄せられていた。
「……ルスラン」
リョウの口から、小さくその名が漏れた。
それが、聞こえたのだろうか。
ユルスナールは眩しそうに目を細めると、徐に身体を起こした。
静かに長い足を進めて、近づいて来る。
そして、リョウの前に立った。
「ありがとうございました」
慣習に習い、軽く抱擁を交わして、両の頬に掠めるだけの口付けを贈る。最後に身体に回された腕に力が込められた。
ふいに身体が持ち上がる。
突然、目の前に迫った顔にリョウは思わず、視界に入った逞しい肩に手を置いた。
「リョウ、またな」
次を約束する言葉。
「はい」

この国では、別れ際の挨拶に必ず未来への繋がりを託した。故郷（日本）の【さようなら】は、この国では【また、会う日まで】に変わる。
ここで終わらない。
そんな予感を伴う一言が、こんなにも嬉しいものだとは思わなかった。

ユルスナールを前にするとどうしても調子が狂う。ついさっきまでは兵士たちとの軽妙な笑いの中に身を置いていたと言うのに。
じわりと込み上げて来そうになる【何か】を、リョウは感謝の気持ちを乗せた微笑みを浮かべることで封じ込めた。
「ルスランもお元気で」
「ああ」
ユルスナールの口元が弧を描く。

それから、何を思いついたのか、リョウは、突然、悪戯っぽい顔をするとユルスナールの耳元で二言、三言【何か】を囁いた。
その瞬間、ユルスナールの目が驚きに見開かれた。
それを間近に確認して、驚いたままの珍しい表情にリョウは触れるだけの口付けを贈った。
驚愕の為にか、ユルスナールの腕の力が緩む。
その隙にリョウはパッと両手を話すと軽やかに身を翻し、駆け出した。

そして、砦の通用門の方へ、よく通る声を張り上げた。
「【アウーーー(おーい)】！　セレブロ、【ガトーバ(いいぞ)】！」
一陣の風に乗って、どこからともなく白く光り輝く【何か】がリョウの前に飛び降りてきた。その巨体は、瞬く間に大きな狼に似た獣の形に変わる。
白銀の王、セレブロだった。
リョウは颯爽とその背中に跨った。
そして、鮮やかな笑みを浮かべて片腕を振り上げた。
「【ダ・フストレーチ】！！」
――――また、会う日まで。
精一杯のありがとうの気持ちを込めて手を振る。
光り目映い白銀の波。うねる跳躍と共に胸元でキラリ、青い光が

煌めいた。
そして、瞬く間に小さな背中が視界から消えていった。
兵士達の耳にその軽やかな笑い声を残して。

「行ってしまいましたね」
穏やかな微笑みを浮かべながら、ユルスナールの隣にシーリスが立った。
「何を言われたんです？」
普段の冷静沈着・無表情の二枚看板を大きく崩して、珍しく、心底驚いた顔を見せた己が上司に、その訳を問う。
シーリスの菫色の瞳は、その好奇心を隠すことなく悪戯っぽく輝いている。
一方のユルスナールは、沈黙を貫いたまま、リョウが消えていった門のその先を見ていた。
「それにしてもよぉ、どういう風の吹き回しだ？」
ガシリと朋輩の筋肉質な肩に自分の太い腕を回して、ブコバルは、意味深な視線を隣に流すと、からかうような人の悪い笑みをその酷薄そうな口に刷いた。
「お前とは長い付き合いだが、そっちの気があったなんて知らなかったぜ」
「何の話だ？」
訳が分からないと片眉を上げたユルスナールに、ブコバルはニヤついたまま、首に回した手に力を込めた。
「んだよ、こんなとこでとぼけんなよ、ルスラン。坊主のことに決まってんだろ」
ブコバルがそう言えば、
「ああ、それは私も同感ですね」
隣にいたシーリスもしたり顔で頷いた。
「まぁ、男の割にゃぁ、細っせーし、見てくれだって悪かねぇけどよ。……よく見りゃ、愛嬌ある面だし？……お前がコロッと

そっちに行っちまっても、まぁ、おかしかねぇや。俺だって、素面じゃぁごめんだが、酔っ払ってたらどうだか分からねぇしな」

などとブコバルが、下卑た笑いを浮かべれば、

「まぁ、私としても、貴方の家の事情はともかく、上司の性癖が世間一般から【ほんの少し】ズレたぐらいでは今更、騒いだりしませんよ。個人的にはリョウのことは気に入っていましたから、あの子が貴方のような男の毒牙に掛かってしまうというのは実に不憫でなりませんが」

続くシーリスは、にっこりと寒々しいまでの迫力のある笑みを浮かべる。

「しっかし、お前が男もいけるとはなぁ。意外だったぜ」

黙っているユルスナールをいいことに、二人は言いたい放題だ。

その言動を、シーリスの傍に控えていた補佐官ヨルグは、辛うじて、いつもの鉄仮面を保ったまま聞いていた。

が、その内側では、怒涛のように嵐が吹き荒れているに違いない。

「お前ら」

ユルスナールは、傍らに居る部下達を振り返ると、仰々しい程の溜息を一つ、吐いてみせた。

呆れたような色をその瑠璃色の瞳に乗せる。

だが、その次の瞬間、突然、弾かれたように声を上げて笑いだした。

「ククククク……アハハハハ……ハハ」

――――大した役者だ。

それは勿論、リョウのことだった。

この砦に突如として吹き付けた一陣の風。まるで春を告げる先触れのような、冷たさの残る清涼感を胸内に刻み付けて行った。

結局、最後まで誰にも気が付かれなかった。自分を除いては。

よくよく思い返してみれば、リョウとの会話には不可解な点が多かった。アレが語る話には、いつの間にか自分の知らないことが多々混じっていたし、流暢に語られるこの国の言葉には、若干の堅苦しさと訛りがあった。

あの小さな体に、一体、どれほどの秘密を抱えているのだろう。数多もの謎をその身に内包して。

だが。

――――そう。

別れ際に囁かれた一言が、ユルスナールに耳に残っていた。

その衝撃は計り知れず。未だ余波となって、己が体の内側を揺さぶっている。

その動揺を吐き出すように、ユルスナールは形容しがたい気分を笑いへと昇華させていた。

『ここの暦で換算すると、ワタシは××歳になります。多分……貴方とそう変わらないでしょう？』

とっておきの秘密を打ち明けるように、その漆黒の瞳に悪戯っぽい光を湛えて。

久し振りの完敗だった。

だが、それも悪くはなかった。

そんなユルスナールの心の動きは、勿論、外には漏れていない。

古くからの友人の突然の変貌に、事態に付いていけない三人は顔を見合わせた。置いてけぼりを食ったという顔をしている。

昔から、どこか変わった所のある男だったが、とうとう頭のネジが一本、抜けてしまったのだろうか。

そんな危惧すら頭の隅を掠める。

ユルスナールは、笑いを引っ込めると不意に真面目な顔つきをした。

そのまま、相手をからかう様な色をその瑠璃の瞳に浮かべた。

そして、いまだ目を白黒させている旧知の知己に、その日、最大の爆弾を投下したのだった。

「リョウは、女だ」

その威力は計り知れず。

「……はい？」

「……」

「はぁぁぁぁあ～～～～～～～～？！」

その日、人生最大とも言えるブコバルの絶叫が、砦を揺るがした。

それは、後々、砦の兵士たちによって語り草になるほどであった……というのは余談だが。

それを引き起こした張本人である砦の長（ユルスナール）は、その様子を小さく口角を上げて、余裕たっぷりに眺めていた。

始まりのサヨウナラ　3）（後書き）

ここまで読んで下さってありがとうございます。
最終的には、リョウの方が一枚上手だったということでしょうか。
ある意味、男は永遠に女に勝てない。そんな気がします。主人公の年齢は敢えて伏せておきます。

新しい日常　1）

この国では、月の初めの1日から10日までを一つの括りとして、【デェシャータク】と呼ぶ。
そして、11から20、21から30、31から40、その四つの【デェシャータク】が合わさって、一か月を形成していた。
要するに、一カ月はおよそ40日。
そして、月は、【青】の月、【赤】の月、【黄】の月、【白】の月、【黒】の月と5つの色分けによる呼び方がされており、その色の月には其々、【第1】の月と【第2】の月があった。
詰まり、5つの色の月が2倍で10カ月。日数に換算すれば、1年は400日となる。

さて、北の砦から森の家に帰って来たリョウの日常は、再び、元の穏やかな流れの中に戻っていた。
と言っても、全てが元通り、同じになった訳ではない。
そこには、ささやかだが、以前とは違う変化が訪れていた。

リョウは今、大量の書物の中に埋もれていた。
然程、広くはない森の一軒家、その中でも一番の広さを誇る部屋は、何と言っても、ガルーシャの書斎だった。
壁一面に備え付けられた本棚には、それこそ、びっしりと上から下まで隙間なく、様々な本が埋まっていた。
ガルーシャは自分の領域（テリトリー）に関しては、ある種、病的なまでに几帳面で神経質だった。　本の背表紙は、歴史書から地理学、言語学、文化人類学的な他国の風土や文化、術師が扱う【術】に関しての【技術書】等、新旧入り混じり、分野毎に綺麗に並んでいる。

リョウは、この部屋に入る度に、古い図書館の蔵書室に紛れ込んでしまったような錯覚を覚えた。

思い浮かべるのは、勿論、本の背表紙にあるあの赤い【禁帯出】の印（マーク）だ。

古い本の少し黴臭い、独特な匂い。それは、どこか懐かしくも柔らかな郷愁を誘う香りだった。

リョウは、術師に成る為の勉強を始めていた。

この場所には、ガルーシャが辿って来た道筋が残されていた。この途方もない大量の書物をただただ時の流れに任せて、朽ち果てさせることだけはしたくなかった。

元々、膨大な知識量を誇る博識の術師であったガルーシャのようになれるとは露ほども思ってはいない。が、リョウとしては、この大量の書物、ガルーシャの汗と血と涙の結晶とも言える【蔵書類（コレクション）】を無駄にはしたくなかった。

幸いにして、生前、短い間だったが、リョウはガルーシャから度々、【術】を使うことに関しての手ほどきを受けていた。

それは、ごくごく日常の事柄で、実際の【術師】が扱うものとは程遠いものであったが、原理としては同じようだった。

それからというもの、リョウの一日の大半は、ガルーシャが残した本から、【術師】としての役割やら実際の技を学ぶことに費やされていた。

一口に【術師】と言っても、その言葉がカバーする範囲は、とても広く、実に多岐に渡っていた。その中から、自分の得手、不得手を見極めながら、そして、自分がどういった方向性に進みたいのかを相談しながら探って行くことになる。

リョウは、始め、眼前に広がるその余りに膨大な情報量に途方に暮れそうになった。

だが、そのようなことを嘆いていても仕方が無い。

ここにある書物は、それこそ【術師】に成る為の修行を積んでい

る者達にとってはきっと垂涎ものであるに違いないのだから。
この国で、この世界で生きて行く為の知識を得ると思えば良いのだ。そう考えることにした。
そうすると自ずと道は開けてきた。
それに、リョウは【独り】ではなかった。セレブロを始めとする森の獣達が、小屋に暮らす自分の無聊を慰め、力になってくれたからだ。彼らは、とても心強い仲間達だった。
寂しさなど感じる暇など無かった。

リョウは、まず手始めに、生活に密着した分野から手を付けることにした。
その一つに【薬草採り】とそれを利用した【薬作り】があった。

新しい日常　2）

リョウは、その日、森に入った。
傍らには暇を持て余した狼達が、番犬宜しくうろうろとしている。
中でも狼のアラムとサハーは、格好の教師だった。
リョウの手には、自分で手作りした不格好な帳面（ノート）と鉛筆が握られていた。
この辺りでは、【紙】は高価な部類に入る代物だった。庶民はおいそれと手を出すことは出来ない。
基本的に自給自足で現金収入の無いリョウには、身の回りの物を有効活用して、代用品を自分で拵えるしかなかった。
幸いにして、ガルーシャの家には、物置のような【ガラクタ】が詰まった納戸があり、そこに何が入っているかは、未知数だった。
要らなくなったものをガルーシャはそこにしまっていたようで、書斎で展開されている几帳面さが嘘に思えるほど、そこは乱雑に色々な物が詰め込まれていた。
それは知らない者から見たら、ちょっとした魔の空間だろう。
だが、そのような場所も、リョウにとっては宝箱のような趣を持っていた。
よくよく覗いてみれば、何に利用するのか分からない代物に紛れて、意外と使えるようなものが転がっていたりしたからだ。
帳面（ノート）は、木の皮を剥いでその繊維部分を煮詰めて漉し、木枠に入れて固めたものだった。何度か試行錯誤を重ねて、紙にするのに適した柔らかい木を見つけ出した。
鉛筆も同じように手作りをした。
この国では、独立したインクとペンが主流で、ペンは羽ペンで無かっただけましなのかもしれないが、持ち運びと言う点ではとても不自由だったからだ。

核となる中心には、墨を主原料にして固めた芯を作った。そこに棒状に削った木を二つに割り、中に芯が入るような溝を削り、その部分に芯をはめ込む。そして木を接着した。

その昔、【テレビ】で鉛筆工場を取材した番組があり、その中で、鉛筆の作り方をやっていたのだ。

紙は小学校の社会科見学で紙漉き体験をしたことに基づいている。思わぬ所で昔の知識が役に立った。と言っても、知識だけを持っているのと、それを実地で試してみるというのは、かなり隔絶した感があったが。

だが、この世界には【術師】としての技術があった。それは、以前ならば、決して想像が付かないような摩訶不思議な現象として片付けられてしまうものだが、この場所では、それは現実として当たり前に作用していた。

それは、芯の作成時に核となる主成分を混ぜ、凝固させる過程に作用したり、木の繊維を柔らかくする為に役立った。

料理であれば、『美味しくなるおまじない』――そういった類に見えるものだった。

そうやって苦労して作った筆記用具は、見てくれは悪くとも大切なものだった。紙は、それこそ茶色にくすんでいて、その手触りもごわつくものだったが、端に小さな穴を開けて太めの針と糸で綴じれば立派な帳面（ノート）になった。

今、リョウが手にしているものは、その内の一冊だ。

中を開けば、小さな、几帳面さを窺わせる丁寧な文字でびっしりと字が並んでいる。

この国の言葉の他に、時折、様々な字体の文字が躍るように並んでいた。

リョウは、何かを探すように辺りに注意を払いながら深い森の中

を歩いていた。
そして、とある木の根元にかがみ込むとそこに生えている小さな草へ手を伸ばした。
「アラム、これって、【ジェルーダク】だよね？」
屈み込んだリョウの手元を覗きこむように、鈍色の豊かな体躯を音もなく滑らせて、一頭の狼が鼻面を押し込んだ。
『ああ、そうだな』
その反対側には、もう一頭の狼が、その背中に特徴的な碧い一筋の毛を波打たせていた。
『ふむ、かような所にあったか』
「お腹を下した時に効く奴だよね」
そんな効用が、ガルーシャの残した薬草関連の本の中には書いてあった。
『我らは、身体に合わぬものを食べた時に食す』
だが、人と狼では若干、その作用や使い方が違うらしい。
「整腸作用があるってことか」
――――成程。
こういう意見は貴重だ。
「量は？」
『その葉一枚で十分だろう』
リョウはその草を慎重な手付きで摘み取ると小さな袋の中に入れた。
袋には予め番号が振ってある。
そして、素早く手にしているノートに番号と摘み取った薬草の名前と形状、効用を書き込んだ。
後で、間違えない為である。ちゃんとした分類と整理は家に帰ってからだ。
そうやって幾度か、立ち止まりながら暫く、森の中を歩いて。
人が分け入ることのないこの場所は、辛うじて獣道らしき道が細

く続くだけで、足場は悪かった。
リョウの額には汗が滲み、黒い髪が額際に張り付いていた。
リョウは体のバランスを取りながら、颯爽と先頭を行く狼の背中にある碧いラインを追う。
やがて、その狼の滑らかな毛並みが立ち止まった。
『リョウ、見てみろ』
サハーに指示された場所には、岩の陰に青々とした草が群生していた。
『ストレールカだ』
「これが……」
サハーの言葉に、リョウは息を飲んだ。
それは、初めて目にする光景だった。
「凄い……」

【ストレールカ】は、切り傷、金創（剣・刀による裂傷のことだ）、火傷といった傷全般に効く薬草だった。
この葉を生のまま擦ると黒みを帯びた粘液が出て来る。それを傷口に塗るのだ。
効用の仕方としては、人が元々持つ潜在的な治癒能力に大きく働きかけるものだった。
その汁は、うっかり舐めようものなら大変なことになる。
昔から、『良薬口に苦し』とは言うが、その苦みとえぐみは半端ではなかった。
リョウはその時のことを思い出すと、今でも口内に得も言われぬ苦みを感じるような気分だった。
あの時はガルーシャの手伝いで、保存用に乾燥させた【ストレールカ】を少量の水と一緒に乳鉢で摩り下ろしていて、跳ねた汁が間違って口の中に入ったのだ。
その時は、余りの苦さに吃驚して、慌てて水を飲みに走った。
そんなリョウの様子をガルーシャは可笑しそうに忍び笑いを堪え

ながら眺めていた。
それから二・三日は、何を食べても舌に痺れるような苦みとえぐみが残って、閉口したものだった。
あの時、使ったのは乾燥させたモノだった。生の方が格段にその効力は違うとガルーシャは言っていた。
【ストレールカ】は森の中でも見つけるのは至難の技らしく、この辺りでも貴重な薬草とみなされていた。だからであろうか、その効力は抜群だった。リョウ自身、それは怪我を負ったアッカの左足を手当てした時に確認済みだった。
あの時は、乾燥させたモノを使った。
ガルーシャは、『今度、森で見つけたら、根ごと持ち帰って栽培しようか』とにこやかに笑っていた。小屋の脇に設えられた小さな薬草園のコレクションに加える積りだったのだろう。
その時の小さな野望は、結局、果たされないまま、時が流れてしまった。

その【ストレールカ】が、今、目の前にあった。
リョウは、自生している【ストレールカ】を見るのは初めてだった。
『ほほぅ、これほど群生しておるのも珍しい』
アラムにとっても珍しいのか、その光景に目を細めている。
『リョウ、それも持って帰るのだろう？』
サハーに声を掛けられて、リョウは我に返った。
「あ、うん」
『根ごと持ち帰るのか？』
アラムに聞かれて、
「そうしようかな」
リョウは少し考える風に首を傾げた。
『気を付けろ』
『ああ、ソレには棘がある』

「分かった」
サハーとアラムの二頭に言われて、リョウは頷くと肩に掛けた鞄から革の手袋を取り出し装着した。
そして、腰のベルトに付けた鞘からナイフを取り出すと群生する【ストレールカ】の傍に跪いた。
根元の土を掘る。その場所はしっとりと湿り気を帯びていて、土は柔らかいものだったので、掘るのは容易かった。
手袋越しに触れた【ストレールカ】の茎には、相棒達に言われた通り、びっしりと細かい棘が生えていた。
「これは、凄い」
棘は意外に固かった。素手で触ろうものなら、確実に人の肌などひとたまりもないだろう。
「アラムとサハー達は、これをどんな時に使うんだ?」
三株ほど引き抜いて、それを土が付いたまま、そっと袋の中に入れた。
茎は固いが、ギザギザの形をした細長い葉は、驚くほど柔らかい。
鼻先を【蓬(ヨモギ)】のような清涼感のある、独特な香りが掠めた。
『この葉には、気を昂ぶらせる作用がある。我らの間では、闘いの前に一枚、口にする輩が多い』
と言うことは、早い話が、興奮剤。気付け薬のようなものなのだろうか。
『だが、あの苦さには参る』
『ああ、我も御免だ』
そう言って、相棒達は顔を顰めた。
味覚と言う点では、その程度の差こそはあれ、狼も人と変わりがないらしい。
「……確かに」
リョウもかつて味わった苦い経験を思い出して苦笑を洩らす。
生憎、人がソレを服用した時の効用に関しては、まだ知らなかった。

帰ったら、調べてみよう。
リョウは、そう気持ちを新たに思ったのだった。

「さて、今日はこの位にしておこうか」
一杯になった袋を手に、リョウは立ち上がった。
「帰ったら御飯にしよう」
『うむ』
『承知』
それに、二頭が続く。
そして、一人と二頭は森の中に薄らと残る獣道の彼方へ消えた。

スフミ村の術師　1）

この場所で一年を過ごしてみて、この国のこの地方は一年を通じて比較的温暖な気候であることが分かったが、四季らしい区分はあった。

春には野原一面に草花が咲き、夏には照りつける強い日差しに木々の濃い緑が、青い空、浮かぶ白い雲に映えた。

そして、それなりに忙しくも、穏やかに時は流れ、気が付けば、襟足で切り揃えられた髪が、肩に届く位になっていた。

あの砦での一件から三か月、季節は移ろい、実りの秋、作物の収穫をする時期になっていた。

小麦に似た穀物、【グレーシュ】の畑。この場所では主食となるパンの原料となる穀物だ。

眼前には、見渡す限り、黄金色の絨毯が一面に広がっている。

その中に細く続く一本道を一人の人物が歩いていた。

黒い頭部が、歩調に合わせてヒョコヒョコと小さく動く。

その人物は、不意に振り返ると、片手を上げて後方へ大きく合図を送った。

「行ってきます」

その遥か後方には、黄金色に輝く背の高い絨毯に埋もれるようにして、白銀の煌めく毛皮を纏った獣が、【束の間の旅人】を見送っていた。

リョウは、その日、森の小屋を出て、少し離れたスフミ村へ薬草を届けに出掛けていた。

森の小屋から見て、東南の方向へ街道沿いに歩くこと約一日。距離にして約五【ヴェルスチ】の所にスフミという名の小さな村はあった。

途中までは、用心棒宜しくセレブロが付いてきてくれた。

スフミ村には、ガルーシャがいた頃から、定期的に森で採取した薬草を、村で薬屋を営む術師に納めていたのだ。

今日は、その薬草を届けに行く日に当たっていた。

リョウが薬草を収める先は、リューバという名の術師だった。

リューバは、典型的なこの国の女性だった。二人の子供を育て上げた肝っ玉母さん。豪快でどこか茶目っ気のある陽気な人だった。

初めてガルーシャに連れられてこのスフミ村を訪れた時のことは、今でも強く印象に残っている。

とにかく、初対面での印象（インパクト）が強烈だったのだ。

同じ術師だということで、勝手にガルーシャのような学者肌の人物を想像していたのが、そもそもの間違いだったのかもしれない。

この世界に来てガルーシャの次に初めて会った人。

リューバは何と言うか、迫力のある女性だった。

この国の女性特有のふくよかな肢体。明るい緑色の円らな瞳は、好奇に満ちて輝き、若かりし頃はさぞかし別嬪であったことを窺わせるような名残を覗かせていた。

良く回る口は、歌うように滑らかにこの国の言葉を紡ぎ出した。

その頃の自分は、言葉に関して言えば、漸く聞き取りに慣れた頃で、リューバの口から淀みなく流れる話は、それこそ、唯、聞き流すだけならばまるで【歌】のようで耳には心地よいものだったのだが、あの頃は、その意味を捕らえるのに必死だった。

リョウは始終、押されっぱなしで、目を白黒させていたものだ。

その反面、リューバと付き合いの長いガルーシャは、慣れたもので、延々と続くリューバの話を実に巧みに半分以上は聞き流していた。

見渡す限り続く一面の黄色。日の光を浴びてキラキラと黄金のように輝いている。平原を吹き抜ける風に合わせて、黄一面の絨毯は波のようにうねり、揺れた。

そんなグレーシュ畑の中の細い一本道を歩いて行くと、傾き始めた日の向こうに集落が見えてきた。

スフミ村だ。

リューバには、先触れとして鷹のイーサンに頼んでその訪い(おとな)を知らせていた。きっと今頃、鼻歌を歌いながら、今か今かと偶さかの客人の到着を待っていることだろう。

街道の向こうから、こちら側に駆けて来る【何か】がリョウの視界に映った。

それは、瞬く間に茶色と白斑(ブチ)の毛むくじゃらの大きな獣の形を取る。

リューバが飼っている村の番犬、ナソリだった。

『リョウ！』

ヴァウ！　と野太い咆哮が上がる。

それにリョウは相好を崩した。

「ナソリ！　元気にしていたか？」

勢い余って飛びついて来た狼にも劣らない巨体にリョウはたたらを踏んだが、倒れることなく、なんとか踏み止まった。

嬉しさを力一杯表現してか、長いふさふさの尻尾がブンブンと左右に揺れる。

『久しいな、リョウ。変わりないようで何より』

頬から口元にかけた範囲を大きな舌でぺろりと一舐めされて、ナソリ特有の挨拶を受ける。そして、ナソリはすっとリョウの傍を離れると直ぐにその脇に付き従った。

『髪を切ったのだな』

以前、この場所を訪れた時、リョウの髪は長かった。
そのことを指摘されて、リョウは小さく笑った。
このナソリも砦にいた馬達と同様、中々に目敏かった。
世の男達も真っ青になる程の口説き文句かと思われるような台詞をさらりと口にするのだから隅に置けない。
「村は変わりないか？」
『ああ、皆、達者だ。リューバなど、また一段と肥えたようだぞ』
その声に若干の呆れを覗かせながら、ナソリが言えば、リョウは耐えきれないようにからからと笑い声を立てた。
そして、リョウは一頭の大型犬をその脇に従えながら、村へと続く細長い道を、時折、高らかな笑い声を響かせながら歩いて行ったのだった。

スフミ村の術師　2）

村の入り口に辿りつけば、点在する家屋からは、夕食の支度をするいい匂いが煙に乗って漂っていた。
目に映る村の景色は、半年前と変わっていない。
慎ましくも穏やかで温かな日常が、ここにはあった。
「おや、お前さんは、ガルーシャんとこの坊主じゃぁないか」
村人の一人に声を掛けられて、
「こんにちは。ご無沙汰しております」
リョウはにこやかに挨拶を返していた。
「リューバのところかね？」
「はい」
「ほうほう、もうそんな時期になったかね」
最近は、時が経つのが早くてねぇ。
朗らかに笑って、腰の少し曲がった老人は、杖を片手に手のひらを一振りすると、徐に振り返った。
「まぁ、ゆっくりしてお行き」
皺だらけになった顔に刻まれた細い目を一段と細めて、己が家の中に入って行った。
「はい。ありがとうございます」
茶目っ気たっぷりのその言葉に、リョウは穏やかに微笑んでいた。

村の集落の中心から少し離れた所にリューバの家はあった。
緑色の屋根と白い窓枠が目印だ。それは、リューバの瞳の色を象徴しているようだった。
【術師】であるリューバの家は、村の外れに位置している。それは、そのまま、この国に置ける【術師】の立ち位置を表わしていた。

特殊な能力を持つ【術師】は、何の力も持たない多くの一般人から見れば、特異な存在だった。

時として崇められたり、その能力を持て囃されたり、頼られたりもするが、それは同時に畏怖される存在でもあったからだ。

自分の理解が及ばない不思議な現象を目にして、人が取り得る反応は様々だが、その内の一つに【拒絶】や【排斥】がある。それは、世界が違っても、国が違っても、変わらない【人】の一面だった。

だからであろうか。付かず離れず、実に絶妙な距離感と間合いで、【術師】は人々の暮らしの中に溶け込んでいた。

そんな中で、この村のリューバは少し例外的な存在かも知れなかった。

元々、この村の生まれであったということもあるのだろうが、生来の陽気さと気風の良さで、今や村に無くてはならない重要な存在であった。村人からの信頼も絶大だ。

僻地の小さな村落では、大きな街のように【医者】が施す医療の恩恵に預かれることはまずない。そういう場所では、大抵の場合、薬草に詳しい【術師】やそれに近い人物が、医者に代わる存在となっていた。そう言う意味で、村唯一の術師であるリューバは、この村の住人の健康を一手に預かっている存在でもあるのだ。

リューバには二人の息子がいた。その息子達も、今は成人して村を離れている。

二人ともに術師としての素養を母親から引き継いだようで、一人は大きな街で、所謂【一般的な術師】として生計を立てており、もう一人は鍛冶屋の方面でその技を発揮しているらしかった。

リューバにとっては自慢の息子達だ。二人はそろそろ【いい年】らしいのだが、揃いも揃って未だ独り身で、嫁の来手がないことが母親としては悩みの種なのだと以前、ぼやいていた。

その口振りは、言葉の割には余り心配していなさそうな軽いものではあったが……。

約半年振りにこじんまりとした玄関に立てば、扉をノックする前に頑丈な内開きのドアが開いた。
「いらっしゃい」
すべらかに開いた扉の傍には、にこやかな笑みを浮かべた大柄な女性が立っていた。
この家の主であるリューバだ。
「こんにちは、リューバ」
目の前で大きく広げられた腕に、リョウは素直に体を預けた。
そのまま力一杯に抱きしめられて、身体の骨が軋みを立てる。
「元気にしていたかい？」
「はい」
この国の慣習通りに、頬に軽く口付けを贈り合って。
顔を上げれば、リューバのふくよかな丸みを帯びた手が、リョウの頬に掛かったおくれ毛を梳いていた。
「すっかり、短くなって……」
襟足で揃えていた筈の黒髪も時の経過に伴い肩口まで伸びていた。
それを邪魔にならない為に後ろで一つに束ねていた。括り紐から伸びる毛先は、小さな刷毛のようだった。
だが、リューバはその時のことを知らない。彼女が比べているのは、約半年前の背中の半ばまであった長さだ。
リューバには【先読み】の能力があった。それを【虫の知らせ】だなんて笑ってはいたが。占い師のようなことも仕事の一環として行っていた。
だからだろうか。リューバは、リョウが髪を切った経緯に見当が付いているのだろう。
珍しく多くを語らない言葉には、いつも以上に様々な【想い】が詰まっているようだった。
「……大変だったわね」
ただ一言、そう言って、再び力強い抱擁がリョウの体を包み込んだ。

それだけで十分だった。
リョウも同じように腕を回して、目の前にある柔らかな体を抱き締め返した。
すると、不意にリューバが顔を上げた。
「あら、やだ、リョウ、この間よりも痩せたんじゃない？　ちゃんと食べてるの？　食事は生きて行く上での基本よ？　唯でさえ細いのに」
確かめるように肩から腕を大きな掌が象って行く。
そのまま腰を掴まれそうになってリョウは慌てた。そこは弱い部分なのだ。

『おい、リューバ、いつまでそんな所にいる積りだ』
痺れを切らしたのか、早く中に入れとばかりに尻尾を揺らしたナソリの低い声に、リューバの手は止まった。
「あらあらあら、やぁねぇ。あたしったら。折角のお客様をこんな関ところに引き留めておくなんて」
ウフフと含み笑いをして、軽やかにスカートの裾を翻す。
「さぁ、リョウ、中に入って。晩御飯にしましょう？　沢山歩いたから、お腹が減っているでしょう？　今日は朝締めた【クーリツァ鶏肉】と畑の【レープカかぶ】を煮込んだのよ。リョウの好物だっだわよね」
丸い上気した頬に上機嫌に笑みを浮かべて、促されるようにして中に入る。
『やれやれ』
目が合ったナソリの顔を見て、リョウは苦笑を漏らした。
ああ。ここの空気も変わっていない。
あちこちで目に映る【不変】の欠片に、密かに安堵の息を漏らしている自分に、リョウは気が付かない振りをしていた。

「それにしてもねぇ、本当にガルーシャったら。相変わらずだわ。あんの莫迦男。こんな子を残してさっさといっちまうんだから。ホント、昔っから身勝手で、浮草みたいな人だったけれど、漸く、一つ所に落ち着いたかしらなんて思っていた所だったのに……」

滑るようになめらかに愚痴めいた言葉が続いたかと思うと、不意にリューバは押し黙った。

簡素な木のテーブルの上には、端に赤を基調とした素朴な刺繍の施されたテーブルクロスが掛かっている。その上には、この家の主が腕によりを掛けて作った料理の数々が並び、食欲をそそるいい匂いを立てていた。

「あんな奴でも……旅に出たっていうのは……やっぱり……寂しいものね」

そう言って、どこか遠い目をすると小さく微笑んだ。

ほんの少しだけ、その口元に哀しさと愛おしさを滲ませるようにして。

だが、その陰りは、一瞬で。

突如として空気が、がらりと変わった。

「それにしても、ホント、唐突だったのよ！　全く、驚く間も無かったわ。まぁ、本来なら、何にも残さないで、言伝なんて寄こさないままだったんでしょうから、それに比べれば大した進歩なんでしょうけれど。毎回毎回、振り回されるこっちは溜まったもんじゃないわ！　いきなり伝令の【ハヤブサ】を寄こして。あたしは【ハヤブサ】が苦手だって言ってるのに。で、寄こした封書には、なんて書いてあったと思う？　一言、『旅に出る』ですって。そして、延々とくだらないことが綴られていたと思ったら、最後、端の方に、

『追伸：後のことは頼む』だなんて、どの口が言うのかと思えば……。もう、酷いと思わない？　あぁ、昔っから、どっか気に食わない所のある奴だったけれど、とうとう最後までいけ好かない奴だったわ。こんな仕打ちったらないわ。思い出すだけでも腹が立つったらありゃしない」

息も吐かず、怒涛の勢いで捲し立てられた台詞にリョウは虚を突かれたようにポカンとした。

いつも大らかで賑やかな人ではあったが、まぁ、多少の口の悪さは目を瞑るとして、リューバが、こんなにも感情を顕わにすることはなかった。

溜まりに溜まった積年の【何か】が不意に破裂をしたような、そんな激情の切れ端が垣間見える。

そこには、ガルーシャとリューバの関係性が薄らとだが透けて見えた。

ガルーシャは何処までもガルーシャであったらしい。その傍迷惑な程に揺るがない一貫性は視点が変われば、良くも悪くも映るものだ。

その被害をリューバは相当被っていたらしい。そう、リョウは踏んだ。

「ホント、いつも、いつも、不意に現れては面倒事を何食わぬ顔で落として行って。こっちのことはまるっきりお構いなし。……身勝手で、……掴み所のない……まるで、そう、風のような男……」

風のような男――ガルーシャに対するその表現は言い得て妙だった。

リョウの脳裏にも、ひっそりと嘯みしめるようにして笑う、ガルーシャの目尻の皺が思い出されていた。

『リューバ、いい加減にしろ。折角の飯が冷める』

再び、物思いに沈み込んだリューバを、ナソリの尤もな一言が、

現実に引き戻した。
「あらやだ」
『話なら、食べながらでも出来るだろう。腹が減って敵わぬ』
同じく席に付いた椅子の上で、ナソリの尻尾が抗議に揺れる。
どうやら、暴走壁のあるリューバの手綱を握っているのは、この優秀な番犬ナソリのようだ。
こうして見るとどちらが主従か分からない。まぁ、リューバは、そんなことは全く気にも留めていないのだろうが。実にいい組み合わせのコンビだった。
「ふふふ、ごめんなさいね」
リューバも熱くなった自分に気が付いたのか、少し照れたように笑う。
「さぁ、御飯にしましょうか」
待ちに待った一言。漸く晩御飯にありつける。
「「リュークスの恵みに感謝を」」
『ブラーガ　ザ・リュークス』
静かに手を合わせると、二人と一頭は、其々にお祈りの言葉を口にする。
「頂きます」
そして和やかに温かい晩餐が開始を告げた。

刻まれた記憶　1）

「思ったよりずっと、元気そうで良かったわ」
晩御飯を終え、食後のお茶を手にソファに座って寛いでいると、前の一人掛けの椅子に座ったリューバが、悪戯っぽい笑みを浮かべてリョウを流し見た。
「いい出会いがあったようね」
意味ありげな視線を寄こした後、小さく含み笑いをする。
そういう仕草は、まるで少女のようで。二人の息子を育て上げたとは、とても思えなかった。
女は幾つになっても、その本質は変わらない。そんな例を目にしているようだ。
リョウは言われたことの意味を捕らえ兼ねて、目を瞬いた。
自分の隣に寝そべって、その顎を膝の上に乗せて寛いでいたナソリが顔を上げた。
それをあやすように、ナソリの柔らかで毛足の長い毛並みを撫でていると、ふと、リューバの視線を捕らえているものがこちら側にあることに気が付いて、リョウも同じようにそれを追って視線を下げる。
そこには、シャツの合間から覗く、瑠璃色の石が煌めくペンダントがあった。
リューバは一体、何処まで分かっているのだろう。
こちらからは何も言っていないのに。
そこにある背景を言い当てられるのは不思議で仕方が無かった。
「出会い、ですか？」
「あら、やだ、リョウ、堅苦しい言葉使いはナシよ？」
以前、来た時と全く同じようなことを言われて、リョウは半ば苦笑した。

その時の言葉が脳裏に蘇る。

【あたしはね、そういうの、苦手なの。だって、ガルーシャみたいじゃない？　あんな堅物は一人で十分。だから、ね？】

――――そんなことを言われても。

どうもリューバにとって、自分の話し方は、堅苦しく思われるらしかった。もっと砕けていいと言われているのだが、その加減が未だによく掴めない。

リョウが言葉を学んだのは、ガルーシャからであったから、その話し方が似てしまうのは仕方がないことだろう。御手本はそれしかなかったのだから。

それにガルーシャの他に、主に言葉を交わす相手と言えば、森の獣達で。彼らは、日常的にもっと古めかしい言葉使いをするのだ。その中に埋もれていれば、自然と出て来るのは彼らのような言葉だ。

耳から入る情報は、かなりの割合でその言語聴覚を支配する。この国の言葉が母国語ではない自分には、そのちょっとした言葉遣いの差から生まれる受ける側の印象の差が、イマイチ良く理解出来なかった。外国語というものは、突き詰めれば突き詰める程難しい。

「ええと、善処します？」

今すぐ、と言う訳にはいかない。それでも誠意を見せるということで。

やや困惑気味に眉根を下げれば、

「仕方ないわねぇ」

からかうような口振りでリューバが笑う。

こうして、往々にして、話は次から次へと脱線して行くのだが、今回は、リューバ自身が元の軌道に拘った。

「そう、出会いよ？　いい出会い。その素敵なペンダントに繋がる」

再び戻った軌道に、リョウはするりと乗った。

「これは、その昔、ガルーシャが作ったものだそうです」

「キコウ石ね。……カ王ローリ、かしら？」

「詳しくは聞きませんでしたが、多分」

「珍しいものだわ」
「これは……お守りだって……」
このペンダントを渡された時の事を思い出すと、今でも胸の奥に形容しがたい擽ったさと温かさが広がる。その記憶に引きずられるようにして、現れて来るのは石と同じ瑠璃色を持つ瞳。
この気持ちを何と呼べばいいのか。自分自身、まだ、分かっていなかった。
『……男か』
どこか遠い昔を懐かしむような穏やかな表情を浮かべたリョウに、ナソリが鼻を鳴らした。
どことなく不満そうだ。
「ん？」
『それは、大方、【男】から貰ったものだろう？　左様な匂いがプンプンするわ』
ナソリの少し変わった表現に首を捻っていると、目の前に座るリューバは、さも可笑しそうに声を上げた。
「ナソリったら。ふふふ。妬いているのよ。そのキコウ石には、贈り主の【想い】がとても強く染みついているから」
「贈り主の想い？」
「ええ。故意にか、偶々かは分からないけれど、ソレには並々ならない【思念】が付いているわ。ナソリは元々鼻がいいから、そういうものには敏感なのよ」
そう言って、目配せをして見せる。

――――思念、想い。それは、一体、なんだろう。
思い出すのは、ガルーシャの封書を届けた時。それには、自分の【残像思念】が付いていて、受取人が封印の解除をした際に、光の粒子が映像となって現れたのだった。
でも、あの時は、全くの無意識で。自分から能動的に【想い】を付与しようなどとは考えもしなかった。気が付いたら、そうなって

いたという具合だったのだ。
あの一件は、未だに自分の中でも不可解な事象として、消化されないまま残っている。リューバなら、そのことも分かるのかもしれない。
そこから類推するならば、この石にも、そういう類の物が、【憑いている】と言うことになる。
未だ、状況が飲み込めていないリョウに、リューバが手を差し伸べた。
「貸して御覧なさい。実際に見てみた方が早いわ」
そう提案されて。
リョウは首から鎖ごとペンダントを引き抜くと、瑠璃色の石を差しだされた大きな掌に乗せた。
室内を照らす穏やかで柔らかい発光石の光に、多面的な濃紺色が煌めく。
「さぁ、よく見てて頂戴」
リューバは、もう一方の片手を掌の上に傾けると、小さく呪文のような言葉を呟いた。
「パァイエヴリャーィ（具現せしめよ）」
すると、青白い光と共に突如として瑠璃色の石が強い光を放った。
体を起こしたナソリの耳がピンと上がる。
リョウは、その眩しさに一瞬、目を瞑った。
『ふうむ』
ナソリの呟きに、閉じていた目を開く。
そして、リューバの掌の上で、展開されていた青白い光の粒子が描き出す映像に、リョウは息を飲んだ。

刻まれた記憶（2）

夜間用に発光石の照射量が落とされた室内、寝台（ベッド）の上で、横になって寝息を立てているのは、紛れもない自分だった。己が姿を客観的に外から見るのは、なんだか変な気がする。自分なのに自分ではないような、そんな不思議な感覚だった。

そこに長い影が差した。

大きな骨ばった掌が現れる。長い指の背の部分が、弛緩した頬を撫でて行く。指先が何度かその感触を確かめた後、大きな掌が、顔に掛かる髪をそっと後方へ梳いた。

そして、その手は、首から、肩、二の腕、背中、脇腹、ゆっくりとその輪郭を暴きだすように触れ、腰から、臀部、そして、太もも、膝へと下って行った。

蝋燭の炎のように揺らぐ光の粒子の中、映像として映るのは、寝台に浅く腰かけた一人の人物の脚と手だ。

そして、最後に、名残惜しむように指先が耳元を擽り離れて行く。

それから、その人物は、寝台の上に屈み込むと、寝息を立てている自分の頬に軽く唇で触れた。

リョウは、余りの衝撃に、頭が真っ白になっていた。

思わず手で口を塞ぐ。

自分は、あの手を知っている。

少し骨ばった大きな手。剣ダコのある長い指。そこから滲むようにして溢れて来る優しさを。

「これは……」

だが、それは同時に信じられない光景でもあった。

まさか、自分の中で意識しない願望のようなものが深層心理の中から現れたとでも言うのだろうか。
そのことに思い至って、少なからず衝撃を受けていれば、
「この石の元々の持ち主が残した意識の断片よ」
リューバが口にしたのは、自分が考えていたこととは反対のことだった。
「つまり、実際に起きたこと？」
過去の時間の断片なのか。
「そうとも言えるわね」
円らな翡翠のような緑色の瞳が好奇に満ちて輝く。
「……心当たりでもあるの？」
意味深に口にされて、リョウの鼓動は跳ねた。

――心当たりは、なくもなかった。
あれは、そう、砦での最後の夜のことだった。
兵士達の酒盛りに紛れて、自分も酒を過ごしてしまって。強制的に戦線離脱を余儀なくされたのだ。折角良い気分であった所を団長の止めが入り、そのまま抱えられて部屋へと戻された。
それから、どうした？
寝台の上に座っていたら、急に眠気が襲ってきて、そのまま横になった気がする。
それからのことは、……実のところ、良く覚えていなかった。

あの後、気が付いたら、自分が使っていた部屋とは違う寝台の上で朝を迎えていた。
二日酔いのような症状は全くなかったが、昨晩の名残を引きずるような気だるさの残る身体、そして、直ぐ傍にあった自分とは違う他者の温もりに、思考が止まり、状況を把握するのが、暫し、遅れた。
体に回された良く鍛えられた逞しい腕の感触。直ぐ目の前には、

朝日を浴びて密やかな輝きを放つ銀色の髪。どこか作り物めいた冷たい印象の造形。その閉じられた瞼の奥にある色を、自分は知っていた。

穴があったら入りたい。まさにそう表現するに相応しい心持だった。

思い出すだけで、体全体の血が沸騰しそうだった。

「大事にされているのね。安心したわ」

映像が途切れ、明るさを取り戻した室内、目の前には静かな微笑みを湛えたリューバがいた。

何故か、とても不釣り合いな言葉を口にされた気がする。

大事にされている、だなんて。

果たしてそんなことがあるだろうか。

「さぁ、リョウ、観念なさい」

その緑色の瞳が、いつになく迫力のある輝きを放った。

だが、リョウは未だ、夢から醒めたような、あやふやな気分に中にいた。

だって、有り得ないだろう。あのような情景が切り取られているなんて。

思ってもみないことだった。

十日間という短い邂逅の中で、何か特別で相手を慈しむような気持ちが現れるとは考え難かった。

ユルスナールは、きっと自分に【何か】を重ねていたのだろう。

それにしても、その行動は傍目には紛らわしく、心臓に悪いことこの上ないが。

勘違いしそうになる気持ちをリョウは、そうやって押し留めた。

「こんな風に【想い】が形を取るのは、中々ないことなのよ。それだけ、ここに込められている気持ちが強いということなの」

そう言って、リューバは掌の中のペンダントをリョウに返した。

リョウはそれを受け取って、再び首に掛ける。

小さな瑠璃色の石をその手に乗せて眺めてみた。
【想い】という表現はとても曖昧だ。それは、それを作りだした本人の【モノ】で、他者にとっては、たとえ、それを推し量ることが出来たとしても、本質の所では理解しがたい。
「リューバにはそれが見えるんですか？」
形のない【想い】が、どうやって感知できるというのだろう。
「見える……というよりも、感じるっていう方が合っているかしらね」

リューバとナソリに囲まれて。
それから、リョウはガルーシャの【旅立ち】から、自分の身の上に起こったことを掻い摘んで話した。それには勿論、アッカから始まる北の砦での出来事が含まれている。
『で、リョウ、そやつとは恋仲なのか？』
聞きたくて仕方が無かった単語をナソリが待ちきれないとばかりに口にした。
心なしかその長い尻尾が気もそぞろにそわそわと揺れているように思えた。
「まさか。それは違う。有り得ない」
なんでそうなるのだろう。
思いも寄らない意外な質問にリョウは苦笑した。
砦の兵士たちは、自分のことを『年端のゆかぬ少年』だと思っていたのだ。
百歩譲って、仮に、兄弟愛・同志愛的な感情が芽生えることがあったとしても、そういう方向に話が行く訳がなかった。幾らユルスナールが自分の性別を認識していたとしても、それは変わりがないだろう。第一、そういう空気はなかった筈だ。
『なれど、余りにもあからさまではないか』
「ん？　ナソリにはそう見えるのか？」
『おぬしとて気を許しておるようではないか』

畳みかけられるように問われた事柄を、リョウは軽く笑い飛ばしていた。

「そんなことはないよ。これをくれた人は、ガルーシャに縁があったんだ。ガルーシャを通じた知り合いってところかな。良くしてもらったのは確かだけど、それは、ワタシがガルーシャの封書を持っていた【使者(Messenger)】だったからだ」

自分から見た客観的事実を口にすれば、

『……そのようには思えんがの』

ナソリはまだ納得がいっていないのか、不服そうに鼻を鳴らした。

だが、それを遮るように、

「ほらほら、ナソリもその辺にしておきなさい。リョウを困らせても仕方がないでしょう？」

飼い主らしく挿まれたリューバの仲裁の声に、それ以上の追及を諦めたのか、再び、リョウの膝の上に頭を伏せたのだった。

優しさに包まれて　1）

リューバは、自分の飼い犬が拗ねる様を半ば微笑ましげに眺めていた。

ナソリの言動の奥に潜んでいるのは、紛れもない嫉妬だ。自分の与り知らぬ所で、リョウが心を許す存在が現れたことが気に食わないのだろう。

珍しく、そんな執着を見せるのだから、困ったものだ。

リョウが持つ【キコウ石】。その中でも希少な部類に入る【カローリ】。

見た目にも鮮やかな瑠璃色の輝きを放つその石は、普通に考えて、おいそれと他人にやれるような代物ではなかった。

家にそれが伝われば、装飾品に加工して、それこそ代々受け継いで大切にしてゆく。そして人生の中で、ここぞという晴れ舞台の時に身につける。そういった類の扱い方をされてもおかしくない物だった。

その辺りの事情を、リョウは、まだきちんと把握していないようだった。

だが、それ以上に重要なのは、そこに込められている並々ならない愛情に似た慈しみだった。

ガルーシャの縁ということは、術師としての素養があるのだろう。

それでも、人の【想い】がこのようにして残り、その持ち主を守るといった、それこそ厄除けのような作用をもたらしているというのは、余り聞かない話だ。それだけ、これを渡した当人が、受け取り手のことを大事に思っているということになる。

だが、その隠された真実を、リューバはこの場で告げる積りは無かった。

他人が軽々しく口に出来るものではないし、第一、お節介という

ものだろう。
リョウが知ったら、恐らく茫然自失になりそうな位驚くことだろう。
本音を言えば、それはそれで面白そうだが、まぁ、そこまで無粋なことはしたくなかった。

「リョウ、大事になさいね」
――その繋がりを。
きっとこれからも、貴方の力になってくれるでしょうから。
「はい」
こちらの言いたいことを察したのか、リョウは、はにかむように微笑むと小さくその石を胸内に握り締めた。
そこにあるのは、どう見ても【女】の顔だった。
初めて目にするリョウの女性としての一面に、リューバは胸の奥が締め付けられるような、そんな複雑な気持ちになった。
村の住人達は、リョウのことを少年だと思っているようだった。
自分も最初、間違えてしまったので余り大きなことは言えないのだが、リューバはそのことに納得がいっていなかった。
男と同じような格好をしているから見間違えてしまうのだろうが、リョウはれっきとした女性だ。
一度、そのことに気が付けば、どう引っくり返っても男には見えなかった。
そんな周囲との認識の差にリューバ自身は、何故かヤキモキしていた。
その一方で、当の本人であるリョウ自身は、別に気にも留めていないようなのだから仕方がない。
相変わらず、『動きやすいから』と簡素なシャツに男と同じズボンを履き、口調もそれらしく変えているようだ。
それはリューバの目には、無意識の【鎧】に映った。
本当の核である己を巧妙に隠すための防衛本能がもたらす自己保

全。

あの子は、何をそんなに恐れているのだろう。

――女であることを隠す必要はないのに。

だが、そこは自分が踏み込んではいけない領域だ。

それだけが、日頃から残念でならなかった。心苦しくも、口惜しくもあった。

リョウは着飾れば、きっと綺麗だ。この国の女達と同じような服を身につければ、見違えるに違いない。それこそ、元が誰だか分からなくなるだろう。

元々、リョウが持つ空気はしっとりと落ち着いたものだ。外見からはどうも幼く見られてしまうようだが、その内面は成熟した女のものだ。

自分の女としての【勘】がそう訴えていた。

リューバの子供達は二人とも男で、常々、女の子が欲しいと思っていたことも関係するだろう。

その願いは、結局、叶うことはなかった。その所為か、リョウを目の前にすると、ついつい自分には縁が無かった己が娘の姿を重ねてしまうのだ。

自分に娘がいたら、こうしてあげたい。

そんな、一度は捨ててしまった筈の欲求が膨らんでくる。

だからであろうか。リューバのリョウに対する心遣いは、自分の娘に対するそれに近かった。

優しさに包まれて　2）

あの日、突然、ガルーシャがリョウを伴ってやって来た時にはそれこそ、腰が抜けそうな程に驚いたものだ。

自分の新しい家族だと紹介された時には、いつの間にそんな隠し子などを作っていたのかと仰天したのだが、連れられた子の顔立ちとその色彩を見て、自分の勘違いには早々に気が付いた。

この国の人間ではまず見かけない異国風の面に黒い瞳、そして真っ直ぐに伸びた長い黒髪。

それは、リューバも初めて目にする珍しい組み合わせだった。

あの頃のリョウは、ちょうどこの国の言葉を覚え始めたばかりで、まだ片言を話すのがやっとという状態だった。そして、ガルーシャの隣にひっそりと控えていた。

時折、見せる控え目な微笑みは、人を惹きつける【何か】を持っていた。

いや、人だけではない。それは獣達にも有効で、この村では番犬宜しく強面で通っているナソリが、あっさりと尻尾を振って懐いて見せた様には、実に大笑いしたものだった。

獣達は、常にその者の本質を見る。彼らに好かれるということは、心根が綺麗な証拠だった。

よくよく観察していれば、ナソリと普通に会話をしている。それはリョウが、多くの人が失ってしまって久しい能力を持っていることを意味していた。

一体、何処からそんな子を連れてきたのか。

まさか、かどわかしてきたのではあるまいかと冗談交じりに、それでも半ば本気で尋ねてみれば、ガルーシャは剣呑そうな顔をしてジロリとこちらを睨みつけた後、ゆっくりと否定の言葉を吐いた。

『馬鹿は休み休み言え』――――そんな言葉だったと思う。

そして、一言、『森で拾った』と付け加えたのだった。
その時は、その『森で拾った子』に関して、それ以上の話をすることはなかった。
ガルーシャが口を開かなければ、聞いても仕方がない。
【術師同士】の会話とはそういうものだった。

一時はどうなる事かと思われたが、二人の共同生活は上手くやっているようで、時折、伝令として飛んでくる鷹や隼達は、ガルーシャと新しい家族の日常の様子を面白可笑しく語って行った。
そんな子が、今は、流暢にこの国の言葉を操っている。
まだ所々、多少の訛りがあるが、上出来だ。その見た目の割には少し堅苦しい話し方を差し引いても十分おつりがくるだろう。
ここまで来るには、きっと並々ならない努力をしたはずだった。
それなのに、リョウはその辛さや大変さをおくびにも出さない。
ここを訪れる度に変わらない、にこやかな笑みを浮かべる。
だから、つい気になってしまうのだ。
あの子が無理をしてはいまいかと。

ガルーシャの【旅立ち】を知らされて、心配したのは、一にも二にもリョウのことだった。
森の動物達の伝手を頼って、その様子を知らせるようには頼んでいたが、やって来る鷹のイーサンは、律儀に報告をした後、『余り心配をしても仕方なかろう』などと釘を差して行った。
今回の訪問は、そのガルーシャの旅立ちから初めてで、自分にしてみれば、待ちに待ったものだった。　報せを受けた時は、喜び勇み、晩御飯にリョウの好物を作ろうと張り切った。
全ての準備を整えて。到着の頃合いになった時分には、柄にもなく気が急いて、ナソリを迎えに行かせた位だ。
そして、約半年振りに会ったリョウの髪は、以前に比べて短くなっていた。

この国の弔いの慣習に倣い、髪を切ったのだろうことは簡単に想像が付いた。
玄関で目にしたリョウの表情は、穏やかなものだった。
心配していたような陰りは見えない。
そして、すぐさま、リューバの視線は、その胸に燦然と煌めく瑠璃色の石に釘づけになった。
そこには、リョウを包み込むような優しい【気】が溢れていた。
そこで、確信をしたのだ。
ガルーシャの代わりにこの子を支えてくれている人物がいるということを。
それは、リューバにとってはまたとない嬉しい報せとなった。
砦での一件を語るリョウの目は優しさに満ちていた。それだけで、リョウがその場所でどんな待遇を受けたのかが分かる。
――願わくば、この出会いが、またとないものになりますように。
リョウを自分の娘のように思っているリューバは、そう、願わずにはいられなかった。

朝の薬草談義

翌朝、リョウは、リューバの家のテーブルの上に、今回持参した薬草を並べていた。

その中には、勿論、アラムとサハーに手伝ってもらい見つけた【ストレールカ】が含まれていた。

「まぁ、【ストレールカ】じゃないの。よく見つかったわね」

乾燥させた数多もの薬草の中から、目敏く、その特徴的なギザギザの葉を見つけ出すと、リューバは感嘆の声を上げた。長年、術師家業をやっているリューバにとっても、それは中々入手するのが難しいらしい。

喜んでもらえたようで何より。色々と探した甲斐があった。

「森の狼達に手伝ってもらったんです」

元はと言えば、サハーとアラムのお陰なのだが、自分が誉められたようで嬉しかった。

「ちょうど、群生している所を見つけて。サハーのお陰ですね」

「そう。じゃぁ、森の番人に感謝しなくっちゃ」

この辺りの人々の間では、狼達は森の番人とみなされていた。

リョウが暮らすガルーシャが残した小屋が立つ森は、この国の人々にとっては、特別な意味合いを持っていた。その広大な面積と深さから、別名、【帰らずの森】、【迷いの森】とも呼ばれる禁忌の場所でもあった。

太古から殆ど人の手が入ることなく、自然のまま、多種多様の巨木を始めとする植物が育ち、その中では様々な獣達が、連綿とした秩序の中で暮らしている。その内実は、人にとって、未だ謎の部分が多かった。

かつて森で暮らしていた【人】の記憶は、遥か昔、継承されない

まま、随分と遠いものになってしまった。受け継がれるべき【糧】を持たず、古の知識は、風の前に塵となり、今や、伝説や伝承の中に細切れに残るのみだ。

その良い例がセレブロだろう。

太古の森に住まう白銀の王。セレブロが居る場所は、森の中でも奥深く、人が決して立ち入ることの出来ない領域だった。長い間、人目に触れることのなかったその悠久の時を生きる存在は、街に暮らす人々にとっては、最早、お伽噺当然のモノなのだ。

森は、【慣れない者】が、一度、足を踏み入れようものなら、すぐさま方角を見失う。そして、森を侵す闖入者には、狼達が憲兵宜しく、縄張りを主張する。

そうやって長い年月に渡り、度々、噂を聞いて肝試しをする果敢な挑戦者達や珍しい獲物を求めた恐れ知らずの猟師達、探究心に我を忘れ、希少な薬草を探す薬師達を、森は【行方不明者】に変えて来たのだ。

そうしたことから、人々は、森を畏怖の対象として恐れた。

だがしかし、それは、同時に薬師を担う【術師】にとっては宝物の宝庫とも言うべき、垂涎ものの領域でもあった。

リョウが分け入って薬草を探したのは、そういう認識をされている森だった。

この村で、その事実を知るのは、取引相手であるリューバだけだ。

リョウ自身、中に入ると言っても、まだまだ、その入り口付近をうろうろとしているようなものだ。

「【ストレールカ】は人が服用してもいいものなんですか？」

「そうねぇ、滅多にお目に掛かれない貴重なものだから、余り一般的ではないけれど、飲んでも大丈夫よ。――但し、恐ろしく苦いから、相当の覚悟がいるわ。だから、余りお勧めは出来ないけれど……」

リョウの質問に答えながら、リューバも経験があるのか、実に嫌そうに口元を歪めた。

「……確かに。アレは半端ではなかった」

思わず、同じような顔付きをすれば、

「あら、リョウも経験済み？」

「……不本意ながら」

それは、薬草を扱うものならば、誰しもが、一度ぐらいは受ける【洗礼】なのだろう。

二人は顔を見交わせると自然と小さな笑いを零し合った。

「その効用は？」

「基本的には、磨り潰して塗る時と変わらないわね。切り傷や火傷。傷の深さは余り関係ないわ。……それから、血を吐いた時。内臓をやられた場合には良く効くの」

――――成程。

リョウは手にした手作りの帳面（ノート）に、真剣な面持ちでメモを取った。

「服用する量は？」

「服用量は、傷の度合いに寄るわね。重症の場合は、乾燥させた葉なら、二枚くらい」

「狼達は、戦闘前に、気を高める為に口にするといっていました」

「あら、そうなの？」

「興奮剤。気付け薬みたいな扱いですかね」

アラム達から聞いた話を伝えれば、リューバは興味深そうに合槌を打った。

「面白いわねぇ。一度にどれくらい使うって？」

「この葉、一枚だそうです。あ、勿論、生のままで」

「一枚で効果覿面なのね。人にはない作用ね」

それから、少し考える風に小首を傾げて、

「あぁ、でも、人の場合でも、治癒力を高めるってことは、一時的に体の身体能力を上げるということでもあるから、原理としては同じかもしれないわね。少し、その作用の仕方は異なるけれど」

そう言って、不意にテーブルの下を覗きこんだ。
「ナソリ、試してみる？」
リューバは、からかうように乾燥させた葉を一枚摘み、その鼻先で軽く振る。
『馬鹿を言え。我は狼とは違う』
急に話を振られたナソリは、すかさず嫌そうに顔を顰めた。
『早よう、ソレを退けろ。臭くて敵わん』
郷愁を誘う、どこか【蓬】に似た匂いも、ナソリには合わないようだ。
いや、犬は人の何百倍も嗅覚が発達している。
『過ぎたるは及ばざるが如し』――詰まり、そういうことなのだろう。
そんなナソリの素振りに、リョウは忍び笑いを漏らしていた。

長年、術師として暮らしているリューバの知識は、実践的で、実に為になる【生】の情報だった。
リューバの方も、森に居る獣達の知識を、リョウを通じて知ることが出来るので助かっていた。
獣達が持つ知識は、人の生活が森を離れてから、徐々に伝わらなくなっていた。人の方が獣達との意思疎通の手段を忘れてしまってからは、尚更、その流れに拍車を掛けることになっている。
そんな中、リョウからもたらされる情報は、未知なものも多く貴重だった。
そう言う意味では、二人の関係は【持ちつ、持たれつ】といったところなのだろう。
まぁ、俄然、リョウが受け取る方が圧倒的に量的には多いに違いなかったが。

アクサーナ　1）

そうやって、持ち込んだ薬草を前に、その処方量を始めとする細かい薬草の知識をリューバに学んでいる時だった。

「リューバ！　リョウが来てるって向かいのムサカ爺さんに聞いたんだけど！」

――――バン！！！！！

突然、勢いよく、扉が開いたかと思うと、金色に輝く長い髪を翻して、一人の女性が飛び込んできた。

「まぁ、アクサーナ、朝から騒々しいわね」

リューバのお小言もそっちのけ。明るい橙色の瞳が、室内をぐるりと見渡す。

そして、一か所で止まった。

途端、その顔が喜色に満ち溢れた。

「リョ～ウ！！！　逢いたかったわ。元気にしてた？」

アクサーナと呼ばれた女性は、そう声が上げると、リョウに突進した。

長い腕が、力強くリョウの体に巻き付いた。そのまま、ギュっと音がしそうなほど抱きしめられて、息が詰まりそうになる。

リューバの時以上の衝撃をリョウは黙って耐えた。

一見、細く見えるのだが、アクサーナはリョウよりも上背があり、その骨格も骨太だった。そして、その細い体の何処から出ているのだと不思議に思う位、とてつもなく力が強いのだ。

『アクサーナ！　離れろ。リョウの息が詰まる！』

【ヴァウ】とナソリが注意を促すように吠えれば、

「アクサーナ！　力を入れ過ぎよ！　リョウが窒息するわ！」

リューバも慌てて声を掛けた。

そうして、漸く、アクサーナの腕が緩んだ所で、

「アハハ。久し振り、アクサーナ。元気そうで何より」
顔を若干、苦笑に歪めながらも、リョウは突然の闖入者に微笑み返していた。
猪突猛進の如く、我が道を行く所は変わらない。
体中の骨が一気に軋みを立てたが、その痛みにも関わらずリョウの顔は嬉しそうだった。
アクサーナの熱烈な歓迎振りは今日に始まったことではないが、毎回毎回、同じように力一杯抱き締められて、リョウは内心、たじたじだった。
この感情表現（テンション）の高さには、中々に慣れるものではない。
「うふふ、リョウも相変わらず素敵ね」
巻き付いた腕を解いて。
満面の笑みを浮かべたアクサーナから、両方の頬にキスを受ける。
同じように挨拶を返せば、
「……あら、髪を短くしたのね。前の長い時も黒い駿馬の尻尾みたいで綺麗だったけれど、その長さも……良く似合ってるわ」
うっとりと些か熱の籠った視線で見つめられて、リョウは、居心地が悪そうに身じろいだ。

アクサーナの口から淀みなく流れ出るのは、自分に向けられるには実に恥ずかしい台詞の数々だった。彼女は臆面も無く褒め言葉を口にする。それが、彼女自身の性格に依るものなのか、この国の女達の属性なのかはよく分からなかったが、リューバを見る限りは、大体半々というところだろう。

アクサーナは、【村一番の器量よし】と評判の娘だった。
この国の女達の例に漏れず、早々に幼さの抜けた顔立ちに伸びやかな肢体を持ち、輝くばかりの色素の薄い金色の髪は、豊かにうねり、腰の辺りまであった。それをゆったりと一つに束ねている。
すっと通った鼻筋にぽってりとした厚みのある唇。大きく見開か

れた目は、暖かい日の光のように明るい橙色をしていた。
こちらでは、人が持つ色彩は実に豊かだ。特に、瞳の色にそれは如実に表れている。
リューバの緑色に、アクサーナのオレンジを想起させる橙色。
これまで見聞きした事例を思い起こせば、砦の兵士達もそうだった。
シーリスは綺麗な菫色だったし、ブコバルは青灰色、ヨルグは木の実のヘーゼル、アッカは、霞がかった春の蒼穹を想起させる蒼い色だった。
そして、ユルスナールは瑠璃色だった。
そういう色とりどりの中では、自分の【黒】という色は、逆に珍しく映るのかも知れなかった。
中でもアクサーナは、事あるごとにリョウの真っ直ぐに伸びた癖のない黒髪を羨ましがった。
他人の芝生が青く見えるのは、何処に居ても同じだ。若い女らしく、お洒落には余念がない年頃でもある。
アクサーナの姉は既に嫁いで、大きな街で暮らしていた。その所為もあるのだろうが、街の若い女達の所謂、【流行】には敏感らしく、【田舎の村娘】という言葉の響きから受ける印象からは、かなり掛け離れていた。
素朴さや地味さから言ったら、自分の方が絶対に勝っている気がする。
そんな取りとめもないことを考えていると、いつの間にか、アクサーナの華やかな顔が間近にあった。
キラキラと日の光が橙色の明るい光彩に反射する。
「ねぇ、リョウ。今回はいつまで居られるの？」
森の小屋から、このスフミ村迄は、徒歩で丸一日の距離だ。馬ならば半日の距離。
こちらの感覚では、それ程、離れている訳ではない。

いつもなら薬草を卸して二・三日はリューバのところに厄介になる。そこで家の手伝いをしたり、薬師としての薬草の用い方を教えてもらっていた。

他には、この辺りの地理や人々の暮らしぶり、慣習や風習など、細々とした知識・常識も教わる。都会の方から風に乗ってやってくる噂話と言うのもあった。

こちらの方が、リョウにとっては非常に重要で、大きな意味を持っていた。

教わると言ってもそんなに堅苦しいことではない。

世間一般の基準から言ってもリューバはおしゃべりな性質であったから、お茶の合間や食事の合間、料理をする合間でも、ふと疑問に思ったことを口にすれば、一つの問いに対して、答えがそれこそ十にも二十にもなって返ってきた。

ここで見聞きすること全ては、自分にとってはなくてはならない情報足り得た。

ガルーシャは、世の博識な学者肌の研究者に等しく、どこか浮世離れしているところがあった。性別が男であったということもあるが、元々の出自が良いのか、物腰も粗野な所は全く見受けられず、どちらかと言えば紳士的で、庶民の地に足の着いた暮らしぶりにはとんと疎かった。

知識としてはそれなりにあるのだが、実践的な面ではからきしと言えばいいか。

その反面、リューバは女性ということもあって、生活に密着した細々とした事柄に詳しいのは無論のことガルーシャには中々聞けないようなことも余り気負わずに口に出来た。

アクサーナ（２）

――今回はいつまでいられるのか。
アクサーナに今後の滞在予定を聞かれて、リョウは少し考えた。
別段、急ぐ用事など端からない。
昔の暮らしのように時間に追われることもなかった。
いつも時計を気にしながら生きてきたのが嘘のように、ここでは緩やかな時間が流れていた。
――こういうのも悪くない。
そう思える程には、ここの暮らしに馴染んでいた。

リョウは一度リューバの方を見てから、今後の予定を口にした。
自分の滞在は、居候先のリューバ次第でもあるからだ。幾ら自分が良くとも、相手の都合もある。
「昨日の夜に着いたばかりだから、まだ、二・三日はいる予定だけど……」
いつものようにそう言えば、
「あら、折角なんだから、もう少し長くいて頂戴よ。せめて、【フタロイ・シェスチ】迄は。ねぇ、リューバ？」
アクサーナは同意を求めるようにリューバを見やった。

【フタロイ・シェスチ】――この国の暦の話は、この間にも少し触れたが、一月に四つある【デェシャータク】（１０日毎のまとまり）をそれぞれ第一から第四という風に番号順に呼び慣わしていた。
【フタロイ】は『二番目の【デェシャータク】』という意味で、【シェスチ】はその６日目ということ、つまり、１６日ということだ。

今日が【ペールヴィ・トゥリ】、【第一デェシャータクの3日目】ということで、3日だから、13日も先の話になる。

そんなに長く滞在しても大丈夫だろうか。

いつになく長くなる逗留に躊躇いを見せれば、

「そうね。収穫祭もあることだし、ここで帰るのは勿体ないわね。リョウはまだ見たことがないでしょう？　こんな片田舎でもお祭りはちょっとした見物なのよ。街から流しの芸人も来るし、皆でダンスも踊るわ。外に出ていた者もこの時期に合わせて家族や親戚の所に帰郷するから村は人で溢れかえるの。ご馳走も沢山。ガルーシャは賑やかなのはだめで、人込みが大の苦手だったから、連れて来る筈がないし……」

リューバが同意を示すように口を開いた。

「お祭りがあるんですか？」

「ええ。今年、豊作をもたらしてくれた神々に感謝をするの。そして、この恵みが来年も続きますようにって。皆でお祈りするのよ」

リューバが事の趣旨を説明すれば、

「まぁ、早い話が、【飲めや謡えや】の【どんちゃん騒ぎ】をするんだけどね」

楽しいわよ、とアクサーナは、種明かしをするように片目をつぶって見せた。

――――成る程。

豊作を喜び、感謝するお祭りは、娯楽の少ない村人達には絶好の息抜き、要するに【ハレ】の日だ。盛大な村を挙げてのお祭りになるのだろう。冬の到来を前にした一大行事（イベント）になる。

「へぇ、凄い。それは楽しそうだね」

『それだけではなかろう』

不意に、ナソリがアクサーナの方へ流し目をくれる。

すると、

「ふふふ、そうね。お祭り自体は【フタロイ・アジィン】（11日）から【セィェミ】（17日）までの七日間なんだけど、今年は、【シェスチ】（16日）に特別な催しがあるのよ」

リューバも意味深に微笑んだ。

「特別な催し？　何があるんですか？」

リューバもナソリもアクサーナの方を見ていた。

「アクサーナ？」

『勿体ぶることもなかろうて』

何か、アクサーナに関係があるのだろうか。

アクサーナは珍しく、少し恥ずかしそうに口を噤んだ。

「こういうのは自分から言わなくちゃ。リョウにも出席して欲しいんでしょ？」

リューバがそう口にするも、躊躇うように白い地に色とりどりの刺繍の入った前掛け（エプロン）の端を握り締める。

何か、アクサーナに関する事柄があるらしい。分かったのは、そこまでだ。

リョウは訳が分からずに、アクサーナとリューバの二人を交互に見やる。

それに痺れを切らしたのか、ナソリがぼそりと呟いた。

『やれやれ、いつもの威勢のよさはどうした？　いきなり色気付きおって』

「どういうこと？」

小さな声で聞けば、ナソリは『フン』と鼻息を吐いた後、事も無げに言った。

『婚礼があるのだ』

【スヴァージィバ】――――コンレイ――――婚礼。

単語を変換させて、

――――結婚式？！

導き出した答えに、リョウは驚いた。

「それはおめでたい」

収穫祭に合わせて結婚式があるのか。それならば、喜びも浮かれ具合も倍増しということだろう。賑やかさが目に浮かぶようだ。

「……あ」

そこで、アクサーナとの繋がりが見えてきた。

「ひょっとして、アクサーナが結婚するのか！」

「あらあら、ナソリったら」

『まどろっこしいことは好かん』

当の本人の方へ話しを向ければ、アクサーナは少し恥ずかしそうに俯いた後、とびきりの笑顔を浮かべて、頷いた。

「おめでとう！」

「ありがとう」

突然のことで驚いたが、アクサーナ位の年頃ならば、別段、不思議でもない。

この国では、成人を迎える前から許婚がいる場合も珍しくはなかった。娘が嫁ぐ年齢も、自分が知る習慣よりも格段に早い。職を持っていたとしても、基本的に女性は家にいるものだし、そういった意味では、農村では尚更なことだった。

「お相手は？」

「ふふ、デニスよ。リョウも知ってるでしょ？」

「そうか。……デニスか」

リョウの脳裏には、いつもしかめ面をしている純朴そうな無口の青年の顔が浮かんだ。

樵のようながっしりとした体つきに、短く刈り上げた明るい茶色の柔らかそうな頭髪が特徴的だ。

アクサーナとデニスは共にこの村で生まれ育った幼なじみだと聞いていた。二人は気心が知れているし、歳も近い。傍目にもお似合いだと言えた。

「よかったね。本当におめでとう」

リョウも嬉しい報せに口元を緩めた。

実を言えば、リョウはほんの少しだけ、デニスが苦手だった。
どうやらデニスの方がアクサーナにベタ惚れらしく、ここに来る度に何故かデニスに睨まれる……というか、余り良い顔をされなかったからだ。
面と向かって言葉を交わしたことは数える程しかない。それも挨拶程度のものだ。
ここにいる間は、何かとアクサーナが自分を構うので、きっと嫉妬みたいな感情が出ているのだろうと思ってはいる。
それに加えて、こちらから見れば不可抗力だとしか言いようがないのだが、初対面で向こうに与えてしまった印象が、恐らく、余り良くなかったのかもしれない。それを向こうが引きずっているような気がするのだ。
――張り合う必要など全く無いのに。
だが、人の【感情】というものは得てしてままならぬものだ。

そして、不意にリョウの脳裏には、初めてアクサーナに会った時の可笑しくも苦々しい出来事が蘇る。　今となっては笑い話で済むが、当時は妙な冷や汗をかいたものだ。
だが、まぁ、それすらもすでに【良い】思い出にはなっていた。

キミの名は　1）

アクサーナに初めて出会ったのは、リューバの家の裏の畑で野菜を収穫する手伝いをしている時だった。
アクサーナは度々、リューバに家で焼いた焼き菓子やパンの類をお裾分けしに来ていたのだ。
彼女の母親であるナデェージュダは、焼き菓子とパン作りに於いては村一番の腕との評判だった。
ナデェージュダのパンは、これまでに何度か御相伴に預かったことがあるが、実に美味しかった。
リョウ自身、森の小屋でもパン作りはするが、水加減が中々に難しく、満足の行く出来には中々ならない。
パンは、この国では主食であるから、女達がパンを焼くのは日々の家事の中でも必須事項で、出来て当たり前のことだった。
リューバも勿論、自分で焼いているのだが、ナデェージュダのものは、やはり一味違うらしい。
それにナデェージュダは【好き】が高じてか、創作意欲も旺盛で、よく変わり種の菓子に近い甘いパンを作ったりもしていた。生地に木の実を練り込んだり、保存用に乾燥させた果物を細かく刻んで入れたり、素朴だけれども、どこか温かく懐かしい味のするモノが多かった。
そんな訳で、そういう試作品を偶に多めに作ったりすると近所に配ったりするのだ。

リューバの家の裏には、広さは然程大きくはないが、かなり本格的な畑があった。
季節ごとに様々な野菜を植えており、基本的に自給自足で賄っていた。足りない物や作り過ぎてしまった物は、村の人々と交換した

りしている。
そして反対側には、様々な薬草を栽培した区画があった。
ガルーシャもそうだったが、薬師を担う術師は、大抵、自分でも薬草を栽培している場合が多いらしかった。

あの時、リョウは、裏の畑の中にいた。
綺麗に整えられた畝の間に体を滑り込ませ、支柱に支えられて、胸の辺りまで高さのある蔓科の植物に付いている実を取っていた。
周囲をぐるりと巡らす柵の向こうで、カサリと物音がした。
その音に振り返ると、豊かな金色の髪を長く垂らした女性が籠を両手に抱えて立っていた。
村の人だろう。リョウはそう思った。
リューバの家には、時折、仲の良い人達がちょっとした手土産持参でお茶をしにくるのだ。
勿論、術師や薬師としての依頼もあるのだろうが、そういう訪いの方が多いように見受けられた。
そういう時、リューバの家は村の女達のささやかな社交場に早変わりする。其々が持ち寄ったお茶受けのお菓子を前に、情報交換と言う名のお喋りに興じる。そうやって、リューバを始めとする村の女達は、互いの関係を確かめ合っているのかもしれなかった。
【女が三人寄れば、喧しい(かまびすしい)】とは良く言ったもので。
天気の話に始まり、作物の話から亭主の話になり、子供の話になり、【何処そこの誰は】と村人の話になり、そして隣町の様子から、果ては王都の流行まで。
次から次へと、その話題は尽きることなく、延々と続いて行く様は、傍目にも実に興味深かった。
このスフミは国の中でも北方の僻地にある筈なのだが、女達が得る情報には目を瞠るものがある。
街道を通じての物流が、人の噂と便りも運ぶのだということを教えてくれるいい例だった。

「こんにちは」
声を掛ければ、その女性は小さく肩を揺らした。目が心なしか、大きく見開かれている。
驚かせてしまっただろうか。
リョウは、相手を安心させるように穏やかな微笑みを浮かべた。
「リューバなら、中にいますよ」
台所で準備をしてくるからと言って、ちょうど、一足違いで家の中に入った所だった。
「あ……いえ。……その……」
籠を抱えたまま、その女性は言葉を詰まらせる。
それを見て、リョウは内心、首を傾げた。
見た目は大人びているが、そういう仕草を見る限り、まだまだ子供なのかもしれない。
母親に頼まれてお使いに来たが、見知らぬ人物がいて驚いた。そんなところだろうか。人見知りをする性質なのかもしれない。
そのままにしているのも可哀想なので、助け船を出すことにした。
「リューバを呼んできましょうか？」
リョウは手にしていた籠を足下に下ろして、ナイフをしまうと、着けていた手袋を脱いだ。
そして、柵を挟んで向こう側で立ち竦んでいる少女と思しき訪問者の前に歩み寄った。

ハッと顔を上げた少女の瞳は、懐かしい柑橘類を思わせる温かい陽だまりの色をしていた。
近くに立てば、目線は余り変わらない。いや、ややもすれば、自分の方が低い位だ。
こちらの人々は、全体的に見て――と言っても、まだ多くの人に遭遇した訳ではないので、比較対象自体が少ないが、これまでの印象から言えば、大柄な人達が多かった。

少女だとしても背は高い。成長の度合いは、もう違うのだ。
「どうかしましたか？」
黙ったまま、微動だにしない少女の顔を覗き込めば、その顔が見る見るうちに赤みを帯びてきた。
「大丈夫？」
尚も案じる声を掛ければ、
「へ、平気です！」
と言った傍から、その子が手にしていた籠が支えを失い落下する。
「おっと」
それへ咄嗟に手を伸ばして。
籠は傾いたものの、落とすことは免れた。

籠の上には布のナプキンが掛かっていたが、そこから立ち上る【マースラ（バター砂糖）】と【サーハル】の甘い匂いに、リョウは目を細めた。
リューバへのお裾分けだろうか。
甘いものが好きなリューバは、お茶の時間に必ずと言ってよい程、手作りしたお菓子の類を用意していたから、この手のものは喜ばれるだろう。
リョウ自身、甘いものは好きな方だった。
布をほんの少し捲って中を見てみたい誘惑に駆られたが、それを寸での所で堪えた。
いきなりそんなことをしたら、失礼にあたるだろう。
「はい。どうぞ。落とさないように気を付けて」
そうして籠を少女の手に渡そうとしたのだが、
「あ、……これは、リューバにって、母さんが」
そう言われて、リョウは籠を手に持ったまま、小さく笑みを零した。

少女の顔は、極度の緊張の為か、首まで真っ赤になっていた。
まるで、自分がつい先ほどまで収穫していた【パミドール】のよ

うだ。

【パミドール】は、【トマト】に似た真っ赤な色をした野菜の一種で、生のまま食べてもよし、煮込んでもよしとこの地方では一般的な野菜だった。果肉は多くの水分を含み、仄かな甘みと清涼感のある後味が特徴だ。

「中を見てもいいですか？」

少女が頷いたのを確認してから、そっと上に掛かった布を捲る。

籠の中には、【マフィン】に似た焼き菓子が綺麗に並んでいた。

ふわりと香ばしい甘い香りが鼻孔を擽った。

「キミのお母さんが作ったのかな？」

「ええ、母さんとわたし、二人で」

「それは凄い。とても美味しそうだね」

素直に感嘆の声を上げれば、少女は照れたように、それでも誇らしげに小さく笑った。

きっと、台所でのお手伝いは日常茶飯事のことで。こうして母から娘へと家庭の味が受け継がれて行くのだろう。

「いい匂い。リューバもきっと喜びます」

少し言葉を交わしてみて、警戒が取れたのか、和やかな空気が二人を包み込んでいた。少女の方も緊張が和らいだのか、表情に硬さが抜けてきている。

「それじゃあ、リューバを呼んできましょうか」

手にした籠を持ち上げて微笑んでみる。

リョウは足下にあるもう一つの籠をもう片方の手に持った。中には、先程、畑から採ったばかりの真っ赤な【パミドール】とその他二・三種類の野菜が艶やかな光を湛えていた。

そのまま踵を返そうとして、

「……あ、あの……」

呼びとめる声に、顔だけ振り向けば、

「――――アクサーナ！」

少女の声に被さるようにして、遠くから低い声が響いてきた。

少女はバッと体ごと振り返ると、こちらに駆けて来る人物を見て表情を緩めた。

そして、合図をするように大きく手を振った。

キミの名は　1）（後書き）

キミの名は　2）

村の中心へと続く、細長いうねった道を上って一人の人物がやって来る。
豆粒程の大きさのその人は、見る見るうちに大きな若い男の姿へと変わった。
短く刈った明るい色の髪が、柔らかそうに風に靡く。
かなりの距離を物凄い速さで駆けたというのに、その男は、息一つ乱してはいなかった。

「待ってろって言っただろ」
辿りつくや否や、少女に対して苦情を言った。
「あら、だって、そっちの話が、長引きそうだったんだもの。仕方ないじゃない。これは、焼き立てが美味しいのよ。冷めないうちに届けなさいって母さんも言ってたんだもの」
これまでの照れてはにかんだ様子が嘘のように、少女の口からは流れるように言葉が出て来た。
これが少女の地なのだろう。余所行きの仮面が取れて、気の置けない相手との会話は淀みがない。
「だからって先に行く奴があるか。何かあったらどうする？」
不満と心配がない交ぜになったような色をその声音に乗せた男の台詞を、少女は軽やかに笑い飛ばした。
「何かって、やあねぇ。こんな場所で、一体、何があるっていうのよ？」
「最近は物騒だって親父さんも言ってただろ」
そう言って、ちらりと男がこちらへ視線を流した。

――――警戒されている。

そう感じた。

狭い村の中、村人は皆、互いに何処の誰かを把握している。そのような中では、【余所者】は目立つ存在なのだ。

必ずしも全ての人が自分を受け入れてくれる訳ではない。それは、前々から予想していたことでもあった。今までは幸いにして、人の温かさ、優しさ、懐の深さに助けれ、励まされてきたが、それこそ、運が良すぎたのだ。

ガルーシャ以外の人達と交流を持つようになって、自分の顔立ちがこちらでは余り見かけないものであることも早々に理解した。それに対する反応も千差万別だが、これまでは概ね好意的でもあった。だが、それは傍にガルーシャやリューバという知り合いがいたからなのかも知れない。自分一人であったら、違った反応が返って来てもおかしくはない。幾ら、己が、自他共に認める人畜無害そうな外見をしていても、だ。

見るからにこの国の出ではない人間が、このような片田舎に一体、どんな用事があるというのか。そう、不審に思われても仕方がなかった。

リョウは、男の反応をさして気に留めなかった。寧ろ、当然のものとして受け止めた。

一抹の疎外感と寂寞感は残るが、一々気にしていたら、それこそ限が無いだろう。

そのまま傍でささやかな言い争いを続けてしまった二人に、リョウはどうしたものかと考えた。

このままリューバを呼んできてもいいのだろうが、それも気が引ける。

――――さて、どうしたものか。

辺りへそれとなく視線を流せば、外の騒がしさに気が付いたのか、裏の勝手口からナソリが、のっそりとその茶色い巨体を覗かせた。

ちょうど良い。ナソリにリューバを呼んできてもらえば良いのだ。

声を掛けようとすれば、ナソリの方が、先にこちらに気が付いた。
『如何いたした？』
「ナソリ、リューバにお客さんが来てるんだ。呼んでもらってもいいかな？」
自分の後方に立つ、二人の人物を見てから、
『ふむ。承知した』
ナソリは、すぐさま体を反転させた。
ふさふさの茶色い長い毛足がふわりと揺れる。

ふと、視線を感じて振り向けば、少女と青年が言い合いを止めて、こちらを見ていた。
動くなら今だろう。
リョウは、甘い匂いのする籠を持ち上げると、二人に向き直った。
「今、リューバを呼んでもらっているので、直ぐに来ると思いますよ」
柔らかな微笑みを口元に刷きながら、そう告げれば、
「まぁまぁ、一体、なんの騒ぎ？」
扉の向こうからリューバのおっとりとした、やや高めの声が聞こえて来た。
リューバが来れば、もう問題ないだろう。
「こちらは、リューバに渡しておきますね」
「あの……」
尚も、何か言いかけた少女を制して、リョウは両手に二つの籠を抱えると、顔を覗かせたリューバに立ち替わり、中に入ることにした。

「リューバ、女の子の家の方から頂き物です」
「まぁ」
すれ違い様、例の籠を手渡す。
リューバは籠に掛かっている上の布を少し捲って中を見るとたち

まち相好を崩した。
「ナージャの所からね？」
そして、顔を上げると、不意にリョウの方を見て小さく笑った。
「リョウもありがとう。ふふふ。ほっぺに葉っぱの汁が付いているわよ。洗ってらっしゃい。それから、お茶にしましょう」
からかうように口にされて、リョウは慌てて、頬の辺りを袖で拭った。
廊下の向こう、リューバの忍び笑いが小さく木霊する。

そして、幾らも経たない内に、
「あらあら、アクサーナにデニスじゃないの！　アクサーナ、いつもありがとう。ナージャにも宜しく伝えて頂戴ね。ナージャの新作はいつも楽しみにしているのよ？　今回はなにかしら……」
リューバの歌う様な声が独特な旋律に乗って響き始めた。

さっきまで、少女が言い掛けていたのは、恐らく、この頬に付いた汚れのことだったのだろう。そう、当たりを付けたリョウは、台所に収穫した野菜の入った籠を置くと、顔と手を洗いに洗面所へ向かった。

キミの名は　2）（後書き）

【ナージャ】は【ナデェージュダ】の愛称で、アクサーナの母親の名です。

キミの名は　3）

一度、外で話し始めたら、リューバは長い。
お茶にすると言っていたから、お湯を沸かしておいた方がいいだろう。
冷たい水で汚れを落とし、さっぱりとした気分で台所に戻れば、ナソリが直ぐ後を付いてきた。
「リューバは？」
『さぁな。大方、話に花を咲かせておるのではないか』
ナソリのピンと立った耳が、時折小さく動く。屋外の会話でも拾っているのだろう。
『やれやれ、まだまだかかりそうだの』
「先にお茶の準備だけしておこうか」
半ば呆れた声を出したナソリに小さく笑って、リョウは台詞通りにお茶の用意に取り掛かった。
水を入れた【チャー(薬缶)イニク】を竈の火に掛けて、茶器は外に居る客分を含めて人数分用意した。
リューバのことであるから、あのまま二人を帰すとは思えない。必ず、折角だからとお茶に誘うだろう。
気さくで、誰にでも分け隔てなく接する朗らかな気性は、まさしく【母性】そのもので、リョウは、常々そんなリューバに感服していた。

リューバが良く飲むお茶は、【薬師】らしく【薬草】を煮出したものが多かった。
【薬草】と一口に言っても、その種類は実に様々で、字面からどうしても苦みや癖のある【薬湯】の類をつい想像してしまいがちだが、リューバのお茶コレクションは、その趣を大分異にした。

リョウが選んだのは、ほんのりとした甘さの後に独特な爽やかさの残る茶葉だ。分類としては、発酵のされていない青茶になる。大きな葉っぱがくるりと丸まっているのだ。

それを沸騰した湯の中に適量入れる。この匙加減が中々に難しいのだが、教わった通りに専用の匙で二杯。そして煮出すこと、感覚的に数分位か。丸まったお茶の葉が完全に開き、湯の中を踊るように跳ねれば、出来上がりだ。

そして、直ぐに煮出したお茶を【ガルショーク（ポット）】に注ぎ、茶葉と分離させる。

そうしないとお茶が苦くなってしまうのだ。うっかり放って置いてしまうと渋みが出て、飲めない訳ではないが、折角の風味が抜けて美味しくなくなってしまう。その不味さは経験済みだ。

【ガルショーク（ポット）】の下部には、温かい熱を逃がさないように保温性の高い石が埋め込まれている。発光石と同じように、こちら特有の便利な代物の一つで、専門の【術師】が作ったものだ。

差し詰め、持続性の高い【温石（オンジャク）】と言った所だろうか。

一緒に温めた茶器を【タレールカ（お盆）】に乗せて、台所から居間の方に顔を出せば、ちょうどリューバが客人を伴って中に入って来る所だった。

リョウが手に持った茶器類を見て、リューバは悪戯っぽく笑った。

「ピッタリね」

「そのようですね」

【阿吽（あうん）】の呼吸よろしくかち合った拍子（タイミング）に、リョウは一人、ほくそ笑む。こういった些細な積み重ねが、ささやかながらも幸福感を生み出していた。

居間となっている部屋のテーブルの上に茶器を並べる傍で、リューバは客人をこの家の主らしく持て成した。

「さぁ、掛けて頂戴。お茶にしましょう？」

促されるようにして、少女と青年がソファに腰を下ろす。

そして、和やかな午後の一時が開始を告げた……筈だった。

お茶を人数分カップに注いでいる間、リョウは妙に執拗な程の強い視線を感じていた。
自分が動く度にその視線も追い掛けて来る。
それに態と気が付かない振りをして流しながら、執事宜しく控え目に、この家の主であるリューバの出方を待った。
目の前のテーブルには、先程、少女が持ってきた【マフィン】に似た菓子が皿の上に乗っていた。甘くて香ばしい匂いが、窓から入るそよ風に乗って、辺りに漂ってくる。
それを遠目にして台所に戻ったリョウは、後を付いてきたナソリを見下ろした。
「ナソリはどうする？」
飲み物のことだ。
『いつものでよい』
「了解」
そう言われて、ナソリ用には薬草（ハーブ）を入れた水を用意する。
リューバ特製のその水は、ナソリ曰く、喉越しがすっきりとしていて、一日の疲れが吹き飛ぶぐらい美味なのだとか。井戸から汲んだ水に薬草を付け込んで、香りを付けたものだった。リョウは、まだ飲んだことが無かったが、以前から興味はあった。
「ねぇ、ナソリ。一口貰ってもいい？」
試しに聞いてみれば、
『ああ、別に気にせず飲めば良い。無くなればリューバに催促すればよいのだからな』
「ありがとう」
快い返事が返ってきたので、序でにと自分用に手にしたカップにその水を注いだ。

一口、口に含めば、ナソリの言う通り、清々しい後味が口内に残る。中々に美味しいものだった。
「本当だ。美味しい」
『リョウも気に入ったか』
「うん。後で、リューバに薬草の配合を聞こうかな」
『そうか』
そうやって一人と一頭で和んでいると、居間の方からリューバの声が上がった。
「リョウ？　ナソリもこっちへいらっしゃい。皆でお茶にしましょう？　お茶受けにナージャ特製のお菓子があるわよ。早くしないと無くなっちゃうわよ？」
幼い子供に言い聞かすような文言に、リョウとナソリは顔を見交わせた。
「はい。今行きます」
さ、ナソリ。と相棒を促して、やや重い腰を上げた。

「先に頂いているわよ」
そう言ってカップを傾けたリューバに、リョウは小さく頷き返した。
リョウはリューバと客人が座るソファとは対角線上にある一人掛けの椅子に腰を下ろした。直ぐ傍にはナソリが控える。
「あら、リョウ、こっちは飲まないの？」
すでにカップを片手にしていたことをリューバに気付かれて、リョウは苦笑した。
「頂きますよ。これは、ナソリのハーブ水を味見してみたんです」
「あら、そう。ナソリにこのお茶は少し強すぎるからね」
そう言いながらトポトポとポットから温かいお茶を注がれて、一口、口に含む。
少し熱い位のお茶は胃の腑に染みた。
やはり温かいお茶は格別だ。

思わず、ほぅと小さく息を吐けば、斜め前のソファに座る少女と目が合った。
先程からずっとこの調子だ。何故か、少女の視線はチラチラと自分に向けられていた。
――なんだろう。何かしただろうか。それとも、何か気になることでもあるのだろうか。
そう思ってみても、彼女とはついさっき初めて顔を合わせたばかりで、その理由が分からない。
少女がその円らな瞳でこちらを見つめている。
内心の気まずさを誤魔化すようにリョウは微笑んでみた。かつての習慣よろしく、専ら社交辞令的意味合いで、だ。
すると少女は、目の縁を若干赤らめて恥ずかしそうに俯いた。
少女の隣に寄り添うようにして座る青年は、その様子を何処か面白くない顔をして眺めていた。
青年は暫く少女の方を見ていたが、やがて、視線を横へ流した。

凍てつくような冷え冷えとした眼差しが、リョウを捕らえた。正面から向けられたその視線は、どう少なく見積もっても好意的には見えなかった。剣呑さを含んだ光が、射貫くように突き刺さる。
どうも歓迎されていないようだった。青年の表情はあからさまではないが、その瞳はとても雄弁にその感情を吐露していた。目は口ほどにものを言う。
負の感情を向けられて。
覚悟はしていたものの、実際には、やはり気持ちのいいものではない。
リョウは、お茶を啜りながら、努めて冷静に状況を分析した。
そして、出て来た結論は、実に単純明快だった。
――――訳が分からない。
その一言に尽きた。
少女がやけに照れる様子も。見ず知らずの青年から目の敵にされ

る謂われも。
平静を取り繕っていても、内心は漣立つ。
思わず息を詰めそうになった。

そんな中、やけに緊張感のないリューバののんびりとした声が耳に入った。
「……そう言えば、リョウは二人に会うのは初めてよね」
口を開くことなく頷きだけで返せば、少女が待ってましたとばかりに身を乗り出した。
「もう、リューバったら、勿体ぶらなくてもいいじゃない」
「ふふふ、アクサーナはせっかちねぇ」
「いいから早く」
少女に小声で促されて、リューバはさも可笑しそうに喉を震わせた。
「はいはい。アクサーナは気になって仕方がないのだものね」
そして、ややぎこちない空気を払拭するように、軽く自己紹介をすることになった。
主導権を握るのはリューバだ。
「この子はリョウ。時折、薬草を届けてもらっているの」
リューバの紹介にリョウは軽く目礼をした。
「よろしく」
「この子は、アクサーナ。ナージャの娘さんなのよ。ナージャの話はこの間したでしょう？　パン作りの名人」
その言葉にリョウは静かに頷いた。
ナデェージュダはリューバの茶飲み仲間の一人だった。
「アクサーナです」
対面で、少女は鮮やかな微笑みを浮かべた。
「パンやお菓子を焼いては、偶にこうしてお裾分けしてくれるの。このお菓子もナージャが焼いたものなのよ。さぁ、冷めないうちに頂きましょう？」

お菓子を一つ手渡されて受け取る。
籠の下に保温石を置いていたのか、手にした焼き菓子は、まだほんのりと温かかった。
「で、その隣が、デニス。アクサーナとは幼馴染みで、仲がいいのよ。ヴァジムの所の息子さんなの」
「……どうも」
デニスと紹介された青年は、こちらを一瞥して、ぼそりと呟くと徐にお茶を啜った。
「もう、デニスったら、相変わらず無愛想なんだから」
「……」
「いつもそんな不機嫌な顔をしていると誤解されちゃうって言ってるでしょ？」
「これは地顔だ。悪かったな」
アクサーナが隣で気を揉めども、本人は至って平然としている。
「どうか気を悪くしないでね？」
相手を思いやるその言葉に、リョウは薄く愛想笑いとも呼べるような笑みを刷くだけに留めた。
余計なことなど言わない方がいい。
それから、お茶を囲んで、リューバの居間では、女主人とその若い客人の高らかな声が響いていた。
気心が知れた女同士、話題となる話は豊富にあるようだ。
二人のお喋りが続く中、残された男とリョウは静かにカップを傾ける。
そして、時折、女達から思い出したように振られる話に、互いに合槌を打ったりした。
ナージャ特製というお菓子は、実に美味しかった。それにありつけただけでも良しとしよう。
リョウは、そんな気分だった。
中に【オレーハ】という胡桃に似た木の実が入っていて、それが香ばしさを醸し出していたのだ。

やがて、一頻りお喋りをして気が済んだのか、アクサーナが急に思い出したように顔を上げ、窓の外を見た。
日が傾き、差し込む影が大分長くなって来ていた。
「もう帰らなくっちゃ。母さんが待ってるもの。随分長くお邪魔してしまったわ。リューバとお話しているといつも時が立つのを忘れてしまうんですもの」
軽やかに微笑みながら立ち上がる少女の傍で、もの言わず青年も立ち上がった。
「リューバ、美味しいお茶、ごちそうさま」
「どういたしまして。いいのよ、お茶くらい。ナージャに宜しく伝えておいてね。御菓子、今回のも凄く美味しかったわ。ありがとう。ねぇ、リョウ？」
「はい」
「リョウも、またね？」
見送りにリューバとともに玄関に立てば、アクサーナが小さく目配せをして、手を振る。
それを遮るかのように、
「ごちそうさまでした」
デニスが無表情で一言。
「それでは、失礼します」
まるで貴婦人をエスコートする騎士のような振る舞いで、堅苦しくそう告げると二人は自宅へと帰っていった。
細くうねった、なだらかな坂道を二つの影が下って行った。

玄関先から居間に戻り、急に静かになった室内で、リョウは漸く長い息を吐き出した。
まるで小さな台風のようだった。
どっと襲ってきた訳の分からない精神的疲労にぐったりとして椅子の背もたれに体を預けた。

それを見てリューバが笑う。
「賑やかだったわねぇ。疲れさせてしまったかしら？」
そう聞かれて、リョウは力なく首を振った。
その中にリューバも含まれていたのだが、それは敢えて言わなくとも良いだろう。
「でも、偶にはいいでしょう？」
そして、意味深に含み笑いをし始めた。
「アクサーナはリョウが気に入ったようね？」
そう茶目っ気たっぷりに口にされて、
「そうでしょうか？」
リョウは首を傾げた。
少なくともあのデニスという青年には快く思われなかったようだ。
何せ、睨まれたのだから。
「ふふふ。そうよ。見ていれば分かるわ」
そのリューバの一言が、どれだけの意味を持っていたのか。その時の自分には、全く見当が付く筈がなかった。
「デニスももう少し愛想が良ければいいんだけれどねぇ。父親のヴァジムはもっと社交的なんだけれど。誰に似たのかしら。まるで正反対だわ」
「母親の方に似たのでは？」
概して、男の子は母親に、女の子は父親に似ると言うではないか。
そう言ってみれば、リューバは少し考えた後、
「そうねぇ。母親のオーリャはどちらかと言えば、物静かで優しい人だから。今日はあんな感じだったけれど、デニスも本当は優しい子なのよ？　人見知りをする性質だから、緊張していたのかもしれないわね」
そう結論付けると穏やかに微笑んだ。
リューバは人を見る目がある。だから、それはこの村の住人にとっては真実なのだろう。でも、それが自分にとっての真実になるとは限らない。

恐らく何らかの理由があるのだろうが、それを直ぐに知りたいとは思わなかった。

世の中には、往々にして、敢えて知らなくとも良いことがあるものだ。

そうして、新しく出会った村人二人のことはあまり深く考えずに、時の流れるまま、その事実だけを受け止めることにしたのだった。

スフミよりアイを込めて　1）

そうして、ガルーシャの下に帰ってから【デエシャータク（10日ごとのまとまり）】が過ぎない内に、詰まり、分かりやすく言い換えれば、１０日も経たない内に、リューバの所から伝令に仕立て上げられた【ゴールビ（鳩）】が飛んできた。

「りょう」

ガルーシャに呼ばれて、書斎へと顔を覗かせれば、リューバからだと言う手紙を渡された。

「……ワタシに、ですか？」

意外なことに首を傾げれば、

「ああ。宛名を見てご覧」

ガルーシャの長い骨ばった指が、封書の反対側を指示していた。

手の中にある封書をひっくり返せば、丁寧にも繊細なリューバのものと思われる印封が施されていた。

逆を返して、宛名を見る。

宛名は、自分宛てになっていた。

小さな、少し丸みを帯びた字体で、覚えて間もないこの国の文字で綴られているのは、紛れもない、自分の名だった。

以前、ガルーシャから教わった通りに印封に触れる。すると、封を施していた蜜蝋が、音もなく砂塵のように砕け散った。

『中身は開けてのお楽しみじゃのう』

窓枠の所で毛繕いをしていた【ゴールビ（鳩）】のピァーチがのんびりと口にする。

どこか訳知り顔な感じだ。

「ピァーチは何か知っているの？」

『まぁ、見てみるがよいさ』

クルルと上機嫌に喉を鳴らす。
報酬として好物のスグリの実を貰ったようで、嘴の先が濃い紫色に染まっていた。

中を開けてみれば、リューバの一筆の他に小さく折り畳まれた紙が入っていた。
――――アクサーナから文を預かっている。
簡潔な一文でそう書かれてあった。
アクサーナと言えば、前回の訪問で会った少女だ。手紙の遣り取りをする程、親しくはならなかった筈なのだが。
首を捻りながらも、几帳面な程に小さく折り畳まれた紙を開いた。
「……」
そして、中に書かれてあった内容にリョウは言葉を失った。一度では理解できずに、もう一度確かめるように文面へ目を通す。
それを何度か繰り返して。
リョウは開いた手紙を無言のままガルーシャへと手渡した。
リョウの取った行動にガルーシャはひょいと片方の眉を器用に跳ね上げたが、何も言わずに差し出された手紙らしき紙を受け取ると目を通し始めた。

――――程なくして。
生真面目な表情で文面を追っていたガルーシャの顔が、皺を刻み、歪みを生じ始める。やがて、小さく小刻みに喉の奥を震わせ始めた。
「……りょう……」
滲んでくる生理的涙を堪えるように目を細めながらも、ガルーシャは何とも言えないような顔付きをして横目でこちらを流し見た。
滑稽とも憐憫とも取れる、複雑怪奇極まりない色をその瞳に浮かべて。
「そんな器用な顔をする位なら、普通に笑ったらどうですか？」
せり上がって来る居たたまれなさと不機嫌さを隠さずに言えば、

そんな拗ねたようなリョウの様子を一瞥してから、ガルーシャは声を立てて笑い始めた。

『如何いたした？』

近くで寛いでいたセレブロがのっそりとその身を起して、訝しげな顔をすれば、ガルーシャは尚も捩れそうになる腹を手で摩って宥めながら、手にしていた手紙をセレブロの鼻先に突き出した。

ガルーシャは余り感情を顕わにしない性質だが、余程ツボに入ったようだった。

いまだ喉の奥を鳴らし続けるガルーシャをリョウは半眼で見た。

「……そんなに笑うこともないでしょう？」

「笑えと言ったのはりょうの方じゃないか」

それはそうなのだが。

いざ目の前でそんな態度を取られると腹立たしいのだから仕方がない。

『……コレの何が可笑しいのだ？』

手紙を読み終えたセレブロは合点が行かぬようだった。

「差出人を見てみろ」

ガルーシャが手紙の一番下を指し示す。

『ふむ、アクサーナというのか。女子の名だな』

「ああ。アクサーナは差し詰め、うら若き乙女だな。スフミでも美人と専らの評判だ」

『宛名は無論……リョウか』

微妙な間の後に、セレブロがこちらへと視線を向けた。

「……どう思いますか？」

「どうとはなんだ？」

リョウとしては思い切った積りだったのだが、ガルーシャには聞きたいことが伝わらなかったらしい。

『中身の話じゃろうて』

ピァーチ（伝令の鳩）が助け船を出すように、小首を傾げながら愛嬌のある姿勢で断定すれば、

『中身とな？』

セレブロも窓枠に居る伝令の鳩へ鼻先を向けた。

『意味など明らかじゃろうが。訊ぬるまでもないわい』

『ああ。左様なことか』

それだけで話が通じたらしい。

納得したセレブロは不意にリョウを振り返った。

『リョウ。何が気に食わんのだ？』

セレブロとの認識の差に、リョウは苦笑しつつも、どう答えたものかと考えた。

「気に入るとか、気に入らないとかの話じゃなくて……」

もっと根底的な話の気がするのだが。

『これは、紛れもない恋文だ』

断定的な口調とともに手紙を返されて、

「やっぱり？」

受け取りながらも、最後の悪あがきをするように、その虹色に煌めく瞳を見る。

『熱烈じゃのう』

ピァーチののほほんとしたしわがれ声が、やけに滑稽に響いた。

『そなたの言う【こなた】での【世間一般の基準】とやらを鑑みてもだな。そう考えるのが妥当だろう』

やたらと常識的で人間臭いセレブロの説明にリョウは、やはりかと何とも複雑な顔をして見せた。

正直なところ、どうしていいか分からなかった。

第一波の衝撃の波が去ってから、少し冷静さを取り戻した頭で考えてみても、戸惑いの方が先に来た。

小さく間延びした癖のある字体で紙面にびっしりと埋められていたのは、迸りそうな程の熱を帯びた言の葉の数々だった。

勘違いもここに極まれり。もう笑うしかないだろう。

このような熱烈な恋文（ラブレター）、いや、恋文自体を貰ったのは初めてだった。

好意を寄せられて悪い気はしないが、それでも限度というものはある。意味合いは大分違うのだ。

何が彼女をここまで駆り立てたのか。リョウとしては首を傾げるばかりだった。

「勘違いされたみたいですね」
それほどまでに自分は男に見えたのだろうか。
ただ、それだけが不思議で仕方がなかった。
髪も伸びるに任せて、長くしていた。それを根元で一つに束ねてはいたが、髪の長さに男女の違いはあまりなさそうだから関係はないだろう。
「何、男も女も【想い】に大差はなかろう」
ガルーシャがしたり顔で言えば、
『好かれておるということじゃろう。良いことではないかのう』
他人事なのか、好々爺らしく、のんびりとピァーチも合槌を打つ。
「それとこれとは話が違いますよ」
これは一体、どんな喜劇だろうか。
だが、性質の悪い冗談にするには、その【想い】は余りにも純粋過ぎた。差出人は、真剣なのだ。それを笑い飛ばすことなど、どうして出来ようか。
それでも、この小さな紙片に一杯詰まった【気持ち】とやらは、自分を【男】だとみなしての感情なのだ。自分の何がそう見えたのか。さっぱり見当も付かない。
『ややこしく取ることはなかろう。その女子はリョウを気に入った。それに変わりはあるまい』
首を傾げるばかりのリョウに、セレブロは至極まっとうな解釈をしようとする。
それはそれで分かるのだが。
だが、親愛の感情と恋愛のそれとは大分差があると思うのだ。
ここでは性別の境界が曖昧だったりするのだろうか。恋愛に性差など関係ないというのか。それはそれで事実ならば受け止めること

はできると思うが……。
いや、ガルーシャやリューバを見る限り、そのようなことはないだろう。

一目惚れだと書いてあった。
あのような短い邂逅の中で、言葉など交わした内には入らないだろう。やたらと視線を感じたと思ったら、こんな落ちになろうとは露にも思わなかった。
そうと決まれば、あの青年の態度も納得が行く。
恐らく、デニスはアクサーナを常から好ましく思っていて、好きな女が、【いきなり現れた見知らぬ“男”】に顔を赤らめたり、視線を奪われたりする様が気に食わなかったのだろう。図式としては随分と単純だ。
こんな所で奇妙な三角関係に巻き込まれる羽目になるとは予想外もいいところだった。

『フォッフォッフォッ。懐かしいのう。儂も昔はそうじゃったわい』
「若いってのはいいもんだ。いつの世もモテる男は辛い。その影には数多もの女達の涙が川を作るのだ。私とて若いころは満更でもなかったからな。……懐かしい」
ガルーシャは深い皺の刻まれた頬をつるりと撫でた。
それから、不意に真面目な顔をして、リョウの方を見た。
「りょう、程々にな。余り、女を泣かせてはいかんぞ。アクサーナは気丈な性質だがら心配ないとは思うが……」
自分の性別を分かっている癖に、ガルーシャはそんなことを言う。
そうやって自分達の昔話に花を咲かせ始めた男達(ガルーシャとビアーチ)をリョウは横目に見遣った。これから自慢話にでもなるに違いない。
概して過去の記憶というものは、脳内で脚色されて色彩鮮やかに、まるで別物のように蘇るものだ。

「……はぁ」
各人の個人的感想は兎も角、リョウは非常に複雑な気分を紛らわすように大きな溜息を吐いた。
『リョウ。溜息など吐くものではない。邪気が入り込むぞ』
溜息を吐くと、こちらではそうやって諫めた。
故郷の【幸せが逃げる】という表現とは根底が似ている。向こうは吐き出す方だが、こちらは吐き出した後、吸い込む方の心配をするのだ。
セレブロに言われて、リョウは情けなく眉を下げた。
「返事……なんて書こう」
これだけのものを渡されて置いて、何も返さない訳にはいかなかった。
『ありのままでよかろう』

「リューバは何か言っていなかったか」
ガルーシャが思い出したようにピァーチに聞く。
『何やら企んでいる風ではあったが、大方、高みの見物で楽しむ腹積もりじゃろう』
「あやつも相変わらず人が悪い」
『じゃが、まぁ、悪いようにはせんと思うぞ』
リューバはリューバで、この事態を面白がっているようだ。
『リョウ、返事をもらって来るようにと言われておるでな』
止めを刺さんとばかりに伝令の役目を預かるピァーチから催促されて、リョウは腹を括った。
大事な役目を負った伝令を手ぶらで帰らせる訳にはいかない。
「分かった。今、返事を書いてくるから、ちょっと待ってて」

この際だから、正直に書こう。後のことは、あちらにいるリューバに任せればよいのだ。リューバのことだから、きっとうまく取りなしてくれるだろう。そう思うことにした。

リョウは、居間にしているテーブルの上に手作りした筆記用具と同じく手作りした少し不格好な紙を取り出すと、早速、返事を書き始めたのだった。

紅に沈む

「じゃぁピァーチ、頼んだよ。リューバに宜しく伝えておいてね。そちらは任せるからって」

それだけ言えば、リューバならきっと分かってくれるだろう。

足に括られた専用の小さな筒に手紙を入れる。アクサーナへの返事とリューバへの一筆だ。

『案ずることはなかろうて。後はリューバがいいようにするじゃろう』

そう言ってピァーチはクルルと喉を鳴らした。

それに一つ頷いて。

自分の記憶の中にある【鳩】よりは格段に大きく、長い翼をバサリと広げたピァーチを腕に乗せて、思い切り、上空へと振り上げる。

『ではな』

「ああ、気を付けてお帰り」

鳶のように頭上でくるりと旋回してから、ピァーチの赤み掛かった、少し特徴のある灰色の羽は、蒼い空の彼方へと羽ばたいて行った。

灰色の大きな翼が視界から消えるまで、リョウは空を見上げ、伝令の姿を見送った。

『帰ったか』

するりと、音もなくセレブロが隣に身を寄せて来た。

リョウは無言のまま、日の光に反射して白くきらきらと輝く、その柔らかな毛並みを一撫でした。

『リョウ』

「ん？」

『余り気に病むな』

セレブロは何処までも優しい。
自分を案ずる声にリョウは一瞬、目を瞠はると擽ったそうに小さく笑った。
思いの外、気を使わせてしまったようだ。そんなに落ち込んだ顔をしていただろうか。
「ありがと。大丈夫。ちょっと……なんというか、吃驚しただけだから」
喉元を一時の熱さが過ぎ去れば、出て来たのはそんな軽い言葉だった。
『……そうか』
きっと大変なのは、向こう(スフミ村)の方だ。
小屋に戻る途中、リョウはもう一度振り返って、伝令が飛び立った方角へ視線を投げた。

手紙には真実を書いた。
気持ちは嬉しいが、自分は彼女が望むような【想い】には応えられないだろうと。
同じ女なのだと。【こちら】では紛らわしい格好をしていた為、勘違いをさせてしまって申し訳ないと一応、謝っておいた。
それで彼女の面目が保たれればいいのだが。
後は、アクサーナ次第だ。勘違いを知ってどうするのか。侮辱されたと憤るだろうか。それとも恥をかかされたと悲しむだろうか。その反応は未知数だ。
この国では基本的に同性とは正式な婚姻関係を結べないとガルーシャは言っていた。
それでも、同姓で似たような関係を築く場合が全くないとは言えないだろうが、通常は、異性間で婚姻が生じ、人は子孫を残し、その一族の血を繋いでゆく。そういう考えは、こういった僻地の農村程、強く人々の意識の中に受け継がれているものだ。
だから、そう言った意味では、アクサーナが妄想という名の想像

を逞しく膨らませる余地はなくなる。
時間が経てば、きっと笑い話になるに違いない。アクサーナが、というよりも、男に間違われて求婚まがいの恋文を貰ったという自分が、だ。話のネタとしては格好の素材だ。

『人とはおかしなものだな。男だろうが、女だろうが、その核は変わらぬというに……』

セレブロが不意に口にした述懐は、何故か、心に染みた。

【好き】という感情は解釈が難しい。

親愛の情、友愛の情、敬愛、情愛、家族愛。同志愛、同胞愛、郷土愛。

愛しいという気持ち、慈しみの思い。慕情、恋情。そこから派生する肉欲までも含めば、その段階は様々で、意味付けも多岐に渡る。

アクサーナは、受けた印象から推測すれば、きっとまだ若い。

一時的に燃え上がる炎のようにパッと火が付いて直ぐに消える。概してあの頃には、そういう感情のブレが起こり得る。

自分の存在は、偶々、彼女の目には物珍しく映ったのだろう。

この辺りでは見かけることのない異国風の顔つき。村人ではない外部の人間。街々を巡る行商よりも訪れる頻度は少ない。

物理的にも心理的にも様々な制約から、村を出て自由に外を歩き回ることのできない少女にとって、外の世界は未知へと繋がるもので、自分の存在に外への憧れのようなものを重ねたのではないだろうかと思った。

ならば、彼女の感情の昂ぶりも一時的なもので、直ぐにまた違うものに取って代わることだろう。

暫く、ほとぼりが冷めるまではそっとしておいた方がよい。そう結論を下した。

その晩、一人寝台に横になったものの、リョウは中々寝付けなか

った。

「……コ、イ……か」

思い出すのは昼間の出来事だ。

あのように何かに熱くなったことが果たして自分にはあっただろうか。

頭を過るのはそんな他愛もないことだった。

アクサーナの文面から溢れんばかりに流れ出て来た【気持ち】の奔流には、ただただ面食らうばかりだった。まだ、その時の動揺の余波が、内部に燻っていた。

恋をすると女は綺麗に、そして強くなるとは言うが、あのような熱さは、自分には無縁だった。うっかり触れようものなら火傷してしまう。

試しに、己が過去を振り返って、かつての【恋人】の顔を思い出してみる。

輪郭はすでに曖昧だ。

ごつごつとした指、そして密やかに笑うたびに微かに現れる左頬の笑窪に惹かれた。控え目に喉の奥を鳴らす独特な空気も気に入っていた。

あれは、今思えば、どんな感情だったのだろうか。

恋人と言うよりは、同志、家族。そんな曖昧な境界線をたゆたっていたように思う。

互いに明確な言葉で、二人の間にある繋がりを確認したことはなかった。滾るような熱などとは無縁の緩やかな繋がり。未だかつて、燃えるような恋など経験したことも無かった。

だが、それで自分は満ち足りていて、その方が却って心地よかったのだから、きっと性にあっていたのだろう。

互いに仕事が忙しくなって、いつの間にか連絡を取る頻度が減って行った。

恋愛をするには、かなり法外なエネルギーが必要だ。元々、冷めたところのある自分には、どう考えても向いていなかった。薄情だ

と思われるかもしれない。自己中心的だとも。それでも、それが自分なのだから、仕方がない。

あの頃を振り返ってみても、当時の自分には、他人を構う余裕がなかったのだ。世界は酷く狭く、同じ歪な楕円形の中を堂々巡り（ループ）していた。

今ならば、それがはっきりと分かる。

日常はとても淡々としていて、同じような歩みを刻む自分は、激情に飲まれたこともなかった。女としては、さぞかし可愛げが無かったことだろう。

アクサーナのように気持ち先行型で突っ走ることが出来るのは、年齢的なものもあるが、個人の性格にもよる。ああいった手段が取れることは、恐ろしくもあり、また、同じ女としては、少し羨ましくもあった。

一度は刹那的に後先考えず、本能の赴くままに行動してみたい。そんなことを夢見た時期もあったが、空想を現実に横滑り（スライド）させることが出来る程の度胸も覚悟も無かった。

所詮、他者との距離を測りながら、鏡に映る己が虚像を気にしてばかりいた自分には、到底、無理なことなのだ。

リョウの顔には、どこか自嘲気味な表情が浮かんでいた。

あの人は、……元気にしているだろうか。

結局、有耶無耶なまま、気が付いたら、連絡を取る術を永遠に無くしてしまっていた。今となっては、【便りがないのは元気な証拠】などという陳腐な慣用句に思いを託すしかないのだから、図らずも、人生とは不条理で皮肉なものだ。

遥か遠く、それこそ地の果てまで行っても、【ここ】は【あそこ】には繋がらないのだ。まるで逆流の出来ない時間のようだ。遡ることのあたわぬ流れ。

そのようなことをつらつらと考えて、リョウは軽く頭（かぶり）を振った。

――――どうかしている。

こんなことではいけない。これ以上は考えるだけ無駄なのだ。そ

う決めた筈だった。
負の連鎖のように際限なく沈み込むと浮上するのは中々容易なことではない。
―　コチラ　ハ　ゲンキ　ニ　ヤッテマス　―
電報に似て、どこか他人事めいた文言を空中に書いてみた。
明日も朝は早い。
そして、全てを封じ込めるように、そっと目を閉じた。

そしてまた日は昇る

――あれからどうなったかと言うと……。

後日、リューバの所から野次馬宜しくピァーチがやって来て、ご丁寧にも事の次第を詳細に語って行った。

ピァーチのお節介にも困ったものだが、向こうの様子が気になっていたのは事実であるので、有り難くその講釈を拝聴することにした。

それによると……。

リューバの所に戻れば、実に都合よく、アクサーナが待ち構えていた。どうやら、返事が気になって仕方がなかったようだ。

リューバもそんなアクサーナの意気込みに、珍しく苦笑いを浮かべていた。

伝令に取り付けられた筒から、急かすようにして小さく丸められた手紙を取り出す。

中を開く前に、アクサーナは目を閉じると一つ深呼吸をした。

気は急いていても、土壇場で躊躇いが生まれているらしい。相反する気持ちが高ぶりとなって震える指先に現れていた。

慎重な手付きで中を開いて。

文面を追っていたアクサーナの顔が、見る見るうちに赤くなったかと思うと、直ぐに青ざめた。

そして、勢いよく顔を上げるとリューバに詰め寄った。

「リューバ！！！　どうしよう！　あたし、大変なことをしちゃったわ！」

いきなり大声を上げたアクサーナにリューバは目を白黒させた。

「あらあらあら、どうしたの？」

アクサーナの謂わんとすることには、一応、予測が付いたのだが、

敢えてリューバは気が付かない振りをして穏やかに微笑んだのだった。

アクサーナの目尻には、うっすらと涙のようなものが滲んでいた。

「あたし、なんてことをしちゃったんでしょう。ああ、どうしよう。リョウが、リョウが……」

そう言ったきり、口に手を当てて押し黙る。

「リョウがどうしたの？」

アクサーナが少し落ち着くのを待ってから促せば、

「……女の人、だったなんて」

やや放心したように呟いた。

だが、次の瞬間、勢いよく顔を上げた。

「ああもう。あたしったら、何やってるの？　女の人だったなんて。絶対、呆れてる。いや、違うわ、多分、怒ってるわ！」

リョウからの手紙を握りしめたまま、突然、絶望的な顔をしたアクサーナに、リューバは少し薬が利き過ぎたかと思った。

リューバは、縋りついてきたアクサーナの柔らかな身体をそっと抱き締めると、宥めるように其の背中を摩った。

「大丈夫よ。アクサーナ。リョウはそんなことでは怒ったりしないわ」

そんなこと、ある訳はない。自分が初対面でいきなり性別を間違えられて、付文をされたら、それこそ激高するに違いないのだから。

アクサーナはそう思って弱弱しく首を横に振ったのだが、リューバは小さく笑うと、アクサーナの眼前に自分宛ての一筆を差し出した。

「ほら、これを御覧なさい」

促されるようにして顔を上げる。

そこには、その昔、学校で習った教本を思い出させるような綺麗で均整（バランス）の取れた字体で、自分を案じることが書かれていた。

否定的なことは何処にも書かれていない。

真実を知ったら、アクサーナは恐らくショックを受けるだろうから、よくよく宥めて欲しいと。そんな意味合いのことをリューバに託してあった。

細やかで何処までも優しさの滲み出ている心遣いにアクサーナは違った意味で涙が出そうになった。

「ね？　リョウは気にしてないでしょう？」

そんなことはないだろうとアクサーナは思ったのだが、優しく微笑むリューバの顔を見ていると、何故か心が軽くなってきた。

「そんな顔をするもんじゃないわ。折角の可愛い顔が台無しよ」

「……でも」

「リョウだって、アクサーナの気持ちは嬉しいと書いてあるでしょう？　今回は、ちょっと意味合いが違ってしまったみたいだけれど、その【想い】自体は変わらないわ。だって、根っこは同じでしょう？　相手を好ましく思うのは、人ならば誰にでも当てはまることなのよ？」

「……でも」

尚も不安そうな顔をするアクサーナにリューバは優しく微笑んだ。

「もし、間違ってしまったと思ったのなら、今度、来た時に謝ればいいわ。それで元通り。ね？　リョウは、そんなこと、気にするなってきっと笑い飛ばすでしょうけれど」

そう継ぎ足すと、空気を変えるように軽やかに手を叩いた。

「さ、ソファに座って。新しいお茶を入れましょう？　折角、リョウが返事をくれたんですもの。じっくり吟味しなくっちゃ。なんて書いてあったの？」

リューバの慈愛に満ちた微笑みに誘われるようにアクサーナも笑顔を見せると、茶色くてごわついた紙を大事そうにテーブルの上に置いたのだった。

そして、新しく入ったお茶とリューバ特製のお菓子を囲みながら、アクサーナは嬉々としてリョウの素晴らしさを熱く語り始めたのだ

った。

リョウは男でないと自分の勘違いが分かって、アクサーナの初恋は点火と同時に虚しくも淡い彼方へと消えて行ったが、違う意味で、すっかりリョウのことが好きになってしまった。

初めて目にした時から、リョウの纏う空気に視線が引き寄せられていた。それは、女性だと分かった今でも変わりがなかった。

気持ちの切り替えが出来れば、あとは早かった。元々、あまり気に病む性質でもない。

こうしてアクサーナは、当の本人が与り知らぬ間にリョウの信奉者になったのだった。

こうして、誤解が解けたのは良かったのだろうが、アクサーナの積極性はそれで変わった訳ではない。寧ろ拍車を駆けることになった。同性だということで遠慮が無くなったということが大きいだろう。

一方で、アクサーナの様子を遠くから見守っていたデニスにしてみれば、面白くないことばかりだった。

リョウが男ではないことを間接的に知って安堵したもの束の間、それ以来、何かにつけてアクサーナはリョウの話をするようになった。それが、デニスの神経をいつになく逆撫でた。

小さな嫉妬心といってみればそうだが、そのようなものでも積り積もればそれなりの感情の土台にはなってしまう。

そのような理由から、あれから時間が経過した今となっても、デニスとの間には未だ小さな溝を残したままだった。

だが、まぁ、【終わりよければ全て良し】という訳ではないが、そんなアクサーナがデニスと結ばれるというのだ。デニスのやや空回り気味に思えなくもない気苦労も、ここで一区切りと言うことだろう。

おめでたいことこの上ない。

今となっては笑い話になった過去のほろ苦い記憶をそっと思い返しながら、リョウはこれで少しデニスの態度が和らげばとの淡い期

待を持ってみたのだった。

関所の俄か番人たち　1）

アクサーナの婚礼まではまだ十三日も間があったので、リョウは一旦、森の家に帰ることにした。

そして、諸々の準備を済ませた十日後の【フタロイ・チティーレ（14日）】、再びスフミ村へとやってきた。

リョウは初めて目にする村の変わりように目を見開いた。

村中、どこもかしこも人で溢れかえっていた。

いつもは閑散として長閑な風景が広がっている景色が、この日は滾るような熱気に包まれていた。

一体、何処に隠れていたのだという程の人影。賑やかなことこの上ない。

家々の軒先には、色とりどりの吹流しのような旗が翻り、目にも鮮やかだ。

遠く、漏れ聞こえて来るのは、陽気な歌い声と賑やかな歓声だ。

流しの楽団だろうか。彼らの奏でる笛や【バラーニ（三弦の弦楽器）】、【リート（太鼓）】、【バラライカ（竪琴）】の音色も風に乗って運ばれてくる。

調子を付けて高らかな歌い声が響いてきた。

ああやって、朝から晩まで、祭りの期間中、村中は休みなく騒ぎ続けるのだという。

眼前には、こちらを立つ前にリューバから聞いていた話通りの景色が広がっていた。

だが、【百聞は一見に如かず】だ。話に聞いて想像をするのと実際に目で見てみるのは、やはり全然違った。

圧倒されるような賑やかさを前に、リョウは眩しそうに目を細めた。

ここまで高揚した気分が伝わって来そうだった。

その切れ端を少しでも取り入れようと、一つ、大きく息を吸い込んでみた。

村の入り口に立てば、【ピーバ】の入ったジョッキを掲げた男達が、赤ら顔を惜しげもなく晒して、外に設けられたテーブルで談笑していた。

【ピーバ】は、この国の農村地帯では一般的な酒で、【ビール】に似た赤みを帯びた発泡酒の一種だった。アルコール度数も然程強くは無く、男達はそれこそ水代わりに浴びるように飲んだ。エールに似たまろやかな苦みが特徴だった。

この日ばかりは、女房にも子供達にも気兼ねすることなく、大手を振って飲めるのだ。一々文句をいう野暮な輩もいない。男達のこの日に懸ける意気込みは、火を見るよりも明らかだった。

そんな男達だから、【談笑】と言っても、最早【だみ声】の域である。

入口にポツンと立つリョウに、男達の一人が気付いて、早速声を掛けた。

「おーい。坊主。オメェは確か、ガルーシャんとこの坊主じゃねぇか！」

ぶーんぶんと緩慢な動作で振られた手に、リョウはにこやかに微笑んで返事を返した。

「こんにちは。随分と賑やかですね」

「おう、坊主。こっち来いや」

誘われるままに傍へと近づけば、

「リョウじぁねぇか。よく来たな」

ぐびりとジョッキの中身を飲み干して、口の周りに白い泡を付けながら、顔馴染みになっていた村人のセミョーンが豪快な笑みを見せた。

八重歯気味の左側からは白い歯が覗く。

村を上げてのお祭りの所為か、いつも伸びっぱなしの無精髭は綺麗に剃られていた。ある筈のものが無いというのは、妙な違和感がある。

だが、その小ざっぱりとした【ハレの日仕様】の感じは、セミョーンを年相応に若々しく見せていた。　よくよく見れば、身につけているものも随分と違う。普段のざっくりとした洗いざらしのシャツと膝に当て布の付いたズボンとは違い、繊細な刺繍が施された意匠の凝ったものを着ていた。

シルクシャンタンのような光沢のあるシャツは、陽の光を反射して滑らかな艶を放っていた。そのシャツの上から長めのチョッキを羽織り、腰には太い飾り紐の付いたベルトが巻かれている。

要するに一張羅だった。

この日は、この時期の気候の割には暖かな陽気で、セミョーンを始めとする男達は、暑いのか、皆、腕まくりをしていた。

捲りあげられたシャツからは、陽に焼けた逞しい腕が覗く。自分の太もも程はあろうかと思われる、その鍛え上げられた太い腕は、日々の労働の賜物だった。

遥か後方、村を囲むようにして植えられた【グレーシュ】の畑は、今は綺麗に刈り取られ、収穫を終えていた。

人の胸の高さまでもある、たわわに実った穂を刈り取るのは、専ら人力で、中々に重労働で至難の技だった。

その昔、本で垣間見た中世ヨーロッパの農業暦の絵に描かれていたような、人の背丈程はある長い柄の付いた刃先の長い鎌を使うのだ。あれだ。タロットカード等で、死神がその肩に担いでいるような大きな湾曲した鎌だ。

村人は横一列になって、一定のリズムを刻みながら、【グレーシュ】の穂を刈った。

それは、遠い昔の話に聞く【稲刈り】に似た光景だった。

リョウも一度だけ、手伝いと称して【グレーシュ】刈りに畑に入

ったことがあったが、全く使い物にならなかった。
鎌は見た目以上に重く、長い柄は使うのにコツが要った。
立ったまま、足下を払うように左右に振り、勢いを付けて手前に引く時に穂の根元に刃を当てて刈り取るのだ。腕の力がかなり必要だし、腰への負担も相当なもので、慣れないことに直ぐにへばってしまった。意気込んで始めたものの、直ぐに根を上げる羽目になった自分が情けないやら、受け入れてくれた村人には申し訳ないやらで、黙々と作業を続ける村人を尻目に早々に戦線離脱となった。
男達からは、へっぴり腰をからかわれ、女達からは危なっかしいから見ていられないと笑われたのも記憶に新しい。
男達も女達もその鎌を手に延々と決められた区画が終わるまで刈り続けるのだ。
それこそ村人総出の仕事だった。
セミョーンを始めとする男達の肉体は、そういう日々の労働から生まれたものだった。

「こんにちは。セミョーン。すっかり見違えましたよ。一瞬、誰かと思いました」
祭り用に身綺麗になったことをからかうように仄めかせば、
「どうだ？　中々男前になっただろう？」
目配せをしてから、自慢げに口角を上げる。
「そうですね」
「ハハハ、言ってらぁ」
「俺だって負けてねぇぜ」
「よ、色男！」
それを聞いていた周りからは当然の如く野次が飛ぶ。
「リョウ。一杯どうだ？」
着いたばかりなら喉が渇いているだろうとジョッキに並々と注がれた【ピーバ】を手渡されて、内心、ぎょっとしたものの、それを苦笑して見せるだけに押し留めた。

折角のいい気分に水を差したくはない。
男達の浮かれ具合に感染するように、リョウはジョッキを受け取ると、ぐいと勢いよく飲み干した。
喉が渇いていたのは確かだった。
【向こう】にいた時は、【ビール】の類はどちらかと言えば苦手だったが、喉を通る【ピーバ】は、すっきりとした喉越しで、ここまでの道のりを歩いてきた身体には、不思議と美味く感じた。
一仕事を終えた後、とっておきの一杯を飲んで、爽快な呻き声を上げる男達の気持ちが、漸く理解出来た気がした。
「お、良い飲みっぷりだ」
それを見た周りの男達が次々に囃したてる。
全てを嚥下して、口に付いた泡をポケットに入れていたハンカチで拭う。
「もう一杯どうだ？」
「いえ、もう十分です。ありがとうございます」
ジョッキに手で蓋をするようにテーブルの上に置いて、リョウは注がれそうになるお代わりを阻止した。
こうしないと次から次へと注がれてしまうのだ。底なしのような村の男達と同じペースで飲むなど、物理的に不可能だった。
「なんだ、坊主。たった一杯か？」
「はい、もう沢山です」
水分と気泡で膨れた腹を摩れば、
「なんだ、情けねぇなぁ」
と呆れた顔をされる。
ここの男達は、酒が飲めてなんぼなのだ。それが出来て漸く一人前の男として受け入れられる。
自分には、とてもじゃないが無理だ。というよりも本来の性別を考えれば、そのような必要は無い筈なのだが……。
北の砦の時と同様に自分の外見が相手に与える印象は、ここでも変わらないようで。

恐らく、ズボンを履き続ける限り、【少年】としての認識は付いて回るのだろう。
リョウとしては、一々気にするのも面倒で、今では、すっかり彼らの反応に合わせることにしていた。
「男なら、もうちったぁ鍛えねぇといかんぞ」
「まぁ、その内、慣れるだろ」
「ああ、酒は慣れだからな」
御説は御尤も。
こういう場合は、素直に頷いておくに限る。
「アハハハ、そうですね」
口を大きく開けて笑う男達の浮ついた空気を真似るように、リョウも高らかに声を上げていた。

「所で、なんでこんな端っこで宴会をしているんですか？」
村全体が祭り一色だからと言っても、ここはまだ村の入り口だった。
人が集まっているのは、村の中心にある広場だと聞いていた。主な催し物も、そこで行われるのだとリューバとアクサーナが楽しげに語っていたのだ。
そういう話を聞いていたから、なにもこんな端で酒盛りを始めなくてもいいだろうにと思ったのだが、
「ああ、俺たちは関所の門番ってとこだ」
胸を反らして親指を上げたセミョーンの言にリョウは居並ぶ男達の顔を見回した。
よくよくその顔を見てみれば、皆、比較的若い腕に覚えがありそうな屈強な男達だった。
どうやら、単なる酒盛りではなく、彼らにはれっきとした役割があったようだ。
酒を飲んだ状態で、果たして、それがいかほどの威力を発揮するのかは不明だったが、彼らには【ピーバ】位では酒の内に入らないのだろうし。まぁ、それは、この際、目を瞑って置くことにした。
「祭の間は、外から色んな奴らが入って来るだろう？　そういうのを俺達【自警団】が一応、目を光らせて置くんだ。こんな時期だからな、祭りに紛れ込んで碌でもないのが入り込んだりすると困るだろ？　ここに来るのは、大抵が顔見知りやら親類縁者だが、各地を回る物売りの類もやって来る。そいつらの顔をここで最初に拝んで置くのさ。怪しい奴は見つけやすい」
セミョーンの隣に腰を下ろしていたジューコフの言葉に、リョウは成程と思った。

ジューコフは、このスフミ村の村長・ダルジの息子だった。
父親の背中を見て育った息子は、自らも積極的に村の治世に参加しているようだ。基本的に比較的若い男達で形成される【自警団】を取り纏めるのも未来の長であるジューコフの役目だった。
「リョウはリューバのところか？」
滞在先を訊かれて。
「はい。アクサーナに招待されたんです」
今回の訪問の目的も含めて答えれば、男達から悲鳴のような雄叫びが上がった。
「だぁぁぁぁあ、アクサーナァ！」
「デニスの野郎、まんまと上手いことやりやがって」
「お前じゃ、無理だろ」
「なんだと！」
「お前だって相手にされなかっただろうが」
どうやらアクサーナは【村一番の器量よし】という評判に違わずに、中々に罪作りな存在であったようだ。
競争に敗れた敗者達からは、（元々参加していたのかさえ怪しいが）やっかみという名の悲哀に満ちた愚痴が零れ始める。
このテーブルは差し詰め、取り残された独身者の慰労会みたいなものに成り下がっていた。
「よし、今日はとことん飲むぞ！」
「馬鹿言え、それじゃぁ仕事にならねぇだろ」
「ハッ、これが飲まずにやってられるかよ」
恋破れた者達の口説は続く。
こういう場合は、巻き込まれる前に速やかに去るべきだ。
自分の第六感が危険信号を発していた。酔っ払いには付き合っていられない。延々と愚痴を聞かされるのは御免だ。こんなところで足止めを食らうもの馬鹿げている。
話が妙な方向に飛び火する前にリョウはこの場を離れようと思った。
村の入り口

こちらの意図に気が付いたジューコフは、目が合うと仕方がないとばかりに一つ頷いてから軽く手を一振りした。
それを了承の合図と取る。
「恩に着ます」
口ぱくでそう礼を言う。
そして、リョウはそろりそろりと後ずさりを始めると、次の瞬間、身体を反転させ、なるべく足音を立てないように駆け出したのだった。

「……なぁ、そうだろ、坊主？　……って、あ？」
そう言って、管を巻き始めていたフョードルが振り返る。
だが、同意を求めようにも、そこに立っていた筈の少年（リョウ）の姿は見えなかった。
フョードルは素っ頓狂な声を上げた。
「あ？　坊主は？　何処行った？」
さっきまでここにいた筈なのにと辺りを見渡す。
「ハハハ、まんまと逃げられたな」
「違いねぇ」
セミョーンが差し示す方向には、小さく、村の中心へ向かって駆けて行く少年の黒い頭部とその背中で弾む鞄が見え隠れしていた。
「だっせぇ。坊主にまで逃げられてやんの」
「うっせぇ」
「おら、フョードル、いつまでもうだうだ言ってんじゃねぇよ。俺達は任務中だ。その眠そうな目ぇかっぴらいて、しっかり見張っとけ」
リョウが去った方向へ、元々の細い目を凝らして、半曲線のようになった瞼を向けていたフョードルに、ジューコフは毒づいた。
そして、フョードルが掛けていた木の椅子をその太い足でガッと蹴り上げた。
「イテッ」

勢いがあったのか、決して細いとは言えないフョードルの身体が跳ねた。
「ヘイヘイ、分かりやしたよ、団長。ちっくしょう、リョウの野郎、後で覚えてろよ」
身に覚えのない逆恨みに似た感情をぶつける筈の相手は、すでに曲がりくねった小道の向こうに消えていた。
尚も愚痴るフョードルに周囲は宥めるように空になったジョッキに【ピーバ】を注いだ。
「おいおい、八当たりなんて止めとけ」
「そうだぞ。坊主になにかあったら、それこそアクサーナが黙ってねぇだろ」
男達の間でも、アクサーナのリョウに対する可愛がりよう（男達の目にはそう映った）はある意味有名だったのだ。
アクサーナは、普段は朗らかだが、本気で怒らせると物凄く怖いのだ。幼い頃からこの村で育ち、それを知る男達は、自ら地雷を踏みに行くような莫迦なことはしない。
「分かってるさ」
そんなことは重々承知している。それでも煮え切らない、消化できずに燻った【想い】というのはあるもので。
フョードルは、友人達の慰めに並々と注がれて揺れるジョッキの中身を己が失恋の苦みと共に一気に呷ったのだった。

南西よりの使者

さて、リョウのスフミ村到着から時を遡ること約三日前。
所は変わって北の砦。この国の最北端にある軍事拠点である。

その日、団長室には、二人の兵士が招集を受けていた。
一人は、逞しい体つきをした背の高い男で、落ち着いた物腰に思慮深さを備えた眼差しをしている。
もう一人は、隣に立つ男とは対照的にひょろりとした線の細い青年で、その顔立ちには若干の幼さを残していた。
だが、それを補うように青年の秀でた額際から現れる明るい黄緑色の瞳には、知性の欠片が宿っていた。
背筋を伸ばして上官の前に立つ二人の表情は、緊張に染まり、真剣そのものだった。それは、この部屋を支配する痛い程に張りつめた空気に晒されて、益々、硬さを増してゆくようだった。
そんな二人を前にして、淡々と事務的な連絡事項が進んで行く。
「その後の報告は？」
「変わりありません」
「不審な動きは？」
「今のところ、見受けられないかと。――ですが、水面下ではなにやら【キナ臭い】話があるのも事実です。噂の類ですが。まぁ、それ自体も向こうの策略であることは十分考えられますが。その件も含めて現在調査中です」
己が片腕（シーリス）の淀みない報告に、この北の砦を預かる【スタルゴラド第七師団】・団長のユルスナールは、一旦、目を閉じると徐に開いた。
瑠璃色の光彩が、鋭い光を帯びる。
団長は、ゆっくりと己が部下へと顔を向けた。

対峙した相手を射貫く鋭角な眼差しに、その眼前に直立不動で控えていた二人の兵士は、改めて表情を引き締めた。
「どんな些細なことでもいい。奴らの動きを見逃すな」
「「ハッ！」」
「報告は逐一寄こせ」
「「ハッ！」」
「――では、頼んだぞ」
「「ハッ！」」
切れのある号令と共に騎士としての敬礼がなされる。
そして、二人の兵士は、きびきびとした無駄のない動きで与えられた任務へと向かうべく、団長室を辞したのだった。

二人が出て行った扉を団長のユルスナールは、組んだ両手に顎を乗せて見つめていた。
「ロッソは分かるが、……キリルはまだ配属されたばかりだろう？」
今回の特殊任務の人選は、シーリスとヨルグに任せていたが、出立の挨拶に現れた二人組の顔ぶれは、自分の予想とは違っていた。
ロッソは経験豊富な兵士だ。ユルスナールもその仕事振りは目にして知っている。なので、そちらに問題は無かった。
一方のキリルは、王都【スタリーツァ】での二年間の見習い期間を経て、先月に補充要員として配属されたばかりだった。
専任は伝令・諜報の鷹匠だ。前線に立つ部隊ではない。
それに実戦経験もなかった。
そのようなまだ一人前とは言えない兵士を今回の任務に抜擢したのは、どう見ても異例なことで、キリルにはいささか荷が重すぎるような気がした。
「心配ありませんよ」
だが、難しい表情を崩さないユルスナールの傍らで、副団長のシーリスは穏やかに言葉を継いだ。

その目には絶対的な自信に裏打ちされた確固たる色が浮かんでいた。

基本、穏やかな性格ながら、その腹の中には一物も二物も厄介な狸を飼っている。政治で言えば、影で動く明らかな参謀タイプだ。敵には回したくない策士だが、王都風の言葉遊びが些か過ぎるようで、自分にしてみれば少々回りくどい表現を好んで使う輩でもあった。大体にして、寄せ集めた莫大な情報を己が掌に転がして高みの見物をするきらいがある。それは、ユルスナールから見れば、友人の【悪い癖】に思えた。

今回もそういった出し惜しみをしているように見受けられた。

シーリスの訳知り顔に、ユルスナールの眉が不審げにひょいと上がる。

すると、常の如く、その隣に控えていた補佐官ヨルグが一歩、前に出た。

「キリルの抜擢には相応の理由があります。経験不足は元より承知です。その上で敢えて選んだのです。それを差し引いても、あの者にはお釣りが来るかと」

「――――詰まり？」

前置きの長さに痺れを切らすように、ユルスナールの長い指が、一つ、執務机を小突いた。

――――コツン。

固い音が、静まり返った室内に響いた。

気の短い旧知の知己の仕草にシーリスは苦笑する。

今日は、いつになく小さな苛立ちが、己が上司の取る仕草の端々に見えていた。

先日、寄こされた報告書が、満足のいくものでなかった所為だろう。

だが、付き合いの長い相手のことだ。今更、そのような不機嫌さを前に怖気づくことなどあり得ない。それは補佐官であるヨルグも

同じことだった。
それとは対照的に、先程まで中にいた年若い兵士の、青褪めて震えそうになるのを懸命に堪えていた下唇を思い返して、シーリスは気の毒なことをしたかと思った。
だが、まぁ、これも新人兵士に対する洗礼とも言うべきもので、今後、この無愛想な上官には慣れてもらわないといけないのだから、遅かれ早かれ、通らざるを得ない道のりではあったのだろう。
シーリスがそんなことを考えている間に、ヨルグはそつのない動作で、決定的となる一言を告げていた。
「キリルの出身地は、【スフミ】です」

贖いと償いの連鎖（前書き）

贖いと償いの連鎖

その一言で、ユルスナールは凡そのことを理解した。

【あそこ（スフミ）】には、【術師】が一人いる筈だった。

王都への届け出には【薬師】として登録されているようだが、それは、あくまでも便宜上の肩書だろう。自由気ままで束縛を嫌う【術師】ならば、その位の目くらましは難なくやってのける。

そのことは想像に難くなかった。

国が【術師】の囲い込みを始めたのは、もう二十年以上も前のことだ。

切掛けとなったのは、当時、最優先懸案事項となっていた隣国【ノヴグラード】との戦だった。

実際に戦闘を仕掛けて来たのは、隣国の方だったが、その数年前から、自国では【術師】の失踪事件が続いており、中央はその対応に頭を悩ませていたのだ。

当時、国は滞在する【術師】を優遇してはいたが、元より定住をせず、街から街へと渡り歩く傾向のある彼らを自国に留めておこうとはしなかった。

【術師】の能力は、軍事的にも高い利用価値がある。

そこに早くから目を付けていたのが、先代から代替わりして、軍事拡張傾向を顕著にし始めた野心溢れる隣国の若き王だった。

古くから連綿と続く我が国【スタルゴラド】とは対照的に、【ノヴグラード】は、その言葉が示すように新しく生まれた新興国であった。

【スタルゴラド】とは【古の都】という意味だ。そして、【ノヴグラード】とは【新しき都】という意味だった。【グラード】とは【都市・街】を意味する言葉である【ゴラド】を異国風に読み変え

たものだった。
だが、元を質せば、その根幹は同じだ。
その昔、【スタルゴラド】で後継者を巡る政権争いが起きた時、敗れた王族の一派が、国を捨て、流れ着いた先を【ノヴグラード】と定めた。
二国は、そのようにして袂を分かった元は同じ国の人間同士なのだ。
峻厳な山脈を隔てた隣合わせの地の利というのは、皮肉なものだ。
その創成の起源は古く、連綿と長きに渡りこの地を統べる大国として時を刻んできたという歴史的背景から、元来、のんびりとした守りの体勢を貫く【スタルゴラド】を余所に、そこから派生した一派である【ノヴグラード】は、好戦的で且つ急進的な性質を遺憾なく発揮させていた。
代々玉座を継承する王は、往々にして野心的な者が多かった。

そして、気が付けば、【術師】の多くは、隣国である【ノヴグラード】に、何らかの形で吸収・奪取され（その方法は、懐柔されたり、強制的に拉致されたりと様々だ）、彼らの特殊な能力を元に有力な武器を開発し、それを元に、こちらへと攻め込んできたのだ。
戦略的には、完全に不意を突かれた形となった。
以前から、そのような危惧が一部の軍部・貴族達の間であったのは確かだが、国の中枢を牛耳る貴族たちにはその進言が届かなかった。
戦いは、【スタルゴラド】側の首脳陣の予想に反して、苦戦を強いられた。
読みが甘かったと言えばそれまでだ。長い間、安穏と続く古くからの大国であるという事実に胡坐をかいていたということになる。
実際にぶつかってみれば、その兵力は互角で、戦況は図らずも長期戦の様相を呈した。
当時の中枢部は、さぞかし焦ったことだろう。

やがて、長引く戦争に疲弊した両国は、程なくして停戦条約を締結する。

そして、現在に至るまで、表面上は、その束の間の和平が守られているという形になっていた。

その戦いから自国が得た苦い教訓は、【術師】が持つ能力の可能性を無視してはならないということだった。

元々、代々、治世に就いていた王族は、彼らの特殊な力を【異形のもの】として蔑視し、忌み嫌う傾向にあった。普段の生活の中で、その恩恵に預かっているという事実は棚に上げて、だ。

元来、その能力は【人】であるならば、誰しもが等しく持つものであったという真実は、この時代、すでに忘却の彼方へと追いやられてしまっていたのだ。

首領者のそういった考えは、周りを取り巻く貴族たちにも伝染する。そうやって長きに渡り、国の中枢では、彼ら能力者を軽んじる傾向が見受けられたのだ。

その結果、もたらされたのが、戦いでの大きな痛手だった。

大国の威信に掛けて、【敗戦】という無様な結果を晒すことはなかったが、元々の国力の差から鑑みても、その結末は、【スタルゴラド】の敗北とみなされても強ち間違いではなかった。

戦禍から国は疲弊し、散々な目にあったのは、戦いに巻き込まれた国の民だ。

その時の苦い経験を元に、新たな政策の一環として【術師】に対する登録制が始まった。

国は、漸く重い腰を上げて、【術師】の【管理】と【庇護】に乗り出すようになったのだ。

それから法令が発布され、王都を始めとする主だったこの国の都市で、【術師】を名乗り、その能力である【施術】で生計を立てる為には、中央の役所から交付された【免状】が必要となった。

――――というのが大きな建前として存在している。

国は、年々減少傾向にある素養（能力）を持つ人間の数を把握出来るし、いざという時に自国への帰属を主張できた。そして、その能力を利用することも。

【いざという時】というのは、他国からの引き抜きや果ては拉致まがいの人攫いのような事件が起きた時に、国として、毅然とした態度を取り、それに対処することが出来るようにするということを意味していた。

以前に比べて、高い能力を備えた有能な人材は、それこそ世界規模で見ても枯渇傾向にあった。

東の神殿は、独自のルートを通してその原因究明に当たっていたが、未だ芳しい成果を得るに至っていない。それに対する諸外国の対応も様々だった。

そんな中、自国【スタルゴラド】の王都【スタリーツァ】には、早い段階から【術師】を専門的に養成する学校が作られ、国を上げて、【術師】の育成に取り組むようになっていた。

このような次第で、この世界に於ける【術師】を巡る背景は、政治的に見てもかなり不安定であった。

国を上げての管理・統制は、術師たちの自由を縛るものだった。

元々、術師たちの国への帰属意識は薄い。

それは、術師たちがその能力があれば、どこに行ってもそれを売りに食べて行けるからだ。

政治的締め付けが強くなった時、術師たちの取った反応も実に様々だった。

強い反発を覚える者もいれば、我が身の安全が保障されることに安堵の息を漏らした者もいた。

それは、先の戦争をどのようにして生き延びたかに影響していた。

政（まつりごと）の道具にはなりたくはないと身を隠した者もいる。

一時は、その名を近隣に轟かした高名なガルーシャ・マライは、

そのいい例だった。
そして、今、現在、術師を巡る近隣諸国の攻防は、政治的にも、軍事的にも再び、この国に不穏な影を落とし始めていたのだ。
【スタルゴラド第七師団】が拠点とする北の砦の任務の一端には、そういった【術師】を巡る政治的背景を念頭に置いた情報収集、諜報活動があった。
この砦から見て、北西に南北に走る山脈の向こうは、隣国【ノヴグラード】だ。
両国を隔てる山脈は峻厳で、自然の要害となっている。そこを抜けるのは容易ではないが、隣国からこちらに入り込むには一番の近道でもあった。
そういった地理的状況が、北の砦をこの国の重要な軍事拠点たらしめていた。

この近辺に【ノヴグラード】側の斥候が出没し始めている。
各地域にいる諜報部隊の兵士からもたらされたその報告の真偽を確かめる為に、アッカは調査に向かい、その途中で負傷した。
ユルスナールにとって、その時の戦慄は、まだ記憶に新しかった。

あの空の向こう

――スフミにいる【術師】の名は、確か、リュドミラ・リュベーズヌィ……だったか。

その名を見れば、女性であることは明白だ。女性の術師は国内でも比較的少なく、その存在は珍しい方だと言えるだろう。

報告書には、ガルーシャ・マライと親交があると記されていた。

――ガルーシャ・マライ。

ユルスナールは、そっと窓の外へと視線を向けた。

ここより北東の方角にスフミ村がある。

そして、視線を少し横にずらして。ここより北西の方角には、ガルーシャが暮らしていた小屋があった。

今、そこに暮らしているのは――――――。

ユルスナールの目裏には、穏やかに微笑む黒い瞳を持つ女の顔が浮かんでいた。

――変わりなくやっているだろうか。

北の砦を後にして以来、リョウからは、伝令の鷹であるイーサンを通じて近況を知らせる手紙が届いていた。

そこには、ガルーシャが残したモノを学んでいるとあった。

書斎にある膨大な書物と日々格闘しているともあった。

そして、それらを自分が独り占めしている状況は実に勿体ないから、どうにかならないだろうかというような相談事も書いてあった。

リョウには術師としての素養があった。獣達と意思の疎通が出来るのは、その顕著な表れである。

ガルーシャもそれを早々に見抜いて、出来る限りのことをしていたようだ。

残念ながら、その時間は余り残されてはいなかったが……。

それでも伝授された【技】は貴重なものであったろう。

そういったことを総合しても、どうやらリョウが術師としての勉強を自力で行っていることは見て取れた。
ガルーシャが、その遺書とも呼べる封書の中で、一人残されたリョウのことを自分に託したのは、このような【術師】を取り巻くこの国の現状を見越した上でのことでもあったのだ。
リョウをこの国の政治的問題に巻き込んではならない。
あの優しい微笑みを曇らせてはならない。
改めて、ユルスナールはその決意を新たにしたのだった。

――――キリルの出身はスフミ。
それが意味することは、今回の任務では大きかった。
この時期、【フタロイ・アディン】（11日）から【セィエミ】（17日）に掛けた七日間、スフミ村では、【収穫祭】が予定されていた。
スフミ村の収穫祭は、辺境にある小さな村にも関わらず、その派手さと賑わい振りは国内でも随一と有名だった。スフミ出身の村人は元より、周辺からも見物に多くの人が訪れるのだ。人口百人程の小さな村落は、それこそ上を下にの大騒動になった。
最終日には、村の中央にある広場で、大きな篝火が焚かれ、村人たちは老若男女問わず踊り明かすのだと聞く。
流しの楽団や行商の類も稼ぎ時とばかりに入り込む。
余所者がこの国に忍び込むには絶好の機会と言えた。
スフミ村は、この砦の北東。仮に山脈側の国境を越えて他国の斥候がこの地へと入り込んだ場合、一番初めに目にする集落でもあった。情報収集の手始めとしては、格好の場でもある。
報告書によれば、リュドミラ・リュベーズヌィは、単なる【薬師】というには到底おさまり切らない有能な【術師】であるという。ガルーシャ・マライ亡き今（その情報がどこまで漏れ伝わっているかは分からないが）、その存在が、隣国に漏れて、その囲い込みの標的になることは避けなければならなかった。

今回の任務は、そのリュドミラ・リュベーズヌィと接触を持つこと。そして、村に入り込んだ不審な人物がいないかどうか、その周辺を警戒することだった。

なので、人選としては【なるべく目立たない人物】ということを優先した。

その点、ロッソは適任と言えた。寡黙な性質だから、服装を変え黙っていれば、村の樵のようにも見えなくもない。

そして、同じ村の出身であるというキリルの存在は、かなりの強みになるはずだった。

自然さを出すには一番だ。ロッソ一人だと警戒を持たれるだろうが、キリルの存在は、村人との間の緩衝材になる。顔見知りがいるということは、村に溶け込むことを容易にするだろう。

「納得頂けたようですね」

「ああ」

ヨルグの慇懃なその一言に、ユルスナールは素直に首を縦に振った。

「それだけではありませんよ？」

安堵の表情を見せた己が上司に、シーリスは再び、含みのある視線を投げかけた。

その口元は、相変わらず薄らと弧を描いている。

促すような視線を投げかければ、シーリスはとっておきの秘密を告げるように、声を低くした。

「なんだと思います？」

ユルスナールは呆れたように小さく息を吐いた。

「シーリス。勿体ぶるな」

不満を隠さずに口にすれば、何が可笑しいのか、実に愉快そうに菫色の瞳を細めた。

悪びれることなどない。

ギロリと睨みつけるように見遣れば、漸く、諸手を前に掲げて、

小さく肩を竦めて見せた。
「キリルの父親は、【ルーク】です」
――――ルーク。
「【ルーク】とは、あの【ルーク】か？」
ユルスナールが確認するように見上げれば、
「ええ」
ヨルグが頷いた。
「悪い話ではないでしょう？」
そう言って、シーリスは片目を瞑って見せた。
それは、各地を隠密に回って独自に情報収集をする、この国の諜報部隊に所属する兵士の名前だった。
彼らの部隊は【チョールナヤ・テェニィ（黒き影）】と呼ばれ、その活動の詳細は、軍部の中でも秘匿事項であった。
その一員（メンバー）は、【アタマン】と呼ばれる頭取以外は明らかにされておらず、各人は通り名をもって特殊な暗号を元に報告を繋いだ。普段は、そこらにいる村人や街の一般市民と変わりのない生活を送っているのだ。
【ルーク】というのも便宜上の渾名で、その意味は【ネギ】だ。
だが、本来、【チョールナヤ・テェニィ（黒き影）】の隊員は、家族にもその事実を隠している。息子とは言え、そのことを知っているとは思えなかった。
その疑問を解く様に、
「キリルは【ルーク】の自慢の息子だそうですよ？」
そう言って、シーリスは懐から小さな紙片を取り出し、ユルスナールに手渡した。
「キリルがここに配属が決まった時にコレが送られて来たんです」
シーリスが可笑しそうに喉の奥を震わせた。
中を開いてみれば、几帳面さを窺わせる小さな暗号文字で、簡潔に一文、【息子を頼む】と書いてあった。
こんなものを態々寄こすとは、【ルーク】も世に言う【親馬鹿】

の類と変わりないではないか。
「要するにこれは【ルーク】なりの意思表示なのでしょう」
「詰まり、自分の血を引いていることを知らせたかったと？」
「それだけ親の贔屓目に見ても使えるということかと」
その本心は、この小さな紙切れだけでは読み切れないが、ヨルグの下した結論に、残る二人はさもありなんと目を見交わし合った。
「だが、まぁ、それも直ぐに分かる」
後は、スフミへと出立した二人の兵士の任務が恙無く遂行されることを祈るばかりだった。

「ルスラン。本当は、貴方が行きたかったのではありませんか？」
補佐官であるヨルグが別の仕事の為、団長室を去った後、ユルスナールと二人きりになったシーリスは、からかう様な眼差しを己が上司へと向けた。
問われたことの真意が分からずに、ユルスナールはシーリスを怪訝な表情で見遣った。
「おやおや、この期に及んで惚ける気ですか？」
「何のことだ？」
「フフフ」
その質問に、シーリスは、再び含み笑いを始める。
「では、私も仕事がありますので、ここでお暇すると致しましょう」
そう言って、踵を返そうとする。
またしてもいい逃げする気なのか。
「おい」
思わず、焦れたような声を掛ければ、シーリスは、去り際にユルスナールの肩を一つ叩いて、
「スフミには今、リョウが滞在しているようですよ？」
そう小さな囁きを残して、軽やかに身を翻し、団長室を後にしたのだった。

一人、自室に残されたユルスナールは、緩慢な動作で執務机から立ち上がるとそのまま後方の窓際に立ち、身体を凭せ掛けた。
そして、今しがた有能な部下が残した最後の台詞を胸内で反芻するように、遠く、件の村落がある方向へと視線を投げた。
秋の空は高く澄みきっている。
――――いづれ、また。
機会があれば、会える……だろうか。
ユルスナールの心の問いに応えるように、蒼穹の遥か向こう、鳶（トンビ）が一つ、高らかに長閑な鳴き声を上げたのだった。

あの空の向こう（後書き）

リュドミラ・リュベーズヌィは、リューバの本名です。

さて、ジューコフの協力もあって、ほうほうの体で俄か門番の男達から逃げて来たリョウであったが、リューバの家の扉を開けても望んだような安息は訪れなかった。

珍しく、迎えに顔を見せなかったナソリに内心首を傾げていたのだが、リューバの家の扉に手を掛けた瞬間、その理由の一端が分かった気がした。

「あら、リョウ、いらっしゃい」

ナソリの毛足の長い体毛に専用の大きな櫛（ブラシ）を当てながら、振り向いたリューバはにこやかな笑みを見せた。

それとは対照的に、リューバの手の下でナソリはしかめっ面だ。

『リューバ、もうよい。十分だ』

「あら、まだ駄目よ。こっちの方をやっていないでしょう？」

『構わん』

「だーめ。折角なんだから、もう少しの辛抱よ。我慢なさい」

『……うぬぬ』

だが、主導権を握るのはリューバの方で、いつもの威勢の良さはすっかり鳴りを潜めている。

情けない唸り声を出したナソリを見て、リョウは小さく笑みを零した。

『リョウ。笑っていられるのも今の内だぞ』

「はい？」

そんな負け惜しみとも取れるナソリの咆哮にリューバが含み笑いを漏らした。

「うふふふ。ナソリが終わったら、次はリョウの番よ？」

「はい？」

「楽しみにしてらっしゃい」

そして、ナソリの様子を笑った報いか、その忠告をリョウは身をもって体験することとなった。

強制的な毛繕い（ブラッシング）を終えたナソリは、リューバの手が離れるやいなや勢いよく飛び退（すさ）るとリョウの後ろに回って、その大きな体を隠そうとした。

その体勢はどう見てもかなり無理がある。

『やれやれ。豪（えら）い目にあった』

「綺麗になったじゃないか」

艶を増したナソリの毛並みへ手を伸ばすとリョウは一撫でした。

絡まりそうになるごわつきも無く、実に滑らかな触り心地だ。

「気持ちよくなかったの？」

つい気になって訊いてみれば、

『リューバは加減を知らぬ』

ナソリには、色々と思うところがあるらしい。

尚もぶちぶちと言い募るナソリが可笑しくて、リョウは笑った。

それでも、艶も倍増しで、見違えるほどに綺麗になったのだからよしとしようではないか。

【ハレの日】仕様は、セミョーンだけでなく、ナソリにまで及んでいたようだ。

込上げて来る笑いを堪えながら――これ以上笑い続けたら、本気でへそを曲げてしまう恐れがある――ふてくされたナソリを宥めていれば、

「さ、次はリョウの番よ？」

こちらにいらっしゃいと普段の倍増しで、きらきらと無駄にその翡翠色の瞳を輝かせたリューバが迫力のある微笑みを浮かべていた。

正面からそれを目の当たりにしたリョウは、思わずぎくりと肩を揺らした。

『リョウ。諦めろ。人生、悟りを開くことも肝要ぞ』

――――なんですと!?

嫌な予感に顔を引き攣らせた直ぐ脇で、僧侶のような文言が下される。

「この日の為に家中ひっくり返して漸く見つけたんだから。さぁ、こっちに来て当ててみて。まだ細かい直しが必要だと思うの。そしたら、直ぐでも手を付けるから」

軽やかに身を翻して、奥の部屋に行ったかと思ったリューバは、その手に何やら服らしきものを持って戻ってきた。

今日のリューバは、何と言うか、鬼気迫るものがある。

リョウは観念して、リューバの元へと近づいた。

何が彼女をそこまで駆り立てているのか、リョウには皆目、見当が付かなかったが、これもお祭りの影響なのだろう。そう思うことにした。

リューバが手にしていたモノは、女性物のこの地方の伝統的な服だった。

【ルバーシュカ】というシャツに【ユープカ】というスカート。そして【カフタン】のような【コーフタ】と呼ばれる長い上着と腰に巻く【レンタチカ】という太めの【サッシュ】だ。

ご丁寧にそれに合われるお対の靴、【トゥーフリ】まであった。

其々の衣装には、金糸・銀糸を始めとする色とりどりの糸で繊細で華やかな刺繍がびっしりと施されていた。

草木をモチーフにしたもの、花をモチーフにしたもの、それを幾何学模様が縁取りしている。

「これは……凄い」

【ルバーシュカ(シャツ)】を手に取ったリョウは、その豪華さに思わず溜息を吐いていた。

襟から深く切り込(スリット)みが入った胸元にかけて、その輪郭を縁取るように青い花をモチーフにした刺繍が縫い込まれている。

随分と手の込んだものだった。

「ふふふ。懐かしいわぁ。これは、私が娘時代に着ていたものなのよ。お祭りの時とか、ここぞという時の晴れ着なの。結婚して、子供を産んだら直ぐに着られなくなっちゃったんだけど、これだけはどうしても手元に残しておきたくて」

そう言って、懐かしそうに目を細めたリューバの顔は、時を巻き戻して、まるで娘時代に戻ったような表情をしていた。

リョウは自然と高揚した気分に包まれていた。

綺麗なものを目にして心躍らせるのは、女ならではの性質だろう。

【こちら】に来て以来、お洒落とは無縁の生活を送って来たのだが、こういった素敵なモノをいざ目の前にすると、昔を思い出すように興奮に胸が高鳴った。

女である部分は、やはりそう簡単に失えるものではないのだ。

忘れかけていた気持ちが引きずり出される。

途端に目を輝かせたリョウを見て、リューバは嬉しそうに、いつもよりは一オクターブは高い上ずった声を上げたのだった。

「さ、リョウ。遠慮しないで試しに着てみて。私のだから少し大きいとは思うんだけど。具合を見たいから。これでも昔は細かったのよ？」

茶目っ気たっぷりに片目を瞑って見せる。

リューバの提案に頷くと、リョウは手渡された衣装を胸に抱えて、こちらに滞在している間に使わせてもらっている客間へと着替えに行った。

そうして、暫く経ってから。
この国の伝統的な衣装に身を包んだ一人の年若い女が、恥ずかしげに頬を染めて、扉の中から現れたのだった。
「まぁ！」
『……何と！』
着替えたリョウを見て、リューバとナソリは息を飲んだ。
「これで合っていますか？」
客室に引き上げていざ着替えようとした時に、ふとその着方を知らないことに気が付いた。
余りの浮かれぶりに、そこまで頭が回らなかったらしい。
スカートとシャツにカフタンを重ねて、上からサッシュをベルト代りに締めるのだろうと予想して着てみたのだが、間違ってはいないだろうか。
リューバが娘時代に着たと言っていたが、彼女の今の体格からは想像が出来ない程、それは小さなものだった。
【ユープカ（スカート）】は、たっぷりと贅沢な程に生地を使い、腰周りは紐で調整するようになっていた。
【ルバーシュカ（シャツ）】は、頭から被る形で、肩の辺りが余るが、上から羽織るモノがあるので誤魔化せるだろう。
【ルバーシュカ】の裾を【ユープカ】の中に入れるか迷ったが、【ルバーシュカ】の裾の方にも刺繍が施されてあったので上に出した。
その上から【コーフタ（上着）】を羽織る。
【コーフタ】は、シャツやスカートとは違いしっかりとした厚手の生地で身体の線（ライン）に沿った仕立てになっていた。肩の部分はやはり自分には少し大きかったが、この国の女たちの体格の良さを思えば、

寧ろ、まだましな方だろう。それよりも、リューバがこれを着られる体つきであったことの方が驚きだった。

いやはや、時間の経過とは時に恐ろしく残酷なものだ。

それはさておき。

兵児帯（へこおび）のような太さの柔らかい色鮮やかな【レンタチカ（サッシュ）】を腰（ウエスト）の辺りで【コーフタ】の上から巻く。

【コーフタ】には前を留めるようなボタンやホックの類は付いていない。

そして最後に、平たいバレエシューズのような【トゥーフリ】を履く。

衣装の華やかさに劣らず、靴にもキラキラと光る石が装飾として付いていた。

靴は偶然にもピッタリだった。

部屋には姿見が無かったので、どんな感じになっているのかは分からない。

果たして自分がこのような華やかなものに身を包んで可笑しくは無いだろうか。

贅を凝らした衣装に着替える間の高揚感の後、徐々に不安が生まれてきた。

自分の顔立ちや体格はこの国の女達とは明らかに違う。

こういった民族衣装の類は、それを身につける自国の女たちをより美しく見せる為に発達してきたものだ。長い時間と弛まない努力を掛けて、彼女たち仕様に作られてきたのだ。

――――己が娘が綺麗になるように。

――――己が妻が美しくなるように。

そんな思いが沢山詰まっている。

その事を思えば、自分に似合うとは到底思えなかった。

恥ずかしそうに俯いたリョウに、リューバは嬉々として近寄った。

「まぁ、リョウ！　とても良く似合ってるわ！！」
その声は、何故か感極まったものだった。
リューバは込上げて来るものをそっと指で拭うと、満面の笑みを浮かべた。
目尻には、まだ薄らと涙の滲んだ跡が残っている。
「よく見せて頂戴？　具合はどうかしら……」
そっと顔を上げたリョウの周りを確かめるように真剣な眼差しで矯めつ眇めつ回る。
「やっぱり、肩幅が大きいわね。脇ももう少し詰めないと駄目だわ。……ホントに。こうしてみると細いわねぇ」
そう言って、リューバは、【レンタチカ（サッシュ）】がぐるりと回るリョウの腰へ溜息交じりに手を宛がった。
「リョウ、【コーフタ】を脱いでみて」
言われるままに帯を解いて、上着を脱ぐ。
リューバは、今度は【ルバーシュカ（シャツ）】と【ユープカ（スカート）】のバランスを見た。
「下は大丈夫ね。丈もちょうどいいわ。後は……」
リューバの視線は、リョウの胸元へと注がれていた。
リューバが言わんとすることに、リョウは苦笑して見せるしかなかった。
お世辞にも胸はある方ではない。これでも【向こう】では平均的であったのだが、【こちら】では稚い（いとけな）少女のようなものなのだろう。
今まで自分の胸元に対してコンプレックスを持ったことはなかったが、この国の豊満な体つきを持つ女達の姿を思えば、自嘲の念が頭を擡げてきても仕方がなかった。
だが、こればかりはしょうがない。
そんな心中複雑な中、その次にリューバの取った行動にリョウは度肝を抜かれた。
「ちょっと失礼するわよ？」
そう言って、腰を掴んでいた手が、そのまま上に上がり、服の上

から胸の丸みを確かめるように掌でその大きさを測る。
リューバの柔らかいふくよかな手が、その形を見るように自分の乳房の辺りに宛がわれていた。
「やっぱり、思ったよりあるわね」
同じ女性であるから、別に気にすることは無いのだが、意表を突かれる形になってリョウの体は硬直した。
「……あの、……リューバ？」
何とも情けない格好で、躊躇いがちに訊ねてみれば、
「ん？　なぁに？　この位……かしらね」
今度は【ルバーシュカ】の脇を絞るようにリューバの手が器用に動いていた。
一頻り計測が済んだのか、満足のいく顔をしてリューバは面を上げた。
「大体分かったわ。【ルバーシュカ】は脇にダーツを入れて、胸元の切れ込みは少し縫い合わせれ良いわね。【コーフタ】は肩を詰めて、脇ももう少し絞れば大丈夫。それじゃぁ、早速取りかからなくちゃ。リョウ、着替えてもらってもいいかしら？　ホントなら、もう少し見ていたいけど、直しの方が先だから」
そうして、リョウは促されるままに元の服へと着替えたのだった。

それからリューバは、一人、部屋に籠ると早速、衣装の手直しに取りかかった。
代々、【術師】を輩出してきた家系であったリューバの家では、娘や息子達に贈る【ハレの日】の衣装には、それを縫う生地や糸に特別な呪いを仕掛けていた。
子供たちに禍が掛からないように、そして丈夫であるようにとの思いを懸けて、一針一針、心を込めて縫い合わせるのだ。
この衣装には、リューバの母親の思いが詰まっていた。
本当なら、リョウにも自分の体に合ったものを作って上げられれ

ば良いのだろうが、いかんせん、今回は急なことで時間が無かった。
間に合わせのように自分が大昔に着ていたものを引っ張り出してみたのだが、その形状は、呪いのお影か、長い年月を経た今になっても、色褪せることなく綺麗な状態なままで保たれていた。
リューバは懐かしむように、テーブルの上に広げた衣装をそっと指で撫でた。
この服には、母親の【想い】もそうだが、自分の【思い出】も沢山詰まっていた。
ほろ苦くて甘酸っぱい、若かりし頃の記憶。
直視するには眩しい程の時間のうねりだ。
子供を産んでから体型が急激に変わってしまって、あの頃のようにこの服に袖を通すことはできなくなってしまった。
本来であれば、自分の体型の変化に合わせて、縫い目を解き、仕立て直せば良かったのだろうが、そうすると、あの頃の楽しかった掛け替えのない記憶までもが無くなってしまいそうで、とうとう手に掛けることが出来なかったのだ。
そうやって納戸の中で埋もれてしまっていた服に、漸く光を当てることが出来た。
このまま、ずっと部屋の片隅で埃を被ってしまうより、誰かのものになり、その身を再び飾ることが出来る方が、この衣装としても本望というものだろう。
そうして、時と共に織り込まれる形の無い【想い】と一緒に、この服も次の手に受け継がれてゆく。
そういう意味合いから、この衣装はリューバにとっては非常に大事なものであったが、リョウにならば、惜しくはなかった。
二人の息子たちの衣装を縫い上げたのは、もう随分と昔の話だ。
いつか、自分に娘が出来たら、こうして専用のモノを作ってあげたいと思っていた。そんな、とうの昔に潰えた筈のささやかな望みを繋ぐ様に、リューバは手にした衣装の縫い目を断つべく鋏を入れたのだった。

近い内にリョウにもきちんとしたものを作ってあげよう。
生地選びから、糸選び。刺繍の意匠や色の組み合わせ。それこそ完成までにやることは沢山ある。
そして、新しく思い描く、そう遠くはない未来を思いながら、一針づづ丁寧に指を動かして行ったのだった。

懐かしくも意外な顔ぶれ　1）（前書き）

懐かしくも意外な顔ぶれ　1）

賑やかな人垣の合間を縫うように、まだ年若い娘が一人、一頭の大きな犬をお供に連れて歩いていた。　その足取りは随分と軽やかだ。

歩く度にたっぷりとした生成り色のスカートからは白い脚が覗いた。

翻るスカートの裾には、他のめかし込んだ村の女達のものと同じように繊細かつ華やかな刺繍が隙間なく施されてあった。

この辺りでは珍しい黒髪が、吹き抜ける風にさらりと揺れる。

漸く肩を越した位のその長さは、他の女たちに比べてもかなり短い部類に入った。

吹き付ける穏やかな秋の風は、間近に迫る冬の到来を匂わせるように若干の冷たさを秘めていたが、天高く澄みきった蒼穹から差し込む陽射しは、遮るものも無く、大地を暖かな気で包み込んでいた。

家々の軒を飾る色とりどりの吹流しを躍らせて、吹き寄せる風は、実に心地が良かった。ムンムンとした村中の熱気をほんの少しだけ和らげてくれるようだ。

そんな風の悪戯か、頬に掛かった髪をかき上げられれば、娘の面が顕わになった。

すっと通ったやや低めの鼻梁に形の良い眉。そして、その直ぐ下にある黒い瞳は、差し込む秋の日差しに眩しそうに細められていた。

薄く引き結ばれた唇には、この日の為にか、ほんのりと紅が引かれてあった。

「おやおや、まぁ！　リョウじゃないかい！　どんな別嬪さんがやってきたかと思えば！！　すっかり見違えたよ。驚いたねぇ。……

……それにしても、リューバの言ってたことは本当だったんだねぇ。そうしてると丸っきり娘じゃないか！」

リューバの家を後にしてから、村人達でごった返す通りを歩いていると、こうやって女たちから度々声を掛けられた。

皆、リューバの茶飲み仲間だ。

普段、男のようにズボンばかり穿いているから、幾ら女だと聞いていても中々に実感が湧かなかったようだ。

初めて目の当たりにする本来のあるべき姿に女たちは、吃驚仰天、目を白黒させている。

それでも自分だと気が付いて認識してもらえるのだから、女たちの感の鋭さ、目端の良さには、感心させられると同時に嬉しくもあった。

その反面、男たちは端から自分を男（少年）だと思っている輩が多い所為か、すれ違って挨拶をしても気が付かない者が殆どだった。

皆、反射的に挨拶を返して、二・三歩歩みを進めた後、不意に足を止めて振り返る。

そして、首を捻った顔には、『はて、今のは何処の誰であったろうか』という疑問が浮かんでいた。

若しくは、隣にいる女房にその場で真実を教えられて、驚きに言葉を失う者が大半だった。

中には、祭りの余興か何かと取ったのか――――要するに、【道化】要員として女装させられているとでも思ったのか――――【馬鹿を言うな】と笑い飛ばした者さえいた。

リョウは、言葉少なににこやかな微笑みを向けることで挨拶を返した。

自分自身、若干の戸惑いがあるのも確かだった。

リューバが手直しを加えてくれたお下がりの服は、【お下がり】というには申し訳が無い程、自分には勿体ない位に立派なものだった。

村の女たちと同じような、この日の為のとっておきの服に着替え

て、薄く口紅まで刷いた。
鏡に映る贅沢な衣装に身を包んだ女の姿は、見知った自分の顔であるのに、違う人のようにも見えた。鏡の中の女は、己が心を投影するように戸惑いの微笑みを浮かべる。
それは、ほんの数刻前の出来事でもあった。

『リョウ？　如何した？』
不意に表情を無くした自分を心配するようにナソリが足を止める。
「ん？　あぁ、ごめんごめん。昨日より人が多いなぁって思って」
せり上がりそうになる何かをするりと押し留め、リョウは眼前に広がる賑やかな人垣の方へと視線を投げかけた。
子供たちは、貰った食べ物を手に走り回り、流しの楽団の周りには、小さな踊りを踊る輪が手拍子に合わせて幾つも生まれていた。女たち、男たち、老いも若きも、心のままに、奏でられる小気味よい旋律に合わせて、軽やかなステップを踏んでいる。
食べ物を並べた屋台もあちこちにあり、その前にはテーブルと椅子が用意され、男たちが酒の入ったジョッキやグラスを手に談笑している。
様々な料理の匂いが、風に乗って運ばれてくる。
肉の脂が焼ける甘い匂い。付け合わせの野菜類を蒸す鍋からは、白い蒸気が上がっている。この日の為にパンも大量に焼かれていた。
吊るされている燻製された肉の腸詰【カルバサ】も実に艶やかな照りを放っている。勿論、果物を煮詰めたジャムを入れて焼いた甘いパイもあった。熱せられた【マースラ（バター）】と【サーハル（砂糖）】の甘い匂い。きっと、その中には、ナージャ特製のお菓子もあるのだろう。
村人はそういった様々な御馳走に舌鼓を打ちながら、これまでの日々の労働を労い、この恵みをもたらしてくれた神々に感謝の祈りを捧げた。
『リョウ』
「ん？」

不意に発せられたナソリの声に振り向けば、
『案ずるな。良く似合っておる』
優しい響きを持った低い囁きが耳に届いた。
先程の鬱々とした心の内を言い当てられて、リョウは内心のむず痒さを誤魔化すように破顔した。
ナソリには敵わない。
――――ありがとう。
そのまま先を行くべく、背を向けた大きな茶色の毛並みに向かって、心の内でひっそりと感謝の言葉を口にしたのだった。

リョウは、アクサーナの家に向かう途中だった。
その手には、ささやかだが、アクサーナへの小さな贈り物が入った包みを持っていた。
結婚祝いの品だ。
アクサーナが婚礼を上げると知らされて、一旦、森の家に帰ったのには、そのお祝い用の贈り物を用意するという目的もあったのだ。時間は余りなかったので、大したものは出来なかった。が、これまでの世話になったお礼も込めて、何かをしたかった。
用意したのは、手作りのブローチだった。
以前、セレブロと森の散策をした時に、途中で出くわした小川で小さいながらも綺麗な石を見つけた。　それを取って置いたのだ。
その石は、見つけた時は薄汚れていたが、セレブロの助言を受けて呪いを唱えながら軽く研磨すると、ちょうど、アクサーナの瞳のような透明で温かみのある橙色に変わった。
そして、暇を持て余しているセレブロに手伝ってもらいながら（この時は人型になってもらった）ガラクタ部屋になっていたガルーシャの納戸を漁って、石を留められるような材料を探し当てたのだ。
素人が作ったものであるから、形は少し不格好だが、それを補うかのように橙色の石が陽の光を吸い込むと反射して輝きを増した。

気に入ってくれるとよいのだが。
ほんの少しの不安と高揚感が綯い交ぜになっている。
出来上がったものを見せたリューバは、綺麗だと誉めてくれた。
ナソリからも中々の仕上がり振りだと太鼓判を貰った。
それだけでも良しとしよう。
要は気持ちの問題なのだから。
そして、手にした包みをそっと持ち直すと、この一時を楽しむ村人たちの笑い声や歓声、子供たちの甲高いはしゃぎ声、その合間を縫うようにして高く低く流れて来る様々な楽器の音色を耳に聞きながら、のんびりと軽やかな一歩を踏み出したのだった。

懐かしくも意外な顔ぶれ　2）

村の外れにあるリューバの家から見て、アクサーナの家は、中央にある広場を挟んで反対側に位置していた。ちょうど村を縦断する形になる。

一番賑やかで人々が集まっている広場を抜けて暫く行くと、途中、小さな小川があった。

村の間をうねるようにして流れるその細い川は、村人の生活には無くてはならないものだった。村人はこの川から水を汲み、飲料水を始めとする生活用水に使っていた。

リョウが小川に差し掛かった時、木立が影を作る場所で、一頭の馬が首を垂れ、水を飲んでいるのに出くわした。

栗毛の艶やかな毛並みの立派な体躯を誇る馬だ。

静かに喉を潤す姿は、やけに気品に溢れていた。垂れた頭の額際には、白い菱形模様がある。

どこか既視感のある光景だ。

それを見て、リョウは驚きに立ち止まった。

――――――あれは、まさか。

「ナハト！　ナハトじゃないか！」

懐かしさの余りに駆け寄れば、川辺から長い首を上げて、穏やかな茶色い瞳がこちらを向くとすっと細められた。

『リョウではないか。久しいな』

近付いてきたリョウに、ぶるりと鼻を鳴らす。

「ホントに。元気にしてた？　砦の皆は変わりない？」

『ああ。皆、達者にしておる』

矢継ぎ早に問いを発するリョウを微笑ましく思いながら、ナハトはその姿をまじまじと見下ろした。

『それよりも、リョウ。随分とめかし込んでおるではないか』
そう言われて、リョウは照れたように小さく笑った。
「こっちでお世話になっている人が貸してくれたの」
『良く似合っている』
「ありがと」
久々の邂逅に一人と一頭で和んでいると、
『リョウ。知り合いか？』
痺れを切らしたようにナソリが傍にやって来て、己が存在を主張するように一つ吠えた。
「うん。北の砦でお世話になった馬のナハトだよ」
『世話をされていたのは専ら我の方であったがな』
おどけたようにナハトが鷹揚に口にすれば、
「そんなことないよ。ナハトは不慣れなワタシに色々と教えてくれたじゃない」
釣られるようにリョウも笑みを浮かべた。
いつしかリョウの言葉使いは、より柔らかさを増すものへと変わっていた。外見がすっかり変わったことで、自然と言葉もそれに見合う形になっている。無意識に本来の気分を取り戻したような形だった。

ナハトがついと対峙する茶色い犬へ視線を向けた。
『その方は？』
「ああ、こちらは、ナソリ。今、お世話になっている人の家族……って言えばいいかな？」
リョウが紹介するように隣に立つ茶色の毛並みの首の辺りを撫でれば、
『砦のモノが、かような所で何をしているのだ？』
警戒心も露に低く唸る。
ナソリのいつにない固い態度をリョウは意外に思った。
『どうやら余り歓迎はされていないようだな』

だが、当のナハトは余裕たっぷりに普段の穏やかな口調を崩さない。

『乗り手はどうした？』

『そういきり立つな。大方、祭り見物でもしておるのだろう』

『見物だと？』

『兵士とて唯の【ヒト】だ。偶には休みも取ろう。ここの祭りは近隣でも有名だからな。偶さかの休みにここまで繰り出しても可笑しくはなかろうて』

『どうだかな』

滑らかに語られるナハトの口説に、ナソリは未だ懐疑的な視線を投げている。それをよく表すようにナソリの尻尾は、いつもより逆立っていた。

ナソリの態度はいつになく好戦的だった。

砦からやってきたということが、そんなにも警戒心を煽るものなのだろうか。それとも、この村と砦の兵士達の間には何か確執のようなものがあるのだろうか。

自分が知る砦にいた兵士達は、皆、親切な人達ばかりだった。

だが、幾ら、そこに所属する個々人が善良な人達であったとしても、それが【砦を守る部隊】という組織に代わった時、そういう見方が出来るかというと、それは違う。立場が違えば、当然その中での優先順位や物事に対する捉え方も違って来るであろうし、そこから派生して、何らかの事柄で対立する事態が起こり得ることは、想像に難くない。

ナソリの堅い態度を見る限り、砦に対しては、余り良い感情を持ってはいないようだ。

リョウとしては、両者がいがみ合う姿を見たくはなかったが、その間にある関係性を知らない限り、口出しをする資格などなかった。

リョウが沈黙を貫く傍らで、二頭の会話は続いていた。

『おお、そう言えば、一人は確かこの村の出であったな。キリルとか言ったか』

『……キリルだと？』

ナハトの口から上がった名前に、ナソリの耳がピクリと動いた。

キリルと言えば、ナターリアの所の息子の名だ。数年前に村を出たきり、ここへはとんと無沙汰な筈だった。父親の名は不明で、どこの誰かも分からない。

ナソリの脳裏には、かつて村を騒がせたとある事件が思い出されていた。

当時、まだ年若かったナターリアが子供を身籠ったと分かった時は、村はそれこそ蜂の巣を突いたような騒ぎになったのだ。

あの頃、まだ健在だった父親のスチョールキンは犯人探しに躍起になり、村中を巻き込んで一悶着を起こした。当時、若かった男達はスチョールキンの剣幕に恐恐としたものだ。

幸いにして、相手が村の男ではないことは判明したのだが、それ以上のことは分からないままだった。相手の名前を幾ら聞き出そうにも、普段の従順さと大人しさからは考えられない程にナターリアは頑なで、決して口を割らなかった。果ては父と娘の根競べのような事態になり、早々に痺れを切らした父親から、もう少しの所であわや勘当という所までいったのを村の女達がようようにして宥め、漸く事なきを得たのだ。

だが、頑固で厳格な父親であったスチョールキンは、結局、最後まで娘を許すことは出来ずに、身重のナターリアを家から出し、自分の目が黒い内は――――要するに自分が一家の主をしている間は、娘には決して家の敷居を跨がせなかった。

それは、連綿と続くこの小さな寒村で一族を守る【主】の取るべき【けじめ】でもあったのだ。

末娘であったナターリアを殊の外、可愛がっていたスチョールキン自身にとっても、それは苦渋の選択の末であったのだろう。

だが、その一方で救いもあった。
捨てる神に拾う神というところだろうか。
そんなナターリアを村の女たちは擁護し、実家とは少し離れた所にある小屋を住まいとして宛がった。そして、母親と他の女たちの支えもあり、程なくしてナターリアは身二つになる。
生まれたのは男の子だった。真っ直ぐで癖のない明るい金茶色の髪に、母親と同じ黄緑色の瞳を持っていた。
もうかれこれ二十年近く前の話になる。

『あの……ひよっこか』
『ああ、若造だ』
ナソリの脳裏には、母親であるナターリアによく似た面立ちの線の細い少年の姿が浮かんでいた。
どちらかというと母親の性質を受け継いだ控え目な性格で、自らを主張するタイプではなかった筈だ。その時の少年と北の砦というのは、どうも結びつきそうで付かなかった。
数年前に母親を一人残して、街へ出たとは聞いていたが、騎士団に志願していたとは過分にも知らなかった。
『兵士になっていたとはな』
そう零したナソリの声には、過ぎ去りし日々を懐古するような複雑な色が滲んでいた。
『この時期に里帰りなら、一人でよかろうに』
『さてな、仲間を誘ったのではないか』
『砦の連中は余程、暇と見える』
『はは、偶には良かろうて』
ナハトとナソリの周りには、いつしか冷たい空気が流れていた。
交わす言葉やその口調は穏やかであるのに、水面下で腹の探り合いをしているような按配だ。
リョウは居心地の悪さを感じ初めていたが、それを面に出すことは控えた。

すると、助け船が意外な所からやってきた。
『お、来おったか』
つとナハトが首を巡らした方に目を向ければ、もう一頭の栗毛の馬が、木立の向こう側から現れた。
あれは、陽気なケッペルだ。
短く逆立った特徴のある鬣（たてがみ）は間違えようがない。
「ケッペル！」
リョウが高らかに声を掛ければ、栗毛は、一旦、その場で顔を上げると、元来落ち着きがある筈の馬達の中では珍しく、素っ頓狂な嘶きを上げた。
『あっれ。リョウじゃねぇか！　こんなとこで会うたぁ、驚き桃の木山椒の木。どうしたんだぁ、え？　すっかり女らしくなっちまって。いやいや見違えたぜ。なんだ、男でも出来たか？　あ？　こちとらぁ、てっきりキッシャーの旦那とデキテるとばかり…思って……た……ぜ……って、皆で揃ってどうしたんだ？』
お馴染みの呑気で間の抜けた調子に、その場に走っていた緊張の糸が不意に緩んだ。
ケッペルの空気の読め無さは、いい意味で健在だった。
リョウは内心、助かったとほっと息を吐いた。
「ケッペル、元気そうで何よりだよ」
リョウは、込上げてきそうになる笑いを堪えながら、近寄って来たケッペルの首へ腕を回した。
『お？　なんか熱烈に歓迎されてる？』
「そうかもね」
そのどこか外れた返答に、リョウは小さく笑った。
一気に脱力したというか和んだ空気は、ケッペルのお陰だった。
ナソリもナハトも気が削がれたのか、先程までの剣呑さはお互いに引っ込めたようだ。
二頭の馬が揃った所で、気になるのはその乗り手のことだった。

馬は、繋がれることなく放し飼いの状態だ。二頭は、よく訓練された聡明な馬たちであるから、心配など無用というのは自分には分かるが、他の人達から見れば不用心に思われるかもしれない。

村の入り口から少し入った所には、一応、外から来る見物客の為に、臨時の厩も用意してあった。馬を使った人々は、そこに自分の乗ってきた馬を繋げて、村の子供達が飼い葉をやったり、水をやったりと世話を焼くことになっていた。

「砦からは誰が来てるの？」

『おいらが乗せてきたのはキリルだぜ』

それは、先程のナソリとナハトの会話の間にも出てきたが、リョウが初めて耳にする名だった。

砦で世話になっている間、兵士達の顔と名前は一通り覚えた。だが、記憶を幾ら辿ってみても合致するような顔は思い浮かばなかった。

思案顔のリョウにナハトが小さく鼻を鳴らす。

『リョウは知らんだろう。そなたが帰った後にやってきた新入りだからな』

「新しく人が入ったんだ？」

『鷹匠だな』

「イサークのところだね」

『ああ。イサークの奴め、体のいい子守だと零して居ったぞ』

老練な古参の伝令である鷹のイサークから見たら、新入りの兵士は、それこそ子供のように見えるのだろう。

ここの獣たちは、人に比べて格段に寿命が長いらしかった。詳しくは確かめたことが無かったが、自分が暮らしている森に住まう獣たちは、白銀の王であるセレブロまではいかないまでも、人とは違う時を刻んでいるということだった。

「ナハトの方は？」

ナハトには、スートやキッシャーのように決まった乗り手というのは居なかった筈だ。自分が砦にいた時は、セルゲイやアナトーリ

ィー、グント、ヤルタ、ロッソ、オレグ辺りがその背に跨っていたようにも思う。
思いつく限りの名前を上げてみたのだが、
『その内分かる。楽しみにしていればよい』
ナハトはここでその乗り手の正体を明らかにする積りはないようだ。
きっと向こうもこちらも意外な所で鉢合わせをする方が面白いとでも思っているのだろう。
ならば仕方がないかとリョウはそれ以上の追及を止めた。
「あ、でも。こっちは分かっても、きっと向こうが分からないよね」
うっかり忘れてしまいそうだが、すっかりこの村の女達と同じ格好をした自分では、きっと見分けが付かないに違いない。第一、向こうは自分のことを男だと思っていたであろうし。
そう思って、ナハトとケッペルを見上げれば、
『それも一興』
『おいらは気付かない方に【マルコーヴィ(人参)】一本』
『では、それがしは逆手に一本だな』
好物を餌に呑気な掛け合いが始まった。
賭けでもする気のようだ。
『そなたはどうする、ナソリ殿?』
『では、ワシも逆手に【カルバサ】一本だな』
『おお、あれは旨そうだ』
ナソリはナソリで、好物の肉の腸詰、所謂ソーセージを賭けにするらしい。
だが、そこで、ふと疑問が生まれる。
「ねぇ、それって、誰が用意するの?」
『決まってんじゃん』
『『無論、リョウ、そなたであろう』』
「……そうですか」
先程までの剣呑さが嘘のように口を揃えた三頭に、リョウは思わ

ず苦笑い。
まぁ、【マルコーヴィ（人参）】と【カルバサ（ソーセージ）】位なら、リューバの家にもあるし、それこそ中央の広場に行けば、簡単に手に入るだろう。
どうやら村人たちの陽気は、訪れる人馬ともに感染する様だ。
だが、それも祭りならではのことなのだろう。
この際だから、自分も楽しんでみようか。又とない機会ではあるし。馬達でさえ、こうなのだ。それに乗らない手はない。
「【ダガヴァリーリッシ（了解）】！」
こちらを見ている三頭に、リョウは親指を突き上げて、晴れやかな笑みを浮かべたのだった

母と姉と妹と　～女たちの系譜～　1）

あのまま、あの場で乗ってきた主を待つことにする言ったナハトとケッペルの二頭とは別れて、リョウはナソリと共にアクサーナの家の前に立った。

途中、予定外のことに少し時間が取られたが、それも一興、祭りならではのことだろう。

本当のことを言えば、もう少しナハト達とは話をして、砦の様子を聞いていたかったのだが、まずは自分の用事を済ませてしまうことが肝心だろう。

アクサーナとデニスの婚礼は明日だ。今日を逃せば、きっとアクサーナとゆっくり話をする時間は取られないに違いなかった。

アクサーナの家の前に立ち、訪いを告げると中から一人の女性が現れた。

豊かな明るい金色の髪を脇に寄せて編み込み、村の女達と同じく晴れ着に身を包んでいる。

衣装は皆、同じ形をしているにも関わらず、生地の色や施された刺繍の意匠、それに使われる糸の色が違えば、着る人によって実に様々な印象を受けることが分かった。

その女性は、金糸で刺繍が施された焦げ茶色の【コフタ（上着）】に鮮やかな橙色の【レンタチカ（サッシュ）】を捲いている。中に着た【ルバーシュカ（シャツ）】は一般的な白で、その下に穿いた【ユープカ（スカート）】は淡い秋桜（コスモス）色だった。

全体的に温かみのある暖色系で纏められている。

「こんにちは」

「まぁ、いらっしゃい」

挨拶をして目が合えば、人懐っこい微笑みにぶつかった。

眦に薄く笑い皺が出来る。明るい赤茶（レンガ）色の瞳が、差し込む陽射し

に煌めいた。
華やかながらも、ややきつめのきらいがあるアクサーナの顔立ちをもう少し柔らかくしたような感じだが、良く似ている。趣は違えども綺麗な人であることには違いなかった。
雰囲気は年齢的なものもあるのだろうが、より穏やかで落ち着きのあるものだ。
晴れ着の色合いも、それを身に着けている人の空気を良く表していた。
話に聞いていたアクサーナのお姉さんだろうか。
「アクサーナのお姉さんですか？」
そう思って尋ねれば、
「ええ」
予想通りの答えが返って来た。
「あなたは、……リョウ、ね？」
「はい」
「ふふふ。アクサーナから話には聞いているわ。いつも妹に良くしてくれてありがとう」
「いいえ。こちらこそ。アクサーナにお世話になっているのはこちらの方です」
「あら、そうなの？」
意外そうに少し目を見開いた後、嬉しそうに微笑んだ。
そして、リョウの隣を見下ろして、傍らに控えていた茶色の大型犬に声を掛けた。
「ナソリもいるのね。こんにちは、ナソリ。久し振りね」
『ああ。久しいな、エレーナ。達者にしておったか？』
こちらも嬉しそうに尻尾を千切れんばかりに振って応えた。
対するエレーナも、手を伸ばすとナソリの艶やかになった毛並みを撫でる。
ナソリは、その優しい手付きにうっとりと気持ち良さそうに目を細めている。

すっかり鼻を伸ばした状態のその仕草に、リョウは何とも言えない視線を投げかけた。
アクサーナの所に行くと言った時にやけに喜び勇んで付いて来たかと思えば、ナソリのお目当ては、どうやらアクサーナの姉にあったらしい。
「ナソリの言葉がお分かりになるんですか？」
試しに訊いてみれば、エレーナは緩く頭を振った。
「いいえ。具体的に何を言っているかは分からないわ。でも、嬉しいとか腹立たしいとか、そういう感情の動きは、何となくでも見ていれば分かるでしょう？」
「そうですね」
その言葉にリョウは大きく頷き返していた。
確かに、そうだ。
言葉が通じなくとも、犬とは意志の疎通は十分可能だ。
【向こう】ではそれが当たり前で、そうやって人と犬は長年に渡り、共同生活を営んできたのだから。
嬉しければ尻尾を振る。機嫌が悪ければ唸り声を上げるし、腹が立てば噛み付きもするだろう。
かつての自分もそうであった。
「あなたは……分かるのですってね」
ナソリの首の辺りを撫でながら、エレーナが、ちらりとこちらを流し見た。
『アクサーナから聞いたのよ』と小さく笑う。
「はい」
別に隠すことでもないので素直に首を縦に振れば、
「……昔は、この辺りにも理解が出来る人は、もっと居たのだけれどね」
そう零すと、少しだけ寂しそうな色をその赤茶色（レンガ）の瞳に乗せた。
「昔……というのは、どれくらいの前のことなのですか」
差支え無ければ教えて頂けないかと一応の前置きをして、リョウ

はやや躊躇いながらも、気になったことを口に出していた。
だが、次の瞬間、相手の顔に浮かんだ表情を見て、それは少し踏み込み過ぎたかと直ぐに後悔をした。
「すみません。今のは無かったことにしてもらえませんか？」
一度、【音】にしてしまった【言葉】は、相手の耳に届いた時点で無かったことには出来ない。それでも、答えは求めていないのだという意思表示をしたかった。
急に申し訳なさそうな顔をしたリョウに、エレーナはハッとして表情を改めると、優しい苦笑に似た微笑みを浮かべた。
「ごめんなさいね。気を使わせてしまったかしら」
「いえ。そんなことはありません。こちらこそ、不躾な質問をしてしまって、すいません」
そう言えば、エレーナは少し驚いたような顔をして見せた後、より一層、笑みを深めたのだった。
「本当に。あなたは気を遣ってばかりね。アクサーナが言っていた通り。あの子が好きになる訳だわ」
一人、何かに納得するように頷く。
姉妹の間で一体どんな話が交わされていたかは分からないが、アクサーナは随分と自分のことを肯定的に捕らえているらしいことが、その言葉の端々からは感じ取れた。
己の評判を他人の口から聞かされるのは、なんともむず痒い気分だ。

内心、そんな居たたまれなさをどうしたものかと思っていると、
「エレーナ？　どうしたの？　どなたかお客さんがいらしたんじゃないの？」
玄関先へ応答に出たきり、中々戻ってこない姉を心配してか、廊下の奥の方から柔らかな女の人の声がした。
「ええ、アクサーナにお客さんよ！」
首を後方に捻って軽やかに返してから、エレーナは少しばつが悪

そうに小さく肩を竦めてみせた。
「あたしったら、つい。いつまでもこんなところで。ごめんなさいね」
だが、そうこうするうちに、廊下の向こうからドタタタと複数の不規則な足音と甲高い声が一緒に響いて来た。
「ママー！」
「お客さん？　ねぇ、誰か来たの？」
小さな塊は、ボスンと音を立てて、エレーナの後ろに飛び付いたようで、その衝撃にエレーナの身体が揺れた。
そのふくよかな腰回りには、にょっきと小さな二対の腕が見え隠れしている。
「あらあら、あなたたち。向こうで大人しくしてなさいな」
しがみ付いた【コフタ（上着）】の合間から小さな頭部が二つ覗く。明るめの茶色の頭髪の合間から二対の円らな緑色の瞳が、興味深そうにこちらに向けられていた。
もしかしなくとも、エレーナの子供たちだろう。服装から、一人は男の子で、もう一人は女の子だと分かる。髪型は違えども、その顔は傍目にも良く似ていた。背丈も同じ位だ。双子なのかもしれない。
一人は、爛々と光る眼差しを隠すことなくエレーナの脇に立ち（その手はしっかりと母親の上着を掴んではいるが）、もう一人は、母親の影に隠れるように、それでも好奇心を抑えることができないのか、しっかりとその視線はこちらに向いている。

リョウは、小さな急襲者達に相好を崩すと、その場で膝を着いた。
そうすれば、自ずと目線は同じ高さになった。
「こんにちは」
知り合う為の始めの一歩として、基本の挨拶をしてみる。
目が合うと男の子の方は、ずいと身を乗り出してきた。
「あんた、リョウって言うんだろ？　男じゃないのか？　なんでそ

んなに髪が短いんだ？」
　子供というのは、実に真っ直ぐだ。遠慮を知らない分、核心を突いてくる。
　矢継ぎ早に出た問いに慌てたのは、母親の方だった。
「こら、ミーシャ、いきなりなんてことを言うの！」
　だが、そんなお小言よりも自分の好奇心の方が勝るのか、男の子はジロジロと何かを確かめるような目つきで、こちらの顔を見ていた。
　リョウはいきなりのことで面食らったが、それも一瞬のことで、直ぐに噴き出した。
　それは、実に子供らしい反応だった。
　きっと、周囲の大人たちが話すことを聞いていて、疑問に思ったことが口をついて出たのだろう。大人であれば、言葉を発する前にそれが周囲に与える影響を考えるものだが、子供にはそれがない。子供は、実によく大人たちのことを見ているものだ。
「どっちだと思う？」
　笑みを絶やさぬまま、謎々を掛けるように聞いてみれば、
「うーん。そうしてると、女にしか見えないなぁ」
　片手を腰に当てて、少しポーズを取るように小首を傾げている。
　そのちょっとした大人を真似した仕草をリョウは微笑ましく思った。きっと父親か母親がそういった仕草をするのだろう。
「じゃぁ、確かめてみる？」
　次に、そう言って両手を広げてみた。
　要するに挨拶の抱擁を交わせば、その感触から分かるだろうと思ったのだが、男の子は、吃驚したように目を見開いた後、若干、視線を左右へ走らせた。
　そして、ちらりと己が母親の顔を窺う。
　エレーナは、呆れたように顔に手を当てていたが、こちらを見た後に小さく頷いて見せた。
　その顔には、苦笑に似た困惑したような笑みが浮かび、口元は『

ごめんなさいね』との言葉を紡いでいた。
「ふふふ。いらっしゃい。ギュッとしてみれば分かるでしょう？」
促してみれば、男の子はおずおずと身を乗り出してきた。
伸ばされた、まだか細い腕を首に回して、小さな少し高めの体温をそっと抱き締める。
幼い子供特有の柔らかい髪が首筋を擽った。
「どう？　どちらか分かった？」
暫くして、顔を上げた男の子は、小さく頷いた。
目の端がほんのりと赤くなっている。
「……女だった」
小さくとも男の子であるのだ。
今更ながらに自分の取った行動が恥ずかしくなったのかもしれない。
ぽつりと呟いた男の子を片腕で抱えながら、リョウはこちらを見ているもう一人の子にも声を掛けた。
「あなたもいらっしゃい」
開いているもう片方の腕を伸ばす。
すると母親のスカートの裾に隠れていたその子は、パッと明るい顔をすると嬉々として飛びついて来た。
片割れの行為を見て、羨ましそうな顔をしていると思ったのだが、どうやら想像通りであったようだ。
その勢いはかなりのもので、体勢を崩しそうになった所を寸での所で堪えた。
大人しそうに見えて、意外に大胆な所があるようだ。
両手に二人の子供を抱えたまま、リョウは微笑んだ。
「ワタシは、リョウ。お名前はなんていうの？」
「オレは、ミハイル」
男の子の方が誇らしげに胸を張って答える傍らで、
「……カーチャ」
女の子の方は、ややはにかみながら、自分の名前を口にした。

「じゃぁ、ミハイルにカーチャね？」
呼び名を確認すれば、
「ミーシャでいいぞ」
男の子の方から愛称で呼んでもいいという許可が出た。
その上から目線に苦笑い。きっと、いっぱしの口を利きたいお年頃なのだろう。微笑ましくはある。
「ミーシャにカーチャね。宜しくね」
言い直してから、交互に二人の顔を見る。
「二人とも、はじめましての挨拶はどうするんだったかしら？」
そんな三人の様子に目を細めていたエレーナから声が掛かった。
「オレ、知ってるぜ！」
「アタシも！」
言うやいなや両方向から、リョウの頬に柔らかな感触が伝わる。
小さな主たちからの歓待の印に、リョウも同じように感謝の気持ちを返したのだった。
「リョウ！　アクサーナに会いに来たんだろ？　オレが案内してやる」
「アタシも！」
簡単な挨拶を済ませて立ち上がれば、二人から其々の手を引っ張られた。
「こら、ミーシャ、カーチャ」
母親であるエレーナのお小言も右から左。
新しい客人に興奮気味の二人は、さながら小さな旋風（つむじかぜ）だ。
困った顔をするエレーナに心配するなと微笑んで、
「それじゃぁ、お願いするわね」
リョウは二人を促すように繋がれた手にほんの少しだけ力を込めた。

小さな二人に連れられて、居間に顔を出せば、中にいたアクサーナからは、これまで以上に熱烈な歓迎を受けた。

余程、村の女たちと同じ格好をした自分の姿が珍しく映ったようだ。

アクサーナは、矯めつ眇めつ色々な角度から、リョウの姿を眺めた後、リューバと同じような顔をして、【文句無し】と太鼓判を押した。リューバの見立ては、どうやらアクサーナの好みにも合致したようだ。

一頻り興奮の波が去ってからソファに落ち着いた時には、リョウは息も絶え絶えになっていた。

とても翌日に婚礼を控えた花嫁とは思えない程の騒ぎ振りだが、それもアクサーナらしいと言えばらしかった。

「ごめんなさいねぇ、本当に騒がしくって」

お茶を用意していた母親のナジェージュダが、お盆に茶器を乗せてやってくると、人懐っこそうな丸みを帯びた顔に、若干の申し訳無さを滲ませて微笑んだ。

いつも様々な美味しいパンやお菓子を作り出しているふくよかな手が、器用に動いて行く。

「大丈夫ですよ」

それを眺めながら苦笑気味に口にすれば、お茶の準備を手伝っていたもう一人の娘、エレーナも可笑しそうにこちらへ視線を向けた。

「すっかり気に入られてしまったわね」

そう言って喉の奥を鳴らす。

リョウが座ったソファの両端には、エレーナの子供たち、ミーシャとカーチャが陣取っていた。

座る場所を決める時でも、アクサーナと二人の子供たちの間で一

悶着あったのだ。子供には勝てないということで、アクサーナが引き下がることになったが、姪っ子、甥っ子とこのような所で張り合おうとするのだから、アクサーナも大人気ない。

だが、それも仕方がないのかもしれないとその経緯を聞いて思った。

お祭りの期間中、婚礼を控えた花嫁であるアクサーナは、ある種の潔斎期間に入っているのだという。潔斎とは、身を清め、精進するということで、突き詰めれば、表立ってお祭りに参加してはならないという決まりなのだ。

毎年、この期間の為に、村の少女たちの中から、祈りを捧げる為の【乙女】が選ばれた。

【乙女】とは文字通り、未婚の純潔を保持した少女のことだ。その年によって人数は一人であったり、二人であったりとまちまちだが、選ばれた【乙女】は、祭りの期間中、村の片隅にある小さな礼拝堂で、豊作をもたらしてくれた神々に感謝の祈りを捧げることになっていた。その回数や時間にもしきたりがあり、事細かに決められているとのことだった。

大人たちが、大騒ぎをする傍らで、そのような儀式が連綿と続いているのだ。

元々、【収穫祭】の起原は、このような儀式の後に、そこで出された供物を村人たちに下して、調理し、皆で食したことが始まりだとのことだった。

時が下り、今ではその比重がすっかりあべこべになってしまったが、その儀式だけは欠かすことの出来ない神聖かつ重要な行事として脈々と受け継がれていた。

【乙女】は通常、その年に婚礼を控えている若い女たちの中から選ばれた。なので同じ時期に婚礼を控えているアクサーナはまさに格好の的であったのだ。

【乙女】に選ばれた若い女たちは、村人を代表して、今年の豊作を感謝し、そして、来年も実り豊かな年であることを神々に祈る。その大義名分の裏には、婚礼を控えた年若い娘が、祭りの期間中、羽目をはずして怪我などをしないように、そして村を訪れた余所の男たちとの間で間違いが起きないようにとの狙いも隠されていた。

それは、恐らく、この村の長い歴史の中で起こり得た様々な事例に対する対処法でもあったのだろう。お祭りというハレの日は、日頃、抑えつけられている様々な欲求が噴き出す機会でもある。村中に余所から人が入り込み、人々が賑やかになる時を狙って、【駆け落ち】をする場合だってあるだろう。

祭りの期間、【乙女】の役割を担う娘は、その間、自分の家族以外の異性との接触を禁じられていた。言葉を交わすことは勿論、視線が合ってもいけないらしい。かなり厳格な規律だ。

村の礼拝堂へ移動する時も、頭の上から白いヴェールのようなものを被り、村の年配の女たちの中から選ばれた案内人と行動を共にする。

特に、婚礼を控えた未来の花嫁は、未来の花婿である婚約者に逢うことも禁じられていた。

それは、祈りと感謝を捧げる対象である豊穣を担う神々が男神であることから、余計な嫉妬をされては敵わないという理由であった。因みに豊穣の神・リュークスは女神なのだが、そのほかの太陽や風、水といった自然の神々には男神が多かった。

そういうことから、今年、その【乙女】に選ばれているアクサーナは、お祭りに参加することはおろか、婚約者であるデニスにも逢うことが出来ないでいるのだ。

元々、賑やかな性質で、人と騒ぐことが大好きなアクサーナには、神聖で大事なお役目とは言え、少々辛抱のいることであろう。七日間の我慢と言ってしまえば、それまでだが、華やかなお祭りの様子

は、屋内にいても遠く聞こえて来る。
今日は、五日目のフタロイ・ピァーチ（15日）だ。そろそろ、外へ出たいという溜まった鬱憤が、はち切れんばかりに膨らんでいる頃合いに違いなかった。
そう言う時に、外から来るお客は、絶好の発散対象に成り得るのだ。
そして、リョウも、図らずしも、そのガス抜きの役目をかなりの割合で担う形になっていたのだった。

「ねぇ、リョウ、初めてのお祭りはどう？　凄いでしょ？」
対面のソファに腰を下ろし、身を乗り出さんばかりに目を輝かせているアクサーナは、全身、白というよりはもう少し柔らかい生成り色の簡素な服に身を包んでいた。
基本の形は、リョウや村の女たちが身に付けているものと同じだ。
【ルバーシュカ（シャツ）】に【ユープカ（スカート）】、その上に【コーフタ（上着）】を重ね、腰の部分を【レンタチカ（サッシュ）】を捲いて留めている。
ただ、贅を凝らした刺繍の類は一切ない。簡素（シンプル）な中にも厳かさのある儀式用の衣装だった。
だが、良く見てみれば、それに使われている生地は、随分と立派なものだ。
柔らかな光沢を放ち、たわんだ生地は滑らかな襞（ドレープ）を描く。
装飾の類は一切ないが、それが却ってアクサーナの金色に輝く髪と華やかな橙色の瞳の色を際立たせていた。
「ええ。こんなに賑やかだとは思わなかった。やっぱり、聞くのと実際に見るのは違うわね」
ここまでの道のりを振り返り、リョウは自ずと感嘆の溜息を漏らしていた。
「広場には行ってみた？　あそこで焼いている【カルバサ（ソーセージ）】は絶品なのよ！」
好物の【カルバサ（ソーセージ）】という言葉に、部屋の隅でひっそりと控えて

いたナソリの茶色の耳がピクンと動いたのが見えた。
エレーナに逢えて御満悦のナソリも、その子供たちのミーシャとカーチャはどうやら苦手のようで、いつもなら自らを主張するようにその大きな体をリョウの足下に横たわらせるのだが、リョウの両隣りには生憎その小さな天敵がピッタリと寄り添い、人様のお家ということもあり、密やかに部屋の隅に控えていたのだ。
「通りすがりだったけど、いい匂いがしてた」
ここに来る途中、広場の様子は遠目にだが窺えた。美味しそうな匂いも漂ってきていた。
ここまで付いてきてくれたナソリの労に報いる為にも、帰りに一つ貰ってあげよう。
「美味かったぞ。なぁ」
すでに広場に行って貰ったのか、隣のミーシャが声を上げて片割れを見れば、
「うん」
カーチャも嬉しそうに大きく頷いた。
「ああ、やっぱり？　もう、なんで今年なのかしら！」
本来なら、自分が一緒に案内する形で回りたかったのだと地団太を踏んで残念がるアクサーナにその母親と姉は、お茶の入ったティーカップを優雅に傾けながらも苦笑い。
「来年があるじゃない」
「そうよ。今年、大役を終えれば、晴れて【女たち】の仲間入りが出来るんですもの。来年は大手を振って村中を歩けるわ」
もう幾度目になるかも分からない慰めの言葉を口にする。
きっと姉も母親も、その昔、大事な役目を果たした経験者なのであろう。妹の気持ちも分からなくはないのだ。
「ねぇ、リョウ？」
同意を求められるようにこちら側にも話を振られて、リョウは穏やかに首肯して見せた。
「そうですね。お祭りは毎年あるものですから、逃げはしないでし

ょう。でも、アクサーナのこのお役目は、一生に一度きりの大事なものでしょうから。それこそ、またとない機会と言えるかもしれませんね。その衣装を着るのも、この時だけなのでしょう？」

とても良く似合っていると言葉を継いでアクサーナを見遣れば、

「もう、リョウったら」

アクサーナは急に照れたようにはにかんだ。ほんのりと頬が染まる。

急に乙女らしく、しおらしげに変わったアクサーナの姿に、母親と姉は顔を見交わせると可笑しそうに小さく笑った。

アクサーナを御するにはリョウの言葉が一番。

我が娘（妹）ながら、奔放な所のあるアクサーナを見事宥めて見せたその手腕に、二人の中で、リョウの評価が一気に上がったことは、対面でにこやかに微笑むリョウには与り知らぬ所であった。

そんなこんなで、ナジェージュダ特製のお茶菓子を囲みながら、暫く、女子供同士のお喋りに興じていれば、

「エレーナ、そう言えば、キーンは？」

不意に母親のナジェージュダが顔を上げて、姉の方を見た。

「多分、広場の方じゃないかしら？　今朝、ムサカさんに誘われていたから。明日の準備もあるから、そろそろ帰って来て欲しい所だけれど……困ったものだわ」

そう言って、エレーナは窓の外を透かし見た。

話を聞くと、どうやら、エレーナの夫であるキーンは、村の男連中に掴まって中々帰ってこないらしい。エレーナの旦那さんということで、この村の出身でなくとも村人たちの間では身内扱いなのであろう。　絵図らから言えば、法事か何かで久々に実家に帰った折、親戚連中に掴まって身動きが取れなくなるというような按配であろうか。

キーンにはキーンなりの、男ならではの【付き合い】というものがあるのだろう。それは想像に難くなかった。妻であるエレーナも

それを分かっているからこその困惑顔なのだ。
「あの、もしよろしければ、声を掛けて行きましょうか？」
伝言ぐらいなら、リューバの所に帰る途中に出来ると思うのだが。
「まぁ、ちょうどいいじゃない」
「でも、悪いわ、わざわざ」
「ええと、お名前はキーンさんですよね？」
村の男達に聞けば、その所在も直ぐに知れるだろう。
そう思って申し出たのだが、アクサーナはあからさまに渋い顔をした。
「駄目よ。あんな酔っ払いばかりの中にリョウを入れるなんて。時間が来れば帰って来るわよ。キーン義兄（にい）さんだっていい大人なんだし」
「……でも、中々切っ掛けがないのかもしれないわ」
エレーナは、苦笑気味に窓の外へ視線を走らせた。
婿殿は何処にいても中々に気を使うものらしい。
「どうせ帰る途中ですから。駄目元で。お見かけしたら、伝言をしますし、擦れ違いだったら、他の人に言伝を頼んで置きますから」
それならばよいだろう。一言くらい訳は無い。気軽に考えてもらえば良いのだ。
「……なら、お願いしてもいいかしら？」
「はい」
ほんの少しの躊躇いを見せながらも、そう言ったエレーナの言葉に頷き返せば、
「あら、じゃぁ、序でに家の人も見かけたらお願いできるかしら？」
ナジェージュダがその手に齧りかけの焼き菓子を摘みながら、こちらを見た。
「いいですよ。クルスクさんなら、こちらに来る途中でお見かけしましたから」
中央の広場で、【ピーバ（ビール）】の入ったジョッキ片手に仲間たちと肩を組んで、男たちの輪の中で陽気に歌を歌っていた。その調子は所

々外れてはいたが、実に楽しそうであった。
その時の様子を話せば、
「まぁ」
「父さんったら」
「相変わらずね」
その様子が手に取るように分かるのか、妻も二人の娘たちも、何とも言えない顔をした後、可笑しそうに笑いを零し合った。

「そう言えば、まだ、こちらへお伺いした本来の目的を果たしていませんでした」
リョウは、小さく微笑んで懐から小さな包みを取り出すと、徐にアクサーナの前に置いた。
忘れていた訳ではないのだが、お喋りな女たちを前に中々切っ掛けが掴めなかったというのが正直なところだ。
「これを……アクサーナに」
ほんの少しの気持ちだからと前置きをして、持参したお祝いの品を手渡せば、アクサーナは、
「アタシに？　なにかしら？」
興味深そうな色をその瞳に浮かべて、包みへと手を掛けた。
リョウの内心はドキドキだった。
「大したものじゃないけれど」
「……まぁ。……綺麗」
包みを解いて、中身を取りだしたアクサーナは、その掌に小さな光る石の付いた塊を乗せて、感嘆の溜息を吐いた。
「ブローチね？」
エレーナが妹の手元を覗く。
「はい。素人だから、形は少し不格好だけれど」
「綺麗な石だわ」
「すげぇ。キラキラしてる」
「……きれい」

目を輝かせて身を乗り出した子供たちに、
「そうね」
母親であるエレーナも優しく微笑み返した。
「アクサーナの瞳にピッタリじゃない」
ナジェージュダの言にリョウは嬉しそうに微笑んだ。
「森で河原を散策している時に見つけたんです。研いたら、かなり綺麗なものに変わったので」
「ひょっとして、リョウが作ったの？」
アクサーナは吃驚して、目を見開いてリョウを見た。
「ええ」
「……まぁ」
そう言って、感極まったように口に手を当てた。
「ありがとう。嬉しいわ。こんなに綺麗なもの。大事にするわね」
その眦には薄らとだが涙が滲んでいた。
「良かったわね」
「ええ」
存外に喜んでくれたアクサーナに、リョウは内心、安堵の息を吐いた。
大事そうに煌めく石を指で撫でるその仕草に、苦労して作った甲斐があったと喜びを増したのだった。
が、それも束の間、
「デニスに自慢しなくちゃ」
「ふふふ。そうね」
楽しそうに語られる母娘の会話に、リョウは内心、ぎくりとした。
「アクサーナ、それは、……ちょっと不味いかも」
リョウの脳裏には無表情の中にも苦い顔をしたデニスの硬質な顔が簡単に思い浮かんだ。
「あら、どうして？」
「デニスは……きっと……いい顔をしないと思うの」
これまでの経緯から、常日頃から、ことアクサーナに関しては妙

に敵愾心を持たれている気がするのだ。
　困惑するリョウの様子に、話の見当が付いたのか母親のナジェージュダが、急に噴出しだ。すると隣にいたエレーナも訳知り顔で可笑しそうに微笑んだ。
「なぁに、デニスはまだ焼きもちを焼いているの？」
「……恐らく」
　要するに、ここの一家には、かつての【恋文】を巡る悲喜交々が、漏れなく伝わっているらしかった。
「アクサーナがリョウを大好きなのは、この辺りじゃ有名だからね」
「ねぇ、デニスがどうしたの？」
「デニスって、あのデニス義兄（にい）さん？」
　置いてけぼりを食らった子供たちは、自分たちが知る人物の名前が出たことで、その背景を知りたがった。
「どうかしらね？」
　両方から腕を引かれて、話の繋がりを聞いて来た子供たちに、リョウは困惑気味に眉根を下げながら、曖昧な笑みを浮かべたのだった。

黄昏のスカモーロフ

さて、アクサーナたちの所を辞してから、リョウは広場の辺りまで戻って来ていた。

勿論、ナソリも一緒だ。

エレーナとその子供たちからは、念の為、父親であるキーンの特徴を聞いておいた。

それによれば、瞳の色は緑色で、髪の色は少し濃いめの茶色。癖のある柔らかなその髪を後ろで緩く束ねているらしい。長さは背中の中程まであるとか。

顔も体格も割と細めで、村の男たちとは明らかに違うので分かりやすいらしい――というのが妻であるエレーナの言だった。

エレーナたち一家が暮らすのは、ここからは二日程街道を南へと下った所にある大きな街、【シーニェイェ・マルタ】で、この国【スタルゴラド】の北部を代表とする一大商業拠点でもあった。

このスフミとは比べ物にもならない大きな街だ。

【シーニェイェ・マルタ】とは、【三月の藍】という意味で、その名が示す通り、春のある一時期（ここの暦で言えば、【青の第一の月】だ）に咲く花の花弁を原料とする藍色の染料が特産で、それに因んだ糸の染色、織物でも有名な街だった。元々は、この小さな織物の町から発展したらしい。今でも、街ではその特産の藍で染めた糸や織物の生地を扱う店が軒を並べ、それを元にした仕立屋も多いという。

要するに、少し都会的な匂いがする人物を探せばいいのかもしれない。

キーンの職業は、所謂、街の【仕立屋】で、客からの注文に合わせて、洋服を作っているのだと言う。採寸から縫製まで、一切合切

を一人でこなし、店は小さいながらも大きな目抜き通りにあり、その丁寧で繊細な仕事ぶりから中々に繁盛をしているとのことだった。

専ら、作るのは男性用の外出着（晴れ着）が多く、顧客は街の中でも裕福な部類に入る地方貴族や商人が殆どだという。女性物も作るらしいのだが、どうしても刺繍の入らない装飾的には控え目な部類の作りになってしまう為（キーン自身は刺繍があまり得意ではないのだとか）、手掛ける件数自体は余り多くはないのだとか。

そんな大きな街の仕立屋であるキーンとスフミ村のエレーナが知り合った経緯は、傍目にも気になるところであったので聞いてみた所、その昔、まだ見習い時代に父親に連れられて、このお祭りを訪れたのが切っ掛けであったらしい。

街でも名うての仕立屋であったキーンの父親、ゲンナージィは、この村の女たちが晴れ着に施している刺繍の技術とその意匠に以前から興味があり、それらを研究する目的で訪れたのだという。

根っからの真面目で仕事熱心な人であったようだ。

ゲンナージィは、村長のダルジを通じて、村の刺繍を得意とする女たちを紹介してもらった。その中に、ナジェージュダの家もあったのだ。

祭りの期間は、あちらこちらで踊りの輪も出来、周辺から見物人も多く訪れる。

祭りは村人たちが交流を深める場であったが、若い男たちと女たちの出会いの場でもあったのだ。

キーンは、エレーナを踊りに誘った。勿論、親たちの許可を取ってだ。

そうして、かつての若者は、このスフミから未来の伴侶を得ることになったのだ。

二人の慣れ染めは、それ位にして。

キーンとは対照的に、アクサーナとエレーナの父親、そしてナジェージュダの夫であるクルスクは、良くも悪くもこの辺りの男たち

の特徴を備えた【典型的な村の男】であった。
陽気で豪快、酒に目が無く、家族思いの優しい【親爺さん】だ。男にしては、やや涙もろいのが玉に瑕だが、それも御愛嬌というところであろう。
たっぷりと顔を覆う髭は、妻や娘たちの躾の賜物か、いつも綺麗に整えられており、陽に焼けた肌に明るい黄金色の瞳。その目尻には歳相応の深い皺が刻まれていた。
外見は、その人物の人となりをよく表すとは言うが、クルスクはその類に漏れず、リョウの目から見ても、【気さくでお人好しの優しいおじさん】だった。

ぐるりと広場を見渡せば、行きと同じような光景が広がっていた。テーブルの周りには、村の男たちが相変わらず、赤ら顔で陣取り、賑やかに御馳走に舌鼓を打っている。
さてさて、これだけ人が多いと探すのも至難の業かもしれない。
今更ながらに、内心、早まったかと思っていると、
「お嬢さん、おひとつ、いかがかな？」
流れる曲に合わせて、軽やかにステップを踏みながら、踊りの輪から抜け出してきたのか、流しの道化師【スカモーロフ】が、その手に小さな花を差し出してきた。

【スカモーロフ】は、お祭りに合わせて、方々からやって来るこの国の【道化師】の総称だった。
流しの楽団・吟遊詩人たちと同じく、祭りや宴会には付き物の存在で、村が直接、懇意にしている人物に依頼をする時もあるが、大体が、祭りの噂を聞きつけてやってくる。
普段は、街から街を渡り歩き、人が集まる場所であれば、そこを生業の場にした。酒場や広場で一曲を披露したり、曲芸を見せたり、各人が持つ芸に依ってそれは様々だ。
リョウ自身、話には聞いていたが、【スカモーロフ】という人た

ちを見るのは、これが初めてだった。
軽やかな身のこなしでやって来た【スカモーロフ】は、ひょろりとした男のようで、顔の右上半分を仮面のようなもので覆っていた。反対側の左半分には、髪の毛が掛かっている為、その表情は判らなかった。
真っ直ぐで癖のない、明るい茶色の髪がさらりと靡いた。

リョウは慇懃な仕草で差し出された【スカモーロフ】の手を見下ろして、一瞬、息を飲んだ。
その手には、小さな黄色い花が一輪、収まっていた。
目の前にある小さな黄色い花。それは紛れもない、薬師たちの間では【ジョールティ・チョールト(黄色い悪魔)】と呼ばれている【毒草】の一種だった。
過日、森の狼たちであるアラムとサハーと薬草採りをした折にも、二頭からは口を酸っぱくする程に注意をされた。その記憶は、まだ新しいものだった。
その花は、見た目は小さくて可憐だが、その中にある赤みを帯びた花弁と花粉には、人や獣にとって毒となる成分が含まれており、それを吸い込んだり、口にしようものなら、痺れやだるさ、時には幻覚が症状として現れ、人の体質に依っては、ひきつけ(ショック症状)を引き起こし、死に至る場合もあるという。
だが、幸いにして、その花は、人が暮らす場所では滅多に見ることが無いというのが、アラムとサハーの言だった。
小屋に戻ってから、セレブロにも聞いてみた所、人はその花の毒を抽出して、暗殺に利用するらしい。　毒草としては『知る人ぞ知る』という代物で、それを用いた場合、通常に巷で流布しているような一般的な毒物を使った場合に比べて、その痕跡が残らない為、原因が特定しづらく、自然死に近い形に見せかけられるからだという。

いきなり、目の前にそのような曰くつきの物騒なものを突き付けられて、リョウは緊張に神経を逆立てた。

この【スカモーロフ】は、これが、なんであるか知っているのか。

このような危険なものを何処で見つけたのだろうか。

何も知らない村人たちから見れば、単なる可憐な黄色い花で済まされる。珍しい赤みを帯びた花弁に興味を引かれる場合だってあり得るだろう。間違って子供が手にしようものなら、それこそ大変なことになる。

偶々、この辺りでも生えていて、それを知らずに摘み取ったものであったとしたら。

それはそれで大変だ。

リョウは、細心の注意を払いつつ、その真意を測るかのように、じっと【スカモーロフ】を見た。

だが、仮面と髪の毛で覆われた目元からは、相手の表情が分からなかった。

小首を傾げて、道化師特有の浮ついた仕草で、こちらの出方を待っている様だ。

不意に下りた沈黙に、楽師の鳴らす【グースリ（竪琴）】の音が響いてきた。

すると、固まったままのリョウに、【スカモーロフ】が一歩、踏み込んだ。

「おや？　お嬢さんには、こちらはお気に召しませんでしたかな？　お近づきの印にと思ったのですが……」

そう言って、空いていたもう片方の手を胸に当てて、実に哀しげな空気を醸し出しながら、小さな花が付いた細い茎を摘んだ指先をほんの少しだけ揺らした。

それは、余りにもあからさまで、人を食ったような態度に思えた。

【スカモーロフ】の口元が薄らと弧を描いた。

リョウは、内心、薄ら寒いものを感じていた。

相手の意図が全く掴めなかった。
この男が手にしているモノは、偶然なのか、それとも故意なのか。
故意であれば、何故、それを自分に渡そうとするのか。性質が悪いにも程がある。
心の内は、高速で実に様々な思考が渦を巻いている。
だが、それを極力表に出さないように気を付けて、出来る限りの微笑みを張り付けた。
「いいえ。そんなことはありませんよ」
上手く笑えているだろうか。
リョウは、【ユープカ（スカート）】の中から、そっと小振りの【プラトーク（ハンカチ）】を取り出した。
そして、それを広げると【スカモーロフ】の手ごと上から覆い、中に黄色い可憐な花を閉じ込めた。
その瞬間、相手の指先が微かに動いた。
だが、そんなことはおくびにも出さず、
「おやおや、折角の綺麗な花を閉じ込めておしまいになるとは。やはり、お気に召さなかったのですね」
如何にも残念そうな声を出した【スカモーロフ】に、リョウも最大限の微笑みを浮かべ返した。
「ふふふ。そんなことはありませんよ。折角の綺麗なお花なのですもの。人目に晒すのが惜しいのですよ。綺麗なものは一人でひっそりと愛でたい性質なんです。どうもワタシは少し欲張りなようです」
そう答えを返していた。
だが、ハンカチ越しにも、未だ相手がその手を放していないのが分かった。
リョウは相手の仕草を真似るように鷹揚に首を傾げて見せた。
「……ワタシに頂けるのではありませんか？」
「ええ。もちろん」
【スカモーロフ】は、にっこり笑うと――――口元だけから察するしかないのだが――――パッと手を放し、軽やかに一歩、後方へ

ステップを踏んだ。

そして、流れるような優雅にさえ見える所作で、そのまま踵を返そうとする背中に、リョウは声を掛けた。

「あの、一つだけ、いいですか？」

「何ですかな？　異国のお嬢さん？」

【スカモーロフ】は、その場で足を止めると、首だけ振り返った。

その瞬間、隠れていた筈の左半分の顔が顕わになる。

さらりと揺れた癖いの無い明るい髪の間からは、額際から斜めに上下に走る引き攣れた刀傷があった。そこから覗く切れ長の目は、少しくすんだ赤みを帯びた不思議な色合いだった。

その薄らと濁りを帯びた色を見て、その目は、もう光を宿してはいないのかもしれないと感じた。

顔の輪郭が少しでも分かったことに、リョウは内心ほっとしていた。相手は尚も得体が知れないことには変わりがないが、仮面越しよりは、少しでもその素顔が知れた方が、【人】と接している気分になれる。

素顔が顕わになったことで安堵に似た微笑みを浮かべた異国風の顔立ちをした髪の短い女へ、【スカモーロフ】は、物珍しそうな視線を反対の仮面の下から向けていたが、それをリョウは感じることが出来なかった。

「場合によっては高く付くかもしれませんよ？」

【スカモーロフ】の引き攣れた目が、こちらの反応を見るようにうっそりと細められた。

「それは……あなた次第、ということですか」

だが、ここであっさりと引き下がるわけにはいかなかった。

「ふふふ。ワタシは何分、気まぐれな性質でしてね」

「では、気まぐれ序でに、気が向いたら教えて頂きたいのですが……」

そう前置きをしてから、リョウは一番知りたいと思っていた核心

へと切り込んだ。
「この花は、この村で見つけたものですか？」
【プラトーチカ（小さなハンカチ）】に包まれたままの見えない花を持つ手を掲げる。
その問いに、【スカモーロフ】は立ち止まったまま、顎に手を当てて天を仰いで見せた。
そして、『ああ』と口にすると大業な仕草で、拳を反対側の掌で軽く叩いて受けて見せた。
合点をした時の、如何にもな胡散臭い態度ではある。
リョウは、次に紡がれるであろう言葉を静かに待った。
「そちらですか。その花はですね。ここに来る途中に見つけたモノでしてね。余りに綺麗だったもので、一つ摘んで置いたのですよ」
そう高らかに告げると懐から小さな横笛を取り出して、口に当てた。
ヒューという甲高い微かな摩擦音の後、不思議な旋律がその笛から流れて来た。
そして、【スカモーロフ】は、何事も無かったかのように静かに背を向けると、現れた時と同様に、自らが奏でる弾むような輪舞に相応しい曲に軽やかに己が歩調を合わせながら、再び、楽師たちが集まる踊りの輪の中へと入って行った。
リョウは、千鳥足さながらに右へ左へと揺らぐ、道化師のその態とらしい足取りと、そんな中でも上体はぶれることなく真っ直ぐに保たれたままのしなやかで線の細い背中を眺めていた。
この祭りに合わせてか、柔らかい生成り色の上下に茶色の【ジレ（チョッキ）】を重ねて、腰から長く足らされた色とりどりの派手な【レンタチカ（ツッシュ）】の裾が、男がステップを踏む度にはらりはらりと風に舞う。
そのリズムに、鈴を脚に括りつけた別の踊り子たちが舞う輪舞の音色が、混ざり合って行った。
『リョウ』
黙って道化師との成り行きを見守っていたナソリが、注意を促す

ように小さく、一つ吠えた。
それで、リョウは漸く我に返り、視線を村人たちが楽しそうに踊る輪舞の輪から、自らの足下に控えている大きな茶色い毛並みへと移した。
『胡散臭い奴が入り込んで来たものだ』
いかがわしいものを見るようにナソリの目が、先程の【スカモーロフ】を追っていた。
結局のところ、いい様にはぐらかされてしまったように思う。
【ここ】に来る途中で見つけた――――ということは、どちらにでも取れる。
【ここ】が【この場所】なのか、それとも【スフミ村全体】のことを指しているのか。
それとも、そのどちらでもない単なる方便であったのか。
答えは謎のままだ。
「ねぇ、ナソリ。【スカモーロフ】って、みんな、あんな感じなの？」
後味の悪さを払拭するように、ナソリへと問い掛ければ、
『さあてな。人にもよるだろうが』
そう言って、遠く踊りに興じる道化師たちの方へ視線を向けてから、鼻を鳴らして見せた。
『リョウ。それは……』
ナソリに聞かれて、リョウはその視線の先にある手にした【プラトーチカ（なハンカチ）】の包みを見下ろした。
ナソリの鼻がヒクリと動く。そして、あからさまに顔を顰めた。
『何やら嫌な匂いがするぞ』
流石、獣の嗅覚は敏感だ。
「だろうね。これは【ジョールティ（黄色い）・チョール（悪魔）ト】だと思う。見間違いで無ければ」
リョウは、もう片方の手でハンカチを覆った。
『なんだと！』

「この間、アラムとサハーに聞いたばかりだから」
『あれは、この辺りでは見かけないはずだぞ』
それを聞いて、リョウは小さく息を吐いた。
「やっぱりそうなんだね。だから、少しおかしいなって思って。万が一、この辺りであったら大変でしょう？　だから、一応、聞いてみたんだけれど……」
結局、肝心な所は分からないままだ。
あの【スカモーロフ】は何を考えていたのか。何がしたかったのか。
もし、これを渡された人がこの花のことを知らなくて、匂いを嗅ごうと顔を近づけて花粉を吸い込んでしまったら。
もし、あの【スカモーロフ】が確信犯的な愉快犯で、人が苦しむところを見るのが好きな嗜虐趣味のある輩だったら。そして、手渡された人が、その後どうなるかをこっそりと影から覗こうという魂胆であったとしたら。
――――――最悪だ。
一旦、考えはじめたら、様々な可能性が湧いて出て来る。
一歩間違えば、自分がその対象に成り得た。それを考えるとぞっとした。
『リョウ、顔色が悪いぞ』
直ぐに心の内を指摘されて、リョウは苦笑した。
いずれにせよ。ここで、一人で考えていても仕方がないのだ。もしものことを考えて、リューバに相談する方がいいかもしれない。最悪の事態を予想して、その対処もしておかなくてはならないだろう。解毒剤は、確か、この間持参した薬草の中に使えるものがあった筈だ。それを確かめておかなくては。
そして、あの【スカモーロフ】の方は、村の自警団・団長であるジューコフ辺りにでもそれとなく注意を促して置こう。自分が出来る範囲は限られているが、何もしないよりはまだいい。

そうと決まれば。まずは、これだ。
リョウは顔を上げると、早速、自らがしなければならない優先事項に手を付けることにした。
「アトラーヴィチ（解毒）　ザメルザーィ（凍りつき）　サフラニャーィ（封じ込めよ）　タ　ヴレーミ（かの時）　ヤ（を）　イ（そして）　イスチェザーィ（消えよ）」
小さく呪いの言葉を囁きに乗せて、リョウは花を包んでいる【プラトーチカ（ハンカチ）】越しにそっと息を吹きかけた。
そして、頃合いを見てから、再びその小さな包みを開けば、そこには、ガラス細工のようにカチカチに固まった小さな黄色い花が横たわっていた。
これで、その花粉が落ちることも花弁が舞うこともない。匂いも封じられている。
このままリューバの所に持って行き、その後の処理を仰ぐことにした。

曰く付きのモノをポケットに忍ばせると、リョウは気分を入れ替えるように小さく両手を叩いた。
「さて、まずはクルスクさんとキーンさんを見つけなくちゃね」
伝言をさっさと済ませて、リューバの元に帰らなくては。
『そうだな』
そして、気持ちも新たにリョウとナソリは、人が集う村の広場の中心へと足を向けたのだった。

黄昏のスカモーロフ（後書き）

さて、スカモーロフの真意とは何だったのでしょうか。その件についてはまた後で。次回はアクサーナのお父さんが登場です。

ちなみに、スカモーロフ（ｏｒスコモーロフ）とは古代ロシア（古代スラブ世界）での道化師たちの総称です。

父の背中

男たちが集うテーブルに辿り着けば、ナデェージュダの夫であるクルスクの姿は直ぐに見つかった。

行きに見た時と同じ場所にいたのだ。

ここでは、酒で弛緩した意識と共に時間がゆっくりと流れている。

「クルスクさん」

傍まで行って、周囲の喧騒に負けないように声を張り上げれば、クルスクは椅子に座ったまま身体を捩って振り返った。

女にしては短い黒い髪を揺らす晴れ着に身を包んだ若い女を見て、クルスクは暫し、目を瞬かせたが、その顔立ちをまじまじと見れば直ぐに合点がいったようで、眦に深い皺を刻むと蜂蜜のようにとろりと相好を崩した。

「リョウじゃないか！　……こいつは驚いた。えらく別嬪になっちまって……ってアクサーナの話じゃぁ、そっちが本当なのか。いやぁ、参ったなぁ。おじさん、柄にもなく胸がドキドキしてきたよ。ちょっと飲みすぎたかな。アハハハ。……それにしても、あの坊主がこんなになっちまうたぁ。いやはや、まるで別人と話をしているみたいだなぁ」

まるでどこかの誰かのように（とはアクサーナのことだ）、そう一息に捲し立ててから、おどけたように肩を竦めて、心臓の辺りに手を当てて見せた。

クルスクもとんだ役者である。

そんな相手に苦笑気味に合槌を打ってから、

「そんなに違って見えますか？」

リョウとしては、そちらの方が不思議で仕方がなかった。

「ああ、天と地ほども違うさ」

「でも、中身は一緒ですよ？」

「ハハハ。そのようだね」

おじさんはちゃんと分かっているさ――――とでも言いたげに茶目っ気たっぷりに片目を瞑って見せる。

それからクルスクは、いいことを思いついたとばかりに顔をパッと輝かせた。

「ちょうどいい。そこでくるりと回って御覧。おじさんに良く見せておくれ。こんな時でもなきゃぁ、拝めないんだろう？」

普段ズボンばかり穿いていることを揶揄された。

「回れって、そんな……」

――――小さな少女ではあるまいし。

いい年をした大人がそのようなことをしても痛々しいだけなのだが。

と思ってみたところで、向こうはこちらの実年齢を知らないのだから仕方がないのかもしれないということに思い至る。

外見だけなら実の娘であるアクサーナとそう変わりなく見えるのかもしれない。

躊躇いを見せるリョウに対し、酒がいい具合に回ったクルスクは、いつになく気が大きくなっているようだった。

「おやおや、恥ずかしがることないだろう？　実によく似合っているさ。おじさんが言うんだから間違いない」

そう言ったかと思えば、まじまじとリョウが身に付けている【コーフタ（上着）】を見て、

「そいつは……、ひょっとしてリューバのかい？」

いきなり飛んだ話題に素直に頷けば、

「そうかい、そうかい。道理で見たことがあると思ったさ。リューバも昔は細かったからなぁ。今では見る影もないがね。アハハハ。……って、ここだけの話だよ。いや、しっかし、良く見ると、あん時のリューバよりも細いか、こりゃぁ」

そんなことをぼやきつつ、にやけ顔で大きな手を腰の辺りに伸ばそうとする。

当の本人が耳にしたら怒るであろう台詞もうっかり飛び出して、リョウは内心、どうしたものかと途方に暮れた。
「ああ、リューバも若い頃は美人だったからなぁ」
クルスクの隣に座っていた仲間のイオーシフも懐かしそうに目を細める。
本人が居ないのを言いことに言いたい放題だが、それも気の置けない内輪だから出来ることだ。
「今だって、十分綺麗じゃないですか」
クルスクの手をさり気なく交わしつつ、リューバの名誉の為にもキラキラと光る円らな翡翠色の瞳を思い浮かべれば、
「そりゃぁ、そうだが。やっぱり若いうちが花だろう？」
「そうさ、女は若いうちが一番。何せ弾力が違う」
「なんてったってピチピチだからな」
テーブルを囲んでいた誰かが発した台詞に、周囲の男たちがどっと沸く。
あちらこちらでガハハハと下卑た明るい笑い声が弾けた。
――――確かに。
肉体的な、物理的な面だけを見れば、若さに勝るものはない。それは分かるのだが……。
男たち同士であるからそんな口説も出るのだろうが、後で家に帰って、事の顛末を耳にした奥さんたちにどやされなければいいのだがと要らぬ心配をしそうになる。
ここの村の女たちは、往々にして皆、強くて逞しいのだ。家の中での【主】は、大黒柱である男たちだが、その姿は妻の支えがあってこそのもので、実質的にその家の実権を握るのは、女たちである。
ここに来てからそんな例を沢山目にしてきていた。
「つぅことで。そこのお若いお嬢さん、おじさんたちにちょっとお酌をしてくれねぇかねぇ」
「お、若いのが来たか。いいねぇ」
「酒がもっと美味くなるぜ」

爛々と好奇に満ちた視線を向けられて、リョウは内心たじろぎそうになった。

何だか、以前にも似たようなことがなかったか？

既視感のある光景に、三月ほど前の砦での宴会の様子が重なった。

だが、こちらの方が、居並ぶ顔触れも年季が入っている分、アクが強い。

あの若い兵士たちも年を取るといずれはこういう風になるのだろうか。いや、兵士達と村の男たちでは身を置く世界が違うか。

その軌道は、願わくば、重ならないで欲しいものだなどと希望的観測を試みてみる。

どこか遠い目をしてあらぬ方向へ意識を向けていれば、

「よし、そうと決まりゃぁ、嬢ちゃん、こっち来いや」

村でも大酒飲みで有名なフセボラドが、だみ声を張り上げて、こちらに手を振っている。

ふさふさとした白いものが多く混じった眉毛の下には、艶やかな頬が光って見えた。

目が合ったフセボラドは、普段からあるかなきかの如き細い目をそれこそ糸のように細めている。

そんな好々爺しかりの姿を見て、こうなっては仕方があるまいかと肩を竦めた。

『リョウ。酔っ払いなど相手にせずともよい』

苛立たしげにナソリが吠えれば、

「おいおい、お嬢さんにゃぁ、騎士様がいらっしゃるぜ」

「あ？」

「ナソリじゃないか！」

「リューバんところの番犬か？」

「……ってことはリューバん所の子か」

「馬鹿言え、あそこは息子が二人だろう。女の子はいないぜ」

「じゃぁ、あいつらが恋人を連れて帰ってきたのか？」

「漸くか。今までは女っ気が無くて、リューバも気を揉んでたみたいだったが、とうとうか」
「こいつは目出度い」
「それなら、飲まねぇとな」
そんなことを口々に言って、やんややんやと騒ぎ始めた。
話は次から次へと脱線し、既に収集が付かなくなっている。
男たちの間では、リョウの存在はリューバの二人の息子たち、どちらかの恋人であろうという話に落ち着いていた。
こうやって噂は、尾ひれえひれが付いて独り歩きを始めるのだろう。
一先ず、運よく、こちら側から意識が逸れたことにリョウは安堵の息を吐いた。

集まって来た男たちは、皆、その手に酒の入ったジョッキやグラスを持っていた。反対側の手には、旨そうな脂を滴らせている焼いた骨付き肉や薄くスライスしたパンにチーズや野菜を乗せたオープンサンドのようなものを摘んでいる。
テーブルには、所狭しと様々な料理が並んでいた。
「ほら、パイが焼けたよ。熱々の【ピラジョーク】だ。揚げたてだよ」
威勢の良い声が響いたかと思うと、別の場所で料理を作っていた村の女たちの内の一人だろう、一人の着飾った女性が、その逞しい感さえある肉付きのいい腕に大きな皿を抱えてやってきた。
ホカホカと湯気を立てて置かれた大皿に、皆の視線が釘付けになる。
ゴクリと唾を飲み込む音が聞こえた。
「インナ、こっちに一つ頼む」
「どれにするんだい？」
「何でもいいぜ」
「ああ、こっちにゃぁ二つだ。【グリビィ（キノコ）】が入ったヤツと【ミャ（肉）

ーサ】が入ったヤツだな」
「はいはい。お次は？」
器用に方々から掛かる声を捌いて行くインナの姿は、実に圧巻だった。
ここのいる男たちは、脇に積み上げられた骨の塊や皿の数を見る限り、既にかなりの量をその胃袋の中に納めていると思われるのだが、よくそんなに入るものだ。底なしかに見えるその胃袋と飽くなき食欲は、実に驚異的であった。
見ているだけなのに腹が膨れてきそうだ。
ぼんやりと半ば呆気にとられるようにして突っ立っていれば、
「リョウ、あんたも一つどうだい？」
湯気を立てる【ピラジョーク（小さな揚げパンに似たパイ）】を差し出された。
鼻先をいい匂いが掠める。それに呼応するように腹の虫が一つ音を立てた。
「頂きます」
リョウも御相伴に預かろうと手を伸ばしていた。
「あの【カルバサ（ソーセージ）】を一本貰えますか？」
ナソリの分も頼む事を忘れない。
視界の隅でナソリの尻尾がピンと立ったのが見えた。
「ああ。いいよ。ほら、こっちにあるから、たんとお食べ」
「ありがとうございます」
『気が利くな』
ナソリは手渡された好物に、待ってましたとばかりに勢いよく齧り付いた。
そうして小腹を満たしてから、リョウは徐にクルスクの方へ向き直った。
「クルスクさん。この度のアクサーナの御結婚、おめでとうございます」

今更ながらだが、きちんとした挨拶をしていないことに気が付いたのだ。
姿勢を正して、祝いの言葉を口にすれば、
「なんだい急に改まって」
クルスクは、面映ゆそうに小さく微笑んだ。
「ああ。ありがとう。あの跳ねっ返りもとうとう嫁に行くことになったよ。これで漸く肩の荷も下りたってもんだ」
そう言って、静かに【ピーバ（ビール）】の入ったジョッキに口を付けた。
言葉とは裏腹に、その横顔は言い知れぬ寂しさを抱えているように見えた。
「寂しくなりますね」
家族が一人、家の中から居なくなるのだ。それまで当たり前にあった賑やかで軽やかな笑い声が直ぐ傍で聞こえなくなるのは、きっと家の中にぽっかりと穴が開いたように感じられるかもしれない。こんなにも部屋が広かっただろうかと、長年住み慣れた自分の家に首を傾げるかもしれない。アクサーナの存在は、クルスク、ナジェージュダ夫妻にとっては、眩しく差し込む陽の光のように掛け替えのないものであろうから。
リョウの脳裏には、不意にガルーシャと決別した直後のことが思い出されていた。
あの時は、小さな森の小屋が、とても広く感じられたものだった。ある筈のない原形をつい探してしまって、そんな自分がどうしようもなく滑稽にさえ思えた。
今でもそうだ。頭では分かっていても、染みついた習慣は反射的で中々治らない。小屋の中は、そこかしこに故人のもので溢れかえっているし、そこからガルーシャの息遣いが聞こえるのだから。
「そんなこたぁないさ」
強がって見せても、
「何、言ってるんだ。今にも泣きそうな面しといて」
付き合いの長い村人たちには、クルスクの心の内が手に取るよう

に分かるようだ。きっと同じ思いを抱いた【かつての父親】もいる筈だ。

「馬鹿を言え」

そう言って、グイとジョッキを呷ったクルスクの目尻には、薄らとだが涙が滲んでいた。

花嫁の父というものは、複雑だ。手塩に掛けて育てた娘が巣立って行く。

それは、きっと晴れやかで誇らしくあると同時に、一抹の寂しさを残すものでもあるのだろう。

唯でさえ、涙もろいクルスクのことだ。今日の内でこれでは、明日は盛大な滝が出来るかもしれない。

それに引き換え、母親の方は割とあっけらかんとしたものだった。エレーナの時のように離れた場所に嫁ぐ訳でもない。同じ村の中だ。それが心理的にも強みになっているのだろうが、先程、一緒にお茶をしたナジェージュダの顔には、娘の幸せを願う喜びの表情しか浮かんでいなかったように思えた。

鼻を赤くしたクルスクを見て、周りにいた男たちは宥めるように言葉を掛けた。

「さぁさぁ、目出度いことなんだ。いつまでも、んな腐った顔してんな」

「さぁ、飲め。今日はとことん付き合ってやるから」

「おい、あっちから歌、歌うやつでも呼んで来い。いや、バラライカ弾きでもいい。こう湿っぽくちゃぁいけねぇぜ。おら、ここは一曲と行こうや」

その声に男たちの一人が、踊りの輪が出来ている辺りにいる楽師たちへ合図を送る。

「おい、クルスク。涙は明日に取っておけ」

止めを刺さんとばかりにイオーシフから言われて、

「分かってるさ」
クルスクは、照れ隠しだろうか、大きなお世話だとばかりに眉を顰めると頬の辺りを大きな拳で擦った。
「おい、ダフネ！　お前、なんか歌えや！」
一人が声を上げれば、
「それでは御指名を受けましたので」
ゴホンと一つ大業に咳払いをしてから、年配の男が一人、立ちあがる。
「よっ、男前！」
「いいぞ！」
「待ってました！」
次々と上がる周りからの野次に手を上げて応えると、朗々とした深みのある声で歌い出した。
赤ら顔で腹が出た少し冴えない親爺の姿からは想像が付かない程にいい声だった。
それは、どこか哀愁の漂う旋律だった。
テーブルに着いていた男たちは、皆、いつの間にか、騒ぐのを止めて、歌に聞き入っていた。中には目を閉じている者さえいた。
リョウも、暫し、その歌声に耳を傾けた。

ダフネが素晴らしい喉を披露すると周りからは一斉に拍手が沸き起こった。
そして、今度はその余韻を引き継ぐかのように流しの楽団の中から別の歌い手が【グースリ（竪琴）】を胸に弾き歌いを始めた。
引き継がれ、色を変えた次の流れに、
「クルスクさん、ナジェージュダさんから家に帰るようにとの伝言です」
中々にタイミングが掴めずに言いだせなかった一言を口にすれば、クルスクは目尻に溜まった【心の汗（泪）】をそっと節くれ立った指で拭うと、ゆっくりと頷いた。

「ありがとう、リョウ。その為にわざわざ寄ってくれたんだね」
それに小さく微笑み返せば、
「折を見て戻るとするよ」
そう、ひっそりと笑った。
「ところで、エレーナさんから、旦那さんのキーンさんにも同じような言伝を言い遣って来たんですが……」
話に聞いていたキーンらしき人物を探して、辺りを見渡せば、クルスクも同じように周囲へ視線を走らせてから、とある一点を指し示した。
「ああ、あそこだ。キーンならあの中にいるよ」
この場所から少し離れたところにある一角に、同じようにテーブルを囲む男たちの集団があった。
目に入る顔触れは、ここよりも少し若そうだ。
その中に、束ねた髪を背中に垂らした男の後ろ姿が見えた。
「それでは、ワタシはこれで。あちらに声を掛けて行きますね」

そう言って、踵を返した背中に声が掛かった。
「リョウ」
「はい？」
振り返ってみれば、クルスクは、先程とは打って変わって穏やかで真摯でさえある表情を浮かべていた。
「いつもありがとう。これからもあの子をよろしく頼む」
その役目は、新郎であるデニスが引き継ぐのであろうが、父親であるクルスクの娘を思う一言に、言いたいことは十分伝わった。
リョウは、穏やかに微笑みを返すことで、それに応えた。
「明日もまだいるんだろう？」
「はい。勿論です」
今回の訪問の目的は、アクサーナの婚礼に出席することなのだから。
「それじゃぁ、また明日だね」

「そうですね。クルスクさんも余りお過ごしにならないように」
「ハハハハ、分かってるさ」
そう言って、手を軽く一振りして見せたのだった。
そして、傍らで骨をしゃぶっていたナソリを促して、リョウはクルスクに教えて貰った一角へと足を向けたのだった。

父の背中（後書き）

２０１１／７／３０　改訂

クルスクから教えてもらった場所に行けば、エレーナの旦那さんであるキーンの姿は直ぐに見つかった。話に聞いていた通り、細面の全体に柔和で優しい空気を纏った人で、村の男たちとは明らかに系統が違う。大きな街の仕立屋らしく、身に付けている晴れ着も控え目な装飾と色遣いながらも繊細でどこか垢抜けた匂いのするものだった。

エレーナからの言葉を伝えれば、キーンはあからさまにほっとしたような表情を浮かべた。

目が合えば、ひっそりと苦笑い。

どうやら、腰を上げる機会を探しあぐねていたようだ。

「ありがとう。助かった。恩に着るよ」

柔らかに細められた瞳の色は、双子の子供達と同じく淡い緑色をしていた。

「お礼ならエレーナさんに。心配をしていたようですから」

「そうか。妻と子供たちには会ったのかい？」

「はい。アクサーナに用事が合ったものですから」

そう答えれば、少し考えた後、

「キミは……ひょっとして、リョウ……かな？」

どうもこちらのことは、あの家族内では筒抜けの様だ。

「はい」

名前が出たことに苦笑気味に返事を返せば、

「そうか」

キーンは何やら納得するように頷いてから、周りにいた若い男たちに声を掛けた。

「アリョーシュ」

「あ？　もう行くのか？」

「ああ。お呼びが掛かったからな」
「分かった」
「えええ、もう少しいいだろ」
「これからじゃねぇか！」
遠くキーンを引き留める声が聞こえて来る。
それを適当にあしらって。
「じゃぁ、またな」
「ああ。そっちも余り調子に乗り過ぎるなよ」
それとなく相手を気遣う素振りを見せて、男たちと話を付けるとこちらを振り返った。
「それじゃぁ、リョウ。キミも」
「はい。また明日ですね」
和やかに別れの挨拶を交わして、洗練された身のこなしの背の高い男の後姿が、瞬く間に小道の向こうへ消えた。

一人、その場に残ることになった村の女達と同じ伝統的な衣装に身を包んだまだ年若い娘に、周囲の男たちは俄かに色めきだった。
「おや。お嬢さんはこっちに残ってくれるのか？」
「おおお、大歓迎だぜ」
「さぁさぁ、こっちへどうぞ。何分むさ苦しいとこではありますが。ささ、何かお飲みになりますか？」
吐く息に酒の匂いが混じり、大分舌の滑りが良くなった男たちに、リョウは半ば呆れたような顔をして見せた。
普段とは真逆の掌を返したような持て成し振りだ。それにやたらと親切でもある。言葉使いも余所行きな感じで、普段の調子を知っているリョウにしてみれば、実に妙な気分だった。
違和感に背中が痒くなりそうだ。
それにしても。これだけ至近距離で接していても、気が付かないものなのだとある意味、感心した。
人がどれ程、【型】に嵌ったものに重きを置き、外見はその第一

のものであるが、それを基準に判断をしているのかが分かる。
その特徴は、やはり男たちの方が顕著だった。
「見ない顔だね。この村の子じゃないのかな。どこから来たんだい？」
「ああ。こんな綺麗な子はここいらじゃぁ見たことが無い」
「お嬢さん、お名前は？」
「誰とここに来たんだい？」
「どこかの親戚筋かな？」
周囲に集まって来た男たちの興味津々な眼差しに、リョウは隣にいたナソリとそっと顔を見交わせた。
『全く。現金な同胞(はらから)よ』
ワフと息を吐いたナソリに、テーブルにいた男たちの中から、セミョーンが目敏く気が付いた。
「あれ？　お前、ナソリじゃねぇか。どうした。こんなとこで」
「あ？　ナソリ？　どれ」
その意外そうな声に、奥にいたジューコフが首を伸ばして、その精悍な顔を覗かせた。
ナソリの姿にジューコフの眉がひょいと上がる。
そして、その視線がナソリの隣に立つ年若い女に向いた。
目が合ったリョウは、試すようににっこりと微笑んでみた。
鋭い観察眼を持つジューコフなら分かってもらえるだろうか。そんな思いもあった。
ジューコフは、一瞬、虚を突かれたような顔をした。
「ジューコフ、ちょっといいですか？」
小さく招くように手で合図を送れば、放たれた声を聞いてか、まだ年若い未来の長はぎょっとしたような顔をして立ち上がると、怪訝そうな表情を崩さないまま、こちらにやってきた。
急に自分たちが良く知るジューコフの名前が呼ばれて、その周りにいた連中は黙っていなかった。
「あ？　何だ、ジューコフの知り合いか？」

「ずりぃぞ、紹介しろよ」
「黙ってやがったな」
「水臭ぇぞ」
やんやと沸く野次を無言のまま、その大きな手を一振りすることであしらって、ジューコフは傍まで来ると躊躇いがちに低い声を出した。
「……まさか、……リョウ……か？」
「ご名答」
信じられないとばかりにジューコフは髭の綺麗に剃られた頬をつるりと撫でた。
すっかり酔いが醒めたような按配だ。
「何やってんだ。こんなところで」
「何って……。お祭りの様子を覗きに。アクサーナの所に行って来たんですよ。その帰りに伝言を頼まれまして」
「そうじゃなくてだな」
ジューコフは、ガシガシと明るい赤みがかった己が髪をかいた。
「その格好は」
「ああ。これですか？　これはリューバがお古を仕立て直してくれたんです」
「そうじゃなくて」
若干の苛立たしささえ滲んだ言葉にリョウははたと思い至った。
何故か、微妙に噛み合わない会話に、其々が立つ前提条件が違うのではないかと。
「あの、ひょっとして、ダルジさんから聞いてはいませんか？」
「何がだ？」
訊いてみれば、案の定、怪訝そうな顔で見下ろされた。
村長の息子であるから、てっきりリューバを通して自分のことはある程度、申し送りがなされているものだと思っていたのだが。無論、本来の性別のことも含めて、だ。
だが、どうやら、それは違ったらしい。

「ジューコフは、ワタシが【わざと】この格好をしていると思っていますか？」
「あ？　違うのか？」
「……ナソリ」
『なんだ？』
「どうやら、【カルバサ（ソーセージ）】もう一本かもね」
『それはそれで美味い話だな』
小川での賭けごとを思い出して話を振れば、ナソリの尻尾が機嫌よく一振りされた。

気を取り直して。リョウは静かにジューコフを見上げた。
「これはリューバがワタシの為にわざわざ自分のモノを仕立て直してくれたんです」
「リューバが？」
「はい」
「アクサーナの婚礼に招待されたので、その為の服が必要だと思ったのでしょう。……その意味が、お分かりにはなりませんか？」
「……」
じっと窺うようにジューコフの目を見る。
灰色の光彩が深い光を湛えて揺らめいた。
暫し、沈黙が下りた。
ジューコフは徐に片手を額に当てて空を仰ぎ見ると大きく息を吐いた。
そして、こちらへちらりと視線を流した。
何とも判じ難い顔をして、実に言い難そうに口を開いた。
「リョウ……お前……もしかしなくとも、そっちが素か」
「はい」
ほんの少しだけおどけたように肩を竦めてから、困惑気味に笑みを浮かべたのだった。
「……そうか」

言いたい事や訊きたいことはそれこそ色々あるのだろうが、長い間にそれを押し留めて、ジューコフは、ただ一言、そう口にしただけだった。

そんなジューコフの思慮深さをリョウは買っていた。

「で、何があったんだ？」

それまでの驚きからは一転、いつもの冷静沈着さを取り戻したジューコフは不意に真面目な顔つきをして見せた。

引き締まった空気にリョウも表情を改めた。

「あの、見てもらいたいものがあるんです」

そう言って、懐から小さなハンカチ包みを取り出すと、それを掌の上で開いた。

中には、先程の【スカモーロフ】から貰った黄色い小さな可憐な花が収まっていた。

「……花……か」

「ええ」

ジューコフはリョウの顔を見て確認を取ってから、その花を摘み上げた。節くれ立った太くて長い指の中では、その花はやけに小さくミニアチュールの玩具のようにさえ見えた。

「固いな」

感触を確かめるようにして触れば、直ぐにその花が通常の状態ではないことは分かる。

「ええ。凝固処理をしていますから」

「凝固処理？」

聞き慣れない言葉にジューコフの眉が僅かに上がる。

「その花の【時】を一時的に封じ込めているんです。早い話が、人がそうやって触れても花粉や花弁が落ちたり、付着したりしないようにする為ですね」

リョウの説明に、ジューコフは分かったような分からないような曖昧な合槌を打った。

だが、そのこと自体はあまり重要ではないので、話を先に進めることにした。
「で、こちらをご覧になったことはありますか？　この辺りで見かけたことは？」
「……いや」
矯めつ眇めつ摘み上げた小さな塊を眺めてから、ジューコフは首を横に振った。
「そうですか」
リョウは一先ず、安堵の息を吐いていた。
「それなら、きっとワタシの思い違いか、取り越し苦労ですね。別段、問題にはならないでしょう」
「なんだ。これは、ただの花じゃないのか？」
リョウは、探るような眼差しを向けたジューコフに静かに頷き、声を一層低めた。
「ええ。これは、恐らく、毒草の一種です」
「毒草？　……とは、【薬師】が用いるものか？」
「それは……分かりません」
リョウは徐に目を伏せた。
これは普通の【薬師】がそう簡単に手に出来るものではないのだ。
だが、その事をここでジューコフに伝える積りはなかった。
「そんなもの……どうしたんだ？」
ここで漸く核心に入る。
「とある【スカモーロフ】に貰ったんです」
「【スカモーロフ】だと？」
それはジューコフにも予想外であったらしい。
「ええ。お近づきの印だと言って。単に偶々であったらいいのですが、少し気になったので」
そう言って、リョウは簡単に【スカモーロフ】との経緯を話した。
「そうか」

リョウの話を聞き終えると、ジューコフは少し考える風に手を組んだ後、それだけを口にして押し黙った。
恐らく、ジューコフの頭の中では、この村に入って来た流しの芸人や楽団達の顔が思い出されているに違いない。
「で、その【スカモーロフ】とやらは、どいつだ？」
そう訊かれて、リョウは、思い付く限りの特徴を上げてみた。
右に白っぽい仮面を被っていた。着ているものは大体が同じような格好なので、余り参考にはならないかもしれないが、【レンタチカ（腰帯）】が実に色とりどりで派手なものであった。
それから、金に近い明るい茶色の癖のない髪。それが顔の左半分を覆っている。その下には、上下に走る刀傷が隠れていた。
そして、小さな横笛を吹いていた。

ジューコフは、辺りを見渡してみた。
リョウもそれに倣って、踊りの人の輪が出来ている辺りに視線を走らせてみた。
村人たちに混じり、色とりどりの派手な衣装に身を包んだ踊り子や得意とする楽器を奏でている楽団の人達が目に付いた。
だが、あの【スカモーロフ】の姿は分からなかった。
「……あそこにはいないようですね」
「そうか。今日、ここに来てるのは、大体が顔見知りの馴染みの奴らばかりだからな。素性もその筋ではしっかりしてる奴らばかりだ。今のところ、その【スカモーロフ】がどいつなのかは分からないが、取り敢えず、他の奴らにも聞いてみるさ。心当たりがある奴がいるかもしれないからな」
「すみません。仕事を増やしてしまいましたね」
ひょっとしたら、自分の勘違いかもしれないのだ。唯でさえ忙しくしているジューコフ達に負担を掛けることになってしまったことを申し訳なく思えば、
「いや、気にするな。それよりも知らせてくれて礼を言う。些細な

ことでも大事になる場合があるからな」
気にする必要などないのだと穏やかに微笑んで、ジューコフはリョウの肩を軽く叩いた。
「それなら……いいのですが」
「ああ。こっちでも気を付けて見てみるさ。いずれにせよ、そのまま、放って置くのは気持ち悪いことに違いないからな」
「ありがとうございます」
からりと明るい笑みを浮かべて見せたジューコフにリョウも微笑んだ。
「……それにしてもな」
不意にジューコフはリョウを見下ろして振り返ると、意外なことを口にした。
「はい？」
「良く似合ってるぞ。その格好も」
良く見れば、同じ顔をしているのだ。声も口調も変わりがない。着るものが違うことで、これだけ印象が異なるとはジューコフ自身も思っても見なかったことだった。意表を突かれるとはこのことだ。
だが、初めてみるその姿にも不思議と違和感は覚えなかった。いや、寧ろ、そうなると村の男達と同じようにズボンを穿いていた時に、少年にしか見えなかったことの方が不思議に思えてくるのだから面白いものだ。
人が持つ対象への認識能力とは、所詮、その程度のものなのだと改めて思い知らされた気がした。
素直に褒め言葉を口にすれば、言われ慣れていないのか、リョウは戸惑いの表情を浮かべた後、擽ったそうに笑った。
「それでは、ワタシはこれで」
「ああ。また明日な」
「はい」

リューバの所に帰ると言ったリョウの後姿をジューコフは静かに見送った。

離れて行くリョウの直ぐ脇には、リューバの家の番犬であるナソリがその大きな体をピッタリと寄せて、【大事な主を守る騎士】のように控えている。

それは見慣れたいつもの光景でもあった。

後ろで騒ぐ仲間たちは、この【娘】が【あの少年(リョウ)】の本来の姿だとは夢にも思わないに違いない。真実を言えば、酒の上の戯言として一笑に付されるかもしれない。

さて、なんと説明すればよいか。

適当に誤魔化すには、どうにも後々のことまで考えれば具合が悪い気がした。

だが、果たして自分の口から伝えていいものか。

そう言えば、その辺りのことを本人に聞くのを忘れたとジューコフは思った。

余りにも驚きの衝撃の方が強すぎて、そこまで頭が回らなかったらしい。

いつになく調子が狂った自分に内心、苦笑い。

だが、その後、直ぐに気を引き締め直した。

リョウからもたらされた情報は、自分の目から見ても注意するに値する事象だった。

村の祭りは明後日までだ。明日は、デニスとアクサーナの婚礼を控えている。この期間の中で一番盛大な催しになるだろう。この村を預かる長の一族の一人として、何としても不測の事態には備えておかなければならなかった。

再び顔を上げたジューコフは、既に未来の長として相応しい顔をしていた。

昼下がりの訪問者　1）

リューバの家に戻り、扉に手を掛けようとした所で、ナソリが急にぴたりと足を止めた。
『……リョウ』
鋭く発せられた低い唸り声に、リョウは、ドアの取っ手に手を置いた所で動きを止めるとゆっくりと振り返った。
ナソリの毛並みは逆立っている。その只ならぬ気配に言い知れぬ緊張が走った。
「ナソリ？」
自ずと囁く様に低く抑えた声で問い掛けていた。
『中に……なにやら、人がいるな』
「お客さんじゃなくて？」
『村の者ではない…だろう。嗅いだ事のない匂いだ。一人……二人か。……男だな』
村人ではない男が二人、家の中にいる。
――――何の為に？
先程の【スカモーロフ】の一件が頭を過る。
嫌な汗が背中を伝った。
術師であるリューバに用事があるというのか。

リューバは長年、この村に住んではいるが、余所からお客が来ることは、勿論、有り得ないことではなかった。その筋で名の知られた術師は、方々から依頼が舞い込む。
だが、それは往々にして、術師たちの独自の経路（ルート）で紹介される場合が多かった。大抵は【伝令】に仕立て上げられた独自の【鳥】を通して、事前に連絡が入るのだ。『こうこういう訳で、こういう類の者が訪ねるがよろしく頼む』といったようなことだ。それは、

自衛の為のギルド的組織に趣が似ていた。先の戦争を経て以来、術師たちは自らの身を守る手段を自発的に作り出していた。

だが、その一方で、噂を聞きつけて依頼人が直接訪ねて来る場合もあった。間に他の術師や知り合いを仲介にしない場合は、受ける方も細心の注意を払う。しかしながら、中には法外な仲介手数料を取る術師やそれを生業にしている闇の口利き屋のような良からぬ輩もいるようで、どちらが悪いとか良いとかは一概に言えなかった。

今回もそういった【依頼人】が、直接訪ねて来たのだろうかと最初にリョウは思った。今は祭りの時期だ。ちょうどその見物も兼ねて、軽い気持ちでやってきたのではないかとも考えられた。

だが、そう思ってみたものの、ナソリの警戒レベルは依然、高いままであった。

獣たちには、本能から感じ取るものがあるのだろう。ナソリが慎重になるのには、何か理由があるはずだった。

「リューバは？　中にいるんだよね？」

――――無事なのだろうか。

リョウは無意識に取っ手を握る手に力を込めていた。

一番の心配事はそれだった。

ナソリは低く首を垂れて、中の気配を探っているようだった。

リョウはその様子をじっと見守った。

緊張に滲み出た唾を飲み込む。

やがて、顔を上げたナソリは、低く口にした。

『なにやら、話をしておるようだな』

――――その内容までは良く分からないが。

そう言って、息を一つ吸い込んだ。

その時だった。

玄関先に大きな影が一つ横切った。

バサリと羽の羽ばたく音がする。

リョウは思わず、腕で頭を覆うように視界を庇った。ナソリも咄

嗟のことに身を低くして、その身を庇うようにリョウの前に出た。
『おうや、これは、とんだ歓迎だな』
そこへ、のんびりとした声が聞こえた。
聞き覚えのあるその音色に、リョウが、そっと顔を上げれば、玄関を囲むテラスのとある杭の上に一羽の鷹が悠々と羽を畳んで止まっていた。
「……イサーク」
リョウは目を見開いて、呆けたような声を上げていた。
鼓動はまだ乱れ、ドクドクと波打っている。
そして、呼吸を整えようと小さく深呼吸をした。
『ハハ、久しいなリョウ』
「イサーク」
リョウは思わず、胸に手を当てた。
突然の登場は今に始まったことではないが、このタイミングでは、心臓に悪いことに違いは無かった。
『ほほう、随分とめかし込んでおるな。よく似合っておるぞ』
「イサーク。こっちに来てたんだね」
こちらの驚きには目もくれず、お馴染みの呑気な口調に、リョウは暫し体の力を抜いた。
『左様』
『おぬしは、……伝令の鷹だな。役目はどうした?』
ナソリが低く問いを発した。
『今しがた、終えた所だ』
『主を待っておるのか?』
『左様。中におるわい』
その言葉にリョウはナソリと顔を見交わせた。
「中にいるのは、砦の兵士なんだね?」
『左様』
鷹揚に頷き返したイサークに、リョウは、小川の所で会ったナハトとケッペルの言葉を思い出した。

ケッペルに乗ってきたのは、新しい鷹匠で、この村の出身の兵士だ。名前はキリルと言った。

『中にいるのは、キリルか？』

ナソリが問い掛ければ、

『ああ。あのひよっこはこの村の出であったな』

そう言えば思い出したというようにイサークが言った。

その言葉に、ナソリは一先ずの警戒を解いたらしかった。

砦の兵士達がリューバに何の用事があるのかと思ったが、取り敢えず、知らない人物ではないということが大きかった。

それならば、普通に中に入ってもいいだろうか。

顔を覗かせるくらいはしても構わないだろうし。もし、込み入った話をしているのならば、また席を外せばよいのだ。

そう考えたリョウは、ナソリを促して、中に入ることに決めた。

リョウは直ぐ脇にあった納屋から革の腕当てを取り出すと艶やかな黒い【コーフタ（上着）】の生地の上に巻いた。

「イサーク」

手を差し出せば、その意味を悟った伝令の鷹は大きな羽をはばたたかせて、その細い腕に降り立った。

ずしりと久し振りの重い感触が腕に伝わる。

イサークが体勢を整えたのを見て、リョウはナソリを振り返った。

「ナソリ。中に入ろうか」

『うむ』

ナソリはまだ、どこか不服そうな顔をしていたが、大人しく付き従うことにした。

「リューバ！　只今、戻りました」

扉を勢いよく開けると、リョウは出来るだけ声を張り上げた。

中にいるであろうリューバとその客人に他者の存在を知らしめる為だ。

やがて、
「あら、早かったわね。こっちにいらっしゃい」
廊下の向こうから、リューバのいつもと変わらぬ軽やかな声がした。
それを耳にして、詰めていた息を吐いた。
無意識に緊張をしていたようだ。
これならば、顔を出しても大丈夫だろうか。
ナソリに目配せをすれば、その言わんとすることが分かったのか、一つ頷くと巨体をするりと先に滑らせた。
リョウは、息を一つ吸い込むと、静かにそれに続いた。

昼下がりの訪問者　2）

さて、時を遡ること少し前。
ちょうど、リョウがアクサーナの家へ出かけている間、リューバの家の戸口を訪う者があった。
ひょろりとした線の細い若者とがっしりとした体つきのまだ年若い男という二人組だった。

村を賑わしている男たちとは対照的に、二人は随分と地味で質素な衣服に身を包んでいた。
淡い生成り色のシャツにくすんだ柿渋（カーキ）色の上着と同色のズボン。実用性重視の簡素な作りで、随分と着古して体に馴染んだ感があった。茶色のなめした革の長靴は、踝の辺りから下が薄らと埃に塗れていた。腰には剣をぶら下げる為のベルトが斜めに巻かれていたが、そこにある筈の長剣は見当たらない。代わりに小さな短剣（ダガー）が数本と小振り小物入れが収まっていた。
ほっそりとした体つきの若者の右肩から腕に掛けては頑丈そうな革製の肩当てと腕当てで覆われていた。
一人は、真っ直ぐな癖いのない明るい茶色の髪に淡い黄緑色の瞳をしている。
もう一人は、落ち着いた青灰色の瞳に柔らかな茶色の髪を後ろに撫でつけていた。長めの後れ毛が縁取るその横顔には、髭の剃り痕が精悍な濃淡を描き出していた。
「大丈夫か？」
背の高い方の男が、無表情の中にも若干の気遣わしげな視線を隣に立つ青年に送る。
「平気です」
だが、対する青年は事も無げに簡潔な言葉を吐くと、似たような

無表情さで黄緑色の目をちらりと横へ流した。
それに何を返すでもなく、がっしりとした体つきの男は、無言のまま一歩、脇へ退いた。
もう一人は、それに促されるようにして一歩、前に出ると重厚な一枚板の扉へとノックをした。

リューバは戸口に現われた若者を見て、その円らな瞳を見開いた。
「まぁまぁ、キリルじゃないの！　久し振りね。何年ぶりかしら。あらあら、すっかり男らしくなっちゃって。まぁ。変わりはない？　いつこっちに帰ってきたの？　ナターシャ（ナターリア）の所へは顔を出した？」
矢継ぎ早に飛び出て来る問い掛けに、キリルは自分が村に帰ってきたのだということを実感した。
久し振りの帰郷。
だが、この村を流れている空気は、自分が騎士団に入団をすべく後にした凡そ二年前と少しも変わっていなかった。二年という期間では往々にしてそのようなものなのかもしれないが、それをもどかしく思うと同時に安堵する自分がいた。
「ご無沙汰してます。リューバ。お元気そうでなにより」
軽い抱擁を交わし合うと、口元に微かな困惑とも微笑みとも取れるようなものを浮かべて、キリルは右側へ小さく首を傾げた。それは、人付き合いが余り得意ではないキリルの内心の戸惑いのようなものを表わす癖のような仕草だった。
それから、リューバはキリルの隣にひっそりと控えるもう一人の青年の存在に気が付いた。
「あら。あなたは、キリルのお友達？」
その声に、ロッソは軽く目礼をした。
「まぁ、貴方がお友達を連れて来るなんて」
ほんの少しだけ意外な色をその声音に滲ませて、嬉しそうに目を細めるとリューバは二人の若者を中へと招き入れたのだった。

「さぁさぁ、入って頂戴。ゆっくりしていって。お祭りの方へは顔を出したの？」
その問いかけに静かにキリルが首を横に振れば、
「あら、そう。でも、まだ日はあるからね。今年も凄い人出よ。大賑わい。ここにいても楽しい音色が微かに聞こえて来るでしょう？」
鈴を転がしたようなリューバの軽やかな声が、室内に響き渡った。

「今日は本当に朝から大忙しなの。千客万来とはこのことね」
ソファへ腰を落ち着けて、用意したお茶を勧めながらリューバはおっとりと微笑んだ。
「さ、どうぞ」
「ありがとうございます」
だが、同じ対面のソファに座ったものの、礼を口にしたまま、二人の若者は一向に出された茶器に手を付けようとしない。まるで借りて来た猫のように、表情は硬いままだ。
そんな二人の様子を見て、リューバは可笑しそうに喉の奥を鳴らした。
「心配しなくても中には何も入っていないわ。特製のハーブを入れたお茶よ。この辺りじゃ割と好評なんだから」
そう言って、先んじるべく、自らカップに口を付けて飲んで見せた。
「落ち着くわよ？」
カップを持った手をそのまま小さく掲げられて、真正面に座ったキリルは、ややばつの悪そうな顔をした。
「頂きます」
素直に茶器を手にしたキリルに倣い、隣に座っていたロッソもカップへ徐に手を伸ばした。
「……美味い」
ぽつりと漏れたどちらからとも言えぬ呟きに、リューバはたちまち相好を崩した。

「そうでしょう？　これはね、今、家に来てる子が余所で摘んで持ってきてくれた珍しい薬草が入っているのよ」
「お客が来ているんですか？」
「お客……というよりは、そうねぇ、身内に近いかしら。今はちょうど出掛けていていないけど、あと四半時もすれば帰って来るでしょうから、そうしたら紹介するわね」
「……はぁ」
「あら、気のない返事ねぇ。綺麗な女の子なのよ？」
リューバの何かを企んでいるようなからかいの声にキリルの眉がピクリと動いた。
「……まだ、そんなことに構っていられる身分ではありませんから」
「キリルも相変わらずね」
苦笑にどこか面白くなさそうな色を乗せてから、つと視線を横に流し、隣でひっそりと佇んでいた青年を見遣った。
「あなたはいかが？」
突然、話を振られる形になったロッソは、その意図を測りかねてか、反応が遅れた。
「……何が、ですか？」
「あなたは独り身？　それとも決まった相手はいるの？」
「いえ」
短く否定の言葉を口にしたロッソにリューバは微かに眉を顰めた。
「あらあら、こんな若い男が二人も揃って、何やってるの？　勿体ないわねぇ」
急に色の付いた話を振られて、慣れないことに調子が狂うのか、キリルとロッソは、二人、顔を見交わせて、複雑そうにその下唇を下げたのだった。
お茶を飲んで一息つくと、口慣らしが済んだのか、リューバは不意に話題を変えた。
「それで、キリル。王都に出て騎士団に入隊してから、もう二年に

なるわね。見習い期間を終えて配属されたのは、北の砦かしら？……あそこは、たしか、【シービリ（北）】の所の三男坊が入っているんだったかしらね？」

つらつらと淀みなくリューバの口から告げられる情報に、キリルはカップを手にしたまま、動きを止めた。

じっとリューバの方を見つめている黄緑色の瞳には、隠しきれなかった驚きの色が滲み出ている。

――――この人には敵わない。

キリルは、その昔、リューバに対峙する度にそう思ったものだが、それは今になっても変わってはいなかった。

元々、リューバは、成長をするにつれて早く村を出たいと考えていたキリルの良き助言者であり、相談相手でもあったのだ。【未婚の母】の元に生まれたキリルは、【父無し子】として村の中でも微妙な立場にあった。村の大人たちは、血縁上の祖父であるスチョールキンや村長のダルジ、そして母親のナターリアを擁護した女たちの手前、大っぴらにそのことを揶揄する者はいなかったが、何分娯楽の少ない小さな村だ。ささやかな噂は日常の話の種として直ぐに広まる。そうやって生じた小さな蟠りは、人々の意識の中に伝播する。

そんな中、大人たちの遠慮や気兼ね、反感やらといった僅かな空気の変化を実に鋭い感性で感じ取る子供たちは、大人たちの普段は巧妙に隠されている反応を映しだす鏡でもあった。父親が何処の誰か知れないことをからかわれたり、揶揄されたりとしたことは数え切れないだろう。

子供たちの言葉の棘は、遠慮を知らない分、思わぬ威力を持って相手に突き刺さる。本人が敢えて気が付かぬ振りをしていても、受けた傷というのは、多かれ少なかれ、じわりじわりと時と共に深くめり込んでいくものなのだ。その事が、キリルの子供時代に幾ばくかの影を落としていた。

村の中で唯一の術師であるリューバは、村一番の物知りで、村の

外のこともよく知っていた。小さなキリルにとっては、外の世界に通じる小さな、それでも大きな可能性を秘めた扉でもあった。

キリルの隠れた才能を早々に見抜いたのもリューバであった。今のキリルがあるのは、リューバのお陰であると言っても大げさではない位だった。

「ふふふ。キリル。この村の女たちの情報網を甘く見ない方がいいわよ」

「……そのようですね」

茶目っ気たっぷりに微笑んだリューバに、キリルは小さく息を吐いた。

師匠には頭が上がらない。そんなところだろうか。

「特に貴方の所には様々な報せが舞い込むようだ」

「それは買い被り過ぎよ。ここはこの国でも北の辺境。あなたたちがいる砦とそう変わりない辺鄙なところでしょう？」

その問いかけに、キリルは曖昧な微笑みを口に刷いて、するりと話の流れを変えた。

「朝からお忙しいというのは、来客があったんですか？」

それに、リューバは思い出したように小さく含み笑いをした。

「トムスク、フリスターリ、スタリーツァ、ペールミ……それから、ヴェーラ。今日は朝から伝令が方々から飛んで来ているのよ。全く揃いも揃って。嫌になっちゃうわ。お陰でお遣いに来た子たちに好物を用意してあげるのが大変なの」

「伝令……ですか」

「そうそう、貴方たちの所からも一羽、来たわよ。鷹がね」

リューバはそう言って立ち上がると、窓の下にある文机（チェスト）から一通の封書らしき紙を取り出した。それを手に取ると二人の男たちの反応を見るように小さく振ってみた。

「そうですか」

だが、キリルはそれを一瞥しただけで、特に芳しい反応を返さなかった。隣のロッソも、固く沈黙を守っている。

「あら、あなたたちは聞いていないの？」
その為に態々、ここまで足を運んだのではないだろうか。そう、リューバは踏んでいた。
「俺は、まだ若輩者ですから。入ったばかりの下っ端には、そういう話は届きません」
「そう」
リューバはキリルの言葉を内心、訝しく思ったが、それをおくびに出すことはせずに、その隣を見た。
「あなたは？」
「私も同じようなものです」
似たり寄ったりの二人の態度に、リューバは軽く目を閉じると、大きく息を一つ吐いた。
二人は一体、何の積りなのだろう。
こんな片田舎の術師相手にまどろっこしい駆け引きをしても仕方がないだろうに。

「さて、言葉遊びはこの位にして。本題に入りましょうか」
パンと軽く手を叩くと、不意に真面目な顔をした。
「貴方たちは【大事なお役目】を預かっている。そうではなくて？」
そうでなければ、伝令で済まされる伝達事項に、態々二重に人を寄越したりはしない。
この時期に、この村の出身であるキリルを里帰りのように見せかけて。その友人を共に連れるという形を取って。随分と手の込んだことをするではないか。
だが、やはり詰めが甘い。
「そちらが手の内を明かさない限りは、こちらも相応のことは出来ないわよ？　それにあなたたち、折角、お祭りの期間にやって来たっていうのに、そんな地味な格好じゃ、却って目立ってしまうわ」
そう言って穏やかに微笑んだリューバに、キリルはロッソと無言で視線を交わした。

そこには、どこか苦々しい表情が浮かんでいた。
それで、二人の間では何がしかの意志の疎通がなされたようだ。
キリルは徐に目を閉じ、一つ息を吐き出すと、開いた両手を胸の辺りで掲げて見せた。降参という合図だった。
「そうですね」
そして、隣に座るロッソを促すように言い放った。

伝令が寄こした手紙の内容は、どれも似たり寄ったりであった。文面とその文例は違えども書かれていることは一点のみ――――ガルーシャ・マライの消息を尋ねるものだった。
風の便りに乗って、ガルーシャ・マライの存在が再び取り沙汰されている。
獣たちの情報網は実に広く、その伝達は速やかだが、何分、気紛れでもあった。【人】のようにそこに無用な思惑は入り込まないので、純粋に事実だけが伝わる。その方法は、【人】にとっては些か複雑怪奇に見えるかもしれないが、獣たちにとっては、それは自然の秩序に基づいた至極当然のものでもあった。　であるから、余計に【彼ら】の間に【人】の意志を介入させ、都合のいいように事実を捻じ曲げたり、口止めなどをさせようとすることなど出来る筈がなかった。
ガルーシャの旅立ちから約半年。その事実が噂となって人の世界に漏れだすのに、そろそろ潮時だとリューバは思っていた。
幾ら人嫌いの偏屈な男であったとしても、人付き合いが皆無という訳ではなかったのだ。それこそ、蜘蛛の糸のように細い繋がりであろうとも、それが存在することには違いがなかった。
急に無沙汰になると却って気に掛けたりするものである。そして、まず親交のあった術師同士の中でふとした会話の弾みに口の端に上る。そこに伝令として各地を飛ぶ獣たちの話が加わる。それが、恐らく、半年から一年であろうとリューバはみていた。
リョウの話を聞く限り、ガルーシャはその旅立ちを何人かに知ら

せていたようだ。その中には勿論、ハヤブサを伝令に寄こした自分も含まれていた。

リョウは、ガルーシャの封書を北の砦にいる人物に届けたとも言っていた。宛先は、恐らく、そこに赴任している【シービリ（北）】の三男坊だろう。

ガルーシャはその昔、王都【スタリーツァ】に居て、そこの術師養成所とも言うべき学びやで教授をしていた。教える相手は、主に貴族出身の素養がある子供たちであった。その時の教え子の一人とは、今でも親交があるらしい。そんなことを昔、憎まれ口を利きながらも懐かしそうに語っていた。

リューバの言っていた鷹の伝令と言うのは、軍部に所属するイサークのことであったが、それが運んできた封書は、北の砦からのものではなかった。北の砦を拠点にしているのは、スタルゴラド第七師団の面々だが、その封書の裏書きには、王都を拠点にする第三師団の封印が施されていた。この国の軍部は、公にされている限りの情報では、第一から第十までの十の師団に分かれていたが、その中でも第三師団というのは、術師としての素養を持つ兵士を多く抱える、やや特殊な部隊でもあった。

寄こされた文書は、当たり障りのない簡素な伝達文の様相を取ってはいたが、その内容は、やたらと仰々しい前書きに始まり、要約してしまえば、やはりガルーシャの所在を尋ねるものであった。片田舎に住む一介の術師に出すには、どうにも大げさで、分不相応な感じでもあった。

その経緯を淡々と静かに語ったリューバに、キリルとロッソの二人も、自分たちがこの場所を訪れた本来の目的を打ち明けた。

隣国に、再び術師を巡っての不穏な動きが出ていること。それに伴い、調査や事実確認を含め、身辺への注意喚起を促す為にここを訪ねたということ。そして、何か気になることがあった場合は、砦に知らせてほしいこと。また、万が一の場合には、遠慮なくこちら

に助力を求めてほしいことを告げた。
その上で、再び、こちらで何か変わったことはないかと問うた。
「……そうねぇ。思い当たる節は無いわ」
暫く、考えた後、リューバは首を横に振った。
「そうですか」
「貴方たちの言い分は分かったわ。戻ったら、そのように伝えて頂戴」
そう言い放つと、辛気臭いお喋りはここまでと、顔を上げて、話を切り上げるように立ち上がった。
「そうそう。そろそろお腹が減ったでしょう？　今日はパイを焼いたのよ。お茶のお代りも入れるから食べて行ってちょうだいな」
――キリル。あなた、好きだったでしょう？
最後に軽やかにそう付け足して、二人の若者が止める間も無く、リューバは台所へと踵を返していた。

ロッソは、晴れ着に身を包んだこの国の女たちの特徴を良く備えたふくよかなその後ろ姿をやや困惑した気分で見送っていた。
自分たちが考える程、事の重大さと深刻さが相手に理解されていないのではないか、伝わっていないのではないかと思わずには居られなかった。
「キリル」
隣に座る年若い同僚を見遣れば、その顔には、いつもの感情の乗らない無表情ではなく、苦笑とも困惑とも付かない、まるで途方に暮れた幼子がするような複雑な顔をしていた。
「どうかしたか？」
低く尋ねたロッソに、キリルは我に帰ると、何でもないと小さく首を振って見せた。
「大丈夫ですよ」
――あの人は、いつもああなんです。
こちら側のことはちゃんと伝わっていますから。

そう小さく囁く様に口に乗せて、珍しく苦笑に似たような笑みをその口元に刷いた。

確固たる自信に基づいたその言葉に、ロッソは一瞬、戸惑いを覚えたが、同じ村の出であるキリルには、その女性との間には、自分には計り知れない関係があるのだろうと思い、その場で口を挟む事はしなかった。

そうこうするうちに、パイとお茶のお代りを乗せた【タレールカ（お盆）】を手にリューバが戻ってきた。

「さ、熱々だから、召し上がれ」

ソファの前にある低いテーブルにパイの乗った皿が置かれた。

香ばしい肉の香りと、風味付けに使われた香草の香りが鼻先を掠める。

その瞬間、キリルの腹の虫が、小さな音を鳴らした。幾ら訓練された兵士とはいえ、育ち盛りの身体的欲求は正直なものだ。

突然、始まった隠れた自己主張にキリルは自分でも苦笑い。

「沢山あるから、どうぞ、遠慮しなくていいわよ」

その様子を見て、リューバはからからと声を立てて笑った。

昼下がりの訪問者　3）

リョウが戻ってきたのは、そんな小休止に似た和やかな一時の頃だった。

「リューバ！　只今、戻りました」

玄関の扉が開く音と同時に、いつもより若干高めの軽やかな声が響く。

すると、たちまちリューバの口元が、笑みを形作った。

「おかえりなさい。早かったわね。こっちへいらっしゃい」

新しく淹れたお茶の入ったカップを手にソファに座っていたリューバは、行儀悪くはあるが、その場から返事を返していた。

その一方、突然の来客に、中に居た二人の若い男たちはソファの上で居住まいを正した。

その場所だけ微かな緊張が走る。

程なくして、一頭の大きな茶色の犬が部屋の中にするりと入ってきた。

「御苦労さま。ナソリ」

『ああ』

リューバの労わりの声に、ナソリは一つ、鷹揚に頷いて見せた。

そして、そのまま視線を対面のソファに座る二人の闖入者へと流した。

「お邪魔しているよ。ナソリ。久し振りだな」

目があった若者は、薄らと微笑みらしきものをその口元に刷いた。

その若者の黄緑色の瞳の中に、ナソリは二年前に見送った線の細い少年の面影を探し当てた。

『……キリルか。久しいな』

「ナソリも変わらないな」

『ふん、お主は、……随分と漢らしくなったようだ』

二年など変化の内に入らないとばかりにナソリは、キリルの言葉を鼻であしらった後、不意に目を眇めて見せた。

王都に出てそれなりに揉まれて来たのか、記憶の中にあったどこか頼りなげな少年の面影は、荒削りの骨っぽさが前面に染み出るように変わっていた。少年から青年に変わるこの時期の二年は、外見的にも内面的にも大きな変化をもたらしていようだ。

そして、つと、その隣に居た男へ視線を移す。

こそばゆいような緊張感が、一時、その場を支配した。

目があった男は、小さく目礼をすると、

「邪魔をしている」

真面目な顔付きで、そう慇懃に口にした。

ナソリは、尚も二人の若者をじっと見つめた後、不意に体を反転させて、部屋を出て行った。

そして、入れ替わるようにして居間に顔を出したのは、一人のまだ年若い女だった。

漸く肩に付くか付かないかの、癖のない真っ直ぐな黒髪が、光を湛えてさらりと揺れる。すらりとした細身の体躯に、腰に巻いた光沢を帯びた明るい群青色の【レンタチカ（サッシュ）】が、軽やかに舞った。女が歩く度に、たっぷりとした【ユープカ（スカート）】が羽のようにふうわりと空気をはらんだ。

その女の左腕には、黒い【コーフタ（上着）】の上に皮で出来た無骨な腕当てが巻かれていた。

そして、その上には、大きな鷹が一頭、行儀よく収まっていた。

それは傍目には妙な光景に見えた。

「おかえりなさい」

「ただいま戻りました。お客さんがいらっしゃるようですね」

立ち上がって出迎えたリューバに、女は小声でそう言うと、反対側に居る客人達へ反射的に軽く頭を下げた。

「お邪魔になりますよね。ワタシ、外の納屋の方にいますから」
そう言って、その場を直ぐに立ち去ろうとする娘をリューバは笑って制した。
「その必要はないわ。今、皆でパイを囲んでお茶をしていたところなの。貴方にも紹介するわ」
リューバは体を横にずらすと、ソファに並んで座る客人の方へ顔を向けた。それに促されるようにして、女の顔が正面を向く。
「……イサーク」
大人しく若い娘の腕に乗る伝令の鷹に、キリルは意外なものを見るような顔をしていた。
「何してるん……だ？」
腕に乗った鷹が、くるりと首を回す。それに合わせるように、女は二人の客人の方を向くと穏やかに微笑んだ。
「初めまして。あなたが、キリルですね」
深い漆黒を湛えた女の眼差しが、ソファに座る、まだ年若い青年の顔を捕らえた。
真っ直ぐな明るい茶色と言うよりは金に近い髪の間から、黄緑色の瞳が覗く。
そのほっそりとした輪郭に、ふと何かの残像が重なって消えた。
それから、ゆっくりと女の視線が、その隣に座る柔らかな茶色の髪をした青年に移った。
黒い光彩の内側に青灰色の瞳が映り込む。
女の口元が弧を描く。
その目が、どこか懐かしそうに細められた。
「それから、お久し振り。ロッソ」
声を掛けられた青年、ロッソは、仰天したようにその場に立ち上がった。
「まさか……」
男の青灰色の瞳が、これまでにない程に開かれていた。
長い沈黙の後――――と言っても時間にしてみれば、それは瞬き

に似た間でしかなかったのだが、当事者にはそう思われた。
「リョウ……か？」
吐き出された声は、驚愕の為か、掠れていた。

癖のない黒い髪に黒い瞳。この辺りでは、中々にお目に掛かることの出来ない珍しい色彩と外見的特徴を兼ね備えている人物は、自分が知る限り、一人しかいなかった。
――――忘れる訳がない。
共に過ごした期間は短かったが、それ程までに強烈な印象を自分の中に残していたのだから。
すっと右手を差し出したリョウに、ロッソは反射的に手を差し伸べていた。
交わる掌の感触もあの時と変わらない。男にしては細く華奢な作りだとは思ったが、まさかあの時の微かな違和感の正体が、こういった形で顕わになるとは思いも寄らないことだった。
そのまま、一連の流れで、軽い抱擁を交わそうとした所で、ロッソは不意に動きを止めた。

相手が戸惑う様子が、リョウには簡単に見て取れた。
今までは少年だと見做されていたので身体的接触を相手が一々気にすることは無かったが、外見が変わったことで、同じような対応をしてもよいのかという躊躇いが出ているのだろう。
それは、真面目で細やかな気働きをする実にロッソらしい反応だった。
リョウは小さく首を傾げるようにして笑った。
「ロッソ。今更ですよ」
――――ワタシは、何も変わっていない。あの時も今も。
「そうだな」
それで言いたいことが伝わったのか、ロッソの口元が笑みを刷いた。

リョウは腕に止まるイサークに小さく囁くと、鷹は軽やかに羽をはばたたかせて、窓際に飛び退いた。
そして、二人は以前と同じように、この国のしきたりに則った挨拶を交わしたのだった。

「それにしても、……そっちが本当なんだな？」
「はい」
静かに頷いて見せたリョウに、ロッソはつるりと綺麗に剃りあげられた髭跡の残る顎を撫でた後、体を預けるようにして背凭れに沈み込んだ。
軽く挨拶を交わした後、集った面々は再びソファに腰を落ち着けていた。
ロッソの脱力したような仕草に、リョウは、何とも言えないような顔をしてから悪戯っぽく笑った。
そして、今更ながらの種明かしをした。
「あの時も別に隠していた訳ではないんです。ただ、誰も疑問に思わなかったようなので、一々訂正するのも面倒で。それに、その方が、あちらにもこちらにも無駄に混乱を招かなくて済みましたから」
そう言って手にしたカップを傾けたリョウの言葉に、ロッソは至極尤もなことだと合槌を打った。
「確かに、一理はあるな」
「ふふふ。やっぱり、そちらはリョウの知り合いだったのね」
穏やかな表情で一部始終を見守っていたリューバは、事態が収束し始めたのを見て取って、摘んでいたパイを手元の皿の上に置いた。
だが、その対面で、キリルは一人、置いてけぼりを食ったような顔をしていた。
それに気が付いたリョウは、簡単に自分が北の砦の兵士たちと知り合いになった経緯を話して聞かせた。恐らく一番気になっている

であろう軍部所属の伝令の鷹であるイサークと知り合いになっている理由も含めてだ。

話を聞き終えて、キリルは一応、納得したらしかった。
だが、それで全ての疑問が解決した訳でもなかったようだ。
「あなたは……術師なのですか？」
キリルの発した問いに、リョウは静かに首を横に振った。
「いいえ。そんな立派な肩書は持っていません」
「あなたは、このイサークやナソリといった獣達と意志の疎通が出来るようだが」
「それは、まぁ、そうですが……」
黄緑色の瞳が、何かを探るようにこちら側に向いていた。
「それが、何か、問題でも？　獣たちの言葉を理解することが、即ち術師であるということにはなりませんよね」
その逆は然りだが。
まるで、発する言葉の行間に潜むこちら側の【感情】を暴き出そうとでもするかのようだった。
「では、これまで誰かに師事したことは？」
「それは、術師に関わる能力……という点に於いてですか？」
「ええ。勿論です」
「それならば、答えは【否】です」
「ならば、あなたのその素養は誰が開花させたのですか？」
その問い掛けに、リョウは少し首を傾げた。
何かが食い違っている。そう思わずには居られなかった。
キリルは恐らく、この世界の一般常識に基づいて疑問に思ったことをぶつけてきている。
だが、リョウ自身、その基礎となるべき知識は実際の所、まだまだ乏しいものだった。
「その前に一つ、良いですか？」
このままズレが生じる前に、こちら側の疑問をぶつけてみなくて

はならないとリョウは思った。
「どうぞ」
「素養というのは、術師としての潜在能力ということですよね？」
慎重に言葉を選んだ。
「ええ」
今更、何を言うのだという顔をしたキリルを気に留めずに、リョウは疑問に思ったことを口にした。
「それは、例えばの話ですが、他者からの介入が無ければ引き出せないものなのですか？」
「……詰まり？」
「そのままの意味です。自発的に、誰からも教えを請うこと無く、その能力は顕在化しないのかと言うことです」
すると、キリルは何故か呆気に取られたように目を瞠った。
その反応から、自分の発した問いが、キリルの持つ常識には軽く反するのだろう事が読み取れる。
リョウは、内心、早まったかと思った。
まるで自分が異端者であることを暗に仄めかしているようではないか。

「……自分が知る限り、そういう例は聞いたことがありませんが」
少し考える風にした後、キリルはそう答えた。
確認するように隣を見たキリルに、
「俺は術師のことはよく分からんが、血縁者に素養を持つものがいる家は、子供が生まれ、ある一定の年齢に達すると、その能力を引き出す力があるかどうかを見る為に術師に引き合わせると聞く」
ロッソも小さく合槌を打った。
「素養を引き出す力というのは、遺伝するんですね？」
「遺伝……？」
「ああ、すみません。簡単に言えば、血の中にその能力が受け継がれるということですね。両親から子供へと」

「通常は、そういうものだとされていますが……」
リョウは、そっとリューバの方を窺った。
術師であるリューバは、その辺りのことには詳しい筈だ。
卵が先か鶏が先か。そんな延々と続く珍問答のようにも聞こえなくはない。
だが、リューバは真剣な顔をして、何故かキリルの方を見ていた。
「……それは、要するに、貴方ご自身のことを言いたいのですか？」
やはりというか当然の如く、キリルは痛い所を突いて来た。
なんと答えたらよいのだろうか。
全てを正直に打ち明けるには、自分はキリルのことを知らなさ過ぎた。そこまで信用をしていいのかも分からない。
そっと目を閉じて、開いてみる。
すると、キリルは真っ直ぐにこちらを向いていた。
黄緑色の瞳は、静かに凪いでいた。そこにある感情は読み取れない。相手の余りにも真剣な眼差しに、リョウは内心、狼狽した。
術師ではないのに、イサークやナソリを始めとする獣たちと言葉を交わすことが出来ることに何か引っかかるものでもあるのだろうか。それは、余り大っぴらにするべきことではないのか。
そんな疑問が浮かぶのと同時に、初対面の相手にそういうことを根掘り葉掘り聞かれることも意外だった。
リョウは、どうにも居心地の悪さを感じて、助けを求めるようにリューバとロッソを順繰りに見た。
今度は、緊急信号は正確に捕らえられる。
目が合うと、リューバは、困ったというように小さく苦笑して見せた。
「あらあら。キリル。どうしたの一体？　リョウのことが気になるのは分かるけど、余り、一時に質問攻めにしたら駄目よ？　吃驚しちゃうじゃない。ねぇ？」
リューバは窘めるように微笑んだが、リョウにしてみれば、それ

は質問と言うよりも尋問に近い気分だった。
キリルは不意に押し黙ると、取り皿にあったパイに齧り付いた。
「それよりもアクサーナの様子はどうだった？　お祝いは渡せた？」
話の流れを変えるように出された質問に、リョウは素直に乗ることにした。
「はい。相変わらず元気そうでしたよ。外に出られないので鬱憤は溜まっているようですが、お姉さんや子供たちもいましたから、実に賑やかでした」
掻い摘んでその時のことを話せば、
「そう。エレーナたちにも会ったのね」
その様子が手に取るように分かるのか、リューバは可笑しそうに小さく笑う。
「それから、ナジェージュダさんから、こちらを預かって来ました。新作のお菓子だそうです」
リョウは手にした袋から小振りの焼き菓子の入った包みを取り出すと、テーブルの上に置いた。
「まぁ、明日の振る舞い用のお菓子ね。ナージャったら随分と張り切っているのね。あら、まだ温かいわ。焼き立てね。折角だから頂きましょう？」
中身を開いて確認したリューバは嬉しそうにそれを各人のお皿の上に乗せた。
綺麗な焼き跡の付いた一口大の焼き菓子が白い皿の上に転がる。木の実みたいだ。
「振る舞い用……ですか？」
帰り際、台所にいたナジェージュダから試作品が出来たから味をみて欲しいと言われて、味見をし、折角だからリューバにも、とお裾分けを貰って来たのだが、それが何か意味のあるものだとは思っても見なかった。
不思議そうに顔を上げたリョウに、リューバは穏やかに微笑んだ。

「ええ。明日の婚礼の時ね。花嫁の家から振る舞われるものなのよ」
「そうだったんですか」
リョウは、取り皿の上にある小さな丸い焼き菓子に目を落とした。一つ摘んで、口の中に入れる。中に柑橘系の果物を煮詰めたジャムが入っているのか、ほんのりと甘酸っぱい味が口内に広がった。
「婚礼とは、アクサーナが結婚するんですか？」
二人の女たちの話を聞いて、キリルがやや驚いたような声を上げた。
「そうよ。デニスとよ」
「――――道理で、いつもより賑やかだった訳だ」
どこか感慨深げな声音で口にされた言葉に、リョウはそれを発したであろう青年を見た。
真中で分けられた少し長めの前髪の間からは、秀でた額と澄んだ黄緑色の瞳が覗く。それは、一見、ガラス玉のような無機質なものに見えて、実は、かなりの感情を宿しているものだということが、この短い間にも見て取れた。
ほっそりとした面立ちは、自分が知っている無骨な砦の兵士たちとは若干、趣を異にしていた。隣に座るロッソの精悍な顔つきと比べてもその違いは一目了然だった。年齢の所為か、元々の性質の所為かは分からないが、身体の作りも筋骨隆々と言う訳ではない。どちらかと言えば、細い部類に入るだろう。お世辞にも肉体派というようには見えなかった。
一口に兵士と言っても、そこには様々な人がいるものだ。改めて、そう感じる。
「久々の里帰りだそうですね。二年は、短いようで、長いものでしょう？」
ここに帰る道すがら、リョウは、キリルの話を少しだけナソリから聞いていた。この村を訪れるのは約二年ぶりになるのではないかと。

「……そうですね。そうとも言えるし、そうでもないとも言える」
キリルは小さく息を吐き出すと、曖昧な微笑みを浮かべて首を右へ傾げた。
そのひっそりとした空気に、リョウは妙な既視感を感じていた。
キリルという青年に会ったのは、間違いなく、これが初めてだ。
それなのに、自分は前にもこの人物に会ったような気がしてならなかった。何かが引っかかる。
何故だろう。その不思議な感覚を確かめるべく、リョウはじっとその対面に座る青年を観察するように見つめていた。
癖のない明るい茶色の髪がそよぐ風にさらりと揺らいだ。
開け放たれた窓を通して、お祭りの楽の音が、切れ切れに聞こえてきていた。
もう少しで、何かが見えてきそうな気がする。
「あの……何か？」
だが、直ぐに居心地の悪さを感じたのか、キリルからもの問いたげな視線を寄こされて、
「いいえ」
リョウは、穏やかに微笑むことでばつの悪さを誤魔化した。
「あなたとは、何故か、初めて会った気がしないんです。それをどうしてだろうと思いましてね」
少し言い訳がましく聞こえるかもしれないが、そう正直に打ち明ければ、
「……リョウ。それは場合によっては、口説き文句のように聞こえるぞ」
呆れたように口にしたロッソに、キリルが、その隣でぎょっとしたような顔をしたのが分かった。
「あれ。そうですか。すいません。別に他意はないですから」
そう言われれば、そうかもしれないとリョウは声を立てて笑った。
それから、話題は自然とお祭りの様子になり、リョウは見聞きし

た村の男たちの様子を面白可笑しく語って見せた。途中、ナハトとケッペルに遭遇したことも忘れてはならない。
「そう言えば」
そして、不意に思い出したように、リョウは懐から【プラトーチカ（小さなハンカチ包み）】を取り出すと、真剣な面持ちで切り出した。
「リューバ。実は、見てもらいたいものがあるんです」
「あら、なぁに？」
「リョウ」
不意に変化を見せた空気を敏感に感じ取ったロッソは、自分たちが居ても良いのかと視線で問うた。
リョウはそれに一つ頷きを返すことで、二人の立ち会いを許可した。
「これなんですが……」
そう言って、そっとハンカチの包みをリューバの前で開く。
中にある可憐な黄色い花弁が顕わになった。
その瞬間、リューバは小さく息を飲んだ。
「っ……」
すると不意に、向こう側からすくっとキリルが立ちあがったのが分かった。
「……あんの……クソ…ＸＸＸ……」
ぼそりとした呪詛に似た小さな呟きが辛うじて耳を掠めた。
「すみません。リューバ。俺、用事を思い出したんで、これで失礼します」
「あ、おい」
そう口早に告げるや否や、挨拶もそこそこに、キリルは風のように部屋を飛び出して行った。
まるで何かに急かされるかのように。
残されたリョウとロッソは、その豹変ぶりにただただ驚いて、暫し、弾かれたように飛び出して行った背中が消えた廊下の向こうを見遣った。

「……リョウ。これを……どうしたの？」
暫くして、やっとのことでリューバがそれだけを口にした。
手で口元を覆ったリューバの顔は青褪めていた。声も気丈な性質にしては珍しく微かに震えている。
そのまま、その場で崩れ落ちそうになるリューバの体を素早く立ち上がったロッソが支えた。
「リューバ？　大丈夫ですか？」
突然のことに、慌ててリョウも反対側からリューバの肩を支えた。
「ええ。大丈夫よ。ちょっと立ち眩みがしただけだから」
ゆっくりとソファに腰を下ろしたリューバにお茶の入ったカップを渡せば、それを口にしてから、小さく息を吐いた。少し、落ち着きを取り戻したようだった。
「ふふふ。ごめんなさいね」
見っともない所を見せてしまったわねと力なく笑う。
「もう平気よ」
まだリューバの顔色は血の気が引いたものであったが、話の先を促す真っ直ぐな眼差しに、リョウは簡単にこの花を手に入れた経緯を語って聞かせた。
「そう。……【スカモーロフ（道化師）】が」
「はい。念の為、ジューコフにはこの事を伝えてあります。ここに来ているスカモーロフたちは日頃から村とは懇意にしている人達ばかりであるとは聞きました。あの【スカモーロフ】が誰であったかが分かれば、きっとその辺りの事情も直ぐに分かるとと思うんです」
「……そうね」
これが偶々であったのか。何らかの意味を持つものであったのか。
「この間、持参した薬草の中に確か、中和に使えるものがありましたよね」
「ええ。そうだったわね」

リョウのその言葉に、リューバの表情に少し明るさが出て来た。

「これは……ただの花ではないのだな？」

リョウとリューバの反応を見て、ロッソはテーブルの上にある小さな花を摘み上げるとそれを透かし見た。

若い兵士のその行動にリューバはあっと声にならない声を上げたが、リョウはすぐさま凝固処理をしているから問題は無いと付けたした。

リューバはそれを聞いて安堵の溜息を吐いた。

「それは【忘れな草】、別名【ジョールティ（黄色い）・チョルト（悪魔）】――――聞いたことがないかしら？」

その声に、ロッソがぴたりと動きを止めた。

「これが……？」

青灰色の瞳を開いて、まじまじと手にした小さな花を凝視する。

ロッソもその昔、噂で耳にしたことがあった。あれは王都で起こったとある暗殺事件に関わることであった筈だ。軍部の限られた筋の間でも、その噂は実（まこと）しやかに語られていた。

使用した痕跡の残らない一級品の毒草があると。そこから抽出した毒の成分は、強力で速攻性があり、実に殺傷能力の高いものであると。しかしながら、それは滅多に入ることのない代物で、専ら限られた闇のルートで取引され、そこには大金が動くのだとか。そして、その事件に件の毒草が使われたのではないかとの噂が流れた。

こんな小さな、可憐にさえ見える花が、あのおどろおどろしい異名を持つ毒草だというのか。

美しいものには棘がある。そんな喩が頭の隅を掠めるが、その意外性（ギャップ）は、喩え以上のものだった。

「これを【スカモーロフ】が？」

怪しい。実に怪しすぎるだろう。こんな奇怪なものを単なる【芸人】風情が手に出来る訳がない。流しの芸人というのは、どう考え

ても方便、何かの隠れ蓑に違いない。
自身の兵士としての感がそう訴えていた。
「リョウ。その【スカモーロフ】はどんな奴だった？」
いつになく険しい表情を崩さないまま低く尋ねたロッソに、リョウは覚えている限りの特徴を伝えた。

それにしても、気になるのは、これを見たときのキリルの反応だった。
あれは、確かにこの花のことを知っている風だった。これを見た瞬間、キリルは血相を変えて、弾かれたように飛び出して行ったのだから。
そして、ギリリと噛み締めた歯の間から漏れ聞こえた微かな呟き。そこには、こちらの聞き間違いで無ければ、実に信じられない言葉が入ってはいなかっただろうか。
――――――あんの、クソオヤジ。
確かに、そう聞こえた。
不意に、つい今しがたまで目の前に座っていたキリルの姿に、あの【スカモーロフ】の姿が重なった。　さらりと揺れる金に近い明るい茶色の真っ直ぐな髪。そこから覗く瞳の色は違ったが、その面差し、やや険のある眼差しは似てはいなかっただろうか。
――――――いや。考え過ぎか。
その思い付きは余りにも短絡的で、随分と飛躍しすぎているようにも思えた。
それでも、キリルは何かを知っている。それがあの花のことなのか、それを渡した【スカモーロフ】のことなのかは分からなかったが、それは確かなことに思えた。
「ロッソ」
深く物思いに沈んでいたロッソにリョウは声を掛けた。
「ん？」
年相応の思慮深さと落ち着きを備えた青灰色の瞳がゆっくりとこ

ちらを向く。
若干の躊躇いはあったものの、思い切って口を開いていた。
「キリルは……大丈夫でしょうか？」
ロッソは額に手を当てて、頭が痛いとばかりに溜息を吐いた。
そして、緩く頭を振って見せる。
どうやら、キリルが取った行動は兵士としては余り誉められたものではなかったようだ。
ロッソと同じように落ち着いているように見えて、その実は、意外に直情的で猪突猛進的な所がある。　それは経験の浅さから来るものなのか、年齢的なものなのか。恐らく、そのどちらでもあるのだろう。
「イサーク」
リョウは、窓辺に居た伝令の鷹に合図を送った。
『やれやれ。あのひよっこめが』
言いたいことが分かったのか、イサークは、大儀そうに羽を広げて見せる。
「ごめん、イサーク」
顎で使う積りなど毛頭ないのだが、結局はその助けを借りることになる。
申し訳なさそうに眉を下げたリョウに、イサークはからりと笑った。
『なに、お主が謝ることはなかろうて。あの小童めが』
「ありがとう。後で、好物の【ザー(兎)ヤッツ】の肉をあげるから」
『はは。それはいい』
そして小さく笑うと、
『ではな』
開け放たれた窓から大きな羽をはばたたかせて、一羽の鷹が飛び立って行った。
『まぁ、案ずることもあるまい』

空の向こうに消えて行くイサークの翼を見つめていれば、ナソリがいつの間にか、するりと傍に来て、事も無げに言い放った。
リョウは直ぐ脇にある、茶色の毛並みに手を伸ばした。
『ここは、あ奴の生まれ育った場所。謂わば、庭のようなものだ』
それに呼応するように、
「大方、ナターシャの所にでも行ったんじゃないの？　その約束を思い出したとか」
折角帰って来たのに、まだ母親の所へは顔を出していないのでしょう？
そう言って、すっかり普段の様子を取り戻したリューバは、窓の外へ視線を向けた。
「確かにそうですが」
だが、己が同僚の勝手な振る舞いに、年長者であるロッソは尚も気遣わしげな顔をする。
それは分からなくはなかった。
組織は個人よりも全体の利害を重んじる。無鉄砲な部下を持って苦労するのは、その上司である。
「ロッソ。イサークが付いているから大丈夫。何かあったら知らせてくれるでしょうし、もしもの時には、ワタシも出来る限りのことはしますから」
リョウはロッソの隣に立つと、宥めるようにその逞しい腕に手を添えた。
「ああ」
ロッソは、目を細めると、傍らに寄り添うようにして立つ、髪の色と同じ艶やかな黒い晴れ着を身に付けているリョウへ、小さく礼を口にした。

明鏡の裏

黒でもない。白でもない。
黒と言うには、余りにも影が無し。だが、白と結論付けるには、手元の情報が少なさ過ぎる。
ならば、――――灰色か。
だが、あれは、どちらにでも転びうる危うさを持っている。
用い方次第では、毒にも薬にも。
「灰色……としておこうか」
――――今の内は。
男は、そう独りごちると密かに口元を緩めた。

男が見つめる遥か前方には、賑やかに踊りに興じる男たち、女たちの輪が出来ていた。
距離がある為、歓声はここまでは聞こえてこない。
だが、曲に合わせて軽やかにステップを踏む度に揺れる色とりどりの女たちのスカートの裾とそれを囲む男たちの長い腰帯は、遠目にも実に鮮やかで、男の耳に残る小気味よい旋律をまだ日の浅い記憶の中から、自ずと引き出そうとしていた。
男は、眩しそうに、唯一、顕わになっている右目を細めた。目に映る光景の中に、何かを探し当てるかのように。
薄い茶色の光彩に陽の光が踊った。

『ルーク』
その男の様子を傍の高い木の上から見下ろしているものがあった。
男は、声のした方向へ無言のままちらりと視線を流した。
その口元は、依然、笑みに縁取られたままだ。
『お主、何故、あの子にあのような真似をした?』

「おや、ヴィーはお気に召さなかったのかい？」
不機嫌さを隠そうともせずに、一羽の大きな鷲がその場で羽をバサリと開いた。
ふわりと風が吹き寄せ、男の癖のない明るい髪を揺らした。
「そんなに怒ることもないだろう？」
威嚇とも取れるその仕草に、だが、対する男は慣れているのか、おどけたように肩を竦めて見せただけだった。
『戯けが。無礼にも程があろう。リョウが不憫でならんわ』
微かな相手のぼやきを男の耳は余すことなく拾った。
リョウ……というのは、もしかしなくとも、あの娘の名前か。
少し耳慣れない、変わった音の響きだと男は思った。
それよりも腐れ縁の大鷲であるヴィーが、その固有名詞を知っていることの方が、意外であった。
この広い大陸の中、人間などごまんといる。その中から、ただの一人を認識するのは、決して容易なことではない。ましてや獣たちに取っては。
人など態々意識を向ける程の存在でもなかろうに。
――――あそこから、あの高みから、この世界はどのように見えているのだろうか。
それは、こうして言葉を交わす度に、男の中では、常から気になる事柄でもあった。
だが、まだ、その問いを相棒に口にしたことはなかった。
「なんだ、ヴィー。知り合いか？　それならそうと早く言ってくれよ。とんだ無駄足を踏んじまったじゃないか」
『ふん。知ったことか。あの子はこの界隈では名が知れておる。知らぬものの方が少ないわ』
「あ？　そんなに有名なのか？」
だが、大鷲はそれに答えることなく、大儀そうにぼやいた。
『やれやれ。これでまた、あの小煩い鷹共にせっ突かれることになるわ』

「そいつは、済まなかったな」
そっぽを向いた相棒に、男は懐から小さな塊を取り出すとそれを上空へと投げた。
大鷲の黄身掛かった大きな嘴が寸分違わぬタイミングでそれを銜える。足に付いた鋭い爪を使って器用に平衡を保ちながら、大鷲は干した肉の塊へ齧り付いた。
『どんな風の吹きまわしだ？』
気前よく大きな肉の塊を放り、男が殊勝にも謝罪の言葉を口にしたことが、妙に薄気味悪かった。
「あ？　なんだ？　文句があんなら返せ」
『そうはいくものか』
首を傾げながらも、大鷲は、肉の塊をしっかと捕らえて離さない。
これから己に降りかかるであろうやっかみ混じりの迷惑料を考えれば、このぐらいでは安いものだと相棒は尤もらしく嘯いた。
『序でに忠告してやろう』
肉を咀嚼しながら、ヴィーは、その相棒を見下ろした。
『余り、無体なことはしないことだな。それから、背後に気を付けることだ。お主など、あの方に掛かれば一ころだ』
物騒で意味深な言葉に男の眉が小さく上がる。
「あの娘には、そんなに凄い伝手があるのか？」
『これ以上は僭越に当たる』
「なんだ。そこまで言うなら最後まで教えてくれたっていいだろう」
『ふん。忠告はしたぞ』
有り難く思えと尊大に言い放った相棒に、男は呆れたような顔をして見せた後、ひっそりと噛みしめるように笑みを零したのだった。

そして、男は再び遥か前方を透かし見た。
陽気に騒ぐ男たち、女たち。老いも若きも。
揺らめく残像の中に、赤い石の付いた指輪を付けた一人の女の姿を探して。

Ｋｏｌｅｃｈｊｋａ　～紅い指輪の物語～

遠い昔、その昔　小さな指輪をキミにあげた。

高く、低く、抑揚を付けながら、微かな鼻歌が聞こえて来る。今にも消えてしまいそうな小さな旋律だ。それは、たなびく煙のように静寂の間を縫い、ひっそりとした闇の中を流れ、そして満ちていった。

小さな手元を照らす発光石の灯りの下、一人の女が繕いものをしていた。

女の手は淀みなく正確に動いていた。その下にあるのは、艶やかな光沢を放つ贅沢なシャツ。繊細な刺繍が、袖口と襟ぐりを縁取っていた。あしらわれている意匠は、大空を羽ばたく鷲を表わす文様だ。その嘴には小さな細い葉っぱが銜えられている。

暫し、手を止めて、縫い目が曲がっていないことを確認してから、再び、女の手が元のリズムを刻み始める。

その口元には、薄らと微笑みの欠片が乗っていた。

最後に結び目を作って、女は手を口元に持って行くと、糸切り歯で縫い糸の繋がりを断った。

発光石の作りだす影の外にあった手元にぼんやりとだが、柔らかな光が当たる。

白くて少し骨ばった感のある細い指。小さなささくれがあるその指には、華奢で細い女の手に似つかわしい金色の指輪が嵌っていた。

紅い丸みを帯びた小さな石が、指の動きに合わせて、光を放つ。

密やかな闇の中に揺らめく、微かな残り火のように。

女の指が、シャツの上を静かに滑った。襟元に施された繊細な鷲の文様に触れる。

愛おしさを込めるように。

――――カタ。

小さな物音に、ふと女が顔を上げた。

闇から滲み出るように女の面が顕わになる。

ほっそりとした柔和な面立ち。かつては滑らかで艶やかに弾んでいたであろう肌も歳と共に陰りが見え始めていた。

だが、それを補うかのように女の淡い黄緑色の瞳には、昔と変わらぬ澄んだ輝きが宿っていた。

暖かくて、限りない強さを秘めた光。

――――風が吹いたのだろうか。

窓の外を見て、揺らぐ梢に、女は今しがたの小さな物音の原因を思った。

そして、巡らした視線を元の位置に戻した時、女は、濃さを増した闇が作りだす戸口の向こうに、静かに佇む長い影を見た。

女は、一瞬、息を詰める。

だが、直ぐに緩やかに息を吐き出した。

長い影の端に、歪な小さな鳥の形をした影が映る。鳥が羽を広げ軽やかな羽ばたきを始めた。

子供騙しのような稚拙な影絵。

「いらっしゃい」

ひっそりと静まり返る室内に遠慮をするかのように女の囁きが響いた。

それが、合図であったのか、薄闇の中から滲み出るようにして、一人の男がその輪郭を覗かせた。

「繕い物でもしていたのか」

――――こんな夜更けに。

女の手元を照らす淡い光が反射するものを捕らえて、男が徐に口を開いた。

草笛のような掠れた囁きが、辛うじて意味を成す音を運ぶ。
女は口元に小さく笑みを刷くことで、それに答えた。

暗がりの中でも、女が手にしているものが、男物の晴れ着であることは見て取れた。
今は村を挙げての祭りの最中だ。
昼間、村の広場を騒がしていた連中は、皆、似たような立派なシャツに身を包んでいた。
女が手にするその晴れ着には、まだ、一度たりとも袖を通された形跡がなかった。
だが、それを口にする積りはなかった。
男の方も、それが誰の為に仕立てられたものなのかを尋ねたことは無かった。
それは互いに必要のないことであったから。

なぜ　どうして　キミに　指輪をあげたのだろう？
なぜ　どうして　キミは　ボクの想いに応えたのだろう？

「お茶を一杯もらえるか」
明るさの落とされた室内は、数多もの影が支配する世界だ。
そうして描かれる濃淡の合間に、女は絶やさずに置いた火種に手を翳すと、お茶の用意に取り掛かった。
男は静かに女が動く様を眺めていた。
程なくして、火に掛けた薬缶がシュンシュンと音を立てる。
そして、男が腰を下ろした椅子の傍にある小さなテーブルにカップが置かれた。

「祭りには出掛けたのか」
昼間見た賑わいを思い出して男が尋ねる。
「専ら、御馳走作りの裏方よ」

小さく首を横に振って、女が答えた。
細められた目尻には、同じ時を刻んだ小さな皺が現れ始めていた。
「ああ、旨い」
湯気を立てるカップに口を付けると、男は一つ満足そうに息を吐いた。
その台詞をもう何度耳にしたことだろう。同じ抑揚の同じ調子。
時折、思い出したようにふらりと現れては、一杯のお茶を飲んで帰って行く。
「【ピラジョーク(パイ)】もあるわよ？」
肉と野菜の詰まった小振りなパイ。
毎年、この時期になると、どうしても多く作り過ぎてしまう。
昔に比べて食も細くなったし、それを喜んで食べてくれるであろう唯一の家族も、今は遠く離れた場所に暮らしているというのに。
――――ああ、これは美味い。
かつて零れた、そんな些細な一言に縛られている。
それは、傍目には酷く滑稽で馬鹿らしく映るものかもしれなかったが、女にとっては重要な意味を持っていた。
あの頃の記憶は、今でも鮮やかに、女の胸内に息づいていた。
そう、全ての始まりは、あの一言からだった。
戯れに似た一言。
『大事にするんだ。無くしたりしないように。誰から貰ったかは秘密だよ』

「それじゃぁ、一つ、貰おうか」
あの頃と変わらぬひっそりとした輝きを宿した瞳に、男はそう答えていた。
この瞬間だけは、二人の間を隔てていた時が霧散する。
まるで初めて出会った頃のように、世界が色付いて鮮やかに踊るのだ。
不安とそれを上回る喜びに心を躍らせた日々。

甘くてほろ苦い記憶の海。
思い出の引き出しは、開け放たれたままになっていた。
女は一つ頷いて、微笑むと台所へ消えた。男の為に用意したパイを温める為に。
多くの言葉は要らなかった。

なぜ　どうして　キミに　指輪をあげたのだろう？
なぜ　どうして　キミは　ボクに心を捧げたのだろう？

「あの子は……どうしてる？」
手にしたパイを頬張って、変わらない味に安堵すると同時に言い知れぬもどかしさすらを感じながら、男が口にした。
これまで決して口にしてこなかった様々な感情を咀嚼するパイと一緒に飲み込む。
「元気に……してるんじゃないかしら？」
便りが無いのは達者な証拠。
母一人、子一人の家族ながら、この家を巣立って行った息子は、お世辞にも筆まめな方ではなかった。　最後に来た手紙は、もう二月ほども前のことで。新しい赴任先が決まったと簡潔に記されてあった。
女は、立ち上がり、小さな箪笥の中から、その手紙を取りだすと男に差し出して見せた。
神経質な角ばった字面。インクの出が良くなかったのか、ところどころに掠れて長く跳ねた文字がある。その次には、加減を間違えたのか、やけに濃く太く染みの出来た判読しがたい文字だ。
それを見て、男が密かに笑った。口元に拳を宛がって、噛みしめるようにひっそりと。
男には、その情景が目裏に浮かんでいるのだろう。
すると、男の顔の左側を覆う長めの髪がさらりと靡く様に揺れた。
あの子と同じ真っ直ぐな癖のない髪。

日の光の下では黄金に近い明るい輝くような髪色も発光石の灯りを落とした薄暗い室内では、燻したようにくすんで見えた。
だが、そちらの方が、女にとっては馴染みのある色合いだった。
「いっちょまえに、ぬかしやがって」
呟くような独り言に、
「あの子も、もう十八になるわ」
女は、そう返していた。
十八年。それは長いようで、あっという間に過ぎて行った。
いつからだろう。時の流れが急に早くなったように感じられ始めたのは。
それを思い出そうとして、幼い息子の皺くちゃになった赤い顔を思い浮かべる。
「もう、そんなになるのか」
「ええ」
「どうりで歳を食った訳だ」
男の声音には自嘲とも取れるような響きがあった。

「そいつを着せるのか？」
先程まで女が繕っていた晴れ着は、綺麗に畳まれて、棚の上に置かれてあった。
それを見て、男が不意に口を開いた。
「どうかしら」
女は曖昧に微笑んで見せただけだった。
今、息子はここから南西の方角にある北の砦に居る。
この村から北の砦までは、息子が最初に目指していた王都に比べれば近かったが、それなりに距離があった。旅慣れた者でも二日から三日は掛かるだろう。とてもじゃないが、おいそれと日帰りで遊びに来れるような距離ではない。
それに戒律の厳しい軍部での仕事だ。新しく配属されたばかりの新入りに、そうそう簡単に自由になる時間があるとは思えなかった。

「まぁ、明日になれば分かるさ」
小さく首を傾げた女を余所に、男は、そう独りごちるとその口元に何やら楽しそうな笑みを刷いた。
「何を企んでいるの？」
悪戯を思いついた子供のするような無邪気な色をその瞳に乗せて、男の薄い唇が弧を描く。
そこから紡がれるのは、一体、どんな真実を含んだ軽薄な言葉なのか。
それに惑わされるも惑わされないも、全て受け取り手次第だ。

男は沈黙を守ったまま、悪戯っぽく微笑むと不意に真面目な顔をして見せた。
「ナターシャ」
男の唇から、女の名前が漏れた。
「ナターリア」
愛称で無い本名を呼ばれて、女は男を正面から見つめた。
「キミは……」
女は男の傍まで来ると、か細い指を一本、その唇に宛がった。
そのまま、小さく微笑んで、ゆっくりと首を横に振る。
――――――それ以上は、言わなくてもいい。
男の目の前にある女の手には、小さな指輪が鈍く光を放っていた。
そこには、小さな赤い石が付いている。

小さな　小さな指輪
遠い昔の物語
どうして　ボクは　指輪をあげたのだろう？
キミの心を　傷つけまでして

唯一、顕わになっている男の右目が、ほんの一瞬だけ、揺らいだ。
とうの昔に光を無くした筈の左目が疼いた。

そこに隠されているのは、指輪に付いた石と同じ紅い色。

この国では、己の瞳の色と同じ色の石には、その者を守る神聖な力が秘められていると考えられていた。そして、その色を持つ石を加工したモノを特別な人への贈り物にするという習わしがあった。

早い話が、恋人に贈られるものだ。求婚の際にも贈り物として使われる。それを女の側が受ければ、結婚に合意をしたと見做された。

男は、目の前にある女の手にそっと口付けを落とした。

まるで、神聖な誓いを立てる敬虔な愚者であるかのように。

女が笑ったのが、震えた空気から伝わってきた。

「後悔なんてしてないわ」

最初から、女の日常の中に、男は既にそこにあるべきものとして取りこまれていた。直ぐ傍には、男の血を分けた小さな命が息づいている。長じるにつれて、息子はあの頃の男の輪郭をなぞり始めていた。

後悔などするはずがない。それは、自らが望んだことなのだから。だから、同じように、男に後ろめたさや後ろ暗さを感じて欲しくは無かった。

その事で苦しんで欲しくは無かった。

その言葉に男は弾かれたように顔を上げた。

いつも飄々として澄ましているか、軽薄で曖昧な微笑みを浮かべるだけの男の表情が、暫し、驚きに固まった。

そのことに女が益々、喉の奥を震わせた。

やがて、男も釣られるようにして密かやかに笑った。

そして、そっと腕の中に温かな女の体温を抱きしめたのだった。

「楽しみにしてるといい。明日を」

謎掛けめいた男の言葉が、再び繰り返された。

「ええ」

今度は、女はそれにそっと頷き返した。

そして、ゆっくりと閉じた女の目裏には、もう二年以上も前に見送った筈のほっそりとした華奢な背中とそれを少し逞しくしたような男の背中が描かれていた。

家族の肖像

曲がりくねった坂道を一人の青年が駆けていた。風を切るように、物凄い速さで走り抜けて行く。

真っ直ぐに前を向いて。

祭りの賑やかな踊りの輪には目もくれず。振る舞われている酒にも見向きもせず。香ばしい匂いを撒き散らしている様々な料理にも気を惹かれることなく。

青年は、ただ一点を見据えていた。

青年が駆け抜けた後には、土を蹴り上げる長靴の下から砂埃が舞った。

まるで一陣の風のようだ。

隼のような俊敏な駆け足に、擦れ違った村人たちは目を丸くする。だが、それも一時のことで、直ぐに興味が失せたように、再び騒がしい喧騒の中に紛れていった。

それから、不意に疾駆していた小柄な体躯は、道を逸れて、低い木立が生い茂る中に飛び込んだ。

こちらの方が近道であることを青年は知っていた。

この場所は、青年が生まれ育った地元だった。幼いころからあちこちを遊び回ったこの場所は、最早、自分の庭のようなもので、それこそ目を瞑っていても走れそうな気がしていた。

やがて、青年の目が前方にあるとある一軒家を捕らえる。

くすんだ赤みを帯びた屋根は、記憶の中にある景色と寸分違わず、そこにあった。

軒先には、この祭りの期間の為の小さな旗が翻っていた。

黄色と緑と赤の旗。それぞれが、豊穣の神、大地の神、火の神の象徴だった。

そして、その手前に立ちはだかるようにして梢を伸ばす大きな【樫(ドゥープ)】の木の下で、青年は不意に足を止めた。
青年は、大人の腕でも二抱えはありそうな太い幹に手を着くと、徐に上を見上げた。
「何の真似だ？」
高く頭上を透かし見て、剣呑さを含んだ低い声を発する。
あれだけの距離を全速力で駆けて来たというのに青年は全く息を切らしていなかった。
それに呼応するように木漏れ日が踊る視界の隅で、黒い影が動いた。
そして、驚くほどに重さを感じさせない軽やかな動きで、するりと一人の男が枝の上から飛び降りて来た。
金色に近い明るい茶色の癖のない髪がさらりと靡いた。
「言伝は上手く伝わったようだな」
予想通りの展開に満足が行ったのか、男が小さく口角を上げた。
「どういう積りだ？」
だが、対する青年は、厳しい眼差しを相手へ向けていた。
秀でた額から覗く黄緑色の瞳は、細められ、相手を射貫く様に見据えられている。
「どういうって……。おいおい。久々に息子の顔を見たいっていう親心じゃないか」
だが、対する男は、青年の怒りの矛先が自分に向いていることにはまるで頓着していないようで、飄々と言葉を紡ぐ。
「はっ、生憎、俺には父親なんていやしないから、分からねぇな」
「おやおや、これはまた。偶さかの逢瀬だというのに、我が息子殿は、どうにも腹の虫の居所が悪いらしい」
――――何をそんなにカリカリしていることやら。
そう言って男が尤もらしく溜息を一つ吐いて、肩を竦めて見せれば、

「気色悪ぃこと言うな」
吐き捨てるような答えが返ってきた。
「――――で、何の用だ？」
尚も刺々しさを失わない青年の態度に、男は可笑しそうに喉の奥を鳴らした。
だが、それすらも青年の神経を逆撫でたようだった。
「何を笑っている？」
対峙する男を睨みつけていた顔に若干の呆れが混じり始める。
こちらの怒りが全く伝わっていないことがなんだか馬鹿らしくなって、青年は剣呑な態度をやや軟化させた。
「ククク……いやさ。余りにも上手くいったものだから。こっちも驚いているのさ」
それがどうして笑うことに繋がるのか、青年にはいまいち理解が出来なかったが、この男に関して言えば、その言動も行動もこれまで理解出来た例など一度たりとも無かったので、今更、気に病むのもなんだか馬鹿らしかった。
「あの娘は随分と優秀なようだ」
ぽつりと漏れた男の呟きに青年は眉を顰めたが、それも一瞬のことだった。
「キリル」
静かに名前を呼ばれて、青年は顔を上げた。
真正面から相手の顔を見る。
相変わらず、男の顔の左側は自分と同じ真っ直ぐな金茶色の髪で覆われていた。
そして、唯一残る右目の茶色の光彩は、先程までの軽薄さが嘘に思えるくらい穏やかに凪いでいた。
優しさを滲ませたその瞳に、キリルはうろたえた。
そんな顔をしている男を見るのは初めてだった。知らない表情を向けられて、今更、どんな顔をすればよいのか。
居心地が悪そうに身じろいだキリルに、男がうっそりと目を細め

た。

男は目の前に立つ己が血を分けた若き片割れを見つめていた。
こうして合図を出せば、打てば響く様に答(いら)えが返って来る。
それは血のなせる技なのか。そんなことを考える自分もどうかしていた。
あの花は、男がここに居ることを示したものだった。
黄色に紅い模様。その色は、男が青年を呼び出すときの符号で、幼いころから時間を掛けて、男がそれとなく仕込んだものだった。
無意識に浸透した認識に如実に反応が返ってくる。その事実を知ったら、青年はきっと顔を真っ赤にして絶句し、その後に激怒をするだろうが。
いつの間にか、下にあったはずの視線は、同じ位置になっていた。
記憶の中にあるほっそりとした頼りなげな背中も、それらしく、しなやかで強靭なものへと変わっていた。
男は心の内で大きく息を吐いていた。
親らしいことは何一つしてこなかった。
ただ、人知れず、遠巻きに、こうしてその成長を見守る位だ。
自分にそんな人間臭い所があるとは思ってもみないことだった。
それを思うと自虐的な笑みが零れ落ちる。

あの日、戯れに過ごした一夜。あの指輪を渡したのは、多分、気紛れのようなもので。
今となっては、どうしてあのような真似をしたのかは思い出せなかった。
若い頃には、誰にでもそうしたことが一つや二つぐらいあるだろう。そんな若気の至りだったはずだ。
全ては一時の気の迷い。そうして忘却の彼方に忘れ去られてしまっても良かったであろうに。

――――それなのに。

気が付けば、この場所を気に掛ける自分が居て、度々、ここに足が向かっていた。

縋るようなことも、責めるようなことも言わず、ただただ変わらずにそこにあり続ける女の姿に、自分の存在意義を刻みつけたかったのかもしれない。

全てが水に流され、そこに有った筈なのに無かったようにされる。それは自らが望んだ筈であったのに。擦り抜けてしまいそうな喪失感を埋めたかったのかもしれない。

人としての【心】をまだ失っていないことを確かめたかったのかもしれなかった。

最後の悪あがきのように。

恋をして家庭を持ち、子を育んで血を繋いで行く。それは、自分のような元より半端な人間には、手の届かない領域であったのだ。

浮草が安寧を求めて暫し夢を見る。

だが、夢はいつか醒めるものだ。それが、どのような形であれ。

自らが父親だと名乗りを上げる積りも毛頭無かった。

女が身籠ったことを知った時も。それが元で家を出されたことを知った時も。男は何もしてやれなかったのだから。いや、何もしなかったのだから。

ならば、今、こうしていることは贖罪の積りだとでも言うのだろうか。

それは――――男には分からなかった。

繋ぎとめたいのは自分なのかもしれない。縋りたいのは、自分の方なのかもしれない。

風の吹くまま、気の向くまま、天涯孤独を謳ったかつての自分はきっと嘲笑っているだろう。

だが、そんな泥臭くて、滑稽で、どうしようもない自分も嫌いにはなれなかった。

「新しい配属先はどうだ？　上手くやっているか？」
キリルは降って湧いたような問い掛けに、一瞬、虚を突かれたような顔をした。
「なんで、んなこと、あんたに聞かれなくちゃなんねぇんだよ」
ガシガシと髪をかき上げて、余所を向く。
「あそこの大将は強面だが、中々のもんだろ？」
「あ？　知ってんのか？」
こうして男の発言に驚かされることは、もう何度目になるだろう。
小さい頃から、ふらりと風のように現れては、訳のわからないことを言って姿を消す。会話はいつも一方的で、小さいキリルは煙に巻かれてばかりだった。
今度来た時は、何か言い返してやる。そんな子供染みた対抗心を燃やしてみたりもした。
それが、無意識に男の訪れを心待ちにしていることの裏返しだとは幸いにもキリル自身、気が付いてはいなかった。
「まぁ、風の噂ぐらいにはな」
男がひっそりと笑う。
自分の発した問いに対して、男は決して明確な答えを口にしたことはなかった。
それ以上は、追及をしようとも無理なこと。
なぜ、男がこうも自分を構うのか。
長じるにつれて、その答えは自ずと導き出されていた。
母に面と向かって尋ねたことは無かったが、一度、この男がふらりと家にやってきた時があり、その時の母の顔を見て、子供ながらにも直ぐにピンと来た。
そこにあったのは、初めて見る【女】としての母の一面だった。
そのことを知った時は、幼いながらにも衝撃を受けて、家を飛び出すと無我夢中に辺りを駆け巡った。大声を上げて、それこそ、へとへとになって倒れ込むまで。そして一頻り泣き喚いて気が済むと、

何食わぬ顔をして家に帰った。
戸口を開ければ、男の姿はもうなかった。
母親は、涙の後がくっきりと残る息子の見っともない顔に気が付いていたのであろうが、その事には触れずに、晩御飯の用意が出来ているから、手を洗って来いといつもと変わらぬ優しい穏やかな微笑みを浮かべて幼い息子を迎えたのだった。
そして、歳を経て、母親似だと言われ続けていた面立ちに、男らしさが加わった時、母親の目は自分の向こうに誰かの面影を見るようになっていた。
キリルは、それから鏡を見ることをしなくなった。ガラス窓に反射する自分の顔にも直ぐに目を逸らす位だ。鏡に映る自分の顔が、段々とあの男に似て来るような気がして、妙に腹立たしかったのだ。
あの男の所為で母はしなくともよい苦労を背負い込んだ。そして自分も、だ。
あの男の軽薄で掴み所のない顔を見るにつけ、苛立ちが募って行った。
誰もが通過するであろう反抗期と言ってしまえば、それまでだろう。
今ではそのことが頭では理解できていた。だが、感情の面ではまだ、追いついていけない。それが、男に対するぶっきら棒な態度になって表れていた。
家を出たい、村を出たいと思った理由の一端には、そんなこともあったのだ。

「まぁ、元気そうで何よりだ。随分と男らしくなったじゃねぇか、あ？」
男はそう言って、キリルの傍に寄ると肩を軽く叩いた。
そして、その腕を逞しくなった肩に回す。
キリルは眉を顰めて嫌そうな顔をして見せたものの、それを振り払おうとはしなかった。

「大分、揉まれたようだな。これなら、砦でもやってけるだろう」
――――あそこの訓練は、中々きついって聞くからな。
そんな、どこかで見てきたような口を利く男に、キリルは半信半疑で、疑わしげな視線を投げた。
「あ？　信じてねぇな。ま、いいさ。その内分かる」
だが、男は気にも留めず、楽しそうな声を上げた。

外で騒ぐ人の声が聞こえたのだろうか。
【ドゥープ（樫の木）】の大木の傍にある家の窓が不意に開くと、中から一人の女が顔を覗かせた。
緩やかに波を打つ茶色の髪が、陽の光に反射する。
黄緑色の優しさを滲ませた女の目が驚きに見開かれた。
「まぁ、キリル。おかえりなさい」
驚きは一転。すぐさま女の顔は柔らかな笑みに包まれた。
「母さん。ご無沙汰してます。只今戻りました」
キリルが小さく微笑んだ。
肩を組んで並んだ二人の男たちを目の当たりにして、女は擽ったそうに笑った。
「さぁ、いつまでもそんな所に突っ立ってないで、中に入ってらっしゃい」
女が招く様に声を掛ける。
「キリル、それに【アリョール（鷲）】、貴方も」
キリルは思わず、男の方を見た。
男はそれに一つ頷いて見せると、己が息子を促すように、その手を背に当てて、女が待つ家の戸口へと促したのだった。

家族の肖像（後書き）

もう一つのタイトルは【はた迷惑な伝言】というところです。流れとしては前の二本の話を下敷きにしています。次回は、いよいよこの章の大詰め、アクサーナとデニスの婚礼場面をお届けします。

純白の花嫁

――――ゴーリカ！　ゴーリカ！　ゴーリカ！　ゴーリカ！
集まった人々が盛大に囃したてる向こうで、花嫁衣装に身を包んだ乙女とその脇に寄り添うようにして立つ正装をした青年が並んで見えた。

――――ゴーリカ！　ゴーリカ！　ゴーリカ！　ゴーリカ！
花嫁の顔は喜びに輝いている。それを見守る花婿の顔も堂々として威厳に満ちていた。

――――ゴーリカ！　ゴーリカ！　ゴーリカ！　ゴーリカ！
尚も村人たちの歓声は止まらない。
花嫁が照れたように、はにかんだ笑みを浮かべた。新郎も緊張した面持ちの中にやや引き攣ったような笑みを浮かべている。
だが、囃したてる人々の声は、益々高まりを見せていた。
皆、心を一つにして、【あること】を待っていた。
それは、婚礼では最早お馴染みの欠かせない光景であった。

――――ゴーリカ。
その言葉の意味は、【苦い】ということだ。人が感じる味覚の甘い・苦いの【苦い】である。
連呼される【苦い】という言葉に、リョウは、そっと隣に立つロッソの袖を引いた

広場の真ん中では、アクサーナとデニスの婚礼が執り行われている真っ最中だった。
式の進行も恙無く進み、若き二人は、礼拝堂の司祭と村長のダル

ジの立ち会いの下、婚姻を結ぶ宣誓を行った。

あの後、キリルは実家に帰ったというイサークからの報告を受けて、リューバの家に残されたリョウとロッソは一先ず安堵の息を吐いた。

そのまま、キリルは母親の所に泊るであろうからということで、リューバは一人残されたロッソに一夜の宿を提供した。

最初は丁重に断りの文句を口にしたロッソであったが、リューバの迫力に最終的には根負けした形で、その首を縦に振ったのだ。

そして翌日、どうせなら、お祭りの一番の盛り上がりである婚礼に顔を出していけばよいということで、ロッソはリョウと連れだって村の中心の広場に来ていた。

ロッソが身に付けている服装は、昨日見た洗いざらしの簡素なものではなく、村の男たちと同じような晴れ着であった。あのままでもロッソ自身は頓着しなかったようなのだが、リューバがそれを許さなかった。地味な服装の方が却って目立つということで、リューバの旦那さんが昔に着ていたという代物を急遽拝借することになったのだ。運よく背格好も似たようなものであったようで、袖丈が若干短い気がしないでもないが、借りものにしては十分と言える位であった。

髭も綺麗に剃り直し、髪もそれらしく整えて。光沢のある柔らかなシャツに袖を通したロッソは、見違えるように垢抜けて見えた。同じく光沢のある黒のズボンに、淡い緑色の腰帯を巻き、その端を長く横に垂らしている。

元々端正な造りであるとは思っていたが、兵士らしい荒削りの野暮ったさみたいなのがすっかり鳴りを潜める形になっており、リョウは不思議な気分になった。

着替えを終えたロッソを見たリューバは、暫く矯めつ眇めつその周りを巡った後、満足そうに息を吐いた。

そして、先に着替えを終えて待っていたリョウが隣に並べば、
「そうしていると若い頃を思い出すわ」
懐かしそうに目を細めたのだった。
きっと思い出しているのは、夫と過ごした若かりし頃のことなのだろう。
全てが輝いて、希望に満ち溢れていた頃の思い出。
リューバの旦那さんは、まだ若い頃に旅立ったとのことだった。
それから、リューバは一人で、二人の男の子を立派に育て上げた。
「良く似合っているわ」
優しく微笑んだリューバに、ロッソは居心地が悪そうに身じろいだ後、小さく礼を口にした。

小さく袖を引かれて、ロッソは、直ぐ脇に立つリョウを見下ろすと、無言のまま、『なんだ』と視線だけで問うた。
「あの、何故、【ゴーリカ】と連呼しているんですか」
囁く様にして発せられたリョウの問いに、ロッソは一瞬、意外そうな顔をした。
「知らなかったか？」
「はい」
素直に頷いたリョウに、ロッソは一つ咳払いをしてから簡単に説明をした。
「あれは、新婚の二人に口付けを促す掛け声だ。こっちは【苦くて】しょうがないから、二人の口付けでここの空気を【甘く】してくれということだ」
それで、【ゴーリカ】。こっちは【苦いぞ】ということなのか。
幸せのお裾分けを求めて、周囲がそれにあやかろうというのだろう。
成程と納得して、隣を見上げれば、ロッソはどこか面映ゆそうな顔をしていた。

その隙に、ワァーという歓声が響いた。
慌てて顔を正面に戻してみれば、アクサーナがデニスと口付けを交わしている所だった。
周囲の人達から歓声と共に拍手が沸き起こる。
リョウも釣られるように精一杯の拍手を送った。
それを合図に周りに控えていた楽師たちが一斉に曲を奏で始めた。
村を挙げての婚礼祝いの始まりだ。

主役であるアクサーナとデニスは、集まった村人たちに揉みくちゃにされていた。
アクサーナの周りには同じ年頃の若い娘たちが群がり、アクサーナはいつも以上に頬を上気させて、笑顔が眩しい位だった。
一方のデニスも、周囲を友人達が取り囲み、一足先に独り身を脱した仲間を憎まれ口半分、やっかみ半分、そして嬉しさ半分、激励半分で取り捲いていた。
少し脇に視線を流せば、案の定、花嫁の父親であるクルスクは、鼻を真っ赤にさせて、ぐずぐずとハンカチを手に溢れ出る【心の汗】と戦っているようだった。それを宥めるように、妻のナジェージュダが、周囲から掛かるお祝いの言葉に笑顔を振り撒きながら寄り添っている。その直ぐ隣には、アクサーナの姉であるエレーナとその夫のキーン。そして、双子の子供たちの姿もあった。

リョウは思わず目頭を押さえた。
ここにあるのは、幸せそのものの家族の形だ。温かな日常。
それに触発されるようにして、自分が失くしてしまったモノの輪郭が滲み出るように侵蝕を始める。
不意に湧いた、恐ろしい程の喪失感に足下が竦みそうだった。
リョウは、無意識に自分の胸元を握りしめていた。
そこにあるのは、小さな瑠璃色の光を放つペンダントだった。
そして、呼吸を整える。震えそうになる指を握りしめて。

「リョウ？」
怪訝そうなロッソの声に、リョウは我に帰った。
慌てて指先で目元を拭うと、にっこりと微笑んで見せた。
「余りにもアクサーナが嬉しそうで。良かったなって。クルスクさんじゃないですけど、少し伝染したようです」
そんな急拵えの弁解に尚もロッソが眉を顰めたが、
「「リョ～ウ～！」」
タイミング良く二つの小さな塊が背中に追突してきて、それ以上の追及を免れた。
後ろを振り返れば、この間よりもお洒落をした小さなミーシャとカーチャの二人が元気一杯に拳を振り上げていた。
「踊ろうぜ！」
「踊ろう！」
急襲に似た突撃に苦笑い。
二人の中では決定事項であったのか、こちらが声を出す間もなく、リョウは、二人に手を引かれるようにして踊りの輪が出来ている方へと連れていかれた。
視界の端を掠めたエレーナとキーン夫妻は、若干、申し訳が無さそうな顔をしながらも、幸せそうに微笑んでいた。
それに笑顔で応える。
そっと後ろを振り返れば、こちらを見ていたロッソは手を一振りして、行って来いとの合図を送った。
それに軽く頷き返して。
無意識に溜まりそうになった澱を吐き出すように、リョウも少し前を行く二つの小さな背中に声を掛けていた。
「ねぇ、ミーシャ、カーチャ」
「あ？　なんだ？」
「なぁに？」
揃って振り向いた二対の緑色の瞳に、とっておきの秘密を漏らす。
「ワタシ、踊ったことないんだけれど、大丈夫かしら？」

首を傾げて見せれば、二人は立ち止まり、吃驚したように目を丸くしたけれども、直ぐにミーシャが得意げに親指を突き上げて胸を反らした。
「簡単さ。俺が教えてやるよ！」
「アタシも！」
「ありがと。じゃぁ、二人ともよろしくお願いね」
そうやって小さな先生に手を引かれるようにして、既に出来上がっている輪の中へリョウも足を踏み入れたのだった。

鳴り響く楽の音色に合わせて、踊りの輪をくるくると幾つか回った所で、隣になった男が、不意に声を潜めて囁いた。
「お嬢さん。悪いことは言わないよ。そいつは仕舞って置くんだ」
声のした方に顔を向けて、リョウは思わず息を飲んだ。
「あなたは……」
だが、それ以上の発言を阻止するかのように、男は指を一本、自分の口元に当てる。
真っ直ぐな癖の無い金茶色の髪が、軽やかなステップに合わせて弾み、穏やかな日の光を反射して目映いばかりに輝きを放っていた。
見紛う筈がない。男は、昨日の【スカモーロフ（道化師）】だった。
昨日のように仮面は付けていない。なので、右半分の本来の顔が露わになっていた。
削げた頬に、やや吊り上がり気味の鋭い眼差し。そこにある瞳の虹彩はありふれた淡い茶色だった。
男の視線は、自分の胸元に注がれていた。そこにはいつの間に出たのか、瑠璃色の石が煌めくペンダントが白いシャツの上で跳ねていた。

リョウは、曲に合わせて足を動かしながら、自由が利く方の手で揺れる青い石をシャツの中に入れた。

それでいいと頷いて、男はからかう様な微笑みを浮かべていた。
「お嬢さんには、恋人がいるんだね」
突然、断定されたように口にされて、訳が分からないという顔をして隣を見上げれば、男の眉がひょいと上がった。
「おや？　違うのかい？　それとも照れているだけかな。別に隠すことなんてないだろう。そいつは恋人から貰ったものなんだろう？」
――――深い青色の瞳を持った男だ。違うのかい？
確かに、男が言うように、これはとある男性から貰ったものだったが、別に恋人という訳ではなかった。
「そんな色のある話ではありませんよ」
苦笑を滲ませて困惑気味に答えれば、男は尚も意味深に目配せをしながら言葉を紡いだ。
「お嬢さんは、これをある男から貰った。そうだろう？」
事実を客観的に捉えれば、そういうことになる。
「……そういう意味では、間違ってはいませんが」
「ああ、そいつも浮かばれないねぇ」
――――可哀想に。
いかにも残念そうに出された声に、リョウは思わず、剣呑な声を出していた。
「何が、仰りたいんですか？」
その言葉に男は意外そうな顔をした。
「おや、お嬢さん、そいつは本気で言ってるのかい？　そんな振りをしているなんざぁ、止めた方がいい。性質が悪いよ」
そう言って、少し意地が悪そうに笑う。
昨日といい、今日といい、この男は一体、何がしたいのだろう。
訳の分からない言いがかりにリョウが目を白黒させていると、その表情から、男は相手が嘘を吐いていないことが分かったようだった。
「おやおや、こいつは驚いた。その様子じゃぁ、ご存じないようだね」

大げさに肩を竦めて、驚いたという表情を作って見せる。
「何のことですか？」
リョウは思わず、焦れたように問い掛けていた。
「そうかい、そうかい。そいつは面白い」
だが、これだけ前振りをしておいても、男はその問いには答える積りは無いらしく、愉快そうに何やら一人で合点をした後、こう付け足した。
「そいつは大事にするんだ。だがね、異国のお嬢さん。そいつをみだりに他人に見せてはいけないよ？　いいかい？」
言葉の真意を探るようにリョウは男を見つめた。
何故、男は自分にそのような助言をするのだろうか。
――――これをみだりに他人の目に晒してはいけない？
詰まり、これは自分のような者が持っていてはいけない代物なのか。
ぐるぐると様々な疑問が渦のようになって湧いて出て来る。
――――そう言えば。
この男が隣に並ぶ前に、次々と入れ替わり立ち替わり踊りの輪の中を、ステップを踏んで行く男たちの中に、このペンダントのことを尋ねてきた人物がいた。
綺麗な石だと誉められて、悪い気はしなかった。石の由来を聞いて来た者もいたが、これは貰いものであったので、リョウ自身はそれらの質問に答えられはしなかった。
「何故、ワタシに、そんなことを？」
思い切って尋ねれば、男の口元が薄らと弧を描いた。
「昨日の礼さ」
その言葉にリョウは益々困惑した。
「あなたにお礼をされる覚えはありませんが？」
そう言えば、男は酷く可笑しそうに喉の奥を鳴らした。
「ハハハ。まぁ、いいじゃないか。お嬢さんには無くっても、こっちにはあるのさ」

相変わらず何を考えているのか分からない表情で、男は唯一顕わになっている右目を瞑って見せた。
それにリョウは息を深く吐き出した。
「分かりました。それでは、そういうことにしておきましょう」
この男とまともに理解し合おうというのがそもそもの間違いなのかもしれないと思った。
男のリズムと言語感覚は到底自分とは掠りそうもなかった。ならば、こちらの線引きの中で、出来る限りの距離を測るだけだ。

そうこうするうちに、曲が段々と終わりに近づいてきた。
フィナーレへ向けて、【バラーニ（太鼓）】が激しく打ち鳴らされ、竪琴や弦楽器、笛が奏でる旋律が急峻を帯びて行く。
――――――ジャン。
そして最後の一音が、轟きのように響いた。
不意に落ちた一瞬の空白に、輪を形作る男たち、女たちが作法の如く、軽く目礼をする。
そして、緩やかな楔で築かれていた円形は、再びばらばらに点となっていった。

やがて、少し離れた所で、別の踊りの輪が生み出される。
次の踊りの輪には、新郎・新婦も参加をするようだ。
こうして、この賑やかな踊りの連鎖は、踊り手たちが疲れ果てるまで、延々と続くことになるのだ。

踊りの輪からさっと身を翻す前に、男はリョウの耳元に小さな囁きを残して行った。
――――――この国の男は、惚れた相手に自分の瞳と同じ色の石の付いた装飾品を贈るのさ。そいつは、どうやら、お嬢さんにぞっこんのようだね。
発せられた言葉の正確な意味を理解するのに、時間が掛かった。

リョウは暫し、その場に立ち尽くした。
そして、呆けたように軽やかに去って行く男の背中を見つめていた。
男の微かな笑い声が耳元でこだまする。
冗談にしては余りにも性質が悪すぎた。
リョウは思わず自分の胸元へ手を当てていた。
そこに隠れているのは深い輝きを放つ瑠璃色の石だ。偶然にも、これを自分にくれた男も同じ色の瞳を持っていた。
そこまで、考えて。リョウは揺るく頭を振った。
湧き出て来る雑念を払拭するように。
馬鹿げている。余りにも。
あの男が何(スカモーロフ)を知っているというのだろう。

リョウは気持ちを入れ替えるように顔を上げると、ざっと周囲を見渡した。件のお騒がせ男の姿を目で追う。
男の傍には振る舞い酒の入ったグラスを手にしているキリルとロッソの姿があった。
昨日は実家に帰り、久々に母親のナターリアと親子水入らずの時間を過ごしたであろう年若い鷹匠(キリル)は、村の男達と同様に真新しい晴れ着に身を包んでいた。
こうして端から見るとキリルとあの男は良く似ていた。昨日、自分が思った親子であるという想像は強ち間違っていないのかもしれないと思える程だ。
ぼんやりとその光景を眺めていた所為か、向こうの二人がこちらに気が付いた。
キリルが軽く目礼をしたのに微笑みを返す。
ロッソは二人に何やら一言、二言告げると、こちらにやってきた。
「大丈夫か？」
どこか気遣わしげな青灰色の瞳がリョウを見下ろしていた。
他人の感情の機微に敏いロッソに居たたまれなさを感じるのは決

まってこのような時だ。
この男の優しさを心苦しく思う自分は、何という罰当たりだろうか。
「どうしたんですか？」
それに気が付かない振りをして、リョウはロッソを見上げた。
穏やかに微笑んで見せたリョウをロッソは暫し、無言のまま見つめた。
「いや」
だが、直ぐに緩く頭を振った。
「リョウも一杯どうだ？」
――――中々に上手いぞ。
そう言って、何事も無かったように手にしたグラスを小さく傾けて見せたロッソに、リョウは心の内でありったけの感謝の言葉を口にしていた。
「そうですね」
そうして、リョウはロッソに促されるようにして、喜びに湧き立つ人垣の中に入って行ったのだった。
村を挙げての婚礼祝いの宴は始まったばかりだ。

純白の花嫁（後書き）

第一章を書き終えた直後、次の話をどうするかと考えたときに、真っ先に浮かんできたのが、この婚礼のシーンでした。当初より随分と話が膨らみ、かつ脱線したので、ここまで来るのにかなり掛かりました。漸くという感じです。ちなみに、ロシアでは結婚式のパーティーなどで、新郎新婦を前に集まった人々が本当に【ゴーリカ】と連呼します。

それぞれの夜

「リョウ、ちょっといいか？」
アクサーナとデニスの婚礼を終えた夜、リューバの家に戻り、簡単に昼間の汗を流した後、自室へ戻ろうとしている所をリョウは呼びとめられた。
声がした方に顔を向ければ、客室の扉の前で、同じくリューバの下に厄介になっているロッソが顔を覗かせていた。
無言で顎をしゃくったロッソに、リョウはタオルを首に掛けたまま、一つ頷き返す。
「済まないな」
「いえ」
ロッソは、そう言って、中に入ってきたリョウに部屋の中に一つだけ置かれてあった小さな椅子を勧めた。そして、自分は寝台（ベッド）の上に腰を下ろした。
「砦に戻る前に、一つだけ、確認しておきたいことがあってな」
静かに切り出されたその言葉に、リョウは目を瞬かせた。
「なんですか？」
当然の切り返しに、ロッソの視線が、躊躇うように揺れた。開きかけた口が、再び閉じる。膝の上で組まれた手の親指が忙しなく動いていた。
何か聞きにくいことでもあるのだろうか。
ロッソのそんな様子は、北の砦滞在時、いつも落ち着いていて暴走しそうになる同僚たちを時に窘め、軌道修正させるという兄貴肌的な姿ばかり目にしていたリョウには、とても珍しく映った。
リョウは、可笑しそうに小さく笑った。
「そんなに聞きにくいことなんですか？」
ロッソは若干、気まずそうに己が柔らかな茶色の髪をかき上げた。

そして、つるりと頬を撫でた。
昼間は綺麗に剃られていた髭も、夜になって少し伸びたのか、頬から顎を縁取る色が濃くなっていた。
だが、そちらの方が、寧ろ見慣れた相手の顔でもあった。
ロッソは、リョウを真正面から見た。
こちらの内心の狼狽とは裏腹に、相変わらず可笑しさを堪えるような笑みを浮かべていた。
それを見て、ロッソは観念したように息を一つ吐き出した。
漸く、覚悟を決めたらしかった。
不意に真面目な顔をしたロッソに、リョウも表情を改めた。
「帰還後、俺には、ここで見聞きしたこと全てを報告する義務がある」
それは、ロッソ自らがここに来た理由を任務の一端であると認めるような発言だった。
だが、敢えてその事には触れることなく、リョウは小さく頷いて見せた。
「それには、勿論、リョウ。お前のことも含まれるだろう」
要するに、このスフミ村で自分に逢ったということを上に報告するということだった。それならば、別段、問題は無い。
「ええ。別に構いません」
「俺は、……ありのままを報告する積りだ」
――――それが、何を意味するか分かるか。
ロッソは慎重に言葉を選んでいるようだった。
「詰まり、ワタシがリューバの下に滞在し、村で行われた婚礼に出席したということですか？」
その問いにロッソは視線を脇に流した後、やや言い難そうに口を開いた。
「まぁ、平たく言えば、それもそうだが。リョウ、お前は砦に居た時は男だと思われていただろう？」
その言葉に、漸く、リョウは相手の躊躇いの原因を悟ったのだっ

た。

詰まり、ロッソは自分が女であることを報告に入れてもよいかという確認を取りたかったのだ。

リョウは、思わず微笑んでいた。

思慮深く、心優しいロッソのことだ。自分が男の格好をしている理由について、きっとあれこれと要らぬ気を回して色々と考えたに違いなかった。

自分が男に間違われていた経緯もここで女物の衣装を着た経緯も、リョウに取っては、実に取るに足らないことであったのだが、ロッソにはそう見えなかったようだ。きっと、ああでもない、こうでもないと勘繰ってしまったのだろう。

無駄に気を使わせてしまったことを心苦しく感じると同時に、相手がそこまでの配慮をしてくれたことを純粋に嬉しく思った。

「ロッソは、ワタシが女であったことを伝えてよいものかと悩んでいたんですね」

「ああ。早い話がそうなるな」

核心を突けば、あっさりと認めた。

「それなら、問題はありません。本当のことを伝えてもらって構いませんよ」

淡々と紡がれた言葉にロッソがこちらを探るような視線を向けた。

「いいのか？」

「はい。別に隠すことではありませんから。但し、砦の皆が信じるかどうかは、また別の話になるでしょうが」

最後、苦笑気味に付け足された言葉に、ロッソは、かなり微妙な表情を浮かべた。

風呂上がりで、リョウはゆったりとした作りの簡素な生成りのシャツとズボンを身に着けていた。ここでは寝間着代わりにしているものだ。

濡れたままの黒髪は、明るさを抑えられた発光石の灯りに鈍く光

を放っていた。
その事実にロッソは、今更ながらに気が付いたようだった。
「済まない。風呂上がりだったな」
濡れたままの髪をよく拭く様に告げられて、リョウは擽ったそうに喉の奥を鳴らした。
「いいえ。大丈夫です。直ぐ乾きますから」
そう言って、首に掛けたタオルの端で髪を拭う。
昼間の残像が色濃く目裏に焼き付いている所為か、そうして男物の寝間着を身に着けていたとしても、最早、ロッソの目には、リョウが男だとは到底、思えなかった。
シャツの隙間から覗く腕も、開いた襟元から覗く首も、驚くほど細い。それこそ、砦の男達であれば、片手で簡単に捻り潰せそうな位に、だ。

――――――それから。
「ルスランは、既にご存じですよ」
そっと目を伏せてから、リョウは砦の中で自分の秘密を知っているであろう男の名前を挙げた。
「団長が？」
意外なことだったのか、ロッソが少し驚いた顔をした。
「はい」
他の兵士達と比べて身体的接触を密に持ってしまったという理由もあるのだろうが、出会って直ぐ、その日の内に、向こうは自分の本来の性別に気が付いていた節があった。
その事を話せば、ロッソはあからさまに感嘆の息を吐いた。
どうやら、無駄に団長への評価を高める形になってしまったようだ。
そして、序でとばかりに、馬や伝令の鷹たちを始めとする獣たちは、皆一目で見分けたということを話せば、目を丸くして、ややばつの悪そうな顔をしながら、『そうか』と大きく息を吐き出したの

だった。　知らなかったとはいえ、自分も気が付かなかったということが心苦しかったのだろう。
　それを感じ取ってか、リョウは気にすることはないと穏やかに微笑んだ。
「ロッソ、そんな顔をしないでください。ワタシは全く気にしていませんよ。シーリスやヨルグ、それにブコバルも気が付いてはいないようでしたら。ルスランは、偶々です。それに、このことに関しては、恐らく、ルスランから話が行っているのではないかと思います」
　だから、ロッソがそのことを報告しても別段、問題にはならないだろう。自分も敢えて秘密にしていた訳ではないのだから。
　そう結論付けたリョウに、ロッソは言葉少なに、
「そうか」
　と口にしただけだった。

――――――そう言えば。
　リョウが砦を後にした際、ブコバルが矢鱈と大きな声を張り上げたという噂を食堂で耳にしたことをロッソは思い出した。
　その日、一日、まるでこの世の終わりのように愕然とした表情を浮かべ、随分と落ち込んだ様子であったという。
　自分は間近にいなかったので、実際、その真実の程は良く分からないが、その姿を遠くから垣間見た時には、砦の兵士達の間でも一位・二位を誇る逞しい体つきが、やけに小さく見えたような気がした。
　ある種、異様な空気に、若い下っ端の兵士たちは、居心地が悪そうに恐恐としていたが、ブコバルの周囲に集う団長（ルスラン）や副団長（シーリス）、そして、その補佐官（ヨルグ）といった砦中枢部の人達は、いつもと同じように淡々としていた。副団長などは、実にいい笑顔を浮かべて、ブコバルをからかっていたらしい。
　だが、そんな珍しく打ちひしがれたブコバルの様子も、元来の能

天気さが幸いしてか、決して長続きはしなかったようで、翌日にはけろっと元に戻っていたらしい。そして、昨日の憂さを晴らすように、翌日の訓練は実に容赦の無いものだった――――というのは、後の兵士達の語り草でもあった。

ひょっとしたら、女相手の駆け引きに掛けては右に出る者がいないと豪語する、根っからの女好きであるブコバルが、最後までリョウが女であることを見抜けなかった事実を知らされて、そのことに衝撃を受けたのではないかと、リョウの話を聞き終えたロッソの中では、妙な邪推すら生まれていた。

その思い付きは馬鹿らしくもあったが、妙な説得力があったのだ。その証拠に、落胆したブコバルの横で、団長はいつになく上機嫌であったらしいと他の仲間たちが噂話をしていた。

ロッソがそのような他愛もないことを思い出していると、

「砦の皆は変わりありませんか？」

リョウが静かに微笑んでいた。

「ああ。アッカの傷もすっかり癒えたし、セルゲイもオレグも相変わらずだ」

皆の様子を聞かせて欲しいと懐かしそうに目を細めたリョウの申し出に、ロッソは思い付く限りの仲間たちの模様を話して聞かせた。

リョウは訥々と紡がれるロッソの話に、時折、合槌を打ち、可笑しそうに小さく忍び笑いを漏らした。

こうして、夜の帳が完全に下りるまでの短い一時、久々の再開を果たした仲間は、ささやかな親交を深め合ったのだった。

さて、所変わって。

今回の任務におけるロッソの相棒、若き鷹匠であるキリルが過ごすナターリアの家を覗いてみることにしよう。

母親と久々に親子水入らずの一時を過ごしていたキリルであったが、その様子は、もう一人余計に加わった人物のお陰で、お世辞にも、和やかと形容されるようなものにはなっていなかった。

キリルは、自分が横になる寝台（ベッド）の反対側で、静かに横になる男を横目で透かし見た。

何を考えているのかは知れないが、大胆にも自分のことを父親だと名乗って憚らないこの男は、珍しくこの家に泊って行くと言ったのだ。

キリルが知る限り、それは初めてのことだった。

なんとも調子が狂うではないか。

それは、母親のナターリアにとっても実に意外な申し出であったらしい。

母親は、男の気紛れに、いつも優しげに細められている自分と同じ光彩を持つ黄緑色の瞳を目一杯開いて、その後、嬉しそうに破顔した。そんな母親の顔を見てしまえば、息子であるキリルは、表立って嫌だとはどうしても言えなかった。

「なぁ、キリル」

発光石の灯りを完全に落として。

差し込む月明かりが、部屋の中に濃淡の影を作る室内に、男の低い呟きが響いた。

キリルは返事をしなかった。目を瞑って寝たふりをする。

だが、そのことを男は全く気に留めていないようで、尚も言葉を紡ぎ始めた。

「あの娘（こ）……確か、リョウといったか。お前はあの子を知ってたんだな」

キリルは瞑っていた瞼を開くと、そっと首を回した。

両手を頭の下に掲げて、寝台に横たわったまま片膝を立てた男は、天井を見つめていた。

「会ったのは、昨日が初めてだ」

答える積りは無かったのに、何故か言葉がするりと口を突いて出ていた。
「ナターシャの話じゃぁ、あの術師（リューバ）の所にいるらしいじゃねぇか」
「アクサーナが、婚礼に招待したと聞いた」
「あ？　この村に居るんじゃねぇのか？」
男の顔が、こちらに向いたのが視界の隅で感じ取れた。
「さぁな」
母親の話では、時折、村を訪れるのだということだった。
薬師でもあるリューバに薬草を届けているらしい。どこで暮らしているのか、この辺りでは見かけない珍しい顔立ちは何処の生まれなのか。それは、誰も知らないとのことだった。
この村の大人たちは、一度懐に入れた相手に関しては、無駄に詮索をしない。
男はキリルの曖昧な言葉から、その正確な意味合いを悟ったらしかった。
「にしちゃぁ、ここに随分と馴染んでるみてぇだったが」
「最初に連れて来たのは、あの【森の爺さん】だって聞いた」
それは、ここから遥か北西に広がる森、通称【帰らずの森】という物騒な名前を恣にしている場所に暮らすという男のことだった。
村の人間は、その真偽を確かめたことは無かったが、実しやかにそんなことを話していた。
ここは、国でも北の辺境に位置する街道沿いの最後の集落で、それより以北は、人が暮らす町や村は存在しなかった。村の人間は、誰一人として、ここから北上をしたことはないのだ。
だが、そんな中で、時折、思い出したようにこの村の術師を尋ねて来る男は、どうやらその北の方角からやってくるらしいとのことだった。
村人たちは、その男を『ガルーシャ』と呼んでいた。痩せてひょろりとした背中に長い外套を引きずっている、風貌からして少し風変わりな男だったが、その男が【術師】であるということに、村人

たちは【術師】というものは皆、そのような奇特な輩だと思っている節があるようで、別段、気にも留めなかったようだ。

「あ？　あの偏屈なジジイか？」

心当たりでもあるのか、男の顔が嫌そうに顰められた。

偶に分からなくなる。この男は、村人ではないのに実に村のことに精通している。それに、様々な場所を放浪している所為か、とても物知りなようだった。と言っても、そういう空気を言葉の端々に感じるだけで、キリル自身、この男が何処で何をやっているのか、全く想像が付かなかった。

それはさておき。

キリルの記憶の中にある【森の爺さん】の輪郭は、酷く曖昧だった。

いつやってくるか分からない幻のような存在で、実際にその姿を目にしたのは、幼い頃、遠目に一・二度位といった所だった。

だが、村の大人たちの間では、それなりに交流らしきものがあったようで、村人は皆、親しみを込めて『ガルーシャ』と呼んでいた。

それっきり、何か物思いに沈むように口を噤んでしまった男に、キリルは静かに目を閉じた。

深い眠りに誘われ、薄れゆく意識の中で、

「おやすみ」

――――――オヤジ。

キリルは無意識に口にしていた。

その消え入りそうな微かな囁きを拾って、男が動きを止めた。

「ああ。おやすみ」

そう言って、囁き返した男の口元は、暗闇の中で、いつになく弧を描いていた。

【青】の象徴

――――ふらりぷらり。ふらりぷらり。
日の光を反射して、青い石が振り子のように揺れていた。

――――ふらりぷらり。ふらりぷらり。
少し歪な形をした多面体。剥き出しの水晶のように切断された断面が、青い光を切れ切れに辺りに散りばめる。それに合わせて、長い光の粒子を帯びた影が、点々と躍った。
そこから透かし見る【ソンツェ（太陽）】は、ゆうらゆうらと白く輝いていた。

一人の人物が、小高い丘の付近、大きな枝葉を伸ばす大木の木陰に寝そべっていた。
洗いざらしのくすんだ色合いのシャツに着古した草色の上着を着て、色褪せた茶色のズボンを穿いている。膝から下は、歳を経て飴色になった焦げ茶色の長靴で覆われていた。その傍には使い古された鞄が無造作に置かれてあった。
先程の光は、この人物が手にする細い鎖の先から生まれていた。
華奢な銀色の鎖。それを手にする指も細く骨ばったもので。
そんな白い指によって摘み上げられた鎖の先端には、濃紺とも瑠璃色とも取れる青い石が付いていた。
その石が、ふらりふらりと揺れる。不規則に。小刻みに。
時折、思い出したように風が吹いた。
そして、攫うように、その人物の緩く束ねられた黒い髪を靡かせていた。

眼前に広がる空は高く、抜けるように青い。

だが、それは、この手の中にある【色】とは違った。
これは、その【色】ではない。
例えるならば、そう。夕暮れ時、日没に現れる、完全に世界が闇に包まれる前の一時の【アオ】。寒い冬の時期、透き通る凍てついた空気の中で深みを増した【アオ】。
冷たさと静謐さ、そして深淵さを兼ね備えた色だ。
そして、遠い記憶の中にある海の色。馴染み深い北国の緩やかな稜線の向こうに見える凪ぎの色。
ここから遥か東南の方角には、海があるという。随分と栄えた賑やかな港町があるという。海の水は塩辛いのだと海など一度も目にしたことがないという村の男が、しきりに感心をしていた。
それは、昨日の酒の席で戯れに耳にした話しだった。

リョウは、上空に掲げていた腕を下ろすと、そっと目を閉じた。
目裏に浮かぶのは、この石と同じ色を湛えた瞳。
――――――紛らわしいことをする。
あの人に、他意はなかったのであろうが。
その口元に苦笑とも判じ難い笑みが零れた。
耳の奥には、まだ昨日のざわめきの中で囁かれた【スカモーロフ（道化師）】の言葉が残っていた。

――――この国の男は、惚れた相手に自分の瞳と同じ色の石の付いた装飾品を贈るのさ。

あの後、念の為、リューバに確かめてみたところ、それはどうやら本当のことらしかった。ただ、男が女に求婚をする際には、専ら、指輪として相手に贈るのが一般的だという。
それを聞いて、安堵した。
だが、それと同時に何故か、落胆に似た気持ちが生じていた。
良く見れば、リューバの指にある指輪には、【琥珀】を思わせる

明るい茶色の透明な石が付いていた。　それは、リューバが娘時代に旦那さんから貰ったもののらしかった。

自分が手にしているものは、ペンダントだ。

お守りだとあの人は言っていた。そして、これはガルーシャの形見でもあるのだ。それ以外の意味がある訳はなかった。

何を期待していたというのだろう。

ほんの一瞬でも掠めた都合のいい思い付きを慌てて打ち消す。

結局、あの【スカモーロフ】には、体よくからかわれてばかりだった。

きっと、この顔が傍目には物珍しかったからだろう。あの男は、自分を【異国のお嬢さん】と呼んだ。

こういう時に、自分が異邦人であることを思い知らされる気がした。

まだまだ知らないことは沢山あった。いや、知っていることの方が少ない位だ。

時として、不意に形容し難い焦燥感に捕らわれることがある。だが、今更、焦っても仕方がないことなのだと頭では理解している積りだった。

それでも、感情は別の所にあって。

その乖離にどうしようもない程のもどかしさを感じるのも確かだった。

幸いにも時間だけはたっぷりとある。それを生かすも殺すも全て自分次第だった。生来の楽天的な性格は、【この場所】でも変わることがない。それを幸運に思った。

『リョウ』

カサリと枯れ草を踏む音に続いて静かに響き渡った低い声に、リョウは、ゆっくりと閉じていた瞼を開いた。

そこに覗くのは、この辺りでは余り見かけることの無い漆黒を孕んだ瞳だ。

鼻面を突きだした相手に、リョウはそっと手を伸ばして触れた。
「ねぇ、セレブロ」
黒い瞳が相手の姿を映して微笑む。
そして、いいことを思いついたとばかりに悪戯っぽく小さな光を放った。
体を起して、華奢な鎖を己が首元に付け直すと、リョウは、目の前に立つ白く輝く毛並みを持つ、大きな狼に似た獣を仰ぎ見た。
「ガルーシャの木はどうなったかな？」
あの種を植えてから、三か月の時が流れていた。
この間もたらされた伝令の鷹であるイサークの話では、人の背丈を越すか越さないか位の大きさになったという。
ガルーシャが残した命の欠片。
『見に行くのか』
「そうだね」
リョウは、勢いを付けて立ち上がると、鞄を手に大きく伸びをした。
ついでに、あの人にこのペンダントのお礼をするのもいいかもしれない。
紛らわしいことをした相手に、ささやかな意趣返しを兼ねて。
黒い石の付いた飾り紐などはどうだろうか。根付のように下げられる小さなものでいい。
その位の冗談は分かってくれるだろう。
そこまで考えて、不意に想像した硬質でやや面白みに欠ける相手の表情に、リョウは小さく噴出した。
他愛も無い思い付きに、いつしか気分は浮上していた。

小高い丘の上は、風の通り道だ。遮るものの無い広大な大地を北の山脈から吹き下ろされる冷たい風が、駆け抜けて行く。
冬は、もう近くまで来ていた。
頬を掠める次の季節を運ぶ風は、陽の光に温められた体には心地

よかった。
リョウは、ゆっくりと傍らに控える大きな相棒を振り返った。
「帰ろうか、家へ」
『ああ』
そして、一人と一頭は、少し前までは青々としていたであろう薄茶色に変わった草原の中へと姿を消した。
その遥か後方では、七日間続いた祭りを終えて、その間の賑やかさがまるで夢の中の出来事であったかのようにひっそりと静まり返り、元の穏やかで静寂に包まれた日常へと戻ったスフミの村落があった。

【青】の象徴（後書き）

ここまで長々とお付き合い下さりありがとうございました。
色々と脱線しましたが、これで第二章【スフミ村の収穫祭】のお話は終りになります。当初よりも随分と脇役が幅を利かせた感があります。特にキリルあたりとかですね（笑）。一人一人の登場人物がそれぞれの物語を持っていて、一度想像を始めるとどうも止まらなくなりました。
この第二章では、主人公を取り巻く世界の様子（常識や理、歴史、文化等）を村人たちとの交流を通して描けたらと思いました。第一章の北の砦の兵士たちという閉じられた小さなコミュニティーからは、少しだけ舞台となる共同体の規模が大きくなったという感じです。こうやって少しずつ（徒歩に似た速さで）広がり行く世界とそれに伴い、徐々に広がりを見せる交流の輪を描けたらと思っています。

とある鍛冶屋の日常（前書き）

お待たせいたしました。Ｍｅｓｓｅｎｇｅｒ　第三章の始まりです。
舞台はがらりと変わります。それではどうぞ。

とある鍛冶屋の日常

「何だと。もう一度言ってみろ！」
狭い路地裏に男の怒声が響き渡った。
「あ？　聞こえなかったのか？　だから、やらねぇって言ったんだよ」
だが、それに答える男の声は、至って落ち着いたものだった。
「貴様、愚弄する気か！」
「はっ、呆れたぜ。生言ってんのはそっちだろうが」
「何だと！」
「物分かりの悪い奴だな」
鬱陶しげに吐き出された相手の言葉に、対峙していた男は、怒りを顕わにした。

ここは、工業都市【プラミィーシュレ】。
【スタルゴラド】の数多ある都市の中でも軍事産業的な意味合いの強いやや特殊な街であった。
街には、多くの武器や武具を扱う店が立ち並び、巨大な市場を形成していた。この場所は、鍛冶屋も多く、各地で産出された金属鉱石が集まり取引される一大拠点でもあった。
街は、四方八方を高い城壁で囲まれ、全体が一つの独立した城塞のようなもののしい趣を呈していた。
そして、この諍う声が聞こえる場所は、街の中でも外れの細々とした日常生活の道具を扱う小さな金物屋や細々とその日を食い繋いでいるような武具屋、そして鍛冶屋が集まるこじんまりとした一角だった。
昼下がりだというのに人通りはまばらで、辺りはひっそりと静ま

り返っている。
　華々しい大きな店構えが多々軒を連ねる表通りと比べれば、同じ街中と雖も実に隔絶の感があるだろう。それでも、場末にありがちな、じめじめとした陰鬱な空気は見当たらないのは、日当たりが決して悪くは無いからであろう。それが唯一の救いとも言えた。

　そんな狭い路地を筒抜けた男の怒鳴り声に、その界隈で店を構えていた人々は、その発生源を探して、戸口から顔を覗かせた。
　その戸口の上方には、ささやかだが、其々構えている店の内容を示すような小さな看板がぶら下がっていた。
　長い間、日光や風に晒されたそれらの標識は、痛みも激しく着色された色が剥げて下地の木が所々剥き出しになっている。だが、それすらも、ここではこの小路の雰囲気を醸し出す味わいの一部になっていた。
　よく見ると、顔を覗かせた人々は、皆、同じ方向へ首を巡らしている。
　そして、顔を合わせると何やら訳知り顔で頷き合い、その路地のどん詰まりの方向へ顎をしゃくった。
　それで、野次馬の如く顔を覗かせた人々は、事の次第に納得をしたようだった。
　一言、二言声を掛けあって。
　やがて、肩を竦めて、興味が削がれたように再び自分たちの持ち場へと戻って行った。

　その間も、言い争う声は、一向に止みそうもなかった。
　だが、よくよく聞いてみれば、激高しているのは片方の男の方で、それが、かなり一方的なものだということが分かるだろう。
「返す返すも失礼な奴だ。そんな態度を取ってどうなるか分かっているのか！」
　――――――良く吠える輩だ。

臆病な犬程、無駄に吠える。その法則は、人にも当てはまった。小物程、自らの存在をひけらかそうとして大きく出るのだ。

顔を真っ赤にしてこちらを睨みつけている相手に対峙していた男は、やっていられないとばかりに大業に溜息を吐いた。

そんなに嫌な相手なら、態々、頼みに来ることもないだろうにと思わずにはいられない。

そして、気だるげにボサボサになった髪を掻いた。

どうしたら、こちらの言い分が上手く相手に伝わるのだろうか。

先程から、堂々巡りを繰り返す噛み合わない会話に、いい加減、男はうんざりしていた。

「大体、こっちは、あんたらみたいな金持ちの道楽に付き合ってられる程、暇じゃぁないんでね。他を当たりな」

そう結論付けた男の言葉に、対峙していた男は、唯でさえ上がっていた眉を一層、吊り上げた。

「道楽とはなんだ？　こっちは真剣に頼んでいるではないか！」

「それが、人に物を頼む態度かね」

端から威気高な態度を匂わせて憚らない相手の言い草に、男は呆れた顔をして見せた。

成金だかは知らないが、客だと言う男が身に着けている煌びやかで上等な衣服は、この寂れた感のある裏通りでは、随分と浮いていて場違いに見えた。

男ぐらいの身分なら、表通りに並ぶ一流の店がこぞって揉み手をしながら相応の接待をするだろう。

それでいいではないか。

男には、何故、この客が自分のような所にやってくるのかが理解できなかった。

「あんた位になりゃぁ、お抱えの鍛冶屋ぐらい居るだろう？　何も態々、こんな辺鄙な所まで足を運ぶことも無い」

それは正直な感想だった。

そう言って切り捨てた男に、件の客は怒りの矛先をほんの少しだけ引っ込めて、宥めるように口にした。
「私が誰に何を頼もうが、それはこちらの勝手だ。お前の知る所ではない。そうだろう？　それに悪い話ではないだろう？　何が不満なんだ？　金か？　代金なら幾らでも弾むぞ？」
その台詞に、それまで面倒くさそうに相手をあしらっていた男の空気が一変した。
男の顔付きから不意に色が消えた。
だが、対峙していた客の男は、そのささやかな変化を見逃してしまったようだった。
不意に黙り込んだ男の態度を客は自分の都合の良いように勘違いしたようだった。
「あ？　もう一度、言ってみやがれ」
男の低い囁きに、
「だから、金なら出す……」

――――――ダン！！

続くかに思われた言葉は、その途中で、掻き消えた。
「ふざけんな」
それまで椅子に座っていた男は不意に立ち上がると、自分にとって理不尽な要求をしていた男の襟元を掴んで壁に叩きつけた。
急に変わった空気に、着飾った男は完全に不意を突かれた形になって、目を白黒させた。
「いいか。もう一度だけ言う。その耳は飾りじゃぁねぇだろ。耳の穴、かっぽじってよく聞け」
至近距離で視線を合わせると男は凄んでいた。
その眼差しは鋭く、射貫く様に相手を見据える。
「ひっ」
突然のことに、それまで威勢よく大声を張り上げていた男が、小

さな悲鳴のような声を上げた。
喉に掛かる手が、男の首元を締め上げていた。
その顔が苦痛に歪み始める。
そこで、ぞっとするほど低い剣呑な囁きが男の耳元で響いた。
「金ならあるだと？　はっ、笑わせるぜ。俺はな、あんたみたいな奴の注文はぜってぇ受けねぇんだよ。分かったか？」
男は、自分を締め上げる男の腕を外そうともがいたが、何をどうやってもびくともしなかった。
苦しさを主張するように、男は、自分の首に回された手から伸びる男の逞しい腕を叩いた。
「分かったか？」
男の鋭い眼光に、男は苦しさから逃れようと無茶苦茶に首を縦に振った。
それを見て取って、ゆっくりと男が手を離した。
「ゲホ……ゴフ、ゴホ……」
すると首を絞められていた男は、急に入り込んだ呼気に壁に背を預けたまま、崩れ落ちるように咳き込んだ。
それを横目に、もう一人の男は、用事は済んだとばかりに相手に背を向ける。
そして、何事も無かったかのように、自分の持ち場へと戻り、中断していた作業を開始した。

「……こんな野蛮な所、二度と来るものか！」
喉を摩りながら立ち上がった男は、負け惜しみたっぷりに捨て台詞を吐いて、肩を怒らせながら戸口から消えた。
男が付けている香水の類だろうか、悪酔いしそうな程に甘ったるい人工的な匂いが辺りに漂い、男はあからさまに顔を顰めた。
「……それはこっちの台詞だっての」
――――あんな客、こっちから願い下げだ。
高慢な勘違い野郎が出ていった戸口を一瞥して、男は、独りごち

るように呟くと、気分を入れ替える為に頭を振った。
どうも最近は、碌でもない輩がここを尋ねて来るようになった。
昔はそれこそ二月に一人いるかいないかであったのに、この所、【デェシャータク（十日）】を過ぎない内に、ああいったおかしな客がやってくる。その度に、案の定、諍いになり、要求を突っぱねた男に対して客だと名乗る人々は、半ば逆上気味にここを後にするのだ。
そろそろ周辺で店を商う仲間たちから苦情が来そうなものだった。そのことを思うと頭が痛くなりそうだ。
元々、男はお世辞にも愛想のいい方ではない。そんなもの必要はないと思っている節があった。
だが、男は、仕事に対しては実直で、妥協を許さなかった。長い間、苦労して積んできた修行の賜物である自分の腕に誇りを持っていた。今更、こんな所で、自分の信念を曲げる積りは毛頭なかった。
それは、自分の腕一本で生きて来た職人としての気構えでもあった。
それにしてもだ。最近は、どういう訳か、こういったはた迷惑な飛び込み客の相手をする機会が増え、その度に無駄に時間を取られている。こんな莫迦げたことで、精神をすり減らすのもいい加減、嫌気が差していた。
こうなれば、別の場所に拠点を変えた方がいいのだろうか。そんな考えまでも浮かんでくる。
男の口から、珍しく大きな溜息が洩れた。

そんな時だった。
先程の迷惑な客と入れ替わるようにして、今度は別の人物が戸口にそっと顔を覗かせた。
「ただいま戻りました」
「ああ、済まなかったな」
掛けられた声に、男は顔を上げると静かに微笑んだ。
先程の剣幕が、嘘のように凪いだ表情だ。

だが、男の口の端には、先程の名残か、苦々しいものを飲み込んだ後のような皺が微かに出来ていた。
それを見て取ってか、現れた人物は控え目な微笑みを浮かべた。
緩く一つに束ねられた癖のない黒い髪がさらりと揺れる。
その人物は中に入ると、手にしていた包みを端にあるテーブルの上に置いた。
そのほっそりとした背中に男は声を掛けた。
「爺さんの様子はどうだった？」
「今日は随分と気分が良いようですよ。持ってきた薬が効いているみたいです」
「そうか。そいつは良かった」
ほっと安堵の表情を浮かべた男に、対する人物は、顔だけ振り返ると穏やかに微笑んでから、話を継いだ。
「お茶を淹れましょうか」
それは、やや唐突な申し出だった。
休憩をするにはまだ間がある。
案の定、怪訝そうな顔をした男に、相手は、小さく苦笑に似た笑みを浮かべる。
「さっき、そこで、凄い形相をした人に擦れ違ったんです」
正しくは我武者羅に歩いていたその男の怒らせた肩にぶつかって、物凄い勢いで罵声を浴びせられたのだが、それは敢えて口にしなかった。
――――――こんな。
そう言って、片付けをしていた手を止めて振り返ると、自分の指を目の端に当てて、両目を吊り上げるような仕草をした。
それは、もしかしなくともつい今しがた、実にこの男らしいやり方で【丁重にお引き取りを願った】件の客のことに違いなかった。
男は、ややばつが悪そうに視線を横に流した。
だが、それも一瞬のことで。
おどけたように相手が見せたその仕草が可笑しかったのか、不意

に喉の奥を鳴らした。
それで先程の蟠りが、ほんの少しだけ、消えて行くような気がした。
こんな時は、気分転換をした方がよい。このようにささくれ立った気持ちのままでは、まともな仕事などできそうになかった。
それを暗に仄めかされて、男は参ったとばかりに苦笑をして見せた。
「ああ、頼む」
相手からの心遣いに、男は素直に乗ることにした。
それを見て取ったその人物は、静かに頷くと、お茶の用意をしに店の奥へと消えていった。

プラミィーシュレ

リョウは、三日前から、この【プラミィーシュレ】を訪れていた。
この街では、リューバの息子が鍛冶屋を営んでいるのだ。
スフミ村の収穫祭を終え、森の家に帰る前にリューバにお使いを頼まれた。その時に街では中々手に入らないと言う薬草の類が入った小さな包みとリューバが息子に宛てた手紙を預かった。それを届けてほしいとのことだった。
――――――ゆっくりでいい。少しずつでいい。この国を見てごらんなさい。
したためた手紙に術師としての封印を施しながら、リューバはそう穏やかに告げた。
リューバは、この国がリョウの故郷とは異なることを知っていた。どういう経緯でガルーシャの下に世話になっていたのかまでは知らなかったようだが、今後、【術師】を目指し、この国で生きて行く為には、まず色々なことを実際に目にして、体験し、感じた方がいいと言った。
リョウが今、身を置くのは、ガルーシャが残した小屋がある森と薬草を届けるリューバが暮らすスフミ村の周辺という限られた範囲で、それは、ある種、とても閉じられた世界だった。
そこに暮らす限り、穏やかな日常と安穏が約束されているだろう。だが、それだけで一生を終えるのは、まだまだ若いリョウには勿体ないとリューバは常々感じていた。　リョウの素養を研く為にも、外の世界を知り、様々な人に出会い、その人達から学ぶべきだと思っていた。それに、リューバとしては、リョウにこの国のことをもっと知ってもらいたいという想いがあったようだ。良い面も悪い面も含めて。
ガルーシャのように隠遁生活をするのは、一通りの経験を積んで

からでよい。引っ込むのはいつでも可能だが、外に飛び出してゆくには、それなりに若さが必要だからだ。

それは、歳を重ねたリューバだからこそ生まれる、含蓄のある助言でもあった。

――――――別に、急ぐ必要はないのよ。焦る必要もないの。ただ、中々、母親に顔を見せないドラ息子にね、偶には帰ってくるように伝えて欲しいの。

術師同士であるのだから、遠く離れていても、その情報交換には【伝令】を飛ばすことで済む。それは簡単だが、それでは余り効果は得られないとのことだった。

だが、そこに生身の人が関われば、自ずと返事は変わってくる筈だ。

そう言って、リューバは微かに笑った。

それは術師として先を歩む先達としてのリューバなりの心遣いなのかもしれなかった。

こういう機会でも無ければ、リョウが森の小屋から外へ出る機会は無いに等しい。

リョウ自身は、慎ましやかに暮らしてゆく分には、それでもいいと思っていたが、リューバがくれた折角の機会を無駄にはしたくなかった。

アクサーナとデニスの婚礼を終えた夜、村人たちに混じって、行商人や流しの楽団の人達が語るこの国の他の地方のもの珍しい話を聞いて、それをやや興奮気味に語ったことをどうやらリューバは覚えていたようだ。そして、そこから薄らと透けて見える外の世界に対する自分の好奇心に気が付いたのかもしれなかった。

外の世界へ踏み出すには、勇気がいる。なにせ周りは知らないことばかりなのだ。困難に直面しても自分自身で対処し、切り抜けなければならないのだから。

この場所で、一人で立つには不安も沢山あった。だが、それと同じくらいに、この場所よりもより広い世界を見てみたいという好奇心があったのも確かだった。

リューバの提案は、そんなリョウの背中を押す形になった。

【プラミィーシュレ】は、スフミ村から街道沿いに南へ下ること約五日の所にあった。

リョウとしては、ガルーシャが旅立ってから初めての長旅となった。

この国で流通している貨幣と物価の水準については、以前、ガルーシャから教わっていたし、今回、改めて確認を取る上で、リューバからも丁寧に教えを受けた。

リョウの手の中には、リューバから貰った貨幣の入った小さな袋があった。

それは、小さくともずっしりと確かな重みのあるもので、初めて手にするこの国のお金に、リョウはおっかなびっくりだった。

この国の貨幣は硬貨で、大まかに三種類に分かれていた。金貨である【ゾーラタ】、銀貨である【セレブロー】、銅貨である【ミェーディ】の三種類だ。

庶民が専ら手にするのは、銅貨の【ミェーディ】で、銅貨が五十集まって、漸く銀貨一枚になり、そして銀貨が三十集まって金貨一枚になるという。普通の暮らしをしている分には、金貨はそれこそ大金で、庶民は滅多にお目に掛かれない代物だということだ。

そして、硬貨類の他に宝石や鉱石の類も硬貨と同等、もしくはそれ以上の付加価値のあるものとして、しかるべき売買の取引としては使われるとのことだった。

リューバは、それをこれまで薬草を届けてくれたことへの対価だ

と言った。
　中を開けてみれば、銀貨が一枚と銅貨が二十枚も入っていた。リョウは始め、頭で計算をしながらそれを手に取って、余りの額の多さに仰天した。銀貨一枚があれば、家族が一月は優に暮らして行けると聞いたばかりだった。元々、自分には現金の必要性が無かったし、自分がこれまでに集めたささやかな薬草の対価としてはそぐわない。とてもじゃないがこんなには貰えないと恐恐と受け取りを辞退したのだが、リューバは頑として譲らなかった。
　街に出たら、何が起きるか分からないし、持っていて損はない。それに、その中には今回の手間賃も入っているのだと言った。最終的にはリョウが折れて、硬貨の入った小さな袋を感謝を示すようにそっと押し抱いた。

　それは、今、小分けにして懐の中に分散して入れている。旅をするとなれば、その道中、何が起こるか分からないからだ。用心をしておくに越したことは無かった。
　いつも下げている鞄の中には、手作りした不格好な帳面（ノート）と鉛筆、水筒、日持ちするようにと固めに焼いたパン、それから干し肉が少々と、常備薬として薬草の類を入れた小さな入れ物が入っていた。少し大きめの柔らかい布は保温性が高いので野宿をした場合に備えてだ。それから着替えとタオルを少々。それだけ入れれば、鞄はもう一杯になった。
　腰のベルトには、短剣が二本と小物入れがぶら下がっている。
　これからの季節に備えて、ガルーシャの納戸から見つけた少し厚めの外套を羽織り、頭には同じく見つけた帽子を被った。冷たい風から、肌を守ると言うよりは、髪の色を目立たせない為でもあった。
　それに、いつものようにズボンを穿いてシャツと上着を重ねる。上着の上には片方だけ、革で作った無骨な肩当てと小手当てを捲いていた。
　そうして身支度を整えてみるとなんだかいっぱしの旅人になった

ような気分になったものだから可笑しかった。
途中、通り過ぎた川面に映った自分の姿は、お世辞にも女には見えなかった。
それにほんの少しだけ苦笑に似た笑みを漏らす。
だが、揺らぐ水面に映るその表情には、陰りの色は見えなかった。
その辺りは、もう割り切っていたからだ。

今回もセレブロは途中まで付いてきてくれた。人目を避けて街道を迂回するにも限度があるので仕方なく中途までとなった。
今回、リョウが目指す街は、スフミとは比べ物にもならない位の大きな街で、方々から様々な人が集まると聞いた。そこで、セレブロが人目に触れて騒ぎになるのは避けなければならなかった。
セレブロには、その別れ際、『万が一のことが起きたら、迷わず我を呼べ』と耳にタコができる程きつく言われた。
心配性な所も相変わらずだ。
だが、この場所で経験値の浅い自分のことを心から案じてくれていることが分かるから、素直にその言いつけを守ると頷いて見せた。
『気を付けるのだぞ』
「うん」
『良からぬ気を感じたら、即、逃げよ。これは旅の鉄則だ』
そして、やたらと人の世界の事情に通じている所も変わらない。
「うん」
『余り長引くようなら迎えに行く』
「うん」
それでもどこか心配そうな色を覗かせる虹色の瞳に、リョウはその煌めく白銀の首に噛り付いて、無理はしないからと約束をした。
そして、相棒に暫しの別れを告げて、途中から、リョウは細々と続く街道を一人で歩いた。
だが、それでも寂しくは無かった。街道沿いには道々、様子を窺いに様々な獣たちが顔を覗かせたからだ。空を見上げれば、遥か上

空には、大空を自由に飛び回る鳥たちがいた。その中には、既に顔馴染みになっている鷹のイーサンもいて、気紛れに声を掛けて来た。
そういった訳で、幸運にも話し相手には不自由をしなかった。
独りではない。それは、とても心強いことだった。

スフミから目指す【プラミィーシュレ】までは旅慣れた男の足でも五日の距離だとは聞いていたので、絶対的に脚力の劣る自分の場合はそれに二・三日は余分に掛かるかもしれないとは覚悟していた。
だが、その間をずっと歩き通しだった訳では無かった。
途中、溢れんばかりに干し草を積み上げた荷馬車に遭遇して、その片隅に乗せてもらうことが出来たのだ。
板張りの簡素な御者台には年老いた背中の曲がった男が手綱を握っていて、街道を一人歩く【少年】の姿が物珍しく映ったようだった。
「お前さん、どこへ行きなさる？」
後ろからガタガタと車輪を揺らしてやってくる荷馬車の音に端に寄って、暫し、その途方もない嵩の干し草のお化けみたいな塊が通り過ぎるのを待っていれば、のんびりとしわがれた声が掛かった。
通り過ぎることなく自分の真横で止まった荷馬車に座る老人に目的地を告げれば、大層驚かれた。
これから寒くなるという時期に、まだ幼い子供が（老人にはそのように見えたのだ）一人で旅をすることが気の毒に映ったようだ。
老人は、その先にある別の街に用事があるようで、【プラミィーシュレ】は途中に通るから、そこまで乗せて行ってやろうと親切にも申し出てくれたのだ。
この場所に来て、専らの移動手段は自分の足であるから、以前に比べて脚力もそれなりに鍛えられてきているとは思ってはいたが、こんなに長く歩き続けてきたのは何分初めてのことで、最初のペース配分を間違ってしまったのか、（と言うよりは単なる体力の問題という気がしないでもないのだが）後半部分ではかなりきつくなっ

てきていた所だったので、その申し出は正直有り難かった。
リョウは老人に丁寧にお礼を言って、その干し草で溢れかえる荷馬車の片隅に体を寄せた。
日の光を吸い込んだ干し草は温かく、独特な草とお日様の匂いがした。
そうやってのんびりと荷馬車に揺られながら、残りの二日間を過ごした。

段々と街に近づいて来ているのか、街道の人の往来は、日を追うごとに増えていった。
その殆どが行商人だ。馬車を仕立てて商隊を組み、疾駆する姿も有れば、大きな荷駄を背中に背負い、黙々と歩いている男の姿もあった。
大きな街には人が集まる。人が集まれば市が立った。実に原始的で明快な論理だ。
「坊、ごらん」
御者台に座る老人の声に閉じていた目を開けば、遥か前方に累々と続く巨大な石壁が見えた。
「あれが、【プラミィーシュレ】さ」
皺だらけの眦を遠く透かし見る為に細めて、老人は腕を前方に伸ばした。
骨ばったか細い指で、街がある方向を指し示されて、目に入ってきた光景にリョウは暫し息を飲んだ。
それは想像以上に大きな街だった。
これまで街道沿いに目にしてきた村落や集落とは比べ物にもならない。街と言うよりも城塞に近いかもしれない。周囲を強固な高い石垣がぐるりと巡らされ、赤茶色のレンガが積み上げられた塔の先には、街の象徴だろうか、紋章の入った旗が翻っていた。
「はは、坊よ。そんな所でたまげていたんじゃ、身が持たないぞ」
驚愕の表情を浮かべて前方を見るリョウは、如何にも田舎から出

て来たという少年の体で、それが可笑しいのか、老人はからからと笑った。
「あの中はもっと凄いからの」
そう言って目配せをした老人にリョウは唾を飲み込んだ。

遥か南、王都へと続く本街道が【プラミィーシュレ】へと続く道と分かれる追分の箇所でリョウは荷馬車から降りると、親切な老人に別れを告げた。
荷を引く馬にも礼を述べることを忘れない。
「パラ　フェルメ　ス　リュークス（リュークスの御加護がありますように）」
互いに旅の無事を祈って、お決まりの挨拶を交わす。
「ありがとうございました。お爺さんも、道中、御無事で」
「ああ、お前さんもな」
腕を大きく振って、旅を続ける荷馬車を見送る。
それから、颯爽と翻った小柄な背中は、前方を見据えると、大きく息を吸い込んだ。
初めて目にする新しい街。
そこで、何が待っているのか。
リョウは、心の中で気合を入れると、鞄を掴む手に力を込めて、一歩、足を踏み出した。

高垣の中

この街は、一言で言って、街道筋に通り過ぎたどの場所よりも活気に満ち溢れていた。

通りを行き交う人も多い。

道を歩いていてまず目に付くのは、屈強な男たちの姿だった。

皆、腰には大きな剣を帯びている。鍛え上げられた体に服の合間から覗く剥き出しになった肌には、沢山の傷が、それこそ勲章のように付いていた。

リョウは始め、自分でもかなり場違いな場所に入り込んでしまったのではないかという気分になった。　ぐるりと周囲を高い城壁で囲まれた街の入り口に立った時にも、その圧倒的な威圧感にその事を感じずにはいられなかった。

この街に入る時には、かなりの緊張を強いられた。

入口には開閉が出来る大きな門があり、そこには両側に二名の完全武装をした兵士が歩哨として立っていた。共に鎧を着込み、腰には長い剣を帯びている。そして、手には長い槍を持っていた。その様子は、中に入る旅人、出て行く行商人達を文字通り、【監視】しているように思えた。

この国では、通行手形のようなものは必要が無かった。であるから、基本的にこの門は万人に開かれている。そう頭では理解していても、このような物々しい場所は初めてだったので無意識に足が竦みそうになった。

リョウは真っ直ぐ前を向いて、門の中に入った。

緊張の為にか、鞄を握り締めていた手に力が入る。

兵士に軽く目礼をして門を形作る厚い石壁を通り抜けようとした所で、後ろから声が掛かった。

「おい、お前」
突然のことに心臓が飛び出しそうな位に跳ねた。
それでも、内心の動揺を面に出さないように気を付けて、リョウはゆっくりと振り返った。
「何でしょう?」
疾しいことは何もない。後ろ暗いことも無かった。だから大丈夫だと心の中で言い聞かせる。
門の両側に立つ二人の兵士の内、右側に控えていた一人が、こちらを見ていた。
目が合えば、こちらへ来るようにと顎をしゃくられて、リョウは大人しく従った。
心臓が早鐘を打つのが分かった。
リョウは気を紛らわすように小さく息を吐き出すと、自分を呼び止めた目の前に立つ男を見上げた。
日に焼けた浅黒い肌に短く刈りあげた明るい金色の髪が目に入る。左頬には、斜めに走る引き攣れた刀傷痕だろうか、細く長い傷跡があった。それだけで、この世界の現実とこの男が潜り抜けて来たであろう過去が透かして見えたような気がした。
リョウは男の浅黄色とも取れる薄い色の瞳を見つめた。その真意を探るように。
対する兵士の男は、動じることなく、じっと自分にもの問いたげな視線を返すリョウの物怖じしない態度に、何故か、小さく口角を上げた。
「坊主、それを取れ」
視線で帽子を取るように促された。
何故、そのようなことを誰何されるのかは分からなかったが、リョウは大人しく従った。
帽子を脱げば、真っ直ぐな黒い頭髪が顕わになった。
冷たさを帯びた風が頭頂部を掠める。
伸びた髪は、無造作に後ろで小さく一つに束ねていた。乱れたで

あろうそれをそっと手櫛で整える。
男の視線は尚も不躾な程に自分に注がれていた。
リョウは居心地の悪さを感じていたが、それを顔に出すことは控えた。
そして、じっと相手の次の動きを待った。

暫くして、男が漸く口を開いた。
「……見ない顔だな。何処から来た？」
低く、簡潔に出された質問に、
「スフミからです」
淀みなく簡潔な答えを出した。
「ここへの目的は？」
「この街で鍛冶屋を営む人に用事があります」
「武器を誂えるのか？」
男の眉が興味深そうに上がる。
「いいえ。スフミに居るその人の母親から荷物を預かりました。それを届ける為です」
「……そうか」
じっとこちらの様子を窺いながら、男が静かに口にした。
そうこうするうちに門の反対側を見ていた同僚の兵士が、こちらにやってきた。
「どうした、イリヤ？」
「いや」
男は、こちらをちらと見た後、怪訝そうな顔をした仲間に何でもないと首を振った。
「見慣れない顔をした奴が通ったから改めただけだ」
そう淡々と説明をした男に、もう片方の兵士が直ぐ傍らに立つ小柄な人物を見下ろす。
そして、一言。
「なんだ。まだ、子供じゃないか」

その言葉に、リョウは内心、ひっそりと溜息を吐いた。
「確かに珍しい顔立ちだが……」
そう言って何やら二人でぼそぼそと言葉を交わし始めた兵士達にリョウはどうしたものかと思った。
疑いは晴れたのだろうか。
「あの、もう通ってもよろしいのですか」
恐る恐る声を掛ければ、後から来たもう片方の兵士がこちらを見て、白い歯を見せた。
厳めしい男にしては実にさっぱりとした笑みだった。
男は、徐にリョウの頭に手を伸ばし、その髪をぐしゃぐしゃに掻き乱した。
「ああ、坊主。悪かったな」
「いえ」
されるがままに頭を弄られて、気が済んだのか男の大きな手が離れて行く。
乱れに乱れた髪をリョウは慌てて手櫛で直した。
「それでは失礼します」
きっちりと頭を下げて、兵士たちの前を通り過ぎようとすれば、最初に自分を呼びとめた男から再び声が掛かった。
「お前、名は？」
「……リョウです」
頭上に沢山の疑問符を並べながらも、リョウは名乗った。
耳慣れない響きだった為か、男は暫く、その名前を舌の上で転がした後、
「イリヤだ」
親指で自分の胸を差した。
もしかしなくとも、それは男の名前なのだろう。
何故、それを自分に教えるのかは謎であったが、
「イリヤさんですね」
確かめるように口にすれば、男は満足したように小さく頷いた。

そして、漸く、もう行ってもよいと小さく片手を振った。
「またな、リョウ」
不意に背中に掛かった小さな声に、リョウは内心、首を傾げたままだったが、ちらりと後方を振り返るとそれに応えるべく軽く頭を下げたのだった。
そんなへんてこなことがあったのは、ここに来た初日。三日前のことだった。

この街、【プラミィーシュレ】は、武具や武器を扱う店が多く軒を連ねることでも有名だった。
要するに軍人御用達の街なのだ。
この場所は、傭兵専用のギルドがあることでも知られており、街中を闊歩する男たちはそれこそ、兵士崩れのような荒々しい風体の者も多かった。用心棒やちょっとした軍部の手伝い、治安維持といった方面に駆り出されたりもするらしい。
皆、当たり前のように腰には大きな剣を下げていた。中には両刃の厳めしい剣を背中に背負っている者もいた。
荒削りでどこか型には収まり切らない野卑さを併せ持つ独特の空気がそこにはあった。
勿論、それだけで街の機能が成り立つ訳は無いので、普通に一般市民も生活をしているのだが、どうしても、そういう少し規格外に見えるような男たちの集団が目に付いてしまうので、総合的に見て、そういう印象を得るに至ってしまうのだ。

少し道を歩けば、今度は、鍛冶屋が多く集まる界隈に当たった。
カンカンと金属を打つ音、熱く滾った【スターリ（鋼鉄）】の煮える音、打った刃を急激に冷やすための水入れの音。蒸気音や熱気に混じり、働く男たちの掛け声が聞こえてくる。
そこは、まるで小さな工場のような様相を呈していた。

この場所は、国の中でも様々な鉱物資源が集まる一大拠点でもあった。そして、ここに集まる良い素材を求めて、優秀な鍛冶職人も多く集まっていた。よって武器の生産も盛んであった。鍛冶職人達は日々、切磋琢磨し、自分たちの技を競った。

そういう理由から、この街には様々な武器を求めて方々から【腕に覚えのある】多くの男たちが集うのだ。その中には、傭兵もそうだが、勿論、主要な顧客である軍の関係者が多かった。

通りを歩く兵士たちの中には、どこか見覚えのあるような隊服に身を包んだ男達もいた。その格好は、北の砦の兵士たちを彷彿とさせたのだ。

良く見れば、着ている物の形は同じだが、細かい色遣いが違った。素人目にも判別が付く顕著な違いは、兵士たちが付ける腕章の色だった。北の砦の兵士たちは、青い模様の付いた腕章を付けていた。ここの兵士たちはその色が緑だった。

聞く所によると、この国の軍部は、大まかに言って第一から第十までの部隊に分かれているらしい。

この街、【プラミィーシュレ】を管轄するのは第五師団の部隊だとのことだ。因みに、北の砦は、第七師団の管轄であるということだ。

軍籍に身を置く男たちが集まる街と言うことで、街中にはそういった男たちが集う酒場や色街、俗に言う歓楽街もあった。

中には、昼間から酒を呷る者もいる。場所柄、些細なこともいざこざの原因になり得た。

往来にて

リョウはその日、そんな通りを足早に歩いていた。そういった一筋縄ではいかないような荒くれ者が多い男たちでごったがえす通りは、抜けるのに中々に神経を使う。

男たちは、気が立っているのか、気が短い者が多いのか、通りすがりに長剣の先が当たったとか、肩がぶつかったとか、そういう些細な接触から、喧嘩になる場合があった。

ここに来てまだ日は浅かったが、そういう光景を既に何度か目にしていた。

そんな中、ふと前方でなにやら人だかりができているのが見えた。野太い声と高めのか細い声が切れ切れに聞こえる。

そっと隙間から覗くと、一人の男が、往来の真中で仁王立ちしていた。そして、大声で怒声を上げている。そのすぐ目の前には、まだ幼い男の子とその姉だろうか、少し長じた少女が男の子を庇うように肩を抱き、寄り添うように体を縮こまらせていた。

周りの大人たちは皆、心配そうな顔をしている。

だが、その間に入って立つ者はいなかった。対峙する男の風体が如何にもという荒削りな感じであるからだろうか。どうにも仲裁に入るのを躊躇っているようだった。

少女は弟らしき男の子を庇うようにして、懸命に男に謝っているようだった。だが、対する男は腹の虫が収まらないようで、尚も喚き続けている。

その顔は薄らと赤みを帯びていた。それは激高から来ているというよりも、酒から来ているように思われた。ひょっとしたら、一杯ひっかけているのかもしれなかった。

なんと間の悪いことだろう。酔っ払いの因縁か。

リョウは無意識に顔を顰めていた。
そうこうするうちに激高した男が、鞘ごと腰から大剣を取りだした。
それを見て、周りの大人たちが息を飲む。
妙な緊張が張りつめていた。
リョウは、それ以上見ていられなかった。
男が、徐に手にした剣を振り上げようとする所で、リョウの体は勝手に動いていた。

引き寄せられるように前に飛び出すと二人の子供たちを庇うように前に出て、男に背を向けていた。
ガンという殴打に特有の鈍い音がしたかと思うと、右肩から上腕に掛けて鋭い鈍痛と痺れが走った。
覚悟はしていたが、それは思いの外、強烈な衝撃だった。
腕の中で、小さな二つの体が強張ったのが分かった。
「何だ。てめぇ、邪魔する気か！」
突然の闖入者に男が剣呑な声を張り上げた。
尋常でない痛みに顔を顰めながらも、リョウは歯を食いしばってそれに耐えた。
「お待ちください」
なんとか痛みをやり過ごして、リョウは顔を上げると、毅然とした態度で剣を振りかざした男を見据えた。
リョウは沸々と湧きあがる静かな怒りに駆られていた。
こんな幼い子供相手に大の大人が兵士の魂とも言うべき剣を振り上げるという行為が許せなかった。
この男のしていることは兵士の風上にも置けない。男が兵士であろうが、傭兵であろうが、それはこの際、関係無かった。北の砦にいた兵士たちの高潔な気概を知る自分としては、男の行為自体が、彼らの心意気を辱めるような気がして許せなかったのだ。
酒が入って酔っ払っていることも理由にはならない。この男の行

為は、人としてどうしても許せなかった。
「どんな事情があるのかは分かりませんが、このような往来の真中で、幼い子供相手に随分なさりようではありませんか」
自分でも思いの外、低い声が出ていた。
「部外者は引っ込んでろ」
「そういう訳にも参りません」
「はっ、小僧が。随分な口を利くじゃねぇか、え？」
男の剣幕に腕の中に居る二人の子供たちが必死にしがみ付いてくる。それに答えるように、リョウはか細い背中を抱く手に力を込めた。
ここで引き下がる訳にはいかなかった。
「どうか剣をお納めください。事情をお聞かせ下さいませんか」
静まり返った往来に静かで落ち着いた声が通った。
それが子供たちを打つ理由足り得るのかどうか。それだけでも知りたかった。
だが、それすらも対峙する男の神経を逆撫でたらしかった。
「クソガキが！」
そう吐き捨てた男が、再び鞘に入ったままの剣を振り上げる。
再び繰り出される殴打の衝撃に覚悟を決めようとした、その時だった。

――――――キーン。
甲高い鳴き声と共に上空に黒い影が差す。
バサリとした大きな羽ばたきに続いて二頭の大きな【鳥】が急降下してきた。
鋭い爪が男の顔を掠めた。
「何だ？　この野郎！」
突然のことに男の足がたたらを踏んだ。平衡感覚を崩して、どさりと後方に尻もちを着く。
「イーサン！」

見覚えのある姿にリョウは声を上げた。
立ちあがったリョウの下に、一羽の大きな鷹が舞い降りた。
それにもう一頭の大きな鷲が続く。
「ヴィー！」
『やれやれ、間にあったか』
『酔っ払いめが、とんだ恥晒しだの』
鷹揚に毒を吐き出して、空いた肩と差しだされた腕に二頭の猛禽類が乗る。ずっしりとした馴染み深い重みにリョウは涙が出そうになった。
それを見て、尻もちをついたまま無様な格好を晒した男が、悔し紛れに地を蹴るような仕草をした。
「チョールトバジミー（クソったれが）！」
そうこうするうちに往来での騒ぎを聞きつけたのか、周囲の大人たちの誰かが呼んだのか、治安維持の任務を担う兵士たちが現れた。
「何をしている！」
左腕に緑色の腕章を付けた男たちの出現に、周囲で事の成り行きを心配そうに見守っていた大人たちは、一様に安堵の溜息を吐いた。
周りの大人たちから簡単なあらましを聞いた兵士たちは、酔っ払った男を拘束し、引っ立てていった。恐らく、しかるべき場所で男に事情を聞くのだろう。
そして、事態の収拾に当たっていた兵士は集まった野次馬達に散るように命じた。
人々が散り散りになって、再び、普段通りの日常取り戻した往来で、リョウは緊張の糸が切れたようにその場で膝を着いていた。
子供たちが打たれることを阻止しようと必死だったが、一歩間違えば、自分も無傷では済まされない大変な事態になる所だった。今更ながらにその事に思い至って、肝が冷えたのだ。
身体の芯が小刻みに震えてきた。
打ち据えられた右肩が、燃えるように熱さを訴え始めていた。
『やれやれ、肝が冷えたわい』

『ああ、寿命が縮んだぞ』
のんびりとした鷹のイーサンと鷲のヴィーの声に、リョウは苦笑をするほか無かった。
「ありがとう、イーサン、ヴィー。助かったよ」
感謝を込めて、二頭の羽を撫でる。
「もう大丈夫だよ」
それから、すぐ傍で肩を寄せ合っている幼い男の子と女の子にも声を掛けた。
男の子は、必死に泣くまいと口をへの字に曲げて涙を堪えていた。女の子の方も涙を目の端に滲ませながら、漸くほっとしたような表情を作っていた。
リョウは立ちあがると、二人の子供たちに歩み寄り、そっと腕を回して抱き締めた。もう大丈夫だというように其の背中を軽く宥めるように叩く。そうすれば、漸く安堵したのか、張りつめていたものが吹っ切れたのか、二人がわんわんと声を上げて泣き出した。

暫くして、
「お前たちも、こちらへ来い」
事態の収拾に駆り出されていた兵士達の一人が、リョウと子供たちの所へ来た。
「大丈夫か？」
縋りつく子供たちの方を見下ろして、やや困惑したような色をその瞳に乗せながら、腕に緑の腕章を付けたこの街の兵士の隊服に身を包んだ男が問うた。
荒くれ者の男たち相手は慣れてはいても、子供の対応には余り慣れていないのだろう。その男は、どういう接し方をしたらよいのか戸惑っているようにも見えた。
そして、リョウを含む二人の子供ともども先程の酔っ払い男と同じく、兵士たちの詰め所に来るようにと言われた。
「一応、双方、当事者の言い分を聞く必要があるからな」

尤もな言い分にリョウは素直に頷いて見せた。
それを聞いて、泣きやんだ男の子と女の子は不安そうな表情をしてこちらを見上げた。
リョウは揺れる二対の瞳に心配ないと微笑んで見せた。
「大丈夫だよ。一緒に付いて行くから」
このような所で、子供たちを放ることなど出来はしなかった。どの道、子供たちを庇ったことで、自分も当事者の頭数に数えられてしまっただろう。
共に行くことを伝えれば、二人は安堵したように体の力を抜いた。それでも上背のあるがたいのいい男達に囲まれて、二人は心なしか体を固くしているようだった。

リョウは、二人の子供たちの手を繋ぎながら、少し前を歩く兵士の後姿を追った。
すっと伸びた背筋に規則正しく繰り出される歩調。その顔はまだ若かったが、隊服に身を包んだ青年のがっしりとした背中は、威厳と自信に満ち溢れていた。
それは、しっかりと訓練された兵士のものだった。
その後ろ姿に、北の砦の兵士達と同じような匂いを感じ取って、リョウはほんの少しだけ肩の力を抜いた。
時折、その青年がちらりと後ろを振り返る。
ちゃんとこちらが付いてきているのかを確認するように。
そして、思いの外、両者の間が開いていたことに気が付いたのか、その歩調を少し緩めた。
そういった相手のささやかな心遣いに、リョウは自然と穏やかな微笑みを浮かべていた。
悪いようにはならないかもしれない。そんな予感を持った。

風来坊の受難（前書き）

久々に【あの人】の登場です。覚えていらっしゃいますでしょうか。

風来坊の受難

さて、ちょうど時を同じくして、【プラミィーシュレ】の治安維持を全面的に任されている【スタルゴラド第五師団】の兵士たちの詰め所、通称【ツェントル】では、一人の男が管を巻いていた。

「おいおい、久々に遠路遥々、友人が尋ねて来たってのに、茶の一杯も無しかよ」

街の中心部よりやや南に位置する重厚な石造りの兵舎の中、その内部でも基本的に限られた兵士達しか出入りを許されることの無い団長室で、高級そうな長椅子にどっかりと腰を下ろして、緩慢な動作で足を組んだ男は、部屋にある数々の落ち着いた調度品とは、どう見ても釣り合わない粗野で粗暴な空気を身に纏っていた。身に付けている衣服も随分と簡素だ。

その風体は、外の通りを我が物顔で闊歩している傭兵の類とまるで変わらなかった。一歩間違えば、兇状持ちのようにも見えなくはない。

長旅の所為か、埃に塗れた長靴が、躊躇いも無く床に敷き詰められた繊細な絨毯の模様を踏む。着古してくたくたになった外套は、どこぞで引っかけたのか、裾の方が解れていた。

この部屋の主である男は、我が物顔で長椅子に座る無頼漢と認識されても仕方が無いような風体の男に冷ややかな視線を送った。

「大体、その格好(なり)はなんだ？　隊服はどうした？」

神経質そうな細い眉を吊り上げ、暗めの茶色の前髪を一寸の乱れも無く綺麗に後ろに撫でつけた男の眉間には、幾筋もの皺が寄っていた。

『この場所を訪れるのならば、それなりの格好をして来い』とでも言いたげな男の視線を相手の男は鼻で笑った。

「んな窮屈なの、着てられっかよ。俺は、ごめんだね。それに今回

は、仕事じゃねぇんだ」

――――――だから、固いこと言うなって。

鷹揚に片手を振った男に、執務机の前で書面に目を通していたこの部屋の主は、片手で秀でた額際を覆うと、心底、呆れたような顔をして見せた。

「だからと言って、のこのことそのまま、ここに来たのでは変わりがないだろうが」

ついつい愚痴の一つや二つは言いたくなる。

公式な訪問では無いのだから、自らの立場を示す軍部の隊服を着る必要はないと目の前の男は嘯いた。　その口で、この第五師団の団長室を真正面から訪ねて来るのだから、恐れ入る。几帳面で対面を重んじるこの部屋の主には、目の前の男の論理は、到底、理解できないことだった。

案の定、兵舎の入り口では、見張りをしていた門番の歩哨に詰問されて、通す通さないと騒ぎになったのだ。この男の粗野さは相変わらずだが、呆れて開いた口が塞がらなかった。

とてもじゃないが、対面を重んじる貴族の生まれだとは思えない。どこをどうしたらこんな息子が育つのか、厳しさの中にも柔和で洗練された物腰を持つこの男の父親の顔を思い浮かべる度に、男には不思議で仕方が無かった。

だが、まぁ、それは今に始まったことではないので一旦、置いておくことにする。

男は、気分を入れ替えるように小さく息を吐き出した。

「ルスランはどうしたのだ？」

不意に団長室の机に座る男が真面目な顔をした。

事前にもたらされた情報では、この男の他に、もう一人の男もこの街に入って来ているはずだった。

同じスタルゴラドの軍部の中でも、第七師団の責任者であるその

男は、自分にとっても旧知の間柄だった。要するに同期の同じ釜の飯を食った仲だった。あちらの方が、まだ、この目の前に座る男よりは馬が合う。久々の邂逅を内心、密かに楽しみにしていたのだ。

この目の前に居座る男と同じく、公式な訪問ではなく、私的な用事だから、構う必要はないとの伝令だったが、てっきり、昔馴染みの顔を覗きに一緒にここを訪ねて来るとばかり思っていた。あの男は、軍部の中でも比較的顔を知られていたから、賊のような風体のこの男が一緒に居たとしてもここを通るのにさして問題にはならなかった筈だった。

なんとも間が悪いとしか言いようがない。

「あ？　アイツはいつもの所さ。朝っぱらから熱心だよ。全く」

だが、返ってきた答えは、実に素っ気の無いものだった。

男の剣ダコが出来た太い指が小さく左右に振れる。そうやって示された符牒に、それを問うた部屋の主も事の次第を理解した。

あの男がここを訪れる理由はいつも決まっていたからだ。

毎年、この時期になると己が剣の状態を改めて貰うべく、馴染みの鍛冶屋の元を訪れるのだ。そうして、歯零れやらを直し、再び鍛えられた己が【愛剣】を手に、来るべき任務に備え、持ち場に戻って行く。

あの男が用いる剣は、特別に鍛えられた珍しい代物だった。

それを作ったのは、当時、この界隈でも一・二を争う名うての名工と呼ばれた偏屈な鍛冶屋で、腕は確かなのだが、気紛れにしか客を取らないことで、その筋では有名だった。あの老人が残した剣は少なく、この世に一振りしかないとも二振りしか存在しないとも言われていた。

稀代の名工とまで称えられた男だ。なんとかして、高名な鍛冶屋に自分の剣を鍛えてもらおうと思った武人も多かったが、その殆どが、険もほろろに追い返されていた。

そんな中、どうした訳か、あの男は奇人・変人の名を恣にしていた鍛冶屋のお眼鏡に敵い、一振りの剣を鍛えてもらった。それ以降、

こうして、年に一回、手入れの為にこの街を訪れていたのだ。
かつての名工と謳われた偏屈な老鍛冶屋は、今は引退して、その弟子が店を継いでいる。そして、親方から引き継いだ【教え】をしっかりと守り抜き、今でも多くの鍛冶屋が集まる街の中心部では無く、この街の外れにある、一見、うらぶれた細い小路の中で、ひっそりと店を構えているらしい。
知る者しか訪れることのない裏通りだ。
「そうか」
事情を知るこの部屋の主は、言葉少なにそう答えた

そんな時だった。
静かなノックの音の後、襟の上までしっかりと留め具を填めて規格通りに隙なく隊服に身を包んだ一人の兵士が、報告書を手に団長室を訪れた。
軍人らしいきびきびとした動作で己が上官に書類を手渡す。
兵士は何やら小声で団長と議論をした後、室内に居た客人である男に一礼をしてから、部屋を後にした。
その兵士は長椅子に居座る男の風体を見ても、別段、顔色を変えることも眉を顰めることもしなかった。実に良く訓練されている。
「ブコバル」
スタルゴラド第五師団・団長のドーリンは、手渡された書類を手に振り返った。
ドーリンは、久し振りに顔を覗かせた友人に対して満面の笑みを浮かべていた。
それは、見る人によってはその肝を冷やすような実にあくどい類のものだった。
「あ？」
案の定、それを目の当たりにしたブコバルは、実に嫌そうな顔をしてぞんざいな返事を返していた。
「ちょうどいい。お前に打ってつけの仕事がある。えらく暇を持て

余しているようだからな」
「んだよ？」
ドーリンは、相手に反論の隙を与える事無く速やかに執務机から立ち上がると、長椅子にだらりと体を持たせかけているブコバルにの鼻先に、先程の下士官が持ってきたであろう書類を差し出した。
「こいつの尋問を頼む」
「あ？　なんで俺がんなことに首を突っ込まなくちゃなんねぇんだよ」
「生憎、俺は忙しい。実に残念だが、次の予定が押している。だが、お前は暇だ」
最後の単語をやけに強調して、簡潔に言い放った。
――――これ以上、単純明快な理由があるか？
そのような副音声が憚らずに聞こえて来た。
ドーリンは、尤もらしくぱらりと報告書の上書きを捲って、簡単に内容を確認する。
「唯の傷害未遂事件だな。相手は子供だ。適当に話を聞いてやってくれ」
決定事項とばかりに口にされた言葉に、ブコバルは冗談ではないと体を起こした。
「はぁ？　なんで俺がんなことやんなくちゃなんねぇんだよ！」
ドーリンが管轄するのは、この街の第五師団で、ブコバルの所属は、北の砦である第七師団だ。
明らかに管轄外である。幾ら同じ国の軍部に属しているとは言え、この場所はブコバルにとっては勝手が違う。余所者がいきなり首を突っ込んだら、それこそ、往々にして仲間意識の強い軍部の第五師団の連中は、いい顔をしないに違いない。
上官の命令は絶対であるから、団長がそう決定を下したのならば、表立って異を唱える輩はいないのだろうが、内心は面白くないに違いなかった。そんなささやかな蟠りも積み重なれば、それなりの不安材料になり得る。このような所でそんな火種を残して置きたくは

ない。見てくれはいい加減だが、軍人として、それ位の思慮深さはブコバルにも備わっていた。

そう思ったのだが。

対するドーリンは至って真面目だった。

「これはお前の得意分野だろう？　適材・適所というではないか」

そう言って、ほんの少しだけ口角を上げる。

そこには、ブコバルがこれまでにこの場所で起こしたであろう度重なる揉め事の前科のことが仄めかされていた。

痛いところを突かれたのか、不意に押し黙った相手に、ドーリンは実に効果的な笑みを浮かべる。

「では、任せたぞ。報告書は書記官が上げるから問題ない。お前は話を聞くだけだ。簡単なものだろう？」

そう言って、書類をブコバルの胸に押しつけた。

「あ、おい、ドーリン。てめぇ、待ちやがれ」

そして、この部屋の主は、手早く椅子に掛けていた上着に袖を通すと、有無を言わせない早さで身を翻し、言いたいことだけを言い捨てて、団長室の重厚な扉の向こうに消えた。

主が去った部屋に一人残されたブコバルは、盛大に舌打ちをした。

「あの野郎、言うだけ言いやがって」

そして、ブコバルはテーブルの上に無造作に置かれた件の報告書を摘み上げた。

「相変わらず、人使いの荒い野郎だ」

年がら年中、忙しそうにせかせかとあちらこちらを動きまわる友人は、こうして偶に顔を覗かせる輩（ともがら）も、使える者は容赦なく使った。

まぁ、ここに来る度に、色街で何かと揉め事を起こすブコバルであるから、それはドーリンにしてみれば、迷惑料の前払い的な意味合いが多分にもあるのかもしれない。

要するに【持ちつ、持たれつ】というやつだ。

ブコバルも決して故意ではないにせよ、その辺りのことに関して

は自覚があったので、最終的にはいつもその尻拭いをさせる形になってしまうドーリンに対しては、中々強く出られない所があったのだ。

ドーリンもその辺りのブコバルの性格を良く熟知しているのだ。総合的に見てみれば、相手の方が一枚上手ということなのだろう。

「しゃーねぇか」

ブコバルはガシガシと伸びた髪を無造作に掻くと、緩慢な動作で立ち上がった。

やる気など端から無い。明らかに嫌々という仕草である。

だが、喩え、それが意にそぐわないものであっても、一度、受けたのならば、与えられた任務を途中で投げ出すことはしなかった。

「後で覚えてろよ。ぜってぇ高く付けてやる」

苦情を聞かせる主の居なくなった部屋で、伝言を残すようにそう吐き捨てると、テーブルの上に置かれた書類を手に、団長室の扉に手を掛けた。

「茶くらい出せっての」

――――ケチな野郎だぜ。

沢山の書類が積み上がって小高い山を成す友人の執務机を一瞥し、相変わらず鬼のような仕事量をこなしているであろう事実に肩を竦めて見せてから、その場を後にしたのだった。

長い廊下を歩きながら、ブコバルは手の内にある書類を捲った。

中に書かれてあるのは、どうしようもない、実にくだらない事だった。

――――こんなことまで、回ってくるのか？

ブコバルは内心、眉を顰めた。

往来で騒ぎを起こした酔っ払い男。相手を鞘で一方的に打ち据えただと？

おいおいおいおい。こんなの良くある喧嘩だろう。自警団に任せ

ておけばいいだろうに。態々、軍部の兵士たちが出張ることなど無いだろう――――――と思い掛けて、そう言えば、この街で揉め事を起こすのは、大抵が自称、傭兵……というか、兵士崩れの柄の悪い連中が圧倒的に多いことに思い至る。

そこで、ふいに自分がこれから顔を拝みに行く相手が、どう考えてもむさ苦しい男であるという事実が簡単に導き出されて、げんなりした。

――――――マジかよ。どうせなら、もっとこう色っぽい話が良いんだがな。色街の娼婦のいざこざとか。

だが、そんなブコバルの願いも虚しく、敵ながらあっぱれという実に素早い用意周到さで、団長からとある有力な【助っ人】が、管轄内で起こった傷害未遂事件の事情聴取を引き受けてくれるという有り難い話に、その登場を待っていた兵士が顔を輝かせた。

「ご苦労様です」

小さく敬礼をして、喜色を浮かべたその兵士の顔に、

「ああ」

ブコバルは曖昧な返事をした。

――――――チクショウ、覚えてろよ。ドーリン。

そっと心の内で呪詛の言葉を吐くのは忘れない。

それが相手に伝わるかは、未知数だが。

こんなことになるなら、朝早くに宿屋を出たユルスナールに付いて行けばよかったかとの思いが頭を掠めたが、それも今となっては後の祭りである。

そして、ブコバルは、緑の腕章を付けたここの兵士から、同じように仮初の兵士としての腕章を受け取ると、それを指先でくるくると弄んだ。

そして、促されるままに騒ぎを起こしたであろう酔っ払い男が止め置かれているという部屋に入ったのだった。

風来坊の受難（後書き）

【あの人】の登場ということでルスランと感違いをされた方、スミマセン。

ブコバルでした。今回は書いていて、とても楽しかったです。個人的にブコバルは好きな登場人物です。次回は、漸く、ルスランが登場するかと思います。

再会へのプレリュード

同じ日、宿屋を出たユルスナールは、真っ直ぐ目的の場所に向かって歩いていた。
その足取りは軽い。
がっしりとした良く鍛えられた肉体を持ちながらも、その長い脚から繰り出される歩調は、実に軽やかで重みを感じさせなかった。
ユルスナールが身に付けているのは、北の砦に居る時に着ているようなかっちりとした隊服ではなく、随分と簡素なものだった。くすんだ黒に近い濃紺の外套を羽織り、その下には飾り気の無い上着とシャツを重ねている。下には黒いズボンに、同じく黒い長靴を穿いていた。どれも着古されて体に馴染んだものだった。
ユルスナールの腰には、普段通り、一振りの長剣が下がっていた。
この剣ともう随分と長い付き合いになる。最早、自分の体の一部のような按配で、その重みがないとしっくりこない程だ。
砦の兵士たちにとっても周囲の友人達にとってもそれは、いつも通りの見慣れた光景だった。
だが、よくよく目を凝らしてみれば、その出で立ちには以前とは違う点が、一つだけあった。
本当にささやかな違いだ。恐らく、それを施したユルスナール本人でしか気が付かないだろう。
その太くて重みのある長剣を支えているのは、引き締まった逞しい腰に斜めに掛かる太いベルトだ。なめした頑丈な革もそれを使い続けている長い年月に比例して、表面には沢山の傷が付き、飴色に光っていた。
そして、そのベルトの剣を収めている部分とは反対側の場所には、小さな飾り紐が付いていた。
その先端には、やや歪な形をした黒い石が三つ程、連なって揺れ

ていた。小さな黒い石は、真中に小さな穴が開き、そこに紅い紐が通っていた。石を連ねた下の方では、その紐は紅い色の他に別の色の糸が入り込んで、一緒に細かく編み込みが施され、複雑な模様を作り出していた。

小さいながらも随分と手の込んだ代物だった。それは、装飾品の類に疎いユルスナールのような男にも十分見て取れた。

その飾り石は、ユルスナールが歩く度に外套の中で小さく揺れた。時折、強い風が吹いて濃紺の外套の裾をはためかす。そうすると、一瞬、吸収した日の光を反射するように、小さな黒い石が、その存在を主張するように煌めいた。

それは過日、お守りだと言ってユルスナールに渡されたものだった。

時折、砦にやってくる伝令の役目を負った鷹の足首に付いた小さな筒の中に一枚の紙片と共に入っていたのを砦の鷹匠の兵士が団長であるユルスナールの所まで持ってきたのだ。

贈り主は、この石と同じ色の瞳を持っていた。

澄んだ深みを備えた闇の色。ひっそりとした静けさの中に、底知れぬ強さと優しさを備えた慈愛に満ちた穏やかな色。

あの瞳に出会うまで、黒という色が、かようにも沢山の輝きをその内に秘めた色であることを過分にも知らなかった。

賑やかな人混みの中を歩いているユルスナールの右手の指先が、そっとベルトに付いた飾り紐に触れた。

まるで、そこに残された贈り主の温もりを辿るかのように。

日の光を反射して銀色に輝く髪を靡かせながら、この街の大通りを歩くユルスナールの姿は、その地味な色合いと簡素な服装にも関わらず、何故か、人目を引いた。

硬質な冷たいきらいのある顔立ちに、そこから覗く切れ長の瞳は、

切れ味の良い鋭い刃物の切っ先のようだ。大手を振って通りの真中を歩いていた荒々しい風体の男たちも、ユルスナールの前にはさり気なく道を譲った。

街の女たちは、颯爽と現れたこれまでとはやや毛色の違う男の登場に目配せをし合い、しきりに秋波を送る。

だが、相手の気を引こうとする女たちの涙ぐましい努力にも関わらず、それを向けられた当人は、全く気にした様子が無かった。

それもそうだろう。

ユルスナールの脳裏には、底知れぬ深い輝きを持った黒い瞳が描かれていたのだから。

人通りの多い大通りを逸れて、それから細い路地を幾筋か抜ける。迷路のように複雑に入り組んだ道をユルスナールは迷うことなく進んでいた。

暫くして、ひっそりとした界隈に出た。

そこは、小さな小間物屋や古道具屋、日用品を扱う金物屋が軒を並べる裏通りだった。

古ぼけた看板も、小さい間口に所狭しと並んだ細々とした品物の様子も、それを形作る店の様相も、一年前にこの場所を訪れた時と変わっていない。

ユルスナールは、この裏通りに足を踏み入れると、迷わず、そのどん詰まりを目指した。

そこに己が剣を鍛えてくれた鍛冶屋の工房があった。

毎年、この時期になると剣の状態を改めて貰いにここを訪れるのだ。そして、微調整をしてもらう。この長剣を作ったのは、先代の鍛冶屋だが、今は代替わりをして、その弟子が工房を引き継いでいた。その男に頼むのも、これで三度目になる。

ユルスナールは、二振りの剣が交差する文様が描かれた古ぼけた小さな看板の掛かる家の前で足を止めた。

そして、戸口を覗いて訪いを告げた。

だが、暫く待ってみるが、中は静まり返ったままで、応えの声、一つもしなかった。
いつもなら、愛想の欠片も無い男の低い声がする筈だった。
ユルスナールは、内心、首を傾げた。
――――留守だろうか。
だが、この場所にはいつも事前に伝令を飛ばして、自分が尋ねることを知らせている。その為か、ここの主が留守であることはこれまで一度も無かった。
ユルスナールは、中を覗いて、男の気配を探った。
だが、そこに人の気配は全く残っていなかった。
どうやら、本当に留守にしているらしい。
ならば、自分が次に取る行動は二つに一つだ。
ここで主が返ってくるのを待つか。それとも出直すか。
さて、どうしたものかと考えを巡らせていると、隣の家からひょっこりと一人の男が首を出した。

「すまないが」
顔を覗かせた隣の金物屋の主に、ユルスナールは声を掛けた。
「ああ。あんたは、カマールんとこの軍人さんだね」
店の主は、毎年、この時期にやってくる兵士の顔を良く覚えていた。
上背のあるがっしりとした体つきに、銀色の髪を持つ兵士。男らしい猛々しさの中にもどこか気品のあるその風貌は、この界隈では目を引いた。
「ここの主は留守のようだが、何処に行ったか知らないだろうか？」
「ああ。なんかね。ついさっきなんだが。えらい血相変えて出てったよ」
狭い小路の中、外で響いた人の話し声に、その周りで店を構えていた人々が次々に顔を覗かせた。
「そうそう、珍しく、やけに焦ってるようだったね。アタシしゃ、

あの男のあんな顔を見たのは初めてだよ」
体格の良い小間物屋の女主人がそう言えば、
「確か、今、カマールんとこにいる坊主が、軍の詰め所に連れてかれたとかどうとか」
古道具屋の男が聞きかじったことを口にすれば、集まった人々は一斉に驚いた顔を見せた。
「詰め所って、【ツェントル】にかい？」

軍の詰め所は、この界隈では、通称【ツェントル】と呼ばれていた。
【ツェントル】とは、【中心】という意味だ。この【プラミィーシュレ】には、軍部とは別に街の行政を司る役所がその中心部にあるのだが、この場所では、体を張って治安維持に取り組む軍部の方が役所にいる役人たちよりも、街に暮らす人々に人気があった。それを暗に揶揄した通称でもあった。
軍部の詰め所は、文字通り街の真ん中に聳える仰々しい行政府の建物よりも、南の方向に居を構えていたのだが、街の人々は、南にある軍部の建物の方をこの街の【中心（ツェントル）】と呼んだのだ。
「ああ。そうさ」
「なんでまた」
「そんな悪さをするような子にゃぁ見えなかったじゃないか？」
小間物屋の女主は、古道具屋の主に詰め寄ったが、
「さぁ、俺も詳しいことは分からんよ」
誰も正確な情報を持った者はいないようで、肩を竦めて見せた。
街に暮らす一般庶民は、軍部にしょっ引かれると聞くと揉め事を起こした荒くれ者の男たちを真っ先に思い浮かべた。酔っ払いの類や物盗り、喧嘩の類だ。詰まり印象としては、否定的な意味合いの方が強いのだ。
だが、ここに集まる人達が知る、その鍛冶屋の元に居る少年というのは、どうもそういう類とは無縁のようだ。

新しく入った弟子だろうか。
話を聞きながら、ユルスナールは思った。
先代の主に似て、その弟子である今の鍛冶屋、カマールも物静かな性質だが、自分の信念をはっきりと持つ頑固な男だった。
あの男も弟子を取るような時期になったか。そう思うと、過ぎ去った時の流れに感慨深いものがあった。
話を纏めれば、何処からか報せを聞きつけたカマールは、取るものも取り敢えず、事実確認の為に軍部の詰め所、【ツェントル】にすっ飛んで行ったということだ。まだ帰ってこないということは、その用事が長引いているのだろう。
一先ず、留守の理由が分かり、ユルスナールはこれ以上ここにいても仕方がないと判断した。
「出直すことにする。もし、主が帰ってきたら私が尋ねて来たことを伝えて貰えるだろうか」
慇懃に出された提案に、その場に集まったまま、噂話に花を咲かせていた男たちは、ユルスナールの方を振り仰ぐと鷹揚に頷いた。
「ああ。伝えておくさ」
「すまないな」
そう言って微かに口元に微笑みらしきものを浮かべたユルスナールに、小間物屋の女主が年甲斐も無く頬を赤らめた。
そして、この少し寂れた裏通りには、どこか浮いてしまう様な【いなせ】な空気を身に纏った男は、銀色の髪を翻して、再び、喧騒で賑わう大通りの方向へ消えたのだった。

「いつ見ても、ホント、嫌みな位、いい男だねぇ」
去って行くその後ろ姿を目の端で追いながら、小間物屋の女主は、どこか夢見がちな目をして零した。
「ああ。益々、男ぶりが上がってくようだ」
それに同意をするように金物屋の主も通りの向こうを眺める。
「ああ、アタシもあと十年若かったらねぇ」

その言葉に周りに居た男たちはぎょっとした顔をして目配せをし合う。

どう良く見積もっても、十年前も今も、男たちが知る女の姿には余り変わり映えが無かったからだ。

だが、夢見る乙女のような顔をする小間物屋の女主人に敢えて口を挟む者などいなかった。

ここで少しでも水を差すような事を口にしようものなら、後でとんでもない具合に跳ね返ってくるのだ。誰もが我が身可愛さに口を慎んだ。

留守であった鍛冶屋のカマールの工房を後にしたユルスナールは、そのまま宿屋には戻らずに、この街を管轄する【スタルゴラド第五師団】の詰め所、通称【ツェントル】を訪ねることにした。

上手く行けばカマールに遭遇するやも知れないし、そうでなくとも、【ツェントル】に赴任している旧友の顔を拝んで来ようと考えたのだ。

恐らく、中にはブコバルもいることだろう。あの男のことだ。冷やかしがてら旧知の友の顔を見て、向こうの訓練に参加したりしているかもしれない。

【ツェントル】に辿りつけば、相変わらず忙しそうに兵士たちが動きまわっていた。

入り口では、ユルスナールの姿を見た兵士たちが、背筋を伸ばして敬礼をした。

銀色の髪に瑠璃色の瞳。その色の組み合わせは、その実、余り多くはない。

身に付けている服は、兵士たちの隊服とは違えども、その凛とした佇まいと風貌から、この人物が誰であるかの見当が、兵士たちに

は付いたようだ。
恐らく、ここの上官から自分が訪ねて来るであろうことが、すでに末端にまで伝わっているのだろう。ユルスナールは、そう思った。
――――相変わらず用意周到な男だ。
ある種、病的な迄の几帳面さは、感嘆を禁じえない。
あの男の下に仕えるの方は、中々大変だろうが。
そんなことを思いながらも、ユルスナールは敬礼をした兵士に挨拶を返した。

ユルスナールは、実際、かなり顔が広く、ここの兵士たちの間では、それなりに名が通っていたのだが、本人は余りその事に頓着していなかった。
ユルスナールが兵士たちの間で有名なのには理由があった。国を代表する軍部の師団長であるということもそうだが、冬場、毎年、王都【スタリーツァ】で開かれる御前武芸大会に於いて、最終戦の常連者であることの方が大きかった。
剣で身を立てる兵士たちにとって、肩書を取り払った純粋な剣技の腕だけを勝ち抜きで競う武芸大会は、日々の鍛錬による成果と己が実力を試すまたとない機会であり、そこで勝ち残る猛者は、正に兵士たちが目指すべき憧れの存在でもあった。
昨年の個人戦の試合では、ユルスナールは二位に入った。最終戦で、第一師団の兵士に負けたのだ。
仲間たちは、口々に惜しいと言ったが、ユルスナール自身は、少しも惜しいとは思っていなかった。
実力の差は歴然としていたのだ。上には、まだ上がいる。その思いを新たに日々の鍛錬に勤しんだ。
その武芸大会には、個人戦の他に、各師団の団体戦もあった。
国の軍部には第一から第十迄、全部で十の師団が存在する。その各師団から代表者を五人選び、立ち会いを行う。軍部では毎年恒例

の行事で、中々の盛り上がりを見せた。軍部内での交流を深め、各師団内の結束力を高め、各人が切磋琢磨するよう刺激を受けるまたとない機会でもあった。男たちの熱い祭りでもある。

――――――それはさておき。

勝手知ったる（毎年のようにこの場を訪れているのだから、そう言っても良いだろう）館内を歩けば、知った顔がここの兵士に詰め寄っている姿に出くわした。

目の前にいる兵士と大して変わらない、いやともすれば勝るとも劣らない大きな体に長年の仕事で鍛えられている太い腕。無精髭が頬を覆う厳つい顔つきだ。

「ですから、何かの間違いです。あの子に会わせてください」

鍛冶屋のカマールだった。

どうやら噂は本当であったようだ。

「どうした？」

ユルスナールが声を掛ければ、カマールに対峙していた兵士は、あからさまにほっとしたような顔をした。

「カマール」

「これは、シービリの旦那」

カマールは、ユルスナールのことをその家名【シビリークス】から、【シービリ（北）】の旦那と呼んだ。

掛けられた声に振り返って、そこにある実に特徴的な硬質な面立ちの人物を見て、カマールはハッとした。

「もしかしなくとも、うちの方へお出でになりましたか。申し訳ねぇ」

カマールは、ユルスナールが訪ねて来る予定であったことを今になって思い出したようだった。

申し訳ないとばかりに頭を下げたカマールをユルスナールは手で制した。

「いや、それは気にするな。それより、何があった？」

【ツェントル】の内部で、中にいた兵士に掴み掛からんがばかりであったカマールの勢いに、その事情を問えば、
「どうも、うちの若いもんがこっちに連れてかれたみてぇでして」
それから、堰を切ったように、あの子は第一、問題を起こすような子ではない。ここに連れてこられたのはきっと何かの間違いで、自分が保証をするから会わせてほしいと切々と訴えた。
その尋常でない剣幕に応対していた兵士も困惑気味だった。堅気の職人らしく、普段の真面目で寡黙な姿からは想像が付かないような焦り振りだった。
余程、その弟子のことを可愛がっているのだろう。
「分かった。俺が確かめてこよう」
ユルスナールの提案にカマールは顔を輝かせた。
「ホントですか？」
「ああ」
「ありがとうございます」
「で、その弟子の名は？」
「ああ。弟子ではございませんよ」
カマールが顔を上げて、小さく目の前で手を振れば、
「違うのか？」
ユルスナールの眉が片方、器用に上がった。
「はい。うちの母親から言伝を預かって来たようでして、遠くから遥々訪ねて来た子なんです」
「では、身内か？」
「いいえ。身内でもございません」
ユルスナールは、その返答を内心、訝しく思ったが、それを顔には出さずに言葉を継いだ。
「そうか。その子供の名前と背格好は？」
「はい。名前はリョウっていう坊主でして。髪は真っ直ぐな黒。瞳の色も同じ黒で。この辺りじゃ、余り見ない色ですから、直ぐに分かります。色もそうですが、顔立ちが異国風といいますか。ちょっ

と変わっていやして……っていっても悪い意味じゃねぇんです。その反対で、人目を引くっていうか。愛嬌のある面でして」

――――――なんだと？

そうして告げられた子供の名前と姿形の描写に、ユルスナールは耳を疑った。

珍しくその切れ長な目を見開いて、カマールの顔をまじまじと見た。

だが、その変化には気が付かずに、カマールは続けた。

「大人しい穏やかな気性の、気立てのいい子でして。間違っても揉め事を起こすような子じゃぁねぇんです」

「リョウ……だと？」

ユルスナールは、無意識に剣を下げたベルトに付いた飾り紐へ指を伸ばしていた。

それは、過日、リョウから送り届けられたものだった。

以前、ガルーシャのお守りを貰ってしまったから、その代わりに、自分で拵えたと同封されていた小さな紙には記されていた。

スフミ村の収穫祭が終わってから直ぐのことだ。

ユルスナールは、パッとその身を翻すと、足早に廊下を歩きだした。

「だ、旦那？」

「シビリークス隊長？」

それにカマールと直ぐ傍にいた兵士が驚きの声を上る。残された二人は無言で顔を見交わすと、すぐにその後を追った。

傍迷惑な事情聴取

――――――その頃、リョウはというと。

先導する兵士に連れられて、この街の治安維持を担当する兵士たちの詰め所、【ツェントル】に来ていた。

リョウは、二人の子供たちと共に小さな部屋に通されていた。

その場所は、正面入り口から広間を抜けて、左に折れ、少し行った所にあった。

廊下にはずらりと似たような部屋の扉が幾つも並び、取り調べ室のような趣だ。

簡素な木の長椅子に座ったリョウと子供たちを確認すると、案内をした兵士は中で待っているようにと告げて、どこかへ姿を消してしまった。

リョウは、もの珍しそうに辺りを見渡した。

剥き出しになった石壁に明かり取りの窓が、かなり上の方に付いている。日の光が差し込み、室内は明るかった。

それにしても、このようにして兵士たちの詰め所というものを訪れるのは二度目になる。

一度目は北の砦。そして、二度目はこの街の【ツェントル】。

つくづくこの国の兵士たちとは縁があるとリョウは内心、苦笑気味に思った。

だが、所変われば、その趣も変わる。小ざっぱりとして実用性重視であった北の砦に比べ、この場所は大きな街中にあるせいか、中の様子も、そこで働く兵士たちも、少し華やいだ空気に包まれているように感じられた。面白いものだ。

そうこうするうちに取調室の扉が開いた。

「やぁ、お待たせ」

そんな軽い言葉と共に現れたのは、やけに物腰の柔らかい男だった。

隊服を身につけ、その腕に緑色の腕章を付けているから、もしかしなくとも、ここの兵士なのだろう。　だが、印象としては随分とちぐはぐな感じを受ける。

「気分はどうだい？　ハハ。怖がることはないよ。簡単に話を聞くだけだからね。後は、ちょっとした確認かな？」

そう言ってあろうことか、片目を瞑って見せた。

隊服を着ていなかったら、違う職業を思い浮かべるに違いない。

武官というよりも文官的な匂いがした。

現れた男が思いの外、優しそうな感じで毒気を抜かれたのか、初めて来る兵舎に緊張でがちがちになっていた子供たちは、体の力を抜くと、男の質問に答える形で徐々に事の経緯を話し始めた。

子供相手ということで、尋問をする兵士の人選にはかなり気を使ったようだ。

男は、実に巧みに子供たちの話から、鍵となる部分を引き出していった。

男の子と女の子は其々、コースチャとラリーサという名の姉弟で、この街の東にある一角に住んでいる。父親は鍛冶屋を営んでいるが、今は病気で臥せっているとのことだった。

姉弟は、その日、母親に使いを頼まれて少し離れた【薬師】の所に父の為の薬を貰いに出掛た途中だった。その途中、ごった返した往来で、あの男に真正面からぶつかった。そして、あの騒ぎになったということだった。

「なるほどね」

要領よく話を聞き終えた男は、そう言うと不意に人好きのする笑みを浮かべた。

そして、視線を二人の子供たちから、その隣に居るもう一人の人物、リョウに流した。

「で、あのおっかないおじさんが、頭に血が上って、腰に差した一物を振り回した……ってところかな？」

突き詰めれば、その内容は間違ってはいないのだろうが。

その何とも気の抜けた表現に、リョウは少し脱力した。その所為か、曖昧な微笑みを浮かべていた。

きっと口元が引き攣っているかもしれない。子供扱いされるのは、今に始まったことではないが、今回はやや度を越しているような気がしないでもない。

ぱらりと報告書らしき紙を捲る音がした。

「ええと、周りにいた大人たちは、あの酔っ払いが君たちを殴りつけたのを見たって言ってたみたいだけれど」

そこで区切ると男は顔を上げた。

「怪我はしてない？」

その声に男の子と女の子が首を横に振る。

「キミは？」

「いえ。大丈夫です」

リョウが小さく否定すれば、男の子が真っ先に顔を上げた。

心配そうな色をその瞳に乗せていた。それに気にするなと小さく微笑む。

「えー？　ホントに？」

目の前に座る兵士は、軽い口調でそう言うと、その長い脚を窮屈そうに組み替えて、こちらを見ていた。

その口元は、薄らと弧を描き、相変わらず感情の読めない表情を浮かべていたが、その眼差しは、どこか探るようなものだった。

柔和な外見は、ある種の目くらましのようなもので。

この男も兵士であるからして、中々に食えない人物なのかもしれない。

リョウは、心の内で、目の前に座る男の印象に訂正を加えた。

「別に、あっちを庇う必要なんてないよ？　こっちが知りたいのは、真実だからね」

それは正論でもある。

リョウは無意識に左手で右手の手首の辺りを掴んでいた。

酔っ払いの男から受けた殴打の衝撃は、時間が経って、鈍い痛みを訴え始めていた。

肩の辺りが熱を持ち始めていた。見ていないので分からないが、痣になっているのは間違いないだろう。単なる打撲で、骨までは行ってはいないといいのだが。生まれてこの方、骨折も捻挫も経験をしたことが無かったので、自分では良く分からないのが正直なところだった。

リョウは出来ることなら、打たれたことを黙っていようと思っていた。

後先考えずに、自分から巻き込まれに行ったようなものだ。怪我をしたなどと声高に言うべきことでは無かったし、第一、今、この街で厄介になっているリューバの息子、鍛冶屋を営んでいるカマールに迷惑が掛かるようなことはしたくなかった。

リョウとしては、出来ることなら、このまま直ぐにでも放免してもらいたい位だった。

カマールの事だ。きっと、近くに使いに出掛けたきり、中々帰ってこない自分の事を心配しているに違いなかった。

ここで怪我をしているなんてことになったら、どう転ぶか知れない。

あの酔っ払い男の処遇も少しは気になった。

「何処にも怪我はしていない？」

「はい」

「本当に？」

「はい」

再度、確認の質問に、間を置かずに答えれば、

「フフフ。キミは随分と強情だねぇ」

可笑しそうに目の前の男が笑った。

――――――だけれど、個人的には、そういうの、嫌いじゃないよ？

そう言って、何故か、目の前の兵士は、意味深に目配せをしたかと思うとひっそりと笑った。

その明るい薄茶色の瞳に、室内に差し込む燦々とした陽射しとは不釣り合いな程のどこか妖しい光が煌めく。

それを見た瞬間、リョウの背中に言いようのない悪寒のようなものが走った。

兵士は、ゆっくり長い腕を伸ばすとリョウの頬に指先で触れた。その輪郭を撫るようにかさついた男らしい指の先端が掠める。

男はリョウ達の座る細長い木の腰掛の前に部屋の隅にあった背凭れのない木の丸椅子を持ってきて腰掛けていた。男とリョウの間には遮るものは無い。

リョウは小さく肩を揺らした。

「恥ずかしがることはないよ。ここで駄目なら、ボクにだけでもいい。教えてくれないかい？　その時は、勿論、場所を変えよう」

――――――それなら、いいだろう？

ねっとりとした男の囁きが耳朶を掠める。そして、同じように耳元を擽った指先が、離れていった。

突然、立ち上るようにして現れた妙な空気に首を傾げる。

リョウは、言われたことの意味が理解できずに目を瞬かせた。

「……あの、仰ることの意味が良く分からないのですが」

「おや？　本当に分からないかい？」

やけに近い場所で、男の瞳が悪戯っぽく輝いた。

随分と楽しそうだ。上機嫌な男に対して、リョウの気分は急降下していった。得体の知れない相手の行動に、だらだらと冷や汗をかきそうな塩梅だった。

リョウは、不意に近づいてきた男の顔に無意識に体を引いた。

その瞬間、殆ど反射的に後ろに着いた右腕から、肩に掛けて激痛が走った。

それを一瞬、顔を顰めることでやり過ごす。
だが、その動きに合わせるかのように、男が同じく間合いを詰めて来た。
男の口元が弧を描いた。
「おや？　やっぱり、どこか怪我をしているんじゃないの？　肩かな？」
そう言って、舐めるような男の視線が、リョウの右肩に注がれた。

そんな時だった。
――――――バン！
勢い良く取り調べ室の扉が開いたかと思うと、凄い形相をした別の兵士が中に入ってきた。
「ウテナ！」
入ってきた兵士は、中にいた同僚を見るなり鋭い声を上げた。
「やっぱり、ここにいやがったか。この変態野郎。これはお前の仕事じゃねぇだろうが！　なにやってんだ！」
物凄い男の剣幕に、ウテナと呼ばれた兵士は別段、堪えた様子も無く、ゆっくりを振り返ると鷹揚に肩を竦めて見せた。
「やだなぁ、なんだい、藪から棒に。騒々しいったらありゃしない。折角、これからが楽しい所だったのに」
「あ？　人の仕事奪っておいて、なんだその言い草は？」
「ええー、良いじゃないか。こっちがやってあげてるんだから。その辺は恩に着ておいてよ」
「馬鹿を言え」
入ってきた兵士の顔にリョウは見覚えがあった。
「あ」
思わず漏れた声に、物凄い勢いで捲し立てていた兵士の顔がこちらを向く。
日に焼けた浅黒い肌に短く刈りあげた金色の髪。そして浅黄色の瞳。見紛う筈がない、三日前に門の所で自分を呼び止めた兵士だ。

名前は確か……。
「イリヤさん？」
目が合った兵士は、一瞬、ぎょっとしたような顔をしてから、傍にやってきた。
「リョウ！　リョウじゃねぇか！　お前、大丈夫か？　こいつに何もされてないか？」
それはどういう意味だろうか。
どこか案じる顔をしながら、イリヤの大きな手が、何かを確かめるようにリョウの肩から腕を辿った。
不意打ちに右肩をいきなり掴まれて、痛みに体が跳ねた。
「イリヤ、手を離せ」
「何すんだよ？」
ウテナはすぐさま、イリヤの手を掴むと、リョウの右肩から外した。
「馬鹿。この子は、怪我をしている」
不意に落とされた真面目な声音に、イリヤの顔がハッとした。
「わりぃ。大丈夫だったか？」
リョウは痛みの走る右肩をそっと左手で抑えていた。
それでも、心配そうに顔を覗き込んだイリヤに微笑んで見せた。
「はい」
「バーカ。平気な訳ないだろうに」
顔を顰めたウテナに、リョウは曖昧に微笑むしかなかった。
「リョウといったね」
名前を確認されるように口にされて、小さく首肯する。
「その怪我は、あの男の仕業だろう？」
先程までの軽薄さが嘘のように真剣な響きを持ったウテナの声音に、リョウはどうしたものかと顔を上げた。
別に騒ぎ立てたい訳ではないのだ。
だが、その事をここで認めたら、どうなるのだろう。
「そんな情けない顔をしないの」

自分でもその自覚はあった。
呆れたような響きを乗せて、ついと伸びて来たウテナの手に頬の肉を軽く摘まれる。
「なに？　痛い方が好きなの？　それならそれで、こっちとしては構わないんだけれど。いや、むしろそっちの方が楽しいっていうか……って、アタ！」
そう言って、話があらぬ方向へ行きそうになるのをイリヤがウテナの頭を引っ叩く事で軌道修正した。
「何すんだ！」
「それはこっちの台詞だ」
イリヤは、ギロリとウテナを一睨みした後、そっとリョウを拱いた。
「悪いな。リョウ。こいつはちょっとばかしおかしな趣味を持ってさ。その、何だ。所謂【少年】ってやつに目が無いんだ。ちょっとした偏った嗜好を持った奴って言えば分かるか？　まぁ、なんだ。要するに【愛好家（マニア）】みたいな所があるんだよ」
耳元で囁かれた仰天の事実に、リョウは仰け反りそうになった。
いや、他人の嗜好云々をとやかく言う積りはないが、それは自分に実害が及ばないと仮定しての範囲内でだ。
「案の定、急いで来てみればこの様だ。間に合って良かった」
ほっとした表情で告げられたイリヤの台詞に、リョウの口元は盛大に引き攣っていた。
「勿論、ここにいる分には大丈夫だ。俺たちの目が光ってるからな」
「失礼な。ボクが好きなのは純粋な【美】だよ。美しいモノは愛でてこそだろう？」
隣で筒抜けになった話声にウテナの嘯く声が聞こえた。
妙な持論を持ちだした同僚に、イリヤはあからさまに顔を顰めて見せた。
イリヤによればこうだ。

本来は、イリヤが尋問をする予定だったのだが、何処で小耳に挟んだのか、少し目を離した隙に、取り調べ室にいる相手が珍しくも年端の行かぬ子供たちだと聞いたウテナが、嬉々として自分の仕事を分捕って行ったのだという。

リョウの顔には、最早、乾いた笑みしか浮かんではいなかった。

少年趣味のある兵士。それをこんな所で大っぴらにしてよく問題にならないものだ。

その事の方がいっそ感心する。まぁ、兵士になる男たちは皆、逞しい体つきをしているから、ウテナが思い描く理想の姿形に嵌るような相手は、軍部内では何処をどう探しても見つからないのだろうが。

だが、それにしてもだ。

イリヤが乱入しなかったらと思うとぞっとした。

心底、呆れたような視線をウテナに向ければ、何を勘違いしたのか、バチンと音がしそうな程のウィンクを返される。

リョウはそれを緩く頭を振ることで追い払った。

何だか馬鹿らしくなってきたのは気のせいではないだろう。

「それはそれは。残念でしたね。ご期待には沿えなかったようで、すみません」

何を期待したのかは知れないが、自分は、美少年とは程遠い。

そのことを暗に言えば、

「何を言ってるんだい。キミは十分圏内だよ。いや、お釣りが来る程だ。その瞳の色も、髪の色も珍しいし、その顔立ちだって……」

それ以上続きそうになる戯言に、

「もういいです」

リョウは手を伸ばすと居たたまれない気分で、ウテナの口を塞いだ。

「おや？　随分と積極的だね」

だが、却って嬉々として輝き出した瞳に、リョウは助けを求めるようにイリヤを振り仰げば、

「少し、黙ってろ」
イリヤは、ウテナの前に体を滑り込ませて、リョウの視界を遮った。

リョウが、ふと後方を振り返れば、二人の子供たちが、目を白黒させながらこちらを見ていた。
リョウは内心、頭を抱えたくなった。二人の子供がいる前で、なんてことをしていたのだろう。
思わず片手で顔を覆えば、
「お兄ちゃん……大丈夫？」
却って姉弟に心配そうに聞かれてしまった。
リョウは顔を上げると穏やかに微笑んだ。
椅子に座って、子供たちの背中になんともない方の左腕を回す。
「ああ、大丈夫だよ。お母さん、きっと心配してるよね。直ぐに帰れるようにしてもらおうね」
そして、リョウがいつになったら開放してもらえるのだろうかと聞こうと顔を上げた時だった。

とんだ再会

「おーら、こっちは終わったぞ。そっちはどうだ？」
野太い男の声が響いたかと思うと、のっそりと一人の男が顔を覗かせた。
伸びてあちこちに跳ねる癖毛を大きな手が、無造作に掻き上げれば、その荒削りな顔立ちが顕わになった。青灰色の瞳が覗く。
そこにあったのは、思いも寄らない人物の顔だった。
――――――ブコバル。
忘れもしない。北の砦で【色々な意味】で【随分と世話になった】兵士だ。
もう四か月ほど前になる出来事は、強い印象を持って自分の記憶の中に息づいているのだから。
いつもその隣には、銀色の髪を持つ男が並んでいた。深い瑠璃の瞳を持つ男が。
リョウは驚きの余り、声を失った。
「ああ、こっちも、もう終わりです。一つ、確認事項が残ってますけど」
顔を覗かせたブコバルにウテナが声を返す。
そして、ブコバルの視線が、酔っ払い男に絡まれたという子供たちへと注がれた。
男の子、女の子と順繰りに辿り、そして、最後、その脇に寄り添うようにして座っていた人物に注がれた。ブコバルはそのまま、何事もなかったかのように尋問をしていたであろう緑の腕章を付けた兵士に向き直る。
が、すぐさま、弾かれたように視線を前に戻した。
「はぁぁぁぁあ？」
ブコバルの大きな声が、狭い取り調べ室に響き渡った。

突然の大声に、中にいたイリヤとウテナの二人の兵士が顔を顰めたその脇で、二人の子供たちは吃驚して、今にも泣き出しそうな顔をしてリョウにしがみ付いて来た。
それで、漸く、リョウも我に返った。
「人の顔を見て絶叫するなんて、随分じゃありませんか」
――――――お久し振りです。ブコバル。
そう言って、穏やかに微笑んで見せる。
目を見開いていたブコバルは、驚きのままに大声を上げた。
「リョウ、お前、なんでこんなところにいやがる！」
「なんでと言われても。……大体、それはこっちの台詞ですよ」
リョウは苦笑をすると僅かに首を傾げて見せた。
こちらとて、何故、北の砦にいる筈のブコバルが、この【ツェントル】にいて、ここの兵士と同じように緑の腕章をその腕に付けているのかが気になった。突っ込み所は沢山ある。
だが、良く見てみれば、ブコバルの格好は、兵士たちの身に付けている隊服ではない。北の砦にいた時のような隊服でもない。もっと砕けた、簡素なものだ。
「配置換えになった……という訳ではなさそうですね。左遷でもされましたか？」
「あ？　バッカ言え。誰が配置換えなんぞになるか！」
「そうですか」
態と口にした軽口に案の定、すぐさま否定の言葉が返る。それを承知の上で淡々と真顔で返せば、じっと視線が絡んだ。
暫くして、ブコバルは何が可笑しいのか、不意に声を立てて笑った。
それにリョウも釣られるように笑いを零す。
「元気そうじゃねぇか」
「はい。お陰さまで」
久々の邂逅に二人で和んでいると、脇から茶々が入った。
「えー、なになに？　この子、ブコバルの旦那の知り合いなの？」

ウテナが興味津々に喰い付いて来た。
「あー、まぁ、知り合いっつうかぁ、なんだ。その」
だが、ブコバルの方は、曖昧に言葉を濁して、ガシガシと頭を掻く。
「何それ、なんか怪しいなぁ。なになに、旦那もとうとうそっちの道に入ったんだ？　女だけでは飽き足らずに？　うわぁ、マジすか。これで、旦那も同志？」
嬉々として上がったその台詞にぎょっとしたのはブコバルの方だった。
「あ？　違うっての。何だよそいつは。お前と俺を一緒にすんな。ボケが」
どうやらブコバルもウテナとは旧知の仲でその性癖をちゃんと把握しているようだ。
ブコバルは、ウテナの頭を嫌そうに小突くと、不意に顔をリョウの方へ向けた。
「大体、リョウ、お前、なんでこんなとこにいるんだ。俺はてっきり、相手は坊主だって……」
「ブコバル！」
リョウは慌てて、ブコバルの台詞に被せるようにその名前を呼んだ。
そして、目配せをする。それ以上は言ってくれるなと。
「【オレ】が、自分から首を突っ込んだんです」
切羽詰まったように口にされたその言葉に何がしかの事情を察したブコバルは、ニヤリと人の悪そうな笑みを浮かべた。
「なぁるほどね」
続いて腕組みすると緑の腕章を付けた兵士を見た。
「で、ウテナ。残ってる確認事項ってのはなんだ？」
「ああ、それは。この子が怪我をしてるはずなんですけど、何ともないって言い張るから」
「あっちは鞘が当たったって言ってたぞ？」

それは、向こうの酔っ払いの尋問をブコバルが担当していたことを示す言葉だった。
リョウは非常に嫌な予感がした。
この男が絡むと碌な事がない。
「リョウ。見せてみろ」
「はい？」
「打ったのは何処だ？　肩か？　ん？　背中か？」
ニヤニヤとした下卑た笑みを浮かべて、ブコバルが近寄ってくる。
リョウの体は自然と後退した。
ブコバルは、完全に面白がっているに違いなかった。自分が女であることは、ルスランから知らされて分かっているようだ。それを承知の上で、そんな無理難題を言ってくる。
傷の確認には、上着だけでなく、その下のシャツも脱がなくてはならない。肩肌だけで済むとはいえ、このような所で肌を晒せる訳がなかった。
「遠慮します。大したことはありませんから」
「あ？　んなの見てみなくちゃ分からねぇだろ？」
少しずつ間合いを詰めて来るブコバルに、リョウの背中に冷や汗が流れた。
不意に視線をそらせば、舐めるような視線でこちらを見ているウテナが目に入った。
目眩がしそうだった。
この際、女だと分かればウテナの興味は自分から逸れるだろうから、最終的にはその方がいいのか。ブコバルは女の体など見慣れているようだし。この国の女たちの豊満な肉体を良く知るブコバルにとっては、自分の貧弱な体など大したことないに違いない。そんなことまで頭を過った。
唯一の救いになり得るだろう常識人と思しきイリヤは、困った顔をしてブコバルの方を見ている。しきりに助けてくれるように目配せをするが、イリヤは諦めろとばかりに首を横に振った。

それもそうだろう。リョウのことを男だと思っているイリヤには、リョウが考えている程、その危機感は伝わっていなかった。
それにしてもだ。ブコバルの傍若無人振りは、この場所でも健在なようだった。

「おら、リョウ。観念しな」
「うわ」
どこぞの悪漢も真っ青な台詞を口にして、一気に間合いを詰めたブコバルは、器用にリョウの左腕を掴むとその体を反転させ、石壁に押し付けた。
一瞬のことだった。
無意識に庇っていた右肩は、ブコバルにはバレバレであったらしい。
頬に冷たい石の感触が当たる。
「さぁて、改めてみるとしますか」
鼻歌が聞こえてきそうな程の上機嫌さで、ブコバルがリョウの上着に手を掛けた。
真後ろに陣取っている為、その表情は見えないが、きっと兇悪な笑みを浮かべているに違いない。
器用に前で止めていたボタンを外して、草色の上着はするりと肩から滑り落ち、掴まれている左手の所でぶら下がった。
「……ブコバル」
自分でも低い声が出ていた。
石壁と自分の体の隙間に、ブコバルの大きな手が入り込んできた。
「こんなことして、楽しいですか？」
「ああ、俺は楽しいぜ？」
耳元でひっそりと囁きを返される。
ごつごつとした指の感触が、的確に素早く動く。噂に違わずブコバルのこの筋での熟練振りを、身を持って体験する羽目になった。
こんなこと知りたくはなかった。全く有り難くない。

器用な手つきで次々と外されてゆく釦にリョウは大いに焦った。
「ブコバル、冗談きついですよ！」
「冗談な訳ないだろ。渋るお前が悪い」
なんでそうなるのだ。
「だからって、何もこんな所で！」
リョウは、普段の落ち着きが嘘のように声が上ずっていた。
「あ？　固いこと言うなって。ちょっと見るだけじゃねぇか」
主旨が大いにずれている。どこかちょっとだ。

「いいなぁ、楽しそうで。ねぇ、ブコバルの旦那、ボクも混ぜてよ」
不意に聞こえたウテナの言葉にリョウはぎょっとした。
慌てて首だけ向けて振り返れば、じっとこちらを見ながら舌なめずりをしている男と目が合う。
「却下です。ちっとも楽しくなんかないです。ウテナさん、きっとがっかりしますよ？　そうですよね、ブコバル？」
リョウは必死過ぎて、自分でも何を口走っているのか訳が分からなくなってきた。
「……って、どさくさに紛れてどこ触ってるんですか！」
もぞもぞと石壁と自分の体の間で蠢いていたブコバルの大きな手が、いつの間にか、片方の乳房を鷲掴みにしていた。
その感触と大きさを確かめるように緩く動く。
「へぇ、意外にあるじゃねぇか」
ブコバルが感心したように口笛を吹く。
呆れて物も言えない。
余りの出来事にリョウはブコバルを足で蹴ろうとした。
腕は塞がっている。自由になるのは両足だけで。
せめてもの抵抗だ。そうしなければ気が済まなかった。
だが、ブコバルはいとも簡単にリョウの攻撃を避けた。それどころか、却って拘束がきつくなる。
「こら、リョウ。動くなって。釦が外れねぇだろうが」

ここまで外しておいて、どの口がそんなことを言うのか。
「もう十分です！」
懸命に声を張り上げるが、ブコバルは全く意に介していなかった。元よりの体格差と力の差は歴然としている。ブコバルにとってリョウの抵抗など痛くも痒くもないだろう。だからと言ってこのまま向こうのやりたいようにさせる訳にはいかなかった。

藁をも縋る思いでリョウは後方を振り返った。
「イリヤさん、この節操なしをどうにかしてください！　あの酔っ払いより性質が悪い。あっちの方がまだましだ！」
だが、抵抗空しく、ビリリとシャツの布地が破れる音がした。
リョウが無理に体を捻った所為である。
肩から腕に掛けて、右側が外気に晒されて冷やりとした。
「……っ」
案の定、動いた拍子に肩に鋭い痛みが走った。
痛みに顔を顰め、抵抗が止まる。
リョウが、とっぷりと諦めの溜息を吐いた時だった。

――――――ヒュン。
風を着るような音がしたかと思うと、ガキンと何か固いモノが壁に当たる衝撃音が耳元で響いた。

「何をしている？」
不意に全身が泡立つような殺気が室内を埋め尽くしたかと思うと地を這うような男の低い声が、狭い室内に響き渡った。
その声量は、決して大きいものではなかったにも関わらず、その場にいた兵士たちの身に緊張を走らせるような何かを持っていた。
リョウは、その声音に聞き覚えがあった。
それに応えるかのように鼓動が一つ、跳ねた。
痛みをやり過ごす為に閉じていた瞼をそっと押し上げた。

直ぐ脇の石壁には何故か、一本の短剣が突き刺さっていた。反射する刃に自分の顔が歪んで映っていた。

先程の音は、どうやらこの剣が刺さった時の音らしい。

余りの動転ぶりに、石壁に剣が刺さるという、かつての自分が持ち得た【常識】ならばあり得ないような事実も簡単に流してしまった。

「おっと。あっぶねぇなぁ」

ブコバルは、反射的に体を後ろに仰け反らせて、投げつけられた短剣の軌道を避けたようだった。

続いて、小さな舌打ちが聞こえた。

「ブコバル。もう一度、訊く。何をしている？」

言葉と共に絶対零度の凍気が入口から流れ込んで来るようだった。

剥き出しになった背筋が泡立った。

リョウは、その冷気の源を求めてゆっくりと首を巡らした。

鼓動が、煩い位に鳴っていた。

その理由はなんなのか。

首に下げたペンダントが白い肌の上で光る。

ゆらりと差し込む穏やかな日差しに反射する銀(しろかね)の色。そして、深い青さを内に秘めた瑠璃の色が、視界一面に飛び込んできた。

「……ルスラン」

リョウは、無意識に視界に入ってきた人物の造形に安堵の息を吐いていた。

涙が滲みそうになるのをそのままに入口に立つ男を見上げる。

その手には、もう一本の短剣が、いつでも放たれるように握られていた。

「あ～、こいつはひでぇなぁ」

室内に走る固い空気を打ち破るように、やけに緊張感の無いブコバルの声がして、リョウは首を捻ってそろりと自分の肩を見た。

剥き出しになったその場所は、成程、無残にも赤く腫れ上がって

いた。道理で痛い訳だ。
誰かが、ゴクリと唾を飲み込む音が聞こえた。
「ブコバル」
再び、険を帯びた声がする。
「分かったって」
ブコバルはパッと両手を離すと目の前に掲げた。
そして一歩、脇へ身体をずらした。
「リョウ」
その懐かしい声に、リョウは無意識に微笑んでいた。
静まり返った室内にカツカツという靴音だけが響いた。
リョウは、剥き出しになった肩を慌てて隠そうとしたが、それは伸びて来た大きな手に阻まれてしまった。
気が付けば、目の前にユルスナールが立っていた。
ごつごつとした骨ばった男の手が、躊躇いがちに腫れ上がった箇所に触れる。
「これはどうした?」
低く問われて、リョウは視線を泳がせた。
有無を言わせない迫力が、ユルスナールにはあった。
「ええと、その……」
「ん?」
「……だから、はっきり言えばいいのに」
ぼそりと水を差すような声がして、ユルスナールはその発生源を確かめるように後方を見た。
「酔っ払いに絡まれた子供たちの間に入って、打たれたんでしょ?」
手にした書類をひらひらと揺らしながらウテナが口にした。
ユルスナールがいつにもまして磨きの掛かった無表情で低く問う。
「獲物はなんだ?」
「鞘だって言ってたぜ?」
酔っ払い男の方の事情聴取をしていたブコバルは、そう言いながらも首を傾げた。

「鞘だけでこんなになるか」
「あの野郎、やっぱ適当だったか」
リョウは観念したように小さく息を吐き出した。
「分かりました。ちゃんと白状します」
「リョウ、その前に」
ユルスナールの手が、シャツの前に伸びると顕わになっていた肌を隠した。
見下ろせば、そこは己の右半身が覗いていた。
ブコバルとの格闘で破れてしまったシャツは、最早、使い物にならなくなっていたのだ。釦を外していただけの筈なのに、どうして身ごろの方まで破けてしまったのか不思議で仕方がない。
シャツ一枚と雖もリョウには貴重なものだった。それはガルーシャのお古であったから、生地が弱くなっていて急な負荷に耐えられなかったのも頷けるのだが、それでも惜しかった。
リョウは何とも言えない情けない気分だったが、それを飲み込んで、代わりに苦笑を滲ませた。
「すみません。お見苦しいものを」
故意にではないとは言え、端たなくも貧相な体を露呈させてしまった。
「いや、気にするな。寧ろ、役得だ」
こちらを気遣ってか、軽く冗談を口にしたユルスナールにリョウも小さく笑った。

なんとか格好が付く様に前を合わせて。
だらりと左腕に掛かっていた上着を引っ張り上げ、ユルスナールに手伝ってもらいながら、着直した。袖に手を通そうとすると肩に痛みが走る。それをどうにかやり過ごす。
今日はツイていない。
だが、思わぬ場所で、再び、この瑠璃色の瞳が見られたことを考えれば、相殺されるだろうか。不思議とそんな気にもなっていた。

それからリョウは腹を括ると正直に事の次第を告げた。
剣が入った鞘ごと強かに打ち付けられたこと。こちらは咄嗟のことで、子供たちを庇うので精一杯であったから、まともに衝撃を受けてしまったこと。
相手は少し脅す程度であったのかもしれないが、元より、そういった殴打に全く慣れていない身体なので、思いの外、腫れてしまったようだとも付け足しておいた。
あの酔っ払いを擁護する積りはなかったが、向こうは少年を相手にしていると思ったのだ。ここの基準で考えれば、まさか、その人物がこんな貧弱な肉体だとは思わないだろう。
気が付けば、いつの間にか二人の子供たちは別室に移されて、他の兵士に家まで送り届けられたとのことだった。ブコバルと一悶着を起こしている間にイリヤがそつなく手配をしたらしい。あんな見苦しい所を見られなくて済んだのは、不幸中の幸いだった。

一通り話を聞き終えたユルスナールは、大きく溜息を吐いた。
「全く、とんだ無茶をする」
心配そうに口にされて、リョウとしては苦笑を返す他無かった。
「報告はこれでいいな？」
確認するように顔を上げたユルスナールに、
「ええ。十分ですよ」
書類を手にしていたウテナが尤もらしく頷いた。
「ブコバル、お前はあっちに灸を据えておけ」
「あいあい。言われなくとも分かってるさ」
「それから、お前たちはもういいぞ。持ち場に戻れ。向こうにいるカマールに、リョウは俺が預かると伝えてくれ」
ユルスナールの口から出て来た名前にリョウは驚いた。
「カマールさんが来てるんですか！」
「ああ。お前がここに連れてこられたのを噂で聞いてすっ飛んで来

たらしい」
　リョウは不意に立ちあがった。
　それをユルスナールが制する。
「リョウ。何処へ行く？」
「カマールさんに一言、声を掛けて置かないと。きっと心配を掛けたでしょうから」
「その格好でか？」
　真顔で言われて、リョウは改めて自分の格好を見下ろした。
　上着を着ていても下にあるシャツが破れて無様にひしゃげているのは分かった。所々肌が覗いている。
　カマールはああ見えて目敏い。すぐさまその訳を問いただされれば、上手く誤魔化せる気がしなかった。
　押し黙ったリョウにユルスナールは言葉を継いだ。
「カマールには俺からも言っておく」
「カマールさんを御存じなんですか？」
「ああ。馴染みの鍛冶屋だ」
「……そうでしたか」
　こうしてみると世間は意外な所で繋がっている。
　リョウが一人、妙な感慨に浸っていると、
「あの、一ついいですか？」
　壁際に立っていたウテナが、徐に手を上げた。
　やけに神妙な顔つきをしている。
　その隣でイリヤは、怪訝そうな顔をしていた。
　ユルスナールは、ウテナに視線だけで『なんだ』と問うた。
「第七の隊長さんですよね。うちの団長の同期っていう」
「ああ」
「隊長さんもそっちの人ですか？」
「この馬鹿！」
　イリヤがすかさずウテナの頭部を引っ叩く。
　バシンとやけに小気味よい音が響いた。

その言葉に壁際に立ち、腕を組んでいたブコバルがずっこけた。
「お前なぁ、いい加減、そこから離れろってば」
ブコバルが心底呆れた顔をした。
ブコバルに呆れられるというのも随分な話である。
「ええ～。折角、思わぬ掘り出し物が出たと思ったのに、第七の隊長が相手じゃ、ボクには分が悪いじゃないですか」
――――――だから、何故そうなるのだ。
リョウは、脱力するように隣に座るユルスナールの肩に凭れかかった。
あれだけ大騒ぎをしたのだが、どうやらウテナとイリヤには分からなかったようだ。そのことを喜んでいいのか悲しむべきなのか、最早、分からない。
「何の話だ？」
当然の如く訳が分からないと言う顔をして、ユルスナールがリョウの方を見下ろした。
リョウは、ちらりとブコバルの方を見た。
目が合ったブコバルは、からかう様な笑みを浮かべていた。
リョウは、ぼそぼそとウテナの趣味とその前の遣り取りを愚痴るように口にした。ここまで来れば半ば自棄である。
話を聞いたユルスナールは、大きく一つ息を吐き出して、額際に落ちかかる己が前髪を掻き上げた。
その表情には何とも複雑な色合いが滲んでいた。
「すみません」
「なんで、お前が謝る？」
「いや、だって。ワタシが勘違いされるのは仕方がないですけれど、その所為でルスランにまでご迷惑を掛けているみたいなので」
「そんな顔をするな」
情けなく眉根を下げたリョウに対し、ユルスナールはその手でリョウの顔に掛かった髪を梳くと小さく微笑んだ。

騒ぎが収束を見せ、不意に流れ込んだ穏やかで和やかな空気。
だが、ここで収まらないのがブコバルという男だ。
「ウテナ、言っとくが、リョウはお前の圏外だぜ」
「はい？」
「どっちかっつうとこっちの分野だ」
そう言って自分の胸を指で示す。
怪訝そうな顔をしているウテナにブコバルが尚も二言・三言囁けば、その目が徐々に驚きに見開かれた。
そうして、ブコバルは含みのある流し目をリョウにくれた。
「リョウ、お前、意外に良い身体してんだな」
リョウは呆気に取られた。
開いた掌を意味深に動かして言い放たれた言葉は、余りにもあからさまだった。
「ブコバル！」
リョウは思わず非難の声を上げた。
感の良いユルスナールは、ブコバルの仄めかしたことを瞬時に理解したようだった。
ギロリと鋭い目付きでブコバルを睨み付けると、ふざけたことを抜かした朋輩を座ったまま無言で蹴り上げた。
「おっと」
だが、それも予想の範囲内だったのか軽々と避けられてしまう。
「避けるな」
「いや、普通、避けるだろ」
ブコバルの減らず口にユルスナールは、一つ、息を吐き出した。
「さっさと行け」
「へいへい。邪魔者は消えますよ」
――――――じゃぁな。
手をひらりと一つ振って、とんだ食わせ者のブコバルの大きな背中は、狭い扉の向こうに消えた。

この空気をどうすればよいのだろうか。居た堪れなさにどっぷりと溜息を吐きたい気分だ。

だが、そんな要らぬ感傷に浸る間もリョウには残されてはいなかった。

それはそれで良かったのであろうが。

「リョウ。行くぞ」

「はい？」

音もなく立ちあがったユルスナールに促されたリョウは、頭上に沢山の疑問符を並べていた。

「まずは肩の手当てだ。それからシャツを変えなくてはな」

そう言って、ユルスナールはリョウの手を取ると、足早に取調室を後にした。

中に緑の腕章を付けた二人の兵士を残して。

狭い取調室に残されたウテナとイリヤの二人は、無言のまま顔を見交わせた。

二人の若い兵士たちの顔には、なんとも言えない複雑怪奇極まりない表情が浮かんでいた。

「女……か」

「ああ。……女だって」

ウテナの脳裏には、剥き出しになったほっそりとした背中と白い滑らかな肌が、まざまざと浮かんでいた。

服の下に隠れていたのは、少年にしても細い身体だった。

「ふふふ」

――――――いいかもしれない。

不意に低く漏れた朋輩の忍び笑いにイリヤは嫌そうに顔を顰めた。

ウテナの口元は、弧を描いていた。

この国の女たちにこれまで自分の食指は伸びなかった。興味惹かれる対象は、所謂成長途中の少年の細さで。

別に女が駄目な訳ではない。この国の女たちが持つふくよかな肉感がどうも駄目だった。

自分の美的感覚が少しズレていることは承知だ。だが、それは好みの問題であるから、別段、恥ずべきものだとはウテナは思ってはいなかった。競合する相手が少ないのは良いことだが、如何せん、その理想を体現している相手を見つけるのが難しかった。

だけれども、あの子は違った。自分好みの華奢な骨格。初めて目にする真っ直ぐな黒い髪。そしてそれに対となるような黒い瞳は、吸い込まれる程に深い光を湛えていた。

恍惚に似た笑みを浮かべたウテナの表情にイリヤは思い切り顔を引き攣らせた。

「ウテナ、変なこと考えんなよ？」

「なにがだい？」

この男とも長い付き合いになるが、こんな顔をしている時は、どうせ碌でもないことを考えているに違いなかった。

「見ただろ。お前の入り込む余地はねぇぜ？」

かの有名な第七師団の団長のあの剣幕を見れば、それは直ぐに気が付くことだった。

それに、いつもあの団長の傍にいるブコバルという兵士。あの男も軍部の中では、それなりに名が通っていた。そのやり方は、かなり独特だが、あれはあれで、ブコバルがリョウのことをそれなりに案じているのが見て取れた。

「大事にされてるみてぇじゃねぇか」

妙なちょっかいを掛けても、返り打ちに遭うのは目に見えている。この仲間のお陰でこっちまでとばっちりを受けるのは御免だった。

「ふふふ。なんか面白そうだよね」

だが、イリヤの折角の忠告も、すっかり自分の世界に入り込んでしまっているウテナには、右から左のようで。

相変わらず薄気味悪い笑みを浮かべるウテナの脇腹へ、イリヤはもどかしさを込めるように拳を入れた。
「痛いなぁ。なにするんだい？」
漸く、意識をこちらに戻したウテナに、
「おら。とっとと持ち場に戻るぞ。お前は報告があるだろうが」
イリヤはもう一度仲間を小突いて、小さな取り調べ室を後にするように顎をしゃくった。
「はいはい。分かったよ」
ウテナは一つ肩を竦めて見せると、先に踵を返した朋輩の後を追った。

小さな扉が左右にある回廊を二人の兵士が歩く。
この【ツェントル】入口付近の広間に出た所で、イリヤは立ち止まるとウテナを振り返った。
「お前、序でに、あっちの方も見ておけよ？」
あっちとは、ブコバルに灸を据えられているであろうお騒がせ男の事だ。
元々、ブコバルは第五師団の兵士ではない。今回は団長が頼んだようだが、最終的な報告を上げるには、こちらの人間が咬まなければならなかった。
「ええ～」
不満の声を上げたウテナをイリヤはギロリと睨んでから突っぱねた。
「当たり前だ。業務は完遂しろ」
イリヤは素っ気なく告げると持ち場に戻る為に仲間に背を向けた。
それで仕事の邪魔をされたイリヤの溜飲は下がったようだった。
一人、賑やかなざわめきが聞こえて来る広間に残されたウテナは、顔を嫌そうに顰めていたが、やがて諦めたのか、肩を竦めると息を一つ吐いた。
「はいはい。やればいいんでしょ。やれば」

そう言って、踵を返したウテナの表情は、だが、その台詞程、嫌そうではなかった。

医務室にて

戸口に現われた男の顔を見るなり、中にいた男は、おやという顔をした。温厚そうな面に意外なものを見たというように太い眉が跳ね上がる。

だが、それも一瞬のことで。

男はすぐさま立ちあがると、柔らかな笑みを浮かべて戸口に歩み寄った。

「珍しいじゃないか」

――――――こんなところに顔を出すなんて。

言外に含まれた台詞を耳に止めて、対する男は、口の端をほんの少しだけ上げた。

「元気そうだな」

懐かしそうに目を細めて、互いに軽い抱擁を交わす。

抱擁を交わし合う二人の男たちは共に背が高かった。

似たような体格の男達は、そうして暫し、旧交を温め合った。

身体を離すと、

「もう、そんな時期になるか」

この部屋の主は、穏やかな表情をしたまま、感慨深げに目を細めた。

男の濃い灰色の髪には所々白いものが混じり、その目尻には、時を刻んだ沢山の細かい皺が現れていた。

この部屋に顔を出した男が、この街を訪れるのは、年に一度、秋の終わりから冬の初めの頃と決まっていた。

その時に必ず、一度はこの兵舎【ツェントル】を訪れるのだが、この場所にこの男自らが出向くのは、この部屋の主が覚えている限り、初めてのことではないだろうか。

「どういう風の吹きまわしだ？」

その目にからかいの色を浮かべて、部屋の主は、前触れもなく訪ねて来た男に中に入るように促した。
そうして、男は背を向ける。
戸口から部屋の中へ足を向けたその主の歩みは不均等で、左足をやや引きずっていた。
「足の具合はどうだ？」
「ああ。良くもなく、悪くもなく。大体こんなもんだろ」
そう言って振り返ったこの部屋の主は、その時になって初めて、訪ねて来た男が一人ではないことに気が付いた。
濃紺の外套の脇から、小さな顔が覗いていた。
目が合うと静かに目礼をされる。
頭は、ちょうど訪ねて来た男の肩の辺り。この男もそれを迎えた男も大概上背のある方だが、一般的なこの国の男たちの基準から見ても、外套に半ば隠れるようにして立つその人物は小柄だった。
頭髪の色は、この辺りでは見られない黒だった。男の外套の色である濃紺よりも濃い髪の色を目の当たりにしたのは初めてのことだ。
癖の無い細い髪は、無造作に束ねられていた。
「連れか？」
「ああ。軟膏を貰いに来た」
不意に切り出された言葉に部屋の主の眉が訝しげに上がった。

この場所は、【プラミィーシュレ】を拠点とする【スタルゴラド第五師団】の兵士たちの詰め所、通称【ツェントル】で。その中でも、この場所は、主に怪我負った兵士たちの面倒を看たり、具合の悪くなった者を診る医務室だった。
ここの部屋の主は、この医務室を任されている軍医のステパンである。
ステパンは経験豊富な軍医だった。医者を志し、軍籍に身を置いてから、もう随分と経つ。
この地に赴任してからは、既に七年の歳月が経っていた。

ここは医務室であるから、普通であれば、ここを訪れた兵士が軟膏を求めても別段、不思議ではない。
だが、この男の場合は違った。
「打撲や打ち身に効く奴があっただろう？」
「ああ。あるにはあるが……。お前が…使うのか？」
ステパンが知る限り、この男は、打撲や単なる打ち身位で軟膏を塗るような輩ではなかった。
大体にして丈夫な男だ。それに腕も立つ。この場所で普通に街を歩いていて、万が一、喧嘩を吹っ掛けられたとしても、怪我を負う様なヘマをするとは到底、思えなった。場合によっては、却って喧嘩を吹っ掛けた相手の方を心配する位だろう。
先程、挨拶の抱擁を交わした時も怪我をしているようには見えなかった。
ステパンが、余程、妙な顔をしていた所為だろうか。
「いや。俺ではない」
その男は、小さく微笑みのようなものを口の端に浮かべると、身体をずらした。

「リョウ」
ユルスナールに促されるようにして、リョウは外套の脇からそっと前に出た。
「こんにちは」
ステパンは目の前に現れた人物の格好を見て、静かにユルスナールへ視線を投げた。
ユルスナールは、無言のまま、小さく頷いた。
それで、ステパンは軟膏の使い道に見当が付いたようだった。
「軍医の方ですか？」
「ああ」
黒い髪が縁取る横顔が、物珍しそうに小さな引き出しや瓶が並ぶ棚を見遣った後、小さく出された問いにステパンは言葉少なに返し

た。
「診てもらえるか」
「ああ」
背をそっと大きな手で押されて、リョウは戸惑うようにユルスナールを見上げた。
「診てもらえ。念の為だ。腕は確かだ」
案ずることはないというように一つ、小さく首を縦に振ったユルスナールに、リョウも素直に頷いた。
「分かりました」
ユルスナールが信頼を置いている人物ならば、問題ないだろう。
そう思ったリョウは、簡単に私見的な怪我の状態とそれを負った経緯を話した。

「こっちに座ってもらえるか」
小さな木の寝台の上に腰を下ろすように言われて、それに従う。
「では、該当箇所を診せてくれ」
医者の言葉にリョウは大人しく上着を脱いだ。
そして、シャツ一枚になると背を向けたまま、ちらりと後方を振り返った。
「あの、……その、お見苦しいものをお見せするかと思いますが……」
そう言うと、やや躊躇いを見せた後、辛うじて形態を保持していたシャツを脱ぎ去った。
再び、人前で肌を晒すことになったが、相手が医者だと思えば、余り気にしないでいられるのは不思議なものだ。
だが、一応、苦し紛れに脱いだシャツで前を隠した。自分の為というよりも相手の為である。それに、それ位の羞恥心は持ち合わせていた。
躊躇いがちに晒された背中を見て、軍医ステパンの動きが止まる。

ステパンは、暫し、言葉を失った。その顔には、隠しきれない驚きが含まれていた。

これまで大きな戦争から小さな小競り合いまで様々な戦闘を経験し、軍医として積んだ長い経験から、大体のことでは動じるようなことは無かったが、服の下から現れた肉体は、違う意味で、ステパンの予想を裏切るものだった。

確認するように無言のまま、ステパンがユルスナールの方を見れば、不自然に落ちた沈黙に前から静かな声がした。

「すみません。ワタシは大丈夫ですので、どうかお気になさらないで下さい。診察をお願いします」

ひっそりとした自嘲めいた笑いに、浮き出た肩甲骨が揺れた。

「あ、いや、すまない」

ステパンは表情を改めると顔付きを真面目なものに変えた。的確に冷静な判断を下す経験豊富な軍医としての顔である。

「こいつは、可哀想に」

ステパンの手が、腫れあがった部分を丁寧に改めた。

右の肩から肘、そして背中、肋骨。

大きなごつごつとした節くれ立った男の手の下にある身体は、驚くほど華奢だった。

滑らかな肌理の細かい肌。吸いつくようなしっとりとした手触り。

ステパンは無意識に小さく唾を飲み込んだ。

純粋に骨格だけを見るならば、成長過程の少年・少女のようなものだ。

しかしながら、首から腰に掛けて、真っ直ぐに伸びた背骨の両側には、しなやかな曲線を描く括れがあった。ステパンが知るこの国の女たちに比べれば、驚く程に細いが、それは十分成熟した大人の女の身体だった。

服を着ていた時は、少年のように見えたのに。

だが、どうだ。洗いざらしの何処にでもあるような男物の服の下には、その見かけを裏切るものが、潜んでいた。

「骨までは行っていないとは思うが……」
いつになく気遣わしげな声音でユルスナールが言葉を紡いだ。
ステパンはそれを意外な思いでちらりと見遣る。
どんな経緯があったにせよ。この男が態々、この場所を選んで連れて来たことは、強ち悪い選択ではなかったであろうと考えた。この男も大概にして秘密が多いが、その一端とも言うべきものを垣間見られたことにステパンの気分は、知らず高揚していた。
「ああ。それは大丈夫だ」
真剣な面持ちで怪我の具合を改めていたステパンは、一通り診察を終えると、顔を上げ、穏やかに微笑んだ。
「そうか」
ユルスナールが安堵の息を吐く。
それから、ステパンは徐に立ち上がると、足を引きずるようにして壁際に行き、小さな瓶が所狭しと並ぶ棚の一角を漁った。
「ああ。これだ」
小さな茶色の瓶を手にすると、それをユルスナールに手渡した。
「良く効く消炎剤だ。打ち身や打撲といった内出血にはもってこいのものだ。朝と夜の二回、腫れがある箇所全体に塗るといい。匂いが少しきついが効き目は抜群だ」
内心、ほくそ笑みながら、ステパンは説明を継いだ。
「塗った直後は、暫く安静にすること。人によって効き方に差があるからな。場合によっては身体がだるくなったり、火照ったりする」
「……詰まり、それは、皮膚から吸収する形で、【人】本来の治癒力に働きかけるものなのですね？」
意外な所から聞こえた声に、ステパンは軽く目を瞠った。
「ああ。そうだ。キミは薬師の知識があるのか？」
リョウの黒い頭部が小さく揺れた。
「ほんの少し。……齧った程度ですが」
「ならば話は早い」
そう言うとステパンはリョウに向き直った。

「副作用はないとは思うが、万が一という場合がある。今日一日は気を付けて様子を見ることだ。キミは、見た所、この辺りの人間ではないようだから、体質的にどうなるかは分からないからな。もし、気分が悪くなったり、おかしなところがあれば、直ぐに知らせてくれ。いいな？」

「はい」

それから、少し考えた後、リョウはそっとステパンの方を窺った。

「あの、この薬の主成分を教えていただいてもよろしいですか？」

だが、ステパンは小さく笑って首を横に振った。

「ハハ。そいつは、悪いが無理だ。これは独自の製法なんでな」

「そうですか」

「じゃ、ルスラン、ほれ」

そう言われて、怪訝そうな顔をしたユルスナールに、ステパンは意味深な含み笑いをしながら顎をしゃくって見せた。

「塗ってやれ。自分でやるにはちと体勢がきついだろ」

ユルスナールは、手の中にある小さな薬の入った瓶を見た。そして、次にステパンの方を見る。

「優秀な軍医の仕事を邪魔する積りはないが」

その言い草にステパンは可笑しそうに拳を口元へ当てた。

本人は至って涼しい顔をしている積りなのだろうが、先程から、凄い目付きでステパンの手元（というよりもステパンの手が辿る患者の肌）を見ているのだ。そのことに気が付かない程、ステパンは兵士として落ちぶれた訳でもなかった。

軍医は、旧知の男の意外な一面を見て、からかう様な笑みを浮かべる。

「俺よりもお前がやった方が良いだろう」

本当は、『お前の方がやりたそうだ』と言いたかったのだが、それを言ったら、後でどんな仕返しが待っているか知れなかった。

渋々と瓶の蓋を開けたユルスナールに、

「擦り込むように、そっとだぞ」

ステパンは軍医らしく尤もらしいことを口にした。
だが、その言葉を告げる表情を見れば、あからさまに面白がっていることが見て取れる。
ユルスナールは無表情の中にも、見る者が見れば分かる苦虫を噛み潰したような顔をした。
「あの……ルスラン？　自分でやりますよ？」
軍医とユルスナールの間に流れた微妙な空気に、これ以上、ユルスナールを煩わせる訳にはいかないと感じたリョウは、恐る恐る申し出たのだが、
「いや。任せておけ。第一、手が届かないだろ」
事も無げに却下されてしまった。
ユルスナールは、瓶の中身を少し掌に空けた。とろりとした液体が大きな掌に溜まる。それを慣れた手付きで己が両手に揉みこんだ。そうすることで冷たい液体が温かくなるのだ。それから、リョウの座る木の寝台に自分も腰を下ろすと、そっとその赤みを帯びた部分へ掌を宛て、薬を塗り始めた。
「じゃぁ、俺はちょっとこいつを届けに行ってくる」
ユルスナールが薬を塗り始めたのを確認してから、ステパンは机にあった書類を持つと戸口に手を掛けた。
そして、小さく湧き出て来る可笑しさを噛みしめるように微笑んでから、邪魔者は退散とばかりに己が牙城を後にしたのだった。

密やかな昼下がり

ユルスナールの大きな手が肩を這って行った。油分（オイル）だろうか、香油に似た、ある種、独特な匂いが辺りに漂い始めていた。

赤く腫れあがっている部分をその周辺から丹念に薬を塗り込んで行く。強過ぎず、弱過ぎず、絶妙な力加減だ。

剣ダコのある固くて長い指は、少しかさついていた。

「どうやら、気を……使わせてしまったみたいですね」

軍医が出ていった戸口の方を一瞥して、リョウは少し苦笑気味に言った。

軍医は左足を引きずっていた。足が悪いだろうことは直ぐに見て取れた。

ここは医務室だ。人の良さそうな温和な気を身に纏った男の仕事場だった。そこを半ば、追い出すような形になってしまったことをリョウは申し訳なく思った。

「気にするな」

手を動かしながら、ユルスナールが微笑んだのが震える空気から伝わってきた。

「あの男の足は、今に始まったことではない。あれで器用に歩く。心配をすれば、却って機嫌を損ねることになる」

その言葉にリョウは同意するように小さく笑った。

確かにそうだ。怪我をしている者は、その現実を既に受け入れているのだ。敢えて、他人が指摘したり、その外見だけで案じたりするのは、却って失礼に値する。その理由を知らない部外者が口に出来ることではなかった。

空気を変えるように息を吸い込んで。

「手慣れていますね」

自分の背中で感じる無駄の無い手の動きに、リョウは前を向いたまま、感心したように口にした。
「そうか？」
「ええ」
「……まぁ、小さな傷は日常茶飯事だからな」
その言葉にリョウは北の砦で垣間見た兵士たちの鍛錬の模様を思い出していた。
一対一の剣を使った立ち会いから一対複数の立ち会い。武器を使わずに素手で相手を伸す為の対処。
若い兵士たちは来るべき実戦に備え、己が肉体を鍛えるのに余念がなかった。
「ルスランも怪我の手当てをするんですか？」
何気なくした質問に、
「どういう意味だ？」
ユルスナールの手が、止まった。
ちらりと後ろを振り返れば、意味が分からないという顔をしていた。
リョウは再び前を向くと、小さく喉を震わせた。
その余韻で剥き出しの背中が微かに震える。
「そのままの意味ですよ。隊長の訓練は厳しいと皆話していましたから」
ユルスナールが訓練で怪我を負うことは余り想像が付かなかったが、何らかの理由で負傷した兵士の面倒を見ることもあるだろう。
自分の肩を這う手慣れた手付きをそう思ったのだが。
「打ち身や打撲は怪我の内に入らない」
淡々と返された言葉に、リョウは改めて、自分が身を置くこの世界のことを思った。
兵士たちは、皆、腰に剣を帯びている。それが抜かれる時は、どんな時なのか。
そこまで考えて、リョウは緩く頭（かぶり）を振った。

そして、別のことを口にしていた。
「あの軍医の先生も言っていましたけど、ちょっと変わった匂いがしますね」
茶色の小さな瓶の中身は、なんとも形容しがたい香りを発していた。
お世辞にも良い匂いだとは言えない。だが、顔を背けたくなる程、嫌な匂いという訳でもなかった。
薬草とそれを馴染ませる油の少し独特な匂い。リョウにとってみれば、馴染みのある香りの類でもあった。
「これは、大分ましな方だな」
職業柄、様々な薬草や薬の匂いを知っているのか、ユルスナールは小さく笑う。
「まぁ、その方が、如何にも効きそうな気がしますが」
薬を塗り込まれた部分が、ひんやりとしてきた。
ユルスナールの掌の上で人肌に温められた薬は、塗った直後は温かかった。それが、じわじわと浸透して、そのまま熱を持つだろうかという予想に反して、冷たくなってきた。まるで冷湿布のようだ。それで火照った患部の熱を奪うのだろう。
リョウは、冷たさに思わず背中を震わせた。
「寒いか？」
「少し。薬を塗った所が冷たくなってきたので」
だが、耐えられないことではなかった。
心配ないと小さく微笑む。
「リョウ」
名前を呼ばれて、そっと肩越しに振り返れば、思いの外、近くにユルスナールの硬質な顔があった。
その距離に驚く間もなく、がっしりとした逞しい腕が身体に回される。そして、背を向けて座っていたはずの身体をくるりと反転させられた。
気が付けば、真正面から抱きこまれるような体勢になっていた。

ユルスナールの外套の中にすっぽりと埋もれる形だ。
「……ルスラン？」
突然のことに、リョウは目を白黒させて、ユルスナールの顔をそっと見上げた。
「これなら幾らかましだろう？」
外套の内側で、剥き出しの背中をユルスナールの大きな手が撫で上げた。もう片方の手は、二の腕の部分に出来た痣に薬を塗り込んでいた。
リョウは、不意に襲った擽ったさに小さく身を震わせた。
「ルスラン」
何やら意味ありげに動く指に咎めるような声を上げれば、ユルスナールは小さく口角を上げて、鼻で笑った。
そのどこか尊大な態度もやけに堂に入っていて。
リョウは観念したように息を吐くとぐったりと身体を凭せ掛けた。
そして、ゆっくりと目を閉じる。
ここに至るまでに使った無駄な労力を思い返せば、これ以上の抵抗をする体力は残ってはいなかった。
しっかりと抱きこまれるようにして衣越しに身体が合わさる。しなやかで強靭な肉体を覆うシャツを通して、相手の鼓動が静かな時を刻んでいた。
薬の為か、肌を晒している為か、冷えてきた自分の身体に相手の熱が緩く不規則に伝導する。
相変わらず冷え症で熱伝導の悪い肉体。
鼻先を掠める薬の匂いには、意図せずして別の香りが混ざり始めていた。
覚えのある匂い。顔を埋めた場所から密かに立ち上って来るものだ。
それを懐かしく思ってしまったことを少し可笑しく思った。
「それにしても。なんであんなことになったんだ？」

――――――大方、ブコバルが悪いんだろうが。
そう言ってユルスナールの指が、無残に破れたシャツの端を摘み上げていた。
取調室での出来事を蒸し返されて、リョウは、外套に包まれたまま、何と答えたものかと天井を仰ぎ見た。
途中、腕をもう少し上げろと言われて、ユルスナールが薬を塗りやすいように調節する。
「ワタシが素直にこの怪我を認めなかったのが悪かったのでしょうけれど……」
それにしても、ブコバルのからかいは性質が悪過ぎた。
「強引に傷を確かめようとしたので、こちらも躍起になってしまって……」
簡単にあの場の経緯を説明すれば、ユルスナールは緩く息を吐き出した。
付き合いの長い朋輩の事だ。恐らく、ブコバルの行動が手に取るように分かるのだろう。
「……それで、あの騒ぎか」
ユルスナールが取調室の並ぶ廊下に辿りついた時には、廊下の向こうにまで騒がしい声が聞こえていた。
それは、この場所でありがちな男たちの低い声や怒声ではなく、幾分高めの音域で。
聞き覚えのある声もどこか上ずっていた。
嫌な予感に中を覗いて見れば、案の定、石壁に身体を抑えられているリョウとニヤニヤとどこぞの悪漢さながらに凶悪な顔をしているブコバルがいた。
そして、それを遠巻きに眺める二人の兵士たち。
ふとリョウの破れたシャツとそこから覗いた肌が目に入った。
脚に括りつけたベルトから思わず短剣を投げつけていたのは、半ば無意識のことだった。
その時のことを思い出してか、ユルスナールが小さく舌打ちをし

た。
「あの野郎、避けやがって」
剣呑な囁きにリョウはぎょっとして顔を上げた。
「まぁ、ブコバルも悪気があった訳ではないでしょうから。シャツの替えも戻ればありますし」
ブコバルの場合、本人はちょっとからかう積り程度だったのだろうが、如何せん、やること成すことが一々豪快というか、やや常人の考えることとは違うのだ。シャツを破られたのは業腹だが、シャツだけで済んだと考えれば、納得出来なくもなかった。
リョウはこの街では、リューバの息子である鍛冶屋のカマールのところに厄介になっていた。
荷物の中には、着替え用にシャツをもう一枚入れていた。
「シャツは弁償する」
「いいですよ。そんなに大げさにしなくても」
「いや。それでは気が済まない。アイツには後で飯でも奢らせるか」
「……そんなに食べれませんよ？」
リョウは自分でも食が細い方だと思っている。沢山食べて、会計時に相手を困らせようという計画は自分には到底、出来そうもない。
そのことを告げれば、
「ハハ。代わりに良い酒を頼めばいい」
ユルスナールは可笑しそうに笑った。

薬を塗り終えたユルスナールは、徐に立ち上がると手に付いた油分をタオルで拭ってから、壁際に並ぶ棚の方へ腕を伸ばした。それから、迷わずに引き出しの中から白い布の塊と油紙のようなものを取り出した。
そして、今度は薬を塗った部分に油紙を当てると、器用に包帯を巻き始めた。
「よし。これでいいだろう」
「ありがとうございます」

包帯の上からなんとか形を保持したシャツを着て、再び上着を重ねた。
服の下でも、薬を塗った部分がジンジンと疼いているのが分かった。
今日一日は、軍医の言葉通り大人しくしていた方が良さそうだ。
「ルスランにはご迷惑を掛けてばかりですね」
――――どうお返しすれば良いやら。
そう口にすれば、
「気にするな」
ユルスナールの大きな手が、ほつれた髪を梳いた。
リョウは、無造作に束ねていた髪紐を解いた。
今まで、気に留める余裕がなかったが、ガラス越しに反射して見えた己が頭部は、随分とぼさぼさになっていた。乱れた髪を誤魔化すように手で梳けば、黒い髪がさらさらと揺れた。再び、手早く束ねて、口に挟んでいた紐で結い直す。
ユルスナールは壁際に寄りかかって、その様子を静かに眺めていた。
「……だが、まぁ、……そうだな」
少し考える風に手を顎に当てると、意味あり気に微笑んだ。
そして、壁から身体を離すと、リョウの傍に歩み寄った。
「ならば、褒美をもらえるか」
「褒美……ですか？」
その意味を測りかねて、リョウは暫し、目を瞬かせた。
「ああ」
伸びて来た手が頬に掛かる後れ毛を耳の脇に掛けた。
香油のお陰か、かさつきの無くなった指が頬に触れた。
しっとりとした温かな感触。そのまま、頬をなぞった指に顎を掬われると親指で下唇をなぞられた。
仄めかされた符牒。分からない振りをすることは出来なかった。
「コレが、褒美になるんですか？」

ゆっくりと近付いて来た硬質な男の面にリョウは小さく囁いた。
「ああ」
反射する日の光が瑠璃色の光彩に踊っていた。その瞳が、何やら愉快そうに細められていた。
深い青を秘めた色に、見慣れた自分の顔が映り込む。
吸い込まれそうだとリョウは思った。
「あなた位ですよ」
――――――そんなことを口にするのは。
「それは光栄だな」
苦し紛れに吐き出される筈の小さな囁きは、だが、音を紡ぐことなく、下りて来たもう一つの囁きに飲み込まれた。
暫し、秘めやかな静けさに満ちた室内で、窓から差し込む傾きかけた日差しに、床に長く伸びた二つの影が、重なって見えた。

薬の効きしろ

ツェントルの医務室を後にしてから、リョウは差し出された濃紺の外套に包まれてユルスナールが滞在しているという宿屋の一室に連れて来られていた。

リョウは大きな寝台の中にいた。破れたシャツは脱ぎ捨てて、代わりにユルスナールから手渡されたシャツに袖を通した。

洗いざらしの柔らかな生地にたっぷりとした身ごろ。袖も丈も大分余る。仄かに馴染みある匂いが鼻先を掠めた。もしかしなくとも、それはユルスナールのものだった。

そして、上着に続いて同じようにズボンも脱いで。素肌にシャツを一枚、寝間着代わりにした。

ここに連れて来られる迄の間、塗った薬の作用の所為か、リョウは急激な倦怠感に襲われていた。

肌から浸透した薬の成分が効き始めているのか、身体が火照り出す。血液がドクドクと体内を、音を立てて巡り始める。身体全体の細胞が治癒に向けて活性化されてゆくのが感じ取れた。

時折、襲ってくる眩暈に似た波をぎゅっと目を閉じることでやり過ごす。

だが、次第にくらくらとし始めて、段々と意識を保つのが難しくなってきた。

壁際に手を着いて、力を無くしたリョウをユルスナールはその腕に抱えて歩いた。

途中、【ツェントル】の廊下で運良く軍医のステパンに会い、ユルスナールはリョウの状態を診せた。

ぐったりと目を閉じて荒い呼吸を始めたリョウを見たステパンは、

一先ず、安静に寝かせて様子を見るようにとユルスナールに告げた。
薬が思いの外、強く効いているようだった。
薬草の成分自体は、この国に暮らす人間ならば割と馴染みのあるものなのだが、異国風の顔立ちを持つリョウには、もしかすると免疫が無かったのかも知れないとステパンは判断した。
ただ、用いた薬草は毒性のあるものでも、人体に害を及ぼすものでもないので、薬草が一通り身体の中に入って血液を通して全体に行き渡り、有効成分がしっかりとその役目を果たすまでは我慢する他ないだろうと結論を下した。
傍目には苦し気に見えるが、それは裏を返せば、用いた薬が良い方向に効いているということでもあるので心配することは無いだろう。
そう診立てると、ステパンは不安の欠片を眦に滲ませたユルスナールの背を、穏やかな微笑みを湛えながら軽く叩いて見せたのだった。

ユルスナールは、リョウを宿屋に連れて帰ると滞在している部屋の寝台（ベッド）にそっと横たえた。
リョウの意識はまだあった。吐き出される息は次第に熱を帯び、時折、苦しそうに眉が下がる。
服のままという訳にはいかないので、簡単に着替えをさせてから、水差しに入った水を飲ませる。
そして、額際に滲み出る汗をタオルで拭った。
「少し、眠れ」
枕元で長く吐き出された息に、ユルスナールの大きな手が、その額に掛かる髪を後ろへ撫でつけた。
「スミマ…セン……ありが…とう……ございます」
閉じていた目を薄らと開けて、リョウはそれに応えるように小さく微笑んでから、再び眠りへと落ちていった。

その夜、リョウは珍しく夢を見た。
取りとめのない記憶の断片なのか、それとも新しく作り変えられた疑似記憶なのかは分からない。脈絡のなさもそれを見ている本人には関係がないだろう。
――――りょう。いい加減、偶には顔を出しなさい。仕事が忙しいのは分かるけれど。お父さんも寂しがっているわ。
電話の受話器越しに懐かしい声が響いていた。
顔は見えないけれども、つれない娘に対して呆れた顔をしているだろうことは直ぐに分かった。
――――そうだね。
――――年末はどうするの？
――――今のところは……こっちかな。ギリギリまで仕事があるし。今年はお休みも少ないから。
――――もう。折角のお休みなのに。また無理してるんじゃないの？　ちゃんと休みなさいよ。あんまり身体が強くないんだから。
大きな病気をしたのは専ら子供の頃のころで。
大人になってからは、普通に恙無く生活をしている。風邪をひくのも人並だ。熱を出して寝込んだりすることも滅多にない。
だが、いつまでも昔の記憶を引きずっている母親に対しては、内心、苦笑を洩らすだけに留めた。
それから、握っていた筈の受話器が滲むように消えた。

場面が変わり、リョウは電車に乗り込んでいた。
プラットホームには懐かしい顔が並んでいた。父、母、祖母。友人たち。
馴染み深い良く知る面々であるのにそれらを【懐かしい】と感じていることが不思議で仕方がなかった。
ガラス越しに声を掛けようとした。
だが、声を出そうとして、喉から出る筈の音が失われていること

に気が付く。
代わりに手を振る。ここにいることを知らしめるように。
だが、音もなく静かに発車した電車は、ゆっくりとプラットホームを離れて滑りだした。
リョウはもどかしさに、ガラスに拳を押しつけていた。
――――――待って。
見知った姿形は、やがて背中を向ける。
朗らかに談笑をしながら。
車内にいる自分は、認識されていなかった。
――――――ここにいるの。ねぇ。気付いて。
自分とプラットホームを隔てるのは薄い一枚のガラスのみ。手を伸ばせば届きそうな所に彼らは居るのに、誰もこちらには気が付かない。透明な筈のガラスが、突如としてこちらとあちらを隔てる強固な境界線に変わる。
動きだした電車と共に遠ざかる景色。それは、【ここ】と【向こう】で流れる時が違うことを示しているかのようだった。
リョウは、不意に恐ろしいまでの絶望感に捕らわれた。足下が掬われそうだ。
心が軋みを立てて萎んでゆく。

「……ョウ……リョウ」
外から揺さぶられるようにして、眺めていた筈の景色がブレを生じ始める。
リョウは、ゆっくりと目を開いた。
眦に溜まっていた涙が、頬を伝った。
ぼんやりとした薄闇の中、揺らぐ視界に青白い何かが映り込む。
小さな発光石の灯りを反射して纏う銀色の何かが。
「リョウ」
不意に意識に飛び込んできた声に、リョウは目を瞬かせた。

そして、やがてぼやけた視点が定まり、視界一杯に映り込んだ鋭利で硬質な線（ライン）が男の顔を描き出してゆく。その変化を見て、リョウは小さく息を吐いた。

――――ルスラン。

「大丈夫か？」

ごつごつとした親指が、そっとリョウの眦を拭った。

濡れた感触に、リョウは自分が涙を流していたことを知った。

「大分、うなされていた」

その指摘通り、額際には髪が張り付いていた。汗でびっしょりと濡れている。水気を含んだシャツがやけに冷たく感じられた。

ユルスナールは身体を起こすと、水差しからコップに水を注ぎ、リョウに差し出した。リョウは同じように身体を起こしてそれを受け取ろうとしたが、身体に力が入らなかった。薬の所為か、体力が思いの外、治癒の方に消耗されてしまったようだった。

ユルスナールはリョウの背中を支えて起き上らせると、その手にコップを握らせた。大きな手が震えそうになる指を上から支える。水を口に含んで、コップの中身を飲み干した。やけに喉が渇いていた。

水を飲み終えると一息ついたのか、リョウは再び、ゆっくりと寝台（ベッド）に沈み込んだ。

大きく息を吐く。

まだ、身体が夢の余韻を引きずっている感じで、ふわふわとして覚束なかった。

「待っていろ」

ユルスナールは、小さく声を掛けると寝台を後にした。

暫くして、戻ってきたその手にはタオルと着替えの為のシャツが収まっていた。

「汗をかいただろ」

温かい濡れたタオルは、冷え始めた身体に気持ちが良かった。

思わず、ほぅと息を吐けば、ユルスナールが小さく笑ったのが、震えた空気から知れた。

ユルスナールの大きな手が、器用に動き、壊れ物を扱うかのような優しい手付きで身体の汗を拭ってゆく。温かな大きな手だ。そうして、汗に濡れたシャツを取り替えた。

リョウは、されるがままに身体を預けていた。

まだ、頭がちゃんと覚醒していなかったが、この男ならば、この身を任せてもよい――どこかでそんなことを思っている自分がいた。半ば夢現。覚醒途中の気だるさが靄のように思考に纏わりついている。

明かりを落とされた室内もその非日常的な空気を助長していた。

「……ありがとう……ございます」

さらさらと乾いたシャツに包まれて、気持ちの良さにリョウは長い息を吐き出した。

――――世話を焼かれている。

その自覚はあった。

恥ずかしさと居たたまれなさとむず痒さと温かさとが綯い交ぜになったような複雑な気分だった。

ユルスナールが思いの外、面倒見の良いことを初めて知った。また、こんなことをさせてしまっていることを申し訳なく思った。

ユルスナールは優しい。ただ、行き掛かり上、放って置けなかったのかもしれない。

そして、また、この男の優しさに助けられている。その気持ちは強かった。北の砦での一件も含めれば、感謝してもしきれないだろう程に。

「すみません」

――――こんなことまでさせてしまって。

再び寝台の隣に横になったユルスナールをリョウはそっと見上げた。

枕元にある小さな明かりに照らされて、その顔の輪郭が顕わにな

った。
大きな手が頬を撫でる。宥めるような優しい手付きだ。意識とは別の所で、それを心地よいと感じている自分をどうすることもできない。
「気にするな」
鋭利な眼差しが緩み、小さく空気が震えた。
低い囁きは、再び、眠りの縁へと誘(いざな)うようだ。
「具合はどうだ？　痛みはまだあるか？」
そう訊かれて、リョウはそっと肩の辺りへ手を伸ばした。
包帯と油紙の感触がシャツの下にある。
腫れは引いているようだった。熱もすっかり無くなっている。
恐る恐る肩を動かしてみる。まだ少し痛みはあったが、昼間程ではなかった。
「痛みは随分と良くなりました。気分は…大丈夫です」
「顔がまだ青いぞ」
顔色を指摘されて、
「夢見が悪かったので……」
リョウは苦笑気味に微笑むと、そっと天井を仰ぎ見た。
そう口にしてみたものの、どんな夢を見ていたかは、既に曖昧だった。
夢から現へと引き戻された直前、酷く哀しくて仕方がなかったのは覚えている。身を斬られるような切なさが息づくように体内に燻っていた。
差し込む月明かりに、闇が濃淡を描きながら踊っていた。大きく切りとられた窓に掛かるカーテン越しには、木々の梢が揺れている。
それが、天井に束の間の影絵を作り出していた。
「風が……出て来た…ようですね」
口から洩れたのは、実に他愛のない呟きだった。
直ぐ脇で、寝台(ベッド)が、ぎしりと音を立てて揺れた。

それなりに広さのある部屋の真ん中に鎮座する大きな寝台。
だが、この国の人間が二人も並べば、広く見えた筈のその場所も幾分窮屈そうではある。
沈み込む寝台（ベッド）は、少し硬かった。
しかしながら、この場所は宿屋としては良い部類に入るのだろう。
間取りも余裕があるし、部屋の内装も華美ではないが、落ち着きのあるものだ。
そんなことをぼんやりと思っていると、リョウの上に影が差した。
視線を辿れば、直ぐ目の前に、ユルスナールの剥き出しの肌が迫っていた。引き締まった身体には、古い傷跡が幾つか走っている。
それに無意識に手を伸ばそうとして。
その時になって初めて、リョウは自分が身を置く状況に思い至ったのだった。
今更ながらではある。
冷たいきらいのある造形が、ゆっくりと近づいて来た。
「……ルスラン？」
「夢見が悪かったのだろう？　悪い夢を見ないで済むようにしてやろうか？」
ひっそりと囁かれた声音は、どこか愉快そうな響きを持っていた。
「おまじない……か、なにか…ですか？」
少しずつ移動をする他者の筋肉質な重みに、だが、リョウは静かに返していた。
「そうだな。まじない……と言えなくもない」
硬質で怜悧な見た目に反する熱さを含んだ吐息が耳元を擽った。
声音にはからかいのような色が潜んでいた。
相手が何を仄めかしているのかについては、見当が付かなくもなかった。この体勢では、ある意味、あからさまではあるだろう。
だが、まぁ、それすらも冗談の範疇で。相手が、何処まで本気なのかは読み取れない。
「そこまで……面倒を見てもらう訳にはいかないですよ」

これ以上、この男の優しさに甘える訳にはいかないだろう。
態と空気を変えるようにおどけて見せる。
「……面倒？」
言葉尻を捕らえて、ユルスナールが顔を上げた。
「ええ。ルスラン。貴方は……優しすぎる。ここまでしてもらって。これ以上は……」
――――――申し訳が無い。
それは正直な感想だった。
この時、初めて、リョウはこの男を慕っているであろうこの国の女たちのことを思い浮かべた。
この国の婚姻関係に関する常識はまだ自分の中では部分的で、判然とはしなかったが、ユルスナール程の人物であれば、既に決まった相手が居てもおかしくは無いだろうということに不意に思い至ったのだった。
軍部でも一師団を任される程の立場だ。恐らく、その出自も良い所の出であるのだろうことは想像に難くない。そうだとすれば、許嫁の一人ぐらい居そうなものだった。
今まで、そんなことを考えた事は無かったが、不意に冷や水を浴びせられたように頭の芯が冷静になっていた。
「迷惑か？」
「とんでもない。寧ろ、その逆です」
「……ならば……いいだろう？」
行き場を無くした熱が、闇の中で熾き火のように瑠璃色の瞳に揺らいでいた。
どうして、そんな風にこちらを見ているのだろう。
場違いな程の熱を感じ、リョウは無意識に身を震わせた。
強い眼差しに潜む熱さが、こちらにも伝染してしまいそうだった。
このまま、見つめていては、きっと囚われてしまう。
ここで捕らわれる訳にはいかなかった。
「リョウ」

「ルスラン」
リョウは、その熱を遮断するように目を閉じると、戸惑うように首を横に振った。
「リョウ。分かっているのか？」
静けさの中、耳に注がれるのは落ち着いた囁きだ。
閉じたままの目元を擽るように辿る指先に、リョウはむずがる様にしてから、薄らと目を開けた。
「俺だって男だ。好みの女が直ぐ傍に居て、只で済むとは思えないだろう？」
――――――何故、そんなことを訊くのだろう。
真面目な顔つきで口にされたその言葉に、リョウは不意に可笑しそうに喉の奥を震わせ始めた。
「何がおかしい？」
笑われるとは思ってもみなかったのか、ユルスナールが不服そうに目を眇めた。
「だって……」
圧し掛かるような重みに息が詰まりそうになる。
至近距離には、未だ熱を孕んだ濃紺の煌めきが揺れていた。
「欲求不満なんですか？」
――――――自分相手にそんな気になるなんて。
思い返してみても、この男に関しては分からないことばかりだった。返ってくるのは、いつも斜め上からの答えで。調子を狂わされる。
「お前は無防備過ぎる」
小刻みに震える身体の下、どこか呆れたような溜息が下りて来た。
――――――それは相手が貴方だからだ。
喉まで出掛かった言葉は、音にはならなかった。
大体にして、ユルスナールならば、その手の相手など、よりどりみどりだろう。客観的に見ても、街を歩けば、女たちが放ってはおかないだろうことは明白だ。

この街、プラミィーシュレには、大きな色街があると聞いている。ブコバル辺りが鼻の下を伸ばしそうなものだ。ユルスナールも毎年、ブコバルと共にこの場所を訪れるのならば、馴染みの店くらいありそうなものだった。

頭の隅で、そんな莫迦らしいことを考えている自分が可笑しくなった。

「人肌が恋しくなりましたか？」

その気持ちは、自分にも心当たりはなくもなかった。そういう気分に苛まれる時は、時としてある。

「男を甘く見ると痛い目に遭うぞ？」

故意にだろうか、剣呑さを増した忠告をリョウは笑って流した。

「ワタシ相手に……ですか？」

半ば挑発的に見上げれば、

「そういうことだ」

ユルスナールの口元が弧を描く。

そして、辛うじて残っていた筈の距離がゼロになる。

落ちてきたのは、羽のように軽い口付けだった。

やがて、触れるだけだった口付けが、徐々に深さを増していった。

「……ルス…ラン」

どこか咎めるような囁きに、ユルスナールは、閉じていた目を開けた。

見下ろした先には、苦し気に歪むリョウの顔があった。

暫くしてから、ユルスナールは緩く頭（かぶり）を振った。

どこか自嘲気味に口元が歪む。

「だが、まぁ、病み上がりに無体を働く訳にはいかないな」

そう独りごちるように呟くと、身体を元の位置に戻して、ごろりと横になった。

「眠れ」

そうして、上掛けの位置を直される。

勝手な男の言い草にリョウは、呆れたように、それでもどこかほ

っとしたように苦笑を返した。
だが、それも束の間のことで。
治癒に回って消耗した体力が続かなかったのか、高波に攫われるように寄せて来た眠気に再び、引き摺り込まれていった。

鍛冶屋の宿命

鍛冶職人であるカマールの一日は、祈りを捧げることから始まる。

竈がある神聖な仕事場。その北西の角、ちょうど天井と柱がぶつかる角には、古ぼけた小さな絵のようなものが、幾つか掛かっていた。それらは、この国の神々が宿るとされる寄り代で、其々の木の板には、祭る神の意匠が描かれていた。

竈と炎を司る神、【ズヴァローグ】

風を司る神、【ストリヴォーグ】

太陽（ソンツェ）を司る神、【ダジヴォーグ】

大地を司る神、【モーコシ】

水を司る神、【ヴァダールグ】

火、水、土、風――――――どれも鍛冶職人には欠かせない重要、且つ神聖な要素だ。

日の出と共に、小さく切りとられた天窓から差し込む自然光が、ぼんやりと神々が祀られている天井の角を照らし出す。

朝一番の清冽で荘厳な空気が立ち込める静寂の中、無骨で荒削りな男の横顔は、敬虔な愚者のそれに変わる。

――――――今日、一日、無事に仕事ができますように。

太い関節の浮き出たひび割れのある手を組んで、早朝の一時、男は静かに目を閉じて祈りを捧げた。

この道の門を叩いてから、もう十年以上は経つ。だが、カマール自身、これまでに満足の行く代物を造ったと思ったことは一度も無かった。親方から独り立ちを認められてから、早三年。それでも、この世界ではまだまだ【ひよっこ】の範疇だ。

鍛冶職人の仕事は毎日が修行である。日々、高みを求めて精進を続けるのだ。終わりなき旅路だ。それは孤独な道程だった。

――――――この腕が動く限り。この手が動く限り。

カマールは、閉じていた瞼を上げると己が腕へそっと指を走らせた。

洗いざらしのシャツで覆われたその下には、日々の労働で鍛え上げられた筋肉質な太い腕がある。筋と血管が浮き出た働く男の腕だ。ちょうど二の腕の内側、丸い力拳が形成される辺縁の辺りには、薄らと紫色の痣が浮かんでいた。

この痣が出来始めたのは、約一年前の事だ。年を追うごとに濃さを増してゆくであろうその痣は、鍛冶職人である【術師】特有のもので、この仕事を続ける限り消えることは無い、切っても切れない宿命のようなものだった。

特に、高い能力を保持する【術師】程、その影響は顕著に表れる。良い腕の職人程、その痣は濃さを増し、それが現れる範囲も広くなった。

鍛冶職人仲間の中には、それを勲章のように思う輩もいる。だが、誰一人として、それを他人に見せびらかすような者はいなかった。

それは恥ずべき行為として認識されていた。

その痣は鍛冶職人の【誇り】であると同時に【忌むべきもの】でもあるからだ。良いモノを作り上げる為の代償とでも言うべきものだろうか。職業病という者もあるだろう。大地と自然からもたらされる【恵み】に対する人が払うべき【対価】だ。

――――――何故ならば。

それは、鍛冶職人の身体を蝕む【毒】の現れでもあったから。厳かな死への招待状なのだ。

人として生を受けたからには、誰しもが、やがて、その終焉を迎える。永遠の命など存在し得ない。尽きては生まれ、生まれては尽き、そして、巡り巡る。そうやって、一つ一つとして見るならば【点】にしかなりえない命は、限りない【直線】を形成する大事な一要素になるのだ。

鍛冶職人の寿命は、通常の人の一生よりも短かった。それは、刀剣を作り上げる際、元となる金属鉱石【スターリ】に、より強度を高める為、【キコウ石】を入れて生成する時に出る、人にとっては有害な物質を長く浴び続ける為である。熱く滾る炎の中、熱せられた金属の塊を一気に冷やす時、それは気化したガスの形を取って、鍛冶屋である術師の体内に入った。

紫色の痣は、その毒が体内に蓄積した証でもあった。仕事を辞めない限り、人によって程度の差はあるが、痣の色は徐々に濃さを増し、その範囲も広がりを見せる。そして、段々と手足の感覚を奪ってゆくのだ。神経細胞をやられてしまうのだろう。

この痣を直す薬は無かった。

だが、鍛冶職人たちは、漫然とただ手を拱いていた訳ではない。痣の広がりは、鍛冶屋としての職人生命に直結する。昔から、どうにかして発症を遅らせようとか、段々と失われてゆく手足の感覚をどうにかしようとする試行錯誤は続いていた。だが、これまで誰一人としてそれに対する効果的な対処方法、治癒の方法を発見できた者はいなかった。

それは、鍛冶屋を志す者ならば受け入れなければならない宿命とも言うべきものだった。

そういう意味で、鍛冶職人の一生は、太くて短い。限られた時間だからこそ、己が魂を込めて仕事をするのだ。そうして作り上げられた刀剣は、正に鍛冶職人の闘魂の一振りだった。

だからだろうか。鍛冶屋を担う術師は独り身のものが多かった。家族を持てば、自分の過酷な定めに大切な人達を巻き込むことになる。短い一生を自分で選び取った鍛冶屋の術師ならば、それは覚悟を決めての事だと言えるが、その自己満足とも自己犠牲とも言うべき選択を、これから一生を共にするであろう相手に背負わせることはしたくないということなのだ。

その代わりとして、鍛冶職人の間では、相互扶助としての寄り合（ギルド）

いが発達していた。家族を持たぬ独り身の術師が、その体調を崩した時や日常生活がままならなくなった時、その手伝いをするのだ。助け合いの精神が生きていた。

カマール自身は、その精神に則り、独り身を通す積りでいた。妻を娶っても、追い先が長くない自分にはきっと苦労をさせるだろう。この身体がままならなくなった時、鍛冶職人として仕事が出来なくなった時のことを考えれば、相手には多大な負担を負わせることになってしまうだろうからだ。

愛する人を悲しませたくはない。それは、心優しい少年が、この道に入る時に決めた揺らぐことのない決心だった。

分野は違えども同じ【術師】として生計を立てている、謂わば先達の母親は、その事を分かっている筈だった。

――――――――それなのに。

カマールは小さく息を吐き出すと緩く頭を振った。

それから、暫くして。

「おはようございます。ただいま戻りました」

不意に辺りに響いた凛とした声に、カマールは作業の手を止めた。作業場と住居部分を繋ぐ戸口にそっと顔を覗かせたのは、昨日の昼からここを留守にしていた少年だった。

伝令から『昨晩は別の所に厄介になる』との報せを受けてはいたが、昨日は往来で揉め事に巻き込まれて街の治安維持を司る兵士たちの詰め所【ツェントル】に連れて行かれたと耳にして大騒ぎになったのだ。

その子の身を預かると申し出たのは、自分もそれなりに知る信頼の置ける人物であった為、間違いのないだろうことは分かっていたのだが、実際にその子の顔を見るまでは心配で仕方がなかった。

「ああ。お帰り。大丈夫か？」

思ったより元気そうな顔を見て、カマールは安堵の息を吐いてい

た。
「はい。御心配をお掛けいたしました」
黒い頭髪が小さく揺れた。
カマールは立ち上がると、その顔を良く見ようと傍に寄った。

その子は、五日ほど前に自分の母親が暮らすスフミ村から寄こされた【伝令（メッセンジャー）】だった。
通常、術師の間で使われる伝令は、大空を飛び立つ鳥だ。長距離を飛ばすならば、大鷲、鷹、隼といった猛禽類。近場であるならば、鳩や鶫（つぐみ）といった所が一般的だった。
伝令の役目を負った【生身の人間】を受け入れたのは、カマールも初めてのことだった。
スフミからもたらされたこれまでの伝令にいい加減な生返事を返していたのが、徒になったのか。母親が突拍子もないことをするのは、今に始まったことではなかったが、その【伝令】を見た時は、内心、慄いたものだった。
母親が何を企んでいるのかは分からないが、だからと言って遥々スフミからこのプラミィーシュレまでやってきた【伝令】を邪険にすることは出来なかった。
スフミからこの場所まではかなりの距離がある。大人の男の足で、丸五日は優に掛かるだろう。馬を使えば三日というところか。

訪ねて来たのは、ほっそりとした体つきの小柄な少年だった。癖の無い黒い髪に、同じような黒い瞳を持つ。その色の組み合わせも珍しかったが、カマールの目を引いたのは、その顔付きだった。この国の人間とは明らかに違う異国風の顔立ちだ。そして、落ち着いた空気に控え目で丁寧な物腰。
その少年は、戸口で訪（おとな）いの返答に現れたカマールに、穏やかな微笑みを浮かべると、その名と訪問の目的を簡潔に告げた。
その少年が名乗った【リョウ】という名は、これまで耳にしたこ

とが無い不思議な響きを持っていた。

「どら、リョウ。顔を良く見せてみな」

明るい日差しの下、晒された白い肌には、心配していた傷の類は付いていなかった。そのことに内心ほっとする。

この少年は、母親からの大事な預かり人だった。

この辺りでは中々手に入れることの難しい薬草の入った袋と共に手渡されたのは、いつになく厚みのある封書で、中を開けてみれば、やけに長い手紙が入っていた。その懐かしい癖のある筆跡が辿る文面には、この封書を持って訪ねて来る人物に対して良くしてやってくれとのことが縷々としたためられていた。

その子は、その顔立ちから想像が付くだろうが、この国のことを良く知らないから、分からないことに直面したら、例えそれが、世間的に見て当たり前の【常識】と言えるようなことでも、莫迦にすることなく、教えてあげて欲しいと書かれていた。

自立心の高い母親からの珍しい頼みごと。それだけでも、遠く離れた場所に暮らし、親孝行らしいことは何一つやってこなかったカマールにとっては、素直に叶えてやろうと思えることであったが、そのことを抜きにしても、実際に目にし、言葉を交わした少年に対しては、何かをしてあげようという気になっていた。

一言で言えば、その少年をカマールは気に入ったのだ。

ここ数日、この家で世話をしていたが、その子は、万事控え目で、良く気の付く子だった。

掃除や買い物、食事の支度といった家の雑事には自分から仕事を買って出る。小さな白い手はそれこそ器用に動いた。仕事の合間には、休憩と称してお茶を淹れてくれる。自分から公言したことはなかったが、誰からか聞いたのか、顔に似合わず甘いモノが好きだという自分の為に、小さな焼き菓子が添えられていることもあった。

出掛ける時には、『行ってらっしゃい。気を付けて』との声が掛かる。用事を終えて家に帰れば、『おかえりなさい』とにこやかな

微笑みが出迎える。誰かと暮らすことがこんなにも心温まることであることをカマールはすっかり忘れていた。

忘れていた筈の遠い記憶が重なった。

「昨晩は良く眠れたか？」

目の下には、薄らとだが隈のようなものが出来ている。

だが、頬には艶があった。

心配そうにかざされた無骨な男の手の下で、少年は擽ったそうに笑った。

「はい。大事ありません」

その少年の背後に影が差した。

「これは……旦那も御一緒でしたか」

その後ろには、昨晩、この子を預かってくれたと言う兵士の姿があった。

上背があり、よく鍛えられた鋼のような引き締まった肉体をその濃紺の外套の下に隠している折り紙つきの美丈夫だ。カマールの目から見てもその男には、人を従わせるような威厳があり、その堂々たる姿は人目を惹いた。

この国の軍部の中でもそれなりの地位にあると聞くその兵士は、先代からの常連客だった。

「ご面倒をお掛けしました。ありがとうございます」

最早、カマールの頭の中では、この少年の存在は大切な身内のような扱いだった。

この少年を送り届ける序でに、自分の用事を済ませに来たのであろう。昨日は無駄足を踏ませてしまったことに対しても申し訳がなかった。

丁重に頭を下げたカマールに対する男は実に複雑な顔をしていたのだが、頭を下げていたカマールは、幸いにして、その表情を見ることが出来なかった。

「カマール。今は…大丈夫か」

「へぇ、勿論ですとも」
徐に切り出された用件に、カマールは静かに頷いた。
外を歩く兵士崩れの横柄な輩と違って、決して他人を見下したりせず、寧ろ、相手への細やかな気遣いを見せることの出来るこの男の気概を、カマールは買っていた。
つくづく立派な男だと思う。昨日のけったいな客に見せてやりたい程だった。

「どうぞ、こちらへ」
自分の仕事場へと促したカマールにその兵士は続いた。
カマールは不意に足を止めて振り返った。
「リョウ、朝飯は食ったか？」
「はい」
唐突ともいえる問いに、声を掛けられた相手は可笑しそうに笑みを零した。
「お前も見ていくか？」
その隣の兵士からも同じような声が掛かる。
『構わないか？』という兵士の顔付きに、カマールは内心、首を傾げながらも諾と首を振った。
「別に構いませんが」
だが、それに誘われた方は首を横に振った。
「いいえ。仕事のお邪魔をする訳にはいきませんから。代わりにレントさんの所に行ってきます。様子を見に」
レントというのは、引退をしたカマールの師匠の名だった。鍛冶屋の宿命とも言うべき痣の影響から、体調を崩して半ば寝たきりの状態が続いているのだ。親方の所に出掛けるのは、ここに来てからの少年の日課のようなものになっていた。
「ああ、頼む」
「はい」
穏やかに頷いたカマールにリョウも微笑んだ。

「リョウ、後で俺も顔を出す。向こうで待ってろ。それから昼飯にしよう」
不意に割り込んできた台詞にリョウは目を丸くした後、喉の奥を鳴らした。
「……ルスラン。もうお昼の心配ですか」
その声音にはどこか呆れたような響きが乗っていた。気心の知れた相手に見せるような柔らかで軽やかな空気が、そこには流れていた。
それをカマールは不思議に思ったが、昨日、ツェントルで二人が知り合いであることを聞かされたことを思い出した。
だが、対する兵士は何食わぬ顔で、それに返すことなく、隣に並ぶ鍛冶屋の方を見た。
「カマール、お前もどうだ？」
カマールは突然の誘いにぎょっとした。
「……いや、あっしには、手前ぇの仕事がありますんで」
恐れ多いと丁重に断りを入れれば、それを見ていたリョウが代わりの提案をする。
「それじゃぁ、お昼に軽く摘めるものを見繕って置きますね」
そう言って軽やかに踵を返したほっそりとした背中を、カマールは眩しいものを見るような穏やかな表情で見送ったのだった。

「それでは、始めましょうか」
その一言で空気が引き締まった。
「ああ」
そして、再び、顔を戻したカマールの表情は、頑固で熟練した鍛冶屋である【術師】のそれになっていた。

鍛冶屋の宿命（後書き）

主人公は女性ですが、カマールはリョウのことを少年だと思っているので、地の文の表記は【少年】となっています。

追憶の影

カマールとユルスナールが仕事の話を始めたのを見て、作業場を離れたリョウは、簡単な軽食をカマールの為に用意した後、鞄の中に小さな包みが入っているのを確認してから、その場を後にした。

リョウが向かった先は、カマールの自宅兼工房から、通りを二つ、三つ程越した所にある鍛冶職人たちの寄り合い（ギルド）だった。その一角に現在カマールの師匠が暮らしていた。

その男の名は、レントという。一年半前に正式に鍛冶職人を引退し、仕事場を弟子のカマールに譲って以来、寄り合いの世話になっているとのことだった。

レントは病に臥せっていた。

リョウは、リューバのお遣いでその息子（カマール）宛てに持参した薬草以外にも、自分自身で薬草を見繕って持って来ていた。長旅に備えての万が一の常備薬のような扱いだ。その中の一つに、痛みを和らげ鎮静作用をもたらすものがあり、試しにその師匠に薬湯として飲んでもらった所、思いの外、効用があることが分かり、それ以来、その男を訪ねるのは、この街に来てからの日課のようなものになっていた。

普段は、弟子のカマールがちょくちょく様子を見に顔を出し、世話をしているようなのだが、この所、仕事が立て込んでいるのか、忙しそうにしているカマールを見て、その替わりにと手伝いを申し出たのが切掛けでもあった。

鍛冶職人の寄り合い（ギルド）がある建物は、立派な石造りのもので、中には通常の事務所の他に医療機関とも呼べる場所や引退した鍛冶職人たちが暮らす居住棟があった。

この街に暮らす鍛冶職人は、皆、この寄り合い（ギルド）に登録されている。

この場所では、街の各地に散らばる鍛冶職人を客の求める希望やその分野によって紹介したり、原料となる金属鉱石などを職人たちに卸したりする仲介を行っているとのことだった。

「こんにちは」

「おう、坊主。今日もおやっさんの所か？」

「はい」

入り口で受け付けにいた人に挨拶をして中に入る。ここ数日、毎日のように訪れるリョウの顔は、その風貌の珍しさも相まってか、既にギルドの人達には馴染みのものとして認識されていた。

入口からずんずんと奥に進むと渡り廊下を挟んで別の棟が現れる。その場所は、現役を退いた身よりの無い鍛冶職人たちが暮らす居住区域になっていた。

入口の直ぐ傍には、医務室があった。

そこのカウンターの中にいる人達にも通り一遍の挨拶を返して、リョウは迷わず、カマールの師匠が暮らす部屋を目指した。

扉の前で、小さくノックをする。

中から聞こえてきた了承の合図にリョウは扉へと手を掛けた。

「失礼します。こんにちは、レントさん。お加減の程はどうですか？」

「おう、坊か」

大きな枕を背に上半身を起こしていた男がゆっくりと振り返る。そして、訪ねて来た人物の姿を捕らえると目を細めた。

大きく切りとられた窓枠の下には、様々な小鳥たちが止まっていた。レントの膝の上には、餌を入れた小さな丸い皿が置かれている。恒例の餌やりの時間だった。

リョウが中に入ると一瞬だけ、賑やかなお喋りが止んだ。だが、入ってきた相手を認めると、直ぐにまた小さな多重音声のさえずりがこだまし始めた。

これは、レントと小鳥たちの情報交換の場でもあった。ほぼ寝た

きり状態で自ら身体を動かすことのできないレントは、この居住区域の外に出る事が出来ないどころか、他人の介助なしには部屋の外へ出ることすらままならない状態だ。そんな状態のレントに代わり、この街の様子、噂話などを、小さな饗応をしながら、聞きだしているのだ。

「で、そいつはどうなったんだ？」

レントがその少し特徴的なしわがれ声で問えば、一斉に幾つもの答えが返ってくる。

『そうそう。その後は、もうぱったりよ』

『音沙汰なし』

『音沙汰なし』

『呆れたものねぇ』

『そんなもんでしょ』

『そうよ』

「ハハ。そうかい」

普通の人が耳にすれば、それは他愛ない小鳥たちのさえずりに聞こえるのだろうが、【術師】であるレントには、それらは意味を成す言葉として聞こえていた。

勿論、それはこの場にいるリョウとて同じことだった。

リョウは集まった小鳥たちから掛けられた挨拶ににこやかに返すと、肩に掛けていた鞄をテーブルの上に下ろし、早速、支度に取りかかった。

鞄の中から小振りの瓶に入った軟膏を取り出す。それは、切り傷や化膿止めとして【ストレールカ】をほんの少し混ぜ加えたものだった。

「レントさん。背中の具合を見せて貰ってもいいですか？」

小皿の中身がすっかりなくなると、窓辺にいた小鳥たちは一斉に飛び立って行った。

途端に、先程までの賑やかさが遠ざかる。鳥たちは、窓の外にある大きな木の枝に止まったのか、お喋りの余韻が切れ切れに聞こえ

てきていた。
「ああ。すまねぇな」
口の端をほんの少しだけ吊り上げて、レントは苦み走った男らしい表情をした。生粋の職人を思わせる風情だ。親方の顔には沢山の深い皺が刻まれていたが、すっかり白くなった頭部には、まだまだ豊かに髪が生えていた。この国の男達と比べれば、その体格は小柄な部類に入るようにも見える。だが、その姿も今現在のレントの在り方しか知らないリョウには、それがレント本来の姿なのかどうかは、分からなかった。鍛冶職人という職業柄、往年の現役時代には、その身体は、逞しい筋肉で覆われていたかも知れないからだ。
レントがこの居住区に暮らし始めてから約一年半、来た当初はまだ一人で歩行が可能な程であったが、ここ三カ月程の間に急速に身体の自由が利かなくなり、今では半分以上寝たきりの状態になっていた。
その背中には小さな床擦れが出来ていた。
初めてこの場所を訪れたリョウの目の前で、顔を顰めて身じろいだのが、ちょうど五日ほど前のこと。その背中を庇う様な仕草が、リョウには酷く気になった。親方が半寝たきり状態だとのことを耳にして、ちょうど思い当たる節があったのだ。不躾を承知で背中を見せてくれと頼んだ。
そして、寝間着代わりにしている簡素なシャツの下から現れたのは、リョウの予想を遥かに超える身体の状態だった。
レントの全身は紫色の痣で覆われていた。そして、その腰に近い背骨の部分には丸い炎症が出来始めていた。幸いにして床擦れは初期のものだった。
だが、それ以上に、リョウの注意を引いたのは、背中一面に広がる紫色の濃淡だった。地図の等高線のように緩やかに広がりを見せる色の波。肌の上を舐めるように広がる色水の軌跡のようでもあった。

「ハハ、済まねぇな。けったいなもん、見せちまって」
背後で息を飲んだリョウに、前を向いたままレントが軽く笑った。
「あの、……これは、……もしかして……」
リョウの脳裏には、かつてガルーシャから耳にした話が思い出されていた。
あれは、ガルーシャが愛用していた短剣（ナイフ）のことを話していた時だった。この国の短剣（ナイフ）を始めとする刃物類は、鍛冶職人が精魂込めて作り上げているもので、鍛冶屋も【術師】の範疇に入るという話を聞いた時だった。
この一本の短剣（ナイフ）は、人にとっては単なる物を切る為の道具にしか過ぎないだろう。だが、この短剣（ナイフ）には、これを作り上げた職人の魂が注がれている。鍛冶職人は文字通り、己が命を削ってこれを作っているのだ。これは、その命の欠片とも言うべきもので、刃物を手にする時、その事実を忘れてはいけない。
いつになく真剣な色をその瞳に乗せて、ガルーシャは諭すように語った。
そして、穏やかな口調が次に紡ぎ出したのは、鍛冶職人が罹るという不治の病のことだった。刃物を鍛える時に用いる鉱物の所為で彼らは毒を浴び続ける。その結果、彼らが迎える最期は、往々にして過酷なものが多いのだと。体内に蓄積される毒物の所為で、徐々に身体の自由が利かなくなるのだと。
ガルーシャ自身、懇意にしている鍛冶屋もいるから、なんとかして発症を抑えたり、症状の緩和が出来ないかと、色々と試行錯誤を続けていたが、未だにその解決方法は見つかっていないのだと、少し悔しそうに眦を下げてその話を締めくくった。
「ああ。おめぇは……初めて見るか」
肩越しにちらりとこちらを振り返ったレントの顔は、色を無くしたリョウの表情とは違い、とても穏やかなものだった。
それは、この男が、この現実をしっかりと受け止めていることを

示していた。
「はい。話には聞いてはいましたが」
だが、やはり、話に聞くのとそれを実際に目にするのとでは随分と違う。
リョウは慌てて動揺を内側に引っ込めた。上手くいっているかは分からないが、微笑んで見る。
本人がしっかりとこの現実を受け入れている以上、他人が騒ぐのは余りにも失礼なことだった。
「すみませんでした」
自分の対応が大人げなかったことを謝れば、
「ハハ、可笑しな奴だ。何を謝ってんだか」
反対に軽く笑い飛ばされてしまった。
レントは、ふと窓の外へ視線を投げながら、静かに切り出した。
「この痣を中にゃぁ、勲章だなんて言う奴もあるがな。俺にとっては相棒さ。こいつは、てめぇを鍛冶屋だって知ら示す【証】みてぇなもんさ。少なくとも、俺はそう思ってる。こいつともう長い付き合いになるからな。今更、がたがた騒いだりなんざぁしねぇさ。見てくれはわりぃが服を着ちまえば分かんねぇしな。鍛冶屋はみんなそんなもんだろうよ」
「――――はい」
その言葉の中に凝縮されたこの男の人生に、リョウは、ただただ、そう返事を返すのが精一杯だった。

やや停滞した空気を入れ替えるようにリョウは顔を上げた。
「あの、この部分に床擦れが出来始めていますね。化膿止め用に軟膏を持っているので、塗ってもいいですか？」
ここで漸く、元々の用件を思い出した。
「あ？　背中の腰んところか？」
「はい」
「そいつぁ助かる。この間から、なんか、じくじくしてよ。変な按

配だったんだよ」
リョウは軽く頷いて見せると、鞄の中から、自分用に作って置いた軟膏を取りだし、蓋を開けて手に取った。
「少し、しみるかもしれません」
念の為、前置きをしておく。
「ああ、そんなの屁でもねぇさ」
薬を塗る為に赤く変色している部分に指が触れれば、レントが小さく呻いたのが分かった。歯を食いしばって痛みを耐えたようだ。

「で、なんなんだ、そいつは」
薬を塗り終えた後、出された問いにリョウは半ば驚きつつ答えた。
「ご存じありませんでしたか。これは『床擦れ』といって寝たきりの状態の人が気を付けなければならないことなんです。長時間、同じ姿勢をとって横になっていると、その部分が空気に触れないですよね。そうすると皮膚が呼吸を出来なくて細胞が壊死してしまうんです」
レントが寝間着を着直すのを手伝いながら前に回れば、
「あ？　壊死ってのはなんだ？　分かりやすく言ってくれよ」
眉を顰めた男の顔が見えた。
ガルーシャからそっくりそのまま教わった言葉は、やはり専門分野に特化したもので、日常的に使うものではないようだ。
リョウは、もう一度、平易になるように慎重に言葉を選んだ。
「ああ。すいません。早い話が、空気に触れない部分が腐ってしまうんです」
「腐る……だと？」
男の表情が凍りついた。
「はい。今は、まだ少し赤く腫れている段階ですが、これが進むともっとぶす黒く紫色に変色して膿を持ってきます。そうすると肌の部分がぐちゃぐちゃになるので、中々治りが悪くなってしまいます。その部分から他の黴菌が入ったら、そこから死に至る場合も考えら

れるんです」
　脅している積りは全くなかったのだが、その時の自分が持て得る知識を総動員して、説明をすれば、レントは心底、驚いたように目を見開いて、その顔の表面をつるりと撫でた。
「はぁ～、そいつぁ、驚いた」
「ですから、なるべく、こまめに寝返りを打って。正面だけでなく右向きになったり左向きになったりと空気に触れさせる必要があるんです」
「成程ねぇ。若いのにてぇしたもんだ」
「いえ。あの、もし御迷惑でなかったら、明日もここに来てもいいですか？　暫く、薬を塗る必要がありますし、これは個人的に作ったもので、床擦れ専用ではないので、効果の程が分からないんです」
　その申し出に、レントはしきりに感心をしたように首を縦に振った。
「ああ。いいぜ。この薬も坊が作ったんか？」
「はい」
「おめぇさんは【薬師】かなにかか？」
「いいえ。少し齧っているだけです。あの、カマールさんのお母様を御存じですか？」
「カマールの母親か？」
　急に飛んだ話題に首を傾げたレントにリョウは種明かしをするように微笑んだ。
「カマールのお母さんは、【薬師】でもあるんです。いつもお世話になっていて、教えてもらったんですよ」
　軟膏の作り方や薬湯の作り方は、本当はガルーシャからの知識であったのだが、リューバから教わったことも多いので、便宜上、そういうことにしておいた。
　その言葉にレントは納得したようだった。
　そして、背中の状態を見る為に、リョウはレントからその後の訪問の約束を取り付けたのだ。

そんな遣り取りがあったのは、ここに来た初日のことだった。

寝間着の上を脱いでもらって、背中を向けてもらう。この五日間、通い続けたお陰が、背中の患部は大分薄くなっていた。

「随分と良くなりました。あともう少しですね」

薬を塗り終えると、リョウは安堵したように微笑んだ。

続けて痛みは無いかと訊けば、

「ああ。大分楽になった。恩に着るぜ」

茶目っ気たっぷりに片目を瞑って見せたレントにリョウは可笑しそうに笑い、部屋の隅に置かれていた小さな丸椅子を手に取ると、レントが身体を起こしている寝台（ベッド）の傍に腰を下ろした。

「それでは、始めますね」

「ああ。すまねぇな」

上着の袖を捲り上げて準備をしたリョウに、レントは大人しく頷いた。

それから、リョウが行ったのは、簡単に言えば、按摩（マッサージ）のようなものだった。

寝たきり状態だと身体の血流が滞ってしまう。放って置けば、血栓が出来て、心筋梗塞のような突然死を引き起こしてしまう原因になり得るからだ。その状態を少しでも緩和する為に、足先から手の先、末端から中心部分に血液が流れるようにマッサージをしていった。それもここに通い始めてからの日課のようなものになっていた。

レントの姿にリョウは無意識に自分の祖父のことを重ねていた。

祖父が亡くなってから、もう随分と経つが、最後、死に目に遇えなかったことが心残りであった。祖父は、その晩年、ヘルニアから来る神経痛の所為で、半分以上、寝たきりの状態が続いていた。遠く離れた場所に暮らす祖父母に、生前、最後に会ったのも随分と前のことで、報せを受けた時には、既に祖父はこの世を去っていた。

祖父の背中には、大きな床擦れが出来ていたと言う。

祖父が亡くなったのは、その治療の為に入院をした先の病院だった。床擦れの具合も良くなってきたとの話を聞いて、今度、休みを取ってお見舞いに行こう、そんな話が出た矢先のことだった。その時の悔恨は今でも忘れられずに残っていた。

レントの身体には、足の先にまで痣が広がっていた。

その痣は、高い技術と能力を持つ術師程、その影響は強く出ると聞いた。カマールの師匠は、この街でも一、二を争う高名な鍛冶職人だったと近所で店を構えている人達は話していた。

その力が徒となる。なんと皮肉なことだろう。

そして、彼らが、その身を削って作った刃は、この街を闊歩する男たちの腰にぶら下がることになるのだ。

その剣が抜かれるのは――――――――人を殺(あや)める時だ。

綺麗事では済まされない、この世界の現実を一つ、見つけた気がした。

リョウ自身、そのことをどうこう言う積りはなかった。いや、口に出来る筈がなかった。

カマールを見ていれば分かるが、鍛冶職人たちは自分たちの仕事に大いなる誇りを持っている。彼らは、その理由は色々あるのだろうが、自ら鍛冶屋の道を選び取った人達だからだ。

自分が出来ることといえば、少しでも症状が和らぐように薬湯を作ったり、暇潰しに話し相手になるのが関の山だろう。

そう。何処まで効果があるかは分からないが、こうして少しでも楽になるようにと身体を摩りながら気持ちを込める。

ガルーシャやリューバの言う【お呪い】の中に、効力を発揮するものがあれば良いのにと思わずにはいられなかった。それすらもこの世界のことをまだ良く知らない自分にとっては身勝手で僭越な気持ちに当たるのかも知れないが。

リョウはそんなことを思いながら、手を動かした。

レントには、ここまで来る途中に垣間見た街の様子などをポツリ

ポツリと話す。
それは、どこか遠慮がちな小さなノックの音が響くまで続いた。

控え目なノックの後に部屋の中に現れたのは、濃紺の外套を身に纏う長身の男、ユルスナールだった。
レントは戸口に立つ男の姿を認めると、少し目を瞠って、それから眦を下げた。
「おやおや。こいつぁ珍しいのが来たもんだ」
飄々とした中にも懐かしそうな声が上がる。
「ご無沙汰しております」
ユルスナールは小さく頭を下げると、寝台（ベッド）の方に歩みを進めた。
リョウは、丸椅子から立ち上がるとさり気なく脇に避けた。
鍛冶屋繋がりでユルスナールはカマールの師匠であるレントとも知った仲であることが、二人の間に流れる空気から見て取れた。
暫く振りの邂逅。カマールの所を訪れるのは年に一度と言っていたので、二人の出会いも恐らく一年振りになるのだろう。
それならば積る話もあるだろうか。

二人の邪魔をしないようにリョウは席を外すことにした。
「お茶を淹れますね」
一言、レントに断りを入れる。
「ああ。頼んだよ。その辺にあるだろう？」
「はい」
目があったユルスナールは、リョウに一つ頷いて見せた。
壁際の戸棚から、茶器とお茶の葉を取り出す。同じように中に入っていた薬缶を手に取って、少し離れた場所にある共同の台所に向かった。
擦れ違いざま、ふとユルスナールが腰に佩く長剣に目が行った。
あの剣にも同じようにそれを作った鍛冶屋の想いが沢山詰まっているのだろう。

己が命と引き換えに誂えられた一振りの剣。
その使い手であるユルスナールは、それをどう感じているのだろう。
そんなことを考えた。

腐れ縁の法則

久し振りに見る男の姿は、一年前に比べて随分と小さくなっていた。

視界の隅に己が愛馬の尻尾のような黒髪が弾むのを見送ってから、ユルスナールはゆっくりと寝台（ベッド）の上の主に向き直った。

真っ直ぐに伸びた背筋は、今も昔も変わらなかった。

「お加減はいかがですか？」

寝台（ベッド）の脇に置かれた丸椅子に腰を下ろせば、目線は同じ位になった。

視線が合えば、豊かな白髪から秀でた額の下、男の酷薄そうな薄い唇が小さく上がった。

「おめぇの陰険な面ぁ拝めば、また、冬が来ちまったってぇ感じだな」

端から聞いたら答えにはなっていないであろうその言葉も、付き合いの長いユルスナールには理解が出来た。

要するに、また一年、命永らえたということが言いたいのだろう。

普通の人間にはなんてことはない一年も、この男にとっては重みのある貴重な時間だった。

――――――だが、まぁ。

窓の外を一瞥してから、男が不意に喉の奥を鳴らした。

「俺は、この通り、もう長くはねぇ。この冬が峠ってぇ所だろ」

そう言って、緩慢な動作で自分の袖を捲って見せた。

鍛冶職人としての生命線である利き腕。その男の右腕には、手首から肘に掛けて、紫色の痣が一面に広がっていた。色も前に比べて随分と濃く、黒ずんでいる。

それを静かに見て、ユルスナールは徐に口を開いた。

「この春、ガルーシャ・マライが旅立ちました」

神経質そうな男の白い眉毛が小さく動いた。

「そうかい。そうかい。あのクソジジイもとうとう、くたばっちまったか」

この男の口の悪さは昔から悪評高かったが、辛辣な言葉とは裏腹に、男の顔には、どこか懐かしそうな表情が浮かんでいた。

「なら、満更でもねぇか。アイツの直ぐ後ってぇのは業腹だが、向こうで会ったら、しこたまからかってやるさ」

男の脳裏には、その昔交わしたガルーシャとの賭けが思い出されていた。

どちらが先にこの世を去ることになるか。酒の席での他愛もない戯言の一種だった。

そして、いつからか、話題は先程までこの部屋にいた黒髪の人物に及んでいた。

「あの子はいつからここに？」

「あ？　あの坊のことか？」

「ええ」

「五日前ぐれぇのことか？　カマールんとこからだってぇ言って。ひょっこり顔を出しやがって。何でもアイツの母親んとこから寄こされた【伝令（メッセンジャー）】だってぇ言うじゃねぇか。生身の人間が伝令で来たって、あの野郎、随分とたまげてたさ」

そんなことを一頻り、可笑しそうに語ると、カマールの師匠であるその男は、不意に柔らかな微笑みを浮かべた。

「それにしても、あの子は良い子だ」

頑固で一切の妥協を許さない鍛冶屋の仮面を剥ぎ取って、突然、孫を可愛がる祖父のような顔付きになった男を、ユルスナールは無言のまま、見遣った。

「あの子……リョウは、ガルーシャ・マライの縁です」

その言葉に、男は動きを止めた。

ゆっくりと首を回して、ユルスナールの方を見た。

穏やかな空気から一転、驚きの表情を浮かべた男に、ユルスナー

ルは小さく笑った。
「と言っても。血の繋がりはありませんが」
「なんでぇ。驚かすなよ。こっちは心臓が止まるかと思っただろ」
本当に驚いたのだろう。
あからさまに安堵の溜息を吐いた男は、つるりと自分の頬を撫でた。
「ですが、あの子は、ガルーシャの旅立ちを看取りました」
暫し、沈黙が落ちた。
静寂に満ちた室内に、窓から入る冷たい風が、男の白髪を揺らした。
「……そうか」
男はただ一言、小さく言葉を発すると開けられたままの戸口へ視線を投げた。
やがて、緩く長い息を吐き出しながら、目を閉じた。
ガルーシャの最期に寄り添ったと言うあの子が、今、この時期に自分の前に居るという事実に、男は運命の悪戯のようなものを感じずにはいられなかった。
――――――最後の最後まで。
あの男との縁は切れそうもなかった。
その繋がりを鬱陶しく思う反面、どこかで喜んでいる自分がいた。

「お待たせ致しました」
不意に耳に飛び込んできた軽やかな声に閉じていた瞼を上げれば、朗らかな表情を浮かべたその話題の主が、お盆の上に茶器を乗せて戻ってきた。
柔らかな風が、室内を満たしてゆく。
その子の腕には湯を沸かした時の薬缶がぶら下がっていた。
かつてガルーシャに師事していたという不肖の弟子が、すぐさま立ち上がって、その子の手の内の物を受け取ろうとする。
それをその子がやんわりと首を振って断った。

――――――だがまぁ、こんな最期も悪くは無いかもしれない。
そんなことを考え始めている自分に、男は小さく笑みを零す。
穏やかな一時が、男の周りを取り巻いていた。

どこか滑稽な悲劇

「あ～ら。ルスランの旦那じゃない。こっちに来てたんだねぇ」

レントの部屋がある鍛冶職人の寄り合い（ギルド）を後にして、これから昼食を取るということでユルスナールと二人、往来を歩いていると、どことなく妖艶な気配のする女の声が掛かった。

聞き覚えのある名前に、リョウは思わず足を止めて、後ろを振り返った。

だが、呼びとめられた筈の当人であるユルスナールは、歩調を緩めることなく先を歩いている。

大通りは、沢山の人でごった返していた。行き交う荷馬車や様々な荷物を担いだ行商人。通りを朗らかに談笑する身なりの良い御婦人たち、街中を闊歩する男たち。

少し路地を覗けば、物売りの声も高く、軒先で店主と客が値段の交渉をしていたりする。

この街は、いつ来ても活気に溢れていた。

このような混雑だ。一度、逸れてしまったら、相手を見つけるのは中々に至難の業かもしれない。

自分が立ち止まったことで、隣を歩いていた筈の銀色の頭髪は、大分先に見え隠れしていた。

――――人違いだろうか。

そう思った矢先、

「ちょいとお待ちよ。無視することないでしょう？」

立ち止まったリョウの横を豊満な肉体を自信たっぷりに晒した一人の女性が通り過ぎていった。

若さというよりも円熟した女の色気を感じさせる雰囲気。広く開いた胸元は、その谷間を強調するように寄せられて、その直ぐ下に

は悩ましい曲線を描きだす絞られた腰（ウエスト）が続いていた。出ている所は出て、引っ込むべき所は引っ込む。女であるならば誰もが羨むような見事な凹凸だ。それは、実に迫力のある姿でもあった。

長く伸びた柔らかそうな明るい髪を翻して、女が通り過ぎた後には、余韻のように華やかで甘い花の香りが漂っていた。

リョウは、暫し、呆気に取られて、なんとも形容しがたい色気を振りまいている女の後ろ姿を目で追った。

このプラミィーシュレには、大きな色街があるとは話には聞いていたが、そのような界隈を想起させる女人を見たのは、初めてのことだった。

その女（ひと）が歩く度に、豊かな臀部が左右に揺れる。

女は足早にドレスの裾を翻すと、濃紺の外套を身に纏う銀色の髪を持つ男の隣に並んだ。

柔らかそうな女の手がしなやかに伸び、男の腕に掛かった。

それは、どこか現実味の無い、まるで映画の一場面（ワンシーン）のような情景だった。

この時、リョウは、唐突に理解した。これまで疑問に思っていた謎が、すとんと音もなく目の前に落ちて来たとでも言えばいいだろうか。

――――――――――成程。

百聞は一見に如かず。

あのような女の人を見てしまえば、どうして自分が少年に見えるのか、納得が行った。

あのような体つきを見せられてしまえば、張り合おうなどとは、露ほども思わない。最早、次元が違う。何を食べたら、あんな体つきになるのか、純粋に同じ人間としては生物学的観点から見ても実に興味深かった。ある意味、感心することしきりだ。

それまで立ち止まることなく、女の声に耳を貸さなかったユルス

ナールが、ここに来て、足を止めた。
簡素で地味な出で立ちであるにも関わらず、存在感があるのか、人目を引くユルスナール。その男が一人でいても、そこには吸い寄せられるような視線の吸引力が発生しているのに、その隣には華やかな極上の美人が寄り添っていた。
実に絵になる光景だった。
往来で立ち止まった二人に、通りを歩く人々がそれとなく視線を送る。その場所だけ、流れる空気が違うような錯覚さえ覚えた。
リョウの足は、その場所で固まったように動かなかった。
あの二人の間に割って入る勇気は流石にない。少なくとも二人は知り合いで。もしかすると、色街の娼館では馴染みの仲なのかも知れなかった。それは、女の方から醸し出される砕けた空気からも良く伝わって来ていた。
喉元をせり上がってきそうになる何かをリョウは慌てて飲み込んだ。
リョウは、ひっそりと息を潜めて、少し離れた場所から、二人の様子を見守ることにした。
「ちょっと、旦那。酷いじゃないの！　随分と久し振りだってのに、素通りは無いんじゃない？」
小さな扇子のようなものを手に、妖艶な女は恨めしげな視線を男に投げた。
だが、振り返ったユルスナールは、自分を引き留めた相手を軽く一瞥しただけで、特に表情を変えなかった。
「何だ。イリーナか」
「『なんだ』とは、なによ。随分な御挨拶じゃない？」
漸くこちらを向いたユルスナールに対して、ややきつめな口調とは裏腹に、その女は嬉しそうに微笑んだ。
「ねぇ、旦那、今晩辺り、どう？　今年はいつも以上に粒揃いなのよ。あたしが言うんだから間違いないわ。ブコバルの旦那も一緒に来てるんでしょう？　二人で来て頂戴よ」

そう言ってから、小さな含み笑いをすると意味深な流し目をくれる。

ぽってりとした厚めの下唇が艶々と光っていた。

「勿論、旦那なら、あたしを指名してくれたって構わないのよ。旦那はうちにとっちゃぁ上客だし、旦那程のいい男なら、余所の連中も黙ってるもの」

「いや。今日は生憎用事がある」

「なら、明日はどう？　みんな旦那が来るのを首を長くして待ってるんだから」

「いや。済まないが、今回は間にあっている」

色気を振り撒きつつ、その逞しい腕にしなだれかかりながらの誘いにも男は顔色を変えることは無かった。

淡々とした返答にイリーナと呼ばれた女性は、吃驚して目を瞬かせた。

「『間にあってる』って？　どういうことよ？」

「そのままの意味だ」

「随分とつれないことを言うじゃない」

尚も女が言い募る傍らで、ユルスナールは徐に辺りを見渡した。

往来には、沢山の人が集まって来ていた。皆、この界隈に突如として現れた美男美女の組み合わせを一目見ようというところだろうか。

ユルスナールの切れ長な瞳が周囲に向けられる。周りから遠巻きに二人の様子を眺めていた女たちは、途端に色めきだった。

あの男がこちらを見ただの。目が合っただのそんな囁きが風に乗って聞こえてきた。

急に騒がしくなった周りにリョウはそっと溜息を吐いた。その顔には、苦いモノを飲み込んだような複雑な表情が浮かんでいた。

あの様子は、恐らく、隣にいた筈の自分の姿がないことを探しているのだろうか。

いや、あのような美人から声を掛けられて、無表情に近い冷たいきらいのある顔からはその感情の機微が見え難いが、内心、満更ではないのかもしれない。男なら、誰だってそうだろう。ブコバルならば、喜び勇んで付いて行きそうだ。そんな益体もないことが頭の隅を掠める。

こんなに周りに騒がれていては、尚更、顔を出しにくい。また、面と向かってあの女の人を紹介されるのも、複雑な気分だった。そこは出来るならば避けたい所だった。

そうこうするうちに女の方が、焦れたようにユルスナールの頬に手を伸ばした。

突然、顔を背けた相手に、こちらを見てくれということだろうか。

――――――私だけを見て。

そんな主張と共に女の顔が男に近づいて行く。

リョウは壁際に身を寄せて、咄嗟に顔を背けていた。肩に掛けた鞄の肩紐部分をきつく握り締める。

それ以上、見てはいられなかった。

もやもやとした妙な形にならない感情が澱のように溜まり始める。きつく目を閉じることで、自分でも言葉にならない気持ちの揺らぎをやり過ごそうとした。

「あの二人が気になるのかい？」

突然、耳元で囁かれた声にリョウは身体を硬直させた。

閉じていた目を開けば、足下に黒い長靴が見えた。

聞き覚えのある声だった。嫌な予感に顔を上げれば、思いの外、近い所に柔和な顔立ちをした男の顔があった。

「……ウテナ、さん」

昨日、往来での揉め事に首を突っ込んで、治安維持を司る兵士たちの詰め所、通称【ツェントル】に連れられた先で、事情聴取を担当した兵士だった。兵士にしては珍しく柔らかな物腰に、一見、優

しそうな男に見えるのだが、『少年趣味』というこの世界でもやや特殊な嗜好を憚ることなく公言しているかなりの変わり者だった。お約束通り、少年に間違えられたリョウは、危うく粉を掛けられるところであった。

兵士の隊服に身を包んだ男の腕には、昨日と同じように緑色の腕章が付いていた。

「どうしたんですか。こんなところで」

街中を歩いていて、まさかばったり出くわすとは思わなかった。心臓に悪いことこの上ない。昨日の迫られた時の印象が強かったせいか、リョウの中でウテナの位置付けは、未だ警戒水域にあった。

驚き半分、声を上げれば、ウテナは人好きのする笑みをその顔に浮かべたまま、パチリと片目を瞑って見せた。

「今は見回りの最中」

そう言って、小さく笑う。

万人受けするであろうその微笑みも、リョウにしてみれば、胡散臭いことこの上無かった。

思わず口元が引き攣りそうになるのを寸でのことで堪える。

「ボクは運がいいよね。それともこれは運命なのかな。昨日の今日でキミに会えるなんて。これも神様のお導きだ」

「……はい？」

急に始まった妙に熱の籠った口説に、リョウは目を白黒させた。それは、リョウにしてみれば、実に突拍子もないことに聞こえた。

「あの、ウテナさん」

「なんだい？」

自分の記憶が正しければ、ブコバルは昨日、確かに自分が女であることを中にいた兵士に告げた筈だった。つまり、ウテナとイリヤにである。

「ワタシが女であることは御存じですよね？」

「ああ。勿論」

「なら、ワタシは当然、範囲外ですよね？」

何の、とは言わなくとも分かるだろう。
「フフフフ」
真面目な顔をして尋ねたリョウの鼻先で、ウテナは実にいい笑顔を浮かべた。
リョウの背中を嫌な汗が流れた。
ずいと顔を寄せられて、無意識に身体が引いた。
――――――からかっているのだろうか。
相変わらず感情の読めない微笑みを浮かべたまま、ウテナは言葉を継いだ。
「ねぇ、リョウ。今晩、空いてる？」
「……あの、意味が分かりませんが」
「やだなぁ、そのままの意味だよ。ボクと食事に行かないかい？　勿論、ボクが御馳走するよ。この街は初めてなんだろう？　美味しいお店を知ってるから。キミも気に入ると思うんだ」
それは余りにも予想外のお誘いだった。
「いや。あの、お気持ちは嬉しいのですが……」
「ホントかい？」
穏便に断りを入れようとした言葉尻を真逆の意味で捉えられて、リョウは慌てた。
ああ。異国の言葉は難しい。
「いや、あの。そうではなくて。お世話になってるカマールさんのこともありますし」
――――――夜遅い外出は控えたいので。
そう言ってみたものの、リョウの内心は恐々としていた。
ウテナと一対一で食事に出かけることなど有り得ないだろう。救難信号が頭の奥で目まぐるしく点滅を繰り返している。
押しの強い相手は正直、苦手だった。
どうやって断ったらいいのだろうか。
「なら、そのカマールっていう保護者の許可を取ればいいのかな？　昨日ツェントルに来ていた男だろう？」

ウテナは断られることを考えていないのだろうか。余りにも肯定的（ポジティブ）な考え方に、いっそ感心する位だ。
だが、ここで頷く訳にはいかない。
さて、どうしたものかと考えていると、
「生憎だが、今晩は先約がある」
底冷えするような低音が、耳に飛び込んで来ると同時に、身体がふわりと温かいもので包まれていた。大きな男の手が腰に回る。
顔を上げれば、直ぐ傍には、こちらを見下ろす瑠璃色の瞳があった。
「ルスラン」
リョウは思わず苦笑を漏らしていた。
またしても、この男に助けられた。
「あちゃぁ、見つかったか」
あからさまに残念という顔をして、手で額を覆ったウテナに、
「当たり前だ」
ユルスナールは鼻を鳴らすと事も無げに言い放った。
「ウテナと言ったな。まだ見回りの最中だろ。職務に戻れ。他の奴らが向こうで探している」
ユルスナールが顎をしゃくった先には、雲隠れをした仲間を探していたのだろう、同じ隊服に身を包んだ二人の兵士たちがいた。
ユルスナールは、手を上げて、彼らに合図を送った。こちらに気が付いた兵士たちは、その傍にいる仲間の姿に呆れたような顔をして、慌ててやってきた。
「ざーんねん」
悪びれることのない仕草に軽い声を上げて、ウテナは肩を竦めた。
「まぁ、いっか。じゃぁ、リョウ。またね」
――――――――あの二人の秘密を知りたかったら、いつでもお出で。
ひらりと片手を振って、その直前に、耳元に意味深な囁きを残して、はた迷惑な男は、軽やかに去っていった。

残されたリョウは、一人、大きな溜息を吐いた。
軽く自己嫌悪に陥る。ウテナも基本的に悪い人ではないのだろうが、不意に縮められる間合いは、実に心臓に悪かった。あのような誘いを上手くかわせない自分が悪いのか、それとも相手に対して警戒をし過ぎなのか。自分でも良く分からなかった。
「リョウ？」
苦い顔をしたリョウを心配してか、訝しげな声が上から掛かる。
「大丈夫か？」
仰ぎ見れば、穏やかにこちらを見下ろす瑠璃色の瞳とぶつかった。
それを見て、リョウは緩やかに頭（かぶり）を振った。
「すみません。お手数をお掛けしました」
「いや、構わない。それよりも、お前は謝ってばかりだな」
ユルスナールが小さく笑う。優しさを滲ませたその瞳に、リョウは、もどかしそうに眉根を下げた。
はた迷惑な男が去って。
そのまま、いつもの和やかで気の置けない空気に戻るかとの予想は、直ぐに裏切られた。
「ちょっと、旦那、いきなりなんだい？　話の途中で、吃驚するじゃないか！」
向こうから、先程の女がこちらに歩いて来ていた。
何だか厄介な気がした。リョウは出来るだけ、無表情を取り繕って、その女とユルスナールの話が終わるのを待つことにした。
自分は空気だ。通行人、其の一。決してこの目立つ男の関係者ではない。念仏のように繰り返す。
だが、そんな内心の願いも虚しく、ユルスナールの傍に立った女は、その脇にひっそりと佇む異分子の存在に気が付いてしまった。
こう言う時、女の人が持つ目敏さを凄いと思う。

「あら。お連れさんがいたんだね。随分と可愛らしい感じの子を連れているじゃない？」

――――――珍しいこともあるのね。

そう言って、妖艶な女の顔が近づいて来た。

少し吊り上がり気味の目元が、女の生来の気の強さを物語っていたが、ぽってりとした厚みのある唇が全体の印象を柔らかなものにしていた。

白い肌に青い瞳。豊かにうねる明るい茶色の髪は、長いままに片側に寄せられていた。

アクサーナの時も思ったが、この国の女性の例に漏れず、この人も背が高かった。

目線は幾分上の所にある。ここでは自分は上を見上げてばかりだ。

「あら？　驚かないのね？」

息も掛からんばかりの距離で形の良い眉が跳ね上がる。

至近距離に微笑まれて、リョウは、少し困ったように笑った。

異性ならば、ここは無意識に身体を引く所なのだろうが、同性相手には別段、気にはならなかった。それ以上、踏み込まれないことが感覚的に分かるからだろう。

そうこうするうちに、女の滑らかな指がリョウの顎を捕らえた。

舐めるような視線が降り注ぐ。

「綺麗な色ね。吸い込まれそう。黒いのは珍しいわ」

そして、満足が行ったのか、女がゆっくりとその手を離した。最後に戯れのように指先が顎を擽る。

「坊や、あと数年もしたら、いい男になるんじゃない？」

開いた扇子の影で、楽しそうに目を細めた女の言葉に、リョウはどっぷりと溜息を吐きたい気分に駆られた。

予想はしていたが、改めて真正面から口にされるとかなり凹んだ。

その威力（ダメージ）は、予想以上に大きい。

リョウがどこか遠い目をしていると、

「イリーナ」

苦々しいような声がユルスナールから掛かった。
「その位にしておけ」
窘めるような言葉に、だが、イリーナは艶っぽく微笑む。
「あたしはイリーナ、よろしくね？」
自己紹介をされて、名乗らない訳にはいかなかった。
「……リョウです」
相手が勘違いしていることは確かなので、出来るだけ淡々と軽く目礼を返すだけに留めた。
こうなったら自棄である。朴訥とした田舎少年を演じてみせようではないか。
「ふふふ。坊や、この辺りでは見かけない顔をしているのね。その黒い髪もさらさらとしていて素敵だわ。神秘的。そう、夜の精の化身みたいだわ」
うっとりとした表情を浮かべたイリーナに傍にいたユルスナールは、あからさまに溜息を吐いた。
「……イリーナ」
だが、聞いていないのか、イリーナは良いことを思いついたとばかりに顔を輝かせた。
「ねぇ、旦那。どうせなら、この坊やも連れていらっしゃいよ。ブコバルの旦那と三人で。この子なら、うちの子たちも喜ぶわ。それこそ、手取り足取り。最後まで面倒を見てあげるわよ？」
――――――――なんの話ですか！
リョウは自分の目の前で、話が段々と怪しい方向へ向かい始めているのが分かった。
これまでの会話から推察するに、どうもこの女性は娼館の女主であるようだ。そして、ユルスナールとブコバルはそこの常連客なのだ。
男二人が遊ぶのは勝手だが、そこに自分を巻き込まないでくれ。
「ねぇ、坊や。綺麗なおねぇさんたちと遊んでみたいとは思わない

？　坊や位の年頃なら、本当は興味があるでしょう？　楽しいわよ？　天国に連れて行ってもらえるわ」

リョウは、それ以上、考える事を放棄した。

途方に暮れたようにユルスナールを見上げれば、そこには、あろうことか、小さな笑いを噛み殺している男の姿が目に入った。

――――――――何ということだ。

そもそも、元はと言えば、この男とこの往来を歩いていたから、こんなことになったのだ。

それなのに、人の不幸を笑うとは何事だ。

リョウは目と鼻の先で笑いを零す男を無言のまま蹴り上げようとした。

だが、それは案の定、男の鍛え上げられた抜群の反射神経に、あっさりとかわされてしまう。

段々とどこかの誰かの真似が伝染(うつ)っている気がしてならない。

人に対して足が出るなんて、これまでの自分からは考えられなかった行動だった。男所帯に囲まれた末の影響なのか、それとも男らしい振る舞いをしているツケなのか、リョウは自分で自分が哀しくなった。

込み上げる笑いを隠す為か、大きな手で顔を覆った男に、

「ルスラン！」

思わず抗議の声を張り上げれば、ユルスナールは我慢できなかったのか、高らかに声を立てて笑い始めた。

イリーナがそれを見て仰天の表情を浮かべる。

――――――もういい。付きあってはいられない。

尚も笑い声を上げる男を尻目にリョウは、身体を反転させた。

「それでは、【オレ】は用事がありますんで。これで失礼します」

小さく頭を下げて、数歩、足を進めた先で振り返ると、満面の笑みを浮かべて見せた。

「それから、イリーナさん。折角のお誘いは有り難いのですが、【オレ】には、まだ早すぎますので、今回は謹んで辞退させて頂きま

す。代わりに、そこで笑っている銀色の髪の男を連れて行って下さい。どうやら暇を持て余しているようですので。それでは」

勢いよく足を繰り出した先、長靴の底が石畳に当たって大きな音を立てた。

「あ、おい、リョウ！」

直ぐ後ろで、いつになく焦ったような男の声が聞こえた。

だが、リョウは内心の腹立たしさにそれを無視して、足を進めたのだった。

自分の行為が酷く子供染みていることは頭では理解している。大人げないとも思う。それでも感情の部分は別の所にあって。

その苛立ちを紛らわすように、ずんずんと我武者羅に歩いた。

本当は駆け出してしまいたかった。だが、なけなしの自尊心と理性が、それを思い留まらせた。

半ば肩を怒らせて、どこか近寄りがたい空気を発しながら通りを足早に歩く『少年』の姿。

この辺りでは珍しい癖の無い黒髪を靡かせたその後ろには、明らかに困惑の表情を浮かべた背の高い男が、同じくこの辺りでは余り見掛けない銀色の髪が乱れるのもお構いなしに、拝み倒すようにして、前を歩く人物の機嫌を取ろうと躍起になっていた――――――――そんな噂が、笑い話のように数日、その界隈を賑やかにしていたのだとか、いないとか。

その真偽の程は、当人たちのみぞ知るという所である。

身から出た錆

――――――ルスランの旦那！

雑踏の中、不意に耳に飛び込んできた女の声に、ユルスナールは内心、ギクリとした。

往来を歩く男の顔色は、表面上、いつも通り、涼やかだ。余り感情の乗らない酷薄な造形。鋭い切れ長の瞳を跨ぐのは男らしい鼻梁だ。黙っていれば、全体として冷たい印象を与える男の表情だが、その口元が小さな微笑みを刷き、眦が下がれば、その印象はかなり劇的な変化を見せた。

だが、往々にして、自他共に厳しい生粋の軍人であるこの男が微笑む機会というのは、そうそうあることではなく、その微笑みを目にすることが出来る人物というのは実に限られていた――――――というのは、本人の預かり知らぬ所であった。

今、その薄い唇の端には、隠しきれない動揺の欠片が現れては消えていた。そんな表情が見られるのも珍しいことだった。

少し鼻に掛かった特徴のある女の声。【ウダレーニエ（力点）】の部分が、やや間延びする発声。

声を掛けた人物に、ユルスナールは心当たりがあった。

それは、この街で【幾度か】世話になったことのある娼館の女主の声だった。

なんと間が悪いことだろう。

舌打ちしそうになるのを寸での所で堪える。

ユルスナールの直ぐ傍らには、黒い頭髪が揺れていた。敢えて無造作に括られたであろう黒髪の直ぐ下には、ほっそりとした首筋と白い項が覗いている。

リョウとあの女主を引き合わせるのだけは避けたかった。

相手は何と言っても色街の住人だ。己の下半身事情を知る相手でもある。顔を合わせれば、何を言われるのか、知れたものではなか

った。独身男の生理事情など大っぴらにするものではないだろう。ましてや、少なからず好意を寄せている相手の耳には絶対に入れたくない事柄だ。男ならば、そこは何としても死守しておきたい砦である。

この事が相手に知れた時に返ってくるであろう反応を思えば、気まずい思いはしたくはなかった。

詰まらぬ男の保身と言ってしまえばそれまでだが、この時のユルスナールにとっては、正に至上命題でもあった。

このまま、気が付かぬ振りをすれば見逃してもらえるだろうか。何と言っても相手はやり手の娼館の主だ。人の感情の機微には敏い。無表情の中にも、そんな淡い期待を滲ませる。

ユルスナールは何食わぬ顔をして、足を速めることにした。

「ちょいと、お待ちよ」

だが、そんな男の小細工を嘲笑うかのように、水面下で進む密やかな計画を阻むべく、再び女の声が掛かった。

娼館の主は、目端の利く商売人であるよりも先に、女である。その重要な部分を失念していた男の負けであった。

――――――――このまま、振り切れるだろうか。

そんなことを思いながら、少し歩く速度を上げようと自分の左側を見下ろして、ユルスナールは固まった。

隣にある筈の黒髪が視界から消えていたのだ。ユルスナールの顔が色を失う。

その時の衝撃を何と言い表せばいいのだろうか。

口内が言い知れぬ渇きを訴え始めた。

――――――――置いてきてしまったのか？

そして、さりげなく後方を振り返った時、久し振りに見る妖艶な女の顔が、直ぐそこまで迫っていた。　それは、数多もの修羅場を潜り抜けてきた強かな女の顔でもあった。

ユルスナールは、咄嗟に周囲に視線を走らせた。

昼飯時とあってか、多くの人々でごった返す往来は、雑然として

いて、己が求める小柄な姿は人混みの中に埋もれてしまっていた。
――――――拙いな。
幾らリョウがこの辺りでは余り見かけないような目立つ色彩を持っているとは言え、これだけの人の中から、その唯一の色を見つけ出すのは、中々に容易なことではなかった。
そうこうするうちに、眼前には華やかな女の顔があった。
――――――仕方がない。
こちらを先に片付けることが肝要だろう。
ユルスナールは、瞬時に表情を改めた。
「なんだ。イリーナか」
今、気が付いたとばかりに振り向けば、相手があからさまに白けた顔をしたのが見てとれた。それで自分の小細工が相手に筒抜けであることを知る。
だが、ユルスナールはそのことを承知の上で話を続けた。
イリーナの用件は、実に他愛ないことだった。早い話が、年に一度、この街を訪れる自分に、店に顔を出せと言っているのだ。客として。
「間にあっている」
とてもじゃないがそんな気は起こらなかった。
険もほろろに撥ねつければ、イリーナは、驚愕の表情を浮かべた。女がつれない相手の気を引こうと尚も誘いの言葉を口にする。
そんな時、不意に強い視線を感じて辺りを見渡せば、少し離れた壁際に探していた色彩が見えた。
視線が光に鈍く反射する黒い頭部とその横顔に吸い寄せられていた。
――――――あんな所にいたのか。
だが、安堵の息を吐いたのも束の間、ユルスナールの目がすっと眇められた。

リョウの傍には、一人の男がいた。兵士の隊服に身を包んだ緑の腕章を付けた男。

ユルスナールは、その顔に見覚えがあった。昨日、リョウの尋問を行ったという【ツェントル】の兵士だ。

――――――あの優男。

無意識にユルスナールの奥歯が軋みを立てる。

忘れはしない。少年趣味のきらいがあるというあの男は、あろうことか、リョウに妙なちょっかいをかけていた。思い出すだけでも腹立たしい。ユルスナールにとっては不愉快極まりない事態だった。

――――――あの野郎、性懲りもなく。

近づき過ぎだ。

壁際に追い詰められて、遠目にもリョウの困った顔が見て取れた。

「イリーナ、悪いが急ぎの用が出来た。また今度」

「あ、ちょっと、何よ！　話はまだ終わってないわよ！」

女との不毛な会話を強制的に切り上げて、ユルスナールは置いてけぼりを食らわしてしまった片割れの元に急いだ。

だが、余計な虫を首尾よく追い払った後、最悪の事態がユルスナールを待ち受けていた。

イリーナが人混みの中から、こちらにやってきたのだ。

「ちょっと、旦那、酷いじゃない。突然、居なくなるなんて！」

怒りも顕わに吊り上がり気味の目尻を普段の二割増しにした華やかな女の顔が近づいてくる。女が歩く度に、惜しみなく晒された豊満な胸元が揺れた。

ユルスナールは、内心、頭を抱えたいのを押し隠した。

そして、キッとこちらを睨みつけたかと思った女の眼差しが、不意に逸れて、ユルスナールの外套の脇にひっそりと隠れるもう一人の人物に注がれることになった。

――――――ゴースパジ（なんてこった）！

ユルスナールは観念した。

「あら？」

興味を引かれたようにイリーナがその顔を覗き込んだ。そこには、数多もの若く見目の良い女たちを抱える娼館の主としての顔が、憚ることなく現れていた。

リョウの顔立ちは、その色彩もそうだが、この辺りでは見かけることの無い、言うなれば異国風だった。だが、決して崩れている訳ではない。寧ろ、人の目を惹き付ける何かを持っていた。

男と同じ格好をしているから、リョウの姿を見た人々は、その第一印象から【少年】との認識を持って疑わないが、そうだとしても、背筋の伸びた凛とした立ち姿は、女たちの視線を集めた。

リョウ自身は、その辺りのことをまるで頓着していないようで、それは自分が見慣れない顔立ちをしているからだと思っている節があった。自分のことは棚に上げておいて、ユルスナールは内心、それを苦々しく思っていた。

商売上、様々な人間がやってくる娼館だが、珍しいものを見慣れている筈のイリーナにとっても、リョウの存在は、その【勘（センサー）】に引っかかったようだ。

イリーナは顔を上げると、手にした扇子を開いて、こちらに意味深な流し目をくれた。

ユルスナールは、嫌な予感がした。

「まぁ、随分と可愛らしい感じの子を連れているじゃない？」

そして、娼館の女主としての癖なのか、品定めをするような目つきでジロジロとリョウを眺め回し始めた。

リョウの表情からは、その心の動きが見えなかった。突然、現れた癖のある女を前にして、驚き、固まっているのかも知れない。

女の滑らかな手が、リョウの頬に伸びた。顎を掴み、そっと顔を上げさせると息も触れんばかりの距離で顔を寄せる。

「綺麗な色ね。吸い込まれそうだわ。黒い瞳は珍しい」

イリーナの口元が弧を描く。うっとりとした妖艶な微笑みに、漸

く、リョウの顔に困惑に似た微笑みが浮かんだ。
「あら？　驚かないのね？」
普通の男ならば、一発で落ちてしまうと評判のイリーナの美貌だが、その色仕掛けは、同じ女であるリョウには、当然のことだが、効き目が無かった。
イリーナの様子を見る限り、リョウがまだ幼い少年であることを疑っていないようだった。
この国では、服装が第一印象を決める大きな基準になっている。仕方がないと言ってしまえばそれまでなのだが、その【常識】の隙を突いたリョウの存在をユルスナールは、常々、目から鱗が落ちるような気持ちで眺めていた。ここでもある意味、規格外であるその姿は、こちらの慣習を当たり前のものとして疑わないこの国の人々に、一石を投じる貴重な存在でもあった。

「坊や、あと数年もしたら、いい男になるんじゃない？」
将来を楽しみにしていると言わんばかりの女の台詞に、ユルスナールは、うんざりとした溜息を吐いた。
自分の美貌に自信を持ち、その効果的な見せ方を知っているイリーナは、その色仕掛けにも靡いたところを見せないリョウの態度が癪だったようだ。
イリーナがリョウの攻略を始めた。
珍しく自分から名乗りを上げて、相手の名を聞き出した。
そっと差し出された女の白い手を、男ならば、当然、手に取って、感激しながら口付けを寄せる所なのだろうが、いつになく硬い表情をしたリョウは、淡々と目礼を返しただけだった。
その余りにも硬派で素っ気ない反応に、イリーナは俄然、娼館の主、もしくは高級娼婦としての自尊心（プライド）を刺激されたようだった。
拙いことになったとユルスナールは思った。ここまで来てしまえば、妙な所で意地を張るきらいのあるこの女の手綱を自分では引き絞ることなど出来そうになかった。

そして今度は、何を思ったのか、リョウも入れてブコバルと三人で店に来いと誘う始末。

艶々と光る女の唇から紡がれる、ある意味、あからさまな誘いに、ユルスナールは口の端を盛大に引き攣らせた。

女の暴走を止めようと口を挟むが、まるで相手にされない。

ユルスナールは、自分の運の悪さを呪った。情けない話だが、こうなると早々に嵐が過ぎ去るのを待つしかった。

対するリョウの顔は、段々と無表情になっていた。

「ねぇ、坊や、綺麗なおねぇさんたちと遊んでみたいとは思わない？　坊や位の年頃なら、本当は興味があるでしょう？　楽しいわよ？　天国に連れて行ってもらえるわ」

――――――天国に連れて行ってもらえる。

男ならば、それはまさに夢見るところだろうが……。

大真面目に相手を口説き続けるイリーナに、ユルスナールは徐々に可笑みを覚えてきた。真実を知る人間からしてみたら、それはさぞかし滑稽である。喜劇の寸劇だ。少しこの通りを行った辺り、目と鼻の先の界隈で掛かる三文芝居よりも客が取れそうだった。

ユルスナールは、腹に力を込めると込上げて来る笑いの波を外に流そうとした。

勘違いをされているリョウの心中を思えば、ここで笑うなどもっての他だった。唯でさえ、自分の所為で、この女と顔を合わせたことになったのだ。ここで、自分がそんな失態をしようものなら、リョウをかんかんに怒らせてしまう恐れがあった。それだけは避けたかった。

ユルスナールは、個人的に、これまでリョウが怒りを顕わにする様を見たことは無かった。北の砦に居た時分には、ブコバルのからかいにも兵士たちの軽口にも、穏やかに笑って流して見せていた。精々、困ったような顔をして苦笑をして見せる位だった。今思えば、それは精神的に大人であることの表れでもあったのだが、当時は、

随分と落ち着いていると感心したものだった。
懐深く、優しい穏やかな気性のリョウも、今回ばかりはその反応が読めなかった。

そして、非常にも天はユルスナールに味方をしなかった。
必死になって笑いを堪えていたユルスナールだったが、それをリョウに見咎められてしまった。
思わずといった風に、リョウから足が繰り出されたが、軍人として鍛え上げられた反射神経は、それを難なく避けていた。
「ルスラン！」
リョウから上がった声を契機に、それまでユルスナールの堪えていた笑いの渦が爆発した。
気が付けば、声を上げて笑っていた。
ユルスナールが、ここまで感情を顕わにすることなど珍しいことだった。
柄にもないことをしている。その自覚はあった。
リョウを前にすると何故か調子が狂う。だが、それを満更でもないと思っている自分がいることも確かだった。
そうこうするうちに、案の定、リョウが腹を立ててしまった。
「それでは、【オレ】は用事がありますんで。これで失礼します」
淡々とした中にも、どこか余所行きな口調。
そして、イリーナの誘いに丁重過ぎる程の姿勢で断りを入れた後、ユルスナールの耳に驚愕の言葉が飛び込んできた。
「代わりに、そこで笑っている銀色の髪の男を連れて行って下さい。どうも暇を持て余しているようですので。それでは」
その容赦ない一言に、ユルスナールは、思いの外、相手の怒りを買ってしまったことを知って愕然とした。
今現在、北の砦で自分の留守を預かっているシーリス（副団長）に負けない程の寒々しいまでのいい笑顔で、そんな空恐ろしい台詞を口にすると、リョウは素早く踵を返した。

そして、小柄な背中は、みるみるうちに雑踏の中に紛れてしまった。

「あ、おい、リョウ！」

焦った声を上げて後を追おうとしたユルスナールを、イリーナが引き留めた。

「ちょっと、旦那。来てくれるんじゃなかったの？」

「馬鹿を言え」

初めて目にするユルスナールの動揺振りに、イリーナは、一瞬、目を見開いたが、直ぐにそれはからかうような目付きに変わった。

そして、妖艶な女は、小さく喉の奥を鳴らすと意味あり気に微笑んだ。

「ふふふ。つれないあの坊やによろしくね。いつでも待ってるからって。じゃあねぇ？」

漸く気が済んだのか、長いドレスの裾を翻した豊満な女の後ろ姿を見送って、ユルスナールはとっぷりと長い溜息を吐き出した。

――――――今日は本当にツイていない。

だが、こうしてはいられなかった。

ユルスナールは表情を改めると、足早に雑踏の向こうへ消えたほっそりとした背中を追うべく、その場を後にしたのだった。

苛立ちの矛先

「リョウ、待ってくれ」
足早に歩くリョウの傍らを大きな影が張り付く様にして並んでいた。
それを尻目に出来るだけ歩幅を大きく取って、勢いを付けて足を繰り出す。
石畳に当たる長靴の底が鈍い音を立てて鳴った。
だが、ぴったりと脇に並んだ男の足は、余裕たっぷりに付いてくる。それが、余計にリョウの闘争心に火を点けていた。
それもそうだ。男は背も高く、その上、足も長かった。男の一歩は、リョウの二歩に当たるだろう。歩幅の違いは歴然としていた。

「リョウ。悪かった。謝る。だから、いい加減、機嫌を直してくれ」
ユルスナールの顔には、珍しく困惑と焦りの色が浮かんでいた。
往来の人混みを器用に避けながら歩く男の声からは、いつもの冷静沈着さは何処に行ったのか、必死な感がひしひしと伝わって来ていた。
ユルスナールは、額に落ちかかる前髪もそのままに、依然として前を向いたまま歩き続けるリョウの顔を覗き込んだ。
リョウは、ちらりと右上にある男の顔へ視線を投げた。
努めて無表情を作ってはいるが、いつにないユルスナールの狼狽振りに、内心、動揺しているのも確かだった。
往来を歩くことで、リョウの腹立ちは収まりを見せていた。元々、のんびりとした気楽な性質で、人に怒りをぶつけたり、怒り自体を抱くことが苦手だった。
だが、子供染みた八つ当たりをしているという自覚はあって。今更、どんな顔をすればいいのか、引っ込みが付かなくなっていたの

も確かだった。
そのもどかしさを紛らわすように、リョウは歩く速度を上げていた。今にも走りだしてしまいそうだ。いや、気持ちだけを見るならば、心は既に疾駆していた。

そんな相手に埒が明かないと思ったのか、ユルスナールが強硬手段に出た。
「リョウ」
手を伸ばして、力任せにそのほっそりとした身体を引っ張る。
突然のことで、リョウの身体は簡単に男の元に引き寄せられた。
ユルスナールは、そのまま、有無を言わせない態度で、直ぐ脇の路地裏に足を進めていった。

人気の無い細い路地裏は石壁と煉瓦造りの建物とに囲まれて、昼間だというのに、薄暗かった。
人が一人通るのがやっとというような細い道が続いている場所だ。
隅には空になった酒瓶が何本か転がり、微かに差し込む陽の光に、品名部分(ラベル)が反射して見えた。
「いい加減にしろ」
ピシャリと放たれた言葉と共にリョウに身体は壁際に縫い留められていた。
リョウはきつく目を閉じた。
そうしなければ、胸内を去来する様々な感情の嵐に飲まれてしまいそうだった。
ユルスナールの叱責の声。自分に向けられたのを聞くのは初めてのことだった。
怒らせてしまった。きっと呆れているだろう。子供染みたことをする面倒な奴だと。そう思うと、目を開けるのが怖くて仕方がなかった。
相手との距離感を測り損ねたのは、明らかに自分の落ち度だった。

自分が少年に間違われることなど今更のことだろう。ズボンを履いて、この格好を続ける限り、それはずっと付いて回ることだ。その事自体は、もう受け入れた筈だった。

それに、あの女の人は、悪気があった訳ではないのだ。あの位、笑顔でかわして見せなくてどうする。あの人はユルスナールの知り合いだ。その二人の間に要らぬ詮索をするつもりもなかった。いや、それはしてはいけないことだ。

――――――自分が嫌になる。

不意に湧いて出て来た気持ちの高ぶりに、涙が滲みそうになるのを、唇を噛み締めることでやり過ごそうとした。

「リョウ」

骨ばった男の指が、俯いたままの顎に掛かる。

「こっちを向け」

予想に反して掛かった静かな声に、恐る恐る瞼を持ち上げれば、ユルスナールが緩く息を吐き出した。

漸く、視線を合わせると、

「俺が悪かった」

男の口からは、再び謝罪の言葉が繰り返されていた。

「なんでルスランが謝るんですか？」

思わず可愛げのない言葉が口を突いて出て来る。

「そう拗ねるな」

「拗ねてなんか……いません」

そう言えば、ユルスナールが小さく笑った。

「そうか？　なら、なんで口を尖らす？」

リョウは咄嗟に目を背けた。

自分の取っている行動が、酷く恥ずかしくなってきた。居た堪れないにも程がある。いい年をした大人のすることではないだろう。

そして、それを見透かされている。この男に。

「リョウ。目を逸らすな。こっちを見ろ。ん？」

至近距離でユルスナールの囁きが震えた。
頬の表面を男の吐息が掠める。その熱に、無意識に肌が粟立った。
ひんやりとした鼻先が触れた。
「ルスランこそ、こんなところでワタシに構っている暇はないんじゃないですか。さっきの女の人……イリーナさん、放ってきてしまったんでしょう？　いいんですか。誘われていたじゃないですか。あんな綺麗な人なのに。勿体ない」
「アレは、いいんだ。お前が気にする必要はない」
「……そうですか。そうでしょうね。すみません。差し出がましいことをしました。ワタシには関係のないことですものね」
完全な八つ当たりだった。感情の振り幅のままに出て来る憎まれ口をどうすることもできない。
「リョウ」
ユルスナールが戸惑うように溜息を吐いたのが分かった。そんな事をさせてしまっている自分が情けなくて仕方がなかった。
「何をそんなに怒っている？」
「怒ってなんか……」
「なら、何故、俺の目を見ない？」
素直になれない自分が、もどかしかった。
「それは……」
少しでも落ち着こうと緩く息を吐き出す。
「……ルスランこそ、どうし…て…」
だが、その先の言葉は、それ以上、音には成らず、くぐもった声と一緒に喉の奥に消えた。
「ん……」
ユルスナールの唇が、それ以上の言葉を強引に封じ込めたからだった。
リョウは混乱していた。
吸い込む呼気に、男からの熱が被せられてくる。それは、強引で、どこか執拗な、文字通りの【口封じ】だった。

長い間、半ば強制的に呼気を奪われて、再び息を取り戻した頃には、リョウはぐったりとしていた。
「なんで……こんなこと……」
「愚問だな」
男らしい口元が尊大な笑みを浮かべる。
先程まで我が物顔で這っていたその薄い唇を見詰めた。
「何とも思っていない相手に口付けをする程、飢えてはいない」
「なら……どうして」
「ん？　分からないか？」
耳元に落ちてきた甘い囁きに、リョウは余所を向いた。
自分から認めるには、余りにも気恥ずかしくて仕方がなかった。
お互い、決定的な言葉は口にしていない。それでも、そこに燻る熱を認めない訳にはいかなかった。
「アナタが考えていることなんて……」
――――――分かる訳がない。
そう言って、リョウは首を横に振った。その目元は、どこか気まり悪げに赤みを帯びていた。
軟化した空気にユルスナールが可笑しそうに喉を鳴らす。
リョウは、そっとそんな笑いを零した男を見上げた。
「……そうやって、今まで何人の女の人を口説いてきたんですか？」
不意に矛先の変わった話に、ユルスナールの眉が小さく上がった。
「何の話だ？」
空惚けた男の台詞に更なる追い打ちが掛かった。
「色街ではさぞかし引く手数多だったんでしょうね。どなたかさんと二人で」
「そんな訳あるか」
――――――ブコバルではあるまいし。
そう言って、それでもばつが悪くなったのか、視線を逸らしたユ

ルスナールに、リョウはひっそりとした笑いを零していた。それで、少し溜飲が下がった気分だった。
　漸く笑顔を見せた相手に、ユルスナールも目を細める。

「腹が減ったな」
　不意に、ユルスナールが口にした台詞に、
「そう言えば、お昼ご飯を食べに外に出たんでしたっけ？」
　当初の目的を思い出して、リョウも自分の腹部に手を宛てた。
　それから二人は、徐に顔を見交わせると肩を揺らして笑い合った。

『やれやれ。気の揉めることよ』
　そんな二人の姿を一羽の大鷲が、少し離れた屋根の上から眺めていた。
　一部始終を見届け終わると、用事が済んだとばかりに大きな羽をはばたたかせて、上空へと飛び立った。黒い影が大きく旋回する。その影が、路地裏を掠めた。

　そして、夜空の闇を映した黒い髪とそこに煌めく星々の色を映した銀色の髪をした二人組は、薄暗い闇の小路を抜けて、再び明るい日差しが降り注ぐ、表の大通りへと戻って行った。

苛立ちの矛先（後書き）

蓋を開けてみれば、犬も食わぬという痴話喧嘩な感じに収まりました。二人の関係も気持ち的に一歩前進といったところでしょうか。

スタローヴァヤの看板娘

あれから昼食を取ろうとユルスナールに連れて来られた場所は、飾らない庶民的な【スタローヴァヤ（食堂）】だった。

その店は、街の東側で開かれている市場から程近く、市中を緩やかに横断する大通りからは一本、脇道に入った所にあった。

開け放しにされたこじんまりとした木の扉を抜ければ、途端に中にいる客の熱気と様々な料理の匂いが顔面一杯に押し寄せて来た。

「はい。お待ちどう。熱々の【ガルショーク（壺焼きシチュー）】だよ！」

威勢の良い掛け声と共に前掛け（エプロン）を着けた体格のいい女が肉付きのよい腕をテーブルの上に差し出した。

「うお、旨そうだ」

客が待ってましたとばかりに揉み手をして唾を飲み込めば、

「何、言ってるんだい。当たり前だよ。心してお食べ。熱いから気を付けるんだよ」

女は艶やかな赤みを帯びた頬に、自信たっぷりにからからと笑い、客の男の肩をど突いた。

男が痛みに顔を顰めたのも束の間、他の客から声が掛かる。

「おーい。こっちは肉団子入りの【シー（スープ）】を頼む」

「あいよ。今行くから、ちょっと待っておくれな」

女は振り返ると、快活なよく通る声を響かせた。

店内は昼時とあってか、かなりの混み合いを見せていた。まさに掻き入れ時と言ったところだろう。

そこは、ちょっとした戦場のようでもあった。

狭い間口からは考えられない程、中は広々としていた。奥にはカウンターが据えられており、その手前には四人掛けのテーブルと椅

子が雑然と、だが、この場所なりの秩序と法則性に則り並んでいた。
飾り気の無い実用性重視のテーブルには、申し訳程度の質素なテーブルクロスが掛かっている。
そこには、多くの男たちがひしめいていた。
たっぷりとした髭を蓄えた職人風な男。これから季節は冬に入るというのに陽に焼けた肌を惜しげも無く晒した【マイカ（タンクトップ）】姿の労働者と思しき男たち。それから傭兵らしく腰に長剣を佩いた男。中には、ツェントルの隊服に身を包んだ兵士たちの姿もあった。
皆、仲間内で談笑しながら、思い思いに目の前の料理に舌鼓を打っている。中には、余程腹が減っていたのか、一心不乱に皿の中身を掻き込む若い男の姿もあった。
リョウは、なんだか懐かしい気分になった。
思い出すのは、北の砦の食堂だ。若い男たちの話し声。騒がしい程の賑やかな空気。料理長ヒルデの豪快な笑い声と厳めしい髭面が目裏に浮かんだ。
――――――皆、元気にしているだろうか。

それから、視線を転じて。
大きな筋骨隆々とした男たちの中を忙しそうに給士に回る女たちも、皆、其々に迫力があった。
肝っ玉母さん。女将さん――――そんな言葉が浮かんでくる。
注文を取って回る女たちの中に一際目を引く若い女の人がいた。
丸顔で鼻の辺りにそばかすが残る素朴だが愛嬌のある顔をしている。
白い前掛け（エプロン）の結び目がその女性が通る度に揺れた。
リョウは、その優しい顔立ちに見覚えが合った。
「……ソーニャさん？」
思わず漏れた声を喧騒の最中に拾ったその女性は、こちらを振り返るとたちまち相好を崩した。
ふわりと柔らかく笑う笑顔の印象に残る人だった。
「まぁ！　リョウじゃないの！　いらっしゃい」

「こんにちは。凄い盛況ですね」
店内の様子を感嘆気味に口にすれば、
「ふふふ。お陰さまでね」
柔らかそうなソーニャの片頬に小さな笑窪が現れた。

ソーニャは、カマールの工房兼住宅がある同じ通りに店を構える金物屋の主の娘だった。独り身のカマールとはこの街に弟子として入門した辺りからの古い付き合いだと言う。顔に似合わず甘いモノが好きだというカマールの秘密もソーニャから聞いたものだった。
父親が営む金物屋は滅多にお客が来ないから、外の【スタローヴァヤ(食堂)】に働きに出ているとは、世間話の序でに聞いてはいたが、まさか、こんなところでその場所に行き当たるとは思っても見なかった。
このプラミィーシュレは、大きな街で、一口に【スタローヴァヤ(食堂)】と言っても、街中には、数え切れない程の店があった。
人の縁とは奇妙なものである。
「ソーネェチカ！　こっちを頼むよ」
「はーい」
厨房から掛かる声に、ソーニャは首だけ振り返って、幾分高めな良く通る声を張り上げた。
そして、ざっと店内を見渡すと空いている席を探した。
「この通り、今は混んでるから相席になるけどいい？」
「はい。勿論」
そう答えると、リョウは隣に立つユルスナールを見上げた。了承を求めるべく『いいか？』と目線で問おうとすれば、当のユルスナールは店内の隅の方を見ていた。
「ルスラン？」
小さく声を掛ければ、ユルスナールがこちらを向く前に、
「おーい、こっちだ！」

合間を縫うように男の野太い声が響いた。
柱と衝立の影になって良く分からなかったが、目を凝らせば、ブコバルが顔を覗かせて、こちらに向かって手をひらひらと振っていた。
余りの頃合(タイミング)いの良さに驚く。
「約束していたんですか？」
「いや、偶々だ」
こちらを見たユルスナールに真顔で問えば、そんな答えが返ってきた。
まぁ、これまでの事を考えれば、この街で行動を共にすることも多かったであろうから、その行動範囲も似たようなものなのかも知れないが。
「知り合いがいるのね。じゃぁ、あそこにする？」
ブコバルのいるテーブルには、ちょうど二つ、空席があった。
ソーニャの訳知り顔にリョウがどうするのかと思っていれば、
「ああ」
ユルスナールからは簡潔な頷きが返ってきた。

先に足を進めたユルスナールの後に付いて、男たちでひしめくテーブルの合間を歩く。肩から提げている鞄がぶつからないように気を付けていると、
「おい、お前」
突然、横から伸びて来た手に腕を取られた。
リョウは、吃驚して振り返った。
そこには、焦げ茶色の上着を身に着けた一人の男が食事の席に着いていた。
なめした革だろうか、くすんだ茶色の袖から伸びた男の右手が、自分の左腕を掴んでいた。
鋭角な顎に掛かる縮れた鈍色(にびいろ)の髪。無造作に括られた髪の合間から覗くのは、ぞっとする程、色の無い瞳だった。

鼓動が妙な具合に跳ねた。
何か、粗相でもしてしまっただろうか。
「なんでしょうか？」
内心、冷や汗を垂らしながら、口を開く。
だが、男の口から紡がれた言葉は、リョウの意表を突くものだった。
「お前……国はどこだ？」
男が低く問うた。
余りにも不意打ち過ぎる質問に、リョウの頭は、一瞬、真っ白になった。
リョウは、じっと男を見下ろした。質問の裏に潜む男の真意を見出そうとでもするかのように。
かちあった視線の先。男の瞳は赤みを帯びた茶色をしていた。そこに色を無くした自分の顔が映り込んでいた。
――――――ナゼ　ソンナコトヲ　キクノダロウ？
暫し、見知らぬ男と見つめ合う形になった。
――――――ドクン。
鼓動がまた一つ、耳の奥で不規則に跳ねた。
「聞こえなかったか？」
落ち着いた男の声に、リョウは我に返った。
「あ……いえ。聞こえてはいます」
――――――だが、なんと答えたらよいのだろうか。
そう言えば、男は当然の如く、視線だけで続きの言葉を促した。
だが、対するリョウの口元は、中途半端に開いたまま、止まってしまった。
「どうした？」
催促するかのように、掴まれたままの場所に力が込められた。
リョウはそっと目を閉じた。迷いを払拭するかのように。ざわざわとした胸内からこの場合の【正しい】言葉を探す。全身の血がドクドクと駆け巡っているのが分かった。

適当に誤魔化せる程、この世界のことに精通した訳ではなかった。この国の知識すら、自分が持ち得るものは、幼子のそれのようなものだ。

――――――この男は、何を求めているのだろうか。

それが分からない。

だが、少なくとも、男が真剣であることは、その瞳から感じ取ることが出来た。

リョウは、小さく息を吸い込むと腹を括った。

「申し訳ございませんが、その質問にお答えすることはできません」

告げるべき答えを持ち合わせていなかった。

そう言えば、男があからさまに顔を顰めたのが見て取れた。

それもそうだろう。普通、出身はどこかと尋ねられて、答えられないというのは有り得ない。

考えられるとしたら、記憶喪失に陥って過去の事を忘れているか、それとも出身を明らかに出来ない何か特別な事情があるとかだ。例えば、それを公にすることが命の危険に繋がるといった。それから、両親のいない孤児の場合も考えられるか。みなしごの為、その出自が分からないという。前者は余程のことでない限り起こり得ないことであろうから、普通に考えれば、後者のいづれかということになる。

リョウは困惑気味に眉を下げた。そして、力なく首を横に振る。

それで相手が何かを感じ取ってくれれば良いのだが。

誰もが真っ正直に光の下を歩いて行ける訳ではない。それは、ここでも変わらない真実の一つだろう。

そんな淡い期待を抱いていれば、リョウの隣に影が差した。

自分の後を着いてこないリョウを心配したユルスナールが様子を見に来たのだった。

「どうした?」

「いえ」

どこか困惑気味に苦笑に似た表情を浮かべたリョウを見て、ユルスナールはテーブルに座る男を見下ろした。
「連れが、何か粗相でもしただろうか？」
ユルスナールが低く尋ねた。
テーブルの男は、突然、介入してきた硬質な空気を身に纏った男を一瞥すると、
「いや」
そう言って、掴んでいたリョウの腕をあっさりと開放した。
そして、再び、何事も無かったかのように、止まっていた食事を再開した。
リョウは、戸惑うようにテーブルの男を見た。
てっきり、自分が答えを口にするまで、腕を掴まれたままかと思っていた。それが意外にも直ぐ離された。先程のどこか緊迫した空気が嘘のように男の関心が自分から逸れていた。
男を見る。だが、その視線は、手元の皿に注がれたままだった。
「行くぞ」
ユルスナールの大きな手が、先を促すように背中に当てられる。
そのまま踵を返そうとして、それでも何か引っかかるものを感じたリョウは、ちらりと後方を振り返った。
すると、男が顔を上げていた。赤みを帯びた茶色の光彩が細められていた。
再び、目が合った男は、小さく口を開いた。
「兄姉(きょうだい)はいるか？」
その問いかけに、リョウは首を横に振ることで答えた。
「……そうか」
小さく息を吐き出した男は、一瞬、途方に暮れたような哀しみの表情をその顔に浮かべた。
「済まなかった」
そして、辛うじて聞き取れるか聞き取れないかの小さな呟きを背に、リョウはブコバルがいるというテーブルに向かったのだった。

どこか釈然としない気持ちを抱えたまま。

四人掛けのテーブルには、ブコバルの他にもう一人の男が席に着いていた。

それは、リョウの知らない顔だった。

「久し振りだな。元気にしていたか」

「ああ。そっちこそ。元気そうで何よりだ」

男は食事の手を止めて立ち上がると、ユルスナールと手を取り合い、挨拶を交わした。

暗めの茶色の髪を寸分の隙も無く後ろに撫でつけている。秀でた額にの直ぐ下には、神経質そうな細い眉が引かれていた。

一言で言って、男が身に纏う空気は、この【スタローヴァヤ（食堂）】では浮いていた。何と言うか、とても上品な感じがするのだ。それは男が身に纏う詰襟の軍服らしい隊服と真っ直ぐに伸びた背筋に良く現れていた。隙の無い着こなし。身に着けている服も上等なものだった。

その前に座るブコバルは、言わずもがな、この場所の空気に良く溶け込んでいた。身なりも北の砦に居た時よりももっと砕けたもので、荒くれ者の男達に混じっても粗野で野卑な所のある男には違和感を覚えない感じであった。

片や優雅な身のこなしの紳士風の男。片や荒削りで無骨な風体の傭兵のような男。

一体、二人にはどんな繋がりがあるのだろう。

その正反対な組み合わせをリョウは妙な気持で眺めていた。

「リョウ。紹介する。この男は、ドーリン。古くからの友人だ」

ユルスナールの紹介に、リョウは軽く頭を下げた。

「初めまして。リョウです」

「ああ、話には聞いている」

再び着席し、白い【サルフェートカ（ナプキン）】で口元を拭う。
淡々と返ってきた男の言葉にリョウは、思わずブコバルの方を見た。
「なんだよ？」
目が合ったブコバルは途端に人の悪そうな笑みを浮かべた。
「いえ。ブコバルが何を話したのかと思いまして」
ブコバルの口から自分の事が他人に語られるのは何とも恐ろしいことに思えた。
何処まで、何を話しているのだろうか。
内心、恐々としながらも正直に口にすれば、
「ルスランが、えらく世話を焼いているという少し毛色の変わった奴がいると聞いたまでだが？」
器用に【ノーシュ（ナイフ）】と【ビールカ（フォーク）】を使いながら、ドーリンが簡潔に言い放った。
「……そう……ですか」
能面のような表情は余り変わらない。有能な官吏のような雰囲気だ。
北の砦にいるヨルグのようだとリョウは思った。
鉄仮面と揶揄されることの多い表情の男は、その実、とても細やかで繊細な神経の持ち主だった。
懐かしい人物の面影のようなものを見出したリョウは、小さく微笑んでいた。
「何だ？」
それに居心地が悪そうに、ドーリンが身じろいだ。
「いえ。ヨルグのことを思い出していました」
そう口にすれば、ドーリンが、食事の手を止めて、まじまじとこちらを見たのが分かった。
「まぁ、似ているかも分からんな」
それまでの遣り取りを聞いていたユルスナールが、可笑しそうに笑った。

「ハッ、やっぱ、血は争えねェって感じか？　おい」
そこにブコバル迄もが割って入る。
二人の言葉に、リョウが尚も目を瞬かせていると、
「似ているのはそうだろう。お前の所とヨルグの所は、確か縁戚関係にあっただろう？」
知る人ぞ知るというようなユルスナールの言葉に、
「二代前だ。母方だがな」
ドーリンが淡々と返した。
ヨルグと目の前の男が血縁関係にある。そう聞いて、リョウは合点した。
「そうでしたか。ヨルグには北の砦で良くしてもらったので、懐かしくなってしまって……」
リョウが穏やかな微笑みを浮かべれば、ドーリンはその様子を不思議なものを見るような気分でじっと見つめていた。
ドーリンは、勿論、ヨルグとは面識があった。面白味に欠ける所がやや難点だが、仕事一筋の有能な男だと思っている。
ドーリンとしては、真面目で実直、鉄仮面の名を恣にしている男が、他人の世話を焼くという行為が、どうにも想像が付かなかったようだ。
だが、良識あるドーリンは、この場で、それ以上の詮索はしなかった。

――――――それはさておき。
「リョウ。何にするか決まったか？」
ユルスナールから声を掛けられて、
「ええと、そうですね」
リョウはぐるりと店内を見渡した。注文をする為に、メニューのようなものを探すのだが、見当たらない。
そう言えば、こういったお店らしい店で食事をするのは、初めて

だということに思い至った。
「あの、料理の品名が書いてあるような目録（リスト）一覧みたいなものはないんですか？」
リョウとしては当たり前のことを尋ねた積りであったのだが、ユルスナールには不思議そうな顔をされてしまった。
「いや。そんなものはないぞ？　基本的なものは置いているだろうが、後は店の店主の裁量によるからな。その日の仕入れによって出来るものも違う」
詰まり、当たりを付けて食べたいものが出来るかどうかを聞く。若しくは、今日のお勧めを店の人に聞いた方が早いと言うことなのだろう。随分と大雑把だが、それはそれで面白い。
だが、この国の基本的（スタンダード）な料理なるものをよく知らない自分には、かなり難易度（ハードル）の高いものだと思わざるを得なかった。
「……そうなんですか」
リョウはさり気なく他のテーブルを見渡した。
こういう時、周りの人間が食べているものを見るのが一番だ。
そして、二つ向こうのテーブルに着いている男の皿の中身が気になった。
「ルスラン。あの人が食べているものは何ですか？」
スープの中に、何やら白い『すいとん』のようなものが入っているように見えた。湯気を立てて労働者風の男が食べる姿は実に旨そうであった。
「ああ。あれは【ペリメニ】だ」
「【ペリメニ】……ですか」
ペリメニ、ペリメニ……と新しい響きを持つ言葉に、もごもごと口の中で単語を反芻してみる。
「あのスープの中の白いモノは？」
「あれが【ペリメニ】だ。中に刻んだ【ルーク（玉ネギ）】と【ミャーサ（肉）】が入っている。ああやってスープに入れて食べるんだ」
「なるほど。じゃぁ、それにします」

半ば、感心したように口にすれば、ブコバルとドーリンの二人が、何とも言えないような顔をしてこちらを見ているのが分かった。
「どうか……しましたか？」
「リョウ、お前、ひょっとして、とんだ箱入りか？」
――――――前々から、頓珍漢なことを言う奴だとは思っていたが。
行儀悪く【ローシュカ（スプーン）】を突き出して、繰り出されたブコバルの言葉に、リョウは、首を傾げた。
「どういう意味ですか？」
告げられた事がよく理解できなくて、ブコバルの顔を見れば、
「おいおい、冗談だろ。お前、【ペリメニ】を知らないなんざぁ、この国の人間じゃ有り得ねぇだろうがよ。庶民の代表的な喰いもんだぜ？」
そんな言葉が返ってきた。
心底、驚いたのか、目を丸くしたブコバルに、リョウは苦笑をして見せるしかなかった。
またここで一つ、自分の知らないこの国の【常識】というものにぶつかった。
だが、不思議と苛立ちは湧かなかった。
「それは仕方がないでしょう？　こういう所で御飯を食べるのは初めてなんですから」
これまでリョウが食べてきたものと言えば、ガルーシャやリューバから教わった所謂、家庭料理の類で、北の砦で世話になっていた時は、毎回出される物が決まっていたから、別段、自分から選ぶようなことはなかった。
「箱入りというよりも、田舎者ですかね」
ブコバルの言葉を真似るように返してみる。
「ワタシが持ち得るこの国の知識は、皆、ガルーシャから教わったものですから」
「ガルーシャとは……ガルーシャ・マライ殿のことか？」

ドーリンがその手を止めて、虚を突かれたような顔をした。
「はい」
「そうか」
正直に種明かしをすれば、今度はユルスナールがこちらを見ていた。
ユルスナールは、多くを問わない。冷静に客観的に見れば、自分が訳の分からないことを言っているという自覚はあった。それなのに、これまでユルスナールは必要以上の詮索をしてこなかった。
そう言えば、この男と肩を並べて、食事をするのは初めてのことではないだろうか。そんなことをぼんやりと思った。
ユルスナールの瑠璃色の瞳は、柔らかく細められていた。
穏やかな凪ぎの色。
リョウは、その温かい眼差しにそっと微笑み返していた。
いづれ、本当のことを伝えられるだろうか。
いづれ、時が来たら。
きっと、それは俄かには信じられないことだろう。自分が逆の立場で合ったならば、そう思う。
だが、この男には、その時が来たら、全てを打ち明けたい。そう思った。

――――――――ゴホン！
何故か、見つめ合った二人にドーリンが態とらしく咳払いをした。
「注文は決まったかしら？」
そして、タイミング良く、ソーニャが水の入ったコップを手に注文を取りに来た。
「【ペリメニ】を一つと【ボールシュ】を一つ」
ユルスナールが簡潔に告げる。
「【フレープ】は幾つ？」
「【クソーチク】でいいから、小さいのを一つ」
「【ブーラチカ】半分だな」

そして、厨房に向けて、ソーニャの良く通る声が響き渡った。
こうして、賑やかな男たちの笑い声を背に、実に個性的な男たちとの食事が始まりを告げたのだった。

スタローヴァヤの看板娘（後書き）

お店では、人が食べているものがおいしく見える不思議。【ペリメニ】はシベリア地方の料理、水餃子のようなものです。寒いと温かいものが食べたくなります。ユルスナールが頼んだ【ボールシュ】はボルシチです。発音表記にしました。

悪魔の招待状

「ブコバル。明後日の晩。【エリセーエフスカヤ】だ」
「はぁあ？」
食事の最中、ユルスナールから簡潔に告げられた言葉に、ブコバルはあからさまに顔を顰めた。
「勿論。お前持ちだぞ」
「げ」
追い打ちを掛けるように放たれた条件を聞き、途端に苦々しい顔をしたブコバルの隣で、一人食事を終えたドーリンは、優雅な仕草で【サルフェートカ（ナプキン）】を手に口元を拭うと、それまでの澄ました無表情からは想像が付かない程の『いい笑み』を浮かべた。それは、見る人によっては寒気をもたらしそうな悪どい類の微笑みに見えた。
その豹変振りを目の端に捉えて、リョウは一人、合点した。
要するに【類は友を呼ぶ】。この男もユルスナールとブコバルの友人であると言うことだ。澄ました仮面の下には、とんだ本性が隠されていた。
「面白そうなことを企んでいるな」
ドーリンがそう言えば、
「ああ。どの道、一度は顔を出さねばならないからな」
斜交いに座っていたユルスナールは口角を上げた。
意味深に目配せをし合った二人の男たちは、そのまま密やかに囁きを交わす。
まるで、飴色をした高級な調度品が並ぶ中で、高い酒の入ったグラスを傾けながら交わされそうな場の空気をリョウは不思議な面持ちで眺めていた。
しかしながら。ここは賑やかな男たちのだみ声が響く街の食堂（スタローヴァヤ）で。その密談風景は、庶民的なこの場所では実に違和感を覚える光景だった。

「どれ。俺も一枚噛むか」
小さく吊り上がった口角のままにドーリンが言えば、
「冗談じゃねぇぞ。唯でさえあの店は肩が凝るってのに。ドーリンまで来んのかよ」
ブコバルは、心底嫌そうに目を眇めると椅子の背凭れに大きな身体を凭せ掛けた。
神経質そうなドーリンの眉が、器用に片方だけ上がった。
「一人も二人も大して変りがないだろう？」
「飯が不味くなる」
ぶすりとブコバルが本音を漏らせば、
「そうでなくては意味がない。お前が楽しんでどうする？」
止めを刺さんばかりの台詞がユルスナールの口から吐き出された。
「ひでぇ。鬼だ。悪魔だ」
「何とでも言え」
二対一。話の内容は良く分からなかったが、明らかにブコバルが不利な展開だった。
いつも傍若無人で、我が道を行くブコバルが遣り込められるという珍しい事態に、リョウは一人静かに【ペリメニ】のスープを啜りながら、内心、目を丸くしていた。
そして、ユルスナールは元より、ブコバルの手綱を握れそうなドーリンの手腕に密かに尊敬の念を抱き始めていた。
そんな他愛もないことを考えながら、熱々の【ペリメニ】を頬張る。生地はもちもちとした触感で、中には丸みを帯びた厚みのある肉団子のような塊が入っている。一口噛めば、口の中に溢れんばかりの肉汁が広がった。
初めて食べる【ペリメニ】は実に美味しかった。今度、スフミに寄ったらリューバに作り方を教えてもらおう。
一人ほくほくと幸せな気分で自分を虜にした【ペリメニ】の味を堪能していると、
「リョウ。お前もだぞ」

不意にこちらを向いたユルスナールが、そんなことを口にした。
唐突とも言える話の振りにリョウは反応が遅れた。
「……はい？」
「明後日の晩、空けておけ。夕方、迎えに行くからな」
続いて淡々と告げられた決定事項のような言葉に、【ローシュカ（スプーン）】を持ったまま、リョウの手が止まった。
「何の話ですか？」
「ブコバルに飯を奢らせると言っていただろう？」
――――――――この間のシャツの詫びに。
それと今の話がどう繋がるのだろう。
「ああ。あれは別に良いですよ。もう過ぎたことですし」
実際の所、もう気にはしていなかった。【ツェントル】の軍医・ステパンから貰った薬を塗布して、ユルスナールの滞在する宿屋に厄介になった時、ユルスナールは何処から調達してきたのか、代わりのシャツをくれたのだ。それで十分だった。今は、それを身に着けている。
不思議にも大きさは自分にはちょうど良かった。肩のところが若干、余るが、それ位は別段気にすることでもない。大き過ぎず、小さ過ぎず。この国の人達の標準的な体格を鑑みれば、子供服を扱っている店にでも行ったのだろうか。そうでなくとも、ユルスナールが、かなり気を使ったであろうことは分かった。
だから、リョウとしてはあの一件は、もう終わったことにしていたのだ。それを急に蒸し返されて、少し驚いた。
「そういう訳にはいかないだろう」
「あ？　リョウも連れて来んのか？」
ユルスナールの言葉に、ブコバルが急に興味を惹かれたように身を乗り出した。
「ああ。その積りだ」
そして今度は男二人で目配せをする。
「そいつはいい。……なら、しゃーねぇか」

「あの……話が、全く見えないのですが」
妙な展開に、リョウは内心、顔を引き攣らせていた。
「まぁ、いい。美味いものが食えると思っていればいい。楽しみにしておけ」
だが、ユルスナール自身は、それ以上この場で話をする積りはないようで、どうやら、三人の男たちの企みにリョウが参加するのは本決まりらしかった。
先程まで、あれ程嫌な顔をして拒絶反応を見せていたブコバルが、急に掌を返したように乗り気になっていた。それがやけにリョウの不安を煽った。
その予感は、後日、見事的中することになる。

食事の後、ドーリンと共に【ツェントル】に戻ると言ったブコバルたちと別れて、ユルスナールに連れられたリョウは、とある場所を訪れていた。
それは賑やかな大通りに面した一角だった。
ガラスが大きく填め込まれた木の扉へユルスナールは迷うことなく手を掛けた。
重厚な石造りの建物の軒先には、小さな看板が掛かっている。その看板には、一組の着飾った紳士・淑女の絵が描かれていた。
扉に付いていたのだろうか、ドアを開けると呼び鈴のような鈴の音が小さく響いて、来客を知らせた。
濃紺の外套を纏った長身の男が店内に足を踏み入れると、
「これはシビリークス様、ようこそお出で下さいました」
店の主と思しき男が、すぐさま駆けつけて来た。
細めの面に小さな口髭を蓄えた温厚そうな顔立ちの男は、ユルスナールを認めると慇懃に胸元に手を宛てて軽く会釈をした。それは、この国では専ら目上の相手に対して行われる礼の一種だった。
「この間のものを見せて貰いたいのだが」

そう切り出したユルスナールに、店の主は上品な微笑みを浮かべると合点して見せた。

「ええ。ございますとも」

そして、ちらりと濃紺の外套の後ろに半ば隠れるようにして立つもう一人の姿へ視線を走らせると、

「そちらがお連れ様でございますね」

一つ、したり顔で鷹揚に頷いて見せた。

「さぁ、こちらへどうぞ」

奥へと足を進めた主人の後に付いて、ユルスナールも足を進めた。

リョウは中に入るとぐるりと店内を見渡した。

そこは、街の仕立屋のようだった。天井まで続く壁際の棚には、様々な種類の反物と思しき生地が積まれていた。視線を転じれば、大きな姿見と低いテーブルと長椅子のある応接室のような空間。それから、作業台のような広い机。隅の方には、色とりどりの刺繍糸やリボンが置かれた棚もあった。トルソーのような人の体型の型を取った木型の模型が置かれ、その首元には巻尺のような紐がぶら下がっていた。

そして、少し奥の方には、見本（サンプル）か、作成途中の注文品なのか、出来上がった服が衣紋掛け（ハンガー）のようなものに吊るされていた。

仮縫い途中と思われる木型の一つにリョウの視線は吸い寄せられていた。

それは女性物の【プラーティエ】、所謂、イヴニング・ドレスだった。光沢のある藍とも群青とも取れる深い艶やかな濃紺の生地がゆったりと襞（ドレープ）を生み出していた。

「綺麗なものだろう」

気が付けば、ユルスナールが隣に立っていた。

「これは【シーニェイェ・マルタ】の特産品だ」

【シーニェイェ・マルタ】――――――その名前には心当たりがあった。

アクサーナの姉エレーナとキーン夫妻が暮らす街の名前だ。そしてその街の特産品は、藍色の染料で染めた生地だとのことだった。

「これがそうですか」

リョウの口からは溜息のようなものが漏れていた。女性であるならば、綺麗なものを前にして思わず漏れてしまうという類のものだった。

このような華やかな衣装を身に纏う女性は、どんな人なのだろう。

「気に入ったか？」

「綺麗ですね」

「お連れ様は、こちらにお越しいただけませんか」

振り返れば、この店の主が巻尺を手に穏やかな表情をして立っていた。

「ワタシのことですか？」

「そうだ。採寸を頼んだ」

――――――何のために？

怪訝そうな顔をしたリョウにユルスナールは小さく微笑んだ。

困惑を隠すこともせずに、リョウは言われるままに店主の前に立った。

促されるままに上着を脱いで、シャツ一枚になると、仕立屋の主は長い指を器用に動かして瞬く間の内に採寸を済ませた。

「いやはや、華奢なお方ですなぁ」

どこか感嘆に似た溜息を吐いた後、

「ですが、御心配には及びません。やりようは幾らでもあります」

――――――久々に腕が鳴りますな。

その顔に喜色すら浮かべて目を細めた。

「そうか」

ユルスナールは店主の言葉に満足そうに返すと、半ば所在無げに立っているリョウに声を掛けた。

「リョウ。当ててみろ」

ユルスナールの合図で店主がトルソーに掛かっていた仕上げ途中のドレスを手に取った。
「さぁ、こちらへどうぞ」
どこか品のある柔らかな微笑みを向けられて、リョウは尚のこと戸惑うようにユルスナールと店主の顔を代わる代わるに見た。
「あの……」
リョウは突然の成り行きに面食らっていた。ユルスナールの考えていることが全く理解できなかった。
まさか、自分にこの【プラーティエ（ドレス）】を着せようというのだろうか。
何のために？
ここは、どうやら仕立屋だ。しかも高級な部類の。この店の店主の応対を見る限り、ユルスナールはここでは、上客の部類に入るのだろう。
リョウはてっきり、ユルスナールがこの店で自身用に服を頼んでいたのかと思ったのだ。それなのに急に自分のことを引き合いに出されて、訳が分からぬ内に話が進んでいる。

ユルスナールは、リョウの傍に来ると耳元に顔を寄せた。
「リョウ。着せて見せてくれ。明後日に間に合わせる為には、若干の手直しが必要だからな」
思いも寄らない言葉に、リョウは心底驚いてユルスナールを仰ぎ見た。
「明後日……ですか？」
「ああ。【ヴェチェリンカ】にな」
「【ヴェチェリンカ】……ですか」
【ヴェチェリンカ】――――――初めて耳にする言葉に、リョウは首を傾げた。
その言葉が、【ヴェーチェル（夜）】という単語から派生していることは、何となくだが、想像が付く。【夜】に関わる何か。そして、明

後日という単語。何かが繋がりそうで繋がらない。
「【ヴェチェリンカ】が分からないか？」
リョウが怪訝な顔をしているのをユルスナールは見逃さなかった。
「はい」
正直に答えれば、
「そうだな」
少し考える風にした後、
「ちょっとした食事会のようなものだ」
「【ヴェーチェル（夜）】に開かれる？」
「ああ」
正解だと言う風にユルスナールの目が細められた。
それからリョウは序でとばかりに気になったことを訊いた。
急に【スタローヴァヤ（食堂）】での男たちの会話が、何らかの意味と共に現実味を帯びてきたのだ。
「あの、【エリセーエフスカヤ】というのは？」
「ああ、それは店の名前だ」
詰まり、これまでの情報を簡単に整理すると、【エリセーエフスカヤ】という店で開かれる食事会（この場合はパーティーの類か？）に出る為に、この【プラーティエ（ドレス）】が必要ということになる。
漸く、飲み込めた事態に安堵したのも束の間、続いて明らかになった事実にリョウは肝を冷やした。
「ルスラン。もしかしなくても、凄く高級なお店で食事をするということですか？」
ブコバルを懲らしめたいが為であったのだろうが、それは余りにも予想外のことに思えた。
「まぁ、入店の際にそれなりの格好は求められるが、そこまで畏まることもない。ブコバルはああいった堅苦しいことを厭うから、罰にはちょうど良いと思ったまでだ。いい薬にはなるだろう」
「もしかして、その費用もブコバル持ちなんですか」
「そうだ。だが、心配はいらんぞ。ああ見えてあいつも貴族の端く

れだ。この位大したことにはならんからな」

男の口から次々と明らかになる真実の断片に、リョウは茫然とした。

ああ。ブコバルもユルスナールも貴族なのだ。上流階級の人間、昔風に言えば殿上人のようなものか。

改めて二人が身を置く場所は、一般庶民とは違う世界なのだと思わずにはいられなかった。だとすれば、先程、【スタローヴァヤ（街の食堂）】で浮きまくっていた男、ドーリンも彼らと同じ側の人間なのだろう。小さい頃から身に着いた育ちの良さは、やはりそうそう誤魔化せるものではないのだ。

自分の預かり知らぬ所で、随分と話が進んでいたようだ。

ブコバルの奢り飯――――――それがこんな事態になると誰が予想し得ただろうか。

「あの……ワタシ……こちらでの食事の作法とか、よく知りませんよ？　大丈夫でしょうか？」

高級店での晩餐会。いや、それ以上に、この場所では階級社会が生きているのだ。細かいしきたりや決まりごとはそれこそ沢山あるのだろう。そう思った途端に言い知れぬ不安のようなものが押し寄せて来た。元より一般庶民の出だ。雲の上のことなど知りえない。

様々なことが浮かんで来た所為か、急に情けない顔をしたリョウを、ユルスナールは心配いらないと軽く笑い飛ばした。

「なに、問題はない。当日は個室を用意してもらう予定だからな。美味いものが食べられると気楽に考えていればいい」

ユルスナール達からすれば、それは日常の延長にある事柄に違いないのだろうが、リョウにとっては、とても遠い世界の話に聞こえた。現実味の無い煌びやかな世界のお話。一時でもそこに紛れこむのは恐れ多いことだった。

「……でも。こんな【プラーティエ（ドレス）】……」

店主が掲げ持つドレスは、店内に入り込む自然光の下、艶やかな光沢を描き出していた。色は深い濃紺という控え目なものだが、表

面の光沢は明かりの濃度で様々に変化をした。滑らかで柔らかそうな生地の風合い。着る人を選ぶ代物だ。自分にはどう引っくり返っても着こなせそうにはない。そう思わずにはいられなかった。

「気に入らないか？」

「まさか！　こんな高価なものをワタシが着るなんて。とても似合うとは思えないのですが……」

不安に慄くリョウに、ユルスナールがそっとその肩を抱いた。

「リョウ。見せてくれ」

「本当に……これを着るんですか？　……ワタシが？」

信じられないとばかりに、だが、やはり、どこかで女としての性（さが）が疼くのか、その視線は、店の店主が持つドレスに釘付けだった。

あともう一押し。そんな思いで、ユルスナールはとっておきの秘密を披露した。

「リョウ。スフミでは女物の晴れ着を着ていたそうだな。ロッソの奴が見違えるほど綺麗だったと褒めちぎっていた」

――――――――なんで、ここでその話が出て来るのだ？

その言葉に、リョウは驚いてユルスナールの方を見た。

だが、その瞬間、リョウは軽く後悔した。

――――――――俺には見せてくれないのか。お前の着飾った姿を？

低く、熱の籠った囁きを吹き込まれて、目眩がしそうだった。

どこか強請るような男の強い視線にかち合う。真剣そのものの本気の色。そこにある瑠璃色の瞳を見てしまえば、【否な】と言うことなどできようか。

「……分かりました」

リョウは内心、白旗を上げる気分でそう口にしていた。

「さぁ、こちらへどうぞ」

それまで静かに成り行きを見守っていた店の主に促されるようにしてリョウはその後に続いた。

別室に案内されると店主の妻と思しき女性が待っていた。
その人は、クセーニアと名乗ると静かに微笑んだ。
その女性は、子供を身ごもっているのか下腹部が大きく膨らんでいた。
クセーニアは、店主と二言、三言言葉を交わすと小さな紙切れを受け取った。
「準備が出来ましたら呼びますから、あちらでお待ち下さい」
店主は妻の言葉に無言のまま頷き返すと、そっと女の膨らんだ腹部へ大きな手を当てる。そして、名残惜しそうに骨ばった大きな手で触れた後、再び扉の向こうへと消えていった。
「さぁ、それでは始めましょうか」
にっこりと微笑んだ妻の言葉に、リョウは諦めたように息を吐いた。身重の女性を煩わせる訳にはいかなかった。
「よろしくお願いします」
ぎこちない微笑みを浮かべたリョウに、
「大丈夫よ。緊張することはないわ」
店主の妻は、どこか可笑しそうに小さく微笑んだ。
身に着けていたものを全て取り去って、言われるままに渡された物を身に着ける。下着姿になったリョウを見て、店主の妻は、矯正（コルセット）の類は必要ないと判断したようだった。
そして、店主の妻に手伝ってもらいながら、慎重にドレスに手を掛けた。
肩紐に手を通すと肌に馴染むように柔らかな生地が吸いついた。その感触に自然と息が漏れた。重厚そうな見た目とは違い、それはとても軽かった。
ドレスは、身体の線（ライン）がそのまま出る形体（デザイン）だった。結婚式のパーティーでも余りお目に掛からないような本格的な代物だ。背中部分は大きく?の字にカットされている。腰の辺りは脇から太い共布をリボンにして後ろに結ぶことで身幅を調整するようだった。前にもかなり大きく切れ込みが入っていた。

やはり、基本は、この国のふくよかな女たちの身体を念頭に於いて作られているものである。自分の貧弱な身体では着こなすのが難しいだろうと思われた。

腰紐の部分を調整してからクセーニアは前に回った。

そこで目が合ったリョウは苦笑を浮かべて見せた。

「大分……余りますね」

前身ごろの部分は生地がかなり余っていた。張りのある大きな乳房を包むであろうその箇所に収まっているのは、自分の貧弱な乳房だ。

「そう？　ここをこうして、こうするとどうかしら？」

だが、クセーニアは仕立屋の妻らしく真剣な面持ちでドレスの具合を確かめながら、生地を摘んでいった。

「これはデザイン的に元々この辺りにたっぷりと生地を持ってきているものなの。そうすると女性らしい線（ライン）が綺麗に出るでしょう？　大きさは余り気にすることはないわ。貴方の場合でも十分すぎる程よ」

慰めなのかは分からないが本職の言葉にリョウは静かに頷いて見せるだけに留めた。

そして、クセーニアは後方を振り返ると声を張り上げた。

「あなた、こっちにいらして」

その声に待ってましたとばかりに仕立屋の店主がやってきた。そして、本職らしく真剣な面持ちで生地のフィット具合を確かめて行く。暫く、妻と二人でなにやら専門用語を交えながら相談をしていたが、やがて納得したのか、もう良いとリョウを解放した。

再び元の服に着替えて衝立の内から出れば、クセーニアと夫は、和やかに仕立ての話をしていた。

「お疲れ様でした。これより仕上げに掛かりますので、どうぞ楽しみにしていて下さいませ」

ひっそりとした品のいい微笑みを浮かべた店主に、リョウは曖昧

に微笑んだ。
　まるで体の好い着せ替え人形のような気分だった。こうしてあちこちを採寸されても、どこか他人事のようで、不思議な気持ちだった。
「それにしても不思議なものですわね」
　再び、元の服を着込んだリョウをクセーニアがまじまじと見つめて言った。
「先程のドレスを着た時は、私からみても艶めかしい女性でしたのに、そうしてズボンを穿いていらっしゃると男の子のようにしか見えないのですから」
「……そうですか」
「ええ。でも当日はとびっきりにお化粧をして。お相手の殿方を驚かせなくてはなりませんわね。うふふ。俄然、やる気が出てきましたわ。ねぇ、あなた」
　そう言ってクセーニアは茶目っ気たっぷりに目配せをすると、鈴を転がすように小さく笑った。
「ああ。そうだな。何と言ってもシビリークス様のお連れ様だ。私どもの腕の見せ所というものだろう」
　対する主人も、何やらやる気満々といった風で、リョウは、もしかしなくとも、とんでもないことに巻き込まれたのではないだろうかと思わずにはいられなかった。
　そして、二日後。その予感は現実のものとなったのだった。

悪魔の招待状（後書き）

ロッソからスフミ村での報告を受けたユルスナールは、きっと内心穏やかではなかったであろうと踏みました（笑）。

流言の裏側

その夜、旧知の友を尋ねたユルスナールは、長椅子に腰を下ろすと背凭れに身体を預け、長い脚を持て余すようにして組んだ。

ここは、【スタルゴラド第五師団】が拠点とする【ツェントル】の中にある最も奥まった箇所の一角である。この場所を取りまとめる所長が利用する、ごく個人的な客人をもてなす為の私的（プライベート）な部屋だった。

「――――――で。その後の収穫は？」

ユルスナールからの問い掛けに、硝子戸の中からボトルを取り出して手元のグラスに琥珀色の液体を注いでいたドーリンは、器用な手付きで均一に【ズブロフカ】がグラスを満たしてゆく様を眺めながら、静かに口を開いた。

「噂の出元は分からん。今となってはな。大体、噂とはそういう類のものだろう？」

至極まっとうな正論を吐いた男の背中をユルスナールは、ちらと一瞥しただけだった。

それはユルスナール自身もよく分かっていた。

――――――ガルーシャ・マライには最後の弟子がいて、その教えを全て受け継いだ。

――――――ガルーシャ・マライは、弟子に全てを引き継ぐとその身を隠した。

そんな噂が、実（まこと）しやかにスタルゴラド国内に広がり始めていた。

ここ、【プラミィーシュレ】に赴任するスタルゴラド第五師団・団長ドーリン・ナユーグの元にも同じような事柄の事実確認を求める公文書が極秘に軍部経由で王都【スタリーツァ】より舞い込んで来ていた。

「大体、おかしいとは思わないか？」
ドーリンは、琥珀色の液体が薄く注がれた低いグラスを手に振り返った。
その神経質そうな顔は、ある意味あからさまで、不機嫌であることを隠そうともしていない。旧知の間柄である相手に、今更、取り繕うものなどなかった。
「何故、この時期（タイミング）なんだ？」
ユルスナールは差し出されたグラスを受け取ると、暫し、グラスを手に中にある液体を弄ぶようにして揺らした。そうすると、小さなグラスから立ち上るようにしてアルコール度数の強いふくよかな香りが鼻先を掠めた。
「……確かに」
それはユルスナールも不可解に思ったことの一つだった。

ガルーシャ・マライが、王都にいる連中に背を向けて、隠遁生活を始めたのは、もう十数年以上も前のことだった。そして、この国の遥か北に位置する広大な森の片隅をその安寧の地に定めた。
それは【スタリーツァ】にいる貴族や術師達も当然のことながら良く知ることだった。何せ、ガルーシャ自身が関係者の前で、田舎に引っ込むことを高らかに宣言したのだ。当時、王都の術師養成学校で教鞭を執っていた【稀代の術師】の突然の引退宣言に、周囲にいた連中は、それこそ吃驚仰天、大騒ぎをしたのだ。皆、こぞってガルーシャを引き留めようとしたが、元より頑固で己が信念を曲げないところのある相手に敵う者などいなかった。
それ以降、ガルーシャ・マライはこの国の表舞台からは姿を消した。だが、この世界から完全に雲隠れした訳ではなかった。細々とだが、外界との交流はあったのだ。
それでも、術師の然るべき伝手を持たない人々にとっては、ガル

ーシャ・マライに繋ぎを取ることは容易なことではなかっただろう。隠遁したガルーシャの住みかを訪ねるのは論外のことだった。

ガルーシャ・マライは森に暮らしている――――――それは、術師であれば、若しくは、その手の話題に関心のある者であれば、誰もが知り得た事実ではあったが、その住居を訪れた者は一人としていなかった。いや、何人たりとも訪ねることが出来なったと言うべきだろうか。

それは、ガルーシャ・マライが森の入口付近にちょっとした呪いのようなものを仕掛けていて、許された者以外は辿りつけないようにその界隈に結界が張り巡らされていたからだ。

しかしながら、それを知る者は多くはなかった。その所為で、ガルーシャの居場所は中々に謎めいたものであったのだ。そこから転じて、ある一部の人たちの間では、ガルーシャの存在そのものが謎めいたものになっていた。

普通の人々には、雲をも掴むような存在であったガルーシャも、交流のあった一部の然るべき人々にとっては、少し偏屈で奇特な所のある【生身の人】であったのだが、その事実を知る者は、余り多くはなかった。

そのガルーシャ・マライが、この世界を旅立ったのは、今年の春のことだった。

それから、半年以上の時が流れていた。

ガルーシャは、その旅立ちを声高にした訳ではない。自分を含め、然るべき人物の所には、何らかの形で伝令を飛ばしたりして繋ぎを取ったようだ。ユルスナールの所には、その最期の時を共にしたリョウが来た。

そして、その報せは気紛れな獣たちの情報網をも通じて術師仲間にも伝わってゆくのだろう。

そろそろガルーシャ・マライの所在が取り沙汰される頃合いだろ

うとガルーシャと比較的深く親交のあったスフミ村の女術師は語っていたと彼女と接触を持ったロッソとキリルの報告にはあった。
ユルスナールの所にも【スタリーツァ】からガルーシャの所在確認を求める依頼が来ていた。

しかし、巷に流布している噂話は、そこから、もう一段階進んでいた。
ガルーシャの最後の弟子――――その文言を耳にして、ユルスナールがまず思い浮かべたのは、リョウの存在だった。
ガルーシャの最期にひっそりと寄り添ったその存在が、何故か表沙汰になり、曲解され、とある一部の間で、変に人々の注意を引きつけることになっている。
具体的なことは何一つ伝わってはいないが、それも時間の問題だろう。ガルーシャの件で神経質になっているこの国の上層部や他の思惑を持つ輩にとっては、その存在は決して無視の出来るものではなくなって来ているのだ。真偽を確かめる為に強引に接触を持とうとするかもしれない。
そのことに思い至った時、ユルスナールは愕然とした。
そして、そのようなこの国の政治的思惑にリョウを巻き込んではならないと決意を新たにしたのだった。
ユルスナールにとってリョウの存在は、単なる【師匠が残した遺児】という枠組みには到底収まりきらない、大切な存在になっていた。
この腕に抱いたあの温かい肉体を失うのは、最早、考えられなかった。

「――――で、本当の所はどうなんだ？」
――――お前は何か知っているんだろう？

そのまま沈思熟考した相手に、ドーリンは反対側の長椅子に同じように腰を下ろすとその長い脚を組んだ。
ユルスナールが、ガルーシャと親交があったことをドーリンは知っていた。
ユルスナールは、視界の隅でドーリンの興味津々な視線が自分に注がれているのを認めたまま、グラスの中身を啜ると徐に目を閉じた。
「ガルーシャ・マライは、この春に旅立った」
静かに切り出された言葉に、ドーリンが動きを止めた。
「それは……本当か？」
「ああ。ガルーシャの旅立ちには、リョウが立ち会った」
「なんだ……と？」
滅多に動じることのない男の顔が、驚きに固まった。
「ならば、あの少年がガルーシャ・マライ殿の弟子だというのか？」
矢継ぎ早に出された問いにユルスナールは、静かに首を横に振った。
「いや。リョウはガルーシャの【弟子】ではない。そもそも、ガルーシャに【弟子】はいない」
「なんでそんなことが言える？　確かめたのか？」
ドーリンの目裏には、昼間、街のスタローヴァ（食堂）ヤで食事を共にした線の細い少年の姿が浮かんでいた。
癖の無い黒い髪に黒い瞳。その色彩もさることながら、その顔立ちは、この辺りでは余り見かけることのない珍しいものだった。
一言で言えば、異質。だが、その外見的な異質さを感じさせない位、その子は周囲の空気に馴染み、溶け込んでいた。それをドーリンは不思議にさえ思った。
昼間、自分の記憶が正しければ、会話の端に、あの子はガルーシャからこの国の知識を得たと話していた。それは、詰まり、ガルーシャに師事したということではないのだろうか。

「あの子は、この国の人間ではないのだろう？　どういう経緯で、ガルーシャ殿に目通りが叶ったのだ？」

余程の然るべき伝手がない限り、隠遁したガルーシャ・マライに接触することは難しいというのが、この国の上層部の見解だった。深く結界に守られた土地でどうやってガルーシャに会うことが出来たのだろうか。

「……俺も、その辺りのことは、詳しくは知らん」

少しの躊躇いの後、言い放たれた言葉にドーリンは吃驚して、まじまじと相手の顔を見た。

それは、友人にしては余りにもお粗末なことに思えた。

ユルスナール程の男が、長く軍籍に身を置き、第一線で任務に当たってきたこの男が、そんな初歩的なことを調べ上げていない。そんなことがあるだろうか。

ユルスナールは肘かけに身体を凭せ掛けると、片手で頬杖を突いた。

その顔には、どこか苦々しい表情が浮かんでいた。【らしくない】ことをしているという自覚は、本人にもあるらしい。

「リョウは……不思議な奴だ」

いきなり始まった男の唐突とも言える述懐に、ドーリンは、訳が分からないと言う顔を向けた。

その視線は、どこか困惑に似たものだった。

ドーリンが知るユルスナールという男は、冷静沈着、理路整然とした論理派で、用意周到、端々にまで注意を怠らない几帳面な性質だ。それは、自分にも通じる所が合った。

情報分析も得意としており、集めた情報を俯瞰的に見ることが出来る広い視野の持ち主でもあった。

そんな男は、これまで曖昧な部分を残したまま、感情のままに突き進むというようなことは決してなかった。

ドーリンとしては、ユルスナールがやけにその子に肩入れをしていることが気になっていた。

冷酷で自他共に厳しい強面で通っている第七師団の隊長が、率先して世話を焼いている子がいる。ブコバルからそんな話を聞かされた時は、なんの冗談かと思った程だ。

だが、実際に、ドーリンが昼間、目にしたのは、我が目を疑う程の事態だった。感覚的な違和感は拭えない。その事も併せて尋ねようと思っていた。

「確かに、髪の色も瞳の色も顔立ちも……この辺りでは見ないものだ」

客観的に見て、その顔立ちも整っている部類に入るだろう。好き者には好まれそうな感じがする。

真っ直ぐに引かれた黒い眉は、その者の意志の強さと潔さを表わしているように思えた。伸びた背筋は、華奢ながらも凛としていて、癖の無い黒髪と相まって涼しげな印象をもたらす。だが、一見、取りつき難そうな第一印象とは裏腹に、言葉を交わした空気は、とても柔らかく落ち着いたものだった。

今日の昼間に感じた様々なことを思い浮かべながら、取り敢えず、一目で目に付く外見的な特徴を真っ先に上げたドーリンをユルスナールは制した。

「それはそうだが、そういうことではない」

簡潔に言い放ったユルスナールの対面でドーリンの細い眉が訝しげに上がった。

「リョウは、どこの国の者なんだ?」

場合によっては、他国の寄こした間者の類とも取れるだろう。身元のはっきりしない人物がガルーシャ・マライの傍にいた。それは見る者が見たら、随分とキナ臭いものに映るだろう。ガルーシャ程の人物が、そう易々と間諜の罠に嵌るとは思えないが。例えば、ガルーシャの影響力とその力を何としてでも自国に取り込みたいと考

える己が国の【上つ方】たちにとっては、邪魔な存在であるかもしれない。
だが、ガルーシャ・マライがこの世を去った今、その辺りの事情も変わってくるだろう。
そんなことを考えていれば、
「知らん」
「は？」
ドーリンにしては、真っ先に、当然の疑問を口にしたはずであったのに、すぐさま返ってきた簡潔な否定の文言に、暫し、思考が止まった。
「だから、知らん」
「……」
ドーリンは、余りのことに言葉を失った。
そして、考えを纏めるようにこめかみにその長い指を当てると、目を閉じた。
「……ルスラン。……お前、一体、何をしているんだ？」
思わず唸るような声が出ていた。
何という後手の対応だろう。ドーリンにはそう思えて仕方がなかった。

不意に落ちた沈黙の後、ユルスナールはゆっくりと息を吐き出した。
「前に、一度、尋ねたことがあったが……どうも上手くはぐらかされてしまった」
本来なら、その場で踏み込む事が出来たのだ。だが、敢えてそれをしなかった。いや、あの時の自分にはそれが出来なかった。
思い出すのは、朝靄の中、砦の傍にある泉での一時だった。
何かを懐古するように、自嘲気味に小さく笑ったユルスナールを見て、埒が明かないと思ったのか、ドーリンは論点を変えた。
「ならば、質問を変える。お前はどうやってあの子と知り合った

のだ？」

ユルスナールは、その問いに、どこか懐かしそうに目を細めるとゆっくりと息を吐き出した。

「リョウと出会ったのは、この春の終わりだ。ガルーシャの遺書ともいうべき【封書】を持って、北の砦を訪ねて来ていた。元々、ガルーシャが旅立った後、俺を探して旅に出る積りであったところを偶々、森で負傷したうちの兵士を拾って、介抱してくれていた。それがきっかけだった。

【封書】は本物だった。ガルーシャの印封がしっかりと付けられていた。中には、ガルーシャの手でしたためられた手紙があった」

「ならば、尚更、【弟子】ではないのか？」

遺書を託される程の人物だ。客観的に見て、それは、その少年がガルーシャに受け入れられていたことを意味していた。

「いや、ガルーシャの手紙には、ただリョウのことを頼むとあった。最後の家族だと。そう書かれていた。弟子という言葉は何処にもなかった。あの偏屈なガルーシャがどんな顔をしてそれを書いたのかと思うと今でも不思議で仕方がない」

そう言って、ユルスナールは目を細めた。

そこにはその男には珍しく、穏やかで優しい微笑みが浮かんでいた。

真実は今となっては、闇の中。残された人間は、手の内にある断片から、それに近いものを手探りで拾ってゆくしかない。

「リョウには、術師の素養があるのではないか？」

ガルーシャがその少年を手元に置いた理由をドーリンは問うた。

「ああ。それはあったみたいだな。日常的なことを中心に教わっていたらしい。それにリョウは獣たちの言葉を解する。俺も初めて会った時は、新しく入った鷹匠かと思ったぐらいだ」

ユルスナールの目裏には、自分の愛馬キッシャーと仲睦まじい様子で話をしていた時の横顔が浮かんでいた。今でもその時の衝撃は

印象として強く残っていた。
「キッシャーとも仲がいい」
「お前の黒毛とか？」
――――――あの気性の荒いと有名な馬とか？
別名【黒き雷】との二つ名を持つキッシャーは、その気位の高さとその気性の荒さで、この国の軍部の間ではそれなりに名が轟いていたようだ。
再び、目を丸くしたドーリンに、ユルスナールは可笑しそうにひっそりと笑いを噛み殺した。
「ああ」
ユルスナールの口から次々と明らかにされるリョウの人物像に、ドーリンは大きく息を吐いた。
ガルーシャ・マライが受け入れ、獣たちとも意志の疎通が出来る。そして、術師としての基本的な素養を持つ人物。
現在、術師の頭数は世界的に見て減少傾向にあった。
術師としての能力と素養を持つ人間をこの国は求めていた。
ガルーシャ亡き今、その存在は、この国が喉から手が出る程欲しい人物になるに違いなかった。

「リョウは、【術師】としては登録されているのか？」
「いや、まだだ。【術師】になる為の勉強をしているとは聞いている。だが、まぁ、リョウのことだ、恐らく【術師】が認可制であることすら知らないはずだ」
昼間、この国では国民食である【ペリメニ】を知らないと言ったことを思い出して、ドーリンは慎重に言葉を選んだ。
「この国のことは、全く知らないと言って良いのだな？」
「ああ。そう思った方がいいかもしれん。何せ、この国の言葉もガルーシャから教わったと言うぐらいだからな」
「何だって！」
心底驚いたのか、珍しく大きな声を上げたドーリンに、ユルスナ

ールも小さく笑った。
この扉を開いてから、ドーリンの驚く顔ばかり見ている。ここまでこの男が感情を顕わにするのを見るのは初めてのことではないだろうか。
頭の隅で、ユルスナールはそんなことを思った。
「ああ。流暢にこの国の言葉を話すが、よくよく聞けば訛りが多少ある。それに言葉遣いも教師がガルーシャだったから仕方がないのだろうが、随分と堅苦しい物言いをする。だが、大したものだ」
大きく息を吐いたドーリンを横目に、ユルスナールは尚も言葉を継いだ。
「その辺りのことも含め、明後日の晩に確かめればいい。リョウはああ見えて、大人だ。言えることと言えないこと。伝えるべきこととそうでないこと。その辺りの線引きは意外にしっかりとしている。いずれ本当のことを話してくれればとは思うが、今、無理に全てを訊き出そうとは思わない。アレにも色々あるようだからな。だが、少なくとも、俺はリョウを信じている。それだけだ」
そう言って、友人を見たユルスナールの瞳には、静かだが確固たる意志が強く潜んでいた。
その真摯で真面目な言葉に感心したのも束の間、
「大人……だと？」
最初の方で引っかかった言葉がドーリンの思考を中断した。
「ああ。言ってなかったか？　この国の人間を基準に考えるとえらいことになる」
「おい、あの子は幾つなんだ？」
思わず口に含んだ酒を噴出しそうになって、ドーリンは慌てて口元を拭った。
そんないつにない相手の動揺をユルスナールは愉快気に見遣った。
「それは、俺の口からは言えんだろう。まぁ、機会があれば、明後日、聞いてみることだな。やり方を間違えなければ、教えてくれ

るやもしれん」

そして、何を思い出したのかユルスナールは可笑しそうに笑った。

「まぁ、何はともあれ、明後日の晩だ。楽しみにしているといい」

そう言って、ひっそりと込上げてきそうになる笑いを噛みしめた男の脳裏には、当日、リョウの本来の姿を見て、きっと茫然自失か、腰を抜かす程驚愕を顕わにするであろう友の姿が思い浮かんでいた。

男の薄い唇が弧を描く。

急に上機嫌になった旧知の友を、ドーリンは胡乱気な眼差しで見遣る。そして、その意味深な男の口振りに、実に嫌そうに眉を顰めたのだった。

こうして、【ツェントル】の片隅でひっそりと行われた男二人の暫く振りの再会は、ひっそりと幕を閉じたのだった。

ナスタルゲーヤ　～近くて遠いキモチ～（前書き）

タイトルは、【ノスタルジア】
街の食堂の看板娘、ソーニャのお話です。

ナスタルゲーヤ　～近くて遠いキモチ～

初めて会ったあの日、まだ成長途中で線の細かった少年は、あどけなさの残る顔を精一杯引き締めて、ぶっきら棒に口を開いた。

――――――どうも。

視線が合わさったのは、ほんの一瞬のことで。

愛想の欠片も無い、素っ気ない態度。

だが、それは表面上のことで。その少年が本当は心の優しい人であることを知るのに、大して時間は掛からなかった。

あれは秋の終わり。真っ赤に染まった茜色の空を背に、長く伸びた小さな影が、狭い小路一杯に広がった時分のことだった。

遠い日の記憶は今も変わらずこの胸に息づいている。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

その日、朝から珍しくすっきりとした晴天で、この時期（冬）特有の澄んだ空気が、朝焼けを綺麗に描き出すところから、一日が始まった。

カマールとの朝食を終えた後、リョウは洗濯物の入った籠を抱えて、外に設置された洗い場に来ていた。

この街には、縦横無尽に水路が張り巡らされ、人々の生活に欠かせないものとなっていた。要所要所で井戸から汲み上げられた地下水が水車を通して各地に回る。土地の高低を生かした緻密な計算に基づく設計の賜物だった。井戸から水を汲み上げるのに使われている動力は【術師】が拵えた【取水石】の力に依るものだった。

洗い場には先客がいた。丸みを帯びたなだらかな曲線がその人物を象る。

「おはようございます、ソーニャさん」
ここ数日でお馴染みになった後ろ姿に声を掛ければ、
「あら、リョウ。おはよう」
穏やかな女性の横顔が振り返った。
長い髪をプラトーク（スカーフ）ですっきりと纏めている。そうするとソーニャの丸い頬が、一段と際立って見えた。
リョウは、ソーニャの隣に腰を下ろすと、籠の中から洗濯用の板と【パラショーク（洗剤用の粉）】を取り出した。
気合十分、腕まくりをして、水の中に手を入れる。
水は外気の冷たさを吸収して閉じ込めたように、とても冷たかった。地下水は、夏冷たく、反対に冬は温かいものだという【かつての常識】とは、少し異なる状況だ。
「冷たっ」
思わず肩を揺らして声を漏らしたリョウに、
「ふふふ。もう少ししたら、この水も温かく感じられるようになるわよ」
ころころと鈴の鳴るような声でソーニャが笑った。そうすると左側の頬に小さな笑窪が現れた。

この世界では、洗濯は専ら女たちの仕事で、手洗いが主流だった。水路の周りでは、女たちが桶を持ち寄って、お喋りに花を咲かせたりする。井戸端会議ならぬ、小さな社交場のような役割も担っていた。
この国は、四季に似た季節区分はあるものの、一年を通じて、比較的温暖な地域に位置しており、冬と言っても水が凍るような寒さが訪れる訳ではなかった。雪も降らない。精々が霙混じりの雨といったところか。
それでも冬場の洗濯は女たちにとっては大変な労働の一つだろう。
リョウの抱えた籠の中には、沢山の洗濯物が入っていた。カマールの分と自分の分だ。今日は天気が良いので、カマールの仕事着や

シーツの類といった大きな物も洗ってしまおうと考えていた。
洗濯板を使うのは、中々にコツがいる。
リョウはこちら側に来て、初めてそれに触れた。自分の母親が子供の頃には、それこそ普通にあった代物も時代の移ろいに伴い過去の遺品になってしまっていた。話しには聞いてはいたが、実際に使うのは初めてだった。何もかもがボタン一つで完了した便利さを懐かしく思わないでもないが、それはもう余り考えないことにしていた。ギザギザと凹凸の付いた板一つで汚れが落ちるのは、それはそれで気分の良いものだった。
水を冷たく感じたのも最初の内だけで、その内、気にならなくなった。リョウはカマールの仕事着を取り出すと、盥の水の中に浸した。自分のものの二倍は軽くあろうかと思われる大きなシャツだ。鍛冶屋特有の泥と鉱石の粉末が付着した汚れは中々落ちにくい。
格闘すること暫く、見かねたソーニャから声が掛かった。
「リョウ、そうじゃなくって。こう縦にね。揉み込むようにしてごらんなさい」
「こう、ですか？」
「そう」
ソーニャの真似をするように手を動かしてみる。
そうすると面白い位に綺麗に汚れが取れた。
「凄い。綺麗になった」
思わず感嘆の息を漏らしたリョウに、
「ね？　ちょっとしたコツなのよ」
ソーニャは、どこか誇らしげに小さく笑った。
ソーニャは、気立ての良い娘だった。年齢は直接尋ねたことはないが、嫁入り前ということなのでまだ若いだろう。少し垂れ下がり気味の眦は、微笑むと一層弧を描いて、見る者の心を和ませる。この国の主流である少しきつめな顔立ちのパッと目を引く程の美人という訳ではないが、人を惹き付ける柔らかな空気を持っていた。きっと結婚したら良いお嫁さんになるだろうことは間違いなしだ。

籠の中のものを全て洗い終えて、物干し竿に干せば、それは実に生活感溢れる壮観な景色になった。

物干し場がある中庭は、ちょっとした風の通り道になっている。吹き込む風に、色とりどりの大小の布がはためいた。

ひらひらと翻る男物の大きなシャツ。それにソーニャがそっと手を掛けた。

「ねぇ、リョウ」

立ち上がって、大きく伸びをしたソーニャが徐に振り返った。すらりと伸びた長い手足を一杯に広げる。簡素な薄い紫色の普段着に白い前掛け（エプロン）の紐が風に靡いては揺れた。

「カマールは元気にしてる？」

「はい」

こうして一日一回、カマールの様子を伝えるのも日課のようになっていた。

「良かったら今度、顔を出して下さい。この間、ソーニャさんの【カーシャ（ミルク粥）】が食べたいって零してましたから」

リョウも空になった籠を手に立ち上がった。

どうも自分がカマールの下に滞在をしている所為で、ソーニャの仕事を半ば奪ってしまっていることに気が付いたのは、割と早い段階でのことだった。突然、余所者が二人の間の日常に割り込んでしまったようで、それを内心、心苦しく思っていた。

「まぁ、カマールったら」

顔に似合わず甘いものを好む男の姿を思い描いてか、ソーニャはひっそりと笑いを零した。

「ねぇ、リョウ」

風に揺れる洗濯ものとそこから透かし見える良く晴れ渡った空を見上げながら、ソーニャが不意に囁いた。

リョウは無言のまま、ソーニャの隣に並ぶと、同じように空を見

上げた。
澄んだ蒼穹は天高く、薄く刷毛で刷いたような雲が南の空に掛かっていた。
こうしてソーニャの隣に立つと、当然のことながら、リョウは、ソーニャの方を仰ぎ見る形になった。
遠くを透かし見るソーニャの横顔は、いつになく、やけに大人びて見えた。
「リョウは……恋ってしたことある？」
空になった籠を抱えて、ソーニャがこちらを振り返った。
初めて目にする、どこか寂しげな空気に、リョウは敢えて気が付かない振りをした。
「恋……ですか」
「そう」
まるで女同士、内緒話をするように話の水を向けられて。
「……そうですね」
リョウは、昔を懐かしむように空を見上げたまま目を細めた。
「それなりに……ありますよ。これでもそれなりの月日を過ごしてきましたから」
不意に隣から漏れた老成したような呟きに、ソーニャは軽く目を見開いてから、小さく笑った。
「まぁ。リョウったら。おかしな人ね。いっぱしの口を聞くじゃない。急に年寄りみたいなこと言うんだもの。吃驚するじゃない」
やはりソーニャは、外見から受けるリョウの印象をかなり低く見積もっていたらしい。
「そうですか？」
「そうよ」
ソーニャの目尻は、よく見ると薄らと淡い桜色をしていた。
若い女は、恋をするとその目元がほんのりと薄紅色に染まる。嘘か本当かは、分からないが、その昔、聞いた話をリョウは唐突に思い出していた。

「ソーニャさんは、恋をしているんですか？」
だが、その問い掛けには答えることなく、ソーニャはそっと含むような笑いを零しただけだった。
「……してみたいわね。一度くらいは。この身を滅ぼしてしまうような恋。その人の為なら、全てを捨ててもいいって思えるほどの恋」
穏やかな女性の横顔からひっそりと吐き出される、意外な程の熱すぎる想いに、リョウは不意に胸を突かれた気分になった。
「女の人って……そういうの、好きですよね」
対して、リョウの口から出たのは、驚くほど突き離した感のある感想だった。
身を焦がす程の切ない恋に憧れる。それは世界が変わっても、決して変わることの無い女の一面のようなものなのかもしれない。
だが、そういった激情は、自分には余りにも縁の無い分野だった。自分の思考が、例えば【恋する乙女】といった類とは程遠い所にあるのは昔からだ。
理解できなくはないが、それに大真面目に陶酔してみせる程の若さもない。
本音半分。ややげんなりしたように肩を竦めれば、
「まぁ、リョウったら」
リョウの【それらしい(少年)】返答に、ソーニャは呆れたような顔をしてみたものの、直ぐに仕方がないわねと優しく微笑んだ。
まるで女心を理解しない【弟】を窘めるような空気に、リョウは心の内で苦笑いをしていた。
ソーニャは、きっとカマールのことを憎からず思っているのだろう。それは、この短い期間の間でも、見ていればなんとなくだが感じ取れた。普段からせっせとカマールの世話を焼いていた。それは相手を思い遣る心が無くては続かないことだろう。カマールもソーニャの作る食事を懐かしく思う位だ。リョウがこの街に来て、まだ六日しか経っていないと言うのに。それを思えば、カマールの胃袋

はすっかりソーニャに掴まれているようだ。
リョウは、スフミで聞いたリューバの愚痴めいた話を思い出していた。

『あの子もいい加減、いい歳だから、そろそろ嬉しい報せが欲しいものなんだけれどねぇ』
それは独り身の息子を案じる母親の言葉だった。
『ねぇ、リョウ。あの子に恋人がいたら教えて頂戴ね』

口数が少なく、愛想が無いので誤解されがちなカマールだが、その芯となる部分は、優しい男だ。付き合いの長いソーニャは、勿論そのことを良く分かっているだろう。

「ソーニャさん、カマールさんなんかどうですか？」
それはリョウにしてみれば、何気なく零れた言葉だった。いつにない話題を振った相手に対しての、ほんの少しの好奇心みたいなものだった。
だが、途端、ソーニャの顔が色を無くした。
それを見た瞬間、リョウはその発言を後悔した。
それは、もしかしなくても、言ってはならない言葉だったのだ。
「もう、やぁねぇ。リョウったら、何を言ってるのよ！」
だが、ソーニャの表情が固まったのは一瞬のことで、次の瞬間には、動揺を押し隠すような明るい声が上がっていた。
「カマール？　あんな愛想の欠片も無い男」
そう言ってから、ソーニャはそっと空を見上げた。
その横顔は、笑みを刷いているのに何故か儚く見えて、そのままソーニャが消えて行ってしまうのではないかとの思いが過った。
「カマールさんは、優しい人です」
リョウの口から、そんな言葉が突いて出ていた。
「そうね」

「真面目で、実直で。熱心で。仕事一筋で。妥協を許さない立派な鍛冶屋だと思います」

カマールとは出会ってまだ六日。何も知らない自分がそんなことを口にするのは、余りにもおこがましいことだとは重々承知している。

だが、そう口にせずには居られなかった。

「そうね」

大きく同意をするように頷いたソーニャは、微笑んでいるのに、今にも泣き出してしまいそうに見えた。

暫し、沈黙が落ちた。

洗濯物のシーツが、吹き込む風にハタハタと音を立てた。

ソーニャのプラトーク（スカーフ）の端が風にはためいた。

男物の大きなシャツも同じように揺れている。

それを一瞬、名残惜しそうに見送って。

「……あたしね。今度、……お見合いをするの」

そう言って、どこか諦めた顔をしたソーニャに、今度はリョウの表情が凍りついた。

「隣町の床屋さん。まだ、決まった訳ではないんだけれど。父さんの知り合いの紹介で。母さんもかなり乗り気なのよ」

ここでも親が子供の縁談を取り仕切るのは、往々にしてあることで。そこに子供の意志は介在しない。

突然の打ち明け話に、リョウはソーニャの方を見た。

「ソーニャさんは……どう思っているんですか？」

「あたし？」

「はい。ソーニャさんの気持ちは？」

だが、その問いには答えることなく、ソーニャは、緩く頭（かぶり）を振ってみせただけだった。

「カマールさんは、どうなるんですか？」

今は、洗濯も食事の世話も、その他の日常の細々とした家事の類

も、リョウがやっていたが、それはカマールの家に厄介になるからと自分から申し出たことで、リョウとしては、いつまでもここにいられるわけではなかった。自分がここにいるのは、カマールの母、リューバから伝令の役目を言い遣ったからだ。

リョウには帰る場所があった。ここからは遥か北の森の小屋だ。だから、リョウがカマールの家のことに手を出すのも一時的なもので、自分が居なくなった後は、また同じようにソーニャがその役目を担うのではないのだろうかと思っていた。

ソーニャが居なくなったら、カマールはどうなるのだろうか。

「カマールは、一人でも大丈夫よ。あの人はね。生涯、独り身を通すって決めてるの。独身主義者なのよ」

そう言ってソーニャは、どこか自嘲気味に微笑んだ。

それはカマールが鍛冶屋であるからなのだろうか。

過去、この二人の間に何が合ったのかは分からない。もしかしたら、何もないままなのかもしれない。

リョウの胸には、言い知れぬもどかしさのようなものが去来していた。

鍛冶屋は独り身のものが多いとは聞いて知っていた。それは、彼らが長くは生きられない宿命にあるからだと言う。カマールの師匠であるレントも妻を、そして家族を持たなかった。それを補うようにこの街では鍛冶職人の寄り合い（ギルド）が発達していた。

それでもだ。幾ら彼らの寿命が短かろうとも、それは他の職業に就いている人達と比べた場合という相対的なもので、必ずしもその人生が、共に歩むのに値しないということにはならないだろう。短くとも濃密な時間は持てるはずで、病に苦しむ時にこそ、家族の支えは力になるはずだ。

それはおかしな話なのだろうか。

独り身を通すのが悪いと言うのではない。唯、もし、その後の大変な時間を共に支えてくれるという人が現れたのならば、その手を取ることは、何も恥ずべきことにはならないはずだと思った。

この国の慣習や風習を良く知らない自分にはとやかく言う資格はないのかもしれない。それでも、自分の気持ちを押し隠そうとして辛そうにしているソーニャを見ると、そう思わずにはいられなかった。

だが、これは最終的には、カマールとソーニャの二人の問題で。関係の無い自分が口出しのできるものでもなかった。

「さぁ、洗濯も終わったことだし。あたしは仕事に行かなくっちゃ」

そう言って振り返ったソーニャの顔には、先程までの陰りは見受けられなかった。

代わりに、優しい穏やかな微笑みが浮かんでいた。

少しだけ覗いたソーニャの本心は、彼女の心の深淵に再び隠れてしまった。

「リョウもまたいらっしゃい。美味しかったでしょう?」

するりとソーニャが働く街の【スタローヴァヤ(食堂)】へと話題を変えられて、リョウもそれに乗るしかなかった。

「はい」

「ふふふ。あのお店。見てくれはあんな感じだけど、あの界隈じゃ割と有名なのよ。なんてったって【ツェントル】のお偉い方がお忍びでやってくる位なんだから」

「そうなんですか」

それは、もしかしなくともドーリンのことなのだろう。

あの後、ユルスナールからドーリンが【ツェントル】の所長であることを知らされて、リョウはある意味、さもありなんと感心したのだ。

その筆頭である神経質そうな男の顔を思い浮かべて、リョウも小さく微笑んでみたのだった。

手探りの試み

それはいつも通り、レントを見舞った後の出来事だった。
その日、リョウは、カマールの家へ戻る途中、往来でラリーサとコースチャの姉弟を見かけた。
二人は、いつぞやの【ツェントル】へ行く切っ掛けになった子供たちだった。ブコバルが起こした騒ぎの所為で、結局、きちんとした挨拶をしないままに二人と別れる羽目になったことをリョウとしては少し気に掛けていた。
「コースチャ！　ラリーサ！」
声を掛けて、手を一振りすれば、こちら側に気が付いた二人の姉弟は、途端に顔を輝かせた。
「お兄ちゃん！」
コースチャは駆け出すと、勢いよくリョウの身体に体当たりを食らわせた。元気なことこの上ない。リョウはその衝撃を、片足を後ろに引くことで、辛うじて持ち堪えた。
「……コースチャ」
弟の突飛な行動を窘めるようにその名を呼んで、姉のラリーサが足早にやってきた。
「こんにちは、ラリーサ」
大丈夫だと宥めるように背を撫でて、やってきた姉に微笑みかければ、ラリーサは、はにかむようにして小さく笑った。
「こんにちは」
「この間は大丈夫だった？　ちゃんとお家に帰れたのかな？」
気になっていたことを訊けば、二人は大きく頷いた。
「うん。【ツェントル】のお兄ちゃんが送ってくれたんだ」
「そうか。それは良かったね」
「お兄ちゃんの方は大丈夫だった？」

反対にこちらのことを心配されて、
「ああ。大丈夫。問題ないよ。知り合いに会ったから、ちょっと吃驚したんだ」
半ば苦笑い気味に当時のことを思い出す。
ふと、二人を見下ろして、姉のラリーサがその胸に小さな包みを抱えているのに気が付いた。
「お薬を貰いに行って来たのかな？」
この間の往来で揉め事に巻き込まれた時も、確か、薬を貰いに出掛けた帰りのことだと聞いていた。
「うん」
ラリーサは小さく頷いた。
その顔は、心なしか、影が差しているように見えた。
「お父さんの具合は、……余り、良くないの？」
少し、踏み込んだことではあったが、つい気になって聞いてしまった。
「ここ一月ぐらいかな」
そして釣られるようにして、コースチャが一転、沈んだ声を出していた。
「二人のお父さんは鍛冶職人なのかな？」
「そうさ。この辺りじゃ結構名の知れた鍛冶屋なんだぜ！」
子供たちにとっては自慢の父親なのだろう。途端に嬉々として顔を上げたコースチャにリョウも微笑み返した。
そこで、少し考えるように首を傾げた後、リョウは、二人にある提案をした。
「あのね。もしよかったらなんだけど。お父さんに会わせてもらえないかな。オレ、今、薬師の勉強をしていてね。薬草の持ち合わせが、少しだけどあるんだ。効くか効かないかは試してみないと分からないけど、鍛冶屋のギルドに暮らしている人には割と評判がいいんだよ」
腰を屈めて二人と同じ目線にする。そう言えば、ラリーサが目を

見開いて、縋るようにリョウの腕に手を掛けていた。
「本当？」
「ああ」
「あ、でも……家にはもう、今月は薬代がないから」
途端に眉根を下げて俯いたラリーサに、リョウは心配いらないとそっと華奢な肩へと手を伸ばした。
「その心配はいらないよ。薬代は要らないから。効くか効かないかは試してみないと分からないからね。それに今のオレには沢山の症例を見ることが勉強になるから、寧ろ、こっちからお代を払って診せてくださいって言わないといけない位なんだ」
そう言って微笑めば、
「まぁ、お兄ちゃん。可笑しなことを言うのね。それじゃぁ、あべこべだわ」
余程、その例えが可笑しかったのか小さく声を立てて笑う。
ラリーサが笑顔を取り戻したことに、リョウは、内心、安堵の息を吐いていた。
「今からでも大丈夫かな？」
「なに？　お兄ちゃん、家に来るの？」
上を向いた弟に、姉が顔を綻ばせる。
「ええ。そうよ。父さんを診てくれるって」
「よっし。ならこっちだよ」
俄然、勢いづいたコースチャに促されるようにして、リョウは混み合う往来を二人の家に向かって歩いた。

鍛冶職人たちが直面する過酷な現実に対して、リョウはこの街に滞在している間は、出来る限りのことをしたいと考え始めていた。
少なくとも自分には、ガルーシャやリューバ、そして森の獣たちから教わった薬草の知識があった。
何も知らなかった自分に知識を、この世界で生きてゆく上での導

をくれた人たち。今度は、自分が何らかの形で彼らから受けた恩に報いることが出来たらと思った。

勿論、自分の得た知識など、専門の薬師や術師たちからみれば、素人はだしもいいところだろう。てんでお話にならないかもしれない。それでも、黙って通り過ぎることはしたくなかった。

自己満足と言えばそれまでだ。お節介と思われるかもしれない。だが、それが今のところ自分が見出したこの世界との関わり方だった。

――――――それに。

リョウはそっと肩に掛けた鞄に手を当てた。

今、リョウの鞄の中には、ガルーシャの書斎で見つけた小さな冊子が入っていた。

それは、出立の前に、何故か心惹かれて手に取り、中身をよく吟味しないままに鞄の中に入れて持ってきたものだった。

そして、漸く落ち着いてから蓋を開けてみれば、ガルーシャお手製の生活に根付いた小さな呪い集みたいなものだった。中には術師のことやガルーシャが最後まで研究していたであろう鍛冶職人の病の症例やその対処方法などが事細かにしたためられていた。

その箇所を偶然発見して、読み耽ったのは昨晩のことだった。

これも何かの巡り合わせなのかもしれない。この偶然をそう思わずにはいられなかった。

コースチャとラリーサの暮らす家は、街の中心からはやや東寄りの武具屋が多く軒を連ねる界隈にあった。表の通りにはひっそりとだが、カマールの家と同じような剣の形を模した意匠の小さな看板がぶら下がっていた。

「「ただいま～」」

二人の子供たちの後ろから、家の中に入ると、和やかな気分は一転、室内は、緊迫した空気に包まれていた。

「パーパシャ！（パパー）」
「パーパチカ！（パパー）」
小さな姉と弟の悲鳴のような高い声が上がる。
リョウも慌てて中に駆け着ければ、寝台の上で、背を丸めた一人の男が激しく咳き込んでいる所だった。二人の母だろう、まだ年若い女性が必死になって背中を摩っているが、男の顔は真っ赤になり、引きつけを起こしたように浅い呼吸を繰り返していた。
それを一目見て、リョウが取った行動は素早かった。
鞄の中から小振りの紙袋を取り出すと口を絞り、膨らませて男の口元に宛がった。
そして、ゆっくりと男の背中を撫で摩った。
「大丈夫です。落ち着いて。ゆっくり、息を吐き出して下さい。そう、ゆっくり。大丈夫。それから、ゆっくり……吸って。そう、大丈夫。ゆっくり。吸って、……吐いて。吸って、……吐いて」
そして、もう片方の手で男の瞼を覆った。
それから、もう一度、ゆっくり同じような調子で静かに声を掛けた。
ギュッと紙袋を抑えつけていたリョウの手を握っていた男の力が弱まってきた。頻繁に上下していた肩が治まりを見せてくる。少し、落ち着きを取り戻したようだった。
それを見て取るとリョウは男の視界を塞いでいた手をそっと離した。そして、鞄の中を漁り、中から小さな茶色の瓶を取り出すとその蓋を開け、男の鼻の辺りに近付けた。男がゆっくり息を吸い込んだのに合わせて、瓶を微かに揺らすと直ぐに蓋を閉じた。
男が起こしていたのは過呼吸だった。
落ち着きを取り戻した男を再び寝台の上に寝かしつければ、漸く、緊迫していた空気が緩みを見せた。
「もう大丈夫ですよ」
リョウは穏やかに微笑むと汗で張り付いていた男の髪を拭った。

静かに目を閉じて横になっていた男は、やがて瞼を上げると微かな囁きのような声を乗せた。
「ありがとう」
「いいえ」
それに微笑んで小さく首を振る。
そして寝台の傍で今にも泣き出しそうな顔をして立ち竦んでいた子供達とその母親の方を振り返った。
「もう大丈夫ですよ」
極度の緊張が緩んだのか、不意に込上げてきたものを堪えるように母親が片手で口元を覆う。もう片方の手はしっかりと弟の背中に回っていた。
その様子を見て、リョウは出来るだけ相手が安心するような穏やかな微笑みを乗せて小さく頷いて見せた。
「奥様は少し休んでいて下さい。大丈夫ですから。台所を少し、お借りしますね。あと旦那さんの汗を拭うものを用意して頂けますか。それから小さな盥も」
その言葉に姉のラリーサが弾かれたように我に返った。
そして、半ば茫然とする母親と弟のコースチャを別室に連れてゆくと、テキパキと動き始めた。
その気丈な背中を見て、この家庭に於けるラリーサの立ち位置が直ぐに見て取れた。ラリーサはまだ幼いが、随分としっかりしている。この家の中で、それなりに自分が果たすべき役割を良く分かっているようだった。
「ありがとう。ラリーサ。まずお湯を沸かして、温かいお湯でお父さんの汗を拭ってあげよう」
脂汗をかいて男の肌はびっしょりになっていた。これから気温が低くなるので、身に着けている物を替えなくてはならない。
「それから、お父さんの寝間着を替えてあげようか。こっちは薬湯を煮出しているから。もう少し時間が掛かるかな」
手を翳し、少し強めに加減をした発熱石の上で、小さな鍋に入れ

た水に持ってきた薬草を入れた。
これは鎮静作用のあるものを中心にして混ぜたお茶だった。それを少し濃いめに煮出すことで薬湯にもなった。

リョウはそっと手を伸ばすと、ラリーサの頬に掛かる髪を梳いて退けた。柔らかな亜麻色の髪は指通りが良かった。
「大丈夫だよ。大丈夫」
安心するように微笑んで見せる。
こういう時、周りの人間が不安そうな顔をしてはいけないのだ。その空気は瞬く間に近くの人に広がって、形にならない不安が負の空気になって淀み始める。停滞した空気は、その中にいる病人を余計に圧迫する。そんな負の連鎖を避けなければならなかった。
直ぐ傍にいる家族には辛いことだろう。でも、外の人間はせめても、中の鬱屈した空気を払ってあげないといけないとリョウは考えた。
ラリーサも不安で仕方がなかったのだろう。母親と弟の手前、気丈に振る舞ってはいたが、まだまだ幼い少女だ。その小さな身体に不安を抱え込むのは無理があった。
リョウはその捌け口になろうと手を伸ばした。そして、縋りついてきた小さな身体を片腕の中に閉じ込めた。
「ラリーサは頑張ってるよ。凄く、頑張ってる」
そして、自己肯定の言葉を掛けてやる。
出口の見えない病への看病は、大変なものだ。それは経験したものしか分からないだろう。自分が出来ることと言えば、その努力をきちんと認めてあげることぐらいだった。家族内では当たり前に思われがちな事柄も、端から見たら凄いことなのだと。視点が変わることで見えてくるものは沢山あるのだと。
母親のやつれた顔を見たとき、リョウの胸は鋭い痛みを覚えていた。病がちの夫と幼い子供たちを抱えるのは、自分には想像を絶することだった。今、この一時だけは、その負担が少しでも軽くなれ

ば――――そう願わずにはいられなかった。

もう一つの竈で沸かして温かくなったお湯を盥に入れて、父親が寝ている寝台の傍に持って行った。

部屋の中は、簡素だが整っていた。素朴な木の寝台に机と椅子。家具は必要最低限で多くはない。寝具のカバーには、温かみのある手縫いの刺繍が端に施されていた。寝台の傍の壁には、同じく母親のお手製だろうか、小さな花を描いたタペストリーが掛かっていた。

慎ましくも穏やかな日常がここにはある。この家族の日々が、それらからほんの少しだけ垣間見えた気がした。

ラリーサに替えの寝間着とタオルを持ってきてもらう様にお願いをして、リョウは手拭を濡らすと、寝台の中にいる男に声を掛けた。

未だ顔色は悪かったが、先程のような苦しさからは抜け出していた。

「少し、汗を拭わせて下さい。シャツを替えましょう。そのままでは風邪を引いてしまいますから」

失礼しますと声を掛けて、上掛けを捲り、シャツのボタンを外すと温かいお湯で濡らしたタオルで男の汗を拭った。

目を閉じたまま、男が緩く息を吐き出したのが分かった。

「お水をお飲みになりますか。今、お茶を煮出してはいますが」

「ああ。ではお茶をもらおう」

「はい」

ラリーサが父親の寝間着を持って戻って来た。

そして、男の身体をゆっくりと起こしてから、すっかり汗を吸って重くなったシャツを取り払った。剥き出しになった男の背中をタオルで拭う。男の背面、首から背骨の中心に掛けて細く薄らとだが紫紺の痣が出ていた。

「背中に痛みはありますか？」

痣の部分を確かめるようにそっと改めてゆく。

「いや。そこは大丈夫だ」

緩く息を吐いた男を見て取って、リョウは素早く男の上半身に新しい寝間着を着せた。同じようにして下のズボンも取り換える。
剥き出しになった男の足首部分を目にした時、リョウは息を飲んだ。
そこは右の踝部分が異様な程に腫れあがって熱を持っていた。皮膚も赤紫色に変色していた。
リョウは傷に触らないように慎重にズボンを穿かせると、煮出したお茶を男に飲ませた。
「鎮静作用のあるものを強く煮出しているので、少し苦味があります」
苦いですよと一応釘を出して。それでも予想通り、その苦みに顔を顰めた男の顔をそっと見遣った。
「ですが、これで少し呼吸が楽になると思います」
これまでレントを始めとする鍛冶職人のギルドでの症例を挙げれば、男はそっと自分の胸の辺りを手で摩った。
「ああ。この辺りがすっとする」
そう言って穏やかな表情をした男に、リョウは漸く安堵の息を漏らした。

「お前さんは？」
発作に似た症状が収まり、落ち着きを取り戻すと、突如として現れた見知らぬ人間の存在が気になったのだろう。
腫れあがった踝に塗る為の薬草を小さな乳鉢で潰していると、寝台の中の男が少し離れた床に座り込むリョウへ視線を投げていた。
そう言えば、まだきちんとした自己紹介をしていなかったと慌ててその場で姿勢を正した。
リョウは簡単に名乗ると、ここを訪れることになった経緯を手短に語った。

「……そうか。カマールの所か」
一通り、話を聞き終えた男は、カマールの名を耳にすると警戒を解いたようだった。
「カマールさんをご存じなんですか？」
「ああ。この街の鍛冶職人は、大抵が顔見知りだ」
その言葉に、鍛冶職人のギルドが、この街では想像以上に大きな影響力を持つ共同体で、鍛冶職人達はその中で強い繋がりを保持しているのだということを改めて認識した。
「リョウ。これでいい？」
姉のラリーサが少し長めの晒しを手に傍らにやってきた。
「ああ、十分だよ。ありがとう」
そして首を少し後ろにずらすと、
「すみません、タマーラさん、急にお邪魔した上に、色々と無理を言ってしまって」
娘の後ろに立つこの家の主婦である母親にも頭を下げた。
突然、部外者が部屋に上がり込んで、家の中を引っ掻き回し始めたのだ。緊急事態であったとは言え、この家を預かる主婦には余り気持ちのいいものではないだろう。
図々しいことをしている自覚はあった。それを申し訳ないと思っていることを仄めかせば、
「いいのよ。こちらこそ、ありがとう。あなたが来てくれて助かったわ」
一息ついて、普段の落ち着きを取り戻したのか、線の細い女性が緩く首を振った。その顔には、人の良さそうな優しい微笑みのようなものが浮かんでいた。
「なぁ、お兄ちゃん。それをどうすんのさ？」
コースチャも本来の子供らしい好奇心が疼くのか、興味深げに傍らにやってくるとリョウの手元を覗き込んだ。
乳鉢の中には、凝固処理を施した生の【ストレールカ】を解凍し

て、磨り潰していた。

【ストレールカ】は、以前、森に薬草採り入った時に狼のアラムとサハーたちと一緒に見つけたものだ。あの時、持ち帰った株を、似たような環境の少し湿り気を帯びた土に植え替えれば、思いの外、株が増えたのだ。茎系の植物であったとことも運が良かっただろう。その自家栽培したものを効力が高い生のまま凝固処理をし、保存したものを鞄の中に入れていたのだ。凝固処理を施された薬草は、ガラス細工のようにカチカチに固まっていたが、解除の呪いを唱えれば、再び、摘んだ時と同じ状態になった。それはその昔、ガルーシャから教わった呪いの中でも重宝する部類になっていた。

鞄の中に入れていた油紙に薄く軟膏を塗る。その上に磨り潰した【ストレールカ】を塗った。緑を焦がしたような深い色が薄茶色の紙の上に広がった。それを男の腫れ上がっている踝にそっと当てた。

男は、その踝の腫れから来る痛みの所為で、歩行がままならない状態であるらしい。踝の内側には濃い紫の痣が斑点のように出ていた。その部分は、触れるだけでもかなりの痛みが走るらしく、その上から包帯を巻き始めたリョウの視界の隅で、男の顔が痛みを堪えるように時折、歪んだ。深く皺の刻まれた男の目尻と眉間に一層の皺が寄る。

それを意識の隅に留めながら、通常より厚めに包帯を巻き終えたリョウは、ガルーシャが残した冊子にある文言を思い出していた。

胸内で反芻する。

意識を集中させて、呼吸を整える。

――――ゴォースパジィ（神よ）、パミルーィ（慈悲深き）、ゴォースパジィー（神々よ）イーイーイーィ……。

小さな囁きと共に抑揚のある独特な旋律が、リョウの口から紡がれ始めていた。

『聖なる大地に口付けを　跪き　頭を垂れ　乞い願う　古き頸木

を解き放ち　かの者の血を無に帰さんことを　瘴気として止まりし
そが源を　再び　地へ還さんことを』

――――ラスターィ……イ……ウマリャァーユゥ……。
（溶けんことを）（乞い願う）

大地から得た力の対価を元の流れに戻すように。
少しでもこの男を蝕む障りが身体の外に溶け出すように。
思いを込めて祈りを捧げる。
掌の下がほんのりと熱を持ってくるのが分かった。呪いに呼応するように【ストレールカ】が反応を始めたのだろう。
自分が実際にガルーシャの真似をして、一体どれほどの効果が現れるのかは分からない。何の変化ももたらさない可能性は十分有り得た。それでも、【術師】としての在り方を探る為に、リョウは冊子に書いてあった通りに、呪いの言葉を口にしていた。

突然、小さな祈りに似た文言を口にし始めたリョウを寝台にいた男とその家族は、黙って見つめていた。
父親に不治の病の兆候が現れてから、家族は出来る限りのことをしてきた。それこそ藁にも縋る思いで、少しでも効きそうなものがあると耳にしては、苦しい家計を遣り繰りして、それを探し求める日々が続いていた。少しでも症状が緩和できたらとの一心で。
だが、これまで目に見える形での芳しい効果は得られなかった。一度発症してしまえば、治癒は難しい。この病に対処法がないのは、家族としても、十分理解している積りであったが、実際、症状に苦しむ父親の姿を見るのは辛かった。
今回も望みはないかもしれない。
ひょっこり現れたのは、まだ幼さを残した少年で。専門の【薬師】でも【術師】でもない。それでも、その少年から醸し出される厳かで真摯な空気を、気紛れでもいい、信じてみたかった。

「これで、少し、様子を見てください」
ゆっくり振り返ると、リョウは少し頼りなげに眉を寄せながら小さく笑った。
「効果の程は分かりません。全く、変わらないかもしれません」
そして、静かに言葉を継いだ。
「一晩は、薬草の効果が出るので患部が熱を持ちます。上手く行けば、腫れを起こしている患部から膿が外側に出てきます。包帯を替えるのは明日ですね。もし具合が悪くなったり、気分が悪くなったら、伝令を寄こしてください」
リョウは少し窓の外へ視線をやってから、母親を見た。
「タマーラさんには、伝令になってくれそうな鳥や獣に心当たりがありますか？」
【術師】である鍛冶職人には大抵、伝令などの役目を担ってくれる鳥や獣の類がいた。
「あたし、友達の雀と蝙蝠がいるわ」
そう言って手を挙げたラリーサにリョウは破顔した。
「そうか。それじゃぁ、そのお友達に頼んでもらってくれるかな。カマールの所にいるリョウだって言えば多分、分かると思うから」
その言葉にラリーサは大きく頷いて見せた。
そして、また明日の朝、様子を見る為に訪れると約束して、リョウはコースチャとラリーサの家を辞したのだった。

彷徨う影

ラリーサとコースチャ姉弟の家からの帰り道、少し遅くなったと思いながら、人々でごった返す往来を足早に歩いていると、キーンという独特な摩擦音の後に、上空に影が差した。

次の瞬間、左肩に馴染みのある重みがズシリと乗った。

「ヴィー！」

三日ぶりに見る知り合いの大鷲の姿に顔を綻ばせると、

『リョウ。そのまま聞け』

それ以上の言葉を挟む間もなく低く告げられて、リョウは前を向いたまま、止まりそうになった足を動かし続けた。

大鷲のヴィーは器用にリョウの肩の上でバランスを取っている。まるで肩先に付けられた？製の人形のようだ。

「どうしたの？」

顔馴染みの大鷲から発せられるいつにない緊張感を感じ取り、目線は自分が歩く通りに向けられたまま、何食わぬ顔を取り繕って低く囁く。

擦れ違う人々が、自分の肩に乗る大きな猛禽類を見て、目を見開いているのが視界の隅に見て取れた。大きな籠を背負った物売りの男が興味深そうに立ち止まる。小さな子供が物珍しそうにこちらを指差し、それを母親に窘められていた。

『お主を追尾しておる輩がおる。東の方角に一人、東南の方角に二人。共に男だ。心当たりはあるか？』

思ってもみないことにリョウの心臓が竦んだ。

驚きに開いた目を慌てて普通に戻す。前を向いたまま、ざっと、リョウはこれまでこの街で過ごした日々を思い返していた。

「いや、この街に知り合いは少ないし。面倒なことに首を突っ込んだ積りも無いけど……」

と言いかけて、三日ほど前、往来から【ツェントル】にしょっ引かれた件を思い出す。
「……あ」
思わず声を漏らしたリョウに、ヴィーが首を回した。
『なんだ？』
「ほら、この間、往来で酔っ払いに絡まれた件だけど」
『ああ。あれか』
あの時は、運良くヴィーと鷹のイーサンに助けられたのだ。
「あの酔っ払いのおじさん。【ツェントル】で多分、事情聴取を受けて。そこで運悪く（？）知り合いの兵士にお灸を据えられたみたいだった。だから、もしかしたら、逆恨みっていうのかな……そういう感情はあるかもしれない」
今、思いつくと言えば、そんな所だった。
『ふうむ』
ヴィーは、再びぐるりと首を巡らすとその鋭い眼光で後方を透かし見たようだった。
『いや、どちらもあの時の男ではないな』
「まだ、付いて来てるんだ？」
『ああ。やけに手慣れている』

その言葉にリョウの背中に冷たいものが流れた。
自分には心当たりが全くない。カマール関係か、それともユルスナール関係か。それともブコバル関係か。いや、彼らと始終一緒にいる訳ではないし、第一、あの男たちの傍にいても自分の存在などあの二人の前では明らかに霞んで目立たないものになるだろう。
莫迦げた思いつきを急いで振り払う。
だが、ヴィーが態々自分の肩に乗って知らせて来る位だ。それは、どう見ても余りよろしくない類のものなのだろう。
まさか。物盗りの類かとの考えが掠めたが、お世辞にも自分は金品を持っていそうには見えないだろう。傍目にも格好は貧相ですら

あると言える。

無言のまま、黙々と足を進めるリョウの傍で、ヴィーが提案をした。

『このまま真っ直ぐ行けば、【ファンタンカ（噴水）】のある広場にぶつかる。そこに屯する【ゴールビ（鳩）】と【ヴァローナ（鴉）】の連中に一斉に合図を送る。その隙に乗じて走れ』

「了解」

ヴィーの言葉にリョウは両手を固く握り締めた。駆け出しそうになる心臓を、深呼吸をすることで押さえた。振り向きたいのを必死で我慢する。きっと相手を見たら足が竦んでしまうに違いない。

『よいか。リョウ。我が飛び立つときが合図だ。そのまま北の方角へ走れ』

「分かった」

リョウは、前を見据えたまま短く頷いた。その顔付きは、緊張の為か無表情になっていた。

鞄のベルトを引き締め、荷物を身体に張り付く様に固定する。左側の腰に下げたベルトに収まっている短剣を手で確かめる。そして、右の太ももに巻いているベルトにあるもう一つの小振りの短剣へ指を伸ばした。

これを使うことにならなければいいのだが。

これまで、手にした刃を人に向けて振るったことはなかった。それは、偶々、運が良かっただけなのかもしれない。兵士たちが当たり前にその腰に佩くのは、長い両刃の剣だ。街中を闊歩する屈強な男たちは、その身に剣を始めとする様々な武具を帯びている者が殆どだった。これまでは幸運にも物盗りの類に会うことも無く、柄の悪い連中に絡まれることも無かった。それまで過ごしてきた場所が辺鄙な田舎で、のんびりとした善良な人々に囲まれていたからということもあるだろう。

忘れかけていたこの場所の現実に再び目を向ける契機となった。

人混みを器用にという訳にはいかないが、それなりに避けながら、大通りを歩く。露天で売られている【パミドール（トマトに似た野菜）】だろうか、野菜の赤い色が、やけに目に付いた。

逸る気持ちを抑えながら歩き続ければ、前方に開けた空間が見えて来た。

大きな噴水（ファンタンカ）が鎮座するその場所は、街の人々の憩いの場所でもあった。

噴水の水は仕掛けに応じて刻々とその形を変えた。そこは、水路で囲まれた街の象徴とも言うべき場所らしい。

日が中天に差し掛かる頃合いである。子供を連れた女たちがここそこで談笑しているのが見受けられた。老人が、温かな日差しの下、束の間の日光浴をしている。集まる人々を目当てに屋台のようなものも出ていた。焼き菓子の甘い匂いが鼻孔を擽った。

ヴィーの言う通り、噴水広場（ファンタンカ）には沢山の【ゴールビ（鳩）】と【ヴァローナ（鴉）】たちが羽休めに集まっていた。

リョウは唾を飲み込んだ。

『行くぞ』

「うん」

合図と共に、左肩から重みが消えた。飛び立った大鷲の大きな翼に呼応するように広場にいた鳩（ゴールビ）と鴉（ヴァローナ）が一斉に羽ばたいた。

突然のことにその場にいた人々が吃驚して、頭を抱えたり、上を見上げたりしている。

その混乱の隙に、リョウは、土を蹴ると石畳の上を勢いよく駆け出した。なるべく姿勢を低くして広場を抜けると北の方角へと進路を取った。

その後方、噴水の広場では、群れを成した鳩（ゴールビ）と鴉（ヴァローナ）が実に統制の取れた動きでその空間を、円を描くように上から下、下から上へと羽ばたいていた。

ヴィーの姿はリョウの視界から消えた。
それは仕方がなかった。大鷲は実に大きな猛禽類だ。羽を伸ばせば、人と同じくらい、もしくはそれ以上の体長になる。その姿は雄々しくもあるが、この狭い小路の界隈では目立ち過ぎた。
北の方角と言われても、リョウには心当たりがある訳ではなかった。目指す場所などない。感覚的に相手を撒けるのどうか分からなかったが、それでも物陰に紛れるように、細い小路を幾つか折れた。
遥か遠くで、男たちの怒声を聞いた気がした。

暫く走り続けると、【ツェントル】に対峙する街の行政部門を担うという役所が見えて来た。【ツェントル】に駆け込むという選択肢も考えなくもなかったが、それを思いつく前に大分先を走り抜けてしまっていた。今から迂回して戻るのは危険だった。
全力疾走をするのは本当に久々で、元々頼りない体力は、早々に悲鳴を上げ始めた。リョウは息が切れて来た。
道を逸れて物陰が出来た場所に飛び込むとしゃがみ込み息を整えた。肩が大きく上下する。耳元で鼓動の音が高くなっていた。全身が心臓に成り変わったように、駆け巡る血液が主張を繰り返す。荒くなる呼吸を落ちつけようと目を閉じて、じっと周囲の音に耳を澄ませた。
暫くして、通りを駆け抜ける男たちの足音が響いた。足音は複数。影に埋もれるようにして身を潜め、息を殺す。
「おい、いたか？」
「いや、見当たらん」
「チクショウ、しくじったか」
「ちょろちょろと逃げ足の速い奴だ」
「俺は向こうを当たる。お前はあっちだ」
「ああ」
「くれぐれも手荒な真似はするなよ」

「ハッ、それは保証できねぇな。手間掛けさせやがって」
「いいから行け」
漏れ聞こえて来た男たちの会話に、リョウは強く目を瞑った。
探されている理由が分からない。それでも複数の男たちの剣呑な様子からは、事態としては最悪な方向だと言えた。

二手に分かれてこの界隈の捜索を始めた男たちの様子を見て取って、リョウはこのままここにいる訳にはいかないだろうと判断した。
呼吸が少し落ち着いたのを確認して、静かに立ち上がると、なるべく物音を立てないように建物と建物の隙間、影に成っている部分を壁伝いに歩いた。
突き当りでそっと往来を窺う。
昼時だというのにこの界隈は、行政の建物が傍にある所為か、とても静かだった。ここでは人ごみに紛れることは出来ない。
建物と建物の隙間から覗く空を見上げる。頼りに成りそうな相棒の影は、どこにもなかった。

あの木陰に移って、影になった役所脇の道を足早に抜けよう。当たりを付けてから、震えそうになる足を叱咤して、リョウは再び駆け出した。
そして、表通りからは二本程中に入った建物と建物の間、人が一人通るのがやっとという位の細い隙間を抜ける。足下を乾いた土埃が舞い、煉瓦造りの建物の隅には、雑草が強かに葉を伸ばしていた。
それを見て、ふと、そろそろ薬草の手持ちが少なくなってきたことが頭を過った。
帰りの行程を考えれば、余り無駄には出来ない。この辺りにも薬草の類が生えている森や林が無いだろうか。明日にでも鳥たちを捕まえて聞いてみよう。補充が出来ればそれに越したことはない。

そんな他愛ないことを考えた所為だろうか。

束の間の現実逃避に集中力が削がれた時だった。
細い小路を抜けて、もう一本の往来と交差する場所を抜けようとした所で、突如として脇から伸びて来た腕に拘束された。
「静かにしろ」
低い男の掠れた声がして、首筋に当てられた冷たい金属の感触にリョウは息を飲み込んだ。
――――――ゴースパジ。
詰めた息を緩く吐き出すと目を閉じた。
そして、無駄な抵抗はしないと意志表示する為に、そっと両手を前に挙げた。

そして同じ頃、リョウが拘束をされた場所から少し離れた人気のない路地裏では。
「ご苦労」
大きな羽を広げ、一陣の風のように真っ直ぐ舞い降りて来た相棒に手を差し伸べた男は、短い労いの言葉の後、直ぐに本題に入った。
「――――で、上手く撒けたか？」
『それはまだ分からぬ』
相棒の声に、男の眉が跳ね上がった。
「あ？　見届けたんじゃねぇのか？」
『北へ行くようにとは告げたが、追えたのは【ツェントル】の界隈までだ。後は【ヴァローナ】のグスタフに任せてある』
――――――――我が傍にいては目立つではないか。
そう言って、尤もらしく付け足した大鷲は、男に剣呑な視線を送った。
『それよりも、お主、話が違うではないか』
「あ？」
『追尾はざっと五人。少なく見積もってもだ。北西の方角にも何や

ら胡乱な輩が二人はいたぞ』
その報告に、男は唯一、顕わになっている右目を眇めた。
「何だって？」
男が感知していたのは、軍部関係から入った情報に基づき調査をしていた男たちだ。要するに早い話が、ガルーシャ・マライ関係の筋だった。
ガルーシャ・マライの弟子だと噂されている人物に【スタリーツア（都）】の連中が、国内で不用意な接触をすることを阻止する為であった。特に、スタルゴラド軍部で術師としての素養を持つ兵士たちを抱える第三師団の介入を警戒していた。それと同時に、ガルーシャ・マライの権力と名声、彼が持つ膨大な知識を利用しようという野心家の貴族たちの動きを追っていた。
「おい、待てよ。俺が張ってたのは、東と南の三人だけだぜ？」
影が色を濃くする中に、ザリと石を踏む音がした。
『では、別口が現れたということだろう』
鼻先で告げられた淡々とした大鷲の言葉に、
「マジかよ。勘弁してくれ」
男は、あからさまに額に手を当てて空を仰いだ。
明るい金茶色の癖の無い髪がさらりと揺れて、仄かに差し込む陽射しに反射する。

上空に小さな影が差し、男の足下に敏捷な斑点を描く。
男の腕に乗った大鷲が、建物によって小さく切りとられた蒼穹の切れ端を見上げた。
『来おったか』
程なくして、小振りの【ヴァローナ（鴉）】が、その灰色の羽をはばたかせて降りて来た。
乱雑に積み上げられ小振りの木箱の上に止まる。
『ヴィー』
『どうであった？』

『従者と思しき輩に捕らわれたぞ』
偵察を命じられていた【ヴァローナ（鴉）】が黒々とした瞳を男に向けた。
男から発せられる空気が、一瞬にして変わる。
「何処へ行った？」
それは一段と低くなった声によく表れていた。
【ヴァローナ（鴉）】は、どこか落ち着きがないように点々と木箱の上を跳ねた。
『【ファナーリ（灯火）】亭に入った所までは確認したが、その後は分からん』
それを聞いて、男の眉間に皺が寄った。
「あ？　【ファナーリ（灯火）】亭っていやぁ、この辺じゃ、名の知れた娼館じゃねぇか！」
――――――なんでそんな所に連れ込まれてんだ。
顔には出ていないものも、内心、男は首を傾げた。
『さぁな、人間の考えることは不可解な事だらけだ』
行間に潜む男の声を感じ取って、どこか不愉快そうに羽を広げた【ヴァローナ（鴉）】を尻目に、男は少し考えると苦々しげに口の端を歪めた。
「まぁ、密会にはもってこいってことか」
――――――趣味が悪いには違いないが。

高級な娼館になれば、大抵、そこには上客の為の特別な部屋が設けられていた。娼館の主ともなれば、この街では顔が広く、その人脈も多様だ。それを生かして、なんらかの表立っては出来ない取引の仲介に立ったりすることもある。そういう時に、客への取り次ぎをするような場合や会合の場としてそういった部屋が使われる場合があった。娼館は客商売であるから、顧客の守秘義務をある程度は守る。人目を誤魔化して密会をするには打ってつけの場所とも言えた。

男は、浅く腰かけていた木箱から立ち上がった。それに合わせて、腕に止まっていた大鷲がその男の肩へと移る。
「連れ去った男は何人だ？」
『傍にいたのは一人だ』
「どんな奴らだ？」
『さてな。どこぞの従者のような格好をしていたように思うが』
曖昧な情報に男が苛立たし気に舌打ちをした。
「ヴィー」
そして、発せられた男の鋭い声に、大鷲は溜息を吐いてから補足的な情報を与えた。
『身なりは上等なものだろう。大方、貴族の従者というところか。野卑な気はしなかった。まぁ、中身は分からんがな』
長年の経験から、相棒の観察眼が、かなり精度の高いものだとは分かっていた。得られた情報は、大方、合っているだろう。
ということは、裏で絡んでいるのは貴族ということになる。一口に貴族と言ってもピンからキリまであるが、往々にして階級意識の高い連中だ。そして、今のところ、軍部の網に引っ掛からなかった男だ。そんな輩が、強引にあの娘に接触をする理由は何か。やはり、ガルーシャ関連と考えるのが妥当か。それ以外に、あの娘に用事があるとは思えない。となれば、もう一度、情報を洗い直す必要があるだろう。
男はざっと頭の中でこれからの計画を立てた。
何やら、非常に面倒な匂いがした。長年の経験から研ぎ澄まされた男の感がそう告げていた。
男は組んでいた腕を解くと、顔を上げた。
『行くのか？』
男の気配を感じ取って、大鷲が低く問う。
「ああ。仕方ねぇ」

男は、木箱の上に止まる【ヴァローナ（鴉）】を振り返った。
「グスタフといったか。協力、恩に着る」
相棒以外の相手に対して、素直に礼を述べるのは、この世界に影として生きる男にとっては欠かせないことだった。
だが、それは【ヴァローナ（鴉）】には意外であったようで、グスタフは、物珍しそうに男を見た。
それから、小さく笑って男の肩に乗る大鷲を仰ぎ見た。
『ならば、我が先触れを務めよう。そなたよりは近づきやすかろう』
『忝い（かたじけない）』
『なに。あの子に万が一のことがあれば、森の長に申し訳が立たん』
そう言って、颯爽と飛び立った灰色の鳥の後に、
『では、我も先に行く』
大鷲が続いた。
そして、遥か上空へと飛び立った二つの黒い影を見送ってから、残された男もすぐさまその場から静かに姿を消した。
賑やかな雑踏に紛れた三つの影が目指す場所は一つ、この街の北西に位置する花街の一角だった。

回りくどい懐柔策

人通りの多い往来を二人の人間が足早に歩いていた。一人は、まだ小柄な少年と思しき人物だ。黒っぽい深緑色の外套の背中には、鞄が張り付く様に付いている。立てた襟の傍を跳ねる癖の無い黒い髪は、小さな尻尾のように、その人物の歩みに合わせて小刻みに揺れていた。

その隣には、もう一人の男が、ぴったりと寄り添うようにして付いていた。

その姿は、一見、人混みの中を逸れないようにと相手を気遣っているようにも見える。だが、男の感情の乗らない澄ました表情は兎も角、その隣を足早に歩く人物の顔は、明らかに強張っていた。

強い力で腕を掴まれたまま、黙々と道を歩いた。背中に張り付いた男の立ち位置は実に巧妙でさり気なく、傍目には二人が連れだって歩いている位にしか見えないだろう。

リョウの顔は強張ったままだった。通りを曲がる度に掴まれた場所に力が入って痛みに顔を顰める。

自分を拘束しているこの男は、一体、何者なのだろうか。

体格は、この国の基準で言えば、中肉中背というところだろうか。ブコバルやユルスナールを始めとする北の砦の兵士たちといった自分が比較対象として知る男たちに比べれば、幾分小柄だ。それでも自分と比べれば、遥かに体格がいいことには違いなかった。

男が身に着けている衣服とそこから発せられる空気は、往来を闊歩している無頼漢や荒くれ者の類とはかなり隔たりがあった。その事にまず、リョウは、何がしかの違和感を覚えた。

きびきびとしたそつのない動きとそこから醸し出されている雰囲気は、どことなく品があり、洗練されている。なんというか、実に主観的で感覚的なものだが、その男からは都会的な匂いがした。

拘束の後、相手の抵抗が無いことを踏んで、男が発した言葉は一言。

「主が呼んでいる」

そして、付いて来いとばかりに顎をしゃくった。

それから、有無を言わさずに強引に引っ立てられている。気分は罪人さながら、最終審判を待つ被疑者といったところだろうか。

男は、道中、沈黙を貫いたままだった。

行き先を尋ねてみても、ギロリと剣呑な目付きで睨まれるだけ。その度に煩いとばかりに掴まれている腕に力を入れられる為、リョウは早々に質問をすることを諦めた。

このまま腕を折られては敵わなかった。そうでなくとも腕には痣が出来ていそうだ。

それから、暫くして、男は身体を入れ替えるようにして前に出ると、とある豪奢な建物の中に入って行った。

裏口だろうか、通用口のような簡素な木の扉から中に入る。

扉を開ければ、途端に噎せかえるような甘い匂いが鼻に付いた。

無意識に顔を顰める。ぼんやりとした室内は、辛うじて日の光が差し込むような薄暗さで、目が慣れるのに時間が掛かった。幾度か瞬きを繰り返す。そうして目に入ってきた光景に、リョウは暫し、呆気に取られた。

廊下の向こうをあられもない格好をした女たちが、気だるげに通り過ぎて行く。

大きく欠伸をする女、のんびりと長い髪を梳る女。密やかな笑い声。退廃的な淀んだ空気が、その一角には立ち込めていた。

――――――まさか。ここは……。

不意に頭に浮かんだ単語を確かめるように目を凝らそうとする。
だが、
「ぼやぼやするな」
ここに来て漸く口を開いた男の第一声に、それ以上の探索を阻まれてしまった。

半ば、引きずられるようにして廊下を歩き、階段を上がった。
内心、連れて行かれる場所が階段を下りた地下室のような所でないことを良かったと思った。
相手が何者で、何を考えているのかは分からない手前、それは大した慰めにはならないのだろうが。それでも気休めぐらいにはなるだろう。
湧き出て来る不安に押し潰されないようにと深呼吸を繰り返した。冷静になるようにと腹の中に力を込める。
そして、とある部屋の扉の前で、男が足を止めた。
「連れてまいりました」
小さなノックの後、男の事務的な報告が行われる。
リョウの緊張は極限に達していた。
これから何が待っているのか。この後の身の振り方を間違えないようにしなくてはと竦みそうになる足を叱咤する。
「入れ」
扉越しにくぐもった男の声が了承の言葉を紡ぐ。
そして、様々な感情でざわめく気持ちを静めるように顔を上げた。

片腕を掴まれたまま中に入れば、二人の男が部屋の中に居た。
全体的に華やかな印象を受ける室内。一目で高級そうだと思われる調度品に囲まれた長椅子に一人の男が寛いでいた。明るい灰色の上下に真っ白なシャツ。膝下には艶を放つ黒い革の長靴が続く。
そして、その直ぐ後ろには、慎ましやかに控えるようにして立つ

男が一人。こちらは自分を拘束している男と同じ黒に近い濃い灰色の簡素な上下に同じく白いシャツを身に着けていた。

「ご苦労」

長椅子に座っていた男が、隣に立つ自分を連れて来た男にどこか尊大な声音で労いの言葉を掛ける。

それに一つ頷きを返して、往来で掴まってから、ここに来るまで続いていた男の拘束がやっと解かれた。

それまでぴったりと脇に張り付いていた男の気配が遠のく。そして、自分の後方、入って来た扉の脇に歩哨のように下がったのを視界の端に確認した。

「それでは、客人はこちらへ」

優雅に男が座る対面にあるもう一つの長椅子を勧められて、リョウは、内心、腹を立てた。

艶やかで品のある上等な衣服に身を包んだ男の口から出された【客人】という言葉。この男の中では、強引に攫うようにして連れて来た相手に対しても使うらしい。随分と広い定義ではないか。

リョウは、その場から動かずに無表情のまま、その真意を測る為に男を見遣った。

「おや、随分と警戒されてしまっているな」

何が楽しいのだかは知らないが、男の口が笑みを刷く。白々しい嘘臭い微笑みだ。

「警戒されない方がどうかとは思いますが」

ここに連れて来られた経緯を思い、淡々と事実を指摘すれば、

「まぁ、硬いことは言わないに越したことはない」

そう言って徐に足を組み替えた。

男が履く長靴の爪先がやけに尖って見えた。

「座らないのか？」

「ええ。この場で結構です」

最低限の礼は失しないように感情を削いで応対をすれば、男は小

さく肩を竦めてみせた。
だが、それ以上は気に止めないようだ。
「ワタシに、なにか、ご用がおありとか」
慎重に言葉を選びながら、それでも早くこの場を辞したいという気持ちから、リョウは、単刀直入に口を開いた。
男がじっとこちらを見る。綺麗に真中で分けられた明るい薄茶色の髪の間から覗く男の表情は、酷く作り物めいて見えた。口元は弧を描いているというのに、その瞳は全く感情が読めない。灰色の玉のような瞳だ。
「他でもない。キミにちょっとした頼み事がある」
そう言うと、男はその口元に笑みを刷いた。
「キミが師事しているという西の鍛冶屋のカマールに、私は以前から依頼をしていたのだが、これまで中々、首を縦に振ってくれなくてね。どうだろう。キミの方から少し口添えを頼めないだろうか。聞く所によれば、キミは随分とカマールに可愛がられているようだ。キミの方から、私の依頼のことを告げてもらえれば、円滑に進むと思わないか？」

リョウは、一瞬、何を言われたのか、分からなかった。
だが、少し、心を落ち着かせて言葉を反芻してみれば、それはカマール関係の話であることが飲み込めた。
過去、カマールに依頼を持ちかけたが、断られているから口添えを頼みたい。要するにそういうことだった。
リョウは虚を突かれたような顔をして、男の顔をまじまじと見た。
一体、巷ではどんな噂が立っていたのだろうか。この男は誰からそんな話を聞いたのだろうか。
自分がカマールの弟子だなんてとんでもない。それにカマールの仕事に口を挟めるような影響力などこれっぽっちも無いのだ。曲解されて伝わっている事実に、どこから訂正を入れたものかと思う。
だが、それと同時に、自分に接触をしてきた男の目的が分かって、

少しだけ意味の分からない気持ち悪さからは逃れられた。状況が変わらないことには違いないが。
「どうだろう？　勿論、事が上手く運んだ際にはキミには相応の礼をする」
――――――悪い話ではないだろう？
黙ったままのリョウに、男は畳みかけるように言葉を継いだ。
「こちらとしては、なるべく穏便に事を運びたいからな」
そして、最後にぞっとするような冷たい響きを持った声がした。

「すみません。ちょっと待って下さい」
リョウは、話を整理する為に左手を額際に当て、右手で軽く長椅子に寛ぐ男を制した。
思っても見なかった展開に頭が痛くなりそうだった。状況を素早く整理し、打開策を探る。
そして、小さく息を吐き出すと顔を上げた。
「どうやら誤解があるようです」
静かに口を開けば、男の眉が訝しげに上がった。
「申し訳ございませんが、ワタシは貴方がたのご期待には添えないかと思います」
まず、分かりやすく結論から自分の立場を明らかにすれば、無言のまま続きを促すように、男の目が細められた。
「まず始めに訂正をしておきたいのですが、ワタシはカマールさんの弟子でも、鍛冶職人を志す者でもございません。今、ある事情からカマールさんの下に厄介になってはいますが、それも一時的なものです」
淡々とそれでも自分にとっての事実をありのままに告げれば、男は、ゆっくりと後ろに控える男を振り返った。
「パーヴェル」
そして、何がしかの遣り取りの後、再び正面を向いた男が問うた。
「それは本当か？」

「はい」
嘘など吐く必要は無かった。
狼狽えることなく堂々とした態度を崩さない相手に、男の眼差しが不満げに眇められる。
急降下した主の機嫌を感じ取ってか、男の後ろに控えていたもう一人の男は、扉付近にいる男に目配せをした。
「ですが、その者があの鍛冶屋にとって大事であるのは変わりません」
「ふむ」
その言葉にリョウは内心、ぎょっとした。
この男を主とみなしているのだから、この男たちは従者と見ていいのだろうが、正確な情報を得られなかった失態を取り繕おうとして、こちらを巻き込まないで欲しかった。
「あの、誤解が無いようにお伝えしておきますが、ワタシはカマールさんの仕事のことには全く関知していません。ですから、ワタシが間に入ってどうこうするというのは、そもそも有り得ません」
カマールの仕事の采配は、全てカマールのものだ。他人が口出し出来るものではない。カマールは強固な信念に基づいて仕事をしている。カマール自身が受けないと判断した決定をどうして他人が覆すことができようか。
カマールの仕事は命を懸けたものだ。カマール自身がそれに値しないと判断したのだ。それは最終的な、そして、唯一の決定だ。
それをこの男はどうしたいというのだろうか。
「カマールさんの下した決定はカマールさんのものです。他人が、ましてやワタシのような一時の居候が、どうこうできるものではありません」
きっぱりとした口調で言い放てば、男は大業に息を吐き出した。
「困ったな」
言葉とは裏腹に全く淡々とした表情で足を組み直す。
ひじ掛けと背凭れに身体全体を預けるようにして頬杖を突いてい

た男が、ふと、こちらに視線を寄こした。
「カマールにはどうしても誂えて欲しいものがあるのだが。どうしたものか」
そこに浮かぶ薄ら寒いような男の笑みに、背中に言い知れぬ悪寒のようなものが走った。
「……あの、ですから、もうお暇してもよろしいでしょうか。ワタシはお役に立ちそうもありませんし、用事がありますので」
自分には男たちが考えているような都合のよい力などない。それが分かった時点で、もうここに止まる理由もないはずだ。
「もう余り時間がないからな。仕方がない。私としては、こんな手段は取りたくなかったんだが」
主である男がリョウの後方に目配せをする。
白々しい台詞と共に、再び、リョウの腕は扉の脇に控えていた男に掴まれていた。
「……なんの積りですか？」
突然の拘束にリョウは後ろに控えた男と長椅子に優雅に寛ぐ男を交互に見遣った。
「大手が無理なら搦め手からと言うだろう？　キミはあの男にとっては価値があるようだ。そんなキミが不用意に傷つくことになったらどうなるだろう」
――――――――――例えば、キミの将来（命）が懸かっているとしたら？　中々、いい条件だと思わないか？
男は顔色を変えることなく事も無げに言ってのけた。
薄らと微笑みすら浮かべた男の表情を見て、リョウはぞっとした。それと同時に頭の芯が、急速に冷えて行くのが分かった。
「ワタシを使ってカマールさんを脅すお積りですか？」
思っていた以上に落ち着いた声が出ていた。腹の底に沸々と煮え切らない怒りのようなものが溜まって行くのが感じ取れた。
「もう一度、言いますが、ワタシには、そのような価値はありませ

ん」
「だが、こちらにはそうは見えない」
尚も言い募る男にリョウはゆっくりと頭(かぶり)を振ると、真っ直ぐに目の前の男を見据えた。
「カマールさんは生粋の鍛冶職人です。誇り高く高潔な鍛冶屋です。自分の信念を曲げるようなことはなさらないでしょう」
「それは、あくまでもキミの主観的なものだろう？」
この男は、鍛冶職人を愚弄する積りなのだろうか。
喉まで出掛かった言葉を押し込むようにして飲み込む。
「こんなことをなさるよりも、カマールさんに直接話しをした方が余程建設的です」
「そうだな。キミのような未来ある若者の芽を摘み取ってしまうのは、非常に忍びない。私にもそれなりに良心というものはあるからな。だから、ふりだけでもいい。協力をしてはくれないだろうか？」
噛み合わない言葉。急に有り得るはずのない妥協点を探るように引いて見せる。
主の言葉に呼応して、拒否などするなというように腕を掴む男の手に力が込められた。
リョウは、奥歯を噛みしめることでその痛みをやり過ごした。
「お断りいたします」
「どうしてもか？」
「はい」
じっとこちらを見つめる冷たい瞳を、リョウは静かに見つめ返した。
「交渉決裂か」
――――――――残念だ。
そう言って大げさに溜息を吐いた男にリョウは唖然とした。
そもそも始めから交渉ですらなかった。この男の思考回路はどうなっているのか。
「こんなことをしても無駄です。カマールさん自身が下した決定は、

外野が騒いだ所で覆らない。ワタシの身がどうなろうとも、それはカマールさんの仕事には関係がありません。影響など、これっぽっちもない」

「黙れ」

男は不意に長椅子から立ち上がるとリョウの傍に歩み寄り、力任せに胸倉を掴んだ。

外套の襟元が引き上げられ、首が締まった。

「お前の言い分は、この際どうでもいい。こちらで確かめてみるまでだ」

表情を無くした男の顔が近づく。男は低い声を出すと鼻先で薄ら寒い笑みを浮かべた。

先程までの空気からは一転。室内に突如として張りつめた緊張感に窓ガラスが震えた気がした。

「どうしてカマールさんなのですか？」

この街には、鍛冶職人は大勢いる。何故、そうまでしてカマールに拘るのだろう。

リョウの脳裏には、この街に来た当初、カマールの工房で目撃したとある光景が思い出されていた。　淡々としたカマールに対して激高する客だという訪問者たち。カマールに取り付く島も無くあしらわれて、肩を怒らせて工房を後にするのをこの短い間にも何度か見かけた。客だと名乗る訪問者は皆、身なりのいい金持ちだと思われる人々だった。

この男もあのような客の一人であったのだろうか。

「こんなことをしてまでして誂えた剣に意味があるのですか？」

「愚問だな。私は腕利きの鍛冶屋が造るいい剣が欲しい」

――――――――そういうものだろう？

そして、どこか自嘲気味な色をその瞳に乗せた。

「どうしても負けたくない相手がいる。それだけだ」

小さな呟きは誰に向けられたものであったのか。

リョウは、目を閉じるとゆっくりと息を吐いた。
何故、カマールがこの男の依頼を受けなかったのか。その理由の一端が分かった気がした。
男にとって剣は単なる道具にしか過ぎないのだ。だが、鍛冶職人にとっては違う。己が魂を込めて造り上げられた命の欠片で、自分の分身のようなものだ。そしてそれは、そのまま作り手が生きていたという証でもある。それを作り上げた職人がこの世を去っても、その魂が込められた刀剣は末代にまで残る。そのような鍛冶屋の魂の結晶を使い勝手の良い道具としか見做さないような相手に、鍛冶屋として命を懸けることなど出来はしまい。
いきなり溜息を漏らしたリョウを男は至近距離から苛立たし気に睨みつけた。
「何がいいたい?」
カマールがこの男の依頼を受けることはないだろう。
「カマールさんは簡単に自分の信念を曲げるような人ではありません。こんな見当違いな脅しなど歯牙にもかけないでしょう」
「お前に何が分かる?」
淡々とした物言いに胸倉を掴む男の手に力が入った。
リョウは、苦しさに顔を顰めるが、ここで屈する訳にはいかなかった。
「あなたは鍛冶職人の人たちを誤解している」
「何だと?」
リョウの胸内には、言い知れぬ悲しみが込上げて来た。
男は少なくともこの国の人間で、恐らく上流階級だ。そして、剣の使い手でもある。この国の行く末を担う立場にあるであろうこの男が、その剣が作りだされる過程とそこにある背景に無頓着であることが、残念であることを通り越して、自分には悔しかった。
カマールを通して顔見知りになった鍛冶職人たち。ギルドの居住棟に住む引退した鍛冶屋たち。そして、ラリーサとコースチャ姉弟

の父親である鍛冶師。皆、身体に爆弾となる肉体を蝕む痣を持ちながらも、その佇まいは凛として威厳と誇りに満ちていた。
この男の行為は、彼らの生き様を愚弄するものだ。

「彼らは己が命を懸けるに相応しい相手を自らの判断で選んでいる」
それは決定的な一言であった。
「ふざけるな！」
突然、激高した男が鋭い声を上げ、後ろへ叩きつけるようにして掴んでいた襟首を放した。
勢いのままにリョウの身体は壁に打ち付けられ、鈍い殴打に似た音がした。
「私の依頼が下らないと言いたいのか！　あ？　ガキが知った口を聞くな！」
「その『ガキ』にこんな話を持ちかけているのはどなたですか！」
売り言葉に買い言葉。
思わず出てしまった言葉に、部屋の中の空気が一段と冷え込んだ。

――――――ダン！
男が冷たい目をして湧き立つ怒りを堪えるように拳を壁に打ち付けていた。振動が壁を通して部屋全体に広がった。
「くだらないお喋りはここまでだ。私は自分のやりたいようにやる。お前など、捻り潰すのは容易い。痛い目に遭いたくなかったら、その生意気な口を慎む事だ」
こちらに指を向けて、刃物のように鋭い男の視線がリョウを貫いていた。

そして、不意に何かに気が付いた男は、嘲るように口角を上げた。
「おい、お前。それは【キコウ石】だな」
男の視線は、リョウの胸元に向けられていた。そこには、胸倉を掴まれた時の衝撃で中から飛び出した青い石のペンダントが白いシ

ヤツの上に乗っていた。
リョウは咄嗟にその石を片手で掴んだ。これは、みだりに人の目に触れていいものではないと以前、とある男から教わった。
「とんだ策士だ。そのようなご大層なものを首から下げているとはな。お前は、やはり、カマールの弟子だろう？　鍛冶屋の守りにはもってこいの石だ」
兇悪な微笑みを浮かべた男は、従者である男に目で合図を送る。
「連れて行け」
「ちょっと待って下さい！」
再びの拘束にリョウは暴れたが、体格の差と力の差は一目瞭然で、あっという間に動きを封じられてしまった。
「無駄な抵抗は止めることだな。腕を折ってやろうか？　鍛冶屋としての利き腕を失うのはどんな気分か」
再び長椅子に腰を下ろした男が、せせら笑うように吐き捨てた。
リョウは口惜しさとこれからカマールに掛けてしまうであろう迷惑を思い歯噛みした。そして、こちらを憎々しげに見る男の冷酷な瞳に慄いた。
悔しいが、今、自分の状況は圧倒的に不利だった。力では敵わない。この男の意志一つで自分の生死が決定する。生殺与奪権は向こう側にあった。

――――――どうしたらいい。
言葉にならない不安と焦燥が体中を駆け巡る。
「こんなの間違っています。人を脅迫してまでして作られた剣など使い物になる訳が無い」
緊張とこれから自分を待ち受けるであろう事態に対する言い知れぬ恐怖から震えそうになる身体をなんとか誤魔化して、男を見据える。
「喧しい。お前の御託など、どうでもいい」
興味が削がれたように男が片手を振った。

それが合図なのだろう。
「来い」
それまで静かに扉側に控えていた男が、再び引っ立てるようにリョウの手首を掴んだ。後ろ手に纏めて拘束をする。
「レオンチューク。言うまでも無いが、そいつの得物を避けておけ」
男が外套の合間から覗く、二つの短剣を指差していた。
指示された男は、当然とばかりに小さく頷いた。
リョウは、どん底に突き落とされたような気分になった。
その目裏には、カマールの男らしい笑みとユルスナールの優しい微笑みが浮かんでは消えた。

キヌギヌの朝

「ねぇ、ブコバルの旦那、今度はお友達も連れて来て頂戴な」
逞しい腕にしなだれかかるようにして口にされた女の言葉に、男は微かに眉根を寄せた。

ここは、とある娼館の一室。
好みの女と一夜を共にした馴染み客が、名残惜しそうに暫しの別れを惜しみ、帰路に着く場面である。

「お前なぁ、これから帰るって時に他の男の名前を出す奴があるか」
だが、発せられた言葉尻とは裏腹に、その声音は些か甘ったるかった。
日も大分高くなり、仕事を終えた夜の蝶たちが束の間の休息に就く頃合いだった。
普通ならば、もう少し早い時分に客である男たちはこの館を出ることになっているのだが、この男は、少し出立が遅くなっても文句を言われない程度には、この店にとっては上客であるようだった。
男は大きな手を伸ばすと、まだ年若い女の弾力のある頬へ触れる。擽るようにして頬を撫でる男の無骨な指先に、女は甘えるように喉を鳴らした。
「何言ってるのよ。あたしが旦那一筋だっていうのは分かってるでしょう？　他の子たちが気になってるの。だって、いつも二人で来るじゃない。なのに、ここのところ旦那一人なんだもの。街で見掛けたっていう噂は聞くから、今年もいらしてるんでしょうけれど、ここには顔を出さないから、皆、どうしたんだろうって気を揉んでいるのよ。まぁ、あの人は、ここに来るだけで目の保養になるでしょう？　ちょっと冷たい感じがするけれど、そんな謎めいた所がま

たいいって。あたしらの中じゃ専らの評判なの。勿論、旦那も負けないぐらいいい男だけれどね」

申し訳なさ程度に付け足された文言に、男は拗ねた顔をして見せた。

「俺はオマケかよ」

「まぁ、そんなことないわよ」

――――――あたしには、あなただけ。

それは、夜の華たちの常套句だ。男の方もそれを良く分かっている。

束の間の言葉遊びに踊らされるのは男の方なのか、はたまた女の方なのか。

それをお互い承知の上で、ここは、暫しの夢と快楽を対価として求める場所なのだ。

虚飾の中に幾ばくかの真実を薄らと練り込んで。

「また来てね」

男の手が、女の滑らかな曲線を名残惜しそうに辿る。

「ああ。近いうちにな」

「きっとよ？」

女は、男の逞しい首に剥き出しの腕を巻き付けた。

申し訳なさ程度に女の身体を覆う薄い夜着からは、昨晩の名残の甘い香水の匂いが男の匂いと共に残っていた。

そして、女と客は、別れの口付けを交わそうと互いの顔を寄せ合う。

そんな時だった。

――――――――ダン！

壁の向こう側から、なにかを強く殴打するような音が響いて来た。

もう少しで唇が合わさるという所で、男と女の動きが止まる。

邪魔が入ったことを忌々し気に舌打ちする男の傍らで、女が吃驚

して音のした方へと顔を向けた。
再び大きな物音がして、女は肩を振るわせた。
「どうしたのかしら?」
殆どの客が掃け、女たちは眠りに就いている時間だ。館内は、昨夜の賑やかさが嘘のように静まり返り、束の間の夢から現への扉を開けた。
そんな状況での大きな物音。それは、通常ならば考えられないことだ。
耳を澄ませば、遠く諍うような声が切れ切れに聞こえてきていた。
女は、途端に不安そうな表情を浮かべた。
「この近くよね?」
この娼館は石造りの三階建てで、女がいる部屋は、最上階、即ち三階にあった。
この階は、娼館の中でもやや特別な場所で、限られた上客をもてなす為の部屋が並んでいた。この一帯を利用できるのは、金回りのよい商人や資産家の貴族といった連中が多かった。気に入った女や馴染みの女を呼ぶことは勿論のこと、ちょっとした人目を憚る密会にも利用されたりした。
心配そうに形のよい眉を寄せた女に、男は安心させるように微笑んだ。
「アニューシャ、大丈夫だ」
男は、女の身体を引き寄せると自分の尖った鼻先を女の少し低めの鼻先に寄せた。
「この階には他に誰が来てるんだ?」
「イリーナに訊かないと分からないわ。アーダとターニャが入るっていうのは聞いたけれど……アーダのお得意様はこの街の豪商だし、ターニャの方は、地方貴族の次男だけど、二人ともいい人たちだって言ってたし……」
そう言って、女は不意に顔を青くした。
「二人のどちらかになにかあったのかしら? それとも……」

この場所は、部屋に入ってしまえば密室だ。扉を閉じてしまえば、小さな、それでいて濃密な世界に早変わりする。女は男に束の間の夢と快楽を与え、男は好みの女の肌に全てを委ねる。

この娼館は色街の中でも由緒あるしっかりとした店で、女主イリーナの手腕の下、訪れる客は皆、身元のしっかりした男たちが殆どだった。

だが、それと同時に、ここは、男と女という根源的で原始的な交わりがなされる場所でもある。

女たちには、娼館で働く夜の華という自尊心とそれに対する心のありようをしっかりと教え込まれているに違いなかったが、完璧な人間など何処にもいない。割り切った関係である娼婦と客の間にも『痴情のもつれ』というものは存在して、そこから引き出されるものは、必ずしも綺麗事ばかりではない。

ここの客には帯剣をした男たちも少なからずいた。そういう男たちが機嫌を損ねて何らかの暴挙に出たのだろうか。

それをさせないのが、女たちの手練手管の見せどころという訳なのだが、何事も、全てが思い通りに行くとは限らないのが、人の世の常でもある。

アニューシャと呼ばれた女が心配したのは、その事だった。良き同志（ライバル）であり、仲間であり、友であり、相談相手であり、苦楽を共にした女たちが、傷つく様をこれまでに何度となく目にしてきた。

先程の尋常でない物音も、そんな小さな不幸への始まりのノックなのだろうか。

「アニューシャ」

男はもう一度、女の名前を呼ぶと、その額に柔らかな口付けを落とした。幼子をあやすような優しい仕草だ。

「イリーナは、自室にいるのだろう？」

「ええ。多分」

「では、帰りに確認しておこう。万が一のことがあれば、【ツェン

トル】の連中を呼ぶ。まぁ、俺だけで対処出来るに越したことはないが」

「……ブコバル」

心細そうな声を出した女に男は心配ないと微笑んだ。

「俺はこれでも兵士だぜ？　こういうのはこっちの専門だ」

そう言って、自信たっぷりに白い歯を見せて笑う。

それを見て、女の方も幾分安堵したように微笑んだ。

男の脳裏には、【ツェントル】を管轄する友人の顔が浮かんでいた。もし、ここで何らかの揉め事の類が起きていて、それが元で兵士が派遣されるようなことになれば、自分にお鉢が回って来るのは火を見るよりも明らかだった。ちょうどよいとばかりに仕事を押し付けるだろう。そうなれば、必然的に状況把握が必要になる。そうでなければ、この場所に居合わせて、何をしていたのだと睨まれかねない。

面倒だとは内心思いつつも、いい加減な見た目とは違い、意外に律儀なこの男の次に取るべき行動は決まっていた。

「おやすみ。【ガルーブチク（スイートハート）】」

最後に、この国特有の挨拶を交わし合って、男は女の部屋を後にした。

女と別れて、男が向かった先は、この娼館を取り仕切る女主の部屋だった。

ここの主は、女ながらに酸いも甘いも噛み分けた中々の傑物で強かな人物だった。

若い頃は、この界隈一の娼妓として名を馳せたこともあった。引退して、この店を切り盛りするようになってからも、その美しさは衰えること無く、年齢不詳の妖艶な色気を振り撒いているというの

がこの界隈で聞く専らの評判だった。熟女好きには堪らないだろう。
だが、そんな絶世の美女にこれから会いに行くというのに、男の顔は余り気乗りしてはいないようだった。基本的に女好きで守備範囲の広い男であったが、ここの女主をそういった対象としては認識していなかったからだ。馬の生き目を抜くという色街で生き抜いてきた女だ。その核にあるのは、苛烈な策士の顔である。ここの女主と対峙していると、その外見は兎も角、とてもじゃないが、か弱い守るべき対象であるとは思えなかった。寧ろ、王都に暮らす老獪な貴族の輩と渡り合っているような気分にさせられるのだ。
まぁ、そんな男の個人的な心情は置いておいて。数多もの若い女たちを庇護し束ねるここの女主の手腕と気風をこの男が買っているのも確かたっだ。女主は、ここの女たちを大切にしている。商売ということもあるが、それ以上に、だ。女が色街の一娼妓から成り上がったということもあるが、基本的に情に厚い一面を持っていた。

廊下を主の部屋に向かって歩いていると、当の本人がひょっこりと向こうから現れた。
白っぽい長いドレスの裾をゆったりと翻して足早に歩いて来た。
「あら、ブコバルの旦那。ちょうど良かったわ」
人の顔を見るなり、妖艶な中にも薄らと喜色を浮かべた女の瞳を見て、男は内心、たじろいだ。
この女がこういう顔をしている時は要注意だった。絶対に面倒なことに決まっている。それは、男の過去の経験から弾き出された結論だった。
だが、男の方もこの主に用事があったのだ。内心の煩わしさはおくびにも出さずに、男は、この界隈の女たちには評判がいいと言う、やや苦み走った微笑みを浮かべた。
「それはこっちの台詞だ、イリーナ」
「あら、旦那もあたしに用があったの？　珍しいこともあるものね」
男が、自分に若干の苦手意識を持っているであろうことを承知の

上で、そんな軽口を叩いてみる。
対する男は黙したまま、肩を竦めてみせただけだった。
それを見て、やや可笑しそうに女が笑った。そして、女主と男は、軽い抱擁を交わして、この国の習慣に則り、簡単な挨拶を交わした。

「で、どうしたんだ？」
男が用件を聞けば、女主は不意に真面目な顔をした。
「ああ。そうそう。さっき、うちの子たちからね、この階で大きな物音がしたって聞いたもだから、ちょっと様子を見てこようと思ったのよ」
その言葉に男も実は同じ用件であったことを告げる。
「何やら穏やかな感じじゃぁ無かったぞ」
男の言葉に女主は眉を顰めた。
「客はどんな奴なんだ？」
男の問いかけに、女主は、少し逡巡するような様子を見せた。
それもそうだ。ここを訪れる輩は、誰もが大手を振って正面から入ってこられる訳ではない。知られたくないお忍びという場合もある。何処まで客の情報を出すかというのは、顧客からの信用と今後の商売にも関わってくる事態であるから、女主が慎重になるもの頷けた。
だが、万が一、【ツェントル】の兵士たちが踏み込んで来るような事態になったら、差し障りが生じるのは決まっている。こちらも、そして客の方にもだ。
この男は【ツェントル】の所長にも顔が聞く。客の名が外に漏れないように穏便に取り成してくれるよう手を回すことも出来るだろう。
そう判断した女主は、手入れの行き届いた白い手を拱いて、男の耳に顔を寄せた。
「王都から来た貴族。ここの常連客の紹介でどうしてもっていうから、部屋を貸したのよ」

「相手の娘は？」
「それは大丈夫。そっちの方は要らないって」
その言葉に男はあからさまに嫌そうな顔をした。
「妙なことに首を突っ込んでるんじゃねぇだろうな？」
女の言葉から、客がお忍びで女を買いに来たのではなく、密談、若しくは密会に部屋を借りているということが読み取れた。その内容如何によっては、この娼館に火の粉が掛かる可能性もあった。
剣呑な眼差しの中にも、どこか心配の色を覗かせた男に女主は、穏やかに微笑んだ。
「その辺は大丈夫だと思うわ。こっちでもそれなりに調べてあるし」
女の口角が意味あり気に上がった。

常連客を通しての紹介で、向こうの身元を明かすには憚りがあるということで『さる貴族の御子息』が利用するとは聞いていたが、それをそのまま鵜呑みにするような女ではなかった。面倒なことに巻き込まれて、商売に支障が出ては敵わない。女の方でも万が一の防衛策は取っていた。
そこに浮かんでいたのは、あらゆる人脈を使って事態を打開しようとする抜け目のない策士の顔だった。
女は一段と声を潜めると、男に告げた。
「王都でも名門よ。【ボストークニ】家の二男」
すっと吊りあがり気味の青い瞳を細めた女の顔に、男の方は苦いものを飲み込んだような顔をした。
「げぇ、マジかよ」
心底嫌そうに溜息を吐いた男に、女主は興味深そうに細い眉を上げた。
「あら？　ひょっとしてお知り合い？」
――――――だったら、尚更、都合がいいわ。
男は口をへの字に曲げると、髪をかき上げた。

女が告げた客だと言う男の名前に、男の方は心当たりが大いにあった。思い出すだけでも虫唾が走る。いけ好かない奴だ。目的の為には手段を選ばない。一見、物分かりの良い優男風に見えるが、そいつの面を一皮剥けば、そこから覗くのは、対抗心を剥き出しにした自己顕示欲の強い餓鬼の顔だ。

あの男と最後に顔を合わせたのは、確か、春の初め、男が赴任している北の砦から所用の為、王都へと帰っていたと時のことだった。

あの男は昔から、何故か、自分の友人を目の敵にしていた。その友人と行動を共にしていた男は、必然的に向こうがなにかと言い掛かりを付けては絡んでくるのに付き合わされることになり、いい加減、閉口していたのだ。男の友人は、その男のことは全く歯牙にも掛けず、始終、無視をするか、適当にあしらっていた。それも昔から変わることのない構図だった。

いつまでも凝りない、しつこい野郎だ。今となっては、男に対しても妙な敵対心を持つまでになっていて、それがまた面倒さに拍車を掛けていた。

そんな曰く付きの男が、目と鼻の先に居るという。大きな物音がしたのも、その男に貸している一室であろう。

顔を合わせたら、絶対に突っかかって来るに決まっている。面倒臭いことこの上ないではないか。

男はどっぷりと深い溜息を吐きたい気分だった。

「あの野郎、しつけぇからな。出来れば顔は見たくねぇ」

駄々漏れの内心に、女主は、可笑しそうに目を細めた。

この男がこんな顔をして見せるのだ。余程、馬が合わないか、二人の男たちの間には人には言えない何かがあるのだろう。

「ねぇ、ブコバルの旦那。取り敢えず、部屋の前まで付いて来てくれるだけでいいわ。中の様子はあたしが見て来るから。でも、もしもの時はお願いするわよ？」

一応の妥協案を出した女主に男は頷いた。

「分かった」
ここで、この館の女主に何かあっては大変だった。男が付いていて、怪我でもしようものなら、この女を慕う色々な方面から恨まれるに違いない。
――――――仕方ねぇか。
男は腹を括ると、件の部屋があるという場所へ向かって廊下を歩き出した女主の後に続いたのだった。

寄り添う影

イリーナの後に続いたブコバルは、女主のその魅惑的な後姿がとある部屋の前で止まり、そこに設えられた重厚な扉を叩くのを、少し離れた場所から眺めていた。

廊下側の窓辺に寄りかかり、向こうからは死角になる場所に身体を置く。

厄介なことにならなければいいが。

だが、ブコバルの野性的第六感は、ひしひしと面倒な匂いを感じ取り、それを伝えてきていた。

窓ガラスに薄らと荒削りで精悍な男の影が反射する。その特徴的な透明感のある青灰色の瞳がすっと細められた。これから起こるであろう遣り取りを一言も聞き漏らすまいと神経を研ぎ澄ませる。

館の主であるイリーナの訪いに、薄く扉が開いた。

扉口に顔を覗かせたのは、従者らしい男だった。

見たことのあるような顔だ。ブコバルの記憶の中に、あの男の傍にひっそりと控える従者の姿が薄らとだが浮かんだ。

そして、何がしかの遣り取りの後、イリーナは中に入って行った。

いつでも飛び込めるように、体勢を整え、腰に刷いた長剣の柄に手を掛けた。

ふと窓辺に影が差し、ブコバルは条件反射の如く身体を壁際に引いた。

外を窺うように窓の方へ視線を投げると、大きな鷲（アリョール）と小振りな鴉（ヴァローナ）が近くにある大きな木の枝に飛び乗った所だった。

その光景にブコバルの眉が訝しげに上がった。

【アリョール（鷲）】と【ヴァローナ（鴉）】は通常、捕食者と被捕食者の関

係にある。相反する性質を持つ二つの姿がこんな間近にあることに何がしかの違和感を覚えた。

このようなところに【アリョール（鷲）】が何の用だろうか。

直ぐに考えられるのは【伝令】としての役割だ。

術師の間では情報伝達に鷹や隼、鷲などの猛禽類を使う者がいる。軍部でも情報の遣り取りは、専門の術師が世話をする鷹などの翼を持った猛禽類が一般的だった。

そんなことを思っていると、窓硝子にカツンと小さな小石らしきものが当たった。

ブコバルは、窓を開けると下を注意深く見下ろした。神経を研ぎ澄ませ素早く周囲へ視線を走らせる。

だが、どう探ってみても人の気配は感じられなかった。殺気の類も、怪しい人影も見当たらない。

ブコバルは更に気を引き締めた。瞬時に顔付きが、経験豊富な兵士のものに変わった。

そんな時、

――――――――プスーッ！！

小さな摩擦音の合図がした。

――――――――何処からだ？

発生源を求めて、青灰色の瞳が鋭くなる。

「旦那」

囁きのように聞こえた声に顔を上げれば、鬱蒼と枝葉を伸ばす樹木の奥の方で、影の間からゆらりと人影が覗いた。顔の左半分を覆う金茶色の髪が微かな木漏れ日に反射した。そこから、枯れ枝のようにほっそりとした鋭角な顎が見える。

影の中から滲み出るようにして現れた男の顔を見て、ブコバルは一瞬、目を見開いた。

寸での所で漏れそうになる声を慌てて飲み込んだ。

樹木の中にひっそりと佇む男は、口元に人差し指を立てると、唯

一、顕わになっている右目をうっそりと細めた。
――――――ルーク。
そこに顔を覗かせたのは、軍部の諜報機関、【チョールナヤ・テ(黒き)エーニィ(影)】に所属している影の男だった。
通常、影は、己が仕える上官以外には姿を現さないことになっているのだが、このルークは少々風変わりな男で、北の砦に居る兵士たちとはちょっとした繋がりがあった。

男は器用に指先を動かすと、軍部の中の特殊な伝達手段である指文字を使って、ブコバルに話し掛けてきた。
『旦那、ちょうど良かった』
何やらどこかで聞いたことのあるような台詞だ。
対するブコバルもその昔覚えた指文字を使って返していた。
『何があった?』
軍部の影が出張っている事態に自ずと緊張が走る。
そして、ルークが伝えて来たのは、ブコバルの意表を突くことだった。
『そこに娘が捕らわれているようだ』
『娘?』
娘と聞いてブコバルが思い浮かべたのは、この娼館で働く女のことだった。
『ああ。旦那んとこの大将がえらくご執心な娘(こ)だ』
ブコバルは、それを聞いて益々首を傾げた。
男が差している大将というのはブコバルが良く知る第七師団の団長、ユルスナールのことだった。
だが、あの男に、馴染みの女が居ただろうか。
ブコバルに付き合って娼館を訪れることは過去にはあったが、特に決まった相手というのは無かった筈だった。別に女にのめり込むような奴ではない。それに、今年、ユルスナールはこの街を訪れてから、まだ娼館には足を運んでいない。

判然としない顔付きも、だが、次の言葉を前に驚きに変わった。
『黒髪に黒い瞳の』
『……なん、だと？』
ブコバルの目が、これでもないかという位に見開かれていた。
黒髪に黒い瞳というのは、この辺りでは珍しい組み合わせだが、黒い髪も黒っぽい瞳も其々単独ではいない訳では無かった。
ブコバルの念頭には、とある人物の像が浮かんでいたが、半ば半信半疑だった。その思い付きは、余りにも突拍子が無いことのように思えたからだ。第一、この娼館の一室を借り受けているという王都から来た貴族の男との接点が全く思い浮かばない。
『本当か？』
『ああ。間違いない』
『その娘（こ）の名は分かるか？』
どうか違っていてくれ。
半ば祈るような気持ちで口にした言葉は、だが、無情にも砕け散ってしまった。
『リョウ』
――――――ゴースパジ（オーマイガー）。
ルークの指先が紡ぎ出す文字の綴りにブコバルは天を仰いだ。
ここまで来れば間違えようがなかった。黒髪に黒い瞳でリョウという人物。ルークの言う捕らわれた【娘】とブコバルの知る人物が一致した。

おいおいおい。どうなってんだ。
ブコバルは思わずといった風に額に手を当てた。
最悪じゃねぇか。リョウの野郎、なんてことに巻き込まれていやがるんだ。大体、ついこの間【ツェントル】に厄介になったばかりじゃねぇか。また、妙なことに首を突っ込んだのか。
最悪な状況に対する憎まれ口が、呪詛の如く渦巻いてくる。
ブコバルから見たリョウは、大人びて落ち着いているのに世間知

らずで、この国のことはまるっきり分かっていない幼子のような奴に思えた。

一言で言えば、不思議で仕方がない。幼く見える外見もそうだが、目を離すとふらふらとどこかに行ってしまいそうで、ブコバルとしては、何故か放っておけない気分にさせられてしまうのだ。

その典型的な例がユルスナールだろう。

リョウが北の砦に現れてから、ユルスナールは変わった。いや、変わったと言うのは語弊があるかもしれない。兵士たちの目に映る砦を守る優秀な指揮官としての姿は以前のままだった。

訪れた変化は内面のごく部分的なもので。それは、女関係に鼻の利くブコバルならではの感じ方だった。

それで今度は、連れ込まれたのが娼館とくれば、呆れてものも言えない。全く、世話が焼ける。ユルスナールにもっとしっかり手綱を握っておけと言うべきだろうか。

ブコバルの中では、ユルスナール＝リョウの保護監督者的な見方が既に成り立っていた。

それにしても、あの男に少年趣味のようなものがあっただろうか。

そうとなれば、リョウがあの男に掴まった原因とその経緯が不思議で仕方無かった。

リョウの外見から受ける印象は【少年】だ。初対面では間違っても【娘】だとは思われないだろう。

ブコバルは苦々しい気分で、あの扉の中に居るであろう男の顔を思い浮かべた。

そして、ふとした思い付きにぞっとした。

まさか、そっち方面で売り飛ばすってんじゃねぇだろうな。それをあの男が買ったとかか？

この国では、人身売買は禁止されているが、それはあくまでも表向きのことで、闇の裏社会では、借金の肩に女衒（ぜげん）に娘を売るなんてことはままった。勿論、男の子の場合も然り。

この色街には、男娼を専門に揃えた店もある。無論、ブコバルとしては足を踏み入れたことも無いし、今後も踏み入れることのない領域だが、そういう嗜好の奴らがいるのは確かだった。

リョウはその色彩と顔立ちの物珍しさもあり、下手をしたら【男娼】としてはもってこいの商品として認識されかねない。珍しいものならば大金を積んでまでも手に入れたいという蒐集癖のある金持ちは意外にいるものだ。往来を歩いていて、そういう方面の奴らの目に止まって連れ去られたのだろうか。

その思い付きに、ブコバルは酷くげんなりした。ぐるぐると考えだせば、それこそ限がない。

だが、これでブコバル自身が関わらない訳にはいかなくなってしまった。

『おい、ルスランには伝えたのか？』

リョウがユルスナールのお気に入りであることはルークも把握しているようだ。それならば話は早い。向こうの思惑とその動きは読めないが、取り敢えずこちらに引っ張る第一段階としては上出来だろう。

ブコバルの問いに、簡潔な答えが返ってきた。

『まだだ。取り敢えず、確認の為に後を追ったからな』

『中にいるのは間違いないんだろうな？』

『ああ。そこの【ヴァローナ（鴉）】と【アリョール（鷲）】が見届けた』

『チョールト（クソッタレが）・バジミー！』

決定的な一言にブコバルは歯噛みした。

『どうする？　旦那が出張るか？』

『相手は【ボストークニ】んとこの頭でっかちだぜ？』

中にいる人物の名前を知らされて、樹木の中に潜む男は、忌々しそうに顔を歪めた。

『げぇ。俺では分が悪い。表立っては動けん』

相手は王都でも名門の家だ。一介の影が近づくには危険過ぎた。

過度の接触は我が身を滅ぼす。それにルークとしては、そこまでして捕らわれているであろうリョウに身体を張る積りは更々なかった。そんなことをする理由も無い。所詮、ルークと俄か捕らわれ人との間は、そんなものでしかない。

『旦那』

その辺りのことは、ブコバルも簡単に想像が付いた。

『分かってるよ。お前は自分の職務を果たせ。序でに余裕があれば援護を頼む。それから、お前の伝令を【ツェントル】に飛ばせ。ドーリンに至急、適任の兵士を見繕うように伝えろ』

『旦那んとこの大将には？』

その問いにブコバルはあからさまに溜息を吐いた。

リョウが捕まったなんてことを耳にしたら、ユルスナールのことだ、顔色を変えてすっ飛んで来るに違いなかった。そこで鉢合わせするのが、あのレオニード・ボストークニだと知れた時には、正直、何が起こるか分からなかった。

今度こそ、絶対に血の雨が降る。【ドゥエーリ（決闘）】だなんて莫迦げたことになりかねなかった。そうなったら笑いごとでは済まされなくなるだろう。

――――――なんて面倒な。

ブコバルの野性的感の正確さはここでも証明されたのだ。

本人にとっては余り嬉しくはない事態だが。

『取り敢えず、打っちゃっとけ。【ツェントル】にいたら、いやでも耳に入るだろう』

後はなるようにしかならない。

ブコバルは全てを天に投げて、その後の成り行きに任せることにした。

そして、簡単にルークと打ち合わせを終えると、再び廊下に向き直り、イリーナが出て来るのを待った。

急転直下の逆転劇

レオンチュークと呼ばれた従者は、主人の言葉に従い、リョウのベルトにある二本の短剣に手を掛けた。
「パーヴェル」
男は、リョウを後ろ手に拘束したまま、主人の脇に影のように控えているもう一人の従者を呼んだ。
「どうした？」
主の声に、
「こちらをご覧に入れたく」
レオンチュークはパーヴェルに短剣を差し出した。
短剣を手渡された従者は、鞘の中を改めた。
小振りな方の短剣は直ぐに鞘から抜けた。そして、その刃の柄に近い根元部分に小さく刻まれた造り手の銘を見て、無言のまま目を瞠った。
そして、すぐさまもう一本の短剣を手に取る。だが、そちらの方は男が鞘から抜こうとしても何故かびくともしなかった。
パーヴェルと呼ばれた従者は、取り敢えず鞘から抜けた小さな方の短剣を主の前に差し出した。
その途端、男の顔付きが変わった。
「ハッ、私も大分軽く見られたものだ」
主人である男は、吐き捨てるように口にすると、ゆっくりと立ち上がった。
「何処まで人を愚弄すれば気が済むんだ？　あ？」
静かに近づいて来た男の瞳は、再び、怒りに縁取られていた。
「……なんの話ですか？」
突然、変化を見せた男の空気に、リョウは半ば混乱しながら、こちら側に近づいて来る男を仰ぎ見た。

いい加減、うんざりしてきていた。男の考えていることが全く理解できない。今の遣り取りで、どこに腹を立てる要素があったというのだろうか。

「惚けても無駄た。これはレントの造ったものだな」

――――――――ここに銘が入っている。

鬼の首を取ったように言われても、リョウにしてみれば何が何だか分からなかった。

「それが……なにか？」

「なにか、だと？　ふざけるのも大概にした方がいい。これは、あの、【レント】が造ったモノなんだぞ！」

男が興奮したように大きな声を出して、リョウは途方に暮れた。

「なんでこんな小僧がレントの短剣を持っている？　何故だ！　おい、お前、これを何処で手に入れた？」

鬼気迫った表情の男に捲し立てられて、吃驚する。

あの短剣はそれ程までに価値があるものなのだろうか。不意にそんな疑問がリョウの頭の中に浮かんでいた。

それは、過日、見舞いに訪れた鍛冶屋の寄り合い（ギルド）の居住棟で、カマールの師匠であるレントから貰ったものだった。

リョウが腰のベルトに差した短剣を見て、レントが懐かしそうに目を細めたのが、切っ掛けだった。

普段、左側のベルトに下げている少し長め（懐剣位の長さだ）の短剣は、あの花畑で、旅立ちの直前にガルーシャから譲り受けたものだった。

これは、その昔、ガルーシャが知り合いの鍛冶屋に頼んで拵えて貰ったものだと聞いた。大小二本を作ってもらい、ガルーシャは使い勝手が良かった大きな方を自分の手元に置き、そして小さな方を、これら二本を作った鍛冶職人の手元に残してきたのだと、遠い目をして過去に思いを馳せるように口にしたのだった。そして、あの時の二振りの短剣は、対になっているのだと言う。

「坊主。そいつを見せてくれねぇか？」
レントからそう声を掛けられて、ベルトに下げていた短剣を鞘ごと渡せば、職人らしい手付きで抜き身の刃を改めると、生粋の鍛冶屋は小さく笑った。
「まぁ、あいつにしちゃぁ、よく手入れをした方か。及第点ってぇところだな」
そう言って、どこか懐かしそうに目を細めたレントに、リョウはひょっとしてガルーシャの言っていた知り合いの鍛冶屋は、このレントなのではないだろうかと思った。
「これは、もしかしてレントさんの作ですか？」
柄を自分の方に向けて刀身を水平にして、その場所から刃を見ていたレントは擽ったそうに喉の奥を鳴らした。
「ああ。随分昔。そうさなぁ、もうかれこれ二十年は経つか。アイツの我儘を聞いて、滅多に造らねぇ短剣をこさえたのさ。あの野郎、刃物のことはからっきしの癖に、一々、ああしろ、こうしろってぇ注文だけはいっちょまえでよぉ。こいつを造るにゃぁ、苦労したぜ」
しみじみと語ったレントにリョウはそっと微笑んだ。
若かりし頃のガルーシャとレント、頑固者同士の二人の様子が情景として目に浮かんできそうだった。
「思い入れのあるものなのですね」
「ハハ。そんな大したもんじゃぁねぇが。まぁ、そうさなぁ」
満更でもないようにつるりと頬を撫でた。
「坊主、この後ろの棚ん中にある短剣、これよか、ちいせぇ奴があるから、取ってくんねぇか？」
不意に思い出したように告げられて、リョウは言われた場所を探した。
「こちら……ですか？」
「ああ。そうだ」
身体を起こしている寝台の膝の上、レントはリョウから小振りの

短剣を受け取ると二本を平行に並べた。
「いいか、見てろよ？」
そっと小さな呪いのような言葉を呟いて、レントが手を短剣の上に翳した。
するとそれに呼応するように二本の刀身が鈍い光を放った。
この二本の短剣は対になっている。本来は肌身離さず二本を身に着けるものなのだが、これを注文した男は片方しか持って行かなかった。もう片方は、それを造った鍛冶屋に友好の印として預けられたのだ。
これらの剣が再び揃うのは、恐らくどちらかがこの世を去った時。そんな戯言めいた約束をしたのだとレントは静かに語った。
それを証拠に対になった剣は、こうして触れ合わせると微量の光を発した。
それは、久々の邂逅を喜んでいるようにも見えた。

「こいつをおめぇにやろう」
小さな刀身を鞘に納めると、レントは短剣をリョウの手に乗せた。
リョウは、その申し出に吃驚してレントの顔を見た。
これはレントにとってもガルーシャとの思い出が詰まった大切なものではないのだろうか。そんな大事なものを受け取ることなどできない。
躊躇を見せたリョウにレントが静かに言葉を継いだ。
「おめぇが持ってろ。こいつは二本揃ってこそ意味がある。これまで世話になった礼だって思えばいい」
「……ですが」
レントは二振りの短剣をリョウの手に握らせると、その上から自分の大きな手をゆっくりと被せた。
所々タコのある節くれ立った大きな手だ。ごつごつとした無骨な職人の手。
「俺は……もう長くはねぇ。餞別だと思って取っておけ」

そうしたまま、穏やかに首を振ったレントに、リョウは小さく頷いた。
そうしてレントから譲り受けたのが、この小振りな短剣だった。

「それはレントさんから頂いたものです」
「冗談も休み休みにしろ！」
真実を告げれば、男は信じられないという顔をして、手にした短剣を壁際に突き刺した。
それは壁際に居たリョウのすぐ脇を掠めるように突き立てられていた。

そんな時、扉の方からノックの音と共に女性の声がした。
主の男は苦々しい顔をしたが、それを一瞬で引っ込めて、リョウを拘束（レオンチューク）していた従者に目で合図を送り、応対をするように促した。

室内に言い知れぬ緊張が走っていた。
リョウは壁際に追い詰められていて、そのすぐ脇には先程のレントから貰った短剣が刺さっていた。
目の前には、短剣の柄を握りしめたまま、こちらを睨みつけるようにして見下ろす男の顔があった。少し離れた所に控えているもう一人の従者（パーヴェル）は、リョウが左腰に差していた短剣を鞘から抜こうとして色々と試しているようだった。
沈黙の落ちた室内に、薄く開いた扉の隙間からレオンチュークと女の話声が聞こえた。
すると、なにがしかのやり取りの後、するりと滑り込むように一人の女性が、中に入って来た。
「御機嫌よう」
白いドレスの裾をゆったりと翻して現れた妖艶な美女に、主の男

は、驚く程の変わり身の早さで実に貴族らしい紳士的な応対を始めた。

リョウは驚いた。男の態度もそうだが、何よりも入って来た女性に見覚えがあった。

忘れる訳はない。先日、往来でユルスナールを呼び止めた色街の女だった。妖艶な大人の色気を振り撒く豊満な肉体を持つ女性。名前は、確か、イリーナといったか。

ここは、色街の娼館なのだろう。連れられてここの裏木戸を通った時に感じたことは強ち間違いではなかった。

「これはこれは、美しい天使の登場ですか」

「ご挨拶が遅れましたわ。私、ここの主を務めておりますイリーナと申します」

優雅に差しだされた女の白い手を男は嬉々として取ると、その甲に小さな口付けを落とした。

「これはご丁寧に。こちらこそ、ご挨拶が遅れ申し訳ない」

にこやかな人当たりの良い笑みを浮かべた男に、

「ふふふ。それは構いませんわ。アントーノフ様のご紹介ですもの」

女の方も同じような柔らかい微笑みを浮かべて鷹揚に返した。

「で、どうかなさいましたかな？」

突然とも言える女主の訪問を男が問えば、

「いいえ。何か御不自由な点、入用なものなどないかと思いまして」

あからさまなことは一言も問わずに、ぐるりと室内を見渡しながら女が微笑む。

「お気遣いありがとうございます。ですが、ご心配には及びません。ここは申し分のない部屋ですから」

「それはようございました」

その視点が、壁際の一点で止まった。

イリーナの青色の光彩に硬直したリョウの姿が映り込んでいた。

女は、そのすぐ脇に突き立てられた短剣を見逃さなかった。

如何にも何かがあったという現場だ。だが、これしきのことで顔

色を変えるようなイリーナではなかった。
「まぁ、可愛らしい方がいらっしゃるのね」
男が止める間もなく、イリーナは、リョウの傍に近寄った。
「ああ。そちらにはお構いなく。何分、見習い途中の使用人なもので。美しい御婦人に無礼があっては申し訳ない」
男が女の気を逸らそうとするが失敗に終わる。

リョウはその隙を見逃さなかった。
傍らに突き刺さっている短剣を勢いよく抜くと、近寄って来た女の首に手を回して引き寄せた。
――――ウフドゥシェーニィェ（劣化）。
小さな呪いの言葉を唱える。
「おい！」
「きゃぁ！」
「動くな」
イリーナの首元には、短剣の切先が添えられていた。
リョウは一か八かの賭けに出た。
兎に角、この部屋から解放される為には、部外者（と言ってもこの館の主だが）が入って来たこの瞬間を逃す訳にはいかなかった。
この女性が男側に付いていたらどうしようもないが、それでもここから脱出するのに必死だった。
途端に男の顔が忌々しげに歪んだ。
――――スミマセン。少し協力してください。
危害を与える積りはないのだ。駄目元で、リョウはイリーナの耳元に小さな囁きを吹き込んだ。
「おい、お前、何、莫迦なことをしている！」
「刃物をどけろ」
「血迷ったか！」
男たちが口々に叱責や取り成しの言葉を発するが、リョウは意に介さなかった。

こちらへ歩み寄ろうとする男たちを、手にした短剣に力を込めることで制した。
極度の緊張に腕が震えていた。
それでも唾を飲み込んで要求を突き付けた。
「ワタシをここから出して下さい」
「何の話だ？」
「あなた方にはもう用はない。ワタシがここに止め置かれる理由も無い。それ以上、近づかないで下さい。さもなくば、この女の命は保証できない」
女を人質に取ったまま、そっと後ずさりを始めた。
「莫迦なことは止めるんだ。こんなことをしてどうなるか分かっているのか」
「ここは由緒ある娼館だ。こんな所で罪を犯せば、【ツェントル】の牢屋にぶち込まれるぞ」
「その女に傷を付けてみろ。お前は生きては帰れんだろう」

「うるさい！！！！！」
気が付けば、ごちゃごちゃと訳の分からない事を発する男たちの声を、語気を荒げて一喝していた。
ビリリと空気が震える。きっと人生で初めて出した大声だった。
「ワタシをここから出しなさい！」
不意に落ちた沈黙に従者の男たちが目配せをする。
頭の片隅でこんな子供の芝居染みた演技などやはり通用しないかもしれないと思った。もう駄目かと感じた時だった。
――――――――キャー！！！
唐突とも言える間合い（タイミング）で女の叫び声が部屋に響き渡った。
と同時に固い沈黙を守っていた重厚な扉が突如として開き、外から帯剣した兵士のような男たちが、数人雪崩れ込むようにして入って来た。
その中に、リョウは癖のある茶色の髪に無精ひげを伸ばした青灰

色の瞳を持つ男の顔を見た。
リョウの顔が内から湧き上がる『なにか』を堪えるように歪んだ。
女を拘束するリョウの腕が緩む。その僅かな隙に、後ろに素早く回った兵士らしき男の一人がリョウに手刀を食らわせた。
リョウはそこで気を失った。
衝撃に崩れ落ちた細い身体は、逞しい男の腕に支えられていた。

意識を失ったリョウの身体を抱きかかえるとブコバルはイリーナを振り返った。
「怪我はないか？」
「ええ。大丈夫よ」
イリーナは何事も無かったように微笑んだ。
相変わらず肝の据わった女である。伊達に修羅場を踏んでいないということなのだろう。
何が何だか訳が分からなかったが、耳慣れない甲高い怒声に続いて上がった、どこか嘘臭い女の悲鳴に急いで中に飛び込めば、リョウがイリーナの首に短剣を当てて凄んでいる絵面に出くわした。

室内はピリピリとした異様な緊張感に包まれていた。
リョウは、全身の毛を逆立てて威嚇する【コーシュカ（猫）】のようだった。紅潮した頬は怒りに染まり、高揚に震えていた。
乱入したブコバルと目が合うと、その円らな黒い瞳が驚きに見開かれた後、その表情がくしゃりと歪んだ。そこには、驚愕、安堵、やるせなさ、怒りといった実に様々な感情が一緒くたにごちゃ混ぜになっているようにブコバルには思えた。
意識が逸れた一瞬の隙に、加勢に呼んだ【ツェントル】の兵士が背後に回り、リョウの首元に手刀を落とした。そうして崩れ落ちた華奢な身体をブコバルが受け止めたのだった。

ブコバルはリョウを抱えたまま人質になっていたと思われるイリーナの傍まで来ると、その首元を覗き込んだ。
上手く加減をしたのだろうか。それとも偶々か。イリーナの白い肌には傷の類は見受けられなかった。そのことにまず安堵した。
「よし。一名確保」
ブコバルの号令に兵士たちが集う。
「イリーナ。事情を聞く。部屋を用意してくれ」
そう簡潔に告げて、そのまま踵を返そうとした逞しい背中に、待ったを掛ける者がいた。
「……ブコバル・ザパドニーク」
低く絞り出された声に、ブコバルは漸く思い出したとばかりに振り返った。
「あ？」
「貴様、こんなところで何をしている！」
そこには、鬼のような形相をして邪魔をした闖入者を睨みつける男の姿があった。
「おいおい。レオニード。随分な御挨拶だな。野暮なこたぁ聞くなよ。ここに何しに来るかなんて、決まってんだろうが。【なに】だよ」
飄々と嘯いて、最後に下卑た微笑みを口元に刷いたブコバルに、レオニードと呼ばれた男の額に青筋が立った。
「相変わらず野蛮な男だ」
だが、そんな男の憎まれ口をブコバルは気に留めなかった。
そのまま、何事も無かったような顔をして歩き出したブコバルに、レオニードは再び、鋭い声を発した。
「おい。そいつを何処にやる気だ？」
男からの誰何にブコバルは心底、面倒臭そうな顔をして見せた。
元はと言えば、この男の所為なのだ。
「こいつは、イリーナ、基、この館の主に危害を加えようとした輩

だ。揉め事が起きたんだ。【ツェントル】の管轄下に置かれる」

――――――そんなことも分からないのか。

至極真っ当な正論を前に、レオニードは一瞬、声を詰まらせたが、直ぐに表情を改め、饒舌に語り始めた。

「その必要はない。先程ここの主にも伝えたのだが、その者は、私が新しく雇った使用人だ。まだ見習い途中でな。ちょっとした行き違いから思わぬ事態になってしまったが、使用人の起こした不始末の責任は主である私にある。その者の処分はこちらにて行う。今後はこのような事が無いようにきつく言い聞かせる故、引き渡して貰いたい。ここの主には、改めてこちらから謝罪を入れよう」

ぺらぺらと実に淀みなく流れた男の口説にブコバルは思い切り顔を顰めて見せた。

ブコバルは沸き上がって来る怒りを鎮めるように大きく息を吐いた。

「レオニード・ボストークニ」

それまでとは空気を一変、真面目な顔をしたブコバルから発せられる静かな怒気に、室内に沈黙が落ちた。迸る殺気を隠そうともしない。冷え冷えとした冷気が周囲を満たしていった。

「お前の妄想に付き合ってる暇はねぇ。莫迦も大概にしろ。こいつは俺が預かる。異議があれば【ツェントル】に来い。いつでも相手になってやる」

――――――まぁ、お前にその根拠と権利があればの話だがな。

そう付け足して凄みのある笑みを浮かべた。

レオニードの肩が小さく跳ねた。

こちら側が知っているとは思わなかったのか、呆気に取られたレオニードの顔に、ブコバルは少しだけ溜飲が下がった気がした。

こうして、有無を言わせない空気で、ブコバルはいけ好かない男とその二人の従者の存在を重厚な扉の向こうに遮断したのだった。

廊下を無言のまま歩くブコバルに【ツェントル】から派遣された二人の兵士が続いた。

彼らはちょうど見回りに外に出ていた所をルークの伝令である大鷲（アリヨール）のヴィーに出くわして、この場にやって来たのだ。

浅黒い肌に短い金髪を跳ね上げさせた浅黄色の瞳を持つ男、お馴染みのイリヤともう一人は、以前、リョウがこの街に入った時にイリヤと共に門番の任に当たっていた兵士で、要するに程度の差こそあれ、リョウの顔を知る男たちだった。

イリヤはブコバルの腕の中で気を失っているリョウの顔を心配そうに覗きこんだ。

「ちょっときつく入ったかも知れません。手加減はした積りですけど」

ブコバルはそっとリョウの顔を見下ろすと額に掛かる髪を梳いた。

「大丈夫だろう」

問題はこれからだ。詳しい話はリョウが目を覚ましてからになるが、その前にイリーナに事情を聴く必要があった。一体全体どうしてあんなことになったのか。蓋を開けてみれば、リョウを連れだす上手い口実にはなったが、ブコバルの肝が冷えたことには変わりがなかった。

「こちらへどうぞ」

イリーナに案内されて、表の応接室のような部屋に三人の男たちは入った。

先程までの場所が店の裏側であるならば、こちらは表側。客が好みの相手を見繕う受付のような場所、謂わば公の場だった。

この店の開店は夕方からで、その室内も、今はひっそりと静まり返っていた。

ブコバルは長椅子にリョウの身体を静かに横たえるとクッションを頭の下に置いた。そして、その傍らに跪くと、リョウの右手へそ

っと手を伸ばし、両手で拳を包み込んだ。
そこには固く短剣が握られたままだった。
余程、切羽詰まっていたのだろう。気を失っても短剣を離すことはなかった。仕方が無いので取り敢えず鞘を填めてこのまま運んだのだ。
「リョウ。もう大丈夫だ。剣を離せ」
意識の無いリョウにブコバルが優しく囁く。
ブコバルの手が固まった指を解すように撫でさすれば、リョウの手が微かに緩んだ。それから一本、一本細い指を剥がして行って、漸く握り込んでいた短剣を取り去った。
「ブコバル殿。こちらを」
大柄な兵士が差し出したのは、リョウから奪われた長い方の短剣だった。
「恐らくリョウのものだ」
訝しげな顔をしたブコバルにイリヤが告げた。
ブコバルがリョウの外套を捲りベルトの辺りを改めれば、成程、左側の腰の所と、右の太ももの所にある留め金が空になっていた。
ブコバルはリョウの短剣を受け取ると一先ずそれをテーブルの上に置いた。
「イリーナ」
――――――それでは本題に入るか。
真剣な顔をして振り返ったブコバルに、
「余り役には立たないかもしれないわよ？」
そう前置きをしてから、イリーナは、白いドレスの裾をゆったりと翻して、対面の長椅子に腰を下ろした。

急転直下の逆転劇（後書き）

記念すべき（？）第１００話目は、ちょっとした活劇的な展開になりました。

思いがけない提案

頬をそっと撫でる柔らかな感触に、リョウの意識はゆっくりと浮上しした。薄らと閉じていた瞼を押し上げる。ぼんやりとした視界に現れたのは、銀色に瑠璃色という馴染みある色彩の対比（コントラスト）だった。

「ル…スラ…ン？」

瞬きをして漏れた囁きに、ユルスナールが安堵の表情を浮かべたのが見て取れた。

「リョウ。大丈夫か？」

――――――何が、あった？

靄が掛かったように霞む思考にきつく目を閉じる。そして、唐突に自分が置かれた状況を思いだして、リョウは跳ね起きた。

「ブコバルは？　それにイリーナさんは？」

周囲を見渡したリョウに近い所で、ブコバルが腕を組んで立っていた。

「お、起きたか？」

ブコバルはこちらに気が付くと、歩み寄って来た。

リョウが覚えている最後の記憶は、イリーナの首に短剣を突き付けたこととブコバルがあの部屋に乱入してきたことだった。

「……助かった？」

半ば放心気味に呟く。

「落ち着け、リョウ。イリーナも大丈夫だ」

ユルスナールが宥めるように背中を撫でた。

長椅子に身体を起こしたまま、リョウは片手で顔を覆った。

大きく息を吐く。

――――――良かった。本当に。

一時はどうなることかと思ったのだ。

改めて押し寄せて来た恐怖と安堵に込上げてくるものがあった。

そのまま顔を背けて、目尻に滲む涙を指で拭う。
「リョウ？　大丈夫か？」
「は……い」
大丈夫だと微笑もうとした顔は、きっと不細工に歪んだことだろう。見っともない所を見せたくはなくて、慌てて表情を取り繕おうとするが、上手くいかなかった。昂ぶりそうになる気分を落ち着ける為に大きく深呼吸をする。それでも身体と精神の感覚（バランス）が少しズレを生じていて、感情の統制（コントロール）がままならなかった。
「大……丈夫……で…す」
気が付けば、宥めるよな大きな手が頭の上に置かれていた。
目線だけ上に動かせば、ブコバルが珍しく優しい顔をして目を細めていた。
「頑張ったな」
それは、余りにも意表を突く言葉で。
なけなしの理性で押し留めていた最後の一線が、一気に決壊する契機になった。
リョウは溢れてくる涙をそのままに、泣き笑いに歪んだ顔を俯かせながら、何度も首を縦に振った。
そんな様子を見ていられなかったのだろうか。リョウが起き上ったのを見て長椅子に腰を下ろしたユルスナールは、その震える身体を己が腕の中に抱き込んだ。意識とは別の所で流れ出す涙に濡れた顔を隠すように、リョウの顔は、男の逞しい胸板に押し付けられていた。
大きな手が、頭や背中を宥めるように優しく撫で摩る。温かい檻（シェルター）に囲まれて、いつしか、リョウの身体の震えは収まっていた。
「気が付いたのね」
控え目なノックの後に、一人の女性が茶器の乗ったワゴンを手に

入って来た。
聞き覚えのある声に、リョウは弾かれたように顔を扉の方へ向けた。
「イリーナさん！　すみませんでした」
慌てて表情を改めたリョウの目尻が薄らと赤みを帯びているのを見て取ってか、
「ふふふ。大丈夫よ」
イリーナは、穏やかに首を横に振って見せた。
滑らかな白い手が、慣れた手付きでお茶を用意する。
それを見て立ち上がろうとしたリョウを手で軽く制して、
「さぁ、どうぞ。落ち着くわよ」
湯気が立ち上るカップを差し出した。
「ありがとうございます」
リョウはそっと手を伸ばした。
中に入っている温かいお茶を一口啜る。微かな甘みが口の中に広がった。それで漸く、人心地ついた気になった。

リョウは、改めて、ゆっくりと周囲を見渡した。
そこは、落ち着いた中にも華やかさの覗く不思議な空間だった。
柔らかなクリーム色の壁紙が周囲をぐるりと囲む。カウンターのような狭くて長い机が隅の方にはあって、その前には草花の文様が複雑に織り込まれた生地のソファと飴色に艶を帯びた木のテーブルが幾つか、行儀良く並んでいた。
「あの……ここは？」
「表の応接室よ」
にっこりと笑みを見せたイリーナにリョウは目を瞬かせた。
「同じ館内だ」
相手に話が通じていないことを見て取ったブコバルが、補足するように言葉を継いだ。
ということは、まだイリーナの娼館に居るということなのだろう。

「ご迷惑をお掛け致します」
リョウは取り敢えず、イリーナに頭を下げた。
対するイリーナは、それを見て呆れたように目を見開いてから、小さく笑った。
「おかしな子ねぇ。あなたが気にすることじゃないのに」
「ですが、一歩間違えれば、イリーナさんを傷付ける所でしたから。すみませんでした」
「そりゃぁ、驚いたのは確かだけれど、あなたの方にも事情があったみたいだし、止むに止まれずというのが分かったから。別に何ともなかったわよ？」
――――――伊達にこの世界に身を置いていないわ。
余裕たっぷりに微笑んだイリーナの言葉に、リョウは本当に良かったと胸を撫で下ろしながらも、釣られるように小さく微笑んでいた。

「それで、何があった？」
和らいだ空気に、それまで沈黙を守っていたユルスナールが口を開いた。
身体に回された腕に改めて力を入れられて、リョウは今更ながらに自分が置かれていた状況に思い至って赤面した。慌ててユルスナールの膝の上から退こうとする。
「ルスラン。すいませんでした。もう大丈夫ですから」
だが、腰に回る男の太い腕はびくともしない。
――――――ヒュウ～。
ブコバルからは茶化すような口笛が飛び出す。
「いいだろ。別に」
あろうことか、ユルスナールは真面目な顔をしてそんなことを言い放った。

「いや、よくありませんから」
拘束から逃れようとするが、ユルスナールは引こうとはしなかった。
「で、何があった？」
再び、淡々と問われて、力では敵わないのは分かり切ったことだったので、無駄な抵抗は止めることにした。
イリーナの視線が気になったが、リョウは諦めたように小さく溜息を吐くと、事の次第を語り始めた。

顔見知りの大鷲のヴィーから、何者かに付けられているということを知らされたことが始まりだった。追い掛けて来た男たちはかわすことが出来たが、気を抜いた途端、往来でいきなり拘束されてこの場所に連れ込まれたのだ。それから、カマールの弟子だと勘違いをされてカマールへの口利きを頼まれた。相手が強硬手段に出ようとした所にイリーナとブコバルが現れたということを時系列的に掻い摘んで語った。

リョウが話を終えるとユルスナールもブコバルも一様に険しい顔付きをしていた。
「……そうか」
ユルスナールは、そう言ったきり、難しい表情をして何かを考えるように黙り込んでしまった。
「そういやぁ、ルークのヤツが、話があるって言ってたぜ？」
ブコバルの声にユルスナールは、顔を上げた。
「この街に来ているのか？」
「ああ。リョウが攫われたって知らせて来たのはアイツだ。まぁ、奴(やっこ)さんにしてみれば、俺がこの場にいたのは想定外だったみてぇだが」
「……ルーク？」
突然、二人の口の端に上った名前のような固有名詞をリョウは聞

き咎めていた。
「ああ。あちこちを放浪している男だ」
ユルスナールは、そう言って少し考えた後、
「リョウ、お前も知っている筈だ。スフミでお前に会ったと言っていたからな」
「スフミ村で……ですか？」
意外なことにリョウは吃驚してユルスナールを見上げた。
「ああ。恐らく、キリルかロッソ辺りと一緒に居た筈だ」
その言葉に触発されるようにして、リョウの脳裏には、ある男の姿が浮かんできていた。
癖の無い金茶色の髪が顔の左半分を覆っていた男。軽薄な飄々とした笑みを刷く口元。人を惑わせるような口調。人騒がせな【スカ道モーロフ化師】だ。
そして、
「キリルのお父さん？」
「そうだ」
ユルスナールはリョウの推察を頷き一つで肯定した。

あの男がこの街にいる。自分に連絡を寄こしたのはヴィーだった。
そう言えば、ヴィーには、相棒がいると聞いたことがある。人間の男で腐れ縁のようなものなのだと。
まさか、あの男がそうなのだろうか。
ばらばらに位置していた点と点が、思わぬ所で繋がった気がした。

その予想を裏付けるかのように、応接室の上部にある薄く開いた窓から一羽の大鷲が風のように滑り込んで来た。
「ヴィー！」
そして、弾かれるようにして長椅子から立ち上がり駆け寄ったリョウの肩にストンと止まった。
『大事ないか。リョウ』

「うん、なんとかね。ヴィーもありがとう」
馴染みある重みを肩に感じながら、喉元を擽ると、大鷲は満足げに息を吐いた。
だが、直ぐに表情を改めると用件に入った。
『そこの男に文を預かってきておる。渡してくれ』
「ルスランに？」
『ああ。銀色の髪の男だ』
ヴィーはそう簡潔に告げると、足元に括りつけられている小さな筒を指し示した。
リョウは言われた通りにその中から丸まった紙を取り出すと、ユルスナールに渡した。
「ルスランにだそうです」
ユルスナールは無言のまま、小さな紙片を取ると中を確認した。
鋭い目付きが普段より三割増しで剣呑な光を帯びた。
ユルスナールは、ブコバルを振り返るとその紙切れを手渡した。
中を見たブコバルもあからさまに顔を顰めた。
――――――何か、良くない報せでも届いたのだろうか。
リョウの心の内を言い知れぬ不安のようなものが襲った。
ユルスナールとブコバルは小声で何やら相談のようなものを始めた。
そして、何がしかの遣り取りの後、
「イリーナ」
ユルスナールは、振り返るとこの部屋の片隅に控えていたこの館の主を見た。
「なぁに？」
「あの部屋の借用期限は？」
「今日の夜までよ」
「そうか」
そこでユルスナールはブコバルと視線を交わすと小さく頷き合った。

「すまないが、一つ頼まれてくれ」
「何かしら？」
――――――場合によっては高くつくわよ？
珍しい男からの頼み事に、女主の目が好奇に光る。
だが、それを言った男の方は、実に淡々としていた。
「あの男がブコバルとリョウの事を尋ねたら、【ツェントル】に行ったと答えてくれ」
「その位、お安いご用よ」
「それから、もう一つ。地味なヤツでいい。そうだな、なるべく目立たないものがいい。女物の普段着を一着用意してくれ」
ユルスナールの言葉に、イリーナは戸惑う様な声を上げた。
「別にいいけれど、そんなのどうするの？」
「リョウに着せる」
「はい？」
唐突とも言える場所で出た自分の名前に、リョウは素っ頓狂な声を出していた。
ユルスナールは小さく驚きの声を上げたリョウを振り返ると、
「事情が変わった。このままお前を出す訳にはいかなくなった。だが、まぁ、心配はいらない。目くらまし位にはなるだろうからな」
その男らしい口元に自信溢れる笑みを刷いた。
「そういうことね」
そして、男のささやかな計画に悪乗りするかのように、イリーナは愉快気な微笑みを浮かべていた。

それからの行動は実に素早かった。
部屋から出たイリーナは、再び女物の普段着を手に戻って来た。
そして、実にいい笑顔でリョウの目の前に突き出した。
襟の詰まった濃い灰色のワンピースに簡素な白い前掛け（エプロン）、髪を隠す為の【プラトーク（スカーフ）】。体の良い掃除婦かどこかの家の召使のよう

な格好だろうか。
　このような地味な服が、派手で煌びやかな娼館にあることの方が、リョウとしては意外だった。
「さ、善は急げよ」
　どうやら、自分がこのままの格好で外に出るのは拙いらしいということは理解出来た。なので、ここは大人しく二人の言うことを聞いておいた方がいいのだろう。ここに来る前のように、また知らない男達に追いかけられるのは御免だった。
　何故か嬉々として声を弾ませたイリーナには謎が深まるばかりだが、ぐずぐずしてはいられないということは分かったので、リョウは素直に着替えることにした。女物の服を着ても本来の姿に戻るだけなので別に抵抗などある訳も無い。
「では、お借りしますね」
　そう言って、手早く外套を脱ぎ、続いて革の肩当てと肘当てを外す（これらは腕や肩に止まるヴィーやイーサン、イサーク等の伝令たちの爪から身体を守る為である）。そのままの勢いで上着を脱ぎ、シャツのボタンに手を掛けたところで、ユルスナールから慌てた声が上がった。
「おい、リョウ！」
　首だけ振り返れば、ユルスナールがぎょっとした顔をしていた。その隣ではブコバルがニヤニヤといやらしい笑みを浮かべている。それを見て、リョウは呆れたように息を吐いた。
　急げと言ったのはそっちなのだ。生憎、部屋はここしかないし、衝立のように身を隠すものもない。着替える為だけにイリーナに別室を案内してもらうのも気が引けた。
「二人ともあっちを向いていてください」
「……努力する」
「へいへい」
　何とも妙な答えが返って来たような気がしたが、リョウとしては気に留めている余裕がなかった。

手早く灰色のワンピースを広げて着方を確認した後、その釦を外す。ワンピースは背中側を釦で止める形体（タイプ）のものだった。中々着るのに手間取りそうだ。

何やら後ろから突き刺さるような視線が送られている気がしたが、シャツを手早く脱ぐとワンピースを頭から被った。腕を通してから、背中側に一列に並ぶ釦を止めるのに苦戦した。

自分では無理そうなので、手伝って貰おうとイリーナの姿を探したが、妖艶な女主の姿は何処にも見当たらなかった。

「イリーナさんは？」

振り返ると、こちらを見ていたユルスナールと視線が合った。その視線がついと横に逸れて、やや気まり悪げに咳払いをする。

仕方がないと腹を括って、リョウはユルスナールを呼んだ。

「ルスラン」

「ん？」

「手伝って下さい。背中の釦が止まらないんです」

恥を覚悟で窮状を訴えれば、

「俺がやってやろうか？　得意だぜ、こう見えても」

「ブコバルが得意なのは外す方でしょう？」

すかさず割り込んできたブコバルの下卑た笑みをリョウはぴしゃりと一蹴した。

冗談ではない。ブコバルに頼もうものなら、余計なことまで付いてきそうで、いつになったら着終わるか分かったものではない。これまでの経緯から、その位の学習能力はあった。

「ブコバル」

ユルスナールの窘めるような声に、

「へいへい」

ブコバルは大げさに肩を竦めて見せた。

ユルスナールはリョウの傍に近寄るとその背後に立った。

そして、目の前にある剥き出しになったリョウの背中を暫し眺め

ていたが、
「ルスラン？」
「ああ、すまない」
促されるように声を掛けられて、慌てて指を動かし始めた。
節くれ立った男の長い指が器用に背中の釦をはめて行く。
それにしても、何でこんなに面倒な着方をする服なのだろうと、その間、リョウは不可解に首を傾げていた。一人で着られないのはなんとも不自由ではないか。
「ほら、出来たぞ」
「ありがとうございます」
それから、長靴（ブーツ）を脱いで、長椅子に片足を掛けると、スカート部分の裾を捲り、ズボンの右足に付いている短剣を止める為のベルトを取った。
その時になって、リョウは奪われた短剣のことを思い出した。
「あの、そう言えば、私の短剣はどうなったんでしょう？」
手早くズボンを脱ぎ、再び、捲りあげた右の太もも部分にベルトを止めながら、リョウはブコバルの方を流し見た。
「ああ。大丈夫だ。お前の短剣は二本とも戻ってる。あそこにあるぞ」
少し先のテーブルを目で示されて、リョウはほっと安堵の息を漏らした。
二本の短剣は共にリョウに取っては大事なものだった。一本はガルーシャの形見になった。そして、もう一本は、恐らく、近い将来、レントの形見になるであろうものだ。
リョウはテーブルの方へ行き、小さい方の短剣をそっと両手に抱いた。
そして、再び長椅子の所に戻って、それをベルトに着けようとした所で、ユルスナールから『待った』の声が掛かった。
「リョウ。そのままでは駄目だ」

手を止めて振り返る。
ユルスナールは、外套の内ポケットから光沢を放つ長い布のようなものを取り出すと、長椅子の上に片足を上げたままのリョウの背後から、屈みこむようにしてその剥き出しになっている太ももを掴んだ。
リョウが突然のことに呆気に取られる傍で、ユルスナールは器用な手付きでリョウが付けていたベルトを一旦、取り去ると、その布を太ももの部分に巻いた。
「こうしないとお前の柔肌など直ぐに擦れて赤くなる。後で痛くなっても知らんぞ？」
耳元に囁く様に吹き込まれて、リョウの背中は無意識に粟立った。
「な……」
そして、その布の上から、短剣を留めるベルトを巻き、小振りの一振りを然るべき場所に収めた。
「きつくはないか？」
具合を確かめるようにベルトと肌の間に指を入れられて、
「大丈夫です。調整は自分で出来ますから」
妙な動きを始めた男の手の甲を、リョウは微笑みを湛えながら抓った。
「そうか」
小さな痛みに一瞬、顔を顰めたものの、ユルスナールはどこ吹く風で、最後に意味あり気な目配せと共にお返しとばかりに太ももの肉を摘まれた。
「ルスラン！」

「おーい、終わったかぁ？」
ブコバルが欠伸を噛み殺しながら、長椅子に寄りかかっていた。
「もう終わります」
リョウは行き過ぎた親切心を発揮したユルスナールを睨みつけると、慌てて残りの支度に取りかかった。白い前掛（エプロン）けを付けてから束

ねていた髪を解く。その上から、髪色を目立たせない為の【プラトーク】を巻いた。そのまま、長靴を履こうとした所で、漸く、何処かに行っていたイリーナが帰って来た。

「あらあら、ちょうど良かったみたいね。間に合ったわ。靴はこれを履いて頂戴」

差し出されたのは、女物の短靴【バチンキ】で編み上げになったものだった。

「ええと、もとのでも大丈夫ですよ？」

リョウとしては今まで履いていた長靴で良いかと思ったのだが、

「あら、駄目よ。あんな男物の長靴を履いたんじゃおかしいわ。この際、完璧にしなくっちゃ。然るべき家の使用人には見えないじゃない？　ねぇ旦那？」

イリーナの言に、待っていた二人の男たちは頷いた。

成程、こういう長靴を履くのは一般的に男であるということをリョウは改めて思い知ることになった。

大人しく【バチンキ】を履いて、着ていた服と長靴、もう一つの短剣を大きな布に包んで、準備は完了した。

「お待たせしました」

何やらどっと疲労感が込上げて来たが、ここで気を抜く訳にはいかないのだ。リョウは改めて気を引き締めた。

「うふふふ。可愛らしい召使が出来上がったわね。これなら旦那たちと歩いていても使用人と主ぐらいにしか見えないわ」

イリーナはリョウの姿形をざっと改めると満足そうに微笑んだ。

きっとイリーナの事だ。この間の勘違いを引き摺っていれば、少年が女装をしたと面白がっているのかもしれない。

「……そうですか」

酷く楽しそうなイリーナを前に、リョウは内心、微妙な気分だったが、それをおくびには出さずに、イリーナに軽く一礼して謝意を

示した。
「イリーナさん、ありがとうございます。お借りしたものは、後で洗濯してお返ししますね」
恐縮そうに告げたリョウに対して、イリーナはからからと笑い、仰天するような事実を明かした。
「あら、その必要はないわ。それ、あなたにあげるわ。前にここで働いていた子がね。お客と『主従ごっこ』をする為に特別に誂えて貰ったものなの。生地もいいものを使ってるし、少し凝ってるでしょう？　それはそのお客の趣味。その子は、もう身受けされて幸せにやってるから必要ないのよ。もう要らないからってね、置いて行ったんだけど、今うちの子達の中には、それが着られる子が居なくて。あの子は随分小柄な方だったから。でも、ちょうど良かったわ。捨てようと思ってた所だったのよ。間一髪。取って置いて良かったわね。うふふふ」
イリーナの形の良いぽってりとした唇が紡ぎ出す意外過ぎる程（といっても娼館の出来事として考えるならば、それはそれで余り驚くに値することではないのかもしれないが）の秘話に、リョウは垣間見てはいけない世界をうっかり覗いた気分になって、少し遠い目をしたのだった。

そして、準備を終えたリョウを見て取って。
――――――詳しい話は宿屋に戻ってからになるが。
そう前置きをしてから、
「リョウ。お前は、カマールの所から俺の所に移れ」
ユルスナールから出された唐突とも思える提案に、リョウは驚いてその言葉を発した男を見上げた。
「ルスランの所に？」
「ああ。あの男がこのまま、むざむざと引き下がるとは思えん。それにお前には、話しておくことがある」

――――――大事な話だ。お前の今後とこの国に関する。

いつになく真剣な顔をしたユルスナールの気迫に、リョウは呑まれたように押し黙った。

自分の与り知らない所で何が起きているというのだろうか。何故、そこに自分が関わって来るのだろうか。何かに巻き込まれているのか。知らない内に。

そう言えば、自分が追尾されていたという理由をまだ聞いていなかったことにリョウは思い至った。

その辺りのことをユルスナールは知っていて、教えてくれるというのだろうか。

途端に不安そうな表情を浮かべたリョウに、ユルスナールはそっと手を伸ばすとその頬に触れた。

そして、安心させるように小さく微笑んだ。

「そんな顔をするな。お前にしてみれば、今の状況で心配するなというのは無理なことかもしれないが、決して悪いようにはしない。約束する。俺を信じろ」

深い青さを湛えた瞳がリョウを静かに見下ろしていた。

真摯で誠実ですらある男の表情に、

「分かりました」

リョウは諾と一つ頷いた。

ユルスナールが思慮深い男であることは十分承知していた。懐の深い男であるということも。

その優しさに救われてきたのも確かだった。そして、ガルーシャ亡き今、この場所で窮地に陥った時、リョウが真っ先に思い浮かべたのは、この男の顔だった。無意識であれ、それを認めない訳にはいかなかった。

リョウは、こちらを穏やかに見下ろす瑠璃色の瞳にそっと微笑み返した。

その微笑みは、ややぎこちなかったかもしれない。だが、自分がちゃんと相手を信じていることを、信頼していることを伝えて置きたかった。

それに取り敢えず、リョウとしても状況を把握しておきたかった。森の小屋から外の世界に出てまだ日も浅い。今回のことでこの国の事をもっと知らなくてはと痛感したのだ。自分の身を守る為にも。

だが、ユルスナールの提案を素直に飲むには、気に掛かることがあった。

「カマールさんの方は？」

カマールにはきちんと挨拶をして、これまでのお礼と事の次第を説明したかった。何も告げずに出て行くというような不義理だけはしたくはない。先程の勘違い男の剣幕を思えば、カマールの傍に居ることが、自分とカマールの立場を悪いものにするだろうことは理解出来た。向こうは、リョウがカマールの弟子であることを信じて疑わなかったのだ。幾ら違うと声を張り上げた所で聞く耳を全く持たなかった。

リョウの気懸りを理解したユルスナールは、それを受け入れた。

「分かった。カマールの所に寄って、話を付けてからにしよう。序でにお前の荷物も纏められるしな」

荷物自体は少なく、いつも一か所に纏めていたので問題はなかったが、カマールに面と向かって挨拶が出来るのは有り難かった。

「ありがとうございます」

口元を緩めたリョウにユルスナールも微笑んだ。

それから、もう一人の相棒を振り返った。

「ブコバル、お前はどうする？」

「俺は、……そうだな、カマールんとこまでは一緒に行くか。その後はドーリンのとこに顔を出してくるわ」

「分かった」

それで男たちの話は付いたようだった。

「よし。準備はいいな？」
「はい。旦那さま」
「……」
主人と召使という設定らしいので、一応、使用人らしく答えてみたのだが、ユルスナールは一瞬、虚を突かれたような顔をした後、可笑しそうに喉の奥を鳴らした。
「可笑しかったですか？」
「いや、妙なものだな。だが、まぁ、お前に傅かれるのも偶にはいいかもしれん」
「そうですか？」
いまいち、ユルスナールが何に反応しているのかは良く分からなかったが、これ以上の詮索はしないことにした。
「リョウ。俺にも言ってみろ」
そんなユルスナールの様子を見てか、ブコバルも面白がって悪乗りしてきた。
リョウは打って変わって、あからさまに嫌そうな顔をした。
「ほれ」
「ブコバルが主だなんて、気苦労が絶えないのでしょうね」
「何だと？　どういう意味だ？」
「そのままの意味ですよ」
「お前なぁ、ルスランとは随分態度が違うじゃねぇか」
それはそうだろう。リョウにしてみれば当然という反応である。
そして、子供染みたブコバルの言い草にリョウは手を口元に当てて、鈴が鳴るように声を立てて笑った。
「何笑ってやがる」
ブコバルがムッとした。
「だって、ブコバルがあんまりなことを言うから」
目尻に薄らと涙すら滲ませ始めたリョウの様子に、ブコバルは不服そうに眉を寄せたが、不意に穏やかな顔をして見せた。
「だが、まぁ、そうしてると本当に女だな。不思議なもんだ」

しみじみと口にされて、リョウは何とも擽ったそうに肩を竦めた。
そして気を取り直すと、表情を改めて、ブコバルに対して流れるような所作で一礼して見せた。
「失礼いたしました。それでは、旦那さま、参りましょうか」
召使然りとしたリョウの態度に、ブコバルは虚を突かれたような顔をした。
その横で、込上げてくる可笑しさを堪えるようにユルスナールが口元を押さえて横を向いたのだった。

そして、この館の女主に挨拶をしてから、二人の男と両腕に荷物を抱えた召使風の女は、静かに、暫しの眠りに就く煌びやかな夢の館を後にしたのだった。

鍛冶屋の選択

カマールは、戸口に現われた二人の上背のある男とその後ろに続いた使用人風の格好をした、まだ年若い女の顔を見て、驚きに固まった。

髭を蓄えた口をあんぐりと開けて呆けた顔を晒したが、直ぐに男たちのどこか張りつめた空気に気が付いて、その表情を引き締めた。

「こいつは、旦那方、お揃いでどうなすったんです？」

屈強な男たちを前に、カマールは、一瞬の動揺を宥めるようにたっぷりと頬を覆う髭を撫でた。

「すまない。火急の用が出来た。少し話がしたいのだが、いいか？」

相変わらず控え目な美丈夫の申し出に、カマールも鷹揚に首を縦に振った。

「へぇ。別に構いませんが」

そして、二人の男たちの間に半ば隠れるようにしてひっそりと立つ使用人と思しき格好をした女の顔を見て、仰天した。

「おめぇは……リョウ…か？」

「はい」

目を見開いたカマールの顔の鼻先で、見知った色彩を持つ顔が苦笑を漏らしたのが分かった。

一体全体どうしたんだ？――――そんな言葉がカマールの顔には透かし見えた。

だが、二人の男たちの只ならぬ様子に、些か狼狽しながらも、このまま戸口で立ち話をする訳にもいかないので、取り敢えず客人たちを中に招き入れることにした。

ユルスナールとブコバルが話を付けるということで、リョウは先に荷物を纏める為に間借りしている部屋に行った。

中は、今朝、この場所を後にした時と変わっていない。簡素な寝台（ベッド）と小さな机と椅子があるだけの小ざっぱりとした部屋だ。

ここを去ると思うとなんだか、少し名残惜しかった。

短い間だったが、ここには愛着のようなものが湧き始めていた。無駄のない素っ気ない造りが、森の小屋を彷彿とさせるからかもしれない。それに、ここの空気はそのまま、ここに暮らす主の性格を良く映し出していた。飾り気のない、素朴で、温かな空気だ。

片付けは直ぐに終わった。元より荷物は必要最低限で、鞄一つで来たのだ。ここで増えたものもない。

そうして、男たちが集まる居間に顔を出せば、リョウに気が付いたカマールが椅子から立ち上がって傍に歩み寄った。

「リョウ。すまねぇことをしたな。俺の仕事にお前を巻きこんじまって」

恐らく、ユルスナールとブコバルからつい数刻前の出来事を聞かされたのだろう。いつも鍛冶屋として自信と威厳に満ち溢れている顔が、いつになく苦渋に満ちていた。

二つの頬をいつものように大きな手で包まれて、リョウは小さく微笑むとゆっくりと頭を振った。

「いいえ。カマールさんの所為ではありません。ワタシの方こそ、認識が甘かったようです」

それを言うのならば、あの男が全ての元凶なのだろうが、それをこの場で口にする積りはなかった。

レントとカマールは、この界隈では想像以上に凄腕で名の通った鍛冶職人だったのだ。剣で身を立てる男たちにしてみれば、二人の鍛冶屋が鍛えた剣は喉から手が出る程欲しい代物だった。それが例え、小さな短剣だとしても、だ。彼らの名前には相当な付加価値（ネームヴァリュー）が

付いていた。
　奪われた短剣がレントの作だと知った時のあの主従の反応は、リョウの知らなかった現実を突き付ける高い授業料になったとも言えた。
「何もなくて良かった」
「はい」
　怪我が無いことを確認して安堵の息を吐いたカマールに、リョウは微笑んだ。
　だが、直ぐにその顔色を曇らせた。
「ですが、あの人たちは、ワタシのことをカマールさんの弟子、若しくは鍛冶屋見習いか何かだと決めつけてしまったようで。面倒なことにならなければいいのですが……」
　そう言って、言葉を濁すと静かに目を伏せた。
「そりゃまた、どうしてだ？」
「恐らく、これが目に触れてしまった為だと思います」
　怪訝そうに男らしい太い眉を跳ね上げたカマールに、リョウは首に下げたペンダントと抱えていた袋の中にある一振りの短剣を取り出して見せた。
「これは、レントさんがその昔、作った短剣です。この他に対になっている小振りのものもここにあります」
　そう言って、短剣が収まっている己が右足にそっと指で触れた。
「おやっさんの短剣だと？　それにこいつは【キコウ石】じゃねぇか。しかも純度が高い。【カローリ王】か？」
　カマールの良く通る野太い声が、珍しく上ずっていた。
　その反応を見るだけでも、自分がどうやら大変なものを引き継いでしまったということが知れた。
「これは、ルスランから頂いたものです」
「旦那が？」
「はい。ワタシのお守りです」
　カマールは振り返ると名前が上がったユルスナールへと視線を走

らせた。
ユルスナールがそれに視線で一つ頷いて見せた。
リョウから提示された二つの代物を前に、カマールは困惑とも取れるような苦々しい顔をした。
「成程な。これじゃぁ、誤解するなってのも無理な話だ」
そう言って大きく息を吐き出すと、リョウに座るように促した。

テーブルには、既にユルスナールとブコバルの二人が席に着いていた。
「それじゃぁ、リョウ。お前に教えとかなくちゃぁならねぇな」
カマールは隣にリョウが座ったのを見てから、ゆっくりと口を開いた。
そして、先程の苦り切った感想の理由を実に簡潔に述べたのだ。
その内容は、軽く目眩がしそうな程に、リョウの想像を絶するものだった。

レントはこの国でも指折りの鍛冶屋で、剣を鍛えて欲しいという客はそれこそ後を絶たなかった。そしてその名は、王都である【スタリーツァ】にまで及んでいた。
切っ掛けは二十数年前の隣国との大戦にあったという。切れ味が良く刃零れのしにくい強固な剣を男たちはこぞって探した。そして、当時、一握りの人たちの間で重宝されていた剣の造り手の名が、戦を契機に広まったのだ。それを使っていた将軍がその戦で多大なる功績を残したことが大きかった。
だが、レント自身は、外野の反応には目もくれず、相変わらず酷く偏屈で、その遣い手が、己が眼鏡に敵わない限り注文を受けないということで有名だった。頑固で堅物で、気に入らない相手は誰であろうが素気無く断った。その現役時代に注文を受けて貰えたのは、実に一握りの人間だったとの話だ。その所為か、奇特な変わり者呼ばわりもされた。だが、レント自身は、そんな中傷など何処吹く風

で、己が信念を曲げることは決してしなかった。
　レントの作品は、受注生産のみで通常の武器屋などには決して出回ったりしない。故に、一部の愛好家（マニア）のような人たちの間には、それこそ『幻の剣』というような扱いをされるようになったのだ。
　そして、その直属の弟子であるカマールも師匠の教えを引き継いだ、その筋では有名な鍛冶職人なのだ。
「だからな、リョウ。そいつは、知ってる奴ならば、目の色を変えちまう代物なんだ。俺もおやっさんが短剣を造ってたなんてことは初めて聞いたぞ」
　レントがこれを鍛えたのはもう二十年以上も前のことだと言っていた。それは、恐らく、カマールが弟子入りする前のことなのだろう。
「これは、ガルーシャがレントさんに作ってもらったものだそうです」
　その言葉にカマールは、まじまじとリョウの顔を見た。
「ガルーシャってのは……あの遥か北の辺境の森に住むっていう隠遁術師の爺さんのことか？」
「そうだ」
　カマールの勢いに気圧されがちなリョウに代わって、ユルスナールが間に入った。
　カマールはユルスナールの方へ顔を向けると徐に腕を組んだ。
「そうか。ならあり得るだろうな。あの二人は似た者同士って感じで。あの爺さんが、おやっさんのとこに来ていたのは知ってる」
「ワタシは、ガルーシャと暮らしていたんです」
　そこで漸く、リョウはその短剣と自分の繋がりの種明かしをした。
「そうか」
「その【キコウ石】も元々はガルーシャが手を加えたものだ」
　そして、補足をするようにユルスナールが言葉を継いだ。
　カマールにしてみれば、師匠に似た偏屈な男が一人増えたという様な所であったが、噂では高名な術師であるというあの男ならば、

純度の高い【キコウ石】を生成することも出来ないことではなかった。

「成程な」

カマールは、自分の母親が伝令として寄こした人物が、単なる年端の行かない少年ではなく、想像以上の伝手と繋がりを持つ人物であることを認識せざるを得なかった。

自分の母親は、恐らく、その辺りのことを理解していたのだろう。だから、あのような長い手紙で伝令としてやってきた子の世話を見てくれと頼んできたのだ。

リョウが共に暮らしていたという術師のいた森から、一番近い村は、母親の居るスフミだった。同じ術師同士、あの二人の間に何らかの交流があったとしてもおかしくはない。

カマールは閉じていた目を開くと眼前に座る二人の男たちを見た。この国の軍部に属する鍛え上げられた肉体と強靭な精神力を持つ男たち。二人は其々異なる風貌と空気を持つが、同じ男であるカマールの目から見ても、揃いも揃って立派な男たちだった。

そして、視線を横に流す。

そこには、その二人が、一様に気に掛ける存在が居た。黒髪に黒い瞳というその色彩もさることながら、実に不思議な雰囲気を持つ子だった。

先程、この二人の男達から、リョウが身を置く状況を簡単に説明されて、その庇護を申し出された。

短い間であったが、リョウと共に過ごした日々は、心休まるものだった。

この場は、この男達に任せた方が良いだろう。寂しさは残るが、今後のことを考えれば仕方がない。

「リョウのこと、よろしくお願いいたします」

カマールは二人の男を見据えると、静かに頭を下げた。

「ああ。任せておけ」
銀色の髪をした男の瞳が強い光を湛えていた。それを見たカマールは、この男にならば、安心してその子の身を任せられるだろうと感じたのだった。

「短い間でしたが、お世話になりました」
この国の風習に則って、両頬に軽い口付けを送り、抱擁を交わす。
「そんなしみったれた顔すんなって。まだ、この街にはいるんだろう？」
腕を解いて、顔を上げたリョウにカマールは、態とおどけた様な声を出した。
「はい。でも、そろそろ帰りたいと思います。大分長いこと家を空けてしまいましたし、きっと皆、ワタシの帰りを待っているでしょうから」
「何だ、お前の帰りを待ってる奴がいるのか？」
「はい。森の獣たちですが」
「そうか」
その言葉にカマールは穏やかに笑って見せた。
「母さんによろしくな」
「はい。リューバに何かお伝えすることはありますか？」
それを聞いて、カマールはあからさまに嫌そうに眉を寄せた。唸るような声を出して、ガシガシと髪を掻くと、
「あ～。後で伝令を寄こすと伝えてくれ」
弱り切ったようにちらりとこちらを流し見た。
「はい」
それを見たリョウは小さく喉を鳴らした。
どの世界でも息子は母親に永遠に頭が上がらないのかもしれない。
何処に居ても変わらない、そんな小さな世界の縮図に思わず笑みが

零れたのだった。

秘密の共有者

――――――チャプン。

湯船から掲げた腕から落ちた水滴が、微かな音を立てて、小さな波紋を作りだしてゆく。透明な水が滴る音は、静まり返った浴室に殊の外、反響するように響いた。

温かいお湯の中に身体を沈めると、リョウは目を閉じて、長く、そして緩く息を吐き出した。

混乱する思考。色々なことがぐるぐると脈絡も無く溢れだし、切れ切れに気紛れで非情さえある残像をチラつかせる。この胸に去来するのは、焦燥、不安、戸惑いといった負の感情。そして、希望、期待、安堵といった正の感情。独立して色付いていた個々の気持ちは、もうどれがどれだか分からない位に混ざり合い、溶けだして、滲んだ境界から、再び違うものを作り上げて行く。

リョウはそっと右手で、左胸、肌の上に残る銀とも緑とも青とも取れる不思議な玉虫色の文様をなぞった。

――――――リョウ。お前は、ガルーシャのことを何処まで知っている？

自分が良く知る男の低い声が、耳元でこだましていた。

カマールの工房を辞してから、【ツェントル】に顔を出すというブコバルと別れて、ユルスナールに連れて来られた場所は、以前と同じユルスナールが滞在しているという宿屋の一室だった。

この宿屋の相場がどの位かは分からなかったが、一応、自分にも多少なりともお金の持ち合わせはあったので、別の部屋を取ろうとしたのだが、それは敢え無くユルスナールに却下されてしまった。

この部屋は十分広さがあるから、一人ぐらい増えても何ら変わりはない。寧ろ、目の届く場所にいた方が万が一のことを考えれば安心する。そんな台詞で、同じ部屋で過ごすことを正当化してしまったのだ。　リョウとしては、ユルスナールに迷惑を掛けることを心配したのだが、自分が置かれた状況を完全に飲み込んだ訳ではなかったので、一先ずは、男の提案に乗ることにした。

それに、リョウの腹積もりでは、もう二日位で、この街を出ようと思っていた。

ここに来た目的はその日の内に済ませてしまっていたし、これ以上、ここに留まる正当な理由も無かった。レントやラリーサ・コースチャ姉弟の父親の容体が気に掛かったが、それをずるずると引き摺る訳にもいかないだろう。この街で知り合って、世話になった人達に別れの挨拶をして回って。それを考えたら、精々あと二日位が妥当な所だった。その数日位ならば、ユルスナールの好意に甘えてもよいかとの思いが頭の中にはあった。

少し遅めの昼食をユルスナールと共にこの宿屋の一階に併設された食堂で取った。

対外的には、リョウはユルスナールに仕える使用人という設定だった。

主と使用人が同じテーブルで食事をするのはどうかと思い、念の為、それを訴えてみたのだが、旅先では、家に依ってはそういう可能性も無きにしもあらずだということで、あっさりと流されてしまった。

なんだか、上手く男の言い分に丸め込まれたような気がしないでもなかったが、実際に貴族などの上流階級のしきたりなどは皆目見当が付かなかったので、面と向かって反論することも出来なかった。

別にこの男と顔を突き合わせて食事をするのが嫌だという訳ではない。唯、そんな芝居染みたことをしているという自覚はあったので、几帳面な所のあるこの男ならば、その辺りの細かいところを気

にするのではないかと思ったまでだった。

そして、再び、部屋に戻り、ソファに落ち着いた所で、ユルスナールが真面目な顔をして切り出したのだ。

――――――お前はガルーシャのことを何処まで知っている？

この国におけるガルーシャの立ち位置をどの程度理解しているかということを。

ユルスナールが身に纏う硬質な雰囲気に、いよいよ話が本題に入ったことを知って、リョウは、表情を改めた。

それからリョウは、ガルーシャに関して知り得る限りのことを語った。共に過ごした一年になるかならないかのガルーシャとの日々だ。懐かしくも温かで無我夢中だった日々の記憶の渦。思い出などには決してならない。それは、今でも脈々と自分を形作る血肉としてこの胸に、この血に息づいているのだから。

だが、それと同時に、自分の話は、もしかしたら相手には上手く伝わらないかもしれないと危惧し始めていた。

自分の話には、全ての土台となるべき大きな前提条件があるのだ。それを抜きにしては、きっと真実は、百分の一程も伝わらないに違いない。

この男に、本当の事を話してしまいたかった。

だが、それと同時に自分の語ることが、普通に考えても常軌を逸したことであることは十分、理解していたので、信じて貰えないだろうことが恐ろしかった。

もし、ここで全てを打ち明けて、おかしなことを言う奴だと少しでもこの男に思われてしまったら、自分が拠って立つ足元が音を立てて瓦解してしまうかもしれない。そう考えると酷く怖かった。自分の存在は、この場所では、砂上の城のように脆弱なものなのだと突き付けられるようで言い知れぬ恐怖に身体が竦んだ。

ユルスナールを信頼していない訳ではないのだ。いや、寧ろこの

男を信頼し、そして惹かれているからこそ、未知数の反応が怖くて仕方がないのかもしれない。

なので、ガルーシャと知り合った経緯を語る時、始めは慎重に言葉を選んでいた。

「ワタシは、森の中を彷徨っていた所をガルーシャに拾われました。今から二年ほど前のことになります」

当時のことは幾ら思い返そうとしても、記憶が曖昧だった。靄が掛かったように霞んでいるのだ。

気が付いたら、あの鬱蒼と茂る森の片隅に倒れていた。【ここ】での意識は、【そこ】から始まっていた。

ざわざわと脳内に侵蝕するように聞こえてくる不協和音を生み出している音の洪水に顔を顰めて、浮上した意識の下、徐に周囲を見渡せば、森の狼たちが憲兵宜しく不審者、基、侵入者である自分を遠巻きに見下ろしていた。

驚く間も無い衝撃の展開に、このまま食われてしまうのだろうかと頭の片隅で思った。

だが、ざわざわとした音声が、やがてはっきりと言葉のようなものを紡ぎ出した時、唐突に自分が狼達と意思の疎通が出来ていることを理解したのだ。

当時は、ここの言葉を全く理解出来なかったから、あれは念のような剥き出しの気持ちを交換したというべきものなのだろう。その時は無我夢中だったが、後から考えてみれば、そういうことなのだろう。

何分、狼たちも意思疎通の出来る人間が、このような森の深部で倒れているということ自体が初めて経験だったらしく、その対応に戸惑っているようだった。そして、彼らに言われるままに森の中を外に向かって歩いている途中に出くわしたのが、当時、薬草採りに来ていたガルーシャだったのだ。

踝まである長い外套を引き摺るひょろりとした男だというのがその時の第一印象だった。

ガルーシャは、狼たちと何やら話をした後、自分に付いて来るようにと手を振った。その時、声を掛けられたのだが、全く理解できない音の羅列で、狼たちに通訳を願って振り返れば、あの男に付いていけということが分かった。そして序でとばかりに、悪いようにはならないだろうと慰めのような気持ちを貰い、この場所での生活が始まったのだ。

一旦、話を区切ったリョウがそっと前に座るユルスナールを見遣れば、そこには案の定、どこか判じ難い顔をしている男の顔があった。

それもそうかもしれない。要するに唐突過ぎるのだ。展開が。どうしてそんな所に倒れていたのかが分からない。ぽっかりと故意に空けられた部分に、鋭い男のことだ、何がしかの違和感を覚えているのだろう。それが戸惑いを生じさせているのかもしれない。

「すみません。きっと混乱させてしまいましたね」

男の顔色を見て、自嘲気味に小さく微笑む。

やはり、このままでは上手く話が進まない気がした。ここが潮時なのかもしれない。

そして、リョウは小さく息を吐き出すと覚悟を決めた。

「ルスラン。聞いて欲しいことがあります」

リョウは、すっと顔を上げると目の前にある瑠璃色の瞳を見詰めた。

そこにあるのは、変わらない凪いだ色だった。包み込むような深い青さを湛えた神秘ですらある優しい色。失ってしまった世界の遠い記憶に重なる懐かしさを孕んだ色だ。

緊張に強張りそうな口元を、微笑みを浮かべることで誤魔化す。

だが、それは少しぎこちなかったかもしれない。

「リョウ」
ユルスナールは対面のソファから立ち上がるとリョウの隣に腰を下ろした。そして、その膝の上にきつく握り締められていた拳をそっと大きな手で包んだ。
「力を抜け。別に無理をしなくてもいい。話したくないことを無理に聞き出そうとは思わない」
相手を案じる優しい響きを持った声に、リョウはそっと力を抜くと首を横に振った。
「いいえ。大丈夫です。今、あなたに聞いてほしいのです。これからワタシが話すことは、きっと信じられないことだと思います。壮大な絵空事か莫迦なことを言っていると思うでしょう。それでも、ワタシにとっては、それは実際にこの身に起きた紛れもない真実で。あなたに知って置いて欲しいのです。ワタシの抱える秘密、ワタシの抱える真実を。それで、きっと今、ルスランが感じている違和感の正体が分かると思います」
そうすれば、きっと、これまでに感じていた不可解な謎も解けることだろう。
静かに告げたリョウの瞳をユルスナールは真正面から見詰めていた。
「分かった。お前の秘密ということは、俺は差し詰め、その共有者だな？」
「そうなりますね」
張りつめた空気を和らげるように口にされた軽口に、リョウは涙が出そうになったが、それを急いで飲み込んだ。
そして、負けないように微笑んでみる。
「覚悟はいいですか？」
「勿論だ」
どこか尊大すらある揺るがない男の態度にリョウは安堵を覚えていた。
大丈夫かもしれない。半ば祈るような気持ちで小さく息を吸い込

む。
そして、リョウはこれまでガルーシャ以外には決して明かしてこなかった唯一絶対の真実を告げるべく、口を開いたのだった。

「以前、ルスランは、ワタシに国はどこかと尋ねましたよね？」
「ああ」
それはユルスナールと初めて会った翌日のことだった。朝靄の中、小さな泉の畔でのことだった。
「あの時の答えをお教えします」
リョウは真っ直ぐに男の双眸を見た。
「ワタシの故郷は、ここには存在しないのです」
その唐突とも言える告白に、ユルスナールは虚を突かれたような顔をした。
発した言葉の意味が理解できないのだろうことは想像に難くなかった。
「どういう意味だ？」
すっと細められた眼差しに、リョウはそっと微笑んだ。
「そのままの意味です。ワタシが生まれ育った国は、この世界にはない。ワタシの【ここ】での記憶は、二年前、森でガルーシャに拾われた所から始まっているのです。ワタシは気が付いたら、こちら側に転げ落ちていた……とでも言いましょうか。他にどう表現したらよいのか分からないのですが。どうしてなのか、どうやってなのかは、自分でも分かりません」
「前の記憶を失っているのか？」
「いいえ。こちら側に来る前の記憶はちゃんとあります」
「……国が、この世界にはない？……世界が、違うだと？」
瑠璃色の瞳が、言葉の真意を図るように見開かれる。
男の導き出した答えにリョウは静かに頷いた。

「はい。ここはワタシが知る【世界】ではないのです。ワタシがいた場所には、どこをどう探しても【スタルゴラド】という国は存在しなかった。言語も風習も成り立ちも、人が拠って立つ前提条件さえも、何もかもが違う。単なる異国という訳でもなかった。その事実を飲み込むのに、ワタシも時間が掛かりました」

愕然とした顔をした男の傍らで、リョウは話を進めた。

「この国の言葉は、一からガルーシャに教わりました」

「ガルーシャは、知っていたんだな？」

「はい」

リョウは穏やかに頷くと、当時を懐かしむように、どこか遠い目をした。

「ワタシがどうしてこちら側に来てしまったのかは、ガルーシャにも分からないと言われました。そういう例は、聞いたことがないそうです。ですが、ワタシが彷徨っていた森は、人智では図ることのできない不可思議なことが起こるそうですね。まだ人にとっては謎の多く残る場所だとか。そこで何らかの力が働いたのか、空間に歪みが生まれたのかは分かりませんが、こちらとあちらがひょんなことから繋がって、ワタシはこちら側に迷い込んでしまったのかも知れません」

窓の外を見ていた視線が再び隣に座るユルスナールに戻った。

「ワタシの国には【神隠し】という言葉がありました。人が突然行方不明になったり、姿を消して見つからなくなってしまった場合、大体、子供の場合に使う時が多いのですが、【神隠しに遭う】という言い回しを使ったんです。きっと人には想像の付かない何らかの【おおいなる力】が働いたということで理解を超えた状況を納得しようとしたということなのかもしれません。差し詰め、ワタシの陥った状況もそのようなものなのかもしれませんね」

全てを話し終えたリョウは、どこかすっきりとした顔をしていた。信じてもらえるか否かは、相手次第だが、漸く胸に問えていたもの

が取れた気分だった。
「言ってしまえば、ワタシはこの世界の【異分子】なんです。同じ【人】の形はしていますが、ワタシにとっては、ここに存在する全ての事象が未知のものだった」
穏やかな表情が紡ぐ言葉は、酷く残酷な響きを持っていた。
対するユルスナールは明かされた内容に、かなりの衝撃を受けたようだった。
「お前は……」
そう言い掛けて、それきり口を閉ざしてしまう。
きっと掛けるべき言葉を探しあぐねているのかもしれない。
その端正な顔立ちが、何かを堪えるように痛まし気に歪んだ。
ユルスナールは思いやりのある優しい男だ。ひょっとしたら、自分の境遇を我が事のように思ったのかもしれない。

「ルスラン」
リョウは、軽やかで明るさすら滲ませた笑みを浮かべると、硬質で鋭角な線（ライン）を描く男の頬に手を伸ばし、そっと指先で触れた。
「そんな顔をしないでください」
なんだか、いつもとは立場が逆転したようだった。
「ワタシは大丈夫ですから」
かつての日常から突然、切り離されて、全く見知らぬ場所に放り投げられた形だったが、こちらでガルーシャに拾われ、そして、救われた。失ったものは大きかったが、それと同じ位、この場所で新しく得るものも多かった。
少なくとも、あれから二年余りの年月が経過している。その【時】の移ろいの中で、リョウは既に現実を受け入れていた。
「ガルーシャが、ワタシにここで生きて行く術（すべ）を授けてくれました。そして、新しい繋がりを残してくれたんです」
セレブロを始めとする森の獣たち。リューバやアクサーナといったスフミ村の人たち。そして北の砦の兵士たち。皆、新しく生まれ

た掛け替えのない貴重な絆だ。【世界】が変わっても【人】の有様は変わらない。そんな単純明快な事実を身を持って教えてくれた存在だった。ガルーシャのお陰で、少しずつ、それでも着実にリョウの世界は広がっていた。

そして、この瑠璃色の瞳を持つ男を知った。

気が付けば、この男の存在は自分の中に深く入り込んできていて、今では心の拠り所のような役割さえ果たしていた。

「ルスラン。ワタシは、この場所で、あなたに出会えたことを感謝しているのですよ?」

その言葉にユルスナールは息を飲んだ。

大きく見開かれた瑠璃色の双眸に、柔らかい表情をした女の顔が映っていた。

リョウはユルスナールの手を取るとそれを静かに自分の頬に当てた。

「例え生を受けた場所が異なっても、ワタシの身体には、きっと同じ血が流れています」

同じ温かさを持つ肉体。同じ人であることには変わりがない。

少なくとも、それを信じて欲しかった。

それから、その大きな手を今度は左胸の上、ちょうど心臓の辺りに置いた。

その場所には、同じように自分が生きているという証拠をこの場所でも刻み続ける心音が鳴り響いていた。

「ワタシも、今、ここであなたと同じ時を刻んでいます」

そして、空いたもう一つの掌を目の前にある男の左胸の部分に置いた。

「あなたとワタシは変わらない。理解をしてくれとは思いません。きっと想像を絶することで、難しいでしょうから。ですが、ルスラン、あなたには知っていて欲しかったんです。耳を傾けて下さり、ありがとうございました」

そして、どこか悪戯っぽい顔をするとユルスナールを仰ぎ見た。
「とっておきの秘密だったでしょう？」
――――――共有者になるには申し分ない程の。

次の瞬間、リョウの身体はユルスナールの逞しい腕にきつく抱き締められていた。
息が詰まりそうな程の強い抱擁。冷酷そうな面を張り付けるこの男の内面が、驚くほどの熱さを秘めていることを知るのは、こういう時だ。火傷をしそうなくらいの激情がその仮面の下に渦巻いている。
「お前は強いな」
腕の力をほんの少しだけ緩めて。
その言葉だけで十分だった。
少なくともこの男は自分の話を信じようとしている。
鼻先で口にされた感嘆に似た囁きに、リョウは苦笑のような微笑みを浮かべると、揺るく頭（かぶり）を振った。
「いいえ。ワタシがここでちゃんと立っていられるのは、周りの人たちの支えがあるお陰です」
それにどれだけ救われたかは分からない。
そして、この目の前の存在にも。
リョウは、ありったけの感謝の気持ちを込めるように逞しい男の首にかじりついた。
「ルスランにも随分と助けられました。感謝してもしきれない程に。ありがとうございます」
背中に回った腕が、再び、きつく華奢な身体を抱き締め返していた。
「お前を最初に見つけたのがガルーシャでよかった」
そして、紡がれた心の籠った述懐に、リョウは無言のまま目を閉じた。
「ありがとう。話してくれて」

暫く、そうして昂ぶった気持ちを落ち着けた。
互いの抱擁を解いた二人は、少し照れ臭さが眦に残るものの、どちらも穏やかな表情をしていた。そして、そこには、以前よりも少し踏み込んだ信頼関係が構築され始めているように思えた。
「そう言えば、話が途中でしたね」
リョウは、停滞した流れを再び元の位置に戻すように、言葉を継いだ。
「ああ。そうだったな」
いつもの冷静さを取り戻したユルスナールも同意するように小さく笑った。
話はちょうど、リョウが身の上を語った所で終わっていた。その内容が想像を遥かに超えることであった為、少し脱線をしてしまったが、元々の話題は、ガルーシャという男のこの国での立場の話だった。ガルーシャに拾われて、共に暮らしたということが、今後、リョウの日常に及ぼしてしまうであろう影響を伝えることだった。

そんな時、ちょうど測ったかのようなタイミングで、部屋の扉をノックする音が聞こえた。
そして、この部屋の主であるユルスナールが返事をする前に、重厚な木の扉が開くとリョウにとっても馴染み深いブコバルの顔がひょっこりと覗いた。
礼儀のなっていない粗野な男の振る舞いに眉を顰めたユルスナールだったが、それに構わず、ブコバルは、ずかずかと室内に入って来た。
「話は済んだのか？」
「いや、まだだ。これから入るところだ」

「お、なら、ちょうどぴったりだな」
そう言って、両手に抱えた茶色の紙袋をテーブルの上に置くと、二人が座っていた対面のソファにどっかりと腰を下ろした。
「それは何だ？」
ユルスナールは、テーブルに置かれた大きな紙袋に胡乱な視線を投げた。
「あ？　腹が減ったんでな。途中で買ってきた」
そう言って、ごそごそと袋を漁ると中から果物とパイのようなものを取り出した。
「お前も食うか？」
「いらん」
それを見て、リョウは立ち上がった。
「お茶を淹れましょうか」
「お、わりいな」
「茶ぐらい、自分で用意しろ」
嫌そうな顔をしたユルスナールをリョウは笑って制した。
「いいですよ。ワタシもちょうど喉が渇きましたし。ルスランも飲むでしょう？」
「じゃぁ頼むわ」
「すまないな」
そうして、濃い灰色のワンピースに白い前掛け（エプロン）の紐を翻して、使用人風の格好をしたリョウは、隣の部屋に据え付けられた簡易的な台所へと向かった。

人数分のお茶を淹れて、再び部屋に戻るとテーブルの上に茶器を置いた。
案の定、パイを食べて油でベタベタになったブコバルの手を見て、リョウは若干、呆れたような顔をしながらも濡らした布巾を手渡し

た。
「ブコバル、これで拭ってください」
「お、気が利くな」
お茶を飲んでから、再び、もう一つのパイに伸びた大きな男の手をリョウは可笑しそうに見遣った。
大きなパイが瞬く間の内に男の胃袋の中に消えて行った。
それにしても、いい食べっぷりだ。
「お昼を食べそびれたんですか？」
「んにゃ？　ちゃんと食ったぜ。ドーリンの奴と。これは別腹」
そう言って白い歯を見せた。
そのどこか子供っぽい仕草に、リョウは堪え切れないように忍び笑いを漏らした。
「そちらの果物、【グルーシャ】ですか、皮を剥きましょうか？」
「ああ、じゃぁ、こっちの【ヤーブラカ】の方を頼む」
小さい青色の小振りな林檎のような丸い形をした果物は、【ヤーブラカ】という名前で、この国では割と一般的なものだった。シャキシャキとした歯ごたえと酸味の強いのが特徴で、肉などの脂っこいものを食べた後に食すと口の中がすっきりした。街の通りに並ぶ露天でも沢山、山積みになっているのを見掛けた。
「ちょっと失礼しますね」
リョウは、ソファに座った身体を少しずらすと、少しはしたないとは思ったが、スカートの裾を控え目に捲って、太ももにある短剣に手を伸ばした。
それまで優雅にカップを傾けてお茶を飲んでいたユルスナールが、それを目の端で捉えて噴出した。
お茶を吹き零したユルスナールにリョウは慌てて布巾を当てた。
布巾を手にした男が何とも言えない複雑な顔をしてこちらを見下ろした。
「リョウ、何をしている？」
「【ヤーブラカ】の皮を剥こうと思いまして。短剣をナイフ代わり

に」

そして取り敢えず、序でなのでベルトごと外してしまおうかと思い手を動かすが、中々上手くいかない。

「なんかアレだな。女の柔肌で温められたナイフで剥かれるかと思うと、ゾクゾクするな」

「妙なことを言わないでください」

変態染みた発言をしたブコバルにリョウは白い目を向けるが、ブコバルは同意を求めるように目の前の男を見た。

「なぁ、ルスラン、お前だってそう思うだろ？」

「お前と一緒にするな」

ユルスナールはあからさまに嫌そうな顔をする。

ベルトが上手く外れなくて、もたもたしていた所に隣からユルスナールの手が伸びた。

「ほら、貸してみろ」

躊躇いも無くスカートを捲り上げられて右側の太ももが晒される。

リョウは慌ててスカートの裾を手で押さえた。

「わわ、ちょっと、待って」

「待たん。いいから足を上げろ」

「ほら、そういうとこ。お前だって一緒じゃねぇか」

ニヤニヤとしたブコバルの前で、ユルスナールは何食わぬ顔をしたまま、手を器用に動かしてベルトを外す。そして、肌を保護する為に巻いていた布も取り去った。

「ほら、取れたぞ」

ベルトごと短剣を手渡されて、リョウは恐縮した。

「ありがとうございます。ご面倒をお掛けいたしました」

「あ？　面倒なもんかよ。寧ろ、嬉々としてやってたじゃねぇか」

ブコバルの合いの手に、ユルスナールから鋭い視線が飛んだ。

「おうおう、おっかないねぇ。ホントのことなのに」

何やら水面下で遣り取りを始めた二人の男たちは放っておいて、

リョウは短剣を取りだすと、鞘から抜いた。そして、そこの刃に薄らと残る光の膜を認めて、小さな呪いの言葉を口にした。

――――――パプラーヴィチ（解除）。

イリーナを盾にした時に、間違いが起こってはいけないので、刃が触れても傷が付かないように小さな呪いを唱えていたのだ。といっても少し切れ味を鈍くする位で、恐らく気休め程度にしかならないだろうが、それを施したことで精神的には大分楽になった。レントから譲り受けた短剣は恐ろしい程の切れ味だったからだ。

「リョウ、今のは何だ？」

こちらへ目敏く気が付いたブコバルが不意に真面目な顔をして訊いてきた。それに簡単に説明をする。

「お前は、そっちの方もイケるんだな」

そんな感想を漏らしたブコバルの言っている意味が分からなくて目を白黒させるが、

「それがガルーシャの使っていた短剣と対になっているものだな？」

間を置かすにユルスナールに訊かれて、リョウは頷いた。

「はい」

「見せてもらえるか」

「どうぞ」

ユルスナールは慣れた手付きでざっと短剣の刃を改めた。

そして、感嘆の息を吐く。

「流石、レントだ。小振りながらもいい出来だ」

リョウはユルスナールから短剣を受け取ると、刃の部分をさっと布巾で拭ってから、テーブルの上に転がる【ヤーブラカ】に手を伸ばした。

そして、器用に皮を剥き始めた。

「なんつうか、複雑だよなぁ」

休みなく動く小さな手を見ながら、ブコバルがぼやいた。

「あのレントの造ったもんだぜ？　まさか、こんな風に果物の皮を

剥かれてるなんざぁ、思わねぇだろ。普通」
それはブコバルらしい武人ならではの感想だった。
「別にいいじゃないですか。ワタシが何に使おうとも」
果物の皮を剥いたりするのに長さもちょうどいい按配だった。
ガルーシャだって、日常生活に於いて、あの短剣を実に色々なことに使っていたのだ。木の枝を切ったり、薬草を切ったり、肉や野菜や獣の皮などを切ったり。それこそ万能に使っていた。軍人ではない一般庶民の利用法など高が知れているだろう。
そして、果物を三つ程剥き終えて、濡れた布巾で刃を拭い、短剣を鞘にしまった所で、漸くと言った感じで、ユルスナールが息を吐いた。
「大分、脱線したが、話を戻すぞ」
「おお、わりぃ、わりぃ。そうだったな」
皿の上に乗った小さく切り分けられた【ヤーブラカ】を美味そうに摘みながら、呑気な声を出したブコバルをユルスナールは窘めるように見遣った。
ブコバルは、直ぐに相棒の醸し出す空気に同調するように、身に纏う空気を真面目なものに変えた。

それから、表情を改めた二人の男たちが語ったことは、リョウの想像を遥かに超える事態だった。
この国に於けるガルーシャの立ち位置。そして、国の上層部との関係。世界的に見て、術師の数が減少傾向にある事実。二十数年前の隣国との戦争とその背景。能力、詰まり、術師としての素養を持つ人間に対する扱い。国の方針。
そして、何よりもリョウを驚かせたのは、ガルーシャが、かなり高度な能力を持ったこの国有数の術師であったということだ。
それと、もう一つ。この国で術師として生計を立てるには、国の中央機関からの免状とも言うべき認可が必要であるということだった。術師は国に登録され、中央機関の下に管理されるのだ。

次々と明らかになる思いがけない事情に、目眩がしそうだった。
そして、極めつけは、今現在、スタルゴラド国内に於いて、軍部や王都の一部の人間の間で流れているというガルーシャに関する噂だった。
ガルーシャには最後の弟子がいて、持てる全てをその人物に伝えたというものだ。
再び、ガルーシャを王都に呼び戻そうとしていた国の上層部は、別口で流れていたガルーシャ旅立ちの噂の真偽と、その弟子に関する噂の真偽の程を確かめようと躍起になっているらしい。この街でリョウの追尾をしていたというのは、恐らく、その辺りの事情を確かめる為に、王都から派遣されて調査をしている人間だろうということだった。
幸いなことに、その弟子に関しての具体的な情報（名前や外見といった具体的な人物像を含めて）は、まだ上がってきてはいないが、この分だと自分のことが表に出るのも時間の問題だろうとのことだった。

「ちょっと待って下さい。ワタシが、どうしてガルーシャの弟子になるんです？」
――――――まだ術師ですらないのに？
寝耳に水の出来事に吃驚仰天して思わず大きな声を上げたリョウに、
「そういう風に捉える輩がいるということだ」
ユルスナールは苦り切った表情をしながらも、簡潔に言い放った。
「都合がいいことにお前には術師としての素養がある」
「そもそも、どうしてそんな噂が立ったのですか？」
弟子であるならば、なにも自分で無くてもいい筈だ。それこそ、昔、ガルーシャを師として仰いだ人物は多いのではないか。それに、北の辺境の森にひっそりと暮らしていた男のことをどうやって知るというのだろう。

様々な疑問が溢れるようにして湧いて出てくる。
「そいつは分からねぇな。裏で糸を引いてやがる奴がいるのかもしれねぇが。だが、まぁ直接的な契機は、あの爺さんがこの世を去ったからだろうな」
そう言ってブコバルは腕を組んだ。
「元々、ガルーシャ・マライは謎を秘めた男だった。何人たりとも許可なしにあの男の下に近づくことは叶わなかった。北の森に隠居を決め込んでからは、尚更、それが顕著になった。ガルーシャはその能力故に、王都の連中とは決別したが、それを面白く思わない奴らもまだいるということだ」
「ガルーシャが持つ力が欲しいということですか？」
「それだけではない。ガルーシャは膨大な知識を残しているだろう？」
ユルスナールのその言葉に、リョウの脳裏には、森の小屋の中でも特別な部屋、詰まり、ガルーシャの書斎の様子が浮かんでいた。天井から床までびっしりと埋まる膨大な量を誇る蔵書たち。ガルーシャの興味と研究の足跡だ。
「……書斎の沢山の書物」
「ああ。王都の連中にしてみれば喉から手が出るほど欲しい代物だろう」
「その辺りのことも含めて、この国にはあの爺さんのことを追ってる奴らがいるってことだな。そんな時にあの爺さんの傍に何やら変わった子供がいるってことが聞こえてきた。偏屈で人嫌いで、ずっと独り身を通して来た男と一緒に暮らしている人間がいる。それだけでも知ってる奴からみれば仰天ものだろうさ」
ブコバルの口から聞かされるガルーシャの人物像は、自分が知るそれとは重なりそうで重ならなかった。
そこでふと、リョウの中に一つの疑問が浮かんだ。
「ですが、これまで森の小屋を訪ねて来た人は一人もいませんでしたよ？」

王都の人間がガルーシャを探していたとは言うが、二年近くあの場所で暮らしていたが、直接、訪ねてくる人物はおろか、術師たちが使う伝令すらも飛んではこなかった。

そのことを不思議に思って口にすれば、

「ああ。それはガルーシャが森の入口に結界を張っているからだ」

「結界？」

リョウは、聞き慣れない言葉を耳に留めた。

「ガルーシャは基本的に面倒なことが嫌いだからな。意に沿わない連中からの介入を排除する為に結界を張って接触を遮断していた」

「早い話が、目くらましみてぇなもんだ。知ってる奴。詰まり、あの爺さんが認めた奴じゃねぇ限り、お前の住んでる小屋は探しても見つからねぇんだよ。けったいな話だろ？」

リョウは余りのことに言葉を失った。

そんな魔法みたいなことが出来るのだろうか。

これまで術師の編み出す術が起こす不可思議な現象を自分でも体験したり、色々見てきた積りだったが、どれも皆、自分の手が届く小さな範囲の出来事で、そんな風に広範囲に影響力を及ぼすことが出来るとは思ってもみなかった。それだけ、ガルーシャが特別であったのだろうか。

「あ、でもアッカは？」

怪我を負ったアッカを見つけたのは、その森の辺縁の部分だった。負傷したアッカを拾い、手当てをしたことが切っ掛けで、リョウは北の砦の存在を知り、この二人の男たちにも出会ったのだ。

「あれは、偶々、運が良かったのかもしれないな」

「ああ。アイツは根っからの真面目人間だから、爺さんの罠に上手い具合に引っかかから無かったんじゃねぇか。お目零しをもらったってぇとこだろ」

「……そうですか」

術師の掛ける呪いといっても万能なものではない。二人の男たち

の言い分にリョウは言葉少なに頷いただけだった。
「あの、その噂というのは訂正することは出来ないんですか？」
ふとした思いつきを口にしたリョウに、ユルスナールはそっと頭（かぶり）を振った。
「噂は所詮、噂で、憶測にしか過ぎない。それを否定して回れば、余計にその裏を勘繰りたくなるものだろう？」
それは分からなくもなかった。
「そうですよね。却って怪しくなってしまいます」
だから、今後、そういう類の接触があることを想定しなければならない。今後、どう転ぶにしても、状況を把握しておくのとそうでないのとでは、心の持ちようが違ってくる。
二人は、そう結論付けてから話を終えた。
男たちの言葉に、リョウの背中に冷やりとしたものが伝ったのだった。漠然とした不安が湧いて出てくるのを慌てて押し留める。
自分の身の上を語ったことで一つ肩の荷が下りたのも束の間、眼前に提示された事実の数々は、この短時間の間に理解して消化するには、余りにも衝撃なことだった。

紺碧に染まる（前書き）

とうとうこの場面に来てしまいました。皆さま、心の準備はよろしいですか？

紺碧に染まる

差し込む朝日に、リョウは唐突に覚醒した。ぼんやりとしたまま目を数回瞬かせて、そこに飛び込んできた景色に、まず違和感を覚えた。

見上げた天井は、カマールから宛がわれていた一室の大きな黒い染みの付いた板壁ではなかった。その代わりに目に入ってきたのは、繊細な文様の入った壁紙だ。品のある薄い水色の地に金色の唐草のような文様が絡み合っていた。

その文様を漫然と見遣って。

そこから、ゆっくりと視線を巡らすと、鈍く光を湛える銀色が映った。

そして、そこで、いつもとは違う感触に初めて気が付いた。

自分の身体に回されている太い男の腕。抱き込むようにして回る筋肉質な固い腕。適度な弾力と温かさが、剥き出しになった肌を通じて伝わる。

少し、目線を上にして、そこに見えた柔らかな枕の中に沈み込む、どこか作り物めいた造形に、リョウは再び目を閉じた。

緩く息を吐き出す。昨晩の記憶を掻き合わせて統合するように。

少し離れたソファの上には、簡素な男物のシャツが無造作に置かれていた。原形を留めていない唯の布地の塊が、差し込む朝の光に恥じらうように、立ち上る揺らぎを反射していた。

腕を動かそうとして、身体が酷くだるいことに気が付いた。喉がひりつく様に、渇きを覚えていた。

昨晩の記憶が、時を巻き戻すように湧き出て来る。

この身体を巡る熱の余韻が、燻るようにして熾き火の如くまだ残っていた。現と夢の間の限りなく薄い狭間で、身体がばらばらになりそうな程の疲労感の後に得られたのは、胸を締め付けられるよう

な切なさと泣きたくなるような安心感だった。
相反する二つのキモチ。揺らぐ天秤に乗るように錘が弾む。
抱えきれない程の熱を与えられた。幾度となく。溢れんばかりの火傷しそうな位の熱を。半ば強制的に。それでも最終的に受け入れたのは自分の意志だった。

リョウは再び緩く息を吐き出した。シーツの下、素肌の胸が緩く上下する。
それから、ゆっくりと寝返りを打った。
直ぐ傍には正確な鼓動を刻む男の艶やかな胸部があった。鍛え上げられた肉体の衣を纏った命の源。それへ掌をそっと押しつける。
――――――トクン、トクン。トクン、トクン。
その緩やかで弛まない心音（パルス）に自分の血流を合わせるように目を閉じた。
そうして暫く、そのリズムを堪能していると、ゆっくりと身体を上に引き寄せられた。
剥き出しの肌が重なるしっとりとした感触に小さな息が漏れる。解いていた髪が、突如としてその存在を主張するように簾のように垂れ下がった。その髪を後ろへ流すように梳いた。
至近距離で、閉じられていた男の瞼がゆっくりと上がる。
視線が合うと静寂を湛えた瑠璃色に光が灯った。
男の薄い唇が弧を描いた。
「おはよう」
「お…は…よう……ございます」
第一声は、酷く掠れていた。
確かめるように喉に手を当てたリョウに、ユルスナールは、隠微な微笑みを浮かべた。
「無理をさせたな」
男の長い腕が寝台の傍に置いてあった水差しに掛かる。そして、

細い注ぎ口の部分に直に口を付けて喉を潤すと、そのままリョウの口を塞いだ。
少し温くなった水が、かさついた喉を通る。それを幾度か繰り返して。
不意に違う意味を持ち始めた舌先に、リョウは大人しく閉じていた目を開いた。
「ル……ス…ラ……ン」
切れ切れになった声は、いつもの音域を取り戻し始めていた。
だが、男の攻勢は止まる所を知らない。大きな骨ばった男の手が明確な意図をもって動きだす。
「もう、朝」
「気にするな」
小さく上がる抗議の声をいとも簡単に封じ込めて。
まだ覚醒途中の華奢で柔らかな肢体を、再び組み敷いた。
「いいだろう？」
耳元で囁かれた強請るような言葉に、リョウは自分を見下ろす男の顔を真正面から見た。
鼻先が触れる。その間も、男の手は、壊れ物を扱うかのような繊細さで這い回る。
「も……無…理」
昨晩と同じ色を持ち始めた瞳をもうまともには見てはいられなくて視線を逸らす。がら空きになった首筋を男の薄い唇が食んでいった。
「大丈夫だ」
身勝手な男の甘い声。この低い声が、昨夜は何度も脳髄を侵した。
この男が、冷酷で淡泊そうな仮面の下に、驚くほどの激情を隠していることを改めて思い知らされた。
だが、それに触発されるようにして再び鳴りを潜めていた筈の熱が引き摺り出される。自分でも意識していなかったその疼きを持て余すように、リョウは目を閉じた。

ユルスナールと一線を越えた。それは、リョウにしてみれば、半ば予想をしていたことには違いなかったが、その実、思わぬ方向で迎えた展開とも言えなくもなかった。

ブコバルが意味深な笑みを浮かべてから部屋に戻った後、リョウは、ユルスナールの言葉に甘えて、先に風呂を使った。

沢山の情報を一気に浴びて、頭が爆発しそうだった。混乱した思考を少しでも整理したかった。

気が付いたら、自分だけでは到底処理できない所にまで事態が進んでいて、それをいきなり知らされても困惑が募るばかりだった。

少し長湯をした所為か、のぼせそうになった身体を引き摺るようにして部屋に戻る。

「お先に頂きました」

端のテーブルの前で、何やら真剣な表情で、ブコバルが【ツェントル】のドーリンから持たされたという書類を繰っていたユルスナールが顔を上げた。

リョウは、ユルスナールが座っていた反対側のソファに、ぐったりと身体を凭せ掛けた。

「大分長かったな。湯当たりでもしたか?」

からかうような言葉と共に水の入ったコップを差し出されて、リョウは有り難く受け取るとそれを飲み干した。

「色々考えていたら、随分と長く浸かっていたみたいです」

「まぁ、無理も無い。今日は流石に色々あり過ぎたからな」

レントの見舞いに行ってから、ラリーサ・コースチャ姉弟の家に行って、それから、往来で拘束されて、イリーナの娼館に連れ込まれたのだ。

確かに、思い返すのも大変な程、濃過ぎる一日だった。今日一日で確実に寿命が縮んだ気がする。

ソファに沈み込んだリョウを見て、ユルスナールが密かに笑った。
その男らしい微笑みをリョウはぼんやりと眺めていた。

全てを聞き終えた後、途端に不安そうな顔をしたリョウに対して、ユルスナールとブコバルは心配することはないと言った。
――――――お前をこの国の政治に巻き込む積りはない。何としてでも阻止してやる。
――――――ああ。北の砦にいる俺たちがお前の盾になってやる。だから、心配するな。
堂々と自信たっぷりに告げられた男たちの台詞は、眩しい程に頼もしかった。
「ありがとうございます」
二人の気持ちを受けて、リョウは気分を上昇させた。
そして、新しく気を引き締めたのだった。
ただ、守られている訳にはいかない。今後、この国で暮らして行く上でも、自分の身を守る為にも、状況を整理し把握することは必要だった。それに、もっと勉強をしなくてはならない。そして、この国のことを知らなくては。術師になるという目標もあった。
いつまでも気に病んでいても仕方がないのだ。漠然とした不安に怯えるだけでは意味が無い。いかにして今後、起こり得る面倒事を回避するか、不測の事態にどう対処するか。考えておくべきことは沢山あった。悩んでいるよりも、今、出来ることを探した方が、余程、建設的だ。今後のことは成るようにしかならない。生来の楽天的な性格がここでも幸いした。
それに今、自分が独りで無いことが何よりも心強かった。
「じゃぁ、俺も入って来るか」
そう言って、シャツ一枚で寛いだ表情を浮かべていた男の逞しい背中が、浴室へと消えゆく様をそっと目で追う。
――――――大丈夫だ。
呪いを口にするように心の内で唱えると、リョウはそっと目を閉

じた。

ユルスナールが風呂から上がって来た時も、リョウはそのまま、ソファに凭れてぼんやりと座っていた。まだ、どこか心ここにあらずと言った具合だった。精神的にも肉体的にも思った以上に消耗したようだった。

濡れて張り付いた髪を男が掻き上げる。風呂上がり、シャツを軽く羽織っただけの姿。逞しく引き締まった肉体が、惜しげも無く眼前に晒されていた。

その時になって、リョウは、唐突にこの男とこの部屋で一夜を過ごすのだということを意識した。

北の砦で最後の夜を過ごした時は、酔っ払った末に寝てしまったし、この間、この部屋に泊った時は、薬の影響でふらふらだった。二回とも、朝目覚めたら、ユルスナールと同じ寝台（ベッド）の中にいた。それでも、こうして夜もまだ更けない内からまともに意識を保っているのは、初めてのことだった。

鼓動が不規則に跳ね上がるのが、自分でも分かった。

明るい日差しの下、日の光を浴びて銀色に輝く髪も、今はしっとりと濡れて深い艶を放っていた。

精悍な男の輪郭を張りついた髪から滴り落ちる水滴が伝う。その姿は、艶めかしく、何とも形容し難い【雄】としての色気を放っているように思えた。

人間が視覚と反射の生き物だと思い知らされるのはこういう時だ。無意識に視線が吸い寄せられている。意識が、目の前の男に釘付けになっていた。

ユルスナールは、首に下げたタオルで髪の毛を些かぞんざいに拭いながら、リョウの座るソファの傍に歩み寄った。

「どうした、リョウ？　疲れたか？」

自分が座っていた場所がぎしりと揺れて、ユルスナールがソファに腰を下ろしたのが分かった。

リョウは、どこか惚けたように男の動きを目で追っていた。
男が柔らかく微笑む。
濡れたままになっていた洗い髪をユルスナールがそっと手で梳いた。そのまま男の指が擽るように首から項を撫でる。
そして、その指が、肌蹴た襟元をぐいと押し下げた。
「前から気になっていたんだが、これは何だ?」
男の長い指が指し示す場所には、肌の上を紋様のような飾り文字が鈍い光を放っていた。
その視線の先にあるものを同じように辿って、
「ああ。これはセレブロの印封みたいなものです」
リョウは小さく微笑んでいた。
「セレブロ殿の?」
「はい。以前、セレブロがワタシに加護を授けてくれた時に現れたものです。これは、その証みたいなものなのだとか」
「加護とはなんだ?」
ユルスナールから静かに問われた。
詳しいことは良く分からないが。
そう前置きしてから、リョウは自分が理解している範囲のことを告げた。
「お守りみたいなものだとセレブロは笑っていました。これがあるとセレブロにはワタシの所在地が分かるのだそうです。そして、ワタシの身に万が一のことが起きた時にも分かるようになっていると言っていました」
リョウは懐かしむように、不可思議な紋様を指で辿った。
リョウの脳裏には、この街に入る二日前、街道沿いでひっそりと暫しの別れを告げた光り輝く白い毛並を持つ気高きヴォルグの長の姿が思い浮かんでいた。
「ここに刻まれているのは、セレブロの名前だそうです。ガルーシャを失って沈んでいたワタシのことをセレブロなりに気遣ってくれたのだと思います」

その説明を聞いて、ユルスナールは呆気に取られたようだった。
「……そんなことが出来るのか？　しかし、どうやって？」
「ルスランは聞いたことがありませんか？」
「ああ。シーリスの奴なら知っているかもしれんが、俺には初耳だ」
そう言って、まじまじとリョウの肌の上にある紋様を眺めた。
「そうですか」
「しかし、加護とはどうやって授かるんだ？」
ふとしたユルスナールの問いに、リョウはそっと目を伏せた。
「……知りたいですか？」
「ああ」
言ってしまってもいいのだろうかとの思いが掠める。
はっきりとこの男の前で口にするには躊躇いの方が大きかった。
興味深そうに注がれている男の視線に、リョウは内心、狼狽えた。
それをなるべく顔には出さないように気を付けながら、当たり障りのないような言葉を慎重に選んだ。
「あれは、…何と言うか……儀式のようなものでした。セレブロの精をこの身に受け入れて、同調させるんです」
「どういうことだ？」
不思議な色合いを帯びたリョウの瞳に、ユルスナールは怪訝そうに眉を寄せた。
やはり、事実を端的に述べた積りでも曖昧に濁した言葉では、相手には伝わらなかったらしい。

そして、不意に話の流れを変えた。
リョウにしてみれば話の糸口を繋げる積りだったのだが、ユルスナールにしてみれば、それは些か唐突に思えるものだった。
「セレブロが人の形を取れるのは、ご存知ですか？」
「……なん…だ……と？」
目を見開いたユルスナールの反応にリョウは内心、しまったと思った。

どうやら、セレブロは人の世界にとっても規格外で謎の多い存在であるらしい。

「白く光輝く体毛はそのまま髪の毛に、そして虹色に変化する灰色の瞳も同じ。じつに綺麗な男の人です」

これまでにその姿を目にしたのは、二回だけであったが、その時の印象は強く残っていた。人の形を取っても、その姿はどこか神秘的で神々しさに溢れていた。

途端に、恍惚に似た表情を浮かべたリョウを見て、ユルスナールは面白くないと言わんばかりにその小振りな鼻を摘んだ。

「ほう？」

気に食わないというように、男が鼻先で、底冷えのする笑みを浮かべた。

「セレブロ殿の男振りは分かった。だが、何故、そんな顔をする？」

加護を貰った当時のことを思い出していたリョウは、気まずそうに視線を逸らした。

その目元が、ほんのりと赤く染まっていることをユルスナールは見逃さなかった。

そして、生来の勘が冴え渡り、唐突に先程の説明と目の前のリョウの反応に、男の中で閃くものがあった。

「……まさか」

小さく呟かれた言葉に、華奢な肩がピクリと震えた。その反応は、男の導き出した仮説を肯定したようなものだった。

不意に頭をもたげてきた嫉妬に似た感情に男を取り巻く空気が冷えた。

「何を思い出していた？」

男の酷薄そうな面がずいと寄ってきた。

その迫力にリョウはたじろいだ。

「言っても……いいですけど……軽蔑しませんか？」

どこか決まり悪げに告げたリョウに、

「軽蔑するようなことなのか？」

意地が悪そうに男の口が弧を描く。
ああ。多分、気が付かれてしまった。感の鋭い男のことだ。きっとその方法については、見当が付いているに違いない。
内心、酷く狼狽しながらも、妙な誤解はされたくなくて、リョウはしどろもどろに口を開いた。
「どうでしょう。すごく潔癖な人は無理かもしれませんが、男の人ならば問題が無いと思います。でも、女の場合だと……その……」
この国に於いての男女の貞操観念はどうなっているのだろうか。そんなどうしようもないことが頭に浮かんでくる。
「ん？」
「あの、ルスラン。どうか気を悪くしないで下さいね？」
何だか、リョウは浮気を咎められているような気分になっていた。いや、現実問題そこまでの関係性には至っていない訳だが、気持ち的には、男の方に全面的に傾いている所為である。第一、今、心惹かれている相手に対して口にできるような事柄ではないだろう。例えそれが儀式のような神聖な意味合いを持っていたとしても、行為としては変わらないのだから。
どうしたものか。
徐々に怪しくなって行く雲行きにリョウは途方に暮れた。
だが、幸いにしてユルスナールは怒っている訳ではなさそうだ。完全にこの状況を面白がっているような空気が、まだ救いだと言えた。
窺うようにそっと見上げた先、瑠璃色の瞳の奥に怪しい光が煌めいているように見えた。
それを目にした途端、リョウの身体は無意識に粟立った。
「それは、聞いてみないと分からないな」
「……じゃぁ、言えません」
リョウは居たたまれなさにフイと横を向いた。
「そうか」

少し、考えるような素振りを見せた後、ユルスナールは、どこか楽しそうに小さく喉の奥を鳴らした。

そして、長い腕を伸ばしてリョウの身体を抱き上げると、そのまま有無を言わせずに寝台へと向かった。

長い男の足で五歩。直ぐにその縁に辿りつく。

それから、そっと華奢な身体を柔らかな寝具の上に下ろした。

簡素な男物のシャツ一枚を寝間着代わりにしていたリョウの姿は、大きな寝台（ベッド）の上では酷く無防備にユルスナールの目に映った。

「ルスラン？」

「ん？」

男の只ならぬ気配を感じてか、無意識に後ずさった小さな体を、ユルスナールは隠微な色気溢れる笑みをその口元に刷いて見下ろしていた。

そして、殊更ゆっくりとその身体で寝台（ベッド）の上に乗り上げると、その耳元で囁いた。

「ならば、直接、聞いてみようか。お前の身体に。夜は長いからな」

そうして、男の強引な甘い責め苦が始まったのだ。

早々に根を上げたリョウが、本当のことを明かせば、それがまた男の行為に拍車を掛けることになってしまった。

そして、恐ろしいまでの甘美な時間は明け方まで続いたのだった。

紺碧に染まる（後書き）

お知らせ：この場面での続き、もう少し詳しい描写を入れたものを、同じ系列の”ムーンライトノベルズ”さんのほうで書いています。もしよろしければそちらの方も覗いてみてください。女性向けにＲ１８の小説を集めたサイトさんです。大人向けの性描写を含む作品を扱っています。

タイトルは　Ｉｎｓｏｍｎｉａ　~Ｍｅｓｓｅｎｇｅｒ　ｓｈｏｒｔ　ｓｔｏｒｉｅｓ~

Ｍｅｓｓｅｎｇｅｒの本編に内容をリンクさせた少し大人向けの短編集になっています。

心の鎧を脱ぎ捨てて（前書き）

漸く、ヴェチェリンカ（夕食会・パーティー）の場面に入れそうです。

心の鎧を脱ぎ捨てて

「さぁ、どうぞ。ご覧になってください」

差し出された手鏡に映る女の顔には、控え目ながらも化粧が施されていた。薄く塗られたおしろいに、小さな唇には深紅の紅が引かれている。いつもは敢えて無造作に束ねられていただけの髪もきっちりと結い上げられて、寸分の乱れも無く巻き上げられ、艶やかな鈍い光を放っていた。

目の端にその縁を強調する様な銀色の線が薄く入っている。

鏡に映る女の顔が、ぎこちなく笑みを刷いた。

そこには、久し振りに化粧を施したことへの戸惑いと懐かしさ、そして気恥ずかしさのようなものが綯い交ぜになっているように見えた。

「いかがでございますか？」

鏡を手にしたまま、黙りこくってしまった女の様子を案じるように、化粧を施していた仕立屋の女房が、柔らかな微笑みを湛えながらその顔を覗き込んだ。

剥き出しになった項は白く、そこから伸びる首はほっそりとしている。女の耳には、長い銀色の房の付いた繊細な鎖を編んだ耳飾りが揺れていた。広く開いた胸元には、青い石の付いたペンダントが肌の上で仄かな光を放っていた。

隣から案じるような視線を受けて、女は顔を上げると、そっと苦笑に似た微笑みを浮かべて振り返った。

「なんだか……自分じゃないみたいですね」

「ふふふ。すごくお似合いですよ」

「ありがとうございます」

満足そうに満面の笑みを浮かべる、ふっくらとした身重の女特有の頬を暫し見て、鏡を手にした女もどこか照れ臭そうに微笑んだの

だった。

昨晩から続いた濃密な一時を終えて、リョウが再び日常を取り戻したのは、昼を過ぎた頃だった。

リョウは再び、質素な男物のシャツにズボンを穿いて、これまでと同じ服装に戻っていた。

ユルスナールからは、念の為、今日一日は、一人でふらふらするなと釘を差されていたので、取り敢えず部屋の中で薬草の整理やらを行った。

それから、大鷲のヴィーから話を聞いたのか、様子見にやってきた鷹のイーサンに使いを頼んで、レントと昨日訪れたラリーサ・コースチャ姉弟の父親の容体を見に行ってもらった。帰って来たイーサンから、子供たちの父親の踝の腫れが大分収まったらしいとの報告をもらい、そのことに一先ず安堵した。

そんなこんなで時間を過ごしていると、出掛けていたユルスナールがブコバルを従えて部屋に戻って来たのだ。

ブコバルは、部屋の中にいたリョウの顔を見るなり、目配せをして意味深な笑みを浮かべた。

「昨晩は随分と楽しんだみてぇじゃねぇか」

「な……」

リョウは潜められた囁きに絶句した。

ブコバルのことだ。絶対に何か言われるのではないかとは危惧していたが、思った通りのことを仄めかされて、居たたまれなさに硬直した。

リョウは目の縁を赤らめて、黒目がちの大きな目を伏せるとふいと横を向いた。

そして、一時の衝撃をやり過ごしてから、ブコバルに呆れたよう

な視線を向けると知らないとばかりに返事を返さないまま、向こうへ行ってしまった。

ブコバルはその後ろ姿をほくそ笑みながら眺めていた。

リョウの白い肌は、艶やかで昨日よりも血色がよかった。その分だと尋ねるまでも無くユルスナールにたっぷりと可愛がってもらえたということなのだろう。好きな男から愛された女は、その翌日、一皮剥けた様に美しくなる。それは、過去の経験から導き出されたブコバルなりの持論でもあった。

リョウの身体からは、満ち足りた空気が色気のようなものとして滲み出ていた。

――――――おいおい、これまでとは大違いじゃねぇか。

ブコバルは、内心、舌を巻いた。

ちょうど固い蕾がほころんで開花間近の花を見ているような雰囲気とでも言えばいいだろうか。

凛とした清々しさの中にも艶やかさが立ち上るようにして匂う。リョウの中にある生来の女としての僅かな変化を嗅ぎ分けたブコバルは、一人、悶々とした。

リョウは外見だけを見るならば、その辺りにいそうな少年だ。だが、今日は、そこに、そこはかとない艶めかしさが色を付けて醸し出されていた。端的に言って、見る者が見れば分かる美味そうな匂いを発していたのだ。

というのはその道に詳しいブコバルの診立てである。

「おい。大丈夫か？」

ブコバルは、直ぐ隣に立つ、その変化の原因となった男の澄ました顔を横目に見た。

『何を』というのは、この男ならば言わなくても分かるだろう。

あんなのを【エリセーエフスカヤ】なんかに連れて行って大丈夫なのかということだ。

あそこには、こっちの分野で鼻の利く連中が集うからだ。
あの場所は、この国の貴族たちがよく利用する店だった。一種の社交場、情報交換の場でもあるからだ。ユルスナールの腹積もりでは、リョウをそれなりに着飾らせようとしているのだろう。その為の準備を何やらしていたようであった。
ブコバル自身もその魂胆に加担する形で、今回の会食を受け入れたのだ。
そこには、純粋にリョウの本来の姿を見てみたいという好奇心があった。いつもズボンばかり穿いて、男と同じ格好をしている奴がどんな風に変わるのか。女としてどういった姿を見せるのか。大いに興味があった。
だが、そのような曰くつきの場所にドーリンを加えた自分たちが、リョウを伴って現れる。
噂好きな貴族の暇人どもにとっては、格好のネタになることだろう。
まさか、そっちの方を焚きつけておいて、ガルーシャ・マライ関連の噂を有耶無耶に濁してしまおうとでも考えているのだろうか。それはそれで分からないでもないが、ある種の賭けのようにもブコバルには思えた。
どの道、良くも悪くもリョウの存在は、注目を集めることには違いない。何せ、これまで社交界で浮いた噂の一つも無かった強面の相棒が、女を同伴するというのだから。
などと、珍しく、ブコバルとしては諸々の諸事情を鑑みて、心配をしてみた訳だが、
「ああ。問題ない」
対するユルスナールの返事は、随分とあっさりとしたものだった。
声音だけを聞けば、いつもの調子ではある。
だが、それを口にした男の顔を横目にちらりと見て、ブコバルはあからさまに大業な溜息を吐いて見せた。
「あああ。やってらんねぇな」

――――――とんだ腑抜けになってやがる。
第七師団の兵士たちの間でも強面・冷酷と揶揄されている険のある吊り上がり気味の目尻が、今朝からやけに下がっていた。
何故かとは言われなくとも分かるだろう。
その先にいるのは、出掛ける準備をする為に、手早く黒い癖の無い髪を束ねている華奢な背中だ。
ブコバル自身、ユルスナールとは、それこそ物心が付く頃からの付き合いの長い相手であるが、その男が、そんな表情をすることを初めて目にした。
なんだか背中がむず痒くなりそうだ。素直に喜ぶべきなのか、そうでないのか、実に微妙なところである。

だが、そんな複雑な表情をしたのも束の間、ブコバルは不意に思い出したように顔を上げると、嬉々として、ユルスナールの首に己が太い腕を回した。
そして、その耳元に吹き込んだ。
「で、どうだった？」
首に回した腕にぐいと力を込めて、その横腹を意味あり気に突いた。
ユルスナールは、無言のまま、横目でブコバルへ胡乱気な視線を投げた。
「お前がそんな顔をする位だ。相当よかったってことだろ？」
途端に声を潜めて、ニヤついた顔をしたブコバルに、ユルスナールはあからさまに眉を寄せると、実に冷ややかな視線を送った。
下世話にも程があった。
ギロリと相手を睨み付けるも、そんなことで今更怯むような相手ではなかった。
「誰が言うか。勿体ない」
「そんなこと言うなよ。俺とお前の仲じゃぁねぇか。……にしてもよぉ。あんな、ほそっこい身体でよくお前の……グェ…」

そのまま淀みなく続くかに思えたブコバルの口説は、【リャグーシュカ(蛙)】が潰れたような声に取って替わった。ユルスナールが有無を言わせずにあからさま過ぎるブコバルの猥談を、その長靴を思い切り踏み付けることで、強制終了させたからである。

突然、後ろから妙な声が聞こえたことに気が付いて、リョウが振り返った。

そこには、相棒の肩に腕を回しながら、何故か顔を真っ赤に顰めて何かに耐えているブコバルと、逆に空恐ろしい程の冷笑を浮かべているユルスナールの姿があった。

「ええと……どうか……しましたか？」

只ならぬ雰囲気に半ば狼狽えるように口を開けば、

「いや、何でもないぞ？」

白々しいまでに飄々と言ってのけたユルスナールと、

「ああ。……気にすんな」

ぎこちない笑みを浮かべるブコバルがいて、

「……そうですか」

リョウは『障らぬ神に祟りなし』ということで、敢えて気が付かぬ振りをしたのだった。

そんなささやかな悶着を間に挟んで。

それから身支度を終えたリョウがユルスナールとブコバルの二人に連れて来られた場所は、街の中心部に程近い閑静な一角だった。

街灯が等間隔で立ち並ぶ大通りの脇には、見るからに立派な二頭立ての馬車が停まっていた。御者台には背筋の伸びた使用人らしき男が乗っていた。

それを横目に見ながら、裏口と思しき場所から中に入ると、そこで待っていたのは、いつぞやの仕立屋の主人とその妻だった。

「お待ち申しておりました」
そう言って、にこやかな笑みを浮かべた夫妻に男たちが挨拶を交わす。
リョウも同じように倣った。
そして、リョウは妻のクセーニアに促されて、対する男たち二人は、主人の方に案内されて、其々、身支度をする為に別室に分かれることになった。
別れ際、ユルスナールは、
「楽しみにしている」
リョウの耳元にそっとそんな囁きを吹き込んでいった。
何処となく甘さを滲んだその響きをリョウは持て余した。

仕立屋の妻に案内されて、控室のような一室に入る。そこには、トルソーのような人型に、件の【プラーティエ（ドレス）】が掛かっていた。
元々身に着けていた洗いざらしの服を脱ぎ捨てて行く。その過程は、一枚ごとに無意識に着こんでいた鎧のようなものを剥いで、本来の姿を取り戻すような不思議な気分だった。
そして、クセーニアの助けを借りて手直しの加えられた【プラーティエ（ドレス）】に袖を通した。
リョウの心は知らず高揚していた。お洒落をするということ自体、随分と久し振りのことだ。スフミ村でリューバから伝統的な女物の衣装を借りたが、あれは、自分の中では馴染みのない服装で、今回ほど、昔のことを想起させるものではなかった。
【シーニェイェ・マルタ】特製の艶やかな生地は、しっとりと素肌に馴染んだ。深い紺色の色合いも派手ではないが、落ち着いた品のある輝きに満ちていた。
この色は自分にとっては特別な意味を持つ。この色の生地を選んだことが偶然なのか故意なのか、それはリョウには分からなかった

が、この色合いに身を包むと、同じ色の瞳を持つ男の腕（かいな）に抱かれているような気持ちにさせられた。

ドレスは、驚くほど自分の身体にぴったりだった。着心地も手直しを加える前とは段違いだった。心配していた胸元もちょうどよいぐらいになっていた。といってもその露出は、普段の自分からは想像が付かないくらいのもので、かなり勇気がいるものであった。セレブロの文様が隠れるか隠れないかという程だ。最後に、たっぷりとした生地で後ろに腰紐を結ぶ。大きなリボンが下がったその背中はギリギリまで大きく切り込みが入っていた。

それから、解いた髪を結いあげ、軽く化粧を施し、ドレスに合わせた高さのある【トゥーフリ（パンプス）】を履いた。

そして、場面は冒頭に戻る。

全ての準備を終えて、リョウは鏡の前に立った。

そこにいるのは、自分である筈なのに、まるで違う人物のような気がしてならなかった。

これまで隠してきた別の人格を暴かれたような気分に陥った。

緩やかな線を描く身体。これまで人目には晒して来なかった骨格が、今は、手に取るように分かるだろう。縁取り（アイラインを引いて）をしていつも以上に強調された目元。

そして、極めつけは唇に薄く履いた紅だろう。突如として存在を主張し始めた艶やかな口元だ。

鏡に映った女が溜息を吐いた。

込上げてくる様々な思いを消化するかのように。

「ふふふ。とてもお綺麗ですよ。きっとお待ちになっている殿方も驚かれることでしょう」

ヒールの高い靴を履いて、同じ目線になった鏡越しに映るクセーニアの顔は、達成感に輝いていた。

並々ならぬ相手からの意気込みを感じて、それを目にしたリョウは内心、苦笑を漏らした。

リョウの心臓は知らず早鐘を打ち始めていた。この姿で人前に出ることへの緊張感とこの姿をユルスナールに見せるという不安が改めて湧きだして来たのだ。

緊張に顔を強張らせたリョウにクセーニアが諭すように微笑んだ。

「大丈夫ですよ。緩く息を吐いて。自信を持ってください」

「そうですね」

身重の身体を押して、これだけの準備をしてくれたクセーニアの為にも、リョウは微笑むと背筋を伸ばした。

そして、身体を慣らす為に、ヒールの高い靴を履いた足で繊細な模様の入った絨毯の上を歩いてみる。

久し振りの感触に心が躍るのも確かだった。

「やっぱり、履き慣れてらっしゃいますね」

足取り確かに絨毯の上を歩くリョウの姿を見て、クセーニアは感嘆の息を吐いていた。

「初めてではないですけれど。随分と久し振りですね」

そう言って、はにかむようにして控え目に微笑むリョウの姿は、実にしっとりとした大人の女性の艶やさを纏い、お伽噺に出てくる夜の精の化身のように見えた。

それから、リョウは、簡単にこの国の女性が取るべき最低限の礼儀作法をクセーニアに確認した。自分と一緒にいるユルスナールやブコバルたちに恥をかかせる訳にはいかないからだ。

そして、男たちの方も準備が整ったとの報せを受けて、リョウは、クセーニアに感謝の言葉を口にすると、これから待ち受けているであろう扉の向こうの世界に不安半分、胸を躍らせて、一歩、足を踏み出したのだった。

ヴェチェリンカ

控室となっていた部屋の戸口を出ると、そこにはクセーニアの夫である仕立屋の主人が待っていた。

リョウの姿を見た主人は、一つ満足そうに頷くと柔らかな微笑みを浮かべた。

「さぁ、こちらへどうぞ。お連れ様がお待ちです」

「ありがとうございました」

自分が身に付けているドレスの手直しのことを口にすれば、

「よくお似合いです」

そんな風に返されて。単なる社交辞令だろうということは分かっているのに、嬉しさが込上げてきた。　こういう時、自分が女であることを強く意識する。

さらさらとした衣擦れの音と共に廊下を歩く。足下は繊細な織柄の入った絨毯が敷かれている為、ヒールの音は吸収されていた。耳元で揺れる銀の房飾りが、大きく切りとられた窓から差し込む夕暮れ時の柔らかな光を鈍く反射して、橙色に煌めいていた。

もうすぐ街灯に入れられた発光石が、穏やかな青白い光を放ち始める頃合いだろう。

程なくして、とある一室の前まで来ると、仕立屋の主人が重厚な木の扉の前で立ち止まった。

「こちらです」

そう言って振り返った主人の柔和な顔立ちに一つ、頷きを返して。

そして、軽くノックをした主人が扉を開ける。促されるようにして、開いた扉の中にリョウは静かに足を踏み出した。

そこには、一人の男が、こちらに側に背を向ける形で鏡の前に立ち、首元に白いネッカチーフを巻いていた。

均整のとれた後姿。光沢のある黒い上下に同じく黒い長靴を履いて。腰から下、後ろに切れ込みが入った、ちょうど男の膝上辺りまである長い上着の縁には金糸で繊細な模様がびっしりと縁取りされていた。斜めに切り込みの入った胸ポケットには小さな白いチーフが覗いている。

普段は、無造作に掻き上げられているだけの光輝く銀色の髪は、丁寧に後ろに撫でつけられていた。そこから零れた後れ毛が、そっと額際に落ちかかる。

リョウは、男の変わりように目を奪われていた。息をするのも忘れたようにその男振りを眺めた。

いつもは北の砦にいる兵士たちと同じ簡素な風合いの上下を身に付け、どこか無骨で荒々しさの残る空気を身に纏っていたが、漆黒の艶のある上下に身を包んだ男は、静謐で厳かな中にも品のある立ち姿を惜しげも無く晒していた。

それは言うなれば、初めて目にする男の貴族らしい姿だった。

襟元を整えていた男が映る鏡の端に、濃紺のドレスに身を包んだ女の顔が映り込んだ。

こちらを熱い眼差しで熱心に見詰めるその黒い双眸に、ユルスナールは瑠璃色の瞳を細めるとゆっくりと振り返った。

「リョウ。その位にしてくれ。穴が開きそうな気分だ」

そんな軽口を叩いたユルスナールは、リョウの全身を真正面から視界に入れて、ほうと息を飲んだ。

「想像以上だ。よく似合っている」

男の目が眩しいものを見るように細められた。

そして、まだ何処か惚けたような眼差しをこちらに向けている相手に歩み寄ると、その頬に片手を当てた。

「リョウ？」

そこで漸く、リョウは我に返った。
そして、直ぐ目の前にある男の瞳を見上げて微笑んだ。
「ルスラン。見違えました」
それは正直な感想だった。
対する男は、どこか擽ったそうに小さく笑った。
「そうか？　それを言うならお前の方だぞ」
ユルスナールはそう小さく囁きながら、頬に当てていた指先を滑らせ、首筋から項、そして肩へと肌が剥き出しになっている部分を辿って行った。
「こんなに肌を露出させてしまって大丈夫でしょうか？」
男の長い指が剥き出しの肌を辿る感触に、今更ながら、自分が身に着けているドレスの形体を思い知らされて、戸惑うように口にする。
「この位は、通常、全く問題ない範囲だが。そうだな、お前の場合は目に毒だな」
そう言って、深い切り込みの入った背中に、その感触を楽しむように大きな掌を滑らせた。
「このまま攫いたくなる」
甘さを滲ませた男の瞳にかち合って、リョウは内心のむず痒さを誤魔化すように、呆れた視線を投げ掛けた。
「そんなことを言うのは、ルスラン、あなた位ですよ」
「それは光栄だな」
密かに男が微笑む。

そのまま、近づいて来た男の薄い唇が、リョウの頬に触れようとした所で、隣の扉が勢いよく開いた。
「ルスラン、こっちはいいぜ」
そして、そこから現れた二人の男たちの姿に、リョウは再び目を瞠ったのだった。
そこに現れたのは、自分が良く知る顔だった。

リョウは、呆気に取られた顔をしていた。
無精髭が綺麗に剃られて、いつもはぞんざいに跳ね上がっている柔らかい茶色の髪がこれまたきっちりと後ろへ纏めるように撫で付けられている。そして、艶を放つ濃い紫紺色の上着にはユルスナールと同じように銀色の刺繍で縁取りがなされており、その下には生成り色（ベージュ）のズボンを履き、足元は同じ黒い長靴に包まれていた。
そこにあるのは、ものの数刻前に別れたばかりの自分が良く知る顔であったのに、男らしい精悍な顔付きはそのままに厳かで上品ですらある空気が醸し出されているのをリョウは実に不思議な面持ちで眺めやったのだった。
「もしかしなくても、ブコバル……ですよね」
「ああ」
信じられないものを見るような気分で確かめるように口にしたリョウに、隣に立つユルスナールは喉の奥を小さく鳴らした。

まるで別人を目にするような気分を味わっていたのは、だが、リョウだけではなかったようだ。
「うお？」
こちらを真っ直ぐに捉えたブコバルの青灰色の瞳も、これでもかという位に見開かれていた。
そして、その隣に立つ【ツェントル】の所長である男もまた、呆気にとられた顔をして固まっていた。
ドーリンが身に纏う空気は、以前、【スタローヴァヤ（街の食堂）】で食事を共にした時と変わっていなかった（あの時からドーリンからは上品で優雅な空気がしていた）が、神経質そうな細い眉は、額際に極限まで跳ね上がり、その怜悧な灰色の瞳は、同じように驚愕に彩られていた。
ドーリンの目に自分はどう映っているのだろうか。その反応を見る限り、ユルスナールもブコバルも自分の本当の性別を旧知の友に告げてはいないようだった。それならば、驚くのも無理も無い。

若干二名から余りにも突き刺さるような視線が注がれる為に、リョウは、居心地が悪そうに身じろいだ。
「ルスラン。ワタシの方が身体に穴が開きそうです」
先程のユルスナールの台詞を真似て、隣に立つ男に窮状を訴えれば、ユルスナールは、可笑しそうに笑った。
「ブコバル。ドーリン。その位にしておけ」
その声に、二人の男たちは漸く我に返ったようだった。
「……こいつは驚いた。それにしても、すげぇ化けたな」
幾ら姿形が小奇麗に変わったとは言え、その中身までもが変わる訳ではない。口を開けば、そこにいるのはいつもと同じ男の姿だった。
相変わらずなブコバルの態度に、リョウは安堵すると同時に、込上げてくる可笑しさを隠すように手を口元に当てた。
その反応に幾ばくかの間を置いて。
「女……だと？」
「はい」
徐々に解凍が始まり、ぽつりと漏れたドーリンの低い呟きに、リョウは艶やかに微笑んで見せた。
ドーリンは、片手を額際に当てて顔を覆うと、こめかみを揉むようにして暫し、瞑目した。そうやって様々な衝撃の余波をやり過ごしているようだった。それは実にその男らしいやり方だった。
「おいおい。リョウ。お前、すげぇもん隠してたんじゃねぇか」
大きく切り込みが入り、剥き出しになった背中とその下に現れた滑らかな括れに、ブコバルは思わずといったように手を伸ばしていた。
だが、その大きな無骨な男の手は、濃紺の生地に包まれた柔らかな曲線に伸びようかという直前で、ぴしゃりと叩き落とされてしまう。
「ブコバル」
ユルスナールが窘めるように冷たく言い放てば、ブコバルは不服

そうに叩かれた手を摩りながら口を尖らせた。
「いいじゃねぇか。少しぐらい。ケチケチすんなよ」
「そういう問題ではないだろう」
そのまま言い合いを続けるかに思われた二人だったが、
「ルスラン」
いつもの表情を取り戻したドーリンは、ユルスナールに近寄るとその耳元で何やら声を潜めて囁きを吹き込んだ。それに伴い、冷徹なきらいのある面が不意に迫力を増した。そのまま、眼光鋭くブコバルの方を見遣る。対するブコバルも先程とは一転、真面目な顔をして静かに頷き返していた。
小さな囁きと無言のままかわされる男たちの符牒めいた遣り取りに、リョウはさり気なくその場を外した。
三人の男達には其々の事情がある。そこに自分は関わる術を持たないし、首を突っ込む積りも無かった。

リョウは窓辺に寄り掛かると、そっと外の景色を眺めた。
そこからは遠く、車止めの場所が透かし見えた。
御者台の付いた立派な馬車が、建物の脇に乗り着けると、中からは着飾った紳士と婦人たちが次々に現れた。男たちは長い上着の裾を軽やかに翻し、同伴する御婦人をエスコートする。そうして着飾った男女の姿は、瞬く間に、この建物の中に吸い込まれていった。
ここに来る途中、この場所、【エリセーエフスカヤ】の特徴とその役割を簡単に聞いた。
要するにこの場所は、この街【プラミィーシュレ】を訪れたこの国の貴族たちの情報交換の場によく利用されるということだった。社交界といような大げさなものではないらしいが、この街の有力者と繋ぎを取ったり、新たな繋がりを模索する関係作りの場でもあるということだ。高級飲食店（レストラン）というよりもサロンのようなものなのかもしれない。そういうことであれば、然るべき服装を要求されるのも理解できる。

だが、それにしても自分には荷が重いことに違いはなかった。美味しいものが食べられるというのは心惹かれることには違いないが、こういう場所は、慣れていない分、肩が凝る。第一、この国の上つ方の礼儀作法というものがよく分からない。基本的な所作は、余り変わらないのかもしれないが、こういう場所ほど、思わぬ落とし穴があるものなのだ。今なら、【スタローヴァヤ（街の食堂）】でこの店のことを切り出された時にブコバルがあからさまに苦い顔をした気持ちが理解出来た。

ガラスに反射する憂いを帯びた女の顔を目の端に捉えて、リョウは自嘲気味に微笑んだ。

こんなところで暗い顔をする訳にはいかないだろう。それに、このようなお膳立てを企てた男の気持ちを無駄にしたくはないという思いもあった。三人の男たちの遣り取りから察するに彼らには彼らなりの目的があり、この場にこうしている自分はオマケのようなものなのだろうが、それでも、その中に自分を加えてくれることが、純粋に嬉しかったのも事実だ。

「リョウ」

低い馴染みある男の声に名前を呼ばれて、リョウは穏やかな微笑みを浮かべて振り返った。

手招きに頷いて、男たちの傍に歩み寄る。

ユルスナールの傍に立てば、男の大きな掌が頬をそっと包んだ。

「大丈夫だ。堂々としていろ」

――――――お前は十分綺麗だ。

今しがた自分が捕らわれていた心配事をさらりと肯定されて、リョウは込上げてくる温かさを心の内側に感じながら、そっと男の手に自分の手を合わせると微笑み返していた。

そうして暫し、見詰め合う。

時間にしてみれば、ほんの束の間のことに違いなかったが、傍目にはそれは相当、甘ったるく見えたようだ。

居心地悪そうに身じろいだドーリンから、
――――――ン、ンン！
ややあからさま過ぎる咳払いが出て、リョウは我に返った。
そして、居たたまれない空気を誤魔化すように微笑むと、触れていた男の手を放し、一歩、脇に退いた。
「おいおい。ルスラン。控えろよ」
あのブコバルから、そんな言葉が飛び出す位だ。
「お前にだけは言われたくない」
だが、それはユルスナールも同じであったらしい。
そんな男たちの既に日常的な光景になりつつある遣り取りの傍ら、リョウは自分の臀部に触れているなにやら固い感触に気が付いて、ついと視線を下ろした。
そこにあるのは、紫紺の上着から伸びた大きな男の手で。
感触を確かめるように動く太くて長い指が伸びたその手の甲をリョウは思いっ切り抓り上げた。
「…オイ(イッ)！！！」
「ブコバルも、控えてくださいね」
そうして、実にいい笑顔で放たれたリョウの言葉に、ブコバルは痛そうに顔を顰めて赤くなった部分を摩った。
その傍ではドーリンが呆れた顔をして、神経質そうな細い眉を顰めていた。
「……ブコバル」
そして、その一部始終を見ていたユルスナールからは、大げさすぎる程の溜息が洩れたのだった。
最早、呆れてモノも言えないという按配だろう。

店の方の用意が整ったという報せを受けて、リョウはユルスナールに続いて表の店内へと足を踏み入れた。

三人の男たちが中に入ると、室内のざわめきが一瞬、止んだ。そして、再び元のざわめきが引いては打ち寄せる漣のように揺れ、閉じられた空間を満たして行った。

その場所は、広い部屋に点々と長椅子と丸いテーブルが配置された待合室のような趣の部屋だった。

家具や調度類は柔らかな暖色系で纏められていた。テーブルの上には軽く摘めるものが用意されている。そして、店の制服に身を包んだ給士たちが客に飲み物を配って歩いていた。

ユルスナールからは、食事の際には個室を用意しているとは聞いていたが、そこに辿り着く前に、こうして客が集まるこの場所で、知り合いの顔を見つけては情報交換、もしくは腹の探り合いという名の雑談を交わすのが、慣習のようなものになっているらしかった。

室内には、着飾った男女が点々と其々の会話を楽しんでいた、

リョウは自分に注がれる突き刺さるような視線に、そっと溜息を吐いた。

それは自分が異質な外見をしている所為なのか、それとも隣に立つ男の所為なのか、恐らく、そのどちらでもあるのだろう。

だが、それを極力表には出さないようにして、無難な表情を取り繕いながらユルスナールの隣を歩いた。社交辞令的笑みは、それなりに経験があった。昔の技がこんなところで役に立つとは思わなかった。

腰に添えられたユルスナールの手に時折、そっと力が入った。無言のまま、心配することはないと励まされているような気がして、リョウはその度に硬質な男の顔を見上げると、見下ろされる男の視線に微笑んで見せた。

「これはこれは、珍しい顔がいたものだ」

そう言って恰幅の良い壮年の男性が近寄って来ると鷹揚に腕を開いて、ユルスナールと軽い抱擁を交わした。
「ご無沙汰しております。イグナートフ殿」
綺麗に整えられた口髭を蓄えた大柄な男は、その後ろに揃った顔触れを見て相好を崩してから、不意に意味深な笑みを浮かべた。
「おやおや、ザパドニークの所もいるのか。それにナユーグも。三人揃って、一体、何を企んでいる積りなんだ？」
茶目っ気たっぷりに片目を瞑って見せた男に、ユルスナールは余裕ある微笑みを浮かべていた。
「人聞きの悪いことを仰らないでください」
「ここには上手い飯を食いに来ただけですよ」
イグナートフと呼ばれた男と同じように軽い抱擁を交わした後、ブコバルも飄々と男らしい笑みを浮かべた。そうしているといつも粗野で礼儀がなっていないと揶揄されるブコバルもしっかりとした相応の男のように見えるから不思議なものだ。
そして、最後に男はドーリンとも挨拶を交わす。
リョウは、三人の男たちと壮年の男の遣り取りをユルスナールの影に控えるようにして見守っていた。
身体の具合や調子はどうだといったお決まりとも言える簡単な遣り取りの後、壮年の男の視線が、ユルスナールの背に半ば隠れるようにしてひっそりと佇むリョウの姿を捉えた。
「おやおや、このような所に素敵な女性が隠れていたようだ」
白いものが混じり始めた灰色の髪に縁取られた男の顔が、ずいと近づいて来た。
そして、ちらりと隣に立つユルスナールに、意味あり気な目配せをする。
「シビリークスの倅殿も隅に置けないな。かようにも麗しい御婦人を連れてくるとは。しかも、まだ随分とお若いようだ。一体、どんな気まぐれだ。紹介してはくれないのか？」
その言葉に、ユルスナールの手が腰に掛かり、前に出るようにと

リョウを促した。
リョウは、軽く微笑んでから名乗ると、小さく膝を折り曲げて、一般的にこの国の女性が取ると言われている礼をした。
そのまま、一歩、後ろに下がろうとしたのだが、大きな男の手が素早く自分の小さな手を捉え、驚く間もない内に、そこに口付けを落とされた。
通常、女の側から手を差し出さなければ、そこに男の方から触れることは有り得ない。
ユルスナールとクセーニア（仕立屋の妻）から事前に教えられていたこととは異なる事態にリョウは目を白黒させた。
口髭の固い感触が手の甲を撫でて、驚いたのも束の間、屈んだ傍からこちらを見上げる男の目が、爛々と妙な光を発しているのに気が付いて途方に暮れた。
だが、内心の動揺を悟られないように笑みを浮かべて見せた。
こういった少し強引な女誑しの男は、どの場所にいても必ずいるものだ。相手はきっとそれなりに年を重ねた経験豊富な男だ。持ち前の好奇心を発揮して、珍しい顔立ちをした自分を観察しているのだろう。そう思い、務めて平静を崩さないように心掛けた。
「私はユーリー・イグナートフ。以後お見知りおきを」
手の甲を男の親指が意味あり気にそっとなぞり、離れて行く。
「【オーチン・プリヤートナ（こちらこそ、宜しくお願い致します）】」
リョウは、控え目に微笑んで見せるも、多少、口の端を引き攣らせてしまった。
だが、男の方はそれには気が付くことなく満足そうに頷いて身体を起こした。
そして、その縦にも横にも大きな肉体を驚く程軽やかに翻して、他の客たちが集う方へと去っていった。
離れて行った貫禄のある後ろ姿を目で追って、リョウは、そっと息を吐き出した。

「大丈夫か？」
ユルスナールから案じるように声を掛けられて、リョウは苦笑気味に微笑むと問題ないと緩く首を横に振った。
「あんのエロ親爺。油断も隙もありゃしねぇ」
自分のことは棚に上げておいて、その脇でブコバルが小さく悪態を吐く。
北の砦の中でも、こと女性関係に関しては百戦錬磨と謳われた男にそんなことを言わしめる相手がいる。そのことに、リョウは内心、可笑しみを禁じえなかった。
要するに上には上がいるということなのだろう。年齢の差が、経験値にそのまま反映されて出ているとでも言えばいいだろうか。
突然、忍び笑いを漏らしたリョウに、ブコバルが怪訝な顔をして見せた。
「なんだよ？」
「いえ。差し詰め、同族嫌悪ですかね？」
「あ？」
「違いない」
「成程な」
言い得て妙だったのか。その例えに、ユルスナールとドーリンまでもが可笑しそうに笑ったのだった。

闇に寄り添う男たち

それより少し時を遡って。

【エリセーエフスカヤ】より北に約３００【サージェン】（約６００ｍ）、街の治安維持を司るスタルゴラド第五師団の詰め所、通称【ツェントル】。その一角にある兵士たちが暮らす官舎のとある一室では、一人の男が、壁に掛けられた鏡の前に立ち、身支度を整えているところだった。

「そうしてると、『馬子にも衣装』ってやつだな。……って、そういや、お前も【お貴族さま】だったっけか」

開いた戸口脇に寄り掛かった男が、鏡に向かうこの部屋の主の出自に関して、今更ながらのことに思い至れば、鏡の前の男はそれを横目に見ながら、首に純白のネッカチーフを器用に巻いているところだった。

鏡越しに映る男の顔は、いかにも上機嫌という風だった。時折、何かを思い出しているかのように口角が上がる。

その様子を、壁際に凭れていた男は、胡乱気に見遣った。

「やけに楽しそうだな」

「うふふ」

気色悪い忍び笑いに、男の背筋に悪寒のようなものが走った。

そして、顔を思い切り顰めたのも束の間、

「だって、面白そうなことが起こりそうじゃないか？」

首元を整えて戸口の方を振り返った男の目は、うっそりと細められていた。

「そうか？　俺にしてみれば、面倒くさい臭いがぷんぷんするけどな」

「それが、いいんじゃないか」

何を言っているんだとばかりに言い放たれた言葉に男は口をへの

字に下げた。
モノは言い様。見方が変われば、捉え方も違ってくる。
つくづくこの男とは考え方が合わない。それでも何故か馬が合う。それが、なんやかんやいいながらも、この男と仕事で一緒になる事が多い理由の一つになっているのだが、幸いにして、男自身、その事実を余り認識してはいなかった。この男のことだ。気が付いたら最後、忌々しげに自分の髪を掻き毟るに違いなかった。
だが、壁際に立つ男は、気を取り直したように口を開いた。
「ま、お前は中で。俺は外」
そう言って腕を組み直す。
今回、この二人の男たちに与えられた任務は、【ツェントル】の所長直々のお声掛かりだった。とある店に出掛けるという所長の身辺警護というのは表向きの名目で、そこに出入りする客に混じる不審者（と言っても、【ツェントル】の立場から見てという条件が付くが）に目を光らせるというものだった。

「中の方がよかったかい？」
「ハッ。まさか。俺には向いてねぇだろうが」
壁際に立つ男の左頬には、斜めに走る古い傷跡があった。浅黒い肌に跳ね上げさせた金色の短い髪。笑えばどことなく人懐っこい表情になるのだが、普段の顔付きは吊り上がり気味の目尻が、見る者には取りつき難い印象を与えていた。とてもじゃないが、温室でぬくぬくと育った良家の御子息の類には見えない。その事は男自身、百も承知だった。
「まぁ、確かにね」
相手の言いたいことが分かったのか、片や、そう言って肩を竦めて見せた男は、見るからに人好きのする笑みを浮かべていた。その口調も人当たりの柔らかい空気も、洗練された物腰と相まってか、【ツェントル】にいる無骨な兵士たちとは一線を画していた。
いつもの隊服ではなく、どこぞの金持ちのぼんぼんのように光沢

のある薄い緑掛かった灰色の上下に、首元には、白いたっぷりとした上質のスカーフを巻く。

すっかりめかし込んだ男の姿を見て、相方が漏らした感想は一言。

「俺に言わせりゃ、胡散臭ぇことこの上ないけどな」

思わず漏れた小さな本音は、すぐさま、相手の地獄耳に拾われてしまった。

「……イリヤ。幾ら温厚なボクでも、それ以上言ったら怒るよ？」

そして、凄みのある笑顔が、目の前に迫っていた。

上まできっちりと着込んだイリヤと呼ばれた男の隊服の詰襟の部分に、相手の男の指が掛かっていた。

喉を潰す気だろうか。冗談にも程がある。

だが、目の前の男の表情からは、その真意が掴み難かった。

「へいへい」

だが、こんなやり取りは日常茶飯事の事で。のんびりと構えていても意外に沸点の低い相方に呆れたような視線を投げながらも、男は肩を竦めて、それ以上は口を慎むことにした。

そして、さり気なく、話を変える。

「てか、ウテナ。お前、あの店に行ったことあんのか？」

男にしてみれば、その話の逸らし方はある意味、あからさまであったが、それ以上、そこに拘る積りもなかったので、相手の話に乗ることにした。

「……まぁ、過去に何度かね。父親に連れられてだけど。ボクが成人した時に顔見せをしたのと、その後は数回かな。あそこで食事をするのは、根回しっていうか、関係作りというか、社交辞令的意味合いが強いから、あんまり楽しいものじゃないけどね」

何せ、狐と狸の化かし合い、腹の探り合いをするような場所だ。

何か嫌な事でも思い出したのか、珍しくその柔和な表情を曇らせたウテナに、

「ふーん。ま、【お貴族さま】ってのも大変なんだな」
――――――俺には、皆目、見当がつかねぇけど。
男なりに気を使ったということなのだろう。
イリヤの言葉にウテナは小さく笑うと、
「まぁね」
軽く肩を竦めて見せたのだった。
「それじゃぁ、行こうか」
「おう」
時間には煩い団長のことだ。少しでも遅れようものなら、神経質そうな細い眉を怒らせて、どんな罰という名の超過労働が待っているやら知れたものではない。
そして、【ツェントル】の裏口から出てきた二人の若者（一人は、きっちりと隊服に身を包み、そして、もう一人は、良家の子息のような優雅な服に身を包んでいる）は、傍目には、どこか、ちぐはぐな印象を振り撒きながらも、沈み掛けた夕陽を背に人気のない裏道を選んで目的地へと急いだのだった。

「へマするなよ」
「そっちこそ」
街灯が灯り、通りに点々と光と闇の二色が混ざり合いながら独特の空間を彩る黄昏時。
煌々と贅沢な灯りが照らし出す明るい建物の中へ入って行った相方を見届けてから、【ツェントル】の隊服の中でも、少し特別な任務を担う時の黒色の制服に身を包んだイリヤは、深い闇が織りなすその中に静かに身を滑り込ませた。
そして、店の表玄関とは逆側の裏口にある小さな門に手を掛けると、軽い身のこなしで高い壁を乗り越えた。
そのまま、壁伝いに歩き、闇が作りだす影に身を潜める。

暫くして、枝葉を大きく伸ばすとある大木の下に辿り着いた。

そんな時だった。

まるで測ったかのような頃合い（タイミング）で、ひらりと上方から一枚の葉が舞い降りてきた。

イリヤはそれをそっと摘み上げた。

「首尾は？」

掠れた風のような囁きが降って来た。風が吹いて梢が軋むような、辛うじて意味をなす言葉が聞き取れる程度の小さな囁きだ。

「まぁまぁってとこだろ」

闇の中、建物がある前方を見据えながら、イリヤは低く返していた。

すると、イリヤが身を潜めている隣に、音も無く、黒い影が舞い降りてきた。

濃い影の合間から、癖の無い金色の髪がほんの一瞬、さらりと揺れた。

影から影を渡り歩く、闇の中に同化する男だった。

この男と顔を合わせるのは、いつも闇の中だった。濃淡を描く薄闇の中、ぼんやりと滲み出る男の輪郭はいつも曖昧だ。

だが、男から発せられる空気は変わらなかった。

ひんやりとした鋭い刃物の切先のような緊張感だ。それは男が発する軽薄な口調の中にも、決して失われることはなかった。

「大分餌を撒いたようだな」

男が愉快気に笑ったのが揺らぐ空気から伝わって来た。

「ま、引っかかるかどうかは、見てのお楽しみってとこだろ」

対するイリヤも暗闇の中、その口元に笑みを刷いていた。

「にしても、お前んとこの大将も中々えげつねぇな」

イリヤの上司である【ツェントル】の所長は、軍部の中でも隠れ

た冷酷非道の策士として、ある一部では、その名が通っていた。
「アンタんとこよかマシだろ」
「まぁ、第七んとこの双璧が来てりゃぁ、そうか」
今、あの店の中では、滅多に見られない組み合わせが出来上がっている筈だった。それだけでも、今宵、この場所を訪れた人間は、度肝を抜くだろうことは間違いなかった。
そして、その傍には、きっと最大の爆破時限装置が、さり気なく隠されている。それが起動されるか否かは、相手の出方次第といったところだろう。

二人がじっと視線を凝らす建物の先、遠く、煌々と光が漏れてくる窓辺の薄いカーテン越しに着飾った男の影が映った。
「アシュケナージだ」
この街の有力者とも言われている男の影を見て取って、イリヤが低く囁いた。
その隣には、はち切れんばかりに開いた胸元を惜しげも無く晒す着飾った若い女の姿が映っていた。
「ありゃぁ、第三のところの情婦(おんな)だな。色仕掛けで来たか」
それだけで第三の連中が内心、穏やかではないだろうことが見て取れた。
手持ちの情報の少なさに、業を煮やしてとうとう直接的な接触を取り始めたということだろう。だが、そこで女を使うというところが実に第三らしいやり口だと言えた。

アシュケナージと呼ばれた男は、艶々とした張りのある丸顔に埋もれた目元をだらしなく緩めている。その理由も目を覆いたくなる程あからさまだった。エスコートに差し出した男の腕には、女のふくよかな胸の谷間がこれ見よがしに押し付けられていた。
そして、その向こうには、食前酒用の小さなグラスを手にした背の高い男の姿が透かし見えた。

「で、あっちにはソルジェが控えてる……か」
王都の中でも名門と謳われた貴族、アファナーシエフの息が掛かった男だった。
「さてさて、踊らされてるのはどっちか」
隣からぽつりと漏れた小さな呟きに、イリヤも心の内で合槌を打った。

そうして暫く、遠巻きに建物の様子を窺っていると、不意に隣から身じろいだ空気が伝わった。
「ああ、それから。さっき、ボストークニが入ったぞ」
一段と潜められて告げられた声に、イリヤは暗闇の中、顔を顰めた。
そこには、あからさまに面倒だとの言葉がでかでかと浮き出ていた。通常は見えない筈のその文字も、夜目が利く隣の男には筒抜けだったようだ。
ボストークニは、この国の中でも古くから存在する名家の一つであったが、あの中にいると目される男は、現当主の次男の筈だった。何でも第七の隊長（ユルスナール）を昔から、目の敵にしており、なにかと突っかかっては悶着を起こすというのが、上司（ドーリン）から聞いた話だった。
普通にしている分には、格式高い貴族の紳士然りとした男なのだが、あの第七の双璧が絡んだ時だけ、その澄ました仮面が剥がれるらしい。
そして、何の因果かは知れないが、件のボストークニが絡んだとある拘束事件に、イリヤが助っ人として関わったのは、まだ記憶にも鮮明な昨日のことだった。しかも、その相手が、自分も面識がある第七に縁のある人物だったということで、内心、相当肝を冷やしたのだ。
ボストークニの方は、あの人物の後ろにあの男が控えていることは把握していないようなのだが、第七の方は、きっと含みがあるに違いなかった。

「不味いだろ。もしかしなくとも鉢合わせすんのか。こりゃ」
接触があった場合の余波を思って、恐々としたイリヤに対して、
「それはそれで面白いだろうな」
隣の男は意味深に呟いた。
その表情は闇の中で見えないが、声音から、男の口元が愉快気に弧を描いているだろうことは想像出来た。
ここにも同じ感性の人間がいた。
ここに来る前、相方が言い放ったのと同じ台詞に、イリヤは、げんなりと息を吐いた。
「攪乱にはもってこいだろ」
飄々とした相手の口振りに、
「それは、転び方次第だろ」
イリヤは顔を顰めていた。
あいつなら嬉々として引っ掻き回しそうだが。
あの中に控えている筈の相方の顔を思い出して、イリヤは大きな溜息を吐きたいのをぐっと堪えた。
そして、面倒な後処理が回ってこないことを、さり気なく祈るのだった。

大木の影でイリヤがそっと溜息を吐いた時と同じ頃。
相方と別れて建物の中に入ったウテナは、店の支配人とにこやかな挨拶を交わしていた。
「これは、これは、ザポロージェ様ではございませんか。いつもありがとうございます。御父上様はお変わりありませんか」
「お久し振りです、支配人。父は相も変わらず健啖家でぴんぴんしておりますよ。そちらも、お元気そうでなにより」
恭しく下げられた後退した頭部に、対するウテナは鷹揚に返していた。

そして、店内をゆっくり見渡すと、
「いやはや、ここはいつ来ても賑やかですね」
そういって人好きのする笑みを浮かべた。
「お陰さまで。御贔屓にして下さるお客様のお陰で、こうして恙無く、好きな事をさせていただいております」
支配人は、その目尻に数え切れないほどの深い皺を刻みながら目を細めた。
その慇懃な物腰から醸し出される柔和な空気に、ウテナも同じように頷いてから、徐に切り出した。
「中に人を待たせているんだ。もうナユーグのところは来ているだろうか？」
その問いかけに支配人はひっそりとした笑みを浮かべた。
「はい。既に御到着しております。お連れ様と一緒に控室の方にお通ししております」
「そうか」
「あの、ザポロージェ様」
そうしてそのまま、廊下を進もうとしたウテナの袖を、支配人が遠慮がちに引き留めた。
「なんだい？」
振り返ったウテナの耳元で、
「つかぬことをお聞き致しますが、今宵は何か特別な会合でも予定されているのですか？」
最大限に声を低くして、支配人がそんなことを聞いた。
「いや？　そういった話は、ボクは生憎、聞いてはいないけど？」
感情の読めない笑みを浮かべたまま、ウテナは飄々と嘯いていた。
「さようでございますか」
「なんだい？　今日はそんなに凄い顔触れが揃っているのかい？」
逆に問い返されて、支配人は少し考えるような素振りを見せてから、素早く周囲に視線を走らせると、ここだけの話だというように声を潜めて言った。

「中に入って頂ければお分かりになりますが、今宵は王都からのお客様が多くいらしてまして。それにお歴々の御子息が」
「それは、……実に、面白そうだね」
ウテナの目が何かを熟考するように細められた。
「それじゃぁ、ボクなんかは大人しくしていた方が良さそうだ」
――――――では、失礼するよ。
そう言って、支配人の肩を軽く叩くと、その言葉通り、中々に珍しい顔触れが揃っているであろう広間の方へ、ゆったりとした足取りで向かったのだった。

東の翁

待合室にいる間、ユルスナール、ブコバル、ドーリンの三人の男たちの下には、実に様々な客が入れ替わり立ち替わり挨拶に訪れては、言葉を交わしていた。

リョウは、その遣り取りの様子を、最初の内は傍にいて聞いていたのだったが、制服を着た給士が着飾った客たちの合間を器用に縫うようにしてやって来て、その手に恭しく掲げられた【タレール(お盆)カ】の上に並んだ飲み物を差し出されて、カクテルのように綺麗な色の付いたソーダ水らしきものの中身を尋ねたりしながら選んでいるうちに、いつの間にか、男たちを囲む人垣の中からはみ出してしまったことに気が付いた。

リョウの手には、ほんのりと薄紅色の付いたソーダ水のグラスが握られていた。

これは、春に採れる果物の【ヤーガダ】を漬けて作った果実酒をソーダ水で割ったものだというのが給士の説明だった。懐かしい桜色に心惹かれて手に取れば、さっぱりとした飲み口が女性には中々に評判の飲み物なのだと、品のある丁寧な口調で言葉を継いだ給士に勧められたのだ。

一口飲むと、口内に爽やかな甘みが広がった。弾けるソーダ水が、食欲増進を促す。食前酒にはもってこいのものだと思った。

リョウはその小さなグラスを手に、人垣に押し出されるようにして少し離れた壁際に身を寄せると、そこから自分の連れの様子を眺めた。

あの中にいても恐らく話の邪魔になるであろうし、当然のように男たちと言葉を交わす客たちから、もの問いたげな視線が自分にまで注がれるのは、余り気持ちのいいものではなかった。

三人の男たちは、其々挨拶にやってきた着飾った男女と、その顔に薄らと微笑みさえ浮かべながら雑談をしていた。

それは、今まで目にしたことのない男たちの一面でもあった。

優雅で洗練された空気が室内を満たし、表面上は和やかな雰囲気で言葉を交わし合う。

だが、この場所が関係作りや情報交換の場であるならば、それらは社交辞令的薄ら寒さを内包してもいるのだろう。

リョウは、どこか非現実的な動く絵巻物を眺めているような不思議な気分に陥っていた。

人々の話声、ひっそりとした笑い声や囁きが、独特な漣のように揺れては押し寄せて来る。この国の言葉の特徴的な疑似音階が、重低音に乗って歌のように聞こえていた。

約二年前には単なる音の羅列でしかなかった響きが、今はちゃんとした意味を成す言葉として自分の耳に届いていた。その事実を、少し感慨深く感じた。

今後、この場所でこれからの人生を送ることになるとしたら、いずれこの身に染みついている筈の母国語も忘れてしまうのだろうか。

不意に浮かんだ疑問は、恐ろしいまでの喪失感を呼び起こした。

リョウの脳裏には、とある男の話が思い出されていた。

戦争で出兵し祖国を離れ、終戦の混乱の最中、現地の人と結婚をし、最終的には国を捨てて、その場所に残ることを選ばざるを得なかった男の話だ。故郷の言葉を口にする機会を失った男は、その後、何十年という長い年月を経て、すっかり自分の母国語であった言葉を忘れてしまったのだ。

その話を初めて聞いた時の衝撃は、未だ忘れることが出来ずに心の片隅に残っていた。

人間の脳の記憶は、一度、習得したものを失ったりはしない。一度、得た情報は、脳内の引き出しの中にしまわれて残ってはいるの

だが、その場所へと辿り着く為の道筋が分からなくなってしまうのだとその昔、話に聞いた。
だが、たとえ記憶そのものを失っていなくとも、そこへ辿りつくべき術を失ってしまえば、それは『忘れてしまった』という事態として見るならば、余り変わらないのかも知れない。

「サクラ　サクラ　ヤヨイ　ノ　ソラハ……」
無意識にリョウの口から、微かな旋律が漏れ出していた。
手にしたグラスの色は、故郷の景色を思い起こさせていた。
「ミワタス　カギリ　カスミカ　クモカ　ニホイゾ　イヅル」
目裏に浮かぶのは、舞い散る無数の花弁。この肉体を構成する遺伝子の中に脈々と受け継がれてきた心の原風景だ。
「イザヤ　イザヤ　ミニ　ユカン……」
少し哀しさを漂わせる独特な音階と音の揺らぎ。この身体を流れる血に染みついた自分を形作るであろう根幹の意識。
この源を失いたくは無かった。
この国でしっかりと地に足を付けて立つ為にも、失ってはならないと思った。
リョウはグラスに口を付けた。
ほんのりと甘酸っぱい香りに記憶の中の景色を重ねた。

「綺麗な旋律ですね」
ふと聞こえてきた渋みのある声に、リョウは我に返った。
振り返ると、すぐ隣に一人の男性が立っていた。
濃い灰色の光沢のある上下が真っ先に目に入った。
そこから視線を上げて行く。
その先には、ひっそりとした温和な空気を身に纏い真っ白になった髪を綺麗に後ろに撫で付けた初老の男がいた。

切り立った峻厳な山の頂きを思わせる高い鼻梁を挟んで、静かな灰色の瞳を囲む目尻には、沢山の深い皺が刻まれていた。その間にある優しさを滲ませた灰色の瞳が、糸のように細められて、こちらを静かに見下ろしていた。

品のあるにこやかな微笑みに、リョウもひっそりと微笑んでいた。

無意識の鼻歌を他人に聞かれてしまったことが恥ずかしくもあり、そこには若干、照れが混じっていた。

「古い歌です。故郷に伝わる」

気が付けば、そんな言葉が口を突いて出ていた。

どこか懐かしそうに遠い目をしたリョウに、

「そうですか」

白髪の老人は、うっすらと微笑みを浮かべたまま、静かに合槌を打った。

そして、少し興味深そうな好奇の光をその灰色の瞳に乗せた。

「先程の旋律は、どのようなことを歌ったものなのですか。恋の歌ですか？」

リョウは、そっと微笑むと穏やかに首を横に振った。

「残念ながら、恋の歌ではありません」

「おや。それは残念」

ついと上がった老人の白い眉をリョウは微笑みを湛えながら見上げた。

そして、ゆっくりと言葉を継いだ。

「春に咲くとある花を歌ったものです。春になって花が咲いたのでお花見に出掛けようという意味合いです。春になると一斉に咲く花がありまして、ちょうど、このような淡い薄紅色をしているんです」

そう言って、リョウは手にしたグラスを掲げて見せた。

そこには、先程、給士から勧められた淡い桜色をしたソーダ水が、細かな気泡を立ち昇らせていた。

「【ヤーガダ】のソーダ割りですな？」

「はい。その花は、同じ時期に一斉に咲いて、それから一斉に散る

んです。咲いてから【デェシャータク（10日）】もしない内に。花弁が雪のように降り注いで吃驚する位の速さで散ってゆく。風が吹くと花吹雪になって辺りを一面、淡い薄紅色に染めるんです」

その光景を想像したのか、老人からは溜息のような息が漏れていた。

「ほう。それは実に興味深い。さぞかし美しい光景なのでしょうなぁ」

感じ入った様な声音に、リョウは同意を示すようにそっと微笑んでいた。

「ええ。この世のものとは思えないくらい幻想的な景色です。夜は特に格別で、闇の中にぼんやりと白く、花を咲かせた木が浮かび上がるんです。散り時は、その木が涙を流しているよう。まるで儚い束の間の夢のように……」

どこかうっとりとした息を漏らしたリョウに、白髪の老人は、ひっそりとした笑みを浮かべた。

「さぞかし綺麗なのでしょうね。まるで、貴女のように」

意味深な目配せを受けて不意に流れを変えた空気に、リョウは苦笑を滲ませた。

「こちらの殿方は、皆、お上手ですね」

ここの男たちは、思いも寄らない褒め言葉を平然と口にする。そういうことを日常的に聞き慣れていない自分には、その対処の加減がまだよく掴めていなかった。さらりと受け流せばよいのだろうが、どうも気恥ずかしさが先に立ってしまうのだ。

「そのようなことはありませんよ。男というものは、皆、自分の心に正直ですからね」

老人は朗らかに告げると、少し声の調子（トーン）を落とした。

「それよりもお連れの方はどうなさいましたかな。貴女のような美しい人をこのような端に放って置くとは男の風上にも置けない」

男に同伴されるべき女が、こうして一人壁際に立っているのは、やはり礼儀的には余り感心することではないらしい。

「連れは、今、あちらに」
リョウが視線を向けた先には、人垣の中に埋もれる銀色の頭髪があった。
遠目に見る、余り感情の乗らない澄ました横顔からは、その心の内が分からなかったが、男の周囲を囲む着飾った女性たちは、その色艶のよい頬を染め、その傍にいる男達も実にいい笑顔を浮かべていた。
大分話し込んでいるらしく、和やかな空気に人波の熱が被さる様にして乗っているのが伝わって来ていた。
他の二人の男たちも似たり寄ったりの状況だった。
「どうも忙しいようで」
この状況を心細く思わないでもなかったが、それは仕方がないことだった。そもそも自分はオマケで、あの三人には、彼らなりの目的とその付き合いがある訳だからだ。
そう思い、少し困ったように小さく微笑めば、対する白髪の老人は、茶目っ気たっぷりに片目を瞑った。
「ですが、今はそのお陰で、こうして貴女のような美しいお嬢さんとお話が出来る訳ですから、天のお目零しに感謝しなくてはなりませんな。私もあと二十年若ければ、貴女のお手を取ろうと躍起になっていたでしょう」
そう言ってのんびりと目を細める。
「お嬢さん、貴女のお名前をお伺いしても？」
老人の言葉にリョウは静かに頷くと己が名前を告げた。

ふと老人の視線が、リョウの胸元を捉えていた。背中側は言うまでも無いが、前も随分と深く開いている。左側、たっぷりとした生地が襞を作る胸元からは、セレブロの紋様が三分の一程覗いていた。
老人は、左胸の部分に薄らと覗くその不思議な色合いの紋様を見て、一瞬、驚いたように目を見開いた。
「……貴女は、長の【魂響（たまゆら）】なのですね」

「タマ……ユラ？」
初めて耳にする言葉にリョウの頭の中で疑問符が立ち込めるが、老人は何かに一人納得したように合点して見せた。
そして不意に真剣な眼差しをすると、実に意味深な言葉を吐いた。
「貴女は、大いなる揺らぎの中にある。そのことを忘れてはいけませんよ」
リョウは、半ば茫然と老人の言葉を反芻していた。
正確な意味を捉えようと思考を目まぐるしく回転させるが、空回りするだけで理解には到底至らなかった。
「今後、王都を訪れることがあれば、東の神殿へいらっしゃい」
そう締めくくると、顔を上げて、表情を元に戻した。
「おや、どうやら、もう時間のようだ。楽しい時間をありがとう。それでは」
そう言って恭しく礼をした後、踵を返そうとした老人の白い頭髪を引き留めるように、リョウは声を掛けていた。
聞きたいことは色々あったが、老人はこちらの反応を気に留めていないようだった。自分が理解しているかいないかは問題ではないのだろう。
だが、リョウはこのまま、老人の背中を見送る訳にはいかなかった。
「あの、貴方は？」
せめてもの手掛かりを尋ねていた。
「【デェードゥシュカ・イズ・ヴァストーカ】。そう言えば分かります」
――――――――東の翁。
「それではお嬢さん。またお会いしましょう」
そんな意味深な言葉を残して。
不思議な老人の背中は、人混みに紛れるようにして消えてしまった。

「このようなところに可憐な花が隠れているとは。壁の花にしておくのは実に勿体ない。花は愛でてこそ。そうは思いませんか？」

――――――お嬢さん。

白髪の老人が消えた先を半ば煙に撒かれたような気分で追っていれば、思いの外、近い位置から声を掛けられて、リョウは我に返った。

この場所は、ある種の社交場だ。放っておいて欲しいと思っても、ここの慣習では女を独り壁際にぽつんとさせておくわけにはいかないのだろう。

それにしても、この国の男たちの口説き文句は実に多種多様だ。そのような言葉に免疫のない自分には到底、慣れそうもなかった。どう軽く見積もっても話半分で流さないと大変なことになるに違いない。

歯の浮くような台詞に内心、苦笑しながら、そっと振り返れば、そこには思いも寄らない男の顔があった。

――――――ウテナ。

一癖も二癖もある【ツェントル】の兵士だ。

「……」

余りの驚きに言葉を失えば、見知った筈の顔が『おや？』という表情に変わった。

相変わらず感情の読めない笑みを張り付けて人好きのする柔らかい気を身に纏っている。

だが、ウテナの性格を知るリョウにしてみれば、それは実に胡散臭いものにしか見えなかった。

このようなところで顔を合わせるとは思ってもみなかった。

ウテナに若干の苦手意識があるリョウは、内心、冷や冷やしたのだが、

「どうかしましたか？」

相手から重ねられた問いに目を瞬かせた。
もしかして、気が付いていないのだろうか。
だが、ウテナは自分が女であることは承知の筈だった。少し化粧をして夜会用の服を着ただけで、元々の造作は変わっていはいない。気が付いていないのならば、それはそれで構わなかった。寧ろ、好都合というものだ。ウテナは勘の良い兵士だと思っていたのだが、向こうもこちらがこのような場所にいるとは思わないのだろう。思い込みというのは、人の認識を大いに左右するということだ。

「いいえ。なんでもありません」
リョウは穏やかに微笑むと、ウテナに対しては初対面の相手に徹することにした。
相手が気付くか気付かないか、それも見ものだと思った。その位のお遊びがあってもいいだろう。
「お嬢さんはお一人ですか？」
「いいえ」
再びの問いに、リョウは品のある淑女の振りをしながら鷹揚な態度を貫くことにした。
「連れは今、あちらで捕まっておりますの」
口元に手を当てて、室内へゆっくりと視線を走らせた。
銀色の頭部に濃淡のある褐色の頭部が二つ。先程まで固まっていた三人は、今はばらけて其々離れたところにいた。
リョウは艶やかな銀色の髪を撫で付けた精悍な男の横顔を見詰めた。
そろそろ気が付いてほしいという本音をほんの少しだけ覗かせて。
そして、すぐに逸らした。
自分の連れがユルスナールだと知れてしまうと、きっと自分のこともすぐに分かってしまうだろう。何せ、この瞳の色と髪の色は、この辺りでは余り見ないものなのだろうから。
「なるほど。それにしても、幾ら話に興じているとは言え、貴女の

ようなお美しい人を放っておくなんて信じられない」
そう言って大げさに肩を竦めて見せる。
浮ついた調子は健在だ。
「それではお連れが戻るまで、私がお相手をしてもよろしいですか？」
まぁ、全く知らない相手よりも、顔見知りの方がまだいいか。そう考えるとリョウは諾と頷いた。
「はい。ワタクシでよろしければ」

改めて見るウテナは、周囲に集う男性陣と同じように正装をしていた。【ツェントル】にいた時も余り兵士には見えない文官的な匂いのする男だと思ったが、そうしていると本当にどこぞの金持ちの子息に見えた。――――と、そこまで考えて、この場所に集うのは、専ら貴族階級が多いと聞いたことを思い出した。するとこの男もそうなのかもしれない。
「それでは、お近づきの印に」
ウテナはそう言って、滑らかな所作でリョウの左手を取ると、その甲に触れるだけの口付けを落とした。
リョウは内心、苦笑を漏らした。
なんと抜け目のないことだろう。余りに自然な仕草に、最早抵抗するのが、却って失礼にあたってしまうのではと思えるくらいだ。やはり、このくらいの身体的接触は、この国の男たちには標準装備なのだ。
リョウはうっかり流されないように改めて気を引き締めた。
「お名前を教えては頂けませんか？」
手を持ち上げたまま、何やら熱の籠った眼差しを向け、出された問い掛けに、
「その必要はないのではありませんか？」
リョウはおっとりと微笑むと相手の願いを軽く受け流した。
「随分とつれないことを仰る」

「いいえ。ワタクシがここに来るのは今宵限りのことですから、もうお会いすることもないでしょう。束の間の邂逅に名など不要ではありませんか」

それに自分はもうすぐこの街を離れる。今後、この【プラミィーシュレ】を訪れる機会などありそうもない。だから、必然的に【ツェントル】に居るこの男にも会うことはないだろう。

「この街の方ではないのですか？」

「ええ」

「そうですか。因みにどちらからいらっしゃったのか、お聞きしても？」

やや焦れたように重ねられたウテナの声に、リョウは無言のまま、首を横に振った。

「貴女はとんだ秘密主義者だ」

「ふふふ。詰まらない日常に適度の刺激（スパイス）は必要ではありませんか」

――――――その方が面白いでしょう？

「なるほど」

その言葉にウテナの目が何故か怪しく輝き始めた。

「詰まり、この私に貴女を探して欲しいということなのですね。ふふふ。貴女は随分と恥ずかしがり屋さんなのですね。そうですか。それではそのご期待に応えなければなりませんね。探し当てた暁には、私に御褒美を下さいませんか？」

話の流れが、不意に変化したことにリョウは内心、ギクリとした。もしかしなくとも、不味いことになってきてはいまいか。

いや、でもこれは、単なる言葉遊びの延長にしか過ぎないのだから、向こうも当然、その辺りのことは承知済みだろう。

「まぁ、褒美だなんて。鼻先に好物の【マルコーフィ（人参）】をぶら下げられた馬のようではありませんか」

「ですが、この広い国の中で、何の手がかりもない貴女を探すのですよ？　中々に骨の折れることに違いないですからね。その位の楽しみがなくては。そうは思いませんか？」

「まぁ、そのようなこと、ご自分から仰ってはいけませんわ。それにそこまでなさらなくても」

――――――――そこまでして知るほどの名前ではない。

そう言って小さく笑うと徐に辺りを見渡した。

すると、ちょうど同じようにこちらを向いたユルスナールと目が合った。

リョウはこちらを案じるような色を乗せた瑠璃色の光彩にそっと微笑んで見せた。

ユルスナールの視線が、リョウの脇に立つまだ若い男の姿を捕らえた。

冷たいきらいのある鋭い眼差しがすっと細められた。

ユルスナールは、リョウに一つ頷いて見せると、周囲を取り捲いていた客たちと一言・二言言葉を交わすと、その輪から離れ、壁の方に歩きだした。

「時間のようですわ」

リョウはウテナに向き直ると微笑んだ。

柔和な顔立ちをした男の肩越しに、こちらへと近づいて来る銀色の頭部が見えた。

「おや、もうそんな時間ですか。楽しい時程、時間の経つのは早い。そうは思いませんか？」

そんな囁きと共に人当たりの柔らかい優しげな顔がずいと迫ってきて、リョウは咄嗟に身体を引いた。

ウテナはやんわりと拒絶をされたことにほんの少しだけ傷ついた顔をして見せたが、それが振り（ポーズ）だと思ったリョウは、あっさりと流していた。

相手の視線が逸れていることに気が付いたウテナが、その先を追うように振り返った。

それと時を同じくして、リョウの隣に影が差し、腰の辺りに大きな男の手が触れた。

「すまない。待たせたな」
耳元にそっと吹き込まれた囁きに、リョウは擽ったそうに肩を震わせた。
房になった耳飾りが、その振動に合わせて揺れた。
「いいえ」
「大丈夫か？」
臀部の緩やかな曲線をなぞりながら口にされた問いに、リョウは、男の方を見上げた。
「何がですか？」
「ここに集まる輩は、綺麗な花に目が無い。無体な事をされてはいないか？」
「ルスランまで」
何を言い出すのかと思えば。
リョウは的外れとも思える男の心配に可笑しそうに喉の奥を鳴らした。
「大丈夫ですよ。皆さん、御親切に話し相手になって下さっただけですから。この方もそうです」
そう言うと視線を前に戻した。
前にいるウテナは虚を突かれた顔をして、ユルスナールとリョウの顔を見比べた。
「……シビリークス隊長」
「ああ。連れが世話になったな。お前の上司はすぐそこだ」
その言葉に合わせるようにドーリンの神経質そうな顔が、こちらへと向き、ユルスナールへ何がしかの目配せをした。
「ルスラン、時間だ」
「ああ」
ドーリンは、壁際にいた部下を一瞥すると、一つ頷きを返した。
そして、ユルスナールはリョウを促して歩き出した。

リョウは背後から注がれる視線に、そっと振り返ると、まだ事態が良く飲み込めていないような顔を晒している男に悪戯っぽい顔をして微笑んだ。

「それでは御機嫌よう。ウテナさん」

ウテナの目が驚愕に見開かれた。

「……まさか」

ウテナは確認するように隣に立つ上司を見遣った。

返って来たのは、簡潔な頷きが一つ。

余りにも淡々とした上司の反応に、ウテナは片手で顔を覆うと、唐突に喉の奥を鳴らし始めた。

堪え切れない笑いが、漏れ始めていた。

「これは一本取られたな」

それにつられるようにドーリンが複雑な顔をした。

「まぁ、あれは仕方なかろう。気にするな」

ユルスナールに寄り添われてこの場を離れて行く、白い肌を晒した華奢な背中を見ながら、ドーリン自身、先程の衝撃を思い出してか、同じような精神状態にあるであろう部下に、幾ばくかの同情の眼差しを送ったのだった。

束の間の団欒

【ザクースカ（前菜）】、【ペールヴァエ（スープ）】に続いて【フタローエ（メイン）】の肉料理が運ばれて来た。

テーブルには、アルコール度数の強い果実酒【ズグリーシュカ】がグラスを並々と満たしている。端の方にはワゴンが置かれ、隙なく制服を着こんだ給士の男が控えていた。

あれから、一通りの挨拶を終えた男たちに伴われて個室に案内されて、待ちに待った食事が始まった。

待合室の中で垣間見た上流社会の独特な空気とそこに集う多くの客たちからあからさまな視線を向けられたことへの無意識の緊張から、食べ物が喉を通るような気分ではなかったのだが、一旦、無言の煩わしさから解放されてテーブルに着き、目の前に料理を並べられると途端に腹の虫が空腹を訴えたものだから、リョウは己の現金さと神経の図太さを内心、可笑しく思ったのだった。

「ここから海は近いのですか？」

独特な苦みのある【アグリェーツ（胡瓜）】と豆類、【シィール（チーズ）】が混ぜ合わされたサラダに続いて、前菜に出された小さな魚【セリョートカ】の塩漬けを目にしたリョウは、赤い輪切りにされた【パミドール（トマト）】の上に品よく乗る一口大に解された油分の多い魚の身を口に入れて、舌先でその味を確かめてから、不意に顔を上げた。

隣から出された問いに、ユルスナールは、器用に【ノーシュカ（ナイフ）】と【ビールカ（フォーク）】を動かしていた手を止めた。

「ああ。近いという程ではないが、そうだな、ここから真っ直ぐ三日ほどか、南東の方角に行けば、港町がある。街道からは少し逸れるがな」

リョウは、少し前にガルーシャの書斎で見たこの国の地図を思い出していた。

王都である【スタリーツァ】を中心に据え、そこから網の目のように張り巡らされている街道が、点々とする大小の街や村々の名と共に記されていたものだった。

縮尺は分からない。王都から見た国内の街や村落の大まかな配置図で、正確な距離に基づいて描かれているものでもなさそうだった。その地図には、リョウが暮らす森は、紙が擦り切れそうな程の端に小さく【レス（森）】との表示があるだけで、小屋から一番近いスフミ村とユルスナールたちが駐屯する北の砦が、この国に於ける北方の最果てのようだった。その表示も全体から見れば実に小さかった。

「この国には、海に面した部分があるのですね？」

「ああ。南と東の端、瘤みてぇに飛び出したところだけだけどな」

前の席に着いて合槌を打ったブコバルに、リョウは改めてこの国の全体図を思い浮かべてみた。

ガルーシャの書斎でこれまでに見た地図は、国内のものとこの国から見た近隣諸国との配置を描いた比較的限られた範囲のものだった。

北から北西にかけて峻厳な山脈を挟んで隣国【ノヴグラード】がある。北東から東は大きな川を挟んで隣国【セルツェーリ】との境になっていた。そして、西から南西にかけては陸続きに隣国【キルメク】と接していた。そして、東から南東の部分には、海を思わせる波模様と魚の絵が付いた空間があった。

この世界全体を捉えた地図はあるだろうか。そして、あの海の向こうには何があるのだろうか。港では諸外国と交易を行っているのだろうか。一度、考えだしたらきりがない程の疑問が次々と湧き上がってきた。

と言っても、この世界は今の自分にとっては途方もない程広いに違いなく、この場所での基本的な移動手段は徒歩か馬であることを

考えても、異国というのは、慎ましやかにその日その日を暮らす一般庶民にとっては、恐らく物語の中にあるような、ある種、現実味のない世界なのかもしれなかった。それにリョウにとっては自分が今まさに身を置くこの国そのものが異国である為、興味惹かれることは多々あっても、とてもじゃないが、そこまでは手が回りそうもなかった。

まずは、この国【スタルゴラド】のことを知ることが第一義であろう。

「港町では他国と交易を行っているのですか？」

リョウとしては、これまでの感覚から、話の流れに沿って他愛ない話題を振った積りであったのだが、不意に落ちた沈黙に顔を上げれば、斜交いに座るドーリンが、ブコバルと顔を見交わした後、ユルスナールに視線を投げていた。

男たち三人の無言の遣り取りに、リョウは自分が随分と間の悪い質問をしてしまったことを悟った。

踏み込み過ぎたのかもしれない。どうやら考えが足りなかったようだ。

「すみません。不用意な質問をしてしまったようですね。障りのあることは流してしまって構いませんから」

慌てて取り繕うように口にすれば、

「いや。お前の所為ではない。だからそんな顔をするな」

情けなく眉根を下げたリョウにユルスナールが気にするなとばかりに微笑んだ。

「あの港は、やや特殊な場所だ。この国の管轄下にあるには違いないだが、住人たちの自治が行き渡っている。街を治める首長の方が、国から派遣されている役人よりも影響力を持っている。まぁ、表向きは違うがな。謂わば、一種の治外法権的な領域とでも言えばいいか。これ以上はここでは言えないが、そんなところだ」

「そうですか」

簡潔に告げられたドーリンの言葉を心の内で反芻しながら、リョウは言葉少なに頷いた。

問いを発した相手がこの男たちでよかったと思わずにはいられなかった。少なくとも手探り状態で知識を吸収するのに、口にして良いこととそうでない事の線引きは、政治的な事柄も含め、かなり難易度が高く、言葉選びには尋常でない程の神経を使うからだ。ものの言い方次第では、首が飛ぶ場合だって考えられるのだ。

「リョウ。お前、もう一遍、この国のことをお浚いした方がいいんじゃねぇか。お前の言動や態度を見る限りよ、知識や良識もそれなりにあるし、そこらへんのガキに比べりゃぁ、何倍も聡明だとは思うがな、なんつうか、お前にゃぁ、この国のガキでも知ってるような当たり前のことがごっそりと抜けてんだよなぁ。大人びてるかと思えば、世間知らずみてぇなとこもあるし。偶に聞いてっと、ひやひやするぜ。なぁ、ルスラン」

思いの外、優雅な手付きで赤みを帯びた【スビョークラ】のスープを口に運んだ後、しみじみと出されたブコバルの述懐にリョウは苦笑をして見せるしかなかった。

「そうだな。お前の知識にはかなり偏りがある。一度、初歩から洗い直した方がいいだろう。お前が何をどこまで理解しているかと照らし合わせてだな」

「そうですね」

ユルスナールとブコバルの二人から実に尤もな事を言われて、リョウとしては素直に頷く他なかった。　もしかしなくとも、これまでの自分の言動や行動は、端から見れば、危なっかしかったり、頓珍漢に思えるものがあったのかもしれなかった。

だが、実際のところ、どうすればいいのだろう。基本的な初歩の教本となるような分野を予め聞いておいて、その関連の本をガルーシャの書斎から見繕うしかないか。後は、日常的な細々としたものであれば、スフミ村のリューバに聞く他ないだろう。

リョウがそんなことをつらつらと考えているとユルスナールが思

い付いたというようにリョウの方を見た。
「戻ってからシーリスに聞いてみるか」
「シーリスにですか？」
久し振りに聞く名前に、リョウは菫色の瞳をした線の細い優しい面立ちをした男の顔を思い出していた。
「アイツはああ見えて、博識で学者肌なところがあるからな。教師役にはもってこいだ」
「ですが、忙しいシーリスにご迷惑をお掛けすることになってしまいます」
申し出としては有り難かったが、本人抜きにそんなことを言っていいのだろうかと思う。
「それは気にするな」
「確かに、シーリスはもってこいだな。その代わり容赦ねぇけど。まぁ、ビシビシ扱いて貰えばいい」
悪巧みを思い付いたような顔をして、ブコバルまでもがそんなことを言う始末。
リョウは、その言葉に、北の砦で垣間見たシーリスの一面を思い出していた。眩しい程の笑顔を浮かべながら引き結ばれた薄い唇から飛び出すのは、実に辛辣な毒のある言葉の数々だったからだ。迫力満点の笑顔で繰り出されるシーリスのお説教を受けていた兵士たちは、大きな身体を縮こまらせて恐々粛々としていた。遠目に見るには何処か滑稽な絵図らであったが、恐らく、当事者にとっては肝の冷えることであったのだろう。柔和な面立ちをしたシーリスがユルスナールの片腕として主の留守を恙無く守っている。リョウとしては、その所以の一端を見た気がしたのだ。
「てか、リョウ。そもそも、お前は幾つなんだ？」
不意にブコバルが、そんなことを言った。
今更ながらのことではあったが、真正面から訊かれるのはこれで二回目のことだった。

こちらを見るブコバルの目は、やたらと好奇に輝いていた。
リョウは、無言のまま、ちらりと隣に座るユルスナールを見た。
以前、北の砦を去る時に、ユルスナールには、自分の本当の年齢を告げていた。
だが、それもこちらの暦に換算し直して出した数字であって、本来の年齢とは違う。二年前、初めてこちら側に転げ落ちた時の実年齢から素直に二年を足した辺りが相応なのだろうが、どちらが正しいのか、そうでないのか、最早、自分には良く分からなかった。というよりも、そのようなことを一々気にしてはいられなかったのだ。
それに自分はまだユルスナールやブコバルの年齢を知らなかった。個人的な感触としては大して変わらない位だとは思っているのだが、正直な所、これまで余り気にしたことはなかった。
何と答えたものかと思い答えに詰まる。
「あ？　何だ、秘密か？」
器用に手を動かして、切り分けた肉を口に運んだ後、ニヤニヤと下卑た笑みを口の端に刷いたブコバルをリョウは呆れたように見遣った。
「こちらでは、女性に面と向かって年齢を尋ねるのは、失礼に当たらないのですか？」
「ああ？　それは妙齢の女に対してだろうがよ」
「妙齢というのは、実際に幾つぐらいですか？」
「成人してから精々、嫁に行くか行かないか位までだろ」
「こちらでの成人はいつからですか？」
「おいおい、そっからかよ」
ここぞとばかりにリョウが問いを重ねれば、ブコバルは目を丸くした。
だが、知らないものは仕方がない。こういう時でなければ聞けないだろう。
「はい」
「この国での成人は、男ならば職に付いた時だ。年齢で言えば、大

体、１６から１８位だな。まぁ、一人前と見做されるのはもう少し後の事だが。女の場合は、地域によって異なるが、大体１８前後だろう。嫁いで初めて大人の仲間入りをすると認識される場合が多い」

ブコバルに変わってユルスナールが端的に詳しい説明をした。

「そうですか」

リョウは強ち自分の予想が間違っていなかったこと思った。

「そうすると、一般的に女性が嫁ぐ年齢というのは、二十歳前後位と思って良いんですね？」

リョウは、ふとこの秋に婚礼を挙げたスフミ村のアクサーナのことを思い出していた。

「まぁ、例外も多々あるには違いないが、大体そんなところだろう」

ユルスナールが静かに合槌を打った。

リョウは、それから、目の前にいるブコバルを見た。

そこには相変わらず興味津々であることを雄弁に語る青灰色の双眸があった。

「そんなに気になりますか？」

「そりゃぁ、そうさ。なぁ、ドーリン？」

突然話を振られたドーリンは、思っても見なかった展開に一瞬、意表を突かれた顔をした後、それを取り繕うように態とらしく咳払いをした。

「お前は、……察するに、成人しているのだな？」

やや躊躇いがちに口にされた言葉にリョウは可笑しそうに小さく笑った。

質素な上着にズボンを履いた普段の格好から受けるであろう第一印象を元にすれば、それは仕方のない反応だった。

「はい。こちらで言えば、随分とうが立った部類に入るでしょうね」

――――――これ以上は秘密です。

具体的な数字を上げることは躊躇われたので、そう言ってにっこりと微笑むと、ちらりとユルスナールを横目に見た。

隣からの信号を感じ取ったユルスナールは、小さく息を吐くと顔

色を変えずに言い放った。
「因みに、俺やお前たちとそう大差ない」
「……」
ドーリンが虚を突かれた顔をして、【ノーシュカ（ナイフ）】を握り締め、小さく口を開けたまま固まった。【ビールカ（フォーク）】に差していた筈の肉の切れ端が、空中に止まったまま、ぽとりと皿の上に落ちた。
それからほんの一瞬遅れて、
「はぁぁあああ？」
ブコバルの大きな声が室内に響き渡った。
こういう場所では滅多に動じることがないようにと訓練されている筈の給士の男が小さく肩を揺らした。リョウも突然の大声に吃驚して身体を揺らした。
ブコバルは、これでもかという位に目を見開いて、自分にとっては無謀とも思える発言をした相棒の顔をまじまじと見た。
「……マジかよ」
「喧しい」
今更ながらに礼儀もへったくれもないブコバルの態度にユルスナールは顔を顰めた。
そして、その真意を測る為か、驚きに固まったまま、こちらへと視線を向けたブコバルに、リョウはこの国の男たちが良くやるように片目を瞑ると悪戯っぽく微笑んで見せたのだった。
「……嘘だろ。いや、でも身体つきを見る限り、そうでもねぇのか？」
何やらぶつぶつと独り言を言いだす始末。
「……ブコバル」
駄々漏れの自己内対話を聞き咎めてか、ドーリンが窘めるようにその名を呼んだ。
リョウは動きを止めた若干二名の男たちのことは放って置いて、目の前の皿にある丁寧に切り分けた柔らかい肉の切れ端を【ビールク（フォー）】

カ】に差すと、ゆっくりと口に入れ、咀嚼した。ソースの掛かった肉は驚くほど柔らかく、味が染み込んでいた。

艶やかな紅を施した薄めの唇が弧を描いた。

「美味しいですね」

そして、何事もなかったかのように食事を続けたのだった。

三文芝居の一幕

それは、一通りの食事を終えて、食後のお茶をゆっくりと楽しんでいた時だった。

「これはこれは、皆さま、お揃いで」

そんな台詞と共に個室の戸口に一人の男が立った。

ゆっくりと視線を向けた先、そこに現れた男の顔を見て、リョウは硬直した。そして、目を合わせないように咄嗟に顔を逸らしていた。

鼓動が妙な胸騒ぎに駆け足を始めていた。

どうしてあの男がこのような所にいるのだ。偶々なのか。それとも……。

不安が湧き出るようにして目に見えない形で膨らみ始めていた。

なんと間の悪いことだろう。

リョウは巡り合わせの悪さを呪わずにはいられなかった。

昨日の衝撃は、燻るようにしてまだこの身に残っていた。

リョウは震えそうになる身体を落ち着かせる為に、カップを手に取ると温かいお茶に口を付けた。

「ルスラン。こっちにはいつから来ていたんだ？　折角いるなら、連絡をくれてもいいだろう？」

戸口に寄り掛かっていた男は、そう言うと、ふらりと中に入って来た。

男が付けている香水だろうか、華やかな匂いが、揺らぐ空気に乗って鼻先を掠めた。

それは、昨日嗅いだものと同じ匂いだった。

リョウの心は漣が立ち始めた。その匂いに触発されるようにして体内に抑え込んでいた筈の様々な感情が呼び起こされそうになる。

それを、カップを握る手に力を入れることで堪えていた。
かなり酒を過ごしているのかもしれない。顔色は変わらないが、どことなく浮ついた軽薄な空気が男の周りを囲んでいた。
「何の用だ？」
緩慢な足取りで上機嫌にテーブルに近づいて来た男をユルスナールは冷ややかに見遣った。
「『何の用だ』とは何だ。随分な御挨拶じゃないか。暫く振りに見る知己に挨拶ぐらいはするだろう」
そう言って肩を竦めた男のいつになく緩んだ目元を見て、ユルスナールは苛立たしげに舌打ちした。
「大分、飲んでいるな。あの二人はどうした？」
闖入者である男の傍には、必ず影のようにして控えているお目付け役の男が、二人いた筈だった。
その事を暗に仄めかせば、
「ああ。あいつらは向こうだ。少し、風に当たろうと思ってな。抜け出して来た」
男は、事も無げに言い放つと身体をくるりと反転させた。
「やぁ、ブコバル。それにドーリンも。久し振りだな」

――――――――ふざけやがって。
白々しい程の口振りに、ブコバルはあからさまに嫌そうな顔をした。
昨日の今日で良くもそんな口が聞けたものだと腸（はらわた）が煮えくりかえそうになる。
こっちはとんだ莫迦男の所為で昨日は大変な目に遭ったのだ。
「ああ」
言い返したいのは山々だったが、ここで昨日の話を蒸し返しても碌なことにならないのは分かり切っているので、ブコバルはぞんざいに頷いて見せるだけに留めた。
そして、ちらりと目の前に座るリョウに案じるような視線を投げ

た。
そこには明らかに色を失い、何かを押し留めるようにきつく紅を刷いた唇を引き結んだ女の顔があった。
それを見て、ブコバルはリョウが闖入者のことを的確に認識したことを知った。
というよりも昨日の今日だ。忘れたくともそう簡単に忘れられるものでもないだろう。気丈には振る舞っているが、カップを握る細い指が微かに震えている。
こうなれば、男がリョウに気が付く前に、早々にお引き取りを願うしかないだろうとブコバルは判断した。
それに昨日の顛末を知っているユルスナールは、相当、頭にきているに違いなかった。
「レオニード。戻れ」
ある程度、自制してはいるようだが、内心の腹立たしさを隠すことなく言い放たれた言葉は、実に冷え冷えとしていた。
「相変わらず、はっきり言うな」
だが、対する男は、それに堪えることなく、感情の読めない笑みをその口元に刷いた。
「お前がここに居ても仕方がないだろう。食事の邪魔だ」
「見た所、食事はもう終えたみたいだな。お茶位なら混じっても構わんだろう？」
この場所に居座る積りなのだろうか。
男の口から出された思いも寄らない提案にユルスナールが身に纏う空気が一段と凍りついた。痛い位の緊張感が張りつめていた。
「向こうが心配するだろう。お前が中々戻ってこないと」
「それなら、ここから伝えればいい」
そう言って戸口に控えていた給士に合図を送ろうとした男を、
「レオニード」
ユルスナールは低く、窘めるようにその名を呼ぶことで制した。
「いいから戻れ」

そして、きっぱりと男に立ち去るように告げた。
「おいおい、レオニード。お前、いい加減、空気くらい読めよ」
拒絶の言葉を吐かれても中々腰を上げない相手にブコバルは呆れた顔をして、気だるそうにひらりと片手を振った。
だが、その人を食ったような態度が感に障ったのか、男は鋭い目つきでブコバルを睨みつけた。
「何だ。その言い方は。俺が邪魔だとでもいうのか」
気位の高い横柄な態度も相変わらずだった。
ブコバルは、至極、面倒臭そうに片方の眉を上げた。
「ああ。そうだよ。分かってんじゃねぇか。お前にしては上出来だ」
「何だと。莫迦にする気か！」
忽ち、男が低い声を出した。

リョウは顔を俯けたまま、目と鼻の先で交わされる男たちの遣り取りを聞いていた。
思いも寄らない闖入者の所為で、折角の穏やかな雰囲気も楽しい気分も霧散してしまった。その原因になった男を内心腹立たしく思った。
徐々に険悪になる空気に、このままブコバルと男の間で口論が続くのだろうかと内心ひやひやしていれば、
「レオニード」
それまで沈黙を貫いていたドーリンが、静かに闖入者を見据えた。
ドーリンの声は低く小さいものだったが、男の注意を引くには十分だった。
声を掛けられて、男は何だとばかりに訝しげな視線をドーリンに投げた。
「お前がこの【プラミィーシュレ】に来てからの噂は、こちらにも届いている。このままでは、後で事実確認の為に、改めてお前から話を聞く必要があるやもしれんな。事と次第によっては本家に連絡を取ることになるが、どうする？」

【ツェントル】の所長としての顔を全面に押し出しての言葉は、それなりに効果があったようで、男があからさまに怯んだ顔をした。
「なん…だと？」
「第一、余所のテーブルに乱入するなど無粋にも程がある」
痛いところを突かれてか、男が眉根を寄せて押し黙った。

そのまま、男の視線が脇に逸れた。
そして、テーブルの一角に着いていた一人の女の姿を捉えると、その目が実に興味深そうに細められた。
顔を伏せていたリョウは、只ならぬ視線を感じて、居心地悪そうに身じろいだ。
鼓動が脈打つのに合わせて、血液が体内をもの凄い速さで巡り始めていた。
「おや？　こんなところに女性がいたとは。これは失礼」
そう言って、急に身に纏う空気を和らげた男に、リョウはこのまま無視を決め込む訳にはいかなくなった事を悟った。
どうか気が付きませんように。祈るような気持ちでゆっくりと顔を上げた。
そこにあったのは、昨日、自分を娼館の一室に強引に招き入れた時と同じ、どこか胡散臭い微笑みのようなものを浮かべている男の顔だった。
リョウは無言のまま、静かに目礼を返すだけに留めた。
「ルスラン。どういう風の吹き回しだ？　お前が女連れで来るなんて」
からかうように男がユルスナールを流し見たが、瑠璃色の瞳はそれに応えることなく、冷たさを孕んだまま、より一層の剣呑さを増しただけだった。
「おやおや。随分とおかんむりのようだ。勿体ぶることもないだろうに」
そう言って、大げさに肩を竦めて見せると徐にリョウの傍に歩み

寄った。
そして、あろうことか、テーブルの上にそっと置いていた小さな手の上に男が自分の手を重ねた。
途端にリョウの背筋に悪寒が走ったが、それを慌ててやり過した。
男はリョウの手を少し持ち上げると、腰を屈めて顔を近づけた。
「初めまして。麗しいお嬢さん。ああ、貴女はまるで現と夢の狭間を彷徨う夜の精のようだ。私は差し詰め、貴女の魔法に掛かった愚かな旅人だ。どうか、そのお名前をお聞かせ下さいませんか？」
男の本性を知る身からしてみれば、全くもって笑えない白々しい程の歯の浮くような台詞に、引き攣りそうになる口元を叱咤しながら、リョウは、息を整えると、ゆっくりと微笑んで見せた。
「それでは、ワタクシは泡沫（うたかた）の存在。夢か現か分からぬものに名乗る名などございません」
そう言ってやんわりと男の手の中から自分の手を抜き出した。
すると、男は拒絶されるとは思ってもみなかったのか、芝居掛かった様に胸に片手を当てて、傷ついた顔をして見せた。
「これは勝気なお方ですな。随分とつれないことを仰る」
「こいつは振られたな。レオニード」
茶々に入ったブコバルを男は睨みつけた。
だが、直ぐにそれを気に留めずに言葉を継いだ。
「それとも、そうやって私の気を引こうとするお積りですかな？」
――――――どうしてそうなるのだ。
昨日も感じた事だが、この男の思考回路をリョウは到底理解できそうもなかった。
「まぁ、そんな恐れ多いこと」
リョウは性質の悪い酔っ払いに絡まれている気分になっていた。
出来るだけ無駄に高い男の自尊心を傷つけないように気を付けながら言葉を選ぶ。こちらに気が付かない内に早くお暇をして欲しかった。
だが、そう思ったのも束の間、じっとこちらを見下ろしていた男

が首を傾げた。
「……はて、お嬢さん、何処かで、お会いしたことはございませんかな？」
核心に近づきそうになる言葉をリョウはさらりとかわした。
「まぁ、こちらの殿方は、皆さん、お上手ですこと」
その言葉は、口説きの常套句でもあったからだ。
リョウは口元に手を当てると小さく笑った。なるべく軽薄な空気になるように。そして、この男の興味が早々に自分から離れるように。
だが、その願いも虚しく、男の視線が、つとリョウの開いた胸元に煌めくペンダントに注がれた。
歪な形をした濃紺の石は、室内を照らし出す柔らかな橙色の発光石の灯りの下、穏やかな青白い光を放っていた。
リョウは反射的にそれを手で覆った。そして、自分で取ったその行為に愕然とした。
なぜなら、それは昨日、この男の前でも取った反応であったからだ。
その瞬間、男の目が何かを見定めるようにすっと細められた。
「おやおや。これは、珍しいものを着けていらっしゃるようだ。【キコウ石】とは」
男の灰色の瞳が、意味深に怪しく輝いた気がした。
男は身体を起こすと、改めて、ゆっくりとテーブルに並んだ顔触れを見渡した。
ユルスナールは、ごっそりと感情の抜けた能面のような顔を晒していた。ドーリンは相変わらずの無表情だ。次に男と目が合ったブコバルは苛立ちの中にも苦々しい顔をしていた。
その居並ぶ男たちの反応を見て、男なりに何か思うところがあったらしい。殊更ゆっくりと頷いて見せると、不意に白々しい笑みを浮かべた。

「ついこの間、偶然にも似たような代物を目にする機会があったのだがね。はて、どこであったか」
表情を変えないまま、沈黙を貫いたリョウに、
「それを首にぶら下げていたのは、随分と小生意気な小僧の筈だったが、確か、その者も黒い髪に黒い瞳だった」
――――――そう、貴女のようにね。
男の目が、何かを探る様に険を帯び、すっと細められた。
「それは、凄い偶然ですね」
対するリョウもその口元に微笑みを湛えて、同じようにシラを切っていた。
ここで認める訳にはいかなかった。たとえ相手が何がしかのことに気が付いていたとしても。
「ええ。仰る通り。単なる偶然としては出来過ぎている。そうは思いませんか？」
「ですが、そういうことも、【偶には】あるのではありませんか？」
「そうですね。【偶には】ね」

「レオニード・ボストークニ」
リョウの隣から鋭い声が上がった。
それ以上、男の暴挙を見逃す訳にはいかなかったのだろう。
降りた沈黙を刺し貫くように、低く漏れたユルスナールの声は、異様な程の緊張感と冷たさを運んで来ていた。
「下らないお喋りはそこまでだ。お前は自分の所に戻れ。即刻だ」
ユルスナールは椅子から立ち上がると、男の傍に歩み寄った。
その隙に、ドーリンは戸口に控えていた給士の男に何がしかの合図を送ったようだった。
「私に指図をするのか、ルスラン」
――――――嫌だと言ったら？
男の口元が挑発的に上がった。
「指図ではない。これは諫言だ」

だが、凍りつくようなユルスナールの視線に、男は反対に興味を引かれたようだった。

「何だ、ルスラン。やけにこのお嬢さんを隠そうとするんだな。そんなことをされると余計に気になるだろう？」

軽薄な緩い笑みを浮かべた男の反応をユルスナールは黙殺した。

「もう一度、言う。この場から失せろ。不愉快だ」

ユルスナールは、リョウの前に立つと、不躾な男の視線から遮るように自らが壁になった。

リョウは、舐めるような男の視線から逃れることが出来て、詰めていた息を吐いた。

「レオニード。お遊びはそこまでだ。その辺にしとけ。悪いことは言わねぇ」

そして、対面に座るブコバルからも相手を諌めるような声が掛かる。

その口調は、のんびりとしたものだったが、その目は決して笑ってはいなかった。

ゆっくりと目の前に立つ、屈強な身体つきの男たちを見て、

「なんだ、なんだ、二人して」

あからさまに興醒めだと言わんばかりに男が肩を竦めて見せた。

だが、そのような三人の男たちの背後から、

「レオニード。時間だ」

ドーリンの冷静な声が掛かった。

簡潔に言い放ったドーリンの視線の先には、男の目付け役である筈の従者が戸口の陰で丁重に控えていた。

ユルスナールの背中越しに見えたその男の顔にリョウは見覚えがあった。

忘れられる訳がない。往来で自分を捕らえ、あの男の下に力づくで引き摺った相手なのだから。仮面のような感情の乗らない抑制された面。主の命令とあれば、目的の為には手段を選ばないであろう冷徹な男だ。

リョウは無意識に剥き出しになっている左の二の腕を右手で覆った。今はもう無くなったが、あの後暫く、男に掴まれた場所には、赤い跡が付いていたのだ。

従者の登場に、男は面白くない顔をした。

だが、それが潮時であったようだ。

「レオニード様。あちらがお待ちです」

従者の男が表面上、恭しく告げた。

四人の男たちからの視線に、駄々を捏ねていた男も漸く諦めたようだった。

「分かった」

そして、何事もなかったかのようにするりと踵を返した。

「邪魔をしたな。それでは、この辺で失礼する」

だが、そのまま立ち去るかに見えた男は、戸口の所で不意に思い出したように、後方を振り返った。

「ああ、それから、ルスラン。来月、【スタリーツァ（王都）】には、お前も出て来るのだろう？　楽しみにしている。ではな」

そんな言葉を残して、お騒がせな台風の目のような男は、上機嫌に去っていったのだった。

後味の悪い空気を部屋の中に残して。

男が去った背中を見送ってから、リョウは脱力したように椅子の背もたれに身体を預けると大きく息を吐いた。

「大丈夫か？」

顔色の悪くなったことを案ずるようにユルスナールがリョウの顔を覗き込んだ。

「はい」

問題ないと小さく微笑んでみたのだが、それが直ぐに、何とも言えない間の悪い表情に変わった。

「もしかしなくても、感づかれてしまいましたよね」
それは、あのレオニードという男が、自分のことをカマールの弟子だとして拘束した少年であると当たりを付けたかもしれないということだった。
そう言って、ちらりとブコバルへ視線を投げれば、
「まぁ、半々ってとこだろ」
ブコバルは、心底、嫌そうに眉根を寄せてぼんの窪に手を宛がった。
「アイツは元々、あんまし勘のいい方じゃねぇが、今回ばっかりはな。同一人物と見做されなくとも、関係はあるって思われるだろ。姉弟とか。だが、まぁ、いずれにしろ、ルスランの関係者だって知れた時点で、面倒なことになったってのは変わりねぇだろ」
「どういう意味ですか？」
その言葉にリョウは首を傾げた。
あの男がここにいる三人の男たちの顔見知りであるということは分かったが、それがどうして『面倒なこと』になるのだろうか。
「ああ？　ああ、そうか。こうなりゃ、行き掛かり上、言っておかねぇとな。なぁ、ルスラン？」
そう言って相棒を流し見みたブコバルに、ユルスナールは無言のまま、眉間に一層の深い皺を寄せた。
その後方で、ドーリンもどこか苦々しい表情を浮かべていた。

それからブコバルは、簡単に、先程の男とユルスナールとの間に古くからある確執という名の溝を説明したのだった。
早い話が、あの男が、事ある毎にユルスナールに張り合い、目の敵にして、なにかと絡んでくるという話だった。それは、幼いころからの変わらない構図だという。そして、てんで相手にされないユルスナールに飽き足らず、いつもその傍にいるブコバルに対しても、その矛先が向けられるようになったのだと聞いた。
その事を耳にしたリョウは、何とも言えない複雑な表情を浮かべ

た。呆れてモノが言えないというよりも、最早、莫迦らしくて仕方がない。何とも子供染みたことに思えて仕方がなかった。

だが、先程の男の様子を見る限り、あの男の方は、実に大真面目なのだ。

あれは、あの男なりの愛情表現の裏返しなのだろうか。ユルスナールのことが好きで仕方がない。そして、その相手に自分を認めてもらいたい。自分を対等の立場として認識してもらいたい。若しくは、単純に構って欲しい。話を聞くだけならば、そんな幼い子供が持ち得る欲求に似たような感情が透けて見える気がして仕方がなかった。そして、可愛さ余って憎さ百倍。憧憬や思慕が転じて、憎悪を生みだすまでになった。

だが、それは、ざっとこれまでの話を聞いてリョウが抱いた、あくまでも個人的な感想というか推察にしか過ぎず、あの男の行動の根幹を支えている原因やその思想は、男が育った環境やその周辺の人間関係などを知らずして、決めつけることなど出来なかった。それにそんな単純なことではないのかもしれない。唯、表面に見える事象を目にしただけで、あまり迂闊なことを口に出来る訳がなかった。

「ルスランも、大変なんですね」

リョウの口から出たのは、そんな慰めにもならないような言葉だけだった。

同情とも憐みともつかない視線を受けて、ユルスナールは口元をへの字に曲げたのだが、

「おい、リョウ。お前、そんなこと言ってっけど、他人事(ひとごと)じゃねぇぞ？」

「はい？」

思ってもみなかったブコバルの言葉に、リョウは呆けた顔をした。

「ああ。少なくともあの男はお前に興味を持った」

ユルスナールまでもがそんなことを言って、心底、鬱陶しそうに、

お茶の入ったカップに口を付けた。
淹れたてで温かかった筈のお茶も、招かれざる客人の登場の所為で、すっかり冷めてしまっていた。
ユルスナールは、給士にお茶を淹れ直すように頼んだ後、軽く息を吐いた。
「だが、まぁ、余程のことが無い限り、顔を合わせることもあるまい」
「そうは言えんだろう」
優雅にカップを傾けたまま、ドーリンが尤もらしく口にした。
冷静な指摘に、暫し、現実逃避をしていたユルスナールとブコバルの思考が戻った。そして、二人とも苦い顔をした後、何かを振り切る様に緩く頭(かぶり)を振った。
「ま、用心すりゃぁ、いいか。対策、立てておけばよ」
「そうだな。そうするしかあるまい」
そう結論付けると、大きな溜息を吐いたのだった。

そうこうするうちに、給士の男が新しくお茶の入った茶器を持って戸口に現れた。そして、丁寧な所作で、銘々のカップに温かいお茶を注ぎ足して行った。
そこで、この話題は一旦、終了となった。
再び、テーブルに着いた四人は、無言のまま淹れ直されたお茶へ手を伸ばした。
こうして、新たに生まれた若干の不安定要素を残したまま、食事会は終わりを告げたのだった。

踊る影法師

「よぅ、大将。今夜もすっぽかされるかと思ったぜ？」
室内に入って来た人物の顔を見るなり、中に居た男の一人が、飄々とそんなことを口にした。
「済まなかったな。ルーク」
男としてはからかい混じりの厭味をぶつけた積りであったのだが、顔色を変えることなく淡々と返された相手からの反応に、男は、やってられないとばかりに天を仰いだ。
「かぁ～、この色男が。恐れ入ったぜ。旦那も隅には置けねぇな」
癖のない金茶色の髪がさらりと流れた。それに伴い長い髪で覆われていた筈の男の顔面の左半分、額際から眼の上を縦断するように斜めに走る引き攣れた古い刀傷が、ほんの一瞬だけ覗いた。

この部屋に来る前に簡単に汗を流したのだろう。まだ乾き切らない湿り気を帯びたくすんだ銀色の髪を手櫛で簡単に撫で付けただけの男からは、いつにない色気のようなものが憚らずに滲み出ていた。
浴室に備え付けられていたものだろう。石鹸の香りが仄かに男の方から漂って来る。
だが、そこに付随するように、心なしか気だるげな男の様子には、何処か退廃的な匂いが付加されていた。
要するに、早い話が、男が身に纏う空気は、如何にも束の間の情事の後と言わんばかりの風情だったのだ。
中に居た男たちは、良くも悪くも、皆、勘の良い者たちばかりだった。男から発せられる常とは異なる気配に、ここに来る前の男の行動の一部始終が手に取るように分かったのだろう。
だが、敢えて、そのことを面と向かって、この場で口にするような野暮な輩は居なかった。

――――とある一名を除いては。
「中途半端に火ぃ点けとくと後が大変だぞ、ルスラン。今頃、悶々としてんじゃねぇか、おい」
――――それはそれで美味そうだけど。
青灰色の瞳が何かを想像するようにうっそりと細められた。
無数の透明な糸のような緊張感が蜘蛛の巣のように周囲に張り巡らされた室内で、そんな惚けたことを口にすることが出来るのは、そう、皆さまの御想像の通りの男、ブコバル・ザパドニークである。
昼間に剃刀を当ててから、夜になって、もう薄らと濃さを増した無精髭の顎を摩りながら、何やら意味深な目配せをしたブコバルに、それを仄めかされた当人であるユルスナールは、無言のまま、若干の呆れを含んだ冷ややかな視線を投げた。
だが、次に何やら思い付いたというようにその口元に小さく笑みを刷いた。
「心配には及ばん。夜は長いからな」
そんな台詞を吐いて、額際に垂れ下がった髪をかき上げた。
幼馴染の容赦ないからかいもなんのその、余裕綽々の態度である。
「ぐはぁ～」
それを目の当たりにしたブコバルは、潰れたような声を上げると、あからさまに苦い顔をして顔を覆った。
だが、ブコバルが何かを言い返す前に、
「じゃれ合うのはその位にしておけ」
室内に冷静沈着な男の声が響いた。
中に居たもう一人の男、ドーリン・ナユーグが軌道修正をするように男たちの注意を引き付けたのだった。
「ああ。済まない」
ユルスナールは、そう言うと表情を引き締めた。
そして、同じようにブコバルも緩んでいた空気を改めた。
「【ラーパルト（報告）】」

再び、落ち着いた空気に、ユルスナールは、一人掛けのソファに片足を上げ、片膝を抱えるようにして座る男の方に向き直った。

あれから、【エリセーエフスカヤ】での食事会を終えた一行は、表玄関から外に出ると、入口付近の車止めに用意されていた二頭立ての馬車に乗り込み、ユルスナールとブコバルが滞在している定宿へと向かった。

その店から宿屋までの道のりは大した距離ではなく、十分徒歩圏内であったのだが、再び着替えるのが面倒だということで、そのまま正装で戻ることになったからだ。無論、男たちだけならば徒歩でも問題はなかったのだが、夜会用の服を着たリョウをそのまま連れて行く訳にはいかなかった為でもあった。

行きに身に着けていた服は、店に出入りする配達人（ポーター）に頼んで、後で纏めて送り届けてもらうように手配された。

そして、男たちは荷物の中から長剣だけを腰に佩く形になった。

リョウも二本の短剣を手元に置いた。

リョウは【プラーティエ（ドレス）】の上から、ユルスナールが身に着けていた【シィネェーリ（外套）】を借りて羽織っていた。

上等な毛織物で出来たその外套は、肌触りも柔らかで温かく、仄かに馴染み深い男の匂いがした。

リョウは初めて目にする馬車に興味津々だった。

まずは御者台の方に回るとそこに繋がれている二頭の馬に世話になる旨の挨拶をした。

「よろしくお願いしますね」

『ああ』

『おやおや、お前さんは分かるのか。なぁに、任せておくがいい。わしらの仕事だ』

鷹揚に言葉を返した二頭の鼻面をリョウは微笑みを湛えながらそっと撫でた。

それから、リョウは男たちと共に中に乗り込んだのだ。

大きく見えた馬車も、大柄の男たちに囲まれれば、中はそれなりの圧迫感があった。

「ほら、リョウ。もう少し、こっちに寄れ」

リョウの隣にはユルスナールが座り、対面には向かい合う形でブコバルとドーリンが並んでいた。

三人の男たちの中で、一番体つきががっしりとしていて身幅があるのはブコバルであったので、その隣に収まったドーリンは些か窮屈そうであった。

「あの、代わりましょうか？」

縮こまったドーリンを気の毒に思ったリョウは、まだ小柄な自分がそちらに行った方が良いかと思い声を掛けたのだが、

「あ？　なんだ。俺の膝の上に乗るか？」

頓珍漢な事を口走ったブコバルの言い草は放って置いて。

「その必要はない」

ユルスナールから低く否定の言葉を出されて、

「いや、……大丈夫だ。もうすぐだからな」

ドーリンは、ちらりとユルスナールの方を見た後、どこか居心地が悪そうに首を振った。

そうして、暫くガタガタと石畳の上を馬車は進み、宿屋の前で止まった。

道すがら【ツェントル】の前を通り、そこで官舎に戻るかと思われたドーリンは、その場所で降りることなく、一緒に宿屋まで来るとその中に入って来た。

男たちの口振りから、ドーリンは、このままブコバルが滞在している部屋に付いて行くらしかった。
「じゃぁ、またな」
「ごちそうさまでした。お休みなさい」
「ああ。お休み」
「ルスラン」
「ああ、分かった」
部屋の前で、形通りの挨拶を交わす。
そして、何がしかの遣り取りをした後、リョウはユルスナールに促されるようにして、再び、部屋に戻った。

その後、ブコバルの部屋へ集まる約束を交わしているらしいユルスナールは、簡単に汗と【エリセーエフスカヤ】で間接的に浴びた女たちの香水からの移り香を洗い流す為に浴室へ入ると、再び、部屋を後にしたのだった。
その時に、リョウは、何故かユルスナールに引っ張られる形で、半ば強引に浴室に連れ込まれてしまった。
この後直ぐに、ブコバルやドーリンたちと今宵の収穫について話し合いをするのだろう。こんなところで時間を無駄にしている訳にはいかないのではと、リョウにしてみれば至極もっともな提言をした積りであったのだが、対するユルスナールは何食わぬ顔をして、リョウのドレスに手を掛けると、驚くほどの速さで身ぐるみ剥いでしまったのだ。
そして、手早く自らも着ていたものを脱ぐと浴室に入り、浴槽の直ぐ上の箇所にあるお湯を注ぐ注水石ではなく、その遥か上にあるもう一つの注水石の方へ手を翳した。すると天井に設えられた細かく小さく穴が開いた場所から、温かいお湯が一気に降り注いできた。
それは、この国で初めて目にする『シャワー』とも言うべきものだった。
リョウは呆気に取られて、降り注ぐ温かい湯が出る場所を見上げ

た。ここにも同じようなものがあるとは思わなかった所為だ。
そうやって一瞬、天井に気を取られた隙に、リョウは身勝手な男の太い腕に捕らわれてしまったのだ。
それから、ユルスナールは、手早く身体に染みついた甘い移り香を洗い流した。そして、自分の身体だけでは飽き足らずに、ご丁寧にリョウの身体にまで手を伸ばしたのだった。

無論、健全な若さ溢れる男であるユルスナールが、幾ら紳士的で抑制の取れた男だとしても、好いた女を狭い浴室に引っ張り込んで、文字通り、単に汗を洗い流すだけで終わる筈はなく、リョウが食事前に恒例になっていた待合室での歓談で、集まった客の男たちから声を掛けられ、粉を掛けられていた場面を何度も目にして、内心穏やかではなかったことも拍車を掛けたのか、その時に疼いた嫉妬心を紛らわす為か、それなりの確認事項を含んだ身体的接触を試みたであろうことは、想像に難くなかった。
それから上機嫌さを隠すことなく、手早く身支度を整えた男は、ブコバルの待つ部屋に赴いたのだった。
一人、気だるげな様子のリョウを大きな寝台（ベッド）の中に残して。

そして、場面は、冒頭に戻る。
男たちが集うのは、同じ宿屋にあるブコバルが滞在する部屋だった。
「餌には食い付いたようだな」
静かに切り出したユルスナールに、一人掛けの椅子に座っていたルークは、愉快そうに目を細めた。
干からびた梢のような線の細い皺が、唯一顕わになった男の右側の目尻に表れた。
「ああ。すっかり話題はお前さんたちで持ちきりだ」

「お前の方は、ゲオルグとアファナーシエフの方だったな」

ゲオルグとはこの国の軍部、第三師団長の名前だった。そして、アファナーシエフは王都でも力を持つ名門貴族の一人である。両者とも軍部の諜報機関【チョールナヤ（黒き）・テェニィ（影）】の影であるルークが密かに追っていた相手だった。

「そう言えば、アファナーシエフの所の男がいただろう？」

ふと立ったまま窓辺に寄り掛かって腕を組んでいたドーリンが、思い出したように顔を上げた。

「ああ、ソルジェだ。あの男の懐刀の一本ってとこだろ」

打てば響く様にルークが答えた。

「取り敢えずの様子見か」

「そう考えるのが妥当だろうな」

「余り収穫はあるまい。それより、アシュケナージの傍に張り付いていた女がいただろう。どこかで見た気がするんだが……」

そう言えばと言うように、二人掛けの長椅子に腰を下ろしたユルスナールが長い脚を組みかえた。

アシュケナージとは、この街の有力者である男の名だった。

代々この街を拠点に発展してきた豪族の一人で、この街に集まる金属鉱石の取引に多大なる影響力を持つ一家だった。

「ああ。ありゃぁ、ゲオルグのコレだろうよ」

そう言って、ブコバルが右手の薬指を立てた。

それは、この国では情婦を表わす隠語的な符号だった。

「ああ。そうか」

ブコバルの指摘に、己が記憶を辿っていたユルスナールの中でも該当者がいたようだ。

そして、ぽつりと呟く。

「相変わらず趣味が悪い」

「ありゃぁ、昔っからだろうよ」
顔を顰めたユルスナールに、ブコバルが可笑しそうな視線を投げた。

「そういやぁ、ボストークニんところのイカレ坊主とも鉢合わせしたみてぇじゃねぇか」
ルークからのからかい混じりの言葉に、ユルスナールは途端に嫌そうな顔をした。
「珍しく鼻が利いたようだな。向こうの方から挨拶に来た」
まぁ、幾ら鈍い男だとしてもあれだけ周囲が騒いでいれば、嫌でも耳に入ることであろうことは明らかだった。
「アレは、誰と約束をしていたんだ？」
不意に気になった事を聞いてみれば、
「ああ。相手は、どうもアシュケナージらしいぜ。なぁ、旦那」
ルークが確認をするようにドーリンを見遣れば、【ツェントル】の所長として部下を内部に配置させていたドーリンは、その役を担っていたウテナから報告を受けたのか、その言葉を肯定するように頷いて見せた。
「ああ。間違いない」
「そうか」
王都からこの街【プラミィーシュレ】にやって来た貴族が、街の有力者であるアシュケナージに挨拶をするのは、ごくごく普通のことだった。
レオニード・ボストークニがこの街を訪れた目的は、長剣を誂える為の鍛冶屋を探しているとのことだった。恐らく、この街の鍛冶職人の寄り合い（ギルド）と武器商人たちにも顔が利くアシュケナージに、何がしかの口添えを頼む積りなのかもしれなかった。カマールとの一件を聞いた後は、余計にそう確信したのだ。
そして、レオニードが去り際に残した【来月、スタリーツァで会おう】という言葉。

今後、待ち受けているであろう事態にユルスナールは、内心、憂鬱になった。

それは、来月の末に王都【スタリーツァ】で開催される武芸大会のことを示していた。

毎年、この冬の一時期に、王都では国内軍部の各師団から選抜した腕に覚えのある兵士たちを集めて、その腕を競わせる武芸大会が開かれていた。

それは、国内兵士の士気と各師団の統率を高めるお祭りのようなものだった。

競技は、師団毎の団体戦の他、自由参加を募る個人戦の枠もあり、そちらは勝ち抜き戦で競われた。そこで技量を見込まれた傭兵などが、改めて国の軍部へ登用されることもあった。要するに寒さの厳しくなる冬に行われる王都での一大行事（イベント）でもあった。

ユルスナールは、毎年、その大会に参加をする常連者であったのだ。そして、レオニードも同じだった。

積年の因縁を、剣を交えた場所で果たそうとでも言うのだろうか。

ユルスナールとしては、何故そこまでしてあの男が自分に拘っているのかが、全く理解できなかった。　だが、正々堂々真正面からぶつかってくる相手をひらりとかわそうとは思わなかった。

煩わしいことに違いなかったが。

それから、今後の方針を簡単に打ち合わせて、秘密裏に持たれた男たちの会合はひっそりと終わりを告げた。

発光石の明かりを極力落とした室内、いつも通り、慣れた闇の中に潜んだルークは、去り際、意味深な笑いを漏らしてユルスナールを見た。

「ご苦労だったな」

「ああ。かまやしねぇさ。それより、旦那、待たせてんだろう？可愛い小鳥を。ありゃぁ良い声で啼く」

その言葉に、ユルスナールは一瞬、虚を突かれた顔をした。

そして、すぐさま男の真意を悟った。
詰まり、昨晩、ルークは自分の部屋を訪れていたということだった。恐らく、あの最中に、だ。
昨日の昼間、この男が自分の所に来るであろうことはブコバルから聞いていたのだ。忘れていた訳ではなかったが、あの時、すっかりその事が頭から抜け落ちていたことは確かだった。
内心、ばつが悪い思いをしながらも、ユルスナールはそれを面に出すことなく、
「済まなかったな」
もう一度、そんな謝罪の言葉を口にしていた。
それを見たルークは小さく可笑しそうに掠れた笑い声を漏らすと、再び、来た時と同様、深まる闇の中に消えたのだった。

踊る影法師（後書き）

お知らせ：本編の中で少し触れたリョウとユルスナールの浴室での顛末はムーンライトノベルズの方で連載しているＭｅｓｓｅｎｇｅｒの短編集、Ｉｎｓｏｍｎｉａの方に載せています。もしよろしければ、そちらもどうぞ。

名残の刻

【エリセーエフスカヤ】での翌日から、リョウは旅立ちの準備を整えながら、この街、【プラミィーシュレ】滞在中にお世話になった人たちへの挨拶回りを開始した。その途中、街中を回る序でに当座の食料等も買う積もりでもあった。

元より荷物は最低限の少なさだ。ここに来て増えたものと言えば、カマールの師匠レントから貰った短剣だけ。それも右の太ももに巻いたベルトに付けているから荷物の内には入らないだろう。

ユルスナールから贈られた形になった夜会用のドレス一式と娼館の女主イリーナから譲り受けた使用人風の服一式は、悪いかとは思ったが、ユルスナールに託すことにした。

森の小屋では、そもそも必要の無いものであったし、なるべく身軽なまま帰りの旅路に着きたかったので、迷惑を掛けるとは思ったが、馬で来ているユルスナールたちに、それらを北の砦まで運んで貰えるように頼んだのだ。後日、取りに行くからと約束をして。

ユルスナールとブコバルの二人は、まだもう暫く、こちらに滞在するようだった。

ユルスナールの方は、カマールに預けている長剣の調整がまだ掛かるとのことだ。それに別件でも用事が残っているらしかった。ブコバルの方も似たようなものらしい。

二人の今後の予定を聞いた後、先に出立する心積り伝えたリョウをユルスナールとブコバルは当然のことながら、引き止めた。どうせなら、共に帰路に着いた方が安全面から見てもいいだろうと。

リョウの移動手段が徒歩であることを考えれば、馬を使う男たちの方が格段に早く着く。それに、ユルスナールとブコバルにしてみれば、この国では幼い少年に見えるリョウが一人旅をするのは、非

常に危険に思えたからだ。
大きな戦が終わり、疲弊した国内も漸くここ十年で上向いて来た頃合いだった。治安も人心も一時に比べて格段に良くはなったが、物盗りや盗賊の輩がいなくなった訳ではないのだ。リョウのような如何にもなか弱い輩は、格好の餌食にされるだろう。恙無くここまで辿りついた行きの行程は、単に運が良かっただけかもしれないのだ。
ユルスナールは、心底心配をして、リョウに自分たちの用事が済むまでここで待ち、共に帰路に着くことを勧めたのだが、リョウは首を縦に振らなかったのだ。
リョウに万が一のことがあったらと考えるだけで、ユルスナールは異様な程に肝を冷やしたのだが、そんな男の心配を余所に、当の本人であるリョウは実に呑気なものだった。
余りに言い募るユルスナールを見て、仕舞には『大袈裟だ』と笑いだす始末。そして、自分にはヴォルグの長であるセレブロがいるから大丈夫だとまで笑顔で言ってのけたのだ。
リョウにしてみれば、ただでさえ、ユルスナールに迷惑を掛けているという自覚が多いにあったので遠慮をした積もりだったのだ。
だが、男の方にしてみれば、それは思いも寄らない展開であったようだ。
身体も心も通わせて、ユルスナールはリョウのなにがしかを理解出来たと思っていた矢先のことだった。通常であれば、そして、女であるならば、自分を頼り、その申し出を受けるであろう。基本的に女性はか弱い存在で守るべきもの。そういう常識を前提としたこの国の、とりわけ貴族階級の中で育ってきたユルスナールは、そう信じて疑わなかった。
だが、　元より独立心の強いリョウは、たとえ、男と以前よりも親密な関係を築くことに至ったとしても。いや、違う。それよりも、逆に親密な関係になったからこそ、必要以上の馴れ合いを良しとしなかったのだ。

親しき仲にも礼儀あり。今後、この場所で地に足をしっかりと着いて生きて行く為にも、自分で出来ることは自分で行わなければならない。それは、この国とは異なる環境に生まれ、育ったリョウの信条でもあった。

過度の依存は互いに悪い影響を及ぼす。最初の内はいいかもしれないが、長い目で見れば、それは両者を疲弊させる綻びになり得た。

束の間の関係であれば、それでいいのかもしれない。だが、リョウとしては、ユルスナールとの関係をそのような浅いもので終わりにしたくはなかったのだ。

それが、環境は異なれども、それなりに長い時間を自立して暮らしていたリョウの導き出した相手との距離感だった。

その辺りのリョウの下した線引きをユルスナールは当然のことながら理解出来なかったのだ。

一人、帰路に着く。そう告げられた時のユルスナールの衝撃は、いかばかりであったろうか。

表情は余り変わらないながらも、余りの落胆ぶりに、あのブコバルでさえ、軽口を叩くのを忘れた位だった。悄然とした幼馴染の姿を見て、ブコバルはなんとも言えない顔をして慰めるように相棒の肩を叩いたのだった。

その後も、ユルスナールはリョウに考えを改めるようにと説得を試みていたのだが、その努力を裏切るかのような出来事が出現してしまったのだ。

というのも、リョウが頼りにしていると言い放ったヴォルグの長であるセレブロが、この街に現れたからだ。

しかも、驚くべきことに、人の形を取って。

ユルスナールは、宿屋の敷地内の奥まった所にある厩の前で、リョウの隣に仲睦まじそうに寄り添う長身の男の姿を認めて、愕然とした。

セレブロは、白い光輝く長髪を緩く靡かせ、ゆったりとした長衣

を腰に巻いた帯で留めていた。その上からガルーシャが身に着けていたような長い外套を羽織っていた。
要するに術師のような格好だった。
話には聞いていたが、実際にその姿を目にするのでは衝撃の度合いが違ったのだ。

リョウにとっては元より予定などない旅であったが、余りにも長い逗留にセレブロの方がどうも痺れを切らしたらしかった。それに、ここ数日のキナ臭い動きを感じたのだろうか、用心棒よろしく自らが迎えを買って出たということだった。
セレブロの隣にいるリョウはいつになく嬉しそうで、ユルスナールとしては、仕方がないと分かってはいても、内心、面白くはなかった。
だが、そんな心の内の葛藤を顔に出すことはしなかった。男の意地（プライド）をかけたやせ我慢ではある。
そうして、ユルスナールは複雑な心の内を胸内に隠しながら、渋々とリョウの出立を認めたのだった。
無茶なことは絶対にするなときつく約束をさせて。

そのような訳で、ユルスナールは方向転換をせざるを得なかった。そして、出された結論が、残り少ない時間を共に過ごすということだった。
そういう具合で、往来に出たリョウの傍には、銀色の髪をした長身の男が寄り添うように連れ立っていたのだ。

リョウは、まず、鍛冶職人の寄り合い（ギルド）にいるレントの元を訪れた。
帰郷の旨を告げれば、レントはただ一言、そうかと笑っただけだった。

「達者でな」
「はい、レントさんもお元気で」
「ああ」
「また顔を出しますから」
リョウは、滲み出そうになる涙を堪えて、穏やかな笑顔を浮かべた。
恐らく、レントとは、これが最後の別れになるだろう。
互いに口に上せる言葉とは裏腹に、リョウにはそんな予感がしていた。
だが、そんなことを払拭するように明るい笑みを浮かべた。
「帰ったら、薬湯用の薬を送りますね。知り合いの鷹を伝令にしますから、レントさんの朝のお友達にも伝えて置いて下さい。いきなりだと、きっと吃驚するでしょうから」
恒例の朝のお喋りの時間に大きな鷹が現れたら、小さな鳥たちは飛び上がって腰を抜かすだろう。
「ちげぇねぇ」
レントは、小さな姦しい小鳥たちのことを思い出してか、可笑しそうに笑った。
そして、ふと、何を思ったのか、部屋の戸口の前に控えていたユルスナールの方を見遣った。
「おめぇも、もう立つのか?」
その問い掛けに、ユルスナールは静かに首を横に振った。
「いえ。もう少し此方に。まだ調整が必要なので」
「何でぇ、坊主の方が先にけえっちまうのかよ。むさ苦しいったらありゃぁしねぇなぁ」
片方の眉をくいと跳ね上げて、相変わらずの憎まれ口を叩いた男に、ユルスナールは飄々と肩を竦めて見せるだけに留めた。
そしてレントは再び、寝台(ベッド)の傍に座ったリョウへ視線を向けた。
「おめぇは、ガルーシャのおんぼろ小屋までけぇるんだろ? 確か、スフミのずぅっと先にある」

「はい」
「まさか、一人じゃねぇだろうな？」
心なしか心配そうに目を眇たレントに、リョウは案ずることはないと微笑んだ。
「大丈夫です。迎えが来ましたから」
その言葉にレントは目を丸くした。
「ああ？　迎えって、あんなとっからか？　まさかぁ森の狼とかじゃぁねぇだろうなぁ？　んな、辺鄙など田舎から出てくるなんざぁ、余程のこったぁ。豪気なことだせ」
当たらずとも遠からず。セレブロは似たようなものだろう。
そんなことを言ったレントに、リョウは可笑しそうに笑った。
「似たようなものですかね」
「ハハ、そうかい。まぁ、一人でねぇならいいか。ハッ、てぇと、おめぇはお役御免か、え？」
部屋の壁際に腕を組んで寄り掛かっていたユルスナールをレントはからかうように仰ぎ見た。
レントが、この両者の関係に関して、何を何処まで知っているのかは分からなかったが、ユルスナールが、レントの目から見ても、いつもとは違う行動に出ていることは、相当、滑稽に映っていたようだった。
屈強で強面の兵士然りとした男が、線の細い少年の傍に張り付いている姿は、やはり端から見れば異様なもので、柄にもないことをしていると思われているであろうとはユルスナールも分かっていた。
この男にとってみれば、そのような世間的な評価など取るに足らないことだったが、それを正面から指摘されるとなると少し違う。しかも相手は男の幼いころからの知り合いだ。
図星を突かれてか、押し黙ったユルスナールをレントはからかうように流し見た。
「まぁ、いいさ。おめぇの陰険なぁ面も、大概、見慣れてきた頃合いだしな。今更ってぇとこだろうがよ」

そう言うとからりと笑った。
それは、晴れ渡った冬空のように澄んだ笑みだった。
最後に、【パラ　フェルメ　ス　リュークス（リュークスの加護がありますように）】――――――合言葉のような決まり文句を交わして、リョウは寝台に体を起こしたレントと抱擁を交わすとその両頬にキスを送った。

それから、ラリーサ、コースチャ姉弟の父親を訪ねた。
二人の子供たちの父親の踝の腫れは、事前に鷹のイーサンに聞いていた通り、思いの外、引いていて、リョウは安堵の息を吐いた。
手当てを施された父親の方も半信半疑のようだったが、翌朝、包帯を代えた時に物凄い量の膿が出て驚いたと言っていた。
人にとっては毒であった成分が薬の効き目によって不要なものとして排出されたのだ。人間に本来備わっている治癒機能、内部均衡（バランス）を保とうとする力が、上手い具合に働いたようだった。
ガルーシャの呪いが思った以上に効いたのか、その結果は、リョウとしても驚く位だった。
今後は、同じように薬を塗って、暫く様子を見る外ないだろう。
完治には程遠いが、症状が少しでも改善したことを嬉しく思った。
何よりも、父親を始めとする家族の表情が明るくなったことが一番の収穫だった。
今回は偶々かもしれない。それでも、少しでも状況が好転したことは、今後、治療を続けて行く上でも励みになるだろう。それを思うと今回のことが家族にもたらしたことは大きかった。
リョウは、彼らにも帰郷の後、薬草を届けるとの約束をした。
直接送るよりも、レントの分と合わせて、鍛冶職人の寄り合に託した方がいいだろうか。
その辺りのことは、帰ってからきちんと考えることにした。

そして次に、カマールのところに行った。
「いつ立つんだ?」
工房の入り口から中を窺うようにそっと入ってきた黒い頭髪の影を捕らえるなり、中で作業をしていたカマールは、手を止めると顔を上げた。
リョウは一瞬、虚を突かれた顔をした後、『こんにちは』と挨拶をしながら、ゆっくりと微笑んだ。
「そろそろ、頃合いかと思ってよ」
中に入って来たリョウを促すように、カマールは立ち上がった。
「それに今朝方、スフミから催促の伝令がやって来た。そん中にお前が街を出たら知らせろって書いてあったさ」
リューバの手紙に何が書かれてあったのかは知らないが、ほんの少しだけ嫌そうな顔をして見せたカマールに、リョウは小さく笑った。
その昔、リューバには先読みの力があるということを聞いた。虫の報せのようになんとなくという感覚的なものだが、その辺りのことを何がしか感じたのだろう。
「明日にでも出立しようと思っています」
「そうか。寂しくなるな」
そう言って、無精髭の伸びた頬をつるりと撫でたカマールを見て、リョウは擽ったい気分になった。
心の中がほんのりと温かくて、むず痒くなるようだった。
「カマールさんにはお世話になりました」
深々と頭を下げたリョウにカマールは『よしてくれ』と言わんばかりにごつごつとした大きな片手を一振りした。
「何言ってんだ。改まって。世話んなったのはこっちの方じゃねぇか」
カマールにしてみれば寝床を提供しただけで、その間、家事の一切合切をリョウにやってもらったという自覚があったのだ。それに自分の仕事の不手際にリョウを巻き込んでしまったという反省もし

ていた。
だが、リョウは、そのようなことはまるでなかったかのように、にこやかな笑顔を浮かべていた。
「リューバに何か言伝はありますか？」
「ああ。そうだなぁ」
暫く、考える風にした後、
「ちょっと待ってろよ？」
そう言って、工房から母屋の方へ行ったカマールは、その手に小さな封書のようなものを持って戻って来た。
「こいつをおふくろに渡してくれ」
「はい。しかと承りました」
リョウは差し出されたモノを両手で押し戴くようにすると、その手紙を上着の内ポケットの中に入れた。
それから、カマールはゆっくりとリョウの傍に歩み寄ると、大きな手でその頬を包むようにした。
そして、不意に両頬の肉をくいと摘んだ。
「またこっちに顔を出せ。そうだな、遅くとも、次の冬ぐらいには。そろそろ、お前の短剣も手入れをしなくちゃなんねぇ頃だろうからよ。ちょうどいい。【シービリ（北）】の旦那が来るのに合わせて一緒に来たら良いだろう。なぁ、旦那？」
そう言ってリョウの頬を摘んだまま、カマールは戸口付近に立っていたユルスナールの方を見た。
「そうだな。俺は毎年、この時期にここを訪ねるから、次回はリョウも連れて来よう」
対するユルスナールも鷹揚に頷いた。
そして、暫く頬の柔らかい肉の感触を楽しんだ後、鍛冶職人の太い指は離れて行った。
「ソーニャさんにもよろしくお伝え下さい」
「ん？　あ、ああ。分かった。あいつの事だから直接見送りが出来

ねぇって喚くんだろうがよ」

ソーニャの名前を出した途端、何故か微妙な反応をしたカマールは、動揺を取り繕うように諾と頷いた。

いつにないカマールの様子に、リョウは内心、首を傾げた。

あの後、二人の間で何がしかの遣り取りがあったのだろうか。それは分からない。ソーニャのことであるから、カマールには結局、何も告げていないのかも知れない。

リョウとしては、数日前、朝の中庭で洗濯を一緒にした時に、今度お見合いをすることになったと言っていたソーニャのその後が気に掛からないでもなかったが、それは自分が首を突っ込むことではないだろうと思い直した。

ソーニャが取った選択はソーニャのもので。カマールが下した決断はカマールのものだ。

だが、その軌道が少しでも掠ればいい。そう願わずにはいられなかった。

そうやってカマールの工房を辞した後、黒い頭髪と銀色の頭髪の傍目にはちぐはぐな印象を与える二人の姿は、今度は、露店が立ち並ぶ賑やかな界隈の中にあった。

リョウは、平台の上に山積みにされた様々な品物を見ながら、目を輝かせていた。

こういう市場はワクワクする。ここに暮らす人々が普段、何を食べているのかが分かるし、どういう生活を送っているのかが、垣間見えるからだ。人混みの中を歩くのは中々にコツが必要で大変だったが、物売りの威勢の良い掛け声や客との値引き交渉などの遣り取りを聞くのは、実に面白かった。

こうして見てみると、この街が豊かであることが良く分かる。物流も人の交流も盛んだ。

「リョウ。そっちじゃない」
ふらふらと彷徨いそうになる華奢な背中を時折、男の長い腕が繋ぎとめた。
ここで逸れたら、絶対に迷子になるであろう事は間違いなかった。人の多い場所では客の財布を掏るような輩もいる。リョウなど体のいいカモだろう。
窘めるように腕を引かれて、リョウは我に返るとばつが悪そうな顔をした。
「……スミマセン」
子供のようにはしゃいでいたことが急に恥ずかしくなって目を逸らせば、ユルスナールは仕方がないというように苦笑をして見せた。だが、注がれる男の眼差しは、実に優しいものだった。
「ほら、手を貸せ」
ユルスナールは、そう言うと、有無を言わせずにリョウの左手を取った。
小さな手が、大きな手に包まれる。
このような人出の多い往来で手を繋いだ男を、リョウは不思議そうに仰ぎ見た。
ユルスナールが、そういうことをする人物には思えなかったからだ。少なくとも、人前では、だ。
「この方が逸れなくて済む」
それは実用的且つ、少しでも身体的接触を目論む男の欲求を満たすささやかな行為だった。
当然のように真顔で淡々と返した男の言い草に、リョウは可笑しそうに笑った。
そして、人目が気にならないではなかったが、男の提案に乗ることにした。
手を繋いだまま、二人して露店の間を巡って、携帯用に固く焼か

れた【フレープ（パン）】、【シィール（チーズ）】、それから、干し肉と果物を少し購入した。

後は、リューバへのお土産になりそうなものがあれば探す積りだった。

露店を見て回っている最中に、リョウはふと、とある店先で足を止めた。

突然のことに繋がれた腕が引かれて、ユルスナールも動きを止め、振り返った。

「どうした？」

立ち止まったリョウの視線の先を追う。

そこに並んでいたのは、繊細なレース編みの布地を扱う露店だった。女ものの【プラトーク（スカーフ）】や【シャーリィ（ショール）】の類いが並んでいる。柔らかそうな毛織物らしきものもある。色は、生成りのような少しくすんだ白が主流だった。

「さぁさぁ、見ていって頂戴な。お手にとってどうぞ！　綺麗なレース編み。奥さんやお嬢さん。恋人への贈り物にはぴったり。これはみんな手編みですよ！」

恰幅のよい艶やかな頬をした女性が、ずらりと並んだ繊細な編み物を前に張りのある声を上げていた。

「おうや、坊や。どう？　綺麗なものでしょう？」

店先に立ち止まった線の細い少年の姿を見て、露店の女主は相好を崩した。

「……すごいですね」

細かな糸が緻密な文様を描き出す生地を見て、リョウは思わず感歎の声を上げていた。

「そうでしょう？　さぁ、よかったら、お手にとってご覧なさいな」

「いいんですか？」

リョウは差し出された布地にそっと手を伸ばした。

それは、とても柔らかな肌触りだった。羽のように軽い。その昔、セレブロに教えてもらった【シフル】という獣の毛で編み込まれたものだろうか。冬場、ショールのように巻いたら暖かいのではないだろうかと思った。

「どう？　軽くて暖かいでしょう？　今の季節、お母さんへのお土産にちょうど良いわよ？」

女主はリョウのことを見て、里帰りをする子供と思ったようだった。

「これは、みな手編みで作られたものなんですよね？」

――――――【ルーチナヤ・ラボータ】――――手仕事。

先程の女主の言葉を反芻してみる。

「ええ、そうよ」

女主は誇らしげに微笑んだ。その首元には、並んでいる商品と同じ白い【シャーリィ（ショール）】が巻かれていた。

それは、素朴だけれども、どこか華がある繊細な代物だった。

リョウはそっと溜め息を吐いた。指先で複雑に編まれた模様を辿る。

こういう綺麗なものは基本的に好きだった。抑えていたはずの女心のようなものを刺激される。

「それが気になるのか？」

不意に影が差して、リョウはユルスナールを放ってしまったことに気が付いた。繋いでいた手もいつの間にか放してしまっていた。

――――――いけない。つい、ふらふらと。興味のままにうろついてしまった。

「ちょっと素敵だなと思いまして」

ばつの悪さと照れ臭さを隠すように、リョウは自分を見下ろす瑠璃色の瞳を仰ぎ見ると微笑んだ。

「これは、この辺りの名産だな」

リョウの手の中にあるものを見てユルスナールが言った。
「そうなんですか？」
「まぁ、旦那、よくご存知なんですね！」
艶やかな銀色の髪を靡かせた美丈夫であるユルスナールの登場に、露店の女主は俄然目を輝かせて、俄かに色めきだった。
「旦那、いかがですか？　お一つ。奥様へのお土産にぴったりですよ！」
やはり、ユルスナール位の男であれば、既婚者、もしくは、決まった相手がいると思われるのが普通のようだ。
隣にいるリョウは、傍目には、小姓か見習いの使用人といったところだろうか。
店の主が狙いをより確実な方（要するにユルスナールだ）へと変えた。

「ぴったりだそうですよ？　旦那さま。奥様へのお土産に」
リョウは、からかうように店主の口振りを真似て、未だ独身者であるユルスナールを流し見たのだが、
「そうか。じゃぁ、お前が好きなものを選べばいい。店主、幾らだ？」
そう言って、女主にショールの値段を尋ねたものだから、今度は逆にリョウの方が慌ててしまった。
気になったのは確かだが、それをユルスナールに買わせる積もりなど全くなかった。欲しければ、自分で買う。その分のお金は持ち合わせていた。

「一つ、【パルトラー・メーディ】です」
銅貨が一枚と半分。物価から見ても、決して安い買い物ではない。
旅の途中で、銅貨【メーディ】の下に【メーラチィ】という単位の小銭があることを知った。【メーラチィ】が５０で銅貨一枚になった。日常的な食べ物の類は、大抵、この【メーラチィ】の範囲で

収まってしまうのだ。
「いいですよ、そんな」
懐から財布を出そうとする手をリョウは制した。
ユルスナールにはドレスのこととといい、宿屋のこととといい金銭的にも迷惑を掛け通しであったので、これ以上、甘える訳にはいかなかった。
「これから寒くなる。襟巻きの一つくらいは必要だ。ちょうどいいだろう？」
「ですが、これは女性ものですよね？」
そう言って、リョウはちらりと露店の女主の方を見た。
その言葉にユルスナールは『今更何を言うのだ』という顔をした。
ユルスナールの中では、リョウは女にしか見えないが、対外的には違うのだ。
これは可憐な少女が使うならいざ知らず、野暮ったい少年が身に付けるものではないだろう。自分のような者が手にするのは滑稽に映る筈だ。
そう思って店主の方を見たのだが、
「あら、坊やくらいの子だったら、大丈夫よ。とても似合うと思うわ」
興味を持った客を逃すまいとしてか店主がおべっかを使う。
そんな言葉など慰めにもならないだろう。
「これなんか、どうだ？」
ユルスナールは暖かそうな毛織物のものを手に取ると、リョウの首にあてがってみた。
「ああ。よく似合うな」
そして、一人、満足そうに頷く。
「暖かいですね」
リョウは首元に回されたふわりとした柔らかな感触に息を吐いてうっとりとした。
それがいけなかったのだろうか。

その隙に、
「これを一つ貰おう」
そう言って、ユルスナールが手早く会計を済ませてしまったのだ。
「まいど、有り難うございます！」
「ルスラン、ワタシが払います」
リョウは代金を払うと主張したのだが、ユルスナールは頑として値を受け取らなかった。
そのまま店先で揉める訳にもいかず、結局、折れたのはリョウの方で、
「ありがとうございます」
嬉しそうにはにかみながらも、礼を述べると、首元のショールをそっと撫でた。

そんな二人の遣り取りを女主は微笑ましそうに眺めていた。
その顔には、始終にこやかな笑みが浮かんでいた。
それもそうだろう。ユルスナール効果だろうか。店先で足を止めた目を引く男の登場に周囲にいた買い物客が物珍しそうに集まってきたのだ。女たちが店先に立つ銀色の髪の長身の姿を横目に入れながら、品物を手に取り始めたのだ。
思わぬ客寄せ効果にびっくり。急に密度を増して賑やかになった店先に女主の滑らかな口上が歌のように響き始めた。
リョウは密かにユルスナールと顔を見交わせて目を丸くした後、可笑しそうに笑った。
そして、そっとその場所を後にした。
それから、二、三の店を冷かして、リョウはリューバとアクサーナに土産を買った。

この国の兵士であるということ

一通りの買い物を終えた後、【ファンタンカ（噴水広場）】の傍で一休みとなった。

刻々と形を変える水の造形は、日の光を反射して眩しい飛沫を上げていた。

リョウとユルスナールは、噴水脇のベンチに腰掛けていた。

二人の手の中には黒い液体の入った飲み物が握られていた。

それは【クヴァス】という黒パンを発酵させて作ったこの国特有の発酵清涼飲料で、独特な酸味が特徴的だった。

【ファンタンカ（噴水広場）】の傍には【クヴァス】売りの屋台が立っていて、喉の渇きを癒そうと子供から大人まで、様々な人々が入れ代わり立ち代わり買い求めていた。

リョウは初めてこれを口にした時は、おっかなびっくりだった。

この街に来る途中に寄ったとある小さな町で周囲の男たちが旨そうに飲んでいるのを見て、興味を引かれて買い求めたのだが、真っ黒な見た目もそうだが、独特の酸味と苦味にほんのりと黒パンの匂いがして、度肝を抜かれたものだ。生温いので、すごく美味しいという訳ではないのだが、少し癖のある独特の酸味は、飲んでみれば喉の渇きを潤すにはもってこいだった。慣れると病みつきになる。そういった類いのものだと思った。

【ファンタンカ（噴水広場）】は多くの人で賑わっていた。

走り回る子供たち。中には、冬場だというのに噴水に手を入れて水を弾いて遊んでいる子供もいる。

日向ぼっこをする老人や老婆。おしゃべりに興じる母親たち。腕を組んで歩く若い男女の姿。

眼前に広がるのは、実に穏やかな昼下がりの情景だ。

頬を撫でる冷たい風が、火照った身体には心地よかった。冬場といえども、まだまだ日中の日差しは暖かい。
「この国は、豊かなのですね」
前を向いたまま、しみじみと口にしたリョウをユルスナールは横目に見た。
「お前にはそう見えるか？」
「はい」
スフミから街道沿いに大小様々な町を見てきたが、すれ違う人々の表情は、皆、穏やかで明るいものだった。
「そうか」
長い沈黙の後、ユルスナールは、ゆっくりと息を吐き出した。
「それも、ここ五年から十年のことだろうな」
その目線は、風に揺れる噴水の水面を見つめていた。

少し影のあるその横顔をリョウは黙って見詰めた。そして、次に語られるであろう男の言葉を待った。
「俺がまだ幼かった頃、そうだな、今からざっと二十年近く前になるか、この国は、隣国と大きな戦をした。この辺りでも戦闘があったと聞いている。戦闘が一番激しかったのは西の砦だった。当時、その前線で指揮を取っていた俺の叔父は、そこで命を落とした」
淡々とした言葉の後に、ユルスナールは眩しいものを見るように目を細めた。
当時の情景を思い出しているのかもしれない。
噴水の水面は、きらきらと細かい光の欠片を反射していた。
そこに踊るのは、一体、どんな景色なのだろうか。
「あれから二十年。今、あの時の影はこの辺りには見当たらない。この国の民は強い」
戦争の爪痕が無い訳ではないのだろう。だが、表面上は、異邦人であるリョウの目から見ても、そのようなことがあったと想起させるものはなかった。

街は取り敢えずの復興を果たしている。そこに住む人の心までは分からないが。

戦争と聞いて、前から気になっていた事をリョウは思い切って尋ねてみた。

「この国には【徴兵制度】はないのですよね？」

「徴兵制度？」

聞き慣れない言い回しだったのか、ユルスナールが眉を潜めた。概念や思想を言葉にするのは難しい。

リョウは慎重に言葉を選びながら、かつての知識から知る事柄に一番近いであろう単語をこの国の言葉に直して当て嵌めてみた。

「はい。ある一定の年齢に達した男子を兵士として強制的に国が徴用する仕組みです」

その説明でユルスナールはリョウの言いたいことを理解したようだった。

「ああ。それはない。従軍するのは自らの意志で軍に志願したものだけだ。殆どが職業軍人と傭兵の類いだ。それに兵士は必ずしも男である必要はない。俺の部隊には偶々いないが、王都の方では剣を握る女性兵士もいる」

女性の兵士がいる。初めて耳にする事柄にリョウは内心、驚いた。この国で女性が軍に従事するとは思っても見なかったからだ。その辺りは保守的なのではないかと思っていたのだが、違ったらしい。予想を少し裏切られた形となった。

すると、この国で戦争が起きた場合は、軍籍に身を置く彼らが真先に矢面に立つのだ。

一般市民はそれに巻き込まれないようにするということだろう。

この国での最後の戦争は、約二十年前の出来事。

それは、まだ多くの人々の記憶には新しい出来事だろう。沢山の人々にとっては鮮やかな生きている記憶に違いない。忘れることの出来ない、いや、忘れてはいけない過去だ。

そこから、この国の人々が導き出した結論とは、どのようなものなのだろうか。

「現時点で、戦争は終結しているのですよね？」

「ああ。一応な。当事国の間で休戦協定が結ばれている」

「終戦協定ではなくて？」

リョウは耳を疑った。

休戦協定。つまり、戦争は終わっていないのだ。政治的な観点から見れば。

隣から出された鋭い指摘に、ユルスナールは、少しだけ苦い顔をした。

「だから、未だに各地で小さな小競り合いがある」

軍事産業的意味合いの強いこの街の繁盛振りと街中を闊歩する傭兵たちの姿は、恐らく、その事実を如実に物語っているのだろう。

「ということは、水面下では、常に臨戦態勢にあるんですね」

「そういうことになるな」

この国の人々にとって、戦は身近に、常に起こり得るものとして傍にあるのだ。

主要な武器は、やはり剣や槍、弓矢なのだろうか。

その辺りのことも含め、まだまだ知らないことが多いとリョウは今更ながらに痛感した。

「戦の経験は？」

不意に出されたユルスナールの静かな問いに、リョウはゆっくりと首を振った。

「いいえ。ありません。ワタシの祖国で最後に戦争があったのは、もう七十年近く前のことでした。ワタシの祖父は若い頃、出兵をして帰ってきましたが、その祖父も、もうこの世にはいません。当時の記憶は、もう一握りの年老いた人々が持つだけで、失われつつあります。国民の大半は戦争を知らない。それがどういうものである

のかすら、想像がつかないでしょう」

祖父は決して、戦争のことを話さなかった。自分がまだ幼いということも関係していたのかもしれないが、余程、辛い目にあったのだろう。言葉少なに思い出したくないと言っただけだった。

唯一、教わったのは、祖父が時折、思い出したように口ずさんだ軍歌の一節だった。戦争についての記憶は断片的で、酷く遠い過去の出来事になっていた。

そういう根幹的な芯の部分での心構えや危機感という点に於いて、この世界に身を置く人々から見たら、自分はかなり能天気に見えるのかもしれない。

実際に経験をしていることとそうでないことには大きな隔たりがあるからだ。

「安穏とした国だったのだな」

やはり当然のように出た感想に、リョウは苦笑して見せるしかなかった。

「そうかもしれませんね。ワタシの祖国に限って言えば」

無論、もっと視野を広げれば、現在進行形で戦争をしている国は沢山あった。

だが、それも、日常生活とは縁のない時点で、どこか遠い世界の出来事に過ぎなかった。そう言う意味で自分は戦争を知らない。遠く離れた所に身を置いていたのだ。

「呆れましたか？」

思わず漏れた本音に、ユルスナールは片方の眉を訝しげに上げた。

「何故だ？」

「端から見たら、ワタシの危機感の無さや世間知らずなところは、きっと目に余るものでしょうから」

自嘲気味に微笑めば、

「それは、仕方あるまい。お前はこの国の民ではなかったのだから。そんなことは、これから幾らでも知っていけばいいだろう」

「そうですね」
励ましとも取れる男の心遣いに、リョウは小さく微笑んだ。

そして、徐に話の流れを少し変えた。
「ルスランは、どうして兵士になったのですか？」
ユルスナールはその問いに、一瞬だけ、虚を突かれた顔をした。
そして、どこか困惑気味に笑った。
「そんなこと……考えたこともなかったな」
そう言うと、手にした【クヴァス】にゆっくりと口をつけた。
「俺の家は、代々軍籍に身を置く家で、そこに男として生まれたからには、小さい頃からそういうものだとして疑わなかったからな。それに、俺にはこの職が性に合っていた。すぐ上の二番目の兄は、別の道に進んだが、長兄は同じように軍部に籍を置いている。だが、兵士であろうが、無かろうが、この国を思う気持ちには変わりはないがな」
「先の戦の理由はなんだったのですか？」
「こちら側の観点から見れば、宣戦布告されて応戦したというところが正しいか。当時、攻め込んできた隣国の王は野心家として悪名高かった。だが、本当の所は分からない。当時、外交上の懸案事項で政治的に折り合いがつかなかったのか。その辺りの真実は闇に包まれたままだ。戦争は見返りも大きいが、それ以上に失うものの方が大きいからな。大博打もいい所だ。それをしない為にまず、外交がある筈なのだが……」
そう言って苦渋に満ちた表情を作った。
ユルスナールの口振りから類推するに、この国は、必ずしも積極的に武力に訴えるという気風ではないようだ。
「この国は、その対外政策の中で、軍事に重きを置いている訳ではないのですね？」
「ああ。喜んで戦に出かけるものなどいまい。軍部と兵士が動くのは最終手段だ。それでも、戦いの火蓋が切って落とされれば、俺た

ちはこの国を守る為に命を賭して戦う。大事なものを守る為にな。
俺はこの国の兵士であることに誇りを持っている。軍部に籍を置く男たちは、皆、そう思っていることだろう」

そう締めくくったユルスナールは、実に男らしい晴れやかな顔をしていた。
瑠璃色の双眸には一点の曇りも迷いも見当たらなかった。
それは、経験と日々の弛まない訓練から導き出される自信に満ちた、覚悟を決めている男の横顔だった。
リョウはそれを眩しいもの見るように目を細めた。
それが、この国の兵士として身を置く男たちの心構えなのだろう。
いずれ、この国の男たちが国を挙げての闘いに巻き込まれることがあるのだろうか。
今後のことは分からない。それでも兵士であるユルスナールには、その覚悟が当然のようにあるのだろう。
この時、リョウは、改めてユルスナールのことを強靭な精神力を持つ真っ直ぐな男だと感じたのだった。
「そろそろ、行くか？」
「そうですね」
ゆっくりと腰を上げたユルスナールにリョウも続いた。
それまでの重苦しい空気を払拭するように男を取り巻く気が柔らかさを増した。
「この後は、どうするんだ？」
「【ツェントル】に顔を出そうと思っているんですが」
「ドーリンか？」
「はい。あと軍医のステパンさんとイリヤさん、ウテナさんがいれば一応、挨拶をしておこうと思いまして」
最後に上げたウテナの名前にユルスナールは眉を潜めたが、それを敢えて口には出さなかった。
「ドーリンのやつは、忙しいから捕まるか分からんぞ？」

「ええ、その時は、ルスランの方から、宜しくお伝えください」
「ああ」
【クヴァス】売りに飲み終えた【チャーシュカ（カップ）】を返して、リョウとユルスナールは噴水の周りをぐるりと回って、ツェントルの方へ足を進めた。

【ツェントル】では、ユルスナールに続いて中に入った。
なんだかんだ言って、この場所にもかなり世話になったのだ。ここに来なければ、リョウはユルスナールに会うこともなかっただろう。それを思うと不思議な縁があるような気がしてならなかった。

真っ先に団長室を訪ねたが、生憎、ドーリンは留守だった。
部屋の中は主の性格をよく表しているようで几帳面な程に片付いていた。
但し、部屋の中心に据えられた大きな執務机の上を除いては、だ。
その場所だけ、決済待ちの箱の中からはみ出るようにして、書類が積み上がっていた。それだけで、この部屋の主の日常が忙殺される程の忙しさだということが垣間見えた。
神経質そうな眉はきっとこの激務から来ているに違いない。そんなことを思った。
ドーリンへはユルスナールの方から簡単に出立の旨を伝えてもらうことにした。

それから、次に医務室を訪れた。
軍医のステパンは中に居て、怪我をした兵士の治療中だった。
リョウは治療の邪魔をしてはならないと思い、すぐに廊下に出ようとしたのだが、
「ああ。直ぐに終わるから待っててくれ」

のんびりとした軍医の声が掛かり、ユルスナールも引き留めるように腕を引いたので、リョウは恐る恐る中に入って待つことになった。

「イテ、イテテ。おやっさん、もっと優しく」

「馬鹿を言え、こんなのかすり傷だろう。十分優しくしてやってるだろうが」

そっと中を覗き込めば、立派な口髭の軍医が兵士の腕の傷口を消毒している場面に出くわした。

中に入って来たユルスナールとリョウに、ステパンはちょうど良いとばかりに声を掛けた。

「ああ、ルスラン、あの棚から油紙と包帯を取ってくれ」

立っているものは容赦なく使う積もりなのだろう。軍医の牙城では、その主であるステパンがヒエラルキーの頂点だ。

大人しく、依頼に従うユルスナールの顔を見て、中にいたツェントルの兵士はぎよっとした顔をした。

「シビリークス隊長！」

所属する部隊は違えども、第五師団の団長と仲の良いユルスナールは、この場所では広く顔が知られていた。

ばっと背筋を伸ばして、敬礼をしようとしたまだ若い兵士をユルスナールは目線で制した。

「動くな。傷口に障る」

だが、その心遣いも虚しく、手当ての途中だった兵士は、反射的に無理な動きをした所為か、突如として走った痛みに盛大に顔を顰めた。

「グゥ……」

「ほら、言わんこっちゃない」

それを見て軍医は呆れたような顔をした。

飄々としたステパンの横でリョウは兵士の腕の傷をそっと見た。

刃物による金創だろう。漸く塞がったと思しき長い傷口は、周辺

に膿が出ていた。
恐らく、包帯の交換を怠ったのだろう。膿を丁寧に拭った後、消毒をしてから、化膿止めを塗る必要があった。
だが、軍医は、消毒の後、そのまま包帯を巻こうとしたので、リョウは驚いて、口を挟む積りはなかったのだが、思わず声を上げてしまった。
「化膿止めはいいんですか？」
ステパンはリョウの方をちらりと見ると緩く頭を振った。
「ああ、仕方がない。ちょうど今日で切れてしまってな、明日にならないと薬が入らないんだ」
間が悪そうな顔をした軍医に、リョウは慌てて鞄を漁った。
「あの、少しですけど、化膿止めを持っているので、よかったら使って下さい。ワタシが調合したものなので、ちゃんとした薬にはかなわないでしょうが、少しはマシでしょうから」
その言葉に軍医は目を見開いた。
「いいのか？」
ステパンは確認するようにユルスナールに視線を投げた。
「リョウ、お前の方には余裕があるのか？」
これから長い旅路に着くのだ。万が一のことを考えて、自分用に残して置く必要があるだろう。
ユルスナールがそのことを仄めかせば、
「はい。大丈夫です。代わりのものがありますから」
「そうか」
ユルスナールはステパンに一つ頷いて見せた。
「済まないな」
「いいえ」
「コイツに施すには、勿体ない気がするが、背に腹はかえられまい」
「ヒデェ、愛が足りない」
「何を言ってる。お前には、十分注いでやっているだろう」
兵士と軍医の軽妙な遣り取りは放って置いて、リョウは手当てを

優先することにした。

「ルスラン、油紙を」

軟膏を手に取ったリョウは、ユルスナールから油紙を受け取ると、そこに傷口に合わせる形で薬を塗りつけた。

「少ししみますよ」

一応、釘を刺してから、剥き出しになった傷口に軟膏を塗った部分の油紙を張り付ける。

「……ツゥゥ……」

その瞬間、兵士の口から堪え切れない小さな呻き声が漏れた。

やはり、しみたようだ。だが、これは効き目があるのだ。アッカの時にその有効性はある程度、実証済みだったので、ここは我慢してもらうほかないだろう。

そして、次にリョウはユルスナールから包帯を受け取ると、小さな呪いの文言を口ずさみながら、包帯を巻き始めた。

【ゴースパジ　パミィルーイ　ゴースパジ（慈悲深き　神よ）、フショー　ブゥージェット　フ　パリャートケ　（すべてが元の流れに還り）、

プレェヴラチィーチ　ヴ　ルーチィシェイェ、ウマリャーユゥ（快方に向かわんことを祈る）】

そして、まだ若い兵士の筋肉質な腕に包帯を巻き終えると、傷口のある部分にそっと掌（てのひら）を当てた。

少しでも、傷口が良くなるようにと祈りを込める。

「はい。終わりました」

リョウが小さく微笑めば、怪我をした兵士は、脱力するようなふにゃりとした笑顔を浮かべた。

「ありがとう」

「いいえ。包帯は面倒でもきちんと毎日取り替えて下さい。そうしないと、またすぐに膿が出てきてしまいますから。治りかけだから

と言っても油断は禁物です。傷口から黴菌が入ってしまったら、患部が壊死する可能性があります。そうなると、最悪の場合は腕を切断しなくてはならなくなるでしょう。それにそれだけでは済まない場合だってあるんですよ。傷口から黴菌が入って、それが血液に乗って身体全体に回ってしまったら、命を落としてしまう場合だってあるんです」

つらつらと出た具体的な内容に兵士がぎくりと肩を揺らした。

そして、顔色をさぁーと青ざめた。

リョウとしては淡々と今後起こり得るであろう症例を挙げただけで、脅した積りはなかったのだが、その若い兵士には効果覿面だったようだ。

怪我を軽く見ると大変なことになる場合だってあり得るのだ。ただそのことを知って置いて欲しかったのだ。

「ですから、患部の衛生状態を良くするためにも、包帯は替えて下さいね」

「う……了解です」

図星を突かれたのか、途端にばっの悪そうな顔をした兵士を見て、軍医のステパンが声を立てて笑った。

「ハハハ、別に膿んだらまた消毒するだけだ。今度は、遠慮なく、たっぷりやってやるぞ？」

「ゲェェ……遠慮します」

その処置が、相当痛かったのだろう。途端に口元を引きつらせた兵士にリョウはユルスナールと顔を見交わせると小さく笑った。

それから、治療を終えた兵士は、きちんと敬礼をすると、ほうほうの体で医務室を後にしたのだった。

あれだけ脅して置けば、今度はきちんとするだろう。

「で、今度はどうした？」

盥の中で手を洗った後、それを布巾で拭いながら、ステパンがゆっくりとこちらを振り向いた。

軍医は、二人の突然の訪問を意外に思ったようだ。
「明日、この街を出ることになりましたので、お暇のご挨拶に」
そう口にしてから、先だっては世話になったとリョウが改めて礼を口にすれば、ステパンはそうかと納得した後に、穏やかに微笑んだ。
「丁寧に済まないな。もう身体の方は大丈夫か？」
「はい。お陰様ですっかり。肩の腫れも一晩で驚く程に回復しましたから。頂いた軟膏のお陰です」
「そうか。それはよかった。薬の成分が大分効いていたようだったから、少し気になってはいたんだが、症状が一過性のものであれば問題はないだろう」
一時はどうなることかと思ったが、大事に至らなかったことに軍医も安堵したようだった。
「あの、それで、その時のお礼とするにはお粗末ですが、もしよろしければ、こちらをお使い頂けたらと思いまして……」
リョウは鞄の中から薬草を入れている袋を取り出すと、その中から小振りな葉っぱを数枚取り出した。
それは、凝固処理を施した【ストレールカ】だった。
何か恩返しをしたいと思ったが、自分の持ち物の中身を考えたら、この薬草の方が少しは役に立つのではないかと思ったからだ。
「これは……まさか……」
提示されたものに軍医の目が驚きに見開かれた。
ステパンは、リョウの手から小さなギザギザの葉っぱを一枚摘むと、返す返す改めた。
「ひょっとして……【ストレールカ】か？」
「はい」
「しかも生じゃないか！」
通常、薬師の間では、乾燥させたものを利用するのが一般的だった。この辺りでは、中々に珍しかったのかもしれない。
「凝固処理を施したので、解除をしなければ長持ちします」

「どうしたんだ！　こんな貴重なものを。一体どこで手に入れたんだ？」
　ステパンの言葉尻には抑えきれない興奮の色が滲んでいた。
　リョウは内心、その反応の方に驚いていた。
　もしかしたら、国の中心部に近いこの辺りでは、この薬草は余り流通してはいないのかもしれない。
「家で栽培をしたものです」
「まさか、そんなことが可能なのか？」
「以前、薬草採りをした際に、駄目元で根ごと持ち帰って植え替えたら、上手く根付いたので」
「それは……すごい」
「先程の軟膏にも入れてあるので、よく効くとは思います。患部が少し熱を持つとは思いますが心配いりませんので、もし、さっきの方がいらしたら、そうお伝えください」
「そうか。しかし、いいのか？　こんなに貴重なものを」
「構いません。家に帰れば沢山ありますから。それよりもお役に立てて何よりです」
「ありがとう」
　軍医は押し頂くようにして、小さな葉っぱを手にした。
　思った以上に喜ばれた事をリョウとしても嬉しく思った。
「それにしても、生の葉に凝固処理をするとは考えたものだ」
　感嘆の言葉を吐いた軍医にリョウは擽ったそうに笑った。
「乾燥したモノよりも生の方が断然、効き目が違うとは聞いていましたので、そのまま保存が出来ないかと思いまして。その時にふと思ったんです。試してみたら、殊の外うまく行ったので」
「成程な。ということは、キミは、いずれは薬師を目指しているのか？」
　軍医の真剣な眼差しに、リョウはそっと頷き返した。
「そうですね。今、自分の興味がその方向にあるので、取り敢えず、その道で独り立ちできればと考えてはいます」

「そうか。すると、まず【術師】の登録申請をする所からだな」
そう言うと少し考える風に手を組んだ。
「ご心配には及びません。その辺りのことはこちらでも考える予定ですから」
ユルスナールが間に入るように口にしていた。
それをステパンは、面白いものを見るような目つきで見遣った。
そして、リョウの顔と男の顔を順繰りに見遣った後、何やら一人、納得するように頷いた。
そうして優しい笑みを浮かべると口髭の端を指でちょいと摘んだ。
「そうか。まぁ、何か困ったことがあったらいつでも相談に乗ろう。【ツェントル】の軍医と言えば分かるから、伝令を寄こしてくれても構わない」
「ありがとうございます」
鷹揚に提案をした軍医にリョウは感謝の意を込めて微笑んだ。

そうして、形通りの挨拶を交わした後、黒い頭髪を靡かせた人物は颯爽と医務室の入り口から消えた。
続いて同じように背を向けた屈強な逞しい背中に、
「ルスラン」
軍医のステパンは、呼び止めるように小さく声を掛けていた。
振り返った先、そこにある軍医の顔には、いつにない真剣な眼差しが浮かんでいた。
そこにある言わんとする言葉をユルスナールは正確に読み取ると、無言のまま、一つ大きく頷きを返した。
そして、去り際、その口元を不意に吊り上げた。
自信に満ち溢れたそのふてぶてしいまでの男の横顔に、ステパンは一瞬だけ、虚を突かれたような顔をしたが、直ぐに相好を崩すと可笑しそうに喉を鳴らし始めた。
そして、片手を軽く一振りすると、右足を引きずって、自分の椅子に腰を下ろしたのだった。

ステパンは机の上に置かれた小さなキザキザの葉を一枚手に取ると、それを陽の光に翳してみた。

【凝固処理】とあの子は簡単に口にしたが、それがどれ程の意味を持つものなのか、あの様子では、きっと分かってはいないのかもしれない。

つくづく不思議な娘だ。そう思わずにはいられなかった。

――――――願わくば、あの子の道筋が照らし出されますように。

黒い瞳を持つ娘の柔和な顔立ちを思い浮かべながら、柄にもなくそのようなことを祈ってみたのだった。

そして、今後、あの男の周囲で、何やら面白そうなことが起きそうな予感に、一人ほくそ笑んだのだった。

ダ・スヴィダーニィヤ　～また逢う日まで～

その日、【プラミィーシュレ】の入り口に聳え立つ門番の詰所には、珍しい顔触れが揃っていた。

短い金色の髪を跳ね上げさせた頬に傷のある兵士。緩い長めの薄茶色の髪を右端に寄せた優しい面立ちの兵士。濃い茶色の髪をきっちりと後ろに撫で付けた兵士の眉間には心なしか皺が寄っているが、これはいつものことである。

そして、明るい柔らかそうな茶色の髪を無造作に掻き上げて無精髭を生やした体格のよい男が続く。その隣には同じくらい上背があるものの幾分細身な銀色の髪を緩く撫で付けた男が続いていた。

然程、狭くはない筈のその部屋は、体格のよい男たちが集う所為か、妙な圧迫感で息苦しそうだった。

ちょうど門番の人員交代の時刻で、通常の門番に任に就いていた【ツェントル】の兵士二人が、交代報告の為に詰所に顔を出した所、そこに居並ぶ錚々たる面子に度肝を抜かれて硬直したが、すぐさま持ち前の反射神経の良さできっちりと敬礼をしてみせたのは、流石、日々の訓練の賜物であると言えた。

「あ～あ、ほら、言わんこっちゃない」

覇気のない声を上げながら緩く手をひらひらと振って、顔を引きつらせている交代の兵士を気の毒そうに見やったのは、同じ隊服に身を包んでいるものの、いかつい兵士たちの中ではやや毛色の変わった柔和な面立ちをした男、ウテナ・ザポロージェだった。

「お疲れ様」

「あ、ああ」

仲間からの労いの言葉に交代の兵士は、ぎこちなく頷いて見せた。

そして、互いに目配せをし合った。障らぬ神に祟りなし、と。

その隣で壁際に寄り掛かって、腕を組んでいたイリヤ・ベールキンは、そんなことを言ってのけた相棒を胡乱気に見やった。

――――――お前もその一人だろうが。

口には出さなくとも、その明るい浅葱色の瞳はその心の内を雄弁に語っていた。

イリヤは、いつもより格段に狭く感じられる一室に集まる男たちをぐるりと見回した。

北の砦から来た第七師団の双璧は、まぁ分からないではないが、イリヤとしては、自分たちの上司である第五師団の団長ドーリン・ナユーグがこの場所に顔を出したことを意外に思った。

いつも沢山の仕事を抱えて神経質そうな顔を全面に押し出して憚らない団長が、どうやってこのような時間を取ったのやら、【ツェントル】に残された副団長を始めとする兵士たちのことを思うと、ほんの少しだけ、気の毒に思わないでもなかった。

それよりも意外だったのは、第七師団の団長が、まだこの街に残るということだった。

あれだけのことがあった後で、あの掌中の玉のような人物をむざむざと一人でこの長い道のりを帰すとは思えなかったからだ。

だが、そう言えば。

イリヤはあの黒髪の一見、少年のような人物が、初めてこの街にやってきた時のことを思い出していた。

ルークから、事前に黒い髪と黒い瞳をした線の細い旅人が着いたら良く見ておけと密かに連絡を寄越されていたのだ。

あのルークが、わざわざ繋ぎを取って知らせてきたということに、一体どんな兇状持ちがやってくるのだろうかと気を張っていたのだが、ひょっこりと現れたのは、ほんの子供のような幼い顔立ちの少

年で、念の為、呼び止めて、被っていた帽子を脱がせてみれば、艶やかな黒髪が真っ直ぐに肩先に散らばった。

呼び止めたのは、ちょっとした好奇心だった。

実際に言葉を交わしてみれば、その人物が見かけよりもずっと大人びていることが分かった。受け答えも丁寧で落ち着いていた。その色彩と顔立ちがやや珍しいということを除けば、不審な点は見当たらない。

ルークが何を思ってのことだったのかはあの時は分からなかったが、とりあえず、繋がりを作る為に自ら名乗ったのだ。

その少年は、いきなりの展開にややぎこちない笑みを浮かべていたが、それは、いかつい兵士たちの中にいてはあまり拝めないようなほんわかとした優しい微笑みだった。

あの時、一緒に門番の任に就いていた相方の兵士は、いつもの厳しい顔付きはどこへ行ったのやら、あからさまに眦を下げて、この辺りではあまり見かけないさらさらとした黒髪を撫で回していた。

あれだ。可愛い犬っころを愛でる感じとでも言えばいいだろうか。むさ苦しい男連中の中にあっては、愛玩動物みたいなものに映ったのかもしれない。

そして、件の人物は、厳つい兵士から解放されるとやや緊張した面立ちを残しながらも、この場所を潜って行ったのだ。

その時の表情もまだ記憶に新しかった。

あの時、リョウは確かに一人だった。遥か北のスフミの方からやってきたと言っていた。

ということはあの長い道のりを遥々、独りで辿って来たということなのだろう。

行きは、それで収まった。だが、帰りはどうなるのだ。独りきりであの長い旅路を行かせるのだろうか。

しかも、蓋を開けてみれば、驚いたことにリョウは女だったのだ。

この国では、訓練された兵士や腕に覚えのある者でない限り、女が独りで旅に出ることはまずなかった。あんなか細い腕で、いざと

いう時に何かが出来るとは、とてもじゃないが考えられなかった。

「あの……第七のお二方は……まだ、こっちに残るんですよね」

リョウはまさか独りで帰路に着くのだろうかと思い、イリヤがそう言葉を発した途端、室内の体感温度が一気に下がった気がした。

――――――え？　不味かった？　まさか、やっちまったか？

恐る恐るイリヤが戸口に近い所に立っていたユルスナールを見ると、明らかに機嫌を急降下させた男の顔があった。

無表情なのは相変わらずなのだが、なんと言うか、そこに輪を掛けたように冷気が取り巻いているのだ。

イリヤは自分の失言に冷や汗を垂らした。

どうやら触れてはいけない部分を掠ってしまったらしい。

冷気から凍気になりそうな気配に助けを求めるべく、ユルスナールの隣に立つブコバルを見やれば、いつもはなんやかんやと茶々を入れる筈の男は、関わりたくないとばかりに肩を竦めてみせたのだ。

――――――何、この空気。俺にどうしろと！

凍てつきそうな気配に、内心、冷や冷やしていれば、助け船は意外な所からやってきた。

「気にするな。あれは拗ねているだけだ」

ドーリンが男の様子をことも無げに看破した。

――――――拗ねているだって？　んな、可愛いもんじゃねぇだろうがよ！

イリヤは心の中で盛大な突っ込みを入れた。

揶揄されたことが大層気に食わなかったようで、ユルスナールがギロリとそれこそ、知らない相手が見たら人を一人殺してしまいそうな勢いでその発言者を睨み付けたのだが、

「本当のことだ」

対するドーリンは慣れているのか、全く気にした様子がなかった。
「あれは、リョウに共に帰るように勧めたのだが、首を縦に振って貰えなくてな。拗ねているだけだ」
「え、まさか。リョウは、ひょっとして一人で帰るんですか？」
イリヤは、なにがしかの事情を知っていると思われる己が上司に矛先を変えることにした。
「いや、リョウは一人ではない。流石に物騒だからな。一人でスフミまで帰るなどと言ったら、俺でも思い止まるように言うだろう」
ドーリンもイリヤと同じことを考えていたらしい。
ということは、だ。リョウはユルスナールたちの誘いを断った。だが、帰路に着くのは一人ではない。
ということは、誰と一緒に帰るというのだろうか。当然のように疑問はそこに行き着く。
しかし、室内に漂う底冷えする空気にイリヤはそれを口にすることを躊躇ったのだが。

「えー？　てことは、リョウは、一体、誰と一緒に帰るんですか？」
ウテナから出された直球とも言える問いに、室内の空気にぴしりと亀裂が走った気がした。
イリヤ自身も知りたかったことではあったが、若干一名、恐ろしいまでもの寒々しい空気を醸し出している人物の手前、口に出してよいものかと迷ったのだが、相棒のウテナは、かくも勇敢であったようだ。
――――――ウテナ、夜道と背後に気を付けろよ。骨は拾ってやるからな。
イリヤは心の中で静かに合掌した。
只でさえ、リョウに関して言えば、ユルスナールの神経を逆撫でしていたであろうウテナのことだ。後で、何が待ち受けているか分からない。例え、ユルスナールが高潔で清廉潔白な男だとしても、だ。そこに入り込む感情が色ものであるから故に、その反応は未知

数だった。

「それは、見てのお楽しみだ」

だが、なにがしかを知っているかに思えたドーリンは勿体ぶったようにそう口にすると薄らとその口元に笑みを刷いたのだ。

己が上司の珍しい表情に、今度は、ウテナの方が一瞬だけ固まった。が、すぐにうっそりと目を細めて特有の胡散臭そうな笑みを浮かべた。

それを目の当たりにしたイリヤの背筋に悪寒が走った。

ウテナだけならまだしも、上司であるドーリンまでもが凶悪すら見える意味ありげな表情を浮かべていた。何だかやたらと楽しそうである。

対する第七師団の面々は、揃いも揃って、苦々しい顔をしていた。実に対象的な反応であった。

――――――なんだ、なんだ？　一体、リョウの側には誰が居るんだ？

イリヤは一人、恐々としながらも、内心の好奇心を抑え切れずに主役の登場を待つことにした。

やがて、すっかり旅支度を終えたリョウが通用門に姿を現した。その隣に寄り添うようにしていた人物に、イリヤは暫し呆気に取られたのだった。

門の所に集まっていた男たちを一瞥して、セレブロはさも愉快そうに目を細めた。

『ほほう。揃いも揃ってか』

白く輝く長い髪が、日の光りを反射してきらきらとまばゆいばかりの煌めきを放っていた。

ゆったりとした術師風の長衣の裾が風に翻る様は、それを身に付けた人物を取り巻く厳かな空気に似つかわしかった。静々と歩みを進める様は、どこか近寄り難い気を見に纏っているようにさえ思えた。

セレブロの視線の先に並んだ男たちの顔触れを見て、リョウはひっそりと微笑んだ。

ユルスナールとブコバルはともかく、【ツェントル】の三人がわざわざ見送りに来てくれているとは思わなかった。偶々なのかも知れないが、最後に言葉を交わすことが出来て良かったと思った。

黒に近い深緑色の外套を来た小柄な人物は、重厚な門の内側にある詰所脇に立つ男たちの元にゆっくりと歩み寄った。その立てられた襟から覗く首元には、真新しいくすんだ乳白色の暖かそうな【シャールフ(襟巻)】が巻かれていた。

その直ぐ後ろに長い衣を翻して、長身の男が続いた。

「セレブロ殿。リョウを宜しく頼みます」

慇懃に兵士としての礼を取ったユルスナールに、セレブロは可笑しそうに口角を吊り上げた。

『無理をせずとも良い。気に食わぬと顔に書いておる』

「……セレブロ」

軽口を叩いたヴォルグの長をリョウは嗜めるように呼んだ。

『本当のことだろうに』

リョウは案じるようにユルスナールの顔ちらりとを見た。

そこにあるのは、いつにもまして色の無い表情で、その心の機微がよく見えなかった。

だが、醸し出される空気は、若干の緊張を孕んでいた。

昨日からユルスナールとセレブロはずっとこんな調子なのだ。間に入るリョウはなんとも言えない微妙な気分だった。

ユルスナールはセレブロの手前、自制をしているようだが、内心は面白くないようで、セレブロの方も放っておけばよいのに、ちくちくとユルスナールをからかうものだから周囲の方が、気を揉んで仕方がなかった。

人の街に降りるというのは随分と久し振りとのことで、セレブロ自身、浮かれているのかも知れなかった。そして高揚した気分のままにちょうど体よく傍にいる男を弄っているようだった。

いやはや、ヴォルグの長はやけに人間臭い所がある。

リョウがセレブロの着衣をくいと引けば、粗方気が済んだのか、表情を戻すと居並ぶ男たちに向き直った。

『まぁ、よいか。こたびはリョウが世話になった。手を掛けたな』

「いえ」

短く答えたユルスナールに、セレブロは愉快そうな視線を投げた。そして、そのまま視線をついと横にずらして濃い茶色の髪を丁寧に撫で付けた男の方に向いた。

『うぬは、ナユーグの所か』

「ハ、お初にお目に掛かります。ドーリンと申します」

丁寧なドーリンの所作にセレブロは鷹揚に頷いて見せた。

『そのほうにも、世話をかけたな』

「いえ」

『それに、うぬらも』

そして、虹色に輝く瞳が、ドーリンの背後に控えていた二人の兵士に向けられた。

『改めて礼を言う』

ウテナとイリヤは、始終目を白黒とさせていたが、只ならぬ気を発する相手に姿勢を正すと兵士としての礼を取った。

何だか、思ったよりも大袈裟になっていはしまいか。

セレブロが迎えに来て、ユルスナールに面倒を掛けなくて済むと喜んだのも束の間、却ってややこしいことになっている気がしてな

らなかった。
「何だか、セレブロはワタシの保護者みたい」
思わず苦笑したリョウをセレブロはまじまじと見下ろした。
『何を言う。似たようなものではないか』
当然とばかりに返されて、リョウとしては、それ以上、踏み込むことは慎んだ。

「まぁ、これならこっちとしても、安心してお前を送り出せるには違いないからな」
周囲に流れていた微妙な空気を取り成すように言ったブコバルに、『ザパドニークの小倅も偶には気の利くことを言う』
セレブロが皮肉っぽく小さく笑った。
ブコバルはあからさまに嫌そうな顔をしたが、それに何か言い返そうとすると事態は再び堂々巡りになるので、大人しく口を噤んだのだった。

「皆さん、お世話になりました」
リョウは頃合いを見計らって小さく頭を下げた。
「ああ、達者でな」
「また、来いよ。今度は美味い飯が食えるとこに案内してやるから」
「はい、楽しみにしてますね」
白い歯を見せて指を突き上げたイリヤに、リョウもにこやかに返した。
「ああ、ボクも、今度来た時は、取って置きの場所に連れていってあげるよ」
そう言って、茶目っ気たっぷりに片目を瞑ったウテナに、
「馬鹿野郎、お前の『取って置き』なんか信用できるかよ」
イリヤは性懲りもなく下らないことを抜かした相棒の頭を拳で小突いた。
ゴチンといい音がして、ウテナが盛大に顔を顰めた。

「痛いなぁ」
それを見ていた周囲が笑いに包まれた。
「ボクの誠意ある行為にケチを付けないで欲しいものだよ」
「何が『誠意ある行為』だ。言ってろ」
和やかな笑いに包まれながら、リョウは【ツェントル】の三人とこの国のしきたりに則り、別れの挨拶を交わした。
「リョウ、大丈夫だとは思うが、気を付けて帰れよ」
「はい」
「また、北の砦でだな」
「そうですね」
ブコバルとも同じように頬に軽く唇を触れさせて、抱擁を交わした。
それから、ブコバルは何を思ったのか、不意に鼻先でニヤニヤと下卑た笑みを刷いたかと思うと、
「リョウ、もっと肉を付けろ」
唐突にリョウの尻を大きな手で鷲掴みにした。
「ルスランに飽きたら、いつでも俺が相手になってやる」
やはり、最後まで唯で済まないのが、ブコバル・ザパドニークという男である。
「だが、俺としては、もう少し肉付きがいい方がいいからな」
「大きなお世話です！」
リョウは勢いよく両手でパチンとブコバルの顔を挟むと、その無精髭の生えた薄い頬の肉を思い切り引っ張った。
そして、すぐさまパッと飛び退くとブコバルの反撃をかわす為にセレブロの後ろに隠れた。
「……ブコバル」
ドーリンとユルスナールの冷たい視線もなんのその、小気味良い音のした頬を擦りながら、
「なんでぇ、ちょっとした冗談じゃねぇかよ」
飄々と嘯いた男に、

「お前の場合は、冗談に聞こえん」
『やれやれ、相変わらず、下世話な男よ』
セレブロからも呆れた声が漏れたのだった。

「リョウ」
そっと名前を呼ばれて、リョウは気を取り直すと、最後の一人の元に歩み寄った。
リョウは、徐にそこに静かに立つ、銀色の髪を緩く後ろに撫で付けた男を見上げた。
男らしい精悍な顔つきにある瑠璃色の双眸は優しさに満ちていた。
こうして、この男と別れの挨拶をかわすのも二回目のことだった。
一度目は春の終わり、北の砦でのことだった。
そして、今、この【プラミィーシュレ】で、再び、暫しの別れを口にする。
季節は巡って、冬の始めになっていた。

あの時と違うのは、互いの気持ちの在り方だろう。あの時は、まだ分からなかったけれど、今ならば、はっきりと認識することが出来る。
例え、遠く離れていようとも、この交わりはきっと切れないということだ。
ここで終わりではない。これからも続いて行くであろう繋がりだ。
目には見えないその強固で柔軟な糸は、自らの今後を支えてくれるであろう導(しるべ)になり得た。
「気を付けて帰れ」
「はい」
名残惜しそうに頬を辿る剣ダコのある掌に、リョウはそっと自分の手を重ねた。

「森の小屋に着いたら、北の砦に連絡を寄越せ」
「ルスランはまだ帰っていないのでしょう？」
幾ら馬を使うと言っても互いの到着時期にかなりの時間差が出るだろうことは明白だ。リョウが無事着いたとの報せを出しても、それを知らせたい相手はまだそこにはいない筈だった。
そのことを問えば、
「お前が無事着いたという確認が欲しい」
何処までも過保護な男の言い種にぶつかった。
恐らく、シーリス経由で聞くということなのだろう。砦に帰った時に、念の為、安否確認をしておきたいというところか。こういう細かなところまで気が回るのは、流石、北の砦を預かる師団長というところだと思った。
リョウは了承するようにそっと微笑んだ。
「分かりました。ルスランも戻ったら、イサークあたりでいいので連絡を下さいね。お願いした荷物を取りに伺いますから」
「ああ。約束しよう。こちらもシーリスに話を通しておくから、暫く滞在する積もりで来い。いいな？」
それは、この国の常識と事情をお浚いする為に、臨時に勉強会を開いてくれるという申し出のことだった。そして、その中には、リョウが今後、術師に成るための道筋と方策を具体的に相談しようということが含まれていた。
リョウとしては願ってもみない申し出であったが、ユルスナールたちに迷惑を掛けると思うと心配で仕方がなかった。少なくともシーリスにはまだ話が行ってないのだ。唯でさえ忙しそうにしている相手を巻き込むのは忍びない。何から何まで申し訳ない程だ。
だが、それと同時に、そうやって自分を気に掛けてくれる相手がいるということは、とても心強く、そして有り難かった。
「いいんですか？」
「ああ。構わん」
躊躇いがちに尋ねたリョウにユルスナールは案ずることはないと

穏やかに微笑んだ。
こうやって、ユルスナールはいとも簡単に自分を甘やかし、手を差し伸べてくれるのだ。
その恩を、今後、どうやって返して行ったらいいのだろうか。
リョウは差し出された腕を掻い潜り、そっとユルスナールの首に自らの腕を巻き付けると名残を惜しむように頬を擦り寄せた。
別れと言ってもほんの暫くのことだ。それなのに、男の首元から立ち上る馴染み深い匂いに、胸が締め付けられそうな堪らない気分になった。
最後の三日日余り、この男と過ごした一時は余りにも濃密だった。全ては都合の良い夢の中の出来事だったのではと思える程に。
満たされているはずなのに、胸内に渦巻く一抹の寂しさは何故なのだろう。
それは、以前ならば考えもしなかった気持ちの変化だった。段々と欲張りになって行く自分が、少しだけ、怖かった。
だが、表面上はそのようなことをおくびにも出さずに、感謝の気持ちを込めて、男の両頬に掠めるだけの唇を寄せた。

束の間の抱擁を解いて、
「リョウ、辛抱出来るか？」
鼻先で問われた言葉に、
「何がです？」
リョウは怪訝そうな顔をした。
男の薄い唇が、弧を描いた。
「あんなに濃い時間を過ごした後だからな」
――――――独り寝が寂しくて仕方がないんじゃないか？
仄めかされた事柄を敢えて流すようにリョウは小さく笑った。
「大丈夫ですよ」
それは、ちょっとした見栄だったのかもしれない。
また、穏やかな日常が戻って来るだけなのだ。燻る熾き火に焚き

つけるものなどありはしまい。熱に浮かされた時間が異例のことだったのだ。

「まぁ、いいか。今度は北の砦だな」

ユルスナールは目を細めるとリョウの耳元に、小さな囁きを吹き込んだ。

――――――次は、遅くとも印が消えない前にだな。余所見をするなよ？

ねっとりとした隠微な低い声に、引き金のように昨晩の記憶が湧いて出て来て、リョウは知らず、ほんのりと目元を赤らめた。

襟巻が回る首筋のとある部分には、今朝方、男が施した鬱血の跡が色濃く付いていた。

その跡が消えない内に。

仄めかされた符牒に身体の奥に漣が走る。余りにも単純に反応を返してしまう自分が、居た堪れなかった。

見上げた先には余裕たっぷりのどこか尊大な感すらある男の顔があった。

「もう、こんな時に何を…」

――――――言うんですか。

だが、恥ずかしさを誤魔化すように上げられた抗議の声は、男からの強引な口付けに途中で掻き消えてしまった。

リョウは吃驚して慌てて身を捩ろうとしたのだが、その前にしっかり回された大きな手と腕に後頭部と身体を押さえ込まれてしまって、入り込む男の舌先を甘んじて受け入れるしかなかった。

人前であるという恥ずかしさも、段々と深さを増してゆく口付けに霞んできてしまった。

最後の口付けは、それ程、執拗で長いものだった。

まるで、言葉にはならない気持ちを乗せるように。

漸く放された時には、目に生理的な涙が滲んでいた。

潤み始めた深い黒を湛えた瞳を見て、ユルスナールは名残惜しそ

うに、その縁に口付けた。

『リョウ、気が済んだか？』

後方から、掛けられた声に正気に戻れば、少し離れたところで、セレブロが静かに立っていた。

その作りもののめいた表情からは感情が読み取れなかったが、さぞかし呆れているに違いないとリョウは思った。

――――――さて、帰るとしますか。

気持ちを入れ替えるように顔を上げた。

「【ヌゥ、パカー】」

別れの言葉は、いつもよりもずっと砕けたものになった。

仲の良い友人が、【また明日】と気軽に見送るように。

重苦しい空気は要らない。その代わりにあるのは、今後も続いて行く日常に繋がるであろう軽やかさだ。

リョウはユルスナールに微笑んで、掠めるだけの口付けを送ると颯爽と踵を返した。

そして、セレブロから差し出された手を取ると振り返り様、空いている方の片手を目一杯、振った。

こうして、二人の束の間の旅人の姿は、瞬く間に街道の向こうへと消えていった。

すっきりと晴れ渡ったとある冬の日の朝のことだった。

ダ・スヴィダーニィヤ　～また逢う日まで～（後書き）

ここまで読んでくださってありがとうございました。
長かった第三章【プラミィーシュレ】編も漸く終了です。次回、小さな小話を挿んで、第三章を終りにしたいと考えています。

回遊するキモチ（前書き）

第三章の最後は、カマールのお話で締めくくりたいと思います。それでは、どうぞ。

回遊するキモチ

「もう、カマールったら、リョウがいなくなった途端にこれなんだから！」

呆れた顔をしながらも、テキパキとした動作で部屋の中を片付けて行く女の後ろ姿を、カマールは静かに視界の隅に認めた。

母親が暮らすスフミ村から遥々やって来た【伝令】が、この街を旅立ってから早二日、鍛冶職人としてのカマールの日常は、良くも悪くも以前と同じように小さな衝突と混沌と、そして幾ばくかの平穏に沿って、いつもの日常を取り戻しつつあった。

全てが元の流れに戻って行く。小さな支流が再び大海に注ぐが如く。

だが、その中にごくごく小さな変化が訪れていることに気が付くのは、もう少し後になってからのことだった。

「折角、綺麗になったと思ったのに。こんなんでどうするのよ？」

――――――――これだから、男の一人暮らしは目も当てられないわ。

滑らかに止めどなく流れ出す憎まれ口を耳にするのも久し振りのことだった。

日数にしてみれば、あの子がここに居た間のことであるから、十日程というごくごく限られた短い期間でしかない筈なのだが、それを懐かしいと感じてしまった自分に、カマールは内心、驚いていた。

口を開けば出て来るのは、怠惰な男を窘める言葉ばかり。愛嬌があると外では専らの評判の丸顔も眉がしんなりと寄って、かなりおかんむりのようだ。

恐らく、あの子の見送りに立ち会えなかったことをいまだ根に持

っているのだろう。もう少し早く知らせてくれれば、ちゃんと時間を作って別れの挨拶ぐらい出来た筈であるのにと。

あの子のことを憎からず思っていたのは自分と同じようで、まるで弟のように可愛がっていたらしいことを後で中庭に集まっていた近所の女たちに聞いたのだ。

最後に一言、直に言葉を交わせなかったことが、相当残念だったようだ。

カマール自身は、自分が怠惰だとは思っておらず（寧ろ、勤勉な部類に入ると自負している）自分の遣りたいようにやっているだけなのだが、それは女の方から見たらてんで話にならないらしい。

認識の差は明らかに甚だしく、だが、今更、それを埋めようとは思ってもいなかった。

「それは、後でやろうと思ってたんだよ」

「まぁ、『後で』って。カマールの『後で』は、明日や明後日のことなのね？」

良く回る口を動かしながらも、その手は休まることを知らない。

よくもまぁ、あれだけしゃべくり回れるものだと寡黙な性質であるカマールは、常々、女という生き物が不思議で仕方がなかった。

不機嫌になるのならば、わざわざ来なくとも良かろうに。

売り言葉に買い言葉で、思わず出掛かりそうになる口癖を喉の所で押し留めた。

口では敵わないのは重々承知だ。それに、きちんと連絡を入れなかった落ち度もやはり自分の方にはあるのだろう。そう思うが故に、カマールは押し黙って、小さな不平不満を垂れ流しながらも綺麗に片付いて行く部屋の一角を複雑な気分で眺めていた。

「そんな説教染みたことばっかり言ってると男が逃げるぞ？」

ついついそんな憎まれ口も言ってみたくなる。

「まぁ、お生憎さま。これでもそれなりに引く手数多なのよ？」

背中を向けたまま、返す女の口調はいつものように強気であった。

「ハハ。そいつは恐れ入ったぜ」
「是非家に来てくれって、縁談だってあるんだから」
そう言って振り返った女の頬は、年相応の張りと艶に溢れていた。暫しの労働に薄らと赤く染まる肌の血色の良さは、元々の白さを一層際立たせることになった。
冬場だというのに腕まくりされた袖から覗くしなやかな腕の白さを、カマールは、眩しいものを見るように見詰めた。

ソーニャに見合い話が持ち上がっている。そんな話を聞いたのは、ついこの間のことだった。狭い地域での商売仲間同士が交わす世間話の中でだ。この界隈の噂はあっという間に広がる。
【スタローヴァヤの看板娘（街の食堂）】の通り名の通り、若くて気立てのいい娘であるソーニャには度々、見合い話が持ち込まれているらしい。
そのことをカマールは当然の如く感じていた。

ソーニャとは、カマールがこの街に来て、レントの下に見習いとして弟子入りした時からの付き合いだから、かれこれ、十年は軽く超える。初めは人見知りをする大人しい子だと思っていたが、蓋を開けてみれば、それなりに社交性のある明るくて陽気な性質だった。
特別美人という訳ではないが、愛嬌のある丸顔にいつも浮かんでいる頬の片笑窪が優しい気性を良く表していた。
流行り病で早くに母親を亡くし、その後、父親と二人で同じ通りにある金物屋の店を切り盛りしていたが、ここ数年は、金物屋の商売は父だけに任せて、自らは街の食堂に給士として働きに出ていた。
若い娘であるソーニャの朗らかな笑顔をお目当てに来る男の客もいるらしい。そんなことも風の噂に耳にした。
往々にして世話焼きな娘だ。自分のような者の所にまでも気を配り、近所のよしみということで態々お節介を焼きに来る位だ。ソーニャは、嫁ぎ先では良き妻、そして良き母になるだろう。それを少し誇らしく思った。

だが、それと同時に、一抹の言い知れぬ寂しさのようなものだろうか、形にならないもやもやとした澱が胸の奥底に溜まって行くような思いをカマール自身は感じていたが、それに対しては、見て見ぬ振りをしていた。生涯独り身を通すと決めた自分には、関係の無いことだったからだ。

――――――『ヒト』は、二人揃って、初めて『ヒト』になるんです。

カマールの脳裏には、この街を去る前に交わした伝令の少年の言葉が浮かんでいた。

あれは、あの子が自分の所から出て行く前の晩の、夕食の席でのことだった。

自分の祖国では、『ヒト』とは、こういう字を使って表わすのだ。そう言って、少年のか細い指がくすんだお手製の紙の上に描き出したのは、斜めになった短い線と長い線が交差する不思議な象形だった。

よくよく聞けば、それがその少年の国の文字であるらしい。

この国では『ヒト』は、【チェラヴェーク】一語だ。そして、それが複数になると【リュージ】に変わる。其々、幾つかの文字を組み合わせた綴りで、たった一つの文字だけで意味を表わす言葉というものは存在しなかった。

斜めになった長い線を支えるように短い線が真逆の角度で走る。其々の線は人間を表わし、こうやって互いに支え合う人間が二つになって初めて、一人の『ヒト』を形成するのだと。

詰まり、人間は一人で生きて行くものではないのだ。知らず知らずの内に誰かに支えられ、そして自分も誰かを支えて、そういった相互干渉の中で生きて行く。それは人が人であるが故のこの世の理なのだと静かに語ったのだ。

――――――ワタシは、この国に来てからずっとそのことを感じていました。そして、この幸運に感謝しているんです。

そう言ってひっそりと締めくくった向かいに座る少年の顔は、いつも以上に大人びていて、とても真摯なものだった。

――――――ですから、『一人で生きなくては』なんて思う必要は、本当はないんだと思います。人が人である以上、それは絶対に不可能なことなのですから。そう思ったら、ある時、ふっと肩の力が抜けたんです。

あの時は、何故、そんな話になったのかは皆目、見当が付かなかったが、今では、あの子の言いたいことが何となく分かるような気がしていた。

あの子に面と向かって、自分の主義や主張を話したことはない。それでも、敏い所のある子だ。恐らく周囲からの反応や噂話に自分のことを聞き齧ったのだろう。

そして、鍛冶職人が身を置く厳しい現実も。

中途半端な同情や憐憫とも違う淡々とした口調は、あの子自身のことを話しているように見えて、その実、自分が敢えて目を背けてきた物事へと目を向けるようにと仕向けたものであったのかもしれなかった。

いや、流石に、そこまで考えるのは、穿ち過ぎだろうか。あの子に他意はなかったのかもしれない。

今となっては、それを直に確かめることは出来ない。だが、その言葉は、思いの外、カマールの心の中に響いたのは確かだった。

――――――素直になってみてもいいのだろうか。それも今更か。

カマールの男らしい口元が、自嘲気味に歪んだ。

主義を変えるのは、それまでの自分の行いを否定するようで居た

堪れなかった。中々、そう変われるものではない。特に自分のような保守的な男は。

暫し、瞑想をしてみる。

自分が描く未来予想図。その軌道上に立つのは――――――――。

幾つもの分岐する選択肢の中で、自分の日常の中に変わらず佇む女の横顔を思い浮かべてみた。

そして、出された一時的な結論を、まぁ悪くはないかもしれないなどと思ってみたことも確かだった。

カマールは、忙しそうに動く背中と滑らかな曲線を描く腰に揺れる白い前掛けの結び目へ再び目を遣った。

そして、その景色を名残惜しそうに記憶の片隅に切り取ってみた。

「まぁ、アレだ。お前がとうとう最後まで売れ残っちまって、仕方がねぇって時には、俺が引き取ってやらんでもねぇか。これも近所のよしみってやつだ。有り難く思え」

そう言って意地の悪そうな男らしい笑みを浮かべたカマールをソーニャは、振り返るとまじまじと見詰めた。

突然、何を言い出すのかと思えば。

男にしては珍しい冗談だ。

しかしながら、こちらをじっと見つめる男の瞳は、いつになく真剣で誠実なものだった。

ソーニャは、ふいと顔を背けた。

「大きなお世話よ。あんたみたいな男なんてこっちから願い下げなんだから。売れ残る前にとっとと行っちまうんだから」

そんな辛辣な言葉とは裏腹に、ソーニャは、慌てて顔を壁の方に戻すと込上げて来るものを指先でそっと拭った。

「もう、いきなり、何なのよ、一体」

何の心境の変化なのかは知らないが、唐突に訳の分からない事を言いだした男に、小鳥のようにぶちぶちと憎まれ口を囀りながらも、その顔は、昂ぶる感情のままにどこか泣き笑いのような表情を浮か

べていたのだった。

回遊するキモチ（後書き）

ここまでお付き合い下さりありがとうございました。
次回はオマケの小話にて締めくくりたいと思います。

お伽噺の裏表（前書き）

第三章の最後に、リョウを見送った後の五人の男たちの様子を小話にしました。

お伽噺の裏表

「結局、あの威圧感ばりばりの人って、誰だったんですか？」
小さく挙手をした己が部下に、ドーリンは目線で続きを促した。
「あのー、質問なんですけど」

ここは、スタルゴラド第五師団が駐屯する詰め所、通称【ツェントル】の中にある団長室の一室である。
束の間の旅人の見送りを終えた一行は、通常業務に戻るべく、自分たちの持ち場に帰ってきたのだが、五人の男たちは、そのまま一旦、団長室に入ることになった。

質問を発したウテナの横で、イリヤも同じように好奇の色をその眼差しに強く乗せていた。
眩いばかりの長い白髪に光の加減によって虹色に変化をする灰色の瞳。研いた石材のようにどこか作り物じみた造形。顔立ちは、恐ろしく整った部類に入るだろう。
だが、それよりも、本能にひしひしと訴える厳かな空気と圧迫感にイリヤとウテナは身の竦む思いをしたのだ。
兵士としてそれなりに様々な修羅場を潜り抜けて来たと自負する自分たちが、あのような気分になるのは初めてのことだった。
それにユルスナール、ブコバル、ドーリンの三人の男たちが、あの人物に只ならぬ敬意を払っていた。それだけでも相当な部類に入るだろうが、あの男は、王都の貴族という訳ではなさそうだった。あれだけ特異な人目を引く風貌をしていれば、職業柄、イリヤとウテナが知らないということはあり得ないからだ。とりわけ、自身貴族の出身であるウテナは尚更のことだった。

ドーリンは、いつになく興味津々の視線を向けて、こちらをじっと見る二対の瞳に愉快そうに微笑んでいた。
「あの方は、この国の者なら誰もが知っているだろう。まさか、このように間近でお目にかかれるとは思ってもみなかったが」
そう言って、どこか冷めやらぬ高揚に長い息を吐いた己が上司に、イリヤは口の端を引きつらせた。
それは、まるで恋する乙女のような反応に見えたからだ。
「確かになぁ。あんな顔してっけど、ありゃぁ、相当な爺さんのはずだぜ。俺もおったまげたし」
「まぁな。リョウから事前に人の姿を取るとは聞いてはいたが、なかなかどうして、この目で直に見るまでは、俺も想像がつかなかった」
「てか、ありゃぁ、詐欺だよなぁ。ぜってぇ。まぁ、捻くれてる中身は変わんねぇみたいだけど」
「そんなことを口にするとまたどやされるぞ。まぁ、姿形は違えども、あの気は変わらないからな」
同じく見送りに出ていた第七師団の双璧であるユルスナールとブコバルは何やら思うところがあるのか、急に意気投合して話を弾ませていた。

前提条件の分からないウテナとイリヤは、益々混乱していた。
それを見たドーリンは仕方がないかと小さく息を吐いてから、口元を緩めると、窓際に立ち、静かに瞑目した。
「【彼の者、森の守り人。古の約定に従い、天と地の理を説く】」
聞き慣れた低い声が紡いだのは、この国の人間ならば、誰もが知るお伽噺の一節だった。
「【その身に纏うは白銀の衣。虹色に輝く眼は、神々に愛でられし証なり。この世に大地が生まれし時と共に産声を上げし古き一族。その身に刻むは悠久の時】」
「それって……かの有名な【ヴォルグ】の一節ですよね？」

「森の王、あの創世記の神話に出てくる？」
驚きに固まった二人に、ドーリンは静かに頷いた。

それは、この国では、子供から大人まで広く知られている存在だった。お伽噺の中や昔話の中に必ず登場する獣だった。
この国の遥か北の方角には、この大陸の始まりからあるという【原始の森】があった。別名【太古の森】ともいう。そこに古くから主のように暮らし、森を守る存在として人々から崇め立てられていたのが守護者【ヴォルグ】の一族であった。
中でも【ヴォルグ】の長は、誇り高き【白銀の王】と呼ばれた。その名は、艶やかで溢れんばかりに光り輝く白い体毛に由来しているという。人は畏怖と畏敬の念を込めて、悠久の時を刻む大きな獣の一族をそう呼んだのだ。

【ヴォルグ】は昔、森で人と共にあったという。人がまだ森に生活の基盤を置き、獣たちと言葉を交せる能力を持っていた時期のことだった。人の王は、森の長と共に交わりながら一定の秩序の下に暮らしていた。
やがて、時は下り、原始の森を離れた人は、かつての能力を失った。そうして、森の獣たちと人の意識は分断され、人の中では【ヴォルグ】の存在も非現実的なものになったのだ。そして、真実は、細々と物語の中にしか存在しえなくなったのだ。一部の知識を脈々と受け継ぐ一族と限られた【術師】を除いては。

子供の頃に読んだ昔話を思い出しながら、イリヤはふと違和感を覚えた。
「【ヴォルグ】って、人でしたっけ？　いや、獣だったよな。話の中じゃ、大きな狼みたいな四つ足の獣だってあったし。人の王の【フセスラフ】が戦いに出る時には必ず傍に寄り添ったって話だったから。ひょっとして、そういう特殊な能力を持った一族が人の中に

あったっていう喩え話だったとか？」
昔話は、往々にして真実をそのまま伝えるものではない。姿形を変え、実しやかに虚構の中に真実が練り込まれているものだ。
【ヴォルグ】自体は、とある人の総体を揶揄したものだったのだろうか。
そう思い混乱するように首を巡らせたイリヤに、
「確かに、髪と瞳の色は物語の記述そのものだったよ」
ウテナも相棒の思いつきを肯定するかのように静かに頷いた。
そこには、いつもの軽薄そうな面はどこに行ったのやら、いつになく真剣な表情が浮かんでいた。
そんな部下の様子を見て、ドーリンは密かな笑みを浮かべただけだった。
「まぁ、信じるも信じないも、お前たち次第だ。あの方は、ガルーシャ・マライの友人だそうだ」
そう締めくくった。

ガルーシャ・マライ――――――それは、この国稀代の術師と名高い男の名前だった。
奇天烈な奇人、変人、狂人。人嫌いな偏屈学者。偉大な術師。
その人物を表わす枕言葉は、良くも悪くも尽きることが無い。そのどれもが幾ばくかの真実と虚構を孕んでいる。
ガルーシャ・マライの筋であれば、【ヴォルグ】と知り合いとしても頷けた。それだけの信憑性をあの男自身が持っていたからだ。
「では、仮にあの男があの【ヴォルグ】の一族に何らかの関わりのある人物だと仮定して。どうしてそんな人が、リョウの迎えに来るんですか？」
取り敢えずの部分は、仮定として置いておいて、一番気になっていた所をイリヤが口にすれば、
「それは簡単な話だ」
今更、何を言うのだという顔をして、ドーリンは二人の部下を横

目に流し見た。
「リョウがあの方の知り合いだからだ」
煙に巻いたような答えに、ウテナとイリヤは暫し顔を見交わせると、天を仰いだ。
どうやら上司は、全てを明らかにしてくれる程、お人好しではないらしい。知りたいのならば、自分で調べろということなのだろう。
肩を竦めた二人に、ブコバルが思わぬことを言った。
「あの爺さんは、知り合いって言うよりもリョウの保護者気取りだぜ。見ただろ、あの好々爺っぷり。リョウには漏れなくアレが付いてくる。そう考えた方が早い。なぁ、ルスラン」
そう言ってどっかりと団長室の長椅子に腰を下ろしたブコバルに、
「まぁ、お前の言い方は幾分語弊があるが、当たらずとも遠からずと言うところか」
いつもならば、その言動を窘める筈のユルスナールまでもがそれを肯定するように頷いていた。

あの男は、外見だけを見るならば若い男だった。それも恐ろしく綺麗な部類の。
それをブコバルは【爺さん】と揶揄したのだ。
それがブコバルなりの感性なのかは分からなかったが、余計に二人の兵士の思考を混乱させたことには違いなかった。
それ以来、【ツェントル】内に設置されている様々な資料が置かれている図書室には、これまでに余りお目に掛からないような珍しい顔触れの二人組（要するにウテナとイリヤだ）が、子供向けのお伽噺の絵本を片手に、やけに熱い議論を交わしていたのだとかいないとか。
【ツェントル】の中でも自称読書好きの兵士が、物珍しそうにそれを語っていたというのは、また、別の話である。

お伽噺の裏表（後書き）

ここまで長々とお付き合い下さりありがとうございました。
ここで第三章を終りにしたいと思います。
次回は第四章へ入る前の幕間ということで、北の砦でのお話を幾つか挿む予定にしています。

副団長のかくも優雅な一日（前書き）

ここから暫くは、第四章への繋ぎの幕間として、北の砦での模様をお届けします。第一弾は、副団長のシーリスのお話です。少し長くなりますが、お付き合いください。それでは、どうぞ。

副団長のかくも優雅な一日

スタルゴラド第七師団の駐屯する北の砦は、この国の最北端に位置する軍事拠点である。

周囲を広大な森林と草原、そして、自然の要害が織りなす岩場に囲まれた辺境だ。

要するに、早い話が、雄大な大自然以外は、何もない辺鄙な場所である。

その砦を守る副団長シーリス・レステナントの一日は、一杯の熱いお茶から始まった。

目覚めの一杯は、欠かすことの出来ない習慣になっていた。この砦に赴任してから、早三年。それは今でも変わらなかった。

湯気の立つカップを片手に窓辺に立ち、遠く、なだらかに傾斜する草原の向こうに昇る朝日を眺めながら、シーリスは、ふと、今現在この砦を留守にしている己が上役である男の顔を思い浮かべた。

くすんだ白銀の髪は、この一日の始まりを縁取る朝日の切れ端のようだった。そして、最後の夜の名残のように深い青さを湛えた瑠璃色の双眸は、ひっそりと夜明けを待つ束の間の一時を閉じ込めたようだった。

――――――そろそろでしょうかねぇ。あの男が帰ってくるのも。

虫の報せとでもいうのだろうか。こういう時、シーリスの勘は、かなりの確率で当たった。

シーリスには、術師として身を立てるだけの素養はなかったが、こういう時、自分が腐ってもレステナントの血族であることを思い知らされる気がした。

【レステナント】は、代々、東の神殿に仕える神官の家系だった。

この国、【スタルゴラド】には、古くから続く名家と目される家系が幾つか存在するが、中でも、東の【ボストークニ（ヴォストーク）】、西の【ザパドニーク（ザーパド）】、南の【ナユーグ（ユーグ）】、北の【シビリークス（シービリ）】といった【東西南北】の方位をその家名に入れた四家を筆頭として、【レステナント】もその上位の中に名を連ねていた。その内実はともかく、歴史的な古さだけを見れば、かなりのものだった。

歴史ある由緒正しきレステナント家の中でも、シーリスは異端だった。それは、【術師】を多く輩出する特別な家系の中で、唯一、これといった能力の開花を見せなかったからだ。最低限の素養はあるにはあったが、それはごく普通の一般家庭と比べたらとの事で、神官の家系ではあるまじき低さであったのだ。　そのような理由から、幼き頃はまだしも、長じるにつれて、段々と能力の具現が覚束ないと分かってくると、シーリスは一族の中で疎んじられ、蔑まされるようにな存在になってしまったのだ。

シーリスの父と母は、共に穏やかな気性で優しい人たちだった。アクの強い一族の中では、却って優し過ぎる程に。

父と母は、他の兄弟たちと同様にシーリスに変わらぬ愛情を注いでくれたが、一族の中で唯一と言っていいほど能力の開花を見せなかった息子を内心、心苦しく思っていたことは、幼いながらにも感じ取れていた。父と母が時折、垣間見せた諦観に似た表情は、幼いシーリスの心に見えない楔となって突き刺さったのだ。そして、何の皮肉か、心優しい両親とは違い、良くも悪くも一族由来の強かな精神を持ったシーリスは、中々に屈折した幼少期を過ごしたのだった。

幸運なことにシーリスには姉がいた。

姉はいつでもシーリスの味方だった。年が七つも離れていたということもあるのだろうが、姉は非常に弟を可愛がった。親戚連中の、時には不躾で無遠慮な視線や口さがない悪口から、盾となるように

シーリスを守ってくれたのだ。からかい混じりに揶揄をする他の子供たちに対しては毅然とした態度を見せ、一歩も引かなかった。そんな時、自分の前に立つ、華奢な筈の小さな背中は、とても大きく見えたものだった。

やがて、長じてから、シーリスは家を出た。そして、入隊の資格が認められる十五の歳を待ちに待って、騎士団に入隊を志願したのだ。

実家とは元より縁を切る覚悟だった。

当時、レステナント家の中から兵士になるものは、古い家系を何代遡っても一人もいなかった。親族の中には、末代までの恥だと罵声を浴びせる者も中には居たが、シーリスは全く気に留めなかった。素養のない人間が神官の職に拘ることの方が、余程、笑止千万に思えたからだ。それよりも、自分には何が出来るのか。別の道を探した方がよっぽど建設的、且つ有意義であった。そうして、シーリスは、兼ねてから鍛錬を積んでいた剣の道で己が身を立てて行くことを選んだのだ。

幸い、騎士団の中では多くの仲間たちに恵まれた。それが、今、自分の周りで苦楽を共にしているユルスナール、ブコバル、ヨルグを始めとする砦の兵士たちであった。皆、誰もが、大小程度の違いこそあれ、人には言えない傷をその心に負っていた。

だが、傷の舐め合いのようなことは一度もしたことはなかった。皆が其々に自尊心（プライド）の高い男たちである。そういった仲間たちは、自分たちの傷を決して表には出さないが、その事実を裏返すように、他人を労われる優しい心を持っていた。

家を出る決意を固めたシーリスが、唯一、心残りであったのは姉のことであったが、元より気丈な性質の姉は、弟の旅立ちを笑顔で送り出してくれたのだ。

だが、後で読むようにと渡された手紙の文字は、所々、堪え切れない涙の跡が滲んでいて、面と向かっては口にされなかった姉の懊

悩と悔恨の気持ちが、激励の中に隠れるようにして覗いていた。
それを独り、騎士団の官舎の中で読んだシーリスは不覚にも涙した。それが、思い返せば、これまでの人生の中で、最初で最後の涙だった。今でもその時の手紙は、引き出しの中に大事にしまってある。

――――――そう言えば。
段々と昇りゆく朝日に、急激に明るさを増してゆく明け方の美しい空を見ながら、シーリスは、ふと、七日ほど前にもたらされた一通の伝令を思い出していた。
伝令は、ここより遥か北西に位置する森の辺縁からもらたされたものだった。送り主は、シーリスも良く知る人物である。
真っ直ぐな癖の無い黒髪に同じく黒い色彩の瞳を持つ少年のような人。年端の行かぬ少年に見えたその人が、実は女性であったことを知らされたのは、束の間の客人がこの場所を去った後でのことだった。
あの時の衝撃は、今でも心の内に残っていた。心地よい春風のような爽やかな記憶と共に。
滅多に動じることのない面々が、それこそ大声を上げて笑い転げたのだ。思い込みから生まれた激しい勘違いを昇華するように。
最初は騙されたと思った。まぁ、向こうにはそのような積りなど無かったのかもしれないが。
だが、それも愉快な結末だった。
柔和な面を持った線の細いあの人物が、見かけによらず強かであったことを強く思い知らされた一件だった。

伝令の内容は、『無事、帰還した』というものだった。それを団長のユルスナールに伝えて欲しいと。
その短い文章から察するに、旅の途中、若しくは、滞在先で、リ

ョウと遭遇したということなのだろう。
留守の間、ユルスナールとはいつもの如く、伝令で遣り取りを行っていた。その中には、シーリスが興味を引かれる事柄も触り程度だが仄めかされていたのだ。
――――――さてさて、一体、どんな土産話が聞けるのやら。
シーリスは、窓ガラスに反射する菫色の瞳に好奇の灯火をちらつかせると、その口元に薄らと笑みを刷いたのだった。

シーリスの予感通り、その日、団長のユルスナールがブコバルと共に帰還した。
ちょうど昼を少し回った辺りの頃だった。
隊長の帰還は、砦内のどこにいても分かった。まず、先触れとして伝令が飛ぶということもあるが、その後、砦内がざわざわとした独特な空気に包まれるからだ。
兵士たちが到着の準備を始め、良い意味での緊張感が辺りに漂い始める。今までまどろみの中にあった場所が、改めて覚醒をするような感じだった。
主の留守を預かるシーリスとて、決して手綱を緩めている訳ではないのだが、砦の兵士たちにとっては、やはり隊長の存在は別格だったのだ。

隊長は、規律を重んじ、自他共に厳しいことで有名だが、砦内の兵士たちには慕われていた。
初めは、生来男に備わる威圧感に気圧され、にこりともしない冷たいきらいのある表情とそれを増長させる鋭い目つきを前に委縮するものが多いのだが、それが、単に不器用な所のある男の標準装備（デフォルト）だと分かれば、余り、気にならなくなる。要は、慣れの問題なのだ。余り、多くを語る訳ではないが、要所要所を押さえた抑制された話

振りは、自然と周囲の耳目を集めた。元より、上に立つものとしての天性のものが備わっていいるのだろう。

一見、酷薄そうな面は取り付き難い印象を与えるが、その内面はかなり違った。第一印象では損をするきらいがあるが、少しでも言葉を交わせば、初めの印象は直ぐに書き直される。意外な程に仲間思いで世話焼きでもあった。一度、懐に入れた人間に対して、それは遺憾なく発揮された。

体格にも恵まれ、剣の腕も今では国内で上位に位置する位だ。だが、それは易々と成されたものではない。

ユルスナールが人一倍負けず嫌いで、努力家であることをシーリスは知っていた。元々の天賦の才もあるのだろうが、それ以上にユルスナール自身が、自己研鑽を怠らなかった。

他人の評価には辛口なシーリスの目から見ても責任感の強い真面目な男だった。

貴族の出身で、この国でも名家の部類に入る【シビリークス】の一族だ。

しかしながら、ユルスナールには王都の貴族にありがちな自分の出自を鼻に掛けた所が無く、同じ仲間であってもそうでなくとも平等に分け隔てなく接した。それも、ある程度の基準を上回れば、一般庶民からも多く人員を募る騎士団の兵士たちに慕われる理由の一つだと言えた。

「お帰りなさい、ルスラン。御苦労さまでした」

「ああ」

凡そ半月ぶりに見た男の顔は、出立の時と比べて、格段に機嫌よく見えた。

周囲の大人たちの顔色を窺いながら過ごしたという幼少期の境遇の所為もあるが、シーリスは他人の感情の機微に敏かった。表情の変化には人一倍敏感である。

「こちらは問題ないか？」
「ええ、勿論」
問題などあってたまるものか。その為に自分がいるのだ。
今、シーリスの存在意義は、この男の片腕として留守を恙無く守ることにあった。この男が常に前を向いていられるように、その背中を支え、共に立つことにあった。
標準装備の穏やかな笑顔で自信満々に言い切ったシーリスに、ユルスナールも男らしい笑みを浮かべた。
多くの言葉は要らなかった。
そして、シーリスはユルスナールから差し出された手に己が手を添えると互いにきつく握った。空いたもう片方の手で、互いの職務を労うように腰の辺りを軽く叩く。
それは、初めて出会った頃から変わらない二人の挨拶の構図だった。

「ああ、そう言えば。リョウから無事帰宅したとの報せがありましたよ。かれこれ、七日前になりますか」
「そうか」
シーリスの報告にユルスナールは満足そうに頷いた。
「七日前だって！　えらく早ぇーじゃねぇか！」
ユルスナールの後から続いて砦の玄関口に現れたもう一人の相棒にシーリスもにこやかに言葉を返そうとして、形の良い細い眉をしんなりと寄せた。
「……ブコバル。なんですか。その普段にも増して、一段と輪を掛けたようなむさ苦しさは。いつからここは山賊のアジトになったんですか？」
挨拶やら労いの言葉やらはそっちのけで、そう言わずにはいられない程、ブコバルの格好は酷いものだった。
「いきなり説教かよ」
ブコバルは嫌そうに顔を顰めて指で片方の耳を塞いだ。

「かてぇこと言うなって、シーリス。俺だって、好きでここまで落としてるんじゃねぇぞ？」

ブコバル自身、自分の身なりの酷さにはそれなりに自覚があり、それでもこの格好で暫く過ごしているうちにこの方が楽でいいかなどと思い始めていたのだが、それはシーリスには口が裂けても言えなかった。

「まぁ、大目に見てやれ、シーリス。ブコバルには傭兵のギルドに潜り込んで貰ったんだ」

「そういうこと」

ユルスナールが取り成すように間に入り、尤もらしい理由の一端を告げれば、ブコバルも腰に手を当ててふんぞり返った。

成程。髭はいつ当たったんだかという位に伸び放題であるし、身に着けている衣服も草臥れて薄汚れている。そして所々、解れ掛かっていた。見るからに、如何にもな稼ぎの悪い傭兵のようだ。しかも、稼いだ分は、全て女と酒に消えてしまうような性質の悪い輩だ。

同じ名門の貴族の出身であるのに、自分やユルスナールと比べて、こうまで違うブコバルの存在は、ある意味、不思議で仕方がなかった。人間とは面白いものだと思わずにはいられない。

シーリスは諦めたように緩く息を吐き出した。

「任務の一環ならば仕方がないですか。でもこちらに戻って来たからには、きちんとしてもらいますよ？」

何も言わなければそのままで過ごしてしまいそうな男に釘を刺すことは忘れない。

「わぁーってるよ！」

ブコバルもシーリスの厳しさは長年の付き合いから十分、分かっているので、面倒臭そうにしながらも渋々と頷いたのだった。

「隊長、こちらは団長室でよろしいですか？」

荷物の荷解きを手伝っていた厩舎番の兵士が、大きな茶色の包みを抱えてやって来た。
「ああ、ヤルタ。すまないな」
ユルスナールは、頬にまだ真新しい擦り傷の残る兵士に鷹揚に頷いた。
「いえ」
そして、それを契機に三人は、一先ず団長室に向かうことになった。
シーリスは扉を開けると、ユルスナールとブコバルを先に通し、続くヤルタを中に促した。
「ありがとうございます」
荷物を抱えた自分の為に開けたままの扉を支えてくれているシーリスに、ヤルタは恐縮して目礼した。
ヤルタは、この砦にいる兵士たちの中でも比較的体格のよい部類に入るのだが、ふとした仕草が、何故か小動物のように見えて、周囲の仲間たちにささやかなおかしみと癒しを与える不思議な存在だった。
男らしい太い眉毛のすぐ下には、くりっとした円らな瞳が行儀よく並ぶ。瞳の色は薄らと赤みを帯びた茶色だった。全体を見れば厳つい筈なのに、どことなく愛嬌のある顔立ちだ。シーリスはヤルタの顔を見る度に、何故か、森に住まう獣の【メェドヴェージ（熊）】を思い出した。

シーリスは、通り様、ヤルタが抱えた荷物の口が少しだけ開いているのに気が付き、そこから覗いて見えるものに興味を惹かれた。
「ルスラン、それはなんです？」
開いた口から覗いた布地らしきものにシーリスは手を伸ばした。
「ん？」
ユルスナールの顔が少し焦ったように見えたのをシーリスは見逃さなかった。

シーリスが引っ張り出したものは、薄い灰色の女物の服だった。使用人風の地味なものだが、よくよく見れば、細部の作りが凝っていて生地も随分と肌触りの良いものを使っている。

服飾に関しては少し煩い所のあるシーリスは、そのちぐはぐな感じを不思議な面持ちで改めていた。

両肩の辺りを摘んで全体を眺めて見る。それは、この国の女たちの標準的な体型から考えても随分と小さな作りをしていた。

シーリスは、小さな服を手にしたまま、それを持ち込んだ男の顔を透かし見た。

「こんなもの、どうしたんです？」

しかも、態々、砦に持ち帰ってくるなんて。

次にシーリスは袋の中から、お対になっていると思われる白い前掛けと【プラトーク（スカーフ）】を取り出した。ご丁寧に編み上げの【バチンキ（短靴）】までもが揃っていた。

何かの記念だろうか。

これらの類は、どう見ても普通のものではなかった。そう、まるで、金持ちが道楽の為に作らせたみたいなものだ。例えば、娼館で気に入った女に着せて遊ぶといった。

だが、これは通常の娼婦が着られるような大きさではない。そう、まだ、年端の行かぬ少女のような細い身体を包むものだ。

そこまで考えて出た一つの仮定を前に、シーリスは胡乱な視線を、これらを持ち込んだ男に投げた。

「ルスラン、……まさか」

この男に限ってそのようなことがあるだろうか。

その思い付きは、この男をそれなりに知っていると自負する自分ですら俄かに信じられないものであったが、目の前の証拠が、何よりも雄弁に物語っていた。

男たちが滞在していた【プラミィーシュレ】は、この国の中でもやや特殊な意味合いを持つ街だ。そこには、大きな色街があること

でも有名だった。そして、そこで取り揃えられる娼妓もよりどりみどり、実に広範囲に客の様々な好みに合わせられるようになっているのだとか、いないのだとか。

まさか、いたいけな幼い少女を買ったのだろうか。そういう専門の店で。

そして、別れ際、一夜を共にした相手に（もしかしたら一夜だけでは済まなかったのかもしれないが）この服を餞別として貰ったとか。私を忘れないで。そのような意味合いを込めて。

灰色の女物の服を手にしたまま、痛ましさに顔を歪めたシーリスに、

「おい、シーリス。お前、碌でもないことを考えてるんじゃないだろうな？」

ユルスナールが、若干、表情を強張らせながらも、部下の水面下で暴走する思考を否定した。

だが、それは却って、一連の想像を完結させた相手を刺激することになった。

「碌でもないこととは、どういうことですか？　私も貴方の個人的な性癖に口を出す積りは更々ありませんが、でも、これは、あんまりじゃないですか。日頃から清廉潔白を謳い、ここに暮らす数多くの兵士たちを統率する立場にある者が、こんな、……こんな、幼い少女に手を出すなんて……」

そのまま絶句したように固まったシーリスの脇で、今度はブコバルが、腹を抱えて大声で笑い出した。

「ガァハハハ、アハハハ……こいつは……ハハハハ、ウィヒヒヒ、止めろって、シーリス。アハハハ……ウケるったら、……ありゃしねぇ、アハハハ」

獣の咆哮のような野太い声を上げ、腹を捩って、終いには涙を浮かべる有様だ。

それにシーリスは虚を突かれたような顔をした。

ユルスナールは、額際を片手で覆って、大きく息を吐いていた。
いつもの冷静さはどこにいったのか。とんでもない誤解だった。
その脇で、荷物を運んだはいいものの、団長室を辞する時期（タイミング）を逸してしまった不幸な兵士、ヤルタが、硬直したようにぎょろっとした目を見開いて顔を引き攣らせながら、じっと事の成り行きを見守るように息を潜めて立っていた。

そこで、妙な流れを打ち破るかのように、団長室の扉をノックする男が聞こえた。
「入れ」
これ幸いとしたユルスナールの了承の言葉に続いて、
「失礼します」
扉の向こうから現れたのは、真面目で実直なシーリスの右腕である補佐官のヨルグだった。
ヨルグは、相変わらず鉄仮面のごとき無表情のまま、きびきびとした動作で中に入ると、室内に漂っている不可解な空気を前に僅かに眉を寄せた。
だが、その事には敢えて触れず、帰還したユルスナールとブコバルに長旅を労う言葉を掛けた。
「無事の御帰還、おめでとうございます」
「ああ、留守中、済まなかったな」
「いえ」
徐々にいつもの空気を取り戻し始めた室内に、戸口で控えていたヤルタがいち早く反応した。
「それでは、私はこれで失礼いたします」
「ああ、ありがとう。もう戻っていいぞ」
敬礼をしたヤルタに、ユルスナールは幾ばくかの目配せをした。
恐らく、ここでの顛末を他言無用にということだろう。
信号を的確に受け取ったヤルタは、少々口元を引き攣らせながらも、無言で一つ頷き返した。そして、驚くほどの速さで脱兎の如く、

団長室を後にしたのだった。

ヨルグは、まだ若いヤルタのやや挙動不審な後ろ姿を目の端に認めながらも、ゆっくりと室内を見渡した。そして、まだ、そこかしこに残る不協和音的な淀んだ気の滞留を尋ねるべく、慎重に口を開いた。

「何か問題でもありましたか？」

「いや、そういう訳ではない」

否定の言葉を吐いたものの、どこか歯切れ悪く答えたユルスナールに、ヨルグはその原因を探るべく、残りの二人を見た。

ブコバルは未だ笑いの余韻と戦うように、ひぃひぃと妙な呼気を出しながら、目の端に滲んだ生理的な涙を指先で拭っていた。

そして、もう一人のシーリスは、何故かその手に女物と思われる地味な服を広げながら、菫色の瞳を瞬かせていた。

ヨルグにしてみれば、全く訳が分からない。最早、混沌（カオス）である。

ユルスナールは、シーリスの傍に歩み寄るとその手にある灰色の服を指で摘んだ。

「それは、リョウが着たものだ」

端的に告げられた台詞に、シーリスは目を見開いた。そうして、手にした服をもう一度、まじまじと見た。

「リョウ……ですか」

ということは、【プラミィーシュレ】でユルスナールたちはリョウに会ったということなのだろう。

確かに、リョウぐらいの体格であれば、この位の服が妥当だろう。

シーリスは記憶の中にある小柄な人物を目の前に思い浮かべてみた。

だが、シーリスの目裏に浮かんでくるのは、線は細いものの、この砦に居た時の少年のような颯爽とした姿ばかりで、女物の服を着た少女らしい姿というのは、上手く想像が付かなかった。

重なりそうで重ならない。
ユルスナールが結論を先に述べたお陰で、妙な誤解は解けたが、シーリスの中には逆に沢山の疑問が浮かび始めていた。
それが顔に出ていたのだろう。ユルスナールは、小さく苦笑に似た笑みをその口元に刷くと若干の補足説明を行った。
「ちょっとした事情があってな。それはイリーナの所で譲り受けた」
イリーナというのは、【プラミィーシュレ】の色街の中でも傑物と有名な娼館の女主の名前だった。
そう言うと、今度は、袋の中に入っていたもう一つの服を取りだして、机の上に並べた。
「それはお仕着せだが、こっちは、【エリセーエフスカヤ】用に誂えたものだ」
「【シーニェイェ・マルタ】の生地ですね」
艶やかな光沢を放つ濃紺色の夜会用のドレスを見た。
「ああ。後でリョウが取りに来ることになっている」
早い話が、ユルスナールは、リョウの荷物を代わりに持って帰って来たということらしかった。
まだまだ謎な部分は残るが、漸く自分の勘違いが飲み込めて、シーリスは安堵の息を漏らしていた。

「リョウに会ったのですね。プラミィーシュレで」
「ああ。偶々な。スフミ村の術師の使いで、その息子に用事があったらしい」
そして、ユルスナールは、その息子が、自分が訪ねた鍛冶職人の男であったことを告げた。
「凄い偶然ですね」
「ああ、俺もそう思った」
ユルスナールは、何かを思い出すように目を細めた後、徐にシーリスとヨルグに向き直った。
「そのことも含めて、お前たちにはきちんと報告をする。それにリ

ョウの事で少し話して置くことがある。ブコバル、お前もだ」
「あ？　俺もか？」
突然に名前を呼ばれて、【プラミィーシュレ】でも共に行動をしていたブコバルは、今更、なんの話があるのだろうかと訝しげな顔をしたが、ユルスナールのいつにない真面目な顔付きに、取り敢えず頷きを返した。
「だが、まぁ、先に腹ごしらえでもするか」
「お、賛成。さっきから腹が減って仕方がなかったんだよ」
「お前たちは？」
振り返ったユルスナールに、シーリスも穏やかに微笑んだ。その隣で、ヨルグも静かに頷いた。
「そうですね。御一緒しましょうか」
「はい」
腹が減っては戦が出来ぬということで、そうして揃った北の砦の主要人員（メンバー）である四人は、ユルスナールとブコバルに取っては久し振りの食堂で、少し遅めの昼食を取ることになったのだ。

そうして、昼食を挟んだ仕切り直しの後に、シーリスとヨルグは、【プラミィーシュレ】で起きた事情を事細かに知らされることとなった。
そして、常にない緊張感の中、ユルスナールが静かに語ったリョウの身の上話は、三人の男たちの度肝を抜くことになった。
本来ならば、当人を交えた形で本人の口より話をした方がいいのだろうとも思ったのだが、シーリスに教師役を頼む手前、その理由の最たるものを明らかにする必要があると考えたユルスナールが取った苦肉の策でもあった。当然のことながら、この三人の男たちに真実を告げる旨は、リョウ本人に確認済みだった。
ユルスナールが、掻い摘んで全てを話し終えた後、暫くは、誰も

口を開かなかった。
それだけ語られた内容の途方も無さに衝撃が大きかったということだろう。
俄かには信じられないことだった。だが、作り話として一笑に付するには、余りにも事例が具体的且つ克明であった。
「ルスラン、貴方は……」
――――――――信じているのですか。
喉元まで出掛かった言葉は、真摯な男の眼差しの前に掻き消えてしまった。
そのような問いを態々聞くのも莫迦げたことだろう。
第一、シーリスが知る限り、リョウは嘘が付けるような性格ではなかった。万事、控え目で、落ち着きのある聡明な人物だ。そういうものは長年、様々な人間を見て来た自分たちには良く分かった。
人の良さが表れている柔らかな微笑みをシーリスは思い浮かべた。朗らかであるのに何処となく影の付き纏う空気とこの辺りでは見受けられない色彩に顔立ち。随分と小柄で華奢な骨格。あの小さな体の中になんという深淵な謎を秘めていたことだろうか。
拠って立つ前提状況が変われば次々と一致する符牒に、途方もないものを感じ取った。

「……なぁーるほどなぁ」
両手を頭の上に掲げて、ブコバルが天井を仰いだ。
ブコバルは、ああ見えて野性的感の人一倍働く男だ。リョウが無害であることは、この砦に来た時早々に感じ取ったが、これまで遣り取りから感じていた違和感の正体を漸く探し当てた気分であったのかもしれなかった。
「ガルーシャ殿はとんだ置き土産を残して下さったものですね」
思わず出た本音に、ユルスナールは口元を緩めると小さく頭を振った。
「いや、寧ろ、ガルーシャに拾われて良かったと思う」

それもそうだ。
「これも何かのお導きなのかもしれませんね」
シーリスは別段、信心深い方ではなかったが、こうして人知の及ばない現実を突き付けられると、そう口にせざるを得ない気持ちにさせられた。

「シーリス、引き受けてくれるか？」
何をというのは、問われなくとも分かっていた。
「ええ。合間、合間に時間を見てという形になるでしょうが。ヨルグに応援を頼むかもしれません」
そう言って、シーリスは隣に座る己が部下を見た。
「ああ。それで構わない。無理を言っているのは承知だからな」
「出来る限りのことはしましょう」
ヨルグも承諾をするように頷いた。
「それよりも、ルスラン、貴方が見てあげた方が早いんじゃないんですか？」
別段、自分が講師役をすることになんら不満はなかったのだが、ふと湧いた疑問に、ユルスナールは形の良い眉を顰めた。
「俺は歴史や神話の辺りは、からっきしだからな。多分、無理だ。それに育った世界が違うということもあるのだろうが、リョウはかなり博識な部類に入るだろう。ガルーシャの影響もあるのだろうが、時折、酷く難解な言葉を使う。お前の方が、馬が合うと思うぞ」
――――――――それに、お前はそういうことに興味があるだろう？
ユルスナールから尤もな事を言われて、シーリスも苦笑を浮かべた。
昔から知識の吸収は好きな方だった。拠って立つ環境が異なれば、その思考も、世界の仕組みも、人の在りようも、全く違う。生来、学者肌で探究心の強いシーリスにとって未知の塊であるリョウは、その好奇心を刺激する以外のものではなかった。

何だか上手く乗せられている気がしないでもなかったが、それでもいいかと思えた。
「ブコバルは……言わずもがなですけど」
第一、この男に関しては、まともに椅子に座っている姿が想像できなかった。頭脳派というよりも断然肉体派だ。
「あ？」
勉強の方はまるっきり不得手な男を横目に見遣れば、
「俺だって教えられることはあるぜ？」
何を思ったのか、ブコバルはニヤリと下卑た笑みを浮かべた。
シーリスは嫌な予感がしたが、余り無下にするのも可哀想な気がしたので、取り敢えず聞いてみることにした。
「それはそれは。因みに、参考までにどのあたりかお聞きしても？」
「そりゃぁ、勿論、決まってるだろうがよ。男女の仲の繊細な機微についてだろうが」
予想に違わず、妙な事を口走ったむさ苦しい髭面の男をシーリスは半眼に見た。
最早、呆れてモノも言えない。いや、この場合、聞いた自分が馬鹿だった。
「閨の中の作法も大事だぜ？　なぁ、ルスラン？」
そう言って意味深な目配せをした後、どっかりと背凭れに背中を預けたブコバルに、隣に座るユルスナールから長い脚が繰り出された。
「余計なお世話だ」
が、寸でのことでひょいとかわされてしまう。
「避けるな」
「冗談！」
何故か、目の前で始まってしまった幼馴染同士の子供染みた遣り取りに、シーリスは何やら引っかかるものを感じた。
そして、まじまじと目の前に座る男を見た。
その視線が横にずれて、大きな執務机の上に置かれた女物の衣服

で留まる。
「まさか……」
「ん？」
「どうした、シーリス？」
「いえ、何でもありません」
シーリスはにっこり笑顔を浮かべるとユルスナールを見据えた。
「まさかとは思いますが、我らが隊長殿に限って、幾ら相手が可愛いからと言っても年端の行かぬ幼子相手に無体な事はしでかしていないですよね、勿論。念の為に確認しておきますが」
そう言って白々しいまでに迫力のある笑みを浮かべたシーリスに、ユルスナールは何と言ったものかと答えに詰まった。
「ルスラン？」
「ああとだな」
「いや、もう遅いって」
――――――食っちまってるから。
ニヤニヤとしながらひらりと片手を振ったブコバルに、
「何ですって！」
シーリスは、眦を吊り上げたのだが、
「リョウは、ああ見えて、とっくに成人しているぞ？　いや、寧ろ、俺たちと大して変わらん。厳密に言えば、暦が違うらしいからどうとも言えんが。恐らく、俺たちとヨルグの間くらいだろう」
だから、年齢に関しては、なんの問題もないと言い放った男を今度は、呆気に取られたように見る羽目になったのだった。
「……要するに、十分、大人の女性だと？」
「ああ」
本日、二度目の衝撃にシーリスはそっと隣に座る己が部下と顔を見交わした。
「まぁ、どうせなら本人に直接、確かめて聞いた方が早い。勿論、繊細な問題だから、それとなく話を振るくらいが精々だろうが」
シーリスはこめかみを揉むように、男にしては細長い指を当てる

と、暫し、瞑目した。
この短期間に与えられた情報の法外さに、目が眩みそうだった。
だが、暫くして、気を取り直したように小さく息を吐き出した。
「まぁ、その辺りのことは追々にでも」
「他に聞きたいことは？」
そう言って、足を組み替えたユルスナールに、シーリスもヨルグも取り敢えずは大丈夫だと首を横に振った。
「ならば、シーリスの都合を見ながらリョウを呼ぶ日を決めるか。伝令も飛ばさないといけないからな」
そう言って密かに笑みを浮かべたユルスナールは、やけに嬉しそうな色をその瑠璃色の双眸に滲ませていたのだった。
それが恋する男特有の甘ったるい表情になるまであと数日。
それを目の当たりにしたシーリスは、初めて目にする男の表情の変化に、まるで天変地異の前触れではないかと危惧するくらいの衝撃（三度目だ）を受けるのことになるのだった。

シーリスは、件の人物の再登場で、途端に賑やかになるであろうこの砦内の空気を思い浮かべ、笑みを零した。
――――――さてさて、一体、どんなことになるやら。
それは、ほんの少しの高揚感をシーリスの中にも植えつけていたのだった。

一兵卒のかくも愉快な日々（前書き）

北の砦の食堂にて。お馴染の面々が顔を出しました。

一兵卒のかくも愉快な日々

「ここ、いいかな？」

掛けられた声にそっと目線だけ上げれば、そこには久し振りに見る小柄な体躯の少年が、円らな黒い瞳を細めて立っていた。

「リ、リョウじゃないか！」

「やぁ、久し振り、ヘクター。元気にしてたかい？」

男にしては穏やかで少し高めの音域は、相変わらず耳に心地よかった。

「あ、ああ。も、勿論だとも」

了承するように首を縦に振れば、ほっそりとした面に人柄の良さが表れている優しい笑みを浮かべると、顔馴染みの少年は目の前のテーブルの空いた席に持っていたトレーを置いて腰を下ろした。

そのトレーの中身は、ヘクターが食べているものと同じで、豆と【ガビャージナ】の肉のスープの入ったお椀と固く焼かれたパンに茹でた【カルトーシュカ】を磨り潰して味付けしたサラダが乗っていた。

だが、その量はヘクターのような一般兵士たちに比べると格段に少なかった。そして、トレーの脇には、オマケのように小さくカットされた黄色い果物【アナナス】が乗っていた。強面料理長ヒルデ特製のこの組合せを見るのも久し振りだった。

ここは、北の砦にある食堂で、ヘクターは仲間の兵士と少し遅めの昼食を取っていた所だった。

ヘクターはこの場所で鷹匠の任に就いていた。

午前中は方々よりもたらされた伝令の統括と情報の収集、こちらから飛ばす伝令の割り振り、そして役目を終えた鳥たちの世話と細

々とした仕事は沢山あり、それなりに忙しかった。だから大抵、昼食にありつくのは第一陣、もしくは第二陣がはけた後のことが多かった。

もしかしたら、人によってはもう少し要領よく早く出来るのかもしれないが、他人と比べて些か不器用な所のあるヘクターには、今の時間配分が精々のことだった。

ヘクターは鷹匠としての自分の仕事を気に入っていた。

元々、人見知りをする性質で人付き合いも苦手な方だ。おまけに吃音の癖もある。それが、劣等感（コンプレックス）で昔からよくからかいの種にもされた。

家族は引っ込み思案なところのある息子を心配したが、幸運なことにヘクターには獣の言葉を理解する能力が花開いた。そして、家族の勧めもあって騎士団に入隊することになったのだ。

ここでの暮らしも、もう三年になる。

ヘクターには人を相手にするよりも伝令としてやってくる猛禽類の鳥たちを相手にする方が性に合っていた。

「は、半年振りか？」

緊張をしている訳ではないのだが、吃音は長じても中々治らなかった。

大抵、初対面の人間は、ヘクターの吃り癖を馬鹿にするものだが、この少年だけは違ったのだ。

ヘクターは、今でもその時のことをよく覚えていた。

緊張気味に言葉を交わしたヘクターに（初対面の相手と対峙する時はいつもそうだ）、少年は何事もなかったように微笑んだのだ。

『よろしく』と自分よりは格段に小さな手を差し出して。

いつもとは違う反応に面食らっているうちに最初の邂逅は終わり、その後、自分と同じように獣たちの言葉を理解する能力を持つ少年

は、頻繁に伝令部屋や厩舎の方に顔を出した。
その後、こっそりと気になって、自分の吃音のことをそれとなく話題にすれば、少年は穏やかな微笑みを浮かべて、そんなことは全く気にならないと笑ったのだ。
そして、自分の祖父もそうだったから、懐かしい気がするとさえ言ってのけたのだ。
「ヘクターさんは人より少し繊細なだけですよ。イサーク(伝令の鷹)やイーサンもヘクターさんは気配り上手だと言っていました。気にすることはないと思いますよ。理解するのには何の支障もありませんから。寧ろ、もっと胸を張っていいです。ヘクターさんはいい声をしているじゃないですか」
思ってもみないことを言われてヘクターは目を丸くした。
そして、万事控えめで朴訥とした青年が、滅多にない他人からの褒め言葉に固まっているうちに、黒髪の少年は颯爽と踵を返していて、我に返ったヘクターは、内心のむず痒さと静かに沸き立つ嬉しさを堪えるように離れて行った華奢な背中をじっと眺めやったのだ。
小さく感謝の言葉をその胸内に吐いて。

「もう、そんなになるか」
半年振りと言われて、リョウは、どこか感慨深げに息を吐いた。
ここで食事をしたのが、ついこの間のような気がしていたからだ。だが、思い返してみれば、あれは春の終わりの出来事だった。そして、今は冬の半ばだ。季節は確実に移ろっている。
「ここはちっとも変わってないから、なんだか、ついこの間みたいな気がするよ」
「ハハ、そうか。それだけ、お、お前が、こ、ここに馴染んだってことだろう」
ヘクターは残りのスープを掻き込むとひっそりと微笑んだ。
それは、その青年の素朴さと善良さが溢れている優しい笑みだっ

た。
「そ、それよりも、こ、今回はどうした？」
再びの訪問の目的を尋ねられて、リョウは『あ～』と暫し、天を仰いだ後、苦笑に似た笑みを眦の端に浮かべた。
「シーリスにこの国のことを教わることになったんだ」
種明かしをすれば、ヘクターがお茶に伸ばしていた手を止めた。
「ふ、副団長にか？」
「うん」
そう言うと、リョウはヘクターの隣で目を丸くしているもうひとりの兵士に声を掛けた。
「キリルも久し振り」
「へ？　あ、ああ」
癖のない明るい金茶色の髪を真ん中で分けた兵士は、突然のことに黄緑色の瞳を瞬かせた。
ここに配属されて三月余り、まだまだ新入りで、分を弁え大人しくしているのが常だからだ。
「あれ？　リ、リョウはキリルを知っていたか？」
キリルが北の砦に配属されて来たのは、リョウが帰った後のことだった筈だ。普通に考えれば、二人は擦らなかった。
そのことを問われて、
「ああ、スフミ村で会ったんだ。収穫祭の時に」
リョウが何がしかの目配せをして確認するようにキリルの方を見れば、我に返ったキリルは、内心の動揺をその聡明な顔付きの下に隠して静かに頷いた。
「ええ」
「ああ、あの時か」
「はい」
同じ鷹匠の任に就いているキリルが、例外的に別の任務に当たったのは、秋の中頃、大体一月半ほど前のことだった
ヘクターもその時のことはよく覚えていた。

王都での二年間の見習い期間を経て、第七師団の伝令部に鷹匠として配属されたばかりの所謂、新米兵士が抜擢されたのだ。通常ならばあり得ない異例のことだった。

確か、ロッソと二人で特別任務に当たったのだ。選抜の理由は、キリルがスフミ村の出身であるということだった。

「で、ふ、副団長の講義を受けるって？　な、何でまたそんなことに？」

再び、話を元の流れに戻したヘクターに、

「ああ、今日からね。ルスランの好意で」

熱々のスープを美味そうに啜りながら、リョウは淡々と答えた。

「団長の？」

意外な名前が出てきて、ぎょっとしたようにキリルがリョウの方を見た。

キリルにしてみれば、リョウが団長と知り合いとは思ってもみないことであったらしい。

それもそうだろう。軍隊の中での戒律は厳しく、しっかりとした序列もある。新米兵士が団長に気軽に声を掛けられる訳ではないからだ。

「偶々、【プラミィーシュレ】でルスランとブコバルの二人に会って、そういう話になってしまって」

「プラミィーシュレで？」

やはり話の流れが突飛過ぎただろうか。自分でさえそう思うのだから、他人が聞いたら尚の事だと思った。

余程吃驚したのか、どもることなく言葉を吐いたヘクターにリョウも小さく笑った。

それから、リョウは掻い摘んで、自分が再びここに厄介になることになった理由を語ったのだった。

一通り聞き終えるとヘクターは緩く息を吐いた。

「成程な。じゃぁ、ま、また暫らくはこ、こっちにいるのか」

「そういうことになるかな」
「そうか」
「また、ちょくちょく顔を出すよ」
そう言えば、ヘクターは少しだけ嬉しそうな顔をした。
「ああ」

そんなこんなで、暫く振りの食堂で旧交を温めながら、和やかな昼食を取っていると、急に食堂の入り口付近が賑やかになった。
「うお、マジでいやがった。リョウ！　ひっさし振りぃ！」
噂を聞き付けた顔馴染みの兵士たちが、ひょっこりと顔を覗かせた。
「ようよう、ちったぁ、大きくなったかぁ？　あ？」
片手を上げて、大きな身体を揺らしながら入ってきたのは、そのよく発達した図体には似合わず、この砦で最年少と目されている人物、兄貴分を気取るオレグだった。キリルが入って来た今ではその辺りのことはなんとも判じ難いが。まぁ、下から数えた方が早いという点では余り変わりがないだろう。
相変わらずの調子を懐かしく思い、リョウは自然と笑みを浮かべていた。
「やぁ、オレグ」
「ん？　あんまし変わんねぇか？」
そう言って、成長度合いを測るように、リョウの頭の上に大きな手を乗せたのは、お調子者のセルゲイだった。
わしわしと髪を態とに乱されて、
「わわ、止めてくださいよ」
久し振りの洗礼に逃げるように頭をずらすが、ごつごつとした大きな手はしつこく付いて回った。
それを外そうと躍起になっていれば、

「元気そうだな、リョウ」
「アッカ、久し振り」
特徴的な赤毛の青年が穏やかに微笑みながら、セルゲイの手を止めてくれた。
「ありがと。助かったよ」
その後ろに続くのは、ロッソだ。
「ロッソもスフミ以来だな」
「ああ。元気にしていたか、リョウ？」
「ああ」
リョウは、伸びてきた大きな手を掴むとロッソと堅い握手を交わした。
ロッソは、スフミでの一件から、リョウが女であったことを知った口であったが、再びの調子を見て、以前と同じように扱ってくれた。

「おい、リョウ。お前、今度はなにやらかしたんだよ？」
空いていた隣の席にどっかりと腰を下ろしたオレグが、不意に声を低くして尋ねてきた。
「へ？」
問われた意味が分からなくて、怪訝そうに隣を見れば、オレグはリョウの肩に太い腕を回して意味あり気に目配せをした。
「惚けるんじゃねぇよ。お前、朝から副団長のとこに居たんだろ？」
流石、日常の刺激に飢え気味な砦の兵士たち。どこで誰が見ているのかは知らないが、この手の噂が広まるのは実に早かった。
その言葉の通り、リョウは朝からシーリスの部屋の一室で一対一の講義を受けていたのだ。
ここに来たのは、今朝一番の事で、シーリスからは事前に朝一の方が、時間的に余裕があるからと言われてのことだった。
声を潜めて、鼻先を近付けたオレグに、

「そうだけど、それが、どうかしたか？」
頭上の上に疑問符を浮かべながらも、取り敢えずの肯定をすれば、
「ほーら、やっぱ、違うじゃねぇか！」
怪訝そうなリョウの態度を見たセルゲイが大きな声を上げた。
「やっぱり。大体、リョウはお前とは違うだろう。なあ？」
「だよな」
そして、次にアッカとロッソが口を挟む。
「一体、何の話だ？」
益々訳が分からなくなって、首を傾げれば、
「リョウ、おま、副団長に絞られてたんじゃないのかよ？」
オレグがこの世の終わりじゃないかと思えるほどの悲壮感を漂わせながら詰め寄った。
「絞られる？」
この場合は、叱られるということだろうか。
「ああ、説教くらってたんじゃないのか？」
独特の言い回しをセルゲイが分かりやすく説明するように言葉を継げば、
「説教？　なんでだ？」
リョウは益々、訳が分からないという顔をしてオレグを見た。
「あ？　違うのか？　俺はてっきり、お前がなんかやらかして副団長の所にしょっ引かれたかと思ったんだけど」
オレグの中では、シーリスの部屋に連れて行かれるということは世にも恐ろしい説教地獄が待っているということに変換されるらしい。要するにオレグ自身は、それなりの経験がある訳だ。
リョウが朝からシーリスの部屋に居ると聞いて、すわ仲間が出来たとでも思ったのだろうか。
「オレグじゃあるまいし。どうしてそうなるんだよ」
リョウが呆れたように隣を流し見れば、オレグはあからさまに狼狽えた。
「おま、薄情な奴だな。俺は心配したんだろうが。あのおっかない

地獄の時間をお前が耐え忍んでるんじゃないかって。だって、いいか、想像してみろ。あの神々しい慈愛の女神みたいな優しい顔でさ、口元に薄らと微笑みを浮かべながらだぞ、これでもかってくらい舌鋒鋭く怒られるんだぞ。次から次へと飛び出す罵詈雑言の数々」

そして、当時のことを思い出したのか、痛む胸を摩るように大きな手を心臓の辺りに当てた。

「ああ。あの時、俺は思ったね。もう一生、この人を怒らすまいってさ。今でも軽く夢で魘される始末さ。悪夢だよ。いや、悪魔か？」

そして、どれだけ、その説教部屋の顛末が恐ろしい出来事であったかを滔々と語るオレグの横で、周りにいたセルゲイやアッカ、ロッソたち他の兵士は、徐々にその顔色を無くしていった。

前に座るヘクターの顔を見れば、ぞっとするほど真っ青になっていた。その隣に座るキリルの顔色も心なしか悪いものになっていた。

目が合ったアッカはしきりに自分たちの背後を見るように合図を送った。

これは、もしかしなくとも。

恐る恐るリョウが振り返れば、

「誰がなんですって？」

――――――随分と楽しそうですね。

凍てついた冷気を背後に背負いながら、にこにこと途轍もない笑みを浮かべるシーリスの顔があった。

その瞬間の、オレグの顔といったら。

蛇に睨まれた蛙の如く、一気に石化したように固まったと思ったら、

「ウギャー！！！」

と悲鳴を上げて、

「スンマセン、副団長。別に他意は無くてですね。久し振りにリョウの奴の顔を見たもんですから、懐かしくなっちまってついつい」

『アハハハ』と濁すように笑って誤魔化してみたが、相手に通じ

ないことを見て取ると、それから掌を返したように、平伏、平謝りだった。

「ええと、シーリスもお昼ご飯ですか？」

オレグのその様子が余りにも見ていて居た堪れなかったので、リョウは思わず助け船を出すように間に入っていた。

シーリスは仕方がないと呆れたように小さく息を吐いてから、優しい手を差し伸べたリョウに微笑んだ。

「いえ。リョウを探していました」

「オレに、何か？」

「ええ。急用が一件入ったので、先にそちらを優先しなければならなくなりまして。午後からの講義は少し待って下さい」

「はい。構いません」

「片が付いたら知らせますから。申し訳ないですけれど、それでいいですか？」

恐縮そうに寄せられた眉根に、リョウの方が慌てて立ちあがった。忙しいのを承知で無理を言ったのはこちらの方なのだ。リョウとしては、勿論、シーリスに日常業務の方を優先してもらいたかった。

「はい、勿論です。こっちこそ、すいません、お忙しいのに態々時間を取って頂いて。オレのことはお気になさらずに。その間、厩舎か伝令小屋の方に居ますから」

そう言って微笑めば、シーリスは穏やかな笑みを浮かべた。

「そうですか。助かります」

丁寧な物腰とその口調は相変わらずで、そうして、きびきびとした動作で踵を返した背中をリョウは何とも申し訳ない気持ちで見送った。

シーリスの事だから、きっと昼食もまだなのだろう。シーリスは忙しくとも、そういう素振りを決して見せないのだ。有能で強ち多くの業務をこなせてしまうから、忙し過ぎることにすら気が付いていないのかもしれない。あのままでは身体を壊してしまう。

唯でさえ貴重な時間を削ってもらっている。そう思うと居た堪れなかった。

料理長のヒルデに頼んで厨房を借りて、【ブテルブロード（オープンサンド）】みたいな軽く摘めるものを用意して差し入れでもしよう。自分にはそれ位しか出来ないから。

リョウは、そう気持ちを入れ替えると途中になった食事を一刻も早く終わらせようと再びテーブルに向き直った。

食堂から消えたシーリスの姿にオレグはあからさまにほっとした顔をしていた。

「うぉー、助かった。命拾いしたぜ」

きっとシーリスにとっては、オレグに説教をする間すら勿体ないに違いない。

リョウは何とも言えない気分で、能天気そうに笑うオレグの顔を眺めた。

「【口は災いの元】」

「なんだそれは？」

ぽつりと漏れた呟きをロッソが聞き咎めていた。

「オレの故郷に古くから伝わる格言だよ。余計なことは口にするなってこと」

「成程な」

「【沈黙は金なり】とも言う」

「へぇ」

「……って、お前のことだろうがよ！」

気の無い合槌を打って、未だのほほんとした顔を晒しているオレグに業を煮やしてか、セルゲイが勢いよくその頭を引っぱたいた。

騎士団に入隊して兵士となる位だから、その中身は決して空っぽという訳ではないのだろうが、やけにいい音が辺りに響いた。

「うぉ！　何すんだ！」

手を上げたセルゲイをオレグは不服そうに睨みつけた。
「それはこっちの台詞だ。このうすらトンカチ」
「あんだと！　このボケ！」
いつものことながら、そのまま低次元の言い争いが続きそうになって、
「ああもう、オレグは少し黙ってくれ」
リョウは自分の【タレールカ（トレイ）】の小皿の上にあった果物を摘むと有無を言わせずにオレグの口の中に放った。
楽しみに取っておいた甘味である【アナナス】をオレグごときに奪われるのは癪だったが、そろそろ平穏が欲しい頃合いだった。
独特の酸味と甘さ溢れる水分の多い果物である【アナナス】の味に、オレグがにんまりと頬を緩めた。そして、もぐもぐと口を動かしながら、暫し、棚ぼた的な褒美を堪能する。
――――――このお子様め。
一人が口を噤んだことで急に静まり返った食堂に、リョウは肩を竦めると、漸くほっとしてテーブルに着いた。
そして残りの食事を平らげながら、オレグを見た。
「なぁ、オレグ。こんなところで油を売っていていいのか？」
アッカやロッソ、それからセルゲイもさっき、午後からの訓練があるからと食堂を後にしたのだ。
中々腰を上げない隣に尤もな質問をしてみれば、
「うぉ？　げ、不味い」
周囲の様子を見て取って、慌てて立ちあがった。
「リョウ、ごっそさん、またな！」
そうして大きな身体は弾丸の如く食堂から飛び出して行った。
ふと、食堂から覗く窓の方を遠く見遣れば、鍛錬場の方へ向かうオレグの背中が豆粒ほどに見えた。先に着いていた仲間から案の定、小突かれている。
そして、天性の野性的感かは知らないが、こちらの視線を感じ取ったのか、これだけ遠く離れているというのに食堂の方へぶんぶん

と手を振った。オレグは視力がいいのだろう。
リョウも笑いながらそれに手を振り返していた。
なんだかなぁと思いながらも、以前と変わらない日常が、可笑しくもあり、そして、愛しくもあった。

そうこうしているうちに、先に食べ終えていたヘクターとキリルが席を立った。
「じゃぁ、またな」
「ああ」
「お先に」
「ヘクター」
振り向いた相手に、
「後でそっちに顔を出しても？」
「ああ」
鷹匠は柔らかな笑みを浮かべて頷いた。
そのまま、キリルもヘクターと連れだって食堂を後にしたのだが、何を思ったのか、不意に踵を返してリョウの下に戻って来た。
「なぁ、あんた」
食事を終えて立ちあがったリョウに、戻って来たキリルが声を掛けた。
「なんだ？」
「あんた……」
「リョウで構わないよ」
言いたい言葉を探しあぐねているのか、口を動かしながらも視線が彷徨う。
リョウは辛抱強く、キリルの言葉を待った。
「ホントはどっちなんだ？」
その問いにリョウはからからと笑った。
詰まり、キリルの中では、スフミ村で会った時の印象と今の自分

が余りにもかけ離れていたから、戸惑っているということなのだろう。

身に着けている物と口調が少し違うだけで、それほどまでに変わるだろうか。そう思うと何だか可笑しかった。

だが、自分の核となる部分は、なんら変わりが無い。

リョウは居心地悪そうに身じろいでいるキリルの目をしっかりと見据えると、穏やかに微笑んだ。

「どちらもワタシですよ。ですが、ここに居る間は、ロッソと同じように接して下さい。その方が、無駄に混乱を招きませんし、ワタシの方も気が楽ですから」

そして、再び少し空気を変えると、徐に手を差し出した。

「ということで。改めて、よろしく、キリル」

「あ、ああ」

目の前に差し出された小さな白い手をキリルは戸惑いながらも取った。

そして、少しだけ握った手に力を込めてから離す。

キリルは、ここにいる屈強な男たちと比べれば、まだまだ線の細い方だった。それでも、やはり男である。その手は、温かくて大きなものだった。

そうして去っていった後ろ姿に、リョウは思い出すように声を掛けていた。

「そう言えば、【プラミィーシュレ】でキミの親父さんに会ったよ」

その言葉に、キリルは瞬時に動きを止めた。

ゆっくりと、どちらかと言えば母親似の繊細な顔立ちが振り返る。

真中で分けられた癖の無い明るい金茶色の髪が、さらりと揺れた。

そこに、もう一人の男の幻影が重なった。

「あ？」

「『ヨロシク伝えてくれ』だってさ」

取り敢えず、【ルーク】からの言伝を伝えれば、キリルの表情が、何か苦いものを飲み込んだように顰められた。

「……あんのクソオヤジ」
小さく呪詛の言葉を吐き出して。
その本心までもは分からないが。
まぁ、父親と息子の関係など、往々にしてそのようなものだろう。
そうして去って行くしなやかな背中を、リョウは小さく微笑みながら見送ったのだった。

一兵卒のかくも愉快な日々（後書き）

補足的に、リョウのトレーに乗っていた食事の件で少し。
ロシア語で【ガビャージナ】は牛肉、【カルトーシュカ】はジャガイモ、【アナナス】はパイナップルのことです。全く同じものがある訳ではありませんが、似たようなものだと考えて頂ければ幸いです。

補佐官のかくも難儀な一時（前書き）

シーリスの右腕、ヨルグの登場です。

補佐官のかくも難儀な一時

「あの、ちょっといいですか？」
やけに神妙な顔つきで自室の戸口に現れた人物に、ヨルグは僅かに片方の眉を跳ね上げた。
「どうした？」
――――――――こんな時間に。
これから夜も更けようという時間帯だった。
国境警備を兼ねた軍事拠点である北の砦は、完全には眠らない。兵士たちは交代で当直の任に就き、昼夜警戒に当たっている。この時間、廊下を照らす発光石の明かりは、夜間用に仄暗く抑えられていた。
薄く開いた戸口からは、室内の明かりが細い線となって外に漏れていた。
ヨルグはひっそりとした闇の中に佇む小柄な人物を見下ろした。
訪問者は予想外の人物で。
「何か疑問に思うことでも出てきたか？」
昼間、急遽用事の入ったシーリスの代わりにリョウの講師役になったヨルグは、昼間の件で、何か質問が出てきたのだろうかと思ったのだ。
だが、リョウは静かに首を横に振った。癖のない黒髪が、闇から滲み出るように揺れた。
そして、躊躇いがちに切り出した。
「あの、ちょっとお聞きしたいことがありまして」
そう言って、些か戸惑うように部屋の主を窺い見たリョウをヨルグは取り敢えず、中へと招き入れた。
「すみません。こんな時間に」

目に入った小さなテーブルの上には、読み掛けの書物と、グラスに薄く入った琥珀色の液体が揺れていた。

日中の忙しさから解放されて、漸く得られた寛ぎの時間を、一人長椅子に寝そべって書物を繰っていたらしいヨルグに、リョウは恐縮そうに眉を下げた。

「いや、別に構わん」

このような時間に、態々自分を訪ねてくるというのは、余程のことなのだろうとヨルグは思った。

いつもとは違いどこか硬い空気を身に纏った相手を見て、ヨルグは鷹揚に頷き返すと部屋の隅にある簡素な木の机と対になっている椅子を引き出し、自分はそこに座った。そして、リョウには長椅子の方へ座るように促した。

小さな沈黙が室内に落ちた。

リョウは明らかに落ち着かないようだった。視線が室内を彷徨う。小さな口を開きかけては、また閉じる。膝の前で握った手を所在無げに動かした。

ヨルグはその様子を内心、珍しく思いながら眺めていた。

ヨルグの目から見てもリョウは非常に落ち着いた人物だった。物静かで、よく人を見ている。さり気なく周囲に配慮の出来る思慮深さも兼ね備えていた。

ヨルグは、じっとリョウが口を開くのを待った。

だが、中々一向に口を開く気配がない。

「何か、困ったことでも起きたか?」

助け船を出すように切り出せば、リョウはじっとヨルグの方を見た。

いつもは穏やかで柔らかい光を湛えている黒い瞳には、戸惑いと逡巡とが表れていた。

やがて、困惑に似た苦笑のような微笑みがその口元に浮かんだ。

「困ったことと言いますか。気になったことと言いますか。……

少々、確認しておきたいことがありまして……」
そう言って言葉尻を濁した。
ユルスナールでもなく、シーリスでもなく、ブコバルはまぁ論外として、リョウが自分を何がしかの相談相手に選んだらしいことが、その言葉から読み取れた。それをヨルグは意外に思った。
何か問題が起きた場合、リョウは、何よりもまず、ユルスナールを頼ると思っていたからだ。

リョウが再びこの砦にやってきてから、ユルスナールの周囲の空気は恐ろしく軟化した。目も当てられない程に。
両者を見れば、何がしかの強い結び付きが出来たことは一目瞭然であった。言葉を多く交わす訳ではないが、ふとした時に交わる視線は、確固たる信頼と敬愛、そして、それ以上の色を含んでいたからだ。
ユルスナールがリョウに向ける眼差しには、慈しみと優しさが憚らずに溢れている。それを受け止めるリョウの方も、男に心を開き、その好意を受け入れている節があった。ブコバルの話を聞く限り、両者の間には、精神的交換以上の、要するに肉体的な関係もあるらしい。
であるから、何かあった時には必ずユルスナールの所へ向かうと思っていたのだ。そして、ユルスナールに話づらいことがあるとすれば、恐らく、シーリス辺りに行くだろうと。
だが、リョウは自分を訪ねてきた。それもこんな夜分に。
相変わらず乏しい表情の裏側で様々な憶測を捏ね繰り回していると、リョウが意を決したように口を開いた。
「ピョートルさんから、ヨルグは医学の知識が豊富にあると伺いまして」
ピョートルと言うのは、この砦の軍医の名前だった。
ヨルグの家系は術師の中でも、代々医師を多く輩出していた。恐らく、その辺り事を聞き齧ったのだろう。

「医学といっても俺の場合は一般的な知識に少し毛が生えた位だぞ？　専門的な事柄は、軍医に任せた方がいい」

元々、家には医学関連の書物や学術書が沢山あり、ヨルグの父も兄も医師であった為、小さい頃より特殊な環境に身を置いているとは思ってはいたが、ヨルグ自身、専門的に医学を学んだ訳ではなかった。精々、興味があった分野を少し掘り下げたという位だ。

「どこか、具合でも悪いのか？」

心配そうな色をその薄茶色（ヘーゼル）の瞳に乗せたヨルグに、リョウは慌てて目の前で手を小さく振った。

「いいえ。身体はどこも悪くはありません。寧ろ、健康すぎる位ですよ。こちらに来てから風邪も引いていませんし、大きな病気もしていません」

「そうか、ならばいいが」

「あのですね、初めはブコバルに聞こうかとも思ったのですけれど、やっぱり、それは躊躇われて。シーリスに話を振るにしてもあんまりですし。偶々、ピョートルさんの所で、ヨルグの話を聞きまして……」

そう言ってどこか言い難そうに目を伏せた後、漸く踏ん切りが付いたのか、ゆっくりと顔を上げた。

目の前にある真剣な顔付きに、ヨルグも改めて気を引き締めた。

「恥を忍んでお尋ねしますが、こちらでは【避妊】という概念はありますか？」

そして問われたことにヨルグは面食らった。

無表情のまま、目を瞬かせること数回。油回りの悪いブリキの玩具のように首を僅かに横に傾げた。

「……【避妊】とは、詰まり？」

繰り返された言葉に、リョウは自分が散々考え抜いて選び出した単語が相手に上手く伝わらなかったことを悟った。

「早い話が、女性が妊娠をしないようにする為の措置です。……ええと、……その、……男女の交わりの時に」

そう言って居た堪れなかったのか、リョウは恥ずかしさに目元を赤らめ、視線を逸らした。

ヨルグに対してとんでもない質問をしているという自覚はあった。だが、ユルスナールに直接確かめる訳にはいかないのだから仕方がない。ブコバルは、そちらの方面では経験豊富であることは知っているが、こういう相談をするのは論外な相手だった。シーリスのことも考えない訳ではなかったが、どうにも二の足を踏んでしまって。そんな時に、偶々軍医の所でヨルグが医師の家系であることを耳にしたのだ。医学の知識も豊富にあるらしいことを聞き及んで、ならば大丈夫かと当たりを付けたのだった。真面目な四角ばった所のあるヨルグであるならば、淡々と簡潔に必要最低限の情報を与えてくれるのではないかと踏んで。

これまでユルスナールとそれなりの関係を持ったが、リョウは男の精を体内に受け入れていた。男の方にそれらしい（詰まり避妊の）素振りは全くなく、このままずると同じ状態を続けていれば、ひょんなことから妊娠しかねなかった。

今の状態でそういった事態に陥ることは、リョウとしては避けたかった。自分の立ち位置が、酷く中途半端な状況にあるからだ。【術師】としてこの国に正式に認められた訳ではない。この国の片隅に暮らしてはいるが、ここの人々にとっては、依然【異分子】のままだ。

それに、万が一そのようなことになって、ユルスナールに迷惑を掛ける訳にはいかなかった。

れっきとした貴族の子息で師団長の地位にある男が、どこのものとも知れない相手を孕ませたというのは、醜聞以外の何物でもないだろう。普通に考えて、貴族であるユルスナールには、正式な結婚相手、若しくは親の決めた許嫁の類がいてもおかしくないのだ。男に並々ならぬ好意を寄せているのは本当の事だが、だからと言って、

その先に必ずしも幸せな未来が続くとは思ってはいなかった。
束の間の激情に現を抜かしていられる程、夢見がちな年頃でもなかった。自分がユルスナールと恋人のような甘い疑似関係にあるのも、今、この時期だからであって、やがて、この関係はとある分岐点に行き着くだろう。そして、ユルスナールと自分は恐らく違う軌道を歩き始める。それは、もしかしたら、それ程遠い未来のことではないかもしれないのだ。
それは、すぐに予想がついたことだった。
ユルスナールは、良くも悪くも家柄に縛られた貴族の出身で、自分は辺境の片隅に暮らす異邦人だ。元々、住む世界が違い過ぎるのだ。そのことを考えると、どうしようもない程に胸の奥が軋みを立てたが、それが客観的に見ても妥当な、当然起こり得るであろう現実に思えた。
この地でしっかりと両足を着いて立つ為にも、現実に目を逸らす訳にはいかなかった。たとえ、それが自分にとっては残酷な結末を呼んでいようとも。
ユルスナールとの関係が踏みこんだものとなって以来、リョウはそういうことを覚悟するようになっていた。
いずれ、ユルスナールとその隣に寄り添う誰かを見送ることになったとしても、恐らく、自分のユルスナールへの気持ちは変わらないだろう。それほどまでに強烈な印象をこの身に刻みつけられたのだから。どうやっても拭えない程に。
その気持ちは、そっと真綿に包むように心の奥底に潜ませて、やがて訪れるその時を笑顔で迎えられればいいとまで考えていた。その時に、もし、天の計らいで男の種を宿すことが出来たら。その時には、責任を持って新しい命を育んで行きたいとさえ思っていた。
それならば、きっと残りの人生も生きて行ける。この森の片隅であろうとも。他のどの場所であろうとも。
そのようなリョウの心の内はともかく。

質問をされたヨルグは、呆気に取られたように目を見開いた。
リョウはそれを苦笑を滲ませながら見遣った。その口元には、自嘲とも取れるような曖昧な笑みが浮かんでいた。
「すみません。こんなことを聞くのはどうかと思ったのですが、他に尋ねるべき人が思い当たらなくて。ルスランに聞くには、どうにも躊躇われてしまって。それに、この国に於ける男女間の貞操観念やその辺りの事情も知っておきたいと常々思っていたので」
最初の第一関門を突破したことで、どこか吹っ切れたような顔をしたリョウを前にして、ヨルグは、口元に大きな手を当てると、暫し考えるように目を伏せた。
日頃から鉄仮面と揶揄されることの多いヨルグの無表情も、こういう時はいいように作用した。その内心はともかくも、表面上の相手の反応を余り気にしないで済むからだ。
その間、リョウは畳みかけるように言葉を継いでいた。
「あの、こちらでは、男女が身体を重ねるのは、その、結婚を前提にした場合が殆どなのですよね？　あ、いや、違うか。結婚して、初めてそういう関係を持つ方が殆どなのか。詰まり、嫁入り前の娘が、男に身体を許すことは、通常、考えられないのですよね？」
これまで見聞きしたことを鑑みれば、この国に於ける男女間の恋愛関係が、かつてのように自由奔放であるとは到底思えなかった。貞操観念も固い方だろう。
いい意味でも悪い意味でも、女性は伝統的な枠組みの中で守られた存在で、風紀も自分の目から見ればかなり保守的で前近代的だった。それは、女性たちの服装（肌の露出が少なく、スカートの裾も長い）に良く表れていた。一般庶民の間では、そこまで厳格でないのかも知れないが、貴族階級では、その辺りの線引きはかなりきちんとされていることだろうことは想像に難くなかった。
ヨルグは顔を上げると、静かに長い脚を持て余すように組み替えた。そして、膝の上に組んだ手を乗せると緩く長い息を吐き出した。

「基本的にはそうだな。一般庶民と貴族階級、都市部と農村ではそれなりに意識の差があるには違いないが」
淡々としたヨルグの説明にリョウは静かに頷いた。
「そうですよね。その辺りのことは大体予想通りでした。因みに、ここにいる兵士たちの意識も基本的にはそのような土台の上にあるのですよね？」
念の為、確認をすれば、
「まぁ、建前上はな」
ひじ掛けに肘を突いて、長い人さし指をこめかみの辺りに当てながら、ヨルグは溜息のようなものを吐いた。
「成る程」
そこにある何がしかの含みに、リョウはさもありなんと頷いた。やはり、そこは若者たちの事だ。古い因習への反発や禁忌への興味は多分にもあるのだろう。生理的欲求を持て余しても、その捌け口はそれなりに用意されているという訳だ。それがヨルグの使った『建前上』という言葉の中に含まれていた。
リョウは神妙に合槌を打った。

いつしか、両者の間には、学問を論じるかのような真面目な空気が漂い始めていた。議題の内容はともかく、リョウとしては真剣であったし、対するヨルグもそれを真正面から誠実に捉えたからだ。
そうして暫く、この国の人々の恋愛観や結婚観といった意識について話し合って。

――――――――少し、踏み込んだことを聞くが。
そう前置きをしてから、ヨルグは一つ咳払いをすると、これまでと同じように淡々と口を開いた。
「ルスランとは、既にそういう関係にあるのだな？」
肉体関係を持っているのかと問われて、リョウは恥じらいながらも頷いて見せた。

「つまり、お前が見た所、ルスランは何も対処をしていないということか」
「ええと。ワタシが知り得る限りでは、恐らく。それよりも、こちらでも対処法があるんですか？」
半ば半信半疑の問い掛けに、ヨルグは小さく笑った。
「お前の国ではどうだった？」
医師を多く輩出する家系としての血が騒ぐのか、途端に興味深そうな顔付きになったヨルグに、リョウは自分が知り得る限りのことを話した。
男の場合や女の場合。飲み薬のことやフィルムを始めとする器具のこと。ゴムのように素材そのものが無い場合は、極力噛み砕く様にしてその役割を説明した。
それから話は、自然と医学の分野に移った。身体の仕組みや体内器官のこと。中でも、生殖機能に於ける女性特有の身体の変化やその体内に妊娠に適した周期的な波（リズム）があることにヨルグは興味を惹かれたようだった。それから、細胞から始まる妊娠の仕組みやその過程。足りない語句をヨルグの手助けを借りて少しずつ手探りで補い合いながら、訥々と議論を交わした。
ある程度のことを話し終えると、
「お前の国は、中々に医学が発達していたのだな」
感じ入るようにヨルグは感嘆の息を漏らしていた。
それにリョウは静かに頭を振った。
「専門的な分野を見ればそうかもしれません。ですが、まだまだ未知の領域、不治の病というのは沢山ありました。そういう点では、こちらと大差はない気がします」
「【ニェジェーリ】の実というのは聞いたことがないか？」
――――――この位の、小さな赤い実だ。
そう言ってヨルグは親指と人差し指の間を豆粒ほどの大きさに開けた。

不意に流れが変わった矛先に、リョウは首を横に振った。
これまでガルーシャやリューバ、セレブロや森の狼たちから、それなりに薬草の知識を教えてもらったが、その言葉は耳にしたことが無かった。
「薬草の類ですか？」
「いや、小さな蔓科の植物に生る実だ。赤い色をしている。それが、この辺りでは一般的な対処法の一つだな」
「それをどうするんですか？」
磨り潰して服用するのだろうか。
思わず身を乗り出したリョウに、ヨルグは小さく笑った。
「どうすると思う？」
いつにない変化球だった。
リョウは少し考えてから、思いつく限りのことを言った。
「そのまま食べるんですか？　それとも磨り潰して果汁を飲む？　いや、それとも乾燥させたものを粉にして服用するとか？　ああ、でもその作用の仕方が分からなければ何とも言えないか」
一人ぶつぶつと独り言を言ってから窺うようにヨルグを見るが、どれも不正解のようだった。
「分かりません。降参です」
「ならば、ヒントをやろう」
単に答えを出すのではなく、筋道を作って、考えさせながら正解に辿りつかせようとするヨルグは、講師役としては打ってつけだった。
「はい」
そうして正解まであと少しというところだった。

――――――――コン、ココン。
室内にどこか性急な感じのするノック音が響き渡った。

束の間の生徒と教師の臨時講義は、それに阻まれて、一時中断した。
「はい」
ヨルグが了承の言葉を放って椅子から立ち上がると、部屋の扉が勢いよく開いた。
そこから顔を覗かせたのは、銀色の髪を無造作に撫で付けたユルスナールだった。
そこにはいつもの余裕ある淡々とした表情が抜け落ちて、些か焦りの色が浮かんでいた。
「どうかしましたか？」
「ああ、済まないヨルグ、こんな時間に。リョウを見なかっ……た……か？」
吊り上がり気味の深い青さを湛えた瞳が、部屋の中に居る黒髪の人物を捕らえると、見開かれた。
リョウは、思ってもみなかった人物の登場に肩を揺らしたが、内心の気まずさを誤魔化すように小さな微笑みを浮かべると小首を傾げてみた。
「こんなところで何をしている？」
剣呑さを含んだ男の低い声が響いた。
「ヨルグに臨時講義を受けていました」
嘘は言っていない。リョウは淡々と事実を述べた。
「こんな時間にか？」
「はい」
何と間の悪いことだろう。正解まで、自分が欲しい情報まであと少しというところで、このことを一番知られたくない男が顔を覗かせるとは。
リョウは心の中で落胆の溜息を吐いた。
「すみません。ワタシをお探しでしたか？」
ユルスナールが自分を探している理由の一端は想像が付かなくもなかった。なぜなら夜はユルスナールの部屋に来るように言われて

いたからだ。久し振りの邂逅に胸が高鳴ったのも事実だった。
約束を取り付けたものの、中々やってこない相手に痺れを切らしたのかもしれない。いや、心配を掛けてしまったか。
だが、リョウの中での優先順位は、気になっていたことを確かめることの方が高かったのだ。
「……リョウ」
つれない相手に対してか、ユルスナールが複雑な顔をした。

「ルスラン」
そこへ、この部屋の主であるヨルグがすかさず間に入った。
このままでは、この部屋で痴話喧嘩の類が勃発しかねなかった。
それに巻き込まれることは何としても避けたかった。
ヨルグは、ユルスナールの耳に何事かを耳打ちした。
ユルスナールの瞳が驚きに見開かれる。
だが、すぐにそれが些かばつの悪そうなものに変わった。
その後、二人の男たちは小声で何やら遣り取りをしていた。そして、最終的に態度を軟化させたのはユルスナールの方だった。
「済まなかったな」
「いえ」
短く否定の言葉を述べたヨルグに、ユルスナールは苦笑に似た笑みを刷いた。
そして、気を取り直したように、部屋の中にある長椅子に恐々として一人腰を下ろすリョウへと声を掛けた。
「リョウ。部屋に戻るぞ」
カツカツと靴音を響かせて室内に入ってきたユルスナールは、有無を言わせずにリョウの腕を取り、椅子から立たせた。そして、そのまま戸口へと向かった。
「あの、ヨルグ？　先程の答えは？」
リョウは内心焦りながらも、戸口際で臨時教師の方を振り返った。
「ああ。それならば問題ない。俺がちゃんと教えてやる」

その耳元で、ユルスナールの声がやけにねっとりとした囁きを吹き込んだ。
ざわりと身体の奥に漣が立った。
「手取り足取り、実地でな」
恐る恐る見上げた先には、兇悪な笑みに弧を描く男の口元が見えた。そして、その上の瑠璃色の双眸には、いつぞやの獰猛な色が滲み始めていた。
――――――【ボージェ・モーイ！（何と言うことだ！）】
リョウは口の端を引き攣らせた。
もしかしなくとも相手を無駄に煽ってしまったのだろうか。
視界の隅でヨルグが肩を竦めたのが見て取れた。そして、一つ、大きく頷くと、緩慢に片手をひらりと振った。
もう行けということだろう。
「何だ、俺では不満か？」
「……いえ。お手柔らかにお願いします」
「そうか」
満足そうに微笑んだユルスナールに腕を引かれて、リョウはヨルグの部屋を後にした。
だが、去り際、束の間の教師に礼を述べることだけは忘れなかった。
「あの、ヨルグ、ありがとうございました」
閉じかけた扉の隙間から、鉄仮面の名を恣にする優秀な補佐官が、何とも言えない実に複雑な表情をしていたことをリョウは見逃さなかった。
そして若干の居た堪れなさを感じながらも、ズンズンと先を歩く男の後頭部を同じように複雑な気分で眺めたのだった。

二人の夜は、これからが本番である。
こうして、束の間の臨時講義は、教師を変えた形で続くのだった。
それが吉と出るか、凶と出るかは、リョウ本人のみぞ知るというと

ころである。

補佐官のかくも難儀な一時（後書き）

個人的にはかなり気になった部分でしたので、ついつい筆の走るままに書いてしまいました。この続きは、ムーンライトノベルズ掲載のＭｅｓｓｅｎｇｅｒ　Ｒ１８　短編集　”Ｉｎｓｏｍｎｉａ”の方に掲載してあります。もしよろしければ、そちらもどうぞ。次回は、普通の流れに戻ります。失礼しました。

見習い厩舎番のかくも爽快な朝（前書き）

今回は、砦の馬たちとの一幕をお送りいたします。

見習い厩舎番のかくも爽快な朝

『ほれ、早くせぬか！』
「分かってるって」
まるで小舅のようにせっつく栗毛馬のスートに急かされながら、馬場の周囲を巡らす柵によじ登って、リョウは何故こんな羽目になったのだろうかと内心、途方に暮れていた。
「キッシャー、もうちょっとこっちに寄って」
『うむ』
キッシャーに頼めば、すぐ傍にいるスートがいきり立ったように鼻をぶるりと鳴らした。
『リョウ、そなたがもう少し寄ればよかろう？』
先程から、チクチクと刺さる辛辣な言葉をリョウは敢えて気に留めないことにした。そして、一先ず、目先のことに集中することにする。
自分の背丈程はある柵の上で体勢を整えると、目の前にある逞しい黒毛の首の根元辺りに手を着いて、その上に乗ろうと片足を開く。
『かようにお手を煩わせるとは、なんたること！』
鼻息荒く高慢に嘆く栗毛を横目に、
「よっと」
黒い大きな背中に跨ると身体の平衡（バランス）を取る為に背筋を伸ばした。
『大事ないか？』
キッシャーより案じる言葉を吐かれて、
「……多分？」
裸馬の鬣の辺りを掴みながら、リョウは些か心もとない表情をしていた。
馬に乗ること自体不慣れであったが、今、キッシャーの背には鞍が置かれていなかった。セレブロの時と比べでも余り大差ない様にも思えたが、獣の背中に乗ると一口に言っても馬と【ヴォルグ】で

は、やはり感覚が違う。それにキッシャーは軍馬の中でもかなり体格のよい立派な馬だった。
格段に高くなった視界にリョウはゴクリと唾を飲み込んだ。
『よし、では参ろうか』
「え、ちょっと待って」
焦った声を出したリョウに、
『なに馬場を一周、軽く流してからだ』
心配など要らぬとキッシャーは事も無げに言い放った。
『お気を付けて』
『うむ』
丁重に見送りの言葉を口にしたスートに、キッシャーは鷹揚に首を縦に振った。
そして、乗り手の心の準備の整わぬまま、軽やかに駆け出してしまったキッシャーの首に、リョウは齧り付く様にして慌てて前傾姿勢を取った。

こんなことになった切っ掛けは、朝の厩舎小屋での一仕事を終えて、ガルーシャの木を見に行こうと思っていると言ったリョウに、泉の場所を覚えているのかとキッシャーが尋ねた所から始まったのだ。
道順をしっかり覚えている訳ではなかったが、なんとなく記憶を辿れば大丈夫だろうと答えたリョウに、それでは心もとないとキッシャーが心配そうに鼻を鳴らしたのだ。
そして、この後は簡単に馬場を駆けて銘々が思い思いの調整をする時間であるからと前置きをして、リョウを自分の背に乗せて案内しようではないかと言ったのだ。
リョウはその提案に仰天した。
「いや、気持ちは有り難いけど、そういう訳にはいかないよ」

馬と雖も、キッシャーたちはこの砦の管轄内の軍馬だ。ここにはここの規律がある訳だから、そのような勝手なことは出来ないだろう。それにキッシャーはここの馬たちの中でも、師団長であるユルスナールが使う特別な馬だ。普通に考えて、兵士ではない自分がそんな勝手なことをする訳にはいかなかった。

そう思って、丁重に断りを入れたのだが、

『なに、かようなことなど問題にならぬ』

堂々と言い放ったキッシャーに続いて、

『エドガーに話を付ければ構わぬだろうて』

頼れる兄貴分、御意見番のナハトまでもが、そんなことを言い、

『いいんじゃね？　偶には』

偶々、傍に居たケッペルが揺るく息を吐いた。

『あの泉のほとりであろう？』

『あそこを抜けるのは気持ちが良いぞ』

ロイドやリグスまでもが肯定するように合槌を打った。

『なに、さほど距離がある訳でもあるまいに。案ずることもなかろうて』

そして、いつもは大人しくしているユベルまでもがそんなことを言う始末。

やけに乗り気な馬たちを前にリョウは目を白黒させた。

そんなに気軽に構えて大丈夫なのだろうか。何らかの事態で急に馬が要り用になる時だってあるだろう。そんな時に肝心の馬がいないのでは話にならない。特にキッシャーの場合、その乗り手はユルスナールなのだ。

万が一のことを考えて、顔を青くしたリョウであったが、

『リョウ。お主、キッシャー殿の好意を無下にする気か！』

キッシャーの熱烈な信奉者であるスートのその一言が、多分にも決定打となったのだ。

そして、一応、簡単に厩舎番の長であるエドガーに話を通した。幾ら馬たちと仲が良いと言っても、流石に勝手をする訳にはいかないからだ。

エドガーは少し驚いて、初めは渋い顔をして見せたが、『すぐに戻る』というキッシャーの言葉に最終的には諾と頷いた。

エドガーは、どうにもキッシャーの扱いには慎重であるらしい。

だが、規則に拠り馬の正式な乗り手でなければ鞍を付けるのは駄目だと言われて、それでも構わないとリョウも頷いた。そして、エドガーに謝辞を述べながら済まないと頭を下げて、馬場に出てきたのだ。

そして、さて、出発しようという段階になって鐙がないキッシャーにどうやって乗ろうかという問題が発生し、あの柵を足掛かりにすればよいということで、馬場脇の柵によじ登ることになったのだ。

そして、冒頭の場面に相なった。

スートはキッシャーと出掛けることになったリョウのことが羨ましいようで、先程からねちねちといたぶるように辛辣な言葉を吐いていた。

スートは、本当にキッシャーのことを敬愛しているのだ。いや、ここまで来ると偏愛かもしれない。無駄に気位が高い所為で、その感情表現の仕方は直截的ではなく、かなり回りくどいことになっているが、その根底にあるものは変わらない。その事を考えると非常に可笑しくて思わず笑いそうになったが、そうすると却ってスートの機嫌を損ねることになるので、なんとか堪えた。

他の馬たちと同じように、軽やかに馬場を一周し始めた逞しい黒毛の後に、同じように体格の良い栗毛が続いた。だが、黒毛馬の背中には、何やらいつもとは違うものが遠目にはへばり付いているよ

うに見えた。
その黒毛は、暫く同じように他の馬たちと並走して馬場内を走っていたが、一周半辺りになった時点で道筋を逸れ、柵を勢いよく飛び越えた。
「うわぁ」
『リョウ、口を開くな。舌を噛む』
すかさず飛んだキッシャーの叱責の声に、
――――――分かってる。
リョウは、心の中で、声を張り上げた。

不意に馬場から逸れた一頭の黒毛馬の姿に、鍛錬場で訓練をしていた兵士たちの幾人かが気が付いたようだった。剣を扱っていた手を止めて、こちらを指差しながら何やら大声で言葉を交わしている。その向こうに日の光に反射する銀色の髪を認めて、リョウはキッシャーの鬣を引っ張った。
「キッシャー、ルスランに一言、言っておかないと」
念の為、主の許可がいるだろう。これでは事後承諾に近かったが。その言葉にキッシャーも諾と頷いた。
『うむ。承知』
そして、リョウを乗せた逞しい黒毛は、颯爽と鍛錬場の方へ向かった。と言っても、その上に跨る乗り手は些かぎこちがなかったが。

鍛錬場の外側を大きく迂回する形で、キッシャーは駆けた。
自分たちの方へ疾駆してくる大きな軍馬に、兵士たちが何だ何だと顔を見交わせた。
鍛錬場の直ぐ脇で、キッシャーは軽やかに止まった。
リョウは体勢を整えてから片手を振り上げると、こちらに気が付いて動きを止めたユルスナールに向かって声を張り上げた。
「ルスラン！　キッシャーをちょっとお借りしますね！」
ユルスナールはぎょっとしたように目を見開いて、こちらへ駆け

てきた。
「あ、おい、リョウ！」
だが、それを合図とするようにキッシャーが嘶いて、己が主の到着を待たずに、駆け出してしまった。
「何処へ行く！」
大きな良く通る声を張り上げたユルスナールに、リョウもキッシャーの首に齧り付きながら、声を張り上げた。
「ガルーシャの木を見に！」
そして、瞬く間に視界から消えた人馬を、ユルスナールは複雑な顔で見送った。
「あんのじゃじゃ馬め」
「おうおう、何だありゃ。リョウか？」
騒動を聞きつけてユルスナールの隣にやってきたブコバルも、同じように小さくなって行く黒毛とその背中に張り付いていた人物を透かし見た。
「隊長、いいんですかい？　キッシャーの背には鞍が付いてませんでしたぜ？」
近くに居て一部始終を見届けていたサラトフがそう進言した。
そこには、楽しげではあるが一抹の不安のようなものが眦に覗いていた。
「ハハハ、こいつは豪気だ。裸馬かよ」
愉快そうに豪快な笑みを浮かべたブコバルへ、ユルスナールは苦々しい視線を送った。
だが、直ぐに思い直したように片眉をくいと挙げて、厩舎小屋の方へと声を張り上げた。
「エドガー！！！」
良く通る張りのある声が辺りに響いて、厩舎小屋の方から古参兵士のエドガーが何だとばかりに顔を覗かせた。
そして、ふさふさとした白い眉を小刻みに動かして、鍛錬場の方へ現れた

「何でございましょう？」
「キッシャーはどうした？」
その問いにエドガーは、先程のリョウとキッシャーの顛末を手短に語った。
「鞍はどうした？」
「規則ですから。正式な乗り手以外は付けられないと申しましたら、それで構わないとのことでしたので」
つらつらと淀みなく流れたエドガーの口説に、ユルスナールは額に片手を当てると、大きく溜息を吐いた。
己が馬の気性を鑑みれば、エドガーの取った判断は一概に責められなかった。それに日頃から規則を守るようにと言っているのは自分の方なのだ。それがこんな形で裏目に出るとは思っても見ないことであったが。
――――――あのお転婆め。
ユルスナールは、軽い舌打ちをして、己が愛馬とそれに乗った小柄な背中が消えた方角を透かし見た。
「全く、落馬でもしたらどうするんだ」
「ハハハ。大丈夫なんじゃねぇ？　【ヴォルグ】の長の背中に軽々と乗ってやがったじゃねぇか。似たようなもんだろうよ」
そう慰めになるようなならないような微妙なことを言って呑気に笑うブコバルを横目に、ユルスナールは、僅かに口の端を下げたのだった。

ユルスナールの心配を余所に、リョウを乗せたキッシャーは、軽やかに風の中を駆け抜けていた。木々の合間を縫うようになだらかに上昇する斜面を駆け上がる。
視界を流れて行くのは色とりどりの緑の濃淡だ。差し込む光に反射する枝々が風に揺れて、薄暗がりの中で星の瞬きのように見えた。

鬱蒼と生い茂る梢が、トンネルのように頭上を覆う場所を抜けた。

視界が開けると泉のほとりに出ていた。

そこには、記憶の中にある情景と寸分違わぬ景色が広がっていた。

この辺りは常緑樹が殆どで、表面上、目立った季節の移ろいは余り感じられなかった。

鬱蒼と茂る木々、深い森に続く林の一角。それらに縁取られるようにして佇む小さな泉。

凪いだ水面は、吹き込む風に柔らかな日の光を反射して、キラキラと輝いていた。

陽射しだけを取るならば暖かい。だが、空気は身を切るように日々、冷たさを増してきていた。

リョウはキッシャーの背中から降りると泉に向かって歩みを進めた。

両手を外套のポケットの中に入れた。

一陣の強い風が吹き抜けた。無造作に括った癖の無い髪が躍るように宙を舞う。その風は、ざわざわと梢を揺らし、水面を波立たせた。

眼下の水面に映り込むもう一つの世界、薄く伸びた青い空と薄らとたなびく白い雲、それを縁取る木々の緑が、一瞬にして掻き消えた。

リョウは泉の縁を回って、ガルーシャの種を植えた場所を目指した。

セレブロと一緒に植えた種。その場所には、目印として隣にある木の枝に小さな飾り紐を結び付けていた。その紅い紐が、そよぐ風にたなびいていた。その役目が続くように、紅い紐にはセレブロから教わった保護の呪いが掛けられていた。

緑の濃淡の中で、それは直ぐに見つかった。

――――――あそこだ。
リョウは自然と駆け出していた。
紅い紐の括られた木の枝は直ぐに見つかった。そして、その隣へ視線を流す。

そこには、見上げる程の大きな若木が一本、すっくと立っていた。こんなにも大きくなっている。リョウは余りの成長ぶりに呆けたように顔を上げた。
背丈は、優に自分の二倍はあるだろう。しなやかに伸びた枝ぶりは、まだ細いながらも立派であった。
「……すごい」
感嘆の息を吐いたリョウの隣に草を踏み締める音がして、大きな黒毛の馬が立った。
『ほう、これがそうか』
キッシャーが同じように首を擡げていた。
リョウは直ぐ脇にある鬣をそっと撫でた。
「春に種を植えたんだ。それが、もうこんなに」
驚異的な成長速度だ。このようなことがあるのだろうか。
『ここの水が合ったのだろう』
「そういうものなの？」
『ここには良き気が満ちておる。長も力を分けたのだろうて』
「セレブロが？」
『うむ。ここに長の御印が結ばれておる』
そう言ってキッシャーは、若木の根元部分を鼻で示した。
『リョウ、触れてみよ。おぬしならば見える筈だ』
リョウは、キッシャーに促されるようにして、その場所に掌を当ててみた。
――――――【パイエヴリャーイ（出でよ）】
リューバがその昔、見せてくれたように呪いの言葉を口にした。

すると、その場所が柔らかな光を放ち、ぼんやりと虹色の光線が膨れ上がるようにして出てきた。踊るような文字が現れ、風に遊ぶ木の葉のようにくるくると舞い始めた。

その形は、自分の胸元に現れている紋様に似ている気がした。セレブロの印封だ。

そして、様々な光を帯びた飾り文字は、流れる音符のように若木の幹の周りを帯のように回り始めた。

それに連動するようにして周囲の空気が揺らいだ。小さな色とりどりの光が、丸く弾けては虹の軌跡をなぞってゆく。震えた気が共振して、クスクスと微かな笑い声のようなものが聞こえた気がした。

『ほれ、水と大地、光と風の精が戯れておる』

キッシャーがふうと鼻息を吹き掛ければ、青と緑と黄色の渦がふわりと跳ねた。

「……わぁ……」

リョウは初めて目にするその光景に心を躍らせた。

木の根元に膝を着いたリョウの周りを色とりどりの光が遊ぶように舞った。手を差し出せば、その内の青い光が指に留まった。指先で弾けば、ふわりと光同士がぶつかり、混ざり合って、また新しい色合いの光が生まれた。

「ふふふ」

思わず小さな笑みが零れた。とても不思議だ。光そのものが生きていて、悪戯に飛び跳ねているようだ。

『ここはおぬしが暮らす長の森に近い。故に、かようにも精霊たちの気が濃いのだろう』

この場所には精霊がいるとはセレブロから聞いてはいたが、その輪郭とも言えるものを実際に目にするのは、初めてのことだった。

リョウは目を細めると小さく囁きを口に乗せた。具現化されたこの類稀な一時を少しでも目裏に焼き付けようとするかのように。

「綺麗だね」

『ああ』

それから、リョウは眩しそうに空を仰ぎ見ると、そっと瞼を閉じた。
日が大分高い所にまで昇って来ていた。
風が吹いていた。
ざわざわと木々の梢を揺らす音が漣のように聞こえていた。
甲高い鳥の鳴き声が響いた。

やがて、その口からは軽やかな旋律が聞こえ始めていた。
それは、大分前にスフミ村のアクサーナから教えてもらった歌の一節だった。
この国の古いお伽噺の一節。この国に住む子供から大人まで、皆が知る英雄譚の一節だ。
遥か昔、まだ、この国が【スタルゴラド】と呼ばれ始めて間もない頃のことだった。この地には大きな戦があって他国より侵略を受けた。男たちは勇猛果敢に対する敵に対峙したが、最終的に戦には敗れ、国土への侵入を許してしまった。侵略者は略奪の限りを尽くし、戦利品として若い女たちを奴隷として連れ帰った。その時に捕虜となって祖国を離れざるを得なかった女たちが、遥か遠い故郷を懐かしみながら歌うのだ。連行中の束の間の休息と宴の席でのことだった。
【風の翼に乗って飛んでお行き　遠き故郷へ　我らが歌よ】
この身が奴隷に堕ちても、あの懐かしき故郷の景色は変わらない。この身に代わって、歌声を届けておくれ。なにものにも縛られない自由な風に乗って。
郷愁を誘う、どこか切ない筈の歌詞であるのに、その言葉を乗せる旋律は故郷の景色の美しさと素晴らしさを謳う喜びに満ちていた。きっと当時もこのような風が吹いていたのだろう。女たちの歌声とその想いを乗せて。
虜囚となった女たちのその後は分からない。異国の地でその短い生涯を終えたのかもしれない。きっと過酷な運命が待っていたこと

だろう。それでも、いつの日か、故郷に帰ることを夢見て、再び、自分たちが生まれ育った雄大な景色を見ることを夢見て、命を繋いでいたのかもしれない。

この歌に想いを託して。

それは、帰るべき祖国を失った自分の境遇に似ている気がしてならなかった。話の中の女たちに比べたら、自分の境遇は遥かに恵まれていることだろう。同じなどと言ったら罰が当たるかもしれない。

それでも、その歌は心に沁みた。するりと自分の中に入ってきたのだ。

リョウの眦には薄らと涙が滲んでいた。それをそっと指先で拭う。いつになく感傷的になってしまった。らしくないことだ。

リョウはその口元に自嘲とも取れる苦笑を滲ませていた。

キッシャーは何も言わずに傍らに寄り添っていた。時折、思い出したようにのんびりと草を食んだ。

静かで穏やかな時が、風と共に流れていた。

『そろそろ、戻るか』

ゆっくりと立ち上がったリョウにキッシャーが声を掛けた。

「そうだね」

それから、泉の脇の湧水で喉を潤した。

砦に戻る前に、リョウは再びガルーシャの若木を振り返った。

周りに立ち並ぶ木々に比べたら断然細いが、その若木は、しなやかで強靭なまでの生命力に溢れていた。伸びる枝葉は瑞々しい。それは、この春に種から生まれた新しい命だった。まるでガルーシャが姿を変えて蘇ったかのようだ。

――――――また、来るからね。

リョウは心の内でその木に呼び掛けた。

それに応えるかのように梢が風にさらさらと揺れた気がした。

今度、この場所を訪れた時にはどんなにか大きくなっていること

だろう。今後の密かな楽しみが一つ出来たと思った。

そうして、北の砦に戻ろうという時になって、リョウははたと思った。行きはキッシャーの背に跨るのに馬場の柵をよじ登ったのだが、ここではどうしようか。

『リョウ、乗れ』

促すようにこちらを見たキッシャーに、リョウは躊躇するかのように複雑な顔をして見せた。

「このまま乗れるかな？」

『試してみればよい。無理なら徒歩（かち）にて帰るか？』

――――――それでも構わんぞ？

からかう様な声音に、リョウはムッとして大きな黒毛を仰ぎ見た。

「やってみる。キッシャーこそ、踏ん張ってね。なるべく気を付けるけど、蹴ったらごめん」

一応、先に謝っておく。

『余り強烈なのはあやまるぞ？』

飄々とおどけるように返したキッシャーに、リョウは神妙な顔付きで頷いた。

「分かってる」

そう言って、目の前の少し高い所にある背中に両手を掛けると勢いを付けて飛び上がった。

「よっと」

開いた足をすかさず背中に引っ掛ける。

『ほれ、齧り付け』

多少、無様な形にはなったが、なんとか踏ん張ってその背中に上がることが出来た。

『リョウ、大事ないか？』

「うん。平気。キッシャーこそ、大丈夫だった？」

『うむ。心配など無用』

跨る位置を調整して、行きと同じように体勢を整えた。

『では、行くぞ』
「【パイエッハリ(ラジャー)！】」
こうして、調子だけは滅法よい合図と共に、再び、立派な黒毛馬は地を蹴ったのだった。

そして、リョウを乗せたキッシャーは、颯爽と北の砦に戻った訳だったが……。

黒い癖のない髪と同じく、黒い尻尾を靡かせた人馬は、馬場の前に仁王立ちをして己が愛馬と愛し子の帰りを待ち構えていた強面(ユルス)の砦(ナール)の長に敢え無く御用となった。
そして、その日、厩舎の端っこでは、やや神妙な顔付きで己が主と保護者のお小言に耳を傾ける黒き人馬の姿が見受けられたというのが、食堂の兵士たちの間を賑わした専らの噂であった。

見習い厩舎番のかくも爽快な朝（後書き）

幕間を始めてから中々第四章に入りませんが、あと一、二話程続く予定です。四章への前振りの部分として、少し人物像や背景を掘り下げた形にしていますので、もう少しお付き合い下さい。

居候のかくも不運な一日（前書き）

今回も兵士たちの日常をコメディータッチでお送りします。それでは、どうぞ。

居候のかくも不運な一日

思えば、今日は朝からツイていなかった。
いつものように手櫛で一つに束ねた髪を結えようとして、その結び紐がぷつりと切れたことから始まったようにも思う。
その紐は、元々かなり使い古したものであったので、偶々と言えばそうなのだが、そういう何かの切っ掛けになるような事象は、振り返ってみれば、やはり怪しく見えるものである。
ここ数刻余りの己の状況を反芻してみて、リョウの口からは長い溜息のようなものが漏れていた。

「何か、分からない所でもありましたか？」
比較的広い執務室にある応接用のソファに斜交いに座り、優雅でどこか気品すら溢れる仕草で手元の書類を静かに繰っていた人物から、柔らかな微笑みと共に尋ねられて、リョウは慌てて、小出しにしていた溜息を引っ込めると、誤魔化すような笑みを浮かべた。
「いえ。今のところは大丈夫です」
「そうですか」
柔和な面に人目を惹く菫色の瞳を細めながら、小さく首を傾げた拍子にその人物のほっそりとした顔を象る柔らかそうな薄茶色の髪がさらりと揺れる。後方で緩く結ばれたその髪は、恐らく自分のものと比べても長かった。
そのまま、にこやかな表情を崩すことなくこちらを眺める人物に、リョウは、些か居心地が悪そうに身じろいだ。
「あの、シーリス、どうかしましたか？」
時折、こちらに向けられる生温いような視線にとうとう堪え切れなくなって、リョウは口を開いていた。
「いえ。中々に良いものだと思いましてね」
朗らかな調子でしみじみと言われて、

「……はぁ」
リョウは曖昧な返事をした。
「何せ、ここはむさ苦しい男所帯ですからね。右を見ても左を見ても、目に入るのは髭面か、擦り傷だらけの顔か、一歩間違えば兇状持ちのような顔、それに小生意気な若造の顔。ああ、それから、融通の利かない堅物の顔というのもありますね」
今日も実に爽快。その毒舌は冴え渡り、眩しいまでの笑顔が漏れなく付いてくる。
「ですから、偶には癒しが必要だと今更ながらに痛感している訳ですよ」

その言葉にリョウは改めて自分の格好を見ろした。
今、自分が着ているものは、灰色の使用人風の地味なお仕着せだった。いつぞやの【プラミィーシュレ】で娼館の女主イリーナから譲り受けた女物の服だ。それに、お対になっていた白い前掛け(エプロン)をして、束ねた髪の上から【プラトーク】(スカーフ)を巻き、足元は編み上げの【バチンキ】(ショートブーツ)を履いていた。
これらの荷物は、【プラミィーシュレ】からの帰還の際に馬で来ていたユルスナールに自分の代わりに持って帰って貰ったものだった。後で、取りに行くと約束をした訳だったが、間違ってもそれをこのように北の砦の中で着用する羽目になるとは、露ほども思っていなかった。

こうなったのも全て、オレグの所為だ。
リョウは、半ば恨めしい気分で、頬にそばかすの残る、身体は成熟しているけれども、まだどこかあどけなさの残る青年の能天気に笑う顔を思い出していた。

あれは、厩舎小屋での手伝いを終えて、敷地内を宿舎の方へ戻ろうとしていた時だった。
「おーい、リョウ。ちょっとこっち来いやぁ！」
馴染みのある声に呼び止められて振り返れば、ぶんぶんと片手を大きく振っているオレグがいて、リョウはなんだろうかと首を傾げた。
オレグが居る場所には、他の兵士たちの姿もある。
あの場所は、確か水場であった筈だ。別名、洗い場で、夏場には兵士たちが訓練後の汗を流したり、普段は洗濯やらをするような場所だった。
その場所には井戸が掘られていて、周囲を囲むように煉瓦で囲いが施されていた。中では水が溜まり、洗い物をしやすいように設計されていた。
洗い場から少し離れた後方には、物干し台とそれを結ぶ綱が一緒に備え付けられていて、シーツなどの大きいものを洗ったりした後は、中々に壮観な長めだった。

少し嫌な予感がしないでもなかったが、無視するのも気が引けたので、取り敢えず傍に寄った。
「なあ、リョウ。暇だろ？　暇だよな？　手伝ってくんねぇ？」
――――――後で、昼飯ん時でもおかず分けてやるから。
オレグは大きな図体に腰に手を当てながら、やけに爽やかに笑って見せた。ニカッとそれこそ白い歯を見せて。
だが、その足元には、目を背けたくなる程の沢山の洗濯物がこんもりと山のように積まれていた。
リョウはあからさまに顔を引き攣らせた。
「うっわ」
そして、眉を顰めた。
「そんなに溜めこんでたのか、オレグ」
もしかしなくとも、相当、洗濯をさぼっていたようだ。

「アハハハハハ。まぁ、なんだ。固いこと言うなって」
笑って誤魔化そうとするオレグをリョウは白い目で見た。

男所帯であるから、酷い場合は、物臭な性質の兵士によっては相当なものだろうとは思ってはいたが、リョウはこれまでの滞在中で、幸か不幸か、そういった男たちの生活の【暗部】を目の当たりにしたことが無かった。恐らく、綺麗好きな副団長・シーリスの影響（と言うよりも教育的指導の賜物）なのだろうが、皆、割と身綺麗にしていたから（無精髭はままあるにしてもだ）、まさか、こういう如何にもな場面に遭遇するとは、思ってもみなかったのだ。

だが、オレグならば、何となくこの状況も納得してしまう。本人が聞いたら『失礼な！』と眉を吊り上げそうではあるが、目の前には有無を言わさぬ証拠が広がっているのだから仕方がない。

「うへぇ」

余りの光景に、リョウの口から漏れたのは、周囲の兵士たちから伝染したと思われる若い男らしい口調だった。

気を付けないと段々と口が悪くなっている気がする。耳から入る言葉は、概して伝染（うつり）しやすい。そして、無意識下に言語中枢に働き掛けるものなのだ。

若い兵士の言葉使いは、思いの外、自分の中に浸透していたらしかった。裏を返せば、それだけ、自分がこの場所に馴染んだことになるのだろうが、本来、女であるリョウとしては、その心中は些か複雑であるに違いなかった。

「なぁ、リョウ。手伝ってくれよぉ。兄貴を助けると思って」
少し情けなく眉を下げたオレグを前に、リョウは洗い場と洗濯物の山を見比べた。
「バァーカ、なま言ってんじゃねぇよ、コラ。てめぇのケツはてめぇで拭えっつの」
その傍らで、囲いの煉瓦の縁に腰を下ろして洗濯板を片手にオレ

グと同じくらい体格のよい兵士が、黙々とごつごつとした大きな手を器用に動かしながらも、険もほろろに言い放った。

大きな体の若い男たちが小さな洗濯板を片手に背中を丸めて洗濯に勤しむ。それは、中々、ある意味、壮観（シュール）な眺めであった。

傍らでオレグを窘めたのは、この砦の兵士たちの中では中堅どころに当たるアナトーリィだ。口は悪いが、大きい身体の割には意外にマメで良く気の付く所のある男である。顔に似合わず（などと言ったら怒られそうではあるが）手先も器用で、繕い物が上手いことを食堂で小耳に挟んだ。

シーツなどの大きな洗い物の場合は、兵士たちの中では、当番制で洗濯をするらしい。中には、自分の分を弟分的下っ端に押し付ける場合もあるようだが、基本、兵士たちは各自の自己責任で身の回りのものの洗濯を行っているらしかった。

「それにしても、よくここまで溜め込んだな」

山になった中からシャツらしきものを一枚掴むと、リョウは信じられない気分で呟いた。

独特な汗の臭いと若い男特有の青臭い臭いが鼻に付いた。まさに発酵している感じだ。まさか、黴が生えているのではなかろうか。これを溜めこんでいた部屋の一角もかなり臭ったのではないだろうか。

それ以上のことを想像しようとして、慌てて脳内に展開された映像を消し去った。

恐ろしすぎるだろう。

オレグの部屋には、決して立ち入るまい。そんなことを思ってしまったリョウであった。

そして、リョウは、シャツを摘んだまま、洗い場に蹲ったオレグの手元を覗き見た。

洗濯板を使う手付きはかなり覚束ない。何というか大雑把である。隣のアナトーリィと比べるとそれは一目瞭然だった。今まで気に留めたことはなかったが、オレグはかなり不器用な部類に入るらしかった。

――――――――はぁ。

それ以上、黙って見てはいられなかった。

リョウは、心の内でとっぷりと溜息を吐くと、徐に上着を脱いで、シャツの腕を捲った。それから長靴（ブーツ）も脱いで、ズボンの裾を膝辺りまで捲り上げ、オレグやアナトーリィたちと同じ格好になった。

「ほら、オレグ、そうじゃなくて。もっとこう縦を上手く使わないと」

オレグの手元から洗濯板を奪うと、見本として洗い方を実践してみた。

オレグは泥と汗染みの汚れと格闘していた。

「ほら、こうすれば落ちただろう？」

【プラミィーシュレ】でソーニャに教わったコツを披露すれば、

「すっげぇ、ホントだ」

途端に輝いて見開かれた眼差しに、リョウは仕方がないかとばかりに苦笑して見せた。

オレグには、なんだか憎めない所がある。ちょっと出来の悪い弟を見ているような気分だった。

それにリョウとしてはオレグには大きな借りがあった。この砦内でこれ程までに自分が受け入れられているのも、ひとえにオレグの存在があったからだ。

オレグが自分のことを何かと構ってくれたお陰で、すんなりと若い男たち中に溶け込めた形になったのだ。そのことは面と向かって口には出さないものの、感謝をしていた。

「ほら、次を寄越してくれ。オレが洗うから、オレグは濯いで干す方に専念しろ」

最終的に手伝うことになったリョウのその言葉に、オレグは喜色

を浮かべた。
「【マラデェッツ（さっすが）】！！！」
そして、嬉々として洗濯物の山の中から、次の一枚を差し出した。
その遣り取りを横目に、隣からは呆れたような深い溜息が漏れた。
「リョウ、適当な所で切り上げろよ？　コイツの落とし前はコイツに付けさせろ。ちょっとでも甘い顔すりゃぁ、すーぐ付け上がるんだから。この馬鹿が」
――――――あんまり甘やかすな。為にならんからな。
流石、頼れる兄貴、アナトーリィである。オレグのことをよく見ている。
後輩の指導に当たる立場からしてみればそれは尤もな事だった。
「そうですね」
その気持ちは良く理解出来たから、リョウも素直に同意を示すように微笑んで見せた。

そうこうする内に、
「オレグ、きたねぇぞ！」
「ずりぃ！」
「そうだ！　オレグの分際で！」
同じように洗い場にいた他の兵士たちが、ガヤガヤと野次を飛ばし始めた。
皆、同じようにそれなりに広さのある井戸の周りに陣取って、洗濯板を片手に背中を丸めていた。
今日は朝からすっきりとした晴天で風もあるから、大きな洗い物でも瞬く間に乾くだろう。
絶好の洗濯日和だった。
「ハハハ。いーだろ。お前ら。これも俺の人徳のなせる業だな！」
――――――なんだって？？？
リョウが横目に見遣れば、鼻高々にふんぞり返った大きな背中が見えた。

急に大きく出たオレグの態度に、リョウはアナトーリィと顔を見交わせると、あからさまに呆れたような顔をした。
だが、それもすぐに可笑しそうな笑いに変わった。
全く調子がいいったらありゃしない。でも、それが良くも悪くもオレグなのだ。

「しっかしさぁ、オレグ」
ごしごしと洗う手を止めて、リョウは隣で大人しく濯ぎをする為に身体を丸めている大きな背中を振り返った。
「こういう汚れは放って置いちゃ駄目だぞ？　時間が経てば経つだけ落ちにくくなるんだから」
一体、いつ付いた汚れなんだかというような食べ零しみたいな染みに、思わず愚痴の一つも出ようというものだった。
当の本人は、ちらりとリョウを横目に見ると、誤魔化すように態とらしい笑みを浮かべた。
「エヘヘヘ」
「……全く」
リョウは、だらしのないオレグへの小さな怒りを洗濯板の上にあるシャツの大きな染みに向けたのだった。

せっせと手を動かし続けた甲斐あってか、山のようにあった洗濯物は瞬く間に無くなっていった。その代わりに物干し台の方は、沢山のシャツが風に煽られるようにして翻り、中々に凄いことになっている。
リョウは最後と思われる一枚に手を掛けた。
しぶとい大きな泥の汚れもどうにか落とした。
いい加減、手がふやけそうだ。
冬場になり井戸の水は冷たさを増していた。それでも川の水よりは格段に温かいのだろう。
だが、今も昔も洗濯は重労働であることに変わりはなかった。

度重なる摩擦に指先がひりひりし始めていた。
「終わったぁ！」
「【ウラー（イヤッホー）】！！！」
最後の一枚を洗い終えると、達成感に思わず大きな声が出た。
「さっすが、リョウ、やるぅ～！　よっ、男前！　出来る男！」
調子の良すぎる囃し声に、リョウは思わず、直ぐ傍らにあった薄茶色の頭髪を拳で小突いていた。
「調子に乗るな。これからは溜めこむ前に洗えよ？」
「【ポーニャル（イエッサー）】！！！」

そうして、長いこと屈んでいた腰を伸ばそうと立ち上がり、両手を上に突き出して、大きく伸びをした時だった。
――――――ズバッシャーン。
幾ばくかの衝撃の後、ふと足元を見下ろせば、滴り落ちる雫がぽたりぽたりと乾いた土の上に染みを作っていた。ずぶ濡れになって張り付いた頭髪と顔を手で拭う。そのまま、緩慢な動作で、自分の身体を見下ろせば、シャツがびっしょりと濡れて身体に張り付いていた。いや、シャツだけではない。右半分の下半身、腰から膝に掛けても、生地がすっかり色を変えていた。
どうやら頭から水を被ったようだった。しかも大量に。
冷たすぎる。
「うっわぁ、リョウ！！！」
「がぁ～、外れたぁ。オレグ、てっめぇ、なに避けてんだよ！」
「うっせぇ、ボケ。普通、避けるだろうが！　反射神経舐めんな！」
「馬鹿野郎、何やってやがる！」
「大丈夫かぁ？」
「うわ、派手にやったなぁ。びしょ濡れじゃねぇか」
「おいおい、風邪ひいたらどうすんだ」
後ろを横目で透かし見れば、大きな洗い桶を片手に担いだ兵士の顔が見えた。

焦げ茶色の短い頭髪が跳ね上がっている。あれはグントだ。と言うことは、先に洗い物を終えたグントたちが、オレグをからかおうとしたのだろう。こういった犬のじゃれ合いのようなことはこの砦内ではままあることだ。それに巻き込まれた形になった。なんとツイていない。

リョウは無言のまま、すぐさま洗い場から足を引き抜いて、脱いだ上着と長靴（ブーツ）のある方へと足早に歩いた。

リョウは内心、酷く焦っていた。あの桶を見る限り、相当な量の水を被ったのだろう。濡れて身体にぴったりと張り付いた白いシャツは肌を透けさせていて、上手く隠していた筈の身体の線（ライン）と少年にはある筈の無い膨らみを暴きだしていた。

このままでは非常に不味い。

頭から滴り落ちる水滴をそのままに、リョウは上着と長靴を胸元に抱えると、裸足のまま反転し、宿舎の方へと駆け出した。

「あ、おい、リョウ？」

「すまん、リョウ！」

「大丈夫か？」

掛けられた複数の声に、リョウは我に返ると足を止めて振り返った。

「ああ、平気だ。気にするな。濡れたから、着替えてくる！」

声を張り上げてそう簡潔に言い放つと、己の部屋に戻るべく宿舎の方へ走り出した。

そして、漸く辿りついた玄関先で、運悪く、この砦の幹部連中に出くわしてしまったのだ。

やはり、今日は厄日か何かなのだろうか。そういう概念がこちらにあるとは思えなかったが、そう口にせずにはいられなかった。

ここまで裸足で駆けて来てしまったから、足裏だけでも簡単に埃を落とそうかと隅の方でもたもたしていたのが良くなかったのかもしれない。ここでの生活は、室内も普通に土足であるから、本来ならば、そのような事を気にしなくてもよかったのだろうが、余りに気が動転していた所為で、ついつい幼い頃から身体に染みついていた【室内土足厳禁】という習慣が、無意識の行動として現れてしまったようだ。

すっかりずぶ濡れになったリョウを見て、ユルスナールはぎょっとして、黒い長靴の踵を踏み鳴らしながら足早に寄って来た。

「リョウ、何だ、そのザマは？」

「あ、いや、その」

男の鋭い声に驚いてか、しどろもどろになったリョウに、近づいてきたシーリスが柔らかく声を掛けた。

「おやおや。びしょ濡れじゃないですか。可哀想に。ああ、ほら、早く拭わないと、風邪をひきますよ？」

そう言って、懐からハンカチを取り出すと、濡れそぼった顔を拭い始めた。

そこで漸く、最初の衝撃から立ち直り、人心地ついた気分で顔を上げた。

冷たい水を被った所為か、リョウの唇は青くなっていた。

「洗い場で、その、洗濯に付き合うことになって。そこで運悪く水を被ってしまったようで」

オレグの名前は敢えて出さなかった。そして、グントたちの名前も。別に彼らを責めたい訳ではないからだ。

「おうおう、何だぁ、えらいことになってんなぁ」

ひょっこりユルスナールとシーリスの合間から顔を覗かせたブコバルは、リョウの姿を見て目を丸くした後、直ぐにその口元にニヤニヤといやらしい笑みを刷いた。

「こいつぁ、えらく気前がいいことで」

うっそりと細められた青灰色の瞳の視線の先を辿り、そこに透けて形が顕わになっている自分の胸元を認めて、リョウはぎょっとして咄嗟に腕で前を隠した。
「……ブコバル」
窘めるようにユルスナールがその名前を呼んだ。
そこに、つい今しがたまでは三人と一緒にいた筈のヨルグが大きなタオルを手に戻って来た。
こういうところは流石、有能な補佐官だ。
「リョウ、これを使え」
「あ、ありがとうございます」
差し出された物を受け取ろうとしたのだが、リョウの手が伸びる前に、ユルスナールがそれを掴み、リョウの上に頭からすっぽりと被せた。そして、片方の手で、黒い髪を束ねていた組み紐を解くと、滴り落ちる髪の水分を拭うように存外、優しい手付きで、拭き始めた。
「全く、風邪をひいたらどうするんだ。今は冬場なんだぞ」
その声に合わせるかのように、大きな手の下から、小さなくしゃみが漏れた。
「ほら、言わんこっちゃない。大丈夫か？」
「はい」
「一緒にいたのは誰ですか？」
何故か弾んで聞こえたシーリスの声音に、リョウは小さく肩を跳ね上げた。
ここで、一緒にいた兵士たちの名前を挙げたら、皆、シーリスの地獄の説教部屋へ直行なのだろうか。そもそもの元凶となったオレグなんぞは、ここぞとばかりに絞られるのではなかろうか。
リョウが内心、恐々としていれば、
「それにしても、おまえ、ズボンも濡れてるじゃねぇか、その分じゃぁ、下着までぐっしょりなんじゃねぇの？」
ブコバルがやけに楽しそうに言い放った。

人の不幸を餌にするとはけしからん男だ。
リョウは思わず、ブコバルの長靴を履いた膝の部分を裸足で蹴り上げていた。弁慶の泣き所だ。入る角度によっては相当痛い筈だ。
「イッ！」
小さく顔を顰めた相手に、ほんの少しだけ溜飲が下がった気がした。

「リョウ、こっちへ来い」
粗方水分を拭った後、ユルスナールに、有無を言わさぬ低い声で促された。
そして、大きなタオルを肩に掛けたリョウは、ユルスナールに伴われて団長室に入り、そのまま浴室へと押し込まれる形になった。
「よく温まれ。いいな？」
湿った髪を梳く様に撫で付けられて、リョウは苦笑を滲ませながらも素直に頷いた。
別に態々団長室でなくとも、今、間借りしている一室で十分であったのだが、それは口には出さなかった。
「着替えは用意しておく」
そう言って、ひっそりと微笑んだ冷たいきらいのある面に、リョウは内心、一抹の不安を覚えないでもなかったが、水を浴びてからそれなりに時間が経って身体が冷えてきたのも確かであったので、直ぐに風呂を使うことにした。

【プラミィーシュレ】では、この国にも【シャワー】があることを知った。こちらでは【ドゥーシュ】と呼ばれていた。
その機能は、ここにも備わっていたりするのだろうか。
そう思って、浴室をよく観察してみれば、浴槽の上部に似たような注水石が見つかった。
そして、すっかり冷えてしまった身体を温かな湯を浴びて温めたのだった。

ヨルグが持ってきてくれた大きなタオルで身体を拭く。それをそのまま身体に巻いて、リョウはそっと浴室の扉を開けた。
そこは寝室で、大きな寝台（ベッド）にはユルスナールが腰を下ろしていた。
戸口から顔を覗かせた黒い頭部に気が付いて、ユルスナールが小さく微笑んだ。
「温まったか？」
「はい」
「そうか」
着替えを用意しておくと言ったユルスナールであったが、その周りにはそれらしき物は見受けられなかった。
「あの、ルスラン。着替えは？」
おずおずと聞いてみれば、
「ああ。今に持ってくる」
そう微笑むとユルスナールはリョウに傍に来るように促した。
タオルを巻いただけの姿は、酷く落ち着かなかった。ブコバルが指摘した通り、ズボンの方もかなり濡れていて、結局下着まで行っていたのだ。
リョウは、浴槽の中でざっと着ていたものを洗った。後で、持って帰って干さなくてはならないだろう。
ユルスナールの下に行けば、引き寄せられて、いつの間にか逞しい腕の中にいた。

「もしかしたら、バレてしまったかもしれません」
先程の洗い場での顛末を簡単に話した後、リョウは少し複雑な顔をして微笑んでいた。
対するユルスナールは、少し考えた後、静かに口を開いた。
その口元には薄らと笑みが刷かれていた。
「アナトーリィは、ああ見えて勘がいい奴だから気が付いたやもしれんな。だが、あれは思慮深い男だ。口も固い。まぁ、好奇心は人一倍ある奴だから、後でこっそり確かめに来るかも知れんが、心配

はいらないのではないか」
　確かに、ユルスナールの言う通り、アナトーリィに関してはリョウも心配はしていなかった。
「オレグやグントたちは気付かんだろう」
「……だといいんですけど」
　宥めるように抱いた肩を男の手が優しく撫でた。
「まぁ、気が付かれたら最後、お前は堂々としていればいい」
「無駄に混乱を招くことにはなりませんか？」
「ハハハ、そうなれば暫くは砦内がざわつくだろうな」
　リョウの心配を余所にユルスナールは大して深刻には捉えていないようだった。逆になんだか楽しんでいるような節がある。一時はどうなる事かと思い肝が冷えたのだが、この砦の長がそう言うのであれば、余り気に病む事もないのかもしれないと思い直した。
「それよりもルスラン、こんなところにいていいのですか？」
「ああ、大丈夫だ」
　忙しい筈の男の予定を狂わせてしまったのではないかと案じたのだが、気にするなと微笑まれてしまった。
　すると、隣の執務室の扉が開く音がして、リョウは無意識に肩を揺らした。
　直ぐに寝室の扉が軽くノックされて、
「ルスラン？　お持ちしましたよ」
　シーリスが訪ねてきたことが分かった。
　ユルスナールの了承の声に扉が開く。
「え、ルスラン？」
　タオル一枚巻いただけのリョウは驚いて、身を隠す為に立ち上がろうとしたのだが、肩に回された男の腕に動きを阻まれてしまった。
　リョウは居た堪れなさにそっと目を伏せた。
　だが、中に入って来たシーリスは、寝台に座るリョウの姿を見ても、別段、気に留めた様子は見られなかった。
「はい。こちらでよろしいですかね。解れ掛かっていた所は繕って

おきましたから」
そう言って、いつも通りのにこやかな微笑みと共に差し出されたのは、リョウにとっては、身に覚えのある服だった。
灰色の使用人風のワンピース。【プラミィーシュレ】で娼館の女主イリーナから譲り受けた代物で、ユルスナールに持ち帰って貰ったものだった。
リョウは、虚を突かれたようにシーリスとユルスナール、そして、差し出された灰色の女物の服を見比べた。
「これを？」
ここで着るのか。
間借りしている部屋に戻れば、もう一着分の着替えはあった。
この場所で、明らかに女物だと思われる物を着てもよいのだろうか。
内心の戸惑いを余所に、シーリスは穏やかな微笑みを浮かべながらリョウを促した。
「さぁ、そのままでは風邪をひいてしまいますから。こちらをどうぞ」
「あの、いいんですか？」
「ええ、勿論」
やけにいい笑顔のシーリスに、リョウはそっと確認するようにユルスナールを見たのだが、無言で頷きを返されてしまった。
シーリスの持ってきた服を手に取ったリョウであったが、そこで、ふと重大なことに気が付いた。
もしかしなくとも下着がない。
「どうかしましたか？」
リョウの困惑にいち早く気が付いたのは、やはりシーリスだった。
「ええと、その、結局、下着まで濡れてしまったので……」
それだけで言わんとすることは、相手に伝わったらしかった。
「ああ、それなら心配いりません。ブコバルが何やら言っていまし

たから」

――――――ブコバルが？

突然、飛び出した意外な名前に驚くのも束の間、その台詞に合わせるかのように都合良く寝室の扉が開いて、噂をすればなんとやら、無精髭の精悍な顔付きがのっそりと現れた。

「ほらよ。リョウ」

ブコバルはその手に何故か袋を持っていて、それをリョウに差し出した。何やらやけに楽しそうではある。

そして、簡潔に告げた。

「イリーナからの土産だ」

――――――イリーナさんから？

内心、訝しげに思いながらも、リョウはその袋を受け取ると恐る恐る中を開いた。

そして、中から出てきたものを手にして、固まった。

「……」

「イリーナのヤツがよ。これが無くっちゃぁ始まらねぇだろうって言ってたぜ」

ブコバルがニヤニヤと意味深な目配せをしながら言い放った。

袋の中には、靴下と靴下留め、そして女物の下着が一揃い収まっていた。

「そっちは新品だって言ってたから、大丈夫だぞ」

リョウの手にするものを見て、シーリスも顔を綻ばせた。

「ああ、ちょうど良かったですね」

いやいやいや。何もそこまでする必要はないだろうに。誰かに見せたりする訳ではないのだから。部屋に戻れば、男物だが一応、下着はあるのだ。

それにしても何故、時間差でイリーナは態々このようなものを自分に寄越したのだろうか。しかもブコバルに託すなんて。イリーナは自分のことを少年として疑っていなかった筈ではなかったか。

ぐるぐるとした疑問に答えたのは、ユルスナールだった。
「あれは完璧主義者で、中途半端を嫌うからな」
暫し、手にした物を見詰めたまま動きを止めたリョウの傍らで、ユルスナールまでもが納得するように、土産の理由とその元になったイリーナの気性を分析してみせる始末。
「いや、別に、何もそこまでしなくとも……」
控え目に異議を申し立ててみたのだが、
「何を言う？」
「何を言うんです？」
「何、言ってやがる？」
この服を着るのならば、下着も靴下もそれなりの物を着けなければならない。
妙な拘りというか、持論を持ちだした三人に（今回は、それが何故かぴたりと一致した）、リョウは思い切り顔を引き攣らせたのだった。
三対一では勝ち目など無い。
こうして、リョウは不可解な気持ちを抱えながらも、渋々と言われるままに着替えることとなったのだ。
そして、使用人風の格好をしたまま、引き続きシーリスの講義を受けることになったという訳だった。

居候のかくも不運な一日（後書き）

元々は違う話にするはずだったのですが、本題に入る前にいつものことながら大脱線をしてしまいました。かなり長くなったので、キリのよい所で切ります。

次回に続きます。

道化師のかくも哀しき昼下がり（前書き）

前回の続きです。着替えを終えてから、リョウはシーリスの講義を受けることになりました。

道化師のかくも哀しき昼下がり

「東の神殿とは、どのような場所なのですか？」
この国の歴史を少しずつ紐解いていた時だった。
偶々、王都のことが話題に上り、リョウはふとした疑問を口に乗せていた。
それは【プラミィーシュレ】より帰還以来、ずっと気に掛かっていたことでもあった。
【エリセーエフスカヤ】での一時。あれはほんの掠るような出会いだった。
だが、リョウの脳裏には、その時の出会いが色濃く焼きついていた。鮮明に、まるで昨日の出来事のように思い返すことが出来る。
優しい面立ちをした品のある老人。真っ白な豊かな髪を綺麗に撫で付けて、その眼差しは、柔らかくも威厳に満ちていた。あの老人が語った長の【魂響（タマユラ）】という言葉。そして、自分のことを図らずも【大いなる揺らぎ】の中にあると評した。最後に王都に来る機会があれば、東の神殿を訪ねるとよいと微笑み、極め付けには、『またお会いしましょう』と今後の邂逅を仄めかすような意味深な言葉を残して行った。
表面だけを見るならば、それは単なる社交辞令であったのかもしれない。しかし、それ以上の何かが、そこには潜んでいるような気がしてならなかった。
あの老人は、自身のことを【デェードゥシュカ・イズ・ヴァストーカ】、要するに【東の翁】と称した。そして、人混みに紛れてしまった背中を、あの時は、半ば茫然とした気分で見送るしかなかったのだ。
あの老人の言葉の意味は良く分からなかった。だが、とても大事な事を言われたとリョウは感じた。

その真意を直ぐに確かめることは、残念ながら出来なかった。
もしかしたら、あの言葉はあの老人が自身で納得する為のもので、自分に対して何らかの意味を成すものではなかったのかもしれない。
ただ消化できない塊が、胃の中に重く圧し掛かった気分だった。
そして、この方、あの時の言葉が、ずっと心の奥底に引っかかっていたのだ。

「そうですね」
シーリスは徐に顔を上げると窓の外へ目を向けた。
梢を揺らす木漏れ日にそっとその菫色の目を細めた。その口元には、何処か自嘲気味な笑みが、浮かんでは消えた。
それから再び、ゆっくりと首を戻すと静かに口を開いた。
「この国に根付いている信仰については、お話ししましたよね？」
「はい」
それは先だっての講義の話だった。

この国では、自然には様々な神が宿ると考えられていた。一神教というわけではなかった。そういう点では祖国（日本）と認識が近いかもしれない。
【炎と竈】を司る神【ズヴァローグ】、【風】を司る神【ストリヴォーグ】、【太陽（ソンツェ）】を司る神【ダジヴォーグ】、【大地】を司る神【モーコシ】、【水】を司る神【ヴァダールグ】、【雷】を司る神【ペールン】、等々、こういった主な神々以外にも他に沢山あるらしい。
【戦】の神【セマルグル】だとか。
この国で挨拶を交わす時の決まり文句として頻繁に耳にする【リュークス】は、大陸のこの地域一体に古くから伝わる【豊穣】を司る神の名前だった。

「東の神殿は、王都（スタリーツァ）の一角にあります。その名が示す通り、王都の

中心、王が住まう居城から見て東に位置しています」
そこまで語るとシーリスは穏やかに微笑んだ。
「リョウは、どのような場所だと思いますか？」
逆に問い返されて、リョウはこれまでの見聞と自分の中にある知識を擦り合わせながら、慎重に口を開いた。
「この国で信仰されている神々を祀っている場所ではないのですか？」
神殿という言葉を耳にした場合、普通に考えるならばそうだろう。
リョウは、カマールの工房で見た神々の意匠が施された絵を思い出していた。
工房の天井と柱が合わさる角の部分、要するに家の隅の部分に、鍛冶職人に縁の深い神々の絵が飾られており、カマールはそこに向かって毎朝祈りを捧げていた。
あのようなものを大々的に規模を大きくしたものではなかろうか。
そう思ったのだが、
「半分正解ですね」
「……半分ですか」
どうやら様子は少し違うらしかった。
「神が祀られている場所というのは合っています」
少しずつ、小出しにされた言葉にリョウは、目を瞬かせた。
「……もしかして、祀られている神が一柱ということなのですか？」
「ええ、そうなんです」
『はいよくできました』とばかりにシーリスが眩しい笑顔を向けた。
「祀られている神は、何だと思いますか？」
継いで出された問いに、リョウは少し考える風に首を傾げた。
王の居城の東にあるということは、王族と縁があるということなのだろう。この国の中心で、王族と密な繋がりを持つ神。そこまで考えて、ふと手元にあるお伽噺の一節を思い出した。
この国【スタルゴラド】を最初に統治した王【フセェミール】は、

【風】を司る神【ストリヴォーグ】の子孫と謳われていたからだ。
「風の神、【ストリヴォーグ】ですか？」
「そうきましたか。ですが、残念ながら違います」
だが、それも違ったようだ。
「この地に古くから存在する神です。謂わば土着信仰の一種ですね」
そう言うと、シーリスは王都と神殿の関係を簡潔に説明し始めた。

それに拠るとこうだ。時系列的にみれば、神殿の方が王都よりも先に存在していたということだった。元々、この場所には、古くから神に対する信仰の厚い一族が暮らしていて、神に祈りを捧げ、その見返りにお告げのような宣託を頂き、それを一種の生業のようなものにしていた。

その神殿（といっても当時はかなり簡素な作りのものだったらしいが）に、遠くから勢力を拡大し、台頭してきたとある一族（要するに後の王族となる一派だ）が訪ねて来て、神の宣託を頂くことになった。後の戦でそれが功を奏し、この周囲一帯を平定するに至った。その一族がこの神殿のある場所を王都として定め、懐にその神殿を抱き込む形になったという訳だ。

そして、後の王族は、感謝の意を込めて、この大陸に数多ある神々の中から、その神殿で祀られていた一柱を、一族の守り神として祀り、大事にしたという話である。

「つまり、民間信仰に根付いた神でもある訳ですね？」
シーリスの説明を聞き終えると、リョウはとある一柱の神を思い描いていた。
「そうですね。この国の民の間でも人気とその知名度は群を抜いているでしょう」
となれば、自然と導き出されるのは、
「【リュークス】ですか？」
この国の人々が、その一生の中で尤も多く口にするであろう神の

名だ。
　リョウの推察をシーリスは目を細めて頷くことで肯定して見せた。
「東の神殿は、【リュークス】を祀っている場所なのです。王族の守り神、この【スタルゴラド】の礎を築くに当たり重要な役割を担った場所と言えるでしょう」
「すると、その神殿に仕えている神官たちは、【リュークス】をのみ神と定めて祈りを捧げている訳ですか？」
　数多もの他の神々の存在は、どのように捉えられているのだろうか。
　そう思って聞いてみれば、シーリスは少し考える風に目を細めた。
「そうですねぇ。【リュークス】のみというよりは、全ての神々の頂点に【リュークス】があると見做していると考える方が妥当かもしれませんね。そもそも、自然を体現する神々に優劣を付けるのは以ての外というのが本当の所なのでしょうが、何分にも王族と結び付き、この国の中に取り込まれた時点で、そこには政治的な色合いが付加されてしまいましたから」
「ということは、この国では政治と信仰が密接に結び付いているのですね？」
　為政者の後ろ盾があってこその神殿。政教分離という訳ではないのかもしれない。
　となると、その権限はやはり神殿よりも王族の方が強かったりするのだろう。
「そうなりますね」
「神殿は独立した組織ではない？」
「ええ」
「そうなると神殿の神官長よりも王族の方が発言権を持つということですよね？」
　中々に鋭い質問に、シーリスの眉根がやや困惑気味に下がった。
　そこには苦笑に似た笑みが浮かんでいた。
「そこは違います。まぁ、あくまでも【建て前上】の話になります

が」

シーリスは、神殿の中で何らかの宣託を受けた場合、それは尊き賜りものとして、王族へ告げられるのだと言った。そういう時は、立場上、神官たちの方が王族の上に位置することになる。それも今は大分形骸化しているようだった。

「神のお告げを聞くというのは、【術師】のように、そういう通常の人よりは突出した、謂わば特殊な能力を持つ人たちなのですか？」

「そうですね。神官になるには、それ相応の【素養】が必要になります」

「その【素養】とは、【術師】の持つものと同じなのですか？」

その問いにシーリスは少しだけ目を伏せた。

「基本的には、そういうものだと聞いてはいます。ですが、そこにどんな違いがあるのかという点については、実際に神官でも術師でもない私には分かりません」

『すみません』とどこか心苦しそうに告げられた言葉に、リョウは、少し踏み込み過ぎたのではなかろうかと思った。

もしかしたら、シーリスにとって、余り触れて欲しくない部分を掠めてしまったのかもしれない。

そう言えば、この砦に最初に滞在した時に、そう、あれは、確か、セレブロが乱入をして来た時の事だ。シーリスの家は、神殿に関わる一族であるというようなことを言ってはいなかっただろうか。

リョウは一旦、そこで質問を変えることにした。

「【東の翁】と呼ばれる方を御存じですか？」

「【デェードゥシュカ・イズ・ヴァストーカ】？」

リョウの口から出た固有名詞らしき言葉をシーリスは繰り返した。

「はい。神殿に関わりのある方のようなのですが」

そして、リョウは【エリセーエフスカヤ】で出会った老人の話を掻い摘んでシーリスにしてみた。

おぼろげながらでもいい、自分の中で渦巻いている謎の何か輪郭を描く為の鍵が出て来ないかと思った。
簡単に話を聞き終えた後、シーリスは少し天井を仰ぎ、緩く頭(かぶり)を振った。
「聞いたことがありませんね。すみません。お役に立てなくて。私の姉や義兄(あに)ならば知っているかもしれませんが」
「そうですか」
緩く吐き出された溜息に、リョウは気にすることはないと微笑んだ。
「シーリスにはお姉さんとお兄さんがいるんですか？」
それから自然と話は、シーリスの兄弟の話題に移った。
「ええ。姉とは血の繋がりがありますが、兄は義理の兄、要するに姉の嫁ぎ先ですね」
そして、どこか昔を懐かしむような優しい目をして、シーリスはリョウに姉のことを話して聞かせた。　年が七つも離れていること。普段は優しいけれども怒らせたら怖いこと。
姉との思い出はシーリスの中では、とても温かいものであるらしかった。
そうして最後は雑談を交えて、和やかな空気の下、講義は終わった。
「それでは、今日はこの辺りまでにしておきましょうか」
「はい。ありがとうございました」
「また、何か疑問点が出てきたら、いつでもどうぞ」
「はい。助かります」
そして、そのまま、広げていた帳面やら本やらをしまおうとした時に、リョウはふと手を止めると、思い切って最後の質問をすることにした。
「あの【魂響(タマユラ)】という言葉を聞いたことはありますか？」
それは、あの老人がリョウの胸元にあったセレブロの印を見て発した言葉だった。

シーリスは少し考える風に顎に手を当てた後、否定の意味合いを込めて小さく微笑んだ。
「いいえ」
「そうですか」
全てが直ぐに明らかになるとは思ってもいなかったが、シーリスならば何か知っていることがあるのではないかと心の内で期待していたのも確かだった。
だが、やはり、そう上手くことが運ぶ訳ではないようだ。気長に考えるしかないのだろう。
もしかしたら、セレブロの方が何か知っているかもしれない。少なくともあの老人は、この印のことを知っている風であったのだから。その内、ここにセレブロがやってくる筈であったので、その時に少し話をしてみようと落ち込んだ気分を上向けたのだった。

それから、そのままシーリスと一緒に昼食を取ることになって、リョウは使用人風の格好をしたまま、食堂に向かう羽目になってしまった。
時刻としては、第一陣が掃けた辺りの頃で、途中、擦れ違う兵士たちがぎょっとして振り返るのだが、隣を優雅に歩くシーリスの手前、面と向かってその理由を誰何する猛者はいなかった。

兵士たちは、ひっそりと顔を見交わせると小声で囁きながら目配せをし、半ば同情とも憐みともつかないような生温い視線をリョウに向けたのだった。
恐らく、彼らはリョウがシーリスの機嫌を損ねでもして、実に副団長らしい効果的なやり方で、その落とし前を付けさせられているとでも思ったようだ。
隣を歩くシーリスはやけに上機嫌である。以前、リョウが女であ

ることを知った際には、シーリス自身、その姿が想像付かなかった訳であるが、いざ、本来の姿を彷彿とさせる格好を目の当たりにすると、随分と感心をしたようだった。そして、いたく気に入ったようだった。

そんな訳で、副団長の背後に見えるいつもより輪を掛けて煌びやかな後光のようなものを前に、兵士たちは余計にリョウが何か碌でもない事をしでかして、シーリスの趣味で男としては屈辱以外の何物でもない女装をさせられているとでも思ったらしかった。

シーリスの後に続いて、半ばその背中に隠れる形で食堂の敷居を潜ったのだが、副団長の傍にいる見慣れない形をした人物の登場に、中にいた兵士たちが一斉に色めき立った。

何故ならば、そこにはこの場所にはいる筈の無い華奢な少女の姿があったからだ。

その時の感覚を何と例えたらよいのだろうか。

ざわりと空間が揺れた気がした。期待と興味に満ちた視線が痛いほどに四方八方から突き刺さる。

だが、直ぐにカウンター越しに響いた料理長ヒルデの大声にざわめきはぴたりと止んだ。

「なんだ、坊主。え？　余興かなんかでもおっぱじめんのか？　けったいな格好してよ」

ヒルデはリョウに気が付くと目を丸くして、その変わり果てた姿をしげしげと見た。

そして、男らしい笑みを口元に刷いた。

「……だが、まぁ、よく似合ってるじゃねぇか」

「……まぁ、そんなところです」

リョウはちらりと横目にシーリスを見遣ると曖昧に微笑んだ。

ヒルデの種明かしに、食堂全体に今度は落胆の波が広がった。

「うがぁー！」

「なんだぁ、吃驚させんなよ！」

「マジ焦ったぁ」
「あー、折角期待したのにぃ～」
「リョウかよ」
「……って、この場所に女がいる訳ねぇだろうが！」
「そりゃそうか」
「儚い夢だったな」
「チクショウ！」
がっくりと項垂れた男たちの野次に、リョウは何とも言えない気分を味わった。
何だか自分が本当は男で、女装をしている気分になってきたから不思議なものだった。バレないことは良かったのだが、ちっとも疑いを持たれないことは、非常に複雑であった。
女物の服を着ても女として見てもらえないとは……。
ここの兵士たちにとって、自分は少年以外の何者でもないのだろう。
リョウは熱々の食事が乗った【タレールカ（トレイ）】を手に暫し、遠い目をしたのだった。
その背中は、事情を知る者が見れば哀愁が漂っているように見えた。

「言いたい放題ですねぇ」
呆れたように食堂の兵士たちを見回したシーリスに、リョウは苦笑気味に返していた。
「気にしませんから。大丈夫ですよ。今更ですし」
本当ならば、こんな格好をさせたシーリスを恨めしく思ってもいいのだろうが、ここまで来れば、もうどうでもよくなっていた。
「仕方ありませんねぇ」
それから、シーリスと共に食卓に着いた。
途中、目があったロッソは、思わず苦笑いを浮かべたリョウに小さく微笑んだ。まるで外野の反応など気にするなとでも言うように。

その向こうには、【ローシュカ（スプーン）】を手にしたまま目を丸くしたヘクターとどこか苦い顔をしたキリルが見えた。その向こうには、ヤルタがいて、目が合った瞬間に視線を勢いよく逸らされてしまった。

ヤルタはその大きな体に似合わず肩を小さく揺らして、口元に手を当てていた。些か顔色が悪いようだ。それは、ヤルタが不幸にもリョウが身に着けている服の来歴と団長室でも顛末を目の当たりにしたからであったのだが、そのことを知る由もないリョウは、ヤルタの挙動不審さに首を傾げるしかなかった。

「でもまぁ、こいつは意外だったな」

リョウの斜交いに腰を下ろしたサラトフが、からかうような笑みを浮かべた。

「似あってるぜ、リョウ。黙ってりゃぁ、女に見える」

太鼓判を押すように白い歯を見せ付けられて、

「……はぁ」

最早、喜ぶべきか悲しむべきか、分からなかった。

だが、サラトフはリョウのそんな態度を、女装をさせられて恥ずかしがっていると勘違いしたようだった。それが余計に『少女らしい』仕草になって見えるというのは、皮肉な話である。

「でも、そんな服どうしたんだ？」

興味津々に口を開いたサラトフに、

「あー、これは、その、色々と事情がありまして……」

リョウは何と言ったものかと曖昧に言葉尻を濁したのだが、

「ルスランが持って帰って来たんですよ」

シーリスが実にいい笑顔で爆弾発言をした。

その余波は驚くほどの速さで、同心円状に食堂内を広がった。

「団長が？　何でまた」

サラトフが素っ頓狂な野太い声を上げる。周りにいた兵士たちも、ぎょっとした顔をして（中には、口に入れたスープを吹き零す者さえいた）、無言のまま、顔を見交わせた。

そして、聞き耳を立てた。
「【プラミィーシュレ】からですよ」
シーリスのその一言で大方の兵士たちは、その背景にある何がしかの事情に、察しが付いたらしかった。そして、個々人が逞しく妄想という名の想像を膨らまし始めた。
「詳しい話はブコバルに聞いてみたらいいでしょう。きっと面白い話を聞かせてくれるでしょうから」
そう言って含み笑いをしたシーリスに、何故か周囲で聞き耳を立てていた若い兵士たちが沸いた。
「あの、シーリス？」
ざわつき始めた食堂内の空気に、リョウは酷く落ち着かない気分だった。
何やら話の流れが変な方向に行ってはいないだろうか。ひょっとしたら随分と曲解されているのではないだろうか。この服には大した曰くなど無いのだが。
視線が合ったシーリスは、茶目っ気たっぷりに片目を瞑って見せた。そして、口元に小さく人差し指を当てて、リョウに口止めを促した。
つまり、全て確信犯であったという訳だ。
「ここは何分にも娯楽の少ない場所ですからね。偶にはこういう刺激が必要なんですよ。でも、嘘は言っていないでしょう？」
そう言ってほくそ笑むシーリスに、リョウはなんとも言えない気分で微笑み返していた。
確かにそうだ。シーリスの言葉は簡潔に事実しか伝えていない。そこに周囲が、妙な想像を乗せて、膨らませているだけなのだ。鍵となる言葉は、恐らく【プラミィーシュレ】と【ブコバル】だ。とすれば自ずと導き出されるのは、色街の話であろう。
リョウは改めて、この砦を裏から支えるシーリスの手腕を垣間見た気がした。そして、オレグではないが、決して敵に回してはいけない人物だと再認識したのだった。

その後、連れだって食堂に現れたブコバルとユルスナールの二人に、中にいた兵士たちが沸いたのは言うまでもない。そして、ブコバルは促されるままに己が武勇伝を語ったのだとかいないとか。

道化師のかくも哀しき昼下がり（後書き）

幕間はこれにて終了です。ここまでお付き合い下さり、ありがとうございました。次回はいよいよ第四章に入ります。

罪と過ちの円環（前書き）

とうとう始めてしまいました。第四章のプロローグ的なお話です。

罪と過ちの円環

――――――――【レス・スヴャシェンニィイ（聖なる森）】に神の御柱が立つ。

一年余りも前に東の神殿にもたらされた御告げが、再び、取り沙汰され始めたのは、この春先のことだった。

一人の男が、高台の上から遥か前方に霞む白亜の城塞を見つめていた。

周囲をぐるりと強固で堅ろうな白い石壁が囲む。その場所を中心として四方八方に網の目のように広がるのは、この国の街や村々を結ぶ街道だ。整備された広い道は、商いの荷を積んだ幌馬車や貴人を乗せた立派な馬車、騎乗した旅人や大きな荷を背中に担いだ商人など、様々な人々が行き交う様子が遠目にも窺えた。

色とりどりの煉瓦と彩色された壁が織りなす精巧な玩具のような街。

だが、あの内部には目も眩むような数多もの人々の暮らしがある。日の出から日没まで、いや、場所によっては昼夜問わず、眠ることのない人々の暮らしがあった。

長く伸びた鈍（にび）色の縮れ毛が風に靡いていた。尖った男の鼻と高い鼻梁から続く下がり気味の眦、そこにある赤みを帯びた茶色の瞳を掠めては、宙に踊った。

男の視線の先には、この国随一の繁栄を誇る王都【スタリーツァ】があった。この大陸にある諸外国の都市と比べても長い歴史を刻む古き都である。中央に聳える尖塔には、王の居城を知らしめす旗が優雅に風に翻っていた。

だが、今、男の目は、その悠然と佇む壮麗な街並みを映していなかった。

男の目裏には、とある双子の姿が焼き付いていた。残像のように立ち上っていた。

まだ年若い、屈託のない笑顔が二つ。

一人は、黒い豊かな縮れ毛を高く結い上げた飴色の肌をした女。瞳は限りなく黒に近い茶色だった。

そして、一人は、浅黒い肌に黒い瞳の男。長く伸ばした癖の無い焦げ茶色の髪は、風が吹くと戯れのようにさらりと揺れた。共に彫の深い、良く似た面立ちだ。

遠い西国の血を引くと言われていた忌み子たち。キルメクとの国境沿いの寒村に、病がちな母親と共にひっそりと暮らしていた。

隣国キルメクでは、双子は縁起が悪いと見做されていた。双子を産んだ母親は、そのうちどちらかを手放し、一族を取り仕切る女の下に預けるのが決まりだった。生まれたのが男と女であった場合は、後継ぎとなる男の方が優先された。共に同性であった場合、よく乳を飲む方を母親の手元に残した。

二人の母親は、この掟に背く形で家を出奔したのだった。そして、知り合いの伝手を頼って、この【スタルゴラド】の片隅に居を移した訳だったが、その場所でも、待ち望んでいたような穏やかな日常が得られた訳ではなかった。

というのも。

この国の西南地域の農村では、黒をその色彩に持つ者は、ある種の禁忌と見做されていたからだ。

黒い瞳を持つ女に誑かされて身を滅ぼした男の話や黒髪の男に騙されて世を儚んだ娘の話が、教訓めいた歌となって古くからこの地方に伝わっていた。

黒は滾るような熱さを秘めた禁忌の色。それをその身に持つ者に

不用意に触れてはならない。触れたら最後、その身を焦がし、やがて全てを焼き尽くされてしまう。

黒は、人を惑わす魔力のような特別な力を体現している。

素朴な人々は、そのような言い伝えを未だに信じていた。

それは、往々にして、この国に比べて格段に開放的な風紀を持つお国柄（キルメク）の人々と交わった際に生まれた、この国（スタルゴラド）の先人たちが得た苦い教訓であった訳だが、両者の関係性を客観的に眺め、そこに生じる文化的、若しくは風習の差異を詳（つまび）らかにする中立者がいない限り、この国では、この国の人々の立場と常識に基づいた、ある意味、一方的な見方からしか、その教訓が語り継がれないものであるからだ。

だが、それは未知のものと交わった際の人間の防衛本能でもあった。そうやってこの国の人々は、先人の失敗から得た貴重な経験を元に己が身を守ってきたのだ。

ちょうど同じ頃。

禁忌を冒して生まれた命に東の神殿に仕える神官たちは、恐れ慄き、と同時に狂喜した。

神殿の奥深く、限られた神官たちの間に口伝で伝わる古の物語には、こうあった。

【黒は全（まった）きを飲み込む力。闇は無限の始まり。そが色を持つは内なる力を宿す。そを神の御許に還せしめよ。言祝ぎに応えむ。――――――リュークス】

それは気の遠くなるような長い年月を経て失われてしまった切れ切れの記憶だった。虫食いだらけの穴開きでも、その伝承は神に仕える者たちとっては、崇高なる意味を持っていた。

祈りには対価、つまり、貢物が必要だ。それが大きければ大きいほど、得られるものも大きかった。

病がちの母親が身罷った頃には、残された二人の子供たちは、もう独り立ちをしてもよい年頃になっていた。そして、母親の弔いを終えてから一月ほど余りの後、親子三人がひっそりと暮らしていた寒村の東屋から、忽然と二人の姿は消えていた。

村の人間に聞いても、元々周囲から距離を置かれていた親子のことを特別に気に掛ける村人は居らず、子供たちの行方は分からなかった。貧しい暮らしに嫌気がさして、新たな職を求めて村を出たのだろうかと思い、街道沿いにある近隣の村々を探してみたが、二人の姿は見つからなかった。

この辺りでは余り見かけない特徴的な色合いを持つ男女だ。街道を行けば、それなりに目撃情報が得られるのではないかと当たりを付けて、あの小さな寒村を起点に街道沿いの村や町をくまなく探し歩いた。

だが、あの双子に関する手掛かりは、何も得られなかった。

そして、とうとう街道の終着地点である王都【スタリーツァ】にまで行き着いてしまったのだ。途中、【プラミィーシュレ】で、あの双子を彷彿とさせるような色合いを持つ少年を見掛けた時は、何らかの手掛かりを得られるかも知れないと心を高鳴らせたが、それも不発に終わってしまった。

二人の消息を尋ねる旅はまだまだ続いていた。傭兵や用心棒のような仕事をしながら、男はこれまで旅を続けてきた。

その合間に、風の噂に王都にある東の神殿で大々的な儀式が行われたことを耳にした。

今から約二年前、ちょうど男がこの旅を始めた頃と時を同じくしていた。

儀式というのは、神殿の通常のお勤めに則り宣託を得る為のものであったという。

どのような宣託が下されたのか。その内容は分からなかった。

東の神殿は、豊穣の神【リュークス】を祀る為のものであることは、この国の人間であれば、誰もが知る所であったが、その内実は多くの謎を秘めていた。神殿は、この国の王族と密接な繋がりがあり、それ故に、その場所は神聖視されていた。

男は神殿や宣託といった事柄には全く興味が無かった。別段、信心深い方でもない。

それなのに、その噂は何故か男の心に引っ掛かった。

男は前方を見つめたまま、緩く瞬きを繰り返した。

軽やかに歌い笑う二人の男女の残像が瞬く間に消えた。

そして、それに代わるようにして男の視線を捉えたのは、王の居城から見て東に位置する高台の上にある白亜の荘厳な建物だった。四隅には特徴的な丸屋根が乗っている。

あれが、東の神殿だ。

男はゆっくりと片手を額に宛がうと、降り注ぐ日の光を遮るように、遠く煌めきを反射する丸屋根を眺めた。

あの場所に、何らかの手掛かりがあるのだろうか。

王都は途轍もなく広い。そして、そこには沢山の人々が暮らしている。それに【スタリーツァ】には国内外を問わず、近隣諸国からも多くの人がやって来た。その中からたった二人の人間を探し出すというのは、恐ろしく骨の折れることに違いない。

だが、男は諦める積りなど更々なかった。それが唯一、あの二人の実の父親として、自分に残された罪への贖いだと考えていた。

この場所で何らかの手掛かりを得られるかもしれない。何故か、そんな気がしていた。

そして、男は、気持ちを新たに一歩、定めし都へと向かって足を踏み出したのだった。

澄み切った蒼穹は天高く、今日も気持ちの良い風がこの大地を吹き抜けている。

それは、冬も半ばのよく晴れたとある日の出来事であった。

罪と過ちの円環（後書き）

補足その１）：ここに登場した男は、第９１話【スタローヴァヤの看板娘】の段で、出てきた人物です。皆さま、覚えていらっしゃいますでしょうか。

補足その２）：ロシア民謡の中には、黒い瞳を持つ女に恋をして破滅をした男の話や、黒髪の男に恋をするなというようなお話が歌われたものがあります。黒は情熱を表す色でもあるようです。恐らく、各地を旅する【ロマ】の人々との交わりを念頭に置いたものなのでしょう。その流れを汲むスペインのフラメンコではありませんが、ああいったラテン系の熱いものに接触した上でのこととでも思って頂ければ。

初回から謎だらけです。見切り発車的な感が否めませんが、上手く話が繋がるように精進したいと思います。次回以降は、またがらりと雰囲気を変えて行ければよいかと考えています。

新しい仲間たち（前書き）

いよいよ本格的に第四章のスタートです。

新しい仲間たち

「それでは、今日はここまでにします」

教壇に立つ講師のその一言に、教室内からは、『ありがとうございました』との唱和がなされた。

すると、それまで静寂の中で止まっていたかに思われた時間が、一斉に動き出したかのように室内に独特なざわめきが広がり始めた。

講師を相手に講義について更に踏み込んだ質問をする生徒、手荷物を手早く纏めて、終了の合図と共にいち早く教室を抜け出した生徒、のんびりと仲間と雑談をする生徒。今後の予定を確かめ合ったり、出された課題に付いて議論を交わし合う生徒たちの姿もある。

中にある顔触れは、皆一様に若かった。歳の頃は十代の後半から、精々行って二十代の前半までであろう。志高く、其々が思い描く来るべき輝かしい未来と目標に向けて夢と希望に満ちていた。

その中に、黒い癖の無い髪を無造作に束ねた人物の姿もあった。明るい茶色系統の頭部が並んだ室内で、その者の黒い頭部も同じようにこの空間に違和感なく溶け込んでいた。

くすんでごわついた些か不格好な御手製の帳面（ノート）を手に、今しがたの講義の中で重要と思われた部分に注意書きをし、それをざっと見返していた所だった。その人物は、少し考えを巡らす風に天を仰いだ後、手にしたこれまた御手製の筆記用具（鉛筆だ）の端で頭を掻いてから、満足そうに小さな笑みをその口元に刷いた。

全体的に見て、周囲に集う生徒たちと比べても、その者は小柄で線が細かった。

その華奢な背中に、後方に集まり始めていた生徒たちから声が掛かった。

「おーい、リョウ。いこーぜ」
その人物は、掛けられた声に振り返ると、穏やかな微笑みを浮かべて頷いた。
そして、手元の帳面（ノート）と筆記具を慣れた手付きで使い古して飴色になった鞄の中にしまい込むと、他の生徒たちと同じように席を立った。
教室を出て直ぐ、先に廊下で待っていた同じような仲間たちに合流した。
「昼飯行くだろ？」
「勿論」
「食堂にすっか」
「ええ～、外に行くのは？」
「却下。面倒」
「そうそう。遠いし時間の無駄だよ」
「ええ～、飽きたじゃん」
「そうか？」
「贅沢者め、罰が当たるぞ」
「あ、今日のお勧めチェックしてくんの忘れた！」
「別にどうでもいいだろ」
「よくないっしょ。それによっては午後から、気合入るかが決まるんだから！」

一人が口を開けば、方々から好き勝手な声がこだまする。その遣り取りは、気の置けない仲間同士の実に年相応で活発、且つ他愛ない事柄だった。そんな軽薄で調子のよい、時には珍問答にも聞こえる会話を耳にするのも、中々に愉快な一時に思えてきた頃合いだった。

先頭を切って歩いていた若者が、歩を進めながら首だけ振り返った。

その視線の先は、仲間内の軽妙な会話に混じることなく、静かに成り行きを見守っていた黒い頭髪の人物を捉えていた。
「リョウはどうする？」
成長期の若者たちの頭の中は、既にこれからの昼食の事で一杯だった。
確認するように意思を問われて、自分よりは確実に一回りは大きい彼らの微笑ましい光景に、幾ばくかの懐かしさのようなものを感じながら、控え目に口を開いた。
「食堂なら、一緒に行くよ」
その言葉に先頭の若者は、満足そうに頷くと片腕を上へと突き上げた。
「おっし、そうと決まれば、メシだ。メシ！」
そして、意気揚々と混み合う廊下を長靴の踵を踏み鳴らしながら、腹を空かせた一団が通り過ぎて行った。

季節は巡り、本格的な冬が、この【スタルゴラド】の地にも訪れていた。暦の上では黒の第一の月の後半に入っていた。
この場所で経験をする二度目の冬だった。

リョウは、今、この国の中心、王都【スタリーツァ】に居た。そこにある【術師養成学校】で、短期間の講義を受けている最中だった。
ユルスナールの好意で、この国の常識をお浚いする為に北の砦に滞在をしたのは、凡そ一月程前の事だ。その時に、主にシーリスとヨルグから国内事情についての講義を受ける傍ら、今後、【術師】としてこの国で暮らしてゆく為の方策について、様々な助言を、ユルスナールを始めとする北の砦の幹部連中に貰ったのだ。
【術師】となる為には、国の認可が必要である。それは【術師】

全般を取り仕切る国の中央機関に登録を認可され、免状を頂くことで承認された。その為には、現在【術師】として生計を立てている人物の推薦状と、もし、その【術師】と師弟関係にあるならば、そこで学んだ分野の一覧を持って、王都にある【術師承認登録機関】に申請書を提出する。そこで分野ごとに一連の試験を受けた後、一定以上の基準に達していると認められれば、登録の認可が下りた。

そして、個人の【印封】――――要するに【術師】一人一人に固有の識別符号や署名のようなものだ――――を正式に登録し、それを認めた（したた）小さな免状（プレートのようなものと考えれば良いだろう）を授与されることによって、晴れてこの国で【術師】として認められる形になっていた。その後、各街や村々にある其々の専門分野に特化した寄り合い（ギルド）に登録するか否かは、各人の自由となっていた。

そして、リョウはシーリスの伝手を頼る形で、術師の養成学校へ通うことになったのだった。

ガルーシャ・マライとの関係は伏せたままの方がよいとのことで、王都で神官の職に付いているシーリスの義兄に推薦人になってもらうという形で話が進んだ。

身元保証人には、シーリスが名乗りを上げた。ガルーシャの旅立ち後、その遺志を引き継いでリョウの後見人のような積りでいたユルスナールは、それに対して余りいい顔をしなかったのだが、ユルスナール自身の王都での立ち位置とその身辺状況を考慮した上で、この一連の申請作業に下手に噛まない方が妥当であると見做され、渋々と身を引いたのだった。

シーリスの義兄は神官職の傍ら、術師の養成学校で臨時に教鞭を取っているそうで、そこに入学をした方が、その後の申請の手続きが円滑に進むだろうとのことだった。

養成学校は、国内外各地から【術師】としての素養のある若者を、貴賤を問わず集め、国が全面的に面倒をみる形で、授業料やら滞在

用の寮費、寮内での食費などが免除されていた。
門戸は、誰にでも広く開かれていた。
単に話を聞くだけであるならば、中々に太っ腹な話に思えるかもしれないが、そこにはのっぴ切らないこの国の事情が隠されていた。
世界的に見て【術師】になるだけの素養を持つ人間は年々減少傾向にあった。そのような衰退とも呼べる傾向の中で、【スタルゴラド】は、国を挙げて能力の発現が認められる人間を囲い込もうという方策に出ていたのだ。勿論、国費による恩恵を受け、【術師】として正式に認められた暁には、この国に帰属する【術師】としての登録を求められる形になっていた。
そのような状況を【鎖に繋がれて、体よく飼い馴らされる】と忌避し眉を顰める者も、往々にして独立心の強い術師連中の中には多々あったが、先の隣国【ノヴグラード】との大きな戦を経て、漸く国内の術師保護に向けて重い腰を上げた国の中央機関の施策を歓迎する風潮があったのも確かだった。

紐付きであるには違いなかったが、授業料やら申請費やら、その他諸々の経費の心配をしなくてよいというのは、リョウとしてはかなり有り難いことだった。独り立ちをする為に無駄な借金をしなくて済むのだ。長い間、お金の掛からない生活をしていた為、この国の金銭感覚に疎い身としては、非常に助かった。
登録後の術師に対する国の管理（という名の締めつけか）がどれ程のものかは、現時点では把握できなかったが、何分にも術師として認められることを一番の念頭に置いていたので、現時点では気に留めないことにした。それに、それはその時になってみないと分からない事であるだろうから。
そういった訳で、リョウは術師になるという確固たる目標を胸に、単身という訳ではなかったが、王都に乗り込んだのだった。
影で色々と骨を折り、根回しをしてくれたシーリスやヨルグ、ユルスナールには、感謝してもしきれないだろう。自分は、本当に恵

まれている。リョウはそう思わずにはいられなかった。訳が分からないまま、こちら側に転げ落ちてしまった時は、この世の終わりのように思えた人生も、これまでの幸運と比べれば、恐らく相殺されてしまうに違いない。一から言語や生活習慣を覚えざるを得なかったこれまでの努力を差し引いても、きっと今の状況はお釣りが付いてくるに違いない。そうまで思えるようになったこの日常を捨てたものではないと思い始めている自分がいた。

そして、この養成所で、自分の実年齢よりも遥かに若い生徒たちに囲まれて過ごすようになってから、【デェシャータク（10日）】は優に経過していた。

この場所への入学の時期は、別段、決まっていないようだった。各人が最初にここの講師と面談をして、その素養の向き不向きを審査する。そして、そこから導き出された個人の傾向とその者が興味を持ち、目指したいと思う方向性を擦り合わせて、ここで開かれている講義を自由に選択するという方式（カリキュラム）になっていた。そして、習熟度に合わせて段階を踏み、ある程度の素養が固められたと判断された暁には、最終試験への道が開かれた。

その為、ここでの学習速度は実に個人により幅があった。入学から短期間で術師への道が開かれる者もいれば、時間を掛けてゆっくりと己が素養を開花させてゆく者もいる。それでも、ここで一通りのことを学べば、ここの講師（皆、術師である）が推薦人となり、最終登録試験への道は、他のやり方（ルート）と比べても格段に円滑（スムーズ）に進むと考えられていた。

一つの講義における生徒の数は、その分野と講義内容により実に様々であった。先程の一般的な薬師関係の授業は、謂わば術師の中でも基礎の分野で、選択者も多く、教室に並ぶ頭数も多かった。室内にすし詰めになることは決してないが、他のより専門に特化した分野の講義よりも賑やかであるに違いなかった。

講義を終えて、食堂に辿りついた一行は、既に出来上がっている配膳の列に並んでいた。

ここでは、この国の中心地、王が住まう都ということもあるのだろうが、目に触れるもの全てが、実に華美で豪華だった。

養成所がある場所は、王の居城である宮殿から直ぐ外側の区画内、宮殿と東の神殿を結ぶ回廊との中間地点に位置していた。それは、講師である術師の本職が宮殿と神殿である場合が多い為、彼らの利便性を考慮した立地でもあった。

ここは、宮殿ではない筈なのだが、内部の装飾はやたらと凝っていた。簡素な石壁しか目にしたことのない田舎者（要するにリョウのことである）にとっては、余りにも煌びやかで実に目が眩みそうだった。

未だに居心地が悪い気がしてならなかったが、それでも初めてこの場所を目にした時の衝撃に比べれば、随分と慣れてきたような気がしている。

ここは、国内外から広く素養のある若者を生徒として集めると謳ってはいるが、ここで実際に授業を受ける生徒たちの多くは、王都の人間か近隣の街の者が大半を占めていた。つまり、北限の村であるスフミのまたその先というようなド田舎から態々やってくるような者は、珍しいのである。

リョウはその色彩と顔立ちのこともあってか、最初の数日は物珍しそうな視線を浴びたが、儀礼的な挨拶から始まり、簡単に言葉を交わしたりして行く内に、周囲の好奇の視線は薄らいでいった。

ここに集まる生徒たちが、何分にも裕福な家庭の者が多く、一様におおらかな性質ということもあるのだろうが、ここには、ごく偶に近隣諸国からも留学生が来るらしく、中にはリョウを見て、そのような類の留学生と見做している者もいるようだった。

銘々が食べたいものの乗った皿を選び、手にした【タレール（トレイ）カ】に乗せて、空いている席に着いた。

北の砦とは違い、ここで提供される料理は実に多様だ。目移りするくらいに沢山の品数が、カウンターの部分に並び、生徒たちはその日の気分に合わせて食べたいものを頼んだ。

贅沢である。

味付けは一様に上品だった。個人的には、北の砦の料理長、ヒルデ特製の少し濃いめの味付けを懐かしく思い出した。

テーブルに着いた仲間たちに倣い、リョウもその端に腰を下ろした。

――――――――【ブラーガ・ザ・リュークス（リュークスの恵みに感謝を）】

小さな御祈りを唱和して、待ちに待った食事が始まった。

リョウは、そっとこの食卓（というにはどうにも華美だが）に着く面々を見渡した。

向かいには、先頭を切ってこの場所へやって来た大柄なヤステル。この中では兄貴分的立ち位置で、個性的な面々の纏め役である。その隣にいるのは、穏やかな気性のリヒター。育ちがいいのか、じつにおっとりとしている。我が道を行く性質（タイプ）だ。その隣を陣取るのは、アルセーニィ。背は高いが全体的に細くひょろりとした印象を受ける。学者肌の勉強家だ。そして、その向かいが、バリース。お喋りで自己主張の強い賑やかな性質だが、我儘という程でもなく、それなりに協調性がある人物だ。その隣はニキータ。寡黙な性質だが、口を開けば意外に辛辣な言葉が次々と飛び出す。無駄が嫌いで、やや潔癖症なところがある。そして、最後にリョウを加えた六人が、大体、顔が会えば挨拶を交わし、一緒に昼食を取る面子（メンバー）だった。中々に皆、個性的である。

北の砦の兵士たちと違って、隣に並んでも然程、圧迫感を受ける

ような体格の良い者はいなかった。
皆、まだまだ成長途中ということもあるのだろうが、やはり基本的に肉体派よりも頭脳派であるからだ。この中で一番体格の良いのはヤステルだが、それでも鍛えられた肉体を誇る屈強な兵士たちの中で揉まれたリョウにしてみれば、まだまだ少年特有の線の細さを残していると思われた。

「そう言えばさ、もうすぐ武芸大会が開かれるだろ。楽しみだよな」
銘々が其々の皿の中身を突いている途中、不意にヤステルが顔を上げた。
「ああ。【チェトヴェールティ・アディン（第四週の一日目）】からだっけ？」
リヒターがのんびりと合槌を打つ。
「そうそう」
「うっわ、楽しみだな」
途端に目を輝かせたバリースに、
「面白いか？　あんなの。暑苦しいだけだろ」
アルセーニィが興味無さそうに呟いた。
「分かってないなぁ。あれぞ男と男の仁義なき熱き闘い。互いの情熱がぶつかり合う血の滾るような瞬間。まさに男の憧れじゃないか！！！」
興奮気味に【ローシュカ（スプーン）】を握った拳を前に突き出して、熱く語り始めたバリースは、そのまま隣に座るニキータの背中を勢いよく叩いた。
「なぁ、ニキータ？」
いきなり叩かれたニキータは、実に嫌そうに顔を顰めた後、ギロリとバリースを睨みつけた。
「喧しい。お前の趣味に俺を巻き込むな」
アルセーニィ同様、全く興味の無いらしいニキータの反応に、バリースはムッとした顔をしたが、直ぐに諦めて、そして狙いを別に

定めた。
「なんだい、アルーシャ（アルセーニィ）もニキータも。この国の男なら絶対見逃しちゃいけないだろうが。この国の兵士たちが頂点を目指すんだぜ。ワクワクするじゃんか。なぁ、ヤステル？」
興奮のままに振り向いたバリースに、ヤステルは宥めるような苦笑を浮かべた。
「まぁな。ここではこの時期一番の催事（イヴェント）だからな。人気もあるし、見物客も多い。俺は楽しみにしてるぜ」
「だろう？」
「毎年、かなり盛り上がるしね」
そして、鷹揚に言葉を継いだリヒターに、
「だろう？」
漸く、この興奮を理解してくれる相手が登場し、バリースは意気揚々と胸を反らした。

リョウは、熱々のスープ・【ボルシュ】を啜りながら、テーブルの話に静かに耳を傾けていた。
随分と白熱しているようだ。若干一名という注釈が付くが。
来週、つまり、黒の第一の月の第四週の一日（いっぴ）から開かれるという武芸大会。

武芸大会と聞いて、リョウはユルスナールたちの話を思い出していた。
自分に関する今後の方針を話し合った時に、何はともあれ、現時点でのその素養の習熟度を知る為に、王都にいるというシーリスの義兄を訪ねた方が良いということで、砦の幹部連中の意見が一致した。そして、その義兄を借りの師として師事する傍ら、術師の養成学校で学び、その後の認可登録申請を行った方が無駄無くていいだろうとのことで、方針が決められた。
具体的な話が次々と出て、いよいよ術師を目指す道筋が現実味を

帯びてきたことに、リョウが改めて気を引き締め、一人、緊張気味に今後の生活に思いを馳せていると、そんな目に見えない未知への不安を素早く感じ取ったシーリスは、案じることはないと穏やかに微笑んだのだった。

王都には近々自分たちも用事があるから、向こうで顔を合わせることになるし、義兄への挨拶がてら、必ず様子を見に行くからそんなに気負うことは無いのだと優しく笑って。

その用事というのが、毎年、この時期に王都で開かれている軍部主催の武芸大会へ出場するということだった。師団長であるユルスナールは元より、ブコバルとあと数名を選抜し、毎年、この時期に第七師団の代表として大会へ参加しているらしい。奇しくも、今年の春、リョウが初めて北の砦を訪れ、そこでユルスナールとブコバルに出会った時、二人は、その王都での武芸大会に出場し、そこからの帰還であったらしかった。偶々、王都での用事が色々と長引いた所為で、帰還の時期が春も半ばにずれ込んだのだという。

ということは、その武芸大会は、もしかしなくともユルスナールたちが参加する大会の話なのだろう。

「今年はどこが優勝すると思う？」

リヒターの問い掛けに、

「去年は第一だっただろう？　第七も惜しかったよな。第五もいい線行ってたし」

やはり、同じ男としては人一倍興味があるのか、ヤステルが嬉々として食いついた。

「今年こそ、第七だね。なんてったてあそこの団長はぴか一だし」

バリースが自信満々に言い放つ。

「個人的には第三を押したいけど、まぁ、無理だろうな」

「確かにね」

すると、それまで、全く興味が無いと言っていたニキータとアルセーニィも話に入って来た。なんだかんだ言いながらも、会話には

加わるらしい。
「あのさ、第一とか第五って、軍部の師団のことだよな？」
そこで、初めてリョウは口を挟んだ。
ユルスナールたちのことならば、気にならない筈がなかったからだ。
ここに来て自発的に会話に参加したリョウに残る五人が一斉に振り向いた。色とりどりの沢山の瞳に晒されて、リョウは無意識に唾を飲み込んだ。
「ああ。そうだ。リョウも興味あるか？」
ヤステルの言葉に静かに頷けば、
「おっし、男ならそうだよな」
バリースが新たな同志獲得に目を輝かせた。
「お前は初めてか？」
隣に座るニキータがつとその目を細めてリョウを見下ろした。
それは、この武芸大会の話を聞くのは初めてかということだろうか。それとも、それを観るのが初めてかということだろうか。
「ああ。話には聞いたことがあったけど、まだ観たことはないな」
どちらとも取れるように答えを返せば、バリースが長々と息を吐きだした。
「マジかぁ。リョウ、それは男として実に勿体ない。損してる。あんなすごいもん見逃すなんて」
バリースの反応にリョウは苦笑を滲ませた。
彼らは、皆、この王都在住か、遠くとも馬車で一日の距離という近隣の街に暮らしている。だから、余計に王都で開かれる祭事（イヴェント）に参加するのは容易で当たり前のようなことなのかもしれないが、この国の辺境に暮らすリョウにしてみれば、それは途方もないことに違いなかった。
「ハハ。これまで王都に来る機会なんて無かったしな」
尤もな理由を述べれば、途端にバリースはしまったという顔をし

た。

自分の発言が、余りにも軽率であったことに思い至ったようだ。

一見、単なる元気（エネルギー）を持て余している賑やかな少年のように見えて、その実、バリースは意外にも、相手の気持ちに敏感で思慮深い所があった。それをリョウは評価していた。

「バリース。本当のことだ。気にすることはない。オレも気にしてないから」

気まずそうな顔をしたバリースに、リョウは心配はいらないと優しく微笑んで見せた。

リョウ自身、田舎者であることを別段、恥じてはいなかった。

この国の北限である森の小屋に暮らしていただけでは知らなかったことが、ここには沢山あった。王都は、この国【スタルゴラド】の中心であり、文化、政治、経済、そして富の中心だ。目にするもの、聞くもの全てが、かつての常識に重なるようで重ならない。それでもこれが、この世界の現実であり、この国の姿だった。

「それよりも、武芸大会のこと、もう少し詳しく教えてくれないか？」

その言葉に俄然、バリースが意気揚々として熱く説明を始めた。

それによると。

武芸大会は、大きく、個人戦と団体戦の二つに分かれる。個人戦は、その名の通り、個人の出場者による組合せ式の勝ち抜き戦で、対戦はくじ引きによって決まるのだとか。

出場資格は特にない。腕に覚えがあれば誰でも良いそうだ。性別も問わないという。傭兵にとっては、軍部の人間に己の技量を訴え（アピール）する絶好の機会でもあった。

この国の軍部には、第一から第十までの師団があり、団体戦は、その各師団の中から五名を選抜し、こちらも組合せ式の勝ち抜き戦で優劣を競った。最初の対戦は同じようにくじ引きである。対戦形式は一対一だが、両者のうち、先に五番目の大将を負かした方を勝ちとして次の師団との対戦に臨んだ。

武芸大会は別名、御前試合とも呼ばれ、個人、団体、其々の最終戦では、国王、女王を始めとする王族が観覧をする天覧試合になるのだそうだ。

期間は出場者の数によって長くなったりするとのことだが、およそ三日間。国内軍部の錚々たる顔ぶれが一堂に会するということで、試合が行われる宮殿前の大広場では、実に数多くの見物客が押し寄せた。

中でも、貴族の女性たちがお目当ての兵士の雄姿を観る為に供を連れて特別に設えられた観覧席に現れるのだとか。それを遠目に観て騒ぐ街の男どももいるらしく、中々に賑やかで、街中がお祭り一色のようになるのだとか。

「それは凄い」

説明を聞き終えたリョウは、思わず感嘆の息を漏らした。

「出場する兵士たちは、中々に人気があるんだ？」

「そうだな。皆、揃いも揃って立派な人たちばかりだからな。俺たちにとっては純粋な憧れで、女たちにとっちゃあ、目の保養ってのもあるだろうし」

ヤステルがそう言えば、その隣でリヒターも可笑しそうに微笑んだ。

「そうそう。妙齢の娘がいる家は、それこそ未来の婿探しに必死だよ。女の子も滅多に拝む事の出来ない男たちの勇猛な姿に、それこそ釘付け。大会中は黄色い野次が飛んだりもするんだ。恥も外聞も忘れてね」

「野太い野次も多々あるぞ。偶に茶色みたいなのとかも混じってるし」

何を想像したのアルセーニィが嫌そうに眉を顰めた。

「皆、観たことがあるんだな」

「まぁな。親に引っ張られて仕方なくという場合もある」

隣のニキータから漏れた呟きに、やはり街全体を上げての一大行事（イヴェント）

事であることを理解したのだった。
「リョウ、お前も見に行くだろ？」
――――――なんなら俺たちと一緒に行くか？
ヤステルとリヒター、そしてバリースは、今年一緒に見物をする約束を取り付けているらしかった。
その中に加わるかという申し出に、リョウは曖昧に微笑んだ。
「どうだろう。観たいのは山々だけど。ちょうどその頃知り合いがこっちに来てるみたいだから聞いてみないと。機会があったら、是非、お願いするよ」

武芸大会に参加するユルスナールやブコバルたちとは別口で、シーリスもこちらに出て来るらしいことを昨日、伝令として飛んで来た鷹のイサークに聞いたばかりだった。
北の砦の兵士たちによると、シーリス自身、剣の腕は中々なものであるらしいのだが、これまで大会に出場することは無かったのだとか。それをしきりに勿体ないとぼやいていたのを思い出した。
シーリスがこちらに来るということは、自分のこの養成所での勉強の進み具合の把握や今後の方針のことなどをシーリスの義兄を交えて話し合うことになるだろうから、リョウとしては見学に行くような時間が果たして取れるのかどうかは分からなかった。
ユルスナールとブコバルは観に来いと言ってはいたが、シーリスならば笑顔で、そんなことに関わってる暇はないと言い切りそうだ。恐らく、シーリス次第ということになるだろう。

ということはユルスナールとブコバルも既に王都入りしているかもしれない。
リョウはそっと胸に下げた瑠璃色のペンダントに指を触れた。そして、それと同じ深い青さを湛えた瞳を持つ男の顔を思い浮かべたのだった。

新しい仲間たち（後書き）

登場人物がまたまた増えてきました。第四章は【王都スタリーツァ】編になります。内容もイベントも盛りだくさんの予定です。

マラウドとマレビト（前書き）

タイトルは【客人たち】というところでしょうか。

マラウドとマレビト

食堂と呼ぶには実に上品で煌びやかな空間で食事を終えた後、リョウは再び午後の講義を受ける為に仲間たちと別れて、一人、校舎の中を移動していた。

次の講義は、シーリスの義兄であるレヌート・ザガーシュビリが講師であった。

東の神殿に仕える神官であるレヌートの専門分野は、【祈祷治癒】であった。

【祈祷治癒】とは、神への祈りに特化した呪いの言葉を紡ぎながら、病の元を取り除くという分野だ。治癒には、一般的な薬師と同じように薬草を用いるが、その薬草を効果的に作用させる為に祈りの言葉を紡いだ。神殿の神官が代々手掛ける治療の一種で、この地域の医薬の分野を長い間担ってきた正統派といえる分野だった。

レヌートは壮年の男で、神官という言葉から想像するに違わない、静かで穏やかな気性の持ち主だった。敬虔な信者を思わせる柔らかな面立ちに、奥深い知性を感じさせる瞳は、孔雀石のような深い緑色をしており、穏やかに微笑むと眦には沢山の細かい笑い皺が刻まれた。明るい薄茶色の髪を長く伸ばし、緩く脇の方で一つに束ねている。シーリスの歳の離れた（七つ上だ）姉の夫ということで年齢的には、四十の半ばは回っているとのことだったが、実際には、ずっと若々しく見えた。

こちらに来てから気が付いたことではあったが、術師である講師たちは、髪を長く伸ばしている者が殆どだった。そして、皆、ゆったりとしたカフタンのような襟無しの外套を羽織っていた。

ガルーシャもその髪は短かったが、似たような格好をしていたことを思い出す。恐らく、それがこの場所での一般的な術師の服装であるらしかった。

穏やかな昼下がりの陽射しが差し込む渡り廊下を過ぎて、講師たちが利用する個人の部屋が立ち並ぶ棟に入った。

この場所には、休憩や講義のための準備に利用する部屋の他に、簡易的な居住設備も備えられており、講師たちは寝泊まりが出来るようにもなっていた。

階段を上がり、三階の突き当たりから二番目の部屋がレヌートの一室だった。

目的の場所まで来ると、飴色に艶を放つ重厚な木の扉を軽くノックする。

「レヌート先生、リョウです」

小さく訪いを告げれば、

「どうぞ」

了承を告げる低めのくぐもった声がした。

「失礼します」

扉をそっと開けて中に入れば、普段、定位置になっている筈の大きな机にレヌートの姿はなかった。

ぐるりと見渡せば、壁一面にびっしりと様々な書物が埋まる巨大な本棚がまず目に入る。

「リョウ、こちらです」

声のした方に首を向ければ、その本棚の向こう側にある小振りの応接用のソファにレヌートが腰を下ろしていた。その対面には、もう一人の人物がいた。

客人があったようだ。

リョウは邪魔をしてはいけないと思い、そのままお伺いを立ててから、立ち去ろうかと思ったのだが、ゆっくりと振り向いた客人の顔を見て、途端に口元を緩めた。

「シーリス！」

それは、自分をこの場所に導いてくれた北の砦・副団長の姿だった。

シーリスは、その柔和な面立ちに優しい笑みを浮かべていた。
「リョウ、元気にしていましたか？」
腰掛けていたソファからゆっくりと立ち上がって両手を差し出したシーリスに、リョウも自ら抱擁を交わすべく近寄った。そして、互いに抱き締め合うと両方の頬に掠めるように唇を軽く寄せて、この国のしきたりに基づく一般的な挨拶を交わした。
「こちらでの暮らしはどうです？　不自由な思いなどしていませんか？」
温かい労わりとこちらの身を案じる言葉に、リョウは感謝の気持ちを込めて微笑み返していた。
「問題ありません。皆さん、本当に良くしてくださいます。レヌート先生にはお世話になってばかりで。不自由な所など、とんでもない」
シーリスは充実に輝く黒い瞳と色艶の良い肌を見て、その言葉に嘘偽りがないことを感じ取ったようで、満足そうに微笑んだ。
「そうですか。それを聞いて安心しました」
「シーリスもお元気そうでなによりです」
「おや、最後に会ったのはほんの２．５【デェシャータク】前ではありませんか。その位でそうそう変わったりはしないものですよ？」
おどけたように肩を竦めて見せたシーリスに、リョウもそれもそうかと笑った。
だが、やはり住み慣れた場所から遠く離れたこの都会の真っただ中で、知り合いに出会えるというのは、格別なものだ。普段は余り、気に留めないようにしていたが、一人、新しい環境に身を置くというのは、思いの外、緊張し、心細く思えるものでもあったようだ。
純粋に知っている人物に会えたという嬉しさが、リョウの顔には現れていた。
「シーリス、座ったらどうだ？　リョウも」
――――――――感激の再会は分かったが、いつまでも立ち話もな

んだろう？
　穏やかな低い声に遮られて、シーリスとリョウは顔を見交わせると小さく笑った。
　リョウは、少しはしゃぎ過ぎた自分を恥じるように微笑んでいた。
「それもそうですね」
「おやおや、義兄さん、無粋なことは言わないで下さいよ」
　シーリスは、そう言って水を差した義兄を流し見たが、その目は久し振りの家族との再会に嬉しそうに細められていた。それはシーリス流の御挨拶であったようだ。
　それから、簡単に雑談を交えながら近況などを報告し合あった。

　暫くして、レヌートが鷹揚に切り出した。
「リョウ、済まないが、講義はまた今度、日を改めてということでいいかい？」
　――――少し、こっちと話があってね。
　そう言って対面に隣に座るシーリスを流し見たレヌートに、リョウは小さく頷いた。
「はい。勿論、構いません。お二人とも積るお話もありますでしょうから。ワタシはいつでも結構ですから、レヌート先生の御都合に合わせてもらって構いません」
「ありがとう、済まないね」
　穏やかに微笑んだレヌートの反対側で、シーリスがその特徴的な菫色の瞳を細めていた。
「リョウ、後で、一緒に食事をしましょう。王都見物を兼ねて街を案内しますよ。まだこの辺りは見に行っていないのでしょう？　偶には息抜きが必要ですからね」
　講義の時間を取ってしまったことへの謝罪なのか、そう言って片目を瞑って見せた。
　確かに、ここに来て以来、まだ新しい環境に馴染むのに精一杯で余所見をしている暇も精神的な余裕もなかったから、街の様子はよ

く知らなかった。
どこまでも優しすぎるシーリスの心遣いにリョウは擽ったそうに微笑んだ。
「はい。楽しみにしてます」
そうして、暫くは中庭の所にいるから、もし何かあったら呼び付けてもらって構わないとだけ言い残して、リョウは再びレヌートの部屋を後にしたのだった。

レヌートの部屋を辞したリョウは、そのまま中庭に出た。次の講義までの合間をそこにあるベンチで過ごそうと思っていた。
冬もいよいよ本番となり、風はめっきり冷たさを増していたが、この中庭は、比較的温かかった。周囲を建物に囲まれている為、吹き込むような強い風当たりも無く、穏やかな日差しはぽかぽかとして心地よい。昼食を食べた後などは、うとうとと居眠りをしそうになるが、幾ら陽射しが温かくとも、このような所で惰眠を貪ったら風邪をひくことは間違い無しだ。
リョウは、大体、いつも座っている（お気に入りの場所と言うほどでもないが）ベンチに腰を下ろした。今のように突発的に空いた時間を潰したり、自分の中で頭の中を整理したい時や気になるところを直ぐに見直したいと思った時には、よくこの場所を利用していた。

リョウは、鞄の中から帳面を取り出すと、先程の講義を復習する為に中を開いた。
森の小屋で暮らしていた時は、薬草採集はいつも行き当たりばったりで、目に付いたものを教わりながら書き留め、後で自分用に押し花のようにして標本を作って纏めてはいたが、ここではそれらを体系的に整理することが出来たのは実に有益であった。

これまで個々でばらばらであった情報が系統的に纏められ、効用や作用の仕方、そして副作用などの知識も得ることが出来た。その上、ここで薬師が診ることになる一般的な症状や症例も教わることが出来た。また、一般的に国内を流通している薬草の種類やそれらの大まかな売買価格も知ることが出来た。こういう生活に根付いた情報は中々に貴重だった。

帳面を繰りながら、リョウはふと浮かんだ疑問点などをその端に書き留めた。恥も外聞もなく気になるところは全て明らかにし、ここで学ぶ間は、吸収できることは残さずに吸収しておきたいからだ。名立たる講師陣が教鞭を執る養成学校で学んでいるという滅多にない機会を無駄にしたくはないということもあるが、まだまだこの国の一般常識に疎い所のある自分には、同じ講義を受けていても、どこか理解力が不足したり、誤解をしたりする可能性があるからだ。上手く言えないのだが、他の生徒たちと比べても物事の考え方や捉え方が違うのだ。

相違は相違として理解し、受け入れた上で、そこからこちらの理解になるように擦り寄せなくてはならない。かつての常識は役に立つ反面、思わぬ所で壁になったりもした。だから、習得には人一倍の努力と忍耐、そして集中力が必要だった。

「相変わらず熱心ですね」

足元に影が差したかと思うと頭上からしっとりとした落ち着きのある声が降って来た。

顔を上げれば、ここ数日で顔見知りになった人物の柔らかな微笑が目に入った。

「こんにちは、ゲーラさん」

にこやかに挨拶をすれば、

「隣、いいですか？」
その人物は、こちらの返答を聞く前に、ゆったりとした優雅な所作でリョウの隣に腰を下ろした。そして、すらりとした黒い長靴の足を組むとその上に緩く合わせた両手を置いた。
「調子はどうです？　捗っていますか？」
当たり障りのない問い掛けに、リョウは開いていた帳面を閉じると苦笑を浮かべていた。
「順調と胸を張れれば良いのでしょうが、中々難しいですね。一進一退といったところでしょうか」
それが、正直な所だった。
一つ理解し、習得したと思ったら、次にまた直ぐ新たな疑問点や壁にぶち当たるのだ。ここに来て以来ずっとその繰り返しで、手ごたえのようなものを感じる間もない、余りにも知らなければならない分野が広く、そして多岐に渡り、それらを同時に掘り下げなくてはならない為、まるで途方に暮れたような気持ちになることも多々あった。
気分は大海に小さな帆かけ舟で漕ぎ出でたようなものだ。気を引き締めていないと目指すべき終着点（ゴール）を見失ってしまう。いや、恥ずかしい話だが、今の時点ではその終着点すら見えていないのが実情だろう。
小さく肩を竦めたリョウをゲーラは、穏やかな眼差しで見つめていた。
「おやおや、それはかなり謙虚な見方ではありませんか？　君は本当に控え目ですね」
ゲーラはそう言って、小さく喉の奥を鳴らすと艶やかな微笑みを浮かべた。
ゲーラと初めて顔を合わせたのは、ちょうど五日前のことだった。一人、この場所でお浚いをしていた時に、同じように向こうから声を掛けてきたのだ。

余り見かけない顔であったので気になった。たしか、そんなことを言っていたように思う。

ゲーラは男性なのだが、どちらかというと余り男らしさを感じさせない中性的な作りの人だった。体格もこの国の平均的な男性陣と比べると小柄な方に入るだろう。顔立ちも彫は深いが、線の細い方だ。

ゲーラがその身に纏う空気は少し独特で、不思議な色気のようなものが滲み出ているとリョウは感じていた。言葉使いも物腰も非常に柔らかで品がある。その所為かは分からないが、年齢も不詳だった。

言葉を交わしてみた印象としては、自分と同じくらいか、もう少し上かもしれないという感じを受けたのだが、外見だけを見るならば、かなり若い方だろう。まぁ、リョウ自身、向こうからしてみれば、恐らく似たようなもので、余り他人の事を言えたものではないのだが。

早い話が、ゲーラはこれまで自分の周囲にいた男たち（その殆どが屈強な肉体を持つ軍人だ）とは系統が、かなり違ったのだ。

リョウは最初、ゲーラもこの養成所で学んでいる学生の一人なのかと思ったのだが、その予想は割と直ぐに外れることとなった。

というのも、ある時、ゲーラに尋ねられたからだ。

晴れて術師の資格を得た暁には、序でに軍部へ籍を登録する気はないかと。

それは今にして思えば、勧誘のようなものだったのだろう。

独り立ちした後、術師として生計を立てるのも、始めの内は何かと大変だ。その点、軍部直属の術師になれば、衣食住、最低限の生活は保障されることはおろか、賃金もかなり高い水準になるだろうとのことだった。

リョウは、最初、余りことに相手が何の話をしているのか、よく理解出来なった。それぐらい突飛に聞こえたのだ。有閑貴族のような匂いのするゲーラとその対極にあるような印象を受ける（リョウ

にとっては、だ）軍部という言葉が、結び付かなかったということもある。

軍部に籍を置く。それはつまり、この国の騎士団に入隊をすることになるのではないだろうか。

王都で職を探すのであれば、それも一つの手なのかも知れないが、何も軍籍に身を置かなくとも、街の寄り合い（ギルド）に登録をして、そこからより専門分野に特化した職を探す手だってあるのだ。薬草を採集して、それを然るべき場所に卸す形でも商売にはなるだろう。

それに、リョウは術師の肩書を手に入れたら、真っ先に森の小屋に戻ろうと考えていた。ガルーシャの書斎を整理して、自分なりの視点で、もう一度、中にあるものを吟味してみようと目論んでいた。ここで得た知識がどれだけのものになるかはまだ分からないが、少なくとも旅立ちの時よりは幾分ましにはなっているだろう。そうやって新たに得た知識（その上積みは小さくともだ）と視点で眺めた書斎の書籍たちは、どのように自分の目に映るだろうか。また、どんな発見があるだろうか。そうすれば、今後の道筋が何かしら見えてくるのではないかと思ったからだ。【術師】になることは、この国で生活をしてゆく上で、漸く始点（スタートライン）に立ったことを意味するのだ。

【プラミィーシュレ】で目の当たりにした鍛冶職人たちの病に対する有効手段もガルーシャの跡を継いで探して行きたいとも考えていた。ひょっとしたら、もっと根本的な部分で職人たちが毒を浴びることを防ぐ手立てを考えられるかもしれない。まるで夢のような話だが、この国の人たちの枠組みに捕らわれない思考を持つ自分には、何か出来ることがあるかもしれないと思っていた。

それに王都は余りにも都会過ぎた。昔の自分が聞いたら笑い転げそうな理由だが、人里離れた森の片隅に生活の基盤を置き、静かで長閑な時間の流れの中で、ここでの暮らしが漸く身体に馴染んできたリョウにとっては、それを失ってまでして、都会に出てくる意味

などある訳がなかった。気ままでのんびりとした田舎暮らしが、性に合っている。それに今は、自分の身の回りの事で精一杯で、軍に所属するなどとてもじゃないが、考えられなかった。

そういった理由から、ゲーラのお誘いを丁重にお断りした筈だったのだが。

「この間の話は、考えていただけましたか？」

再び、蒸し返された問いに、リョウはどうしたものかと苦笑気味に眉を下げた。

中々、諦めが悪いらしい。それとも自分の断り方が相手には伝わり難かったのだろうか。

この間から、何故かゲーラは、自分を軍部に入らないかと誘うのだ。始めは冗談かと思ったのだが、こうして何かと勧誘のような言葉を仄めかされている内に、向こうはかなり本気らしいことが分かってしまった。

「オレには過ぎたお話で、余りにも恐れ多いことです」

降って湧いたような話は、余りにも現実味が無さ過ぎた。想像が付かなかった。

軍部と術師の関係が未だよく理解出来ていないということもある。ゲーラ本人に尋ねるのは、どうにも躊躇われたので、後で当たりを付けて、誰かに聞こうとずっと思っていたのだ。シーリスがこちらに来たことが分かった今、リョウとしては同じく軍籍に身を置くシーリスに教えを乞おうかとも考えていた所だった。

「またまた。君は大変優秀だと講師陣からも伺っています。滅多にない逸材を我が国の軍部としてもみすみす手放したくはないのですよ。私の目から見ても君は実に惜しい人材だ」

「それは余りにも買い被り過ぎです」

リョウは、少しだけ途方に暮れたような笑みを浮かべると、緩く頭(かぶり)を振った。

何をどう曲解されて伝わっているのかは知らないが、毎日、講義とそこで出された課題に四苦八苦している状態を見れば、自分がゲ

ーラに望まれるような人材とは程遠いことが良く分かる。
それに軍部は、基本的に女人が立ちいるべき場所ではないのではないだろうか。
兵士の中に剣を扱う女性がいることは以前、ユルスナールから聞いてはいたが、その存在はごく稀だという。しかも彼女たちが所属するのは、この国の第二師団、つまり近衛隊でも奥向きの方面で、主に王族の女性たちの身辺警護の為に宮殿に仕えている者が多いのだとか。仕事柄、貴族出身の者が多く、身元もかなりしっかりとしているとのことだった。
養成学校の方でも、一応、入学には性別を問わない為、中には女生徒もいたが、やはりその数はとても少なかった。むさ苦しい（と一蹴するには中の生徒たちは一様に品があったが）若い男たちの中では、女生徒の姿は一輪の可憐な花のように見えた。可笑しな話だが、食堂で長い【ユープカ（スカート）】の裾を軽やかに翻す彼女たちの姿を遠目に見た時には、柄にもなく感動をしたものだ。
右を見ても左を見ても、自分の周囲にいるのは男たちばかりだ。その状況をある種、当たり前のように思ってしまっていることは置いておいて、外見から受ける誤解のままに軍部に入ることだけは到底、無理な話だろうと思っていた。第一、あってはならない事だ。
唯でさえこの国では、身元の不明の異邦人なのだから。
恐らく、ゲーラも他の人たちと同じように自分の事を外見から、少年と勘違いしているのだろう。だから、なんの躊躇いもなく軍部へ勧誘が出来るのだ。
「軍籍に身を置くなど、オレには到底、無理な話です。折角の御好意を無にする形で申し訳ありませんが、お断りいたします」
控え目ながらも、きっぱりと拒絶の言葉を口にした。
そして、それが本心であることを知ら示すように真っ直ぐにゲーラの目を見つめ返した。
淡い灰色の瞳が、日の光を反射してきらりと光った。緩く吹いた風が、その淡い金糸のような細い髪を揺らした。

「ふふふ。私はそういう君の真っ直ぐな所を評価しているのですよ」
否定の言葉を吐いた相手に対し、何故か、ゲーラは満足そうに小さな息を吐き出していた。
「誰が相手でも物怖じしない態度。一見、柔らかく、人当たりが良さそうに見えて、その実、芯の所は実にしっかりと己を保持して揺るがない。知れば知るほど、実に惜しいですね」
そして、男にしては実に艶やかに微笑んだ。それは、周囲の視線を集めるような綺麗な微笑みだった。
それを真正面から見たリョウは、些か居心地が悪そうに身じろいだ。
「ですが、まぁ、気長に行くとしましょうか。幸い、まだ、時間はあるようですし。ここで余り押しても、現時点でこちら側は分が悪そうですからね。ここで君のような人に出会えたのも何かの縁です。私はこう見えて信心深い方でしてね。この運を逃したくないのですよ。思った通り、君は中々に手強い。ですが、それも一興。今度は、少し攻め方を変えてみましょうかね」
そう言うと、何故か楽しそうに口元に手を当てて笑った。

思ってもみなかった相手の反応に、リョウは内心、途方に暮れた。なんという人だろうか。ここまで頑なに断っていても、それがこちらの揺るがない本心だと分かった上で、敢えて揺さぶりを掛けてこようとしているのだ。随分と諦めが悪いというか性質が悪いではないか。普通に言葉を交わして雑談をするには、なんともないのだが、一旦利害関係が絡むとややこしいことこの上ない。
柔らかい仮面の下に覗く策士の顔に、正直ぞっとしないでもなかった。
こうなれば根気よく断り続けるしかないだろう。そうすれば、そのうち見込みがないと諦めてくれるかもしれない。いや、それよりも、実際には、自分には向こうの期待に応えるだけの素養が無いことが判明する方が先だろうか。いずれにせよ、充実している学生生

活に、気持ちの上で暗雲が立ち込めたことには、敢えて気が付かない振りをするしかなかった。
だが、リョウは、この時の自分の考えが実に甘かったことを後日、身を持って思い知らされることになった。

そうこうするうちに、講義の終わりを知らせる鐘の音が聞こえてきた。
「残念。時間切れですね」
ゲーラは、言葉ほど残念には思っていないようで軽やかな声を上げると立ち上がった。
リョウも同じように帳面を手にしたまま、ベンチから立った。
ここでは、講義の終了と開始を知らせる合図として鐘が鳴った。
少し低めの重みのある渋い音が終了の合図で、少し高めの軽やかな音が開始の合図になっていた。合図としては分かりやすい。

そのまま何となくゲーラと肩を並べて、次の講義がある教室へ向かう為に建物の方へ歩く。
入口の手前で、ゲーラは静かに歩みを止めると、にこやかに振り返った。
「それではまた。今度、ゆっくりお茶でもしましょう」
そう言ってリョウの肩を軽く叩くと、養成所の建物が立ち並ぶ方角とは別の方向へ踵を返した。
リョウは咄嗟に曖昧な微笑みを浮かべていた。そして、そうやって遠ざかってゆく男にしては小柄な背中を、些か複雑な気分で見送ったのだった。
普通に話をする分には悪い人ではないのだろうが。さて、どうしたものか。
だが、気を取り直したように顔を正面に戻すと、そこには、同じように分厚い本を手にしたニキータの姿があった。
「やぁ、ニキータ」

声を掛ければ、ニキータは、遠くを透かし見ていた視線を間近に落とし、目を瞬かせたた。
「ああ。リョウか」
そして、そこにいた知り合いの顔に今しがた気が付いたようだった。
「レヌート先生の講義じゃなかったのか？」
中庭にいたリョウをニキータは訝しく思ったようだった。
「ああ。先生の都合が付かなくなって延期になったんだ」
「そうか」
「ニキータも、もう一コマあるんだろう？」
頭一つ分は上にある顔を見上げれば、
「ああ」
淡々とした頷きが、一つ返って来た。
「オレは二階の端だ」
リョウが、次に講義が開かれる教室を告げれば、
「鉱石処理の講義か？」
ニキータもその内容に当たりが付いたようだった。
「ああ」
「あれは…実に奥が深い」
隣から深い溜息のような感想が漏れた。
「そうだな。こっちは付いてくのがやっとだ」
その内容の濃さは、経験をしたものでなければ分からない。
リョウも同意をするように微笑んでいた。
それから、他愛のない雑談を挟みながら歩いて、階段の手前で、ニキータとは別れた。
次の講義へ向けて互いに健闘を称えあう。そして、リョウは改めて気を引き締めると次の講義が開かれる二階の教室へ向かうべく、階段を一つ飛ばしに駆け上がった。

マラウドとマレビト（後書き）

今後、少しずつ”俄か学生生活”の様子などを織り込んでいけたらと思っています。そのうち、北の砦のあの人たちも登場するでしょう。

２０１１／５／６　訂正（ゲーラの台詞の一部分『利がない』→『分が悪い』）

２０１１／６／１７　誤表記修正

イオータの巣窟（前書き）

今回は、術師のお話を少し。

イオータの巣窟

講義を終えてから講師に確認したいことがあったリョウは、他の生徒たちが質問を終えるのを教室の片隅で待っていた。
最後の一人が終わってゆっくりと踵を返した線の細い背中に、廊下で声を掛けた。
「イオータ先生。あの、お聞きしたいことがあるのですが、お時間よろしいですか？」
やや躊躇いがちに切り出せば、老齢の講師は、白いものが多く混じる長く伸びた眉を揺らして振り返った。
そして、声を掛けてきた生徒の顔を視界に入れると、眦を下げて、目の端に数え切れないくらいの沢山の皺を刻んだ。
「おや、君も質問かね？　ほうほうほう、今日はやけに多いの。どこぞ分かりにくい所でもあったじゃろうか」
鷹揚に頷きながらも疎らになった顎髭をつるりと撫でた。
リョウは小さく微笑んだ。
「いえ、分かりにくいところはありませんでした。個人的に少し気になった所がありまして、自分が正しく理解できているかどうかを確認したいのですが……」
用件を端的に切り出せば、
「ふむ。まぁ、よい。君、この後、なんぞ予定はあるかね？」
講師はついとほっそりした鉤鼻の鼻先をリョウに向けた。
「いえ、大丈夫です」
「ならば、ついてらっしゃい。儂はちと疲れたから、研究室でお茶を飲みながらにでもしよう」
そう言って、大儀そうに骨ばって皺の寄った片手を軽く振った講師に、
「はい。お供いたします」

リョウも静かに頷いていた。

そうして案内された場所は、渡り廊下を渡ってすぐの一階の部屋だった。

中は薄暗く、窓には大きな遮光用カーテンが下がっていた。隙間から辛うじて光が差し込むような按配だ。

講師は薄暗がりの中、慣れた足取りですたすたと部屋の中に入っていったのだが、リョウはその入り口付近で足を止めると、その場に立ち竦んでしまった。

というもの、目の前に広がる光景が、余りにも想像を絶するものだったからだ。

ガルーシャの納戸以上に、その場所は色々なものがひしめく巣窟のようだった。

雑然と並んだ棚には、至る所に厚みのある本やら標本と思しき資料やら、一体何に使うのか皆目見当もつかないような木材の切れ端や計測器具などが乱雑に置かれており、天井からは、なにやら模型のような物体が、部屋を横断するように目一杯に垂れ下がっていた。

講師に与えられる部屋は、基本的に同じ作りで、皆、かなり広い筈なのだが、この場所はとても狭く感じられた。その前のレヌートの部屋と比べると雲泥の差だった。

リョウは不意にガルーシャの書斎よりも、まず先に納戸の方を片付けなければならないだろうかと脈絡のないことを思った。この部屋の状態は、あの納戸を彷彿とさせたからである。単純な連想と言ってしまえばそれまでだ。ただ、ガラクタをやたらめったらに詰め込んでいたと思われていたあの納戸も、あれはあれでガルーシャなりに一定の秩序に基づいて分類されていたと聞かされた時は、仰天したものだった。　ガルーシャは何処に何があるかをきちんと把握していたのだ。ひょっとしたら、この部屋も、ここの主による常人には理解し難い一定の法則に則り全てが正しく配置されていて、主から見たら、十分片付いて見えているのかも知れない。

「ほれ、どうした？　お前さんもお出でなさい」
不可解な思考を打ち破るようにして掛けられた実に呑気な声に、リョウは我に返った。
「……あ、はい」
リョウは、背中側に掛けていた鞄を前に持ってくると身体に張り付けるように抱えた。
それを見て、講師が眉を跳ね上げた。
「なぁに、お前さんは細いから心配なかろうて」
あちらこちらから飛び出しているものにうっかり引っ掛けないようにと神妙な顔をしつつ、細心の注意を払いながら中に足を踏み入れた。
そして、漸く辛うじて空いた空間（先程、講師が積み上がっていた書籍類と外套のような上っ張りを除けていた）の長椅子に、勧められるままに腰を下ろした。
おっかなびっくりのリョウの様子を見て、講師のイオータは可笑しそうに歯を見せて笑った。そうするとやけに発達した鋭い犬歯が片側だけ剥き出しになった。
最後に、茶目っ気たっぷりの笑顔で一言。
「我が城、イオータの巣窟へようこそ」
片手を広げて、芝居がかったように恭しく紹介されて、
「お邪魔いたします」
リョウも返すように恐々と肩を竦めたまま小さく頷いたのだった。

「さてさて」
そう言って、お茶の用意を始めたイオータを見て、リョウも手伝うことを申し出たのだが、『まぁ、座っていなさい』と手で制されて、浮き上げかけた腰を再び固い長椅子の上に下ろすことになった。
「最初くらいは、儂が記念に淹れよう。はっはっは、次からは大いに頼むよ」

リョウは小柄な体躯の老人が、長い外套を引き摺りながら、狭い空間で恐ろしく器用にお茶を淹れる様を不思議な面持ちで眺めることになった。

そして、差し出された小振りな【チャーシュカ（カップ）】を恭しく受け取った。

「頂きます」

「はい、どうぞ」

あちらこちらに薄らと積る埃が、視界の隅に入ってはいたが、受け取った小さな【チャーシュカ（カップ）】の中のお茶は至って普通だった。

いや、口を付けてみてびっくり、申し分ないくらいに旨かった。

「……美味しい……」

意外だと言わんばかりに漏れてしまった言葉にイオータは、別段、顔を顰めるでもなく、その逆に嬉しそうに目を細めた。

「そうじゃろう、そうじゃろう。これはとっておきの茶でな。態々【トゥーラ】から取り寄せておるものじゃて」

【トゥーラ】というのは、記憶が正しければ、この国の北東部に位置する町の名前だった。その場所がお茶の産地かどうかは、恥ずかしながら、リョウは分からなかった。

イオータは、そう言って同じように一口啜ると、

「うむ、今日も旨いの」

満足げに眦を細めたのだった。

それから一息ついた所で、漸く本題に入ることとなった。

リョウは、今日の講義の中で確認したい部分を挙げていった。

イオータの専門は術師の観点から見た地質学の分野で、先程の授業は【鉱石処理】に重点を置いたものだった。その基本理念と方法論、そして実践の講義だった。

この世界では、術師により加工をされた【鉱石】が広く日常生活に普及していた。

浴室で水を出したり、井戸の水を汲みあげたりする為の【注水石】や【取水石】、それを温めたりする時に利用する【発熱・保温石】の類、そして、普段から一番、その恩恵を預かっていると言えるものは、何と言っても部屋の明かりである【発光石】だろう。それらは、石の特性を系統的に選り分けた後に術師が専門に加工を施したものだった。

鍛冶職人たちが利用する【キコウ石】も術師が手を掛けたものだった。

リョウが挙げたのは、【鉱石】を精製する際の術師と自然界との関わり方についての理解に関することだった。元となる石の塊、つまり、不純物を多く含んだ原石を術師がその力で精製をする過程とその処理方法のことだ。

原石に手を翳し、内部の核となる成分を探し当て、凝縮させる。それは、石本来が持つ【気】の流れを感じ取り、己が内部の力を同調させることで働きかけるのだという。

石本来が持つ【気】というのは、水や風や光、木々の緑や大地が持つ自然の力と同じで、石は大地の力が凝縮された変容体の一形態だとのことだった。

「儂らもこの石っころと同じじゃ」

イオータは傍らにあった鉱石の一つを手にすると、それを掌の上に乗せた。

「水も光も土も木も、全てが同じ源で繋がっておる。人も、その中のごく小さな一部に過ぎん。儂らが働きかけるのは、自らが再び、その流れの中に還るということじゃ」

人は、この大地に育まれ、内包された存在である。それが、この国の術師たちの間での基本となる捉え方だった。

人は、その一生を終えた後、再び土に還る。それは、世界を違えても変わることのない真理であった。

リョウの脳裏には、この春、あの満開の花畑の中で、散りゆく花

弁と吹きすさぶ風に乗って、再び、大地へと還ったガルーシャの姿が浮かんでいた。そして、残された種は、再び地に根付き、あの泉のほとりで若々しい枝葉を伸ばしている。

全てが巡り巡って、その循環の中に人の一生があるのだ。

術師としての能力というのは、その大いなる流れの中から、ほんの少しだけ自然の力を借りる形で小さな流れを己の中に汲み取り、それを変化させるものであるという。変化には、個々人の資質と想いが強く反映される。使い手によって、それは薬にも毒にも成り得るということだった。

「気を感じるというのは、熱を感じたりするものなんですか？」

水は触れれば、その感触が分かる。冷たい、柔らかい、温かい、固い。

風は目を閉じれば、より感じることができる。優しい風、冷たい風、鋭い風。猛々しい風。

土も光も木々も手で触れたりすれば、その気というものは、なんとなくだが理解出来た。ガルーシャの若木の下で垣間見た精霊たちの戯れを思い出す。

だが、石に関して言えば、その辺りは、どうもよく分からなかった。冷たい、温かい、柔らかい、固い。それは全て触覚からくる認識だ。

石は、とても静かだ。その総体が大地であり、山であるのだろう。

リョウの質問に、イオータは静かに言葉を継いだ。

「感じ方というのは、人其々じゃよ。一概には言えんのう。人によっては、熱のように温かく感じるやもしれんし、逆に川の水の流れのようにひんやりと感じるやもしれん」

「先生は、どういう風に感じるのですか？」

その問いに、イオータは、少し考えるように小首を傾げた。

「そうさなぁ、これは頭で理解するようなものではなし。感覚的な

ものであるからのう。言葉にするのは難しい」
――――お前さんとて、例えば、獣の言葉を解する時に、どうやってとは考えんだろう？　それと同じじゃ。
確かに、言われてみればそうだった。
以前、ユルスナールに『キッシャーの言葉が分かるのか』と尋ねられた時も、そのように聞こえるとしか言いようがなかった。あの感覚はどう考えても言葉にはし難い。
「そうですね」
納得したように緩く息を吐いたリョウに、イオータは掌の中にあった小さな石を摘むとそれをリョウの手の中に乗せた。
「どうれ、お前さんもやってみるがよい」
――――実際に試した方が早いによって。
「今日の課題ですか？」
「そうじゃな」
今日は、課題として生徒一人一人に小さな石が配られていた。その中に潜む成分を探し当て、それを次の講義までに【精製】してくるようにとのことだった。その結果は、次回の講義の時に中を割って確かめてみようというものだった。
リョウの鞄の中にも先程の講義の時に渡された石が入っていた。

「こちらを使っても？」
「ああ、構わんよ。材料はこの中に腐るほどあるからの」
リョウは、イオータに言われた通りに、この場所で石の精製を手掛けてみることにした。
掌に乗る石は、何の変哲もない灰色をした唯の固い塊だ。だが、講師であるイオータの目には、これは然るべき成分を含んだ原石なのだ。
リョウは掌を重ね合わせると、そっと目を閉じた。意識を集中させ、指先の感覚を研ぎ澄ませる。そして、石の中に潜んでいるという【気】の流れを探った。

深く静かに呼吸を合わせた。同調、共鳴、共振。
掌を通じて伝わる映像（イメージ）は、紅。さらさらとした脆さ。
頭の中に浮かんでくる取りとめのない文字と映像を一つに纏めて行く。細い糸を縒り合せて一本の糸を作り出すように。
太陽（ソンツェ）の光。木漏れ日のような小さな光。その黄色い光の中に潜む熱の色。温かい。
手繰り寄せる糸に反応をするように、掌の中にある石が、じんわりと熱を帯びてきたように思えた。

「……ほうほうほう。これは、また珍しい」
小さな呟きに閉じていた目を開けば、合わさった掌の隙間から、微かに赤みを帯びた光が漏れていた。
「……温かい」
それは、まるでその石そのものが生きているかのような温かさだった。
「どれ、もういいじゃろう」
――――貸して御覧なさい。
リョウは、静かに掌を開いた。
そこにあったのは、手渡された時と変わらない灰色をした石の塊だった。
だが、その石は、ほんのりとした熱を帯びていた。
リョウは差し出されたイオータの手に、その石を置いた。
イオータは、慣れた手付きで、棚の上から先が丸い小さな金槌のようなものを取り出した。
「さぁ、御開帳といこうかの」
そう小さく微笑んで、金槌の丸い先端部分を石の表面に当てると、
――――――【アトクリィーチ（開封）】
呪いの言葉を紡ぎ、軽く振り落とした。
その瞬間、石の表面に亀裂が走ったかと思うと、綺麗に二つに割れた。そして、中から出てきたものは、薄い紅色をした小さな楕円

形の石だった。所々に黄色が斑に入っている。
「うまく行ったようじゃの」
イオータは、目を細めてその小さな粒を摘むと、リョウの手の上にそっと乗せた。
「……すごい」
リョウの口からは、思わず感嘆の声が漏れていた。
そこにあったのは、小さくとも結晶化された綺麗な石だった。表面は驚くほど滑らかだ。形も球体を上から少し力を掛けて潰したような楕円形だった。
それは、蝶が蛹から羽化したかのような劇的な変化（へんげ）に思えた。
「【アルマ石】のようじゃな」
イオータは、手のひらに乗るその石を見ながら言った。
「【アルマ石】……」
それは初めて耳にする石の種類だった。
「左様。その色が尤もな証拠じゃ。純度が高ければ高いほど、澄んだ混じり気のない色が出る。お前さんのは、少し、黄色の斑点が出ておるが、形も申し分ない。初めてにしては中々大したもんじゃて」
そう言うと、鋭い犬歯を覗かせて小さく笑った。
「どうだね？　何か感じることはできたかね？」
静かな興奮が冷めやらぬままに、リョウはしっかりと頷いていた。
「はい。言葉には上手く出来ない感覚的なものですが、理解することは出来ました」
ありがとうございましたと深々と頭を下げれば、イオータは相好を崩して、嬉しそうにその目を細めた。
「課題の方は、同じように帰ってからやってみるとよい。さて、次はどんなものが出てくるのか、楽しみじゃの」
「はい」
ふと、そこでリョウは、あることに気が付いた。
「あの、先生は、生徒たちに配った石からどんな鉱石が精製されるのか、ご存じではないのですか？」

原石の選別は、ある程度、なされているのではないかと思ったのだ。

だが、その問いにイオータは長椅子の背凭れにゆったりと身体を預けると、髭が疎らに生えた顎の辺りを手で摩った。

「ハハハ。それはまぁ、半々だのう。これらの石は、大体、どのように変化するかは、想像が付かないことはないが、ここには他にも沢山の成分が入り混じっておる。その中で、どの部分を結晶化させるかによって、出てくる石も違うというものじゃからな。つまり、それを手掛ける術師がどの成分を選び出すかによるんじゃ。勿論、術師との相性もある。お前さんのこの原石とて、違う者の手に掛かれば別の鉱石になったであろうよ」

その答えに、リョウは深く頷いた。

「そうですか。よくわかりました」

「その石は記念に取って置くといい。綺麗な薄い紅色だ。その内、同じような瞳を持つお嬢さんに巡り合うかもしれないからの」

――――――指輪にするには、ちょうど良い大きさだからのう。

イオータはそう言って、からかうようにリョウを流し見た。

要するにあれだ。今後、もし、好いた相手が出来たとして、その女性がこの石と同じ色の瞳を持っていたとしたら、贈り物にはぴったりだと言いたいのだろう。

男が女に正式に求婚をする際には、自分の瞳の色と同じ色の石を指輪にして贈るとは言うが、そこまでに至らないまでも、男が、相手の気を引く為に、逆に相手の瞳の色と同じ石を装飾品として贈りものにするということは多々あった。それはお守りのような意味合いを持つらしい。

唐突に色の付いた話を振られて、それがイオータの勘違いの上に成り立っていることを理解して、リョウとしては曖昧に微笑んで見せるしかなかったのだ。

だが、まぁ、それは別段、気にすることではなかった。

初めての【鉱石処理】の結果は、ハンカチに包んで大事に懐の中に入れた。

後で研いたらもっと艶が増すかもしれない。いずれにせよ記念になることは間違い無しだった。

リョウは、イオータに丁寧に礼を述べると、入った時と同様に慎重に扉までの障害物をかわして、その悪名高き巣窟を後にしたのだった。

思わぬ収穫に、ほくほくと足取りも軽かった。そして、早速、現在間借りしている寮の自室に戻ったら、この感覚を忘れない内に課題の方も済ませてしまおうと考えたのだった。

学生寮の貴人（前書き）

お待たせいたしました。再び、あの人の登場です。

学生寮の貴人

今日一日の講義を終えて、機嫌良く校舎を出たリョウは、出入り口のところでヤステルとリヒターに出くわした。
二人もちょうどこれから寮に戻るところで、帰路を共にすることになった。
「なんか、いいことでもあったのか？」
口数が多い訳ではないが、隣から醸し出される軽やかな空気を感じ取って、ヤステルがからかうように歩調に合わせて揺れる黒い髪を手で弾いた。
「随分と楽しそうだよね」
リヒターからも指摘されて、リョウは小さく微笑むと、先程、イオータの研究室で課題のヒントを貰えたことを二人に話したのだった。
「うっわ、あの地質学者の部屋に行ったのか」
だが、ヤステルとリヒターが食いついたのは、その講義の内容ではなく、リョウがイオータの研究室を訪ねたということだった。
「あの先生は、この養成所の中でもちょっとした名物だものね」
相変わらず人の良さそうな笑みを浮かべて、リヒターがおっとりと口にした。
「ヤステルもリヒターもあの部屋に入ったことがあるのか？」
二人もあの凄まじい現場を目にしたことがあるのだろうか。
そう思って尋ねてみれば、
「いや、話に聞いただけだ」
「僕も」
二人ともあっさりと否定の言葉を吐いていた。
「でも、生徒たちの間じゃ有名な話だよ」
「なんつーか、紙一重ってやつだよな。術師ってのは大体にして変

わり者みたいな目で見られたりするけど、あの先生は中でも飛び抜けてるし」

リョウは、お茶目に笑うイオータの剥き出しになった犬歯を思い出していた。

あの部屋を見なければ、普通に研究熱心な学者だと思っただろう。だが、ガルーシャの納戸を知るリョウにしてみれば、あの惨状も、まぁ納得の行く範囲内のことだった。

何かに打ち込んで突出した才能を持つ人というのは、往々にして、常人には理解し難い拘りをみせたりするものだ。それが普通の人には行き過ぎに見えてしまうことも多々あるだろう。それでも、出されたお茶は普通以上に美味しかったし、臨時講義の内容も実に分かりやすく、リョウにしてみれば有意義な時間だった。

「でも、いい先生だよな。教え方は丁寧で分かりやすいし」

リョウが同意を求めるようにそう言えば、ヤステルとリヒターは、一瞬、虚を突かれた顔をしてから、互いに目配せをし合った。

そして、ヤステルは奇妙な唸り声を上げると空を仰いで、その赤みのある茶色の髪をガシガシと掻き毟った。

「だぁ〜、やっぱ、リョウ、お前、すげーよ」

「へ？」

突然上がった大声に訳が分からないという顔をすれば、その隣でリヒターが苦笑を漏らした。

「イオータ先生の講義は、ここでは難解だってことで有名なんだよ」

そして、ヤステルの方をちらりと横目に見ながら声を潜めた。

「ヤステルは、この夏に講義を選択して、散々な目に遭ったらしいよ」

「……そうなんだ？」

「そう。僕も基本理論の方だけ選択したけど、難しかったなぁ。あの先生、興が乗るとすぐに話が脱線するし。まぁ、それはそれで楽しかったんだけどね。試験は大変だった」

そう言って笑ったリヒターにリョウは曖昧に合槌を打つと、
「オレの場合は、偶々、肌に合ったのかもしれないな」
軽く流すように小さく肩を竦めて見せた。
一口に術師といってもその分野は広く、各人が目指す専門性もその素養の特質によって細かく分化する。得手・不得手というのは、往々にしてあるだろう。リョウとしては、イオータの講義内容の分野は、比較的、すんなりと頭と身体に入ってきたから、そういう捉え方をされているとは思ってもみないことだった。

そんなこんなで、他愛ない雑談を交わしながら、寮への道のりを歩いた。
学生寮は、その名の通り、養成所で学ぶ学生向けに用意された宿舎だった。寮費は勿論、掛からない。部屋は一区画に三人。扉を開けると、其々の独立した個室と、共同の洗面所と風呂があった。台所は自炊ができるように、各階に一か所、共同のものが設置されていた。
リョウが入った区画は、偶々、他の生徒がおらず、一人でその場所を利用していた。
中は、明るい白色系統で統一され、実に綺麗なものだった。学生用ということで、華美な装飾の類はなかったが、全体的に上品に纏められていた。
暫く歩くとその宿舎の外観の石壁が見えてきた。周囲の空間に上手く溶け込んだ重厚な造りだ。寮は四階建てで、ロの字型をしており、採光の為に中庭が広く設けられていた。其々の個室は、全てこの中庭部分に面していた。

玄関を潜れば、途端に特有のざわめきが広がった。
入り口で寮の管理人に挨拶をする。
既に顔見知りになった管理人は、帰宅した顔触れの中に黒い頭髪を認めると、小さく手を拱いて声を潜めた。

「おい、リョウ、さっきから、えらくびしっと決めた男前な兵士があそこに来てるんだが、ありゃぁ、お前の知り合いかなんかか？何でも黒髪の小柄な奴を探してるって言ってよ。最近ここに入った奴だなんて言ってるから、こっちが知る限り、お前しかいねぇとは思ったんだが、何せ相手は中々の強面だからよ。万が一ってこともあるから、お前が来るのを待ってたんだよ」

管理人は、その特徴的なしわがれ声で、リョウの耳元で口早に捲し立てると目線だけで玄関の奥にある談話や休憩用に置かれた椅子とテーブルが並ぶ空間を示した。

そこは、何故か、人だかりのようなものが出来ていた。

ちょうど講義が終わった時間で、学生たちの帰宅が重なる頃合いでもあったが、それにしても直ぐに自室に引っ込む筈の生徒たちが、遠巻きにうろついているように見えた。

どうかしたのだろうか。

リョウは、人垣の向こうにいると思われる人物を確かめようと首を伸ばしたのだが、如何せん、高い身長の学生たちに阻まれて、その姿を捉えることは出来なかった。

「リョウ？　どうした？　部屋に戻らないのか？」

管理人の所で足止めを食っていると先に歩いていたヤステルとリヒターが振り返った。

「ああ。先に行っててくれ」

リョウは取り敢えず、声を張り上げた。

「じゃぁ、晩飯ん時、また声、掛けるからな？」

「ああ。分かった」

「じゃぁ、またね」

「ああ」

そのまま、階段の方へ歩みを進めたヤステルとリヒターに手を小さく振った。

その時、玄関付近の空気が不意にざわりと揺れた気がした。

リョウは、なんだろうかと顔をそちらに向けた。
すると学生たちの人垣がゆっくりと割れる。そして、その向こうから管理人の言う兵士であるという男が、その姿を現した。
若い顔触れの学生たちの合間から覗いたのは、光を鈍く反射して輝く銀色の髪だった。
筋肉質で体格の良い均整のとれた体つきにすらりと伸びた長靴を履いた長い脚が、ゆっくりとこちらに歩みを進める。黒い外套が、男の歩みに合わせて翻った。その下に現れたのは、艶やかな光沢を放つ明るい灰色の詰襟の軍服だった。男が歩く度に、腰に刷いた長剣が小さな音を立てて鳴った。
リョウは、その人垣から割れて出てきた人物の姿に目を奪われていた。
酷薄そうな作り物のような造形が変化を見せる。鋭いきらいのある吊り上がり気味の目が、細められ、その薄い唇が弧を描いた。
リョウは視界一杯に広がる馴染み深い銀色と瑠璃色の対比（コントラスト）に、自然と笑みを零していた。
鼓動が逸るように高鳴り始めていた。周囲にある筈の雑音が消える。全神経が、とある一点に集約されてゆくのが分かった。
男の口元が小さく動いて言葉を紡いだ。音は聞こえなくとも、その唇の動きから自分の名前が呼ばれたことが分かった。
「……ルスラン」
溜息混じりの声は、小さく掠れていた。
心のどこかで、再び、あの男にあいまみえることを期待していた。
日中は、余り考えないようにしていたが、夜、寝台の中で一人眠りに就くときに思い浮かべるのは、胸元にあるペンダントと同じ深い青色だった。優しさを湛えた紺碧の色。そして、記憶の中にある低い艶のある声だ。
この身体に刻まれた形の無い刻印が、失った熱を呼び覚ます。胸の奥が締めつけられるような感覚に無意識に唾を飲み込んだ。

リョウは、吸い寄せられるように静かに男に歩み寄っていた。
「ルスラン」
差し出された腕に自らの体を重ね合わせた。爪先立って、首に回した腕に力を込めると精悍な頬に自分のそれをそっと擦り寄せた。鼻先を馴染み深い香りが掠めた。それをなんだか懐かしく思ってしまったことを心の内で可笑しく思った。
「お久し振りです」
「元気にしていたか？」
大きな手が、頬の輪郭をなぞる様にそっと触れた。
「はい」
小さく微笑めば、
「そうか」
男が微かに口の端を吊り上げた。
多くの言葉は要らなかった。
いや、話したいことは沢山あった筈だった。今度、会った時は、あんな話をしよう、こんな話をしようと色々と考えていたのだ。新しい生活のこと。この場所で出来た新しい友人たちのこと。毎回苦戦している講義のこと。面白く、実に個性的な講師陣のこと。王都の街並みの印象……等々。でも、いざ、目の前で男の顔を見たら、そういった全てのことが直ぐに吹き飛んでしまった。今、純粋に男の顔を見て、その体温を身近に感じられたことが嬉しかった。
それでも急激に高まった気持ちを押し隠して、軽い儀礼的な抱擁を解くと、リョウはそっと後ろを振り返った。
「ハノーさん。御心配をお掛けしました」
カウンターから身を乗り出すようにして顔を覗かせていた管理人に、件の兵士が、自分の知り合いであることを告げれば、人の良い中年の管理人は、その小さな目を見開いて驚いたようだったが、直ぐに相好を崩した。そして、通常の業務に戻るべく、管理人室の中にその体格の良い身体を引っ込めたのだった。

「いつからこちらに？」
「ああ。着いたのは昨日の昼間だ」
あれから、何故か周囲の生徒たちから注目を浴びていることに気が付いたリョウは、ユルスナールを伴って寮の自室へと戻って来ていた。
二階の隅にある台所で、簡単なお茶の用意をしてから自室に戻れば、ユルスナールは外套を脱いで、窓がある方の壁に寄り掛かって、外の景色を眺めていた。
「ルスラン、どうぞ」
お盆の上に並んだ茶器類を机の上に置いて端正な横顔に声を掛ければ、
「ああ、今、そちらに行く」
ユルスナールは穏やかに微笑んだ。
淹れたお茶を手渡せば、ユルスナールはカップに口を付けるとその口元を緩めた。
「ああ、旨い。お前のお茶を飲むのも久し振りだな」
しみじみとそんなことを言った相手をリョウは可笑しそうに横目に見た。
「そんなことを言っても何も出てきませんよ？」
何だか身体の内側がくすぐったくて仕方がなかった。

学生寮に現れたユルスナールは、いつになく引き締まった印象を与えていた。
無造作に掻き上げられていただけの髪は、綺麗に撫で付けられており、軍服の色も光沢を放つ明るい灰色で見慣れないものだった。下に穿くズボンもいつもの黒ではなく、明るい生成り色（ベージュ）だ。上着には沢山の銀色の飾り紐が装飾品として付いていた。襟元には、小さな青い石が徽章として煌めきを放っていた。

玄関口で颯爽と現れた姿を見た時は、息が詰まるかと思った。それくらい立派に見えたのだ。

清々しい立ち姿は、その男が持つ硬質な空気に実に似つかわしかった。

「それが正式な服装なんですか？」

勉強机と対になっている椅子に腰掛けたリョウは、簡素な寝台の上で足を組んだユルスナールをまじまじと見つめていた。

「ああ。今日は朝から、宮殿や軍部の方に挨拶回りをしていたからな。あの中に入る時は、大体、この格好だな」

「そうですか。大変、よくお似合いですよ。さっきは一体、どんな立派な騎士様が現れたかと思いましたもの」

何処か熱の籠った囁きを誤魔化すように、リョウは淹れたお茶に口を付けると、小さく微笑んでいた。

対するユルスナールは、心なしかむず痒そうに顔を顰めた。だが、直ぐに思い直したように顔を上げると、

「リョウ、何故そんなところにいる？」

自分の隣に来るようにと空いた空間を小さく叩いた。

「こっちに来い」

リョウは椅子に腰掛けたまま、面映ゆそうにユルスナールを見た。すごく久し振りという訳ではないのだが、いつもと服装が違うだけで、自分が良く知る筈の男が別人のように見えて仕方がなかった。それが、妙な気恥ずかしさのようなものをリョウの中に生み出していた。

「リョウ？　どうした？」

目の端を若干、赤く染めて、恥じらうように男を見てはその目を伏せる。そのいつになく初々しい態度にユルスナールは可笑しそうに喉の奥を鳴らした。

「何をそんなに恥ずかしがる？」

「……だって」

そう言ったまま、一向に椅子から動こうとしない。

業を煮やしたユルスナールは、腕を伸ばすとその華奢な身体を自分の方へ引き寄せた。そして、軽々と膝の上で横抱きに抱えると骨張った男らしい剣ダコのある手を柔らかな頬へ滑らせた。

「リョウ、よく顔を見せてくれ」

――――――久し振りだからな。

優しく触れる男の指に、リョウは顔をそっと上げた。

すると予想以上に甘さを滲ませた瞳にかち合う。その瑠璃色の双眸の中に、同じように溶けた表情を晒している自分の顔が、みっともなく映り込んでいた。

リョウは、何故か無性に居た堪れない気分になって咄嗟に目を閉じた。すると、ユルスナールが小さく笑ったのが、震える呼気から伝わって来た。

間を置かずして、柔らかな口付けが降って来た。もしかしなくとも、それは相手には自分から口付けを強請ったように見えたらしかった。

リョウは閉じていた目を薄く開いた。高い形の良い鼻と同じように閉じていた瞼から伸びる銀色の長い睫毛が眼前に迫っていた。それを見て、再び目を閉じた。

緩やかに静かに口付けを交わす。換気の為に薄らと開けた窓から、学生たちの賑やかな話声が時折、響いてきた。

口付けは段々と深さを増していった。混じり合う吐息が、狭い室内を満たしてゆく。

内に潜む一抹の淋しさには、ずっと気が付かない振りをしていた。いつの間にか贅沢になってしまった自分を戒めるように、新しい環境に慣れようと必死だった。

「リョウ、寂しくはなかったか？」

口付けの合間に紡がれる睦言に、本心をするりと隠した。大丈夫だと、敢えて微笑んで見せる。それは、自分なりのケジメでもあり、強がりでもあった。

「まだ、そんなに経っていないじゃないですか」
最後に顔を合わせてから、それ程、時が流れた訳ではなかった。
溺れる訳にはいかない。心配を掛ける訳にはいかなかった。
「随分とつれないことを言う」
――――俺は寂しくて仕方がなかったぞ？
そう言って、どこか酷薄そうに笑った男の顔を、胸内に生じた切なさのままに見上げていた。
「そんな顔をするな」
それは一体、どんな顔なのだろうか。
「これでもかなり我慢しているんだ」
何を我慢しているというのだろう。
苦笑を滲ませた男の顔が、視界一面に広がる。リョウは、目の前にある薄い唇へ舌を伸ばすとぺろりとその場所を舐めた。
ユルスナールは、大きく息を吐き出すと、腕の中にある華奢な身体を力一杯抱き締めた。
急激な負荷に体中の骨が軋みを立てた気がした。
頬に触れた胸部から伝わる男の心音が、早鐘を打っていた。
「ルスラン、苦しい…です」
思わず苦情を言えば、
「この天の邪鬼め」
そんな呟きと共に強引で執拗な口付けが、追い掛けてきた。

気が付けば、リョウの身体は寝台の上に縫い留められていた。その上に男の重みが隙間なく圧し掛かる。上着を縁取る様々な飾り紐が、揺れて光を鈍く反射していた。
「ルスラン……駄目」
「何がだ？」
「これ以上は……」
敢えて忘れていた筈の疼きが引き出されてしまう。
小さな囁きに衣擦れの摩擦音が混じった。

「ルスラン……駄目です」
「構わんだろう？　これだけ煽っておいてそんなことを言うな」
「煽ってなんか……いません」
「そうか？　俺はお前に会いたくて仕方なかった。お前のこの甘い肌に触れたくて堪らなかった」
ユルスナールは熱い吐息を吐くと器用に緩めたシャツの胸元を肌蹴させて、鎖骨の下に口付けを落とした。
「そんな……」
それは自分も同じだ。こんなに傍に居て、欲しかった温もりが、今、手の届くところにある。このまま流されてしまいたい。この男を感じたいという思いはリョウの中にも強く湧き上がっていた。
だが、ここで首を縦に振る訳にはいかないのだ。

――――なぜなら。
リョウの予感を裏付けるように、部屋の扉をダンダンと叩く音がして、リョウとユルスナールは寝台の上で折り重なったまま、動きを止めた。
「あ、ヤステルたちだ」
思った通り、晩御飯を一緒に食べようと誘いにやってきたのだ。
「ヤステル？」
ぽつりと漏れた呟きをユルスナールが聞き咎めた。
そうこうするうちに大きな声が室内の方まで響いて聞こえてきた。
「おーい、リョウ、晩飯、行こうぜー！」
「ここで新しく出来た友達です」
身体を起こしたユルスナールの腕の間で同じように上体を起こせば、
「ほう？　男のようだな」
声を聞いたユルスナールの目がすっと細められた。
その反応にリョウが白けた顔をした。
「何を言ってるんですか。ここでもワタシは男扱いですよ？」

――――北の砦と変わりません。
そう言って、くすくすと小さく肩を震わせた。
「晩御飯を一緒に食べようって、いつも誘ってくれるんです」
リョウがそう明かせば、ユルスナールはあからさまに気に食わないという顔をした。
「おーい、リョウ？　居るんだろう？」
再び掛かった声に、リョウも返すように声を張り上げた。
「ああ、ごめん、今、行く！」
「おーう！　待ってるぜ！」
リョウは身体を起こすと、未だ自分の上に乗っているユルスナールを促した。
「ルスラン、退いてください。取り敢えず、待たせる訳にはいかないので」
邪魔が入ったことが気に入らないのか、不機嫌丸出しで眉を顰めたままのユルスナールにリョウはそっと口付けた。
そして、隠していたはずの本心をほんの少しだけ覗かせた。
「続きはまた今度、ね？　ワタシだって寂しかったですよ？」
リョウのその言葉にユルスナールは、一瞬、虚を突かれた顔をした。だがすぐに、嬉しそうに相好を崩した。鋭い眦がいつになく下がっていた。
男というものは実に単純な生き物である。それは、このユルスナールとて例外ではなかった。
「分かった。近いうちに必ずな。その為にはお前の予定を把握しておかないとな」
俄然、張り切って今後の予定へと算段を巡らせ始めた男をリョウはおかしそうに流し見た。

「ルスランは、今どちらに滞在しているんですか？」
肌蹴た胸元を整えながら、リョウは手早く部屋を出る支度をした。
その合間にユルスナールを振り返った。

「ああ、俺は、本家……実家の方にいる。軍の宿舎の方にしようかとも思ったんだが、実家の方がなにかと都合がいいからな」
ユルスナールは、手にした外套を再び羽織りながら答えた。
「じゃあ、今からは、そのご実家に帰るんですね？」
「ああ。近いうちにお前も呼んでやる」
その言葉にリョウはぎょっとした。
「それは、いいですよ。きっとご迷惑をお掛けしますから」
目の前で否定の意味合いを込めて両手を振った。
貴族の邸宅だなんて恐ろし過ぎるだろう。只でさえ、養成所の煌びやかな空間に頭がくらくらするというのに。それに好いた男の実家とは、後ろ暗いところのある女にとっては鬼門以外なにものでもない。
リョウの言葉に、ユルスナールは不服そうな顔をした。
「お前が変に気を回す必要はないが。……まぁ、おいおいな」

そして、リョウはユルスナールを伴いながら寮の自室を出た。
外の廊下には、ヤステルとリヒターだけでなく、バリース、アルセーニィ、ニキータ、要するにいつも一緒に食事をしている五人が勢揃いしていた。
「ごめん、待たせたな」
扉を開けたところで、ヤステルの男らしい笑みにぶつかった。
「いや、大丈夫だ」
「お客が来てたんだ。下まで送ってくるから、先に食堂に行っててくれないか。直ぐに追い付くから」
五人の若者たちは、リョウの後ろから現れた体格のよい男の姿に目を見張った。
「あああああ～！」
バリースがいきなり大声を出した。
「ちょ、バリース、うるせぇ」
ヤステルが慌てて、バリースの口を塞いだ。

「気持ちは分かるけど、それは不味いでしょ」
リヒターも目を丸くしながらも呆れたようにバリースを見た。
「……うっそ」
「……あ」
アルセーニィとニキータは、ぎょっとしたように目を白黒させていた。
誰もが信じられないという顔をしている。
バリースの大声に顔を顰めたリョウは、仲間たちの視線が隣にいるユルスナールに注がれているのに気が付いた。
内心、苦笑い。
確かに、ユルスナールはこの場所では目立った。只でさえ、人の視線を集める男振りだが、今の服装はこの国の軍部の正装で、贔屓めに見ても、はっきり言って文句なしに格好よかった。

リョウの隣にいたユルスナールは、仲間たちの反応に別段、嫌な顔をするでもなく、徐に一歩、前に出た。
「リョウが世話になっていると聞いた。感謝する。ありがとう」
存外、柔らかな声音で、ヤステルたちに話し掛けた。
いち早く反応を返したのはヤステルだった。
「いえ、とんでもありません」
「これはこの通り世間知らずだから、迷惑を掛けるやもしれんが、宜しく頼む。仲良くしてやってくれ」
そう言って、リョウの肩に手を置いた。
リョウは急に保護者のような顔をしたユルスナールを内心くすぐったく思ったが、顔には出さなかった。ユルスナールの好意に口を挟む積もりもなかった。
「もちろんです」
「そうか」
目を細めたユルスナールにやや緊張した面持ちで五人が頷いた。
そして、ユルスナールがリョウの背中を促すように押した。

「じゃあ、オレはこの人を送ってから合流するから」
リョウが間に入るようにして停滞気味の空気の流れを変えた。
「ああ、分かった」
そして、五人とは反対方向に踵を返した二つのちぐはぐな背中に、バリースが声を上げていた。
「あの！」
振り返れば、大柄なヤステルに後ろから羽交い締めにされる形で、身を乗り出しているバリースが見えた。それは、例えるなら、犬が尻尾を振って今にも飛び掛かって来そうな勢いに見えた。
「あの、不躾を承知でお尋ねしますが、軍の第七師団の団長さんですよね？」
掛けられた声にユルスナールは、表情を変えることなく静かに頷いた。
「あの、今年も武芸大会に出場なさるんですよね？」
「ああ」
「俺、応援してますから！」
その言葉に、ユルスナールは男らしい笑みを浮かべた。

二人のやり取りに、リョウは昼間、ヤステルたちが武芸大会の話をして盛り上がっていたことを思い出した。
バリースは感激したように固まっていたのだが、すぐに背を向けたリョウにはその様子はよく分からなかった。

階段を二階から一階に降りながら、ユルスナールが口を開いた。
「あれが、お前の言う新しく出来た友達か？」
何を思い出したのか、小さく笑う。
「はい。皆、不慣れなワタシに気を使ってくれて。優しいいい子たちです」
穏やかに目を細めたリョウにユルスナールが緩く息を吐いた。
「そうか。お前にしてみれば、まぁ、年の離れた弟のようなものか」

リョウの実年齢を知るユルスナールは、リョウが彼らに抱く感情をそう評価した。

勿論、そこにはユルスナール自身の希望的観測も入っていることだろう。

「そうですね」

リョウもユルスナールの妙な嫉妬の矛先が鈍ったことを感じ取って苦笑を漏らしていた。

「楽しくやってるようで、安心した」

「シーリスにも言われました」

「会ったのか？」

「はい。今日の午後に。義兄のレヌート先生を訪ねて来たところでした」

「そうか」

リョウは、それからシーリスに会った昼間のことを掻い摘んで話した。

そう言えば、シーリスもユルスナールと同じ格好をしていたことに今更ながらに思い至った。だが、あの時は思いがけず知り合いに出会えたことが嬉しくて、そこまで頭が回らなかった。勿論、正装はシーリスにも実によく似合っていたが、ユルスナールの時のような衝撃は受けなかった。それは、恋の欲目か知らないが、冷静に考えれば、現金なものである。

それから管理人のいる部屋の脇を軽く会釈して通り、玄関に出た。

「リョウ、明日、また連絡を入れる」

「はい」

玄関から外に出たところで、ユルスナールが足を止めた。

「いい子にしてろよ？　いくら周りは男だらけだからと言って余所見をするな、いいな？」

妙なことを心配するユルスナールをリョウはからりと笑い飛ばした。

「する訳ないですよ、余所見なんて」
そんな暇などあるわけはない。
「そうか？」
からかうように眉を跳ね上げたユルスナールに、リョウは表面上、ムッとしてみせた。
「そんなに信用なりませんか？」
それはそれで業腹だ。
だが、むくれ面も心の中で密かに待ち望んでいた相手を前にそう長く続く訳はなく、すぐに柔らかな笑顔になった。
「なるべく早いうちに続きをしよう。俺の我慢も限界に近いからな」
ユルスナールは、リョウの柔らかな頬に手を滑らせてその感触を楽しむと最後に耳元で名残惜しそうに囁いた。
深い瑠璃色に場違いな熱が揺らいでいた。
それを正面からまともに見てしまったリョウは、内心のむず痒さを堪えるように微笑んでいた。
「はい。楽しみにしていますから」
思いの外、素直な言葉を吐いた相手に満足そうに微笑むと、ユルスナールは軽く頬に触れるだけの口付けを落としてから踵を返した。
リョウは、その逞しい背中が夕暮れ時の温かな橙色を背景に視界から消えるまで、その場所で見送ったのだった。

それから、ゆっくりと身体を反転させると、足取りも軽やかに寮の中へ入り、五人の仲間たちが待つ食堂へと向かった。
あの様子だと、ユルスナールとの関係を根掘り葉掘り聞かれそうだ。
興奮したバリースの顔を思い出し、質問攻めに合う事態を予想して内心たじろいだが、それでも、ユルスナールに出会えたことが、かなり気分を上昇させていたのは間違いなかった。
いつもは煩わしく思われる詮索もあの男の事を話すと思えば心が弾んだ。

思っていた以上に浮かれている自分に内心、苦笑い。
だが、そんなことも今の自分には楽しく思えるのだから、人を好きになるということは、実に不思議な変化を人の心にもたらすものだとしみじみと思った。

そして、食堂に現れたリョウを待っていたのは、異様な程の熱気を憚ることなく剥き出しにした五人の若者たちだった。
その余りの迫力にさすがのリョウもたじたじだった。そして、あっさりと前言撤回したい気分になったのだった。中でもバリースには鼻息荒く詰め寄られて、何故か、隊長と並んで第七師団の双璧との呼び声高いという（リョウはその時初めて耳にしたのだが）ブコバルに会わせる約束まで取り付けさせられてしまう始末。ブコバルは神出鬼没だから、そう都合良く会えるかは分からないと一応釘を刺して置いたが、相手の迫力に負けるように首を縦に振ったリョウに、バリースは俄然張り切っていた。
そして、それからは、いかにあの二人が尊敬に値する凄い兵士であるかを滔々と語るのに付き合わされる羽目になったのだ。
食事を終えたリョウは、やけに疲労困憊していた。主に精神的な面で。
だが、それも終わってみれば楽しい一時でもあった。
この王都（主に少年たちの間）でのユルスナールとブコバルの知名度と人気の高さには、正直、驚いた。ユルスナールはともかく、あんなきらきらとした目でブコバルを語られると反応に困ってしまう。リョウにしてみれば、ブコバルは癖のある、むさ苦しい女好きにしか見えなかったからだ。まぁ、あんな見かけでも、人の心の機敏には聡いし、いざとなれば仕事はきちんとするようだが。前途洋々たる若者にブコバルのような男になれとは、天と地がひっくり返っても言えそうになかった。本人が聞いたら確実に怒りそうだが、それがこれまでの付き合いの中で、リョウがブコバルに対して抱いた感想だった。

まぁ、それはともかく。

その日から、リョウの日常は、急に色が付いたように賑やかになったのは間違いがなかった。

アルセナール　1）

その日、やや緊張した面持ちの人物が、王都の中心である宮殿の辺縁に沿って足早に歩いていた。

黒に近い深緑色の外套の襟を立てたすぐ上には、癖の無い黒髪が馬の尻尾のように歩く速度に合わせて揺れていた。背中には、使い古して飴色になった革の鞄がぴったりと張り付いていた。よく見れば、その表面には細かい傷が沢山付いていて、随分と年季の入ったものであることが分かる。

その人物が歩く度に、石畳の上を焦げ茶色の長靴の底が、音を立てて鳴った。そこから伸びるのは、着古してよく身体に馴染んだ生成り色（ベージュ）のズボンを穿いた脚だった。

風が吹いて、膝上辺りまで丈のある外套の裾をはためかせれば、その者が腰に下げた短剣の鞘と右の太ももに巻いた短剣のベルトがちらりと覗いた。

その日、リョウはこの国の軍部の詰所、通称【アルセナール】と呼ばれている建物に向かっていた。

養成所の講義は午前中で終わりの日だった。

【アルセナール】は、その言葉の元々の意味である【武器庫】という名の通り、かつてこの場所に王宮の兵士たちが使用する武具や武器の類を保管した倉庫があった故事に因んで付けられた呼び名であった。

【アルセナール】は宮殿から見て東の外環部に位置する術師養成所とは、ちょうど真逆の場所に位置していた。

今朝、ユルスナールから伝令に仕立て上げられた隼が飛んできて、

その足に付いていた筒の中を開けてみれば、中には用件の書かれたユルスナール直筆のカードと軍部の兵士たちが身分証明として利用する腕章が入っていた。

どうやら、この腕章を腕に付けて【アルセナール】にいるユルスナールの元に来いということらしかった。門の所で腕章を見せ、所属を告げて（もしかしなくとも、第七師団管轄の『見習いの鷹匠』辺りの振りをしろということだ）、このカードを通行許可証代わりに提示すれば、中に入れてもらえるということだった。

またまた無茶なことを考えたものだ。

忙しい身のユルスナールのことを考えれば、まだ時間的に余裕があって身軽な自分が動いた方が早いということなのだろうが、見知らぬ場所を訪ねる（それが軍部である）というのは、かなり緊張を強いられるに違いなかった。

リョウ自身、昨日の今日でユルスナールに会えることは、純粋に嬉しかった。だが、晴れて男の元に辿り着く迄には、越えなくてはならない関門が幾つもあったのだ。

リョウの外套の左腕、上腕部には第七師団所属を意味する紋章の入った青い腕章が巻かれていた。俄か見習い兵士の真似をする為に普段は身に付けていない短剣も二本装着した。外見だけを見るならば、兵士としては線が細過ぎるのは否めないが、まぁ、及第点というところだろう。

そして、思いの外、長い道のりを歩いて、漸く【アルセナール】に通じる通用門の前に立った。

案の定、門に歩哨として立つ武装した物々しい出で立ちの兵士に行く先を誰何（すいか）された。

「小僧、何の用だ？」

長い槍の先を向けられて発せられた鋭い声にリョウは唾を飲み込んだ。

「ハッ、自分は第七師団に所属する鷹匠見習いであります。この度、

此方に滞在しております我が第七師団・団長にお目通りを願いたく参上つかまつりました。許可証は、ここにございます」

きびきびとしたそれらしい所作で、今朝方ユルスナールから渡されたカードを手渡せば、門番の兵士はその中身を確かめた後、慇懃に敬礼を返した。

「いかにも。これは直筆の呼び出し状だな。通行を許可する」

立場上、重々しく返された言葉に、

「ハッ、恐れ入ります」

リョウも神妙な顔付きで敬礼を返したのだった。

そうして、第一関門はどうにか突破したものの、門の中に入ってから暫くして、リョウは途方に暮れる羽目になってしまった。

目指すべき【アルセナール】の場所が、どの建物なのか分からなくなってしまったのだ。

見習い兵士として中に入った手前、もう一度、門の所に戻って【アルセナール】の所在地を尋ねる訳にもいかなかった。中に入れば分かるかと思ったのだが、塀の内側は皆、同じような石造りの重厚な建物が隙間なく並んでいて、どれがどれだか見分けがつかなかった。

見取り図のようなものや、ましてや看板などがあるわけでもない。人に尋ねようにも、時間帯の所為か、場所柄かは知らないが、人っ子一人、歩いている様子は見受けられなかった。

――――――仕方ない。

これでは、恥をかくのを覚悟の上で、当たりをつけた建物の中に入り、そこにいた人に場所を尋ねるしかないだろう。

そう考えたリョウは、目についた建物の入り口を目指して歩いていたのだが、一体、どこをどうしたものか、気が付いたら、中庭のような庭園らしき場所に迷い込んでしまっていた。

別段、方向音痴という訳ではなかったのだが、不思議な気分になり、内心、途方に暮れた。

恐るべし、王都・スタリーツァ。

やはりこの国を担う中心都市であるが故に、何もかも規模（スケール）が違った。完全にお上りさん状態である。

こうなったら、人が見つかるまで根気良く探すしかないだろう。人でなくとも、ここの地理に詳しい獣でもいいのだ。

だが、長い距離を歩いた所為か（この場所は建物と建物の間が見た目以上に距離があった。あれだ。目指すべき場所は見えるのに中々辿り着かないという視覚の錯覚（マジック）である）、少し疲れたので、ついでに休憩を取ることにした。

折よく目の前には緑豊かな綺麗な景色がある。

リョウは綺麗に手入れの行き届いた庭園の中に足を踏み入れると、一際、大きな木が枝葉を伸ばし木陰を作っている場所まで歩き、その根元に腰を下ろした。

長い距離を歩いた所為か、身体が汗ばんで火照っていた。

冬場といえども、日中は日差しが出ればかなり暖かかった。その分、日が落ちれば、寒暖の差はかなりなものだが。

基本的にこの国は四季を通じて温暖な気候に属していた。精々が霙混じりの雨で、雪とは無縁だ。かつては当たり前であった冬場特有の凍てつくような寒さを懐かしく思わないでもない。

さやさやと気持ちの良い風が吹いていた。火照った頬の熱を冷ましてくれる。

リョウは大木に寄り掛かると上空を見上げた。

潔く伸びた枝には、びっしりと葉が生い茂っていた。そこから入り込む木漏れ日は、折り重なった影の中を夜空の星のようにきらきらと輝いて見えた。

そっと目を閉じる。木の梢が風に揺れる。深く張った根が地中から水を吸い上げ、太い幹を通り、末端の枝葉にまで到達する情景が目裏に浮かんだ。

――――――そういえば。

リョウは不意に、初めてこの王都【スタリーツァ】にやってきた日のことを思い出していた。

以前、【プラミィーシュレ】までの長旅をした時は、途中までセレブロの背に揺られ、残りの行程を徒歩で（途中、親切な老人の荷馬車に乗せてもらったが）辿り着いたわけだが、今回は、同じくセレブロと王都入りしたのだが、その方法は、かなり掟破りのような感じだった。

この場所に来てからというものの、以前の常識からは想像が付かないような途方もないことを幾度となく経験してきたが、今回の王都入りはその最たるものだったと思う。

セレブロと共にいると人知では計り知れない不可思議な現象が起こった。

【プラミィーシュレ】までは旅慣れた男の足で五日だ。王都【スタリーツァ】は、街道沿いにそこからもう三日は優に掛かった。なので普通に考えれば、リョウが暮らす森の小屋から王都までは、どう少なく見積もっても、【デェシャータク】（10日）は掛かる算段だった。

それが、実際に掛かった時間は、ほんの数刻という短い時間で済んでしまったのだった。

出立の準備を終えたリョウがセレブロに伴われてやってきたのは、街道があるスフミ村へと続く方角ではなく、なんと森の中だった。それも、いつも狼たちと薬草採りをするような辺縁ではなく、深い森の深部だった。

鬱蒼と木々が生い茂る深い森をセレブロと共に黙々と歩いた。

セレブロにどこへ行くのかと尋ねても、『付いてくれば分かる』と鷹揚に笑うばかりで、リョウは大いに首を傾げたのである。

段々と奥に進むにつれ、周囲の空気が変わってきたのが肌で感じられた。何というか、神聖で荘厳な冒しがたい清冽な空気が、その

場所には満ちていた。
リョウは身の竦む思いを味わった。と同時に、身体中の神経が研ぎ澄まされ、心地よい緊張感が張り巡らされてゆく。不思議な感覚だった。
『そろそろだな』
ぽつりと呟いたセレブロの声に前を向けば、眼前には驚く程の大きな巨木が聳え立っていた。
太い幹。腕を伸ばした人が十人いてやっと周囲を囲む事が出来そうな程の想像を絶する大きさの巨木が、そこにはあった。
リョウは言葉を失った。惚けたようにその巨木を見上げた。
『ここは、この森の中心だ』
立ち竦んだリョウの隣で、セレブロが白く輝く毛並みから伸びる長い尻尾を揺らしながら、静かに言葉を紡いだ。
『この木は、この大地が生まれてからこの方、変わらずにずっとここにある』
この場所が【太古の森】と呼ばれる理由が、目の前にあった。
神々しいまでの巨木。圧倒的な力強さと生命力に満ち満ちていた。
「これが……」
リョウはそれ以上、言葉が出なかった。
『行くぞ』
――――――どこへ？
セレブロの掛け声に、リョウは内心、首を傾げたのだが、大人しく付いてゆくことにした。
セレブロは幹の周りをゆっくりと歩き、とある場所で足を止めた。
『ここだ』
そこには、大きな【うろ】が口を開けていた。人が二人は優に入ることの出来そうな大きな【うろ】だ。
『リョウ、行くぞ。付いて来い』
気が付けば、セレブロはいつの間にか人の形を取っていて、リョウの手を掴むとしっかりと握りしめだ。

『途中、逸れてはかなわんからな』
そう言って小さく笑うと、リョウを連れて、その大きく開いた【うろ】の中に飛び込んだのだった。
驚く間もなかった。
闇の中に入った瞬間、空間が歪むような何とも言えない気持ち悪さを感じた。目眩がしてきつく目を閉じた。すると、セレブロと繋いでいた手に力が込められた。
『大事ない。じきに着く』
すぐ隣に馴染んだ温かさを感じながら、リョウは真っ暗闇の中、ただ黙々と足を動かし続けた。
『もうよいぞ』
それから、どのくらい時間が経過したのかは分からない。感覚的には長かったように感じられたが、ほんの短い間であったのかもしれない。
掛けられた声にそっと目を開ければ、目の前には森とは全く違う景色が広がっていた。
「え……」
リョウは再び、言葉を失った。
視界一杯に広がる景色は、自分が暮らす森の片隅ではなかった。周囲に木々はあるが、空気が違う。何よりも、生い茂る木々の向こうに白亜の城塞ともいうべき白い石壁の立派な建物が目に入った。四隅の支柱の上には装飾の施された実に特徴的な丸屋根が乗っていた。あのような建物は初めて目にする。
リョウは、ぐるりと周囲を見回した。そして、自分の背後にある周りと比べると一際、大きな木の根元部分に大きな【うろ】があることに気が付いた。
「まさか……」
リョウは、信じられない面持ちで隣に立つセレブロを見上げた。
虹色に輝く瞳は、リョウの予想を肯定するように愉快そうに細められていた。

「あの場所とここが繋がっているの？　あの【うろ】を通じて？」
『左様』
リョウの問いを肯定するようにセレブロが静かに頷いた。
『この大陸には、あの古代樹と通じる古の木が幾つか残っておる。それらは、【うろ】を通じて互いに空間が繋がっておるのだ。これは、我々、【ヴォルグ】に代々伝わる抜け道のようなものだ』
セレブロの口から出たのは、想像を絶する説明だった。最早、理解を超えている。
「……そうだったんだ」
頭の一部が痺れたように、呆けたような声しか出なかった。
『驚いたか？』
「驚いたなんてものじゃないよ。なんて言うか、夢を見ているみたいだ」
リョウは、余りの衝撃に、狐に摘まれたような顔をしていた。
理解が出来た訳ではない。だが、これは自らが体験した事実だった。それをただ頭とは違う感覚的なもので受け入れるしかなかった。
「……ってことは、まさか、ここは、王都【スタリーツァ】だったりするの？」
セレブロに王都に行くことになったと告げた時は、また長旅になることを案じたリョウに、王都までなど造作もないとセレブロは軽く鼻で笑ったのだが、その理由が今、分かった気がした。
半信半疑で、素っ頓狂な声を上げたリョウに、
『左様、あれに見えるは、王都にある神殿だ。ここは、この街の中でも一番古い場所でな。森の古代樹と繋がる古木がある』
瞬間移動ともいうべき、反則業的裏技にリョウは開いた口が塞がらなかった。
「……うわぁ」
それは、また一つ、途轍もない秘密を抱えてしまったのではと思えた瞬間だった。
「でも、そんな抜け道にワタシを連れて良かったの？」

他言する積りなど更々なかったが、自分にそんな大事な秘密を漏らしてしまっても良かったのだろうかと心配をすれば、
『何、普通の人間には無理な話だからな』
セレブロが事も無げに冷たく笑った。
「どういうこと？」
『そなたのように我の加護を持たぬ者は、たとえ、あの【うろ】の中に入ったとて、身体が負荷に耐えられぬわ』
「え？……」
『あの中は、特殊な空間だ。導を持たぬ者には、瞬きの間も耐えられぬだろうて』
「……つまり？」
『早い話が、足を踏み入れたら最後、粉々に砕けるだろうて』
余りの話にリョウは再び絶句したのだった。
そうやって、リョウはかなりの旅程を省いたことになったのだ。

あの時の衝撃は、まだこの身の中に燻る様にして残っていた。
リョウは、そっとセレブロの加護が表れている胸元の紋様を服の上から手でなぞった。
自分も何やら規格外な存在になっている気がした。
いや、そもそも、界を跨いでこちら側に転げ落ちた時点で、すでにこの世界の道理からは外れているのか。
改めて、そんなことを思い、なんだか可笑しくなった。
そんなことを思い出していると、ふと、目の前を小さな淡い光が横切った。
それを目で追う。
よく見渡せば、木の周りを似たような色とりどりの淡い光がゆうらゆうらと漂っていること気が付いた。
それは、ガルーシャの若木のところで目にした精霊たちと同じ光だった。

赤、黄、紫、緑、青、白。ぼんやりと霞む虹の色。まるでセレブロの瞳のようだ。

風と光と土と水と。この木に宿る精霊たちかもしれない。

そっと手を差し出せば、指先に小さな黄色い光が止まった。よく目を凝らせば、赤い斑点のようなものが混じっている。

それは昨日の鉱石、確か【アルマ】石と言ったか、色の出方は石とはあべこべだが（昨日の石は、薄い紅色に黄色の斑点が出ていた）、それを思い起こさせた。

綺麗だ。触れた指先が、ほんのりと温かい。

リョウは再び、そっと目を閉じた。

吹きぬける風が心地良かった。それに合わせて時折、思い出したように、さわさわと梢を揺らす。

とても静かだった。

ここはあの塀の中だというのに。まるで、この場所だけがぽっかりと切り取られてしまったかのようだ。透明な目に見えない壁で隔てられたかのように。

幻想的な光景の中に身を置いている。そんな気分だった。

触発されるようにして思い出すのは、遥か遠い記憶の断片だ。闇の中に光る真夏の蛍。海に潜む夜光虫。小さな小さな淡い光だ。

今は冬だというのに、何故か、思い描いたのは真逆の夏の光景ばかりだった。

この木も、あの木のように相当古いものなのかもしれない。ふとそんなことを思った。

アルセナール　2）

そうして暫く、ぼんやりとしていた時だった。
「ねぇ、あなた、死んでるの？　生きてるの？」
足元で草を踏む音がした。
か細い潜められた高い声に、リョウはゆっくりと閉じていた瞼を上げた。
焦点を合わせるように瞬きを繰り返す。
すると、目の前に、小さな女の子が、腰を屈めてこちらを覗き込むようにしていた。
柔らかな赤みがかった金色の髪を耳の上で二つに結んでいる。大きな白いリボンが場違いのようにその場所で揺れていた。円らな瞳は淡い空色をしていて、抑え切れない好奇に輝いていた。
リョウは、可愛らしい客人にそっと微笑んだ。
「こんにちは」
挨拶をしてみる。
「まぁ！」
視線が合った女の子の瞳が、これでもかというくらいに大きく見開かれた。
「あなた、ひょっとして、【夜の精】なの？　ここに迷い込んでしまったの？」
少女から放たれた思いもよらない言葉に、リョウは小さく笑った。
「迷い込んでしまったのは、本当だけれど、【夜の精】ではないよ」
じっと此方を見ている女の子に合わせるように声を潜めて答えた。
まるで、とっておきの秘密を告げるかのように。
「本当に？　だって、あなたは髪が黒いわ。それに瞳の色も」
「ふふふ。この辺りでは、少し珍しいかもしれないかな。でも、ちゃんとした人間だよ」

そう言って、女の子の頬にそっと手の甲で触れてみた。
「ね？　温かいでしょう？」
温かな体温は人である証拠だ。

【夜の精】――――――こちらに来てから、幾度となくその言葉を耳にした。
シーリスのところで読んだお伽噺には、【夜の精】のお話が幾つかあった。
【夜の精】とは、その名前の通り、【夜を司る精霊】で、【風の王】の娘という設定だった。
その姿は、闇を写したような長い黒髪と夜空の星の煌めきを閉じ込めたような黒い瞳をしている美しい女性ということだった。
この国では、【夜の精】のお話は、老若男女問わず人気があると聞いた。
だが、その内容は悲恋だった。

遠い遙か昔、人がまだ精霊たちと交わりのあった時代の話だ。
自由気ままな【夜の精】は、その日もいつもと同じように気の向くままに夜の帳が降りた優しい闇の世界をたゆたっていた。そして、いつの間にか、精霊たちが暮らす森の境界線を越えて、人が暮らす宮殿の方まで迷い込んでしまったのだ。
そこで、一人の人間の男に出会った。眠れずにまんじりともしない夜に、気を紛らわす為に夜風にあたろうと庭先に出て来た、まだ年若い男だった。
男は初めて目にしたこの世のものとも思えぬ美しい女性に心を奪われた。【夜の精】である女の方もその心根の綺麗な人間の男に惹かれた。
二人が恋に落ちるのに時間は掛からなかった。やがて、二人は種族を越えて愛し合うようになった。

二人が会うのは、いつも真夜中の最初に二人が出会った庭先だった。

しかし、幸せな時間は長くは続かなかった。

宮殿に仕える騎士であった男は、とある事件に巻き込まれた。その時に窮地に陥った男を守る為に【夜の精】である女は、自らの命を犠牲にしたのだ。

猛毒の塗られた矢が女の心臓を貫き、崩れ落ちた女は、愛する男の腕の中で、吹きすさぶ風に煽られながら散り行く砂埃のように跡形もなく消えたのだった。

愛する男の命を救えたことに薄らと満足そうな綺麗な笑みを刷いて。

愛する人を無くした男は、嘆き悲しんだ。だが、男の哀しみを宥めるかのように一陣の優しい風が吹き、男の手の中に小さな黒い石の付いたペンダントを残して行った。

それは、いつも女の胸元にひっそりと光を放っていたものだった。

男はそれを女の形見として肌身離さず身につけ、その後、生涯、妻を娶らずに独身を貫いたのだという。

細々とした違いはあれど、それが大体の話の筋だった。

なんとも悲しい結末だが、種族を超えて惹かれ合った男女の互いを思いやる強い愛情を感じるお話だった。

その影響からか、この国の人々は、黒い髪と黒い瞳を持つ人物を見ると、真っ先に【夜の精】を思い浮かべるらしかった。

偶々なのだろうが、自分としては、そのような類稀な美貌を持つ訳でも、お話にあるような儚い存在でもないので、揶揄されたり比べられたりするのは非常に複雑だった。

「じゃあ、あなたは【夜の精】じゃないのね？」

「そうだよ」

この少女も同じ反応をしたようだ。

目の前で屈んだ幼い少女に、リョウは穏やかに微笑んで見せた。
「なんだ、つまらないわ！　せっかく大発見かと思ったのに」
少女は当たりが外れて、がっかりしたように声を尖らせたが、
「でも初めて見たわ。髪も瞳も黒い人なんて。本当に、お話みたいに綺麗なのね」
次の瞬間には、半ば、夢見心地でうっとりとしたような息を吐いていた。
その変わり身の素早さはともかく、その表情に、この少女はまだ小さくとも、れっきとした女性であることを感じて、リョウは少し可笑しくなった。
「ねぇ、でも、こんなところで何をしているの？」
興味津々というように身を乗り出して来た少女に、リョウは少し気まずそうに微笑んだ。
ちょいちょいと指でもっと傍に来るように促して、近づいてきた小さな耳元に囁いた。
「実はね。迷子になっちゃったみたいなんだ」
自らの失態をとっておきの秘密のように打ち明ければ、
「まあ！　それで、こんなところに？」
少女の目が大げさに見開かれた。
その大きな反応（リアクション）にリョウは苦笑を返した。
「沢山、歩いたら疲れちゃって、ちょうどいいところに気持ちよさそうな木陰があったものだから、ちょっと一休みしていたんだ」
「まあ、そうなの」
本当のことを明かせば、少女は大きな空色の澄んだ目を更に見開いた後、可笑しそうに笑った。
「大きいお兄ちゃんでも迷子になるのね」
コロコロと鈴が鳴るように笑われて、リョウは、些かばつが悪そうに視線を逸らすと頬の辺りを掻いた。
それを見て、少女が勝ち誇ったような得意げな声を上げた。
「ねぇ、お兄ちゃんはどこに行きたかったの？」

ぴょんと勢いよく少女が立ち上がれば、大きな白いリボンの付いた二つに結わえられた髪が同じように跳ねた。
リョウもゆっくりと立ち上がるとズボンと外套の裾に付いた埃を軽く払った。
リョウは少し考えるように首を傾げた。
この幼い少女に行き先を尋ねてもいいだろうか。
まぁ、せっかく見つけた最初の【人】であるし、駄目元で口を開くことにした。
リョウは、腰を屈めると可愛らしい天真爛漫な少女に目線を合わせた。
「【アルセナール】って場所なんだけど、どこにあるか分かるかな？」
「【アルセナール】？　軍の詰所の？」
名前は知っているようだ。
「そうだよ。兵隊さんが沢山いる場所かな」
だが、その場所が分かるだろうか。
少女は少し考える風に指を小さな口元に当てた。そして、思い付いたというように突然大声を上げた。
「あ！　スヴェータなら、知ってるかもしれない」
「スヴェータ？」
「そう。こっち、こっち」
それから、俄然張り切り出した少女に手を引かれて、リョウはぐいぐいと力強く引っ張る小さな身体とそれに合わせてぴょこぴょこと揺れる髪の毛を微笑ましい気分で眺めながら、中庭の中を歩いたのだった。

少女の足取りは軽く、迷いがない。
やがて、綺麗に煉瓦で舗装された細い小道が現れた。
「ねぇ、お嬢さん、今、どこに向かっているの？」
念の為、行き先を尋ねてみた。

「スヴェータがいるところ！」
にこやかに少女が答える。
スヴェータとは人の名前だろうか。
やがて、大きな白い石壁の建物が見えてきた。柔らかなクリーム色で彩色が施されている。
「あ、ほら、あそこよ！」
甲高い声が、辺りに自慢気に響いた。
すると、前方から、何やら血相を変えた人物が走り寄ってきた。
リョウは、幼い少女以外の大人が現れたことに安堵の息を吐いたのだったが、すぐに、それを後悔することになった。

走り寄ってきた人物は、兵士の格好をした女性だった。ズボンを穿き、同じ隊服の詰襟を着込んではいるが、その人物の豊満な肉体は女性特有のなだらかな曲線を綺麗に描いていた。話に聞く女性兵士のようだ。長く伸ばした癖の無い薄茶色の髪を高く結っていた。
その兵士は、小さな少女に手を引かれた見慣れない人物を見て、いきなり抜刀すると、リョウの目の前に剣先を突き付けた。
「貴様、こんなところで何をしている？」
鋭い声音で問われて、リョウは突然のことに硬直した。
ひょっとして、普通の人間が立ち入ってはいけない禁域に入ってしまったのだろうか。
その予想を肯定するように、女性兵士が言葉を継いだ。
「この場所は限られた者以外立ち入りを禁じられている場所だ。貴様のような小僧が、どうやって中に入ったのだ？」
声を荒げる訳ではないが、低く詰問された。それは、その兵士の鋭角（シャープ）な顔立ちとも相まってか、とても迫力があった。
どうやってと言われても、普通に彷徨っていたら何故かあの場所に出てしまったのだ。それは、リョウの方が聞きたいぐらいだった。が、ぼやくのはぐっと堪えた。
「スヴェータ！」

いきなりの展開に手を引いていた少女が目を丸くして、リョウの足元にかじりついていた。
リョウはそれを見て、そっと少女の肩に手を置いた。
「すみません。剣をお納めいただけませんか。オレだけならともかく、このような幼い子供の前ですから」
――――――抵抗はしませんし、ちゃんと理由も話しますから。どうかお願いします。
出来るだけ冷静に相手に告げれば、兵士はリョウの腰に噛り付いている幼い少女に視線を移した。
「エクラータ様、何をなさっているのです。こちらへいらしてください！」
女性兵士はリョウに張りついている少女に離れるように諭した。
どうやら、この幼い少女は、兵士にとっては主筋に当たる身分の高い存在のようだ。
「スヴェータ！　違うの！　このお兄ちゃんは迷子なの！」
そして、どうやら、この女性兵士が、少女の当てにしていた大人であるらしいことがその呼び名から分かった。
ぴたりと剣先をこちらに掲げたまま、少女の言葉を耳にして、その兵士は余計に眦を吊り上げた。
美人に凄まれるというのは、実に恐ろしいものだ。
「小僧、つくならもっとましな嘘にすべきだな。何が目的だ。何をしにここに入った？」
相変わらず剣呑な様子に、リョウは外套のポケットを探ると中からこの場所に来ることになった原因を差し出した。
「エクラータ様、何をしておいでです？　早くこちらに」
その隙に兵士が少女を自分の元に来るように告げるが、少女はリョウの腰に腕を回したまま離れなかった。
「あの、信じていただきたいのですが、【アルセナール】へ行く途中に道に迷ってしまいまして、気が付いたら、あの中庭のような場所に迷い込んでいたのです。こちらに入ったときの許可証はこれで

す」

信じてもらえるかは分からなかったが、少しでも相手の不信感が払拭されるようにと、ユルスナールから渡されたカードを差し出せば、兵士の女性は、ついと手を伸ばしてカードをひったくるとその内容をじっくりと吟味するように改めた。

そして、不審そうに、リョウを見た。

「この許可証は本物のようだな。紛れもない刻印がある。だが、あの西門から【アルセナール】へ行くのにどうしてこんなところまで来るのだ？」

それは、こちらが聞きたいくらいだった。

リョウは途方に暮れたように眉根を下げて、肩を竦めて見せた。

こうなれば恥も外聞もあったものではなかった。このままでは捕まりかねない。下手をしたら不審者として牢屋に入れられるかもしれないのだ。そんなことをしてユルスナールたちに迷惑を掛ける訳にはいかなかった。

リョウは極力、穏やかに言葉を継いだ。

「あの、ですね。門を潜ったのはいいのですが、元々、【アルセナール】の場所を知らなかったんです。今朝、突然、このように上司より呼び出しを受けまして、中に入れば分かるかと思ったのですが、それが浅はかであったようです。道を尋ねようにも、他に人が見当たらなくて、彷徨い歩いていたら何故かあの場所に辿り着きまして、長い道のりを歩いて疲れたものですから、少し一休みをしていたんです」

そして、その場所で、この少女に出会ったことを告げた。

「そうなの。お兄ちゃん、あの大きな木の根元で眠ってたのよ。【夜の精】みたいに。お兄ちゃんの周り、きらきらだったの。色々な光がこう沢山飛んでいて」

リョウの話の内容を肯定するように、少女が両手を開いてその時の様子を語った。

小さな女の子の必死な説明にリョウは心を和ませたのだが、それ

は相手である女兵士にも同じであったようだ。
相変わらず、ぴったりとリョウの傍を離れない少女の様子に、内心の苛立ちを上手く隠しているようだったが、取り敢えず、剥き出しにしていた剣を鞘に納めてくれた。
「ありがとうございます」
ほっとしてお礼を述べれば、兵士は、苦いものを飲み込んだような複雑な顔をして見せた。
「全く、それが事実であれば、随分と間抜けな話だな、小僧」
辛辣な言葉を吐かれた。だが、それは事実であるのでリョウは神妙な顔をした。
「すみません。ご迷惑をお掛けいたしました」
「今回は、その必死なエクラータ様に免じて、許してやろう。だが、同じ手は二度と通用すると思うな」
「申し訳ございません。以後、気を付けます」
軟化した兵士の空気に、傍にいた少女が肩の力を抜いたのが分かった。
もしかしなくとも、こんな小さな女の子に、随分なことをさせてしまったようだ。
リョウは、その場で膝を着くと、少女を少し見上げる形になった。
「ありがとう。エクラータ、助かったよ」
謝意を述べて微笑めば、目の前の女兵士が、またもやいきり立った。
「この痴れ者が。貴様、エクラータ様を呼び捨てにするなど、言語道断。今すぐ、ここで切り捨ててやろうか」
低く一喝されて、リョウは内心、しまったと思った。
この幼い少女は、どうも身分ある高貴な方らしいのだ。身分社会というものは、かくもややこしい。
どう見ても一般庶民（おまけに不審者だ）であるリョウは、慌てて、呼び名と言葉使いを改めた。
「ありがとうございました。エクラータ様」

そう口にすれば、少女はあからさまに嫌そうな顔をした。
「お兄ちゃんは、別にいいのよ？　そんなに畏まらなくて」
「エクラータ様、そういう訳には参りません。下々の者に示しがつかなくなります」
少女を窘めるように女兵士は告げると、きびきびとした動作で、こちらに近寄って来た。
「さ、エクラータ様、先程から、御母上がお待ちかねです。参りましょう」
女兵士は少女の手を取った。
リョウはそれを見て、そっと脇へ退いた。
「お兄ちゃんは、どうするの？」
心配そうにこちらを振り返った少女に、これ以上心配を掛ける訳にはいかなかったので、リョウは案じることはないと最大限の笑みを浮かべていた。
「この者は、そこの衛兵にでも引き渡しましょう」
警戒を解かずに切り捨てた女兵士の迫力にたじろいだが、見知らぬ、如何にも怪しい風体の人物が現れたら、主を守る兵士としてはそのような態度を取って然るべきものだろうと思い、リョウは自分を慰めることにした。
女兵士が指し示した方向に、同じように帯剣した屈強な兵士の姿が目に映り、リョウは内心、恐々としたが、どうやら天はリョウを見放さなかったようだ。

『その必要はあるまい』
不意に割り込んできた艶のある声に、リョウは顔を上げた。
「ティティー！」
少女が軽やかな声を上げた。
声がした方向に顔を向ければ、そこには煉瓦敷きの小道をゆったりとした足取りで歩いてくる四足の獣の姿があった。全身を光沢のある濃い灰色の体毛が覆う。鋭い牙が、二本、口の端に覗いている

小型の獣だった。しなやかな体つきは、まるで豹のようだ。
『我が案内しよう』
その獣は、リョウの前まで来るとうっそりと目を細めた。
リョウはその場で膝を突いた。
「我が名はリョウ。貴公の申し出、感謝する」
謝意を述べれば、その獣は、鷹揚に頷いた。
『我はティーダ、好きに呼ぶがよい』
「ありがとう、ティーダ」
リョウが微笑めば、その獣は、ひょいと軽い身のこなしでリョウの肩に乗り上げると、その首に襟巻のように巻き付いた。
ずっしりとした温かい重みに、リョウは平衡感覚（バランス）を合わせるようにして立ち上がった。
伝令の鷹たちと違って若干重かったが、この際、文句など言える訳が無かった。
「ティティー？」
女兵士が、肩に乗った獣に訝しげな視線を送った。
『スヴェータ、この者は我が送る。異存はあるまい？』
「それは構わないが……」
若干の躊躇いを見せた女兵士に、
『なに。少しでも怪しい素振りを見せおったら、このティーダ、この者の喉笛を噛み切ってやるわ』
そう言って、残忍な笑みを浮かべて御自慢の牙を剥き出しにした獣に、女兵士は、渋々と頷いたのだった。
「分かった。お前がそこまで言うのならば、頼んだぞ」
リョウは不穏な会話にぎょっとしたが、その動揺を極力表に出さないように気を付けた。
そうこうするうちに、獣と女兵士の間で話が付き、兵士は少女を連れて、建物の方へ戻ろうと踵を返した。
すると、ぱっと手を放した少女が再び、リョウの元に走り寄って来た。

「エクラータ様！」
女兵士が鋭い叱責の声を上げていた。
「お兄ちゃん、あのね」
そう言って手で口元を覆い、内緒話をするように顔を上げた少女に、リョウも再び腰を屈めた。
――――――――今度会った時は、エクリーって呼んでいいからね。
それだけ言うと元気一杯に走り去っていった。
リョウは、その大きな白いリボンの揺れる小さな背中を何とも言えない微笑ましい気分で見送ったのだった。
『では、参ろうか』
「ああ、お願いするよ」

その後、肩ではどうも収まりが悪かったので、リョウは小さな獣を前に抱えながら、歩くことにした。　柔らかな毛並みは艶があり、手触りは抜群だった。
『先程は失礼した。長の【魂響（タマユラ）】よ』
案内されて、【アルセナール】に向かう途中、腕の中でティーダが不意に言葉を発した。
「なにが？」
リョウはのんびりと石畳の上を歩きながら、鷹揚に返していた。
『そなたの喉笛を噛み切るなど、無礼にも程があろうに』
「ハハ、そんなことか。それは気にしてないよ」
そうでもしないとあの場で、あの兵士は納得しなかったであろう。
『ふむ、それにしても【アルセナール】に行くのに、とんだ所に迷い込んだものよ』
ティーダが呆れるように、実際に歩いてみれば、リョウが迷い込んだ場所は、目指すべき【アルセナール】とは真逆の方向だったのだ。
リョウは、心底ばつが悪そうに苦笑いした。

「面目次第もございません」
『ハハハ、なれど、そのお陰でそなたに会うたわ』
小さな獣はリョウの腕の中で気持ち良さそうに揺られていた。
「ねぇ、ティーダ。『長の【魂響(タマユラ)】』って、セレブロの加護を持っているってことだよね？」
リョウは、この間から気になっていた言葉を再び耳にして、思いきって聞いてみることにした。
『なんだ、おぬし、そのようなことも知らぬのか？』
腕の中で気持ち良さそうにまどろんでいたティーダが、つとこちらを見るとあからさまに呆れたような顔をして見せた。
リョウはそれに曖昧に微笑んだ。
【プラミィーシュレ】から戻った時に、気になってセレブロに聞いてみたことがあった。その時、セレブロは、一般的に力ある獣から加護を貰い、その印が現れた人間のことを人の間ではそう呼ぶようだと語ったのだが、セレブロ自身、その呼称には余り馴染みがないようだった。
その事を説明すれば、ティーダは少し瞑目した。
そして、訥々と語り始めた。

ティーダの話によれば、太古の力を持った悠久の時を刻む獣（その最たる存在が【ヴォルグ】である）と交わり、その力を体内に同調させた人間を【魂響(タマユラ)】と称するとのことだった。これは勿論、人から見た場合の呼び名だ。
加護をもらった人間は、その獣と強い結びつきを保持し、互いに助け合い、補完する関係にあると考えられていた。加護を受けた人間は、その証として身体のどこかに加護を授けた相手の名前が紋様のように肌に浮き出るという。実際に加護がそれを受けた人側にどのような作用を及ぼすのかについては、具体例が余り伝わっておらず、よく分かっていないとのことだった。要するに、そういう事例が限られた神殿の神官たちや術師たちの間に知識として伝わってい

るに過ぎないとのことだった。
ティーダも【魂響（タマユラ）】となった人間を間近に見るのは初めてのことらしい。
因みに【魂響】になった人には、その身に加護を与えた獣（リョウの場合はセレブロだ）の気が薄らと膜のように現れる為、人とは違う鋭い感覚を持つ獣たちには分かるのだという。

そんなこんなでティーダの講釈に耳を傾けながら歩いていると、前方に一際、荘厳な建物が見えてきた。薄い空色に灰色を混ぜたような彩色をされた石壁とその周りを囲む白い縁が視界に入った。
軍部の拠点であるから質実剛健で実用性重視の質素な外観かと思いきや、【スタリーツァ】特有の貴族仕様なのか、それは優美で洗練された印象を与える建物だった。

『ああ、見えてきたぞ』
ティーダはリョウの腕の中からするりと抜け出ると颯爽と前を歩いた。身のこなしは随分と軽やかだ。
入り口の少し手前で、ティーダは足を止めた。
リョウはその場で膝を着くと案内をしてくれたティーダに感謝の意を表した。
頭を撫で、顎の下を擽るようにすれば、気持ちよさそうに目を細め、喉を鳴らした。
「ありがとう。ティーダ。助かったよ」
『なに、これしきのこと。リョウと言ったな。また会おうぞ』
「うん。エクラータによろしく伝えてくれるかな。それからスヴェータさんにも」
『ああ、伝えておこう』
「ありがとう」
そして、瞬く間に灰色の艶やかな毛並みを持つ豹のような風貌の小柄な獣は、石壁の立ち並ぶ建物の合間に消えたのだった。

アルセナール　2）（後書き）

受難続きの主人公。ユルスナールに会う為には、まだまだ突破しなければならない関門があるようです。

アルセナール　3）

リョウは、改めて気合いを入れるように立ち上がった。大分遠回りをしたが、なんとか目的地に辿り着けたようだ。

だが、まだまだ安心できない。これからあの【アルセナール】の中に入って、ユルスナールの居る場所を探さなくてはならないのだ。

【アルセナール】の入り口は広く、両側には門番の任に就く兵士が二名ずつ立っていた。共に隙なく肩当てやら胴当ての防具を身に着け、腰に長剣を穿き、長い槍を持っている。

リョウは、緊張した面持ちで入り口を潜った。

門番の兵士に咎められるかと内心、冷や冷やしたのだが、兵士は、通り過ぎる間際に左腕にある腕章を目で確認すると小さく頷いただけだった。

内部は、外観から受ける印象に違わず、優雅で広々としていた。幅のある廊下の中央には臙脂色の絨毯が敷かれ、大きく切り取られた明かり採りの窓から差し込む日差しは、燦々と周囲を明るく浮き上がらせていた。

さて、中に入ったはいいものの、ユルスナールの居場所が分からない。

どうしたものかと考えていると、ちょうど前方から廊下をこちら側に向かって歩いてくる兵士がいたので尋ねてみることにした。

「あの、すみません」

声を掛ければ、その兵士は書類を手に立ち止まり、見慣れない小柄な人物を不審げに見下ろした。

この兵士もこの国の男の基準に違わず背が高く、体格もよい為、傍に立たれると言い様のない圧迫感があった。

「なんだ？」

「ちょっとお尋ねしたいのですが、第七師団の団長がいらっしゃる部屋はどこか、ご存知ではありませんか？」

威圧感のある兵士は、リョウの左腕にある腕章に視線を走らせた。

「お前は第七の所属だな。自分のところの長がどこにいるかも知らないのか」

思いの外、さげずむように冷たく突き放されて、リョウは内心、尋ねる相手を間違ったと思った。

だが、表情を変えずに続けた。

「申し訳ございません。お恥ずかしい限りですが、王都は初めてでして、この場所を訪れるのも初めてなのです。今日、急遽、呼び出しを受けたものですから」

淡々と最もらしい理由を述べれば、その兵士は鼻で笑った。

「ハッ、呆れたものだ。上が上なら下も下という訳か」

何が気に食わないのかは知らないが、嘲るように吐き捨てられて、リョウは内心の憤りをぐっと堪えた。

こちらに来て以来、これまで余り初対面の人からあからさまな敵意や負の感情を向けられたことはなかった（【プラミィーシュレ】での一件は特別だったとしても、だ）ので、正直、驚くと共に地味に傷ついたが、敢えて気に留めないことにした。

どこにいても人がいる限り、様々な人間がいる。馬が合う、合わないということもあるだろう。世の中、善良な人ばかりとは限らないのだ。

それに、この兵士は、第七師団に何やら含みがあるようだ。余りいい感情を持ってはいないことが言葉の端々に棘となって表れていた。

軍部の中でも、互いに仲が良かったり悪かったりすることがあるだろうことは想像に難くない。

知らなかったとはいえ、面倒な相手に声を掛けてしまった自分が、運がなかったという他ないだろう。

「すみませんでした」
リョウはこれ以上、自分の精神衛生上の為にも、この男の手を煩わせる訳にはいかないと思い、そのまま、軽く会釈をして、通り過ぎようとしたのだが、
「おい、お前。どこに行く？」
予想に反して、男に引き留められてしまった。
リョウはなるべく感情を出さないように表情を消し、男を真正面から見上げた。
どこか尊大な薄い緑色の瞳が、訝しげに細められていた。脇に流した濃い茶色の髪が、一筋、額際に落ちかかっていた。やけに高圧的な物言いが、板に付いた印象を受けるのを内心、苦々しく思った。
「いえ、これ以上、貴殿にご迷惑をお掛けする訳にはまいりませんので、自力でなんとかします。お忙しいところ、呼び止めてしまい申し訳ありませんでした」
最後に薄らと儀礼的な笑みを刷いて、その場を立ち去ろうとしたのだが、その男は呆れたように息を吐いた。
「お前は場所が分からぬのだろう？　何も、教えないとは言っていないが？」
不服そうな顔で見下ろされて、暫し面食らった。
それならそうと言って欲しかった。のっけから嫌みのようなものを言われたので、男には教える気が更々ないのかと思ったのだ。紛らわしいことをする。
「ついでた。近くを通るから付いてくればよい。お前のような胡乱な輩にこの館内をうろうろされても困るからな」
――――――いちいち嫌味な男だ。
高飛車に目線で促されて、リョウは内心、ムカッ腹を立てたが、向こうから見れば自分が不審者であることに違いはないし、一先ず案内をしてもらえそうだったので、その点は素直に従うことにした。
「ありがとうございます」
親切なのか、そうでないのか、判断がつかなかった。

早い話、利害が一致したというところか。
こちらはユルスナールの居所が知りたい。で、向こうは自分のような不審者にこの場所でふらふらされるとかなわないということだ。
「おい、何をしている？」
――――――もたもたするな。
「あ、はい」
再び歩き始めた男の後をリョウは慌てて追った。

男は自分の速度（ペース）を乱すことなく、足早に廊下を歩いた。背も高く、足も長いので、リョウとの歩幅はかなりの差があった。
リョウは遅れをとるまいと必死に足を繰り出した。
「それにしても、お前のところは不親切だな。田舎者にまともな案内も付けずにここまで来いと呼び付けるとは」
男は念のため、こちらに入ることになった許可証の提示を求め、それを改めると、歩調を緩めることなく、そんなことを言った。
リョウは押し黙った。
ここでのしきたりが分からないので、迂闊なことは言えなかった。第一、自分は兵士ですらない。自分の認識が甘かったのか、ユルスナールもそこまでは気が回らなかったのか、それは分からない。
男の言葉は辛辣だが、的を射ているし、どうも迷子になった自分を男なりに不憫に思ってくれたようだ。態度は横柄だが、それが男の標準仕様だと思えば、余り気にならなくなった。というのも、この男は、何故か、北の砦に居る気位の高い馬、スートを彷彿とさせたからだ。スートと同じと思えば、腹立ちは幾分、紛れた。
この男は、元々気位の高い貴族なのかもしれない。この国は、身分社会が確立されている場所だ。誰もが平等という空気とはやはり違うのだ。自分には余り馴染みのない階級意識が、そうさせているのかもしれない。そう思い、これまでの不愉快な気分を慰めた。
何も言わないリョウを横目に見て、男は歩きながらふんと鼻を鳴らした。

だが、別段、気を悪くしたようではないようだ。

それから黙々と歩いた。渡り廊下のような場所を抜けて、もう一つの建物の中に入った。

道々、擦れ違う兵士たちが、少し前を歩く男に対し、慇懃に礼をしていった。

もしかしたら、この男はそれなりに身分の高い兵士（もしくは階級が上か）なのかもしれない。そうであれば、偉そうな態度もそれなりに説明が付く。そんな相手をしょっぱなに引き当ててしまったことは、運が悪かったとしか言いようがないだろう。

リョウにしてみれば一難去って、また一難であった。

そこから階段を一段上がる。

そして暫く歩いて、とある扉の前で足を止めた。

入り口からは、かなり歩いた。建物も別棟に跨いでいた。確かにこれでは、到底一人では辿り着けそうになかった。

「あの男なら、この中だ」

簡潔に告げて再び歩き出した男の背中にリョウは謝意を述べた。

「ありがとうございました」

丁寧に頭を下げれば、男は振り返って、何を思ったのか、再び、リョウの元に歩み寄った。

「お前、名はなんという？」

顎を指で軽く持ち上げられて、男の顔を真正面から見る形になった。

「リョウです」

頭上に沢山の疑問符を並べながらも淡々と男の問いに答えた。

「リョウ……か。耳馴れぬ響きだな」

男が名前を反芻して、すっと目を細めた。

「そうですか」

「国はどこだ？」

「分かりません」
鼻先で訝しげに上がった眉に、リョウは苦笑するように眉根を下げた。
「自分は、孤児だったものですから。出自は分かりません」
それは、以前、北の砦でシーリスたちと相談をした時に、自分の故郷を聞かれたときの答えとして提案されたことだった。
自分の顔立ちと色彩はこの国では見慣れないものだから、その出自を必ず聞かれることになるだろう。その時に疑念を抱かれない為に事前にその辺りのことを打ち合わせておいたのだ。
それが、『孤児』という設定だった。
両親の顔は知らない。スフミ村の近辺でとある老人と共に暮らし、今回、育て親の老人がこの世を去ったことで、その伝を頼って北の砦にいる老人の遠い親戚だという兵士を訪ねた。そこで、シーリスたちに出会い、世話になったという筋書だった。
ガルーシャの名前は、決して出してはならないときつく言われた。大体の設定としては無理のないところだったので、それはすぐに飲み込めた。
二親は、つい最近まで実在したが（きっと今でも恙無く暮らしているだろうが）、もう会うことは叶わないだろうから、内心、心苦しくはあったが、仕方のないことだと諦めていた。嘘をつくことは苦手だが、本当の事を言えないのだから仕方がない。
それに孤児と言えば、それ以上は、余計な詮索もされないだろうと見越してのことだった。
「……そうか」
案の定、対する兵士の男は、その理由で納得したらしかった。打って変わって神妙な顔付きをした。そして、それ以上、出自の件を触れることはなかった。
男は長い指を放すと、どこか不遜で高慢な笑みをその口元に刷い

た。
「まぁいい。第七に嫌気が差したら。うちに来い。歓迎するぞ」
指先で軽く弾くようにリョウの頬を叩いて、そんな気障な台詞を吐いて、どこか高慢な空気をその身に帯びた男は、何故か意気揚々と去っていった。
リョウは、半ば呆気に取られて、その男の後ろ姿を見送った。
――――――なんだ、一体？
男の姿が見えなくなってから、リョウはその男の名前を聞いていなかったと気が付いた。そして、当然のことながら、あの男が何処の誰かも分からなかった。
――――――だが、まぁいいか。
あの男が何をしたかったのかは分からないが、思ったより悪い人ではなかったようだ。最後に態度を軟化させた男を不可解に思ったが、それ以上は、深く考えないことにした。
世の中には触れてはいけないことが、ままあるものだ。

リョウは、気分を入れ替えるとユルスナールが居るという部屋の扉の前に立った。
そして、姿勢を正すと重厚な扉を静かにノックした。
中から、了承の声が掛かり、ようやくとの思いで扉に手を掛けたのだった。

中に入ると出迎えたのは、洗練された物腰の上背のある男だった。きっちりと隙無く正装である明るい灰色の軍服の詰襟を着込み、金色の髪は寸分の狂いなく、丁寧に後ろへ撫で付けられていた。
体格はよい方だろう。鍛えられたしなやかな肉体の輪郭が優美な隊服の上からでも見て取れた。瞳の色は薄い灰色で、まなじりは薄く上がっている。その姿は、森にいる狼たちを想起させた。
リョウが訪いを告げれば、中に入ってきた黒髪の小柄な人物の造

形を見て、どうやら話を聞いていたらしい男は、鷹揚に一つ頷いた。
「お前が、養成所に通うという学生か？」
「はい」
「ルスランから話は聞いている」
愛想の欠片もない事務的な態度だが、それは別段、気にならなかった。自分に馴染みある第七師団の領域と思えば、警戒を解くにはそれだけで十分だったからだ。
男はそう言うと口の端に取って付けた笑みのようなものを一瞬だけ刷き、リョウに適当に座るように言い残した後、別室へと消えた。
どうやら、ユルスナールを呼んできてもらえるようだ。
そこで、リョウは、ようやく安堵の息を吐いた。
ゆっくりと周囲を見渡す余裕が生まれた。

中は、事務机のようなものが一列に並んだ広い空間だった。壁は相変わらず白とくすんだ空色を基調とした優雅な作りで、調度類も上品でいかにも値の張りそうなものばかりに見えた。
ここで、第七師団に振り分けられた様々な案件を処理するのだろうか。事務方といった感じがする。
机には、同じように軍服を着た兵士が書類片手にペンを走らせていた。
静けさの中、紙が擦れる摩擦音とペンを走らせる音、それに中にいる兵士たちの咳払いや身じろぎの音が混じった。皆、其々に忙しそうである。
リョウは、仕事の邪魔にならないようにそっと扉の端に立って待つことにした。
机が並ぶ反対側の窓際の方に、小振りな応接用のソファーとテーブルがあったが、そこに腰を下ろすのはどうにも躊躇われた。

ぐるりと室内を見渡した時に事務机に座り、書類を繰っている人と目が合って、小さく会釈をした。

その人は、人懐こい笑みを浮かべるとこちら側に向かって手で応接用のソファーを指し示したが、リョウはそれに緩く頭を振って、気持ちだけもらうように感謝の意を込めて、そっと微笑んだ。

こういうささやかな心遣いは、正直、心に染みた。ここに来る途中に受けた応対（不審者扱いやどこか冷たい横柄な態度）を思えば、涙が出そうだった。

そうして、ぼんやりと待っていると、先程、体格の良い男が消えた扉が勢いよく開いて、中から、ようやく待ち望んだ銀色の髪と瑠璃色をした双眸を持つ人物が現れた。

ユルスナールは、リョウの顔を見るとあからさまに安堵したような表情を見せた。

そして、長い脚を繰り出して、足早に室内を横切ってリョウが佇む扉付近にやってきた。

「リョウ！　余り遅いから心配したぞ。大丈夫だったか？」

いつになく口早なユルスナールの問い掛けに、リョウはなんとも言えない曖昧な笑みを返していた。

「すみません。遅くなってしまって。途中、道に迷ってしまったものですから」

正直に吐露すれば、ユルスナールは心苦しそうに眉を顰めた。

「済まなかったな。この場所に不慣れなお前には大変だっただろう」

ユルスナールがどこまで予想していたのかは知らないが、申し訳なさそうに告げられて、リョウとしては、気にするなとしか言いようがなかった。

「大丈夫です。途中、親切な方々にここまで案内していただきましたので」

終わりよければ、全てよし。色々あったが、ティーダや先程の男のお陰で最終的に目的地に辿り着けたのだから、それでよしとしようではないか。

待ち望んだ男の顔を見たら、現金なもので、これまでの不愉快な気分も霧散していた。
「そうか」
ユルスナールはリョウの背中に手を当てて促すように歩き出した。途中、最初にこの部屋で待機していた厳かな空気を持つ兵士に擦れ違うと、
「グリゴーリィー、暫く、此方には誰も通すな」
そう声を掛けた。
「ああ、了解した」
ユルスナールの言葉にグリゴーリィーと呼ばれた兵士は、一瞬、動きを止めてこちらを見たが、小さく頷いた。

そして、ユルスナールに連れて来られた場所は、二間続きの休憩室のような部屋だった。
ゆったりとしたソファーとテーブルの置かれた応接室が手前の一間にあり、その奥に寝台の置かれた寝室と思しき部屋が見えた。
ユルスナールはリョウを促して、まずソファーに座った。
二人きりになって、リョウは漸く人目を憚らずに身体の力を抜くと隣に腰を下ろしたユルスナールの肩にそっと頭を寄せた。
すると大きな手が背後から回り、腰の辺りをしっかりと支えた。労うように温かい手が堅い服の下の柔らかな線を暴くように撫でて行った。
「済まなかったな。本当は迎えをやる筈だったんだが、ちょっとしたゴタゴタで行き違いがあってな」
ユルスナールは、顔を近づけると米神や頬桁の辺りに軽く唇を寄せた。
「いいえ、ルスランが謝る必要はないですよ」
リョウは静かに苦笑を滲ませながら、緩く頭を振った。
「それよりも、忙しかったんじゃないですか？」
案じるように、そっと隣に座る男を見上げた。

【アルセナール】の内部は、兵士たちが忙しなく行き来していた。
この場所はこの国の軍部を取り仕切る中枢だ。自分のような部外者には想像が付かなかったが、中に満ちている活気のようなものを感じ取れば、ここは日々、沢山の業務をこなす為に多くの人員が集う場所であることは理解出来た。
自分の為に無理をしたのではないだろうか。
そう思い心配したのだが、
「大丈夫だ。お前が心配することはない」
そう言って、ユルスナールは男らしい笑みを刷いた。
そのどこか尊大な態度も男の弛まない努力と自信に裏打ちされたものであると分かれば、なんだか頼もしい感さえあった。比べるのも妙なものだが、先程の兵士の場合とは大違いである。

「……それよりも」
ユルスナールの大きな手が、そっとリョウの頬を挟んだ。首筋を擽るように片方の指先が下りてゆく。そして、反対側の耳たぶに男の擦れた吐息が掛かった。
「今日はゆっくりしていけ」
――――――昨日のような邪魔は入らない。
呪いのような甘い囁きに、リョウは身体の芯が痺れたような感覚を覚えた。
昨日、忘れかけていた筈の熱を引き摺り出され、それが体内の奥で熾き火のように燻っていた。ほんの少しの火種で燃え盛るに違いない。着火温度は極端に低くなっていた。

それから、どちらともなく視線を合わせると、昨日の隙間を埋めるように口付けを重ねた。
柔らかな羽のような口付けが降ってくる。性急さは微塵も感じられなかった。
本心を言えば、強引に無茶苦茶にされても構わなかった。だが、

敢えて、勢いに流されないようなゆったりとした流れ（ペース）を崩さないのは、ユルスナールなりの考えなのかもしれなかった。

焦らされれば、焦らされた分だけ、その後に得られる快楽は大きい。互いにそれを知っているから、今、ここで先走りそうになる気持ちに待ったを掛ける。それにいい歳をした大人としては、余り余裕のない様を相手に見せたくはない。どちらも欲張りで意地っ張りだからこそのことでもあった。そんなところは、両者共に似ているかもしれない。

口付けを交わしながら、ユルスナールの手は巧みに動いていた。リョウが身につけていた外套を鞄ごと滑らせ、上着の釦に手を掛ける。腰に穿いていた短剣の付いたベルトも右の太ももに巻いていた短剣のベルトも気が付けば取り払われていた。

二人の人間が絡み合うには些か手狭なソファーの上に折り重なるようにして、リョウの重心は徐々に傾いで行った。

ユルスナールの骨張った大きな手は、全身の形を確かめるように隅々まで這っていった。

やがて、履いていた長靴を落とされる。衣擦れの音の合間にごとりと鈍い落下音が響いた。

段々と深さを増してゆく口付けにリョウは夢中になっていた。男の首に腕を回し、指先に触れる逞しい肌の感触に半ば陶酔していた。

だが、暫くして、ふと、ひんやりとした感触にリョウは閉じていた目を開いた。

視界の隅に銀色の髪の他に、見慣れない優美な装飾の施された天井が目に入った。

そして、急に我に返り、思い至った。ここは、ユルスナールの職場だということに。

あの扉の先には、机を並べて、書類を繰っている兵士たちが忙しそうに働いていた。

こんなところで、自分は何をしようとしているのか。

リョウは急に現実に戻り、自分の置かれた状況を見て、ぎょっと

した。
　ソファーの上で、自分より二回りは確実に大きな男の身体に圧し掛かられていた。その下にある己が上半身は、いつの間にか、シャツの釦は全開で、ズボンの留め金も開かれている。一言で言えば、あられもない格好だった。
　ソファーの周りに身に着けていた筈の上着や外套や長靴が散乱していた。
　ユルスナールの手は、その感触を確かめるように胸元の辺りを彷徨っていた。
「ルス……ラン」
　合わさった唇を解き、身を捩れば、がら空きになった首筋を熱い舌が這っていった。
「駄目……ですよ。こんな……ところで」
　リョウの形ばかりの抵抗など物ともせず、ユルスナールは己が唇と舌先を使って、隠されていた柔らかな肌を味わうように、その舌触りを堪能していた。
「ル…ス…ラ……ン！」
　堪らない刺激に思わず悲鳴のような声が漏れた。
　そこで、漸く、ユルスナールは顔を上げると意地の悪そうな笑みを浮かべてリョウを見下ろした。
「リョウ、余り声を上げると怪しまれるぞ？」
　ちらりと扉がある方へ視線をやってから、からかうように男の目が獰猛な色を帯びて細められた。
　リョウは慌てて音量を抑えて、声を低くした。
「ルスラン、こんなところで、駄目ですよ。向こうには仕事をしてる人たちがいるじゃないですか！」
　扉一枚隔てた向こうでは、日々の業務をこなしている人々がいるのだ。
「気にするな」
「気になりますよ。それに、まだ昼間ですし」

ここまで流された自分も呆れたものだが、会って早々、こういう空気に持ち込んだ男をリョウは困惑気味に見遣った。せめて夜まで待ってと思うも、ひょっとしたらそんな時間など取れないのかもしれないと頭の片隅で思った。

「堅いことを言うな」

ユルスナールが唆すような言葉を紡いだ。

だが、ここで流される訳にはいかないだろう。

「だって、いつまた誰かが来るか分からないのに」

「それは大丈夫だ。此方には入らないように伝えてある」

「でも、急ぎの案件だったらどうするんですか。万が一ということもあるでしょう?」

「そんなものなどない。表のグリゴーリィーが対処する」

「……でも」

「もう十分待った」

抵抗を続けるリョウにユルスナールは痺れを切らしたように、その口を塞いだ。

「もう、黙れ」

――――――せっかくの時間がもったいないだろう?

「それとも、俺とこうするのは嫌か?」

長く執拗に唇を合わせて、リョウの口腔内を蹂躙して行った舌先が名残惜しそうに唇の端を舐めた。

それはずるい聞き方だとリョウは思った。

嫌な訳があろう筈はない。それでも、事に応じるのに時と場所はある訳で。

理性と衝動の天秤が大きく揺らいだ。

それでも、リョウの理性は、いつ誰が踏み込むとも分からない職場で、ユルスナールの期待に応えることには二の足を踏んでいた。

こんなところで、仕事の合間に情人(イロ)を連れ込んだことが外に漏れたら、それこそ、ユルスナールの立場を悪いものにするのではないか。醜聞もいい所だろう。

敢えて、このような人の気配のする場所を選ぶことで却って興奮の度合いを増す性癖の人もいるだろうが、生憎、リョウはそういう性質ではなかった。こういうことは、秘めやかに人知れず行うものだ。誰にも邪魔をされない場所で。いつ誰かに見咎められるかもしれないというようなスリルなど求めていなかった。第一、集中できない。

「ルスラン、やっぱり無理です。落ち着かない」

駄目だと苦言を呈しても、

「心配するな。直ぐに場所など気にならなくさせてやる」

ユルスナールは、既に乗り気のようで、自信たっぷりにそう口にした。こちらの言葉に聞く耳を持たないようだ。

――――――だから、そうではなくて。

リョウの心の内の叫び声が届いたのかは分からない。

――――――が、その時だった。

ちょうど図ったかのような間合い（タイミング）で、部屋の扉が勢いよく開いた。

そして、複数の足音と、話声が波のように押し寄せては引いた。

瞬時に扉が閉まる音がして、リョウは身体を固くした。

幸い、ソファーは扉から部屋の動線に並行して並んでおり、扉の方向に足を向けていたので、向こうの様子は見えなかった。

「うお？　おいおいおい、マジかよ。ルスラン、昼間っから、んなとこでおっぱじめんなよ」

――――――こんな時に限って。

聞き慣れた声と共に、こちらに近づいて来る足音がして、リョウは居たたまれなさに目を閉じた。

――――――万事休す。だから言ったのに。

こんな時ばかり嫌な予感は当たるのだ。

耳元で、ユルスナールが忌々しげに舌打ちしたのが聞こえた。

「……ブコバル、取り込み中だ。あっちへ行ってろ」

ユルスナールは、底冷えするような低い声を出したが、それを物

ともせずに、ブコバルは長靴の底を鳴らして、こちらに近づいて来た。
上方に影が差した。そして、優美な紋様の描かれた天井を背景に、記憶の中にある造形よりは幾分こざっぱりとした、よく知った男の顔が逆さまに視界に映り込んでいた。
「よぉ、リョウ、元気にしてたか？」
この状況を楽しむようにしてニヤニヤと意味深な笑みを浮かべたブコバルに、リョウは諦めたように息を吐いた。
ユルスナールの手が止まったのはいいが、その代償がブコバルの乱入だと思うと複雑で仕方がなかった。こうなれば、どちらがマシだったかは分からない。
「ええ、お陰さまで、ブコバルも相変わらず、お元気そうで何よりです」
逆さまに映る色艶の良い精悍な顔立ちと好奇に怪しく輝く青灰色の瞳に、リョウは淡々と返していた。
綺麗に髭をあたった口元が、逆さのまま、にんまりと弧を描いた。
ここまで来れば開き直るしかないだろう。ブコバル相手ならば、自分もかなり面の皮が厚くなったと思う。
リョウは、辛うじて残る隙間から肌蹴たシャツを手繰り寄せ、前を掻き合わせた。
「ルスラン、退いてください」
ユルスナールが、ぐったりするように脱力してこちら側に目一杯体重を掛けていた。その重みにリョウは息が詰まりそうになった。一向に引こうとしない相手の下から、身なりを整える為にリョウは抜け出そうともがいた。
「ブコバル、何の用だ？」
昨日に引き続き、いい所でまたもや邪魔が入り、ユルスナールは苛立たしげに闖入者を睨みつけていた。
「おうおう、おっかねぇなぁ。んなこと言っていいのかよ、ルスラン。まだ入って来たのが、俺でよかったじゃねぇか、なあ？」

だが、対するブコバルは飄々と肩を竦めて、同意を求めるようにリョウを見たが、リョウは口の端を引き攣らせただけだった。
「グリゴーリィーが居ただろう？」
それは、言外にブコバル以外なら遠慮をしたであろうということが仄めかされていた。
「ああ、人払い中だとは言われたぜ？」
――――――だけど、中に居るのは術師養成所の学生だって言うじゃねぇか。
つまり、ブコバルは中に居る相手が、リョウであることが分かっていたのだ。それが知らない相手ならともかく、ブコバル自身もよく知る人物である。それならば、入室に何を躊躇うことがあるのかということだった。
ユルスナールは、徐に身体を起こすと不機嫌な表情を隠さずに髪を掻き上げた。
リョウはその隙にソファーから這い出ると、周囲に散らばっている上着やら長靴やら外套やらを抱えて目に付いた隣の部屋に駆け込んだ。そして、その場所で、再び身なりを整えることにした。
「でもよぉ、こっちはドーリンだけならまだしも、第一と第二が揃って顔出しに来たんだぜ。うっちゃっとけねぇだろうがよ。流石に」
些か面倒臭そうに告げられたブコバルのその言葉に、ユルスナールはあからさまに苦々しい顔をして、押し黙った。
要するにブコバルの判断は正しかったということなのだ。
「な？　俺でよかっただろ？」
得意げに胸を反らしたブコバルに、ユルスナールは大きな溜息を吐いた。
「分かった。どうせ単なる挨拶だろう。こっちに通してくれ」
「りょーかい」
そうして立ち上がったユルスナールは、手早く乱れた着衣を整えると、寝室の方に隠れたリョウに声を掛けた。
「リョウ、済まないが、これからここに来客がある。その間、そこ

で待っていてもらえるか？」
　同じく元通りに身なりを整えたリョウは、戸口からひょっこり顔を覗かせると穏やかに微笑んだ。
「ならば、お茶の用意をしましょうか？」
　その申し出にユルスナールは、少し考える風に顎に手を当てた後、小さく頷いた。
「そうだな。頼もうか。場所はグリゴーリィーに聞いてくれ」
「はい。分かりました。御客人は何名ですか？」
「俺とブコバルを併せて、五人か、その内一人は、ドーリンだ」
【プラミィーシュレ】で世話になった第五師団の団長の名前が上がり、リョウは懐かしさに口元を緩めた。
「分かりました」
　そして、先程までの甘い空気が嘘のように、清々しい表情で部屋を出ようとしたリョウの腕をユルスナールは、咄嗟に引いていた。
　怪訝そうに向けられた顔に掠めるだけの口付けを落とした。
「済まないな」
　中途半端に煽られた所で終わり、燻る熱を些か持て余すようにして苦笑を滲ませた男に、
「別にいいですよ」
　リョウも同じように苦笑気味に返していた。
　そして、与えられた用事をこなすべく、先程の広い執務室のような場所へ通じる扉を開いたのだった。

アルセナール　3）（後書き）

またもや、いいところで邪魔が入りました。やはり、ここはブコバルです。中々、二人きりにはなれない模様。ユルスナールには、もう暫く、悶々としてもらいましょう（笑）

噂話の切れ端　1）

グリゴーリィーと呼ばれた兵士にお茶の用意をすることになったと告げてから、手伝うことを申し出れば、広い執務室の隣にある給湯室のような場所に案内された。

茶器とお茶の葉の場所と種類をざっと確認して、リョウは、手早くお茶の準備を始めた。

五人分とユルスナールは言っていたが、万が一の為に一つ追加して六人分を用意した。ついでに後で、こちら側で仕事に就いている兵士たちにも休憩用に淹れようと思った。

湯が沸くのを待っている間、執務室の方が急に賑やかになり、客人が訪れたことが分かった。

それにしても、ユルスナールはとんだ綱渡りをするとリョウは先程の一件を冷や冷やしながら思い返していた。寧ろ、闖入者がブコバルでよかったと思った。究極の選択には違いないが、まだユルスナールにとって身内扱いの人物でよかったと思った。それに余り簡単に流されないようにしなくてはとも改めて思った。特にユルスナールの仕事場である公の場にいる時は。

ユルスナールは、冷静なように見えて（それは、やはり外見から受ける印象がそう思わせるのだろうが）、時として自分の欲望を優先し、押し通すきらいがあることを再認識した。冷酷で無関心そうな仮面の下には、繊細で情に厚い男の顔が隠れている。その内に潜む激情の一端を知る身としては、その本質を見誤ってはいけないだろう。

グリゴーリィーにノックをしてもらい、茶器の乗ったワゴンを押して、中に入った。

「失礼します」

中央の一人掛けの椅子にユルスナールが座り、入口から見て右側のソファーにブコバルとドーリンが、そして、その対面には客人が二人座っていた。

皆、同じ光沢を放つ華やかな軍服を身に着けていて、傍目には圧巻だった。飴色の優美な曲線を描く調度類と清楚な色合いの壁紙の中で応接間に寛ぐ五人の姿は、まるで一枚の油絵から抜け出て来たような非現実的な光景に見えた。

ドーリンがこちら側に視線を投げて、その目を軽く見開いたのが分かった。

まさか、こんなところにいるとは思わなかったのだろう。

向こうもそうだが、リョウとしてもそうだった。ドーリン自身が出場するかは分からないが、武芸大会に合わせて第五師団の団長であるドーリンも王都入りしたということなのだろう。

リョウの中では、神経質そうなドーリンと剣の大会とは結び付きそうで結び付かなかった。武闘派というよりも頭脳派の参謀のような印象があったからだ。

リョウは、暫し動きを止めたドーリンに小さく微笑むことで返した。

そのまま、ちらりとユルスナールの方を見たドーリンは、視線だけでなにがしかの会話をしたようだ。

それを目の端に見ながら、リョウはまず客人である二人に先にお茶を出した。

「どうぞ、熱いのでお気を付けください」

「ああ、ありがとう」

一人は、男らしい顔立ちの人当たりの柔らかい兵士だった。軍人らしく、がっしりとした体つきだが、洗練された身のこなしに歳相応の落ち着いた空気を身に纏っていた。

「どうぞ」

そして、もう一人は、

「お前は……」

――――――先程の小僧。
ここに来る途中、迷子になった中庭のような場所で抜き身の剣先を突き付けた迫力美人、確か、スヴェータと呼ばれていた女兵士だった。
女兵士は、やや吊り上がり気味の目を眇めた。そうすると元々整っている顔付きに凄みが増した。
鋭い視線が、憚らずに突き刺さる。
かなり警戒されているらしいことが分かって、リョウは、内心、困惑した。
自他共に人畜無害な外見をしているとは自負していたが（余り威張れるようなことではないが）、どうも今回は、初対面での印象が相手方にはかなり悪く映ったらしかった。
「先程は失礼致しました」
リョウは、相手を刺激しないように穏やかに微笑むと再度、丁寧に頭を下げた。
そして、今度はドーリンの前にお茶の入ったカップを置いた。
「ご無沙汰しております」
「ああ。変わりないか？」
「はい。お陰さまで」
「……リョウ？」
ユルスナールのもの問いたげな視線に、リョウは手を動かしながら、ここに辿り着く迄の経緯を掻い摘んで話した。迷子になるなど恥ずかしい話なので、余り気乗りはしなかったが、正直に告げない訳にはいかなかった。
その時に軽く自己紹介をして二人の客人を紹介された。
女兵士は、スヴェトラーナ・クロポトキンスカヤという名で第二師団の団長とのことだった。因みにスヴェータは親しい人だけが呼ぶことのできる愛称だ。
この国では、名前を呼ぶ時の愛称の種類が実に多く、その呼称は一つの名前に幾通りもある為、人の名前を覚えるのは中々に大変だ

った。正式な本名だけでなく、愛称が付いて回るからだ。長い名前を語尾を変化させて少し短くしただけの呼び名なら類推が簡単だが、中には全く関係の無いような音になってしまうものもあった。

もう一人は、マクシーム・フラムツォフと名乗った。こちらは第一師団の団長を拝命しているとのことだった。

二人とも威厳のある立派な人たちだった。

両者の肩書を知らされて、その錚々たる顔触れにリョウは粗相をしてはならないと気を引き締めた。

一から十まであるスタルゴラド師団の中で、第一と第二は王族が住まう宮殿に勤務する近衛隊だった。

第一は表、つまり宮殿、及び公的な場所での警備と王族や上級貴族の身辺警護が主な仕事だという。

第二は裏、要するに後宮での奥向きの警護が専門で、第二には、その警護対象の特殊性から女性の兵士も数多く存在するとのことだった。

ということは、あの中庭で出会った少女は、第二師団の団長が恭しく接していたことを考えると相当身分の高い名家の子供であったのだろう。もしかしたら、王族のお姫様であったのかもしれない。

相手が幼子ということもあって、つい、いつもの癖で名前を呼び捨てにしたことを思い出して、リョウは一人青くなった。身分制度の確立された社会では、不敬罪にあたるかもしれないからだ。だとすれば、あの時、傍にいたスヴェトラーナが激昂した理由も納得できた。

「お前は、ルスランの小姓かなにかか？」

お茶を配り終えた後、ワゴンの傍に控えたリョウにスヴェトラーナが尋ねた。

リョウは、なんと答えたものかとユルスナールの方を確認するように見た。

正直に告げていいのだろうか。
だが、ここに来る途中、散々見習い兵士の振りをしてきた手前、それは少し躊躇われた。
ユルスナールが静かに頷いたので、リョウは控えめに口を開いた。
「いえ。自分は、今、術師養成所で学んでいる学生です」
「なん…だと？」
スヴェトラーナは優雅な所作でお茶に口を付けながら片方の眉をくいと跳ね上げた。
「軍部の者でないのか？」
「はい」
その言葉に、スヴェトラーナは呆れたようにユルスナールを横目に見た。
「……ルスラン。お前、何をやっているか分かっているのか？」
――――――ここは関係者以外立ち入り禁止だろうが。
艶やかな唇から放たれたのは、女性らしい華やかな外見とは真逆の貫禄ある雄々しい言葉で、その内容にリョウはぎょっとした。
やはり、ここは部外者がみだりに立ち入ってはいけない空間だったようだ。
普通に考えればそうだ。軍部と言えば国防の要であり、機密事項の多い場所の一つだろう。
だが、対するユルスナールは事も無げに嘯いた。
「勿論、関係者だ」
「なんだ？　その子を、ゆくゆくは騎士団に入隊させようと考えているのか？　今から唾を付けておく気か」
スヴェトラーナの隣に座る体格の良い兵士、マクシームが、面白そうな顔をして発言者の真意を問うた。
だが、対するユルスナールは、それに答えることなく、意味深に口の端を吊り上げただけだった。
余裕綽々な態度だ。
「随分と勿体ぶるな」

マクシームは、ぽつりと呟くと白けた顔をした。
リョウがふと視線を移せば、ブコバルは、その隣で静かに、だが、ニヤニヤとした顔付きで成り行きを見守っていた。ドーリンは相変わらず澄ました表情だが、話の内容に合わせて、細い眉が時折ぴくりと動いた。
するとこのままでは埒が明かないとでも思ったのか、マクシームの視線が逸れて、リョウの方に向けられた。
じっと先程の答えを求めるように探るような視線を向けられたかと思うと、不意に柔らかく微笑まれた。
リョウは、狼狽えた。真正面から向けられた男の笑みが、やけに眩しかったからだ。
無表情の時とはがらりと印象が変わった。それは、相手から情報を引き出したいが為の見え透いた作戦なのだろうが、大の男、しかも軍人がやるにしては、些か茶目っ気があり過ぎるように思えた。
だが、実際、なんだか憎めない気がしたものだから、やはり男の企みは成功したのだろう。
リョウは視界の隅でユルスナールの顔色を窺ってから、やや困惑気味に苦笑を返していた。
「いえ、今のところ軍部に入る予定はありません。自分は術師を目指していますので」
「術師の中にも軍籍に身を置くものは多い。典型的なのがすぐ近くにあるだろう？」
スヴェトラーナが間に入るように口を挟んだ。
典型的なものとは、なんのことを差すのだろうか。
不意に虚を突かれた顔をしたリョウに、助け船を出すようにドーリンが言った。
「第三師団の連中は皆、術師の資格を持っている」
「あ、そういうことですか」
つまり、単に術師を目指しているとの言い方では、軍に入らないという理由には成り得ないのだ。

リョウの脳裏には、艶やかに微笑む男にしては線の細い上品な顔立ちをしたゲーラの顔が浮かんでいた。ということは、いつぞやのゲーラの勧誘は、第三師団への入団を差していたのかもしれない。

リョウは、この時、出来るだけ早いうちに術師が軍部に所属する意味とその役割を知らなければならないと痛感した。その前提条件を知らなければ、断りを入れるにも相手が納得する理由にはならないだろうと思ったからだ。

だが、取り敢えず、自らの意思はこの場でも明確にしておこうと思った。

「自分に軍部での勤めは向いていないと思います。きっと足手まといになるだけでしょうから」

本心を吐露すれば、スヴェトラーナはまじまじとリョウを上から下に眺めた後、小さく笑った。

「確かに、お前のようないかにも非力な輩には無理だろうな。兵士になるには体力がいる。訓練次第である程度は鍛えられるが、そんな【ラプーフ】のような細さではまともに使えるようになるまで、大分掛かるだろうな」

【ラプーフ】というのは、確か、細長いひょろりとした根菜だった筈だ。

そう鼻で笑ったスヴェトラーナの身体は、女性特有のなだらかな曲線を隊服の上から伝えながらも、筋肉質で引き締まり、よく鍛えられていると思われるものだった。無駄な贅肉など付いていない。元々の骨格の違いもあるのだろうが、リョウよりはずっと上背があり、肉厚でもあった。

至極尤もな指摘に、リョウは内心苦笑いした。

スヴェトラーナは、どうも歯に衣着せぬ言い方をするようだ。もし、自分が男で、密かに軍部入りを目指しているような若者であったら、それは、相当、身に堪える発言だっただろう。ただ、その言葉に悪意のようなものは感じられなかったので、向こうとしては、悪気がないのかもしれないが。

だが、スヴェトラーナの竹を割ったような裏表のないさっぱりとした気性は、個人的には好感が持てた。笑顔を浮かべながらも腹の中で何を考えているか分からない輩よりは、かなりましである。
からかうようにこちらを見たスヴェトラーナに、リョウは曖昧に微笑んで肩を竦めて見せるしかなかった。

それから、リョウは静かにその部屋を辞した。
去り際、ユルスナールに『どこに行く?』と聞かれたが、給湯室に片付けをしに行くと断った。自分がここにいても邪魔になるだけであろうし、向こうで働いている他の兵士たちにもお茶を淹れようと思ったからだ。
【タレールカ(トレイ)】を小脇に抱えて扉を開ければ、部屋の一番奥にある執務机の上で書類に目を通していたグリゴーリィーが、顔を上げた。
「ありがとうございました。グリゴーリィーさん」
茶器を運んだワゴンを片付けてくれたことの礼を言えば、軽く頷いた後、
「グリーシャでいい。長いから呼び辛いだろう」
グリゴーリィーは綺麗に撫で付けた金色の髪の下、薄い灰色の瞳を細めて小さく笑った。
「すみません。ひょっとして、上手く発音できていなかったですか?」
グリゴーリィーの申し出に、リョウは少し情けない気分で眉根を下げた。
自分がこの国での生活に馴染んだように思えた矢先、偶にこうして些細なことが大きな揺り返しとなって、リョウに現実を見せ付けた。
人の名前の発音は難しい。

この国の言葉、要するに、全く異なる言語を習得する際、耳からの情報に大きく依存するのだが、聞こえる音は、大抵、母国語に近い音に変換されてしまうからだ。

こちらの言語には母国語には存在しない音（発声方法）がいくつもあった。それがきっと正確には聞き取れていないのだと思う。正しく聞き取りができなければ、正しい発音もできない。母国語にない音を聞き取るのは、中々に至難の技だった。

今ではそれなりにこの国の言葉を淀みなく話せるようにはなったが、新しい単語や言い回しに当たったりすると、思考が途切れることもままあった。母国語の音で言語聴覚が既に確立されてしまっているので、音を似せることはできても、完璧に同じように発音するのは無理な話だった。

恐らく、周囲にはそれが【訛り】として認識されているのだろう。【グリゴーリィー】という名前も、自分ではそれなりに言えた積もりでも、本人には、おかしく聞こえたのかもしれない。名前はその人物を象る唯一の認識符号であるが故に、それが正しく伝えられないことは、とても失礼にあたるだろう。ひょっとしたら、グリゴーリィーは嫌な思いをしたかもしれない。

そう思い、リョウは恐々として机に座る男を見たのだが、

「いや、そういう訳ではない。単に言い難そうだったからな」

それが本心なのかは分からなかったが、手にした書類をトントンと揃えながら、穏やかに言い放った。

自分よりも大分年上だと思われる男性を愛称で呼ぶことに多少の抵抗はあったが、リョウとしては相手の好意に甘えることにした。

「そうですか。それではお言葉に甘えて、グリーシャさんとお呼びしても？」

そう尋ねれば、グリゴーリィーは、最初の印象を覆すような存外穏やかな笑みをその口元に刷いたのだった。

「ああ。構わない」

「では、自分のことは、リョウとお呼びください」

『改めて宜しくお願いします』と手を差し出せば、予想に違わず大きな手に包まれた。

だが、その感触は少し柔らかかった。武官というよりも文官の手だと思った。

グリゴーリィーに許可を貰い、再び、今度は執務室の中で働く兵士たちの為にお茶を用意することにした。

気分転換になるように鞄の中に常備している薬草をほんの少しお茶に混ぜ込んだ。その薬草は口内に清涼感をもたらす香草（ハーブ）の一種で、お茶に混ぜ込むと後味がすっきりしたものになるのだ。これは、その昔、スフミ村のリューバから教わったやり方だった。

人数分のお茶を淹れて執務室の方に戻れば、グリゴーリィーが、窓側に並んだソファーの方へ運ぶように言った。リョウは大人しく頷いて、そこにある低いテーブルの上に持っていた【タレール（トレイ）カ】を置いた。

リョウの傍にやって来たグリゴーリィーは、その場で机の並んだ方を振り返ると、パンと軽く手を打ち鳴らしてから、大きくはないが、よく通る声で言った。

「お茶が入ったから、休憩にしよう。飲みたい奴はこっちに来い」

その言葉に、机に座って仕事をしていた兵士たちが、わらわらと集まって来た。

「はい。どうぞ」

リョウはお茶をカップに注ぎ入れると集まって来た兵士たちに渡して行った。

兵士は、全部で六人いた。そこにグリゴーリィーと自分を入れると八人だ。

そして、最後に余った分を自分用に小さなカップに注いだ。

実際の所、喉が渇いて仕方がなかったのだ。ここに来るまでにか

なり歩いた所為である。
　自然と皆、ソファーの周りに腰を下ろすことになった。全員が座るには、些か手狭だったので、中には自分の机の所から椅子を持ってくる兵士もいた。
　お茶にありつけて、リョウは、漸くほっと一息吐いた。
「あ、なんか、旨い」
「さっぱりするな」
「お茶の葉を変えたのか？」
　カップに口を付けた兵士が、口々にそう言って、リョウは少し面映ゆそうに微笑んだ。
「いつも皆さんが飲んでいるものに、手持ちの薬草を少々加えたんです。こうすると後味がすっきりとするので。お口に合ったようで良かったです」
「ああ。美味いな」
　グリゴーリィーも傍で口元を緩めていた。
　思いの外、好評のようでリョウも嬉しくなった。
　ここにいる兵士たちは、皆、物静かで穏やかな雰囲気の人たちだった。年齢はばらばらだ。自分と同じような若者もいれば、壮年の域に入っていると思われる者もいた。北の砦のような溌剌とした、時として喧し過ぎるような賑やかな喧騒とは無縁の感じだ。立ち振る舞いも何処となく気品があって、教養ある文化人的匂いがした。
「へぇ、薬草か」
「君は、薬師なのか？」
　一人の兵士がそう訊いたが、
「……って、違うのか。でも見ない顔だな」
　リョウの左腕に巻かれていた第七師団の腕章とそのすぐ上にある顔とを順に見比べた。
「北の砦の方から来たのか？　隊長たちと一緒に？」
「ん？　でも昨日、顔出しに来た時にはいなかったよな」
　謎めいた存在を前にした所為か、興味津々に見つめられて、リョ

ウは居心地の悪さを誤魔化すように微笑んだ。
「ああ、これは、ここに入る為にルスランからお借りしたんです」
「隊長から？」
兵士の一人が意外そうな声を上げた。そして、周囲にいた兵士たちは、益々訳が分からないという顔をした。
リョウは上着の腕に付け直した腕章を指先で触れながら、自分が兵士でないことを明かした。
「北の砦の皆さんにはいつもお世話になっていますが、オレは一般庶民です。兵士ではありません。今は、養成所に通っている学生です」
「養成所の生徒か。ということは、君は術師を目指しているのか」
六人の中で、一番落ち着いた印象を受ける壮年の兵士が静かに尋ねた。
「はい。シーリスのお義兄さんが、そこで講師をしているとのことで、その伝手を頼って、今回、こちらに入学することになったんです」
それからリョウは、こちらに来ることになった経緯を簡単に話した。

噂話の切れ端　2）

そんなこんなで、リョウが兵士たちと束の間の休憩を楽しんでいるのと時を同じくして。

重厚な扉を一枚挟んだ応接室では、ユルスナールたちと客人の情報交換という名の雑談が交わされていた。

リョウが隣の執務室へと消えて、ユルスナールは一瞬だけ、興醒めな表情を浮かべたが、すぐにそれを引っ込めて、いつもの隊長しかりとした落ち着いた態度になった。

その変化に気が付いたのは、恐らく、ブコバルぐらいなものだろう。

――――――そう言えば。養成所で思い出したが。

そう前置きして、マクシームがゆっくりと長い脚を組み換えた。

「今、結構、面白い噂が出回っているんだが、もう耳に入っているか？」

そう切り出した。

「ああ。あれだろ。第三のゲオルグが、日参してるという」

――――――宮殿の侍女たちが頬りにぼやいていたぞ。その所為か知らないが、中々こちらに顔を見せないと。

相槌を打つようにスヴェトラーナが言葉を継いだ。

「日参とは、養成所の方にか？」

ユルスナールが確認するようにマクシームを見た。

「ああ。どうやらそのようだ。噂になるくらいだからな。日参かどうかは知らんが、かなり頻繁にあの界隈に出没しているということだろう」

「あ？　なんでまたんなとこに？　あいつ宗旨替えでもしたのか？」

意外だと言わんばかりにブコバルが眉を顰めれば、

「日参というのは解せないが、大方、術師繋がりで、向こうの講師陣と議論を交わしているんじゃないのか？」

ドーリンが至極真面目な顔をして最もらしいことを言った。

「どうだかな。あの男がそんな殊勝なタマだと思か？　どうせ女でも口説きに行っているんじゃないのか？」

スヴェトラーナは、顔をあからさまに顰めると嫌悪感丸出しで吐き捨てた。

第三師団・団長は、艶聞の絶えないことで王都では有名だった。単なる女好きというよりも遊び人と言った方が近いかもしれない。しかも、かなり性質が悪いというのがとある筋での評判だった。

黙っていても女が放って置かない容姿をしている上に女と見れば取り敢えず声を掛けずにはいられない性格だった。そして、甘い言葉を囁くのだ。

男にとっては挨拶代わりのようなものだが、それを勘違いして真に受けた女の方が、一人逆上せて後で痛い目に合うというのがよく聞く話だった。男慣れしていない純情な女程、中々にこじれるらしい。

娯楽（ゲーム）のように女たちの間を渡り歩き、そうして束の間の一時を楽しんでいるというのがもっぱらの噂だった。その毒牙に掛かった貴族の女性や宮殿に仕える侍女の数は知れず。

だが、元々、恋の駆け引きを楽しむ空気が存在する貴族階級の中では、その行為自体はあまり問題視されていなかった。要するに、【よくあること】なのだ。男を上手くあしらえない女の方にも相応の責任があるというような見方もされた。

スヴェトラーナは、貴族の出だが、その中でも珍しく、厳格な家風の中で育ったので、こういう軽薄な空気を心底唾棄していた。宮殿の奥向き勤めであるから、知り合いの侍女があの男の毒牙に掛かって傷ついたと知った時は、大層腹を立てたものだった。

早い話が、女の敵というわけだ。
なので、大抵、二人が顔を合わせると喧嘩腰の嫌味の応酬のようになった。宮殿内の廊下は、底冷えするほどの冷気と殺気が漂うらしい。二人が鉢合わせをした場面に出くわしたら、巻き込まれない為に速やかに撤退せよというのが、宮殿に勤務する人たちの暗黙の不文律のようになっているのだとか。
それはさておき。

「養成所に女など殆んどいないだろう？」
スヴェトラーナの発言を受けて、ユルスナールが養成所の生徒の構成比を思い出しながら首を傾げれば、
「だからさぁ、宮殿の女だけじゃ飽き足らなくなって、とうとう男の方にまで食指が伸びたんじゃねぇの？」
ブコバルは、ソファーに踏ん反り返ると嫌そうに片手を振った。
「だが、あそこにいるのは年若い少年たちだろう？」
ユルスナールは、昨日リョウの傍にいた新しく出来た友人たちだという若者の顔触れを思い出していた。
「だからじゃねぇか。むさいのよか、まだ、ほそっこい見目の良い奴がいいんだろ？　女の代わりにするんだから。なぁ、ドーリン？」
「……俺に振るな」
急に同意を求めるように顔を向けられて、ドーリンはギロリとブコバルを睨み付けた。

「議論が白熱しているところ水を差すようで悪いが……」
おかしそうにクスクスと喉を鳴らしながらマクシームが前方から割って入った。
「残念ながら、そういう色の付いた話ではないようだ」
人を食ったような口振りに、ブコバルは面倒臭そうな顔をした。
「何だよ、シーマ（マクシーム）。それならそうと早く言えよ！」
「……あれか、目ぼしい学生を引き抜こうとしているのか？　自

分のところに」
　少し考えた後、ドーリンの冷静な声が響いた。
「恐らくな。詳しいところは分からないが、考えられる理由としては、妥当なところだろう」
　そう言って、マクシームは優雅にカップを傾けた。
「相変わらず、地獄耳な男だ。だが、何もあの男自らが足を運ばなくともいいだろうに。無駄なことをする」
　スヴェトラーナが、ここぞとばかりに冷たく言い放った。
　そんな中、ユルスナールは一人じっと考え込むように口を噤んでいた。その顔が徐々に険しさを増す。眉間にぐっと深い皺が寄った。
　その脇で、ブコバルがふと思い付いたように声を上げた。
「リョウに聞いてみりゃあいいじゃねぇか。あいつはもう【パルトラー[5日]】[1]は通ってるんだろ？　ゲオルグみたいな目立つヤツがあんなところでうろついてたら、嫌でも噂になってるだろ。なぁ、ルスラン？」
　ブコバルは、そう言ってユルスナールを見たが、声を掛けられた当人は、考え込むようにして空を睨んでいた。
「おい、ルスラン？」
　ブコバルが大きな手をぞんざいにユルスナールの目の前でひらひらと振った。
「ん？」
　話を聞いていなかったのか、顔を上げたユルスナールにブコバルは再び同じ台詞を繰り返した。
「ああ。そうだな」
「そうと決まりゃあ」
　ブコバルはそう言って立ち上がると、のしのしと長い脚を繰り出して、扉の方に向かった。
「マクシーム。その噂が出てきたのはいつ頃からだ？」
　扉を勢いよく開くブコバルの背中を視界に止めながら、ユルスナールが低く聞いた。

「ああ、そうだな、確か……」
そう言って、のんびりと視線を天井に向けたマクシームの横で、
「ここ五日程のことだと聞いたが」
スヴェトラーナが表情を変えずに言えば、
「ああ、俺が聞いたのもそんなところか」
マクシームも鷹揚に頷いた。
それを聞いて、ユルスナールは無言のまま眉間の皺を一層深くしたのだった。

「おーい、リョウ！」
いきなり応接室に通じる扉が勢いよく開いたかと思と、中からブコバルが顔を出した。
お茶を飲みながら、のんびりと兵士たちと談笑していたリョウは、突然のことに驚いて振り返った。
「何ですか？」
ソファーから立ち上がったリョウに、ブコバルは親指を立てて顎をしゃくって見せた。
「ちょっと、こっち来い」
内心、首を傾げながらもリョウは大人しく求めに応じた。
「お前にちょっと聞きてぇことがある」
ブコバルはそう言うと、リョウを応接室の方に引っ張り込んだ。
そして、リョウは再び、ユルスナールたちがいる部屋に入ることになった。

部屋の中は、何故か重たい空気が停滞するように淀んでいた。しかも、それは真正面の一人掛けの椅子に座る若干一名が、発生源になっているようだった。
「お茶のお代わりはいかがですか？」

取り敢えず、話の接穂として聞いて見たが、それは空振りに終わった。

ブコバルは、気に留めることなく、リョウを促すように自分が座っていたソファーに座らせて、後ろから華奢な肩に両手を置いた。

まるで逃げるなとでも言いたげな仕草だ。

「あの……ブコバル？」

リョウは不安そうにブコバルを見上げたが、心の内の疑問もとって付けたような笑みに阻まれてしまった。

重たい空気の中、最初に口を開いたのは、ドーリンだった。

「リョウ、お前が通っている養成所で、妙な輩が徘徊しているというような噂はないか？」

「はい？」

リョウは、問われたことの意味が良く分からなくて、目を白黒させながら横に座るドーリンを見た。

「なんですか？　また、いきなり。変質者みたいな人が出没しているんですか？」

あの辺りの界隈はあちこちに関所のような門番の詰め所があり、警備が厳しい筈なのだが、養成所の周囲はいつからそんなに危険な地域になったのだろうか。

「アハハハ。これはいい。大方そんなところだろうな」

リョウの言葉に、突然、斜交いに座るスヴェトラーナが、声を立てて笑った。その端正な美人顔に似合わない豪快な笑いっぷりに、リョウは度肝を抜かれた。

「え？　本当に怪しい人なんですか？」

思わず身を乗り出したリョウに、前に座るマクシームが、宥めるように片手を上げた。

澄ました表情を取り繕ってはいるが、堪え切れない笑いを噛み殺すように口が不自然に歪んでいた。

「いや、そこまで心配をする必要はない。あの男は、それなりに身元はしっかりしているから」

だが、それはやけに引っ掛かるもの言いだった。
「ええと、つまり、見慣れない男を見なかったかということですか？　その人は、それなりに立場のある人なので養成所と外部を簡単に行き来できるけれども、学生たちの中では浮いてしまうというような？」
リョウが果たしてそんな人があっただろうかと考えながら口にすれば、
「おや、理解が早くて助かるよ」
マクシームは満足そうに微笑んだ。
リョウはちらりと横目でユルスナールを見た。
こちら側に来てから一言も口を開いていなかった。
ユルスナールは、膝の上で組んだ両手の上に顎を乗せて、その眉間には深い皺が刻まれていた。前傾姿勢で上半身を前に倒しているので、直ぐ目の前に、感情を削ぎ落した作り物のような造形があった。何が気に食わないのか知らないが、酷く不機嫌そうだ。
リョウはついと手を伸ばすと、ユルスナールの眉間を指で押さえた。そして、皺を伸ばすようにその場所の皮膚を横に引っ張った。
「ん？」
ユルスナールがなんだとばかりにリョウを見た。
「ルスラン、極悪人みたいな顔をしてますよ」
リョウがからかうように笑えば、額に置かれた指をそのままに、ユルスナールは不服そうな顔をした。
「すごい皺」
くいくいと伸ばすように引っ張ってみる。
「君は見かけによらず、中々はっきりものを言うんだな。しかも大胆だ」
そんな遣り取りを見て、マクシームは目を丸くした後、可笑しそうに笑った。
その指摘にリョウは慌てて手を放した。
ついいつもの乗りでやってしまったが、今は客人があったのだ。

ユルスナールは曲がりなりにも第七師団の団長で、それなりに地位のある人間だ。今のは余りにも気安く接し過ぎただろう。

「……で、リョウ。思い当たる節はあるか？」

やや強引に脱線しかけた話をユルスナールが元の位置に戻した。

ユルスナールは体勢を元に戻して、椅子の背に身体を預けるようにして足を組み、肘掛に肘を突いて、頬杖を突いていた。

改まった空気に、リョウは、これまでの情報を整理するように反芻してみた。

自分の周りで見慣れない人物など居ただろうか。そういう怪しい人がうろついていたという話も友人たちからは聞かなかった。至って穏やかな淡々とした日々だったように思う。

「ここ最近のことですか？」

「ああ。そうだな」

学生でも講師でもない人物。養成所にいるには違和感を覚えるような。

そこまで考えて、リョウの脳裏には、ふと、とある人物の顔が思い浮かんだ。

中庭のベンチで知り合いになったあの人だ。

「……あ」

でも、あの人は別段、怪しい人ではないだろう。そんな雰囲気は全くなかった。養成所を訪ねたのも用事があってのことであろうし。

リョウは、そっと心の中で中性的で艶やかな笑みを浮かべる男の顔を思い出していた。

「なんだ？　心当たりがあるのか？」

急に押し黙ったリョウに、ユルスナールがずいと身体を乗り出して来た。

「リョウ、気になったことがあるなら、大人しく吐いちまいな」

――――――その方が身の為だ。

両肩に乗っていたブコバルの手に力が入り、リョウはそっと上を

見上げて、そして後悔した。
そこには、何故か兇悪な笑みを浮かべた精悍な男の顔があった。
何だか捕らわれて自白を強要されている被疑者の気分になった。
こんなのは【ツェントル】での取り調べ以来だ。
そっと横を窺えば、続きを促すようにユルスナールがやけに真剣な顔をしてこちらを見ていた。
「あの……思い当たる節というか、……それに近い感じがしないでもないというか……」
間違っていたら随分と失礼な話であるので、取り敢えず慎重に言葉を選んだ。
何と言ったものかと躊躇っていると、
「要するに生徒でも教師でもない人物が居たということだな？」
的確に合いの手を挟んできたドーリンに、リョウは半ば観念する形で頷いていた。
「お前は、どうやってそれを知った？」
低く尋ねたユルスナールに、リョウは当時の事を思い出しながら口を開いた。
「少しお話をしたんです。最初は、同じ生徒かと思ったんですが、話している内にそれが違うことが分かって。でも、何をしている人かは知りません。軍部に関係しているというぐらいしか」
「もしかして、その人が君に声を掛けたのか？」
マクシームが身を乗り出しながら声量を落とした。
急に接近してきた男らしい顔にリョウは無意識に身を引いていた。
「はい。見かけない顔があるということで、気になったというようなことを仰ってました」
「会ったのは、その一度きり？」
「いえ。その後、大抵、日に一度はお会いしました。休み時間や空いた時間に中庭でお浚いをしていたりすると、どこからともなく現れるので」
そこまで口にすれば、ユルスナールは、大きな手で顔を覆った。

「念のために聞いておくが、その人はどんな感じの人だった？」
マクシームの瞳が怪しく光った気がした。
目の前から醸し出される妙な威圧感にたじろぎながらもリョウは言葉を継いだ。
「こんなことを言うのもなんですけれど、妙に色気のある綺麗な男の人でした。どちらかというと中性的で余り男っぽさを感じさせないような人です。淡い金色の髪に薄い灰色の瞳をしていて」
その時、急に肩に乗っていたブコバルの手に力が入って、太い指が食い込み、リョウは悲鳴を上げた。
「ブコバル、痛い」
「お、わりぃわりぃ。つーか、リョウ。お前、つくづく面倒なことに頭を突っ込みやがるな」
「なんの話ですか？」
呆れたように言われて、リョウは思わず後ろを振り返ったが、
「で、その男はお前に何の用だったんだ？」
ユルスナールの問いに再び顔を前に戻すことになった。
「そうですねぇ。最初は世間話みたいな雑談をしていたんですけれど、途中から雲行きが怪しくなって」
「あ？」
何故かユルスナールから凄まれて、リョウは肩を揺らした。

この国の人々は、会話の中で、もう一度、相手が言ったことを反芻したり（つまり、『え、なに？』という感じだ）、直近の相手の発言を確かめたり（『なんだって？』とか）、同意を求めたりする時（『ね、そうでしょう？』あたりだ）に、よく【あ？】という表現を使った。
初めてこれを耳にした時は、どうしてそこで凄まれるのだろうかとたまげたものだが、今ではすっかりその使い方にも慣れ、自分で使っても違和感を覚えない位にはなったが、これまでユルスナールから自分に対して使われたことは余りなかったので、少々驚いてし

まった。
　蛇足になるが、この場合、ユルスナールは、『なんだと?』という意味合いで使ったのだ。

「何を話した?」
　いつにない厳しい雰囲気の男を前にしてリョウは面食らった。何故、急に機嫌を急降下させたのか、その理由が分からない。何か不味いことでもあったのだろうか。
「いや、その、術師になったら、軍部に籍を置かないかと勧誘を受けまして……」
　そこまで言うと、只でさえ鋭く迫力のある男の目が眇められて、リョウは慌てた。
「勿論、丁重にお断りしましたよ? こっちにそんな気は全くありませんから。でも向こうも中々諦めが悪いようで、その後も何度か話を蒸し返されて。今の所、平行線を辿って……いま……す」
　そこまで語り終えると、何故か周囲には言い様のない沈黙が落ちていた。先程の比ではない位、重苦しい沈黙だった。
　リョウの背中には、冷や汗が流れた。良く理解できないが、何か大変なことをしでかしてしまったということは感じ取れた。
　そんな中、
「はぁぁぁぁぁ」
　ブコバルがやけに大げさな溜息を吐いた。
「おっまえなぁ、妙なもん引っ掛けてくるなよ。なんか憑いてんのか、こりゃ」
　緊張感のないブコバル特有の言い回しだが、そこには明らかに非難の意味合いが込められていた。
　リョウは見当違いな八つ当たりをされている気分になった。理不尽な言い掛かりだ。何故、そんな風に言われなければならないのか、全くもって理解できない。
「なにか問題でもありましたか?」

不可解な気持ちを押し隠すように聞けば、
「大ありだよ」
軽く頭を後ろから小突かれて、リョウは不機嫌さを隠すことなく口を引き結んだ。
「その男は名乗ったか？」
再び、ユルスナールから問われて、
「あ、はい。ゲーラさんと仰いました」
リョウはその人物から聞いた名前を告げた。
すると。
一瞬の間の後、何故か周囲は爆笑の渦に包まれた。
「あ？」
「アハハハ。なんだ、そのふざけた名前は」
「うっわ、あの顔でゲーラかよ」
「ハハハハ。それはあんまりだ」
「なんどもえげつない」
ドーリンまでもが小さく喉の奥を震わせる始末。

リョウは一人置いてけぼりを食ったように途方に暮れて周囲を見渡した。
どこに笑う要素などあっただろうか。
あの人は、自らゲーラと呼んでくれと言ったのだ。
これまでこの国で培ってきた感覚から言えば、その呼び名とあの人は別段可笑しくもなかった。かなり癖のある人物であるには違いないが、理由なく貶める必要はない筈だ。
ゲーラと言葉を交わしたことは、そんなに不味いことだったのだろうか。
だが、それはユルスナールたちから見た見解で、リョウとしては単に少し話をしたということに過ぎなかった。それだけで、どうしてこのような仕打ちを受けなくてはならないのだろうか。勧誘の件もちゃんと断っているし、今後もその意志は変わらなかった。この

事で彼らに迷惑を掛ける積りはないし、自分で対処する積りだ。
――――――それなのに。
リョウは、突如として湧いてきた疎外感に虚しさを覚えた。それと同時に腹立たしさと苛立ちと口惜しさと哀しさと、様々な言葉にならない感情が一遍に押し寄せてきて、身体の内側が震えてくるのが分かった。
この五人は、昔からの知り合いで知識も経験も共通の土台を持っている。張り合おうなどとは更々思ってもいなかったが、訳が分からない内に話が進み、挙句の果てに笑われるのは、それがたとえ自分のことでなかったとしても不愉快で仕方がなかった。
リョウは拳を握り締めると高ぶりそうになる気持ちを鎮める為に深呼吸をした。
このままこの場にいてはいけないと思った。きっと感情のままに余計な事を口走ってしまいそうだった。
リョウは表情を消すと無言のまま、すっくと立ち上がった。
そして、一呼吸。
伏せていた顔を上げた時には、余所行きの笑みが張り付いていた。
「それでは話も終わりましたことですし、自分はこれで」
――――――失礼します。
慇懃に礼をすると、その場から立ち去るべく踵を返した。
「あ、おい、リョウ?」
突然のことにユルスナールが訝しげな声を上げたが、リョウは振り返ることなく室内を横切ると執務室へと通じる扉へ手を掛けた。
「どこへ行く?」
急に硬化した態度にユルスナールは顔色を変えると椅子から立ち上がった。
リョウは、扉を開くとその場で振り返り、どこか他人行儀な微笑みを浮かべた。
「今日はこれで失礼します」
室内に残った人々に軽く会釈をして、開いた扉の向こうへ身体を

滑り込ませるともやもやとしたものを断ち切るように空間を遮断した。

執務室では休憩を終えた兵士たちが仕事を再開し、再び独特な摩擦音の混じる静けさが支配していた。

応接室へと通じる扉が開いたことでグリゴーリィーが顔を上げた。

それにそっと微笑んで。

そのまま、出口に向かおうと足を踏み出した所で、閉じたばかりの応接室の扉が再び勢いよく開いた。

「リョウ、待て。一体どうしたんだ？」

焦りの表情を隠すことなく、慌てた様子のユルスナールが足早に近寄って来た。

リョウは歩き出していたが、不意に腕を掴まれて進行を阻まれた。

思いの外、腕を掴まれた力は強く、リョウは痛みに微かに眉を寄せた。

「今日はゆっくりして行けるんだろう？」

驚きと戸惑いがユルスナールの声には表れていた。

リョウは、ぎこちない微笑みを浮かべて自分を引き留めた男を見上げた。そして、困惑を滲ませている瞳に向けて、緩く頭を振った。

「今日はこれで帰ります」

腕を掴む手を外そうと手を掛けたが、逆にそれを掴まれてしまった。

「リョウ。何を怒っている？」

その台詞にリョウは苦笑を返していた。そして、出来るだけ静かに言葉を紡いだ。

「怒っているのは、ルスランの方じゃありませんか？　ワタシはゲーラさんと知り合いになった経緯をお話ししたまでです。ワタシにとってあの人は、単に挨拶を交わす程度の顔見知りに過ぎません。

そのことをあなた方にとやかく言われる筋合いはない筈です。そちらには、そちらなりの事情があることは分かります。ですが、それにワタシを巻き込まないでください。訳が分からないうちに、あんな憤りやら不満やら不機嫌な感情をぶつけられても、ワタシには…どうしようも……ありません」

小さくともリョウの声は静まり返った室内に響いていた。

自分で言っていて、酷く悲しくなってきた。涙が滲みそうになって、慌てて顔を背けた。

「ですから、今日の所は、これで失礼します。色々と混乱してしまいそうですので」

その述懐に、ユルスナールはあからさまに動揺したようだった。リョウの反応は、恐らく、思ってもみなかったものなのだろう。

リョウが顔を背けた際に眦に溜まっていた涙が、一筋、頬を伝って落ちた。

「ルスラン、放してください」

リョウは、こんな時でも微かに微笑みを浮かべて、困ったように掴まれた腕を見た。その様子は、どこか痛々しくさえあった。

これならば、直接怒りを顕わにしてもらった方が、ずっとマシだった。まさか、このように哀しい微笑みと共に詰られるとは思ってもみなくて、胸が痛んだ。

ユルスナールは、髪を掻き毟ると大きく息を吐き出した。

「リョウ、済まなかった。だから、そんな顔をするな」

ユルスナールはリョウの身体を引き寄せると、まるで壊れ物を扱うようにそっと抱き締めた。そして、涙の滲む顔を自分の胸元に押し付けて、宥めるように軽く頭と背中を叩いた。

ユルスナールは自分の至らなさを苦々しく思いながら口を開いた。

「リョウ、悪かった。お前に不快な思いをさせたな。俺の考えが足りなかった。謝る。だから、機嫌を直してくれ」

ユルスナールは腕の力を緩めると、リョウの顔を覗き込んで頬に残る涙の跡を指で拭った。そして、その眦に許しを乞うようにそっ

と口付けた。
広い執務室内は、異様な程の静けさと緊張感に満ちていた。誰も物音の一つも立てない。息をするのも躊躇われるように、じっと、信じられない面持ちで、この成り行きを見守っていた。応接室へと通じる扉は全開状態で、ここでの一幕は、全てあちら側にも筒抜けていた。
停滞した空気を打ち破ったのは、応接室の方からその長身を現したブコバルだった。
「あー、ルスラン、その辺にしとけ」
ブコバルは、そう言うと態とらしく咳払いをした。
そして、どこか苦い顔をして、
「リョウ、悪かったな。お前がそんな風に受け取るとは思わなかった。取り敢えず、こっちに戻れ。な？」
意外な程に優しい声音で諭すように言った。
リョウは、顔を上げると気まり悪そうに目を泳がせた。
「すみません。みっともない真似をしました」
それから、改めて周囲を見渡して、自分の置かれた状況を思い出したようだ。
神聖な仕事場でなんてことをしでかしてしまったんだろう。
穴があったら入りたいくらいの恥ずかしさが込上げて来た。まるで癇癪持ちの子供みたいなことをしてしまった。
だが、まず、仕事を中断させてしまった無礼を詫びなければならない。
リョウは、ユルスナールの腕の中から離れると室内を振り返り、深々と頭を下げた。
「お仕事の邪魔をして申し訳ありませんでした。どうか続けてください」
その言葉に、目があったグリゴーリィーは頷くと他の兵士たちを通常業務に戻るように促した。
そして、ややぎこちないながらも、紙の摩擦音やペンを走らせる

音が聞こえて来たのを背に、再び応接室の方に戻ることになったのだった。

中に入ると、

「お騒がせいたしました」

微妙な空気の中、リョウはスヴェトラーナとマクシーム、そしてドーリンに非礼を詫びた。

「いや」

「気にするな」

「リョウ、済まなかったな」

ドーリンまでもが謝罪の言葉を口にして、リョウは小さく微笑むと緩く首を横に振った。

「てかさ。この辺でいいだろ。お前らも忙しい身なんだから、いい加減、戻ったらどうだ？」

ブコバルのその一言で、この場はお開きになった。

帰り際、ブコバルは客人二人に何事かを耳打ちした。二人は目を見開いて顔を見交わせたが、何も言わずに頷いただけだった。

そして、二人の客人は其々の業務に戻るべく、自分たちの持ち場に帰ったのだった。

シーリスが【アルセナール】にある第七師団の執務室に顔を出したのは、そんなぎこちない空気が漂っている時だった。

「どうしたんですか、一体？」

開口一番、室内に漂う微妙な空気を感じ取って、シーリスはぐるりと周囲を見渡した。

発生源を探す。その視線がとある一点で留まった。

そこには、目の縁と鼻の辺りが少し赤くなっているリョウの姿があった。

泣いたのだろうか。いや、この場合、泣かされたのだろうか。自

己抑制の取れた落ち着いた性格をしているリョウが人前で取り乱すのも珍しいことだ。

シーリスは、真っ先にリョウの元に歩み寄った。

「リョウ、こちらにいましたか。ちょうど良かったです。あちらへ連絡を入れようとしていた所だったんですよ」

シーリスは、敢えて何気ない様子でこのいつもとは違う雰囲気には触れずに用件を切り出していた。

「どうかしたんですか？」

シーリスに向けられた表情は、いささか硬さが残るものの、心配しているような影のようなものはなかった。それを感じ取ってシーリスは安堵の笑みを浮かべた。

「昨日お約束した街中見物に出掛けませんか？　ちょうど時間が空きましたので誘いに来ました。今からでもどうですか？　どうせなら夕食も一緒に取りましょう。美味しいと評判のお店に案内しますから」

そう言って自信たっぷりに片目を瞑ったシーリスに、

「本当ですか！」

リョウは途端に表情を明るいものにして食い付いたようだった。素に近い反応で作ったようなものではない。それを見て、シーリスも柔らかく微笑んだ。

その横で急に入った横槍に不満そうな顔をしている強面の男が一人。そして、その状況を面白がっている態度のでかい男が一人。そして、その様子を一歩引いた立ち位置で淡々と眺めている物静かな男が一人いた。

原因はここにあるのだろうことは容易に想像が付いたが、その中身までは流石のシーリスも分かりかねた。だが、それはこの場で追及することではないだろう。

「あ、でも……」

リョウは、顔色を変え、躊躇うようにそっと隣に立つ不服そうな顔をしている男を仰ぎ見た。

ユルスナールは、瞬時に表情を柔らかいものに変えると（その変わり身の早さにはシーリスも開いた口が塞がらなかった）、リョウの腰の辺りに手を伸ばし、そこを優しく叩いた。
「お前の好きなようにしろ」
何の罪滅ぼしかは知らないが、酷く甘ったるい声を出していた。
リョウは喜色を浮かべて頷いた。
「だが、俺も一緒に行くぞ？」
そう言って、ユルスナールは横目にシーリスを見た。
シーリスは、心の内でげんなりしながらも傍目には鷹揚に見えるように肩を竦めた。
「はいはい。どうぞ、構いませんよ」
そして、序でとばかりにその横に視線を流した。
「ブコバルはどうします？　それからドーリンは？」
この二人も一緒に付いてくるのだろうか。
そう思って訊けば、
「あー、俺はこの後、家に戻んなくちゃなんねぇから駄目だわ」
「俺は仕事が残っている」
どうやら、二人は不参加のようだ。
「そうですか。それは残念ですね」
そう口にしてはみたものの、言葉尻ほど残念には思っていない様子で、シーリスはおっとりと微笑んだ。
その後、シーリスは、この場所で渉外活動や中央との折衝といった内部調整に携わり、この執務室全般を取り仕切っているグリゴーリィーと二、三簡単に連絡事項を取り交わす傍ら、さり気なくこの場であった一連の出来事について事情を聞きだしていた。
そして、後に残すこの部屋の兵士たちに当たり障りのない情報を差し出してから、恐らく不自然な空気の原因となった二人を引き連れて、この場所を後にしたのだった。

噂話の切れ端　2）（後書き）

ゲーラというのは、ゲオルグの愛称でした。
恋をしている間というのは、上手く感情がコントロールできずに、時として突発的激情にとらわれたりするものですが、今回のリョウも恐らくそのような感じです。いきなりな展開で分かりにくかったかもしれませんが、そのようなものだと思っていただけると助かります。
さて、今後ゲーラがどう絡んでくるのか。作者自身ドキドキしております。
それでは、また次回にて。

貴婦人の邸宅

「おかえりなさいませ。ユルスナール様」
玄関で出迎えた男に一つ鷹揚に頷くと、銀色の髪をしたこの国の軍部の制服に身を包んだ体格の良い男は、手にしていた外套を預けた。
足早に邸内を歩きながら、男は、自分の直ぐ後ろを影のように付いてくる黒い上下に身を包んだ男に告げた。
「これからまた出掛ける。夕食は外で取ってくるから、兄上たちには、そう伝えておいてくれ」
「畏まりました。お戻りにはこちらに？」
慇懃な初老の男の問い掛けに、銀色の髪の男は少し考えるような素振りを見せた後、小さく首を横に振った。
「いや、軍部の方になるやもしれん。なにか急用があれば、そちらに連絡を寄越してくれ」
「承知いたしました。それとパーシヴァル様から書簡が届いております」
「返事は？」
「出来れば早めに欲しいとのことでした。それからリガルスキー様よりお茶会のお誘いが。招待状を頂いております」
「そのようなものなど義姉上たちに任せておけばよいではないか」
軍服の詰襟を緩めながら、どこか不服そうな声を上げた男に、対する初老の男は小さく微笑みのようなものを浮かべると鷹揚に返した。
「この度、こちらにお戻りになられたことを早くもお耳に挟んだのでございましょう。ご婦人方の情報網は侮れません」
その言葉に男は小さく息を吐き出した。
「分かった。日時をみて、こちら側の予定を照合してから返答をし

よう。いずれにせよ、一度は顔を出さねばなるまい」
「はい。それがよろしいかと」
そうこうするうちに廊下を歩いていた男とそれに着き従う初老の男は、とある一室の前まで辿りついた。
そのまま、重厚な扉に手を掛けて中に入ろうとした男に、
「ああ、それから」
この広大な邸宅の奥向き全般を取り仕切る初老の男は、その耳元に近づくと、一言、二言小さな囁きを加えた。
「分かった。善処しよう」
途端にどこか苦々し顔をして大きく息を吐いた男に、初老の男は静かに頷くと一礼をしてから丁寧な所作で踵を返し、次の仕事をするべく己が持ち場に戻ったのだった。

あれから、街に出るのに隊服のままだと都合が悪いということで、一度、着替えに戻るというユルスナールに連れられて、リョウは、ユルスナールの実家だという大きなお屋敷を訪れていた。同じように着替えに戻るというシーリスとは、途中で待ち合わせをすることになっていた。
名立たる貴族の邸宅ということで、そこは想像以上の空間が広がっていた。
ユルスナールの実家は、王都の中でも宮殿に近い区画の貴族の邸宅が立ち並ぶ一角にあった。
目の前に建つ広い邸宅を前にリョウは唖然とした。
二階建ての重厚な石造りの建物が同じく背の高い堅固な門の向こうに見えた。門から玄関口まではかなり距離がある。それを取り囲む敷地も広々としていた。周囲には似たような門構えの家々が、目測で大体等間隔に並んでいた。
貴族であるとは聞いていたので、それなりのところだろうとは覚

悟していたが、目の当たりにした光景は、遥かに予想を越えていた。
門の前で、リョウは呆気に取られたように隣に立つ男を見上げた。
見上げた先にあるその横顔は、当たり前だが、平然として涼しげである。
「ルスラン……本当にいいところのお坊ちゃんだったんですね」
半ば放心気味に呟けば、
「なんだその例えは」
酷薄そうな表情をそのままに、訳が分からないというような顔で見下ろされてしまった。
「こんなものすぐに慣れる。只の家だからな」
――――――ほら、いくぞ。
そう簡潔に吐き捨てて、歩き出した長身にリョウは慌てて付いていった。

玄関口に入ると、落ち着いた雰囲気の初老の男が音もなく現れて、慇懃な態度でユルスナールを出迎えた。そこはホールのように広い吹き抜けの空間が広がっており、明かり採りの窓から差し込む陽射しに外と同じくらいの明るさが保たれていた。脇の方には上階に上がる階段がある。
リョウがぼんやりとしているうちに、ユルスナールは待ち受けた初老の男と慣れた様子で留守中の来客の有無やもたらされた書簡についての処理等に付いて言葉を交わし、指示を出していた。
そして、二人はそのまま廊下を歩き始めた。
着替えに行く為に邸内を恐らく自室に向かって歩き始めたユルスナールの後をついて行くか迷ったが、リョウは大人しく玄関口で待つことにした。
ユルスナールと執事らしい男の邪魔をしたくないという気持ちもあったし、何よりもこの場所の雰囲気に気圧されていたからだ。
リョウは気後れを感じていた。住む世界の違いをまざまざと見せ

付けられた気がしてならなかった。

そうしている内に、戻ってきた執事の男と目が合って、リョウはそっと目礼を返した。

「ユルスナール様のお連れ様ですね。主の支度が整いますまでどうぞこちらへ」

そう言って、丁寧な所作で別室に案内しようとする。

リョウはその誘いを小さく首を振ることで断った。

「いいえ。自分は、こちらで待たせていただきます。お気遣いありがとうございます」

第七師団所属の腕章を着けたままである（その方が都合がいいだろうと言われたのだ）自分は傍目にも上官に付き従う従者といったところだろう。規律の厳しい軍隊では、上官の家で下級兵士、ましてや一兵卒のような輩が寛ぐ訳にもいくまい。

物静かに目を伏せれば、心得たもので執事の男は何も言わずに奥へと引き返した。

そうしてリョウは、一人広い玄関ホール内に止まった訳だが、ユルスナールを待つ間、一人、この広い空間を持て余していた訳でもなかった。

というのも玄関口から二頭の白い毛並みの大きな犬が勢いよく飛び込んできたからだ。

どうやら番犬よろしく放し飼いにされているらしい。

『おや、かようなところに珍しい客人が』

『はてはて面妖なこと』

飛び込んできた二頭の犬は、勢いのままに邸内を駆け抜けようとして急停止をし、進路を変えた。

「こんにちは。お邪魔してます」

リョウが挨拶をすれば、くんくんと鼻を鳴らしながら傍によって、見慣れぬ人間の匂いを嗅ぎ始めた。

『ほうほう、これはなにやらよき匂いがする』
『なんと、どれ、わしも』
自分とあまり背丈（全長）の変わらない大きな犬二頭にじゃれつかれて、リョウはくすぐったそうに首を竦めた。
ざらりとした大きな舌で頬を舐められる。
「わわわ、くすぐったい。ちょっと、待って」
『これ、カッパ、そなたがやめい』
『ラムダ、何を言う。そなたこそやめい』
「二頭とも、もういいから」
『『これはしたり』』
一時的な興奮が治まったのか、二頭は大人しくリョウの足元に控えた。
リョウもその場で膝を着くと、わしわしと犬たちの顎の下や首筋などを撫でてやった。こうするのもスフミ村のナソリ以来、久し振りの感覚だ。
「キミたちはこのお屋敷に住んでるんだ？」
落ち着いた所でのリョウの問いかけに、
『『左様』』
右と左から重低音が重なって聞こえた。
「兄弟？　それとも双子？」
『儂が兄じゃ』
右が鼻を寄せれば、
『儂が弟じゃ』
左も同じように鼻を鳴らす。
「カッパがお兄さんでラムダが弟だね？」
二頭の会話と印象から確認するように聞けば、小振りの耳がピンと嬉しそうに立ち上がった。
『これはしたり』
『よう判じたものじゃ』
感心したように言われて、リョウは小さく笑った。

正直な所、どちらがどちらかは、当てずっぽうだった。だが、まぁ正解であったようで何より。

白い艶のある毛並みに腹の当たりに少しだけ灰色が混じっている方がカッパ・兄の方で、同じく白い毛並みに尻尾の辺りに灰色が混じっている方がラムダ・弟という訳だ。

『うぬはルスランの連れか？』

『三男坊もやりおるの』

二頭の問いかけにリョウも鷹揚に頷いた。

「そう。今、着替えにいってるんだ」

『出掛けるのか？』

『いや、仕事であろう？』

「うん。出掛けるけれど仕事じゃないよ」

一言話す度に、二方向から一遍に答えが返ってきて、リョウは不思議な気分を味わっていた。

だが、そうやって存外楽しく過ごしていると。

着替えを終えたユルスナールが玄関ホールに颯爽と姿を現した。先程の軍服とは違い、装飾の省かれた上下を着ている。要するに見慣れた姿だった。だが、それも王都仕様なのか、生地は十分上等そうなものを使っていることは素人目にも見て取れた。

大きな白い犬二頭の間に埋もれた黒い頭髪を認めて、ユルスナールは密かに笑みを噛み殺したようだった。

主の到着を察知してか、素早く耳を立てた二頭に促されるようにして顔を上げたリョウは、ユルスナールのどこか可笑しそうに細められた視線を受けて微笑んだ。

そのまま口を開こうとしたその時だった。

「ルーシャ！」

歓喜に満ちた高音のよく響く甲高い声が聞こえたかと思うと、外から一人の若い女性が飛び込むようにして玄関ホールに現れ、足早

に目の前を通過していった。
年若い女性は、淡い紫色の長いドレスの裾を翻して、一目散にユルスナール目がけて走り寄るとその細い腕を目一杯回して抱き着いた。
リョウは突然のことに度肝を抜かれて、口を半開きにしたまま目を瞬かせた。
――――――ルーシャ。
もしかしなくとも、それはユルスナールのことを差したのだろう。
幼い子供ならいざ知らず、大の大人に向けるような愛称とは思えなかった。ましてや強面の男に対しての呼び名とするには違和感があり過ぎた。
リョウは思わず吹き出しそうになるのを堪えた。
それは、ユルスナールの幼い頃の呼び名だろうか。
子供の頃の呼び名を今でも使う相手の登場だ。
そうこうするうちに広いホール内をやや興奮気味の甲高い女性の声が響き始めた。
「ルーシャ！　いつこちらにお戻りになったの？　すぐに知らせてくれないなんて酷いじゃない！」
熱烈な抱擁付きの挨拶をユルスナールは慣れたようにあしらった。
「着いたのは一昨日だが、これまでなにかと忙しくてな。元気にしていたか、アリアルダ？」
逞しい首筋に齧りついた細くしなやかに伸びた腕をやんわりと外して、若い女性と距離を取った。
「ええ、変わりなくってよ」
「ズィンメル殿と奥方は？」
「お父様もお母様も相変わらず」
「そうか」
「それよりも以前のようにアーダとお呼びくださいな。堅苦しいのは嫌ですわ」
その女性は、甘えたようにそう口にするとユルスナールの腕を取

り寄り添い、嬉しさに満ちて輝いている顔を男へと向けた。
「ねえ、ルーシャ、これからお茶にしましょう？　ちょうどお姉さまとの街で評判の焼き菓子を買ってきたところなのよ。これから一緒にお茶にしましょうってお話ししていたところなの」
白い肌に薔薇色に染まる艶やかな頬。明るい金色の髪を綺麗に結い上げ、ほっそりとした項が顕になっている。瞳の色は赤みがかかった琥珀を思わせる色だった。
まるで、繊細なお人形のような姿だ。
「いや、せっかくだが、これからまた用事があってな。出掛けなくてはならん」
やんわりと断りの言葉を吐いた男に、
「もう、お仕事ばかりね。せっかくあんな辺鄙なところから帰ってこられたのだから、偶にはゆっくりしたらいいのに。お仕事なんて部下に任せて置けばいいじゃない。何も隊長自らが動く必要が無いのではなくて？　有能な部下が揃っているのでしょう？　お父様がそう言ってらしたわ」
鈴の鳴るような軽やかな声は、まるで歌でも歌っているかのように滑らかに抑揚のある旋律を紡ぐ。
ほんの少し拗ねたように女が口を尖らせれば、
「そうは行くか」
ユルスナールは苦笑を滲ませた。
優しいよく知る相手を宥めるかのような声音だった。
そうやって寄り添う二人の姿は、絵になると純粋に思った。

リョウは不意に見てはいけないものを見てしまった気分に陥った。
これまで目を背けて余り考えないようにしてきた現実が、目の前で展開されていた。
覚悟が出来ているなどとは聞いて呆れる。それをこのようにして思い知らされるとしても、まだ先のことだろうとどこかで思っていた。

自嘲的な笑みが薄らと口元に浮かんでは消えた。
ユルスナールの隣に立つのは、きっとあのような女性だ。突き付けられた現実は、余りにも唐突で、残酷だった。
リョウは喉元に競り上がってくる苦いものを慌てて飲み込んだ。このような醜い気持ちを勘づかれてはならない。
そして、そっと目を伏せた。
『いかがした？』
『顔色が優れぬぞ？』
すぐ傍から二対の切れ長な目に覗き込まれて、リョウは咄嗟に表情を取り繕った。
「いや、大丈夫だ。なんでもないよ」
そう口にしてみるものの、それを告げる表情は些かぎこちなくなっていた。
これ以上追及されては敵わないと思い、逆に質問をした。
「あの綺麗な人は？」
『ああ、あれはアリアルダ』
『あの男から見たら義理の妹といったところか』
『あの姉がルスランの長兄に嫁いでな。親戚関係にある』
『元より付き合いはそれなりにあったがの』
「つまり、幼馴染み…ってことかな？」
幼いころからユルスナールのことを知る人たち。少なくともあの女性は、ユルスナールに並々ならぬ感情を抱いていることが傍目にも良く分かった。
『ああ、そういうことになるか』
『ほれ、噂をすればじゃ』
ピンと尻尾を立てたラムダが見る方向を同じように見やれば、優雅に着飾った一人の婦人が、淑やかに玄関ホールの中に入ってきたところだった。薄い灰色の外套に淡いくすんだ黄色のドレスの裾が翻る。
「まぁまぁ、アーダ。急に駆け出すからなにかと思えば。あらあら、

ルーシャが帰ってきたのね」
静々と長いドレスの裾を滑らせながら、目鼻立ちの整ったすっきりとした顔立ちの女性が現れた。先程の若い女性よりも随分と年上な印象だ。気品溢れるおっとりとした佇まいは、いかにも良家の奥方という感じを受けた。
その女性は、ユルスナールとその傍に寄り添う年若い女性の方を見ながらも、不意に視線をずらすと、二頭の大型犬に挟まれるようにして片膝を着く見慣れぬ人物に気が付いたようだった。
「あら、カッパとラムダも先に行ってしまったと思ったらあんなところにいたのね。あら、どなたかしら？　あんなに懐いているなんて珍しいわね」
おっとりと微笑むその女性と目が合って、リョウは静かに目礼を返した。
「あら、あなた、ルーシャの新しい付き人かしら？」
そのまま、興味が惹かれたようにこちらに歩み寄ってきた貴婦人に合わせる形で、傍にいる二頭を促しながら、ゆっくりと立ち上がった。
「まぁ、随分と可愛らしい感じの子が入ったのね」
その女性はそう言って目を細めると白い指を伸ばして、リョウの頬にそっと触れた。
目線は、やはり自分よりも幾分上だった。この国の基準に漏れず、二人の婦人は背が高かった。足下のヒールのある靴もそれを助長していることだろう。
イリーナの時も思ったが、この国では女性でも意外に初対面の相手に対して身体的接触を持つようだった。間合いも随分と近い。まぁ、向こうとしては自分の外見から判断して、子供に接しているような積りなのかもしれないが。
いきなり頬を触れられても、リョウは顔色を変えることなく、無言のまま、静かに目礼をするに止めた。
「あら、随分と恥ずかしがり屋さんなのね？」

口を開かないリョウに、その女性がからかうように言った。
「義姉上、その辺りにしておいてください」
一部始終を見ていたユルスナールが見かねて間に入ったが、それも余り効果が無いようだった。
「まぁ、堅いことを言わないでちょうだい、ルーシャ。あなたが付き人を連れてくるなんてなんて珍しいじゃない。それにこんなに珍しい顔立ちをしているのですもの。黒い髪に黒い瞳なんて、わたくし初めて見たわ。ふふふ。お伽噺の【夜の精】みたいね」
貴婦人はそう言って、じっとリョウの顔を見つめた。
リョウは居心地が悪そうに身じろいだ。自分がまるで見せ物になったような気分だ。相手に他意はないのだろうが、余り気持ちの良いものではない。
これまでの会話の内容から、この女性がユルスナールの兄嫁なのだということは分かった。カッパの言を借りれば、長兄に嫁いだ人なのだろう。

「そうだわ。折角だから皆でお茶にしましょう？」
いい思い付きだというように貴婦人が手を合わせれば、
「それはいいわ、お姉様、ルーシャにも先程そう誘ったばかりなのよ」
意気投合して顔を輝かせた二人に、ああこの二人は姉妹なのだということをぼんやりと思った。
ちらりと横目に見たユルスナールは、どこか苦い顔付きをしていた。困惑をしているようだ。珍しいことがあるものだ。どれくらい年が離れているのかは知らないが、長兄の兄嫁ということで、常日頃から頭が上がらないのかも知れない。
「いや、義姉上、アリアルダにも話したが、これから出掛けるので」
その口調はやはりどこか遠慮をしたものだった。
「まぁ、随分とつれない事を言うのね。偶に帰って来たと思ったら。さぁさぁ、よく顔を見せて頂戴、義弟に会うのも随分と久し振りだ

わ」

そう言って、義姉はユルスナールの方に歩み寄ると、その華奢な手を伸ばして男の頬に手を当てた。

その子供に対する様な仕草にリョウは、何らかの力関係（ヒエラルキー）を垣間見た気がした。

ユルスナールも実家に帰るのは随分と久し振りのようだ。この分だと親しい家族との時間を優先させた方がいいのだろう。折角の空いた時間を自分に付き合わせるのは申し訳ない気がした。それに余り遅いとシーリスも心配するだろう。

年若い妹の方は、愛しい男との時間を邪魔する軍部の人間（この場合はリョウである）を冷めた目で睨むように見ていた。

向けられたある意味あからさまな感情に苦笑い。あの子もあの子なりに必死なのだろう。恋をしている乙女というものは、強く逞しいものだ。

それにしても今日は色々と上手く行かない事が続くものだ。

今日一日、これまでの事を思い返しながら、リョウは内心そんなことを思った。ひょっとしたら、そういう巡り合わせの日なのかもしれない。

リョウは二人の姉妹に挟まれている男に静かに向き直ると声を掛けた。

「隊長。この後は、どうぞこのままご実家でご家族とお過ごしになって下さい。自分の方はお気になさらず。こちらはなんの問題もありませんから。折角のお休みを有意義に使わなくては罰が当たります」

そう言って慇懃に敬礼をしたリョウに、ユルスナールは虚を突かれた顔をして、目を見開いた。

「リョウ、何を言っている？」

訝しげに細められた目に、

「優先順位が違います。自分の方は大丈夫ですから」

敢えて穏やかに微笑むとその傍にいる二人の女性に対して、
「ご迷惑をお掛けいたしました」
小さく頭を下げた。
その言葉に姉妹は俄然、喜色を浮かべた。
「そうこなくっちゃ。良かったわね、ルーシャ」
「まぁ、よかったわね、アーダ。ルーシャもほら、折角のお休みなら、なにも問題ないでしょう？　あの子の言う通り、家族との時間は大切にしなくては駄目よ。さ、こちらでお茶にしましょう？　美味しい焼き菓子を買ってきたのよ。ああ、それはアーダから聞いたわね」
「ねぇ、ルーシャ、行きましょう？　あんな従者なんか放って置いて構わないわ。ねぇ？」
姉妹の心を躍らせた会話にリョウはほんの少しだけ傷ついた顔をしたのだが、それも直ぐに消えてしまった。
「それでは自分はこれで失礼します」
そう小さく口にするとリョウは踵を返した。
ユルスナールの顔は見られなかった。
「リョウ、待て」
玄関口まではなんとか平静を保って足を進めた。そして、そこを潜り抜けると、一目散に駆け出した。
「あ、おい、リョウ！」
ユルスナールの焦った声が後方から聞こえたが、気が付かぬ振りをして、そのまま駆け抜けた。

『帰るのか？』
『よいのか？』
門を目指して駆けていると左右の脇に白い毛並みの大型犬が並んだ。ちらりとこちら側を案じるような視線を向けてくる。
門の所まで着くと来た時と同じように小さな脇の潜り戸を抜けた。
柵の前で、リョウは追ってきた二頭に柵越しに向き直った。

こちらとあちらを隔てる境界線だ。世界の違いをまざまざと見せ付けられた。それを早い段階で知ることが出来て逆に良かったのかもしれない。今なら、まだ引き返せる。

そんなことを頭の隅で考えた自分に嫌気が差した。

「じゃぁ、またね。カッパ、ラムダ」

柵越しに伸ばした手で二頭の頭を撫でた。もうここに来ることもないだろう。

『そなた、何故かように苦しげな顔をしておる』

兄のカッパが、気遣わしげな声を上げた。

「急に走って疲れちゃったみたいだよ」

そう言って小さく笑ったリョウに、

『嘘を吐くでない』

弟のラムダが詰るように言った。

「中々、現実は上手く行かないものだね」

『何の話をしておる?』

『分かりやすく話せ』

「気持ちだけではどうしようもないことがあるってことだよ」

煙に巻かれたような顔をした二頭に、リョウはそっと微笑むと小さく手を振った。

別れの合図だった。

それ以上は何も言わずに、リョウは来た時とは全く真逆の気持ちを内に抱えたまま、大きな屋敷に背中を向けた。

そして、小さくなって行く小柄な背中に二頭の犬が吠えた。

『おい! そなた名は何と言う?』

「……リョウ…」

届いたのは、聞こえるか聞こえないかの音だった。風に運ばれて来た小さな哀しさを隠した声色に、二頭の犬はそっと顔を見交わせた。

『リョウと言ったな』

『ああ。リョウと言った』

『ルスランの所為か』
『左様、大方、あの三男坊の所為だろう』
二頭はじっと柵越しに、馬の尻尾のように揺れる黒髪が視界の隅から消えるのを見つめていた。
やがて、その姿が視界から消えた。
『戻るか』
『ああ。せっついてみるか』
『止せ。あやつは我らの言葉を解さぬ』
『……なれど』
『まぁ、なるようにしかなるまいて』
先程とは気分一転、尻尾をだらりと下げた二頭は、大人しく屋敷へと戻るべく踵を返したのだった。

すれ違いの軌跡

待ち合わせの場所に一人やって来たリョウを見て、シーリスは小さく首を傾げた。
「ルスランはどうしましたか？」
リョウはその問い掛けにぎこちない微笑みを浮かべると静かに首を横に振った。
「家の方で用事が出来たようで、都合が付かなくなりました」
詳しくは話さずにそれだけを告げた。
「そうですか」
シーリスは一瞬、眉を跳ね上げたが、リョウの顔色を見て、それ以上の追及を止めにした。

着替えに戻るからと別れた時の晴れやかな表情とは明らかに違う、どことなく沈んだ空気が眦の端に滲んでいるのを感じ取って、シーリスはユルスナールの実家で何かがあったのだと見当を付けた。大方意に染まぬことを言われたか、されたか、何かしたのだろう。ユルスナール自身、家のものに捕まったのかも知れない。そう言えば、あそこにはユルスナールを慕ってやまない幼馴染のような若い娘が親戚にいたことを思い出した。もし、あの娘と鉢合わせをしたのなら、万事控え目な性格からリョウの方が遠慮をしたのだろうことは容易に想像が付いた。
一人、あの大きな邸宅を後にするリョウの心中はいかばかりであったか。本人は上手く隠している積りなのであろうが、浮かない顔をしているのを見れば、それが良く分かる。好いた相手にそのような顔をさせてしまうなど男としては言語道断だとは思ったが、友の不甲斐なさには敢えて触れず、シーリスはそっと心の中で溜息を吐くに留めたのだった。

対するリョウは、シーリスがそれ以上、何も聞かないことに心の中で感謝をした。シーリスのことだから、間違ってはいないが事実を正確には伝えていない、ぎこちない言い訳を内心、訝しく思っているだろう。だが、それを敢えて口にしないのは、シーリスなりの優しさだった。

リョウは気分を入れ替えるように顔を上げた。

「それでは行きましょうか」

「ええ。そうですね」

今回、ユルスナールの都合が付かなくなって良かったのかもしれないとリョウは思い直すことにした。というのもリョウとしてはシーリスに確かめておきたいことがあったからだ。

結局、【アルセナール】でのゲーラとの一件は有耶無耶になったままだったので、この際、術師と軍部の関係や、軍部の中に於ける第三師団の立場、それからユルスナールたちとゲーラとの関係を聞いておこうと思ったのだ。あれだけ不穏な空気を出して怒りのような感情を顕わにしていたユルスナールに再びゲーラの話を振るのは、どうにも躊躇われた。その点、シーリスならば、もう少し引いた客観的な立場から事情を説明してくれるのではなかろうかと踏んでいた。

街の中心部は実に賑やかだった。この国一番の繁栄を誇る大都市だ。街並みは、綺麗に区画整備され、整然と石造りの堅牢な建物が並んでいた。建物の外部には、様々な曲線を使った彫刻が施されており、冷たい石の印象に反して、優美で柔らかな雰囲気を与えていた。

通りを出歩く人々も多い。老若男女、着飾った人々がゆっくりとした足取りで街中を歩いている。貴婦人や身分ある貴族を乗せた立派な馬車もガラガラと車輪の音を高らかに鳴らして石畳の上を多く

走っているのが見受けられた。それは王都ならではの光景だった。
大通りに並ぶ路面店は、どれも落ち着いた感じの造りになっていた。ガラス張りのショーウィンドウにその店で扱っている商品が綺麗に並んでいる。意匠の施された小さな看板がさり気なく軒先にぶら下がっていた。
だが、少し脇道に入ると、若干空気が変わる。上品で他所行きな雰囲気から一転、親しみのあるやや雑然とした空間が広がっていた。
時折、街中を歩く全身を白い衣服に身を包んだ人々に擦れ違った。白いズボンに踝まで届きそうな同じく白い上着を重ねて、発色の良い色とりどりの腰帯で腰の部分を留めているようだった。腰帯の先は、だらりと長く伸びて、それを身に着けた人が歩く度にひらひらと舞った。人によって、その腰帯の色が違うようだった。それを不思議な面持ちで眺めていれば、シーリスが、あれは神殿に仕える神官たちだと教えてくれた。
神官は、皆、あのような白を基調とした簡素な衣服に身を包み、腰帯の色は、その神官の階級を表わしているということだった。そう言えば、シーリスの義兄であるレヌートもよくよく考えれば、似たような格好をしていたことに思い至った。レヌートの場合、その上にいつも襟なしのカフタンのような丈の長い上着を羽織っていたから若干、印象が異なったようだ。

神殿と聞いて思い出すのは、【プラミィーシュレ】での不思議な邂逅だった。自らを【東の翁】と名乗った老人は、もし、今後、王都に来る機会があれば、神殿を訪ねて来るようにと言っていた。リョウは図らずも今、その機会を得た訳だが、近いうちにあの白亜の城塞の如く聳え立つ場所を訪れてみようと考えていた。
この場所に一緒に来たセレブロは、あれ以来、姿を見せたり見せなかったりだった。セレブロなりに色々と用事があるらしく、神殿の方にも顔を出しているらしいことを言っていた。
神殿は、養成所の寮からも然程遠くない所にあった。寮の部屋の

窓からもその姿が見えるくらいだ。高台の上の方にあるので、実際に辿りつくのはそう容易ではないのかもしれないが、何でもその場所は、この街の中で一番高い場所にあるらしく、そこから望む街並みは、一見の価値があるとのことだった。

それからシーリスの案内で、この街一番の薬草を豊富に扱うお店だとか、今、王都で評判の焼き菓子を売っているというお店、それから街で流行している服装だとか装飾品（アクセサリー）を扱う店等、俗に名物だと言われているというお店を見て回った。

それは、どうもリョウが女性であることを念頭に置いた上での選択のようだった。それが功を奏したのかは分からないが、リョウにとって目に付くもの全てが新鮮で、物珍しく、気分が高揚しているのが、その輝く瞳から見てとれた。

暫くして、大分歩き疲れたので、少し、休憩を入れることになった。路面に面したオープンカフェのようになっている解放感溢れる飲食店のようで、外に並んだテーブルや椅子には着飾った人々が思い思いの飲み物やら軽食を前に話に興じていた。

昼下がり特有のゆったりとした時間が流れていた。

シーリスは、その場所に優雅な仕草でリョウを案内した。

「甘いものはいかがですか？　ここは王都（スタリーツァ）でも評判のお店なんですよ。若い女性には大変人気があるんです」

そう言って片目を瞑って見せたシーリスに、リョウは内心のむず痒さを隠しながらも、小さく苦笑いをして見せた。

シーリスは優しい。そして、人の感情の機微に驚くほど敏感だ。浮かない気分を少しでも浮上させようと気を使ってくれている。それに応えない訳にはいかなかった。

「それは楽しみです」

リョウはにっこり微笑むと店の給士に先導されて案内された場所に腰を下ろした。

注文を取りに来た給士に、この店のお勧めだという菓子とお茶を頼んだ。
果物以外の甘いものを口にするのは久し振りだった。
「でも、ワタシとシーリスとでは、何だか変な組み合わせでしょうね」
リョウはぐるりと店内を見渡してから、態とらしくおどけて見せた。
自分が傍目には少年にしか見えないということへの揶揄である。
ここで暫しの休憩を挟んでいるのは、場所柄、男女の二人連れか、女性同士の組み合わせが多かった。後は、点々と、一人で煙草を燻らす老人なども見受けられる。若い男の二人連れ（のようにここでは見えているだろう）というのは余りないようだ。
「おや、そうですか？　私は満更でもないと思いますよ」
対面でシーリスは可笑しそうに小さく笑った後、声を潜めた。
「だって、ほら。先程からあちらの女性客がこちらを見ているでしょう？」
小さく目線で促された先、さり気なさを装ってゆっくりと振り返れば、若い女性客のどこか熱の籠った視線にかち合い、リョウは一層、苦笑を深くした。
「シーリスを見ていたんじゃないんですか？」
優雅で柔らかな物腰のシーリスは人目を惹いた。ユルスナールやブコバルといった荒削りの武人らしい男らしさとはまた違う洗練された空気があった。きっと都会では、貴族の婦女子に人気が高そうな感じだとリョウは心の中で思った。
目があった女性客の一人が微笑んだので、反射的にリョウも微笑み返していた。するとキャーというような悲鳴のような声が上がって驚いた。
それを見ていたシーリスが、楽しそうに喉の奥を鳴らした。
「おやおや、隅には置けませんね。ほらね。リョウ、もっと自信を

持ちなさい。あなたはここでも十分魅力的なのですから」
妙な励ましをするシーリスにリョウは困ったように笑った。
「それはワタシが珍しい顔立ちをしているからではありませんか？この髪もこの目も、こちらでは余り見ない色ですから」
多くの似たようなものの中に紛れこんだ異物というのは、それが綺麗なものであろうが無かろうが、同じような衝撃（インパクト）を持って、瞬時に【異物】として弾き出されるものだ。それを人は示差性と呼ぶ。ここにいる自分の存在も大方似たようなところだろうと思っていた。異質であるから注目を浴びる。それは致し方の無いことだ。
「そうですねぇ。それもありますが、あなたには人を惹きつける独特な空気があるのですよ。感覚的なものなので、口にするのは難しいのですが」
「独特な空気…ですか？」
思っても見ない事を言われて、不思議そうに首を傾げたリョウに、シーリスは小さく微笑んだ。
それはセレブロの加護を貰ったからなのであろうか。【魂響（タマユラ）】と成った人間には、その加護を与えた獣の気が薄らと覆うようにして現れるのだという。獣は皆、それを感じ取れるのだと聞いた。だとすれば、昔ながらの鋭い感覚を持つ人の中にもそれを感じ取る人がいてもおかしくはなかった。
そのことを簡単に口にすれば、シーリスは、少し、虚を突かれたような顔をした後、
「……そうかも知れませんね」
どこか複雑な表情を一瞬、覗かせてから、苦笑のようなものを浮かべたのだった。
そのシーリスの中の心の動きは、当然のことながら、リョウには理解できなかった。

そうこうするうちに糊の利いた制服に身を包んだ給士が恭しくやってきて、テーブルの上に頼んだ菓子とお茶を並べ始めた。

リョウが頼んだのは木苺が並んだ小さなパイだった。そして、シーリスが頼んだのは、柔らかなシフォンケーキのようなものだ。

最後に給士が、小さな焼き菓子の乗った皿を差し出しながら告げた。

「こちらは、あちらのお客様からのものです。ここへいらしたからには是非、こちらもご賞味くださいとのご伝言です」

その言葉にリョウは吃驚して、給士の男の顔とテーブルに添えられた焼き菓子の皿を交互に見た。

マドレーヌのようなこんがりとした焼き色の付いた小振りの菓子だった。焼き立てなのだろう。温かみのある甘い匂いが鼻先を掠めた。

「おやおや。随分と気障な誘いをする人がいるものですね。それは一体どなたでしょうか？」

にこにこと感情の読めない微笑みを浮かべたシーリスを前に、リョウは困惑したように給士の指し示す方を見た。

そして、そこにいた人物に目を見開いた。

「……え……」

何で、あの人たちがあそこにいるのだ？

ひらひらと手を振っているのは、優しい面立ちをした兵士だった。いや、リョウはその男が兵士であることを知ってはいるが、傍目には、一見、暇を持て余した貴族の男のように見えるかもしれない。

だが、その対面に座るもう一人の男が、その印象を分からなくさせていた。浅黒い肌に金色の短い髪を跳ね上げて、明るい浅黄色の瞳が覗く直ぐ下の頬桁の辺りには、横に走る刀傷の跡があった。視線が合うと、その男が人懐こそうな笑みを浮かべて片手を上げた。

――――――ウテナとイリヤ。

【プラミィーシュレ】でなにかと世話になった【ツェントル】の兵士たちだった。

「なんで……こんなところに？」

驚きの余り、呆けたように呟けば、
「おや、リョウの知り合いですか？」
確認するように問いを発したシーリスに小さく頷いて見せた。そして、リョウは簡単にあの二人の若者と知り合いになった経緯と彼らの所属を告げた。

ウテナは近づいて来た給士の男に二・三告げると、イリヤを促して席を立ち、こちら側にやって来た。
「やぁ、リョウ。久し振りだね。こんなところで会えるなんて、やっぱりボクたちは運命なんだよ。それにしても酷いじゃないか。ボクという者がありながら、そんな男と浮気をするなんて」
――――――はい？
リョウは放たれた言葉の半分以上、理解が出来なかった。いや、頭が理解をすることを拒否していた。
「相席をしてもよろしいですかな？」
そう言って、こちらの返事を聞く前にウテナは空いていた椅子に腰を下ろしてしまった。
余りの出来事に面食らっているうちに、テーブルに着いたウテナと目があって、バチンと音がしそうな感じでウィンクをされる。
相変わらずの軽薄で浮ついた調子に、リョウは、脱力するように椅子の背もたれに身体を預けた。
そうこうするうちに給士が来て、ウテナ達のテーブルにあった茶器類をこちら側のテーブルに並べ変えてしまったのだ。
強引なやり口に、リョウは心配するようにシーリスを見た。シーリスは笑顔のままだが、そこから醸し出される空気は、不愉快さを隠してはいなかった。
不味いことになったと思った。
「すみません。シーリス」
小さく謝れば、シーリスは笑みを深めてリョウを見た。
「どうしてそこであなたが謝るんです？　礼を失しているのは向こ

うではありませんか。折角の一時に邪魔をするなんて、無礼にも程があります。信じられませんね」

そう言って、底冷えのするような笑顔で二人の闖入者を見遣った。

だが、対するウテナの方も負けてはいなかった。

「アハハハ。硬いことを言わないで下さいよ。第七の副団長さん。お互い知らない仲ではないでしょうに」

そう言って人好きのする（リョウにしてみれば、どこか胡散臭い）笑みを浮かべたウテナの横で、イリヤが『済まない』と苦笑を滲ませた。

「おやおや、私はそちらのような不躾な輩と知り合いになった覚えは全くありませんが？」

「相変わらずの毒舌ですね。久し振りに聞くとゾクゾクしますよ。ああ鳥肌が立ちそうだ」

北の砦の兵士たちを震え上がらせるシーリスの鋭い舌鋒もなんのその、ウテナは全く堪えていないようだった。いや、なにやら愉しそうでもある。

なんだか雲行きが怪しくなっている気がした。それ以上二人の会話を聞いていると何やら危ない世界を垣間見てしまいそうな気がして、リョウは、些か強引かとは思ったが、間に入ることにした。

「この焼き菓子、とても美味しそうですね。こちらの名品かなにかなのですか？」

唐突とも言える発言だったが、リョウの意図を速やかに感じ取ったウテナとシーリスは、それ以上の言い争いをそこで止めた。

「ああ、これは、今、王都（スタリーツァ）で一番人気と評判の焼き菓子なんだよ。食べてごらん、美味しいから」

そう言ってウテナより差し出された皿から、リョウも一つ摘んでみた。

小振りの平べったい楕円形をしたものだ。マドレーヌを思い出させる形だった。

「頂きます」

「はい。召し上がれ」
リョウは促されるままに一口齧ってみた。【マースラ（バター）】と【サー（砂）ハル（糖）】、いや【メード（蜂蜜）】だろうか、しっとりとした生地の感触と爽やかな甘さが口の中一杯に広がった。
「……美味しい」
ぽつりと呟いたリョウに、
「それは良かった」
ウテナは相好を崩した。

それから、何故か和やかな空気になって、普通にお茶を始めてしまった四人であったが、
「ウテナさんとイリヤさんは、いつからこちらに？」
「ああ、こっちに来たのは、大体五日くらい前からか」
カップのお茶を静かに傾けながら、イリヤが答えた。
どうして【プラミィーシュレ】勤務の二人がこの場所にいるのかと訊けば、二人とも来週の武芸大会に出場するのだと言う。
「お二人も出場なさるんですか？」
イリヤは何となく想像が付いたが、ウテナの方も武芸が巧みだと聞いて、リョウは少し驚いたように目を見開いた。普通に考えてみれば失礼な話であるが、仕方がない。
その辺りの含みを的確に感じ取ったウテナは、心外だというように肩を竦めて見せた。
「なんだい、リョウ。ボクが出るのがそんなに信じられないかい？」
心の内を的確に言い当てられて、リョウはちらりとイリヤを横目に見てから、言葉を慎重に選んだ。
「ウテナさんは、どちらかと言えば、武官よりも文官的な印象があったので」
今更、隠しだてをしても無駄なので、そう正直に話せば、
「そちらのシーリス殿だってそうだろうに」
ウテナは小さく微笑んでから、リョウの向かいに座るシーリスを

見た。
「今年も出場はなさらないんですか？」
そして、出たイリヤの質問に、
「ええ。私は遠慮しています」
シーリスはおっとりと微笑んだ。
「それは勿体ない」
「ふふふ。人には向き、不向きがありますからね」
北の砦の兵士たちの言によれば、シーリスとて中々の剣の使い手であるらしいのだが、こういう大会というのは趣味ではないようだ。
「あの、じゃぁ、ドーリンさんは？」
リョウが気になっていたことを思わず口に上せれば、
「ああ、隊長？　勿論、出るよ。あの人、ああ見えて中々手強いし」
「ええ。ドーリンも中々のものですよ」
「てか、そうじゃないと団長にはなれないから」
「……そうなんですか」
これまでの予想とは違った答えに、リョウは心底、驚いて息を吐いたのだった。
ウテナ、シーリス、イリヤの三人から順に肯定をされても、ドーリンが剣を扱う姿は余り想像が出来なかった。新たな一面を発見という気分だ。

それから、リョウは自分の事を尋ねられて、手短に現在術師の養成所に通っていることを二人に告げた。それで、二人はリョウがこの場所にいる事情を納得したらしかった。
「リョウ、武芸大会は勿論、見に来るんだろう？　それなら第五の所においで。そうしたら、ボクの雄姿を間近で見ることが出来るから」
そう言って茶目っ気たっぷりに微笑んだウテナに、リョウは小さく微笑んでから逡巡するように首を傾げた。
「はい。折角なので、出来れば見に行きたいとは思っていますが、

都合が付くかどうか」
　そう言葉を濁したリョウを見てシーリスが笑った。
「その心配は要りませんよ。この期間中は、街中がお祭り一色になるので、養成所の講義もお休みになる筈です」
「そうそう。勉強どころじゃないってね」
「そうなんですか」
「ええ。ですから気兼ねなく見物にいらっしゃい」
「分かりました」
　懸案だったシーリスからお墨付きを貰い、リョウは嬉しそうに微笑んだ。
　その後、ならば当日は、第五の所に来いというウテナとイリヤ、それから、第七の所に来たらよいではないかというシーリスの誘いに、リョウは感謝の言葉を口にしながらも、逡巡するように首を少し傾げた。というのも養成所の仲間であるヤステルやバリースたちに都合が付けば一緒に見に行かないかと誘われていたからだ。そのことを話せば、ならば、その友人たちと見に来たらよいと言われた。
　当日は凄い人出になるから迷子にならないように気を付けること。警備はそれなりに敷かれてはいるが掏りの類が多く出るから身の回りのものには気を付けること。そして、必ず軍部の方に一度は顔を出すようにと注意点ともども教えを受けた。
　見物人が多い場合は、友人たちも一緒でいいから軍部の方に来ればよい。そうすれば、目の前（要するに特等席だ）で試合が見られるとまで言われて、そんなことをヤステルやバリースに話したら、爛々と目を輝かせて鼻息荒く迫られそうだと内心、苦笑いした。
　リョウは、三人の心遣いに感謝をして、武芸大会の当日、必ず一度は、軍部の方に顔を出すと約束した。そして、この冬一番の盛り上がりを見せると言う街を上げての大きな一大催事（イヴェント）を楽しみにすることになったのだった。

すれ違いの軌跡（後書き）

思わぬ場所で、思わぬ人たちに遭遇。ウテナファンの皆さま、お待たせしました（笑）

三男坊の憂鬱

ちょうどリョウがシーリスと王都見物をしている頃と時を同じくして。

一人、実家に残る羽目になったユルスナールは、普段の仏頂面を三割増しにして、庭先に設えられたテーブルに着いて静かに茶器を傾けていた。

ユルスナールの眉間には、深い皺が刻まれていた。あんなにもあっさりと身を引いたリョウのことをつれないと不満に思っていたのだ。折角、自由になった時間を二人きりで過ごそうと思っていたのに、それが、ことごとく上手く行かなかった。

離れている間、思い出すのは、いつも決まって癖の無い黒髪を靡かせ、黒い瞳を細めて穏やかに微笑む女の姿だった。会いたいと思っていたのは自分だけなのか。恋しいと思っていたのは自分だけなのか。恋愛においては先に好きになった方が負けとも言うが、目に見える形で行動に現れる気持ちの温度差が、正直、もどかしくて仕方がなかった。

手っ取り早くその想いを行動で示そうとしても、今日は邪魔が入ってばかりだった。そのこともユルスナールの不快指数を上げる要因になっていた。やっとのことで捻り出した時間も突発的な事柄に阻まれてしまった。仕方がないとは言え、腹立たしかった。

「ねぇ、ルーシャ。さっきからだんまりじゃない。どうしたの？」

そんな男の心の内を分かっていないのか、それとも敢えて分からぬ振りをしているのか。ユルスナールは自分の不機嫌の原因の一端となった人物をちらりと横目に見てから、

「いえ」

言葉少なに返した。
長兄に嫁いだ義姉は、良くも悪くもこの国の上流階級、即ち貴族の女だった。そして、その妹であるアリアルダもそうだ。おっとりとした気ままな性質で、自分たちの楽しみを追求するのに余念がない。男の事情を斟酌せよという方が土台、無理な話だった。
「ねぇ、ルーシャ、焼き菓子をもう一ついかが？」
余り甘いものが好きではないユルスナールは、その申し出に閉口した。付き合いとは言え、一つが限度だった。
「いや、俺はもう十分だ」
「あらそう？　なら私が頂くわね」
そう言って、嬉しそうに自分の皿に焼き菓子を取ったアリアルダを見て、それから、この王都で、今、若い女たちに人気があると言う小さな焼き菓子の乗った皿を見つめて、ユルスナールは、ふと、リョウはこういった甘味を好きだろうかと考えた。
思えば、、こういう食べ物の好みの話も余りしたことが無かった。北の砦では甘味と言えば、精々が果物で、菓子の類は当然のことながら出ない。【プラミィーシュレ】で共に過ごした時も、自ら甘味を求めたり興味を引かれたりする様子は、ユルスナールが覚えている限り、見たような記憶はなかった。
そんな些細なことも知らない自分にユルスナールは愕然とした。何ということだろう。好いた相手の好みの一つも分かっていない。知っているのは、控え目で穏やかな気性と実は頑固であるという芯の強さ、そして、閨の中での情熱的な一面とその肌の甘さだった。そして、リョウがその身に抱えている重大な秘密の共有者になったとはいえ、それが、今現在の【リョウ】という人物を形作る輪郭を知ることには繋がらなかった。
黙りこくったままのユルスナールを横目に見て、義姉のジィナイーダはからかうような声を上げた。
「あの付き人の子が気に掛かるの？」

ふいにそんなことを口にされて、ユルスナールはその発言者の真意を探るように義姉の方を見た。
明るい榛色（はしばみ）の瞳が好奇に輝いていた。
この義姉が鋭いのか、鈍いのか、分からなくなるのはいつもこんな時だった。おっとりとした性格のままに呑気なように見えて、偶にこう核心を突くようなことをさらりと口にするのだ。柔らかい言葉は、時として小さな短剣のように鋭く心に突き刺さる。
「あら、どうして？　あの人は軍部の人間なのでしょう？　腕に腕章をしていたもの。ルーシャが気にすることはないんじゃなくて？」
軽やかに紡がれるアリアルダの言葉に、ユルスナールはそっと目を伏せた。
アリアルダの言葉は尤もだった。リョウに第七師団所属を意味する青い腕章を付けるように言ったのは自分の方だった。その方が、面倒が少なくてよいかと思ったのが、あれを付けている限り、リョウは自分の部下で、それも下っ端の見習いのような少年にしか見えないのだろう。
良かれと思ったことが裏目に出ている。アリアルダが初対面の相手に対して、歯牙にも掛けないような剣呑な態度を取ったのも、それが軍部でも下位の人間だと思ったからだった。
リョウはきっと嫌な思いをしただろう。表面上はそんな素振りを微塵も見せなかったが。それも自分の所為なのだ。そう思うと居た堪れなかった。

「いえ。あの者は軍部の人間ではありませんよ」
「あら、そうなの？」
「ええ。今、術師の養成所で学んでいる者です。シーリス・レステナントが今は面倒を見ていますが、自分ともそれなりに親交があったので」
北の砦での打ち合わせ通り、自分がリョウの養成所通いに一枚噛む事は憚られるということで、ユルスナールとしては内心、苦々し

く思いながらも、そう説明をするのがやっとだった。
「あら、じゃぁ、【プラミィーシュレ】で連れ歩いていたというのは先程の子のことかしら？」
余りに唐突に思えたその言葉にユルスナールは驚いて、動きを止めた。
まさか、そのようなことを義姉が知っているとは思ってもみなかったからだ。
それを見た義姉のジィナイーダは、可笑しそうに手を口元に当てて小さく笑った。
「ルーシャ。わたくしたちの情報網を侮ってはいけないわ」
そう言って目配せをする。
「【エリセーエフスカヤ】で食事をしたのでしょう？　あそこで黒髪に黒い瞳の綺麗な子を連れていたという噂はこちらにも届いているわ。こちらも暫く、その話で持ちきりだったのよ？」
あの時、あの場にリョウを連れて行くことで、そういう風に仕向けたのは、ユルスナール自身の思惑があってのことだったが、それが遠く離れた王都の、ましてや親族の間にまで広まっているとは、実際の所、思っても見なかったことだった。読みが甘かったのかも知れない。ということは、既に父や母、兄たちも知るところなのだろう。
だが、ジィナイーダの口振りでは、事実は曲解されて切れ切れに伝わっているようだった。【エリセーエフスカヤ】でリョウは、女性の格好をして本来の性別を明らかにしていた訳だが、髪と瞳の色という外見的な特徴だけが伝わって、その性別の辺りは、きちんとは伝わっていないようだった。
と思ったのだが、
「あら、私は女の人だと聞いたわよ？　娼館の商売女ではなくて？」
優雅な仕草で茶器を傾けながら、あっけらかんとしたアリアルダのもの言いに、姉であるジィナイーダは眉を顰めると妹を窘めるように見た。

「こら、アーダ。若い娘がそのようなことを口にするなんて、はしたないですよ」

嫁入り前の若い女性が、娼館の女のことを口にするのは、貴族の淑女としては品位に欠けると見做されていたからだ。

「噂など当てになりませんよ」

ユルスナールは肯定も否定もすることなく、ただ、そう口にするだけに留めた。

「あら、私は気にはしませんわ。ルーシャがそういう店に足を運ぼうが運ぶまいが。男の人の生理的な事情ですもの。そのくらい許して差し上げるわよ」

そう、あけすけな言葉を継いだアリアルダに、

「アーダ、なんてことを言うの！」

姉は悲鳴のような声を上げた。

その言葉の意味を本当に理解しているのか、いないのか。まるで恋人の浮気を咎め立てしない寛容な女を演じるような口振りに、ユルスナールは、大きく溜息を吐きたいのを寸での所で堪えた。

幼いころに両親が許嫁の口約束のようなものを戯れに交わして以来、アリアルダは、ずっとユルスナールに嫁ぐ積りでいるようだった。正式なものではない親しい間柄同士の口約束だ。ユルスナール自身は、それが今でも有効だとは思っていなかった。

自らの伴侶となる相手は、自分で見つけてみせる。幼い頃より独立心の強いユルスナールはそう考えていた。

そして、今、自分の心を捕らえて止まない女性は、一人しかいない。

リョウに出会う前であれば、両親の口約束をそのままに押し通されても仕方がないかと思わなくもなかったことだろう。往々にして貴族の縁組などそのようなものであるからだ。家柄が釣り合うか、合わないかという体面を重んじる傾向があった。婚姻が政治的に利用される場合も珍しくはなかった。そういう流れから見れば、全く知らない相手を嫁に迎えて、その女性を愛せと強要されるよりも、

まだ幼い頃より知った仲で、気心の知れた相手（この場合はアリアルダの事である）の方が幾分ましだと考える節があった。

だが、そのような受動的な考えは、今はこれっぽっちも持っていない。

「ねぇ、ルーシャ。わたくしはそろそろいいお話が聞きたい頃だわ。ロシニョールも言ってらしたもの。あなたが独り身を通すのは、そろそろ具合が悪いだろうって」

この間合い（タイミング）で長兄の名前を出されて、ユルスナールは眉根を寄せた。

十も歳の離れた長兄をユルスナールは尊敬していた。弟の目から見ても立派な兄だった。

だからと言って、親や兄たちの思惑通りに事を進める気は更々なかった。事が己の人生を左右する出来事、要するに縁談ならば尚更のことだ。

自分には譲れない一線がある。その線引きがどこにあるかくらいは、ちゃんと理解している積りだった。

ユルスナールは義姉の柔らかな言葉の中に潜む圧力を小さく微笑むことで受け流した。

実の妹の恋心を知る姉としては、年の離れた妹は可愛いもので、その味方になってあげたいという所なのだろう。

だが、この世に自分以外の男など沢山いる。もっと外に目を向けてもいい筈だとユルスナールは思っていた。幼き頃より周囲の人間が口にする希望的観測を疑わずにここまで来てしまったきらいがアリアルダにはあった。身勝手な男の言い分と言ってしまえばそれまでだが、アリアルダを生涯の伴侶として娶ることは決してないだろうということは、ユルスナールの心の中では、既に決定事項だったのだ。

義姉の口振りから、近いうちに兄たちや父から似たような話を蒸し返されるかもしれないと考えて、ユルスナールは少し憂鬱になっ

た。

これまでユルスナールには、アリアルダ以外にも縁談の話が、何度か持ち込まれていた。

この国の中でも古い家柄であるシビリークス家に自分の娘を嫁がせ、そこと繋がりを持ちたいと思う貴族は多いようだった。長男が結婚をし、次男も縁組を果たした後、未だ独身を貫く三男を密かに狙っている家は多かった。政治的な匂いのするものは、どうやら父や兄たちの方で、事前に突っぱねていたようだが、偶にそこを通過してくる話があった。それを若輩ものだからとか、まだ、軍部の仕事に専念をしたいから等と、色々な理由を付けて全て断って来たのだ。アリアルダとその姉のジィナイーダの方は、それをユルスナールが、アリアルダが相応の歳になるまで待っているとでも思ったようだった。

ユルスナールは、そういった諸々の事情が鬱陶しくて仕方がなかった。だが、今回、それを逆手に取ろうと思っていたのも事実だった。

もし、また縁談の話を仄めかされたりしたら、今度こそ、これまで有耶無耶にしていた許嫁の件を清算し、自分には心に決めた女(ひと)がいることを両親と兄たちの前で宣言しようと考えていた。そして、時期が来たら、その女(ひと)を家族に紹介し、結婚の許しを得たいと思っていた。勿論、その前に当然のことながら結婚の承諾を得る為に相手である当人を口説き落としておくことが肝要だろう。

そこに漕ぎ着けるまでの道のりは、決して平坦なものだとは思ってはいなかった。貴族というしがらみに始まり、様々な障害があるだろう。それでも思い描いた未来を譲りたくはない。それがユルスナールの心に秘めた決意だった。

父と息子たちの夜

その夜、シビリークス家の居間には、この家の家長とその息子たちが勢揃いしていた。

皆が顔を合わせるのは、久し振りのことだった。ユルスナールが昨年、武芸大会に参加する為に帰還して以来であるから、約一年振りになるだろうか。

落ち着いた茶系統の色合いの調度類が並ぶ、ゆったりとした広い部屋には、長椅子とソファが余裕を持って配置され、男たちは、銘々の昔から定位置となっている場所に腰を下ろしていた。

長い脚を持て余すようにして一人掛けの椅子に腰を掛けているのは、シビリークス家の長男、ロシニョールだった。代々軍人を輩出している家系の嫡男として、幼い頃からその家名に恥じないようにと厳しい教育を受け、着実に人生の階段を登ってきた男だ。

厳格な父の影響を一番に受けたであろう長男は、真面目な男だった。父親譲りの体格の良さと銀色の髪を持つ。男らしい精悍な顔立ちは、綺麗に整えられたたっぷりとした髭に縁取られ、積み重ねられた年月からもたらされる威厳に満ちていた。瞳の色は、母親のものを引き継いで淡い空色をしていた。豪胆な性格で、野性味溢れる男の魅力を持つ。この国の軍部に所属し、今ではその中枢を担う将軍の地位にあった。

この国の軍部には、一から十まである師団の上にそれを統括する本部の将として、東西南北、四つの方位を模した四人の将軍がいた。代々、北の方角を守護する家として軍事的な分野で発展してきたシビリークス家の嫡男である男は、その系譜から【北の将軍】を拝命していた。

そして、壁際に並んだ低い棚の前で、人数分のグラスに酒を注いでいるのは、この家の次男だ。その名をケリーガルと言った。

どちらかというと母親に似た柔らかな面立ちをしており、武芸一辺倒の厳つい長男とは、趣がかなり異なった。母親の血は、髪と瞳の色に表れていた。柔らかい薄茶色の髪に、淡い空色の瞳を持つ。

家系の伝統よろしく軍人の道を歩んだ長男とは違い、次男は文の道に進んだ。王都にある貴族の子息たちが通う学問所で優秀な成績を修めた後、国の中央機関に職を得て、今では財政を担う財務官として忙しい毎日を送っていた。

穏やかな気性で争い事は好まない性格だ。だが、その反面、無駄な面倒事は嫌いで、交渉術に長けた策士の顔を覗かせる。優しそうな見た目を裏切る強かな一面を持っていた。

兄弟仲はいい方だろう。末と長兄の間は十も離れている。真ん中は、その間を取る形で、共に五年ずつ離れていた。

そして、小さな低いテーブルを挟んで長椅子に腰を下ろし、その長い脚を組んでいるのは、我らが主人公の片割れ、ユルスナールである。

三男坊であるユルスナールは、姿形だけを見れば、父親の形質を一番よく引き継いでいた。銀色の髪に瑠璃ともとれる深い青さを湛えた濃紺の瞳を持つ。冷徹な印象を与える切れ長の眼差しは、父親譲りだった。だが、顔立ちの線の細さは、若干、母親の方に似ているかもしれない。

三兄弟、其々に特徴的な男たちだが、やはりそこは三人並べば、血の繋がりがあることが直ぐに見て取れた。

そして、テーブルを挟んでユルスナールの対面にあるソファーに寛ぐのは、三人の息子たちの父親であり、この由緒正しきシビリークス家を束ねる家長である男、ファーガスだった。

ファーガスは、現役時代には、その名を国内外に轟かせた豪傑だ

った。二十数年前の隣国ノヴグラードとの戦では、敵国に【銀(しろかね)の悪魔】と恐れられた将軍だった。冷酷無慈悲、非道の策士、歴戦の猛者。男を形容する枕詞は尽きない。

現在は、引退し、家督を長男に譲って国政の表舞台からは姿を消した形にはなっているのが、国内の貴族たちの間（主に軍事の方面）での影響力は、まだまだ無視できないものがあった。

その風貌は、一言で言えば厳めしい部類に入るだろう。吊り上がり気味の鋭い眼差しの上には潔さを現す男らしい眉が乗る。真っ直ぐに伸びた鼻梁と大きめの鼻。その下にある唇は、薄く引き結ばれ、酷薄そうな印象を見る者に与えた。

感情表現の豊かな方ではない。普段は余り口数の多くない物静かな性質だ。それに本来男に備わる威圧感が、相乗効果となって取りつき難い印象を与えていた。

若かりし頃は、社交界でそれこそ多くの女性たちに騒がれた美丈夫だった。冷たい鋼のような硬質さは、高潔な孤高の漢のようで密かに人気が高かった。男が現れると場の空気が変わる。そう揶揄されたこともあった。長い年月を経て、年老い、皺が多く刻まれた今でも、その当時の片鱗は面立ちのそこかしこに窺えた。

幼い頃、三人の息子たちにとって父親の姿は、それこそ畏怖の対象だった。家庭においては子煩悩な良き父親であったが（といってもその愛情表現は余り表面には出ないので、傍目には分かりづらかったが）、躾は厳しかった。間違ったことをした時は、それこそこっぴどく叱られたものだった。

父親の背中はいつも大きくて、そして、遠い。それは目指すべき目標でもあり、と同時に越えるべき対象でもあった。父親を前にすると、その威厳からくる威圧感に子供ながらにも体が竦んだものだ。

だが、息子たちが長じた今では、その関係は、少し形を変えていた。それでもこの家にとって、父親の存在は、その精神的な主柱であることに違いはなかった。

次男のケリーガルは、琥珀色の液体が入ったグラスをテーブルの上に並べた。
「どうぞ」
四人の男たちは、無言のままグラスに手を伸ばすと、手にしたそれを自分の上方に掲げた。
「久々の再会を祝して」
音頭を取った父親の言葉に合わせるように三人の息子たちは、掲げたグラスを小さく揺らした。
「「「久々の再会を祝して」」」
そう唱和するとグラスの中身を一気に呷った。
それは、長い夜、男たちの宴の始まりの合図だった。

「調子はどうだ?」
暫く振りに帰還した息子に(ユルスナール)、父親のファーガスは静かな眼差しを向けた。
久し振りに見る息子の顔付きは、一年前と比べても違っているように見えた。一段と引き締まり男振りが上がったとでも言えばいいだろうか。自分と同じで、表面上は余り面に出ない為、分かり難かったが、そこはやはり血の繋がった親子である。その身に纏う空気から、末息子がそれなりに充実した毎日を送っているだろうことが読み取れた。

北の砦は、峻厳な山脈を挟んで隣国ノヴグラードとの境界となるこの国の重要な軍事拠点ではあったが、王都から見たら、その場所は僻地である辺境、つまり、なにもないド田舎もいい所であった。ここに暮らす貴族たちの中には、生粋の貴族であるユルスナール(スタリーツァ)のような男があのような僻地を任されたことに対して、それを上層部

の不興を買って左遷されたに違いないと捉える輩がいたことも確かだった。。

約四年前、第七師団長の任を拝命し、北の砦に配属が決まった時は、その辺りのことを父親も密かに案じないではなかったが、息子の様子を見る限り、それは全く気に掛けていないようだった。

いずれにせよ、一生、北の砦を任される訳ではない。大体、四年から五年に一度の割合で、軍部内では組織編成が行われ、各師団の勤務地の移動や人事異動が行われていた。

ユルスナールは、いずれ王都に戻ってくる。それはシビリークス家の血筋を引く者に対する暗黙の了解のようなものだった。

「お陰さまで、恙無く過ごしていますよ」

口にする言葉は少なかったが、父と子の間では、それで十分通じていた。

――――――堅苦しい挨拶はその位にしておいて。

そう前置きすると長男のロシニョールが、意味あり気な視線を斜交いに座る弟に投げた。

「ルスラン。そろそろ腹は決まったか？」

からかうようなその声音にユルスナールは伏せていた目を上げた。

「何の話ですか？」

長兄が突然脈絡のない話を振るのは今に始まった事ではなかったが、ユルスナールには仄めかされた事柄の見当が付かなかった。

「ああ。僕も興味があるな」

不意に話に割って入ってきた次男のケリーガルは、グラスに継ぎ出した【ズブロフカ】を舐めるように含みながら、その口元を緩めた。

怪訝そうな顔をした弟に穏やかな笑みを浮かべて見せる。

「勿論、【プラミィーシュレ】でのことだよ」

他に何があるのだと言わんばかりの口振りに、ユルスナールは、早くもあの噂話の事を訊かれているのだと確信した。

「大層、素敵な女性を連れていたそうじゃないか」
その言葉に、義姉たちの方はともかく、兄たちの情報網では、事実がかなりの正確さで伝わっていることを理解した。
「感心なさそうな顔をしていてよくやる。俺たちもまんまと騙された訳だ」
そう言って口の端を吊り上げて、可笑しそうに笑ったロシニョールは、
「で、相手はどこの誰なんだ?」
早速、単刀直入に切り込んできた。
「伝え聞いた話では、娼館の女だというのもあったけれど、実際の所はどうなんだい?」
好奇心を隠すことなく、二対の淡い空色の瞳がユルスナールを捕らえていた。
「こちらには、どのように伝わっているのですか?」
だが、素直に答えを与えるでもなく、逆に問い返したユルスナールに、父親のファーガスは小さく喉の奥を鳴らした。
「なんだ、ルスラン。あれもお前の余興か何かだったのか?」
今まで浮いた話の一つもなかった(それは敢えてそのようにしていたのだ)息子の降って湧いたような突然の艶聞に、父親はその裏に潜む何かを的確に感じ取ったようだ。
そもそも几帳面な性質で、その辺りのことに並々ならぬ神経を配っていたと思われる末息子が、今更、そのような事であのようなヘマをするとは考え難かった。何か裏で企んでいるに違いない。良くも悪くも宮殿という政治的な化かし合いの中で登りつめてきた男には、それが良く分かった。
「それについては半々ですね」
父親の推察を裏付けるような口振りに、
「なんだ、やけに勿体ぶるじゃないか」
次男が不服そうな声を上げて肩を竦めた。
「何でも随分と珍しい色彩を持った女(ひと)だと言うじゃないか。まるで

【夜の精】の化身のようだったと俺は聞いたぞ」
そう言った長男の隣で、
「黒髪に黒い瞳を持つと言う話だよね。確かに珍しいと僕も思ったよ。この国の常識では考えられない」
次男も静かに合槌を打った。
「この国の人間ではないのだな」
止めとなる父親の言葉に、ユルスナールは観念するように小さく息を吐いた。
「ええ。この国の者ではありません」
「ならば、キルメクの出か？」
黒い色彩を持つと聞いて、まずこの国の人間が思い浮かべるのは、比較的黒髪の人間がいる西方の隣国のことだった。だが、あの国の人々は、浅黒い日に焼けた肌に縮れた黒髪を持つ者が殆どだった。
「いいえ。違います」
静かな、だが、確固たる返答に、父親は微かに眉を上げた。
「まさか、どこぞの間諜ではないのだろうな？」
深く考えるように低い言葉を発した長兄に、ユルスナールは否定するように小さく笑った。
「いいえ。それはありません」
あれは、そのような影の工作が務まる相手ではない。考えていることが直ぐに表情に出る性質で、隠し事は苦手な筈だ。そういうキナ臭さとは無縁の場所にいたであろう女の顔を思い描いて、ユルスナールは微笑んだ。
自信満々に言い切った弟に、当然のことながら長兄のロシニョールは首を傾げた。
「では、どこの国の者なんだ？」
相変わらず長兄の言葉は直球である。
「それは、今、この場では控えさせてください」
その返答は、思っても見ないことだったのか、長兄は、虚を突かれたような顔をした後、意味深に笑った。

「なんだ。えらく慎重だな」
「何だか意味ありげだね」
その脇で、次兄のケリーガルが興味を惹かれたように身を乗り出して来た。
基本的に自分が巻き込まれる形での面倒事は嫌いだったが、こういう曰くのありそうな一筋縄ではいかなさそうな話は、次兄の好きな分野だった。やや性質が悪いと言えなくもないが、高みの見物が好きなのだ。
興味津々の兄たちの様子を見て、ユルスナールはやや困惑したように微笑んだ。
「今度、折を見て、紹介しますよ」
その言葉に長兄と次兄は信じられないという顔をして互いに目配せをし合った。
秘密だらけかと思いきや、本人を兄たちに会せてもいいと言う。それは随分と矛盾しているように思えたからだ。
「その子は、今、こっちに来ているのかい？」
「はい」
「お前が連れて来たのか？」
「いいえ。今、縁あって養成所の方で学んでいます。【術師】の認可を受ける為に」
それを聞いて父親は目を瞠った。
「その者は、素養があるのだな？」
「はい。そのように聞いております」
それからユルスナールは、簡単にその人物について、当たり障りのない事柄を語ってみせた。
――――――――それから、この話が出た序でと言っては語弊がありますが。
そう前置きをするとユルスナールは徐に背筋を伸ばし、畏まった。
「父上にお願いがあります」

不意に対面で身に纏う空気を改めたユルスナールを父親のファーガスは静かに見つめ返した。
「なんだ？」
息子が、自分に頼みごとをするのも珍しいことだった。
「父上が、昔、ズィンメル殿と交わしたアリアルダを私の許嫁とするという昔の口約束を破棄させてください」
「……なんだと？」
きっぱりとした口調に驚きの声を上げたのは、長兄のロシニョールだった。
それもそうだろう。アリアルダは長兄の妻であるジィナイーダの実の妹に当たる。恐らく、ジィナイーダ経由で義理の妹の恋心やその腹積もりを聞かされていた筈だからだ。協力を要請されていたかもしれない。
「理由は？」
「私には、既に心に決めた女（ひと）がいます。その女（ひと）以外、自分の妻となるべき相手を考えられないからです」
ユルスナールは、真正面から父親の顔を静かに見つめると真剣な面持ちで告げた。
それは、覚悟を決めた男の顔だった。
自分と同じ造形と色彩を持つ息子。血を分けた我が子は、昔から、顔に似合わず、頑固で一途な所があった。それに執着の薄そうな印象を与える外見に反して、その内面は、酷く情熱的なところあった。
ファーガスは自嘲気味に小さく笑った。
まるで自分の若い頃を見ているようだった。我武者羅に駆け抜けた一時期を。
いや、自分はあそこまで頑固ではなかったか。
それでも息子が自分の血を引いているという事実をまざまざと見せつけられた気分になったのには変わらなかった。
「それが、【プラミィーシュレ】で連れていたという娘か」
「はい」

ファーガスは、暫し瞑目すると、その瑠璃色の瞳を眇めた。
「ルスラン。妙なことに首を突っ込んでいるのではないだろうな？」
どんなにか強面でも我が子は可愛いものなのだ。年老いて尚、迫力のある顔の下に、息子を案じる親心が見え隠れする。
現段階で聞かされている情報だけでは、判断する材料としては余りにも少な過ぎた。
「それについては、今の所、何とも言えません」
そんな積りはユルスナールにはなかったが、自分を取り巻く周辺事態の変化に依っては、面倒なことにならないとは言えなかったからだ。
納得のゆく答えでなかったのか、父親が不服そうな息を吐いた。
「その娘の係累は？」
その問い掛けにユルスナールは小さく微笑むと緩く頭を振った。
「何もありません。家柄も、後ろ盾も、この国との繋がりも、一切、何も持っていない。身一つの女（ひと）です」
「お前は、それでいいのか？」
「ええ。問題などありません。今では、天涯孤独の身の上ですから、面倒な事にはならないかと。強いて言えば、保護者のような役割を担っている御方がいらっしゃいますが、その方はこの国の政治とは無縁のところにあられます」
父親の眉間に深い皺が寄った。
「その御方というのは？」
「今、この場では申し上げることができませんが、父上も恐らくご存じの方です」
それは捉え方によっては人を煙に巻くような言い方だった。
先程から、ユルスナールは、肝心な部分の問いに何も答えていない。全てをこの場で明らかにされないのは癪には違いなかったが、息子の思慮深さを知る父親としては、その言葉を信じない訳にはいかなかった。
瞑目を続ける父親にユルスナールは尚も言葉を継いだ。

「父上。私は本気です。生涯の伴侶となるものは、その女以外考えられません。もし、それが原因で、この家と縁を切ることになったとしても、私はそれで構いません。後悔などしない」

静かに淡々と告げられた告白に度肝を抜かれたのは、二人の兄たちの方だった。

「ルスラン、何てことを言うんだ！」

「おいおい。何もそこまで思い詰めることもないだろう？」

このシビリークスの家と縁を切る。それは、この国で生きて行く上で、相当の足枷になる筈だった。

だが、裏を返せば、そこまでの覚悟を既に決めているということなのだ。

「相変わらず頑固な奴だ」

決めたら最後、頑としてそこから引かない。

その言葉に父親のファーガスは眦に沢山の皺を寄せるながら、どこか満足そうに微笑んでいた。

「いいだろう。お前がそこまで言うのなら」

そこで顔を上げたユルスナールに、父親は、かつてこの国の軍部を束ねたやり手の武官の顔を覗かせて、凄みのある笑みを浮かべるとじっと息子に視線を合わせた。

「但し、一度、その娘をここに連れて来るように。その者がお前に相応しいか否か、最終的に私が判断しよう。私が認めなければ、この話はなかったことにする」

――――――それが条件だ。

父親の眼鏡に適わなかったら、この話はなかったことになる。すぐさま勘当を言い渡されたり、反対をされる訳ではなかったが、それなりの厳しい条件に、ユルスナールは、ぐっと唇を引き結んだ。

その表情を見て、ファーガスは、今度は愉快そうに声を立てて笑い始めた。

「ハハハ。知らぬ間にお前もそのような顔をする歳になったか。徒に歳は取りたくないものだな」

そう言ってグラスの中身を一気に呷った。そこへ、すぐさま次兄が酒を注いだ。

言葉尻とは裏腹にその声は満足そうに響いた。

「へぇ、それは僕も楽しみだな。ルスランが惚れた相手なんて想像が付かないや。一体、どんな顔して口説いたのやら」

琥珀色の液体が入った瓶を傾けながら、面白そうに頬を緩めた次兄の隣で、

「どんな顔と言っても、あの顔で口説いたに決まってるだろう。一体、どんな言葉を吐いたのかは知らないが、よく相手に逃げられなかったものだ」

父親譲りの厳めしい自分の風貌は敢えて棚に上げておいて、長兄も可笑しそうに笑った。

「確かに、よく頷いてくれたよね」

そこで、ユルスナールは途端にばつの悪そうな顔をして押し黙った。

その事に気が付いた次兄が鷹揚に首を傾げた。

「ん？　どうしたんだい？　ルスラン」

「あ？　なんだ、なにか問題でもあったか？」

「いや、あの、まだ、正式な申し込みはしていないので……」

尻すぼみになって掠れた弟の声に二人の兄は仰天した。

「なんだって？」

「あ？　なんだ、まだお前だけの腹積もりかよ？」

二対の淡い空色の瞳が信じられないという風に見開かれた。

それもそうだろう。端から聞いていれば、ユルスナールは既に相手の女性の心を捕まえていて、あとは両親の承諾を得るだけのような口振りに思えたからだ。

「いや、その、恐らくは向こうも同じ気持ちだとは思うのですが……まだ……その…ちゃんと確かめた事がないので……」

先程までの余裕はどこへ行ったのやら、何やらしどろもどろになった弟を見て、そのいつもの可愛げのない冷静さを失った様子に、

兄たちは可笑しそうに声を上げて笑った。
「アハハハ。なんだ、じゃぁ、父上に会う前に、そっちを先に攻略しておかなきゃならないんじゃないか！」
「なんだなんだ。まだまだ詰めが甘いぞ、ルスラン」
「ええ。そういうことになりますね」
二人の兄からのからかうような口振りに、ユルスナールは、手にしたグラスを所在なさげに揺らしながら、気まずそうに視線を逸らした。
そんな息子たちのどこか滑稽な遣り取りを対面に座る父親は目を細めて眺めていた。
「ちょうどいい。来週の武芸大会で確かめてみればよかろう」
どこか呆れを含んだ声音ながらも的を射たような提案に、
「ああ。それはいい考えですね」
長兄も頷いた。
「リボンを腕に巻いて、申し込みをするってやつかい？」
次兄も興味を惹かれたように顔を上げた。

昔から、武芸大会は単に軍部に所属する兵士たちの士気を高めるという役割の他に、若者たちの恋を成就させる場でもあったのだ。
心に決めた相手から身に着けているリボンを貰い、それを二の腕の上腕部分に巻きつけて闘いに臨むのだ。それは、その昔、戦場に向かう男たちに、後に残される女たちが、意中の相手が無事帰還するようにとの願いを込めて、その腕に自らが身に着けていたリボンを巻きつけたという故事に由来していた。
かつては、通常のドレスの中の装飾として使われていたリボンが用いられていたが、時代が下り、その後、形を変えて、今では、女たちは、それ専用に色とりどりのリボンを用意するようになった。大抵が、自分の瞳の色や髪の色を模した色だった。
腕に愛する人からのリボンを巻いて、見事、闘いに勝った暁には、その女性の元に跪き、自らの想いに応えてくれるようにと男が求愛

をするのだ。闘いに勝つことは、相手への愛情の証でもあった。そして、相手が差し出した男の手を取ったら、目出度く合意をされたものと見做された。片恋に身を焦がす若い兵士にとっては、一世一代の賭けのような大舞台でもあった。

それを自分にやれというのだろうか。あのような衆人環視の前で。

ユルスナールは密かに口元を引き攣らせた。

だが、生憎、己が気持ちを伝えたい相手は、そのような風習があることすら知らないだろう。それを自分の口から説明をするのも随分と間の抜けた話ではないか。

己の気持ちばかりが先走って、至らぬ自分が悪かったのだろうが、悪乗りをする兄たちの口車に乗せられてか、段々と面倒になって行く事態に、ユルスナールは軽く目眩がした。

だが、その反面、自分の告白が概ね好意的に受け入れられたことに、内心、安堵の息を吐いたのも確かなことだった。

アリアルダの方を断るにしても、一悶着はありそうだが、それは最低でも越えなければならない障害だった。

この日、ユルスナールは、己が思い描く未来と目標に向かって、漸く、小さな一歩を踏み出した形となった。

印封と古代文字

ユルスナールの実家から半ば逃げるようにして背を向けたあの日から、暫くユルスナールとは顔を合わせることはなかった。

あの日、夜遅くに小さな【ノズリ】が伝令としてやってきて、小さな手紙（といっても走り書きのメモのようなものだった）が、ユルスナールから届けられた。

昼間のことを済まなかったと詫びる言葉とこの埋め合わせは後日必ず行うということが短く書かれていた。そして、最後に添えられた【ツェルーユー（キミに口付けを）】という一語。

リョウはそのやや特徴的な右上がり気味の掠れた文字を愛おしそうに眺めながら、そっと指で辿った。

こうやって気に掛けてくれることは純粋に嬉しかった。あのような態度を取ってしまった後でも、こうしてユルスナールは自分を案じてくれている。男を試す積りなど更々なかったが、目に見える形でもたらされる繋がりに涙が出そうだった。

あの日、王都見物を終えた後、シーリスとの別れ際に、今日一緒に来られなかったユルスナールへの伝言があるかと訊かれて、リョウは、『自分の為に、余り無理をしないで欲しい』とだけ伝えてくれるように頼んだ。

それは、正直な気持ちだった。ユルスナールには、ユルスナールの仕事がある。それと同じように、リョウにもやるべきことがまだまだ沢山あった。養成所の講義が佳境に入ってきたということもあり忙しくなったのだ。講師たちの方も街を挙げての武芸大会を三日後に控え、その間は授業がお休みという形になるので、その前にある程度キリの良い所まで講義を進めてしまおうと考えているようだった。

その日、リョウは古代エルドシア語の講義を午前中に受けた。

古代エルドシア文字は、術師が印封に使う際の文字として、無くてはならないものだった。飾り文字のような複雑なものだ。

今年の春の始め、初めてガルーシャからユルスナール宛ての手紙を預かった時、あの封書の宛名部分にはユルスナールの名が、そして、裏面の差出人の部分にはガルーシャの名前が、古代エルドシア文字で刻まれていた。

その昔、その不可思議な紋様のような文字を見たリョウは、自分には到底読めそうもないと思ったのもだった。ガルーシャも普通に暮らしてゆく分には、その文字が読め無くても日常生活になんら支障はないと朗らかに笑ったものだった。

今、リョウは、その文字を習っていた。その巡り合わせを少し不思議に思った。

かつて、この大地は【エルドシア】と呼ばれていたそうだ。【スタルゴラド】という国が誕生する遥か昔のことだ。

その頃、【エルドシア】の地は、別名【テラ・ノーリ】とも呼ばれていた。

【テラ】とは古代エルドシア語で【大地】を意味し、【ノーリ】とは、【数字のゼロ、物事の始まり、円環】を意味した。

つまり、【テラ・ノーリ】とは、【生命巡る大地】という意味を持っていた。

この呼び名は、遥か昔に失われてしまったという。

一柱の神の名と共に。

古くからこの地に伝わる伝承には、こう記されていた。

――――――【かつて世界は、一つだった】

文字の講義と共にそれが生まれた背景へも言及がなされた時に講師がそう語ったのだ。

その言葉が意味するところは、リョウにはよく理解できなかった。

リョウは文字を鉛筆で何度もなぞった。発音をしながら、基本的な文字の形を頭に叩き入れた。形自体は複雑で難しいが、音の付いた絵柄のようなものだと思えばいいのだ。表音文字で意味を表わすものではなかったが、複雑さだけを見れば、漢字と似ているかもしれない。基本となる母音は6つ。そして、それに組み合わさる子音が33もあった。

手始めにまず講師から配られた一覧から自分の名前の音を探した。【印封】として使う為には、自分の名前が書けなくては始まらないからだ。晴れて【術師】となった暁には、それをこの国の機関に登録することが求められていた。かつての署名や印鑑登録のようなものだと考えれば理解は早い。

【リョウ】という音は、二つの文字の組み合わせから成った。子音【エール】と母音【ヨーォ】。その音を表わす二文字が合わさって、【リョウ】となる。

紙の上に自分の名前を書いた後、順に知り合いの名前を書き連ねていった。

ガルーシャ、ユルスナールに始まり、シーリス、ブコバル、ヨルグ、アッカ、オレグ、ヒルデ……等、北の砦の面々の名を書いて行く。小半時もすれば、紙は、色々な名前を表わす飾り文字で一杯になった。　まるで緻密な暗号のようだと思った。

新しい言葉を覚えるというのは不思議なものだ。始める前は、単なる記号のような形の羅列にしか思えなかったものが、不意に意味と音を持った【文字】として頭の中に入ってくるようになるのだ。それが長々と法則性に則り組み合わさって文章になる。系統のまったく異なる文字を全て覚えるのは中々に骨が折れたが、一度、覚えてしまえば、最初の取り掛かりとしては随分と楽になった。

練習用に配られた紙の辛うじて空いた隙間の端の方で、リョウは自分の【印封】を描いてみた。

そして、ふと思った。

シーリスやユルスナールに短い手紙でも送ろうか。【印封】を施す練習として。

相手側で開封が問題なく行われれば、それは成功となる。上手く行ったらその事を後で伝えてもらえばいいのだ。そう思うとなんだか楽しくなってきた。

リョウは早速、ユルスナールに宛てて短い手紙をしたためてみた。そして、封の部分に講義の内容を思い出しながら、自分の名を【印封】として刻む。同じように宛名にユルスナールの名前を古代文字で刻んだ。これで、受取人が開封の意図を持ってその場所に触れない限り、封書の開封が出来ないようになった。

果たして術式は、上手く作用しただろうか。

それから、リョウは養成所の中庭に降り立つと、口笛を吹いた。お世辞にも上手いといえるものではなかったが、甲高い独特の摩擦音が響いた。

近くにこの辺りをうろつく暇を持て余した獣がいないだろうか。誰か、自分の呼び掛けに応えてくれるものはいないだろうか。翼を持つものであれば一番手っ取り早くていいのだが。

そう思い、遥か上空を見上げていたリョウの足元でカサリと草を踏む音がした。

ゆっくりと視線を下に転じれば、そこには艶やかな灰色の毛皮を纏う小型の獣がこちらに向かって悠々と歩いてくるのが見えた。重さを感じさせないどこか気取ったような足取りだ。

あの小さな豹のような形をした獣には、リョウも見覚えがあった。いや、忘れる訳はない。先日、自分の窮地を救ってくれたのだ。それから、セレブロから貰った加護の事を詳しく語って聞かせてくれた有り難い存在だった。

灰色の獣は、ゆったりとした足取りで直ぐ傍まで来るとこちらを見上げつつ目を細めた。
『なにか用か？』
「ティーダ！」
思ってもみなかった獣の登場にリョウは驚いた。
リョウは直ぐさまその場に膝を着くと、手触りのよい柔らかな毛並みに手を伸ばした。そして、身体全体で擦り寄ってくるティーダを思う存分撫でて摩った。こうしているとまるで人に飼われている猫のようだと思った。ただ、ティーダの場合、その口元には大きな鋭い牙が二本覗いているが。
ティーダが気持ち良さそうに喉を鳴らした後、リョウは徐に用件を切り出した。
「お使いを頼みたいんだ。【アルセナール】にいる知り合いに、この手紙を渡して欲しいと思ってね」
そう言って手にした小振りの手紙を軽く振って見せた。
『急ぎのものなのか？』
低く尋ねたティーダに、リョウは小さく笑った。
「ううん。そんな大層なものじゃないんだ。今日、【印封】の授業を受けたから、その術が上手く掛かっているかどうか確かめたいと思ってね。どうせなら、実地でやってみようと思ったんだ」
『そういう訳か』
リョウが術師の養成所で学んでいる事を知るティーダは、その言葉にしたり顔で頷いた。
『相手は誰だ？』
「ティーダが頼まれてくれるの？」
なにやら高貴な匂いのする獣に自分の瑣末な用事を頼むのもどうかと躊躇したのだが、
『その為に呼んだのであろう？　あんな下手っぴな合図では他のものには、中々気付いてもらえまいて』
リョウの口笛が余程、調子はずれだったのか、可笑しそうに鋭い

牙を見せて笑ったティーダに、リョウは拗ねたような顔をした。
だが、ティーダはそのようなことは気にも留めずに促した。
『ほれ、相手は誰だ？』
「名前は、ルスラン。第七師団の団長で、【アルセナール】にいると思う」
それから、リョウは手短にユルスナールの身体的特徴（髪と瞳の色のことだ）を語った。
その人物にティーダは心当たりがあったようだ。
『シビリークス家の末か？』
「うん」
ならば、全く知らない相手よりも話が早いだろう。
「ルスランがいなかったら、第七師団の人の誰かに渡して貰って構わないから」
『恋文かなにかか？』
急に下世話な勘ぐりをしたティーダに、
「そんな楽しいものじゃないよ」
リョウは慌てて両手を前で振った。その仕草はある意味あからさまで、却って、ティーダにはその事実を肯定しているように見えたのだが、賢しい獣はそれ以上は触れなかった。
『まぁ、よい』
小さく笑った後、リョウが手にした封書をまじまじとみたティーダは、徐に小さく息を吐き出した。
『リョウ、念の為、表と裏に普通の文字で宛名と差出人の名を書いておけ』
「へ？」
『この文字は通常の者には読めぬ。普通の兵士達には、何がなんだかさっぱりだぞ？』
よく考えてみれば当たり前のことなのだが、すっかり失念していたことを改めて指摘されて、
「そう言えば、そうだね」

リョウは苦笑を滲ませながらも、その通りだと思い、その封書に現代の文字で情報を書き足した。
『では参る』
「うん。ありがとう。頼んだよ」
ティーダは小さな封書を口に銜えると颯爽と踵を返した。
「後でお礼をするから、欲しいものやなにかしてもらいたいことがあったら、遠慮しないで言ってね」
軽快に走り去って行く小柄な豹に似た猛禽類の背中に、リョウはそう声を掛けた。
ティーダは、途中、振り返ると、足を止めてこちらを見た。
それで言いたいことは伝わったのだろう。
それから、灰色の獣の姿は、瞬く間にリョウの視界から消えていた。

「さてと。お昼を食べたら、セレブロの所に行かなくちゃな」
今日は、この後、セレブロと東の神殿を訪れる約束をしていたのだ。
リョウは、そう言って大きく天を振り仰ぐと、今後の予定を頭の中でざっと組み立て直しながら、校舎である建物の中に入っていった。

幻の亡霊

同じ日の昼下がり、一人の男が人気のない坂道を上っていた。長剣を腰にぶら下げた大柄な男だ。

急いでいる訳ではない。が、男の長靴の足が繰り出す一歩は大きく、のんびりとした歩調ながらも、男の背中は見る見るうちに小さくなっていった。

男の手には、小さな花束が握られていた。大柄な男には不釣り合いな程の可憐な小さな花が集められた小振りの花束だ。

冷たい真冬の風が、吹きつける度に男の柔らかな茶色の髪を揺らし、荒削りな顔立ちを顕わにした。その瞳の色は、よく晴れて澄んだ、だが、少し明度の落ちた冬の空の色と同じ青灰色をしていた。

男が目指す道の向こうには、白亜の建物があった。荘厳な太い柱が並ぶ四つの角には、特徴的な丸屋根が乗っていた。

あれは、この街の中でも一番古い建物と目されている神殿だった。どれくらい古いものなのかは、実の所、よく分かっていない。それでも、ここに街が作られる前からあの場所に存在していたというのは、この街に住む者ならば誰もが知る事実だった。

男が目指す場所は、その白亜の城塞と謳われた神殿ではなかった。緩やかな上り坂を登っていた男の姿は、やがて二手に分かれる道の片方に逸れた。その追分は、注意していないとうっかり通り過ぎてしまいそうなくらいのひっそりとした小道だった。そこは、神殿の裏手側にあるなだらかな丘陵へと繋がっていた。

細い道の終着点で、男は徐に立ち止まった。

男の眼前には、低く刈り取られた草の中に点々と規則だって並ぶ沢山の白い石が、群れを成すように広がっていた。

遮るものの無いなだらかな斜面は、風の通り道だ。舐めるように地面を風が駆け上がり、辿りついた先、男の足元でその長い外套の裾を一斉に翻した。

暫く、その場で佇んでいた男が、再び歩き出した。

丸い石盤の間を縫うように歩く男の足には、迷いが無かった。

それもそうだ。男はもうこの場所に幾度となく足を運んでいた。

数え切れないほどに。目を瞑ったままでも辿りつけるくらいにその道程は身体に染みついていた。

数多もの石盤が並ぶ中、とある箇所で男は足を止めた。

静かに足元の丸い白い石を見つめる。

丸い平たい円盤の形をした石の表面には、そこに眠る者の名前が、古代文字で刻まれていた。

それは、この国の術師たちが印封に使う際に使うものと同じ、飾り紋様のような複雑な文字だった。

「達者にしてたか、エルメリア」

男は、手にしていた小さな花束をそっと丸い墓石の前にたむけると、その場所に片膝を着いた。ごつごつとした剣ダコのある節くれ立った指が、そこにある名前を刻む複雑な紋様をいとおしむようにそっとなぞった。

――――――――ねぇ、ブコバル。もう十分よ。

年老いた婦人の穏やかな声音が耳の奥で鳴っていた。

あの時から、既に十年の月日が流れていた。

――――――――あなたも、私たちも、十分苦しんだわ。あなたがそこで足踏みする必要はもうないのよ。いつまでも過去に捕らわれていては駄目。あの子の為にも前を向いて頂戴。

同じ傷を抱えた老夫婦の優しい諫言。気丈な婦人が見せた思いやりだ。

やがて訪れる未来に、何の疑念も挟む事無く、ただただ毎日が眩しいくらいに輝いていた日々。
そして、それが一瞬にして崩れ去ったあの日。
あの日も今日と同じような冬晴れの日で。くすんだ蒼穹の雲を薙ぎ払うかのように気持ちの良い風が吹いていた。

「なぁ、お前はどう思う？」
――――――許してくれるのか。俺が、再び、止めていた時間を動かすことになっても。

『馬鹿ねぇ。そんなの決まってるじゃない！』
男の静かな問い掛けに、勝気でお転婆だった少女の鈴のような声音が、風に乗って届いた気がした。

男はそっと目を閉じた。
後悔などしていない。お互いの為にも、あの時の自分にはああするしかなかったのだ。
それでも。その事が、あの少女の死の原因の一端を担ったことに、心のどこかでずっと負い目を感じ続けてきたのも事実だった。
あの日以来、ブコバルは過去の亡霊に取り憑かれていた。幼い頃の輝かしい眩しい程の幻影に、がんじがらめに捕らわれているのだ。
本当にああするしか方法が無かったのか。それは今でもよく分からなかった。幼い子供の胸算用など高が知れているし、この世の中には、気持ちだけではどうにもならないことがままあり、それを受け入れるのも人生だということに気が付いたのは、あれから何年も先、長じてからのことだった。

あれは昔から気の強い性質だった。
ブコバルは、どこか遠い目をして、なだらかな丘陵を見渡した。
大きな雲が、一筋の影となって視界の先を走るように通り過ぎて行

った。

一度決めたことには頑として引かない。その意志の強さと頑固さが徒となった。

そろそろ下手な罪滅ぼしなど止めた方がいいのか。

毎年、ここに来る度に同じことを思い、そして、同じことを繰り返して来た。

答えは未だ出ていない。

ブコバルは緩く頭を振ると、ゆっくりと空を仰いだ。

降り注ぐ日差しは、男の逡巡を嘲笑うかのように、酷く優しく、そして温かかった。

午前中の講義を受けた後、食堂での昼食を挟んで。

リョウは、養成所の敷地を出ると進路を東に取っていた。今、目指しているのは、遠く高台の上に霞んで見える白亜の城塞の如き堅牢な建物、この街の中でも古くからあるという東の神殿だった。

神殿は、高台の上にあった。そこはこの街全体を一望にできる場所であるという。そこでセレブロと待ち合わせをしていた。

昨晩、不意に養成所の寮の自室にセレブロがやってきて、共に神殿に行こうと誘われたのだ。なにやら、神殿にはセレブロの知り合いがいて、リョウに引き合わせたいということだった。リョウの方でも【プラミィーシュレ】での一件以来、【東の翁】と名乗った老人のことが気に掛かっていたので、その申し出をちょうど良いと思った。

神殿に向かって緩やかな坂道を登っていると、前方の木陰から不意に一人の少女が現れた。手足の長い可憐な少女だった。明るい赤みがかった巻いた髪を後ろで一つに束ねて、薄い灰色の目をしていた。白い肌に上気した薔薇色の頬が可愛らしい印象を与えていた。

その少女は、リョウの方を見るとにっこりと笑って、小さく手を拱いた。

なんだろうかと思う間もなく、少女が歩き出す。途中、小さく振り返っては、ちゃんとリョウが付いてきているかを確かめているようだった。

「あ、ちょっと。キミ！」

声を掛けてみても何やら嬉しそうに微笑むばかりだ。

手を拱いていた少女が、不意に道を脇に逸れた。リョウは内心訝しく思いながらも、誘われるままにその後を付いて行くことにした。

リョウは、小走りに駆けた。少女は軽やかにステップを踏む。傍に行こうと思い足を進めるも、何故か少女との距離は縮まらなかった。

少女が歩く度に淡いクリーム色のたっぷりとしたスカートの裾が翻った。細くくびれた腰の部分にも大きな共布のリボンが揺れている。歳の頃は、１４、５位だろうか。全体的に線の細い、まだ女性としては発達途中の少女だという印象を受けた。

縮まらない距離を不思議に思いながら、見失わないように集中して少女の後を付いて行くと、やがて、細い小道を抜けて、開けた場所に出た。

そこには、なだらかな丘陵が広がっていた。視界の右の方に白い建物が見える。あれが、目指していた神殿だろう。ちょうどその裏手に出たようだった。

その場所には、リョウにとっては初めて見る不思議な光景が広がっていた。

なだらかな背丈の低い芝生だろうか、草で覆われた地面に、丸い白い円盤のような石が等間隔に広がっていた。囲碁の白い碁石を盤の上にマスの部分に沿って全部並べたような、そんな印象を受けた。

それをぼんやりと見渡してから、不意に、リョウは、息を飲んだ。

これに似たような景色を自分は知っている。そう思った。

辺りは、とても静かだった。厳かな静寂が満ちているように思えた。聞こえてくるのは、大地を舐めるように走る風の音ばかり。

暫くして、『ああ』と合点した。ここは【墓地】なのだと。

記憶の中にある情景と目の前の景色が重なった。

それから足下にある石の一つを見下ろしてみた。そこには、恐らく、この場所に眠っているであろう人物の名前が、古代エルドシア語で刻まれていた。

覚えたばかりの文字を辿ってみる。

アリョーヒン、享年４７。×××年、青の第２月１５日。

その表示を見て、この場所が墓地であることを確信した。

――――――ねぇ、どうしたの？　早く！

不意に朗らかな高い声音が聞こえた気がしてリョウは顔を上げた。

先程の少女の声だろうか。

そう思い、ぐるりと辺りを見渡して、とある一点でリョウの視線が止まった。

遥か向こう、丘陵の窪地を越えて少し左方向に上がった所に小さく人影が見えた。

よく目を凝らしてみる。それは、黒っぽい外套を羽織った男の姿のように見えた。

その男は一人、ぽつんと立っていた。微動だにしない。まるでその場所だけ、時が止まっているかのようだった。

だが、吹きすさぶ風が、男の外套の裾と髪を揺らす。そうやって、止まっているのは時ではなく、その男そのものであることを知らしめていた。

こちらに背を向けて立っている為、男の顔は分からなかった。

不意に男が、空を仰ぐように上を向いた。

――――――ビーカ！！！

高らかな少女の声が響いたかと思うと吹きすさぶ風に掻き消えた。

それに合わせるかのように、こちらに背を向けていた男が、ゆっく

りと振り返った。
男の顔が露わになる。柔らかな茶色の髪に縁取られた男らしい顔立ち。遠く離れている為、その造作はよく分からなかったのだが、何故か、男の瞳の色は、このくすんだ冬晴れの蒼穹を写したような青灰色の色だとリョウは思った。
男の目が大きく見開かれた。口が薄く開き、何かを紡ぐ。
「……ビーカ……」
リョウの口は、何故か、その言葉を吐き出していた。
無意識だった。頭の中に反響した単語を復唱していた。
こちらの言葉が届いたのかは分からない。いや、これだけ距離が離れていて、おまけに風もあれば普通は無理な話だろう。
それなのに。
男の顔が痛みを堪えるようにくしゃりと歪んだ。そして、徐に顔を背けると片手で顔を覆った。
リョウは、先程の声の主を探して、ゆっくりと後方を振り返ったが、自分をここまで案内してきたであろう少女の姿は、どこにも見当たらなかった。
リョウは、何故か、自分はあの男を知っていると思った。
――――――ブコバル。
その瞬間、頭の中に浮かんだ人の名前に自分で驚いた。
そう。あれは、ブコバルだ。
リョウは、ハッと我に返ると足を一歩前に踏み出していた。
そして、いまだ立ち尽くす男の元に歩み寄った。その瞬間、少女の鈴のような笑い声が耳の奥で鳴った気がした。
近づいて来た人物の姿形が露わになって、ブコバルは不意に金縛りから解けたように身体を震わせた。
「やっぱり、ブコバルだ」
近づくにつれて、黒っぽい外套を羽織った男の姿は、自分が良く知る人物の形になった。

それは向こうも同じだったようで。
「リョウ、なんだ、お前。……こんな所で」
近づいて来た人物が知り合いだと分かった為か、ブコバルは気の抜けたような声を出していた。
それにそっと微笑んだ。
「あそこに行く途中だったんです」
そう言って後方を振り返ったリョウは、右手の高台の上に聳え立つ白亜の建物を指差した。
「神殿にか？」
「はい」
「そうか」
「でも、こんな所にこんな場所があるなんて知りませんでした」
リョウは小さく微笑むと周囲を見渡してから、感じ入るように息を吐いた。
所々、丸い石盤の上には、添えられた花束が点々と置かれているのが見受けられた。
この場所に花を手向けに訪れる人があるのだろう。
リョウは、ふと、ブコバルの立つその足元を見遣った。そこには、まだ真新しい小振りな花束が、白い円盤の上にそっと置かれていた。
そこに刻まれた名前を目で追った。
――――――エルメリア。×××年、黒の第一の月27日。享年17歳。
黒の第一の月27日。奇しくも今日が命日だった。
リョウの視線の先を辿ったブコバルが、小さく身じろいだ
「お墓参りにいらしてたんですね」
「ああ」
「エルメリア……さん。若くしてお亡くなりになったんですね」
「ああ」
リョウは、ふと、自分がこのくらいの歳には、何をしていただろうかと思った。

毎日、学校に通って、それなりに楽しくて。小さな悩み事はあったけれども、それも一晩経てば忘れてしまうくらいのささやかなもので。時の経つのも忘れて、友人たちとお喋りに興じていた。その後の将来については全く疑いを持たずに、未来はそれなりに輝いて見えた。少なくとも、そこで自分の生涯が強制終了するとは露も思っていなかった筈だった。

そんな輝かしい未来を残して、そこに眠る少女は永久（とわ）に旅立った。後に残されたご両親の心痛は、いかばかりであっただろうか。

そして、恐らくこの男の心も。

リョウは顔を上げると命日に墓参りに訪れた男の方を見た。

「【ビーカ】というのは、ブコバルの小さい頃の愛称かなにかですか？」

その言葉にブコバルは目を見開いた。

だが、直ぐに、そこで昔を懐かしむような顔をして目を細めた。

「ガキのころの話だけどな」

そして、不意にリョウの方を振り返った。

「それにしてもよくこんな所が分かったな。なんだ、おい。迷子にでもなったのか？」

人を小馬鹿にしたからかうような声音（ブコバル流の御挨拶だ）に、リョウは軽く首を振ると、ここに至る契機となったとある少女との不思議な邂逅を語った。

「神殿に向かう途中で、綺麗な女の子に会ったんです。歳の頃は、そうですね、１４、５くらいでしょうか。明るい少し赤み掛かった茶色の巻き髪を束ねた可愛らしい感じの女の子です。溌剌としたお転婆そうな感じの」

その子が手を拱いて呼んでいるようだったので付いて来たのだが、何故か、ここに来てその姿を見失ってしまったのだ。

事の次第を簡単に告げれば、

「なん、だって……？」

ブコバルは、固まって虚を突かれたような顔をすると、次の瞬間、

いきなりリョウの肩に掴みかかった。
「おい、リョウ。その子はどんな格好をしていた？　どんな奴だった？　瞳の色は？」
掴んだ肩を揺さぶって畳みかけるように問われて、リョウは、突然のブコバルの剣幕に驚きを隠せなかった。面食らうように青灰色の瞳を見上げる。
だが、対するブコバルの目はえらく真剣で、なにやら切羽詰まったような感じだったので、言われるままに思いつく限りのことを挙げていった。
大きな共布のリボンを着けた淡いクリーム色のワンピースを来た少女であったこと。たっぷりとした生地をふんだんに使ったスカートからは白いレースが覗いていた。全体的に華奢な感じのほっそりとした少女だった。瞳の色は、確か薄い灰色だった。
リョウが自分をこの場所に案内してきた少女の姿形を覚えている限りで挙げ連ねると、ブコバルは、不意に掴んでいた肩から手を放し、それから、緩慢な動作で、片手で柔らかな髪を掻き上げた。
「まさか……」
そんなはずは。そんなことがあるのかというような信じられない声を上げる。
リョウは、徐に白くて丸い墓石の前に跪くと、そこに刻まれている装飾文字に触れた。
ブコバルの只ならぬ反応を見る限り、あの少女は、ここに眠るというエルメリアであったのだろうか。あれは、あの少女の魂が現れたものであったのだろうか。こちらにも霊魂のようなものが存在するのだろうか。それもとこの場所に残っている誰かの記憶に触れてしまったのだろうか。ブコバルの記憶なのだろうか。そんなことがぐるぐると頭の中を巡った。
リョウは、以前、ガルーシャの封書から立ち上るようにして現れた青白い光の粒子が集った幻影を思い出していた。あの時、ユルス

ナールは、それが自分の残像思念だろうと告げたのだ。
そこで初めて、この世界では、人の想いが時として映像の形で残ることを知った。リョウの胸元にぶら下がる瑠璃色の石の付いたペンダントには、ユルスナールの想いが図らずも付着していて、スフミ村のリューバの所で具現化したものを目の当たりにしたことも記憶の中にまざまざと残っていた。
それらの経験談から、自分をここに案内したものは、ひょっとしたら、ここに残る誰かの記憶ではなかろうかと思ったのだ。
とても強い想いだ。それを確かめてみようと思った。

――――――――【パイェヴリャーイ（出でよ）】

呪いの言葉を唱えながら、名前の刻まれた古代文字の部分を指でなぞると、淡い光が現れた。それは初めて見る赤みを帯びた光だった。
温かい何かが流れ込んでくるのをリョウは指先に感じていた。光は徐々に大きくなってくる。そして、迸る奔流のようになってきた。熱い。と同時に息の詰まるような強い圧迫感が押し寄せて来た。
リョウは余りのことに目を瞑った。それは、今までに感じたことのないような強烈な感覚だった。
「――――――ッツ！」
思わず堪えるように漏れた声に、
「リョウ？」
ブコバルから心配そうな声が掛かった。
触れている指先を石盤から放そうにも身体が動かなかった。固定されたように、刻まれた文字の部分から離れない。
何か途方もない大きなものが入ってくる。侵略される。いや、飲み込まれるような感覚がした。その衝撃を、歯を食いしばり、精神を集中させることで耐えた。
だが、最終的には、光の奔流の方が上回り、耐えることが出来なかったようだ。そこで、リョウの自我は、一時、強制的に外部から

遮断され、外から入ってきた何者かに取って替わった。

その瞬間、傍にいるブコバルは、リョウの空気が変わったのを肌で感じ取った。

「リョウ、大丈夫か?」

先程の淡い赤みを帯びた光はなんだったのだろうか。

石盤の前で片膝を着いたまま、急に動かなくなったリョウの肩にそっと手を置いて覗き込むようにしてその顔を見た。

ブコバルは、徐に顔を上げたリョウを見てぎょっとした。

身に纏う空気が、先程までのリョウのものとは明らかに違っていた。姿形は変わらないのだが、それを包む空気が違っている。それは野性的勘の発達したブコバルならではの感じ方だった。

「ええ。大丈夫よ?」

そう言ってリョウは、静かに立ち上がった。

その瞬間、ブコバルは途方もない違和感を覚えた。全身に鳥肌が立つような気持ち悪さだった。

顔の造りや外見はリョウなのだが、その表情は、ブコバルの知るものとは違った。リョウはこんな風に自分を見ない。リョウは決してこんな顔をしない。

ここにいるのは一体誰だ?

「リョウ……じゃねぇな?」

ブコバルは目を眇めると声を低くした。

「誰だ?」

一体、何が起きたというのだ。リョウがエルメリアの石盤に触れた瞬間、その体は、淡い光に包まれたように思った。赤みを帯びた光だ。

警戒心丸出しのブコバルを前にリョウの姿を取った何者かは、少し不服そうに口を尖らせた後、からりと笑った。

「やぁねぇ、ビーカ。あたしを忘れちゃったの?」

その口調。その言葉使い。

ブコバルは、口を呆けたように小さく開けたまま、目を見開いた。
余りの衝撃に思考が一時停止する。
――――――――まさか。
「酷いじゃない！」
「まさか……」
そんなことがあるのか。
「エルメリア……か？」
「ええ」
リョウの姿を取っている人物は、エルメリアであることを認めると嬉しそうに微笑み、その華奢な腕を伸ばして、ブコバルの男らしい首に抱きついた。
「ビーカ、会いたかったわ。ずっと」
夢を見ているのだろうか。ブコバルは信じられない気持ちで一杯だった。
エルメリアは、十年前に死んだのだ。それも自ら命を断つという形で。
膨れ上がった借金で身動きの取れなくなった実家の為に、借金のカタに裕福な地方貴族の元に嫁いだ。勝気でお転婆な所があったが、元々病弱な性質で、同じくらいの年齢の子供たちと比べても小柄な方だった。そんな少女は、嫁いだ先で、早々に短剣で喉を突いたのだと言う。

その昔、嫁ぎ先が決まった直後辺りの頃だ、酷く思いつめた顔をしてエルメリアがブコバルを訪ねて来たことがあった。
あの日のことは、今でもよく覚えている。あの時のエルメリアの表情は、今でも鮮やかに目裏に焼き付いていた。
突然やってきたエルメリアは、ブコバルに自分を抱いてくれと迫ったのだ。
当時、ブコバルは、エルメリアのことを憎からず思っていたには違いはなかったが、余りにも突拍子の無いことに度肝を抜かれたの

をよく覚えている。
　エルメリアが、近々嫁ぐことが決まったということはブコバルも知っていた。それはエルメリアにとっては意に染まぬ婚姻であったのだろうが、往々にして親が相手を選ぶ貴族の婚姻などそのようなもので、当時、まだ子供であったエルメリアもブコバルもどうすることも出来なった。
　エルメリアは、どうせ知らぬ相手に嫁ぐなら、その前に好いた男と想いを遂げたいと思ったのだろうが、ブコバルは、それを受け入れることはしなかった。
　それもそうだろう。嫁いだ先、初夜を迎えた時点で処女である筈の花嫁が、男を知っていたなどということになれば、ただ事では済まされないからだ。恥をかかされたと憤った花婿側にその場で手打ちにされることだってあるだろう。そして、事は当人だけでなく両者の家を巻き込んでの騒動になりかねなかった。純潔を奪った相手である男の方の家をも巻き込む形にだってなるだろう。幾ら、年若い少年と《いえど》雖も、ブコバルもその辺りの事情はよく分かっていた。だから、最後の一線を踏みとどまったのだ。
　無茶なことをするなと宥めすかして、ようやく相手を思い留まらせて。エルメリアはその夜、泣きそうな顔をしながらも、強くブコバルを睨みつけて帰っていった。
　そして、エルメリアはとある地方貴族の元に嫁いだ。
　エルメリアが、自ら命を断ったと聞いたのは、それから半月程経ってのことだった。
　公には、病死ということで届けられた。それは、外聞を気にした嫁ぎ先の配慮であったようだ。
　訃報を聞いた人々は、若くして亡くなった花嫁のことを悼み、嘆き悲しんだ。元々、病弱であったということもその信憑性を裏付ける形になった。
　エルメリアの遺体は、秘密裏に実家に返され、そこでひっそりと親族だけの立ち会いの下、葬儀が行われたと聞いた。

エルメリアの喉には、無残にも切り裂かれた跡があったという。自らの喉を突いたということがそれから知れた。それによる失血死が死因だった。

あの時、棺の中に静かに横たわる幼馴染の少女の姿を遠目に見て、ブコバルは唐突に気が付いたのだ。失った少女のことを好きだったという己の気持ちに。

あの日以来、ブコバルの目裏には、思いつめた顔をしたエルメリアの表情が頭から焼き付いて離れなかった。

あの日以来、そのことがブコバルの中に暗い影を落としていた。明るい少女の幻覚が幻影のように立ち上り、目の前にちらついて止まなかった。

それ以来、ブコバルは、女性と遊びはしても心から愛する人を作ってこなかった。女好きというのは、二度と手に入れることの出来ない存在によってぽっかりと空いた空虚さを埋める為の誤魔化しなのだ。

それを本人が自覚しているかどうかは分からないが。

今、ブコバルの目の前にいるのはリョウだが、そこに薄らとかつてのエルメリアの姿が重なった。

背丈も体つきもちょうど同じくらいだろうか。

だが、あの日から、既に十年の歳月が流れているのだ。

今更、なんだというのだろうか。

ブコバルは途方に暮れたような顔をしながら、首に齧りついていた華奢な腕を外した。

「どういうことだ、エルメリア？　リョウに何をした？」

今、気懸りなのはその部分だった。

「少し身体を借りただけよ」

リョウの姿をしたエルメリアは可笑しそうにクスクスと笑った。

記憶の中にあるのと変わらない屈託のない笑顔で。

「この人は凄いわ。あたしと波長が合って吸い込まれたのよ。だって、この人は空っぽなんですもの。温かで、とても気持ちが良くて。この人なら、あたしが見える。あたしの想いを分かってくれるって思ったの」

ブコバルは、エルメリアが何の話をしているのか理解できなかったが、リョウの術師としての素養のことを言っているのだろうと見当を付けた。

「じゃぁ、これは一時的で、リョウは、ちゃんと元に戻るんだな？」

「ええ。大丈夫よ？。この人の自我はちゃんとこの片隅にある。あたしが今、こうして前に出ているのが分かっていると思うわ」

その言葉にブコバルは安堵の息を吐いた。

信じられない事には違いなかったが、実際に目の前で起きていることなのだ。不思議ではあったが、信じない訳にはいかなかった。

エルメリアは表情を改めるとブコバルをそっと見上げた。

「ずっとあなたに謝りたかったの。ビーカ。こちらではもう何年経ったの？」

「十年だ」

「……十年。……そう。そんなに。あなた、すっかり男らしくなっちゃって。吃驚したわ」

男の成長した姿にエルメリアは眩しそうに目を細めて微笑んだ。

「お前はあの時のままだな」

「ええ」

エルメリアは、そっと目を伏せ、再び視線を上げた。そして、真正面からブコバルの青灰色の瞳を見つめた。あの頃と変わらない色合いの瞳だ。

「ごめんなさい。ビーカ。あなたをずっと苦しめて。まるで当てつけみたいにあんなことをして。それだけが、ずっと心残りだったの」

そう言うとエルメリアはどこか苦しそうな顔をした。

「あなたが毎年、ここを訪れる度に苦しんでいるのが分かったわ。だから、もう終わりにしましょう？　あなたが、これ以上負い目に

思うことはないの。みんなあんなことをしたあたしの所為なんだから。あたしはもう平気だから。ずっとそれだけが言いたかったの。でもそんな機会なんて無くて。あたしの想いに気が付いてくれる人もいなくて。そんな時に偶々この人が現れたの。あなたの知り合いだったなんて吃驚ね」

「そうか」

ブコバルはそれだけを口にするのが、やっとだった。

「済まなかったな。エルメリア」

「どうしてそこでビーカが謝るの？」

「俺はお前に何もしてやれなかった」

そうだ。あの時、もう少し違う別れ方をしていたら、エルメリアは自暴自棄にならなかったかもしれない。それをずっと悔んでいた。

「そんなことないわ！」

エルメリアは首を横に振ると苦々しい顔をしたブコバルにそっと微笑んだ。それは、どこか自嘲的な哀しい笑みだった。

「馬鹿な事をしたわね、あたし。生きていればもっと楽しいことがあったかもしれないのに……。でも、あの時は、それが分からなかった」

ブコバルは抱擁を解くと、そっとエルメリアの頬に手を伸ばした。宥めるように大きな手でその柔らかな頬を触りながら、自分の額をエルメリアの額に押し付けた。

エルメリアは、その大きな手にそっと頬を擦り寄せた。

「でも、漸く、これであたしも旅立てるわ」

そう言って見上げるとそっと泣き笑いのような顔をした。

「あたしは、叶うことならあなたの妻になりたかった。でも駄目だったわ。だから、あたしの分まで幸せになってね。そうじゃないと許さないんだから！」

当時のままの勝気な台詞にブコバルは小さく笑った。

「随分なことを言うじゃねぇか」

小さく口の端を吊り上げたブコバルにエルメリアは口早に囁いた。

「ビーカ、さようなら。ありがとう。この人によろしくね」
不意にエルメリアの身に纏う空気が変わったとブコバルは感じた。全面に出ていた眩いばかりの幻影が霞み始める。エルメリアが消えようとしていることが分かった。
「もういい。それ以上、しゃべるな」
ブコバルは、エルメリアをきつく抱き締めると貪るように口付けた。
最後のお別れだということが分かった。
ビーカ。ビーカ。ビーカ。さようなら。ありがとう。ごめんなさい。
口付けの合間に繰り事のように繰り返される呪縛のような言葉。その言葉を全て飲み込むようにして、ブコバルは深く愛しい女の呼気を奪い取った。
そして、そっとエルメリアは目を閉じた。眦から、一筋の涙が頬を伝って流れていた。
そこで、エルメリアは身体の力を抜いた。リョウの身体からすっと離れ、その意識と交代したようだった。

鉛のように重く沈んでいた身体が、急激に軽くなって、上から引っ張り上げられるような感覚がリョウを捕らえた。暗闇から急激に明るい場所に引き摺り出される。眩い光が差し込み、目眩がしそうだった。
唐突に意識が戻った時、リョウは自分が外部からきつく拘束されて、息苦しくて堪らないことに気が付いた。電灯の明かりが付いたようにぱちりと目を開いた。そして、眼前に迫っている見知った男の顔に吃驚した。
「ンンン――――――――！」
気が付けば、熱い舌が口内を蹂躙していた。
ブコバルと口付けを交わしているのか！？　何でこんなことになっているのだ？

覚醒直後、余りの出来事に頭の回線が焼き焦げたように真っ白になった。鼻で息をするのを忘れるくらいだ。

リョウは、息苦しさに、慌ててブコバルの胸の辺りを叩いた。

「ン、ン、ン、ンー！！！」

区切った音節で名前を呼ぶように声にならない悲鳴を上げた。

そして、リョウが唇を解放された時には、ぜぇぜぇと肩で息をしていた。

ブコバルは、口付けを交わしていた筈の相手が、エルメリアでなく、いつものリョウに戻ったのを感じた。

涙目でこちらを見上げる顔は、信じられないという表情をしていた。

その事に内心、安堵の溜息を吐いた。

「リョウ……か？」

確認するような言葉にリョウは、目を白黒させた。

ブコバルは、何を言っているのだろう。決まっているではないか。

「はい？」

自分の意識が沈み、何かに取って代わられたということは薄々感づいていた。客観的に外から自分を眺めている妙な感じだったのだ。もう一人の自分の姿をした自分ではない別の誰かの存在を感じていた。それも、熱くて切ない程の途方もない【想い】を抱えた誰かだ。

あれは、エルメリアという少女だったのだろうか。

あの石盤に刻まれた文字に触れた時、指先から沸騰した血液が逆流するかのように流れて込んで来たのは、ブコバルへの複雑な激情とも言うべき感情の奔流だった。愛しさと自分の気持ちに応えてくれなかったことへの恨めしさと。はち切れんばかりの愛憎、張り裂けそうな程の強い魂の叫びだった。

その時の激情の一部を思い出してか、未だ、夢現の中を彷徨うように茫然としたままのリョウに、いち早く、冷静さを取り戻したブコバルが、この短い時間の間に何が起きたかを簡潔に告げたのだっ

た。

そこで、リョウは、自分の中にエルメリアという少女の【想い】が入り込んだ事を知ったのだった。リョウが徒に石盤に触れた所為で、そこに残った【想い】がこの身体を一時的に乗っ取るまでになったらしかった。

俄かには信じられない出来事にリョウは唖然とした。そして、軽率な行動を取った自分を戒めた。

「済まなかったな」

そのまま、どちらからともなく地面に腰を下ろして。

それからブコバルは、ぽつりぽつりと墓石に刻まれたエルメリアという少女との関係を語り始めた。

リョウは、それを黙って聞いていた。

幼馴染のような少女の自殺。輝かしい未来を残して少女は自ら命を絶った。それが、少女に唯一出来た最後の抵抗とも言うべき意思表示だったのだ。そして、その原因の一端になったであろう自分との関わり。

「……そうだったんですね」

全てを聞き終えたリョウは、長い息を吐き出した。

去来する様々な思いに先程まで体内を駆け廻っていた激情の波を昇華させるように。

女好きで手が早いことで有名なブコバルに隠された過去は、余りにも痛ましかった。

その時の悔恨を少しでも薄める為に、女たちと身体を重ねるのだろうか。だが、それも一時的な快楽の後には、底知れぬ虚しさが残るだけだろう。

リョウはこの日、初めて、ブコバル・ザパドニークという男の本質を垣間見た気がした。

リョウはそっと隣に座るブコバルの横顔を盗み見た。

膝を抱えて座るブコバルは、まるで別人のように小さく見えた。。
「なんて顔をしてるんですか」
リョウは態とらしく明るい声音でからかうように口にすると、手を伸ばして、そっとその男らしい精悍な輪郭に触れた。
静かに佇むブコバルの横顔には、迷子になって途方に暮れたような不安を滲ませた幼子の表情が浮かんでいた。そこに、まだ幼さの残る少年の姿が重なって見えた。
そんなブコバルを見るのは、初めてのことだった。いつもの飄々としてふてぶてしいまでの尊大な態度は欠片もない。
リョウは手を放し、そっと微笑むと、小さく息を吐き出して遠くを見つめた。
「こちらでは【人の想い】というものは、時として物凄い力(エネルギー)を持つものなのですね。こうして形となって残り、現れるくらいに」
それを具現化させる為には、特殊な能力を持った術師の介在が必要なのだろうが、それでも形にならない筈の【人の想い】が目に見える形で提示されるのは、かつての常識では考えられないことだった。
「忘れることなんて出来るかよ……」
エルメリアに自分の事は忘れてくれとでも言われたのだろうか。
どこか苦しげに小さく吐き捨てたブコバルに、
「無理に忘れる必要はないと思いますよ」
リョウはそう口にすると、なだらかな丘陵を吹く風に揺られる芝生の軌跡を眺めた。
「あの子が言いたかったのは、ありのままの事実を受け止めることだと思います。かつての衝撃的な出来事を客観的に見るのは、とても難しいことですが、それが出来て初めて、過去を過去として捉え、そこから一歩、踏み出すことが出来ると思うんです。そうは言っても、【過去】にはどうしてもその時の【余計な個人的感情】というものが付いてきてしまいますから、口で言う程、容易ではありませんが」

そう言うと小さく微笑んだ。
「少しずつでいいんです。今日、ブコバルは、エルメリアの本当の【想い】を見つけた。十年という途方もない時間は掛かりましたが、全く知らないよりはずっと良かった筈です。それで、少し、心が軽くなったのではありませんか？」
「……ああ」
ちらりと横目に見たブコバルは、一瞬だけ、泣きそうな顔をした後、不意に小さく笑った。
「そうだな」
そうやって空を仰いだ精悍な男の横顔に、涙が一筋流れたことに、リョウは気が付かない振りをした。

くすんだ冬晴れの蒼穹は、男の瞳を映して淡い空色に染まる。
この日も、あの時と同じように、心地の良い風が吹いていた。

幻の亡霊（後書き）

ブコバルの意外な過去が明らかになりました。そして少しずつ、リョウに隠された秘密が暴かれることになりそうです。

伝令狂騒曲

リョウが神殿へ向かい、緩やかな坂道を登っている頃と時を同じくして。

この国【スタルゴラド】が誇る首府、王都【スタリーツァ】の軍部が入る建物である【アルセナール】の館内を悠々と我が物顔で歩みを進める小型の灰色の毛並みを持つ猛獣が一頭。生来の俊敏さを思わせる軽やかな足取りに、その口には、何やら封書と思しき小さな手紙のようなものが銜えられていた。

【スタルゴラド第三師団】副団長の肩書を持つヒューイ・サフォーノフは、廊下を左側からこちらに向かって歩いて来るその珍妙な生き物を前に足を止めた。

「ティティーではないか！」

その小振りな四足の獣は、現在、王族のとある姫君の下で暮らしているというのが専らの認識だった。姫君のお気に入りというよりは、獣の方が姫を気に入っているらしい。

というのも、小さいからと言ってこの獣を見縊ってはいけない。獰猛な肉食獣であるその口元には、一噛みで人一人の息の根を止めることが出来る程の鋭い牙が二本生えていた。性格は見かけによらず意外に温厚で常識的な方だろう。但し、それも獣の中でみた場合という注釈が付くだろうが。

この国に暮らす獣たちの例に漏れず、この灰色の四足も人の生と比べれば格段に長生きだった。自分の父親が子供の頃にも同じようにこの宮殿の敷地内を悠々と闊歩していたと聞いている。ある意味、その存在は、宮殿の敷地内に仕える者たちにとっては有名だった。

獣たちは、人知では測り知ることの出来ない知性を持っている。その事をよく知るこの国の貴族連中は、決して【獣風情】などと侮

ることはしなかった。そんなことを口にしたら最後、痛い目を見るのは、確実にそれを口にした人間の方であったからだ。

その獣は、ティティーと呼ばれていた。随分と可愛らしい呼称だ。本当の名前は、どうも違うらしいのだが、それを敢えて尋ねる者もいなかった。

ヒューイが声を掛ければ、ティティーと呼ばれた灰色の獣はうっそりと目を細めた。その口に何やら物を銜えているようなので、声は出ないらしい。

「こんな所にどうしたのだ？」

自由気ままな性質ではあるが、通常、宮殿の敷地内で暮らすティティーが、その区画を抜け出し、このような軍部の集まる【アルセナール】にやってくるのは珍しいことだった。

ヒューイが知る限り、初めてのことかもしれない。

『ふん、サフォーノフのところか』

目の前に立ちはだかる体格の良い男を見て、ティティーはどこか尊大な態度で返していた。

このティティーに限らず、人と交流のある獣たちは、大抵、その家名で人を認識・判断している節があった。ヒューイも初対面の時には、自らの名を名乗った訳だが、このかた名前で呼ばれたことはなかった。

人よりも格段に長い寿命を生きる存在だ。いい加減、覚えるのも面倒なのかもしれない。

だが、家名だけでも区別を付けてもらえるのだから、その点は有り難いと思わなくてはならないのだろう。

軍部が専ら伝令に使う鷹や鷲、隼といった猛禽類たちもそうだ。人との関係は、対等な立場か、時として獣の方が上であったりする。特に新米の兵士に相対する時はそうだ。

軍部に於いても人が獣を使役するのではない。対等な関係の下、人の方が獣に協力を仰いでいる形になるのだ。両者の関係にひびが

入れば、獣たちはそっぽを向く。そこを上手く取り持って両者の関係維持を図ることが【伝令】という重大な任務を統括する兵士たち（要するに鷹匠たち）の腕の見せ所であった。

ヒューイは、ティティーの口に小さな封書のようなものが銜えられていることに目を留めた。

「珍しいこともあるものだな」

そこには、薄らと術師の施した印封が見て取れた。宛名の一部も確認できたが、それはまるで教科書のお手本にあるような綺麗な飾り文字で刻まれていた。

どうやらティティーはお使いの途中のようだ。だが、小さな灰色の獣が、【伝令】の如く封書を口に銜える様は、実に珍しくヒューイの目には映った。大体にして人に媚を売ったり、懐いたりすることはしない性質だ。

そのことをヒューイが仄めかせば、ティティーはフンと鼻で笑った。

『うぬには関わりのないこと』

ティティーは廊下が交差する突き当たりで、軽やかにヒューイの隣に並ぶと、その前に躍り出た。するとその軌跡が、小さな光の帯のようになって現れたのが分かった。

ティティーの口にある封書が、仄かな青白い光を放っているのにヒューイは気が付いた。そして、瞬時に、その封書にはかなり強い呪いが掛けられているらしいことを見てとった。

【印封】とは、術師が宛先に記された者以外の人物にその中身を改められないようにする為に施す措置だった。然るべき密書や機密を扱う重要書類、そして親書の類に利用されていた。呪いが強固であればあるほど、そして、それを施した術師の能力が高ければ高いほど、その印封には、薄らと光のような帯が巻かれているのが見えるのだと聞いている。

ティティーが口に銜えているものには、そのような強い呪いが掛けられていた。あのように強い光を放っているものをヒューイは間近で目にした機会は、これまで余りなかった。

ヒューイは、不意に片方の眉をくいと引き上げて、興味深そうな顔をした。

あれは、余程のことが書かれている内密な文書なのだろう。昨今、類を見ない現象に不意に胸が騒いだ。と言っても、その心の内は、表面上、男の姿には表れていなかったが。

ヒューイは、ティティーに負けず劣らず、どこか尊大な空気を持つ男だった。濃いめの茶色の髪をすっきりと脇に流して、その瞳は緑色をしていた。見る者に硬質で鋭利な印象を与える顔の造作だった。それなりに名の知れた貴族、所謂、上流階級の出身であることも起因しているだろう。

因みに、リョウが【アルセナール】で初めて見掛けた人間で、道を尋ねようと声を掛けたのがこの男だった。

「おい、ティティー」

ヒューイは、自分の前に躍り出たかと思うと軽やかに去ってゆく獣に追いつこうと長い脚を繰り出した。

「その封書は誰に宛てたものだ?」

ティティーはちらりと後方を振り返ったが、鼻で笑って相手にしなかった。

『そなたに教える義理もない』

小馬鹿にしたようにこちらを見たティティーの態度にヒューイは内心ムッとした。

「余程、大事な封書のようだな?」

伝令の役目を負っているティティーは、みだらに依頼者とその宛先の情報を開示する筈がなかった。

だが、そのまま歩調を緩めることなく、廊下を歩くティティーに、ヒューイは尚も食い下がった。小さな獣の背中を追うように歩く速

度を速めた。
『いづれの封書も大事。優劣などないわ』
どうやらティティーはその宛先を教える積りは更々ないようだ。
ヒューイは、こうなったらティティーがどこに向かうのか、その先を見届けてやろうと思った。
ヒューイ・サフォーノフという男には、見掛けに寄らず、意外に負けず嫌いで子供染みた所があった。

こうして【アルセナール】の広い館内を悠々と軽やかに駆けて行く灰色の小型の獣とその後方を必死に付いて行こうとする強面で大柄な第三師団副団長という珍しい組み合わせが見受けられた。
小さな獣の後を追いかける男の物凄い顔付きに、途中、廊下を擦れ違う兵士たちは、ぎょっとして飛び退き道を譲った。軍部の礼式に則り、敬礼をするが、簡単な頷き一つで返される。今にも駆け出しそうな程の競歩に似た勢いで通り過ぎる、どこか滑稽すらあるその追いかけっこのような顛末を、目を白黒させながら見送った。
一陣の風のように一頭と一人が通り過ぎた後、残された兵士たちは、徐に顔を見交わせ、肩を竦めた。そして、触らぬ神に祟りなしと、今しがた目にした一部始終を悪い夢か、若しくは見なかったこととして処理したのだった。

ぐるぐると暫く館内を巡ってから、ヒューイは不意に自分がティティーにからかわれているということに思い至った。ティティーのことだ。本気を出せば、直ぐにヒューイのことなど撒けるだろう。
獣の脚力と人間のそれとでは身体能力の差は一目瞭然だからだ。それを、ある程度の速度で付かず離れずの絶妙な距離感を保たせながら館内を回っていたことにふとヒューイは気が付かされたのだ。
「ティティー！　おのれ、謀ったな！」
勝手に後を付けていた事は棚に上げて置いて、ヒューイが悔しそうに呻いた。

『なんだ？　追いかけっこはもう終いか？　根性がないのう』
今にも欠伸を噛みそうな程にのんびりと尻尾を揺らされて、ヒューイは忌々しげに舌打ちをした。
「宛先の主が待っているのではないか？　このように遊んでいる暇などなかろう？」
半ば悔し紛れに早く届けてしまえとせっつけば、
『ハハハ。そなたに言われんでも』
ティティーは愉快気にうっそりと目を細めてから、そのまま踵を返そうと身体を反転させたのだが、
『おっと』
ちょうど廊下の角を曲がってきた人物にぶつかりそうになり、慌ててその体を器用に捻って難を逃れた。
「おやおや、こんな所で何をしているんですか？」
額際に薄らと汗を滲ませて、忌々しげな表情をして憚らない己が部下とそれをせせら笑うかのような小さな灰色の毛並みをした獣を廊下の途中に見かけて、一頭と一人の間にある剣呑な空気に可笑しそうな声を挙げたのは、
「ゲオルグ……」
ヒューイの上司であり、第三師団を取りまとめる団長である男、ゲオルグ・インノケンティであった。
「ヒューイ？　それからティティーも。こんな所でどうしたというんです？」
にこやかな笑みを浮かべながらこちらを見下ろした人物をちらりと横目にして、ティティーは、あからさまに嫌そうな顔をした。

ティティーにとって、ゲオルグは面倒な相手だった。一見、人当たりの良さそうな優男というには随分と綺麗な顔立ちをしてはいるが、その中身は、この王宮に潜む狐狸の類も真っ青になるくらいの腹黒さで、抜け目の無い策士の匂いがぷんぷんとした男だった。
要するにティティーにとっては甚だ臭いのである。鼻が曲がりそ

うな程に。
「おや？　何やら珍しいものを銜えていますね」
早速、ゲオルグは、ティティーが口に銜える仄かに青白い光を放つ封書の存在に目敏く気が付いたようだった。
そして、徐に上体を屈みこむとそこにちらりと見え隠れする宛名を瞬時に読み取ったようだった。
「第七のルスラン宛てですか」
目端の良さは、相変わらずだった。ヒューイの時のようにただからかう相手ではなかった。
ティティーはその身に纏う空気を瞬時に変えて引き締めた。威嚇の体勢に入る。
「何やら面白そうですね？」
そう言って男にしてはやけに艶っぽく微笑んだその表情を見て、ティティーは、薄ら寒いものを感じた。本能に忠実な獣としての直感である。
「随分と強固な呪いの掛かった封書のようですねぇ？　中にあるのは余程の機密文書か何かですか」
その言葉に、ティティーは、これを預かった人物の能天気に微笑む顔を思い浮かべて、げんなりとした。
ティティーが銜えるものはリョウから預かったものだった。印封の講義を受けたので試しに施術を試みてみたのだと嬉しそうに笑っていた。
ティティーは、リョウが嘘を付いているとは思わなかった。精々、中身は恋文の類というのが関の山だろう。この男たちもとんだ勘違いをしたものだ。リョウは、きっと初めてのことで【印封】を施す際の加減が分からなかったのではあるまいか。だから、単なる試しの印封に思いの外、強固な呪いが掛かってしまったのだ。初めて印封を掛けてみたと嬉しそうに綻んだ顔を思い浮かべて、今度、顔を合わせた時には、その辺りの事情を今一度、含み置かなければなるまい、『やれやれセレブロ殿もとんだ骨の折れる相手を選んだもの

よ』と溜息を吐いたのだった。

『やれやれ。お主らの早とちりにも困ったものよ』

ティティーはしみじみと大儀そうに口にすると、すぐさま踵を返して、軽やかに駆け出した。

「あ、おい！　ティティー！」

ヒューイの声が廊下に響いた。

「おやおや、相変わらずつれないことで」

――――――――行ってしまいましたねぇ。

ゲオルグは、どこか愉しそうに微笑むと、軽やかに去ってゆく小型の灰色の獣の姿を目で追った。

「ヒューイ。行きますよ」

ゲオルグはいまだ悪態を吐いている部下を促すと颯爽と身体を反転させた。

「戻るのか？」

怪訝そうな顔をしたヒューイにゲオルグは呆れたように振り返った。

「勿論、第七の所に決まっているじゃありませんか」

――――――――何を言っているんです？　その為にそんなにまで汗だくになったのでしょう？

嫌みたっぷりに的確に己の陥った状況を指摘されて、ヒューイは押し黙った。

「で、差出人は誰だか分かったんですか？」

その問いにヒューイは、口の端を僅かに下げた。

「いや。それは、上手くはぐらかされてしまった」

「やれやれ、仕方ありませんねぇ」

こうして、足取り軽やかに第七師団が居を構えている一室に向かって歩き出したゲオルグは、背後を付かず離れず静かに付いてくるヒューイに向けて、前を向いたまま鷹揚に肩を竦めて見せたのだった。

それにしても、あのように強い印封を施すことの出来る人物など第七の繋がりであっただろうか。ゲオルグは頭の回転をいつも以上に速めながら首を傾げていた。

術師絡みの情報は常に把握をしている積りだった。第七の団長は、元々、術師としての素養は余り開花しなかった口だ。その昔、養成所で共に机を並べたこともあったが、自分が覚えている限り、そちらの方面はからっきしであった筈だった。

「ティティーが態々伝令の役を買って出るなんて、相手は王族なのでしょうか？」

あの獣が専ら姿を現すのは、とある王族の姫君の周辺が多いと聞いている。現国王の第二皇子の一人娘、現国王には孫娘の一人に当たるエクラータ嬢だ。確か、今年で六つになったかならないかという年齢だった。

だが、第七師団の団長、シビリークス家の三男坊である強面な男といまだ幼い王族の令嬢との接点は、思いつかなかった。

「まぁ、着いてみれば分かりますかね」

いずれにせよ、あの男に王族との個人的な繋がりが見えれば、それはそれで収穫となる。

と同時に、あのように強い印封を施す術師がいたことにゲオルグは興味を惹かれた。

通常、術師というものは、あのように己の能力をみだらに明らかにしないものだ。強かで警戒心の強い人間が多いからだ。他者を欺く為に、研いだ爪は常に隠しておくのだ。それをあのように表立って見せて憚らないというのは、まだ不慣れなものなのか、それとも偶々なのか、それとも、それ程までに重要な文書であるのか。一度考え始めたら限がない。

だが、本当の機密書類であれば、通常、印封には、幾重にも仕掛けが掛かっているものなのだ。一見、何の変哲もないように見せか

けて、その実、誰にも解くことが出来ないようにするものなのだ。
そう、あのガルーシャ・マライのように。
ゲオルグの脳裏には、この国稀代の術師と謳われた男の存在が思い出されていた。あの男の周辺はいつも多くの謎に包まれている。この国の貴族連中にそっぽを向いて、辺境で隠遁生活を始めたと聞いたのはもう二十年近く前のことだった。それ以来、政治の表舞台からは姿を消したが、今でも時折、その男のことは噂に上っていた。
いずれにしても興味深いことに違いは無かった。自分のすぐ後ろを歩くヒューイもその辺りのことを嗅ぎつけたのだろう。ゲオルグから見ればいつも詰めが甘いが、その独特な嗅覚の鋭さは部下としては買っていた。
ゲオルグは、その男にしては艶めかしい繊細な面立ちに妖艶な笑みを浮かべた。
それを横目に見たヒューイは、ほんの少しだけ嫌そうに口の端を引き攣らせた。ゲオルグがこのような顔をする時は、大抵碌なことを考えていない。それは過去の経験から導き出されたヒューイなりの法則だった。

ほうほうの体でティティーは、【アルセナール】内を素早く駆け抜けると、第七師団が拠点とする執務室の前に辿りついた。器用に扉の取っ手を跳躍して飛びついて開けると、その隙間に身体を滑り込ませた。
いきなりノックの音もなく扉が開いたかと思うとその隙間から飛び込んできた灰色の小さな塊を目にして、己が執務机に座って書類に目を通していたグリゴーリィー・ダルトゥーは、顔を上げると目を凝らした。
ティティーは、執務室内をぐるりと見渡すと高らかにその声を上げた。

『我は伝令なり。第七師団・団長はあるか？』
グリゴーリィーと獣の言葉を理解する能力を持つ兵士が、すぐさま立ち上がり、小さな灰色の伝令と思しき獣の前に膝を着いた。
『シビリークスの末はおるか？』
その声にグリゴーリィーは静かに頷いた。
グリゴーリィーは、その獣の口に小さな封書のようなものが銜えられていることに気が付いた。
「はい。今、お呼びいたしましょう」
そう言って、慇懃な態度で立ち上がると隣の団長室へ向かった。
その後にティティーも付いて来た。
「貴殿は王宮に住まうお方とお見受け致しますが」
『いかにも』
グリゴーリィーは、宮殿に暮らすという灰色の獣の存在を知ってはいたが、実際にこのような近くで対峙し、言葉を交わしたことは無かった。

団長室の扉をノックしてから開けると、中には第七師団の団長であるユルスナールとその片腕、副団長のシーリスがいた。
「どうした？」
扉を開いた途端、勢いよく中に飛び込んできたティティーを見て、中にいた二人は、怪訝そうにグリゴーリィーを見た。
生憎、この二人はグリゴーリィーのように獣の言葉を理解する素養を持ってはいなかった。
『シビリークスの末よ。そなたに手紙だ』
「隊長に手紙だそうです」
すぐさま、グリゴーリィーが間に入って獣の言葉を通訳した。
「そちらは宮殿にお住まいの方ではありませんか？　かのエクラータ嬢が目を掛けているという」
灰色の小さな獣の姿を見て、シーリスが目を丸くして言った。
ティティーは軽やかに跳躍してテーブルの上に飛び乗ると口にく

わえた封書をユルスナールの前に置いた。
そして、ぼやいた。
『やれやれ。えらい目におうたわ』
その台詞にグリゴーリィーは、眉を跳ね上げた。
『気を付けよ。途中、厄介な奴らに捕まってのう。あ奴らもここを訪ねて来るやも知れぬ』
「どういうことですか？」
『我が伝令の役目を負ったが、興味を惹いたらしい。心せよ』
「どなたに勘づかれたのですか？　厄介なとは一体誰のことですか？」
面食らったグリゴーリィーが重ねて問いを発したのだが、
『封書はしかと渡したぞ。応えはいらんそうだ』
言いたいことだけを口早に言い残して、ティティーは身体を翻すと来た時と同様、恐ろしい程の素早さでこの執務室を後にしたのだった。

中に残された第七師団の面々は、余りの出来事に顔を見交わせた。ユルスナールとシーリスは、伝令の獣と何がしかの言葉を交わしていたグリゴーリィーに説明を求めるように顔を向けた。そのグリゴーリィーも珍しく困惑の表情を浮かべていた。
シーリスは、徐に手を伸ばすとテーブルの上にある封書を手に取った。表面の宛名を見てから裏書きを見る。
「ルスラン宛てですね。差出人は、リョウのようですね」
シーリスもユルスナールも印封の施された封書をそれなりに扱う仕事柄、そこに記された古代エルドシア文字には精通していた。ブコバルもヨルグも読むだけならば出来るだろう。貴族出身者は、最低限の教養として概ね幼いころに学問所でこの国の歴史と共にみっちりと扱かれるので大抵読む事は出来た。
「それにしてもティティーはいつリョウと知り合いになったんでしょうか」

封書を手に取りながらシーリスが首を傾げた。
まぁ、獣たちに好かれる性質であるリョウのことであれば、ひょんなことから仲良くなっても不思議はなかった。
その言葉に、ふと思い当る節のあったユルスナールは、ああと合点した。
「以前、ここに来た時に迷子になって宮殿の方に迷い込んだとスヴェトラーナが話していた。恐らく、その時に知り合いになったのだろう」
あの時にスヴェトラーナはどこか苦々しい顔をして、リョウがエクラータ嬢と言葉を交わしたと語っていたのだ。
それを聞いたシーリスはさもありなんと納得したようだった。
シーリスの手の中にある封書には、薄らと仄かな青白い光が膜のように表面を覆っていた。それを見て、随分と手の込んだ呪いが掛けられていることに気がついた。余程、他人の目に触れては欲しくないことなのか。恐らく個人的な恋文の類だろうと気を回したシーリスは、からかうようにユルスナールを見た。
「席を外しましょうか？」
その言葉にユルスナールは怪訝そうに片眉を上げた。
「何故だ？」
「だって、こんなにしっかりと印封が施されているんですよ？　余程のことではありませんか」
そう言って可笑しそうに笑う。
きっとリョウのことだ。中身が他人の目に触れたと知ったら、顔を真っ赤に染めて狼狽するに違いない。それはそれでからかい甲斐があって面白そうではあるのだが。
シーリスは小さく微笑むとユルスナールに封書を手渡した。
ユルスナールはそれを手に取ると、なにやら神妙な顔つきで表の宛名部分を改め、そして裏面を返して、その差出人の部分を確かめた。
そこに記された几帳面な程に整った印封を見て、それを施した本

人の性格が良く表れている飾り文字に思わず微笑が零れた。
そこへ間合い（タイミング）を測ったようにグリゴーリィーが声を掛けた。
「ルスラン」
「ん？」
「先程の伝令の言なのだが……」
「そう言えば、酷く焦っていたようですが、何だったんです？」
グリゴーリィーは暫し言い難そうに複雑な表情を作った後、
「何やらここに来る途中に【厄介】な相手に見つかり、興味を持たれたようなので、【心せよ】とのことでした」
グリゴーリィーはそう口にすると困惑気味に眉根を寄せた。
対するユルスナールもシーリスもその言わんとすることが良く分からずに顔を見交わせた。

そうこうするうちに、執務室の扉を再びノックする音がして、第七の兵士の一人が珍しくその顔に困惑の色を浮かべながら、顔を覗かせた。
「どうした？」
「いえ。第三のお二方が隊長を訪ねていらしたんですが」
――――――如何いたしましょう？
先程の伝令が言っていたのはこのことなのか。
その瞬間、室内の空気が一気に凍りついた。
「取り込み中です。機会を改めてもらってください」
実に輝かしい笑顔を浮かべてバッサリと切り捨てたシーリスであったが、
「おやおや、酷いじゃありませんか。随分とつれないことを仰る」
いつの間にか、制する（と言ってもそれは恐らく形ばかりであっただろう）第七の兵士たちを擦り抜けて、第三師団の団長とその右腕である副団長が執務室の戸口に現れていた。
室内の空気が一気に冷え、体感温度が急降下したのを周囲にいた兵士たちは感じ取った。

――――――――【ゴースパジ（ああ、神よ）！】

グリゴーリィーは頭が痛くなる思いがした。

よりによってこの二人がやってくるとは。

成程、あの伝令の言う通り、【厄介な相手】というのは言い得て妙であると思った。

「御機嫌よう、ルスラン。それにシーリス。お久し振りですね」

ゲオルグは、にこにこと底知れぬ微笑みを浮かべながら団長室に入ってくると断りもせずにユルスナールとシーリスが腰を下ろす対面の長椅子に優雅な仕草で腰を落ち着けた。

ゲオルグの後ろにいたヒューイも何食わぬ顔をしてそれに続いた。

ユルスナールは、突然の闖入者を冷え冷えと睨みつけた。

過日、この男が原因でリョウの事を悲しませてしまったのだ。もう少しで仲違いをしそうになったことは記憶に新しかった。それにゲオルグが度々、養成所の方でリョウに接触を持っていたことを知り、ユルスナールもシーリスも第三師団長に対しては、極度の警戒状態にあった。

勿論、ユルスナールとしてはそれ以上の含みがあった。自分が中々会えない相手にゲオルグが毎日のように会って言葉を交わしていたと聞いて妙な嫉妬心を刺激されていたのだ。

「いきなり何の用だ？」

「まぁまぁ、そんな怖い顔をしなくてもいいじゃないですか」

「これは地顔だ」

「久しく友人の顔を見ていなかったと思ったものですからね」

ゲオルグは白々しい台詞を吐いて、片目を瞑って見せた。

「おや。それはそれは。このような無礼な方々を友人の範疇に入れた覚えはないんですがねぇ。どうしたものでしょう」

対するシーリスも負けてはいなかった。威圧感を隠すことなく、冷笑を浮かべてゲオルグとヒューイを見遣った。

室内は、恐ろしいまでの緊張感と緊迫感が張りつめていた。

「こちらにティティーが伝令で来たでしょう？　その封書の差出人に興味を惹かれたんですよ」

あけすけなもの言いにユルスナールは呆れたように溜息を吐いた。何を言い出すかと思えば。

「これはただの信書だ。俺宛てのごく個人的なものだ。お前たちが期待するようなことは何もない」

政治的な意味合いなどこれっぽっちもないのだ。

「ただの個人的な手紙に何故かように強い呪いが掛けられているんだ？」

仄かな青光りする封書を睨みつけながらヒューイが尊大に言い放った。まるで鬼の首を取ったような言い方だ。

「それは偶々だろう」

ユルスナールは、差出人の名前が刻まれている印封を見て小さな笑みを零していた。

それは、いつも無愛想で強面と揶揄されることの多い硬質な男が見せるには珍しい類の柔らかな微笑みだった。

とんだ誤解を受けたものだとユルスナールは思った。リョウのやつが聞いたらたまげるに違いない。そして、すぐさま顔を青くさせるだろう。そんな感情の動きのままにころころと変わる表情が思い浮かんで、なんだか可笑しかった。

一人、含み笑いを始めたユルスナールをゲオルグとヒューイは、気味悪そうに見遣った。

ユスルナールの考えていることが手に取るように分かったシーリスは、どこか呆れたような曖昧な表情を浮かべていた。

「ルスラン。その気持ち悪い顔を引っ込めてください。鳥肌が立ちそうです」

堪りかねたゲオルグは、そう口にするとこれ見よがしに腕を摩って見せた。相変わらず失礼な男である。

「ならば、それはごく親しい人からの手紙なのですね？　もしよろしければ封書を見せては頂けませんか。個人的には、その印封が非

常に気になるんですが」
「それは駄目だ」
間髪入れずにユルスナールに突っぱねられてゲオルグは白けた顔をした。
「差出人は秘密ですか」
「そういうことだ」
「秘密とはまた、それは凄く気になりますねぇ」
ティティーの知り合いであのように強い術式を使える人物が誰であるかを突き止めたかった。こと術師に関しては、ゲオルグの興味は貪欲だった。
「ルスラン」
中々腰を上げそうにない相手を見かねてか、シーリスがある提案をした。
「封書を開封してみてはいかがですか？　中を見せる必要はないでしょう。ただ、そこのお二人は、印封が大変気になるようですので、それを無くしてみてはいかがでしょう」
中身は、恐らく、ごく個人的なことだろう。リョウの事だ。熱烈な恋文の類を書いたとはとてもじゃないが考えられなかった。それはそれで悲しいものがあるが、仕方がないだろう。
何か知らせたいことがあったのかもしれない。あの日以来、ここ数日は会えない日々が続いていた。もしかしたら、この間の伝令への返信の積りなのかもしれない。
「分かった。いいだろう」
このままでは引き下がりそうにない第三の二人組を見て、ユルスナールはシーリスの提案に乗った。だが、このことが後で裏目に出るとはユルスナールもシーリスも思ってもみなかったことだった。
ユルスナールは薄らと青白い気を纏う小さな封書の宛名部分と差出人部分に開封を念じながら触れた。
その瞬間、淡い光が濃さを増し、その封書の上に立ち上るように

して青白い光が集まった。
そして、その光の中から現れたのは、あろうことか、優しい微笑みを浮かべた美しい女の姿だった。
情事の後を彷彿とさせる軽くシャツを羽織っただけのしどけない姿。いつも束ねている髪は解かれたままで背中に滑らせている。
リョウの姿を取った光の粒子は、そのまま、ほっそりとした腕を伸ばしてユルスナールの首にかじりつくとそっと男の薄い唇に触れるだけの口付けを与えた。そして、満足したように微笑むと青白い光は煙のように霧散して掻き消えたのであった。

ユルスナールは余りのことに度肝を抜かれた。半ば呆けた顔をして、緩慢な動作で手にした開封済みの手紙へと目を走らせた。
だが、余程、気が動転しているのだろう。そこにしたためられていたのは短い文章であったのだが、動揺している余り、何度目を走らせても中々その内容が頭に入ってこなかった。
それから、何度か瞬きを繰り返して、漸くそこにある内容を読み取った。
中身は、実に他愛の無いことだった。古代エルドシア語の講義を受けて印封のやり方を学んだので、試しに施してみた。上手くいっていたら、後で知らせて欲しい。そんなことが書かれていた。
「ルスラン？」
窺うようにこちらを見ていたシーリスは苦笑いをしていた。
ユルスナールは無言のままシーリスに手紙を差し出した。
「私が見ても？」
「ああ」
まさか、あのように差出人である当人が、幻影となって現れるとは思ってもみなかった。
だが、ふとユルスナールは、リョウに初めて出会った時のことを思い出していた。
あの時、ガルーシャの封書を手にしていたリョウは、知らず、そ

の印封に自分の記憶を付加していたのだ。そして、開封の瞬間、今と同じような幻影（あれはリョウの記憶の一部のようだった）が青白い光の粒子によって作られ現れたのだ。

手紙の最後には、追伸として【ツェルーユー（あなたに口付けを）】の一語が添えられていた。

まさか、この一語がこのように幻影を伴って具現化するとは思いも寄らなかった。

ユルスナールの本心から言えば、歓喜の余りに小躍りしそうなくらいだが、これを自室でこっそり開封するならまだしも、このように人目に晒してしまったことを内心、苦々しく思った。

本当にリョウはいつも自分の予想の斜め上を行く。それが界を跨いだ異邦人だからなのか、それともリョウがリョウであるからなのか、はたまた単に自分がリョウに対する認識が足りないだけなのか、その辺りのことは良く分からなかった。

手紙の内容にざっと目を通したシーリスは、その柔和な面立ちに同じように苦笑に似た笑みを浮かべていた。だが、見る者が見れば分かる優しい眼差しをしていた。それは、まるで近親者の突拍子もない悪戯を困ったと言いながらもどこか微笑ましく眺めるような、そんな生温い表情だった。

「らしいと言えば、実にらしい。でも、これは些か予想外でした」

そう結論付けるとシーリスは手にしていた手紙をユルスナールに返した。

「本当にあの子に出会ってから退屈しませんね」

それはシーリスにとっても想像の斜め上を行くものであったらしい。

ユルスナールとシーリスの二人が暫し、封書の差出人に思いを馳せながら和んでいると、漸く幾ばくかの衝撃から回復したらしい第三師団の二人が呆けたような声を上げた。

「今のは……」
「ああ。ちょっとした目の錯覚ですよ」
眩しい程の笑顔でシーリスが嘯いた。
「そんな馬鹿な！　あのように【想い】が実体化するなど滅多にあることではないですよ！」
ゲオルグは、珍しく興奮したように立ち上がっていた。
「ルスラン。あれはお前のコレか？」
その横で、ヒューイは、右手の薬指を差して尋ねた。
それは、この国の男たちの間では情婦や恋人を表わす隠語のようなものだった。
「あれは一体誰なんです？　実に綺麗な女の人だ。まるで、そう、【夜の精】のように美しい」
そこでゲオルグはハッとしてユルスナールの方を見た。
「まさか、【プラミィーシュレ】で共にいたという人ですか？」
ちょうど、あの時、ゲオルグの息の掛かった人物（情婦と思しき女だった）が【エリセーエフスカヤ】にいたのだ。街の有力者であるアシュケナージの傍に張り付いていたのも記憶に新しかった。
ユルスナールは、どこか尊大な笑みを浮かべて余裕たっぷりに二人の闖入者を見遣った。
「もういいだろう？　お前たちの用事は済んだはずだ。持ち場へ帰れ」
その声は低く静かで、決して荒げたものではなかったのだが、臓腑がちりりと竦む程の威圧感を持っていた。
ゲオルグは、これ以上相手に食い下がっても、めぼしい情報は得られないだろうと、その微妙な空気の変化を的確に感じ取った。引き際を見誤ってはいけない。これ以上、無駄に突けば、余計に心象を悪くする。
心の中では、口惜しく思いながらもそれを表には出さずに平然を取り繕うようにして、小さく微笑んだ。
「分かりました。今日の所はこれでお暇するとしましょう」

そう言うと静かに立ち上がり優雅に一礼をした。

収穫はあった。ユルスナールの影にちらつく女の存在。それも術師としての高い素養を持つ人物だ。あの封書の差出人と先程の幻影の女は、恐らく同一人物だろう。男への愛情が溢れんばかりの優しい気に包まれていた。

ゲオルグは、【プラミィーシュレ】に派遣した女からもたらされた情報をもう一度洗い直してみることを決めた。何か、見落としている気がしてならなかった。それもとても重大なことを。

【プラミィーシュレ】でも上ったが、ガルーシャ・マライに関する噂とその弟子だという人物に関する情報。散り散りになった欠片（ピース）を掻き集め、そこに現れる実像、若しくは虚像が、どのような形を取るのか。

こちらからは、その後ろ姿と横顔が少ししか見えなかった。さらりと揺れた癖いの無い黒髪。華奢な骨格。この国の女たちと比べれば格段に細いが、あれは紛れもなく成熟した女の身体だった。

ゲオルグは、お伽噺の中に描かれているような黒髪を持つ美しい女性に暫し、思いを馳せた。

ゲオルグ自身、お伽噺を単なる子供騙しの物語だとは考えていなかった。あれは過去の真実の断片を巧妙に虚構の中に織り交ぜた歴史書の類だと思っていた。それを考えるとまるで子供の頃に戻ったように心が躍った。誰かの秘密を暴くことは、いつもワクワクする。

それからゲオルグは、いまだ、どこか不服そうな顔をしているヒューイを促すようにして、第七師団の執務室を後にした。

「さてさて、俄然やる気が出てきましたね。もう少し調べてみましょうか」

そう小さく呟くと実に足取り軽く、気持ちも新たに第三師団がある執務室を目指したのであった。

こうして、授業で習ったことを試してみたいという実にささやかな思い付きから始まったこの印封を巡るちょっとした騒動は、それを施した本人（つまり、リョウのことだ）の与り知らぬ所で、思わぬ方向へ独り歩きをすることになったのだった。

揺らぐ魂　揺れる世界

あの後、【アルセナール】に戻るというブコバルと別れて、リョウは当初の目的通り、神殿に向かうことにした。少し寄り道をした形になったが、この場所（墓地）を知ることが出来て良かったと思った。何よりもブコバルの新たな一面を知ることが出来たのは、思いがけない収穫だった。

緩やかな坂を登り切ると神殿の裏手側に出たようだった。周囲を鬱蒼とした木々に囲まれた中にぽっかりと開けた巨大な空間があった。その中に収まるようにして白い石造りの荘厳な建物が眼前に迫っているのが見えた。リョウは手始めに、ぐるりと周囲をその巨大な白い石壁に沿って歩き、正面の広場の方へ出た。

表側には、一般の参詣客と思しき人々が数多く見受けられた。だが、それ以上に目を引いたのは、白い上下に身を包んだこの神殿に仕えるという神官たちの姿だった。

先日、街中見物に訪れた時にシーリスから教わったのだが、神官たちは装飾の無い踝まであるような裾の長い上着にその下にズボンを穿き、腰の部分を色の付いた帯で止めていた。帯は柔らかく幅の広いもので、腰をしっかりと留めてから余った部分をだらりと横に長く伸ばす形を取っていた。

その帯の色は、実に鮮やかで色とりどりだった。身に着けている上下が簡素で白い分、それが余計に際立って見えた。目に付く限りの色を挙げてみる。赤、黄、橙、茶、青、緑、紫、水色、黒と実に多様だった。その帯の色は、そのまま神官たちの階級を表わしていると過日、シーリスは言っていた。この白亜の荘厳な建物を背景に静々と神官たちが帯の端を翻しながらゆったりと歩く様は、どこか神秘的で冒しがたい静謐な雰囲気を醸し出していた。

神殿は、広く一般市民にも開かれているという。裏道の方から来たリョウは、ここに来る途中、誰とも擦れ違わなかった訳だが、表側であるこちらの方は、多くの人々でごった返していた。

なるほど、表側の方にも街とこの神殿を繋ぐ大きな坂道があり、そこを人々が思い思いの足取りで行き来しているのが見えた。皆、神に祈りを捧げ、供物を捧げに訪れるのだという。

突如として降って湧いたように（リョウにとってはそのような印象を受けた）現れた人々の姿にリョウは驚いた。ぐるりと参詣客を見渡す限り、ここを訪れるのは年配の人たちが多いかもしれない。この場所には信仰の厚い人々が多く集うようだ。

リョウは、周囲を見渡してセレブロの姿を探した。単に神殿で待ち合わせをしようということで、具体的な場所の指定などはなかった。リョウにとっては初めて訪れる場所であるので、その辺りのことを考慮したのかもしれない。指定をされても逆に困ってしまうからだ。

取り敢えず、参詣客に混じって中に入ってみることにした。

だが、その前に、リョウは意識をセレブロの加護が紋様となって表れている左胸の部分に意識を集中して、セレブロに神殿に到着したと念じてみた。これで、恐らく、セレブロは、自分が近くに来ていることを感じてくれたと思う。

神殿の中は、想像以上に広々としていた。引きずられるように思わず上を見上げる。天井が驚くほど高い位置にあった。

中は、薄暗かった。かなり高い上の方に採光の為の小さな窓が点々と並んでいる。自然光は極力抑えられているようなのだが、暗くてジメジメしたような陰鬱な印象は全く受けなかった。使用されている石材が白色をしている所為だろうか。光が余り入らなくとも、中はぼんやりと明るく浮かび上がるようになっていた。

一言で言えば、不思議な空間だった。周囲を囲む柱や梁には繊細な彫刻が刻まれている。色は、白一色で、街中で見受けられるような色とりどりのタイルや煉瓦、華やかな装飾の色彩の類は一切なかった。

この神殿に祀られているという豊穣を司る女神であるリュークスを模したものだろう。この国の一般的な女性を彷彿とさせる豊満な肉体を柔らかそうな服の襞から晒している。優美な微笑みを浮かべた美しい顔立ちだ。その彫刻を見て、こちらでは偶像崇拝は、別段、問題視されている訳ではなさそうだと思った。

リュークスは、豊穣の女神であると同時に、先読み、要するに未来予知を司る占いと宣託を得意とする異能の女神でもあった。神殿の元々の成り立ちとこの場所に発展してきた役割を考えれば、後者の方が重きを置かれていると言えるだろう。

――――――【パラ　フェルメ　ス　リュークス（リュークスの加護がありますように）】

この国の人々が別れ際や挨拶代わりに、よくその文言を口にするのは、恐らく、『これから先、訪れる未来が良いものでありますように』との願いを込めた所から転じているのだろう。

未来予知。これからの未来に何が起こるのか、それが吉事なのか凶事なのか、それを知りたいと思うのは、たとえ世界が変わっても変わることの無い人の欲望のあり方のようだ。

参詣に訪れた人々が祈りを捧げている祭壇のような場所には、だが、女神を模した像ではなく、丸い楕円形のような形をした乳白色の石が鎮座していた。大きさは、かなりある。横幅は、人一人が両腕を目一杯広げた位だろうか。その表面には、複雑な網目のような、織物の織り目のような紋様がびっしりと彫り込まれていた。その中心には、大きな丸い穴が開いており、空洞になっていた。形だけを見れば、それは、まるで人の瞳を模したようだ。

参詣に訪れた人々は、その石の表面に片手を当て、その場所を摩るようにして目を閉じながら、なにやら祈りの文言を小さく唱えているようだった。石の表面をよく観察してみれば、参詣客がよく触れているであろう部分は、刻まれた凹凸の部分が往年の摩擦から滑らかに変化していた。

そうして暫し、お上りさんのような気分で神殿内を見学していた時だった。

――――――――リョウ。

不意に頭の中に響いてきた深みのある声に顔を上げれば、祭壇よりもずっと奥へと続く回廊のような所に、光輝く白い長髪を揺らしながら、こちらに向かってゆっくりと足を進めているセレブロの姿が見えた。

予想通り、セレブロは人の形を取っていた。純白というよりはややくすんだ灰色に近い神官と同じような上下に黒い繻子のような光沢のある帯を腰に巻き、その余った紐の部分を横に垂らしている。その上から同じ色合いの長いカフタンのような襟の無いたっぷりとした外套を羽織っていた。

「お待たせ」

リョウは、セレブロに近寄るとそっと微笑んだ。

人の形を取ったセレブロの姿は、この神殿内の厳かで静謐な空気に実に似つかわしかった。

『迷わなんだか？』

ここに来る途中、迷子にならなかったかとからかうように口にされて、リョウは小さく微笑んだ。

「ううん。大丈夫だったよ」

『そうか』

この神殿は、街全体を一望できる高台の上にあった。それは裏を返せば、街のどこからでもその姿が見えるということだ。それでは迷いようがなかった。

『リョウ。こっちだ』
それから、セレブロに連れられて、神殿の中を奥へ奥へと進んだ。途中、神官たちに擦れ違ったが、別段、見咎められたりすることもなかった。皆、こちらが見えていないかのように何事もなく通り過ぎて行く。それを少し不思議に思った。

そうして暫く歩いて。とある一室に辿りついた。
『ここだ』
目の前には、暗闇がぽっかりと口を開けたような部屋の入口があった。中は暗くて見通せない。まるでこの場所(スタリーツア)に初めて来た時に使った大木の【うろ】のようだと思った。
リョウは窺うようにセレブロを見たが、セレブロは小さく頷くだけだった。
そして、セレブロに促されて一歩、中に足を踏み入れた瞬間、なんとも形容し難い感覚が全身に広がった。体中の細胞が一気にざわついて、そして治まるような不思議な感覚だった。一度バラバラになったものを再び集めて組み直すような、実体を持つ人としては有り得ないことなのだが、そのような映像(イメージ)が頭の中に浮かんだ。
リョウは、不意に襲った気持ちの悪さに目を瞑った。そして、再び瞼を開けた次の瞬間、自分が四方を石壁に囲まれたこじんまりとした室内に立っていることに気が付いた。

部屋の四隅には、発光石がその光を抑えられて穏やかな橙色の光を鈍く放っていた。壁には複雑な紋様のようなものが描かれた緻密なタペストリーが掛かっていた。
そして、その部屋の中央には、小さなテーブルと椅子が並んでおり、そこに一人の老人が腰を下ろしているのが見て取れた。
その老人の顔にリョウは見覚えがあった。綺麗に撫で付けられた豊かな白い髪。峻厳な山の頂を思わせる高い鼻にそれを挟む静かで理知的な灰色の瞳。多くの皺に刻まれたほっそりとした上品な面立

ち。
――――――――【デェードゥシュカ（おじいさん）】。
思わず漏れたリョウの声に、テーブルの前に座っていた老人は、穏やかに微笑んだ。
「やぁ、いらっしゃい。美しいお嬢さん。またお会いいたしましたな」
そう言って茶目っ気たっぷりに片目を瞑った老人に、
「ご無沙汰いたしております」
リョウも静かに微笑み返していた。
リョウは、そっと傍らに立つセレブロを見上げた。
「セレブロの知り合いって【東の翁】のことだったんだね」
『左様』
セレブロは、事前に話を聞いていたのか、それとも知っていたのかはよく分からないが、したり顔で頷いた。
立ち尽くしていた二人に翁が声を掛けた。
「さぁ、お嬢さん。こちらにお掛けなさい」
その言葉にリョウは擽ったそうに小さく笑った。こちら側で、この格好（要するにズボンを穿いた姿だ）で、女性として扱われたことなど滅多にあることではなかったので、慣れないことに何だか面映ゆかったのだ。
リョウは、勧められた椅子に腰を下ろした。その隣にセレブロも同じように続いた。
「元気にしていたかね？」
「はい」
【プラミィーシュレ】からのこれまでのことを訊かれて、リョウも静かに微笑んだ。
「それは重畳」
翁も小さく口元を緩めると、ゆっくりと息を吐き出した。
「さぁて。何からお話しするとしますかな。お嬢さんを呼んだのは他でもない。この爺めがお話しをしておきたいことがありましてな」

そう言って以前と変わりなく上品に微笑んだ翁に、
「あの、その前にお尋ねしたいのですが、【デェードゥシュカ】とセレブロは、古くからのお知り合いなんですか？」
話しの腰を折るような気がしたが、リョウとしてはまずその辺りのことが気になって仕方がなかったのだ。
「ハハハ。では、まずはそこからお話しするとしましょうかな」
翁は別段、気を悪くする風でもなく鷹揚に頷いた。

言葉は些か乱暴かも知れないがと前置きして。
「私は、簡単に言ってしまえば、そこの【ヴォルグ】の長であるセレブロ殿と似たようなものなのですよ」
そうして、翁は、静かに自分が何者であるかを語り始めた。
それによると。
【東の翁】というのは、とある一人の人間に代々受け継がれている【通称】で、過去と未来、その道筋を【視る】ことができるという特殊能力（要するに【異能】だ）の持ち主ということだった。
【人】ではあるが、限りなく【人】からは離れた存在。単なる【人】というよりもどちらかと言えば、悠久の時を刻むとされている【ヴォルグ】を始めとする獣に近い超然とした存在だということだった。
というのも、【東の翁】は、代々、その魂が生まれ変わるのだという。【東の翁】の人としての寿命は、この国の一般的な人間となんら変わりがないのだが、そこに受け継がれる魂は、遥か太古からの記憶を引き継いでいるのだそうだ。
【東の翁】は、生まれながらに前世の【東の翁】であった人物の魂を引き継ぐ。そして、ある一定の年齢に達した時（その時期は、その時の生によってまちまちであるというが）、これまでの記憶の一部が蘇ってくるのだという。言い換えれば、【東の翁】という存在は、太古からの知識を脈々と受け継ぐための【器】としての役割を担っているということだった。

そういう関係で、セレブロと【東の翁】とは、もう思い出せない位途方もない昔からお互いを知っているのだという。

そして、その異能の能力の一端として【東の翁】には、【人の魂のあり方】が【色】のようにして視えるのだそうだ。

つらつらと淀みなく語られたことを前に、リョウは呆気に取られた。

俄かには信じ難かった。魂が巡る。輪廻を繰り返して。そうして前世の記憶を代々引き継ぐというのだ。その思想自体は、別段、突飛には思えなかったのだが、それは余りに途方もない、目の眩むような情報量の多さだと思った。頭がはち切れないのだろうか。

その辺りのことを不思議に思って尋ねてみれば、

「なに。全てをきっちりと覚えている訳ではないのだよ」

と翁が可笑しそうに笑った横で、

『都合の悪いことなど綺麗さっぱり忘れておる』

セレブロも合いの手を挟むようにからかいの声を上げた。

「ハハハ。人とは所詮、そのようなものだて」

『何をいうか。おぬしは、その【人】という範疇からは、既に逸脱しておろうに』

気の置けない者同士の応酬は、そのまま続いた。リョウはそれを不思議な面持ちで眺めていた。

【東の翁】として覚醒した人物は、その時から【東の翁】を名乗り、前世の記憶を引き継いでこの部屋を訪れるのだという。そして、この場所で引き続き、生涯の業務に携わるのだそうだ。先読みの能力を持つ【東の翁】の存在は、この神殿の中でもある程度の位を持つ上層部の神官たちに秘匿されて受け継がれて来た謂わば公然の秘密のようなものであるらしかった。

「さて、私の話はこれくらいにしておきましょうかな」

そう言って、ある程度のことを語った翁は、己が身の上話を打ち切ったのだった。

リョウは、それをそういうものだと信じることにした。

こちら側に来てから、不思議な事ばかりが起こっているが、そもそも自分がこちら側に転げ落ちてしまったこと自体が最大の不可思議でもあるのだ。それを思えば、翁の話は余り現実味がないには違いなかったが、十分理解が出来そうな気がしていた。

「それでは、お嬢さんの話に移るとしましょうかな」

翁は、小さく微笑んでから、不意に空気を改めると真摯な態度を作った。

リョウもいよいよ本題に入るのだと思い無意識に背筋を伸ばした。

「以前（プラミィーシュレで）、私がお嬢さんに言った言葉を覚えていますかな？」

静かな問い掛けに、リョウはそっと頷いた。

リョウとしては忘れる訳はなかった。自分がセレブロの【魂響（タマユラ）】という存在で、【大いなる揺らぎ】の中にあると形容されたのだ。あの時の不思議な言葉は、ずっとこの心の奥に謎として突き刺さったままだった。

後日、【魂響（タマユラ）】がなんたるものかは、ティーダに聞いて理解出来たが、後者の方はいまだ謎のままだ。リョウとしてもずっとその辺りのことを機会があれば、今一度、尋ねてみたいと思っていたのだ。

そのことを確認するように話せば、翁は満足そうに目を細めた。

「私には、人の魂のあり方が色として視えるということは先程、お話ししましたな」

「はい」

翁の真剣な眼差しにリョウも静かに頷いた。

【プラミィーシュレ】で初めてリョウを見かけた時、【東の翁】には、意図せずして、その魂の色と過去と未来の道筋が【視えた】のだという。それが、余りにも普通のものとはかけ離れていた為、最初、翁もなにかの間違いではなかろうかと思ったということだっ

た。それから、王都に戻り、神殿に伝わる古文書の類を見直しながら、己の引き継いでいる古い記憶をずっと辿っていたのだと言った。そして、今回、セレブロがリョウを伴って王都入りをしていることを聞き及び、あの時の感覚を確かめる為に、リョウをこの場所に呼んだのだと打ち明けた。

「今から少しお嬢さんのことを視たいと思うのだが」

――――――許可を頂けますかな。

改まって口にされた厳かな言葉を前に、リョウはそっと隣に座るセレブロを仰ぎ見た。

リョウは、何かとても重大な事を言われるのだと感じた。この身に置きたことの謎が少しでも解明出来るのなら、それに越したことはないと思っていた。元の場所に戻れるとは思っていなかった。今となっては、戻りたいという気持ちも薄くなっている。それだけ、自分がこちら側の世界に馴染み始めていて、ここでの生活を掛け替えの無いものだと思い始めていたからだ。

過去と未来の道筋が視えるという【東の翁】。輪廻を繰り返し、想像が付かない程の長い時を、この世界に身を置いているのだという【東の翁】。この老人に、自分の存在はどのように【視えて】いるのだろうか。それは、興味惹かれることではあったが、と同時に底知れぬ恐怖を感じるものでもあった。

セレブロは、静かにリョウの方を見下ろしていた。虹色に煌めく光彩は、変わらぬ温かさと優しさを滲ませていた。セレブロが、そっと頷き、無意識の内に膝の上で固く握り締めていたリョウの拳に己が手を静かに乗せた。

セレブロは、言葉を発しなかった。だが、元々、この場所に自分を呼んだのもそうすることが正しいと思ってのことなのだろうと思った。

大丈夫だ。自分が付いているから。そんなことを言われた気がして、リョウはそっと瞼を閉じると、セレブロの手を強く握り締めた。

そして、小さく息を吐き出してから、目を開くと、静かに目の前

に坐する老人を見つめた。
「お願いします」
「私が視るのは、真実の一部。全てが明らかになる訳ではない。ですが、隠し事は致しません。たとえ、それがお嬢さんにとって過酷なものであったとしても、ありのままをお伝えすることになりますが」
――――――――それでもよろしいかな。
念を押されるように再度、意思を確認されて、
「はい」
リョウも覚悟を決めた。
「それが真実ならば、……受け入れたいと思います」
「よかろう」
リョウの顔に確固たる思いを見た翁は、静かに瞑目をした。
「では、始めますよ」
その言葉を合図に、【東の翁】は己が手をテーブルの上に開き、リョウの目の前で翳した。

「……やはり同じか」
暫くして、瞑目していた【東の翁】がゆっくりと長い息を吐き出した。
そして、鑑定の後、【東の翁】が語ったことは、リョウにとっては全く思いも寄らないことだった。
思考が停止したように頭が上手く働かない。文字として羅列される言葉が、右から左へと素通りするようだった。
――――――――大いなる揺らぎの中にある。
それはつまり、リョウの【魂】が、この世界で安定をしていないことを意味しているのだと翁は語った。不安定な【魂】をセレブロが加護を与えることで、半ば強制的にこちら側の世界に繋ぎ留めて

いる。それをしなければ、恐らく、リョウの存在は、やがてこちら側から消えていたことだろう。

存在が消える。それは一体、どういうことを意味するのか。【死】というのとは違う意味合い(ニュアンス)にリョウは最初、何を言われたのか良く理解することが出来なかった。

リョウの脳裏には、ガルーシャの最後の情景が浮かんでいた。あの花畑での情景だ。吹きすさぶ風。舞い上がる数多もの花弁と共にガルーシャは、文字通り消えたのだ。

存在の消失。それを聞いてまず思い浮かべたのは、その時のことだった。

「あの……では、…今のワタシは……」

リョウは茫然として自分の体を見下ろした。自分は、ちゃんとこの世界に存在をしている筈だ。触覚もあるし、痛覚もある。肉体は肉体として、以前と変わらない姿のままある。

それなのに。

「お嬢さんの【魂】は、元々、この世界の理からは外れておりますな」

その言葉にリョウは静かに頷いた。

それは、言われなくとも重々承知していることだった。自分がこの場所では異質な存在、異分子であることは自分が一番理解していた。

「では、何故、ワタシはこちら側に来てしまったのでしょう?……」

それは、この場所で生活をしてゆく上で、もう疑問に持つまいと封印をしたはずの問いだった。

リョウの掠れた声を前に、【東の翁】は瞑目すると、緩く頭(かぶり)を振った。

「それは残念ながら、私には分かりません」

「これまでにそのような例を聞いたことも?」

一縷の望みを託すようにリョウは口にしていた。長い年月を人の中で、人と交わりながら過ごしてきた翁だ。そのような事例がもし

かしたら、今までにもあったのではないかと。
だが、返ってきた答えは非情なものだった。
「私も、そこにいるセレブロ殿も、この世界に生まれ落ちてより人には想像が付かぬほどの長い時を過ごして来ましたが、お嬢さんのように界を跨ぐという話は、いまだかつて耳にしたことがないのですよ」
「……そうですか」
この世界はまだまだ不可思議で、未知の領域に溢れている。【人】から見れば特異とも言える自分たちのような存在も、この世界そのものから見れば、実に瑣末な存在に過ぎないのだ。神々の気紛れかもしれない。そう言って翁は小さく微笑んだ。
「お嬢さんがこちら側に来たのは……」
「昨年の春です」
「ふむ」
それから翁は考えを巡らすように小首を傾げると次のような事を語った。
この世界では、数百年に一度の割合で大きな力（エネルギー）の交換が起こる。その間、この世界の創世期より存在すると目されている太古の森は、活性化されるのだという。森が大量に大地から多くの力を吸い上げ、それを元に木々が一斉に成長をする。それをこちらの世界では、【芽吹きの時】と呼んでいるとのことだった。二年前の春は、奇しくも、ちょうどその時期に当たっていたとのことだった。
もしかしたら、リョウの【魂】は、その時、ちょうど何らかの原因で元々いた場所から切り離されて、漂っていた所をこちら側の【芽吹きの時】に巻き込まれる形で引っ張られたのかもしれない。あくまでも想像でしかないが、そういうことも考えられなくもないと翁は言った。
リョウは、力なく頭を振った。こちら側に来た前後のことは、正直な所、よく覚えていなかった。気が付いたら、あの森の中に倒れていたのだ。

どこか重苦しい空気が流れていた。
だが、それを敢えて振り切るように、
「そして、ここからが重要なのですが」
そう言って【東の翁】は、真っ直ぐにリョウを見つめた。
翁は、鑑定結果の続きを厳かに告げ始めた。

リョウの【魂】は、今も、揺らぎの中にある。それ故に、翁からは、リョウの過去が視えない。だが、同時に未来も視えないのだと言った。全てが漆黒の如く、闇の中に包まれている。こちら側で生活をしているのならば、こちらに【魂】が完全に移ってきているのならば、未来は視えてもいい筈だった。それが視えない。そのことが意味することは、考えられることとしては一つ。リョウの【魂】は、いまだこの世界に止まることなく浮遊している状態で、このままでは、いずれ消えてしまうかもしれないとのことだった。
リョウは、頭を鈍器で殴られたような衝撃を受けていた。頭が真っ白になった。
――――――このままでは、自分の存在が消える。
こちら側に転げ落ちてから、必死に言葉を覚えて生活習慣も学んだ。そうやって一から我武者羅になって生きてきたというのに。自分はいまだ、根本的な所で【この場所】から弾かれた存在である。そう言われた気がした。どんなにかあがいてもこの世界に受け入れられていない。それは、なんと表現していいのか分からない程の絶望的な宣告を受けた気分だった。
「ワタシは、……【ここ】には、受け入れてもらえない…のですか……？」
やっとのことで絞り出した声は、酷く掠れていた。
突き付けられたのは、直視するには、余りにも厳しい現実だった。
『それは少し語弊があろう』
それまで傍らでじっと沈黙を守ってきたセレブロが、徐に口を開いた。

『リョウ。こやつが言うは、そなたの【魂】がまだこちらでは不完全ということなのだ』

慰めるようにセレブロが淡々と口にする。だが、それは、リョウにとっては、同じことのように聞こえた。

「じゃぁ、この魂を完全にこちら側に移す？…っていうこと？　そうするには、どうしたらいいの？」

リョウは、思わず隣に座るセレブロの袖に掴みかかっていた。

心臓が煩い位に鼓動を速めていた。体中の血液が沸騰したように耳の奥がざわざわとする。そして、一気に血の気が引いて行くのが分かった。

「それは……」

『我にも分からぬ。我が精を注ぐことでそなたは半分、こちら側に近づいた』

言い換えれば、それは、セレブロの力を持ってしても、リョウをこちら側に繋ぎ留めておくのがやっとということだった。

リョウは、縋るように【東の翁】を見た。

折角、ここまで来たというのに自分はやがて【ここ】から消えてしまうのか。折角、この場所に馴染んで、それなりに【ここ】で残りの人生を生きて行く心構えが出来たと思ったのに。そんなことがあるのだろうか。あんまりな仕打ちではないか。

――――――――【ゴースパジ（ああ、神よ）】！

もし、この世界に、この願いを叶えてくれる神がいるのだとしたら。

ぽっかりと空いたような喪失感にリョウは、ただただ茫然とした。足下をすくわれるというのは、このことだろう。

余りの衝撃に言葉を失ったリョウの対面で翁は静かに言葉を継いだ。

「今、私に言えることは、お嬢さんの時が止まったままだということなのだよ」

その証拠に、お嬢さんには、【メシャーチィニィイ（月のもの）】が訪れてい

ないのではないか。
その言葉にリョウは愕然とした。
指摘されてみればそうだ。こちら側に来て以来、女としての生理的機能である月経が止まっていた。それを不可解に思いながらも、忙しさにかまけてここまで来てしまったのだ。自分の体の事について相談をするような相手もいなかった。ガルーシャが生きていれば、そのことを聞けたのかも知れないが、そのガルーシャも今はいない。
自分の体が、二年前から時を止めたままである。それは恐らく、【点】として辛うじて【ここ】に片足を突っ込んで、ゆらゆらと揺れているような状態なのだ。
リョウ自身は、女として月経が訪れないことに、これまでのことが余りにも大変であったからだろうとどこか軽く考えていた所もあった。ストレスが溜まったり、環境が変わったりするとその周期がかなりずれこんだりするからだ。
ユルスナールと身体を重ねるようになって、女として愛されることを再び知るようになって、いずれ元に戻るのではないかとどこか楽観的に考えていた。それがどうだ。こちらでは、その機能がちゃんと働いていなかったのだ。妊娠のことをあれだけ心配していたというのに。何と言うことだろう。それ以前の問題だったのだ。
リョウは不意に笑いたい気分に陥った。とんだ空回りをしたものだと。

「それでは、ワタシは、このままでは、やがてこちらから消滅してしまうのかも知れないのですね？」
自分が正しく理解をしたかを確認するために口にしたのは、余りにも残酷な言葉だった。
「具体的なことは私にも分からない。それが一年先か十年先か、それとも三日後か。私に視えるのは、今、お嬢さんが置かれた状況でしかないのです」
「ということは、どうすればいいのかも……？」

その問い掛けに【東の翁】は緩く頭を振った。
「私の方でも引き続き調べてみるとしましょう。神殿に残る古文書の中には、その辺りのことを書いた記述が見つかるかもしれない」
それから翁は不意にリョウの方をみると力なく笑った。
「済まないね」
情けなく白い眉毛を下げた翁に対して、リョウは小さく微笑んだ。
「いいえ」
どうしてそこで【デェードゥシュカ翁】が謝るのだろう。
リョウの中では、翁を責めるような気持ちは、全く生まれていなかった。寧ろ、話してもらえたことを有り難いと思った。何も知らずに、突然、この世界から消えてしまうよりは、自分の今の状況を知ることが出来たのだ。慰めにもならないが、今となっては、そう思うより他なかった。
『リョウ』
セレブロにそっと肩を抱かれて、リョウはその胸元に顔を埋めると目を閉じた。そして、ゆっくりと息を吐き出した。
「ありがとう。セレブロ」
『なんだ？』
「ワタシをこちらに繋ぎ留めてくれて」
セレブロは、これまで自分がそのような中途半端な状況にあることを一度も口にしなかった。きっと心配をしながらも見守っていてくれたのだ。そして、自分がこの状況をある程度、理解できるようになるまで待っていてくれた。ここに案内してくれたのもこのことを知らせる為であったのだろう。
どこまでも温かくて優しい【ヴォルグ】の長。
『案ずるな、リョウ。そこまで気落ちすることもない。こやつが血眼になって調べる。我も出来る限りのことをする故に。我はそなたと繋がっておる。そなたに何らかの変化が現れれば、即ち、我の知るところとなる』
「うん。そうだね」

セレブロなりの最大限の心遣いにリョウは感謝の気持ちで一杯になった。

正直、このようなことになるとは思ってもみないことだった。まさに青天の霹靂だ。

この世界に来て、もうすぐ二年になる。

ガルーシャに拾われてセレブロに出会い、ガルーシャを失ってからは、ユルスナールを始めとする北の砦の兵士たちに出会った。人生というのは、本当に山あり谷ありで、幸せと不幸せは一本の糸のように常に交互に縒り合わさっている。そして、今、順調かに思われた時、これまでの幸せを嘲笑うかのように衝撃の事実を知らされるに至った。

リョウは、不意にユルスナールの顔を思い浮かべた。この事実をユルスナールに伝えるべきか否か、心が揺れた。だが、結論として、正直に話す勇気はなかった。

この日、リョウは、初めて、叶うことならば残りの人生をこの国で、いや、もっと突き詰めるならば、あの男の傍で、終えたいと思ったのだった。

不思議と涙は出なかった。もしかしたら、まだ実感が湧かないからかもしれない。

それもそうだろう。病を得て、余命宣告をされたのならともかく、いずれこの存在がここから消滅するかもしれないと言われてもピンとこなかった。それは、余りにも漠然としたことだからだ。後で、ずっしりとこの重みが現実に圧し掛かってくるのかも知れないが、具体的な時間の限度（リミット）が、現時点では提示された訳ではなかった。

リョウは気持ちを入れ替えるように顔を上げた。些か強引な手段ではあったが、敢えて浮上させるように自分を鼓舞した。下を見た

ら限が無い。悩み始めたら限が無いのだ。カラ元気でもないよりはマシだ。

未来のことは分からない。もしかしたら、こちら側で【魂】が安定して、問題なく済むかもしれないし。その逆に、この状態が続き、やがてここから消えてしまうかもしれない。それが、元の場所に戻ることを意味するのか、それとも【死】を意味するのか、それすらも分からなかった。

それならば、これまで通り、やるべきことをやるしかないだろう。いつ訪れるかも分からぬものに怯えていては、何事も始まらない。【術師】になって、この国に認められたい。その目標は、まだ果たせていなかった。

どれ程の時間が残されているのかも分からない。それでも、最後にもう一度、あがいてみようと思った。

願わくば、残された時間が出来るだけ長くなりますように。そう祈るしかないだろう。

この日、リョウは、この世界を司る神々に心から祈りを捧げたいと思った。

そして、この日の出来事は、今後のリョウの人生の選択に大いに影響を及ぼすこととなった。この日を境にリョウの深層心理の中で、気が付かない程の変化をもたらすことになったのだった。

リョウは、【東の翁】の部屋からの帰り道、神殿の祭壇で一人、静かに祈りを捧げた。セレブロは、何も言わずにリョウの傍に寄り添い、好きにさせてくれた。

その姿をじっと遠くから見つめていた人物がいたことには気が付かなかった。

揺らぐ魂　揺れる世界（後書き）

この後の夜の出来事を「ムーンライトノベルズ」さんの方で連載中のＭｅｓｓｅｎｇｅｒ　短編集Ｉｎｓｏｍｎｉａに載せています。もしよろしければそちらもどうぞ。

街中の治療院

衝撃の事実から一夜明けて、久し振りにユルスナールと濃密な一時を過ごしたリョウは、明け方、【アルセナール】へと戻って行く男の姿を窓辺に立ち、見送った。

昨晩、突然、ユルスナールが養成所の学生寮の自室を訪ねて来たことに驚きを隠せなかったが、再び男と肌を合わせて、そこにある【想い】を確かめることができて、沈んでいた気持ちが再び浮上できたのは、確かなことだった。

そして、再び、新たな気分で新しい日を迎えた。身体は疲れていたが、心は満ち足りていた。

寮の食堂で簡単な朝食を取った後、リョウは支度を整えるとシーリスの義兄でもある講師、レヌート・ザガーシュビリの元に向かった。今日はこれからレヌートの講義を受けることになっていた。

それから、レヌートに連れられてやってきたのは、養成所内の教室でもレヌートが使っている講師の部屋でもなく、養成所からは離れた王都（スタリーツァ）の街中だった。そこにある神殿の管轄下に置かれている治療院で実践的な祈祷治癒の授業を行うことになったのだ。

神殿所属の神官であるレヌート・ザガーシュビリは、昨日、神殿でリョウが見かけた神官たちと同じように簡素な白い上下に艶やかで柔らかい薄紫色の帯を締めていた。その上に同じように少しくすんだ色合いで洗いざらしのたっぷりとした襟の無い外套を羽織っていた。一目で神官だと分かる装いである。

穏やかで知性溢れる眼差し。その顔立ちも『神官』という言葉から想像するに違わず、密やかで慈愛に満ちた優しいものだった。

神殿の役割の中には、神に祈りを捧げ、その宣託を聞くという未来予知や占いの分野の他に、知の集積を担うという一面もあった。古くから様々な知識を集め、分析をし、そして系統的に纏め上げて行く。神殿に仕える神官たちは、長きに渡り、神に仕える傍ら、この土地に暮らす人々の模範者であり、助言者であり、先導者のような立場でもあったのだ。所謂、知識人というものだろう。

そして、学問や知識の集積から派生した医薬の分野に於いても、同じようにその先導的立場にあった。

神官たちは皆、高い素養の持ち主だ。多くの人々が既に失ってしまって久しい古来の能力を保持していた。この国、この地域のみならず、世界的に見ても、能力を持つ【術師】の数は年々、減少傾向にあった。そういった世界情勢の中でも、神殿は、常に素養のある人間を多く抱えている場所であり、そういう意味で、人知の最後の砦となるべき存在でもあった。逆に言えば、昔から、そのように素養のある人間を積極的に集め、囲ってきたともいえる。

今では珍しくなってしまった能力の内、神殿が脈々とその伝統を引き継いできた分野の中に【祈祷治癒】があった。【祈祷治癒】とは文字通り、神への祈りの文言を紡ぐことで、人本来に備わる治癒能力を一時的に高め、それを引き出すことで病や怪我の治療とするものである。

基本的に民に開かれた場所である神殿は、病を得た人々を広く受け入れ、癒す場でもあった。困窮した人々に手を差し伸べる慈愛の精神と奉仕の精神を引き継いでいた。そういった流れから、この国の首府である王都【スタリーツァ】は、唯一、神殿が存在するお膝元でもあり、街中には、神殿が管理する治療院が数か所、設けられていた。

かつては神殿内にそういった病に苦しむ人々を受け入れる場所があったとのことだが、街が発展して大きくなるにつれて様々な不都合が出てきた為、現在は、神殿内から街中にその拠点が移されてい

るとのことだった。

神官たちは持ち回りで、この治療院に祈祷治癒を専門とする治療師として入った。

代金は基本的に取らなかった。ここに派遣される治療師が、主に見習いから一つ位を上がったくらいまでの新米神官が殆どだからだということもあるが、そこには昔ながらの奉仕の精神が生きている為でもあった。代金を受け取るとしても少量の薬草代に少し毛が生えたくらいのもので、貧困に苦しむその日暮らしのような人々からは何も取らなかった。

この街には他に薬師も医療の分野を得意とする【術師】も多く居を構えている。腕が良いと評判の者もいて、金持ちや金銭的に余裕のある人々は、大抵がそちらに行った。それに貴族は、皆、昔から懇意にしている専属の薬師や術師を抱えているものである。

それに対して、こちらの治療院にやってくるのは、貧しい人々が多かった。薬を買うお金も持たない人々だ。

煌びやかで華やかな王都の中で埋もれてしまいがちな厳しい現実が、ここには見てとれた。街が大きく栄えていればいる程、そのような暗部は自然と大きくなるものだ。人が集まれば、職を求めて外から様々な人が街中に入り込む。一旗挙げようと希望を胸に都会にやってきても、そこで誰もが上手く行くという訳ではないからだ。

神殿の治療院がある場所は、一般的な賑やかな商業区域の中心からは外れた、少し寂れた所にあった。術師養成所や【アルセナール】がある宮殿に近い区画とは、天と地ほどの差があった。

【プラミィーシュレ】で少し陰鬱な脇道に入った時のような独特な空気が、いかがわしさのようなものとして漂っていた。道の端には、空になった酒瓶が転がり、荒んだ赤ら顔の傭兵崩れのような柄の悪い男たちが安い酒場に屯する。酔っ払いの喧嘩やいざこざの絶えないような場所でもあった。治安はお世辞にもいいとは言えないだろう。停滞し、淀んだ空気がそこかしこに影のように潜んでいた。

だが、この街にも当然のことながら、【プラミィーシュレ】のように治安維持を司る専門の軍部があると聞いていた。【プラミィーシュレ】はドーリンの所の第五師団が統括していたが、首府である【スタリーツァ】は、第四師団の管轄下にあるのだと過日、シーリスより教わった。

王が住まうお膝元であるということもあるのだろうが、それなりに街中の治安維持組織は、しっかりと機能しているとのことだった。第四師団の詰め所は、【アルセナール】にもあるが、【アルセナール】は、基本、中央との折衝や軍部の横繋がりでの調整をするような本部であるので、街の治安維持機能としては、その中心部に近い商業地区の傍らに専門の詰め所があるとのことだった。

リョウが訪れた治療院は、その第四師団の詰め所から見ても、もっと場末の区画にあった。

治療院は、石造りの小さな診療所のような趣だった。規模は驚くほどに小さい。昨日訪れた母体である神殿が驚嘆に値するほどの大きな施設であったので、その息が掛かった場所であれば、それなりのものだと思っていたのだが、どうも予想とは違ったようだった。

その辺りの事を純粋に疑問としてレヌートにぶつけてみれば、穏やかな気性の壮年の神官は、ほんの少しだけ困惑に似た苦々しい顔をその優しい面立ちに浮かべて、かつてはそれ程でもなかったのだが、近年、こういった奉仕活動の分野を縮小しようという動きが神殿の内部で出てきており、年と共に規模を縮小せざるを得なくなっているのだと目を伏せて語った。神殿の上層部の中には、このような街中に貴重な若い人材を回す余裕などないと主張する声も高く、それが近年、富みに強まっているのだと寂しそうに微笑んだ。

神殿内では、先読みや宣託を得る儀式の方に力を入れようとする流れが出てきている。神殿のそもそもの成り立ちでもある古来よりある原点に回帰しようとする動きが強く出始めているのだと言った。

近年、この国の中での神殿の立場は、以前に比べても弱くなっていた。その傾向を憂慮する声が、神殿の内部で高まっているとのことだった。神殿の神官たち、中でも、主に上層部では、この国の未来を占い、正しい宣託を得ることでこの国を良い方向へと導いてきたという自負（プライド）があった。

昨今は、国政、つまり宮殿への発言権を強める為に、かつての威光を高めようとする動きがあった。その中では、神殿の上層階級、主に神官長の補佐の間で熾烈な派閥争いのようなものが生まれているらしい。神殿は、神官長を筆頭にその下に様々な階級の神官たちが集まる組織ではあるが、女神リュークスへの信仰を取り去れば、そこに残るのは、どうやら一枚岩の組織ではないらしい。神官と雖も人であり、この国に政治的に組み込まれた組織であるがゆえに、そこには随分と俗物的な固執や権勢欲、及びキナ臭い動きが見え隠れするとのことだった。

従来の伝統を重んじ、古き良き時代に回帰しようとする【保守派】とそれでは世の中の流れに取り残されるだけだと反発をする【革新派】の対立が、水面下にはあった。民の中にある神殿、大地の中の均衡を重んじ、政治からは一歩引いた立ち位置を取ろうと主張する一派とその反対に、政治に食い込み、その発言権を強めようと画策する一派があった。

革新派の中には、神殿に祀られている女神【リュークス】の力を高める為に、古代伝承の中で、その伴侶と目されていた一柱の男神【エルドーシス】の復活に向けての儀式を行おうと目論む者たちがいた。【エルドーシス】信仰を復活させれば、リュークスの力も相乗効果として強まるであろうとの考えだった。それによって、より正確で威力のある宣託を得ようということだった。約二年前に行われたという宣託を受ける儀式は、この革新派の一派が、強引に推し進めたものでもあったのだ。

そのような神殿上層部の事情はさておき。

治療院は、その後も、志ある末端の神官たちの手によって、規模の縮小を余儀なくされながらも細々と運営されているとのことだった。

レヌートは、偶にこうして治療に当たる新米神官たちを励ます形で様子を見に訪れているとのことだった。

レヌートは、本来の神官である務めを忘れ、派閥争いに無駄な時間と労力を割いている現時点での上層部の方針を憂慮していた。神に仕える者が情けないというのが本心なのだが、この神殿が、遥か昔、この国に取り込まれた時点で、政治的な色合いを強く帯びてしまったことは避けて通れないことだったのだ。

以来、神殿の中では、そこから脱却しようとする動きと支配権力に迎合して上手く関係維持を図って行こうとする動きのせめぎ合いの中で、時代の移り変わりと共にその振り子が右にぶれたり左にぶれたりしながら揺れ動いて来たのだ。

それから、リョウは、レヌートの助手のような形で治療院での手伝いをすることになった。レヌートに付き従いながら、訪れた患者の話を聞き、症状を診立て、それに適していると思われる薬草を選び出した。そして、その薬草を症状に合わせて、軟膏のようにしたり、粉末にして飲み薬にしたりと手を加えて行った。

流石、長きに渡って知識を集め、学問の一端として系統立てて来た神殿の治療院だ。在庫する量的には少ないようだったが、その薬草の種類は驚くほど豊富であった。

訪れる患者の症状は、軽微なものから深刻なものまで多岐に渡った。打ち身から捻挫、切り傷や火傷など実に様々だ。でも大概が医者や術師に掛かる金銭的余裕の無い人たちである所為か、傷を放っておいたり、若しくは適切な処置をしなかったりで悪化させてしま

っている場合が多かった。

胃が痛いという人の為に、飲み薬にする為の薬草【ジェルーダク】をすり鉢の中でせっせと粉末にしていると、小さな子供を抱えた母親と思しき若い女性が血相を変えて駆け込んできた。

「先生！　子供が鍋を引っ繰り返しちまって！」

わんわんと泣き叫ぶ子供を抱えた母親の言うことには、料理の最中にちょっと目を放した隙に子供が誤って鍋を触り、煮立っている中身をぶちまけてしまったのだという。その時にぐつぐつと煮え立っていたスープが子供の足に掛かってしまったのだ。

「水を持ってきます！」

リョウは、急いで水場に走ると桶にたっぷり水を汲み、治療院の部屋に戻った。懐から小振りの【冷却石】を取り出して、中に入れると手を翳した。

――――――【パハラデェーニェ（冷却）】

小さな呪いの言葉を口にしてから意識を水と石に集中させ、汲んだ水を冷たくした。

手がビリビリと冷たくなったのを確認してから、その中に真っ赤になった男の子の足を浸すように促した。

「大丈夫。大丈夫だよ」

リョウは不安そうにしている母親と痛みに泣いている男の子に微笑み掛けた。

これである程度、熱を取ってから火傷用の軟膏を塗って様子を見るしかないだろう。

リョウは桶の中にある男の子の足にそっと触れた。単なる水とは違い、塩分や油分の入ったスープは、沸点がかなり高くなっている。お湯を被った時よりも炎症が酷くなることは必至だった。比較的軽度の火傷の場合、その第一段階で患部を冷やすことが肝要だった。

子供はまだ五つになるかならないか位の小さな男の子だった。ここに連れて来られた時は、突然に襲った熱さと痛みとで泣きじゃく

っていたが、急に冷たい水の中に足を入れられる形になって吃驚したようだった。冷たさで痛みが麻痺してきたのか、泣きやんでじっと堪えていた。

リョウはその男の子の小さな手になにやら白い人形のようなものが握られているのに気が付いた。良く見れば、犬のような形をしている。

母親にもう少しこのまま冷やす必要があると告げてから、リョウは子供の気を紛らわす為にその人形の事を聞いてみることにした。

「キミが持っているのは、白い犬？」

桶の中に手を入れて、冷却の加減を見ながら、しゃがんだまま男の子に視線を合わせれば、

「違うよ！　これは【ヴォルグ】なんだよ！」

泣きじゃくった涙の跡をそのままに男の子が言った。

「へぇ、【ヴォルグ】なんだ」

「【ヴォルグ】でも只の【ヴォルグ】じゃない。長老なんだよ。真っ白いんだから」

そう言って手にした人形をリョウの方に向けた。

「それはすごい。かっこいいね」

「きらきらしてるんだよ。体中が真っ白なんだ」

そう言って嬉しそうに顔を綻ばせた男の子にリョウも微笑み返した。

男の子が手に持つ人形は、なんと【ヴォルグ】の長であるセレブロを模したものであるという。こんな所で小さなセレブロに御対面だった。随分と可愛らしい形になっている。

この国のお伽噺の中に描かれている【ヴォルグ】の長は、聡明で勇ましく、子供たちの間でも人気があるらしかった。実物のセレブロは、それよりもずっと慈愛に満ちて優しい温かな存在だ。そして文句なしに凛々しい。リョウは、何だか身内が誉められているような気分になり、嬉しくなった。

「キミは、セレブロが大好きなんだ？」

「セレブロ？　なんだそれ？」
「【ヴォルグ】の長の名前だよ」
その言葉に男の子は目を輝かせた。
「セレブロっていうのか？」
母親の膝の上から身を乗り出しそうになった男の子を支えて、リョウは小さく笑った。
「そうだよ。その毛並みが、真っ白で銀色に光り輝くから、【セレブロ（銀白）】なんだ」
「そんなの知ってるよ。当たり前じゃん」
「そうだね」
幾ばくかの元気を取り戻した男の子にその背後で母親がほっとしたような顔をした。
「お兄ちゃん、足がびりびりしてきた」
少し、気持ちが解れてきたのか、落ち着いて自分の感覚を訴え始めた男の子に、
「うん。今、冷やしているからね。もうちょっと頑張ろうね。ここでちょっと我慢したら、あとでうんと楽になるからね」
リョウは宥めるように優しく言葉を継いだ。
「ほら、キミのセレブロもその方がいいって言ってるよ」
「うん」

大体の経過を見て、そろそろかと判断したリョウは、母親にその子の足を桶から上げるように声を掛けた。
「よし。もういいよ。頑張ったね。セレブロもきっと誉めてくれるよ」
そう声を掛ければ、男の子はほんの少しだけ嬉しそうに胸を反らした。
それから、リョウは火傷に効くとされている一般的な薬草【ガレーニィエ】を磨り潰した。欲を言えば、金創や火傷に良く効くとされている【ストレールカ】があれば一番いいのだが、贅沢は言えな

かった。あれは街中では滅多に出回らない希少な部類の薬草で、おいそれと使われるものではないことを講義の中で知り、リョウは鞄の中に手持ちの【ストレールカ】があったのだが、ここではみだりに使わない方がいいだろうと自粛したのだった。この治療院の在庫の中にも【ストレールカ】はあるようだったが、もっと重症の場合の為に残してあるようだ。代わりになる薬草も沢山ある。万能薬に頼るよりは、手に入り易いその代替品を利用することも学んだ方がいいだろう。

油紙に磨り潰した薬草を馴染ませた軟膏を塗り、それを男の子の足の火傷が尤も酷く腫れている部分、ふくらはぎの辺りに張り付けた。そこに膝下からそっと包帯を巻いて行った。包帯を巻きながら、祈りを込めて、かつて小屋の中で見つけたガルーシャの呪い集の中にあった文言を小さく紡ぐ。

【禍巡りて、源に帰す。我、古の約定に従い乞い願う。古きには再生を。新しきには強靭なるしなやかさを】

包帯を巻き終えると、炎症の部分にそっと手を翳し、神経を集中させた。

――――――――【ウマリャーユー（願い届かんことを）】

末尾の言葉を紡ぎ、そっと手を放した。

「さぁ、これで終わったよ。頑張ったね。セレブロもきっと誉めてくれるよ」

「ほんと？」

「うん。本当だよ」

手作りなのだろう。男の子の手の中にある少し不格好な、それでも味のあるセレブロの人形をちょんと指で突いてから、リョウはそっと男の子の頭を撫でた。

それから母親に今後の注意事項を与え、明日、包帯を取り換えに来るようにと告げた。

「――――――で、いいですよね？」

一頻り治療を終えてから、ずっと傍らにいたレヌートと今日、この治療院に専任で入り、患者を診ていた二年目だというもう一人の新米神官を振り返った。

レヌートももう一人の神官も途中、口を挟まなかった。ということは、その治療の方法自体に間違った点があった訳ではないのだろう。見過ごせない部分は、妥協をする訳はないのでしっかりと訂正が入る筈だからだ。

振り返ったリョウに、レヌートは、静かに頷いた。

「ああ。問題ないだろう」

そして、ここを訪れた際、簡単な自己紹介の時にスタースと名乗った新米神官は、ハッと我に返ったようにリョウを見ると頷いた。

「ああ。大丈夫だ」

先達二人からのお墨付きに漸くリョウもほっと胸を撫で下ろした。元々医薬の知識があった訳でも専門に学んだ訳でもない、皆、こちら側に来てから見よう見真似で覚えたもので、自分の知識など、医薬と呼ぶにはおこがましい程のもので、恐らく家庭療法の域を出ない物であるとは常々思っていたからだ。

火傷がまだ軽傷の部類でよかったと思った。重症であればきっとどうしていいか分からなかったに違いない。患者を前に気が動転してしまったかも知れなかった。

リョウも子供の頃に誤って熱湯を被ったことがあり、火傷の辛さは身を持って経験していた。あの時も単なるお湯ではなく、塩分の入ったスープだった為、散々な思いをしたのだ。

ひょっとしたら炎症部分が爛れて水膨れができるかもしれないが、今後は、様子を見る他ないだろう。

少し元気を取り戻した男の子を抱いて、母親が帰って行った。

それから細々とした手伝いは続いた。薬草を選び出したり、薬蕩

を煮出したり、磨り潰したりと細かい作業を行った。
やってくる人もその症状も実に様々だった。その昔、鍛冶職人をしていたという男や石切り場で鉱石の採掘をしていたという老人もやって来た。彼らには、【プラミィーシュレ】で目の当たりにしたあの特有の痣があった。発症の程度は、遅いようだったが、長年に渡って静かに男たちの身体を蝕んでいることが分かった。慰めくらいにしかならないのだろうが、リョウは現れている症状に合わせて薬湯となる薬草を選ぶと、ガルーシャの残した呪い集の中からそれに尤も近いものを選んで、心を込めて呪いを唱えながら、治療の手伝いに当たった。

訪れる患者の中には、偶にこうして巡回にやってくるレヌート目当ての人もいた。持病を抱えた恰幅のいい男だった。その人はそれなりの生活水準にあるらしく、暮らしには困っていない裕福な部類の人のようで、いつも薬草代に治療代と称して、幾ばくかの小銭を包んだり、家で奥さんが焼いたというパンなどを差し入れに持ってきてくれるとのことだった。

「俺が今こうしてぴんぴんしてるのも、この大先生のおかげさ」

そう言って豪快な笑みを浮かべた男に、レヌートは大げさだと苦笑を滲ませながらもどこか嬉しそうに笑っていた。

小さいながらもこの場所には、温かい空気があった。それは、きっとこの場所を守っているレヌートを始めとする神官たちの人柄が現れているのだろう。

「少し休憩を入れようか」

やってくる患者の波が一旦、引いた所で、レヌートがリョウに声を掛けた。

「はい。ではこれを片付けてから」

傷口の洗浄に使った洗い桶を手にリョウは立ち上がると戸口から外に出た。

桶の中の汚れた水を洗い場に捨ててから、空になった桶を手にぐ

っと大きく伸びをした。室内を細々と動いていた積りであっても、薬草を磨り潰したり、薬湯を煮出したりと一か所で腰を下ろしての作業が多かった為か、身体がバキバキと鳴った。凝り固まった筋肉を解すように肩を回した。

中に戻れば、レヌートがお茶の用意をしている所だった。

小さな簡素な木の丸椅子に腰を落ち着けるとリョウはそっと長い息を吐いた。

「疲れたかい？」

同じように丸椅子に腰を下ろしていたスタースの言葉にリョウは小さく笑った。

「少し。こんなに大変だとは思いませんでした」

本当にこんなにひっきりなしに患者が訪れるとは思ってもいなかったのだ。息を吐く間もなかった。

正直な所を吐露すれば、

「ハハハ。ここは結構患者が多くて、ひっきりなしに人がやってくるからね」

それだけこの地域にこの治療院が根付いているということなのだろう。

リョウはレヌートから差し出されたお茶のカップを、謝意を述べてから受け取った。そっと口に含む。柔らかなほんのりとした甘みが口の中に広がった。

「美味しいです」

思わず笑みを漏らしたリョウに、

「それは良かった」

レヌートも静かに微笑んでいた。

「キミは術師を目指しているんだよね？」

一息吐いてから、新たな患者が来るまでの間、スタースが徐に口にした。

神官の服装に身を包んだスタースの帯の色は赤色だった。

神官たちが腰に巻く帯の色は、そのまま階級を表わしているという。見習いの内が白で、そこから正式に神官として採用され、位を一つ上がるごとに色が暖色系から寒色系に徐々に移行するのだという。最初の位は赤で、その次が橙、黄、茶、緑、水色、青、紫、黒の順になるとことだ。

神官に正式に採用されてから二年目であるというスタースの帯は赤色だ。淡い紫色の帯をしているレヌートは、神官の位の中でも高位の部類で、本来なら、このような場末の治療院に気軽に顔を出すような位にはいないのだとのことだった。それを態々、時間を見つけては、この場所に足を運んでくれているということで、スタースはレヌートに対し、並々ならぬ尊敬と感謝の気持ちを持っているようだった。それは、スタースの態度や言葉の端々によく表れていた。

「ザガーシュビリ殿に師事をしているんだろう？　こっち（神殿）に来る気はなかったのかい？」

神殿で神官を目指す積りはなかったのかと問われて、リョウは緩く頭（かぶり）を振った。

「いいえ。神官を目指すなんて、考えたことはありませんでした」

そんなことなど考えてみたこともなかった。自分は辺境に暮らす田舎者で、世話になった人が偶々術師であったから、それを引き継ぐ形で術師になりたいと思ったのだ。偶々、自分にはそれに見合うだけの素養らしきものがあったからということもあった。

なんの能力も無ければ、ずっとあの辺境でひっそりと暮らしていただろう。この国の中心である王都などという場所を見るのは夢のまた夢のようなことで、でなければ、ここ（スタリーツァ）を訪れる機会などなかった筈だ。今回、王都に来られたのも知り合いの伝手を頼ってのことで、その伝手の中に偶々、レヌートが居て、自分を引き受けてくれたのだ。

そう語って聞かせれば、スタースは小さく笑って納得したようだった。

「スタースさんはどうして神官になったのですか？」
「僕は孤児でね。幼い頃、神殿に預けられたんだ。素養の開花が比較的早かったから、神殿の方でも受け入れてくれて、お陰で野垂れ死にしないですんだのさ」
そう言ってお茶を飲むと小さく微笑んだ。
語り口は飄々としていたが、その言葉が語るスタースの人生は、実に重みのあるものだった。
途端に気まずそうな顔をしたリョウに、スタースは気にすることはないと笑った。
「だから僕としては恩返しをしている積りかな。神殿にはこれまでかなり世話になったから。少しでも、出来ることをしたいんだ。で、漸く、それができる機会に恵まれたって所かな」
だから、率先してこの治療院に入っては、治療師としての任を全うしているのだと言った。

神殿の神官は、皆、男性だった。それは祀られている神【リュークス】が女神であることと関係をしている。女神に嫉妬を起こさせない為に、仕える者は男のみという取り決めが古くからあるのだそうだ。
それを聞いた時は、成程と思ったものだ。ということは自動的にリョウとしては、自分が望む望まない以前の問題で神官への道は閉じられていたということになる。だが、まぁ、レヌートやスタースにしてみれば、リョウの外見は少年にしか見えないのだろうから、先程のような質問が出たのだろう。

そうして束の間の休憩を挟んでいると、
「スタース、薬草の補充はどうする？」
薬草の棚を改めていたレヌートが、静かに口を開いた。
「ああ。今、必要なものの目録は作っておきましたので、後で【セ

ミョーノフ】に行こうと思います」
「一覧はこれだな？」
レヌートは簡素な木の机の上にあった一枚の紙を手に取ると、中にざっと目を通した。そこに手にしたペンにインクを付けて、なにやら書き足し始めた。
そして、顔を上げるとリョウの方を見た。
「リョウ、すまないが使いを頼まれてくれないか？」
「あ、はい」
レヌートの声にリョウは立ち上がった。
スタースが驚いたようにレヌートを見たが、レヌートは新米神官に何がしかの目配せをした。
「ここから通りを二本挟んで東の方角、【ムィーシュキン】通りに薬草を扱っている【セミョーノフ】という店がある。店先に大きな看板が掛かっているから、すぐに分かるだろう。そこへ行って、この紙を見せて、この一覧にある薬草を用意してもらってほしい」
【ムィーシュキン】通りの【セミョーノフ】。リョウは通りと店の名前を復唱した。
「支払いはどうしているんですか？」
「ああ。後で月毎に纏めて神殿から代金を払うことになっているから、薬草と一緒に受け渡しの確認をこの紙にもらってくれればいい。向こうでも一覧を作るから、この紙と照合して問題が無ければ署名をしてくれ」
「分かりました」
リョウは一覧を手にすると、早速、使いに出掛けることになった。

黒い頭髪を靡かせて、小柄な背中が戸口から颯爽と消えた後、スタースはやや困惑をしたようにレヌートを見た。
レヌートとは自分が幼い頃から知る長年の付き合いだ。スタース

は、レヌートが自分と内密な話をする為に、態々、弟子として連れて来たリョウという名の少年を使いに出したのだと分かった。薬草の補充は、別段、急ぐものではなかったからだ。

「何か問題でもありましたか？」

その問い掛けに、レヌートは珍しく逡巡をしたような様子を見せてから、どこか躊躇いがちに口を開いた。

「スタース、キミは、あの少年、リョウのことをどう思った？」

「それは、術師としての素養に関してですか？」

「それもある」

何故、そのような事を訊くのだろう。内心、訝しく思いながらもスタースはこの短い間で感じたことを淡々と言葉にしていった。

「第一印象から言えば、実に落ち着いていますね。判断も的確で実に冷静です。先程の火傷の子供に対する処置は、正直、驚きましたよ。動きに無駄が無かった。それに患者の事を良く見ています」

そこで一旦、言葉を区切ったスタースにレヌートは無言のまま続きを促すように頷いて見せた。

「術師を目指しているということですが、専門は、【祈祷治癒】の分野になるんですか？　薬草の知識は、まだまだだとしても、あの呪いの文言は、我々が神殿で学んだものとは若干、異なります。実際の効果の程は、もう少し時間が経ってみないと分かりませんが、不思議な気を帯びたのを感じました。あの子は、ここに来る前にどなたかに師事をしていたのですか？」

「私も詳しいことは分からないのだが、あの子が暮らす田舎で術師であった人物に初歩的な手ほどきを受けていたようだ」

その言葉にスタースは、考える風に手を顎の辺りに宛がった。

「もし、あの子の能力が本物であったら、神殿としては欲しい所でしょうね。それも喉から手が出るほどに。単なる術師にしておくには勿体ない。神官向きだと思いますよ」

「お前もそう思うか」

ということは行き掛かり上、あの少年の面倒をみることになった

レヌート本人もそう思っているということなのだろう。先程の会話から察するに、当の本人は全く神官になる積りはないようだったが。

だが、少し考えた後、スタースが眉を寄せた。

「ですが、あの子の外見は、少し厄介かも知れません」

スタースの言葉に、レヌートもその目をすっと細めた。

そうするとレヌートの印象はかなり変わった。春の陽気から一転、底冷えのする冬の寒さのような剣呑さを帯びた。

そのような顔をするレヌートを久々に見るとスタースは内心、思った。

「確かに。あのような黒髪に黒い瞳だ。革新派に目をつけられたら、大変なことになるだろう」

それは神官たちの中でも急進派である一派が、黒い色彩を持つ人間を血眼になって探しているという噂だった。それも【エルドーシス】復活のための儀式、若しくは新しい宣託を得る為の儀式に利用するという噂だ。

神殿の中で黒い色彩はある種、神聖化されていた。と同時に禁忌でもあった。それは神殿の内部に切れ切れに伝わると言う古い伝承に端を発していた。

【黒は全き(まった)を飲み込む力。闇は無限の始まり。そが色を持つは内なる力を宿す。そを神の御許に還せしめよ。言祝ぎに応えむ】

古いリュークスに関する伝承の中にその一節があった。時代が下り、その本当の意味というのは、残念ながら正確には伝わらなかった。神官たちは、そこを自分たちなりに解釈しようとした。

それを念頭に置いたのかは分からないが、二年前に得られた宣託の際の儀式には、黒い闇のような噂がひっそりと神殿内部でも囁かれていたのだ。宣託を受ける際の儀式の為に、黒い色彩を持つ人間が贄として捧げられた。それは黒い髪と黒い瞳を其々に持つ二人の人間だったと。

それは、驚嘆に値するほどのおぞましい話だった。人の命を購いに宣託を得るなど間違ったやり方だ。それが神官ならともかく、こ

の神殿の神官たちの中にそのような色彩を持つ者は一人としていなかった。　そうまでして得られた宣託の内容は、【聖なる森に神の御柱が立つ】という曖昧なもので、その宣託が意味することを神殿はいまだ解明できていなかった。

もしその噂が本当の事ならば、余りにも馬鹿げている。人の命を冒?したものだ。

「二年前の噂は本当なのですか?」

スタースは真剣な面持ちで声を低くした。

儀式の為に神殿とは関係の無い人が犠牲になったという話だ。本来、儀式を行うのは、高い能力を持つ上位階級の神官たちだ。秘密裏に行われるという儀式の内容は、その中身が明らかになることはなく、下位の神官たちには、皆目、見当が付かないものだった。

それなのに、あの当時には、実しやかに儀式の裏には犠牲になった人がいたという噂が流れたのだ。それは、どこか作為的ですらあったかもしれない。

「本当の所は分からない。だが、火の無い所に煙は立たないと言うからな」

レヌートはただ、そう口にするとそっと目を伏せた。

「あの子は、キルメクの出身なのですか?」

スタースはふとあの子の顔立ちがこの辺りでは余り見慣れないことに思い至った。色合いとしてはキルメクの民に近いのではと思ったのだが、その問いにレヌートは緩く首を振った。

「いや、どうも違うらしいのだが、その辺りのことも分からんそうだ。身よりのない孤児だと聞いている。田舎の村で拾われて育ったという話だ。あの子も親の顔は覚えていないそうだ」

「そうなると益々厄介ですね」

つまり、この国には、表だってあの少年を守るような係累が居ないと言うことなのだ。身よりのない少年。しかも、顔立ちと色彩から想像するにこの国の人間ではない。そのような人物が突然、この場所から一人いなくなったとしても、大きな問題にはされないだろ

うということだ。そのことを知った儀式推進派の連中は、喜び勇んで接触を持とうとするだろう。そして、言葉巧みに誘い出し、あの少年を罠に嵌めるかもしれない。

「ああ。あいつらにとっては、都合が良すぎるところだろうな」

だがそこで、ふとスタースは顔を上げた。

「ですが、あの子の身元保証人はどうなっているんですか？」

術師の養成所で学ぶ為には、身元を保証する人間が必要とされているからだ。申請時の書類に提示が求められている筈だ。通常ならば、親や、その申請者が師事していた術師が担うことが多いのだが、あの少年の場合はどうなっているのだろう。

「ああ。私の義理の弟が保護者代わりになっている」

「弟さんは、……確か、軍部の方でしたか」

その昔、神殿の中でも一時期、噂になったことがあった。代々神官を輩出する家であるレステナント家から、軍部に入る者があったと。当時、スタースはまだ子供であった為、その辺りの事情はよく飲み込めていなかったが、大人たちが眉を顰めて噂話に花を咲かせていたのは覚えていた。長じてから、レヌートがそのレステナント家から妻を娶る形になったのを知り、そう言えばと思い出したのだ。

「ああ。今は第七師団で副団長をしている」

レヌートはそう言うと、先程までの固かった表情を少し改めて柔らかいものにした。それだけで、レヌートにとってその義理の弟が大切な存在であることが感じ取れた。

第七の副団長。そして、本家はレステナント。それだけの肩書があれば、後ろ盾としては、相当なものだろう。

そう思うとスタースは、少し安心した。

「ならば、迂闊には手は出せないのではありませんか？」

「そうだといいがな」

「あの、その辺りの事情を弟さんはご存じなのですか？」

「いや、恐らく、まだだ。私も話してはいないからな。だが、今度、折を見て知らせておこうと思っている」

流石に神殿内部の恥を晒すようなものだから、幾ら身内とはいえ、外部の人間にその辺りのことを口にするのは憚られるのだろう。こととは機密事項にも触れる可能性がある。往々にして神殿というのは、秘密が多い場所でもあった。

「……そうですか」

いずれにしろ、下位の神官であるスタースには、途方もないことのように思えた。

恐らく、後輩の指導にも熱心で、面倒見が良いとされているレヌートのことだ。義弟経由とは言え、今回、あの子の術師申請に関わることになり、もしかしたら、面倒事に巻き込まれるかもしれないという万が一のことを考えているのだろう。

だが、裏を返せば、逆にレヌートがそのような心配をするだけの不安定材料が神殿内部にあるということなのだ。

「私の方でもなにか気が付いたことがあったらお知らせしますよ。まぁ、私が知り得ることの出来る範囲なんて高が知れているとは思いますが」

これまでレヌートには世話になっているという自覚があるスタースとしては、その憂いを取る為に出来るだけの協力は惜しまない積りだった。

微力ながらも力添えをすると口にすれば、優しい面立ちの高位神官は、

「ありがとう。スタース。恩に着る」

そう言って、少し影のある微笑みを浮かべたのだった。

街中の治療院（後書き）

冒頭の部分で少しだけ触れた『ユルスナール突然の訪問』の顛末は、Ｍｅｓｓｅｎｇｅｒ　の大人向け短編集　Ｉｎｓｏｍｎｉａの方に掲載しています。もしよろしければ、そちらもどうぞ。

灰色の髪の男

神殿管轄の治療院を出て、レヌートに教えられた通りに東へ二本、通りを抜けると角の所に緑の草木を模した大きな看板が軒先にぶら下がっているのが見えた。看板には、意匠をぐるりと囲むようにその周囲に、【セミョーノフ】という文字が刻まれていた。どうやら、ここが、目的地のようだ。

「こんにちは」

小さな硝子の填め込まれた扉を押すと、ちりりと来客を知らせる為の小さな鈴の音のような金属音が響いた。

中は直射日光が入らないように細心の注意が払われている為に薄暗かった。そして、独特な、リョウにとっては馴染み深い薬草の匂いが鼻先を掠めた。柱の隅に据えられた小さな発光石が煌々とほの白い明かりを放っている。

中は、広々としていた。壁一面は棚になっており、そこを沢山の小さく切りとられた四角い引き出しが埋めていた。引き出しの一つ一つには、其々中に常備されていると思われる薬草の名前が書かれた札が貼られていた。

この棚全部が薬草なのだ。なんという量の多さ、それに種類の豊富さだろう。

リョウは密かに感嘆の息を吐き出した。その内、自分が普段から扱うのは、ほんの一握りだった。

薬師としての基本的な講義を受けて、それなりに薬草の知識も増えた気になってはいたが、この室内にあるものを目にすると、自分が学んでいたものがいかに狭い分野であったかを再確認させられることになった。

感嘆と驚嘆に似た思いで棚を見回していると、店の奥にある細長いカウンターの中から声が掛かった。

「いらっしゃい。何をお探しですかな？」
白いシャツに前掛け（エプロン）を掛けた体格の良い壮年の男が、にこやかにこちらを見ていた。その太い首には小さなルーペをぶら下げている。
リョウは我に返ると、呆けていた自分の行いを誤魔化すように小さく微笑んでからカウンターにいる店の主だと思われる男の元に歩み寄った。
「神殿の治療院から使いに参りました」
――――――――こちらの薬草をお願い致します。
そう言って手にしていたスタースが作成したという一覧を手渡せば、店主は合点したように頷いた。
「おや、これは珍しい。いつもはスタースが来るんだが、キミは新しい見習いの子かね？」
一覧に目を通しながら、店主が興味を引かれたようにちらりとこちらを見た。
「いえ。今日は偶々で、別の神官の方と共に治療院の方で手伝いをすることになったので」
自分が、まだ術師の養成所で学んでいる学生だと告げれば、店主はたちまち相好を崩した。
「そうかいそうかい。キミも養成所の学生さんなんだね。いやね。内にも一人、あそこで学んでいるのがいるんだよ」
「そうなんですか」
「ああ。今日はこっちに手伝いに戻って来ているから。呼んで来ようか。どれ」
その申し出にリョウは慌てて手を前で振った。
「あ、いえ、お仕事の邪魔をしてはいけませんから。どうかそのままで」
第一、いきなり呼ばれても自分が相手を知っている確率は低いだろう。運が良ければ見かけたことがあるかもしれないが、基本的に養成所に通う生徒は沢山いる。こちらに来てからまだ半月程しか経

っていないリョウには、当然ながら知らない顔の方が多かった。そんな人を同じ養成所で学ぶ生徒だからという理由で呼ばれても向こうも困るだろう。

と思ったのだが。

「なに。その心配はないよ。この一覧にある薬草を今から用意するのに人手が必要だからね」

そう言うと店の主は、身体を反転させ、奥へと続く戸口の方へ向かって良く通る声を張り上げた。

「おーい、リヒター。ちょっと手伝ってくれ！」

男の太い声が紡いだ名前に、リョウはまさかと思った。

自分の知り合いの中にリヒターと称する友人がいた。

互いに家の事や出自のことは余り話をしたことが無かった。養成所で新しく出来た友人たちと一緒にいる時は、大抵、集団の中で下らない言い合いをしながら雑談をするのが常であるので、個人的に深く立ち入った話をしたことが無かったのだ。

だが、不意に、そう言えば、バリースがリヒターは街の大きな薬種問屋の息子であると話していたような気がすることに思い至った。

だが、まぁ、同じ名前の別人ということもある。

そう思っていたのだが、戸口に現れたのは、おっとりとしたどこか柔らかな空気を身に纏うお馴染みの少年だった。

「あれ？　リョウじゃないか！」

客の相手をしろと呼ばれたリヒターは、カウンター越しに立つ人物を見て目を見開いた。

思いも寄らないことだったのか、少し驚いた顔をしたリヒターに、リョウもひらりと手を振った。

「やぁ」

「おや、この子の知り合いかい？」

「はい。リヒターにはいつもお世話になっています」

そう言って、恐らくリヒターの父親であろう店主に小さく礼をす

れば、
「おやまぁ、これはご丁寧に。うちの子の方が却って、厄介になっているんじゃないかね？」
さり気なく養成所での様子を聞く為に話しを振ったであろう父親に、
「いえ。とんでもありません」
リョウも穏やかに微笑み返していた。
そのまま他愛ない世間話を続けそうになった父親に待ったを掛けたのは、息子であるリヒターだった。
「父さん。仕事は？」
「ああ。そうだった」
大げさに肩を竦めておどけたような声を出した店の主に、リヒターも同じように小さく肩を竦めて見せた。
そうしているとやはり親子である。柔和な面立ちをしたリヒターに比べて、父親は男らしい精悍な顔付きをしている為、顔立ちは余り似ていなかったが、リヒターと父親はその身に纏う雰囲気がよく似ていた。

こんな所にどうしたんだとリヒターからも聞かれて、リョウは簡単にレヌートの講義の一環で、神殿管轄の治療院で手伝いをすることになった経緯を語った。
「成程ね。じゃぁ、レヌート先生ってことは、祈祷治癒の講義も取ってたんだ？」
「そうだね」
「じゃぁ、術師の認可を受けた後は神殿入りするのかい？」
「いや。それはないよ」
リヒターの問いをリョウは笑って流した。
そして、元々、この養成所に入ったのも、レヌートの義弟を仲立ちにしてのことだったのだということを付け足した。その経緯からレヌートには後見人のような形をお願いすることになり、その為に

祈祷治癒の分野も養成所で学ぶことにしたのだが、神殿や神官の方面は全く考えていないと言い切った。
それから話しの流れを変えた。
「リヒターは薬師を目指しているんだよね？」
「ああ。この店があるからね」

そして、リョウがもらってきた一覧にある薬草を父と子が揃え始めた。広い店内を迷わず行き来して、棚を探し当て、求められているだけの薬草を抜き出す。それを一つ一つ袋に入れて、表書きを施して行った。
リヒターはいつになく真剣な顔をしていた。そうして薬草の棚と向き合う横顔は、いつもより数倍も引き締まって見えた。それは薬師としての顔なのだろう。
それから全ての用意が終わり、店主が作成した一覧とこちらの一覧、そして、個別に包まれた薬草を一つずつ確認して行って間違いがないことを確かめた。受け渡しの確認に一覧に裏書きを貰い、そして店主の一覧の方にも、リョウは受取人として自分の名前を署名した。署名には、印封と同じ古代エルドシア文字を利用した。これで書類が正式なものとされるのだ。
「じゃぁ、また、養成所の方で」
「ああ」
「スタースによろしく伝えておくれ」
「はい。分かりました」
そして、ありがとうございましたと謝意を述べて、リョウは【セミョーノフ】を後にした。

それから、治療院に戻るべく、元来た道を辿っていると、往来で狭い路地から男たちの怒声のようなものが聞こえた。

――――――いいかい、リョウ。ごろつきの類や柄の悪い連中がこの辺りにはいるんだ。だから絶対に脇道に入っちゃ駄目だよ。それに喧嘩を目撃しても、仲裁なんて以ての外、目を合わせちゃ駄目だ。下手に絡んだら因縁を吹っ掛けられて、ややこしいことになるから。

帰り際、リヒターに口を酸っぱくする程言われた注意事項が頭を過った。

リョウは、足早に治療院への道を急いだ。その時、脇から一際大きな諍いの声が上がり、思わずそちらへ顔を向けてしまったのだ。それが、恐らく運の尽きだった。

狭い路地の所で、一人の男が複数の男たちと対峙していた。いかにも柄の悪そうな屈強な男たちに囲まれている。剣呑な空気が漂っていた。男たちは皆、腰に剣を佩くか、短剣を手にしているようだった。一触即発という雰囲気だ。

その中の囲まれていた男と目が合ってしまった。その男が何故か驚いたように目を見開いて、何がしかの声を上げたようだった。その所為で、男を囲んでいた他の男たちが、自然とリョウの方へ視線を向けることになった。

その中の一人と目が合ってしまった。

その瞬間、ニヤリと下卑た笑みが男の口元で形作られたのが見て取れた。

内心、不味いと思った矢先、

「おい。坊主。ちょっとこっち来いや」

髭面で赤ら顔の男に声を掛けられて、リョウはドキリとした。

だが、なるべく平静を装うように、

「すみません。急いでいますので。ご勘弁を」

そう口早に告げてから、そそくさとその場を立ち去ろうとしたのだが、いつの間にやら、こちら側にやってきていた仲間の一人と思しき男に腕を掴まれてしまった。

いきなり捻り上げるように強い力で腕を掴まれて、声を上げそうになった。顔を顰めてその痛みをやり過ごした。

リョウは、動揺していた。

なんだ。一体、何があったのだ。物盗りの類か。金品を強請る積りなのか。はたまた恐喝か。

だが、自分の身なりはこの界隈に紛れこむくらい貧相なもので、どう高く見積もっても金目の類を持っていそうには見えない筈だった。

リョウは薬草を入れた袋が入った鞄の紐をきつく握り締めた。これは盗られる訳にはいかない。それに治療院はもう目と鼻の先という距離だった。大声を上げれば、気が付いてもらえるだろうか。そんな胸残用をする最中、心臓が早鐘を打ち出した。

「おら、こっちだ」

「あの、…何なんですか？」

有無を言わせない力で引っ張られ、あっという間に剣呑な空気を醸し出していた男たちの中に放りこまれてしまった。

リョウは男たちと対峙していたと思しき男の足下に転がった。いきなり投げられて、咄嗟に手を突いたが間に合わず、尻もちを着く形になった。

「何の真似だ？」

低く掠れた男の声がすぐ脇からして、リョウは顔を上げた。鋭角な顎の線が際立って見える。尖った鼻先に縮れた灰色の髪が男の輪郭を象っていた。頬は削げ落ち、無精髭が疎らに生えている。顔には、年と共に刻まれた皺が多く見受けられた。

リョウは体勢を立て直す為に慌ててその場に立ち上がった。

「あ？　そいつをおめぇが口にするのかよ？」

灰色の髪の男が無言のまま、その目を眇めた。

それに対して、男たちの中でも頭（リーダー）であるらしい髭面の男が口を歪めた。

「なぁに、この坊主が、どうもおめぇの知り合いみてぇだからよ。ちょっと面ぁ貸して貰ったんだよ」
リョウは目を白黒させて、対峙する男たちを見た。
自分がこの男と知り合いだって？　そんなことが果たしてあるのだろうか。自分は少なくともこの男を知らない筈だ。
「こんなガキ。俺は知らん」
灰色の髪の男が、忌々しげに吐き捨てた。
「あんだと、こら」
「すっとぼけんなよ、おっさん」
「ああ。さっき、声を上げたじゃねぇか。おい」
リョウは静かに後ろに一歩、下がった。逃げる隙を探す。
良く分からないが、どうも人違いのようだ。
「あの……オレもこの人のことは知りませんし、何かの勘違いのようですから」
――――――もう行っても構いませんよね？
そう口にして、内心、冷や汗を流しつつ、灰色の髪の男を真正面から見た瞬間、リョウの脳裏を走馬灯のようにとある一つの情景が駆け廻った。
それは、【プラミィーシュレ】のソーニャが働く【スタローヴァヤ（街の食堂）】で、ユルスナールやブコバル、ドーリンと食事をした時（あれはそう、ドーリンと初めて顔を合わせた時だった）に、テーブルに着く前にある一人の男からいきなり腕を掴まれる形で突然、声を掛けられたのだ。
――――――生まれはどこかと。兄弟の類はいるかと。
あの時の臓腑が冷やりとした感覚を身体は覚えていた。
「……あ」
思わずというように小さく声が漏れた。そして、その場で軽く目を見開いたリョウに、灰色の髪の男が鬱陶しそうに舌打ちをした。
「どうやら、坊主の方は、心当たりがあるようだな？　え？」
背後から凄まれるように肩を掴まれて、リョウはぎくりと身体を

震わせた。
だが、全くもって訳が分からない。この男があの時の男（プラミィーシュレ）だとしても、自分とは顔見知りという範疇にすら入れられないだろう。掠るような一瞬の出会いだった。偶々、食堂で声を掛けられた。ただ、それだけだ。擦れ違うようなものであったから、リョウの方は男の顔をすっかり忘れていた程だった。
それなのに。どうしてこのようなことになっているのだろう。
「あの……オレに…何か……用ですか？」
口の中がカラカラに乾いていた。震えそうになる声をどうにかして絞り出す。
「用ってほどでもねぇんだがよ。なぁ？」
そう言って男たちが意味深に含み笑いをし合った。
途轍もなく嫌な予感がした。
「ああ。ちょっと、このおっさんが口を割らねぇもんだから。こちとら困っちまってよぉ」
「あの……それとオレが……何の関係があるんでしょうか？」
疑問を呈すれば、
「ああ？」
反対に凄まれてしまった。
「関係なんて少しでも掠りゃぁ大アリなんだよ」
それは随分と乱暴な論理だった。
「で、あんた、どうする？　あんたの代わりにこいつをやっちまってもいいんだがな」
髭面の男が、リョウの方を一瞥して顎をしゃくった。
事態が途方もない方向へ行っていることに気付かざるを得なかった。
要するにこの灰色の髪の男を脅す為の手段として、偶々、通り掛かった自分が目を付けられてしまったということなのだろう。
「寝言は寝てからにしろ」

「あ？」

そう低く吐き捨てると、灰色の髪の男が、いきなり目の前の男に足払いを掛けた。目の前の大柄な男が無様に転げ、一瞬の隙ができたのを突いて、男がリョウに目線で『逃げろ』と促した。灰色の髪の男は、豊かな縮れ毛に白いものが混じり、それなりの年齢に達しているようだったが、その動きは俊敏だった。

リョウは男の意図を悟り、すぐに頷くと地を蹴った。男のことは気になったが、自分がいては却って足手まといになるだろうと思ったからだ。

だが、全力疾走をしようとした所で、

「あ、コラ、待ちやがれ！」

追いかけて来た男に斜め掛けにしていた鞄の紐を勢いよく引っ張られ、駆け出した勢いを殺すように動きを止められて、リョウは、背中から転げた。

鞄の中には先程の【セミョーノフ】で誂えた薬草の袋が入っていた。鞄を置いて身一つで逃げるという選択はリョウの頭の中にはなかった。そのもたつきが悪かったのかもしれない。慌てて前に鞄を抱え直した時に、追って来た男に思い切り背中を蹴り上げられた。

息の詰まるような衝撃にギュッと目を閉じた。そのまま地面に転がり、リョウはぐっと歯を食いしばった。

「チョロチョロすんな。ガキが！」

顔を上げた所に忌々しげに唾を吐きかけられて、リョウは顔についた男の唾液を袖で拭った。そして、男を睨みつけた。

そうこうするうちに男たちの怒声が後方から上がり、鈍い金属音が聞こえ始めた。リョウが振り返ると男たちが皆、抜刀していた。灰色の髪の男は長剣を手に其々の得物を持った男たちに対峙していた。

互いに一歩も引かない、緊迫し張りつめた空気にリョウの肌は粟立った。

目の前で起きていることは何だ？　どうする？　どうしたらいい？
この男たちは人を傷つけることに何の躊躇いも持っていなかった。目的を果たす為には手段も選ばない。
リョウの足は唐突に竦んだ。
逃げなくてはと思ったのも束の間、片腕を引っ張り上げて立たされた。
「お遊びはそこまでだ」
その場で後ろから羽交い締めにされると首筋に冷やりとしたものが当てられた。
「そこまでだ」
リョウの背後から掠れた男の声が、その場に響き渡った。
横目に見ると鋭い短剣の切先が見えた。小さく反射する自分の顔は言い知れぬ恐怖に引き攣っていた。
「おい、お前。それ以上、無駄な抵抗はよせ。このガキの命はねぇぞ？」
「チッ」
長剣を手にしていた灰色の髪の男は、舌打ちをするとギリリと奥歯を噛み締めた。
「そいつを放せ。そのガキは無関係だ。関係の無いヤツを巻き込むな」
低く地を這うような声だった。声量は小さかったが、底冷えするような冷たさに男が本気で怒りを顕わにしていることが感じ取れた。
「ハッ、そいつは無理な話だな」
震える怒気に喉元に触れる切先が肌に食い込んだ。
「何が望みだ？」
男が徐に口を開いた。
「何を探っていた？」
「何の話だ？」
「とぼけるな。お前がユプシロンの周りをウロウロしていたのは分かってんだよ」

「何故、それをお前らに言わねばならん？」
「そいつは仕事だからさ」
「金か。……幾らで雇われた？」
「んなのてめぇの知ったこっちゃぁねぇだろ！」
いきり立った大柄な男の傍らで、リョウを羽交い絞めにしていた背の高い細身の男が舌なめずりをしながら凄んだ。
「こちゃごちゃ言ってねぇで、とっとと吐きな。でねぇとこのガキのほっせぇ首が飛んじまうぜ？」
「……ツッ」
ビリリとした痛みにリョウは顔を顰めた。短剣を手にしている男の興奮に合わせて、刃先に力が入り、皮膚が切れたのかもしれなかった。
「おっと」
後ろの男が態とらしい声を上げた。
「アイツは気が短けぇからな。うかうかしてると動脈を行っちまう」
それを肯定するように、
「ああ。手元が狂った」
何処か愉快そうな耳障りな声がして、リョウは観念したように目を閉じた。

――――――その時だった。
上空を甲高い鳴き声と共に大きな影が舞い、急降下してきた。
「うわっ」
「なんだ？」
バサリと大きな風を切る音がしたかと思うと後ろからの拘束が離れ、左肩に馴染み深い重みが乗っていた。
閉じていた目をそろりと開けるとすぐ傍に、よく見知った猛禽類の、尖って湾曲した黄色い嘴が見えた。
「……ヴィー！」
『リョウ、大事ないか？』

「おいおい、なんでぇ、こんな真っ昼間から。ガキ捕まえてなぁにやってんのさ？」

どこか間延びしたのんびりとし声と共に薄暗い路地の脇から滲み出るようにして影が揺らぎ、その中から一人の男が、音もなく現れた。

日の光に反射する明るい金茶色の癖の無い髪がさらりと揺れた。その髪は、男の顔左半分を覆っていた。

――――――ルーク。

「おめぇは……」

「……【片目の鷲使い】…」

「クッソ」

驚愕の声に続いて、あからさまな舌打ちが漏れ、男たちの間に小さな動揺が走ったようだった。

「何の用だ？」

鋭い声を発した親分格の髭面の男に、ルークはゆったりとした足取りで歩み寄ると、左肩に己が相棒である大きな鷲を乗せた少年の傍に近づいた。そして、その小柄な体を、腕を取って引き寄せると自分の背で庇うように前に出た。

「何の用かって？　随分な御挨拶じゃぁねぇか。あ？　このガキに用があんだよ」

「何だと？　邪魔する気か？」

ギロリと睨みつけた男にルークはからりと笑った。

「いや？　おめぇらが何をやろうと俺の知ったこっちゃぁねぇさ。だがな、このガキは別だ」

そう言って、この少年は自分の知り合いであるから、妙なちょっかいを掛けるなと言い放った。

睨み合うこと暫し、分が悪いと判断したのか、髭面の男は、忌々しげに吐き捨てた。

「【チョールトバジミー（クソッタレが）】！」

だが、すぐに思い直したように手にしていた長剣を腰の鞘に納めた。
「おめぇを相手にする積りはねぇよ。俺だって命は惜しいさ」
――――――おめぇら、行くぞ。
周囲にいた仲間たちを促すように合図をして、大柄な男はあっさりと背を向けた。そして、撤退の意思表示を理解した取り巻きの男たちは、最後にこちらを睨みつけながら薄暗い狭い路地の中へと姿を消したのだった。

ごろつきのような風体の男たちの姿が消えて、リョウは半ば茫然としたように緩く息を吐き出した。
ゆっくりと前に立っていた男が振り返った。
「よぉ、姫さん、今度もまた妙なことに首を突っ込んだみてぇだな？」
苦み走った癖のあるもの言いに、
「自分から首を突っ込んだ積りはないんですが……」
リョウは苦笑を滲ませたが、その瞬間、一筋の涙が頬を伝って流れた。それを慌てて拭ってリョウはぎこちなく笑って見せた。
「助かりました。ルークさん。ありがとうございます」
ルークはそっと手を伸ばすと、リョウの頬に付いている泥を親指の腹で拭った。
この男が現れるのはいつも唐突だ。前触れもなく現れては同じようにいつの間にか姿を消す。不思議な男だった。
リョウの肩に乗った大鷲のヴィーは、どこかそわそわとしてリョウを見ていた。
『リョウ、大事ないか？　おお可哀想に。首に傷が付いておるではないか！』
「どれ」
その指摘に前に立つルークからも改めるように首に手を当てられ

て、その手付きが存外優しいことにリョウは形容し難いむず痒さのようなものを感じていた。
『ルーク、どうだ？　傷は浅いか？』
案じるヴィーにリョウはそっと微笑んだ。
「大丈夫だよ、ヴィー。そんなに心配しなくても。多分、表皮の部分がちょっと切れたくらいだから」
『何を呑気なことを！　傷跡が残ったら如何いたすのだ！』
「大丈夫だ。ヴィー。ちょっと表面を掠ったくらいだ。こんなの傷のうちに入らねぇよ」
『それはおぬしらの場合だろうに。リョウをうぬらと一緒にするな！』
大げさに反応を返すヴィーにリョウは知らず笑いが漏れた。
それから少し余裕の出たリョウは、そっと自分の体を見下ろした。地面に転がったりしたのだ。
案の定、あちこち泥だらけだった。それでも鞄を死守したことに安堵の息を吐いていた。先程までの恐怖は、いつの間にか引いていた。

長剣を納めた灰色の髪をした男が、リョウとルークの傍に近寄って来た。
「済まなかったな。巻き込んでしまって」
苦い顔をした男に、
「いえ」
リョウはそっと首を横に振った。
リョウとしては何がなんだか訳が分からぬ内に一先ず事態が収まっていて、それ以上の反応が返せなかったのだ。突きつめてしまえば、とんだとばっちりで、運が悪いとしか言いようがなかった。
と思ったのだが、
「なんでぇ。相変わらず能天気だな。ちったぁ、文句の一つぐらいかませよ」

呆れたようにルークがこちらを流し見たのだが、リョウとしては、こんな所で男に不満をぶつけても不毛だろうと思ったので、苦笑をするにとどめた。
「あの、ひょっとして、【プラミィーシュレ】でお会いしましたよね？　【スタローヴァヤ（街の食堂）】で」
確かめるようにリョウが男を見上げれば、
「ああ。そうだったな」
男が小さく口の端を歪めた。
男はすっと手を伸ばすとリョウのぼざぼざになった髪を手櫛で梳いた。その手付きは意外な程に労わるような優しいものだった。
「お前はここの人間か？（王都）」
「いえ。今、こちらで養成所に通っているんです」
普段は、この国の北の辺境、スフミ村の先の田舎で暮らしているのだと告げれば、
「そうか」
男はただ一言、そう口にしただけだった。

「リョウ、おめぇ、使いの途中じゃなかったのか？」
不意にルークから言われて、リョウは今更ながらのことに思い至った。
「そうでした」
鞄を掛け直した時、ふと目の前にある男の二の腕の部分が破れて切れているのが見えた。薄らと血が滲んでいる。
「これから治療院に戻るところだったんです。怪我の手当てをしますから、どうぞご一緒に」
「治療院……というのは神殿が開いているやつか？」
男が何かを考える風にこちらを窺い見た。
「はい」
「お前は神官見習いなのか？」
「いえ。今日はお手伝いです」

男は始め、このような怪我などかすり傷で、大したことではないと固辞したのだが、リョウの戻る場所が神殿に関係する施設だと聞いて、考えを改めたようだった。
「分かった。世話になろう」
「はい。ご案内いたします」
話しがある程度纏まった所で、ルークが声を掛けた。
「じゃぁ、リョウ。俺は行くぜ？」
その傍らで、ヴィーが小さく首を傾けた。
『我は、暫くそなたの傍に』
「ヴィー、頼んだぜ」
『承知』
「ありがとうございました。ルーク」
リョウは深々と頭を下げてから顔を上げた。
「暫くこちらに？」
「ハハ。そいつは分からねぇな。風の吹くまま、気の向くままさ」
口角を少しだけ吊り上げて、ルークは飄々と口にした。
その返答を実にらしいと思った。
リョウは、ルークが何をしている男なのか分からなかった。知っているのは、僅かな事だ。ユルスナールたちと知り合いで軍部の中でもそれなりに顔が利くということ。そして、北の砦にいる新米兵士、キリルの父親であるということ。それから大鷲のヴィーの相棒であること。
そんな男が、偶にこうして、まるで計ったかのような間合い（タイミング）でひょっこりと顔を出すのだ。謎が多い男だが、謎は謎のままに、それを突きとめたいとは思わなかった。自分が深く立ち入る必要の無い所に男は立っている。そう思うことにしていた。
それからひらりと気だるげに手を一振りすると、いつもと同じ軽薄な空気をその身に纏いながら、影の男は薄暗がりの闇が濃淡を描き出す狭い路地の向こうに姿を消したのだった。
『では、参るか』

「そうだね」
リョウは左肩に乗った大きな鷲の喉の辺りを小さく撫ると、傍らに立つ灰色の髪の男を促すようにして、気分を新たに治療院へと向かったのだった。

治療院に戻ると中にいたレヌートとスタースは、リョウの姿を見て訝しげに眉を顰めた。
「遅くなりました。すみません」
存外、手間取ったことを詫びて、鞄の中から薬草の入った袋を取り出すとスタースに渡した。薬草の入った袋が、然程傷んでいないことを確認して、心なしか安堵した。
出掛けた時とは打って変わって、どこか草臥れて薄汚れた感のあるリョウの姿を見て、
「リョウ、何があった？」
不意に顔付きを真剣なものに改めたレヌートにリョウは穏やかに微笑んで、深刻な空気を軽く受け流した。
「途中、喧嘩に巻き込まれてしまって……。ですが薬草は無事ですよ」
その言葉にレヌートは目を見開いた。そして、すぐさまリョウの傍に走り寄った。
「どこか怪我はないか？　大丈夫か？」
鬼気迫るレヌートを前にそっと苦笑を滲ませると、
「あちらの方が腕に怪我を。どうか見てあげてください」
リョウは戸口脇でひっそりと控えていた灰色の髪の男の方を指示した。
その言葉にスタースが心得たように赤い帯を靡かせ、男を診察台の方へと促した。
「お前も喉を切られただろう。診てもらえ」

淡々とした男の声に、
「なんだって！　リョウ、見せなさい」
レヌートが血相を変えた。
「少し刃先が当たっただけですから大丈夫ですよ」
「どうして刃物が首に掛かるんだ？」
仰天したレヌートが焦った顔をしてリョウの首筋を改めた。
刃物が首に当たる状況がどんなものなのかは簡単に想像が付いた。
使いに出したはいいが、こんな刃傷沙汰に巻き込まれるとは思ってもみなかった。この辺りも治安は余りいい方ではないのだが、昼間ということもあってレヌートとしては大丈夫だろうと高をくくっていたところもあったのだ。
レヌートは、リョウの細い首筋に走る薄い赤い線を見て、痛ましげに顔色を曇らせた。
「済まない、リョウ。私がキミを使いに出したばかりに」
苦しげに吐き出された言葉にリョウはそっと頭を振った。
「いえ、大丈夫です。ちょっと吃驚しただけで。大事はありませんから」
『リョウ、はよう手当てをしてもらえ』
肩に乗ったままませっついた大きな猛禽類にレヌートは今更ながらに気が付いたようで、片眉を跳ね上げた。
「知り合いのヴィーです」
そして、ヴィーの相棒であり、自分の顔見知りでもあった人間の男に揉め事の仲裁に入ってもらい事なきを得たということを序でに語った。

リョウを丸椅子に座らせたレヌートは、外套を脱がせた後、首の傷が見えるように顎を上げさせた。そこに消毒を施し、軟膏を塗り込んだ。
外套を脱いだ時、背中の部分に痛みが走った。きっと痣になっているに違いないと思った。強かに蹴り上げられたのだ。食い込んだ

長靴の爪先は痛かった。その時の衝撃を思い出して思わず顔を顰めた。

「しみるか？」

それを消毒がしみる為と勘違いされて、リョウは慌てて違うと訂正をした。

「大丈夫です」

寮の部屋に帰ったら軟膏を塗ろう。手が届かない所だったら、セレブロを呼んで人型になってもらおうかと胸の中で思った。

男の治療を終え、リョウの持ってきた薬草を一覧と照合したスタースは、問題ないと請け負った。受け渡しの際の裏書きも確認する。

「リョウ、ありがとう。助かったよ」

柔らかく目を細めたスタースに、

「はい」

リョウも嬉しそうに微笑んだ。

治療を終えた灰色の髪をした壮年の男は、神官（スタース）に丁寧に礼を述べた。

男とスタースは傷を改めている最中に何やら小声で話をしていたようだった。二人とも真剣な面持ちで、一瞬、険悪な空気になったような気がしたのだが、それはどうもリョウの思い過ごしであったようだ。

そして、帰り際、何を思ったのか、リョウの元に近寄るとその頬にそっと指で触れた。リョウはそれを自分の揉め事に巻き込んでしまったことへの謝罪の気持ちの表れだと受け取った。

こうして灰色の髪をした壮年の男は、治療院を後にしたのだった。

それから、リョウはレヌートと共に養成所のある区画へと戻った。

リョウの肩には精巧な置物のように大きな鷲であるヴィーが乗り、歩調に合わせて器用に平衡（バランス）を保っていた。

岐路に着く間、リョウはいつもより饒舌に言葉を紡いだ。ひょっとしたら、それは些かあからさまであったかもしれない。

レヌートが怪我の件を気に病んでいることが分かったからだった。どこか沈んだ空気を背負ったレヌートを見て、リョウは気にしないでくれと言いたかった。自分は平気だからと。

【セミョーノフ】が養成所で知り合った友人の実家であることも話して聞かせた。父親と息子の顔は余り似ていなかったが、仕草がそっくりでなんだか微笑ましかったと笑顔を絶やさずに続けた。

レヌートは軽やかに響く、少年にしては幾分高めな声に静かに合槌を打っていた。

養成所の近くになり、学生寮と校舎を隔てる分かれ道の所で、レヌートが不意に足を止めた。

「リョウ」

「はい」

真面目な顔付きをしたレヌートにリョウも一転、同じように表情を改めた。

「最終的な判断はスタースの報告を待ってからになるが、それが問題なければ、これで私の講義を修了にしよう」

その言葉にリョウは顔を綻ばせた。

「本当ですか？」

「ああ。私の目から見ても、大丈夫だろう。このまま外に出しても恥ずかしくない位にはなっている。勿論、まだまだこれからも精進が必要だがな。後で正式な修了印を出しておこう」

「ありがとうございます」

リョウは顔を輝かせた。

レヌートの修了印をもらえるということは、最終試験への道が開かれたことを意味していた。勿論、分野はレヌートが受け持った【祈祷治癒】に限られる。そして、最終試験を受けて、それに合格すれば、【祈祷治癒】の【術師】としての登録認可が下りることにな

った。
それはリョウにとって何よりの朗報だった。目に見える形で、目標に一歩、近づくことができたのだ。

このまま学生寮に戻ると言ったリョウに対し、レヌートは養成所の講師の部屋に戻ることにした。
そこでお別れだった。
リョウは再度、今日一日の講義に対する礼をレヌートに対して述べた。
「レヌート先生。今日はありがとうございました」
「ああ。こちらこそ助かった」
「それでは失礼します」
「ああ」
そして軽やかに遠ざかってゆく小柄な背中を見送りながら、レヌートは静かに表情を改めると、その口元に浮かべていた笑みを消した。そうすると柔らかな面立ちと言われる神官の隠れた一面が覗いた。
レヌートは深く息を吸い込んだ。そして、あの少し風変わりな空気を持つ少年を神殿のおぞましい揉め事に巻き込んではならないと改めて気を引き締めたのだった。

イオータの出張講義

武芸大会を翌日に控えて、リョウが学ぶ術師養成所内の空気もいつもに比べて、心なしかざわついているように感じられたその日、【鉱石処理】の講義を終えたリョウは、名物講師であるイオータに廊下を出た所で呼び止められた。

「ああ、リョウ」

「何でしょう、イオータ先生」

小さく拱く手にイオータの元に近寄れば、

「キミは、このあと何か用事があるかね？」

今後の予定を聞かれて、別段、他に取っていた講義のコマがある訳ではなかったので、

「いえ。特に何もありませんが」

そう返せば、イオータは口元を緩めて、その特徴的な発達した犬歯を片側だけちらりと覗かせた。

「そうか。それはちょうど良かった。これからちょっと用があって出掛けるんじゃが、キミも付いておいでなさい」

――――――面白いものが見られるからの。

そう言って茶目っ気たっぷりに片目を瞑った小柄な白髪混じりの老講師に、リョウは、内心なんだろうかと思いながらも、お伴することにした。

小柄な老人は足取り軽く廊下を進んで行く。養成所の建物内を過ぎると、そのまま進路を西に取った。

「あの、イオータ先生、どちらに向かわれているんですか？」

ただ付いて来いとだけ言って踵を返した小柄な背中を付かず離れず追って来たのだが、段々と自分が知る養成所内の敷地を越えて、

隣接する隣の区画に入ったのを見てとって、リョウは心なしか不安そうな声を上げていた。こちら側は、話に聞いている通りだとすれば、この国の王が住まうという宮殿があるとされている場所の筈だった。

その想像を肯定するかのように徐々に空気が煌びやかさを増していった。渡り廊下を一つ越えた所で、明らかにこれまでとは違う空間に足を踏み入れたのが分かった。

「ハハハ。付いて来れば分かる。見てのお楽しみじゃ。何もそうびくびくすることはなかろうて」

落ち着かなさそうに辺りを見回したリョウをイオータはからかうように笑い、流し見た。

「こちらは、もしかしなくとも宮殿の区画ですよね」

イオータの背中にぴったりと張り付くようにして、リョウは背後から小さな声で囁いた。

「そうじゃな」

前を向いたまま、ずんずんと足を進めていた矍鑠（かくしゃく）とした老講師は、長い外套の裾を軽やかに翻しながら、ちらりと横目にリョウを見ると、心底、可笑しそうに喉の奥を鳴らした。

リョウは気後れを感じていた。廊下や窓枠やら天井やらには優美で繊細な金色の装飾が施され、目に映るもの全てが、眩し過ぎる程にきらきらと輝いて見えた。頭がくらくらしそうだ。視覚から入るどこか浮世離れした景色に脳の処理が追いついていかない。そんな感じだろうか。

一目で分かる贅を尽くした空間に圧倒されていた。自分がこの場を歩くのが、酷く場違いに思えて仕方がなかった。

途中、擦れ違う官吏のような人々は、皆、優雅で洗練された服装に身を包み、何やら書類の束のようなものを抱えながら静々と館内を足早に歩いて行く。擦り切れて着古した外套に飴色になった年季の入った鞄を背にした自分が、酷くみっともなく思えたのだ。

「あの、このような格好でこちら側に入っても問題ありませんか？」

この身なりも街中では浮かないが、ここでは酷く場違いな程だろう。その自覚はあった。

半ば恥入りながら心配そうに口にしたリョウに、

「なに、そのようなことなど気にせんでもよい」

その辺りのことはまるで頓着しないのか、イオータは鷹揚に言葉を継いだ。

「キミは儂の大事な生徒じゃ。胸を張っておればよい」

不意に真摯な眼差しで口にされて、リョウとしては、『はい』と頷かざるを得なかった。

そして、イオータはとある豪奢な扉の前で立ち止まると、小さくノックをして訪いを告げた。

重厚な扉が音もなく開く。中から顔を出した官吏と思しき男は、戸口に立つ人物を確認すると丁重にイオータを招き入れた。イオータの隣に立つ小柄な人物に官吏の男が一瞬、眉を寄せたが、無言のまま二人の訪問者を部屋に通した。リョウも小さく目礼を返してから、その後に続いた。

中は、広々とした落ち着いた空間だった。廊下側に比べて比較的装飾は控え目だった。そのことにほんの少しだけ安堵の息を吐いた。

壁紙の色は、白から薄い青灰色を基調とした淡い色合いだった。抑えめの臙脂色の絨毯には、この国の伝統的な模様（モチーフ）である優美な草花の紋様が描かれていた。

「これは、イオータ殿、お待ちして申しておりましたよ」

中に入ったイオータに一人の男が近づいてくると丁寧な所作で一礼をした。

「お待たせいたしましたかな？」

「いえ。それ程でもございません」
優雅で落ち着いた物腰の初老の男は、イオータの傍に半ば隠れるようにして佇む見慣れない小柄な人物に目を止めた。
「こちらは？」
イオータは、リョウの隣に立つと皺が多く刻まれた骨張った手をその背中にそっと宛がった。
「儂の弟子じゃよ」
朗らかに紹介されて、
「お初にお目に掛かります」
リョウはやや緊張した面持ちで静かに目礼をした。
その様子に男が品のある微笑みを浮かべた。
「そうですか。それは頼もしい限りですね」
そして、イオータとその弟子を次の間へと促した。
「こちらへどうぞ。皆さん、お揃いです」

促されて入った別室には、大きなテーブルが部屋の真ん中に置かれ、その周囲には数人の男たちがテーブルを囲むようにして立っていた。
落ち着いた余り装飾の無い上下に身を包んだ官吏のような人々がまず目に入った。だが、その衣服の生地は、光沢があり、上等なものであることが分かる。そして、其々に白いシャツの首元には、同じく白いネッカチーフがきっちりと巻かれていた。【プラミィーシュレ】の【エリセーエフスカヤ】でユルスナールやブコバルたちが身に着けていたような装いだった。

「お待たせいたしましたな」
外套の裾を翻し、ゆっくりと中に足を踏み入れたイオータに中に集う面々が振り返った。
振り返った男たちは、其々に特徴的であった。一人は、男盛りの重厚感のあるどっしりとした体格の良い男で、見るからに威厳があ

った。その男の傍に、二人の部下と思しき男たちが寄り添っていた。
そして、中にいる男たちと比べると相対的に線の細い印象を受ける優しい面立ちをした文官らしき男が一人。テーブルを挟んでその対面には、兵士と思しき服装に身を包んで腰に長剣を佩いた二人の男（中年の上長と若い下士官のようだ）の姿があり、その隣には、背筋のぴんと伸びた老齢の学者風の男がいた。ひい、ふう、みい、と数えて、総勢七人だった。

イオータは、テーブルの傍に近寄るとそこに広げられている大きな地図を見下ろした。
「イオータ殿。その少年は？」
中にいた兵士の格好をしている中年の男が、イオータの後ろにいたリョウを見咎め誰何（すいか）した。
「ハハハ。儂の弟子じゃよ。どうぞお構いなく」
上背のある七対の瞳からもの問いたげに見下ろされて、リョウは無意識に唾を飲み込んだが、先程と同じ紹介にそっと目礼を返すにとどめた。
「ですが、このような場にそのような子供を同席させるとは」
兵士の男があからさまに眉を顰めたが、
「なぁに。この子はお役に立つと思いましてな」
相変わらず人を食ったような微笑みを浮かべたイオータに、兵士の男は諦めたように引き下がった。
リョウはイオータの台詞に内心、恐々とした。
一体、自分をこのような所に連れて来て何を始める積りなのだろう。そっと窺うようにイオータを見たが、老講師の眼差しはテーブルの上に置かれた地図に向いていた。

「では、始めましょうか」
どっしりとした体格の良い男の傍に立つ部下のような男の掛け声に、場の空気が引き締まった。

それを合図にイオータはリョウを促すようにしてテーブルの周りに立った。

そこには大きな地図と思しき絵図がテーブル一面に敷かれていた。この国、スタルゴラドの地図だ。近隣諸国との境が、地図の端の方にぎりぎりで描かれている。国内の地図と見て良いだろう。縦横に走る街道とそれを繋ぐ街が詳細に記されていた。一番目に付く中心に近い部分に、この国の首府である王都、【スタリーツァ】が据えられていた。そこから目線を北西の方角に移せば、北の砦とその少し先には、小さくスフミ村の名前が見て取れた。そこから更に北の方角を見れば、【レース（森）】と表示された広大な空白部分と隣国【ノヴグラード】との境になっている峻厳な山脈が描かれていた。

リョウはそっと自分が暮らす森の小屋がある辺りを探った。空白部分の森の辺縁だ。地図を見るとどうしても自分が暮らす場所を確認してしまいたくなるのは何故なのだろう。スフミ村と北の砦からの位置関係から、大体の場所を弾き出した。そこから目線を下に持ってくる。中心にある王都との距離はかなりあった。それを見て、自分が随分と遠い所まで来たのだという思いに駆られた。

似たような地図がガルーシャの書斎の中にもあったことをリョウは思い出していた。

目の前の地図には、何箇所か色で囲いの施されている場所があった。北東の方向と東、そして南東の方角。いずれも王都より総じて東の部分だ。そして、その場所には、目印の旗のようなものが立ち、そこに鉱石の原石と思しき石の塊が置かれていた。

威厳のある男が、徐に口を開いた。

「その後の鉱脈の変化は？」

それに二人いた兵士の内、年若い方が、姿勢を正しながら答えた。

「目立った変化はないとの報告を受けています」

「ふむ。目ぼしいものが出ないのでは、近いうちにここは廃鉱という形を取らざるを得ませんな」
初老の学者風の男が尤もらしく口にした。
「他に当たりの付きそうな場所は？」
「現在鋭意調査中ですが、今の所、見つかってはおりません」
「ならば廃するには時期尚早か」
「しかし維持をするにも問題が」
どこか沈痛な空気が流れ始めていた。

男たちが真剣な面持ちで議論を交わす傍ら、
「さて、リョウ」
イオータが傍らに立つリョウをゆっくりと振り返った。
「ここに石が幾つかある。其々、この国の鉱脈から採掘されたものだ」
そう言うと地図の上に置かれていた石を一つ手に取った。
「これらを一つずつ手に取って見てご覧。キミがこの原石を結晶化するとしよう。その時に一番強く感じる石の成分は何かな？」
「ワタシがですか？　今、ここで？」
「ああ。これまでの授業と同じと思えばいい」
その言葉と共にイオータから手にしていた石を手渡された。
リョウは、その真意を問うように老講師の方を見てから、手の中に置かれた石を見た。だが、イオータは、静かに微笑むばかりで促すようにリョウを見ている。
「分かりました」
リョウは、良く分からなかったが、イオータの言う通りにすることにした。自分をここに呼んだのも恐らくこの為なのかもしれなかった。かといってこれが何を意味するのかについては皆目、見当が付かなかった。
リョウは、小さな灰色の原石を両手の間に挟み込むと、意識を集中させる為に目を閉じた。これまでイオータの講義で繰り返し行っ

てきたように石の中に潜む【気】を探る。
そして、頭の中に浮かんできた映像（イメージ）を言葉にしていった。きっと求められていることは、その過程にもあるような気がしたからだ。
「紫……夜明け前の西の空。澄んだ井戸の底のような……冷たい……儚い色」
暫し、瞑目しつつ、リョウは傍らにいるであろうイオータにそっと囁いた。
「このまま結晶化をしても？」
「ああ。構わんよ」
「銀（しろかね）の瞬き……海の凪ぎ……静かな……微かな……風の音」
手の内から爽やかな清涼感のある風が吹いた気がした。戯れのように黒髪がふわりと揺れた。
「……ほう」
どこからか溜息のような小さな息が漏れた。
「どれ。もういいかの」
その言葉と共にゆっくりと目を開く。そして、手の中にある結晶化させた石をイオータに手渡した。

それからリョウは老講師に言われるままに、次々に原石の結晶化を行った。
石は全部で五つあった。リョウが精神を集中させて成分を探る間、周囲にいた男たちは、それまでの話し合いを止めて、誰も声を発しなかった。
静まり返った室内にリョウの密かな囁きのような文言が流れる。
少し離れた所にいた若い兵士が、その文言をさらさらと手にした帳面に書き留めているようだった。
そして、一通り、結晶化を終えると、リョウは小さく息を吐いた。
「はい。ご苦労さん。それでは、中を見てみるとしようかの」
イオータは懐から小さな金槌を取り出すと、開封の呪いを小さく口にしてから、地図の上に置かれた結晶化の施された原石を次々と

割っていった。中からは、色とりどりの小さな鉱石の塊が現れた。
大きさは、まちまちだった。イオータはそれらを手に取って確かめると、再び地図の上、それらの原石が採掘された鉱脈の上に並べた。
「これは、キコウ石ではありませんか！」
小粒だが深い青さを湛えて鈍く光る石を摘んで、地質学の専門家であるという老齢の学者が驚嘆の声を上げた。
「【カラリェーバ（女王）】か？」
「ここからは、もうキコウ石は無理だと思っていたが」
地質調査のために派遣されていたという術師の能力を持つ兵士の年嵩の方が唸った。
「偶々ではありませんか？　稀に混じる可能性もあるとは聞いていますし」
その部下であると思われるもう一人の年若い兵士は、そう言うと問い掛けるような眼差しでリョウを見た。
リョウはその視線を正面から受け止めた。
「【気】としては非常に僅かなものでした。何分、不純物が多かったので。結晶化されたものが小さいのもその所為でしょう」
男の求める答えになっているかは分からなかったが、リョウは感じたことを告げた。
「だが、可能性としては出るんだな？」
念を押すように再度、年長の兵士から問われて、
「同じような原石を渡されて中の成分を結晶化させよと言われたら、ワタシであれば、恐らく同じ結果になるかと。ですが、これはあくまでも個人的な意見で、他の人の場合は分かりませんが」
結晶化するのにどの成分を探し当てるかについてはそれを施す術師の資質に大いに関係するのだ。肌に合う、合わないということもある。そのことは、術師であれば理解の範疇出あったが、念の為、告げた。
「――――――ですが、存続させる為には見合わないかと」

それまでじっと沈黙を守っていた財務官であるという男が、冷や水を浴びせるが如く切り込んできた。
採掘を続ける経費、そして、それを確実に結晶化できる人員の確保を鑑みても、それに見合うだけのものは、出ないとの意見を述べた。
「キコウ石の出る鉱脈は貴重だ」
地質調査隊の上級兵士が、どこか不服そうに口にした。
「ええ。ですが、こちらを止めても、こちら一本に絞れるのではありませんか？　その方が、効率が良いと思いますが、いかがでしょうか？」
そう言って、しなやかな手付きで、別の鉱脈を指示した。
処理を終えて出て来た石は全部で五つ。キコウ石にアルマ石、リール石、サリト石、シッカ石。どれもこの国の産業を担う為の鉱石としては、実に重要な部類の原料だった。
リョウは先日、イオータの講義の中で聞いたこの国の鉱脈と鉱石の分布図を思い出していた。記憶の中にあるその分布と目の前の地図にある場所を重ね合わせてみる。そして、そこにある微妙なズレに気が付いた。
それから七人の男たちは、テーブルの上の地図を前に喧々諤々と議論を交わし合った。
リョウは、その間、じっと地図を眺めていた。
イオータは男たちとの議論に加わることなく、リョウの隣でひそひそと囁いた。
「この国の地図を見るのは初めてかね？」
「いえ。家に似たようなものがありました。ここまで詳細なものではありませんでしたが」
「ほう？」
小さく囁き返されたその言葉にイオータは興味深そうに白いもの

が混じるふさふさとした眉を片方、跳ね上げた。
「お前さんは、どこに住んどると言っておったかな?」
「ちょうどあの辺りです」
リョウがそう言ってスフミ村の先にある森の縁の部分を指示せば、イオータは、その細い眼を見開いて、それから、さも愉快そうに声を立てて笑った。
「ほっほっほ。そうかい、そうかい。キミはあそこから遥々来たんだね」
イオータは、つるりと皺の沢山刻まれた頬を撫でると、何やら一人で納得したようだった。
「あの」
リョウは極力声を潜めて、イオータの耳元に囁きを吹き込んだ。
「部外者のワタシがこのような場にいてもよろしいのですか?」
ここは、明らかに重要な話し合いの場だった。政策決定をする会議のような場だった。
男たちの真剣な話声が強弱を伴い聞こえてくる。内容的にもこの国の鉱脈と鉱石、資源開発に関する案件のようだ。そのような重要な機密事項とも思える場に自分のようなどこのものとも知れぬ輩（向こうにしてみれば、そう見えるに違いない）を立ち会わせて良いのだろうかとその辺りのことを心配したのだが、
「リョウ、お前さんは、もうこの場の一員じゃよ。あれらの石を結晶化させたではないか」
案ずることはないとイオータはリョウの不安を朗らかに笑い飛ばしたのだった。

そうこうするうちに男たちの話が一段落したようだった。
「では、そういうことでよろしいかな」
「ええ。それならば、こちらとしても問題ないかと」
それから、この場を取り仕切っていた威厳のある男とその部下の二人の男が部屋を後にした。

「では私たちもこれで。引き続き調査は続行ということで、報告はまた改めまして」

失礼しますと口にして、地質調査の任務に就いていたらしい二人組の兵士も慇懃に敬礼をしてからきびきびとした動作で去って行った。

地質学者であるという老齢の学者風の男は、一頻りイオータと言葉を交わしてからゆっくりとこの場を後にした。

そして、最後に広い室内に文官であると思しき柔和な面立ちをした男が残った。

柔らな薄茶色の髪を緩く後ろで一つに束ね、淡い空色の瞳をしていた。身に着けているのは、濃紺の地味な上着と生成り色（ベージュ）のズボン。目立った装飾はないが、それが却って男の持つ上品で気品あふれる身のこなしを引き立てていた。

イオータの話では、この男は中央の財務官であるとのことだった。その名の通り、この国の財政を司る部署に勤めているということだ。ここでの会議にも予算や財務の立場から意見を述べる為に派遣されたようだった。

財務官の男は、リョウを見ると儀礼的な笑みをその口元に刷いた。観察するような視線が、頭のてっぺんからつま先まで照射された。

リョウも反射的に似たような微笑みを浮かべて男に向き直った。

一見、優しい面立ちをした男の空色の瞳がすっと細められた。捕捉されたような気分になり、リョウは、心なしか緊張した。

この部屋にいた男たちは、自分の存在をイオータの弟子ということで不問にしたようだったが、この男はどうも違うようだとリョウは思った。

「どうかいたしましたかな？　ケリーガル財務官」

イオータがのんびりと口にしてリョウの隣に立った。

すると張りつめていた空気が不意に緩んだ気がした。

「いえ。イオータ殿のお弟子さんがどのような方かと思いましてね」

ケリーガルと呼ばれたまだ若い財務官は、穏やかな笑みを浮かべた。

「黒い髪に黒い瞳……珍しい色彩ですね。そして、顔立ちも」

財務官の男はリョウの傍に寄ると『失礼』と小さく口にしてから、そっとその手を伸ばし、リョウの頬に手を掛けた。

リョウはそっと目を伏せた。自分の顔立ちのことを面と向かって揶揄されるのは、久し振りのことだった。好奇の眼差しは、余り気持ちのいいものではないが仕方がない。暫く放っておけば気が済んですぐに興味が逸れることだろう。これまでの経験から、これくらいのことを一々気にしてはいられなかった。

「おやおや、これはいけませんなぁ。幾ら、この子が可愛い顔立ちをしているからと言って。これだから宮殿は気をつけなくてはいけない」

イオータがやんわりと窘めるような軽口を叩く。それは、宮殿ならではの軽妙な雰囲気だった。

繊細な、それでも大きな男の手が頬に掛かり、そっと顔を上げさせた。ごつごつとした武人の手ではない滑らかな、それでもペンだこのある文官の手だ。

リョウは、じっとしていた。こちら側の顔を覗き込むようにして男が顔を寄せてきた。

それにしても、どうしてこの国の人々は、こんなにも身体的接触の距離が近く、他人を懐に入れる許容範囲が広いのだろうと今更ながらのことを思った。束の間の現実逃避ともいう。初対面の相手にこのようなことをされるのも、ここではしばしばのことだった。

一番初めは、そう、北の砦で。相手はユルスナールだった。狼たちが鼻先を寄せて、その匂いで確認をするような仕草だった。そんなことを今、この場で思い出したことを可笑しく思った。

「避けないんですか？」

どこかで聞いたことのあるような台詞と共に男の柔らかな面立ち

が迫っていた。
「避けた方がいいですか？」
いつかの繰り返しのように、リョウはそんな言葉を口に乗せていた。
どこか面白がるように男が鼻先で笑った。
唇がもう少しで触れようかとする時、
「ケリーガル殿、そのくらいにしておきませんと奥方に叱られますぞ？」
小さく咳払いをしたイオータが間に入った。
それを契機に頭上に掛かっていた男の影が引き、リョウは、そこで詰めていた息を小さく吐き出した。
「実に興味深い……」
そんな小さな呟きが、耳に届いた気がした。

財務官は、不意に良いことを思い付いたとばかりに後方にいるイオータを振り返った。
「イオータ殿。お茶を御一緒にいかがですかな？　勿論、そこのお弟子さんも入れて」
その誘いにイオータは白々しい顔をして大げさに肩を竦めた。
「やれやれ、お前さんが誘いたいのは儂ではなくて、その子だろうに」
「そんなことはありませんよ。先程の鉱石処理は実に興味深かったですから。その辺りの事を、お茶をしながらでもお聞かせ願えませんか？」
にっこりと人当たりの柔らかい笑みを浮かべた。
イオータは暫し、考える風に顎に手を当ててから、とんでもないことを言ってのけた。
「リョウ。儂の代わりにお茶に呼ばれてきなさい」
「はい？」
リョウは、戸惑うようにイオータを見た。

「儂はこれから養成所の方に戻らねばならん。お前さんだけでもゆっくりとしてお行き。この男の所ならば、いいお茶に美味しいお茶菓子が付いてくるからの」

――――――この男の茶は上手いぞ。

そう言ってにんまりと何かを誤魔化すような愛想笑いを浮かべてから、さっさと背を向けた小柄な老人の背中にリョウは呆気に取られた。

「あの……イオータ先生？」

その声に心細そうな匂いを感じ取ったのか、イオータが戸口付近で一旦、足を止めて振り返った。

「なぁに、大丈夫じゃ。この男はちゃんと心得ておる。心配せんでもよい。美味しい茶を馳走になってくればよい。先程のことで疲れたであろう？」

後はよろしく頼んだとばかりに茶目っ気たっぷりに片目を瞑って見せた白髪混じりの老人は、そうして颯爽と背中を向け、扉の向こうに消えたのだった。

リョウは、内心、都合の悪いことを押し付けられたのかと思った。美味しいお茶に目が無い筈のイオータが、お茶のお誘いを断るというのは、余程のことかもしれない。逃げられたのか。

一人、室内に残される羽目になったリョウに、

「それでは、師匠の御許しも頂きましたことですし」

財務官は、感情の読めない笑みを浮かべた。

リョウは腹を括るしかなかった。これで、何か面倒なことになったら、絶対にイオータに話しを振ろうと妙な気合を入れたのだった。

「それでは、場所を移しましょうか？」

ここは会議室のような場所であるので、お茶をするのは別の場所になると言われて、リョウは静かに先導する財務官の後を付いて行くことになった。

本心から言えば、この場から逃げ出したかった。ここは余りにも

煌びやかな空間で、どうも落ち着かなかった。自分が酷く浮いた存在に思えてならなかった。

努めて平静を装ってはいるが、どこか気もそぞろな表情を見せているリョウを横目に財務官ケリーガルは、小さく喉の奥を鳴らした。

「宮殿は初めてですか？」

「はい」

緊張の所為か、ぎこちない笑みを浮かべたリョウを財務官はからかうように見た。

「そのように硬くならなくとも大丈夫ですよ」

「……はい」

そう言われてもすぐに緊張が解れる訳ではない。

「ふふふ」

まだまだ硬さの残るリョウの様子を何故か楽しそうに財務官は見ていた。

財務官は、途中、擦れ違う人々と優雅な仕草で挨拶を交わし、時には言葉を交わし合った。歩調は、さり気なくリョウのものに合わせてくれているようだった。気配りのある人だと思った。

だが、それでこれから自分を待ちうけているであろう事態にリョウの心が晴れた訳でもなかった。

イオータの出張講義（後書き）

中途半端な所ですが、長くなりそうなのでここで区切ります。次回に続きます。

風変わりなお茶会（前書き）

前回の続きです。長くなりますがお付き合いください。

風変わりなお茶会

そうして案内された場所は、とある一室の緑溢れる庭に面したテラスのような場所だった。

財務官は慣れた仕草で、側用人のような使用人にお茶の用意を頼んだ。リョウはそれを半ば恐縮しながら見ていた。

「どうぞ、こちらに」

促されるようにして席に着いた。人工的に水路を作り、水の流れを引きこんでいるのだろう、仕掛け噴水のような小振りの噴水が、透明な形を刻々と変え、遊ぶ水が差し込む陽射しにきらきらと反射して眩い光の瞬きを散りばめていた。そこから水のせせらぎが聞こえてきた。

その庭の美しい景色を前に、リョウはいつの間にか緊張を解いていた。

一年を通じて比較的温暖な気候であるこの国では、冬場であっても庭先に様々な花が咲いていた。丹念に手入れが施された綺麗な庭だ。木々の枝はきちんと刈り揃えられている。小さな可憐な花が、寄り添うように咲いていた。色は淡い薄紅色と黄色、それから白が多かった。

「素敵なお庭ですね」

リョウは、小さく感嘆の息を吐いていた。

「お気に召していただけたようですね」

財務官が嬉しそうに微笑んだ。

「ここはちょっとした穴場なんです。息抜きにはぴったりですから」

確かに、ここには雑音が全くなかった。まるで、小さな林の中に紛れこんだかのような錯覚を覚える。だが、目の前にある小振りの

人工的な噴水が、この場所が自然のものではないことを知らしめていた。

やがて制服に身を包んだ女官と思しき女性が現れて、静々とお茶の用意をテーブルの上に並べて行った。そして、丁寧な所作で一礼をすると去って行った。

「どうぞ」

お茶を勧められて、リョウは素直に茶器に手を伸ばした。

「頂きます」

「はい。どうぞ」

一口啜るとほんのりとした甘みが口内に広がった後、微かな清涼感が後味として残った。恐らく、茶葉に香草の類を混ぜ合わせているのだろう。上品な味わいだった。

「美味しいです」

ほっと息を吐いて微笑んだリョウに財務官の男も穏やかに口元を緩めた。

イオータの所で飲んだお茶も美味しかったが、ここのお茶も美味だった。

イオータも一緒に来ればよかったのに。一人あっさりと逃げるように去って行った小柄な背中を思い出し、リョウは老講師の余りにも冷たい仕打ちを半ば恨めし気に思い返していた。

リョウは、静かに自分をお茶に誘った男を見た。

リョウは、内心、首を傾げていた。初対面である筈の自分の何が男の興味を引いたというのだろうか。何か個人的な話しがあるのだろうかと思ってもみたが、それも普通に考えれば可笑しな話であるから、単なる暇潰しか。もしかしたら、この人は好奇心の旺盛な性質で、毛色の変わった人間が珍しく映ったのかもしれない。

それにしてもお茶に誘うなら、自分のような相手ではなく、もっと見目の良い若い女性を誘ったらよいのにと思ってしまう。品の良

い、いかにも良家の出身と思える男の空気（貴族の淑女方にはさぞかし人気がありそうだ）にそのような他愛ないことを思った。それに自分は、イオータとは違って養成所に通うまだまだ半人前のしがない学生だ。先程の鉱石処理のことを話すにしても、とてもじゃないが財務官にとって何か有益な話ができるとは思えなかった。

王都の宮殿に近い区画で出会う男たち、要するに上流階級と思しき男たちは、実に言葉が巧みだった。それに接触過多なきらいもある。あくまでも自分の感覚的なものだが、強ち間違ってもいない気がする。皆、躊躇いもなく手を肌（大抵が頬だ）に触れさせた。

そして、この男もこの例に漏れなかった。

こちらとしては別段、他意はなかったのだが、考える時の癖でじっと相手の顔を見つめてしまっていたようだ。

感情の読めない笑みを刷いていた男の口元が、目の前でゆっくりと大きな弧を描いた。

「ふふふ。キミの瞳は不思議ですね。こうして見つめられていると吸い込まれそうな気がしますよ」

「あ、すみません」

リョウは、余りにも相手を不躾に見てしまっていたことに気が付いて咄嗟に目を伏せた。

そして、ばつの悪さを誤魔化すように視線を庭先へ転じた。

「ここは静かな所ですね。風が心地よい」

「ええ」

暖かな日差しにリョウは、身に着けていた外套の襟元を寛げた。

そこへ声が掛かった。

「首をどうかされたのですか？」

リョウの首元には、昨日、神殿管轄下の治療院の界隈でちょっとした揉め事に巻き込まれた時に出来た刃物の傷跡があった。あの後、すぐにレヌートから消毒を受け、軟膏を塗ってもらい、大げさかとは思ったのだが包帯を巻いたのだ。

因みに背中の蹴り上げられた部分は、案の定、痣になっていて、夜遅くに寮の部屋に戻って来たセレブロに軟膏を塗ってもらった。その時に共に首にも薬を塗り直して、呪いの文言を自分の為に唱えたのだが、他人には上手い具合に作用をしても、自分に対しては治癒の働き掛けがどうも上手く作用しないことが分かったのだ。それは、ちょっとした盲点でもあった。

なので、軟膏を塗って手当てはしたのだが、思いの外、切り込みが深かったようで、治りが悪かった。油断をすると傷口が薄く開いて血が滲んだ。ひょっとしたら、また血が染み出しているのかもしれない。

襟元を緩めた時に、その包帯の部分が見えてしまったのだろう。

「これは、ちょっとうっかり引っ掛けてしまって」

「血が滲んでいますよ」

そう指摘されて、リョウは咄嗟に自分の首元に手を当てた。

「すみません。お見苦しいものを」

苦笑を浮かべたリョウに財務官は、そっと微笑んでから、眉を寄せた。

「いえ。大分、深いようですが、大丈夫ですか？」

だが、心配される程痛みはなかった。

「あ、はい。後で薬を塗り直しますので大丈夫です。どうぞお構いなく」

「今、薬をお持ちなのですか？」

「はい。鞄の中に」

「それでは今、手当てをしてしまった方がいいでしょう。包帯はありますか？」

「はい」

矢継ぎ早に有無を言わせない感じに言葉を継がれて、リョウは目を瞬かせた。対面に座る財務官の男は、真剣な面持ちをしていて、それに少し気圧された。

リョウは観念するように外套を脱ぐと鞄の中から御手製の軟膏と

油紙、そして、包帯一式を取り出した。
「動かないで下さいね」
そう言って財務官は慣れた手付きで、するするとリョウの首元の包帯を取って行った。
テーブルの上に置かれた白い包帯には、くすんだ血が滲み出ていた。なるほど、これならば替えた方がよいと心配をされても仕方がないだろう。
空気に触れた傷口はひりひりとした。鏡が無いので自分では良く分からないが、薄らと傷口が開いてしまったのかもしれない。大した傷ではなかった筈であるのに思いの外、出血があることを内心、訝しく思っていた。

財務官は、痛ましそうに繊細な眉を顰めた。そして、傷口を改めると小さくぽつりと呟いた。
「これは刃物の傷ですね。ですが単なる刀傷ではない。刃先に毒が塗ってあったのではありませんか？」
「毒……ですか？」
思いがけないことにリョウはぎょっとして、それから一気に肝を冷やした。呆けたように財務官の顔を見ていた。
「傷口が塞がり難くなるようにするものです。ほんの少しの掠り傷でも、放って置けば傷跡が時間の経過と共に深くなるんです。この包帯の部分に薄らと紫色が混じっているでしょう？　それが証拠です」
――――――聞いたことはありませんか？
それを聞いて、リョウは顔色を無くした。それが本当ならば、道理で治りが悪い訳だ。掠り傷であった筈であるのに、段々と血が滲むまでになったことを成る程と思った。
それと同時に、薬草の講義の際に、用い方に寄っては毒にも薬にもなるということで、そういう作用をする薬草（毒草）のことを学んだことを思い出した。

リョウは、鞄の中から、御手製の帳面を取り出すとその講義の箇所を探して開いた。そこには、そのような作用をすると認識されている薬草の一覧とそれに対処する中和剤（要するに毒消しだ）が記されていた。そして、その中から、とある箇所を見つけた。自分のものと似たような症状だ。毒草の名は、【ヤード】。白い小さな花を咲かせる野草の一種で、その根の部分を磨り潰して利用するものだった。それに施す中和剤は、【プラチヴァーダ】。野に生える草だ。

生憎、その中和剤（毒消し）は手持ちにはなかった。毒の作用としては即効性のない鈍いもので直接、命に関わるものでもないので、後でレヌートの所か養成所内の医務室に寄るしかないだろう。【ヤード】の場合は、ある程度時間が経過しないとその作用が表れないので、昨日の時点で気が付くことができなかったのだ。まさか、こんな所で毒草に当たるとは思ってもみなかった。【毒】と聞いて一瞬、冷や汗が出たが、一先ず打つ手が分かり、リョウは冷静でいられた。

取り敢えず、この場では止血をする必要があるだろう。リョウは、鞄の中に入れていた薬草の入った袋の中から、凝固処理を施した【ストレールカ】を取り出した。切り傷などには抜群の効果を見せるものだ。解除の呪いを唱え、一瞬の躊躇いの後、その生の葉を口に入れて噛み砕いた。予想通り、何とも形容し難い恐ろしい程の苦みが口に広がったが、我慢した。そして、柔らかくした葉を外した包帯で抑えていた傷口に宛てがおうとしたところで再び、隣から声がかかった。

「貸して御覧なさい」

「いや、大丈夫です」

「それでは見えないでしょう？」

「あ、はい。では、お願いします。傷に張り合わせて下さい」

自分の唾液塗れになったものを他人に触れさせるのはどうかと思

ったが、それを心配する前に強烈な痛みが傷口に広がってそちらに気を取られた。

傷口が恐ろしくしみた。だが、その分、ちゃんと成分が入り込んでいるということでもあるので、ぐっと歯を食いしばってその痛みを堪えた。その上に軟膏を塗った油紙を置いて、新しい包帯を手に取った。

駄目元で油紙の上から手を宛がい呪いの文言を小さく紡いだ。

包帯を巻く時にも財務官の男に手伝って貰った。

「あの、一重目を少しきつくお願いできますか」

「分かりました」

滲まないようにするために少々不自由になるが、きつくなるようにお願いした。首元はどうしても自分だと加減をしてしまうので緩くなりがちだからだ。

そうして一通り、手当てを終えた。

「先程ものは、中和剤ではありませんね？」

それなりに薬草の知識があるのか、財務官が目敏く尋ねた。

「あ、はい。生憎、【プラチヴァーダ】が手元になかったので、取り敢えずの応急処置です。ですが、きっとこちらの方が効き目はあると思いますから」

そう言って残る痛みに引き攣った笑みを浮かべたリョウに財務官は眉を顰めた。

「毒性の弱いものとはいえ、毒を甘く見てはいけません。適切な処置をしなければ後々大変なことになります。最初の判断を誤ることが重大な過失に繋がるのですから」

思いの外、真剣な眼差しにリョウは息を飲んだ。

「術師ならば尚更ではありませんか？」

「そうですね」

尤もな指摘にリョウは神妙に頷いた。そして、後で必ず医務室か師として仰いでいる祈祷治癒師の所に行くことをきつく約束させられた。

「それにしても、随分と手慣れていらっしゃいますね」
話しの流れを変えるように、リョウは先程の男の手際の良さを口にしていた。
対する男は、お茶の入った茶器を優雅に傾けながら、ひっそりと笑った。
「私には兄と弟がいましてね。小さい時から年中傷をこさえて駆け回っていたものですから。自然と身についてしまったんですよ」
――――――――今では残念ながら、滅多にそういう事態にはなりませんが。
そう言って小さく肩を竦めて見せた。
「そうですか」

そんなこんなで思いがけず、和やかな時を過ごしていると、
「おい、ケリーガル。いきなりあのような使いを寄越してどうしたというのだ？」
一人の男が前触れもなく庭先に現れた。
リョウは、その男の姿形を見て、息を飲んだ。
現れたのは、男盛りの壮年の域に入る美丈夫だった。がっしりとした逞しい体つきに、精悍な顔立ち。それを縁取るように男らしい髭を蓄えている。男は、軍部のものと思しき制服に身を包んでいた。だが、これまでリョウが目にしたものとはその形や色合いが随分と違っていた。
だが、何よりもリョウの視線を釘付けにしたのは、きっちりと後ろに流されたその男の髪の色だった。
その男の髪は、銀色だった。自分が良く知るとある男と同じ色である。その色が、この国でも余り多くないことをこれまでの経験上知っていた。そして、現れた男の瞳は、この目の前に座る財務官と同じ淡い空色をしていた。

突然、現れた体格の良い男に財務官の男は驚くでもなく、鷹揚に微笑んだ。

「ああ。兄上。ちょうど良かった。お茶をしていた所だったんですよ」

「それは見ていれば分かる」

「兄上もいかがですか？　どうぞこちらへ」

財務官である男は、新たに現れた男の事を兄と呼んだ。血の繋がりがあるのかは分からなかったが、少なくとも戸籍上は兄弟ということなのだ。

こうして並んでいると顔立ちは余り似ていないが、どことなく身に纏う空気というか全体的な雰囲気が似ている気がした。ということは血が繋がっているのかもしれないとリョウは密かに思った。

そこまで考えて、不意にリョウの鼓動は、一つ不規則に跳ね上がった。

――――――まさか。

この瞬間、頭の隅を掠めた莫迦げた思い付きをすぐさま消し去った。

自分が良く知る男には二人の兄がいるとのことだった。だが、その男と目の前の二人の人物を繋げるには、偶然にしても余りにも突飛なことのように思えたからだ。

軍部の隊服に身を包んだ貫禄のある男と目が合って、リョウは咄嗟に目礼を返した。

その瞬間、酷薄そうな造形をしている男が目を見開いて、隣にいる財務官の男に視線で何がしかを問うたことにリョウは気が付かなかった。

「これは、また珍しい客人がいたものだ」

そう言って男らしい笑みを浮かべると空いていた席にどっかりと腰を下ろした。

「お邪魔しております」

何と言ったものか分からなかったのだが、兄弟の親密な空気の中に紛れこんでいることは分かったので、そう口にすれば、何を思ったのか、銀色の髪の男は可笑しそうに豪快に笑った。

自分が良く知る男は、こんな風な笑い方をしない。どちらかと言えば、ひっそりと噛みしめるように喉の奥を鳴らすのだ。髪の色と顔立ちがどことなく似ている気がするが、やはり、この目の前の人物は、自分の知る男とは違った。そのささやかなズレが、妙な違和感のような不思議な感覚を引き起こしていた。

「私の顔に何かついているかな？　【チョールナヤ（黒い）・コーシェチカ（子猫ちゃん）】」

重なりそうで重なり合わない、妙な感覚に、知らず男の顔を見つめてしまっていたようだ。

男の淡い空色の瞳がからかうように光って、リョウは咄嗟に目を伏せると不躾を詫びた。

「すみません」

そう言って恥じらうように目元をほんのりと赤らめた。先程から、自分が柄にもないことをしている気がした。何だか調子が狂ってしまう。

「ハハハ。成る程。確かにこれは面白い」

その言葉にリョウはそっと顔を上げた。

いつの間にか、兄上と呼ばれた男の前には新しいお茶が入った茶器が置かれていた。

リョウは視界の隅に揺れる使用人の女性の前掛け（エプロン）の紐をぼんやりと目で追った。

「キミもお代りをどうですか？」

「あ、はい。ありがとうございます。頂きます」

先程、生の【ストレールカ】を噛み砕いた所為で、口の中はまだまだ苦いままだった。お茶のお代りがもらえるのは助かった。

そして、奇妙な兄弟と思しき男たちとのお茶会は、まだまだ続いたのだった。

テーブルの上にあったお茶菓子も一緒に勧められて、リョウは御相伴に預かることにした。イオータのことだ。きっと後で養成所の講師の部屋（巣窟と呼び声の高いあの部屋だ）に顔を出したら、お茶やお菓子の事を聞かれるかもしれない。イオータには別れ際、後で自分の所に顔を出すようにと言われていた。

リョウは、財務官の男が何故、自分をこの場に誘ったのか、良く分からなくなっていた。先程の鉱石処理の一件を聞かれるかと思いきや、何故か話はそちらの方には触れられなかった。その代わりに他愛ないような雑談が続いた。宮殿内でのおかしな習慣やら名物だと目されている人物の話などだ。財務官の男の語り口は軽妙で実に愉快だった。

その合間もリョウは専ら話に合槌を打ちながら、チラチラと横目に精悍な顔つきの軍人の方を盗み見ていた。

自分では隠している積りであっても、それは相手にはどうやらあからさまであったようだ。

「ふふふ。兄上のことが随分と気になるようですね」

「あ、すみません」

再度の指摘に、リョウは顔を羞恥に赤らめると視線を逸らした。

「何か気になることでもあるのか？」

「ええ。遠慮せずに仰ってください」

二対の同じ色の瞳に見つめられて、リョウは間の悪さを誤魔化すように小さな微笑みを浮かべた。

「あの……その……そちらの方が、知り合いに似ている気がするものですから」

「おやおや」

「その人も同じように銀色の髪をしているので、つい気になってしまって」

――――――すみません。
その言葉に財務官は、興味を引かれたようにそっと身を乗り出した。
「その人は、もしかして男性ですか？」
「はい」
「なるほど」
「あの、こちらでは余り銀色の髪の方はお見かけしませんよね？」
これまでこの国で見聞きした経験が正しいものであるのかを口に上せてみれば、
「そうですねぇ。珍しい方かもしれませんね。私が知っているのも、一人、二人、三人……。存命している中ではその位でしょうか」
弟の飄々とした口振りに兄である武官の男は、内心、笑いたいのを堪えるように口の端を歪めて辛うじて表情を取り繕っていた。口元にある立派な髭が、その表情を隠すのに一役買っていたようだ。
それをちらりと横目に見ながら、弟は尚も質問を重ねた。
「そのお知り合いは、お若いのですか？」
その問いに、リョウはそっと微笑んだ。
「恐らく」
面と向かってユルスナールに年齢を尋ねたことはなかったが、大体、自分と変わりがない位だろうとは踏んでいた。
「キミは、学生かなにかか？」
「あ、はい」
リョウは自分が養成所に通う学生であることを告げてから、申し遅れたと口にして、自分の名前を名乗った。
その時に、目の前の男たちの名前を知った。財務官の男はケリーガルと名乗り、その隣の精悍な顔立ちの武官は、ロシニョールと名乗った。
「リョウ……ですか。耳慣れない響きですね」
「生まれはどこだ？」
不意に口にされた問いに、リョウはそっと目を伏せた。

「この国ではありません。とても……遠い所です」
小さく漏れたのは本音だった。この目の前の男が、自分が良く知る男に似ているからであろうか。似たような顔立ちに似たような色彩を持つこの男を前に、何故か嘘は付きたくないと思ってしまったのだ。
「それ以上は、この場ではどうかご容赦を」
そう言って貝の如く口を噤んでしまった。
不意に変化を見せた空気に二人の男たちは目配せをし、この分野でそれ以上の質問を控えた。随分と繊細（デリケート）な問題のようだと判断した。その憂いを帯びた横顔は、外見に反して酷く老成しているように見えた。
リョウは、相手に気が付かれないようにそっと眦を指で拭った。不意に捕らわれる感傷をどうも上手く制御（コントロール）することができない。その傾向は、恐らく神殿での一件が影響を及ぼしているのだろう。初対面の人たちにこのような醜態を晒す訳にもいかなかった。

「ワタシが知っているその人は、ロシニョールさんに少し面立ちが似ているかもしれません」
停滞した空気を入れ替えるようにリョウは顔を上げた。
「おや、こんなに恐い顔をしているんですか？」
こちらの意図を汲んだのかは分からなかったが、ケリーガルがすぐさま茶々を入れた。
リョウは、何かを思い出すように柔らかく微笑むと、小さく首を横に振った。
「いいえ。第一印象は誤解をされてしまうかもしれませんが。とても優しい人です」
そこで何かに思いついたように小さく笑った。
「お二人とも実にお上手なので、このままではうっかり余計なことまで口走ってしまうかも知れませんね」
軽く流すように飄々と肩を竦めるとお茶に口を付けた。

「不躾を承知で尋ねるが……」
「はい、何でしょう？」
ロシニョールが真面目な顔をしてこちらを見ていた。
瞳の色合いは違うが、ユルスナールがあと十数年、年を重ねて髭を生やしたらこのような風貌になるのだろうか。不思議と湧いた親近感のようなものにリョウは気をつけないと本当に尋ねられるままに余計なことまで白状してしまいそうだと思った。
「キミは……男か？　それとも……女か？」
リョウは、一瞬、虚を突かれた顔をした。そして、すぐに可笑しそうに声を立てて笑った。
これまで面と向かって自分の性別を堂々と尋ねられたことはなかった。この格好をしている限り男であることを疑われなかったからだ。そのようなことを聞いたのは、ユルスナールぐらいなものだった。
リョウは、この男がユルスナールの血縁者なのではないかと思い始めていた。
直截的なもの言い。躊躇いもなく核心に切り込んでくる。
「何かおかしいことでもありましたか？」
兄弟は顔を見交わせると笑っているリョウに不思議そうな顔を向けた。自分たちが笑われている理由が、全く理解できていないようだった。
リョウは、ロシニョールとケリーガル、同じ色彩を持つ淡い空色の瞳を交互に見た。
そして表情を改めると不意に真面目な顔付きをして見せた。
「どちらだと思われますか？」
それから目を細めるとどこか挑発的に口元を吊り上げた。それは、艶やかな女の笑みだった。
だが、それをすぐに引っ込めて、声を潜めるとすぐに答えのヒントとなるような問いを重ねていた。

「あの、宮殿のこの区画では、女人禁制ではありませんよね？」
「ああ」
その声に一先ず、安堵の息を吐いた。
「兄上、どうやら我々の負けのようですよ？」
ケリーガルが声を立てて笑った。
「では……お前は……」
目を瞬かせながら躊躇いがちにされた言葉に、
「はい。ご想像の通りでよろしいかと」
リョウも穏やかに微笑み返していた。
そして、補足するように、自分のこの格好は個人的な趣味というか利便性を考えてのことで、別段深い意味はないこと。自分としては別に隠している積りはないのだが、この格好をしているとこの国ではどうも少年にしか見えないようで、それを逆手に取って利用しているという自覚はあるということ。一人で行動をすることが多いので、それは自分の身を守る一手段でもあることを話した。
少々、あけすけな感がなきにしもあらずであったが、一通り話し終えたリョウは、どこかすっきりとした顔をしていた。
「ですが、こちらでは男として扱われることのほうが多いですし、その方が慣れていますから。どちらでも結構ですよ」
そう言って茶目っ気たっぷりに微笑んだリョウに二人の男たちは顔を見交わせると苦笑を滲ませたのだった。

そんなこんなで、ちょうど風変わりなお茶会が行われているのと時を前後して。
一人の男が、些か焦りの色をその表情に浮かべながら、軍部の詰め所である【アルセナール】から宮殿に向かって足早に歩いていた。
その男は、酷く焦燥に駆られていた訳だが、それは傍目には良く分からないかもしれない。

だが、一見、無表情に見えてもその男の眉間に深い皺が寄っていることに気が付けば、男がそれなりの感情を抱いていることが分かるだろう。その苛立ちは、男の大きな歩幅にもよく表れていた。長い脚を繰り出す度に腰に佩いた長剣が揺れ、鈍い音を立てた。その勢いは、ややもすれば駆け出しそうな程だ。それを漸くの事で自制している。そんな印象を受けた。

ユルスナールの脳裏には、先程、廊下ですれ違った第二師団・団長スヴェトラーナの呑気な声がこだましていた。

――――――そう言えば、お前の次兄殿とこの間の養成所に通うという、確か、リョウと言ったか、あの小僧が連れ立って歩いているのを見たぞ。

一頻り、情報交換という名の雑談をしてから、不意に思い出したというように告げられた言葉にユルスナールは虚を突かれた顔をした。

――――――なんだと？

次兄のケリーガルとリョウが共にいた。それは余りにも性質の悪い冗談にも思えた。

だが、口から飛び出す言葉は辛辣だが、基本的に真面目な性質であるスヴェトラーナが、このような場で冗談の類を口にするとも思えなかった。

顔を引き攣らせたユルスナールを余所に、スヴェトラーナはすぐに片手を振って用は済んだとばかりに踵を返してしまった。

「スヴェータ！　見かけたのはどこだ？」

遠ざかって小さくなった同僚の背中にユルスナールは、大声を張り上げていた。それも自制心の強いこの男にしては、珍しいことだった。

スヴェトラーナは大儀そうに首だけ振り返ると一言、

「南の仕掛け噴水がある方だと思うぞ」

それだけ口にするとさっさと背中を向けてしまった。

父と兄たちを交えて己が心積もりを告白した夜から、まだ数日しか経っていなかった。

ユルスナールには、中央の財務官である次兄がリョウと接触を持つことになった経緯が全くもって想像付かなかった。

黒髪に黒い瞳で養成所に通う学生である。それだけの情報があれば、次兄ならばすぐにリョウに辿りつくだろうとは思っていた。最後、本人を目の前にした時点で、性別の所で首を傾げるかも知れないが、自分が惚れた女であるという決定的な切り札（カード）があるのだ。そこには多少は引っ掛かりを覚えたとしても、すぐにそういう観点から見れば、相手の性別にはすぐに気が付くだろうとは思っていた。

ユルスナールは、大いに頭を抱えたい気分だった。リョウを兄たちに紹介するのはやぶさかではなかったが、それも場を選んで、当然のことながら自分の立ち会いがあってのことだと考えていたからだ。

次兄のケリーガルは、自分の興味が惹かれたことに対しては、割りと一直線だった。どちらかと言えば母親に似たその生来の顔立ちから、柔らかで人当たりのよい印象を与えるが、それをそのまま信じてしまうと痛い目に遭う。そんな外見を裏切る強かな一面を持っていた。厄介なことに次兄には愉快犯的な一面もある。リョウを相手に自分の幼い頃のあれやこれや、過去の封印しておきたい出来事の類を【うっかり】口にされようものなら、堪らなかった。

そのことを抗議しても、後の祭り。きっと『面白かったから、ついね』との一言で、悪びれた所もなく微笑んで、さらりとかわされてしまうだろう。

ユルスナールは宮殿の区画に辿りつくと、門のところに立ってい

た衛兵に対する型通りの挨拶もそこそこに入口を足早に通り過ぎた。二人の衛兵は、冷静沈着で物静かな性質であると評判の第七師団の団長が常にない必死の形相（というのは、兵士の勘からも感じ取れたのだ）で、門を抜けて行ったという珍事に目を丸くして顔を見交わせたのだとかいないとか。

それはさておき。

「兄上！！」

美味しいお茶とお菓子を囲みながらの談笑の合間に、突如として低い男の声が轟いて、リョウは何事かと肩を揺らした。

そして、庭先に回り込むようにして現れた男の方は、落ちかかる前髪をそのままにそこに広がる光景に我が目を疑った。

「おやおや、ルスラン、どうしたんですか？　そんなに血相を変えて」

窘めるようにケリーガルは不調法にも突然乱入してきた弟を見遣った。その内心は、酷く愉しがっている風なのが、柔和な面立ちに浮かぶ表情から窺えた。その隣で一人静かに茶器を傾けていたもう一人の兄も貫禄のある風貌をそのままに余裕のある態度で闖入者へ一瞥をくれた。

驚きの表情を浮かべているリョウとそこにいる二人の兄たち。

ユルスナールは余りのことに言葉を失った。

何故だ。次兄のケリーガルだけならまだしも、何故、長兄のロシニョールまでがいるのだ。

「ルスラン……？」

心底不思議そうにその黒目がちな瞳を瞬かせたリョウの声に、ユルスナールは漸く我に返ると大きく息を吐き出し、乱れた髪を掻き上げてから、折よく空いていたもう一つの椅子（リョウの隣だ）に腰を下ろした。

「ルスラン？　どうしたんですか？　そんなに慌てて」

人の気も知らないで。実に呑気な声を出したリョウにユルスナールはほっとするやら腹立たしいやら、感情の矛先を急に失って行き場を無くした気持ちを昇華するようにどっかりと背凭れに身体を預けると天を仰ぎ、額際を片手で覆って大きな息を吐き出した。

いきなり現れたかと思ったら、力なく椅子に座ったユルスナールの様子にリョウは慌てた。

「ルスラン？　大丈夫ですか？　どこか気分でも悪いんですか？」

ユルスナールの方を覗き込んだリョウにケリーガルが可笑しそうに含み笑いをしながら間に入った。

「リョウ、心配いりませんよ」

「ああ、気にすることはない」

その二つの声に、ユルスナールはむっくと身体を起こすと二人の兄に不満そうな顔を向けた。

「兄上たちも人が悪い。このように不意打ちをすることもないでしょうに」

「俺は知らんぞ。ケリーガルに呼ばれたんだ」

どこか拗ねたように兄たちを見たユルスナールに長兄が男らしい笑みを浮かべた。対する次兄は、心外だと言わんばかりに肩を竦めて見せた。

「人聞きの悪いことを。今日は偶々ですよ。ねぇ、リョウ？」

いきなり話しを振られたリョウは、肩を揺らして、いささか剣呑な顔をしているユルスナールとにこにこと実に眩しい笑顔を浮かべているケリーガルを交互に見てから、そっと控え目に苦笑を滲ませた。

「はい。本当に偶然でした」

そして、まだ不可解な顔をしているユルスナールに、イオータに呼ばれてからの顛末を訥々と語る羽目になった。

イオータから始まった一件を話し終えると、まだどこか不服そうな色をその眼差しの端に滲ませているようであったが、ユルスナー

ルは一応、納得したようだった。
ユルスナール自身は、まだまだ次兄に言いたいことがあったようだが、小さく息を吐くことでその感情を押し込めると、
「そういうことにしておきますよ」
そう言って寛大な様を見せた。
それが弟なりのやせ我慢であることが分かる兄たちは、平静を装う振りをしているユルスナールの態度に、顔を見交わせるとさも可笑しそうに笑ったのだった。

リョウは、そんな三人の男たちの遣り取りを端からぼんやりと眺めていた。
やはり、途中から感じていた通り、この二人はユルスナールの兄たちであったのだ。
三人は其々、単体で見ると実に個性的であった。だが、三人揃っても、そこには口では上手く説明ができないのだが、親族としての血の繋がりを感じられる独特な空気があるように思えた。当初考えていたように三人共に顔立ちは似ているだろうかという予想とは違っていたが、ある意味、それは実に『兄弟らしい』壮観な眺めだった。
微笑ましい気分で三人の男たちを眺めていると、ユルスナールが不意にリョウの方を振り返った。
「リョウ、兄上たちに妙なことをされてはいないか？」
妙なこととは何を指しているのだろうか。
やたらと真剣なその口振りにリョウは可笑しそうに喉の奥を鳴らした。
「ルスラン、何を言っているんですか。美味しいお茶とお菓子を御馳走になりましたよ」
「人聞きの悪いことを言うな」
鼻を鳴らした長兄を横目に、リョウは尚も言葉を継いだ。
「本当ですよ？」

そこでユルスナールはふとリョウの首元に巻かれている包帯に気が付いた。
「リョウ、これはどうした？」
ごつごつとした大きな手が、そっと首の包帯に触れる。その途端、リョウは目を泳がせて押し黙った。あからさまに狼狽えたようだ。
「目立つ所に痕は残していない筈だが……」
「ルスラン！」
一昨日の夜の事を思い出してか、見当違いなことを言ったユルスナールにリョウは慌てて違うと目配せをした。
「怪我をしているんですよ。先程、包帯を変えましたけれど、【ヤード】の毒が回っているようですから、毒消しの処理をする必要があります」
すっと目を細めたユルスナールに、次兄が余所行きの丁寧な口調を変えないまま、淡々と言い放った。
その言葉に、ユルスナールの顔付きが険を帯びた。
「何だと？　何があった、リョウ？」
急に怖い顔をして迫ったユルスナールの勢いにリョウはたじろいだ。
だが、すぐに観念すると小さく息を吐いてから、淡々と怪我を負った経緯を正直に告げた。どういう繋がりがあるのかは知らないが、ユルスナールと懇意である男、ルークが絡んだ手前、適当に濁すことはしなかった。きっと後でバレるからだ。
ざっと話し終えると、ユルスナールは苦々しい顔をしていた。無言のまま、包帯が巻かれた細い首筋をそっと労わるように撫でた。
「そう言えば、先程の応急処置では何の薬草を使ったのか、お聞きしても？」
暫し落ちた沈黙を破るようにケリーガルが声を発した。
「凝固処理を施した生の【ストレールカ】です」
「ああ、【ストレールカ】ですか。あれは大層苦いと言いますからね。成る程。ですが効き目は抜群の筈です。そうですよね、兄上

？」

先程の薬草を口に入れた時のリョウの顔を思い出してか、ケリーガルが尤もらしい合槌を打ち、隣に座る兄を見た。

「ああ。そうだな。だが、ちゃんと中和処理をしておいた方がいいだろう。そっちは言わば荒療治だからな」

長兄からも真面目な顔付きで言われて、リョウは再び、神妙に頷いた。

「リョウ、今すぐ医務院に行くぞ。ここからだと一番近いのは【アルセナール】の方か。それとも養成所の方か？」

「こちらにもありますけど」

宮殿内

「いや、止めておけ」

「ご冗談を」

突然、立ち上がったユルスナールをリョウは吃驚して見上げた。

「今からですか？」

のんびりとした声を出したリョウをユルスナールが何を言っているんだというように見下ろした。

「一人で大丈夫ですよ。後でレヌート先生の所に行きますから」

祈祷治癒を専門とするシーリスの義兄の名前を上げれば、ユルスナールはなんとも言えない顔をして、椅子に座ったままのリョウの身体を、上体を屈めることでそっと抱き締めた。

「リョウ、せめてものことだ。このくらいはさせてくれ。俺が知らない間に怪我を負うなんて。肝が冷えたぞ。それに毒を甘く見るな」

耳元で囁かれたいつになく真摯な声に、リョウは目を伏せると複雑な気分で自嘲気味に微笑んでいた。

「すみません」

「何故、お前が謝る？」

「ルスランには心配をおかけしてばかりなので」

鼻先が触れ合わんばかりの間合いで、ユルスナールがそっとリョウの頬に大きな手を宛がった。

「そんなことを言うな。済まないな。肝心な時に傍にいてやれなくて」
悔恨の滲む男の言葉にリョウは小さく笑った。
「そんなの仕方ありませんよ。それにルスランが気に病む事ではありません。注意力の足りないワタシが悪いのでしょうから」
「【ルーク】にまた借りが一つできたな」
「借りになるんですか？」
「まぁ、いつでも取り返せるがな」
そのまま頬を寄せてきた男に反射的に瞼を閉じようとした所で、
――――――――ん、ンン！
少し態とらしい咳払いが、唐突に始まった二人だけの甘い世界に罅（ひび）を入れた。
「ルスラン、我々がいることをお忘れなく。それで良ければ、勿論、構いませんが？」
邪魔が入ったことに、ユルスナールは恥じらうどころか、些か不服そうに間に入った次兄を流し見たが、リョウは人前でしでかしてしまった己が行為を恥じらうように咄嗟に顔を背けた。
が、運悪く、視線を逸らした先に真正面から長兄の顔を見ることになって、そこに浮かぶ生温い視線に居た堪れなさを感じる羽目になった。

「ルスラン、お前、鍛錬の途中ではなかったのか？」
ユルスナールが身に着ける訓練用の身軽な軍服を見て取って、長兄が唐突に話題を変えた。
武芸大会を翌日に控え、【アルセナール】内に設置された鍛錬場で最終調整をしていた所だったのだろう。
「いえ、もう一通り終えた所でした」
長兄の問いにユルスナールは姿勢を正した。
それから話題はいつの間にか武芸大会のことになった。
「リョウ、キミも観に来るのでしょう？」

次兄のケリーガルからなんとはなしに聞かれて、リョウも頷いた。
「あ、はい。養成所の友人たちと一緒に行く予定です」
「そうですか。良かったですね、ルスラン」
「まぁ、精々頑張ることだな」
二人の兄たちのなにやら含みのありそうな眼差しに、ユルスナールは無言を押し通した。
「明日が楽しみですね。ねぇ兄上？」
「ああ。そうだな」
二人の兄たちは意味深に顔を見交わせる。その前で、ユルスナールは、困惑に似た表情を浮かべながら、ほんの少しだけ嫌そうに口元を下げていた。
そんな一風変わった兄弟たちの遣り取りをリョウは不思議な面持ちで眺めていた。

風変わりなお茶会（後書き）

ここまで読んで下さりありがとうございました。
ユルスナールといえども、兄たちには敵わないようです。

悪魔の囁き（前書き）

今回は少し、趣向を変えまして。

悪魔の囁き

【アルセナール】から宮殿の区画に足を踏み入れて暫く、通い慣れた道筋を辿っている時だった。色調の抑えられた赤い絨毯が敷き詰められた回廊を歩いていると隣に音もなく一人の男が並んだ。

「これはこれは、インノケンティ殿。ご機嫌うるわしゅう」

囁くような小さな掠れ声にスタルゴラド第三師団・団長ゲオルグ・インノケンティは、ちらりと横目に声を掛けてきた人物を見た。

別段、顔の確認をしなくともゲオルグにはその男の見当が付いた訳だが、反射のようなものである。そして、少し上にある干からびた魚のようなぎょろりとした大きな眼(まなこ)を見て、溜息を吐きたいのを寸での所で堪えた。

ゲオルグは、当たり障りのない儀礼的な笑みをその口元に刷くと出来るだけ鷹揚に返した。

「御機嫌よう、クルパーチン殿」

「相変わらず、お美しいですなぁ、ヒッヒ」

小さく掠れたからかいの呼気にゲオルグは額に青筋を立てそうになったが、それを小さく息を吸い込むことで堪えた。

この世の中に生理的に受け付けない類の人間がいるとすれば、ゲオルグにとってクルパーチンがそれに当たった。理由など論(あげつら)えば限が無い。だが、それは皆、後付けのようなもので、恐らく本能的に感覚の部分で相入れないものを感じ取っているのだろう。深く考えたことはなかったが、ゲオルグ自身はそういうものだと理解している風だった。

隣から注がれるねっとりとした絡み付くような視線に鳥肌が立ちそうになったが、嫌悪感を表に出すことは決してしなかった。それは大人としての嗜みであることもそうだが、この男に対して負けを

認めるようなものだと思っていたからだ。ゲオルグは、一見、飄々と世の中を渡り歩いているように見えて、その本質は、負けず嫌いで自尊心（プライド）の高い男だった。

これまでの経験上、この男が擦り寄ってくる時は、決まって碌なことがなかった。ゲオルグはこれまで、相手との距離を測りながらこの男を上手くあしらってきたわけだが、ごく稀に有益で興味深い情報を持ってくることがある為に、完全に無視を決め込む事ができなかったのだ。大概下らぬ（ゲオルグにとってはだ）情報の中にごく偶にこれはと思うような貴重なものが混じっていたりするので、その有益・無益の見極めにはいつも骨が折れた。持ってくる話しが全て外れの時は、実に鬱陶しくて仕方がない存在であったが、当たりと思えるものを引いた時の効果を考えると煩わしさを差し引いてもお釣りがくるほどであったので、その確率の低い、だが、見返りの大きい当たり効果を見越して、この男の相手をしているという訳だった。

クルパーチンは、神殿に仕える神官であった。その割には、酷く俗物的な匂いのする男だ。

ゲオルグは、視界の隅にちらつく濃い紫色の帯を苦々しい思いで見遣った。

この男も神官の例に漏れず、簡素な白の上下に帯を締めていた。その帯の色は濃い紫で、神殿の中でもかなりの高位にいることを示唆していた。その為、この男に対して余りぞんざいな扱いができないというのも正直なところであった。

神殿は建前上、宮殿よりも下位に当たるが、その歴史的な古さは宮殿の王たちの祖よりもかなり遡るので、その実質的な立場は時の政権によって幅があった。

現在、神殿と宮殿の政治的力関係は、宮殿の方が圧倒的に強かっ

た。それは先代の王から続く、ここ二十年余りの傾向だった。
かといって、立場上優位にあるというだけで、宮殿は、神殿を無碍にすることは出来なかった。神殿は、この国の中では民の信仰の拠り所でもあり、この土地に根付いた存在で、その影響力は無視できないものがあったからだ。
宮殿にとっては目の上の瘤とまではいなくとも、時と場合によっては煩わしい存在にも成り得た。
その力関係の微妙な力学は、其々に仕える者たちの間にも浸透していた。

「随分と良いことがあったようですね」
鼻歌が聞こえてきそうな程の（といってもこの男が実際に鼻歌を歌う様は全く想像が付かなかったが）軽やかな足取りから、冬の枯れ枝のような細い手足にぎょろりとした大きな目を爛々と怪しく光らせている中年男の機嫌が大層良いことが読み取れたので、ゲオルグは一先ず、そう話を振ることにした。
この男の場合、始めは自分から擦り寄って来る癖に、肝心な所で勿体ぶる傾向があった。だから、こうしてゲオルグの方から相手にお伺いを立てなくてはいけなかった。それもいい加減、この男に対峙することを煩わしく思うことの一つでもあった。
「ヒッヒッヒ」
待ってましたとばかりにクルパーチンが含み笑いをした。
ひゅうひゅうと鳴る喉笛が、ゲオルグには不愉快に響いた。
「おや、お分かりになりましたか？　これは私としたことが」
そう言って『しまった』とでも言いたげに軽く天を仰いで見せる。
大げさでどこか芝居掛かった仕草にゲオルグは早速、頭の血管が切れるような気がしたが、努めて冷静を装った。
ここで本心をほんの一瞬たりとも覗かすわけにはいかなかった。
研いだ牙は、最後の最後まで大事にして、ここぞという時の為に隠しておくものだ。それは、相手というよりも自分の限界との根競べ

であった。
「それは大変気になりますね」
ゲオルグは人好きのする笑みを張り付けた。
自分の微笑みが相手に与える効果は、十分把握していた。生来のものを利用しない手はないのだ。自分の顔立ちが男らしさとは極地にあることを気に病んだのも、子供の頃のほんの一時だけで（よくある反抗期である）、今は、それを十二分に活用することで、その時の一時的な懊悩の労力分は既に取り返していた。
「教えては頂けませんか。勿論、『タダ』でとは言いません」
有益な情報は等価交換が基本だ。手元の駒をいかに相手に上物と見せかけて、それ以上のものを引き出せるか、それはゲオルグとしても腕の見せ所であった。

こちら側からの取引に応じることを仄めかす符号（サイン）にクルパーチンはそのぎょろりとした大きな瞳を殊更見開いて見せてから、糸のように細めた。
疑似餌に掛かったのは、相手の方なのか、それとも自分か。
まだまだ気を抜けない。いや、ここからが本番だ。クルパーチンは、ゲオルグの目から見ても、実に狡猾で抜け目のない男であった。
クルパーチンは、素早く周囲に視線を走らせると、声を一段と潜めた。
「それでは、つかぬことをお聞き致しますが。いや、ほんとうに些細な、ちょっとしたことなんですがね」
そんな前置きをしてから、干からびた骨のような手を白い上着の袖からさり気なく前に出した。
そして、軍部の人間が遠距離（と言っても視界に入るが声の届かない距離だ）の通信で利用する指文字で尋ねてきた。
それだけ他人に聞かれては不味いことなのか。
だが、その相手の慎重さの理由は、すぐに判明した。
『【ジョール（黄色い）ティ・チョール（悪魔）ト】が少々入用でしてね』

何事もなかったかのように手を袖の中にしまうと、クルパーチンは前を向いたまま、一歩後方に下がった。

「確か、そちらにはご用意があったかと思うのですが」

――――――――【ジョールティ・チョールト（黄色い悪魔）】。

その単語にゲオルグはすっと目を細め、ほんの一瞬だけ無表情になった。だが、すぐに人好きのする笑みを浮かべていた。

【黄色い悪魔】、またの名を【忘れな草】。それは暗殺など証拠を残したくない時に使用される毒草の名前だった。その毒性は驚くほど強く、効果はぴか一。恐ろしい名前に反して、それは黄色い花弁に赤い斑点が混じる可憐な花だった。全長は小振りな女の掌ぐらいの長さだ。だが、極めて毒性の強いもので、花弁数枚で人一人を死に至らしめるのには十分だった。

経口摂取が一般的で、その毒の作用の仕方は、実に繊細でひっそりとしたものだった。じわじわと真綿で首を絞められるが如く体内に密やかに回る。そして、眠るように息を引き取るのだ。量にも拠るが、服用から数時間から一日で効果は表れた。

大抵が毒を盛られたことに気が付かない内に眠る如くに死を迎えた。余りにも自然に息を引き取るように見える為、別名、【悪魔の子守唄】とも影で呼ばれていた。他の毒物とは違い、もがき苦しむこともない。毒を使ったという紫斑のような痕跡も残らなかった。

それは暗殺に用いるには絶品の毒草だった。

だが、この【黄色い悪魔】はその効果に反比例するように、滅多にお目に掛かることのできないものでもあった。入手が酷く困難なものだ。国中の様々な品が集まるこの王都【スタリーツァ】でも公には出回っていなかった。

だが、どの世界にも抜け道というものはあるもので。然るべき闇の経路（ルート）で密かに驚くほどの高値で取引をされる品物だった。知る人ぞ知るというものである。

兵士であると同時に【術師】でもある人員を多く抱える第三師団は、スタルゴラドに十ある師団の中でもやや特殊な部隊だった。

薬草、その中でも毒草の研究を活動の一つの柱として据え、それを軍事目的に利用する為の組織だった。毒草の成分研究とその抽出、そして対処法も含まれる。そうして得られた研究結果を自白や催眠誘導の為に利用することもあった。もう一つの柱は、獣たちを使った独自の諜報活動にあった。

どうしてもその活動は内向きで秘密裏に行われることが多く、【毒殺や暗殺に長けた集団】と影で後ろ指さされることもしばしばだった。

そういった仕事柄、薬草・毒草の類は、常に然るべき場所に保存されており、【黄色い悪魔】と名高い希少な毒草も当然のことながらあった。それらを保管している部屋は、専門の術師が厳重な結界を施し、限られた者しか出入りができないように徹底に管理されていた。無論、その第三師団を統括する立場にあるゲオルグは、その保管庫に出入りできる数少ない人物の一人である。

「それは、また随分な話ですねぇ」

突然とも思える些かあけすけ過ぎる要求に、ゲオルグは見かけ上、和やかに苦笑を漏らしていた。

だが、困惑の表情は隠さなかった。

【黄色い悪魔】は第三に保管されている薬草の中でも希少価値の高い部類であった。然るべき伝手を介して、ごく稀に仕入れができるものだ。当然のことながら、おいそれと一つ返事で出せるものではなかった。その研究内容も機密事項に当たる。その辺りの事情は、無論、相手も重々承知のことだろう。

だが、そこを敢えて突いて来た。手にしている情報がそれに匹敵するものなのか。それともガセネタで大きな見返りを得ようとしているのか。その見極めは、慎重に行わなければならない。

ゲオルグは、逡巡するような素振りを見せた。
「アレは、中々、手に入るものではありませんからねぇ」
そう言ってちらりと横目に男を見た。
「何にお使いになるのか、お聞きしても？」
それを聞くのは野暮かとも思ったが、一応、口にしない訳にはいかなかった。
その質問は想定の範囲内であったのか、クルパーチンは、薄らと笑みを浮かべた。そうすると口元に小さな皺が寄った。
「ここだけの秘密なのですがね。アレを元に薬を開発しようという話が出ていまして」
「薬……ですか」
「ヒッヒッ。以前、とある持病を持つ神官が誤って口にした所……ああ、抽出した成分をほんの少し舐めてしまったと言っていましたか。その病の症状が改善したという報告があったのですよ」
それが単なる口実か、はたまた真実かは分からなかった。
「成る程。それは我々としても実に興味深いお話ですね。一体、その神官はどんな持病をお持ちだったのですか？」
「ヒッヒッヒ。ご冗談を。そこはまだ研究段階ですので、はい。お教えすることは叶いませんよ。でないと私の首が飛ぶ」
「そうですか」
その毒草の成分を研究しているのは、第三としても同じだった。新たな発見があれば、こちらとしても有益な情報になるかとは思ったのだが、向こうにほんの少しでも明かす気が無いのでは仕方がない。別段、研究過程で神殿の神官たちに張り合おうとは思っていなかったので、その辺りは割り切っていた。
あっさりと引いて見せたゲオルグにクルパーチンは、ほんの少しだけ白けた顔をした。
だが、すぐに意味深な目配せをするとそっと屈み込み、ひそひそとその耳元に囁いた。

「ほんの少しでいいんです。分けて頂いた暁には、その仔細と結果をきちんとお知らせするとお約束いたしますよ」

――――――――如何でしょう？　早々悪いお話しではありますまい。

そうして窺うように隣を見た神官に、第三師団長は、尚も考えるように首を傾げた。

「……そうですねぇ」

第三としては、別段【黄色い悪魔】の成分解析を急いでいる訳でもなかった。新しい情報を得られるのに越したことはないが、近年、宮殿内での暗殺事件も一時期に比べるとその数がめっきり減っている為、そちらの方面での出番が余りなかったのだ。

急いで飛び付く話でもない。それが正直なところだろう。

予想よりも中々好感触を得られないことに焦れたのか、クルパーチンは、ほんの少し身体を前傾すると声の調子（トーン）を変えた。

「ここだけの話ですがね」

ひゅうひゅうという掠れた呼気が、ゲオルグの耳朶を震わせた。

「近々、神殿で儀式を行おうという動きがあるんですよ」

思いがけない言葉に、安定した歩調を繰り出していた筈の足が、動きを止めた。その隙に後ろにあったはずの神官の枯れ枝のようなひょろりとした身体が、前に出ていた。

ゲオルグは少し前にある細い背中を見遣った。回廊を歩く白い衣の背には影が掛かり、男の姿を暫し儚い闇が包んだ。

「……儀式ですか」

そして再び、同じ歩調を取り戻すと神官の横に並んだ。

「それは宣託を得る為のものですよね」

「ええ」

横目に見た神官の顔には、どこか恍惚に似た表情が浮かんでいた。

「そう言えば、二年前の宣託の解明は出来たのですか？」

凡そ二年前、同じように宣託を受ける儀式が行われた時に、宮殿と神殿との間で、ちょっとした騒動が起きたことは記憶に新しかっ

た。前触れもなく行われたという儀式に宮殿側は困惑し、そこで得られた宣託の内容も何とも曖昧で抽象的であった為に、その後、その解釈を巡って宮殿と神殿との関係が、ぎくしゃくしたものになったのだ。その時の影響は、まだ両者の間に残り、きちんと解消された訳ではなかった。

「我々が聞くのは、神の言葉。それが必ずしもそちら側の望むものになるとは限らない」

前を向いたまま、掠れた声が懐に潜む短剣の刃を反射させた。

「それは、そちらも同じことではありませんか。聞こえてくる言葉が、必ずしも求めているものにはなるとは限らない」

返す刃も、その切っ先は鋭く、相手の喉元を突かんとする。

「いや、そもそもその前提条件すら……」

換気の為に開けられた窓から一陣の風が吹き込み、その言葉尻をかき消して行った。

一瞬、全ての音が止んだ気がした。

だが、次の瞬間、小さく喉の奥を鳴らす掠れた呼気が、束の間の沈黙を震わせた。

「ヒヒヒヒ。そこは私の管轄外でして、残念ながら、お答えすることは出来ませんな」

ほんの一瞬だけ覗いた真実の欠片は、再び深淵の闇の中に隠れてしまった。

「……儀式……ですか」

「ええ。勿論、これはまだ内々の極秘事項ですが」

やがて、廊下を二手に分かれる分岐点に辿りついた。男が向かう筈の神殿は右手に、そしてゲオルグは左手に向かう予定だった。

「どうかご検討をよろしくお願いいたします。ヒッヒッヒ。良いお返事が頂けることを期待しておりますよ」

――――――それでは御機嫌よう。

濃い紫色の帯を締めた神官は、枯れ枝のように細い身体を小さく前傾して笑みを浮かべると、何事もなかったかのように通路を右に

折れ、神殿がある方向へと向かった。
男が身に着けている白い筈の衣が、影を背負い灰色に見えた。ひらりと揺れる紫色の帯が男の影を踏んでいた。
――――――忌々しい悪魔め。
心の中でひっそりと悪態を吐いてみる。心が揺れ動いたのは確かだが、相手の条件を飲むには、まだ対価がそぐわない気がした。
ゲオルグは、まるで悪い夢を振り払うかのように頭を振った。そして、気持ちを入れ替えるように顔を上げると、再び目的地に向けて進路を左に取った。

悪魔の囁き（後書き）

次回より漸く武芸大会のお話に入れると思います。

願掛けのリボン

その日、この冬、街を挙げての盛大な一大催事（イヴェント）である軍部主催の武芸大会が幕を開けた。

早朝、リョウにとっても顔馴染みの伝令の鷹であるイサークが、ひょっこり養成所の学生寮の自室に現れた。シーリスの元から派遣されて来たとのことで、イサークの足に付けられた小さな筒の中を開ければ、シーリスからの手紙とその他に何故か黒い色をした幅の広い紐が一本入っていた。

手紙には、この【レンタチカ】――――要するにリボンの事だ――――をユルスナールに渡して欲しいとのことが書かれていた。

シーリスはユルスナールと同じ軍部の人間で、ましてや同じ師団の上司と部下との関係にあるので、当然、離れた養成所にいるリョウよりもユルスナールの傍にいる確率は高い筈だった。それなのにこのような紐を渡してくれと自分に頼むのは、一体、どうしたわけであろうか。随分と不可解なことをすると思った。

リョウは、手にした黒いリボンのような紐と書き手の性格をよく表わしている几帳面な小さな文字が紡いだ文面を交互に見てから、心底、不思議そうに首を傾げた。

「ねぇ、イサーク」

窓際で静かに手渡した褒美の干し肉の塊を突いていた伝令の鷹をリョウは振り返って見た。

『なんだ？』

鋭い足の爪を使って器用に肉の塊を抑えながら鋭い嘴でちぎった肉の小片を飲み込む。大きな鷹がその動きを止めた。

「これって何だろう？　イサークは何か聞いてる？」

リョウが手にした黒くて長い紐を見て、イサークは、小さく首を揺らした。

『さてな。我には人の考えておることなど分からぬわ』
とまで言い掛けて、
『……アレではないか？』
「アレって？」
『兵士が腕に巻くヤツよ』
「腕に？　このリボンを？」
イサークの返答にリョウは益々首を捻った。
腕章のようなものだろうか。何かの所属を表わす為の。腕に巻くと言われて思いつくのはその位なものだ。だが、色が黒というのは、どうも喪に服している際の腕飾りのようで、余り縁起が良さそうではない。
『ああ。そのようなものを見かけた覚えがある』
「……ふうん？」
しかしながら、イサーク自身はその目的や意味を知らないのか、それ以上聞いても要領を得なかったので、リョウは一先ず、この件は不問にした。後で、どの道第七師団の面々が集まる場所に顔を出すことになっていたので、その時にでもシーリスを見つけて聞こうと思った。

それから、先だっての約束通り迎えに来たバリース、ヤステル、リヒターの三人と一緒に学生寮の食堂で簡単に朝食を食べてから、武芸大会が行われるという宮殿前広場に向かうことになった。
伝令の役目を果たしたイサークは、そのまま【アルセナール】の方に戻るかと思われたのだが、何故か帰らずに定位置であるリョウの左肩の上に乗っかっていた。
バリースたち三人は、初めて間近に見る軍部が伝令として使う猛禽類に驚いたようだったが、皆、術師としての素養を持ち、獣たちの言葉を解したので、その存在が気になるようではあったが、取り

敢えず、リョウの傍にいることを受け入れてくれたようだった。
バリースは、朝から一人大張りきりだった。昨日の夜は興奮の余りに中々寝付けなかったと言って、それを聞いたヤステルに小突かれ、リヒターからは、呆れたような視線を向けられていた。
その薄茶色の大きな目は、いつにもまして爛々と輝くのを通り越して、ギラついている程だ。鼻息荒くこれからの意気込みを語る様子に、リョウは心の中で苦笑を滲ませた。

開催場所となる宮殿前広場は、その名の通り、この国を治める王が住まう宮殿の前にある大きな広場だった。本来は、ぽっかりと空いた広い空間が広がるだけの場所なのだが、今日は、その場所には所々に天幕のようなものが張られ、広大な敷地は大まかに四つの区画に区切られていた。
遠く、宮殿の豪奢な建物を望んで、向かって右側と左側、其々、東と西にまず分けられていた。西側の区画では、個人戦が、そして東側の区画では、各師団代表者による団体戦が行われるとのことだった。
武芸大会の開催は三日間。最初の二日で参加者のふるいを掛け、三日目の最終日には、王族たちが見守る中での決勝戦、要するに天覧試合が行われることになっていた。

会場に近付くにつれ、沢山の人が既に集まっているのが分かった。やはり男たちが多い。独特の高揚感が、熱気となり、こちらにまで伝わってくる。開催期間中は、王都だけでなく近隣の街や村からも多くの見物客が訪れるそうだ。それを見込んでの物売りや行商の類も集まって来る。普段から賑やかな街中が、輪を掛けて華やぐのだ。その分、街の治安維持を司る第四師団の方は、なにかと忙しくなるらしい。
一般庶民にとっては、普段滅多にお目に掛かることの出来ないこ

の国の軍部の錚々たる面々が間近で見られるということで、いつにない盛り上がりを見せていた。強い男を決める頂上決戦というのは、やはり男たちの本能に備わる隠れた闘争心を大きく刺激するものであるらしい。

普通の見物人と思しき人々に加えて、個人戦の方に出場すると思われる腰に長剣を佩いた男たちの姿もちらほらと見受けられた。団体戦に出場しない軍部所属の兵士が腕試しに参加をしたりもするのだとか。勿論、軍部に所属していなくとも出場には差し支えがない。出場資格は、剣の腕に覚えがあること、ただ、それだけだ。ここで名声を得る為に傭兵と思しき風体の男たちも集まってきていた。

道行く人々の中には、着飾った女たちの姿もあった。母娘と思しき組み合わせ、若い女たちの集団。年齢も階層も実に様々だ。

その中で、擦れ違う若い女性たちが、その手に色とりどりのリボンのような長い紐を持っていることに気が付いた。話に興じている女性たちの頬は艶やかに上気し、小鳥のさえずりのような高らかなお喋りの声が、漣のように寄せては引いた。

「なぁ、ヤステル」

一人先頭を切って歩くバリースとその隣で腕を掴まれる形で引っ張られているリヒターの後ろから、リョウはヤステルと肩を並べてのんびりと会場へと向かっていた。

リョウは、同じ方向へ歩みを進める若い女たちがその手に持つ紐らしき物が気になって仕方がなかった。

頭一つ分は上にあるヤステルの顔を仰ぎ見れば、

「ん？　なんだ？」

「あの女の人たちが手にしている【レンタチカ（リボン）】か？　あれは何なんだ？」

手に持つ長いリボンが、ひらひらと女たちが歩く歩調に合わせて視界の中で揺れていた。その形状と長さを見る限り、今朝方、シーリスから寄越されたものにとても酷似しているように思えたのだ。

「ああ、あれか」
ヤステルは、合点したように小さく頷くと、すぐ下にある黒い頭髪を見下ろした。
「あれは【願掛けのリボン】だな」
「願掛けのリボン？」
耳慣れぬ言葉を繰り返した。
「聞いたことないか？」
「ああ」
それからヤステルは、そのリボンの意味と由来を簡単にリョウに語り始めた。

女たちが手にするリボンは、武芸大会の出場者に武運を祈って捧げられるものなのだという。これはと思う男性に大きな怪我をしないようにとの思いを込めてその腕に巻いてやるのだ。大抵が恋人や、意中の相手に贈るもので、特に若い娘の場合、相手への告白の意味合いも兼ねていた。
そして、リボンはその贈り主である女たちの瞳の色、若しくは、髪の色を模したものであるとのことだ。この武芸大会は、若い男女の出会いの場でもあり、恋を成就させる場でもあった。意中の相手からリボンを贈られた男は、闘いに勝った後、そのリボンを持って、それを授けてくれた相手の元に跪き、求愛をする（中には求婚の場合もあるとのことだ）。そして、相手が男の手を取れば、同意をされたものと見做された。証人は、勿論、その場に居合わせた多くの見物客たちだ。
片恋に身を焦がす若者たちにとっては、絶好の告白の機会でもあった。事前にリボンが欲しいと打診をし、相手が頷いてくれたら、それは脈があるということだった。

「だから若い女の人は、勿論、そこは若くなくてもいい訳だけど。まぁ、早い話が、恋人や好きな相手が武芸大会に出場する場合、リ

ボンを用意して、当日、その男の腕に巻いてやるんだよ。怪我をしないようにってさ。ま、お守りみたいなものだな」

そう言って、前方を歩く若い女たちの後姿を些か眩しそうに見つめながら、元々は、戦地に旅立つ兵士にその無事の帰還を祈って恋人や家族が、自分が身に着けていたリボンを腕に巻いて見送ったという故事に由来するのだと語った。

「……そうなんだ」

リョウは、やっとのことでそれだけを口にすると、手をさり気なくポケットの中に入れた。そして、そこにある黒いリボンの艶やかな感触を確かめた。

つまり、シーリスは、そういう意味合いで自分にこれをユルスナールに渡せということなのだ。

お守りであれば、そこは問題が無いのだが、引っ掛かる点があるとすれば、一つ。

「じゃぁ、普通は女の人が意中の相手に贈るものなんだ？」

「ああ。そうさ」

剣を振るうのは男たちである。中には女兵士という例外もあるが、それはあくまでも稀な話しだろう。そうすると少年にしか見えない自分が、ユルスナールの腕にこのリボンを巻きつけるのは、恐らく滑稽に映るのではないかと思った。

『それは中々に面白い話だな』

リョウの左肩に留まっていたいたイサークが、意味深に笑った。

「イサーク」

リョウは、余計なことを言わないでくれとすぐ傍らにいる鷹に目配せをした。

『ハハハ。分かっておる』

「ん？　どうかしたか？」

「いや、何でもない」

『やれやれ。我は差し詰め恋路の使いであったか。あの男も鷹使い

が荒い』
「イサーク！」
どこか大儀そうにぼやいたイサークに、リョウは滅多な事を言うなと小さく囁いてから、その羽を突いた。
戦う男たちの腕に色とりどりのリボンが腕章のように巻かれる。己が持つ色彩を相手の腕に巻きつけるというのは、この男は自分のものだと声高に公言するようなものだ。それは、なんだか無性に恥ずかしいことのようにリョウには思えた。
どうしたものか。リョウは、知らず困惑気味に眉根を下げた。お守りとしての意味合いならば、ユルスナールに渡したい。だが、それで、ユルスナールが笑い物になったらと思うと気が気でなかった。
シーリスは、きっと気を回したのだろう。この国の風習に疎い自分を案じて。いや、もしかしたら面白半分なのかもしれないが。
単なる武運を祈るお守りとしてならまだしも、そこに潜む、ごく個人的な感情を勘繰られるのは、どうにも居た堪れない気がした。

そんなことを考えながら歩いていた所為か、少し歩みが遅れがちになってしまった。ヤステルはさり気なく、自分に歩調を合わせてくれていたようだ。
「おーい、リョウ、ヤステル。早く来いよ！」
気が付けばバリースとリヒターの二人が大分先の所にいた。見物客用の入り口のような所に立っている。バリースが中々やってこない後方の二人に焦れたように手を振っていた。
「ったく。あの野郎。最初っから飛ばし過ぎだ」
そう悪態を吐いたヤステルの瞳もこの場の浮ついた空気にいつもより輝いているように思えた。
「アハハ。これじゃぁ、先が思いやられるか。途中でへばんなきゃいいけど」
「そしたら置いてくさ」
リョウは軽口を叩いてから、ヤステルを促すようにして先んじた

二人の後を追うべく、歩幅を大きく取った。

入口に着いた所で、どこで見学をするかという話になった時に、
「オレ、ちょっと先に知り合いの所に顔を出すようにって言われてるんだ」
先に済ませなければならない用事があると告げれば、
「ひょっとして、この間の第七の団長の所か！」
バリースが今にも身を乗り出さんばかりに顔を近づけて来た。
ヤステルが落ち着けというようにバリースの肩を叩いた。リヒターもさり気なくバリースの腕を取り、必要以上の暴走を抑えてくれているようだった。その様子は、まるで手綱（リード）に繋がれた犬のようだ。
期待に満ちた眼差しで詰め寄られ、リョウはその迫力にたじろぎそうになりながらも苦笑をして見せた。
「ああ。それもある。序でだから一緒に来るか？」
「マジで！」
鼻息荒く、拳を握りしめたバリースの隣で、
「おい、リョウ。いいのか？」
ヤステルが無理をするなというようにこちらを見た。
部外者が、試合前の兵士たちの前で騒いで大丈夫かと案じているようだったが、リョウは恐らく大丈夫だろうと肩を竦めて見せた。
「ああ。大丈夫だと思う。どうせなら友達も連れて来いって言われているし。それに今なら、ブコバルもいるだろうから。会いたいんだろ？」
リョウは以前、第七師団の双璧と謳われるというユルスナールの相棒・ブコバルにも会いたいというバリースの言葉を覚えていた。
「リョウ～！」
感極まったのか勢いよくバリースに抱きつかれそうになって、リョウは慌てて身体を捻った。肩に乗ったイサークごと抱き潰されては敵わなかったからだ。
「リョウ！　避けるなよ！」

空を掴んで前につんのめったバリースが、恨めし気にこちらを見たが、リョウは笑って流した。
「いや、だって。イサークがいるから」
『あ奴め、我を視界に入れておらんぞ。潰されては敵わん』
そして一人、軽やかに身体を反転させて、団体戦が行われる東側の区画に足を踏み入れるべく足を繰り出した。
その後ろに三人の友人たちが続いたのだった。

東側の区画は、西側の区画と比べても整然としていた。雑多な階層の出場者が集う個人戦の会場とは違い、こちらは各師団の軍部代表者たちばかりであるから当然と言えば当然だった。こちらでも既に集まった見物客が定められた範囲を守って、遠巻きに場所取りを始めていた。団体戦は、各師団から五名が選抜される。万が一の補欠人員を合わせても精々七・八名がいいところだろう。

大会に参加する兵士たち用に大きな天幕が二つ設けられていた。リョウは一応、関係者であることを示す為に以前【アルセナール】を訪れる時に身に着けていたものと同じ第七師団所属を意味する青い腕章を左腕に着けていた。そして、肩に伝令の鷹である大きな猛禽類が乗っている。これで傍目には、軍部の鷹匠見習いのように見えるだろう。ひょっとしたら、その辺りのこともシーリスは考えていたのかも知れなかった。
取り敢えず、兵士たちがいると思われる天幕の方に向かって歩いていると、前から一人の兵士が歩いて来た。動きやすいような訓練用の衣服に簡単な胸当てや小手当てといった防具を付けている。そして勿論、腰には長剣を佩いていた。
その兵士は腕に緑色の腕章を付けていた。その色の腕章には、リョウも見覚えがあった。ドーリンの所の第五師団のものだ。

真正面からその若い男と目が合った。
「あ～！！！！」
リョウを見た男は、いきなり大声を上げると走り寄って来た。
「お前もこっちに来てたんだな！　この間はありがとな。すげぇ助かったし」
リョウの手を取ると駆けてきた勢いをそのままに捲し立てた。
「あの後、すぐに傷が塞がってさ、いやもう、吃驚するのなんのって。その後の経過も良くってさ。また痛い思いをしなくて済んだんだ。マジ、あの先生、半端ねぇから。お陰で、ほらこの通り」
そう言って右腕をぶんぶんと回した。
リョウは突然のことに目を白黒させたが、
「ああ。ステパンさんの所でお会いした方、ですよね？」
記憶の中の人物に該当者を探し当てた。
第五師団を表わす緑色の腕章と人懐っこい笑みを浮かべた顔付きから、リョウは【プラミーシュレ】での最終日の出来事を思い出していた。腕に怪我を負って、消毒をしてもらいに医務室を訪れていたのだ。　その時にちょうど化膿止めを切らしてしまったということで、リョウは自分の手持ちの軟膏を分けてやったのだ。
「そうそう。良かった。覚えててくれたんだな」
「はい」
一頻り落ち着いた所で、不意に男がリョウを見下ろした。
「あ、ひょっとして、うちの隊長に用か？」
「いえ、第七の方に」
「ああ。そっか」
若い兵士は、したり顔で頷いた。ステパンの所で第七の団長であるユルスナールと共にいたことを覚えていたのだろう。
「第七ならあっちだぜ」
前方に見える二つの天幕の内、右の方を指し示されて、リョウはありがとうございますと謝意を述べた。
「いいってよ」

軽やかに片手を振って、その若者は去って行った。
後ろから付いて来ていたヤステルたちが、いつの間にか追いついていた。
「あっちだって」
リョウは先程の兵士から教えてもらった天幕の方を指してから歩き出した。
「知り合いか？」
「ああ。今のは第五の人。名前は知らないけど」
ヤステルは意外に広いリョウの人脈に驚いたようだった。

第七の兵士たちがいるという天幕の中をそうっと覗こうとした時に、背後から目の前ににょっきと太い腕が伸びてきた。と同時に頭の上に何か硬いものが乗った。
突如として圧し掛かってきた重みに驚きの声を上げる間もなく、
「よう、坊主。こんな所に何の用だ？」
頭上から男のものと思しき低いだみ声が降ってきた。リョウは男の風貌を確かめる為にそっと目線だけ上げてみたが、そこには尖った高い鼻先が見えるだけだった。
左肩の上に乗っていたはずのイサークは、獣の本能で危険を察知したのか、ばさりと羽をはばたたかせて、どこかへ飛んでいってしまったようだった。
「あの……何をなさっているのですか。とても…重いのですが」
圧し掛かるずっしりとした重みに困惑気味に苦言を呈してみれば、
「あ？　なんだ非力だなぁ」
からかうような声と共に余計に体重が掛かってきて、リョウは踏ん張る為に足の裏に力を入れた。
「あの、用事があるんで……退けて……ください」
なんとかして目の前に回された太い腕を外そうとするがびくとも

しない。
「あ？　そんなんじゃぁ、いつまでたっても変わらねぇぞ？」
必死になっているリョウの反面、体重を掛けた男はやけに楽しそうだ。
リョウは素早く天幕の中へ視線を走らせた。そして、奥まった一角に、探し求めていた銀色の頭部を見つけて、思わず声を上げていた。
「ルス…ラン！」
ユルスナールは、生憎こちらに背を向けていた。その周りには、北の砦でのお馴染みの顔が揃っていた。ブコバルにシーリス、その傍には、アッカとロッソ、そして、アナトーリィ―の他にヤルタとグントもいた。シーリスは出場しないとのことであったので、残りの七人が一応予備も入れた出場予定者ということなのだろう。
七人の中で、こちらに身体を向けていたシーリスがいち早く、リョウに気付き、それに次ぐ形でユルスナールが振り返った。
目が合ったユルスナールは、リョウが陥った状況を見て、瞬時に何が起きたかを悟ったようだった。
つかつかと長靴の底を踏みしめて、入口付近まで来ると徐に妙な男の張り付いたリョウの前に立った。
「何をしている？」
「あ？　なんだ、ルスラン」
冷ややかな視線が、リョウとその上に覆い被さる男に注がれた。
リョウは、少し情けない顔をして困惑気味にユルスナールを見上げた。といっても頭上には、男の顎が乗っている所為で、ちゃんと顔を上げることができなかった。
からかわれているだけなのだろうが、一人では対処のしようが無かった。
「ザイーク。退け」
ユルスナールの手が伸びて、リョウの肩に乗ってびくともしなかった男の筋肉質な腕をあっさりと退けた。脳天を突いていた顎の感

触（意外に痛かった）も無くなって、リョウはやっとのことで息を吐くと、素早くユルスナールの腕を掴んで、その大きな背中の後ろに隠れた。

「なんだ？　そいつはお前のところのガキか？」

リョウは、ユルスナールの背後からそっといきなり自分に圧し掛かって来た男を見上げた。

縦にも横にも大きな男だった。第七の中でも大柄だと言われているブコバルよりも一回りは大きいかもしれない。目の前に立たれると尋常ではない程の圧迫感がある。

吊り上がり気味の細い目尻に、薄茶色の短い髪を跳ね上げている。艶やかな飴色をした浅黒い肌をしていて、右側の目の下から頬骨のある辺りには、刺青のような紋様が入っていた。よく発達した顎は、うっすらと割れていた。あれが、頭の上に乗っていたのだ。道理で痛い訳だ。

薄い灰色の瞳に見下ろされて、リョウは無意識に肩を揺らした。これまでに色々な種類の男たちを見てきたとは思っているが、この男の風貌は、中でも余りお近づきにはなりたくない匂いがした。

真正面からリョウの顔を見た男が、癖のある笑みを浮かべた。

「へぇ？　お前んとこに毛色の変わったのがチョロチョロしてるって噂は本当だったんだな。なんだ、愛玩動物（ペット）でも飼ったのか。あ？」

ニヤツいたあからさまな視線にリョウが居心地悪そうに小さく身じろげば、ユルスナールが冷たく一蹴した。

「妙なちょっかいを掛けるな」

「あ？　良く見りゃぁ、中々の上玉じゃねぇか、おい」

そう言って自分の親指の腹をぺろりと舐めた男の仕草にリョウは思わず身を引いて、ユルスナールの背中に張り付いた。

背筋を悪寒のようなものが駆け抜けた。

ひょっとしてこの男もウテナと同類なのだろうか。少年趣味を憚らず公言していた第五師団の兵士を思い出して、リョウは身震いした。

その肩にそっと手が掛かり、一瞬、身体を揺らしたが、続いて掛けられた柔らかな声にリョウはそっと肩の力を抜いた。
「リョウ、あんな下品な男は放って置いて、こちらにいらっしゃい」
顔を上げれば、すぐ傍にはシーリスが立っていて、リョウは安堵の息を吐くと小さく頷いて、ユルスナールの背中からそっと離れた。
「あ？　なんだ？　いっちまうのかよ」
ザイークと呼ばれた男の声に、
「ええ。勿論。あなたの前に置いては、猛獣の前に好物の肉をぶら下げるようなものですからね。我々がそんなことをする訳はないでしょう？」
実にいい笑顔でシーリスが言い切った。
「けっ、相変わらず、えぐいな」
ザイークは嫌そうに顔を顰めたが、気を取り直したのか、前に立つユルスナールと何やら言葉を交わし始めた。
その隙に、リョウはシーリスに促される形で、第七の面々が集まっている所に向かった。
「元気にしていたか、リョウ？」
「はい」
久し振りに見るアッカやロッソから声を掛けられて、リョウは北の砦の面々と型通りの挨拶を交わした。
「あのシーリス、今朝方、イサークが持ってきた手紙の件なんですけど……」
今の内にと思い切ってリボンの件を尋ねてみれば、ちょうど先程の男と話しを終えたユルスナールが傍に来て、
「ああ、ルスラン。リョウがあなたに渡すものがあるそうですよ？」
先手を打つように言われてしまい、
「なんだ？」
こちらを見下ろしたシーリスが、合図をするように片目を瞑った為、リョウはポケットの中から黒い紐を取り出さざるを得なくなっ

てしまった。
「あの、ルスラン。左腕を出して下さい」
リョウは腹を括って、ポケットの中にあった黒いリボンを取り出した。
「上腕のこのくらいの位置ですか？」
そして、シーリスの反応を窺いながら、ユルスナールの腕に黒いリボンを巻きつけた。
「結び方にしきたりはありますか？」
「いいえ。自由で構いませんよ」
結び目をどうしようと思ったが、取り敢えず蝶々結びは躊躇われたので、片輪結びにしておいた。
「きつくはありませんか？」
具合を見る為にユルスナールを見上げれば、
「あ……ああ」
ユルスナールは目を瞬かせた後、なんとも形容し難い微妙な顔付きになっていた。
「どうか御武運を」
リョウは小さく呟くと、男の腕に巻かれたリボンの端にそっと口付けを落とした。
――――――ヒューウ。
ブコバルから冷やかすような口笛が漏れていたが、リョウは敢えてそれを無視した。
ユルスナールは、暫く、己が左腕に巻かれた黒色のリボンを見つめていた。
「これでは何だか喪に服しているみたいですね」
この国でそういう風習があるかは分からなかったが、連想からどうもそんなことを口走ってしまった。
苦笑気味に小さく笑ったリョウにユルスナールは、漸く我に返ったようだ。
そして、微かに笑った。

「いや、そんなことはない。ありがとう、リョウ」
「おーい、リョウ、俺にはないのかよ？」
飄々と嘯いたブコバルに、
「すみません、生憎、一つしかないものですから」
「何を言ってるんですか。あなたは外に出れば沢山貰えるでしょうに」
シーリスが呆れたようにブコバルを流し見れば、
「ま、そうだけどよ。黒ってのは中々ねぇだろう？」
暗にご婦人方からの人気が高いことを自分でも認めているようなどこか尊大な口振りは、ブコバルらしかった。

淡々と懸案のリボンを渡し終えれば、ここでの用事は粗方済んだ。残っているのは一つ、天幕の外で待ってもらっている友人たちのことだ。
それから、ブコバルに養成所の友人たちが一目会いたいと外で待っていると告げれば、
「なんだ、野郎かよ？　可愛い女の子はいねぇのかよ」
「残念でした。養成所で野郎以外に誰がいるんですか」
女の子の比率は極端に低いのだ。顔を合わせるのは自然と男ばかりになる。
ブコバルは、文句を垂れながらも、一応、天幕の外に出て来てくれた。リョウの友人たちということで、一度顔を合わせているはずのユルスナールだけでなく、シーリスやらアッカやらもその顔を拝んでやろうと出てきた為に、一時、天幕の外は随分と賑やかになった。
バリースは、感極まったようにブコバルと握手を交わし、ブコバル流の拳に力を思いっ切り入れた挨拶（リョウもブコバルに初めて会った時にその洗礼を受けた）に、顔を顰めながらも嬉しそうに笑っていた。ヤステルとリヒターとも同じように言葉を交わし、三人の青年は、喜んだようだった。

ブコバルもブコバルで満更でもない顔をしているように見えて、なんだか可笑しかった。
「それでは、ワタシはこれで失礼しますね。皆さん、お怪我の無いように。御武運をお祈り申し上げます」
そして、型通りの敬礼をしてみせれば、
「ああ、任せておけ」
「今年は、負けねぇよ」
「ああ。目ぇ、かっぴらいてよく観とけよ」
アッカやアナトーリィー、グントたちの自信に満ちた男らしい笑みにぶつかった。
そして、出場者たちは、再び天幕の方へと帰って行った。

別れ際、最後まで残っていたユルスナールから不意に呼び止められた。
「リョウ」
「なんですか？」
「お前は、この風習のことをどこまで聞いた？」
小さく揺れる黒いリボンの端を目で示してから、ユルスナールが小さく問うた。
「武運を祈る為のお守りだとか」
「他には？」
じっと探るような視線が降り注ぐ。
「ああ。通常は女性から男性に贈られるものだとか。元々は戦地に赴く兵士たちの無事の帰還を祈るためのものだったそうですね」
ヤステルから教わった由来を告げれば、またしても、矢継ぎ早に言葉を重ねられた。
「他には？」
いつになく真剣な表情で見下ろされて、リョウは少し逡巡した後、はにかむように小さく微笑んだ。
「若い男女の求愛の為のものだそうですね。想いを寄せる相手への

意思表示（アピール）というか、切っ掛けというか、片恋を成就させる為の小道具として使われているようなことを聞きました」

この短い間に知り得た情報を掻い摘んで話せば、ユルスナールは暫し、無言のまま、目を瞬かせた。

どうしたというのだろう。何か混乱させるようなことでも言っただろうか。

「ですが、まぁ、ワタシとしてはルスランの武運をお祈りするという意味合いが強いですよ。なので他の人から揶揄されたら、そう返してください」

苦し紛れとも言えなくもなかったが、リョウは男の腕に黒いリボンを巻きつけた正直な気持ちを告げていた。

ユルスナールは、沈黙を守ったままだった。

「ルスラン？」

怪訝そうに見上げれば、

「いや、何でもない」

ユルスナールは、どこか不遜そうな笑みを小さくその口元に浮かべていた。そして、リョウの頬にそっと片手を掛けると、その輪郭を緩く指でなぞりながら、次のようなことを言った。

「見学の間は、友人たちの傍を離れるなよ？　迷子になるからな」

「はい」

これから大会への出場を控える相手に、逆に心配をされてリョウは擽ったそうに小さく笑った。

そして、ゆっくりと離れて行った逞しい背中に、思わず声を掛けていた。

「ルスラン」

無造作に撫で付けられているだけの銀色の髪が光を反射して揺れた。

「頑張ってください」

「ああ」

最後に小さく微笑んで、細められた深い青さを湛えた瞳に、

――――――――どうか、怪我をしませんように。

リョウは、そっと心の中で小さく呪いを掛けるように呟いた。そして、去ってゆく男の左腕に巻かれた黒いリボンが揺れる様を見つめたのだった。

花の影踏み（前書き）

本格的な大会の模様を前に、その周辺事情を少し。

花の影踏み

その日、一組の姉妹が腕を組んで、御付きの女性と男性の使用人と共に、武芸大会が開かれるという宮殿前広場に向かっていた。

邸宅から馬車に乗り、宮殿脇の車止めに降り立った二人の女性は、年の離れた姉妹だった。

共に金色の艶やかな髪をしていた。緩く波打つ髪を持つのは姉の方で、妹は癖の無い真っ直ぐな髪をしていた。二人の顔立ちは、姉が母親似であるのに対して、妹は父親の形質をより引き継いだようで、共によく似ているという訳ではなかったが、二人して並べば、そこには血の繋がりを感じさせる同じような雰囲気が見て取れた。

妹のアリアルダの手には、赤みを帯びた明るい橙色のリボンが風に靡いて揺れていた。それはアリアルダの瞳の色を模したものだった。対する姉の方は、妹よりもずっと控え目な榛色（はしばみ）の瞳をしていた。その手にも瞳と同じ色のリボンが揺れていた。

アリアルダが手にするリボンは、武芸大会に出場する兵士へ贈られるものである。

リボンを渡す相手は既に決まっていた。昨年と同じだ。幼い頃よりアリアルダの世界には、一人の男しか映っていなかった。この国でも余り例を見ない銀色の髪を持つ男だ。その色は、代々、この国の北の方位を守護してきた名家、シビリークス家の色だった。

アリアルダの心は躍っていた。それは、男たちが競う剣技を観戦するという高揚感とは別の所にあった。

もしかしたら、今年こそ、自分の秘めた想いに望むような答えが返ってくるかもしれない。そのような期待感に満ちていた。

その期待は、先日耳にした姉の言葉に裏打ちされていた。姉の嫁ぎ先である夫が、その弟の婚礼に前向きな考え方をしているとの話

を聞いたからだった。アリアルダが想いを寄せる男は、義兄の一番下の弟にあたった。

周囲には、同じように色とりどりのリボンを手にした若い娘たちの姿があった。綺麗に着飾った可憐な花のような娘たちだ。皆、この日の為に時間を掛けて己を飾る準備に余念がなかった。

娘たちが手にしているリボンは、大抵が、その瞳の色を模していた。髪の色よりもその方が、種類が豊富で他者との識別が容易になるからでもある。

目の覚めるような明るい青、水色、くすんだ空の色、深い緑色、新緑の黄緑色、明るい黄色、情熱的な赤みを帯びた茶色。橙色。菫色に明るい灰色。実に色鮮やかだ。

その色とりどりのリボンは、この後、武芸大会に出場する若者の腕に巻かれることになっていた。大会での健闘と無事に試合を終えられることを祈願して、若者の逞しい左腕に翻るのだ。

「アーダ！」

会場へ向けて、淡い桃色のドレスの裾を軽やかに翻しながら貴族の婦女子たち用に設けられた特別席の方に歩いていると、年若い娘たちの一団から声が掛かった。

「御機嫌よう、ジィーナ。それにアーダ」

「御機嫌よう、皆さま」

上流階級のしきたりに則り、小さく膝を折る形で挨拶を交わす。其々にリボンを手にした若い娘たちの瞳は、皆、同じような期待感と幾ばくかの恥じらい、そして不安を胸にきらきらと輝いて見えた。

「マリーナ」

アリアルダは、近寄って来た若い娘の腕を取った。

「おめでとうを言わせてちょうだい、マリーナ。婚約が正式に決まったのですってね」

腕を組んで輝かしい笑顔を向けたアリアルダに、マリーナと呼ばれた娘は、はにかむように微笑んだ後、小さく頷いた。その顔には、眩しい程の美しさと幸せが満ち溢れているのが見て取れた。

「ありがとう。アーダ」

「婚礼はいつになるの？」

「まだ具体的には決まってないわ。それでも軍の方で次の組織編成の話しが出る前にしましょうっていう話しは出ているの」

マリーナの手には、その瞳の色を模した薄い黄緑色のリボンが揺れていた。そのリボンを左腕に揺らすであろう男は、婚約者からの想いを受け取ることになる。

「そう。でも良かったわ、本当に」

アリアルダは、まるで自分の事のように友人の幸せを喜んだ。華やいだ話は、耳にするだけでも嬉しい。それが親しくしていた友人ならば尚更だ。

「春が来たらがいいわね。沢山の花が咲き乱れる中で。綺麗な髪飾りができるわ」

「ふふふ。そうね」

幸せそうに微笑んだマリーナは、同じようにアリアルダの手の中にある一本のリボンに目を留めた。

「アーダも渡すのね。例のあの人に」

「ええ」

親しい友人同士の内緒話のような小さな囁きにアリアルダも釣られるように微笑んだ。

「アーダの方もそろそろなんじゃない？」

「どうかしら？」

マリーナからの意味深な目配せをアリアルダは笑って流した。

それでも内心では満更でもなかった。きっと周囲の人たちにも自分の恋路の行方は、その機が熟しているように見えているのだろう。そう思うと周りからも自分の気持ちを認められているような気がして何だか心強かった。

こうしてささやかな喜びを共有しながら、合流した若い娘たちの華やかな集団は、手入れの行き届いた庭に咲き乱れる花々のように、その人工的な美しさを振り撒きながら会場への道のりを辿ったのだった。

貴族の婦女子が安心して見学できるようにと設けられている特別席は、団体戦が行われる東の地区に一か所、そして個人戦が行われる西の地区に一か所、其々、日よけとしての天幕が大きく張られる形で設けられていた。

その場所は、遠目にも一目で分かるほどに非常に華やいだ空間だった。その背後に望む豪奢な宮殿は別として、土埃が舞う殺風景な背景の中に突如として女たちの身に着けるドレスの色が浮き上がるのだ。

急拵えの高く張り出した木組みの舞台の上に観覧しやすいようにと席が段々に設置されている。そこにまるで花壇の花々のように赤や桃色、黄色、菫色といった主に暖色系を中心とした明るい色が並んでいた。この日の為に気合を入れて着飾った貴婦人たちの優雅な姿は、見学に集まった男たちの視線と続いて漏れる溜息を誘う光景でもあった。

アリアルダたち一行は、その見学場所に辿りつく前に、団体戦が行われる東側の地区にある軍部の兵士たちの簡易的な控室になっている天幕の方へと足を進めた。マリーナの婚約者は、今回は団体戦の方には選ばれず、個人戦の方に出ることになったということで西側に向かう為、途中で別れることになった。

天幕の近くへ行くと実家から御付き兼護衛として付いて来た男の使用人に目当ての人物を呼んで来てもらえるように頼んだ。

正式な大会の開催は、まだ始まっていない。あと一刻程もすれば、宮殿広場前に整然と整列をした各師団の代表者たちと個人戦の参加者を前に、この大会を取り仕切る軍部の代表者――――今年は、西の将軍の番だった――――が高らかに開会宣言をすることになっていた。そして、鳴り響く鐘の合図と共に闘いの火蓋が切って落とされることになっていた。

対戦相手の抽選は、個人戦の場合は、当日の朝、出場者の登録を締め切った時点で行われ、団体戦の方も、この日の朝に行われた。そして、共に開会宣言の後に大々的に発表されることになった。対戦状況とその結果は、其々西と東に設置された大きな掲示板の前に張り出され、逐一、それを管理する運営委員会に属する裏方の兵士たちの手で、手書きで更新されることになっていた。

なので、団体戦の方も当日になるまでどことどこが最初に対戦となるかは分からないのだ。それは事前に妙な小細工が行われないようにとのことでもあった。それが、余計に観客側の憶測を呼び、人々の熱気を盛り上げることにも繋がっていた。一般庶民の男たちの間では、どこが優勝するかという賭けも盛んだった。武芸大会が近付いてくると街中の食堂や酒場など、男たちが屯する場所では盛大に賭けが行われていた。

アリアルダは、姉の傍らで胸を高鳴らせながら、目当ての人物が出てくるのを今か今かと待った。

この広大な広場に浸透する集まった人たちの高揚感や興奮の度合いは、遠く貞淑と然るべき品位を保つようにと教育されている上流階級の婦女子たちにも少なからず影響を及ぼしていた。これからの三日間は、まるで街中が流行り病に感染をしたように浮足立つ。この日ばかりは、少々のお転婆をしても大目に見てもらえたのだ。

「ルーシャ！」

やがて、天幕の中から現れた男の姿にアリアルダの顔が輝いた。

「……え……」

だが、その姿が段々と近づいて来るにつれて、視界の中ある男の左腕に揺れる幅広いリボンのような形状の黒い紐の存在に嫌でも気が付かされ、その顔色を無くした。

アリアルダは目を瞬かせた。そこにあるものが信じられないというように。そして、じっと男の逞しい左腕にある一点を見つめていた。

「どうした、アリアルダ？」

記憶の中に蓄積されているものと寸分も違わない表情で淡々と口にされた言葉に、アリアルダは気を取り直したように顔を上げた。

「ルーシャ、左腕を」

アリアルダの手にあるリボンを一瞥し、ユルスナールは相手に気が付かれない程の一瞬だけ躊躇いのようなものを見せたのだが、静かに腕を差し出した。

アリアルダはその場所に手慣れた所作でリボンを巻きつけていった。

男たちの腕に巻かれる願掛けのリボンは、一本でなければならないという決まりは、別段、無かった。女たちから人気のある兵士には、それこそ沢山のリボンが集まったが、それを腕に巻いてもらえるか否かは、男の側の腹積もりに掛かっていた。それでも大抵、常識的な本数というものはあるもので、精々いっても腕に翻るのは、二・三本というのが上限だろうという暗黙の了解のようなものはあった。ブコバルなどは女性関係も幅広く、意外にマメな性質でもあったから、それこそ毎年、自分のリボンを付けてくれと迫られることが多々あるようだったが、意外や意外、これまで実際に受け取ったリボンを腕に巻いたことはなかった。それは恐らく、若くして亡くなった幼馴染の少女、エルメリアの存在が、心のどこかでずっと引っ掛かっていたからなのかもしれない。

それはさておき。

現れたユルスナールは、生成り色（ベージュ）の隊服を身に着けていた。闘技用に極力装飾の類が省かれた実用性重視の服装だ。簡素な立襟のシャツに同じ色のズボンだ。それに黒い長靴を履いていた。試合の時には、その上に胸当てや肘当て、小手当て、肩当てといった一連の防具を身に着けることになっていた。

だが、軍部の兵士たちに限り、この服装は最初の二日間だけのもので、最終戦に勝ち残った男たちは、最終日、三日目の天覧試合に臨む際には、正式な軍服に身を包むことが要求された。

兵士たちは、この日ばかりは通常、左腕に着けている軍部の所属を表わす腕章を右腕に付け替えていた。左腕はリボン用に敢えて空けておくということなのだ。ユルスナールの右腕にも第七師団所属を意味する青い腕章が巻かれていた。

「ルーシャ。今年こそは優勝してくださいね。応援していますから」

昨年は、実に惜しい所まで行ったのだ。試合会場の広場に立つ男の腕に自分の瞳と同じ色の明るい橙色のリボンが翻る様は、とても誇らしかったのをよく覚えていた。

アリアルダは、黒いものが巻かれている上に重ねるように自らのリボンを括りつけた。

「それにしてもルーシャ、酷いじゃない。私が付ける前に他の人からリボンを貰うなんて」

アリアルダは、少し拗ねたように口にしていた。

胸の奥がざわりとした騒いだ。自分以外の女がこの腕にリボンを巻く権利を得たかと思うと心の奥底に黒々とした澱のようなものが溜まって行くのが分かった。

それにユルスナールもユルスナールだ。毎年、必ず自分がリボンを用意するのを承知の上で、他の女のものを受け入れるなどとは。

気心の知れた気安さからつい苦情を口にしていたが、ユルスナールはアリアルダを一瞥しただけで、その腕に先に巻かれていた黒い

リボンのことには一切、触れなかった。

――――――ああ、これはどうしてもと頼まれて仕方なく。

そんな弁解のようなものでもいい。男の口から言い訳のような言葉を聞きたかった。

それで、きっと自分は『しょうがないわね』と安心できるのだ。

強面で冷酷そうな印象を見る者に与える造形をしているユルスナールだが、その本質は、情に厚い優しい男であることをアリアルダは知っていた。女性の涙に滅法弱いことも知っていた。無表情に見える顔の中で、その濃紺とも瑠璃ともいえる深い青さを湛えた瞳が、困惑気味に揺れるのを知っていた。

この男のことをよく知るのは、自分だけだ。幼い頃からシビリークスの家と交流のあったアリアルダには、そんな自負があった。

長じるにつれて、【氷の美貌】と謳われたその父親の形質を兄弟の中でも一番に引き継いだユルスナールは、貴族たちの社交界の中でもある意味、特別な目で見られる存在だった。

かつて、その父親であるファーガスに恋破れた若い女たちも其々に嫁ぎ、子供を儲けた。中でも娘を授かった女たちは、儚い夢の続きを見るように、その昔、恋い焦がれた男の息子の元に己が娘を嫁がせることを願った。

ユルスナールは、これまで社交界では、必要最低限の付き合いしか持たなかった。四年前に北の砦に赴任が正式に決まってからは、一年の殆どを王都より遠く離れた北の辺境で過ごしている。その姿を垣間見ることができるのは、冬場のこの一時、武芸大会が開催される前後の短い期間だけだ。

ユルスナールの王都入りを素早く聞きつけた貴族たち、特に年頃の娘を抱えている家は俄かに色めき立って、お茶の誘いやら音楽の鑑賞会やら、パーティやら、様々な用事にかこつけて、いまだ独り身を通しているシビリークス家の三男坊を誘った。だが、その招待

状に対しても、大抵は軍部の方での仕事が詰まっているからとの理由で丁重に断りの手紙が届けられるのだ。

父親の若かりし頃を彷彿とさせる美丈夫であるにも関わらず、浮いた噂の一つもないユルスナールに狙いを定めている家は、声高にせずとも多かった。

そのような状況の中でも実の姉がシビリークス家の長男に嫁ぎ、これまで以上に強い結び付きを得たアリアルダは、自分が、少なくともシビリークス家にとって、いや、もっと突き詰めれば、ユルスナールにとって、特別な存在であることを疑わなかった。その他大勢の遠巻きに想い焦がれるだけの娘たちよりも一歩も二歩も確実にユルスナールに近い所にいると思っていた。

――――――それなのに。

男の左腕には、あろうことか、自分のものよりも先に黒いリボンが翻っていたのだ。その事実が、少なからずの衝撃（ショック）をアリアルダの中に生み出していた。

黒い瞳を持つであろうと思われる女の存在に、アリアルダは臓腑が冷やりとするのを認めざるを得なかった。それは、現実で初めて感じた危機感のようなものだった。

その女は、少なくともユルスナールの心を捕らえたのだ。左腕にリボンを巻くことを許される位には。

これまで圧倒的な優位性を保っていたはずの己が足元が、突如として軋むように揺らいだ気がした。

「ねぇ、ルーシャ」

アリアルダの細い手が、男の腕に掛かるもう一つのリボンに触れていた。

そのリボンは、女たちがよくするような蝶々結びでもなく、両端をだらりと流す固結びでもなく、片方だけの輪を縦にした不思議な結び方をしていた。

この黒い紐を下に引いたら、きっとこのリボンははらりと落ちるだろう。自分を不安にさせているこの黒い紐を思い切り引いてしまいたい欲求が、不意にアリアルダの頭の中に擡げてきた。

「アリアルダ？」

だが、その思考は、続いて聞こえてきた自分を案じるような低い声に途絶えてしまった。

その声に引き寄せられるようにアリアルダは顔を上げた。

いつの頃からか、以前のように親しみを込めて【アーダ】と呼んで欲しいと頼んでも、ユルスナールは自分との距離を測るように敢えて丁寧な態度を崩さなくなった。それがアリアルダには不満だった。姉はそのことをユルスナールがアリアルダのことをきちんとした大人の女性として節度ある態度で接してくれていることの表れだと言ったが、アリアルダは、何だかユルスナールとの間に見えない透明な壁ができたようで、もどかしくて仕方がなかった。

――――――いつまでも子供のままではいられないわ。

姉のジィナイーダは、事あるごとにアリアルダをそう諭した。

男の目に留まるように美しくなりたい。早く大人になりたいとずっと思っていた。そして、歳を追うごとに娘らしく、そして女らしくなり、輝かんばかりの美しさを誇ると周囲の人々からは言われるようになった。

それなのに、いざその年齢になってみると、思い描いていた景色と自分が今立つ景色は、随分と違って見えた。それをどうしてなのだろうと不思議に思っていた。

アリアルダは頭上から聞こえた声に、胸に去来する様々な思いを振り切るように揺るく頭を振った。

ユルスナールは、すぐ近くに、今もこうして変わらず手の届く所にいる。まだ見ぬ影に恐怖や不安、嫉妬を感じるのは、莫迦らしいに違いなかった。

――――――その人は誰？

喉元まで出掛かった言葉は、声にはならなかった。

「いいえ、何でもないわ」

アリアルダは目の前にある男の逞しい手を取ると、その甲の部分にそっと己が額を押し付けた。

「御武運を」

かつて、戦地に赴く大切な人たちを見送った女たちのように、祈りの文言を口にしていた。

「ありがとう、アリアルダ」

ユルスナールは、小さく微笑むとアリアルダの頬に掛かっていた後れ毛をそっと耳の後ろに掛けた。

さらりとした金色の髪は、艶やかに日の光を反射して細かな煌めきを放っていた。

ごつごつとした男らしい指先から伝わる温もりは、変わらずに優しいままだ。それを信じたいと思った。

黒い瞳の女。キルメクの女だろうか。それとも混血か。

その時、アリアルダの脳裏には、ふいに一人の人物の顔が思い浮かんでいた。先日、シビリークス家にユルスナールと共に現れた少年のような年若い男だ。腕に第七所属を意味する腕章を付けていた。

あれは、ユルスナールの部下であっただろうか。違うと訂正されたような気もするが、ユルスナール以外に関心の無かったアリアルダは、その辺りの事を全く覚えていなかった。ただ、ユルスナールがいつになく気に掛けていた存在であったことを内心、忌々しく思ったのだ。

今、唐突に、あの男が、黒い瞳をしていたことを思い出した。そして、その髪の色も黒であったことを。

まさか、あの男の係累なのだろうか。姉弟であれば、その色彩はあり得るだろう。

機会があれば、その辺りのことを確かめてみようと密かに思った。

そうして、開催宣言までの間、再び天幕へと戻って行く逞しい男の後ろ姿を眺めながら、アリアルダは、その左腕に靡く明るい赤みを帯びた橙色のリボンをじっと見つめたのだった。

花の影踏み（後書き）

優しさ故か、ユルスナールも罪作りな男です。その優しさは立場が変われば、時として残酷でもあります。それでは次回に続きます。

開会宣言

異様な程の緊張感を前に集まった群衆は、【その時】が訪れるのを、固唾を?んで待っていた。

やがて、広場の中央にすらりとした体格の威厳ある男が一人、目にも鮮やかな朱鷺(とき)色の長い外套(マント)の裾を翻しながら現れた。この国、スタルゴラド軍部を統率する四将の一人、【西の将軍】である。この国の軍部の正装に身を包んだ壮年の男は、中央に設えられた台の上にゆっくり乗り上げると、静かに眼前に居並ぶ数多もの剣士たちを睥睨した。

ちりちりと肌を焼くような緊張が、辺りを支配していた。

物音を立てる者は、一人としていない。声を発する者も。

皆、時が止まったかのように、じっと【その時】を待っていた。

眼下には、この広場を埋め尽くすほどの群衆が集まっているというのに、まるでこの世界からぽっかりと音そのものが無くなってしまったかのように神聖さえある張りつめた静寂が満ちていた。

男が徐に腰に佩いた剣を抜き上空へ掲げた。

大きく息を吸い込んだ。

そして、静まり返った広場に腹の底から出された深みある声が朗々と響き渡った。

「ここに【第１４９回スタルゴラド武芸大会】を開催することを宣言する」

高らかに放たれた開会宣言に続き、その後方で小振りの鐘を手に横一列に並んだ正装に身を包んだ兵士たちが、一斉に音階の違う鐘を振り鳴らした。

それが合図だった。

様々な高低の入り混じった鐘の音に、広場に整然と並ぶ剣士たち

とその周囲を取り囲む群衆からは、大地を震わすような鬨の声が上がった。
男たちの熱き祭典、武芸大会の始まりである。

――――――ウラァァァアアア！！！！！

地鳴りのように突如として湧いた腹膜が震えるような耳を劈く男たちの叫び声に、リョウは目を白黒させながら思わず両手を胃の腑の上に当てていた。外部の声が、身体の内側から反響して、もの凄い勢いで狭い体内を駆け巡る。凶器のように降り注ぐ重低音の洪水に、腹膜がじんじんと疼く。周囲に居並ぶ男たちの一丸となった雄叫びに、ただただ唖然とするしかなかった。
周囲を囲む男たちは、片手を天高く上げて共鳴するように鬨の声を発していた。
驚きの余りに固まっていると、すぐ隣に立つバリースから腕を取られて、リョウも同じように片手を上げさせられていた。
バリースが嬉々として雄叫びを上げる。それにつられるようにその隣からも少年にしては幾分高めの声が上がった。
そして、音階を紡ぐように不協和音とも思える独特な鐘の音色が、反発し、響き合い、重なってその速度を上げて行く中で、男たちの雄叫びも一気に膨れ上がり、そして収束していった。

耳の奥がグアングアンと反響するように鳴っている。指で耳の穴を塞ぐようにしてから、リョウは緩く頭を振った。
「大丈夫か？」
初めての洗礼に、ヤステルから案じるような声が掛かった。
「ああ。突然だから吃驚した」
鼓膜が破れるのではと思えるほどの大音声にまだ耳の奥が妙な具

合であったが、リョウは心配いらないと苦笑してみせた。
「何度、聞いてもこればかりは凄いよね」
――――――全身に鳥肌が立つし。
そう言って、穏やかな笑みを浮かべながらリヒターが自分の腕を摩っていた。そんな柔和な顔立ちをしたリヒターもリョウの隣で片腕を天に突き上げて、一緒に大声を上げていたのだ。
それは、宮殿広場に集った参加者と観客全てが一体になる一瞬だった。同調（シンクロ）した気分が圧倒的な大きさの塊となって、そのまま雄叫びに変換されるのだ。一糸乱れぬ期待と興奮の統率、膨大な力を生んだ熱量（エネルギー）に、ただただ度肝を抜かれた気分だった。

リョウは、バリース、ヤステル、リヒターの三人と団体戦が行われる東側の区画にいた。
剣技が競われる広場では、その会場に杭を打ち、周りを太い荒縄で囲っていた。その内側が、大会に出場する剣士たちの晴れ舞台となる。杭の周りには、警備の為の兵士たちが隙なく軍服に身を包み、物々しい装いで立っていた。観客が誤って中に入らない用にする為と観戦中に押し合いなどの揉め事が起きないようにする為に周囲に睨みを利かせるのだ。警備の兵士たちは、皆、押し出しの強い立派な体格の男たちだった。
そして、張り巡らされた荒縄には、出場する剣士たちの左腕を飾る栄誉からは漏れてしまった色とりどりのリボンが、この場所で戦う男たち全ての武運を祈るお守りのように結えつけられ、吹き込む風に翻っていた。道行く女たちが、老いも若きもその手にリボンを手にしていたのは、この為でもあった。

この後、すぐに団体戦の対戦の抽選結果が発表され、掲示板に張り出されるとのことで、その周囲には多くの人々が集まっていた。
対戦相手は、当日になるまで分からないようになっていた。同じ軍部の師団同士と雖も当日の試合直前になるまでどこが相手になる

かは分からない。事前に決まっていれば、初戦相手の研究や対策ができるのかも知れないが、そういったことが一切不可能になっていた。戦う兵士たちも応援する方も蓋を開けてみるまで、いい意味での緊張を強いられる。それは、とても面白いやり方だと思った。

リョウは、人だかりの中で揉みくちゃにされては敵わないということで、リヒターと大人しく開会宣言を聞いた場所で待つことにした。人混みは苦手であるし、体格的にもかなり劣る為、林立する大きな男たちの間に埋もれると身動きが取れなくなってしまうからだ。

性格的なものもあるが、リヒターもまだまだ男としては線の細い方なので、二人は大人しく待つことを選んだ。それに対して、朝から大張りきりのバリースは、小柄ながらも鉄砲玉のように待ちきれないとばかりに一人掲示板がある方角へ飛び出して行き、その後をお目付け役としてヤステルが追い掛けて行った。

ヤステルは、表面上はバリースに呆れた視線を投げかけていたが、この国の男の端くれとしてこの日が来るのをとても楽しみにしていたのか、なんやかんや言いながらも、バリースの背中を追い掛けるその足取りは軽かった。

離れて行った二人を待つ間、リョウは先程の開会式の模様を一人、思い出していた。まだ、体内に先程の余韻がざわざわと駆け廻っている。表現のしようの無い程に圧巻、その一言に尽きた。

控室となっている天幕から装備を整えた兵士たちが現れると、周囲に集まった群衆からは一頻り歓声が上がった。兵士の名前を呼んだり野次を飛ばしたり、待ちきれない興奮を小出しに吐き出すようだ。

だが、出場者たちが広場内に整列を始める頃には、周りのお喋りの声はぴたりと止んでいたのだ。集まった人たちは、杭と荒縄で区切られた線の外側で息を潜めるようにしてじっと会場内に集まる剣士たちを見守っていた。

まるで何かを待つように。彼らの視線は、広場前方の中央に向けられていた。

すると、一人の男が、目にも鮮やかな朱鷺色の外套（マント）を翻しながら颯爽と現れたのだ。中央に足を進める男の姿を見て、隣にいたバリースが『西の将軍だ』と小さく呟いた。

口髭を生やした威風堂々たる初老の域に達するかとも思われる男だった。癖の無いすっきりとした面立ちの中に厳格さが見え隠れする。天から一本の見えない支柱が身体の中心を貫くように真っ直ぐに伸びた背筋が、男を実年齢以上に若々しく見せていた。

これから何が始まるのだろう。これだけの人数の人々が集まっているというのに、辺りは驚く程に静かだった。まるで口を開くことを忘れてしまったようだ。水面下で競り上がる静かな興奮に感染したようにリョウも知らず、唾を飲み込んだ。

目の覚めるような青い詰襟の軍服を縁取る煌びやかな金糸の縁取りと黄金色の釦。腕に下がる肩飾りの紐を揺らし、西の将軍は、徐に腰に佩いていた一振りの長剣を抜いた。

そして、両刃の剣を高く前方に掲げ、高らかに開会を宣言したのだ。それから直ぐに養成所の中で授業の開始や終了を告げる時に鳴り響くような鐘の音が、複雑怪奇な旋律と和音を紡ぎ出したかと思うと、大地が震えるほどの男たちの大音声が、湧きあがるように同時多発的に立ち上ったのだった。

それは、日々切磋琢磨し、並々ならぬ努力の上に研き上げられた剣技を競うという大会の意義に実に似つかわしい始まり方であった。

人だかりのある掲示板の前で一際大きな歓声上がった。振り返って後方を透かし見るようにしてみれば、大きな白い細い棒状のようなものを抱えた兵士が木の板の前に立ち、するすると巻き物を開くように板の上に張り付けていった。リヒターの話しでは、あれは頑

丈な一枚の布で出来ているらしい。そこに手書きで当日の対戦表が書かれるのだ。

集まった男たちのどよめきが、離れたこちら側にも伝わって来た。予想外の組み合わせであったのか、それとも想定の範囲内であったのか。恐らく、そのどちらでもあるのだろう。大きな掲示板の方は観客向けだが、出場兵士たちが控える天幕前にも対戦の組み合わせが発表されているらしかった。

対戦表を見た男たちは、これから始まる目当ての試合に向けて、広場内を散り散りにばらけて行った。

散らばる男たちの中から、飛び跳ねんばかりの勢いでバリースが走り込んできた。

「リョーウ～！！！」

余程興奮しているのか、駆けこんできた一回りは大きな体をリョウは吃驚しながらも真正面から受け止めた。

お目付け役だったはずのヤステルは、その後ろから付き合ってられないとばかりにのんびりと歩いてくる。

「第一試合は、第七と第四だ！」

がばりとリョウの肩を掴むと目に焼き付けて来た対戦表の内容を淀みなく捲し立てた。

リョウはバリースの勢いに呑まれるように目を瞬かせた。

「手前の方だな」

戻って来たヤステルがしたり顔で頷いた。

「いいのか？」

組み合わせ如何によっては、他に見たい試合があったのではないだろうかと心配をすれば、

「何言ってんだよ、リョウ。第七は絶対外せないからな！」

バリースが鼻息荒く息巻いた傍らで、リヒターもヤステルも同意をするように頷いた。

「そうか」

「そうと決まれば行くぞ！」
――――――あそこは人気が高いから早く行かないといい場所が無くなる。
俄然張り切りだしたバリースに腕を引っ張られる形でリョウと残りの二人は、第一試合が行われるという宮殿寄りの会場に向かった。

会場には既に多くの観客が押し寄せていた。下手をすると押し合いへし合いになるだろう。
集まっている顔触れは実に様々だ。階層、年齢、共に幅広い。ここから少し離れた所には、女たちの姿もちらほらと見受けられた。
日に焼けて真っ赤な顔をした秀でた額の職人と思しき腕っ節の強そうな男たちや毎日屋内で帳面とにらめっこをしていそうな色白の線の細い男もいる。勿論、兵士たちの姿もあった。贅沢な衣服に身を包んだ金持ちや上流階級と思しき上品な衣服に身を包んだ貴族の姿もある。この日ばかりは、貴賤関係無く入り乱れる形で、雑多な人々が集い、選ばれし男たちの雄姿を見ようと押し寄せていた。
少し視線を転じれば、団体戦が行われる区画の第一会場と第二会場の間には、主に貴族の婦女子を集めた特別観覧席が設えられていた。
通りすがりに何とはなしに視線をやる。この日の為に着飾ったのだろう。色とりどりのドレスに身を包んだ若い娘たちの姿は、遠目には華やかな花束のようで、リョウの目には眩しく映った。まるで、その場所だけ一足先に春が訪れたようだ。

不意に視線を感じて振り向けば、雛壇になっている客席の中から一人の若い娘がこちらを見ていることに気が付いた。
リョウは、誰だろうかと目を凝らした。
明るい金色の髪が、眩いばかりの光を反射している。その瞳が大

きく見開かれていた。華やかで意志の強そうなはっきりとした顔立ち。

その娘には、見覚えがあった。いや、忘れる訳はなかった。ユルスナールの実家であるシビリークスの本家で見掛けた年若い娘だ。名は確か、アリアルダといった。

ユルスナールの許嫁だろう。男から確かなことを聞いた訳ではない。だが、仲睦まじく寄り添うように立っていた二人の姿は、何者も立ち入ってはいけないような絵になる光景だった。何よりも、あの少女から一歩抜け出して大人の女性になったばかりの匂い立つような美しさを秘めた娘の方が、満ち満ちた若さと生命力を漲らせて全身でユルスナールのことが好きであることを訴えていた。

視線が合って、リョウはそっと小さく微笑むと軽く会釈をした。たとえ掠るような出会いであったとしても、たとえ、向こうには自分のことは眼中になかったとしても（ひょっとしたら覚えていないかもしれない）、こちらは相手を認識してしまったのだから無視をする訳にはいかなかった。

娘は呆気に取られたような顔をしていたが、ふいと横を向いてしまった。その反応にリョウは内心、苦笑いを零した。先日も感じたが、やはり、余りいい印象を持たれていないようだ。曖昧な微笑を浮かべているとあの時、年若い娘の傍にいた兄嫁だという年上の女性がこちら側に気が付いて、目が合った時に小さく微笑みかけられたので、リョウも同じように会釈を返していた。

「リョウ？　どうかしたのか？」

不意に足を止めたリョウに腕を引っ張っていたバリースが、その進行を妨げられて振り返った。

リョウの視線の先を素早く捕らえてか、

「なんだ、リョウ？　あん中に好みの子でもいたのか？」

ヤステルがニヤニヤしながら、リョウの肩に腕を回した。

「あそこは触れちゃいけない高嶺の花だよ」

その隣でリヒターが意味深に目配せをした。
「ああ、あそこは言うなれば、俺たち一般庶民にとっちゃぁ雲上人。手の届かない人たちだ」
「上流階級の貴族の人たちか？」
あそこは、自分のような半端者が立ち入ってはいけない領域だ。
「そ、俺たちはこうやって指くわえて遠目に眺めるだけだ」
ヤステルの年寄り染みたしみじみとした述懐が何だか可笑しくて、リョウは不意に肩を震わせ始めた。
「なんだよ？　リョウ」
ムッとしたのかヤステルが首を締め上げるように肩に回した腕をずらした。
「アハハハ。だって、なんかすっごい実感がこもってるからさ。ヤステルも深窓の令嬢相手に片恋に身を焦がしたことがあるのかと思って」
からかい混じりに直ぐ上にある顔を見上げれば、ヤステルはばつが悪そうに視線を逸らした。
「あれ、ひょっとして図星だった？」
態とらしく明るい声を上げれば、
「なんだと！　リョウの癖に生意気だ。いっぱしの口利きやがって」
自分よりもずっと年下の少年（だとヤステルは思っている）から揶揄されたことが面白くなかったのか、首元に回された腕に一段と負荷が掛かって締め上げられる。
苦しくなったリョウは、ヤステルの男らしい太い腕をバシバシと叩いた。
「ヤステル、たんま、ストイ（ストップ）、待ってくれ」
「ヤステル、その辺にしておきなよ。みっともない。ていうか、リョウ、首に怪我してるだろう？」
仲介に入ったリヒターの言葉に、ヤステルはぎょっとして腕を解いた。

むせかえるように手を喉元に当てたリョウは、それでも楽しそうに笑っていた。

「うっわ、マジか。平気か、リョウ？」

外套の襟から覗く首元に白い包帯が巻かれていることに気が付いて、慌てて心配そうな顔をしたヤステルにリョウは大丈夫だとからりと笑った。

シビリークス三兄弟との一風変わったお茶会の後、シーリスの義兄で祈祷治癒を専門とする神殿の神官である講師のレヌートの所に寄って、毒消しとなる薬草をもらったお陰で、怪我はすっかり良くなっていた。傷口は完全に塞がっていた。包帯をしなくてもよかったのだが、今日は埃まみれになると思ったので、念の為に巻いていたのだ。

結局、昨日、ユルスナールはレヌートの所にまで付いて来て、養成所の講師用の準備室の戸口に応対に出たレヌートを吃驚させていた。シーリスとの繋がりがあるとはいえ、ユルスナールが、直接レヌートの元を訪ねることはまずないからだ。思わぬ軍人の登場に目を丸くしたレヌートに、リョウはシーリスを通じて世話になっているとだけ告げた。

突然の訪問の理由を尋ねられて、毒消しが欲しいということを正直に告げれば、レヌートは傷口が塞がり難くなる毒草【ヤード】が使われていたことに驚きを隠せなかったようだ。幾ら治安が余り良くない地域であったからと言って、単なる喧嘩のいざこざで、刃先に毒の仕込まれた刃物を持つ男たちにぶち当たるというのは、余程のことであるからだ。少なくとも、対峙する相手に対する明確な殺意があるということだ。

レヌートは治療をしながら何か考え込むように表情を硬くした。それは、いつも穏やかで柔和な笑みを欠かさない講師にしては珍しい表情だった。

あの後、ユルスナールは結局、学生寮の玄関まで付いて来た。少

し過保護かと思ったが、互いに忙しい身で上手く時間が合わなかった日が続いた為、態々見送る必要はないと表面上は口にしてみたものの、心の中では嬉しく思っていた。その気持ちを素直に出せない自分が、何だかもどかしくて歯痒くもあった。だが、これは自分の性分で中々改められそうにはない。

昨日、ユルスナールはリボンのことを一言も口にしなかった。それをほんの少しだけ、不可解に思った。

――――――お守りが欲しい。

ただ一言、そう言ってくれれば、この国の風習が分からないながらも、友人たちに聞いたりしてなんとか出来たと思うのだ。

それでも自分から何かを強請るのはユルスナールの性格上、憚られたのか。いや、そこまで控え目でもない気がするのだが。

あの一見冷酷そうに見える顔の内側で男が何を考えているのかは、よく分からなかった。

シーリスから渡されたものをユルスナールの腕に巻いた時も、リョウは、気恥ずかしさが勝ってよく男の顔を見ることは出来なかったが、そんな中でもユルスナールが嬉しさを表わすというよりも戸惑いのようなものを感じていたようにも見えた。それを敢えて気が付かぬ振りをしたのだ。

リョウは、せり上がってきそうになる何かを慌てて押し止めた。

そして、傍らでしきりに恐縮そうにしているヤステルの背中を思いっ切り叩いた。

突然のことに、ヤステルが顔を顰めた。

「気にするな、ヤステル。こんなの掠り傷だから」

――――――ほら、行こう。

こうして、リョウは鮮やかな笑みを浮かべると、止まっていた足を動かしたのだった。

辿りついた先、第一会場には既に出場する兵士たちが並んでいた。杭と荒縄で区切られた辺縁を多くの見物人が取り囲む。

「うっわ、始まる！」

駆け出したバリースに腕を引っ張られる形でリョウも土を蹴った。小柄な体格を生かしてか、隙間を上手く縫うようにバリースは器用に立ち並ぶ男たちの間をすり抜け前に出た。ヤステルもリヒターも慣れたように後を付いてきた。そして、見学場所を確保した。

会場の真ん中には、試合に出る五人の兵士たちが、正装をした兵士を真中に置いて、逆Vの字になるように（所謂真中を頂点にした山形ともいう）並んでいた。

中心の男はその手に旗を持っていた。リヒターが言うには、この試合の勝負を判定する審判とのことだった。将軍や第一線を退いたかつての歴戦の猛者、剣術師範等が交代で審判にあたるのだという。現役の者もいるが、多くは引退した兵士で、若かりし頃は、それこそ居並ぶ兵士たちを震え上がらせたという曰くつきの男たちだ。中には過去の大会の優勝者もいるのだとか。要するに対戦する両者が納得するだけのお歴々ということだ。

第七の方は、中心に近い所から団長のユルスナール、ブコバル、アナトーリィー、ロッソ、アッカの順で並んでいた。ヤルタとグントは補欠要員のようだ。

そして、鋭い目付きの初老の審判。服装から将軍ではないということで、ヤステルは王宮の剣術師範なのではないかと言っていた。因みに将軍たちの正装は、開催宣言をした西の将軍のように朱鷺色の外套（マント）と濃紺の詰襟の軍服なのだそうだ。

審判を挟んで向かって右側には同じように五人の男たちが並んでいた。バリースによれば対戦相手は、第四師団の選抜者たちだ。

第四師団は、王都の治安維持を主な任務とする部隊だ。団長と思しき男から居並ぶ男たちをざっと見て、その二番目の男の姿にリョウは目を見開いた。

浅黒い肌の体格の良い男。あれは、ユルスナールにリボンを渡した時に天幕の所で自分に圧し掛かってきた巨躯を誇る男だった。

「……あ」

思わず漏れた声が、大分距離のある相手に届くとは思えなかったが、何故かあの男と目が合って、うっそりと目を細められた。

捕食者の目だと思った。狙った獲物は逃さない。残忍な顔付きだ。薄い唇が吊り上がり、リョウは勢いよく顔を逸らした。

「リョウ？」

隣に並んだリヒターからそっと囁かれて、リョウは慌てて何でもないと口にした。

審判の男の合図で、居並ぶ十人の剣士たちが敬礼をした。

そして、一番最初に試合をする兵士が其々会場の真ん中に進み出ると、残りの兵士たちは其々両端に別れ、対峙するように横一列に並んだ。

第七の一番手はアッカだった。赤みがかった柔らかな髪が風に揺れる。その瞳は、よく晴れた夏の青空のように青かった。

生成り色（ベージュ）のシャツとズボンに防具として胸当て、肘当て、小手当て、肩当てをしていた。特に左側の肘当ての部分には、大きく迫り出したような形で鈍く光を反射する強固な板状（プレート）ものが取り付けられているようだった。板（プレート）のような楕円形の部分だけ、周囲の金属の部分とは異なる色をしていた。ヤステルの話では、あのような武具も術師が精製し磨いた硬い鉱石を利用して作られるものであるという。ヤステルの実家は、代々、武具を専門に加工する術師の家らしく、自分もその後を継ぐのだと以前に語っていたことを思い出した。

思えば、全てはあの青年（アッカ）との出会いから始まったのだ。この春からの一年を振り返って、リョウは思わず感慨深げに息を吐いた。

あの森の辺縁で負傷したアッカを拾ったことが、全ての始まりだった。あの時は、まさか自分を取り巻く環境がこんなにも変化する

とは露ほども思わなかった。こんなにまでこの国の軍部の人間と深い関わりを持つようになるとは。その中でも北の砦を任されている男と深い仲になるとは、思ってもみなかった。

あのままずっと森の片隅にある小屋で、セレブロや森の狼を始めとする獣たちとの穏やかで長閑な生活が続くと疑わなかった。出掛けると言っても偶にスフミ村のリューバの所に顔を出す位で、自分の世界は、とても閉じられたごく狭小な範囲で終わる筈だったのだ。

それが今ではどうだ。あの北の辺境である田舎から、この国の中心都市、王都にまで来ることになったのだ。

ガルーシャが残した一通の封書から始まった縁（えにし）。そこから徐々に広がっていた自分の新しい世界。人の繋がりとは、時として思わぬ土産（ギフト）をもたらしてくれる。その目には見えない緩やかで強固な鎖が生まれた過程をなんとも不思議なものだと思わざるを得なかった。

赤毛の青年は、すらりと腰に佩く剣を引き抜いた。腰を低く落とすと右手一本で剣を構えた。

対する第四の一番手は、明るい茶色の髪を後ろで一つに束ねた男だった。体格は互角。アッカは第七の中では体格が特に恵まれた方ではなかったが、それでもよく鍛えられたしなやかな肉体を持っていた。それは、日々の厳しい訓練の賜物でもあった。

間合いを測って静かに対峙する二人の剣士たちの手にした剣（つるぎ）の光る切先を見て、リョウは徐に口元に手を宛がっていた。

自分でも呆れたものだが、唐突に、本当に今更ながらに、この試合が【真剣】で行われる実戦のようなものだということに思い至ったのだ。

子供騙しの摸造刀でも刃を潰した練習用の剣でもない。あれは人の肉を切り裂き、骨を断つものだ。

不意に目の前に落ちて来た真実にリョウの背中は粟立った。足が震えそうになる。サァーと血の気が引いて行くのが分かった。

「なぁ、リヒター」
確認の為に小さく口にした声は、少し震えていた。
「ん？」
リヒターが目線だけでリョウを流し見た。リョウの視線は、二人の男たちが向け合う日光を反射する切先を見つめたままだ。
「あれって……本物だよな」
「本物？」
「……剣」
始めは何のことを訊かれたのか分からなかったリヒターも続いて出て来た単語に合点して見せた。
「ああ。そうだね」
突然、顔色を失くしたリョウを横目に見て、リヒターはからかうでもなく下できつく握り締めたリョウの拳に己が手でそっと触れた。心優しい穏やかな少年が何を思ったのか、その事に見当が付いたのだ。
リヒターは、穏やかに微笑むと小さく囁いた。
「大丈夫だよ。掠ることはあっても本当に殺し合いをするわけじゃない。剣を突いても寸止めだから」
その為に男たちは防具を身に着けているし、怪我をしても救護班がすぐ近くに仮設の救護所を設置しており、備えも万全だ。それにここに出てくる男たちは、皆、伊達に代表者として選ばれている訳ではない。日頃の厳しい鍛錬に耐え、身を賭して諸々の任務に当たっている兵士たちにとっては、この場に立つということは、そうやって培われてきた己の技量を披露する栄誉あることなのだ。

「よく見てごらん」
リヒターは静かに前方を見据えた。
「皆、自信に満ちた顔をしているだろう？　これから戦うことが嬉しくて仕方がないというようにね」
その声にリョウは、中央の二人とその両端に居並ぶ兵士たちを見

た。

男たちは、皆、いい顔をしていた。ふてぶてしく思える程の自信に満ちた立ち姿だ。恐れや恐怖は微塵も感じない。堂々と胸を張り、仲間の健闘を見守っている。

「だから、僕たちは彼らの晴れ舞台をちゃんと見てあげなくちゃ。そうだろ？」

諭す風でもなく淡々と密やかに囁かれて、リョウはその通りだと感じ入った。

なんて思い違いをしていたのだろう。

リョウは己の考えを恥入るように目を伏せた。

これが、この国の現実で、ここに暮らす男たちの流儀なのだ。それを理解せずして自分の一方的な見解で判断をするのは愚かしいことだ。失礼極まりないことだろう。

北の砦では、皆、血の滲むような訓練をしていた。そして、いかなる困難にも対処できるようにと過酷な集団生活の中で己を律しているのだ。

この場所で、代表者に選ばれて試合をするということは、そういった日頃の努力が認められるということでもあるのだ。

これは闘いだ。それでも戦（いくさ）ではない。そこを履き違えてはいけないと思った。

「そうだね。ありがとう、リヒター」

リョウは振り返ると小さく微笑んだ。

そして、再び視線を前に戻すと真剣な面持ちで、顔を真正面に向けた。

今年の春先に追った足の怪我も今ではすっかり完治しているはずだ。だが、一度、傷を負った身体は、相応の足枷（ハンデ）になっただろう。元々、アッカは強かったのかもしれないが、ここまで巻き返すのは、相当の努力を要したはずだ。

――――――頑張れ、アッカ。

リョウは、そっと心の中で一人、祈るような気持ちで声援を送っ

た。

開会宣言（後書き）

少し筆が進んだのでいつもとはイレギュラーな更新になりました。思ったより前に進みませんでした。次回こそ、闘いの模様をお伝えいたします。

２０１１／６／２０　誤字修正

団体戦　第一試合

「始め！」

審判の低い掛け声に、対峙する二人の男たちを囲む空気は、一気に張りつめたものになった。両者ともに剣を構えて、じりじりと相手の隙を窺う。

先に動いたのは、アッカの方だった。腕を軽く曲げ、地面と水平になるように剣先を前に向け、鋭い突きを繰り出した。相手の方は、その第一閃を流すように弾いた。

金属と金属のぶつかり合う鈍い音と刃同士が擦れる甲高い摩擦音が、繰り返し響く。それに長靴が地面を踏みしめ、蹴り上げる音が混じった。

間合いが徐々に詰まっていった。

アッカが繰り出した剣先を相手の男が大きく後方へ飛び退くことで避けた。そのまま向こうの間合いに入ったアッカに相手の男はその場からすかさず薙ぎ払うように剣を横に振るう。アッカは、その軌道を長剣の柄を両手で握り込み、垂直方向に立てることで受け止めた。

――――――――ガキン。

一際、高い金属音が周囲にこだました。衝撃を堪える為に踏み締めた長靴の踵が、土と砂を巻き込んでザリザリと鳴る。

そこから相手もすぐに水平にしていた剣を垂直方向に立て直し、至近距離で交差する剣同士の鍔迫り合いのようになった。

暫し、力の押し合いが続く。だが、両者の力は拮抗していたようで、そのままでは勝負が付かないと判断したのか、相手の方が力任せに押し込み、そこから再び飛び退くことで間合いを取り直した。

二人の兵士は、その場で相手をひたと見据えた。互いの呼吸から

相手に付け入る隙を探す。互いの視線は逸らさない。逸らした方が負けだ。

観客は、固唾を呑んで対戦の行方を見守っていた。

王都スタリーツァ街中の治安維持を一任されている第四師団の兵士たちは、その仕事柄、街の人々と接する機会も多く、その高潔で遅延のないしっかりとした仕事振りは、地元の人々の間では評価も高く、人気もあった。一部、ちょっとした例外もあるようではあったが（とりわけ、ここで自分の出番を待っている四番手の兵士のように）、それは第四師団を纏め上げる団長の人徳のなせる業でもあるのだろう。

――――――セイラム！

知り合いだろうか、観客の中からは相手の兵士の名前らしきものを呼ぶ声が細く長く響いた。

負けて欲しくない。そんな必死さが、掛けられた声には籠っていた。

それから、暫くは重みのある打ち合いが続いていた。剣と剣がぶつかる度に金属音と地面を蹴り上げる長靴の音と段々と荒くなる男たちの息遣いが聞こえる。

リョウは、剣のことは全く分からなかった。どちらの方が、技量が上なのかも見当が付かなかった。だが、アッカは押されてはいないと思った。互角、いや、時折、相手が思い描く軌道を僅かに外れる巧みな剣さばきに、相手の反応が若干遅れを取っているような気がした。

リョウは両手を身体の前で握り締めていた。指に自然と力が入る。アッカには勝って欲しい。先程、対戦者の名前を叫んだ人たちと同じ気持ちが、心の中を支配し始めていた。

相手が踏み込み、あっと思った時には、ギリギリの所で剣先がアッカの横顔を掠めていた。それでもアッカは落ち着いていた。そして、その動きは俊敏だった。

アッカは、直ぐに剣先を流すように弾くと一気に間合いを詰め、返す一刀を浴びせる。相手の兵士は、間にあわず体勢を崩したが、それをどうにか己が剣で受け止めた。だが、片足が後方に大きく下がり、身体の軸が傾いたことが命取りとなったようだ。

次の瞬間、相手の体が大きく開いた所に、アッカの方が素早く相手の首元に剣を突き付けていた。

――――――そこまで！

審判の鋭い声が上がり、手にしていた旗を上げた。

「勝負あり。第七、一本」

場の緊張が弛緩し、あちこちでワァァーと大きな歓声が上がった。

そこで漸く、リョウも詰めていた息を吐き出した。

アッカと対戦相手の兵士は姿勢を正すと一礼し、負けた方が後方へ下がって行った。そして、入れ替わるように今度は第四の方から次の対戦相手が前に進み出て来た。

再び、両者一礼をしてから二番目の対戦者は剣を引き抜き、間合いを取る。そして、審判の合図で試合が始まった。

団体戦の試合は、両師団から一名ずつを選抜し対戦した後、そこでの勝ちを点数にするのではなく、どちらか一方が先に五番目の大将を倒した方が、勝ちとされた。各師団共に上位にいる兵士たちは粒揃いであるので、団体戦に出場する個人の技量の差が圧倒的になる場合は余りないが、極論から言えば、最初の一人が勝ち続け五人と試合をし、それで勝者となる場合も有り得るのだ。まぁ、飛び抜けて強い者がいるならともかく、往々にして力は拮抗するものなので、一人勝ちという事態は過去の経験から見ても有り得なかった。

勝った方は勝った方で、すぐに次の選手（ましてや大体どこも一番手よりも技量が上と目されている兵士だ）を相手にしなくてはな

らないのだから大変だ。だが、実際の戦闘になった場合、疲れたからなどと悠長なことは言っていられない訳である。この試合は、兵士個人の忍耐と持久力も試されているのだ。

第四の二番手の若者の左腕には、深い緑色のリボンが揺れていた。

――――――ウルスラ、頑張れ！

男たちの野太い声に混じり、女たちの声援も聞こえて来た。

きっとこの会場の何処かで、深緑色をした瞳の若い娘が、その若者の雄姿を見守っていることだろう。神に祈りを捧げるような気持ちで。この表舞台には現れない所で、もう一つの物語が既に始まっているのかも知れない。

アッカは、この第二回戦で相手の兵士と引き分けとなった。

引き分けの場合は、そこで対戦者が共に入れ替わることになっていた。

「アッカ、お疲れ様！」

一礼し、後方へ下がる赤毛の青年にリョウは声を張り上げていた。

リョウが見学をしている場所からは大分、距離がある為、自分の声が届くかは分からなかったが、赤毛の青年は、小さく振り返ると先程までの張りつめた表情からは一転、いつもの優しい微笑を浮かべて、こちら側に小さく片手を振った。

周囲の観客は、下がって行く二人の兵士たちの健闘に野次と声援、そして惜しみない拍手を送った。

アッカが下がり、第七の方は二番手のロッソが前に出た。そして、間を置かずして第四の方からも三番手の兵士が出て来た。

第三回戦の始まりだ。

第四の兵士は周囲と比べても幾分、小柄な男だった。手にする剣と比べても線が細いように見える。だが、その動きは実に俊敏で、体格からくる力の差をその素早さで補っているようだった。そして、

繰り出される剣の動きも洗練されており、実に無駄の無いものだった。

序盤は、ロッソの方が押されがちに見えた。鋭く突き出される剣先を受け、防御の方に多く時間を削られていた。だが、相手の方も中々決定打となる一撃を入れることができない。そうするうちに後半から徐々に体力の差が出て来たようだった。

重みのある一刀を繰り出すロッソの一撃に相手の反応が少しずつ狂いを見せてゆく。相手の一撃を受け流すかに見せた所でロッソが一気に間合いを詰め、相手の剣を巻き込むように力で弾いた。次の瞬間には、相手の一振りがその手を離れ、地面に音を立てて落ちた。

そこで、審判の旗が上がった。ロッソの粘り強さが勝ちを引き寄せた形となった。

第四の兵士は悔しそうに歯がみして見せると落ちた剣を拾い、だが、すぐに表情を改めた。そして、一礼をすると会場を後方に下がった。

会場からは兵士の頑張りを称える拍手と声援が上がった。とりわけ、女性陣からは金切り声のような熱烈な声援が届いていた。女たちに人気のある兵士であったらしい。

そして、続いて第四の方からは四番手の男が出て来た。

巨躯を誇る男の登場に周囲の男たちが一斉に湧いた。

浅黒い肌に短く刈り上げた薄茶色の髪、その右目の下には頬桁のところに刺青のような紋様があった。何よりもこれまでの品行方正そうな清潔感のある兵士たちとはかなり趣が異なっていた。

「待ってました、ザイーク！」

「いいとこ見せろ！」

「ここで負けたらただじゃおかねぇぞ！　有り金つぎ込んだんだ。ぱぁになっちまう」

「男だ。ここで挽回しろ！」

観客の男たちの些か品に欠けると当時にかなり切実な願いの籠っ

た野次の類に対して、ザイークと呼ばれた兵士は、緩慢な動作で大きく片手を振り上げることで応えた。
それに応えるように観客の方も一斉に湧き立った。
そして、ゆっくりとした足取りで会場の真ん中に歩み出た。

男はロッソよりも一回りは大きかった。獰猛そうな笑みをその口元に刷いて、挑発するように相手を見下ろした。だが、ロッソは相手のそのような挑発には乗らなかった。
暫し、無言のまま睨み合いが続いた。業を煮やしたのか、間に入った審判が、試合を始める体勢に入るように両者を促した。
そして、第七と第四の四回戦、ロッソ対ザイークの試合が始まった。

結論から言えば、ロッソは、ザイークに負けた。ロッソは二戦続けての出場で相手よりも体力を消耗していたが、それでも果敢に相手に食らい付いていた。だが、そこには自ずと力量の差があったようだ。
剣と剣のぶつかる時の衝撃が、今までの比ではない位に大きかった。丸太のような太い腕から繰り出される重みのある一撃をロッソは時として流し、そして受けた。強烈な一打に低い声が上がる。だが、その中で、ほんの一瞬の気の緩みからか、身体を支える時の軸足の部分がずれてしまった。そこを一気に相手に踏み込まれる形になった。
己が剣を弾かれ、喉元に大剣の切先を突き付けられた時、ロッソは酷く悔しそうに相手を睨み上げていた。対するザイークが、余裕ある態度であったのが余計に内なる闘争心を刺激したのかもしれない。だが、そこはよく訓練された兵士だ。己の感情を表に出すことを良しとしない男たちは、取り乱すことを恥入るように、瞬時に表情を改めると一礼して、次の仲間に後を託すべく後方へ下がった。
その内側では、ここでの悔しさを糧に今後の鍛練に一段と熱が入る

ことになるに違いない。
第四のザイークが勝って、形勢逆転を狙おうとばかりに応援をしていた観客が一気に湧いた。そこに被せるように第七を贔屓している人々の声も負けじと上がっていた。

次に、第七からは三番手であるアナトーリィーが、前に出た。
アナトーリィーは、第七の中でも中堅どころの兵士である。北の砦では面倒見の良い兄貴分として後輩の兵士たちからは慕われていた。大きな図体に似合わず手先が器用で、繕い物が得意なのだとか。その事が関係しているのかは分からないが、アナトーリィーが使う剣は、押し出しの強い体格から想像するような力で押すというよりも技巧派だった。
続く第五回戦、アナトーリィーもいい所までいった。序盤は、かなり相手と互角に渡り合っていた。巧みな剣さばきで相手を時には翻弄していたようにも見えた。
剣がぶつかる度に火花が散りそうな程の強打音が響く。一撃を受けた時の衝撃は余程のものであるのだろう。踏ん張る時の気合の声が低く短く、金属同士がぶつかりあう音に混じった。
だが、やはり最終的には相手の方が上手であったらしい。後半、大きな体から繰り出される一撃を流しきれずにアナトーリィーが体勢を崩し、片膝を着いた。そこで、ザイークから振り上げられた一刀にリョウは思わず目を瞑ってしまった。
一際、高い金属音の後、間髪入れずに審判の制止の声が響いた。
恐る恐る目を開けば、上げられた旗が、第四の方を勝者として指示していた。そして、ザイークの剣は、片膝を着いたアナトーリィーの喉元に、対するアナトーリィーの切先は、相手の防具に覆われた腰に当てられていた。
勝負あったとばかりにあくどい感のある余裕のある笑みを浮かべて、ザイークが剣を引いた。アナトーリィーは無表情のまま、剣を引くと立ち上がり、審判と対戦者に対して一礼をして下がって行っ

た。
第四を応援していた観客が二戦続けての勝利に咆哮を上げた。

「すまん……」
心底悔しそうに奥歯を噛みしめた後、ぽつりと漏れたアナトーリィーの言葉にブコバルは、その自分と然程変わりのない大きな背中を擦れ違い様に軽く叩いた。
後は任せておけ。そんな意味合いが込められている。
多くの言葉はいらなかった。
アナトーリィーはよくやった。ただ対戦をした相手の方が一枚上手であったということなのだ。
「借りにゃぁ、きっちり利子付けて返してやるさ」
律儀なところのある男は、『すまん』などと謝罪の言葉を口にしたが、そのようなことは気にすることではないのだ。共に目指すものは同じ。この国の兵士の頂点だ。己が力を出し切って正々堂々と戦ったことに意義がある。同じ釜の飯を食べ、苦楽を共にした仲間の健闘を称えはしても、その結果を貶めたりすることは決してしなかった。負けを一番悔しく思っているのは、その本人であるからだ。
「ああ。頼んだぜ」
余裕の笑みを刷いた仲間に敗れた兵士は、小さな笑みを送った。
そして、第七からは四番手の対戦者が、再び湧き起こった多くの声援の中、次なる第六回戦に向かうべく、ゆっくりと舞台中央へ足を進めたのだった。

「よぉ、待ちくたびれたぜ」
大剣を肩に担ぎ、残忍な笑みを浮かべた大柄の男に、
「そいつは悪かったなぁ」
対する男も悪びれることなく挑発的に薄い唇の端を吊り上げると、

待ち構える男の元にゆっくりと歩み寄った。
この時をどんなにか首を長くして待ったことか。その想いは、相手も恐らく同じことであろう。
力では負けないという自負があった。共に昔から好敵手（ライバル）と見做されることが多かった。
この国、【スタルゴラド】の誇る軍部の中でも、とかく毛色の変わった扱いをされがちなブコバルであったが、この目の前の男、ザイークもそれに負けない位、色々と噂話の絶えない曰くつきの男であった。二人の男がこうして対峙すると軍部の兵士たちの正式な試合というよりもゴロツキ同士の諍い、又は喧嘩のようにも見えるのだから不思議なものだ。
まぁ、当の本人たちはそんなことはこれっぽっちも気にしてはいないのだろうが。
だが、二人は共にこの国を代表する兵士である。上下関係の厳しい軍律の中で揉まれてきた二人にも、最低限の礼儀は心得として染み付いている筈だった。
ブコバルは中央まで来ると審判の男に軽く頭を下げた。
「よろしく頼みます」
かつて扱いた弟子の姿に審判の男は『ふん』と尊大な態度で鼻を鳴らしたが、次の瞬間、薄らとその冷徹そうな口元に笑みを刷くと、
「洟垂れ小僧どものお手並み拝見としようか」
そんなことを言い放った。
「望むところだ」
ブコバルは腰に刷いた長剣をすらりと引き抜くと、相手との間合いを取った。
「久し振りに腕が鳴るぜ」
ザイークから漏れた言葉にブコバルも同意をするように男らしい笑みを浮かべた。

ブコバル対ザイークの第六回戦は、これまでとは些か趣が異なった。

とにかく、周囲の観客たちの野次がすごかった。途中、景気付けに一杯、引っ掛けて来たのではないかというような男たちの野太いだみ声が、あちらこちらから上がっていた。急に場末の酒場が客ごと移動してきたような感じだった。

約四年前にユルスナールと共に北の砦への赴任が決まって以来、ブコバルも王都に顔を出す機会は随分と減った訳だが、毎年開催されているこの武芸大会の常連者であることが、やはり起因しているのだろう。集まった観客たちの間では、ブコバルはその名前と顔が広く知られているようだった。

この二人の組み合わせには、周囲の野次を寧ろ喜び、嬉々として受け入れているような不思議な空気があった。それが余計に周りの熱気を集めているようだった。

第七の中でも剣でブコバルの相手になるのはユルスナールぐらいなものだった。シーリスともそこそこやりあえるのだろうが、如何せん、シーリスの方がブコバルの相手を嫌がるものだから、ブコバルの中では日々の訓練に対して、常に物足りなさというか、ある種の欲求不満のようなものを感じていたのだ。

これまで大きな戦を経験している訳ではない。だが、二十数年前の隣国と大戦は、完全に終結を迎えた訳ではなく、今でも各地で小競り合いのようなものが起きていた。なので実戦経験はある。命を懸けた危険と隣り合わせの遣り取りも間々あることだった。

ブコバル自身、人を斬ったことも殺めたこともあった。それが、任務であり、任務完遂の為にはそれが正しい道であることを信じていたからだ。

絶えず、【死】は隣り合わせにあった。戦いの場では一瞬の気の緩みが命取りになる。極限の緊張状態は、これまでにそれなりに経験をしていた。

この場所では、その時に限りなく近い緊張感が疑似体験出来た。

ブコバルは、この高揚感が昔から堪らない程に好きだった。全身の血が体中を駆け巡る。剣と剣がぶつかる一瞬、神経が研ぎ澄まされた一瞬には、快感すら覚える程だった。男ならば、誰しもが持ち得る危ういまでの残虐性と闘争心、そこに付加する肉体の痛みまでもが、全神経を高ぶらせ、陶酔の世界に己を誘(いざな)った。

これは、神官たちが神殿で祈りを捧げ、神のお告げを聞く時のような一時的な精神離脱状態(トランス)に近いかもしれない。意識と魂と肉体が、辛うじて一本の細い糸で繋がっている。そんなギリギリな綱渡り的状態が、ブコバルの中では快感として変換されていた。

それは自分のみならず、この目の前にいる右目の下に刺青を彫った男もそうなのだろう。

ユルスナールのように何かを守る為、その大義の為に剣を振るう者もいるが、ブコバルの場合は、そういった精神の崇高さよりは、少し外れた所にその意味を見出していた。

国の為、仲間の為、愛する人の為。人がこの国で兵士となりその手に剣を持つ理由は様々だ。勿論、ブコバルの中にもそのような気持ちはあったが、それが第一義ではなかった。その点、ブコバルは利他的であると同時にかなり利己的でもあった。一昔前なら、戦場でこそ、その持ち味を遺憾なく発揮するような男だろう。

そして、この場は、唯一、公に認められた、心置きなく思う存分相手と剣を交えることの出来る機会であるのだ。北の砦で発散しきれていない日頃の鬱憤を爆発させることの出来るまたとない機会でもあった。

それは恐らく向こうも同じだろう。対峙する相手からも同じように抑え切れない高揚感と内なる興奮が伝わってくるのが、ブコバルには分かった。

「ちったぁ、ものになってんだろうな？　おい」

挑発的に吊り上がる薄くて幅の広い唇。うっそりと細められた薄

い灰色の瞳に、ザイークもこの状況を自分と同じくらい待ち望み、そして楽しんでいることが分かった。準備万端といつでも飛びかからんばかりに目をギラつかせて、その一瞬を待ち構えている獣のようだ。

「ハッ、そっちこそ、途中でへばんねぇで、少しは楽しませてくれよ？」

視界の隅でかつての師匠でもあった審判が、旗を上げた。その瞬間を横目で確認しながら、ブコバルは嬉々として土を蹴った。

「なんか……ブコバル、すごく生き生きしてる？」

これまでとはかなり変化を見せた会場内の空気に、リョウの口からは小さな呟きが漏れていた。

「うわ……すげぇ……」

その隣でバリースが感極まったように己が拳をきつく握り締めていた。

周囲をひしめく群衆が集うこの場に飲み込まれるのではなく、この場そのものがあの二人の勢いに飲み込まれている。満を持して野に放たれた野生の獣のように伸び伸びと大きな剣を振るう様は、実に鮮やかで、生き生きと輝いて見えた。心の底からこの勝負を楽しんでいるということが、会場でぶつかり合う男たちの大きな体全体から伝わってきていた。ここまで来るとその剣が【真剣】であるとか、怪我をするのではないかというような心配は、最早、リョウの中では感じなくなってきていた。それ以上に目の前で繰り広げられている剥き出しの力と力のぶつかり合いに夢中になっていた。

――――――反則技の多いブコバルですが、恐らく、一番、実戦向きでしょうね。

今年の春先に北の砦で耳にしたシーリスの台詞が、不意にリョウ

の頭を過った。
　相手のザイークと呼ばれていたあの男も随分と楽しそうだ。大柄な二人が繰り出す剣さばきは、ぶつかると火花が散るのではないかと思えるほどに端から見ていても強烈なもので、剣と剣がぶつかるというよりも、大きな肉体同士がぶつかるというような錯覚を覚えた。

　ここで再び、立ち会う二人に注目をしてみよう。
　暫く打ち合いを続けていると徐にザイークが口を開いた。
「そろそろ身体が解れてきたかよ？」
「ああ。十分だろ」
　これまでは慣らしの準備体操のようなものであったらしい。
　ブコバルの言葉に、ザイークがとある提案をした。真剣勝負を始める前のお約束のようなものだ。
「俺が勝ったら、お前んとこの【玩具（ペット）】を貸せ」
「ああ？　なんだそりゃぁ？」
　打ち込まれた剣を弾きながら、ブコバルが怪訝そうな声を張り上げた。
　相手が訳の分からないことを吹っ掛けてくるのは今に始まったことではなかったが、ブコバルには突拍子もないことのように聞こえた。
「お前んとこでチョロチョロしてんのがいるじゃねぇか。【チョールナヤ（黒い）・コーシェチカ（子猫ちゃん）】がよぉ」
　ブコバルはそこで相手が何を言わんとしているかを理解した。
　要するに控室の天幕の所で顔を出したリョウのことを言っているのだろう。どの面下げて【コーシェチカ（子猫ちゃん）】などと口にするのか。ブコバルは全身に鳥肌が立ちそうになった。そんなのを借りて、一体、何をするつもりなのか。考えるのもおぞましい。
「ああ？　お前にそんな趣味があるなんて知らなかったぜ。【コーシェチカ（子猫）】を愛でるっつうタマじゃねぇだろがよ」

「こう見えて俺は動物好きなんだよ」
ニヤリとあくどい感のある笑みを浮かべたザイークに、ブコバルは心底嫌そうな顔をした。ザイークのような男が、何かを可愛がる様など天と地がひっくり返っても想像できそうになかった。
「そいつぁ、無理だな」
ブコバルが、気合十分、大きく剣を横に薙ぎ払うと、ザイークはその巨体に似合わず、思いの外の俊敏さで間合いを取って飛び退いた。
「なんでだよ？　ケチくせぇな。ちょっとぐれぇいいだろう？」
ザイークが絡むように踏み込んできた。
重みのある一撃を真正面から受けながら、ブコバルが相手のしつこさに嫌そうな顔をした。
「あー、そいつは俺の一存じゃぁ決められねぇ」
リョウを賭けにザイークと試合をしたなんてことがばれたら、それこそ若干一名に本気で殺されそうだ。こんな下らないことであらぬ恨みを買いたくはなかった。
その言葉にザイークの顔にこれまで以上に残忍な笑みが浮かんだ。
当人としては機嫌よく、よい思い付きに心が躍った末の感情の発露であった訳だが、何故かそれは傍目には兇悪な類なものに見えてしまうから不思議だった。そういう意味では、ザイークという男は、人生でほんの少しだけ損をしているのかもしれない。
「へへ。そうかい。なら、おめぇをぶちのめして、序でにそっちの頭（かしら）もねじ伏せりゃぁ、文句はねぇ訳だ」
しつこく食い下がる相手をブコバルは一蹴した。
「ほざけ、このどアホが。そう易々とやられてたまるかよ。寝言は寝てからにしろ！」
口慣らしも済んだ所で、
「じゃぁ、そろそろ本気出して行くか？」
「ああ」

二人の男たちの碌でもない会話は、幸いにして観客の方には伝わっていなかった。遠目には、何やら声を掛け合っているようにも見えたが、距離があればそれは呪詛の類を気合として発しているようにも取れなくなかったからだ。

だが、それらを届く範囲で聞かされていた審判は、いつまでたってもガキ臭い所の消えない男たちの莫迦らしい遣り取りに内心、呆れの溜息を吐きながらも、この場を固唾を呑んで見守っている観客たちの手前、無表情を通していた。

――――――じゃれあいはそこまでにしておけ。

そのような意味合いを込めて、審判がギロリと二人の対戦者を睨みつけたように思えた。

それが合図であったのかは分からない。だが、突如として咆哮のような雄叫びが中央から上がった。

ブコバルとザイークの顔付きが、一瞬にして変化を見せ、獲物を狙う捕食者の目付きに変わった。この場が、疑似的な生と死を懸けた究極の極限状態に陥ったように思えた。

そして、一気に間合いを詰め、懐に飛び込んだのはブコバルだった。力では互角、いや、ややもすればブコバルの方が劣るだろう。だが、ブコバルの肉体は野性の獣のようなしなやかな柔軟性を持っていた。

打ち込み、ギリギリの所で剣を引く。そして身体を素早く反転させると間髪入れずに踏み込んだ。

そして、次の瞬間、己が剣の切先を斜め背後から男の太い首元に突き付けていた。

――――――そこまで！

審判の声が旗と共に上がった。

「勝負あり」

「フゥーラァァァァ！」

その瞬間、獣のようにブコバルが吠えた。

――――――ワァァァァァ！！

杭と荒縄で区切られた即席の会場を取り囲む群衆からは、これまでの比ではない程の歓声と野次が湧き立つように上がった。

「チクショウ！」

思わず悪態を吐いたが、剣を納めて振り返ったザイークは、満更でもないというような晴れやかな顔をしていた。互いに全力を出し切った結果ということなのだろう。額際に流れる汗が、潔くも光って見えた。

「楽しかったぜ。相棒」

大歓声の轟く中、ゆっくりと手を差し出したブコバルに、ザイークは、パンと打ち鳴らすように己が掌を叩き付けた。

そしてその口元に薄らと笑みを刷いた。

「今度は、負けねぇ。首洗って待っとけよ」

「ああ。望むところだ」

そして、正々堂々と戦いを果たした両者は、力一杯その拳を握り締め、握手を交わしたのだった。

その後、ある種、異様な興奮に包まれる中、ブコバルと第四師団の最終相手、団長との試合である第七回戦が行われた。

第四の団長はかなり人気があるのか、あちこちで声援が響き渡った。その中でも『頼んだぞ！』とか『頼むー！』といったどこか悲痛すらある男たちのだみ声（きっと団体戦で第四に賭けた男たちなのだろう）が、この勝負の行方と心中しかねない勢いで最後の声援を送っていた。

「ひょっとしたら、ここで決まるかもな」

様々な野次と歓声がうるさい位に湧き起こる中、リョウの後ろにいたヤステルがそんなことを言った。

「え、でも、団長って、さっきの身体の大きな兵士よりも強いんだろ？」

リョウは振り返って、ヤステルを仰ぎ見た。
剣の腕が強くなければ団長にはなれない。ついこの間、街中で第五のウテナとイリヤがそのような事を言っていたのだ。それに、これまでの流れから、相手もかなりの腕前で、さぞかし熾烈な立ち会いが行われるのだろうと思っていたのだが、
「あー、なんてーの？　多分、あの人たちはなんか別格な気がするんだよな。第五とか第一だったら、団長まで引っ張り出されるんだろうけど……」
そう言ってヤステルはブコバルが立つ前方を見つめながら言葉尻を濁した。
ブコバルの方が第四の団長よりも強い。それは、過去の試合と対戦成績を見てきたヤステルなりの分析のようなものなのだろう。きっとヤステルの頭の中には、兵士たちの番付のようなものが独自であるのかもしれない。
「まぁ、見てのお楽しみだよ。ほら始まる」
怪訝そうに後ろを振り返っていたリョウを隣からリヒターが突いた。そこで、リョウも再び顔を正面に向け直した。

第四の団長は、ザイーク以外の系統を引き続ぐかのように凛とした立ち姿の立派な風格を持つ男だった。きびきびとした動作の一つ一つが、丁寧で品があった。茶色の真っ直ぐな髪を短く刈り、斜めに分けて横に流していた。見るからに真面目で堅物といった印象を受ける正統派な美丈夫だろう。
「よっ、待ってました、隊長！」
場所柄、周辺警備や通常の仕事の合間を縫って駆けつけた第四所属と思われる兵士の集団が直ぐ近くにあった。兵士たちは、中で戦っている出場者たちと同じ黄色の腕章をその左腕に巻いていた。
「隊長、頼んだぜぇー！」
仲間内からの声援に第四の団長は慣れた仕草で片手を上げて応え

ていた。その端正な顔立ちに小さく笑みが浮かべば、どこからともなくキャーというような女性たちの黄色い悲鳴が上がっていた。

度重なる熱戦に場が温まり、観客たちの盛り上がり（ヴォルテージ）も最高潮に達しているからなのだろうが、剣士たちの一挙手一投足がもたらす周囲の反応は、見ていて面白かった。

リョウたちが見学をしていた場所の直ぐ近くにも第四の兵士がいて、大きな声援を送っていた。それを目の当たりにしたリョウは、大っぴらに声を上げることを控えた。

第七回戦の結果は、ヤステルの予想通り、ブコバルの勝ちだった。第四の団長も実に惜しかった。いや、ずぶの素人であるリョウから見れば、ブコバルとは互角のように思えたのだが、最後の最後で、ブコバルの方がほんの一瞬、動きが早かったようなのだ。

第四の団長の動きは実に洗練されていた。まるでお手本となる型を見ているような気分だった。だが、洗練された技よりも野性味溢れる実戦派の方が勝ったということなのだろう。リョウが、気が付いた時には、ブコバルの剣の切先が団長のすらりとした喉元に突き付けられていた。

審判が高らかに試合の終了を告げた。

歓声と落胆に似たどよめきが、色々な箇所から同時多発的に渦巻いて突発的な花火のように立ち上っていた。

最後、ブコバルは第四の団長と握手を交わした。団長は負けたというのに何故か晴れやかな笑顔を見せていた。にこやかに言葉を交わしているようだ。そして、ブコバルの腕を取ると、高らかにそれを天へと持ち上げた。

それは、勝者を称える仕草だった。

それを見た観客たちは、壮絶な戦いを繰り広げた男たちに惜しみないと拍手と賛辞を送った。リョウたちも同じように大きな拍手を送っていた。

「がぁぁぁぁぁ」
直ぐ近くにいた第四所属の兵士たちが落胆の声を出していた。
「肉ぅぅぅ～」
「計画がパァだな」
初戦で一勝をしたら、肉料理を奢る。内輪でそのような賭けでもしていたのだろうか。それとも上位入賞者か優勝者には肉が振る舞われるとか。そのような褒美があったりするのだろうか。
男たちの会話から、釣られるようにしてそのようなことを想像した。
「でも、しゃーないっしょ。相手が第七じゃ」
「まぁな」
「てか、お前に言われてもなぁ」
仲間内でも剣の腕はいまいちなのか、慰めるように肩を叩いた一人の兵士が、逆に周りから小突かれていた。
見る方も参加する方も、この武芸大会の一戦、一戦には悲喜交々の様々な情景（ドラマ）があるようだ。
再び、開始の時のように会場の真ん中で審判を中心に整列を始めた兵士たちに、周りを取り囲んでいた観客たちは、一際、盛大な拍手を送った。

終わってみれば、結局、第一試合ではユルスナールの出番はなかった。まだまだ先が長いには違いないのだが、それを少しだけ残念に思った。
初戦は、ブコバルが美味しい所を攫っていったようだ。だが、まぁそれも見る側の醍醐味であるのだろう。意気揚々と晴れやかな顔をしている青灰色の瞳の男を見て、リョウはそんなことを思った。
男たちの熱き戦いはまだ始まったばかりだ。

団体戦　第一試合（後書き）

団体戦初戦の模様をお伝えいたしました。いかがだったでしょうか。途中、視点が転々として読みにくかったかもしれません。正直、苦戦しました。今回は初戦ということで、ブコバルにスポットライトを当ててみました。ユルスナールの登場を心待ちにしていた方には申し訳ありませんでした。ですが武芸大会はまだまだ始まったばかり、出番はこの後にきっとありますのでご心配なく。それではまた次回、お会いいたしましょう。ありがとうございました。

モザイクの輪郭（前書き）

風変わりなお茶会第二弾というところでしょうか。それではどうぞ。

モザイクの輪郭

室内を大きく切り取るように開け放たれた窓からは、遠く切れ切れに湧き上がる人々の歓声が、そよぐ風に乗って聞こえてきていた。この場所は、術師養成所の講師陣が居を構える研究室が並ぶ棟の一角である。その三階の一番隅に位置するとある一室に三人の男たちが集まっていた。

来客用のソファーに腰を下ろしているのは、小柄な老人だった。豊かな頭髪には多くの白いものが混じっている。たっぷりとした長い外套を羽織り、ふさふさとした眉毛は、顔の輪郭からはみ出さんばかりの勢いで控え目な自己主張をしていた。長い年月を経て細かい皺が刻まれた顔のその顎の部分には、疎らに長い髭が生えていた。

そして、もう一人は、この部屋の主である男だ。神殿に仕える神官であることを表わす簡素な白い上下に淡い紫色の帯を巻いていた。その上から防寒用として室内用の茶色い襟なしの長い上着を身に着けていた。

そして、最後の一人は、軍部の詰襟に身を包んだ男だった。男が身に着けている隊服は、正装ではなく略式のもので、明るい光沢のある灰色の生地は同じだが、装飾の類が一切省かれているものだった。辛うじて詰襟の左側の部分に男の所属を表わす赤い色の石が徽章として付いていた。それは、軍部の第三師団幹部であることを表わす職章でもあった。

男は、軍部の兵士の例に漏れず、その腰に一振りの長剣をぶら下げてはいたが、それが抜かれることは滅多に無かった。剣を佩いていなければ、そのまま宮殿に仕える文官のようにも見えるだろう。

三人分のお茶を淹れたこの部屋の主であるレヌート・ザガーシュ

ビリは、珍しく、その柔和な面立ちに困惑の色を隠すことなく、偶然にもこの部屋を訪れることになった二人の客人を流し見た。

「どうぞ」

「おお。これは忝い（かたじけな）」

差し出された湯気の立ち上るカップに無類のお茶好きである老講師・イオータが嬉々として手を伸ばした。

イオータは中身を一口啜ると満足そうにその目を細めた。

同じ養成所で教鞭を振るう講師として、イオータの訪問は珍しくはあったが、それでも理解できないものではなかった。だが、まぁ、大抵は、養成所内を擦れ違い様に挨拶を交わし、ごく稀に世間話をする程度のもので、相手が鉱石を主に研究する宮殿お抱えの地質学者であることもそうだが、神殿の神官であるレヌートとはその日常の行動範囲も趣味や興味を惹かれる対象も全く違っていたので、この養成所内でも変わり者と目されている老講師が態々自分の研究室を訪ねてくる目的をレヌートは想像することが出来なかった。

お茶を進めながら、レヌートはもう一人の客人（と呼ぶには些か引っ掛かりを覚えざるを得なかったが、それ以外の言葉が生憎思い浮かばなかったのでそう呼ぶことにする）を流し見た。

線の細い、男にしては些か繊細な面立ちをした人物だ。略式とはいえ、軍部の詰襟を身に着けていなかったら、同僚の神官としても問題なく通用してしまうような落ち着いた印象を与えなくもない。

だが、レヌートの耳にもこの男に関する評判はそれなりに入ってきていて、そこから形成されたその者の輪郭（イメージ）はおぼろげながらも保持していた。

しかしながら、元々第七師団の副団長を拝命している義弟（シーリス）以外、軍人との交流を持たないレヌートの所に、この男が態々訪ねてくる理由もレヌートには思い浮かばなかった。

片や風変わりな地質学者。片や優しい面立ちの仮面の下に強かさを隠した癖のある軍人。そして、神官であるレヌート。一つ所に会

しているその組み合わせは、端から見ても多くの謎を秘めているように見えるだろう。

各人を其々一つの円と見做し、その三つの円が重なるところには、何があるのか。それは、やがて明らかになる。

大きな歓声の切れ端が、窓の所で揺れる薄い日除(カーテン)けに反射する。ここから少し離れた所にある宮殿前広場では、毎年恒例の開会式が行われているのだろう。複雑に鳴り響く独特な鐘の旋律にいよいよ待ちに待った戦いの火蓋が切って落とされたことが知れた。

「始まったようですな」

ゆっくりと窓の外に視線を走らせながら、イオータがのんびりと口にした。

「そのようですね」

レヌートも静かに合槌を打った。

今日は、軍部主催の武芸大会の開催日だった。この冬一番の街を挙げてのお祭りだった。開催期間中の三日間は、いつも賑やかで人馬の往来の絶えない大通りも日中は人通りが閑散となる程だ。沢山の人々が、大会が開かれる宮殿前広場へ手弁当持参で見物に押し寄せた。

夜は夜で昼間の大会の話を酒の肴に男たちが杯を酌み交わし、団体戦ではどこが優勝するのか、個人戦では誰が上位に食い込むのか、皆、いっぱしの予想家気取り、俄か軍人評論家の気分で己が持論をぶつけあった。

この三日間は、養成所の授業も休みになっていた。国の中でも大きな影響力を持つ軍部が大々的に主催をするということもあるが、養成所の生徒たちはその多くが男子生徒である為、講義を開いても大会の行方が気になって、てんで授業に身が入らない為である。

ということで、この期間中は、教授する側の講師陣は、お役御免とばかりに暇となるのだった。皆、其々別に本職を持つ者たちでも

あるので、これ幸いと束の間の休息を取る者もあり、はたまた同じように男としての秘めた血が騒ぐ者は、観客の一人として試合会場で大声を張り上げることで日頃の鬱憤を晴らしたりもした。

「このような所にいてよろしいのか？」

レヌートは自分の分のお茶に口を付けながら尤もらしい問いを発して、対面のソファーにゆったりと足を組む気品ある男を見た。

レヌートの記憶が正しければ、この男は軍部の人間であるばかりでなく、第三師団の師団長という肩書を持っている筈だった。第三の代表者が、このような所で油を売っていてよいのか。今更ながらのことを心配したのだが、対する客人は男にしてはやけに鮮やかと思われる笑みを浮かべて、ゆっくりとお茶に口を付けた。

「ああ。問題ありませんよ。私はこちらの方はからっきしですからね」

そう言って細くて長い指先を小さく縦に振って、言わんとすること――要するに剣の腕前のことだ――を仄めかした。

「うちの所は副団長が張り切っていますからね。適材適所というものですよ」

だが、代表者としてその部下たちの雄姿を傍らで見物しなくてもよいのかとレヌートは思ったのだが、そのことは敢えてこの場では触れなかった。

「それにしても一体、どんな風の吹き回しですかな？」

イオータが、喉の奥を小さく鳴らして、からかうように隣に座る第三師団・団長ゲオルグ・インノケンティを見遣った。

レヌートはこの度の訪問の用件をどうやって切り出そうかと思っていたのだが、イオータのその台詞に手間が省けた形となった。

「宮殿で面白い話を小耳に挟んだものですからね」

ゲオルグは、そう言うと意味深に含み笑いをした。

艶やかな笑みを浮かべたゲオルグの対面で、レヌートは控え目に首を傾げた。

「面白い話……ですか」
「ええ」
それが、ここを訪ねて来ることとどのような関係があるのだろうか。
「宮殿ということは、私の管轄外ですね」
養成所の講師をする以外は、専ら神殿か、その管轄下に置かれている街中の治療院に顔を出すくらいとその行動範囲が限られているレヌートにしてみれば、宮殿での話は自分とは関わりが無いように思えた。
ということは、イオータを探していて、偶々ここにかち合ったというのだろうか。そう思ってゲオルグを見れば、その色素の薄い明るい灰色の瞳が、小さく煌めいたように思えた。
「いえ、ザガーシュビリ殿にも関わりのあることですよ」
「私にも……ですか？」
「はい」
尚も首を傾げる落ち着いた物腰の壮齢の神官に勿体ぶるような素振りを見せてから、ゲオルグは徐に切り出した。
「ザガーシュビリ殿が、今、後見人として面倒をみている生徒が居りますでしょう？」
――――――大変優秀だと評判の。
そこでゲオルグは、レヌートの反応を窺うように言葉を切った。
「その子に関することで、少しお聞きしたいことがありましてね」
「……リョウのことか？」
少しの間を置いて、レヌートの口から出た声は、予想よりも硬い響きを持っていた。
無言のまま、ゲオルグは相手の問い掛けに対して肯定をするようにすっと目を細めた。
室内の空気に緊張のようなものが走った気がした。
レヌートが今現在、面倒を見ている生徒というのは、一人しかいない。義弟を仲立ちにその身を引き受けた少し風変わりな空気を持

つ人物だった。
その子にこの男が一体何の用があるというのだろう。
「ふむ」
それまで沈黙を守っていたイオータが不意に間に入った。
「それは、この間の会議の件ですかな？」
そう言って、隣に座るゲオルグを流し見た。
怪訝そうな視線を寄越したこの部屋の主に、ゲオルグの発言に思い当たる節のあったイオータが、昨日、リョウを伴って宮殿内の会議に参加したことを明かした。それは、鉱物資源と鉱山開発を行っている鉱脈の存続の是非を問う調査会の一幕で、そこで試験的に採掘されていた鉱石の原石をリョウに加工させたのだとイオータは語った。イオータとしては、自分の講義を選択した生徒に対する修了試験の意味合いと実益を兼ねていたらしい。
「あの子は、鉱石処理の能力も発現しているのですね？」
レヌートが専門とする【祈祷治癒】の分野の他に薬草学一般の知識を得る為の講義を幾つか選択していたことは聞き及んでいたが、その中にイオータが教授をする【鉱石処理】の分野が含まれているとは思わなかった。
「そうじゃな。儂としても教えがいのある生徒じゃわい」
「成る程」
イオータの説明にゲオルグは、何かを考えるように目を伏せた。
ゲオルグが小耳に挟んだ興味深い話というのは、イオータが宮殿内に弟子を連れてとある会議に参加したということだった。まだ年若いどこの者とも知れぬ少年を重要な会議の席に同席させたということで快く思わない者もいたというようなことだった。だが、それと同時にそれだけイオータが見込んだ人物が現れたということで、珍しいこともあるものだと半ば奇異の目で見られたりもしたようだ。
そして、その者は一風変わった顔立ちをしていたということで中には警戒心をもった者もいたようだ。
「それでは、リョウはイオータ殿の目から見ても、かなり優秀な部

類に入る生徒ということなのですね？」
　確認の為に言葉を重ねれば、
「そうじゃな」
　地質学者は、小さく頷いて見せた。
「それよりもお前さんは、あの子を知っておったのか？」
「ええ。こちらで何度か言葉を交わしています」
「相変わらず耳の早い男だ」
「お褒めに預かり恐縮です」
「褒めてはおらんわ」
　飄々と嘯いた男にイオータは小さく鼻を鳴らしたが、
「おや、そうですか」
　相手はまるで気にも掛けていないように柔らかく微笑んだ。
　それで、口慣らしが済んだらしかった。

――――――――単刀直入にお聞きします。
　そう前置きをしてから、ゲオルグはイオータとレヌートを静かに見つめた。
「リョウは、ガルーシャ・マライの縁ではありませんか？」
　それは、現時点でゲオルグが弾き出した一つの仮定だった。それを確かめるべく、この場所に訪いを入れたのだ。
　これまで独自に集めた様々な情報を再び精査して改めてみれば、点と点でしかなかった切れ切れの小さな独立した断片が、何らかの直線を作り出していることに気が付いたのだ。
　北の辺境にある広大な森の片隅に隠居を決め込んでいたガルーシャ・マライ。その男の影に寄り添うようにして、突如として現れた一人の少年の存在。黒という色彩。異国風の顔立ち。そして【プラミィーシュレ】で追っていたガルーシャの弟子だとされる人物の足跡。そして、【エリセーエフスカヤ】に派遣していた女の情報。これら全てものが、一つの大元から派生していると考えるのが、妥当

だった。

不意を突くような問い掛けに、広い室内に暫し沈黙が落ちた。

「リョウが……ガルーシャ・マライの……縁？」

驚きに目を見開いたレヌートの横で、

「それを知ってどうなさるお積りですかな？」

これまでの飄々とした口振りからは一転、イオータが真面目な顔をして、その発言者を静かに見つめていた。

真摯すらある灰色の瞳は、今も濁らずに深淵なる輝きを宿している。言葉の裏に隠された真実を暴きだす眼差し。イオータの瞳は、誤魔化しを許さなかった。

ゲオルグは、観念したように小さく息を吐き出すと、ほんの少しだけ口角を上げた。

「個人的な興味と言ってしまえば、それに尽きるのでしょうが」

そう言って、珍しく困惑気味に苦笑を滲ませた。それは対人関係に置いて、常に腹の探り合いを優先し、己が手の内を簡単に明かさない策士の男にしては珍しい反応だった。

「この春、『ガルーシャ・マライが旅立った』と風の噂に聞きました」

それは、ゲオルグが長を務める第三師団の伝令の獣たち経由で聞きだした情報を分析し、集めた上で導き出した一つの結論だった。

稀代の術師と謳われた謎の多い男の去就が宮殿内で取り沙汰され始めたのは、今年の夏の終わりから秋の初めの頃だった。

これまで、あの男が遠く離れた北の辺境に暮らしているというのは、宮殿内でも周知の事実であったが、あの男が隠居を決め込んだのは、今から十数年以上も前のことで、それ以来、ガルーシャ・マライの名が、表だって人々の間に出て来ることはなかった。宮殿内の人々の記憶には、既にその男の名前は、忘却に近い所にあったのだ。その一方、養成所の中では、その昔、教鞭を取っていたガルー

シャ・マライを呼び戻そうと画策する動きもこれまでに何度もあったようだが、いつも険もほろろに突っぱねられて、失敗に終わっているとのことだった。

同じ術師として、ゲオルグは前々からガルーシャ・マライに興味があった。今回も降って湧いたような宮殿内でのざわつきにあの男がどのような反応を返すのかを気に掛けていたのだ。

そして、叶うことならば、今一度、あの男と言葉を交わしてみたいと思っていた。あの男の目に今、この国はどのように映っているのか。この世界をどのように見ているのか。それを聞いてみたいと思っていた。

今でもある一定の年齢に達している術師や宮殿内の官吏、貴族たちの間では、ガルーシャ・マライという男の存在は、ある種の伝説のようなものとして生きていた。

ゲオルグの記憶の中にあるガルーシャ・マライの姿は、その昔、術師養成所で講師として教鞭を振るっていた時のものだった。あの頃のゲオルグは、まだ幼く、ガルーシャ・マライという男の本当の凄さというものをこれっぽっちも理解していなかった。隣で机を並べたその他大勢の生徒たちと同じようにガルーシャ・マライに対する評価は、『どこか近づき難い偏屈で変わった男』というものだった。

あの時の自分はなんと勿体ないことをしていたのだろう。もっと積極的にあの講師と関わりを持って、色々な事を学んでおけばよかった。後悔先に立たずとはまさにこのことで、今でもあの頃を思い出すと己の浅はかさと至らなさに歯がみをするほろ苦い記憶だ。

そのガルーシャ・マライが、この春先に『旅立った』のだという。それは、獣たちから得られた情報だった。獣たちは、事実を捻じ曲げたりはしない。故にそこに偽りがあろうはずはなかった。

あの男が、この世を去った。その報せは、ゲオルグの中に思わぬ

衝撃をもたらした。
　ガルーシャ・マライとて、同じ人であるには違いないから、その寿命に限りがあることは、十分承知している積りだった。だが、それでもまだ先の話だろうとどこかで楽観的に考えていたのだ。
　人嫌いと揶揄されていた男だが、王都を去って以来、人と全ての関わりを絶っていたいという訳ではなかった。ごく限られた術師仲間や古くから繋がりを持つ人々は、あの男と細々と関係を保持していたのだ。そして、ゲオルグ自身は、どうにかしてその中に食い込もうと密かに機会を窺っていたのだった。
　だが、もう、その機会は、失われてしまったのだ。永遠に、そして唐突に。
　その報せを受けた日は、一日、何も手に着かなかった。だが、翌日、あの男がこの世からいなくなったとしても、あの男が遺したものがあるということに思い至った。すると今度は、どうしてもそれを手に入れたいという思いが湧き上がってきた。
　ガルーシャ・マライは、北の辺境にある広大な【原始の森】――人々の間では畏怖を込めて【帰らずの森】とも呼ばれている――の片隅にひっそりと暮らしているという話だった。ただ、それを伝え聞くだけで、宮殿内はおろかゲオルグの周囲では、誰もその場所を突き留めたという話は聞いたことがなかった。辛うじて伝令に使う獣たちから、そのようなことを聞くだけだった。
　ゲオルグは、あの男の住処を知る為にあらゆる限りの手を尽くした。親交があったとされる術師を片っ端から調べ上げ、繋ぎを取るべく手紙を送ったりもした。その過程で、この国の最北端に位置するスフミ村には、あの男が定期的に顔を出していたという情報を手に入れたのだ。そして、そこを手掛かりにあの男が生活をしていたという足跡を辿ろうとしていた矢先、僥倖とも言うべき思いがけない吉報が飛び込んできたのだった。
――――――――ガルーシャ・マライと共に暮らす人物がいる。
――――――――ガルーシャ・マライには弟子がいる。

それを聞いた時は、思わず拳を握り締めて歓喜の声を上げそうになる程だった。全て絶たれたかに見えた糸が繋がった。そして、その後、その周辺を洗ってゆく内に（ここまで来ると執念のようなものだ）、その人物が、この国で確実に息をし、生活を営んでいるということが見えてきたのだ。そして、今度はその者が【プラミィーシュレ】に向けて旅立ったという話を聞き及び、そこにかねてより懇意にしていた有能な女を派遣したのだ。女は情報収集能力に長けており、独自の伝手を持っていた。

そこで得られた情報は、その者が黒髪に黒い瞳を持つ少年だということだった。

だが、興味深い情報は、それだけではなかった。思わぬ副産物も転がり込んできたのだ。

それは、女が訪れた【エリセーエフスカヤ】――そこは、【プラミィーシュレ】の有力者たちが客人たちを持て成したり、情報交換によく使うとされるサロンのような場所だった――で【夜の精】を彷彿とさせる美しい女が現れたというものだった。その女を同伴していたのが、第七の双璧と呼ばれる二人と第五の団長ということで、女にとってはそちらの方が、意外性（インパクト）が大きかったようでしきりにそのことを話し、途中で情報が錯綜してしまって閉口したのだ。改めて女の元を自ら訪ねて、その辺りのことをもう一度、整理し直した。そして、少しずつ散り散りになっていた欠片の断片を合わせてゆくと、それが一人の人物を浮かび上がらせるモザイク画のようになって来たのだ。

「もし、その子がガルーシャ・マライに学び、何からのものを引き継いでいるのだとしたら、その辺りのことを聞いてみたいと思ったのですよ」

――――――あの男が生きた証を知る者として。

「そして、あわよくばお前さんの所に引き入れたい……という訳か」

老講師は、ゲオルグの下心などお見通しだとばかりに小さく鼻で笑った。

ゲオルグは、それには答えずに人好きのする笑みを浮かべて見せた。

敢えて否定はしなかった。ここで否定をした所でこの老講師には直ぐに看破されるだろう。そして、その笑みが、やがて苦笑のようなものへと変化していった。

ガルーシャ・マライ云々は抜きにしても、今の所、そのことを打診した当人からは色良い返事をもらえていないのだ。接触した当初は、簡単に相手を言いくるめられるかとの予想に反して、その人物は驚くほどに真っ直ぐで、一本芯の通った人だった。攻略するには中々に骨が折れそうだ。かといって、ゲオルグは諦めた訳ではない。そして、今、その者がガルーシャ・マライと繋がることを導き出し、余計に手元に引き付けて置きたいと考えるようになったのだ。

何らかの意思疎通を測っていたゲオルグとイオータの前で、一人、ソファーに座るレヌートは、呆気に取られたような顔をしていた。その大きな手は、何かを考えるように口元に当てられていた。

一方、ゲオルグは、イオータの態度に自分の仮定が正しかったということを確信した。思えば、このイオータも隠遁生活を営んでいたガルーシャ・マライと親交があったと目される数少ない者の一人であったからだ。もしかしたら、その辺りの事を生前、ガルーシャ・マライから聞き及んでいたのかもしれなかった。

「あと、もう一つ。これは、ザガーシュビリ殿にお尋ねしたいのですが」

そう前置きをして、ゲオルグはレヌートの方へ顔を向けた。

対するレヌートは、これまでの自分の考えを整理するように茶を啜った。お茶は既に冷めていたが、その分、喉通りが良かった。それで、少し落ち着きを取り戻した。

「リョウに、兄弟の類、もっと言ってしまえば、姉か妹といった近しい女性の肉親者はいるのでしょうか？」

レヌートの孔雀石を模したような深い緑色を湛えた瞳が瞬いた。

「いや、詳しくは知らないが、義弟（シーリス）の話では身寄りの無い孤児だと聞いている」

――――――――それが、どうかしたのか？

「そうですか」

レヌートにはゲオルグの質問の意図が全く読め無かった。だが、ゲオルグは望む答えが得られたのか、満足そうに綺麗な笑みを刷いた。

【プラミィーシュレ】に現れたという美しい女性の話。懇意にしている女に依れば、第七のユルスナールが同伴していたのは、小柄な女だったという。まるで【夜の精】のようだったとお伽噺に出てくる精霊を捕まえて、皆、口々にそう評していたのだと言った。誰もお伽噺の中の存在である【夜の精】を本当に目にしたことのあるものはいないというのにだ。艶やかな黒髪を結い上げて、その漆黒の瞳は一度目を合わせたら、魂ごと吸い込まれてしまいそうな不思議な魅力（というよりも魔力かもしれない）を持っていたとのことだった。

この国では余り見かけない黒い色彩と異国風の顔立ち。その姿を垣間見た女も其の者がこの国の女たちとは明らかに異なる風貌をしていたと語った。

これまでに手に入れた情報を寄せ集め吟味して、ゲオルグがまず思い浮かべたのは、リョウのことだった。

リョウと初めて言葉を交わした時のことはよく覚えている。養成所内に優秀な生徒がいる。日頃から懇意にしている講師たちの話の中で出て来た未来の術師の存在にゲオルグは直ぐに興味を持った。逸材であれば、自分の所にも引き入れたい。有能な人材は、貴重だった。そして、それとなく探りを入れて、どうせならとその者の人と成りを見る為に接触を図ったのだ。

リョウの第一印象は、大人しく控え目な少年というものだった。勉強熱心のようで復習の為にか開いていた帳面には、びっしりと細かい字で埋め尽くすように様々なことが書かれていた。

その色彩と顔立ちを見た時、報告書にあったガルーシャ・マライのことが直ぐに頭を過ったが、その時はその思いつきは、余りにも都合がいいように思えたのだ。単に髪と瞳の色が同じ黒というだけだ。その色彩は珍しいには違いなくとも、ただそれだけの情報で判断を下すのは、お粗末だった。

少し探りを入れれば、レヌートの推薦で養成所に入学をしたことが分かった。そして、その身元保証人の所には、第七の副団長であるシーリス・レステナントの名が記載されていた。入学申請書の台帳を、伝手を使って見せてもらったのだが、そこには出身はスフミ村とあった。

スフミ村は、この国最北端の辺境の村だ。その村には、ガルーシャ・マライと親交のあった術師が暮らしていた。かつてゲオルグもその術師宛てにあの男の消息を尋ねる手紙を出したことがあったが、返ってきた返事は当たり障りの無い儀礼的なものだった。

そのスフミ村の出だという少年が、距離的には比較的近いとはいえ、北の砦にいる軍部の人間と個人的な繋がりを持っていることをゲオルグは意外に思った。術師になる為の申請をするのならば、何故、その村にいる術師を仲介にしなかったのだろうか。その辺りの疑問はもう少し調べてみるか、機会があればさり気なく当人に聞いてみるしかないだろうと考えていた。

リョウの優秀さは、さり気なく会話をした講師たちが口を揃えて太鼓判を押した。そして、とても意欲的で熱心であるということを聞いた。よく質問をし、その中身も中々に鋭いものであるのだという。

実際に言葉を交わしてみると、大人しく自己主張をしないように

見えて、その実、自分の核となるものをしっかりと持っていた。外見だけを見るなら、その辺りに居そうな普通の少年だ。だが、少し会話をすれば、落ち着きがあり聡明さの片鱗を覗かせる。世間話をする傍ら、それとなく術師に登録をした後の予定を聞いたが、軍部への誘いは、はっきりと否定されてしまったのだ。だが、その理由付けは曖昧なものでゲオルグは納得した訳ではなかった。

引き続き、ゲオルグはリョウの周辺事情を並々ならぬ関心を持って探っていた。自分の所に引き入れる為の策を色々と練る為だ。そして、少しずつ明らかになってくる事柄にゲオルグはある一つの仮定に行きついたのだ。

リョウは少年にしても線の細い小柄な方だ。何よりもその顔立ちと色彩が女の説明に合致する。

簡素なシャツにズボンを履いて男と同じ格好をしているが、その中身が本当は女性だったとしたら。少し考えが飛躍しているかとも思われたが、そう考えると、これまでの小さな欠片が実に生き生きと動き始めたのだ。ユルスナールが手にしていた封書の印封が形作った光の粒子――――あれは呪いを掛けた者の【想い】が結晶化したものだ――――が浮かび上がらせたのは、美しい女のしどけない後ろ姿であったが、その映像はゲオルグが良く知るこの国の女たちの豊満な肉体と比べると幾分控え目というか、どこか中性的な匂いのするものだった。

あの贈り主が、養成所でも高い素養と持つと目されているリョウであったならば。そう考えると全てが繋がった。

「リョウは……女性なのですね」

思わず漏れた――――というよりは、やや確信犯的な匂いもあるが――――自己内対話（独り言）に、正面に座るレヌートが小さく肩を揺らしたのが分かった。

狼狽えた。もしくは、動揺をしたようだった。そこでゲオルグは、レヌートには何か思い当たる節があるのだということに気が付いた。

「ご存じではありませんでしたか？」
態とカマを掛けるようにゲオルグはそのような問いを発していた。
レヌートはその繊細な眉を困惑気味に下げて、緩く頭を振った。
「シーリス殿は何も仰らなかったのですか？」
「ああ」
レヌートは上半身を前方に屈めると膝の上に肘を突いて、縦に合わせた両手で覆うように口元に宛がった。そして、大きく息を吐き出した。
レヌートの脳裏には、昨日、改めてリョウの首元の怪我を治療した時のことが思い浮かんでいた。
傷を塞がり難くする毒草、【ヤード】の毒が回っているらしい。その事実にも仰天したのだが、首元に磨り潰した中和剤となる薬草を張り付けた時に、男ならばある筈の喉仏が見当たらないことに気が付いたのだ。顎を上げて反らした首元は、細く、ともすれば折れてしまいそうなくらいだった。そこに走る刃傷の跡がやけに痛ましく見えた。
その細い首元に、あるべきはずの小さな凹凸はなかった。まだ声変わりをしていないのではとも考えたが、リョウがそこまで幼いとも思えなかった。
その時の事をここで口にして良いものかとレヌートは逡巡した。ゲオルグの口振りでは、リョウが女であることを確信しているようにも思えた。
女性であることを隠し、態と男の服装に身を包んでいる。それには何か重大な理由があるのだろうとレヌートは考えた。本人がその辺りのことを隠している以上、周囲がとやかく口にすることではない。
「性別など、どちらでも構わんじゃろうに」
イオータがお茶を啜りながら、窘めるような言葉を吐いていた。
「男だろうが、女だろうが、その者の核は変わらぬ。そのようなこ

とに囚われるのは、笑止千万」

それは、術師が心得として持つべき基本理念のようなものでもあった。獣たちと交わる時の心得として、その昔、耳にたこが出来るくらい繰り返し説かれたものだった。

獣たちは、人に対峙する時、その相手の核を見る。性別など瑣末なことなのだ。

「妙な気を起してはおらぬだろうな？」

ゲオルグの手広い女性関係の噂を知っているイオータは、釘を刺すように隣を見た。

リョウが女性であることを知り、その手のちょっかいを掛けるのではないかという心配をしたようだ。

「おやおや、イオータ殿まで。人聞きの悪いことを仰らないでください」

ゲオルグは可笑しそうに小さく喉の奥を鳴らした。

「どうだかのう？　そなたの周辺はなにかと姦しいからの。あらぬ鞘当てに巻き込まれたりしたら堪ったものではないわ。のう、レヌート殿？」

ゲオルグの良からぬ噂は、レヌートの耳にも及んでいたのだが、いきなり話を振られて、分別ある大人である穏やかな気性の神官は、ただ曖昧に微笑んで見せるに留めたのだった。

ゲオルグは心外だとばかりに肩を竦めて見せた。

「あの子には、この上なく大きな後ろ盾がありますからね。人の者に手を出す趣味はありませんよ」

――――――私もそこまで酷くはない積りですよ？

術師としての興味はあるが、女としてそういう目で相手を見ている訳ではない。それにあの子の後ろに控える第七の面々を敵に回すのは限りなく面倒なことだった。

そうきっぱりと口にしたゲオルグに、イオータはどこか胡散臭そうな目を向けていたが、敢えてそこには触れなかった。

「それよりも、ザガーシュビリ殿」

――――――神殿の方で、なにやら妙な動きがあるようですね。

これまでの和やかな表情からは一転、不意に真面目な顔付きをしたゲオルグは、やけに真剣な眼差しで探るように神殿の神官を見ていた。

レヌートがその腰に巻く帯の色は淡い紫。それは神官でも高位に在ることを意味していた。

「妙な動き……とは？」

仰ることの意味が分かりませんが――――とでも言いたげに、レヌートはその発言者の真意を測るように男の薄い灰色の光彩を見つめ返した。

それにゲオルグは鷹揚に微笑んで見せた。

「この期に及んで下らぬ隠し事は止めにしませんか？　時間の無駄です」

無表情になったレヌートを諭すように、ゲオルグは静かに、だが、辛辣とも言える空気で言葉を継いだ。

「我々は、もう少し互いに寛容な所を見せるべきだと思うのですが、如何でしょうか？」

同意を求めるようにゲオルグがイオータを見れば、

「それは話の内容にも依るじゃろう」

年老いた地質学者は、その発言者をちらりと横目に見ながら、ゆっくりと息を吐き出した。

「先日、妙な噂を耳にしましてね。何でもそちらでは近々儀式を予定しているのだとか、いないのだとか」

ただでさえ微妙な力学の上に均衡を保っているように見せかけている宮殿と神殿の力関係の天秤は、どちらかからのほんの少しの力加減で大きく傾く危険性を秘めていた。前回の神殿側による突発的な儀式執行によって宮殿内では、神殿関係者への不信感がまだまだ

強く残っていた。そのような状態で、宮殿側への打診無しに再び儀式が行われることになったら、それこそ宮殿と神殿の間の溝は深まるだろう。今は国内で無駄な混乱を招く時ではない。

ゲオルグが両者の関係亀裂を憂慮するには訳があった。関係が悪化すれば、系統は違えども同じ【術師】として、宮殿内での第三の立場は思わぬ風当たりを強く受けることになるのだ。とんだとばっちりと言ってしまえばそうに違いないのだが、王族を始めとするこの国の中枢部には、まだまだ術師という存在を忌避し快く思わない者たちも多くいたからだ。そのような理由から軍部の中でも術師を多く抱える第三師団はかなり特殊で、常にその立場は中央の影響を被り易かった。ゲオルグは第三の取り纏め役として、自分の部下たちを守る責務があった。

「単なる噂話ならば良いのですが、こちらとしても二年前の二の舞は踏みたくないですからねぇ」

その時も、神殿側の突発的行為を快く思わない中枢の貴族たちの煽りを受ける形で、同じ【術師】として、第三は何かと面倒事の矢面に立たされることになったのだ。粘着系の厭味の応酬には殊更辟易した。そして、ここぞとばかりに日頃から第三に対して良い印象を持っていない者たちが、加勢する形になった。【術師】という共通事項の前に、向こうは神殿に仕える【神官】で、こちらは国に仕える【軍人】であるという根本的な立場の違いがあるのだが、批判をする側にとってみれば、腹立たしい限りだが、関係の無いことであったようだ。

「……そのような動きはこちらでは関知していませんな」

幾ばくかの間の後にレヌートはそう口にした。

「そうですか」

ゲオルグはその返答に一瞬、目を眇めて見せたが、それ以上は突かなかった。

神官は、何かを隠しているようだ。ゲオルグの勘はそう訴えていた。

だが、ここでは明かす積りはないようだ。それならば、こちらとしても絶えず注意を払いつつ、その周辺を独自に探ってみるしかないだろう。

「では、もしそちらで何か動きがあった場合には、こちらに知らせては頂けませんか。私としても何らかの対策を取る必要がありますので」

「ええ。お約束いたしましょう」

相手がどこまで譲歩を見せるかは分からなかったが、取り敢えず、そう締めくくることでこの件は一旦、不問とした。

「それでは、儂はこの辺でお暇するとしましょうかな」

ゆっくりと立ち上がったイオータのその一言で、この少し風変わりな面子を揃えたお茶会はここで終わりとなった。

養成所の棟内をゆっくりと歩きながら、イオータは一人、回廊に等間隔で設けられている窓辺の一角に立ち止まった。武芸大会が行われている宮殿前広場の方角からは、湧き上がる歓声と集まった人々の熱気のようなものが切れ切れにこちら側にまで届いて来た。

毎度の事だが、随分と白熱しているようだ。あの大勢の観客の中にあの子の姿も紛れているのだろう。

イオータの脳裏には、少しはにかむようにして控え目に微笑むとある生徒の顔が浮かんでいた。そして、その穏やかな笑みの上に斜めに構えて人を食ったような笑みを張り付けた一人の男の姿が重なった。

――――――やれやれ。何年経っても、あの男の周りは騒がしい。

あの男から伝令が飛んで来たのは、今年の春の初めのことだった。自由気ままな性質で束縛を嫌う術師としての特徴を顕著に備え、それを遺憾なく発揮していた男だった。あの男のことは、その能力の

高さゆえに周囲が放っておかなかった。

あの男が連絡を寄越すのはいつも唐突で、その内容も突拍子もないことが多かった。往々にして人騒がせな男だ。

そして、今回も。

伝令がもたらした手紙の中には、イオータにとっては予想外の事が書かれていたのだ。余りのことにイオータは、その文面を何度も何度も読み返した。そして、その内容に驚愕の余りもう少しで顎が外れそうになったのも記憶に新しかった。

手紙には、あの男が近いうちに『旅に出る』とのことが書かれていた。天命には逆らえない、それはもう受け入れているから良いのだが、唯一、心残りにしていることは、今、共に暮らしている子を一人置いていってしまうことだと書いてあった。

イオータが仰天をしたのは、その男の『旅立ち』ではなく、その後の『共に暮らす者がいる』という部分だった。他人からの干渉を酷く嫌っていたあの頑固な男が、都会の真っただ中からど田舎の何もない所へ引っ込んだあの孤独を愛する男が、誰かと共に生活をしているということが、信じられなかったのだ。

今後のことはどうなるかは分からないが、もし、その子が王都に出てきて、そちらに顔を出した折には、よくよく面倒をみてやってくれ。そんなことがしたためられていた。

生涯独り身を貫き己が血筋を残さなかったあの男が、まるで人の子の親になったかの如く愛情を滲ませた文面を書いて寄越したのだ。何の心境の変化か。はたまた天変地異の前触れか。そのようなことを疑うほどの驚きだった。

あの男がどこまで先を見通していたのかは分からない。だが、あの男が残した愛し子は、季節が移ろい、そして再び巡ろうかという頃になって、自分の前に現れた。あの男がその昔、使っていた古ぼけた鞄を背中に担いで。

あの男の手ほどきがあった為かは知らないが、その子は、並々ならぬ高い素養を持っていた。まるで何かの示し合せのように。

あの男と同じく、その子の周辺も実に賑やかだった。あの子が無事、術師として登録の認可が下りるようになるまでは、陰ながらあの男が果たせなかった責任を負ってやろう。それが、せめてものあの男の旅立ちの手向けになるだろう。

そして、再び、小柄な体躯の老人は、長い外套の裾を軽やかに翻しながら、己が研究室に向かうべく踵を返したのだった。

モザイクの輪郭（後書き）

ガルーシャ・マライを巡る周辺事情を少し。次回は再び武芸大会に戻ります。

錯綜する気持ち

第一会場で、第七と第四の団体戦・第一試合が終わりを告げてから程なくして、隣の第二会場からも一際、大きな歓声が上がった。あちらでも第一試合が終了をしたようだ。

このあと第一会場では、第五と第八の第二試合が行われ、そこでの勝者が、次に第七と当たることになっていた。第一会場側は、その三試合で今日の所は終了となる。

隣の第二会場では、第一試合で第二と第十、第二試合では、第一と第六、続く第三試合では、第三と第九が其々当たり、先の二試合の勝者同士の対戦が第四試合となった。そして、そこでの勝者と第三試合の勝者が、次の第五試合の勝者となった。

抽選の組み合わせとはいえ、決勝戦へ辿りつくまでには、二回の試合で済む所と三回試合をしなくてはならない所があるのだ。どこの組み合わせ（ブロック）に配置されるかで道のりの険しさが若干違ってくる。だが、それも天の運ということなのだろう。

次はどの試合を観戦するかということで、リョウたち四人は、対戦表が張り出された掲示板の前に来ていた。

「次はどうする？」

同じく上を見上げながらのんびりと口にしたリヒターの隣で、

「あー、俺は第二会場の方の第一と第六が気になるな」

「あ、やっぱり？」

ヤステルはそれでも迷っているのか、自分の顎に手を掛けながら大きな白い布の張られた板を睨み上げていた。

第二会場で先に行われた第一試合では、第二師団と第十師団が対

戦をし、第十師団の方が勝ったとのことだった。第二師団はあのスヴェトラーナが団長を務める奥向きの近衛の一団だ。そして、第十師団は、王都（スタリーツァ）【プラミィーシュレ】、東の貿易港である【ホールムスク】といった主要都市を除く、その他の都市や村々の統括を行っている部隊とのことだった。本部は勿論、【アルセナール】の中にあるが、街道沿いの主要な街々には、其々治安維持を司る為の第十師団の詰め所が設置され、そこに兵士たちが派遣されて、日々任務に当たっているとのことだ。

　ヤステルが興味を惹かれているのは、第二会場で行われる第一師団と第六師団の試合だ。第一師団は近衛でも表向きの部隊で、団長は【アルセナール】の第七の執務室で見かけたマクシーム・フラムツォフ、気品と風格を兼ね備えた立派な兵士だった。王族や高位高官の警護をするという役目柄、第一師団は、軍部の中でも身元の確かな貴族の出身者から構成され、随一の精鋭揃いとのことだった。騎士団の中でもやや別格の扱いをされるエリートたちだ。対する第六師団は、東の貿易港【ホールムスク】を拠点とする一団だった。

「バリースは？」

「俺はその次の第三と第九がちょっと気になるけど、そうすると第一会場の方の第三試合と被るだろうし……ってあぁ、悩むなぁ。でも取り敢えず、次は個人戦の方をちょっと覗いて来ようかなぁ」

　そう言って大きく伸びをした。

「リョウはどうする？」

　リヒターから同じように聞かれて、

「ああ、オレは、第五の試合を見たいかな。知り合いがいるから」

「そっか」

「じゃぁ、別れるか？　待ち合わせはこの掲示板の前ってことにしておいて」

　ヤステルとリヒターは第二会場の方が気になるということで、バリースは西側の個人戦が開催されている区画の方を覗いてみるとの

ことだった。リョウは、先程と同じ第一会場の方だ。
「リョウ、一人になるけど大丈夫か？」
ヤステルから案じるように声を掛けられて、リョウは小さく笑った。
「ああ。大丈夫だ。何かあったら控えの天幕の方に行ってるから」
「そうか」
試合前にユルスナールから友人たちの傍を離れるなと忠告をされたが、リョウとしては第五の面々の試合が観たかった。ウテナとイリヤにも顔を出すと言っていたし、何よりも団長のドーリンがどのような剣さばきを見せるのかにとても興味があったからだ。それに大人しく観戦をするだけならば一人でも大丈夫だろう。
第五師団と対戦をする第八師団は、この国のやや北東よりの方向に位置する隣国【セルツェーリ】との国境地帯を守る軍事拠点である【東の砦】に駐在する部隊だ。どちらの方が剣技を得意とするのかは分からなかったが、ここを逃したら、第五の面々の雄姿を見逃してしまうのではと思ったからだ。勿論、第五の兵士たちには勝ってもらいたかったが、結果は、どうなるか分からなかった。
こうしてリョウは、ヤステルやリヒター、バリースの三人と別れて、一人、先程の試合が行われた第一会場に向かうことになった。

そうして、第一会場に向けて人混みに紛れながら元来た道を辿っている時だった。
「ちょっと、そこのあなた」
誰かを呼びとめるような女性の声が後方から響いた。
周囲には、沢山の人がいる為、リョウは気に留めずにそのまま歩を進めていたのだが、
「そこの坊や！　黒い髪のあなたよ」
その台詞にリョウは足を止めるとゆっくりと振り返った。

黒い髪と言われては、そのまま無視を決め込む訳にもいかなかった。見物に訪れた人々の中には、黒っぽい濃い色をした髪の人たちも偶に見かけた。その人たちは大抵良く日に焼けた浅黒い肌をしていた。それでも黒い髪というのはこの辺りでは余り見ないものだということが分かっていたから、心当たりはなくとも自分のことでは無いとは一概に判断できなかった。

念の為、確認をするように声のした方へ顔を向ければ、後方から年配の女性が一人小走りに駆け寄って来るのが見えた。

「あなた足が速いのねぇ」

その女性は傍まで来るとふくよかな胸に手を当てて、息を整えていた。一体、どこから追いかけてきたのは分からないが、随分と体力を消耗させてしまったようだ。

早く会場の方へ行こうといつになく早足になっていたようだ。それにリョウの周りは上背がある（そして皆、足の長い）男たちばかりであったので、いつの間にか周囲に合わせるように、自然とその歩く速度は一般の女性たちよりも随分と速いものになっていたのだ。身についた習慣のようなものだ。

「あの、何か御用でしょうか？」

リョウは声を掛けてきた女性に心当たりがなかった。

濃いめの茶色の髪を一つにまとめて結い上げている。濃い灰色の外套の裾からは、落ち着いた臙脂色のドレスと白いレースの裾が見え隠れしていた。品の良い丸顔に円らな明るい灰色の瞳、その下に小振りの鼻が行儀よく収まっていた。

暫く呼吸を整えてから、その女性がにっこりと微笑んだ。そうすると目尻に細かい笑い皺が現れた。

「うちのお嬢様がお呼びなのよ。少しお時間よろしいかしら？」

リョウはいきなりの申し出に目が点になった。

お嬢様というのは、一体、なんの冗談だろうか。

「あの、急いでいますので……」

丁寧に断りを入れてみたのだが、

「大丈夫、お時間はそんなに取らせないわ。ほら、こちらに来て頂戴。あの方をお待たせする訳にはいかないわ」

有無を言わせない力で腕をがっしりと掴まれて、あれよあれよという間にその女性が歩き始めてしまった。

「あの、いきなり何なのですか？　そのお嬢様というのは一体……」

リョウは半ば引きずられながら面食らったように声を上げていた。その女性は、リョウを一瞥すると茶目っ気たっぷりに片目を瞑って見せた。

「一緒に来れば直ぐに分かるわ」

ふくよかである柔らかな女の手が思いの外、強い力で腕に食い込んだ。そのまま、ずるずると引き摺られるようにして女のやや後方を歩く。

リョウは、内心、途方に暮れていた。こちらの事情を聞かずに自分たちの主張を押し通すのは、些か強引過ぎるやり方だ。気分が悪い。

リョウは歩きながら何やら嫌な予感がした。面倒な匂いがする。こういう時ばかりは、その勘は何故か当たるのだ。

ぐいぐいと力任せに引っ張られながら、辿りついた先は、貴族の婦女子が集まる特別観覧席のすぐ傍だった。結果的には目的地には近づいていたのだが、何やら随分と遠回りをしている気分になったのは気のせいではないだろう。

雛壇のようになった木組みの陰で、リョウは漸くその腕を解放された。

「ちょっとここでお待ちなさいな」

それは、どこか高飛車な物言いだった。

掴まれて痛んだ腕を摩りながら、リョウは逞しい感さえあるその女性の大きな臀部をなんとも言えない気分で見送った。

それにしても随分と強引なやり口だ。もっと相手の事を考えて行

動をしてもいいのだろうにと考えて、それはこの場所では必ずしも通用しない論理であることを思い出した。

こちらが明らかに目下の者であるということで、強気に出ているのだろう。いや、それは女の側からしてみれば当然のことで、そこには疑問の余地すらないのかも知れない。ここは身分社会の確立されている世界だ。人を使う側、使われる側ではその立場は驚く程に違う。先程の女性は、主人である人物に使われる側でありながらも人を使役することに慣れている者の態度だった。

リョウは、このまま逃げ出したい気分に駆られた。

少し離れた所で歓声が上がった。第一会場の方では既に試合が始まったようだった。気になって男たちが囲む人垣の向こうを透かし見たが、当然のことながら試合に出ているであろう兵士たちの姿は見えなかった。

そうしているとすぐ傍に人の立つ気配がした。内心のざわつきを無理に抑えながら、ゆっくりと振り返った。そして、そこに現れた人物を見てリョウは目を見開いた。

「ちょっとよろしいかしら?」

赤みがかった琥珀を思わせる橙色の瞳が、燃えるような熱を秘めながらも冷ややかにリョウを見下ろしていた。

アリアルダと呼ばれていた若い娘だった。その後方には、先程のふくよかな女性が控えていた。どうやら、先程の年配の女性のいうお嬢様というのは、このアリアルダのようだ。

「あなたに聞きたいことがあるの」

そのぽってりとした厚みのある唇が薄らと儀礼的な笑みを刷いた。きっちりと隙なく結い上げられた癖の無い金色の髪が、降り注ぐ日の光を反射して、鈍い光を湛えていた。

「何でしょうか?」

リョウは内心の動揺を慌てて隠しながら、努めて平静を装った。そして、相手から出てくる言葉を待った。

「あなた、もしかして、今日、ルーシャに黒いリボンを渡したのかしら？」

鋭い視線を受けて、リョウは心の中でそっと苦笑を漏らした。

要するにアリアルダの方でもユルスナールにとリボンを用意していたのだろう。するとそれを巻きつけようとした時に別のものが既にあることに気が付いて、憤慨したのかもしれない。

やはり、自分があのような真似をするのは間違っていたのだ。リョウは、自嘲気味に小さく息を吐き出した。

「はい」

隠しだてするようなことでは無かったので、リョウは小さく頷いた。

「あなたの係累にルーシャを想う人がいるのね？」

だが、そこで、リョウはアリアルダの勘違いに気が付いた。もしかしなくともリョウに同じような色彩を持つ肉親（姉や妹の類だ）がいて、その仲立ちをしたと思われたようだ。

「いいえ。それは違います。アレはワタシが渡したものです」

ややこしくなるのは面倒であったので、淡々と先方の思い違いを訂正すれば、

「何ですって？」

アリアルダの吊り上がり気味の大きな瞳が一段と見開かれた。

「それでは、あれは、あなたがルーシャの腕に巻いたというの？」

「はい」

「な……」

思ってもみないことであったのか、アリアルダは手にした小さなハンカチをギュッと握り締めていた。

「紛らわしいことをしないでちょうだい！」

アリアルダはリョウを睨み付けると、嫌悪感を顕わに吐き捨てた。

「あなた、自分が何をしているのか分かっているの？　男の癖にあのようなものを渡すだなんて。汚らわしいわ。それにルーシャがいい迷惑だわ。お分かりになって？　あなたの行いがルーシャを笑い

物にするかもしれないのよ？　男からリボンを渡されてそれを着けているなんて知れたら、とんだ恥晒しだわ。幾らルーシャが優しいからって、付け上がるのもいい加減にしてちょうだい！」

嫌なものを見るように苛立ちのままに厳しい言葉を重ねられて、リョウは思ってもみないことに驚いた。

何故、そこまで非難されなくてはならないのだろうか。それ程までにあの男たちが腕にリボンを着けるという行為は、特別な意味を持つものなのだろうか。

それに、ただリボンを腕に巻いているというだけでは、それを渡した相手のことが分かる訳ではない。男（のように見える自分）から渡されたとは、分からないはずだった。

リョウは表情を消してアリアルダを見た。

アリアルダの頬は、激昂の余り薄らと赤みを帯びていた。本気で怒っているようだ。

この娘は、本当にユルスナールのことが好きで堪らないのだとリョウは感じた。ユルスナールの立場を悪くするようなことがないようにと必死になっている。そこには嫉妬のような感情も混じっているのだろう。

「ワタシの行為はそれほどまでに非難されるものなのですか？」

気が付けば、そのような言葉を口にしていた。

「男であろうと女であろうと、あの方の武運を祈る気持ちには変わりはありません。それをどうしてあなたに否定されなくてはならないのですか？」

淡々と静かに、そのような言葉が口を突いて出て来ていた。

「何ですって！」

対するアリアルダは、信じられないというようにリョウを見ていた。

気持ちの昂ぶりか、苛立ちの為にか、その肩が小さく震えているのが分かった。

「あなた、自分が何を言っているのか分かっているの？」

その言葉にリョウは静かに頷いた。

ユルスナールを想う気持ちに偽りはない。ただ、勘違いをされて、もの笑いにされるのが嫌ならば、ユルスナールは自分がリボンを巻いた時に拒絶をすれば良かったのだ。腕に巻かなくとも、ポケットに忍ばせるだけでも良かった。だが、あの男は優しいから、いや、ともすれば優し過ぎる程であるから、本当はそう思っていても言いだせなかったのかもしれない。

リョウは、そっと深い青さを湛えた瑠璃色の瞳を思い出すように、胸元にぶら下がる同じ色をしたペンダントに無意識に指を伸ばしていた。服の下にあるその輪郭をそっとなぞった。

それでもリボンを受け取り、それを腕に巻くか否かは、男の側の判断だ。それを周囲の人間がとやかく言うことではない。ましてや、この目の前の若い女から誹りを受ける謂われはなかった。

リョウは静かに真正面からアリアルダを見つめていた。この良家のお嬢様は、恐らく、将来、ユルスナールに嫁ぐことを疑っていないのだろう。男にとって良き妻たるべく、今からその責務を果たそうと躍起になっている。きっとそうやって育ってきたのだ。その気持ちは、同じ女として分からなくはなかった。それ程までに必死なのだ。あの男の傍に突如して現れた不穏分子を本能的に取り除こうとしているのかもしれない。

リョウは小さく苦笑のようなものを浮かべた。本当にこの世の中には、気持ちだけではどうにもならないことが幾つもある。だが、それは仕方の無いことなのだ。ユルスナールに決まった相手がいる以上、リョウは自分がその間に入れるとは思ってもいなかった。いや、それをしてはいけないとさえ思っていた。ユルスナールとの関係がこの先、いつまでも続くとは思ってはいなかった。夢を見るような年頃でもない。身を引く覚悟は、気持ちの面ではまだ追いついていないが、頭の中では出来ていた。

だからと言って、自分の気持ちまでもを否定をされるのは敵わない。

「何がおかしいの？」

無表情から一転、小さく苦笑のようなものを浮かべたリョウを見て、アリアルダが詰め寄った。

「いえ。混乱をするようなことをしたのならば、謝ります。それでも、リボンを巻くか否かは、あの方の自由。外野が口出しを出来るものではありません」

「何ですって。あなた、私の行為がお節介だとでも言いたいの？」

「いえ。そこまでは」

リョウはそっと目を伏せた。

赤みを帯びた橙色の瞳が、燃えるような激しい炎を小さく揺らめかせながら、自分を見つめていた。その強さに心が焼き尽くされそうだと思った。

「男の癖に……。なんて野蛮なの。ルーシャもいい迷惑だわ。あなた、ルーシャの部下なのでしょう。そんなことも分からないの？」

ここまで来れば相手の勘違いを訂正する気にもならなかった。それに却って自分の性別を明かす方が余程、問題になるだろう。

「それは、あなたが決めることではありません。ワタシとあの方の間の問題です」

「お黙り！」

鋭い一喝と共に左頬に強烈な痛みが走った。

咄嗟に瞑った目をゆっくりと開けば、右手を中途半端に宙に浮かべたまま、アリアルダが半ば茫然として立ち尽くしていた。その視線の先は、赤くなった己が右手を見ていた。それは自分でも相手を叩いたことが信じられないという顔付きだった。

じわじわと打たれた頬が痛みを訴えていた。同じように相手の掌も痛かったことだろう。

頬をぶたれたのは初めてのことだった。ここに来てから本当に初

めての経験ばかりをしている。そんな他愛ないことが頭の隅を過った。

頭の芯が急速に冷えて行くのが分かった。

「まぁまぁ、お嬢様、一体どうなすったのです」

これまで後方に控え、事の成り行きを見守っていた御付きの女が、のんびりとした口調で近づくと立ち尽くしたアリアルダを支えるようにその肩を抱いた。

「あなた、お嬢様に何を言ったの？」

剣呑さを秘めた年配の御付きの女の声をリョウは敢えて無視した。

「これで、お気が済みましたか？」

真正面から相手を静かに見つめたリョウは、そこで薄らと笑みを刷いた。

アリアルダが小さく息を呑んだのが分かった。

激情に駆られ、頭の中が真っ白になる時、人は自分での思いも寄らない行動に出たりするものだ。己の感情の制御（コントロール）がままならない若い頃には、そのようなことがあってもおかしくなかった。ましてや蝶よ花よと育てられ、周りから傅かれてきた貴族の娘には、我慢というのは馴染みのない事柄であるだろう。

その証拠にアリアルダは自分の行動に驚いて、湧き上がる気持ちの昂ぶりのままに目の端に涙すら浮かべていた。反対のハンカチを握った左手が、ゆっくりと口元を覆う。

もう十分だろう。これ以上ここに居ても無駄だ。

そう判断したリョウは、

「それでは、ワタシはこれで」

――――――失礼します。

小さく頭を下げると、しきりに主である若い娘を宥めるようにその背中を摩る御付きの女の姿を横目に、素早く踵を返した。

団体戦の試合を観戦する気は急に失せてしまった。もし、ここで第五の面々が負けてしまったのならばイリヤとウテナには悪いかと

思ったが、それも仕方がない。
自分は今、きっと酷い顔をしている。その自覚はあった。
リョウは、じんじんと痛みを訴え始めた左頬をそっと手で覆いながら、取り敢えず熱を持ち始めた箇所を冷やすべく試合会場となっている人混みから離れたのだった。
それに頭を冷やす必要があった。アリアルダの熱に引きずられるようにして、様々な感情が湧きあがって来るのが分かった。混乱しそうになる気持ちの整理をする為にも、少し、静かな所で落ち着きを取り戻す必要があった。
すぐ近くであるはずの立ち上る男たちの歓声が、どこか遠くで聞こえていた。

錯綜する気持ち（後書き）

つくづくユルスナールは罪作りな男です。きっと男の与り知らぬ所でリョウの受難は続くのでしょう……多分。次回に続きます。

水辺の囁き

リョウは、騒がしい人混みの間を縫うようにして武芸大会の会場から足早に遠ざかっていた。緩やかな人の流れに逆流する。次はどこが勝つ、あそこだ、いやあっちだと対戦の行方に熱くなっている男たちの間をぶつからないように注意しながらすり抜けた。

そして、会場の東側、目に付いた建物の陰に身体を滑り込ませるとその場で漸く大きく息を吐いた。

会場が設けられている広場との空間を遮るように重厚な石造りの建物が並んでいた。この辺りまで来ると湧き上がる男たちの歓声も吹き込む風の通り道を塞ぐように随分と小さくなっていた。

リョウは建物と建物が並ぶ間の隙間、石壁の一方に背中を預けるとそのままずるずると腰を下ろした。耳の奥ではうるさいぐらいに体中の血液がドクドクと巡る音が鳴っている。それに呼応するように左側の頬がちりちりとした痛みと熱を訴え始めていた。

リョウの口元には知らず、自嘲めいた笑みが浮かんでいた。勢いに任せて言いたいことを言って逃げてきてしまった気がする。何故、もっと上手くあしらえなかったのだろう。差し出がましいことをしたと謝罪の言葉を型どおりに口にして、有耶無耶に濁してしまっても良かったのだ。何もあのように自分から突っかかる態度をとらなくともよかったではないか……と一人冷静になって考えてみれば、あのアリアルダのことをとやかく挙げる前に自分の方こそ、頭に血が上っていたことが分かった。

それでも。相手が自分を男だと勘違いしていることは分かっていたが、あのままでは自分の気持ちまでもが全否定されるようで我慢がならなかったというのも正直な所だった。

この想いは自分だけのものだ。その心の最奥で一番大切にしてい

るものを徒に攻撃されて、反射的に反撃をしてしまった。自分の中で、まだこのような激情の類が存在していたことを少し可笑しく思った。

　このようなことでは先が思いやられる。身を引く覚悟など言っておいて、聞いて呆れるではないか。もっと冷静にならなくては。客観的になれ。瑣末に囚われるな。自分が今、一番優先しなくてはならないことはなんだ。それは、この国で術師として認められることではなかったのか。そこを履き違えてはいけないのだ。今更、恋だのなんだのと現を抜かしている訳にはいかない。残された時間があとどのくらいあるのかも分からないままであるのだから。

　そうやって一連の取りとめのない思考を集約していって、いつもの結論に落ち着かせる。そして再び同じように得られた結論にどこかで安堵の息を吐いていた。胸の奥に走る小さな軋みには、気が付かない振りをした。

　時折、思い出したように吹き付ける真冬の冷たい風が、火照りを帯びた頬には気持ちが良かった。

　そこでようやっと打たれた頬を冷やさなくてはいけないということに思い至った。

　この感じでは、恐らく赤くなっていることだろう。下手をしたら腫れあがるかもしれない。このようなみっともない顔を晒していてはリヒターやヤステル、バリースの三人と合流など出来ない。いや、あの三人なら綺麗な女の子に声を掛けて振られたとでも言えば信じてもらえるかもしれない。最初は吃驚するかもしれないが、笑い話くらいにはなるだろう。問題はユルスナールたちの方だ。見つかったら最後、誤魔化しなど効かないのだから。次の試合の時には、なるべく目立たないように端の方で見物をして、試合が終わったら直ぐに会場を後にするしかないだろう。

　つらつらと今後の身の振り方を考えながら、ざわついた心を落ち

着かせるべく壁に寄りかかって目を閉じていると、すぐ傍でシャリと土を踏む音がした。
リョウは緩慢な仕草で瞼を上げると音がする方へ顔を向けた。
そこには、悠々とした貫禄さえある足取りでこちらに向かって歩みを進めている小型の灰色の毛並みをした獣がいた。
「ティーダ」
『リョウではないか。如何いたした。かような所で』
それはいつぞやの伝令を頼んだティーダだった。するりと近寄ってきた艶やかな毛並みをリョウはそっと手を伸ばして撫でた。
「ティーダ。この間はありがとう」
【アルセナール】への使いを頼んだことを改めて口にすれば、
『なに、あのようなことなど、造作もない』
些か面倒になったことは棚に上げておいて、ティーダは鷹揚に喉を鳴らしてみせた。
『それよりも、如何いたした。そなた、頬が腫れておるではないか』
ついとこちらを見上げたティーダからの指摘にリョウはほんの少しだけ苦笑を滲ませるように笑った。
「綺麗な女の子とお話しをしていたらね、どうも相手を怒らせてしまったみたいで、気が付いたらバチーンてね。あはは」
飄々と態とらしく口にしてから肩を竦めて見せた。
その説明にティーダは胡乱気にリョウを見遣った。
『なんだ。そなた、女子でありながら、女子を誑かしたのか？』
獣であるティーダは自分の性別を間違えたりはしない。だから同性から頬を打たれるという結果になった経緯を訝しく思ったようだ。
「人聞きの悪いこと言わないでよ。そんなことする訳ないじゃないか」
ティーダのからかいにリョウは眉根を寄せた。
『ならば、何故、頬を打たれる？』
それはこっちも知りたいくらいだ。だが、まぁ、大した理由など無かったのかもしれない。

リョウは困惑気味に眉根を下げると天を仰ぎ見た。大きな二つの建物の陰に切り取られた空は、どこか遠く、余計に青く澄んで見えた。

「うーん。……多分。意見の相違ってやつだと思うよ」

そう言うと小さく微笑んでティーダの顎の下を擽った。

ティーダが怪訝そうな顔をしたのが分かったが、これ以上、この話を蒸し返されては敵わなかったので、リョウは話の流れを変えた。

「そうだ、ティーダ。この辺りに水場はないかな？」

腫れた箇所をハンカチで濡らして冷やそうと思っていると告げれば、小さな灰色の気高き獣は首を巡らせた後、

『ふむ。ならば付いてまいれ』

先導するように顎をしゃくった。リョウはティーダに促されるようにしてその場から立ち上がると、少し先を歩き始めた灰色の艶やかな毛並みを追った。

「そう言えば、ティーダはこんな所で何をしていたの？」

歩きながら、あのような人気の無い建物の陰に現れたことを問えば、

『……ああ。散歩よ』

若干の間の後、些か歯切れ悪くティーダが答えた。

実の所を明かせば、ティーダが現在居候しているやんごとなきエクラータ嬢の命を受けてティーダを洗う為に風呂桶に入れようとした侍女たちの手をほうほうの体で掻い潜って逃げて来たのだった。

ティーダは昔から風呂が大の苦手で、ましてや他人から洗われるというのがどうにも我慢がならなかった。素養を持たない侍女たちと意思の疎通が出来ないということも大きいだろう。そういう訳で、態と人目に付かない端の方にまで逃げて来たという訳なのだが、ティーダは外聞が悪いのか、その事をリョウには話さなかった。対す

るリョウもそのようなティーダの生活を知る由もないので、変だとは思いながらも然程、疑問には思わなかったのだ。
それはさておき。

そして、ティーダに案内されて辿りついた先は、昨日のシビリークス三兄弟とのお茶会を彷彿とさせる小さな噴水のある水場だった。だが、昨日とは場所が違うようだ。
『ここならばよかろう』
ティーダは軽やかに駆けると水を湛えた石の縁に乗り上げて、そこで尻尾を揺らした。
ゆらりゆらりと左右に揺れる灰色の長い尻尾を内心微笑ましく思いながら、リョウも促されるようにしてその縁に腰を下ろした。
小さな丸い水場の中心からは時折、思い出したように細い鉄砲水が噴き出した。そして、小さな水の流れは、丸く囲いを施された石の辺縁から伸びる二方向の細い水路で繋がっていた。水量は余りないが、それでも作りは凝っている。
この水場を囲むように色々な種類の庭木が点々と植えられていた。直ぐ傍には大木が見事な枝ぶりを伸ばしていた。微かな水音に木々に遊ぶ鳥たちのさえずりが混じる。静かな場所だった。

「ねぇ、ティーダ。ここはワタシのような部外者が立ち入ってもいい場所なんだよね？」
この間、【アルセナール】行く途中に、うっかり間違えて関係者以外立ち入り禁止の場所に迷い込んでしまい第二師団のおっかない女性兵士（団長のスヴェトラーナのことだ）から叱られた時のことを恐々と思い出しながら尋ねれば、
『ああ。案ずるな。ここは宮殿内でも浅い区域故、立ち入り自由な場だ』
その言葉に一先ずほっとした。
リョウは外套のポケットから小さなハンカチ（といっても飾り気

のない布地を断ったものだ）を取り出すと噴水の小さな流れの中に浸した。大きな木の影が張り出しているということもあるのだろうが、水はとても冷えていた。これならば冷却石を使うまでもないだろう。そうして緩く絞った布切れをそっと左の頬に宛てた。その気持ち良さに緩く息を吐いた。

そうやって暫くハンカチを濡らしながら患部を冷やしていた時だった。

「ティティー？」

「ティーティー、どーこー？」

「ティティー？」

切れ切れに幼い少女のものと思しき甲高い声が木立の合間から響いて来た。

その瞬間、石の上でのんびりと寛いでいたティーダの背中がぴくりと反応して毛が一気に逆立った。ティーダは石の上に身体を起こすとそわそわするように小刻みに尻尾を揺らし始めた。

「ティーダ、呼ばれているみたいだよ」

人より何倍も鋭い感覚を持つ獣であるから分かってはいるだろうが、念の為声を掛けてみる。

その呼び声は段々と大きくなってきている。こちらに近づいてくるようだった。

ティーダはせわしなく尻尾を揺らしていたが、それをぴんと立てたかと思うと、次の瞬間、勢いよくリョウの懐の中に逃げ込むように飛び込んできた。

「うわわ。ティーダ？」

『リョウ、匿え』

「はい？」

『今、見つかってはかなわん』

小さな獣はそんなことを言うと外套と上着の間に潜り込んでその

場で息を潜めた。
リョウは突然のことで目を白黒させた。懐が急に暖かくなって、くすぐったさに身を震わせた。
見つかりたくないのならばさっさとこの場から去ればいいものを。態々人の懐の中に入り込まなくともと思わないでもなかったが、どうやら、それだけティーダも余裕がなかったようだ。
「ティーダ？」
リョウは、頬に冷やしたハンカチを宛がいながら小さく囁いた。
小さな水場を囲む石の上に腰を下ろしたリョウの外套の中、身体を折り曲げた膝の上に蹲りながら、灰色の獣がそっと顔を上げた。小さく尖った灰色の耳がぴくぴくと外の声を捕らえるように動く。そして、すぐに引っ込めてしまった。随分な警戒ぶりである。
「いいよ、隠れてて」
リョウは小さく笑うと外套の上から腹部に当たる温かいもう一つの体温をそっと撫でた。

そうこうするうちにいよいよティーダを呼ぶ声が大きくなってきた。そして、こんもりとした手入れの行き届いた庭木の向こうからひょっこりと現れたのは、大きな白いリボンが揺れる小さな頭部だった。
明るい柔らかな少し赤みがかった黄金色の髪がふわりふわりと頭の動きに合わせて揺れる。小さな頭部が、庭木の下を覗いたり、茂みの中を覗いたり。青々とした緑の中で、その明るい髪色と白い大きなリボンがやけに目立って見えた。
あれはこの間の幼い少女だろうか。エクラータ様と呼ばれていた。
「エクラータ嬢？」
リョウが懐で身体を小さくさせている灰色の獣に囁けば、
『左様』
服の合間からくぐもった囁きが返ってきた。
「なにか悪戯でもしたの？」

これだけ必死になって隠れているということは、悪さでもして叱られるのが嫌で逃げているのかと思ったのだが、
『たわけ。左様なことがあるか！』
心外であったのか、不満そうに声を荒げたティーダに、
「しっ」
リョウはすぐさま声量を下げるように注意をした。
『侍女もおるか？』
「うん」
小さな少女の周囲には御付きと思われるお揃いのお仕着せに身を包んだ女性が三人いた。濃い灰色の首まである服に白い前掛け(エプロン)を掛けている。その遥か後方に護衛の兵士と思われる男の頭部がちらりと見えた。
「一生懸命探してるよ。いいの？」
『かまわん』
小さな頭部がひょこひょこと高低のある庭木の間を動き、時には地面に這い蹲っている。それを侍女たちが、『おやめ下さい』など『もう戻りましょう』などと言って宥めているようだった。だが、その度に小さな頭部は頑なに『いやいや』と横に揺れる。そしてまた小さなティーダ探索隊は振り出しに戻っているようだった。
必死に探している様は何やら不憫でもあったが、ティーダがこれだけ嫌がっていることを考えれば、リョウは口出しをしないことにした。
リョウは取り敢えず口を挟まずに温くなったハンカチを再び流水に浸した。
立派な枝ぶりの長い梢を通して差し込む柔らかな木漏れ日が、小さな水場の表面を揺らし独特な斑模様をその水面に作り出していた。
その模様を指先で弾くように弄びながら、小さなハンカチを絞っていると、
「あー！！！」
甲高い少女の声が響いて、リョウはどうやら見つかってしまった

ようだと思った。

淡い空色の円らな瞳が大きく見開かれたかと思うと、勢いよく駆けてきた。

「おにーちゃん！」

リョウは顔を上げると微笑んで、小さくひらひらと手を振ってみせた。

「どうしたの？　また迷子になっちゃったの？」

少女の第一声に苦笑をする。前回の印象がどうも色濃く残っているらしい。

勢いよく突進してきた小さな体に抱きつかれて、リョウは突然のことに流水がさらさらと流れる噴水の縁から水の中に落ちそうになった。慌てて体勢を整える。齧りついてきた大きな塊に懐にいるティーダが圧迫されたのか、ぐっとくぐもった呻き声を上げたのが聞こえた。

「こんにちは。エクリー」

侍女たちがまだ追いついて来ていないのを確認して、リョウは少女の腕を外しながら、その耳元に小さくとっておきの挨拶の言葉を吹き込んだ。

今度、会う時はエクリーと愛称で呼んで欲しい。この間の台詞を覚えていたからだ。

「覚えててくれたのね？」

エクラータが嬉しそうに目を輝かせた。

「勿論、約束だったからね」

そう言ってリョウはさり気なく服の下にいる小さな獣を庇う為に身体を横にずらした。

そうこうするうちに茂みの向こうから御付きの侍女たちが慌てて駆けつけて来た。

「まぁまぁ、エクラータ様、なにをなさっておいでですか？」

そして、噴水脇に佇む見慣れない少年（リョウのことだ）と仲睦まじそうに寄り添うエクラータを見て、眉を潜めた。

三人の御付きの侍女の中で一番位が上だと思われる年嵩の女性が、エクラータの傍にやってきた。

「さぁ、エクラータ様。もうお戻りになりませんと。ティティーならば直ぐに帰ってきましょう」

年配の侍女の声に反応したのか、懐に中にいる小さな獣がピクリと身体を震わせた。どうやらこの侍女はティーダが苦手とする人物のようだ。

「駄目よ。ティティーをお風呂に入れるって決めたんですもの。今日こそは捕まえてみせるんだから！」

少女は並々ならぬ決意と情熱に小さな拳を胸元で握り締めていた。

お風呂とな。リョウは、内心脱力しつつも事の次第を理解した。どうやらティーダは洗われるのが嫌で逃げ回っていたようだ。風呂に入って汚れを落とすの気持ちのよいことなのだが、この灰色の獣は、それを苦手とするようだ。

リョウは小さく微笑むと直ぐ前に立つエクラータに声を掛けた。

「ティーダに逃げられちゃったんだ？」

「そうなの。もうティティーったら、長いことお風呂に入ってないのよ。気持ちがいいのに」

不服そうに口を尖らせた少女にリョウは微笑んだ。

「ティーダはお水が得意じゃないのかもしれないね」

「でも、駄目よ。綺麗にならなくちゃ！」

エクラータは並々ならぬ使命感に燃えているようだ。

リョウは懐の中に入り込んだティーダがそこまで薄汚れているとは思わなかったのだが、この目の前の少女の許容範囲を超えてしまったのかもしれない。宮殿内は煌びやかであるから、余計にその辺りのことが目立つのかも知れないと思った。

直ぐ傍に集まっていた三人の侍女の内、年嵩の女性がこちらを信じられないという面持ちで見ているのに気が付いて、リョウは慌てて口調を丁寧なものに改めることにした。エクラータは身分ある女の子なのだ。

リョウはちらりと横目に侍女たちを見た後、エクラータに向き直り、小さく微笑んでから諭すように言葉を継いだ。

「エクラータ様。ティーダは獣です。人とは違ってティーダにはティーダなりのやり方があるのですよ。そこを無理に人のやり方に合わせようとすれば、ティーダも納得がいかないでしょう。ティーダとお話をされましたか？　どうしてお風呂が嫌なのか」

静かに同じ目線にある空色の瞳を見つめれば、少女は小さく首を横に振った。

「エクラータ様はティーダの言葉がお分かりになるのですよね？」

念の為、確認すれば小さな頭部が頷きに揺れた。

「では、今度、お尋ねになってみるといいでしょう」

そこで言葉を区切ると、おどけたように小さく声を潜めた。

「それでもあまりにもティーダが汚れ放題で、ぷんぷん臭いにおいをさせていたら、『臭くてかなわん。鼻が曲がる』と言ってあげましょう」

ティーダの声真似が可笑しかったのか、エクラータが可笑しそうに笑った。

「まぁ、湯に浸からなくとも浸した布で身体を拭ってやるだけでも大分違いますからね」

「ほんと？」

「ええ。それでも嫌がるようなら。ティーダに『臭いから絶交よ！』と言ってあげるといいかもしれません。素敵な淑女（レディー）に対して礼を失していますからね。そうすれば、きっと慌てて『綺麗にしろ』と言うでしょうから」

そのたとえが可笑しかったのか、エクラータがからからと声を立てて笑った。その思いつきは、いたくお気に召したようだ。

一方、懐の中にいるティーダは、余りの貶されぶりに腹が立ったのか、『そこまで不潔ではないわ』と抗議をするようにリョウの膝をガブリと噛んだ。

「いっ……冗談だってば」

リョウは小さな痛みを堪えるように一瞬だけ顔を顰めてから、服の下に囁きを吹き込んだ。

ティーダを探すことを諦めたエクラータに御付きの侍女たちは、安堵の息を漏らしたようだった。

だが、それも束の間、エクラータの興味は、今度は直ぐに別の対象に移っていた。

「お兄ちゃんはこんな所で何をしているの？」

「ちょっとほっぺを冷やしていたんだ」

そう言ってハンカチを当てた左頬を指して見せた。

「まぁ、赤くなっているわ。どうしたの？　痛いの？」

矢継ぎ早に問いを重ねられてリョウは苦笑した。

「ちょっとね」

まさか正直に話す訳にもいかない。

「さ、エクラータ様。参りましょう」

これまで沈黙を守っていた年配の侍女が、痺れを切らしたように声を掛けた。

「その者は、大方、女性に声を掛けて振られたのでしょう」

リョウの左腕にある第七師団の青い腕章を一瞥し、事も無げに吐き捨てた。

男が頬を腫らす理由などそうそう種類がある訳ではない。相手が男であれば拳で殴られるであろうから少し腫れるぐらいでは済まされない筈だ。口の中を切ったり、ぶす黒く痣になったりするだろう。それが少しの腫れで済んでいるのだから、どうせ碌でもない理由で女に叩かれたに違いない。そう思ったのだろう。

侍女が下した推測は強ち間違っていはいない。今日はお祭りの日

だ。若い男女が見物客として、はたまた出場者として一同に会する会場がすぐ傍にある。その中で起こり得る戯れの一幕の結果として見做されたようだ。

「お兄ちゃん、そうなの？」

興味津々に問い詰められて、リョウは曖昧に濁すように微笑んだ。

それは、このような小さな少女に話すことではないだろう。

心の中には、何ともいえない隙間風が吹いていた。後ろで同じように控えていた若い侍女たちから憐れむような視線を感じて、リョウは一人たそがれたように遠い目をした。

リョウは、誤魔化すように当たり障りのない微笑みを浮かべると目の前に立つエクラータに向き直った。

「エクラータ様。ワタシは大丈夫ですから。どうぞご心配なく。さぁ、皆さん、心配をされているようですし、お戻りになった方がいいでしょう。途中、ティーダを見かけましたら、身綺麗にするように伝えておきましょう。あんまり臭うようならばワタシがお預かりして、責任を持って綺麗にいたしますから」

「本当？」

「ええ。お約束いたしましょう」

「じゃぁ、約束ね」

そう言って、エクラータは、自分の小さな人差し指を前に差し出した。そして、期待するようにこちらを見ている。

リョウは、その謂わんとする所が分からずに目を瞬かせた。

「あの、エクラータ様？」

「お兄ちゃんも早く指を出して。約束するんだから」

要するに『指きりげんまん』みたいなものだろうかだが、そのような似た習慣があるとは思いも寄らなかった。

どうしたらいいのか分からずに首を傾げれば、

「指をどうするのかな？」

「まぁ、お兄ちゃん、そんなことも知らないの？」

驚きに見開かれた目に、リョウは曖昧に微笑んだ。

子供同士のやり取りの習慣など知る由もなかった。
困惑気味にたじろいだリョウを見かねてか、後ろに控えていた若い侍女の一人がエクラータの傍に歩み寄った。
「同じように人差し指を差し出してください」
「こう……ですか？」
「はい。そして先端を小さく合わせてください。軽く触れ合うように」
「こう……かな？」
侍女に教わったように目の前にあるエクラータの小さな人差し指の腹に自分の指先をちょんと当てた。
「これで約束よ？」
正しかったのか、エクラータが満足そうに微笑んだ。リョウも微笑み返す。面白い習慣をまた一つ知ったと思った。
それで気が済んだのか、エクラータは年嵩の侍女に促されるようにして元来た道を戻って行った。時折、ちらちらとこちらを振り返る。リョウはその姿を眺めながら、小さく手を掲げると控え目に手を振った。その後ろにもう一人の年若い侍女も続いていった。

「助かりました」
一人残った若い侍女が、小さく膝を折り曲げて礼を述べた。それを見たリョウは、慌ててその場に立ち上がった。
突然のことで、懐の中のティーダがずさりと落ちそうになって、空いていた右手を慌てて服の上から腹部に宛がった。相手に感づかれるかとも思ったが、その侍女は気に留めなかったようだ。
「エクラータ様は一度言い出したら中々聞かないお方なので」
「いいえ。ワタシは何もしていませんよ」
丁寧に謝意を表す侍女にリョウは恐縮した。
エクラータとは少し話をしただけだ。その話も見方によっては、酷く不躾に思われたかもしれなかった。幼い少女と雖も身分ある方

に馴れ馴れしい口のきき方をしていたのだから。それを裏付けるように年嵩の侍女は凄い形相でこちらを睨んでいた。まるで第二のスヴェトラーナみたいだった。

「それでもあのようにエクラータ様が素直にお話しをお聞きになるのはとても珍しいことなのですよ」

エクラータはなにかと侍女泣かせのお転婆娘のようだ。良く言えば、無邪気で好奇心が旺盛な性質なのだろう。

くるくると変わる表情豊かな空色の瞳を思い描いて、リョウは小さく笑った。

「あの方は、あなたに随分とお心を開いておいでのようですね」

「そうでしょうか」

「ええ」

どこか居心地の悪そうに首を傾げたリョウに、年若い侍女は穏やかに微笑んだ。

「あなたは、第七師団の方なのですね？」

品のあるほっそりとした顔立ちの中に収まる薄い緑色の光彩が、リョウの左腕に回る青い腕章を見ていた。

「いえ、これは仮のもので。ワタシは正式に第七に所属している訳ではないのです」

ここでまた第七のほうに迷惑が掛かっては不味いと思ったので、正直に告げていた。

「それでは見習いの方ですか？」

「いえ。厳密に言えば、そういう訳でもありません」

何と言ったものかと曖昧に濁せば、案の定、その年若い侍女は不思議そうな顔をした。

「ワタシは養成所に通う学生です。第七には知り合いがいまして、これは臨時で預かったものなのです」

失くさないようにと腕に巻いていたと答えておいた。それで相手は納得をしたようだった。

「まぁ、そうでしたの。するとエクラータ様がよくお話しになって

いた【夜の精】のようなお方というのは、あなたのことなのですね？」

その言葉に今度はリョウの方が虚を突かれた顔をした。

これまでエクラータに会ったのは【アルセナール】に向かう途中で迷子になった折の一度きりだ。それももう七日程も前のことだった。

目を白黒させているリョウの傍らで、侍女は可笑しそうに喉の奥を鳴らした。

「あなたにお会いになって暫くは、もうそのお話しで持ちきりでしたのよ。『庭先で【夜の精】が迷子になっていた』と仰って」

その時の光景を思い出しているのか、侍女は微笑ましそうに目を細めるとその口元に品よく手を宛がった。

リョウは曖昧に苦笑を浮かべてみせるしかなかった。あの時は敷地の広さにほとほと困り果てたということもあるが、いい年をして迷子になったというのは恥ずかしい以外のなにものでもない消し去りたい記憶だ。それを知らぬ場で囁されていたかと思うと穴があったら入りたい気分だった。

そんなことを考えていると目の前に影が差した。

思いの外すぐ近くに年若い侍女が立っていた。

「本当に。髪も瞳も。真っ黒なのですね。お話しの通りだわ」

どこか感嘆に似た息を吐いた。

侍女の細い手がリョウの頬に伸びた。左側の少し赤みを帯びた部分に白くて細い指先が触れた。その瞬間、ぴりりとした引き攣れるような痛みがその場所に走った。

思わず顔を顰めたリョウに、侍女が囁いた。

「可哀想に。腫れてしまって」

「いえ、どうぞお気になさらないでください。ただの打ち身ですから、すぐに良くなります」

「罪作りな人。恋人を泣かせてしまったのかしら？」

至近距離で薄い緑色の瞳が細められた。どこかからかうような口ぶりだ。

「いいえ。そのような色のあるお話しではありませんよ」

妙な方向に流れ始めた空気を払拭するようにリョウは淡々と口にしていた。

「そうだわ。わたくし、腫れによく効く薬を持っていますの。よかったら、塗って差し上げますわ」

その申し出にリョウは狼狽した。

「いえ、どうぞお構いなく。薬であれば、ワタシの方にも用意がありますので」

見ず知らずの侍女にそのようなことをしてもらう訳にはいかない。それに自分はこれでも術師見習いなのだ。こういった怪我への対処は、自分の専門分野でもある。

そのことを挙げて断りを入れたのだが、

「いえ。どうかこちらにいらして下さいな。折角の可愛らしいお顔が台無しですもの。そのままでお帰しするわけにはまいりません。どうかご安心を。効き目は抜群のお薬なんですから」

それから何度も丁重に断りの言葉を口にしても、何故か侍女は納得せず、頑なに手当てを受けるようにと勧めた。そして、リョウはとうとう根負けする形で頷かざるを得なかった。

「あの、よろしいのですか?」

宮殿の区画に入り、前方を静々と歩く侍女と同じような格好をした女官たちや官吏と思しき人々、そして要所要所に立つ長剣を腰に佩いた近衛の兵士たち（恐らくスヴェトラーナの所の第二師団の兵士たちだろう）と擦れ違うようになって、リョウは全くの部外者である自分がこのような奥向きの場所に立ち入ってしまっても良いのだろうかと内心、冷や汗を垂らしていた。

不安が声音に滲んでいるのが知れたのか、先導する侍女は小さく振り返ると『心配することはない、大丈夫だから』とおっとりと微笑んだ。

先程からこのような遣り取りをもう何度も繰り返していた。

ティーダは這い出す切掛けを逸した形になって、いまだリョウの懐の中にいた。ただ、手で片手で身体を支えるには限界があったので、ベルトで腰を締める形になっている上着の中に移動してもらった。歩きながら外套の中にさり気なく手を入れて、上着の釦を外し、こちらの方に入るようにティーダを促した。お腹の辺りが妙に膨らむ具合になったが、元々大きめの外套でなんとか誤魔化した。幸か不幸か、今の所、前方を歩く侍女は気が付いていないようだった。

「ティーダ、苦しくない？　大丈夫？」

落ち着いた色合いの石畳の敷かれた長い回廊をおっかなびっくり歩きながら、小さく囁けば、

『やれやれ』

大儀そうにぼやきながらも、ティーダはそこから出ようとはしなかった。

『眠くなってきたわい』

回廊を歩くリョウの内心の動揺とは裏腹にやけにのんびりとした態度でそのようなことを言う始末。

リョウは苦笑いをしながらも、いざとなったらこの場所に精通していると思われるこの灰色の獣を頼ればよいかと思い直して、腹を括ることにした。

リョウは少し前を歩く侍女を見た。一つにすっきりと纏められた茶色の柔らかそうな髪が歩く度に小さく揺れていた。

歳はどのくらいであろうか。自分と同じくらいか、もう少し下か。こちらの女性は総じて大人びて見えるので自分の勘は余り当てにならなかった。ブコバルならばこういうのは得意なのかもしれないが。

第一、これまで若い女性と接する機会は驚くほど少なかったのだ。

俗に妙齢と言われる年頃の娘たちと言葉を交わす機会など殆どなかった。精々がスフミ村のアクサーナとその友人たち位だ。それから【プラミィーシュレ】で出会ったソーニャぐらいなものだろう。

たとえ儀礼的な遣り取りと雖も、そういう女たちと言葉を交わすことが出来て、本音の所では少し嬉しくもあったのだ。まぁ、向こうにしてみれば、こちらのことは年端の行かぬ少年だと思っているのであろうが。

そのようなことを思いながら、少し薄暗い、それでも落ち着いた品のある色使いの廊下を進んで行くと、とある部屋の前で侍女が立ち止まった。

「こちらへどうぞ。少し散らかってますけれど」

そう言って促された場所は、若い侍女たちの休憩室、若しくは控室のような趣の場所だった。

「まぁ、イーラ、遅かったわね。大丈夫だった?」

侍女が中に入ると中にいた女たちから次々と声が掛かった。

リョウは念の為、戸口で一旦、立ち止まった。可笑しな話だが、女たちばかりの部屋に男のように見える自分が立ち入ってよいものかと逡巡したからだ。

「どうぞ。いらっしゃい。こちらで手当てをしますから」

部屋の中から手を拱いた侍女に周囲にいた女たちが一斉に戸口付近を振り返った。

中には、少なく見積もっても六・七人はいるだろう。其々に繕いものをしていたり、帳面らしきものを繰っていたり、束の間の時間を思い思いに使っていたようだ。

リョウをこの場に案内してきた侍女は、壁際の棚へ手を伸ばしながら戸口に立つリョウを見ていた。

沢山の好奇に満ちた瞳に注目されてリョウは無意識に肩を震わせた。『目は口ほどにものを言う』とはまさにこのことで、憚らずに

注がれる視線は其々に雄弁だった。
「まぁ、イーラ、どうしたの？　あんな子を連れて来て」
「あら。第七の腕章を着けているわ。兵士……っていうには若いわね」
「見習いの子かしら？」
「なぁに、イーラ。どこで引っ掛けてきたのよ」
「珍しい顔立ちね」
「瞳が黒いわ」
「髪もそうね」
一斉に甲高い女たちのおしゃべりが、それ程広くはない室内を埋め尽くした。何度聞いても女たちの話声は、高低と抑揚のある特徴的な言葉使いで、まるで軽やかに歌でも歌っているように聞こえるのだから面白いものだ。この国の言葉を覚えたての時は、本当に歌のように聞こえたのだが、その内容を理解出来る今では、語られる言葉のあけすけさに内心ドキリとすることの方が多い。
リョウは、女たちの迫力に気後れしていた。
「ほら。あなた。いらっしゃい。大丈夫よ。誰も取って食べたりはしないわ」
若干口元が引き攣りそうになっているリョウの躊躇いが見てとれたのか、侍女からは鈴が鳴るようにころころと笑われて、リョウは曖昧な微笑みを浮かべると
「すみません。失礼いたします」
軽く会釈をして、断りを入れてから女たちの園に足を踏み入れた。
小さく湧き立つような妙な外野の反応は、敢えて気に掛けないことにした。
『相変わらず、姦しいものどもよ』
上着の中で小さくティーダがぼやいた。リョウも心の中でそっと同意をしておいた。
部屋の中には真ん中に大きな木のテーブルが置かれ、その周りに

は小さな椅子が並んでいた。侍女たちは思い思いの場所に座りながら其々の作業をしていた。壁には大きな棚が並んでいる。
簡素な木の丸椅子に腰を掛けるように勧められて、リョウは大人しく従った。
そこに手当てをする為に軟膏と油紙、布の切れ端を手に侍女がやってきた。

「あの、お名前をお聞かせくださいませんか？」
自分の名前を名乗ってから、リョウは改めて侍女の名前を尋ねた。
ここまでしてもらって名乗らない訳にはいかなかった。
「まぁ、イーラったら。名前も聞かずに連れて来たの？　いつになく積極的ねぇ」
斜交いに座るふくよかな女性がおおらかに笑った。
「もう、そんなんじゃないわよ」
すぐに入った茶々を慣れたようにあしらいながら侍女が微笑んだ。
「イーラよ。よろしくね、リョウ」
「はい。こちらこそ」
「あらまぁ、そうやって笑うと随分と可愛らしい感じになるのねぇ」
年嵩のどっしりとした体格の良い侍女が、リョウの方に身体を寄せながら顔を覗き込んだ。
「あらあら、本当に髪も瞳も真っ黒なのねぇ」
そうして感心したように口にする。
リョウは、ただただ大人しくじっとしていた。
「あら左側の頬が腫れているじゃない。どうしたの？　誰かに叩かれたの？」
「あらあら大変だわ」
「まぁ、可哀想に」
周りに座る女たちから矢継ぎ早に言葉を重ねられて、
「まぁ、そのようなものです」
リョウは曖昧に微笑んだ。

対するイーラは手当ての用意をしながら、だからここまで連れて来たのだと言った。

気が付けばリョウの周りにはわらわらと侍女たちが集まっていた。ここまで来ると何やら見世物になった気分だが致し方ない。これもある意味、いつものことなのだ。

「さらさらとして素敵な髪ね」

無造作に紐で括っただけの黒い髪の束へ一人の侍女が手を掛けていた。

「ほら、御覧なさいよ。こんなに指通りもいいわ。細い【ノーチ】の糸みたい」

「ターネェチカ、退いてちょうだい。そこにいたら薬が塗れないわ」

軟膏を手にしたイーラに、薬ならば自分で塗るから大丈夫だと声を掛けたのだが、すげなく却下されてしまった。

「動かないでくださいね」

イーラの細い指が頬の腫れた部分に軟膏を塗り込んでいく。些細な刺激は少々痛んだが、我慢した。

「肌も綺麗ね。肌理が細かくて。羨ましいわぁ」

イーラが軟膏を塗る反対側からうっとりと囁かれて、リョウは心の中で苦笑いをした。

やはり女たちだ。幾つになっても御洒落や美容に関心が高いのは共通項だ。

「何かお手入れをしてるの？」

興味津々に尋ねられて、顔を動かせないので横目で問いを発した侍女を見た。色白で頬にそばかすが残る愛嬌ある顔立ちをしていた。

「いえ、特には……」

こちらでは石鹸で顔を洗うだけだ。かつてとは違い何も特別なことはしていなかった。ただ、こちらの水は身体に合っていたのだろう。普段、鏡を見るようなことをしていないので、その辺りのことは良く分からない。ひょっとしたらシミだらけになっているかもし

れない。
「まぁ、ユーリャったら。男の子がそんなことをする訳ないじゃない。おかしな子ねぇ」
「あら、でもいい所のお坊ちゃん方は、ちゃんとお手入れをしているそうよ？　この間、アルーハーン様が仰ってらしたもの」
頭上を行き交う女たちの舌は実に滑らかだった。上着の中のティーダが絶え間なく続くお喋りに閉口したように身じろいだ。
するとリョウのすぐ脇で繕いものをしていた体格の良い侍女が、リョウの外套の合わせ目から覗く灰色の尻尾に気が付いたようだった。
「あら、あなた。懐に何を隠しているの？」
その瞬間、中にいるティーダの身体が強張ったのが分かった。
「どうしたの？　マーシャ？」
「なにかいるみたいよ？」
大人しく薬を塗られている時だったので、身体を思うように動かすことが出来ず、あれよと思う間に隣から外套に手を掛けられた。
「あらまぁ」
そこには、こんもりと妙な具合に膨らんだ上着とその釦の隙間からは長い尻尾が飛び出していた。
『頭隠して尻隠さず』という珍妙な塩梅だった。
リョウは大きく息を吐くと、
「ティーダ。観念しなよ？」
そう口にしてから、静かに上着の釦を外して行った。やがてその合間から、ひょっこりと灰色の獣が鋭い二本の牙を剥き出しにして顔を覗かせた。
「きゃぁ！」
思いがけないものだったのか周りの侍女たちから悲鳴のような声が上がった。
ティーダは上着の縁に手を掛けて、なにやらぐったりとした様子だった。

「ティーダ、大丈夫？」
『ああ』
「まぁ、ティティーじゃないの！」
薬を塗っていたイーラが吃驚して手を止めた。そして、まじまじとリョウの方を見た。
エクラータがあんなにも必死になって探していたのだ。それに付き合うことになったイーラも随分とあちらこちらを探したのかもしれない。
申し訳ないことをした……のかもしれない。
「すみません。匿ってくれと頼まれたものですから」
「あら、あなた。ティティーの言葉が分かるの？」
「はい」
上着から這い出たティーダは観念したのか、リョウの膝の上に乗っていた。リョウは宥めるようにその毛並みをそっと撫でていた。
「随分と懐いているのねぇ」
大人しくしている小さな獣を見て、感心したような声が漏れた。
「さぁ、終わったわ」
軟膏を塗ってその上に油紙を張り、その上から当て布を張った。
何だかとても大げさになった気がしたが、折角の行為を無碍にすることも出来ずにリョウは素直に『ありがとうございました』と謝意を口にした。
イーラは『どういたしまして』と微笑んで、手を洗い片付けをするべく隣の部屋に行った。そのほっそりとした後姿をリョウは些か複雑な気分でそっと見送ったのだった。

中座してしまった武芸大会の行方も気になるし、手当てをしてもらったのでそろそろお暇しようかと腰を上げかけた時だった。
俄かに控室の戸口が賑やかに色めき立ったきがした。
「まぁ、嬉しいわ。いつもありがとうございます」

先程よりも幾分音域の高い侍女の華やいだ声が室内に響いた。
その弾んだ声に戸口の方を透かし見れば、若い侍女たちに囲まれるようにして立つ男の横顔が見えた。
淡い金色の繊細そうな細い髪が真っ直ぐ顎の所まで伸びている。そこで切り揃えられた髪は、艶やかに光沢を放っていた。
視線を感じたのか、その男がゆっくりと振り返った。そこにある薄い灰色の光彩と目が合った瞬間、相手が小さく目を見開いた。だが、すぐに男にしては実に艶やかで綺麗な類の微笑みを浮かべたのが分かった。
「リョウじゃないですか。このような所でどうしたんです？」
「……ゲーラさん」
それはこちらの台詞でもあった。まさか、このような所で顔を合わせるとは思わなかった。
戸口に立っていたのは、第三師団の団長であるゲオルグ・インノケンティだった。
侍女たちの視線も一気にこちらに向いた。
「こんにちは」
再びの注目に居心地の悪さを感じながらも挨拶を返せば、ゲオルグは、つかつかと中に足を踏み入れ、丸椅子から立ち上がったリョウの傍に来た。
「まぁ、インノケンティ様。その子とお知り合いなの？」
「ええ」
侍女の問い掛けにゲオルグは振り返ると鷹揚に頷いた。
「おやおや、怪我をされたんですか。このような所に」
リョウの左頬を見たゲオルグは、その形のいい眉を顰めた。
「ああ。これは大したことではありません。ちょっとぶつけてしまって。イーラさんが念のためにと手当てをして下さったので」
繊細で柔和な面立ちがずいと寄ってきて、リョウは咄嗟に身体を引いていた。
近づいたまま、ゲオルグの視線がついと下に降りた。

「おや、ティティーも一緒なのですね？」
そう言って、にっこりとどこか白々しい感のある笑みを刷いた。
リョウの腕の中でまどろむように目を瞑っていたティーダは、閉じていた目を片方だけ上げて、すぐに感心なさそうにそっぽを向いてしまった。
何やら含みのありそうな関係だ。

「インノケンティ殿」
注意を喚起するような響きを持った男の声が、戸口の向こう、廊下の方から響いた。
「ああ、今、行きますよ」
――――――名残の挨拶くらいさせてくださいな。
ゲオルグは、手土産である菓子の類を手渡した後、一頻り、侍女たちに愛想を振り撒いていた。
シーリスから、第三師団の団長は、ブコバルとは違った意味合いで女性関係が手広いとのことを聞かされていたが、奇しくもその評判を目の当たりにした気分だった。
恐らくゲオルグは、驚くほど強かで根回しの上手い男なのだ。単なる女好きということもあるのだろうが、こういう宮殿の下支えをしている侍女たちを味方に付けるのは、ちょっとした裏の情報収集や人間関係を円滑にしてゆく上で、大事なことに違いない。
定期的な貢物を欠かさないというのを聞き及んで、実にマメな男だと思った。そして、きっとあの類稀に整った容姿も武器になっているのだろう。

ちょうど潮時だと思った。
「それではワタシもこれで」
このまま暇を告げるべく声を掛ければ、
「あら、もっとゆっくりしていけばいいのに」
繕いものをしていた侍女に引き留められた。

「いえ、皆さまのお邪魔になりますので」
「まぁ、控え目なのね」
それから、戻ってきたイーラにもう一度、ありがとうと礼を述べて、リョウは賑やかな侍女たちの控室を後にしたのだった。

戸口を出た所で一緒になったゲオルグにこれからどうするのだと聞かれて、武芸大会の会場である宮殿前広場に戻るのだと伝えれば、ちょうど良いから自分も一緒に行こうと言われた。
ここまでの道のりが少々覚束なかったので、リョウはその申し出を有り難く受けることにした。腕の中にいたティーダは、疲れたので昼寝をすると言って、来た時と同様にふらりとまたどこかへ行ってしまった。
ゲオルグの傍には、もう一人、連れの男がいた。自分にとっては最早お馴染みになった白い簡素な上下に艶やかな濃紺の帯を締めた神官と思しき男だった。どことなく影のある密やかな空気を身に纏う壮年の神官だった。
リョウはその神官に軽く会釈をして、途中まで同行させてもらえるようにと許しを請うた。神官はちらりとゲオルグの方を見て、その繊細な面立ちが了承するように頷いたのを見てとってから、静かに首を縦に振った。
こうして再び、武芸大会の会場に戻るべく、些かちぐはぐな組み合わせの男たちとリョウは行動を共にすることになったのだった。

水辺の囁き（後書き）

長々とお付き合い下さりありがとうございました。
少々脱線しましたが、漸く武芸大会の会場の方へ戻って来られそうです。次回に続きます。

意外な組み合わせ

侍女たちの控室からの帰り道、リョウはゲオルグと神官の二人の男たちが歩く後ろをそっと付いて行く形になった。

こうしてみるとゲオルグは神出鬼没な気がした。いつもどこからともなく現れるのだ。

ゲオルグは曲がりなりにも第三師団の団長だ。このような所にいてもよいのだろうかとリョウは疑問に思った。軍部の団長を拝命するには、ある程度剣技の腕が立たないと成れないものだと聞いていたからだ。だから当然、団長であるゲオルグも大会の方に参加をしているのではと思っていた。

折しも、今は武芸大会の団体戦が行われている真っ只中だ。掲示板で見た組み合わせでは、ゲオルグの第三師団は、第二会場の組み合わせ（ブロック）で、三試合目にこの国の南西方向、キルメクとの国境警備を担う【西の砦】に詰めている一団である第九師団と一戦を交えることになっていた筈だった。

少し前を歩くゲオルグからは、別段慌てたような様子は見受けられない。急ごうという感じもない。いつも通りののんびりとした自然体である。

リョウは、ひょっとしたら、この男もシーリスのように大会へは不参加なのかもしれないと思った。それにしても、仮にゲオルグが不参加だとしても、仲間たちが戦う雄姿をすぐ傍で見届けなくてもよいのだろうかという疑問は依然として残るには違いないが。

スタルゴラド騎士団の十ある部隊の中でも、第三師団は他と比べても若干、その任務の趣が異なっていた。ニキータやアルセーニィーが以前、食堂で話していたのだが、第三には目立って剣技を得意とするものはいないのだとか。軍部に所属をするのでその辺りは一応基礎的な訓練は受けているのだろうが、第三ではそれで身を立て

るということにはならないとのことだった。そのような理由から団体戦ではいつも初戦で敗退をしているのだとか。術師を多く抱える第三師団にニキータとアルセーニィーの二人は親近感を覚え、贔屓にしているようだったが、そこは仕方がないのだと割り切っているようでもあった。

そう言えば、以前、授業が一緒になった時、ニキータは術師の登録認可が下りた後、第三師団への登録を考えているというようなことを口にしていた。

ゲオルグの隣を歩く神官は、物静かでどことなく影のある壮年の男だった。神官を表わす白い簡素な上下のいでたちが実によく似合っている。階級を表わす帯の色は濃紺だ。淡い紫色の帯を締めているレヌートよりは位が一つ下だが、それでも神官たちの中ではそれなりの高位に位置するに違いなかった。

先を歩く二人の男たちの会話は、専らゲオルグが話をし、その隣にいる神官は合間に合槌を打つ程度であった。ゲオルグは決して喧しいという感じではないのだが、話題の引き出しも多く、じつに会話が巧みなようだ。

「ああ。リョウ」

不意に前を向いていたゲオルグが後ろにいるリョウを振り返った。

「はい」

「先程、ザガーシュビリ殿の所にお邪魔していたのですよ」

その言葉に、ゲオルグは随分と顔が広く様々な人脈を持っているのだと密かに思った。

「……そうなんですか」

小さく目配せをするようにして微笑まれたが、リョウは相手の言わんとする所がよく掴めずに、実に面白味のない返事を返していた。

「レヌート先生を御存じでいらっしゃったのですね」

「ええ。互いに顔を見て認識をするという程度でしたが。まともに言葉を交わしたのは今日が初めてでした」

「……そうなんですか」
ゲオルグは何が言いたいのだろう。互いに顔は知っていたが、会話をしたのは今日が初めてだった。要するに態々、レヌートの所に何がしかの目的を持って訪ねたということが言いたいのだろうか。別段、深い意味はないのかもしれないが、ふとその裏を勘繰るような方向へ思考が行ってしまった。

そのようなことに気を取られていると、
「キミはレヌートに師事をしているのか？」
そこで初めて、リョウの左斜め前方を歩く神官が、こちらをそっと振り返った。
淡い茶色の玉のような瞳がこちらを捕らえた。
「はい」
「では、いずれは【ユプシロン】に？」
「……ユプシロン？」
聞き慣れない単語に思考が止まった。
「ああ、神殿の神官になるということですよ。こちらではそのような呼び習わしがありまして。まぁ隠語のようなものでしょうか」
リョウの戸惑いを感じ取ったゲオルグは、ご丁寧にも説明をしてくれた。
要するに神殿に仕える神官を仲間内では【ユプシロン】と呼んでいるとのことだった。
【ユプシロン】――――――どこかで聞いたことがあるような気がする。それはどこであっただろうか。
だが、それをこの場で思い出すことはできなかった。

リョウは雑念を振り払うかのように小さく頭を振ると、問いを発した神官を見上げた。まだ肝心の質問に答えていなかった。
「いえ。神殿入りする積りはありません」
そもそも自分の性別を考えれば、それは不可能な話だった。

小さく眉を跳ね上げた神官にリョウはそっと微笑んだ。
「道が閉じられておりますので」
神官は、尚も訝しげな表情をしたが、リョウはそれを有耶無耶に流した。
その隣で、ゲオルグが何かを判じるかのようにその目を細めていたことには、気が付かなかった。

やがてリョウたちの一行は宮殿の区画から外に出ていた。
日が大分高い所にある。地面に伸びる影が随分と短くなっていた。
神官は、この後、神殿に戻るとのことで進路を東方向、左手に取った。こちらとは真逆の方向だ。
そして、リョウはゲオルグと共に武芸大会の会場である宮殿前広場へ向かうべく進路を右手に取ったのだった。
「ゲーラさんは、お出にはならないんですか？」
どうしても気になったので一応聞いてみれば、ゲオルグは何やら楽しそうに微笑んでリョウの推測を肯定した。
「そう言えば、第三は第九と当たるそうですよ」
リョウは掲示板で見た対戦表の組み合わせを伝えていた。
「おや、キミは私の所属を御存じでしたか」
「ああ。はい。レヌート先生の親戚に第七の副団長をしている方が居まして、その方からお聞きしました」
知り合いになった順序としてはあべこべであったのだが、向こうが自分の事を色々と調べ上げているとは思わないリョウは、相手に分かりやすいようにそのような説明をしていた。
リョウの方とて、ゲオルグのことは【ゲーラ】という愛称しか教えてもらっていなかったのだ。ゲオルグ自身は、自分が軍部の人間であることを仄めかしはしたが、実際にどこに所属をしているのだとか、どのような立場にあるのかといったことは、何も口にしていなかった。
気が付けば周囲からその男の情報を得ていた。

「そうですか」
ゲオルグは何やら愉快そうにその目をうっそりと細めた。
「シーリス殿は何と？」
そう言って横目にこちらを見下ろしたゲオルグは、妙に迫力のある微笑みを浮かべていた。
リョウは、一瞬、たじろぎそうになったが、敢えて、気が付かぬ振りをしてさらりと流した。
「ゲーラさんが、第三の団長であると教えて頂きました」
他にも色々と入ってきた情報はあるのだが、それはこの場では言わなくてもいいだろう。
「すみません。そのような身分ある方だとは知らず。これまでの御無礼、お許しください」
初対面の相手に不躾な態度を取った積りはなかったのだが、軍部の中でいう所の上官に対して節度ある態度が取れていたかどうかは怪しいものだった。
そう言って取り敢えず自己完結したように口を噤んだリョウに、ゲオルグは小さく喉の奥を震わせた。
「本当に、キミは控え目ですね。そのようなことなど気にすることはありませんよ。私の方も自分の肩書を明かさなかったのですから。おあいこです」
――――――それに肩書に縛られるのは面白くありませんからね。
そう言って茶目っ気たっぷりに片目を瞑って見せた。
相手が見せた寛容な態度にリョウは小さく微笑んでいた。
「ありがとうございます」

そこで不意にゲオルグが真面目な顔付きをした。
「リョウ。後でお時間を下さいませんか」
「はい？」
「キミが暇な時でよろしいので。少し、キミとゆっくりお話をした

いと常々、思っていましてね」
その申し出にリョウはいよいよ【その時】が来たかと緊張した。
これまで幾度となく軍部への誘いを口にされていたが、断りの言葉を告げても中々どうして相手は諦めた様子を見せなかったのだ。今一度、正式に断りの話し合いをしなければとは思っていた。いざとなったら忌憚なく腹を割って正直に話をしなければなるまいとさえ思っていた。要するに自分の性別のことも含めてだ。
リョウは腹を括ると静かに頷いた。
「分かりました。この大会が終わって、養成所の方の授業との兼ね合いを見る形になるので今すぐ【いつ】とはお約束ができませんが」
レヌートとイオータの二人の講師からは、其々、【祈祷治癒】と【鉱石処理】の分野で、一応講義の修了印を貰っていたのだ。他に選択している講義も佳境に入ってきていた。それらとの進み具合と兼ね合いを見て最終試験への申請を行う必要があった。なので時間を取るとしたら、術師の最終試験を受けた後になるかもしれない。
その辺りのことを告げれば、
「ええ。キミの都合に合わせてもらって構いません」
ゲオルグは鷹揚に頷いた。
時間が取れたら伝令を使って知らせてくれて構わない。なるべくこちらもそちらの都合に合わせられるように調整するからと言われて、リョウは恐縮してしまったのだが、相手の申し出に静かに頷いて見せた。

そして、再び辿りついた宮殿前広場は、多くの人々でごった返していた。午前中に比べても見物人の数は増えているように思えた。
ゲオルグは広場から直ぐに会場の方には向かわずに、何故か広場入り口の外にある外郭部分の方へ足を伸ばした。
「どちらへ向かわれるのですか？
不意に進路を逆方向に転じたゲオルグを不思議そうに見遣れば、

「少しお腹が空いたでしょう?」
そう言って物売りの屋台が並んでいる方を指差した。

そこには、集まった多くの観客たちを当て込んでか、様々な屋台が臨時に軒を並べていた。
聞く所によると事前にこの街中を管轄している第四師団の方へ許可を申請して受理されれば、この場所で飲食物や雑貨などの販売ができるのだとか。
リョウは、腹の辺りに手を当てて優雅な身のこなしで佇む気品溢れる男とそこに並ぶいかにも庶民的な屋台の組み合わせを見て、内心、可笑しみを禁じえなかった。どう見てもちぐはぐな感じがする。略式の軍服をきっちりと着込んだ男が、あのようなものを食べ付けているとは思えなかった。それもある種の偏見なのかもしれないが、致し方ない。
仮設屋台の周りには、多くの人たちが集まっていた。焼いた肉の脂の匂い。菓子の甘い匂い。果物の清涼感溢れる甘い匂いも漂っている。物売りの威勢の良い掛け声。まるで街中の小さな市が、そこに突如として現れたかのようだった。
リョウの内心の疑問を感じ取ったのかは知らないが、
「意外にイケるんですよ」
繊細な面立ちの上品な口元が、そのような台詞を紡いで小さく口角が上がる。
リョウがその意外な組み合わせに目を白黒させている間に、ゲオルグは一人、屋台の方へ足を向けたかと思うと何やらそこで売られているものを購入し、小さな紙袋を二つ手に戻ってきた。
「はい。どうぞ」
手渡された口が開いた小さな袋の中には、こんがりと硬めに焼いたパンの間に野菜と香辛料を付けて焼いたと思われる【クーリツァ(鶏肉)】だろうか、何かの肉を挟んだものが入っていた。
「あ、お幾らでしたか?」

リョウは慌てて、代金を払おうと小銭を入れていた上着の内ポケットを探ったが、ゲオルグに要らないと断られてしまった。
「美味しいですよ？」
言った傍からゲオルグは、その場で同じ紙の包みに齧り付いていた。
それは、やはり少し違和感を覚えてしまうような光景だった。これがブコバルであるならば、たとえ貴族だと言われても妙な感じは受けないのだろうが（リョウも大概失礼なことを考えている）。意外や意外。上品な有閑貴族のように見えるゲオルグもこのようなものを口にするのだと知って、リョウは慌てて脳内にあるゲオルグの人物像（プロフィール）に訂正を書き加えた。
お祭りだからなのか、それともゲオルグ自身がこういう性質なのか、ひょっとしたらその両方なのかもしれないが、リョウにはいまいち判別がつかなかった。

「あ、はい。頂きます」
折角なので、リョウもその場で御相伴に預かることにした。包みを捲って齧りついてみる。シャキシャキとした野菜の歯ごたえと油のある肉の旨味とが口に広がって、思った以上に美味しいものだった。香草を加えて焼いた肉が、肉本来の甘みを上手く引き出している。香草の香りが肉の脂をしつこくないものにしていた。
「……美味しい」
吃驚して手にした包み紙の中身を見たリョウに、
「ね？　中々でしょう？」
ゲオルグは少し得意そうに笑った。そんな仕草をなんだか子供っぽいと思ってしまったのはここだけの話だ。
見かけに寄らずゲオルグは買った包みの中身をぺろりと平らげてしまった。こういう所は、やはり細くとも男なのだと思った。対するリョウは漸く半分を食べたぐらいで、相手を待たせる訳にはいかないので、そのまま食べながら歩くことになった。行儀が悪いかと

も思ったが、周囲には似たような食べ歩きをしている男たちの姿がある。これもお祭りならではのことなのだろう。リョウも道々齧りながら、ゲオルグと一緒に歩いた。

会場の方に戻り、リョウはそのまま第一会場の方へ向かうことにした。ゲオルグは第三の兵士たちが対戦する第二会場の方へ行くのかと思われたのだが、何故かそのままリョウと共に第一会場の方へ行くという。

「あの、いいのですか？」

控え目に自分は一人でも大丈夫だから第三の方へ行って構わないと告げたのだが、

「ええ、いいんですよ」

自分の所は元々剣技に力を入れている訳ではないので、団体戦ではいつも初戦止まりなのだと実にあっさりとその訳を口にした。

リョウ自身、それでは団体戦に出場する兵士たちが報われないのではと思ったのだが、ゲオルグにはゲオルグなりの考えがあり、部下への接し方があるのだろうと思い、それ以上は口にはしなかった。

第一会場へ向かう途中、第二会場の前で一際、大きな歓声が上がった。漏れ聞こえる人々の会話から第三試合が終わったことが知れた。掲示板が張り出されている所では早速、係の兵士が第九師団の方に赤い丸を付け、次の第五試合の方へ赤い線をなぞっていった。

どうやら第三は敗退してしまったようだ。

「やはり駄目でしたか」

その様子をちらりと横目に見たゲオルグは、実に淡々とした感じの感想を述べた。特に何の感慨も抱いていないようである。

「さて、向こうはどうなっているんでしょうかねぇ」

のんびりと口にするとリョウの背中に手を当てて促すように歩き出した。

ゲオルグはあろうことか、そのまま貴族の婦女子たちが集まる特別席の方に向かおうとした為、リョウは慌てて共に行くことを固辞した。

あの場所には、恐らくアリアルダがいるだろう。さっきの今で、顔を合わせたくはなかった。それはきっと向こうも同じはずだ。

「リョウ？　どうしました？」

突然、立ち竦んだ相手を訝しく思ってか、ゆっくりと振り返ったゲオルグに、リョウはこのまま友人たちを探して合流すると口にした。

「こちらの方が、邪魔が入らずにゆっくりと観戦できますよ？」

「すみません。お気持ちは有り難いのですが、オレみたいなのがそこに入る訳にはいきません」

リョウの言葉にゲオルグは気にすることはないと微笑んだ。

「心配要りませんよ。私が一緒にいれば大丈夫ですから」

「いえ。申し訳ありませんが、本当に無理なんです。ゲーラさんは、どうかそちらで観戦なさってください。オレは、あっちの方へ行きますから。多分、友人たちがいると思うので」

言葉を重ねるゲオルグに対し、リョウは頑なに特別席の区域へ立ち入ることを拒んだ。

小さく頭を下げて、そのまま踵を返そうとしたリョウに、ゲオルグは驚くべき反射神経の良さでその腕を掴んでいた。

俯いたリョウの顔色を見て、ゲオルグは内心、驚きつつもそれを表には出さずに微笑んだ。

「リョウ、なんて顔をしているんですか？」

そう言って、傷の付いていない右頬の辺りをそっと撫でた。

そう言われても鏡がないので自分ではどんな顔をしているかなんて分からなかった。だが、恐らく酷い顔になっているのだろう。薬草の成分が効き始めている所為か、左の頬の部分が、じわりと痺れるように温かくなっているのが分かった。

「すみません」
小さく謝罪の言葉を口にしたリョウをゲオルグが軽く笑った。
「何を謝るんです？」
「すみま……あ、いや、そうではなくて」
再び癖になりつつある言葉を口にしそうになって、慌てて気まずそうに視線を泳がせた。
ゲオルグは、リョウの過剰とも思える拒否反応に特別席に顔を合わせたくない相手でもいるのだろうかと思った。ひょっとしたら、その左頬を腫らしている原因もその辺りにあるのではないかと思った。下世話な勘繰りと言ってしまえばそれまでだが。
「分かりました。それではあちらにしましょう」
ゲオルグは小さく息を吐くとリョウの腕を取ったまま、特別席からは離れる方向へと歩き出した。
「あの、ゲーラさん。ゲーラさんはどうぞあちらで。オレは一人で大丈夫ですから」
一緒について来ようとするゲオルグにリョウは自分の個人的な事情に相手を付き合わせる訳にはいかないと慌てたのだが、
「リョウ、そんなつれないことを言わないでください」
振り返ったゲーラがほんの少し哀しそうにその繊細な眉を下げた。
「私が共にいては迷惑ですか？」
畳みかけるように儚い風情で言われて、リョウは何故か妙な罪悪感に似た気分に囚われた。
こういう時、ゲーラの持って生まれた美貌という名の武器は、思わぬ方向で作用した。恐らく、その効用をよく知る本人は確信犯で使っているのだろう。
リョウは酷く申し訳ない気持ちになって、
「いえ、とんでもない」
すぐさま否定の言葉を口にしたのだが、その瞬間、自分の鼻先でゲーラが実に眩しい笑みを浮かべた。
それを目の当たりにしたリョウは、内心、相手の手中にまんまと

嵌ってしまったのではと思った。
「すみま……」
と再び、同じ言葉を繰り返そうとして、
「いえ、ありがとうございます」
リョウは言葉を改めた。
相手が気を遣ってくれたことが分かった為、謝罪よりも感謝を表わす方がいいだろうと思った。
改められた言葉にゲオルグは穏やかに微笑んで見せた。

意外な組み合わせ（後書き）

短いですがキリがいいので、この辺で。次回に続きます。

団体戦　第三試合

第一会場は、本日最後の試合ということで、リョウが先に見学した第一試合の時よりも更なる熱気に包まれていた。囃したてる野太い声に混じり、時折、甲高い声も響いていた。

ゲオルグは器用に男たちの人垣をすり抜けて見物する場所を確保した。近くにどうも知り合いがいたようで、こっちに来いと呼びよせてくれたのだ。

そして、二人が陣取ったのは、第五の兵士たちが縦に並ぶ北寄りの場所だった。

そこに並ぶ顔触れを遠目に見て、この会場でユルスナールたち第七と試合をするのは第五のドーリンの所だということが分かった。ということは、先の第二試合では第五が勝ち進んだのだ。思わぬ出来事で先の第五の試合を見逃してしまったので、リョウは内心、良かったと思った。

会場の中央では、既に試合が始まっていた。第七の方は一番手のアッカが出ている。それに対峙しているのは、以前、【プラミィーシュレ】で化膿止めを分けた兵士だった。

審判の鋭い声が旗と共に上がり、両者は一礼してすると共に下がっていった。

アッカは引き分けたようだ。

次に二番手のロッソが第七から出て、第五の方からはイリヤが出て来た。

短く刈った明るい金色の頭髪が、日の光を浴びてきらきらと輝いていた。良く日に焼けた浅黒い肌は艶やかではりがある。左側の頬桁の辺りに斜めに走る刃傷の跡が、猛々しい武骨さを滲ませていた。

剣を手にしたイリヤの表情は、とても引き締まっていた。リョウにとっては初めて目にする真剣そのものの顔付きだった。イリヤも基本的な顔の造作は強面の部類に入るのだろうが、リョウはこれまで厳しい顔付きをしたイリヤを見たことがなかった。下手に言葉を交わし、何がしかの交流がある分、同じ人であるのに、別人のような印象を受けるのだから面白いものだ。

リョウは、どちらを応援したらいいのか迷った。ロッソには勝って欲しいが、イリヤにも負けて欲しくない。なので、勝ち負けには拘らずに、其々が思う存分持てる力を発揮できるようにと祈ることにした。

審判の掛け声と共に打ち合いが始まった。力ではロッソの方が押しているように見えるが、イリヤも負けてはいなかった。

ロッソが踏み込んで、イリヤが体勢を崩し、膝を着いた。金属同士のぶつかる鈍い音が響く。だが、それも一瞬のことで、すぐに下から一息に受けた剣を押し上げて、イリヤは体勢を整えると反撃に回っていた。素早さではロッソよりもイリヤの方が上のようだ。

リョウは知らず、握り締めた拳に力を入れていた。唾を飲み込む。

「リョウ、肩に力が入っていますよ」

耳元でゲオルグの声が掠めた。

力を抜くようにと肩をそっと撫でられて、リョウは詰めていた息を吐き出した。

「第七の方は分かりますが、第五の方も顔見知りですか？」

すぐ脇に立つ小さな体から並々ならぬ緊張を感じ取ってか、ゲオルグが訊いた。

「あ、はい。少し前に【プラミィーシュレ】を訪れたことがありまして、その時に【ツェントル】の方々にお世話になったので」

「そうですか」

リョウの言葉にゲオルグは興味深そうな声を上げていた。

「すると第五の団長ともお知り合いですか？」

「ドーリンさんですか？」
「ええ」
「そうですね」
「……成る程」
この時、ゲオルグの顔には満足そうな笑みが浮かんでいたのだが、前を向いて試合の行方に夢中になっていたリョウは、当然のことながらそのことに気が付くはずもなかった。
「やはり思った通りでしたね」
思わず漏れた呟きにリョウが一瞬、怪訝そうな視線を隣に走らせたのだが、
「いえ、こちらのことです」
ゲオルグはあっさりと流して見せた。

一際、鋭い気合の声が、剣を交える男たちから上がった。
次の瞬間、審判がばっと旗を上げた。
上方に掲げられたすらりと伸びた二本の剣先は、互いの首の辺りで止まっていた。
――――――両者、引き分け！
審判の声に周囲からはどよめきが上がった。二戦続けての引き分けだ。互いに一歩も引く所を見せない。どこかで生唾を飲み込む喉の鳴る音が聞こえた。
ロッソとイリヤは静かに一礼をして後方へ下がる。そこに両者の健闘を称える声援と拍手が惜しみなく送られていた。
「イリヤさん！　お疲れさま！」
リョウも周囲の声援と拍手に混じるようにして下がって行くイリヤに声を張り上げていた。
第五の兵士たちが並ぶ位置から割と近い所にいたということもあるが、戻ってきたイリヤは声を掛けたリョウに気が付いて、白い歯を見せて笑った。あともう一歩だったという悔しそうな気持ちをその眦の端に滲ませているのが分かった。

引き分けということで共に選手交代とあいなった。
次に第七から前に進み出たのは三番手のアナトーリィーで、第五の方は、なんとウテナであった。
ウテナはイリヤを差し置いて三番手の位置に就いていた。純粋な剣技だけを取れば、ウテナの方が上ということなのだ。それを少し意外に思った。

擦れ違いざまに何事かを囁いたイリヤにウテナがこちらの方を見たのが分かった。ウテナは、バチリと音がしそうな程の勢いで片眼(ウィンクして)を瞑って見せたかと思うと、あろうことか自分の口元に寄せた二本の指をリョウの方へ向けて放ったではないか。どこからともなくキャーというような黄色い女たちの悲鳴に似た歓声が沸き上がった。
もしかしなくとも、あれは投げキスというやつであったのだろうか。
ウテナの思わせぶりな態度をまともに食らって顔を引き攣らせたリョウは、それでも直ぐに苦笑を滲ませた。
相変わらず軟派で人騒がせな男である。だが、それも実に【らしい】と思えるほどにはウテナに馴染んでいた。
「おや、もしかして、あの男とも知り合いなのですか？」
先程の下らない伝達(アピール)を見たのか、すぐ傍でゲオルグがどこか呆れたような声を上げていた。
「ええと……はい」
言葉尻を濁したものの、リョウは素直に頷いていた。

そして、アナトーリィーとウテナの第三回戦が始まった。
リョウが最初に観た試合よりも展開が早い。第一回戦、第二回戦、共に引き分けたのが大きいだろう。
技巧派のアナトーリィー。対するウテナも恐らく同じように技巧派だろう。体格を見るだけならばウテナもイリヤと然程変わりはな

い。だが、ウテナの外見には、どうも荒事とは無関係そうな文官的匂いのする空気があるとリョウは思っていた。

不思議な面持ちで対峙する両者を眺めていたのだが、すらりと腰に佩いた長剣を引き抜き、身構えた瞬間、ウテナを取り巻く空気が一瞬にして様変わりを見せた。

それは、初めて見るウテナの隠された一面でもあった。

――――――なんだあれ。

リョウは心の中でひとりごちた。

いつもの飄々とした胡散臭い微笑みは消えていた。標準装備となっている微笑みが無くなると、切れ味の鋭い刃物のような剣呑さが表に滲み出るようにして出てきていた。

リョウは、全くの別人を眺めている気分になっていた。

気迫と共に相手の剣を受ける鈍い音の後に、その切っ先を弾く甲高い金属音が鳴り響いた。

「腕を上げたようですね」

ぶつかり合う剣先とその軌道を見つめながら、ゲオルグがぼそりと呟いた。

「ウテナさん……のことですか？」

「ええ」

「あれは私の従弟なんです」

――――――ここだけの話ですが。

そう小さく前置きして告げられた言葉に、リョウは心底驚いて、思わずゲオルグの方を見た。

だが、そこで一際大きな音がして、慌てて視線を前方へと戻した。

「私の父とあれの母親が兄妹なんです」

「……そうだったんですか」

ウテナとゲオルグには血の繋がりがある。リョウは、不思議な面持ちで長剣を手に戦いを繰り広げているウテナを見遣った。だからなんだというのはあるが、共に一癖も二癖もある男たちだ。そこに

流れる底辺の所に同じ血のなせる業があるのだと思うと何とも不思議な気分に陥った。思わぬ所で繋がった回路。そこからどのような派生が生まれるのか。

リョウは隣に立つ細面の男を横目に見ながら、血の成せる神秘を垣間見た気がした。

そう言えば、第五のドーリンと第七のヨルグも縁戚関係にあるということだった。あの二人は硬質で神経質そうな雰囲気が良く似ている。共に几帳面な性質だ。【プラミィーシュレ】で初めてドーリンに会った時は何となく分かったのだが、まさかゲオルグとウテナもそうだとは思いも寄らなかった。

そのような取りとめのないことを思った。

ウテナの剣さばきは実に巧みだった。突き入れたと思った瞬間、驚くほどの速さで次の一撃を繰り出している。

リョウは、その剣筋を追うことを早々に諦めた。動体視力が追いついていかない。その代わりに男たちの足の動きを追った。本当は顔の表情を追えれば一番良いのだろうが、何分距離がある為、それも無理な話だった。

アナトーリィーも巧みに応戦していた。だが、速さという点ではウテナの方が勝ったようだ。

薙ぎ払うようにして横から繰り出された剣先をアナトーリィーが弾いた。そこからウテナの剣先が不思議な動きを見せた。アナトーリィーが誘われるように踏み込んだ所で、ウテナがひらりと身体を反転させたかと思うとその勢いのままに次の一撃を繰り出していた。

――――――そこまで！

審判の制止の声が上がり、白地の中に青色で獣らしき紋様の描かれた旗がウテナの方を指示した。

アナトーリィーの逞しい首元にウテナの光る剣先が伸びていた。

勝負があったようだ。

周囲から歓声が沸き上がった。

両者が一礼し、アナトーリィーはその大きな背中に悔しさの片鱗を滲ませながら黙々と後方へ下がっていった。
「アナトーリィー！　格好よかったですよ！」
大分距離がある為、声が届くかは分からなかったが、リョウは気が付けば、去ってゆく逞しい背中にそう声を張り上げていた。
アナトーリィーがゆっくりと振り返る。だが、遠く反対側の陣地にいるリョウには気が付かなかったようだ。

ウテナはそのまま中央に止まり、第七からは四番手のブコバルが出て来た。武芸大会の名物とも言える常連者の登場に第七を応援している観客たちが一斉に沸いた。
「ブコバルー！」
「いいぞ！　このまま行け！」
ブコバルは悠々とした貫禄ある足取りで、降り注ぐ声援に軽く手を上げることで応えながら対戦者の元へ歩み寄った。
「第五！　負けんなよ！」
「ウテナー！　しっかりー！」
元々王都の貴族階級の出身であるウテナには、この場所での知り合いも多いのだろう。友人の晴れ姿を見る為にか、その名を呼ぶ声が高く聞こえる。貴婦人たちが集まる貴賓席の方からも一頻り声援が送られていた。

こうして、審判によって高く掲げられた旗印を合図に第三試合の第四回戦、ブコバル対ウテナの試合が始まった。
「ブコバルは流石ですね」
開始早々に隣から漏れた静かな呟きに、リョウはそっとその発言者であるゲオルグを横目に見た。その色素の薄い灰色の光彩は、じっと目の前で繰り広げられている闘いを見つめている。
「ゲーラさんはどちらに軍配が上がると思われますか？」
こんなことを聞くのをどうかとも思ったが、素人ではなく剣を実

際に扱う男たちの意見も聞いてみたいと思った。
「それは決まってますよ」
ゲーラはそう言うとごく自然な微笑みをその口元に浮かべていた。
「あれにはまだ無理です。精々五本に一本取れればいい方でしょう。まぁその五分の一の確率がここで発揮されたら別ですけどね」
そう言って会場の中心、そこにある二人の剣士を見つめた。

要するにゲオルグの目から見ても、ウテナよりもブコバルの方がずっと上手であるということなのだ。
ブコバルはこの回でも実に生き生きしていた。端から見ても楽しそうに重みのある剣を振るっている。対するウテナの表情も真剣さの中にどこか喜色に満ちたものが浮かんでいる気がした。
一際、強い当たりにその衝撃の為にか顔が顰められる。食いしばった歯からはぎりぎりと音がしそうな程だ。
ゲオルグの予想通り、ブコバルとウテナの対戦は、ブコバルの方に軍配が上がった。ウテナはほんの一瞬、悔しそうに口の端を歪めたが、すぐに晴れやかな笑みを浮かべると対するブコバルと固く握手を交わし合った。

一礼して下がったウテナは、そのまま仲間たちの並ぶ所へと戻るかと思われたが、途中、不意に進路を変えて、リョウとゲオルグが立つ場所へとやってきた。
ウテナは、ちらりとリョウの隣に立つ従兄殿を横目に胡乱気な視線を向けたが、すぐに視線を真正面へと戻した。
「お疲れ様でした。ウテナさん」
労いの言葉を掛けたリョウにウテナは柔らかく微笑んだ。先程の試合での表情が嘘のようだ。
「やぁ、リョウ。ボクの雄姿、観てくれた？」
「はい。別人みたいで吃驚しました」
「惚れ直したかい？」

ずいと柔和な顔立ちが寄ってきて、額際から滴り落ちる汗が、ウテナの頬を伝っていった。
リョウはなんと答えたものかと曖昧に微笑んでおいた。するとウテナは面白くないとばかりに形の良い眉を跳ね上げた。
「リョウ、そこはすかさず『はい、そうですね』って頷いてくれなきゃ」
「あはは。そうですかね？」
そのような軽口も笑って誤魔化す。
「まぁ、いいか」
ウテナはどこかすっきりとした顔をしていた。この分だと思う存分、持てる力を出せたということなのだろう。それで負けたのであれば、相手との実力の差があったということなのだ。

「それよりも、一体どういう風の吹き回しですか、ゲオルグ？」
――――――あなたがこんな所に顔を出すなんて。むさ苦しいのは確かお嫌いなはずだったでしょう？
そんなことを口にするとウテナは胡散臭そうに従兄であるゲオルグを見た。
「偶にはいいかと思いましてね」
だが、対するゲオルグは全く気にすることなく、鷹揚に微笑んで人好きのする笑みを浮かべていた。
それを見てウテナは軽く肩をすくめて見せた。
「リョウ、これはどうしたいんだい？　こんな所に大きな湿布を張るなんて。虫歯にでもなったのかい？」
ウテナがついと手を伸ばすと左頬の大きな当て布が貼られた不細工な箇所を指先で触れた。心なしか、その眉根が案じるように寄っていた。
「ウテナ、お止めなさい。黴菌が入ったらどうするんですか？　手が汚れたままでしょう？」
すかさずゲオルグから窘めるような声が上がり、ウテナはムッと

したようだった。
「単なる打ち身なので大丈夫ですよ」
リョウは大したことではないと微笑んで見せた。
そうこうするうちに、
「ウテナ！」
少し先で居並ぶ第五の面々の中からイリヤが首をさし伸ばし、中々戻ろうとしない相棒に焦れてか鋭い声を上げて顎をしゃくった。ウテナは渋々とその場から離れ、仲間たちのいる方へと戻っていった。だが、最後にさり気なくリョウの右頬に軽く指を触れさせるのを忘れなかったのは流石というべきものだろう。
その一連の動作を見ていたゲオルグは、
「全く、キミも妙なのに目を付けられたものですね」
自分のことは棚に上げて、そのようなことを言った。
リョウにしてみればここにいるゲオルグもその【妙なもの】の中に入るのであろうが、そのようなことをこの場で言える訳もなく、リョウは曖昧に笑って誤魔化したのだった。

続く第五回戦、ブコバルの相手として前に出て来たのは、リョウが初めて目にする男だった。ゲオルグによるとその男の名はヤーコフ、第五の副団長なのだという。
ヤーコフは背の高い男だった。だが、あまり厳つい感じは受けない。癖の無い長めの灰色の髪を後ろで緩く束ねていて、どちらかと言えば、ドーリンの副官としてその直ぐ背後に音もなく控えていそうな感じだった。しなやかな若木のような雰囲気を持っていた。
結論から言えば、ブコバルが勝った。相手の男も粘り強くブコバルに食らいついていたのだが、あと一歩及ばなかった。
片や野性味溢れる豪快な剣さばき、片や洗練された剣使い。其々の性格が良く表れた立ち会いだった。

ドーリンの片腕である男は、余り表情豊かな方ではないようだった。相手に揺さぶりを掛ける為にか、ブコバルが何やら挑発するように大きな声を上げていたが、全く動じた所を見せなかった。

リョウは、こちら側に並んでいる第五の顔触れの中から団長のドーリンを見た。そして、対戦している二人の向こう、第七の面々が並ぶ向こう側に最後の砦として控えている銀色の髪の男を遠く透かし見た。ヤステルが先の試合で言っていたように、ここでユルスナールが『引きずり出される』ことになるのだろうか。

「そろそろですかね」

二人の対戦者を追っていたゲオルグが小さく呟いた。

試合中、隣から漏れる言葉は、実に的確だった。リョウは、ひょっとしたらゲオルグもそれなりに腕が立つのではないかと思った。

リョウにはブコバルと相手の優劣が見えなかったが、程なくして決着が付いた。

ブコバルは、勢いよく相手の一撃を弾いたかと思うと、その勢いのままに向こうに反撃の隙を与えることなく剣先を滑らせて、その切先を相手の喉元に突き付けていた。ブコバルがニヤリと余裕ある笑みを刷いたのが遠目にも見て取れた。

ブコバルの勝利に周囲の観客たちが沸いた。第五の副団長は、静かに一礼をすると表情を変えることなく淡々と後方へ下がっていった。

「ブコバルって……強いんですね」

思わずというように小さく漏れた呟きをゲオルグが拾った。

「そうですねぇ。軍部の中でもかなり上位には入るでしょうね」

毎回何故か個人戦の方には出場していないので、埋もれてしまいがちだが、十本の指の内に入るのではなかろうかとゲオルグはブコバルをそう評した。

「ですが、上には上がいるものです」

そう言って意味深に笑う。中央の舞台には、ちょうど第五のドーリンが出て来た所であった。

「ドーリンさんの方が強いのですか？」
隣を振り仰いだリョウにゲオルグは、
「まぁ、見てらっしゃい」
そう囁いて、リョウに前を向くようにと促したのだ。

会場の中心、審判の元に進み出たドーリンは、リョウの知るいつものドーリンのようにも見えた。濃い茶色の髪を隙なくきっちりと後ろに撫で付けている。あの髪がこれから乱れることになるのかと思うと少し不思議な気がした。ただ、対戦用に防具を身に付けたいでたちもドーリンには不思議と似つかわしかった。こうして改めてみると上背もあり、体格もそれなりに良いことが分かる。

そして、ブコバル対ドーリンの第六回戦が始まった。
ドーリンの動きは実に無駄が無かった。細部にまで神経が行き届いているとでも言えばいいか。かといって型に嵌っているという感じも受けない。荒削りで大雑把な所があるブコバルとは対照的に見えた。
ドーリンは、力で押すきらいのあるブコバルに全く引けを取らなかった。体格だけを見ればブコバルの方が大柄だが、その差は全く気にならなかった。
「うわぁ……」
リョウは感嘆に似た息を吐いていた。ドーリンがこれほどまでに剣を巧みに使うとは思ってもみないことだった。
「流石、ドーリンですね」
隣からも溜息のようなものが漏れている。
試合を実際に観るまでは、ドーリンが剣を振るう様を全くといっていい程想像が出来なかったが、目の前で展開される男たちの剣技にリョウは全神経を集中させていた。
ブコバルもこれまでとは一転、身に纏う空気を一段と研ぎ澄まされたものに変え、そこにある表情も真剣そのものになった。対する

ドーリンは、相変わらず涼やかな印象だ。今の所、きっちりと撫で付けられたその髪が乱れることはなかった。それだけ上体が安定しているのかもしれない。ひょっとしたら、その髪には特別な整髪料の類を使っているのかも知れなかったが。

北の砦での訓練では一人法外な体力を見せつけていたブコバルだが、これまでに二回、対戦をして、これが三回目だった。その影響がここで出始めているのかもしれない。

野性的な本能で剣を繰り出すブコバル。対するドーリンは、相手の動きの裏の裏をかこうとする頭脳派だ。暫くして、ドーリンがブコバルの裏の先を行くような動きを見せ始めた。ブコバルはその剣の軌道を持ち前の勘の良さでかわしてみせていたが、徐々に追い詰められていった。

どうやらドーリンの方が上手であったようだ。

ブコバルが踏み込んだ重い一撃を受け、両者は暫し至近距離で睨み合った。そして、ブコバルが力で押し返す間合い（タイミング）を上手く利用して、ドーリンは後方に飛び退くと、すぐさまその場から更なる追撃を繰り出していた。

リョウが思わず『あっ』と声を上げそうになった時、ドーリンの剣の切っ先がブコバルの喉元に突き付けられていた。ブコバルの剣もドーリンの胸元に届こうとしていたが、若干、その距離が足りなかったようだ。

――――――勝負あり。勝者、第五！

審判がすかさず旗を上げ、高らかに勝負の行方を告げた。

一瞬の空白の間の後――――それだけ、周囲の観客もその試合の成り行きに息を詰めていたのだ――――割れんばかりの歓声と野次が沸き起こった。ブコバルの敗退に唸り声を上げる者。ドーリンの勝ちに甲高い口笛を吹き鳴らす者。その反応は実に様々だった。

ブコバルは悔しそうに吠えていた。性質の悪い獣染みた咆哮だった。

そんな相手の反応を見てドーリンは、その口元に薄らと笑みを刷いていた。それが余計にブコバルの神経を逆撫でしたようだ。しきりに『チクショウ！』と悪態を吐いていた。

負けた悔しさを滲ませながらもブコバルは最後ドーリンと握手を交わすと互いの健闘を称え合うようにその腰の辺りを軽く叩き合った。

そして、一言二言、言葉を交わしてから、その腰に剣を納めた大柄な男は、大きな声援が鳴り響く中、後方に下がって行ったのだ。

「ブコバル！　お疲れさま！」

リョウは、去ってゆくその大きな背中に声を掛けていた。

まさかブコバルがドーリンに負けるとは思いも寄らなかった。いや、ドーリンがこれ程までに巧みに剣を使うとは想像しなかったことだった。

ブコバルの柔らかな茶色の頭部がゆっくりと振り返る。先程の声の主を探すようにその青灰色の瞳が大勢の観客で埋め尽くされた会場を一周した。

リョウは、ブコバルがこちらに気が付くとは思わなかったが、もう一度、その名を呼んでみた。

男の瞳が遠く対岸を透かし見るように眇められた。そして、とある一点で止まった。

ブコバルの瞳は、大柄な男たちの間に文字通り埋もれるようにして立つ小柄な人物の姿を捕らえていた。そして、序でにその隣に立つ男の存在にも気が付いた。ブコバルはほんの一瞬だけ嫌そうに顔を顰めると直ぐさまその男の存在を綺麗に無視した。そして、その隣を陣取る黒い頭髪の人物に照準を定めるとその口元に男らしい笑みを刷いた。その者の片方の頬になにやら大きな湿布のようなものが貼られていることを見逃さなかった。

一際、大きな歓声に包まれる中、ブコバルは悠々とした足取りで人々の声援に応えながら後方へ下がって行った。そして、次に出番

を待つ相棒に選手交代（バトンタッチ）の合図を送ったのだった。

ブコバルが下がる中、リョウは次にこの会場に現れるであろう男を遠く透かし見た。

第七の兵士たちが並ぶ場所からは距離が大分あるので、その表情は良く分からない。それでも威風堂々たる逞しい体格と降り注ぐ光を一杯に浴びて光輝く銀色の頭部が眩しく見えた。他の選手たちと同様に生成り色の簡素なシャツとズボンに防具を身に着けている。その腰に帯びているのは、その昔、あのレントが鍛え、二か月ほど前にカマールによって微調整をされた長剣だ。その鞘のベルト部分にはその昔、自分が拵えて贈った小さな黒い石の付いた飾り紐が揺れていた。

ブコバルと入れ替わる形で静かに中央へ歩みを進める硬質な空気を持つ男の登場に周囲の観客たちがこれまで以上の大きな声を上げていた。鼓膜が破れるのではと思えるほどの声援と野次が方々から沸いていた。その中に女たちの悲鳴に近い金切り声も響いていた。

リョウは、その逞しい男の左腕に明るい赤みを帯びた橙色のリボンが揺れているのに気が付いた。それから、その向こうに見える貴族の婦女子たちが集まる特別席の方を透かし見た。

あの中にあのリボンを男の腕に巻き付けた同じ色の瞳を持つ娘がいるのだ。燃えるような炎をちらつかせた熱い瞳だった。

――――――アリアルダ。

自分が今朝、男の腕に付けたはずのものは、明るい橙色の下にそっと隠れるようにして小さく揺れているのだろう。いや、ひょっとしたら外聞が悪いと言って外されてしまっているかもしれない。そんなことを半ば自嘲気味に思いながら、徐々に中央へと近づく男の腕を眺めて、その橙色の下にひっそりと揺れる黒い布の切れ端が浮かび、リョウは何とも言えない複雑な気分になった。

気恥ずかしさと嬉しさとむず痒さと切なさと痛みと。様々な想い

が混ざり合い、知らず肌を粟立たせた。リョウは、それをこれから初めて目にすることになるユルスナールの試合に対する緊張のせいだろうと考えた。

中央に立ったユルスナールは、何かを探すようにぐるりとその視線を、会場を取り囲む観客たちへと向けた。それに呼応するかのように女たちの悲鳴に似た声が上がる。やがて何を思ったのか、左腕に回る黒い布切れの端をそっと掴むと何事かを呟きながらそこに己が唇を寄せた。

そして、ユルスナールが小さく微笑んだ。

そのような意味あり気なやや芝居掛かった男の行為を見て、周囲の観客たちは一斉に囃したてた。

やれ、あれは恋人から貰ったリボンに違いないとか。とうとうあの堅物と目されていた男にもそのように心を許す相手が出てきたとか。あれは何がしかの宣言だとか。常にない男の行動に周囲は俄かに色めき立ち、様々な憶測を生んでいた。

リョウは離れた所から男の一連の行動を目の当たりにして固まっていた。随分と思わせぶりなことをすると思った。このような衆人環視の中で、なにもあのようなことをしなくともいいだろうに。

まるで自分がリボンを結えた時の行為をなぞらえるかのように黒いリボンの端に口付けを落としたのだ。リョウは酷く居た堪れない気分になった。それでも男が自分の想いに応えてくれているという事実に嬉しさのようなものが込上げて来たのも確かなことだった。

不意にユルスナールの視線がリョウを捕らえた。擦れ違い様、ブコバルに聞いたのかも知れない。そして、その隣にある人物を見て、一瞬、目を眇めた。

「おお怖い」

小さく漏れたゲオルグの呟きもその深い瑠璃色に囚われていたリョウは気が付かなかった。

視線がかち合って、リョウは控え目に微笑んでいた。
――――――どうか御武運を。
小さく呪いのように言葉を紡ぐ。
それが相手に伝わったかは分からない。だが、その硬質な男の口元に小さな男らしい笑みのようなものが浮かんだとリョウは感じたのだった。

団体戦　第三試合（後書き）

次回はいよいよユルスナールとドーリンの対戦の模様をお伝えする予定です。

団体戦　大将対決

ブコバルとドーリンの両者が立ち会いを繰り広げる中、ユルスナールは、ぐるりと周囲を取り囲む群衆の顔触れをざっと見渡した。その中に自分にとって唯一の色となる一色を見つけることを願いながら。

先の第一試合の時には友人達の中にあったその特徴的な黒い頭部も、一つ試合を挟んで第三試合目に入るとその姿を捕らえることが出来なくなっていた。何分、小柄ということもあり、居並ぶ男たちの中では直ぐに埋もれてしまうだろう。もう一度、試合前に控室となっている天幕の方に顔を出すかとも思われたのだが、その予想は外れてしまった。

再び、ユルスナールはその視線を会場の中央に戻した。

ブコバルはよくやっているが、そろそろだろうと踏んでいた。ドーリンは相手の動きを緻密に計算し、先回りをする。それを驚くほどの素早さでやってのけるのだ。あの頭の中には幾通りもの方法（パターン）が瞬時に弾き出され、その中から一番適したものを選び出す。ブコバルの使う剣は本能に重きを置くので、中々その剣筋を予想するのは至難の技だったが、一度、本人が意識をしていない癖のようなものを掴んでしまえば、それを逆手に取って利用することができた。ブコバルがそのことにいち早く気が付かない限り、この試合はドーリンの方が優位だった。

ドーリンの剣が誘うように動く。それについ乗せられたブコバルは、案の定、次の瞬間、繰り出された攻撃をかわすことが出来なかった。少し冷静になって視野を広く取れば、それは対処できる範囲の攻撃であったのだろうが、一度頭に血が上ると中々その辺りの調整は難しいようだった。それがブコバルの欠点でもあった。

ブコバルが一際大きな咆哮を上げた所で勝敗に決着が付いた。審

判の旗が高らかに上がり、空中にその特徴的な紋様が翻った。
漸く回ってきた己が出番に、ユルスナールの心は知らず高揚していた。周囲の興奮が静かに、だが、確実にこの男の心をも捕らえ始めていた。

「くっそう、ドーリンの野郎。相変わらず小賢しい攻め方してくるぜ」
悪態を吐きながら、のしのしとその大きな体を揺すってブコバルがこちら側に下がってきた。
だが、言葉の割には、余り悔しそうな顔はしていない。その分だと日頃の鬱憤をかなりの割合で発散できたのだろうことが見て取れた。
ブコバルの額から滴り落ちた汗が、その戦いの激しさを控え目に知らしめていた。
下がってきたブコバルにユルスナールは小さく口の端を吊り上げた。
「よう、相棒。あとは頼んだぜ？」
「ああ。任せておけ」
擦れ違い様、利き手とは逆の右手（ブコバルは左利きだ）で肩を軽く叩かれる。そのまま通り過ぎるかに思われた野性味溢れる顔を晒した幼馴染は、その場で少し足を止めると声を落として囁いた。
「あっち側にリョウがいたぜ。隣にけったいなもん連れてやがる」
――――――あの野郎、ほんっと面倒なのを引っ掛けてくるぜ。
そう口にするや否やその顔を面倒くさそうに顰めて見せた。
密かに探していた相手がこの試合会場にいると知って喜んだのも束の間、ユルスナールはブコバルのその一言に高揚した気分を一気に急降下させていた。
だが、それを悟られないように（といっても長い付き合いであるブコバルにはバレバレであったが）、表情をそれとなく改めると、沸き立つ歓声の中、静かに中央へと足を運んだのであった。

「漸く出て来たか」
「ああ。待たせたな」
中央に立つドーリンの言葉にユルスナールは小さく笑みを刷いた。ドーリンはブコバルとの戦いで身体が十分に解れたのか、いつになく表情豊かにその頬を上気させていた。灰色の瞳の奥には静かな興奮が煌めきのように小さく踊る。獰猛な笑みを隠そうともしない。
ユルスナールは相手の興奮に感染するように同じように口の端を吊り上げると、そこから視線を少し横にずらした。
ブコバルの言う通り、第五の兵士たちが並ぶ側、少し外れた所にその特徴的な黒い頭髪を見つけた。大柄な男たちに埋もれるようにしてその華奢な体躯が杭の後ろに立っていた。
だが、ユルスナールは直ぐにそこにある『異変』に気が付いた。一つ目は、その者の左側の頬に大きな当て布が貼られていたこと。軟膏を塗った後に張るような湿布のようなものだった。そして二つ目は、その華奢な肩にとある男の手が乗っていたこと。
ユルスナールは、リョウの隣に当然のようにして立つ男を認識すると冷え冷えと剥き出しの感情のままに睨み付けていた。それに相手がおどけたように『おお怖い』とばかりに肩を竦めてみせたのが見て取れて、尚更ユルスナールの神経を逆撫でしたのだった。
だが、すぐにそこから意識を逸らして、暫し、その黒い瞳を見つめた。
中央に進み出る途中、ユルスナールは自分の左腕を飾る黒いリボンの先に小さく口付けを落としていた。あの距離であるならば、こちら側の意図が相手にも伝わったことだろう。
あれは自分なりの意思表示であった。この左腕には不本意ながら二本のリボンが揺れているが、自分が心から慕い、想いを寄せる相手はこの黒いリボンの贈り主である。そのことをこの場で声高に表明した積りだった。
深い漆黒を湛えた瞳が、ユルスナールの視線を受けてゆっくりと

細められた。そこに浮かぶ苦笑に似た控え目な微笑みに、ユルスナールは、気持ちを込めて密やかに微笑み返していた。
その小さな薄い唇が、何事かの文言を紡いだ。それに応える形でユルスナールは一つ頷きを返すと、その視線を再び舞台中央へと戻したのだった。

「なんだ？　決意表明でもする積りか？」
一連のユルスナールの行動を静かに見ていたドーリンが、からかうような声を上げていた。
「まぁ、そのようなものだ」
同じようにユルスナールの視線の先を追い、そこにある光景に形の良い眉が小さく上がった。
「前途多難のようだな？」
「そうか？」
向けた視線の先、その相手から社交辞令的な笑みでも返されたのか、ドーリンが珍しくその顔を微妙に歪めた。
「ああ。俺にはそう見えるが。……まぁいい」
ユルスナールが然程気にした様子を見せていないのを横目にドーリンは意識を戻すように首を小さく傾げた。
「ならば、早くこちらの片を付けねばなるまい」
「ああ。その提案には賛成だな」
それが合図であったのか、両者すらりと剣を抜いて、間合いを取った。

ユルスナールが徐に腰に佩いていた剣を引き抜くと、それまでざわついていた周囲の雑音がぴたりと止んだ。その対面でドーリンも同じように剣を構えた。
長剣の切っ先が日の光を鈍く反射してきらりと瞬く。

――――――始め！

審判の試合開始の合図が、やけに耳に響いた気がした。

対峙した二人は、じりじりと相手の隙を窺うように間合いを詰めていった。

リョウは、知らず握り締めた拳に力を入れていた。ユルスナールの動きを寸分も見逃したくはないという気持ちと出来ることならば目を背けていたいという二つの相反する気持ちが心の中でせめぎ合っていた。それは、これまでの試合中では感じることのなかった変化だった。

ユルスナールがそう易々と膝を着くことになるとは思わない。それでも、あの切れ味抜群であろうドーリンの剣の切っ先があの男の肌を掠めることがあるのだと思うと不意に言い知れぬ恐怖のようなものがリョウの心を捕らえたのだった。ブコバルやロッソ、アナトーリィー、アッカたちにはこのようなことを思わなかったというのに。不思議なものだ。

それでもユルスナールが、この日の為という訳ではないのだろうが、日夜厳しい鍛錬をしていることは知っていた。北の砦での任務は、常に危険と隣り合わせだ。砦内に滞在していた時は、兵士たちの賑やかさや持ち前の陽気さについついそのことを忘れてしまいがちだが、リョウが彼らと知り合うことになったそもそものきっかけを考えてみても、そこには綺麗事では済まされない過酷な現実があったのだ。

きっかけは、負傷したアッカを拾ったことから始まったのだ。あの時のようにその任務の性質によっては、兵士たちは無傷では済まない。下手をすれば命に関わることだってあるだろう。アッカが負った傷は刃物によるものだった。この国で剣を抜くということは、目の前に同じように己が命を懸けて対峙する相手が存在するということなのだ。

ユルスナールたちも時と場合によっては、その腰に佩いた剣を抜

く。今、その相手が完全な敵でない分、ここでの状況は遥かにマシというか、次元の違う話になるのだろう。
少なくともこれは実戦ではないのだ。

「リョウ、大丈夫ですよ。そんなに硬くならないで」
これまで以上に張りつめた緊張のようなものを感じ取ったのか、ゲオルグが穏やかに微笑んで、殊更柔らかく言葉を紡いだ。
「……そうですね」
指摘をされて、肩に入る力を抜こうとするが、どうも上手くいかなかった。宥めるように隣から腰の辺りを軽く叩かれて、リョウは苦笑を滲ませた。頭では理解している積りなのだが、身体の方へそれが上手い具合に伝わらなかった。

やがて高らかに剣の打ち合いが始まった。金属のぶつかり合う音が高低を持って周囲に響き渡る。そこに男たちの気合いを発する声や踏ん張る時の息使いが、低く合間に挟まっていた。
洗練された無駄のない動き。恐らく何百回、何千回と繰り返されてきたであろう軌道だ。
ドーリンとユルスナールの剣さばきは似ているようでやはり違った。
あの一撃は相当重いものなのだろう。その昔、北の砦で戯れに立ち会いの練習をした時の手の痺れをリョウは思い出していた。自分が経験したものは本当に子供騙しのものに違いなかった。あの時、ユルスナールは全く本気を出したりはしなかった。こちらが非力なのを重々承知の上で持ったこともないような剣を握らせ、相手の攻撃を流せと口にした。その時のことを少し懐かしく思い出した。
二人の男たちがここで交わす一撃は、あの時の比ではないのだろう。自分など最初の一振りすらまともに受けることが出来ずに剣を落とすことだろう。

打ち合う音の感覚が徐々に狭まって行った。二人の間合いが詰まって行く。

先に懐に飛び込んだのはユルスナールだった。だが、ドーリンの方も相手の動きを予測済みであったのか、すぐさま繰り出された一撃を寸分違わずに受けた。

至近距離で剣の刃と刃が擦れる摩擦音がした。相対する二人の男たちの食いしばる歯からもぎりぎりとその音が聞こえてきそうだ。

ブコバルとの対戦の時と比べて、ドーリンの表情は大きく変化していた。涼やかなところは欠片もない。対するユルスナールもいつもの無表情な仮面を剥ぎ取って剥き出しの漢の顔をしていた。猛々しい荒々しさ、そして無骨さが二人の男たちを支配している。

きっちりと撫で付けられていたはずのドーリンの髪も戦いの激しさに乱れ、その一筋が、額際に落ちかかっていた。

男たちが剣を打ち合う度に額から流れ出る汗が周囲に散り、ほんの一瞬だけ地面を点のように湿らせた。だが、その小さな染みもすぐさま踏み出す長靴の底に削られてしまう。

ユルスナールとドーリンは共に一歩も引かなかった。周囲の観客たちは息を呑んで舞台中央で繰り広げられる二人の男たちの勝敗の行方を見守っていた。

逆るような気迫がぶつかり合う。それだけで共鳴するように腹の内側がゾクリと震えるような錯覚に囚われた。

相手の一撃を受けた時に目測を誤ったのか、ユルスナールの足がやや後方にずれて踏み止まった。そこへすかさずもう一撃が入る。

――――――ルスラン！

リョウは、思わず胸の前で祈るような気持ちで拳を握り締めていた。

だが、ユルスナールは直ぐに体勢を立て直すと反撃に出た。その口元に薄らと笑みのようなものが浮かんでいた。

その表情の変化をリョウの隣にいたゲオルグは見逃さなかったよ

うだ。
「相変わらず、いやらしい男ですねぇ」
しみじみと小さく漏れた述懐のような言葉に、リョウは思わずゲオルグの方を見てしまった。
ゲオルグには、今の一連の動きがそのように見えたのだろうか。
リョウにしてみれば、ゲオルグの口にした【いやらしい】という形容詞は、ユルスナールには対極にあるような言葉に思えたからだ。
そう思ったことが顔に出てしまっていたのかもしれない。つい非難がましく相手を見てしまっていたようで、ゲオルグが小さく苦笑をのようなものを浮かべたのが分かった。
どうもユルスナールに対しては感情の面で先立つものがあるので、リョウは男のことを客観的に見ることが出来なくなっていた。
「おや、キミを怒らせてしまいましたか？」
からかうような口振りだが、その目はそこに潜む何がしかの感情を探ろうと妙に真剣味を帯びていた。
リョウは出過ぎた真似をしたかと思い、咄嗟に目を伏せた。
「いえ、そういう訳では……」
剣のことは全く分からない。それにユルスナールのこともその実、自分は本当に少ししか知らないのでは。不意にそのようなことが頭の隅を過り、リョウは愕然とした。
恐らく、同じ王都の貴族出身ということで――リョウは本人からしかと聞いた訳では無かったが、ゲオルグも貴族の出身だろうと踏んでいた――ゲオルグはユルスナールに関してリョウの知らない多くのことを知っているのだろう。その事実は自分でも理解している積りなのだが、時として嫉妬に似た感情が、もどかしさのようにして渦巻いてくる。
そのような事を思う自分が嫌で堪らなかった。その度に自分はなんて矮小な人間なのだろうと思ってしまう。
リョウは、もやもやとしたものを敢えて微笑みの下に隠した。
「別に他意はないんです。ただ、ワタシは……あの人のことを本

当に何も知らないのだと思ったものですから」

そう言うと少し困惑気味に眉根を寄せた。

そうだ。自分があの男の何がしかを理解したような気になっていたのが間違いであったのだ。あの男と過ごした時間というのは、冷静になって客観的に眺めてみれば、切れ切れのものを全て合わせてみても一月半を越えるか越えないかという位の短さだった。それは相手の事を理解したと豪語するには驚くほどに短い共有時間だった。たとえその時が濃いものであったとしても、この隣に立つ男のように相手を知る年月の長さには敵わない。そのように思い上がっていた自分がいけないのだろう。

リョウの口元には、自嘲気味な微笑みが浮かんでは消えた。

ひょっとしたら、自分はあの男の輪郭すら掴めていないのかもしれない。あの幼馴染だという娘の足元にも及ばないに違いない。それでも心の奥底であの男を想う気持ちを諦めたくはないというもう一人の自分がいるのだ。自分でも知らぬ間になんと欲張りになってしまったことだろう。

中央でぶつかり合う二人の男たちを眺めながら、リョウは不意にそのようなことを考えたのだった。

決着は、ほんの一瞬のことだった。些細な気の緩みが引き金であったのかも知れない。

不意にドーリンの動きが乱れた。そこを狙ったかのようにユルスナールが渾身の力を込めて踏み込んでいた。

そして、リョウが気付いた時には、ユルスナールの剣の切っ先がドーリンの喉元に向けられていた。

だが、ドーリンもただでは負けない。辛うじて挽回を図ったその剣先は、ユルスナールの太ももを突かんとしていた。これが実戦であったならば、ユルスナールも無傷では済まされなかったことだろう。

辺りがしんと静まり返ったように思えた。

――――――勝負あり！

一瞬の静寂の合間を突き刺すように審判の高らかな声が判定を告げた。

――――――ワァァァァァアア！！

観客たちは一斉に詰めていた息を吐き出すように大きな声を上げた。

「ウラァァァァアアー！！！」

どこかで歓喜の雄叫びが上がった。

「よっしゃぁ！！！」

第七を応援していた男たちが一斉に勝利の咆哮を上げる。そこに第五を贔屓にしていた男たちだろう、落胆のような声が混ざり合って辺りには混沌とした空気が満ち始めていた。

それを横目に熱い目の眩むような勝負を繰り広げていた二人の対戦者は、静かに剣をしまうと審判を間に挟んで元の位置に着いた。

動から静へ。その中心部分だけ周りの空気が急激に変化をした。

周囲の観客たちは、見事な剣技を披露した選手たちに盛大な拍手と声援を送った。

会場内が割れるような地響きに包まれた。それほどまでに観客たちの興奮の度合いは、最高潮に達していたようだ。

二人の男たちは作法に則り、静かに一礼をすると互いに固く握手をした。

ドーリンもユルスナールもいい顔をしていた。共に額際には滴る汗と共に前髪が落ちかかっている。だが、そのようなことなど微塵も気に留めてはいない。

ドーリンは徐にユルスナールの腕を取ると戦いの勝者であることを知ら示す為にその左腕を高らかに上空へと掲げた。

そこには、黒と明るい赤みを帯びた橙色の二本のリボンが、吹き込む風に誇らしげに揺れていた。

相手への無言の賞賛に観客たちからは一際、大きな歓声が上がり、

惜しみない拍手が送られた。
そして、リョウも周囲の人々の陶酔に感染したように、半ば夢心地で心からの拍手を戦いを終えた選手たちに送ったのだった。

団体戦　大将対決（後書き）

短いですが、場面的にここで区切りたかったので。試合後の模様は次回に回します。ありがとうございました。

２０１１／７／７誤字修正

陽炎の下

第一会場、第三試合で勝ちを収めたユルスナールたち第七師団は、そのまま翌々日に控えた決勝戦に臨むことになった。その時の対戦相手は、隣の第二会場での結果を待ってからになるのだろう。

始まりの時と同じように審判を中心に第七と第五の選手たちが整列をした。皆、汗と埃に塗れていたが、表情はすっきりとしており、全力を出し切って戦ったという充実感に満ちているように思われた。

この日、第一会場は、これで試合終了となった。観客たちは、いまだ興奮冷めやらぬ様子で口々に目にした対戦の話で盛り上がりながら周囲に屯っていた。少しでもこの興奮を分かち合おうと新たな同志探しに余念がなかった。

リョウも半ば呆けたように立ち尽くしていた。間近で耳にした歓声が耳の奥で鳴っているようだ。『手に汗握る』とは良く言うが、まさにその通りで、固く握り締めた掌を開けば、真冬だというのにそこにはじっとりと汗が滲んでいた。リョウはポケットの中からハンカチを取り出すと汗を拭った。

「さて」

空気を入れ替えるように口にしたゲオルグに、リョウは再び『ありがとうございました』と謝意を口にした。

ゲオルグならば、なにもこのようにむさ苦しい人混みの中に混じらなくとも特別席の方で観戦できたのだ。周囲に着飾った女たちを侍らせて。それこそこの男の得意とする分野だろう。それを態々こちらの個人的な事情に付き合わせる羽目になってしまったのだ。相手に気を遣わせてしまったことを少々、心苦しく思っていた。

「本当に。キミは他人(ひと)の心配をしてばかりですね」

恐縮することしきりのリョウの言葉にゲオルグはおかしそうに笑い、気にすることはないのだと微笑んでいた。

「お陰で収穫もありましたし、それに面白いものが見られそうですからね」
そう言って意味あり気に目配せをすると徐に人気の無くなった試合会場の方へ顔を向けた。
「ほら」
リョウは、ゲオルグが何を言わんとしているのかが分からなかったのだが、その視線の先にこちら側に歩いて来る一団を見てぎょっとした。
そこには試合を終えたばかりの第七の面々がいた。先頭を切ってやって来るのは、もしかしなくともユルスナールだった。乱れた銀色の髪を鬱陶しそうに掻き上げて、その隣に並んだブコバルも何やらニヤニヤと妙な笑みを浮かべながらこちらに向かって来る。その後ろにはアッカやロッソ、アナトーリィーの姿もあった。
一体、どうしたというのだろう。皆、まだ防具を着けたままの物々しい姿だ。
こちらに近づいてくる迫力ある一団に周囲にいた人々が何事かと目を白黒させて小さく囁きを交わしていた。

ユルスナールはリョウを真っ直ぐに見据えると脇目も振らずにやってきた。男の強い視線に晒されたリョウは、何故かその場から逃げ出したい気分に駆られてしまった。
その理由を探そうとして、不意にもしかしなくとも隣に第三の団長がいるのは非常に不味い事態なのではということに思い至った。この間の【アルセナール】での一悶着でユルスナールたちとゲオルグの間には、なにやら含みがありそうだと感じたばかりであった。少なくともユルスナールたちは、ゲオルグに対して余りいい感情を抱いていないと思ったのだ。
だが、時既に遅し。
妙な焦燥感を抱えたリョウを余所に、ユルスナールは、ちょうど見物客と出場者たちを隔てる杭と綱（ロープ）が張り巡らされた境界の所まで

来ると徐に手を伸ばして、無言のままリョウの大きな当て布がしてある左側の頬にそっと触れた。
男の形の良い眉が痛ましそうに下がったが、リョウは気に留めないように微笑んでいた。
「お疲れさまでした。ルスラン」
そして、朗らかに微笑むと先の団体戦で勝利を収めたことを労った。
「まずはおめでとうございます」
相手に疑問を差し挟む間を与えないようにと立て続けに口を開いた。
「今度はいよいよ決勝戦なんですよね。すごい」
そして、隣に立つその相棒を見上げた。
「ブコバルもお疲れさまでした」
「おう」
「それにしてもドーリンさんには驚きましたよ。まさか、あのように剣を得意とされるとは思ってもいませんでしたから。普段の様子からは全然想像が出来なかったので、本当に吃驚でした」
「リョウ」
周囲の観客たちの興奮が乗り移ってか、いつになくやたらと饒舌に言葉を紡いでゆくリョウに、ユルスナールが低く声を掛けた。その大きな手は、いまだ頬から首の辺りを躊躇いがちに彷徨っている。
「アッカもロッソもアナトーリィーも。皆さん、お疲れさまでした」
「ああ」
ユルスナールたちの後ろから顔を出した三人は、若干一名から発せられる何がしかの不穏な空気を感じ取ったのか、顔を出すと直ぐに身に付けた防具類を外すべく、足早に天幕の方へと去って行った。
「リョウ」
「それにしても…」
「リョウ」
そこで漸くユルスナールは焦れたように些か剣呑な声を発してい

た。
「これはどうした？」
「何がですか？」
その返答にユルスナールの片眉が器用に跳ね上がった。
「これは、どうした？」
もう一度、はっきりと音節を区切って口に出された問い掛けをリョウは何事もなかったかのようにさらりと流していた。
「ああ、これですか？　すみません。お見苦しいものを。単なるちょっとした事故のようなもので。大したことではないんです。ちょっとぶつかってしまっただけで。ただ、手当てをして下さった方が随分と丁寧な方でして、少し大げさになってしまっただけなん……で……す」
ユルスナールは親指を伸ばすとリョウの口元に宛がい、その後も滔々と続きそうになる弁明を封じた。
普段、口数の多くない者がこのように淀みなく言葉を紡ぐのも却って不可解に思うことだった。肝心な所でお茶を濁して有耶無耶にしてしまいたいのだろうが、ユルスナールがそのような見え透いた策に引っ掛かる訳がなかった。
「ごちゃごちゃとした御託はいい。何があった？　あ？」
試合後のことでいつになく気が立っているのか知らないが、普段の倍増しの怖い顔で凄まれて、リョウは一瞬、怯みそうになったが、それでも小さく息を吐き出すときっぱりと笑顔で答えた。
「いえ。なんでもありません」
それはある意味、完全な拒絶だった。
リョウとしては、ユルスナールを前に本当のことなど言える訳がなかった。ここでアリアルダの名を口にしてはいけない。それは本当にちっぽけな自尊心（プライド）から端を発するのかもしれなかった。
それにこのような瑣末な事で大事な試合を控えている男を煩わせることはしたくはなかった。
リョウは、少し視線を下げると男の左腕に揺れる橙色のリボンを

そっと見つめた。ユルスナールがリボンを受け取り、そこに巻くくらいだ。男にとってもアリアルダは大切な存在であるのだろう。それをまざまざと見せつけられた気がした。だが、そのことをこの場で口にしようとは思ってもいなかった。

それから再び、リョウはユルスナールに視線を合わせると『何でもない』のだと笑った。

そこからは、やたらと愛想よくにこにことして『気にするな。大したことではない』の一点張り。その顔を腫らすことになった原因やら経緯やらについては一切、口を割ろうとしなかった。

一度、こうと決めたら余程のことでない限り己の考えを覆そうとしない頑なな所がリョウにはあった。このことを本人が明かさないと決めた以上、相手が素直に口を割るとは思えなかった。自分も大概にして頑固な方だが、リョウにも似たような所があるというのはこれまでの経験上ユルスナールが感じていたことでもあった。

ユルスナールは大きく息を吐き出すと、この場ではそれ以上の追及をすることを諦めた。他にやり方は幾らでもあるのだ。

そうやって一旦は大人しく引いて見せたものの、その内心は心穏やかではなかった。

少し目を離した隙に傷を拵えて帰って来る。ユルスナールには、それは非常に胆の冷えることだった。この間の治療院の実習で街中に下りた時に負ったという首の傷も漸く癒えた頃合いだというのに。首にはその時の名残の包帯が巻かれていた。

肝心な時に傍にいてやれない自分がとても不甲斐なく、そして歯痒かった。だからこそ、どんな些細なことでもいい、相手に隠し事をして欲しくはなかったのだが、こちらの気持ちとは裏腹に向こうは心配を掛けまいとしてか、自分一人で解決をしようとする。それが、ユルスナールにはどうにももどかしくて仕方がなかった。

どうも王都に帰って来て以来、自分とそしてリョウを取り巻く環境は己の与り知らぬ所で随分と変化を見せているようだ。それも余

りおもわしくない方向へと。

――――――そして、この男も。

ままならぬことの多い自分の周辺事情。今やその一つにも挙げられる男の存在をユルスナールは忌々しげに見遣った。

「こんな所で何をしている？」

抑えている積りでもかなり低い声が出ていた。

ユルスナールは、リョウの隣に我が物顔で立つ男へ冷ややかな視線を投げた。

この男がこのような場所で試合観戦をしていたと聞いたら第三の連中も度肝を抜かれるに違いない。それほどまでに珍しいことなのだ。第三の団長がこういった武ばったことを厭うのは、軍部内でも有名な話で、これまでこのような試合の真っ只中に顔を出したことはなかった。端から出場しないこともそうだが、己の部下たちが戦う様も見物しないのだ。元々第三師団は剣の実力を問われることの無い特殊な部隊だが、それでもこの大会期間中は、毎年、同じ軍の一団としてその参加者の中に名前を連ねるのだから、団長としては少しくらい興味を持っても良さそうなものである――というのが、面と向かって口にはしないまでもユルスナールが常々思っていたことでもあった。

そんな男があろうことかリョウの隣にいた。恐らく、引き続きリョウに接触を持って色々と嗅ぎ回っているのだろう。この間の伝令騒ぎの一件も記憶に新しい。

人当たりの良さそうな外見を最大限に有効活用して上手い具合に相手の懐に入り込むのだ。ブコバルの言ではないが、本当にリョウは厄介な輩に目を付けられたと思う。術師に並々ならぬ関心を持つ強かなこの男の事だ。ひょっとしたらリョウとガルーシャの繋がりについても薄々感づいているのやもしれない。いずれにせよ、ユルスナールの目から見ても食えない男だった。

「いやですねぇ、ルスラン。あなたたちの雄姿を見る為に決まっているじゃありませんか」

お得意の万人を魅了すると揶揄されている笑みを浮かべて、しゃあしゃあと白々しい台詞を口にしたゲオルグをユルスナールは胡乱気に見遣った。

「うっへぇ、妙なことぬかすなよ、ゲオルグ。お陰でこっちは鳥肌が立っちまったじゃねぇか、おい」

ユルスナールが口を開こうとした所で、隣にいたブコバルが一息先にそのようなことを言って、あからさまに顔を顰めつつ己が太い腕を摩り始めた。

急激に体感温度が下がったのは、恐らく気の所為ではないのだろう。

試合が終わり防具を身に付けた押し出しのある男たちは、その額際に汗を滲ませていた。向こうとこちら、互いを隔てているのは、細い杭とそこに渡された細い綱（ロープ）だ。その綱（ロープ）の部分には、所々出場者の健闘を称える為に結ばれた色とりどりのリボンが、ひらひらと風に靡いていた。

「おやおや、それはいけませんねぇ。ですが、見るからに暑苦しいくらいですから、いっそその位でちょうどいいのではありませんか？」

鳥肌が立つ

ああ言えば、こう言う。ゲオルグも笑顔のままさらりと辛辣なことを言ってのけた。

ゲオルグが小首を傾げると癖の無い淡い金色をした髪がさらりと揺れた。

妙な緊張感が辺りに漂い始めていた。近くにいたゲオルグの知り合いだという兵士たちが、恐々としてこちらの様子を窺っているのが見て取れた。

徐々に剣呑さを増してゆく空気をなんとなく放っておくことが出来ずに、リョウは勇気を振り絞って間に入ることにした。だが、若干、腰が引けそうである。

「あの、ルスラン。ゲーラさんはワタシに付き合って下さったんです。宮殿の侍女の方々の控室のような所で偶々お会いしまして。ワタシが会場への道のりが不案内だったものですから、ここまで連れて来て頂いたんです」

ゲオルグを庇うように間に入ったリョウにユルスナールはあからさまに面白くないという顔をしたのだが、すぐにその台詞を聞き咎めた。そこには思いも寄らない単語が含まれていたように思えたからだ。

「宮殿の侍女部屋に行ったのか？」

「はい。手当てをして下さった方がエクラータ様付きの侍女の方だったので」

この武芸大会の会場にいた筈であるのにどうして宮殿なんかに、しかも侍女たちの控えの間などに行くことになるのか。ユルスナールにはリョウの足取りが全くもって見当付かなかった。

思いがけないことであったのか、虚を突かれた顔をしたユルスナールの傍らで、ブコバルがニヤニヤとその笑みを深くした。

「なんだリョウ。お前、俺たちが汗水垂らして頑張ってる間に侍女とよろしくやってたのかよ。あ？」

ブコバル流の性質の悪い冗談にリョウはそれが態とだと分かっていながらも心底呆れたような顔をした。

「人聞きの悪いこと言わないでください。そんなことある訳ないでしょう？」

――――――誰かさんとは違います。

かなり心外であったようで口を尖らせるとふいと横を向いてしまった。

そうこうするうちに天幕の方からシーリスがやってきた。シーリ

スは試合が終わったものの中々帰ってこないユルスナールとブコバルの二人組に業を煮やしたようだ。
「ルスラン、ブコバル。こんな所で何をやっているんです？」
開口一番、両者を窘める言葉を吐いたのだが、その視線がついとその杭の向こうに立つ小柄な人物を捕らえると小さく息を詰まらせた。
「リョウ！　そんな所に……一体、どうしたんです？」
目敏く――と言っても左の頬の湿布は存外人目を引くには違いなかったが――リョウの左頬の状態に気が付いたシーリスが、慌てて駆け寄ってきた。
「可哀想に。こんな所に怪我をするなんて。おや、少し腫れているではありませんか」
そう言って痛ましそうに柳眉を下げた。
リョウは、その反応に小さく苦笑を浮かべていた。
自分が男であったら、このようなものなど本当にちょっとした掠り傷くらいの認識で全く問題にされないのだろうが、本来の性別を知っているシーリスは女が顔に怪我をすることはどうにも許せないことであったらしい。
シーリスの余りの仰天ぶりに却ってリョウの方が驚いてしまった。
これは少し大事を取って軟膏を塗ってもらったので、ベタベタするのが嫌で貼ってあるのだ。少しぶつけたくらいで何ともないのだとこれまでに繰り返した言葉を再び口にしていた。
シーリスは心配そうな顔をしながらもその説明で一応は納得したらしかった。

そこで漸くリョウの隣に立つ見慣れない人物の存在に気が付いたようだ。
「おや、ゲオルグ。珍しいこともあるものですね。明日は大雨が降るのでしょうか？」
「いや、大雨なんてもんじゃぁ済まねぇだろ。槍ぐらい降ってきそ

うだぜ」
この国でこの時分に雨が降ることは滅多になかった。シーリスとブコバル、二人の口振りから、どうやらゲオルグがこの場に顔を出すのは相当に珍しいことであるとリョウは悟った。
辛辣な言葉を吐いた二人にゲオルグは返すことなく感情の読めない笑みを浮かべていた。

その時、隣の第二会場の方から大きな歓声と野次が上がった。どうやら向こう側でも試合が終わったようだ。
不意に集まった面々の意識が逸れた所で、シーリスが空気を入れ替えるように言い放った。
「ほら、ルスラン、ブコバル。いつまでもそのままではみっともない。それを外してらっしゃい」
防具を外す為に控室である天幕へと戻るように促される。
シーリスの催促にユルスナールとブコバルは渋々と頷いた。第七の中でその実権を実質的に握るのは、影で北の砦を支えるシーリスであるのだろう。ここに図らずも第七の精神的序列（ヒエラルキー）が垣間見えたこととなった。
だが、ここですんなりと終わらないのが、ユルスナールという男である。
「リョウ、こっちに来い」
冷酷そうな薄い唇が唐突にそのような言葉を口にしたかと思うと前方から二本の腕が伸びてきて、あろうことかリョウの身体を脇の下から持ち上げ、瞬く間に杭と綱（ロープ）の境界線を跨がせた。硬い胸当てのひんやりとした感触がしたと思ったのも束の間、気が付けばその足元に下ろされて、リョウはその手を取られるとそのまま踵を返したユルスナールの後を引っ張られる形で付いて行く羽目になっていた。
「……ったく」
それを見たブコバルは小さくぼやくように口にしてから、のんび

りと二人の後を追った。
「え？　あの、ルスラン？」
突然のことにリョウは驚いて少し前を行く男を見上げたのだが、相変わらず澄ました硬質な男の表情からは、相手が何を考えているのかを読み取ることは出来なかった。
リョウはそっと後ろを振り返った。そこでゲオルグに小さく頭を下げて突然その場を去ることになった非礼を詫びた。ゲオルグは人当たりの良い笑みを浮かべて、こちらにひらひらと手を振っていた。

一人、その場に残されたシーリスは、足早に遠ざかってゆく体格の良い男とそれに引きずられるようにして半ば小走りに駆けて行く小柄な背中、そして、その後ろからのんびりと天幕の方へ向かって歩いて行く大柄な男の背中を視界に入れながら、小さく溜息を吐いた。そこには若干の呆れのようなものが混じっていた。
そして、徐に肩を竦めたかと思うとゆっくりと杭と綱（ロープ）で区切られた向こう側に立つ男を振り返った。
同じように小さくなって行くちぐはぐな三体の背中を追っているその眼差しは、心なしか和らいでいるようにも見えた。そのことを少し意外に思った。
「随分と良いことがあったようですね」
相手の機嫌が恐ろしく良いことには直ぐに気が付いた。そうでなければ、この男がこのような人混みに紛れているはずはない。日頃からむさ苦しいのと暑苦しいのは御免だと公言して憚らない輩だ。
「ええ。それはもちろん」
繊細な面立ちをしたその口元が、艶やかに弧を描いた。
すると何故か言い知れぬ悪寒のようなものがシーリスの背中に走った。相手の機嫌の良さに反比例をするかのようだ。
シーリスはこれ以上、この男とは関わりになりたくないと思った。
「それでは、私もこの辺で」
柔和な面差しに儀礼的な笑みを刷いてから静かに踵を返した。

同じような略式の詰襟の軍服を身に着けたその背中に柔らかな声が掛かった。

「ああ、シーリス。先程、ザガーシュビリ殿をお訪ねしたんですよ」

その言葉にシーリスは足を止めると緩慢な動作で振り返った。態々そのようなことを宣言した相手の意図を透かし見ようと菫色の光彩が細められた。

ゲオルグは、相変わらずその顔に男にしては艶やかな笑みを浮かべていた。だが、そこにあるこの男の本心は中々に読む事が出来ない。

束の間の戦士たちがいなくなった会場に風が吹き込み、顎の辺りで切り揃えられたゲオルグの細い髪を揺らし、その顔を半分覆った。

暫し、菫色の瞳と薄い灰色の瞳が静かに見つめ合った。

やがてどちらからともなく交差した視線が外される。両者共にそこにある表情は、判じ難い曖昧な微笑みを浮かべたままだった。

「……そうですか」

ただぽつりと小さく口にして、シーリスは何事もなかったかのように背中を向けると先程の仲間たちの後を追うべく天幕の方へと足を進めたのだった。

一方のゲオルグも、その口元には相変わらず微かな微笑みのようなものを浮かべながら、多くの人たちで賑わう試合会場を一人後にしたのだった。

有無を言わせない強引さで天幕の中に連れていかれたリョウは、第七の面々が身支度を整える傍で、臨時に置かれた木製の低い簡素な長椅子の上に控え目に腰を下ろしていた。

大きな体躯の男たちが周囲をうろうろとする中、その片隅で防具を取り外すユルスナールの姿を所在無げに眺めていた。

これから待っているのは説教だろうか。それともこの頬を腫らす

ことになった経緯についての詮議だろうか。いずれにしても自分にとって余りいいことではないに違いない。それは黙々と身に付けた防具を外し、汗を拭う男から発せられる空気からも感じ取れていた。

リョウは頬を張られることになった顛末は、決して口にはしまいと決めていた。そこはどうしても譲れない一線であったからだ。

だが、たとえ本人がそう固く決意をしていたとしても常にそれが上手く行くとは限らないというのが世の常である。

伏兵は思わぬ所に潜んでいた。

「よぉ、聞いたぜ、坊主。お前、えれぇ別嬪にこっぴどく振られたんだってなぁ、おい」

不意に頭上に影が差したかと思うと座っていた椅子がぎしりと音を立てて傾いだ。

首に腕を回されるようにして、大きな体格の男がどっかりと隣に座ったのが分かった。

リョウは無言のまま、ちらりと横目に妙なことを吹っ掛けて来た男を見た。

艶やかな飴色をした肌に吊り上がり気味の灰色の光彩がこちらを興味津々に見ていた。よく発達した頬骨の直ぐ上の辺りには、黒い複雑な紋様が刺青のようにして入っていた。

第四師団の兵士だった。名前は確か……。

「ザイーク」

窘めるように鋭くユルスナールがその男の名を呼んだ。

そうだ。少し面倒な匂いのする男だった。

だが、男はユルスナールの方をちらりと見ただけで気にすることなく、からかうように絡んできた。

「おいおい、一体何を言ったんだ。え？　相手はいいとこのお貴族さまだったんだろう？　そんなお上品な女から手が出るなんざぁ、よっぽどのことじゃねぇか」

人の不幸を面白がるような声音で首を絞めるように回した腕に力

が入る。
　リョウはぐっと押し黙った。相手は興味を惹かれたように好奇に満ちた瞳を向けてきたが、対するリョウの顔からは一切の表情が抜け落ちていた。
　だが、相手の反応など気にも留めずに尚も男が続けた。
「それにしてもよぉ、横っつらを張られたか、え？　随分いい音がしたっていうじゃねぇか」
――――――バチーンてよぉ。
　リョウは今すぐ、この男の口を塞ぎたい気分になった。
　辛うじて無表情を保った下では様々な感情が渦巻いていた。まさか他人からあの場面を見られていたとは思ってもみなかった。いや、木組みをした雛壇の影とはいえそこに人の往来はあったから、それなりに人目はあったのだろう。それでも皆、試合の方に夢中で、その裏手で行われていたちょっとした密会（のように見えたことだろう）に興味を持つような者など滅多なことではいないと思っていた。
　それなのに。まさかこのような近くで、あの場面を目撃した人物がいるとは思いも寄らないことだった。
　その口振りでは男自身が目撃したわけではないのだろう。恐らく知り合いの兵士か誰かがあの時の様子を見て面白可笑しく吹聴したに違いない。他人の不幸は蜜の味。年若い少年が貴族の娘に平手打ちを食う。身分違いの恋だとか片恋の顛末だとか。絵図らだけを見れば滑稽な一幕に違いないからだ。
　周囲には妙な沈黙が落ちていた。図らずも乱入した男の口からリョウが怪我を追った時の状況が少しずつ明るみになってきた。それはリョウの事を良く知る第七の兵士たちにしてみれば笑えない状況だった。当人ならば尚更のことだろう。それに勘の良い男たちにはその裏にある何がしかの事情に察しが付いた。

少しずつ見えてきた事態にユルスナールが口を開こうとした矢先、
「なんのことでしょう？　人違いではありませんか？」
そんな白々しい台詞がリョウの口から飛び出していた。その口元には薄らと余所行きの笑みのようなものが張り付いていた。
「嘘付けや。おまえ、そんな顔しておいて、よく言うぜ」
男の太い指が左頬の湿布の部分を叩いて、新たな外部からの刺激にリョウは思わず顔を顰めた。
だが、その痛みをすぐにやり過ごして、
「お言葉ですが、あなた自身がしかと見た訳ではないのでしょう？　ならばその時の人物がオレだということにはならないのではありませんか？」
言い逃れとしては苦しいとは思ったが、周囲にいる第七の兵士たちの手前、その事実を認めたくはなかった。
シラを切る言葉に、ザイークが鼻先で残忍な笑みを刷いた。
「あ？　残念だったな、坊主。そいつは黒髪に黒い瞳のひよっこで腕に第七の腕章をつけてたって話だがな」
これだけ揃えば、考えられる該当者は一人しかいない。
剣呑そうに目を細めた相手と暫し見つめ合い、リョウは不意に視線を逸らした。これ以上は迂闊に口を開けば墓穴を掘ることになりかねないと判断したからだ。だが、それは相手の言葉を認めたことでもあった。
沈黙を貫いたリョウにザイークはしてやったりというような笑みを刷いた。
「あの、腕を放して頂けませんか？」
首に回っていた太い腕が肩に滑り、そこから二の腕の辺りを撫で下ろされ、リョウの肌は言い知れぬ気味の悪さに粟立った。からかうにも性質が悪過ぎた。
「傷心なら、俺が慰めてやろうか？　あんな気位だけが高いだけの女のことぐらい直ぐに忘れさせてやるぜ？」
耳元に吹き込まれた低い囁きに、

「いえ、結構です」
間髪を入れずに淡々と返す。馴れ馴れしいにも程があった。それに口にする台詞がどう考えてもおかしい。やはりこの男は、ウテナと同じ系統の人なのだろうか。
そのようなことを半ば現実逃避のように考えていれば、目の前に影が差した。
「……ザイーク」
地を這うような低い声が頭上から降ってきた。それだけで相手が相当おかんむりであることが感じ取れた。
恐る恐る目線を上げる。そこには、もの凄い形相で仁王立ちをする銀色の髪の男がいた。
ユルスナールは有無を言わせずにリョウの肩に回った太い腕を掴むと捻り上げるように外したが、相手は簡単に掴まれた腕を外した。
「なんだよ、ルスラン。邪魔すんなよ」
そんな台詞を軽い調子で言い放った男をユルスナールは無言で睨みつけていた。それこそ人一人を射殺してしまいそうなくらいの鋭い眼差しだった。
「おっかねぇなぁ」
相手の本気の度合いを感じ取ったザイークは、両手を前に掲げてそそくさと座っていた椅子から退いた。
「ザイーク、止めとけ。本気で殺されるぞ」
防具を外してから身に着けていたシャツを脱ぎ、半裸で汗を拭っていたブコバルからも窘めるような言葉が掛けられた。そして、ザイークは、改めて周囲に並んだ第七の男たちを見回してからやってられないとばかりに肩を竦めて見せた。
「何でぇ、どいつもこいつも。そんなにこの【チョール(黒いの)ナヤ】が大事かよ。ご大層なもんだぜ」
「そりゃぁ勿論、あなたのような者の毒牙に掛かると分かっていながら、みすみす黙っている方がどうかと思いますよ」
――――――うちは皆、その位の良識は持ち合わせていますか

ら。
　傍にいたシーリスが眩しい笑顔のままに毒づけば、多勢に無勢、一人敵陣にいるザイークは面白くなさそうに口の端を下げた。
「へいへい。じゃぁ、またな。坊主」
　一頻りからかって気が済んだのか、第四師団のお騒がせ男は、周囲から冷たい視線を浴びながら天幕の外へと消えたのだった。

　そして再び、沈黙の落ちた控え室では、男たちが黙々と着替えを始めた。ザイークの口から漏れた事柄に敢えて触れる者はいなかった。それは男たちの優しさでもあるのだろう。
　リョウは心の中でそっと感謝の言葉を口にした。
　ユルスナールが身支度をしていた場所では、同じような簡素な木の長椅子の上に男の左腕に巻かれていたリボンが二本置かれていた。
　今日は朝から本当にこのリボンに振り回された形になった。自分の指二本分にも満たない幅の細長い色が付いた紐。ただそれだけのことであるのに。乱気流に呑まれたように上下した気持ち。感情の振り幅は、自分が思っていたよりも大きいものだった。それを再確認する羽目になったのは、果たして良いことだったのか。
「ルスラン、これはワタシがお預かりしますね」
　リョウはついと手を伸ばすと今日一日散々己が心の内を悩ますことになった原因を手に取った。たかがリボン。されどリボン。手の中にある紐は、関係の無い者から見たら本当にただの紐に過ぎないのだ。そこに人の【想い】が付与されることで、新たな意味が付加されることで、この細長い紐は、酷く重みのあるものに早変わりする。
「ああ。明日も頼むぞ」
　こちらを振り返ったユルスナールは、シャツの釦を止めながら小さく微笑んだ。
　それは、また明日、同じように自分にリボンを巻いて欲しいということなのだろうか。

「お前の呪いは良く効く」
――――――――ドーリンに勝てたのもそのお陰だ。
そんな軽口を叩いて笑った男にリョウは何とも言えない気分になった。だが、それをすぐに引っ込めて小さく笑うと首を横に振った。
「いえ。明日は止めておきましょう。ルスランにはそちらがありますし」
――――――――態々二本も巻くことはありますまい。
リョウは黒いリボンを小さく折り畳んでポケットの中にしまうと椅子の上にあるもう片方のリボンを見遣った。その顔に浮かんだ笑みはどことなく影のあるものだった。
「リョウ、勘違いをするな」
シャツを替え終えたユルスナールは、木の長椅子を跨ぐとそこに腰を下ろし、リョウに目線を合わせた。
ユルスナールは真剣な顔をしていた。
「あれは今日だけだ。それで義理を果たしたからな。明日以降は、お前のものだけだぞ？」
その言葉にリョウは何と答えたものかと思った。
男の言葉を素直には喜べなかった。もし、明日以降、男の腕に翻るリボンが自分のものではない他の色だったとしたら。あの娘はどれだけの衝撃（ショック）を受けるだろうか。それを思うと胸の奥が締めつけられるように苦しくなった。
ユルスナールはきっと理解していないのだ。この細い紐の中に相手の気持ちがどれだけ込められているかを。
この紐と同じ色の燃えるような熱い瞳の色をリョウは目裏に思い描いた。まるで焼印を押されたかのように小さな傷口が疼いた。
「ルスラン、そのようなことを口にするものではありませんよ」
リョウは小さく微笑むとどこか哀しい顔をして窘めるようにすぐ傍にある深い青さを湛えた瞳を見つめた。
鼻先で男が、訳が分からないというように目を細めたのが分かった。それに力なく首を振る。

「リョウ」
そっと伏せた眼を上げるように男の掌が右の頬に掛かり、顔を上げさせた。
「こっちを見ろ」
いつになく真剣な響きを持った声音にリョウはゆっくりと視線を合わせた。男の声は凪いでいたが、そこには従わずにはいられない力があった。
そして、すぐにその事を後悔した。そこにある揺らぐことなのない真っ直ぐな瑠璃色を目にして、リョウは何故か泣きたい気分に駆られた。
二つの真摯すらある瞳には、困惑に眉根を下げた情けない顔を晒した自分が映っていた。
――――――ああ。お願いだから、そのような目でこちらを見ないで。
そこに潜む魔力は絶大で。これまで必死になって隠していた筈の本心をいとも簡単に引きずり出されてしまう。
「いいか、リョウ。俺が訊きたいのはお前の本心だ。周囲の雑音を気に掛けるな」
低い耳に馴染んだ男の声が、本当は欲しかった言葉を紡ぐ。この男のようにぶれることなく真っ直ぐに立っていられたら、どんなにかいいだろうか。
「お前は俺にこのリボンを巻いてはくれないのか？」
ここで頷いてしまっていいのだろうか。リョウは暫し逡巡した。と同時にそのような事を考えている自分が酷く打算的で狡猾な人間に思えて堪らなく嫌だった。
「リョウ？」
そっと返答を促すように男の無骨な指が、まっさらな頬を撫でた。そこから滲み出るようにして伝わって来るのは、この男の優しさだった。
「……済まなかったな」

尚も返事をしない相手に、ユルスナールはそう口にすると、そっと大きな当ての布が貼られている方の頬を手の甲で撫でた。
それだけで十分だった。その一言で、男が、自分がひた隠しにしている事実の欠片を拾ってしまったことに気が付かされた。
「いいえ」
リョウは伏せていた目を上げると小さく微笑んだ。ユルスナールが謝るようなことではない。
そして、何かを決意するように小さく息を吐き出した。
「分かりました。それではまた明日、こちらに伺えばよろしいのですね？」
「ああ。ありがとう」
再びの約束に男が柔らかく微笑んだ。そして、そのまま当然のように距離を詰めてきた男の顔をリョウはその口元に指を宛がうことで押し留めた。少し困ったような苦笑に似た笑みを浮かべて首を横に振る。

ちらりと横目で周囲を見遣れば、どこか呆れたようにこちらを見ているシーリスとニヤニヤと成り行きを見守っているブコバル、そして、やや挙動不審気味にこちらの様子に対して見て見ぬ振りをしているロッソ、アッカ、アナトーリィーと控えとして残っていたグントとヤルタがいた。グントとヤルタは視線が合った途端、顔色を変えてばっとその顔を逸らした。
ユルスナールは、些かばつが悪そうに態とらしい咳払いを一つして見せると座っていた長椅子から立ち上がり、上着を取る為に背中を向けた。
リョウは取り繕うようにそんな仕草をした相手を見て、さもおかしそうに声を立てて笑ったのだった。
こうしていつの間にか、不穏さえあった空気は元に戻っていた。

陽炎の下（後書き）

たかがリボン、されどリボン。七夕ということで、少し頑張ってみました。それではまた次回お会いいたしましょう。

絡み合う糸

翌日、武芸大会二日目は、個人戦一色の一日となった。

団体戦の方は、昨日一日で決勝戦に進む二組が選び出された。第一会場の組み合わせ（ブロック）からは、ユルスナールたちの第七師団、そして第二会場の組み合わせ（ブロック）から激戦を勝ち抜いたのは、前評判通り近衛の精鋭（エリート）が揃う第一師団だった。両者は、翌日の大会三日目、国王を始めとする王族たちを前にした天覧試合でその頂点を決めることになった。

本日、試合会場では一日目に引き続き個人戦が行われ、参加者の更なるふるいが掛けられる予定だった。決勝戦に進む栄誉を与えられるのは、二人の剣士たちのみ。会場は宮殿前広場の西側二つの区域が主たる場所だが、この日ばかりは団体戦で利用された東側の二会場も使用された。

個人戦の方にも出場するというユルスナールの出番は、早くとも午後からになるだろうとのことだった。昨年の上位入賞者十名までは、その翌年も出場を望めば、最初の予選を免除されて最終的に参加者が五名から十名に絞り込まれた時点で参加をすることになるのだという。前年の上位者に対する特典（シード権）のようなものだろう。

という訳で、リョウとしては二日目の朝はゆっくりしていようかと思っていたのだが、昨日の興奮を引きずるようにしてやってきたバリースの急襲を受けて、午前中の内から試合会場の方へと引っ張り出される羽目になってしまった。

一緒にいたヤステルとリヒターは無理することはないと言ったのだが、王都に滞在する機会などそうそうある訳でもなく、今後このような機会も滅多にはないだろうとの思いから偶にはいいかと思い、リョウはその誘いに乗ることにした。

これまで顔を見せなかったアルセーニィーとニキータの二人は、明日、合流することになるのだという。やはり最終日の天覧試合は、この国の男であるならば欠かしてはいけないようだ。

心配していた左頬の腫れは、一晩経ってすっかり引いた。侍女のイーラに塗ってもらった軟膏が大分効いたようだ。薬草の成分が身体の中に浸透した所為か、昨晩は身体が火照り随分と寝汗をかいていた。この国の薬草の成分は、やはり自分の体には馴染みがない所為か、その効用の仕方は前回に引き続き、少し極端でもあった。

昨日と同じ宮殿前広場では、既に多くの人々が集まっていた。個人戦が行われる西側の会場は、団体戦が行われた東側の会場と比べると大分その趣が異なった。

団体戦の方はれっきとしたこの国の軍部の兵士たちだったが、こちらは傭兵や集団には属さない一匹狼、風来坊と言った軍部には所属をしないが、剣の腕には自信があるという男たちが多く集まっていた。

大きな剣を背中に担いだいかにも荒くれ者といった風体の輩もいた。勿論、出場者の中には腕試しとして参加した兵士たちの姿もある。そして、軍人ではない貴族の子弟もちらほらとだが見受けられた。一言で言えば、様々な階層の男たちが集う雑多な集団だった。その中には、本当に珍しいのだが、女性剣士の姿もあるのだとか。

それでも目に付くのは、やはり、どことなく荒々しい粗野な雰囲気を持つ屈強な男たちが多かった。そのような男たちが点々と屯っていたりする様は、まるで場末の酒場や盛り場のような空気が醸し出されていた。

個人戦の会場の掲示板の所では、沢山の数字が並んだ布が張り出されていた。一桁台から始まり最後の方は二百番台の数字が並んでいる。個人戦の出場者は受付時に連番となっている番号札を貰い、

それが試合中の名前に代わる個人の認識番号となった。全ての出場者が登録を済ませた後、番号の若い順から籤を引いて行き、そこで引き当てた番号が対戦者となり、声高に呼ばれた後に試合となった。そして、その後、審判たちは、ひたすら立ち会いの数をこなしてゆくという感じだった。

掲示板には、昨日の時点で戦いに勝ち残った勝者の番号が記されていた。最終的に出場者の総数は優に二百名を越えたようだ。

立ち会いの勝敗は、団体戦の時と同じように寸止めで、相手の急所を先に突こうとした方が勝ちとされた。同じように審判が合図となる旗を持って、その勝ち負けを判定した。

ただ団体戦の時と違うのは、引き分けがないということだ。どちらかが勝つまでの勝負となる。そして、これは団体戦の時とは大きな違いの一つだと言えるのだが、こちらの試合では、大抵負傷者が出るのが常だった。

良く訓練された兵士たちとは違い、こちら側の出場者はそれこそ階級も違えば生い立ちも違い、其々が扱う得物も違う雑多な人々の集まりだった。そのような理由から、日頃から厳しい訓練をしている兵士たちのように必ずしも剣を止める間合い（タイミング）が上手く取れるとは限らなかったからだ。

往々にして刃が男たちの肌を掠める場合が多々あった。中にはそれを故意に行う性質の悪い場合（ケース）もあるようだ。要するにこちらの方がより実戦に近い形となるのだ。

怪我を負った出場者たちの為に個人戦の会場では救護班の天幕が大々的に設けられていた。中に詰めるのは、王都に拠点を置く部隊――この場合、第一、第二、第四師団だ――の軍医と主に金創を得意とする神殿の神官たちが臨時に駆り出されるのだそうだ。その他、街中で治療院を営む術師たちも呼ばれたりするようだ。

救護班の天幕は、掲示板から見てもすぐ脇の目に付く所にあった。その入り口には大きく覆いが片側に寄せられていて、中からは白い

神官の装束に身を包んだ者や術師と思われる長い外套を羽織った者たちが出入りしているのが見て取れた。

万が一、重傷を負った場合は、応急処置をした後、状況を見て、そして怪我を負った人物の出自や所属などを鑑みてから街中の治療院や宮殿内の医務室など適当と思われる場所に移されるのだという。

掲示板での数字を見る限り、昨日の時点で出場者たちは三十人前後にまで絞られていた。これを午前中で一桁台にまで絞り込み、そこから昨年の上位者を加えての対戦となるのだ。

救護班の天幕の入り口を何気なく眺めていると、中から赤い帯を締めた一人の神官が現れた。

リョウはたなびくその赤い色に吸い寄せられるようにその男の方を見た。

視線が合った瞬間、その柔和な面立ちが穏やかな笑みを刷いたのが分かった。

そのまだ年若い神官には見覚えがあった。街中の治療院に祈祷治癒師として治療に当たる為に入っていたスタースという神官だった。

「スタースさん！」

「リョウ。ちょうど良かった」

挨拶をする為に近づいた小柄な人物にスタースはあからさまに顔を綻ばせた。

開口一番に思ってもみないことを言われてリョウは内心首を傾げた。

「今日はこちらで治療をなさるんですか？」

この天幕の設置理由やその性質については、先程ヤステルとリヒターから教えてもらったばかりだった。

街中の治療院の方ではなく、今日はこちらに駆り出された形になったのだろう。優秀で仕事熱心、そして身軽なスタースは、神殿の内外を問わずに何かと重宝をされている存在なのだろう。

「ああ。そうなんだ」

特徴的な片笑窪を右の頬に浮かべて小さく首を傾げながらスタースが微笑んだ。
その瞳がついと期待交じりにリョウを見ていた。
「リョウ。今、暇かい？」
「はい？」
「いやさぁ。試合を観に来たんだろうとは思うんだけど、こっちも何かと人手が足りなくってさ。良かったら、手伝ってもらえないかなぁ……なんてね」
思ってもみない申し出にリョウは驚いたのだが、別に反対をするようなことでもなかったので快く承諾をしようとして、はたと思い、後方を振り返った。そこには掲示板の前辺りで次はどの会場を観に行こうかと相談をしているヤステル、リヒター、バリースの三人がいたからだ。
「ちょっと待ってて下さいね。多分、大丈夫だとは思うんですけど。一応、友人達に断りを入れておきたいので」
「本当かい？」
好感触の返事にスタースはその優しげな顔に喜色を浮かべた。

一緒にいた三人に救護班の手伝いを頼まれたのでそちらに行きたいと告げれば、ヤステルとバリースの二人は、その目を少し見開いて驚いたようだった。実家が街中で大きな薬種店を構えているリヒターは、この間、治療院でのお使いの為に訪れた店先でリョウとは顔を合わせており、リョウが神殿の【祈祷治癒】の授業を取っていたことを知っているので、『ああ、そうか』と訳知り顔でおっとりと頷いた。
ヤステルとバリースは少し驚いたようだったが、リヒターの説明で直ぐに納得をして、『好きにしていい』と笑顔で送り出してくれた。自分たちは会場の方にいるから、後で合流しようと約束をした。ユルスナールが個人戦にも出場することをバリースたちも知っていて、その時は必ず観戦をするとのことだったので、会場で会おうと

いうことになった。

それからリョウは、天幕の外側で待っていたスタースに友人たちと話が付いたことを告げてから手伝いをするべくその中に入ることになった。

中は質素な木の長椅子が並び、端の方には大きな細長いテーブルが置かれ、その上には薬草やらを詰めた持ち運びが可能な大きめの木箱と治療の為の器具や包帯や油紙などが入った箱、それから桶や盥等がきちんと並べられていた。ちょっとした野戦病院のような趣だ。怪我人を寝かせる為の簡易ベッドのような木製の低い戸板に足が付いたようなものも運び込まれていた。中には既に数名の男たちが居て、医者の治療を受けていた。まだ試合が始まってはいないとのことなので、昨日の経過を診てもらっているのかも知れない。

軍医や街中で術師をしている男たちも中にいるとのことで、その中で手伝って欲しいと言われたのだから、中には余程沢山の人たちが治療を待つことになるのだろうかと思ったのだが、その予想は直ぐに外れることとなった。

「ええと、オレは何をすれば？」

足りない人手というのは、薬草を磨り潰したりするような地味で根気のいる作業の為だろうか。

天幕の中をぐるりと見渡してから自分の存在意義を尋ねるべくゆっくりと振り返れば、スタースは、ほんの少しだけ申し訳なさそうに眉を下げた後、そっと天幕の中でも奥まった所にある一角を控え目に指示した。

「その……何と言うか、細々とした雑用…みたいなものなんだけどね」

そこは、持ち寄った薬草やら包帯やらが乱雑に散らばっている空間だった。最初に目に入った場所とは大違いの汚さだ。

「片付けをすればいいんですか？」

その周りには使用した器具や汚れた布などが積み上がっていた。

取り敢えず合間にそこに置いたという感じだ。要するに治療を優先するあまりに片付けの方が追いつかなかったということなのだろう。それだけ昨日は大変であったということなのか。修羅場の名残りというようなものに見えた。

それにしても、その箇所だけは、医療関係者にあるまじき汚さだった。道具類は放っておいたら大変なことになる。使ったら昨日の内に全て洗浄を済ませて翌日に使えるようにすべきであるのに、それだけ昨日は忙しかったということなのだろうか。

「気が付いたら、そこだけそのままになってて」

弁明するようにスタースが頭を掻いていた。

「分かりました」

リョウは大きく息を吐きそうになるのを堪えて、取り敢えず、肩から斜めに掛けていた鞄を外し、外套を脱ぐと上着の袖を気合十分に腕まくりをした。

まず貴重な薬草類を所定の位置に戻す所から始めた。それから新しい布やら包帯やらを使い勝手がいいように然るべき場所に配置し直した。

そして、汚れた布やら使ったすり鉢やらの器具類を桶の中に入れるとリョウはスタースを振り返った。

「こちらは洗った方がいいんですよね？」

「ああ、そうだな」

それから簡単に水場となっている場所を教えてもらい、言われた道筋を頭の中に叩き入れてから、

「それでは、ちょっと洗ってきますね」

「ああ。済まない。頼んだよ」

尚も申し訳なさそうな顔をしている人の良い神官に気にすることはないと微笑んでから、洗い物の入った桶を手に、颯爽と救護班の天幕を後にしたのだった。

スタースから教えてもらった水場は、会場から西の方角に進路を取り、黄味がかった柔らかな乳白色をしている【アルセナール】の外壁がよく見える所にあった。目印となる細い石畳の道を辿ってゆくと建物の陰になった場所に小さな水場がひっそりと備えられていた。注意をしていないとうっかり通り過ぎてしまいそうな程の控え目さだった。

石で囲まれた小振りの囲いとそのすぐ脇には人の膝の高さ程の四角い石柱が設置され、そこに小振りの青い【注水石】と水が出る穴が開いた部分があった。石柱には溝が穿たれており、緩やかに斜めに走る注ぎ口から水が流れ出て、その下の囲い部分に溜まるようになっていた。囲いの部分には可動式の小さな堰があり、それを動かすことで中の水を排出する仕組みになっていた。

リョウは注水石に手を翳すと水を流した。そして囲いの部分にある堰を止め、ある程度水が溜まった所で桶の中のものを洗い始めた。真冬の水は冷たかった。指先がじんじんと痺れるようだ。薬草をすり下ろす時に使った乳鉢の中のこびりついたものを洗い流す。それから血や薬で汚れた布巾の類を濯いだ。

遠く切れ切れに会場の方から歓声が聞こえ始めていた。どうやら個人戦の試合が始まったようだ。

それにしても、この汚れものの量を見る限り、個人戦の方ではかなりの頻度で負傷者が出てきているようだ。団体戦の方は、リョウが観戦をした限りでは、誰も怪我らしい怪我を負ったものは見受けられなかった。

こちらの方は随分と趣が違うのだろうか。

不意にリョウの背中を冷たいものが走った。万が一、ユルスナールが怪我をしたら。そう考えると急に恐ろしくなったのだ。

だが、すぐに下らぬ想像を追いやるように目を閉じた。心配をしてもきりがない。それがここでのやり方なのだから。自分が出来ることとしては昨日と同じように怪我をせずに男が無事試合を終えら

れるようにと祈るくらいだろう。そう考えると益々あのリボンを渡さない訳にはいかなかった。

リョウはそっと上着のポケットの中に忍ばせている黒いリボンを服の上からその感触を確かめるように触れた。今朝方目が覚めて、寝台のすぐ脇に置いていたこのリボンに祈るような気持ちで願いを込めた。少しでもあの男の助けになるように。厄除けになるようにと心を込めて祈ったのだ。

そして粗方洗い物を終えて、天幕の方へ戻ろうと立ち上がった時だった。

遥か後方からこちらに向かって石畳の上を歩いてくる人影があることに気が付いた。

この付近には薄く石畳が小道のように敷かれ、宮殿前広場に通じる場所と【アルセナール】一帯を結んでいるようだった。この水場はその小道からは少し離れた所にあったが、それでも大股で十歩も行けばぶつかるというようなすぐの距離である。小振りな建物と建物の間、ちょうど木陰になったぽっかりと空いた空間だった。

多くの見物客で賑わう広場とは打って変わって、こちらの【アルセナール】近い区域には人通りが全くなかった。この場所を教えてくれたスタースも水場の付近は滅多に人が立ち入らない場所なのだと話していた。だからこそ、ここでは宮殿の区画にありながらこのような洗い物が出来るのだと言っていた。

こちらにやって来るのは三人の男たちだった。

一人は防寒用にたっぷりとした襟無しの外套を羽織ってはいたが、その下に覗く簡素な丈の長い白の上着に同色のズボンを身に着けていることから神殿の神官であることが知れた。こういう時、神官たちの服装は一目瞭然だ。帯の色は濃い紫色だった。自分が知るレヌートのものよりももう一段濃い色のようだ。ということはかなり位

の高い人なのだろう。その直ぐ隣を歩く男は、貴族の男たちが身に着けているような膝上丈程の丈の長い上着にズボンを佩いて、その腰には剣を下げていた。上着は深緑色をしていた。その後ろから静かに歩みを進める男も色合いは濃い灰色で地味だが、似たような形の服に身を包んでいた。

リョウは、このまま直ぐに小道の方に戻るのではなく、その男たちの一団が通り過ぎるのを待ってからにしようと考えた。余り深い意味はなかったのだが、何となく背後に人の気配を感じるのは嫌だったからだ。

だが、すぐにその事を後悔することとなった。

リョウは小道の手前で顔を伏せて、男たちが取り過ぎるのを待った。だが、歩いていた男たちの足取りが少し離れた所で突然止まった。そこでどうしたのだろうとゆっくりと顔を上げた時、リョウの身体は突然鉛のように動かなくなった。

三人の男たちの視線がこちらに向いていた。その内の一人は、あからさまに驚いた顔を見せたが、次の瞬間には嘲るような高慢さえある笑みを浮かべて皮肉っぽく口の端を吊り上げた。

「これは。これは。こんな所でお前に会うとは」

あの時と変わらぬ剣呑さを隠そうともしない強い視線が、その特徴的な色彩と顔立ちを捕らえていた。

対するリョウも信じられない気分でその場に固まった。

何故この男がここにいるのだ――そう思いかけて、そう言えば、【エリセーエフスカヤ】で、食事中に乱入してきたこの男は、一室を去り際、ユルスナールに武芸大会の話を振っていたことを思い出した。

「お前までここに来ていたとはな。ルスランの腰巾着が。この間は随分と嘗めた真似をしてくれたものだ」

吐き捨てるようにして出された言葉を頭が理解するのを拒否していた。あの時の理不尽な怒りと恐怖が沸き上がりそうになって体中

がざわついた。何やら貶めるような酷い言葉を吐かれたとは思ったが、その実、それらはリョウの耳を素通りしていた。

その後も男は憎々しげに言葉を紡いでいたが、幸か不幸か、リョウの意識には到達していなかった。

「これも何かの巡り合わせか」

――――――まぁいい。

一頻り悪口(あっこう)を口にして気が済んだのか、男が不意に口を噤んだ。

リョウはじっと息を潜めるようにして立っていた。足が棒のように竦んで動かなかった。洗い終えたものを入れた桶を強く握り締めていた。

一際鋭く男がこちらを睨みつけた。あの時と同じ凍てついた瞳だった。

「小僧、ルスランに会ったら、精々首を洗って待っていろと伝えておけ」

男の高揚に共鳴をするようにかちゃりと腰に佩いた剣の柄の部分が鳴った。

「おや、こちらはボストークニ殿のお知り合いですかな?」

男の隣を歩いていた神官が、ぎょろりとした魚のような大きな目を糸のように細めた。

どこか執拗な視線にリョウの全身は鳥肌が立ちそうになった。舐めるような不躾な視線だった。高位であることを示す濃い紫色をした男の帯が小さく視界の隅で揺れた。

神官は、恐ろしく背の高い男だった。ひょろりとした枯れ枝のような体つきがそれを助長させているようにも見えた。

隣からの問い掛けに貴族風の男は不服そうに鼻を鳴らした。

「知り合いという程でもない。あの男の所の者だ」

「ほほう、ということは第七の?」

あの男――それだけで話は通じたらしかった。

「ああ」

「そうでございましたか」
神官は何やら思案するように頷いて見せた後、不意にリョウの方を見た。
「それにしても見事なお色ですなぁ」
男の視線が自分の頭部に注がれている気がした。
まるで舌なめずりをするようにその目を細められて、リョウは無意識にあとじさっていた。
これ以上、この場に長居はしたくなかった。
「オレはこれで失礼します」
リョウは、そう言って桶を抱え直すと、その場から逃げるようにして天幕へと戻るべく小道を宮殿広場の方へ向けて駆け出したのだった。

リョウは足早に歩きながら（走らなかったのはなけなしの意地（プライド）だ）、先程の男たちの事を思い出していた。
あれはレオニード・ボストークニ。二か月ほど前に滞在していた【プラミィーシュレ】で散々な目に遭う原因となった男だった。
王都は広い。何もこのような場で鉢合わせしなくともいいだろうに。何の因果であろうか。
あの時の極度の緊張と怖さを思い出してか身体が震えそうになった。あの男の直ぐ後ろに静かに控えていたのはあの時の従者であった。
それにあの隣にいた神官の男。あのぎょろりとした魚のような大きな目が爛々と怪しい光を湛えてやけに不気味に見えた。
神殿に仕えている神官たちの中で、あのような得体の知れないいかがわしさのようなものを醸し出している男がいることにリョウは少なからず衝撃を受けていた。自分がこれまでに相対したレヌートを始めとする神官たちは、皆、どこか高潔で浮世離れした感のある穏やかな空気を持っていたからだ。
あの男から注がれた不躾な視線を思い出してリョウの身体は震え

た。

それにしても、ブコバルによればあの昔からユルスナールを敵対視しているというレオニードという男も武芸大会に出場しているのだろうか。格好を見る限り軍部の人間には思えなかった。ということは個人戦の方に出場をしているのかもしれない。そこでユルスナールと対戦することを待ち望んでいるのか。何やら不穏な空気を滲ませていた男にリョウの中で小さな不安のようなものが生まれていた。

「おや、逃げられてしまいましたな」

――――――残念ですな。

その言葉ほど感情が籠っているでもなく、いや、寧ろ、思わぬ掘り出し物に一人心躍らせるように神官のクルパーチンが言った。

その視線の先には、足早に遠ざかってゆく小さな背中とそこに揺れる黒い頭髪が見え隠れしていた。

「あの者は第七の兵士ですかな？」

「さあな。兵士というには若すぎるだろう」

「確かに。漸く見習いに入ったという位でしょうな」

「こんな所で顔を合わせることになるとはな」

二か月ほど前の屈辱を思い出すようにレオニードの歯がぎしりと鳴った。

腕利きと評判の鍛冶職人の男の弟子だと聞きつけて些か強引な手段ではあったが、あの少年と接触を持った時のことは今でも歯がみするほどに良く覚えていた。

頑固で偏屈だと有名な鍛冶屋へ口利きを頼んでもらう積りだった。だが、そこであの少年には散々にコケにされたのだ。鍛冶職人から剣の製作を断られた末での苦肉の策ではあったが、あの時は使えるものならば何でも使う積りでいた。それだけ切羽詰まっていたのだ。

そんな中、あの少年は自分の申し出を断ったばかりでなく、こちらを憐れむような目をして言ったのだ。侮蔑に似た寂しい目をして言ったのだ。

あの鍛冶屋は、決して自分の依頼を受けたりはしない。鍛冶職人たちは、己が命を懸けるべき相手を自らの目で選んでいる――要するに自分はそれに値しないのだと大胆にも言ってのけたのだ。

恐喝まがいのようなことまでして作られた剣に意味はないとまで言ったのだ。

思い出すだけでも腸が煮えくりかえりそうだった。これほどまでの侮辱があったであろうか。しかも相手はよりによって年端の行かぬ小童だったのだ。

自分は鍛冶職人を志す者ではないと言っておきながら、あの者の首には良い剣を作る時に使う【キコウ石】がお守りのようにぶら下がっていた。そして、あの者が身に付けていた二本の短剣は、あの街でも有数の鍛冶職人が作った代物だった。それだけのものを備えておきながら、あの少年は自分は鍛冶屋とは関係がないと嘯いたのだ。

ならば、最終手段としてあの者を使って鍛冶職人にちょっとした提案を行おうと思っていた矢先、忌々しいことに【ツェントル】の邪魔が入り、ふてぶてしいあの男の仲間があの少年を連れて行ってしまった。

そして、再び、口利きの依頼の為に訪れた【エリセーエフスカヤ】では、何とあの男の傍に似たような色彩と顔立ちの【女】が居たのだ。あの時、レオニードはかなり酒を過ごしていたので、しかと確かめることが出来なかったのだが、あれはあの時の小僧のようにも思えた。しかも驚くべきことに【女】の格好をしていた。

この際、男だろうが女だろうがどちらでも良かった。レオニードにしてみれば、あの少年があの男に繋がるものである――それだけで十分だった。

鍛冶職人への口利きを断っただけでなく、人を散々愚弄したあの黒髪の小僧が、あの男とも親しげにしていた。これ以上の忌々しい偶然があるだろうか。

だが、それと同時に、レオニードはこれを好機（チャンス）とも捉えた。ずっとあの男に一杯喰わせなくては気が済まなかった。これまで世話になったことへの礼を込めてだ。

元々依頼をしようと考えていた鍛冶職人の男には結局険もほろろに突っぱねられたが、【プラミィーシュレ】滞在が徒労に終わった訳では無かった。運良く、街の有力者である男に他の優秀だと評判の鍛冶職人を紹介してもらい、その鍛冶屋が誂えたという剣の中からこれだと思う一振りを選んだのだ。

その時の一本が、今、レオニードの左側のベルトにぶら下がっていた。

もうすぐだ。もうすぐ。あの男と剣を交える時がやって来る。この時をどんなにか待ったことか。昨年の雪辱を果たすべく、日夜、剣の技を磨いてきたのだ。全てはあの男に己が目の前で膝をつかせる為に。あの澄ました顔に泥を塗りつける為に。

胸内に渦巻く高揚感に男の手が震えそうになった。それをギュッと拳を握り締めることで流していた。

「あの若者は第七の手の者なのですな？」

再び確認をするように神官の男が口にした。

「ああ。恐らくな」

兵士であるかは判別が付かなかったが、あの男と繋がりがあることに違いはなかった。

「そうでございますか。ヒッヒ」

枯れ枝のような細い男が、何やら愉快そうにそのぎょろりとした大きな目を細めていた。返す返すも生臭い匂いのする男だった。

「それでは序でと申しては何でございますが、面白い余興をご用意

いたしましょう」
「ほう？　貴殿の口から余興というのも珍しいことだな」
神官にはあるまじき俗物的なもの言いにレオニードが興味を惹かれたようにその目を細めた。
「それだけ言うのであれば楽しめるのだろうな」
「ええ。それはもう勿論でございますとも。ボストークニ様にとっては特にお楽しみいただけるものになるかと。ヒッヒ」
神官の男が含み笑いをする度にその喉笛がひゅうひゅうと鳴った。
――――――それで、相談と言ってはなんですが。
クルパーチンはそう言って、レオニードの耳元に顔を寄せるとその耳元でなにやら囁きを吹き込んだ。
淡々としていたレオニードの表情が、一瞬の驚きの後ゆっくりと変化し、悪どい感の笑みがその口元に浮かんだ。そこには、どこか満足そうな愉悦を湛えた表情が浮かび上がった。
「ハッ、それはいい。さぞかし見物だろうな」
「ええ。それはもちろん。皆さんをあっと言わすことになりますでしょうな。ひっひ」
計画の成功を思い描いてか、恍惚に似た表情を浮かべた神官をレオニードはややさげずむような高慢さで流し見た。
「それにしても神官である貴殿が時としてかように悪どいことを思いつくものとはな」
それはレオニードなりの厭味のようなものであったのだろうが、神官は別段気にした様子もなく続けた。
「ヒッヒ。それ程でもございません。我らは崇高なる使命の為に日夜研鑽に励んでおりますからな」
その台詞は余りにも不釣り合いで白々しいとは思ったが、レオニードはさして気に留めずに小さく笑った。
「まぁ、いいだろう。そちらはそちらで好きにすればいい」
そう言って片手を一振りして見せた男に、
「ありがとうございます」

神官は小さく満足げに笑みを浮かべたのだった。

絡み合う糸（後書き）

なにやら不穏な動きが再び出てまいりました。複雑に絡み合う糸。水面下の策略。次回に続きます。

救護班の天幕にて

さて、一方、急ぎ救護班の天幕に戻ったリョウは、中にいたスタースに声を掛けると何事もなかったように洗ったものの片付けを始めた。

スタースは、中で怪我人の治療をしているようだった。対面の長椅子に腰を下ろしていた男が包帯を巻き終えた左腕を外套の中にしまう。

ふとそちらを見て、その男の顔にリョウは見覚えがあることに気が付いた。街中の治療院の界隈で共にいざこざに巻き込まれて――元はと言えば、その男のとばっちりを食ったのだが――怪我をした所を手当てするようにと治療院の中に招き入れた相手――縮れた鈍色（にびいろ）の髪に尖った鼻と顎をもつ鋭角（シャープ）な印象を与える男だった。

リョウは、男の顔を認識すると血相を変えて歩み寄った。

リョウがあの時、男と共に負った怪我は、刃先に傷口を塞がり難くするという毒の成分が塗り込められていた刃物によるものだった。それを知らずに適切な処置が遅れた為、中々に面倒なことになって快方が遅れてしまったのだ。あの時、この男も同じように二の腕に怪我をしていた。相手は違う男だったが、それでもあの刃に同じように毒が仕込まれていたということも考えられた。こちらの男の方は大丈夫だったのだろうか。

「あの、この間の傷は大事ありませんでしたか？　その後、傷口が塞がり難くなることはありませんでしたか？」

いきなり顔色を変えて捲し立てたリョウに灰色の髪をした壮年の男は、その特徴的な縮れ髪を揺らして低く否定の言葉を吐いた。

「いや、問題はない」

「そうですか」

その言葉を聞いて少し安堵した。

「どうかしたのか？」
鼻先で男は一人怪訝そうな顔をしたが、
「いえ。なんでもありません」
リョウは、こちらの思い過ごしであったから気にするなと首を振っていた。刃に塗られた毒のことを告げるのはどうしても躊躇われてしまった。
それから話を変えるべく男の方を見下ろした。
「あの、もしかして、大会に参加なさっているのですか？」
街中で会った男が、このような場所にいる理由が他に思い当たらずに首を傾げた。天幕の外で見掛けたのならば観戦に来たのだろうと思ったのであろうが、よりによって天幕の中だった。
「ああ」
言葉少なに男が答えた。
「そうですか。ということは、今日もこれから試合に？」
「ああ」
ということは、あの掲示板の中に男が持つ番号札の数字があるということなのだろう。昨日の試合に勝ち残っているということだ。
それは驚嘆すべきことに思えた。
リョウの思ったことを肯定するように、
「イースクラさんは凄いですよ。予選からここまで残るんですから」
いつの間に知り合いになったのか、親しげに男の名前を呼びながら、飲み薬となる薬草をすり下ろしつつ、スタースが感心したように言った。
「上位十名までに入れるといいですね」
「そうだな」
治療を施したまだ年若い神官の邪気の無い笑みに男は言葉少なに返した。
その後、服用する為の薬を受け取り、謝意を口にしてからその恐ろしく無口な男は天幕を去って行った。

リョウは去ってゆく男の背中を見ながら、不意に疑問に思ったことを口にしていた。
「十位までに入ると何かあるんですか？」
「ああ。リョウは知らなかったか」
そう言うと手を動かしながら、スタースがその理由を教えてくれた。
神官は、序でにリョウを傍らに座らせて、他の飲み薬を作る為の調合を手伝うように依頼した。傷口が早く塞がるようにする為の薬草である乾燥させた【レザーニエ】を箱の中から取り出すとその隣で同じようにすり鉢で磨り潰し始めた。
スタースの話によると個人戦の上位十名までには大会を主催した軍部から報奨金が与えられるとのことだった。そして、その個人が軍部への入団を希望すれば、実技試験を抜きにしてその個人の資質を鑑みた後、優先的に登用されるとのことだった。諸国を渡り歩く傭兵たちの中には、この報奨金目当ての参加者も少なくないのだとか。その金額の程は明らかになってはいないが、優勝者には、それこそ一般庶民には一生掛かっても手にすることが出来ないような金額が与えられるのだとか。なので十位でもその金額は、かなりの額になるらしいとのことだった。
「そうなんですか」
一攫千金を狙って剣を交える男たち。その出場理由は、人によって様々であろう。
ユルスナールは何を思ってこの大会に出場しているのだろうか。名誉の為か、己が実力を試す為か。高潔な男の潔い背中を思い出しながら、リョウはふとそんなことを考えた。
それから暫くは、細々とした雑用を天幕の中で行うことになった。薬草を磨り潰したり、水を汲みに行ったり、汚れものを洗いに行ったり、治療をするスタースの邪魔にならないようにと天幕の後方の奥まった所に控えていた。

試合への参加者が随分と絞り込まれているので怪我を負う出場者の絶対数は少ないようだったが、その代り昨日の時点で救護班の世話になった男たちが、この場所を訪れていたので、それなりに忙しかった。

水場が離れている分、水汲みには何度も往復をしなければならなかった。水の入った桶を運ぶのは中々に重労働で大変だった。元々、腕力には自信がないということもある。直ぐにへばったリョウを見て、年若い少年だと疑っていないスタースには、『だらしないなぁ』と笑われてしまった。その姿は（恐らく、へっぴり腰だったのだろう）、余りにも情けなかったようで、天幕の中にいた他の軍医や術師たちにも笑われてしまった。リョウは、誤魔化すように愛想笑いを浮かべるしかなかった。

こうして暫くは、和やかな空気の中で過ごしていたのだが、

「怪我人だ！」

飛び込んできた兵士の形相に天幕の中に緊張が走った。

中にいた軍医たちは、すぐさま顔付きを改めた。

そして担架に乗せられて運び込まれた男の状態を見て、リョウは顔色を失くした。男の脚（左側の太ももの部分だ）からは大量の血が流れ出ているようで、男が身に着けているズボンが真っ赤に染まっていた。

アッカを拾った時の光景がリョウの目の前に重なった。

「こちらへ！　早く！」

「大量に出血している。止血を！」

「はい！」

「うあぁぁぁぁ……」

軍医や術師たちの緊迫した鋭い声の合間に激痛に顔を歪める男の呻き声が混じった。

リョウは、すぐさま自分の鞄を置いていた場所に戻るとその中から即効性の痛み止めが入った小さな瓶を取り出した。それは、まだ

森の小屋にいた時に、ガルーシャの書斎の中にあった学術書の中からこれはと思うものを選び出して、森で集めた薬草を調合して作ったものだった。主成分には、森に薬草採集に行った時に本当に偶然にして見つけた【ジョールティ・チョールト（黄色い悪魔）】が入っていた。

黄色い可憐な花を咲かせるその薬草は、人体にとっては毒性の強いとされる毒草の一種で、その花の花弁数枚で人一人を死に至らしめることが出来るという恐ろしい代物でもあった。人がそれを口に入れるとまるで眠るように死んでゆくというのが専らの噂だった。証拠が残らない為に毒殺、暗殺に使われるのはもってこいとされている曰くつきの毒草でもあった。

だが、この毒草も用い方によっては薬になり得たのだ。これをほんの数量――この匙加減がかなり肝要になる訳だが――他の薬草と一緒に混ぜて使うと麻酔代りや痛み止めになった。人体の感覚を一時的に鈍くさせるのだ。その配合量が難しく、少しでも【ジョールティ・チョールト】を入れ過ぎてしまうと昏睡状態になったり、そのまま死にいたる場合もあると本の中には、書かれていた。とある頁には、ガルーシャの導き出した配合がメモ書きのように残されていて、それを見つけた時に試みに作ってみたのだ。アッカの時は、良く効く痛み止めを作ることが出来ずに最初の段階でかなり苦しませてしまったので、その時の反省点を色々と踏まえた積りでもあった。

これは試作段階のもので、実際に使ったことはない。自分で試した時は怪我をしてはいなかったので、その効果の程が良く分からなかった。精々、一時的に感覚が鈍くなるというのを確かめるくらいだった。

リョウは小さな瓶を手に取ると低い戸板の上に横たわる男の元に歩み寄った。

軍医が慣れた様子で男のズボンを切り裂いてから傷の状態を改め始めた。男の顔には苦悶の表情が浮かび、額には脂汗が滲んでいた。そのような中でもなるべく声を上げないようにしているのが見てと

れて、リョウは苦しくなった。
「失礼します。痛み止めを少し使ってもよろしいですか？」
傍にいた軍医に許可を貰うべく声を掛けた。
「痛み止め？」
こちらを目線だけで振り返った軍医に簡単な成分と効用を説明した。
「はい。少しだけ痛みを感じる感覚を鈍くさせるものです。感覚を麻痺させるといいますか。その方が、多分楽になると思うので」
「それは助かる」
軍医が頷いたのを見て取って、リョウは男の鼻先に小瓶を近づけるとその蓋を開けた。
「少し吸い込んでください」
手を宛がって風を送るようにすると周囲に何とも言えない強烈な匂いが漏れた。これは薬草の苦みを抽出して後から付けたものだった。
厄介なことに【ジョールティ・チョールト】は、無味・無臭の為、その成分を摂取する時の加減が難しいのだ。余り吸い込み過ぎると意識を失う可能性もあるので、苦肉の策として編み出したのが、この苦い匂いを付けるということだった。これならば吸い過ぎるということにはならないだろうと思ってのことだった。
それにしても強烈だ。森の小屋でこの作業をしているときは、セレブロも一緒に薬草採りに行った狼のアラムやサハーたちも決して近づいてこなかったのは記憶に新しい。まだまだ試作段階であったので、この匂いはもう少し調整をしなくてはと思っていた所でもあった。
周りにいた男たちが、一斉に顔を顰めてむせたのが分かった。
「すみません。まだ試作段階で、匂いの調整が終わっていなくて」
だが、吸い込んだ瞬間小さな呻き声を発したものの、怪我負った男の息が少しづつ落ち着いたものになっていた。
「痛みはどうですか？」

「ああ、大分楽になってきた」
「少し痛みが残るくらいの方がいいと思いますので、この辺にしておきますね」
そう言ってからリョウは小瓶を仕舞った。
痛覚は人間の防衛機能の一つであるから、身体からの信号を見逃さない為にも、少し痛みが残るくらいの所で止めてほいた方がいいだろうと考えた。
その間、傷口を簡単に洗い、術師の男が調合した薬を軟膏と混ぜ、油紙に塗り、それを男の開いた傷口に張り付けた。術師の男が使ったものは、止血と傷口の癒着を促す薬草に化膿止めを混ぜたものだろう。男の体が痛みに跳ねたが、そこをすかさず軍医がきつく包帯を巻いていった。
一先ず止血をすることが最優先事項だった。男の脚を抑えてくれと言われて、リョウも足元の方に回ると加勢した。
一通り、包帯を巻き終えた後、軍医が促すように神官であるスタースを見た。
「後は頼む」
この段階で【祈祷治癒】の処置を行えば、一時的に人の持つ自然治癒の力を高めることで傷口が塞がりやすくなるということだった。こちらでは、刃物による傷でも縫合を行うことはないようだった。その代わりにあるのが術師の使う【施術】だった。
「リョウ」
軍医からの視線を受けて、スタースはリョウに振った。
「やってごらん」
「ワタシが……ですか？」
吃驚して顔を上げたリョウにスタースが穏やかに微笑んだ。
「ああ。大丈夫。キミの能力はザガーシュビリ殿のお墨付きだから」
誠実さえある静かな眼差しで言われて、
「分かりました」
リョウは小さく頷くと男が怪我を負った左脚の方へ行った。そし

て、跪くと血が滲み出し始めている箇所にそっと掌で触れた。微かな刺激の為にか男の脚がぴくりと動いた。

リョウは目を閉じると意識を集中させる為に小さく息を吐きだした。そして、緩く息を吸い込むと男の怪我の回復を願いながら呪いの文言を紡ぎ始めた。

【我　古の約定に従い母なる大地の名の下に希う　そが力の源巡りて元の流れに還らんことを　古きには再生を　新しきには更なるしなやかさを】

――――――――【ゴースパジ、パミルーィ。ウマリャーユー】

掌の下がじんわりと熱を帯びてくるのが感じ取れた。温かい。いや、ともすれば熱い位だ。

「……はぁぁぁ」

横たわった男が、大きく息を吐いたのだ分かった。

ゆっくりと閉じていた目を開くと、リョウは怪我を負った男に微笑みかけた。

「これで少し様子を見ましょう」

あとは男の体力次第だった。

男は、小さく頷いてから目を閉じた。

「お疲れさま。ありがとう」

スタースから肩を軽く叩かれて、リョウはそこで漸く全身の力を抜いた。

薬草の成分が効き始めているのか、男は目を閉じたまま、ゆっくりと長い息を吐き出し始めた。呼気に熱が籠っているように思えた。

リョウは再び男の頭の方へ移動すると、冷たい水で濡らした布巾で男の顔から首筋を拭い始めた。埃と痛みで出た脂汗を綺麗にしてゆく。水の冷たさが心地よいのか、男の息が緩くなった気がした。

粗方、最初の処置が終わり、専任で様子を診ることになった軍医が背筋を伸ばして、今後の処置の指示を部下に出していた。

「気分は大丈夫ですか？　どこか気持ち悪いところはありませんか

？」

男の汗を拭いながら、小さく囁くようにして声を掛けた。

「ああ。大丈夫だ。すまんが、水を貰えないか？」

「はい」

リョウは立ち上がると飲料用に汲んでいた小さな水がめから木製のカップに水を注ぎ、男の口元に持って行った。横になった男が少し上体を持ち上げるのをどうにかして手伝った。

逞しいがっしりとした身体つきの男だった。服越しに触れる肌はとても硬い。男の身体は、激しい戦いの為にか、とても火照っていた。しっとりと汗ばんだ肌が、身に付けたシャツ越しに伝わって来ていた。

「寒くはありませんか？」

「ああ。大丈夫だ。今は体中がかっかして暑いくらいだ」

男から漏れた小さいながらも力のある言葉にリョウは少しほっとした。身体が熱いというのは薬草の成分が効き始めている証拠だった。だが、念の為に厚みのある大きな布を取りに行った。今は身体が火照って熱く感じるかもしれないが、やがて体の全機能が怪我を負った箇所を治そうとする方向へ働く為、患部以外の場所が冷えてくる筈だった。それに今は冬場なので、ただこの天幕内で横になっているだけでも冷えてくるに違いない。

そうして男の身体に大きな布を掛けている時だった。

天幕の外で高らかに鐘の音が鳴り響いた。それは、昨日の開会式の時に鳴り響いたのと同じ、兵士たちが手で振り鳴らす小振りの鐘の音だった。

その合図にリョウはハッと顔を上げた。

「すみません、スタースさん。ちょっと外に出てもいいですか？」

事前にユルスナールに聞いていたのだが、一旦、一桁台に選手たちが絞り込まれた後、昨年の上位者を含めた人数で再び対戦を決めるくじ引きを行う為に集合を促す時の合図として鐘が鳴ると言って

いたのだ。
「すみません。また直ぐに戻ってきますから」
戸板に毛が生えたような臨時の寝台に横たわる男に声を掛ける。
男が小さく頷いたのを見て取ってから、リョウは慌てて天幕の外に飛び出した。そしてユルスナールがいると思われる選手たちの控えの天幕へと走った。
その時、リョウは急がなくてはと気が動転していた所為か、自分がどんな格好になっているのかを良く理解していなかった。

走って行くと、ちょうど掲示板の前の所に出場者たちが集まり始めていた。
ユルスナールはどこにいるのだろう。特徴的な銀色の頭部を探す。そして、ちょうど天幕の方から出てくる男の姿を捕らえた。
良かった。間にあった。
「ルスラン！」
リョウは、勢いを殺すことなく駆けて行って、あわや衝突という手前で急に速度を緩めた。
ぶつかりそうになった身体は、ユルスナールから伸びた二本の腕で支えられていた。
リョウの姿を一目見て、ユルスナールの瑠璃色の瞳がこれでもかという位に見開かれた。
「リョウ、なんだそのザマは！　どこか怪我でもしているのか？」
驚くほどの速さで改めるように体中を男の手が辿った。リョウは、その時になって初めて自分の格好をまざまざと認識することになった。
「あ……」
先程の怪我を負った男の治療の際に飛び散ったのだろう。乾いて黒くなった血の染みが点々とあちらこちらに付いていた。特に腕を捲り上げたシャツの折り返しの部分とズボンの太ももの所には大きな染みが付いて赤黒くなっていた。上着は柿渋色（カーキ）をしていたので余

り目立たなかったが、ズボンの方は薄い生成り色（ベージュ）だったので、鮮血の空気に触れてくすんだ色が、大きな花びらのように歪に滲んでいた。

リョウは慌てて何ともないのだと言った。

「これは、返り血で、ワタシのものではありません。救護班の天幕にいたので」

顔見知りの神官に手伝いをお願いされて天幕の方にいた時に、怪我人が運び込まれてきたのでその治療を手伝っていたのだと言えば、ユルスナールはあからさまに安堵の息を吐いた。

「そうか」

「すみません。驚かせてしまいましたね」

「ああ。驚いた。だが、お前に怪我が無くて良かった」

――――――この間みたいなのは御免だ。

そう言って微かに頬を緩めた男にリョウは恐縮しながらも微笑み返していた。

「ああ、そうだ」

そこで漸くリョウは駆けてきた当初の目的を思い出した。

「忘れられたかと思ったぞ」

ポケットを漁り始めたリョウにユルスナールが軽口を叩いた。ユルスナールの方は、天幕の方で今か今かとリョウがやって来るのを待っていたようだ。

「すみません。もう少しで忘れる所でした」

怪我をした男のことで、リボンのことは頭の中にちゃんとあったのだが、その時間感覚までは覚束なかった。あの鐘が鳴っていなかったら思うと冷や冷やする。

本当のことを口にすれば、ユルスナールは少しだけ拗ねたような顔をした。小さく口の端が下がっている。

「冗談ですよ」

男の子供染みた態度を軽く笑い飛ばして、

「ルスラン。腕を出して下さい」
リョウは懐から昨日と同じ黒いリボンを取り出すと、ほんの少しだけ不服そうな顔をしながらも言われるままに腕を差し出した男の上腕部分にそれを巻き付けた。
「どうか怪我をしませんように。御武運をお祈り申し上げます」
器用に結び目を作ってから、昨日と同じようにその端に口付けを落とした。
リョウの頭の中には、先程の怪我を負った男のことがあった。どんな立ち会いだったのかは分からないが、男の左側の太もも部分は大きく刃物で切り裂かれていた。
どうかユルスナールは無事試合を終えられますように。リボンに触れた指は微かに震えていたが、膨れ上がりそうになる不安を心の内側にぎゅっと押し留めた。
「ありがとう」
機嫌を直して笑みを浮かべたユルスナールにリョウも微笑み返していた。

そうこうするうちに、
「おーい、ルスラン！」
掲示板の方に集まっている出場者たちの中から、大会運営に回っていると思しき兵士から声が掛かった。
『今行く』と合図を送るように片手を小さく振って、そのまま踵を返したユルスナールの後ろをリョウも同じように付いて行こうと思ったのだが、あの集団の中にいる一人の男の存在に脚が竦んでしまった。
こちらに鋭い視線を投げているのは、先程の水場で鉢合わせをしたレオニードだった。
男たちの間に一体どんな確執があるかは良く分からなかった。だが、少なくとも【プラミーシュレ】での出会いが、その間を余計に拗らせてしまっていることには気が付かざるを得なかった。それも

全て元をただせば、レオニードの勝手な思い込みというか、見当違いな逆恨みのようなものなのだろうが、周りがそう思っても本人がそれを真実だと思っている以上、どうしようもできないものなのだ。

なんて面倒な男だろう。かつてブコバルがあの男のことをそう評したように、リョウは思わずげんなりとしたのだが、その憎悪と悪意の矛先が向かうユルスナールと自分にしてみれば、それを冗談として笑い飛ばすことなど出来ようはずがなかった。

リョウはただただ、この大会が無事に終わってくれることを祈るしかなかった。

そして、リョウは少し離れた所から、他に掲示板の周りに集まった野次馬たちの中に遠巻きに紛れるようにして、朗々と読み上げられてゆく対戦者の番号と試合会場のくじ引き結果に聞き耳を立てたのだった。

ちょうどその時に、掲示板の前に集まった男たちの中に、リョウはヤステルの茶色い頭部に引き続き、リヒターの横顔とバリースのひょこひょことせわしなく動く頭部を発見した。そして、彼らに声を掛けるべくそちらに足を進めたのだった。

救護班の天幕にて（後書き）

なんとかユルスナールにリボンを渡すことができました。ちょっとあっさり流し過ぎたかもしれません。それでは次回に続きます。ありがとうございました。

とある男の執念

暫し休憩を挟んで、午後から個人戦の試合が行われることになった。

昨日から続く激戦を勝ち抜いたのは、七名の男たちだった。そこに今年も引き続き参加をすることになった去年の個人戦上位者八名を合わせた総勢十五名での戦いとなった。残っている番号札は、１６、４３、６９、１１５、１７３、２０１、２３２の七名分と昨年の上位八名には、個人の名前が記された木札が用意され、前者七名の番号札と一緒に抽選の木箱の中に混ぜて入れられた。そこで大会運営の兵士が、木箱の中に入っている木札を順に引いて行き、対戦をすることになる番号、若しくは参加者の個人名を呼び上げることになった。そして、その結果を掲示板の所に控えている書記係の兵士が、大きく張り出された真っ白な布の上に手書きで記して行った。上段の方が第一会場、そして下段の方が第二会場で行われる試合のようだ。

この対戦者の発表もある種の名物のようで、掲示板の周りに集まった多くの観客たちは、対戦者の名前や識別番号が呼び上げられる度に意味があるようなないようなどよめきの声を上げていた。そして、掲示板の前に集う出場者たちの錚々たる顔ぶれを遠巻きに眺めながら、誰が勝つとか負けるとか、誰を応援しているとか、誰が一押しだとか、そういう類の予想をそれこそ唾を飛ばしながら熱く語り合っていた。

リョウは、ヤステル、リヒター、バリースの三人に合流して、発表される対戦者の組み合わせの行方を追っていた。最初、リョウの姿を見た三人は、皆一様に仰天したが、治療の時の怪我人の血がうっかり付いてしまったことを説明すれば、それで納得し、胸を撫で下ろしたようだった。

「あ～、そういや、アレはちょっと凄かったよな」
先程の男たちの試合を観ていたのだろう。ヤステルが嫌なものを思い出すように顔を顰めていた。
「アレは酷かったよね」
「確かに。アレはないよなぁ」
その隣でリヒターとバリースの二人も後味が悪そうな顔をして見せた。
「その人は大丈夫だった？」
心配そうにリョウの方を振り返ったリヒターに、
「ああ。ちょっと傷口は深かったけど、多分、大丈夫じゃないかな。止血は上手くいったし。あの中には立派な軍医も詰めているし、神官や街の術師も揃っているから」
リョウは天幕での様子を少しだけ話した。
その時の怪我を負わせることになった相手の対戦者は、あの中に残っているのだろうか。話の流れからそんなことを思って三人に話を振れば、三人は思わず顔を見交わせた後、声を一段と低くした。
「あんまりこんなこと言いたかないけどさ」
口火を切ったヤステルは、そう前置きをしてから、ちょいちょいと指先でリョウに顔を寄せるように促した。そして、少し躊躇うように喉を鳴らしてから、近づいた頭一つ分は低い耳元に小さな囁きを吹き込んだ。
「ほら、あの中にいる左側から、えーと、ひいふうみい……と五番目の後ろの方にいるヤツ。どうもいい所のお貴族様らしくってさ。鼻持ちならない感じなんだよな。居丈高っての？　近くで見てた兵士の人たちなんか、あれは絶対態とだなんて言ってたし。剣の腕は立つらしいんだけどあれじゃぁなぁ。胸糞わりい」
ヤステルの言葉通り集まった剣士たちを目で追って、その該当者と思われる人物を認識し、リョウは思わず眉を顰めて直ぐさま視線を逸らした。
そんなことがあるだろうか。リョウは思わず口元に手を宛がって

いた。
それから、ヤステルの言葉は耳を素通りしていって頭の中に入ってこなかった。
何故なら、そこにいたのはあのレオニードであったから。
相手をねじ伏せる為であれば手段を選ばない。【プラミィーシュレ】での苦い個人的な経験を思い出さずにはいられなかった。あの時、もしかしなくとも一歩間違えば、自分は無傷では済まなかったということに今更ながらに思い至ったのだ。あの男の言った通り腕を一本失うことになったかもしれなかった。いや、若しくは最悪の場合、殺されていた可能性もあったのだ。そこまで考えてリョウはぞっとした。
「リョウ？　平気かい？」
急に顔を青くしたリョウにリヒターが心配そうに声を掛けた。
「あ、ああ。大丈夫」
急遽、悪夢から呼び覚まされるようにしてリョウは我に返ると何でもないと笑った。だが、その笑みは、周囲の三人の友人たちから見ても、どこかぎこちなさの残るものだった。

「……ユルスナール・シビリークス……次に……」
その時、不意にユルスナールの名前が対戦を発表する兵士から呼び上げられて、リョウはすぐさま掲示板の方に意識を戻し、注目した。
ユルスナールの相手となるのは前年の上位入賞者の男だった。同じように名前が呼び上げられていたからだ。最初に当たるのが、あのレオニードでなかったことにリョウは内心、安堵の息を吐いていた。
抽選の結果、ユルスナールの試合は、第二会場の第四戦目、この回最後の試合になった。
掲示板の前に居並ぶ男たちの顔触れを良く良く見渡せば、何とイ

ースクラと呼ばれていたあの灰色の縮れ髪の男の姿もあった。試合開始当初の三十余名からよくぞここまで残ったものだ。軍部に所属をしている訳でもない傭兵のような風体の、周りの参加者たちに比べても些か年を重ねていると思われるあの男が、何を目指しているのか、何を望んでこの大会に出場しているのかは、分からなかったが、出来る限り頑張って欲しい。掠るような出会いでしかなかったが、あの男に対してリョウはそんなことを思った。

何故か、あの恐ろしく無口な壮年の男に妙な親近感に近いものを抱き始めていた。

それから、リョウは一旦、天幕の方に戻り、スタースに断りを入れてから観戦に出掛けることにした。その時に時間があれば、衣服にこびりついた血糊を拭っておこうと思った。流石に自分のものではないとはいえ、べったりと血液の付いた服のままでうろうろする訳にもいかないだろう。あらぬ誤解を生むかも知れないし、擦れ違う人々にぎょっとした顔をされるからだ。あの運び込まれた男の容体も気に掛かったが、ユルスナールの試合だけは大目に見てもらえないだろうかと密かに希望的観測を試みたのであった。

＊＊＊＊＊＊＊

沸き立つ歓声の中、男は静かに対戦者として対峙する相手を見据えた。相手は、軍部の兵士だった。男よりも一回り、いやともすれば二回りは若いかも知れない。この国の兵士であることを表わす平時の軍服にその右腕にはその者の所属を表わす水色の腕章を巻いていた。そして、その左腕には目にも鮮やかな明るい黄色のリボンが吹き込む風に揺らいでいた。

個人戦二日目、昨年の上位入賞者を交えての組み合わせ抽選後の

初戦を迎えていた。
　ここでこの若者に勝てば、男の上位十位内入賞は確定する。若かりし頃に比べて反射神経も俊敏さも落ちた肉体に鞭を打って、漸くここまで漕ぎ着けた。正直な所、男自身このような所まで勝ち進めるとは思ってもいなかった。ここまで順調にという訳でもなかったが、勝ちを重ねることが出来たことに男自身が一番驚いていた。これも己が執念のなせる業なのだろう。

　約二年前、この国の西域の辺境にある小さな寒村を起点として始まった男の旅は、ここに来て一つの転機を迎えようとしていた。行方知れずになった娘と息子、二人の双子の消息を尋ねてとうとうこの国の中心である王都にまでやってきた。そして、この場所で手掛かりとなる情報を手にすることが出来たのだ。それはふらりと寄った安い場末の酒場で耳にした噂だった。
　二つ前の春に、王都にある神殿では先読みの儀式が行われ、その時に何でも黒い色彩をその身に持つ人たちを集めていたという話だった。その頃には実(まこと)しやかに大々的なお触れが出て、黒髪、黒い瞳、黒い肌、そのほか黒い鉱石でもいい、【黒】という色彩に特化したものを神殿が集めているという内容だった。何でも儀式を行う際の重要な学術的研究の一環として【黒】という色に拘りがあったようで、協力を申し出てくれた人々には相応の謝礼をするというようなことが言われていたのだとか。その甘い誘いに乗った、若しくは乗せられた輩がいたのだとかいないのだとか。
　元々この国の純粋な血統としては黒という色彩を髪や瞳に持つ者はいなかった。西に位置する隣国であるキルメクの民の血を引くものならば違ったのかもしれないが、国内ではそう簡単に見つかる訳でもなかったらしい。一時は謝礼欲しさに、態と子供に髪を黒く染めさせたり、かどわかしのような事件も起こったのだとか。
　どうやってあの西の果ての小さな寒村から双子がこの王都にまでやってきたのか、その足取りを追うことは出来なかった。だが、そ

の噂を耳にした時、確かめてみる価値があると男は判断した。そして、翌日から早々に噂の真偽を確かめるべく、男は聞き込みを開始した。

運良く、何代か前に西域の血が混じり、他に比べても黒に近い焦げ茶色の髪を持つという男から、当時の様子を聞くことが出来た。男は人よりも髪の色が非常に濃かったので、噂を聞いた後、試しに神殿に行ってみたのだという。そこで同じように謝礼金欲しさにか、神殿前に集まった人々を見掛けたということだった。そこで、男は真っ黒でうねる様な縮れ毛を高く結い上げた飴色の肌をした年若い女を見掛けたと話した。どうやら、その女性は男好みの美人であったらしい。尖った鼻を持つ気の強そうな女だった。だから、よく記憶に残っていたのだそうだ。そして、その隣には、体格の良い黒い瞳を持った若い男が並んでいた。こちらの男もその肌は良く日に焼けて浅黒かった。集まった人たちの中でもこの二人の色彩は見事であったようで、男はそれを見て自分には用事が無かろうとそのまま取って引き返したのだと話した。それが、約二年ほど前の春先のことだった。

身体的特徴から見ても、その男が見掛けたのはあの双子であろうと男は思った。そして、その後の足跡を辿ろうと儀式に関することを聞き回っているうちに、何ともおぞましい噂に行き当たったのだ。

それは、若い頃に神官をしていたという呑んだくれの老人の話だった。その昔、神官であった老人は戒律を破って酒に嵌り、そのままお役御免になったのだという。

その老人は、とある酒場のカウンターの片隅で震える手を誤魔化しつつグラスに薄く入れられた安酒をちびちび舐めるようにして楽しみながら――それが今や唯一の老人の楽しみらしかった――二年前に行われたという儀式について知りたいと言った男に、皺だらけになった目を細めながら無言のまま酒手を要求した。

そして、カウンターの店主にこの老人へ酒を注いでやるようにと

注文を出した所で、漸く喉の奥を鳴らして言った。
「いやいや、すまないね。お前さんが聞きたいってのは神殿の話かね？」
老人が吐く息は、様々な酒の臭いが入り混じっていた。
その質問に男は再び、自分が知りたい内容を口にした。
「ほうほうほう、儀式の話しかね。それも二年前の。悪いこたぁ言わない。お前さん、それ以上は止めておいた方が身のためだ。あれは……いやはや、実に恐ろしいもんだった」
老人は、そこでグラスの中身をぐいと一気に呷り、口を噤むと促すように男を見た。
先程の一杯では、どうもそこまでしか話す積りが無いらしい。男は内心腹立たしく思ったが、店主から瓶ごと酒を受け取ると差し出されたグラスにもう一杯注いでやった。それも気前よく並々とだ。
「恐ろしいとはどういうことだ？」
低く問いを発した男に、老人はちらりと己がグラスを目の端に捕らえてから些か大げさとも思える仕草で身体を震わしていた。
「そりゃぁ、恐ろしいもんに決まってる。あそこは閉じられた世界だ。お前さん、分かるかね？　え？　想像してごらんなさい。小さくて狭い中にぎゅうぎゅうに押し込められているとそのうちそれが当たり前になってくる。毎日目にするのは精気の無いどんよりとした男の顔かギラギラと欲望に飢えた男の顔だ。何が普通で、何が当たり前だったか、そんな人並みな感覚すらぁ分からなくなっちまって、恐ろしいことも平気で行うような神経になるのさ」
そこで老人は、なにかにおびえるようにぎゅっと首を縮込めて見せた。
核心に入ることなく、どうもお茶を濁したように周辺をうろうろする老人の話を男は辛抱強く待った。
そして漸く巡り巡った男の話が核心に入った。
「いいかい」
男はそう言うと、周囲を気に掛けるように素早く――――と言って

もこの老人なりの素早なので男には緩慢な動作に見えた――――辺りへ視線を走らせてから、身体を縮込めるようにして男を見た。

「二年前、それこそ妙な噂が立ったのさ。それも恐ろしい噂がね」

不意に黙り込んだ老人に男は目線だけで続きを促した。

「元々、ああいう儀式っていうのは秘密裏にひっそりと行われるもんで、高位の神官たちしか知らないもんなんだが、その時は、どうしたものか妙な噂が流れたんだよ」

そこで老人は言葉を区切ると男の目をじっと見た。

「あの儀式は通常とは違う特別なもんだった」

老人の視線が空になったグラスに注がれて、男は仕方なくもう一杯、並々と注ぎ入れた。

それを横目に確認してから、老人は一段と声を潜めると聞こえるか聞こえないかの小さな掠れた声で言った。

――――――――捧げられたのさ。贄として。神託を得る為の対価だ。

その言葉に男は動きを止めた。

「贄とはどういうことだ？」

言葉の意味合いに齟齬があってはいけないので、男は慎重に口を開いた。

それ程広くはない酒場の薄暗い店内、年季の入ったカウンターの片隅でいかにも薄汚れた酔っ払いの老人とその対面には傭兵風の強面の男が真面目な顔をして相対する。それは傍目には酷く不釣り合いで滑稽にさえ見えただろう。だが、宵の口、場末の酒場でその奇妙な二人の組み合わせに注目をするような客は、この中にはいなかった。

老人は年季の入った赤ら顔をつるりと撫でた後、小さな背中を丸めてせわしなく周囲に視線を走らせた。それは神経症を患う患者のようにも見えた。

琥珀色の液体が半分に減った所で、男は再び老人のグラスに酒を注いでいた。

「そのままの意味さ」
そう言うと、老人は宣託を得る為には対価が必要で、それが大きければ大きいほど下される宣託も精度が増すのだと続けた。対価として最たるものは、【命】である。神殿に祀られている女神リュークスは、【黒】に執着している。その為、【黒】という色彩を持つ人間が一番相応しいのだ。

男は老人の言葉を信じるかどうか迷った。どこからどう見ても酔っ払いの与太話のようにも思える。だが、何故か男にはそれを一笑に付すことは出来なかった。
神殿が宣託を得る儀式の為に関係の無い人の命を利用する。男は実際にそれがどのようにして行われるのかについては想像が付かなかったが、それが事実ならば、とてもおぞましいことに思えた。そのようなことが果たしてあるのだろうか。もし、この老人の話を信じるならば、あの双子たちはその為に殺されたということになる。
そんなことがあってたまるか。例えようのない怒りが沸いて、男は握り締めた拳を薄汚れたカウンターのテーブルの上に押し付けた。
高潔と清廉さ、そして奉仕の精神を謳う神殿がそのような卑劣なことに手を染めるものなのだろうか。そう考えると神官たちの身に着ける白い装束が酷く薄汚れているように思えた。
これまでの仮面のような無表情から一転、あからさまに驚愕の色をその赤みを帯びた茶色の瞳に滲ませた男に、老人はグラスの中の酒を美味そうに啜りながら、下卑た笑みを浮かべた。
「あそこは途轍もなく古い場所だ。この国の中でも、いや、この国よりもその歴史は遡る。底知れぬ闇が巣くっているのさ。長い年月に渡って吐き出された澱が溜まってるのさ」
――――――あそこはそれを上手く隠している。
それ以上は自分の口からは言えない。老人は意味深に目配せをして見せると、
「まぁ、この老いぼれの話を信じるか否かは、お前さん次第だがね」

そう言って話を締めくくったのだった。

それから男はもう少しその辺りの事を調べてみる為に神殿の神官たちに接触を持った。

神殿は日頃から民に開かれている。そして実際にその場に足を運んだ。

神官たちが身に着ける帯の色はそのまま階級を表わしていた。神殿の敷地内を静々と歩く白い衣を眺めながら、まだ位が低く口の軽そうな――と言っては語弊があるが、要するに親身になって相談に乗ってくれそうな善良な相手のことだ――を探し、声を掛けた。

当たり障りのないことで口慣らしをした後、若い神官たちにさり気なくその話を振ると、皆、あからさまに狼狽えた様子を見せた。そして、粘り強く会話を続けると『ここだけの話だが』と前置きをして、そのような噂があったのは確かだが、自分は下っ端なので真偽のほどは分からないと締めくくった。若い神官たちは大抵似たような答えを返していた。

どうも神官たちの間でもその儀式とやらに関しては禁忌扱いとされているようだ。

それから、運良くもう少し位の高い神官を捕まえることが出来た。男の帯の色は、茶色だった。位としては中くらいのところだろう。

だが、その男は柔和な面立ちで清潔そうな外観に反して、腹黒く狡猾であった。当たり障りのないことを口にしてから、神官は男の外套の袖を小さく引くと、これ以上のことを聞きたければ、あろうことか金を寄越せと言ってきた。具体的にそう口にした訳では無かったが、仄めかされたことは同じだった。言い方が真綿に包まれている分、余計に性質が悪くも思えた。

自分は儀式に参加した訳ではないのだが、懇意にしている上位神官からかなり正確な所を聞いている。だが、これは非常に繊細（デリケート）な問題で神殿の権威に関わることでもあるので、それなりのお布施を用意してもらわなければ割に合わない。そのようなことを恥ずかしげ

もなく堂々と口にしたのだ。そして神官が男に提示した金額は、普通に考えても大金だった。

――――――金貨三枚は下らない。

口で言葉にすることはなく、掲げた手を開いて三本、指を差し出した。

金貨が一枚あれば優に二年は遊んで暮らせる。庶民であれば、一生のうち金貨を拝む機会など一度あるかないかだろう。

法外な金額の提示に男は仰天したのだが、神官はそれを手に入れる方法があるとご丁寧にも男に教えてくれた。それが武芸大会の個人戦に出場して、上位十名の中に残るということだった。十位以内に入れば報奨金が貰える。一番下の十位でも金貨三枚は堅いだろうとのことだった。

このようなお膳立てまでする神官を正直、胡散臭いと思わないでもなかったが、どうしても真実が知りたかった男は、一か八かの賭けとして武芸大会、個人戦への参加を申し込んだという訳だった。

そして今に至る。

ここで決めるのだ。もう少しで真実に手が届く。ここで負ける訳にはいかなかった。そう思うと男の心は震えた。

何がここまで男を駆り立てているのだろうか。これまで滅多に二人と接触を持たなかった男が、二人が消えた途端、執念とも言うべき執着を見せて、その行方を探し回った。

その理由は、男自身もよく分かっていなかった。それでも何かの為に一命を賭して事に当たる。一生に一度位、そのような莫迦げたことをしてみるのも悪くはない。そう思っていた。

男は気合十分、柄を固く握り締め、小さく息を吐き出すと真っ直ぐ相手を見据えた。そして、審判の高らかに上がる旗の合図と共に土を蹴った。

とある男の執念（後書き）

第四章のプロローグで登場した男の目的は果たされるのか。そしてその男の運命にリョウは今後どのようにして関わることになるのか。複雑に絡み合う糸、その一本をお伝えしました。次回はあの人の登場になるかと。それではまた次回にてお会いいたしましょう。

２０１１／７／１９　誤表現修正

とある男の妄執

レオニード・ボストークニは、さんざめく歓声の中、会場の真ん中に進み出ると額から滲む汗をそのままに少し先で対峙する男に残忍な笑みを投げかけた。心が湧き立つように言葉には表わせない程の歓喜に満ちて来るのが分かった。この日が来るのをどんなにか待ち侘びたことか。昨日の予選から地道に試合を重ねて、漸くここに辿りついたのだ。いや、昨年の大会、この場であの男に膝を着いた所からレオニードの挑戦は始まっていた。妄執と言ってもいい程の執念と執着とがレオニードの心の中に渦巻いていた。

ざっと簡単にこのレオニードという男の人生を振り返れば、あの男に対する関心は、幼い頃より既に始まっていた。同じ東西南北の方位を司る軍人の家系に生まれ、古くから連綿と続くスタルゴラドの名家の中で、レオニードとあの男は何かと比較をされる対象だった。生まれた年が同じであったということも起因しているだろう。

レオニードの父親、現ボストークニ家の当主は、その昔、現シビリークス家の当主に公の場でこっぴどくやり込められたことがあり、その事をいまだに根に持っていた。それ以来、両者の仲は余り良くなかったようで、【忌々しい悪魔め】と悪態を吐いて目の敵にしていたのだ。その経緯や因果関係は抜きにして、公の会議の場であったかは知らないが、そのような大勢の人々が集まる中で辱められたことが相当腹に据えかねることであったらしい。

その父親の影響を強く受ける形で、レオニードは幼き頃より【北（シービリ）（シビリークス家）】には負けるなと発破を掛けられてきた。こうなると洗脳に近いかもしれない。レオニードの上には三つ年の離れた兄が居たのだが、その存在は父親との緩衝剤にはならずに、父親の関心と期待は【北】の三男と同じ年に生を受けた次男（レオニード）の方に向けられることになった。それもレオニードの運命の歯車を狂わせたこ

との始まりとなった。

長じるにつれて、両親、中でも特に父親はレオニードを【北】の三男と競合させた。そして、このレオニードの不幸の始まりは、父親の期待に応えることを己が使命のように受け入れてしまったことにあった。ここで反発をしていたら、その後の人生の軌道は随分と違ったものになったであろう。だが、このレオニードは本質的に素直で従順な性質でもあったのだ。

レオニードは幼い頃から学問でも剣の腕でも、いつもユルスナールと比べられていた。そして、少しでも負けるまいと必死になってやってきた。全てはボストークニ家の家名に恥じることが無いように、そして父の期待を裏切らないようにする為だ。

だが、持って生まれた才能の違いなのか（それを人は一般的に個性と呼ぶのであろうが）、いつも後一歩の所で及ばなかった。父親はそれがいたく残念で仕方がなかったようで、己が息子に対して理不尽な八つ当たりをすることはなかったが、そういうときは必ず口惜しさからくる苛立ちを一人、じっと堪えているようだった。その様子は、机やテーブルの上を忙しなく叩く人差し指の動きであるとか、邸宅の廊下を踏みしめる足音だとか、扉を開閉する際の力の入り具合だとか、そういう実にささやかではあるが、耳に付く所に表れた。

その音を耳聡く聞きつけると、家人も使用人も『ああ、旦那様の機嫌が悪いのだ』と思ったのだった。父親の不機嫌さを感じ取った若きレオニードは、益々今度は負けられないと闘志に燃えることになるのだ。

こうして出された結果というのは、レオニードにしてみれば血と汗の滲むような努力の賜物でもあった。だが、自分がこれだけ必死になっているというのに、いつも追い越すべき目標にしているユルスナールの方は、いとも涼しい顔をして淡々と自分以上の結果を出すのだ。それがレオニードには堪らなく悔しくて仕方のないことであった。

レオニードはいつしかユルスナールに一方的な敵愾心を持つようになったのだ。ユルスナールとて努力をしていない訳ではなかった。いや、寧ろシーリスの言葉を借りるならば、かなりの努力家である。元々感情の細かな機微が表情に出難い性質であったが、それを決して表に出すようなことをしなかったので、同じ子供のレオニードにはそれを見抜くことが出来なかったのだ。

それにレオニードの兄が割と器用な性質で、一通りのことをそれなりにこなせてしまう人物であった為、ボストークニ家の基準は、かなり高めに設定されていたというのもレオニードにしてみれば不幸の巡り合わせとも言えたであろう。また、レオニードには昔から一度決めたことに対しては固執するきらいがあり、それも対ユルスナールへの敵愾心という無限連鎖（ループ）に嵌り、そこから抜け出せなくなるという事態に陥る要因にもなった。

よく出来の良い兄がいるとその下にいる弟はなにかと比べられることで反発し、その後屈折した人生を歩んだり、人の道（所謂王道や正道）から大きく外れたりするものだが、レオニードの場合は、兄の他に【北】の三男坊という大きな壁が立ちはだかり、尚且つ両者が作りだすその大きな狭間から抜けだすことが出来なかった。決められた限られた範囲の中で足掻くしかなかったのだ。両側は高い壁、若しくは急峻な崖で、一人そこをよじ登るか、崖の合間の細い道を辿るかの二択で、時折、崖を登るも途中で挫折して細い道を歩み、また崖を登ることに挑戦する。絶えずその繰り返しであった。

そういう背景の下で繰り出されるレオニードのちょっかいを昔からユルスナールは相手にしなかった。良くも悪くも慎重で思慮深く、しっかりと己の核となる部分を持つユルスナールは、一々他人の事を気にしたりはしなかった。自分は自分、他と比べるのは莫迦らしい。それはシビリークス家の家訓に寄る所が大きいだろう。その姿は、傍目にはどこか超然として揺るがないように見えた。それがレオニードにとっては堪らなく腹立たしいことでもあった。負けん気

だけは人一倍あったので、今度こそと自分を優位に見せる為に――――今にして思えば、それは己を傷つけまいとする自己防衛本能の一種でもあったのだろう――――嫌みのような憎まれ口を叩くこともあったが、ユルスナールの方はそれをあっさりと流してしまうのだ。顔色一つ変えることなく、ただ『そうか』との一言で強制終了されてしまうのだ。レオニードとしては拍子抜けというか持て余した気持ちの行き場を失くしてしまい、それが長年に渡って鬱々と溜まって行ったという按配だった。

そのようなこともありレオニードはユルスナールと顔を合わせる度に相手を強烈に意識した。そして、この構図は、すっかり成人した今になっても変わることがなかった。

宮殿に出入りを許されるようになったものの、国政に関わることはせず、家の所領を管理する仕事に就いているレオニードは、その昔、ユルスナールが騎士団に入団したと耳にしても同じ道を歩もうとは思わなかった。同じ軍人を輩出する家系だが、兄は軍部入りを果たしたが、レオニードはそこには加わらななかった。そこでレオニードは長年の悪路から逃れることが出来た訳だが、それでもユルスナールに対する積年の一方的な蟠りが解消された訳でもなかった。

そして、今、唯一ユルスナールに勝つことの出来る機会というのは、王都で毎年冬場に開催される武芸大会だけとなった。いつかあの男の鼻をあかせて見せよう。あの澄ました顔を悔しさで歪ませてやろう。それがレオニードの人生最大の楽しみであり、生き甲斐にすらなっていた。一方のユルスナールにしてみれば甚だ迷惑で鬱陶しい存在でしかない。

そして、毎年のようにレオニードは武芸大会に参加をした。初めは直ぐに負けてしまった。同じく大会に出場をしていたユルスナールと対戦することは叶わなかった。それからレオニードは軍部とは関係の無い有閑貴族でありながら剣技を磨くことに並々ならぬ時間と労力（エネルギー）を注ぎ込むことになった。そして漸く二年前、初めてこの場

でユルスナールと対戦することが出来たのだ。あの時は、個人戦のまだ早い段階で、出場者の人数が漸く三十人前後に絞られた頃合いだった。その対決は、惜しくも（とレオニードは思っている）ユルスナールに軍配が上がることになった。

そして、昨年、レオニードは再び、あの銀色の髪の男に対峙することになった。それは準々決勝の手前の試合で、ここで勝ては十位以内への入賞が約束された試合だった。

その試合で、レオニードはユルスナールに負けた。それも剣士としては最悪の事態、己が剣を折られるという形で幕を引いたのだった。あの時、あの剣が折れなければ、ひょっとしたら勝てていたかもしれない。それは、歯噛みするほど悔しい事態だった。

今年は気合十分、昨年のような惨めったらしい負けを喫しない為にも、頑丈でよい剣を探し求めたのだ。そして、国中の腕利きだという鍛冶職人を調べ上げて、実際にその一振りを選ぶ為に自ら足を運んだ。そんな中、【プラミィーシュレ】であの男を鉢合わせをしたのだ。

自分が依頼をしようと思っていた腕利きと評判の鍛冶屋は、噂通りの偏屈で頑固な堅物だった。なんの美学があるのかは知れないが、どれだけ金を積むと言っても依頼を受けてはくれなかった。思い返すだけでも腹立たしい程のふてぶてしい高慢な態度だった。しかもその鍛冶職人は、あろうことかあの男の馴染みの鍛冶屋で、ユルスナールの剣はその先代の師匠であるレントという男――それは国内外問わず、この分野では随一の評判を持つ男だ――が鍛えたものだった。ユルスナールには良くて自分では駄目。その違いは何なのか。それが一層ユルスナールへの嫉妬心を煽る形になった。

また、どうしても諦められなかったレオニードが、その鍛冶屋への口利きを頼もうと接触を持った少年も自分を拒絶したのだ。あろうことかその一風変わった顔立ちと色彩を持つ少年は、あの男の知り合いで、あのレントの鍛えた短剣を所持していた。レオニードにとってはその事実も大きな衝撃（ショック）をもたらしたのだった。

返す返すも屈辱的なことだった。どうしてあの男には良くて、自分には相応しくないとされるのか。そこにある違いはなんなのか。再びその問いに苦しめられることになった。何故、自分の依頼は受けてもらえないのか。その事への不満は、己が行動を内省し、顧みることではなく、昔からある構図（パターン）である外部の人間、要するにユルスナールとあの黒髪の少年に向けられることになった。

そして、とうとう新たに鍛えられた切れ味も強度も抜群によい一振りを持って、今冬レオニードは大会に出場し、ここまで順調に勝ちを収めて行った。

【プラミィーシュレ】の有力者の口利きで紹介された鍛冶屋の作った剣はレオニードの願いを叶えるものだった。大金を叩いただけのことはある。切れ味の良さはこれまでの立ち会いで証明されていた。少し前の対戦では、ついつい興に乗ってそれを確かめてしまったくらいだ。その時、対戦者の苦悶を浮かべた表情を見て、それがあの銀色の髪の男であったらと思うと、例えようもない興奮が押し寄せてきた。この剣であの男を傷つけることができたら。そのようなことを夢想した。狂気染みた執着は刻々と増していった。

そして、漸くその機会が巡ってきたのだ。まるで長年に渡り恋い焦がれた相手に会いまみえるように胸が高鳴った。こんなにも高揚した気分を味わうことはこれまでなかった。

この手であの男を傷つけることができるかと思うとぞくぞくした。そして、この会場のどこかであの男の活躍を見守っているであろうあの黒髪の小僧が、悲しみと驚愕に動揺する様を見られるかと思うと堪らなく愉快で仕方がなかった。

――――――狂っている。ああ。そうだ。自分でも認めよう。確かにこれは狂気染みた沙汰だろう。だが、これで念願が叶うのだ。そう思うとおかしくておかしくて気を引き締めていないと口元がだらしなく緩んでしまいそうだった。

待ちに待ったこの時を前にレオニードは、抑え切れない興奮を目の端に滲ませていた。

「待ちかねたぞ」

だが、同じように試合会場に進み出たユルスナールは、顔色一つ変えることなく、

「そうか」

ただ、その一言を口にした。

その時、レオニードの中で何かが弾けた。ここまで引きずり出して来ても、この男はそれを『そうか』のただ一言で片付けてしまうのだ。

レオニードは突発的に湧き上がった怒りに我を忘れそうになったが、これまで鍛えてきた持ち前の精神力でそれを堪えた。ここで激昂するなどとんでもない。ぎりりと握った剣の柄に力を込めた。

冷静さを失ったら、この目の前で余裕の表情で静かに対峙する男を打ち破ることなど出来ないからだ。そのくらいの状況認識と客観性は持ち合わせていた。

レオニードは昂ぶりそうになる気持ちを落ち着かせる為に緩く息を吐きだした。審判の合図に剣を構え、男と対峙する。

そして、高らかに掲げられた旗印と共に渾身の力を込めて宿敵に飛びかかった。

とある男の妄執（後書き）

短いですが、レオニードの背景を少し。対戦の模様は次回にお送りいたします。

２０１１／９／２５　誤字修正

因縁の結末

リョウは息を詰めて試合会場の中央で対峙する二人の男たちを見つめていた。

うるさいくらいに心臓が高鳴って、気を引き締めていないと口から飛び出して駆け出してしまいそうだった。その昔、とある小説の中で、朝目覚めて鏡を見たら【鼻】がいなくなって、独り歩きを始めてしまったという笑い話があったが、もし、自分の心臓が勝手に動き出すとしたら、それはきっと今この時だろうと思う位だった。

とうとうこの時が来てしまった。組み合わせの抽選後、一戦目、二戦目を順調に勝ち進んだユルスナールは、出場者が四人に絞られることになった準決勝で、とうとうレオニードと当たることになった。

この時点で残った四人の剣士たちは、先の二人に加え、第一に所属する兵士と第二に所属する兵士だった。

レオニードの表情は、遠目にもどこか鬼気迫るものがあった。リョウには狂気の沙汰のように思えて仕方がなかった。

会場はこれまで以上に物凄い興奮に包まれていた。渦巻く歓声と野次がうねるように頭上高く揺らめいている。だが、リョウはその周囲の熱気とは裏腹に段々と足元から冷えてくる気がしていた。

どうかユルスナールが怪我もなく無事試合を終えられますように。単なる勝ち負けよりも思うことはただその一つだ。胸元で握り締めた拳に自然と力が入った。

レオニードは、ここに勝ちあがって来るまでの試合でも勢い余って相手に傷を負わせたようだった。

だが、リョウが手当の手伝いをした救護班の天幕に寝かされているあの男のように幸い深手にはならなかったようで、皆、少し掠っ

た程度と噂していた。
レオニードの剣は、相手を傷つけることを躊躇わない。いや、ともすれば殺さんばかりのものだった。迸る殺気を隠そうともしない。これまでの度重なる立ち会いでそれなりに体力を消耗しているであろうにレオニードは全く疲れた様子を見せてはいなかった。それよりも回を重ねる度にその勢いは増しているようにすら見えた。
何があの男をそれほどまでに駆り立てているのだろうか。
そして、あの男がこの場でユルスナールと対峙した時、不意にリョウの脳裏には、【プラミィーシュレ】の娼館の一室であの男が零した一言が前触れもなく蘇ってきたのだ。
――――――負けたくない相手がいる。
どうしてそこまでして自分が世話になっていた鍛冶屋であるカマールの剣に拘るのかという話になった時、男はいい剣が欲しいと言った後に小さくそう呟いたのだ。
負けたくない相手――それは即ち、ユルスナールのことなのだろう。
レオニードの背負う気が揺らいで見えた。そこに透かし見えるのは、憎悪と狂愛と興奮と歓喜と狂気に似た様々な感情が入り混じり複雑に絡み合っているように思えた。
――――――ルスラン！
リョウは心の中で愛しい男の名前を呼んだ。

審判の合図で試合が始まり、剣のぶつかり合う金属音が周囲に響き始めていた。昨日の団体戦の時と同じようにユルスナールは防具を身に着けてはいたが、それは動きを妨げない為の必要最低限のものだった。対するレオニードも同じようなものを身に着けているが、こちらは見るからに煌びやかで上等そうなものだ。男が動く度に日の光を反射して傷のない胸板の金属が目にも眩い光を発していた。まだ真新しいものなのかもしれない。

戦いは熾烈を極めていた。二日連続の長丁場でここまで残ってきただけあってレオニードの剣は鋭く迫力のあるものだった。それに加えてレオニードには殺気が十分にあった。それは剣技を比べる為の純然たる立ち会いというよりも実戦――いや、殺し合いに近いように思えてならなかった。

リョウの全身は粟立った。それほどまでに相手から発せられる気迫が凄かったのだ。初めてあの男に相対した時に感じたような優雅さや相手を見下すような落ち着きは、微塵も感じられなかった。

レオニードの顔は獰猛な獣のようだった。それも手負いの獣といった風情に思えた。いつぞや自分が目にしたような他人を嘲るような軽薄さも余裕綽々とした態度もない、まさに真剣で命を精神力に変えて削っているようにも見えた。

一方、対するユルスナールの表情は余り変わっていなかった。いつも通り淡々と落ち着いているようにも見える。レオニードの攻撃は今の所、ことごとく弾き返されていた。昨日のドーリンと対戦した時のように追い込まれた感じがある訳でもなかった。それが端から見ていてリョウには救いのように思えた。

大丈夫。ユルスナールは相手の気迫に呑まれた訳ではない。昨日の試合に比べてもまだまだ余裕がありそうだ。

一際、大きな金属音の弾ける音がしたかと思うと両者は一旦、飛び退いて間合いを開けた。暫し、無言のまま対峙し合う。じりじりと長靴の底が地面に擦れる音に男たちの呼気が同調（シンクロ）してくる。ほんの少しの気の緩みが、即ち隙となるのだろう。

対峙する両者の気迫に押されてか、観客たちは声援を送ることも野次を飛ばすことも止めて、静かに息を詰めて試合会場中央で繰り広げられている対戦者たちの成り行きを見守っていた。

先に動いたのはユルスナールだった。相手の懐に入り込むと渾身の一撃を繰り出す。そして、立て続けに剣を突き入れた。

レオニードは最初の一撃を受け、踏み止まった。だが、そこで勢いに負けて若干体勢を崩し、その後の追撃をかわし切れなかった。

勝敗は一瞬だった。

レオニードの剣を巻き込むようにユルスナールが上方へ勢いよく弾き上げた。汗で柄を握る手が滑ったのか、相手の剣はその手を離れ、きらりと日の光を反射して宙に舞う。それから、カランと音を立てて、地面に転がった。

レオニードは慌てて剣に手を伸ばしたが、ユルスナールがその隙を見逃す訳がなかった。

がら空きになった首筋に間髪入れずユルスナールの一閃が突き付けられて止まる。そして、それを合図に審判が高らかに判定の旗を上げた。

――――――勝負あり！

一瞬の空白の後、会場が一気に歓喜と様々な雄叫びに包まれた。

静かに剣を納めたユルスナールに対し、レオニードは地面に倒れ込んだまま、その場で悔しそうに拳を打ちつけた。

観客たちの歓声が輪を掛けて湧き上がる。

「チクショウ！！！」

そこに慟哭とも言うべき男の咆哮が立ち上った。

レオニードは落ちた剣を引っ掴むとゆらりと立ち上がった。ぎりぎりと柄を握る手に力が入る。何かに憑かれたかのような幽鬼の表情をしていた。目だけがギラギラと仄暗い光を湛えて揺らぐ。そしてその目は、審判がいる試合会場の中央へと向かう男の背中を執拗に睨みつけていた。

リョウは、じっとレオニードの様子を見つめていた。剣の柄を握り込んだまま微動だにしない。レオニードの中にどのような感情が沸き上がっているのか、リョウは理解をすることも推し量ることも出来なかったが、男が何か途方もない深い情念のようなものを抱えている――それだけは感じ取ることが出来た。

お願いだから、早く剣を鞘に納めてくれ。リョウは、じりじりとしながらレオニードの一挙手一投足を見守った。まさか、あのまま

恨みを晴らす為にユルスナールの背中に斬りかかることだけはしないでくれ。レオニードがこの一戦にどれだけの想いを注ぎ込んできたのかは分からなかったが、リョウは嫌な予感がしてならなかった。それは剣士としてはあるまじき卑劣極まりない行為であったが、今のレオニードの精神状態では何をしでかすか分からなかった。

だが、流石にそこまで腐りきってはいないようだ。

そうこうするうちに剣を握った男の手が小さく上下し、その場で握った一振りを地面へと叩きつけた。ガキンと剣の切っ先が地面を削る音がした。そこでレオニードは大きく肩で息をする。それから、何かを堪えるようにゆっくりと己が得物を鞘に納めたのだった。

それを見て取ってリョウは漸く詰めていた息を吐き出した。

ユルスナールは審判の傍に立ち、その様子を眺めていたようだった。だが、その表情は微動だにしない。仮面のように別段、これといった感情を乗せてはいなかった。

レオニードは中央に歩み寄った。審判の合図で両者が一礼をする。その後、レオニードは何を思ったのか、いきなりユルスナールに詰め寄った。襟元を掴んで声高に捲し立てている様子が遠目にも見えた。

だが、ユルスナールは表情を変えたりはしない。無言のまま掴まれていた手を外すと去り際に小さく、本当に微かに相手にだけ分かるように仕向けた挑発的な笑みを刷いていた。

――――――望むところだ。

薄く動いた唇は、そのような言葉を吐いたように思えた。

そして、大きな歓声の中、下がって行く二人の選手たちの姿に、リョウは静かに目を閉じてから、ほぅと息を吐いた。

ユルスナールに怪我がなくてよかった。その安堵の気持ちで一杯だった。

周囲の観客たちの惜しみない拍手が、戦った選手たちに向けて轟かんばかりに鳴り響いていた。

因縁の結末（後書き）

前回の【とある男の妄執】とセットの感じだったので。取り敢えず間を開けずに更新しました。これで武芸大会二日目の様子を終えたいと思います。次回は三日目の天覧試合に行く前に少し周辺事情を挿みたいと思っています。ここまでお付き合い下さりありがとうございました。

嵐の予兆

武芸大会の二日目を終え、いよいよ王族を観覧席に迎える天覧試合が行われる晴れ舞台を翌日を控えて、決勝戦で剣を交える選手たちの顔触れも揃った。

今宵、街中の酒場では、明日の対戦の勝利を予測する激論があちこちで交わされ、最後の賭けに参加した男たちは、なけなしの資金を叩いて明日の勝者を予想していることだろう。誰も彼もが試合の話で持ちきりだった。この時ばかりは、盛り場も大賑わい。いつも以上の景気の良さに、とっておきの酒が振る舞われたりもした。そして、機嫌を良くした客たちが酔っ払って束の間の眠りに就くまでの間、飽くことなく、夜更けまでこの一角は猥雑で雑多な賑わいを見せるのだ。

その夜、とある貴族の邸宅の一室では、二人の男が艶やかな飴色に光る重厚なテーブルを囲んで座っていた。

テーブルの上には、この国の男たち、主に貴族連中が嗜むとされている遊戯盤（ゲーム）が置かれていた。縦横のマス目で均一に区切られた盤の上に様々な役職の駒を並べて行われる疑似戦争とも取れる王取りゲームだ。対戦は二人で行い、法則（ルール）に基づいて動く駒をもって先に相手の陣地にいる王を倒した方が勝ちという決まりだった。

一人の男が手の内にあるグラスの中の琥珀色の液体を揺らしながら、盤の上にある【騎士】の駒を動かした。

男の指は皺だらけで大きく骨張ったものだった。その太い男らしい指には赤い大きな石のついた指輪が収まっていた。その赤い石は、男が身じろぐ度に鈍く艶やかな色を反射していた。

発光石が穏やかに室内を照らし、温かみのある橙色に滲んだ影の濃淡を作り出していた。そして年月を重ねて皺が多く刻まれた男の

横顔にも影を作る。
男が揺らしたグラスからは、ふくよかな甘い香りが立ち上っていた。
「計画の方は？」
盤の上の駒を眺めながら男が低く問うた。
「万時、恙無く進んでおります」
「そうか」
男の対面にひっそりと座るもう一人の男が、淡々と機会的な返答を返す。それに主である男は、小さく含み笑いをした。
これまで長い間、密かに計画を練り、それが実現することを夢見てきた。だが、それは所詮、絵空事で。これまでは虚しくも男の胸内だけで終わっていた想像が、ついに現実世界へと横滑りして、今、着々とその実を結ぼうとしていた。
とうとうこの時がやってきた。全てが上手く運んだ暁には、さて、あの男がどんな顔をするのやら。それを思うと今から愉快で仕方がなかった。
神が漸く我々に味方をしたようだ。男は別段信心深い方では無かったが、この所の状況を見ているとそう思わずにはいられなかった。
「風向きが変わってきたな」
「はい」
あの男に一泡吹かせてやりたい。そんな思いから端を発した男の思いつきは、年月を重ねる度に段々と大きく肥大化していった。あの男が苦々しく口を歪める様を想像すると、口惜しそうに歯がみする姿を見るかと思うと身体の芯がぞくぞくと言い知れぬ高揚感に粟立った。
今回は、ささやかな意趣返しのようなものだ。小手調べとも言えるだろう。あの男の顔に泥を塗る。いや、泥団子を投げつける。そんな子供染みた欲求を吐き出したものだった。
あの男は今も昔も揺らがない。あの男の足場を切り崩すことは早々に諦めていた。その代わりに思いついたのは、周辺から揺さぶり

を掛けることだった。
　あの男には三人の息子がいる。今回、男が目星を付けたのは、その末だった。この国の社交界でも政界でも今の所目立った所のない男だが、あの三男坊は父親の形質を姿形という点に於いては実によく引き継いでいた。まるで時を巻き戻して、あの男の若い頃を見ているようだった。それもその末を標的に選んだ理由の一つだった。
　あの男に小さな落とし穴を用意してみる。子供染みた悪戯の延長のようなものだ。そこであの男が上手くこの事態を乗り切ることが出来なければ、それまでの男であったということなのだろう。
　手駒は面白いように集まり始めていた。そして全てが上手く運んだ時、あの男が慌てふためく様子を見るのも楽しいに違いない。
　今の所、全てが筋書き通りに進んでいた。
「しかし、アレは予想外だった」
「ええ。ですが、却って好都合かと」
　末息子の周囲を洗ってゆく内に実に面白い掘り出し物が見つかったのだ。
「ああ。それは言うまでもない。願ったり叶ったりだ」
　今回はそれを使ってちょっとした余興を考えていたのだ。
　ささやかな思い付きから始まった男の計画は、神殿をも巻き込んだ規模の大きなものになっていたのだが、やはり全てを取り仕切る男にしてみれば、それらは皆、手駒の内の一つ。御手製の三文芝居の一コマに過ぎなかった。
「アレは使えそうか？」
「はい」
　男の問いに対面に控える優秀な部下は、野心ある男は喜び勇んで飛び付いたと告げた。
「そうか」
　大いなる手の内で転がされているとは知らずに目先の欲に目が眩む者など探せば幾らでもいる。その中から無難な所を見つけ出すのが至難の技なのだが、今回、その選択は上手く行ったようだった。

男は徐に盤の上にある【神官】の駒を動かした。
「それにしても【ユプシロン】の連中も妙な事を思いついたものだ」
「それだけ必死なのでしょう」
男の脳裏には、ぎょろりとした大きな目をした高位神官の顔が浮かんでいた。まだそこまで年老いている訳ではないのに枯れ枝のような印象を与えるひょろりとした男だった。瑞々しさを失った肉体。そこにある目だけが異様な程に爛々と光を湛えていて、男が生に執着していることが見て取れた。
取引としては上々だった。こちらへの協力を打診すると共に最終的にはあの男が欲しているものを渡すことができるのだから。互いに利害が一致したという訳だ。悪い話でもない。たとえ計画が上手く行かなくとも男に痛手はなかった。あちらとしても別のものを見繕えばいいのだから同じようなものだろう。
それから男は、【女王】の駒の頭部を皺だらけの指で撫でた。暫し弄ぶようにいじる。
「奥の方はどうなっている？」
「今日辺りにでも実行された模様です」
「そうか」
男は重厚な椅子の背もたれに寄り掛かりながら、ゆっくりとグラスを傾けた後、徐に目を閉じた。
きっとあちらは水面下で蜂の巣を突いたような騒ぎになることだろう。男にはその光景が手に取るようにまざまざと浮かんできた。事態の究明に名乗りを上げるのは、第二か。いや、当然、第三の連中も出張って来るだろう。クロポトキンの娘は逆上するやもしれない。父親によく似た神経質な顔立ちをした若い兵士の顔を思い浮かべながら、男は不意にそのようなことを思った。
いずれにしても事が事だけに調査は慎重になるだろう。何と言っても狙いとして王族の末端を匂わせているのだから。あの第二王子は子煩悩であることは有名なので、事態の収拾に向けてきつく捻じ込んでくるに違いない。

そして、騒ぎが大きくなればなるほどこちらの計画は円滑（スムーズ）に進む。なにせ、こちらの証拠は残らないのだから。あるのは状況証拠のみ。アレを手に入れるのは中々に労を要したが、今日はそれが予想以上の効果を発揮したことだろう。

その後、明るみになる状況証拠を持って、全ては一つの仮定的結論に集約されてゆくことになるのだ。やがて明らかにされる疑似的【真実】。そして、芋蔓式に引きずり出されてくるのは、あの男だ。

そこまで考えて男は緩く頭を振った。

だが、まだ弱い。決定打には欠ける気がした。片方は簡単に落ちるとしても、もう片方はそれだけでは不十分だった。こちらをどうするか。もう少し、何らかの手を打つ必要があるだろう。

「あの男とあちらの繋がりはどうするか」

ゆっくりと瞑想に耽るように息を吐きだした男の対面で、

「そうですねぇ。今のままでは余り具合はよろしいとは言えませんね」

懐刀と目される部下の男が同意をするように小首を傾げた。落ち着き払ったもの言いは、時として人を食ったようにも受け取れるが、躊躇いもなく核心を突く部下の言動を男は気に入っていた。

「ふむ」

盤上の【兵士】の駒を動かしながら、部下の男が言った。

「アレを間諜にするのはいかがでしょう？　キルメク経由で息が掛かった者ということで」

流す情報はどうにでも工作することは可能だった。当たり障りのない部分を証拠として挙げておけばいいのだ。

「ふむ。で、あの男を足掛かりにしていたというところか」

あれが下手な色仕掛けにでも掛かったとすれば外聞が悪いに違いない。あの男の周辺では普段からそういった浮いた話を聞かないから醜聞（スキャンダル）にするにはもってこいだろう。それでも個人的には、あの男の面子を潰すには些か不十分な気がして仕方がないが、ここは一先ず目を瞑ることにする。

「本当に。一時はどうなる事かと思いましたが、思いの外に良い働きをしてくれると思いますよ。申し分ない程に」

――――――――あちらの言を借りる訳ではありませんが、実に良い人材が現れたものです。

そう言うと、万事控え目な男は、珍しくその細面の顔に薄らと笑みのようなものを刷いた。

それは素晴らしい計略を生みだした時に見せる男特有の表情だった。

それを対面で目にした男は、小さく鼻から息を吐き出すと白いものが多く入り混じる立派な顎ひげを摩った。

「まぁ、後はあやつがどれだけ腕を振るうかにかかっているか」

男としてはそれとなく材料（それも頗る良いものだ）を用意しただけだ。実際に調理をするのはあの男だった。こちらの筋書き通りに【美味しい】一品が出来あがるか否かは、まさにあの男の手腕にかかっているのだろう。

「些か荷が重すぎたか？」

ぽつりと漏れた不安定要素を有能な部下は的確に拾い上げた。

「現時点では五分五分というところでしょう。ですが、まぁ、執念だけはありますから、その辺りをもう少し突いてみれば上手い具合に行くかと」

後は途中で手綱をそれとなく引き絞ることが肝要だろう。

納得をした男の傍で、部下が不意に顔を上げた。

部下の細長い指は【兵士】の駒を摘み、盤の上でマスを一つ進めていた。

「ああ、それから。懸案事項があるとすれば一つ。以前、あちらと繋ぎを取った際に邪魔が入った時の話ですが」

「ああ。今年の春先のことか」

「ええ。どうもあの時、仕留めたはずの男が生きていたようでして」

それはこの部下の采配にしては珍しい失態と言えた。徹頭徹尾完璧を良しとする部下は綿密な計画を立て、そこからの逸脱を徹底的

に嫌うはずだった。
「気取られていはいまいな?」
「ええ。それは勿論です」
だが、抜かりはないのか自信満々に言い切った部下の言に男は鷹揚に片手を振った。
「ならば、捨ておけ」
「御意」
そこで男は、不意に目線を上げると、肘掛に片肘を突いてこめかみの辺りに触れていた指を外した。
「そやつは今、こちらにいるのか?」
「はい。団体戦の方に出場していることが確認できました」
あの時の報告では途中邪魔が入ったが、繋ぎは上手く行ったと記されていた。この部下ならば、足が付くような真似はしていないはずだった。
「ふむ。まぁいいだろう。下手に絡まぬ方がいい」
男は再び頬杖を突くと、徐に盤の上の駒を動かした。
今日、街中の人々が華々しい武芸大会の興奮に酔いしれている裏側で、ひっそりと小さな事件が一つ生まれたはずだった。
賽は投げられた。後は随時、必要に応じてそれとなく茶々を入れながら、動き出した小さな玉が敷かれた軌道(レール)の上を走って行く様を眺めればいいのだ。
役者は揃った。後は舞台とその機が熟すのを待つのみ。さて、幕が上がった時、そこではどんな芝居が観られることやら。やり直しの利かない本番勝負。だからこそ読めそうな展開とそこからの派生するあらゆる逸脱への対処を怠ってはならないのだ。事態がどう転んでもいいように逃げ道は塞いでおかなくてはならない。そうやって見えない蜘蛛の糸のように幾重にも掛けて透明な罠を仕掛けるのは、男の趣味に合っていた。
余興の開幕まであと僅か。全ての観客が揃った所であの男がどれだけの演説を打つことが出来るかに懸かっている。一生に一度の大

舞台、蛹が見事蝶になるか、それとも蛾になって潰されるか。
今後の流れをつらつらと思い描いて、男は一人ほくそ笑んだ。
どちらに転んだとて見物になるには違いなかった。この所こういった刺激に飢えていた宮廷の貴族連中は、こぞって飛び付くことだろう。そして、全ての顛末を耳にしたあの男がどう出るか。それが楽しみで仕方がなかった。
男は、【隠遁者】の駒を盤の上に滑らせると相手の【王】の駒の前に置いた。
――――――――王手（チェックメイト）。
全ては最後にただその一言を口にするが為。
逸りそうになる心を鎮める為に男はゆっくりと息を吸い込んだ。
そして、一人、満足そうに息を吐くと手にしたグラスを小さく掲げた。
「計画の成功を願って」
対面に座る男も心得たように己がグラスを掲げると同じ文言を唱和した。
そして、二人の男たちは一息にグラスの中身を呷った。共に思い描くささやかな計画の実現を祈願して。

嵐の予兆（後書き）

場面で取り上げたゲームは、チェスのようなものとでも思って頂ければ。次回は武芸大会に戻ります。

勝者の微笑み（前書き）

武芸大会三日目、団体戦決勝の模様です。それではどうぞ。

勝者の微笑み

待ちに待った剣士の登場に会場の観客たちが一斉に声を上げた。

宮殿の中腹、大きく迫り出したバルコニーには、正装に身を包んだこの国の王族たちが、数多もの群衆でひしめく広場を見下ろすように並んでいた。国王を中心にその隣には妃、そして二人の皇太子たちとその家族の姿があった。遠目にも鮮やかな深紅の衣に身を包んでいるのは、この国の頂点である国王だという。会場から見れば小さな点のような姿だが、それでもこの国の統治者を前に人々が大きな興奮状態に包まれているのが分かった。

耳をつんざくような囃し声。選ばれし男たちの名前を声高に呼ぶ声。老いも若きも男も女も関係なく、この場に集まった人々は、皆、様々な思いを内に秘めて、この広場の中心に佇む二人の男たちに注目していた。

一人は、銀色の頭髪を風に靡かせ、酷薄そうな面を惜しげもなく晒している男、スタルゴラド第七師団の団長、ユルスナール・シビリークスである。そして、もう一人は、端正な顔立ちに明るい金茶色の髪を優雅に翻す男、スタルゴラド第一師団・団長マクシーム・フラムツォフだ。共にこの国の貴族階級の出身であり、貴族の婦女子たち、そして軍部のみならず街中の一般庶民からも絶大な人気を誇る美丈夫たちだった。

絶え間なく沸き上がる声援に軽く片腕を上げることで応えながら、男たちは審判が立つ広場中央へと進み出て行った。

武芸大会最終日、この国が誇る猛者を決める決勝戦では、審判は正装をした将軍が勤めた。この国の軍部には東西南北の四つの方位に因んだ四人の将軍がいるが、この度、対戦者の縁となる【北（シービリ）】を除いて、今回は【東（ヴォストーク）】のボストークニ家がその晴れがましい役目を負うことになった。東の将軍が目にも鮮やかな朱鷺（とき）色のマントを翻

して中央に立つ様は、ただそれだけでも圧巻だった。
　因みに蛇足だが、現【東の将軍】は、あのレオニードの兄上である。しかし、兄の方は弟とは違いユルスナールに対しては別段何の感情も抱いてはいなかった。

　リョウは、多くの男たちが周囲にひしめく中で、埋もれるようにして観衆の一部に同化していた。シーリスの計らいで宮殿とは真逆側の中央付近の最前線で見物をすることができていた。ここは軍部の兵士たちが多く集まる区域で、自然と屈強な男たちに囲まれることになる。
　リョウの隣にはシーリスがいた。そして、その隣には今大会中はずっと控えに回っていた第七の二人の兵士、グントとヤルタがいた。
　彼ら二人は今回出番がなかったものの、久し振りの王都とこの大会特有の興奮に銘々が生き生きとしていた。二人はきっと北の砦に帰るやいなや留守番の兵士たちに囲まれるに違いない。そして、グントなどは身ぶり手ぶりを交えて、いかに大会が凄いものであったか、そして第七の兵士たちが勇敢に戦ったかを若干の誇張を補正として加えつつ話して聞かせるに違いない。それから食堂の兵士たちの話題は暫くは武芸大会一色になるのだろう。そのような一連の様子が、リョウには手に取るように想像が出来た。
　養成所のお馴染みの面々（ヤステル、リヒター、バリースの三人に今日はアルセーニィーとニキータも加わっている）は、共にリョウの左側にずらりと陣取っていた。初めの内は、がたいの良い兵士たちに囲まれているので内心、恐々としているようだったが、試合が始まれば、それはすぐに意識の外に追いやられたようで、気合十分声援に大声を張り上げていた。

　大会三日目の団体戦決勝、第七師団対第一師団の試合は、共に四人の選手たちを使い果たし、大将同士の戦いに突入した所だった。

各試合共に力量の拮抗するいい対戦だった。先程、ブコバルと第一の四番手の選手が引き分けたのだ。

そして、ここで両師団の団長が雌雄を決すべく、この場に顔を揃えることになった。

ユルスナールの左腕には昨日と同じ黒いリボンが翻っていた。昨日と同じように今朝、その左腕にリボンを結んだ時、ユルスナールはやけに真剣な顔をして次のようなことを言った。

この大会が終わった後に大事な話がある。そして、今日の決勝戦では必ずや勝ってみせる。自分にこの勝ちをくれるから、その代わりに一つ願いを聞いて欲しい。

突然、何を言いだすかと思えば。

そのような台詞を口にしたユルスナールにリョウは小さく微笑むとゆっくりと首を左右に振った。

勝負の行方は、ユルスナール自身のものだ。自分は勝ち星や勝敗の結果を称えることはあってもそれを欲しいとは望んではいない。無事試合を終えて戻って来てくれればそれでいい。それ以上に何を望む事があろうか。

そう告げれば、ユルスナールはほんの一瞬だけ虚を突かれたような顔をした後、破顔してみせた。

すると今度は、交換条件のように言った。では、頑張った折には褒美が欲しいと。

急にどうしたというのだろう。四角張って真面目なきらいのある男にしては珍しく、悪戯っぽさをその瑠璃色の瞳の上に乗せながら、そのようなことを口にしたのだ。

「褒美……ですか？」

「ああ」

どこか期待に満ちた眼差しにリョウは半ば面食らい、困惑をしたように眉を下げてそのようなことを強請った男を見上げていた。

「ワタシにはルスランにあげられるようなものは何もありませんよ

？」

男とはもう何度も身体を重ねていた。高価なものを持っている訳でもないし、なにか特別な力がある訳でもない。男にとって将来有利となる特別な伝手や繋がりがある訳でもなかった。あるのはこの身体一つだけで、それすらも、もう男にとっては別段真新しいものでも無くなっているはずだった。

それなのに。

「そんなことはない」

ユルスナールは何故かきっぱりと断定した。

そして、じっと黒い瞳を見下ろすと意味深に笑った。

「まだ一つ、唯一のものが残っている」

「唯一のもの……ですか？」

それはこの命だろうか。だが、それすらも今の自分には酷く曖昧なものだった。

「ああ」

そのような御大層なものなどないはずなのだが。

リョウはユルスナールが何を望んでいるのか、いまいちよく理解をすることができなかったのだが、取り敢えず、

「ワタシにできることであれば」

そう言って首肯した。

常識あるこの男ならば、途方もない要求はしないだろうと踏んでのことであったが、この一言が、この後、あのような予想外の騒ぎを呼ぶことになろうとは、この時、リョウは露ほども思っていなかった。

「よし、ならば約束だ」

途端、意気揚々と声を上げたユルスナールは、不意に何かを思いついたというように傍らにある黒い瞳を見下ろした。

「リョウ、指を出せ」

徐に自分から人差し指を一本差し出した男を見てリョウは小さく笑った。

「子供が約束をする時にするお呪いなのでしょう？」
それは、この間、エクラータ嬢から教わったばかりの習慣だった。互いの人差し指の腹を小さく突き合わせて約束を口にするのだ。それはこの国で子供同士がよくやる遣り取りらしい。
そのような子供染みたことをこの強面のいい年をした兵士である男が率先してやろうという。その絵図らの可笑しさに笑いが込上げてきた。
「知っているのか？」
「はい」
「ならば話は早い」
込上げる笑いを堪えるようにしていれば、男は笑われていることを気にした風でもなく促すようにこちらを見ていた。
「ほら」
尚も念を押されてはやらない訳にはいかなかった。
嬉々としてごつごつとした太い指を自分へ向けて差し出したユルスナールにリョウも小さな指の腹を向けて、その先に腹をちょんと当てた。
「約束だな」
「はい」
機嫌良く嬉しそうに微笑んだ男にリョウもそっと微笑み返していた。
こうして今朝、団体戦の決勝へと向かう男を送り出したのだ。

中央に歩み寄るユルスナールは、とても立派に見えた。この日は、御前試合ということもあり、対戦する兵士たちはこの国の軍部の正装に身を包んでいた。国王を迎えた一世一代の大舞台。男たちにとっては晴れがましいことに違いない。
リョウは眩しいものを見るように目を細めた。身に着けている防具も昨日までのものとは違い煌びやかで真新しいものだった。日の

光を浴びて、金属がいぶし銀のように鈍く光を湛えている。所々、補強に取り付けられた鉱石が艶やかに照りを反射している。肩の辺りには、紋章のようなものが付いていた。

甲冑は全身を覆うものではなく、動きやすさを優先させた必要最低限のものだった。それがこの国の一般的な仕様なのか、それともこのような試合用に特別に誂えられたものなのかは、リョウには分からなかった。

二人の剣士たちは、中央まで歩み寄ると審判に目礼し、それから宮殿の方に身体を向けるとこの国の統治者に最敬礼をした。

そして、威風堂々たる審判の朗々たる合図を皮切りに、団体戦最終の大将決戦が火蓋を切って落とされた。

この国に男として生を受けたのならば、一度は夢見るであろう大舞台。長い歴史と共に続くこのスタルゴラドの武芸大会は由緒あるもので、剣で身を立てる者の憧れでもあり、目標でもあった。

止まるところを知らない歓声を背にユルスナールは、静かに広場中央へと歩みを進めた。周囲の興奮に同調するように身体の奥底が小さく疼いてくるのが分かった。それでも頭は冷静でいられた。上ずるような緊張もない。静かな高揚感が身体を支配し、漲(みなぎ)るように四肢の末端にまで到達する。

軍人の家系に生まれたユルスナールは、幼いころからこの場所に立つことを目標にしてきた。かつてこの場に立ち勝利を収めた今は亡き叔父の姿を驚嘆と尊敬、そして憧憬と共に目裏に焼き付けていた。その大きな背中を追う形で十五の歳を待って騎士団に入団し、以来、日夜研鑽を怠ることなく禁欲的(ストイック)な程に己を律してきた。その結果、とうとう昨年の冬、かつての叔父と同じ場に立つことを許されたのだ。

限られた者だけが与えられてきた栄誉。そして、この場で勝利を収めることが、これまでの自分の努力と集まった人々の歓声に応える術だと思った。

決勝戦は、その前二日間の試合とは、かなり趣が異なった。この場所を支配する空気が、肌で感じる空気が違うのだ。沸き上がる歓声は、中にある剣士たちをも飲み込もうとする。そして、縦横無尽に隙間なく注がれる視線は無数にも肉体を突き刺し、見えない糸で絡め取ろうとする。それらの重圧を撥ね退けて己の力を発揮してこその舞台だった。

昨年は、この空気に若干たじろいでも呑まれることはなかった。だが、肝心の勝利は逃してしまった。その時の悔しさを糧にこの一年を過ごして来た。

そして、再び巡ってきたこの季節。仲間たちと共にここまで勝ち上がってきた。

今年は絶対に負けられなかった。必ず勝ちを収めたかった。この左腕に結ばれたリボンの為にも。この広い会場のどこかで己が戦いの行方を見守っているであろう人の為にも。

勝利をした暁には、予てより抱いていた心積もりをこのリボンを授けてくれた相手に告げる予定であった。今のユルスナールにとっては、こちらの方が失敗の出来ない一世一代の大舞台となるのだろう。

対戦者である第一の団長マクシームは、ユルスナールとは旧知の仲だ。昨年はあちらに優勝を攫われてしまったが、今年はそう易々と手渡せる訳がなかった。

「両者、準備はよろしいか」

「はい」

「ええ」

威圧感のある東の将軍の声に対戦者たちは更に気を引き締めた。

互いに掛ける言葉はない。視線が合い、小さく頷きを返す。それだけで十分だった。

マクシームもいつも以上に引き締まった顔をしていた。その体からは力(エネルギ)が漲(みなぎ)っているのが感じ取れた。現時点での力量は恐らく五分五分。手応えのあるいい試合になるに違いなかった。

ユルスナールはすらりと腰に佩いた剣を引き抜いた。そして、鮮やかに翻る将軍の朱鷺色のマントを合図に土を蹴った。

第一と第七、団長同士の大将戦は熾烈を極めた。第一の団長は近衛の精鋭（エリート）を束ねるだけあって、名実ともに備わった立派な男だった。リョウが初めて出会った時は、落ち着いた物腰の穏やかな人物という印象を受けたのだが、今、広場中央で剣を交わし合う姿は、その時のものとは随分と違っていた。

両者の力は拮抗していた。剣が繰り出され、金属の重みのある打撃音が周囲に甲高く響く度に、広い会場を取り囲むようにして集まる観客たちにどよめきが走った。

剣を交える男たちの波動（リズム）とじわじわと周囲を囲む数多もの群衆の鼓動（リズム）が、徐々に同調をしてゆくようだった。踏み込み、踏み込まれ、押し出し、押し返され。長靴の底が土を蹴る躍動感と粘るようにして踏みとどまる重圧感。そこに男たちの動きを寸分も逃すまいと息を詰めた観客たちの眼差しが重なる。

リョウもその中の一人として、拳を握りしめながら男たちの勝負の行方を追っていた。

「リョウ、力をお抜きなさい」

またもや肩に力が入っていたようで、隣に立つシーリスから宥めるように肩先を軽く叩かれた。

「……はい」

視線は前方に向けたまま、リョウは小さく答えると全身の力を抜くように緩く息を吐き出した。

この二日間、妙な力みからか一日を終えると肩から腰に掛けて酷く筋肉が凝り固まっていた。それを毎回、学生寮の小さな風呂に浸かりながら揉み解していたのだ。この分では今日も同じような末路を辿るのだろう。だが、それも今日で最後のはずだった。

リョウが観戦をしている周りには、これまで団体戦に参加してい

た出場者たちを始めとする兵士たちが多く集まっていた。大きな野次を飛ばす者はいなかった。皆、一様に真剣な表情で打ち合いの続く広場中央を睨み付けるように見ていた。今、舞台中央で決戦を繰り広げている二人は、この中から勝ち上がってきた猛者なのだ。

随分と長い時間が経過しているように思えた。死闘を繰り広げる二人の顔付きに、徐々に苦しいものが混じり始めているようだった。上下する胸から荒くなった息遣いまでもが聞こえてきそうだ。

「そろそろですかねぇ」

「ああ」

やけにのんびりとした声が隣から聞こえたかと思えば、シーリスの呟きに答えるようにその隣には第五のドーリンが澄ました顔をして立っていた。

「てか、あの体力（スタミナ）すげぇよなぁ」

「ここまで来てあれだけ動けるんだもんねぇ」

そしてドーリンのすぐ傍には、第五のイリヤとウテナも陣取っていた。

「今回ばかりは無様な真似はできないだろうからな」

不意に聞こえてきたドーリンの声に思わずそちらの方を仰ぎ見れば、ドーリンは珍しく意味あり気に小さく笑ってリョウに前を向くように促した。

「リョウ、よく見ておけ」

――――――あの男のあんなに必死な姿など滅多に見られるものではないからな。

その口振りは、微かにからかいのようなものを含みながらも淡々としていて、その実、相手（ユルスナール）のことを称えているようにも思えた。

リョウはドーリンの言わんとすることが良く分からなかったが、そちらに気取られている暇も無く、すぐに視線を広場中央で戦う銀色の頭部に戻した。

延々と続くかに思えた戦いにもやがて決着が着いた。最終的に驚くべき粘り強さと体力を誇った方に勝利の女神は微笑んだようだった。

横から空気を切り裂くようにして繰り出されたユルスナールの一撃にそれを受けたマクシームが体勢を崩した。そして、そのほんの僅かな隙を逃すことなく、鋭い一撃が再び繰り出されていた。

次の瞬間、ユルスナールの腕から伸びた剣の鋭い切っ先が、相手の喉元にぴたりと突き付けられていた。

全ての音が消えた。まるで周囲が真空になったかのように。

張りつめた静寂が会場を支配する。誰かがゴクリを唾を飲み込む音が聞こえたような気がした。

「勝負あり！」

審判が朱鷺色のマントを翻しながら高らかに判定を謳い、それから一呼吸の間を置いて轟くような歓声が同時多発的に周囲から立ち上った。

男たちの雄叫びが、地鳴りのように大地を震わせた。

「ウラァァァアアー！！！」

歓喜に満ちた声が、直ぐ近くからも沸き上がっていた。

グントとヤルタが大声を上げて肩を抱き合い喜びに飛び跳ねていた。そして周りにいた兵士たちが二人に向けて次々と祝福の言葉を掛けていた。

「勝った……んだ」

周りの反応から遅れること暫し、漸くリョウも事の次第を飲み込んだ。

思わず呆けたような声を上げたリョウに、シーリスが隣から肩を抱くようにしてその体を揺さぶった。

「ええ」

口にする言葉は少なかったが、そこに浮かぶ表情を見れば、シーリスがとても喜んでいることが分かった。

じわじわと喜びが体中に広がった。

そして、リョウも周りの男たちの興奮に感染するように、
「ウラァー！」
両手を突き出して祝福の叫び声を上げると勢い余ってシーリスに抱きついていた。

ちょうどその頃、舞台中央では、剣を納めた第一の団長がゆっくりと対戦相手に歩み寄り、その左腕を取ると高らかに上方へと掲げ勝者を称えた。
周りからは一段と大きな歓声が上がり、盛大な拍手が送られた。
掲げられた男の腕に揺れる黒いリボンの切れ端を目にして、リョウは何故か胸が詰まりそうになった。
それからユルスナールは、舞台後方、ずらりと並んだ仲間の元へと下がって行った。出迎えたブコバルと固く握手を交わし合う。そして次にアナトーリィーの手を掴もうとした所で、ブコバルが相棒の頭部へ手を伸ばすとこの日の為にきっちりと撫で付けられていた髪をぐちゃぐちゃにかき乱した。若干、鬱陶しそうな顔をして見せたが、戦いの直後の気持ちの高ぶりのままにユルスナールも笑顔を浮かべていた。そして、嬉しそうに口元を綻ばせながら仲間たちから入る茶々に応えていた。方々から（主に知り合いの兵士たちだ）喜びを噛み締める第七の面々に祝福の声が掛かった。

弛緩した空気を引き締めるが如く発せられた将軍の号令に団体戦に出場した総勢十名の兵士たちは審判を中心に再び整列した。対戦者たちは静かに一礼した後、徐に宮殿の方へ向き直り、その中腹から試合の一部始終を見届けていた国王を始めとする王族たちに深く敬意を表した。その後、ゆっくりと観客たちの方へ身体を向けるとこの国の兵士らしく息の合った敬礼をした。
それに応えるように観客たちからは、『ワァァァアアー』と一斉に声が上がった。そして、この時ばかりは勝者、敗者の関係なくこの場で多くの人々を魅了する熱き戦いを繰り広げた剣士たちに惜

しみない拍手が送られたのだった。
リョウも居並んだ男たちを前に同じように手が痛くなるくらいに拍手を送った。
とても誇らしくて嬉しくて仕方がなかった。まるで子供の頃に戻ったかのように大きな声を張り上げて男たちの健闘を称えた。
「リョーウ～！」
反対側ではしゃいでいたバリースから高く突き上げた掌を差し出されて、リョウもそこへ勢いよく掌を打ちつけた。共にいたヤステルやリヒター、ニキータ、アルセーニィーとも同じように喜びを分かち合う。それでも興奮が収まらないのか、勢い余って抱きついてきたバリースの一回りは大きな体を慌てて支えようとするが、余りのはしゃぎ振りにリョウの小さな身体はいとも簡単に後方へ傾いた。それにすぐさま反応をしたのはヤステルで、ぎょっとして手を伸ばしたが間に合わず、あれよあれよと言う間にすぐ脇にいたリヒター、ニキータ、アルセーニィーをも巻き込んで、折り重なるようにして皆で尻もちを着いていた。
六人は痛みに顔を顰めながらも、顔を見交わすと声を立てて笑いあった。それを見た周りの兵士たちも囃したてるように一斉に笑った。
地面に仰向けになって、そこから見えるスタリーツァ（王都）の冬の空は、遠く澄んでいて、周囲に響き渡る高らかな笑い声と同じようにからりと晴れ渡っていた。

「リョウ、今からそれでは身が持ちませんよ？」
苦笑を滲ませたシーリスの言葉にリョウは勢いよく身体を起こした。
「そうでした」
今、漸く団体戦が終わったばかりなのだ。この後、ユルスナールは個人戦の決勝を午後に控えていた。第七の皆が優勝したことはこの上なく喜ばしいことなのだが、まだ全ての試合が終わった訳では

なかった。気を抜くのはまだ早かった。
年甲斐も無くはしゃぎ過ぎたことに照れ笑いをしながら、差し出されたシーリスの手を取って立ち上がる。そして埃まみれになった外套やらズボンやらを叩いた。
リョウは再び会場を振り返ると大きく息を吸い込んだ。
「おめでとうございます！」
そして、ゆっくりと控えの天幕の方へ下がって行く五人の勝者たちの背中に、最後の一声を張り上げたのだった。

勝者の微笑み（後書き）

次回はいよいよ個人戦決勝です。ユルスナールは男になれるのか？

ご期待下さい（笑）。

愚者の敬虔なる儀式（前書き）

今回は、サブタイトルに悩みました。もう一つの候補は【この手を離さないで】。

愚者の敬虔なる儀式

――――――――我、ユルスナール・シビリークスは、あなたに心からの忠誠をここに誓う。我が喜びは、あなたと共にあること。我が幸いは、あなたと共に道を歩むこと。どうかその寛大なる御心をもってこの手をお取り下さい。あなたの下僕となった愚かな男の手を。

朗々とした低い艶のある声の後に、跪いた男が徐にその右手を差し出した。そこには、この三日間、男が離さず左腕に身に着けていた黒い紐が、その両端を垂れ下がるようにして乗っていた。

「もし、あなたが慈悲深く、我が想いに応えてくださるのであれば、どうかこのリボンを我が手に」

――――――――巻いてください。

突然、醸し出された厳かな空気と共に始まった男の口説。余りにも急な出来事に頭の中が真っ白になった。

リョウは呆けたような顔をして目の前に跪く銀色の髪の男を見下ろした。

耳に入った言葉が、意味を成さない音の羅列のように通り過ぎて行く。一度、変換された意味合いが一つの形となり、再びバラバラに分解される。字面だけなら追うことができても、それが口にされた時（タイミング）と向けられた相手が間違っているような気がしてならなかった。

周囲から雑音が消えていた。空間が急速に縮小し、この場が自分と男、二人だけの閉じられた世界になった気がした。

「今……なん…て……？」

あの薄い唇が、今、何を紡いだ？　何を言った？

その意味を図ろうとして、驚愕の余りに思考が全停止した。

＊　＊　＊　＊　＊

怒涛のような歓声が、周囲を埋め尽くしていた。体中の細胞が外部からの音の洪水に反響する。耳の奥がガンガンと鳴り、様々な叫び声、悲鳴、囃し声が共振を繰り返し、増幅して行った。

午後から始まった個人戦の決勝、戦いの神【セマルグル】は、銀色の髪を持つ男に勝利の盃を掲げた。

二人の剣士は作法に則り一礼をしてから宮殿へ向けて最敬礼をすると再び観客の方を向いた。水色の腕章をその右腕に巻いていた第一師団所属の兵士は、青色の腕章を巻いた第七の兵士に歩み寄ると晴れやかな笑顔で言葉を交わし、その左腕を高らかに掲げてみせた。

そこには、この三日間、激戦に耐え抜いた男と共にあった黒いリボンが吹き抜ける風に翻っていた。

観衆は、一斉にこの日最後の戦いを繰り広げた猛者たちに惜しみない拍手を送った。

午後からの個人戦決勝は、ユルスナールが勝利を収めた。リョウは、身体の内側で鳴り響く己が心臓の鼓動を持て余すように自分の手を胸の前できつく握り締めていた。

午前、団体戦の方で第一の団長と激闘を繰り広げたユルスナールは勢いに乗っていた。その流れは失われることがなかった。そして、午後からの個人戦ではそれまでの疲れを見せることなく己が力で勝ち星をもぎ取ったのだ。男の体から発せられる並々ならぬ気迫は遠く離れたこの場所にも十分伝わって来ていた。そして、剥き出しの闘志と華麗なる剣技は、数多もの観客たちを釘づけにした。

このまたとない快挙を胸内に刻みつけるように、リョウは大きく息を吸い込むと暫し目を閉じた。

今日、この日のことを決して忘れはしないだろう。この興奮と高

揚と不安と安堵と。様々な感情の入り混じった三日間だった。ここに集う多くの人々が落胆し、泣き、笑い、歓喜した一体感。この時、ここでしか味わうことのできない特別な経験だった。

一頻り人々の声援に応えていた二人の剣士たちはゆっくりと舞台中央から下がっていった。そして主役のいなくなった舞台中央では、揺らぐ熱気がいまだ燻るように興奮の余韻を引きずっていた。

ユルスナールがこちらに戻って来たら、まず心の底から『おめでとう』と言おう。リョウはそう決めていた。団体戦に引き続き、個人戦でも勝利を収めたのだ。これ以上の快挙があるだろうか。

言いようのない興奮が、リョウの心を捕らえていた。男の勝利が、まるで我が事のように嬉しく、そして誇らしかった。

そのまま控えの天幕へと戻るかに思われたユルスナールは、会場をぐるりと見渡した後、何故か進路を変えた。そして、ゆっくりとこちらに向かって来るように思えた。

リョウの周りには、ブコバル、シーリスを始めとする第七の兵士たちがいた。団体戦を共に戦った仲間たちも、午後からは遠くから己が団長の個人戦の行方を追っていたのだ。先程と変わりなく、この付近にはドーリンたち第五の兵士の姿もあった。

この後、この広場では、余興として個人戦の優勝者と南の将軍による模擬試合が行われる予定だった。そして、その後に団体戦優勝者と個人戦入賞者上位十名への表彰式があり、参加者全員を集めた閉会式をもって全ての行程が終了とされた。

ゆっくりとこちらに歩み寄った優勝者に方々から祝福の声が掛かった。

「おめでとうございます、ルスラン。お見事でした」

「ああ」

第七の面々が集まる所にやってきたユルスナールは、シーリスの言葉に目を細めると小さく頷いた。

隣にいたブコバルが無言のまま拳を突き上げる。それにユルスナールも男らしい笑みを浮かべながら拳をぶつけることで返した。

そのまま戦いを勝ち抜いた体格の良い男の姿は、一言言葉を交わそうと周囲に詰めかけた多くの兵士たちに囲まれて見えなくなってしまった。

リョウは、後方に控えて喜びを分かち合う男たちの姿を眺めていた。同じく軍に所属する者同士、同じ環境に身を置く者たち同士、そこには自分には測り知ることのできない絆と繋がりがあるのだろう。

暫くして、ユルスナールの視線が何かを探すように彷徨った。隣にいたドーリンが何事かを小さく口にする。そして、頷いた視線がこちらに向いた。深い青さを湛えた瑠璃色と真っ直ぐに視線がかち合って、リョウは男の快挙を称えるように微笑んでいた。

返すように男が頬を緩めていた。

それからユルスナールはリョウの傍まで来ると、突然、その場に片膝を着いて跪いた。身に付けた防具の膝当てが、乾いた地面に当たりカチャリと金属音を立てた。

男はそのままリョウの手を取るとその甲に小さく口付けた。そして、視線を合わせるように黒い瞳を見上げると、真剣な顔をして淀みなく宣言のような文言を紡いだのだった。

リョウは呆気にとられて、立ち竦んだまま男の行動を見ていた。

そして、舞台は冒頭へと戻る。

リョウは、その場で何度も目を瞬いた。口を開いて何か言葉を発しなくてはと思うが、具体的に声が出て来なかった。

これは何かの芝居の一幕だろうか。それ程、ユルスナールの取った行動は、突拍子がなく珍妙で芝居がかって見えた。

リョウは吃驚したままユルスナールを見下ろした。それでもそれをやった男の方は大真面目なようで、誠実すらある真摯な表情でこちらを見上げていた。

妙な緊張が周囲に張りつめていた。
跪いた男が差し出した右手には、あの黒いリボンが掛かっている。
それを手に取れというのだろうか。言われた言葉を胸内で反芻してみる。
だが、それは安易にしてはいけないことのように思えた。
とても重要な事を切り出されている。動揺しながらも、それは理解することが出来た。
「あの……ルスラン？……これは、一体……」
――――――何の真似ですか？
男が取った唐突とも思われる行為の前提条件が分からないリョウは、ただただ驚いて、試合の後、落ちかかる前髪をそのままに静かにこちらを見上げる男を見下ろした。
男の額際には激しい戦闘の結晶である汗が幾筋も滴り落ちていた。不意に濡れて張り付いたその前髪を後ろに撫で付けてやりたいという衝動に駆られた。それは現実逃避に近い行動なのかもしれない。
瑠璃色の双眸は、とても真剣で強い光を発していた。決意のようなものを秘めているのか、やけに熱っぽく感じられた。深い青さを称えて揺らいでいる。
硬直したままのリョウにユルスナールは愛おしそうに目を細めると試合直後の高揚のままに熱に浮かされたように囁いた。
「リョウ、どうかお願いだから、この手を取ってくれ」
それをするとどうなるのだろうか。
尚も面食らったままのこちらの心の内を読んだのかは知らないが、ユルスナールは小さく微笑むと、
「我が心は生涯お前のものに」
恐ろしい程に熱い言葉を吐いていた。
「これは……何かの儀式……ですか？」
試合を終える為に必要なものだろうか。
対するリョウから漸く漏れた言葉は、この状況をよく知る周囲にしてみれば実にちぐはぐなものだった。

噛み合わない台詞に痺れを切らしてか、シーリスが苦笑を零しながら助け船を出した。
「リョウ、リボンの意味は何だか分かりますか？」
リョウは、顔を上げるとつらつらとこれまでに耳にしたこのリボンの習慣が生まれた経緯とその使われ方を思い出していた。
意中の相手からリボンを授かった男は、それを腕に巻いて試合に出場し、見事勝利を得た暁には、それを渡してくれた女の下を訪れて愛の告白をする。そこで女の側がその手を取れば、恋が成就したものとみなされた。片恋に焦がれる男の求愛や果ては求婚に利用されたりするのだとか。
そこまで考えて、リョウは目を見開いた。
――――――まさか。
ユルスナールは、衆人環視のこの場で自分に求愛をしているのか。
だが、それと同時に態々そのような事をこの場で口にした男の意図が読めなかった。自分の気持ちは男の方も端から知っているはずだからだ。そうでなければ身体を重ねたりはしなかった。何を今更という感じである。
いや、それともこれには何かもっと重大な意味が隠されているのだろうか。
ぐるぐると思考の渦に流されるようにして沈黙を貫いたリョウに外野から追い打ちが掛かった。
「リョウ、よーく考えた方がいいぜ？　でねぇとここでお前の一生が決まっちまうからな。……って言ってもどうせお前にゃ選択肢なんぞねぇんだろうがよ」
振り返れば、ニヤニヤとした笑みを浮かべながらブコバルがこちらを見ていた。
その台詞にリョウは更に驚いて目を見開いた。
自分の一生が決まるとは何の話だろうか。
「どういうことですか？」
それほどまでに重要な意味合いがあるのだろうか。

周囲にいる男たちは、皆、その意味を知っているようだった。痛いくらいの沈黙と突き刺さるような視線があちこちから注がれているのが感じられた。

リョウは途方に暮れたように辺りを見渡した。だが、皆、下手に関わり合いになりたくないのか、それとも高みの見物を決め込んでいるのか、自分が望むような答えをくれそうな者はいなかった。

そうするうちにやっとドーリンが小さく咳払いをした。

「ルスラン、相手に通じないのでは話にならんだろう？」

ドーリンの尤もらしい言葉にユルスナールは苦笑を滲ませた。

「そうだな」

ユルスナールは、一向に立ち上がろうとはしなかった。跪いたまま、少し考える風に首を傾げたかと思うとその薄い唇が、とんでもない言葉を吐き出していた。

「リョウ、単刀直入に言う。私の妻になってくれ」

その瞬間、周囲に何とも言えないどよめきが走った。皆、意表を突かれた顔をして、突如として始まったこの奇想天外とも言える成り行きをじっと見守っていた。

突然、始まったのは、この武芸大会開催期間中ではある意味、恒例とも言える若き男の求愛行動だったが、それを行う人物とその想いを向けられた相手が彼らにとっては予想外もいい所だった。

――――――妻になってくれ。

リョウは、頭を鈍器で殴られたような衝撃を受けていた。喉がからからに乾いてゆく気がした。

このような時になんてことを言ったのだ。いや、このような時だからこそか。混乱をするように思考が止めどなく溢れ出していた。

これまでのことから互いを憎からず思っている。それは十分理解していた。それでも、まさか男の側から求婚をされることになるとは思ってもいなかった。

だって、ユルスナールには決まった相手がいるはずだった。この

国の由緒ある貴族の男として然るべき所から妻になるべき相応しい人を貰うはずで、男の未来に自分は入らないはずだった。
沸き出してくる様々な想いを封じ込めるようにリョウはきつく目を閉じた。
今、この場で安易な返事は出来なかった。自分の一言が、男の今後を大きく左右してしまうかもしれないのだ。
ユルスナールが何をどこまで考えているのかは分からなかった。それに気持ちだけではどうにもならないことがある。目裏に浮かんだ一人の若い女の顔。素直に本心をぶつけるには状況が霧に包まれていた。
それに、ここには人目もあった。男の面目が潰れないように慎重に言葉を選ばなくてはならないだろう。
「リョウ？」
催促の言葉に、リョウはほんの少しだけ困ったように微笑んでいた。
そして、緩く首を振った。
「少し時間を下さい。正式なお返事は後日改めて致します」
リョウは、ユルスナールの手にそっと自分の手を乗せた。リボンを手に取ることはしなかった。いや、出来なかった。触れた指先が震えた。
探るような視線がこちらを捕らえていた。このままでは何もかも見透かされてしまいそうだと思った。
リョウは堪らなくなってその場に同じように膝を着いた。これで目線も立場も対等になったことだろう。
リボンが乗った男の掌を両手で閉じるようにそっと包むとそこに額を押し付けた。
「たとえどのようなことがあろうとも我が心はあなたの傍に」
この場では、それだけ口にするのが精一杯だった。
どうか分かって欲しい。勝手な事を言っているとは分かっている。それでも、それが多くの犠牲を払うことを知りながら、男の人生に

自ら首を突っ込む事は出来なかった。
「分かった」
ユルスナールは、小さく息を吐くと静かに頷いてみせた。
この気持ちがどこまで相手に伝わったかは分からない。それでも小さな頷きと共に自分の要求は受け入れられたのだ。答えを引き伸ばした。姑息なやり方だろう。
リョウは恐る恐る顔を上げた。そして、そこにある優しい微笑みに何故か泣きたい気分になった。
「では返事は後日改めてということだな」
「はい」
ユルスナールは男らしい余裕ある笑みを浮かべてみせた。
「こう見えて俺は諦めが悪いからな。お前が首を振るまでしつこく食い下がるぞ？」
そんな軽口すら叩いて男が立ち上がった。
同じようにしてリョウもその場に立ち上がった。
ユルスナールは手を伸ばすとリョウの頬にそっと触れた。
「色良い返事を待っている」
薄い唇がそんな台詞を紡いだかと思うとリョウの顔に影が差した。そして触れるだけの口付けが落ちてきた。
そして、来た時と同様に颯爽と控えの天幕の方へ踵を返した逞しい背中をリョウは一人見送ったのだった。湧き上がる様々な想いをこの胸内に抱えたまま。

愚者の敬虔なる儀式（後書き）

ユルスナール殿、試合直後で気分がハイになっていたのかは知れませんが、衆人環視の場でやってくれました。リョウは一人、混乱中です。次回に続きます。

若者たちの好奇心（前書き）

前回の続き。さて残された人々の反応はというと……。短い小話的なお話を挿みます。

若者たちの好奇心

そうして青天の霹靂とも言える宣言（求婚）をした男が、一人悠々と去って行った後、その場所には、何とも形容し難い空気が残像のように残り、漂っていた。

男の背中を見送っていたリョウが静かに振り返れば、事情を良く知るシーリスは苦笑い。ドーリンとイリヤは良識ある者同士、どこか呆れたような顔をして、その口元には薄らと苦笑を滲ませており、ブコバルとウテナは共に完全に面白がっている風だった。その向こうにいるロッソは、驚きつつも理解をしたような訳知り顔で、アッカ、アナトーリィー、グントは、なんとも言えない微妙な顔をして、引き攣りそうになる口元をなんとか自制をして堪えているようだった。ヤルタは大きな図体にきょろりとした円らな瞳をパチパチと瞬かせて、その顔色は明らかに悪かった。

もしかしなくともやってしまったようだ。いや、この場合、突然あのようなことをしでかしたユルスナールが悪いのだが、そのことを声高に非難しようとも、その矛先を向けるべき相手は、やりたいことをやってさっさと姿を消してしまったのだから、どうしようもなかった。

一人残されたリョウは途方に暮れた。だが、どうすることも出来ないので、敢えて外野を黙殺することにした。周囲にいるであろう不特定多数の観客たちのことは、この際、気に留めないことにした。

あの第七師団・団長が求婚まがいの熱烈な告白をした。きっとその噂は、もの凄い勢いで街中を駆け巡ることだろう。そして、有名である男の方が話題に上り、それを向けられた相手については有耶無耶になることを密かに期待をしてみることで、リョウは自分を慰めることにした。

兵士たちの方は、一先ずよしとしよう。ここまできたら第七の仲

間たちにはシーリスから説明が入るであろうから。
問題はあそこだ。リョウは取りとめのない考えを払うように緩く頭を振ると固まったまま沈黙を守る人々の中から若い顔触れを探し出した。
養成所の友人たちだった。ここは避けては通れないだろう。
リョウは若き友人たちの傍に行くと何事もなかったかのように微笑んで見せた。
居並ぶ五人の中で、一番早く息を吹き返したのは、やはりここでの兄貴分であるヤステルだった。
「あーとだな。……なんだ。……その」
視線をうろうろと彷徨わせて、ヤステルは言い難そうに言葉を濁した。
きっと掛けるべき言葉を探しあぐねているのだろう。思慮深いヤステルは、目の当たりにした出来事を彼なりに果敢に処理しようとしているのかもしれない。
「てか、リョウ。……まさか！　まさか……お前」
言い淀んだヤステルの傍らで、ここでもその本領を発揮するのは、バリースだった。
急に我に返ったバリースは、リョウの肩に掴みかかると突発的な勢いのままに揺さぶった。そして、外套の合わせを開いたかと思うと今度はそこにある上着の釦に手を掛け始めた。
「あ、おい、バリース！」
焦った声を上げたヤステルの制止の声は耳に入らない。
物凄い速さで上着の釦を外していったかと思えば、前身ごろを開き、そこにある一点をまじまじと見た。
「あ……れ？」
何をやろうとしていたのか、その意図が分かったリョウは、一先ずバリースにさせるがままに大人しくしていたのだが、上着を開いてシャツ一枚になった胸の辺りへじっと探るような視線を投げたま

ま微動だにしない。
ここまでやっておきながら最後の最後で躊躇っているのか。それともそこまでしてもどちらか分からずに考えあぐねているのか。
幾らこの国の女たちの標準体型とはかけ離れた身体をしているという自覚があると言っても、ここまでしておきながら分からないものだろうか。バリースの行為は、違う意味でリョウの女としての自尊心（プライド）を傷つけた。
決してふくよかな方ではない。肉感的な方でもない。それでもそれなりに男とは違う柔らかい身体をしているとは思っていた。
ここまで来ると自棄だった。
「バリース」
リョウは小さく息を吐き出すとシャツの釦を上からもう二つほど緩めた。そして、上着の端に掛かっているバリースの手を掴むとそのまま己が胸の上に宛がった。
「あ……え？……」
バリースは目を白黒させて、リョウの顔と胸元に置かれた自分の手を交互に見遣った。
それから暫くして、反射的に感触を確かめるようにその手を動かした後、
「やわら……かい？」
ぽつりと呆けたように呟いた。
ここまでしないと気が付いてもらえないというのは、正直、哀しいものがあった。
「――――で。ご感想は？」
リョウは、そこでにっこりと微笑んでみた。
それは些か迫力のある笑みだった。大体にしてのんびりとした性質で穏やかな気性のリョウには珍しい反応（リアクション）だった。ここまでしておいてよもや間違えることはしないだろう――そんなドスの利いた副音声が聞こえてきそうだった。
その笑みを真正面から見たバリースは、ぎょっとして勢いよく手

を離した。そして、挙動不審気味にあわあわと捲し立てた。
「いや、これは、その、なんつーか。ごめん、リョウ。てか、女だったんだな。思ったより意外にあるっていうか。最初は良く分かんなかったけど……って、いや、じゃなくて。その、よく分かったからさ」
「馬鹿、落ち着けって」
狼狽したままのバリースの頭をヤステルが勢いよく引っ叩いた。
パシンと小気味良い破裂音が周囲に響き渡った。
「アタッ。今、思いっ切り行っただろ！」
バリースが頭を抱えながら恨めし気にヤステルを見た。
「いや？　気の所為だろ、軽いもんだぜ？」
ヤステルは余裕たっぷりに肩を竦めて見せた。
そして始まったいつものような漫才らしい空気に、リョウは内心安堵に似た思いを抱きながら、二人の遣り取りを半ば呆れたように笑った。
そんな二人組を尻目に、
「そっかぁ、リョウは女の子だったんだね。気が付かなかったよ」
一人、己が道を行くリヒターは、しみじみと納得したように口にするとのんびりと笑った。
実際問題【女の子】という括りをされるような年でもなかったのだが、それを言ったら余計に混乱を招きそうなので、リョウは大人しく頷いていた。
「あはは。別に隠していた積りはないんだけれどね」
紛らわしいことをしているという自覚はあったので一応謝ってみる。
「ごめん」
「マジかぁ」
『全然気が付かなかった』とヤステルが改めて大きく溜息を吐いた横で、
「いや、びっくりだわ。今年一番の驚き」

「ああ」
それまで沈黙を守っていたニキータとアルセーニィーが狐につままれたような顔をして互いに顔を見交わせた。
「うっわ。でもマジ焦ったぁ。俺、団長が『まさかそっちの人！』とか思って軽く衝撃（ショック）っていうの？　度肝を抜かれたとこだったからさぁ。いや、ホント。取り敢えず良かったよ」
何が良かったんだか。
調子良くバリースはそんなことを言って、心底安堵したように笑った。
その論点は、何だか分かるような分からないような妙な論理で、ズレているような気がしないでもなかったが、取り敢えず、バリースの抱く【理想の第七師団・団長像】なるものが傷つかずに済んだようで、リョウは『そうか』と曖昧に微笑んでおいたのだった。

こうして漸く空気が元の軽妙さを取り戻しつつあった時、ヤステルが不意にリョウに同情するような視線を投げていた。
「ていうかさぁ、リョウ、お前、これからすげぇ大変なんじゃねぇの？」
「ああ、確かにそうだよね」
しみじみと口にしたヤステルにリヒターが同意をするべく頷いた。
「へ？　なんで？」
「そうだよ！　うがぁー、リョウ、マジで分かってない！」
首を捻ったリョウの隣で大げさにバリースが頭を抱えて唸り出した。
一々反応（リアクション）が大げさなバリースは取り敢えず置いておいて、常識派であるヤステルとリヒター、二人の言葉に尚も首を傾げたままでいれば、
「だって、あの第七の団長に求婚されたんだろ！　リボン巻いてたし。この街の女を敵に回したみたいなもんだってば！」
「はい？」

「俺、あんなの初めて見たよ」
「ああ。確かにあそこまで潔く慣例通りにやったのって珍しいかもな」
「しかも、よりによってあの人だ」
「ああ」
いきなり飛躍した話にリョウが目を白黒とさせていれば、ニキータとアルセーニィーの二人はリボン談議で盛り上がっていた。そして、二人は一頻り意見を交換し合った後、憐みともとれるような微妙な表情をしてリョウを見た。
「リョウ、ドンマイ」
「ああ。精々、気を付けろ」
「はい？」
「俺たちが言えるのはこのくらいだからな」
「ああ」
親切なのだかそうでないのか、意味不明なことを言って口を噤んだ二人にリョウは煙に巻かれたような気分を味わったのだった。
そうこうするうちに、
「リョウ、こちらにいらっしゃい」
シーリスから声が掛かって、リョウは友人たちの所から一旦離れることになった。

その後、友人たちがどのようなことを話していたのかについては、リョウは知らないままであったのだが、それはそれで良かったのかもしれない。
というのも。そこは若い男同士であるから恋の話には其々興味津々で。その後、友人たちの話題は自然と恋の話から好みの女の子の話になり、そこから飛躍するようにユルスナールの好みの話に発展した。そして、立派な軍人である名門貴族出身の男が、自分たちとそう変わらない（と彼らは思っている）庶民の（というよりもど田舎に暮らしている）少女に対して大真面目で求婚をしたという事実

に少なからず衝撃（ショック）を受けたのだとかいないのだとか。彼らの中でも世間一般の常識として、ユルスナールのような男は、同じような名門貴族の深窓の令嬢と恋仲になるだろうという考えがあったからだ。それからもう少し話を進めて、泣く子も黙る強面の第七師団長に対して俄かに少女趣味（ロリコン）疑惑が浮上をしていようなどとは露にも思わないだろう。流石、噂に違わず貴族であることを鼻に掛けない気さくな男だと褒める一方で、バリースなどはしみじみと『人は見かけに寄らないな』などと零していたらしい――というのはまた別の話だ。

若者たちの好奇心（後書き）

さて、個性的な友人たちの反応をお送りいたしました。バリースは相変わらず勢い余って暴走気味です。それをヤステルが宥めつつ、その隣でのほほんと笑っているのがリヒターという所。これまで余り登場をしてこなかったニキータとアルセーニィーの人物像がいまいち定まっていませんね。ひょろりとした博士風の感じがアルセーニィーで、寡黙ながらも口を開けば意外に毒舌なのがニキータです。次回は通常モードに戻ります。長かった武芸大会もあと一・二回で終りに出来そうです。ありがとうございました。

面影を重ねて

現【南の将軍】オリベルト・ナユーグは、広場に対峙する男の姿に静かに目を細めた。

この度、個人戦を見事勝ち上がってきた栄えある猛者は、オリベルトも良く知る男だった。

日の光を浴びて鈍く小さな漣のような光を反射する銀色の髪。その下にある余り感情の乗らないどこか作り物めいた造形は、オリベルトが良く知る一族の形質を引き継いだ証だった。

あの小僧がここまでに成長したか。オリベルトは、一人感慨深げに息を吐き出した。

かつての戦友を彷彿とさせる立ち姿。あの男と最後に剣を交えたのも、ちょうどこのくらいの年頃ではなかっただろうか。共に切磋琢磨し、同じ国軍の中で剣の腕を磨いてきた。オリベルトにとっては良き好敵手（ライバル）だった。

あの男、ラードゥガ・シビリークスは、二十年前の大戦の最中、最も熾烈を極めたとされる西の砦でその短過ぎる生涯を閉じた。若手の中でも随一の剣の使い手であり、当時、西の砦を守る実質的な長として多くの部下たちからの信頼も厚かった。

まさか、あの男が自分より先に逝くことになろうとは。当時のオリベルトには思ってもみないことだった。

長引く戦いに疲弊し、停滞した空気が鬱々と重くスタルゴラド軍部の中に圧し掛かっていた時期だった。あの時も、ちょうど季節は冬。実りの秋に豊かな収穫を終え、神々に感謝の言祝ぎをしてから凡そ一月後の良く晴れた日のことだった。

隣国、ノヴグラードがその南にあるキルメクを懐柔し、我が国の鼻先に再度大軍を展開した時、この国の中枢部は漸く事の重大さを理解した。対応としては恐ろしくお粗末で遅すぎるものだった。

当時、最前線となったのは、キルメクとの国境警備に築かれた西の砦だった。そこを死守できるか否かで今後の戦況の行方が左右される軍事的にも非常に重要な拠点だった。そこが切り崩されれば、以後は目立って軍事要塞的な機能を発揮する大きな都市がある訳でもなく、なだらかな平野が広がるスタルゴラド国内、一気に王都まで敵軍の侵入を許すことになるからだ。

当時、西の砦に駐屯していたのは、あの男、ラードゥガだった。

あの男がいたからこそ、我々は当時あそこで持ちこたえることが出来たのだ。あの男が勇猛果敢に兵を率いたからこそ、我々はその後、ノヴグラード側と休戦協定を締結するに至った訳だ。その事実は、残念ながらこの国の中央にはきちんと伝わっていなかった。その代わり、当時共に戦った兵士たちの胸には、あの男の姿は語り継ぐべき英雄として深く刻まれていた。

あの男は西の砦、ひいてはこの国を守ったのだ。その命と引き換えに。

自ら軍を率いて打って出た男は、満身創痍で戦いの最中に倒れたと聞いた。その時、男が身に着けていた衣服は、所々が破れ血に染まり、とても直視出来るものではなかったとその男の最期を看取った軍医が話していたという。それは、壮絶な最期だった。と同時に実にあの男らしい最期だと言えた。

ラードゥガは、口下手な男だった。言葉で何かを伝えるというよりも自らの体をもって行動することで周囲に示す、そんな男だった。不器用な男だった。【北】の方位を司るシビリークス家の形質を良くも悪くもよく引き継いだ無骨で実直な男だった。やや真面目が過ぎたかも知れない。自らに厳しく、己を律することのできる懐の深い男でもあった。

ラードゥガは、多くの部下に慕われていた。そして、中でもその後ろをせっせと付いて回っていたのが、現シビリークス家の末であり、あの男にとっては甥にあたるこの男だった。

小さな甥っ子にとっても叔父は憧れの存在で、子供の割に表情の

乏しい性質だったが、よくラードゥガの周りに張り付いていたのをオリベルトはよく覚えていた。たまさかの休みやちょっとした付き合いであの男の実家を訪ねるとそんな二人の姿がよく見受けられたものだった。

どちらかというと強面の部類で、鍛え抜かれた体格の良い男の傍に良く似た顔立ちの子供が張り付いている。その様は端から見るとどこか滑稽で、まだ若く独り身である男が明らかに戸惑っている様子が窺えるのも、また余計に笑いを誘ったものだった。

その男の兄である男（要するに子供の実の父親だ）は、自分よりも弟の方に末子が懐く様があまり面白くないようで、共に良く似た兄弟でありながらも拗ねた顔をして見せる。オリベルトなどはどっちもどっちだろうと思うのだが、見かけによらず子煩悩な所のある男を主とするその家は、いつ訪ねても穏やかで和やかな空気に包まれていて、オリベルトを妙にくすぐったい気分にさせたものだった。

あの時、ラードゥガの後を付いて回っていた小さな幼子も今や立派に成人をして、この国の軍部の中でも一・二を争う程の美丈夫になった。

そして、今、こうしてオリベルトの前に立っていた。その腰に剣を佩き、兵士の鎧を身に着けて。

時の移ろいは、過ぎてしまえば早いものだった。この二十年、この国には束の間の安寧が訪れていた。先の戦いは、徐々に人々の記憶の隅に追いやられつつある。

だが、この二十年、オリベルトは一度たりとてあの男のことを忘れたことはなかった。歳を重ねて【南の将軍】の地位を拝命した折にも、あの男のことを思い浮かべた。

現在、生きていればあの男が立ったであろう【北の将軍】の地位には、あの男の一番上の甥っ子が立っていた。

叶うことならば、あの男と共に同じ高みからこの国を見渡してみたかった。

今でも考える。もし、あの男が生きていたら、後の世を見て何を語るだろうかと。

いや、あの男の事だ。多くを語らず、日々淡々と己が職務を真面目に全うするのかもしれない。その潔い後ろ姿をもって自分の問いに答えるのかもしれない。

「よろしくお願いいたします」

小さく頭を下げた青年に、オリベルトはからかうような笑みを浮かべた。

「ああ。少しは使えるようになったか。ルー坊？」

二十年以上も前の話を持ち出せば、対峙した青年は、実に嫌そうにその口の端を下げた。

幼い頃の話というものは、当人自身がよく記憶していないからこそ、それを切り出されると妙な居た堪れなさとこそばゆさを感じる類のものだ。

その苦虫を噛み潰したような表情もオリベルトが良く知るあの男の面影に重なった。

「一体、いつの話をなさっているんですか」

オリベルトにとってはついこの間のような、いまだ記憶の中に鮮明として残る光景なのだが、それを言われた当人は、遥か昔の過去の遺物のように口にした。

その認識の差が小さな傷のように胸内で疼いた。

どおりで歳を取った訳だ。

「徒に年は取りたくないものだな」

小さく漏れたオリベルトの述懐をかつての幼子が的確に拾い上げる。

「何を仰ることやら。まだまだそのようなことを口にする齢でもありますまいに」

「ハハ。そうか」

ならば手加減することもあるまいか。

「では、いつでもいいぞ」
すらりと抜いた剣を構える。同じように剣を抜き、間合いを計る青年の姿にかつての朋輩の姿が重なった。
その瞬間、二十年という時が鮮やかに巻き戻った。髭の無い艶やかな頬に武骨さを滲ませた男が、瑞々しい若さ溢れるかつての親友に対峙していた。
――――――久し振りだな、相棒。
懐かしさを滲ませながら、将軍は小さく笑みを刷いた。その瞳は、かつてと変わることなくどこか悪戯っぽい輝きを放っていた。
この日最後の試合に集まった群衆の歓声が、遠く耳にこだました。そして、いつかの風景が男の中で重なった。
――――――いざ、勝負。
気合十分、剣士たちが土を蹴る。
こうして、個人戦優勝者と南の将軍による恒例の模範試合が、開始の鐘を鳴らしたのだった。

武芸大会恒例の余興とも言える将軍と優勝者との模範試合は、大いなる盛り上がりを見せた。ひょっとするとこの三日間で行われた数々の対戦の中でも随一のものであったかもしれない。
興奮をして野次を飛ばす男たちの中に埋もれながら、リョウは引き続き、広場の片隅でその試合の模様を観戦していた。
会場に現れた南の将軍は、ドーリンの叔父に当たるという話だった。立派な髭が顔を覆う見るからに貫禄のある大きな男だった。将軍の正装である朱鷺色のマントを華麗に翻して颯爽と現れた。それだけで観客は興奮のままに咆哮のような声を上げた。そして、余裕たっぷりに方々から絶え間なく上がる声援に片手を軽く上げることで応えていた。
開会宣言を行った西の将軍と同じく、ただそこにあるだけで畏怖と妙な威圧感のようなものを与える男だった。数多もの国軍の兵士

たちの頂点に近い地位にいる男たち。重ねた年齢と経験が生み出す重みが将軍にはあった。こうして見るとユルスナールがやけに若く見えたものだから、なんだか可笑しかった。

両者の戦いは、最終的に将軍の方に軍配が上がった。

まだまだ若い者には負けられない。男盛りで脂の乗った壮年の男が繰り出す剣は、重みがあり熟練されたものだった。素早さでは劣るが、それは全く欠点にはならなかった。何よりも若い頃に大きな戦を経験している。そこで得た経験は、やはりその後の人生に大きく影響を及ぼしているのだろう。

ユルスナールは、遠目にも実に生き生きと剣を振るっていた。こういう時でなければ将軍と直々に剣を交える機会がないからかもしれない。遠巻きに両者の対戦を見守っていたブコバルなんぞは実に羨ましそうな顔をしていた。

最終的に負けたとは言え、ユルスナールはどこかすっきりとした顔をしていた。そこにあるのは悔しさというよりも晴れがましさのようだ。

両者は剣を収めると固く握手を交わし合った。将軍は何やら一言二言ユルスナールに声を掛けながらその肩を叩いた。

それから二人の男たちは、益々盛り上がりを見せる観客たちの大きな歓声と割れんばかりの拍手に応えながら、軽く一礼をし、会場を後にしたのだった。

この後、宮殿前広場では、団体戦優勝者と個人戦上位入賞者十名に対する表彰が行われた。

表彰式には、ユルスナールの兄上でもある【北の将軍】が栄光を掴んだ剣士たちを前に祝いの言葉を述べた。

ここでの勝利はあくまでも通過点である。これで慢心することなく更なる高みを目指して精進を積むように。朗々と深みのある美声が紡ぎ出したのは、実に軍部の将軍らしい祝辞の文言だった。

第七の兵士たちが整列した隣、個人戦上位入賞者が並んだ中に、リョウはあの灰色の髪をした男、イースクラの姿を見つけた。救護班の天幕でのスタースとの掠るような遣り取りを思い出す。そして、それを殊の外、喜んだのだった。

――――――これをもって第１４９回、スタルゴラド武芸大会を閉会する。

こうして最後、集まった多くの参加者と観客たちを前に開会式の時と同じく西の将軍の荘厳なる閉会宣言によって三日間に渡る男たちの熱き戦いは幕を閉じたのだった。

面影を重ねて（後書き）

三日間の武芸大会のお話は、これにて終了と致します。最初はどうなるかと思いましたが、何とか最後まで辿り着けました。
最後は南の将軍にご登場頂きました。髭を生やした貫禄あるおじさまたち、大好きです。渋すぎるカッコよさになんだかユルスナールが霞んだ気が……。ルー坊呼ばわりされたのでは形なしですね（笑）。次回は、そろそろＩｎｓｏｍｎｉａ　の方にしようかと迷い中。ありがとうございました。

ワタシのいない未来（前書き）

ここより第五章の始まりです。四章が長くなったので、キリの良い所で分割致しました。（２０１１／１０／１９）

ワタシのいない未来

武芸大会を終えた翌日、【スタリーツァ（王都）】の人々は三日間の興奮の余韻を心のどこかで引きずりながらもいつもの日常へと戻って行った。そして、リョウの生活も以前のように養成所で講義を受ける勉学の日々に戻っていた。

講義の方はいよいよ佳境に入っていた。これまでにイオータの【鉱石処理】とレヌートの【祈祷治癒】、二つの分野で修了印を貰っていた。

そして、武芸大会終了から二日後のその日、午前中の講義を受け終えると一般的な薬草学関連の講義二コマの修了印を貰うことが出来た。また、【古代エルドシア語】と【印封】の授業に関しては昨日の内に修了のお許しが出ていた。これで予てから懸案事項でもあった呪いの加減についてもきっちりと学び修めることが出来た。

これで選択していた講義全てに関して修了印が貰えたことになった。そのことをいち早く面倒を見てくれているレヌートに報告すれば、穏やかな気性の壮年の神官は柔らかな笑みを浮かべて『それはよかった』と言ってくれた。

当初の予定よりも早く工程が進んだようだった。この後、正式に術師最終試験への申請を出し、後日試験の日が選ばれ、通達されるとのことだった。

「いよいよだな」

講義修了を喜んでくれたレヌートにリョウも改めて気の引き締まる気分だった。

術師の最終試験は全て口頭で、養成所の講師たちから選抜された者が試験官になるとのことだった。そこに後見人であるレヌートと登録機関の役所の方から一人、役人が立会人として参加する予定だということだ。

漸くここまで漕ぎ着けた。術師になることは、この国で新しい生

活を始める上での第一歩だった。術師として認められ、登録をされることで漸く自分の身元は法的に保証され、この国の引いてはこの世界の一員と見做されるのだ。

それと同時に。そのことはこれまで自分が歩んできた過去との決別を意味した。永遠の決別だった。かつての【佐久間諒】は消滅し、術師の【リョウ・サクマ】が誕生する。

後ろを振り返る積りはなかった。いや、きっとそのような感傷に浸る暇などないだろう。ここからが新しい人生の始まりなのだから。新米術師にとってはこれから毎日が試行錯誤の連続で修行のようなものだろう。

森の小屋に帰り、ガルーシャの納戸や書斎を整理して身の回りを粗方整えたら、今度は本格的に身の振り方を考えなければいけなかった。どうやって生計を立てて行くか。どのような人生設計を行うか。考えるべきことはそれこそ沢山あった。

だが、何よりもその前に片付けなければならないことが、リョウには一つあった。それは、ユルスナールの求婚への返答である。

リョウの心は揺れていた。何も考えず気持ちのままに男の手を取ることが出来たらどんなにか良いだろうか。だが、リョウにはそこまで夢見がちな少女のように振る舞うことなど到底出来そうになかった。それなりに歳を重ねて自立した生活をしていたからこそ持ち得る分別と思慮深さがあったからだ。

この二日間、悩みに悩んだ。考えに考え抜いて様々な予想（シミュレーション）もしてみた。色々な分岐点を作り出して、これからの未来予想図を幾つも並べてみた。そうやって何度、どんなにか工夫をして考えてみても、その数多ある選択肢の中に自分があの男の人生に深く関わり、そして男の傍に寄り添って立つという情景は現れては来なかった。

ユルスナールの隣に立つのはアリアルダか、若しくは似たような家柄から迎えた若くて綺麗な貴族の女性で、二人は結婚し、やがて子供が生まれ、温かい家庭の中で子供を愛しみ育んで行く。

あの男の順風満帆な人生と幸せを願いながら、それをそっと遠くから見守る。そんな自分の姿しか思い描くことが出来なかった。

ユルスナールが自分を妻とすることは男にとって何の利益（メリット）にもならないはずだった。いや、逆に負債を負わせかねなかった。貴族のしきたりとは無縁の出自も不明の女だ。ユルスナールの妻として自分にその責務が果たせるとはとてもじゃないが思えなかった。

異国の女を妻とした。その事によってユルスナールが嘲笑されたり、後ろ指を指されたりする事態だって起こり得るだろう。この国の貴族社会がどれだけ寛容なのかは分からない。だが、往々にして既得権益を持つ狭い社会というものは閉鎖的なものだ。

ユルスナールが庶民であったら、話はまだ違ったのかもしれない。保守的な農村は難しいかもしれないが、そこそこ人の集まるような国境に近い街であったならば、他国との人の行き来もあるであろうし、異国風の顔立ちをした女を妻としても然程目立つこともないだろうから。

だが、ユルスナールは貴族の男だった。それもこの国では名門と目される一族の男だった。幾ら男が三男であると言っても、やはり血統を重視するだろう。

そのような状況下で差し出された手を取ったとしても、すぐに男の立場を悪いものにするに違いない。そして、優しいユルスナールは一人苦しむことになるだろう。自分が属する社会と妻となった女の間で板挟みになるかもしれなかった。そうやって考える度に出てくるのは、自分にとっては否定的な側面ばかりだった。

無駄にしなくてもいい苦労を態々することはないのだ。一時、ほんの一時、苦しい時を乗り越えれば、心の傷はやがて時が癒してくれることだろう。そして、男の方も時の移ろいと共に黒髪の女のことなど忘れ、新しい妻と共にこの国の然るべき立場にある兵士として立派にその勤めを果たすことだろう。対する自分も、いつかは『そんなこともあったわね』とほんの少しのほろ苦さと懐かしさを胸に昔話に興じることが出来るようになるかもしれない。そうやって

穏やかにこの国の片隅で残された時間をゆっくりと過ごすのだ。
ああ、そうだ。旅に出るのもいいかもしれない。ガルーシャの書斎の書物は養成所の方に引き取ってもらって、今度はこの国を自らの脚で見て回るのだ。術師の組合（ギルド）に登録をしておけば行く先々で仕事は見つかるだろう。そして、術師として細々と生計を立てながら、この広い国を転々とするのだ。まだまだ知らないことは沢山あるだろうから、ささやかなことでも新しい発見に胸を躍らせ、毎日はそれなりに退屈しないで済むかもしれない。そして色々回った街や村々の中で自分の肌に合った場所を永住の地にしてみるのもいいかもしれなかった。
この国の東には海があるという。故郷を思い出させる海をこの目で見てみたかった。
そういう未来を想像するのは楽しかった。そのようなことを考えてリョウは落ち込みそうになる気分を上方へと修正させていった。
そして、最終的に得られた結論は一つ。それは、ユルスナールの申し込みを断ることだった。
決して男を嫌いになった訳ではない。愛しく思うが故にユルスナールには波風の立たない幸せな人生を歩んで欲しかった。あの男を支え、その人生に寄り添うことが出来るのは、残念ながら自分のような半端者ではないのだ。
気持ちだけではどうにもならないことが現実にはある。それを強く思い知らされたが、仕方がなかった。
ならばせめて、後の自分に出来ることは一つ。陰ながら男の幸せを願い、遠くからその行く末を見守ることだった。
たとえ遠く離れていても、ユルスナールを想う気持ちは変わらないだろう。それを相手に伝えることが出来なくともそれで良かった。あの男に愛された。その記憶と共に過ごした過去の濃密な時間は変わりようがないのだから。ユルスナールが達者でいてくれればそれでいい。風の噂にあの男が笑っていてくれればそれで良かった。
そこまで考えて、リョウはふととあることを思いついた。

最後にペンダントを作ってお守りとして渡そう。その後の人生が良きものであるように。男が幸せであるようにと祈りを込めて。

この場所では人の想いというものは時として形を持ち得るのだ。それこそ、術師としての初仕事に祈願の呪いを施すのもいいかもしれない。ちょうど【鉱石処理】の講義の中で結晶化を施した鉱石の中に黒い石があった。それは【リール石】と呼ばれる鉱石の一つで、ここでは発光石の光の調節に使われたりする原料だった。その昔ガルーシャが作り出したというこの胸にぶら下がる【キコウ石】に比べれば、天と地ほども差がある。大したものではないが、【リール石】は通常粉々の粉末にされることが多いので、純粋な石の塊であるものを装飾品として使用するのは珍しいことだった。この石に穴を開け金具と鎖を通す。そして密かに厄除けの呪いを施そう。そうすれば少しはまともなものに見えるはずだった。そして、正式に返答をする時に、それを渡すのだ。我儘な自分を許して欲しい。罪滅ぼしの積りはなかったが、離れていても自分の心は傍にある。それを伝えられたらと思った。

そのようなことを思いついたらいてもいられなくなって、リョウは早速街に出ることにした。

石は手元にある。必要なのは金具と鎖だ。そういった装飾品の金具を扱う店は、以前シーリスに王都案内をしてもらった時に見つけていた。そこは主に若い娘たちに評判だという出来合いの装飾品を扱う店だったが、その片隅で金具と鎖を売っていた。主な用途としては修理用だという。あの時は、装飾品には別段興味の無かった自分を何故シーリスはここに案内したのだろうかと思ったものだが、今ではそのことを感謝していた。

これから街に出る積りであると言ったリョウにレヌートは序でにお使いを頼んだ。神殿の管轄下にある街中の治療院に届けるものがあったようで、小さな包みと封書を手渡された。今日も恐らくスタースが詰めているはずだから、彼に渡してくれとの事だった。

こうして鞄の中に預かったものを入れるとリョウは養成所を後にしたのだった。

街に繰り出したリョウは、先に治療院に顔を出し、レヌートの言っていたように中に詰めていたスタースに預かって来たものを渡してから、件の装飾品を扱っている店へ向かった。

装飾品を扱う店は相変わらず若い娘たちで賑わっていた。展示された繊細な完成品を眺めながらあれは素敵だとか、あれが似合うのではないかという甲高い女たちのお喋りの声を聞きながら、リョウは店の中に入ると真っ直ぐに金具類が置いてある端の方に向かった。

この店に足を運んだのは十日程前のことだったが、店主は一風変わった客を覚えていたようだ。

ペンダントにする為の金具と鎖を探している。そう言えば、少し神経質そうな細面の顔立ちに人当たりのよい笑みを浮かべた店の主は、したり顔で頷いた。そして、ペンダントにしたい石を持っていたら出して御覧なさいと言われて、こういう場合は専門家に見てもらった方が良いだろうと懐の中の小袋の中に入れていた石を差し出した。

店主は親指の爪程の大きさの丸みを帯びた黒い石を摘むとしげしげと見た。

「ちょっといいかね？」

そう言って足取り軽くカウンターの中に入ると作業台の明かりの下、拡大鏡（ルーペ）のようなもので舐めるように観察をし始めた。

「これは【リール石】だね？」

「はい」

「ふむ。これはかなり純度の高い良い石だ。表面も滑らかで艶がある。この照りは実にいい」

一頻り観察をしてから顔を上げると店主はうっとりとした様子で言った。静かな興奮に心なしか頬が上気していた。

「いやぁ、久々に良いものを見せてもらったよ。ありがとう」
「いえ」
この店主は無類の鉱石愛好家（マニア）なのだろうか。リョウは何といったものか分からずに曖昧に微笑んでいた。
「これをペンダントにするんだね？」
「はい」
「キミも中々に良い趣味をしているね」
その珍しい思いつきは、店主の気にも入ったようで、小さく喉の奥を鳴らすと茶目っ気たっぷりに片目を瞑って見せた。
「加工はどうするかな？　穴はこちらで開けようか？」
「お願いできますか？」
「ああ。勿論だとも」
その提案は願ったり叶ったりだったので、リョウは素直に顔を綻ばせた。
それから石に合う金具と鎖を店主と共に選び出した。小さな金具は、沢山種類があって目移りをしてしまったが、どのようなものにしたいか希望はあるかと訊かれて、リョウはシャツの中から首にぶら下げていた青いペンダントを取り出した。
できれば同じような簡素（シンプル）なものにしたいと思った。石には上部に小さな穴が開いていて単純な金属の輪が三つ連なっていた。
胸元から取り出した石を見て、店主がその細い目を目一杯に見開いた。
「これは珍しい。【カローリ王】じゃないか！」
感嘆に似た息を吐いた店主の反応をリョウは敢えて流して、自分の希望を淡々と述べた。そうしないと話が脱線し中々前に進まなさそうな気がしたからだ。
「これと同じような感じにしたいのですが」
「ほうほうほう」
拡大鏡（ルーペ）を手に矯めつ眇めつ眺めた後、店主は鷹揚に微笑んだ。
「いや本当に今日はいいものを見せてもらったよ。小さな三つの輪

っかだね」
そう言うとカウンターの後ろにある小さな引き出しが沢山並んだ棚の一つから、似たような金具を取り出した。鎖も同じようなものを選び出した。こちらは自分が身に着けているものよりも若干長めにした。
それから店主に石を預けると金具代と鎖代、そして加工の手間賃を聞いて支払った。値段は銅貨一枚で少々のお釣りがくるくらい。いいものを見せてもらったお礼だと言って、値は少しまけてもらった。
「それではよろしくお願いいたします」
「ああ、明日の今時分には上げておくから。楽しみにしておくといい」
「はい」
こうして少しほくほくとした気分で出来上がりを楽しみにしながらその店を後にしたのだった。

ワタシのいない未来（後書き）

リョウさん、思考がかなり後ろ向きです。やっぱりあの男の妻になるのは、かなりの勇気がいることかもしれません。さてさてユルスナールはどうするのやら。次回に続きます。

２０１１／８／２　誤字訂正

泡沫の夢　1）

用事を全て終えると辺りはすっかり薄暗くなっていた。そろそろ街の街灯に明かりが付く頃合いだった。冬場のこの時期、日が落ちるのは早い。今は【黒】の【第一の月】、第四【デェシャータク】（10日のまとまり）だが、これが【黒】の【第二の月】の半ばくらいまで来ると（要するにあと二十日程だ）春の息吹があちらこちらで感じられるようになって来るだろう。

装飾品を扱う店は街の中心部を走る目抜き通りからは一本、脇に逸れた所にあった。因みにこの大通りを真っ直ぐ北に辿れば、宮殿前広場に繋がっていた。

養成所の学生寮への帰り道、大通りを渡り、神殿管轄下の治療院がある界隈に近づいた時だった。狭い路地の続く辺りを通り掛かった時、男の怒鳴り声と複数の人の叫び声が聞こえてきた。切羽詰まったような緊迫感が声からは伝わってきた。

「おい！　医者を呼んで来い！」

「治療院だ！」

「いや術師でもいい。テルマーのところなら早いだろう」

人だかりの中から聞こえてきた【治療院】、【術師】という身に覚えのある単語にリョウは人波を掻き分けるようにして前に出た。

そこで目にしたのは、血だまりの中に蹲るようにして横たわる一人の男の姿だった。倒れた男の傍にはもう一人男がいて、その男が大きな声を上げて近くにいる人たちに救援の指示を出していたようだ。

「それから第四の連中を呼んで来い！」

怪我人がいる。それを認識したリョウは、慌てて倒れている男の傍へ走り寄った。

「大丈夫ですか？　状態は？」
肩にかけていた鞄を下ろして中から包帯とそれに使えそうな布、それから薬草の入った袋や小瓶を取り出した。
「お前は？」
助けを呼んでいた男から掛けられた声に、リョウは横たわる男の状態を改めながら口早に答えた。
「術師見習いです」
取り敢えず怪我の状態を診なくては。地面にある血だまりを見る限り、かなり出血をしているようだ。とにかく止血をしなくてはならなかった。怪我をしているのは何処だ。
リョウは男の着衣を慎重に捲りながら傷を改めていった。
横たわる男は体中傷だらけだった。大きなものから小さなものまで。殆どが今付けられたばかりの真新しいもので、その多くは刃物で斬りつけられたような金創だった。
横たわる男は虫のような息だった。下半身の方で出血が酷く、血が水溜りのように溜まっていた。
外套をゆっくりと開いていって、そこにある光景にリョウは目を見開いた。
男の左胸に深々と短剣が突き刺さっていた。刃先は完全に体内に埋まっているようで柄の部分しか見えなかった。男はまだ息がある。辛うじて心臓から外れているのだろう。それでもその傷は肺に到達していると思われた。
リョウはその衝撃を一瞬でやり過ごして、他に出血している部分を探した。
出血している所は何処だ。左胸の短剣は抜かない内は一先ず血が出ることはないだろう。今は止血の方が肝要だ。そうして更に外套を捲ると男のズボンが真っ赤に染まっていた。太ももを大きく切り裂かれているようだ。血が溢れていたのはそこだった。
リョウはまず取り出した硬い布を自分の太ももに括りつけていた

短剣（ナイフ）で切り裂くと直ぐに男の脚をきつく縛った。今は止血が優先だった。消毒用に持参していた強い酒に薬草を混ぜたものを口に含むと傷口に吹き掛けた。そして、素早く巻きつけた布をきつく縛る。布の上にはあっという間に赤い染みが広がったが、その箇所に手を翳すと神経をこれまで以上に集中させて止血の呪いを唱えた。

手を宛がった包帯の部分が淡い光に包まれたのを見て取って術が掛かったことを知った。そして、もう一か所、酷く出血をしている右肩の部分も同じように消毒をして強制的に止血をした。

この呪いは、レヌートの【祈祷治癒】の授業の中で最後に習った少し型破りなものだった。成功をさせるのに術師の集中力と技量を問われるからだ。

他に大きな傷がないことを確かめてから、今度は男の体をそっと仰向けにした。外套を捲（まく）り上着を慎重に捲（めく）れば、左胸に突き刺さった剣の刃は短いもので貫通はしていないようだった。

こういった刃傷に手慣れた専門の医者か術師が来るまで待とうかとも思ったが、男の呼吸が徐々に小さくなっているのを感じ取って、悠長な事を言っていられないと悟った。ならば、この場にいる自分が出来るだけのことをしなくてはならなかった。

傍にいた男は恐々と術師見習いだと名乗った若者（リョウ）が、倒れた男の応急処置を施していく様を眺めていた。それを騒ぎを聞きつけて集まった野次馬が心配そうに遠巻きに見守っていた。

リョウはまず短剣が突き刺さった箇所に手を当てて息を深く吸い込んだ。

「短剣を抜きます」

決意を秘めた静かな一言に傍にいた男が目を見開いた。

「おい、大丈夫かよ？」

「分かりません。しかし、このまま悪戯に時間が過ぎるのを待つ訳にはいかないので。出来る限りのことをしたいと思います」

リョウは淡々とそう告げると男に短剣を抜いてくれるように頼ん

だ。自分の力では恐らく無理だと思ったからだ。傷口を広げない為に一息でいかなければならなかった。

男はぎょっとした顔をしたが、真剣な顔をしたリョウの迫力に負けてかゴクリと小さく唾を飲み込んでから短剣の柄に手を掛けた。

「合図をしますから、一息にお願いします」

リョウは鞄の中から凝固処理を施していた【ストレールカ】を取り出すと解除の呪いを唱えてから葉を二枚口に含んだ。噛み砕いてから吐き出し、それを剣が突き刺さっている周囲に塗り込めた。そして、大きな当て布を手にその周りを囲んだ。

準備が整ってリョウは男に頷いた。

「お願いします」

その合図で男が短剣を引き抜いた。それに合わせて【ストレールカ】の滲んだ当て布で傷口を抑えながらこれまで以上に精神を集中させて強力な止血の呪いを口にした。

男が剣を引き抜いた瞬間、血が飛沫のように飛び散った。顔にも掛かったが、咄嗟に目を瞑り、なんとか凌いだ。リョウは呪いを口にしながら、開いた傷口を抑えるように布の上から手を当てると身体全体を使って圧し掛かるように圧迫した。剣が心臓を掠めていないことを祈り、血が早く止まるようにと祈った。

そこでふとリョウは倒れている男の顔を初めて目にした。これまでは傷を改めて早く止血をすることを優先した為、倒れている男が何処の誰であるかに気を回している余裕がなかったのだ。

高い尖った鼻に鋭角な顎を持つ男だった。血の気が無くなって真っ青になっているが、リョウはその男の顔に見覚えがあった。何よりも縮れた灰色の髪が男の正体を雄弁に語っていた。

「イースクラさん！」

リョウは胸を突かれたように大きな声を上げていた。

傷だらけで倒れていた男は、自分も知るあのイースクラだったからだ。二日前の武芸大会では個人戦に出場し、見事十位以内に入賞を果たした剣の使い手のはずだった。

その男がこのような姿になろうとは。

リョウが大きな声でその名を呼んだ所為か、男が薄らと目を開いた。少し下がり気味の赤みがかった茶色の瞳が微かに揺れた。意識はあるようだ。

「イースクラさん、分かりますか？　もう大丈夫ですよ。だから頑張りましょう。今、応急処置をしました。ちゃんとしたお医者さまか術師の方を呼んでもらっていますから。もう少しの辛抱です」

胸の傷を抑えながら、リョウは大きな声で呼び掛けた。

男の手が小さく動いた。そして、その口元が震えた。眉間に深い皺が寄った。

「痛みますか？　今、少し楽になるように痛み止めを使いますね」

傍にいた男に自分の代わりに胸元を抑えてくれるように頼んでから鞄の中に入っている小さな瓶を探った。そして、男の顔元に近寄ると小さく蓋を開けて中の薬草の成分を吸い込ませた。

「少し吸い込んでください。それで大分楽になるはずですから」

その間、男の瞳は空を見るように彷徨っていた。そして何かを言おうとしてか口が小さく開く。その時、男の口から血が溢れ出した。

「イースクラさん！　しゃべらないで！」

虚空を見つめながら小さく上げられた手をリョウは手にとってきつく握り締めた。そこで漸く男はリョウの存在に気が付いたようだった。

「お……ま…え」

男が口を開く度に血が溢れ出した。口の端を伝って赤い線が幾つも流れた。それを見て、傷が肺にまで達していることを悟った。

「話さないでください。傷口に障ります」

リョウは必死になって何かを口にしようとする男を押し留めた。

それに男が軽く眉根を寄せた。深手を負い、大量に血を失って、自分の死期が近いことを悟ったかのようにその口元に薄らと笑みのようなものを刷いた。

リョウは男の顔を横に傾けた。流れ出した血液が逆流して気道に入るのを防ぐ為だ。

握った手に微かに力が入る。そこで再び男が何かを伝えようと口を開いた。

「お願い。駄目。それ以上話したら駄目です」

必死に囁くリョウの言葉に男は耳を貸さずにゆっくりと呼気を吐き出した。ひゅうひゅうとした息が漏れた。

「ユ……プ……に……気…つけ…ろ。……がねら…いだ。ぎ……おま……」

「何です？　何ですか？　ユ？」

リョウは男の口元に耳を近づけた。

「ユ……プ…シ…ロン」

「ユプシロン？」

問い掛けに男の目が瞬いた。

「ユプシロンですね。それがどうしたんですか？」

そこで男は激しく咳き込むとすっと眠るように目を閉じた。かくんと首が下がった。

「イースクラさん？」

リョウは慌てて首元で脈を確かめてから顔を鼻先に近づけて呼気を確かめた。

男は息をしていなかった。

嘘だ。リョウは跳ね起きると胸の傷口を改めた。短剣が刺さっていた傷口の表面は一時的に塞がり血が止まっていた。それを素早く確認するとリョウは男の鼻を摘んで息を吹き込んでから胸の中心を力強く押し始めた。

「イースクラさん！　戻ってきて。お願いだから！」

リョウは必死になって男の胸部を押した。一、二、三と数を数えて、三十まで押した後、男の口に呼気を吹き込み、また同じように胸部を押す。その作業を繰り返した。

こんな所で男を死なせてしまう訳にはいかなかった。何故なら、

男にはやらなければならないことがあるからだ。
「イースクラさん！　戻って！　こんな所でくたばってどうするんです！　お子さんたちに会うんでしょう？」
個人戦の表彰式が終わった後、リョウはイースクラに祝いの言葉を掛けたのだ。その時に少し話をしたのだ。イースクラ自身、ここまで残るとは思ってもみなかったようで神のお目零しだと小さく笑っていた。
興奮の余韻がこの寡黙な男をも捕らえていたのだろう。それからぽつりぽつりと小さな他愛ない話をしたのだ。もらった報奨金で漸く願いが叶えられそうだと言った。そして、自分は行方知れずになっている二人の子供たちを探して旅をしているのだと。ここでその手掛かりが掴めそうなのだと。皺の多く刻まれた眦を細めて懐かしそうに、そして嬉しそうに語っていたのだ。
「もうすぐだって言ってたじゃないですか。お二人ともきっと待っていますよ！」
こんな所で死んで欲しくなかった。いや、死なせたくはなかった。一昨日まであんなにも嬉しそうに話していたではないか。これからのことを。子供たちの足取りが掴めるかもしれない。そんなことを言っていた筈だった。
男が探している子供は双子で、黒髪に黒い瞳を持つ美男美女なのだとか。だから顔立ちは異なれども似たような色彩を持つリョウを【プラミィーシュレ】で見かけた時には懐かしさの余り思わず声を掛けてしまったのだと優しい目をして、自分にそのような告白をしたのだ。
その時、リョウは男に父親の姿を見た気がした。
無口な男が珍しく饒舌に語った家族のこと。子供たちのこと。
「イースクラさん！　お願いだから、戻ってきて！」
必死に呼び掛けるリョウの目からは、いつしか涙が流れていた。
しんと静まり返った細い路地。辺りはすっかり闇に包まれていた。
集まっていた野次馬も散り散りになっていた。

そこに漸く医師やら術師やら第四の兵士たちを呼びに行っていた男たちが其々助っ人を連れて戻ってきた。

やってきた男たちは、そこにある光景に声が出なかった。横たわる男の身体に馬乗りになって、一人の若者が髪を振り乱して男の胸部を押しながら叫んでいたからだ。戻って来いと。暗がりで良く分からなかったが、その顔は涙に濡れているようだった。

いち早く我に返ったのはやはり医者だった。医者はいち早く患者の元に足を運んだ。そして、同じように意識を取り戻した男たちは患者の上に乗っているリョウの身体をどかそうとした。

リョウは、突然外部から拘束されて抵抗をした。もう少し、あともう少し頑張れば、男が息を吹き返すかもしれないと。そううわ言のように繰り返す。

だが、男の容態を診た医者と術師の男は、もう無理だと力なく首を横に振った。男は完全にこと切れている。これ以上は何をやっても無駄だと。

非情なまでの宣告に悲痛な沈黙が落ちた。

「そ……ん…な」

リョウはその場で力なく項垂れた。

そうこうするうちに街中の治安維持を取り仕切っている第四師団の兵士たちがやってきた。兵士たちは通常の簡素な隊服にその左腕には部隊章である黄色い腕章を付けていた。

呆けたように尻餅をついたままのリョウに怪我人を助けようと奮闘した善良な街の男たちは首を横に振った。諦めろ。仕方がない。そんな意味を込めて。

男たちは茫然として座り込んだ若者をどう扱っていいか分からずに半ば困惑したような視線を向け合った。

ここで仲介に入ったのは派遣されてきた第四の兵士だった。兵士たちはこういったことには慣れているのか、手際よく周囲に集まる

男たちに何があったのか詳しい事情を聞き始めた。
リョウは、まだイースクラの傍にぺたりと座り込んでいた。その視線は青白くなった男の顔を見つめていた。茫然自失。男の死を受け入れられないのだろう。
その間、医師と術師の男は倒れている男が負った怪我やその手当の具合を丹念に改めていた。
リョウは、そっと目を閉じたままの男の顔に指を伸ばして触れた。
このようなことになるとは思ってもみなかった。一体どうしてこんなことに。そこまで考えて、男が最後に自分に伝えようとした言葉が頭の片隅を過った。
――――――【ユプシロン】に気を付けろ。
男は確かにそう言った。微かな虫のような息で。
【ユプシロン】とは神殿の神官たちのこと指した言葉だった。仲間内での隠語のような言葉だ。
神官たちに気を付けろとは一体どういう意味なのだろうか。それを解明する鍵は、その後に続けられた言葉にあったのかもしれないが、掠れた小さな声からリョウはそれを聞き取ることが出来なかった。
男の体には沢山の金創があった。一体、誰がこんなことをしたのか。何があったのか。そのようなことをぼんやりと考えながら呆けたように男の顔を見つめていた。ごっそりと表情の抜け落ちた顔の下では様々な感情が止めどなく湧いては消えて行った。

周りにいた男たちから粗方事情を聞き終えた兵士たちは、改めて男たちに第四の詰め所に来るようにと言った。そこで更なる事情聴取をするようだ。
そして、その内の一人が座り込んだままのリョウに声を掛けた。
「おい、坊主。お前はこの男のことを知っているんだな？」
近づいてきた兵士にリョウは緩慢な動作で顔を上げると静かに頷いた。

「ならばお前も付いて来い。詰所の方で話を聞く必要があるからな」
動かなくなったイースクラの身体を二人の兵士たちが担架に乗せて運んで行った。それを目で追いながら、リョウはゆっくりと立ち上がった。同じように鈍くなった腕を伸ばして地面に散らばっていた薬草の入った袋やら瓶やら、手当てをした時に使った道具類を鞄の中に詰めた。そして、鞄を手に取るとその紐をきつく握り締めた。
あの男を救えなかった。リョウの心に悔しさと後悔の波が押し寄せていた。やはり無理に短剣を引き抜いたのが不味かっただろうか。だが、あれはこれまで自分がここで習得してきた知識の中での最善のやり方だった。自分にはあれが限界だったのだ。

それから、促されるようにして発光石が鈍く光を湛えた中に現れたリョウの姿に居合わせた兵士たちは息を詰めた。あの男の血だろう。顔から上半身からズボンに至るまでリョウの全身は所々、真っ赤に染まっていた。それは誰が見ても顔を顰める酷い有様だった。事情を知らない者が見たら、リョウが男を殺したと思われてしまうだろう。
両手も真っ赤に染まっていた。
ゆらりと立ち上がったリョウは、まだどこか心ここにあらずといった具合だった。それだけ衝撃が大きかったのだろう。人の死に間近で直面したのはこれが初めてだった。
小さな班（グループ）の班長（リーダー）らしい兵士は、内心痛ましく思いながらもそれを顔に出すことはせずにぼんやりと立つリョウの腕を掴んだ。そして、他の男たちと一緒に第四の詰め所に向かって歩き出した。
日がすっかり落ちた後のことで良かったのかもしれない。少なくともリョウの惨状を隠すのに夜の闇は大いに役立った。
闇に紛れるように街灯の明かりが殆どないような裏道を選びながら、男たちは詰所へと歩く。それに引きずられるようにしてリョウも足を進めたのだった。

泡沫の夢　2）

兵士たちは人通りの無い小道を選びながら詰め所までの道のりを歩いた。先に先導する兵士の後を付いているのは、三人。イースクラの脇にいた男と方々に助けを呼びに行っていた二人の男だ。兵士は全部で五人いた。二人が担架を手に男の遺体を運び、街の男たちを挟むように二人の兵士が前後に並んだ。そして、最後尾でリョウの腕を掴んでいるのが班長の男だった。一列に並んだ九人の人影。そして横たわる一人。ひっそりと行われる葬儀の行進のようだ。

道々、誰も口をきかなかった。狭い路地を静かに歩く。まるで長い闇のトンネルを抜けているようだった。どこか重苦しい空気が流れていた。

そして、一団が第四の詰所前の大きな通りに出た時、辺りを煌々と照らす発光石の光が眩しい程に闇路を辿った彼らの姿を暴き出した。

リョウも眩しさに思わず目を細めた。そこにある街灯の光は夜間用に抑えられたもので、決して明るい類のものでは無かったのだが、暗い夜道を黙々と歩いていた人々には刺激が強かったようだ。

第四の詰め所は、石造りの重厚な建物だった。【アルセナール】のどこかお高く留まった澄ました優美さとは異なる質実剛健な印象を見る者に与えた。実用性重視なのだろう。無駄な装飾の無い石壁が続く。そこにこの場所での第四師団の性格が表れているような気がした。

詰所の中は明るかった。腕に黄色の腕章を付け隊服を身に纏った屈強な男たちが闊歩している。夜勤の兵士たちなのだろう。

【スタリーツァ】は大きな繁華街を抱えるこの国随一の巨大な街

だ。眠ることを知らない賑わいを見せる。特にこの時期は武芸大会が開催されていたこともあり、方々から沢山の見物客が押し寄せていた。そういった客たちが束の間の興を求めて夜な夜な外に繰り出す。その所為か第四師団の兵士たちが処理をしなければならない揉め事やいざこざの類、窃盗事件、傷害事件等も増えており、彼らは日々対応に追われていた。ここでは昼夜問わずに交代で勤務を行い、必要に応じていつでも然るべき人員を割けるようにしてあった。

詰所の中で擦れ違った兵士たちは、班長に連れられたリョウの姿を見ると皆一様に一瞬だけ動きを止めた。だが、日頃から何事にも動じないようにとよく訓練されているのだろう。次の瞬間にはその驚愕を見事引っ込めて、隣に立つ班長に目配せをする。そして、納得したように小さく頷き合うと再び何事もなかったかのように持ち場へと戻った。

だが、そのような兵士たちの中でも例外というものは確実に存在した。

前方からやってきた一人の兵士がリョウの姿を見て、あからさまに野太い声を上げたからだ。

「あ？　なんだ、【チョールナヤ（くろすけ）】じゃねぇか。おいおいどうした？　そんなえげつねぇ格好（なり）してよぉ」

のしのしと向こうから大股でやってきたのは浅黒い肌をした一際大柄な男だった。短く刈りあげた薄茶色の髪に灰色の瞳。何よりも特徴的なのは、よく発達した顎とその右目の下に施された紋様のような黒い彫り物だった。

「……ザイーク、さん」

見知った男の登場にリョウは力なく笑った。そして、その時になって初めて、リョウは自分がどのような状態にあるのかということに意識を向けることになった。

まじまじと明かりの下で己の格好を見下ろして、まず目に入ったのは、真っ赤に染まった両手だった。

「……あ」

それを認識した途端、リョウの身体はカタカタと小さく震え始めた。

両手は乾いた鮮血がこびりついて真っ赤になっていた。後から追いかけるように今更ながらにやってきたのは、恐怖だった。

「大丈夫か？」

相手の動揺を素早く感じ取った班長は、小さく震える肩を抱くようにして腕を回すとその顔を覗き込んだ。

「取り敢えず、それを落とさないとな」

そう言ってリョウを別室へと促した。

あの時は、目の前にいる男を救うことで必死だったが、少し落ち着いて明るい場所に出た途端、あの男を死なせてしまったという重みがリョウの心に重く圧し掛かってきた。

大変なことをしてしまったと思った。それは、術師という職業が、人の生死に関わることがあるのだということを初めて思い知らされた瞬間でもあった。

出来る限りの事をした――それは単なる言い訳に過ぎないのかも知れなかった。この手から零れ落ちてしまった命。そして、それは自分が知る相手でもあった。たった二日前、晴れがましさと嬉しさを滲ませて微かに笑った男の姿に横たわる男の血の気の引いた青白い顔が重なった。

リョウは思わず口元を手で覆った。その顔には、手と同じように跳ね飛んだ男からの返り血が点々とこびりつき乾いていた。頬の辺りには擦った所為で横に伸びた赤黒い線が幾つも走っていた。

リョウの動揺を見た班長は、ぼさぼさになったその黒髪を宥めるようにそっと手で撫で付けた。

「お前はよく頑張った。医者がお前の施した処置を褒めていたぞ」

慰めの言葉が耳を通り過ぎて行った。

リョウは緩く息を吐き出すと無言のまま小さく頭を振った。あの男を救えなかった。その事実は変わらなかったからだ。

リョウの目には再び涙が溜まり、眦から流れ出していた。それが

頬に付いた血液と混じり、あたかも血の涙を流しているかのように赤く頬を伝っていった。

鼻をすする。ハンカチを取り出そうとして自分の手に戸惑い、だが、すぐに衣服も血まみれであることを見てとって、もういいかと諦めた。

そして、リョウが取り出したハンカチでそっと涙を拭う傍ら、ザイークはちょいちょいと小さく指で班長の兵士を拱いた。

班長は近くにいた別の兵士にリョウのことを注意して見ておくようにと目で合図を送ってから、促されるままにザイークの傍に近寄った。

「ザイーク、知り合いか？」

血塗れになった若者（リョウ）の姿を見て声を上げた仲間の兵士にそのことを問えば、ザイークは声を低くした。

「第七のルスランの【コレ】だよ」

そう言って自分の太い薬指を指示した。

「聞いただろ？　この間、すげぇ騒ぎになった【アレ】だよ。あの【チョール（黒いの）ナヤ】はその相手だ」

「何……だって？」

班長は、あからさまに驚いた顔をしてまじまじとイサークの顔を見た。

冗談だろう？　班長の目は雄弁にその心情を語っていた。

第七の団長がリボンを使って古式に則り求婚をした。武芸大会の後半で、そのような噂が兵士たちの間を物凄い勢いで駆け巡ったのは記憶に新しかった。個人戦の決勝戦を見事勝ちとった後のことのようで、目撃者も多かったらしい。それを目にした人々は仰天し、一時は大騒ぎになったのだ。

班長自身、それを聞いて驚いた。初めは性質の悪い冗談だろうと思ったくらいだ。第七の団長は多くの兵士たちが尊敬と憧憬を持っ

て接する立派な男だったが、これまでそういった艶聞の類には全く縁がなかったからだ。行動を共にしている相棒のブコバルの方がそういった女性関係は派手で、団長のユルスナールの方は、いつもその陰に隠れる形だった。

そのような男が衆人環視の中で、堂々と申し込みをしたのだと言う。冷酷そうな情の乗らない顔立ちをした男が、そのような熱い一面を持っていることを初めて垣間見た気分だった。それに噂では男の事ばかりが話題に上り、肝心のその相手についてはよく分からずじまいだった。だが、まぁ普通に考えて相手は同じ貴族の女性であろうと思っていた。

その予想に反して、ザイークは、なんとその相手がそこにいる若者だと言ったのだ。

そして、ザイークは珍しく何とも言えないような微妙な顔しながらも、真面目な声で言葉を継いだ。

「ありゃぁ、第七の連中も可愛がってる【チョールナヤ（黒い）・コーシェ（猫）チカ】さ。間違いねぇよ」

何かを飲み込むように大きく溜息を吐いた班長にザイークは更に声を低くした。

「なんだ、事件か？」

ザイークの切れ長の目がすっと細められた。

「【シェスナーツアッチ（16番の）】の裏通りで男が一人殺された」

「まさか、あいつが殺（や）ったのか？」

「いや、どうも違うようだ」

小さく否定の言葉を口にするとこれまで班長が聞き出した状況を簡単に説明した。

要するに倒れていた男を発見した街の連中が大騒ぎをして、そこに偶々通りかかった黒髪の若者が手当てをしたということだった。怪我をしていた男の出血が酷く、その時の返り血で、あのような姿になっているのだと。

一通り話を聞き終えたザイークは、至極神妙な声音で言った。

「早いとこあっち(第七)に連絡を入れた方がいいんじゃねぇ？　あいつなら、血相変えて飛んでくるぜ？　いずれにせよ、一言、言っとかねぇと不味いだろ」

ザイークという男は少々型破りな点があるが、れっきとした第四の兵士である以上、己が職務に対してはそれなりに忠実で真面目な男でもあるのだ。

「分かった」

ザイークの提案に班長は静かに頷いた。

それから二人は小さく囁きを交わし合うと何からの確認をしたようだった。真剣な面持ちで頷いたザイークは、やがて持ち場に戻るべくその場を後にした。

班長は、リョウの傍に戻ると涙の跡が赤く滲んだ頬を見て内心眉を顰めながら、取り敢えず汚れた血を洗い流すことが先決だと判断した。身に着けているものもこのままという訳にはいかないだろう。まだ激しく動揺の色が残る相手から話を聞くにも、落ち着かせなければならない。倒れている男を発見したという街の男たち三人衆の方の聴取を先に済ませてしまえば、時間的にもちょうど良いだろう。

そう考えると、一応、ザイークの言を確かめる為に、本人に直接当たってみることにした。

班長の問い掛けにその若者はリョウと名乗った。第七の所属かと問えば、自分は術師見習いで養成所に通う生徒であると明かした。そして付け加えるように第七の面々とは訳あって顔見知りなのだと言った。

それを確認すると班長は傍にいた別の兵士に第七への伝令を頼んだ。

内容としてはこうだ。リョウという名の若者を預かっているので迎えに来られたし。

それから今度は当人を別室へと案内した。

そして、リョウが連れて来られたのは、先を歩いていた三人の男たちが事情聴取を受けている部屋ではなく、簡素な作りの違う部屋だった。

中はがらんとしている。真中に四角い木のテーブルがあり、丸い背凭れの無い簡素な木の椅子が辺りに点々と散らばっている。端の方には流し台と煮炊きが出来る簡易的な竈が据え付けられていた。給湯室兼休憩室のような趣の場所だった。

壁際に立てかけられていた盥を手に取ると男が水を汲んで入れた。そして、そこで一先ず色々な汚れを洗い流すように言った。

「ありがとうございます」

小さく礼を口にしてからリョウは身に着けていた外套と上着を脱ぐとシャツの袖を捲って手を洗い始めた。鞄に入れていた発熱石を取り出し盥の水をぬるま湯に替えた。

「あの、石鹸をお借りできますか？」

ぬるま湯だけでは限界があった。

「ああ。そこの流しにあるやつを使うといい」

「ありがとうございます」

石鹸はちびた欠片のようなものだったので、それを大事そうに使った。

脱いだ外套と上着はあちこちが血塗れだった。特に外套は酷い有様だった。地面に溜まっていた血を生地が吸いこんでしまったようだ。上着の方も点々と飛び跳ねた血液が染みとなって赤黒く変化していた。

腕まくりをして手を洗う。こびりついた血で直ぐに盥の水は真っ赤になった。

一度乾いた血は中々落ちにくかった。何度も盥の水を取り替えて、漸く元に近い状態に戻った。それからハンカチを濯いで顔を拭った。剣を引き抜いた際に返り血を浴びたのだ。鏡がないのでよく自分では分からなかったが、生温い血の感触は覚えていて、同じように点

々と付いているはずだった。

リョウを連れてきた第四の兵士は中にいて、静かにその様子を見守っていた。途中、どこからか別の兵士がやって来て、中にいた男に着古したシャツとズボンを手渡して行った。どうやらそれはリョウの為の着替えらしかった。

一通り、手と顔を洗い終えたリョウに男が言った。

「これに着替えろ。大分大きいかもしれんが、お前のはもう使い物にならないだろうからな」

そう言って手にした衣服をテーブルの上に置いた。

よく見ればズボンも血まみれだった。膝を着いた時に血だまりの中に足を突っ込んでしまったらしかった。幾ら夜が更けたとは言え、街灯に照らされた街中を血糊の付いた格好で歩き回る訳にはいかなかった。それこそ殺人鬼のような格好だ。取り敢えずの一時凌ぎ。養成所の学生寮に戻るまでの辛抱だ。

兵士の配慮をリョウは有り難く受け取ることにした。

「ありがとうございます。お借りします」

再び礼を口にしたリョウに男が小さく微笑んだ。すると男の眦には小さな笑い皺が現れた。

その時になって、リョウは漸く自分を連れてきた男の方に意識が向いた。

男は濃いめの茶色の髪を緩く後ろに撫で付けていた。どことなく品のある顔立ちと誠実そうな雰囲気に既視感を覚えた。そして、ここ数日の記憶を辿って、それが団体戦に出場していた兵士の顔に重なった。

「あの、武芸大会の団体戦に出場なさっていませんでしたか？」

その問い掛けに男は静かに頷いた。どうやら合っていたようだ。

「ああ。観ていたのか」

「はい」

そして、手渡されたシャツとズボンを広げてみた。それらはどこ

から持ってきたのか知らないが、どう考えてもかなり大きなものだった。
「大分余りそうだな」
「そうですね」
シャツはまぁ袖を捲ってどうにかなりそうだが、問題はズボンの方だ。ベルトで調整してもどうにかなりそうな類のものでは無かった。一本の足の方にそのまま二本が収まってしまいそうな大きさだったからだ。
目の前でズボンの腰の部分を手に広げたリョウの姿とその手にしたものの大きさを見て取って、それは余りにも違いすぎると思ったのか男が眉を跳ね上げた。
「やはり、そちらはもう少し小さいのを探すとしよう。それでは穿いた途端に脱げそうだ」
「すみません。ありがとうございます」
男はもう一度ズボンを手に外に出ると別の兵士にもっと小さいものを持ってくるように依頼したらしかった。

「しかし、お前はまた随分と細いな」
再び部屋の中に入った男は、シャツとズボンだけになったリョウを見ながらしみじみと口にした。
上半身を誤魔化す上着がないことで薄い肩の線が露わになっていることもそうだが、捲り上げられた袖から覗く腕も細かった。男にとっては目に付いた全てが恐ろしく華奢で細く思えてならなかった。まるで一本の棒切れのようだ。
リョウの方は何と返していいか分からず、曖昧な微笑みを浮かべた。
どうやら兵士の男はここで支度が終わるのを待つようだった。リョウはどうしようかとも思ったが、流石に濡れたズボンが気持ち悪くなってきたので、長靴を脱ぐと身に着けていた短剣を外してからズボンのベルトに手を掛けた。着ていたシャツは大きめのものだっ

たので太ももの半ば位までは隠れた。向こうもこちらを男だと思っているようだし、このくらいならばいいかと思いズボンを脱いだ。

案の定、ズボンに付いていた血の染みは、中にまで浸透し肌を赤く染めていた。リョウはハンカチを絞ると同じように足に付着した汚れを拭っていった。ふとガラス越しに映った己が頭部がぼさぼさであることに気が付き、髪を結えていた紐も取り去った。

さらさらとした黒髪が突如として存在を主張するように散らばり、肩先で揺れた。それをざっと手櫛で整えた。

それから何度か盥の水を取り替えて、漸く脚に付いていた汚れも落とし終えた。そして男に背を向ける形で手早く借りたシャツに着替えた。

「お前……まさか……」

後ろを向いてはいたが、着替えている最中も男の視線を感じていた。それは、どこか観察するようなものだった。未知のものに対する純粋な興味。そのような所かも知れない。

小さく漏れたその言葉に骨格の違いから相手が自分の性別に感付いたらしいことが分かった。

やはり男の前で着替えたのは不味かっただろうか。

「すみません。お見苦しいものを」

小さく目を見開いた男にリョウは静かに笑った。はしたないかとは思ったが、状況的に仕方がなかった。

「いや、済まない。分からなかったとはいえ、こちらこそ不躾な真似をした」

男は気まり悪げに咳払いを一つした後、さり気なく視線を横にずらした。

「どおりで細い訳だ」

そして、納得するように一人ごちた。

それから男は横を向いたまま、淡々と口にした。

「先程、【アルセナール】の第七に使いを出した。その内、お前を迎えにやってくるだろう。それまで少し話を聞くがいいか？」

「はい。構いません」
汚れを洗い流し、衣服を取り替えてリョウは少しずつ落ち着きを取り戻していた。
「……とその前にズボンだな」
「……そうですね」
用意された大きなシャツ一枚で所在無げに丸椅子に座ったリョウの姿に兵士は少し狼狽えたように咳払いをすると当たり障りのない笑みを浮かべた。
それから再び持ってきてもらった先程よりは少し小さめのズボンを履いた。腰の辺りをぎゅうと絞って辛うじて腰骨の所で止まっているという按配だった。だが、それでも無いよりは有り難い。
汚れた衣類は纏めて鞄の中に入れていた大きな布に包んでから両手で抱えた。汚れた衣類は後で洗濯をする積りだった。付着した血液は中々に落ちにくい。綺麗になればよいのだが、落ちなければ新しくこちらで古着か出来合いのものを調達するほかないだろう。一番多く血を吸いこんだ外套は、もしかしたら諦めなければならないかもしれなかった。

着替えを終えた後、男はリョウを別室に案内した。
「ここで待っていてくれ。今、茶を持ってこさせよう」
男はそう言うと再びどこかに消えた。
随分と慇懃で丁寧になった扱いに、リョウは内心苦笑いをした。女と知れた時点でどうも相手の物腰が柔らかくなったようだ。慣れないことをされて何だか身体の内側がくすぐったい気分だった。

中は小さな取り調べ室のような場所だった。【プラミィーシュレ】の【ツェントル】の時と似ているかもしれない。簡素な木の椅子が中央に置かれ、端の方に木の小さな机が寄せられていた。窓は上方の天井に近い所に一か所、明かり取りの為に小さな長方形が切り取

られていた。今、そこから覗くのは濃さを増した闇だった。
室内の明かりはかなり抑えられていた。少し薄暗い。それはここが取調室のようなものだからかもしれない。
辺りはひっそりと静まり返っていた。廊下を歩いていた時は、館内を歩く兵士たちの気配と低い話声が漣のように寄せては引いて感じることが出来たが、一枚木の扉を隔ててしまうとこの場所は小さな音の無い密室へと変わった。
やがて複数の足音が聞こえてきて、控え目なノックの後、先程の班長の男が部下を連れて顔を出した。部下は別の男たちに事情を聞いていた兵士の一人だった。
先程の言葉通り、部下の男はその手にお盆を持っていて、その上に乗る小さなカップからは湯気が立っていた。本当にお茶を持ってきてくれたようだ。
部下の男は慇懃な所作で飲み物をリョウに手渡した。リョウはその心遣いに感謝の言葉を口にしながら受け取った。
カップの中を一口啜る。温かい液体が胃の腑を回ってじんわりと心にまで浸み渡るようだった。
「ありがとうございます」
リョウは小さく微笑むと緩く息を吐き出した。
「どうだ、少しは落ち着いたか？」
「はい」
そこで、やってきた兵士が二人だけでは無いことに気が付いた。二人の黄色い腕章を付けた兵士のすぐ後ろから見えたのは、銀色の髪の頭部だった。そこから徐々に酷薄そうな造形が現れる。だが、いつもは淡々としているはずの表情には収まりきらない焦燥のようなものが滲み出ていた。
そこで漸く、そう言えば班長が第七に使いを出したと言っていたことを思い出した。
先程、ザイークと顔を合わせた時に第七との関係を聞かれたが、リョウはただの顔見知りだと答えていた。ひょっとしたらザイーク

の方で、向こうに知らせるようにと手を回したのかも知れなかった。

「……ルスラン」

ユルスナールの髪は酷く乱れていた。もしかしなくとも伝令の報せを受けて急いで駆け付けて来たのだろう。額際に薄らと汗が滲んでいた。

深い青さを内に秘めた瑠璃色の双眸と視線が合う。その時に初めてリョウは肩の力を抜くことが出来た。張りつめていたものが急激に弛緩して、撓んで行くのが分かった。

「ルスラン」

カップを手に茶を啜る姿を見て、ユルスナールは漸く安堵の息を吐いた。

「リョウ、大丈夫か？」

つかつかと長靴の底を踏み鳴らして中に入ってきたユルスナールは、リョウの傍に行くとその体をそっと抱き締めた。

第四の方から【アルセナール】の第七の執務室にリョウを預かっているとの伝令がもたらされた時は、また何かあったかと胆が冷えた。伝令の内容は簡潔な一文のみで、詳しい事は何も書かれておらず、ユルスナールは焦燥に駆られるままに急いで駆け付けたのだ。もしや、また、自分の知らないところで怪我をしたのではないか。そう思うと居ても立ってもいられなかった。

一先ず怪我をした訳ではなさそうだ。そう思うとほっとした。報せを寄越した第四の兵士にここで最初にそう言われたが、その顔を見るまでは安心などできなかった。

ユルスナールは第四の二人の兵士に少し外すように目線で頼んだ。それを正確に受け取った班長は、じっと大柄な男にしがみつく小柄な人物を見て取って小さく頷いた。但し、余り時間を掛けないでくれ。そう指文字で付け加えることは忘れなかった。ユルスナールは小さく頷くと音にならない感謝の言葉を小さく口元で紡いだ。

ユルスナールの顔を見て、リョウの目には再びじわりと涙が浮かんできた。深い瑠璃色の瞳は自分を安心させた。そのことに気が付かない訳にはいかなかった。この男の存在は自分で思っている以上に深く心の中に入り込んでいて、隅々にまで根を伸ばし、精神的な面で大きな支えになっていることを認めない訳にはいかなかった。自分でも気が付かない内にリョウはユルスナールに依存していた。

そして、一度緩んだ涙腺が再び決壊するのは容易かった。リョウはまるで子供のように泣いた。みっともなく声を上げて。

ユルスナールは、初めて見るそのような相手の姿に一瞬、驚いて、少し狼狽えた。これまでにもリョウの涙は何度か見てきたが、それは静かに内に秘めた感情を堪えながらの抑制されたものだったからだ。このように声を上げて泣くなど初めてのことだった。

昔から女の涙に滅法弱かった。たとえそれが自分の所為ではないとしても目の前で泣かれてしまうとどうしていいか分からなくなる。

ユルスナールは、リョウが座る簡素な木の長椅子に同じように腰を下ろすと震える体を引き寄せ、胸元に抱え込んだ。そして、一連の感情の発露の波が去るのとじっと待つことにした。

暫くして、落ち着きを取り戻したリョウは、ばつの悪そうな顔をした。

「すみません。ご迷惑をお掛けして」

その言葉にユルスナールは不満そうな顔をした。

「そんな他人行儀なことを言うな」

「……ですが」

「お前が知らない男の前で涙を流すのは敵わない。俺の知らない所でお前が悲しい思いをするのも耐えられない。せめて傍に居させてくれ。迷惑だなんて思っていない。寧ろ大歓迎だ」

そう言って小さく笑った男に、

「……ルスラン」

リョウはどこか呆れたような顔をしながらも、その本心の所では

有り難く感じていた。そして、再認識するのだ。この男の優しさと温かさを。

「何があった？」

その問いにリョウは静かに第四の詰め所に連れて来られた経緯を語った。所用を済ませてから学生寮に戻る道すがら、怪我人がいることを聞き及んで騒がしかった人だかりの中を覗けば、路地の真ん中に血だらけの男が倒れていた。医者が来るまでの間、応急処置の手当てをしたが、その途中で男が息絶えてしまった。しかもその男は、自分の知り合いでもあった。

「武芸大会の個人戦で入賞をした人でした。ルスランも見覚えがありませんか？」

顎と鼻の尖った縮れた灰色の髪をした壮年の男だ。

男の特徴を挙げれば、

「ああ。あの男か」

心当たりがあったのか、ユルスナールは小さく頷いて見せた。

人の死を間近に見たのはこれが初めてで、気が動転してしまった。それに自分の力が及ばなかったことが悔しくて悲しくて、どうしていいか分からなくなってしまった。取り乱したことを恥入るようにリョウは男の胸に涙の跡が残る顔を埋めた。

「リョウ、上着はどうした？」

宥めるように大きな手で華奢な背中を摩っている間、ユルスナールはリョウがシャツ一枚であることに気が付いた。しかもよく見れば、それは兵士たちに支給される官給品のようだ。シャツの襟には第四師団の部隊章が隊色の黄色い糸で刺繍されていた。穿いているズボンもそうだ。

「ああ。これはその……手当の途中で汚れてしまったので、お借りしたんです。あのままでは外を歩くには憚られたので」

そう正直に言えば、

「そのままでは風邪をひく」

ユルスナールは自分が身に着けていた外套を脱ぐとそれをリョウ

の肩に掛けた。
じんわりと包み込むような温かさと覚えのある匂いが鼻先を掠めて、リョウは再び滲みそうになる涙をなんとか堪えた。深く息を吸い込む。
「ありがとうございます」
その代わりに微笑んで、男の厚意に感謝の言葉を口にしたのだが、その表情はまだどこかぎこちなさの残るものだった。

頃合いを見計らってか、小さなノックの音がして扉が開き、先程の兵士の男が顔を出した。
「よろしいですか？」
その声にユルスナールは案じるようにリョウを見た。
「大丈夫か？」
これから先程の件を話さなければならなかった。
「はい。ありがとうございます」
しっかりとした声で頷いた相手の姿に班長も大丈夫だろうと己が仕事を進めることにした。
「セイラム。俺も立ち会うが、構わんだろう？」
「ええ。勿論です」
ユルスナールの提案に、班長もその方が却って有り難いと口にした。
そして、セイラムと呼ばれた班長は部下を促すようにして、再び、室内に入った。その手には書類とペンが握られていた。
こうして照明の抑えられた飾り気のない狭い室内に大柄な男三人と小さな一人が集い、簡単な事情聴取が行われることになった。

リョウは兵士の質問に淡々と答えて行った。そして、それと同時に自分が関わった経緯を時間を追って簡潔に話して行った。
兵士が手に持つ書類の中には、先に事情を聞いた三人の男たちの

証言が書かれているようだった。そして、そこには医者である男の怪我人の傷を改めた際の見解も入っていた。
「あの男はお前の知り合いか？」
「はい。ですが、言葉を交わしたのは数えるほどで顔見知りといった具合です」
「あの男の名は？」
「イースクラさんとお聞きしました」
それからリョウは、自分がその灰色の縮れ髪の男と知り合いになった経緯を手短に語った。
最初に出会ったのは【プラミィーシュレ】だった。
「あの【スタローヴァヤ（街の食堂）】の男か」
「はい」
初めてドーリンと出会った時のことをユルスナールも覚えていたようだ。
ここ（王都）で出会ったのは、今日を入れれば三度目だ。一度目は神殿管轄の治療院の傍で柄の悪い男たちに囲まれていた時で、自分も何故かとばっちりを受けて巻き込まれてしまったのだ。そして、二度目は武芸大会二日目の救護班の天幕の中。そして、三度目が今日だ。
勘の良いユルスナールは、一度目の邂逅はリョウが首に怪我を負った時のことだということに気が付いたようだった。
その時の事を詳しく話してくれと言われて、リョウは覚えている限りのことを話した。
「どうやらその男は厄介なことに首を突っ込んでいたようだな」
刃先に毒が仕込まれていたことを挙げながらユルスナールが静かに言い放った。
「毒というのは？」
書類にペンを走らせていた班長が顔を上げた。
「ああ。傷口を塞がり難くする【ヤード】です」
「ああ。あれか。まぁ比較的手に入りやすい一般的な毒草だな」
「はい」

「その時、あの男を取り囲んでいた男たちのことは覚えているか？」
その問い掛けにリョウは力なく首を振った。
「いいえ。金で雇われたと言っていたような気がしますけど、はっきりとは」
男たちの顔や姿形はうろ覚えだった。輪郭は既に曖昧で、いかにも荒くれ者というような風体をした男たちだった。きちんと覚えているのは、仲間の中心にいた頭（リーダー）の男が赤ら顔で髭面だったことぐらいだ。
そこでリョウは不意に思い出したというように顔を上げて、隣にいるユルスナールを見た。
「ああ。【ルーク】なら知っているかもしれません」
あの時、ルークとヴィーのコンビに助けてもらって事なきを得たことを口にすれば、
「ルーク？」
それは誰だというように班長がこちらを見た。
その問い掛けにユルスナールは、静かに片手を前に出すとそこで指文字を使って伝達をした。どうやらその名を口にするのは憚られるようだ。
――――――【チョール（黒き）ナヤ・テェニィ（影）】の男だ。
意外な言葉だったのか、班長は目を見開いた。
「必要とあらば繋ぎは取る。俺が訊いてもいい」
その申し出に班長は助かったという顔をした。
「そうして頂けるとこちらとしては助かります」
その名の通り、この国の影の諜報機関である【チョール（黒き）ナヤ・テェニィ（影）】は、軍部の中でも特殊な位置づけをされていた。それを取りまとめる長は【アタマン】と呼ばれ、その構成人員は秘匿事項とされていた。同じ軍部と雖も、余程の伝手がなければ繋ぎを取ることは出来ない相手だった。
それからリョウは、手当ての為に男を神殿管轄の治療院へ連れて行ったと言った。そこに詰めている神官とはその後も親しげに話を

していたことも付け加えた。
「その男はここで何をしていた？　何か聞いているか？」
「武芸大会に参加されてました。個人戦では入賞していましたよ」
その言葉に班長は意外そうに眉を跳ね上げた。
「ということは剣の腕は立つんだな」
そう言いながら書類を捲って、中にある報告に目を走らせた。
そこで眉間に皺を寄せた。
「大きな太刀傷が左の太ももに一か所。左の肩に一か所。左胸に一か所。それに無数の浅い切り傷。致命傷となったのは恐らく太ももと左胸で、死因は大量に血を失ったことによる失血死だろう……というのが医者の見解だ。後で軍医にも診てもらうが、恐らく同じ結果になるだろうな」
相手は複数か。いや一人の場合もあるだろう。あそこは狭い路地だった。あの界隈の光景を思い浮かべながら班長は内心首を捻った。単なる強盗の類にしては傷が多過ぎる。では暗殺か。いや、明確な殺意があったとしてもあれだけの傷を負わせておいて止めを刺していないのは随分とお粗末だと思った。助けを呼んだ男たちの話を聞く限り、その傷を負わせた相手を見た者はいなかった。
それから班長は徐に視線をリョウに移した。
「手当てをしたのはお前だそうだな」
「はい」
目を伏せたリョウに班長は小さく微笑むと息を吐き出した。
「お前の処置は的確だった。傷口は完全に塞がっていて、出血も止まっていた。医者が目を丸くしていたぞ。大したものだと」
「いえ」
それでもあの男を救えなかったことには変わりはない。顔を俯けたリョウに尚も男は言葉を継いだ。
それは諭すような声音だった。
「あの男はそれまでに血を流し過ぎた。お前が殺した訳ではない。あの男を救えなかったことをお前が気に病む必要はない」

「……はい」

それは客観的な正論かもしれない。だが、リョウの中では割り切れないものがあるのも確かだった。

ユルスナールからも同意を示すように抱かれた肩に力を込められて、リョウはこの場では素直に頷くしかなかった。

「他に何か知っていることは？」

停滞しそうになる空気を変えるように話題を変えられて、それからリョウはあの男のことで思いつく限りのことを語って聞かせた。

男には血を分けた子供が二人いて、行方不明になったその子供たちを探して旅をしていたということ。そして、もうすぐその手掛かりが掴めそうだと言っていたことなどだ。

そして最後に謎めいた言葉を残されたことを明かした。

「【ユプシロン】に気を付けろ？」

ユルスナールと班長はそこで顔を見交わせた。

「はい。聞き取れたのはそこまでで……」

「一体、何の話だ？」

「分かりません。神殿の神官に関係があるとしか……」

どうやら【ユプシロン】という言葉は、軍部の人間には広く認識されている言葉らしかった。

「分かった。後でその治療院の神官にも話を聞くとしよう。何か知っているかも知れないからな」

話が思わぬ方向に進んで、班長はこれは思ったよりも複雑な事件かもしれないと思った。

単なるゴロツキとの喧嘩や傷害致死事件とは違う可能性が出てきた。しかも神殿が絡んでいるかもしれないのだ。武芸大会に入賞したと聞いてその時の報奨金目当ての物盗りの犯行かとも思ったが、男の着衣を改めた際に懐から金貨が出てきたのでその線も薄くなった。

もう一つの線としては、人身売買をしている闇の組織から制裁を

受けた可能性もある。スタルゴラドでは奴隷や人身売買は公には禁止されているが、その網の目を掻い潜るように闇の世界では取引がなされていた。借金で首が回らなくなった者やその家族の中で特に見目のよい若い娘がいれば、娼館や金持ちに売り飛ばされたりした。

行方知れずになった子供たちを探していると聞いて浮かんできたのはそのようなことだった。

だが、そこに神殿の神官が絡むとなると分からない。神官の中にそのような闇の経路（ルート）から人を買ったものがいるのだろうか。そうなると捜査は困難を極めるだろう。

「警告……のようだな」

これまでの話を聞いて、じっと考えるように虚空を睨んだ後、ユルスナールが言った。

「だが、誰に対するものだ？」

その問いに対する答えは誰も持っていなかった。

「さぁ」

リョウが力なく首を横に振った対面で班長も肩を竦めた。

神殿はその歴史も古く、宮殿と並ぶ権力を持ち、多くの秘密を抱えた組織だった。男はそこで何かを探っていて、向こうの逆鱗に触れて報復を受けた。若しくは口を封じられた。これまでの話を総合すればそのような図式も考えられた。だが、それはあくまでも推測で、その裏を取るのは非常に難しいことのように思えて仕方がなかった。

「いずれにせよ。事があちら（神殿）に及べば、こちらでは手も足も出ませんからね」

神殿には治外法権的な権力があって、おいそれと第四の兵士が介入することは出来なかった。

そうなったらお手上げだとばかりに肩を竦めた班長に、

「だろうな」

ユルスナールも合槌を打った後、小さく口の端を吊り上げた。

「だが、まぁ、やり方はいくらでもある」

そう言うと、こちらはこちらで伝手を使って調べてみようと言った。その伝手というのは、もしかしなくともシーリスとレヌートの繋がり（ライン）だろうか。

その後、一通りあらましを聞き終えてから、リョウは漸く解放された。

班長に借りている服は洗濯をしてから返すと言えば、それは古いものだから好きにして構わないと言われてしまい、少し困った。

そこでユルスナールは苦い顔をして見せた。

「そんなのを着ていたら、今度は第四の兵士だと思われるぞ？」

「それはいけませんね」

リョウは苦笑いをした。それは流石に御免だったのでやはり洗って返すことに決めた。

「着るものくらい買ってやる」

突然被せるようにして出てきた男の提案にリョウは目を瞬かせた後、少し困ったように笑った。

「大丈夫ですよ。ワタシにも持ち合わせはありますから」

「そのくらいさせてくれてもいいだろう？」

「いいえ。そう言う訳にはいきませんよ」

口調は柔らかいが、そこにはきっぱりとした否定の意思が表れていた。

これまでユルスナールには色々と世話になっていた。理由もなく何かを買ってもらうのは憚られた。

「何だ、俺の楽しみを奪うのか？」

「楽しみって……何の話ですか？」

飄々とそんな軽口を叩いたユルスナールにリョウは少し脱力した。そこから何故か妙な甘さを帯びてずるずると脱線しそうになった空気を前に、第四の二人の兵士は居心地が悪そうに身じろぎし、どうしたものかと目配せをし合った。

部下からの必死な信号を受けてか、班長が態とらしい咳払いをし

た。
「聴取は以上です。ご協力ありがとうございました」
それは取ってつけたような台詞だったが、二人の注意を引き戻すには十分だった。
「いえ。こちらこそ。色々とお気遣いありがとうございました」
穏やかな口調で丁寧な礼を述べたリョウに班長はそっと微笑んだ。
小さく頭を下げた時、相手の癖の無い黒髪が艶やかに流れ落ちた。
そこにあるのは紛れもない成熟した女の顔だった。
そして再び、視線を横にずらして。その隣にいる強面と揶揄されることの多い男の表情が緩み切っているのを見て取って、班長は成る程と妙に感心したのだった。というのは、また別の話である。

術師への扉

「それでは、これで最後の問いにしよう」

全ての質疑応答が終わった後、最後に一列に並んだ五人の試験官の中から、真中に座る老人が尋ねた。

「キミは、見た所、この国の出身ではないようだが、ここで術師としての登録をした暁には、この国【スタルゴラド】への忠誠が求められる。国からの要請があった場合にはそれを最優先にすることが求められるが、そこに異存はあるまいか？」

「はい」

一人、対峙する受験者は静かに頷いた。

あれから更に三日が経過したこの日、術師の最終試験が行われることになった。

場所は、養成所の校舎内ではなく宮殿の区画へ入った外縁部にある一室で行われた。中には五人の講師たちが試験官として横一列に並んで座っていた。それに対峙する受験者は一人。広い空間の中央に椅子がぽつんと置かれている。窓際には、更に二つの椅子が並び、そこには受験者の後見人となっている術師と登録機関の要請を受けて派遣されているという役人が一人、立会人として席に着いていた。

試験は全て口頭で、其々の試験官から出された問いに答えてゆくというものだった。範囲は、受験者が選択し修了をした全ての分野に関してだ。

試験官は全部で五人いた。向かって左端には鉱石処理を専任とする地質学者であるイオータ、その隣に座る二人の老講師は其々この養成所の所長と副所長という肩書を持っており、術師の中でも幅広い分野に精通し深い造詣を持つ熟練の講師である。その次に座るの

は神殿から派遣され教鞭を取っている神官、そして最後、右端に陣取っているのは、以前、イオータのお供で宮殿内のとある会議に参加することになった時に居合わせた地質学者の老人だった。

窓側に設置された二つの椅子の内の一つには、この養成所に入学をする際の世話役になってくれたレヌートがいた。そして、その隣には、何故か、第三師団の副団長の肩書を持つ男、ヒューイ・サフォーノフが立会人として着席していた。リョウが初めて【アルセナール】を訪れた時に道案内を頼んだどこか尊大な匂いのする男である。

通常、この場所には術師登録機関の方から派遣された役人が実務的な諸手続きを兼ねて立会人として参加するはずなのだが、今回はどういう訳か話が回り回って第三師団の方から人が派遣されることになったようだった。

こうして一通り、最終試験の設問が終了した所であった。

真ん中に座る老人、この養成所の所長からの静かな問い掛けにリョウは真っ直ぐに前を向いた。所長の表情は穏やかであったが、そこにある瞳は真摯で偽りを許さないものだった。

「ワタシにはもう帰るべき国はありません。強いて言えば、この地が第二の故郷になればと思っております。元より、この地に骨を埋める覚悟です」

この場で取り繕うような嘘は付きたくなかった。だから本心を正直に答えていた。

「ふむ。よかろう」

所長は、その答えに満足したように一つ鷹揚に頷いた。

「では私からももう一つ。ここで術師の登録が済んだ後はどうするお積りかな？」

真ん中の老人の向かって右隣に座る神官の男が今後の去就を尋ねた。老人の帯の色は、神官の中でも最高位を表わす黒い色をしていた。

「一度、家に帰りたいと思います」
その言葉を受けてか静かな空間に紙を捲る音が響いた。受験者の申請書とそこにある内容を確認しているのだろう。
「キミの家はスフミ村かね？」
申請時の書類にはこの国の最北端の村であるスフミを名を便宜上、書いていた。
「厳密に言えば、スフミ村よりも更に北西の方角、ちょうど広大な森が見える辺りに暮らしています」
「ほう？」
その発言に養成所の所長と副所長である高齢の二人の試験官が顔を見交わせると興味を惹かれたように身を乗り出した。
「キミに家族は？」
「そこで一人で暮らしておるのか？」
畳みかけるように問われて、
「今は一人ですが、家族と呼べる獣たちがいます」
リョウの頭の中にはセレブロや鷹のイーサン、アラムやサハーといった狼たちの姿が浮かんでいた。
「一度、家に帰って少し身の回りを整理したいので、これから先のことはそれから考えてみようと思っています。何分、時間だけはたっぷりとありますから」
そう言うとリョウは柔らかく微笑んだ。
「神殿で神官になる積りはないのかね？」
老齢の神官が期待を込めてこちらを見ているのが分かった。それに小さく苦笑を滲ませるように微笑んでから緩く頭（かぶり）を振った。
「いいえ。ワタシには無理です。申し訳ありませんが」
「何か理由でもあるのかね？」
リョウはその言葉に少し逡巡したが、この際、本当のことを明かしてもよいかと思った。森の小屋に戻れば、もうこの場所にも来ることもあるまい。最後の置き土産として自分に正直になろうと思った。

リョウは顔を上げると真っ直ぐに老齢の神官を見た。
「神殿に仕える神官は、皆男性だとお聞きしています」
「ああ。そうじゃな。神官になるには男でなければならない。それがしきたりじゃ」
「だからです」
被せるように告げられた言葉に老齢の神官は虚を突かれたように動きを止めた。
「ワタシはこのような格好(なり)をしておりますが、性別としては女なので」
だから最初から道が閉じられているのだと告げれば、しんと室内に何とも言えない静寂が落ちたような気がした。
やはり唐突過ぎただろうか。内心、恐々として居並ぶ五人の試験官たちを見遣れば、四人の試験官たちは呆気にとられた顔をしていた。唯一、左端に座るイオータだけは事情を知っているのか、にこにこと笑っている。
やがて神官の老人がさも愉快そうに声を立てて笑い始めた。
「ふぉふぉふぉ。そうかいそうかい。それではなりたくとも端から無理な話じゃのう。これは一本取られたわい」
「すみません。紛らわしいことを致しまして」
恐縮そうに肩を縮めたリョウに老齢の神官は、軽く片手を振った。
「なに。キミが謝ることではない。キミがどのような格好をしていようともそれはキミの自由。キミの本質は変わらぬ。勘違いをしていた儂らが悪いのじゃからの」
そう言うと老講師たちはしたり顔で頷き合った。
――――――では、最後に。
それまで一人、沈黙を守っていたイオータが徐にその口を開いた。
灰色の澄んだ玉のような瞳がリョウを静かに見つめていた。
これまでとは違った誠実で真摯な表情にリョウも同じように態度を改めると背筋を伸ばした。

「リョウ。お前さんが能力を開花させるのに最初の手ほどきを受けた術師の名を聞かせてはもらえんかの？」

リョウはその言葉に軽く目を瞠った。

ここでその名を口にしてもよいのだろうか。シーリスやユルスナールたちからはきつく口止めをされていたその名前を。

だが、そこでイオータは続きを促すように穏やかに微笑んだ。

リョウはゆっくりと目の前に対峙する五人の老人たちを見渡した。

そこにある空気は凪いでいた。波乱や混沌とは無縁の俗世からも突き抜けたような厳かな空気だ。

それからリョウは再び発言者であるイオータを見た。そこに浮かぶのは慈愛に満ちた優しい微笑みだった。これまで男が過ごしてきた年月を如実に刻んだ皺だらけの顔。そこにかつての情景が重なり、同じように深い皺の刻まれた一人の男の顔が浮かび上がってきた。

大丈夫だ。そう言われている気がした。

リョウは一旦、目を伏せてから再び前を向いた。そして、昔……と言ってもほんの一年にも満たないこの春先の出来事を懐かしく思い出しながら、ゆっくりと口を開いた。その顔には、これまでにも増して柔らかな微笑みが湛えられていた。

「ワタシの中にある素養を見抜き、ワタシにそれを使う手ほどきを授けてくれたのは……」

そこで吸い込んだ息をゆっくりと吐き出した。

――――――ガルーシャ・マライです。

静寂に包まれた室内にその男の名前が反響し震えた。

その瞬間、リョウの胸元から一条の光が放たれた。首に下がっていたペンダントが強烈な青白い光を放ち始めていた。

リョウは、吃驚して上着を開き、鎖を引き抜いてそこにぶら下がる青い石を取り出した。

するとシャツの隙間から漏れ出していた光が一気に溢れ出した。その自分の親指の半分にも満たないような小振りの小さな青い石が、

一際大きな光を放ち、周囲に拡散し始めたのだ。それを至近距離で浴びたリョウは、余りの眩しさに目を瞑った。

「……おお」

「これは……」

閉じられた視界、小さく呟かれた呆けたような声が耳に入った。

リョウは閉じていた目をゆっくりと開いた。するとそこには思いがけない光景が展開されていた。

胸元のペンダントから青白い光の粒子が集まって伸び、照射するように一人の男の姿を浮かび上がらせていた。ぼんやりと揺らぐ粒子から立ち上るようにして現れたのは、リョウが失って久しい愛する故人の面影だった。いや、よくよく見れば、それは自分の記憶の中にある姿よりも幾分若いかもしれない。たっぷりとした長い外套を羽織った姿。身に着けているものは変わらないが、それらも草臥れた感じは受けず、真新しいもののように見えた。

「ガルーシャ……」

リョウの口からは故人の名が漏れていた。

その声に反応してか、青白い光の中の男がゆっくりと振り返った。そして、最後に見たときよりも格段に若々しい顔付きで微笑んだ。

「おめでとう、諸君。時が満ちたようだな」

揺らぐ青白い光の粒子の中にある男は、そう言うと慇懃な動作で片手を胸元に当て、上体を少し傾けた。それは、この国の一般男性が行う最上の敬意の表し方だった。

男のその仕草はやけに芝居掛かって見えた。男の動きに合わせて残像のように青白い線が軌道を描いた。

光の中に揺らぐ男が小さく微笑んだように思えた。

「キミの顔を見られないのは至極残念だが、致し方あるまい」

口調は変わらずともその声音は記憶の中にあるものよりもやはり幾分若かった。

それから男は振り返ると後方に居並ぶ講師陣を見渡した。

「大事にしておくれ。私の愛し子を。まぁ、逃げられんように精々

気を付けることだな」
　男は皮肉っぽく小さく笑うと静かにリョウの方を振り返った。だが、その視線はどこか遠くを見つめているようで、幾ら目を合わせようとしても焦点が合うことはなかった。
「結界が解かれた」
　五人の講師陣が居並ぶ端でイオータが小さく呟いた。
「……ガルーシャ？」
　その呼び掛けに答えることなく、ガルーシャ・マライはどこか遠くを見ていた。いつかの起こるとも知れない遠い未来を見つめているのかもしれなかった。
「キミに我が知を譲ろう。キミの行く末が幸多からんことを」
　ガルーシャは手を伸ばすとリョウの頬に触れようとした。だが、実体の伴わない光の塊は、ぐにゃりと歪んで鼻先で形を変えただけだった。
　男の薄い唇が薄らと弧を描いた。少し尊大な感すらある独特な微笑み。
　そして、最後の灯火のように一段と周囲を取り巻く光が明るさを増したかと思うと、塊であったはずの光の粒子が噴き出すようにして散り散りに拡散し、そして、そこに浮かんでいたはずの男の幻影を瞬く間に消し去ってしまった。

　そして、部屋の明るさが元通りに戻った時、リョウの掌にはいつもと変わらぬ控え目な輝きを放つ、なんの変哲もない深い青さを湛えた石が静かに乗っていた。
　リョウはその石を胸元でぎゅっと握り締めた。
　誰も口を開く者はいなかった。
　先程のガルーシャの幻影は、きっとこの部屋に残されていた思念のようなものなのだろう。いや、ひょっとしたらガルーシャ自身が前もって呪いの類をこの部屋に仕掛けていたのかもしれない。かつてガルーシャが養成所で教鞭をとっていた時代の話だ。それに何か

が反応をした。
「本当にあの男は相変わらず突拍子もないことをする。我々を驚かせてばかりだな」
立ち上る幻影が消えた先を見つめながら、真ん中に座る所長がつるりとその頬を撫でた。
「今のは、ガルーシャがこちらにいた時の姿ですか？」
その予想には肯定の頷きが返ってきた。
「ああ。そうだな。あの男の事だ。大方、ここを去る前にあのような仕掛けをここに残しておいたのだろう」
――――――いつ来るかとも知れぬ己が知識を譲るにふさわしい若者が現れる時を待って。
「全く、かように仰々しいことをせんでもよかろうに。相変わらず人騒がせな男だ」
憎まれ口を叩いた老人の顔には、それでも故人を懐かしく思い出していることを疑わせない穏やかな微笑みが浮かんでいた。
「このペンダントの石が媒体になったのかもしれませんね」
これはその昔、ガルーシャが作ったものだった。持ち主の手を変えて、再びこの場所に戻ってきた。それがここに仕掛けられていた術に反応をしたのかもしれないとリョウは思った。
「それも一理あるが、儂は、リョウ、お前さん自身が【鍵】になったと思うぞ？」
イオータがそう言ってじっとこちらを見ていた。
「ワタシが…ですか？」
「ああ。なんの因果かは知らぬが、お前さんがここで学んだこともあの男の導きがあってこその話だからのう」
それは言い得て妙だった。そもそもの始まりはガルーシャの封書を手に北の砦を訪れたことだった。そこから何かが動き始めたのだ。見えない糸に手繰り寄せられるようにして。
ガルーシャがどこまで未来を見通していたのかは分からない。だが、こうして思い返してみれば、それが巡り巡って、自分を王都に

まで辿り着かせた。
　複雑に絡み合った糸が、今、こうして思いがけない繋がりを生み出し、それを白日の元に晒す。
　この場所では本当にガルーシャには世話になってばかりだとリョウは思った。故人を失って久しい今でも、ガルーシャはこうして自分を見守ってくれているのだ。それを思うと心の奥がじんわりと温かくなり、一度は枯れたはずの涙が出そうになった。

　それから程なくして最終試験の全ての行程を終えたリョウは、一人試験会場を辞した。
　試験が行われた部屋を出てから回廊を通って外に出た。冬場の空は遠く澄んでいて、とても薄い青色をしていた。
　それから少しぶらぶらと当て所なく歩いて、ベンチのある中庭のような場所に出た。
　外に出ると解放感に大きく伸びをした。コキコキと骨が鳴る。やはり慣れないことにかなり緊張をしていたことが、急激に弛緩を始めた筋肉から感じ取れた。
　入室した際、中にずらりと並んだ試験官たちを目の当たりにして、それが見知った講師たちだとしても足が震えそうになった。その極度の緊張も最初の内だけで、実際に試験が始まってしまえばそのようなことは気にならなくなった。
　全てを終えて、不思議と心は凪いでいた。後は結果を待つのみ。やれることはやった。悔いはなかった。
　これからあの部屋では試験官と立会人、後見人を交える形で合否の審査会が開かれるとのことだった。そこで出された結果は、後日、後見人となったレヌートを通じて知らされることになっていた。
　それにしても不思議なことがあったものだ。リョウはその発端になった胸元にぶら下がる小さな青い石をそっと指で触れた。試験のことよりもあの最後の幻影の方がリョウの心に強い印象を植え付け

ていた。

あの場所は、代々術師の最終試験用に使用されている部屋の一つであるという。養成所の行う試験であるから、てっきりその会場も同じ養成所の校内だとばかり思っていた。それを敢えて宮殿の区画内にある一室で行っているのだ。そこは講師たちの利便性を考えてのことでもあるとのことだった。

あの部屋ではこれまでにそれこそ何百回という試験が行われてきたに違いない。だが、今まであのようにガルーシャ・マライの残像が現れたことはなかったそうだ。

リョウは、あの部屋の中に張り巡らされていたガルーシャの仕掛けと波長が合ったのかもしれないと思った。この場所で、術師と呼ばれる存在があることを自分に教え、その道に導いてくれたのはガルーシャだったからだ。一年と少しという短い期間ではあったが、共に過ごした時間は、今にして思えばとても濃密で掛け替えのないものだった。

振り返ってみれば、あれは実に泥臭い日々だった。毎日が試行錯誤の連続で、目にするもの耳にするもの全てが新しく、覚えなくてはならない対象だった。途方もない程の状況に愕然とする間もなかった。飲み込みの悪い自分にガルーシャは根気よく付き合ってくれた。

ガルーシャはいつも淡々としてそこにあった。失敗をしても上手く行かなくても無理に励まそうとしたりはしなかった。それがどんなにか支えになったことか。

そして旅立って尚、自分をこうして陰ながら支えてくれている。

立ち上るようにして現れたのは、記憶の中に刻まれていたものよりも若かったガルーシャの姿。ガルーシャがこの王都を後にしたのは、二十年近くも前のことだという。

あの幻影は決して自分を認識していた訳ではなかった。当時、恐らくいつ来るとも分からない未来の術師の卵に向けて、あのような伝言を呪いにして残しておいたのだろう。あのガルーシャのことだ。

ちょっとした悪戯心のようなものもあったのかもしれない。張り巡らされた罠のようなものに運良く（若しくは運悪く）引っ掛かった者がいたら、『オメデトウ』という具合に。未来の術師を励ます積りだったのか。だとしたらやけに手の込んだ仕掛けだ。だが、それも実にガルーシャらしいやり口だと言えた。

実際の所、リョウにはあの若きガルーシャが何を伝えたかったのか、よく分からなかった。懐かしさで胸が一杯になっていたという方が大きいかもしれない。

それからリョウはゆっくりと後方、東の方角を振り返った。そこからは遠く、神殿の白亜の建物が堂々とした姿を晒しているのが見えた。

今頃、あの裏手にある墓地ではイースクラの葬儀が行われていることだろう。

この場所で身寄りがなく引き取り手のない遺体は、神殿に移送され、そこで神官たちの手によって埋葬が行われるのだという。あの丸い特徴的な白い石碑には、そこに眠る者の名前と亡くなった日付が刻まれることになるのだろう。

弔いの日時が決まったとの報せを受けた時、リョウは出来ることならば参列したいと考えていた。少なくともあの男の最後を看取った形になったのだ。

だが、ちょうどその日が、今日の試験に当たってしまった。報せを寄越してくれたスタースには、返す伝令で参列は無理かもしれないと伝えていた。

葬儀には間に合わなかったが、後でお参りに行きたいと考えていた。小さい花を見繕って手向けることぐらいは出来るだろう。

葬儀にはスタースが神官として立ち合うとのことだった。この国の風習に則り、小さな鐘を振り鳴らしながら祈りの文言が滔々と紡がれるのだという。それは、まるで歌を歌っているような独特な節回しの旋律なのだそうだ。名もなき男の為の鎮魂歌。ひっそりと紡

がれる厳かな哀悼歌というところかもしれない。
あの男が探しているという二人の子供たちがこのことを聞いたら、どんなにか悲しむだろうか。それを思うと胸が潰れそうになった。
あの後、スタースとはイースクラのことで少し話をした。あの男の旅の理由は、スタースも聞かされていたようで知っていた。そして、もし、あの男のことを尋ねる人があったら、遺品を神殿で預かっているからそう伝えて欲しいと言われ、リョウも素直に頷いたのだ。

見上げた空は少しくすんでいて、相変わらず気持ちの良い風が吹いていた。風はまだ冷たいが、もう少し経てば春の香りを運んでくるに違いない。そんな狭間の頃合いでもあった。
ゆっくりと振り返った先、吹き寄せる風に乗って微かに鐘の音が聞こえた気がした。

もう一つの試験

術師の最終試験が終わった後、小さな庭先のようになっている花壇脇の石の縁に腰を下ろして、これから神殿裏の墓地にでも行ってみようかと算段していた時だった。

上空を旋回するような影が足元に射したかと思うと甲高い鳴き声を一つ合図に上げて、こちらに向かって急降下してくる翼の姿があった。リョウは上方を見上げると逆光を透かして、そこにある影の姿を捉えた。

「ヴィー」

差し出した腕に馴染みある重みがずしりと乗った。それは知り合いの大鷲・ヴィーだった。ここで会うのは暫く振りだった。以前、街中の治療院がある界隈でいざこざに巻き込まれた時以来だ。あれは武芸大会が始まる二日前の出来事であったから、約【デェシャータク[10]日】振りということになる。

「やぁ、ヴィー、久し振り。元気にしてた？」

久々の訪いの理由を問えば、大きな鷲は平衡（バランス）を取るように羽を広げると胸を反らした。

『ああ。変わりない。なに。そなたが今日、試験であると聞いてな』

「心配して来てくれたんだ？」

半ば苦笑を滲ませた問いにヴィーは答えなかったが、リョウは別段気にはしなかった。気位の高い獣たちとの会話は大体似たようなものであるからだ。全ての問いに対し、こちらが望むような答えが返ってくるとは限らない。

『もう終わったのか？』

「うん、ちょうどついさっきね」

頬を緩めたリョウの鼻先で、ヴィーが空気を改めた。

『【アタマン】より伝令だ』

「……アタマン？」
初めて耳にする言葉にリョウは首を傾げた。
『ああ。長のようなものだ。ルークの上役とでも思えばよい』
あの神出鬼没なルークの上役と言われてもリョウはその長がどういう組織の長なのか全く想像が付かなかったが、取り敢えず話を進める為に頷いていた。
それにしてもあの気ままな男が誰かに仕えているというのも妙な感じだ。あのルークという男は束縛を嫌うように思えたからだ。
更にその長とやらからだという伝令は、リョウには不可解なことだった。
『時満ちて結界綻びぬ。ついては話したき儀あり、近々使いを寄越す故、参られよ』
リョウはヴィーの口上を静かに聞いた後、頭の上に沢山の疑問符を並べた。【アタマン】と呼ばれる長からの呼び出しの通達であることは理解出来た。だが、そこに使われた語句が全く意味不明だった。まるで何かの暗号のように思えた。時が満ちるとは何のことだ。結界が綻びるとは何の話だ。そこで、ふとリョウの脳裏には試験会場でイオータが漏らした小さな呟きが過った。集まった青白い光の粒子がガルーシャの姿を描き出した時、確か、そのようなことを口にしていたような気がしたのだ。結界が解かれたと。
「ええと、ヴィー。それって、ワタシ宛ての伝令なんだよね？」
『左様』
なんのことだかさっぱり分からない。呼び出しを受ける理由に心当たりもない。素朴な疑問を口にすれば、ヴィーは少し考える風に首を揺らした。
『先程、結界が解かれしことを我らは感知した。恐らく、その事で二・三、確認したき事があるのだろう』
「……結界？」
『ああ、そこからか？』
「うん」

『結界というのは、あの男がその昔、施した呪いのこと』
「あの男って？」
『無論、ガルーシャのことよ』
ガルーシャの施した結界。それはもしかして森の小屋の位置を隠すような仕掛けのことだろうか。
以前、ユルスナールとブコバルが言っていたのだ。森の小屋の近辺にはガルーシャが施した結界があり、無用な来訪者を選別し、弾き返しているのだと。ガルーシャが認めた者でない限り、あの小屋の場所は分からないようになっているらしいとのことだった。
『今しがた大きな気の乱れを感知した』
試験の時に何か変わったことが起きなかったかと聞かれて、リョウは胸元のペンダントを取り出すと、ガルーシャの幻影が現れたことをヴィーに話した。
『ならばそれが契機だろう』
ヴィーは何かに納得するように言った。リョウは理解出来た訳ではなかったが、ヴィーがそのように言うのならば間違いがないのではないかと思った。
いずれにせよ、伝令は【アタマン】直々の要請ということだった。組織の内部以外の人間に長が自ら繋ぎを取ることは滅多にないことであるとも付け足された。そのことを聞いてリョウは心なしか緊張気味に肩に力を入れたが、少し話をするくらいだから気構えることはないと逆にからかわれてしまった。そういう呼び出しが今後あるということを頭の片隅に入れておけばよい。ヴィーの話を纏めるとざっとそのような感じだった。
リョウは取り敢えず分かったと頷いていた。
「じゃぁ、また改めて連絡が来るのを待っていれば良いんだね？」
『左様』
「連絡はまたヴィーが？」
『それは分からぬ』
「ふーん」

『ではしかと伝えたぞ』
「うん、分かった。ありがとう」
リョウはそれからポケットを探って中に入れていた小さな袋の中から干したスグリの実を取り出した。スグリの実は一般的に鳥たちの大好物で、猛禽類であるヴィーも好きなものだった。
「生じゃないけど食べる？」
その実が取れるのは専ら夏の盛りの時期で、冬場はこうして保存用に干したものを摘むのだ。少々硬いが、噛めば噛むほど凝縮した甘みが増して、ちょっとしたおやつ代わりに重宝するものである。これは夏場、森の中で見つけた野生の実を取って乾燥させたものだった。森の小屋には他に煮詰めて瓶詰にしたものもあった。
差し出した濃い紫色をした小さな実をちらりと横目に見て、
『干したものか』
ヴィーはやや不満そうにぼやいたけれども、
「じゃぁ、いらない？」
リョウがその手を引っ込めようとすれば、
『待て。要らぬとは言っておらんだろう』
掌の上にあった小さな実は、瞬く間に黄色く湾曲した嘴の中に消えて行った。
『うむ。この間のよりはこなれておるの』
この間、同じようにあげた実は、出来が良くなかったようで（干し加減にも色々あるようだ）美味しくないと言いつつもヴィーは出されたものを全て平らげたのだ。ヴィーは食い意地が張っているのかもしれない。その時のことを思い出してリョウは小さく笑った。
「それは良かった。当たりだったね」
『ではな』
「うん。ルークによろしくね」
『ああ。あやつに会ったら伝えておく』
それから用件を終えた伝令は、大きな羽を伸ばして再び大空へと飛び立って行った。

その軌道をぼんやりと追っていた時のことだった。近くで土を踏む足音がして、リョウはゆっくりと振り返った。

そこには男が一人立っていた。その視線の先は、同じように飛び立って行った伝令の行く先を追っているようだった。

初老の域に達しているかと思われるような齢の男だった。服の下からでも分かる大柄のがっしりとした体つきに髪の色は、銀色とも薄い灰色ともとれるような色合いで豊かにうねり、それをきっちりと後方に撫で付けるようにして緩く一つに束ねていた。

束ねた先が吹き込む風に揺らいだ。

存在感のある男だと思った。

「どうかされましたか？」

いまだ飛び去ったヴィーの帰路を追っていた男に声を掛ければ、男の視線がリョウを捕らえた。

そこにある男の双眸にリョウの鼓動は一つ不規則に跳ねた。自分でもよく分からない。だが、男の瞳は深い青さを秘めたものだった。そう、まるでこのペンダントの【キコウ石】と同じように。

男の風貌は堂々としていた。男らしい真っ直ぐな眉。目尻には皺が多く刻まれている。すっと伸びた鼻筋の下には薄い唇が引き結ばれ、その周りを綺麗に整えられた髭が囲っていた。全体的に男らしい硬質な顔立ちだ。そこにある何らかの既視感のようなものを覚えた所で、男が静かに口を開いた。

「あれはキミの【ツレ】か？」

その声は深く艶やかでもあった。語尾が少し掠れる。その独特な摩擦音に尾てい骨が震えた気がした。

【ツレ】――それは、軍部の中で伝令の任に就く鷹匠たちが、自分と組み（ペア）になる伝令に対して使う言葉だった。【相棒】と称するのが意味合いとしては最も近いかもしれない。

つまり、ヴィーは自分の相棒かと聞かれたのだ。

リョウは小さく微笑むと緩く首を横に振った。
「いいえ。あれは知り合いの伝令です。ワタシに用事があったようなので」
リョウも同じようにヴィーが消えた彼方へと視線を向けていた。
そこにはもう大きな羽の影はなく、少しくすんだ明るい空色の蒼穹が広がっている。
「そうか」
男はゆっくりと振り返ると徐にリョウの傍に歩み寄った。

男は静かにリョウを見下ろした。瑠璃色とも思われる深い青さを湛えた瞳がすっと細められた。何かを見定めるように。何かを重ねるように。
この瞳の前では、何もかも見透かされてしまいそうだと思った。
自分が良く知る男と同じような色合いをしているからかもしれない。
男は黙ってリョウを見下ろしていた。それは静かな眼差しだった。
深い水面の底を覗いているようなひっそりとした凪ぎの色だった。
それから長いこと無言のまま見下ろされて、リョウは流石に居心地の悪さを感じ始めていた。
「あの……何か？」
――――――ワタシに御用でしょうか？
怪訝そうな顔をしたリョウに男が微かに口元を緩めた。
そうするだけで男の印象はかなり様変わりした。近寄り難い硬質な空気がそれだけで柔らかく変化した。
「キミは、軍部の人間ではないのだな」
小さく漏れた確認のような呟きにリョウは自分が養成所に通う学生で、今、最終試験を受けたところなのだと答えた。
「そうか。キミは術師を目指しているのか」
「はい」
「その後は軍部入りをするのか？」
「いいえ。それは考えていません」

怪訝そうに小さく上がった眉にリョウは誤魔化すように笑った。
「まだどうするか、今後の道筋をはっきりと決めた訳ではないので。一度、家に帰ってからゆっくり探して行こうと思いまして」
――――時間だけはたっぷりとあるものですから。
「そうか。キミはまだ若い。大いに悩めばいい」
きっと男が想像しているよりも自分の実年齢は高いはずだった。だが、初老の域にいると思われる男の方から見たら、それは余り変わりがないのかもしれない。
「そうですね」
リョウは同意するように微笑んでいた。

「キミは、どんな術師を目指しているんだ?」
立ち話も何だからと言って、促されるようにしてすぐ傍にあったベンチに腰掛けることになった。
それは初めて聞かれた問いだった。今までは術師としての資格と地位を得ることに重点を置いていて、その先にある道筋や自分が取るべき方向性を具体的に詰めていた訳ではなかった。
「そうですねぇ」
リョウは遠く霞むようにたなびく薄い雲を目で追いながら、ゆっくりと口を開いた。
「今、そこにある人に寄り添うことのできる術師になりたいと思っています」
ここでは術師が世の中で果たす役割は大きく、しかもその分野は多岐に渡っていた。それこそ日常の細々としたことを始めとして、術師とその施術によって生み出されたものは巷に溢れていて、知らない間にその恩恵に預かっているという具合だ。人がその一生の中で常に関わり、そして多くの機会で接する存在であるとも言えた。
この場所では形にならないはずの人の想いが時として形を持ちえたが、それを具現化させる為には、術師の介在が必要だった。

時には近しい他者としてその者が抱える傷に寄り添い、時には理解者としてその者の苦しみ、悲しみ、そして喜びに立ち会う。そのような存在になりたいと思った。草の根のように目立たないけれども、気が付いたら深く入り込んでいて欠かせないものになっている。そういう存在になりたいと思った。

「と言っても、まだ術師になれたわけではないのですけれど」

今は、試験を受けたばかりでまだ合否の判定が出ていないのだ。つい一人で熱く語ってしまったことに気が付いて、リョウは込上げてくる恥ずかしさを誤魔化すように小さく首を傾げた。

そんなリョウの隣で男は目を細めていた。

「そうか。良き術師になれることを祈っている」

「ありがとうございます」

それから男とは他愛ない話をした。男はその後も何故か立ち去る素振りを見せなかった。

「キミは不思議だな」

不意にこちらを見た男がそのようなことを言った。

「不思議……ですか？」

それはどういうことだろうか。

「顔立ちを見る限りこの国の者ではないようなのに、ここに溶け込んでいる」

それはリョウにしてみれば最上級の褒め言葉に思えた。

「ありがとうございます」

何故そこで謝意を口にされるのか、そんな不可解そうな顔をした男に、リョウはこれまで誰にも明かしたことのなかった本心を漏らしていた。

「ワタシは、見た目がこれですから、少しでもここの人たちの中に馴染んで行きたかったんです」

自分の異質さは変わることがない。それが己の寄って立つ自己認識（アイデンティティー）でありながらも、それを肯定し、そこに縋りつくことは出来なか

った。この国に、この地に溶け込もうと必死になって言葉を覚え、風習を学んで来た。

「だから、嬉しいんです」

「そのようなことなど気にすることはない。この国は我々のようなスタルゴラドの民だけで成立している訳ではない。それにこの国の民はそこまで閉鎖的でもない」

「ええ。そうですね」

それは自分が一番良く理解していた。ここの人々は総じて懐が深い。その最たる男の顔を思い浮かべて、リョウの口元には微かな笑みが浮かんでいた。胸の奥がじんわりと温かくなるようだった。

「私には息子が三人いてな」

急に始まった男の一人語りにリョウは耳を傾けると静かに相槌を打った。

「上の二人は既に結婚をして家族を持っているのだが、三人目がいまだ独り身でな」

「心配をされているのですか？」

親にとって子供は幾つになっても子供だ。そして、その中でも末子というのは可愛いものなのだろう。父親であるこの男にとっても。

「心配？　いや、どうだろう。あれは私に似て酷く頑固で一途な所がある」

そう言うとどこか愉しそうに小さく笑った。

「その末が、一人前に好いた女子（おなご）ができたと私に直談判してきおった。その女人を妻にしたいとな」

そして、リョウをじっと見下ろした。どこか相手の反応を探るような視線であったが、リョウはそこに潜む意味合いに気が付くことは出来なかった。

その息子の申し出は、父親としては驚くべきことであったのだろうか。まだ若い末息子の告白。何とも情熱的な一面を持つ男なのだろう。

どっしりと落ち着いた貫禄ある男からは、その息子とやらの様子を想像するのは難しかった。

「若さ故の情熱……でしょうか？」

リョウはそう言うと隣に座る男を振り仰いだ。

こちらを見ていた男の目尻の皺が一段と深くなった。

若い頃には、思いのままに突き進むだけの体力と精神力（パワー）（エネルギー）がある。

それを時に人は、【若気の至り】と称したりもする。燻し銀のような父親の向こうに薄らと垣間見える末息子の若さにリョウは眩しいものを見るように目を細めていた。

それは既に自分が失ってしまった年月でもあった。ほんの少しの懐かしさと羨ましさに思いを馳せる。

もし、自分にも同じだけの情熱があれば、何かが変わるのだろうか。そんなことを思ってしまった。

「キミには恋人がいるかね？」

不意に転じた矛先にリョウは暫し逡巡した後、口を開いた。

「恋人と呼べるかは分かりませんが、お慕いしている人はいます」

これまでユルスナールと自分の間にある関係性を具体的に言葉にして表わしたことはなかった。向こうからもはっきりとした形で自分の存在を確定するようなことを言われたことも無かった。

思えば、武芸大会最終日のあの告白が初めてのことだった。衆人環視の中で、妻になってくれと言われた。リョウにしてみれば、それはいきなり過ぎる展開で、ユルスナールがそこまで考えているとは思いも寄らなかった。だから、吃驚してしまったのだ。自分の中では、とても不安定で曖昧な感情の下に成立している甘い疑似的な恋人関係――その位の認識だったからだ。現実問題、今の距離をこれまで以上に詰めて、男の人生に踏み込むようになることまでは考えていなかった。

「ならば、もし、その相手から結婚を申し込まれたら、その男といずれは一緒になるのか？」

それは、男がこちらの性別を間違いなく理解しているような口振りだった。

リョウはちらりと横目に男を見るとそっと目を伏せ、小さく首を振りながら微笑んだ。悲しみともどかしさを内に隠したような儚い感じの笑みだった。

「いいえ。多分、それは無理だと思います」

「何故だ？」

間髪入れずの低い問い掛けに、リョウは苦笑を漏らした後、遠くを見るように視線を空へと向けた。

「ワタシとあの方では住む世界が違います。幾ら情が通じていようとも、状況的に難しいでしょう」

「では、諦めると言うのか？」

「どうでしょう？　この気持ちを捨てようとは思いません。ですが、想いだけではどうにもならないことがあるというのは世の中の常でしょうから」

そう言って達観したような透明な笑みをその口元に刷いた。

それからリョウはさり気なく話の矛先を変えた。

「反対……なのですか？」

――――――その息子さんの申し出に。

隣に坐する初老の男は、身分ある人物のようだ。身に着けている衣服も落ち着いた色合いだが、生地は光沢があり上等なものだ。何よりも男から発せられる雰囲気は、洗練された優美なものだった。

惚れたはれたということで、すぐさま息子が願うように婚姻の許可を与えることが出来るような場合ではないのかもしれないとリョウは思った。個人の自由が保障されると言っても、それは決められた枠組みの中でのことなのだ。そこからの逸脱は許されない。家名を負い、家に縛られるというのはそういうことでもある。この隣に座る男もその家族も同じような義務を背負っているのかもしれない。

男はちらりとリョウに視線を流すと何故か意味深に目配せをした。

「条件を一つ、出した」
たっぷりとした髭に覆われた口元が薄く弧を描いた。
「条件……ですか」
それは息子の願いを聞き届ける為の対価ということだろうか。
「何だと思う？」
そこで秘密を打ち明けるかのように男が硬質な顔を寄せた。そのにある深い青さを湛えた瞳は悪戯っぽく輝いているようにも見えた。
「とても簡単なことだ」
リョウは少し考えると一般的な人の真理（心理とも言う）に触れた。
「そのお相手の方が、閣下のお眼鏡に適ったら……という所でしょうか」
早い話が、舅が気に入るか気に入らないか。家柄の釣り合いということもあるのだろうが、一番単純で、だが、外すことのできない条件だろう。様々な装飾を取り払った後に見えてくる本音は、あけすけではあるが、真実だ。
ずいと鼻先に寄った瞳が正解とばかりに細められた。
「ハハハ。私とて、ただの男親に過ぎない」
「なれど閣下は、酸いも甘いも？み分けていらっしゃる」
それが年の功というものだ。
そう言えば、
「キミは見かけによらず年寄りに理解が深いのだな」
と笑われてしまった。
だが、リョウも負けてはいなかった。
「はい。ワタシもそれなりに年を重ねておりますので」
笑顔でさらりと口にされた台詞に男が目を丸くしてその顔をまじまじと見た。
「キミも中々に言う」
そうして顔を見交わせると、どちらからともなく小さな笑いを零しあった。

初めは堅苦しいように思えたが、口を開くと意外にひょうきんな所のある御人だと思った。
どうやらこれで気が済んだらしかった。
「いや、中々に楽しかった。年寄りの戯言に付き合わせて済まなかった」
「いいえ。こちらこそ楽しゅうございました」
ベンチから立ち上がった男に倣うようにリョウもその場で立ち上がった。
「これでよい土産話ができた」
そんなことを言ってほくそ笑む。その上機嫌の理由は当然のことながら、リョウには見当も付かなかった。
「ああ、そうだ」
去り際、男が足を一歩踏み出しかけた所で徐に振り返った。
「キミの名を聞かせてはくれないか？」
そう言われて、その必要があるのだろうかと思ったが、リョウは自分の名を口にした。
「リョウ……か」
何度か口の中で含むように転がした後、男が言った。
「良き名だ」
「ありがとうございます」
ここで名前を褒められたのは初めてのことだった。響きが変わっていると言われたことはこれまでにも何度もあったが、それ以外の肯定的な言葉を掛けられたのは初めてのことだった。
何だか認めてもらえたようで嬉しかった。
そこで付け足すように小さく男が言った。
「愚息を今後ともよろしく頼む」
「……はい？」
そこで男は微笑みのようなものをその口元に浮かべると片手を一振りしてから颯爽と去っていった。
「機会があればまた会おう」

そんな社交辞令ともとれる謎めいた囁きを残して。

「あ……の……」

一人残されたリョウは、狐に抓まれたような顔をして遠ざかってゆく男の後ろ姿を見送った。

日の光を浴びて輝く銀色の髪が目に焼き付いた。そして、少しずつ小さくなってゆく後ろ姿に、自分が良く知るもう一人の男の影が、重なるようにして伸びたのだった。

ファーガス・シビリークスは、足取り軽く宮殿内を歩いていた。艶やかな照りを反射する回廊の床に男の影が歪んで映っている。だが、豪華な調度類も煌びやかな装飾も天井や壁を彩るこの国の植物を模した優美な紋様も男の目には映ってはいなかった。

ファーガスが思い返していたのは冷たい風にそよぐ癖の無い黒髪だった。繊細な糸のように細いその髪が象るのは、色の白い穏やかな女の横顔だった。男のようにズボンを履いて地味な格好をしていたが、その者はれっきとした女だった。ファーガスには一目で分かった。間違えようがなかった。

愛くるしい顔をしていた。優しい面立ちをしていた。まだ若いが老成したような落ち着きがあった。

黒い瞳に黒い髪。その色彩で思い出したのは、末息子の打ち明け話だった。

過日、久々に実家に帰って来た末息子が、惚れた女がいると自分にそっくりなふてぶてしい無表情さで言ったのだ。それから感情の余り乗らない顔がいつになく表情豊かに好いた女のことを口にした。まるで自分の若かりし頃を見ているような気分になり、ほんの少しのほろ苦さが喉元を通って行ったのも記憶に新しかった。

そして、息子の王都滞在中に父親の耳にまで届いた噂では、息子が想いを寄せる女性は黒い色彩を持つ、恐らく異国の女。そして、

術師になるべくこの地にある養成所で学んでいるということだった。

ファーガスがあの庭先に足を運んだのは偶然だった。今日は宮殿に所用が合って、偶々近くの回廊を歩いていた時に、窓の外、遠目にその者の姿を見かけたのだ。

その者の腕には伝令で使われていると思われる猛禽類が一頭乗っていた。仲睦まじく語らうその姿を見た時、そこにかつての朋輩の姿が立ち上るようにして現れていた。

高い素養を持ち、獣の言葉をよく理解した男だった。人よりも獣たちに囲まれていることの方が多かった。術師ではなく同じ軍部の人間で、伝令の役目に就いていた。兵士ではあったが、穏やかな気性の男だった。控え目で寡黙な性質で争いごとを好まない。そんな心根の優しい男が軍部に籍を置いていること自体、ファーガスには不思議で仕方がなかった。

腕に伝令を乗せ、にこやかに対峙しているその者の姿を見た時、ファーガスはかつての友人が時を越えて現れたかのような錯覚を覚えた。そして、それを確かめようとして一人と一頭がいる場所へ近づいたのだ。

廊下から外に出て、一歩足を踏み出した時、かつての友人の横顔は煙のように消え失せていた。そして、変わるようにしてそこに現れたのは友人とは似ても似つかない細面の女の横顔だった。

興味を惹かれて声を掛けていた。かつての友と同じく伝令の鷲をその腕に語らいをしていたから。

姿形は全く違う。だが、口を開いたその者はかつての友を彷彿させる柔らかく静謐な空気を身に纏っていた。こちらを見る瞳は黒く澄んでいて従順で聡明な駿馬のような眼差しだった。言葉を交わせば、その者がしっかりと己を持った芯の強い者であることが分かった。

術師を目指す養成所の生徒であるとその者は言った。最終試験を受けた所だとその場所にいる理由を明かした。

友人は術師ではなかった。いや、あの頃はまだ素養持ちと術師の境界は曖昧なままで、はっきりとした区別が付けられてはいなかった。

信念も持った人物であることは分かった。そして、その心根も美しいのだろう。獣たちに好かれるというのはそういうことだ。

息子からしかと聞いていた訳ではない。だが、ファーガスはこの女性が件の相手ではないだろうかと思った。噂に違わない小柄で愛くるしい顔立ち。凛とした背筋に透明感のある佇まい。何よりもその者を包み込む空気が柔らかかった。だが、それと同時にそこには内なる強さも秘めていた。

父と子で通じるものを感じていたファーガスは、その息子の好みに成る程と合点した。自分があと二十年若かったら、同じようにその小さな手に口付けを強請って跪いたかもしれない。血は争えないというところだろうか。

ファーガスの耳にも武芸大会の最終日、息子が慣習に則り勝者のリボンを使って申し込みをしたという噂は届いていた。

あの夜の戯れに出た一言をやはり息子は真に受けたようだった。そのように仕向けたのは紛れもない自分であったが。

身持ちの固い、ともすれば朴念仁とも目されていた末息子の行動は、社交界の人々の度肝を抜いたようだった。その珍しさだけが注目されて、その後がどうなったかということは曖昧だったのだが、方々で聞いた話を寄せ集めてみれば、その場で了承の言葉をもらった訳ではないことが分かった。

どうやら、確約の言葉を取り付けた訳ではないらしい。振られはしなかったが、受諾もされなかった。それが余計に噂に拍車を掛けることに繋がった。

あれだけ認めてくれと自分に言い募った割に、どうやら息子はその相手の心を完全に掌握した訳では無かったようだ。

そこで先程交わした会話と黒い睫毛に縁取られた少し影を帯びた表情を思い出していた。

好きな相手はいるが、一緒になれるとは思ってはいない。それを耳にした時、ファーガスは胸を突かれた気がした。

恐らく、思慮深く慎重な性質なのだろう。息子を取り巻く状況と現実をしっかりと認識している。単に感情に惑わされているだけではないことが読み取れた。

何をどこまで話したのかは分からないが、肝心な所で相手には息子の覚悟が上手く伝わっていないようだと思わざるを得なかった。息子の詰めの甘さと不甲斐なさが却って際立つことになった。

――――――やれやれ、これでは先が思いやられる。

だが、それは若さの特権でもあった。大いに悩み、苦しめばいい。そして、得られたものを大事にすればいい。その経験はその後の人生にとってまたとない糧になるであろうから。

ファーガスはそっと窓辺を振り返った。先程、あの者と話をしていた場所には、もう人影がなかった。そこにあった筈の場所からは忽然と姿が消えていた。

【夜の精】のようだとあの夜に次男が噂に聞いたと言う文言が、不意にファーガスの頭の片隅を掠めた。確かに色彩だけを見ればそのような想像をしたのも頷けた。だが、ファーガスにはあの女性がそこまで儚い泡沫の存在のようには思えなかった。

あの者は笑いもすれば泣きもする。感情のままにその表情を変化させる実体を持った人だ。

だが、本来なら交わることのなかった存在なのかも知れない。そんな思いも頭を掠めた。あの者がどのような人生を歩んできたのかは分からない。息子もその辺りのことは伏せたままだった。だから、お伽噺の結末と同じく、その心を手に入れるのは至難の業なのかもしれない。

それでも少なくとも、息子は慕われているようだ。それが分かったことは救いだった。後は、末息子がきちんと状況を整理し、場を整えてから、どこまで食い下がれるかに懸かっているのだろう。

あの夜、自分と兄たちを前に打ち明けた熱意を欠片でもいい、真正面から相手にぶつけることが出来るのか。

自分に良く似て執念深い所（諦めの悪い所とも言う）のある息子の性格を思い出して、今後はどう転ぶかは分からないが、親としては陰ながら様子を見守ろうと思った。まぁ、余りにだらしがないようであれば、横槍を入れてみるのも一興といった所だろう。

そんなことを結論として出した所で、ファーガスは小さく息を吐き出すと、止めていた足を再び繰り出したのだった。

もう一つの試験（後書き）

ご無沙汰いたしておりました。本人の知らない所で、リョウはもう一つの試験を受けたようです。

垂れこめる暗雲

コツコツと硬い机の上を不規則に跳ねる指の音が、静まり返った室内に響いていた。

その日、スタルゴラド第二師団・団長のスヴェトラーナ・クロポトキンスカヤは、朝から募る苛立ちを隠そうともしなかった。

ここは、【アルセナール】にある第二師団の執務室の区画内、その中にある団長室である。

大きな飴色の机の上で細く伸びた剣ダコのある指が書類を捲る度に出る紙の摩擦音が静寂に満ちた室内に響いていた。

ピリピリと微かに震えるような緊張感が、大きく切り取られた窓ガラスに反響していた。その発生源は、もしかしなくとも、この机に座る人物である。

元々笑顔や微笑みの類とは無縁の冴え冴えとした顔立ちだが、持って生まれた美貌も宝の持ち腐れだと密かに残念に思う同僚もいるに違いない。もう少し愛想が良ければ軍部内での他師団との交渉や協力関係、引いては宮殿中枢部との関係も円滑に進むのではないかという見方は常に第二師団・団長には付き纏っていたのだが、スヴェトラーナ自身、そのようなことなど歯牙にもかけなかった。容姿を武器に相手の感情に揺さぶりを掛けようなどとは姑息な輩のすることであると唾棄しているところがある。昔から卑怯な真似が大嫌いで、正々堂々と真正面から事に当たることを良しとした。根回しや水面下での交渉、相手の腹を探り合うことが日常茶飯事の宮殿内政治とその中で築かれる人間関係の中では、スヴェトラーナのような輩は珍しい方(タイプ)だと言えるだろう。

大きな執務机に腰を下ろしていた団長は、一枚紙を捲るとそこで顔を上げ、鋭い視線を部下に投げた。

「状況は？」

報告をしていた部下の兵士は、直立不動で机の斜め前の辺りに立っていたが、スヴェトラーナの眉間に浮かぶ深い溝を目に留めると改めて背筋を伸ばした。

「まことに残念ながら、現時点での変化はありません。他に有力な手掛かりや目撃証言も出てきてはおりません」

淡々と事務的に報告を行う部下の表情は、さながら良く出来たからくり人形のようで、目の前に座る上司から発せられる苛立ちを見事に受け流していた。要するに団長の性格をそれなりに理解し、そのような態度に慣れているのである。

「使用された毒物の鑑定結果は？」

「報告にありますように【ジョールティ（黄色い）・チョールト（悪魔）】で間違いないかと」

「入手経路は？」

「目下、鋭意調査中です」

ここ数日、第二師団内部は、水面下で蜂の巣を突いたような騒ぎになっていた。といっても見かけ上はよく分からないかもしれない。それは情報が的確、且つ迅速に処理・統制され、団長を中心にこの件に関わった第二師団全ての兵士に緘口令が敷かれている為でもある。

スヴェトラーナは深い溜息を吐くと考えを纏めるように暫し瞑目した。腹心の部下は、その様子を傍らで静かに見守っていた。

ここ数日、第二師団・団長を悩ませている一つの事件があった。それは過日、宮殿の奥向きで起きたとされる侍女の不審死だった。

死亡したのは奥向きに仕える一人の侍女だ。まだ若く、下級貴族の出身でその身元もしっかりとしたものだった。

真面目で仕事熱心と評判のその侍女が、仕事が始まる時刻になっても姿を現さないことに疑問を抱いた同僚は、各自に宛がわれている部屋に様子を見に出かけた所、そこでこと切れていた侍女を発見したというものだった。

侍女は着衣のまま寝台の中にいた。それを不審に思いながらも最初は単に眠っているだけなのかと思ったのだが、起こそうと近づきその肩を揺さぶってみたが、身じろぎもしない。何の反応も返さない仲間にまさかと思い、脈と呼吸を確かめた。そこでその侍女が亡くなっていることに気が付いた。

第一発見者の侍女はすぐさま侍女頭と医者を呼んだ。そこで最終的に死亡が確認された。

まだ年若い侍女の突然死。持病などもなく至って健康で奥向きの侍女として職を得てから約十年、体調を崩したり、大きな病気をしたりすることも無かった。

仲間の突然の死は、侍女たちに大きな衝撃と動揺をもたらした。誰も俄かにはその死を信じられなかった。何故ならその侍女は前日まで仲間たちと朗らかに談笑していたからだ。

その死因を調べる為に外傷の類がないかを改めていた医者が、寝台脇にあるサイドテーブルに置かれた水差しに気が付いた。水差しの中には水がまだ三分の一程残っていた。そして、その水を飲んだとされるグラスの中にも残っていた。通常であれば、それは対して気にも留めることのないごく普通の光景だ。

だが、そのグラスの中を見た医師は一瞬、眉を顰めてからその顔色を変えた。透明なグラスの底に小さな花弁らしきものが沈んでいるのが見て取れた。黄色に赤い筋のような模様が混じる小さな花弁だ。

それは、専ら暗殺の類に使われるとされる毒草の一種だった。医師や術師である者には、ある程度その名が知られている【黄色い悪魔】と呼ばれるものだ。中でも宮殿のお抱え医師や術師はよく知るものだった。

後宮内で不審死が出た場合、医師たちはまず毒殺を疑った。今ではめっきり少なくなったが、それだけ一時期には、毒草を持ちいる暗殺が頻発していたのだ。

発見された花弁は速やかに正式な鑑定に回された。そして、第三師団に所属する術師による検査の結果、それが間違いなく【黄色い悪魔】と呼ばれている毒草であることが判明した。

【黄色い悪魔】が見つかったことで侍女の死は一気に事件性を帯びたものになった。ここ数年、宮殿内での暗殺事件は未遂案件も含み、めっきり鳴りを潜めていた。そのような中での毒草の発見に奥向きの警護を一手に預かる第二師団の中には緊張が走った。

その侍女は毒殺されたのか。それとも他に死因があるのか。もし、毒殺だとしたならばその目的はなんなのか。

死亡した侍女は、国王の第二王子の長女（国王には孫に当たる）、エクラータ嬢付きだった。主であるエクラータ嬢を始め、他の侍女たちの信頼も厚く、彼女たちの中では一目置かれた存在であるとのことだった。最悪の場合、もしかしたらその標的は王族であったということも考えられた。そして、事件は王族への暗殺未遂へと発展していた可能性もあった。

侍女の死には不審な点が多々あった為、この一件は事件性があると見做され、奥向きの警護を一手に任されている第二師団に話がもたらされた。そして、事は慎重を要する為、団長のスヴェトラーナが自ら、その調査と究明に陣頭指揮を執ることになった。

医師と術師立ち会いの下、行われた検分では侍女の遺体には目立った外傷の類が見つからなかった。他の一般的な毒物を使った場合に現れる特有の紫斑や兆候となる匂いもない。

そして、室内で見つかった【黄色い悪魔】の花弁。この毒草は、滅多に手に入らない知る人ぞ知るというような代物だった。街中の普通の薬草店には出回ることがなく、裏の経路（ルート）で高値で取引をされることで有名だった。

その効き目は群を抜いていた。使用の跡が残らない為、暗殺には打ってつけとされていた。高い毒性がある為、小さな花弁数枚で人は簡単に命を落とした。それも苦しむことなく、まるで眠るように

安らかな表情で死に至るのだ。死亡した本人さえも気が付かない内に。それは亡くなった侍女の遺体が綺麗なままであるという状況と一致した。

普通に考えて、もし暗殺とするならば、暗殺者は自然死に見せかける為にそのような証拠を残したりはしないものだ。だが、状況的に見て毒殺されたのだろうという判断が下された。

自殺という点も考えられなくもなかった。そして、水差しに入っていたということから他の香草（ハーブ）の類と勘違いして誤って口に入れたのではということも考えられなくもなかったが、【黄色い悪魔】は入手困難な代物だ。普通の人間には手に入れることすら難しい。然るべき伝手と金、そして運を持っていなければならないのだ。そうすると単なる奥勤めの侍女がそのような毒草を手にすること自体、考えられなかった。それに勤務場所の特殊的な事情から侍女たちは一様に毒草の知識を持っていた。中でもこれまで後宮で起きたとされる毒殺事件に用いられてきた毒草に付いては、徹底してその性質やら対処法の教育がなされていた。そうすると誤って口入れたという線も薄い。

侍女が遺体で発見されたのは、武芸大会二日目の朝だった。暦に直せば【黒】の【第一の月】第四【デェシャータク】の二日、つまり３２日のことだ。

不審な死を遂げた侍女に後宮は震撼した。そして、その日の夕方には一連の報告が第二師団にもたらされ、その原因究明と事件への対処を団長のスヴェトラーナが任されることになったのだ。事件はまだ幼いエクラータ嬢周辺の耳にも入っていしまい、動揺が他の侍女たちにも広がった。

この一件の内々の調査を開始してから既に五日が経過していた。調査は思うように進まなかった。

犯人の目星とその目的を探ることが第一優先事項だった。スヴェトラーナは、後宮の警備状況（レベル）をもう一段階引き上げた。見張りの兵

士と巡回の兵士の頭数を増やした。そして最優先事項として、死亡した侍女が仕えていた主、王族のエクラータ嬢の身の安全を確保するということが挙げられた。

殺害された侍女の周辺、その交友関係ととりわけ外部との接触の有無を洗ってゆく内に、見えてきた事実があった。侍女の周辺で何か不審な点はなかったか、最近の侍女の様子に何か変わった点はなかったかなどを同僚の侍女たちから聞いて回った。身内の犯行かそれとも外部の人間の犯行か。聞き込み調査を続けて行く内に手掛かりとも思えることが浮上してきた。それは、その侍女が外部の人間と接触を持ったということだった。それも死亡する前日、武芸大会初日のことだ。

仲間の侍女たちは口を揃えてその侍女が自分たちの控えの間に見知らぬ人物を連れてきたのだと言った。どうも怪我をしたようで、世話焼きで面倒見のよいその侍女は放っておけなかったらしく、治療に連れてきたとこのとだった。

その者は黒い髪をした線の細い少年だったという話だった。その少年は手当てを受けた後、礼を述べて帰って行ったとのことだった。

捜査線上に浮上したその人物にスヴェトラーナは注目した。亡くなった侍女は下級貴族の出身でその身元はしっかりとしていた。日頃の勤務態度も真面目で品行方正、侍女自身に怪しい点は今の所、見つかっていなかった。

数日前のことであったが、侍女たちはその少年の名前を誰一人としてしっかりとは覚えていなかった。確か、【エール】から始まる変わった響きを持った名前だったと年嵩の侍女が言った。笑うと愛嬌のある顔立ちをしていたと告げた。

その者を至急探し出し、事情を聴く必要があるだろう。そして話を聞いて行く内に、その者が宮殿に暮らす四足の獣であるティティーを懐に抱いていたということが分かった。更に当日控えの間に顔を出した第三師団の団長とも顔見知りであったとのことだった。

黒髪の少年――それを耳にした時、スヴェトラーナが真っ先に

思い浮かべたのは第七のユルスナールが世話を焼いているというリョウという名の人物だった。術師の養成所に通っているという素養持ちで、ティティーとも顔馴染みだ。無論、薬草の知識もあるだろう。

スヴェトラーナがリョウに抱いた第一印象は、物静かで呑気（マイペース）な性質（ス）ということだった。あの少年が人を殺めるようには見えなかった。第一、目的は何だ。

先日、訪れた【アルセナール】内の第七の執務室では、団長のユルスナールとブコバルの二人とは随分と気の置けない間柄であるということが見て取れた。ユルスナールの話では、その者は王都の人間ではない。辺境の田舎の村から遥々術師になるべく養成所に入学をする為に出てきたということだった。

まさかとは思うが……。

人は見かけによらないというのもまた一面の真実だ。時としてあのような温厚で人畜無害に見える人物が冷酷非道な性格を隠し持っていたりすることだってあり得る。表層は真実を隠す薄い膜のようなものだったとしたら……。

頬杖を突いていた左側から顔を少し上げるとスヴェトラーナは報告をしている部下を流し見た。

「侍女の周辺で何か進展はあったか？」

「いえ、今の所、目新しい情報は出てきていません」

「そうか」

とするとやはり何よりもまずあの黒髪のリョウという人物に話を聞いてみる必要があるだろう。侍女たちの言う人物がその者なのか裏付けを取る必要がある。違ったのであればそれはそれで構わない。一つ一つ疑わしき点を潰してゆくことが肝要だった。

それから第三の方にも話を通さなければなるまい。その者は偶々立ち寄ったゲオルグと共に帰って行ったという。それが本当かの確認もいるだろう。

それからあの毒草の入手経路も調べなくてはならない。【黄色い

悪魔】を使った不審死であれば、第三の領分でもある。捜査の命は第二に下ったが、毒草を使った事件についてはそれを専門に研究している第三の協力を仰がなくてはならないだろう。第二の兵士たちに緘口令を敷いているとしてもこういう類の噂は直ぐに広まるものだ。第一、初期の段階で侍女たちの口を閉じさせようとした時にはもう手遅れだった。耳聡いあの男のことだ。この一件を聞きつけたら早々に捻じ込んで来るに違いない。

男にしては繊細で秀でた容姿を持つが、『美しいものには毒がある』――その喩えのように外見の美しさとは反比例するが如くその腹の中が真っ黒に染まった第三師団の長（トップ）の顔を思い浮かべて、スヴェトラーナは無意識に眉間に深い皺を刻んだ。

「何か、問題でも？」

急降下した上司の機嫌に部下が尋ねれば、手にした書類をもう二枚捲りながらスヴェトラーナは忌々しげに吐き捨てた。

「第三のあの男に繋ぎを取らなければなるまい」

元々仲は余りよろしくない。スヴェトラーナは女好きで軽薄なあの男が大嫌いだった。二人が宮殿内で顔を合わせる度に嫌みの応酬のような毒舌合戦が繰り広げられるというのは周知の事実だった。勿論、そのことは部下の兵士も良く理解していた。

「ああ。それでしたら。後ほどこちらにいらっしゃるとの連絡を頂きましたが」

淀みなく続いたその報告にスヴェトラーナは無言のまま、益々機嫌を急降下させた。そして、ぞっとするような凍てついた笑みをその口元に刷いた。

なんとも用意周到なことではないか。こちらから呼ばずとも態々向こうの方からやって来るというのだから。お陰で手間が省けたということだ。

「どこで嗅ぎつけるのか知らないが、よく鼻が利く。相変わらずいけ好かない男だ」

鼻でせせら笑うように吐き捨てた。

上司の底冷えするような冷笑を見ても部下の兵士は慣れているのか、動じた様子は見せなかった。
「まぁいい」
取り敢えずの不快感をぐっと押し込めるようにスヴェトラーナは机の上に開いていた書類を閉じた。
それから術師養成所に通うというあのリョウという名の少年をここに連れて来るように命じた。
「伝令にしますか？」
繋ぎを取る方法をどうするか。距離的には兵士を派遣した方が早いのかもしれないが、それでは騒ぎになるかもしれない。この件は、慎重に取り調べをする必要があった。その為には目立たない方がよい。
部下の問い掛けにスヴェトラーナは暫し考えを巡らせるように目を伏せて、口元に手を当てた。
「そうだな。獣の方が早いだろう」
この部屋に来るにも伝令に案内をさせればよい。序でにティティーにも言伝をするようにと伝えた。あの灰色の獣にも事実確認をしなければなるまい。鋭い嗅覚を始めとして人とは異なる感覚を持つティティーであれば、何か感づいたことがあるかもしれない。
団長の指示を的確に理解した腹心の部下は、すぐに手配をするべく団長室を後にした。

一人執務室に残ったスヴェトラーナは、机の上にある報告書を弄ぶように指で触れた。そして、椅子から立ち上がるとゆっくりと窓辺に歩み寄った。
ガラス窓に憂いを帯びた女の鋭さのある面立ちが反射して映っていた。そこに映る細い柳眉がしんなりと寄った。
死亡した侍女はスヴェトラーナも良く知る女官だった。廊下で会えばちょっとした立ち話をするくらいだ。朗らかで人懐っこい笑み

を見せる可愛らしい女性だった。
まだまだ若かった。年を確かめたことはなかったが、自分よりも若いだろうとスヴェトラーナは思っていた。
どうしてあの子が死ななければならなかったのか。しかも、あの【黄色い悪魔】によって殺されなくてはならなかったのか。
突然奪われた若い命。その無念さを思うと怒りが込上げてきた。それは、腹の底からふつふつと滾るような静かな怒りだった。
真相を究明し、必ず手を下した犯人を捜し出してみせる。スヴェトラーナは固く拳を握り締めるとギリリと奥歯を噛み締めた。
「何があったのだ、イーラ？」
スヴェトラーナは低く一人ごちた。その問いに返ってくる答えはあるはずもなく、広い室内に呟きはやがて立ち消えた。

垂れこめる暗雲（後書き）

２０１１／８／２４　誤字修正

綱渡りの攻防

――――――脱げ。

簡潔に吐き出された一言にリョウは動きを止めた。

今、何を言われた？　その真意を確かめるように目の前に腕を組んで座るその人物を見た。

鋭い眼差しが射抜くように突き刺さった。視線が交差してもその表情はピクリともしなかった。僅かに口の端の筋肉が動くのみ。まるで凍てついた氷の世界の住人のようだ。閉ざされた氷塔に独り佇む気高き氷の国の女王。

孤高の女王が冷ややかにリョウを見下ろした。

「どうした？　聞こえなかったのか？」

「あ……の……？」

「その耳は飾りか、小僧？」

「脱げ、とは？」

「そのままの通りだ。何を迷う必要がある？」

微かに見せた動揺に相手が畳み掛けるように凄んだ。

リョウは相手の瞳をまじまじと見つめた。淡い空色の静かな光彩。それは、とても真剣で冗談の類を言っているようには見えなかった。

「何の為…ですか？」

辛うじて絞り出されたその問いを目の前に座る相手は鼻で笑った。高く結い上げられた薄い茶色の髪がさらりと揺れた。

「ありきたりな確認事項の一つだ。妙なものを仕込んでいないかな」

「妙なもの……とは？」

だが、その質問には答えずに、

「持ち物を改める。背中に担いでいるその鞄もここへ出せ」

目線だけですぐ傍に置かれた簡素な木のテーブルを指示された。

それは、この部屋の調度類から醸し出される華やかで優美な雰囲気

からはかけ離れた粗末なもので、この時の為にか、外から運び込まれたもののようだった。

矢継ぎ早に出された命令口調にリョウは唖然とした。

術師の最終試験を終えた後、少し裏庭のような所で道草を食っていたが、そろそろ神殿裏にある墓地の方へ行ってみようか思い歩き出した時だった。小振りの猛禽類・ノズリが伝令として飛んで来て、今すぐに来て欲しいということでその呼び出しに応えたが、このような扱いを受ける謂われはなかった。

訳が分からない。その一言に尽きた。

「何故、このようなことをするのですか？」

何の説明も無しにいきなりこのような理不尽な要求を突き付けられたが、それに従う理由はリョウにはなかった。

動じることなく、真っ直ぐに相手を見据えたリョウにこの部屋の主である人物は不満そうに目を眇めた。

それから腕を組み、背凭れに身体を預けていた体勢を改め、前傾姿勢を取ると大きな執務机に肘を突いて合わさった両拳の上に顎を乗せた。

そこで感情の読めない小さな笑みを浮かべた。

小さな伝令を肩にリョウが案内された部屋は、【アルセナール】にある一室だった。館内を歩く兵士たちが左腕に付ける紫色の腕章から、その区画が第二師団管轄の区域（エリア）だということが知れた。

伝令は『ただついて来い』と言うだけで、その呼び出しの理由を明らかにしなかった。元々、そこまで知らされていないということの方が大きいだろう。

一方、呼び出しを受けた当人のリョウには、全く見当が付かなかった。心当たりなどない。ユルスナールの第七や先日世話になった第四ならともかく、第二の兵士たちとは団長のスヴェトラーナを除けば、接触を持ったことはなかった。そのスヴェトラーナとも前後

でちょっとした経緯はあったが、ユルスナールを仲立ちにして簡単に紹介をされた程度だった。

呼び出された先、広い室内の真ん中に鎮座した大きな執務机の後ろでリョウを待っていたのは、その第二師団の団長であるスヴェトラーナだった。整った美貌の持ち主だが、それは月光のように冴え冴えとした冷たい印象を受けるものだった。多くの兵士たちの上に立つ者としての威厳と厳しさを兼ね備えていた。要するににこりともしない迫力美人である。

「なんだ？　なにか都合が悪いことでもあるのか？」

荷物を出せと言われて、黙ったまま立ち尽くしたリョウにスヴェトラーナは探るような視線を投げた。

リョウはいきなりの展開に暫し、途方に暮れた。

ここまで案内をしてくれた小さな伝令は、この後もこなさなければならない用事があると言って扉の外で別れてしまった。今、この部屋の中にいるのは、主であるスヴェトラーナとその後方に控えている補佐官のような一人の兵士、そして、自分の後方、扉付近にはもう一人、紫の腕章を付けた兵士が歩哨のように立っていた。

どこか挑発するような声音に面食らいながらも、リョウは努めて冷静に状況を把握しようと頭を働かせた。こうなったら少しずつ理解を引き出してゆくほかない。

「都合が悪いとは一体、なんの話ですか？」

「さぁな。それはお前が判断することで、我々の知ったことではない」

――――――だが、まぁ、予想は出来なくもないが。

問いを重ねても相手から返ってくるのは、核心からは離れた言葉遊びのような曖昧な台詞ばかりだった。どうやらこの場では、こちらが欲しい答えをくれる積りはないようだ。

疾しいことなどなかった。見られて困るようなものもない。何を疑っているのかは知らないが、気になるのならば気が済むまで調べ

ればいい。
　不躾な応対を内心腹立たしく感じながらも、リョウは無言のまま、斜め掛けにして背中に張り付けるように回していた鞄を外し、質素な木のテーブルの上に置いた。
「どうぞ。何をお疑いになっているのかは知りませんが、中にはこれと言って貴殿の興味を引くものは入っていないと思いますが」
　最低限の礼は失しないように、それでも仄めかす程度の厭味を忘れずに付け足せば、
「減らず口を。それはこちらが判断することだ」
　女王は貫禄たっぷりに口の端を少し歪めた。
――――――始めろ。
　目線で指示を受けた部下の兵士は、部屋の中心付近に置かれた場違いな程にみすぼらしい木のテーブルの傍にやってくると、そこに置かれた古ぼけた鞄に手を掛け、中身をテーブルの上に並べて行った。
　その手付きが繊細さに欠けることを見て取ったリョウは、すぐさま兵士に丁寧に扱うようにと注文を出した。中に入っているのは治療用の薬の瓶や薬草の類だった。うっかりなどと見え透いたことを口にして割られたりしては敵わなかった。
　鞄の中身を改めていた兵士は、淡々とした横槍を入れられて、ちらりとその持ち主を横目に流し見たが、何も言わずに手付きをほんの少しだけ慎重なものに改めた。
「外套も脱げ」
　続いて出された要求にリョウは肩を竦めると言われた通りに外套を脱ぎ、同じようにテーブルの上に置いた。
　それは、まだ真新しいものだった。ガルーシャの納戸の中から見つけて愛用してきた古ぼけた外套は、先日のイースクラの一件で使い物にならなくなってしまった。
　これは、代わりにユルスナールが用意してくれたものだった。前のものと同じような色合いの、それでも上等な部類に入るのか軽く

て温かなものだった。どこで手に入れてきたのかは知らないが、大きさも少し余るくらいでちょうど良かったのだ。リョウはそれを不思議に思った。その辺りのことをユルスナールに聞いたのだが、気にするなと上手くはぐらかされてしまった。

こちらでは、衣服の類は基本的に仕立屋による受注生産か自分で生地を買って縫うもので、出来合いの代物を扱っているのは少なかった。一般庶民は、大抵の場合、自分たちで生地を買って手作りする。街には専門の生地屋が軒を連ねており、遠く離れた村々へは行商の繊維商が反物を担いで出入りした。スフミ村にも年に数回、そういった行商人が現れて村の女たちに囲まれていた。なので女は嫁入りの条件として必ず裁縫ができないと貰い手がなかった。

貴族階級の場合は、大抵が馴染みの仕立屋を抱えているものである。裕福な家庭は、季節毎に流行に合わせて好みのものを誂えていた。富裕層が集まる王都では、そういった仕立屋の看板もあちらこちらに見掛けられた。

リョウは静かに自分の持ち物を改めている兵士を見ていた。兵士の男は、鞄の中身を全部出し終えると、次に外套を手に取り、ポケットから細部に至るまで慎重な面持ちで調べて行った。その命令を出したスヴェトラーナもじっとその様子を眺めていた。

一通り中身を改め終えた兵士は、目線で上役である団長を促した。スヴェトラーナはゆっくりと立ち上がると、テーブルの傍に歩み寄り、それらを自ら検分し始めた。

気つけ薬の入った茶色の小瓶を手に、スヴェトラーナが徐に口を開いた。

「七日前に後宮でとある事件が起きた」

小瓶に付けられた中身の識別表示（ラベル）を見た後、切れ長の空色の瞳が、リョウを流し見た。

「奥向きに仕える侍女が一人、死んだ」

淡々とした口調でスヴェトラーナが言葉を継いだ。

「いや、正確には、殺された」
リョウは息を潜めてその話に耳を傾けた。恐らく、ここで自分を呼び出すことに繋がった理由が明らかになるような気がした。
「その侍女は、勤勉で仕事熱心、気性も朗らかで多くの侍女仲間から慕われていた。勤続年数も十余年、後宮に勤める侍女たちの中では中堅で、来春には結婚を控えていた」
そこでスヴェトラーナは真正面からリョウを見た。
「下級貴族の出身で身元も確かだった。何か私的な問題を抱えていることも、揉め事の類に巻き込まれていることも出て来なかった。死の前日まで、和やかに仲間の侍女たちと談笑していた」
「病死ではなかったのですね？」
「ああ。持病を抱えていることも聞かなかった。至って健康で、前日までぴんぴんしていた」
「殺された……というのは、死因は失血死だったのですか？　それとも……窒息死？　絞殺されたのですか？」
「いや。専任の医師と術師が立ち会い遺体を調べたが、外傷はなかった。どこもかしこも綺麗なままだった」
それを聞いてリョウは眉を潜めた。あと考えられる原因は、脳梗塞や心筋梗塞の類の突然死。だが、侍女はまだ若かった。元々、本人にも自覚の無い身体的欠陥のようなものを抱えていたのかも知れないが、こちらではそれを詳しく調べる術はなかった。表に現れる事象のみから判断をするしかない。
だが、スヴェトラーナは殺されたとはっきり口にした。ということは他殺であるとの断定ができているということだ。
とすると他に死因として考えられるのは、
「毒殺……ですか？」
「まるで眠るように死んでいた。穏やかで綺麗な顔だった。侍女自身、死んだということに気が付かなかったかもしれない」
通常の毒殺であれば、大抵は苦しんだり血を吐いたりして死相は壮絶なものになる。それに使用された毒の成分によっては身体に特

徴的な斑点が出たり、匂いが付いたりするものだ。
だが、侍女は、まるで穏やかに眠るように亡くなった。そして、それは恐らく毒殺だった。侍女が死んだ場所は権謀術数の蔓延(はびこ)る宮殿のその奥、後宮だ。
――――まさか。
リョウはその条件に当てはまるものを一つだけ知っていた。その筋では有名な暗殺に利用するには一級品であると見做されている猛毒の植物。小さな可憐な花を咲かせる、繊細な黄色い花弁に赤い筋が模様のように入る野草だった。
だが、あれは薬師でも滅多にお目に掛かることのない珍品(レアもの)だ。
「……まさか」
思わず漏れた小さな声に、スヴェトラーナは器用に片眉を跳ね上げた。
「おや、お前には心当たりがあるのか？　さすが、未来の術師殿だ」
その声にはどこか人を嘲るような調子(トーン)が含まれていた。
「ならば話は早い。これが何だか分かるか？」
スヴェトラーナは懐から透明な小瓶を取り出すとリョウの目の前で揺らした。
中には、干からびた小さな黄色い花弁が数枚、入っていた。
見紛うはずはなかった。
「……【ジョール(黄色い)ティ……チョール(悪魔)ト】……」
目を見開いて掠れた声を出したリョウにスヴェトラーナはしたり顔で頷いた。その様子は、何故か芝居掛かって見えた。
「ご名答。この花弁が、侍女が水を飲んだグラスの中に残っていた」
「だから【毒殺】と判断されたのですね？」
だが、内心、リョウは引っ掛かりを覚えた。【黄色い悪魔】は秘密裏に暗殺を行う為に利用されることが多いと聞く。当然、暗殺者はその足が付くような真似はしない。普通に考えて、その場所に花弁の入ったグラスを残すように態と証拠を残す真似をするはずがなかった。これでは、この毒で死んだのだと声高に公言するようなも

のではないか。余りにもあからさまで見え透いている。
「この花弁に心当たりは？」
低く発せられた問いにリョウは目を瞠った。
「どういう意味ですか？」
「そのままの意味だ」
広い室内に暫し、重苦しい沈黙が落ちた。
「……ワタシをお疑いなのですか？」
リョウの口からは絞り出すような掠れた声が出ていた。
第二師団・団長のスヴェトラーナは、自分がその侍女の死に関わったと言いたいのだろうか。何を根拠にそのような推察に至ったのだろうか。
驚きを隠さずに目の前に立つ硬質な顔立ちを見上げれば、氷の女王は次のようなことを言った。
「武芸大会初日、お前が侍女たちの控えの間に顔を出したという話が出ている。そのことは相違ないか？」
突然、尋問が始まった。いや、もしかしたらリョウが室内に入った瞬間から、それは始まっていたのかもしれない。
「ええ。それは本当です」
リョウは神妙に頷いた。
「何の為に？」
「宮殿外縁部の噴水の所にいた時に、偶々、侍女の方にお会い致しまして。ワタシが顔を腫らしているのを見たものですから、親切にも手当てをと申し出てくださったのです」
最初は固辞したのだが、良く効く薬があるからと強く促されて頷いた。その時の経緯を掻い摘んで要点を絞って話した。
「その侍女は知り合いか？」
「いえ。その時に初めてお会いしました」
「ほう？　やけに親切なものだな？」
「ええ。ワタシもそう思いました」
「それまでに、その侍女に会ったことはないのだな？」

「はい」
くどいくらいに同じ質問が形を変えて出されていたが、それに対する答えも変わらなかった。
「控えの間では何を話した？」
リョウは当時のことを思い出すようにゆっくりと口を開いた。
「特にこれといったことは。……室内には他に多くの侍女たちがいましたので」
騒がしい最中、中身のある話をした覚えはない。大人しく手当てを受けただけだ。
「顔を腫らしたとは、どうしたのだ？」
痛い所を突かれて、リョウは少し困惑したように苦笑いをした。自分から口にするには余り褒められたことではないからだ。忘れかけていた傷を抉られるようで、少し凹んだ。
「とある方に少々誤解を受けまして、叩かれたのです」
話の内容は下らないことだった。ささやかな嫉妬の鞘当て。
「とある方とは？」
「それはワタシの口からは言えません。その方の名誉の為にも」
スヴェトラーナはじっと睨むように黒い瞳を見つめたが、リョウは敢えて柔らかく微笑んで見せた。ここでみだりに口を割る訳にはいかない。元よりその義理もない。確固とした線引きだった。
「ふん。まぁ、いいだろう」
スヴェトラーナは、そこで一旦引き、話の矛先を変えた。
「その後はどうした？」
治療を受けた後はどうしたのかと聞かれて、
「偶々知り合いの方が顔を出したので、その方と一緒に武芸大会の会場の方へ戻りました」
「知り合いとは誰だ？」
リョウは、少し逡巡して見せたが、己の潔白の為に正直に話した。
「ゲーラさんです」
予想通り、第三師団長に含むもののある第二師団長は、ぞっとす

るような無表情になった。
リョウはなるべく腫れものに触れないように口早に付け足した。
「その時のことは、ゲーラさん本人にお尋ねになって下さい。あと他に神官の方もいらっしゃいましたから」
それから思い出したとばかりに顔を上げた。
「ああ、それから。手当てを受けている間、ティーダが一緒でした」
スヴェトラーナは獣の言葉を解する。裏付けを取るのならばティーダに話を聞いた方がいいだろう。獣たちは人と違って嘘を吐かない。証言としては有力で信用の置けるものになるはずだ。
「……そうか」

一通り事情を聴き終えた後、再び簡素な木のテーブルの所に戻ったスヴェトラーナは、そこに並べられたものを観察するようにつぶさに眺めた。手にとって嗅し、匂いを嗅いで確かめる。そのようなことを繰り返した。
「これは薬草か？」
「はい」
「これらの中身は？」
「普通の術師が持つようなものばかりです。痛み止めや気つけ薬、消毒液、風邪薬や整腸剤、傷薬等です」
何か疑念に思うことがあるならば、他の術師を呼んで確かめてみれば分かるものばかりだ。どれも一般的なもので、特別視するようなものはない。
「他に聞きたいことはありますか？」
動じた所のない静かな問い掛けに、スヴェトラーナはその口元に挑戦的な笑みを刷いていた。
「そうだな。次はその上着を寄越せ」
リョウは大人しく上着を脱ぐとスヴェトラーナに手渡した。スヴェトラーナは、それを部下に渡して同じように改めさせた。
「それから、その短剣も見せてもらおうか」

その視線が太ももと腰にある短剣に注がれていた。
リョウは太ももに巻いたベルトと腰に巻いたベルトを外し、付いた短剣をベルトごと手渡した。
その間、部下の兵士は上着のポケットを探り、中に入れていたハンカチやら干したスグリの実を入れていた小袋などを取り出した。
「これは何だ？」
スヴェトラーナが、その小さな袋を摘み、中を覗いた。
「乾燥させたスグリの実です。伝令たちの好物なので」
「お前には繋ぎを取る伝令がいるのか？」
「いえ、そうではなくて。顔見知りの獣たちはいますが、偶に伝令を受ける時があるので。その時の為です」
使いの役目を労う為のちょっとした御褒美だ。
「伝令はどこから？」
「知り合いからです。第七の所が殆どです」
その後、シャツとズボンだけの姿になったリョウの背後に戸口付近にいたはずのもう一人の兵士が立った。
この部屋の主から両手を頭の後ろに置くようにと言われる。
「何を……？」
――――するんですか？
最後まで疑問を口にする前に、
「通常の身体検査だ」
被せるように言ったスヴェトラーナが、強制的にリョウの腕を上に持ち上げて頭の後ろで組むようにさせた。
その隙に背後から伸びた大きな手が、シャツの上から身体の輪郭をなぞるように全身を改めて行った。他に隠しているものがないかを確認（チェック）するようだ。上半身の側面から軽く叩くようにごつごつとした剣だこのある男の手が触れた。冒頭で言われたように脱げとの命令を実行されないだけましなのだろうが、明らかに疑いを持って食ってかかられるのも余り気持ちのいいものではなかった。
その手が胸部に届いた時、兵士が動きを止めた。そこにある違和

感に気が付いたのだろう。
「どうした？」
「どうぞ続けてくださって構いません。もう今更ですから」
部下の躊躇いを素早く感じ取った上司の言葉に被せるようにリョウは言い放った。
「あ…の…私よりも団長の方がよろしいかと」
後ろに立つ兵士が困惑気味に口にした。その表情は前に立つリョウには見られなかったので分からなかったが、恐らく、戸惑っているだろうことが声音からも感じ取れた。
前に立ったスヴェトラーナの視線が、膨らみの露わになった胸部に注がれた時、その切れ長の目が驚きを表わすように見開かれた。
「お前……まさか……女…なのか？」
「ええ」
スヴェトラーナは、シャツの釦を途中まで外すと素早く開いては、また閉じた。
肯定するようにリョウが微笑めば、第二師団長は途端にばつの悪そうな顔をした。
これまでずっと向こうはこちらのことを年端の行かない少年だと思っていたのだ。だから、その態度もリョウにとっては居気高で横柄にさえ思えるものだった。その勘違いを敢えて訂正しようとは思わなかったが、さすがに誤りを悟って居心地が悪くなったのだろう。
「――で、何かお分かりになりましたか？」
相手の戸惑いを気にすることなく、リョウは淡々と言い放った。
外套も上着も脱いで、鞄の中身も開けた。シャツにも細工はないし、ズボンのポケットにも目ぼしいものは入っていない。
これだけやってスヴェトラーナは、自分の何を疑い、何を探していたのだろうか。
口を噤んだスヴェトラーナは腕を組み、己が執務机の端に浅く腰掛けた。

暫し、その場で瞑目するように目を閉じた後、伏せていた目を上げた。
射抜くような強い視線だった。偽りを決して許さないというような。確固たる信念を持った眼差しだった。
「イーラという名前に聞き覚えは？」
「ああ。イーラさんですか。手当てをして下さった侍女の方のお名前もそうでした」
少々強引ではあったけれども世話焼きで優しい女だった。長い髪を後ろで一つにまとめた清潔感のある女だった。
「殺されたのは、イーラだ」
「……え？」
その言葉にリョウは顔色を失くした。口元に浮かべていた笑みが固まり、粉々に砕け散った。
そして、ゆっくりとスヴェトラーナの方を見た。
「イーラさんが？　……殺された？　どうして……ですか？」
「それを今、調べている」
やっとのことで絞り出した掠れた問い掛けに、殊の外、低い声が宣告のように言葉を紡いだ。それはまるで宣戦布告のような堂々としたものだった。
再び、室内に重苦しい沈黙が落ちた。

綱渡りの攻防（後書き）

なんだか初めのころのほのぼのとした空気が懐かしいですね。緊迫した空気は、この後、暫く続く予定です。少しずつ発動する罠。リョウを取り巻く状況はどうなるのか！？　それではまた、次回にお会いいたしましょう。

焦燥と規律のジレンマ

その後も続くかに思われた尋問は、予定外の横槍により中断を余儀なくされた。

張りつめた沈黙の中、突如として響いた小さなノック音の後に、一人の兵士が滑り込むように中に入って来た。兵士は、きびきびとした動作で団長の傍に行くとその耳元に何事かを囁いた。

その瞬間、スヴェトラーナが小さく舌打ちしたのをリョウは聞き逃さなかった。

「急用が入った」

用件を伝えた後、速やかに廊下へと退いた兵士の背中を視界の隅に認めてから、第二師団・団長が、振り返った。

「先にそちらを済ませてくる。それまでこの場で待っていてもらえないだろうか」

これを機に漸く解放されるかと思ったリョウは、その台詞にぬか喜びをした。

これは、一時的な中断でしかなかった。

自分が同じ女性だと分かってか、スヴェトラーナの態度は少し軟化したように思えたが、その口振りに、こちらの拒否権はなさそうだと思わざるを得なかった。

「分かりました」

帰りたいのは山々だったが、リョウは大人しく頷くしかなかった。

スヴェトラーナは、中にいた部下に後を頼む（要するに見張っておけということだろう）と告げると足早に己が執務室を後にした。

――――――妙な気を起こさないでくれよ。

去り際、そう釘を刺してゆくのも忘れなかった。

リョウは、広い団長室を所在無げに見渡すと簡素な木のテーブル

の上に浅く腰を掛けた。散らばった薬草の袋や小瓶を鞄の中にしまおうとすると見張りとして残された二人の兵士の内、団長の後ろに控えていた兵士がそれを制した。

薬草や薬品の類は、この後、中身の確認をする為に鑑定に回すとのことだった。

どこまで人を莫迦にするのか。リョウは突発的に怒りを覚えたが、それをぐっと堪えた。逆にそうして中身が普通のものだということがはっきり分かれば、潔白の証拠になるだろうと思い直した。

そして、念の為、許可を得てから薬品の類を除いた他のものを鞄に詰め直した。次に脱いでいた上着を着込み、外套を畳んでから腕に掛けた。

二本の短剣は、まだ返してもらえなかった。スヴェトラーナが戻って来たら、改めて検分するという理由だった。

浅く机に腰を掛けたまま、リョウは大きく息を吐き出すのを我慢しつつ窓の外へ視線を投げた。

一体、何が起きているのだ。自分の周りで。

この間のイースクラの一件。そして今度は侍女・イーラの突然の死。立て続けに起きた二つの事件。そこに何らかの繋がりがあるのか。いや、それは余りにも飛躍し過ぎだろう。リョウはその思いつきを振り払うように頭を振った。

第一、イースクラは傭兵上がりの男だ。それに引き換えイーラは宮殿の奥向きに仕える侍女である。両者の立場は余りにも違う。二人の生活基盤は掠りもしない。

偶々、悪いことが重なったのかもしれない。

リョウは気を落ちつけようと深く息を吸い込んだ。

あのイーラが死んだ。いや、殺された。そのようなことを突然聞かされて、リョウは動揺した。自分の知らない所で何かが起きている。そんな気がしてならなかった。言い知れぬ漠然とした不安が澱のように腹の底に溜まって行く気がした。

それにスヴェトラーナは、その侍女の毒殺にリョウが関わったと

疑念を抱いているようだった。
どうしてこんなことになったのか。自分がイーラを殺すなんて、そんなことある筈がない。第一、何の為に？
スヴェトラーナの言い分を信じるのならば、使われたのは、一般に出回ることのない高価な毒草、【ジョールティ・チョールト（黄色い悪魔）】だ。それを手に入れることの出来る人物は限られているだろう。暗殺の玄人（プロ）にしてはお粗末な手口だった。現場にその証拠を残して置いたのだから。すると誤って口にしたのか。何かの香草と間違えて。だが、イーラのことを良く知らないリョウには、その背景などは分かろうはずもなかった。宮殿で何らかの面倒事（トラブル）に巻き込まれたのかもしれない。そう考えるのが限界だった。
スヴェトラーナは、リョウがイーラと接触したことを知った。恐らく、死の直前に。あの時は周りに沢山の侍女たちがいたから、調査の段階でそのことが出てきたのだろう。だからこうして確認をしているのかも知れない。
しかし、実際の所、リョウは何の関係もなかった。手当てをしてもらった。ただそれだけだ。それなのにスヴェトラーナは自分を疑っているようだった。
この分では、身の潔白を主張するしかないのだろう。話せば分かってくれるはずだ。剣呑そうに自分を睨み付けるスヴェトラーナの顔を思い出して、若干、不安を覚えないでもなかったが、誠心誠意を持って事に当たれば、きっと疑いは晴れる。今は、そう信じる他なかった。
リョウが一人項垂れている間、職務に忠実なスヴェトラーナの部下は、黙ってその任務を全うしていた。

そうやって待たされている時間を何とも言えない気分でやり過ごしている時だった。
「ヴァロージャ！　おい、待て！」
大きな声がしたかと思うと突然、団長室の扉が勢いよく開き、中

に一人の兵士と思しき若い男が飛び込んできた。その後を追うようにもう一人の兵士が現れ、先に入った男の腕を引き留めようと引いた。

リョウは吃驚して、突然乱入してきた男たちを見遣った。扉付近にいた兵士と仲間の兵士がその男を取り押さえようとして揉み合いになった。その時に、始めに飛び込んできた男と目があった。

燃え盛るような瞳だと思った。明るい茶色の光彩が、怒りに染まっていた。

仲間の男たちの制止を振り切って突然その男が物凄い形相でリョウに掴みかかった。

「お前か！　お前がやったのか！」

襟元を持ち上げるように締め上げられて、リョウは慌てて気道が塞がりそうになる首元に手を宛がった。ぐいと力任せに持ち上げられて長靴の爪先が浮いた。

「何の……話…ですか？」

やっとのことで絞り出した声は掠れていた。

「おい、ヴァロージャ、止めろ。莫迦なことはするな！」

仲間の制止の声に耳を貸すことなくその男が声を低くしてリョウの鼻先に詰め寄った。

「お前か？　何が目的だ？　あ？」

緩く癖の付いた柔らかそうな茶色の髪を振り乱し、男が凄んだ。

「何故、イーラに手を掛けた？　どうして、イーラを殺した？」

それは、喉の奥から絞り出すような悲痛な叫び声だった。泣いたのかも知れない。真っ赤に腫れた瞼に血走った目が、睨みつけるようにリョウを見据えていた。

「違う！　ワタシは何もやってない！」

ぐっと喉元が詰まり、リョウの顔は真っ赤になった。絞め殺すことも辞さない。そんな相手の本気が伝わって来た。苦しくなって、リョウは自分を締め上げる男の太い腕を叩いて力を緩めるように頼んだ。もがくリョウの姿に漸く仲間の兵士たちが躍りかかって来た

男を力ずくで引き離した。
手が外れ、急激に気管に空気が入り、リョウはむせた。大きく肩が上下する。締め上げられてひりひりとする喉元に手を宛がった。
「ヴラジーミル！」
扉付近にいた兵士が男を一喝した。
「何を考えているんだ。ここは団長室だ。団長がいなかったからいいようなものを。弁えろ」
スヴェトラーナの一任を受けた腹心の部下が、突然の暴挙に出た若い兵士へ諭すように、だが、冷たく言い放った。
「疑わしい人物を召喚したと聞いた」
「まだ取り調べ中だ」
「犯人の目星が付いたということなのだろう？」
「落ち付け、ヴァロージャ、まだそうと決まった訳ではない」
「だが、こいつが今、最有力候補だと聞いた」
ちらりとリョウの方へ鋭い視線を投げてから、拘束された兵士が忌々しげに吐き捨てた。
その台詞に中にいた二人の兵士は苦い顔をした。
「重要参考人だ。被疑者ではない」
「滅多な事を口にするな。軍律違反で懲罰ものになるぞ？」
「ハッ、営倉でもなんでもぶち込めばいいんだ。俺が知りたいのは真実だ。誰がイーラに手を掛けた？　何の目的があって？　どうしてイーラなんだ？　何故！？」
深い悲しみと行き場のない怒りに彩られた男の沈痛な声が、迸るように広い執務室内に響き渡った。
「ちょっと待ってください。ワタシが……疑われているんですか？」
不意に落ちた痛いくらいの沈黙の中、リョウはゴクリと唾を小さく飲み込むと問えそうになりながらも茫然と呟いた。掠れた吐息のような声量であったにも関わらず、その声は室内の隅々にまで染み渡って行った。

「ハッ」
闖入者が吐き捨てるように言った。
「シラを切る積りか？　あ？　見事なものだな」
乱入してきた男は、リョウを端から犯人と決めてかかっているようだった。
「どうしてワタシがイーラさんを殺さなければならないんですか？」
一度しか会ったことのない相手をどうして殺めなければならないのだ。人を物理的に傷つけたことなど一度としてない。リョウにとっては余りにも理不尽な言い掛かりだった。
「それは俺が知りたいくらいだ！」
苦々しく吐き捨てた後、一瞬の激情から徐々に平静を取り戻しつつあった男は、仲間の拘束を解き、ゆっくりとリョウの傍に近づいた。
男は、左腕に紫色の腕章を巻いていた。第二師団に所属する兵士なのだろう。良く鍛えられた逞しい体格が隊服の上からも見て取れた。腰に長剣を佩いている。長靴の底が擦れる音と共にカチャリと剣が鈍くぶつかる音がした。
目の前に迫った男の口元が、残忍に歪んだ。
「詳しいことは俺が聞く」
そう言うといきなりリョウの鳩尾に拳を思い切り突き入れた。
「……ッツ……」
小さな呻き声を上げてがくりと糸の切れた操り人形のように崩れ落ちた小柄な体をその男は肩に担いだ。
そして、その男は、そのまま部屋を後にしようと扉の方へ向かった。
「ヴラジーミル・ボグダーノフ」
中にいた兵士が低く制止の声を掛けた。
「止まれ。その者をどうする積りだ？」
「ヴァロージャ、止せ。私怨をぶつけるのは恥ずべきことだ」
意識を失ったリョウを肩に担いだまま歩きだした大柄な兵士に方

々から鋭い叱責の声が掛かった。仲間の兵士がその前に躍り出て、進路を塞ぐように立ちはだかった。

「もう七日も待った。あんたたちに任せていたら捜査は遅々として進まない。いつになっても犯人は捕まらないままだ。事は慎重を要する？　ハッ、呆れたぜ。あんたらがちんたらしてる間に当の犯人はのうのうと過ごしてるんだ。何事もなかったかのようにな。俺はそんな莫迦げたこと、真っ平だ！」

再びの激高に男の顔が赤く染まった。

「ヴァロージャ、お前の気持ちは分かるが、莫迦な真似は止せ。そんなことをしても解決には繋がらない」

宥めるように言葉を紡いだ仲間の兵士の襟元を男が掴んだ。

「何だって？　俺の気持ちが分かる？　冗談言うなよ、アカーキィー。お前に俺の何が分かるって言うんだ。婚約者を殺されたんだぞ！」

――――――大切な人を失った俺の悲しみがお前に分かるというのか。

「その者の取り調べは団長が行う。お前の出る幕はない。私情を挟むなど言語道断だ」

だから、規律を乱すようなことはするな。スヴェトラーナの腹心の部下は、強硬手段に出た兵士を一喝した。

軍部では縦の指揮系統がしっかりしていなければならない。上長の命令は絶対だ。男の行為は命令違反、軍律違反に当たった。違反者には厳しい罰則規定がある。それが軍部内の統制（ルール）だった。

「罰なら後で幾らでも受けます」

最初の暴発的な怒りから少し冷静さを取り戻したのか、これまでのぞんざいな口調を改めて潔く吐き捨てたボグダーノフを階級が上である兵士が窘めた。

「そういう問題ではない」

それにもう一人の兵士も諭すように言葉を継いだ。

「お前が頭に血を上らせてどうする？　冷静になれ。そうでないと

重要なことを見逃すことになる」
「自分は十分冷静です。少なくとも、あなた方よりはマシだ」
ボグダーノフは頑なだった。一歩も引く所を見せなかった。アカーキィーと呼ばれた仲間の兵士が取り成すように間に入った。
「諦めろ、ヴァロージャ。尋問は団長が行うと言っているんだ。お前もそこに立ち会う許可を貰えばいいだろう？　それならいいですよね？」
ボグダーノフは苛立たしげに奥歯を噛み締めた。
「私情は禁物だ。的確な判断を鈍らせる」
だから、余計な真似はするなと団長の補佐官でもある有能な部下、カレーニンは切り捨てた。
統率を乱すような行為は慎まなければならなかった。漸くこの事件解明への糸口が掴めそうな所であったのだ。この兵士一人の軽はずみな行いの所為で、全てが台無しになる可能性も十分考えられた。そういう横槍や先走りは、規律を重んじる団長が一番嫌うことでもあった。
「自分に黙って見ていろと？　指を銜えて見ていろと？　そう仰るんですか！」
「ヴラジーミル・ボグダーノフ」
平行線を辿る議論に補佐官が苛立たしげに舌打ちした。
「これは命令だ。第一、その者はまだ犯人と決まった訳ではない。重要参考人だ」
「同じことではありませんか？」
「いや、違う。大きな違いだ。いいか。こんな子供に何ができる？　裏で糸を引く黒幕がいるはずだ。貴様がここで妙な事をしでかせば、折角の手掛かりが消える恐れがある。これまでの努力が水の泡だ。貴様はこの件を侍女の暗殺だけだと思うのか？」
下士官の暴挙を思い留まらせるように上官が訥々と説いた。
――――だから、慎重に事を運ばなければならない。
その一言にボグダーノフは、激高した。

「慎重？　それは聞き飽きました。この件の迅速な原因究明と解決を望んでいるのは自分も同じです。ですが、あなた方のような生温いやり方では駄目だ」

だから、自分が問い質す。そう言って、一歩、前に踏み出した。

「お前を行かせる訳にはいかない」

友人である兵士が最後の砦となるべく男の目の前に立ちふさがった。婚約者を失って悲しみの余り自棄になる友をこのまま放って置くことは出来なかった。第一、このようなやり方は間違っている。

「どけ、アカーキィー」

「そういう訳にはいかない」

「ならば、力ずくで突破するまで」

ボグダーノフは低く呟くと目の前に立ちふさがる友の腹に強烈な一発を叩き入れた。完全に不意を突かれた兵士が呻き声を上げてその場に膝を着く。その隙に、重要参考人を肩に担いだボグダーノフは、足早に団長室を後にした。

「待て！　ボグダーノフ！」

遠ざかってゆく大きな背中に上官の命令が虚しく響いた。

団長のスヴェトラーナよりリョウの見張りを一任されていた補佐官のカレーニンは、大きく溜息を吐いた。

ボグダーノフは、普段は温厚な性質のはずだった。それだけ今回の一件が堪えているということなのだろう。だが、この国の兵士たる者、常に冷静でなければならなかった。私情を挟んではならない。殺された侍女の婚約者ということで、ボグダーノフは今回の捜査からは外されていたのだ。最初は大人しくしていたのだが、とうとう痺れを切らしたらしい。

上官として同情の余地はなかった。厳しいかもしれないが、そこは割り切らなくてはならない。

カレーニンは、すぐさま部屋にいたもう一人の部下に視線で合図を送り、ボグダーノフの後を追うように言った。

あのままでは何をしでかすか分からなかった。頭に血が上り怒り

のままに突っ走っている。憎しみの余りにあの者を殺しかねなかった。それは非常に不味い。

少年のように見えたその人物が、実は女性だった。その事実を知った今、これまでの調査で集めた情報をもう一度洗い直す必要があるとカレーニンは、感じた。

それに団長のスヴェトラーナが帰って来るまでにあの者を連れ戻さなければならなかった。ことのあらましを聞いたら、団長のことだ、普段から吊り上がり気味の眦を一層吊り上げて、静かに激高することだろう。止められなかった部下の失態を口汚く罵ることはしないだろうが、その口元にぞっとするような凍てついた笑みを浮かべて、規律を乱した兵士へ容赦ない懲罰を下すことだろう。

一連の流れを思い描いて、一人、広い室内に取り残されたカレーニンは、口の端を僅かに下げたのだった。

焦燥と規律のジレンマ（後書き）

ヴラジーミルという名前は、世界を手に入れる、【世界制覇】というとても野心的な意味です。同じ系統でロシア極東の都市、ヴラジヴォストークは【東を制する】という意味です。ボグダーノフというのは、神から与えられた、神の賜物といった感じでしょうか。
短いですがキリがいいので今回はこの辺で。次回に続きます。

慟哭の暴走

――――――バシャリ。

何かが勢いよく打ちつけられる衝撃と不意に襲った冷たさにリョウの意識は、ゆっくりと浮上した。重い瞼を静かに開く。そうして霞む視界にまず入ってきたのは、薄闇の中に仄かに浮かび上がるごつごつとした石造りの床の割れ目だった。

ひんやりとして冷たい感触が頬に伝わった。体中が冷えて固まったかのようだった。

どうやら横になっているようだ。少しずつ戻ってくる感覚にリョウは自分が倒れていることを認識した。頭の奥がずきりと痛んだ。纏まらない思考を無理にでも掻き集めるようにきつく目を閉じる。息を吸って吐きだした。

起き上ろうとして身体が思うように動かないことに気が付いた。腕を動かそうとするとガチャリと金属の擦れる音がした。腕が言うことを聞かない。どうやら後ろ手に拘束されているらしかった。

何だ、これは一体。どうなっているのだ。

腹筋を使って起き上る。腹部全体に何故か鈍痛が走った。するとぼたぼたと額際、髪を伝って水滴のような液体が落ちて行くのが分かった。

濡れている……のか。リョウは瞬きを繰り返した。

思考は靄が掛かったように働かない。

中は薄暗かった。天井付近から僅かに差し込む光が薄く伸び、埃が絶え間ない不可思議な軌道を描いてチラチラと舞っていた。その淡い光が、石造りの床を暴きだしていた。

ここで漸く、暗闇に目が慣れてきた。目の前の床は、何故か、ぐっしょりと濡れていた。一面に薄い水溜りのようなものができていた。良く良く目を凝らせば、それは自分の身体を中心にして広がっ

ているようだった。薄い暗がりの中で見る限り、それは透明の液体に見えた。匂いもない。

水……なのだろうか。

底冷えするような寒さが全身を這いあがって来るのが分かった。まだ完全には働かない思考の中で、リョウはゆっくりと辺りを見渡した。

ごつごつとした石壁に囲まれていた。遥か上方に小さく切り取られた場所があり、そこから溢れるように光が集まっていた。明かり取りの小窓のようだった。

右側も正面も石壁だった。それからゆっくりと首を動かして左側を見た。

そこには錆びた金属の棒が、細かく等間隔に並んでいた。仄かな錆びの匂いが鼻先を掠めた。

そして、格子が並ぶ中に一つの大きな真っ黒い影が立っていた。視界がぶれて黒い影が膨張するように揺らいだ。

リョウは瞬きを繰り返した。拡散した闇が収束し、その場所に一人の男の輪郭をぼんやりと浮かび上がらせた。

長靴を履いた足。直ぐ傍には長剣がぶら下がっていた。反対側の足元には小振りの木桶が転がっていた。

少しずつ目線を上げて行った。腰、上体、太い喉元から顎、そして口元に辿り付いた所で、不意に地を這うような低い声が鼓膜を震わせた。

「お目覚めか？　このクソガキが」

鬱蒼しそうに掻き上げられたうねった短めの髪が、重力に従い額際に流れた。

「あ……な…た…は……」

燃えるような淡い茶色の瞳が、差し込む光に反射した。そこにある男の顔を認識した途端、もの凄い速さでリョウの脳裏を少し前の一連の光景が駆け巡った。

男の口元が歪に吊り上がった。

【アルセナール】の第二師団の執務室から強制的に連れ出された後、リョウが放り込まれたのは、どうやら牢のような場所らしかった。

擦れるような囁きが交わされた後、牢屋を管理していると思しき兵士が鍵を開けた。そして、団長室でリョウに掴みかかってきた男が、ゆらりと中に入って来た。

男は無言のまま、後ろ手に拘束されているリョウの細い腕を掴むと力任せにひっ立てた。強制的に立ちあがった。垂れ下がった鎖が軋み、ジャリという音が静まり返った室内に反響した。

「何の…真似…ですか？」

目覚めてからの第一声は酷く掠れていた。

男はリョウの問い掛けを無視して、独房の外に出た。そして、そのまま歩き始めた。

力任せに掴まれた腕が軋みを立てた。身体を捻るような無理な体勢だが付いて行く他なかった。

男はずんずんと格子のはまった石壁の間を歩き、突き当たりで石造りの階段を登り始めた。一方、リョウは、長時間無理な体勢でいた所為か、急な動作に痺れた足が上手く歩けずにもつれた。だが、それに構うことなく男はリョウを引きずって歩いた。コツコツと薄暗い建物の中に踏みしめた踵の音が反響した。

そして、急激に襲った眩しさに目を閉じ、再び開いた時には、もう外に出ていた。

そこは見たことの無いがらんとした場所だった。周囲を鬱蒼とした木々に囲まれていた。

何も言わない男にリョウは底知れぬ恐怖を感じだ。何をする積りなのだろうか。這い上がって来る得体の知れない恐ろしさに足が震えた。

水場のように四角く区切られた場所にやって来ると男は拘束していた腕を突き離すように放した。不意を突かれて、リョウは地面に転がった。

何をする気なのだろうか。リョウはじっと男の行動を恐々と目で追った。

男は水場に置かれていた桶のようなものを掴むとつかつかとこちらに歩み寄り、いきなりその中身をリョウ目がけてぶちまけた。

――――――バシャン。

大量の水を頭からしこたま被った。反射的に目を瞑り衝撃をやり過ごした。真冬の水はかなり冷たかった。痛いくらいに肌を刺した。

この時の感覚から、先程も同じように水を掛けられたのだと悟った。

この真冬の寒空の下、濡れた身体は急速にリョウの体温を奪っていった。寒さで震えそうになる唇を噛み締めた。もしかしたら、その震えは余りに理不尽なことをする男に対する怒りから来るものかもしれなかった。

「何をする！」

転げた地面から出来るだけ素早く上体を起こして、下から睨み上げるようにして声を荒げたリョウに男が鼻で笑った。そして、息を吐く間もなく再び桶からの水を掛けられた。男の傍にはいつの間にかもう一人の兵士と思しき男がいて、せっせと木桶に水を汲んでいた。

そして、男は水の溜まった桶を受け取ると順にリョウ目がけてぶちまけていった。一杯、二杯、三杯と続き、五杯目になった時には、すっかり全身ずぶ濡れになっていた。上着からズボン、長靴に至るまで、文字通り頭のてっぺんからつま先まで、大量の水を吸ってぐっしょりとしていた。髪からはだらだらと滝のように水が流れていた。相変わらず腕は後ろ手に拘束されている為、顔を拭うことも出来なかった。リョウは獣のように水気を払うべく頭を振った。

からんと空になった木の桶を放り投げる音がして、気が付いた時

には男がぐっしょり濡れたリョウの襟首を掴み、その鼻先へ引き寄せていた。
「何故、イーラを殺した？」
低く問われた声が鋭い刃物の刃先のようにリョウの耳を削いだ。
この男は自分がイーラを殺した犯人だと疑っていないのだ。そして、今、怨みを晴らそうとしている。行き場の無い怒りをぶつけているのだ。そう理解した瞬間、リョウは絶望を感じた。
「ワタシはやってない」
もう何度目になるかも分からない言葉を繰り返した。至近距離で突き刺さる男の強い視線を真正面から受け止めた。全ては男の思い違いだ。男の行動を全否定する言葉に首元が一層ギリリと絞られた。リョウは寒さで震えそうになる歯を噛み締めてその苦しさに耐えた。
「何だと？」
「ワタシじゃない」
もう一度、はっきりと繰り返した。
男の瞳が剣呑さを増したが、続けた。
「イーラさんに会ったのは一度だけだ。怪我の手当てをしてもらった。親切にしてもらった。恩を感じることはあっても恨むようなことなど有り得ない」
第一、イーラのことはよく知らない。
「この後の及んでしらばっくれる気か？」
「あんたこそ、何故、何を根拠にワタシを疑う？」
この男がここまで頑なに自分を疑う理由は一体何だ。
頭の芯がびりびりと痺れてくるようだとリョウは思った。それほどまでに凄まじい憤りが皮膚のすぐ下をざわざわと駆け巡って行った。
「【黄色い悪魔】は常人には入手困難なものだ。術師見習いのワタシが手に入れられる訳がない」
「そんなものお前の伝手を使えば容易いんじゃないか？」
「グラスに花弁を残しておくなど、余りにも見え透いている」

リョウは力強く男を見据えた。漆黒の瞳が冷酷さえある冷たさを帯びて細められた。

「それに、ワタシが実行犯なら、花弁を残すような莫迦な真似はしない」

冷たく吐き捨てたリョウに男が逆上した。

「黙れ！」

掴まれていた襟首が不意に緩んだと思ったら、左側に強烈な衝撃が走った。思い切り殴られたと理解した時にはぐわんぐわんと共鳴するように脳が揺れた。勢いのままに投げ出され、不自由な身体のまま受け身を取ろうとして失敗した。口の中に苦い錆びの味が広がった。今ので口の中が切れたことを知った。

リョウは口に溜まった唾を吐き出した。乾いた地面に血の混じった染みができた。

「こんなことをしても時間の無駄だ」

リョウは再び倒れていた上体をゆっくりと起こした。じんじんと男から受けた理不尽な痛みが体中のあちこちで熱を持ち始めていた。だが、今、そのようなことに構ってはいられなかった。突き抜けたような怒りがリョウの表情を冷たい仮面のように失わせていた。

「ワタシは関係ない」

一貫して怯まない相手の強さに、連れ出した男の方がほんの少し狼狽えた様子を見せた。

「お前でなければ誰が……」

「そんなの知るか！　それを調べるのがあんたたち第二の仕事じゃないのか！？」

「それなら……何故？」

男が立ったまま茫然と呟いた。

張りつめたような沈黙が静かに引き絞られて行った。吹き込む風に周囲を囲む木立の梢が影のようにざわざわと揺れた。

そんな時だった。

緊張を引き裂くような複数の人の足音が聞こえたと思ったら、こちらに向かって駆けてくる人影が見えた。
徐々に大きくなってくる人影が、先だって別れたばかりの人物を象った。団長のスヴェトラーナだった。
「そこまでだ。ヴラジーミル・ボグダーノフ」
鋭い一喝の後、つかつかと苛立たしげに長靴の踵が踏み鳴らされた。ここまで急いでやって来たのだろう。真冬だというのにその額際に汗が一筋流れ落ちていた。
共に付き従ってきた紫の腕章を付けた第二の兵士たちが、二人がかりで先走った仲間の男を拘束した。
団長のスヴェトラーナは、暴走した兵士に歩み寄るとその襟元を引き絞った。
「勝手な真似はするな」
冷たく吐き捨てると男の頬をいきなり殴り付けた。鈍い殴打音がした。それは実に軍部の長らしいやり方だった。
「頭を冷やせ、ボグダーノフ。謹慎を申し付ける。追って沙汰があるまで静かにしていろ」
これまで以上に容赦ない厳しい叱責の声が第二師団・団長から発せられたかと思うと、
「やれやれ、どうやら間にあったようですね」
場違いな程にのんびりとした男の声と、
「リョウ！！！」
焦燥に駆られたように自分の名前を呼ぶ低い男の声を聞いた。
スヴェトラーナは、己が部隊の兵士の起こした騒動に渋面を作りながらも、後から現れた二人の男たちを前に神妙な顔をした。

「私は常々、キミは女性擁護論者だと思っていたのですが、どうやらそれは勘違いだったようですねぇ」

スタルゴラド騎士団・各師団長を集めた定例会議が終わった後、気配なく隣に並んだ人物に第二師団・団長のスヴェトラーナ・クロポトキンスカヤは、冷ややかな視線を投げた。

「何が言いたい？」

男にしては些か繊細すぎる顔立ちに感情の読めない笑みを浮かべた男を一瞥してから、スヴェトラーナは関心なさそうに突き離した。

スヴェトラーナは、うんざりだと言わんばかりに大業に溜息を吐いた。不愉快だということを取り繕おうともしなかった。そのような事など今更だった。

昔からねちねちと遠回しな厭味を口にするこの男とは頗る仲が悪かった。お互いに顔を合わせる度に静かな毒舌合戦が展開されるのだ。毛嫌いしているのならば、言葉を交わさなければいいだろうにと思うのだが、この二人の間には磁力のように引き寄せられては反発し、離れて行くという不可思議な現象が起きていた。当の本人たちにもそれは分からないかもしれない。本当は相通じるものが過分にもあるのだろう。喧嘩するほど仲がいい。詰まりはそういうことだ。だが、まぁ、当事者の二人は決してその事実を認めたがらないであろうが。

忌々しい相手を振り切ろうと歩調を早めたスヴェトラーナの隣に犬猿の仲と呼び声の高い第三師団・団長、ゲオルグ・インノケンティがそつなく並んだ。両者共に身長は余り変わらない。恐らく、脚の長さもだ。

「何故、あの子を牢に入れた？」

艶やかに弧を描いた口元から発せられた声は、いつになく低かった。そこにある変化にスヴェトラーナは足を止めて、すぐ隣にある細面の男の顔を振り返った。

いつもそこにあるはずの人を食ったような笑みは消えていた。代わりにあるのは、久し振りに見る男の本質の欠片だった。普段はにこにこと人当たりのよい微笑みを仮面のように張り付けているゲオルグだが、この男の本質は烈火のごとき苛烈なものだった。凍てつ

いた冷たさというよりも灼けるような熱さだ。それは冷めた男の外見を裏切るような正反対のものだった。

普段は上手い具合に隠しているその本質もごく稀にこうして僅かな隙間から顔を覗かせることがあった。この男のこんな表情を見るのも久し振りのことだった。

「何の話だ？」

だが、スヴェトラーナにはゲオルグの言わんとしていることが分からなかった。

あの子を牢に入れた？　誰を牢に入れたというのだ？　そもそもそのような命令を出した覚えはなかった。

「惚けるな」

口調もいつもの慇懃無礼ともいうべき丁寧なものから素に近いものに変わっていた。

スヴェトラーナは、空色の目を眇めてじっと同じ高さにある薄い灰色の瞳を見つめた。

「リョウを尋問していたのだろう？」

部下のカレーニンの話では、後でゲオルグも合流するとのことだった。

「ああ。それが何か？」

と言いかけて、スヴェトラーナは途端に苦虫を噛み潰したような表情になった。

「そっちの兵士が一人暴走中だ」

低く出された囁きに、

「あんの莫迦が……」

スヴェトラーナは呪詛の言葉を吐いた。

残念ながら、スヴェトラーナには心当たりがあった。普段の素行にはなんの問題もない優秀な兵士だ。その兵士をスヴェトラーナは今回の事件の捜査人員（メンバー）から外していた。それは指揮系統に支障をきたす恐れがあると判断した為である。何故なら、その兵士は、殺害されたとされる侍女の婚約者だった。その兵士は当然のように捜査

に志願したが、スヴェトラーナは却下した。私情を持ち込む訳には行かなかった。

その兵士が公正な判断ができるとは思えなかった。捜査の上で感情的になることは許されない。常に客観性が保てなければ、この一件で大切なことを見逃してしまう恐れがあった。

これまでに集めた情報を精査してゆく内にスヴェトラーナは、引っ掛かるものを覚えた。尋問の為に呼び出した黒髪のリョウという人物は、侍女たちの言い分を肯定した。敢えて相手を怒らせるような揺さぶりを掛けてみても動じた様子は見せなかった。

それにずっと少年だと疑わなかったその相手が、本当は女性だった。それを知った今、侍女との痴情のもつれや横恋慕といった可能性は消えた。

あの者は、少なくともイーラの死に衝撃を受けていた。これまでの兵士として培った勘から言って、リョウが本当に何も知らなかったということが濃厚なのではと思えてきた。

「部下の監督不行き届きですねぇ、スヴェータ」

無表情からは一転、鮮やか過ぎる程の笑顔でゲオルグが言い放った。

「私は怒っているのですよ。事前に何の相談もなくあの子を取り調べたことに。ねぇ、ルスラン？」

――――そうは思いませんか？

そう言ってゲオルグは後方を振り返った。そこには、会議後、他の師団長たちと立ち話をしていた第七師団長・ユルスナール・シビリークスがいた。

急に端から声を掛けられて、ユルスナールが先を行く二人に注目した。

なんと間の悪いことだろう。スヴェトラーナは、小さく舌打ちをした。

「先に行く」

スヴェトラーナは、小さく口にすると長靴の底を蹴った。
部下の失態は、即ち上長である自分の責任である。この会議に参加する前、室内に残して来たカレーニンとファイナの二人はスヴェトラーナにとっては有能な腹心の部下たちだったが、あの二人ならば問題ないだろうと思った自分の読みが甘かった。
どういう経緯かは分からないが、ゲオルグの言を借りれば、リョウは今、牢屋にいるという。独特の情報網を持つゲオルグに己が部隊の内情をほじくり返されるのは業腹だったが、今はそれを感謝しなければならないのだろう。感情的な面は一先ず置いておいて、こういう所で素早く頭の切り替えができるのは、スヴェトラーナの良い所だった。
事態が最悪の方向へ行かないように今はいち早く状況を把握し、対処する必要があった。
殺害された侍女・イーラの婚約者でもあった兵士・ボグダーノフは、スヴェトラーナが知る限り、無駄な争いはしない穏やかな気性の男のはずだったが、腕っ節の強さは部隊内でも定評があった。あの寡黙で真面目な男が怒りに我を忘れるというのはどうもスヴェトラーナには想像が付かなかったが、団長室で主の戻りを待っている筈のリョウが牢やにいるということは、何らかの異常事態(トラブル)が発生したということなのだろう。
スヴェトラーナは、駆け出した。ゲオルグがああやってお節介を焼くくらいだ。ことは緊急を要すると思われた。
【アルセナール】の第二師団の区画(エリア)へ走り込み、団長室の扉を勢いよく開けた。
「カレーニン！　状況は？」
室内に残っていたのは腹心の部下の一人、補佐官のカレーニンだけだった。
「ファイナはどうした？　リョウは？」
低く矢継ぎ早に発せられた問いに、カレーニンは正確な情報を淡々と上司に報告した。

案の定、ボグダーノフが乱入し、リョウを連れ去ったということが分かった。もう一人の部下であるファイナにその後を追わせてから、まだ何の連絡も入ってきていないということだった。

「【フチュリィムー（牢屋だ）】、カレーニン。急げ」

その一言で、待機していた第二の兵士たちが動いた。

そうして、他に有能な部下数名を引き連れて、【アルセナール】の北西に位置する牢へと急いだ。この場所は兵士の懲罰や罪人の一時留め置きに使用されている留置所のような場所だった。周囲を鬱蒼とした木々に囲まれた薄気味悪い曰くつきの場所でもあった。

諍う声が聞こえて、周囲を取り囲む木立の合間からボグダーノフの後姿が見えた。その左腕に巻かれた紫色の腕章を見て、スヴェトラーナは眉間に皺を寄せた。己が部下の失態ということがどうにも気に入らなかったようだ。

そして、どこか茫然と立ち尽くしていたボグダーノフを速やかに拘束した。数多もの兵士たちを統率する団長として、違反を働いた部下に自ら鉄槌を下すことも忘れはしなかった。規律を乱す行為は軍部ではご法度だ。同情の余地、情状酌量の余地はない。兵士としてやっていいことと悪いことがある。それが厳しい軍の掟だった。

暴走した兵士を拘束した後、スヴェトラーナは、連れ去られたというリョウの姿を探した。

少し前方で駆けつけた第二の兵士に声を掛けられながら、身体を起こしてよろよろと立ち上がった所だった。

その姿を一目見て、スヴェトラーナは顔色を曇らせた。一言で言えば、酷い有様だった。

恐らくボグダーノフも自分と同じようにリョウを少年だと勘違いしたのだろう。だから躊躇いもなく手を上げた。殴られたのか左側の頬が真っ赤に腫れていた。唇の端が切れ、血が滲んでいる。何よりも全身がびしょ濡れだった。

直ぐ傍に転がる木の桶。そして少し先にある水場で茫然と立ち尽

くす牢屋番の兵士。スヴェトラーナは、大体の状況を一瞬のうちに把握した。

「やれやれ、間一髪だったようですねぇ」

そこに場違いな程のんびりとした男の声と、

「リョウ！！！」

鋭い声を一つ上げて駆け寄る急いた足音が重なった。

スヴェトラーナは、これで、この一件を内々に済ませることが出来なくなったと悟った。

「命拾いしましたね、スヴェータ」

自分の後を追って現れた第三師団長の冴え冴えとした冷ややかな笑みに第二師団長は苦い顔をする他なかった。リョウが取り敢えず無事でよかった。ゲオルグの言う通りである。

だが、スヴェトラーナが思うよりも実際の所、状況はおもわしくなかった。それはゲオルグと共に現れたもう一人の男、第七師団長のユルスナールに負う所が大きかった。スヴェトラーナにとっては大きな番狂わせであったかもしれない。

仰天したユルスナールは第二の兵士の手を借りて立ち上がったリョウに駆け寄ると、無事を確かめた後、その細い身体をきつく抱き締めた。

銀色の髪の男は、びりびりと辺りを振るわせるような静かな怒気を抑えることなく撒き散らしながら振り返ると、第二師団長を睨みつけた。

「何の真似だ、スヴェータ？」

低く、決して語気を荒げるような声音ではなかったが、その一言でスヴェトラーナは、ユルスナールが途轍もなく怒っていることを悟った。

「ああ、でも。これでは半殺しにされるかもしれませんねぇ。ルスランに」

恋する男を怒らせてはいけない。今回、第二は一番やってはいけない禁域に手を出してしまった。

そのようなことを飄々と口にしたゲオルグにスヴェトラーナは、これまで見聞きしたユルスナールとリョウの間にある親密すぎる程の関係性を瞬時に理解した。詰まり、あの二人は恋仲ということなのだ。リョウが女性であることを知ったスヴェトラーナは、それをすんなりと受け入れた。と同時にその事実を今更ながらに知った自分の間の悪さと至らなさを呪った。

怒りに震える第七師団長は、近くで顔色を失くし立ち竦んでいた牢屋番の兵士から鍵をもぎ取るとリョウが後ろ手に拘束されていた手枷を外した。ずっしりと重い金属の手枷。罪人に嵌められるその器具を手にすると苛立たしげに牢屋番の兵士の足元に投げつけた。ガシャンと鈍い重みのある音が辺りに響き渡った。

寒空の下、冷たい水を浴びせられたリョウの顔は真っ青になっていた。ユルスナールの登場に安堵したのか痛々しい傷跡の残る顔で情けなく微かに笑った後、痛みを堪えるように眉を顰めた。

ユルスナールは水を吸い込み過ぎた上着を脱がせると自分が着ていた上着を脱いで華奢な身体を包(くる)んだ。

ずぶ濡れになって額際に張り付いた黒髪を掻き上げ、冷え切った身体全体を摩るように抱き締めながらこめかみの辺りに口付けた。そして、緊張の糸が切れてぐったりとしたリョウを腕に抱えると踵を返して歩き出した。

「すまなかった」

全ては自分の監督不行き届きである。小さく謝罪の言葉を口にしたスヴェトラーナをユルスナールは冷ややかに見下ろした。ユルスナールの顔は、幼い頃から相手をよく知るスヴェトラーナから見ても初めて目にするような凄まじい形相をしていた。ぶちまけたい怒りを必死に抑え込んでいる。そんな顔にも思えた。

「事情は後で聞く」

そう言ってスヴェトラーナの横を通り過ぎた。
ユルスナールの現時点での最優先事項はリョウの状態だった。
「ルスラン、リョウの様子は？」
ゲオルグが心配そうな声を掛けていた。
「身体が冷え切っている。至急、温めなければ」
「リョウ？　大丈夫ですか？　もう少しの辛抱ですからね？」
同僚の会話がどこか遠くに聞こえた。
――――自分の判断は間違っていたのか。
自分が尋問をしていた相手に同僚でもある第三師団長と第七師団長の二人が案じる声を掛けている様子を目の当たりにして、スヴェトラーナは自分の間違いを認めない訳にはいかなかった。第七のユルスナールだけならともかく、第三のゲオルグもリョウに心を砕いているようだった。二人が大切にしている人物を疑ったということは、即ち、あの二人を敵に回したということになる。
――――いや、私は真実を掴もうとしていただけだ。自分の取った方法は正しかった。己が職務を全うしようとしていたに過ぎない。
スヴェトラーナはその場に立ったまま、自問自答し、きつく両の拳を握り締めた。
だが、こんな所で気落ちしている暇はなかった。こうなったらもう一度全てを洗い直す必要があるだろう。自分にはまだまだやらなければならないことがある。
後でユルスナールからはきつい一発をお見舞いされることになるだろうと覚悟した。普段、女性には優しく紳士的な態度を崩さないユルスナールだが、第二師団を纏める団長に対しては容赦などしないだろう。
スヴェトラーナは女である前に、スタルゴラド騎士団の第二師団長だった。その責任は著しく重い。
こうして、スヴェトラーナは、覚悟を決めると迅速な事態の収拾を図る為に、一歩、足を踏み出したのだった。

慟哭の暴走（後書き）

２０１１／８／２９　誤字修正

夜更けの会合

――――――なんだ？　悪巧みでも始める積りか？

そこに揃った顔触れをざっと見渡した後、この家の主である男は、小さく片方の眉を跳ね上げて、からかうような笑みを浮かべた。

だが、室内には何故かその男の冗談を受け流すような弛緩した空気はなかった。張りつめたような緊迫感が僅かなブレを生じさせたのみ。

室内をぐるりと見渡して。主に良く似た面立ちをした若い男が、軽口を叩いた男、即ち己が父親を複雑な顔付きで見やっていた。

おや。どうやらお気に召さなかったようだ。主は心の中で肩を竦めた。

その一室に集う面々は、昔から知る子供たちの長じた姿だった。ルーシャ、ビーカ、シーリャ、ドーリャ、スヴェータ、ジョーラ。母や乳母たちが軽やかに抑揚を付けて呼ぶ子供たちの愛称は、つい昨日のことのように男の耳の奥に残っていた。其々が良くも悪くも個性的でアクの強い子供たち。幼い頃はそれなりにあった行き来も、大人になり其々に役職を得た今では、その交流の頻度は少なくなり、所によっては途絶えがちでもあった。

「これはこれは閣下。人聞きの悪いことを仰らないでください」

――――――ご無沙汰しております。

小さく小首を傾げて、かつてのシーリャ、神官の家系を引くレステナント家の中で唯一軍人になり、今は息子の片腕として第七師団の屋台骨を影から支えている男、シーリスが鷹揚に微笑んだ。

「ええ。本当に。私たちはもう悪戯好きな子供ではありませんよ」

その反対側で、男の割には艶めかしく整った顔立ちに人当たりのよい笑みを浮かべる軍人が一人。幼い頃はこの世のものとは思えないくらい愛くるしい仕草で屈託なく笑ったジョーラも大人になった

今、その面影は随分と遠いものになってしまった。
「今でも大して変わりなかろうに」
その少し手前でぼそりと漏れた低い呟きは、故意か、それとも思わず音になってしまった自己内対話（独り言）か。研ぎ澄まされた刃のように鋭利な印象を与える造形をそのままに今も昔も変わらない、いっそ清々しい程の雄々しい態度で紅一点のスヴェトラーナが鼻を鳴らした。
「父上、いかがなされましたか？」
言葉使いは丁寧だが、何をしに来たのだと言わんばかりの息子のつれない態度に父親は過ぎ去った年月の残酷さを暫し、噛み締めた。
「普段、家に寄りつかない放蕩息子と偶には盃を酌み交わそうってな魂胆だろうよ」
息子にとっては腐れ縁とも言える幼馴染がのんびりとした口調で茶化すように隣に座る友を見た。
「それはそれで実に魅力的なお誘いには違いありませんが、お楽しみは次回に取っておくということで」
――――どうぞご心配なく。決して閣下を仲間外れにするようなことはございませんので。
最後にそつなくこの状況を締めくくったのは、相変わらず仮面のように微動だにしない顔立ちに薄らと微笑みのようなものを刷いたドーリンだった。
やれやれ。どうやら今回はお呼びではないらしい。いかにこの家の主とて、こうも客人たちにせっつかれては、大人しく首を引っ込めるしかあるまい。
「そうか。ではいずれまた次の機会に」
若干の寂しさと虚しさを胸内に抱えつつも、この家の主である男、ファーガス・シビリークスは開いていた扉の向こうに消えたのだった。

先走った兵士による強引な詮議の一件から解放されたリョウは、一先ず距離的に近い【アルセナール】の一室に運び込まれ、そこで冷え切った体を温めることになった。

軍医を呼び、手っ取り早く温まる為に湯に入れようと濡れて張り付いた衣服を脱がした際、ユルスナールはリョウの鳩尾の辺りにできた痣を発見して顔を顰めた。詳しい事情は後でスヴェトラーナに問い質す積りであったが、武芸大会に合わせたこの時期に毎年恒例となっている軍部の定例会議の後、不意に第三のゲオルグから声を掛けられて、その時に道々聞いた話では、過日、宮殿の奥向きで侍女が不審死を遂げた事件を巡り、内々にリョウを取り調べていたというユルスナールにしてみれば寝耳に水の仰天すべき事柄で、その途中、殺された侍女の婚約者であったという一人の兵士が暴走し、リョウを拉致したということだった。恐らく、この痣はその時にリョウの気を失わせる為に急所に入れられた一発なのだろう。

華奢な身体を抱えるようにして浴槽に沈めれば、ぐったりしながらも意識のあったリョウはほうと小さく息を吐いた。

「……あったかい」

そう口にして目を閉じたリョウにユルスナールは湯を掛けながら血の巡りを良くする為に肌を摩った。

切れて血の滲んだ唇に腫れ始めた左頬。ついこの間も左側の頬を腫らしたばかりだというのに。白いきめ細かな柔肌に浮かぶ傷跡がとても痛々しかった。

スヴェトラーナの勝手な振る舞いにユルスナールは非常に腹を立てていた。そもそも自分に一言話を通してしかるべきだった。挙句の果てに謂われのない嫌疑を受けて怪我を負わされる始末。行き過ぎた取り調べに腸が煮えくり返りそうだった。第三のゲオルグがあの時知らせてくれなかったら、もっと大変なことになっていたやもしれない。それを考えるとぞっとした。また自分の知らない所でリョウが傷を増やしてゆく。それは己が不甲斐なさを知らしめられると同時に耐えられないことだった。

その日、リョウは、そのまま【アルセナール】の一室に泊った。
真冬の寒空の下、冷たい水を沢山浴びせられた所為か、リョウはその日の夜から高熱を出して寝込んでしまった。そのままでは満足な介抱ができないと判断したユルスナールは、翌日、リョウを自分の実家であるシビリークス本家に移した。
実家に運んでからもリョウの熱は一進一退で中々下がらなかった。大きな寝台の中で目を閉じながら苦しそうに荒い息を吐く。
リョウには信頼の置ける熟練した使用人を看病に付けた。術師の資格を持つユルスナールも良く知る侍女だった。ユルスナールとてリョウの傍にずっと付き添っていてやりたいのは山々だったが、己が職務の関係上、そういう訳にもいかなかった。
今回の一連の騒動の経緯をしっかりと把握しておく必要があった。そして、その必要があれば暴走した兵士を始めとする第二の面々に然るべき処罰を要求する。ぐったりとしたリョウのことがなければ、自分の大切な人を酷い目に遭わせた第二の兵士にあの場で自ら報復をする所だった。女相手に手を上げるなど言語道断。リョウが受けたであろう恐怖と痛みを思えば、一発殴るくらいではとてもじゃないが、気が済まなかった。
しかも罪人の如く後ろ手に枷をはめられて、よろよろの状態で立ち上がったリョウの姿を目の当たりにした時は、一気に怒りが心頭した。髪の毛の末端まで逆立つのではないかというくらいの衝撃だった。自分でもよくあの場で抑えることができたと思う。

その夜、シビリークス家の一室では、ユルスナールを始めとする六人の同僚たちが密かに集まっていた。
「具合はいかかです？」
開口一番、心配そうに病人の容態を尋ねたのは【アルセナール】の執務室でこの一件を驚きと共に耳にしたシーリスだった。

「今、ちょうど眠った所だ。熱は相変わらずだな。一時期よりは下がったが、注意をしていないと直ぐにまた上がる」

ユルスナールの言葉にシーリスは柳眉を下げ、顔色を曇らせた。

この場に集まったのは、ユルスナール、ブコバル、シーリスのお馴染みの第七の面子（メンバー）と第五のドーリン、第三のゲオルグ、そして第二のスヴェトラーナだった。スタルゴラド騎士団を代表する錚々たる顔触れである。

この面々が一堂に会するのも珍しいことかもしれない。今しがた顔を覗かせたこの家の主も驚いた口だったに違いない。

「これを渡しておいてくれ」

スヴェトラーナは懐の中から二本の短剣と付属のベルトを取り出すとそれらを対面のソファに座るユルスナールに渡すべくテーブルの上に置いた。

それらはリョウが肌身離さず身に着けていたものだった。取り調べの際に外すようにと言われたのだろう。

「自分で返さないのか？」

その問いにスヴェトラーナは苦い顔をした。

「いや。まだ落ち着いていないのだろう？　そんな時に私が顔を出しては却って治るものも治らない。良くなったら改めて謝罪に伺う」

――――まぁ、許可をもらえればの話だが。

そう言って自嘲気味に形の良い厚めの唇を歪めた。スヴェトラーナなりに今回の件を反省しているらしいことが読み取れた。

「中は改めたか？」

「ああ。一本はな。そっちの小さい方だけだ。もう一本はどうしても鞘から抜けなかった。主ではないと駄目らしい。小さくとも律儀な剣だ」

改めることのできた小振りな方の短剣は、スヴェトラーナの目から見ても非常に良いものだった。鞘の作りを見る限り、恐らくその二本は対になっているのだろう。無駄な装飾の類は一切ない実用性一辺倒のものだが、それがいっそ清々しかった。

「呪いが掛けられているのですね？」
――――――貸してみてください。
この六人の中で唯一、術師としての高い素養を持つゲオルグが鞘から抜けなかったという少し長めの一振りを手にした。
「【プゥースチィ　アトクロイェッツァ（解放せしめよ）】」
解除の呪いを小さく唱えると赤みを帯びた淡い光が鞘の周りを取り巻いたかと思うと弾けるように掻き消えた。
そして、ゲオルグはゆっくりと短剣を鞘から引き抜いた。
「……ほう」
どこからともなく感嘆に似た溜息が漏れていた。
「それは、レントの作ったものだ」
ユルスナールの言葉に対面でスヴェトラーナが大きく目を見開いた。
「プラミィーシュレのあの偏屈鍛冶屋か？」
稀代の鍛冶屋、レントの名前は遠く王都（スタリーツァ）にまで達していた。
「成る程。さすが名人と謳われるだけありますねぇ」
短剣を透かし見ながらゲオルグが言った。
「見事なものだ」
その横でドーリンも合槌を打つ。
「ではその小さな方も？」
「ああ。そうだ」
「珍しいこともあるのですね。あの人は生粋の刀鍛冶だったと聞いています。専ら作成するのは長剣で。このような短剣を作っていたとは」
「ああ。そうだな」
レントの弟子であるカマールさえも知らなかった程だ。恐らく、この世にレントの魂の籠った短剣はその二振りしか存在しないのだろう。
それらの二本の短剣の注文主を知るユルスナールは、昔を懐かしく思い出すように目を細めた。どちらも一風変わった頑固者同士、

反発し合いながらもその根底では、お互いを認め合っていた。
「でもそいつはリョウにとっちゃぁただの短剣だ。果物の皮だって躊躇いもなく剥きやがる」
プラミィーシュレでの顛末を思い出したのかブコバルが飄々と言った。
「だが、それでいいのだろう」
ユルスナールが小さく息を吐いた。
軍人ではない一般人が刃物を手にする理由はそのような日常生活に根差したものだ。これは生活の道具であって人を傷つける為のものではない。この短剣も元々そういう目的の為に作られた。

ここで漸く何らかの口慣らしが済んだようだった。
「スヴェータ」
「ああ。分かっている」
ユルスナールの一声にスヴェトラーナは小さく咳払いをして背筋を伸ばすと、この度の顛末について第二師団長としての見解を交えながら語り始めた。後宮に於ける侍女の不審死の一件についてこれまでの調査で分かった諸々のことだ。
一通り時系列的に語り終えた所で、
「しかし、どうしてそれだけの材料でリョウが犯人だということになったのですか?」
全くもって心外だとばかりにシーリスの菫色の瞳が厳しく第二師団長を射抜いた。
リョウを良く知る第七の面々からすれば余りにも馬鹿らしく、そして腹立たしいことだった。リョウのように自分よりも他人を優先する善良なお人好しが殺人に関わるなどとは有り得ないだろう。
「犯人と決めた訳ではない。あの時点では他に有力な手掛かりがなかった。だから重要参考人として召致した」
「全て内々にあなた自ら先頭に立って進めていたのでしょう?」
「ああ」

「当然、例の兵士については監視を付けていた」
「無論だ」
ドーリンの言葉にスヴェトラーナは、そこに抜かりはなかったと息巻いた。
「だが、あのような事態を招いたのだから、結果的にはお前の読みが甘かったということだ」
一時の怒りは収まったが、それでもユルスナールはスヴェトラーナを許した訳ではなかった。そして、あの兵士のことも。あのような見るからに非力な相手に対して暴力でねじ伏せようなどとは断じて許せることではなかった。
「ああ。そこは面目次第もない。私の責任だ」
スヴェトラーナもその点は認めざるを得なかった。結果が伴わなければなんの対処もしていなかったのと同じことになる。
「ですが、あなたとあの兵士では随分と温度差があったようですが？」
ゲオルグの斬り込むような鋭い指摘にスヴェトラーナは苦いものを飲み込んだような顔をした。
あの兵士はリョウを犯人だと思って疑わなかった。その根拠は一体、何だったのか。

団長と部下の間にあった温度差について、スヴェトラーナはこの日、一日、この件に関わった兵士たちの聞き取り調査をした。そこで出てきたのは、侍女の中にリョウが件の侍女・イーラに小さな花のようなものを手渡していたという話やリョウからイーラに小さな花が届けられたとする侍女仲間の話があったということだった。
スヴェトラーナは初めて耳にしたそれらの情報を前に居並ぶ兵士たちを見据えた。何故そんな重要とも思えることが自分の方にまで届いていないのか。
良く良く聞いてみれば、それは裏付けの取れていない曖昧な噂のようなもので実際にその現場を目撃したという侍女が誰かは分から

なかったということだった。
スヴェトラーナは実(まこと)しやかに入り込んだ流言に作為的なものを感じた。敢えて捜査から外されていたボグダーノフは、その噂を耳にして逆上したらしい。
「何故、報告が上がらなかった？」
この件で陣頭指揮を執るのは団長である。全ての情報はスヴェトラーナに一元化され集約されなければならなかった。
厳しい言葉を紡いだスヴェトラーナに部下の兵士たちは神妙な顔をした。そして、自分たちがその噂を耳にしたのもボグダーノフと同じ昨日のことだったと口にした。誰かが悪意を持ってそのような噂を流した。黒髪のリョウが犯人であるかの如く見せかける為に。
スヴェトラーナにはそう思えた。

「リョウには何か恨みを買うようなことでもあるのか？」
穏やかに微笑む人当たりの良い……と言えば聞こえがいいが、自分の目から見たら警戒心の欠片も無い能天気な顔を思い出して、スヴェトラーナは眉を顰めた。ここに集まる連中ならともかく、どう考えても敵を作るような性質(タイプ)には見えなかった。
『何を莫迦げたことを言っているのだ』とでも言いそうな顔をしたシーリスの隣で、
「ああ。そう言えば」
そこでユルスナールは、かれこれ四日ほど前に第四の管轄下で男が一人殺害された件を思い出した。
リョウが恨みを買うというのとは少し趣(ニュアンス)が違うがと前置きして。
スタリーツァの裏通りで斬殺された男はリョウの知り合いで、その死の間際に実に意味深な言葉を残されたのだと語った。
――――――【ユプシロン】に気を付けろ。それが最期の言葉だったという。
「武芸大会の個人戦で十位内に入賞していた男だった」
その言葉にシーリスが、

「そこそこの剣の使い手が斬殺ですか？」
考え込むように顎に手を当てた。
【ユプシロン】とは神殿に仕える神官たちのことを言い表わす隠語のようなものだった。
「神官がリョウに危害を加えるというのか？　一体何の為に？」
訳が分からないとばかりにドーリンが首を傾げれば、
「うーん……繋がりそうで繋がりませんねぇ」
その隣でゲオルグも沈思黙考していた。
「どういうことだ？」
ゲオルグの言葉をユルスナールが聞き咎め、集まった皆が一斉にその発言者に注目した。

身を乗り出したユルスナールにゲオルグは『まぁ焦るな』と笑ってから、次のようなことを語った。
武芸大会が始まる数日前に（ゲオルグ曰く）生臭神官が密かに接触を持ってきた。そこで自分に【黄色い悪魔】を融通出来ないかと持ちかけてきたのだ。
「なんだと？」
【黄色い悪魔】と聞いて眦を吊り上げたスヴェトラーナは、ゲオルグを鬼のような形相で睨みつけた。
「まさか、お前が流したのか？」
「まさか。そんな莫迦なことをする訳ないじゃないですか？　これだから短絡的な人間は嫌ですねぇ」
「なんだと!?」
ドーリンを間に置いて、厭味たっぷりにスヴェトラーナを流し見たゲオルグに言われた当人は声を荒げたが、
「スヴェータ。一々相手にするな。話が逸れる」
ユルスナールからの静かに窘められて、スヴェトラーナはぐっと押し黙った。
「神官が【黄色い悪魔】を探していた――その使用目的について

は何か言っていましたか？」
シーリスが考えを引き継ぐように口にした。
「ああ。そこは上手くはぐらかされてしまいましたねぇ。残念ながら」
少し間を開けて、ゲオルグは意味深に笑った。それはゲオルグを良く知る同僚たちにしてみれば悪どい感のある笑みに映った。
「使えん」
ぼそりと漏れた呟きは敢えて流された。
「ですが、その時に実に興味深いことを小耳に挟んだのですよ」
――――――なんだと思います？
艶やかな笑みに弧を描いた口元にユルスナールが目線だけで続きを促した。勿体ぶらなくてよいから早く言えとばかりにその眼差しが険を帯びた。
それを気にすることなく、ゲオルグはたっぷりと相手を焦らすような間を開けてから、低く囁いた。
「神殿ではどうも近々儀式を行う腹積もりのようですよ？」
「……儀式、だと？」
その言葉に集まった一同は耳を疑った。
「まぁた、けったいなことでもおっぱじめるつもりかよ？　あっちのジジイ共は」
何やら心当たりでもあるのか、ブコバルが心底嫌そうに口の端を歪めた。
「神殿で最後に宣託を得る儀式が行われたのは二年前のことだろう？」
己が記憶を探ったドーリンに、
「ええ。そのように聞いていますが」
シーリスがその問いを肯定した。
当時、プラミィーシュレに赴任していた第五のドーリンと北の砦に赴任していた第七の面々は、王都にはいなかったので、その時の話は伝令を介した事務的な報告や噂話に聞く程度だった。

「ああ。お前たちはこっち（スタリーツァ）にいなかったか」
長椅子に凭れかかり肘当てに肘を突いたまま、いまいち理解の浅い当時の不在組をスヴェトラーナが緩慢な動作で見渡した。
当時、儀式で得られた宣託の内容は、蓋を開けてみれば実に曖昧なものだった。宮殿側に事前に何の連絡もなく、唐突に儀式を行ったことで、宮殿と神殿の間は一時は一触即発のように緊張が高まったのだ。
神殿側の高圧的な態度に宮殿側は不信感を抱いた。神官たちに対する不信感は、そのまま同じ素養持ちの術師に対する不信感に繋がった。元々宮殿内部には術師に対する偏見もあった。その時の軋轢と対立の余波を一番に被ったのは第三のゲオルグだった。
「こっちは大変だったんですよ。もうあの時の二の舞は踏みたくありませんねぇ。懲り懲りです」
二年前とはいえ余程腹に据えかねることがあったのか、つい昨日のことのようにしみじみと口にしたゲオルグを見て、同じく軍部で上に立つ者としての苦労が分かるのか、ドーリンが同情的な視線を送っていた。
「こっちでは特にそんな話は聞かなかったぞ？」
生まれてからこの方、ずっと王都暮らしで宮殿の貴族たちともそれなりに太い繋がり（パイプ）を持つスヴェトラーナが、不信感も露わに眉を上げた。
「ええ。ですから問題なんですよ」
そう言ってゲオルグは肩を竦めた。
自分に接触を持った神官は神殿でも高位の者で、単なる疑似餌的な撹乱の為の情報という訳でもなさそうだった。それなりに信憑性が高いものだとゲオルグは判断していた。
「その辺りのことを一度、ザガーシュビリ殿にもそれとなくお聞きしたのですが、こちらもまぁ、上手い具合にはぐらかされてしまいました。本当にあそこの方々は秘密がお好きなようだ」
――――――そうは思いませんか、シーリス？

ゲオルグのその台詞は、代々神官を輩出してきた家系の生まれであり、その義兄が同じく神官の職に就いているシーリスには、かなり挑発的とも取れなくなかった。

だが、このような遣り取りは毎度のことで。その辺りの心得があるシーリスも負けてはいなかった。

「では、私の方でも義兄上（あにうえ）に今一度、確かめてみましょう。詮索好きで腹黒い他人には言えないことでも身内ならば漏れるものがあるやもしれません」

そう締めくくるとにっこりと微笑んだ。

両者を隔てるテーブルの間に冷たい隙間風が吹き抜けた気がした。

だが、そのような日常茶飯事には頓着することなく、儀式で思い出したがと前置きしてドーリンが不意に顔を上げた。

「そう言えばあの時、何やら【黒】に関するものを集めていなかったか？」

久々に儀式が行われたという事実にどうしても注目が行きがちだが、思い返してみれば報告書の中にそのような記載があり、ドーリンはその使用目的に当時、首を傾げた覚えがあった。

「ああ。そうですね。確かお触れが出て、黒い色彩を持つ人や物、鉱石なども含めてですが、そういったものを集めていましたね。心当たりのある者は、それらを持って神殿に来て欲しいというようなことをやっていましたっけ？」

神殿の儀式そのものには関心のなかったゲオルグは、その辺りのことを話に聞いただけで、実際に何がどうなったかについては追って調べなかった。

ゲオルグの記憶を肯定するようにスヴェトラーナが続きを受けた。

「ああ。確かに黒いものを集めていたな。侍女たちの中にも黒い髪留めを神殿に寄付するのだと言っていたものがいた」

「……【黒】……だと？」

仄めかされた符牒にユルスナールは眉間に深い皺を刻み、その顔付きを険しいものに変えた。

「だから神殿の連中はリョウに接触を持とうとしているのか？」
その色彩故に。黒い深淵なる闇を抱えた双眸と細い糸のような艶やかな髪を思い描いて、ユルスナールは独りごちた。
「だが、そんなことをしてどうするのだ？」
その時、ユルスナールの脳裏についこの間、第四の詰め所で聞いたリョウの言葉が過った。
殺害されたイースクラという男には、リョウと同じような黒い色彩を持つ子供たちがいたという。二年前に行方知れずになったその子供たちを探す為に、辺境から遥々旅をして巡っていた。そして近々、その手掛かりが掴めるかもしれないと言っていた矢先に事件が起きた。久々の再会まで後もう少し。だから、あの場で死んで欲しくなかったのだとその目に涙を溜めながらリョウは言った。
――――――【ユプシロン】に気を付けろ。
同じ【黒】という色彩を持つ子供たちの行方を探って、あの男は神殿の行った儀式に手掛かりを求め、そこで何らかの事実に辿りついた。
だが、その途中で、消された。神殿の息が掛かった者に。恐らく、あちらにとって都合の悪い何かをあの男に察知されたのだろう。
その【何か】とは何か。
不均等に散らばる点と点が、これで繋がった気がした。

「てかさぁ、そんな【黒い】もんばっかし集めて、神殿の奴らはどうする積りだったんだ？」
訳が分からないという顔をしてどっかりとソファの背凭れに身体を預けたブコバルに、シーリスが事も無げに言い放った。こういう所はさすが代々神官を輩出する家の出である。
「それは決まってますよ。捧げるんです。宣託を得る為の祈りの対価として……」
とそこまで口にして、シーリスは不意に顔色を変えた。
「……まさか」

不意に落ちた沈黙に、普段より勘の鋭い男たちはその言外に含まれる事柄に見当が付いてしまった。
「まっさかなぁ、おい」
突如として深刻さを増した空気をブコバルがいつもの如く冗談にして流そうとしたが、今回ばかりは、その機転は上手く働かなかった。
「そんなことが……」
――――――あるのか？
その後に続くはずのドーリンの言葉は、落ちた深い沈黙を前に音にはならなかった。
「シーリス」
「ええ。分かっています」
ユルスナールの低い呼び掛けにシーリスは真剣な面持ちで答えた。両者は視線を交わすと静かに頷き合った。
早急にこの件を調べなければならなかった。ことは神殿に関する一件だ。慎重に当たらなければならないだろう。
これ以上、大切なリョウを妙なことに巻き込むことはしたくなかった。
今度こそ、守ってみせる。この手で。
ユルスナールは奥歯を噛みしめ、拳を握り締めると決意を新たにした。

夜更けの会合（後書き）

なんとか8月中にもう一本更新ができました。
ジョーラとはゲオルグの愛称です。ゲーラの他にもゴーラ、ユーラと多々あります。
それではまた次回に。

静養の一日

秘密裏に持たれた同僚たちの会合から更に三日後、シビリークス家に滞在していたリョウは、漸く熱も下がり、少しずつだが食事も喉を通るようになっていた。

高熱を出して寝込んだのは久し振りのことだった。約三月ほど前のプラミィーシュレ滞在中以来ではないだろうか。だが、あの時は打ち身に良く効くとされる薬草の成分が身体に行き渡った為という外因性のことで、今回のように自発的に風邪のような症状を起こして熱が出たのは本当に久々だった。

症状が快方に向かったのには、術師が処方してくれた薬湯が効いたということもあるのだろうが、常に付きっきりで看病に当たってくれた存在があったからだろう。心細い思いをしなくて済んだのが大きかったかもしれない。

「まぁ、リョウ。起き上って大丈夫なの？」

ふっくらした丸顔の中に行儀よく収まった円らな灰色の瞳を大きく見開いて、一人の恰幅の良い女性が部屋の扉を開くと軽やかな声を上げた。

この女性の名はポリーナという。シビリークス家に仕える使用人で術師でもあるのだそうだ。とうの昔に成人した息子と娘が一人ずついる母親でもあった。そして、リョウがこちらに移送されてから、熱にうなされている間もずっと傍にいてくれた女(ひと)だった。

この日、リョウは寝台から起き上ると部屋の中を歩いてみた。顔を洗いさっぱりとした気分になってから、窓を少し開けた。長い間、寝込んでいた時特有の立ち眩みがあり、足どりが少々覚束なかったが、ふらふらとしながらも窓辺に近づいた。

あの日、【アルセナール】の一室で冷え切った体を温めたことま

ではちゃんと覚えていたのだが、その夜に熱が出てからのことは記憶が曖昧だった。体中がかっかと熱くて息をするのも苦しい程で浅い眠りを繰り返した。ユルスナールに場所を移動すると言われた時も半ば夢現の状態だった。

術師を目指している者が、聞いて呆れる。普段、このような時の為に自分でも薬草を見繕って持ってきていたのだが、肝心な時にそれらが手元になかった。多分、色々なものと一緒に第二の団長室に置きっ放しなのかもしれない。簡素なテーブルの上に並んだあの薬類は、その後どうなったのであろうか。鑑定に回されたのか、それともそのままなのか。いずれにせよリョウにとっては大事な品ばかりで、あの古ぼけた鞄共々早く自分の手元に戻って来ることを願わずにはいられなかった。

それにしてもえらい目に遭った。四日ほど前のことを思い出して、リョウは複雑な気分になった。あのまま下手をしたら殺されていたかもしれなかった。あのように強い怒りと憎しみを真正面からまともにぶつけられたのは初めてのことで、生きた心地がしなかった。

後にあれは錯綜した情報による混乱が招いたちょっとした誤解ということで、自分に掛けられていた嫌疑は一先ず晴れたようだったが、その安堵感を差し引いても、苦い記憶が頭の片隅にこびりつくようにして残っていた。

本当にあの時の相手の激情を思えば、今は五体満足でいられることが有り難かった。所々、あの暴走した兵士から受けた傷が痛みを訴えてはいるが、これはやがて癒えるだろう。

思い返せば、これまでなにかと面倒なことに巻き込まれては来たが、中でもあの激高した兵士から植えつけられた恐怖は、中々消えそうにはなかった。

それでもいつまでも引きずっていては仕方がない。リョウは少し前の恐怖を敢えて封印するように心の中に押し留めた。

そうして、ゆっくりと窓の外へ目をやった。そよぐ風が微かに吹き込んでくる。朝特有の湿気を含んだ清冽な空気をゆっくりと吸い込んだ。

草と土の青くほんのりと甘い匂い。鳥のさえずりが聞こえてくる。

そこからの景色は、リョウにとっては見慣れないものだった。裏庭のような広い開けた空間を囲むように大きな木々が立派な枝ぶりを伸ばしていた。何の花だろうか。名前は知らないが、青い色をした小振りの花がたわわに咲き誇っていた。

この場所はユルスナールの実家、シビリークス本家の一室だった。目に映る調度類は洗練された優美なもので、いやらしい派手さや華美さはない。全てが調和したしっとりと落ち着きのあるもので、この家の気風をよく表わしていると感じた。

まさか再びこの場所を訪れることになろうとは。初めて【アルセナール】に行った帰り、ユルスナールに連れられてこの場所を訪ねた時のことが、とても昔のことのように思えた。

また、ユルスナールに迷惑を掛けてしまった。自分が窮地に陥った時、ユルスナールはいつもその手を差し伸べてくれた。そして、こうして今もあの男の優しさに助けられ、世話になっている。自分は甘えてばかりだ。

そして、今まさに自分の身を案じてくれている恰幅の良い女性もユルスナールの優しさと心遣いの表れでもあった。

部屋の中とはいえ、白い簡素な寝間着姿でうろうろとしていたのは不味かっただろうか。リョウはばつの悪さを誤魔化すようにして微笑みながら振り返った。

「おはようございます。ポリーナさん。大丈夫ですよ。もうすっかり」

「あらあら私ったら、朝の挨拶もまだだったわね」

ポリーナは照れたように小さく笑うとリョウからの朝の挨拶に同

じように返した。
「まぁまぁ、昨日までずっと寝たままだったのよ？　気分がいいのはいいことだけど余り無理をしてはいけないわ。まだ青い顔をしてる」
そう相手を案じる言葉を口にして上品な笑みを浮かべているポリーナにリョウは擽ったそうに微笑んだ。
「そうですね」
ようやく熱が下がったのは昨日のことで。それまでユルスナールにもこのポリーナにも散々心配を掛けてしまったことは分かっていたので、リョウは大人しく頷いた。
ポリーナは寝台の枕辺に置かれていた肩掛け（ショール）を手に取るとそっと窓辺に歩み寄り、広げたそれをリョウの肩に掛けた。
「寒くはないかしら？」
柔らかく保温性の高い肩掛け（ショール）の上から骨張った細い肩を温めるようにポリーナのふくよかな手が摩った。
季節は冬の終わり。春はもうすぐ目の前にまで迫っていたが、まだまだ昼夜の寒暖の差は厳しかった。吹き込む風も冷たさを帯びている。
「ありがとうございます」
リョウは肩に掛けられた上着の前を掻き合わせると開けていた窓をそっと閉じた。
ポリーナが乱れていた黒髪をそっと手で梳いた。顔を洗った際に少し濡れてしまった所為か、所々湿り気を帯びていた。
「さぁ、朝ごはんにしましょう？」
――――少しでも栄養のあるものを食べて早く元気にならなくっちゃ、ね？
丸顔に浮かぶその優しい笑みは、リョウにはとても眩しく映った。
ポリーナは多くを聞かなかった。幾ら主であるユルスナールの言い付けとはいえ、いきなり見ず知らずの女を看病しろと言われて驚いたのではないだろうか。

だが、ポリーナはそのようなことはおくびには出さずに親身に接してくれた。まるで己が娘に対するかのように。

おおらかで慈愛に満ちた温かな人だ。その姿にリョウはスフミ村にいるリューバを重ねていた。

術師になる為に王都に行くことになった。そう告げた時、スフミ村のリューバは、初め驚いた顔をしたが、すぐに相好を崩した。王都の術師養成所で学ぶ機会を得たことを殊の外、喜んでくれたのだ。

王都は様々な【知】が集まるこの国随一の大都市だ。いい機会だから色々なことを吸収してくればいい。そう言って背中を押してくれた。ふっくらとした温かな手で。その温もりを貰ってから、凡そ一月が経過していた。

「そうですね」

リョウはそっと微笑みを返した。

「ええ。健康の基本は食事から。まずはちゃんと食べられるようにならなくっちゃ」

それからポリーナはこの国の女性の例に漏れることなく、朗らかに歌うような旋律に乗せて、様々な言葉を紡いでいった。

ポリーナの【歌(おしゃべり)】は続いていた。まるで小鳥のさえずりのように。甲高く強弱を付けて。

「そうして、ルーシャ坊ちゃんをあっと驚かせてあげるのよ」

その思いつきは、かなりポリーナの気に入ったようだった。

「ええ。そうよ。それがいいわ。本当に。このお屋敷にお仕えしてもう大分経つけれども、ルーシャ坊ちゃんのあんなに必死な顔を初めて見たのよ？」

『うふふふふ』――そう言って鈴が鳴るように軽やかに笑った。

あのユルスナールを【ルーシャ坊ちゃん】と呼ぶ。幼い頃はさぞかし可愛らしかったのだろうと思える男の子も、今や筋骨逞しい強面の男に成長していた。

きっとポリーナは、それこそ赤ん坊の頃からユルスナールを知っていて、昔からの習慣は中々変えられないのだろうが、いい大人に

なった今でも親しみと慈愛を込めてルーシャと呼ぶ。そのような関係を内心微笑ましく思うと同時になんだか少し可笑しかった。自分の中にある現在のユルスナール像とルーシャという言葉から感じる幼さが重ならないからかもしれない。

小さく含み笑いをしたリョウに、

「あら、どうかした？」

何かおかしいことでもあったかしらとポリーナが不思議そうに小首を傾げた。ポリーナにとってはユルスナールをルーシャと呼ぶことは息をするのと同じように自然なことなのだ。

年と共にふくよかになった首回り。そこに寄る皺さえも愛嬌あるポリーナのお茶目さを象る愛すべきもののように思えた。

「いえ」

「さぁどうぞ」

リョウは小さく首を横に振るとテーブルの上に行儀よく並べられてゆく朝食を前に促されるようにして席に着いた。

そうして消化によいとされている【カーシャ（おかゆ）】を食べ終え、保存用に作られた果物のシロップ煮（コンポート）に木の【ローシュカ（スプーン）】を入れている時だった。

どこか忙しない感のある控え目なノックの後に扉が開き、中から銀色の頭部が見えたかと思うとリョウにとっては馴染み深い男の顔がひょっこり現れた。

「おはようございます。ルスラン」

「ああ。おはよう。気分はどうだ？」

その口元に小さな笑みを浮かべながら挨拶を返し、室内につかつかと足を踏み入れたユルスナールは、リョウの傍に来るとその顔色を良く確かめようと覗きこんだ。

額に手を当てて火照りがないことを確認すると薄い唇が更に弧を描いた。

「熱もすっかり下がったな」
「はい。お陰さまで。ありがとうございまず」
額に当てられていた手がそのまま頬を撫で、まだ少し変色の残る打ち身の跡に触れた。
「腫れも大分引いてきたでしょう？」
無意識だろう。微かに顰められる眉にリョウは明るい声を上げていた。
「まだちょっと見苦しい感じで痣が残ってますけど、これもあと数日もすれば消えると思います」
――――――何と言ってもポリーナさんの薬は良く効きますから。
そう言って微笑んだリョウにユルスナールも笑みを浮かべた。
「そうだな」
頬にあったユルスナールの手がそのまま首筋に下りた。そこで何を思ったのかユルスナールは小さく笑うと上体を屈め、リョウの右側の唇の端を舐めた。
「甘いな」
ぽつりとそんな呟きが漏れた。
「あ……れ…付いてました？」
リョウは、まだ男の唇の感触が残る辺りを指で触れた。
ちょうどデザートとして出された【グルーシャ（梨に似た果物）】のシロップ煮を食べていた所だった。保存目的と栄養価を高める為なのだろうが、恐ろしく甘かったのだ。煮詰めたシロップが口の端に付いていたのかもしれない。
だからと言って何も舐めとることはないだろうに。
「教えてくれれば自分で拭いたのに」
そう言ったリョウの鼻先で、ユルスナールは飄々と嘯いた。
「味見だ」
「……もう」
そうして再び離れたかに見えた男の硬質な顔が近づいて来たかと思った時だった。

唇が触れ合うほんの少し手前で、再びガチャリと部屋の扉が開いた。
「まぁまぁ、ルーシャ坊ちゃま。まだお食事も済まないうちから、お部屋にお入りになるなんて」
ポリーナが目を丸くして中にいるユルスナールを窘めた。
「硬いことを言うな、ポーリャ」
「このように軽々しく若い女性のお部屋にお入りになってはいけません。私はそのようにお育てした覚えはございませんよ？」
部屋に入って来るなり早々、眉を顰めて説教染みたことを言い始めたポリーナにユルスナールは、ぐっと押し黙ったかと思ったのだが、
「ポーリャ、そう朝からカリカリするな。リョウが吃驚するだろう？」
話の矛先を逸らすようにリョウのことを挙げてから、何やら意味深な目配せをした。
「それにリョウとはそのような遠慮を挟む間ではない。なぁ？」
「……は…い？」
ポリーナに向けていた顔を戻して、同意を求めるようにこちらを見たユルスナールにリョウは虚を突かれた顔をした。
確かにユルスナールにしてみれば今更かもしれない。リョウが世話を焼かれるのはいつものことで。
これまでに具合の悪い時は付きっきりで看病をしてもらった。そして、情けない姿を散々晒してきたのだ。今更、寝間着姿に肩掛け（ショール）を羽織った体で片頬に痣が残っているような顔を見せるのも、恥ずかしくないと言ったら嘘になるが、ポリーナのように取り立てて騒ぐほどのことにも思えなかった。
だが、まぁ、普通に考えて、独身の若い男が身支度の整っていない女の部屋に入るのは、褒められたものではないのだろう。特にユルスナールが身を置く貴族階級のしきたりでは。
リョウがつらつらとそのようなことを考えている間に、

「まぁ！　では本当ですのね？」
「ああ」
「まぁまぁ、それは素敵ですわ！　ああ。でもルーシャ坊ちゃま。だからと言って最低限の礼儀は守って頂かなくてはなりませんわ」
「分かっている」
ユルスナールとポリーナの間では何らかの意思疎通が図られていたようだった。
先程までのしんなりと寄った眉からは一転、喜色さえ浮かべた輝かんばかりのポリーナの表情に、リョウは一人シロップ漬けを口に運びながら小首を傾げていた。
それにしても甘い。甘いものは嫌いではなかったが、甘過ぎるものは苦手だった。べっとりと染み込んだ密度の濃い【サーハル（砂糖）】。こちらの人々の基準からみたら驚くほど食が細いリョウの為に苦心して拵えてくれたものだとは思うのだが、過ぎる甘さには閉口した。
だが、量が食べられないのならば、質を高めるしかないということで。折角工夫して用意してくれたものを前にそのようなことを言える訳もなく、小さく刻みながらお茶を飲みつつ口に運んでいた。
そして、最後の一口を食べ終えた所で、
「よし。全部食べたな」
ちゃっかりと椅子に座り、いつの間にやらポリーナから出されたお茶を飲みながらユルスナールが満足そうにリョウを見ていた。
往生際悪く小さく刻んだものを少しずつ口に運んでいた様子をつぶさに観察されていたかと思うと非常に居た堪れなかった。リョウは居心地が悪そうに視線を逸らした。
「……ルスラン。何だか…お父さんみたい」
微妙な顔をしたリョウの傍で、
「あらまぁ、ルーシャ坊ちゃま。もうそんなお積りだなんて。まぁまぁ、どうしましょう？　いやだわ」
何故かポリーナがリョウのその言葉に過剰なまでに反応をして頬を赤らめる始末。

リョウは目を白黒させた。
付き合いの長いユルスナールにはポリーナの心の動き（早とちりとも言う）が直ぐに分かったようで、深々と呆れたような溜息を吐いた。
訳が分からなかったリョウは『どうしたのだ？』と男の方を見たのだが、視線が合ったユルスナールは、『気にするな』と苦笑を滲ませた。
まぁ、いいか。リョウは深くは気に留めないことにした。
そして、話題を変えた。
「ルスラン。今日はお仕事ですか？」
ユルスナールはいつぞやの正式な軍服を着こんでいた。光沢のある明るい灰色の生地のものだ。
「ああ。【アルセナール】にいる。何かあったら使いを寄越せ」
「はい」
どこまでも過保護な男の申し出に苦笑を洩らしながらもリョウは素直に頷いていた。

「行ってらっしゃい」
部屋の戸口まで見送りに立ったリョウにユルスナールは暫し、掛けられた言葉を噛みしめるように浸っていた。束の間の疑似的幸福にこうして見送られるのもいいものだと一人、頭の中では勝手な未来予想図を描き出していた。だが、当然のことながら相対しているリョウには、男が澄ました顔の下で、そのようなことを夢想しているなどとは分かるはずがなかった。
「出来るだけ早く帰って来る」
まるで新婚家庭の夫のような言葉にリョウは苦笑した。
「無理はしないでください」
――――大人しくしていますから。
「ではな。いい子にしていろよ？」

そのような言葉を残して、ユルスナールは掠めるだけの口づけをリョウに与えるとやたらと上機嫌に半病人の部屋を後にしたのだった。

そして、ゆっくりと振り返った先。部屋の中では、ポリーナが主の出立もそっちのけで相変わらず一人、何やらもの想いに耽っているようだった。すっかり自分の世界に入っているようで、しきりに指折り数えながら何やらぶつぶつと呟いていた。

――――――ああ。忙しくなるわぁ。

そんな呟きが聞こえた気がしてリョウは益々首を捻った。

午後からは、久し振りに湯を使いさっぱりとした。ここに来る際に着ていた服はどうなったのだろうかとポリーナに聞けば、運ばれて来た時から既に寝間着姿だったと笑われてしまった。そして、代わりにと言って差し出されたものは生成り色の女物（ワンピース）の服だった。

それはポリーナの娘がその昔に着ていたものだという。お下がりで申し訳ないけれど、ちょうど合いそうな大きさのものが差し当たりそれしか見つからなかったのだと言った。

リョウは有り難くその服を借りることにした。少しくすんだ柔らかな色。何度も洗濯を重ねた為か、硬さの取れた生地は肌に馴染んで心地よかった。

それから【突っ掛け】のような【ターパチカ（サンダル）】を借りて、外に出ると暫し、日光浴をした。

場所は中庭の片隅で柔らかい下草が生えている所だ。枯れて茶色になった古い草の下から、青い若葉が生え始めていた。

春はもうすぐだ。ささやかな所でその息吹が感じられた。温められた地面は、ほんのりと熱を持ち、草の青い匂いを微かに立ち昇らせていた。

リョウの傍には、カッパとラムダ、シビリークス家の二頭の番犬

が寄り添い寝そべっていた。外に出たいと言ったリョウにポリーナは余りいい顔をしなかったのだが、ちょうど(タイミング)よく部屋の中に入って来た二頭を連れて行くならばと最終的に許可を出してくれた。まだまだ寒いのだから肩掛けを持ってゆくこと、そして、寒さを感じたら直ぐに室内に入ること、その二つをリョウに約束させた。

大きな布を下草の上に広げて、その上でごろりと横になった。両脇には、ふかふかとした温かい白い毛皮。リョウから見て右側に寝そべっているのが兄のカッパで、左側に寝そべっているのが弟のラムダ。長い尻尾に混じる灰色の毛がラムダであることを知らしめていた。

『温(ぬく)いのう』

『ああ。温(ぬく)い』

左右から漏れるのんびりとした呟きにリョウはゆっくり目を閉じた。

ああ。気持ちがいい。ぽかぽかとした暖かな日差しに適度なそよ風。両側からも温かな毛皮に挟まれて、このままうとうとと眠ってしまいそうだ。

小鳥たちのさえずり。風の音。木々の梢が擦れる音。そこに微かに混じる——使用人たちだろうか——人の声。

そして、まどろみの中、左右から聞こえる深みのある重低音。まるで子守歌のようだ。

『もうじき春じゃ』

『やや。既に春ぞ』

『戯(たわ)け。まだ匂いだけであろうに』

『なれど、先触れはここかしこに』

『嵐が来ておらぬ。春の嵐が』

『ああ。そうじゃ。春の嵐は来ておらぬ』

それは文字通り、春を告げる嵐だった。とても強い風が吹いて、叩きつけるような雨が雷鳴と共に降るのだ。空が俄かにかき曇り、

稲妻が閃光となって大地を突き刺す。それは、来るべき春を歓迎する天と大地の喜びであると共に居残っていた冬の最後の抵抗のようにも思えた。そして熾烈な鍔迫り合いを重ねた後は、必ず春の勝利で幕を閉じる。その季節交代の一幕を描いたお伽噺が、この国にはあった。

今年の春の始め、この嵐を迎えた時は、まだ一人ではなかった。もうすぐ一年。そしてその後は二年、三年と、時は加速をつけてこの身体の中で進んで行くのだろう。

ああ。でも。先のことは分からない。己が魂に残された時間は、自分では計れないのだから。

「……春の神と冬の神は、共に数多もの僕(しもべ)を従え、静寂の平原に対峙した。遥か古(いにしえ)より続く大地の儀式が始まる。見物に集まった神々は時の太鼓を打ち鳴らし、風の笛を吹く。エルドシアの地に高らかなる雄叫びが轟いた……」

『エルドシア創世記の一節か』

『テラ・ノーリ伝承の一節か』

左右の声にリョウは閉じていた目を開けた。

「そう」

印封に使われる古代文字、エルドシア語を習った際に、講師が引用した一節(テキスト)がその物語からの抜粋だった。冬から春に移り変わる時に起きる嵐の激しさを神々の戦いになぞらえたものだ。

雲がゆっくりと蒼穹を走り、束の間の日光を遮った。リョウの身体の上にも暫し影が走った。あの天空ではきっと強い風が吹いているのだろう。天の風は、地のそれよりも強靭で逞しい。

ザワリと大気が震えたと思った。何かに呼応するかのように。無言のまま、両端にいるカッパとラムダの耳がピンと立った。二頭が身体を起こした。その鼻先は共に同じ方向を向いていた。

リョウもゆっくりと上体を起こした。そして、その目に入ってきた姿に顔を綻ばせていた。
「……セレブロ」
悠々と堂々たる風情でこちらに向かって近づいてくるのは、うねるように光輝く純白の毛並みを持った大きな四足の獣だった。
「セレブロ」
リョウは腕を伸ばすと頭(こうべ)を垂れた白銀の王の首に齧りついた。
『大事ないか？』
左胸の上にある紋様が薄らと熱を持った気がした。
「うん。もう大丈夫。セレブロにも心配を掛けたね」
多くの言葉は要らなかった。
傍にいた二頭は長の登場に背筋を伸ばすように畏まった。
『これは長。ご尊顔を拝し奉り恐悦至極』
『お初にお目に掛かりまする』
『その方(ほう)らは、シビリークスのものどもか』
「そう。カッパとラムダ」
セレブロの問い掛けにリョウはその首に齧りついたまま微笑んだ。
『リョウが世話になっている』
『勿体なきお言葉』
『有り難きお言葉』
平伏しそうな勢いで畏まった二頭にリョウは手を伸ばすと宥めるように首の辺りを撫でた。

それからリョウはセレブロの腹部に凭れるようにして座り、上体を白くて長い毛の中に埋めた。
「ねぇ、セレブロ」
リョウは滑らかな毛並みの感触を楽しみながら口にした。燦々と光を浴びた毛先は、透明な虹色の光を反射して銀色に輝いていた。
「あれから、【東の翁】は何か言ってた？」

この問いは恐ろしくもあったが、ずっと気になっていたことでもあった。目を逸らしてはいけない現実だ。

セレブロは王都に来て以来、あちらこちらに出掛けているようだった。その中でも神殿の【東の翁】の所には頻繁に顔を出しているらしかった。二、三日帰って来ないこともあったが、大抵夜は学生寮の一室に戻って来た。術師の最終試験が行われた朝、寮の一室で『行ってくる』と別れを告げた時も、緊張の為にか硬い表情をしていたリョウに『案ずるな。普段通りにこなせばよい』と励ましてくれたのだ。

あれから色々あって、寮の自室には戻っていなかった。いつもとはあべこべの状況にセレブロには心配を掛けたやもしれない。

『いや』

リョウの問い掛けにセレブロはそっと目を伏せた。そして、静かに言葉を継いだ。

『あれよりあやつは神殿最奥の黴臭い書庫に籠っておるが、未だ収穫はないようだ』

「……そう」

『済まぬ』

「どうしてセレブロが謝るの？」

急に沈んだ声を出したセレブロをリョウは柔らかく微笑みながら笑い飛ばした。セレブロが気に病むことはないのだ。如何にこの地に長く生を受けていようとも、この世界の理（ことわり）を完全に理解していることにはならない。それに自分は恐らく、ここの理（ことわり）からは外れた存在だ。

セレブロも【東の翁】も自分の為に態々貴重な時間を割いてくれている。それだけで十分だった。それにセレブロは自分に加護を与えてくれた。この誇り高き白銀の王と繋がる術をくれた。これ以上、何かを望むのは罰あたりだろう。

『試験は如何であった？』

「ああ。最初はすごく緊張したけれど、いつも通りに集中出来たと

は思う。最後の方は雑談みたいな感じだったし」
ずらりと居並ぶ五人の講師たちと二人の立ち会い人に囲まれた時は心臓が妙な具合に跳ねたが、それも初めのうちだけだった。
それからリョウは、最後の方で若かりし頃のガルーシャが現れたことを語って聞かせた。
『そうか。結界が解かれたのだな』
「うん。なんかそのことで【アタマン】から伝令を受けたよ」
あの後、大鷲のヴィーが来たことを話せば、
『そうか』
全てを理解したようにセレブロは虹色に光輝く灰色の瞳を細めた。
「また、後で連絡をくれるんだって」
セレブロは【アタマン】を知っているのだろうか。その問い掛けに、
『ああ。今の代の者には会うたことはないが、ガルーシャより話は聞いている。まぁ、我よりも【東の翁】の方が詳しかろうて』
「ふーん」
『それよりも。身体の方は大事ないか？』
不意に向けられた鼻先をリョウはそっと撫でた。
「うん。熱も下がったし、今日から少しずつ食べてる」
そうは言ってみたものの、セレブロにはきっとリョウの体調は筒抜けだろう。印封に似た模様の加護のお陰だ。まだまだ本調子には程遠い。
『そうか。時はたっぷりとある。心ゆくまで休めばよかろう』
――――精々、あの小倅を扱き使えばよい。
ユルスナールのことを仄めかして笑ったセレブロにリョウは堪らず吹いた。何を言い出すかと思えば。
『のう？　そうは思わんか？』
首を巡らせた白銀の王に、
『御意』
『それは愉快』

シビリークス家のカッパとラムダの二頭はしたり顔で同意をした。
「もうルスランには良くしてもらってるよ。また迷惑を掛けちゃったね」
リョウは自嘲気味に小さく笑うと本心を零していた。
『気にすることはない。あやつにしてみれば迷惑どころか、嬉々としておるだろうて』
「そう…かな？」
『左様』
ユルスナールに辛口なセレブロ節も相変わらず好調のようだ。

そうやって久方振りの温もりと手触りを堪能しているとセレブロが小さく身じろいだ。直ぐ傍に控えていたカッパとラムダの二頭も頭を上げた。
『ポーリャだ』
『ああ。ポーリャだな』
それを肯定するように自分の名前を呼ぶポリーナの高らかな声が切れ切れに風に乗って聞こえてきた。
「リョ～ウ～！　アウ～！（どこにいるの？）」
もう戻って来いということだろう。外に出てから時間の感覚は良く分からなかったが、空を見上げれば、中天よりやや西にあった太陽（ソン）（ツェ）が、更に西に傾いていた。
『そなたを呼んでおるな』
「うん。カッパ、ラムダ」
術師でもあるポリーナは獣たちの言葉を解する。リョウは二頭の番犬に直ぐ戻ることを伝えて欲しいと頼んだ。
『『承知』』
二頭は諾とばかりに頭（こうべ）を垂れるとポリーナの声がする方向へ白くて長い尻尾を翻し駆けて行った。
それをそっと見送ってから。
『もう、行くのか？』

「うん。きっと心配をかけちゃうから。セレブロはどうする？」
ここで別れるのはなんだか名残惜しかった。何でもない風を装っていてもそれはやはり相手には筒抜けであったようだ。
『なんだ？　独り寝が淋しいか？』
セレブロは、からかうようにリョウを流し見た後、
『今宵、そなたの元へ』
そう約束してくれた。
体が本調子でない時は、何かと心細くなる。ユルスナールの実家とはいえ、馴染みの無い場所で一人過ごしているのだ。寂しさを感じない訳がなかった。
「じゃぁ、また夜にね」
ゆらりと音もなく立ち上がったセレブロに続いてリョウも腰を上げた。下に敷いていた大きな布を手に取り、少し叩いてから器用に折り畳んで腕に抱えた。
そして、ゆっくりと建物の方へ踵を返した。

少し歩いた所で、リョウはそっと後ろを振り返った。
「セレブロ」
くすんだ生成り色のたっぷりとしたスカートが吹き込む風に翻った。いつもとは違って背に垂らしたままの黒髪が風に煽られて再び元に戻る。
「ありがとう」
顔に掛かる髪を掻き上げて、リョウは微笑んだ。
一つ小さく頷いて見せる。自分は大丈夫だと無意識に言い聞かせるように。
そしてまた、くるりと転じたほっそりとした背中が遠ざかってゆく。セレブロは黙ってその様子を見守っていた。
やがて、リョウを探していた女術師の甲高い声が切れ切れに聞こえてきた。それを確認するとセレブロは、再び現れた時と同様に吹き込む一陣の風に紛れるようにしてその姿を消したのだった。

その場所に己が存在を知ら示すきらきらと光る眩いばかりの光の残像を残して。

静養の一日（後書き）

この所不穏な場面が続いていましたが、息抜き的な一コマになりました。

【ポーリャ】は【ポリーナ】の愛称です。

吉報の使者

それから更に数えること三日。リョウが、シビリークス家に来てから七日経った辺りのことだった。頬に残っていた痣も消え、鳩尾にあった内出血の跡も無くなっていた。

その日は朝から客を迎えていた。自分を訪ねてお客が来ている。その報せにリョウは応接間に案内された。ユルスナールは既に【アルセナール】へ勤めに出て不在だった。

そこにいたのは、ゆったりとした白い簡素な上下に淡い紫色の帯を締めた神官の装束に身を包んだ男、養成所で後見人になってくれているレヌート・ザガーシュビリであった。

「レヌート先生！」

扉を開けるなり走り寄ったリョウにレヌートは立ち上がると大きく腕を伸ばしてその小柄な体を抱き止めた。

一頻りきつく抱擁を交わしてから、柔和な顔立ちの穏やかな気性の壮年の神官は、ひっそりとした微笑みを零した。

「話はシーリス（義弟）から聞いた。大変だったな」

囁くような低い慰めの言葉にリョウは無言のまま、軽く首を横に振った。

「具合はもういいのか？」

「はい。お陰さまで。ご心配をお掛けいたしました」

床払いをしてから三日。体調もすっかり回復し、今は一日の殆どを起きて過ごしている。

リョウは復調したことから昨日辺りから学生寮の自室へ戻ろうと考えていたのだが、その申し出にユルスナールはいい顔をしなかった。まだ予断は禁物だ。もう暫くは様子をみた方がいい。そう主張して憚らなかった。リョウが術師の最終試験を受けたことはユルスナールも知っていたので、受講しなければならない講義は残っていない為、養成所の方に今すぐ戻らなければならないという理由もな

く、時間があるだろうと見越してのことだった。
滞在中、ユルスナールは、毎朝、リョウの部屋に顔を出し、そして、仕事を終えると真っ直ぐに実家へと戻り、真っ先にリョウの所へ足を運んだ。これまで余り家に寄りつかなかった三男坊が、この所、毎日のように家族と共にする夕食の席に現れるものだから、両親を始めとして二人の兄夫婦もその変化に目を瞠った。
そして、興味惹かれるままにその理由を尋ねると体調を崩した知り合いを客間の一室に移し、この屋敷に古くから仕えており、かつては三男坊の乳母でもあったポリーナを看病に充てたということが分かった。
どうやらその客人は三男坊にとってはかなり大事な人であるらしい。ユルスナールは【知り合い】としか言わなかったのだが、勘の鋭い二人の兄たちと父親には、それが恐らくリョウのことであろうとは察しが付いていた。そして、半ば可笑しさを堪えるように互いに目配せをし合った。
実の所、昨日からリョウも一緒に夕食を取ろうと誘われていたのだが、謹んで辞退していた。家族内の団欒の一時に部外者である自分が混ざるのは躊躇われたし、それにまだこの家の主（つまり、ユルスナールの父親だ）に正式な挨拶を済ませていなかったからだ。それをしない内にのこのこと顔を出すことは出来なかった。ただでさえ邸宅の中の一室を間借りして、ポリーナという熟練（ベテラン）の使用人に面倒を見てもらっているのだ。リョウの中では申し訳ないという気持ちの方が大きかった。それに食事も漸く通常のものに戻ったばかりで、それでも余り量は食べられなかった。なので大人数の前よりも一人の方が気が楽だった。ユルスナールは残念そうな顔をしたが、リョウの言い分を渋々と飲んだようだった。
レヌートは再びソファに腰を下ろし、リョウもその対面に腰を落ち着けた。ポリーナが二人分のお茶を用意してくれたので、リョウはそれを手ずから運んだ。

そして少し喉を湿らせてから、レヌートが眦に皺を刻みながら柔らかく微笑んだ。

「今日は荷物を届けに来た」

そう言って差し出されたのは、古ぼけた鞄だった。皮が飴色に光り、所々擦れた箇所がある味わい深いと言えば聞こえがいいが、要するに年季の入った代物だ。

それは、リョウが愛用していたガルーシャのお下がりだった。これまでの旅の相棒である。ずっと自分の持ち物のことは気になっていた。中にはお金には変えられない大切な物が沢山詰まっていたからだ。

「ありがとうございます」

リョウは礼を口にすると鞄を手に取り、中をざっと改めた。

二本の短剣と付属のベルト、そして外套はユルスナール経由で三日前に返してもらっていた。その時に鞄と中身の薬草類はどうなったのだろうかと尋ねたのだが、そちらは第二師団経由でレヌートに渡ったと言われていたのだ。ということは、中身を調べたのだろうとリョウは思った。

一つ一つ薬の小瓶や薬草の入った袋を確認して行って、薬の類は自分の記憶と照らし合わせてみても変わっていなかった。だが、足りないものがあった。それは養成所での授業内容やこれまでに独学で学んだことを書き留めた帳面（ノート）だった。

「他に預かったものはありませんでしたか？」

テーブルの上に中身を取り出して、空になった鞄を前にリョウは怪訝そうな顔をした。

「ん？　何か足りないものでもあったか？」

「はい。いつも使っている帳面（ノート）がなくて」

くすんでごわついた茶色の紙を束に纏めて綴りにしたお世辞にも立派とは言い難い不格好なものだ。それでもそこには、これまで独学で学んだことや養成所で学んだ事柄が様々な注意事項と共にこと細かに記載されていた。

それは、リョウにとっては非常に大事なものだった。薬草の類は、森の小屋に戻れば幾らでも予備がある。だが、あれは替えが利かない。全ての知識は一応頭の中に入っているけれども、それだけでは心もとない時や、見直したい時に必要なのだ。並はずれた記憶力を持つ天才肌の人物ならまだしも自分は努力型の凡人だ。

「そうか。私が預かった時には薬草の類しか入っていなかったが」

第二師団の兵士より鞄を渡された際に、念の為、中の薬草類を確認して欲しいと言われて、レヌートもそれらが一般的な薬師が処方する薬の類と何ら変わりがないことを認めたのだそうだ。ということは、その前の時点で既に中に入っていなかったということになる。

「……そうですか」

リョウは顔色を曇らせたが、すぐにここで考えてみても埒が明かないので、後日、改めてスヴェトラーナに確認を取ることにした。第二の団長室の中に置き忘れているのかもしれないと思ったからだ。いや、そうあって欲しいと思った。

「で、ここからが本題なんだが」

どうやら鞄の件は序での用事であったらしい。そう言って、レヌートは口の端を小さく吊り上げた。

不意に改まった空気に、リョウも対面で居住いを正した。

「はい。何でしょうか？」

壮年の神官のいつにはない真剣な表情を前にリョウは小さく唾を飲み込んだ。

そして、告げられた言葉はリョウの意表を突くものだった。

「おめでとう、リョウ」

落ち着きのある静かな声が厳かに祝辞の言葉を紡いだ。

レヌートが、目の前に手を差し出していた。タコの類とは無縁の大きな手をリョウは見下ろした。相手の言葉を反芻するように目を瞬かせた。

「昨日、養成所の所長から連絡があってね。キミが最終試験に合格

したとの報せを受けた」
「本当ですか！？」
思わず素っ頓狂な程の大きな声が出ていた。
「ああ。本当だ」
身を乗り出して驚いた顔をしたリョウの鼻先で、レヌートが柔らかく微笑んだ。
試験に受かった。それは、またとない嬉しい報せだった。最終試験を受けてから既に七日が経過していた。調子が普段通りに戻ってきて、まず気になっていたのは、試験結果のことだった。
これで管理機関に登録を済ませれば、晴れて術師として認められることになる。この国で新たな一歩を歩むことができるのだ。
差し出された手を取り、顔を綻ばせたリョウにレヌートも満面の笑みを浮かべていた。
「良かったな」
「はい」
「だが、ここからが始まり（スタート）だ」
壮年の神官であり養成所の講師でもあるレヌートは釘を刺すように真面目な顔をした。
「はい」
試験に合格したことは喜ばしいことだが浮かれていてはいけない。術師にとってはここからが漸く始まりなのだ。レヌートが言わんとしていることは重々承知していた。
新しく気持ちを引き締めるようにリョウも顔付きを真面目なものにした。術師という肩書を公に名乗る以上、今後、そこには然るべき責任と場合によっては義務が付いて回る。そのことを常に肝に銘じておかなければならないのだ。
「そして、これがその証書だ」
手渡されたのは、掌一枚分（たなごころ）くらいの大きさの厚手の紙だった。特殊加工をされた薄く地模様入った綺麗なもので青みがかっていた。
そこには古代エルドシア語の飾り文字で試験に合格したという旨が

したためられていた。更に右上には養成所所長の印封、そして左上には副所長の印封、そして左下にはレヌートの印封が施されていた。ぽっかりと開いた右下の空間をレヌートは指示した。

「その空いている所にキミの印封を施してから登録機関に持ってお行きなさい。そこで登録業務を行えば全ての手続きは完了だ」

その時に登録した印封とこの修了証書と引き換えに術師としての正式な登録札（プレート）を受け取ることになるということだった。そしてその登録札は、常に携帯することが求められるとのことだった。

リョウは感慨深げに四角い合格通知を見下ろした。これはただの紙切れだ。それでもリョウにとっては非常に価値があり、重みのあるものだった。

リョウはこれまで自分を支えてくれていたレヌートに心から謝意を述べた。

すると穏やかな表情を変えぬままにレヌートは小さく頷いた。

「これからもこの国の術師の名に恥じぬよう精進なさい」

「はい」

「困った時には、いつでも連絡を寄越しなさい。キミは私の弟子だ。この繋がりはこれからも切れることがないのだから」

師事した時は期間にして一月にも満たない。だが、密度の濃い有意義な日々だった。

「ありがとうございます」

恩師からの温かい言葉をリョウは噛み締めるように胸に刻みつけた。それはセレブロの印封のように肌の上に現れることはなかったけれども、己の胸内に根を張り、今後の人生を支えてくれるものになるはずだった。

「ありがとございます」

もう一度、リョウは同じ言葉を繰り返した。最後は滲み出そうになる涙を慌てて指先で拭った。照れ隠しの笑いは、どこかぎこちなさを生んではいたが、心は温かかった。

そうして穏やかな笑みを浮かべながら、心優しい師は仕事があるからと帰って行った。

吉報の使者（後書き）

短いですがキリがいいので。次回はシビリークス家滞在中の様子をお届けする予定です。
感想でご指摘頂きました分かりにくい表現を訂正しました。２０１９／２０

千客万来の一日　1）

――――――閣下……！？

淀みない口上を述べた後、ゆっくりと顔を上げたその女（ひと）は、円らな瞳を見開いて心底驚いた顔をしていた。特徴的な黒い髪が、さらりと吹き込む風に揺れた。深い闇を閉じ込めたような双眸は静寂なる光を湛え、木漏れ日のように密かに輝いて見えた。

それを真正面から捉えた男は、たっぷりとした豊かな顎髭を撫で摩りながら、してやったりというようにほくそ笑んだ。男の隣には、長年連れ添った妻が静かに座し、『ああ。また悪い癖が始まった』と夫のちょっとした悪戯に呆れながらも優雅に茶器を傾けていた。

「リョウ？　そんなに驚くようなことか？」

その場で固まったまま立ち尽くした相手にこの家の主である男は、からかうような笑みを浮かべていた。

生成り色（ベージュ）のたっぷりとした生地を使った簡素な女物（ワンピース）の服を着たその女（ひと）は、俄かに我に返ると、

「これは失礼いたしました」

薄らとその口元に笑みを刷きながら流れるような所作で小さく礼を取った。

良く考えてみれば、それは軍部の人間が上官に対して行うような武ばった敬礼で、女物（ワンピース）の服を着た見るからに普通の女性が行うには些か違和感があったのだが、主はそのようなことは気に留めなかった。寧ろ、それだけこの女性が軍人のしきたりに通じていることを実に興味深く思ったのだった。

「私とアレはよく似ているだろう？」

「そう……かもしれませんね」

目が合えば、髭で覆われた口元が薄く弧を描いた。それに対し、その女（ひと）は苦笑ともとれるような曖昧な笑みを浮かべながら小首を傾

げたのだった。

かねがねこの家の主に滞在の挨拶をしたいと申し出ていたリョウの願いは、その日、叶えられることになった。体調も良くなり、顔の痣も消えたので人に会っても恥ずかしくないくらいになったということも大きいだろう。

息子の一存とはいえ、余所者を屋敷内に入れていたのだ。執事やユルスナールを通じて、話が行っているだろうとは思っていたが、礼義的にそこを素道りする訳にはいかなかった。

迷惑を掛けたことを詫び、一室を間借りしていたこと、丁寧な看病を受けたことを感謝する積りだった。

この家の主は、家督を長男に譲り第一線からは退いてはいたが、それなりに充実した日々を送っているようだ。リョウが滞在中には色々と用事があり、中々自由な時間が取れなかった。そして、この日、久し振りに一日在宅とのことで目通りの時間が取れるという言葉をポリーナ経由でもらったのだ。

この家の旦那様と奥方様はどのような人か。リョウがその問いを口にしなくともおしゃべり好きのポリーナが、例によって自発的に色々と話をしてくれたお陰で、大体の輪郭は知ることができた。何と言ってもユルスナールの両親だ。以前、宮殿内で出会った二人の兄たちは気さくな人たちだった。そこから想像するに、その二親も立派な人たちなのだろう。厳しくも優しく慈愛に満ちた人たちではないだろうか。

ユルスナールの家は、代々軍人を輩出する家で、その歴史もこの国と同じくらい古いものであるという。そこでリョウは、この国には東西南北の方位を司る名家と目される一族があることを知った。其々将軍を輩出する国防の要を担う一族で、名家は其々守護する方

位をその家名の中に入れているらしい。【北(シービリ)】のシビリークス、【南(ユーグ)】のナユーグ、【東(ヴォストーク)】のボストークニ、【西(ザーパド)】のザパドニークの四つだ。

その講釈をポリーナから改めて聞いた時、リョウはもしかしなくとも聞き覚えのある名字に複雑な顔をした。ブコバル、ドーリン、レオニード、そして、ユルスナール。指折り数えて自分が良く知る男たちの顔が直ぐに浮かんだ。

ブコバルはともかく、皆、貴族でもかなりいい所の出なのだろうとは踏んでいたが、自分のその認識はまだまだ甘かったかも知れないとリョウは今更ながらに痛感したのだった。国を代表する名家ということは一般庶民にとってはまさに雲の上の人々だろう。ユルスナールもブコバルも普段から上流階級であることを鼻に掛けたりはしなかったのでつい忘れてしまいがちだが、武芸大会での若い娘たちや若者たちの熱狂ぶりを思い起こせば、両者が共においそれと近づくことの出来ない相手であることが理解出来た。

リョウは、その日もポリーナの娘のお下がりの服を着ていた。飾り気のない実用性重視のワンピースだ。スカートは踝(くるぶし)の少し上までである丈の長いたっぷりとしたもので、脇を共布で後ろに縛るような形になっているので腰回りは調整ができた。

手櫛で整えていただけの髪にもしっかりと櫛を入れた。ここでは髪は束ねることなく垂らしたままにしていた。リョウは、最初わずらわしいかと思ったのだが、ポリーナにその方がよいと言われて、そのままにしていたのだ。靴も編上げの【バチンキ(ショートブーツ)】を借りた。少しくすんだ色合いの生成り色(ベージュ)のワンピースは、リョウの髪の色と瞳の色に映えた。こうして屋敷内には、少し毛色の変わった女が一人、誕生していたのだ。

そうしていると本当にお伽噺の中の【夜の精】のようだとうっとりとした表情でポリーナに言われて、リョウは何とも言えない気分を味わいつつ苦笑を漏らしていた。

というのも、自分がこれまでに読んだ物語から受けた印象では、【夜の精】は可憐でとても儚い存在だったからだ。通常、人とは交わることのない闇の世界の住人。大気の精霊や風の精霊、光の精や水の精と同じように【ここ】に実在するのだが、人にとっては触れることの出来ない透明な存在だ。そこから考えると自分のように高らかに笑い、カッパ、ラムダの二頭の番犬と庭先を走り回る姿はどうにも重ならなかった。

身支度を整えるとポリーナに先導される形で、広い邸宅内の廊下を歩いて行った。初めてこの屋敷の外観を遠目に見た時も、その桁外れの大きさに驚いたものだが、中は、その予想を裏切ることなく一見単純なようで複雑に入り組んでいた。リョウが知るのは静養している一室とそこから中庭へと通じる通路のみ。一人だけではきっと迷子になるだろう。室内の装飾が統一され似通っている所為か、暫く歩いているとどこがどこだかすっかり分からなくなってしまった。

歩みに合わせて左右に揺れるポリーナのふくよかな臀部とそこから垂れ下がる前掛け（エプロン）の蝶々結びになった白い紐を眺めながら、リョウは静々と廊下を歩いた。途中、カッパとラムダの二頭がやって来て、主人に挨拶をするのだと言えば、何故か『ならば、儂らも同行しよう』と付いて来た。

そうして辿りついた先は、広い応接間のような一室だった。庭先に面したテラスのような場所には、大きく開けられた解放感溢れる窓の向こうにテーブルと椅子が並んでいて、入口に背を向ける形で二人の男女が腰を下ろしていた。

リョウは入り口付近で一旦立ち止まると、そっと目を伏せてポリーナの取り次ぎを待った。

ここに来る前にこの国に於ける貴人に対する一般的な礼儀作法をポリーナに教わった。付け焼刃程度のものだが、礼を失しないよう

にするためには知らないよりはましだ。緊張に身体が強張りそうになる中、挨拶の手順を胸内で反芻した。

身分ある人に接する時、女性は相手の許しがあるまではその顔を真正面から見つめてはならない。そして、相手から話し掛けられるまでは声を発してはいけない。そういった暗黙の了解的な決まり事が多々あった。

戸口で立ち止まったリョウは、ポリーナが主に話しかけるのを息を潜めて待っていた。

日差しが燦々と降り注ぐ庭先は眩しい程で、逆光のようにそこにある男女の輪郭をぼやけさせていた。

一緒に付いてきたカッパとラムダの二頭は、主の方には行かずにリョウの両側にまるで衛兵のように控えていた。

リョウは二頭の白い毛でおおわれた頭部をそっと撫でた。極度に高まりそうになる緊張を紛らわす為でもあった。

やがてポリーナの取り次ぎに夫人の方がゆっくりと振り返る。そこでリョウの傍にいた二頭の姿を見て上品に笑ったようだった。

「まぁ、あなた。カッパとラムダがすっかり懐いているわ」

少し低めの柔らかな声だった。その声に主が同じように振り返る。

「おやおや。我らが男どもはすっかり骨抜きのようだな」

「まぁ」

忍び笑いのように小さく漏れた男の声音にリョウは何故か聞き覚えがあった。

「リョウ、こちらが旦那さまと奥さまですよ」

ポリーナの声にリョウは淑女の礼に則り、小さく膝を折り曲げると目を伏せたまま、これまで何度も頭の中で復唱していた言葉を述べた。

「お初にお目に掛かります。リョウと申します。この度は、こちらに御厄介になりまして並々ならぬご厚情を賜り、誠にありがとうございます。ご挨拶が遅れましたこと、どうかお許しください」

自分の中での最大限の敬意を持って堅苦しい最上級の言葉使いで

挨拶の口上を述べれば、少し先で空気が揺らいだ。
『ふふふ』と奥方の方から忍び笑いのようなものが漏れた。
「リョウ、そのように畏まらなくともよい」
――――――面(おもて)を上げよ。
聞き覚えのある深みのある掠れた声音にリョウはゆっくりと伏せていた目を上げた。そして、そこにある男の姿に息を飲んだ。
「あ…なたは……」
円らな黒い瞳がこれでもかというように見開かれていた。
「あの時の……」
知らず、リョウの声は掠れていた。
たっぷりとした髭で覆われた端正な中にも男らしさを窺わせる顔立ちの初老の男。年経ても尚、貫禄ある体つきに顔に刻まれた皺までもが匂い立つような男の色気を醸し出していた。
自分が良く知る男と同じ銀色の髪に深い青さを湛えた瑠璃色の瞳が細められ、男はどこか愉快そうに微笑んでいた。
それはリョウが術師の最終試験を受けた直後に宮殿区画内の中庭のような所にあるベンチで暫し言葉を交わした御人だった。
不意にその時の会話を思い出し、リョウは赤面した。何ということだろう。あの時の御人が、ユルスナールの父親であったとは。知らなかったとはいえ、その外見的特徴から気が付いても良さそうなものだ。ぼんやりとしていた自分に今更ながらに呆れた。
あの時に仄めかされた息子の話。そして、自分が語った恋の話。バラバラになった欠片が急に集まりだして一つの情景を描き出そうとしていた。
まさか、この御人はあの時からユルスナールと自分の関係を知っていたのだろうか。それを知らずに随分とあけすけに本心を吐露していたような気がする。それを思うと込上げてくる羞恥に居た堪れなくなった。
青くなったり赤くなったり、忙しなく様変わりするリョウの顔を見て、シビリークス家の家長、ファーガスとその妻、アレクサーン

ドラは、可笑しそうに互いの顔を見交わせた。
救いの手を差し伸べてくれたのは、奥方の方だった。
「リョウと言ったかしら？　どうぞこちらにいらしてちょうだい。顔を良く見せて」
リョウは弾かれるように顔を上げると差し伸ばされた奥方の細くて白い手に引き寄せられるようにその年配の婦人の元へと歩み寄った。
緩く波打った明るい茶色の髪に春の空のような淡い水色の瞳。既視感を覚えた顔立ちにユルスナールの次兄であるケリーガルの姿が浮かんだ。きっと次兄は母親の形質をよく引き継いでいるのだろう。
奥方は上品な女(ひと)だった。落ち着いた雰囲気の中にも小さな光を湛えた瞳が聡明さと少女のような天真爛漫さを覗かせている。三人の息子たちを産み育てたとは思えないようなどこか浮世離れした空気が感じられた。
リョウは椅子を勧められて、奥方の隣に座った。
触れた手は、労働とは無縁の柔らかで傷一つない滑らかなものだった。指先が少し冷たい。その中指には、強い青みを帯びた鮮やかな色の【キコウ石】、【カラレェーヴァ(女王)】が存在を主張するように鈍い光を湛えていた。
不意にリョウは、薬草ばかりいじっている自分の手が、酷くかさついていてみっともないような気がして恥ずかしくなってしまった。そんなささやかな心の動きに自分がまだまだ女であることを捨てていないことが分かって、なんだか可笑しかった。
裕福な貴族の奥方と比べる方が間違っているのだ。そもそも住む世界が違うのだから。それは自分とユルスナールの間に横たわる見えない壁を浮き彫りにさせる小さな、だが、非情な現実でもあった。
どうやら二人は夫婦水入らずでお茶をしていたようだ。テラスに設置されたテーブルの上には飲みかけの茶器が置かれ、その傍らに

はお茶受けの焼き菓子が添えられていた。
午後の日差しが燦々と差し込むこの場所はとても温かかった。
「あなたのことは息子たちから聞いているわ」
そう言って意味あり気に目配せをした奥方にリョウは内心、ドキリとした。一体、どんな話がなされていたのだろうかと恐々としていれば、
「本当に瞳も髪も真っ黒なのね。吸い込まれてしまいそうだわ」
奥方のアレクサーンドラは、そのほっそりとした手をリョウの頬に当てると覗きこむように顔を近づけた。
不意に縮まった距離に息が詰まりそうになったが、これもある意味、お馴染みの光景ではあったので慌てたりはしなかった。
リョウは大人しくしていた。目の端に笑い皺が寄る。年を重ねても尚、その頬は艶やかであった。滑らかな繊細な手が、今度は垂らしたままになっている髪を梳いた。
「ふふふ。本当にさらさらしているのね。不思議だわ。まるで【ノーチ】の糸を束ねたみたい」
【ノーチ】というのは、この国では専ら高級な服地に使われる糸だった。独特の光沢を持ち、色の染まりも良いという。女たちが行う刺繍にも使われるものだ。

そうこうするうちにポリーナがお茶のお代わりを持ってやって来た。リョウの前には新しい茶器を置き、ファーガスとアレクサーンドラの方にはお茶を注ぎ足した。
「お話しが弾んでおられるようですね」
ポリーナの言葉に奥方が嬉しそうに微笑んだ。
「ええ。ルーシャったら、酷いわ。こんなに可愛らしい方を隠しておくんですもの」
「あれは昔から大事なものほど大切にしまいこんでおくからな。お気に入りの玩具（おもちゃ）を取られまいと必死な幼子のようだ」
どれだけ脳内で時を遡らせたのか、父親のファーガスが己が息子

の性格をそう評した。
「まぁ。そんな所はあなたにそっくりだわ」
「そうか？　私はあそこまで頑なではなかろう？　なぁ、リョウ？」
「……どうでしょうか？」
いきなり話を振られたリョウは、突然のことに目を瞬かせながらも曖昧に微笑むに留めた。そのような問いに答えられるほど、リョウは父親のファーガスのことを知らなかったからだ。

それから、流れでお茶を一緒にすることになった。テラスは広い中庭に面した一角で、手入れの行き届いた庭木の中に滞在している部屋の窓からも見えた青い小さな花が点々と咲いているのが見て取れた。
「もう身体の具合は良いのか？」
主の言葉にリョウは小さく頷いた。
「はい。ポリーナさんのお陰ですっかり良くなりました。突然、こちらに御厄介になりましてご迷惑をお掛けいたしました」
明日にでも養成所の学生寮の方へ戻ろうと思っている。そう口にしたリョウに奥方があからさまに残念そうな声を上げた。
「まぁ、もっとゆっくりしていらっしゃい。まだ一緒に食事もしていないわ。折角ですもの。ねぇ、あなた？」
お邪魔をしているという自覚はあったので早々に寮へ戻る積りでいたのだが、反対に引き留められてしまった。奥方はかなり寛容な方のようだ。
だが、リョウとしてはユルスナールの優しさに甘え、長く逗留し過ぎたと思っていたのでそういう訳にはいかなかった。
「いえ。お気持ちは大変ありがたいのですが……」
リョウは逡巡するように困った顔をした。
「養成所の授業は全てこなしたのだろう？」
前回、初めて会った時に試験を終えた直後であったことをファーガスは覚えていたようだ。

「そう言えば、先程レヌートが来ていただろう？」
どうやらレヌートは帰り際、主であるファーガスの元にも顔を出したようだった。
「はい。養成所の方は全て修了致しました」
それから、先程、レヌートより試験の合格通知を貰ったばかりなのだとつい嬉しくて、高揚のままに顔を綻ばせた。
「そうか。それは重畳。良かったな。おめでとう」
厳格な中にも温かみのある声音でファーガスが言った。
「ありがとうございます」
リョウも満面の笑みを浮かべていた。
「まぁ！　では、あなたは術師なのね？　素晴らしいわ。合格ならお祝いをしなくては。ねぇ？」
両手を胸元で合わせて、俄然張り切り出した奥方にリョウは驚くと共に少々狼狽した。
「いえ。お気持ちだけで十分です。ありがとうございます」
まだ正式な登録を済ませていないのだ。そのことも含めて一度、養成所の方に戻らなくてはならなかった。だから、これ以上ここで厄介になる訳にはいかない。
そう固辞したリョウに、だが、主のファーガスは思いも寄らないことを言い放った。
「役所ならばここからでも十分近い。それに向こうは既に引き払ったと言っていたぞ？」
「は……い…？」
引き払ったとは何のことだろうか。言葉の意味が分からずにまじまじと精悍さと重ねた年齢により渋みの増した主の顔を見遣れば、
「おや、ルスランは伝えていなかったか？」
太い眉を上げて、少々気まずそうに視線を逸らした。
「何をですか？」
ファーガスの話では、ユルスナールは学生寮の一室にあるリョウの荷物を全てこちらに移すように手配をしたとのことだった。

寝耳に水の話にリョウは酷く驚いた。今朝、出掛け際に送り出した時、ユルスナールはそのようなことには一言も触れなかった。

自分に黙って荷物を移動させたというのか。何の為に？　ここでの滞在が長引いた為、不便さを感じないようにとのユルスナールなりの配慮なのだろうか。

困惑に思考が止まってしまったリョウを尻目に奥方のアレクサーンドラは、

「まぁ、ルーシャったら。いつになく積極的なのね」

と何故か見当違いの呑気な声で含み笑いをした。奥方は究極に我が道を行く性質なのだろう。そういう所は、いかにも貴族の女のように思えた。

ファーガスは昨晩偶々耳にした息子の腹積もりを漏らしてしまったことを内心、不味かったかと思ったが、口にしてしまったものは仕方がない。

もしかしたら秘密裏に事を運んで、相手を驚かせようと思ったのかも知れなかった。それは、根回しを念入りに行い慎重さを大事とする息子には珍しいことだった。どうもこの娘に関することでは、理性よりも感情が先走るきらいがあるようだ。だが、それも息子の人間臭く若者らしい一面のように思えて微笑ましかった。

「いずれにせよ。リョウ、お前がこの屋敷にいるのに異存はない。部屋なら幾らでも余っているからな。この際だ、ゆっくりして行けばいい」

――――――歓迎する。

ファーガスはこの家の主らしくどっしりとした趣でそう締め括ったのだった。

そして、付け足すように末息子は昔から慎重な性質だから悪いようにはしないだろうと言った。

それは、父親なりの優しさなのかもしれなかった。身内に対する甘さと言えなくもないだろう。

リョウは自分の関知しない所で勝手に話を進められたことを少し

腹立たしく感じたが、とにかく後で当のユルスナール本人に訊いてみようと思った。

そうして、シビリークス夫妻と予想以上に和やかな一時を過ごしていると、部屋の中にこの家の内向き全てを取り仕切る執事の男が現れた。所々髪に白いものが混じる初老の執事は、慇懃な態度で主の元にやって来ると身体を屈めて小さく耳打ちをした。

執事が再び背筋を伸ばした所で、ファーガスがリョウの方を向いた。

「リョウ、お前に客人があるらしい」

お客という言葉にリョウは首を傾げた。

「ワタシに…ですか？　どなたでしょうか？」

リョウがシビリークス家に滞在していることを知る人たちの中で、ユルスナールの留守中、レヌート以外にこの場所を態々訪ねて来るような人物は思い当たなかった。第七関係ならば伝令か、若しくはユルスナールが直接言伝を寄越すだろう。

主以上に感情の乗らない能面のような顔を張り付けた初老の男は、リョウの問い掛けに丁寧な所作で一礼すると、軍部の第五師団・団長とその部下二名が見舞いに訪ねて来たと言った。

「ドーリンさんですか？」

「はい」

「ワタシにですか？」

「はい」

ユルスナールがまだ帰ってきていないのにどういう訳だろうか。ユルスナールを間に挟むならともかく、ドーリン自身が直接自分の元を訪れるのは、リョウにとっては不可解に思えた。

内心首を傾げたリョウの隣で、ファーガスは椅子の背もたれに身体を預けながら茶器を傾けつつ緩慢な動作で軽く片手を振った。

「ふむ。ドーリャか」

主から発せられたドーリンの愛称に思わず飲んでいたお茶を吹き

零しそうになった。
「折角だからここに通せ」
主の一声で、客間で待つという客人たちがこちらにやって来ることになった。

千客万来の一日　1）（後書き）

前回のレヌートの訪問と同じ日の出来事です。とうとうユルスナールのご両親とご対面となりました。久々のほのぼのモードは暫く続く予定です。それではまた次回にお会いいたしましょう。

千客万来の一日　2）

――――――ハッ……クシュン！！！

その日、【アルセナール】にある第七師団の執務室では、一際、豪快なくしゃみ音が響き渡った。それは、ただでさえ静かな室内に反響するように轟いた。窓ガラスが震えたと後日、中で仕事をしていた若い兵士が語ったという。

「ブッチェ・ズダロフ」

「ブッチェ・ズダロフ」

そして間髪入れずに、同じ部屋で机に向かっていた部下の兵士たちから次々に労わりの言葉が掛かった。

――――――ブッチェ・ズダロフ。

それは、この国でくしゃみをした相手に周囲の（特に親しい間柄で）人々が必ず掛ける決まり文句である。直接的な意味は、【健康になって下さい】だが、意味合いとしては【どうぞお大事に】という所だろう。

すっと伸びた高い鼻をひくつかせて顰め面をした団長――――先程の豪快なくしゃみの主である――――に傍にいたグリゴーリィーは書類に走らせるペンを止めないまま、からかうように上司を一瞥した。

「どうやら噂をされているようだな」

その言葉にユルスナールは、面白くないとばかりに目を眇めた。風邪をひいた覚えはない。元より軍人として鍛え抜かれた身体は、滅多に風邪などひかぬものだ。最後に熱を出して寝込んだのはいつのことだっただろうか。ざっと己が記憶を探れば、それは直ぐに幼少期にまで遡った。

くしゃみが出るのは、誰かに噂をされているからである。そんな迷信が、民間では広く信じられていた。

ユルスナール自身は、そのような迷信など単なる偶然だと信じてはいなかったのだが、不意に背中を走り抜けた悪寒のようなものに

頗る嫌な予感がした。これは恐らく軍人として培われてきた生来の勘に依るものである

「おうおう、これだから色男は。隅に置けねけなぁ。おい」

書類とにらめっこするのはもう飽き飽きしたのか、手にしていた紙の束を前のテーブルに放り投げて長椅子の背凭れにどっかりと身体を預けたブコバルが、ニヤニヤとしながら盛大なくしゃみをした幼馴染を見遣った。ブコバルは先程のくしゃみの原因をどこぞで女たちが噂をしていると見做したようだ。ブコバルらしい捉え方である。

そして、ここにもう一人、その会話に乗る人物がいた。

「そりゃぁ決まっているでしょう。大方、本家の方ではありませんか？」

同じように机に座って書面を繰っていた副団長のシーリスは、顔を上げると万人受けする微笑みを浮かべながら己が上司を流し見た。

仲間たちの容赦ないからかいをユルスナールは黙殺した。実家でされる噂話など碌なことがないに違いない。

そして、嫌な予感を振り切るように急に話題を変えた。

「スヴェトラーナの方はどうなっている？」

ユルスナールにとってはどうも触れて欲しくない事柄のようで、本音から言えばシーリスはもう少し突いてみたかったのだが、苛立たしげに机を叩いた長い指先に相手の不機嫌の度合いが知れて、それ以上のからかいは現時点では諦めることにした。

そして、少々胡散臭くはあったが、表情をごく真剣なものに改めた。

「どうも暗礁に乗り上げたようですよ。侍女の部屋で【妙なもの】が見つかったと言っていましたが、それを鵜呑みにするには状況的にかなり怪しいでしょうねぇ。まぁ、それを手掛かりにあちらのしっぽを掴めるようなことを言っていましたが、それをスヴェトラーナにやらせて良いものか。些か荷が重すぎるような気がします。スヴェトラーナにしてはとんだ貧乏くじといった所でしょうか。宮殿

の方からも捻じ込みがあるようですし。ですがまぁ、このくらいは頑張ってもらいましょうか」

――――――リョウのことを思えば、このくらいはね。

そう言って最後に取ってつけたような笑みを刷いた。

ユルスナールは、シーリスのその冷え冷えとした微笑みに何とも言えない顔をした。つまりシーリスにとっては、この間のリョウが受けた理不尽さを思えば、このくらいのことは罪滅ぼしとしてさせようということなのだろう。ユルスナールとて割に合わない仕事を振られたスヴェトラーナを多少、気の毒に思わないでもなかったが、リョウの一件では憤りを覚えたのも確かなことであったので、その分はきっちりと働いてもらう積りだった。

いつもなら仕事に私情を挟むなと苦い顔をする所であったのだが、今回ばかりは事情が事情だけに些か例外的であった。スヴェトラーナにしてみれば運が悪かったとしか言いようがないだろう。

「目的は……撹乱か、誘導？……そして、標的は……」

侍女の死の裏に見え隠れする不可解、且つ不審な動き。相手は、どうもかなり慎重にことを運んでいるようで、中々その姿を輪郭さえも捉えることができていなかった。

「神殿の方から探りを入れるしかないか」

広い執務机の上で組んだ手の上に顎を乗せて、ユルスナールは見えない影を睨みつけるように目を細めた。

「だけどよぉ、あんま突き過ぎると却って不味いんじゃねぇ？」

相手を不用意に刺激し過ぎると勘繰られることを恐れて漸く表面に顔を出そうとした手掛かりが引っ込んでしまう恐れがある。そう言いたいのだろう。

ブコバルの言葉にシーリスが尤もらしく頷いた。

「ええ。それは勿論。加減が肝要でしょうね。まぁ、義兄（レヌート）上の方がどうなるか。そちらの動き次第になるでしょうが」

そうして三人は顔を見交わせると互いに大きく頷いた。

取り敢えずその日の内に処理すべき案件を全て決済し終えたユルスナールは、この日も同じように家路を急いだ。ここ数日、帰宅する足取りは非常に軽やかだった。

この日、ユルスナールの隣にはブコバルが並んでいた。

『そう言えば、リョウのヤツは元気になったか』とシビリークス本家で静養をしている顔馴染みのことを口にして、『いい加減暇を持て余してるだろうから退屈しのぎにからかってやろう』ということで帰宅するユルスナールに付いて来たのだ。

言い方はかなりぞんざいだが、ブコバルなりにリョウの事を心配していることが分かったので、ユルスナールは好きにさせた。

――――そう言えば、ファーガス殿との顔合わせは済んだのですか？

――――いや、まだだ。リョウの体調も戻ったことだし、これから折を見てと考えている。

――――おいおい、お前んとこの親父殿のことだ。もたもたしてっと先を越されるぞ？

【アルセナール】を出る直前、執務室内で交わした会話を思い出して、ユルスナールは僅かに口の端を下げた。傍目にはいつも通り冷静沈着で落ち着き払っているように見えるユルスナールだが、付き合いの長いブコバルにはそのささやかな変化が筒抜けであった。

「なんだ？　んなしけた面して。リョウと喧嘩でもしたのか？」

からかい混じりの声に、

「いや。それはない」

真顔で即答したユルスナールにブコバルは幼馴染を横目にちらりと流し見てから、

「へいへい。聞いた俺が莫迦だったよ」

とぶっきらぼうに返した。
だが、そこで不意に何かを思い出したように『あ』と声を上げた。
「そういやぁ、養成所の方のリョウの荷物を移したんだって？　そっちに」
「ああ。それは既に済ませた」
「てか、よくリョウが頷いたな」
――――あいつなら嫌がりそうなのに。
ひ弱で頼りなげな見かけの割に独立心の強いリョウの性格を良く知るブコバルにしてみれば、リョウがユルスナールの実家に世話になることを躊躇うだろうと思っていたからだ。まぁ、最後はなんだかんだと理由を付けてごり押しするのだろうが。
思ったことをそのまま口にした積りだったのだが、ぐっと押し黙ったユルスナールにブコバルは怪訝な顔をして相棒を振り返ると、ニヤリと人の悪そうな笑みを浮かべた。
「あ？　なんだ事後承諾か？」
歩調を緩めずに正面を向いたまま横目に相手を睨んだだけで、ユルスナールは言葉を発しなかった。ということは図星であったのだろう。
神殿側の不穏な動きがある所為で、いつになく神経質になっているのは分かるが、少し焦り過ぎだろうとブコバルは思った。リョウのことだ。勝手なことをしたと言って怒るだろう。
だが、まぁ突きつめれば相手のことを思っての行為ではあるので、当事者の二人でどうにかするだろう。いや、そうしてもらわないと困る。
「まぁ、なんとかなるんじゃねぇ？」
なんだかんだ言って二人とも相手に対しては頗る甘い所があるのだ。ちょっとした痴話喧嘩のようなものにでもなれば、却って間に入る方が莫迦を見る。
そう結論付けるとブコバルはあちこちに跳ねて飛んだ柔らかな茶色の髪をがしがしと掻いた。

そんないい加減ともとれる言葉で（その実、ブコバル自身はかなり考えているのだが）この話を締めくくったのだった。

そうしてユルスナールがブコバルを伴い実家に帰宅するとシビリークス家の執事である初老の男、フリッツ・リピンスキーが玄関先で二人を出迎えた。

「お帰りなさいませ。ユルスナール様」

「ああ。リョウはどうしている？　変わりはないか？」

この所、口癖のようになっている問い掛けに、執事は隣のブコバルにも同じように挨拶をした後、ユルスナールの傍で小さく耳打ちをした。

「ええ。今日も恙無くお過ごしのようでした。それと軍関係のお客様がいらしておりまして、リョウ様は南のテラスの方にいらっしゃいます」

その言葉にユルスナールは暫し、動きを止めた。言われたことを上手く処理できなかった。そんな風にも見えた。

「なんだ？　リョウのやつ、いねぇのか？」

妙な反応をしたユルスナールにブコバルが訊けば、

「いや、いるにはいるが……あー……」

そう言って急に唸るような声を上げ、額に手を当てて天を仰いだかと思うと直ぐに表情を取り戻して、そこからまた苦々しい顔付きになった。

「お前の言う通りだ」

「あ？」

「どうやら先を越された」

怪訝な顔をしたブコバルを余所に一人自己完結したユルスナールは、そう言って真っ直ぐに目的の場所へと歩き出した。

ブコバルは廊下の向こうに遠ざかり始めた友の背中を見ながら、もの問いたげに執事のリピンスキーを見遣った。だが、長年、この家に仕えている執事の男もユルスナールの心の機微は分からなかっ

たようで、力なく首を横に振る。
「南のテラス……って言ってたか？」
「はい」
それから、互いに顔を見交わせて、ブコバルは肩を竦めると先を急いだ幼馴染とは対照的にゆったりとした足取りでユルスナールの後を追ったのだった。
一人残された執事のリピンスキーは、その二人の姿を見送った後、再び己が業務に戻るべくピンと伸びた背筋に颯爽とした足取りで踵を返した。

左右に広く開け放たれた扉の敷居を跨いだ瞬間、ユルスナールはそこに広がる光景に暫し、言葉を失った。頭を抱えて大きく溜息を吐きたいのを我慢して、何食わぬ顔をして小さく咳払いをするに留めた。
室内には、自分の両親とリョウだけならまだしも、何故か第五のドーリンにウテナとイリヤの二人が寛いだ顔をしていた。そして、最も不可解であったのが、ソファに座り談笑している第三のゲオルグの存在だった。中では、応接間のテーブルを囲んで銘々が好きな位置に座りカード遊び（ゲーム）に興じているようだった。
「お帰り、ルスラン。早かったね」
目の前の状況を上手く処理できずに立ち尽くしたユルスナールの隣に次兄のケリーガルが音もなく並んだかと思うと腰の辺りを軽く叩いてから、カードゲームに興じている人々の輪の中へと入って行った。
一度、中座していたらしい次兄が戻り、顔を上げたリョウは、そこで複雑な顔をして戸口に立つユルスナールに気が付いたようで、花が咲いたように顔を綻ばせると席を外して近寄ってきた。
「お帰りなさい、ルスラン」

いつになく上機嫌な笑顔だ。白い肌に血色良く上気させた頬を見て、ユルスナールはリョウが楽しんでいるのであれば仕方がないかと腹の底からせり上がってきそうになる不満をぐっと押し込んだ。

ユルスナールは足早に寄ってきたリョウの身体を軽く腕を広げて抱き締めるとさらさらと垂らしたままになっている髪に唇を寄せた。そして、その手を背中から腰、滑るようにその下に走らせた。

飾り気のない地味な普段着だが、ポリーナの娘マーシャのお下がりだという女物の服は、リョウに良く似合っていた。

ああ。こんなお下がりではなくて、近いうちにちゃんとしたものを作ってやらなくては。ユルスナールは一人、心の中でそんなことを思った。ズボンばかりではどうにも味気がない。

本家滞在中、生来の性別に合った服を着ているリョウの姿は、ユルスナールには新鮮に映っていた。折角だから、普段着の他に余所行きのものも拵えておこう。出入りしている仕立屋を呼ぶか、いや、どうせなら街中を案内がてら店まで行くのもいいかもしれない。様々な色合いの数多もの生地の中からリョウに似合う色合いを選び出すのはきっと楽しい一時になるだろう。澄ました顔の下、仕立屋行きを今後の予定に加えるべくつらつらと思い巡らせて下降した気持ちを急激に浮上させた。

細く括れた腰を挟んでいるのは柔らかな成熟した女の膨らみだ。少女のようなあどけなさをどこかに残しながらも、そこには男を知る女の艶めかしさがあった。

指通りの良い髪を梳き、頬に掛かった一房を耳の後ろに撫で付けてやるとリョウは顔を上げて柔らかく微笑んだ。そこにある少し薄めの唇にユルスナールは吸い寄せられるように己が唇を寄せた。

触れるだけの口づけを名残惜しそうに解いてから、ユルスナールは小さく笑った。

「どうした？　やけに上機嫌だな？」

「はい。今日はレヌート先生がいらして鞄を持ってきて下さったんですけれど、嬉しいお知らせを頂いたんです」

それから、いそいそとスカートのポケットを探ると厚い青みがかった小さな紙切れを取り出し、効果音を付けて少し誇らしげにユルスナールへ差し出して見せた。
「どれどれ」
そこには、術師が専ら印封に使う古代エルドシア語で試験に合格したとの旨が記載されていた。紛れもない術師養成所が発行する最終試験の合格通知だった。
「そうか。受かったんだな？」
「はい」
「良かったな。おめでとう！」
ユルスナールは明るい笑みを浮かべるとリョウの腰を掴み軽々と上へ抱き上げた。
「わわ、ルスラン」
まるで幼い子供をあやすように上方へと身体を持ち上げられて、急な浮遊感にリョウは慌ててユルスナールの逞しい肩に手を置いた。何を思ったのか、そのままステップを踏むようにくるりと一回転したユルスナールにリョウは声を立てて笑った。
レヌートより試験合格の報せを受けてから、リョウは早くそのことをユルスナールに知らせたくて仕方がなかった。言葉にならない嬉しさが膨らんで、この喜びを誰かと共有したくて、受け止めて欲しくて仕方がなかった。そうして男が帰って来るのを心待ちにしていたのだ。
ユルスナールが結果をまるで自分のことのように喜んでくれて嬉しかった。
身体を下ろされて、リョウは少し年甲斐もなくはしゃぎ過ぎたかと照れたように笑った。
二人にとってはいつものような遣り取りであったのだが、同じ室内でカード遊び（ゲーム）に興じていた両親と兄たちにはユルスナールの行為は非常に珍しく映ったようだ。柄にもないことをしているという自覚がある所為か、目を丸くしてこちらを見ている両親（特に母親）

にユルスナールは居心地の悪さを誤魔化すように小さく咳払いをした。そして、リョウを促すようにほっそりとした背中から下に手を滑らせてさり気なくその柔らかさを堪能しながら、カード遊びに興じている人々の中に入っていった。

「一体、どういう風の吹き回しだ？」

傍にいたドーリンに突然の来訪の理由を問えば、相変わらず鉄仮面のような真面目くさった顔付きで、リョウのことを小耳に挟んだ部下（ウテナとイリヤの事だ）にどうしても見舞いに行きたいとせがまれたので、念のために付いて来た。そう言って、テーブルを囲むように輪の中に入り、にこやかに己が母親と談笑しているウテナとその反対側で自分の手札（カード）を真剣な表情で睨みつけているイリヤの二人を見遣った。リョウはイリヤの隣に座り、その手持ちの札を覗き込んでいた。

「お前たちのことは分かった。だが、何でアレまでいるんだ？」

百歩譲って、第五の関係は【プラミィーシュレ】でのこともあるから良しとしよう。だが、あの男はどういう腹積もりなのか。

小さく囁かれた声は、耳聡い相手には筒抜けていたようだ。悪口ほど、それを聞かれたくない相手に届いてしまうという不思議は、ここでも健在だった。

優雅な手付きで自分の持ち札を一枚、テーブルの上に置くと、揶揄された当人である第三師団長は、にっこりと人好きのする笑みを浮かべてユルスナールとドーリンの二人組を見た。

「私もそこのお三方と同じくリョウのお見舞いですよ。それに届け物もありましたから」

その対面で、リョウが同意するように微笑んだ。

「ああ。そうなんです。失くしたかと思った帳面（ノート）を持ってきてくださって。大変助かりました」

先日の騒ぎで鞄の中から見当たらなくなっていたものを偶々ゲオルグが手にして持ってきてくれたということだった。

「ほう？」
ゲオルグの言い分をどこか白々しく感じたユルスナールであったが、両親の手前、それは敢えてこの場では表に出さなかった。
それから、ぐるりと室内を見渡して、不意に目が合った母親は、口元に手を当てながら上品に笑い、何ごとかを隣にいる父に囁いた。
そこでユルスナールはイリヤの傍にいたリョウを促して両親の元へと赴いた。
「いつの間に仲良くなったのですか？」
本来ならばユルスナール自らがリョウのこと両親に紹介するはずだったのだ。それなのにブコバルの予想通りどうやら先を越されてしまったようだった。二人の兄たちの時も然り。リョウに関しては何故か自分の思い通りに事が運ばない。
どこか拗ねたような響きを声音に感じ取ってか、父親のファーガスは小さく笑うと余裕たっぷりに末息子を見た。
「かれこれ七日前だな。なぁ、リョウ？」
――――なんだって？
思いがけない言葉にユルスナールは驚きのままにリョウを見た。
リョウは、そこで小さく苦笑のようなものを漏らすと、正式に挨拶をしたのはこの日の午後のことだったが、父親のファーガスとは偶然にも七日前の試験直後に会って言葉を交わしていたのだと明かした。
「そう言うことだ」
父親はそう言うと茶目っ気を滲ませながら片目を瞑って見せた。
それを目の当たりにした末息子は、湧き上がりそうになる様々な思いを昇華するように小さく息を吐き出した。
「リョウ、ちょっといいかしら？」
「あ、はい」
そんな中、母親のアレクサーンドラに呼ばれて、リョウはユルスナールの傍を離れた。

元々、母親は社交的な性質（タイプ）だったが、短い間にすっかりと打ち解けたようだ。リョウが母親と仲良くなるのは、ユルスナールにとっては喜ばしいことに違いないのだろうが、何だか自分の恋人を取られたようで、本音の部分では些か複雑でもあった。

その隙に父親のファーガスはユルスナールに無言のまま目配せをして、テラスの外に出るようにと合図を送った。信号を的確に受け取った息子は、一つ頷きを返すと立ち上がった父親に続いた。

閉められていた大きな窓ガラスを開けて、二人の男たちは室内から外に出た。冬の終わりの名残のような冷たい風が頬を撫でて行った。同じ銀色の髪に濃紺の瞳を持つ良く似た父子（おやこ）は、テラスの端のバルコニー部分にやって来ると並んで立った。

リョウを妻にしたい。そう告白した時、父親のファーガスは、ユルスナールに一つの条件を出した。それは、ユルスナールの選んだ相手が息子の生涯の伴侶たるに相応しいか否かを父親が直にその目で確かめるということだった。

父親の目に自分の愛する女（ひと）はどのように映ったのだろうか。たとえ反対をされたとしてもそう簡単に諦める積りはなかったが、シビリークス家・家長である父の判断は同じくこの家、そしてこの国を支える息子にしてみれば、とても重みのあるものであるということも確かだった。

「ご存じだったのですね」

言い知れぬ緊張を吐き出した言葉の中に隠した。

「ああ。偶々だ」

本来ならば自分の立ち会いの下、然るべき時を選んで顔合わせをする積りだった。元より見え透いた小細工が通用するような相手ではないことは重々理解していたが、それでも両親の手前、形だけでも整えたいというのがユルスナールの本心であった。

だが、リョウはそのような自分の思惑をするりと抜けて、父と偶然ながらも邂逅を果たしていた。事前の余計な情報がない分、自然

な形で言葉を交わしたのではないだろうかとユルスナールは思った。そのありのままの姿が、良い影響を及ぼしているといいのだが。そう願わずにはいられなかった。

「リョウは、術師の試験に合格したそうです」

「ああ。聞いた。大したものだ。しかもこのような短期間で。養成所で学んだのは一月に満たないというではないか。優秀なのだな」

「ええ。そのように聞いております」

シビリークスの家では、高い素養を持つ者は出て来なかった。だからだろうか。術師という存在に畏怖と畏敬を感じるような所が少なからず存在した。

リョウのことを褒められてユルスナールは純粋に嬉しかった。父親の高評価に思わず口元が緩む。

息子のだらしなく下がった目元を横目に見て、父親のファーガスは、半分、可笑しみ堪えながらも呆れたように口にした。

「お前には勿体ないくらいだ」

ファーガスは、そう独りごちるように言うと男らしい笑みを浮かべた。

ユルスナールは弾かれたように隣に立つ父親を見た。

「それでは……お許し頂けるのですね？」

静かに喜色を浮かべた息子をちらりと一瞥してから、ファーガスは庭先に咲き誇る青い花へ視線を投げた。

息子が心奪われた女性は、あの花のように凛として潔い女(ひと)だった。この国では冬の野に咲く花だ。正式な名前はあるのだろうが、巷では専ら【春待ち草】と呼ばれていた。冬の終わりに最盛期を迎える花で、春を告げる【先触れの花】としても知られていた。この花が咲くと人々は心を躍らせるのだ。もうすぐ春が来ると。灰色に沈みがちな風景の中で、その花が描き出す淡い青色は、明るい未来への希望の光のようにも見えた。

控え目な程の可憐な小さな花だ。春ではなく、夏でもなく、秋でもなく、敢えて過酷な寒さの厳しい時期に花を咲かせる。息子が選

んだ女は、あの花のように小さくとも逞しい立派な女性だとファーガスは思った。誰かの言いなりになるのではなく、自らの力で考え、そして進むべき道を切り開いて行く。内に秘めた強さには、初めて言葉を交わした時に気が付いていた。

高い素養を開花させ、今回、晴れて術師の試験に合格した。優秀な人間はこの国では貴重な人材だ。神殿の方は、性別からして無理だとしても軍や養成所の方ではその去就に注目をするだろう。

安穏とした温室育ちの同じ貴族階級の娘では、ユルスナールのような最前線できつい任務を全うしようとする軍人の妻は務まらないだろう。あの女が息子の傍に並んで立ち、支えてくれるのであれば、それはとても心強いに違いない。

だが、肝心の息子はその相手の心をしっかりと捕まえることができるのだろうか。

ファーガスの脳裏には、悟り切ったように静かに微笑む聡明さの片鱗を覗かせた女の横顔が浮かんでいた。武芸大会で息子が古式に則り申し込みをしたという話はファーガスの耳にも届いていたが、その場で色良い返事をもらえなかったらしいことも伝わって来ていた。

慕っている男はいるが、その男と一緒になれるとは思っていない。冷静に、いや、冷酷な程に己が立場を突き離して明確にし、その立ち位置を模索していた。想いだけではどうにもならないことがある。そう言って、どこか老成したような表情で少し哀しそうに微笑んだ黒い瞳が頭から離れなかった。

「ルスラン、後は、お前次第だ」

ファーガスはゆっくり身体を反転させるとバルコニーに背中を預けた。

真剣な眼差しで息子を見つめた父にユルスナールはその言葉の意味を噛み締めるように胸内で反芻した。

「まだリョウからは色良い返事をもらえていないのだろう？」

父からの鋭い指摘にユルスナールは途端に苦い顔をした。だが、

それを直ぐに改めて、ふてぶてしいまでの顔付きで言い放った。
「父上、私はあなたに似て諦めが悪いですからね。欲しいものは必ず手に入れてみせますよ」
「ハハ。そうか」
いつの間にか男らしい顔付きになった末息子に父は時の流れを身に沁みて感じながらも満更でもない顔をして笑った。
「精々、張り切り過ぎて嫌われぬようにな」
「勿論ですよ。その辺りの加減はちゃんと心得ています」
――――――ならばよい。
大口を叩いた息子の背中を父は思い切り張り倒した。父からの一風変わった、だが、実に軍人らしい激励にユルスナールは顔を顰めながらもどこか嬉しそうにしていた。
そして、先に室内へと戻ってゆく父の年経ても変わらぬ大きな背中をユルスナールはじっと眺めた。幼い頃から、ずっとあの大きな背中を目標にしてきた。あの父の背中を越えられる日は来るのだろうか。不意にそのようなことが頭を過った。
室内に戻った父は、先程と同じように母親の隣に腰を下ろした。母は明るい表情を浮かべながら父に話しかけていた。それをいつもと変わらぬ柔しい微笑みで見つめる父。二人は息子の目から見てもむず痒くなるくらい幾つになっても仲睦まじかった。
自分にもあのような幸せな家庭を築くことができるのだろうか。己が愛する女(ひと)と共に。

「ルスラン！」
一人、バルコニーに残ったユルスナールに窓の所から声が掛かった。たっぷりとしたスカートを翻しながらゆったりとした足取りでやって来るのは、優しい微笑みを浮かべた美しい女(ひと)だった。
血色の良い肌に引き締まった腰。無駄な贅肉の付いていない、だが、柔らかく魅惑的な肢体をその簡素な女物の服の中に隠して。華奢で脆くも見えるその肉体が、想像以上にしなやかで強靭であるこ

とをユルスナールは知っていた。そして、穏やかに微笑むその女(ひと)がとても芯の強い人であることを知っていた。

自分の何を犠牲にしてもいい。その愛する人を失いたくはなかった。父親の言う通り、今後、思い描いた幸せを手に入れられるかどうかは、きっとこの己の手に掛かっているのだろう。

バルコニーのこちら側にやって来たリョウにユルスナールは手を伸ばした。

「リョウ」

もうこれまでに幾度となく口にして耳に馴染んだその響きを、掛け替えのない大切な名を、含むように舌先に転がした。

差し出された剣だこのあるごつごつとした大きな手に少しかさついた小さな手が乗った。その手をしっかりを握り締めて。ユルスナールは、ゆっくりとその手を引き寄せると華奢な身体を腕の中に抱き締めた。

「ルスラン？　どうしたんですか？」

何も言わず、ただ自分を抱き締めた男にリョウは大人しく腕の中に収まりながらも怪訝そうな声を上げた。

無言のまま、抱き締める腕に力が入った。リョウは同じように男の背中に手を回すとそっと顔を上げた。小さく傾いだ首の角度に合わせて、癖の無い黒髪が滑るように流れた。ふわりと甘やかな覚えのある香りが微かにユルスナールの鼻先を掠めた。

「リョウ」

もう一度、ユルスナールはその唯一の固有名詞を紡いだ。

再び名前を呼ばれて、リョウは男の真意を測るように静かに相手の顔を見つめた。見上げた先、深い青さを秘めた瑠璃色にもう一人の顔が映り込んでいた。そこにあるいつもとは違う色合いに見惚れているうちに、近づいてきた男の顔が傾いて僅かに残っていた距離が消えた。

条件反射のように目を閉じていた。そうして下りて来たのは、そっと羽のように優しい、まるで許しを乞うかのような口付けだった。

「あら、あなた、ルーシャは？」
外に出たきり、中々に戻ってこない末息子の行方を尋ねた妻に父親であり夫でもある男は、意味あり気に目配せをして窓の外を指示した。
夕闇が迫る赤焼けに染まった庭先に二つの影が寄り添うように立っていた。遠目に見る末息子の横顔には、初めて見るような男らしくも優しい色が橙色に滲んでいた。
何事かを耳元に囁き、それに隣に立つ人物が小さく肩を震わせる。そうして笑い合う二人の姿は、とても自然で似つかわしく見えた。
「まぁ。いつの間にか、あんな顔をするようになったのねぇ」
これまでの長くも短くもあった年月に思いを馳せながら母親はしみじみと口にしていた。
「あの子にも一足先に春が来たということかしら」
「ああ。そうかもしれないな」
小さな呟きには、手塩にかけて愛しみ育てた息子が愛する人に巡り合えたという喜ばしさに混じり、その息子が、いつの間にかこの手を離れてしまったという一抹の寂しさのようなものが含まれていた。
夫は妻の傍に寄り添うとそっとその肩を抱いた。そして、新しい恋人たちの輪郭に心の中で過ぎ去った年月を重ねたのだった。

千客万来の一日　２）（後書き）

コメディー調で始めた予定が、しんみりとしてしまいました。
次回は、短編集のＩｎｓｏｍｎｉａ　の方に脱線するかもしれません。

悠久の歪み

リョウが術師最終試験の合格通知を受け取ったその日、シビリークス家を辞したレヌート・ザガーシュビリは、その足で神殿に向かった。

「猊下（げいか）」

人気の無い青白い静寂が満ちた空間に一人の男の声が響き渡った。それは、ごく微かなものであったにも関わらず、物音一つしない室内に反響し、増幅するように空間を震わせた。

それは、この部屋の造りの所為でもあった。ここは神殿の奥深く、一般の参詣客が立ち入ることの出来ない空間だった。神官たちが朝夕の勤めを行う祈りの間であった。神官たちが紡ぐ祈りの文言は、歌うように抑揚がつき強弱と共に繰り返される独特な音色で、神聖で厳かな旋律だった。そして、この祈りの間は人の声がよく反響するように設計されていた。

通常の祈りの間のさらに奥、神官たちの中でも高位のごく限られた者だけが入室を許される一室で、一人の男が祈りを捧げていた。白い簡素な上下に黒い繻子のような光沢のある帯を腰に巻き、その端を横に垂らしていた。目を閉じた男の横顔は、多くの深い皺で刻まれていた。白い髭に覆われた口元が小さく祈りの言葉を紡いで行く。年経ても尚深みのある美声を持つと評判のその男の朗々とした声が、広い室内に見えない波紋を作るように響き渡っていた。

男は、この神殿に仕える数多もの神官たちの頂点に立つ地位にいた。神官長の任に就いて早十年。神殿は数多くの神官たちからなる雑多な集団だ。

神官の職は、一般的に広く開かれていると言えた。但し、性別が【男】で高い素養を持つことが最低条件として必要とされている。

だが、それを満たせば、出身や貴賤は問われなかった。
その他に神官になる為に必要とされるのは、神殿に祀られている女神リュークスへの忠誠心である。
その戒律は、厳しいものではなかった。豊穣を司る神でもあるリュークスはこの国の幅広い人々に愛され、崇拝されていた。神官たちは女神に仕えるということで皆、男ばかりだが、妻を娶ることは許されていたのだ。中には昔ながらの厳格な規律を重んじ、生涯独身を貫く者もいるにはいるが、時が下った現在では、その既婚者と独身者との割合は半々くらいにまでなっていた。
基本的に神官たちは高い素養の持ち主である。世界的に見ても、この国に於いても、術師や神官になるだけの高い素養を持つ人間の頭数は減少傾向にあった。能力は親から子へと血筋によって伝わると考えられていた。それ故、高い能力を持つ人材を育成する為にも、スタルゴラド国内には、神官たちに妻帯を推奨する空気があった。
だが、この場で祈りを捧げていた男は、生涯独り身を公言し、その方針を貫いていた。

神官長の祈りが終わりを迎えた頃、間合いを測るように同じ神官の装束に身を包んだ一人の男が、傍らに立ち、一歩足を踏み出した。神官たちの身に着ける踝までの柔らかい革靴が磨かれた床の上を滑るように擦れ、小さな音が鳴った。特殊な石、【ムラーモル】を術師でもある専門の石屋が加工して磨き上げられた床は、まるで鏡のようにそこにある人物を映した。四方八方、その【ムラーモル】で覆われた空間は、ごくわずかな発光石の明かりで室内を明るく照らすことの出来る荘厳で不可思議な部屋でもあった。
人の気配に長は、ゆっくりと閉じていた目を開くと横目で傍らに控える神官の腰元から垂れ下がる淡い紫色の帯の色を見てとった。
「レヌートか」
「はい」
祭壇の前で跪いていた老齢の神官は、ゆっくりと体を起こすと立

ち上がった。
「猊下（げいか）」
柔和な顔立ちをした壮年の神官は、数多もの弟子の中でも実に真面目で実直、仕事熱心なことで有名だった。敬虔な神に仕える僕（しもべ）である。いつになく真剣でどこか思い詰めた感さえある弟子の表情に神官長は静かな眼差しを向けた。
「お聞きしたいことがあります」
神殿内部の最奥とはいえ、ここは然るべき高位の者であれば立ち入ることの出来る場だった。それにこの一室は声がよく反響するように作られた場所だ。
人払いが必要だと感じた長は、
「では私の部屋へ」
一つ小さく頷くとそのまま踵を返した。軽やかに翻る長の白い長衣の裾を見ながら、弟子のレヌートは、その後ろに続いた。

禁域として度合いの違う二つの祈りの間を抜けて、より開かれた本殿へと通じる木の扉を開き、神聖な間から神殿内のより雑多な空間へと移る。神殿はそもそも世俗から離れた場所ではあるが、そこに暮らす神官たちが【人】である限り、程度の差こそはあれ、生活感のある世俗的な空間は点在した。
高い位置にある明かり取りの窓から降り注ぐ柔らかな日差しは、僅かな光でも白い石壁に反射して、回廊をぼんやりと明るく照らし出していた。神殿内は基本的に白一色の作りである。要所要所には、繊細で細かな彫刻が施され、一見、殺風景にも思える空間に控え目な華やかさを添えていた。その内部を歩く神官たちの階級に合わせた色とりどりの帯は、この荘厳な建物の中で、唯一の色たり得た。
年を重ねても尚、背筋の伸びた矍鑠（かくしゃく）とした背中を眺めながら、レヌートはふと明かり取りの窓に差した影に視線を上げた。そこには伝令として使われている【ゴールビ（鳩）】が、一羽、くるると喉を鳴らしていた。

それを視界の隅に留めながら、レヌートは、過日、義弟であるシーリスと交わした会話を思い出していた。

「義兄上」

珍しく、レヌートの元を訪ねて来た義弟は、いつになく硬い声を出してその義兄の名を呼んだ。

養成所内にある講師の部屋の一室で。今年、この場所を義弟が最初に訪ねて来たのは、かれこれ半月以上も前のことだった。

「どうした、シーリス？　そんな怖い顔をして」

自分の妻によく似たレステナント家特有の繊細な面立ち。そこにいつも浮かんでいるのは仮面のように張り付いた微笑みの残骸のようなものだった。出来そこないの微笑みだ。

代々神官を輩出するレステナントの家で唯一これと言った高い素養の開花を見せなかったシーリスは、実家と袂を分かつように騎士団に入隊し、そこで軍人となった。今では北の砦を預かる第七師団の副団長として数多くの部下たちを抱える立場にある。普通の人にとっては人当たりの良い笑みに思える表情は、シーリスが幼い頃に身に付けた処世術でもあった。

半ば家出同然でレステナントの家を出てから、長じても尚、その敷居を跨ごうとはしなかった。レヌートの妻であり、シーリスにとっては唯一の理解者でもあった姉のクラーヴィアは、年の離れた弟のことをいつも気にかけていた。近くに来ているのならば顔を出して欲しい。弟が武芸大会に合わせて王都に来ていることを風の噂に聞いたクラーヴィアは、そう零していた。

クラーヴィアは、良くも悪くもレステナントの血筋を色濃く引き継いだ気丈な性質だった。そして高い素養を持つ女性だった。性別の理由から神官にはなれなかった。だが、その代わりに神官の男を婿に取った。レステナントの血筋を絶やさぬ為に。そうして弟の為

に家を守ったのだ。

「騎士団に入り、心身共に軍人になったつもりでしたが、やはり私には、レステナントの血が流れているのでしょうねぇ」

広い講師部屋の中で、促されるままに応接用のソファに座ったシーリスは、そう言って、少し自嘲気味にひっそりと笑った。

「でも、今回ばかりは、その血筋で良かったかも知れない。そう思いましてね」

――――――忘れたはずの【家】という重みも偶には役に立つものですね。

そんな前置きをしてから、シーリスが語ったことは、良くも悪くも直球だった。装飾や誤魔化しの無い剥き出しの言葉。のらりくらりと核心から外れた宮殿特有の言葉遊びに長けた義弟にとっては珍しいことで、それだけ義弟が真剣であることがよく分かった。

「義兄上、単刀直入にお聞きします。今、神殿では何を始めようとしているのですか？」

そう言って、薄らと特徴的な菫色の目を細めたシーリスは、実に冷え冷えとした色の無い表情をしていた。柔らかな顔立ちの下に隠れるこの義弟の本質は、恐ろしく凍てついた冷たいものだった。情よりも理を重んじることのできる軍人としては類まれな資質を持った男だった。

「何の話だ？」

その言葉に隠された意味合いに、レヌートとしては思い当たる節が色々とあった。その中で、義弟に話しておかなければならないと思ったこともあった。だが、表面上は知らない振りをした。

そんな義兄の態度にシーリスは全てを悟ったような顔をして困ったように笑った。

「義兄上、今日は【ユプシロン】の方々がお得意とする言葉遊びをする積りは全くありません。今からお話しすることは、あなたが義兄上だからお尋ねするんです。姉上が唯一認めた方だからです。ど

うか私の信頼を裏切らないでください」
そうして吐き出された言葉は、驚く程の威力を持ってレヌートの身体を貫いた。
「リョウの黒という色彩は、【贄】としては最上級のものになるのですよね？」
「なん…だと？……」
それからシーリスは、これまでリョウの周りで起こった不可解な出来事と神殿との繋がりを一つの仮定として提示した。近々、神殿では儀式を予定している。その下準備の為に軍部に接触を持った高位神官がいた。
「そういう噂が出たのは、二年前のことだ」
神からの宣託を得る為に、リュークスへ捧げる特別な儀式が行われた。その時にどうやら黒という色彩を持った人間が犠牲になった。これはある一定以上の神官たちが知ることになった口外出来ない神殿の闇の一つだった。
「では、今回も？」
「まさか……そんなはずは……」
神殿内部の儀式推進派の中にそのような動きがあることはレヌートも感じ取っていた。
だが、実際にそれが実行に移されるとは思えなかった。儀式には神官長の許可が必要だ。良識ある敬虔な信者でもある高潔な長が、そのような野蛮な愚行を許すはずがなかった。特に二年前の失態が明るみになった今では。
だが、不安定要素があるのも事実だった。レヌートが仲間の神官から小耳に挟んだエルドーシス復活の祭事の計画。遥か昔、神代にリュークスの恋人であった男神エルドーシスを復活、降臨させることでリュークスを勧請し、もたらされる宣託の精度を高めようという途方もない計画だった。それはリュークスがエルドーシスに執着していたという言い伝えから来ていた。
この大地にスタルゴラドという国が誕生する遥か昔、この大陸一

帯は、エルドシアと呼ばれていた。別名、【テラ・ノーリ】――【魂巡る大地】という意味を持つ。だが、この【エルドシア】の名は、失われてしまった。一柱の神の名と共に。その神が【エルドーシス】だった。

神殿の最奥の書庫に眠る古文書の中から、その失われた男神復活に関わる秘儀を発見した。それを興奮気味に語る仲間の話を聞いた時、レヌートは耳を疑った。所々失われた曖昧な穴あきだらけの古文書を鵜呑みにするなどとは、危険（リスク）が大きすぎた。その解読も解釈も未だ謎の部分が多いのだ。

それに神を呼び出すには器が必要だ。選ばれた依り代の中に神の降臨を願う。薬によって眠りに就いた生身の人間が依り代になった。だが、一度、膨大な力（エネルギー）を持つ神を降ろした人間は人としての自我を失う。大きすぎる力に精神が耐えられないからだ。儀式後、一命を取り留めたとしても廃人同様になった依り代は、やがて死に至る。

二年前の儀式の顛末を詳しく調べたレヌートはその事実に行きついた。それは直視するにはおぞましい出来事だった。

二年前、神託を得る為に神を降ろされたという二人の贄は、その最中で負荷が大きすぎて息絶えてしまったのだ。そして、儀式は失敗に終わった。得られたという神託がかなり曖昧なものになったのは、リュークスの降臨途中で器が壊れ、儀式が強制終了されてしまったからだった。そして、神官たちはその事実を隠す為に散らばった欠片を集めてそれらしい体裁を整えたという余りにもお粗末な話だった。

儀式の最中に亡くなった二人の贄にされた男女は、神官たちの手で秘密裏に神殿裏にある共同墓地に埋葬されたという。

レヌートの口から静かに語られた神殿内部の禁忌に当たる情報に、シーリスは顔を凍りつかせた。

だが、伏せた眼を上げると真っ直ぐに義兄を見た。

「先日、第四の管轄内で、男が一人斬殺されました。義兄上もご存

じのイースクラという灰色の縮れ髪をした傭兵風の男です。その男は、二人の男女を探していたそうです。共に黒い色彩を持つ若者。その二人は、男の血を分けた子供だそうです」

つまり、その男は二年前贄にされた男女の係累とのことだった。繋がった点と点にレヌートの目が驚きに見開かれた。

「その男は神殿を探っていたようです。そして、恐らく、知ってはいけない事実に辿りついてしまった」

「それで……消されたというのか？」

常に善行を謳う神殿の神官たち全てが、真っ当な道を進んでいるとは限らない。神殿は長きに渡りこの地に栄えてきたこの国の誕生よりも古い歴史を持つ場所だ。時と共に姿形を変え、時代と共に解釈を変えた因習は、淀んだ澱が溜まり歪(ひず)みを生む場所でもあった。その深い闇を抱えながら、神官たちは日々勤めを果たしている。

光の裏には、それを際立たせる闇が存在する。途方もない闇が。

「そう考えるのが妥当でしょうねぇ」

シーリスはそう言うと緩慢な動作でソファーに腰を下ろした脚を組み替えた。そして、少し身体を前傾させると声を一段低くした。

「その男が死の間際、リョウに伝言を残したそうです」

「リョウに？」

「ええ。偶々、男が刺客に遭った直後に傍を通りかかり、懸命に手当てをしたそうですが、その場で息を引き取ったそうです」

そこで語られた最期の言葉が――――【ユプシロン】に気を付けろ――ということだった。

「これは一体、何を意味するのでしょうねぇ、義兄上？」

ソファの対面に座るレヌートは、膝の上に肘を突くとそこで頭を抱えるように項垂れた。きつく目を閉じる。状況は、自分が考えていたよりも更に悪い方向へ進んでいる。それを認めない訳にはいかなかった。

口の前で両手を合わせたレヌートは前傾姿勢のまま、目だけで前に座る義弟を見た。

「神殿内部で儀式推進派の連中が、再び活発に動き出していることは聞き及んでいた」

だが、あの儀式自体は、神殿の戒律からみても禁忌に当たるものだ。人の命を贖いに宣託を得ようなどとは、命を言祝ぐ慈愛の女神でもあるリュークスを祀る神官たちにはあってはならない事態だった。それに二年前、一部の神官が手を染めた領域は、人が触れてはならない神の領域だった。だから、人である贄は、凄まじい神気に耐えきれずに死んだ。

「リョウは、その色彩もそうですが、義兄上もご存じのように高い素養を開花させています」

それからシーリスは少し前にブコバルから耳にした不思議な出来事をレヌートに語った。それは神殿裏の墓地で、そこに残る死者の魂に反応し、リョウが依り代となって残っていた残像思念に一時的に飲み込まれたということだった。

それを聞いたレヌートは穏やかな表情を一変させ、目を眇めた。

「シーリス、そのことは他には言っていないだろうな？」

「ええ。勿論、話が話だけに、そのことを知るのは当事者のリョウはともかく、ブコバルと私、そしてルスランだけです」

「ならば、これまで通り他言無用だ。伏せておけ」

なんと言うことだ。レヌートは心を落ち着ける為に深く深呼吸をした。シーリスが語った出来事は、リョウが別の魂を入れる器として適していることを意味したからだ。人の思念であるから神のものとは大きく違うが、それでも原理としては同じだ。そして、高い素養と持つということは、リョウがとても強靭でしなやかな精神を持つことを意味した。それは言ってみれば、神を降ろす為の器としては最適な人物だった。その事実があちら側に知られれば、何が何でもリョウに接触を持とうとするだろう。いや、ひょっとしたら、その手はもうリョウに伸びようとしているのかもしれない。だから、真実を知る為に、義弟は自分の元を訪れたのだ。

それからレヌートはリョウが、宮殿での侍女の不審死に関わった

とされる疑いを持たれた上に酷い扱いを受け、その静養の為にユルスナールの実家であるシビリークス家に移された事を知らされた。
リョウがそのようなことに関わっているはずがない。事実を大きな衝撃を持って知らされたレヌートは、リョウの喜怒哀楽に富んだ屈託のない笑顔を思い浮かべて、心を痛めた。
シーリスは、その一件に、神殿の神官が関わっているのではないかと推測した。全ては贄を得る為に。罪人とされれば、その身柄を色々な理由を付け、そして賄賂を使い、神殿側に移すことが可能だ。罪人であれば、その者が後にどのような扱いを受けようとも非難されることもない。
もし、それが本当だとしたら、同じ神官として由々しき事態だった。

そして、この日、レヌートはリョウに試験結果を伝える為に満を持してシビリークスの家を訪れたのだ。久し振りに見たリョウは、すっかり女らしくなっていた。顔にあったという痣も消えていた。服装が違うだけでこんなにも人は変わるものだろうかと半ば眩しい気持ちで柔らかく笑う弟子の姿を見つめた。
この日、レヌートは気持ちを新たに引き締めた。リョウは自分にとっても大事な弟子であった。その弟子をむざむざと神殿内部の陰謀に利用されるのは決して許せないことだ。
そして、並々ならぬ決意を持って、事の次第を糺すべく、神殿の長の所へと足を運んだのだった。

神官長の後を付いて、レヌートがやって来たのは、神殿内部の中でも奥まった所に位置する長の私室だった。
「ここならば、人に聞かれたくない話もできる」
長の私室の一室には結界が張られ、内部の音を外に漏らさないよ

うに呪いが掛けられていた。
「ありがとうございます」
師匠の心遣いに弟子は感謝の言葉を口にした。
それからレヌートは促された簡素な椅子に腰を下ろすと、静かに訪問の目的を語った。余すことなくこれまでに自分が知り得た事実と、方々からもたらされた情報を照らし合わせて、一つの結論を長に提示した。
それは、この神殿に仕える仲間を糾弾するものでもあった。
「良からぬ動きがあることは私も感知している」
弟子の話を聞き終えた後、神官長は、憂慮するように白いものが多く混じる眉を寄せた。
「あの者たちは野心を持ち過ぎた」
異端に走ろうとする仲間たちの原動力となる行動の根底には、この神殿の影響力を高めようとする想いがあった。かつては等しくあった宮殿との力の天秤は、この所著しく、神殿側に不利な状態が続いていた。それを是正しようとする反動とも言えた。
「ならば、既に猊下(げいか)にお話しが届いているということなのですか？」
儀式を行う許しを得る為に。
「いや、正式な申請は未だ来てはおらぬ」
だが、儀式に向けて着々と準備は進められているようだった。
「猊下(げいか)は、勿論、この件をお認めにはなりませんよね？」
レヌートの問い掛けに、神官長は暫し、瞑目した。そして、沈黙の後、ゆっくりと長い息を吐き出した。
「我らは常にリュークスと共にある。神の御心に従うのみじゃ」
【ユプシロン】特有の言い回しに、レヌートは奥歯を噛み締めた。
「あれは禁忌に当たります。何よりも僭越で、神を冒涜する行為です。そのようなやり方は間違っています。二年前の過ちを再び繰り返すお積りですか？」
静かに語気を荒げた壮年の神官に長は静かに一瞥をくれた。
「過ちを認めるも、それを正すも、我らが人の定め。神の怒りに触

れれば、鉄槌は必ず下される」
「そのような悠長な事を言っている場合ではないかもしれません。私は断固として反対です」
相手を煙に巻くような言い方にレヌートは焦れたように言葉を紡いだ。だが、この神殿を取り仕切る長である男には、また別の考えがあるようで、レヌートの進言は、一神官の意見として流されてしまったようにも思えた。
「猊下の英断を信じております」
最後にそう一言、強い眼差しで己が師匠を見据えるとレヌートは、椅子から立ち上がった。そして沸々と湧き上がる怒りと口惜しさをその背中に滲ませながら、長の私室を辞したのだった。
「やれやれ。どやつもこやつ血の気の多い者どもよ」
弟子の背中を見送って、長は大きな溜息を一つ吐くと、これからの事態を思い描くようにゆっくりと目を閉じた。
「全てはリュークスの御心のままに」
苦渋に満ちた小さな述懐は結界の中に消えた。

レヌートが帰った後、影になった扉の向こうから、二つの人影が滲み出るようにして長が座る室内に現れた。白い豊かな白髪を撫で付け後ろでゆったりと束ねた彫の深い老齢の神官と同じ装束を身に纏った男と光輝く白い豊かな長い頭髪を垂らしたままにしている恐ろしく整った顔立ちの若い男の姿だった。
静かに現れた二人の存在に神官長は、恭しく一礼をした。
二人の視線は、先程この部屋を立ち去った壮年の神官の軌跡に注がれていた。
「あれはザガーシュビリの所の次男だな？　レステナントに婿入りをした」
「はい」

老齢の男の問い掛けに長は静かに頷いた。
「リョウが世話になっている男だ」
若い作りの美貌の主が、その外見にしてはしわがれた深みのある言葉を継げば、
「そういう訳か」
その隣に立つ老齢の男は、したり顔で頷いた。
冒しがたい沈黙が、暫し、然程広くはない室内に落ちた。
「イシュタールよ」
厳かでどこか異形の神々しい気を発しながら、若い作りの男が、虹色に煌めく類稀な瞳を神官長へと向けた。それは、いつになく険を含んで長を射抜いていた。
「我らは、元より人の理からは外れた存在。必要以上の干渉は許されぬ」
その声はどこか苦渋に満ちていた。
「なれど、あの子は、【そちら】よりも【こちら】に近いところにある。その言わんとすることは、そなたならば分かるな？」
峻厳な山の頂のような高い鼻を挟んで、玉のように煌めく灰色の瞳が神官長・イシュタールを見つめていた。
「リョウには我が加護を与えている」
その言葉に神官長は弾かれたように神々しい美貌の青年を見た。
「では、あの者は長の【魂響（タマユラ）】なのですね？」
「左様。こちらではそのように呼ぶらしいな」
「あの子を害することは、我らに対する冒涜と同じ。それをお忘れなきように」
「人の世に介入を許されぬ我らと雖（いえど）も、同胞（はらから）を害されれば黙ってはおらぬ」
「御意」
室内を震わせるような静かな確固たる宣言に神官長は恭しく頭を垂れた。

「【フセェレンナイ】よ。こたびほど歯痒き思いをしたことはない」

とうの昔に失くしたはずの名を呼ばれて、【東の翁】は、そっと傍に立つ絶世の美貌を誇る青年の横顔を見た。【人】ではない存在が【人】としての形を取るのは、その神代に近い遥か昔に、人と獣との境界があいまいだった時期の名残だった。その頃、人は獣と交わり、然るべき秩序の下、共に暮らしていた。己が血潮に眠る遥か昔の記憶を探り、辛うじて【人】としての形を持つ【東の翁】は、複雑な表情を憚ることなくその顔に浮かべた。

「人はいつになっても過ちを繰り返すのだな」

長い悠久の時を生きる白銀の王には、比べ物にならない程短い生涯を送る【人】の在り方が、理解できない時がままあった。人の世を見限り、長い間、太古の森の奥に引きこもっていたセレブロが、再び人と交わることになったのは、己が領域である森の片隅に隠居を決め込んだ風変わりな男が居たからだった。

あの男との交わりの中で、再び、人の世も捨てたものではないかと思い始めていた。そして、リョウというこの世の人の理から外れた知己を得た。

リョウを気に掛けたのは、それが己と似たような境遇であると思ったからだ。この世にありながらも、この世の誰とも交わることの無い別の次元にあった魂。ゆらゆらと不安定に揺らぐそれを繋ぎとめようとしたのは、半ば無意識のことだった。

セレブロにとって、リョウは仲間だった。清らかな心を持つ少し変わった愛すべき【人】だった。保護者を任じていたガルーシャ・マライ亡き後、この広い世界の中で自らの足で立とうとする姿をずっと見守ってきた。

人にとっては恐ろしく長い年月を生きる森の王にとっては、リョウの一生など瞬きにも似た僅かな時間だった。その束の間の時を人に交わり過ごしてみるのも偶には良いかもしれないと思ったのだ。

ヴォルグは深き森にある気高き種族で同胞を大事にする一族だ。交わり、加護を与えられた者は、その仲間に等しい。仲間が傷つけられることを黙って見過ごすわけにはいかなかった。

この地にあり、遥か遠い昔に天と地の理を説く役目を授かったヴォルグの一族は、静かなる天秤として、徒に人の世に介入することを禁じられていた。それは【知】と【記憶】をこの世に引き継ぐ、【東の翁】とて同じことであった。

大いなる揺らぎの中にありながらも、人の世にあり、自らその中で生きる術を探そうとしているリョウは、セレブロたちのような存在と【人】を繋ぐ稀有な存在でもあった。その大事な仲立ちを自らの手で屠(ほふ)ろうとしている。この所、リョウの周りで起こっている不審な動きは、セレブロの神経を逆撫でていた。

「セレブロ殿、過度の手出しはなりませぬぞ」

珍しく苛立ちを顕わにびりびりとした空気を帯びた人の形を取った白銀の王に、輪廻を繰り返すことで人としての長い生を生きてきた東の翁は、釘を刺すように言った。

「分かっておる」

――――――分かっておる。

再び、同じ言葉を繰り返して。白皙の美貌を苦渋に歪めた青年は、付き合いの長い翁から見ても実に人間臭い表情をして、虹色に輝く瞳をそっと閉じたのだった。

悠久の歪み（後書き）

前回の「千客万来の一日」と同じ日の出来事です。東の翁やセレブロといえでも、万能ではない。その一端を垣間見る回になりました。

次回は再び、リョウの生活に戻ります。

お知らせ：「千客万来の一日」の夜のお話を、ムーンライトノベルズのほうで連載しているＭｅｓｓｅｎｇｅｒ　の大人向け短編集（Ｉｎｓｏｍｎｉａ）で更新しました。もしよろしければそちらもどうぞ。

ありがとうございました。

夢の扉のその前に

「リョウー！」
「リョーウー！！」
甲高い二つの声がして、ゆっくりと振り返ろうとした途中で、背後に衝撃が走った。そのまま前方にたたらを踏みそうになった身体は、だが、前からもたらされたもう一つの衝撃に吸収される形になった。
「うわわ！」
何が起こったのかと目を白黒させているうちに背中に張り付いた温かさと後ろから腰の辺りに回った腕の感触の後、胸元に飛び跳ねる柔らかそうな銀色の頭部が張り付いているのが視界に入った。
「スラーヴァ？　ユーラ？　もう吃驚するでしょう？」
突然飛びついて来た二人の正体が分かって、リョウは驚きに早くなった鼓動を宥めながら、窘めるように急襲をしてきた二人の男の子を見た。だが、その表情はいつになくにこやかだった。
「リョウ、出掛けるのか？」
「どこに行くんだ？」
「養成所か？」
「俺たちと一緒か？」
ぎゅうぎゅうと前からも後ろからも自分の体を力任せに抱きしめながら口早に問いを発するきらきらとした淡い空色の瞳と薄い緑色の瞳。そして、さらさらとした銀色の髪。
この二人の男の子は、シビリークス家・長兄ロシニョールの息子たちだった。後ろから背中に張り付いているリョウと余り背丈の変わらない方が長男のスタニスラフ。愛称はスラーヴァだ。そして、前に張り付いて、胸元にぐりぐりと頭を押しつけているのが次男のユーリィー。愛称はユーラ。元気一杯の無邪気な子供たちで、二人とも父親のロシニョールに良く似た――つまり、シビリークスの

血を多く引き継いだ顔立ちをした――男の子たちだった。ということは、当然のことながら、この二人にとっては叔父に当たるユルスナールにもどことなく似ていたのだ。それがリョウの頬がいつになく緩んでいる理由でもあった。

シビリークス家滞在中、番犬のカッパとラムダの二頭を従えて中庭でのんびりと読書をしていた時に知り合って、それ以来、何かと二人の子供たちの相手をしていた。見慣れない少し毛色の変わったリョウが珍しく映ったのか、どうやら完全に懐かれてしまったようだった。

基本的に子供は好きだ。そして二人は共にどことなく自分の好いた男の幼少期を彷彿とさせる顔立ちをしているのだ。自分が知らないユルスナールの少年時代が目の前にあるようで、ついつい可愛らしく思えても仕方がなかった。だが、子供の頃から無愛想の塊のような男の子だったと聞くユルスナールとは違い、スラーヴァとユーラの二人は、好奇心が旺盛で表情豊かな子供たちだった。

この日、リョウはズボンと上着を身に着けたいつもの姿になって出掛ける用意をしていた。昨日、レヌートから術師最終試験の合格通知をもらったので、早速、役所に赴き、登録申請をする積りだった。ユルスナールも【アルセナール】に出勤するということで、朝食を食べ終えたら一緒に出掛けようという話になったのだ。役所まではユルスナールが案内をしてくれるとのことだった。

一足先に玄関ホールにいたリョウに二人の子供たちが興味津々に飛び付いてきたという訳だった。

「お役所にね、登録に行くんだよ」

「術師のか？」

背後から顔を覗き込んできたスラーヴァの淡い空色の瞳にリョウは柔らかく微笑んだ。

「そう」

リョウが養成所の学生で、この度、術師の試験に合格したという

ことは二人の子供たちも知っていた。
　ユルスナールの母親であるアレクサーンドラがお祝いをしなくちゃねと夕食の席で嬉々として話した所為で、【お祝い＝ごちそう（イコール）が食べられる】という図式に食べざかりの子供たちが目を爛々として食いついたという訳だった。
　それから養成所の方にも顔を出す積りだった。学生寮を急に引き払うことになったことで突然いなくなった自分を不可解に思っているだろう友人たちに事情を話しておきたかったのだ。それに世話になった講師陣たちにお礼の挨拶をして回る積りだった。
　尻尾を振り切れんばかりにぶんぶんと振る犬のように興奮気味に纏りついてくる二つの体温の高い身体を宥めるように軽く叩いて、リョウは二人に離れてくれるように頼んだ。
　まだまだ細いと雖（いえど）も男の子だ。腕っ節の強さは父親譲りなのか、加減なく回される腕の力は強くて、苦しくなっていた。
「ほら、二人とも離れて」
「ええー、いいだろ、リョウ、ケチケチするな」
　少し尊大に毒づきながらも甘えるような言葉を吐くのは長男だ。
「スラーヴァ、苦しいから。ユーラも、ね？」
「リョウ、今日はズボンなんだな。俺たちと一緒だな」
　そう言って顔を上げた弟にリョウは苦笑を滲ませた。
「そうだね」
　脈絡なく話が唐突に飛ぶので、二人一度に相手にするのは中々に骨の折れることだった。其々、性格も興味の対象も異なるからだ。そこに子供特有の無邪気さが加わる。
「俺はあっちの地味なワンピースの方がいいと思うぞ？　それじゃぁ、まるで男だ」
　昨日身に着けていたポリーナの娘、マーシャのお下がりの服のことを言っているのだろう。
「そう？」
「だがまぁ、そっちもそれなりに違和感ないくらいにはなってるが

な。似合わないとは言っていないぞ？」
そう言ってどこか照れたようにそっぽを向いた少し険のあるスラーヴァの愛くるしい顔立ちをリョウは微笑ましく眺めた。

そうやって玄関先で思わぬ悪戯っ子たちの襲撃に拘束をされていると支度を整えたユルスナールが颯爽と現れた。いつもの正式な詰襟の軍服を身に着けている。
ユルスナールは、団子のようにリョウの前後に張り付いた甥っ子たちを見て妙な顔をした。
「何をしている？」
それはリョウが聞きたいくらいだった。
リョウは少し情けなく眉を下げて、困ったように笑った。
「ほら、二人とも離れて。もう行かなくっちゃ。ルスランも来たから、ね？」
後ろに張り付いていたスラーヴァは何を思ったのか、リョウの耳元に顔を寄せると意味深に囁いた。
「なぁ、リョウ。ルーシャ叔父さんってさ。やっぱり、あっちも凄いのか？」
「はい？」
リョウは振り返ると目を白黒させて訳の分からないことを言った長男を見た。
「何の話？」
尋ねたリョウにスラーヴァは、目を細めてどこか悪戯っぽい顔をした。そうすると右側の発達した犬歯の尖りが小さく覗いた。
「そりゃぁ、もちろん決まっているだろ。あれだよ、あれ」
そう言って少年のまだほっそりとした指が指示した場所は、あろうことかこちらにやって来るユルスナールの下半身で、
「なっ……」
仄めかされた事柄にリョウは絶句した。
だが、その衝撃には更なる追撃が待っていた。

「なぁ、リョウ、ルーシャ叔父さんは【ゼツリン】なのか？」
前に張り付いていた弟も顔を上げると淡い緑の瞳を好奇心一杯に煌めかせながら会話に入って、リョウはぎょっとしてユーラの口を塞いだ。
こんなまだ年端の行かない子供たちの口から、【絶倫】などという性的な言葉を聞くことになるとは。おませにも程がある。目眩がしそうな気分だった。
「ユーラ、キミ、その言葉の意味を分かって使っているの？」
狼狽しながらも信じられない気分ですぐ下にある柔らかい頬を抓れば、痛いと言いながらも無邪気な顔をして笑った弟は、
「んー？　夜もすごいってことだろ？　母上が話してたぞ？」
その言葉に再度、絶句する羽目になった。
どうしてそのようなことを長兄の奥方が子供たちの前で話すことになったのか。そういう方面の教育を既にしているということなのか。リョウは、やや挙動不審気味に目の端を赤らめて狼狽するように視線を彷徨わせた。そして、こちらに向かって歩いてくる瑠璃色の瞳にぶつかった。その瞬間、リョウの脳裏には、昨晩、ユルスナールと過ごした濃密な時間が唐突に蘇ってきて、余りの居た堪れなさに勢いよく顔を逸らした。
「リョウ？　どうした？」
急に顔を赤らめて余所を向いたリョウにユルスナールは怪訝そうな顔をした。
「なぁ、リョウ、どうなんだ？」
「どうなんだ？」
兄の真似をするように弟からも同じように問いを重ねられて、リョウは直ぐ傍にある二つの頬を思いっ切り抓った。
「もう、そんなの知りません。そんなに知りたいのなら、ルスランに訊いてみればいいでしょう？」
「ん？　なんだ？」
すぐ傍に来たユルスナールに、二人の子供たちは漸くリョウから

離れた。リョウは、ユルスナールにちょいちょいと指を拱いて耳を近づけさせると二人の子供たちから聞かれた言葉をそのまま囁いた。

その瞬間、ユルスナールは目を見開いて、何とも言えない顔をしたかと思うと唇を引き結び、興味津々にまだ若い叔父を見上げている二人の甥っ子たちの頭上に左右の拳を落とした。

ゴチンといい音がして、二人の子供たちからすかさず痛いと声が上がった。

そして、窘めるような口調で低く言い放った。

「スラーヴァ、ユーラ。滅多なことを口にするな」

そして、全く義姉上も兄上も子供のいる前で一体どんな話をしているのだと半ば呆れたように毒づいたのだった。

スラーヴァとユーラの二人は、これから養成所の近くにある貴族の子息たちが主に通うという学問所に行くのだそうだ。強面の叔父からの叱責もなんのその、遅れてやって来た御付きの男と共に元気一杯に出掛けていった。

それからリョウはユルスナールと二人連れ立って、ひんやりとして澄んだ朝の爽やかな空気の中、術師登録機関がある宮殿区画内の役所へと向かった。

「それにしてもえらく懐かれたものだな」

二頭の番犬カッパとラムダのように嬉々としてリョウに張り付いていた二人の甥っ子たちの姿を思い出してか、ユルスナールは面白くない顔をした。

「元気一杯のやんちゃな盛りですものね」

あの二人の相手をするのは母親のジィナイーダもさぞかし大変なことだろうとリョウは小さく笑った。

それに対して、ユルスナールは何とも言えないような微妙な顔をした。

普段、余り顔を合わせることのなかった甥っ子たちだが、シビリークス家の家訓に則り、それなりに厳格な躾の下、教育をされているはずだったからだ。長兄はああ見えて真面目で父親の方針を誰よりもよく理解し、そして踏襲しているはずだった。そこから考えると、あのように子供であることを全面に曝け出してリョウに絡む様も珍しかった。義姉のジィナイーダは、二人の息子たちのことを【手の掛からない子】だと評していたのだ。それがどうだ。あのように甘えて。尻尾を振り切らんばかりに興奮と喜びを表わす獣のようだった。

リョウはまだまだ子供だと思って甘い顔をしているようだったが、長男のスラーヴァは今年で12になる。次男のユーラは10だ。貴族の子息は往々にして早熟な所があるが、ユルスナールから見れば、あの二人がリョウに懐く様は、異性への興味が憚らずに出ているように思えて仕方がなかった。リョウは笑っていたが、前後でぴったりと身体を寄せて抱きついたあの二人、特に長男のスラーヴァの方は、確信犯である。リョウはこの国の女たちと比べるとその骨格は華奢だが、十分成熟した女の肉体を持っている。触れればとても柔らかでそれなりの肉感があった。

「全く、油断も隙もない」

そう言って、不満そうに口の端を下げたユルスナールに、男が二人の子供たちに嫉妬のような感情を抱いていることが知れて、リョウは可笑しそうに笑った。

「まだまだ子供じゃないですか？」

軽く笑い飛ばしたリョウにユルスナールは目を眇めた。

「馬鹿を言え、あのくらいの年頃になれば十分男だ。無暗にベタベタと触れさせるな」

リョウとの閨での行為を仄めかされて呆れるやら腹立たしいやら。ユルスナールの心配を余所にどこか甘く寛容すぎる所のあるリョウは呑気に笑う。人の気も知らないでとユルスナールは口から出そうになった台詞を喉元で押し止めた。

「ルスランもあのくらいの頃には、異性への興味で悶々としていたんですか？」

ふいに変わった矛先にユルスナールは妙なことを訊いてきたリョウを横目に見下ろした。

「そんなこと聞いてどうする？」

苦り切った様子を眦に浮かべたユルスナールにリョウはからりと笑った。

「だってワタシはルスランの子供時代を知りませんから。ちょっとした好奇心です」

そう言って少しはにかんだように顔を綻ばせた。それはユルスナールが全面降伏の白旗を上げてしまいたくなるような可愛らしい笑みだった。

自分の事を知りたいと言っているリョウに悪い気はしなかった。だが、相手を好ましく思っているからこそ、幼い頃の恥ずかしい話など、口にできる訳がなかった。それは男としての見栄である。一つ不規則に跳ね上がった鼓動を誤魔化すようにユルスナールは小さく咳払いをした。

黙り込んだ相手をいいことにリョウのおしゃべりは続いていた。

「ルスランは小さい頃からさぞかし女泣かせだったんでしょうねぇ」

「俺はブコバルとは違う」

過去をほじくり返されて面白くないのか、ぶすりと漏れた一言に、そう言えば、ユルスナールとブコバルの二人は幼馴染であったことを思い出す。そして、今度ブコバルにユルスナールの小さい頃の話を聞いてみようかと思った。それは、とても良い思い付きのように思えた。

途端に機嫌良く軽やかに足を繰り出したリョウにユルスナールは嫌な予感がして隣を流し見た。

「リョウ、妙な事を考えてはいないだろうな？」

「妙な事……ですか？」

一体、なんのことかしらと小さく含むようにして笑う。

「別にルスランの小さい頃の恥ずかしいあれやこれやをブコバルから聞きだそうなんて思ってはいませんよ？」
「なんだ。俺はてっきりポーリャに……」
と言い掛けて、いや、なんでもないと慌てて濁した。だが、リョウはその一言を聞き逃さなかった。
「ああ。その手がありましたね」
ポリーナはユルスナールの乳母でもあったのだ。それこそ子供の頃の話は良く知っているだろう。おしゃべり好きなポリーナのことだ。一つ水を向けるような質問をすれば、何十倍にして驚くほど密度の濃い昔話が飛び出してくるに違いない。
にっこりと微笑んだリョウの上方でユルスナールはあからさまにしまったという顔をした。常に冷静で思慮深いユルスナールにしてみれば、とんだ失態である。
「あ、おい、リョウ。待て！」
ついと伸びてきた腕をかわすようにリョウはひょいと身体を反転させると可笑しそうに笑いながら駆け出した。
急に駆け出した相手を捕まえるべく、ユルスナールも勢いよく長靴を石畳の上に蹴り出した。そして、実に不可解な組み合わせの追いかけっこが貴族の邸宅が点々とする界隈から厳めしい役所関係の建物が並び立つ辺りまで続いたのだった。

ちょっとした予定外の軽い運動を挟んで、リョウはユルスナールに促されるようにして宮殿区画内外縁部にある役所に入ると術師の登録・管理を行っている部署を訪れた。
入口の所でもう大丈夫だからとユルスナールを仕事に向かうように促したのだが、ここまで来たら同じことだと言ってリョウの後を付いて来た。ユルスナール自身も登録機関に興味があったようだ。
登録受付（カウンター）をしている部署は、細長い受付台のある静かな場所だっ

た。午前中で閑散としているということもあり、どこかのんびりとした役所らしい雰囲気が広がっていた。

受付台の所には、登録を意味する【ザーピシ】の看板がぶら下がっていた。その後ろの小さな執務机のような所には、役所の人だろう官吏の制服に身を包んだ男が一人いた。

リョウはユルスナールに一言『行ってくる』と言付けてからカウンターの所に向かった。

「おはようございます」

声を掛ければ、役人らしい物静かな感じの男が徐に顔を上げた。リョウは小さく微笑んで、相手が何がしかの言葉を発する前に手にしていた試験の合格通知を受付台の上に滑らせた。

「術師の登録をお願いします。証書はこちらに」

合格通知となる証書には、昨日レヌートに言われた通りに、自分の印封を施しておいた。

「術師の登録ですね」

官吏はそう言うとついと手を伸ばしてその証書を改めた。男にしては白くか細い指が表裏とその少し青みがかった厚手の紙をひっくり返した。

「確かに。承りました」

そう簡潔に言って一つ頷くとこれより登録の準備をするので、少し待っているようにと言い残してカウンターの向こうに姿を消した。そのどこか機械的で事務的な動きをリョウは不思議なものを見るような顔をして見送った。

それにしても登録の準備とはどのようなものなのだろうか。レヌートは正式な登録の際には、正規の登録札が発行されると言っていた。リョウは申請書のようなものに新しく必要事項を記入することになるのだろうかと思ったのだが、その予想は外れることとなった。

待っているリョウの傍にユルスナールがやって来た。

「これから登録をするそうです」

これで晴れて術師として認められることになるのだ。どこか緊張

した面持ちをしたリョウにユルスナールはそっと肩を抱くように腕を回した。そして無言のまま、大丈夫だというように小さく回した腕に力を入れた。隣を見上げれば、優しい色をした瑠璃色にぶつかり、リョウも同じように微笑み返していた。

それから暫くして、戻って来た官吏の手には、小振りの透明な箱のようなものが抱えられていた。透明な箱の中には、同じような透明な液体が入っていて男の歩みに合わせてたぷんたぷんと揺れていた。

官吏は、リョウの隣に立つ軍服を着た体格の良い男をちらりと横目に見て眉を少し跳ね上げたが、何も言わずに、

「それでは始めます」

そう事務的に口を開くと、透明な液体の入った透明な箱を受付台の上に置き、その中にリョウが持ってきた合格証書を入れた。

青みがかった厚めの証書は液体の上に浮いていた。

「それでは、右手か左手、お好きな方をこの箱の中に入れてください」

――――――上に乗っている証書を中に押し込むように。

予想外の事を言われて、目を白黒させながらもリョウは右腕を捲ると言われた通りに紙を沈めるように手を入れた。

「……ッ……」

その瞬間、ビリリと感電したような痛みが上腕に這いあがり、吃驚して咄嗟に引こうとしたのだが、

「どうかそのままで」

低いながらも容赦のない淡々とした声が官吏から掛かった。

「そのまま証書を押し込んでください」

何とも形容し難い痛みのような刺激に、リョウは歯を食いしばりながら指示された通りにした。

「リョウ？　大丈夫か？」

すぐ隣で突然のことに驚きを隠せないユルスナールから心配そう

な声が掛かる。
　こんなことが待っているなら一言事前に言って欲しかった。それならば少しは心構えが出来たというのに。一時の痛みは無くなったが、まだ続く妙な感覚に思わず受付台の前に立つ官吏を恨めし気に見遣れば、目が合った男は、そこでうっそりと目を細めた。どうやらこの男は非常に【心優しい】性格の持ち主のようだ。
　中に入れている右腕を左手で掴んで耐えていると透明の液体が躍るように跳ね上がり始めた。まるで沸騰している水のように上下運動を繰り返す。中に入れた証書が液体に溶けたようにふにゃふにゃになり、右手にまとわりついた。
「もう少しの辛抱です」
　酷く冷静な官吏の声の直後、透明の箱から突如として眩いばかりの光が漏れた。リョウは思わず目を瞑った。
「これは……凄い」
　ぽつりと漏れた小さな声に恐る恐る目を開けば、透明だった液体が虹色に変化しながら手の回りを躍っていた。初めのような無秩序な荒々しさではなく、緩やかに一定の法則に従い変化をしているようだった。
　どのくらい時間が経ったのだろうか。
「もうよろしいですよ」
　官吏の声にゆっくりと右手を引き抜いた。驚いたことに濡れているかに思われた右手は何事もなかったかのように乾いていた。リョウは心底驚いて、暫く呆然と自分の右手と箱の中で生きているかのように揺らめいている光の塊を見比べた。
「これは……一体……？」
　何が起こっているのだ。
　面食らって頭の上に沢山の疑問符を浮かべたリョウに、官吏の男が愉快気に細めの眉を跳ね上げた。
「おや、もしや、あなたは事前に説明を受けてはおりませんでしたか？」

「説明……ですか？　何に…対する？」
「ああ、ならば驚かれても仕方がありませんね」
そう言うと、この透明な箱の中にあるのは専門の術師が研究に研究を重ねた末に出来た特別な液体で、中に入れた証書とそこにある印封、そして登録する術師本人の潜在能力をほんの少し借りる形で、証書を強度な呪いの掛かった特殊な登録札に変化させる装置なのだと説明した。
先程までの事務的な無表情からは一転、実に生き生きとした表情で詳細を語り始めた官吏に、リョウは目を丸くしながらも聞き入っていた。そして、この一連の登録作業の事には全く触れなかったレヌートの穏やかな顔を半ば恨めし気に思い返したのだった。
「いやいや、久し振りに大変興味深いものを見せて頂きました。私も長年この場所で様々な方の登録業務を担当させていただいておりましたが、このように実に珍しい発現の仕方をしたのは本当に久しぶりです」
「珍しい発現の仕方……ですか」
「ええ、このように虹色に煌めく光はとても珍しいですね。しかもとても強い」
「……はぁ」
熱の籠った説明を終えた官吏は満足したように息を吐くと、最初の頃とは打って変わった実にいい笑顔で、また二・三日後に来るようにと言った。どうやらその間にこのゆらゆらと蠢いている光が収束し、登録札の形に落ち着くとのことだった。
こちら側で生活するようになって、それこそ驚くことは沢山あったが、この登録業務もリョウにとっては予想もしなかったことで度肝を抜かれることになった。一口に術師と言ってもその世界は本当に奥が深いのだと改めて思い知らされた気分だった。

夢の扉のその前に（後書き）

予定ではもう少し話を進めるはずだったのですが……。
リョウからはシビリークス家の男たちを籠絡するようなホルモンが出ているのではと思った今日この頃。無邪気な子供たちの直球にタジタジの回となりました。それでは、また次回に。
２０１１／９／２１　脱字修正

終の欠片

どうして、どうして、どうして。どうして私じゃ駄目なの？

アリアルダ・ズィンメルの中には、この七日間ずっと同じ問いがぐるぐると頭の中を駆け巡っていた。

武芸大会最終日、ユルスナールがこの国に古くから伝わる慣習に則り求愛をしたという噂はアリアルダの耳にも入っていた。

今年の冬、ユルスナールの左腕にあったもう一つのリボン。アリアルダが渡したリボンが受け入れられたのは大会期間三日間の内、初日だけのことだった。

アリアルダは、目にした現実が信じられなかった。いや、信じたくはなかった。これまで、過去数年に渡り、ユルスナールの腕に巻かれていたのは、自分の瞳と同じ少し赤味がかった橙色のリボンだけだった。他の色を見たことはなかった。

幼い頃からアリアルダは、ユルスナールの妻になることを信じて疑わなかった。幼少期からの知り合いで、姉のジィナイーダがシビリークス家の長男・ロシニョールに嫁いでからは、一層、家族ぐるみの深い付き合いをしてきたのだ。

これまでユルスナールの影に女の姿はなかった。【氷の微笑を持つ貴公子】と謳われ、往年、社交界を騒がせた父親・ファーガスの美貌を余すことなく引き継いだと言われる美丈夫で、目付きは些か鋭いが、初めてユルスナールの姿を見た女たちを瞬く間に虜にしてしまうような魅力溢れる男だった。

貴族の中でも名家の出であるにも関わらず、社交界には必要以上に近寄らなかったが、貴族の若い娘たちの間では頻繁に噂になっていた。誰もがユルスナールと言葉を交わし、その手に口付けを落とされることを夢見たが、現実は厳しいもので、軍部の仕事にのめり込んでいるという話を聞く以外は、驚くほど女の噂は聞かなかった。

四年前に第七師団長を拝命し、北の砦に赴任してからは、王都に姿を現すのは年に一度の武芸大会の時のみだったので余計に王都に住まう貴族の婦女子たちからは遠い存在になってしまった。

ユルスナールの周辺で浮いた話が一つも出て来ないことをアリアルダは全く気に留めていなかった。いや、寧ろ当然だと思っている節があった。シビリークス家・家長のファーガスと竹馬の友である父、ラマン・ズィンメルは、アリアルダが生まれた時に二人の娘たちのどちらかを必ずシビリークス家に嫁がせようと戯れに言ったそうだ。それは酒の席でのことだった。その時の約束を本気にしてずっと覚えていたのか、それともそれが切っ掛けであったのかは知らないが、姉のジィナイーダはロシニョールと恋に落ち、そして、シビリークス家に嫁いだ。やがて時の移ろいと共に次男のケリーガルも嫁を貰い、残った三男、ユルスナールにはアリアルダを娶せようか、そんなことを話したらしかった。

その約束は決して正式なものではなかったが、アリアルダは幼い頃からシビリークス家の中でも比較的年の離れていないユルスナールに嫁ぐものだと言われて育ってきた。周囲の使用人たちも母親もそのような心積もりの中で、やがてアリアルダは当然のようにユルスナールに恋をして、その想いを大切に心の中で育んできたのだ。

だが、いつの頃からであろうか。アリアルダは自分が長じるにつれてユルスナールとの距離が離れて行くような気がしてならなかった。幼さから抜け出し、初潮を迎え、娘らしく蛹から蝶へと変化した時、ユルスナールは以前のようにアリアルダを【アーダ】と愛称で呼ばなくなった。

アリアルダは、その変化にいち早く敏感に反応した。一線を引かれたような気がして気に食わなかった。姉のジィナイーダは、それは妹が一人前の女性として相手より受け止められている証だと言ったが、アリアルダはどうしてもユルスナールとの間に見えない壁が立ちはだかったような気がして仕方がなかった。

そのような事が続いてから数年、今年に入り、ユルスナールはそろそろ腰を落ち着かせる為に妻を娶(めと)るべきだ。そのような事を語ったという長兄ロシニョールの言葉にいよいよその時がやって来たかと心を躍らせた。漸く自分の幼い頃から描いてきた夢が叶えられる。

だが、そう思ったのも束の間、その喜びは長くは続かなかった。

今年、王都に帰還したユルスナールの背後に一人の人物の影がちらつき始めたのだ。初めてその人を見た時、アリアルダは少なからず衝撃(ショック)を受けていた。ズボンを穿いて軍の腕章を付けた軍人の割には、恐ろしく線の細い少年だった。だが、ユルスナールはその少年に対して並々ならぬ配慮と優しさを見せていたのだ。あのように少年の一挙手一投足に感情を顕わにするユルスナールなどこれまで見たことがなかった。

あの少年がユルスナールとの間に何らかの強い絆を作り上げていることにアリアルダは嫉妬した。そして、初めて、順風満帆かに思えた自分の人生に大きな黒い影が差したことを意識しない訳にはいかなかった。

そして、後日、その時の悪い予感は的中した。

武芸大会開催期間中、ユルスナールはずっとあの少年から渡されたという黒いリボンを腕に巻いていた。そして初日の団体戦の最中、己が試合の直前にその黒いリボンの端を摘むとそこに口付けを落としたのだ。アリアルダは貴族の婦女子たちが観覧する為に特設された特別席からその一部始終を見ていた。

信じられなかった。いや、信じたくはなかった。あの黒髪の人物とユルスナールの間にある繋がりが羨ましくて、そして男の腕に揺れる黒いリボンが疎ましくて仕方がなかった。

その少し前に、同じく会場内に来ていたあの時の黒髪の少年を呼び付けてリボンの事をを詰問すれば、あろうことか、あのリボンは少年自らが渡したものであるという。

それをあのリョウという少年の口から聞いた瞬間、アリアルダは

怒りに目の前が真っ白になった。男の分際でユルスナールにリボンを渡した。そのような事が明るみになったら、ユルスナールがいい恥晒しではないか。何を考えているのかは知れないが、同じ軍部の人間（とアリアルダは思っていた）として、とんでもないことをしている。おぞましいことに思えて仕方がなかった。

そして、その気持ちの高ぶりのままに、気が付いた時にはあの少年の頬を張り倒していた。勢いよく叩いた掌がじんじんと痛かった。それ以上に心が軋んで痛くて、苦しくて仕方がなかった。

自分で自分のやったことに驚いて、茫然と立ち尽くしたアリアルダの前で、頬を叩かれた少年は、あろうことか小さく微笑んだのだ。

――――――これで気が済みましたか？

そんな台詞を吐いて。

その時、真っ直ぐに自分を見据えていた黒い澄んだ瞳にアリアルダは何故か戦慄した。そこにあったのは、穏やかで、哀しげで、だが、確固たる強い意志を持った【女】の顔であったから。

それを真正面から見た時、アリアルダは息を飲んだ。外見から、その格好から、ずっと少年（男）だと思っていた人物が、もしかしたら自分と同じ女かもしれない。不意に過ったその考えは、アリアルダを恐怖に突き落とした。

だから、ユルスナールは、その人物の色彩を象る黒いリボンを腕に巻いた。そして、何かを誓うようにその端に口付けた。

それは、生まれて初めて経験する不安だった。大きな漠然とした不安だった。

そして、武芸大会最終日、アリアルダの目の前で、ついに恐れていたことが起きたのだ。観客席からは遠く、しかとその様子が掴めた訳ではなかったが、ユルスナールが個人戦勝利の後、腕に巻いていた黒いリボンを外すとそれを片手に会場の片隅に向かい、その場で片膝を着いた。

あれはなんだ、どうしたのだとざわざわとした話声が広がる中で、

ユルスナールが申し込みをしているとの話が飛び込んできた。その話は、周囲の観客たちを、特に貴族の若い女たちを騒然とさせた。

アリアルダは、それを聞いた瞬間、その場から立ち上がると脇目も振らずに駆け出していた。傍にいた侍女のリーダが驚いて声を上げたが、構わずに駆け出した。それ以上、その場所で、ユルスナールのことを耳にしたくはなかった。そして、車止めに待たせていた馬車に乗り込んで実家に逃げるようにして帰ったのだ。

それから五日余りが経ったある日、アリアルダが最も恐れていたことが起きてしまった。シビリークスの家からユルスナールとアリアルダの許嫁の話はなかったことにという正式な通達が父、ラマン・ズィンメルの元に届いてしまった。それは長年抱いていたアリアルダの夢が潰(つい)えた瞬間だった。

ユルスナールの噂は父の耳にも届いていた。元よりあってないような口約束のようなものだったが、そのようなものに正式な書面で破棄の通達が届けられたのだ。そこにはシビリークス家、基(もとい)、ユルスナールの本気の度合いが見えて、アリアルダは絶望した。

実家の居間で、茫然と手紙の内容を聞いたアリアルダに父親のラマンは力なく首を横に振った。どうやらユルスナールには、本気で妻にしたいと願う女性が現れたということだった。その女性を手に入れる為ならば、シビリークス本家と縁を切っても構わない。それ程までの強い決意を持った上での事だと書かれていた。これまで徒に期待をさせてしまったご息女(アリアルダ)には申し訳ないが、末息子の決意は固く揺るがないもので、親がどうこう出来るものではないこと。そして、何よりもユルスナールがその女性を深く愛していること。更に父親のファーガスは、最終的に末息子とその女性との婚姻を許可する積りであること。アリアルダにとっては耳を覆いたくなるような非情な文面が続いていた。その内容は、アリアルダを絶望のどん底に突き落とした。

「お父様！　お相手はどこの誰なの！？」

まさか、本当にあの黒髪の【女】なのだろうか。それとも他の貴族の娘なのか。自分が太刀打ちできないような名家の立派な娘なのか。

ぼんやりしていたかと思うと突然我に返り、父親に詰め寄ったアリアルダに、書簡を手にした父もその隣に座る母も困惑したように顔を曇らせた。

難しい顔をして押し黙った父親の傍で、

「お相手の事は何も書かれていないわ」

母親は宥めるように目の前に力なく膝を落としたアリアルダの身体を優しく抱き締めた。

「……アーダ」

それから母は同じ長椅子に座る夫の方を向いた。

「ねぇ、あなた。ファーガス殿にもう一度直接会って確かめてみることは出来ないのかしら？　突然、このような紙きれ一枚で、こんなに大事な事を告げるなんで、あんまりななさりようだわ。これでは納得できないわ。どうして今更、こんな……」

妻の言葉に夫のラマン・ズィンメルは苦渋に満ちた顔をした。大事な娘の悲しみは、父親であるラマンにとっても深い悲しみとなった。だが、その一方で、長年の友であるファーガスの性格を良く知る父には、これが単なる紙きれではないことがよく理解できた。

これは、シビリークス家の刻印のされた正式な文書である。対外的にも使われる正式な通達だった。それだけで向こうの真剣さと本気の度合いが知れた。これを覆すのは至難の業だろう。

それでも父親は愛する妻と娘の手前、その依頼を受ける素振りを見せた。

「そうだな。今一度、私の方からも問い合わせてみよう。その前にジーナに連絡を入れておこう。あの子なら詳しいことを知っているかも知れないからな」

シビリークス家に嫁いだ長女ならば、この書簡の中からは読み取ることの出来ない特殊な事情を知っているかもしれない。そして、

上手い具合に妹を慰めてくれるかもしれない。
艶やかな張りのある薔薇色の頬を涙で濡らした娘に父親はそっとハンカチを差し出した。大きく吐き出しそうになる溜息を飲み込む。
父親は幾ばくかの罪悪感に駆られていた。いずれユルスナールの元に嫁ぐ。そのように夢見るように仕向けてしまった親の所為で、娘が徒に苦しむことになった。この国に独身男は何もあのユルスナールだけとは限らない。シビリークス家の三男坊は、申し分のない立派な男だが、結局、娘のアリアルダには縁がなかったということなのだ。
だが、初恋破れ、千々に乱れる娘の気持ちを思えば、慰めとしてそのような台詞を軽々しく口には出来なかった。
「アーダ、さぁ、涙をお拭きなさい。折角の可愛い顔が台無しだわ」
愛する娘を宥めるように母は、その癖の無い金色の髪を撫でた。父も母も娘の傍に寄り添い、ある程度の落ち着きを取り戻すまで傍にいた。

翌日からアリアルダは塞ぎこむようになった。両親はなんとか娘の気持ちを上向きに持って行こうと様々な努力をしたが、それは不発に終わった。その間、姉のジィナイーダからもたらされた手紙の内容も妹を励ますものにはならなかった。アリアルダは日に日にどこか思い詰めた顔をするようになった。食事も満足に喉を通らなくなった。
そして、その非情ともとれる通達を受け取ったその日からおよそ六日が経ったある日、絶望に打ちひしがれたアリアルダは、両親には思いも寄らない行動に出ることになった。
それは図らずもシビリークス家に滞在していたリョウが抱いた漠然とした悪い予感を裏付けるものになってしまった。

終の欠片（後書き）

タイトルは、ツイのカケラ。いよいよアリアルダとの件に決着を付ける時がやってまいりました。短いですが、キリがいいのでこの辺で。続きは、今日の夜か明日の午前中には上げたいと思います。

運命の悪戯（前書き）

時間的流れとしては、前々回の【夢の扉のその前に】の続きです。

運命の悪戯

正式に術師への登録を済ませた後、また三日後に訪れることを約束してリョウは登録・管理の部署からから外に出た。リョウはそこから進路を右に取って養成所に向かう積りだった。【アルセナール】は左側にあるので、ユルスナールとはそこで別れることになった。

「リョウ、用事を終えたら、【アルセナール】に来い」

ユルスナールの申し出をリョウは緩く首を振ることで断った。

「お約束は出来ませんよ。養成所の友人たちの方に顔を出しますし、その後、先生たちの方にもお邪魔をしますので時間がどうなるか分からないので」

術師の試験に合格したことを伝えれば、ヤステルやバリース、リヒターたちは仰天するかも知れないが、きっとお祝いをしようとかご飯を食べに行こうというような話になるような気がした。なので、その後の予定は全く想像が付かなかった。それに、もし時間に余裕があれば、リョウは以前、ペンダントの加工を頼んでいた装飾品（アクセサリー）を扱う店に顔を出そうと思っていた。黒い【リール石】を加工したものに穴を開けて金具と鎖を通す作業を頼んでいたのだ。あの後、すぐに取りに行く積りであったのだが、イースクラの一件以降、なにかとごたごたが続いたのでずっと延び延びになっていた。

それはユルスナールへの贈り物にする積りだった。出来ることならば、そのことは秘密にしておきたい。

ユルスナールはその返答に苦い顔をしたが、何かあれば伝令を飛ばすし、戻る時はちゃんと連絡を入れると約束をして、少し強引ではあったが、最後には頷いてもらった。もしかしたら、自分の方が早く帰るかも知れない。その時は、帰宅の旨を庭先にいる小鳥にでも頼んで知らせると約束した。それからまだ納得いかなそうに引き結ばれた男の唇に掠めるだけの口づけを送ると颯爽と踵を返して駆

け出したのだった。

そうして所用を全て終えて、リョウは一足先にシビリークス家に帰った。最初に予想していたよりも時間が掛からなかった。友人たちは案の定、騒いだが（特にバリースが煩かった）、後日改めてお祝いをするから外で食事をしようという話になり、それから彼らはまだ講義が残っているということですぐに時間切れになったからだ。

その後、講師たちへお礼参りも済ませ、念願のペンダントも引き取りに行くことが出来た。これからシビリークスの家に帰るとの旨を街中にいる途中で暇を持て余していた【ヴァローナ（カラス）】に頼んで、【アルセナール】に行ってもらった。勿論、ちょっとしたお礼に鞄の中に入れていた鳥たちが大好物とするスグリの実を渡すことは忘れなかった。

そして、軽やかな気分でシビリークス家の玄関に辿りついたのだが、そこでいつもとは違う異変に気が付いた。

玄関ホールの所でまだ年若いと思しき娘の甲高い声が響いていた。真っ直ぐに伸びた癖の無い淡い金色の髪が、激しく左右に揺れている。その若い娘のすぐ前には、この家の内向き全般を取り仕切る執事のフリッツ・リピンスキーが、職務に忠実な真面目くさった慇懃な顔付きで詰め寄る娘を宥めるように対峙していた。

リョウはそれを不可解な面持ちで見遣った。随分と取り込んでいる感じだ。執事と揉めていた娘はこちら側に背中を向けていた為、その顔は良く分からなかった。背筋がすらりと伸びた淡い灰色の外套の下からは淡い黄色のドレスの裾が覗いていた。

玄関を開けて『ただいま戻りました』と上げた声は、少し先で立ちふさがるリピンスキーと娘を前に音にならずに掻き消えた。

「お姉さまはいらっしゃるんでしょう？　ならばそちらに行ってるわ」

「ですが、今、ジィナイーダ様にはお客様がいらしております」
「大丈夫よ、大人しく待っているから」
「ですが、ユルスナール様のお戻りがいつになるのか分かりませんので」
「構わないわ。私はルーシャが帰って来るまで待っているわ」
「ですが、それではお嬢様を満足にお持て成しすることができません。ユルスナール様がお戻り次第、こちらよりご連絡を差し上げます」
「なぁに？　出直せって言うの？」
不機嫌さを隠さずに急に跳ね上がった声の後に、老練な執事の慇懃な落ち着いた声が続いた。
「はい。日を改めてお約束をして頂いた方がよろしいかと」
「まぁ、フリッツ。あなたまで。そんな他人行儀なことを言うのね！」
静かに淡々と言葉を紡いで行くリピンスキーに対し、詰め寄る女性は益々機嫌を損ねていった。
興奮に高まった甲高い声が金切り声のようになるまであと一呼吸という所で、執事のリピンスキーが帰宅したリョウに気が付いた。
挨拶の声を掛けようとしたリョウにリピンスキーは目配せをし、先に部屋に戻るようにと促した。相対する娘の剣幕に何やらただならぬものを感じ取ったリョウは、そのまま大人しく玄関ホールを横切ろうとしたのだが、急に動きを止めたリピンスキーの素振りに対峙していた若い娘が振り向いた。

赤い燃えるような瞳だと思った。
リョウの姿を認識した途端、その燃え盛る炎のような瞳を揺らめかせた娘、ユルスナールの許嫁であったアリアルダは、息を飲んだ。
そして今度は、物凄い勢いでリョウに迫って来た。
「あなた！　どうしてあなたがここにいるの！？」
勢いのまま、肩のすぐ下、二の腕の上腕部をきつく掴まれて、リ

ョウは痛みに顔を顰めた。
そこにリピンスキーがすかさず間に入った。
「アリアルダ様、リョウ様は当家のお客さまです。縁あってこちらに滞在しておられます」
初老の執事の丁寧な言葉にアリアルダは眦を吊り上げた。怒りの為か、白い頬が真っ赤に染まっていた。
「ここに滞在しているですって！？」
執事の言葉は、どうやら火に油を注いだようだった。
「どうして？　どうしてあなたなの！　ねぇ、どうして私からルーシャを奪うの？」
力任せに肩を揺さぶられ、少し上にあるアリアルダの華やかな顔がくしゃりと歪んだ。
「ねぇ、どうして？」
最後に見た時（頬を打たれた時だ）よりもアリアルダの頬はこけていた。その燃えるような瞳からは止めどなく涙が流れ、激情に上気した頬を伝っていった。甲高い嗚咽が、静まり返った広い玄関ホールに切れ切れに響き始めていた。
アリアルダの取り乱した様子を目の当たりにして、リョウは相手にユルスナールが自分に申し込みをしたことを知られてしまったのだということに気が付いた。
そして、昨晩、寝台の中で耳にしたユルスナールの言葉が蘇ってきた。
――――アリアルダとの許嫁の件は破棄した。正式に通達が届いているはずだ。
きっとその事を知らされたのだろうと思った。
「……アリアルダ……さん」
リョウには掛けるべき言葉が見つからなかった。アリアルダにしてみれば、リョウが憎くて仕方がないだろう。大事な男を目と鼻の先で攫ったような感じになってしまったのだから。
自分の腕を掴んだまま咽び泣いていたかと思ったアリアルダは、

リョウがその鼻先で沈痛な面持ちをしているうちに、その右の太ももに巻かれていたベルトにある短剣を手に取ると引き抜いた。
そして、リョウがあっと思う間もなく、それを逆さに両手で握り込むと己が細い首元に宛がおうとした。
「アリアルダさん！　何を……」
短剣を手にしたアリアルダは、リョウから勢いよく身体を離すと握り込んだ刃先を自分の首元に向けて、声を震わせた。
橙色の瞳には、ぞっとするほどの冷たい絶望が浮かんでいた。憎しみがギラギラと唯一の動力の源のように光る。まるで幽鬼に取り憑かれたかのような表情だった。
「ルーシャの元に嫁ぐことが叶わないのなら、死んだ方がマシよ！」
その願いが、望みが叶わぬのならば、このままこの場で自害する。
そう言って興奮に荒い息を吐きながら、己が首元に短剣を押し付けようとした。
それは余りにも自分勝手な言い草にリョウには思えた。自殺することでユルスナールに当てつけようというのか。それが残された者にどのような深い悲しみと苦しみを与えるのかも知らずに。残された者はその苦しみを一生抱えて生きて行かなければならないというのに。
リョウの脳裏には神殿裏の墓所で見たブコバルの横顔が浮かんでは消えた。ブコバルと同じ隠された懊悩をユルスナールに与えるのは許せなかった。
だが、それは一方で、それだけアリアルダも深く傷つき、自棄になっていることの表れでもあった。
リョウは深く息を吸い込むと莫迦な真似をしようとしているアリアルダを一喝した。
「馬鹿な真似はおよしなさい」
腹の底から出た厳しい静かなる怒声に周囲の空気がびりびりと震えた気がした。
アリアルダの手は震えていた。前屈みになって泣きじゃくりなが

ら、燃えるような瞳でリョウを強く見つめ返していた。
「あなたに何が分かるの？　ルーシャに選ばれたあなたに。あなたの所為で、私の人生は滅茶苦茶になった。ルーシャのいない人生なんて生きている価値がないわ！」
ああ。とうとう恐れていたことが起きてしまった。リョウの心は軋みを立てて揺らいだ。
アリアルダは、ユルスナールの元に嫁ぐことが出来ないのならば、命など要らないと人を傷つけたことの無い真っ白な柔らかい手で、手にしたこともない武骨な短剣を持ち、自らの命を終わりにしようとしている。
自分がユルスナールの手を取るということは、きっとこの娘の人生を狂わせてしまうことになるのだろう。
リョウは込上げる息苦しさを堪えるように緩く長く息を吐き出した。

リョウは、肩から身体に斜めに掛けていた鞄を外すと床の上にそっと滑らせた。そしてその場で外套を脱ぎ、上着を脱いだ。
相手の突然の行動にアリアルダが動きを止めた。怪訝な顔をしてこちらを見ていた。その隙にリョウは身に着けていたシャツの釦を上から二つ三つ外すと寛がせた外套の襟元の下、胸元の大きく開いた服を着ているアリアルダと同じように日に焼けていない己が喉元を晒した。それから徐に腰に佩いていた短剣を引き抜いた。
「なんの……真似…を？」
驚きに見開かれた橙色の瞳を前に、リョウは艶やかに切れ味の良い光を放つ抜き身をアリアルダと同じように己が右の首元、頸動脈の上に宛がった。
「アリアルダさん」
思ったよりも静かで落ち着いた声が出ていた。
「な……によ？」
アリアルダの意識が自分に向いたことにリョウは少し安堵した。

「自らの命を断つなど、悲しいことは言わないでください。残された御父上や御母上、あなたを愛しているご家族はどうなるんです？」

そう言うと静かに手にした短剣を自刃の角度に握り直した。そして、そのまま真っ直ぐにアリアルダの瞳を見据えた。己が覚悟を知ら示すように。

「あなたがここで自害するというのならば、ワタシも共に死にましょう。この場で」

それはアリアルダにとっては思いも寄らない言葉だった。

「なん…ですって……？　どうしてあなたがそんなこと……」

「あなたは自分の命だけでなく、ワタシの命も道連れにする。あなたの手の中にもう一つ別の命があることで、あなたにこの莫迦げた行為を思い留まって欲しいからです」

――――――自分の所為で他人が死んだというのは余り気持ちのいいものではないでしょう？

アリアルダが、信じられないというように目を見開いた。

――――――【ザシィータ　イ　ペェレェホート】

リョウはその隙に小さく呪いの言葉を唱えていた。アリアルダの手にした短剣とリョウが持つ短剣が微かな囁きに反応して同時に薄い光の膜を纏った。

すぐ傍で揺らいだ淡い黄色い光にアリアルダが狼狽えた。

「な…にを…したの？」

「この二本の短剣は対になっています。これはその昔、ワタシの知り合いの鍛冶職人が己が命を削って鍛えたものです。この一振りにも、あなたが手にしている一振りにもその職人の魂が籠っている。ですから、どうか自害などという愚かなことにこの短剣を使わないでください。あなたがやろうとしていることは、この短剣の造り手を侮辱する行為だ」

この二振りの短剣はレントが己の命を削って造り上げたものだった。それを人を傷つけ、殺(あや)めることに使うことをリョウは絶対に許せなかった。

「そんなの、あなたには関係ないわ。鍛冶屋がなんだっていうのよ！　私が何を使おうとあなたの知ったことではないわ！」

だが、鍛冶職人の話は、上流階級の貴族の娘には、やはり馴染みのないものだった。当然のことながら理解をしてもらえなかったことにリョウは哀しく微笑んだ。

リョウは出来るだけ時間稼ぎをしようとしていた。アリアルダのような細い腕で自害など出来る訳がなかった。自分で死に至るまで頸動脈を傷つけるというのは大変に力が要ることだからだ。一息に行かなければならない。余程の覚悟を持つか、訓練された者でない限り無理な話だろう。幾らレントの刃物がその切れ味が抜群であろうとも。自害など上手く行くはずがない。

こうやって話をすることで相手が少しでも落ち着いてくれればと思った。その間に有能な執事であるリピンスキーが然るべき手立てを打ってくれるのではないかと期待した。それが吉と出るか凶と出るかは分からなかったが。

だが、リョウの言葉はその意図に反して相手の神経を逆撫でしてしまったようで、次の瞬間、アリアルダが自分の喉元にその剣を突き立てていた。リョウの喉元に鋭い痛みが走った。と同時に先程掛けた術が、成功したことを身を持って知った。

リョウの首筋を赤い鮮血が伝い始めた。曝け出していた首筋を通り、白いシャツに赤い染みを作って行く。アリアルダがそれを見て、息を飲んだのが見て取れた。自分が死ねば相手も同じように自害するという言葉を口先だけだと信じていなかったようだ。

「ど…うし…て？　何を…してるのよ！」

恐怖混じりの苛立たしげな掠れた声が切れ切れに響く。

アリアルダが自分の喉元を突いたはずのその場所には、なんの傷も見当たらなかった。ただ傷をつけようと自分の首に刃先を滑らせたはずであったのに、そこにあるはずの痛みがなく、何故か、目の前で同じように短剣を構えているリョウの方が傷ついている。

深くめり込んだ切っ先にリョウは熱い痛みに顔を顰めながらも言葉を継いだ。

「術を…掛けました。あなたが自らを害しようとした傷が、ワタシに…移るように」

それはこの二本の剣が対になっているから出来たことだった。短剣同士に強い結び付きがあり、波動が同調しているから。

これは、その昔、万が一の時の為にとガルーシャから教わった呪いの一つだった。本来の目的は、術師の身に刃物を寄せることでそこに生まれるはずの傷を対峙する相手に移すというものだった。ガルーシャはそれを護身の為にリョウに教えたのだ。リョウはそれを逆に自分に移るようにしたのだ。

信じられないという顔をしたアリアルダに、リョウはその理由を口にした。

「ワタシは術師です。それなりに傷や血を見てきています。これまで必死になって怪我を治療する為の術（すべ）を学んできました。そんな術師であるワタシがあなたを傷つける訳にはいかないでしょう？」

人の病を取り除く助けをする為に、人の命を助ける手助けをする為に術師の技を学んできたのだ。それを人殺しになど使ってなるものか。それはリョウの中で生まれた術師としての覚悟（プライド）だった。

そこでリョウは小さく微笑んだ。

「アリアルダさん、あなたは人の血など見慣れていないでしょう？これらの短剣は切れ味抜群です。こうして切れれば、当たり前のことですが血が出ます。そして、これは【痛い】ものなんですよ。自害するには力が必要です。あなたのような細腕ではまず無理だ。一思いに頸動脈を切ることは出来ないでしょう」

徒に苦しむだけだ。だから思い留まってくれ。このような所で折角の命を捨てることはしないで欲しい。残されることになる家族の為にも、本来なら輝かしいはずのあなたの未来の為にも。

そう訥々と説く間にもリョウの首元には血が伝い、白いシャツを赤く染めていった。リョウの額には脂汗が滲み始めていた。思いの

外、アリアルダは強く喉を突いたらしかった。そこは少し計算違いであったかもしれない。急所からは外してあるが、大分深く入ったようだった。

だが、ここで引く訳にはいかなかった。

「お願いです。短剣を離してください。もう止めましょう。こんな莫迦げたこと。人は血を流し過ぎると死ぬんですよ。ワタシもこのままでは助からないかもしれません。あなたはワタシを死なせたことを後悔するかもしれません。人の死を背負って、その後の人生を生きる覚悟がおありですか？　それとも、今ここであなたを悩ませている元凶を消し去る方をお取りになりますか？」

随分と意地の悪いことを訊いているという自覚はあった。だが、それだけリョウも必死だった。

もう一息だと思った。短剣を持つアリアルダの手が震えていた。その震えが首元に当てられた自分の傷を深くさせた。

そこでリョウはとっておきの事情を明かした。

「過日、ワタシはルスランより結婚を申し込まれました。ですが、まだ正式な返事はしていません。それが何故だか、お分かりになりますか？」

アリアルダは半ば恐慌状態に陥りながらも首を小刻みに左右に振った。分からない。いや、分かりたくもないというように。

そこでリョウは敢えて笑った。覚悟を決めて、最後の言葉を告げようと。

「何故なら、ワタシは……」

――――お断りする積りだからですよ。

苦渋に満ちた決断は、だが、音として現れる前に、玄関ホールに響いた慌ただしい人の足音に掻き消えてしまった。

「まぁ、アーダ！」

リョウの視界の中に顔を蒼白にした姉のジィナイーダとその夫ロシニョールが映った。そして、その後ろから騒ぎを聞きつけた家長

のファーガスがやって来るのが見えた。その脇に執事のリピンスキーが控えていた。

助かったと思った。二人の男たちは軍人だ。これでアリアルダをどうにかしてくれるだろう。

張りつめた緊迫感の所為か、こちらに近寄ることが出来ずに少し離れた所で明らかに心配そうな顔をしているジィナイーダにリョウは言った。

「ジィナイーダさん、アリアルダさんは大丈夫ですよ。怪我はないはずです」

それから、アリアルダに向き直った。

「アリアルダさん、もう止めにしましょう。人が傷つくのを見るのは余り気持ちのいいものではないでしょう？　たとえそれが憎い相手だとしても。それともここで一思いに遺恨を断つお積りですか？　今なら引き返せます。だから剣を置きましょう」

軍人であるロシニョールならば、アリアルダの手にある剣を奪うことが出来るだろうか。リョウはゆっくりと相手に気取られぬように移動してアリアルダの背後に立とうとしている長兄に視線で合図を送った。いや、それはひょっとしたらこの状況を打開して欲しいという救難信号に近かったかもしれない。

その時になって漸くアリアルダの手から短剣が落ちた。静まり返った玄関先にカランと金属が打ちつけられる音が聞こえた。それをすかさず長兄のロシニョールが手に取った。

アリアルダは、張りつめていた緊張の糸が切れたのか、その場で力なく崩れ落ちた。そこへ姉のジィナイーダがすかさず走り寄った。身体が小刻みに震えている。顔は涙でぐちゃぐちゃになっていた。

そこで漸くリョウは小さく息を吐くと力が抜けたように床に片膝を着いた。そして、手にしていた剣を一先ず鞘に戻し、傷口を手で押さえると足元に落としていた鞄を探った。

中から痛み止めと止血の薬を取り出した。瓶のふたを開けて、そ

れを口に含み、残る全神経を集中させて自分に強制止血の呪いを掛けた。以前、自分の怪我には祈祷治癒の呪いが上手く作用しないと思っていたのが、後日、それは集中力が足りないからだということが分かったのだ。他人に作用させるのと自分に作用させるのでは、同じようで、その力の使い方が異なることを学んだ。

「……リョウ」

リョウの白いシャツが鮮血に染まっていることに気が付いたファーガスが、近寄ろうとしたが、それを目で制した。

「ワタシは大丈夫です。アリアルダさんを別室に。落ち着ける場所に移してください。鎮静作用のある薬草をお茶の中に入れてあげてください」

長兄のロシニョールが無駄なく動いて、アリアルダとその妹の肩を抱く姉を別の場所に移動させた。

玄関ホールから立ち去る三人と入れ替わるように、騒ぎを聞きつけた次兄のケリーガルが現れた。廊下では術師であるポリーナを呼ぶ声がこだましていた。

リョウは次兄を呼んだ。

「ケリーガルさん、お手数ですが包帯を巻くのを手伝って頂けませんか？」

この場に残る張りつめた空気とリョウの格好を見て瞬時に何事かがあったことを理解したケリーガルは、リョウの傍らに膝を着くと包帯を巻く前にその傷をざっと改めた。応急処置がなされていることを確認するとリョウが望むように包帯を手際よくきつめに巻いていった。

「……リョウ。また無茶をしたのかな？」

穏やかに微笑もうとしたものの痛ましげに顰められた眉にリョウは少し困った顔をして微かに笑った。

「そういうことになってしまうんでしょうか」

無茶な事をした積りはなかった。リョウは精一杯のことをした積りだった。あの場でアリアルダから力任せに短剣を奪うことは物理

的に自分には出来なかったからだ。却って相手を逆上させ、傷つけてしまうかもしれなかったから。あの場で、自分に思いついたことは、アリアルダが思い留まるように時間を稼いで説得することだった。

だが、それは結果的には上手く行かなかったのかも知れない。アリアルダの剣を止めることが出来なかったのだから。

このような騒ぎを起こしてしまうことになるなんて。やはりユルスナールにとって、自分は疫病神でしかないのかもしれない。そのようなことさえ頭を掠めた。

包帯を巻き終えると、リョウは次兄に礼を言い、荷物を手にゆっくりと立ち上がった。足が震えそうになったが、なんとか誤魔化した。

「お騒がせいたしました」

家の玄関でこのような騒ぎを起こしてしまったことを主に詫びたリョウにファーガスは何とも言えない複雑な顔をした。恐らくこのような騒ぎになった大体のあらましは執事のリピンスキーより聞いているのだろう。

ファーガスはゆっくりリョウの傍に歩み寄るとその頬に手を当てた。ごつごつとしたかさついた肌の感触が伝わった。そして、緩慢な動作で華奢な身体を抱き締めた。

「済まなかった、リョウ」

「いいえ」

思ってもみなかった謝罪の言葉にリョウは軽く首を左右に振った。だが、直ぐにハッとして慌てたようにファーガスの胸に自分の二の腕を突いて相手との距離を開けた。

「お召物に汚れが付きます」

自分の手と襟元が流れた血で濡れていたことを唐突に思い出したのだ。ファーガスの着ているものに付いてしまう。高価で肌触りの良い服地に。

そのような瑣末なこと（リョウにとっては重大なことだったが）に拘ったリョウにファーガスは沈痛な表情をするとより一層、離れた細い身体を抱きこむ為に抱擁を強めた。
「そのようなことなど気にするな」
「ですが……」
小さく身じろいだリョウの背にケリーガルから声がかかった。
「リョウ、汚れなんて洗えば落ちるんだから、気にすることはないよ」
ファーガスは何も言わなかった。リョウの後頭部に大きな温かい手を回すと己が胸に押し付けるようにきつく抱き締めた。
そうしてそっとその大きな手で滑らかで手触りの良い髪を梳いた。
リョウは小さく息を吐き出すとされるがままに目を閉じた。そして馴染みある体温と似たような温かさに暫し身を委ねたのだった。

アリアルダがリョウに鉢合わせをして短剣を振りかざしている。その話を耳にした時、ファーガスは胆が冷えたと思った。ユルスナールとの許嫁の破談は思いの外、アリアルダの心を傷つけたようだった。恐らく、その辺りの理由を問い質しに自ら乗り込んで来たのだろう。だが、その怒りの矛先が向かうはずのユルスナールは生憎不在で、そこに偶々居合わせたリョウがアリアルダの激情をまともに向けられることになってしまった。
いつになく険しい顔をしたリピンスキーの報せに急いで駆け付けてみれば、短剣の抜き身を其々己の喉元に添えて相対する二人の姿が目に入った。震えるアリアルダの前で、リョウは毅然とした態度を取りながらも何故かその首元から血を流していた。同じように刃先が食い込んでいると思われたアリアルダの方には、傷一つ付いていなかった。
それを素早く目視で確認した時、ファーガスの脳裏には、術師が使うという呪いの一つが思い浮かんだ。相手が被るべき傷を己が身に引き寄せるというものだった。それは限られた条件下で成立する

類稀な術だと聞いていた。詳細は後で本人に確かめてみないと分からないが、恐らく、リョウは、そうやってアリアルダを守ったのだろう。自分を傷つけることで。

息子のユルスナールが惚れ込み、そしてリョウの行動を心底心配する理由が分かった気がした。

アリアルダの一件は、元はと言えば、息子の至らなさから発したことだ。そしてその責任の一端は父親である自分にもある。政治的理由での婚姻、また金銭的理由などによる婚約の破談、そのようなことなどこの貴族社会ではよくあることだ。これはシビリークス家とズィンメル家との問題で、両家の中で解決しなければならないものだった。

そこに息子が愛する人を巻き込んでしまった。それも自分の影響力が行き届いているはずのこの屋敷内で。

なんということだ。ファーガスは己が不徳を恥じるようにリョウの細い身体を抱き締めた。このような小さな身体にどれほどの負担を強いてしまったのだろうか。

それと同時に感じ入った。この小柄な体躯にこれほどまでの強い精神が息づいていようとは。

感嘆に似た気持ちでファーガスは抱き締める腕に力を込めた。このか細い腕で、どれほどまでの寛容さを息子に対して見せて来たのだろうか。

それから暫くして、リョウはそっとファーガスの胸元から顔を上げた。気遣われたと思った。騒ぎになった原因は自分にあるのにファーガスはそれを責めなかった。逆に、こうしてまた不用意に傷を負った自分を慰めてくれている。

シビリークス家の人たちは優し過ぎた。そしてまた、その最たる男に心配を掛けることをしてしまったと思った。

「ありがとうございます」

すみませんと謝罪の言葉を口にしそうになって。それを慌てて謝

意の言葉に変えた。
「あの、お願いがあるのですが……」
それから落ち着きを取り戻したリョウは、この場での一件をここで収めてくれるようにと頼もうと思い口を開きかけたのだが、そこで、玄関の重厚な扉が開いた音を聞く羽目になってしまった。
恐る恐る振り返る。
そして、そこに現れた男の姿に、何とも間の悪い思いをしたのだ。
玄関先に現れたのは、今、自分を温かく抱き締めている初老の紳士と同じ銀色の髪に瑠璃色の瞳を持つその息子、ユルスナールだった。リョウはなるべく穏便に且つ内々に収めようとしていたこの一件が自分の手を離れてしまったことを知った。

運命の悪戯（後書き）

スミマセン。また肝心な所で話を切ります。続きは鋭意執筆中です。なるべく間が空かないようにする積りです。

アリアルダとの衝突は避けて通れなかったとはいえ、予想外のことになりました。大いなる山を前に小さな山を一つ越えました。そして次回は、もう一つ小さな山を越えることになりそうです。ありがとうございました。

禍福は糾える縄の如く（前書き）

禍福はあざなえる縄の如く。幸せと不幸せは撚り合わせられる縄のように交互にやってくる。有名な故事ですね。

「ルスラン、お話しがあります。ファーガス殿も、お兄様方も、ご同席頂けますか？」

――――――少し、お時間を頂けますでしょうか？

ファーガスからの抱擁を解いた後、リョウは血で染まった襟元と首の包帯を隠すように手にした鞄と外套、そして上着を前に抱え直すと、口を開きかけたユルスナールを制した。

「ああ、その前に。お帰りなさい、ルスラン」

そして、にっこりと微笑んでみる。心配は要らない。自分は大丈夫だからと言うように。

ここでの出来事はその時にきちんと話す。そう言って一先ず、この場を収めようとした。

ユルスナールは、リョウの傍にいる父とその直ぐ脇に立つ次兄を見た。そして、その少し後方に二人の姉妹を別室に移してから戻って来た長兄の顔とその隣に控える執事の顔を見た。

誰も言葉を発する者はなかった。だが、この場に残るいつもとは違う肌を刺すような緊張感に、ユルスナールは己が考えを纏めるように無言のまま息を緩く吐き出した。

アリアルダとリョウが鉢合わせをした。それに対するユルスナールの反応は、リョウにとっては未知数だった。ましてやアリアルダがまだ屋敷内に居るのだ。この一部始終を聞いたら、また無茶をした、莫迦な真似をしたと怒るだろうか。ユルスナールの怒りが自分に向けられるのならばまだいい。それがもしアリアルダに向かったら。それともアリアルダにそのようなことをさせてしまったことに心を痛め、自分自身を責めるのだろうか。

だが、この一件で、リョウの決心は付いてしまった。これまで足

掻くようにずるずると引き延ばしにしていた答えを、今、出さなければならないことを悟った。

ここが潮時だった。

口を開きかけたユルスナールは、いつになく真剣なリョウの雰囲気を前に言葉を発することを止めた。

苦いものを飲み込んだような悲痛さえある表情をほんの一瞬だけ覗かせて、しかし、直ぐに平静を取り戻すと静かに頷いてみせた。

「では、場所は私の書斎にしよう」

ファーガスがこの家の家長らしく場を取り仕切るように口を開いた。父親の提案に異存がないことを確かめるように三人の息子たちを順繰りに見て、そこで反対がないことを知ると傍に立っているリョウに囁いた。

「リョウ、お前はシャツを替えてから来るといい」

着替えをしておいで。その言葉に小さく微笑んだ。

「お気遣いありがとうございます」

「大丈夫か？　そのままで。少し時間を置くか？」

さっきの今で、自分の怪我を案じる問い掛けにリョウは問題ないと返していた。

「はい。手当ては済んでいますから。それにこれはシビリークスの方々から見たら掠り傷程度のものでしょうから」

剣を扱う軍人の家ではこのような傷など騒ぐほどのことではないに違いない。そう気丈に振る舞ったリョウにファーガスは少し眉を下げたが、咎めるようなことは何も言わなかった。

そして、ファーガスは準備が整い次第、自分の書斎に来るようにと告げて、その場は一旦お開きとなった。

何か言いたそうにこちらを見ていたユルスナールにリョウは、

「それでは後ほど、ファーガス殿の書斎で」

と突き放すように微笑んでいた。

それを見たユルスナールの瑠璃色の瞳が傷ついたように揺らいだのをリョウは気が付かない振りをした。胸の奥がきゅうと引き絞ら

れるような気分を微笑みの下に隠した。

それからリョウは自室に戻ると洗面所で短剣に付いた血糊を洗い流した。このようなことにガルーシャからもらったレントの短剣を使ってしまったことに罪悪感を覚えたが、それを小さく息を吐き出すことでやり過ごした。そして、首筋と手に付いた血液を拭った。

あらましを聞いたポリーナは、リョウの元にも飛んで来て、痛ましい顔をして包帯の巻かれた箇所を見たが、何も言わずに傷の状況を再度改めてくれた。敏いポリーナのことだ、アリアルダとユルスナールの件は承知していたのだろう。

思った以上に深かった傷口にポリーナの細い女らしい眉がしんなりと寄ったが、直ぐに術師らしく平常心を取り戻すとてきぱきと処置をしていった。

止血の呪いは上手く作用していたようで出血は止まっていた。そこに化膿止めと傷を塞がりやすくする軟膏を塗り込んで、油紙を貼り、その上から再び包帯を巻き直した。

そして手当てを済ませた後、シャツを取り替えた。着ていたものは脱いでみたら思った以上に血の染みが大きくて、リョウは少し驚いた。

脱いだものを取り敢えず洗面所内の水を張った盥の中に入れて、新しいシャツを着込んだ。洗うのは全ての用事を済ませてからになるだろう。

それからシャツにズボンという出で立ちでファーガスの書斎に向かった。その前にズボンのポケットの中に帰宅途中で引き取りに行った黒い【リール石】のペンダントを忍ばせることを忘れなかった。

リョウが書斎の扉を小さくノックしてから中に入ると、三人の息子たちは既に顔を揃えていた。書斎にある重厚感のある広い机を前

にファーガスが腰を下ろし、その手前にある小振りの応接用の長椅子に長兄と次兄が座っていた。ユルスナールはその長椅子の前にある小さなテーブルを挟んだ反対側の壁一面に据えられた本棚の前に立ち、厚みのある本の背表紙を落ち着かない様子で指先で叩いていた。

「お待たせして申し訳ございません」

一番最後になったことをリョウは詫びた。それにファーガスが鷹揚に返した。

「なに、構わん。それ程待ったという訳でもない」

長兄のロシニョールと次兄のケリーガルが座る長椅子の前には、もう一つ、同じような長椅子が置かれていたが、ユルスナールは本棚を背に立ったまま、その場で腕を組んだ。

ファーガスは、リョウにその空いている長椅子に座るようにと目線で促したが、リョウはその場で揺るく首を左右に振って、今は、まだこの場所でよいと返した。

「すまなかったな、リョウ。お前をこちらの事情に巻きこんでしまった」

「いえ、とんでもありません。アリアルダさんは大丈夫ですか？」

その問いにロシニョールが頷いた。

「ああ、今、ジーナが傍にいる。疲れが溜まっていたのだろう。あれから直ぐに眠りに就いた」

それを聞いてリョウは少し、安堵した。

「全て私の責任だ。済まなかった」

深く謝罪の言葉を口にしたファーガスにリョウは静かに首を横に振った。

「いいえ。ワタシも徒に煽るようなことをしてしまいましたから」

アリアルダを物理的に傷つけることは阻止できたが、落ち着いてみれば、もう少し上手いやり方があったかもしれないと思ったからだ。

「リョウ」

どこか焦れたようにユルスナールが口を開いた。こちらを見つめる瞳は、抑え切れない苛立ちと哀しみと苦悩をその濃紺の揺らぎの中にちらつかせていた。

「お願いだからもっと自分を大切にしてくれ。一歩間違えば、お前が死ぬ所だったんだぞ。どうしてお前は怒らない？　アリアルダがあのようなことをしたのは俺の所為だろう？　何故、お前は自分を傷つけて尚、平然としていられるんだ？　どうして俺に怒りをぶつけない！？」

ユルスナールの声は抑制されたものだが、湧き上がる様々な感情に駆られるように早口になっていた。

その言葉で、リョウは自分が来る前にユルスナールが大体のあらましを聞いたことを理解した。

リョウは少しだけ悲しそうな顔をして、だが、小さく微笑んだだけだった。

ユルスナールに対して怒りはなかった。アリアルダに対してもあのような場で当てつけに自害をしようとしたことに怒りを覚えたが、今は、怒りよりも哀しみの方が大きかった。

何よりも心が痛かった。アリアルダがあのような暴挙に走った原因の一端は間違いなく自分にあると思っていたから。ともすれば罪悪感のようなものさえ覚え始めていた。それは身を切るような切なさだった。

「リョウ、何故黙る？」

「ルスラン」

尚も焦れたように言葉を発しようとした三男を父親の低い一喝が押し止めた。窘めるような声音にユルスナールは口を噤んだ。

「話があると言ったな？」

そう言って空いた長椅子の後方に立つリョウを見たファーガスに、リョウは小さく頷くとこの場の主導権をこの部屋の主から引き継いだ。

リョウはズボンのポケットから黒い石の付いた首飾り（ペンダント）を取り出す

と、それを手に本棚の前に立つユルスナールの傍に歩み寄った。
「ルスラン」
男に上体を少し屈めるようにと頼んでから留め金を外すと黒い【リール石】がひっそりと鈍く輝く細い鎖を上着を脱いでシャツ一枚になった男の逞しい首に回した。
「これはなんだ？」
ユルスナールは己が首にぶら下がったペンダントを手にリョウを見た。
リョウは柔らかく微笑んだ。
「ルスランに贈り物（プレゼント）です。日頃の感謝の気持ちを込めて。ルスランにはいつもお世話になりっぱなしですから」
そう言うと、その小さな石にはお守りになるようにとささやかながら呪いを掛けているのだと自分の首にぶら下がる【キコウ石】の付いたペンダントを引っ張り出しながら明かした。
「これと同じです」
ユルスナールは小さな金属の輪が三つ連なった先にある黒い石を掌（てのひら）の上に乗せた。
「【リール石】か？」
「はい。鉱石処理の講義の過程で形の良いものができたので」
ユルスナールの大きな掌（たなごころ）の中では、その黒い【リール石】は非常にちっぽけなものに見えた。
石を留めている金属の三つの輪は、過去、現在、未来という三つの時を表わしていた。それは、その後のユルスナールの人生が恙無いものになるようにとの願いを込めたものだった。たとえ自分が傍にいられなくとも。
「リュークスの加護がありますように」
最後にお馴染みになっている台詞を口にした。
「ありがとう、リョウ。大切にする」
そう言って微笑み返したユルスナールにリョウも柔らかく笑った。
ユルスナールは、このリョウの微笑みの裏にある秘めた決意につい

ては、当然のことながら思い至ることが出来なかった。

リョウはその場から一歩下がるとゆっくりと顔を上げた。そして、どことなく嬉しそうな顔をしているユルスナールを真正面から見つめた。父親と二人の兄たちはその様子をじっと見守っていた。

リョウは背筋を伸ばした。そして、その場に集う男たちを順繰りに見渡した。父、長男、次男、三男。同じ血で結ばれた優しさ溢れる高潔な男たち。この男たちの姿を最後に目に焼き付けるかのように。

「ルスラン……いえ……ユルスナール・ハイデ・ドゥ・アマン・シビリークス殿」

リョウはユルスナールの本名を口にした。初めて出会った時のように。

あの時は、単なるガルーシャに繋がる記号に過ぎなかった男の名前も、今ではすっかり別の意味を持つものになっていた。大きすぎるほどの意味を持っていた。その変遷を感慨深く思い返した。

「愛しています。あなたを。心から」

真摯で偽りのない言葉を口にした。これ以上、自分の心に嘘をつきたくなかった。

ユルスナールの目が大きく見開かれた。だが、そこに喜色が浮かぶ前に、リョウは残酷で非情なまでの決意を告げていた。

「ですが、ワタシはあなたの手を取ることは出来ません。これが、あなたの申し込みに対するワタシの正式な答えです」

「な…ん…だと……」

思いも寄らない結果に虚を突かれた顔をしたユルスナールを前にリョウは更に言葉を継いだ。

「ワタシがあなたの手を取ることは、きっとあなたを余計なことに巻き込んでしまう。そして、あなたを苦しめることになるでしょう。今日のように」

そこで少し哀しそうに目を伏せた。

「ワタシがあなたの気持ちに応えることは、多かれ少なかれ、どこかで犠牲を伴うことになるでしょう。ワタシの所為で、今後、あなたが不利益を被ってしまうことが心配なんです。ワタシは貴族のしきたりを知りません。まだこの国の常識さえ覚束ない部分が多々あります」

「そんなことちっとも構わない。瑣末なことだ。知識などこれから幾らでも吸収できる。これから学んでいけばいいだろう？」

――――――これまでお前がそうしてきたように。

だが、リョウはその問いには返さなかった。

「それが第一の理由です。そして、もう一つ最大の理由は……」

そう言うとリョウはシャツの釦を上から外し、己が左半身を胸のふくらみが始まるぎりぎりの所まで大きく開いて見せた。そこにあるセレブロの加護の印をこの場に集う男たちに見せる為に。

白い肌の上に銀色とも蒼色ともつかないような不思議な紋様が浮かんでいた。

「ファーガス殿、これが何だかお分かりになりますか？」

ファーガスであれば、この印封に使われる古代エルドシア語の更に古い形の文字を読めるのではないかと思った。

だが、その答えは、同じくリョウの左胸の上に刻まれた銀色とも蒼色ともとれる不可思議な色合いに注目していた次兄が先んじることになった。

「セェ…リェ…ブロ。……【セレブロ】。【銀（しろかね）】……か。とても古い形だね」

次兄の言葉にファーガスがゆっくりと目を見開いた。

「まさか……ヴォルグの……」

やはりファーガスはセレブロの存在を知っていたようだ。そして、この刻印が意味するところを。

「はい。ここに刻まれているのはヴォルグの長、セレブロの名です」

「キミは、長の【魂響（タマユラ）】なのか？」

ファーガスの低い美声は驚きに掠れていた。

「はい。セレブロは、ワタシに加護を与えてくれました。この世の理から外れたワタシの魂をここに繋ぎ留める為に」
　案の定、訳が分からないという顔をしている男たちを前に、リョウは息を一つ吸い込んだ。
「【東の翁】を御存じですか？」
「神殿にいるという賢人のことか？」
「はい」
「確か、先読みを得意とするという」
「はい」
　リョウは【東の翁】が、人の魂の在り方を視ることの出来る特殊な能力の持ち主であることを語った。そして、過日、自分もその鑑定を受けたことを語った。その結果も含めて。
「そ…んな」
　その非情なまでの宣告にユルスナールが目を見開いた。
「リョウ、どういうことなんだ？」
　長兄のロシニョールがこちらを見ていた。
　ユルスナール以外のリョウの秘密を知らない男たちは要領を得ない顔をしていた。それも仕方がないことだ。そこでリョウは簡単に己が身の上を掻い摘んで語った。
「ワタシは、元々、この世の理からは外れた存在です。ワタシの魂は、『大いなる揺らぎの中にある』と東の翁はそう評しました。翁には、ワタシの過去も未来も視えなかった。ワタシの魂は未だ漆黒に包まれた闇の中にあるそうです」
　それは、この魂が不完全な状態で、この世に留まることなく、やがて消えてしまうだろうことを意味した。
「セレブロは、ワタシに加護をくれることで、この魂を半分、こちらに繋いでくれました。ですが、それはやはり不完全なのです。ワタシはいずれこの世界から消えるでしょう。それが明日なのか、明後日なのか、一年後なのか、十年後なのかは分かりません。ですが、残された時間は少ないと思っています」

こちら側に転げ落ちてから一年で、セレブロはリョウの魂の異変に気が付き、加護を与えた。そこから予想をすれば、残された時間は多く見積もっても数年という単位なのではないかと思えたのだ。

だが、本当の所は誰にも分からない。リョウ自身にも知る術はなかった。

「セレブロ殿はなんと？　【東の翁】は？　なんとかする方法はないのか？」

ユルスナールの焦れた声にリョウは緩く頭を振った。

「セレブロにも【東の翁】にもどうすることも出来ないそうです」

【東の翁】は、あれ以来、神殿の書庫で古文書を調べてくれているそうだが、目ぼしい収穫は上がっていないとのことだった。

「そ……んな……」

明らかに色を失くしたユルスナールにリョウはそっと歩み寄った。そして利き腕を上方に伸ばすと精悍な頬にそっと己が手を滑らせた。

「そして、もう一つ。二年前からワタシの時は止まったままなのです。その関係で、ワタシの身体は【女】としての機能を失っています」

言われた言葉が良く理解できないのか小さく眉を顰めた鋭いきらいの眼差しにそっと微笑んだ。

「今のワタシは子を成すことの出来ない身体ということです」

誰かが息を飲む音がした。

これまで幾度となくこの男と肌を合わせた。そして、その精を身体の中に受け入れていた。一時期は避妊の心配さえしたというのに、それは全く意味がなかったのだ。

「だから、ルスラン、もう終わりにしましょう？　ワタシはあなたに子供を残すことができません。ワタシはきっとあなたを置いて先に逝ってしまうでしょう。だから……だから……」

徒に別れを引き伸ばして辛い思いをするくらいならば、いっそのことここの時点で終わりにした方がいい。今ならまだ引き返すことが出来る。アリアルダでもいい、れっきとした然るべき家の娘を娶り、

シビリークスの血筋を繋いで行くことが出来る。何よりもユルスナールは家族を持つことが出来る。そして新しい家庭を築くのだ。それは今のリョウには叶えられない眩しい程の未来だった。

リョウの頬にはいつしか涙が伝い、静かに流れて行った。

「だから……」

それ以上は、言葉にならなかった。

「勝手な事を言うな！！！」

沈黙を貫く雷鳴の轟きのような怒声が広い書斎に響き渡り、壁にある本棚に並ぶ書籍類を震わせた。

それは初めてリョウに向けられたユルスナールの厳しい叱責の言葉だった。突き抜けたような怒りだった。

「そうやってお前はいつもいつも一人で何もかもを抱えて。他人の心配ばかりして。お前はどうなる？　俺を愛しているんだろう？　ならば何故、その荷を俺に分けようとしない？　俺はそれ程までにお前にとって取るに足らない存在か？　俺はそれ程までに頼りない存在か？」

迸る怒りを余すことなく伝えた声が、鼓膜を劈くように反響した。滾るような熱を秘めた瞳が燃えるように熱く煌めいていた。薄い肩を掴んだ剣ダコのある手が、男の熱を余すことなく伝えていた。触れた所から奔流のように男の感情が流れ込んでくるようだった。

「……ルスラン」

次の瞬間、息が詰まりそうな程にきつく抱き締められていた。

「子供などいらない。俺はお前がいればそれでいい。お前の残りの時間を全て俺に寄越せ。消えるかもしれない？　そんなことを聞かされて俺がみすみすお前を離すと思うのか？　愛してると聞かされてお前を手放せると思うのか？」

慟哭に染まった獣の咆哮のような声だった。

「それにまだ分からないことばかりなのだろう？　お前がいなくなることが確定したわけではないのだろう？　ならば他に方法が見つ

かるかもしれないじゃないか。だから簡単に諦めるな。俺を捨てるな」

そして、ユルスナールは苦しい程の抱擁を解くと、これまでにない真剣な顔をしてリョウの肩を掴み、その涙に濡れた黒い瞳を真正面から睨むように見つめた。

「いいか。もう一度言う。俺の人生にお前が必要なんだ。残された時間に限りがあるのなら、その時は俺の前で逝けばいい。だが、それまでは、俺の傍にいろ。そうすると約束しろ！」

「ッ……ルスラン」

リョウの双眸からは、止めどなく涙が溢れだしていた。

いいのだろうか。本当に。その言葉の通りにユルスナールの手を取っても。

「いいんですか？　本当に？」

嗚咽混じりの声は掠れ、そして震えていた。

「ああ」

自信たっぷりに微笑んだ男を前にリョウは咄嗟に両手で口元を覆った。歓喜と苦しさと切なさと躊躇いと様々な思いが噴き出すように湧き上がって来て、堪えなければ叫び声をあげてしまいそうだった。みっともなく泣き叫んでしまいそうだった。

「リョウ」

深い艶を帯びた男の声がその名を呼んだ。声がした方にゆっくりと視線を向ければ、父親のファーガスが何かを堪えるような、それでも優しい眼差しをしてリョウを見ていた。

「私からも頼む。たとえ僅かでもいい。どうか最期のその時まで、残された時をルスランと共に過ごしてもらえないだろうか」

父親の言葉を肯定するように長椅子に座った兄たちからも声が掛かった。

「僕からもお願いするよ。君に振られたんじゃ、ルスランの方が狂ってしまいそうだからね」

そんな軽口を叩いたケリーガルの淡い空色の目には薄らと涙が滲んでいた。

「ああ。使い物にならなくなるだろうからな。こんな図体のでかいのが腑抜けになってみろ。とてもじゃないが扱いきれん。だが、お前が傍にいてくれれば心強い」

辛辣な言葉を吐きながらも長兄は、少し困ったような、それでいて優しい表情をしていた。

「……いいんですか？　ワタシで？」

「ああ」

再びの問い掛けに父と兄たちがしっかりと頷いた。

「お前じゃないと駄目なんだ」

覆い被さるようなユルスナールの声に、リョウは微笑もうとして失敗した。くしゃりと歪んだ顔を隠すように伏せる。だが、漸く男の申し出に応えるように何度も何度も頷いていた。その体をユルスナールが再び、きつく抱き締めた。

そして一頻り、涙が止まるのを待って。少し、落ち着きを取り戻したリョウは、そっと男の胸元から顔を上げた。

ユルスナールの抱擁を解くと徐に姿勢を正してファーガス、ロシニョール、ケリーガル、そしてユルスナールと、シビリークス家の男たちにを前に礼を取った。

「不束者ですが、よろしくお願いいたします。ワタシを受け入れてくださいましたこと、深く感謝いたします」

そうしてこの国の慣習に則り、静かに一礼した。

涙の余韻で瞼は腫れぼったかったが、再び上げられた顔は、過酷な運命を隠すほどの喜びと嬉しさを滲ませた穏やかな表情をしていた。

こうして、リョウは、この日、残された余生をユルスナールの傍で生きることを選択したのだった。それは沢山の不確定要素と不安

を抱えながらの出発でもあった。
それでも、この日の選択を後悔する積りはなかった。
そして、何よりも心が温かかった。

禍福は糾える縄の如く（後書き）

記念すべき一周年目のお話です。
Ｍｅｓｓｅｎｇｅｒ　は今日で連載開始より一年が経過しました。
これまで続けてこられましたのも作者の趣味にお付き合いくださる寛大なる読者の皆さまのお陰です。この場をお借りいたしまして御礼申し上げます。

野分のあした（前書き）

タイトルは、「ノワキの明日」、嵐（台風）の翌日という意味合いです。

2001

野分のあした

「お茶のお代りはいかがですか？」

華やかなで温かな色合いの壁紙が天井から四方の壁を囲む広い室内、優美な印象を与える飴色の調度類に囲まれた中にある大きな寝台の中で、起き上った娘の背筋は、ピンと伸びていた。

潔い程に真っ直ぐで頑なで硬い。その姿は、やや柔軟性に欠けるきらいのある娘の性分をそのまま体現しているようでもあった。垂らしたままになっている癖の無い金色の髪は、大きく切り取られた窓から差し込む柔らかな日差しに鈍く煌めいた。

この国の女たち特有の少し厚めの唇。生来の気の強さを表わす吊り上がり気味の眦に大きな瞳。少し高めの鼻。全体的に見て、それはまるで繊細な人形のような造形だった。

膝の上に置かれた白い手は労働とは無縁の傷一つない滑らかなものだ。大事に大事に両親からの愛情を一身に浴びて育てられて来たのだろう。

昨日は蒼白となっていた頬は、一晩泥のように眠りに就いた所為か、本来の血色を取り戻し始めていた。

掛けられた声に答えを返すことなく、娘は無言のまま、窓の外に目を向けた。

そこからは常緑樹の緑濃い葉の付いた梢が、そよぐ風に揺れていた。小鳥たちの甲高い囀(さえず)りが聞こえた。外を気ままに走り回るこの家の番犬であるカッパとラムダの白い毛並みがちらついて見えた。その向こうに、春の先触れとして知られる淡い青色の花が咲いているのが見えた。

長閑な昼下がりの光景だった。

「ずっと、ルーシャには私だけかと思っていたわ」

ぽつりと漏れたのは、本当に微かな声だった。風の囁きのような

声だった。
「でも、ルーシャは私じゃ駄目なんですって。大の軍人が私に頭を下げたの。この償いは何でもするって言って」
――――あんな必死な顔を見たのは初めて。
淡々とした突き放すように囁かれていた声音が、ここに来て微かに震えた。
寝台の中にある娘の一人語りに、少し離れた所にある茶器の乗ったワゴンの前に立つ人物は、静かに耳を傾けていた。

「傷は……大丈夫なの？」
窓の外を向いていた視線が、一瞬だけ室内に佇む女に向けられた。そこにある赤みを帯びた橙色の瞳は不安に揺れていた。昨日のような気丈さは全く鳴りを潜めていた。
そして、怒りも。代わりにあるのは、ただ悔恨に似た深い悲しみだった。
「ええ、大丈夫ですよ。少し切れただけですから。掠り傷です」
女にしては少し低めの、だが、耳触りのよい声を紡いだその女は、そう言って傍にある簡素な背凭れの無い丸椅子に腰を下ろした。
そこにあるのは凪いだ空気だった。いつもと変わらない日常に溶けてしまいそうな静寂に満ちた空気。
不意に落ちた沈黙に、寝台に居る娘が焦れたように口早に言った。
「ねぇ、どうして怒らないの？　私の所為であんなことになったのに……」
娘の夕暮れ時を思わせる橙色の瞳は、対峙した相手の同じようにほっそりとした首元に回る白い包帯を見ていた。
寝台から少し離れた所にある簡素な丸椅子に腰を下ろしていた黒髪の女性は、そっと微笑むと小首を傾げた。後ろで緩く束ねられた黒髪が、馬の尻尾のように左右に揺れた。
「アリアルダさん。あなたがルスランを想う気持ちはあなただけのものです。それをどうして咎めることができましょうか。それだけ、

あなたは真剣だった。そして真っ直ぐでした」
　ただ、それを好いた相手に分かって欲しくて仕方がなかったのに。そのやり方を少し間違えてしまったのだ。
　その言葉に寝台の中の娘は小さく息を飲んだ。そして、何かを堪えるように顔を歪めるとその顔をそこにいる相手に見せまいとでもいうように再び窓の外へと向けたのだった。

　シビリークス家の玄関で刃物を手にしたアリアルダが力なく崩れ落ちたその日、姉に寄り添われながら別室に移されたアリアルダは、緊張の糸が切れたように意識を失った。
　ここに至るまでずっと睡眠不足が続いていたのだろう。食事も思うように喉を通らなかったと聞く。青白く、こけた頬を晒したまま、寝台の中で眠りに就いた己が妹の姿に姉のジィナイーダは心を痛めた。そして、枕辺に膝を着くと、すっかり女らしくなった妹の額際に掛かる髪をそっとかき上げてやった。
　夫のロシニョールから弟・ユルスナールの秘めた決意を聞かされた時、ジィナイーダは耳を疑った。ジィナイーダも妹のアリアルダがいずれはユルスナールに嫁ぐものと疑っていなかったからだ。アリアルダはユルスナールに恋をしていた。それは幼い頃から周囲の人間が意識的に、そして無意識の願望によってそうなるように仕向けてしまった結果でもあった。
　アリアルダは、ユルスナール以外の若い男を知らなかった。アリアルダは貴族の社交界でも華やかな顔立ちをした美しい娘であったから、若い男たちはこぞってその手を取ろうと躍起になったが、いつも門前払いを受けていたのだ。それは見目麗しい有力貴族の娘に悪い虫が付かないようにとする周囲の人間の弛まないお節介と言う名の努力の為でもあった。また、アリアルダが想いを寄せるユルスナールは、この国の独身貴族の中でも有能な軍人で、第七師団長を

拝命するという立派な男であったので、そのような男と比較されてしまう普通の貴族の男たちには、アリアルダに自分を認識してもらえるように仕向けるのは、中々に労力と機転の必要なことだった。

武芸大会最終日、ユルスナールが古式に則り求愛をしたことは当然のことながらジィナイーダの耳にも入っていた。試合中、その腕には、アリアルダのものではない黒い色のリボンが回っていたのだという。

黒いリボン。黒い色彩を持つ女の影。そこでジィナイーダは、少し前に王都の噂好きな貴族たちの間を賑わせた義弟の話を思い出した。

プラミィーシュレのサロンで義弟はお伽噺の【夜の精】を思わせる女(ひと)を同伴していたという。それは、それまで浮いた話の無かった義弟の背後に初めてちらついた女の影だった。思えばその頃から、ジィナイーダの中には、ある種の女の勘とでも形容すべき一抹の不安が生まれていた。

義弟は昔から独立心の強い男だった。自分の進むべき道は、自らの力で切り開いてきた。そして、生涯の伴侶と成るべき女性も、恐らく自らの手で探し出してくるだろうという予感はあった。

そしてその予想は、図らずも的中することになってしまった。それは、また、妹の初恋が破れた瞬間でもあった。

ジィナイーダは、仲の良い男親たちの徒な口約束の通り、シビリークス家の長男ロシニョールに恋をして、そして、男の元に嫁ぐことができた。貴族社会の中では、その婚姻は、往々にして政治的、経済的な意味合いを持つことが多い。そのような因習がある中で、恋愛感情を優先させた婚姻というのは珍しい部類に入るのだ。ジィナイーダは、偶々、運が良かったに過ぎないのだ。顔も見たこともないような相手に嫁ぐ場合だってあり得る。だが、そこから互いを知り合うことで夫婦として愛を育むこともできるのだ。そういう例をジィナイーダは、多々知っていた。

ジィナイーダは、妹に掛けるべき言葉を探しあぐねていた。男な

どユルスナール以外にもこの国には沢山いる。そのことを知ら示すことができればいいのだろうが、それを先に恋を実らせた自分が口にするのは却って妹の傷を抉るようで躊躇われた。

アリアルダは、昔から気の強い性質だった。笑顔の絶えない朗らかで明るい性質だった。貴族の淑女たるべく淑やかに振る舞うことを教え込まれてはいるが、その本質が変わることはない。そして、普段は規律の中で抑えられているはずのその本質が、この日、勢いよく噴き出してしまったのを姉は目の当たりにしたのだ。

アリアルダが目を覚ましたのは、翌日の昼を過ぎた頃だった。枕辺にはシビリークス家より連絡を寄越されて、余りの事態に仰天して素っ飛んで来た両親の姿があった。

丸顔で癖のある薄茶色の髪を乱した父の姿とハンカチを握り締め、薄らと眦に涙を溜めた母の顔を目の当たりにした時、アリアルダは自分がとんでもないことをしてしまったことに気が付いた。そして、両親に大きな心配を掛けてしまったことを思い知った。

「パーパ、マーマ」

「……アーダ」

自分の手をきつく握り締めていた母の眦から、一筋の涙が流れた。目を覚ました娘に母は安堵して微笑もうとしたが、咄嗟に口元を手で覆った。漏れる嗚咽を殺す為だった。

「アーダ、気分はどう？」

「……平気よ」

母親を安心させようとしたアリアルダの笑みは、どこかぎこちないものになった。

「まだ青い顔をしているわ」

母親の温かい手が、娘の顔に伸ばされた。額際を優しく撫でる。

そこで傍にいた父からも小さな声が漏れた。

「アーダ、済まないことをしたね」

それは毅然とした態度を崩さない厳しくも立派な平生の父とは思

えない程の弱弱しい声だった。
アリアルダはゆっくりと目を閉じると枕に頭を埋めながら首を緩く左右に振った。

その後、アリアルダが意識を取り戻したという報せを受けて、侍女のポリーナが術師としてアリアルダの容態を診た。少し、食事をした方がよいということで、中にいた両親は別室で待つことになった。

ズィンメル夫妻が案内されたのは、この家の立派な応接室だった。そこには、シビリークス家の主であるファーガスとその妻・アレクサーンドラ、そして、三男のユルスナールがいた。
ファーガスは竹馬の友であるラマン・ズィンメルと挨拶の抱擁を交わした。そして同じようにズィンメル夫人・アントーニナとも挨拶を交わした後、二人を来客用のソファに促した。
「申し訳ございませんでした」
斜交いの一人掛けの椅子に腰を下ろしていたユルスナールが、徐に謝罪の言葉を口にした。
「私からも謝罪をしよう。済まなかった」
この度、自分の屋敷内で起きた騒動に主のファーガスも静かに頭を垂れた。
それに慌てたのはラマンの方だった。
「止してくれ、ファーガス。それにルスランも。今回のことは我々にも責任がある」
徒に娘の心を弄んでしまったという意識は父親のラマンの方にもあった。シビリークス家のユルスナールと娘のアリアルダは正式な許嫁の関係にあった訳ではなかった。それなのに親たちや周囲の勝手な願望を子供たちに押し付けてしまったのだ。
「寧ろ、謝罪するのは私の方だ。ルスラン、キミをアリアルダに縛りつけようとしてしまったのだから」

だが、真摯な声を滲ませた父親の傍らで、
「ねぇ、ルスラン、アーダにはもう望みがないの？」
娘の気持ちを良く知る母親が藁にも縋る思いでユルスナールを見ていた。その手は不安げに夫の太い腕を掴んでいた。
「申し訳ございません」
ユルスナールは静かに、だが、毅然とした態度を崩さなかった。
「私にはもう既に心に決めた女がいるのです。その女以外に、生涯の伴侶となるべき女性はいません」
揺るがない程の真っ直ぐな眼差しにズィンメル夫妻は、己が娘に一縷の望みがないことを認めない訳にはいかなかった。
「……そうか」
可愛い娘の心中を思えば、心は苦しかったが、ここで我儘を言える訳はなかった。何よりもユルスナールには既に他に愛する女がいるのだ。そうなった以上、父親としてはこの件をどうすることも出来ない。
「お相手はどちらの方なの？」
過日もたらされた書簡には相手のことは全く触れられていなかった。娘の代わりに選ばれた女性をズィンメル夫人・アントーニナは知っておきたかった。何が娘には足りなかったのか。そして、ユルスナールの心を捕らえた女性はどのような人なのか。
「どちらの家の方？」
夫人のその問いにユルスナールは苦笑するように小さく口の端を上げた。
「いえ、貴族の娘ではありません」
「まぁ、それでは商人の娘？」
貴族の人間でないのならば、裕福な商人の娘か。それはこの王都に暮らす貴族であるならば、誰もが考えるような思考回路だった。
「いいえ」
「一体、どんな娘なんだ？」
貴族の娘でもなければ、商人の娘でもない。ならば、ユルスナー

ルの心を射止めた女性はどのような人なのだろうか。父親のラマンも興味を惹かれたように身を乗り出した。
「ふふふ。とっても可愛らしい方よ？」
そこで、ズィンメル夫妻の対面のソファに優雅に腰を下ろしていたシビリークス夫人・アレクサーンドラが含み笑いをして、長い付き合いのある友人たちを見た。
「まぁ、サーシャ、あなたはご存じなのね？」
アントーニナが、アレクサーンドラを驚きと共に見た。
「ええ。今、うちに滞在しているの」
――――ねぇ、あなた？
そう言ってアレクサーンドラは悪戯っぽい光をその淡い空色の瞳の中に覗かせると隣の座る夫のファーガスを仰ぎ見た。
それにつられるようにズィンメル夫妻も対面のファーガスに注目した。
「ルスラン」
ファーガスは、だが、そこで自身は口を挟む事はせず、続きを当の息子に振った。最後まで責任を果たせということだろう。
ユルスナールは父親の意図を読み取ると、話を引き継ぐようにゆっくりとズィンメル夫妻の方を見た。
そこで不意に柔らかく微笑んだ。その微笑みは、ユルスナールのことを幼い頃からよく知るズィンメル夫妻にとっても驚くべきものだった。昔から感情表現の乏しいと評されることの多いシビリークス家三男坊が初めて見せた心からの笑みだった。
「家柄も、後ろ盾もない、身一つの女(ひと)です。この国の者でもありません。強いて挙げるならば、術師でしょうか」
「まぁ」
驚きに目を見開いたアントーニナの横で、夫のラマンも呆けたように小さく口を開いた。そして、その真意を確かめるように友のファーガスを見た。
驚きを隠せない友人夫妻にファーガスはたっぷりとした髭に覆わ

れた男らしい口元を綻ばせて愉快そうに笑った。
「先日、晴れて術師になった新米だ。だが、優秀と聞いている」
「……術師」
この国で、術師として登録されている女性は多くはなかった。王都には、術師を養成する専門の学問所があるが、そこで学ぶ生徒たちの多くは、王都にいる貴族や裕福な町人の子息たちだった。
「ルスラン」
「ああ、そうですね。実際にご覧になって頂けた方が早いかもしれません」
目配せをしたファーガスの意図を汲み取ったユルスナールは、鷹揚に頷くと椅子から立ち上がり、窓辺に歩み寄るとガラス窓を開けた。
そして、その場から外に向かって良く通る声を張り上げた。
「リョウ！　【イディーシュダー（こっちに来い）】！」
それから程なくして、この応接室にやって来た人物にズィンメル夫妻は、良くも悪くも度肝を抜かれることになった。
だが、それは同時にその相手が自分たちの娘がどう逆立ちしても敵わない真逆の魅力を備えた女（ひと）であることを認める契機にもなったのだった。

嵐のような一夜から明けて、ゆっくりと起床したリョウは、遅めの朝食をユルスナールと共に取ると、昨日の顛末を聞きつけて慌てて駆け着けて来たアリアルダの両親ズィンメル夫妻との話があるとのことでファーガスがいる応接間へと向かった。
昨晩、ユルスナールと共に過ごした濃密な一時の証である気だるい身体の余韻を引きずりながらも、リョウは満ち足りた気分で目覚めた。
残っていた秘密を全て残らず男に打ち明けた。そして、その非情

なまでの過酷な定めを相手に伝えた上で尚、リョウの人生は丸ごとユルスナールに受け入れてもらえたのだ。
そうしてリョウは男の手を取ることを決心した。ユルスナールの妻になることを受け入れた。
――――残された時間が限られているのならば、それを全て俺に寄越せ。それが定めならば、俺の前で逝け。
今でも身を焦がすような熱い男の純粋な想いが耳の奥に残っていた。

食事を終えた後、この所、日課になっているように番犬のカッパとラムダを連れて、庭先を散歩した。そして、偶に二頭と追いかけっこをしていたのだが、リョウがいつになく気だるげにしていることに早々に気が付いたカッパとラムダの二頭は、その理由に思い当たる節があるのか、したり顔で目配せをし合い、リョウに自分たちに寄り掛かって読書をするなり、のんびりするなりして休むようにと言った。
リョウは二頭からの並々ならぬ気遣いに気まずそうに眦を赤らめながらも素直に頷いて、以前のように部屋から持ち出した大きな布を草の上に広げて、そこに腰を下ろした。
そうやって二頭と他愛ないお喋りをしながら日向ぼっこをしつつのんびりと過ごしていると、母屋の方の窓が開いて、そこから馴染み深い男の顔が覗いたかと思うと自分の名を呼ぶ男の声を聞いたのだ。

リョウは少し緊張した。昨日の今日で、ユルスナールはアリアルダの両親と話し合いするとのことだった。そして、自分がそこで呼ばれるということは、新しい婚約者を紹介するということなのだろう。
アリアルダの両親に自分の姿はどのように映るだろうか。娘の恋が破れることになった原因として憎しみをぶつけられることになる

のだろうか。
　しかし、それはリョウがきちんと向き合わなければならないことだった。真正面から。ユルスナールの手を取るということは、アリアルダとその家族が自分に対して抱くであろう感情を受け止めなければならない。たとえそれが負の感情であっても。それは避けては通れないことだった。
　許してもらえるとは思っていない。それでも自分がユルスナールを心から慕い、その後の人生を男と共に過ごすことを決めた選択が、生半可なものではないことを知ってもらいたいと思った。

　半ば不安を抱えながら緊張した面持ちで応接室を訪ねれば、詰られることを覚悟していたリョウの予想に反して、アリアルダの両親であるズィンメル夫妻は、リョウに落ち着きのある抑制された態度で接してくれた。
　そして、男物のシャツと上着の合間から覗く白い包帯を目に留めた父親のラマンは、リョウの手を握り締めると苦渋に満ちた顔をしながらも感謝の言葉を口にした。
　――――ありがとう。娘を守ってくれて。
　自暴自棄になった娘が自害をしようとした。その時、本来なら娘が受けるはずの傷を術師であるリョウが引き受けてくれたということを知ったのだ。
　ラマンは心が震えた。己が娘と然程変わらない、いや、娘よりも一回りは華奢な身体で、娘を守ってくれたのだ。何という寛大さ、そして懐の深さだろうか。
　ラマンの目には、その首にある包帯が痛ましく映った。同じような娘に傷をつけてしまった。刃物の傷だ。きっとそこには薄らと痕が残ってしまうだろう。
　抑え切れない気持ちに頭を垂れ、肩を震わせた父親に、リョウは労わるようにその肩に手を置くと言った。
「どうかお顔を上げてください。怪我は大事ありません。ほんの掠

り傷ですから」
　実際は思ったよりも深かったのだが、そう偽りを口にした。それを声高に告げる必要は全くない。優しい嘘だった。
　そして、穏やかな表情のまま言葉を継いだ。
「それよりも謝らなくてはならないのはワタシの方です。昨日のことに関しては、その原因の一端はワタシにもあるのですから」
「リョウ、それは違うぞ」
　ユルスナールが鋭く訂正をするように口を挟んだが、それを笑って制した。
「いいえ、同じことです」
　そこでリョウはズィンメル夫妻が座るソファの前に片膝を着いた。そして、真っ直ぐに誠実さを滲ませた漆黒の瞳を持って夫妻を見上げた。
「ですが、ワタシは、ルスランを諦める積りは微塵もありません。アリアルダさんには申し訳ありませんが、これがワタシの本心です」
　ハンカチを握り締めたアントーニナの拳が震えていた。これほどまでの静かな、そして確固たる心を示されては、それを認めない訳にはいかなかった。
　ラマンはそっと片膝を着くリョウの肩に手を置いた。そして、もう一度、同じ言葉を繰り返した。ズィンメル家当主に相応しい毅然さと一人の娘の父親としての誠実さと慈しみを持って。
「キミにも済まないことをしたね。ありがとう。娘を守ってくれて」
　その言葉にリョウはそっと微笑みを浮かべた。その眦には、薄らと涙が滲んでいた。

　その後、ユルスナールはアリアルダが休む部屋に赴いた。そこで改めて自分の気持ちを告げるとのことだった。
　その間、リョウはシビリークス夫妻とズィンメル夫妻と共に応接

間に居たのだが、何故かユルスナールとアリアルダが話をしているその場に呼ばれることになった。アリアルダがリョウと二人きりで話をしたいとのことだった。

序でにお茶の用意をして欲しい。ユルスナールのその言葉に頷いて、用意を整えた後、アリアルダが休んでいるという部屋に入った。

半日振りに顔を合わせたアリアルダは、どこか憑きものが取れたような顔をしていた。昨日のような厳しいまでの剣呑さは見受けられなかった。小柄な体躯が一回り小さくなったような、そんな印象を受けた。例えるならば、萎(しぼ)んだ風船のようだった。

その変わりようを見たリョウは、昨日の出来事をアリアルダなりに反省しているのだろうと思った。一夜明けて落ち着きを取り戻してみれば、自分のしたことが大変なことだということに思い至ったのかもしれない。

お茶を用意して室内に入れば、ユルスナールが無言のまま一つだけ頷いて、そして部屋を後にした。どこか案じるようにこちらを見下ろした瑠璃色の瞳にリョウは心配要らないと微笑み返した。

そして、淹れたお茶をアリアルダの居る寝台脇の小さなテーブルに置いた。

こうして場面は冒頭に戻る。

お茶を淹れたものの、アリアルダは寝台の中に身体を起こしたまま、口を開かなかった。

沈黙が落ちた。だが、それは耐えられないものではなかった。リョウの方も黙って相手の出方を待った。

それから暫くしてアリアルダは淹れられたお茶に手を伸ばし、一口飲んだ。

そして、アリアルダの一人語りが始まった。

訥々と漏れ出した気持ちの切れ端。手探りをするように散らばったその破片を拾い上げ、繋げて行った。

その日、リョウは初めて素のアリアルダに向き合った気がした。

それから何故か、他愛ない話をすることになった。

「ねぇ、どうやってルスランと知り合ったの？」

その問いにリョウは少し驚いて、そして一瞬の狼狽を誤魔化すように微笑んだ。

「お知りになりたいんですか？」

恋敵の相手との馴れ初めなど、知っても面白くはないだろうに。

「だって気になるんですもの」

寝台の中で、アリアルダは小さく口を尖らせた。そうするとアリアルダはずっと幼く見えた。

「私がルスランに出会ったのは、今年の春の終わりのことでした」

そう言って、リョウは当時を懐かしく思い出すように目を細めた。

「当時、一緒に暮らしていた人が旅立って、一通の書簡を預かったんです。これをとある人物に渡してくれと。その相手がルスランでした」

切っ掛けはそんな些細なことだった。普通ならそこで終わり得た掠めるような出会いだった。

「私はこのようにズボンを穿いて男と同じ格好をしていましたから、北の砦滞在中は、男として過ごしていました。誰も疑問に思わなかったんですよ？」

だが、その中でユルスナールだけは違ったのだ。ユルスナールだけは、唯一、リョウが女であることを暴いた。獣のような鋭い本能で。

「ねぇ、北の砦ってどんなところなの？」

北の砦は、この国の北方の辺境。ごつごつとした岩壁の続く自然の要害だ。峻厳なる険しい山脈を遥か前方に望むこの国最北端の軍事拠点で、殺風景な場所だった。王都に安穏として暮らす貴族の娘には想像が付かないに違いない。

リョウは、自分が知る北の砦の雰囲気を思い出すように窓の外へ

視線を投げた。
「賑やかな所ですよ。駐屯しているのは、若い兵士たちが多いですからね。皆、個性的で元気な若者ばかりです」
「男ばかりなのでしょう？」
「ええ」
「そんな中にいたの？」
「ええ」
むさ苦しい男ばかりの中に。そのような副音声がはっきりと聞こえてきそうな雰囲気にリョウは微かに笑った。
「ワタシはこの見てくれですから。兵士たちの中では一番下っ端の弟分みたいな感じだったようで。よく厩舎番のお手伝いをしていました」
そこで何故か話は思わぬ方へと逸れた。自由気ままな貴族の娘との会話は、ロシニョールの二人の子供たちとの会話のように脈絡なくあちらこちらに飛んだ。
「あなた、馬に乗れるの？」
「あー、ちゃんとは乗れませんね。多分」
これまで馬に乗ったのは、ほんの数えるほどで。初めてはユルスナールの鞍の前だった。その次は、鞍の無いキッシャーの背だ。あれは馬に乗るというよりも首にかじりついていただけだったので乗馬とは程遠いだろう。
「まぁ、なのに厩舎番？」
抑揚の付いた問い掛けにリョウは不意に真面目な顔をした。
「おかしいですか？」
「変なの」
「アリアルダさんは乗馬を？」
「ええ。一人では無理だけど、昔、ルーシャに教わったわ。あの黒毛の背に乗ったの」
「キッシャーですか？」
「そう。あの逞しい大きな黒毛」

寝台の中にいるアリアルダは、そこでじっと傍らに座すリョウの方へ顔を向けた。
「あなた……あの黒毛みたいね」
不意に変わった矛先にリョウは目を瞬かせた。
「そうですか？」
キッシャーに似ていると言いたいのだろうか。恐らく髪と瞳の色から。
「ルーシャは昔から、殊の外、あの黒毛を気に入っていたわ。騎士団に入る前から」
そう言って再び窓の外を眺めた。
――――だから、あなたもそうなのね。
最後に付け足された言葉は余りにも小さくて、少し離れた所にいるリョウの耳には届かなかった。
それから再びリョウの方を向いたアリアルダは、小首を傾げた。
「あなたって不思議ね。見た目は私と大して変わらない感じなのに、とっても年寄り染みた感じがするんですもの」
アリアルダの率直で遠慮の無い言葉にリョウはなんとも言えない気分で笑った。そして、取って置きの秘密を暴露するように片目を瞑った。
「こう見えてワタシはそれなりに年を取っていますからね」
「え……あなた、幾つなの？」
その打ち明けは思いも寄らないことであったのか、アリアルダの夕焼けのような瞳が大きく見開かれた。
対するリョウは誤魔化すように笑った。
「アリアルダさんよりもずっとずっと上ですよ」
「まぁ……」
アリアルダは心底、驚いたようだった。
「……そう」
だが、次の瞬間には、何かを諦めるように柳眉を寄せて、そして、その厚みのある唇に微笑みの残骸のようなものを浮かべていた。

「あなたって変な人。あんなにあんなに、あなたのことが……」
――――――憎くて、疎ましくて仕方がなかったのに。
続くかに思えた言葉は音になる前に掻き消えた。

と言うのも。
その時、部屋の扉を小さくノックする音がして、室内から了承の返事が聞かれる前に重厚な扉が開き、そこから銀色の光輝く頭髪が見えたからだ。そして、直ぐに室内にいる二人が良く知る男の顔が覗いた。
「終わったか？」
顔を覗かせたユルスナールに寝台の中にいたアリアルダは、呆れた顔をした。
「まぁ、ルーシャ。まだ終わっていないわ。邪魔をしないでちょうだい」
ぴしゃりと言い放たれた険もほろろの応対にユルスナールは、ほんの一瞬、虚を突かれた顔をしてから、
「ああ、すまん」
即座に謝った。そして、どこか困惑したように眉を下げた。
そこへ助け船を出したのは、リョウの方だった。
「ルスランもお茶をどうですか？　アリアルダさんは？」
「じゃぁ、いただくわ」
「はい」
扉を中途半端に開いたまま半身を覗かせて怪訝な顔をしたユルスナールにリョウは柔らかく笑った。
「ルスラン、お許しがでたようですよ。中へどうぞ」
リョウは、アリアルダの寝台の傍にあった椅子をユルスナールに勧めると再びお茶の用意をした。そして、手際よく発熱石で温めたお湯を茶器に注ぐと然るべき時間蒸らしてからカップに注いだ。
淹れたお茶をまずアリアルダに手渡した。
そうやって、三人で喉を湿らせた。

「……いい匂い」
「ああ。中に少し薬草を入れているのですよ。香り付けの為に」
「どこで買ったの？」
「いえ、これは外で求めたものではなくて、こちらにある茶葉にワタシが家で栽培している薬草を加えたものなんです」
その昔、スフミ村のリューバから教わったやり方だった。
「そう。美味しいわ」
「お口に合ったようで何よりです」
リョウは小さく微笑むと顔を上げた。
「今度、薬草を少しお届けしましょうか？　いつになるかはしかとお約束は出来ませんが、同じように乾燥させたものが家に帰ればあるので、もしよろしければ。伝令を飛ばせば、ここまでは直ぐですし」
「まぁ、本当？」
「ええ」
「分かったわ。じゃぁ約束ね、きっとよ？」
アリアルダはそう言って人さし指を立てるとそれをリョウの方に向けて差し出した。
リョウはその子供染みた仕草を内心、微笑ましく思いながらも椅子から立ち上がり、寝台の傍に歩み寄ると差し出された指の腹に同じように自分の指の先をちょんと触れさせた。
その場で、アリアルダは顔をユルスナールの方へ向けた。
「ルーシャ、認めてあげるわ。あなたがこの人と結婚することを」
それは上から目線で横柄なもの言いであるには違いなかったが、アリアルダなりの精一杯の虚勢でもあったのだ。
ユルスナールは口にしていたお茶を思わず吹き零しそうになったが、直ぐに表情を取り戻すと、安堵したように口元を綻ばせた。
「そうか。ありがとう」
アリアルダは、そこで目を伏せると力なく笑った。
「まだ直ぐに諦めることはできないけど……」

「アリアルダさん、無理に想いを捨てることはありません。やがて時が折り合いをつけてくれるでしょうから。ワタシがこのようなことを口にするのはなんですが」

そう言って相手を励ます言葉を口にしたリョウにアリアルダは、驚いて、そして、どことなく呆れたような顔をした。

「あなたってつくづく変な人。お人好しにも程があるわ。恋敵を励ますなんて。馬鹿じゃないの？」

だが、辛辣なもの言いの中には、昨日のような毒気は含まれてはいなかった。精々、厭味のような、それでもからりとしたものだった。それが、アリアルダなりの強がりであることが見てとれて、リョウは嬉しそうに笑った。

「ふふふ。そうですね」

アリアルダが、少なくとも自分のことを認めてくれたことが嬉しかった。

そうして昼下がりの午後は、昨日とは打って変わって、予想以上に穏やかに過ぎて行ったのだった。

2020

野分のあした（後書き）

前回の一周年記念の際には、多くのお祝のお言葉、そして温かい励ましのお言葉を頂きまして、本当にありがとうございました。この拙作が多くの皆さまに愛されておりますことを実感し、その書き手であることに多大なる幸せを感じております。本当にここまで続けてきて良かったと身に沁みて思いました。読者の皆さまには改めて心より御礼申し上げます。

さて、次回は少しＩｎｓｏｍｎｉａ　の方に脱線しようかと考えています。更新の折には活動報告の方に載せますので、よろしければどうぞ、お付き合いください。

2021

祝賀会への切符

翌日、アリアルダは両親に伴われて実家に帰って行った。

その日の午後、シビリークス夫人アレクサーンドラがリョウを呼んだ。

「ねぇ、リョウ。どちらがいいかしら？」

侍女に案内された部屋を覗くと、アレクサーンドラは大きな鏡の前でドレスを己が身に当てて、おっとりと微笑んでいた。

そこは、アレクサーンドラの私的な一室だった。衣裳部屋と呼ぶべき場所かもしれない。広い室内に大きな鏡が設けられ、部屋の奥、両扉の内、片方の扉が開いた先には、沢山の色とりどりの衣装が吊るされて、保管されているのが垣間見えた。夫人の傍らにはもう二人、身の回りの世話をするのだろう、同じお仕着せに身を包んだ側仕えの侍女が控えていた。

夫人が指示した所には、もう一着、ドレスが広げられていた。夫人が肩に宛がっているのは、淡い空色のもので、もう一着、長椅子の上に掛けられているのは、薄い紫色のものだった。色は、発色の良い明るめのものだが、施されている装飾が地模様の入った織生地の他は、繊細なレース編みの飾りのみという落ち着いたものだった。

「どのような所でお召しになるのですか？」

どちらも上等な部類のドレスに見えた。形としては共に胸元が大きく開いたもので、胸の直ぐ下からは、身体の線が程良く隠れるようにたっぷりとした衣が続いていた。

どちらがいいかと聞かれても、その目的が分からなかったので返答のしようがなく、そのような質問をした訳だが、かと言って、貴族階級の細かいしきたりを良く知らないリョウには、それを聞いても判別はつかないのかも知れないとも思った。だが、まぁ、それでも二つの内の一着を選ぶのだから、どちらもその予定に合うものを

選び出しているのだろう。
目的を尋ねたリョウに夫人は鷹揚に首を傾げた。
「あら？　ルーシャは何も言っていなかった？」
「は…い？」
何か特別な催しでもあるのだろうか。ここでユルスナールの名前が出てきて、リョウは益々首を捻った。ユルスナールからは何も話を聞いてはいなかったからだ。
「明日の夜、宮殿で祝賀会があるの」
「祝賀会……ですか」
「そう」
アレクサーンドラの話によれば、それは国王主催の夜会（パーティー）で武芸大会の団体戦と個人戦の優勝者や上位入賞者たちが招かれる毎年この時期恒例の催しであるとのことだった。そして、王都にいる貴族たちはその殆どが出席するらしい。それに団体戦に出場した軍部の兵士たちも招かれ、日頃の鍛錬や任務を労う（ねぎら）目的もあるそうだ。そこで団体戦、個人戦の優勝者は国王（ツァーリ）直々のお言葉を賜る栄誉に浴するらしい。栄えある晴れがましいことなのだそうだ。
成る程、今年の武芸大会で個人戦優勝と団体戦での優勝を果たしたユルスナールは、多くの招待客の中でも随一の注目株ということになるのだろう。そうすると当然、名家で宮殿に近い所にいるシビリークス家の人々も出席をするのだろう。
「皆さんも参加なさるんですね」
「ふふふ。そうなの。だからね、この日の為にドレスを用意していたのだけれど最後までどちらにしようかと迷ってしまって」
そう言って夫人は、楽しそうに笑った。大きな姿見の前でドレスを広げて見せる様は、まるで可憐な少女のようで、年を重ねても尚このように御洒落心を失わないということがアレクサーンドラをいつまでも若々しく見せている秘訣なのだろうと思った。
「そうですねぇ。ワタシはそちらの空色の方が素敵だと思います」
リョウはアレクサーンドラが手にしている方のドレスを指した。

そのドレスの生地は、ちょうど夫人の瞳の色より一段暗い色合いなのだが、光沢がありながらも年相応の落ち着いた感じで厭味がなく、夫人の肌の白さをより際立たせるように思えた。
「そう？　リョウもそう思う？　じゃぁこちらにしようかしら。ああ、でもこちらも捨て難いのよねぇ」
　鏡の前で小首を傾げる夫人の様子をリョウは何とも言えない微笑ましい気分で眺めていた。ふと視線を逸らして、目が合った侍女とは思わず苦笑い。こうしていつも衣装選びには殊の外、時間が掛かっているのだろう。

　そのような中に妻を尋ねて夫のファーガスがひょっこりと顔を出した。
「サーシャ」
　妻を愛称で呼んだ夫にアレクサーンドラは相好を崩した。
「まぁ、あなた。ねぇ、あなたならどちらがいいとお思いになって？」
　そして、夫にも同じ問いを発した。
　その瞬間、ファーガスの片方の眉がくいと跳ね上がった。ファーガスはそろりと傍らにいたリョウに目配せをした。ああ。また始まった。そのようなところだろうか。しかしまぁ、そのような所も含めて奥方を愛しているのだろう。
　ファーガスは、無言のまま指でどちらを勧めたのかとリョウに尋ねた。リョウはさり気なさを装って、左の淡い空色の方を指した。こういう時は多数決に限るのだ。
　リョウの選択を知ったファーガスは何食わぬ顔をして言った。
「ああ。そちらの空色の方がいいな」
　すると予想通り、
「まぁ、やっぱりあなたも？　じゃぁ今回はこちらにするわね」
　あれだけ悩んでいたのが嘘のように、夫人が決断をした。
　こうして一先ずドレス選びが終わったことに控えていた侍女もフ

ァーガスも、そしてリョウも、そっと胸を撫で下ろしたのだった。

それから不意にファーガスがリョウを見下ろした。

「ああ、リョウ。お前はどうする？」

「何がですか？」

ファーガスから尋ねられたことの意味が分からずに首を傾げれば、

「まぁ、そうね。この際だからリョウもいらっしゃい。ええ、その方がいいわ！」

アレクサーンドラはその思いつきに己が両手を胸の前で合わせると途端に喜色を浮かべた。

リョウは内心、狼狽えた。それは、もしかしなくとも明日の祝賀会に自分も参加するということなのだろうか。

こちらを見下ろしたファーガスを前にリョウは慌てたように両手を前で横に振った。

「とんでもございません。ワタシは子供たちとお留守番をしていますから」

夜会であるから当然、幼い子供たちは参加をしない。出掛ける両親の代わりに侍女たちが面倒を見ることになるのだろう。リョウは子供たちと一緒にいようと考えた。宮殿で開かれる夜会など華やか過ぎて自分には分不相応だ。それに着て行くような服もない。【プラミィーシュレ】滞在時、【エリセーエフスカヤ】で煌びやかな空気に当てられて肩が凝ったことを思い出して、とてもじゃないが無理だと思った。それに今回はあの時の比ではないのだ。国王直々のお声掛かりで宮殿で開催される夜会だ。王都にいる貴族たちが一堂に会することになるのだろう。

リョウはこれまでに垣間見た宮殿外縁部の華やかな装飾が散りばめられた空間を思い出していた。宮殿区画内の一番端の部分でもそうなのだ。夜会が開かれるような場所ではもう目がちかちかとして眩いばかりで目が開けられない事態になるかもしれない。

そんな恐ろしい所に出掛けるのは御免だと恐々としていたのだが、

「リョウ、いい機会だ。共に来るがいい」
ファーガスが簡潔に言った。
詰まり、ユルスナールが身を置く世界がどのような所なのか。そして、シビリークス家に入るということはどのような世界と関わりになるのか。それを肌で感じ取った方がいいということなのだろう。
「今回は国王（ツァーリ）も顔を出す。この国のことを知りたいのだろう？　この国を治める治世者の顔を拝んでおくといい」
ファーガスの言葉に妻のアレクサーンドラも嬉々として合槌を打った。
「そうよ。こんなときでもなければ王（ツァーリ）のお顔を拝めないもの。元々、ルーシャは必要以上に社交界には近寄らなかったけれど、今後はそうも言っていられなくなるわ。だから今回は顔見せには絶好の機会になると思うわ、ねぇ、あなた？」
「ああ。そうだな」
リョウが茫然とするうちにファーガスとアレクサーンドラの間では話がどんどん具体的に進んで行った。
「いや……あの」
「なに、ちょっと覗いて中の空気を肌で感じてみればいい。そんなに気を張ることもない」
ぎょっとして顔を青くしたリョウの背中に大きな手を当てて、ファーガスは大したことではないと宥めるように軽く叩いた。
「ですが、ワタシにはそのような晴れがましい場所に着て行く服がありませんので」
だから、出席は無理だと尤もな理由を口にした積りだったのだが、
「ああ、それならば問題ない。サーシャのものを借りればいい。少し詰めれば大丈夫だろう」
「ええ。それでも構わないわ。ああ、でもルーシャはちゃんと用意しているようなことを言っていたわよ。そうそう、以前着たドレスを持ってきたって言っていたかしら」
ファーガスに続いたアレクサーンドラの発言にリョウは耳を疑っ

た。

もしかしなくとも、それは【プラミィーシュレ】で身に着けたあのドレスのことを指しているのだろうか。【シーニェイェ・マルタ】の生地で作った。あれは北の砦のユルスナールの部屋にある衣装箪笥（クローゼット）の中に入れてあったはずだ。あの一式を持って来たと言うのだろうか。それが本当ならば、何とも用意が良すぎるだろう。

「【プラミィーシュレ】の時の……ですか？」

半ば唖然と恐る恐る口にしたリョウの横で、

「ふふふ。噂の【夜の精】の姿を私たちも見られるのね。楽しみだわぁ」

そう言って柔らかく微笑んだアレクサーンドラとその横で穏やかに目を細めているファーガスに、リョウは自分の祝賀会への参加が本決まりになってしまったことを認めない訳にはいかなかった。

そして、その日の夕方、念の為【アルセナール】より帰宅したユルスナールに明日のことを尋ねれば、ユルスナールは形の良い眉を顰めて、『また先を越された』とぼやいたのだが、『ああ、お前も連れて行く積りだ』とシビリークス夫妻の言葉を肯定した。そして、案の定、自室の衣装箪笥（クローゼット）の中から【プラミィーシュレ】滞在時に着たドレス一式をリョウの目の前に取り出して見せたのだ。勿論、ご丁寧にも対になっている履物である【トゥーフリ（パンプス）】まであった。

「ルスラン、どうしてこれを？」

北の砦にあったはずのものを王都にまで持ってきたのか。

その問いに、ユルスナールは万が一のことを考えてそれらを持参したのだ返した。

万が一――要するにユルスナールとしては事前にこのような事態を予想していたということなのだろう。

とんでもないことになったと急に不安そうな顔をしたリョウに、ユルスナールは心配することはないとその頬に手を宛がいながら柔らかく微笑んだ。

ユルスナールは、【プラミィーシュレ】でのことを思い返して、リョウが驚くほど淑女らしく振る舞えることを知っていた。以前、リョウがどのような暮らしを送っていたのかは皆目見当が付かなかったが、王都に暮らす流行に敏感な街娘も足元に及ばない位のしっかりとした素地を持っていると思っていた。

【エリセーエフスカヤ】では上品に微笑み、貴族の男連中の誘いを実に感心するほどそつなくあしらっていた。言葉使いも女らしく丁寧なものに変わっていた。

普段のリョウは基本的に丁寧でややもすれば堅苦しい言葉を使った。元々、言葉を教わった相手があのガルーシャ・マライであったし、普段から言葉を交わす獣たちはセレブロのようにかなり古めかしい言葉使いをすると聞いている。だが、北の砦にいる時は、基本形は変わらないながらも、若い男が使うようなものに変わっていた。恐らく、非常に耳が良く、そして器用な性質なのだろう。対峙する相手と場所に合わせて言葉だけでなくその振る舞いに至るまで、まるで演じているかのように変化させているのは大したものだった。それを然程苦労なく、ごく自然にしてみせるのだ。そして、閨の中では、普段の凛とした物腰が嘘のようにぐずぐずに甘くなり、甘えたように口調がより砕けたものに変わるのだ。その時の口調が、ユルスナールは堪らなく好きだった――というのは余談であるが。

また、言葉使いだけでなく、リョウは食事をする際の作法も洗練されていた。器用に【ノーシュカ（ナイフ）】と【ビールカ（フォーク）】を使う。どこに出しても恥ずかしくない位だとユルスナールは思っている。後はこの国の貴族の習慣や宮殿内のしきたりを教えれば完璧になるだろう。

煌びやかで人の多い所は苦手である。そう言って困った顔をしているリョウを余所にユルスナールはそのようなことを澄ました顔の下で考えていた。

堂々としていればいいのだ。自信を持って。リョウは既にそれだけのものを持っている。

だが、本人はかなり控えめな性質なので（ともすれば控え目過ぎる程だ）、『とんでもない。恐れ多いことだ』と慌てふためいている。そういう慎ましやかさもユルスナールはリョウの愛すべき美徳だと思っていた。

それにユルスナール自身、今回の祝賀会への出席はいい機会だと思っていた。リョウを伴うことでユルスナールの正式な婚約者であることを周囲に知らしめることが出来るからだ。自分に決まった相手がいることが分かれば、これまでせっせとその方面での渉外活動をしていた貴族連中は諦めるだろう。そして、何よりもリョウの存在を周囲に知らしめることが出来るのだ。特に妙な企てをしていると思われる神殿の神官たちに対してはいい牽制になるだろう。

明日の夜会は、神官たちも多く招かれることになっていた。リョウの後ろにシビリークス家があることを示せば、迂闊には手を出せまい。このような所で実家の名前が良いように作用するとは思ってもみなかったが、この際、使えるものはなんでも利用する積りだった。

「リョウ、大丈夫だ。明日の午前中にでも儀礼的なことをお浚いしておこう」

「……分かりました」

ユルスナールがそう言えば、リョウはもうこの件は決定事項なのだと諦めたのか、ぎこちないながらも少し緊張気味に微笑んだ。

こうやって少しずつ、リョウには自分が身を置く世界のことを、そして、この国の中枢に近い所のことを知ってもらいたいと思った。リョウが考えているよりも恐らく、この貴族社会が、柔軟で懐が深いということを知ってもらいたかった。上手く行けば国王（ツァーリ）の姿も遠目に垣間見ることが出来るかもしれない。王族は連綿と長きに渡って続くこの【スタルゴラド】を治める一族だ。その良い所も悪い所も含めて、今あるこの国の現実を見てもらいたいと思った。

夕食前にユルスナールとはそのような遣り取りがあった。

そして夕食後、リョウはシビリークス家の女たち、夫人のアレクサーンドラと長兄の妻ジィナイーダ、そして次兄の妻、ダーリィヤと束の間の時を過ごしていた。

話題の中心は、貴族の若い娘たちの間の流行や明日の打ち合わせだ。装飾品（アクセサリー）をどうするか、髪形をどうするか。そのような男にとっては取るに足らないことだが、女にとっては実に切実な議題でおしゃべりをしながら過ごしていた。

リョウにとっては、それはこれまで忘れていた女心を刺激されるものだった。女友達と服や流行を話題に他愛ないお喋りという名の情報交換をする。昔の楽しくて軽薄ですらあった時を思い出させるには十分だった。懐かしい感覚だ。大勢の女たちに囲まれてワイワイとおしゃべりをするのは正直な所、余り得意な方ではなかったが、シビリークス家ではそれなりに楽しんでいた。何よりも気ままで基本的に善良で優しい女たちだ。どこか貴族らしい能天気さもリョウは嫌いにはなれなかった。元よりのんびりとした気ままな性質でもある。こういう空気感は肌に合っていたのだ。

母親のアレクサーンドラも二人の兄嫁たちも然るべき教育を受けた聡明な人たちだった。特に次兄ケリーガルの妻であるダーリィヤは、上品で落ち着きのある淑女の見本のような女（ひと）だった。アレクサーンドラとジィナイーダのあちこちに飛びながら絶え間なく続くおしゃべりを柔らかな微笑みと共に聞きながら、脱線し過ぎる話をそれとなく元の軌道に乗せるように修正してみせるのだ。とても聞き上手で、俯瞰的に場を眺めることが出来るのだろう。決して出しゃばる訳ではないが、ダーリィヤが居ることで、会話にメリハリが付き、浅いお喋りの内容にも時折ハッとさせられるような深い洞察がなされたりする。ようするに好き勝手な方向に行こうとする二人の手綱をよく引き絞り、的確に場を作り出しているのだ。それをごく

自然に当たり前のようにさり気なくしてみせるのだ。とても知的で頭の回転が速い人なのだとリョウは感心することしきりだった。

シビリークス家の三兄弟の中でも次兄のケリーガルは、代々軍人を輩出する武ばった所のあるこの家で、唯一軍人にならずに武ではなく文を磨き、財務官になっていた。柔らかい当たりだが、中々に強かで抜け目ない人物であることをこれまでの遣り取りからリョウは感じていた。そして、その妻であるということは、そういう次兄のお眼鏡にも敵う素晴らしい女(ひと)なのだろうとこれまでの短い邂逅の中でも感じていたのだ。

「そうだわ、リョウ。【プラミィーシュレ】では髪はどうしていたの？」

アレクサーンドラからの急に降って湧いたような振りにリョウは内心苦笑しながらも答えた。【エリセーエフスカヤ】でのことを聞かれていると思ったからだ。

「上の方に束ねて巻いてもらいました」

あの時は、仕立屋の妻、クセーニアが色々と面倒を見てくれたのだ。当時、クセーニアは身重だった。あれから約二月半は経過している。クセーニアは無事新しい家族を迎えることが出来たであろうか。

「じゃぁ、明日もそうした方がいいかしらね。その細い項を隠しておくのは勿体ないもの」

「…ですが、まだ傷が完全に癒えた訳ではないので」

首に巻いている包帯の下には、いまだ刃物による刃傷の痕が付いていた。傷は完全に塞がってはいるが、見るものが見れば、それが何による傷かは分かってしまうだろう。それは貴族の婦女子たちには無縁のもので、きっと眉を顰めてしまうようなものかもしれない。

その辺りの心配を躊躇いがちに口にすれば、

「それなら後れ毛を脇から垂らせばいいわ。アクセントにもなるし、上手く隠れると思うわ」

次兄の妻ダーリィヤがおっとりと微笑みながら助言をくれた。
包帯を巻いたリョウの首周りへ一瞬、痛ましげな視線を投げたが、女たちはその事には触れなかった。それを有り難く思った。
「そうですね」
相手からの好意を無駄にはしたくない。リョウもそっと微笑み返していた。
そして話題を変えるようにジィナイーダが言った。
「本当にあなたの髪はさらさらしているのね。素敵だわぁ。まるであの黒毛みたい。ほら、ルーシャが乗っている」
感嘆に似た溜息混じりの言葉にリョウは昨日のアリアルダとの一件を思い出して微笑んだ。アリアルダもリョウを見てユルスナールの黒毛馬キッシャーのことを口にしたのだ。こういう所は姉妹ということなのだろう。
こういうのも偶には良いかもしれないとリョウは思い始めていた。女であることの特典を余すことなく活かし、その恩恵に預かることができるのだ。それはリョウが半ば無意識に、そして半分は意識的に忘れていたことでもあった。こうなれば、この目でしかと貴族という人たちが身を置く社会を見ておきたいという気になっていた。

こうして女たちが実に女らしい話題でおしゃべりに興じている頃、ファーガスの書斎にはいつものようにこの家の男たちが顔を揃えていた。其々、グラスの中に薄く注がれた琥珀色の酒【ズブロフカ】を舐めながら、定位置となる場所に四人のシビリークスたちが腰を落ち着けていた。
「リョウを連れて行くんだって？」
口火を切ったのは次兄のケリーガルだった。
「ええ。その積りです」
話題は、勿論、明日の夜に宮殿で開かれる祝賀会のことだった。

「楽しみだね。ねぇ、兄上。噂の【夜の精】を拝めるのだから」
以前の噂話を揶揄しながら次兄が言えば、
「はは。そうだな。だが、気を付けなければなるまい。あそこには美しいものに目がない連中がうようよいる。うっかり攫われてしまうやもしれん」
長兄はたっぷりとした髭で覆われた顎を手で摩った。
その情景を思い描いてか、ユルスナールは嫌そうに眉を顰めたのだが、
「ああ。そうだ。お前は何かと忙しくなるだろうからな」
父親のファーガスも兄の心配を肯定した。
数多の招待客の中でもユルスナールは個人戦及び団体戦を制した兵士だ。主役級の扱いになることは違いなかった。集まる貴族たちからは次々に祝いの言葉を掛けられるに違いない。そして、そこでは実に貴族らしいやり方で新たな関係作りが模索されることだろう。着飾らせたリョウを傍に伴っていたとしてもユルスナールの注意が逸れた隙に他の貴族たちから声を掛けられ別の場所に移動させられてしまうかもしれない。
「その時は父上たちにお願いしますよ」
ユルスナールはそう言うとグラスの【ズブロフカ】を口に含みながら面白くなさそうな顔をした。
父親のファーガスや兄たちがリョウの傍に付いていれば、余計な虫を寄せ付けないようにするのにこれ程効果的な牽制はないだろう。
そのような他愛ない話から始めて、漸く、口慣らしが済んだらしかった。
「――――で、ルスラン。お前は何を企んでいるんだ？」
意味あり気に目配せをしながら、ファーガスが末息子を見た。
ユルスナールは父親の視線を受けて、その口元に薄らと笑みを刷いた。
「企んでいる――――という程のことではありませんが、少し余計な

ものを炙り出せればと思ってはいます」
そう前置きをしてから、ユルスナールはリョウを実家に移すことになった経緯とその背景にある出来事を集まった男たちに掻い摘んで話した。
「リョウが標的にされていると？」
「ええ」
父親の問いに即答したユルスナールの横で、
「うーん」
ケリーガルが緩慢な仕草で首を傾げた。その手はグラスを揺らしていた。琥珀色の液体が波のように揺れ、独特な芳醇でふくよかな香りを微かに立ち昇らせていた。
「それにしては手が込んでいないかい？」
本当に純粋な意味でリョウを手に入れたいというのならば、神殿の神官たちはリョウをかどわかしてしまえばいいのだ。特別に訓練を受けた兵士でもなく見た目は細くひ弱だ。その外見通り、護身の術を持たないリョウなどその手の玄人に掛かれば、赤子の首を捻るよりも容易いことだろう。拉致監禁をして神殿で儀式が行われるその時まで行方不明にしてしまえばいいのだから。足が付かないようにするやり方はそれこそ幾らでもあるだろう。そして、そのような機会もこれまでには多々あったはずだ。そこに敢えて侍女の死を関連付けさせて罪人に仕立て上げるというようなまどろっこしいことをする必要はないはずだとケリーガルは言った。
その指摘には、ユルスナールも神妙な顔をして同意した。
「ええ。私もそのことには若干、違和感を覚えてはいます」
態々第二師団の管轄内で侍女を死なせた理由は何処にあるのか。奥向きで撹乱をしたかったのか。そちらに注目を集めさせて置いて、注意を逸らすように。だが、何からだ？　それに、そもそも侍女の件とリョウの一件は繋がっているのか。
リョウが拘束をされた前後、実（まこと）しやかにリョウが犯人だとされる噂が流された。それは考えようによっては後付けのようなものと思

えなくもない。
　ケリーガルの言うように、それがリョウを嵌める罠だと言うのなら、少し手が込み入り過ぎている気がしてならなかった。
　だが、もしリョウがその切っ掛けでしかないとするのならば……。そして、その裏に別の本当の目的があるとするのならば。
　考え込んだユルスナールに長兄のロシニョールが言った。
「向こうはお前を引っ張り出したいのかもしれんな」
「私……ですか？」
「ああ。これまで数々の縁談を突っぱねて来たからな。今年になって急にお前の傍にちらついた女の影に吃驚して、その相手を憎く思うこともあるだろう。そこにいち早く神官たちが敏感に反応し、協力を仰いだとも考えられる」
　社交界で敵を作った積りはなかったが、その説は予想以上に説得力がある気がした。
「神殿の方は堅いのだな？」
　確かめるようにファーガスが鋭く切り込んだ。
「ええ。恐らく」
　シーリスの義兄レヌート・ザガーシュビリの話からは、そのような動きがあることが確認できた。レヌート自身もこの事態を大いに憂慮していると言っていたそうだ。だからこそ、シーリスに洗いざらい打ち明けてくれたのだ。その中の情報は、明らかに神殿の禁忌に触れるようなことだった。
「だが、単なる恋の腹いせにしてはやり口がいやらしいな」
　深く息を吐きだしたロシニョールにケリーガルが頷いた。
「確かに侍女が一人死んでいますからね。しかも【ジョールティ・チョール（黄色い悪魔）ルト】で」
　【黄色い悪魔】は普通の貴族には手が出ない毒草だ。手に入れるのは相当困難なことだろう。然るべき伝手と大金が必要になる。あの毒草を用いることは暗殺に足が付かないことで有名だが、そこまでして侍女を死なせておきながらも、これ見よがしに毒殺であるこ

との証拠を残していたのだ。余りにも見え透いているとしか思えない。

そうすると侍女の死の裏には、神殿の単独の犯行ではなく宮殿内部に協力者がいると見ていいだろう。互いに利害が一致した。神殿の方の目的は、明らかになったが、宮殿内の方はどうか。

つらつらと一連の出来事を思い返しながら、ファーガスは暫し、瞑目した。

他に考えられることとしては一つ。

「私も敵は多いからな」

シビリークス家に恨みを持つ者の犯行かもしれない。生憎、心当たりはそこそこあった。長年、この王都に暮らし、軍関係の仕事に従事しながら、宮殿内部に出入りしていたのだ。若い頃は、喧々諤々と丁々発止の議論をしたこともある。これまでに多少の軋轢は経験していた。

「それを言うなら私とて同じですよ」

どこか苦い顔をして見せた父の隣で、長兄のロシニョールが男らしい笑みを浮かべた。

「まぁ、誰にでも思い当たる節はそれなりにあるってことなんじゃないかなぁ」

その隣で次兄のケリーガルも父親の言葉を肯定するようににっこりと微笑んだ。

「それを言えば私とてそうでしょう」

そして、次兄の台詞を引き継いだのは末のユルスナールだった。詰まり、四人ともそこそこ思い当たる節がある訳で。まっさらな人生を歩んでいるものなどいないということなのだ。

そして、男たちは互いに顔を見交わせた。

「ならば、明日の夜、向こうが何か仕掛けてくると？」

「ええ。そうなるかもしれないと考えています」

父親の問い掛けにユルスナールは真剣な顔をした。

相手が貴族ならば、この機会を逃すとは思えなかった。王都に暮

らす多くの貴族たちが一堂に会する機会だ。リョウの参加までもを向こうが予想しているかどうかは分からなかったが、何らかの動きを見せるはずだと踏んでいた。そこで、少しでも相手の輪郭とその最終目的が掴めればと思っている。

「でも、それって、ちょっとした賭けだよね」

「ええ。それは分かっています」

「下手をするとリョウを巻き込むことになるな」

ケリーガルの隣で、ロシニョールも形の良い男らしい眉を寄せた。リョウを危険な目に遭わせてしまうかもしれない。それはユルスナールとしても苦渋の決断ではあった。だが、シーリスやブコバルを始めとする軍関係の仲間たちとよくよく話し合って決めたことでもあった。黙っていても、今後、リョウの身辺が不穏な空気に満ちていることには変わりがない。自分の目が届かない所でまたもやひょんなことから大事に発展する場合も十分考えられた。それなら、ここで仲間たちが一致団結して攻めの姿勢を取ることで、これまでの憂慮を断つべきだ。そして、相手の顔が覗けば、ささやかながらこれまでの【返礼】をすべきだという意見が多かったのだ。それにリョウを一人、この家に残しておくよりもユルスナールを始めとする男たちの傍に置いた方がより安全だと思えた。

「ええ。ですから父上にも兄上たちにも少し気を付けて頂けたらと思いまして」

万が一、自分の注意が行き届かない場合はリョウのことを頼みたい。そう告げたユルスナールにファーガスも二人の兄たちも力強く頷いて見せた。

それから四人の男たちは、一頻り情報交換をした。要するに己が胸に手を当てて、心当たりがある人物たちを挙げ連ねて行くのだ。そして、現時点での宮殿内の人の繋がりと政治的な勢力図を確認し合った。

ユルスナールは北の砦に赴任以来、一年の殆どを辺境の地で暮ら

す為、王都の政治からは離れていたが、それでも常に情報交換は怠ってはいなかった。【アルセナール】にある第七の執務室を預かるグリゴーリィーが、重要な役目を担っていた。それでも入ってくる情報は常に間接的なものだ。父や兄たちのように現場で得られる生の情報は貴重だった。

それによると国王（ツァーリ）の側近で、この所、力をつけているのが、アクショーノフという貴族だった。宮殿中枢部の中でも国王（ツァーリ）の覚えも目出度く、発言権を強めているとのことだった。

アクショーノフは有能な政治家だ。権勢欲を徒に表に出したりはしていない。根回しが上手く、敵を作らないよう如才なく振る舞っている強かな性質だが、この所の躍進を余り快く思わない貴族連中も中にはいるようだ。

そして、ここ数年大人しくしてはいるが、再び宮殿に返り咲く機会を窺っているのがアファナーシエフ辺りだろうとのことだった。今は、半隠居状態で滅多に宮殿の方には顔を出さないと聞いているが、その影の影響力はまだ強く、ご機嫌伺いや助言を求めて男の元を訪れる貴族も多いという話だった。その水面下での精力的な活動を思わせる事例としてユルスナールは【エリセーエフスカヤ】で男の懐刀と目されている男、ソルジェを目撃したことを思い出した。

他には、イリューヒン。この男は常日頃から神殿を煙たく思っている王族至上主義者だ。故に神殿側と手を組むことは考えにくかった。そして、大臣たちの中では、イジューモフ、タラカーノフ、ゴンチャロフ辺りが要注意とのことだった。其々程度の差こそはあれ、出世欲が強く、目的の為には手段を選ばないという所があるらしい。

現国王（ツァーリ）は、この国を建国した伝説の王【フセスラフ】の末裔とされている一族だ。ここまで時代が下るまでに紆余曲折はそれなりにあったようだが、それでもその血筋を絶やすことなく脈々と繋いできた。数多もの人を従え、人の上に立つことの出来る有能さを失っていないと言えるだろう。

現国王（ツァーリ）は穏やかで聡明な君主との評判が高い。二十年前、隣国【

ノヴグラード】と戦を交えた時はまだ皇太子だった。
　平和な時代が長く続いた政権の特徴として時の王族は、野心を持たず、どっしりと豊かさの上に成り立つ安穏に胡坐をかいていた。先の戦は、この国の中枢部の弛緩し過ぎた危機感の無さを浮き彫りにする結果となった。だが、あのような戦を経験し、辛酸を舐めながらも、そこにはどこか大国の甘さが残ることになった。
　ファーガスなど軍部を司る軍人たちは、それを常々、苦々しく思っていた。そういう点で、強硬派や生粋の軍人の目から見たら、現国王（ツァーリ）は、対外的にやや臆病で弱気に映るかもしれない。
　そして、そのような王（ツァーリ）を取り巻く貴族たちは皆、一様に一癖も二癖もある者ばかりだと言えた。
　今の所、政権を簒奪（さんだつ）しようなどという大それたことを企てる者はおらず、国王を中心とした政治がそこそこ機能している。古の約定（いにしえ）に従い王（ツァーリ）をこの国の中心に据え、諸侯たちはその直ぐ下の限られた空間の中で、己が影響力を誇示しようとぶつかり合っている。
　そして、明日の祝賀会のような宮殿主催の夜会では、その勢力図の一端が多かれ少なかれ明らかになることだろう。
　ユルスナールは、長い脚を持て余すように組み替えながら、手にしたグラスを傾けた。
「売られた喧嘩は倍返しが基本ですからね」
　それはこの家の男ならば誰もが知るシビリークス家の家訓でもあった。
　見えない敵を睨み付けるように不敵に笑った末息子に、同じ血を引く父親のファーガスも二人の兄たちも顔を見交わせると似たような男らしい、そして実にシビリークスらしい笑みを浮かべたのだった。

祝賀会への切符（後書き）

いよいよここから少しずつ、最終局面に突入の予定です。長々とお付き合いいただきましてありがとうございました。次回に続きます。お知らせ：第１８６話「禍福は糾える縄の如く」の続きの場面（艶話）をＩｎｓｏｍｎｉａ　の方で更新しました。活動報告の方にも小話を付けましたので、もしよろしければそちらもどうぞ。

策謀の糸

シビリークス家では翌日の祝賀会への準備が着々と進められていたその日、時を前後して【アルセナール】を出て、一人、宮殿内の後宮の区画を歩いていたスタルゴラド騎士団第二師団団長スヴェトラーナ・クロポトキンスカヤを呼び止める者があった。

「やぁ、スヴェータ。仕事は捗っているかな？」

その声にスヴェトラーナは、ほんの一瞬だけ苦虫を噛み潰したような顔をしたのだが、それを瞬時に引っ込めて、珍しく薄らと微笑みを浮かべながら振り返った。

「これはこれは殿下。ご機嫌うるわしゅう」

スヴェトラーナが振り向いた先には、見るからに上等な衣服に身を包んだ中年の男が立っていた。見た目はどことなく若いが、良く見れば目尻には年相応の皺が刻まれていることが分かる。どちらかと言うと甘さの残る顔立ちには柔らかな微笑が乗っている。淡い金色の緩やかにうねった髪に澄んだ灰色の瞳は、男が醸し出す高貴な雰囲気をいい具合に助長させていた。

ああ。また、厄介なものに捕まった。スヴェトラーナは内心ぼやいた。

この男が爽やかな見かけに反して実に【素晴らしい】性格をしていることは、スヴェトラーナもよく理解していた。若干、粘着質で一つのことに固執するきらいがある。そして、この【デェシャータク】[日][10]余り、スヴェトラーナにとっては頭痛の種でもあった。

この御人、この所、実に計ったかのような間合い（タイミング）でスヴェトラーナの前に現れてはチクチクと遠回しに（要するに宮殿の貴族らしいやり方だ）厭味を口にするのである。相手は国王の第二皇子（ツァーリ）というやんごとなき身の上の為、無碍にあしらうことも、そして正面から

口ごたえをすることも出来ず、黙ってただ相手の気が収まるのを待つしかない。スヴェトラーナには苦行の一時だった。

宮仕えの悲哀たっぷりに溜息を吐きたいのを寸での所で思い止まった。元々こういう陰険で陰湿なやり口は好かない。文句があるのならば正々堂々と真正面から正攻法で来いと言いたい父親譲りの実に雄々しい性格なのだが、生憎、同じ軍人ならばともかく、宮殿内の政治を司る貴族たちは往々にして、スヴェトラーナが常々唾棄して止まない回りくどい方法（アプローチ）を好む傾向があった。

思えば、この殿下からの執拗な横槍をかわしたいが為にスヴェトラーナの中で事態打開への焦りが生まれ、あのようにリョウに対して強硬手段を取ってしまう結果になったのだった。

焦りは禁物だ。冷静になれ。呪文のようにその言葉を心の内で繰り返した。

研いだ刃のように冴え冴えと美しいと揶揄されるスヴェトラーナの顔立ちのこめかみの辺りには青筋が一本立っていた。

だが、相手はそれに気が付くことなく口を開いた。いや、気が付いていたとしても気にも留めないのかもしれない。

「明日の準備は抜かりないのだろうね、スヴェータ？　いや、君が常に仕事熱心で職務に忠実であることはこの私が一番よく分かっているよ。だがね、考えてもみたまえ。明日は特別な日だ。大勢の客人をこの宮殿内に迎えることになる。聞く所によると私の大事な娘エクラータの件はまだ解決していないそうじゃないか。警備は大変だろうが、よろしく頼むよ。こんな晴れがましい日に何かが起きたんじゃ、我々王族の面目は丸潰れだからね。いや、私がこんなことを言うまでもなく優秀な君たちならば、その辺りの事情は当然よく理解していると思うがね。だが、まぁ、ほんのちょっとした確認事項というか、私なりの親切心というやつだよ。気にしないでくれたまえ」

よくもまぁ、男の癖にぺらぺらと口が回るものだ。

腹の内では毒づきながらも、スヴェトラーナは見かけ上、神妙な

顔をして見せた。あくまでも演技であるが、宮殿内の円滑な人間関係の為には必要なことである。

スヴェトラーナは恭しく一礼した。

「殿下、後宮での一件につきましては誠に私の不徳の致す所、大変申し訳なく思っております。ですが、引き続き第二師団の総力を上げて事態の打開と真相を究明中です。明日の祝賀会につきましては第一のフラムツォフ共々事前にしっかりと準備をしております。それこそ不審な輩は、鼠一匹たりとて入ることは出来ないでしょう。お約束いたします」

堂々とした態度で言い放ったスヴェトラーナに、殿下も鷹揚に頷いた。

「そうか、そうか。それを聞いて私も安心したよ。いやね。万が一という場合があるだろう？　不測の事態に備えておくのは軍の基本だ。君が実に軍人らしい心構えで任務に当たっていることが分かって私も心強い。では、引き続き頼んだよ」

一頻り注意勧告という名の愚痴をぶちまけて気が済んだのか、踵を返そうとしたのだが、殿下は不意に立ち止まると再び振り返った。

「ああ、それから。エクラータの件が進展したら、是非私にも報告願いたいものだね」

その台詞に殿下が例の一件に並々ならぬ関心を持っていることを再認識せざるを得なかった。

「承知致しました」

そうして満足したように片手を一振りしてから去って行った第二皇子の背中を、何とも言えない複雑な顔をしながら見送った。

だが、直ぐにスヴェトラーナは顔付きを引き締めた。そして腹の中に湧き上がりそうになる不快感を小さく息を吐き出すことでやり過ごすと、直ぐに気持ちを切り替えた。

侍女イーラの不審死の一件については正直な所、暗礁に乗り上げていた。だが、その間、リョウの身辺についてもより詳しい状況が

見えてきた。そして、その裏に神殿の神官の影がちらついていることが見えてきた。

だが、まだ弱い。神官がそのような大それた計画を成功させる為には、宮殿内、もしくは後宮に協力者がいなくては始まらない。その繋がりは、ともすれば切れてしまいそうな程に細い糸だ。神官たちと親密な関係にあるとされる貴族たちの素行を洗い直す必要があった。更に、そこにイーラが絡む余地があったのかということを。

そして、恐らく、何か目に見える形での変化が表れるとすれば明日、多くの貴族たちが集まる華やかな夜会の場になるだろう。大勢の中に隠れてこっそりと密談を持つにはもってこいの機会だ。

これが好機となるか、それとも益々、謎の混迷を深めることになるのかは分からない。だが、スヴェトラーナとしては、侍女イーラの死の原因を突き止めたいと思った。いや、突き止めなければならないと思っていた。

先日、侍女の部屋で妙なものが見つかったという報告がスヴェトラーナの元にもたらされた。スヴェトラーナ自身、それを見た瞬間、顔を顰めた。

それは、亡くなった侍女が書いたとされる封書だった。後で正式に筆跡の鑑定をしなければならないが、どうも不自然な点があり過ぎるように思えた。内容は、国内で開発中の隠し鉱脈の在りかを伝えるものだった。宛先は不明だが、特殊な暗号文で書かれたそれは、他国へ流す情報に相当すると思えた。

要するにイーラは間者だった。もしくはその手先になっていた。そんな図式が成り立つような【証拠】だった。

事件発覚直後ではなく、それより後になってから出て来たその書簡は、軍人として培ってきたスヴェトラーナの勘から言えば、実に胡散臭かった。だが、それが実際に表に出てきた以上、浮上したその線でも調べを続けなければならなかった。勿論、それがイーラ自身の手のものであるかという確認も含めてだ。

その報告を受けた時、そんな訳があるかと耳を疑った。スヴェトラーナには俄かには信じられなかった。初めてイーラと顔を合わせた時のことは今でも覚えていた。初めての後宮での仕事に緊張気味の面持ちを見せながらも、凛とした背筋の伸びた立ち姿で挨拶をしたスヴェトラーナの視線を真正面から受け止めた。頼もしい人物が入ったと思ったものだった。

それに宮殿の奥仕えの侍女になるには、それ相応の厳しい審査があった。まず貴族からの紹介状が必要だ。その出自も貴族が多い。中には、未婚の子女の行儀見習いの為に後宮入りをさせる場合もあった。イーラは下級貴族の出身だったが、品行方正との評判が高く、何よりも国内有数の大貴族イジューモフの紹介だった。イーラを疑うことはその後ろ盾になったイジューモフの面目を潰す事態にもなりかねない。なので、この件はそのことも含めて慎重に運ばなければならなかった。

また、一介の侍女が軍部で使われるような暗号文字を習得しているのも不可解だった。そのような特殊なものをどこで学んだというのか。イーラの家系の中に軍人になった者はいなかったはずだ。

百歩譲って仮に、間者であったと仮定した場合、他国と繋ぎを取ろうとした矢先に殺されたというのか。仲間に。それとも……事前に状況を察知した【チョールナヤ・テェニィ（黒き影）】にか。国内軍部で影の諜報活動を行うその組織ならば、【黄色い悪魔】を入手することも可能だろう。そして、他の不特定多数の離反者予備軍に見せしめの形で毒草を現場に態と残したというのだろうか。自分たちはちゃんと見ているということを知らしめる為に。

だが、それならば内々に第二に密かな通達があっても良さそうなものである。今の所あちらからはなんの報せも来ていなかった。【黒き影】は独自の規律を持ち、その活動内容も人員も全てが非公開で闇に包まれてはいるが、同じ軍部の中に数えられている一団だ。必要とあらば繋ぎを取る術を持っている。そこまで閉鎖的な関係でもなかった。

現時点では埒が明かない。取りとめのない考えを振り切るようにスヴェトラーナは頭を振った。いずれにせよ、明日はこれまで以上に気を配らなければならないだろう。

そのようなことを考えながら回廊を歩き、後宮がある奥向きと王や貴族たちが政(まつりごと)を行う表を区切る緩衝地帯の区画でスヴェトラーナはお目当ての相手、第一師団・団長のマクシーム・フラムツォフの姿を見つけた。

「シーマ」

同僚の呼び声にマクシームは、振り返ると穏やかな笑みを浮かべた。

「ああ。スヴェータか」

スヴェトラーナは素早く周囲へ視線を走らせるとマクシームに人気の無い場所に来るように促した。

そして、表の回廊から逸れ、中庭に通じる細い石畳の道が連なる脇、柱の影になっている所に来るとスヴェトラーナは声を潜めた。

「何か動きはあったか？」

無意識に眉間に皺を寄せたスヴェトラーナに、マクシームは力みを抜くようにとその肩を軽く叩いた。これではいかにも密談をしている体ではないか。

マクシームの目から見てもスヴェトラーナは生真面目過ぎるきらいがある。老獪な宮殿に出入りする貴族たちを相手にするには、些か柔軟性に欠けていた。ある程度の所で余力を残しておかないと潰される。もう少し力を抜けと顔を合わせる度にそれとなく言っているのだが、生憎マクシームの助言は相手には上手く伝わらなかった。しかしながら、そのような堅物然りとした性格を差し引いても、マクシーム自身、スヴェトラーナの優秀さは認めていた。

「ああ。どうも内々にこっちに接触を持ってきているな」

マクシームは当たり障りのない世間話をするように穏やかに微笑んでから、接触を持ってきたという相手の名前を軍部が情報伝達に

使う指文字で告げた。
スヴェトラーナの瞳が剣呑さを増して細められた。
「お前の所を引き入れようというのか？」
「というよりも、話を通しておくという感じだったがな。お前の方にも行っているだろう。調べてみた方がいい」
「忌々しい」
思わずという感じでスヴェトラーナは吐き出した。影でこそこそと動き回られるのが、スヴェトラーナは一番大嫌いだった。
「再度、買収には応じるなと言っておけ。目先の欲は身を滅ぼす」
――――まぁ、弱みを握られている場合は、また話が別だが。
そう言って口の端を吊り上げたマクシームは、普段の穏やかさが嘘のように凄味のある笑みを浮かべていた。
要するに向こうがそれなりの【袖の下（賄賂）】を持って挨拶をしてきたということだった。高潔を良しとする軍人に対しての侮辱である。こうなるとやはり明日、何らかの動きがあると見た方がいいだろう。
そして、マクシームがそのような表情を見せるということは、事態はかなりの所まで来ているのだろう。
久し振りに目にした同僚の本質にスヴェトラーナは、改めて顔を引き締めた。
「ああ。無論だ」
「それから、警備計画に変更はない」
「いいのか？」
「ああ。本当なら、もう一段、引き上げてもいいくらいだが、目立った動きをすると悟られるからな」
――――だから、それなりの準備をしておけ。
言外に含まれた台詞を的確に理解したスヴェトラーナは、
「分かった」
小さく、だが、力強く頷いた。
「じゃあ、またな」
そして、気分を入れ替えるようにやけに明るい声を出して無駄に

笑顔を振りまきながら、第一師団長は影から出ると、己が職務に戻るべく光降り注ぐ回廊の先へと消えた。
それを見送ってから、同じように第二師団長も踵を返すと後宮内にある第二師団の詰め所に戻ろうと足を一歩踏み出した。

宮殿内の片隅でそのような打ち合わせが持たれたのと同じ日。所変わって、とある貴族の邸宅では、静まり返った広い室内に男の囁きが響いては消えた。
「明日の手配に抜かりはないか？」
「はい」
「あちらからの連絡は？」
「特にございませんのでこのまま進めてよろしいかと」
「そうか」
室内にある重厚な椅子に一人座るこの家の主は、ゆっくりと長い息を吐いた。気を引き締めていなければ、静かなる興奮に心が浮足立ってしまいそうだった。男のがっしりとした身体の内側では、鼓動がいつになく早鐘を打っていた。それを緩く深呼吸を繰り返すことで宥めていた。
「第一の方は動きそうか？」
「はい。大義があれば必ず。第二の方にも少々協力を仰いでおりますので、そちらの方は問題ありません」
「そうか」
淀みない部下の報告に男は、豊かに蓄えた髭を摘むと小さくほくそ笑んだ。
突如として男の目の前に転がり込んで来た幸運があった。それを認識した瞬間、男は天は自分を見放さなかったと歓喜した。
上手い話には必ず落とし穴が潜んでいるという格言の通り、そのような心配が頭の隅を過らないでもなかったが、それだけの危険（リスク）を

冒してまでも、その幸運を手に取ることは実に魅力的に映ったのだ。それに男としてもただ漫然と手を拱いていた訳ではない。それなりに下調べを済ませている。男にはこれまで宮殿内で培ってきた人脈と影響力があった。そして全てを総合的に判断して、男は今回、その話に与することを決めたのだ。

「将軍たちはいい顔をしないだろうな」

それは結果として越権行為になり得る男の企みに対してか、それともその内のただ一人のことを念頭に置いているのかは分からなかった。

男の髭で覆われた口元には自嘲気味な笑みが零れていた。だが、男の濃い灰色の瞳には、抑え切れない興奮が星の瞬きのように現れては消えた。

弱気とも取れる男の発言を励ますように室内に佇んでいたもう一人の男がそっと前に出た。長い衣の衣擦れが新たな空気の揺らぎを作り出す。

「とんでもない。これはある意味、あちらにとっても非常事態ですからねぇ。致し方のないことかと。ひっひ」

室内にいたもう一人の男は、白い簡素な上下に濃い紫色の帯を締め、その上に暗い色の襟なしの外套を羽織っていた。

この男は、今回、幸運をもたらした使者のような役目を担っていた。【幸運の使者】という言葉がこれほど似合わない相手もいないだろう。天の御使いというよりも悪魔の方が相応かもしれない。

恐ろしく細い男だった。まるで枯れ枝のようだ。だが、ぎょろりとした男の目は爛々とした光を湛え、堪らなく愉快だというように細められていた。薄い唇を湿らせるかのように小さな舌先が舐めていった。それは、それだけその男自身も己が内側に渦巻く静かなる興奮に囚われていることの表れのようにも思えた。

そして、その特徴的な呼気を弾ませながら掠れた声で言葉を継いだ。

「クロポトキンの所が躍起になっているようですが、まぁ、芳しい

成果を上げるには至っておりませんからなぁ。その隙を突く形になりましょうな」

要するに警備体制の穴を憂慮し、更なる締め付けを行うにはいい機会だと言いたいのだろう。大義としては十分で、こちらの協力の申し出に否なは出ないはずだった。

「上手く行けば貴公の株は上がる。そして我々は望みのものを手に入れる」

「貴殿も中々に知恵が回る」

――――それにこの男の裏にいるとされるもう一人の男も。

「それ程でもございませんよ。ひっひ」

吐き出された台詞には、男なりの皮肉が込められていたのかも知れなかった。だが、そのようなことはおくびにも出さずにたっぷりとした顎髭を摩った男に、来客用のソファに腰を下ろした男は、鷹揚に笑って見せた。

ほんの少し、凪いでいるかに見える水面（みなも）に小石を投げ入れるだけでいいのだ。漣が広がりやがて大きな波紋となって、盤石に見えたものを揺さぶるだろう。

ほんの少し揺さぶりを掛けるだけで良かった。多くの聴衆を味方に付けられるかはこの男の匙加減に懸かっているのだろう。これはちょっとした悪戯のようなものだと男は思っていた。冗談にして流すには些か性質が悪いかも知れないが、このくらいのことは宮殿内では日常的な範疇と思えなくもない。油断をすると直ぐに足元を掬われる。隙を見せた向こうが悪いということになるだろう。この所、こういった種類の遊び（ゲーム）から遠退いていた宮殿内の貴族たちはこぞって注目することになるだろう。

そして、今回その標的となったあの男が、ふてぶてしいまでの貫禄ある表情を変え、苦虫を噛み潰したような顔を見せることを思い描いて、男は一人、口元を緩めたのだった。

それから二・三、最終的な確認事項を話し合って、枯れ枝のよう

に細い男はその邸宅を辞した。

「では御機嫌よう」

【スカモーロフ（道化師）】のような大業な仕草で慇懃に一礼した【幸運の使者】に主の男は小さく頷いて見せた。

相手の申し出を全て鵜呑みにしている訳ではない。だが、目的の為に利害が一致したのは確かだった。

扉の向こうに消えた細い背中を見送って。

「さて、パーティーの始まりだ」

椅子から緩慢な動作で立ち上がった主は、その場で一つ手を打ち鳴らすと、明日への期待を込めて居間の天井の隅を見上げた。東側の天井と柱が交差する角には、男が信仰するこの国の女神リュークスを模した画が小さな額縁に入って掲げられていた。

――――――【ブラーガ・ザ・リュークス（リュークスの恵みに感謝を）】

心の中で密かに口にした祈りの文言は、誰に対するものなのか。それは、男のみが知る所である。

そして翌日、様々な男たちの思惑が複雑に絡み合う中で、この冬最後の催しである華々しき祝賀会が宮殿で開かれることになる。

策謀の糸（後書き）

次回より祝賀会のお話に入る予定です。９月３０日付けの活動報告に小話を掲載しましたので、もしよろしければそちらも覗いてみてください。ありがとうございました。

【夜の精】再び

「さぁ、できましたよ」

柔らかく微笑んだポリーナに鏡の中に映る女(ひと)は、少しはにかむようにして笑うと伏せていた目を上げた。鏡を見つめる双眸は深い闇を映していた。

「ありがとうございます」

きっちりと巻き上げられた黒い髪、前方の斜め脇からは右側に向かって一筋の髪を顎の線(ライン)に沿って流している。そうすると女の細い首元に見えていた赤い刃傷の痕が隠れた。髪と同じ黒い睫毛に囲まれた目の縁には、身に着けている衣の色に合わせた濃紺の縁取り(アイライン)が薄く引かれ、円らな瞳をより強調することになった。肌にはお白いが薄く叩かれて、唇には艶やかに紅が引かれていた。

薄くとも赤みを帯びた弾力のあるその口元が、鏡の中で弧を描く。鏡の前の椅子から徐に立ち上がったその女(ひと)は、ぐるりと全身を確認するように鏡を見ながらゆっくりとその場で一回転した。

「素敵ですよ。とっても」

うっとりとしたように漏れたポリーナの声に、

「ポリーナさんのお陰です」

鏡の中の女が、少し低めの耳触りのよい声で言葉を紡いだ。

「着心地の悪い所はないかしら？」

「はい。大丈夫です」

女が小首を傾げると両の耳から垂れ下がる長い銀色の房飾りの付いた耳飾り(イヤリング)が揺れた。

大きく切り込(スリット)みの入った女の胸元には青い【キコウ石】の付いたペンダントが一つだけ。だが、それは見る者が見れば実に希少価値の高い珍しいものであることが分かるだろう。

濃紺のドレスの生地は、この国の人間ならばよく知る【シーニェ

イェ・マルタ】の特産だった。春に咲く青い花から取れる染料で【ノーチ】の糸を染め上げた伝統的な織物だった。そのドレスは、単純に色味だけを見れば華やかではないが、生地自体には滑らかな光沢があり、何よりもその肌触りがよく、身体の線にぴったりと馴染むようにして作られたそのドレスは、歩調に合わせて軽やかに襞（ドレープ）を生みだし、優美な輪郭を描き出して行った。

「素敵な貴婦人の出来上がりだわ」

「見かけ倒しでなければいいのですが」

褒めてばかりの相手の言葉に面映ゆそうに苦笑を滲ませたリョウにポリーナは心配することはないと穏やかに微笑んだ。

「大丈夫。自信をお持ちなさい。私もこれまでに沢山の貴族のお嬢さんたちを見てきているけれど、リョウ、あなたはちっとも負けていないわ。さぁ、殿方が首を長くしてお待ちですよ。ルーシャ坊ちゃんをあっと驚かせてあげましょう」

ユルスナールは以前、【プラミィーシュレ】でこの姿を見ているので、さすがに驚くようなことはないだろう。だが、そのようなことは敢えて口にはせずに、リョウはそっと微笑んだ。

「他に何か気がかりな点はないかしら？」

「はい。大丈夫です」

昨日の夜から今日の昼間にかけて、ざっと儀礼関係のお浚いをしたのだ。そして、招待客の顔触れや相手と言葉を交わす際の注意事項などを一通り教わった。基本は一応押さえてある。後は、個別にその場で臨機応変に（と言っても上手く行くかは分からないが）対処するしかないだろう。

「分からないことがあれば奥様たちが助けて下さるわ」

「はい」

励ますようなポリーナの言葉にリョウは素直に頷いていた。祝賀会にはシビリークス家の人たちも全員招かれているし、他に会場には第七や第五の知り合いの兵士たちがいるはずだった。一人になることはないと思う。そう考えて、心細くなりそうな気持ちを浮上さ

せた。
「では気をつけて行ってらっしゃい。後でお土産にお話しを沢山聞かせてもらいますからね。どうぞ楽しんでらっしゃいな」
「はい」
そうして、ポリーナのふくよかで温かい手に背中を押される形で、リョウは自室から出た。

祝賀会当日、早々と出掛ける支度を終えたシビリークス家の男たちは居間に集まっていた。そこで其々妻である女たちが用意を終えるのを待っているのだ。
軍部に所属している長兄ロシニョールと三男ユルスナールは、正式な軍服に身を包んでいた。ユルスナールの方は、いつぞやの明るい光沢のある灰色の生地を基調とした詰襟に肩の部分には第七師団長を表わす複雑な編み込みの施された飾りの付いた肩章が付き、その右側から銀色の飾り組紐が腕の回りを緩く一重する形で垂れ下がっていた。襟の部分には、同じく第七の所属を表わす青い石が師団長の紋様の中に徽章として付いていた。そして、腰には儀礼用の装飾が施されたベルトにいつも愛用している一振りの長剣を吊り下げる形で佩いていた。上着と同じ生地のズボンに黒い長靴が続く。普段は無造作にかき上げられているだけの銀色の髪もきっちりと後方に撫で付けられていた。
そして、将軍であるロシニョールの方は、濃紺を基調とした詰襟の軍服姿だった。その裏地には目にも鮮やかな赤が使われており、袖の折り返しや裾の合間からちらりと覗いていた。襟の徽章と肩章は【北の将軍】を表わす意匠が金色の組み紐であしらわれている。そこに朱鷺色（とき）の外套（マント）を羽織れば完成だ。武芸大会の時に垣間見た将軍たちの出で立ちだ。外套以外は、全体的に落ち着いた色合いながらも、どっしりとした重厚感ある将軍らしい装いだと言えた。

そして、父親のファーガスは、今は退役しているが、かつての名将を彷彿とさせる貫禄ある立ち姿だった。軍服と同じ形の詰襟の生地は、光沢のある黒を基調とし、金色の縁飾りが華やかに襟から肩章、そして袖の部分にあしらわれていた。それはかつて将軍の地位にまで上り詰めた者だけが付けることを許される装飾でもあった。そして左胸の上の部分には、先の戦での功績を称えて国王（ツァーリ）より賜った勲章が、小さいながらも輝いていた。

一方、次兄のケリーガルは、先の三人の男たちと比べると文官（もしくは貴族の青年）らしい服装だった。白い光沢のある柔らかなシャツに同じく白いネッカチーフを巻き、それを銀色のブローチで止めていた。膝丈まである上着は光沢のある生地で落ち着いた青灰色の色合いだ。そして下にベージュ色のズボンを穿き、艶やかな黒い長靴が続いていた。

其々ソファから長椅子に座った男たちの周囲には留守番をする子供たちの姿もあった。ロシニョールの所のスラーヴァとユーラ、そして、ケリーガルの所の長男オーシャ（正式にはイオーシフ）だ。部屋の隅には、子供たちの面倒をみる乳母代わりの侍女たちが控えていた。

子供たちはどこか落ち着きがなく、そわそわしていた。着飾った父親たちの引き締まった威厳ある空気と別室で出掛ける用意をしている母親たちの華やいだ空気に高揚感のようなものを敏感に感じ取っているのかも知れなかった。

だが、それだけでもなかったようだ。

部屋の中程の窓辺に立ち、夕闇迫る外の景色を眺めていたユルスナールに甥っ子のスラーヴァとユーラが近寄って行った。

口を開いたのはスラーヴァだった。

「ルーシャ叔父さん、リョウも連れて行かれるんですよね？」

「ああ。そうだ」

「なーんだ。折角、リョウと留守番かと思っていたのに……」

即答された返答にどことなく詰まらなさそうな顔をしたユーラの頭をユルスナールは宥めるように軽く叩いた。
「今夜は無理だが、また昼間にでも遊んでもらえばいいだろう？」
「昼間だけですか？」
重ねて言い募ったユーラにユルスナールは小さく笑った。
「リョウとてそんなにいつも暇を持て余している訳ではないからな」
「今度、本を読んでくれるって約束したんです。寝る前に。いいですよね？」
「何故、それを俺に聞く？」
敢えて何気ない振りを装って上げられた眉に、スラーヴァがしたり顔で言った。
「だって、夜はいつも叔父さんと一緒だからと言っていたので」
その瞬間、次兄のケリーガルだろうか、ソファの方から吹き出した声が漏れた。
誰から何を聞いたのかは分からないが、早熟な所のある甥っ子たちのあけすけな問い掛けに内心苦い顔をしながらも、
「リョウが約束したんだろう？　ならば構わん」
ユルスナールは何食わぬ顔で寛容な所を見せようとした。

そうこうするうちに居間に着替えを終えたリョウが顔を出した。室内に足を一歩、踏み入れた瞬間、中の空気が変わった気がした。雑音が止んだと言えば良いだろうか。
リョウは、ぐるりと室内を見渡すと中にいる男たちにそっと微笑んだ。それは、どこか照れたような控え目な笑みだった。
見惚れること暫し、いち早くリョウに気が付いたユルスナールがゆっくりと近づいてきた。
ユルスナールは吸い寄せられるようにリョウの頬に手を当てると、脇から流れている黒髪を一筋指先で擽るようにして掬った。
「ダーリィヤさんがこうした方が傷が隠れるからって言ってくれたんです」

「綺麗だ。リョウ」
ユルスナールは顔を寄せると耳元で囁いた。その間、まだ手袋をはめていない大きな手は、さり気なく露わになった腰の括れ（くび）を辿る。
場違いな程に熱の籠った低い囁きにリョウは擽ったそうに肩を竦めた。そうすると耳飾りの銀色の長い房飾りが左右に小刻みに揺れた。この装飾品（アクセサリー）も以前【プラミィーシュレ】で身に付けたものだった。ユルスナールからの贈り物である。
それからリョウは、ゆっくりと後方を振り返った。急に静かになった室内に首を傾げた。この部屋に入る前は、男たちの低い話声と子供たちの甲高いお喋りの声が漏れ聞こえていたからだ。
まず目に入ったのは、ぽかんと口を開けた三人の子供たちの姿だった。
「スラーヴァ？　ユーラ？　オーシャ？」
幾ら普段、化粧っ気のない顔を晒しているからといっても、それほどまでに驚くことだろうか。大して造作は変わっていないはずだ。
可笑しさを堪えるように艶やかに微笑んだリョウにいち早く飛び付いて来たのは、次兄ケリーガルの所の長男イオーシフ（通称オーシャ）だった。
オーシャは、今年で五つになる男の子だ。ロシニョールの所の二人の子供たちに比べると控え目で恥ずかしがり屋なところがあるが、上の二人と同じようにリョウにも懐いていた。
「リィョ～！」
まだどこか不完全な舌足らずの発音が居間全体に響き渡った。
リョウは、微笑んで腰を屈めると走り寄って来た小さな身体を抱き止めた。
「リィョー、しゅごいきれいだぞ。おとぎばなしみたい！」
興奮気味にいつもより口早に捲し立てるオーシャに、小さな身体を宥めるようにその背中を軽く叩いた。くるくるとした淡い茶色の髪にきらきらと光る淡い空色の瞳が、爛々と光を湛え眩しいくらいだった。

「ふふふ。ありがとう。オーシャ」
対するリョウの表情もいつになく緩み切っていた。
それに続いて息を吹き返したロシニョールの所の二人の子供たちがやって来た。
「……すごい。【夜の精】みたいだ」
興奮気味にリョウの回りをうろうろとするユーラ。そして、長男のスラーヴァは、目の端を若干赤らめながら斜交いにリョウを流し見た。どことなく顰め面だ。
そして、一言。
「似合ってるな」
少しぶっきらぼうな反応も照れ隠しなのだろう。いつもとは違う子供たちの反応にリョウも内心のむず痒さを感じながらも柔らかく微笑んだ。
「ふふふ。どうもありがとう」
立ち上がったリョウの傍でそわそわとユーラが身体を揺らしていた。リョウの脇にはオーシャがぴったりと張り付いている。
「ユーラもいらっしゃい」
いつものように抱きつきたくて堪らないのだろう。そう口にした途端、ユーラは目を輝かせて飛びついて来た。
「あ、おい。ユーラ」
ユルスナールが若干、焦ったような声を上げる。そして案の定、勢い余ってたたらを踏み、後方に倒れそうになったリョウの身体をユルスナールが背後から支えた。
ユーラは深く開いた胸元に顔を埋めていた。いつものように服越しではなく、直にユーラの鼻先が肌を擽り、リョウはその感触に耐えきれずに身体を震わせた。
「ユーラ、くすぐったい」
そして一頻り、ぎゅうとしてから満足したのか腕を離した。そして、その傍らでチラチラとリョウの方を見ているスラーヴァにも声を掛けた。

「スラーヴァは？」
差し出された腕にスラーヴァは嬉々として顔を上げたのだが、背後にいたユルスナールがリョウの身体に腕を回した。
「リョウ、その位にしておけ」
その途端、スラーヴァが面白くないという顔をした。
ユルスナールはスラーヴァに何やら目配せをした。下の二人のような純粋さとは些か違う所にある甥っ子の欲求を叔父は黙認出来ないということなのかもしれない。もしくは縄張りと所有権を主張する為か。暫く、無言のまま攻防がなされる。
その実に微妙な空気にリョウは首だけ後方を振り返りながら呑気に笑った。
「いいじゃないですか。軽い抱擁ぐらい。こちらでは皆、いつもしているでしょう？」
往々にしてこの国の人々は身体的接触が多く、他人との身体的距離も近かった。このくらいのことでスラーヴァのような子供相手に目くじらを立てる程のことではない。そう言いたいのだろう。
リョウから援護をもらったスラーヴァは、『ほれ見ろ』と言わんばかりの表情をして些か挑戦的に叔父を見た。対するユルスナールは、リョウの背後で不機嫌さを隠すことなく目を細めた。端から見れば完全にムキになっている子供の顔だ。
子供相手に何を張り合っているのだか。
だが、当のユルスナールは、かなり本気だった。
そして、その大人げない攻防に決着を付けたのは、双方に影響力を持つ長兄のロシニョールだった。
「スラーヴァもルスランも、みっともない真似をするな」
ここでユルスナールだけでなく自分の息子も窘めたのはさすがと言えるだろう。
呆れた顔をしながらやって来たロシニョールにユルスナールは口の端を下げたが、何も言わなかった。
「本当に驚いた。これは噂以上だね」

そして、さり気なく話の流れを変えるように半ば感嘆に似た息を吐き出しながら次兄のケリーガルが言った。
「ああ。随分と見違えた」
ロシニョールもまじまじとリョウを見下ろせば、
「ルスランには勿体ない」
本音のようなものをちらりと覗かせながら父親のファーガスも傍らに立った。
身なりの立派な上背のある男たちに囲まれて妙な圧迫感を感じながらも、
「もう、本当に皆さん、お上手なんですから」
口々に褒めそやされて、リョウは困ったようにそれでも悪い気はしないのか嬉しそうに口元を綻ばせた。
そうこうするうちに漸く他の女性陣が身支度を終えてやって来た。
「まぁまぁ、どうしたの？　皆して固まって」
一か所に集まる男たちを不思議に思いながら声を掛けたアレクサーンドラであったが、その中心に埋もれるようにして立っていたリョウに気が付くと、まるで花が咲いたように顔を輝かせ、足早に近寄って来た。
「まぁ、リョウ！　素敵、素敵だわ！」
先程のオーシャばりに周囲によく響く甲高い声を上げた夫人に中にいた男たちは顔を見交わせると小さく苦笑いした。
そして今度は、集まって来た女性陣に囲まれることになった。

【夜の精】再び（後書き）

短いですがキリがいいのでこの辺で。次回は祝賀会会場の模様をお伝えする予定です。

祝賀会の幕開け

その後、一頻り興奮の波が収まった所で、着飾った大人たちは残る子供たちに大人しく留守番をしているようにと言い残して、玄関先に着けられた馬車に乗り込んだ。まだ五歳の一番幼いオーシャは、出掛けてしまう両親を始めとする大人たちに今にも涙が零れそうな不安そうな顔をしたのだが、リョウが戻って来たら今度一緒に寝台の中で絵本を読もうと約束をして、なんとか宥めすかした。そして、見送りに出て来たカッパとラムダの二頭に後を任せてシビリークス家を出立した。

馬車は二頭立てで四人乗りのものが二台用意されていた。宮殿までは距離にしては然程遠いとは言えないのだが、日も暮れ、着飾った女性たちがいる為にシビリークス家にある馬車を使うことになったのだ。御者台には、厩舎番の男が其々座り、手綱を取っていた。

一番目の馬車に長兄夫妻と次兄夫妻が乗り込み、二番目の馬車にシビリークス夫妻とユルスナール、そしてリョウが乗ることになった。

こうして馬車に揺られるのも【エリセーエフスカヤ】の帰り道以来のことだ。

中は、見た目よりもゆったりとしていた。内部の椅子の部分は深い臙脂色の天鵞絨（ビロード）のような滑らかな布張りで大きなクッションが宛がわれており、車輪からの振動を抑える形になっていた。それでも慣れない独特な揺れはある為、妙な感じだった。

貴族の邸宅が並ぶ界隈から宮殿の区画に入り、馬車は衛兵が警備をする門の前で一度止まった。馬車の側面にはシビリークス家の家紋があしらわれており、兵士たちはその紋章と中にいる男たちの顔

触れを目視で確認すると慇懃に敬礼をした。
それから再び馬車が止まったのは、宮殿の南西側にある玄関口だった。
車止めで馬車を降りた。このまま馬車はここより北西の一角に設えられた場所に停め置かれ、御者はその傍にある詰所のような休憩所で主人たちの帰りを待つとのことだった。
車止めには次々と招待客を乗せた馬車が止まり、着飾った男女を降ろしてゆく。馬の嘶きと御者の掛け声。そして、ガタガタという石畳の上を滑る車輪の音。案内係の声。静かな印象が強い宮殿は、この時ばかりは賑やかな喧騒に包まれていた。
リョウもシビリークス夫妻に続き、ユルスナールと共に馬車から降りた。足を地面に着けた瞬間、一陣の冷たい夜風が吹き抜け、ドレスの上に羽織っていた外套の裾を揺らした。リョウの身体は一瞬ぶるりと震えたのだが、それが風の冷たさから来るのか、それともこれから待ち受けているであろう未知の世界に対する緊張から来るのかは分からなかった。
それから世話になった馬たちに一言『ありがとう』と声を掛けるのを忘れなかった。

宮殿内は、リョウの記憶の中にあった光景よりも明るかった。この日の為に発光石の明かりを一段と強いものにしているのだろう。夜の帳が落ちた闇から抜け出して一歩足を踏み入れた先は、まるで別世界のようだった。白っぽい明かりが室内の金銀の装飾や曲線を描く彫刻類、そして優美な草花を基調にした紋様が彩色された空間を煌々と照らし出していた。
そして、何よりも室内に溢れんばかりに集う男たち、そして女たちの目にも鮮やかな色とりどりの衣装が、この場を一層華やかなものにしていた。その色合いは、赤や薄紅色、黄色、緑、青、紫とそ

れらの濃淡も含めて実に彩り豊かだ。中に集う人々は、皆、生き生きとした顔をしていた。寛いだ表情をしている男たち。穏やかな微笑を浮かべている女たち。それに対照的なのは頬を高揚に上気させている若い娘たちだろう。

ああ、やはり思った通りだ。いや、これは予想以上かもしれない。リョウは眩し過ぎるその光景に目眩がしそうだった。目に映るもの全てが煌びやかでちかちかと反射し、網膜に映った映像を脳が上手く処理しきれていないようだ。

思わず竦みそうになった足に歩調が乱れた所為か、隣に寄り添うユルスナールの腰に回された手の指先に小さく力が入ったのが感じ取れた。

「リョウ、大丈夫だ。お前は十分綺麗だ。ここにいる誰よりも」

そんなに不安そうな顔をしていたのだろうか。まだ何も口にしていないのにユルスナールはリョウが欲しい言葉を一番必要としている時にくれた。

リョウは、そっと隣を見上げた。そこにはいつにも増して柔らかく優しさを滲ませた瑠璃色の双眸があり、甘さを含んだ表情でこちらを見下ろしている涼やかな男の顔があって、リョウは思わず苦笑していた。

「そんなに情けない顔をしていますか？」

「そんなことはない。だが、そうだな。もっと堂々としていた方がいい。上を向いていろ。なんなら俺を見ていればいい」

緊張を解そうとしてか、そんな軽口を叩いたユルスナールにリョウは小さく笑った。

「ふふふ。では困ったらルスランを見ることにしますね」

「ああ」

そして、玄関口から広間へと通じる室内を横切って行く。宮殿内はとても天井が高く、柔らかな白い光が室内を照らしていた。散りばめられた金銀の装飾にその光が反射してより周囲を明るく見せていた。あちらこちらで交わされる囁きと談笑のざわめき、靴を踏み

鳴らす足音やドレスの衣擦れの音が、天井や壁に反響して、ざわざわとした、だが、不思議と耳に心地よい不協和音の漣を生みだしていた。

右を見ても左を見ても周囲は着飾った紳士と淑女たちの姿ばかりだ。溢れんばかりの色とりどりのドレスの色。その多くは光沢のある生地で明るい色合いのものであったので、余計に明るさが増しているように感じられた。

辺りは独特の高揚感に包まれていた。

宮殿内でこれほどまでに人が集まっているのを初めて見た。武芸大会時の貴族の婦女子たちの集まる貴賓席を見た時も華やかだと感じたが、ここはそこに多くの男たちの姿も混じり、輪を掛けて豪奢な空気に満ちていた。

これだけ大勢の人がいれば自分のようなものを気にする人はいない。そう思ってみてもリョウの周囲にいるシビリークス家の人々はそれなりの注目を浴びていて、自然にその傍にいるリョウにも意識が向けられることになった。シビリークスの人たちには知り合いも多いようで、あちらこちらから掛かる声に和やかに挨拶を交わしたり、雑談を交わしたりしていた。

ファーガスもロシニョールもケリーガルも人好きのする微笑みを浮かべて久し振りに見る友人や知り合いたちに挨拶をしていた。そして、夫人たちのアレクサーンドラ、ジィナイーダ、ダーリィヤは尚のこと生き生きとおしゃべりに花を咲かせていた。その様子を見たリョウは、改めてこのような場所での主役はやはり着飾った美しい女たちなのだろうと思ったのだった。

中でもユルスナールは、多少の驚きと大いなる好奇を持って他の招待客たちに迎えられていた。これまで必要以上に社交界には近づかなかったユルスナールが宮殿の夜会に顔を出すのが珍しかったようだ。昨年の祝賀会へは顔をちらりと出して義理を果たしたとばかりに帰ってしまったのだという。そして、この時の為に気合を入れて着飾って来た貴族の娘たちをがっかりさせてしまったのだとか。

そのような話を道々馬車の中で母親のアレクサーンドラから聞いたのだ。

ユルスナールが館内を歩くと方々から様々な囁きが漏れ聞こえて来た。若い娘を連れた母親たちが俄かに色めき立った。じりじりとした灼(や)けるような熱の籠った視線をユルスナールは動じることなく受け流していた。その堂々とした態度は傍にいるリョウから見ても惚れ惚れとするほどだった。羨望の眼差しやうっとりとした溜息、独特の空気が秋波となって漂ってくる。

そして、武芸大会でユルスナールが求婚したという噂は瞬く間に社交界にも広まっていたようで、隣にいるリョウにも相応の好奇の視線が突き刺さるようにして向けられていた。リョウはまるで針の筵の上に座っているような気がした。決して自意識過剰ではないだろう。

「……ルスラン」

リョウは思わず何とも言えない気分で隣に寄り添う男を見上げた。

「ん？」

「穴が開いてしまうかもしれません」

ユルスナールの隣を歩いているリョウに注がれる視線は、単なる好奇だけのものでもなかったからだ。ユルスナールが大会中、黒いリボンを腕に巻いていたという話も伝わっているようで、その色を目に見える形で体現することになったリョウは、男を慕っていると思われる女たちからの強い視線、そして中には呪詛に近いと思えるような鋭いものを感じ取っていた。この時、リョウの脳裏には武芸大会で養成所の友人たちに言われた言葉――第七の団長に求婚されるということは、この王都中の娘たちを敵に回したようなものだ――が思い出されていた。リョウは、なるべく前を向いてそのような雑音を務めて排除しようとした。

祝賀会の主会場(メイン)となる大広間はまだまだ先のようだ。正式な夜会が始まるまでにはまだ間があるのか、多くの人々が手前側の控えの間で談笑したり、旧交を深め合ったりと思い思いの時間を過ごして

いるようだった。こういう事態は、予想をしていない訳ではなかったが、想像と実際とはやはり違うもので思わず怯んでしまう。
思わず漏れてしまったリョウの本音にユルスナールは柔らかく笑った。
「気にするな……と言っても、急には無理か」
立ち止まったリョウにユルスナールはそっと腰を抱き寄せ、顔を近づけるとさり気なく耳とこめかみのあたりに触れるだけの口づけを落とした。
「ルスランは慣れているのでしょうけれど……」
「そういう訳でもないぞ？」
「でもワタシとは比べ物にならないでしょう？」
何しろこのような華やかな空気は初めてなのだ。その豪華さは【エリセーエフスカヤ】の比ではない。
「それよりもリョウ、気を付けろ。ここに集まる男たちは美しいものに目がないからな。俺の傍を離れるな」
――――でないと攫われてしまう。
話の流れを変えるようにユルスナールがそのようなことを言った。
「もう。ルスランまで。ここには綺麗な人たちが大勢いるじゃないですか。女の人も男の人も。私は少し毛色が変わっているだけで地味なものでしょう？」
「この中ではお前が一番だ」
自分が弱いと知る低音でそんな口説き文句を口にした男に、
「ルスランは、きっと美的感覚が変わっているんですよ」
リョウは色を変えた空気を冗談に流そうとした。
「そうか？」
「ええ」
「それは聞き捨てならないな」
「そうですか？」
恐ろしく甘い空気を撒きながら蜜のような言葉を吐くユルスナール。きっとそれはこの場での自分の緊張を少しでも解そうとしてい

るのかも知れない。そして、その思惑は功を奏したのだろう。そうやって他愛ない遣り取りをしていると気が紛れるのも事実だった。それにこうして話をしていればユルスナール以外を視界に入れないで済む。

「ブコバルやシーリスたちも招待されているんですよね？」

団体戦に出場した兵士たちも同じように正装で参加すると聞いていた。第七のお馴染みの面々もこの場所にいるはずだった。

そう思って訊けば、

「ああ。噂をすれば。ほら」

そう言ってユルスナールが目線で促した先には、着飾った若い女たちが大勢集まっている一際賑やかな一角があり、よく目を凝らせば、その中心には噂のブコバルがやけに小ざっぱりとした引き締まった顔付きで（要するに無精髭を綺麗に剃っているのだろう）和やかに談笑しているのが見えた。

「……ああ…」

やはりブコバルはブコバルである。女たちに囲まれたブコバルは女誑し（女好きとも言う）の本領発揮とばかりに実に生き生きとしていた。まるで水を得た魚のようだ。単なるむさ苦しい男も身なりを整え、こうして晴れやかな舞台の中で見ると実に立派に見えるのだから不思議なものだとリョウは当の本人が耳にしたら機嫌を悪くしそうな失礼なことを平気で考えていた。

「皆、騙されてますよ……絶対」

思わず漏れた言葉にユルスナールは可笑しそうにククと小さく喉を鳴らした。

「だが、あれは昔からだ」

「まぁ、そうなのでしょうけれど……」

それはリョウが知らないブコバルのもう一つの顔だった。貴族としての顔だ。そして、このことは隣に立つユルスナールについても言えることなのだろう。

そのようないつもの遣り取りをして和んでいると不意に目の前に影が差した。そして深みのある渋い声が落ちてきた。
「これは珍しい。やはり噂は本当だったんだな。ルー坊？」
声のした方に顔を上げれば、逞しい体つきの貫禄ある壮年の男が立っていた。濃紺の生地に赤い縁取りが見え隠れする軍服は、ロシニョールと同じ軍部の将軍の正装だ。少し縮れた焦げ茶色の髪をすっきりと後方に撫で付け、顎はたっぷりとした髭で覆われていた。全体的に男らしい精悍な顔立ちた。
リョウはその男をどこかで見たことがあるような気がした。はて、それはどこであっただろうかと脳内の記憶を探っている傍らで、男たちの会話は進んでいた。
「将軍、その呼び方は止めてくださいとお願いしているはずですが」
ユルスナールから漏れた【将軍】という一言にリョウは目の前に立つ男が武芸大会時ユルスナールと模範試合をした【南の将軍】であることに思い至った。確かドーリンの叔父だという男だ。
リョウは、大柄な男をそっと見上げてみた。成る程。神経質そうな顔をしたドーリンとは面立ちが大分違うが、髪の色や雰囲気は似ているかもしれない。
「……今日の主役はお前だからな。それよりも嬉しい報せがあるのだろう？　ファーガス殿もロシニョールもやけに張り切っていたぞ」
そして、ついと隣にいるリョウに視線を投げると、強面の顔に驚くほど人懐っこい笑みを浮かべた。
「で、ルー坊、紹介してはくれないのか？」
リョウは、ユルスナールが呼ばれた【ルー坊】という言葉に思わず吹き出しそうになって慌てて口元に手を宛がった。【ルーシャ】と呼ばれたのを聞いた時も仰け反りそうになったが、【ルー坊】というのは更にその上を行く。まるで赤ん坊に対するような呼び名に

言い知れぬ可笑しさが込上げて来た。
だが、男の手前、ここで笑う訳にはいかないだろう。そう思って堪えようと下を向いたのだが、
「リョウ、笑いたければ笑えばいい」
直ぐ下にある剥き出しの肩が小刻みに震えていることにいち早く気が付いたユルスナールは、当然その理由にも思い至ったらしく、低い拗ねたような声を漏らした。
だが、気を取り直したのか、取って付けたような咳払いを一つするとリョウを将軍に引き合わせた。
「リョウ、こちらは南の将軍、オリベルト・ナユーグ殿だ。ドーリンの叔父に当たる方だ。そして、将軍、こちらはリョウ。私の婚約者です」
改まってユルスナールの口から自分のことを婚約者と称されるのはなんだか照れくさくて仕方がなかった。
リョウは、慌てて笑いを引っ込めるとにっこりと微笑んだ。
「【オーチンプリヤートナ(はじめまして)】　お噂はかねがね。ドーリンさんにはいつもお世話になっております」
昨日お浚いした淑女の儀礼に則り、目を伏せながら膝を軽く折って挨拶をすれば、
「おや、うちのドーリンを御存じでしたか。それにしても噂に違わずお美しい方だ。お手を頂戴しても？」
ちらりと確認するようにユルスナールを見て、澄ました硬質な顔立ちが小さく頷いたのを見て取ってからリョウは手を前に差し出した。
そっと上げられたその右手を将軍は恭しく己が手に取るとそっとその甲に口付けを落とした。柔らかい髭の感触が手の甲を擽った。
「ああ。なんて可憐な小さな手だろう！」
ごつごつとした硬い大きな手の中にあるリョウの手は、まるで子供のように小さなものに見えた。かさついていた手にも昨日の内に香油を擦り込んでいたお陰かしっとりと滑らかになっていた。

将軍は、どこか恍惚に似た表情を浮かべながらリョウの少し骨張った白い手を己が両手の中に入れると恭しく撫で回した。
儀礼上、直ぐに解放されると思っていたのだが、いまだ相手の手中にある右手にリョウは困惑し、どうしていいのか分からずにそっとユルスナールを見上げて助けを求めた。
口を挟まずに、だが、憚らずに呆れた顔をしていたユルスナールは、リョウからの信号を的確に受け取ると、態とらしい咳払いを一つした。
「オリベルト殿、初対面なのですから、どうぞこの辺でご勘弁を」
そして、将軍の耳元に顔を寄せると小さく囁いた。
「いきなりそのように趣味全開でこられたら吃驚しますよ」
それは、オリベルトだけに向けられたはずの忠告であった訳だが、傍にいるリョウにも聞こえてしまった。
何やら途轍もない秘密の世界を覗いてしまったような気分になったのは、気のせいではないのだろう。
「趣味……ですか」
無意識だったのだろう。ぽつりと微かに声を漏らして目を瞬かせたリョウに、だが、将軍は恥ずかしがることなく、実に堂々とした態度で笑ったのだ。
「ああ。私は小さくて可憐なものに目がないのだよ。キミのような素敵なお嬢さんは特に。【チョールナヤ・コーシェチカ（黒い子猫ちゃん）】とは言い得て妙だな」
そう言って茶目っ気たっぷりに片目を瞑って見せた。
リョウは失礼かとも思ったが、堪らずに吹き出してしまった。
だが、慌てて口元に手を当てて笑いを堪えると目の端に余韻の涙を浮かべながら言った。
「すみません。別に他意はないんです。可愛らしいものがお好きなのですね。例えばあのような」
そして、ぐるりと館内を見渡すとまだ少女のようなあどけなさの残る若い娘の姿を目で捉えて微笑んだ。

色白の肌に上気した薔薇色の頬、華奢な骨格。淡い黄色のドレスから伸びたすらりとした手足はまるで精巧な人形のようだった。【可憐】という言葉はあのような娘を評するのにこそ相応しい。自分は足元にも及ばない。

「ははは。これは参ったな」

リョウの返しに将軍は愉快そうに声を立てて笑った。

「だが、私はどちらかと言うとキミの方が好みだ」

「……オリベルト殿」

ユルスナールが合間に入るように低い声を出したが、

「まぁ、光栄ですわ」

リョウは動じることなく微笑み返していた。この国の男たち特有の社交辞令だと思ったからだ。

そして、穏やかな表情のまま言葉を継いだ。

「ワタクシも可愛いらしいものは好きですわ。ルスランの甥っ子たちは特に」

「ロシニョールの所とケリーガルの所のか？」

「はい」

にこやかな微笑みを浮かべたリョウにオリベルトはちらりと隣に立つユルスナールを流し見た。

あそこは確か、オリベルトの記憶が正しければ男の子ばかりで、しかもかなりやんちゃな盛りだと思っていたのだが。シビリークスの形質を良く引き継いだ顔立ちのはずだが、あれが【可愛らしい】という範疇に入るのだろうか。そんな素朴な疑問が頭の隅を過った。

ユルスナールは面白くないことでも思い出したのか、オリベルトに口パクで『リョウだけですよ』と答えると小さく肩を竦めて見せた。その様子に将軍は再び可笑しそうに笑った。

その後、後から追い付いてきたロシニョールが合流して同じ将軍同士、二人して何やら話し込み始めた。

そして将軍との別れ際、最後に名残惜しそうに太い指で手の甲を擽られたのは意外だった。

だが、リョウはそこに社交界という世界の一端を覗いた気がした。つまり、そうやって女性に甘い誘いの言葉を掛けるのは挨拶のようなものなのだ。そして、このような場では際どい感のある言葉遊びが男女間の駆け引きのように多く飛び交うのだろう。そのような観点から見れば、ブコバルのような一見、軽い遊び人風の態度は、余り問題視されるようなものでもないのだろう。寧ろ当然なのかもしれない。そして、リョウは芋づる式にその筋では有名だと言う第三師団長、ゲオルグの顔を思い浮かべたのだった。

最終的に、リョウは南の将軍に対して【少し変わったお茶目で可愛らしい人だ】という印象を持った。その感覚は実にリョウらしいもので、きっと部下の兵士たちが聞いたら、仰け反るか、人気の無い所で腹を抱えて笑うに違いない。

それから主会場（メイン）のほうの準備が整ったのか、大広間の方へ招待客を案内する声が上がった。リョウもユルスナールに促される形で足を進めた。

だが、緩やかな人の流れに沿って歩いていた所で、その歩みは、再びユルスナールを呼び止める声により止められた。

「まぁ、ユルスナール殿。今年は初めからいらしているのね」

艶やかで張りのある声の後、優雅な足取りでやって来たのは、アレクサーンドラのような初老の域に達していると思われる貴婦人だった。

「ご無沙汰いたしております。リガルスキー夫人」

ユルスナールは、振り返り、差し出された婦人の手を取ると恭しく慇懃な所作で軽く指先に口付けを落とした。

「本当に幾らお茶会にお誘いをしても中々お顔を出して下さらないんですもの。やっとお会い出来たわ」

姿勢よく背筋を伸ばし、柔らかな微笑を浮かべながらもユルスナールのつれなさに恨み節を込めるのは忘れない。凛とした空気はどこか近寄り難く、穏やかな中にも威厳ある孤高の女王のような印象

を受けた。落ち着いた色合いの薄い紫色のドレスがそのきつめの空気を少し和らげているような気がした。

「申し訳ございません。中々に都合がつかなかったものですから」

ユルスナールは、珍しく薄らとした笑みを口元に刷きながら寛いだ様子で老婦人に対峙していた。恐らく古くからの知り合いなのだろう。

「この度はおめでとう。見事な試合でしたよ」

「勿体なきお言葉、ありがとうございます」

リョウは、さり気なく会話の邪魔にならないように身体をずらすと一歩、後ろに下がった。リガルスキー夫人と呼ばれた老婦人の後ろにぞろぞろと若い娘たちを始めとする着飾った婦人たちがやってくるのが見えたからだ。きっとリガルスキー夫人のサロン（お茶会）の友人達なのだろう。何となくこのままユルスナールの傍にいるのは具合が悪い気がして（今思えば、それは女の勘というやつなのかもしれないが）、リョウは身体を反転させるとざっと周囲を見渡した。

シビリークス家の人々がいないだろうかと思ったのだが、特徴的な銀色の髪も華やかな淡い空色のドレスも（アレクサーンドラが身に着けているものだ）も見当たらなかった。

他に知った顔がないかと探して視線を彷徨わせていれば、後方で、人垣の中から軍服を身に纏った一団がやってくるのが目に入った。賑やかなざわめきがこちらにまで伝わって来るようだった。

そこで先頭を歩いている人物に目が止まり、リョウは思わず相好を崩した。

先陣を切って歩いているのはシーリスだった。お馴染みの人当たりの良い柔らかな笑みを浮かべている。その後ろには団体戦に出場した第七の兵士たち（アッカ、ロッソ、アナトーリィー、そして控えのグント、ヤルタ）と【アルセナール】に詰めているグリゴーリィーを始めとする第七の兵士たちが続いていた。

皆、きっちりとした正装に身を包んでいた。宮殿の中という視界

に映る特殊な背景の影響もあるのだろうが、リョウが良く知る兵士たちは、北の砦の時とは違い、やけに上品で騎士団という名に相応しく立派に見えた。

団体戦優勝者である彼らは今回の主役でもある。周囲からは次々に声が掛かっていた。

その他にも同じような軍部の制服に身を包んだ兵士たちがいるようだ。詰襟の徽章には其々の部隊色と所属を表わした紋章の付いた石が煌めいていた。聞く所によると肩章の部分にも部隊毎にあしらわれている飾りが違うのだそうだ。と言ってもリョウのような素人には、その違いはよく分からなかったが。

リョウはさり気なくユルスナールの指に触れて離れる為の合図を送った。そして、ドレスの若干長い裾を摘み上げると軽やかに反転し、こちらの方にやってくるシーリスの方へ足を踏み出した。

「シーリス！」

決して大きな声量という訳ではなかったが、人々のざわめきの中に凛とした声が通り、名を呼ばれた第七師団副団長は、声がした方に顔を向けた。

それまで社交辞令的な他所行きの微笑みを浮かべながら適当に人の合間を掻い潜っていたのだが、前方からやってくる濃紺のドレスに身を包んだ一人の女性の登場に暫し、目を奪われた。

あのドレスには見覚えがあった。まず脳が認識したのはその女(ひと)が身に着けている服の方だった。華やかな明るい色合いのドレスを身に着けた婦人たちが多い中で、その【シーニェイェ・マルタ】特産の濃紺の色は別の意味で人目を引いた。リョウが聞いたら機嫌を損ねそうなものだが、逆に言えばそれ程、目に入った絵図らがシーリスの想像を超えていたのかもしれない。

そして、ゆっくりと視線を上げると満面の笑みを浮かべたどこか

妖艶で異国風の顔立ちをした黒髪の女性にぶつかった。遠目に小さく見えた女性の姿がみるみる内に大きくなる。そして、この国の一般的な成人女性よりは幾分小柄な、シーリスが良く知るはずの人物のの高さで止まった。

「…リョウ……ですか？」

余程思いがけないことだったのか、呆けたような声を出したシーリスに声を掛けられた当人（リョウ）は、艶やかな笑みを浮かべた。

「もう、どうしたんですか、シーリス。そんなに変わってはいないでしょう？」

口元に手を当てて淑やかに周囲に集う貴婦人たちとまるで変わらないように微笑むその知り合いの姿を目の当たりにして、シーリスは事前にユルスナールから聞かされていたので頭では理解していた積りであったが、実際に目にしたリョウの変わりように予想以上の衝撃を受けていた。勿論、この場合、良い意味で、だ。

シーリスでさえそうなのだから、後ろに続いていた第七の兵士たちは【推（お）して知るべし】だろう。

「いや、これは想像以上です。すっかり見違えましたよ」

『驚いた』とつるりと己が頬を撫でたシーリスは、そのまま顎に手を置いて立てた右肘に左手を当てて自分でも少し可笑しそうに笑った。

だが、直ぐにいつもの表情に戻った。

「ああ。そう言えば術師の試験に合格したそうですね。おめでとうございます。良かったですね」

シーリスからの祝辞にリョウは嬉しそうに微笑んだ。

「はい。ありがとうございます。これもシーリスがレヌート先生を紹介してくださったお陰です」

「ふふふ。お役に立てて何より。登録は済ませたのですか？」

「はい。申請は受理されたのですが、まだ登録札の方が出来上がっていなくて」

恐らく、今日明日で出来上がるだろうから、後で取りに行く予定

であると語ったリョウにシーリスもそうかと目を細めたのだった。

そこで不意にシーリスはリョウの周囲を見渡した。

「それよりも、ルスランはどうしました？」

このように女として見事な変貌を遂げたリョウをあの男ならば放っておくはずがないと思っていたのだが、用心棒よろしく隣に張り付いていそうな強面の美丈夫の姿は生憎近くになかった。

その問いにリョウはそっと来た方角を振り返った。

そこには、社交界では広い人脈を持つことで有名なリガルスキー夫人とその取り巻きのご婦人方がいて、華やかな女たちの中に囲まれている銀色の頭部が見えた。

シーリスは状況を瞬時に理解した。

確かにあの中にいたのではリョウは息苦しくて堪らないだろう。なにかと押し出しの強いご婦人たちだ。控え目なリョウなど迫力負けしてしまうだろうし、要らぬ嫉妬の鞘当てならまだしも集中砲火を浴びてしまいそうだ。

その昔、娘時代にリガルスキー夫人はユルスナールの父親ファーガスに恋破れたことがあるそうで、それ以来なにかとシビリークス家の男たちを気を掛けているというのは社交界では有名な話だった。そして、今の所のお気に入りは、ファーガスの形質を一番よく引き継いだ三男のユルスナールであるというのが貴族たちの暗黙の共通認識であるらしい。年を重ねる毎にユルスナールはファーガスに似てきたようで、その昔、同じようにファーガスに恋をしたが、その夢が叶わなかったかつての社交界の花たちは、その想いを自分たちの娘に託そうとした。

即ち、ユルスナールの心を射止めたリョウにとっては、あの集団は鬼門に違いなかった。近寄らない方が身の為だ。

「それは正解でしたね。あちらの方々は皆さん、中々に迫力がありますからね」

にっこりといつもの人好きのする笑みを浮かべたシーリスにリョ

ウはほんの少しだけ困惑したように笑った。
リョウがそういう表情をすると普段の凛とした清々しさになんとも形容し難い儚さというか哀愁のようなものが漂い、シーリスは妙に男心を擽られるような気分になった。あれだ。放っておけないというやつだろう。庇護欲をそそられ、自分から何かと世話をしてやりたくなる。そのような不思議な空気をこの日のリョウは持っていた。そして、ユルスナールはこれに落ちたのだろうと新しい発見に一人感心したのだった。
これは目を離したら大変なことになりそうだ。シーリスは内心、独りごちた。ここに集まる男たちはこういうある種、独特の匂いに敏感に反応をするものだ。遊び人の戯れに穢されては敵わない。そういう遊戯（ゲーム）の好きな性質の悪い男たちがこの場には多く集まっているのだ。早速、その匂いを感じ取ったのか、こちらをチラチラと見ている貴族の男たちの顔触れをそっと頭の中に入れて要注意人物候補に指定してからシーリスは言葉を継いだ。
「シビリークスの方々は？」
ユルスナールのことだ。自分の目が届かない場合は、それ相応の保護網を張っていると思ったのだが。
「恐らく中の方かと」
だが、生憎、頼みの綱もこの人混みの中で離れてしまったようだった。
「そうですか」
ならば、その役目は自分が引き受けた方が良さそうだ。
その時、隣にリョウがいないことに気が付いたユルスナールが周囲を見渡し、シーリスの姿を捕らえた。そして、そこに佇むリョウの姿にも気が付いた。厄介な相手に捕まったという自覚がある所為か、どこか苦い顔をしている。だが、思いの外、リョウが近くにいてほっとしたようでもあった。シーリスはユルスナールにこちらに任せておけとばかりに鷹揚に頷きを返した。
それからシーリスは、リョウに向き直ると穏やかに微笑んだ。他

所行きではない心からの笑みを浮かべていた。
「それではお嬢さん、お手をどうぞ」
芝居掛かった慇懃な仕草で恭しく一礼してから己が手を差し出したシーリスにリョウは可笑しそうに笑ったのだが、このような大勢の招待客の中でシーリスのような知り合いが傍にいてくれるのは非常に助かったので、相手の好意を素直に受けることにした。それにこういう夜会のような正式な場では、女性は必ず男性に同伴されるものであるからだ。一人でいることは有り得ないのだ。
「ふふふ。では、よろしくお願いいたします」
白い手袋を付けたシーリスの手にリョウもそっと自分の手を乗せた。

「おい、シーリス」
こうしてリョウはシーリスたちと行動を共にすることにしたのだが、シーリスの後ろにいた第七の兵士たちは、いまいち事情が飲み込めていないようで突如として加わった艶やかな笑みを浮かべる女性に戸惑っているようだった。
どこかそわそわと落ち着きのない様子でリョウの方を見ていた。特に深く開いた胸元と同じように露わになった背中、そして大きなリボンを背後に結んだ腰から臀部の曲線をちらちらと盗み見ては態とらしく咳払いなどをしつつ視線を逸らしていた。中々に男の欲求に正直ではあるが、意外な程に初にも思える反応である。
「そちらの方は？」
紹介してくれと言わんばかりに集まった面々を代表してか、そのような問いを発したロッソにリョウは傷ついたような顔をして見せた。勿論、ちょっとした演技だ。少し服装が変わって化粧をしただけで元々の造作は変わっていないのだ。特にロッソはスフミ村での一件からリョウが女であることを知っている口だった。気付いても

らえないのは、ほんの少しだけ悲しかったと言うのも本心だ。
「まぁ、酷いわ。ワタクシのことをお忘れになったの？　ロッソ。あんなに素敵な時間を過ごしたと言うのに……」
スフミでのことを仄めかしながら、ほんの少しの恨みがましさを込めて哀しい顔をしてみれば、ロッソは仰天したように目を剥いた。青灰色の瞳が驚きに見開かれたまま固まった。掛けられた言葉をを上手く消化できていないようだ。
そんなロッソの傍らで、
「おい、ロッソ。おまっ、こんな美人と知り合いだったのかよ！」
アナトーリィーが声を低くして詰め寄った。
「え……いや……その……そんな…はずは…」
普段の冷静さはどこにいったのか、ロッソは急にしどろもどろになった。明らかに狼狽している。
そんな反応が返ってくるとは思わず、少し楽しくなったリョウは、そのままちょっとした演技を続けることにした。
そして、今度はその矛先を変えてみた。
「いいえ。ロッソだけではないわ。アナトーリィーもアッカも、それにヤルタにグントも。グリーシャさんまで。皆さん、ワタクシのことをお忘れになるなんて……。なんて薄情な方々なのでしょう。ねぇ、シーリス？」
大声を上げて笑いたいのを堪えながらその三文芝居のような成り行きを見ていたシーリスは、リョウからの振りに調子よく乗っかった。
「ええ。本当に。随分な話ですねぇ。全く男の風上にもおけない。嘆かわしいことです」
悲しそうな顔をして目を伏せたリョウの儚げな姿にシーリスは宥めるようにリョウの肩に腕を回した。その口元は不自然に歪んでいたのだが（勿論、笑いを堪える為である）、それに気が付くには相手の兵士たちは気が動転していたようだ。
名前を呼ばれた兵士たちは突然のことに吃驚仰天、互いに顔を見

交わせて狼狽したように視線で会話をし合った。
「うぇぇえ？」
「え、いや、まさか」
グントとヤルタが言葉にならない奇妙な声を上げた傍で、
「それは本当ですか？」
「お嬢さんみたいな人なら絶対忘れはしないんですがね」
アッカとアナトーリィが信じられないというような顔をして心当たりの無い非難をした相手を見た。
その横でグリゴーリィーは、無言のまま目を瞬かせていた。
ユルスナールが自分に求婚紛いのことをした時に、てっきりシーリスから詳しい事情説明が行われているかと思っていたのだが、どうやら違ったようだ。リョウは確認の為にシーリスの方を見たのだが、当人は目の端に涙を浮かべて必死に笑いを堪えているようだった。
こうなったら皆が気が付くまでだ。この際だからリョウはもう少しからかって遊ぼうかと思ったのだが、そうは問屋が卸さなかった。
――――というのも。
「おうおう、みんな揃ってんな」
リョウにとっても第七の兵士たちにとっても実に馴染み深い男がひょっこりと顔を出したからである。
「……ブコバル」
野生の勘かは知らないが、実に計ったかのような現れ方をする男である。
「あ？　どうかしたのか？」
周囲を取り巻く微妙な空気を敏感に感じ取ったブコバルは、首を傾げながら綺麗に髭の当てられた顎を撫でた。ブコバルからは、囲まれていた時に女たちのものが移ったのか香水の甘い香りが漂ってきた。
だが、直ぐにその場にいない人物に気が付いて顔をリョウの方に

向けた。
「……ってか番犬はどうした、リョウ？」
最後に告げられた名前に周りにいた兵士たちが呆気に取られた顔をした。
だが、それには構うこと無く、リョウは聞き捨てならない言葉の方に反応していた。
「……番犬……て。もしかしなくともルスランのことですか？」
「ああ？　そうに決まってんだろうが」
他に誰がいるんだとばかりの顔をしたブコバルにリョウは何とも言えない顔をした。
その表現が強ち間違ってはいないのではと思ってしまうのは、ここに来る前にあったスラーヴァとの大人げない遣り取りを思い出したからだろうか。ユルスナール本人がいないのをいいことに散々な言われようだ。
――と思ったのだが。
「なんだ？　何か言ったか？」
ぞっとするような低い声が不意に切り込んできたかと思うとリョウの背後に影が差した。そして、さり気なく定位置となった腰に手を宛がわれ、そっと引き寄せられた。
噂の主の登場に第七の兵士たちは顔を一斉に強張らせたのだが、その原因を作ったはずの張本人（ブコバル）は、全く気にも留めていないようで、何やら愉快そうな顔をして嘯（うそぶ）いた。
「あ？　なんでもねぇぞ。なぁ、リョウ？」
「え？　あ、はい」
いきなり振られて、取り敢えず話を合わせる為に合槌を打ったものの、
「ルスラン、こんな所でブコバル相手に威嚇してどうするんです？　それでは言葉通り、まんま番犬ですよ」
折角、上手く誤魔化そうとした話の流れをシーリスが元に戻してしまった。

だが、それは確信犯であったのだろう。そっと仰ぎ見たシーリスは実に良い笑顔をしていたからだ。

ユルスナールは仲間からの容赦ないからかいに嫌そうに口の端を下げたのだが、何も言わなかった。

そうこうするうちに周囲に高らかな鐘の音が鳴り響いた。

祝賀会の幕開け（後書き）

思ったより話が進みませんでした。まだメイン会場であるホールの手前です。次回からは祝賀会の模様に移れるかと。ありがとうございました。

夜の蝶　壁の花

高らかに鳴り響く鐘の合図と共に祝賀会の開催が告げられた。その音頭を取ったのは、王族ではなく、要職にある上級官吏とのことだった。こういった夜会を取り仕切る立場にあるらしい。

その後、間を置かず室内には楽師たちが奏でる軽やかで繊細な旋律が流れ出した。宮廷内のお抱え楽師たち、若しくはこの日の為に用意された楽団による生演奏が始まった。横笛、縦笛、【グースリ（竪琴）】、【バラライカ（弦楽器の一種）】、【ガルモーニカ（アコーディオン）】【バラーニ（太鼓）】、その他の大小の弦楽器など楽師たちの手にする楽器は色々だった。

給士が参加者全員に配った小さな乾杯用のグラスに形通り口を付けてから、リョウは、しっとりとした柔らかな曲を耳にしながら、広間中央へ集まりつつある人々に目を向けた。

その場所には着飾った招待客の男女が集まり、踊りの輪が生まれつつあった。踊りというと四カ月ほど前のスフミ村の収穫祭の時のものを思い出したが、こちらはあの時のものとはかなり趣が違っていた。それも当然だろう。片や庶民のお祭り。片や貴族の社交界。それが開かれる場所も目的も全く異なり、両者に流れる空気はかなり違う。

スフミ村ではさんざめく囃し声の中、高らかな歌声とテンポの速い調子（リズム）に乗せて賑やかに輪舞が行われた。軽やかで、時には軽薄過ぎるほどの楽しい曲のはずなのにどことなく哀愁の漂う音階を紡ぐ不思議な旋律だった。賑やかでどこか猥雑さすら感じる空気。笑い声や下卑ただみ声の混じる庶民の踊りだった。

一方、この宮殿の大広間で始まっている踊りは、曲調もゆったりとして洗練されており、上品ですらあった。踊りの調子（リズム）も随分と違う。こちらは男女が組（ペア）みになって踊る形が基本のようだ。

だが、両者ともに若い男女の出会いの場であることには変わりが

ないのだろう。
　踊りは男性側の方から申し込むのが通例らしい。広間の辺縁部では踊りたい男女が相手を探し、組み合わせが出来た所から中央の輪に加わって行った。
　端の方には、簡単に摘める軽食の類が長いテーブルの上に並べられ、踊りの輪に入らない人たちは皿やグラスを片手におしゃべりに興じていた。同じ黒い制服に身を包んだ給士たちが、飲み物の入ったグラスの乗ったお盆を手に招待客たちの間を器用に回っていた。
　前奏のような曲から調子が変わった所で、ごく自然に男性は女性を誘い中央に集まって行った。流れるような優雅な曲調に合わせて手を取り合い身を寄せ合って男女が広間をくるくると軽やかにステップを踏んで行く。仲睦まじい夫婦、初々しい恋人たち、どこかぎこちないながらも互いを意識している若い男女。好みの女性を熱心にかき口説いている男。意中の男性に零れんばかりの笑みを浮かべている若い女。女たちが身に纏う色とりどりのドレスの裾が足さばきに合わせて揺れている。そこは、様々な物語（ドラマ）が生まれ紡がれる空間だった。

　今回、主役に当たるユルスナールは、案の定、様々な人から祝いの言葉を掛けられ、その応対に忙しくしていた。団体戦に出た第七の兵士たちも似たり寄ったりの感じだ。ブコバルは早速、好みの女性（豊満な肉体を持った妖艶な女だ）を誘って踊りの輪の中に入って行った。そして他の兵士たちもここぞとばかりに踊りに誘い誘われては恭しく淑女の手を取っていた。
　シーリスは、招待客の中にいた姉だという女性に声を掛けられていた。レヌートの奥方だというその女（ひと）は快活そうな朗らかな女性で、リョウも紹介されて挨拶をした。レヌートに世話になっていることを多大なる感謝の気持ちを込めながら告げれば、奥方もレヌートの方からリョウのことを聞き及んでいたらしい。その後、少し話をしないかと誘われたのだが、シーリスは姉と会うのは随分と久し振り

らしく、姉弟水入らず積る話もあるだろうと遠慮をした。そして、仲睦まじくテラスの方へ出て行った姉弟の後ろ姿を温かな気持ちで見送ったのだ。

そんなこんなで気が付いたらリョウは一人になっていた。視界に入る所にいたシビリークス家の人々も其々踊りの輪に入ったり、知り合いに話掛けられて忙しそうにしていた。

リョウは少し調子の早くなった楽曲に合わせて広間を優雅に回転しながら踊る男女の流れを眺めながらゆっくりと息を吐き出した。漸く、この場の空気と煌びやかな空間に目が慣れてきたような気がする。気持ちは、ここにある軽やかな空気に感染するように高揚していた。

やはりここは非日常の世界だった。にこやかな笑みを振りまいている美しく着飾った女性たち。楽しくて仕方がないという嬉しさが内側から滲み出るようにして表情に現れている。艶やかに上がる口角に輝かんばかりの瞳。踊りの輪の中にいる人たちは皆、きらきらと輝いて見えた。形は異なれども、純粋な人の在り方はここでも変わらない。

そこから少し視線を転じて、様々な年齢の男女に囲まれ埋もれているユルスナールは、遠目にも実に堂々としていた。気後れをするような様子は微塵もない。場慣れしているというよりも自然体だ。やはり昔からこのような空気感の中に身を置いてきたのだろう。リョウとしては、なにはともあれ、この場の空気を肌で感じることが出来たのは収穫だった。

だが、同時に別の意味で、ユルスナールの妻になるということはこのような中に自分から入っていかなければならないことを思い知ったのもまた事実だった。ユルスナールは今はまだ北の砦に赴任をしているが、いつまでも辺境で燻っている訳ではないだろう。やがて王都に戻るか、別の都市に派遣されることになるのかもしれない。軍部では四・五年に一度の割合で人事異動と人員の配置換えが行わ

れるとのことだった。その地域の有力者や地元の名士たちとの癒着を防ぐ為でもあるらしい。ユルスナールは北の砦に赴任してからもうすぐ四年になるとのことだった。いつぞやのシビリークス家での夕食の席で聞いた話を思い出していた。

新しいことを始めるには不安が付きまとうが、リョウは自らの意思で選んだこの選択を後悔する積りはなかった。それに残されている時がどれほどかも分からないままなのだ。一々迷い、足踏みをしている暇はなかった。終わりを意識したら前には進めない。しっかりと前を向いて出来る限りのことをしたいと思った。様々な欠点（ハンデ）を抱えながらも漸くこの国で術師としての認可を得たのだ。そして、様々な不確定要素と限界がある中で、自分を選んでくれたユルスナールの想いに応える為にも、これまでに得た恩を少しでも返して行きたいと思っていた。

喉の渇きを覚えたので、リョウは飲みものをもらおうと給士を探した。生憎、背筋の伸びた黒い制服は近くには見当たらなかったが、軽食が並んでいるテーブルの方でグラスを並べている男の姿が見えたので、そちらに歩いてみることにした。

壁側に沿って、リョウは広い室内をゆっくりと歩いて行った。気持ちだけをみればそれなりにここの空気に身体が馴染んできていた。これもユルスナールやシーリスたちのお陰かもしれない。当初のような妙な緊張感はないが、常に見られているという意識はあった。

背筋を伸ばし高いヒールを器用に捌いて歩く。濃紺の滑らかな服地が歩調に合わせて揺れた。肌に吸い付くようなしっとりとした質感は健在だ。

踊りの輪には加わっていない男たちが意味深な目配せをしてくる。何故か、男たちとはよく視線が合った。その都度、リョウは社交辞令的な当たり障りのない微笑みを返していた。やはりここでも顔立ちの違う自分は悪目立ちしているのかも知れない。そんなことを思った。

壁側でにこやかに談笑している軍服に身を包んだ兵士たちの前を通った時、進路を塞がれるように前に人が立った。顔を上げると、詰襟の制服を隙なく着込んだ上品な顔立ちの男がにこやかな甘ったるい感のある微笑みを浮かべていた。

「このような所に【夜の精】が迷い込んでいたとは。【フセェミール】王の御代以来の幸運ですな。美しいお嬢さん、もしよろしければ私と一曲、踊っては頂けませんか？」

歯の浮くような大げさな台詞にリョウは内心、可笑しさを堪えながらも少々困ったように微笑んだ。

「お誘いは有り難いのですが、申し訳ございません。ワタクシ、踊れませんの」

夜会には踊り（ダンス）は付きものだとユルスナールから聞かされた時、リョウはやはりそうかと自分の予想が正しかったことを知った。勿論、そのような踊りなど知らないし、踊れる訳もない。貴族の婦女子ならば、最低限の教養として踊れることが淑女たる最低条件とされるのだろうが、自分は違う。スフミ村の時は、アクサーナの姉エレーナの双子の子供たちに教わって見よう見真似で踊りの輪に入ってみたが、ここではそういう訳にはいかないだろう。どんちゃん騒ぎの余興とは違うのだ。

リョウは、その懸念をユルスナールに話したのだが、心配することはないと軽く笑い飛されてしまったのだ。無理に踊る必要はない。そのような誘いに乗る必要もない。興が乗らなければ女性側が断るのは普通のことであるらしかった。今回は見学する積りで見ていればいい。必要ならば後で踊れるように練習をすればいいだろう。その時は勿論自分が相手をすると言ったのだ。だから、リョウとしては後学の為にもどのような踊りがあるのかをちゃんと見ておこうと思っていたのだ。

正直に告げたリョウに男はあからさまにがっかりした顔をした。

断られると思ってはいなかったのかもしれない。往々にして貴族の男たちは皆、自信家な所がある。

「もしよろしければ、私がお教え致しましょか？　これでも踊り（ダンス）は得意でしてね。コツを掴めば簡単なものですよ？」

矛先を変えて言い募った男にリョウは微笑みながら緩く首を否定の意味を込めて振った。

「いいえ。お気持ちは大変有り難いのですが、今回は止めておきます。みっともないことになってしまうでしょうから。きっとご迷惑をお掛けしてしまいますわ。次回、もし機会がありましたらお願い致しますわ」

「それは残念ですな」

「では、我々と少しお話を致しませんか？」

踊り（ダンス）の誘いを体よく断れたと思った矢先、傍にいた他の兵士たちから声が掛かった。襟の徽章の色は水色をしている。ということは第一師団の兵士たちなのだろう。彼らは近衛の精鋭（エリート）部隊だ。その出身も貴族が多いと聞く。このような場所は彼らの得意とする分野なのだろう。

「ああ、それは良いね」

リョウが口を開く前に先に踊らないかと誘った男が乗って来た。

「いえ、あの、飲み物を取りに行く途中でしたので」

と男たちの誘いをさり気なく断ろうとしたのだが、

「ああ、これは失礼。我々としたことが。おい、君」

リョウが口を開くより早く、その内の一人が実にそつなくお盆を手に招待客の間を回っていた給士の男を呼び止めて、気が付いた時にはリョウの目の前に綺麗な色をしたカクテルのようなソーダ水が並んでいた。

ちらりと給士の男を見遣る。

さぁどうぞ。どれでもお好きなものを。無言のまま、だが、雄弁な眼差しで給士の男が語った。

同じように壁際にいた兵士たちを見れば、促すようににこやかに

微笑まれた。
　仕方がない。こうなれば早い段階で話を適当に切り上げるしかないだろう。リョウは腹を括ると方針転換をして小さな泡を発生させているグラスを一つ手に取った。
「新しい出会いを祝して」
「麗しいお客人の為に」
「この特別な一夜の為に」
「今後の繋がりを祝して」
　同じようにアルコールの入ったグラスを手に取った男たちが、口々に乾杯の音頭を上げてから盃を干した。
「ご親切な皆さんの為に」
　リョウも同じように口にしてからグラスに口を付けた。一口、口に含んで思いの外、強い刺激に驚いた。予想していたよりもアルコールの度数が高い。これは気をつけなければならないとリョウは密かに思った。
　自分ではそうでもないように思っていたのだが、いつぞや『酔っ払うと性質が悪い』とユルスナールに笑われたのだ。あれは武芸大会の最終日、お祝いをしようということで馴染みの店に繰り出した夜のことだった。リョウの中では楽しかった記憶しかないのだが、ユルスナールに言わせればヤルタに絡んで困らせていたと言うことだった。暗に酒癖が悪いと窘められたような気がして、気の置けない相手ならば少し羽目を外しても許されるだろうが、初対面の相手には気をつけなければならないと思ったのだ。
「ああ、それは少しきつかったかもしれませんね」
　リョウの反応に目敏く気が付いた男が、柔らかく微笑んだ。淡い茶色の髪を後ろで緩く束ねている。目尻が下がり気味の優しい面立ちをした男だった。
「この国の酒は周辺諸国に比べると濃度の高いものが多いですからね。ご婦人方は気を付けなければなりません」
　顔立ちから直ぐにこの国の人間ではないことが知れたのかもしれ

ないが、その隣で少し生真面目そうな雰囲気の男が小さく微笑みのようなものを口の端に浮かべながら首を傾けた。そうすると少し長めの緩い癖の付いた灰色の髪が頬桁に掛かった。
「ですが偶には良いでしょう？」
少し険のある吊りあがり気味の瞳をした男が片目を瞑った。見かけによらずその仕草は人懐っこい。
「日常に適度な刺激は必要ですからね」
初めに声を掛けてきた甘い優男風の男がそう締め括った。
「そうかもしれませんね」
リョウも同意をするように微笑んでいた。
四人の男たちは皆、紳士的で洗練された空気を身に纏う男たちだった。口では上手く言い表せないのだが、第一師団長のマクシーム・フラムツォフと同じような匂いがすると思った。
「皆さんは第一師団の方ですか？」
「ええ」
「先程仕事を終えたばかりで、偶々こちらに顔を出してみたのですよ」
「我々は運がいい」
「ああ。あなたのような素敵な女とお会いできたのですからね」
「まぁ、こちらの殿方は本当にお上手なのですね。うっかり信じてしまいそうになりますわ」
苦笑を漏らしたリョウに、吊りあがり気味の瞳を持った男が些か傷ついた顔をして、その口元に微かな笑みを浮かべた。それすらも演技であるのかもしれない。
「あなたのような美しい人を前に我々が軽薄な言葉を口にできるとお思いですか？」
「ふふふ。どうでしょう？　何を美しいと感じるかは、人それぞれですもの。そこにワタクシが入るとは思えませんわ」
ユルスナールではあるまいし。この国の女性の美しさに慣れているこの国の男たちには、自分は異質にしか映らないだろうと笑い飛

ばせば、
「おや、あなたはご自身を分かってらっしゃらない」
「ええ、それはいけませんね」
淡い茶色の髪を後ろで緩く束ねた男が肩を竦めた隣で、生真面目そうな男も友の言葉を肯定するように合槌を打った。
「我々が教えて差し上げましょうか？」
三体一ではどうにも分が悪い。三人の男たちからの口説きを持て余していれば、
「ああ。それはいい。折角ですから、我々ともう少し親密になってみませんか？」
初めに声を掛けてきた男がリョウの傍に寄ると耳元で囁いた。
不意に色を変えた空気には敢えて気が付かない振りをした。
「その必要はないかと」
「おや、随分とつれないことを仰る」
白けた顔をした男にリョウは穏やかに微笑んだ。
「ワタクシがこのような晴れがましい場に顔を出すのも今宵一夜限りのことでしょうから」
王都を去った後は、再びあの森の小屋に戻るのだ。今後のことはユルスナールと相談しなければならないが、いずれにしてもスタリーツァを訪れることは暫くないだろうと思っている。だから、ここでの掠めるような出会いは、この夜限りの限定的なものでしかない。
「そんな。それではまさに【夜の精】と同じではありませんか」
「ええ。そう思って頂いた方がよろしいかと」
束の間の泡沫のような存在を気に掛ける必要はないのだ。
「では今宵、あなたに出会えた我々は本当に幸運であったということなのですね」
「幸運であるとは限りませんわ」
「では、せめてものお近づきの印にお名前をお聞かせ願えませんか？」
その問いにリョウは少し悪戯っぽい顔をしてから小首を傾げた。

「お伽噺の【夜の精】に名前はありましたか？」
「さぁ、どうだったかな」
「聞いたことはないな」
「【夜の精】は【夜の精】だろう」
「伝わってはいないんじゃないかな」
否定の言葉を吐いた男たちにリョウはしたり顔で鷹揚に頷いて見せた。
「ならば、ワタクシとて同じこと。この場で名乗るような名などありませんわ」
「これは中々に手強いな」
生真面目そうな男が愉快そうに笑った。
彼らとて本気ではないのだろう。この場を楽しむ為のちょっとした潤滑油のような遣り取りだ。暇潰しのようなものだろう。こういう駆け引きの類は余り得意ではなかったが、リョウ自身、それなりにこの会話を楽しんでいる節があった。

そんな時だった。
ふと隣に人の気配がした。
「やぁ、皆さん、楽しんでいるかな？」
柔らかな物腰の聞き覚えのある声に顔を上げれば、同じような軍服をかっちりと身に着けた知った顔があった。徽章の色は緑、第五師団の印だ。
「なんだ、ウテナか」
知り合いであるのか、第一の兵士が興醒めのような口をきいた。
こちらを見下ろしたウテナは、パチリと音がしそうなくらいに片目を瞑ってリョウに眩しい笑みを向けた。
「……ウテナさん」
「やぁ、リョウ。酷いなぁ。ボクという者がありながらこんな所で浮気をするなんて」
ウテナ流の挨拶代わりの言葉を軽く流してリョウは小さく微笑ん

だ。
　リョウは内心、助かったと思った。初対面の四人の男たちに囲まれて抜け出す間合い（タイミング）を計っていたのだが、中々隙が見つからなくて困っていたのだ。
　壁際にいた四人の第一師団の兵士たちは途端に面白くない顔をした。
　そして、今度は左隣に影が差した。
「こんな所に隠れていたか」
「あ、ドーリンさん」
　振り返れば、神経質そうな顔に眉を吊り上げて第五師団・団長のドーリン・ナユーグが立っていた。きっちりと撫で付けられた濃い茶色の髪の下、露わになった額には皺が寄っている。
「よ」
「……イリヤさん」
　その後ろにはお馴染みのイリヤもいた。同じように詰襟を着て、髪もいつもよりすっきりとまとめられているイリヤは随分と立派に見えた。左頬桁の上に斜めに走る刃傷の痕も粗野さというよりも男らしさを助長させる役割を果たしていた。
「……もしかしなくても探していましたか？」
　飲み物が欲しかっただけでユルスナールがいた場所から遠く離れた積りはなかったのだが、結果的には同じようなことになったのだろう。ひょっとしたら身動きの取れないユルスナールに変わって探しに来たのかも知れない。心配を掛けてしまったのだろう。
「すみません」
「いや、こっちこそ、慣れないお前を一人にして悪かったな」
　謝意を口にすれば、ドーリンに却って気を遣われてリョウは恐縮した。
「いえ、とんでもないです。お忙しいのに態々すみません」
　顔馴染みが現れたことで第一の兵士たちはそれ以上リョウを引き留めて置くことができないと悟ったようだった。ウテナだけならば

まだ違ったのかも知れないが、第五の団長であるドーリンの登場は思いの外、効果があったようだ。

ドーリンたちに促されるようにしてリョウは誘いの言葉を口にした四人の男たちの前を去った。その時、軽く会釈をしたのだが、皆、特に気を悪くした風もなく小さく手を振って応えたのだった。

「ああ、そう言えば、先程、ドーリンさんの叔父様、南の将軍にお会いしてご挨拶させていただきました」

「……」

リョウとしては話のきっかけとしての軽い振りの積りだったのだが、ドーリンは不意に黙り込んで無表情になった。そして、まじまじとリョウを見下ろした。

何か不味いことでもあっただろうか。ドーリンと見つめ合うこと暫し、淡々とした顔に苦々しい色が滲むようにして表れた。

黙った上司の代わりにウテナが嬉々として話に入ってきた。

「ああ、あの少女趣味（ロリコン）疑惑の将軍？」

「こら、ウテナ。口を慎め」

あけすけなもの言いをしたウテナを常識人のイリヤがすかさず窘めた。だが、それを気に留めることなくウテナはいつもの調子で言葉を継いだ。

「なに、リョウ、ひょっとして迫られた？　口説かれた？　あの人、好みは煩いけどリョウは多分、ドンピシャなんじゃないかなぁ。『ああ、なんて可憐なんだ！』なーんて言って触られまくったんじゃないの？」

ご丁寧に将軍の口真似までして、どこかで見てきたような言葉を吐いたウテナに、リョウは思わず口の端を引き攣らせていた。

「あれ？　当たった？」

「さぁ？　……どうでしょうねぇ」

隠し事は出来ない性質なのできっと顔にはウテナの推量が当たっていると表れているのだろうが、良識あるリョウとしてはそれをこ

の場で肯定出来る訳もなく、曖昧に濁して微笑んでみた。
目の前で額際に手を当てて大きく溜息を吐いたドーリンの横でイリヤは何とも言えない複雑な顔をして己が上司を見遣った後、妙な事を言い出した朋輩を睨んだ。それらを横目にリョウは曖昧な微笑みを浮かべて誤魔化した。これ以上何かを語るのは、ドーリンの手前良くない気がしたからだ。と同時に、あの南の将軍の奇特な趣味が、そこそこ知れ渡っているということを知ってしまった。

それから暫くして、
「少しお話をしましょう？」
シーリスと久し振りの語らいをしていた姉のクラーヴィアは、テラスの方から戻ってくるとそう言ってリョウを誘った。
ドーリンたち第五師団の兵士たちは、シーリスとその姉が戻って来たのを確認すると用事があるとのことで人混みの中に紛れてしまった。
リョウがその申し出にちらりと隣にいたシーリスを見遣れば、柔らかく微笑まれた。シーリスは、もう十分、姉との時間を堪能したということなのだろう。リョウは折角だからもう少し一緒にいればよいだろうにと思わないでもなかったが、いつになく嬉しそうな空気を醸し出しているシーリスを前に口を挟むのは止めた。
「リョウ。どうぞ姉の相手をしてあげてください。どうせ暇を持て余しているんですから」
こちらを気遣う、だが、少し捻くれたシーリス流の物言いにリョウも静かに頷いた。
「ワタクシでよろしければ」
そうして、促されるままに室内の端の方、窓際に置かれた長椅子に腰を降ろせば、クラーヴィアは、慣れたような様子で給士の男を呼び、飲み物を一つ手に取った。リョウも同じように、今度はアル

コールのなるべく軽いものを給士に聞いてから手に取った。

広間の中央では曲が変わり、今度は少しテンポの速い旋律が流れ始めた。聞いているだけで体が自然と拍子（リズム）を取るように動き出してしまいそうな軽やかで少し楽しい音色だった。横一列、向い合せに並んだ男女が相手（パートナー）を変えながら軽やかにステップを踏んで行った。それは、どこかスフミ村の空気を思い出させるような素朴で懐かしい匂いのする踊りだった。老いも若きも思い思いに踊りを楽しんでいる。

それらの楽しそうな男女の姿を遠巻きに眺めながら、クラーヴィアとリョウは乾杯の為に其々手にした小さなグラスを己が前に掲げた。

「素晴らしい出会いの為に」

「素敵な一時の為に」

目を合わせて互いに微笑み合うとグラスに口を付けた。

クラーヴィアの瞳はシーリスと同じ菫色だった。髪は少し濃いめの茶色で弟と同じように柔らかく、緩く癖の付いたものを上に束ねて巻いていた。静かで穏やかな空気を持つシーリスとは少し違って、姉のクラーヴィアは年齢的な落ち着きの中にも朗らかで快活な印象が強く出る可愛らしい感じの女性だった。少し吊り上がり気味の眦は生来の気の強さを表わしているような気がした。夫であり、リョウの後見人でもあった神官、レヌート・ザガーシュビリとは性格的にも正反対な感じがする。

「術師になったのですってね」

『おめでとう』と祝いの言葉を掛けられてリョウは嬉しそうに微笑んだ。

「はい。ありがとうございます」

「養成所で学んでいたのでしょう？」

「はい。短い間でしたが、レヌート先生には本当に良くしてもらいました。それからシーリスにも」

シーリスが色々と影で根回しをしてお膳立てをしてくれたお陰で、王都（スタリーツァ）というこの国の首府を訪ねる機会を得たのだ。そして沢山の貴重なことを学び、吸収することが出来た。養成所では年の離れた弟のような友人たちも出来た。何よりも知り合いになった講師たちを始めとする新しい繋がりを得ることが出来た。これらはその場限りではない一生涯のものだ。ガルーシャが遺した一通の封書から始まった出会いは思いもよらない幸運を自分にもたらしてくれた。

「本当に何とお礼を言っていいやら」

言葉だけでは到底足りない。ここで得られたものは、単なる知識だけではなかった。それ以上の掛け替えのない繋がりを沢山得ることが出来たのだから。

「ふふふ。レヌートも自慢の生徒だと言っていたわ」

「恐れ多いことです」

そこでクラーヴィアは顔を上げるとリョウの目を見てから微笑んだ。

「私の方からもお礼を言わなくてはならないわ。ありがとう」

思いがけない台詞にリョウが目を瞬かせれば、

「だって弟（シーリス）が王都に来たのもあなたのことがあったからでしょう？この夜会もそう。ずっと薄情な程にこういった場に近寄らなかったあの子（シーリス）に会えたのも元はといえばあなたのお陰ですもの」

そう言って微笑んだクラーヴィアの瞳は、嬉しそうであるのにどことなく哀しそうな色を内包していたのだが、リョウはそれには触れずに恐縮そうに微笑んだ。

「いいえ。とんでもない。勿体ないことです。今回のシーリスの王都訪問は、ワタクシのことがあったからというよりも武芸大会があったからではありませんか？　それに付随する仕事があった為です。シーリスは仕事に私情を挟むことはなさらないでしょうから」

「あら、そうなの？」

「はい。きっかけの一つとしてはそういう見方もできるのかもしれませんが、それは偶々で、第一義ではなかったはずです」

本人に聞いてみないと分からないが、といっても本当のことを教えてくれるとは思えないが、最終的にシーリスを動かした動機は別の所にあるだろう。例えば、家族が恋しくなったとか。

その言葉にクラーヴィアは目を丸くして、でも面映ゆそうに優しく笑った。

「そうだといいのだけれど……。ああ、でもあの子は昔から少し捻くれている所があるからそういう口実が必要だったのかも知れないわね」

「ええ」

シーリスの性格をそれなりに把握してきたリョウも姉のクラーヴィアに同意するように頷いた。

「ああ。それから」

クラーヴィアは顔を明るくすると花が綻んだように笑った。シーリスとは七つ離れていると聞くが、リョウの目にクラーヴィアはとても若々しく映った。笑った時に目尻に表れる笑い皺は年相応だが、クラーヴィアの魅力をより引き立てているように思えた。自分もこういう風に年を重ねていければと心の中で思った。

「おめでとう。嬉しいお話しを聞かせてもらったわ」

――――シビリークス家の末と婚約なさったのですってね。

「はい」

リョウは少しはにかむように微笑んだ。この数日間で劇的に変化した状況にまだ頭と感情が付いていかないのかもしれない。婚約者という言葉はまだ実感がない。勿論、言葉にならない嬉しさはある。そして気恥かしさと一抹の不安も。それでも総合的にみれば嬉しいという気持ちが大きかった。

「あちらの御父上も漸くこれで一安心ね。長い間、堅物の噂が絶えなかった三男坊がやっと妻を迎えると聞いて、皆、驚いているわ」

そこでクラーヴィアは、何かを思い出すように小さく笑った。

「ああ、でも。妙齢のお嬢さんたちがいる家は、がっかりしたかも

しれないわね。あそこはかなりの優良株だったから。うちの娘を是非にって思っていた所は沢山あったはずだわ」

一時期は、余りにも女性を寄せ付けなかった為に女に興味がないのではないかという噂も流れたのだとか。それを真に受けて、見目の良い年若い男をユルスナールの元に側仕えに使ってくれと送り込んだ貴族もいたのだとかいないのだとか。そのような社交界の裏話を可笑しそうに語ったクラーヴィアにリョウは貴族社会の奇異な一面を知った気がして、内心、驚きながらも同じように小さく笑ったのだった。

そうやって暫く女二人で楽しい語らいをしていた時だった。

「おやおや。このような所に可憐で美しい花が二輪も。壁の花にしておくには実に勿体ないですねぇ」

――――――そうは思いませんか？

そんな軟派な台詞を口にしながらやって来たのは、軍部の詰襟を隙なく着こなした優雅な身のこなしの恐ろしく繊細な面立ちをした男だった。男にしては余り雄々しさを感じさせない美貌の持ち主、リョウがつい先程、ブコバル繋がりで思い浮かべた第三師団長のゲオルグだった。その襟元には第三師団の所属を表わす赤色の徽章が付いていた。

ゲオルグは、慇懃な所作でリョウとクラーヴィアが座る長椅子の前に来ると恭しい仕草で一礼した。顎辺りで切り揃えられた癖の無い淡い金色の髪が降り注ぐ数多もの光に反射して煌めいていた。

「これはインノケンティ殿。ご無沙汰いたしております」

クラーヴィアが淑女然りとした態度で微笑んだ。

「クラーヴィア様もお変わりなく。いや、その美しさは益々磨きが掛かっていますね。余りの眩しさに気を付けていないと目を潰されてしまいそうです」

「まぁ、相変わらずお上手ですこと。インノケンティ殿もお元気そうで何よりですわ」

「ええ。このようにお美しい方々とお話しできる栄誉に浴することが出来まして、寿命が確実に伸びていますからね」

クラーヴィアに対するゲオルグの台詞は、余りにも大げさで芝居掛かった物言いな気がして、それがゲオルグ流の言い回しなのか、それとも宮殿特有の言い回しなのかは知らないが、何だか端から聞いているリョウにしてみれば可笑しくて仕方がなかった。

突然、笑うのは失礼に当たるので何とか堪えていたのだが、最後に耳にしたゲオルグの言葉にリョウははしたないかと思ったが、我慢できずに吹き出してしまった。貴族の男たちが色々と知恵を絞って吐き出すのであろう口説き文句もリョウにしてみれば余りにも大げさで滑稽に思えてしまうのだ。こればかりは育った環境とそこでの常識の違いによるもので如何ともしがたい。

「おや、何か可笑しいことでもありましたか？　麗しいお嬢さん」

笑われていることが心底不思議で仕方がないとばかりに小首を傾げたゲオルグに、

「いいえ。失礼しました。なんでもありませんわ。ゲーラさん」

なんとか笑いを引っ込めてにっこりと笑みを浮かべたリョウに声を掛けられたゲオルグは、その淡い灰色の瞳を驚きに見開いた。

「……リョウ…ですか？」

珍しくその声が裏返っていて、リョウは内心複雑な気持ちになりながらも微笑んだ。

「はい」

「いやいや。これは驚きました」

そう言うとゲオルグはリョウの左隣の空いた場所（スペース）に腰を降ろした。

「そうですか？」

自分ではそんなに変わっているとは思えないのだが、やはりこうして化粧をしてそれらしい格好をするのは、以前の姿からは考えられないということなのだろう。自分をそれなりに知るはずの第七の兵士たちも事情を良く知るはずのシーリスさえも直ぐには気が付かなかったのだから。中身は変わらないのに可笑しな話だと思わずに

はいられなかった。
だが、それに比べればゲオルグは直ぐに気が付いたのだから勘の良い方なのだろう。
「ええ。でも実によく似合っています。ええ。とても素敵ですよ」
暫し感じ入ったように長い息を吐いて、腰掛けた傍からまじまじとリョウを眺め渡した。
思いの外、観察するような真剣な眼差しにリョウは擽ったそうに笑った。
「ふふふ。ありがとうございます」
「いやいや。これはどうして。成る程。想像以上ですねぇ」
「あら、リョウ。お知り合いなの？」
右隣に座るクラーヴィアからの問われてリョウは小さく首肯した。
「はい。以前、養成所でお知り合いになりまして」
「あら。そうなの」
第三師団長でもあるゲオルグは術師でもあるので、その繋がりをクラーヴィアは別段、不思議には思わなかったようだ。
だが、それも束の間。
「まぁ、インノケンティ殿、ひょっとして、また悪い癖をお出しになったのではありませんか？」
からかうような声音で意味深な目配せをしたクラーヴィアにゲオルグは鷹揚に微笑んだ。
「いやですねぇ。私は皆さんが思っていらっしゃるほど【好きもの】ではありませんよ？　純粋な【美】に興味はありますけれどね」
どこかで聞いた事のあるような台詞と挑発的な遣り取りにリョウは【アルセナール】やその他で聞きかじった第三師団長の女性遍歴とその分野での武勇伝ともいえる話題の切れ端を思い出していた。
ブコバルとは違った意味で手広く女性たちに声を掛けるゲオルグは、その美貌を武器に社交界では華々しい浮名を流しているのかもしれない。そして、何とも言えない気分でその手練手管の一つを垣間見た気分になったのだった。

話題を変える為にリョウはクラーヴィアにレヌートは今回の夜会には参加しないのかと聞いてみた。すると普段、神官たちは、一部の例外の除き、このような場には参加しないものなのだが、今宵の祝賀会は、年に一度の国王肝いり(ツァーリ)の盛大なもので、招待客の階層も多様であるということで、後から顔を出すらしいということだった。神殿の方での勤めが終わり次第、こちらに合流するのだそうだ。

それを聞いてリョウはレヌートが顔を出したら挨拶をしたいと申し出ていた。

そうこうするうちにクラーヴィアは、とある貴族の知り合いと思しき紳士に踊り(ダンス)に誘われて広間中央へと向かった。リョウは長椅子に座りながら、その様子を眩しいものを見るように目を細めて眺めていた。

曲が変わり、ゆったりとした温かで落ち着きのある旋律(メロディー)が流れ始めた。それに合わせて広間に集まった男女が踊りを再開した。

ゲオルグと二人、長椅子に腰を降ろしていたリョウは、ゆっくりと隣に座る繊細な面立ちの主を見上げた。

「先日、お役所の登録機関に申請に行きました」

「ああ。術師の試験に合格されたと聞きました。おめでとうございます」

順番がすっかり逆になったことを詫びつつ、ゲオルグが柔らかい笑みを浮かべた。

「ありがとうございます。登録札は明日にでも取りに行こうと思っています。それで、以前のお話しなのですが、覚えていらっしゃいますか？」

「ええ。勿論」

それは以前、ゲオルグがリョウに少し話をする時間が欲しいと申し出ていた件だった。最終的に術師の試験が終わってからならば時間が取れると返答していたのだが、それが具体的に可能になったの

だ。
　術師になった暁には第三師団に入らないかとの勧誘をずっとされていた。リョウが女性であると分かった現時点では、また意味合いは違って来るのだろうが、いずれにしてもガルーシャとの繋がりのことも含めて、ゆっくり話をしなければならないことがあるだろうと思っていた。その約束を果たさなければならない。
「ワタクシの方は、時間の余裕が出来ましたので、ゲーラさんの都合の良い時をご連絡ください」
「シビリークスの方に？」
「はい」
　養成所の学生寮の方は引き払ってしまったのだと言えば、ゲオルグは少し可笑しそうに笑った。
「そうですか。ルスランも中々に気が早いですねぇ」
――――ですがまぁ、その方がいいかもしれませんね。
　全てを語っている訳ではないのに、ゲオルグにはそれが全てユルスナールの差し金であることが分かってしまったらしい。
　リョウは肯定も否定もせずに曖昧に微笑んでから言葉を継いだ。
「もう暫くはルスランの所に御厄介になると思います。場所はゲーラさんにお任せします。【アルセナール】でも、どこでも構いませんので」
　日時と場所を指定してくれればこちらから出向くと言ったリョウにゲオルグはそれは有り難いと口にしながらも、途中迷子になると困るであろうから、伝令を道案内に付けようと申し出てくれた。
「分かりました。それではなるべく早いうちにご連絡を差し上げましょう」
「はい」
　それから不意に真面目であった空気を瞬時に変えて、ゲオルグは身のこなしも軽く長椅子から立ち上がるとリョウの前に立ち、人当たりの良い微笑みを浮かべながら腰を屈めて手を差し出した。
「どうです？　一曲、踊りませんか？」

似たような誘いにリョウは少し困ったように微笑んでから緩く頭(かぶり)を振った。耳に付いた銀色の房飾りが動きに合わせて可憐に揺れた。
「いいえ。踊れませんから」
「では、私が教えて差し上げましょう」
「ふふふ。きっとご迷惑をお掛けいたしますわ。ですから、今回は止めておきます」
「おや、そうですか？」
ゲオルグは形の良い柳眉を片方、跳ね上げたが、別段、気を悪くした風でもなく、それ以上は押しては来なかった。
「ええ。ですから、ゲーラさんは他の方をどうかお誘いになってください」
――――ほら、あちらに沢山いらっしゃいますよ。
先程からゲオルグに熱い視線を送っている若い女性陣の方に気が付いていたリョウはさり気なく視線をそちらに投げてからまた前に戻した。一方、ゲオルグは会場をぐるりと見渡して、とある一点を見ていたかと思うと徐にリョウの方を振り返り、苦笑に似た笑みを浮かべながら小さく肩を竦めた。
「どうやら時間切れのようですね。それではご助言通りに少し体を動かしてくることにしましょう。リョウ、次回は私と踊って下さい。約束ですよ？」
ゲオルグは自然な所作でリョウの手を取るとその甲に掠めるだけの口づけを落とした。
そう言って生来の女誑しの性質を遺憾なく発揮させた第三師団長は、華やかなドレスの色が溢れる方向へとほっそりとした背中を向かわせたのだった。

夜の蝶　壁の花（後書き）

祝賀会メイン会場に入りました。思った以上に話が前に進みません。のらりくらりと華やかなＢＧＭを背景にもう少し似たような社交界的なシーンが続く予定です。

それでは、また次回に。ありがとうございました。

２０１１／１０／１３　誤字修正

迷走円舞曲

「あの、少し気になっていたんですが」
そう前置きしてから、リョウはこれまで疑問に思っていた事を口にしていた。
「ブコバルは、あのような所では言葉使いを変えているんですか？」
リョウの視線が向けられている方角には、紳士然りとした洗練された物腰で華やいだ顔立ちの豊満な女性に寄り添いながら軽やかに広間中央を踊るブコバルの姿があった。この日ばかりは、正装である詰襟の軍服を一糸の乱れもなく着込み、伸び放題であった無精髭も綺麗に剃り込まれ、ぞんざいに掻き上げられているだけの茶色い柔らかそうな髪もきちんと後ろに撫で付けられていた。
リョウが良く知るいつもの山賊の親玉のようなむさ苦しい姿は微塵も見られない。まるで違う人を見ているような気分だった。
主会場（メイン）に入る前に言葉を交わした時は、普段通りのどこか粗野な口調であったのだが、ふとあのような貴婦人を前にした時は、大きな猫でも被って丁寧な言葉使いに変わるのだろうかと疑問に思ったのだ。
囁きを交わし合いながら対峙する女性も艶やかな笑みを浮かべている。そこにあるのは穏やかな空気で、貴婦人である女性を前にブコバルは寛いだ表情をしていた。
良く言えばざっくばらんで悪く言えば粗雑な口のきき方しか知らないリョウとしては不思議で仕方がなかったのだ。一体、あのブコバルは、どんなふうに女性を口説くのだろうと。ちょっとした純粋な興味である。
リョウの隣にはドーリンとウテナがいて、思わず漏れた疑問の声に両者はリョウの頭上で無言のまま視線を交わし合った。
取って付けたような咳払いを一つしてから、最初に口を開いたの

はドーリンだった。
「ああ。ああ見えて貴族の男だ。ブコバルの御父上は躾に関しては人一倍厳しかったはずだからな。貴族としての礼節はしっかりと身体に叩きこまれていると思うぞ」
ユルスナール、ブコバルとは同期であるドーリンの言葉はかなり信憑性があった。それにドーリンは真面目な性質であるから、こういう所で嘘は吐かないだろう。
「つまり、ブコバルは紳士……なんですか？」
ドーリンを疑っている訳ではないのだが、どうにも信じられないという顔をして憚らないリョウに隣にいたウテナが可笑しそうに肩を震わせた。
「あはは。そんなことを言うのは、きっと、この中じゃぁ、リョウくらいだろうね」
ウテナの言葉は、ブコバルがこのような場所では素を隠している、いや、相当な猫を被っているというリョウの考えを肯定するものだった。
「ブコバルが女好きなのはよく分かりますけれど。何だか、紳士的な言葉使いをしているかと思うと妙な感じですね」
でもここまでの間でブコバルの女性の好みは大体把握が出来た。そのようなことを知ってどうするのだと思わないでもないが、まぁ、それは置いておくことにしよう。
ブコバルは、【プラミィーシュレ】の娼館の女主イリーナのように豊満でたっぷりとした肉感的な（特に見事な臀部を持つ）女性が好みのようだ。リョウは、以前、ブコバルが北の砦で行われたどんちゃん騒ぎの時に若い兵士たちを前にした猥談で『女と言えば尻だ』と豪語していたのを不意に思い出した。そして、【プラミィーシュレ】では別れ際に尻を掴まれてもっと肉を付けろとお節介な助言をもらったことも記憶に新しかった。
一曲終わると、恭しく女性の手に口付けを落としてからブコバル

はリョウたちが談笑している方に戻って来た。噂の主のご帰還である。

ブコバルはリョウの前に来ると苦み走った野性味溢れる微笑み――とご婦人方には評判のようなのだが、リョウにとっては甚だ胡散臭いものだ――を浮かべた。

「いかがですか、お嬢さん？　私と一曲。それとも、より記憶に残る一夜にしますか？」

今、噂をしていたばかりの口調で意味深な目配せと共にそんな甘い誘いの言葉を吐いたブコバルにリョウはあからさまに嫌そうな顔をして剥き出しになった肩から腕を摩った。ご婦人方には効果てき面の口説き文句もリョウには掠りもしなかった。

「そうやってブコバルは女の人を口説いているんですね。ううう……でもワタシには勘弁です。鳥肌が立ってきましたよ」

それを聞いて隣にいたウテナが吹き出した。ドーリンもどこか愉快そうに目を細めている。

失礼極まりないが正直な感想を口にしたリョウに、

「あ？　なんだと？」

直ぐにいつもの口調に戻ったブコバルは明らかにムッとした顔をした。そして、本当にその腕に鳥肌が出ているのを確認して、苛立たしげに舌打ちするとリョウを半眼に見た。

「この俺の美声で鳥肌が立つなんてぇほざきやがるのは、リョウ、お前くれぇなもんだよ」

そう言って腹立ち紛れにリョウの片頬に手を伸ばすと摘んで引っ張った。

ブコバルはそれなりに良い声をしているのだが、それを考慮しても尚、その性格を知るリョウとしては他の女たちのようにブコバルを紳士として憧憬と敬意を持って接することはとてもじゃないが出来そうになかった。

「だって、いつものブコバルを知っているんですよ？　急にそんな風に口調を変えられても胡散臭いだけですよ。なんのお芝居かと思

ってしまいます」
「あ？　そう言うお前だって、人のこと言えねぇだろうがよ」
「ああ。確かに。言われてみればそうですね」
尤もな指摘にリョウも苦笑した。
リョウとしても時と場合に合わせて、口調を変えている自覚はあった。だが、それも意図せずして男に間違われるのだから仕方の無いことだったのだ。それに今夜は特にこれまで以上に女らしい丁寧な言葉使いをして、振る舞いもそれに見合うように変えている。
だが、リョウ自身にしてみればこちらの方が素に近いのだ。
「でも、ワタシとしてはこの方が自然なのですけれど」
これまでの方が少し作った感があったのだ。そう言ってにっこりと微笑みながら小さく首を傾げたリョウを前にブコバルはドーリンと顔を見交わせてから口の端を少し下げたのだが、不意にニヤリと人の悪い笑みを浮かべた。
目の前で豹変したブコバルの表情にリョウはたちまち嫌な予感がした。
「……で、リョウ。んなとこでボケっと突っ立ってねぇで一曲くらい踊れ。折角そうやって着飾ってるんだ。付き合ってやるぞ？」
急に何を言い出すかと思えば。
リョウは慌てて後じさった。
「いいえ。無理です。踊れる訳ないでしょう？」
「あ～、そうか。でも覚えちまえば簡単なもんだぞ。それにいずれは必要になんだろ。覚えといて損はねぇ」
第七の兵士たちのように運動神経が特別良いわけでもないのだ。反射神経は、昔からそこそこ良い方だとは思っていはいたが、それでも訓練された軍人と比べるのはおこがましい程のものだ。
「いや。無理ですよ。絶対、ブコバルの足を踏んでしまいます」
妙な所で自信満々に言い切れば、
「それはいい。今の内に思う存分こいつの足を踏んでおけばいい。そうやって練習すれば上達するぞ？　勘を掴むまでは練習するしか

ないからな」
　今度は何故かドーリンまでもが悪乗りしてブコバルを体の良い練習相手にすればいいと言う始末。
　ドーリンはいつになく口の端を吊り上げてあくどい感のある笑みを浮かべていた。それに対してブコバルは嫌そうに友人を睨みつけたのだが、ドーリンは慣れているのか歯牙にもかけなかった。
「それならボクが教えようか？　足を踏まれるくらい、キミからの愛の鞭だと思えば痛くも痒くもない。それにリョウ、キミは軽いものだろう？」
　そう言って片目を瞑って妙な申し出（アピール）をしたウテナにリョウはぎょっとした。
「いいえ、とんでもない！」
　元々王都の貴族階級の出身であるウテナは、このような社交界でも知り合いが多いようで、久し振りに会う知己に相変わらずの人のよさそうな笑顔で接していた。そして、まだ若いウテナは、ここでも若い女性の人気を集めているようだった。
　リョウとしてはこれ以上、無駄に敵を増やしたくはなかった。ただでさえ、ユルスナールを始めとするシビリークスの人々やドーリンやゲオルグと言った華々しい男たちが傍にいて、突然、現れた異国の女の存在にこの場に集まった女たちは心穏やかならざるものを感じているようで、興味、好奇、敵愾心、その瞳の色は様々だが、時には不穏すらある囁きも聞こえてきていたのだ。リョウは今日の所は分を弁（わきま）えて大人しくしていようと思っていた。

　リョウはぐるりと広い室内を見渡して無意識にユルスナールを探していた。そして、反対側にある人の輪の中に特徴的な銀色の頭部と精悍な男の横顔が見えた。
　ユルスナールの前にはどっしりとした恰幅の良い老年の紳士が対峙しており、その横には妻と思しき老年の貴婦人が立っていて、にこやかに言葉を交わしているようだった。

忙しくなると分かっていてもこのような場所で頼りになるユルスナールが傍にいないのは、少し心細かった。隠している積りでもそんな縋るような本音が出てしまったのだろうか。往々にして鋭い所のあるユルスナールがこちらの視線に気が付いて、ゆっくりと振り返った。それにつられるようにして話をしていた老夫婦の視線もこちらに向いた。

リョウは咄嗟に笑みを浮かべて軽く会釈をした。ユルスナールが柔らかく微笑み、何事かを老夫婦に囁いた。夫人はそれに何度もにこやかに合槌を打ちながら、こちらを見ていた。リョウもにこやかな微笑みを向けられて同じように返していた。

だが、リョウが同じようにのほほんと呑気な笑みを浮かべていた対面で、ユルスナールの顔が不意に苦々しいものに変わった。すると今度は老夫婦が互いに顔を見交わせて可笑しそうに笑っている。

どうしたのだろうと思った矢先、リョウは隣から逞しい腕に腰を掬われるようにして抱き止められ、気が付いた時には広間中央の方へ向かって歩かされていた。

「リョウ、折角だからな。私と踊れ」

黒い艶やかな詰襟の軍服に煌びやかな金糸の装飾が施された袖と肩。何よりも銀色の髪と同じ色の艶やかな髭、そしてユルスナールと同じ濃い青色の瞳が、してやったりというように細められて、こちらを見下ろしていた。そして、刻まれた皺に囲まれた瑠璃色の双眸の中には、驚きを顕わに呆けた顔を晒した女がみっともなくも映り込んでいた。

「ファーガス殿!?」

思いがけず吃驚した声を上げたリョウにファーガスは小さく笑った。

「リョウ、そろそろ【父上】と呼んでくれても良いだろう?」

「え、いや。そうですか?」

「ああ」

驚く間もなく話を挿げ替えられて、それに乗せられてしまうリョ

ウも大概単純なのだろう。
「では、お義父(とう)さま」
そう言った瞬間、ファーガスが相好を崩した。
「ん？」
「あの……これは一体？」
――――――何をなさるお積りですか？
目を白黒させながらも、腰をしっかりと掴まれているので足は自然と促されるままに広間の中央に向かっている。
どうしたというのだろう。そんな疑問を抱いたのも束の間、
「いつまでも壁の花ではつまらんだろう？　一曲くらい付き合え」
そんな恐ろしいことを言ったファーガスにリョウは仰天した。
「え、いや、でも、ご存じでしょうが、ワタシ、踊れませんよ？」
ユルスナール以外のシビリークス家の人たちにも、その旨を事前に伝えてあった。
しどろもどろになりながらも狼狽したリョウにファーガスは男らしい笑みを浮かべた。
「ああ、それは承知だ。だが、大丈夫だ。次の曲はゆっくりとした簡単なものだからな。初心者にはもってこいだ。なに、心配することはない。私に任せておきなさい」
「…でも……」
「ルスランはあの通り忙しいからな。お前を放っているあやつに見せつけてやればいい」
そんなことを言ってファーガスは上機嫌に足を進めた。そして、踊りの輪が出来上がっている場所で止まるとリョウの腰にしっかりと手を回して体を支え、そのほっそりとした右手を己が左手に取り少し上に掲げると姿勢よく背筋を伸ばし、体をより密着させる為にか回した腕に力を入れた。
ファーガスの背丈はユルスナールと余り変わりがなかったが身幅はずっとある。リョウの身体はファーガスの詰襟の黒色と同化するように大きな体の中にすっぽりと埋まるような感じになっていた。

ザワリと空気が揺れた気がした。だが、リョウはそれに気を取られている暇もなく、流れ始めた曲に合わせるようにファーガスから足さばきの指示が入り、ゆっくりとステップを踏みながらごく自然に流れに乗っていた。

そうやって無理のない速度（ペース）で広間の中をゆっくりと移動する。腰をしっかりと支えられている所為か、曲が思ったよりも緩やかなものであったということもあるのだろうが、ファーガスの足さばきと的確な指導の囁きに促されるようにして、なんとか無様な真似を晒すことなく、自発的に踊るというまでにはいかないが、そこそこ合わせることができていた。それでも意識は足元と曲の調子に集中していた。

「リョウ、体の力を抜け」

低く渋みのある声に耳元で囁かれ、剥き出しの背中をファーガスの大きな温かい手が宥めるように摩った。

リョウはなんとか笑みを作った。必死でややぎこちないものになっていたが仕方がないだろう。

「こういうときは男に身を任せておけばいい。身体を相手に委ねるのがコツだ」

――――――閨でのようにな。

ひっそりと付け足された囁きにリョウは居た堪れない気分になって目の端を赤らめながらも、窘めるように相手を見上げた。

「もう、お義父さままで、なんてことを仰るんですか」

甥っ子の子供たちといい、ファーガスといい、女性相手になんというあけすけな仄めかしをするのだろう。シビリークス家では性的な話題に寛容すぎはしないだろうかと埒もないことを考えてしまったのはちょっとした現実逃避かもしれない。

「だが、その方が分かりやすいだろう？」

「ううう……はい」

リョウは暫し、恨めし気にファーガスを見上げながらも最後には小さく肯定した。

だが、そのような際どい感のあるファーガス流の軽口に緊張が解れたのも事実だった。

それからはあれよあれよという間にファーガスのペースに乗せられて、広間中央の踊り（ダンス）の輪の中に加わっていた。少し前までは、この中で踊る人たちを眺めていたというのに。予想外もいい所だ。

立場が逆転すると面白いもので、意外に周囲の人々の様子が分かるものなのだということが知れた。それだけ余裕が出てきたのかもしれない。もうこうなれば一曲踊り切るまでは粗相をしないように気を付ける他ないだろう。ファーガスは年老いても尚、現役の兵士たちのように逞しい身体をしており、小柄な体格のリョウの重みは然程苦にはならないようで、軽やかに先導（リード）してくれた。

リョウは、小さく息を吐き出すと肩の力を抜いた。

「そう、それでいい」

それを感じ取ったファーガスは、どこか満足そうに男らしい笑みを浮かべたのだった。

「まぁまぁ。珍しいこともあるものね」

新しく始まった踊りの輪の中で見つけた顔触れにパーシヴァル夫人は、隣に立つ夫を見上げた。

「おやおや。ファーガス殿はすっかり骨抜きのようだな。それにしてもなんとも可憐なお嬢さんではないか。一体どこで見つけてきたんだ、え？　ルスラン？」

「ええ。本当に。なんとも不思議な感じの方ね。ああ、あれだわ。あなた、お伽噺にあるじゃない。風の王の娘よ。黒い髪に黒い瞳の美しい娘」

「ああ、あれか。確か【夜の精】か」

「ええ」

今夜の主役に祝いの言葉を掛けていたパーシヴァル夫妻は、婚約者を連れてきたというユルスナールの打ち明け話にその相手の方を見ていたのだが、向こうがこちら側に気が付いて小さな会釈をしたのも束の間、颯爽と現れた夫妻もよく知る人物に攫われる形になってしまい、目を丸くしながらもからかうようにユルスナールを見た。

そこには、己が掌中の珠を目の前で攫われた所為か普段の澄ました表情を変えて苦々しい顔をしたまだ若い男の精悍な横顔があった。

周囲に集まった人々が、広間の中央をゆったりと流れる旋律に合わせて踊る一組の男女に注目し始めていた。

初老の域に入る男は、若かりし頃、【氷の微笑を持つ美貌の貴公子】と揶揄され社交界を賑わせた男だった。現役を退いた今でも鍛え抜かれた屈強な肉体は昔のままに年齢を重ねた重みが貫禄として備わる燻し銀のような美丈夫だった。今でも社交界では一目置かれている。男の銀色に鈍く輝く髪色はその一族特有の色だ。

男がこのような華やかな場で踊るのは別段珍しいことではないのだが、いつもその組み(ペア)となる相手(パートナー)は、奥方のアレクサーンドラと決まっていた。夫婦仲が良いというのは昔からの評判で、今日も若々しい笑顔を振りまきながら二人して優雅に仲睦まじく踊っている姿が垣間見られていた。

だが、今回、その男が相手に選んだ女性は奥方ではなかった。そのことがまず周囲の人々の目を引いた。

女性の方は随分と小柄のようだ。華奢で少女のような線の細さだが、体つきは十分成熟している。すらりと伸びた背中と上方に掲げられたほっそりとした腕。身に着けたドレスの色合いも黒に近い濃紺で、華やかな女たちの色とりどりの衣装の中ではかなり地味な方だったが、それが逆にその女性の艶やかな黒い髪の色と相まって他の女性たちにはない独特な雰囲気を醸し出していた。

一言で言えば、その衣装はひっそりとしたその女性の美しさを引き立てていた。ともすれば埋もれてしまいがちな慎ましやかさだが、一度、その隠れた美しさに気が付くと目が離せなくなる。そういう

類の静的な魅力を持っていた。
そして、その姿を垣間見た人々が一様に思い浮かべるのは、この国に伝わるお伽噺の中に出てくるという【夜の精】のことだった。闇色の衣装を身に纏う初老の男に寄り添う姿を見て、まるで闇から抜け出てきたようだと人々は口々に噂した。

それではこれより少し、周囲の様子を眺めてみよう。
パーシヴァル夫妻がいた場所より少し南側に離れた所では。

「ふふふ。さすがファーガス殿。かつて社交界を賑わせた貴公子の名は健在のようですね」
壁際に寄り掛かり腕を組んでじっと広間の中央を見据えていたユルスナールの横にやってきたシーリスは、相手の不機嫌もなんのその、そう臆することなく言い放つとからかうような視線を投げながら己が上司の目の前に【ズグリーシュカ】の入った濃い紫色の液体が揺れるグラスを差し出した。
ユルスナールは、無言のままグラスを受け取ると中身を一息に呷った。その視線は相変わらず広間中央に注がれている。
そして、その隣に逞しい体つきの幼馴染が大きな図体の割には音もなく並んだ。その野性味溢れる精悍な顔にはニヤニヤと人の悪い笑みが憚ることなく浮かんでいる。
「ははは。またしても先を越されたか。お前んとこの親父殿は顔に似合わず手が早いからな。あ～、でも、そう言う意味じゃぁ、お前も血は争えねぇっつうことか」
一人勝手に自己完結したブコバルにユルスナールは無言のまま冷ややかな視線を送ったのだが、何も言わなかった。
同じように壁際に寄り掛かったシーリスは、手にしたグラスに口を付けた後、穏やかに微笑んだ。
「ですがまぁ、ルスランの心中はともかく、これが一番効果的ではありますね」

シビリークス家の家長自らがその存在を認め、大事だと公言しているようなものなのだ。これ以上の分かりやすい主張（アピール）もないだろう。

「何せ一目瞭然ですからね」

辛うじて慰めとも取れる言葉にユルスナールはまだ不満げな様子だが、半ば仕方がないとばかりに小さく息を吐き出した。

シーリスの言は尤もである。だが、本音の所では面白くないのも事実だった。

約一年ぶりに顔を出す社交界で、当然のことながらユルスナールはこれまでの無沙汰を返上するように方々から声を掛けられてその応対に忙しかった。本来なら、あの位置には自分がいてしかるべきなのだ。リョウのことを中々構ってやれず客たちの間で身動きの取れない状況になるだろうことは初めから予想が付いていたことだ。その隙間を埋めるように父が気を回してくれたのだろうということはよく分かる。

そして、そこに見え隠れする父親特有の不甲斐ない息子への当てつけも。

しかもそれは一番効果的なやり方だった。初めてリョウと踊るという権利をかくもあっさりと攫われてしまったことにユルスナールは婚約者としての自尊心（プライド）を否応なく刺激されたのだった。ファーガスの方はそれを分かってやっている。だから本当ならば、父の行動に感謝しなければならないのだが、素直になるには業腹な気分だった。

シビリークス家の三男が婚約者を得た。その噂はこの祝賀会の広い会場内に瞬く間に広まっていった。

なんでもその相手というのは、予てより噂されていたズィンメル家の末娘ではなく、珍しい顔立ちをした異国風の女であるという。その話は並々ならぬ驚きと好奇心を持って招待客の間を駆け巡って

いった。

そして、その噂話を肯定するかのように今、踊りが行われている広間中央ではシビリークス家・家長のファーガスが明らかに毛色の違った不思議な魅力を持つ女性の手を取り、ゆったりと舞台中央を進んでいた。

踊りの曲は、年配の客人たちにも余り負担が掛からなようなゆったりとした曲調のものが掛かっていた。ゆらゆらと揺れるように会場を思い思いに組みになった男女が散らばっている。これは専ら夫婦や恋人たちにもってこいとされる曲目でぴったりと隙間なく体を寄せ合う形のものだった。愛しい相手への囁きが、流れる曲の合間に交わされる雰囲気（ムード）あるものだった。

シビリークス夫妻を良く知る人々は、ファーガスが若い女性に手を出して気を揉んでいるに違いないとその奥方であるアレクサーンドラを心配したのだが、それは何故か杞憂に終わった。というのも、ファーガスの妻、アレクサーンドラは夫が自分以外の女性と踊る様子を遠巻きにどこか微笑ましそうに眺めていたからだ。

アレクサーンドラの傍には長男の妻女であるジィナイーダと次男のケリーガルが居て、にこやかに話をしながら踊るファーガスとそれに付き合わされることになったリョウを見ていた。

その実、リョウが踊れないということはアレクサーンドラも聞き及んでいた。社交界の踊り（ダンス）なんて恐ろし過ぎると顔を青くしていたのだ。その時の様子を思い出せば、直ぐにファーガスが無理に誘ったというよりも強引に連れ出したのだろうということが分かる。悪戯を成功させた子供のように輝いている瞳とそこに浮かぶ表情を見て、奥方は『ああ、また悪い癖が始まった』と思ったのだった。

そして、その広間中央の踊りに注目している人物が他にもいた。

多くの客人たちに混じり、遠巻きにその様子を眺めていた男は、手にしたグラスを静かに傾けながら、ひっそりとした笑みを浮かべていた。この祝賀会への招待状の中には特に招待客の厳密な記載が

あった訳ではないのだが、予想通り目当ての人物がこの中にいることを確認することが出来て、一人ほくそ笑んでいたのである。

「それにしても見事な色だ」

汚れや染み一つない光沢ある白い上下に濃い紫色の地模様の入った帯を締めた神官の正装に身を包んだ男は、半ば陶酔するようにうっとりとした表情を浮かべていた。

その視線の先には漆黒の衣に隠れるようにして寄り添う見事な闇色を体現した女が映っていた。

神殿の方の準備は整いつつあった。後は鍵を手に入れるだけである。未知への新しい扉がもうすぐ開かれるのだ。

ぎょろりとした魚のような大きな目を細めて、神官は傍らにいたもう一人の同僚に耳打ちをした。

計画は万事恙無く進んでいる。高鳴りそうになる鼓動を宥めすかしながら、神官は、高い天井から吊り下げられた華やかな装飾の付いた発光石の明かりの向こう、広間の反対側にいる二人の男たちを流し見た。そして、そちらに向けて手にした盃を目の前で小さく掲げると音にならない言葉を口内に紡ぎながらその中身を干した。

――――――ブラーガ・ザ・リュークス（リュークスの恵みに感謝を）

全ては神の御心のままに。

枯れ枝のように細い首を晒した神官の男が小さく掲げた祝杯は、その男一人のものではなかった。

遥か後方、踊りの輪から外れた多くの客人が和やかに談笑をしている長椅子が並べられた付近では、これまた二人の男が同じように手にした小さな盃を胸の前に掲げていた。

繊細な彫り物が施されたグラスを持つ男の手は、深い皺に刻まれたごつごつとした無骨なもので、その中指には人目を引く大きな紅い石が鈍く光を湛えていた。

そして、もう一つ。その対面で同じようにグラスを手にしている

男の手は、無骨さの欠片もない文官のような滑らかな手だった。指が恐ろしく長い。強いて言えばその指先には小さなペンだこがある。他には目立った特徴の無い男の手だった。

「そろそろだな」

「ええ」

主の言葉に影のように付き従う部下がそっと頭(こうべ)を垂れた。

年老いた主の男は広間中央を優雅に回る銀色の髪をした男の姿を見つめていた。

いつになくやに下がった感のある男の横顔。束の間の幸福に酔いしれているであろうあの男をその場所から突き落としてやるのだ。見事淑女然りとして振る舞っているあの女の化けの皮を剥がすのだ。

これから起こる事態を想像すると愉快で仕方がなかった。後はあの男が上手く手札(カード)を切れるか否かに懸かっている。手先の器用な魔術師のようにいかに【無】から【有】を生み出すことが出来るか。その為のお膳立ては一通り済んでいた。

「では、お手並み拝見といこうか」

「御意」

そして、年老いた男とその腹心の部下は、再び広間をぐるりと見渡すと対角線上よりやや前方に立つ一人の男を流し見た。

男たちの視線が向けられた先には、今宵の鍵を握る男が一人立っていた。別段面白味のない顔に無表情を装ってはいるが、近づきつつある【その時】を前に深緑色の上等な衣服の下では微かな胴震いをしていた。

これまで幾度となく頭の中で反芻してきた台詞と情景をお浚いするように思い返す。気分は初舞台前の役者だ。

これは、男にとってはちょっとした運試しのようなものでもあった。転がり込んできた幸運が本当に幸運であるのかを確かめる機会だった。

今宵、広間に集う人々の会話に耳を傾けてみると、そこから漏れ

聞こえてきた言葉の切れ端は、男に味方をしているように思えた。
風向きは確実に自分の方にある。
男は、深い緑色の上着の縁を軽く下に引っ張ると緩く息を吸ってから吐き出した。

そんな内なる興奮に震える男の元に配下の男がやって来て、小さなグラスを男に手渡した。甘い顔立ちをした有能な部下はグラスを満たす琥珀色の液体を揺らしながら人当たりの良い微笑みを浮かべて己が主を見た。
「配置は済んでいます。万事恙無く。問題はありません」
囁きは瞬く間に周囲の喧騒に紛れた。
「そうか」
男は大きく息を吐き出すとたっぷりとした髭に覆われた口元に笑みを刷いた。
「あちらからは？」
その問い掛けに部下の男は否定の意味を込めて無言のまま目を細めた。
「ふむ。上つ方は？」
「もうすぐお越しになるでしょう」
「第二皇子は？」
「勿論、御出ましになるかと」
「ならばよい」
宴が中盤に差し掛かり、会場内の空気が完全に暖まった頃合いを見て、漸く、今回の祝賀会の主催者である国王を始めとする王族たちが会場に顔を出す予定になっていた。そして、今回の夜会の主旨でもある先の武芸大会で見事、勝ち抜いた剣士たちに国王自ら御言葉をかける表彰式が執り行われることになっていた。
もうすぐ男の人生を懸けた【余興】が始まる。

それと時を前後して。

部下の兵士と巡回を終えた第二師団・団長のスヴェトラーナは、同じく正装の光沢ある灰色の詰襟に部隊色である紫色の徽章を付けた立派な風貌で、祝賀会が開催されている会場へと通じる回廊を歩いていた。

宮廷楽師たちの奏でる軽やかな旋律が切れ切れに聞こえてきていた。流れている曲は弾んだ調子の心躍るような楽しそうなものだ。

だが、その曲調とは対照的にスヴェトラーナの表情はいつになく厳しいものだった。鋭い眼差しが、時折、闇に包まれた周囲を射抜くように照射されている。ピリピリとした緊張感に隣を歩いている部下の兵士は、改めて気を引き締め直した。

招待客の中の貴族が連れてきた私兵と思しき男たちが警備に配置された衛兵たちと二・三言葉を交わしているのを度々見かけていた。スヴェトラーナの方でも道々、任務に当たっている兵士たちに声掛けを行い、その都度、慇懃な敬礼と共に『異常なし』とのきびきびとした報告を受けていた。

今の所、不審な点は見当たらなかった。ただ気になることもある。それは、招待客の家中の者と思しき男たちが広間以外の廊下付近でも散見されること。そして、第一師団のマクシームの所にもたらされた宮殿の警備増強策の一環としてとある貴族たちから募った私兵を宮殿内に受け入れたという連絡事項だった。

通常ならば貴族が軍部に、中でも近衛の第一師団の任務に介入することは有り得ない。表向き貴族たちから協力の申し出があり、軍部はそれを快く受け入れたという触れになっていたが、それは余りにも見え透いたくだらない方便だった。明らかに越権行為で、第一の面目を潰すものである。受け入れ先は主に表の第一の区域ということだが、王族から直々の依頼があったということで、フラムツォフは外部からの介入を普通ならば排除する所なのだが、今回ばかりは強く突っぱねることが出来なかったようだ。

今宵の警備計画は、秘匿すべき最重要事項を除いて、四人の将軍たちとその上の軍事を統括する国防大臣にも伝えてある。現場で陣頭指揮を執るのは勿論、警備の一切を任されている第一師団長のフラムツォフだ。そして、第二師団長のスヴェトラーナは、全面的にフラムツォフに協力する形になっていた。

スヴェトラーナとしては土壇場で入った貴族の横槍がいたく気に入らなかった。大方第二皇子辺りが国王（ツァーリ）に進言し、大臣に捻じ込んだのだろうが、遠回しにこの間の第二の手落ち（後宮での一件だ）を指摘されているようで甚だ面白くなかったのだ。

あの御人は、ちくちくと厭味を口にするだけでは気が済まなかったらしい。

だが、相手は王族だ。しがない宮仕えの身では、上の決定事項に表だって逆らうことは出来なかった。

しかし、やり方は幾らでもあるだろう。

と同時にスヴェトラーナは確信した。今回、明らかな介入が入ったことでそれまで裏で動いていた貴族たちが表面に出てきたことが分かったからだ。フラムツォフによれば、私兵を提供したのは、中央でも要職にあるイジューモフとタラカーノフ、そしてアクショーノフだという。

彼らが何らかの動きを見せるとしたら、今夜を置いて他にないだろう。依然、相手方の目的は見えないままだが、これまで以上に覚悟を決めて事に当たらなくてはならないだろう。

「何を企んでいるのかは知れないが、煩い虫は潰すまで」

スヴェトラーナはそう吐き捨てると厚みのある唇を吊り上げて挑戦的な笑みを刷いた。

売られた喧嘩は買う主義だ。勿論、負けることは考えていない。

そうして、些か場違いな程に並々ならぬ闘志を燃やした第二師団長は、闇から一歩抜け出すと祝賀会の主会場（メイン）となる煌びやかな大広間に足を踏み入れたのだった。

迷走円舞曲（後書き）

ファーガス殿は一枚も二枚も上手。ユルスナール殿、肝心な所を攫われてしまいました。トンビに油揚げな状態。

少しずつ外堀を埋めています。じわじわと真綿で首を締め付けられるような息苦しさかもしれません。読者の皆様をじれじれとさせてしまうでしょうが、どうぞ次回までお待ちください。

悪魔の罠

ファーガス直々の些か強引な舞踏指導から解放された後、踊りの輪から抜け出したリョウの前にはここぞとばかりにユルスナールが待ち構えていて、拗ねたような恨めし気な視線でリョウを見下ろした。

対外的には澄ましたような顔を取り繕ってはいるが、その瞳を良く見れば、そこにある感情はある意味、雄弁だった。

だが、幸いにしてその内面的変化はユルスナールの人となりを良く知る相手にしか分からなかったようなのだが、それはそれで十分面倒な話ではある。いい年をした大人がへそを曲げるというのも厄介な話だからだ。それが色恋沙汰から端を発していれば尚更である。

「随分と楽しそうだったな」

開口一番、吐き出された含みのある言葉をリョウは軽く流していた。ユルスナールがファーガスに妬いていたとは思ってもいないようだ。

「もう、お義父さまったら、強引なんですもの。でも幸い、無様に転げることもなかったのでほっとしました」

――――――足を踏むことも無かったんですよ。

少し誇らしげに邪気のない微笑みを向けられて、ユルスナールはほんの少しだけ罪悪感を覚えた。ここでリョウに八つ当たりをしたのでは余りにも情けないではないか――という訳である

そんな男の内心の葛藤を汲んだのかは分からないが。

リョウはユルスナールの傍に立つとそっとその手を取り、腕に体を凭せ掛けるように預けた。そして少し甘えるような仕草で擦り寄った。

「ルスラン、今度、教えてくださいね？　簡単なものからでいいので。もう、こんないきなりは懲り懲りですから」

そう言って少し照れたように微笑んだ。
男というものは、かくも単純な生き物である。
その瞬間、ユルスナールの中に突如として形容し難いリョウへの愛しさが込上げてきた。この場で今すぐその華奢な身体を思い切り抱き締めたいという欲求が生まれた。
「ああ」
そして、先程までの不機嫌さはどこへ行ったのやら。すっかり機嫌を直して微笑んだものだから、その現金さに直ぐ傍にいたシーリスやブコバルたちは無言のまま顔を見交わせると内心の可笑しさを堪えながらも肩を竦め合ったのだった。

やがて、絶え間なく鳴り響いていた楽師たちの曲が止み、広間に招待客が集まり出した。ユルスナールの話では、これからこの祝賀会を主催した王族が挨拶に現れるのだという。そして、国王（ツァーリ）の謁見があり、先の武芸大会で優秀な成績を収めた剣士たちに労いの言葉を与えることになっているのだそうだ。
個人戦、団体戦で優勝を果たしたユルスナールと第七師団の兵士たちは、所定の場所に整列する為に玉座に近い広間の前方の方へ向かった。広間の前半分では、他師団の兵士たちも揃いつつあった。
同じ色の詰襟の軍服を着た体格の良い男たちが静かに整列する様は、遠目にも圧巻だった。そして、その周りを色とりどりの晴れ着に身を包んだ招待客たちが囲む。広いはずの室内が、急激に増した人口密度に狭く感じられた。
リョウはケリーガルの妻、ダーリィヤと共に遥か後方の端の方に立っていた。知り合いは皆、軍人たちなので前方に集まっている。そして、軍部と深い繋がりのあるファーガスも現【北の将軍】を拝命しているロシニョールも夫婦共々同じく前の方へ行った。財務官であるケリーガルも近くへと移動したようだ。そして、残されたの

がダーリィヤとリョウだった。
　室内は独特な高揚感と緊張感に包まれていた。ざわざわとどこか落ち着かない空気が人々の囁き声と衣擦れの音、そして咳払いなどに漂っている。それだけこの国の王（ツァーリ）の登場をここに集まる全ての人が心待ちにしていることが伝わってきた。王族はこの国を支える主柱でもある貴き（たっと）一族なのだろう。広間に張り巡らされた程良い緊張感は、これから現れる国王（ツァーリ）が畏敬の念を持たれていることの表れだろう。

　ざわざわと燻るように揺れていた室内が、不意に静まり返った。人々の話声がぴたりと止む。荘厳さえある深い沈黙の中、国王（ツァーリ）の登場を願う声が議事進行の高級官吏から上がった。
　広間前方にある大きな扉が開かれたと同時に招待客が一斉に頭を垂れた。男たちは最敬礼をし、女たちは膝を屈めて頭を下げ、淑女としての礼を取る。
　ダーリィヤに促されるようにしてリョウも慌ててそれに倣った。目に入った磨き上げられた石材【ムラーモル】の床が、艶やかに天井から降り注ぐ数多もの発光石の明かりと広間に集まる人々の姿をぼんやりと映し鏡のように反射させていた。
　物音一つしないどこか厳かで張りつめたような沈黙。静まり返った室内に複数の足音が響き渡った。ゆったりとした男の重みのある硬質な足音。それに続くのは軽やかで小さな複数の足音だ。そして、再び雑音が消えた。
「面を上げよ」
　凛とした威厳ある声に集まった人々が一斉に姿勢を正した。リョウも同じように下げていた頭を上げ、遥か前方に立つ人影をそっと見上げた。

　そこには真っ白な詰襟の軍服のような衣装に身を包むこの国の最高権力者がいた。肩の片側にゆったりと掛けられた外套（マント）は、目にも

鮮やかな明るい青色で白い滑らかな獣の毛で縁取りがされていた。左胸の部分には沢山の色とりどりの勲章のような飾りが付いていた。

王は初老の域に入ると思われる齢の男だった。堂々とした威厳ある立ち姿であるが、良く見るとその顔立ちは柔和な印象を受ける。たっぷりとした口髭と顎髭が顔の表面を覆う。やや濃いめの灰色の髪には、所々白いものが混じり始めていた。

王（ツァーリ）を中心に居並んだ王族たちの背後には、青い大きな旗のようなものが掲げられていた。そこに描かれているのは、白い獣の姿だった。武芸大会時、審判が手にしていた旗にも同じような意匠が施されていた。そこに描かれているのは、悠久の時を生きるとされる太古の森の守護者【ヴォルグ】であるという。

「皆、今宵の一時を楽しんでおるようだな」

柔らかで少し高めの声が軽やかに響いた。

「今宵は他でもない。先の武芸大会での我が軍の兵士たちを称え、労う会でもある。其々の勇敢なる戦い振り、実に見事であった。頼もしい限りだ。今後ともこの国の為、そして民の為、大いに励んでもらいたい」

国王（ツァーリ）の慈悲深く寛大なる御言葉に各師団毎に整列した兵士たちは一斉に畏まった。

それから団体戦で上位入賞した各師団へお言葉が下された。側用人の高級官吏が平たい箱を手に王の傍に控えた。その中には、今回の武勲を称えた小さな勲章が並んでおり、それを上位入賞の師団長に授与するのだ。

王（ツァーリ）はまず三位入賞となった第九師団と第五師団の長に歩み寄り、言葉を掛けながら勲章を授与した。周囲の招待客たちは入賞者を称え、盛大な拍手をした。そして、同じく二位となった第一師団長にも下される。

そして最後に団体戦、個人戦共に優勝を果たした第七師団長・ユルスナールの番となった。

「この度は、盛大なる祝賀の儀にお招き預かり恐悦至極、重ねて御

礼申し上げます」
　静かに騎士としての最敬礼を取った第七師団長に、国王は鷹揚に頷いた。
「随分と腕を上げたようだな。こたびの戦いぶり、実に素晴らしかった。今後とも我が軍の名に恥じぬよう精進せよ」
「は、勿体なきお言葉」
　そして、慣例に則り、国王（ツァーリ）自らユルスナールの首に小さな勲章（メダル）を掛けようとしたその時だった。
「お待ちください！」
　広間中央から突如として一人の野太い男の声が沸き上がった。
「恐れながら申し上げます」
　その男は前方にやってくると王族が立つ舞台の直ぐ傍で片膝を突いて畏まった。
「なんだ？」
　勲章授与を止められた国王（ツァーリ）は、突然の闖入者を訝しげに見下ろした。そこには憚らずに進行を中断されたことへの不快感が表れていた。
　不測の事態に第一と第二の近衛の兵士たちが、素早く王（ツァーリ）を守るべく傍に駆け付けようとしたが、国王（ツァーリ）はそれを無言のまま手で制した。
　突然、乱入とも言える不遜な振る舞いをしたのは、国の中央機関でも大臣の要職に就く有力貴族の一人、タラカーノフだった。
　王（ツァーリ）の誰何（すいか）にタラカーノフは、その場で朗々とよく響く声を張り上げた。
「恐れながら申し上げます。そこなる第七師団長ユルスナール・シビリークスには、この度、間者に通じ、我が国の重大な機密事項を他国に流しているとの嫌疑報告が監察機関より上がっております。そのような恥ずべき売国奴の疑いがある輩に王御自（ツァーリ）らご厚情をお下しになる必要はないかと」
　その瞬間、音にならないどよめきが一斉に館内を駆け抜けて行った。動揺が集まった人々の間を高波のようにうねり揺るがした。

皆、信じられないという顔をしている。それもそうだろう。第七師団長のユルスナールは、代々【北】の方位を守護する名家シビリークス家の三男で、品行方正、実直で真面目な仕事ぶりが定評だった。醜聞を流すこともなく、日々堅実（ストイック）なまでに己を律する騎士団の中でも鏡のような男である。そして、この国への忠誠心も篤（あつ）い。そのような立派な男が、斥候に通じ国を裏切るような行為を働いている。それは余りにも法外な寝耳に水のような出来事で、そのような嫌疑自体が掛けられることが到底信じられなかった。遥か後方に佇むリョウも動揺の余波に晒され、一体、何が起こったのか理解できなかった。

突然の暴言とも言える大臣の主張にユルスナールの背後に立つブコバルがいきり立って声を上げようとしたが、ユルスナールはそれを制した。

「イリューヒン、それは真（まこと）か？」

王が監察機関の長を務める大臣の一人を静かに見遣れば、

「是」

大臣は、深く一礼してから一言、言葉少なに肯定をすると先日そのような報告書が監察の方に届いたことを認めた。

それが余計に人々の間に動揺を生んだ。単なる噂でも讒言（ざんげん）でもなく、報告が上がっているということは然るべき根拠と証拠があるということでもあるからだ。

「これへ！」

タラカーノフの低い合図の声に広間の反対側の入り口から一斉に槍を手に武装した男たちが室内に突入してきた。そして、瞬く間に国王の前に立つユルスナールを囲んだ。その間、国王と王族たちの周りを警戒に当たっていた第一と第二の兵士たちがその身を守る為に盾となり王族を安全な場所に後退させて行った。

突然の兵士と思しき男たちの乱入に招待客の中の婦人たちからは悲鳴の声が上がった。『何なのだ？』と誰何（すいか）する男たちの動揺もその声に表れていた。

「タラカーノフ殿、国王（ツァーリ）の御前ですぞ。お控えなされ」
大臣という要職に就く男が謁見会場に武装した男たちを乱入させたという行為に、【西の将軍】が一喝した。
野太い将軍の声に周囲に沈黙が落ちた。

「これは一体、何の真似ですか、タラカーノフ殿？」
己が周りを取り囲む鋭い無数の槍の切っ先に、ユルスナールは静かにその原因となった相手を見据えた。ユルスナールの表情は冷え冷えと冴え渡り、一切の感情を失くしていた。
「おやおや、これは見上げた御人だ。面の皮が相当厚いと見える。この後に及んでお惚けになるとは」
嘲笑するようなタラカーノフの挑発に、だが、ユルスナールは慌てることなく、奇想天外な言い掛かりをしてきた男を見た。
「一体、なんの話をなさっているのやら。どなたかと勘違いをなさっておられるのではありませんか？　誰しも寄る年波には勝てませんからね。冗談にするには些か行き過ぎています」
珍しく憚らずに厭味を言い放ったユルスナールをタラカーノフは鼻で笑っただけだった。何の自信があるのかは知れないが、相当居丈気な態度である。
「この私に間者に通じているとの嫌疑が掛かっていると？　何を根拠にそのようなことを仰るのですか？」
――――仮にもやんごとなき国王（ツァーリ）の御前。厳粛なるこの場を穢した罪は何よりも重い。そうではありませんか。
国王（ツァーリ）の目の前での明らかな僭越行為は、見過すことの出来ない事態だ。不敬罪もいい所だろう。
だが、淡々と相手の愚行を窘める言葉を吐いたユルスナールを前に、
「ああ、嘆かわしい。なんということだ！　貴公はすっかりあの女狐に籠絡されているようだ。今後、この国の行く末を支えて行くであろう若者が何たる不始末。情けなや」

タラカーノフはやや芝居掛かった大げさな動作で天を仰いだ。
そして、この突如として始まった前代未聞の告発に周囲の人々は声を上げることなく、じっとその成り行きを恐々として見守った。

タラカーノフは、国王と周囲に集う人々をぐるりと見渡した。その姿は、やけに自信に溢れていた。
「王(ツァーリ)よ、この広間には日頃高潔と謳われるこの師団長を悪魔の道へ唆した不届き者が紛れ込んでおります。その者は我が国を探り、キルメク経由で隣国【ノヴグラード】に情報を流しております」
近衛の兵士たちに守られた後ろで、王(ツァーリ)が目を眇めた。
「なんだと？」
その言葉にユルスナールは耳を疑った。余りにも突飛な言い掛かりだった。自分を足掛かりに他の誰かを引き出そうとしている。この男の矛先はどこに向かおうとしているのだろうか。

【ノヴグラード】の間者という言葉に、先の苦い戦争の記憶を持つ人々が一斉にどよめいた。二十年近く前の辛酸を舐めた【ノヴグラード】との戦いは、スタルゴラドの人々の中に癒すことの出来ない深い傷を残していた。愛する人を亡くした者もこの場には大勢いることだろう。何よりも凄惨を極めた戦いから派生した恐怖は、直接的であろうとも間接的であろうとも当時国内に暗い影を落とし、幾ら拭おうとしても拭いきれない記憶(トラウマ)となっていた。
先の戦以来、この国の人々は【ノヴグラード】という言葉に敏感に反応した。時としてその反応は過剰すぎる程だ。
周囲の空気が一気に剣呑さを増したのは気のせいではないだろう。
周囲の人々の感情が徐々にユルスナールに不利な方向へと風向きを変え始めていた。何の根拠もない。だが、【ノヴグラード】という言葉はそれだけの影響力を持っていたのだ。
そして、タラカーノフの扇動は続いた。
「その男は、忌まわしき隣国の女斥候にすっかり骨抜きにされて

いる。あの女の色仕掛けにな」
人々の恐怖を煽るような言葉に、
「タラカーノフ殿、それは真か！」
広間の前方にいた大臣、有力貴族の一人でもあるイジューモフが声高に問うた。
「ええ。あの女を出せば分かります。皆さまもご覧になったでしょう？　黒い髪に黒い瞳をした異国の女です」
その形容がなされた瞬間、周囲にいた人々が一斉に遥か後方にいたリョウを振り返った。
ひそひそとあからさまな視線が注がれ始めた。驚愕と侮蔑と嫌悪と。様々な負の感情が渦のようになってリョウの周囲に集まり出していた。
「なん……だと？」
ユルスナールは驚きに目を瞠った。それをタラカーノフは、相手が動揺したというように受け取ったようだ。
ユルスナールは、左手を無意識に腰に佩いた長剣の柄に置いた。震える右手をきつく握り締め、沸き立つような静かなる怒りを顕わにギリリと奥歯を噛み締めた。
腸が煮えくり返りそうだった。自分に向けられた数々の見当違いな暴言もそうだが、これで男の狙いが自分を通り越した所にいるリョウであることが分かったからだ。
黒幕はこの男だったのか。神殿側に協力をしたのはこの男か。これまでの一連の不可解な事件を思い返しながら、ユルスナールは怒りに震えた。

一方、リョウは、突然のことに茫然と立ち尽くしていた。一体、なんなのだ。何が起ころうとしているのだ。
遥か前方では、剥き身の槍を突き出した兵士と思しき男たちに囲まれた銀色の頭部が垣間見えた。他師団の兵士たちはいつの間にか壁際の方に追いやられ、シーリスやブコバルを始めとする第七師団

の兵士たちも広間中央のユルスナールとは切り離されるようにやや遠巻きに、同じく武装した男たちに囲まれていた。

突然、ユルスナールが敵国に通じていると糾弾を始めた男を驚きと共に見た。深緑色の落ち着いた上下に身を包んだ貫禄ある初老の男のように思えた。リョウには全く見覚えがなかった。

会場内にはキリキリと肌を刺すような緊迫した空気が満ちていた。信じられないことに会場の空気は告発をした男を擁護するようなものに色を変えていた。

リョウは、はちきれそうになる不安を押し止める為に胸の前でつく両手を握り締めた。

「貴公はあの異国の女にすっかり騙されている。今ならまだ間に合う。目を覚まされよ」

一時の興奮から抜け出したのか、先程よりも言葉使いを落ち着かせて、タラカーノフは声高に言葉を継いだ。

「先日、後宮で侍女が毒殺されるという仰天すべき不可解な事件が起こりました。その侍女はエクラータ様付きの者で、一つ間違えばエクラータ様に危害が及びかねない事件でした。未だ、犯人は捕まっておりません。ですが、それもそのはず。あのような重大なおぞましい事件を余所に、当の犯人はこの場にのうのうと顔を出しているのですからな」

その話に女たちが悲鳴のような声を上げ、男たちが驚きの声を出した。

「おい、タラカーノフ。それは本当か！」

その一件に並々ならぬ関心を持っていた国王の第二皇子（ツァーリ）（エクラータの父親だ）が前に出れば、タラカーノフはここぞとばかりに強く頷いた。

「はい。先日、殺された侍女の部屋からこの国の鉱脈に関する機密事項を記した暗号文が見つかりました。恐らく、あの者は侍女と通じていたのでしょう。途中、仲間割れでもしたのか、都合が悪くな

って相手を消したということでしょうな」
何とおぞましいことでないか。衝撃が人々の間に広まった。
「タラカーノフ殿、推量で勝手なことを吹かないで頂きたい。当案件は目下、調査中です。そのような事実は上がっておりません！誤解を招くような言動は慎んで頂きたい」
侍女の一件を担当していた第二師団長のスヴェトラーナが、彼女にしてみればふざけたことを言う大臣を制する為に前に出てきた。スヴェトラーナにしてみれば、『何を莫迦なことを』という所だろう。
いきり立った第二師団長にタラカーノフは嘲るような眼差しを向けた。
「推量ではありませんよ。こちらにはれっきとした証拠が上がって来ているのですから。貴公がのんびりと他所で油を売っている間に我々は隠された重大な事実に辿りついたのですから」
そう言うとタラカーノフは徐に後方に佇む大臣の一人、国内有数の大貴族でもあるイジューモフを見た。
「イジューモフ殿、先日、宮殿内で行われた鉱脈関連の会議に黒髪に黒い瞳の見慣れない輩が同席したという話は本当ですかな？」
「ああ。それは確かだ。その場に私もいたからな。イオータ殿の弟子ということで養成所の生徒ということだったが、今にして思えば、それすらも怪しいものだ」
その言葉にタラカーノフは、勝ち誇ったように胸を反らした。
「聞く所によるとその者は貴公と随分親しい間柄とのことですな。さぁ、第七師団長殿。あの女をこちらに引き渡してもらおうか。そうすれば全て、真実が白日の下に晒されるでしょう」
ユルスナールは一人、奥歯を噛み締めた。相手の目的がリョウの身柄であることがこれではっきりと分かったからだ。リョウを斥候に仕立て上げ、機密情報を流したとして濡れ衣を着せ、罪人の烙印

を押そうというのか。
――――誰の差し金だ？
ユルスナールは、広間をぐるりと見渡した。そして、数多もの人々の間に埋もれていた一人の神官を見つけると底冷えするような鋭い視線を投げた。
そこにいたのは、第三師団長のゲオルグが接触を持ってきたと話していた高位神官、クルパーチンという男だった。ぎょろりとした目がうっそりと細められ、干からびた枯れ枝のような薄い口元が弧を描いた。
――――あいつらか。
ユルスナールの中で点と点が一本の線で繋がった。それは、背後にいる友人達とて同じことだろう。
神殿の神官たちは、そこまでしてリョウに執着し、贄を得ようというのか。随分と手の込んだことをしてくれたものだ。
――――そしてこいつもグルか。
爆発しそうになる怒りを薄皮一枚の下に必死に押し止めて、ユルスナールは堂々とした態度で難癖を付けた大臣を冷ややかに流し見た。ユルスナールの身体の身じろぎに合わせて突き付けられていた槍の切っ先も同じように移動した。
まずはこの場を切り抜けなければならない。タラカーノフの言葉は、全く、根拠の無いでたらめであることを明らかにしなくては。
ユルスナールは素早く周囲を見渡した。国王（ツァーリ）を始めとする王族たちは、第一と第二の兵士たちに守られている。あそこは心配ないだろう。元より王族に危害を加える積りはないのだから。狙いはそこではない。
他師団の兵士たちは壁際に寄せられていた。皆、驚き半分、だが、口を挟むことも出来ずに成り行きを見守っている。
事情を知る第五のドーリン、ウテナ、イリヤは、厳しい顔付きでタラカーノフたちを見ていた。第二のスヴェトラーナも冷え冷えとした冷徹な眼差しを向けている。

ブコバルは物凄い形相で長剣の柄に手を掛けながら、ユルスナールの方を見ていた。いつでも抜刀して飛び出せるように間合いを計っている。シーリスも険しい顔付きでこちらを見据えていた。だが、その手は今にも剣を抜こうとするブコバルを制していた。

基本、宮殿内で剣を抜くことは騎士としての礼節に背くということで禁忌とされていた。いみじくも国王（ツァーリ）の御前だ。勝手な振る舞いは許されない。

第一のマクシームは国王（ツァーリ）の前に盾のようにして立ちながら、大臣たちの動きを目で追っていた。

仲間たちは静かにユルスナールの動向を見守り、そして隙を窺った。タラカーノフは私兵をこの場に入れたが、その狙いは、王族に反旗を翻そうというものではなかった。その狙いは、ユルスナールの動きを封じ、声高に公衆の面前で辱め、そしてそれを餌にとある人物を釣り上げようというものだった。

行き場を失った怒りを持て余しそうになりながらも、ユルスナールは努めて冷静に口を開いた。この場では感情を顕わにした方が負けだ。

「戯けたことを。冗談も休み休みにして頂きたいものですね。貴殿こそ、誰に唆されたのですか？」

「なんの話ですかな。随分と人聞きの悪いことを言う。それよりも。さぁ、あの女をここにお出しなさい。不埒者がこの中に紛れ込んでいるのは分かっている。それともこちらから迎えにやりましょうか？」

タラカーノフは嘲るように口にすると会場内の後方を見透かした。そして、その野太い声を力一杯張り上げた。

「女！　聞こえているのだろう？　姿を現わせ。さもなくばこの男を槍が貫くぞ？　この男を罪人にする積りか？　健気なものだな。お前の罪を被ってな」

会場内に響き渡ったその言葉に遥か後方にいたリョウはきつく拳

を握り締めた。リョウは一体、何が起こっているのか理解できなかった。だが、ユルスナールが捕らわれたのは、どうやら自分を誘き出そうとするための餌であるらしいことが読み取れた。いや、それを理解しない訳にはいかなかった。

黒い色彩を持つ異国の女。その表現に当てはまるのはこの中では自分しかいないだろう。

この場でも再度、見知らぬ男からあの侍女の一件を持ち出されて、リョウは混乱していた。

何故、ありもしない嫌疑を押し付けられて、ここまで声高に非難、そして罵倒されなければならないのだ。何が目的なのだ。一体、何が起こっているのだ。ここまで来ると狂気の沙汰のように思えて仕方がなかった。

自分の身が神官たちから狙われているという肝心な事実を知らされていないリョウには、彼らの言い分が全く理解できなかった。そして、ユルスナールたちがよかれ思って秘匿したこの事実が、この後、裏目に出ることになろうとは、何と皮肉なことだろう。

だが、迷っている暇はなかった。幾らユルスナールが帯剣していて、凄腕の剣士であろうと雖も、あのように周りをぐるりと多くの男たちに囲まれていては多勢に無勢だ。それにここには未だ多くの着飾った招待客が残っていた。彼らを巻き込んだら大変なことになるだろう。

「……リョウ？」

隣でずっと沈黙を守っていたダーリィヤが心配そうに振り返った。聡明なダーリィヤのことだ。前方から声高に求められている人物がリョウであることを察知したのだろう。

それにリョウは心配はいらないと微笑んだ。

そして、唇を引き結び、意を決すると顔を上げた。

誤解があるのならばそれを解くしかない。上手く行くかは分からないが、このままでは埒が明かなかった。

「お待ちください！」
会場内に突如として凛とした高い女の声が響き渡った。人垣が徐々に割れ、遥か後方から一人の女性が静かに歩み寄って来た。
「リョウ、来るな！　これは罠だ！」
ユルスナールの怒声が響いた。だが、それに構うことなく、リョウは背筋を真っ直ぐに伸ばし、顔を上げて、堂々とした態度でやって来た。
リョウは、広間前方近くまで来ると騒ぎの原因となった男に対峙した。
「ワタクシは逃げも隠れも致しません。疾しいことなど微塵もありません。一体、これはなんなんですか？　誰が間者で、誰が反逆者だというのですか？　ワタクシが一体何をしたというのです？」
前方に現れたリョウをタラカーノフ配下の男たちが間髪入れずに囲み、槍の切っ先を向けた。
「チホーン・タラカーノフ！」
人垣を掻き分けるようにして父親のファーガスと長兄・ロシニョールが前に出た。
「我々を愚弄する気か？」
ファーガスの発した声は、とても低く静かだった。だが、そこには押さえきれない憤りが憚ることなく表れていた。
「何が目的だ？　その子が間者だと？　莫迦も休み休みにしろ。その子は、我が息子、ユルスナールの選んだ伴侶だ。リョウに対する愚弄はそのまま我々シビリークスに対する愚弄でもある。分かっているのだろうな？」
「はっ、落ちたものだな。ファーガス。お前もその女を擁護するのか。大したものだ。このような堅物一家を手玉に取るのだからな。いや、それとも引っ掛かったのはお前の方か？」
返す返すも容赦の無い侮蔑の言葉にシビリークス家の男たちの空気が一気に下がった。

「なんだと？」
「タラカーノフ殿、口をお慎みください。幾ら大臣と雖も言っていいことと悪いことがあります」
目を眇めたファーガスの隣で、ロシニョールも剣呑さを滲ませながら言った。
「何故、そこまでこの女を庇う？」
――――どこの馬の骨とも知れぬ異国の女だろう。
タラカーノフが嘲りの色をその目に浮かべた。

「お待ちください」
その時、男たちの問答を遮るように静かな声が割って入った。槍の切っ先が光る合間からリョウが男たちを真っ直ぐに見ていた。
「一体、ワタクシを斥候とみなす根拠はなんですか？」
状況を整理するようにリョウは口を開いた。リョウにしてみれば、突然、間者だとか【ノヴグラード】の回し者だと言われて訳が分からなかったからだ。
それからリョウは一つ一つ、先程上がった侍女絡みの嫌疑の件を論破し崩して行った。
第二のスヴェトラーナからも事情聴取を受けたが、そこで疑いは完全に晴れたこと。殺された侍女イーラとの掠るような接点。そして、間者の疑いが掛かっているという鉱脈の会議の話。講師イオータのお供で会議に出席したのは間違いないが、それはイオータの最終試験であり、自分はれっきとした養成所の生徒であるということ。それは養成所に確認してもらえば分かることだ。暗号文など知らないし、第一、筆跡を鑑定すれば、自分が書いたものではないことも直ぐに分かるだろう。そしてこの度、術師の最終試験にも合格し、役所に登録を済ませたことを挙げ連ねていった。術師として、リョウはこの国に帰属し、忠誠を誓ったようなものなのだ。
だが、術師になったという事実に、大臣は【黄色い悪魔】という希少な毒草の入手の経路について疑惑を深めたようだった。

議論は、この場では平行線を辿っていた。
「では尋ねるが、お前はどこの者だ？」
「どこ……というのは？」
「簡単な話だ。国は、どこかと聞いている」
「それは……」
そこでリョウは詰まってしまった。ここで口にすべき答えを持っていなかったからだ。リョウの真実は、彼らにとっては真実たりえないのだ。仕方がないので少しずつ真実を遠巻きに小出しにして行った。
「この国の者ではありません」
「ああ。それはお前の顔を見れば分かる」
「キルメクでもノヴグラードでもありません」
「ではセルツェーリか？」
「いいえ」
そこで、リョウは絶望した。
重苦しい沈黙が辺りを席巻しようとしていた。明らかに自分に不利な状況だった。それもそうだ。相手はこの国の有力者（大臣）で、自分は身元不明の不審者だ。どちらの言葉を信じるかとこの場に集まる人々に聞いても、その答えは火を見るよりも明らかだろう。
「ワタシは……」
口を開きかけて、また閉じる。
ああ、どうしてこのようなことになってしまったのだろう。
「なんだ？　早く言え」
限られた人たちにしか明かしていない【真実】をここで口にする訳にはいかなかった。信じてもらえる訳がない。いや、余計に怪しいと思われるのがオチだった。
「その問いには……お答えすることが…できません」
絞るようにして出した返答にタラカーノフはそれ見ろとばかりに得意げな顔をした。
「ですが、私は斥候でも間者でもありません。キルメクもノヴグラ

ードもセルツェーリも。ましてやこのスタルゴラドのことすら、満足に知らないのですから。斥候になどなれる訳がない」
「なんだ？　この後に及んで言い逃れか？　あ？」
「ですが、誓ってワタシは何もしていません。この身は潔白です」
顔を上げて堂々と言い切ったリョウにタラカーノフは鼻を鳴らした。
「ふん、ならばちょうどいい。お前の言い分が正しいかどうかは確かめてみれば分かる。この場でな。こちらで用意しているものがある」
――――――これは専門の術師に作らせた判じ薬でな。
そう言ってタラカーノフが配下の男に持って来させたものは、お盆の上に乗ったグラスだった。乾杯の時に使われたような小さなグラスの中には、透明の液体と小さな花が入っていた。
「これは特別な判じもので、第三師団でも使われているものだ」
続けてタラカーノフは、その身の潔白を主張するのならば、この中身を飲み干せと言った。それが真実であるのならば、何の反応も起こらない。だが、もし、それが偽りであった場合、たちまちグラスの中の試験薬の成分が作用し、もがき苦しむことになるだろう。
「これならば構いませんね？」
後方を振り返り、監察官を始めとする諸大臣、そして王（ツァーリ）を見たタラカーノフに、一同が同意をするように諾と頷いた。

リョウは差し出されたグラスの中身を見て、目を見開いた。透明な液体の中に揺れる小さな花。黄色い可憐な花弁に赤い斑点のような斑模様が入っていた。
見紛う筈がない。それはまさに【黄色い悪魔】だった。このように一輪丸ごと入っているとなるとその成分も大分液体の方に溶け出しているはずだった。毒の成分は水溶性であるからだ。
判じものだなどと聞いて呆れる。これだけのものを飲み干せば、もがき苦しむことなどなく、即死するだろう。それを飲めというこ

とは、この場で死ねと言っているのと同義だった。
リョウは顔を上げると小さく微笑んだ。相手が並々ならぬ敵意、いや、殺意を抱いていることだけはよく理解出来た。突き抜けた怒りと絶望がリョウを支配しようとしていた。
「このグラスの中に入っているのは【黄色い悪魔】とお見受け致しますが？」
【黄色い悪魔】――――悪名高い毒草の名に周囲で息を飲むものがいた。
伊達に術師になった訳ではない。向こうは分からないとでも思ったのだろうか。挑戦的に見上げた黒い瞳にタラカーノフはほくそ笑んだ。
「おやおや、やはり知っていたか。さすがは術師殿。ああそうだ。お前の言う通り、これは【黄色い悪魔】だ。だが、まぁ案ずることはない。これは特別に加工下処理のされたもので、毒の成分は中和されているからな」
そのようなことがあるのだろうか。幾ら毒の成分が水溶性であるとは言え、その花弁そのものに強烈な毒性があるのだ。全てが完全に溶け出る訳でもないし、これだけのものを中和する薬草もリョウは過分にも知らなかった。
「さぁ、どうぞ？」
――――――自身の身の潔白は、自身で示せばよかろう。
目の前で、男が悪魔のように囁いて微笑みを浮かべた。

リョウは素早く周囲を見た。多くの槍の切っ先に囲まれた中で、ユルスナールが物凄い形相でこちらを見ていた。それで心は決まった。
「分かりました。ですが、条件が一つあります。あちらの第七師団長に向けている武器をおろしてください。あの方は、全くの無関係です」
リョウは確固たる強さでタラカーノフを見た。自分がこれを飲み

干せば、相手はきっと満足するのだろう。あの男が望むのは、自分の命なのだ。その理由は全く見当が付かなかったが、このままでは徒にユルスナールを傷つけてしまうことになるだろう。

リョウは何故か笑いたくなってしまった。本当に漸く全てを打ち明け、過酷な運命を受け入れて、愛する男の妻になるという幸せを手に入れることができたと思ったのに。このような所でかようにも大きな落とし穴が待ち構えていようとは。人生、本当に何が起こるか分からないものだと今更ながらに自嘲気味な気持ちが表れてきたのだ。

いや、遅かれ早かれ、いずれこの世界から消える定めならば、それは余り変わりのないことなのかもしれない。ほんの少し、その時期が早まったというだけで。元々、ここにはいてはいけない存在だったのだろう。何かの間違いで混ざり込んでしまった完全なる異物を取り除こうと大いなる力が再び働いている。だから、今、こうして、この国の最高権力者、国王（ツァーリ）の前で全てを終わりにしろと宣告されたのだ。

と同時に、これでユルスナールへの危害を少しでも取り除けられるのならば、それは本望だった。ユルスナールのことだ。きっと後は上手くやるはずだ。

「いいだろう」

暫し、逡巡した後、タラカーノフはそう譲歩し、配下の男たちに槍を下ろすように命じた。

「但し、第七の師団長殿はその場でお待ちを」

ユルスナールを囲んでいた人垣が緩くなった。男たちが槍を下げる。そこで埋もれていた愛しい男の姿がリョウの目にも露わになった。

リョウは覚悟を決めた。最後、その姿をこの目に焼き付けようとユルスナールを見た。そして、柔らかく微笑んだ。

奇しくも先だっての約束をこれで果たすことが出来るだろう。その生に限りがあるのならば俺の前で逝け。こんなにも早く、その約

束を実現することになるとは思わなかった。
リョウは手を伸ばした。
「リョウ！　止せ！　これは罠だ！　こいつらの目的はお前だ！」
こちらに駆け出して来ようとするユルスナールを配下の男たちが囲み、その動きを封じた。
「あの方に手出しは無用です」
「ああ。約束は果たす」
「リョウ！　莫迦な真似はやめろ！」
必死な形相でこちらを見ているユルスナールを視界の隅に認めながら、リョウは差し出されたグラスを手に取った。
「リョウ！」
「リョウ！　お止めなさい！」
「リョウ！　俺を信じろ！」
ユルスナールの声に混じり、シーリスやゲオルグの厳しい声がした。
黄色い可憐な花が揺れる透明なグラスの向こう、視界に入る人垣の中から沢山の知り合いの顔が見えた。
リョウは周囲の知った顔を見渡して、それから最後にユルスナールを見た。そこで、ありったけの感謝の気持ちを込めて微笑んだ。
鮮やか過ぎる程の晴れやかな笑みだった。
その瞬間、ユルスナールを始めとする周囲の男たちが息を飲んだ。
「ルスラン、ありがとう。この国で、この世界で、あなたに会えてよかった」
――――――サヨナラ。アイシテル。
出来ることならば、この国で、あなたと共に生きたかった。
最後にこれまで決して口にしてこなかった故郷の言葉を音にした。
それはきっとユルスナールには伝わらないだろう。だが、それでも良かった。
そして、リョウは一息にグラスの中身を呷った。

「リョウー！！！」

悲痛すらある男の絶叫が、広い室内にこだました。

それからはまるで一時的に時の流れが遅くなったかのようだった。空になったグラスがリョウの手を離れた。そして、その小さな盃が床に落ちて砕け散る前にリョウの身体は力なくその場に崩れ落ちた。胸元に下がる青い光を帯びた【キコウ石】のペンダントが大きく跳ね上がり、一瞬だけ強い光を放ったかと思うと粉々に砕け散った。

「リョーーウー！！！」

形容し難い衝撃と哀しみに縁取られた男の咆哮が周囲の空間を揺らした。

悪魔の罠（後書き）

スミマセン。肝心な所で切ります。いよいよ最後の一山クライマックスに入りました。これまで方々から張り巡らされた策謀の糸が放たれました。そして【余興】の全てが明らかに。

続きは鋭意執筆中です。それではまた次回に。

投げられた賽

「リョウーー！！！」

愛する唯一無二の大切な人の名を連呼しながら、ユルスナールは囲む人垣を抜け出した。

「クソッ」

制止をしようと掴みかかる男たちを勢いのままに殴り倒し、少しでも早く、崩れ落ちたリョウの傍へ駆け寄ろうとしたが、その進路を塞ぐように槍を手に周りを囲んでいた男たちが前に立ちはだかった。

「どけ！　邪魔をするな！」

ユルスナールは、腰に佩いた長剣の柄に手を掛けるとタラカーノフの私兵と思しき男たちを眼光鋭く睨みつけた。

「退け。それ以上邪魔をすれば、容赦なく斬り捨てる」

宮殿内での剣を手にしての乱闘、そして私闘は御法度とされていた。ユルスナールとて厳罰は免れないだろう。だが、そのような事など、今は瑣末なことだった。

真正面からぶつけられた迸（ほとばし）るような殺気に周りを囲んでいた男たちが怯んだ。相手は武芸大会で優勝を果たした猛者だ。格の違いは明らかで個別に剣を交えたら敵う相手ではなかった。何よりも放たれる気迫が凄かった。槍の切っ先が逡巡するようにぶれる。

その隙にユルスナールは囲みを抜けるように走り出した。

だが、足止めをしようと直ぐに男たちが躍りかかって来た。

加減などしなかった。立ちはだかる男たちに対し、乱闘さながらの様子で自分を抑えつけようとする輩を殴り、そして蹴り倒した。辛うじて残る最後の理性がこの場で剣を抜くことを止めさせていた。だが、それはいつ切れるともしれない綱渡りのような細い糸だ。

ユルスナールは必死だった。早く、一刻も早くリョウの下に行かなくては。リョウが口にしたのは、本当に単なる【判じ薬】だった

のか。それとも悪魔の毒薬だったのか。心臓が煩いくらいに鳴っていた。脈打つ血液が耳の奥をガンガンと鳴らしていた。

前方、崩れ落ちたリョウの傍にどこからともなく白い上下に身を包んだ神官たちの姿が現れた。

その足さばきに揺れる白い衣が目に入った瞬間、

「ふざけるな！」

ユルスナールの怒りは頂点に達し、一気に爆発した。

「リョウに触れるな！　お前たちの好きにはさせない！　リョウを儀式の贄になどさせるものか！！」

獣の咆哮のようなびりびりとした怒声が広い空間に響き渡った。

辺りはさながら乱闘のような様相を呈し始めていた。このままではいつこの神聖なる宮殿で血が流れてもおかしくない。第一のフラムツォフを始めとする各師団長たちとその上の将軍、そして大臣たちが事態を収拾すべく動き始めた。

まず、タラカーノフの私兵たちと揉み合いになっている第七の兵士たちを引き離そうと試みる。

「タラカーノフ殿、今すぐ、兵を引きなされ！　これ以上はただでは済まされない。貴殿を厳罰に処することになりますぞ！」

「第一、速やかに両者を拘束せよ！」

「第二、客人の誘導を！」

「第七の兵士を拘束しろ！」

「皆さん、どうか落ち着いて下さい！」

「静まれ！」

進路を阻もうとするタラカーノフ配下の男たちと第七を始めとするユルスナールの友人たちが揉み合いになっていた。

突然の暴動に中にいた招待客たちが驚き、逃げまどうように後方へ避難し始めた。女たちの恐怖に満ちた叫び声や悲鳴で辺りは錯乱状態になった。第一と第二の兵士たちは速やかに王族たちを避難させ、同時に招待客たちの誘導を行った。

立ちはだかる他師団の兵士たちやタラカーノフの私兵たちを前に、ユルスナールは声を張り上げた。
「ブコバル！　シーリス！」
だが、ブコバルもシーリスも行く手を阻まれて、身動きが取れない状態だった。
「【チョールト（クソッタレ）】！」
ユルスナールは呪詛の言葉を吐いた。
そして今度は別の方角に叫び声を上げた。
「父上、兄上でもいい。リョウを、リョウを！」
神官たちの手に渡してなるものか。
ユルスナールが目の前に飛び込んできた男の足を払い、次にやって来た男の腹に拳を突き入れて相手を伸した所で、神官たちが衛兵を連れてリョウの傍に近づこうとしているのが見えた。

――――その時だった。
広間の中に突如として獣の咆哮が響き渡った。そして、人々が動きを止めた瞬間、大広間の中央に一頭の大きな獣白く輝く毛並みを波打たせるようにして飛び込んできた。
ヴォルグの長、セレブロだった。
『この痴れ者めが！』
空気を引き裂くようなびりびりとした一喝が雷のように落ち、天井から吊り下がる発光石の明かりを揺らした。
『その者に触れるな！』
リョウの傍に膝を着き、その手を伸ばそうとした神官たちにセレブロの怒りがぶつけられた。
その瞬間、室内全ての音がぴたりと止んだ。あれほどまでに騒然としていたのが嘘のように周囲に異様な程の沈黙が落ちた。まるで時が止まったかのように人々が動きを止めた。
そして、広間にいた人々は、この中に突如として現れた人ならざる大きな四足の獣に意識を引き寄せられた。

広間前方のぽっかりと空いた空間、リョウが崩れ落ちた傍らには、身の毛もよだつような恐るべき怒気を振り撒いた大きな白い獣が、光輝く毛を全身に逆立てていた。頭(こうべ)を低く垂れ、威嚇するように重低音の唸り声が人々の肌を舐めて行った。その大きな前足が音も無く床を叩いた。そうすると立ち上った神気の切れ端が、もうもうと波紋のように室内の空気を震わせ同心円状に派生し広まっていった。

神官たちは驚愕に目を瞠り、その場で無様に尻餅をついたまま動けなくなった。

「あなたは……【ヴォルグ】の長……」

静まり返った中で漏れた唯一の音は、この国の最高権力者によるものだった。

玉座に近い所からその獣の姿を見た国王(ツァーリ)は、驚きに目を見開き、そして震え上がった。

王(ツァーリ)は【ヴォルグ】の長を知っていた。というのも王族と【ヴォルグ】とは昔から深い繋がりを持っていたからだ。王(ツァーリ)が代替わりをする際、戴冠式では必ず【ヴォルグの長】が見届け人として立ち会うことになっていた。それは遥か昔、まだ人が森の獣たちと共にあった時代、【人の王】と【森の王】が末長い友好を願う証として交わした約定に基づくものだった。

初代スタルゴラド王【フセェミール】とヴォルグの長【セレブロ】との交流は、この国のお伽噺の中にも連綿と謳われ、現在にまで受け継がれていた。時代が下った今では多くの人々は【ヴォルグ】を架空のお伽噺の中の存在だと思っている。だが、そのお伽噺は、かつての歴史をそのまま閉じ込めた史実であり、【ヴォルグ】は今尚、この地に生きる気高き一族であった。この国が旗印に使う意匠は、この【ヴォルグ】の長を象ったものだ。

そして、現国王(ツァーリ)もその位を父親より引き継いだ時、この【ヴォルグ】の長であるセレブロの立ち会いを受けたのである。それが現国王(ツァーリ)がセレブロと初めて対峙した時だった。人ならざる神に近い存在

を前に王（ツァーリ）は畏敬の念を抱き、人として驕りを持たぬように自らを戒めたのだ。

それから約十七年の月日が流れていた。だが、王（ツァーリ）はかつて出会ったその稀有な存在を一度たりとて忘れたことはなかった。【ヴォルグ】は悠久の時を生きるとされる一族だ。遥か神代まで遡ることの出来るこの大陸最古の一族でもある。神々より【太古の森】の番人としてこの地に於いて天と地の理を説く役目を担った一族であった。

王位を引き継ぐ時、新しい王（ツァーリ）は誓いを立てるのだ。その昔、【人の王】が【ヴォルグの王】と交わした約定を守ることを。

『みそこなったわ、【ツァーリ】よ。我が加護を与えし者へのこの仕打ち。我が同胞（はらから）をかような惨（むご）き目に遭わすとは。この報い、必ずや後日、受けてもらおうぞ』

「な…ん……と」

王の顔がみるみるうちに色を失った。

「その者は……長の【魂響（タマユラ）】…なのですか？」

絞り出された王（ツァーリ）の声は震えていた。

【魂響（タマユラ）】という言葉に床に尻餅をついていた神官たちは弾かれたように横たわるリョウを見た。

約定の中の一節に、【徒に同胞（はらから）を傷つけること勿（なか）れ】という文言があった。獣たちと交わった人間もその中に含まれる。それは【獣】と【人】とを繋ぐ【仲立ち】として、尊重されなければならなかった。

そして理由なく【人】がその【仲立ち】を傷つけた場合、必ず、相応の報復を受けることが古文書の中でも伝わっていた。

王（ツァーリ）は愕然とした。配下の大臣が斥候呼ばわりしたあげく崩れ落ちた女は、長の情けを受けていた。その者を亡きものにしようとしたとは。れっきとした約定違反だった。スタルゴラドの王（ツァーリ）として失格である。【ヴォルグ】の長の怒りは王族にとって天罰と同じだった。

誰も言葉を発する者はいなかった。王族と近しい大臣たちは、自分たちのしでかした不手際に青くなり、そして、周囲に集う人々は

初めて目にする伝説の【ヴォルグ】の長の神々しいばかりの威厳ある姿に意識が釘づけになっていたからだ。息をするのさえ忘れたように広間前方を見ていた。

苛立ちを顕わに吐き捨てたセレブロは横たわるリョウをその背に担ぎ上げた。

「セレブロ殿！　リョウをどこへ？」

堪らず上がったユルスナールの声にセレブロは答えなかった。

そして、まるでどこかに合図をするかのように一つ遠吠えをすると後ろを振り返ることなく、現れた時と同様にたちまち姿を消した。

「セレブロ殿！」

ユルスナールの叫び声に突如として広間中央に灰色の小型の獣が躍り出た。宮殿内に住まうとされる獣ティーダだった。

『神殿だ』

そう低く一言呟きを漏らして、長の後を追うように同じく広間を走り抜けて行く。

「ルスラン！　ティティーについて行け！」

いち早くそれに気が付いたスヴェトラーナがユルスナールに向かって叫んだ。

「神殿だ！」

そして、ユルスナールは弾かれたように立ち上がると闇に消えたティーダの後を追うように神殿へと走った。

リョウをその背に担いだセレブロは、神殿最奥の東の翁が結界を張った中にリョウを運んだ。この場所は人である神殿の神官たちには立ち入ることの出来ない最奥の神域だった。

「可哀想に……」

冷たい石の台の上にそっと横たえられたリョウを前に、東の翁は

その傍らに跪くとそっとリョウの乱れた髪をかき上げた。綺麗に結い上げられていたはずの髪は、頸木が放たれたように解かれ、散らばっていた。

リョウの胸に燦然と輝いていたはずの強い青みを帯びた【キコウ石】のペンダントは、跡形もなくなっていた。それを繋いでいた銀色の鎖が辛うじて残るのみ。それが強烈な光を放ち砕け散った瞬間、東の翁とセレブロはリョウに掛けられていた守りの結界が同じように砕け散ったことを感知した。

リョウはまるで眠っているかのように意識を失っていた。昏睡状態に近かった。辛うじて即死は免れていたが、命が尽きるのも時間の問題だった。【黄色い悪魔】の毒の成分は、元々、この大陸の気候風土に生える薬草類に対して全く免疫を持たないリョウの体には予想以上に浸透し、その効力を発していた。

東の翁には、リョウの魂が発する生命力が著しく下がり、今や消え入りそうな程に弱くなっていることが感知出来た。風前の灯火のようだった。

「口にしたのは、【ジョーティ・チョールト】ですな？」

「ああ。だが、それだけでもあるまい」

静かに問うた東の翁にセレブロが低く言い放った。

大きく開いた胸元の左側に浮き出ていたセレブロの紋様が、淡い光を発し、肌の表面に立ち上り揺らぐように漂い始めていた。

「【時】が尽きようとしているのやも知れぬ」

その揺らぎに呼応するかのようにリョウの身体は、少しずつ部分的に透度を増し、不規則な形でその実体が集まった細かい粒子の塊のように揺らぎ始めていた。それは、術師が具現化させることで現れる人の【想い】を実体化させたものに似ていた。吹き込む風に揺れる蝋燭の炎のような揺らぎだった。

辛うじてこちら側に留まっていた魂が離れ始めているのかも知れない。その可能性を想起させるには十分な現象だった。

時間がなかった。直ぐに手を打たなければならない。

「解毒の用意を致します」
「頼む」
言葉少なに立ち上がった東の翁に、セレブロも頷いた。
その間、セレブロは己が加護の印が表れている部分に鼻先を当てると静かに祈りの文言を紡ぎ始めた。低い抑揚のある不可思議な旋律が流れ始めた。そうして己が魂を相手の魂の波長を同調させ、重なった波長に力を注ぎこむ。上手く作用するかは分からない。だが、リョウは半分セレブロによってこの地に留め置かれていた。両者を繋ぐ魂の道筋は、辛うじて残されている。それに懸けるしかなかった。

やがて、結界で覆われたこの場所へ通じる入口に人影が現れた。灰色の獣ティーダとその後を追ってきたユルスナールだった。
『待て、シビリークスよ』
入り口でぴたりと足を止めたティーダの制止の声に構わず、ユルスナールは開いた戸口を抜けようとして、だが、見えない壁にぶつかるようにして跳ね返された。大きな肉体がぶつかる鈍い殴打音が響き渡った。
『結界が張られている』
「クッソ」
反動で勢いよく後方に転げたユルスナールは、すぐさま立ち上がると行く手を阻む透明の強固な壁に拳を打ちつけた。
「セレブロ殿！　ユルスナールです。お願いです。私をリョウの傍に行かせてください。セレブロ殿！！」
力任せにダンダンと見えない強固な壁を強く叩いた。そして大声を張り上げた。だが、無色透明の壁はびくともしなかった。ユルスナールの必死な声が、狭く薄暗い回廊にこだました。
『落ち付け。そう急くな。今、訪いを入れる故』
ティーダが宥めようとするが、獣の言葉を理解しない相手にはそれは徒労に終わった。

やがて、ユルスナールの祈りが通じたのか、それとも相手の執拗な掛け声に業を煮やしたのか、目の前にあったはずの壁がふっと消えた。その間も拳を打ちつけていたユルスナールは、突如として見えない障壁がなくなり、勢いのままに前にたたらを踏みそうになるが、すぐさま体勢を整えた。

『入れ』

セレブロの声が暗い闇の向こう側からぼんやりと耳に届いた。

「セレブロ殿！」

『ついてまいれ』

そして同じように先導するティーダの後を追う形で、ユルスナールも明かりの無い闇の中に飛び込んだ。

そうして長い回廊をひた走ること暫し、やがて、ぼんやりとした明かりに照らされた白壁の空間に出た。

室内は驚くほど広い空間だった。天井がとても高い。

その中央付近では低い石の台の上に体を埋めて顔を寄せる白銀の王と東の翁の姿、その合間に横たわるリョウのドレスの脚先が目に入った。

「リョウ！！！」

セレブロと神官と同じ装束に身を包んだ男の間でリョウの姿は、ゆっくりと立ち上る煙のように不規則に揺らいで所々希薄になっていた。その幻影のように揺らぐ姿にユルスナールは息を飲んだ。

だが、直ぐに我に返ると傍に走り寄って来た。

「リョウ！　目を覚ませ！　リョウ！　俺だ。分かるか？」

掴んだ肩にはまだ感触があった。それなのに時折空間が揺らぐようにしてリョウの体は部分的に半透明になってはまた元に戻った。

それをずっと繰り返していた。その状況にユルスナールは戦慄した。

「セレブロ殿！　リョウは、リョウは！」

まるでこの世の終わりのような顔をして詰め寄ったユルスナールに、セレブロは低く苛立ちを顕わに言い放った。

『喧しい。黙れ。集中出来ぬだろうて。邪魔をするな。小倅』
「長の言う通り、少し落ち着きなされ。そなたがいかに騒ぎたてようとも状況は変わりませんぞ」
セレブロの傍にいた東の翁が、突然の闖入者を淡々と窘めた。
それは余りにも相手を突き放すような冷酷にさえ思えるものだったが、その客観的な指摘が却ってユルスナールの興奮を鎮める効果があった。そこで少し落ち着きを取り戻したユルスナールは、表情を改めると先程よりかは抑制された声で問うた。
「リョウは、どうなったのです？　助かるのですか？」
「まだ息絶えてはおりませぬ。だが、非常に危うい状態ですな」
淡々と発せられた冷酷なまでの宣告にユルスナールは愕然とした。呆けたように目の前に横たわるリョウを眺めた。言われたことが理解できない。いや、理解することを理性が拒んでいるのかもしれない。
「そなたはシビリークスの末とお見受け致しますが？」
「……はい」
「私は【東の翁】と呼ばれておる者。そこな【ヴォルグ】の長とは昔馴染みという所ですな」
そこで翁は精悍な顔付きをした若者を見下ろした。
「そなたにとってリョウは？」
「生涯を誓い合った仲です」
真剣な眼差しできっぱりと言ったその深みを帯びた青い双眸に、翁は静かに頷きを返した。
「そうか。良かろう。全く、手立てがないわけではない」
「本当ですか？」
勢いよく顔を上げたユルスナールに、東の翁は手にしていたものを差し出した。それは、ぼんやりとした淡い光を帯びた小さな細長い青い葉で、周囲がぎざぎざの形状をしていた。全部で三枚ある。
「これはストレールカ……ですか？」
職業柄齧る程度には薬草の知識があったユルスナールは、それを

見て小さく声を上げた。何よりもそれはリョウが大事そうに鞄に忍ばせていた薬草でもあった。過日、効き目が抜群なのだと笑みを零して教えてくれたのだ。ただ、その時見せてもらったものは、このように光を帯びてはいなかった。

「ほほう。そなたは知っておるか。ならば話は早い」

東の翁は口元を緩めると、この葉を口に入れて噛み砕き、出てきた液をリョウに口移しで含ませろと言った。

「それで目覚めるのですか？」

「いや。これは…そうですな。切っ掛けに過ぎぬでしょう。後はリョウ自身に懸かっておる。あの子が心よりこの地に留まりたいと強く思い続けることが出来れば、上手く行けば戻って来られるやもしれぬ。可能性は皆無ではない。全てはこの子次第ですな」

そこに一縷の望みがあるのならば。

ユルスナールは迷わずに手にしたストレールカを口の中に入れて噛み砕いた。えも言われぬ強烈な苦みが口腔内一杯に広がり、思わず顔を顰めた所で東の翁が口にした。

「ああ、それは恐ろしく苦いですぞ。生のものは特に。常人ならば一枚がやっとのこと。なれど我慢なさい」

後出しで飄々と口にされても我慢するしかない。

ユルスナールは言われるままに薬草を噛み砕いた。唾液に混じって浸み出した薬草の成分は仰天するほど苦いものだった。痛いくらいの渋みが口内に広がる。それを堪えながら咀嚼し横たわるリョウの上に顔を寄せるとその回復を願いながら唇を寄せた。舌先を捻じ込み歯列をなぞって隙間から口を開かせる。そして苦い薬の成分を口腔内に注ぎ込んだ。

反射的にか、リョウの喉がごく僅かに飲み下すように動いた。その瞬間、リョウの指先がぴくりと動いた気がした。

「よし」

それを見て東の翁は満足そうに息を吐いた。そして己が精力を注いでいたセレブロがゆっくりと顔を上げた。

「よかろう。後は待つのみ。我らに出来るのはここまでだ」
白銀の王は、そう言い切ると光輝く白い毛並みを揺らし、リョウの傍らに静かに蹲るようにして横たわった。そしてその毛並み豊かな尻尾をリョウの足元に寄せた。
冷たい床に横たわった体を少しでも労わる為に東の翁は奥に引っ込むと枕代わりになる大きなクッションと敷布になるような厚めの布、そして上掛けになるような毛布を手に戻って来た。そしてユルスナールの手を借りながら、それをリョウの上に掛けた。
「このままここに？」
静かに顔を上げたユルスナールに東の翁は頷いた。
「ええ。ここは聖なる気が満ちた神域に近い場所。ここの方が邪気が入らなくてよいでしょう」
その間もリョウの身体は時折、揺らいでいた。まるで砂漠の中に浮かぶ逃げ水や蜃気楼のようだ。それこそお伽噺の一節の中にある【夜の精】の最期のように、吹き寄せる風に塵の如く存在そのものがそのまま掻き消えてしまいそうだった。
ユルスナールはそっとリョウの頬に手を伸ばした。触れた頬は柔らかく、そして、ほんのりと温かかった。こうして触れることの出来る存在が今にも消えようとしているなどとは信じたくなかった。
ユルスナールはリョウの傍に跪いたまま、その手を取るときつく握り締め、己が額に押し当てた。そして、心から愛する人が再び目を覚ますことを祈った。
――――どうか、戻って来てくれ。リョウの命を繋ぐ為ならば、自分の何を犠牲にしてもいい。だから。どうか愛する人を奪わないでくれ。
この日、ユルスナールは心の底から、この地を統べると言われる数多もの神々に祈りを捧げたのだった。

投げられた賽（後書き）

思ったよりも進みませんでしたね。前回よりも状況は少しはマシになったでしょうか。次回は宮殿広間での様子をお伝えする予定です。気分転換と言ってはなんですが、活動報告の方に小話を載せる予定です。もしよろしければそちらもどうぞ。

２０１１／１０／２０　誤字修正

【余興】の結末

ちょうど時を同じくして、セレブロがリョウを連れ去った後、祝賀会が開かれていたはずの大広間では、大きな動揺が走っていた。暫し、人々は時間を止めたように身じろぐことすら忘れていた。中には呼吸の仕方を忘れてしまったような者もいた。正確には、何が起こったのか分からない者が殆どだろう。まるで悪い夢を見ていたような気分かもしれない。

やがて息を吹き返した人々が、少しずつ己が【時】を取り戻していった。不特定多数の人々から発せられる例えようのない衝撃と不安と焦燥と驚愕の入り混じった感情が渦巻くようにしてざわざわとその場を支配しようとしていた。

だが、そのような中でいち早く、この場の状況打開に声を上げたのは、この国の最高権力者【ツァーリ（国王）】だった。

「【ヴニィマーニィエ（静粛に）】！」

王のその重みある一言に広間内に満ちていた低い囁きがぴたりと止んだ。王は、一人、玉座のある上段に足を進めるとその中心に立ち、広い会場内に点々と散らばる己が臣下たちを始めとする招待客を威厳ある立ち姿で睥睨した。

「状況を整理する。こたびの祝賀会はこれにて打ち切りとする。ご婦人方は速やかに別室へ。準備が整い次第、帰宅願おう。全大臣、将軍、各師団長、監察官、神殿神官（ユプシロン）、その他関係者はこの場に留まられたし。他の者は、速やかに帰宅のこと」

そして、招待客の避難誘導を行っていた第二師団の兵士たちに別室に客人たちを移動させるよう命を下した。

だが、その前に一言付け加えるのを忘れなかった。

「尚、この場での顛末、みだりに騒ぎ立てることは無用。追って沙汰を下す。それまではいかなることも不用意に口走らぬこと。皆の

良識と節度ある態度に期待する」

そして、祝賀会の散会と人々の移動が始まった。

この広間に残ったのは、国王（ツァーリ）による執政の補佐機関である中央審議会の大臣たち、監察機関の官吏、神殿（ユプシロン）の神官たち。軍部からは将軍、そして各師団長とその部下。当事者となったシビリークス家からは、セレブロの後を追って神殿へと向かったユルスナールに代わり、父親のファーガス、そして二人の兄たちがこの場に留まった。勿論、この全ての発端になった直訴をした貴族タラカーノフもいた。

残された人々の大半もまだつい今しがた起きた事態を上手く飲み込めていないようだった。どこか心ここにあらずという表情をしていた。これから何が始まるのか。未知に対する漠然とした不安のようなものが霞みのように漂っていた。

辺りには乱闘の末、昏倒したタラカーノフ配下の男たちが点々と散らばっていた。

まず始めに第一師団長のフラムツォフが中心になり、乱入した男たちを得物共々拘束し、別室に移すよう手配した。広間に残る他師団の兵士たちもそれに手を貸した。

兵士たちが黙々と作業をする間、王の周りに残された人々は沈黙を貫いていた。発するべき言葉を持たなかったということもあるが、何よりも玉座の前に立つ王から発せられる空気が常になり緊迫感と苛立ちを顕わにしていたからだ。事態は深刻である。そのことだけは理解出来た。

この場に残った貴族たちの中に大臣の任には就いていないが中央審議会に加わっている男が一人いた。その名をアファナーシエフという。交友範囲も広く、影響力を持つことから顧問的立場から議会の末席に名を連ねていた。

その有力貴族であるアファナーシエフの隣に腹心の部下であるソルジェが気配なく立つと己が主にそっと顔を寄せて耳打ちをした。

主はやや険のある眼差しで己が懐刀を見るが、何も言わずに小さく右手を振った。その右手の中指には鈍い輝きを放つ赤い石、【アルマ石】の付いた指輪があり、微かな男の手の動きに合わせて小さな煌めきを放った。それを合図に忠実な部下はそっと背後に下がった。

王（ツァーリ）の傍には、二人の息子、皇太子と第二皇子が立った。

やがて闖入者の拘束を終えた第一師団長が戻り、場の空気が一段と引き締まったものに変わった。

王（ツァーリ）は集まった男たちをぐるりと見渡した後、その視線を先の【北の将軍】シビリークス家・家長へ向けた。

「ファーガス、かの者は？」

「我が息子、ユルスナールの婚約者です」

「そなたは、その者が長の【魂響（タマユラ）】であることを知っていたのか？」

「御意」

肯定として小さく下げられたファーガスの頭に王は沈痛な面持ちで緩く長い息を吐きだした。

「【ヴォルグ】の長に会いまみえるは、先の即位以来、十七年ぶりだ。二度目の邂逅がこのような事態になろうとは……」

絞り出されるようにして零れた述懐は苦渋に満ちていた。

【ヴォルグ】の長の情けを受けるということは、その者が何者にも縛られない自由な身であり、その心根清き証でもあった。政治的、軍事的な策謀蠢くきな臭い領域に身を置くような者ではないはずだった。

あの突き抜けたような怒り。激しい憤怒の怒気を真正面からぶつけられて正直生きた心地がしなかった。こちらを低く見据える瞳は、かつての記憶通り虹色に煌めきならがも、そこにあるのは冷酷さえある禁色だった。

ここに集まる者たちの中で、王族と縁戚関係にある大臣を始めとする貴族たち、そして長きに渡り受け継がれて来た王族とヴォルグとの深い繋がりを知る者たちは、王の心の内を思い、同じような沈

痛さに目を伏せた。
　そこでファーガスが念を入れるように一歩進み出た。
「陛下。高潔を信条とする【ヴォルグ】の長の【魂響（タマユラ）】であるあの者が【ノヴグラード】の斥候であるはずがございません。あの者は、我が息子が生涯の伴侶として選んだ者。ここ暫く我が屋敷で面倒をみておりましたが、私の目から見ても曇りなき純真な心根の者です。我が息子に掛けられた嫌疑共々、お門違いもいいところ。何故、かようなる侮辱を受けねばならぬのか、甚だ理解に苦しみます」
　確固たる決意を秘めた深い瑠璃色が王を真っ直ぐ見ていた。

「陛下。恐れながら申し上げます」
　そして、そう言ってその場で騎士の最上級の礼節に則り床に片膝を着いたのは、ユルスナールの片腕である第七師団副団長のシーリス・レステナントだった。
　シーリスはその場で普段の柔らかさの欠片もない引き締まった顔を上げた。
「第七師団長ユルスナール・シビリークスの身の潔白は、我ら第七師団所属の部下一同、この命に代えましても保証致します。ユルスナールとはこれまで長きに渡り部下として行動を共にしておりましたが、スタルゴラドに忠誠を誓い、その職務に忠実な立派な男です。おかしな素振りを見せたことなど一度もありません。何よりもその仕事ぶりが証明してくれるでしょう。隣国に通じているなぞ、とんでもない。莫迦げた話もいい所。それはここにいる兵士たちも認めることです」
「「「是」」」
　その言葉に第七の兵士たちは一斉にシーリスに倣うようにその場で片膝を着いた。
「身内の話など当てになるものか」
　沈黙の隙間を突くように吐き出すようにして小さく漏れた呟きをシーリスは的確に拾い上げると寒々しい程の冷笑を浮かべた。口元

は辛うじていつものような笑みに象られていたが、その目は烈火の如き熱い怒りを秘めながら、不躾な言葉を吐いた中央審議会の一人である大臣、イリューヒンを見据えていた。
レステナント家特有の苛烈な菫色の瞳にイリューヒンはばつが悪そうに小さく咳払いをした。

「陛下、私からも一言申し上げたき儀があります」
次に静かに一歩前に踏み出でて敬礼をしたのは、【南の将軍】を拝命するオリベルト・ナユーグだった。堂々たる風貌をそのままに武骨さの中にも気品を滲ませながら深みのある声で語った。
「ユルスナールは、あのラードゥガ・シビリークスの甥であり、幼き頃から叔父であるラードゥガを慕っておりました。私の目から見てもあの男の魂と遺志を引き継いでいるのは、ユルスナールであると言っても過言ではないでしょう。先の戦でこの国の為に戦い、最後の一線で志高く散っていったラードゥガをこのような茶番で辱めることは断じて許せません」
そのやや後方から間髪入れずに別の声が上がった。
「私からも一言、申し上げます」
その後を引き継いだのは第三師団長のゲオルグ・インノケンティであった。
「タラカーノフ殿が、斥候だと主張したあの者は、ここより遥か北方、我が国の軍事拠点である【北の砦】よりもさらに北東、【太古の森】が始まる辺縁に暮らしていると聞いております」
――――ですよねぇ、シーリス？
同意を求めるように振り返ったゲオルグにシーリスは真面目な面持ちで頷いた。
「ええ。間違いありません」
太古の森の辺縁と聞いて心当たりのある者は顔を見交わせ密やかに囁きを交わし合った。
そこに更なる動揺の切れ端のようなものを見て取ったゲオルグは

うっそりと目を細めて男にしては鮮やかな笑みを浮かべた。
「ええ。皆さんの御想像の通り、あの者は故ガルーシャ・マライ殿と共に暮らしておりました」
それを引き継ぐ様にシーリスが姿勢を正した。
「はい。かの者は、あのガルーシャ・マライ殿をして【最後の家族】と言わしめました。そして、その最期を看取ったそうです。どうかこれ以上、故人の名を穢すことはなきようお願いいたします」

「それは……真か？」
それまでずっと沈黙を貫いていたタラカーノフが、絞り出すように掠れた声を上げた。口を小さく開いては閉じを繰り返すが、それ以上、音として認識出来るような言葉は出て来なかった。
どうやらタラカーノフは、それらのことを知らなかったようだ。
「タラカーノフ殿、お聞かせ下さいませんか？　一体どなたからどのような情報を得て、このような奇想天外なお話しを創り上げたのか。私としては非常に興味があります」
冴え冴えとした冷ややかな眼差しを投げたシーリスの隣で、ゲオルグも姿勢を正すと口を開いた。
「ええ。それは私にも是非お聞かせ願いたいものですね。あの者、リョウはこの度、術師養成所を優秀な成績で修め、見事術師としての認可を得ました。我が国にとっても貴重な人材と言えるでしょう」
「まさか……あの者はガルーシャ・マライに師事していたというのか？」
少し前に耳にしたガルーシャ・マライの弟子に関する噂を思い出したのか、監察機関を統括する大臣であるイジューモフが驚きの声を発した。
「師事していたというのは若干語弊がありますが、リョウの素養の高さを見込んで、それなりの事をしていたようです」
事情を良く知るシーリスが静かに頷けば、イジューモフは豊かな髭が生えた頬を形容し難い苦々しい表情で撫で摩った。

「ああ、それから。イジューモフ殿、貴殿にお聞きしたいのですが」
今度はゲオルグが、明るく波打つ茶色の髪を緩く束ねた壮年の男を見遣った。小首を傾げたゲオルグの顎の辺りで切り揃えられた淡い金色の髪がさらりと揺れた。
「最近、何でも神殿の方では儀式を予定していると専らの噂ですが、その件はそちらに報告が届いているのですよね？」
神殿、儀式。その二つの単語に反応したのは、王族の皇太子だった。
「儀式……だと？　そのような話はこちらには届いていない。どういうことだ？」
皇太子が気分を害したように半ば憤慨しながら神官たちを見た。
神殿が行う先読みの儀式は、宮殿の意向を確認した上で行われるというのが決まりであった。神殿による宣託の儀式は、この国の行く末を左右させる王族にとっては重要な意味合いを持つものだからだ。そこで得られた宣託は神聖且つ貴き賜りものとして王の政治に強い影響力を及ぼした。
二つ前の春、その慣例を覆した神官たちの勝手な振る舞いに宮殿は神殿に対して不信感を募らせていた。その後、両者の一部穏健派によって関係修復が目指されたが、未だぎくしゃくした影を落としていた。
「ちょうどいい。こちらにユプシロンの方々がいらっしゃいますからお尋ねになれますね。如何でしょう、クルパーチン殿？」
ゲオルグは白い上等な正装用の上下に濃い紫色の帯を締めた高位神官を見た。集まった人々の視線が一斉に白い衣に身を包んだ神殿関係者に注がれた。
「おやおや御冗談を。何を仰ることやら。いけませんねぇ、インノケンティ殿」
クルパーチンはぎょろりとした魚のような目を細めて、肉の薄い皺だらけの頬を緩めた。シラを切る積りであるらしい。
「おや、この後に及んでお惚けになるのですか？　先日、私に教え

て下さったではありませんか。そちらで儀式を予定していると。その時、【黄色い悪魔】を融通出来ないかとお尋ねになりましたよね？」

――――――痴呆になるにはまだまだお若いはずですが？　それとも健忘症ですか？

「そして、リョウをその色彩から贄にしようと企んでいたのではないのですか？　その為に一人の侍女の命を弄んだ」

ここぞとばかりに畳み掛けるようにシーリスが言い放った。

「なんだと？」

贄という言葉にシビリークス家の男たちは一斉にその身に纏う気に剣呑さを含ませた。

「さて。では今度はそなたたちの意見を聞こうか？　イジューモフ、タラカーノフ」

一連のユルスナール支持者たちの擁護の主張を聞いた後、王（ツァーリ）は騒ぎの原因を作った直訴の張本人とその訴えの元になったとされる監察官を見た。

タラカーノフは、口を小さく開いたまま震えていた。心底、忌々しげに顔をくしゃりと歪めるとだらりと垂らしたままの腕の先、己が拳をきつく握り締めた。顔色は一度蒼白を通り越して、再び怒りにか斑な赤みを帯び始めていた。

「では、監察に届いた申し立ては……」

低く漏れたイジューモフの声に、

「今となっては、その中身の信憑性は当然のことながら疑うべき点が多いでしょうね。その証拠となったとされる暗号文も怪しいものです」

シーリスが堂々と言い放った。

「ええ。同感です。そもそもあの会議は大した秘密などない確認のようなものでしたからね。知られて困ることなどなかったはずです」

そこで初めて財務官として件の鉱脈関連の会議に出席していたケ

リーガルが間に入り、補足的な説明をした。
「ということは、全てが仕組まれたものだったと？」
そう言って、確認をするように疑念の目でタラカーノフを見たイジューモフに、当事者のタラカーノフは、
「【カァコーイチョールト（チクショウめ）】！」
王の御前であるにも関わらず低く絞り出すように呪詛の言葉を吐いた。
「おのれ謀（たばか）ったか！」
そう言って自分の周りをぐるりと見渡すと、とある一点を睨み付けるようにありったけの憎悪を込めて見据えた。燃えるような瞳が貫いた視線の先で、豊かな長い髭に覆われた男の口元が微かに動いた。
だが、タラカーノフが再び呪詛の言葉を吐こうとした次の瞬間、
「……クッ……」
突然、タラカーノフが胸を押さえて苦しみ始めた。そして、がくりと片膝を着くと瞳を限界まで見開いて、悶え苦しむように空いた手を前方へ伸ばした。
「……グァハッ……」
「タラカーノフ殿？」
「いかがなされた？」
近くにいた第一のフラムツォフが、配下の兵士に傍に行くように目配せをした。
「タラカーノフ殿？」
「旦那さま！？」
少し離れた所に控えていた従者が急ぎ駆け寄って来た。
だが、第一の兵士が傍に跪き、蹲る男に手を伸ばした所で、タラカーノフは動かなくなった。
「どうした？」
一通り、状況を改め頸動脈の辺りで脈を測った兵士は、顔を上げると緩く首を横に振った。

「こと切れております」
どこかで舌打ちの音が聞こえた。
各師団の兵士たちの間に突如として緊張が走り、辺りに侵入者の気配がないかどうかを改め始めた。
「先手を打たれたか」
「消されたか」
「どうやら即効性の毒を盛られたようですね。しかもかなりの劇薬だ」
何が使われたかは実際に調べてみないと分からないだろう。
部下に続いてタラカーノフの遺体をざっと改めたフラムツォフがその首の所に刺さる小さな針のようなものを見つけて手袋をはめた手に取った。広間にいる間、タラカーノフの後ろには誰もいなかった。吹き矢のようにして飛ばしたにしては距離があり過ぎる。が、念の為、フラムツォフは即刻部下の兵士たちに付近を捜索し不審な人物がいないかどうかを改めるように命じた。
「証拠隠滅を図ったのかもしれません」
「死人に口無しという訳か」
「ということは裏にもう一枚あるな」
険しい顔をした第一師団長の報告を受けて、【西の将軍】が眼光鋭く周囲を見渡した。まるでタラカーノフを操っていた透明な糸の先を辿るように。
これで、タラカーノフの主張が不当なものであることが濃厚になっただろう。
王（ツァーリ）は顔を唇を引き結ぶと即決したように顔を上げた。
「即刻この一件を始めから洗い直せ。その任はオスターペンコ、そなたに任せる。関係者と第二は惜しまず協力せよ」
「ハッ」
「御意」
第二師団長のスヴェトラーナが恭しく頭を垂れれば、その隣で一

連の調査の指揮を取るように命を受けた中央審議会の一人であるオスターペンコも倣った。オスターペンコは、軍部にも属さず、宮殿内での立ち位置も比較的中立を保っている男だった。どちらにも左右されない公平性を重視しての人選のようだ。

そして次に王はシビリークス家の男たちを見た。

「それまでシビリークスの末は謹慎せよ。良いな？」

「御意」

ファーガスが王の命に静かに頭を垂れた。

第三者による公平な調査の間は大人しくしていろということだろう。ファーガスとしてもその事に異論はなかった。

引き続きタラカーノフ配下の男たちの身柄を拘束し、取り調べを行うよう命が下った。

宮殿内関係の方は、これで一先ず方針が決まった。

残るもう一つの懸案事項は、王（ツァーリ）にとってはより大きな意味合いを持っていた。何と言ってもヴォルグの長が絡んでいる。長きに渡りこの地を治めてきた【ツァリョーフ】一族の今後、引いてはスタルゴラドの繁栄と発展に関わる事態でもあった。

神々の寵愛を受けた【ヴォルグ】の一族から見放されるということは、神々から見放されたも同じ。その噂が広まれば、周辺各国からは呪われた国との烙印を押され、今も尚、虎視眈々（こしたんたん）と国土拡大の機会を狙っている隣国【ノヴグラード】に再び付け入る隙を与えかねなかった。この国を滅びの道に進ませる訳にはいかない。

一家臣の暴挙に長の同胞（はらから）を巻き込んでしまったことは、貴族たちを従える立場にある王としては監督不行き届きである。この償いはしなければならない。たとえどのような代償を払うことになろうとしても。

王は新たに気を引き締めると顔付きを更に真剣なものへと改めた。

「では次に神殿からのお客人に尋ねるとするか」

王（ツァーリ）のその言葉に多くの臣下たちが広間に残る神官たちの一団に一斉に視線を向けた。明白な対立の図式が図らずもこの場に現れたこととなった。

宮殿側の強い視線にあからさまに顔色を悪くしたような者も中にはいたが、このような宮殿側との渉外活動に当たる神官たちは、強かさという点では宮廷政治を泳ぎ回る貴族たちに負けないくらい豪胆で面の皮の厚い男たちが多かった。

その最たる者が、多くの神官たちの前に立つ枯れ枝のように線の細い男、クルパーチンだった。交渉を得意とする男で巧みな話術で宮殿内の様々な男たちに接触を持ち、その影響力を触手のように伸ばして行った。

「なんなりと。我々の出来る範囲でご協力を致しましょう」

クルパーチンは取って付けたように恭しく一礼すると皺だらけの口元に象られた薄い唇に笑みを浮かべた。

「儀式を予定しているというのは真か？」

偽りは許さない。強く相手を見据えた最高権力者に対し、クルパーチンは顔付きを真面目なものに改めると淡々と口を開いた。

「神殿内部の急進派の中に一部そのような動きがあったのは確かなことですが、それもあくまでも過去のこと。今では収束しております」

相手の発現の真意を確かめるように王（ツァーリ）が目を眇めた。

「贄云々というのは？」

「我々は豊穣を司る女神であると同時に慈愛の女神でもある【リュークス】に生涯の忠誠を誓う敬虔な愚者。無用なる殺生は戒律で厳しく禁じられております」

ユプシロン流の言い回しに王が鋭い視線を投げた。

「では、かの長の【魂響（タマユラ）】をその儀式の贄として得んが為にタラカーノフを唆したという訳ではないのだな？」

核心を突くような質問にクルパーチンは動揺を見せなかった。

「それは余りにも酷い仰りようではありませんか。我々がそのよう

な神を愚弄する野蛮に手を染める訳がございません」
「その言葉に偽りはないのだな？」
「御意。我が神リュークスに誓って」
尤もらしい言葉を口にしてから静かに頭を垂れたクルパーチンに、王はその場でのこれ以上の追及を無駄だと判断した。
「良かろう。イシュタールに伝えよ。明朝、神官長を改めて召致し、この件を確かめることとする。良いな？」
「仰せのままに」
俯いた神官の口元が薄らと笑みの形を作ったことに気が付いた者はいなかった。
「ではこれにて散会」
王（ツァーリ）が息子たちと側近を引き連れて広間を後にした後、残された人々も散り散りに広間を離れることとなった。事態究明の任を帯びたオスターペンコは早速第二師団長を捕まえて、今後の方針を話し合いながら足早に広間を後にした。そして中央審議会の大臣たちも其々派閥ごとに纏まりながらその場を離れて行った。
その中の一人、アファナーシエフは、去り際、ファーガスの方を一瞥して小さく笑みの切れ端のようなものを浮かべて口角を上げた。無言のまま向き合うこと暫し、最初に視線を逸らしたのはファーガスの方だった。

こうして最後に広間に残ったのは第七師団の兵士たちと第五のドーリンたち、そして第三のゲオルグだった。彼らは無言のまま顔を見交わせると小さく頷き合った。
これより向かう先は決まっていた。ユルスナールの後を追うべく神殿を目指すことで一致した。彼らとしても崩れ落ちたリョウの身が心配だったからだ。
「ゲオルグ、あの判じ薬というのは本物ですか？」
リョウが口にしたグラスの中身をシーリスは尋ねた。
「似たようなものがあるのは確かですが、我々の所では【黄色い悪

魔】を使ったものではありませんよ」

【黄色い悪魔】は、その成分研究と軍事的転用を含め、未だ調査試験中の代物だ。第三の中では、それらを有効利用する方法をまだ確立できていなかった。

「やっぱし、眉つばもんかよ」

憎々しげに毒づいたブコバルの横で、シーリスは眉を顰めた。

「では、あれは本当に【毒薬】であったかもしれないと？」

「可能性は否めません」

同じく険しい顔をしたゲオルグであったが、一縷の望みを繋ぐようにシーリスを見遣った。

「ですが、儀式の贄は生きていなければならないのですよね？」

「ええ。そのように聞いています」

神を降ろす為に、その者を昏睡状態にさせるのだ。

「ならばまだ望みはあるかもしれません。ヒューイ！」

ゲオルグは第三師団副団長のヒューイ・サフォーノフへ合図を送ると第三の薬草庫から至急、解毒剤を取りに向かうよう告げた。

そして、部下の長身が広間を抜けたのを見て取った所で振り返ると、直ぐ傍に影が立った。第五師団の面々だった。

「ならば、あの神官の言動を見る限り、諦めてはいないのではないか？」

第五のドーリンが眉間に深い皺を寄せて冷静に指摘すれば、

「クッソ、あのイカレ野郎め」

ブコバルは盛大に舌打ちをして後方を振り返ると大声で叫んだ。

「シーマ！　万が一の場合がある。お前（第一師団）んとこの手合いを神殿に向かわせろ。上に報告、神殿で不穏な気配あり。俺たちは先に行く！」

「分かった」

そして、残った兵士たちは再び、神殿を目指して駆け出した。

【余興】の結末（後書き）

ここまで読んでくださってありがとうございます。徐々に終わりが近づいて参りました。ゴールまであと一息。それではまた次回に。

補足：「シーマ」とは第一師団長マクシーム・フラムツォフの愛称です。「マクシーム」からの変化形。

罪と罰

Господи помилуй господи.....

течение священного потока будет превратить в реку могучую.

С неба на землю все мирно и спокойно и постоянно воротится,

ожидая тогда, когда с ключом

откроется дверь.....

蝋燭の明かりが点々と小さな光を生み出している仄暗い室内には、複数の男たちの低い詠唱が響いていた。一定の抑揚に基づき流れるその声は、虫の羽音のように微かに絶え間ない振動の波を限られた空間に伝えていた。その音は四方八方を囲む周囲の壁に反響し増幅して行った。

その音は、この国の一般的な話言葉とは異なる人々には耳慣れない特殊な音だった。それは遥か昔の息吹に通じる最も古い形の言葉だった。発音も音の組合せも現代のものとは全く異なる言語だ。暗号文や呪文のように聞こえるかも知れないそれは、だが、ちゃんとした意味を持っていた。

暗い室内にぼんやりと複数の白い衣が浮き上がっていた。神官たちの装束である。一人が祭壇に向かって跪き、その後方に多くの男たちが同じように控えていた。

香だろうか。微かに煙をたなびかせながら一人の男が手にしている長い鎖の付いた小さな容器が振り子のように揺れ、白い細い煙と共に甘い匂いを振り撒いていた。周囲には集まった男たちの静かなる興奮を窺わせるように熱気が生まれ、香炉から漏れる甘い匂いが、

それに拍車を掛けるように密度濃く立ち込め始めていた。
やがて同じ言葉を紡いでいた複数の声が、時間差で分裂を始める。一点より全方向に向けて、同じ文言を紡ぐ似て非なる音の波が複数生まれ、そして再び元の流れに戻るように収縮していった。
それを幾度となく繰り返し、ある極みに到達した時、突き抜けた先で新しい変化が訪れるのだ。集中を高め、自らの細胞一つ一つを音に同調させて、人としての意識を極限までに抑えることで、紡がれゆく音階の一つになり代わる。【私(ワタクシ)】を全て捨て去った後の境地を彼らは目指していた。

宮殿での祝賀会に参加していた仲間から報せを受けた神官たちは、直ちに計画を実行に移した。多少の変更を余儀なくされたが、基本的な方針は変わっていない。ただ、考えていた以上に状況が複雑になったのは否めなかった。
それでも諦める積りはなかった。この日の為に長きに渡り綿密な計画を立ててきたのだ。そして今回、これまでに注いできた情熱に報いるように類稀なる僥倖が重なった。この機会を逃す積りは更々なかった。それが集まった神官たちの共通認識であった。
【鍵】が攫われた。宮殿から神殿に届けられた情報は、かなり限定的であった。最も肝心な部分である【ヴォルグ】の長を巡る部分は意図的に割愛されていた。鍵が【ヴォルグ】の長に連なる存在であることが分かれば、待機していた神官たちは自分たちがこれからやろうとしていることに恐れ慄き儀式を思い留まるだろうという危惧があったからでもあった。
だが、用意していた薬は服用されたのだ。今頃は別の所で深い眠りに就いていることだろう。それは不幸中の幸いだった。しかしながら、時間がないということで、早速残された儀式推進派の神官たちは準備を整えると勧請の祈りを唱え始めた。

儀式の詠唱が成功し、降臨が叶えば、大いなる存在がこの祭壇に現れることになるだろう。本来なら、その鍵となる寄り代が直ぐ傍にあった方が安定をするのだが、この際、そのような悠長なことを言っていられる場合ではなかった。

神官たちの使命は一つ。遥か昔に失われた男神、エルドーシスを呼び寄せることでリュークスの訪れを願うというものだった。そして聖なる御声を賜ろうというものだ。それは、時代が下った現時点でも【人】が神域へ働きかけることが出来るということを証明しようとする行為でもあった。

神殿の西側、最も奥まった場所にある祈りの間、その中の隠し扉の中にある一室で、白い衣を身に纏った神官たちが祈りを捧げていた。いつもは階級を表わすはずの色とりどりの帯は、この時、白い帯にとって代わっていた。それは神の御前では人は遍く等しいという考え方に基づいていた。

儀式用の香炉を持った神官は、白っぽい煙をゆっくりとたなびかせるその小さな丸みを帯びた容器の付いた長い鎖を振り子のように揺らしながら、祭壇の前に跪(ひざまず)いて頭を垂れ、祈りの文言を詠唱し続ける神官たちの周囲を大きく回るようにゆっくりと歩いて行った。

祭壇に向かって左回りに歩いて行く。ここではない時を遡り、神代に通じる道を見つける為だ。その神官の口からも同じように祈りの旋律が低く紡がれていた。

祭壇の中央には緻密な彫り物の施された白い楕円形の石が置かれていた。それは神を表わした聖なる石だった。神殿の表の区域に設置されている一般参詣客が祈りを捧げて行く大きな石をずっと小さくしたようなものだった。

その石は専ら儀式用に使われるもので神が降りることの出来る【場(スポット)】であった。宣託の儀式の際にはその石に降り立った女神の声を神官たちが聞くことになっていた。

最後に儀式が行われたのは二年前だ。ここに集まる神官たちは、

その時と同じ顔触れだった。皆、頭の上にはすっぽりと覆うように白い頭巾のような大きな布を被っていた。

室内に点々と灯された蝋燭の明かりが揺れ、辛うじて神官たちの絶え間なく動き続ける口元を照らし出していた。この儀式の間では、発光石ではなく蝋燭が明かりとりに利用される。空気に揺らぐ炎の影が、神との交信に欠かせないとされていたからだ。

詠唱を続ける男たちの意識は徐々に一つにまとまっていった。其々が一本の糸であり、その糸を縒り合せるように一本の太い意識の奔流の中に集約されていった。

男たちは静かなる興奮に包まれていた。音が少しずつ大きくなり、直ぐ傍に反響して、狭い空間そのものに同調していった。

術師としての素養というものは、この世界に流れ満ちている大きな自然の力に自らの意識を同調させ、その大いなる力をほんの少し借りる形で術を行うというのが基本的な形だった。その原理は、高位神官と呼ばれている素養持ちの男たちも同じだった。そして、ここで展開されている儀式もその同じ原理に基づいていた。

やがて全てが溶け合い肉体と精神が分離し、別の次元で混ざり合い、精神世界の麓に辿りついた。その時、神官たちの紡ぐ声は、より一層独特な旋律を刻み始めていた。

そして、ついにその時がやって来た。

祭壇に置かれていた聖なる石に淡い光が踊り始めた。祈りを捧げる神官たちの詠唱も佳境に入り、その額際には汗が滝のように流れて落ちていった。【人】であるものが【神】の領域に接触することは肉体、及び精神に相当な負荷が掛かった。快感とは紙一重の所にある麻薬のような常習性の苦しさに顔を歪めながらも、祈りは最終段階に突入していた。

ちょうどその頃、【東の翁】の結界が張り巡らされた界隈では、これまでとは違う空気の流れにセレブロと東の翁が顔を上げた。

横たわるリョウの傍に寝そべっていたセレブロは、伏せていた顔を上げると長い尻尾を一振りした。険しい顔をして睨むように宙の一点を睨みつけた。

結界を強める為に器の中に清め用の水を入れて戻ってきた東の翁もセレブロと同じ異変を感じ取ったのか、器を手にしたままぴたりと歩みを止めた。その間、リョウの手を取り己が額に押しつけていたユルスナールもただならぬ気の揺らぎを感じ取り、閉じていた瞳を開いた。

そこでユルスナールは息を飲んだ。

「こ……れ…は……？　リョウ？」

リョウの体が薄らと光の膜に包まれ始めていた。淡い黄色と青い糸のような細い光だ。それらはまるで生きているかのように縦横無尽にリョウの体を覆い始めていた。

『おのれ。うつけどもが！』

セレブロは突然体を起こし立ち上がると大きく咆哮を上げた。広いはずの室内、四方八方にぐわんぐわんと長の雄叫びが反響した。それはまるで地鳴りのような響きだった。

『イシュタール！！！』

無数に伸びた光の糸に包まれてゆくリョウを前にユルスナールは仰天しながらも、突然凄まじい怒気を振り撒いたセレブロを仰ぎ見た。

「セレブロ殿？　一体、何が……」

白銀の王の身体は長い毛足が逆立つように揺れていた。鈍い発光石の明かりを受けて煌めきと共にうねるその白い体毛は、そこだけ風が吹いているかのように揺らいでいた。獣特有の低い唸り声を上げたヴォルグの長は、じっと虚空を睨んでいた。

一体、何が起きているのだ。突然の場の変化に内心、狼狽しなが

らも何か良くないことが始まっているということだけはユルスナールにも感じ取れた。
「シビリークスの末よ。離れなさい」
唖然としたままのユルスナールに東の翁が言った。静かながらも有無を言わせない迫力のある声音にユルスナールは大人しく従った。
「……【東の翁】殿？……」
「今、扉が開かれようとしている」
「……扉？……」
怪訝な顔をしたユルスナールの前で、東の翁は柔和な面立ちに深い皺を多く刻みながら沈痛な面持ちで口を開いた。
そして、白い口髭が覆うその口から吐き出されたのは信じられない言葉だった。
「儀式を始めた者がいる。リョウの身を寄り代に」
「なん……ですって？」
深い青さを湛えた瑠璃色の双眸が驚愕に見開かれた。
「何故です？　そんなことが可能なのですか！？」
この場は、東の翁が結界を張ったいわば閉じられた空間だった。そしてリョウは、この中に横たわっているのだ。神殿の中でも常人の立ちいることの出来ない限定的な空間だ。そこは安全であると思っていた。
「ここには結界があるのではないのですか！？」
思わず低い声を上げたユルスナールに、東の翁は残酷な現実を告げた。
「我が結界は【人】にのみ有効。ここに降り立とうとしている【神】を防ぐ手立てにはなりませぬ」
「……神が？……降りる……？」
ユルスナールは、言われた言葉の意味がよく理解できなかった。
「だが、リョウはここにいて、神官たちとは離されている」
離れた場所にいるというのに神官たちが儀式を始めたというのか。
そんなことが可能なのか。

余りの衝撃に口を小さく開いたまま言葉を失ったユルスナールに、東の翁はセレブロと同じように虚空を睨みながら眉を顰めた。
「向こうもかなりの禁じ手を使ったようですな」
禁域に手を染めることは、それを行う神官たちも無事では済まないだろう。
だが、二年前の過ちが再び繰り返されようとしていた。それほどのことまでをして神官たちは何を得ようというのか。
淡々と言葉を継いだ東の翁に対してユルスナールは不安に掠れた声を上げた。
「リョウは……どうなるんですか？」
詰め寄らんばかりの勢いのユルスナールに対し、東の翁は無言のまま力なくその首を横に振った。
「……まさ…か……」
つまり、器として一度神を降ろしてしまったら最後、人は人としての自我を失う。廃人となりそのまま命尽きるだろう。少し前にシーリスから聞いた話を思い出して、ユルスナールは愕然とした。
「これよりは神の領域。我々には手出しができませぬ」
「ならば即刻儀式を止めさせればいいのですよね？」
早く中断をさせなければ。術式が整ってしまう前に。弾かれたようにその場から駆け出そうとしたユルスナールの傍で、
『下衆どもめが！！！』
じっと虚空を睨んでいた白銀の王が、高らかに怒りの咆哮を上げ、光る毛並みを翻して跳躍した。
「セレブロ殿！」
そのまま飛び出して行った銀（しろかね）に輝く軌跡を追い掛けるように反射的に走り出したユルスナールは、一度、出口付近で後方を振り返った。
こちらを真っ直ぐに見ていた東の翁は大きく頷いた。
「ここより西、この場と対になっている西の祈りの間の奥でしょう。隠し扉があります」

恐らく儀式はそこで行われているのだろう。
東の翁の助言にユルスナールは真剣な面持ちで頷きを返していた。
そして、少し離れた所に横たわる己が愛する人を一瞥した。深い眠りに就いたリョウの身体は、脚先から膝の辺りまで黄色と青の光の糸が細く絡みつき、これから蛹（さなぎ）になるかのようにその輪郭を覆い始めていた。
時間がない。本能的にユルスナールは悟った。きっとあの二色の光が全てリョウの体を覆いつくしてしまったら終わりだ。そんな気がしてならなかった。
「リョウを頼みます！」
ユルスナールは短く吐き捨てると勢いよく長靴を蹴った。

「【チョールトバジミー（クソッタレ）】！」
ユルスナールは神官たちが儀式を始めたという一室を目指して全速力で駆けながら、自分の考えの甘さを呪った。宮殿での出来事に気を取られていて、まさかこの期に及んで神官たちが儀式を同時進行的に行うだろうとは思ってもみなかった。全ての危機はひとまず去ったかと思っていたのだ。
リョウが自分の目の届く場所にいる。それなのに危険な目に遭わせてしまっているという事実に戦慄さえした。神殿という本来ならば神聖であるはずの場所に巣食う得体の知れない闇とそこに蠢く神官たちの強欲に自分の認識が足りなかったことを痛感せざるを得なかった。
だが、今は、そのようなことを考えている暇はない。物凄い形相で飛び出して行ったヴォルグの長の様子を見る限り、状況は危機的であるのだろう。今は、一刻でも早く、術式が整い、何らかの効力を発揮してしまう前にその儀式を妨害し、中断させなければならない。

こんな形で繋がりかけた糸を断ち切ってしまう訳にはいかない。
リョウを失う訳にはいかなかった。
ユルスナールは左の長剣の柄に手を置きながら、必死になって走った。焦燥からくる脂汗と走っていることからくる汗が混じり合い、点々と夜間用の発光石の明かりが鈍い光を発する薄暗い回廊の中、白い壁際に象られる投影に飛び散っては消えた。

暫くそうして走り、天井の低い長い回廊を抜け、解放感に溢れた闇が濃淡の影を織りなす空間に出た所で、こちら側に向かって来る複数の長靴の足音が聞こえた。
ユルスナールは長剣の柄に手を掛けると鞘ごとベルトから引き抜いた。神官であれば容赦なく昏倒させる。本来ならば出会い頭に斬って捨てたいというのが本音であったが、それをどうにかして理性で抑えた。だが、迸る殺気は隠そうともしなかった。邪魔をされる訳にはいかない。
そして大きな柱の影から出てきた相手に鞘ごと剣を振り下ろした瞬間、
「うっわっとっとと。あっぶねぇなぁ！」
間一髪のところで避けられたと思ったら、剣の軌道を避ける為にかごろりと床に体を転がせた男から、場違いな程の呑気な感のある声が上がった。
間違えるはずがない。聞き覚えのあり過ぎる声だ。
「ブコバルか」
思わず漏れた舌打ちに幼馴染からはたちまち非難の声が飛び出した。
「なんでぇ、ルスランかよ。たまげたじゃぁねぇか。殺されるかと思ったぜ」
いつにない殺気を真正面から向けられたブコバルは、すぐさま体勢を整える為に起き上った。
ユルスナールが剣を左手に持ち替えた所で、

「ルスラン！」
　一番先頭を走っていたブコバルの後に続いていたシーリスが顔を出したかと思うと、後ろから続々と顔馴染みの面々が現れた。ドーリン、ウテナ、イリヤにゲオルグ、そしてアッカ、ロッソ、ヤルタ、グント、アナトーリィーの第七の兵士たちだった。
「西の祈りの間へ向かう」
　仲間たちの顔を見るとユルスナールは駆け出した。今は、説明をする間も惜しかった。
　ユルスナールから只ならぬ緊迫感を感じ取った男たちは、反射的に同じように走り出した。
「リョウはどうなったんだよ？」
　走りながら隣に並んだブコバルが低く発した問い掛けに、
「儀式が始まった」
　ユルスナールは前を向いたまま簡潔に吐き捨てた。
「「なんですって！？」」
　シーリスとゲオルグから驚きの声が漏れた。
「ぶち壊しに行く」
　前を向きながらユルスナールは心底忌々しげに吐き捨てた。
「ハッ、そうこなくっちゃぁ」
　どこか残忍な顔をして舌なめずりをしたブコバルの隣で、ユルスナールは横目にちらりと後方を一瞥すると、シーリスたちに向かって言い放った。
「説明は後だ。時間がない」
「「【ポーニャル（了解）】」」
　上長の命令に部下たちが低く頷きを返した。
　そして集まった総勢十二人の男たちは、儀式が行われているという神殿の西にある祈りの間のその最奥を目指した。
　仄暗い回廊の闇の中には、セレブロが振り撒いた怒気の切れ端が点々と差し込む日の光に遊ぶ塵のよう煌めきを放ちながら漂っていた。それは神殿内部の構造に余り詳しくはないユルスナールたちを

導く標（しるべ）になった。

その頃、西の祈りの間の隠し扉の中に設えられた祭壇では、神官たちの詠唱が最終段階に入ろうとしていた。中で祈りを捧げている神官たちは全部で十三人。その内の既に二人が、崩れ落ち倒れていた。

だが、力尽きた同僚に構うことなく男たちの詠唱は続いていた。白い頭巾の合間から辛うじて覗く一人一人の表情は苦しそうだ。それでも恍惚に似た高揚感があったのも確かだった。

室内には【ここ】とは違う【気】が立ち込め始めていた。男たちが懸命に祈りを捧げる聖なる石が仄かな光を発し始めていた。黄、青、白、黒、そして赤。この国の暦と同じ五色の光が術式と祈りの文言が彫り込まれた楕円形の石の上に踊り、揺らぎ始めた。

五つの光はやがて混ざり合い一つの大きな光となるだろう。そして、その時が、勧請の祈りが天高く神の世界に通じ、寄り代を下界の目印としてこの場に降臨する証となった。

中心になって祈りを紡いでいた男が、声量を上げて行き、それに合わせるようにして残りの十人が声を揃えていった。

そして、小さな鐘を手にしていた男が最後の仕上げにそれを振り鳴らそうと手を上げた瞬間、小さな祈りの間の扉が粉々に砕け散り、辺りに轟音が響き渡った。

『させるものか！！！』

光輝く白い毛並みを振り乱しながら飛び込んできたのは大きな獣で、祭壇前の神官たちを横倒しにし、中心となっていた一人の男の上に圧し掛かった。

虚空を見つめ精神離脱状態（トランス）にあった神官の瞳の中では瞳孔が収縮し、抜けかけていた意識がこの場に戻って来た。そして、今度ははっきりとした意識の中で見開かれた灰色の光彩には、憤怒の形相を

したヴォルグの長の顔が映っていた。
『そこまでだ。異端者どもが』
「あ……な……た……は？……」
圧し掛かって来た大きな白い獣を前に神官は息を飲んだ。信じられないという具合に目を見開いた。
「……ヴォルグの……長？」
セレブロは鼻先を神官の間近に寄せて残忍な笑みを刷いた。剥き出しになった犬歯が室内の微かな光を吸収してきらりと反射した。
「どうして……？」
何故この場にヴォルグの長がいるのか、神官はまるで理解できないというようだった。
『ほう？　いい度胸だ。愚か者めが。莫迦げた儀式など即刻止めよ。これ以上、我が同胞（はらから）を害すること許さぬ』
今にもその喉笛を噛み切らんばかりの勢いで低く唸り声を上げたセレブロに神官が虚を突かれた顔をした。
「長のはらから……？」
『うぬらが贄に定めしは、我が朋輩』
「な……ん…と？」
「セレブロ殿！」
そこに後から駆けてきたユルスナールたちが飛び込んできた。
こじんまりとした室内には、心身共に消耗しきった神官たちが散らばるようにして倒れ、蹲（うずくま）っていた。術の途中でセレブロの急襲を受けた彼らは吹き飛ばされ、意識朦朧としたまま起き上れずにいたのだ。
「シーリス」
「ええ」
ユルスナールの目配せにシーリスは静かに頷くと共にやって来た兵士たちに命令し神官たちを後ろ手に縛り上げ拘束していった。兵士たちは正装の軍服の腰に回っていた飾り紐を毟り取り、それを捕縛に充てた。

「キシニョフ殿」
　ユルスナールはセレブロの前で横倒しになり片肘を突いて上体を起こした神官に近づいた。神官の瞳孔は再び収縮を繰り返していた。闖入者を認識した様子はなかった。
　ユルスナールは神官の襟首を掴むと思いっ切り引き寄せた。視点の定まらない相手の正気を戻す為にその頬を思い切り張った。
「何をする？　何故邪魔をした？」
　意識が戻った神官は、目の前にある男の顔を見て、その顔を忌々しげに歪めた。
「何故邪魔をした？　あともうすぐだったのだ。あともう少しで遥かなる高みに届いたというのに。扉があった。この手には鍵もあった。今まさに、その神聖なる扉が開かれんとしていたのだ。我々の長年の夢が叶う時が来たのだ。我々はいまだかつてない新たな境地に辿りついたというのに！」
　術式完成の手前で邪魔が入ったことへの恨みを込めるように己が持論を繰り返した神官の自分勝手な言い草にユルスナールは激高した。
「ふざけるな！！」
　掴んだ襟元をぎりぎりと引き絞り、苦しみに歪む男を睨み付けるように凄んだ。
「儀式などクソ食らえ。何の縁（ゆかり）もない人間の命を贖いに何が得られるというのだ。神はそのようなおぞましい犠牲に応えるというのか。慈愛を謳うリュークスはかようにも残酷なのか！」
　ユルスナールの怒りは頂点に達していた。
「そんなことがあってたまるか！　どうせやるならあんたたち神官中から選べばいいだろう。敬虔なる信者なのだろう？　あんたらの中では殉教は名誉ある死ではないのか？　神の為に自らを捧げるんだ。嬉々として手を挙げる者がいるんじゃないか？　何故、無関係の人間を巻き込んだ？」

だが、その時、祭壇に置かれていた【聖なる石】が突如として眩いばかりの光を発し始めた。五色とは違う虹色の光彩が煌めきながら立ち上り、少しずつ何かの形を取ろうとしていた。

それを横目にした神官は、狂喜とも驚喜とも思える恍惚の表情を浮かべた。

「素晴らしい！　おおお。やはり我らが祈りは通じたのだ。道が繋がった。扉が開かれたのだ！　リュークスは我らが想いに応えてくれた！」

狭い祈りの間の中に突如として出現した膨大な光に、黙々と捕縛作業に当たっていた仲間たちは意表を突かれ、眩しさに顔を腕で覆った。

ユルスナールはその光景に愕然とした。

「そ……ん…な！」

神の降臨は、即ち、己が愛する人の永遠の死を意味していたからだ。

儀式が成功してしまったというのか。間に合わなかったのか。リョウはもう戻っては来られないのか。

放たれた膨大な光が集約し、少しずつそこに人のような造形を描き始めた。ぐにゃりと何かが生まれ出るように歪み、徐々に髪の長い【女】の姿を象り始めていた。

女神の降臨だった。何よりも狭い室内に充満し始めていた体が竦むような威圧感と圧迫感に息をするのが苦しくなるような気がした。金縛りにあったように体の自由が利かなかった。足が鉛のように重くなり床に張り付いたようだ。

『我が愛しの背の君はいづこ？　懐かしき気を辿ってきたと思いしが。妾（わらわ）を呼ばったのではないのか？』

直接脳内に響いた声は、高い鈴のように澄んでいた。揺らぐ小さな粒子の中に現れた女性はぐるりと首を巡らせて、室内にあったとある存在に目を留めた。

『やや。珍しいのが居る。長ではないか』

そこには白銀の艶やかな毛並みを持ったセレブロがいた。
『リュークスよ。こたびの召喚は人の理より外れたこと。即刻戻られよ。そなたの尋ね人はこなたにはあられぬ』
女神の降臨に頭を低く垂れながらもセレブロは静かに言葉を紡いでいた。
『久方振りに降りたというに即いねと言いやるか。相変わらず無粋な輩よのう』
『もう一度言う。即刻戻られよ』
慇懃な態度を崩さないながらも剣呑な空気を醸し出した白銀の長に女神リュークスは白けた顔をした。
『道を繋いだのはその方たちであろう？』
『我が同胞（はらから）をその器と導（しるべ）にしおってな』
怒りの籠ったセレブロの声音にリュークスは目を細めて白銀の王を見遣った。そして、そのまま首を周囲に散らばった神官たちに向けようとした。

その時だった。
祭壇に置かれた石から今度は別の青い光が強く出て、周囲に揺らぐ闇を飲み込むように輝きを放ち始めた。
『リュークス』
室内にもう一つ別の声が響き渡った。
『戻りなさい』
今度の声は、しっかりとした低い男のものだった。
強烈な思念のようなその音でありながらも音でない声音に、室内にいたユルスナールたち常人は咄嗟に耳を覆い、こだまする鈍い金属音のようなものから頭を庇うように体を低くした。中には膝を着き蹲（うずくま）るようにしている兵士もいた。それほどまでに【人】にとっては耐えがたい強烈な神気の片鱗が現れようとしていたのだ。
男の声に光の中のリュークスは嬉々として顔を上げた。
『おお、我が君！　探しましたぞ。いづくにあられまする？　おお、

そこな。参りまする故、今しばらく』

そこで突如として淡い黄色の光が揺らぎ、強い風が吹き抜けたように女神の姿を形作っていた虚像が消えた。

「リュークス！　お待ちください！」

待ち望んだ女神の降臨に感極まり、魂が抜けたように呆けていた神官は、急に遠ざかってゆく高次元の存在に悲痛な叫び声を上げた。

「どうか今しばらく御猶予を！」

だが、神官の懇願も虚しく、再び、祈りの間は小さな蝋燭の明かりが揺れる仄暗い空間に舞い戻ったのだった。

網のように張り巡らされた重苦しい静けさと沈黙の中、中にいた男たちは金縛りが解けたように次々と息を吹き返して行った。

セレブロは一人静かに体を反転させると祈りの間を後にしようとした。

「セレブロ殿？」

不安と焦燥に駆られるように白銀の長を見たユルスナールに、セレブロはその虹色に煌めく光彩に象られた瞳を陰らせながら目を伏せると、無言のまま静かに首を横に振った。

ユルスナールの言いたいことは理解出来たようだ。元より、セレブロとユルスナールが思うことはだた一つ。リョウの身を案じることだった。

『我にも分からぬ。だが、覚悟をせねばならぬやもしれぬ』

悲痛さえある長の弱気な発言にユルスナールは固く拳を握り締めた。

「いいえ。絶対にリョウは戻ってくる。いや、呼び戻してみせる」

ここで全てを諦めたくはなかった。熱い決意を秘めながら、ユルスナールは再び愛する人の元へと戻る為に来た道を駆け出していた。

残された男たちは、無言のまま、縛り上げ拘束した神官たち引き

立てて行った。昏倒している者は肩に担ぎあげ、意識のあるものは歩かせる。このまま【アルセナール】にある牢の一室に留め置く予定であった。

ブコバルとシーリスは顔を見交わせると頷き合い、ユルスナールの後を追った。そして、ゲオルグとドーリンが中心となって神官たちの移送を行った。

「何故だ？　何故！　神は帰ってしまわれたのだ。我らが祈りに応えて下さったのではなかったのか。何故だ？」

邪魔が入ったにも関わらず術が成功していたという歓喜の後、宣託を得られぬまま消えてしまった女神を前に絶望の淵に落とされた神官は気が狂ったように戦慄(わなな)いていた。

「何故邪魔をした！　忌々しい悪魔どもめが！　お前たちの横槍さえなければ、我々は宣託を得られるはずだったのだ！」

第五のドーリンにひっ立てられながらもぶつぶつとうわ言のように繰り返していた神官が、突然金切り声を上げてドーリンに掴みかかろうとした。

「キシニョフ殿。お静かに」

ドーリンは拘束した後ろ手を力強く掴むことで相手の動きを封じた。元より鍛えられた軍人と肉体労働とは無縁の神官たちの力の差は歴然としている。

神官の心はここにあらずといった具合でその目も焦点が合っていなかった。その間も呪詛のような罵り言葉が駄々漏れになっていた。

埒が明かないと悟ったドーリンがそろそろ強制的に相手を黙らせようかと思った矢先のことだった。

神殿の白壁が続く建物から出た所で、天を覆う夜の闇の中に突如として閃光と共に雷鳴が轟き、次の瞬間、バリバリと空を引き裂くような轟音とともに天より地へ向けて真っ直ぐに一筋の閃光が降り注ぎ、神官の体を貫いて行った。

ドーリンは咄嗟に体を伏せると地面に転がった。何が起きたのか

はよく分からなかったが体が反射的に動いていた。
そして、すぐさま顔を上げた時、ドーリンの視界に入ったものは、真っ黒に焦げた人の形を辛うじて保っている黒い燃え滓（かす）のような塊だった。もうもうと煙のようなものが上がっている。
驚愕に目を見開くも、直ぐに鼻先を掠めた特有の生臭さと焦げ臭さにいつも以上に深い皺が眉間に寄った。
「ドーリン！」
「隊長！　大丈夫ですか？」
「隊長！」
ゲオルグと部下のイリヤとウテナからすかさず声が掛かった。
先程まで神官のキシニョフがいた場所には黒い塊があるだけで、それも突然吹き寄せた強い風に瞬く間に塵のようにして掻き消えて行こうとしていた。
一体、何が起こっているのだ。ドーリンを始めとする兵士たちは度重なる人知を超えた予想外の出来事に驚き、そして硬直した。

「天からの鉄槌じゃ」
その時、じゃりと地面の砂を踏む音がして、声のした方へ顔を向ければ、白い簡素な上下に身を包んだ小柄の老齢の神官が立っていた。
神官長のイシュタールであった。
「どれ、それがしも共に参りましょう」
――――全てはリュークスの御心のままに。
そう言って集まった兵士たちを見渡した。
数多もの神官たちの頂点に君臨する老人は、セレブロの咆哮に最悪の事態が起きたことを知ったのだ。イシュタールは、キシニョフたちの無謀とも言える暴挙を止めることが出来なかった。それは数多もの弟子を束ねる神殿の長としては失格であると見做されるのかもしれない。だが、歴史ある神殿の長い伝統の中では、それは些か趣が違った。属する場が違えば、そこでの慣習も常識とされる考え

も随分と異なってくるものである。神殿という場所は、その言葉使いからして外部の人間には分かりにくい論理がまかり通っていることで有名だった。

彼らの考えとしてはこうだ。滔々と流れ続ける川を堰止めることは出来ない。たとえ堰を作ったとしてもやがてそれは溢れ出し、また別の新しい流れを生み出すことだろう。そしてその川の流れは大海に注ぐまで続くのだ。

要するに弟子の間違いも必然的な大いなる流れの中で起こるべくして起こったもので、過ちには必ず神から相応の罰が下るという思想だ。それは神殿の中にある種独特な【自浄作用】というべき論理であった。

そして今、目の前でその【自浄作用】が行われたのだ。

神官長イシュタールの全てを悟ったかのような厳かな佇まいにドーリンは丁重に頷いた。

神殿は元より治外法権的な場でもある。神官たちの処罰は神殿の中でのみ行われ、宮殿の権力は及び辛い。それを敢えて宮殿側に委ねようということなのだ。これまでの慣習から考えれば、それは神殿側の決断としてはかなり思い切ったことだった。

「では参りましょう」

ドーリンの静かなる号令に神官長は同意し、そして兵士たちは拘束した白い衣の男たちを引き連れて神殿から【アルセナール】へと向かった。男たちは黙々と歩き続けた。

罪と罰（後書き）

思いの外難産でした。今回で危機的状況を脱しようとしましたが、あえなく挫折。次回に持ち越します。

補足：最初の四行は神官たちの祈りの文言です。意味不明な古代文字が使えればよかったのですが、ロシア語で代用しました。

意味は大体次の通り。

「神よ、慈悲深い神よ。聖なる流れはやがて大いなる川となり、天から地へと万物は調和の中で静かに巡り続けけるだろう。やがて扉が開かれるその時を待ちながら……」

出会いと別れ

不意に浮上した意識にゆっくりと瞼を開くと真っ白な空間にいた。ゆっくりと体を起して周囲を見渡してみる。どこもかしこも見渡す限り白一色だった。果てしない白がそこにはあった。手に触れる感触も足が触れる感触も臀部に当たる感触も何もない。冷たさも温かさも感じられない不思議な感覚。まるで夢を見ている時のようだ。

ああ。これは夢なのかもしれない。夢を見ている時にこれは夢だと認識することはままあることであるから。

そのようなことをぼんやりと思いながらリョウは自分の体を見下ろした。いつものようにシャツとズボンという簡素な姿だ。だが、くすんでいるはずのシャツも着古してくたくたになっているはずのズボンも、そして傷だらけの長靴までもが何故か輝くほどに真っ白で、このような新しい服や靴を持っていただろうかと不思議に首を傾げた。

やはり夢を見ているのかもしれない。そのようなことを考えて、不意に思い出した。自分がお伽噺に描かれているような煌びやかで華やかな宮殿にいて、綺麗なドレスに身を包み、夜会に参加していたということを。そこで毒草の入ったグラスを飲み干したということを。

私は死んだのだろうか？　これは死後の世界なのか？　あの世だというのか？

リョウは緩慢な動作でぐるりと周囲を見渡してみた。すると真っ白な世界の中で、遥か向こうに何かがあるような気がした。感覚的なものだったが、リョウは引き寄せられるように歩き出していた。

そして、どれくらい歩いただろうか。気が付いた時には、リョウは色に溢れた開けた空間にいることが分かった。

そこは川べりだった。大きな川が滔々と流れる少し高い堤の上に

リョウはいた。

二人の男女が川のほとりを歩いていた。仲睦まじい様子で。

男はすらりとした背の高い青年で艶やかな長い黒髪をそよぐ風に靡かせていた。女の方は、柔らかな明るい金色の長い髪をゆったりと脇で束ねていた。

穏やかに微笑む男の瞳は、深い闇を映したかのような漆黒で優しく細められていた。その柔らかな眼差しの先にあるのは、明るい若草色をした円らな女の瞳だった。その瞳は喜びに溢れ溌剌とし、生き生きと輝いていた。

季節は春……なのだろうか。少し高台になった川べりには一面に草が青々と生い茂り、緩く傾斜のついた斜面には色とりどりの花が咲き乱れていた。爽やかで優しい風が青い草の海の表面を舐めるように吹いていた。

青年は路傍に咲いていた一輪の花を摘むとそれを隣を歩く女の耳元にかけた。小さな可憐な黄色い花だ。よく見るとその花弁には赤い無数の斑点が模様のように入っていた。

――――――よく似合っている。

そんなことを囁いたのだろうか。微かに弧を描いた青年の口元に娘はどこかはにかむようにそれでも嬉しそうに肩を竦めて笑った。

そうやって二人の若い男女は仲睦まじく歩いていた。それは喜びに満ち溢れた幸せの情景だった。

だが、その幸せな景色は突如として切り替わった。まるで瞬きをした瞬間に場面そのものが変わったかのようだ。

そして、入れ替わるようにして現れたのは、嘆きと哀しみに満ちた灰色の景色だった。

窓辺に佇む娘が一人、じっと窓の外を見ていた。娘の明るい若草

色の瞳は哀しみに曇っていた。柔らかな明るい金色の髪もかつてのような艶が陰り、娘の心持ちを映すようにややくすんでいた。

娘はじっと窓の外を眺めていた。その心は遥か草原の向こう、あの川べりに飛んでいた。そこで自分を待っているであろう男の姿を目裏に思い描く。

恋い焦がれる愛しい相手に会うことは叶わなかった。何故なら娘は外出を禁じられてしまったから。一族の者に外であの男と会っていることが知られてしまったからだ。しかもその相手は、娘が属する社会とは違う川向うにある別の一族の男だった。若い娘が一族とは違う男と会い、親密な関係を築くことは、その掟の中で禁じられていた。掟を破った娘に一族の男たちは怒り、以後、一切の外出を禁じてしまったのだ。

娘の傍には一族の女たちが居て勝手な真似をしないように四六時中目を光らせていた。そして、もうこのような間違いが起こらないようにと娘の嫁ぎ先を急ぎ探し始めていた。

もうあの約束をしていた川べりに行くことは出来なくなってしまった。もう何日、こうしてこの窓辺に佇み、あの川べりの方角を見つめているだろうか。窓の外、草原の遥か向こうに愛しい男の影を探して。

来る日も来る日も娘は窓辺に座り、そこからじっと男が待っているであろう川辺のある方角を見つめていた。

きっと現れない自分を心配して心を痛めているかもしれない。いや、それとも、もう諦めて束の間の戯れとして忘れてしまったであろうか。

そうこうするうちに娘は同じ一族の男に輿入れすることが決まってしまった。掟を破った女として後ろ指を指されながらも望まぬ婚礼の支度は日一日と整っていった。

それと同じ頃。男は一人、川辺に佇み、緩やかに吹き込む風に長い黒髪を遊ばせながら、きらきらと日の光に反射し揺れる川面を見

ていた。
　優しい面立ちをした青年の澄んだ黒い瞳は、この日、陰っていた。こうして一人川面を見つめていると必ず軽やかな声が青年の背に掛かるのだ。
　だが、こうして待っていてもその鈴のように澄んだ響きを持った優しい声をもう何日も聞いていなかった。
　ひょっとしたら、もうこれまでなのかもしれない。聡明さを宿した漆黒の双眸を持つ青年は、愛しい娘が現れない原因に薄々感づいていた。二人だけの秘密としてひっそりと持たれていた邂逅がきっと明るみになったしまったのだ。
　青年にとってもあの娘に会うことは一族の掟からは外れた行為だった。青年には既に決められた相手がいたのだから。そして、この川は、娘の一族と青年の一族とを隔てる境界でもあった。
　滔々と流れる大きな川。あちらと向こうを繋ぐ橋はない。あるのは少し下流にある小さな渡し場に係留されている小さな船が一艘。葦の間に隠れるようにしてもやっているそれを頼りに娘がこちら側にやってきたのだ。
　あちらとこちらを隔てる大きな川。緩やかなその流れが下ってゆく先には【海】があるのだという。それは果てしない程の大きな水がたゆたう場所で、舐めると塩辛いのだと数年に一度、集落にやってくるという行商人から聞いた話を一族の男が口にしていた。
　その果ての【海】という所にまで出てしまえば、こちらとあちらを隔てている境界はなくなる。女が器用に操る小舟を目にする度に、その小さな船に二人して乗って、この川が流れつく先に行けたらと男は一人夢想した。
　リョウは、気が付いたらその青年の隣に寄り添うようにして立ち、同じ方向を見ていた。青年が恋い焦がれる娘の暮らす集落がある方角だ。諦観と哀しみと切なさとやるせなさと温かく優しい思い出が流れ出るようにしてリョウの体内にも注がれていた。悲喜交々（こもごも）の感

情。それでも束の間の邂逅で育んだ娘への愛しさと慈しみが溢れ出てくる優しい気持ちの奔流だった。

どれくらいそうして立ち尽くしていただろうか。

ふとした気配に青年がゆっくりと顔を上げた。そこで一瞬、嬉しさをその瞳に滲ませたが、直ぐに顔色を曇らせて哀しい微笑みを浮かべた。

大きな川を隔てた向こう岸に想いを寄せる娘が立っていた。少し痩せたのだろうか。はりのある艶やかな頬が少しくすんでいるような気がした。記憶の中にあるはずのにこやかに輝く若草色の瞳が苦しさに歪み、淡い金色の髪を振り乱しながら、何かを懸命に青年に向かって叫んでいた。

だが、両者を隔てる川の上を吹く風が娘の声を散らし、その声は男に届かなかった。

やがて、その娘の後方から同じ一族の男だろうか、一人の男が現れた。精悍な顔立ちをした若い男だった。その若者は弓矢を手にして立っていた。矢をつがえた弓をその手に引き絞り、川向うに立つ男に狙いを定めていた。憎悪に満ちた燃えるような赤い眼差しだと青年は思った。

その間も娘は必死な顔をして弓矢を手にした同じ一族の男に叫び、掴みかかろうとしていた。だが、力では敵わない。すると今度は川を挟んで立つ愛しい男に対して大きく手を振った。早くここから立ち去るようにと告げるように。

だが、青年は動かなかった。恋い焦がれた相手にやっと会えたことへの嬉しさにその姿を目に焼き付けようとした。早く立ち去るようにと切れ切れに掛かる娘の声すら、男には長い間待ち通した甲斐の褒美のように思えた。それが聞こえなくなってしまうのは惜しかった。

そして対岸に立つ若者は、ぎりぎりと極限まで引き絞った弓をしっかりと溜めた後、その矢を放った。

手を離した瞬間、ヒュンと風を切る音がした。矢は真っ直ぐに飛

び、対岸に立つ青年の身を貫いていた。真っ直ぐにその左胸を。
その口元に笑みを象ったまま、矢を受けた男の目は見開かれ、そのままゆっくりと後方に体が傾いでいった。男の長い癖の無い黒髪が撓(たわ)んで緩やかな軌道を描いた。
全ての音が止んだ。そして、遅れて沈黙を破るように娘の甲高い絶叫が周囲に響き渡った。娘は足をもつれさせながらも斜面を駆け下り、川の縁に降り立った。そして、そのまま両者を隔てている大きな川をものともせずに中に入ろうとした所で弓を手にした若者に捕まり連れ戻されてしまった。
娘の泣き叫ぶ声がこだました。悲痛な慟哭の叫びだった。

リョウは、左胸に矢が突き刺さったまま倒れた男の傍らに膝を着くとその傷口に手を当てていた。ドクドクと滲むようにして流れ出てくる鮮血を止めようと止血の呪いを唱えたが、上手く行かない。薄らと目を開けた青年は苦悶に眉を寄せながらもその口元に微かな笑みを刷いて、首を緩く横に振った。まるで『もういいのだ』とでもいうかのように。
ずきりと胸の奥が痛んだ。そう思ったら、リョウの左胸にも同じようにじわじわと真っ赤な鮮血が滲み出し、白いシャツに大きな紅い花のような歪な染みを作っていった。
胸が痛くて仕方がなかった。だが、リョウが感じていたのは物理的な痛みではなかった。切なくて苦しくてどうしようもない程に哀しい心の痛みだった。
リョウは思わず声を上げようとした。突如として湧いた胸内に渦巻く混沌とした例えようのない気持ちの濁流を外に吐き出してしまいたかった。
だが、口を開いても声が出なかった。リョウは混乱し、恐慌状態に陥りそうになっていた。
リョウは鮮血が流れ続ける男の胸元に手を当てて、必死に止血をしようとしていた。

――――こんな所で死なないで、お願いだから。兄……さん！

ありったけの願いを込めて、そう心の中で絶叫した刹那、パチリと瞼が開き、意識が唐突に覚醒した。

そして、瞳を開いた先に見えたのは、先程と同じ真っ白で何もない空間だった。

リョウは瞬きを繰り返した。心臓がドクドクと脈打ち、耳の奥がざわざわと鳴っていた。額際に冷や汗が伝い、髪が張り付いていた。それを緩慢な動作で拭う。手の甲にひんやりとして湿った感覚が伝わった。

それからリョウは深く深呼吸をした。そして、ゆっくりと体を起こした。再び、同じように周囲を見渡してみる。

夢……であったのだろうか。それにしては酷く生々しい感じだった。不可思議な感覚が体中にまとわりついていた。手の下にあった男の硬い胸の感触が残っていた。そして、それを確かめようとふと見下ろして開いた掌には真っ赤な染みが残っていた。

リョウは足の竦むような恐怖に戦慄した。そして、悪夢を振り払うかのようにゆっくりと頭を振ると再び意識がぐにゃりと歪み、場面がまた切り替わっていた。

それから再び目を開けた時、今度は、視界一杯に青い空が見えた。ゆっくりと煙のように細く流れる白い雲。それを囲むように周囲には青々とした草と色彩豊かな花々が咲き、額縁のようになって見えた。

リョウは再びゆっくりと目を閉じ、そして開いた。静かに深呼吸をする。

鳥の囀(さえず)りが聞こえた。さわさわと吹き抜ける風の音が聞こえた。穏やかな日差しが降り注いでいた。肌をじんわりと焼くように暖かかった。立ち上る草の青い匂いと咲き誇る花の蜜の少しつんとした甘い匂い。むせ返るような密度の濃い草花の匂いから逃れるように

ゆっくりと体を起こした。
辺り一面、草原が広がっていた。色とりどりの草花が咲き、吹き込む風にゆうらゆうらと揺れていた。
見渡す限りの平原の中、遥か向こうに大きな木が一本立っているのが見えた。遠目にもはっきりと長い梢が天高く、そして空を掴むように青々と茂った枝葉を伸ばしていた。
リョウは立ち上がると今度はその大きな木を目指して歩いていた。何故かは分からない。だた、何かに引き寄せられるような気がした。とても懐かしい感じがしていた。

そして草を踏み、掻き分けながら辿りついた先で、懐かしい顔がリョウを出迎えたのだった。
「おや、りょうじゃないか。どうしたんだ。こんな所で」
大きな木の下ではテーブルと椅子が置かれ、そこで二人の男がお茶を楽しんでいた。
優雅な手付きで茶器を傾けていた男がカサリと草を踏む音に顔を上げると器用に片方の眉を跳ね上げた。
心底、驚いているのかもしれないが、その感情の機微が余り出ない声と表情は、余りにも懐かしい男の姿を良く表わしていた。
「……ガルーシャ……」
忘れる訳はない。この一年、ずっと会いたくて仕方がなかったガルーシャ・マライその人がそこにいた。
「ここは……死後の世界……なの？　あの世？　私は死んだ……の？」
リョウは呆けたように立ち尽くしていた。
「私はガルーシャの所に来てしまったの？」
今年の春先にガルーシャは旅立ったのだ。永久（とわ）に。安らかな眠りに就いた。そのガルーシャがいる場所というのは、あの世ではないのか。奇しくもこの草原は色とりどりの草花が咲き乱れていた。お誂え向きな場所に思えた。

会いたかったガルーシャを前に嬉しいはずなのに心の隅が軋むように音を立てて揺らいでいた。

「りょう。なんて顔をしているんだ」

椅子から立ち上がったガルーシャは、記憶の中にあるそれと寸分も違わぬ同じ姿で、薄らと口角を上げて笑い、リョウの頬に手を伸ばした。そして、その顔を覗き込むように小さく首を傾げた。

「私に会えて嬉しくはないのか？　随分と哀しいことを言ってくれるじゃないか」

「……本当にガルーシャなの？」

「ああ。私だ。忘れたなどとは言ってくれるなよ？」

ゆっくりと回された長い腕がしっかりとリョウの体に回っていた。抱き締められる感触も変わっていない。突如として巻き戻ったかのような【時】にリョウは暫し、懐かしい男の胸に顔を埋めた。

暫くして落ち着きを取り戻したのか顔を上げたリョウにガルーシャは木の下にあるテーブルの方に来るように促した。

「それじゃぁ、折角だから少し話をしよう。ちょうどお茶をしていた所なんだ」

テーブルにはお茶の用意が並んでいて、丸いテーブルの上に茶器と茶菓子の乗った皿が並んでいた。

その場所にはもう一人、別の男がいた。その男はガルーシャの隣にいるリョウの方をじっと見ていた。

視線が交差する。その男の姿を目にした時、リョウの体には雷に打たれたような衝撃が走っていた。

黒い癖の無い長い髪を垂らした優しい面立ちをした男だった。年齢はよく分からない。若いような年老いているような掴みどころのない不可思議な印象だ。男の瞳はリョウと同じ漆黒だった。

「あ…なた……は……」

この場に辿りつく前に見た光景の中にいた、川べりに立ち、射かけられた矢に崩れ落ちた男だった。

自分と同じ色彩を持つ男をまじまじと見たリョウにガルーシャは『おや？』という顔をした。
「リョウはエルドーシスを知っていたか？」
「……エルドーシス？」
それはどこかで耳にしたことがあるような名前だった。どこで聞いたのだろうか。目を瞬かせながら、促された席に着いた所で、ガルーシャの対面に座っていたその男が苦笑のようなものを滲ませた。
「ああ。君はここに来る前に【あちら】に迷い込んでしまったのだね」
「……【あちら】？」
穏やかな声が紡いだ暗号めいた言葉を繰り返せば、
「ああ。古い古い昔話の断片。ここに漂っている私の記憶に繋がった時間軸の【時】だ」
益々訳の分からない説明にリョウは一人、目を白黒させた。
器用にリョウの為にお茶を淹れながら、ガルーシャが間に入るように言葉を継いだ。
「りょう。この国のお伽噺や神話の話はどのくらいまで聞いたんだ？」
「……あ……」
その言葉にリョウは不意に思い出したことがあった。確か、リュークスの恋人として目されていた男神がいたのだ。その名は、エルドーシス。かつてこの地がエルドシアと呼ばれていた時にその大地を治めていた神だと神話にはあった。【エルドシア】は、別名【テラ・ノーリ】とも呼ばれていたのだ。【テラ・ノーリ】とは【零の大地】、【循環する大地】、から転じて、【魂巡る大地】という意味を持っていた。
「【テラ・ノーリ】……の神さま？」
その言葉にエルドーシスは静かにどこか自嘲めいた笑みを零していた。

「今では【あちら】ではそのように呼ばれてはいるが、私もかつては普通の【人】であったのだよ。ただ、【ここ】ではない別の世界の話だ。私は【そこ】で【人】としての一生を終えた。思い出すことも出来ないような遥か昔の出来事だよ」

――――君はその時の私を見たのではないかい？

その言葉にリョウはここに来る前に目にした光景を思い出した。

そして、それを自らエルドーシスと名乗った男とガルーシャに語って聞かせた。

エルドーシスはどこかほろ苦いものを思い出すような懐かしい顔をして目を細めた。

「そうか。君は私の最期の時に居たのだね」

「恐らく」

「私も単なる恋に焦がれた男であったという訳だ」

それから、エルドーシスは、そっとリョウの方を見るとその手を伸ばし、頬に触れた。顔立ちは大分異なるが、同じような癖の無い漆黒の髪に互いの瞳に映るその色彩は同化するように同じ闇を湛えていた。

「君の元々の魂は私に少し似ているのかもしれない。魂の在り方が同じような気がする」

「初めてお会いするのに何だか懐かしい感じがするのはその所為なのでしょうか」

リョウも不思議とそのような気分になっていた。若きエルドーシスが矢に倒れた時、リョウは無意識にエルドーシスを【兄】と呼んでいた。実際に自分に血を分けた兄はいなかった。それなのにとても近しい近親者のような気がしてならなかったのだ。

それを少し照れながら明かせば、エルドーシスは穏やかに微笑んだ。

「そうか。だからかもしれない。きっと。君は私に似た所があったから、リュークスの強い呼び声に引き摺られてしまったのかもしれない」

「リュークスというのはあの若草色の瞳の女の人ですか？」
「ああ」
【人】としての禁じられた恋の結末は、余りにも哀しかった。あの後、嫁ぎ先を強制的に決められたもののエルドーシスの種を宿していることが知られてしまったリュークスは、産まれてくる我が子の運命を思って集落を抜け出そうとした所を一族の者に見つかり、掟を破った愚かな不義の女として私刑に処されたのだそうだ。
時間差で【人】としての短すぎる生涯を閉じざるを得なかった二人は、その後、途方もない程の長い時を経て、違う場所で神という存在になっていた。人と神とは尺度の異なる【時】と【場】の中で、その役割を変えながら生まれ、一生を終える流転の中では同じ存在なのだとエルドーシスは語った。
「すまなかったね。恐らく、君を巻き込んでしまったのは私の所為なのだろう」
リョウが界を跨いだ存在であるということをガルーシャから聞かされたエルドーシスは、真摯な顔をしてリョウを見た。そして、リョウがこちら側に来てしまった原因の一端は自分にあるのかもしれないと打ち明けた。
二年前の下界で起きた【芽吹きの時】に偶然にも人の世界では【黒】を寄り代に使った儀式が行われた。そこで【人】の世界への道を見つけ現れたリュークスが、恋い焦がれた相手であるエルドーシスと同じ色彩を持つものに引き寄せられて、その面影を探して、地中から吸い上げられた膨大な力をその探索に利用した。そして、その時にひょんなことからこの界の狭間に漂っていたリョウの魂をこちら側に引きずりこんでしまったのではないかとエルドーシスは言った。
それはあくまでも仮説に過ぎなかったが、リョウにとっては納得の行きそうな説明でもあった。それでも今度はどうしてそのような狭間に己の魂が彷徨っていたのかという疑問が残るが、それについてはガルーシャが鍵となるような事を言った。

「【ここ】は、様々な界が重なった歪みの中にある淀みのような場所と言えばいいか」
そう言ってガルーシャは静かに茶器を傾けた。
「どの世界にも曖昧な綻(ほころ)びというものがある。普段は見ることが出来ないし、感知することも出来ないが、その境界は常に存在し、時に収縮し、拡大をする。そして、時に違う界同士が衝突や接触を繰り返し、何らかの反応を生む場合がある。そのような異なる界では当然のことながら流れている【時】は違う。複雑に折り重なった無数の層がいつもどこかで口を開いているという感じだろうな。だから、りょうもその合間を縫ってこちらに来たのかもしれないな」
「ガルーシャもいずれは【ここ】からまた別の場所で生まれ変わるの？」
ふと気になった疑問を口に乗せたリョウにガルーシャは小さく笑った。
「はは。それは御免だな。私はこの場所が気に入ったからね。まぁ飽きるまではここにいるだろう」
そう言って肘を突いた手の上に顎を乗せると片目を瞑った。
その余りにも【らしい】返答にリョウは小さく笑った。

それからお茶を一杯、御馳走になった所でガルーシャが真面目な顔をしてリョウの方を見た。
「さぁ、りょう。ここはまだお前が来るべき場所ではない。お前が戻るべき場所は分かるね？　お帰りなさい。お前を待っている者がいる。ほら、ご覧、聞こえるだろう？　いい男がみっともなく情けない顔をして泣き喚いている」
――――あの男のあんな顔を拝むことになるとは思わなかったぞ。いやいや人生何が起こるか分からんものだな。
そう言って、どこかからかうような表情をして飄々とガルーシャが指示したのは、大きな木の直ぐ傍にあった小さな泉で、促されるままに中を覗きこめば、滾々(こんこん)と清らかな水が湧き出でる透明に澄ん

だ水面が揺らぐその表面には、水鏡のようにリョウにとっては馴染み深い男たちの姿が映っていた。

冷たいきらいのある顔立ちに少しくすんだ銀色の髪がそこには映っていた。いつものような澄ました冷静さの欠片も無い悲壮に満ちた瑠璃色の瞳とその男らしい精悍な横顔が見えて、リョウは胸がじわりと熱く、そして苦しくなった。ユルスナールの傍には、ブコバルやシーリスもいた。それからセレブロにティーダの灰色の尻尾が見えた。静かに横たわる夜会用のドレスを着た抜けがらのような自分の傍らで皆、じっと心配そうな顔をしていた。

そこでリョウはここに来る直前の出来事をはっきりと思い出していた。

「りょう。戻りたいのだろう？　君を待つ者たちの所へ」

隣に立ったエルドーシスはそう言ってそっとリョウの肩を抱いた。

「ひょっとしたら元の世界へ帰る道も残されているかもしれない。ここは【揺れ動く時】と【静かなる時】の狭間で数多もの世界が集まり重なる場所だ。我々と共にここにいれば、君がかつて暮らしていた世界への手掛かりが掴めるかもしれない」

かつての恋人、リュークスがリョウをこの世界に引きずり込んでしまったのではないかと考えて、その罪滅ぼしのような積りであったのかもしれないが、ひょっとしたら帰る道も残されているかもしれない、その可能性は零ではないと言ったエルドーシスの言葉にリョウは顔を上げると否定の意味合いを込めて小さく首を横に振った。そこには薄らと優しい笑みが浮かんでいた。

「いいえ。もう前の世界に戻りたいとは思いません。未練がないと言ったら嘘になるのかもしれないですが、私の中ではある程度、折り合いが付いているので」

それよりも大事なものが自分にはあった。大切な人がいた。この命を懸けてもいいと思えるほどの大切な人が。

今、一番の心残りは、その人を残して来てしまったということだった。それ以外は、何もいらない。それほどまでに想える人に出会

ってしまったのだ。もう後戻りは出来なかった。
「出来ることならば、あの場所に戻りたいと思います。【こちら】に来たのは本当に偶然で、当時は理解を超えた事態に正直絶望したこともありました。でも、今ではすっかり私は【こちら】の人間で、あの場所で生きて行く覚悟ができているんです」
何よりもあの男の傍に帰りたかった。これからどれほどの時間が残されているのかは分からない。元々異質な自分は、あの場所からは永遠に弾かれたままなのかもしれない。それでもやっとあの国で術師になることが出来たのだ。そこで暮らす最低限の身分証明は得られた。だから、この後は、自分の【時】が終わるまであの男の傍で共に生きて行きたかった。
迷いのない口調でそう告げたリョウにエルドーシスは柔らかく微笑むとゆっくりと一つ頷いた。
「そうか。では、これも何かの縁だ。私から君にこれをあげよう」
そう言って差し出された大きな掌をリョウは不思議そうな顔をしながらも両手で受けた。
「では、りょう。目を瞑っていなさい」
「はい」
言われるままにじっと瞼を閉じると受けた両の掌から温かいものが流れてきた。じわじわと指先から腕、体、そして血液が全身を巡るように足先まで伝わって行った。そして、その全ては巡り巡って左胸の心臓付近に溜まっていった。セレブロの紋様の刻まれている付近が薄らと熱を帯びた気がした。
「これで君は大丈夫だ」
もう目を開けていいと言われて瞳を開いたリョウは、体を巡る熱源の意味を問うようにエルドーシスを見上げた。
「あの……何を？」
「君に私の魂の欠片をあげたのだよ」
「……魂の欠片…？」
虚を突かれたリョウの鼻先で漆黒の双眸が優しさを滲ませていた。

「ああ。ほんのちっぽけなものだが、これで君の魂はあの場所に根付くだろう」
それは思ってもみなかった僥倖だった。
「本当ですか！」
吃驚して、それでも嬉しさに顔を綻ばせたリョウにエルドーシスは少し可笑しそうに笑った。
「これでも私はあの場所では【神】と目されているからね。それに君と私の魂は似ているからね。それは種のようなものだが、やがて君の中に根付き、そして君本来の輝きを取り戻すだろう」
「ありがとうございます」
「私からの餞別だ。幸せにおなりなさい」
――――私が得られなかった分まで。
「はい」
そのような声が聞こえた気がして、そっと頬を辿る優しい指先の感触に、リョウの瞳には感謝に涙が滲みそうになったが、慌ててそれを押し止めた。そして、心からの笑みを浮かべたのだった。
その様子をガルーシャはどこか満足したような面持ちで眺めていた。

そして、再び別れの時が近づいてきているということをリョウは感じていた。だが、今回の別れは、先のように唐突でも絶望的でもない。温かな感謝の気持ちに満ちたものだった。
「ではな、りょう。達者でな」
「はい」
大きく広げられた両手にリョウは飛び込むようにして固くガルーシャと抱擁を交わした。
そこで不意にリョウは何かを思い出したように顔を上げた。
「あ、そうだ。私、術師の認可をもらえたんですよ」
「はは。そうか。おめでとう」
「あの、それでガルーシャの書斎の蔵書のことなんですけれど」

「ああ。好きにして構わない。必要なものとそうでないものを分けて、要らないものは養成所の奴等にでも引き取ってもらえばいいだろう」
「分かりました」
一先ず気がかりであったことの再確認が取れて、リョウはほっと安堵の笑みを浮かべた。
「りょう、お前は愛しい私の娘だ。それを忘れてはいけないよ。私はここからお前を見ているから」
「はい」
言葉にしたいことは多々あるはずなのに喉元をせり上がって来そうになる何かに、リョウが口に出来たのは簡単な肯定の一言だけだった。
リョウは一頻りガルーシャと抱擁を交わし、その後、エルドーシスとも同じように抱擁を交わした。
「それにもう君は私の娘でもある。小さな魂で繋がったのだから」
「ありがとうございます」
思いも寄らない温かい言葉にリョウは感謝の気持ちを込めて微笑んでいた。
そして、リョウはエルドーシスから翳された手の前で、再び眠るように目を閉じていた。身体がすっと軽くなるような気がして段々と意識が遠くなっていった。
こうして、ガルーシャとエルドーシスの前からリョウの姿は消えていた。

出会いと別れ（後書き）

長らくお待たせいたしました。ようやく浮上ができました。懸案事項であったリョウの「魂」の問題が解決しました。ちょっと禁じ手の感じはありますが、リョウがこちらに転がりこんでしまった経緯の謎がほんの少しだけ明らかに。謎は謎のままの残しておこうかと思ったのですが、ロシアでも大真面目に議論されていた「パラレルワールド」理論を思い出しました。それではまた次回に。ありがとうございました。

目覚めの朝

ゆっくりと意識が再浮上してゆく気がした。じわりじわりと体が軽くなってゆく。目裏が真っ白になるような眩しさにリョウは思わず顔を顰めた。

深い眠りからの覚醒は、体が反応する反射が恐ろしく鈍く、まるで油回りの悪いブリキの玩具のように、細胞の一つ一つ、関節の一つ一つが軋みを立てて少しずつ動き出すような気がした。

右の手にじんわりとした仄かな温かさがあった。そして足元にも。何だろう。その柔らかで繊細な熱を自分はよく知っているはずだ。馴染み深い感触だ。そのような他愛ない事を断片的に思いながら、リョウはゆっくりと瞼を開けた。

まず視界に入って来たのは、真っ白な壁だった。またあの真っ白な場所に舞い戻ってしまったのかと一瞬冷やりとしたものが頭の片隅を過ったが、緩慢な瞬きを繰り返すこと暫し、その白いものが良く見れば影が濃淡を描く滑らかな石の天井であることがおぼろげながら分かった。

体の感触から自分が寝そべっている。それは理解出来た。

その間も視界を埋めようとしている眩しさにリョウはゆっくりと首をその光が溢れ出している場所に向けた。眩しさを堪えるようにその方角を見てみる。

それは小さな明かり採りの窓から漏れる日差しだった。窓は小さいものであったが、ちょうどそこから差し込む日差しが角度的に横になっているリョウの目元を狙い撃つかのように照射していたようだ。

周囲には澄んだ冷たい空気が満ちていた。真っ白かに思えた天井とその周りがくすんだ青い影に包まれていることが分かった。

とても静かだった。深い深い静寂。深々とした沈黙。それでも恐怖のようなものは全く感じられなかった。

朝……なのだろうか。

清冽な空気を吸い込むようにリョウはゆっくりと深呼吸をした。それから何か温かいものに包まれている自分の右手がある方を見た。

右手はごつごつとした大きな手に包まれていた。そこから目線だけを動かしてその先を辿る。そこに青白い光の中で薄らとした輝きを放つ銀色が見えた。

ここから見えるのはその大きな骨張った手と銀色の頭部だった。だが、リョウにはそれだけで十分だった。

帰って来ることが出来たのだ。再びこの場所に。そして、この男の元に。

じわじわと例えようのない安堵と歓喜が胸内から湧き上がって来るのが分かった。それに応えるかのように左の胸奥が熱を帯びた気がした。そこにはエルドーシスからもらった魂の欠片が、この地に根を張る為の種子になるようにと息づいていた。

――――戻って来られたのだ。

あれからどれくらいの時が経っているのだろう。ガルーシャたちがいた場所は、界と界の狭間で、【こちら】とは時の流れが違うとその別れ際に言われた。ただその差はどのくらいになるのかはガルーシャにも分からないとのことだった。その間、ユルスナールはずっとこうして自分の目覚めを待っていたのだろうか。

リョウは、ゆっくりと体を起してみることにした。何だかまだふわふわと漂っているような妙な感じがしたが、そっと腹筋に力を入れてみた。

その時、足元にあったもう一つの温かさの原因が分かった。白く光輝くセレブロの長い尻尾が足元に上掛けのように掛かっていたのだ。

リョウの目覚めに気が付いたセレブロがゆっくりと顔を上げた。虹色に煌めく灰色の光彩が一瞬、驚きに見開かれた後、静かに細め

られた。白銀の王は音もなく軽やかに身体を起こし、リョウの傍に近づいてきた。

そして、差し出された鼻先にリョウはそっと顔を埋めた。

――――――ただいま。

ありったけの気持ちを込めて。

セレブロは言葉を発しなかったが、左胸の上に刻まれた印を通して温かな奔流が流れ込んできたのが分かった。それは不安と焦燥を安堵で包みこんだような珍しく雑多なものが入り混じった複雑な色をしていた。

そして、起き上ったまま今度は下にある銀色の頭部がある方を見た。リョウが横たわっていた場所は周囲の床からは少し高くなった広い台のような所だった。その縁に寄り掛かるようにして銀色の髪を持つ男が眠っていた。右手はしっかりと握り込まれたまま。硬い石の床の上に座すようにして無理な体勢で崩れ落ちるように眠っていた。

差し込む微かな日差しが、俯き加減なその横顔の輪郭を薄らと象っていた。記憶の中に刻みこまれているのと同じ作り物のような造形だ。だが、整えられていたはずの髪は無造作に垂れ下がり、頬や顎には薄らと髭が濃さを増していた。その少しやつれた感のある雰囲気にもしかしなくともかなりの心配をかけてしまったことを知った。

一体、このままこうしてどのくらいの時を待っていたというのだろうか。

込上げてくるどこか切ない温かさとそこにある優しさにリョウはそっと空いた左手を伸ばすと乱れたままになっている男の髪をそっと手櫛で梳いた。久し振りの感触に何故だか涙が出そうになった。

外部からの感触に浅い眠りを繰り返していたユルスナールは直ぐに気がついたようで、弾かれたように覚醒した。

そして作り物めいた造形に深い青さを秘めた瑠璃色の光が灯った。

「ッ……！！！」
息を飲み、驚きに目一杯見開かれたその双眸に穏やかに微笑む女の姿が映っていた。
「ただいま、ルスラン」
第一声は掠れていたが、それでも十分役目を果たしてくれた。
「ッ……リョウ……」
暫し、呆けたような顔を晒したユルスナールにその余りの仰天ぶりが窺えて、リョウは小さく笑った。
「どうしたんですか？　そんなお化けにでも会ったみたいな顔をして」
小さく首を傾げると下ろしたままの黒髪がその存在を主張するようにさらりと流れた。
「リョウ！」
そこで漸く息を吹き返したユルスナールが大きな声を上げた。それは広い静寂に満ちた空間に反響するように響いた。
「リョウ！」
起こした上体をユルスナールは反射的に抱き締めていた。
「リョウ……リョウ……リョウ…ッ…」
感触を確かめるように男の手が背中を辿る。痛くて苦しいくらいの締めつけだ。ユルスナールは古ぼけた機械仕掛けの人形のようにリョウの名前をただ連呼するのが精一杯のようだった。それだけ言葉にならない感情が怒涛のように溢れ出し、制御の利かない喜び、安堵といった千々の気持ちがその逞しい体の中で暴れているのかもしれなかった。冷静沈着を謳われる平静の第七師団長を知る人々には仰天する事態と言えるだろう。
リョウは苦しさに顔を顰めながらも、そっとその腕を男の背に回した。まるで幼子が縋りついてくるかのような加減の無い抱擁は、それだけユルスナールが心底心配していたことの表れでもあった。
リョウは宥めるようにそっとその広い背中を摩った。もう大丈夫だというように。

「心配を掛けてしまいましたね」
ぽつりと漏れた苦笑に似た声に、ユルスナールはきつい抱擁を解くとその存在をもう一度確かめるようにその頬に大きな掌を宛がった。長い指が、まるで壊れものを扱うかのように躊躇いがちに頬に触れた。
「もう駄目かと思った。だが、お前ならきっと帰って来ると信じていた」
きっと祈るような気持ちだったのだろう。少し掠れて震えた声にその心の揺れ幅が表れているように思えた。
「ありがとうございます」
――――信じて待っていてくれて。
「……もう大丈夫…なんだな？」
「はい」
その少し不安を滲ませた問い掛けにリョウは満面の笑みを浮かべて答えた。詳しい話は後になるのだろうが、一先ず、心配はないということだけは伝えて置きたかった。
「気分はどうだ？　水を飲むか？　ああ、そのままでは寒いな」
最初の驚愕から持ち前の反射神経の良さで直ぐに回復をしたユルスナールは、今度は急に『大変だ』とばかりにリョウに世話を焼き始めた。上掛けを剥き出しのままになっていた肩に掛け、寒くないように摩った。
一見、冷静そうに見えたが、それだけまだ気が動転して慌てているのかも知れなかった。
「ルスラン、あれから何日経っているのですか？」
宮殿での祝賀会の夜からどのくらいの時間が経過したのだろうか。
そして返って来た答えに今度はリョウの方が吃驚することになった。
「今日で六日目になる」
五日もこうして昏睡状態にあった。
「……え……」

「丸五日、お前は目覚めなかった」
「そんなに……ですか」
【あちら】と【こちら】では時の流れが異なるとは聞いていたが、リョウとしてはほんの数刻というような感じだったのだ。それが五日も経過していた。少し憔悴したようなユルスナールの顔を見て、本当にその間まんじりともしなかったのであろう、酷く心配を掛けてしまったことに心を痛めた。
リョウはもう一度、差し出された手を握り返した。

「おかえりなさい」
ふと落ちた沈黙に柔らかな声が掛かった。
神殿の東側にある【東の翁】の結界が張られた祈りの間の最奥。いつもならば人気のないひっそりとしたその場所で突如として湧いた声に小さな清水を入れた器を手にこの場所の主である東の翁が現れた。
目覚めたリョウの姿を一目見て、その魂の在り方が視える東の翁は、その変化にいち早く気が付いたようで、たちまち相好を崩していた。
――――おかえりなさい。
その言葉がこれほど嬉しく思えたこともなかった。
「【上つ方】とお会いできたのですね？」
近くに歩み寄ってきた翁の問い掛けにリョウはそっと笑みを浮かべた。
「はい。ガルーシャとエルドーシスにお会い致しました」
「そうですか」
「……ガルーシャに？」
ゆっくりと一つ大きく頷きながら微笑んだ東の翁の隣でユルスナールは驚いた顔をしていた。ガルーシャに出会ったというのが思いも寄らないことであったらしい。
「呑気にお茶を飲んでいましたよ。沢山の草花が咲いた草原の大き

な木の下で」
「そこで【種】をもらったのですね？」
「はい」
「……そうですか」
翁は、感慨深げに息を吐き出した。
翁は、今ならリョウの魂が視えると言った。まだ小さなものだが、とても豊かで深い輝きを秘めた小さな種のような魂の欠片だと言った。やがてそれはリョウの中で大きくなり、この地に馴染むように混ざり合うだろうとのことだった。
『良かったな、リョウ』
「うん」
ずっと傍らで静かに見守っていたセレブロの言葉にリョウは微笑みながら頷いた。
セレブロと東の翁は、リョウのその体から発する新しい【気】とその断片的な会話からその身に起きたことを理解したようだ。
だが、その隣で、ユルスナールは一人置いてけぼりをくったように怪訝そうな顔をしていた。
説明を求めるようにこちらを見たユルスナールにリョウはそっと微笑んだ。
「エルドーシスに魂の欠片を分けて頂いたんです。これでワタシはこの地に根付くことができるそうです」
リュークスの恋人と目された失われた男神の名前はユルスナールも知っていたようだ。
「……ということは？」
「はい。もう以前のようにいつ消えるかなんて心配する必要がなくなったんです」
これで完全にこの世界の住人になれるのだ。そう語ったリョウにユルスナールは歓喜に顔を綻ばせた。
「そうか！！！」
そして、再び思い切りリョウを抱き締めた。

騒がしくなった最奥の気配を感じ取ってか、表に通じる出入口の方から勢いよく走り込んで来る複数の足音が聞こえた。
「リョウ！」
「リョウ！」
一度入り口で足を止め目を見開いてから、直ぐに走り込んできたのはシーリスとゲオルグで、その後ろからはイリヤとウテナ、そしてドーリンとブコバルいうお馴染みの面々が顔を覗かせた。皆、祝賀会で見かけた華やかな正装ではなく、普段のような簡素な軍服になっていた。
集まった男たちを前にリョウは少し照れたように微笑んだ。
「ただいま……戻りました」
その一言で敏い男たちは何がしかのことを察してくれたようだ。それ以上にリョウの傍にいるユルスナールの嬉々とした様子が状況を雄弁に語ってくれたということもあるだろう。それまでまるでこの世の終わりとでも言わんばかりの落ち込んだ顔をしていたユルスナールが、今は天にも昇るような喜びをその顔一杯に表わしていたのだから。黙っていれば、そのまま踊りだしてしまいそうなそんな軽やかな雰囲気を纏っていた。
だが、それはユルスナールだけではなかったようだ。
いつも泰然自若としているシーリスも、珍しくその菫色の瞳を潤ませていた。
「おかえりなさい、リョウ」
台の上で体を起していたリョウにシーリスは近づくとその薄い身体をそっと抱き締めた。
労わりの溢れる温かな腕にリョウは思わず涙が零れそうになった。でも再びこうして懐かしい仲間たちに出会えたことが嬉しくて仕方がなかったので、リョウは顔を上げると晴れやかに笑った。零れそうになる涙をそっと指先で拭いながら。
本当に戻って来られたのだ。かつての日常に繋がる大切な仲間に

囲まれて、改めてリョウはその思いを噛み締めた。
「しっかしなぁ。よくもまぁ五日も寝こけていられたな。俺なら節々が痛くなりそうだぜ。体中がなまってんじゃねぇか？　あ？」
そこでそっと立ち上がろうとしたリョウにブコバルが実に【らしい】台詞を口にした。そんな軽口を叩いたブコバルの顔もユルスナールまでとはいかないものの珍しく憔悴の跡が残っていた。
「リョウ、大丈夫ですか？　気分はどうです？」
案じるように顔を覗き込んだシーリスにリョウは平気だと微笑んだ。
「どうも時の流れが違ったみたいですね」
リョウは苦笑を滲ませた。自分の感覚ではほんの数刻位にしか思っていなかった時が、ここでは丸五日を数えるまでになっていた。だが、逆にそのくらいで済んでよかったのだろう。故郷のお伽噺のようにならなくてよかったと胸を撫で下ろした。
「腹は減ってねぇか？」
何よりもまずお腹の具合を心配したブコバルにリョウは内心可笑しさを堪えながらも小さく首を傾げた。
「どうでしょう？　お腹が空いたという感じはありませんけれど、お水が欲しいです。喉が渇いたので」
「ええ。今すぐお持ちしましょう」
そこでいち早く動いたのはやはりシーリスだった。
「水なら俺が」
そう言って立ち上がったユルスナールをシーリスは実にいい笑顔で制した。
「何を言っているんです、ルスラン。あなたの方が今にも倒れてしまいそうな顔色をしているのに。だから休みなさいと言ったでしょう？　リョウが折角目覚めたというのにあなたがぶっ倒れたんじゃ洒落になりませんよ」
リョウが目を覚ますまではと寝食を忘れてその傍に付いていようとしたユルスナールにきついお叱りの言葉が容赦なく突き刺さった。

シーリスの愛情あるお小言に思わず言葉を詰まらせたユルスナールを見て、リョウは取り成すように微笑んだ。
「そうなったら今度はワタシがちゃんと面倒を見ますよ」
笑って軽く流そうとしたのだが、
「リョウ、あなたのその優しさには涙が出ますが、そんなに甘やかしていてはいけません」
逆にその矛先がリョウの方にまで向いて、
「ふふ。そうですね」
懐かしい遣り取りに誤魔化すように笑みを浮かべた。
そこにブコバルからも合いの手が入ってきた。
「ハハ。そんくらいでぶっ倒れるようなタマじゃぁねぇだろうが。ルスランは頑丈だぜ。だが、ま、へばって使いもんになんねぇってんなら、俺がリョウを担いでやってもいいぜ？　お姫様？　ほれ、立ってんのがやっと、ふらふらじゃぁねぇか」
長い間眠りに就いていた所為で、気持ちとは裏腹に体が上手く動かない。足元がふらついた所をユルスナールに支えられた。そうやってもたついているとブコバルがからかうような声を上げてリョウと相棒を流し見た。
いつもと変わらないニヤニヤとした顔にリョウは内心呆れながらも、普段と変わらない空気が何だかとても大切で愛おしく感じられた。
だが、そんなブコバルの威勢のいい申し出も重鎮の御出ましに軽くあしらわれてしまった。
『ふん。ザパドニークの小倅が。うぬが出るまでもない。シビリークスの小倅が駄目ならば、我が運べばよい』
――――簡単なことではないか。
主張をするようにぱたりと一振りされた白くて長いセレブロの尻尾にブコバルとユルスナールは何とも言えない顔をして互いの顔を見交わせると肩を竦め合った。
「そうだね。なら、セレブロにお願いしようかな」

そう言って可笑しそうに笑ったリョウに、
「はは。これは一本取られたね」
「違いない」
ゲオルグとドーリンが合槌を打ち、
「やっぱ、そうなるんだ」
「自業自得ですよ」
「相変わらずきついっすね」
ウテナ、そしてシーリスとイリヤまでもが意味深な目配せをした後に笑ったのだった。

それからリョウは少し休憩を挟んでから居候をしていたシビリークスの家に戻った。身に着けていた夜会用のドレスの上から外套を羽織り、その上から温かい毛布でぐるぐる巻きにされて、ユルスナールの前に横抱きにされながら愛馬である黒毛、キッシャーの背に揺られた。最初に馬車を呼ぶと言われたのだが、そんな大げさなことはしなくてもいいと押し問答をして、キッシャーにということで落ち着いた。結局、セレブロとブコバルの厄介にはならずに済んだ。ユルスナールも男としての沽券（プライド）にかかわったようだ。

だが、リョウが目覚めたという報せは先にシビリークスの家にもたらされていたようで、ユルスナールに抱えられて玄関先に辿りつくや否や今か今かと待ち構えていたシビリークス一家に囲まれてしまった。その迫力にリョウは驚いた。

シビリークス家夫人アレクサーンドラは、目の端に涙を湛えながらハンカチを握り締め『良かったわ。本当に良かった』と繰り返していた。長兄の妻ジィナイーダは風で乱れた髪をそっと掻き上げてくれて、次兄の妻ダーリィヤはそっとリョウの手を取ると握り締めてくれた。そして、その様子をすぐ傍からロシニョールとケリーガルが見ていた。

それだけシビリークスの人々が心配をして気にかけてくれていたことにリョウは嬉しいやら、申し訳ないやら、再び緩みそうに涙腺をキリキリと絞りながら、笑顔で『ただいま』と答えていた。
そして最後に家長のファーガスにも笑顔で向き直った。
「ご心配をお掛けいたしました。もう大丈夫です」
ファーガスは言葉少なに大きく一つ頷いた。ユルスナールと同じ瑠璃色の瞳が深い優しさを憚らずに滲ませながらリョウを見下ろしていた。
「ああ。おかえり。ゆっくりと休みなさい。後で精のつくものを作らせよう」
「ありがとうございます」
そしてファーガスは何を思ったのか、末息子の方を見た。
「ルスラン、お前もだ。酷い顔をしている」
ユルスナールは父親からの尤もな指摘に、冷静さを欠いたここ数日間の己の行為を窘められたようで恥入るようにそっと目を伏せたが、大人しくその言葉に従った。

それからリョウは、暫くゆったりとした時間をシビリークスの家で過ごした。今回もポリーナが張り切ってリョウの世話を焼き、カッパとラムダの二頭の番犬も付かず離れず傍にいた。そして、先の宮殿での騒ぎを受けて謹慎を言い渡されていたユルスナールもずっと実家にいて、時間が許す限りリョウの傍で過ごしていた。
そうやって緩やかで温かい時の流れの中で数日を過ごし、鈍くなっていた体の感覚を回復させたのだった。

目覚めの朝（後書き）

感動（？）の再会の朝の模様をお伝えしました。次回はその後の様子を少しお伝えしようと思います。

裁定と和解

その日、リョウはユルスナールに付き添われて宮殿の区画内にある役所に向かった。術師として登録を済ませた後、その証となる登録札を貰いに行っていなかったからだ。予定では祝賀会の翌日にでもと考えていたのだが、諸事情により大幅に遅れてしまった。

役所の窓口には、以前と同じ細面の官吏が受付台（カウンター）の後ろに陣取っていた。

「ああ。お待ちしていましたよ」

リョウの顔を見ると覚えていたのか、官吏は笑みを浮かべて立ち上がった。そして奥に引っ込むといそいそと例の透明の箱をその手に戻って来た。

「こちらがあなたの登録札です」

――――どうぞ、御確認ください。

差し出された箱の中には小さな親指の大きさ程の細長い楕円形をした銀色に輝く薄い札状のものが入っていた。そこにはリョウが印封として利用する【印】が彫り込まれたかのように刻印されていた。その裏側には虹色に輝くセレブロの印封のような紋様が入っていた。

「素敵な形になりましたね」

表裏を確認したリョウに官吏はにっこりとやけに愛想よく微笑んだ。他者との比較対象を持たないリョウにはこの札の形が一般的なものなのかそうでないのか、はたまた何が素敵なのかは理解できなかったが、初めて手にするこの地での己が身分証明に嬉しさを隠すことはしなかった。

「はい。ありがとうございます」

満面の笑みで答えていた。

「ちょうどいい具合に小さな通し穴が開いていますのでそれに鎖を通して首から下げてはいかがですか？」

今後、術師としての証であるこの札は肌身離さず身に着けておくものであるという。そこに厳格な決まりはなかったが、皆、慣例のようにそうしていることが多いということだった。

その勧めにリョウは一も二もなく頷いていた。そして首から下げていた鎖を取り出すと留め金を外し、そこに真新しい登録札をぶら下げた。

以前、ユルスナールからもらいお守りのようにずっと大事にしていた【キコウ石】のペンダントは、気が付いたら跡形もなく消えていた。そして、この首には鎖だけが残っていたのだ。シビリークスの家に戻り、それに気が付いた時は、もの凄く驚いて大きな叫び声を上げてしまったくらいだった。あれはガルーシャの形見でもあり、ユルスナールの気持ちが沢山込められたものでもあった。リョウにとってはとても大切なものであったから、失くしてしまったことが悲しくて、残念で仕方がなかったのだが、セレブロと東の翁の話では、それはあの宮殿の騒ぎの際に砕け散ってしまったのだという。リョウの身に降りかかった災いをその守り石が身代わりのように一部引き受けてくれたのではないかという話だった。

その話を聞いた後は、それならば仕方がないかと諦めたのだが、それでも残念な顔をしていたリョウにユルスナールが言った。

「あれはただの石だ。形あるものはいつかは壊れる。きっと潮時だったのだろう」

そして宥めるようにリョウの頬に触れるだけの口づけを落とした。

「今度お前にちゃんとしたものを贈ってやる。首飾りではなくこっちの方にな」

そう言ってユルスナールはリョウの手を持ち上げるとその左手の薬指の部分にそっと口付けを落とした。

この国の男は好いた女に己が瞳と同じ色の石が付いた指輪を贈るのだ。それが婚約、ひいては婚姻の証となった。ユルスナールはペンダントではなく指輪をくれると言った。それは自分がこの男の妻

になることの証でもあった。
熱の籠った眼差しにリョウは擽ったそうに微笑んだ。
「ありがとうございます」
だが、不意に思い立ったように顔を上げた。
「あ、ならばイオータ先生の所に行かなくては」
「イオータ殿の所に？」
突然のことで話しの繋がりが見えず、ユルスナールにとっては脈絡のないように思えたのか、怪訝そうな顔をした男の鼻先でリョウは微笑んだ。そして、男にとってはとんでもないことを言い放ったのだ。
「はい。【キコウ石】の元となる原石をもらってこようかと思いまして。あの研究室の箱の中にごろごろ転がっていましたから」
それを見繕って自分で鉱石処理を行い同じような【キコウ石】を結晶化させようと思ったのだが、それを聞いたユルスナールは、微妙な顔をした。
「リョウ、俺はそんなに甲斐性がないか？」
「はい？」
リョウとしてはイオータの所で埋もれている石をもらえば元手が掛からないし（一般的に市場に流通している【キコウ石】は恐ろしく高価だと聞いていた）、何よりも自分が気に入ったもので【キコウ石】を作れると思ったのだが、それを贈ろうとしていたユルスナールは、いたく自尊心（プライド）を傷つけられてしまったようだ。
「自分で鉱石処理をした石ならば愛着が湧くと思ったのですが、……いけませんか？」
石が出来たらそれをユルスナールに渡すから、それを指輪に加工してもらうのでは駄目だろうか。それを加工してもらうにも専門の術師に頼むことになるのだ。その方が手軽に済むと思ったのだが。
無意識にか、じっと強請るように見上げた漆黒の瞳を前にユルスナールは暫し、たじろいで、少し逡巡した後、好きなようにすればいいと最終的には折れてくれた。

「じゃぁ、一緒に【リール石】のものも作ってルスラン用にしましょう」

リョウが以前、ユルスナールに贈ったものは黒い石の付いたペンダントだったが、かつての故郷の習慣を踏襲するように女だけではなく男の方にも指輪を作ろうと考えた。

その思いつきをリョウはかなり気に入ったようで、嬉しそうに口元を緩めたリョウにユルスナールは全面降伏するような気持ちで目を細めたのだった。

それから二日後、リョウは再びユルスナールと共に宮殿を訪れることとなった。

この日、ユルスナールは正装をしていた。その後の第三者による厳正なる調査の結果、祝賀会の時に掛けられていた嫌疑が晴れて、この度、正式に謹慎解除の申し渡しがなされるということだった。

ユルスナールはリョウにも共に来るようにと言った。あの騒ぎの当事者で、唯一の被害者でもあったリョウが息を吹き返したという報せを受けて、王族から改めて話をしたいという申し出があったのだ。ユルスナールはリョウが受けた精神的苦痛を考慮して、無理に顔を出さなくてもいいと言ったのだが、けじめを付ける為にも共に行くことを承諾した。そして、いつもと同じズボンにシャツ、上着という簡素な服装で赴いたのだ。

場合によっては国王（ツァーリ）への拝謁があるかもしれないということで、アレクサーンドラはそのような男と同じ格好では申し訳が立たないと言ったのだが、リョウはこれでいいと言った。普段はこのような格好をしていたのだ。今ではこれが板に付き、自分の中では素に近かった。あるがままの自分と向き合う為にもこのままでいいと考えた。それでもかなり気を使って一番綺麗なものを身に着けた。

ユルスナールと共に訪れたのは宮殿の大広間からは少し離れた一室で、中には調査を担当していた中央審議会の一人であるオスターペンコと第一師団長のフラムツォフ、そして第二師団長のスヴェトラーナの姿があった。

そして、オスターペンコよりやや格式ばった形式的なもの言いで次のような言葉が下された。

「スタルゴラド騎士団第七師団長、ユルスナール・シビリークス。その方に掛かっていた斥候に通じ他国に我が国の情報を流していたという嫌疑は、この度、全くの事実無根であることが判明した。よって、これより王（ツァーリ）より申し付けられていた謹慎を解く。以後も変わらずこの国への忠誠を誓い、その職務に励むよう期待する」

「ハッ、有り難きお言葉。謹んでお受けいたします」

騎士としての最敬礼を取ったユルスナールにオスターペンコは表情を緩めると静かに付け加えた。

「良かったな、ルスラン」

「ありがとうございます」

それからオスターペンコは、ユルスナールの後方にひっそりと控えるようにして立っていたもう一人の当事者に視線を投げた。細かい皺に囲まれた誠実そうな薄茶色の瞳が、リョウを捕らえていた。

「それから、……リョウ……と言ったか。君に掛かっていた疑いも綺麗に晴れている。我々中央の面倒なごたごたに巻き込んでしまったようで済まなかったね」

――――何よりも君が無事でよかった。

最後に付け足されたその言葉は、その男の正直な述懐のようにも思えた。オスターペンコの真摯な態度にリョウは、静かに頭を下げた。

それからオスターペンコは、不意にその身に纏う空気を柔らかいものへと変えた。その口元に薄らと笑みのようなものを浮かべている。

「術師としての登録が正式に済んだようだね。登録機関より報告が

上がっている」
「はい」
リョウは胸元にぶら下がる真新しい登録札にそっと指で触れた。
「素養を持つ人材は我が国にとっても宝だ。これからの君の活躍に期待している」
「はい。勿体なきお言葉、精進する所存であります」
淡々と紡がれた、それでも優しさの感じられる祝辞にリョウはすぐ脇に立つユルスナールに倣うかのように静かに敬礼をした。
「ああ。それから、リョウ。この後、少し時間を取れるかな？　陛下が少し君と話がしたいと仰っている」
思いがけない申し出にリョウは少し驚いて、オスターペンコを見てから隣に立つユルスナールを見上げた。それを受けてユルスナールは、一歩前に出るとオスターペンコを真っ直ぐに見た。
「それは私的なお話しですか？」
「ああ。この一件のことでリョウに確認を取りたいことがあるそうだ」
そう言うとオスターペンコは少し態とらしい咳払いを一つした。
――――それから、これはここだけの話だが。
前置きをしてからオスターペンコは意味深に目配せをすると声を一段と潜めた。
「図らずもヴォルグの長のお怒りを買ってしまったことに、陛下はかなり御心痛の御様子であられてね。君に直々に謝罪をしたいとのお言葉なのだよ」
この国の最高権力者自らが謝罪の言葉を口にする。それはとても大変なことだとリョウは想像した。常に揺るがずに在ることを求められる国王（ツァーリ）が過去の行いを過ちと認めるのは、政治的にも大きなことであるだろうから。その謝罪相手が、他国の王族でも貴族でもない、自国の一般庶民なのだから尚更だろう。
だから、ユルスナールはそれが【私的な】ものであるのかを尋ねたのだ。

リョウとしては、最終的にはこの場に戻って来ることが出来たし、騒ぎの原因となった貴族達の陰謀の件に関しては、オスターペンコを始めとする中央の人々がこの国の規律に則り適正な処分を下すであろうから、自分が態々関わる必要はないだろうと思っていたので、その必要はないかと思っていたのだが、事がセレブロに関わることであれば少し違ってくる。

「少しお話をするくらいならば」

非公式で、内々のものであるならば構わない。そう思い、リョウはその話を受けることにした。

「本当か！　それは助かる」

安堵したように顔を綻ばせたオスターペンコとは対照的に、

「リョウ？」

――――いいのか？　大丈夫か？

案じるようにこちらを見下ろしたユルスナールにリョウはそっと微笑んだ。

「はい。避けて通れぬ道ならば、今の内に済ませてしまいたいと思います」

王（ツァーリ）はごく内々に話をしたいということで、リョウだけが忍ぶようにその場へ案内されることになった。案内人には、中にいたスヴェトラーナが名乗りを上げた。

時間はそれ程取らせないということなので、リョウはユルスナールにその場で待っていてもらうことにした。ユルスナールは共に行きたそうな顔をしていたが、相手が王（ツァーリ）である以上、それも敵わなかった。

こうして一人、先導するスヴェトラーナの後に付いて行った。

「オスターペンコ殿」

「大丈夫だ、ルスラン。君が心配するようなことはない。約束しよ

う」

扉の向こうに消えた華奢な背中をその目で追い掛けていたオスターペンコは、ゆっくりと振り返ると小さな笑みを浮かべた。あの少年のような格好をした小柄な女性とユルスナールとの関係は、オスターペンコも承知していた。ユルスナールの心配は分からなくもなかった。

この度、この騒動の一件を調査する任を受けた中央審議会の一員であるオスターペンコの脳裏には、先日の緊急会議の模様が思い出されていた。あの女性が無事生還してよかった。この国を支える一貴族として、そう思わずにはいられなかった。

全ての調査を終え、その最終報告の為に中央審議会とその関係者が招集されたのだ。その場所には神殿の神官長も重要参考人として召喚された。王族と並び立つ影響力を持つとされる存在である神官長が審議会に召致されるのは、前代未聞のことだった。

室内は重苦しい沈黙に満ちていた。騒ぎの当事者となり御前での申し立てを行ったタラカーノフは、あの場で殺害された。事情を良く知ると思われた配下の男は、その日の内に屋敷で毒を呷って死んでいるのが発見された。宮殿内に押し入った私兵たちは、その後、アルセナールで取り調べを受けたが、タラカーノフの手足となり命令に従ったというだけで、その内容を知る者はいなかった。

結局、タラカーノフの裏にいたと思われる人物については不透明なままだった。口封じ的にタラカーノフが死亡したことで真実は闇に包まれてしまったのだ。辛うじて繋がりが見えたのは神殿の神官たちで、あの場にいた神官たちに詳しい事情を聞こうとした矢先、最悪な事態が起きたという報せを受けたオスターペンコを始めとする宮殿内の貴族たちは震撼した。

それは、神殿で先読みの儀式が行われたということだった。しかも【ヴォルグ】の長の【魂響（タマユラ）】であったあの黒髪の女を寄り代にして。

「とんだことをしてくれたものだな。イシュタールよ」

一連の報告後、張りつめた緊張感の漂う中で、最初に口を開いたのは国王（ツァーリ）だった。【ヴォルグ】の長の【魂響（タマユラ）】が、宮殿内で斥候との誹りを受け、判じ薬という触れ書きの毒物に崩れ落ちたという事態だけでも、ヴォルグの長直々の乱入に騒然としたのに、今度はその者を儀式の贄に利用とした。王族が代々守護者として崇めてきた存在に対する不敬。そして王族がその繁栄の為に代々守り抜いてきた長との約定に著しく抵触する事態に、この国の行く末がまさに天秤に掛けられたも同じだった。それだけ王族にとっては、ヴォルグの長との繋がりは神聖なものであったのだ。

結果的に儀式は失敗に終わったという。だが、懸案となった長の【魂響（タマユラ）】の安否は不透明なままで、神殿の【東の翁】が結界を張った中で昏睡状態にあるとのことが、その傍にいると思われる第七師団長の関係者より漏れ聞こえてきていた。その間もずっと己が朋輩の傍らにいたヴォルグの長が、儀式を行っていた神官たちの中に突入し、更なる怒りを爆発させたということだった。

その緊急事態を受けて神官長自らが、この場に赴き、儀式を行った神官たちの裁きを宮殿側に委ねることとなった。古くより治外法権的な大きな権力を持ち、神殿における神官たちの行為を直接的には咎め立てすることのできなかった政治的聖域を思えば、これは驚くべき譲歩でもあった。だが、それだけ事態は深刻であるということの裏返しでもあった。

王（ツァーリ）は、厳しい顔付きで審議会の面々が居並ぶ中、一席に着いた神官長を見遣った。元来穏やかな気性の王には珍しい臣下の大臣たちが震えあがりそうになる凍てついた視線に、だが、神官長イシュタールは動じることなく真っ直ぐに伸びた背筋をそのままに敬虔な信者である節度ある態度を崩さなかった。

「全てはリュークスの御心のままに」

神殿神官ユプシロン流の独特な言い回しに王は不快感を露わにした。
「では、貴公の考えでは、この事態も起こるべくして起きたということなのか？」
ヴォルグの長の怒りを買う事態を防ぐ手立てはなかったということなのか。
「全ての流れには因果があり、大いなるその流れを堰き止めることは出来ませぬ。過ちには必ずや報いあり。神の鉄槌は下されました。我々はそれをあるがままに受け入れるのみ」
「それは随分と受動的で消極的な話ではありませんか？　神殿の長たる者の責務をなんと心得ておられるのですか？」
監察機関の大臣であるイリューヒンが徐に口を開いた。神殿内部での不穏な動きは前々からあったと聞いていた。それを神官長が知らない訳がない。その事態を認識していながら何の打開策も打たなかったというのは、長としての職務怠慢に思えた。
厳しい糾弾にもイシュタールは堪えた様子を見せなかった。
「我々は慈愛の女神リュークスへの忠誠を第一義としております。こちらの政治とは異なる規律の中にあります」
その言を受けて苛立たしげに円卓のテーブルを指で叩いた王（ツァーリ）に神官長は静かに言葉を継いだ。
「こたびの儀式は一部の神官の暴走によるもの。神殿の総意とは異なります。異端には既に天からの裁きが下されております」
それは余りにも厳しいやり方だった。神々はその約定違反には、容赦がない。雷の神【ペールン】が放った矢に射抜かれ、黒き灰に成り果てたかつての弟子の末期に、イシュタールは神の怒りを真摯に受け止めることで応えようとした。
「あの者たちの裁きはこちらに委ねます。それが神の御心に沿うものであるのならば」
儀式実行の中心的役割を果たした弟子は死亡した。そしてその他の神官たちも禁忌に触れた勧請の儀式の代償として、その精神を崩壊させていた。今は、【アルセナール】管轄下の留置場に留め置か

れているが、廃人となった者たちのその命が尽きるのも時間の問題だと思われた。そういう意味では、神官たちは既に報いを受けているのだ。宮殿側の裁定は形式的で体面的なものであると言わざるを得ない。が、それを宮殿側の権力誇示の為に利用することについては否と強く出ることはできなかった。

一件、譲歩を引き出したように思えて、その実、対等である強かな神殿の態度に、王（ツァーリ）は苦々しい溜息を吐いた。

だが、その決断は早かった。

「よかろう。神の怒りは共に同じ。神官たちは今後の見せしめにに極刑に処す」

大きく揺らいだ天秤の平衡が、再び元の位置に戻ろうとしていた。

「全てはリュークスの御心のままに」

安定までには、まだ小さな揺り戻しがあるだろうが、それも時と共に一時的な停止に向かうだろう。

こうして神官長への糾弾とその処分についての裁定は終わりを告げた。

それからオスターペンコの報告に基づき、今後の方針と対策が話し合われることになった。後宮を騒がせた侍女の不審死もタラカーノフの策略によるものであることが結論付けられた。そして、第七師団長のユルスナール・シビリークスに掛けられた嫌疑、その婚約者に掛けられた斥候の嫌疑も事実無根であることが判明した。

イジューモフとイリューヒンはタラカーノフに上手い具合に踊らされた形となった。特に監察機関の責任者であるイリューヒンにとっては、その職務の性質上、中立であることが常に求められる。その認識の甘さを露呈させることになった。だが、今回の失態についてはこれまでの仕事ぶりを鑑みて解任までには至らなかった。イリューヒンは、情報の精査と公正さを改めて王（ツァーリ）に誓うこととなった。

そして一同の懸案事項は、自ずとヴォルグの長に関することとな

った。

「こたびの責任の一端は私にもあるだろう」

宮殿内の政争に何の関係も無い人々を巻き込んでしまったのだ。タラカーノフは元々シビリークス家を良く思っていない節があった。恐らくその辺りの含みがあったのだろう。本人が死亡した今、その理由を明らかにすることは出来なくなってしまった。全ては憶測の域を出ない。

「長の怒りは、真摯に受け止める他あるまい」

臣下の失態は、その上に立つ王の責任である。それをすぐさま認めた点に於いて、この国の王（ツァーリ）は、潔く、数多もの民を抱える国の最高権力者に相応しい心を持っていたといえるだろう。

「【魂響（タマユラ）殿の安否は？」

王の補佐機関である中央審議会の大臣の一人が、静かに問うた。

それに答えたのは、関係者として末席に着席していたシビリークス家・家長ファーガスだった。

「いまだ深い眠りに就いているそうです」

「では……最悪の事態は……」

「現時点では、そのような報告は受けておりません」

そしてファーガスは、昏睡状態の長の【魂響】の傍にはヴォルグの長セレブロと東の翁と共に己が愚息が付き添い、その様子を見守っていると語った。あちらで出来る限りの手は尽くしたそうで、今は、皆が祈るような気持ちでその目覚めを待っているとのことだった。

「……そうか」

王は深い息を吐き出しながら静かに目を伏せた。その面持ちは相変わらず沈痛なままだが、そこには神の慈悲に縋るような祈りの気持ちが込められていた。まるで一筋の薄い光明を頼って闇の迷路から抜け出そうとでもいうように。それはこの場に集う他の臣下たちも同じことだろう。

「我々としても今は、その回復を祈るほかあるまい」

そう口にすると王は改めてファーガスを見た。
「出来る限りのことはしよう。必要なものがあれば、なんなりと申し出よ。その者の早い回復を願っている」
「勿体なきお言葉」
真摯な王（ツァーリ）の言葉にファーガスは恭しく頭（こうべ）を垂れた。

最終的にユルスナールの謹慎を解く旨が議決された。【アルセナール】に留め置かれているタラカーノフ配下の私兵たちは然るべき処分を下すことで一致。タラカーノフ家は、主死亡によりその家督を一時、宮殿預かりに、残されたその妻と三人の息子たちの処遇については、この一件との関係性を精査した後、正式に処分を言い渡すと決められた。
そして、ヴォルグの長との関係修復に関しては、もう少し【魂響（タマユラ）】の目覚めを待ってから改めて方策を探ることに決まった。
こうして緊急会議は散会となった。
その去り際、ファーガスが中央審議会に名を連ねている一人の男を呼び止めた。ファーガスの前にはその指に特徴的な赤い指輪を嵌めた一人の初老の男が立った。
その男、アファナーシエフは、会議中、一言も口を開かなかった。顧問としての立場から静観を貫いていたのかと思われたのだが、それを横目に見たオスターペンコは、両者の間に走る緊張感にそっと二人の会話に聞き耳を立てた。
二人は無言のまま見つめ合った。ファーガスの視線は鋭くアファナーシエフの瞳を射抜いていた。
「この借りは必ず返す」
剣呑な調子で低く囁いたファーガスにアファナーシエフは余裕たっぷりに鼻で笑った。
そして、二人は再び何事も無かったかのようにこの会議が開かれた一室を後にした。

その頃、スヴェトラーナに先導される形で宮殿内の廊下を歩いていたリョウは、不意に足を止めた第二師団長に並んだ。
「身体の方は大丈夫なのか？」
――――その様子ならば尋ねるまでもないが。
そう言ったスヴェトラーナにリョウは少し驚きながらも小さく微笑んだ。
「はい。もうすっかり」
まさかスヴェトラーナからこのように案じるような言葉を掛けられるとは思ってもみなかった。
「お前が無事でよかった」
リョウの頬に指先で触れると珍しく優しい笑みを浮かべた。その女性らしい温かさえある仕草にリョウは笑みを深めた。
「ご心配をお掛けいたしました」
だが、直ぐにスヴェトラーナは空気をいつものやや硬質なものに改めると再び何事も無かったかのように歩き出した。
「ふん、ルスランがあのまま腑抜けになったのならば、容赦なく蹴り上げていた所だ」
そのようないかにも軍人らしいことを淡々と吐き出しながら口の端を吊り上げたやや険のある美貌にリョウは内心目を丸くしながらも、その長い脚から繰り出されるであろう渾身の一撃を想像して、かなり痛そうだなどとしょうもないことを考えて可笑しくなった。
だが、スヴェトラーナなりに今回の事に心を痛めていたことが感じ取れたのは確かだった。その表現方法はやや遠回りで分かり難かったが。

そして案内された場所は、こじんまりとした静かな一室だった。内装も色使いも控えめで落ち着いた感じの部屋だ。
室内には昼下がりの濃い影が濃淡を作り出していた。明かりは点

けられていない。だが、差し込む光は十分だった。
南側に面したテラスの向こうに一人の男が腰を下ろしていた。
「お連れ致しました」
『おお来おったか』
第二師団長スヴェトラーナの慇懃な声に反応したのは、小柄な灰色の獣のティーダだった。
『リョウ、加減はどうだ？　悪い所はないか？』
戸口脇に立ったリョウは、軽やかに走り寄って来たティーダのしなやかな身体をその腕に抱き上げた。
「ティーダ、ありがとう。もうすっかり大丈夫だよ」
そこで中にいた男がゆっくりと振り向いた。
そこにあったのは、あの祝賀会の夜に遠目に垣間見たこの国の最高権力者、【ツァーリ】その人だった。
リョウは咄嗟に腰を低くして頭を下げた。兵士たちがやるような敬礼になったのは身に付いた習慣と反射によるものだった。
「そう畏まらなくともよい」
――――――面を上げよ。
その声にそっと伏せていた顔を上げた。
「こちらへ」
そうして促されるままに王が座る椅子の向こう、テーブルを挟んだ向かい側に腰を下ろした。
「今日はこの国の王ではなく、クチマ・ツァリョーフ、一人のこの国の民としてここにある」
つまり公な人ではなく、私的なごく個人的な話をする積りだということがその発言から読み取れた。
その宣言にリョウは真っ直ぐに王（ツァーリ）を見つめ返すとしっかりと了承の意味合いを込めて頷き返していた。
だが、そのような真剣な空気をぶち壊すようにリョウの膝の上にいたティーダが軽やかに尻尾を振った。
『勿体ぶりおって』

さすが長い年月王宮に暮らすと言われているティーダだ。人とは違う理の中で生きる【獣】にとっては、この国の頂点に立つ王（ツァーリ）といえども【人】であることに変わりはないので容赦がない。

両者の関係がよく見えなかったリョウは、なんと答えたものか分からなかったので、宥めるようにその艶やかな灰色の毛並みを撫でた。

王（ツァーリ）、クチマ・ツァリョーフは獣の言葉を解するようだ。その資質は王族の中に脈々と受け継がれているのだろう。

王（ツァーリ）は、ティーダに恨めし気な視線を投げた。だが、直ぐに気を取り直したようにリョウの方を見た。

案内をしたスヴェトラーナは戸口際に歩哨のように姿勢よく立ち、中にいた侍女がテーブルの上にお茶の入った茶器を静かに並べていった。穏やかで慎ましさすら感じる空気がそこにはあった。

「具合はもういいのか？」

「はい。すっかり」

少しの間の後、王はゆっくりと口を開いた。

「君が無事でよかった」

目覚めて以来、会う人皆にそう声を掛けられた。その意味合いはその発言者の立ち位置によって随分と趣が異なるだろう。純粋にリョウの身を案じた人々もいれば、その裏にある利害関係に胸を撫で下ろした人々もいた。国王の場合は、きっと後者であろう。王は何よりもセレブロの怒りを買ってしまったことを心配していたようだったから。

目覚めた後、王族とヴォルグの長との関わりをユルスナールやケリーガル、ファーガスから聞いたのだ。

【ツァーリ】とはそれまで面識もなかったので別段気にはならなかった。何よりもそれが正直な本音であるだろう。

「君には済まないことをした」

勧められたお茶に口を付けながらリョウは緩く首を横に振った。

「もう済んだことです。それに関係者には然るべき処分が下されたと聞きました」
ならば自分が関わることはもうない。政治に首を突っ込む気はなかった。
「我々を恨んではいないのか？」
「いいえ。ワタシはこうして目覚めることが出来たことだけで十分ですから」
蓋を開けてみれば、神殿側の企てに巻き込まれていたということが知れたが、それが切っ掛けで魂の欠片を貰うことが出来たのだ。あのままではただ消える時が来るのをじっと手を拱いているしかなかったであろうから。禍転じて福となる。そう思うことにしていた。思わぬお目零しをもらった気分だった。
「そうか」
穏やかに微笑んだリョウに王（ツァーリ）は、その瞳を柔らかく細めた。
そこで、それまで大人しくじっとしていたティーダが徐に顔を上げて、意地の悪そうな顔をして王（ツァーリ）を見た。
『クチマよ。前置きはその辺で良かろう。早く本題に入らぬか。このままでは退屈で眠りそうだわい』
「ティティー、今日はやけに突っかかるな」
王（ツァーリ）は途端に苦い顔をして手にしていた茶器に口を付けた。
どうやらティーダによれば、これまでの遣り取りは全て口慣らしのようなものであったらしい。
「ワタクシにお話しがあるとお聞き致しました」
リョウはなんと切り出したものかと逡巡していたらしい王（ツァーリ）に助け船を出していた。思い当たる節は一つしかなかったからだ。
「セレブロのことでしょうか？」
王（ツァーリ）は、ほんの少しだけ気まずそうな顔をしたが、それを曖昧な笑み一つで濁してから不意に真面目な顔をした。
「ヴォルグの長に取り次ぎを頼めないだろうか？」
「直接、お会いになりたいということですか？」

リョウの問い掛けに王は静かに諾と答えた。
「ならば今、この場にお呼びしましょうか？」
「そんなことが出来るのか？」
驚きに目を見開いた王（ツァーリ）にリョウはそっと微笑むと左胸の上にある印封の上に手を当てて、そっとヴォルグの長の名前を囁くように呼んだ。
「……セレブロ」
すると次の瞬間、開け放たれたテラスの向こうから午後の日差しを一杯に浴びて白く光輝く大きな獣の姿が現れた。
『やれやれ、待ちくたびれたわ』
どうやらセレブロの方では呼ばれるのを今か今かと待ち構えていたようだ。
「長！」
座っていた椅子から立ち上がり、前方に走り出てその場で恭しく片膝を着いた王（ツァーリ）にセレブロは鼻を鳴らした。
『その分ではティーダにこってりと絞られたようだな』
小さく肩を揺らした王（ツァーリ）の向こうで、のんびりとリョウの膝の上に寝そべったティーダの尻尾がふらりふらりと揺れていた。
リョウはその様子を見て、内心、妙なことになったと思いながらも静かにしていた。
『ならば我の出る幕はなかろう。以後は心せよ』
リョウが無事であればそれでいい。単純明快なセレブロ流の理論を王（ツァーリ）は寛大なる御心と思い感激したのだが、
『なれど、次はない』
しっかりと釘を刺した一言に、
「御意」
王（ツァーリ）は再び胆に銘じるように神妙な顔をしたのだった。

こうして一時はどうなることかと思われた王の懸案事項は一応、解決の糸口を見い出せたようだ。一度失墜した信頼関係は、再び弛

まない努力によって少しずつ回復をさせて行く他ないだろう。
　リョウは、王（ツァーリ）との個人的な面会を終えるとスヴェトラーナに案内されてユルスナールが待つという部屋に戻った。勿論、セレブロがその傍についていたのは言うまでもない。そして、その後ろからは子分よろしくティーダが軽やかについてきたということだ。

裁定と和解（後書き）

記念すべき?２００話目（登場人物紹介込みですが）をお届けいたしました。お仕置き……温かったですかね。ですが、これがｋａｇｏｎｏｓｕｋｅ　の限界でした。どうぞご勘弁を。セレブロに代わってティーダがきついお仕置き（?）をツァーリにしてくれたようです。

次回は、もう少しその後を続ける予定です。二・三残っているエピソードがあるので。それではまた。ありがとうございました。

ガルーシャ・マライ

宮殿での王との非公式な会談から暫くして、シビリークス家にいたリョウの元に大鷲のヴィーが伝令としてやって来た。

以前、術師の最終試験を受けた後に話があった【チョールナヤ・テェニィ（黒き影）】の長である【アタマン】からの呼び出しだった。

【チョールナヤ・テェニィ（黒き影）】についてユルスナールに尋ねた所、軍部の影の諜報活動を専門とする特殊な部隊であることが知れた。いつもふらりとどこからともなく現れては消えて行く風来坊のような男、【ルーク】は、その組織に所属する人員（メンバー）ということだった。

通常【黒き影】所属の男たちは、その名の通り影のように闇に紛れて活動をし、決して表舞台には現れて来ないのだという。一応、同じ騎士団の中にその名を連ねてはいるが、全てが謎に包まれている特殊な部隊で、それを取り仕切る中心人物は代々【アタマン】と呼ばれているということ以外は全くの不明で、その所属人員もそれを管轄する長も明らかにはされていないのだという。それを知るのは、将軍たちの上にいる国防大臣と王（ツァーリ）のみという話だ。更に、その二人と雖（いえど）も、【黒き影】の所属兵士たちの顔触れを把握している訳ではない。その人員を掌握しているのは頭領である【アタマン】のみで、所属の兵士同士も自らその立場を口外することは固く禁じられているので、その組織の規模がどのくらいなのか、どういった者たちが所属しているのかは分からないのだそうだ。徹底された影に生きる男たち（全てが男という訳でもないのかもしれないが）である。

本来ならば、その職務の性質上、所属兵士はそのことを声高に明かしたりしないものなのだが（それは即、命取りに繋がるからだ）、【ルーク】という男は例外的にユルスナールたち第七師団の兵士たちとは交流があるということだった。それは例外中の例外であるらしい。【ルーク（意味は『ネギ』だ）】というのも通り名で本名は

決して明かさない。その他にもその風貌から【片目の鷲使い】と呼ばれているのを耳にした。リョウの所にやって来たお馴染みの大鷲はその相棒である。

呼び出しの報せを初めて受けた時、リョウは首を傾げた。軍部の諜報機関、それもその長が自分に一体何のようなのだろうか。伝令としてやってきたルークの相棒であるヴィーにその事を訊けば、どうやらガルーシャのことが関係あるらしいということだった。リョウが術師の最終試験を受けた際にガルーシャがその昔掛けていたという術式が反応し、その結界が解かれた。その件で話があるのではないかとヴィーは言った。その後、セレブロにも【アタマン】のことを尋ねてみたが、今の【アタマン】とは面識はないということだった。だが、セレブロもヴィーと同じようにその用件はガルーシャの結界に関することだろうと言った。未知の得体のしれない組織ということにリョウは内心恐々としたのだが、セレブロはそのように気を張ることもないと笑った。

ユルスナールも【黒き影】に関しては、ルークを通してその活動の一端を垣間見る機会があるということだけで、その頭領である【アタマン】については全く情報がないということだった。そこは、みだりに立ち入ることの出来ない領域であるということだ。

それからリョウは、シビリークス家の執事であるフリッツ・リピンスキーに知り合いの大鷲から伝令が来たので出掛けることを言伝た。ユルスナールは例の如く【アルセナール】に出勤していた。行先はどちらにと聞かれたので、リョウは肩に乗ったヴィーに尋ねた。

「宮殿の方？」

『ああ。位置的にはそうだな。なに【アルセナール】から然程離れては居らぬ』

それを受けてリョウはリピンスキーを見上げた。

「もし、先にルスランが戻って来たらヴィーが来たと伝えてくださ

い。それで分かるでしょうから」
その言葉にリピンスキーは静かに頷いた。
「ではそのように。行ってらっしゃいませ」
「はい。行って参ります」

そうして肩に乗せたヴィーの案内で辿りついた先は、宮殿の区画内の西の外れ、【アルセナール】の淡い色壁が遠目に望めるような一角だった。周囲は鬱蒼とした木立に囲まれており、このような所に建物があるとは思わなかった。ここに至るまで、衛兵が門番として立つような場所は通らなかった。俗に言う抜け道のようなものであるらしい。
『この中だ』
何の変哲のもない古ぼけた地味な外観のとある建物の前でリョウは足を止めた。その中に【アタマン】が待っている一室があるということだった。
そして、ヴィーに促されるままに中に入り、その部屋があるという扉の前で再び止まった。
リョウは肩にヴィーを乗せたまま、目の前にある重厚な扉を小さくノックした。
するとすぐさま中からくぐもった感のある了承の声が聞こえた。
そして、小さく唾を飲み込んでから、リョウは中に入った。

まず目に入ったのは、大きな背凭れのある一人掛けの椅子だった。
それからそこに降り注ぐ溢れんばかりの燦々とした日の光だった。
刻限はちょうど昼を過ぎた辺りで、傾きかけた冬の名残、【ソン(太)ツエ(陽)】の日差しが室内一杯に入り込んでいた。椅子が斜めにこちら側に背を向ける形で向いていた。
リョウは思わず逆光に目を細めた。

その間にゆっくりと背を向けていた椅子が回転し、真正面を向いた。後光が差すように光が滲む椅子の背凭れの中にあったのは、一人の男の姿だった。

ゆっくりと目を開いたリョウは、その男を見て息を飲んだ。

「……ガ…ルーシャ？……」

いや、そのような訳がある訳はない。ガルーシャは旅立って、【ここ】ではない場所にいる。

だが、そこに座る男は、自分が良く知っているはずの男によく似た背格好と面立ちをしていた。

細面の線の細い顔。少し吊り上がり気味の切れ長な目。少し尖った顎。その色彩。

「おや？　私はそんなにあの男に似ているかね？　あれに比べれば私の方が断然いい男だと思うのだが」

その声を聞いた時、リョウは我に返った。口調はよく似ているが、その声が懐かしい人とは違ったからだ。

『何を戯けたことを』

リョウの肩に乗るヴィーの横槍に椅子に座る男は片方の眉を器用に跳ね上げた。その仕草もガルーシャのものとよく似ていた。

「失礼いたしました」

間違えたことをリョウは直ぐに詫びた。

だが、男は別段、気を悪くした訳ではなかったようだ。男は、小さく苦み走ったような笑みを浮かべた。喉の奥を鳴らすように呼気が漏れた。

「はは。君が気にすることではないよ。君の答えはそうだな、半分正解だからね」

「……半分？」

その言葉にリョウが尚も目を瞬かせれば、男は簡単に種明かしをした。

「ああ。私はあれの血縁なのだよ。何の因果かあれと同じ血が流れているからね。だが、実際、気が付くものは中々いない」

――――君は中々に勘が鋭いようだね。
そう言ってどこか愉快そうに小さく笑った。
「……そう…なんですか」
ガルーシャの血縁者。そのような存在があったことをリョウは初めて知った。共に暮らしていた時は、ガルーシャはずっと天涯孤独かと思っていた。自分には身寄りはいないと言っていたからだ。
「ガルーシャはそのようなことを一言も言いませんでしたから」
「はは。それはそうだろう。私はあれとは縁を切った仲だ」
飄々とした口振りから漏れる言葉は、意外に多くのものを含んでいるのだろう。
だが、きっと自分はそのガルーシャとの縁のお陰でここに呼ばれた訳だから、その縁は向こうにとっても言葉とは裏腹に切っても切れないものに違いない。
『無駄口はそのくらいにせんか』
中々に進まない話に焦れてかヴィーが口を挟んだ。
そこでリョウは話の流れを元に戻す為、改めて背筋を伸ばした。
「ワタシに…なにか御用があるとか」
「ああ。他でもない」
そう言うと男は、リョウの目の前に置かれたソファーを手で差して座るように勧めた。リョウは小さく頷いてそれに従った。

「あれが遺したものについて少々確認をしておこうと思ってね」
それからガルーシャの血縁者だという男は、先日、ガルーシャが掛けていた呪いが発動し、施されていた結界が解かれたことを語った。
ガルーシャは元々人嫌いで孤独を愛していたという。宮廷政治特有の人間関係が煩わしくなって、王都スタリーツァから隠居を決め込んだガルーシャがまず初めに行ったことは、余計な詮索から逃れる為に意に染まぬ外部からの接触を断つということだった。その為に遥か北方の僻地、人々が【帰らずの森】と恐れ近寄らない場所に

居を構え、隠居場所となる庵の位置が分からないようにと目くらましになるような結界を張ったのだ。類稀なる高い素養を持ち、そして研究熱心だったガルーシャは、その探究心が赴くままに様々な術式の利用と応用を研究していたようだ。その成果は、ガルーシャの書斎を埋める膨大な書物や資料、そして標本の類いに体現されていた。

「君は術師の認可を受けたそうだね」

「はい」

「今後は、あの森の小屋に戻るのかな？　それともシビリークスの家に入るのかな？」

諜報部隊の長らしく、そこには沢山の情報が集まり、把握されているようだ。元より隠すようなこともなかったが、リョウのことは既に調べがついているのだろう。

「一度、森の小屋に戻る積りです」

今後のことはユルスナールとも相談しなければならないだろうが、ユルスナールはまた赴任地の北の砦に詰めることになるだろう。リョウも森の小屋に戻って、ガルーシャの遺したものの整理をしたいと考えていた。

昏睡状態にあった時、界と界の狭間でガルーシャに出会ったことを話せば、【アタマン】は興味深そうに体を少しだけ前に傾けた。

「なんということだ。私がこうして日夜職務に励んでいるというのにあれは優雅にお茶を飲んでいるというのか」

――――なんて世の中は不公平なんだろう。そうは思わないか？

「……どう…でしょうか？」

リョウはなんと答えたものか分からなかったので曖昧に微笑んだ。そして、話しの流れを戻すように、そこでガルーシャに書斎にある蔵書類は好きにしていいと言われたことを語った。

「そうか」

【アタマン】は、机の上に肘を突くと片手の上に顎を乗せ、緩く息を吐き出した。

「あれの結界が解かれたことで、君が暮らすあの小屋は丸裸になった。ああ、言っている意味が分かるかな？　目くらましがなくなってよく見通せるようになったのだよ」

理解の程を確かめるようにこちらを見た男にリョウは小さく頷き返した。

「ガルーシャの安否、若しくはその行方を尋ねてこれからは伝令が自由に飛んでくることになるだろう。もしかしたら押しかける者も出てくるかもしれない」

「ガルーシャの遺したモノを手に入れたいということですか？」

ガルーシャの小屋がある場所は北方の僻地だ。そこまで人が訪ねてくるというのだろうか。しかもその口振りからすると客人は余りよろしくない種類のようだ。

「ふむ。まぁ、早い話がそういうことだ」

そこでリョウはその蔵書類を自分一人が持っていても仕方がないので、中にあるものの中から特に必要と思われるものを除いた分は養成所の方に引き取ってもらおうかと思っていると言った。あれは一術師が一人占めしていいものではない。あのまま管理が行き届かずに埃塗れにしてしまうのは勿体なさ過ぎる。貴重な知識は、共有するべきだ。それらを喉から出るほど欲しい人たちもいることだろう。図書館のような場所に保管し、誰でも自由に閲覧することが出来れば有効活用できるのではないかと考えていた。

「勿論、これはワタシの個人的な考えで、そちらから見て不適切ならば助言を頂きたいと思いますが」

「なるほどね」

【アタマン】はそこで机の上に再び頬杖を突いた。

「基本的には君が思うようにしていいだろう。だが、あれが溜めこんでいたものの中には恐らく人目に触れてはいけないものも含まれているだろうからね。外に出す際には、出来れば私が立ち会いたいものだが……」

さて、どうしたものか――――と言葉の割には大して困っていない

ように首を小さく傾げる。
「あの、セレブロやヴィーでは判別がつかないでしょうか？」
勿論、今すぐどうこうということも別段急ぐようなことではないので、可能ならば【アタマン】自身が自らその選別をしてもらっても構わない。そう付け加えることも忘れなかったが、セレブロ辺りは、どうなのだろうかとふと疑問に思ったことを口にした。
「ねぇ、ヴィーはどう思う？」
肩から腕に移動したヴィーに尋ねれば、
『ヴォルグの長ならともかく、我は細かい文字を読むのは御免だぞ』
目が痛くなるわと嫌そうに口にされて、それもそうかと思った。
だが、【アタマン】は少し違ったようだ。
「ああ、その手があったか。まぁ、セレブロ殿の了承を得られればだな」
「では聞いてみますね」
「まぁ、別段、急ぐという訳でもないのだがね。ふむ。その辺りは追々でよいか」
「他に何か気がかりな点はありますか？」
一先ず落ち着いた所で、そのように話を振れば、【アタマン】は頬杖を突いたまま、その場でニヤリと意味深に口の端を吊り上げた。
「第三が君をかき口説いているだろう？」
「ゲーラさんのことですか？」
リョウは思わず苦笑を滲ませた。
「以前より軍部に登録しないかとは誘われていましたが」
だが、それは向こうが自分を【少年】と勘違いしていた時の話だ。色々と状況が変わった今は、ゲオルグの考えも違うような気がしていた。
「そのお話しを受ける積りはありません」
同じ術師として打診を受けたならば協力は惜しまない積りだが、新米術師の力量と経験値では大した力添えにはならない気がする。それでも気持ち的にその用意があることを伝える積りではあった。

「君は第三とも随分と親しくしているようだね」
「どうでしょうか？」
ユルスナール繋がりで王都に来てから軍部の知り合いは増えたが、それが【親しい】と形容すべきものであるかというとどうも違う気がする。精々面識があるという所だろう。
「まぁいい。あの男は術師としてはかなり熱心な部類に入る。そういう意味で君に興味があるようだが、心配するようなこともないだろう」
――――何よりも君には立派な【番犬】がいるからね。
最後に付け足されたからかいの言葉に、リョウの脳裏には祝賀会の時に言われたブコバルの言葉が過ったのだが、それを慌てて打ち消して、曖昧に微笑んでおくに留めたのだった。

そうこうするうちに、
『話しは済んだか？』
二階の薄く開いた窓から一頭の小型の灰色の獣が体を滑り込ませて来た。お馴染みのティーダである。そして、リョウが座るソファの所まで歩いてくるとその膝の上に飛び乗った。
「君は随分と獣たちに好かれているようだね」
腕から肩に移動したヴィーと膝に乗ったティーダ。其々中々に目方があるのでリョウとしては軽々という訳にはいかないが、それでも獣たち特有の手触りと温かさは好きだった。
意外なものを見るような顔をした【アタマン】にリョウは小さく笑みを零した。
こうして【アタマン】との邂逅は終わりを告げた。思い返してみても雑談の域を出なかったと思う。話した内容はとりとめのないことで、顔合わせのようなものであったのかもしれない。
「ああ。それから」
去り際、【アタマン】は、リョウを呼び止めて指を一本上に上げた。

「私のことは…」
「内密に、ですね」
その台詞にガルーシャによく似たその人はうっそりと目を細めたのだった。

「ねぇ、ティーダ。結局、あの人の用件ってなんだったのかな？」
帰り際、その後、用事があると言ったヴィーに代わって途中まで道案内を買って出てくれたティーダに、リョウはつい今しがたの【アタマン】との不思議な邂逅を思い出していた。
ガルーシャの血縁だと言った故人によく似た雰囲気を持つ男。若いようで年老いているような年齢不詳な感じだった。何よりも掴みどころのない変わった佇まいだった。それでも畏怖のようなものを感じなかったのは、やはりその姿にガルーシャが重なったからかも知れない。
話した内容も世間話の域を出ないもので、長直々の呼び出しということで気構えしていた分、何だか拍子抜けしてしまった感もある。それこそセレブロが言った通りであった。
『なに、いつもの気紛れであろう。ガルーシャと暮らしたというそなたを一目見ておきたかったのやも知れぬな』
――――――あやつは何かとあの男と張り合っておったから。
それは二人の関係性を仄めかす言葉だったが、リョウは深くは聞かなかった。
「ふうん？」
『まぁ、気にすることはあるまい』
「そうだね」
世の中、知らなくてよいことはままある。過ぎる好奇心は身を滅ぼすことに繋がりかねないのだから。追々、時の流れの中で機が満ちたら明らかになるかもしれない。その時を待つのも悪くないと思った。

それから用事を終えたリョウがシビリークス家に戻ると客人が来ていると執事のリピンスキーが慇懃に告げた。
「お客人ですか？」
「はい。第三師団長のゲオルグ・インノケンティ様です」
まるで計ったかのような間合い（タイミング）での訪問にリョウは思わず苦笑い。シーリスの言では、ゲオルグは軍部の中でもかなりの情報通であるらしい。どこかで見張っていたのだろうか。まぁ単に偶然が重なったということなのだろうが、そのように言われても思わず信じてしまいそうになるくらいの強かさをゲオルグは持っていた。

「お帰りなさい、リョウ」
「ただいま戻りました」
そのまま応接室に顔を出せば、男性にしては艶（あで）やかな笑顔がリョウを出迎えた。
「すみません。遅くなってしまって。出掛けていたものですから」
「いいえ。構いませんよ」
ソファーの対面に腰を下ろせば、早速ゲオルグが口を開いた。
「【アタマン】の印象はいかがでしたか？」
切り込むかのような鋭い視線が、リョウを射抜いていた。いきなり正攻法で来たことに内心驚きながらも、リョウは苦笑を漏らすと緩慢な動作で首を横に振った。
「ワタクシの口からは申せません」
そして、しっかりとゲオルグの淡い灰色の瞳を見つめ返した。
【アタマン】との接触は他言無用だ。その人物を象るかのような言葉は決して他人に告げてはならない。
見つめ合うこと暫し、均衡を破ったのは仕掛けてきたゲオルグの方だった。

「冗談ですよ。私もその辺りはちゃんと心得ていますから」
前のめりの体勢を崩すとゲオルグは背凭れに背中を預けて鷹揚に肩を竦めた。ちょっとした悪戯のようなものであったというような軽い空気だったが、そこには薄らとゲオルグの本音が見えているような気がしないでもなかった。

そうこうするうちにリョウの帰宅を知ったシビリークス家の番犬、カッパとラムダの二頭が室内に入って来て、リョウの横に陣取るように座るとその頭を膝の上に乗せあった。どうやら二頭はゲオルグが妙なことをしでかさないか見張っている積りであるらしい。
ゲオルグはそれに対しても持ち前の寛容さを持って穏やかな笑顔で受け入れていた――と思っていたのは、恐らくリョウだけで、二頭とゲオルグの間には一瞬、何がしかの目配せ的遣り取りがあったのだが、それは敢えてこの場では触れなくともいいだろう。

そのようなちょっとした口慣らしが済んでからリョウは姿勢を改めると真面目な顔をして真っ直ぐにゲオルグの灰色の光彩を見つめ、そして、これまで延び延びになっていた件への最終回答を告げた。
「ゲーラさんには申し訳ありませんが、軍部に籍を置く積りは全くありません」
そこで補足的に、次のような譲歩的な言葉を告げていた。
軍部への登録はしないが、術師としての依頼や要請であれば、もし、自分の力になることがあれば、出来る限りの協力はしたいと考えている。
少しの間の後、ゲオルグは人好きのする笑みを浮かべた。
「……そうですか。残念ですが、仕方ありませんね」
だが、言葉尻程残念がる様子もない。
「ルスランが許してくれる訳もないでしょうからね」
幾ら術師と雖も、己の妻となる大事な女性を陰謀と策略の渦巻く政治の場に晒すことを黙って見ているはずがない。軍部は宮廷政治

からはある程度距離を置いているが、仕えるべき相手が宮廷の長たる王（ツァーリ）である限り、無関係ではいられないだろう。ユルスナールの気性を良く知るゲオルグは、当然、猛烈に反対するだろうと思っていた。

だが、これでリョウとの繋がりが完全に切れた訳ではない。思いがけず引き出すことが出来た相手からの譲歩案（協力の申し出）にゲオルグは内心、ほくそ笑んでいた。

「今後はあの庵の方に？」

「はい。詳細はルスランと相談をしなければなりませんが、一度、森の小屋に帰ろうと思っています」

そうして暫くは、以前と変わりない日常を過ごすことになるだろう。また素朴で穏やかな日常が戻って来る。だが、気持ち的には以前とは全く違った新しい日常だ。

「結界が解かれたそうですね」

「はい。詳しくは分かりませんが、術が発動してそのようなことになったと聞いています」

「そこで一つキミに相談なのですが」

ゲオルグはそこで不意に空気を変えた。

「なんでしょう？」

小首を傾げたリョウの鼻先でゲオルグが目を細めた。その瞬間、膝の上に乗っていたカッパとラムダの二頭が顔を上げた。室内に緊張のようなものが一瞬、走った。

「私がそちらにお邪魔してもよろしいでしょうか？」

「森の小屋にですか？」

「ええ。以前からガルーシャ・マライ殿の足跡には個人的に非常に興味がありましてね。あの方がどのような研究をしていたのかを知りたいと言いますか。まぁ、ちょっとした好奇心というやつですよ」

そう言って片目を瞑ってみせた。

「ゲーラさん御本人がいらっしゃるんですか？」

そのような暇などあるのだろうか。リョウがまず疑問に思ったの

はそこだった。
　第三師団の師団長であるゲオルグは忙しいのではないか。纏まった休暇や時間が取れるのだろうか。
　リョウが暮らす森の小屋は遠い。詳しいことはユルスナールに聞いてみないと分からないが、王都からは軍馬でも七日前後は軽く掛かるだろう。往復と滞在の時間を入れても軽く半月は超える。そのような時間を捻出できるのだろうか。
「スフミ村のその先ですから遠いですよ？」
「ええ。それは重々承知していますよ」
　だが、ゲオルグはリョウの疑問を余所に平然としていた。
　そこでリョウはこれまでに温めてきた自分の考えを【アタマン】に告げたのと同じようにゲオルグにも聞かせた。
　要するに、ガルーシャの書斎を少しずつ整理しようと思っていること。今、自分が手元に残しておきたい分とそうでないものをざっと分けて、必要のないものは取り敢えず養成所の方に預けようかと考えていること。そこの図書館に置くか、空いている講師陣の一室をその書斎代わりに利用させてもらうかをして、多くの術師や術師を目指す人たちに有効活用してもらいたいと思っていた。
　ユルスナールの妻となる以上、いつまでもこの森の小屋で過ごす訳にもいかないだろう。この場には様々な思い出や愛着があるので去るのは忍びなかったが、仕方がない。この先、どう転ぶかは分からないが、少なくともガルーシャが丹精込めて育て上げ、引き継いだ薬草園は定期的に手入れをして面倒をみる積りだった。いざとなったらセレブロの力を借りてヴォルグが抜け道に使う古代樹の【ウロ】の通路を使おうと考えていた。
　書斎の蔵書類は好きにして構わないとの言質をガルーシャよりもらっているので、もし、ゲオルグが必要と思うものがあれば、その蔵書類を持って行っても構わない。
　そう締め括ったリョウにゲオルグは瞬時に顔を輝かせた。
「本当ですか！」

「はい。折角の貴重な資料やガルーシャの情熱と努力の結晶をワタシだけが一人占めする訳には行きませんから」
それに自分が有効活用できるとも思えない。
ゲオルグは興奮気味にリョウの手を取ると珍しく早口で捲し立てた。
「リョウ！　ありがとう！　是非お邪魔させていただきますよ。ああ、こうなったら近いうちに早速段取りを付けて長期休暇を申請しなくては！　いや、それとも調査として申請した方がいいかな。その方が堂々と時間を取れますし、何よりも邪魔が入りませんからね。ああ、それがいい！」
ゲオルグの突然の変貌にリョウは目を丸くしながらも、予想以上の喜びように嬉しそうに顔を綻ばせたのだった。

ユルスナールが【アルセナール】よりシビリークス家に戻ったのは、ちょうどそんな歓喜の一幕が上演されている時だった。
リョウに第三の客人があるというリピンスキーの報せにユルスナールがその一室に顔を出せば、ちょうど運悪く、ゲオルグが嬉々としてリョウの両手を取っている場面に出くわした。
「何をしている？」
ユルスナールの空気が一気に剣呑さを増したが、ガルーシャの書斎に立ち入ることが出来るという嬉しさと興奮の中にあったゲオルグには、その鋭い視線は痛くも痒くもなかった。
「ああ。お帰りなさい、ルスラン」
憚らずに顔を顰めたユルスナールにリョウは少し可笑しそうに微笑んだ。
そして、ゲオルグが訪ねてきた理由とそれまでの事をざっと簡単に話して聞かせたのだが、
「……なんだと？」
森の小屋に立ち入る許可をゲオルグに与えたという件（くだり）で、ユルスナールはぞっとするように冷たい笑みを浮かべた。

それを見た時、リョウは、もしかしたらユルスナールに相談した方が良かったのだろうかと冷や汗が流れたのだが、もう約束をしてしまった以上、撤回は出来ない。
「約束はしましたからね。ね、リョウ？」
態々確認をするように念を押されて、
「え、あ、はい」
リョウは少々狼狽しながらも頷いた。

そして、嬉々としてゲオルグがシビリークス邸を後にしたのだが。
頗るご機嫌で帰って行ったゲオルグとは逆に残されたリョウとユルスナールの間には、微妙な空気が淀んでいた。
ユルスナールはソファに座り、考え込むように腕を組んだままじっと宙を睨んでいた。
「あの……ルスラン？　勝手なことをしましたよね？　ひょっとして怒っていますか？」
不機嫌さを滲ませたままの男の空気にリョウは恐る恐るユルスナールの傍に近寄った。
ユルスナールは傍に来た細い身体を掴むと己が膝の上に跨らせるように乗せた。
「……ゲオルグめ」
低く呪詛に似た囁きを漏らしてから、じっと心配そうに男を見上げてくるリョウに小さく微笑んだ。
ユルスナールはリョウを抱き締めるとその左肩の部分に顎を乗せた。そこで大きな溜息を漏らした。
「ごめんなさい」
咄嗟に零れたリョウの言葉に、ユルスナールは無言のまま宥めるようにその背中を撫で、露わになった項の少し上から伸びる愛馬キッシャーの尻尾のような艶やかな髪を指で弄んだ。
「約束をした以上、仕方あるまい。但し、あいつを小屋になんか泊めるなよ？　北の砦に戻ってこさせるか。いや、野宿で十分だ」

森の小屋から北の砦までも意外に距離がある。軍馬で一日半は優に掛かる程離れているのだ。その距離を毎日通うというのはさすがに無理な話だろう。ただ、ガルーシャの書斎は膨大な書物で埋まっているので、目録を作成するだけも膨大な時間と労力がかかりそうだ。いざとなったら泊りこみで腰を据えて掛からなければならない作業になるだろう。

純粋に術師としての知識に興味があるゲオルグのことだ。居候をさせてもユルスナールが心配するようなことは起こりっこないのだが。セレブロや森の狼たちもいることだし。そうは思ってみても婚約者である男の心中はかなり複雑であるには違いない。

だが、一応、リョウは腕の中でユルスナールを見上げると微笑んだ。

「ルスランも泊りに来ますか？」

忙しいユルスナールのことだ。早々時間は取れないかもしれないが、そう提案することで気休めにはなるだろうか。

そう思って告げたのだが。

「ああ。そうするか。それはいいな」

逆にやけに乗り気な答えが返ってきてリョウは慌てたのだが、ユルスナールが急に機嫌を直してしまったものだから、その変わり身の早さに思わず噴き出してしまった。

それでも、これまでガルーシャ以外の人と言えば、負傷したアッカくらいしか立ち入ることのなかった己が核となる領域（テリトリー）に馴染み深い男がやって来るということに心が沸き立ったのは事実だった。

賑やかになるかもしれない。そんな少し先の未来を予想してリョウは一人嬉しそうに微笑んだのだった。

ガルーシャ・マライ（後書き）

２０１１／１１／６　誤字修正

エピローグ　～永久の誓い～

――――――ゴーリカ！　ゴーリカ！　ゴーリカ！　ゴーリカ！

その日、シビリークス家の庭先では、大勢の人々の声がこだましていた。

――――――ゴーリカ！　ゴーリカ！　ゴーリカ！　ゴーリカ！

庭先一面に並べられた長いテーブルの上には様々な御馳走が目移りするほど並べられている。勿論、この日の為に用意された酒瓶もふんだんに並べられていた。

――――――ゴーリカ！　ゴーリカ！　ゴーリカ！　ゴーリカ！

季節は春たけなわ。木々の緑が真新しい芽ぶきの色に象られ、色とりどりの花々が咲き乱れている。

燦々と降り注ぐ暖かで柔らかい日差しを目一杯に浴びて、溢れんばかりの生命力に輝いていた。周囲には蝶や虫たちが遊び、小鳥が高らかに歌う。そして何よりも涼やかな心地の良い春の風が吹いていた。

全てがこの世にある喜びを謳い称えるかのように。

そして、その祝福をここに集まった人々に与えるかのように。

この日、シビリークス家の敷地には、大勢の人たちが集まっていた。その多くは軍人だった。スタルゴラド騎士団の正装である淡い灰色の詰襟に身を包み、その腰には長剣を佩いている。その詰襟についている徽章と肩章にある石の色を見れば、その兵士たちの所属先である師団が分かるだろう。その色の殆どは青い色だったが、中

には、緑、赤、黄色、水色、紫のものも混じっていた。
他には上等な衣服に身を包んだ男たちの姿があった。その年齢も若いものから老齢の域に至るまで実に様々だ。その男たちの傍には寄り添うようにして様々な年齢の色とりどりの華やかなドレスを身に纏った女たちの姿があった。そして、真っ白い光沢のある上下に黒や淡い紫、赤という華やかな帯を締めた神殿の神官たちの姿も散見された。

この日、シビリークス家では婚礼の宴が開かれていた。
中央の人だかりの奥には、上背のあるがっしりとした逞しい体つきの軍部の正装に身を包んだ男の姿が垣間見えた。艶やかに光る銀色の髪は、丁寧に撫で付けられていた。その男が今回の主役の片割れ、この家の三男だった。
平生は何かと強面だと評される男の顔は、嬉しさが滲み出るように輝いていた。深い青さを秘めた瑠璃色の瞳が優しく細められている。その視線の先にあるのは、華やかで繊細な刺繍の施された純白の衣装を纏った花嫁の姿だった。
花嫁が身に纏っているのは、この国に伝わる伝統的な花嫁衣装だ。きっちりと結い上げられた漆黒の髪を覆うのは大きな髪飾りで、色とりどりの石と刺繍が施された華麗なものだった。そこから頭部には白くて長いヴェールが顔を覆うように掛けられていた。所々あしらわれた草花の刺繍は赤や薄紅や紫の花弁を散らし、白いレースがふんだんに使われた清楚な装いに文字通り【華】を添えていた。
その女(ひと)は華奢で小柄だった。たが、女としての成熟した肉体を持っていた。薄いヴェールで覆われたその女(ひと)の表情は遠目にはよく分からなかったが、艶やかに引かれた赤い紅が弧を描き、そして、その身体全体からは嬉しさと幸せが滲み出るようにして醸し出されていた。
そんな二人の新郎新婦に向かって、人々は一斉に声を張り上げた。

――――ゴーリカ！　ゴーリカ！　ゴーリカ！　ゴーリカ！

集まった招待客の歓声が徐々に高まって行く。

皆、とあることを期待して待っていた。

【ゴーリカ】――それはこの国の言葉では【苦い】という意味を持つ。人々が連呼する言葉は文字通り、【苦いぞ！】ということなのだ。

【ここ】はこんなにも苦くて苦くて仕方がないから、早く【甘く】しておくれ。

――――二人の甘い口付けで。

最高潮に達した客人たちの思いに応えるかのように花婿が花嫁の頭部を覆っていたヴェールをそっと避けた。

そこに現れたのは、涼やかな面立ちの中、幸せに満ちた笑顔で、少しはにかむように伏せられている瞳は髪の色と同じ深い闇を閉じ込めた漆黒だった。その瞳は、今や夜空に輝く星々のように小さな煌めきを宿していた。

花婿が微笑みながら何かを小さく囁いた。それに答えるように花嫁も小さく笑った。そして囃したてる男たちの野太い声がする方へちらりと一瞥してから、落ちてきた影にそっと目を閉じた。

待ちに待った【甘味】に招待客からは一斉に歓声と拍手が上がった。

この日の為に摘まれた沢山の花弁が宙を舞い、幸せの絶頂にある二人を祝福するように降り注いだ。

方々から祝福の声がこだました。

「おめでとう！」

「おめでとう！」

「お幸せに！」

「羨ましいぞ！　コンチクショウ！」

「浮気すんなよ！」
「よっ！　色男！」
「おめでとう！」
祝辞の合間に野次と共に口笛の甲高い音も混じる。

長い口付けを解いた後、花嫁と花婿は互いの顔を見交わせると晴れやかに笑った。
「ルスラン！　ご感想は？」
招待客の中から突如として掛けられた声に花婿は艶やかに笑うと、
「言うまでもない」
そう言って晴れて妻となった愛しい花嫁をその腕に抱き上げた。
見せ付けるような新郎の行為に途端に周囲からは輪を掛けるように野次が湧いた。
突然のことに花嫁は驚きならがもしっかりと男の首に手を回した。
その際、花嫁の首から下げられた銀色の小さな札（プレート）が、日の光を浴びて眩いばかりの光を反射した。
溢れんばかりの幸せな笑顔の下で輝く、その虹色の光。それは、新しい人生の始まりを祝福する門出の象徴だった。

（終わり）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
下記、最後のシーンをイラストにしました。これまで一年以上という長きに渡り、本編にお付き合い頂きました読者の皆様へ、ｋａｇｏｎｏｓｕｋｅ　よりのささやかなお礼です。もしよろしければご覧ください。
皆さまの中でのリョウとユルスナールのイメージはいかがなものだったでしょうか。

作者の中ではこのような感じでした。

＞ｉ３４３０３―３４１５＜

エピローグ　～永久の誓い～（後書き）

本編はこれにて完結です。
約一年という長きに渡り、お付き合いいただきまして誠にありがとうございました。ここまでこうして何とか息切れせずに続けて来られましたのも励ましや温かいお言葉を下さる読者の皆様のお陰です。
今一度、重ねて御礼申し上げます。

婚礼のシーンは、「え？　これだけ？」と肩すかしのようになったかもしれませんね。楽しみにお待ち頂いた方々には申し訳ありませんが、詳しく書くとどうもだらだらと中弛みしてしまいそうなので、最後はすっきりとさせました。
詳しい宴会の様子は、後日改めて番外編扱いでエピソードを追加出来たらと考えております。
ありがとうございました。

1）内緒話の距離（前書き）

これより番外編に入ります。
このお話は以前活動報告に載せた小話です。まとめる為にこちらに掲載しました。

時間的にはシビリークス家滞在中の出来事です。

1）内緒話の距離

「リョ～ウ～？、ルーシャおじさーん？　どこ～？」
「アウ～、リョ～ウ～」
「リィョー、ルーおじしゃーんー」
切れ切れに甲高い子供たちの声が聞こえてきた。

シビリークス家の裏庭付近にある納戸のような板壁の小屋の中、その室内の窓の直ぐ下では小さな囁きが交わされていた。
「ルスラン、探してますよ。スラーヴァとユーラ、それにオーシャも。いいんですか？」
「ああ。構うものか。せっかくゆっくり出来る時間ができたんだ。邪魔をされたくない」
子供染みたユルスナールの言い分に、リョウは、可笑しそうにクスクスと小さな忍び笑いを漏らした。
子供たちとのかくれんぼの途中、何故か途中から合流したユルスナールと二人一緒に隠れることになってしまったのだ。そして促されるままに鍵の開いていた納戸の中に身体を滑り込ませた。
「そんな、子供たちと張り合わなくても」
「何を言う。オーシャだってべったりじゃないか」
次兄のケリーガルとその妻ダーリィヤの一人息子、イオーシフ（通称オーシャ）は、今年で五つになる。ロシニョールの所のスラーヴァ、ユーラの二人とは少し年が離れているが、甥っ子たちは仲が良く、上の二人は小さないとこの面倒をよく見ているようだった。
オーシャは少し控えめで恥ずかしがり屋な所があるが、リョウには懐いていた。それがどうもユルスナールには面白くないようだ。
偶さかの休み。空いた時間を久しぶりに二人っきりでのんびりとしようと思ったのだが、ユルスナールの前には甥っ子三人衆という

強力なライバルが立ちはだかった。

子供たちの声が徐々に近づいてきた。

「ほら、リョウ。頭を下げろ。窓から見えるぞ？」

様子を見ようと顔を上げかけた所を制された。

そして、汚れるのも構わずに埃っぽい板張りの床に腰を下ろしたユルスナールに、リョウも同じように隣に座った。大きな手がリョウの肩をそっと抱き寄せた。

高く低く独特の抑揚をつけて周囲に響き渡る子供たちの声。それを薄い板壁一枚に聞き流しながら、ユルスナールが囁いた。

「ああ。そうだ。今度、遠駆けにでも行くか？」

「キッシャーに乗って？」

「ああ。少し走らせた所に大きな川がある。眺めの良いところだ」

スタルゴラド国内を北から南へ斜めに横断するように大きな川が流れている。北方の峻厳な山から湧いた水が、やがて大きな川となり滔々と海に注ぎ込むのだ。その川から派生した支流が王都内にも流れていた。ユルスナールは王都の北東にあるその大きな川の方へ出掛けようと誘った。

「素敵ですね。ああでも。それなら少し馬に乗る練習をしないと」

長時間の乗馬はきっと無理だろう。内股からお尻からもう色々な所が筋肉痛になりそうだ。

「ハハ。そうだな」

そこでユルスナールは何を思ったのか薄い口の端を吊り上げて意味深に笑った。

「練習するなら付き合うぞ。今晩たっぷりと」

肩に置かれていた男の手が下に滑り、くびれた腰から太ももの辺りを彷徨った。

仄めかされたあけすけな誘いに、リョウは絶句して、だが、すぐに呆れたような視線を隣に投げた。

「もう、なんてこと言うんですか！？」
思わず上がった高い声に、
「……しっ……」
長い男の指がリョウの唇を塞ぐようにあてがわれた。
その瞬間、こちらに駆け寄る不揃いの長靴の足音と木の扉を開けようとガチャガチャ鳴らす音がした。
「開かないや」
「ユーラ、そこは駄目だ。建てつけが悪くなってるから危ないって言われてるし」
力任せに扉を引いた弟を兄が制した。
「鍵がかかってるの？」
どこか舌足らずな声に、
「みたいだな」
スラーヴァが言った。
「なーんだ。リョウなら絶対ここに隠れるかと思ったのに」
ユーラの台詞にリョウは内心、ぎくりとした。
だが、鍵がかかっていることを確認して諦めたのか、スラーヴァが、二人の弟分を促すようにして踵を返した。そして、子供たちの気配が遠ざかって行った。
「ルスラン、鍵って……」
そんなものあっただろうかと首を傾げれば、ユルスナールは事もなげに戸口を指示した。
「中から鍵がかかるようになってる」
成程、よく見れば、小さな金属のかんぬきがあった。そして更に、その下にはご丁寧にもつっかえ棒がされていた。
「これで暫く邪魔は入らない」
どこか勝ち誇ったように得意げに口元を緩ませたユルスナールに、
「もう、ルスランったら」
リョウは内心の可笑しさを堪えるように微笑んだのだった。

＊　＊　＊　＊　＊

下記、この小話を書いたきっかけとなったイラストがありまして。
思えばこの辺りからイラスト描きたいスイッチが入ってしまったのです。

お厭でなければご覧ください。
ユルスナールとリョウはもっと体格差があるはずなのですが上手くいきませんでした。

＞ｉ３２０６１―３４１５＜

2）もしも【スタルゴラド】にハロウィンのような風習があったら（前書き）

こちらも以前活動報告に載せた季節ネタです。

2）もしも【スタルゴラド】にハロウィンのような風習があったら

始めに：
スラブ（ロシア）地域では、ビザンツ帝国時代からの東方教会の影響を強く受けたので、ケルトに端を発するハロウィンの風習は全くありません。ですが、そのようなものがあったらと仮定した際のお話です。まぁ、似て非なる世界ということですので。完全なるお遊びです。

＊　＊　＊　＊　＊

「ダーイカ　スラーダスチ、ア　ウティビャ　チョールト　シューチット！！！」
「ダーイ、カンフィェーティ！！！」

――――――「おやつをくれなきゃいたずらするよ！」

その日、シビリークス家に居候しているリョウの私室前の廊下に元気いっぱいの子供たちの声が響き渡った。
ノックの音がしたと思いきや、勢いよく扉が開く。入室の許可を求める余裕もないようだった。
だが、室内にいたリョウは慌てた素振りを見せなかった。机の上に置いてあった小さな籠を手にするとにこやかに戸口際に出た。
「いらっしゃい」
リョウは笑みをこぼすとその場で片膝を着いた。
戸口に立っていたのは、シビリークス家の子供たち、長兄の所のスラーヴァとユーラ、そして次兄の所のオーシャ、お馴染の甥っ子三人衆である。
子供たちはいつもと違って、それぞれ不思議な衣装に身を包んで

いた。仮装のようなものと言えばいいだろうか。
そして戸口に現われたリョウに一斉に声を揃えて言った。
「「おやつをくれなきゃ、いたずらするよ！！」」
「おやつ、ちょーらい！！」
子供たちは、皆、黒っぽい衣装に身を包んでいた。頭にはとがった耳。そしてお尻には先が三角にとがった長ーいしっぽ。そしておそろいの黒いマントを羽織っている。そして頬の辺りには呪文のような文様が描かれていた。
それはこの世界に存在すると信じられている【悪魔】の恰好を真似たものだった。
この国には、暦の中で定められたある特定の日に子供たちが【悪魔】の仮装をして近所の家の戸口に門つけをし、お菓子をもらって回るという風習があった。元々、いたずら好きな【悪魔】に業を煮やした人々が年に一回、【悪魔】に持て成しをすることで、その行為を止めさせようとしたという故事に基づくものだった。
【悪魔】は小柄で人の半分ほどの背丈だと伝わっている。そのようなことから子供が仮装をするようになった。子供たちは、この日ばかりは遠慮なくお菓子をもらえることから、嬉々としてこの役目を果たした。
そしてリョウが滞在中、奇しくもその習慣に行き当たったという訳である。そのような話を事前にポリーナから聞いていた。
戸口に現われれる子供たちには事前にお菓子を用意しておくのだそうだ。なんでもいい。キャンディーやキャラメル、チョコレート、小さな焼き菓子等だ。この日の為に女たちはそれぞれ家でお菓子を作る。この日が近づいてくると各家の台所からは色々な甘い匂いが漏れ漂い、ああもうすぐ【あの日】がやってくると時の移ろいを実感したりするのだそうだ。特に街中の住宅が密集した区画では、随分と賑やかなことになるらしい。嗅覚の鋭い獣たちなどは、『どこもかしこも甘ったるくてかなわん』と顔を顰めることだろう。
リョウもシビリークス家の厨房の片隅を借りてポリーナと一緒に

お菓子作りをした。シビリークス家があるのは貴族の邸宅が立ち並ぶ区域で隣の屋敷まではそこそこ距離があるので、周辺から子供たちがやってくることはないのだそうだ。それでも屋敷内には、三人の子供たちがいる。ユルスナールの甥っ子三人衆も一年に一度のこの小さなお祭りを心待ちにしているらしい。

【おやつをくれなきゃ、いたずらするよ】――――それが、門（かど）つけをする際の決まり文句であるらしい。

リョウは微笑むと手にした小さな籠の中から、昨日焼いた焼き菓子（クッキ）を取り出した。

子供たちは銘々が小さな籠を手にしている。そうして家じゅうの女たち、男たちを回り、用意されたお菓子をもらうのだそうだ。

籠の中には既にお菓子が沢山入っていた。中々に立派な戦利品のようである。

「はい、どうぞ」

籠から籠へ焼き菓子の入った包みを入れて行く。

「やったぁ！　リョウのはなんだ？」

無邪気に目を輝かせたオーシャにリョウは相好を崩した。

「ポリーナさんと一緒に作った焼き菓子よ」

「ポーリャと一緒か？」

「ええ。そうよ」

「なら、大丈夫だな。ちゃんと食べられるだろ」

そう言って小さく口の端を【悪魔】のように吊り上げて、聞き捨てならない台詞を口にしたスラーヴァに、立ち上がったリョウはムッとして同じくらいの高さにある頬をくいと抓った。

「まぁ、失礼しちゃうわね。ちゃんと味見をしたから大丈夫よ。そんなこと言うなら、スラーヴァにはあげないわ」

スラーヴァの籠から先ほど入れたばかりの焼き菓子の包みを取り返そうとしたら、素早く籠を後ろに隠されてしまった。

「もらったものは返さないさ」

そして瞬く間に黒いマントを翻して走ってゆく。
「あ、待って。ぼくも～」
その後に嬉々として小さなオーシャが続いた。

「あら、ユーラ？　どうしたの？」
颯爽と消えた二人に対して、真ん中のユーラが籠を手にしたままじっと俯いていた。なにやら真剣に悩んでいるようだ。
「クッキー、苦手だった？」
心配そうに腰を屈めてその顔を覗きこめば、
「ううん。お菓子は大好きだけどさ。やっぱり悪戯も面白そうだなぁって思ってさ」
そう言ってにやりと笑った顔は子供用のお伽話の中に描かれている【悪魔】そのもののような表情で、リョウは可笑しくなって吹き出した。
リョウは少し下にあるすっと伸びた鼻をつまんだ。
「こら。悪戯はいけませんよ。お菓子が足りなくなったら後でまたあげるから、そしたらいらっしゃい」
「うん。分かった」
最後は聞き分けよく頷いて、ユーラも颯爽と身を翻すと黒いマントをなびかせて廊下を走って行った。

そうして、一頻り、この日の行事を恙無く終わらせたことに達成感と満足感を抱いていたのだが。思わぬオマケが付いてきた。

その夜、【アルセナール】から戻り、リョウの部屋を訪れたユルスナールは、リョウの前に手を差し出した。
「なんですか？」
小首を傾げたリョウの前で、あろうことかユルスナールの口からとんでもないセリフが聞こえた。
「【ダーイカ　スラーダスチ】」

「え？　ルスランまで？」
作り置きしておいた焼き菓子は全部子供たちにあげてしまった。あの後、ユーラが再びやってきてお菓子をくれとせがませたのだ。
ユルスナールには用意をしていない。もっぱら子どもたちが主役の行事であるから、そんなこと考えもしなかった。それにユルスナールは元より甘いものは苦手だと聞いていたから要らないだろうと思っていた。
「もうないですよ？」
空になった籠を見せながら答えた瞬間、酷薄そうな薄い唇が弧を描いた。切れ長なきらいのある瑠璃色の双眸が細められた。
そのなにやら企んだ感のある眼差しにリョウは嫌な予感がして無意識に後じさった。
「ルスラン？」
「ならば異論はないな？」
言うが早いが、ユルスナールはリョウの身体を腕の中に抱きとめると体中をくすぐり始めた。
「え？　ルスラン？　ちょっと待って。な……なに？　うわわわ。やめて。やだ。くすぐったい！　あ、ちょっと待って。わわわわわ。あ、だめ。そこはダメ！」
普段よりずっと高音の笑い声を漏らしながら、リョウはくすぐったさから逃れようと身体を捩り必死に肩を竦めた。だが、腕の中から抜け出そうともがくが相手に腰をしっかりと掴まれているため、逃げ出そうにも逃げられなかった。
「ルスラン！」
苦し紛れになんとか手を抑えようと格闘すること暫し、いつの間にか倒れ込んだソファの上で、スカートの中に入り込んでいたごつごつとした男の手が、太ももを撫で上げる。
「ストーイ！（待って）　プリクラチィー！（やめて）」
思った以上の体力の消耗に肩で息をすれば、不意に動きを止めた酷薄そうな造形が鼻先で笑った。

「なんだ？　これはお気に召さなかったようだな。じゃぁ、少し手法を変えるか？」
「もういいから！」
だが、リョウの抵抗も虚しく。元より力では敵わない相手だ。そうして今度は怪しく動き始めた手を前に、リョウの身体は再びソファーの中に沈み、別の意味で翻弄されることになった。

＊　＊　＊　＊　＊

ある意味、お約束的なパターンですね。
スラブ（ロシア）世界では、キリスト教（東方教会）の影響なのでしょうが、【悪魔】という概念が発達しています。オカルト要素満載ということで偶にテレビでも【悪魔払い】の様子が取り上げられたりしているのでご存知の方も多いかもしれません。ハロウィンやケルト文化の場合、悪戯をするのはもっぱら「妖精」なのでしょうが、「悪戯」繋がりでここでは「悪魔」にしました。

3）【南の将軍】オリベルト・ナユーグの華麗なる日常（前書き）

こちらも以前活動報告に載せた小話ですが、半分加筆致しました。

時間的には少し未来のお話です。

3）【南の将軍】オリベルト・ナユーグの華麗なる日常

その日、オリベルト・ナユーグは悩んでいた。その表情はいつになく真剣であった。

小さなテーブルの上には、数々の生地の見本が並べられていた。長年、【隙間（ニッチ）芸術愛好会】の上級会員として類稀なるセンスと熱き情熱を持って数々の「男のロマン」を体現してきたことを誇るオリベルトは、今回もその「究極の美」への更なる追求のために一切の妥協を許さなかった。オリベルトの熱心さは、同じ愛好会の同志たちが口を揃えて同意するだろう。

「これに……これを…合わせるのはどうだ？」

数多もの生地の見本を眺めること暫し、その道の敬虔な愚者でもあるオリベルトについに芸術の女神がほほ笑んだ。

「よし。今回はこれだ！」

傍らにあったペンを掴むとテーブルの上に置かれていた一枚の紙にさらさらとペン先を走らせた。そうして出来上がった一枚を手に、いかめしい顔立ちに満足そうな笑みを浮かべたのだった。

それから2[20]【デェシャータク】程経ったある日。

「旦那様、例のものが届きました」

「そうか！！」

慇懃な所作で告げられた執事の言葉に、その日、本家ナユーグ邸の居間で優雅にお茶を楽しんでいたオリベルトは、喜色を浮かべた。

「こちらへお持ちいたしましょうか？」

「ああ。今すぐ見てみたい」

それからオリベルトは寛いでいた長椅子の上で一人姿勢を正すと執事が持ってきた包みに嬉々として手をかけたのだった。

「ああ、ドーリン、ちょうどよかった」
その日、ナユーグ本家の居間に顔を出したドーリンは、かけられた声にぎくりとした。そのまま持ち前の鍛え抜かれた反射神経を遺憾なく発揮し、くるりと身体を反転して廊下に戻ろうとしたところで、その背に更なる追撃が容赦なく襲いかかった。
「この間、新しく頼んでいたものができたんだ。是非、【お前】の意見が聞きたいと思ってな」
――――――いいだろう？
その一言にドーリンは逃亡が失敗したことを悟った。
そうして、叔父のオリベルトが嬉々としてテーブルの上に広げたソレを前にドーリンは言葉を失くした。
「……」
「どうだ？　中々のものだろう？　今回は今までの中でも一・二位を争う出来だと思うんだ。私の自信作だ。見て御覧、この繊細なレースとビロードの絶妙な合わせ具合。こう裾からチラリとのぞかせるのがミソなんだが、この丈をどうするかで悩みに悩んだものだ。あと1【約2センチ】【ジューイム】でも長かったら、ここは野暮ったくなってしまうからな。この黄金率。素晴らしいものだろう？」
「……」
テーブルの上には、実に手の込んだ小さな【プラーティエ】が広げられていた。勿論、それは女性物の晴れ着だ。だが、それはドーリンが普段目にする成人女性用にしてはかなり小さかった。叔父、オリベルトの太い指が壊れものにでも触れるようにそっとその表面を撫でた。その時、オリベルトは恍惚に似た表情を浮かべていた。
いまだ発するべき言葉を持たない甥を前に叔父の迸るような興奮は、更に白熱していった。
「この色もいいだろう？　少しくすんだ深い森の色だ。これを見た

途端、天啓を得たんだ。ああこれは絶対にあの髪色に映えると思ってな。手触りも極上。腰はこの共布で絞るようにしてある。本来ならばきちんと採寸してぴったりのものができればいいんだろうが、あいにく採寸はさせてもらえていないからな。ルー坊め、ケチケチしすぎだ。今度、会ったら言っておかなければならないな。男なら寛容なる心を持つべし。心の狭い男ほどみっともないものはない。なぁ、そう思わんか？」

そこで目を細めて甥を見た叔父に、ドーリンは油回りの悪いブリキの人形のようにギギギと目を瞬かせた。

「だが、私の見た感じからいったらこの位のものだと思ってな。どうだ？　え？　中々にいい線をいっているだろう？」

「……叔父上」

漸く、その言葉を口にしたドーリンは、額に手をあてがいながら大きく息を吐いた。もう何度、叔父を前にこのように大きなため息を吐いたことだろう。

「叔父上が崇高なる趣味に情熱をお傾けになるのは、毎回頭が下がる思いですが、よもやこれを本人に着せようというのではありませんよね？」

「おお、さすが、ドーリン。理解が早くて助かる」

――――――ゴースパジ（なんということだ）！

そこでドーリンは、自ら墓穴を掘ってしまったことを知った。

叔父が常人には理解しがたい趣味を持っていることは小さいころから知っていた。幼いころはその餌食にされたことも一度や二度ではない。そして本家の廊下のとある片隅に掛かる肖像画をちらりと一瞥するたびにあの頃の悪夢が蘇ってくるのだ。そこには一人の「幼女」が描かれた肖像画があった。

ああ、何故、叔父は女性でなかったのだろう。これが普通に幼い子供を持つ母親であったならば、なんの違和感も持たなかったというのに。幼いころは、子供心に不思議に思ったものだった。

叔父は昔から「可憐なもの」に目がなかった。

「可憐なもの」――――その定義はかなり曖昧で広範囲に渡る。受け手によって、それぞれが思い浮かべる「可憐なもの」はそれこそ様々な種類があるだろう。

この叔父・オリベルトの場合は、特にフリルやレース、リボンといった繊細な服飾素材、もっと言ってしまえば「少女の服」に並々ならぬ関心があった。掌に収まるぐらいの小さな靴も好物である。

そうして度々、己が理想とする可愛らしく可憐な服を色々と注文をつけ懇意にしている仕立て屋に作らせては一人悦に入っていた。これまではそれを作っては、小さな娘がいるという家にあげたりしていたのだ。金持ち貴族のとんだ道楽と言ってしまえばそれまでだが、この叔父の趣味は、社交界の一部の中では中々に評判で、中には自分たちの娘用に服を誂えてくれと頼む者もいた程だ。

これまで叔父が興味を持っていたのはもっぱら「服飾」の方で、それを身に着ける対象は特に定まっていなかった。それは単に叔父の理想を見事体現するような対象がいなかったからに他ならないのだが、幸か不幸か叔父は発見してしまったのだ。

それ以来、叔父の中では単なる「可憐な服」を誂えるという段階から更に一歩進んで、「ある特定の人物の為に服を誂える」という段階に来てしまった。

そしてこの度、目出度くその「ある特定の人物」として白羽の矢が立ってしまった人（ドーリン曰く「被害者」）は、あろうことかドーリンもそれなりによく知る相手だった。そして、そのことはこのところドーリンのひそかな頭痛の種でもあった。叔父の暴走癖は今に始まったことではないが、それを止めるのは中々に至難の業なのである。

「ああ、早速、会員たちに連絡を取って次の会合の日取りを決めなくては！」

趣味が高じた叔父には、何故か理解者となる同志がそれなりにいた。貴族の中には少し変わった趣味をもつ人間が往々にしているも

のだが、叔父の理想に賛同する同志たちは、【愛好会】を作って、定期的に集まるようになっていた。それが、【隙間芸術愛好会（ニッチ）】である。会員たち自身は、自分たちの趣味が狭い分野であることを心得ている。だが、そこに芸術性を見出していることに誇りを持っていた。そうして時折、集まっては叔父の力作（といってもそれを縫ったのは仕立て屋の訳だが）を手に時に批評、時に賛同したりしながら、彼らが愛して止まない【理想の美】について延々と夜を徹して語り合うのだ。

その会合の様子を偶然、偶々、いや、本当にうっかり、垣間見てしまった時のドーリンの心情と言ったら。幼いころの記憶とも相まって、悪夢の再来のような気分を味わった。決して覗いてはいけない別次元の世界を垣間見たようだ。

その顔ぶれを口にすることは憚られた。ただ、それなりに高い地位と名誉を持つ男たちだとだけ明かしておこう。

素朴で普通の生活を送る人々には、知らなくてよい世界である。覗き見たら最後、無事、戻ってこられるとは限らない。

暫し、一人、どこか黄昏たように遠い目をしたドーリンをよそに、オリベルトが立派な髭に覆われた口元を緩めながら口にした。

「そこで、ドーリン、ちょっと頼みたいことがあるのだが……」

「駄目です、無理です、絶対にいけません！」

オリベルトが最後まで言い切らないうちにドーリンは強く否定の言葉を口にしていた。それも三度も。

「まだ何も言っていないじゃないか！」

「そんなの言われなくとも予想がつきます。どうせ品評会のモデルになってくれるよう頼んでこいということでしょう？」

「ああ。さすがはドーリン。話しが早い」

品評会というのは、その【隙間芸術愛好会（ニッチ）】のメンバーが集まって、言葉の通りそれぞれが追求した「男のロマン」を具現化したものを見せ合って、意見を交換し合うというものだった。

そして、叔父のオリベルトは、単に出来上がった服を見せるだけに飽き足らず、あわよくばそれを生身の人間に着せて披露したいということなのだ。

叔父が情熱を注いだ傑作（愛好会メンバー談）は今の所、全て、とある【人妻】のために作られたものだった。その女性は十分成人しているのだが、この国の女たちとは違い非常に小柄で華奢だった。まるで少女のような骨格といえばいいだろう。そしてその顔だちもこの国の人間とは違い異国風だった。それがまたなんとも形容しがたい異国情緒的な魅力（エキゾチック）を増幅させているのだと叔父は力説している。

だが、もう一度言うが、その女（ひと）は、【人妻】である。夫のある身である。そして、その夫は、ドーリンが非常によく知る男だった。妻をこよなく愛する男は、澄ました堅物の見本のような顔に似合わず嫉妬深い所があった。そして、結婚をしても尚、こうしてあちこちから妻に掛かる昔馴染みの男たちからの声にいい顔をしなかった。

「叔父上、私はまだ死にたくはありませんよ」

それはつい漏れてしまった心の叫びだった。

ただでさえ、この愛好会についてはお目こぼしをもらっているのだ。それはそのメンバーが、その夫にとってもそれなりに影響力を持つ男たちであるからに他ならない。そして、その妻自身が叔父の趣味を容認している節があるお陰でもあった。

この件は実に微妙な力学的均衡（バランス）の上に成立している事態なのだ。

「叔父上が直接依頼をしてください。その方が話が早いはずです」

――――――このような話を持ち込んだら最後、あの男に何を言われるか分からない。

「そうか？」

「ええ」

「そうか。お前がそういうのならば確かだろう」

思いの外、あっさりと納得した叔父にドーリンは内心安堵の息を吐いたのだが、

「ああ。となるとこれに合わせる靴が必要だな。帽子もあった方が

いい。それから手袋！　あの小さな手を包むものが必要だ。それに日傘なんかはどうだ？」

そして、更なる「美」の追求に、一人深淵（ディープな）なる世界に突入してしまった叔父を尻目に、ドーリンはこれ幸いと気配を消すようにして抜き足差し足と居間を後にしたのだった。

それから暫く。

「やはりこれには、こういう方がいいだろうな。ああ。それがいい。なぁ？　ドーリン？」

一人、己が世界から帰還したオリベルトが同意を求める為に顔を上げたのだが、そこにあるはずの甥の姿はなかった。

またしても逃げられてしまったようだ。

「薄情な奴め」

オリベルトは白けた顔をして毒づいたのだが、それからすぐに居間に顔を出した己が妻を見て、嬉々として声を上げた。

「ああ、ナースチャ、ちょうどよかった！」

そして今度は妻を前に再び己が持論を展開するのであった。

――――――新作が出来たので是非見に来てほしい。

そんなことを綴った招待状を携えた伝令が、この日、シビリークス家本邸のとある一室に届いた。

飛んで来た隼（はやぶさ）にお礼として好物だという【シィール（チーズ）】を与えながら、その受け手であるシビリークス家三男坊の新妻は苦笑を滲ませた。

「ねぇ、ゴーシャ。前回お邪魔した時からまだそんなに時間が経ってないのに……もう新作？」

裏情報を引き出そうとする為か、いつもより大きな【シィール（チーズ）】の塊を足で掴んで器用にむしっていた隼のゴーシャは、もぐもぐと

咀嚼をしながら辛辣に言った。
『我にはあやつの趣味は分からん。何やらやけに気合が入っておったようだがな』
そしてどこか遠い目をして窓の外、己が主の邸宅がある方角へ首を巡らせた。
そのなんとも含みのある物言いにリョウは口の端を引き攣らせてしまった。

初めて祝賀会で南の将軍であるオリベルト・ナユーグに出会った時、将軍が少し【変わった】趣味を持つことでその筋では有名であるという話を聞きかじった。何でも【可憐なもの】に目がないということで、その興味は広く服飾関係の分野で発揮されているということだ。
もう少し詳しく話を聞いた所、何でもフリルやらレースやら繊細で手の込んだ幼い子供用の服を企画（デザイン）しては仕立屋に作らせて楽しんでいるらしい。金持ちの道楽と言ってしまえばそれまでだが、それが意外に社交界のとある筋では大評判で人気があるということだ。
オリベルトがそのような趣味を持っていると知ってもリョウは然程、驚いたりはしなかった。御洒落にのめり込むのは女だけの特権ではないし、専門の仕立屋の多くは男だ。それに女よりも男の方が趣味にのめり込むと驚くべき集中力と拘りを往々にして発揮するからだ。貴族の着道楽の一形態なのだろうと理解した。だが、まぁそれが無骨なイメージの先行しがちな軍部の将軍という取り合わせは面白いと思ったが。
ウテナが言った【少女趣味（ロリコン）】という言葉は、些か誇張というかウテナ流の捉え方であったのかもしれない。その話をシビリークス夫人のアレクサーンドラから聞いた時、リョウはそう思った。
そして、晴れてユルスナールの妻になるという時、結婚祝いだということでレース編みがふんだんに使われた素敵なショールと手袋をオリベルトから贈られたのだ。綺麗な刺繍がアクセントとして付

いたそれは、もう溜息が出るほどの手の込んだ素晴らしいもので、やはり女としてそういうものが好きであったリョウは、突然の贈りものに驚きながらも凄く喜んだのだ。そこで、実はリョウの為に用意しているものがあると言われて、オリベルトが取り出したものは、シンプルな一着の女物の服だった。この所、製作意欲が高まっているオリベルトは新しい啓示（インスピレーション）を得る為にもこれまでとは違った方向性を探っているのだと目を輝かせて語り、オリベルトが追及して止まない芸術の為にも是非にこの服を着てみてくれないだろうかと訥々とかき口説いた。

リョウはその申し出に一も二もなく了承していた。素敵な贈り物を頂いてしまったということもあるが、このようなシンプルな服であるならば着て見せても別段構わないかと思ったのだ。それは、形は飾り気のない一般的なものであったが、生地は手触りのよい贅沢なものだった。

そして促されるままに着てみせたのが前回の訪問の時だった。

あれからそれ程時間が経った訳ではなかったのだが、また見に来てくれないだろうかというお誘いの話が、この日、やって来たのだ。是非、リョウの女性としての意見を聞きたいと熱く行間から滲み出るような想いが伝わって来た。オリベルトが趣味に注ぐ情熱は、本当に吃驚する程深いもので、リョウはただただ驚嘆と感嘆の溜息を吐いていた。

そしてリョウは深く考えることはせずに、それでは翌日にでもお邪魔させていただくとの返事を帰る伝令の隼ゴーシャに託したのだった。それが巧妙に張り巡らされた悪魔の誘いであるとは露も思わずに。

その日、【アルセナール】から帰宅した夫のユルスナールにオリベルトから招待を受けたので出掛けてくるとの旨を話せば、ユルスナールはぎょっとして、奇妙な唸り声を上げたかと思うと天を仰いだ。

「あの……ルスラン？」
――――ひょっとして不味かっただろうか。
思いがけない夫の反応（リアクション）に一抹の不安を覚えたのも束の間、ユルスナールはいきなりリョウの肩を掴むとやけに真剣な顔をして言い募った。
「リョウ、絶対に一人で行くな。俺も一緒に行く」
「え？　でも、ルスラン、お仕事は？」
「そんなもの後回しだ」
「はい？」
――――ドーリンめ、このことだったのか！
小さく舌打ちをしたかと思うと何故かここでドーリンに対して悪態を吐いた。
リョウは突然のことに目を丸くしながらも只ならぬユルスナールの剣幕に素直に頷いていた。

そして翌日、オリベルト将軍を訪ねてナユーグ本邸を訪れたリョウの隣には、ユルスナールが用心棒よろしく付き従っていた。ナユーグ邸はシビリークス邸から少し距離があるのでユルスナールの愛馬であるキッシャーに乗って訪いを入れたのだが、門の所から玄関に辿りつくまでに邸宅の玄関先でオリベルト自らが客人を待ち構えていた。
「やぁ、いらっしゃい。待ちかねたよ」
将軍自らのお出迎えにリョウは吃驚するやら恐縮するやら、そわそわとどこか嬉しそうなオリベルトの歓待を受け、同じく出迎えた家礼と厩舎番にユルスナールがキッシャーの手綱を手渡し、己が愛馬の処遇について二・三確認を交わしている隙に、オリベルトはリョウの手を取って口づけを落とすとそのまま促すようにして中に入ってしまった。その際、オリベルトが玄関に入り際、ちらりと後方

を振り返り、どこか勝ち誇ったような意味深な笑みを浮かべたことにユルスナールは思い切り苦い顔をして機嫌を急降下させた。

「ユルスナール様、どうぞ大目に見てあげてくださいまし」

長年ナユーグ邸に仕える老齢の家礼が慇懃な所作で微笑んだ。この男も家礼の鏡のような穏やかな顔の下に驚くほどの強かさを持っていた。

「旦那さまのお趣味はもう末期です。ここまで来てしまえばもうどなたにも止められません。いっそこのまま好きにさせてあげて下さい」

――――――その方が御身の為かと。

最後に付け足された余計な一言にユルスナールは文句を言おうと口を開こうとしたのだが、それを溜息一つに変えて何とも言えない複雑な顔をして少し下にある家礼のふさふさとした白い眉毛を流し見た。ナユーグ邸に仕える執事であるこの男もユルスナールから見れば鬼門に近かった故である。

そして、執事のゲルテンに伴われながら居間の方に顔を出せば、そこには早速、応接用のソファに座って嬉々として今回の新作について熱く語るオリベルトとそれをどこか微笑ましそうに耳を傾けているリョウの姿があった。

そこでユルスナールは理解した。リョウは元々どちらかと言えば寡黙な性質だが、それを補うかのように中々に聴き上手である。こうして嫌な顔を一つせず素直に話を聞いてくれる存在というのは、オリベルトのような男にとっては嬉しくて仕方がないのだろう。

そこから窓際に視線を移せば、複雑な顔をしてソファの二人を眺めているドーリンと目があった。思わず恨みがましい目で睨みつければ、ドーリンはどこか諦めたように小さく笑い、そして肩を竦めた。

そしてその隣に置かれた一人掛けの椅子を見れば、そこには何故かブコバルがいた。

目が合った瞬間、ニヤリと意味深なからかいの笑みを向けられた。
「おう、ルスラン、やっぱおめぇも来たか。なんかおもしれぇことがあるっておっさんが言うからさ」
オリベルト将軍と雖(いえど)もブコバルにかかれば【おっさん】である。
ブコバルの父親である【西の将軍】イェレヴァン・ザパドニークとオリベルトはその昔師弟関係にあったそうで、その間柄から幼い頃よりブコバルとも親交があり、【おっさん】呼ばわりを許すくらいには気の置けない関係を築いている模様であった。というのは蛇足だが。
「暇潰しになるかと思って」
書類仕事は真っ平御免だとばかりに【アルセナール】に中々寄りつかないブコバルの勝手な言い草にユルスナールはせめて配分された分の仕事はしろと言いたくなった。

そうやっていつものメンバーと他愛ない遣り取りをしている間に、振り返った先でソファにいたはずのリョウの姿が忽然と消えていた。その代わりに、そこには満足そうににこやかな笑みを浮かべたオリベルトが揉み手をしていた。
「……オリベルト殿……」
全ての元凶である張本人を思わず恨めし気に見遣れば、
「いやぁ、ルスラン、お前の度量の広さには感服するよ。やはり私が見込んだだけのことはある。ラードゥガもきっと草葉の陰からお前の成長した姿を見て涙を流しているだろう」
やたらと上機嫌に先制攻撃を掛けられて、ユルスナールは二の句を継げなかった。敬愛して止まなかった叔父の名前を出されれば黙るしかない。なんという性質の悪さだろう。オリベルトはそれを分かってやっているのだ。
憚らずに歯噛みをしたユルスナールを前にオリベルトは尚も滑らかに口を回していた。
「いいじゃないか。今回はちょっとした味見……ンン（小さく咳払

い）……いや、様子見なんだから。最終調整の衣装合わせ（フィッティング）だよ。何も愛好会でのお披露目という訳でもない。実に内々のものだ。お前もきっと気に入るはずだ」

そう言って茶目っ気たっぷりに片目を瞑って見せた。

「……オリベルト殿」

ユルスナールは思いっ切り溜息を吐いた。

「よもや……いや、オリベルト殿の良心が自分の期待を裏切らないことを切に願いますよ」

「勿論だとも！　私は芸術の神【ムーザ】の忠実な僕（しもべ）であることを誇りに思っているからな。安心しろ。お前の期待を裏切るようなことはしない」

爽やかな白い歯を見せて自信満々に言い切ったオリベルトにユルスナールは疑わしそうな視線を投げた。

そんな友人と変わり者の将軍の遣り取りをブコバルは楽しそうに眺め、ドーリンはやや同情的な眼差しを込めながらもその実、可笑しそうに見ていた。

そうこうするうちに今回の新作（自信作だと言い切っている）を手に着替えに行っていたリョウの準備が整ったようだ。

オリベルトの趣味は服飾関係に疎いユルスナールの目から見ても中々に玄人の域に入るものだった。己が妻の着飾った姿を目にするのは嬉しい反面、それが他の男の創り出したものであるというのが実に気に食わない。愛する妻をネタに様々な妄想をされているかと思うと胸糞が悪くなる。だが、オリベルトが引き出す新たな妻の魅力というものも抗いきれない大いなる誘惑の魔力を持っていた。見たい。けれどこの場では見たくない。ユルスナールは二つの相反する気持ちを天秤にかけてその均衡を思い切り激しく揺らしながら、一人で暫し涼やかな顔の下、身悶えることになった。

だが、ユルスナールは直ぐにその欲望に負けたことを激しく後悔することになった。

今回の新作だという服を見て、リョウがまず思ったのは、なんて繊細で豪華なのだろうということだった。深い森の奥にある木々の色を思い起こさせるような深淵なる緑色。落ち着いた色合いの中にも控え目な光沢を放つ滑らかな生地。手触りも抜群だ。何よりもその生地の上に重ねられた黒いレースと裾から覗く白いレースが素敵だった。形も大げさではない。デコルテの開きも控え目で、その分肩部分が剥き出しになっているが、それは余り気にならなかった。ワンピースの腰回りは同じ共布で縛って調整するようになっている。釦が背中側についていて脱ぎ着はそれでするようだ。スカートの丈は膝頭が少し出るか出ないかだった。

リョウはこの時、大事なことをすっかり失念していた。かつての常識のままに膝丈のワンピースは久し振りだなどと思ってしまったのだ。そして、にこやかに微笑む侍女の手を借りてオリベルトから手渡されたドレスを着た。

この侍女は、オリベルトの趣味の理解者、そして賛同者であるらしかった。着替えの最中、己が主人の拘りをまるで本人が乗り移ったかのように恍惚に似た表情でしゃべり通したものだから、リョウは何だか精神的にどっと疲れてしまったというのは、ここだけの話だ。

侍女の勧めもあって縛っていた黒髪を解いた。そして艶やかな細い【ノーチ】の糸のような髪を垂らして取り敢えずの準備完了となり、再び男たちの待つ居間に戻ることになった。

控え目なノックの後、先に扉を開けた侍女に続いて中に入った。リョウは何だか恥ずかしくなってしまってまともに正面を見ることが出来なかった。

誰かが息を飲んだ気配がした。そして何かを思い切り吹きだす破裂音と摩擦音の混じったような音。

それに続いて上がったのは、

「うっわ、きったねぇ！　かかった！」
何とも珍妙なブコバルの叫び声だった。
一体、何が起きたのだろうか。
リョウが気を引かれて顔を上げようとした矢先、
「【ズドーラヴァ（素晴らしい）】！！！　【クラサターカカーヤ（なんて美しい）】！！」
朗々とした深みのある大声が居間にこだました。
気が付いた次の瞬間、リョウの目の前にはオリベルトがいて、矯めつ眇めつリョウを舐め回すように見ていた。
そして興奮のままに捲し立てた。
「ああ、やっぱり思った通りだ。この艶、そしてこの色、この夜空のような秘めやかな漆黒に映える。うむ。レースの出方も申し分ない」
相手の勢いに飲まれるように驚いて目を白黒させたリョウを余所にオリベルトの称賛は続いていた。
「大きさもぴったりだな。そうか。こうしてみるとリョウ、キミは本当に腰が細い。折れそうな程だ。こんな柳腰でルスランの相手をしているのか。何ということだ！　さぞかしあれの相手は大変だろう。なにせシビリークスは代々絶倫で有名だからな」
「ンンンン―！！！」
余りにあけすけで身も蓋もない話に常識人の甥ドーリンから叔父（おじうえ）の暴走を止めるように非常に態とらしい咳払いが入った。
「ああ、すまん。ついつい。淑女を前にする話ではなかった。こういうことは夜に酒を酌み交わしながらではないとな」
誤魔化すようにそう言ってオリベルトは片目を瞑った。
対するリョウは、一体、何のスイッチが入ったのかは知らないが、思いも寄らない方向に話が行って、耳から入る言葉に思考が付いて行かずに固まった。
「ああ。丈もちょうどいいな。素晴らしい。キミはさすが引き締まったいい足をしている。筋肉も程良く付いているな。形のいい膝頭から……」

「オリベルト殿！！！！」
淀みなく（ノンストップで）続くオリベルトの禁断の世界に待ったを掛けるように大きな怒声（と言っても悲鳴のようなものだ）が居間一杯に響き渡った。
「なんてものをリョウに着せたんですか！　そんな膝まで足が出ているものを！！」
ユルスナールの叫び声に我に返ったリョウは、そこで非常に大事なことを思い出した。そして、一気に青くなった。
この国の女性は豊満な肉体をそのままに胸元を大きく開けて晒すことはあっても決して足を出すことはしないのだ。娼館で春をひさぐ夜の蝶たちも閨以外で足を露わにすることはない。要するに女が足を剥き出しにすることは相手と体を重ねた時だけなのだ。それはすぐさま性的な主張（アピール）に繋がってしまうのだ。
そういう基準と常識の中にある男たちを前に、自分はなんてことをしているのだろうと今更ながらに思い至ったのだ。ここにある男たちにしてみれば、膝少し上まで出した足は、有り得ない仰天すべき事態に違いない。破廉恥どころではない。とんだ【あばずれ】もいい所だ。
リョウはたちまち恥ずかしくなって、狼狽のままに捲し立てていた。それが却って墓穴を掘ることになるとは思わずに。
「あああ、ごめんなさい。ついうっかり。膝ぐらいならいいかと思って。そうですよね。こちらでは女性が足を出すのは相手と親密な関係になった時だけですものね。以前みたいに太ももまで晒すような短いスカートじゃないからついついいいかと思って……」
「ちょっと待った！　短いスカートとはなんだ？」
オリベルトが食いつくように鼻息荒く声を上げ、
「え？　いや、あの、その……」
リョウは激しく狼狽した。
その鼻先でオリベルトが目を見開いた。
「そうか！　きみの故郷では女性は足を出すのは普通だったんだな

！」

あわあわと胸の前で動揺に振られたリョウの手をオリベルトは握り締めると喜色を浮かべた。

「なんて素晴らしい！」

その時、リョウは否が応にも己の発言がオリベルトの類稀なる芸術心を刺激してしまったことを知った。

段々と収集が付かなくなりそうな事態にリョウはおろおろと助けを求めるように奥にいた男たちを見た。

だが相手をどうにかして欲しいという切なる願いも虚しく、目が合ったブコバルはニヤニヤしながらとんでもない爆弾を落とした。

「ああ、そういやぁ、北の砦ん時に向こうの服を持ってきたって言ってたか。そん時のことだろ？」

――――――シーリスがやたら珍しがってたからよ。

「それは本当か！　是非見たい。見せてくれ！」

「あ、いや、その……あれは……」

「叔父上！」

「オリベルト殿！」

リョウの窮地を救ったのは、夫とその友人だった。

「そのくらいにして頂けませんか？　妻が驚いています。これ以上無理を仰るようなら、この件で以後協力をすることは出来ません」

――――――妻に二度とこちらの敷居は跨がせないようにさせますよ。

まるで最後通牒の如く、半眼で冷たく言い放ったユルスナールにオリベルトは、それは敵わないと握っていたリョウの手をパッと放した。

そして同じように呆れながら窘めるように叔父を見ている甥の冷たい視線を受けて、オリベルトは誤魔化すように咳払いを一つすると立ち上がっている面々に再びソファに落ち着くように促した。

「まぁ待て。ほんの冗談ではないか」

ちっとも冗談には聞こえなかったのだが。というのが残された四

人の一致した見解である。
そしてお茶のお代わりを持ってきた侍女が去った後、この珍妙な品評会はもう暫く今度は少しトーンを落として行われたのだった。
その間、オリベルトが自らの拘りを滔々と語っていたのだが。ドーリンがなるべくリョウの足を見ないようにと態とらしく視線を逸らしている隣で、ブコバルは時折捕食者のような獰猛な色をその瞳に滲ませながら舐めるようにチラチラと見ていた。リョウはユルスナールの隣に収まりオリベルトからは一番離れた所にいたのだが、それが余計に向こうにとって全体をよく観察できるようになってしまったことには気が付かないままだった。
ユルスナールはリョウの腰を抱くように腕を回しながらも視界の隅に映る色の白い剥き出しの足に、まるでそこには何かの吸引力があるのではないかというくらいに意識を吸い寄せられ、盗み見ては、ハッと我に返ると視線を逸らす。そのようなことを繰り返していた。
最終的に、リョウは服を身に着けた女性視点での感想と助言をオリベルトに語った。

こうして取り敢えずオリベルトの満足の行くものが出来たということで、その日は、無事散会となった。
――――――のだが。
後日、ユルスナールとブコバルが、【アルセナール】での仕事を私的な用事（別名さぼりとも言う）でほったらかしたことを知ったシーリスが、二人に厳しいお灸を据えたのはまた別の話だ。そして、オリベルトの趣味に付き合うためにリョウが着飾ったということを聞かされて、元々服飾関係に多大なる興味を持ち、リョウの事を可愛がっているシーリスは、自分だけが除け者にされたことを根に持って、その後暫くは事あるごとにねちねちと厭味を言い続けたのだとかいないのだとか。それはアルセナールの執務室にいる兵士たちのみぞ知る話である。

3）【南の将軍】オリベルト・ナユーグの華麗なる日常（後書き）

後半部分のイラストを「みてみん」さんの方に載せました。
挿絵として載せる勇気はありませんのでアドレスだけ表示します。
先に謝ります。色々スミマセン。ご興味がありましたらどうぞ。
ｈｔｔｐ：／／３４１５．ｍｉｔｅｍｉｎ．ｎｅｔ／ｉ３４５４３
／

4）並行の景色

口の端だけ微かに上げてキミは笑った。僅かに息が漏れるくらいの控えめさで。

他の者には分かるまい。

振り返るその背中、すらりと伸びたその首に駆け寄ってしがみつきたいのを態とぶっきら棒に振る舞って見せるのは私なりの照れ隠し。

気付いていたかい？

少し得意そうに横に並んで。眺めている景色はきっと違うけれど。キミの髪をそよいだ風は、私の頬に触れる。その涼しげな眦から零れ落ちる泪は、私の掌を濡らす。

約束するよ。これからもキミの隣で。口にする言葉はないけれど、指先から流れる温もりくらいなら受け取れるだろう？

――――――だから。

一人で先に行こうなんて思わないでくれ。

私の隣で震えていた小さな手。その小指にそっと触れた。

今はまだその程度。

けれど。キミの小指は微かに動いて答えをくれた。

それで十分だった。

口の端だけ僅かに上げてキミは笑った。他人（ひと）には分からない控え目さで。

キミの隣で同じように私も小さく微笑んでいた。

＊　＊　＊　＊　＊

その日、一人の男が淡い新緑に覆われた緩やかな丘陵に佇んでいた。春の先触れとなる暖かい湿った風が丘陵を舐めるように這い、そして男の元に戯れを掛けてはその硬い茶色の髪を揺らした。

男は真っ直ぐに遥か平原の向こう、地平線に薄らと見える深い針葉樹林の連なりを見ていた。一年中変わることのない常緑樹。時の変化を感じさせないその青さが男にはとても眩しく映った。

だが、男は知っていた。この世に不変なものなどないことを。そして、永遠に続くかと思われた幸せほど、手に触れた瞬間、脆くも崩れ去ってしまうことを。

まるで夢を見ているようだった。繰り返し、繰り返し。終わりのない夢を。夢から覚めたと思ったら、それはまだ夢の中の出来事で。それを幾つも幾つも積み重ねて。入れ子のようになった覚めることのない永遠の狭間に、気が狂いそうな程の孤独と絶望を味わった。

男の精悍な頬は少しこけていた。髭は辛うじてあたってある。だが、急いていた所為か、所々剃り残しがあった。

厳しい軍部の懲罰規定に則り営倉入りをしていた男は、この日、漸く解放されたのだ。

冬はもう終わる。枯れ草の上を覆うように新しい新芽が目にも鮮やかな淡い緑の絨毯を一面に敷き詰めていた。

男の手には小さな花束があった。小さな草花を寄せ集めたそれは、幼女が戯れに摘み取って遊ぶようなものだった。けっして高価なものではない。だが、それこそが、この場には相応しいことを男は知っていた。

それはかつて愛した女(ひと)が、好きな花だった。野原にある小さな花。気を付けていないとそのまま通り過ごしてしまうような地味なものだ。

この花を見ると故郷を思い出す。そう言って小さく笑うその控え目な微笑みが好きだった。

今でも男は理解できなかった。どうして愛する人が逝ってしまったのか。どうして死ななければならなかったのか。どうして突然、その命を奪われなければならなかったのか。どうして自分を置いて行ってしまったのか。

どうしてどうしてどうして。答えのない問いをこうして何度繰り

返したことだろう。
だが、そのような中でもけっして変わることのない事実が一つだけあった。残酷すぎるほどの現実だ。
それは――――もう愛する女はこの世にはいない――――ということだった。
男はその事実を完全に受け入れた訳ではなかった。信じられないというのが半分。嘘であってほしいというのが半分。理解をしようとしても感情がそれを簡単に裏切る。

そのような気持ちを抱えながらも、この日、男はこの場所へ足を向けた。神殿の裏手に広がるなだらかな丘には、一面に点々と白い丸い石が等間隔に置かれていた。風雨に晒され色褪せた石が多く見受けられる中で、男が目指したその場所にある石は、まだ真新しいものだった。艶やかで滑らかな石の白さが降り注ぐ柔らかな初春の日差しに照り返されていた。
その丸い石の傍で男は静かに膝を着いた。刻まれたばかりの墓碑銘をそっと指先で辿る。
――――――イーラ・タリコーヴァ。黒の第一の月。３２日。享年ｘｘ。
男より長じていたその女は、初め、男の申し込みを軽く笑って流した。自分のような行き遅れに一体何の冗談かと言って。
儀礼的な挨拶を交わすだけの関係から、男は必死になってその女をかき口説いた。自分の本気の度合いと真剣さを分かってもらうために。
男の視界には、もうその女以外映っていなかった。恋は時として人を愚かにも無鉄砲にもさせる。そして、若さ溢れる男は己が内に滾る想いを持て余しそうになりながらも、懸命になっていた。
そんな一途で真っ直ぐな男の想いに打たれてか、女が漸く首を縦に振ってくれた。そして、男は天にも昇るような気持ちで、この後自分を待っているだろう女との幸せを思い描いては、日々の厳しい

訓練や任務に耐えてきたのだ。
だが、漸く得られたかと思った幸福は、まるで男の必死さを嘲笑うかのようにするりと手の中から零れてしまった。
人は余りの衝撃を受けると却って頭の芯が冷えることを知った。突き抜けた哀しみは、後からやって来るのだということを初めて知った。

婚約者が死亡した。その一報を受けた時、男は何の冗談かと思った。そんなことがある訳がないと。その女(ひと)は宮殿奥勤めの侍女であったが、誰からも好かれる優しい女(ひと)だった。侍女たちの中では中堅で、面倒見が良く、細やかな心遣いが出来ることから多くの侍女仲間に慕われていた。大きな病気をしたこともない至って健康な女(ひと)だった。なによりも小さく口の端を上げる控え目な微笑みが好きだった。
そして変わり果てたその姿に対面した時、亡き骸を前にしても男はまだ信じられなかった。何故ならその女(ひと)はまるで眠るように安らかな顔をして横たわっていたから。死後硬直が始まっていたが、紫斑が出てくる前だった。
男は横たわる女に近づくといつものようにそっと声を掛けた。
「イーラ、起きてくれ。イーラ」
幾度となく繰り返して来たその名を呼ぶ。既に己が血肉と同じようにこの身体に刻み込まれたその唯一の固有名詞を唇に乗せた。
眠るイーラの身体はまだほんのりと温かかった。それが余計に男を混乱の極致に押しやった。
「イーラ、イーラ……イーラ？　イーラチカ？」
幾度となく肩を揺さぶっても、その女(ひと)が瞳を開き、その薄い緑色の光彩に男の姿を映すことはなかった。
「起きてくれ、頼むから。イーラ？　嘘だろう？　なぁイーラ、お願いだから」
男が我武者羅になってそのほっそりとした肩を揺さぶった。それ

は見兼ねた同僚の兵士が止めるまで続いた。
「ヴァロージャ！」
「イーラ？」
真っ直ぐに愛する人を見つめたまま、男は途方に暮れたような顔をした。その顔がだんだんと悲痛に歪み始めた。
――――――イーラ！！！
そして、その女(ひと)が割り当てられていたこじんまりとした侍女部屋の一室で、若い男の獣のような慟哭の咆哮が響き渡ったのだった。

それから男がしたことと言えば、殺害されたという婚約者の恨みを晴らすべくその下手人を突き止め、報復をすることだった。復讐の為に男は辛うじて息をしていた。愛する人の死は後宮での不審死事件として捜査が開始された。その一件を担当した男の上官でもある第二師団長は、男がその侍女の関係者であり、公正な判断ができないという理由から男を捜査の人員(メンバー)から外した。
男はそれに黙っていなかった。婚約者が殺されたというのにそれを黙って指を銜えて見ていろというのか。そのようなことなど絶対に我慢できなかった。犯人を挙げるのならば必ずこの手で。そして同じ苦しみを味わわせてやるのだ。
復讐の炎を燃やした男は、独自に捜査を始めた。そして狂気と正気の狭間、紙一重の所で暴走する激情のままに当たりを付けた人物を見つけ出した。そして逆る気持ちのままにそれを相手にぶつけたのだ。
それから後のことは、広く知られたことである。
軍律違反で、男は営倉入りを申し渡された。男の先走った行為が第二師団の兵士としてあるまじき理性を欠いたもので、無実の者を徒に巻き込み暴力を振るったということを重くみた上層部が厳しい処分を言い渡したのだ。
男は混乱した。この抉られるような哀しみをどうしたら良いのか分からなかった。来る日も来る日も薄暗い牢屋に少し毛が生えたよ

うな営倉で、男は自問し、苦しんだ。

そして謹慎が解けて、男が真っ先に思いついたのは、愛しいその女(ひと)が眠る場所に花を手向けることだった。

白い真新しい石盤の上に苦労して見つけて摘んできた草花を置いた。まだ春が来たばかりの頃合いで、愛する人が好きだと言ったその花が咲くのは、時期的にはもう少し先のことだ。大の男が必死になって汗を流しながら草原のただ中にこの草花を捜し歩いたのだ。

土と草の露に塗れた男の太い武骨な指が刻まれたばかりの墓碑銘をなぞった。

「……イーラ」

そんな時だった。かさりと草を踏む男がして、男の傍に人の立つ気配がした。

男は緩慢な動作でゆっくりと顔を上げた。

そこにいたのは一人の女だった。地味で簡素な女物の服を着て、編上げの靴を履いていた。

逆光になってその表情は良く分からない。だが、ちょうど自分が愛したあの人と同じように少し薄めの唇が微かな笑みのようなものを象ったのを男は見逃さなかった。

「イーラチカ?」

掠れた男の声にあからさまな落胆の色が落ちた。何故なら、そこに立っていたのは、自分が愛した人ではなかったから。

「お花を手向けさせては頂けませんか?」

落ち着いた低い女の声が、男の鼓膜を震わせた。

よく見れば、女の手には同じような草花があった。大輪の花を咲かせる訳でもない、小さな、小さな野に咲く花だ。それも霞んだ春の空のように淡い色をした花だった。

男はその問いに答えなかった。

だが、訪れた女の方は、それを肯定と捉えたのだろう。女はそっ

とまだ真新しい石碑の前に跪くと、そっと手にした草花をその石の上に置いた。

その横顔は、深い哀しみと懊悩のようなものが滲み出るようにして表れていた。

友人か知り合いだろうか。男はぼんやりとそのようなことを思った。

「Саёнара（サヨナラ）……Аригатоу（アリガトウ）……Гоменнасаи（ゴメンナサイ）」

男が耳にしたことのない音の羅列を女が紡いだ。不可思議な呪文のような言葉。そして小さな草花を墓石の上に置いた女のか細い指がそこに刻まれた古代文字による銘をなぞった。

「安らかなる永久の眠りを」

――――――【イースクレンナウマリャーユー（心から願って）】

女がそう口にした瞬間、名前の刻まれた石から小さな明かりが出たと思うとそれは徐々に大きく光り、細かい粒子のように揺らぎ始めた。

そして、男が呆気に取られている目の前で、ぼんやりとした淡い黄色い光が、男の愛した女の造形を象り始めていた。

「イーラ！？」

男は虚を突かれたように掠れた声を上げた。柔らかな光の中に揺らぎ、佇むその女は、記憶の中にあるのと寸分違わぬように少し唇を吊り上げて微かな微笑みを浮かべるとそっと男の頬に手を伸ばし、その唇に触れた。そして、名残惜しそうに唇と唇を触れ合せてから消えた。

その口元に儚い、哀しげな笑みを残して。

「ッ……イーラ？」

男はハッと我に返ると墓石の上に屈みこんだ。光の幻影はすうっと石盤に吸い込まれるようにして消えて行ったのだ。まるでその軌跡を追うかのように男は何の変哲もない白い石に齧りついた。

「イーラ！」

「今のは、ここに残っていたイーラさんの残存思念です」
隣に跪いた女が囁くように言った。
「あなたを愛していたと。……約束が守れなくてごめんなさいと……」
そう伝えたかったのだろうと女は今にも泣きそうな顔をして微笑んでいた。
「……お前は……」
そこで男は初めて隣にいる女の顔をまじまじと見た。深い闇を閉じ込めたような漆黒の瞳。そして濡れたような夜の色を模した黒い髪。哀しみを閉じ込めた優しい女の顔の中に、かつて男を睨みつけた苛烈な若者の影が重なった。
「まさか……あの時の……」
それ以上は声にならなかった。
だが、尋ねられた方は、男の問い掛けの意味が分かったのだろう。静かに目を伏せると再び視線を白い石の上に落とした。そこでほんの少し懺悔に似たような笑みを浮かべると静かに目を閉じた。
先に逝った知り合いの旅路が恙無いことを祈りながら。

口の端だけ微かに上げてキミは笑った。僅かに呼気が漏れるだけの控え目さで。
それはきっと男にだけ分かるその女(ひと)特有の合図。
――――ねぇ、ヴァロージャ。私よりずっと背の高いあなたは、こうして並んで立っていても、きっと私とは違う景色を見ているのでしょうね。
――――私とあなたの景色は同じようで違う。けっして重なることのない平行な景色なの。それでも……あなたはいいの？
躊躇いがちに不安を滲ませながら男を見上げる淡い緑色の瞳。
男の中で愛する女の声が頭の中にこだました。

口の端だけ僅かに上げてキミは笑った。
――――ああ。イーラの見えているものを教えてくれよ。そうしたら俺も同じようにキミに話すから。そうしてお互いのものを共有すれば、一つのものが二倍になる。これってちょっと得してないか？
――――まぁ、ヴァロージャったら、欲張りなのね。
口の端だけ微かに上げてキミは笑った。他人（ひと）には分からない控え目さで。
そして、あの日、男も同じように微笑んでいた。

独り残された男は、この日、初めて涙を流した。そして声が枯れるまで泣いた。その傍にはずっと黒い髪を風に靡かせた一人の女の姿があったという。

4）並行の景色（後書き）

暴走した兵士ヴラジーミル・ボグダーノフの後日譚をお届けしました。なんだか少ししんみりしてしまいましたね。

5）名もなき未来への讃歌

一人の男が、囁きに似た文言を紡ぎながらピンと伸ばした人差し指と中指を揃えて、空中で静かに十字を切った。

空間に僅かに歪みが生じる。

だが、それはほんの一瞬のことで、室内はすぐに何事もなかったかのように元の静寂に満ちたものに戻った。

その男の様子をじっと眺めていた灰色の四足の獣は、術が掛かったことを感じとると憚らずに胡乱な視線を男へと投げ掛けた。

『妙なことを考えたものだな』

だが、男は灰色の艶やかな毛並みを一瞥しただけで、何も言わなかった。いや、微かに上がったその口角を見れば、男の心の内は明らかであろう。

「人生にちょっとした愉しみは必要だろう？」

――――――このくらいはなんてことはない。

茶目っ気たっぷりに片目を瞑った男に灰色の獣はやれやれとばかりに鼻を鳴らした。

『ふん。かような古くさい罠にひっかかる奴があるかの』

あまりにも正直な顔馴染みの感想に男は小さく喉の奥を鳴らした。

「それも含めてだ。面白かろうさ」

もし、将来、男の施した術に反応する者が現れたら。そんなあるかないかの奇跡のような確率を信じてみるのも悪くはない。これより先の人生にそのくらいの余興（ゲーム）はあってしかるべきだ。

それは、男が、己が【知】を引き継ぎたいと思える相手を炙り出す為の第一関門のようなものだった。

男は、未だかつて弟子のような存在を持ったことがなかった。天涯孤独を憚らずに公言し、自分の領域（テリトリー）に他人（ひと）が入るのを極端に嫌う性質だ。研究には独りで没頭するダイプだし、自分のペースを崩されることが嫌いだった。

他人からの干渉を嫌う男は、度重なる煩わしさから逃れる為にこの場所を去ることを決めた。だから自分が生きている間はその望みを叶えることは無理な話だろうと思っていた。

男はこれより先、王都を後にして遥か北方の僻地へと向かう積もりだった。人々が【帰らずの森】と呼ぶ太古の木々が眠る深い森の裾野だ。そこで隠遁生活を送るのだ。誰にも邪魔されない日々を送る為に。そこでは小さな庵を建てて、研究の拠点全てを移す積もりだった。そして、念には念を入れてそこに目眩ましの結界を張る積もりだった。この王都と小うるさい貴族連中からの永遠の決別だ。

そんな人嫌いの男でもこれまで集めた蔵書類や研究の成果（コレクション）を自分の旅立ちの後、このまま人知れず朽ちさせるのは少し淋しい気がしてしまったのだ。そこで思いついたのが、多くの知が集まるとされているこの場所に仕掛けを施すことだった。男の死後、どれくらいの時間が経過するかは分からないが、もし、それらを有効活用できそうなくらい高い素養を持つ者が現れたら、その者の為に道しるべを残しておこうと考えた。そして、見事、あの小屋にまで辿りつけたのならば、【おめでとう】という具合に。それは旅立ちの後、残された世界へのちょっとした贈り物のようなものだった。

それから男は養成所内にあった全ての私物を引き払った。すっかり空になった広い部屋はがらんとしていた。かれこれ１０年近く、この場所で教鞭をとっていた。自分でもよく続いたと思う。その間に受け持った数多もの生徒たちの中には、これはと思う者もいたのだが、残念ながら知識を継承するだけの高い素養を持った者はいなかった。

だが、男は全く諦めてはいなかった。ここで得た見込みのある教え子にはそれとなく【仲立ち】としての役割を担ってもらおうと考えていたからだ。

そうやって、暫し空洞を見つめていた男の隣に音もなく人が並ん

だ。どこか老成したような雰囲気を身に纏う、だが、まだ年若い青年だった。
男は同じ高さにある青年の尖った鼻先を一瞥すると視線を真正面に戻した。
「いつ……立つんだ？」
青年が静かに問うた。
「明日にでも」
「……ったく、面倒なことばかり押し付けやがって」
悪態を吐いた青年に男は鼻で笑った。
「偶にはよかろう」
――――偶にはだと？
その表現が不適切であったのか、そんなことを言った男を青年はギロリと睨み付けた。
「何を言う」
だが、男は気分を害した様子はなかった。
「少なくとも、こうして顔を合わせることはなかろう」
「ハッ、どうだか。たいして違いはなさそうだがな」
「まぁ、適当にあしらっておけ」
「それが面倒なんだが？」
いつものように好戦的な態度を崩さない相手に男は顔だけ振り返ると不意に真面目な色をその瞳に乗せた。
「お前だからだ」
――――こんなことを頼むのは。
青年の顔が忌々しげに歪んだ。
その言い方は卑怯だと隣に立った青年は思った。
「あの部屋に種を播いた」
「……みたいだな」
男までとはいかないまでもそれなりの素養を持つ青年には男が施した仕掛けというのが感じ取れた。
「後で連動させる積もりだ」

「あばら家とか？」
「ああ。全ての鍵はそこに繋がる」
そう言って一人満足そうな顔をした男を横目に、青年はこれ見よがしに大きく溜息を吐いた。
「やっぱり面倒なことじゃないか！」
その言い草に隣に立つ壮年の男は、静かに口の端を吊り上げた。分かる者だけには分かる控え目な微笑みだった。
男は隣に立った青年が、文句を言いながらも自分の申し出を断らないことを知っていた。同じ術師同士の距離感。何よりもその両者の間に流れる同じ血が、否応なしに二人の男たちを結びつけていたから。
「まぁ、適当にやっておくさ」
青年はぞんざいに言い放った。
その言葉の裏に込められた本当の意味を男はちゃんと理解していた。この青年ならば手を抜くはずはなかった。病的なまでに神経質な性質は男とよく似ている。
だが、青年は厭味を付け加えることを忘れなかった。
「そっちこそ、しくじるなよ？」
「ああ。分かっている」
男はちらりと横に立つ青年の顔を一瞥した。
「落ち着いたら報せを寄越そう。森に住まう鷹にでも使いを頼むとするか」
「ハッ、あんたの顔を見なくて済むんだ。清々するぜ」
「それはこっちの台詞だ」
互いの意見が珍しく一致した所で、男たちは肩を竦め合った。

それから約２０年の歳月が流れていた。
その時の青年があの男と同じ年齢に達した時、思いがけない噂話が伝令として飛ばしていた猛禽類たちよりもたらされた。

あの男が子供と暮らしている――それは、仰天すべき話だった。
あの我儘で自己中心的でいい加減で研究一筋で他人からの干渉を厭うあの男が、他人と暮らしているだと!?
なんの冗談かと真っ先に耳を疑った。だが、元々獣たちは嘘を吐くことはない。真実をありのままに伝えるのだ。その表現方法は些か変わっていたりはするが。
伝令たちは一様にあの男と暮らすという者を『心清き者』だと言った。そこで男は理解した。【人】という括りではなく【獣】という括りなのだろうと。そうでなければあの男が誰かと共同生活を営むなど考えられなかったから。

それから約半年後、男の元にあの男から伝令が飛んで来た。それは約二十年ぶりのことだった。中には小さな封書が一通入っていた。この印封を目にするのも随分と久し振りのことだった。
そこに施されていた印封はご丁寧にも最上級のものだった。随分と気合が入っているものだ。
それを目にした時、男は何やら嫌な予感がした。あの男からこうして態々寄越される報せというのは、過去の数少ない経験を思い返してみても大抵、男にとっては碌なことにはならなかったからだ。
男は、暫しその封書を机の上で睨みつけていたが、やがて決心が付いたのか、手に取ると古代エルドシア語で施された飾り文字の宛名に触れた。開封の呪いに反応して強固なまでに施されていた印封が解けた。
そして気が進まないながらも、ざっと文面に目を通して。
かつて青年だった男は、内容を読み終えると額に手を当てて天を仰いだ。
――――――【ゴースパジ(なんということだ)】!
その一語には、かつての青年の様々な想いが閉じ込められていた。驚きと呆れと腹立たしさと苛立ちと哀しさと嬉しさとやるせなさと切なさと。そして、ほんの数滴程の愛しさに似た温かさと。ごちゃ

混ぜになった感情の洪水のようなものだった。
だが、一時的な嵐が過ぎ去った後、
――――――あの男らしい。
男がまず思ったのはその事だった。いつも一方的なやり方。意思の疎通は一見、成立しているかのように思えて相互理解という点からするとまるで成立しない。
それは、あの男からの一方的な通告だった。
近いうちに【旅立つ】ことになるということ。その為の準備をしているということ。唯一の心残りは、今共に暮らしている子を後に残してしまうということで。それだけが気がかりで、気乗りをしないがこうして男に手紙を書いているということ。願わくば、その子が自らの足で立つことが出来るようになるまで万事、よろしく頼む。
――――――ヨロシク　タノム。
たった一文。だが、そこに含まれるであろう諸々は男にしてみれば途方もないことだった。
「あんの莫迦男。簡単に言いやがって」
腹立たしさを滲ませながら吐き捨てると男はガシガシと髪をかきむしり、手にした封書を壁に叩きつけた。
だが、柔らかく薄い紙で出来たその封書は、投げようとした所で男の手を離れると直ぐにひらりと空を舞った。
男は、じっとその紙がひらひらと風を孕みながら落下する不規則な軌道を目で追っていった。
そして、磨き上げられた床に映るその紙切れを暫し眺めてから。徐に歩み寄ると手を伸ばして取り上げた。
かつての青年は、再びその手紙を手に取るともう片方の手の人さし指で小さく弾いた。男の顔には、苦いものを飲み込んだような複雑な表情が浮かんでいた。
だが、男は再び一人掛けの椅子に腰を下ろすと背凭れに体を沈みこませるように預けた。そうして、暫く経った頃には、男の顔にはすっかり真面目な色合いが上澄みのように乗っかっていた。

男は小さく口笛を吹いた。【人】には聴くことのできない高い音域だ。

やがてバサリという大きな羽ばたきの音と共に開いた窓から一頭の大きな鷹と鷲が入って来た。

「……イーサン…と言ったか」

男はこの度、遥か北方の森から伝令としてやってきた鷹を見た。

「あの男に伝えてくれ。――万事引き受けたと」

『是』

鷹が小さく答えた。

そこで不意に男は空気を変えるとからかうような好奇に満ちた光りをその赤茶けた瞳に宿した。

「――で、貴公から見て、かの者は、【後継】に値しそうか？」

『それは分からぬ』

鷹は小さく首を傾げた。

『素養はある。だが、その深さは未だ知らず。全てを明らかにするには【時】が足りぬだろうて』

「そうか」

要するに鷹から見ても可能性は零ではないということなのだ。今はまだそれでいい。いずれにせよ男にとって出来る限りのことをしておけばよいのだ。

男は、暫し瞑目した。

『なれど』

落ちた沈黙に鷹のイーサンが言葉を継いだ。

『【最後の家族】になるだろうと言っていた』

その台詞に男は虚を突かれたように目を瞠り、やがて堪え切れない可笑しさを吐き出すように大声を上げて笑った。

最後の家族――あの男からそのような台詞を聞くことになろうとは思いもよらなかった。【家族】、【血縁】という繋がりをとうの昔に自らの意志で捨てたあの男が、そんな言葉を吐くとは。なん

とも滑稽なことではないか。
この時、かつての青年は、初めてあの男よりもずっと年少であったことに感謝をした。あの男のこんな莫迦げた一面を垣間見ることが出来たのだから。
「――――で、その者の名は？」
その問い掛けに鷹は静かにその名を告げた。
――――――リョーウ。
不思議な響きだと思った。まるで出来そこないの呪いの切れ端のような。

それから男は精力的に情報を集め対応策を練り、積み上げて行った。縦糸と横糸を複雑に絡めながら慎重に対策を講じて行った。まるで村の女たちが機織りをするように。
気が付けば、男はその余りある知性と機転を利かせてあの男からの依頼に応えるべく励んでいた。
そして、それから一年になるかならないかという時に、男は漸くその件（くだん）の人物と直接対面を果たすことになったのだ。
これまでその者に関する情報は、伝令や方々に散った部下たちから報告を受けてはいたが、『百聞は一見に如かず』というやつで、想像よりもずっと呑気で凡庸に思えるただの【人】だった。
だが、その者は同時にこの国にとっては類稀なる存在でもあった。生きながらにヴォルグの長の情けを受けた者。先祖返りのような素朴な時代の息吹を持つ者。何よりも獣たちに好かれる真っ直ぐな心根を持つ者。
予てより計画していた初めての邂逅を終え、頭上に沢山の疑問符を浮かべながらこの部屋を後にして行ったほっそりとした背中を見送った後、この国の影の諜報部隊【チョールナヤ・テェニィ】の【アタマン】である男は、ゆっくりと机の上に肘を着いた。
扉は開かれた。唯一の鍵によって。
あの男がどこまで先を見越していたかは分からない。だが、あの

端迷惑な男【ガルーシャ・マライ】の元よりやって来たあの【女(ひと)】は、その知を引き継ぐべくこの地で術師となり、そして、二十数年前にあの男が幾ばくかの期待を込めながらも戯れに張った結界を解く契機となったのだ。

奇しくもあの者が、この世界で新しい一歩を踏み出した瞬間にそれは重なった。まるでその者の門出を祝福し、その小さな背中をそっと押してやるように。閉じられ、守られた小さな箱庭の世界からより大きな開かれたこの地へと一歩踏み出すことが出来るように。

それは、あの男が遺した【名もなき未来】への讃歌のように男には思えた。

5）名もなき未来への讃歌（後書き）

今回はガルーシャ・マライと影の諜報部隊【黒き影】の長【アタマン】の間の小話をお送りいたしました。
以前とある方より、ガルーシャの結界が解かれることになった理由についてご質問を頂きまして、本編を補う形で裏事情を小話にまとめてみました。説明をするのも野暮かもしれませんが、ガルーシャの結界が解かれたということに、リョウが森の小屋という隠され閉じられた小さな世界から外に出て、改めてスタルゴラドという国に受け入れられるようになる、その新しい一歩ということを重ね合わせました。

このことに関連して本編第２０２話に登場した【アタマン】との邂逅の一場面をイラストにしてみました。といっても描いたのは【アタマン】だけですが。
もしよろしければご笑覧下さい。
ｈｔｔｐ：／／３４１５．ｍｉｔｅｍｉｎ．ｎｅｔ／ｉ３５１４３／

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9199n/

Messenger

2011年11月17日12時22分発行